# 魔法少女リリカルなのはties

ハルハルharuharu

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私の書いていた二次創作『魔法少女リリカルなのはｔｉｅｓ』が、なろうで二次創作規制により削除され、続くアットノベルスの消滅で、再度載せ場所を失ったので、ハーメルンへ軟着陸しました。

アットノベルス移籍時は、とにかく、なろう削除からの流れで意欲を失いたくなかったので、１４２話から地続きで掲載していました。

１話から推敲して掲載していきます。Ａ，ｓ編の完結までは駆け抜けられると思います。

アンチ歓迎します。

他人の意見を取り入れない分、内容を好きなように貶してくれて大丈夫なので、読んでいってください。

まとまり次第、製本してコミケにでも応募しようと思っています。

# 目次


第一話『桜、散る頃に』 1
第二話 48
第三話 91
第四話 115
第五話 163
第六話 176
第七話 188
第八話 200
第九話 210
第十話 229
第十一話 239
第十二話 251
第十三話 266
第十四話 279
第十五話 296
第十六話 308
第十七話 321
第十八話 332
第十九話 349
第二十話 362
第二十一話 384
第二十二話 416
第二十三話 437
第二十四話 481

A, S編 第一話『夜の帳、下りる頃に』 510
A, S編 第二話 526
A, S編 第三話 539
A, S編 第四話 554
A, S編 第五話 566
A, S編 第六話 582
A, S編 第七話 592
A, S編 第八話 606
A, S編 第九話 616
A, S編 第十話 634
A, S編 第十一話 644
A, S編 第十二話 661
A, S編 第十三話 671
A, S編 第十四話 699
A, S編 第十五話 711
A, S編 第十六話 725
A, S編 第十七話 740
A, S編 第十八話 755
A, S編 第十九話 768
A, S編 第二十話 778
A, S編 第二十一話 786
A, S編 第二十二話 795
A, S編 第二十三話 803
A, S編 第二十四話 818
A, S編 第二十五話 828

Ａ，Ｓ編　第五十話　1207
Ａ，Ｓ編　第四十九話　1199
Ａ，Ｓ編　第四十八話　1191
Ａ，Ｓ編　第四十七話　1180
Ａ，Ｓ編　第四十六話　1150
Ａ，Ｓ編　第四十五話　1132
Ａ，Ｓ編　第四十四話　1118
Ａ，Ｓ編　第四十三話　1102
Ａ，Ｓ編　第四十二話　1092
Ａ，Ｓ編　第四十一話　1073
Ａ，Ｓ編　第四十話　1062
Ａ，Ｓ編　第三十九話　1043
Ａ，Ｓ編　第三十八話　1026
Ａ，Ｓ編　第三十七話　1007
Ａ，Ｓ編　第三十六話　986
Ａ，Ｓ編　第三十五話　977
Ａ，Ｓ編　第三十四話　943
Ａ，Ｓ編　第三十三話　917
Ａ，Ｓ編　第三十二話　900
Ａ，Ｓ編　第三十一話　887
Ａ，Ｓ編　第三十話　877
Ａ，Ｓ編　第二十九話　866
Ａ，Ｓ編　第二十八話　856
Ａ，Ｓ編　第二十七話　847
Ａ，Ｓ編　第二十六話　838

Ａ，Ｓ編　第七十五話　147
Ａ，Ｓ編　第七十四話　146
Ａ，Ｓ編　第七十三話　145
Ａ，Ｓ編　第七十二話　144
Ａ，Ｓ編　第七十一話　143
Ａ，Ｓ編　第七十話　142
Ａ，Ｓ編　第六十九話　141
Ａ，Ｓ編　第六十八話　139
Ａ，Ｓ編　第六十七話　138
Ａ，Ｓ編　第六十六話　137
Ａ，Ｓ編　第六十五話　136
Ａ，Ｓ編　第六十四話　135
Ａ，Ｓ編　第六十三話　134
Ａ，Ｓ編　第六十二話　133
Ａ，Ｓ編　第六十一話　132
Ａ，Ｓ編　第六十話　131
Ａ，Ｓ編　第五十九話　130
Ａ，Ｓ編　第五十八話　129
Ａ，Ｓ編　第五十七話　128
Ａ，Ｓ編　第五十六話　127
Ａ，Ｓ編　第五十五話　126
Ａ，Ｓ編　第五十四話　125
Ａ，Ｓ編　第五十三話　124
Ａ，Ｓ編　第五十二話　123
Ａ，Ｓ編　第五十一話　121

A's編 第七十六話 …… 488
A's編 第七十七話 …… 500
A's編 第七十八話 …… 513
A's編 第七十九話 …… 524
A's編 第八十話 …… 536
A's編 第八十一話 …… 547
A's編 第八十二話 …… 558
A's編 第八十三話 …… 575
A's編 第八十四話 …… 585
A's編 第八十五話 …… 596
A's編 第八十六話 …… 607
A's編 第八十七話 …… 618
A's編 第八十八話 …… 630
A's編 第八十九話 …… 644
A's編 第九十話 …… 656
A's編 第九十一話 …… 668
A's編 第九十二話 …… 676
A's編 第九十三話 …… 699
A's編 第九十四話『暁、迎える頃に』 …… 717
A's編 第九十五話 …… 767
A's編 第九十六話 …… 787
A's編 第九十七話『雪、降る頃に』 …… 818
StrikerS編 第一話 …… 848
StrikerS編 第二話 …… 932
StrikerS編 第三話 …… 1961

Strikerｓ編　第四話　――――――

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第二十五話『そしてまた、激動の日々が始まる。しかし、歩みは独りではなく』――――――2811
ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第二十六話『～　Ｂｅ　ｍｙ　ｄａｒｌｉｎｇ　～』――――――28402819
無限の未来へ――――――2876
ｖｉｖｉｄ編　１話『その者、聖なる王として君臨せしは、、』――――――2895
ｖｉｖｉｄ編　２話『グッバイ現世　～　覇王のユッケ　～』――――――29342911
ｖｉｖｉｄ編　３話『嗚呼、太陽神はヒキコモリ』――――――29682947
ｖｉｖｉｄ編　４話『ひとりえんそく』――――――2991
ｖｉｖｉｄ編　５話『彼女たちの受難　～　被害者の会　～』――――――3073
ｖｉｖｉｄ編　６話『審判の鎖』――――――304330143002
ｖｉｖｉｄ編　７話『ぼっち生態学　～カラオケ地獄変～』――――――3153313931093093
ｖｉｖｉｄ編　８話『正しき間違い』
ｖｉｖｉｄ編　９話『孤独の中の神の祝福』
ｖｉｖｉｄ編　１０話『再会と再開のものがたり』
▪ｖｉｖｉｄ編　１１話『社会をいい方に変えていく第一歩』
ｖｉｖｉｄ編　１２話『しせつぐらし！』
ｖｉｖｉｄ編　１３話『男の戦い』
ｖｉｖｉｄ編　１４話『がんばれ女の子』
ｖｉｖｉｄ編　１５話『ちょっとしたＢ級青春ドラマ』

vivid編　16話『神罰執行』――――――

# 第一話『桜、散る頃に』

――ピピピピッ、ピピピピッ

部屋に響く電子音。私は、自分の体温でぬくぬくした掛け布団の中から、それを聞いた。

「眠い……」

できることなら、いつまでも心地よくまどろんでいたかったが。

――ピピピピッ、ピピピピッ

「うる、さい……」

布団の中から、携帯電話を置いてあるはずのサイドテーブルへ手を伸ばす。とりあえず、うるさい目覚まし機能を止めよう。外気に手が触れる。季節は六月。暖かくなり、春というよりは夏に近い季節とはいえ、朝はまだ寒い。

「あれ、無い……」

がさがさとしばらくテーブルの上をまさぐる。そうしている間にも、眠気は徐々に抜けていってしまう。

ようやく手が触れた、と思ったら、ごんっ、と鈍い音を立てて落ちてしまった。もういいや。放っておこう。

……眠。

――ピピピピッ、ピピピピッ

「……はいはい、起きればいいんでしょ？」

諦めて、布団から出る。憎き携帯電話は、律儀に健気に電子音を……私を惰眠から引き剥がさんと労働を続けていた。

――ピピ、

電源ボタンを押し、アラームを切る。ついでに時間を見る。午前七時ちょっと。いつもどおりだ。

「あ～～……」

姿見が、そこに映る私の姿が見える。ぼさぼさの栗色の髪の毛。眠気にしょぼしょぼする目。だらしなく半開きの唇。

「……顔、洗おっと」

面倒だけど……

洗顔し、肩に掛かるくらいの髪の毛に櫛を通す。前髪だけを適当にクリップで留め、朝の準備は終了……ではない。

――かちゃかちゃ

卵をボウルに割り入れ、かき混ぜる。最初は卵の殻が入ったり、飛び散ったり、ロクなことにならなかったけど、今では手馴れたものだ。二年もやっていれば、自然と上達する。

フライパンに流し、形を整える。フライ返しでひっくり返し、オムレツのような、卵焼きのようなものが出来上がる。皿に載せ、ご飯と共にからっぽの食卓の上に運ぶ。

「いただきます」

返事は無い。会話も無い。ただ一人、黙々と箸を動かし、口に入れる。食事というよりは、栄養補給と言ったほうがふさわしいかもしれない。いつものことだけど。

「ごちそうさま」

流しで皿を洗う。一人分の食器なんて、洗うのに二分も掛からない。

「行ってきます」

ランドセルを背負い、鍵をかけてから家を出る。返事は無い。これもいつものことだ。

一人で起き、一人で身支度を整え、一人で食事をし、一人で学校へ行く。

全く持って、いつもどおりの私……高町なのはの朝だった。

『　私の家族　三年二組　高町なのは　』

私のシャープペンシルは、四百字詰めの原稿用紙にそれだけを書き、机の上に転がっていた。

静まり返った教室からは、鉛筆やシャープペンシルが原稿用紙のマスを埋める音がひっきりなしに聞こえてくる。

はぁ……

ため息をつき、頬杖を突く。もう作文なんて書いている気分では無かった。なにせ、タイトルがタイトルだ。私の、最も触れられたくな

い、自分でも考えたくも無い話題。
『将来の夢』とかだったら、適当に書いてさっさと終わらせるのになぁ……
「高町さん、授業中よ」
担任の女性教師に注意された。
「……はい、すみません」
面倒くさいが、書いているポーズだけは取っておかないとな……
青い志に燃える教師は、私の原稿用紙を手に取り、驚いたような顔をした。
「あら……何も書いていないの？　ダメよ、ちゃんと半分は書かないと」
「……はい、すみません」
書きたくないんです、とは言わない。あくまで私は作文が苦手なんです、とアピールする。だが教師は、いらぬアドバイスをしてきた。
「例えば、お父さんの仕事のこととか」
数年前に大怪我をして、今も病院に入院しています。
「お母さんのご飯が美味しい、とか」
父さんのお世話と経営する喫茶店が忙しいので、私が自分で作っています。
「兄妹とどんなことをして遊んだ、とか」
兄さんも姉さんも店の手伝いが忙しくて、数日に一度しか顔を合わせていません。
「家族で遊園地に行ったとか……そういうの、あるでしょう？」
『あるでしょう？』
まるで、あって当然、無いのはおかしいとでも言いたそうな言い草。頭に、カッと血が上っていき……くすくす、と教師に叱られる私を嘲笑するクラスメイトの声に……
ぶちっ、と、何かが私の中で切れた。
「――――うるさいっ!!!」
教室中の視線が、私に集まった。
「た、たかまち、さん？」

呆けたような顔で、私を見る。
「……ッ！」
机の中の教科書を、ノートを、筆箱を、投げつけるようにランドセルの中に放り込む。椅子を蹴立てて立ち上がり……机の上の原稿用紙を、びりびりに破り捨て、教室を飛び出した。後ろから、誰かが私を呼び止めるような声が聞こえたが、聞こえないフリをした。
「はぁ……」
怒りを消費して残ったのは、虚しさと、面倒くささだけだった。教室を飛び出し、教師を撒いたまではいいが、どうせ月曜日にはまた顔を合わせるのだ。今のうちに、言い訳を考えておこう。
「はぁ……」
二度目のため息。携帯電話で時間を確認する。三時間目の授業を脱走したので、まだお昼前だった。
（家、帰りたくないなぁ……）
広い家。父さんと母さんが、家族みんなで住むために買った家。でも、誰もいない家。
家に向かっていた足は動くのをやめ……くるっと反転した。
何度も通った道を通り、目的の場所に向かう。
『海鳴市立図書館』。それなりに新しく、小奇麗な外観の図書館だ。
入り口で、カウンターのお姉さんに怪訝そうな顔をされた。ほぼ毎日通っていれば、顔も名前も覚える。楠美穂さん、だった気がする。
「あら、高町さん」
「こんにちは、美穂さん」
「こんな時間に来て……学校は？」
柔和な笑みで聞かれた。先生を怒鳴りつけて飛び出してきました……なんて、言える筈も無く。
「……体調が悪くて早退したんですが、歩いていたら治ったので」
我ながら、ひどい言い訳だ。明らかに嘘だと見抜かれる。
「あら、そうなの」
だが、美穂さんは何も言わなかった。何かを見透かされているようで、少しムッとしたが、何とかそれを顔に出さずに済んだ。適当な数

冊の手に取り、閲覧スペースに向かう。
名探偵が事件を解決し、全裸のマラソン男が親友と抱擁し、一人称が我輩の猫が浴槽に水没した頃。
「高町さん、閉館よ」
美穂さんが私の肩を叩いた。
壁の時計を見れば、午後の五時を回っていた。席を立ち、本を書架に戻す。美穂さんに見送られ、夕焼けの中に足を踏み出した。公園の近くを通る。丁度、そういう時間帯なのか、親が子供を迎えに来ていた。
――あ、お母さん
――そろそろご飯よ。帰りましょう？
――うんっ！
聞こえてくるのは、楽しげな家族の会話。
「……っく」
鼻の奥がツンとする。考えるな。考えたらダメだ。
あんな小さい子供に嫉妬するなんて、みっともないにも程がある。でも、駄目だった。
――何で私には、御飯を作ってくれるお母さんがいないんだろう。
――何で私には、キャッチボールをしてくれるお父さんがいないんだろう。
――何で私には、一緒に遊んでくれるお兄ちゃんとお姉ちゃんがいないんだろう。
「……」
ぎゅっと目を瞑り、駆け出した。あれ以上、見ていたくなかった。妬ましさでごっちゃになった頭のまま、走り出した。目を瞑りながら走ったら危ない。そんな当たり前のことさえ、考えていられなかった。
どんっ。
そして案の定、誰かにぶつかった。べた、と尻餅をついてしまう。
「お、悪い。大丈夫か？」
ぶつかった――多分、高校生くらいのお兄さん――は、私の両脇に

手を差し入れて立ち上がらせた。
「……すみません。ぼうっとしていました」
　できるだけ目を合わせないようにしながら、頭を下げる。服についた土ぼこりを払い、頭を下げる。
「そうか。気をつけてな」
「はい、すみませんでした」
　これは、ほんの偶然。私と、この見知らぬお兄さんとの、互いの長い人生で唯一の邂逅……だったはず。
『誰か、僕の声が聞こえますか？』
　――でも、違ったんだ。
「……何、今の？」
「……君も聞こえたか？」
　辺りを見回すが、他の人達は何も聞こえていなかったらしく、すたすたと歩いていく。
『誰か、僕の声が聞こえますか？』
「まただ」
　お兄さんが言ったとおり、また聞こえた。
「あっちの雑木林から、みたい」
　最初は普通に歩き、次第に早足になり、とうとう全力疾走した。
　何がこんなに私を駆り立てるのかは分からない。分からないが……何かが私を待っている。そんな気がした。
「……あそこ！」
　そして、見つけた。雑木林の、割と開けた場所。
「ん？　……何だこれ」
　お兄さんが抱き上げたのは、黄色と茶色の毛並みの……
「フェレットですよ」
　そう、フェレットだった。
「怪我はしてないけど……弱ってるな」
　このあたりの地図を頭に思い描く。たしか、少し先に四階建ての大きな動物病院があったはず。私は、お兄さんを先導して歩き出した。
「衰弱していますが、命に別状はありませんよ」

優しそうなお爺さんは、聴診器を外し、そう言った。それはよかった。確かによかったのだが……別の問題が発生した。
私は、小学生だ。お小遣いは年相応の金額しか貰っていない。こんな立派な病院の診察料を払えるのだろうか……。私はお財布を取り出し、金額を確認した。千五百円。ペットの診察料がいくらなのかは知らないが、きっと足りないだろう。
ぽんぽん、と肩を叩かれ、身体をびくっと跳ねさせてしまった。
「な、なんですか？」
「待合室にいろってさ」
「……はい」
お財布をポケットに仕舞い、お兄さんの後についていく。
待合室のソファはふかふかで、とてもすわり心地がいい。
「飲みなよ」
お兄さんが、そこの自動販売機で買ってきたらしいジュースをくれた。
「お金、払います」
「子供は気にしないでいい」
「……では、ありがたく」
こくこく。ミルクティーの甘さが口いっぱいに広がる。お兄さんはブラックコーヒーを買ったらしい。よくあんな苦いの飲めるなぁ……以前、冒険して飲んでみたことがあるがのだが……あれは、ありえない。
早々に飲み終えたらしいお兄さんは、がきょっ、とスチール缶をひねり潰した。男の人って、力持ちなんだなぁ……
「そういえば」
「はい？」
お兄さんは手持ち無沙汰になったのか、私に話しかけてきた。
「君、名前は？」
……あー、全然気にしてなかった。
「高町なのは、です」
お兄さんは、にっこりと笑った。どこか子供っぽい、無邪気な笑顔

だった。
「俺は吾妻秀人。よろしく、高町さん」
「はい、吾妻さん。よろしくお願いします」

翌日。
職員室で、昨日の件を教師に謝罪し、反省の（嘘）意を示すことで、どうにかこうにか、保護者への連絡は防げた。教師なんて、こちらが下手に出て折れるポーズを取ってさえいれば、実にチョロい人種だ。
……が、私にも、苦手な類の人間がいる。
「あっ、高町じゃーん？」
廊下の曲がり角で、あからさまな嘲笑を湛え、行く手を遮る複数の女子生徒。中心にいるのは、腕を組み、取り巻きを数人従えた、女王気分を醸し出す……ええっと、名前なんだっけ。
「……あの、通れないんだけど」
「えーなにー？　きこえなーい」「もっと大きい声でしゃべったらぁ？」「そうそう、昨日みたいにー」「きゃはははは！」
……ああ、そうか。昨日のアレが、私を虐げる大義名分になっているのか。
もし、教師に見とがめられても、昨日の私の行動を盾にすることで追及から逃れることが出来る。そういう腹だろう。
正直、腹が立つけど……そういう過敏な反応は、格好の餌になってしまう。だから、こういうときの最適な行動は……
「ごめん、名前なんだっけ？」
……相手を、とことんイラつかせてやればいい。
「……！」
所詮は、子供だ。肩口に、どん、という衝撃。感情任せに、私を突き飛ばした。
「……おっ、と」
ぺたん、と、わざとらしく廊下にしりもちをつく。
「いたい……」
もちろん嘘だ。けど、このまま座り込んでさえいれば、相手は手出

しができなくなる。この場面を見られては、さすがに言い逃れができないだろう。そろそろ、始業時間だ。こいつらも、教室へ向かわなければならなくなる。
「……！　調子乗ってるんじゃないわよ！　テンコーセー!!」
――転校生。

……私も、別にクラスメイトの名前を覚えたくなくて、覚えていないわけじゃない
（八割くらいはそうだけど）。
私は、ほんの一年ほど前に私立学校からこの公立学校へ転校してきた転校生だ。
その、『有名私立出身』ということが、彼女らにとってはやっかみの対象になるらしい。
「いこっ！」「ほんと、イヤミだよね」「元の学校に帰ればいいのに……」
くだらない。
私に自己満足を押し付ける教師も。つまらないやっかみを向けてくるクラスメイトも。見て見ぬふりをする同級生たちも。くだらない。くだらない。くだらない。
「くだらない……!!」
――皆、大嫌い。
……くそつまらない学校が終わり、私は帰路についていた。途中で寄るのは、フェレットを預けている動物病院だ。ええっと……、あ、いた。
「吾妻さん」
「ああ、高町さん。待ってたよ」
入り口付近で柱にもたれて、吾妻さんが手を振る。最近は、こうして待ち合わせをして、一緒に病院へ入るようになっていた。最初は別行動だったのが、よく遭遇するようになって、それなら、と私が提案したことだ。
獣医さんから、容体が安定して、回復状態になっていること。あと数日で退院できることを伝えられ、ひとまず安堵。吾妻さんが、ここ

最近の治療費を支払う傍ら、ソファに座って待つ。
「つ、……？」
ずきん、と、肩口に鈍い痛みが走る。突き飛ばされたとき、ほとんど無防備だったから、変な打ち方をしてしまったのだろう。
（……痣さえ残ってれば、証拠にできたんだけどなぁ）
この様子では、別に内出血も無いだろう。とても残念だ。
「お待たせ」
「あ、いえ……、」
立ち上がるとき、また、ずきん、と痛みが走り……つい、顔をしかめてしまった。
「？　……どうかしたのか？」
……気取られてしまった。でも別に、迷惑をかける程のことでもない。
「なんでもないですよ」
愛想笑いをして、何でもない風を装う。これで、これ以上は追及してはこないだろう。
笑顔は、こうした人の遠ざけ方に使えるときもあるから便利だ。
「……肩だな。上腕靭帯」
へ？　と思った矢先。大きな手が、私の肩を掴んで、僅かに握るような動作を見せた。
「え、あ、何をあの、」
ぎゅ、という圧迫感。
「痛っ……、……く、ない？」
……それが引くと、動かすたびに痛かった肩が、とても楽になっていた。
「……あの、ありがとうございます……」
ひとまず、お礼だ。どういうことかは分からないけど、これ以上ひどくなることはなさそうだ。
「……虐められてるのか？」
「――、」
鋭い……というか、ちょっと無神経な人じゃないだろうか。面と向

かって。
「違います。些細なことです」
「何が些細なもんか。痛いんだろ？」
「……だから、……なんでも、無いですってば」
　これは、……なんだろう、この感情は。
　怒り？　苛立ち？　……違う。これは。
「……いじめられてなんか、いませんっ！」
　これは……『悔しい』、の感情だ。
「私は、誰ともトラブルになんてなっていません！　誰にも関わっていません！　あんな連中……あんな子供の遊び程度に、何も感じてなんかいませんっ！」
　同情されるなんてまっぴらごめんだ。
「……今日は帰ります。さようなら」
　ざわつく心を押さえつけ、踵を返す。
「……ちょっと待った」
　……もう、思い通りに動かない人だなぁ！
「なんですか！」
「……きみは、どうしたい？」
　どうする、って……
「そんなこと、どうだっていいじゃないですか。他人の問題でしょう」
「どうしたい？」
「だ、だから……！」
　話を聞いているの!?　だから、何度も言っているでしょう！
「わ、私、は……！」
　――なら、どうして声が震える。どうして、視界が滲む。
「わたしは、……！」
　くそ、くそくそくそ。
「やりかえしたい、とか、どうにかしてほしい、とか……そういうのじゃ、なくて……そういうのじゃ、ぜんぜん、なくって！」
　どうして、誰かに本音を言う。何にもいいことなんてない。感情も、本音も、全部ぜんぶ、自分の内にしまっておくのが、『賢い生き方』

というものなのに……！

「――――私は、何が相手でも、屈したくないんです！」

――――どくん。

心臓の鼓動が、何か別の鼓動と、連動したような錯覚を覚えた。

「……」

吾妻さんは……いいや、見るまでも無い。子供の癇癪なんてぶつけられて、真摯に向き合うような出来た人間なんて、そんな馬鹿真面目な人間なんて、フィクションの世界以外にいるわけがない。

「……よし、任せろ！」

……。ば、ば……――――馬鹿がいた……!!

翌日。平穏な一日の終わり際。帰り道。

「あっれー、高町さんじゃん」

……待ち構えていたように、例の……ええっと、名前知らないけどナントカさんが、立ちはだかった。校内で好きにできないとみて、校外で攻撃を仕掛けてきた。

「……」

いつもなら、過ぎ去るのを適当に待つか、やり過ごしていた。でも、今日は……

――ぎゅ。

手に、力を込める。昨日の……吾妻さんの言葉を脳内で再生しながら、行動に移る。

――――『んじゃ、まずは……拳の作り方からだな』

平手から……掌の、指の付け根に最も近い、手相で言う『感情線』に沿うように、小指から握っていく。

――――『荒事に不慣れなら、相手の目は見なくてもいい。ネ

クタイの結び目……のど元に注視するんだ。ビビっちまいそうなら、今までの事を思い出しながら、大きく息を吸え』

意地の悪い顔は、見ない。深く、静かに、深呼吸。……聞こえよがしに嫌味を言われたこと（本読んでてあんまり聞こえなかった）、通りざまに足を引っ掛けられたこと（普通に避けた）。掃除を私一人に押し付けたこと（私もやらなかったから全員怒られた）、突き飛ばされたこと（少し痛かった）。

足の震えが、止まる。

――『集団なら、何を置いても、まずはリーダーを狙え。だいたいこれで、集団はバラけた個に成り下がる』

「な……何よ、ちょ、ちょっと……！」

ずかずかと、大股に、不意打ちで距離を詰めて……顔の中心。

――『良心の呵責は一度忘れて、――鼻を思いっきりブン殴れ』

ぶん殴る!!

――べしぃっ!!

「ぶぁっ、!?」

「ちょ……カナ!?」「ひぃ……！」

よし！　鼻血は出ていないから証拠は残らない！　次は……

――『次は、目をブン殴れ』

メガネはしていないから、安心だ！　くらえ!!

――ばちぃっ!!

「ぎぁ……!!」

「ちょっと……なんてこと」「いやぁぁあ……」「おかしいんじゃないの!?」

――『これで九割の奴は戦意を失う。あとは、止められても何しても、とにかく、リーダーだけを派手な動きで徹底的にボコボコにしろ。泣いても許すな。とにかくボコれ。統制のとれてない集団なんか、結局は自分の身しか大事にしないから』

とにかく、拳で！　頭を！　顔を！　肩を！　腹を！　背中を！　殴って！　殴って！　殴って！　うずくまったら蹴飛ばして！　く

そ、掴まれた袖が破れた！　髪の毛が引っ張られた！　構わない！
知るか！　思い知れ！　思い知れ！　思い知れぇぇぇぇぇぇぇぇ!!
「ご、ごめんなさい……！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!　ごめんなさいいいいいいっ!!　もうやめてぇぇぇぇぇぇっ!!　痛いのぉおおおおっ!!」
――『詫びを入れてきたら、一度手を止めろ』
はー。はー。つ、疲れた……でも、もう一息だ。
携帯電話を、取り出して……――。
「……じゃあ、言え。『私は、高町さんを虐めていました。』ほら」
「わ、わたしたちは……やってないし」「そうだよ……カナちゃんが悪いんじゃん……」
――『過失が自分の側にある、って証拠を、どんな形でもいいから残せ。取り巻きは責任逃れをするけど、全員分な。逆らうならボコれ』
「甘ったれるな！」
前蹴り喰らえ！
――どすっ！
「うぐっ……!!」「……！」
よし……場の空気を、完全に支配している。
「――二度目は無いよ。……さっさとしてくれるかな？　それとも……」
――『あとは、一番ダメージがでかいやつを死体蹴りをして、示威行為だ』
カナなんとかさんのわき腹を蹴飛ばす。
「……おまえたちも、こうなりたいの？」

録音終了。
四人、全員分の言質を取ったぞ！
「……で、その怪我はどうしたんだっけ？」
――『口止めと、口裏合わせを忘れないこと』
顎で促すと、取り巻きの一人が恐れおののきながら……

「わ、わたしたちが、ささいなことで、喧嘩をしました……高町さんは、ここには、いませんでした……」
「で？」
「わたしたちは、ふだん、高町さんを、いじめていました……カナちゃんと、みぃちゃんと、ともちゃんと、わたしの、四人です……」
――――――勝った。
「それじゃあ、皆……『また明日』ね？」
「……！　は、はい」
――――――『意味深に笑顔で挨拶をして、パーフェクトだ』
――――――『これぞ、『ガキの喧嘩・必勝法』だ！』

るんたった。
るんたった。
あは。
あはは。
あははは。
「あはははは！　あーっはっはっは!!　ざまぁあああああああああああ!!!!」
気分、サイッコー!!
破れた服も、乱れた髪も気にしなーい!!
「吾妻さーん！」
携帯電話を、勲章みたいに掲げて、待っていてくれた吾妻さんに駆け寄った!!

「……マジで」
吾妻さんは、心底驚いている。教えてくれた本人に、最大限の戦果を報告することができて、本当に良かった。
「はいっ！　ボッコボコにしてやりました！　あっでも、鼻血も青タンも残しませんでしたよ！　服も持ち物も、一つも破壊していません！　だから完璧です！」

「しょ、証拠隠滅のことは教えて無かったんだけどな……？」
「自分で、自分のやりたいことを、ちゃんと考えました！」
あの子らにもプライドってなものがあるだろう。まさか、「普段いじめているクラスの地味子に泣かされました」なんて、言わない確率が高い。
……ふぅ。ようやく、高ぶった気持ちが落ち着いてきた。
「……あの、ありがとうございました。おかげで、サッパリしました」
これで……また、一人きりの静かな生活に戻れる。
「そうか。ちゃんと役立ったのなら、何よりだよ」
ぐしゃ、と、少し乱暴気味に、私の頭を撫でてくれる。
「ちょっとやりすぎだから、これはお仕置きだ」
わしわしわし、と、頭をもみくちゃにされる。
「わ、わ、わ……!!」
ぱっ、と手を離し……今度は、優しそうに笑った。
「――頑張ったな、高町さん。よく頑張った」
その笑顔は、最近ではめっきり見なくなった父親の笑顔に、どこか……似ていて。
「――――なのは、です」
だから、だろうか。
「え？」
父親に似た男の人に、名前を呼んで欲しい。そんな、馬鹿げた我侭を考えてしまった。
断ってくれるなら、それでもよかった。でも。
「なのは、って、呼んで、下さい……」
声は期待に震え、途切れ途切れになってしまう。いつもの癖で、下を向いてしまう。
呆れているだろうか。馴れ馴れしいと思われているだろうか。鬱陶しく感じているだろうか。ごちゃごちゃとネガティブな予想で頭が埋め尽くされる。
「あのっ、嫌なら、別に高町でも……！」
ぽん、と軽く頭に手を載せられた。顔を上げる。秀人さんは、にっ

こりと微笑んでいた。
「よくやったな。よく頑張ったな――なのは」
「あ……」
じわっ。視界が、水滴を垂らされたように滲んだ。
なのは。
確かに、そう呼んでくれた。名前で、呼んでくれた。
「うっ……うぅ……！」
唇をかみ締めても、駄目だった。
「え⁉　何で泣くの⁉」
秀人さんは、あたふたと慌てている。泣き止まないと。涙を止めないと。そんな気持ちとは裏腹に、涙腺が壊れてしまったようにぼたぼたと涙が溢れてくる。
しゃくりあげ、鼻まで垂らして……
「な、泣くな……ほら、よしよし」
それは、泣いている子供を落ち着かせるための行動だったのだろう。意外に大きな手で……優しく、頭を撫でられた。
ああ、暖かい。人の体温は、何でこんなにも温かくて、心が落ち着くんだろう。
「落ち着いたか？」
「……はい」
……恥ずかしい。とてつもなく、恥ずかしい。すっきりしたにはした。だが、今は恥ずかしさが多分を絞めている。穴があったら入りたい！
「いや……まさか泣くとは思わなかった」
秀人さんの上着には、紺色の生地のおかげで目立たないが……明らかに、私の鼻水がついていた。
「はいティッシュ」
「ありがとうございます」
ちーん、と鼻をかみ、屑籠に捨てる。
「……理由、聞かないんですか？」
名前を呼んで、頭を撫でたらいきなり泣き出したのだ。訳が分から

ないだろう。
だというのに、秀人さんは何も聞いてこない。
「言いたくないだろ？」
「……ええ、できれば」
「なら聞かないよ」
優しい人だ。
「吾妻さん、窓口までお越しください」
その時、職員らしき女性が秀人さんの苗字を呼んだ。
「おっと、」
ひょいっと軽い動作で立ち上がり、同時に、私の頭の上から温かさが消えた。
「あ……」
温もりが消えてしまった。じわじわと喪失感が胸を締め付ける。もっと、撫でて欲しかったな……と、自分があまりにも子供っぽいことを考えていることが猛烈に恥ずかしくなり、首をぶんぶん振った。

外はもう暗く、満月と街灯が灯っている。もう子供一人で帰るには遅すぎるということで、秀人さんが送ってくれていた。どうせ予定も無いし、とのことだが、明らかに迷惑をかけている。申し訳なくて、いつもより俯き加減が気持ち十パーセント増しだ。……私は何を考えているんだろう。
ぶつくさ考えながら歩いていたら、道路の段差に躓いた。
「わっ、きゃっ」
転ぶ！　ぎゅっと目を瞑り、咄嗟に顔を庇う。だが、いつまで経っても衝撃も痛みもやってこない。不思議に思い目を開けると、私の胴体に回された腕が目に入った。
秀人さんが、私を支えていた。
「普段、使わない筋肉を使ったんだ。今晩と明日は、筋肉痛を覚悟するといい」
「す、すみません！」
ぺこぺこと頭を下げる。ああ、もう。私は。高町なのはは、もっと

しっかりした子じゃなかったの!?
「ほら」
秀人さんが、開いた手を差し出してきた。掌を見るが、何も乗っていない。
「……？」
よく意味が分からなくて、首をかしげる。
秀人さんは、『しょうがないなあ』とでも言いたげに、私の手をそのまま握った。私の手をそのまま握った！
「え、あう……」
じわ～っと温もりが伝わってくる。
「転ぶと危ないから」
「……はい」
うわぁ……多分、私ものすごく顔真っ赤になってる……
少し寒いくらいの気温なのに、私の周りだけ春になったように温かい。憧れていた。実は、父さんか兄さんに手を引いてもらうの、すっごく憧れていた。
ああ、幸せ。
だが、幸せな時間というのは、経過するのが非常に早く感じるもので。
「……ここ、です」
私は、豆電球一つとして灯っていない、真っ暗な家の前に着いてしまった。表札に並べて書かれた家族の名前が空々しい。
ぽかぽかしていた身体が、一気に冷たくなっていく。さび付いたロボットのように、間接がぎしぎし軋む錯覚。
「ここか？　でも、誰もいない……あ」
秀人さんは、申し訳無さそうに目を逸らした。
あ～あ、気付かれちゃった。勘のいい人だなぁ。
「そうですよ。ここが、私の家です。私と父さんと母さんと兄さんと姉さんが暮らすはずだった、広～いおうちです。……真っ暗でしょう？　ふふっ」
……言うな。もうそれ以上、言うな。

「別に、死んじゃったわけじゃないですよ。みんな生きてます。でも、父さんは数年前から病院で、目を覚ましません。母さんは喫茶店の経営で、毎日朝早くから夜遅くまで働いています。兄さんと姉さんはそのお手伝いです。私が起きる頃にはお店で仕込みをしていて、私が寝てしばらくしてからヘトヘトになって帰ってきます」

口が心と直結してしまったように、べらべらと情報を垂れ流しにする。

「おかげで、翠屋はあの大通りで一番人気のお店になったんです。すごいでしょう？

テレビの取材まで来たんですよ。美人の店主に、その子供達。あはは、話題性抜群ですよね！」

「もういい」

そうだ。もう、話さなくていい。秀人さんが困ってる。

「リポーターのお姉さんが、母さんの作ったサンドイッチとケーキを食べて、『美味しい、美味しい』って、馬鹿みたいに繰り返すんです。わ、私は……それ、それを……それを」

「もういい」

そんな言葉も、耳に入らない。

「だ、だれもいないおうちで、自分で作ったご飯を食べながら……テレビで見ていたんです。母さん、お母さんが、知らない人に……！　なのは、お母さんが作った食べ物、なんて、何年も食べてないのに、テレビのお姉さんが、それ、食べてて……！」

「もう、いい」

「なのはだって、お母さんのご飯が食べたいのに、家族みんなで、食べたいのに、でも、そうしたら、お母さん、困っちゃうから、なのはは、『いい子』じゃないと、『手のかからない子』じゃないと、いけないからぁぁ……!!」

「もう、いい」

全身が、温かい。秀人さんが。力いっぱい、私を抱きしめてくれている。

「寂しいなら、そう訴えればいい。我侭を言って、泣けばいい。それ

は、子供の特権だ。そんなこと、求めて当然なんだ。無理に自分の心を殺してまで、我慢しなくてもいい」
今度こそ、心の堰は崩壊した。
「もう、嫌だ！」
封印していた我侭が、本音が、叫び声になって喉を枯らす。私の心を覆っていた外殻が、破壊された瞬間だった。
「もう、寂しいのは嫌だ！　一人ぼっちは嫌だ！
『行ってきます』って言ったら、『いってらっしゃい』って言ってほしい！
『ただいま』って言ったら、『お帰りなさい』って言ってほしい！
一人でご飯を食べるのは嫌だ！　もっとお話がしたい！　テストで百点取ったら褒めてよ！　誕生日にお祝いしてよ！　もっとなのはに構ってよ！」
人目も憚らず、泣き叫ぶ、何年分も泣いて、泣いて、泣き疲れて……
秀人さんはその間、ずっと私を抱きしめてくれていた。
「……ん」
目を覚ましたとき、私は、見知らぬ天井を仰いでいた。
身体を起こし、部屋の全体を眺める。広さは、大体八畳くらい。オートバイが表紙を飾る雑誌や漫画が、その辺に無造作に放ってある。
「ああ、起きた？」
秀人さんだった。私の鼻水が付いてしまった上着を脱ぎ、青いエプロンを着けている。
その手には、暖かな湯気を上げる土鍋があった。
「……ここは？」
まだ少しぼうっとする。あの後、散々泣いてからの記憶が無い。
「俺んち」
「えっ……」
秀人さんの家!?
秀人さんは、雑誌を適当に積み上げ、座卓を空けた。
何で、私が秀人さんの部屋に？　だが、そのことを考えるよりも先

に。
ぐうううううぅ〜〜。
お腹が、盛大に鳴った。そういえば、今日は朝から何も食べてない。給食も食べていない……というか、脱走したのだから当然だ。
「まずは、飯にしよう」
私は、顔を真っ赤にして、首を縦に振った。
はふはふ。
「美味いか？　……まぁ、ちょっとした勝利祝いだ」
秀人さんが、春菊を小鉢に入れて卵を絡めながら聞いてくる。
「美味しいです！」
お腹ペコペコ。それに加え、誰かと囲む鍋だ。美味しくないわけがない。お肉が、豆腐が、白滝が、つくねが、見る見るうちに減っていく。
「ごちそうさまでした」
いつもだったら、独り言になるその言葉。でも、今日は。
「お粗末様でした」
ちゃんと、返事をしてくれる人がいる。それが、泣きたくなるほど幸せだった。でも、帰らないと。ここは、他人の家なんだ。いつまでもいたら、邪魔になる。
「そうだ、なのは」
「は、はい？」
不意に秀人さんに呼ばれ、無意識のうちに下を向いていた顔を上げた。
「いま、携帯電話、持ってるか？」
持っている。薄いピンク色の、去年出たばかりの機種。朝起きたら、食卓の上にぽつんと箱ごと置いてあったものだ。……その日は、私の誕生日だった。
アドレス帳には、家族全員のアドレスと電話番号が登録されていた。……着信履歴も、発信履歴もゼロ以外の数字を刻んではいないが。もしかしたら、と、淡い希望とともに持ち歩いている。のろのろと取り出したそれを、秀人さんはぱっと素早く取り上げた。かちか

ち、と微妙に慣れていない動きでボタンを操作し出す。
「ほれ」
突っ返された携帯電話の画面には、『吾妻秀人』の名前と、十一桁の数字。
「これ……」
「俺の番号。ついでにメアドも入れといた」
わたしは、恐る恐る、通話ボタンを押した。
――ピリリリリリッ！
秀人さんのポケットから、恐らくデフォルト設定のままの電子音が響いた。
「はいはいっと……」
ポケットから取り出したのは、シンプルな形の携帯電話。それを、耳に当てた。
「『もしもし』」
目の前と耳元から、二重に聞こえる声。――繋がった。
「……あはっ」
電話が繋がる。そんな当たり前の事が、何故か嬉しくて、可笑しくて。何度も切って、何度も掛けて。電池が切れるまで。何度も。何度も。
「あはははっ！」
誰かとの繋がりが、嬉しくて仕方なかった。
「それで」
秀人さんが表情を引き締めた。……ついに、この瞬間が来た。いくら秀人さんが優しいとはいっても、居座られては迷惑だろう。鞄に手を伸ばす。
だが、出てきた言葉は、あまりにも予想を外れたものだった。
「布団とベッド、どっちで寝たい？」
……へ？
「……いや、今日は帰りたくないだろうと思って」
ぽりぽり、と頬を掻きながら。
「もちろん、嫌だったらいいんだ。また、家まで送るから」

……真っ暗で。冷たくて。寒くて。
そんな家に帰り、また一人ぼっちで寝る？
「……や、です」
昨日までなら、いつも通り、諦めの溜息と共に受け入れていただろう。でも。
「？」
目の前にある、優しい笑顔を、手放したくなかった。
「泊まっていきます」
どもることなく、あっさりとそんな言葉が出た。
「よし、そうと決まれば……」
秀人さんが、『待っていました』とばかりに布団を取り出そうとしていて。
「……なのは？」
不思議そうに、私の顔と……自分の袖を引く私の手を、見た。
「いっしょが、いいです」
言葉の続きを待つように、じっと私の目を見る。
「秀人さん、言ってくれました。『わがままを言うのは、子供の特権だ』って。だから、」
きゅ、と。秀人さんの手を握る。
「だから、わがままを言います」
にっこりと。多分、上手に笑えた。
「秀人さんと、一緒の布団で、寝たいです」
少しだけびっくりしたような秀人さんは、くす、と苦笑し、言った。
「……しょうがないな」
夢を、見た。たわいも無い、日常の夢を。
家には家族がいて。お母さんが朝ごはんを作ってくれて。お父さんは新聞を読みながらそれを待っていて。お兄ちゃんとお姉ちゃんが朝の稽古を終えて、食卓にやってきて。
――みんなで、『いただきます』をする。
そんな、たわいも無く、退屈で、だけど、掛け替えの無い、夢を。
◆◆◆◆

「すー……すー……」
俺……吾妻秀人は、いわゆる腕枕の枕ポジションで、寝入ったなのはの顔を見ていた。
「よし……寝たな。……ふぅ～～～～！」
大きく深呼吸をする。いや……それにしても。
「緊張したぁ……」
いつも通り、素の態度だったとはいえ、こんなに長く他人と話をしたのは久しぶりだ。
俺にしがみ付くようにして眠っているなのは。
この少女を、どうにも放っておけなかった。目……だろうか。本人が気付いているのかどうかは知らないが、常に下向きで、誰とも合わせようとしない。それが、かつての自分を見ているようで、つい、構ってしまった。ああ、分かっている。これが代償行為であるということも。この少女に愛情を注ぐことで、自分の過去を――
「……おとうさん」
引き戻される。腕に感じる僅かな重みに。しがみ付いてくる手の感触に。
「……どうした？　なのは」
ぼんやりとした寝ぼけ眼。どうやら、寝ぼけて俺を父親と間違えているらしい。
「……呼んでみただけ」
そして、また眠る。
今夜だけでも、この子が安心して眠れますように。

――ところでコレ、普通に誘拐罪だよな。

……俺、ヤバくね。

◆◆◆◆

「ん……」

朝、かな。
「んん～……」
いつもより少しだけ硬い布団の中で、伸びをする。
「……ん？」
はた、と目が覚めた。がばっ、と布団を跳ね上げ、起き上がる。
（お……思い出した！）
昨日、秀人さんの家に泊めてもらって、そのまま、そのまま……
『一緒の布団で、寝たいです』
「うわぁ……やっちゃったよ……！」
カーッ、と、顔面にが熱くなる。体中の血が集まっているみたいに。
（でも、腕枕……気持ちよかったなぁ……）
「……えへ」
頬が、緩む。
「あ、おはよう」
台所から、秀人さんが顔をひょいっと覗かせた。不意打ちだった。
「ひゃい!?」
裏返った声で返事をする。
「ちょうど朝ごはんが出来たところだから」
身体には青いエプロン。右手には甘い香りを漂わせるフライパン。左手にはフライ返し。
……やたらとサマになっている。主夫？
「あっ……言ってくれたら、手伝ったのに」
家主を働かせて、客分である自分が惰眠を貪る。明らかに礼を失している。
「いいからいいから。子供は気にしない」
「むー……」
子供って……まあ、確かに否定する要素は無いんだけど。
ちゃぶ台の上に並べられたのは、オムレツ。マカロニサラダ。白米。味噌汁。
和風洋風ごちゃまぜだ。でも、どれも美味しそう。
いそいそと正座する。よく考えてみれば、ちゃぶ台なんて使うの、

初めてだ。
「それじゃ」
秀人さんが、神妙な顔で両手を合わせた。私も真似る。そして。
「「いただきます」」
わ、タイミングぴったりだ！　へへ、嬉しいなあ。
「なのは」
「はい？」
もぐもぐ。食べながら喋る。お行儀が悪いとは思うけど、折角お話ができるのに黙っているのは勿体無い。
「どこか行く予定とかある？」
「いえ、特には」
予定なんて、せいぜい図書館にでも行こうかな、という程度のものだ。
「この後、本でも買いに行こうかと思うんだけど、一緒に来るか？」
私は、少し意外に思った。
「秀人さん、本読むんですか？」
部屋を見た感じ、数冊の雑誌と漫画と新聞くらいしか置いていない。
「んー、まぁな。買って読んだらすぐ売っちまうけど」
買って、読んで、すぐ売る？
「いや、本って結構スペース取るんだよ。大して広くない部屋だから」
「あの、それでしたら……図書館で借りればいいんじゃないでしょうか」
どんな分厚い本でも、貸し出し期限の一週間もあれば読める。しかもタダだ。
「……その発想は無かった」
……えー。
「あら、高町さん。いらっしゃい」
日曜日のお昼。行きつけの図書館に行くと、カウンターで美穂さんが顔を上げて、挨拶をしてきた。白いサマーセーターに、金のネックレス。深窓の令嬢……なんて、何かで読んだ呼称がふっと沸いてき

た。
「あら……そちらは？」
秀人さんを見て、首をかしげる。私が誰かと一緒にいるところなんて、全く無かったから。意外に思われているんだろう。どうせ、友達いないもん……
「ああ、えーと、今日はカードを作りに」
秀人さんは、どことなく上ずった声を出す。案外、人に接するのが苦手なのか……それとも、魅力的な女性相手に緊張しているのか。
……ちょっとイラつくかな？

その日の晩。秀人さんはベッドを背もたれにするようにエッセイのページを捲って、私はその隣で借りてきた長編ＳＦ小説を読んでいた。かち、かち。時計の針が時間を刻む音と。ぱら、ぱら。ページを捲る音。その二つだけが、部屋の空気を支配する。
そこに、ぱたん。という音が加わった。秀人さんが一冊を読み終え、本を閉じた音だ。
「さて、夕飯の準備でもするか」
「あ、私、手伝います！」
数年間、ダテに家事をこなしていない。『子供』発言を撤回させてやろう。
『誰か、僕の声が聞こえますか!?』
その時だった。
昨日聞いた時よりも切羽詰まった声色で、あの声が聞こえた。
「あ、ああ、聞こえてる！」
秀人さんが、初めてその声に返事をした。
『あの時の人！　よ……よかった！　お願いです、今すぐ、僕の所……病院に来て下さい！』
ぱっとイメージが直接、頭の中に浮かんだ。四階建ての、立派な建物。フェレットを預けている動物病院だ。
「どういうことなの？」
私は、声の主に聞いた。事情が全くわからないのだ。

『あれ、二人も!?』
あ、驚いてる。
『はい、実は……って、う、わあああぁ!?』
悲鳴。そして、声がしなくなった。秀人さんがすぐさま立ち上がった。
「……ちょっと行ってくる。なのは、ここで待ってろ」
壁際に置いてあったヘルメットを引っ付かみ、玄関へと走る。
その後ろ姿を見ていたら、何故か不安になった。その後ろ姿が、大怪我をした日の父と重なって見えてしまい……
「私も行きます！　連れていって下さい！」
だから、思わずそう頼んでいた。秀人さんは、何秒か思い悩み……もう一つ、ヘルメットを手にした。
耳元で風が轟々と唸る。自動車とは違い、時速百キロ近い風が直に体にたたき付けられているのだ。サイズが大きく、顎紐で無理やり頭に装着したヘルメットが風を孕み、ばたばたと揺れる。
秀人さんのバイクが、住宅街を疾走していた。
「……ふううっ！」
振り落とされないように、秀人さんの大きな背中に全力でしがみつく。運動は得意ではない。むしろ、大の苦手だ。腕がぷるぷると痙攣するが、弱音を吐いてはいられない。
直角に近い急カーブが目の前に迫る。だけど、秀人さんは全く速度を落とさない。
「きゃあああぁ～！」
有り得ないほど倒し込まれた車体が、横滑りするように直角カーブを通過した。
ギャギャギャッ！　……後輪が地面を掴み損ね、滑る音を聞いた。
心臓がばくばく跳ねている。肝が冷える、とはよく言ったものだ。とはいえ、この先は直線一本。今のようなアクロバティックな動きはしないだろう……
「飛ばすぞ！　掴まれ！」
「へ？」

条件反射的に掴まっておいて、本当に良かった。一直線。それは、最もスピードを出し易い道ということで、少なくとも、このバイクのエンジンには、まだまだ余裕があるわけで……！

――ヴァアアオオオオオン!!

エンジンが、残ったパワーを全て搾り出すような高音を立て……未知の速度へと突き進んでいく！

「ひ、ひいいいいいいいいっ!!」

今度は、真正面からの強烈な風圧に上体が仰け反る。それでもバイクは止まらず、ぐんぐんと。ぐんぐんと空気の壁を押し開いていく。バイクどころか、乗用車にも乗った事が無い（いや、本当に）私にも分かる。この速度は、異常だ！

とりあえず……あの『声』の主、会ったら、絶対に一言文句言ってやるぅー!!

ようやく動物病院に到着したときには、全身の力が抜けかけていた。メーターの横に付いていたデジタル時計を見る。出発してから、数分しか経っていない。これまでの短い人生の中で、最も密度の濃い数分だった。

それにしても……

「……おかしいな」

秀人さんがつぶやいた。そう、おかしい。ここに到着するまで、猫一匹すら見かけなかったのだ。夜とはいえ、午後十時。多少の人通りくらい、あって当然だというのに。

数分という所要時間は、通りに一台も車が走っていなかったからたたき出せたタイムだ。でなければ、街中を時速二百キロ近くで飛ばせるはずがない。

夜空は少し紫がかっていて、圧迫感がある。息苦しい。

――がっしゃあああああん!!

唐突に、頭上で大きな音が聞こえた。

見上げ……無数のガラス片が、きらきらと、スローモーションのように降り注いできた。

（……あ）

――動け、ない。
竦んでしまっている。頭からの命令が、手足に伝わらない。スローモーションのように迫っていたはずのガラス片は、いつの間にかもう目の前にあって。
――温かい何かに、抱き締められた。
「あ、が、あああぁぁッッ!!」
秀人さんが、私に覆いかぶさるようにして……降り注ぐガラス片をその身に受けていた。
「ひ」
口が、最初に動いた。
「ひでと、さん……?」
「うっ……ぐ、ぅ」
呻き声を上げる秀人さんが、私の横にどうっと倒れた。背中には、出来損ないのサボテンように、ガラス片が顔を出している。
「ちょっと、ドジっちゃったな……」
血だらけで、はは、と薄く笑う。
「とにかく……急ごう」
「で、でも、せなか、ささってるよ!?」
秀人さんは……言い表しがたい表情で、言った。
「大丈夫、大丈夫……俺は、そういう風に、できてるから」

笑う膝を叱咤し、階段を秀人さんに続いて駆け上がる。
秀人さんは、最初は辛そうに。でも、十段を登ったあたりから徐々に顔色に赤みが戻り。二階分を走破する頃には、背中に刺さっていたガラス片は抜け落ち、出血も、抉れた肉も、すっかり元通りになっている。さすがに、その異常さは自分でも理解できた。
そして四階。あの声の主はどこに……
――ゴゴン!!
廊下の曲がり角。そこから、飛び出してきたのは……昼間のフェレットと、
「グウウオオオオオオオオオオ!!!」

……形容しづらい、あえて言うなら、巨大な黒い毬藻みたいな化け物が飛び出してきた。
毬藻が、その巨体からは考えられないほど俊敏にゴムボールのように跳ね、モルタルだかコンクリートだかの床に、クレーターを作り出した。
――ボゴォッ!!
衝撃で、フェレットが胸元に飛んできた。間一髪でキャッチすることに成功した。毬藻は、床に半分めり込んで身動きが取れないようだ。
「イマイチ状況が理解できんが……逃げるぞ!」
「はいっ!」
とりあえず、あの毬藻が友好的な存在でないことは確かだった。
秀人さんが殿をつとめ、私はフェレットを胸に抱いて走る。
「ギュルアアアアアアアアアアアアアア!!!」
バゴッ、と、硬いものが砕ける音がした。多分、あの毬藻がその身体を床から無理やり引っこ抜いたんだろう。
「振り向くな! 走れ!」
し、心臓が……破れそう!
「ったく、なんなんだあの毛玉は!?」
「あれは、ジュエルシードの、暴走体です」
……
……
……
……ん?
今の、誰の声?
秀人さんもきょろきょろと辺りを見回している。
「……僕です、僕」
その声は、私の胸元から聞こえてきた。ぎ、ぎ、ぎ。胸元に視線を落とす。
「驚かせてしまって済みません。でも、どうしてもあなたたちの力が必要だったんです」

フェレットが、理知的な瞳で私を見ていた。ぴこぴこ、と短い手を振っている。こんな状況でなければ、思わず顔が緩んでしまいそうな愛らしい仕草だった。
「フェレットが……」「しゃべった……」
……うっそお。
「いきなりこんなことを頼むなんて、無茶苦茶だということは分かっています。でも、こうでもしないと、あの暴走体を止める手立てが……」
ブオッ!!
「伏せろォッ！」
怒鳴られ、言われたとおりに床に身体を投げ出す。
「ギュフッ!!」
あ、フェレット潰しちゃった。
倒れた私の頭上を、凄い勢いで毬藻が飛んでいった。
ドゴォン!!
その先にあった障害物を吹き飛ばし、壁に大穴を開け、毬藻は私達を正面から見据えた。そのらんらんと輝く目が、『逃がさない』と明確に語っていた。
「どうすればいいの……」
こんな怪物から、どうやって逃げれば……
「ゲホッ、方法が、一つだけあります」
フェレットが、少し咳き込みながら、首輪のように括り付けていた『ソレ』を私に差し出してきた。引き込まれそうなほど鮮やかな、真っ赤な宝石。
「これは……？」
「それを、手に持ってください」
心臓が、運動とは別の理由で鼓動する。視界がクリアになっていく。
これは。この感覚は。あの時、このフェレットの元へ向かった時に感じた焦燥感。
ゆっくりと、赤い宝石に手を伸ばし……

「ゴアアアアアアアアアッ!!」
だが、それをいつまでも許すほど毬藻は甘くなかったらしい。無防備になった私に突進してきた。
「し、しまっ……!!」
大きな背中が、私の前に立ちふさがった。
「……空気読みやがれこの毛玉がああああッ!!」
秀人さんが、毬藻を、『受け止めて』いた。踵が床に半ばめり込み、沈み……耐えた。
「な、生身で……!?」
フェレットが、驚愕に目を見開いた。
「おい、フェレット!」
その状態で。秀人さんが言う。
「はいっ!」
「こいつをどうにかするには、俺達の力が必要って言ってたな!?」
ぎり、ぎり、と拮抗が徐々に傾いていく。やはり、化け物たる所以か。徐々に秀人さんを押し切っていく。
「はい、そうです。僕の念話をキャッチできる……魔力を持った人になら、」
秀人さんは、毬藻を抱えたまま、後ろに『跳んだ』。
「グウッ!?」
「おおりゃあああ!!」
不意に抵抗が無くなり、体勢を崩す毬藻。その胴体（一頭身）に足を突っ張り……投げた。オリンピックで見たことがある。巴投げという技だった。
バゴオオン!!
また別の壁を突き破り、勢いのままに吹き飛んでいった。
「今のうちに、早く!」
私は、今度こそしっかりと、赤い宝石を手に取る。
「僕の言うことを、繰り返して!」
「え、えーと、はい」
「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」
赤い宝石が、どくん、と胎動した。
「契約のもと、その力を解き放て」
「契約のもと、その力を解き放て」
どくん、どくん。
――胸が、熱い。
「「風は空に、星は天に」」
心に、言葉が浮かんでくる。
「グオアアア!!」
恐ろしい咆哮が、叩きつけられる。でも、怖くない。
「だりゃあああ!!」
あの大きくて優しい背中が、私を護ってくれている。
それだけで。
「「そして」」
それだけで。
「「「不屈の心はこの胸に！」」」
勇気が、心に満ちてくる！
「どわあああああっ!?」
秀人さんが、壁に空いた穴から、外に放り出された。
だんっ！
飛び出すことに、何の躊躇も覚えない。
「秀人さん！」
空中で、秀人さんを抱きとめる。
「一緒に！」
秀人さんは、最初は虚を突かれたように。でも。
「……ああっ！」
笑って、答えた。
「「この手に魔法（チカラ）を！」」
赤い宝石から、眩い光が溢れる。そう、この子の、名は……！
「「レイジングハート、セットアップ！」」
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔ　ｕｐ』

瞬間……世界が、光で満ち溢れた。
私の身体からは、薄いピンク色の光が。秀人さんの身体からは、空色の光が。
紫色の濁った空を、明るく照らし出す。
「ふ、二人とも、なんて魔力量……！」
『マスター認証を行います』
赤い宝石……レイジングハートが、涼やかな女性の声で話し出した。
『まずは名前を』
「えと……高町なのは、です」
『バリアジャケットの生成を行います』
「ど、どうやって？」
『思い描いてください』
思い描く。バリアジャケット……言葉の響きからして、戦闘服みたいなものだろう。だとしたら、制服？　頭の中に、それを思い浮かべる。今はもう着ることが無い、その制服。
『確認しました』
「へ？」
今のでいいの？　えらくあっさり決めちゃったけど……
『魔法の杖である、私の姿を決定して下さい』
杖……白柄に、金の台座。その中心に、赤い宝石。
『確認しました』
桜色の光が解け、地上にゆっくりと降下した私は……『変身』していた。
「え、え、ええええええええええっ!?」
腕を振り、腰をひねって背中を見て……唖然。先ほど、私がイメージした通りの服を纏っていた。
ザシャッ！
地面に着地した秀人さんが目を剥いている。
「……いつ着替えたんだ？」
「さ、さあ……？」

『アカウントを作成します』
まだ続きがあるようだ。
『使用者、名前を』
「……俺か？」
秀人さんが、不思議そうにレイジングハートを見た。
「マスターはなのはだろ？」
『はい。ですが、起動詠唱の一部を共有し、魔力のパーソナルデータの登録も完了しています。サブ使用者として、機能の一部を使用可能です』
あー、あれね、はいはい、と極めて軽い調子で相槌を打つ。
『名前を』
「、吾妻秀人」
『認証します。プログラムの一部が使用可能になりました。使用可能プログラムを提示します』
ぱっ、ぱっ。象形文字のような、英語の筆記体のような文字が表示される。
その視界の隅。黒い何かが、もぞ、と蠢いた。
「グオオオオオオオオオオオ!!」
秀人さん！
杖を、前に突き出す。同時。
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
レイジングハートから障壁のようなものが展開され、
バチイィッ!!
『ルギャアアアアアアアアッ!?』
毬藻の突進を止めた！
「え……？」
障壁は、ふっと空気に溶けるようにして消えた。
今の、私が？
『グルルルルル……』
警戒のうなり声を上げ、じりじりとゆっくり距離を詰めてくる。近づいてきたら、また今の障壁で防げる。だけど、それではいたちごっ

こだ。こっちからも、なにか攻撃しないと。
「よっし、分かった！」
後ろでモニターと睨めっこしていた秀人さんが、そんな声を上げた。へ？　と振り向く。考えてみればそれは、戦闘中に注意を外すという、自殺行為だった。
『グゴオオオオオオオオ!!』
「あっ……!?」
『Ｉｍｐａｃｔ　！』
レイジングハートが、今度は私が予期しないタイミングで単語を口にした。衝撃、と。
――ドパァン!!
毬藻が、その単語の通り、破裂音を上げた。
秀人さんの突き出した拳の先に、一つの『○』と二つの『□』を組み合わせたような、幾何学的な図形が浮かんでいた。色は、空色。
「これが、魔法ってヤツか？」
秀人さんが、ぷらぷらと手首をスナップさせながら聞いた。
『基礎攻撃魔法・インパクト』
「さっきの、バリアみたいなのも？」
『そうです。基礎防御魔法・プロテクション』
「……すごい威力」
毬藻の身体は、大部分が砕けてあちこちに散らばっている。たったの一撃で、分厚いコンクリートをも砕いた、あの毬藻の身体が。
『いいえ、マスター。魔法の威力そのものは、Ｃ～Ｂランクです。ですが、ヒデトによって込められた魔力はＡＡ相当。それが、威力を底上げしたのです』
わざわざ分かりやすく説明してくれた。もしかして、この子……すごくいい子なんじゃないだろうか。
「今です、封印を！」
階段から降りてきたらしいフェレットが、そんなことを言った。
「封印……？」
その言葉が引き金だったのか。

『Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ』
　レイジングハートに、光り輝く桜色の翼が発生した。
「え、えっと？」
『発動呪文を』
「そんなの知らないよ」
『構いません。あなたの言葉で』
　成り行きを見守っていた秀人さんが、ぽん、と私の肩を叩いた。
「つまり、即興でいいってことらしい」
　そういうことなら。
「……」
　って、そうだった。私、こういう創作が、苦手なんだった。何でもいいと言われたが、だからといっていい加減な呪文はレイジングハートに失礼だし……秀人さんお願い！
「発動呪文の設定・アカウント『吾妻秀人』」
『アカウント確認しました。入力して下さい』
「発動呪文は『不屈の心はこの胸に』」
　それは、あの起動呪文のワンフレーズ。私も、密かに気に入っていた一文だった。
「これでいけるか？」
『問題ありません』
　……よし！
「『不屈の心はこの胸に』！」
　桜色の光の帯が、毬藻を縛り上げていく。そして毬藻の額に、ローマ数字が浮かび上がる。その数字は、２１。
「ジュエルシード、シリアル２１！　……封印！」
『グアアア

気無く吸い込まれた。
「えっと……」
　これで、終わったの？
「やった！　成功だ！」
　フェレットが、全身で喜びを表す。そっか。成功、したんだ。
「「ふぅ～……」」
　気が抜けて、その場に座り込む。全く同じタイミングで、秀人さんもそうした。
「「ぷっ……」」
　そんな些細なことなのに、ひどく可笑しくて。
「あはははははは!!」
　顔を見合わせて、気が済むまで。笑い続けた。
　――遠くから、サイレンが聞こえてくるまで。
「げえっ!?」
　秀人さんが、慌てて周囲を見る。
　穴が空いた壁に、あちこちに散らばるコンクリート。そして、そこにいる私達。どう考えても、怪しい。
「に……逃げるぞ！」
「はいいっ！」
　この年で警察のご厄介になるのは……勘弁！　母さん達に、迷惑がかかっちゃう！
　秀人さんが私にヘルメットを被せ、自分も被り、フェレットの首根っこを掴まえた。
「ぎゅー!?」
　上着のポケットにねじ込まれたフェレットが、変な声を上げたが……逃げることが先決だった。
「なるほどな……」
　秀人さんのアパート。私と秀人さんの前で、フェレットがちょこんとこちらの顔を見上げている。
「つまり、『危険物を運んでいたら事故って落としちゃいました』ってことか」

「仰るとおりです……」
　項垂れる。多分、責任感とか、使命感とか、そういうのがとても強い子なんだろう。
「回収しようにも、今は力を使い果たしてしまいまして……」
　そして、がばっと頭を下げた。人間で言えば、土下座でもしているような感じだろうか。必死さが、伝わってきた。
「お礼は、必ずします！　貯えはありますから、金銭でも、宝石でも……！」
「馬鹿か、お前」
「……え？」
　今の、秀人さん？　横を見る。秀人さんが、とても怖い顔で、フェレットを睨んでいた。
「……はは、確かに、勝手な話でしたね」
　フェレットが諦観したように呟く。けど、私も、秀人さんと同じように、怒っていた。
　なぜなら……
「俺がムカついてんのは、お前が、金を条件に出したことだ」
　そう。真剣にお願いされれば、力を貸すつもりでいた。なのに。
「あのね、ユーノ……くん？」
　怒りが、徐々に悲しさに変わっていく。
「あ……なんですか？」
「もう関わっちゃったから、今更投げ出すことなんてしないよ？」
「ごめん、なさい……」
　うな垂れるユーノくんに、秀人さんが続けた。
「手伝うのはいい。最初からそのつもりだしな。ただ、条件が一つだけ」
「なん……でしょうか？」
「敬語禁止」
「へ？」
「あんま好きじゃないんだよ。なのはもだぞ」
「うん、わかった」

願ったり叶ったりだ。敬語で話すのは、距離があるみたいで寂しいと思っていたところだ。
「というわけだ。わかったな？」
ユーノくんは、少しだけ呆けた様子で黙り……
「……うん、それじゃあ、改めて。名前はユーノ・スクライア。ユーノって呼んで」
私たちの、仲間になった。
二日連続での外泊は流石にまずいだろう、ということで、私は一度家に戻ることにした。
でも、足取りは軽い。
ポケットに手を入れる。かちゃり、という感触を探り、取り出す。真新しい鍵だ。
『来たいときに来ていいから』
そう。帰り際に持たせてくれた、秀人さんのアパートの合い鍵だ。
「なのは？」
肩に乗っているユーノくんが、人がいないことを見計らって声をかけてきた。レイジングハートの細かい調整をするため、しばらくは一緒に行動したい、と彼から申し出てきたのだ。
「なぁに？」
「頼んでおいて言うのもなんだけど、本当にいいの？」
……ふふ。
「大丈夫。だって、一人じゃないもん。ユーノくんもレイジングハートもいる」
『光栄です』
それに何より……
「秀人さんが一緒だもん♪」
家に着いて、まず最初に覚えたのは、違和感。いつもは真っ暗なのに、玄関に明かりが点いている。もしかして。知らず知らずのうちに、早足になる。
誰かが帰ってきている！　おに……ごほん、兄さんかな？　姉さんかな？　それとも、母さんかな？

家の敷地に入る。玄関先にいたのは、黒いＴシャツにジーパン姿の、兄さんだった。
「兄さん！　ただい……」
「こんな遅くまで、どこに行っていた」
――足が、止まった。
久しぶりに見る……大体一週間ぶりの兄さんの顔は、静かな、しかし確かな怒りを浮かべていた。
つかつかと歩いてきて。――ぱしん。……頭を、叩かれた。
『おかえり』と暖かく撫でてくれるのではなく。
冷たく、叩かれた。
「……はは」
不思議、だなぁ……何も、感じないよ。痛さも、哀しさも、何も……
「どれだけ心配したと思ってるんだ」
――この人は何を言っているんだろう。
「学校からも、連絡があった。ここ最近、勝手をしていたそうじゃないか」
無遠慮に私の二の腕を掴む手。
その手が、得体の知れないものに思えて。秀人さんの温もりが消されていくようで。堪らなく、気持ち悪かった。

「母さんも、美由希も、心配していたぞ」

虚無の心に、一片の火花が散る。
「しんぱい……心配、だって……!?　心配!?」
そして、それは……溜め込んで溜め込んで、膨大な量になっていた『怒り』に、引火した。
「――――ふざけないでよ!!」
自分でも驚くほど、大きな声が出た。気持ち悪い手を振り払う。
「『心配してた』!?　いつもいつも放ったらかしの癖に！　こんな時にだけ調子のいい事言わないで！」
さあ、言ってやったぞ。どんな顔をするのだろう。バツの悪そうな

顔だろうか。それとも、顔を真っ赤にして怒るのだろうか。涙ながらに謝るのだろうか。
けれど、そのどれでもなかった。兄さんは。
――何で私が怒るのかわからない。そんな顔をしていた。
（……もう、いいや）
怒りと、失望と、諦観が渦巻く。ああ、本当に、もういいや。
「……レイジングハート」
『Ｙｅｓ，ｍｙ ｍａｓｔｅｒ』
察してくれたらしく、レイジングハートが起動する。本当、いい子だなぁ……
――リンカーコア起動。
私が今、一番やりたいことを……
――術式構築。
誰よりも早く判断して……
――魔力循環。
手伝いまで、してくれるんだから……！
呼吸をするように、『魔法』を組み立てていく。
『ちょ、なのは!?』
ユーノくん、悪いけど静かにしてて。
自分の体から、桜色の魔力光が漏れだす。
『高町恭也』が、驚愕に目を見開いている。
クリアな視界の中……玄関から、『高町桃子』と『高町美由紀』が出て来た。
あぁ、都合がいい。こいつらも、纏めてやっちゃおう。
「なの、は……？」
『高町恭也』が、呆然と私を見ている。
「五月蠅い。五月蠅い。五月蠅い!!　私を気安く名前で呼ぶな！　馴れ馴れしい！」
術式『インパクト』に、拡散効果を付加。
「あんた達なんて……」
『Ｉｍｐａｃｔ　＃２　…　［ｌａｒｇｅ］』

「あんた達なんて！」
掲げた手に、バレーボール大の光が生まれる。それを――
「――――――大ッッッ嫌い!!」
思いっきり、地面に叩き付けた――！
――――――ズドオオオオン！
地面に目掛けて炸裂させた衝撃波は、爆風に変わり、辺り一面に撒き散らされた。
私と同じ、高町という苗字を持つ三人の『他人』が、無様に、呆気なく、吹き飛ばされる。忌ま忌ましい家のドアが外れ、ガラスが割れ、瓦の何割かが無くなっていた。
「……う」
三人の誰かが、呻いた。何の感慨も沸かない。達成感も。高揚感も。罪悪感も。
「秀人さん……秀人さん……」
ただ、無性に、秀人さんの顔が見たくなった。
くるっと振り返り、転がった三人を見下す。そして、告げる。
「さようなら」
決別を。
「お世話には……なってないよね」
レイジングハートが、便利な魔法を教えてくれた。『念話』という、テレパシーみたいなものだ。携帯電話の電池が底をついていた私には、まさにもってこいな魔法だ。
『秀人さん、聞こえてる？』
少し間を置いて、繋がった。
『なのはか？　どうした？　っていうか、これ（念話）、ユーノが使ってた……』
『会いたい』
単刀直入に、切り出した。
『……今、どこにいる？』
ユーノくんがそうしたように、イメージを念話に載せて送る。
『わかった。ちょっと待ってろ』

ぷつん、と切れる感覚。
「……ありがと、レイジングハート」
『問題ありません』
掌に乗せた赤い宝石が、キラリと輝いた。今度、ちゃんとした飾り紐でも買ってあげよう。
「……なのは」
肩に乗ったまま、ずっと黙っていたユーノくんが口を開いた。言われることは、大体想像がつく。
「今回だけだからね」
――魔法を、あんなことに使うのは。
「……ん。わかった」
電柱を背に、夜空を見上げる。
ヴォオン、と、すっかり馴染んだ音が聞こえてきた。
「待ったか？」
ヘルメットから、くぐもった声が聞こえる。
「ううん」
横に引っ掛けてあったもう一つのヘルメットを被る。
「ん」
秀人さんが手を差し出してくる。それを掴み、バイクによじ登った。
「それじゃ、行くか？」
「うん」
私の居場所は、あんな、冷たくて暗い牢獄なんかじゃない。
お日様のように暖かい秀人さんの傍が、私の居場所なんだ。
私はもう、振り返らない。
――これは、小さな出会いの物語。
――平凡とは言い難い小学三年生の私、高町なのはに訪れた、大きな転機。
――渡されたのは、赤い宝石。
――手にしたのは、魔法の力。そして、優しい居場所。
――出会いは偶然か、必然か。

――けれど確かに言えるのは、出会いをくれた友人と、赤い宝石への、ありがとう。

――繋がる絆。そして、ここから始まる物語。

――それは、魔法と日常が並行する日々のスタート。

――開幕。

# 第二話

それから、数日が過ぎた。

とっても悪いことだけど、学校をズル休みして、買い物に出かけた。主に、私の食器とか、衣服とかの生活用品だ。

最初は遠慮しようと思ったけど、秀人さんの『着たきりはちょっと……』との鶴の一声だった。一番の問題だったお金は、秀人さんが負担してくれるそうだ。いくらなんでもそこまで、とは思ったが、秀人さんは聞いてくれなかった。ちょっと、お人よしが過ぎるんじゃないだろうか、この人。

というわけで、私は大通りから一本外れた通りの、こぢんまりとした食器店にいる。一つ一つがすごく丁寧に作られていて、素人目で見てもいい物だということがわかる。その分、値段も市販品に比べて数段上だけど……あ、でも、このマグカップ、星が散りばめられていてすごく綺麗。

「これか？」

横から伸びてきた手に、ひょいっと取られた。

「あ！」

「すみません、これ下さい。あと、これと、これと、これ」

私が目に付けていたマグカップを、お皿を、フォークとスプーンのセットを、レジにいた女性に渡す。ちょ、それ、値段が四桁後半なんですけど!?

「私、そんな高い物じゃなくても……！」

「あ、名前入れてもらえます？　ひらがな三文字で『なのは』」

女性の店主は、笑顔で頷いた。

「秀人さ～ん!?」

「いいからいいから」

「よくな～い！」

「さて、次は服か……」

「あ、こっち！　こっちに服屋あるよ」

右に注意を引き付け、手を引く。確か、この近くに安い衣料品の

チェーン店があったはず。絶対に、右側のデパートなんて見せてはいけない！
第一、私はそんなにおしゃれに興味は無い。気にするのは、せいぜい色と、丈が長いか短いかの違いくらいだ。今着ている服だって、上下共に無地の服だ。
「ごめんね、秀人さん……お金、いっぱい使わせちゃって」
安いとはいっても、十着以上買い込めば、かなりの値段になる。秀人さんが右腕に提げるぱんぱんの袋が、私の罪悪感を否応無しに刺激する。
「いいって。他に使い道も無いし」
秀人さんに手を引かれ、街中を歩く。
そして、大通りに差し掛かり……私は、足を止めた。
「……」
この先には、『あの店』がある。大通りで一番人気の喫茶店で、毎日たくさん人がいて、店主は美人で、店員は……
「なのは」
ハッ、と我に帰る。知らず知らずのうちに、足が止まっていた。
「な、なんでもない、大丈夫……」
でも、動けない。足が地面とくっついてしまったように、この先へ行くことを拒否している。イヤだ。この先に行きたくない。『あいつら』の顔を見たくない。じめじめと気分が悪くなっていく。ダメだ。ダメだ。折角の楽しいお買い物なのに。秀人さんに迷惑をかけてしまう。
「よいしょっと」
そして、次の瞬間、両足が地面から離れた。
「……ふぇっ!?」
突然のことに驚く。
肩車されたことで、視界が一気に高くなった。道行く人たちの何割かが、私に注目する。
「ひ、秀人さん、恥ずかしいよ！」
顔が熱い。きっと、真っ赤になっている。

「うんうん、わかったわかった。じゃ、行くか」
「分かってない～!?」
　あああああ、見ないで、見ないで～!!
　五分ほど肩車のまま歩き……ある場所で、すとんと下ろされた。
「もうっ、ひどいよ～!」
　本気で怒っているわけじゃないけど……恥ずかしかったんだもん。
　そこは、アクセサリーショップのようだった。店内には、髪留め、ブレスレット、ピアスにネックレスと、アクセサリーが所狭しと並んでいる。
　その中に売っていた、シンプルな飾り紐が目に留まる。値段は、手頃。私のお財布の中身とぴったりだ。
「あの、これください」
　すこし派手な格好をしていた女性は、ネックレスをじゃらじゃら鳴らしながら陽気に応じた。
「オウ、お客さん、……、……うん、『待っていたよ』」
　？　……店員さんは、秀人さんを見て、よく意味の分からないことを言った。
（？　……秀人さん、知り合い？）
　念のため、念話で。
（意味深なこと言ってなんか売りつける気だろ）
「ンなことしねーってば」
（（え!?））
　しまった。うっかり口に出てた!?
「あっはっは!　まぁ気にしなさんな!　んで、どれをお求めだい!?」
「あの、この飾り紐を」
　秀人さんが財布を出そうとするのを、抑える。こればっかりは、ね。
「これ、レイジングハートに丁度いいかなって思って。大事なパートナーだし、自分のお金で買ってあげたいの」
「そうか」
　ポケットから、レイジングハートを取り出す。飾り紐のアタッチメントとは、大きさもピッタリ。

「ほら。ぴったりだよレイジングハート」
『ありがとうございます』
首に下げてみる。レイジングハートは相変わらずクールだけど、どことなく喜んでいるようにも見えた。
「似合う似合う」
秀人さんが、頭を撫でてくれた。

――どくん
『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』
「うっ……！」「……何だ？」「……ン」
突然、空気が変わった。この近くから、凄まじい圧迫感が押し寄せてくる。この気配は、そう。あの晩の……！
レイジングハートも、危険を促すように点滅している。
『二人とも！』
ユーノくんから、念話による通信が入った。
「ユーノくん!?　まさか……」
『そう、ジュエルシード暴走体だ！』
予感は、的中した。
「場所は!?」
秀人さんが、道の隅に荷物を置き、聞く。
『そこからまっすぐ！　２００メートル！』
「よっし！　行くぞ、なのは！」
「はいっ！」
秀人さんの後を追い、走り出す。
着いたのは、寂れた神社。
数十段の石段を登り終えた途端、
『グガアアアアアアアアアアッッ!!』
暴走体に、襲い掛かられた。だけど、いつまでも、怯えている私じゃない！
即座に手をかざし、障壁を発生させる。
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』

――バチイッ！
『ギャンッ！』
この障壁には、ぶつかった物を弾き飛ばす効果がある。だから、
「秀人さん！　いくよ！」
暴走体を、秀人さんの目の前に放り出した。
「いっ、せー、のー……！」
既に構えていた秀人さんが、左足を軸に、腰を回転。コマのように腕を振り、身体を大きく捻る。そして、
「せいっ!!」
十二分に威力を高めた回し蹴りを、暴走体に叩き込んだ！
――ズドンッ!!
『ガウウウウウッ!?』
ドガンッ！　と吹き飛ばされた暴走体が、賽銭箱を粉砕した。
「くうっ……硬って～……!!」
秀人さんが足をぷらぷらと振る。
確かに、この前の毬藻と比べて、ぶつかってきた時の衝撃が強かった。
『まずい』
ユーノくんが焦っている。
『まずいって、何が!?』
『今回の暴走体は、実体のある物に取り憑いて暴走している。
だから、この前の……ジュエルシードが単独で暴走しているときよりも、数段』
「厄介ってことだね」
見据える先。賽銭箱の残骸の山から、暴走体が立ち上がっていた。
『グルルルル……』
ジュエルシードが取り憑いているのは多分、犬か何かなんだろう。四足歩行の獣の姿をしている。
でも、回復し切ってはいない。今のうちだ。
飾り紐からレイジングハートを取り出し、天に掲げる。
『それじゃあ、なのは。この前と同じように……』

それを無視し、告げる。
「レイジングハート！　セットアップ！」
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ』
湧き上がる。桜色と、空色の光が。起動したレイジングハートを掴み、戦闘服……バリアジャケットを装着する。
『詠唱抜きって……』
「ん、まあ、変身するたびに長々と唱えてたら隙だらけだからな。レイジングハートに頼んでみたんだ」
空色の魔力光を立ち上らせる秀人さんが、軽い調子で言う。
『ガアアッ！』
「よ、っと」
暴走体の突進を回避する。
「……なんか、大した事無いな」
確かに。動きは直線的だし、突進はバリアを張れば余裕で弾き飛ばせる。
「せいやっ！」
――ドンッ！
『ギャアッ！』
秀人さんの攻撃は、問題なくダメージを与えられている。
けれどそれは、安易な慢心だった。
「おい、なんか……！　速くなってないか?!」
身を屈めて、時に後ろに跳んで攻撃をやり過ごす。でも、段々とその頻度が増してきている。暴走体の動くスピードが、明らかに上がってきているんだ！
「秀人さん、こっちへ！」
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
全方位をドーム状に囲うバリアを展開し、退避する。
「まずいな……」
「うん……」
バリアに時折接触するものの、もう殆ど目で追えないスピードになっている。私は元より、秀人さんでも捕まえられないだろう。

――ガリッ！
「くうっ！」
バリアに鋭い爪が食い込み、一部を削り取る。その度に、術者である私自身にダメージが伝わる。
動きを止めることさえ出来れば……
「ん？」
動きを、止める？
はたと気付く。そうだ、何もわざわざあのスピードに付き合ってやらなくてもいいんじゃないか。頭の中で作戦を、戦術を組む。
「レイジングハート」
以心伝心の頼もしいパートナーは、すぐに答えた。
『確かに可能ですが、マスターの今の力量では、防御との同時展開は難しいでしょう。それに、術式を構築するのに時間が掛かります』
「具体的には？」
『五十二秒』
「うっ……」
長い……！　そんな長時間バリアを解除していたら、術式が完成する前にやられちゃう！
『方法はあります。マスターが術式を構築している間……』
「俺が足止めする、ってとこか」
切り傷が塞がった秀人さんが言う。
「なのは」
私をまっすぐに見据える。
「上手くいくかどうかは、なのはに賭かってる。しくじるなよ」
「はい！」
そうだ。いくら秀人さんが時間を稼いでくれたって、私が失敗したら元も子もない。一回で、必ず成功させるんだ！
「こっちだ、犬コロ！」
秀人さんがバリアから駆け出し、暴走体の注意を引き付ける。
『ガアッ！』
バリアに掛かる負荷が消える。それと同時に、バリアを解除。

「はあっ……」
深呼吸し、目を瞑る。思考の邪魔になる情報は、可能な限りシャットアウトする。この五十二秒に……秀人さんが作ってくれる五十二秒に集中するんだ！
「くっ、この！」
『グルルルル！』
ドスッ、という鈍い音。ざしゅっ、という鋭い音が断続的に聞こえる。
……二十五、二十六、二十七
『ガアアアアアアアッ!!』
気付かれた！
咆哮が間近に迫る。それでも、目を開けない。集中を、絶対に乱さない！
「でええいっ!!」
『ギャアアッ！』
横に逸れ、雑木林をめきめきなぎ倒していく音。
……四十五、四十六、四十七
……五十一、五十二！
『お見事です』
「……よし、やるよ、レイジングハート！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』
足元に、魔方陣を展開。術式選択。
暴走体は、私の背後、上空から飛び掛ってきた。
「……読み通り！」
見えない壁に激突したかのように、暴走体が、空中に静止した！
『グオオオオッ!?』
その四肢は、がっちりと、桜色のリングで拘束されている。
『Ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』
初歩拘束魔法、リングバインド。名の通り、魔力の輪で四肢を締め上げる魔法だ。例によって例のごとく、大目の魔力を注いだ分、従来のものより頑丈になっている。

『ガアッ！　グガアアアッ!!』
暴走体が足掻くが、拘束は硬く、全く抜け出せないでいる。
封印魔法を使うには、このバインドを解除する必要がある。でも、恐れる必要は無い。
この暴走体の加速には、『地面を蹴る』行為がどうしても必要だ。足場が無い空中に放
り出してしてしまえば、あの速度は出せない！
「『不屈の心はこの胸に！』」
暴走体の額に、ローマ数字が浮かび上がる。数は……
「ジュエルシード、シリアル１６！」
『オオオッ！』
暴走体の爪が迫る。レイジングハートの変形は、多分、間に合わない。だから。
「秀人さん！」
「っしゃあ！　レイジングハート！　封印だ！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　．　』
五十二秒のうち、四十七秒はこのために！　封印術式を、初歩攻撃魔法『インパクト』に追加！
『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｉｍｐａｃｔ　！』
「封……印ッッ!!」
――ズドオオオン！
暴走体のどてっ腹に、封印攻撃魔法と……それを纏った拳が、深々と突き刺さった！
『グ……ガハッ』
長い一瞬。そして、
――バシュウウッ……
暴走体の身体が霧散し、痩せた野良犬と、ジュエルシードが転がった。
「くぅ～ん……」
素体にされていた犬も、怪我は無さそう。
「やった……」

レイジングハートに、ジュエルシードが吸い込まれた。
へたり込みそうになるが、気合で耐える。そんなことより！
「秀人さん！　怪我は!?」
駆け寄り……ひ、っと変な息が漏れた。
「秀人さん……その、腕」
震える手で、指差す。
裂傷と表現するのも生温い、深い、無数の切り傷。皮膚をめくり上げ、肉を抉り……一番深い左肩の傷なんて、恐らく骨にまで達しているだろう。今も、どぼどぼと壊れた蛇口のように真っ赤な液体を流している。卒倒しそうになる自分を叱咤し、上着を傷口に押し当てる。黄色の生地が、見る見るうちに赤く染まっていく。抑え切れるはずも無く、ぼたぼたと赤い雫が垂れてくる。
（どうしよう……どうしよう……!!）
病院。救急車。
「……放っておけば治る。俺は……そういう風にできてるから」
いつか聞いた言葉を繰り返し、秀人さんは目を閉じた。
道端に放置していた荷物を回収し家に戻る途中、ユーノくんが合流した。今更な感じがする。まあ、魔力が回復するまでは念話くらいしか使えないらしいし、仕方無いんだけど。
「秀人、なのは！　怪我は無い!?」
「おー、見ての通りだ」
ひらひらと手を振る秀人さん。何でなのかは知らないが、あれだけの傷が短時間で回復してしまったから、確かに無傷だ。私も無傷だが……これは、秀人さんが守ってくれたから。あんな、普通の人なら、一生傷跡や後遺症が残りそうな傷を負いながら。いくら治るとは言っても、痛みが無いわけじゃあないんだろう。ついさっきまで、まるで蝋人形のような顔色をしていた。きっと、私に心配を掛けまいと無理をしていたんだ。
事前に準備できていたら。二つ以上の魔法が同時に使えていたら。……私が、もっと強かったら。秀人さんは、痛い思いをしなくて済んだ。

「レイジングハート」
『はい、マスター』
「私……強くなりたい」
レイジングハートは、はっきりと答えてくれた。
『なれます。あなたなら、誰よりも』
決意を新たに。レイジングハートを、ぎゅっと握り締めた。
「なのは、俺、少し出かけてくる」
食後、使い終わった食器を洗っているときの事だった。秀人さんがヘルメットを手に、出かけていってしまった。どうせなら、一緒に練習したかったなぁ……
まあ、無い物をねだっても仕方が無い。
私は正座し、ちゃぶ台の上に鎮座するレイジングハートと、ユーノくんと向き合った。
「なのは、最初に言っておくね」
ユーノくんが、張り詰めた声で言う。私は、背筋を伸ばしてそれを聞く。
「魔法は、怖い力だ」
それは……ジュエルシードを見れば分かる。あんな化け物が、もし街中に現れたら。どんな被害が出てしまうのかなんて、想像すら出来ない。
「使い方によっては術者の身を滅ぼして……いや、それならまだしも、周囲の人を巻き込む可能性だってある。だから、魔法の指導に、一切の馴れ合いは無しだ。それを……肝に命じておいて」
ごくり、とのどが鳴る。私がやろうとしていることは、危険と隣り合わせの技術なのだ。下手をしたら、ジュエルシードを集め終える前に自滅することだってあるんだ。少し……ううん、すごく怖い。でも……秀人さんの血が、頭にこびりついて離れない。あんな光景を見るのは、もうまっぴらだ。
「ユーノくん、レイジングハート、魔法の練習……いや、特訓、お願いします！」
『お任せ下さい、マスター』

私は、強くなる！

◆　◆　◆　◆

俺は、通りの一角にバイクを停め、ヘルメットを脱いだ。昼間は人でにぎわう大通りも、夜九時を過ぎ、商店がシャッターを閉めると途端に人通りが少なくなる。

「……ここか」

携帯電話のナビは、『目的地に到着しました』と無愛想に沈黙している。

『大通りで一番人気の店』……たったこれだけでヒットするなんてなぁ。

目の前には、一軒の喫茶店。看板には『翠屋』とある。ドアノブには、準備中の看板が掛かっている。最低限の照明を残すのみの店内からは、まだ人の気配がした。

（……居てもらわないと、困るんだけどな）

悩んだ末、俺はノックの代わりに……

――ガンッ！

ドアを蹴りつけることを選んだ。壊れない程度に、思いっきり手加減して。

ノブを捻り、店内にずかずかと足を踏み入れる。

「……申し訳ありませんが、」

モップ片手に近づいてきた男。切れ長の瞳に、長身。こいつは兄貴か。奥でテーブルを雑巾がけしている三つ編み眼鏡は姉だろう。カウンター内を掃いている女、こいつはなのはにソックリだ。多分、母親。

こいつらが……この三人が、あの子をあそこまで追い込んだ元凶。

「お前たちがなのはの肉親か」

「なっ……！」

なのはの兄が、モップを取り落とした。

「……そうみたいだな」

「貴様ッ！」

胸倉を掴み上げられ、壁に押し付けられた。暑っ苦しい……

「きょうちゃん、ストップ！」「恭也！」
姉と母が、兄……恭也と俺を引き剥がす。荒い息をついていた恭也は、二度三度息を整え、『すまない』と頭を下げた。
「今、なのはがどこにいるかご存知なんでしょうか？」
なのはと同じ、栗色の髪の毛をした女が質問してきた。平静を装っているが、焦りのようなものが浮いて見える。
「ああ、俺んとこにいる」
ぞわっ……
エレベーターが停止した時のように、毛が逆立つ。これは、殺気。そして発生源は恭也だ。
「……なのはをどうするつもりだ」
「俺は何もしねぇさ。なのはには、合鍵を渡してやって、好きに使ってもらってる状態だからな」
「ふざけるな……！　この誘拐犯め！」
大した殺気だ。気を抜けば、膝が笑い出してしまうかもしれない。だけど、こんな野郎相手にそんな無様な姿は見せられない。なのはのためにも。
「なら、お前たちは虐待犯だろう」
――恭也の目が、見開かれた。取り繕うように、厳しい表情を作る。が、殺気はすっかり霧散してしまっている。
「なのはは、泣いていたぞ。『もう寂しいのは嫌だ』ってな」
女二人が辛そうに目を逸らした。
「聞き分けのいい子。しっかりした子。我侭を言わない子……いい子。だから、放っておいても大丈夫、か？」
とうとう恭也までが、俺から目を逸らしてしまった。
「おい、なのはの母親」
「……はい」
「ここ数年、なのはに飯を作ってやったことが無いんだって？」
「……」
……答えられないか。なのはは、『母の料理が食べたい』なんて当たり前のことを涙ながらに訴えたのに。

「テレビの取材で忙しかったか？　店の人気がそんなに大事か。なのはより、店の売り上げか」
「違う！　私は、なのはを愛して……！」
「なのはは、自分で作った料理を一人で食べながら、テレビに映る母親を見ていたんだっとさ」
「っ!!」
……何、ショックを受けた顔してるんだ？　全て、自分のせいなのに。
――なのはだって、お母さんが作ったご飯、食べたいのに！
「おい、姉」
「……なん、ですか」
「なのはが何才になったか、言ってみろ」
「……九才」
「なのはは、誕生日を三回、一人ぼっちで過ごしたそうだ」
三つ編みの女は、俯き、唇をかみ締めている。
――誕生日にお祝いしてよ！
「おい、兄」
「……何だ」
「お前、なのはを叩いたんだってな」
それが、何よりも許せない。叩かれる理由なんて、欠片も無かったのに！
「……夜遅くまで出歩いていたからだ」
なるほどな。そういう言い訳をするのか。
「その前日から、俺の家に泊まっていたんだが？　気付かなかったのか、家族の不在に？」
「!?」
心底驚いた、みたいな顔。
「普段は見向きもしない癖に、都合のいいときだけ兄貴面か」
――家に帰ったら、お帰りなさいって言ってよ！
こいつらは、そんな、ごく当たり前の愛情すら注いでこなかった。なのはは、あんなにも泣いていたのに。あんなにも、家族の愛情を求

めていたのに。
怒りが、ふつふつと湧き上がってくる。
「笑わせるな。このザマの、何が家族だ。」
弱弱しく睨み付けてくる、なのはと同じ苗字の男。
拳を握り締め俯く、なのはと遺伝子的には近い筈の女。
膝を折り、嗚咽するなのはを出産した女。
「お願いします、なのはに、なのはに会わせて下さい！」
なのはを出産した女が、縋り付いてきた。
その顔は、『私は悲しんでいます』と言わんばかりで……！
――切れた。
「ふざけてんじゃねぇぞっ!!」
俺は、怒りを抑え込んでいたタガを外し、激情のままに叩きつける。
縋り付いてきた女を、床に蹴倒す。
「被害者面してんじゃねぇ加害者共！　なのはがどれだけ寂しかったか、辛かったのか、どうせ理解しちゃいないんだろう！　会ってどうする!?　その場凌ぎで許してもらって、また繰り返すのか！　あの暗い家に、なのはを一人ぼっちで取り残すのか！」
呆けた顔で立ち尽くす三人に、引導をくれてやる。
「――お前達は、気付くのが遅すぎたんだよ」
ちゃりっ……と、懐の呪符を取り出す。ユーノが組んでくれた術式を、文字という形で密封した、使い切りの魔法のアイテムだ。
『――緩慢なる忘却の檻・怠惰なる眠りにて・其の者らの歩みを阻め』
……ある事象への『想起』を阻害する、精神操作系の魔法だ。変に絡んでこられないように、徹底的にやってやるさ。
ドアを開け、店を出る。背後からは、しくしくという泣き声が聞こえていたが、ドアを閉めると聞こえなくなった。
「ただいま」
家に帰った俺が見たのは……
「……んあ～」
……不必要に大人びた子というイメージを爆砕する、なのはの痴態

だった。床に大の字で倒れ、口の端から涎が垂れている。
……これはひどい。
「……おい、ユーノ、レイジングハート」
「……はい」
『何でしょうか』
目がぐるぐると回り、ここではないどこかを見ている。
「何をした」
「マルチタスク……並列同時思考の訓練を」
『手始めに五つほど』
「んな過剰な脳トレを九才の女の子にやらせんなあああああ!!」
ユーノの首根っこを掴み、胴体を掴み……雑巾絞り!
「んぎょえええええええええ!!」
『憐れです、かつての我が主……』
「お前もだ! 何考えてやがる!」
ボロ雑巾ユーノをぺいっと放り捨て、レイジングハートに指を突きつける。だが、レイジングハートはクールに電子音声で返した。
『マスターが望んだのです』
「……は?」
こんな、吐くような過剰なトレーニングを? 一体、何でそこまで……
『あなたのためです、ヒデト』
「……何だよ、それ」
俺のため?
『暴走体との戦いで、あなたはマスターを守り、幾度と無く傷ついた』
まあ、確かにガラスの雨を浴びたり猛獣の爪で切り裂かれたりはしたが……
「俺の身体なんて……放っておけば勝手に治るんだ。そんなに気に病む必要なんて無いだろ」
そうだ。俺の身体は特別製なんだ。いくら傷付こうが、砕かれようが、すぐに回復する。痛みを我慢していればいいだけの話だ。俺の怪我なんて瑣末なことで、なのはが悩む必要なんて……

「……違う、よ。それは、違う」
なのはが、ふらふらと立ち上がった。まだ寝起きのようにふらふらしているが、目は、まっすぐに俺を見ていた。ふらふらと数歩進み……俺の身体に、手を回した。至近距離から俺の顔を見上げ、言う。
「治るから、傷ついていいなんて、絶対に違う……！」
真っ直ぐな瞳に気圧される。
「秀人さんが私を守って傷つくなら……」
決意を込めた目が、言葉が、心地よく耳に届く。
「私は、『私を守る秀人さん』を、守る」
それだけ言って、電池が切れたように、ぱたっと倒れた。それを、受け止める。
腕の中で寝息を立てるなのは。思わず、苦笑が漏れてしまう。
「……傲慢だったな。『俺が守ってやらないと』だなんて」
弱い子だと決め付けて。でも、それは間違いだった。
『私を守る秀人さん』を守る。
あれは、本気の目と言葉だった。なのはという女の子は、俺が考えていたよりも、ずっと強い子だったらしい。
手櫛で髪の毛を梳いてやり、ベッドに横たえる。
「……レイジングハート、ユーノ」
『はい』「あいたたた……何だい？」
「俺にも、魔法の訓練を頼む。いつまでも『インパクト』一辺倒じゃあ……」
なのはの、綺麗な栗色の髪の毛を撫でる。
「この先、なのはを守れない」
◆　◆　◆　◆
「ふああ～……」
朝日が眩しくて目が覚めた。頭に、まるで錘が乗っかっているように重い。
そう、昨日は［今朝のご飯は何にしようか］［先生に何て言い訳しよう］レイジングハートと［新しい食器を使うのが楽しみ］マルチタスクの［あーあ、髪の毛ぼさぼさ］れんしゅ、う!!

「うぐううっ!!」
頭が……痛い！
「ふうっ……あ、あぐっ！」
痛い……痛いッ！
「はあっ、はあっ……!!」
これは多分、昨日の訓練の後遺症みたいなものだろう。
並列同時思考。
高度な演算を必要とする魔法を、いくつも同時に展開するためには必須の技能……らしいのだが。
「頭、痛いよぉ……」
ずきずきと疼痛が頭に住み着いてしまっている。
「だから、言ったじゃないか。いきなり五つは多すぎるって！」
ユーノ君が、小さな手で私の頭をぽむ、と抑えた。
「あう～……」
じわじわ～、っと痛みが引いていく。
「とりあえず、痛み止めしておくから」
「ありがと～……」
……ようやく、痛みが引いた。まだ少し、頭が重いような気もするけど。
「レイジングハート……今日の訓練メニューはどうしよっか？」
「なっ……なのは!?」
ユーノ君が、飛び上がるように驚いた。まあ、言いたいことはわかるんだけど。
「駄目だ！　今日は、魔法使用もマルチタスクの使用も厳禁だ！」
「あっ!?」
必死……いや、怒気さえ滲ませて、レイジングハートを取り上げられた。
「権限行使。二十四時間の、マスター『高町なのは』による一切の機能の使用を……」
ユーノくんには、今のところ、私より上位の権限がある。それは、もし魔法が暴走しそうになったとき、即座に停止させるためのものだ。

これを行使されたら、いくらマスター登録されていても魔法は使えない。それだけは……絶対に駄目だ！
「ユーノくん!!」
ダンッ！と床を強く叩き、ユーノくんの声を遮る。
「……もう、嫌なの。私に力が無くて、秀人さんが傷つくのは」
一日の遅れが、また、『あれ』を繰り返すかもしれない。切り裂かれた身体。あふれる血液。蒼白になった顔色。私を安心させるために、無理やり作った歪な笑み。もう……あんなのは沢山だ。
「だから、お願い。練習させて、ください……もう、あんな無茶はしないから。ちゃんと言うこと聞くから……！　お願い、お願いします……！」
涙で滲む目を目蓋で隠し、土下座するように頭を深く、深く下げる。嗚咽が漏れないよう、唇を噛み締め。
ふう、と。諦めたような吐息が、耳朶に響いた。
「内容変更。これより十二時間、マルチタスク二つのみの使用を許可」
「あっ……ありがとう！」
顔を上げる。ああ、良かった……本当に。
「僕が『いい』って言うまで、基礎以外の事に手を出したら駄目だからね！」
「……はい」
とにかく、起きよう。
のそのそと身体を起こし、台所に向かう。冷水で顔を洗うと、いくらか気分がしゃっきりした。痛みというレベルではないが、頭が重い。
「う～……」
冷蔵庫を物色。アジの開きと、豆腐があった。コンロに火をつけ、鍋を乗せ、水を入れる。湯気が出る程度に温まったら、削り節を入れ、一煮立ち。出し殻を取り出し、お味噌を溶いて入れる。もう片方のコンロに火を点け、網に載せたアジの開きを乗せる。味噌汁に豆腐を一センチ角に切って入れる。味噌汁の火を落とし、蓋をする。さて、あとは、アジが焼けたら朝食の準備は完了っと。

「随分と手馴れてるんだね」
「ん……まぁね」
伊達に数年、半一人暮らしをしていない。この程度の作業なら、寝ぼけた頭でも勝手に身体が動いてくれる。さてと。秀人さんを起こそう。
「秀人さん、おはよう」
ベッドに膝立ちし、秀人さんの寝顔を覗き見る。しばらくすると、
「ううん……」と呻き、むくっと上半身を起こした。
「……おはよう、なのは」
ふわあ、と大あくび。
「朝ごはん、できてるよ」
寝癖が付いた髪の毛を梳いてあげる。
「ありがとな」
そして、もそもそと起きだしてきた秀人さんが顔を洗い、食卓についた。
あ、いけない。鞄の中身、この前のままだ。
がさがさと鞄の中身を入れ替える。すると、見慣れないプリントが出てきた。わら半紙のそれには、こう書いてあった。
『授業参観のお知らせ』
「……」
配布された日付は、大体一週間前。適当に鞄の中に突っ込んでいたっきり、忘れていたようだ。
台所で、食器を洗っている秀人さんを見る。
「……あ、」
声が、出せない。ただこのプリントを見せて、『来てください』と言えばそれでいいのに。
「ん？」
秀人さんが、視線を感じたのかこちらを振り返った。
「どうした？」
――今日、授業参観があるの
でも。私の口からその言葉が出ることはなかった。

「……ううん、何でも無いよ」
無理矢理、笑顔を作る。プリントをぐしゃっと丸め、屑籠に放り込んだ。
◆　◆　◆　◆
なのはが出掛けて行った直後……ばたん。俺は、笑顔で手を上げた姿勢のまま、少し色あせた畳に倒れこんだ。
「ぐおおおお……頭が割れるうううう……!!」
なのはの前では格好付けていたが、もう限界だ。頭の中を金槌でせわしなく叩かれているような激痛。
「……大した根性……いや、意地っ張りだね、君も」
ふう～、とため息をつくユーノが恨めしい。
「うっせー……こんな情けない姿、なのはに見せられないだろ」
一歩も動けない。だらだらと脂汗を垂らしながら、畳と見詰め合う。あら、少しカビているわ。いやだもう、ウフフフフ……
「秀人！　気を確かに！」
ハッ！　あ、危ない……危うくアッチの世界に飛んでいくところだった。
「全くもう……なのはもそうだけど、何でそんな無茶するんだよ。最初は、二つ同時から始めて、徐々に慣らしていくのが普通なのに」
「えっ……？」
その発想は無かった！
「『その発想は無かった』みたいな顔するなーーー!!」
はぁ……今日はもう駄目だ。ずるずると這い、ベッドから毛布を引っ張り下ろし、床で寝る。そうして、何時間寝ていただろうか。目を覚ますと、日は真上近くに昇っていた。
横に傾いた視界の中、屑籠に見慣れない色の紙が捨てられていた。腕を伸ばそうとして……断念。無理。動けない。
「ユーノ……それ、取ってくれ」
「はぁ、やれやれ」
ぱさっと目の前に置かれる紙。
「読んでくれ」「自分で読め！」

ちっ。
えーと、なになに？
「三年三組、授業参観のお知らせ……？」
「ジュギョウサンカン？　何だい、それは？」
「ああ、学校行事の一つでな。授業風景を保護者が見に来る……って、ええええええ!?」
頭を支配する痛みを気合で無視し、立ち上がる。プリントに目を通す。
「うわっ……！」
――日程は、今日！
「あンの、馬鹿！」こんな時にまで！
『授業参観に来て欲しい』と一言言えば済むものを、あの子は、また変に遠慮して……！
一張羅のスーツの袖に腕を通し、ネクタイを締める。
「どうしたのそんなに慌ぶぎゅる！」
ユーノの首根っこを掴み、窓の外に停めてあるバイクのリアボックスにスローイング！　ストライーク！　ホールインワン！
「あああああああ!?」
説明は後だ！
「行きながら念話で説明する！　とにかく行くぞおおおお!!」
窓を跨ぎ、バイクにキーをぶっ挿す！　ヘルメットを被り、発進！
「ぎゃあああああああああ」
◆　◆　◆　◆
……やっぱり、こうなったか。
職員室で担任に頭を下げながら、ひたすらそんな事を考えていた。
金曜日のエスケープに続き、月曜日のズル休みだ。そりゃあ、いくら温厚な先生でも怒る。
「高町さん、ちゃんと聞いてるの!?」
「……はい、済みませんでした」
惰性で優等生の真似事をしていたが、前回のエスケープと、昨日のサボタージュの二件で、完全に信用を失ってしまったようだ。

職員室を、一礼してから出る。詰まっていた息を、はあ、と吐き出し、教室へと向かった。クラスメイトたちは、皆どこか浮き足立っている。まぁ、それは仕方ない。何せ、年に二回の授業参観なのだ。勉強が出来る子も、そうでない子も、親にいい所を見せようと張り切っている。私はというと……頬杖を突いて、窓の外をぼうっと見ていた。机の上には、申し訳程度に教科書とノートを広げている。が、これを今日使うかどうかは不明だ。

ええっと、くだんのカナなんとかさんの一派は……あ、いたいた。恐怖がしっかりと染みこんだ目でこちらを見ていた。

にっこぉおおおおおお、と、極上の笑顔を返してあげた。料金は後で徴収。

「ね、ね、高町さん」

クラスメイトの誰かに、声を掛けられた。無視しても良かったが、波風を立ててもメリットは無い。顔を上げ、作り笑顔の仮面を被る。

「あ、……なに？」

しまった……この子の名前知らない。

「高町さんの家族って、どんな人が来るの？　お父さん？　お母さん？」

――ぴき

作り笑顔の仮面に、一瞬ヒビが入った。

「え」

怒るな。誤魔化せ。無視しろ。

「えっと……」

あんな奴らのこと、思い出すな！　すう～、はあ～……よ、し。落ち着いた。落ち着いた。私は落ち着いた。私は落ち着いた。怒ってなんかいない。

「……もしかしたら、今日は都合が悪くて来れないかもしれないって」

「そっかー、残念だなぁ」

何が残念なんだ。ぎりぎりと、机の下に隠した手を硬く硬く握り締める。

「あ、おい八代！　先生来たぞ！」

その時、扉から外を見ていた男子が、私に話しかけてくる女子――八代というらしい――に大声を浴びせた。
「うっさいアホ葉山！」
男子は、葉山というらしい。八代さんは舌打ちをして、葉山君を睨み付けた。
「ンな大声出さなくても聞こえてるっつうの！」
「お前と一緒に高町さんまで怒られたらどうするんだよ！　さーちゃん先生、怒るとマジ怖いんだぞ！」
ついさっき実体験したばかりだけど。ふぅ……とりあえず、この葉山君には感謝だ。八代さんの話を強引にでも断ち切ってくれたことだし。
「またね」と席に戻っていく八代さん。葉山君は、何故かまだ私の席の近くにいた。
「……なに？」
声を掛けると、びくっと身体を硬直させ、目がきょろきょろとせわしなく教室内を泳ぐ。
どうしたんだろう？
「あっ、た、高町……その、あいつ、五月蝿いだろ？　昔からそうなんだよ。許してやってくれ、な？」
「そう」
どうやら、八代さんのフォローをしたかっただけらしい。もういいから、さっさと席に戻ればいいのに。あ、ほら。
「葉山君！　席に戻りなさい！」
先生に見つかっちゃった。私は目を背けていたから、目を付けられる事は無かった。
三時間目と四時間目が授業参観だ。二時間目が終わる頃になると、教室の雰囲気がそわそわし出し、廊下側の窓を気にしだす子が増えてきた。
『マスター、集中力が乱れています』
シャツの中に隠したレイジングハートからの注意に、ハッと気付く。

（ごめん）
登校してから、ずっと発動していたマルチタスクに意識を戻す。家に帰ってからでは、練習時間が足りない。私には、休んでいる暇は無いのだから。
数は二つ。一つは、黒板の文字をノートに書き写すもの。もう一つは、基礎魔法を頭の中でシミュレーションするもの。
『順調です。段々と構築速度が上がってきています』
二つの魔法が同時に使えるようになれば、戦い方の幅も広がる。秀人さんに守ってもらってばかりの私を、変えられる。
『初歩攻撃魔法・インパクト。初歩防御魔法・プロテクション。初歩拘束魔法・リングバインド。封印魔法・シーリング。以上の四つは、個別に発動する分にはもう問題無いでしょう。あとは、発動時間の短縮に努めて下さい』
レイジングハートから及第点を貰う。とはいえ。
『では、新しい魔法を教えます』
鍛錬に休みは無い。教わってわかったことだが、魔法というのは基礎魔法だけでも膨大な数がある。もちろん、全てを習得する必要はまだ無いが、私の魔導師としての『適性』を計るためには、浅く広く覚える必要があった。
『今日だけで、最低でも五つ、習得して頂きます』
（うん、任せて！）
私は、へこたれない。私のために。そして、秀人さんのためにも。
『マスターの魔力量ならば、基礎のプロテクション・リングバインドでも強度は十分。ですので、新たな攻撃魔法を覚えていただきます』
（……うん）
攻撃魔法。その言葉の重みで、おへその下がずん、と下がる。
『気が進みませんか？』
（……ううん、大丈夫）
私は、私を守る秀人さんを守る。そう決めたんだ。
『恐らく、マスターの敵性は中・遠距離型。
まず、攻撃の柱となる、直射型砲撃魔法を……』

がやがやと廊下と教室が騒がしくなってきている。休み時間に入り、化粧でめかしこんだクラスメイト達の母親や、スーツを着た父親がぞろぞろとやってきていた。
思わず……無意識で。私は、来る筈の無い人物を探してしまった。
(そうだ。来るはずが無い。頼んですらいない。プリントだって、屑籠に捨ててしまった)
『魔力を、一直線に射出するのです。簡単に聞こえるでしょうが、束ねた魔力が拡散しないよう、砲撃の先端にまで気を配る必要があります』
授業が始まる。先生が問題を出すと、普段は全く手を上げないような生徒までが、我先にと手を上げる。当てられた生徒は、嬉しそうに、教室の後ろの壁際を、そこにいる親にアピールするように答える。
休み時間に入ってすぐ、親の元へ行くクラスメイト達。一様に笑顔だ。その『親子』というものの姿が、ちくちく胸を刺す。
その中から、八代さんと葉山君が席にやってきた。
「高町さ、ムグ!?」
何かを言おうとした八代さん。まあ、大体想像がつく。残念だったね、とか、そんな話だろう。それを、口を塞ぐことで阻止したのは葉山君だった。八代さんは、乱暴に葉山君の手を振りほどいた。
「何すんのよアホ健太!」
……健太?
「誰がアホだバカ望!　少しは空気読め!」
……望?
下の名前(多分)で呼び合っている。不思議に思って夫婦漫才を見ていたら、二人揃ってバッ!と振り返った。
「違っ、高町さん、誤解しないでね!?　単に、家が近い幼なじみってだけだから!」
「そうそう!　第一、俺は……!」
顔を真っ赤にして俯き、もじもじと指をいじり出した。何なんだろう。用が無いなら、さっさとどこかへ行って欲しい。マルチタスクを維持するのって結構大変なんだよ?

あ、チャイム鳴った。やれやれ……
授業参観もそろそろ終了。
（……いつものことじゃないか。今までだって、一人でやってきたじゃないか）
そんな時だった。
――から
教室のスライド式のドアが、ゆっくりと開けられる音。本人としては気付かれないように開けたつもりなのかもしれないが、バレバレだったりする。……遅刻してもすぐバレてしまう、魔のドアだ。そんなドアを開けて、時間ギリギリにやって来たのは。
秀人さん。
「え？」（え？）
マルチタスクが、驚きのあまりぽんっと解除される。クラスの視線は、また黒板に、先生に戻る。でも。私は、秀人さんから目を離せない。
秀人さんが私に気付き、ひらひら、と控えめに手を振った。
でも……何で？　プリントは捨てたのに……
がさ、と秀人さんがポケットから取り出したのは、くしゃくしゃになった、授業参観のお知らせだった。……そっか、見つけちゃったんだ。
ああ、どうしよう。顔がにやけてしまう。気を抜いたら、くすくすと笑い出してしまいそうだ。
「秀人さんっ！」
授業が終わってすぐ、秀人さんのところに駆け寄った。
「悪い。よく考えたら、勝手に来ちゃったよ」
「ううんっ、嬉しいよ」
ぎゅー、っと、抱きつく。
「ぎゅー!?」
……あれ。なんか、ポケットから変な声が。
「あ、忘れてた」
無造作にポケットから引っ張り出したのは、栗色の毛並みをぼさぼ

さに逆立てた、ユーノくんだった。
『……やぁ、なのは』
「どうしたの？　なんかボロボロだね」
　秀人さんに聞いてみた。ユーノくんは疲労困憊で、ぐったりとしている。秀人さんは気まずそうにそっぽを向いた。
「バイクで来たんだけど……途中でユーノ落っことしちゃってさ」
　はっはっは。参った参った。　……と、明らかに笑って誤魔化そうとする秀人さん。
『咄嗟にプロテクション張ったから助かったものの……普通に死ぬわあああああ!!』
　机の上に立ち、がーっ、と怒る。
「きゃー！　かわいいー！」
　……しまった、見つかっちゃった！
「かわいいー！」「これ高町さんのペット？」「名前なんていうの？」
　クラスメイト達が、ユーノくんに殺到する。見た目はフェレットだし、小動物が好きな子にはたまらないだろう。地の性格は……まあ、不幸体質のうっかり者だけど。
　私が避けたいのは、クラスメイトの質問攻めではなく……
「高町さんっ！」
「……うわっ」
　この、情熱が空回り気味の先生に見つかってしまうことだったのに。
　だがしかし、先生は私ではなく、秀人さんに詰め寄った。……ああ、そうか。秀人さんを私と同じ『高町』だと勘違いしたのか。
「ペットの連れ込みなんて非常識です！」
「あ、済みませんでした」「済みませんでした」
　ぺこ、と素直に謝る。
「もう、今回だけですよ？　……もう」
　ちら、ちら、と、女子にもみくちゃにされているユーノくんに視線を投げよこしている。
「……触ってみますか？」

提案を口にしてみた。
「いいのッ!?」
目を輝かせて食いついてきた！
「え、ええ……ユーノくん、こっちおいで」
『りょーかい』
女子の手をするっと抜け出し、とたたた、と寄ってきた。抱え上げ、先生に手渡す。
「か……かーわいいー!!」
……先生が、壊れた。
「あはははは……（ユーノくん、モテモテだね）」
「ぎゅ、ぎゅ～～うう……!!（なのは……助けて、苦しい！　出ちゃう！　中身出ちゃうううう!!）」
「（頑張って。私の平穏な学校生活のために）」
「……！　……！」
あ、動かなくなった。多分だけど、この先生、猫には嫌われるタイプだろうなぁ……
学校の校舎というものは、昼こそ生徒でごった返し活気に満ちているが、夜になると途端に不気味な異界と化す。上履きの底が床板を擦るキュッキュッという音がいやに大きく響き、より一層の不安感を煽り立てる。
さて、何故私がこんな夜の校舎に居るのかと言うと。
「……き、肝試しらしくなってきたよね、うん！」
「そうそう！これくらい迫力が無いとな！」
そう。肝試しである。私と、八代さんと、葉山君の三人で。もちろん許可は下りていない。前に通っていた私立校ならともかく、公立校だ。多くの監視カメラも、ガードマンもいない。せいぜい、宿直の先生がいるくらいだ。鍵が壊れている裏口からこっそり侵入するなんて、たやすい事。
「お、おい望。怖いなら、帰ってもいいぞ……？」
「ふ、ふん！　そんなに高町さんと二人きりになりたいわけ!?」
「なっ……ンな事言ってないだろ！」

「そういうことでしょ？　馬鹿健太！」
気丈に振る舞っているが、かたかたと笑っている膝を見れば、それが虚勢だと明らかに分かる。
「二人とも、静かに。見つかっちゃうよ？」
こうも五月蝿かったら、宿直の先生が目を覚ましてしまう可能性がある。
「あ、悪い……」「ごめんなさい……」
（はぁ……なんでこうなっちゃったんだっけ？）
私は何も、本気で肝試しをしに来た訳じゃないというのに……
話は、ほんの数十分前にまで遡る。
◆▪◆　◆　◆
レイジングハートを片手に、通いなれた校舎を見上げる。
「レイジングハート、ジュエルシードの反応は？」
『まだありませんが、僅かに気配がします。お気をつけて』
「うん」
よし、行くぞー……
「あれ、高町。　何してんだ？」
「え、高町さん？　ホントだ」
……うっ。
嫌な予感と共に振り返り、出かけていたため息を飲み込んだ。
「八代さん……葉山君、君達こそ、何してるの？」
クラスメイトの二人は、口をそろえて「「塾」」と言った。
「そう。行ってらっしゃい」
仕方ない。別の場所から入ろう。
「っていうか、何してるんだ？　忘れ物したなら、宿直の先生に言えばいいじゃん」
葉山君がもっともなことを言う。
ジュエルシードを探しにきました。自由に動き回りたいので、宿直の先生は邪魔です。
――言えるわけ無い！
ああ、二人の顔がどんどん訝しげになっていく！　なんとかして誤

魔化さないと！
「き、肝試しをしようと思って……」
「「……肝試し？」」
やっちゃった……
「……うん」
ああ、終わった……私の平穏な日々……
「へー、楽しそうじゃん！　俺も混ぜてくれよ！」
「ちょっと、健太!?」
へ？　あれ？　なにこの展開……
『マスター、どうされますか？』
『いやぁ……どうしよっか……？』
もしここで断ったら、余計に怪しまれてしまうかもしれない。それなら。
「いいよ。三人で行こう」
「よっしゃ！」「ええっ!?　私も!?」
手元に置いて、監視していた方がマシ。そう決めた。
『大丈夫だよ。この二人には、適当なところで消えてもらうから』
◆▪◆　◆　◆
「それじゃ、コースの確認をするよ。宿直室を避けて、階段で二階へ。ぐるっと回ったら、次は三階へ。理科室の黒板にチョークで名前を書いたら、またここに集合」
それにしても、なぜゲストであるはずの私が主催者のような役割をしているのだろう？
「よ……よし！」
「……わかった」
一人一人、5分置きに個別に出発するルールだ。じゃんけんで順番を決める。
「ひい、一番!?」
八代さんが一番。
「に、二番手か、はは……」
葉山君が二番。

「じゃ、私は最後だね」
私は最後になった。
へっぴり腰の八代さん、おっかなびっくりの葉山君が出発し、スタート地点に一人残される私。さてと、行くか。懐中電灯片手に、階段を上る。
今日は、ユーノくんも秀人さんもいない。ユーノくんは放出してしまった魔力の回復のため。秀人さんはお仕事らしい。
暗闇の中、胸元でキラリと輝くレイジングハートだけが、今日の相棒だ。
二階を制覇し、三階へ。その時、事件は起きた。
ずくん、という、お馴染みの感覚。そう、これは……
「ジュエルシード……！」
かなり近い。ほんの、数十メートル先だ！
「きゃあああああああああああ!!」「ぎゃあああああああああああ!!」
「八代さん！　葉山君！」
最悪だ！　ああ、もう！　だから一人で来たかったのに！
「レイジングハート、セットアップ！」
『Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ　！』
弾ける桜色。ジャケットの裾を翻し、理科準備室に急ぐ。
角を曲がる。そこで見たのは、床にぱったりと倒れる二人のクラスメイト。そして。
人体模型。
身体の正中線の沿って、筋肉組織が半分だけ露出した、理科の教材だ。残り半分の『普通の身体』は、不気味な無表情。直立しているところしか見たことが無いソレは、腕を曲げ、足を曲げ……まるで、生きているように動いている。
「き、」
夜の校舎に、動く人体模型。それが、ジュエルシードによって動いていることも分かっている。分かってはいても……怖いものは怖い！
『マーーー!!』

動いたあああああこっち来たあああああああああああ!!
「きゃあああああああああああ

ジらしいダメージは無い。でも、攻撃魔法がキャンセルされてしまった。
「このっ、何が!?」
闖入者の姿を確かめる。
窓から差し込む月明かりに照らされる、骨ばった……というか、
「……骨格標本？」
だった。
すかすかの身体をくねらせ、月明かりを浴びて謎のポーズを決め……
『ヒョーゥ！』『マーー！』
びしいっ！
人体模型も釣られて、左右対称のポーズを取った。
「……ねえ、レイジングハート」
『なんでしょうか、マスター』
「……もう帰る」
『マスター!?』
果てしなく脱力を誘う二体の暴走体に……なんというか、萎えた。主に闘志とか、そんな類のものが。
「うん……もういいや。害は無いみたいだし、放っておこうよ」
さーて、八代さんと葉山君を回収して帰ろうっと……
『マスター、気を確かに！』
ぽんぽん、と気安く肩を叩かれた。気だるく振り向くと、人体模型と骨格標本が、私の両肩を掴み、『うんうん』とでも言いたげにしきりに頷いていた。
元はといえば……元はと言えばあああああああああああ……!!
――ぶちん。
「お前たちのせいだろおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
『ｉｍｐａｃｔ　！』
ドパァン！
『マー!?』『ヒョー!?』
衝撃波を叩きつけた。

今更だが、無様に怯えていたついさっきの自分の姿を思い出す。ああ、みっともない。超みっともない！　たかが理科の教材ごときに！
菱えていた闘志が、モリモリと鎌首をもたげてきた！
『魔力値、最大まで回復……』
レイジングハートの、若干呆れたような声は聞き流しておく。
「そう……そんなに遊びたいんだ？」
じゃきっ。レイジングハートを突きつける。
『マッ……』『ヒョッ……』
じり……
人体模型と骨格標本が、無表情のまま後ずさった。
ふふ、ふふふふふ。何をそんなに怯えてるのかな？
「遊んであげるよ……！」
『Ｓｈｏｏｔｅｒ』
術式選択・シューター！
魔力スフィア、形成。数は、六！　フル回転！
「シューーーーーーート!!」
ドドドド！
連射された魔力弾は、正確に二体の獲物に肉薄し……
『マッ！』『ヒョッ！』
避けられた。
だけど、それは予想済み。
私が今の段階で行使できるのは、一つのタスクにつき三つが限度。
そして、私のタスクは最大三つ。三発～九発を発射できる計算だ。
足元を狙った一発を、それぞれ飛び上がって避ける。飛び上がり、天井に張り付こうとした所を、さらに一撃！
――ドンッ！
天井で魔力弾が弾け、二体を宙に躍らせる。そこに、残り二発のシューターを打ち込んだ！
「シューーーーーート!!」
――ガンッ、ガンッ!!
『マーーーーーー!!』『ヒョーーーーーーーーーーーーーー！』

人体模型の心臓部分と、骨格標本の頭蓋骨に着弾！
封印されてたまるか、と動き出す二体の暴走体。
『ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』
シューターの行使に割り振っていたタスクの一つを、拘束魔法に切り替え。リングバインドで四肢を拘束。もう一つのタスクで、封印魔法を発動！
「『不屈の心は』」
二体が、逃げようともがく。
「『この胸に』！」
浮かび上がる、シリアル２０とシリアル１７。
「ジュエルシード、シリアル２０、シリアル１７……封印!!」
桜色の光が、三階の廊下を一杯に満たし……
がしゃん、と床に投げ出される二体。意外に重いそれを、何とか理科準備室に押し戻す。
「何か……掴めたかも」
今日のこの戦闘で、確かな手応えを感じた。がむしゃらで、行き当たりばったりだった今までの戦い方に、確固たる『芯』が通ったような、そんな感じだ。まだそれが何なのかはっきりはしないが、一歩進んだことは間違いない。
「八代さん、葉山君」
さて、後片付けだ。
八代さんと葉山君を揺り起こす。二人とも、単にショックで気絶していただけだったらしい。
「二人とも、立てる？」
「は、半分こ怪人が！」「無機質な坊ちゃん刈りが！」
……あー。これは、トラウマになるな。抱き合って、がたがたと震えている。
「何のこと？　そんなの、見てないよ？」
すっとぼけた顔を作り、首を傾げてみせる。
二人は納得しかねているようだったが……あんな、非常識極まりない現象、受け入れられるはずが無く。

「夢……だったんだよな」
「そうだよね。いくらなんでも……」
よし。
「そろそろ帰ろう？　もう時間も時間だし……」
薄暗い廊下の向こう、くたびれたスーツ姿の先生が見えた。寝起きなのか、少し目がぼんやりしている。多分、騒ぎを聞きつけて起き出してきたのだろう。私達を呼び止めるように手をこちらに差し出し、緩慢な動きで近づいてきた。やばっ！
「行くよ、二人とも！」
「お、おう！」「急げ急げ！」
顔を見られないように、斜め下を見ながら疾駆する。
――あんな先生、この学校にいたかなぁ……？
◆　◆　◆　◆
「……ってことがあってね」
夕食の席。俺は、なのはの話を聞いていた。それによると、胆試しの最中、なんと、なのはの通う小学校に潜伏していたジュエルシードが発動し、それを封印したらしい。
「それでね、戦い方がわかったんだ！」
嬉しそうに笑顔を振りまく。やっぱり、なのはには笑顔が一番似合う。
掴んだ答え。それは……
「まずは『小さいの』で敵の逃げ場を塞ぐ！」
手を横に凪ぐ仕草をする。
「追い詰めてから、『大きいの』でとどめの一撃！」
ぐっ、と拳を握り、前に突き出す。
『マスターの適正は、砲撃魔導師です』
机の上に乗ったレイジングハートが、全員に聞こえるように言った。
「遠距離型ってこと？」
『平たく言えば。ただ、マスターの防御力にはまだまだ伸びしろがあります。近接特化型の攻撃にも耐えられるようになるでしょう』

よくわからんが……とにかくなのはは、方向性が定まったらしい。
「なあ、俺は？　やっぱり……その、近接特化型とかいうのになるのか？」
一応、シミュレーションではバレットという射撃魔法を使ってみた。
だが、命中率は散々なものだった。四発に一発、的の端っこにでも掠ればいい方で、あ
とは見当違いの方向へ飛んでいきレイジングハートに呆れられた。
とはいえ、散弾銃のようにばら撒くことで的を粉砕できたのだが。あと、魔法という程でもないが、身体の表面や内部に魔力を循環させることに関しては、なのはの数倍は緻密に行えているらしい。
要は、スクルトとバイキルトは出来るが、メラ一発も打てない……ということだ。どう見てもスタンドアロンの前衛タイプだろう。
『一応は、それを目指しましょう』
「一応……？」
気になる言い方をする。俺に、それ以外に適正なんてあるのだろうか？
『まだ、ヒデトの正確な適正は判明していません。ですので、一応です』
◆　◆　◆　◆
翌日。
珍しいことに、担任が学年主任に怒られていた。学年主任は年配の人で、締めるところはしっかり締める、真面目な人だ。
「あなたは、いつまで学生気分でいるつもりなのでしょうか」
「すみません、すみません！」
八代さんを見つけたので、聞いてみた。
「先生、昨日の宿直だったらしいんだけど、朝まで居眠りしちゃったんだって」
宿直の意味無いよね、それ。
はたと気付く。
「……じゃあ、昨日のスーツの先生は……？」

「……」
返事は無い。ただ、顔がさーっと青くなっていく。あはは……まさか、ね。
◆・◆　◆　◆
金曜日のことだった。
「高町さん。明日、サッカー見に行かない？」
八代さんだ。最近、話をするようになった。……二人で話していると、結構な頻度で葉山君が割り込んでくるのが面倒くさいが。今は、サッカー部の朝練でいない。
「健太のいるクラブが、近くの学校のクラブと練習試合するの。それで、みんなで応援に行かないかって話になって」
「？　みんな、って？」
「え、だから、みんな……」
「……？　どうして、私？」
「え？」
「え？」
……駄目だ、何を言っているのかお互いによくわかっていない。ええっと、考えるに……『みんな』というのはつまり、八代さんのお知り合いズのことで、仲良しグループご一行のことで、……
「ああ、」
一応、お義理でクラスメイトの私にも声を掛けた、ってことかな。それなら別に、行かなくてもいいや。名前も知らないような人たちと、何かを共有する必要は無い。今はジュエルシードの探索と、魔法の練習に忙しい。今こうしている間も、マルチタスクで模擬戦を行っているのだ。
興味ないから……と言いかけて、余計なトラブルのもとになったら、また肉体労働が必要になるから……ええっと、言葉を選んで……
「悪いけど……」
私は行けない。そう言い掛けたのだが、何やら汗臭い葉山君が席に駆け寄ってきたせいで言いそびれてしまった。
「あ、あのさっ、俺の試合、見に来てくれるよな!?　な!?」

う……暑苦しい。何でそんなに私に来て欲しいんだろう、この人。もう、さっさと断ってしまおう。
「悪いけど、用事があるから行けない」
笑顔は作らず、真顔でスッパリと言う。葉山君は一瞬凍りつき、「な……何で？」と追いすがってきた。
「私も、その、練習しないといけないから」
魔法の、とは言えないが。まあ、スポーツなんて答えたら「一緒に練習しようぜ」とか、更に面倒くさいことになる未来が見えるので、適当に何か答えておこう。料理とか、裁縫とか……
「何の練習なんだ？」
ああ、やっぱり。えーと、女の子が習っていても変じゃなくて、尚且つ男子は絶対にやりそうもない習い事は、と……。
「……お料理」
これで行こう。
「料理？　自分で？」
普通の家庭なら、母親がやってくれることだろう。でも、私の場合は……って、違う違う。あんなの、もう思い出す必要は無いんだ。私は、新しい二人の家族のためにお料理を作ってあげるんだから。
「ふうん……」
我ながら、言い訳が下手だ。こんなの、気付かれてしまうに決まって……
「そっかぁ……じゃあ、頑張ってな」
……あれ？
ああ、忘れてた。葉山君は、幼なじみの八代さんが全面的に認めるほどの……おバカさんだった。
「来ないんだ、高町さん」
八代さんのその時の表情は……何かおかしかった。残念そうな表情の影に、どこか……暗い喜びが見え隠れしていた。
「……？」
けど、それがどういう意味なのかは、分からなかった。
◆　◆　◆　◆

目の前に現れる、マネキンのように無機質な人影。出現箇所は全くのランダムだ。
「はっ！」
目の前に現れた一体を殴り壊すと同時、背後に現れたもう一体に後ろ回し蹴りを浴びせる。反撃してくることは無いが、なにぶんペースが速い。
「このっ！」
今度は、少し離れた場所に現れた。一歩間合いを詰め、前蹴りで胴体を捕らえる。
ただの格闘訓練ではない。このマネキンは、魔力を込めた攻撃以外は通らないように設定されている。筋力だけでは破壊できない。一発一発に、一定の魔力を込めて攻撃しなければならないのだ。簡単に聞こえるかもしれないが、これが結構難しい。
ひょこっ、とマネキンが起き上がる。今のは、魔力を纏わせることに失敗してしまった。
「これで……二百！」
最後の一体を、正拳突きで破壊。
「はあっ、はあっ……タイムは!?」
傍らのユーノに聞く。没頭する余り、時間を計っていたマルチタスクを解除してしまった。
「四分二十秒……点数で言えば、七十点」
「あー……くそっ！　厳しいなぁ……」
どうっ、と地面に背を預ける。場所は、町を一望できる展望台。週末にでもなれば、カップルだの夫婦だの親子連れだの人が絶えない。だが、平日の真昼間ともなれば、人通りは極端に少なくなる。そこにユーノが結界を張れば、広々とした練習スペースが出来上がるって寸法だ。ユーノ曰く、『本調子だったら、あのアパートの中を五十倍くらいの空間にもできるんだけどね』とのことだ。便利だな、魔法って。
「それに、マルチタスクの維持が出来てないよ」
うーん……それなんだよなぁ。六つ同時に展開した時は、一瞬で意識が飛んでしまった。それで今は、最低ラインの二つで練習してい

る。しているのだが……どうにも、うまくいかない。まあ、練習あるのみだ。
「悪い。もう一回頼む」
起き上がりかけ……ユーノのちっこい手に止められた。
「少し休もう。適度に休憩を挟まないと、逆に効率が落ちる」
空気が変わった。薄く周囲を覆っていた膜のようなものが、ふっと消えうせた。ユーノが結界を解除したのだろう。近くのベンチに腰を下ろし、水筒に入れてきたスポーツドリンクを飲む。
――ｐｒｒｒ
ベンチの上に丸めて置いてあった上着から、軽快な電子音が響いた。携帯電話だ。取り出し、通話ボタンを押して耳に当てる。発信者は、見ないでも分かる。
『あ、秀人さん。今どこ？』
なのはが、少し弾んだ声で聞いてくる。
「高台で練習してる。もう少しで帰るよ」
「ねえ、秀人」
「んん、何だ？」
「念話があるのに、どうしてわざわざ『電話』を使うんだい？」
あー、そうだよな。普通、そう思うよなぁ。電池残量は気にしないといけないし、圏外になることもあるし、金掛かるし。
「ああ……そういや、お前にはまだ教えてなかったな」
ユーノになら、話してもいいだろう。なのはと、初めて会ったときの話を。
◆　◆　◆　◆
「秀人さ～ん！」
丘の階段を登り終える。頂上の展望台。そのベンチに腰掛けた秀人さんと、その横にちょこんと座ったユーノくんが見えた。はっ、はっ、と少し息切れしてしまう。
「大丈夫か？」
苦笑し、スポーツドリンクの入ったカップをくれた。
「はっ、だい、大丈夫。ありがと……」

ぐいっと一気飲み。ああ、生き返る……

「ずっとここで練習してたの？」

秀人さんの隣に腰掛け、町並みを見渡す。丁度夕焼けの時間らしく、町がオレンジ色に染まっていた。

「いや、練習は結構前に終わった。ユーノと話してたらこんな時間になっちまった」

「どんな話？」

「なのはと初めて会った時の話」

ああ、あのことか。確かに、ユーノくんには話しておいてもいい。

「なのは……」

ユーノくんが、少し同情交じりに何かを言おうとして、すぐに押し黙った。

「別に、遠慮しなくてもいいよ？　もうあんなの、何とも感じないから」

これは、本当に本音。私は今、間違いなく幸せなんだから。

順風満帆とは言えないけど、魔法も、日常も、それなりに上手く行っていた。

けれど……それは、ただの錯覚だった。入っていたのは、小さな亀裂。それが、徐々に広がりつつあることに、私はまだ、気付いていなかった。

# 第三話

――なんで、こんなことになっちゃったんだろう。

「シューター！」

覚えたての射撃魔法を駆使し、うねうねと迫り来る植物の根を破壊する。だが、

しゅるるるる……！

まるで、ビデオの逆再生か早送りを見ているようだ。打ち砕かれた植物の根。それが、まるで数十年分を一気に成長するように再生し、変わらぬ勢いで迫ってくる！

「はっ、はっ……！　もう一発！」

――ドォン！

轟音と共に、魔力弾が残る根を一掃する。だが、

駄目だ、キリが無い……！

「このおおっ!!」

――ギュキキキッ！

タイヤが限界ギリギリで、波打つアスファルトの路面をグリップする。私の顔面めがけて伸びてきた根は、ギリギリのところで外れた。

「秀人さん！　一旦距離を置こう！　あの、高台まで！」

後部座席に立って乗った姿勢のまま、ハンドルを巧みに操る秀人さんに、半ば怒鳴るようにして立案する。

「了解だ！」

瞬間、強烈な遠心力が私の体を振り回した。必死に秀人さんの首に片腕を回し、落下を防ぐ。視界が百八十度回転し、それを認識する前に強烈な加速。

――ヴァアアアアアアアッ!!

バイクのエンジンが悲鳴を上げ、時速百キロオーバーの世界に突入する。

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』

――バキバキバキッ！　バチイイン！

進行方向にバリアを張り、目の前に迫っていた根の集合体を弾き飛ばす。だが、攻撃は止まない。二度、三度と、バリアに巨木のような根がぶつかり、私の体を揺さぶる。
「ねえ、どうして!?　どうしてなの!?」
後ろを振り返る。
町中を覆い尽くした樹木。ビルの外壁を突き破り、舗装された道路を掘り起こし、駐車してあった車を貫いている。
その、どこかにいるであろうジュエルシードの宿主に対して、声を張り上げる。
「聞こえてるんでしょ!?　八代さん！　」
異常な成長を続ける樹木はただ沈黙し、ひたすら私に攻撃を仕掛ける。
――明らかな憎悪を宿して。
話は、数時間前に遡る。
◆　◆　◆　◆
自動ドアを潜ると、そろそろ梅雨入りを予感させる湿った空気が吹き付けてきた。
「これで全部だな」
横で、肉や魚や野菜で、ぱんぱんに膨らんだエコバッグを持った秀人さんが確認する。
「うん、これでだいたい一週間分だよ」
これだけあれば、一週間は余裕で食べていけるだろう。
秀人さんの冷蔵庫は、元々一人暮らしをしていただけあって、本当に小さかった。つまり、中身もそれに準じた量しか入っていなかったわけだ。家族が二人も増えれば、あっという間に底を突いてしまうのは自明の理。
近所のスーパーまで徒歩十分。アパートが割と便利な立地にあって助かった。
秀人さんの両手が塞がっているのに対して、私は手ぶらだ。気が引けて、それとなく一袋奪おうとしたが、のらりくらりとかわされてしまう。

「今夜のおかず、どうしようかなぁ……」
せめて、美味しい手料理で恩返しをしよう。あまり贅沢はできないが、できる範囲で。
そして、家まであと数分といった所で、サッカーのユニフォームを着た少年と、私服姿の少女の集団とすれ違った。
「あ、高町!?」
……ん？　誰だろう。
振り返ると、集団の中に二人、見知った顔を見つけた。
「……あ、八代さん、葉山君」
ああ、そういえば、今日だったっけ。サッカー部の練習試合。すっかり忘れてた。
「偶然だな！　どこ行くんだ？」
集団の中から出てきて、こっちに来た。ああ、嫌な予感しかしない……
「今から帰るところ」
先手を打っておかないと。このままじゃ、なし崩し的に付き合わされる。
「そういうわけだから。じゃあ、試合頑張ってね」
愛想笑いでそう言い、踵を返す。特に嫌いな人というわけではないけど、サッカーには興味が無い。興味が無いものを見て、時間を浪費したくはない。
「あ、あのさ、折角だし、来てくれよ！」
「ひゅー！」「ハヤマ、大胆！」「おお、直球で行ったぞ！」
他の男子がざわめき、女子はきゃーきゃー言いながらこっちを見ている。
……はぁ。何て言って断ろう。
『今からお昼ご飯だから』。よし、これで行こう。秀人さんと一日中過ごせる貴重な週末なんだ。他の用事は、後回しにしよう。
「あ、もしかしてお昼まだ？」
まさかの援護射撃。八代さんに先制された。
「あ、うん。だから……」行けない。

「私たち、こいつらの分までお昼ご飯持ってきてるから、一緒に食べない？　女の子一人分くらいなら何とかなるし」
「……えーと」
どうしよう……今度こそ、断る理由が無くなっちゃった。
こういうの、ありがた迷惑って言うんだっけ……昔の人は、うまいことを言ったものだ。
『秀人さん……どうしよう』
念話で、秀人さんに助けを求めた。
『さすがにこれで断ったら、月曜日から気まずいんじゃないか？　休みは明日もあるんだし、ちょっとだけ見て、昼飯だけ食べたらすぐ帰ってくればいいよ』
逡巡すること数秒。
「……わかった、行く」
私は、同行することにした。はぁ……せっかくの休日が……
「ねえねえ、今日は誰の応援する？　佐々木君？　それとも、堀川君？」
……何で、チームプレイのサッカーで、特定の誰かを応援するんだろう。チームを応援するんじゃなかったの？
「……」「……」「……」
なぜかユニフォームを着た数人が聞き耳を立てている。
「えーと……チーム全員かな。ははは……」
愛想笑いの仮面を被り、意味不明な話にも相槌を打つ。ああ、早く帰りたい……
「そっかぁ……私はね、佐々木君の応援するの！　お弁当も作ってきたんだ！」
耳元に顔を寄せられ、こしょこしょと喋られる。こそばゆい。
八代さんは、数人の女子に囲まれていた。
「ノゾ、アンタはやっぱり葉山？」
「……うん」
すこしはにかみ、控えめな笑顔を見せる。手には、やけに大きい包み。話からすると、あれは葉山君に作ってきたお弁当だろう。幼馴染

だけあって甲斐甲斐しいなぁ。
そして、市民運動場に到着した。反対側のコートには、赤いユニフォームを着た少年が集まっている。あれが対戦相手かな。キャプテンらしき人と、葉山君が挨拶をする。
葉山君がキャプテンなんだ、このチーム。大丈夫かな？
そんな、ちょっと失礼なことを考えてしまう。いや、だって……葉山君だよ？　誰かに指示を出すなんて、出来るの？
審判のおじさんがホイッスルを鳴らし、試合が始まった。
ボールが蹴りだされた途端、女子が爆発したように大声を張り上げ始めた。
「堀川くーーーーん!!　いけーーーーー!!」「佐々木――！　負けたら承知しないぞー！」「小俣――！　走れー！　」「アホ葉山――――!!　抜かれたら昼飯抜きだからねーーーーー!!」
み、耳がキンキンする……！　私も、申し訳程度に腕を振り、応援する。
「が、頑張れ～……負けるな～」
――ぴたっ。
あれ？　なんか、数人の男子の動きが止まって……
「うおおおおおおおおおおおおおっ！」
「ボールをよこせえええええええっ！」
「負けるかあああああああああっ！」
なんか、いきなり動きが良くなった。どうしたんだろう。
あ、葉山君がボール取った。こうして見ると、なかなか上手だ。キャプテンは伊達じゃないってことかな。赤ユニフォームが葉山君に接近し、ボールを奪おうとする。それを、時々足を蹴られながらも回避し……
――ばすっ！
試合開始から五分。葉山君の蹴ったボールが、相手のゴールネットに吸い込まれた。
「「「「きゃーーーーーーーーーー!!」」」」
黄色い声援の大合唱。だが、それをかき消す大音声が向こうのベン

チから響き渡った。
「くぉらあああ!!　負けたら承知しないわよ!?　シャキッとせんかーーーー!!」
相手側の応援をしていたのは、気の強そうな、金髪の女の子だった。
それにしても、すごい。あんな遠くから、こっちにハッキリ聞こえてくるような声が出せるなんて。
「……あれ？」
何故か既視感を感じる。もしかして、どこかで会ったことがあるのかな？　あんな派手な髪の毛、一度会ったら忘れそうに無いけど……って、私が言っても説得力無いか。未だにクラスメイトの顔と名前が一致していないんだし。
金髪の子に気合を注入されたのか、赤ユニフォームが巻き返してくる。そこから先は、本当に白熱した試合だった。これ、本当に練習試合？と聞きたくなるくらいだった。最後のほうでは、私が、無意識のうちに立ち上がって応援していたのだ。
一点入れ、一点返され、ゴール前でフェイントの応酬。シュートを転がりながら止めるキーパー。貪欲にボールを狙うフォワード。
手に汗握るという言葉を実感したのは初めてだった。そして、試合は三対三のまま延長戦にもつれこみ……
――ピピィーーーーーーーー!!
審判の吹いたホイッスルによって、唐突に終わりを告げた。公式戦なら、ロスタイムとか、ＰＫで決着を付けるんだろうけど、あくまでも練習試合。引き分けで終了みたいだ。
「……はあ」
気が抜けて、ストンとベンチに座り込んでしまう。引き分けだったけど、見に来た価値は十二分にあったかもしれない。うん、サッカーを少し見直した。
葉山君たちは、向かい合い「ありがとうございました！」と礼をし、ベンチに戻ってきた。汗まみれ泥まみれだが、妙に爽やかな印象がある。なるほど。これなら、他の女の子達が夢中になるはずだ。
「おつかれー！」「惜しかったね！」

女の子たちは、口々に賞賛の言葉を口にしながら、タオルや飲み物を渡す。
葉山君は、八代さんからタオルを受け取り、顔をガシガシ乱暴に拭いていた。遠巻きに眺める私を見つけ、歩いてきた。
「あ、健太……」
八代さんが下の名前で呼び止めたが、葉山君は片手を挙げただけでこっちに来てしまった。うーん……ちょっといただけない。
「なあ、見ててくれた!? 俺、二点入れたぞ！」
興奮冷めやらぬといった様子で詰め寄ってくる。汗臭いのは、頑張った証みたいなものだ。嫌悪感は特に無い。
「うん、見てたよ。すごかったね」
「だろ!?」
嬉しそうだ。多分、滅多に話すことができないクラスメイトとの会話が新鮮なんだろう。
「あ、八代さんがお弁当作ってくれたんだって。食べてきなよ」
さっき、葉山君が離れてしまったとき、すごく寂しそうな顔をしていたから。柄にも無く、お節介を焼いてしまった。
「……ッ!!」
それは、ほんの一瞬のことだった。瞬きもすれば見逃してしまうような、ほんの一瞬。
八代さんが憎しみに満ちた目で私を睨んだのと同時。
そのポケットから、あの、禍々しい波動を感じた。
「……え？」
だが、その気配はすでに無い。……勘違い、なのかな？
レイジングハートに頼もうにも、ユーノ君に機能を制限されているため細かい探査ができない。とにかく、ユーノくんと連絡を取ろう。
不自然に思われないように、念話で。
『ユーノくん、ちょっといい？』
『なのは？』
『あのね……』
さっきの出来事を話す。

『……だから、制限を解除してほしいの』
『わかった。それじゃ、あの交差点まで来てくれる？　直接接触すれば、解除できるから』
次は、秀人さんだ。
『秀人さん、私の電話を……』『了解だ』
聞いていたんだろう。言い切る前に、私のポケットから、軽快なメロディが流れた。ポケットをまさぐるような動作を繰り返し、周囲の目が十分に集まったところで、電話に出る。
「はい、もしもし」
『それっぽいこと言って、抜け出してくれ』
急用が出来たフリをしてこの場から離れる。そうして、ユーノくんと落ち合ってレイジングハートの機能制限を解除。ユーノくんの結界で、八代さんごと一帯を隔離。封印魔法でジュエルシードを封印。
「うん……うん、そう、わかった」
ぱたん、と携帯電話を折りたたむ。
「ごめん、急用ができちゃった。お昼ごはん、一緒に食べられそうに無い」
それだけ言い、立ち上がる。まだ状況がのみこめていないようだった。好都合。
「それじゃあ、また月曜日にね」
踵を返し、駆け出した。
八代さんが持っているであろうジュエルシード発動の鍵は、葉山君の行動が、八代さん以外に向けられることらしい。嫉妬を増幅しているんだろうか？　仲のいい幼なじみが、自分以外の誰かと仲良くしているのが嫌でたまらないとか……でも、他の女の子と話していても、発動の兆候は無い。
（あれ？）
じゃあ、何で私の時だけ……
（ああ、もう！）
グダグダ考えていても面倒くさいし埒があかない！　さっさと封印して、終わらせちゃおう！

『ユーノくん、今どこ？』
『今、秀人と一緒にそっちに向かってる！』
『あと二分もあれば到着だ。その場で待機しててくれ』
『わかった』
見通しのいい交差点で立ち止まる。
えっと、家は向こうだから……ここにいれば、すぐに見つけてもらえるはず。うん、順調だ。この調子なら、本格的に暴走する前に封印できるかもしれない。とにかく、あと一分か二分あれば……
「ちょっと、待ってくれよ高町！」
「……はい？」
……あの、葉山君……何で、ここにいるの？
呆然と立ちすくむ私の前で立ち止まる。
「なあ、何で帰っちまうんだよ？　急用って……いきなりすぎるだろ？」
……えーと、つまり、急用の内容を聞きに、わざわざ走って追いかけてきたと？
「……いきなり入る用事。人はそれを急用って言うんだよ。それで、何か用？　急いでるんだけどなぁ……」
計画をぶち壊しにされたせいで、ついイライラとした口調になってしまう。
葉山君は、捨てられた子犬のような目で私を見る。
「……なあ、高町は……俺のこと嫌いなのか？」
何で、こんな脈絡の無いことを言うのだろう。好きか嫌いかで言えば、今、間違いなく嫌いだよ。
「そんなことより、戻りなよ。八代さん、きみのためにお弁当を一生懸命……」
「お、俺はッ！」
――神様というものがいるのなら、それは、間違いなく底意地が悪くて、根性が腐っているに違いない。
「健太……！　みつけ、」
八代さんが、葉山君を追いかけてやってきて。

『なのは、お待たせ……！』
秀人さんとユーノくんが、バイクで駆けつけてきて。
「高町のことが、好きなんだっ！」
葉山君が、その一言を口にした。
――どさっ。
――きゅいいいっ。
葉山君が言い終わるのと同時。
追いついてきた八代さんが、お弁当を地面に散らかし。
秀人さんとユーノくんが乗ったバイクが、路肩に停まった。
……えーと、今、『好き』って言われちゃったの？　えっと、『好き』……友達としてとか、家族としてとか、いろいろあるけど……この場合は、アレだよね。ライクじゃなくて、ラブの方。……ちょっと待て。ヤバい！
「……」
八代さんは、無言だ。無言で、俯いている。ただ、そのポケットからは、青白い光が段々と……！
それはそうだ。自分の好きな人が、自分以外を好きでいることを、目の前で宣言されてしまったのだから――！
「なのは！」
レイジングハートをユーノくんに渡す。
『制限を解除しました。全機能の使用が可能です』
「早速でごめん！　レイジングハート、セットアップ！」
『Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ！』
バリアジャケットを纏い、秀人さんが私に並び立つ。そして、ユーノくんが結界魔法を使う……その、数秒前。
――八代さんのポケットからあふれ出した光が、周囲を覆い尽くした。
カッ!!
周囲が、まるで花火を爆発させたかのように白く染まる。
直前にバリアを張っていなかったら、目を焼かれるところだった。

「……間に合わなかったか」
秀人さんがヘルメットを脱ぎ捨て、グローブに魔力を流し、補強する。
「二人とも、気をつけて！　今回ばかりは、シャレにならない！」
こんなに切羽詰ったユーノくん、初めて見た。だけど、そうなってしまうのも仕方が無い。ジュエルシードは、持ち主の願いが強ければ強いほど、強大な力を発揮する。
八代さんという、人間の依代を得たジュエルシードは、きっと……！
「離れろッ！」
秀人さんの一喝と共に、全力で後ろに飛び退く。
――ズガンッ!!!
数秒前まで私が立っていた場所を、何かが抉った。もし飛び退いていなかったら、砕かれていたのはコンクリートの道路ではなく、私の身体だった。
煙が晴れ、目の前に見えたのは……
「……木？」
だった。だが、もちろん街路樹なんかじゃない。数秒ごとに枝を伸ばし、根を伸ばし、葉を茂らせる、巨大な樹木だ。その幹には、半透明の液体に、まるで琥珀のように封じ込められた……
「八代さん！　葉山君！」
ぼごっ、ぼごっ……！
地面を貫いていた根が抜け、その尖った先端を私たちに向け……
『ｂａｒｒｅｔｔ　！』
――ガガガガン！
無数の弾丸に、粉砕された。
「なのは、気をしっかり持て！」
手元にピンポン玉サイズの光弾を数個同時に出現させ、発射した。
今のは、秀人さんの新しい魔法なんだろうか。
「あの二人を助けたいなら、これ以上成長する前に止めるんだ！」
「……は、はいっ！」

そうだ。ボケッと突っ立っている暇は無い！
「レイジングハート！　シューター！」「こっちはもう一回、バレットだ！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ．　Ｓｈｏｏｔｅｒ　ａｎｄ　ｂａｒｒｅｔｔ』
レイジングハートの先端に、合計五つの桜色の光弾。秀人さんは、四つの空色の光弾。
「シューーート！」
「ファイア！」
合計九つの射撃魔法が帯を引いて発射され、
――ドガガガガガガガガッ！
全てクリーンヒット！
巻き上げてしまった粉塵のせいで、状況が分からない。けど、多分……
「……」
レイジングハートを握る手に、力をこめる。秀人さんも、構えを解かない。
――グオンッ！
やっぱり、まだだ！
横凪ぎに繰り出された枝の一撃を、バリアで逸らす。
「はあああっ！」『ｉｍｐａｃｔ　！』
――バガァンッ！
秀人さんの回し蹴りが命中し、枝を真っ二つに割った。。
「よし、通った！」
……いけない！
「秀人さん、まだ！」
折れた枝の先から、繊維がしゅるしゅると集まり、
「回復しやがった……」
これまでの暴走体にも、ある程度の再生能力はあった。けど、こんなに早く、あれだけの損傷を回復できるなんて……
そうこうしている間に、琥珀のように固められた二人の姿は、幹の

中に隠れてしまった。
「あっ、待って！」
静止も虚しく、ズブズブと地中に潜行してしまう。
「ユーノ！　あの暴走体、どこに行ったんだ!?」
「わ、わからない……！」
「ええ!?」
わからないって……見つからないの!?
ユーノくんは焦り、苛立ったように声を荒げた。
「この周囲十キロ全域から、ジュエルシード反応が出てるんだよ！」
「なっ……んな、馬鹿な話が！」
同時。
――メキメキメキ……ベキッ、ボコッ……バキッバキッ!!
近くから。遠くから。アスファルトを捲り上げる音が。コンクリートを貫通する音が。ガラスを砕く音が。不協和音のように、耳に入ってきた。
「何……何なの!?」
そして、見た。ビルが立ち並び、大小さまざまな商店が軒を連ねる繁華街が……枝に、根に貫かれ、葉を茂らせ……『森』に、覆われていくのを。
ズズン、と一際重い音がして、『森』は成長を止めた。
「……」
「……」
あまりの光景に、言葉を失ってしまう。コンクリートの町並みが、いきなり大自然に埋もれてしまった。
もう、どこに本体があるのかすら分からない。ただ呆然と、『森』を見つめる。
『ずるい……』
「え？」「何だ、今の？」
ドーム状の『森』に、声が反響する。その声は……
『なんで……健太は……』
「八代さん!?」

もしかして、まだ意識が残っているのでは。そんな私をあざ笑うように、ざわざわと『森』が揺れる。季節はずれの森林浴。だけど、感じるのは息苦しい圧迫感と、突き刺さるような敵意！

「なのは！　こっちだ！」

秀人さんが、停めていたバイクのキーを回した。

キュボッ、と小気味のいい音を立て、エンジンが再び火を点す。

「乗れ！」「はい！」

乗るというより、半ばしがみ付くようにしてシートに飛びついた。

『アンタを選ぶのよおおおおおおおおッッッッッ!!!!!!』

枝が。根が。葉が。『森』を構成する全てが、狂ったように殺到してきた！

「このおおおおおおおおっ!!」

秀人さんがヤケクソ気味に放ったバレットが、進行方向の敵のみを吹っ飛ばす。

――ああ、本当に。なんでこんなことになってしまったんだろう。

◆　◆　◆　◆

ついこの間来た丘で、バイクを止めた。

見下ろす町は。海鳴市は。『森』に覆われてしまっていた。

「ユーノくん、町の人たちは……？」

それが一番の気がかりだった。

「それは、一応大丈夫。位相をずらして、半径十キロの一般人は隔離したから」

よかった……せめてもの救いだ。

「でも、ごめん。建造物は間に合わなかった……もし暴走体を封印しても、建造物は元には戻らない」

「私の所為だ……」

ぐしゃっと前髪を掴む。

ユーノくんに制限をかけられてしまうような無茶をしなければ、未然に防げた筈なのに。

「「違う」」

だけど、秀人さんとユーノくんは、それを否定した。

「僕が、遠隔操作で制限を解除できるようにしておけば」
「俺があと少し早く到着していれば」
「「……」」
　こんなところで、責任の所在を確かめても仕方無い。今は、とにかく暴走体を封印しないと。また成長を始めたら、今度は人が巻き込まれちゃう。でも、どうすれば……？　あの広大な『森』の中に潜んでいるジュエルシードを、ピンポイントで見つけ出す方法なんて……方法？
「あ」
　閃いた。
「レイジングハート、『これ』、出来る？」
　頭の中にイメージを浮かべる。それを、念話の要領で秀人さん、ユーノくんにも見せる。
『可能です』
　レイジングハートは、簡潔に答え、
「駄目だ。危険すぎる！」
　ユーノくんは反対だった。確かに、分の悪い賭けだから……これで、秀人さんにまで反対されたら、この案は没だ。
「よし、やってみろ」
「秀人さん……！」
　よかった！
「秀人、わかってるの？　下手したら、怪我じゃ済まないんだよ」
　ユーノくんは、静かに聞く。秀人さんの真意を確かめるように。
　秀人さんは、つかつかと歩いてきて……ぽん。私とユーノくんの頭に手を置いた。
「ちょ、何!?　何!?」
　私は単純に嬉しいけど、ユーノくんは戸惑っている。
　そして、秀人さんは私たちの目をまっすぐに見据えて、言った。
「ユーノもなのはも、俺が守る」
「……」
「だから、大丈夫だ」

さすがに、ここまで言われたらユーノくんとて飲むしかない。
渋々といった様子で、ユーノくんはトランクボックスに入った。
「行くぞ！」
秀人さんがバイクに跨り、エンジンを吹かす。
（もう、これ以上被害は広げさせない！）
バリアジャケットのまま後部座席に座るのと同時。頼もしい排気音を轟かせ、バイクが走り出した。
◆　◆　◆　◆
がつん、がつんと、リアタイヤがコンクリート片を踏んで振動が響く。俺もなのはもノーヘルだが、それを見咎める者はいない。
目の前に、茶色と緑色で構成された壁が見えてきた。言わずもがな、暴走体である。
最初に比べたら成長速度は亀の歩みだが、それでも確実に広がっている。
「……防壁、展開」『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』
目の前に、薄い空色のバリアを張る。バイクを直接ぶつけるわけには行かない。
ズボッ！　と沈み込むような音を立て、バリアの先端が壁に突き刺さる。一瞬の停滞。そして、すぐに抵抗がなくなる。何せ、俺のバリアの強度はレイジングハートのお墨付きだ。たかが樹木如きで阻めるほどヤワじゃない。
『高町いいいいっ!!』
当たり前だが察知され、すぐに枝やら根やら葉やら、無数の攻撃が襲い掛かってきた。
タイヤのグリップ力限界まで車体を倒し、横滑りするように攻撃を潜り抜ける。カウルが地面と接触し、ガリガリと削れた。
一つ目の問題は、この広がり続ける『森』をどうするか。ユーノの全力の結界は、直径
十キロ前後。それを上回ってしまったら、今度こそ最悪の事態になる。それに対して、な
のははこういった策を練った。

『八代さんの狙いは、私みたいなの。だから、あの中にいれば、あれ以上『森』が成長することは無いと思う』
確かに、あの暴走体に取り込まれた女の子は、やけになのはに固執しているようだった。標的が体内にいるとなれば、わざわざ狩場を広げる理由は無い筈だ。
二つめの問題は、ジュエルシード本体の場所をどうやって特定するか。この問題に関しては、なのはが新たに魔法を組むことになった。
『レーダーってあるでしょ？　あれは、音波を発信して、反射のパターンから敵の所在を割り出す機械なんだけど……それを、魔力でやってみる』
俺には魔力はあるが、それを形にする才能が無い。だから、なのはに任せるしかない。適材適所だ。
そして三つ目の問題は、どうやって問題その一とその二を両立させるか。敵陣のど真ん中で、全神経を集中して魔法を組むなんて、一人では不可能だ。そう、一人では。
『でも、今からその術式を組むと大体五分くらいかかっちゃうの。だから、私を乗せたまま、『森』の中を逃げ回って』
なのはが魔法を組み上げている間、俺がバイクで逃げ回り、ユーノが防御魔法で攻撃を防ぐ。これが可能だというのだから驚きだ。
ごん！　がん！　と衝撃が走るたび、サスペンションが軋む。そもそも、オフロードバイクでないどころか、スポーツ走行には不向きなツアラーにこんな無茶な走りは想定されていないのだ。帰ったら、あちこちガタがくるだろうな……
『いなくなれえええええええっ!!』
「ざっけんなあああああああああ!!」
ギャッ、ギャッ、ギャッ!!
スラロームの要領で、地面から突き出してきた根を連続で避ける。その度に、俺の首に腕を回し、背中にしがみ付いたなのはが大きく揺さぶられる。だが、その目はずっと閉じられたままだ。転倒する恐怖も、不安も、微塵も感じさせない。静かに見えて、その頭の中では高度な演算によって魔法が構築されつつあるのだろう。額には玉の汗

が浮かび、流れる風にきらきらと雫を振りまいている。
「でやあああああああっ!!」
ユーノも奮闘している。進路を妨害する枝を、無防備ななのはを狙う根を、一つ残らず打ち落とし、逸らし、防ぎきっている。お陰で、バイクの操縦に集中できている。避ける。跳ぶ。踏み越える。一瞬たりとも集中を途切れさせることは出来ない。
そして、永遠に続くかと思われた時間は、唐突に終わりを告げた。
「できたぁっ!!」
なのはが、魔法を完成させた。
デバイスモードに変形させたレイジングハートを横凪ぎに振る。
『ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ｓａｒｃｈ』
「災厄の根源、姿を現せ!」
広範囲探知。探り当てることに特化された魔法が、解き放たれる。
レイジングハートの赤い宝石部分が脈打ち……
――ズババババババッ!!
無数の光が、解き放たれた。
光は波紋のように広がり、『森』全域に広がっていく。思わず、見とれてしまいそうなほど幻想的な光景。だが、ボケッと見ている暇なんてありはしない。その間も続く攻撃は、まるで、弱点を探られることを恐れているように数を増す。
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　!』
空色。桜色。緑色。三色のバリアが重なり合い、攻撃を受け止める。全方位を覆うバリアは、既に底が見えている攻撃なんて通さない。
『何で、何で、何でえええええッ!?』
子供の癇癪のように、精彩を欠いた攻撃が降り注ぐ。とはいえ、棍棒のようにぶっとい樹木だ。油断するわけには行かない。
「八代さん……」
ぽつりと、なのはが依代にされた少女の名を呟いた。
◆　◆　◆　◆
広大な『森』の中にいる、一人の少女を探す。砂漠に落ちた一本の

針……ってほどでもないが、見つからない。
「……くっ」
探査魔法によって頭に入ってくるイメージは、膨大だ。数千枚の写真のスライドショーを、休まず見せられているような状態だ。車酔いのように、風邪を引いたときのように、頭が重く、目が回る。
立体駐車場。オフィスビル。銀行。ホテル。廃ビル。個人商店。屋台。コンビニ。
「違う……！　どこに!?」
『高町いいいいっ！』
ぶおんっ、と風を切る音と共に、目の前に枝の一撃が迫る。
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
それは、目の前に展開された空色のシールドに阻まれる。
「フッ！」『ｉｍｐａｃｔ　！』
パァンッ！
秀人さんに蹴散らされた、枝。今の一撃は、自動ではなく、八代さんの声を反映するように動いていた。なら！
「ユーノくん！」
「何!?」
「私が選んだ枝か根っこ、捕まえて！」
バインドの同時発動も、出来なくはない。だけど、より確実にするために……
「わかった！」
同時、探査魔法を一旦カットする。そして、大きく息を吸い……
「私は、葉山君なんて、大っ嫌い！」
恥ずかしさを我慢して、目一杯の大声を、張り上げた。
「な……なのは?」
秀人さんと、ユーノくんが目をぱちくりさせている。ううう、お願いだから今は突っ込まないで！
「無神経だし、図々しいし、馴れ馴れしいし！　何より馬鹿だし！」
『高町ぃ……！　アンタ、何様のつもりよおおおっ!!　アンタに、健太の何がわかるってのよおおおおおおおお！』

ざわざわと、八代さんの怒りに鳴動する。そうだ。怒れ。もっと怒れ！

「あんなのにご執心だなんて、八代さんも悪趣味だね！　私はあんなのいらないから、八代さんに熨しつけて譲ってあげるよ！」

『高町いいいいいいいっ!!!　絶対に許さないいいいいいいっ！』

金切り声と共に、一際太い枝が一本、迫ってきた。これだ！

「ユーノくん、これ！」「了解！」

――ジャリイイイイイイイイン！

枝に、緑色の鎖が幾重にも絡みついた。ユーノくんが今の状態で発動できる拘束魔法、チェーンバインドだ。細いながらも強靭な鎖が幾重にも絡みつき、枝の動きを封じる。

「えええええいっ！」

そして、無防備になった枝に、レイジングハートを突き立てた。

『きゃあああああああっ!!』

八代さんが、今まで上げてこなかった悲鳴を上げる。その悲鳴は、私の仮説が正しかったことの証明であり……同時に、クラスメイトの少女を傷付けた証明だった。

（……ごめん）

レイジングハートの先端を枝の中に固定する。そして、枝の中に直接、探査魔法を流し込んだ。

『ああ、ああああああっ！　痛い、痛い痛い痛いいいいいっ！』

その悲鳴が泣き声にシフトしても、止めない。

この枝は、他の自動攻撃タイプではなく、八代さんが直接操っている枝だ。だから、この枝の根元を探っていけば、必ずそこに八代さんがいる。

『目標を確認しました』

「……うん、見えた」

核……八代さんは、ここから数キロ先のマンションの屋上に根を張っている。

『森』が、収縮していく。ただの一箇所へ……八代さんを守るように。

『来ないで……来ないでよ……』
弱弱しい声が、その中から漏れる。
あの殻に阻まれて、封印魔法は届かない。攻撃魔法で傷つけても、すぐに再生してしまう。……なら。防御も、再生も無視して、一撃で中心まで撃ち抜けば良い。
「レイジングハート、モードチェンジ」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　ｍａｓｔｅｒ　・　Ｃａｎｎｏｎ　ｍｏｄｅ』
レイジングハートが、変形する。仮想空間では何度も繰り返した手順だが、実際にやるのは今日が初めてだ。
丸みを帯びていた先端は、鋭い、槍のような形に。柄の部分の半ばには、拳銃のようなグリップとトリガーが。石突には、余剰魔力を排出するコッキングカバーが増設される。
――レイジングハート・キャノンモード。
私に合わせ、砲撃能力に特化した新形態だ。
「秀人さん、ユーノくん」
「ああ、行くぞ」「任せて」
短いやりとり。そして、添えられる手。消耗戦を強いられてきた私たち三人の魔力は、もうほとんど残っていない。この一発を撃ち漏らせば、もう、封印する手段は無い。残った三人分の魔力を全部注いで……
「一気に、カタを付ける！」
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』
私の切り札。直射型砲撃魔法・ディバインバスター。
インパクト、バレット、シューターより、格段に強力な魔法。これなら、分厚い壁もぶち抜ける！
『チャージ完了』
二人と目が合い……頷きあう。
「ディバイン……!!」
――キュイイイイイイイイ……!!
魔力スフィアが甲高い音を立て、一瞬だけ収縮する。それに抗うよ

うに、内圧を高め、高め、高め……！
――トリガーを、引き絞る！
「バスターーーーーーーーーー!!」
――ズドオオオオオオオオオン!!
魔力によって『筒』を形成し、その爆発のエネルギーを内部に通すことで指向性を与える。これが、直射型砲撃魔法。
真っ直ぐに突き進んだ砲撃は、植物の壁を呆気無く貫通し、八代さんが握っていたジュエルシードに直撃。
「ジュエルシード、シリアル１０。　……封印」
『ｓｅａｌｉｎｇ』
ぶち抜いた穴から、ジュエルシードがゆっくりと出てくる。それがレイジングハートに吸い込まれた途端、町を覆いつくしていた『森』が、まるで霧のように消滅した。
……痛々しい傷跡だけを残して。
「ユーノ、行くぞ」「え、でも……」「いいから」
秀人さんが、ユーノくんを肩に乗せ、屋上の入り口に歩いていく。気を利かせてくれたんだろう。本当なら、私の口から言わないといけないんだろうなぁ……
「ごめんね」
床に寝転がり、意識がはっきりしていない八代さんに話しかける。
「八代さんは、葉山君が好きなんだよね」
こくん。八代さんの首が、縦に振られる。
「葉山君が私にばかり気をかけるのが、気に入らなかったんだよね」
こくん。再び、肯定。
「……でも、私は、葉山君の気持ちには答えられない。だからといって、葉山君の気持ちが変わるのは、ずっと先のことだと思うの。だから……」
胸が、痛む。自分がこれから言う言葉に、足がすくむ。でも……私が、言わなくちゃ。それが、二人の気持ちをかき乱した私に与えられる罰だから。
「絶交、しよう」

交わりを絶ち、お互いを空気のように無視し、一切の関わりを排除する。それは一見、とても悲しいことかもしれないけど。彼女には、私の代わりはたくさんいる。私は、前と同じく一人に戻るだけ。私にとっても、彼女にとっても、傷を最小限に抑えることが出来る……たった一つの、冴えたやり方。

「……それじゃあ、バイバイ。私の話し相手になってくれて、本当にありがとう」

精一杯の感謝を込めて、その頭を撫でる。明日からは、他人だ。

外に出ると、町は喧騒に包まれていた。

地震による被害だと勘違いされているらしい。とはいえ、抉れた地面や、どてっぱらに穴が空いた自動車など、不自然な点はいくらでもあるのだが。それをどこか現実感の無いものとして見ながら、のろのろと歩く。

どるん、と、目の前にバイクが止まる。言わずもがな、秀人さんだ。回収してきたらしいヘルメットを、無言で差し出してくる。それを被り、後部座席に座る。

少し速めのスピードで、街を離れた。風が冷たくて、涙が浮かんできた。きっと、風が目に染みた所為だ。目を瞑っても、まだ流れてくる。

ああ、本当に……風が冷たい。

◆　◆　◆　◆

ここは、とあるビルの屋上。海鳴市でも指折りの高層建築であり、最新の技術が惜しみなくつぎ込まれている。

その屋上で、一人の少女と、一頭の獣が佇んでいた。

「くふふふっ」

長い金髪を二つに結い、黒を基調とした装束に身を包む、整った容貌の幼い少女。その手には、容姿とは不釣合いなほど無骨な、一振りの斧が握られていた。斧とはいっても、手斧ではない。長い柄に半月状の刃の、どちらかといえば薙刀のような得物だ。その斧を、重量を感じさせない動作で手元でくるくる回している。

「くふふふふっ……！　ねえ、見た？　見た？　あの白い子、泣いてたよ？」
だが、その整った顔に浮かぶのは、子供が昆虫の足を引きちぎるような、残忍な嘲笑。
「ああ、見てたよ」
対して、答えるのは傍らに佇む狼。大型犬より、一回りも二回りも大きな体躯を包むのは、見事な緋色の毛並み。首元には鬣まであり、明らかに通常の種ではない。
「……よかったのかい？　あの子にみすみす渡しちゃって」
流暢な言葉で言語を話す。その声色は、女性のそれだ。
金髪の少女は、けらけらと軽い調子で笑いながら、斧を振り回す。
「いいのいいの。今日は、アレが見られただけで満足だよ。それに……」
――ガヅンッ！
唐突に、硬いものが砕ける音が響く。屋上の床に、斧が深々とめり込んだ音だ。
「どうせ、後で横取りしてやるんだし♪」
にっこりと、天使のような笑顔で言う。
「くふふふっ。それじゃ、帰ろうか。アルフ、バルディッシュ？」
ぽんぽん、と狼……アルフの頭を撫で、踵を返す。
「ああ、フェイト」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ　．』
斧に据えられた、金色の瞳が明滅し、電子音声で答える。
そして、少女……フェイトは、笑顔のまま屋上から姿を消した。

# 第四話

「……」
目を閉じ、意識を集中。リンカーコア、起動。術式選択。誘導弾・アクセルシューター。
『Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
魔力循環。展開数、五つ。
――ヒュン
目の前に、五つの魔力スフィアが出現する。よし、問題ない。
五つ全てに意識を配り……発射！
「シュート！」
――ドドドドドン！
五つの誘導弾はそれぞれ個別の軌道を描き、結界内を飛び回る一つの的に向かって突き進む。
「くうっ……！」
さすがに、的が速い。なにせ、二体目の暴走体のデータを参考にしているのだ。遅い筈が無い。頭の中で、五つのルートをそれぞれイメージし、それをレイジングハートに伝える。軌道は問題ない。正確に標的の動きをトレースしている。だが、
（駄目だ）
的のスピードが速く、誘導弾が徐々に引き離されていく。このままじゃ、追いつかない。
（それなら！）
「アクセル！」
加速せよ。命令に従い、誘導弾のスピードが上がる。
「このっ、このっ……！」
だが、それは同時に操作の難易度をグンと上げ……暴走。
――ボンッ！
「きゃあっ！」
――ボンッ！　ボボボンッ！

「あっ、あっ……!?　駄目えっ！」
一つが破裂。そこで集中が途切れ、残り四つの誘導弾も破裂してしまった。
「あ～……失敗しちゃった」
『三十点です』
レイジングハートの採点も容赦が無い。的だけが変わらず飛び回り、挫折感を後押しする。ああ、上手くいかないなぁ……
『ではマスター。例の魔法を実践してみましょう』
「うん、そうだね」
兼ねてから問題だった、私自身の機動力の低さを補う魔法。術式自体は、ユーノくんに相談したり、レイジングハートといくつか試作してみた。だが、それを実際に行使するのは初めてだ。
「……上手くいくといいけど」
まあ、とにかく試してみよう。
術式選択。飛行魔法・アクセルフィン。
『Ａｃｃｅｌ　ｆｉｎ』
――フォンッ……
くるぶしに、光の羽が出現する。うまく動作すれば、飛行を補助してくれるはずだ。恐る恐る魔力を注ぎ込む。エレベーターが止まったときに感じる、あの違和感。それを数倍に引き伸ばしたような感覚の後……
「う……浮いた！　やったぁ！」
私の体は、地上五メートル程まで浮かんでいた。よっし！
「やったよ！　レイジングハート！」
『マスター、今は集中して……』
――がくんっ。
「へ？」
一瞬、軌道がブレ、上下が逆さまになる。それを皮切りに、
――ががががががががががががっ!!
「きゃあああああああああっ!?」
上下左右に、揺すら、れ、ええええええええ!!

「なのはっ！」
ぼふんっ。柔らかい感触と共に、視界の回転が止まった。ううっ、気持ち悪い……
「大丈夫か？」
「……い、一応は」
秀人さんが受け止めてくれたおかげで、怪我はしていない。地上五メートル。あんな勢いで地面にぶつかっていたらと思うと、ぞっとする……って、あれ？　まだ、浮かんでる？　もう魔法はキャンセルしたはずなのに。
「あっ」
目を凝らすと、秀人さんの両足首に、環状魔方陣が展開していた。
「秀人さんも飛べるようになったんだ！」
「ああ。とはいっても……」
ひゅんっ。軽い音と共に、環状魔方陣が消失。秀人さんが両足で地面に着地する。
「まだ数分も維持できないけどな」
『理想としては、飛行魔法・攻撃魔法・防御魔法を併用することです』
はぁ……まだまだ先は長いか。
『マスター。ヒデト。飛行魔法は、最低でも一週間で使いこなしてもらいます』
「うん、頑張る！」「練習あるのみだ」
そして、一週間が過ぎた。
私と秀人さんは、問題も無く飛行魔法を行使できるようになっていた。
「待て～！」
だけど、まだ複雑な動きは出来ない。直進、上昇、下降、浅い角度での旋回ができるだけだ。それらを上手に組み合わせ、更には他の魔法も併用しなければならない。
「タッチ！」
「おっと」　ひらり。
その練習として、ユーノくんが提案したのが、この『空中鬼ごっこ』

だ。
円柱状のフィールド内で、飛びながら鬼ごっこをするだけ。それだけだが、実に練習になる。それというのも……！
「秀人さぁん！　そろそろタッチされてくださいよぉ！」
「駄目駄目。練習なんだから」
ぶんっ。またしても空振り。空しく虚空を掻く手。
「むーっ！」
そう、秀人さんがなかなか捕まらないのだ。ユーノくん曰く、私は射出したり、展開したりするのに向いていて、秀人さんは、体を覆ったり、強化したりするのに向いているらしい。
「そこまで！」
ユーノくんの声と共に、円柱状のフィールドが消える。
結局、勝敗は五対一で私の惨敗だった。
バッグに入れてきたスポーツドリンクを飲み、一息つく。
「うん。二人とも、中々いい感じだよ」
『七十点といったところでしょうか』
七十点。厳しいような、上々のような、曖昧な点数だ。けど、最初が二十点だったことを考えるとかなりの進歩だ。
「ってことで、明日は久しぶりに休みにしよう」
休み？
「別に疲れてないけど」
それに、今は魔法の練習時間が一分でもあった方が良いんじゃないか。いつまた暴走体が現れるかも分からないんだし……
「ま、いいんじゃないか？　たまには」
秀人さんが、あっけらかんとした調子であっさり言う。
「でも……」
少しでも力を付けないと。一つでも多くの魔法を身に付けないと。また誰かが……
知らず知らずのうちに俯いていた私の頭に、ぽん、と手が乗せられる。
「明日、ちょっと隣町に用があるんだ。ちょっと付き合ってくれ」

うう～ん……まぁ、秀人さんがそう言うなら。
「行きます」
明日は、お休みを取ろう。
◆　◆　◆　◆
「行きます」
なのはがようやく頷いた。顔には出さず、ほっと一息。ユーノもどこか安心しているようだった。
あの、街を半壊させた暴走体を封印した日から、なのはは明らかに無理をしていた。学校から帰ってくるや否や、すぐにユーノに結界を張ってもらい、夜まで魔法の練習に没頭する。しかも、明らかに自分を追い詰めるような練習を、だ。すぐに気が付いて、一緒に練習することでやんわりと抑えていたが、あくまでそれは対症療法にしかならない。
それはまるで、何かを必死に振り払うかのようで……いや。まるで、というか、事実そうなのだろう。本人は頑なに否定するが、友達との辛い喧嘩別れは、相当堪えたらしい。
さて、明日はどこに連れて行くかな……町に用事があるなんて、大嘘だし。適当に買い物にでも連れ回して、強引に気分転換させてやろう。
「それじゃ、明日に備えて今日はもう休もう」
「……はい」
まだ釈然としないらしく、少し表情が硬い。はぁ……この子、将来はワーカーホリック気味になりそうだ。その辺は、『あの親』の子供なんだろうな。
『ユーノ、お前も来いよ？』
念話と共にユーノに目配せをする。
『そうだね。万が一ってこともあるし』
こいつはこいつで、前回のことを引きずっている。自分が、レイジングハートに制限を掛けなければ、もっと早期に鎮圧できた筈だ、と。
実際には、なのはの無茶な訓練を諌めるという目的があったのだから、仕方ないと言えば仕方ないことだ。全く。うっかり屋の癖に責任

感が強いんだから。
『うっかり屋って何さ、うっかり屋って!?』
やべ、念話してるの忘れてた。
「じゃ、帰ろうか」
ユーノの抗議を念話の回線ごとカットし、ヘルメットを被る。
「よいしょっと」
慣れたもので、なのははもう俺の手を借りずにタンデムシートに座れる。ユーノも文句を言いながらも、トランクボックスに収まった。
『なのは、どこか行きたい所は?』
念話のお陰で、インカム要らず。ああ、魔法って便利。
少し、サスからのショックが大きい。この頃無茶な使い方ばっかりしてたからな……。
明日、隣町で部品買うか。
『……特には』
そりゃそうだ。ん～っと……
『それじゃ、たまには外食でもしてみるか』
俺の用事なんて、ちょっとバイク屋に寄って部品をいくつか買うだけだし。ハンバーガーチェーンで人数分買って、どこか眺めのいい場所でのんびりしよう。
『そういえば、私、ハンバーガー食べるの久しぶり』
なのはがぽつりと呟いた。
『へぇ、意外だな。俺なんか、食事の用意が面倒な時はよく買ってたもんだけど』
流石に、食べ盛り育ち盛りの小学生にジャンクフードばっかり食べさせるわけにはいかないし、最近ではご無沙汰だ。
『大人の人ばっかりで、ちょっと怖かったから』
ああ、確かに……十代後半の若者がメインだもんな。小学三年生からすれば、十分に大人だ。
『はんばーがーって、どんな食べ物?』
ユーノが混ざってきた。よし、俺がハンバーガーの真実を教えてやらなければ。

『丸いパンを横に切り開いて、間に肉とか野菜とかを挟む食べ物。要はサンドイッチの変形だ』
『ああ、アレの亜種か』
こちらの食べ物にも慣れてきた異世界人。案外理解が早くて助かる。
『そうそう。フェレットバーガーとか絶品だぞ』
がつんっ！
リアボックスの中で、何かが跳ねる音がした。
『ふぇ、ふぇ、フェレットバーガー!?』
『ああ。内臓と骨を取ったフェレットをミンチにして、練り合わせた肉を挟むんだ。結構、人気商品でさ、早く並ばないと売り切れちまうんだ』
――がたがたがたがた……！
リアボックスが大フィーバーだ。少し間をおいて、言う。
『そういえば、『材料』の『持ち込み』もオーケーだったな……？』
『下ろせええええええええっ!!! すぐに下ろせええええええっ!!』
『おい、静かにしろよ具……じゃなくてユーノ』
『今、具って言った!?』
「……ふふっ」
お、やっと笑った。バカな話をした甲斐があった。
『な、何だ……冗談だったんだね』
『……』
『何か言えよおおおおおおおおお!?』
夜は更けていく……

◆▪◆　◆　◆

土曜日。天気は快晴。テレビの中の気象予報士は、今日は半そで一枚で過ごせる気温であることを告げていた。つまり、絶好のお出かけ日和だ。最初は乗り気ではなかった私でも、うきうきしてくる。姿見の前で、服装をチェック。
デニム生地のベスト。七分丈のオレンジ色のTシャツ。ホットパ

ンツ。縞模様のオーバーニーソックス。スニーカー。よし、大丈夫。
ぴったりのタイミングで、アパートの前に秀人さんのバイクが戻ってきた。遠出するということで、ガソリンを補給してきたらしい。部屋を出て、戸締り。さて、出発しよう。
ファーストフード店に入り、二人分のセットを注文した。秀人さんは、お肉が二重になっている、何だか大きなハンバーガーと、コーラ。それと同じものはとても食べ切れそうになかったから、私は普通のハンバーガーとオレンジジュース。ユーノくんは、鞄の中でフライドポテトとアップルパイを一生懸命食べている。
「「いただきまーす」」
ぱくり、と齧り付く。少し油っぽいお肉と、パサパサしたパンが、何故か妙にマッチしていた。個別に食べたらそんなに美味しくないのに……不思議だ。
ポテトをつまんだり、ジュースをちびちび飲みながら、ハンバーガーを食べ進めて行く。
結局、私の小さな口では、一個を食べきるのに十分を要した。
「あうう……苦しい」
さすがに、脂分が多すぎた……美味しかったけど。
「はは、やっぱりなぁ」
秀人さんが、コーラの容器に入っていた氷をガリガリ噛み砕きながら笑った。
「ほら、食べカス付いてるぞ」
「え、うそ!?」
ひゃー！　かっこ悪い！
「ちょっと動くなよ？」
手元にあった紙ナプキンを取り、私の口元を拭った。目を閉じてされるがままになる私。
「うううう、ごめん、秀人さん」
ああ、もう。私ってば、いつも秀人さんに迷惑ばっかり……
ぽふ、と頭を撫でられた。あ……もしかして私、また下向いてた？
「気にするなよ、家族なんだから」

「……うん」
店を出た次に向かったのは、一軒のバイク屋だった。どうやら、バイクの消耗部品を買うらしい。最近、無茶な使い方してたからね。
店内には、所狭しと色々なバイクが並んでいる。色も形も様々で、見ていて楽しい。
『へぇ……全部、ガソリンエンジンかぁ』
ユーノくんが、興味深そうにバイクを見ている。
「エンジンって、ガソリンで動かすものじゃないの？」
『僕のいた世界では、水素エンジンが実用化されてたから。クリーンなエネルギーだけど、爆発的なパワーは出ないんだ』
秀人さんが、伝票らしき紙切れを持って戻ってきた。
「無公害にも、それなりにデメリットがあるってことか」
『初めて秀人のバイクに乗ったときはびっくりしたよ』
「……私も」
何せ、初めて乗ったバイクで、時速２００ｋｍだもん。怖かった……
バイク屋を出ると、丁度お昼だった。
「ねえ、ちょっといい？」
お昼ごはんはどうしよう。さっきのハンバーガーはちょっと重かったから、軽く済ませたい。
「ちょっと、ねえってば」
でも、それだと秀人さんがお腹空いちゃうかも。う～ん……あ、そうだ！　回転寿司なんてどうだろう。安く済むし、量も自分で決められるし……
「高町さん！」
「はいっ!?」
え、何!?　慌てて振り向くと、気の強そうな外国人の女の子が立っていた。えっと、えっと、外国人に話しかけられた場合は……
「そ、そーりー！　あいきゃんのっとすぴーくいんぐりっしゅ！」
逃げるしかない！　英語なんて話せないもん！
踵を返して駆け出す。

「日本語で喋ってるでしょうがあああ!!」
が、上着の袖を思いっきり掴まれてしまった。結構な勢いだったせいか。
――びりっ
「あ」
……破れちゃった。縫製が甘かったのか、袖が肩口でぷらぷらと揺れている。
「ご、ごめん、やりすぎた……」
「……別に」
嘘。本当は、秀人さんに買ってもらった上着を台無しにされて、怒鳴りつけてやりたい気分。でも、初対面の人にそんなことするわけにもいかないから、我慢だ。
「アリサちゃん?」
人ごみを掻き分けるようにして、もう一人、女の子がやってきた。今度は、長い黒髪の女の子。目の前にいる外国人の子――名前は、アリサさんというらしい――の知り合いみたい。どちらにせよ、見知らぬ相手だ。服は、家に帰ったら繕えばいい。
「じゃ……」
「ちょっと待って、高町さん」
見つかっちゃった。面倒くさい……
「あの……どこかでお会いしたこと、ありましたか?」
二人とも、私の苗字を知っているみたいだ。
「……」
二人は、ジト目で私を見た。そして、金髪の子が、はぁ〜、とため息をついた。
「あのねぇ……元クラスメイトの顔、忘れたの?」
……元クラスメイト? ということは、二人は聖祥大附属小学校の時の同級生?
確かに見覚えが……無い。忘れる忘れない以前に、最初から覚えていなかったらしい。
「とにかく、じゃあね。服のことは気にしないでいいよ」

再三、逃亡を図る。
「ウチなら、その服直せるから一緒に来てくれない？」
が、またしても。今度は黒髪の子に手をやんわりと掴まれてしまった。目が合いそうになり、慌てて逸らす。どうにも、他人は苦手だ。
「人、待たせてるから」
「お願い」
「放してよ……いいって言ってるんだから」
「お願い」
う……何この人。大人しそうに見えて、結構強引だ。
『秀人さん……ごめん、ちょっと』
念話で秀人さんを呼ぶ。
「どうした？」
バイク屋から秀人さんが駆け出してきた。掴まれた私の手と、破れた袖に目をやり……
「……なのはに、何か用でも？」
低い声で、聞いた。
しかし、黒髪の子は臆するでもなく、秀人さんに頭を下げた。
「私は、月村すずかと言います。彼女の服を破ってしまったので、お詫びを兼ねて我が家にお招きさせてもらえないでしょうか？」
礼儀正しく、申し出る。秀人さんも毒気を抜かれたようで、困ったように私を見た。
「……どうする、なのは？」『僕としては、別にどちらでもいいよ』
私次第か。わざわざ自分で繕う手間が省けるなら……でも、一人で行くのはやだ。
「秀人さんとユーノくんが、一緒なら」
「勿論、歓迎します」
月村さんは、そういってにっこりと微笑んだ。
「んじゃあ、俺、バイク取ってくるから」
「うん」
秀人さんのバイクで、月村さんとバニングスさんが乗る車に着いていくことになった。

さて、秀人さんが来るまで手持ち無沙汰だな……
「あのさ、秀人ってのは、あの人のこと？」
「そうだよ」
「じゃあ、ユーノって誰？」
……あ。
「……ええと」
どう説明したものか。うーん……あ、そうだ。
『ユーノくん、ちょっとこっち来て』
『いいよー』
秀人さんの鞄から、ユーノくんが出てくる。
足元まで走り寄ってきたユーノくんを抱き上げ、二人に見せる。
「この子が、ユーノくん」
口で説明するより、見せたほうが早い。
「うわぁ……可愛い！」
「綺麗な毛並み……」
どうやら、気に入ってくれたらしい。でも、ごめんねユーノくん。ペット扱いして。
『はは、もう慣れたよ……』
バニングスさんと月村さんにもみくちゃにされながら言う。
と、路肩に秀人さんのバイクが止まった。
「なのは、お待たせ」
「うん」
ヘルメットを被り、あご紐を締め、バイクによじ登る。
それを、二人はぽかん、とした顔で見ていた。
……もしかして、私も一緒に車に乗ると思っていたのだろうか。自慢じゃないが、私の人見知りは筋金入りだ。ほぼ初対面の相手と、密室に入る勇気は無い。
「ユーノくんは、そっちに預けておくね」
「え、ええ……」「わかった……」
妙に長い車に先導され、着いた先は……
「でか……」

そう、大きな洋館だった。一体何坪あるのか、聞くだけ馬鹿馬鹿しくなるくらい大きい。
漫画みたいなお金持ちだ。
「それでは、二輪車はこちらでお預かりします」
燕尾服を着た初老の男性が、秀人さんを車庫へ先導していった。
破れてパンクな雰囲気になった上着をメイドさんに預け、多少身軽な格好でテーブルについた。月村さんは微笑、バニングスさんは苦虫を噛み潰したような顔で、私を出迎える。
「高町さん、好きな紅茶は？」
紅茶の葉っぱに種類なんてあるの？　リ○トンしか飲んだこと無いんだけど……
「匂いがキツくなくて、砂糖とミルクが入ってれば何でもいい」
月村さんが、またくすりと笑った。被害妄想なのだろうが、馬鹿にされたみたいで少し腹が立った。月村さんが何かを伝えると、メイドさんは頷き、引っ込んで行った。さてと、そろそろ、理由を聞くとしよう。
「それで、どういうつもり？」
「え、何が？」
月村さんは、飄々と受け流す。
「さほど面識の無い私を、わざわざ家に上がらせて、どういうつもりなのかって聞いてるの」
多少、強い口調になってしまった。
「ちょっとアンタ、言い方ってモンがあるんじゃないの？」
それに噛み付いてきたのは、バニングスさん。
あぁ……元はと言えば、この人のせいなんだよね。
「私は『アンタ』じゃなくて『高町』だよ、バニングスさん」
多少の威圧を兼ねて、ジロリと睨む。
「あなたみたいに呼びづらい苗字じゃないんだから」
「何ですって!?」
「何、文句あるの!?」
がたん、とバニングスさんが椅子を蹴立てて立ち上がる。私も席を

立ち、真正面から睨む。
「はいはい、そこまでですよ～」
緊迫した雰囲気を一瞬にして弛緩させる、ユルい声がかかった。紅茶やらお菓子を載せたカートを押してきたメイドさんだ。
「もう、仲良くしないといけませんよ～？」
「……ふん」
席につき、配膳された紅茶を一口飲んでみる。
……美味しい。
「高町さん、どう？」
月村さんが感想を聞いてきた。……意固地になる必要は無いか。
「うん、美味しいよ」
「……ねぇ、『高町』は、何で転校したの」
バニングスさんが、恐る恐るといった感じで聞いてきた。普通聞くかな、そんなこと。
さらっと適当にでっち上げて済ませよう。
「ああ、家計が厳しくてね。学費が払えなくなったんだよ」
大半は真実だからか、するりと言葉が出た。
「……」
「……」
二人は、神妙な顔つきで沈黙していた。不幸自慢なんて、したくなかったんだけど。紅茶の最後の一口を飲み干し、カップを置いた。
「ちょっと外すね」
席を立つ。さてと、秀人さんはどこかなー。

バイクから下り、俺の住むアパートがそのままスッポリ入りそうな車庫の中を見渡した。
（……長いロールスロイスとか初めて見た）
「どうかされましたか？」
俺を先導する執事が振り返る。
「……いや、金持ちっているんだなぁ、と」
「左様でございますか」

実にアウェー感漂う。
なのはとは別行動だ。小学生とはいえ、女の輪に入る勇気は無い。
『……僕も、あの中に入るのはもう無理』
肩の上でユーノがぐったりとしている。車の中で、あの二人に徹底的に可愛がられまくったらしい。それに、これがきっかけになって、なのはに友達が出来れば、というセコい思惑もある。
と、車庫の一角に目が、足が止まる。恐らく、ここにある車を整備するためだろう。
まるで、車検場のように整然と工具が並んでいる。このまま店が開けそうな規模だ。
「あの、」
「何でございましょうか」
「バイクの整備したいんですけど、アレ、借りられます？」
執事さんは少し思案し、笑顔で頷いた。
「勿論、構いません」
よし、やるか。
レンチ、スパナ、ドライバー……各種工具を手元に揃え、作業を始めた。
バイクと格闘して油まみれになること数十分。ようやく作業が終わり、洗剤で手の油汚れを落とした頃。
「秀人さ～ん」
なのはが車庫にやってきた。
「どうしたんだ？」
まだあの二人とお喋りしてるかと思ったのに。
「ちょっと様子が気になって……」
目線を外し気味に言う。……嘘だな。大方、何を話せばいいのかわからなくなって逃げたんだろう。まぁ、いいか。
なのはを案内してきたのは、俺とほぼ同年代らしいメイドさんだ。
「ふふ、仲がよろしいですね」
――ずくん。
「やっぱり出たな」「そだね」

ジュエルシードって、いつも実に面倒臭いタイミングで現れるよなぁ……

『ユーノ、結界頼む』

『了解』

ユーノも慣れたものだ。

目の前にいたメイドさんの姿が、曇りガラスを挟んだように徐々に輪郭をぼかし……消えた。

暴走体の気配は、そこまで強くない。戦闘力でいえば、一体目の毬藻モドキにも劣るだろう。とはいえ、放置は出来ない。なのははバリアジャケットを纏い、デバイスモードのレイジングハートを携えている。準備万端、っと。

車庫を飛び出し、気配の源へと向かう。俺はユーノを肩に地上を走り、なのはは飛行魔法で空を走る。楽勝……の、筈だ。けど、何でだ？　妙に、嫌な予感がする。

◆・◆　◆　◆

その、数分前。

「へー、大きい家だね」

少し痩せ気味の体躯に黒装束。無骨な斧を携えた少女が、月村邸を俯瞰していた。少女の足場は、電信柱の頂上。直径にして４０センチ程度の円の上だ。だが少女は、慄くでもなく、まるで地面に立っているかのように平然としていた。

「くふふっ……折角、お膳立てしてあげたんだから……」

天使のように可憐な、悪魔のように無慈悲な笑みを浮かべる。

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

行使するのは、魔力の共震波。

目的は、そう……ジュエルシードの、意図的な暴走。月村邸の中庭。ジュエルシードと、素体にはお誂え向きの、飼い猫。

「いい声で啼いてよ？」

『ｆｉｒｅ』

そして、魔法は寸分違わずジュエルシードに命中。狙い通りジュエ

ルシードは発動し、子猫を取り込んだ。
◆▪◆　◆　◆
「……」「……」「……」
開いた口が塞がらない。いや、だって、これは……
『みゃ～～～～～ご』
野太い鳴き声が鼓膜を震わせる。
「……猫、だよね」
見れば分かることを、わざわざ口に出して確認する。
「ああ、うん、多分……」
秀人さんも困惑しているのだろうか、自信なさ気だ。
『みゃ～～～～～ご』
……うん、猫だ。
ただし全高約１０メートル。ふさふさな毛並みと、つぶらな目、ぴんと尖った耳。ご丁寧に、首輪まで付いている。
「多分だけど……これは、素体になった子猫の『明確な願望』がカタチになったんだと……思うよ？」
……まさかとは思うけど。
「……『大きくなりたい』」
秀人さんが、私の代わりに口にしてくれた。
「多分」
ジュエルシード、融通が利かないにも程があるでしょ……首輪が付いてるってことは、多分この家の飼い猫だろう。さっきの部屋にも何匹かいたし。見たところ、大きい以外に害はない。サクッと終わらせて引き上げよう。
『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ』
猫の額に、ローマ数字が浮かぶ。
「ジュエルシード、シリアル１４、封いッ……!?」
『Ｃａｕｔｉｏｎ！』
レイジングハートの警告と同時に、その場から全力で飛びのいた。
――ドガッ!!
私たちと暴走体を隔てるように、ソレは地面に突き刺さった。

「攻撃魔法だ！　僕たち以外に、魔導師がいる！」
その言葉を皮切りに、右から、左から、上から、文字通り縦横無尽に、『光の槍』が飛来する！
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』
――キュガガガガガガガガガガガガガッ!!!!
三人分の魔力を注いだ防御魔法を展開し、爆撃のような攻撃魔法の雨に耐える。
「くうううッ……!!」
何秒か、何分か、何時間か。一体どれだけ耐えていただろう。攻撃魔法の雨が止み、粉塵がようやく収まった。
「二人とも、大丈夫……？」
「なんとか」「僕も」
そうだ、子猫……！
晴れた粉塵の向こう。暴走体は、地面に倒れ伏していた。身体の至るところに、光の槍がいくつも突き刺さり、血を滲ませている。満身創痍どころか、瀕死の重傷だ。
『ミャ、ァ、、』
苦しげに鳴く暴走体。早く、ジュエルシードと切り離さなきゃ……！封印魔法を暴走体に放つが……
――ガンッ！ガゴンッ！
その片っ端から、あの光の槍に打ち落とされる。
秀人さんが近付こうとすると、それをまた光の槍が阻む
「……誰なの!?」
封印を取りやめ、周囲を見渡す。だけど見えるのは、曇り空と、鬱蒼とした雑木林。あの攻撃魔法がある間は、エリアサーチは行えない。
「出てこい！」
無作為にばらまいた射撃が、雑木林の枝を落としていく。
――あはははははは！
耳障りな嘲笑が、雑木林に反響する。
「こっ……このおぉぉぉぉ！」

「落ち着け！」
　ぐいっと腕を掴まれる。
「無駄に消耗するな！」
「は……はい」
　秀人さんに叱責され、いくらか冷静さを取り戻せた。そうだ。機会を伺うんだ。少しでも姿が見えるまで。その時は……！　レイジングハートを握る手に力が入る。
「近くにいる」
　ユーノくんが忠告する。
　ちらりと後ろを振り返る。暴走体の子猫は、もう弱々しい吐息を漏らすだけになっている。
『ニャアァ……』
　助けを求めるように首をもたげる。
　でも、近づけない。あの光の槍の一つ一つは、私一人の防御で十分防ぐことができる。けど、それが何十も叩き込まれるなら、話は別だ。一瞬で意識を刈り取られてしまう。目の前で助けを求めているのに、助けられない。それがひどくもどかしく、苛立たしい。
「出てこい、卑怯者！」
「うん、いいよ？」
　それは、唐突だった。
「なっ!?」
　耳に息がかかるような距離から、いきなり聞こえた声に驚き飛びのく。慌ててレイジングハートを向けるが、既にそこには誰もいない。
『ギャアッ！』
　目を逸らした暴走体が、悲鳴を上げた。
「くふふふふ」
　暴走体の頭に腰を下ろし、紅い瞳が悠然と私たちを見下ろしている。
　ようやく、姿が見えた。
　二つに束ねた、バニングスさんとはまた違った質感の金髪。細身を黒いバリアジャケットで包み、手にはデバイスであろう斧を持ってい

る。とても、綺麗な子だった。
「そこをどけ」
秀人さんが、少し緊張した面持ちで告げる。
「早く切り離さないと、素体の猫が死んじまう」
「それが？」
鈴を転がすような、ハスキーでよく通る声。
「それが、って……！」
綺麗な子。だけど、間違いない。こいつは、敵だ！
『Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
誘導弾を五つ出現させる。喰らえ！
「シュート……!?」
「遅いよ」
『Ｔｈｕｎｄｅｒ』
――バチィッ!!
「……ッぐ!!」
「なのは！」
……え？
何で私、秀人さんに抱えられてるの……？
「あ……う」
口が、動かない。いや、口だけじゃない。身体の自由が、効かない。からん、と手からレイジングハートが転がり落ちてしまった。拾い上げないと。早く、早く……でも、思いとは裏腹に、力が抜けていく。視界にモヤがかかったように霞んでいき……
――意識が、途絶えた。

「天候操作……!?　こんな高度な魔法を、ノーモーションで!?」
気絶したなのはをゆっくり横たえる。なのはに怪我は無い。バリアジャケットが、代わりにボロボロに黒焦げていた。落雷の直撃を受けて、この程度で済んだのは幸運なのかもしれない。けれど。
「……てめぇ」

ふつふつと、怒りが沸いてくる。
「タダで済むと思うなよ！」
なのはを傷付けるなら、どんな奴だろうと俺の敵だ！
「レイジングハート、モードリリース！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』
デバイス形態を解除し、スタンバイモードに。俺が使う機能なら、この状態のままで十分だ。
「へぇ、デバイスを共有してるんだ。効率悪ッ！」
小馬鹿にされるが、知ったことか。
「ユーノ、お前はなのはと子猫の治療を頼む」
黒衣の少女の手には、ジュエルシードが握られていた。なのはを攻撃するのと同時に、封印したらしい。
「わかった。でも、相手が子供だからって油断しないで……かなりの使い手だ」
「ああ」
あの攻撃、あの速さ。油断なんて、最初からしていない。
「次はお兄さんが相手？」
少女が黒塗りの斧を向けてくる。
「くふふっ、いいよ。どうせ、ボクには勝てないけど」
やってみろよ！
「バレット！」
ピンポン玉サイズの青い魔力スフィアを数個、拳に纏わせる。
『Ｂａｌｌｅｔｔｅ』
「ファイア！」
――ドガガガガッ!!
だが、やはりと言うべきだろうか。
「ひょいひょいっ、と」
わざわざ擬音を口にして、余裕で回避してみせる。やはり、速い……！
密集した木々の隙間を飛び回り、跳ね回り……
――ヒュンッ！

唐突に、斧が死角から迫る。
「うおっ!?」
――ガンッ！
慌てて腕でガード。
魔力で強化した腕を、衝撃が突き抜ける。なんて威力だ！
「くふふっ。よく防いだね、お兄さん」
ひゅんひゅん、と、鉛筆回しでもするように軽快に斧を振り回す。
「じゃあ、これはどうかな!?」
『ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ』
バチッ、と、薄暗い森の中に光が散る。これは、さっきの……！
「ファイア！」
――キュドドドドド！
光の槍の、一斉掃射！
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』
間に合え……!!
「ぐ……あああ！」
弾き飛ばす度に、衝撃が突き抜ける。
――ガガガガガガガガガガガガ……!!
なんつー連射だよ！
――ピシッ……ピキッ……
バリアに亀裂が入ってきた。そこを修復し、全体を補強し……ようやく、攻撃魔法が収まった。何とか……耐えきったか。
「大した硬さだね」
少しだけ感心したように、太い枝の上で立ち止まる。
「ボクの攻撃を防ぎ切ったのなんて、リニス以来だよ」
「そいつぁ、光栄だね……」
対してこちらは……？
『残存魔力４８％です』
「そうか。まだ余裕だな」
多少はダメージを喰らったが、戦闘の続行は可能だ。あのクリーンヒットが堪えたけど、倒されるほどじゃない。

「……あ、もういいや」
唐突に、少女から戦意が消えた。
「どういうつもりだ？」
バレットを構えながら尋ねる。くふふっ、と笑い、告げる。
「もう、目的は果たしたから。バイバイ、お兄さん」
ひゅんっ、と消える。周囲をサーチしてみたが、反応は無い。どうやら、本当に離脱したらしい。
それにしても、目的って何だ……？

まず感じたのは、固い地面の感触。
そして、身体を包む暖かさ。
「……う」
けだるさを無視し、目を開ける。半球状の膜が、私と、さっきの子猫を覆っていた。
「気が付いた？」
「ユーノ、くん？」
そうだ、私は子猫を助けようとして……！
がばっと身体を起こす。
「あ、まだ無理しちゃ駄目だよ！」
「あ、あいつは!?」
きょろきょろと辺りを見回す。私はバリアジャケットではなく普段着で、レイジングハートは手元には無かった。
「今、秀人が追ってる」
そっか……
「私、負けちゃったんだ」
「……うん」
ユーノくんは、否定しなかった。
「そっ、か……」
強くなったつもりだった。練習は実を結んでいると思っていた。
……でも。
「何にも、出来なかった……」

悔しくて、悔しくて。ただ、拳を握ることしか出来ない。
「本当にこっち？」
「うん、あそこがお気に入りだから」
不意に、人の声が聞こえてきた。
「え!?　結界を張ってるのに……！」
ユーノくんが慌てる。
「綻んでる……!?そんな！」
魔法を見られるのを防ぐためか、治療魔法が中断される。ほぼ同時に、バニングスさんと月村さんが姿を見せた。
「あれ、高町さん。こんな所で何を……あ！」
その視線が、倒れている子猫に向いた。
「マルス！」
子猫を抱き上げると、白い服にじわりと赤い染みが広がった。月村さんが携帯電話で、誰かを呼ぶ。よかった。これで、少なくともあの子猫は助かる。
けど、何でだろう。
――何で、バニングスさんは私を睨んでいるんだろう。
「高町、何でアンタはここにいるの」
血の気が引く。それを実感したのは、初めてのことだった。
「アンタの連れは、ガレージにいるんでしょ？　なんで、アンタはここに、マルスのそばにいるの？」
どうしよう……どうしよう！
「……アンタがやったの？」
静かな問い。
「ち、違……」
「じゃあ、何でこんな所に一人でいるのよ！」
言えない。言えるわけがない。
ただ黙る私を見て、バニングスさんは確信したらしい。私が子猫を傷付けたと。
「……て行け」
「違う、違うの、バニングスさ、」

「出て行け！」
「……あ」
言葉が、出ない。視界が滲み、まともに物が見れなくなる。鼻頭がツンとして、のどの奥が引き攣り……
「うあああ……！」
嗚咽が、漏れだした。

ただひたすら走って、走って、走って……気付いたら、屋敷の外を歩いていた。涙は涸れたのか、もう流れない。
――ぽたっ、ぽたっ
頭に水滴が落ちる。それが合図であるかのように、
――ざあああ
本格的な、雨になった。傘も無く、ぐしょ濡れになる。生暖かい雨に打たれながら、ひたすら屋敷から逃げるように遠ざかる。
「なのは！」
エンジン音に負けない大きな声で、後ろから呼び止められる。
「……秀人さん、ユーノくん」
そっか。置いて来ちゃったんだ。傍らにバイクを止め、駆け寄ってくる。
「ユーノに聞いた」
「……そう」
俯き黙り込む私を、抱き寄せる。秀人さんも、ユーノくんも、雨でぐしょ濡れだった。
「……違うのに」
不意に、口をつく言葉。私の意思とは無関係に、激情をぶちまける。
「私じゃない！　私は何もしてない！　何もしてないのに！　何で、何で……！」
涸れたはずの涙が、また溢れてくる。雨と涙が混ざり、地面に落ちていく。
「うあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

◆▪◆　◆　◆

「あはははははは!!」

黒衣の少女……フェイトは、大笑いしていた。目の端に涙まで浮かべ、腹を抱えて身をよじり……、喜悦を、全身で表現していた。

望遠モニターの中には、先ほどまで相対していた二人と一匹が映っている。

「あはっ、あはははは……!　はぁ、はぁ……、」

笑い疲れたのか、肩で息をする。

「フェイト、」

そこに赤い狼……アルフが戻ってきた。

「ああ、アルフ、お帰り。ちゃんとやってくれたんだね」

「……ああ」

隔離結界の一部を解除し、民間人の少女二人を誘い込んだのはアルフだった。

「あぁ、こんなに上手く行くなんて……くふふっ、可笑しっ!」

あの子猫に重傷を負わせるのも、その罪をあの少女になすり付けるのも、全てフェイトの描いた通りだ。

「さぁて……楽しくなってきた」

そして一人と一匹は、雨の帳に姿を消した。

◆▪◆　◆　◆

「ただいま」

アパートの鍵を開け、自分で言いながら部屋に入る。

「……」

なのはは、無言で靴を脱ぎ、部屋に上がった。俺の服を、がっちりと掴んでいる。仕方ないから、そのまま風呂場に連れていった。ユーノは黙って、後ろをついて来る。バスタオルで頭を拭いてやるが、雨粒を吸い込んだ服は、拭いたくらいではどうにもならない。

「ほら、風呂入ってこい」

棒立ちになるなのはを残し、風呂場を後にする。だが、

「嫌ッ!!」

背中に抱き着いてきた。

「お、おい……」
「嫌だ……」
かたかたと震えている。寒さだけが、原因じゃないのだろう。あんな理不尽な出来事、子供が経験していいものじゃない。
「……一緒に入るか？」
半ば、冗談のつもりだった。小学三年生とはいえ、女の子だ。
「……うん」
断るかと思っていたのだが、帰ってきたのは、肯定の頷き。逃げようとしたユーノも捕まえ、三人で入ることになった。
小さな背中にシャワーをかけてやり、冷たくなった身体を温める。なのはの表情は、髪の毛が覆っているせいで読めない。
「髪、洗うぞ」
シャンプーを手に取り、背中に掛かるくらいの長さがある髪の毛を丁寧に洗う。しばらく洗い、洗面器に張ったお湯で泡を流す。髪の毛を洗い終えたら、今度は身体だ。小さな背中を、ボディソープを染み込ませたスポンジで擦る。
「……負けちゃった」
ぼそり、と呟く。
「……ああ、そうだな」
泡を洗い流す。
「私、何もできなかった。頑張って……頑張ってたのに、ちっとも敵わなかった」
その小さな身体を、後ろから、そっと抱きしめる。
「なのはは、よくやったよ。なのはの頑張りは、俺が一番よく知ってる。だから……そんなに気に病むな」
「……うん」
なのはは、また少しだけ泣いた。
「うーん……」
湯舟に浸かりながら考え事をする。
なのはは先に上がらせ、ベッドに入らせた。今日のところは、もう眠らせてやった方がいいだろう。

あの黒い子は何者なんだとか、そういう事ではない。
（どうすれば、元気になるかな……）
元気が無くて当然だ。ただでさえ友達（本人は否定するが）を失ったばかりだというのに、今回の件。しっかりしているように見えて、その実傷つきやすいなのはには、相当堪えたに違いない。
『ユーノ、なのはは？』
『まだ起きてるけど……元気ない』
だろうな。さーて、どうすっかなぁ……

「おい、ヒデ」
「あ、ハイ。何すかカントク？」
その翌日。工事現場のプレハブ小屋で休憩中、上司に呼び止められた。
俺の収入源は、主にこういった肉体労働だ。鉄骨や土のうを運んだりといった単純作業は、気楽でいい。短時間で高収入。何より、自分の体質を隠さなくていいというのが最高だ。人付き合いも最小限で済むし……って、駄目人間の思考だなこりゃ。
そんな俺を特に目に掛けてくれているのが、目の前のオッサン……現場責任者、通称『カントク』。
そのカントクが、俺にチケットをくれた。最近オープンしたばかりの温泉宿のペアチケットだった。
「最近、シフト増やしてもらったからな。小遣いに取っとけ」
俺がシフト増やしたのは、あくまで生活費のためなんだが……
「まぁ、カノジョでも誘ってシッポリ休んでこいよ。ヒヒヒッ！」
親しみの篭った下ネタに苦笑しつつ、それを受けとった。ペアというのはありがたい。
「んじゃ、ありがたく頂きます……っていうかカントク？」
「あぁ、何だ？」
タオルで汗と泥を拭き取りながら。
「なんでペアチケットなんですか？」
それが不思議でならない。ペアチケットというのは、二人でないと

使えないものが殆どだ。下手したら無駄になる可能性だってあるのに。だが親方は、ニカッと歯を見せて笑い、言った。
「男が汗流して働くのはな、大抵オンナのためって相場が決まってんだよ」
俺はもう一度、頭を深く下げた。
「ありがとうございます!!」
◆▪◆　◆　◆
「……はぁ」
遊歩道のベンチに座り、読みかけの本から顔を上げる。夕日が上って、空が赤く染まっていた。どう見ても、夕方だった。
（……また、サボッちゃった）
あの日以来、私は学校へは行っていない。この前までは、空気のように、クラスの中に溶け込んできたつもりだ。でも、八代さんとの一件で、それが出来なくなってしまった。
教室に顔を出して、いつも通りに過ごせる自信が無かった。それに。
（他人が、怖い）
誤解を受けるかもしれない。ひどいことを言われるかもしれない。傷付けられるかもしれない。そんな恐怖が心に根付き、人がいる場所から足が勝手に遠ざかった。
『戦闘終了』
レイジングハートと行っていた模擬戦を終える。
「十七連敗、か……」
仮想敵は、あの黒衣の少女。秀人さんが戦った時に収集した戦闘データを基に作り上げたアバターだ。それを相手に、私は不様に黒星を更新し続けていた。攻撃は避けられ、防御は破られ、逃げられたら追いつけず、追い掛けられたら逃げきれない。まざまざと、実力の差を見せ付けられた。
『なのは、今日はここまでだ』
膝に乗ったユーノくんが、訓練の終わりを告げた。確かに、頭を使いすぎてちょっと熱っぽい。

「……私、こんなに弱かったんだ」
今日、何度目になるかも分からないため息。
「帰ろうか」
ランドセルを背負い、公園を後にする。
夕食を終えた後、秀人さんが細長い紙をちゃぶ台の上に置いた。
「温泉？」
「ああ。仕事場の人から貰ったんだ」
日付は、明日と明後日。一泊二日だ。平日だけど、どうせ学校へは行っていないし、構わないだろう。
「何も起きなければいいんだけど……」
「ちょ……不吉な事言うなって！」
秀人さんが、割と本気で慌てている。でも、思い返してみれば、ジュエルシードと遭遇するのは、いつも出かけた先だ。出たら出たでなんとかしよう。
「わかりました。学校には連絡しておきます」
「ついでに無断欠席のこと、謝っておけよ？」
「――はい」
バレバレだったらしい。じろりとユーノくんを睨むと、そそくさと目を逸らした。犯人はユーノくんか。
アパートの外に出て、担任の電話番号を押す。留守電だったら楽でいいんだけどなぁ。
しかし、数回の呼び出し音の後、がちゃりと電話が繋がった。
『もしもし？』
まだ私だとは知らないようだ。携帯電話だからだろう。
「夜分遅くに済みません。高町です」
がたんっ、と何かが落ちる音が、受話器の向こうから聞こえてきた。
『た、高町さん!?』
「はい。こんばんは」
『五日も休んでどうしたの!?心配したのよ!?』
「済みません、面倒臭かったんです」
私は嘘が下手だ。どうせバレるなら、最初から正直に開き直って話

してしまった方がいいだろう。
『め、面倒臭いって、あなた……』
「人付き合いが面倒なんです。だから、誰とも会いたくありません」
『本気なの!?』
「はい。なので、しばらく学校へは行きません。じゃ」
『待って！』
電話を切ろうとしたが、まだ話があるようだ。
『そこにご両親はいらっしゃるの!? すぐに替わって！』
ご両親、ねぇ。思わず苦笑が漏れる。
「喫茶店にでもいるんじゃないですか？」
ぶちっ、と電源を切り、着信拒否リストに放り込んだ。
「秀人さん、オッケーだよ」
「ん。それじゃ、着替えの準備しようか」
「はいっ」
翌日の朝。バイクに乗り、温泉宿に向けて出発した。市街地を走り、高速道路に乗る。メーターを覗いてみると、現在の速度は時速１２０キロ前後。散々アクロバティックな走
行で慣らされた私たちには、どうってこと無い速度だった。
温泉宿に着いたのは、お昼過ぎだった。寄り道してたら、遅くなってしまった。
「吾妻さまですね。ご予約、承っております」
通されたのは、十畳ほどの和室。私たちには丁度いい広さ。温泉は、共用の大浴場の他に、各個室ごとに用意されているらしい。障子を開けたそこには、柵に囲まれた石風呂があった。
「せっかくだから」と、まずは大浴場に行くことにした。当然、男湯と女湯は別になっている。ペットの連れ込みは厳禁だから、ユーノくんは部屋でお留守番。何だか、悪い。
脱衣所で服を脱ぎ、かごに入れる。
と、私のすぐ横に、女の人がずいっと現れた。
……こんなに広いんだから、別の場所を使えばいいのに。
視界の隅に揺れる、真っ赤な毛髪。

（え？）
思わず、横を向いてしまった。うん、見間違いなんかじゃない。お姉さんの髪の毛は、鮮やかな茜色だった。
「珍しいかい？」
不意に、お姉さんに声をかけられた。まじまじと見すぎた。
「ご、ごめんなさい」
「いいさ」
外見とは不釣り合いな、無邪気で子供っぽい笑みを見せる。
「綺麗だと思いますよ？」
「ありがとうよ」
そして、豪快に服を脱ぎ捨てた。羞恥心が薄いのだろうか。引き締まった肉体が、いやに眩しい。
「なぁ、アンタ……」
「はい？」
浴場に入ろうとしたところで、また話し掛けられた。
「あたし、こういう場所に来るの初めてなんだ。ちょっと教えてくれよ」
えっと、つまり、温泉でのマナーを教えてあげればいいの？
「わかりました」
「よーし！じゃ、行こうか！」
「……え？」
がっしりと手を取られた。
「あの、口頭じゃ……」
「ダメだ。あたしは体験主義者なんだ」
ずりずり……
「あ～……」
「まずは身体を洗います」
身体を洗うスペースへ行き、椅子に座る。
「身体を洗う時は、かならず椅子に座って、シャワーは通路側ではなく、壁際に向けて」
桶にお湯を張り、手足など、体の末端から徐々に掛け湯をして温め

ていく。お姉さんも見よう見真似で、掛け湯をする。
石鹸をタオルで包み、泡立てる。身体を洗い、汚れを丁寧に落として行く。
「うー……あたしゃ、このシャンプーってのが苦手でねぇ」
「ああ、目に入ったら痛いですよね」
目をぎゅっと瞑り、わしわしと乱暴に髪の毛を洗っている。
そして、湯船に入る。
「……」
う……なんか、お姉さんがじっと私を見てるんだけど……
「あの……何か？」
「なんか、悩んでる匂いが……」
「に、匂い……？」
腕に鼻を近づけ、嗅ぐ。石鹸と温泉の匂いしかしない。臭く……ないよね？
「じゃなかった。悩んでる顔してるからさ」
見ず知らずの他人に話すような内容じゃないことは、わかってる。こんな話、されるほうが迷惑だろうし、気分も悪いはずだ。
「勝負に、負けちゃったんです」
それなのに、話さずにはいられなかった。
「負けられない……負けちゃいけない勝負に。ほんの数秒で」
それっきり、黙り込む。お姉さんも、何も言わない。
（やっちゃった……）
いきなりこんな話されてドン引きしてるんだ。ああ、もう。私の馬鹿！
「じゃあ、次は負けないように頑張るしかないね」
「え？」
お姉さんは、笑って……それでいて、真剣な表情で、そう言った。
「そうだろ？　足を止めたら、今度こそ、本当に届かなくなっちゃうよ」
照れくさくなったのか、そっぽを向く。
「頑張ったのに報われないなんて、そんなこと、あっちゃいけないんだ

……」
その最後の言葉だけは、私に向けられたものではないようだった。
「あの、ありがとうございます……あれ？」
私の隣にいたはずのお姉さんは、忽然と姿を消してしまっていた。
『じゃあ、次は負けないように頑張るしかないね』
お姉さんの言葉を、反芻する。
「全く、気軽に言ってくれちゃって……」
くすり、と笑う。
そうだ。一回負けたくらいで、何をうじうじ悩んでいたんだろう。今の私がするべきことは、負けないように頑張る、ただそれだけじゃないか。今度こそ、勝つために！
熱意が、沸き上がる。
「よーし！」
ぱんぱんっ、と両頬を叩き、板張りの廊下を駆け抜ける。
――私は、まだ頑張れる！
◆・◆　◆　◆
――がつんっ。
薄暗い裏庭に、不穏な音が響いた。
「うぐっ……」
茜色の頭髪をもつ女性……アルフが、頭を押さえてうずくまる。それを、絶対零度の視線で見下ろすのは、彼女の主であるフェイトだ。
「……ねぇ、どうして？」
華奢な手には、血を滴らせる黒い斧。これで、アルフの頭を打ち据えたのだろう。
「ボク、言ったよね？『あの子の心をへし折る』って」
「……ああ」
抑え切れず、赤い血がアルフの額を伝い、地面に染み込んでいく。
「だったら！」
「あうっ……！」
長い髪の毛を掴み上げ、顔の高さを合わせる。
「なんで、元気付けるような真似をした!!　ええっ!?」

真っ赤な双眸は怒りに見開かれ、使い魔たるアルフを睨みつける。
そして、再び斧を振り上げ……
――ガンッ！
「言うことを聞けない、悪い子には！　お仕置き、だっ!!」
――ガンッ！　ガツンッ！
二回。三回。打ち据えられる度に、アルフの身体に衝撃が走り、血が飛び散る。
「はあっ、はあっ……!!」
肩で息をして、血を流して倒れるアルフを見下ろす。
「ねぇ……アルフは、ボクのことがキライなの？　ボクのことなんてどうだっていい？
ボクを困らせるのが楽しい？」
次の瞬間には、怒りは消え失せ、深い哀しみを浮かべた。あきらかに、情緒が不安定だ。錯乱している、と言ってもいい。
「キライなはず、無いだろ？」
アルフは、フェイトの華奢な身体を抱きしめる。フェイトは機嫌を良くしたのか、アルフを柔らかく抱き返した。
「じゃあ、もうボクの言うことに逆らわない？　ちゃんと言うこと聞く？」
深い、深い、深淵のような瞳で、アルフを真っ直ぐに見据える。
「……あぁ、約束するよ」
「絶対だよ……悪い子は、いらないからね」
そして、慈しむように、アルフの血まみれの頭を撫でる。
びちゃ……とフェイトの手が赤く染まるが、意に介さず、アルフを愛撫する。
「……今夜、この辺りにあるジュエルシードが発動するよ」
それに身を任せながら、アルフが言う。
「そうみたいだね」
その気になれば、発動前のジュエルシードを確保できるだろう。だが、そうしない。
「あの子が出て来たら……くふふっ！」

迫る、『お楽しみ』の時間に思いを馳せ、笑いを漏らすフェイト。
「奪ってやる……！」
獰猛な笑みを浮かべる。その感情の猛りに呼応するように、周囲の空気がバチバチと帯電していた。
「あの弱っちい子が必死に集めたジュエルシードを、全部奪ってやる！
くふふっ、くふふふふっ!!　あーっはっはっは!!」
◆▪◆　◆　◆
一体何があったんだ……
俺は、少し離れた場所でそれを見ていた。
「……ここで旋回。振り下ろしてきた斧を、」大浴場から戻るや否や、レイジングハートの前に正座し、イメージトレーニングを始めてしまった。さっきまでは沈み濁っていた瞳が、星を散らしたように明るく輝いていた。
元気になったのはいいことだが、少し、極端すぎる気が……
「バインドは回避……回避した先に、誘導弾で先回り……」
もうかれこれ、二時間近くああしている。
「……すごいよ、なのは」
ユーノも驚いている。
「アバターとはいえ、互角に渡り合ってる」
今まで黒星続きだったというのに、格段に進歩している。
「……よし！」
そして、訓練開始から二時間半。なのはが、汗びっしょりのまま、会心の笑みを見せた。
「勝った！」
『お見事です、マスター』
「やったな、なのは……!?」
お馴染みの、あの感覚。あーあ、やっぱりなぁ。嫌な予感だけは、よく当たる。
「行けるか、なのは」
訓練で消耗しているんじゃないか？だが、杞憂だったようだ。

「全然平気。むしろ、いつもより調子いいかも」
身体が温まっているらしい。窓から飛び出し、裏庭へ飛ぶ。
多分……いるだろうな。あの子が。

暴走体は、さほど強力な個体ではなかった。いつも通り、バインドし、射撃魔法で弱らせ、封印。還元されたジュエルシードをレイジングハートに納める。
そして、やはり。
『来ました』
月明かりを受けて、金色の髪が輝く。紅い瞳は、猛禽のように私を捉えていた。
睨み返し、レイジングハートを握る手に、強く、強く力を入れる。
「今日は、勝つ！」
飛翔の勢いのまま、あの子が真っ直ぐに突っ込んできた！
――ツガギイイィィン！
プロテクションを展開。勿論、これだけで防げるとは思っていない。あくまでこれは、衝撃を受け流すため。
（……ここ！）
身を翻し、力点をずらし、いなす。即座に方向を換え、斧が迫る。プロテクションを解除。レイジングハートの柄で、斧の一撃を受け止める。
――ギィン！
「うっ！」
受け止められた。だけど、衝撃で手がビリビリ痺れる。
『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
鍔ぜり合いのまま、誘導弾を発動。
『ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ』
あの子も、光の槍を出現させた。
「シュート！」
「ファイア！」

発射は、同時。
――ズガガガガガガッ！
攻撃魔法は、ぶつかり合い、互いを食い合う。そして、最後の一発が爆ぜ、その場から離れる。
「ふぅん、腕を上げたね」
どうでもよさ気に呟く。バリアジャケットの腰の部分が、擦り切れたみたいになっていた。
「でも、まだ届かない」
ぱきん、と音を立て、私の手甲が砕ける。
「すぐに届かせるよ」
不敵に笑い返す。それがカンに障ったのか。
「調子に……！」
ぐぐっ、と。獲物に飛び掛かる猛獣のように身体をたわませる。そして……
「乗るなアァァァッ！」
視認できる限界の速度で突っ込んで来た！

少し離れた場所で、衝突音と光が瞬く。
（なのは、負けるなよ）
俺とユーノは、結界の上空を飛んでいた。
月村邸での一件。明らかに不自然なタイミングで結界に穴が空き、彼女達がなのはと接触した。最初は、あの黒衣が空けたのかと思っていたが、俺と戦っていた場所からでは遠
すぎる。なら、残る可能性は。
「協力者がいる」
ということ。
伏兵として、結界の中に潜んでいる筈だ。エリアサーチは、レイジングハート無しでは発動できない。だからこうして、肉眼で探している。そして。
「「いた！」」

茂みに身を隠すようにして、茜色の毛並みが揺れている。
「ガアアッ！」
――ドンッ！
見つかったと分かるや否や、攻撃魔法を仕掛けてきた。照準は甘い。牽制目的だとアタリをつける。
「だあぁりゃあああああああ！」
足元にインパクトを纏わせ、急降下！
――バゴオオォォン！
地面をクレーター状にえぐり取る。だが、手応えは無い。回避したか。
周囲は鬱蒼とした雑木林。奇しくも、月村邸と似通った雰囲気だ。獣にとって、これほど有利なフィールドは無い。
「なら……」
手の平に、魔力スフィアを出現させる。インパクトに、拡散効果を付与。広範囲を、纏めて！
「吹ッ飛べぇ!!」
――ドゴオオォォン！
ばきばき……と、衝撃波を浴びて樹木が薙ぎ倒され、効果範囲が更地になる。
「まだまだぁっ！」
二発、三発と連射する、その度に、更地の面積が広がる。
「ちょっとちょっと！　いくら直せるとはいっても、限度があるからね!?　主に僕の魔力とか体力とか！」
「頑張れ！」
「ちょっとおおおおお!?」
「ガアッ！」
獣とて、逃げるばかりではない。大振りになった隙を突き、鋭い爪と牙を剥き、飛び掛ってくる。
「どりゃあっ!!」
それを、強化したブーツの底で迎撃する。
（やっぱりな。リーチが短い）

それに。
（二体目の暴走体と、戦い方がソックリだ）
そう。俺には、その分だけアドバンテージがある。
「ガアアッ!!」「よっ！」
爪の一撃を回避する。目も慣れてきた。
「おりゃあああああ!!」
――ドスッ！　ガコッ!!
腹部にミドルキックを浴びせ、下顎へアッパーを叩き込み、
「ガ、グッ……！」
「沈めぇっ!!」
ふらついた頭部に、踵落とし！
「やった！」
「いや、仕留めそこなった」
直前に、橙色のプロテクションで威力を殺された。そして、この場にはもういない。
「行くぞ。多分、なのはの所だ」
この距離なら、飛んだ方が速いな。
「……フロート！」
意識を集中し、足首に環状魔法陣を展開。そして、なのは達の元に飛んだ。
◆　◆　◆　◆
首筋に、鎌をぴたりと突き付けられた。魔力で形成された光の刃が、肌をチリチリと焦がす。……まさか、こんな隠し玉を持ってるなんて。
「またボクの勝ちだね？」
笑顔で勝ち誇る。
『……』
レイジングハートが明滅する。そして、ジュエルシードを一つ、吐き出した。
「舐めてるの？」
彼女は笑顔を消し、冷えきった声を出す。と、首筋に当てられてい

た鎌が離れ、そして。
——ガギュン！
「……な」
レイジングハートの柄が……真っ二つに、切断された。
「お前……！」
「一つで見逃す訳無いでしょ？　全部だ。全部よこせ！」
鎌が、再び押し付けられる。
「頭と胴体、永遠にお別れさせたい？」
「こ、この……！」
拳を固める。だけど、動けない。
「あはは、何？」
レイジングハートが、ジュエルシードを排出しようとしたその時……
——ガコンッ！
青い魔力弾が、彼女を弾き飛ばした。
「うぐっ!!　だ、誰が……！」
隙あり！　今だ！
『Ｉｍｐａｃｔ　！』
至近距離から……！
「喰らえ！」
——ドォン！
「がぁっ……！」
腹部に衝撃波をまともに喰らい、悶絶している。
「よくも……！　げほっ、げほっ……！」
距離を取り、レイジングハートを向ける。幸にも、破壊されたのは外装部分だけ。魔法の行使する分には、何の問題も無い！
「ディバイン……！」
もう一回、喰らえ！
「バスター!!」
——ドカアアアン!!
発射された砲撃は二十メートル程度の距離を一瞬でゼロにし、着弾

した。
『直撃です』
「あはははは っ、ざまあみろ！」
気分爽快！
向こうから、秀人さんが飛んできた。
「秀人さん、ありがと。助かった」
あの最初の一発が無ければ、ジュエルシードを全部奪われるところだった。
「レイジングハート、大丈夫か？」
私の握る、真っ二つになったレイジングハートを見て心配する。
『問題ありません。魔力さえあれば、再構成が可能です』
「秀人かなのはが魔力を注げばくっつくよ」
言われた通り、魔力を切断面に集中する。切断面が僅かに輝き……
『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』
元に戻った。よかった……
「プラナリアみたいだな」
「ちょ、秀人さん!?」
秀人さんが、言ってはいけない一言を言ってしまった！　確かに、私もちょっと連想したけど！
『ブチ殺しますよ？』
「レイジングハートも何言ってるの!?」
まあ漫才はさておき。
煙が晴れたそこには、意外なほど無傷なあの子がいた。傍らには、真っ赤な毛並みの狼。あれが、彼女の仲間なんだろう。
「あ、アルフ！」
「ぐ……」
だが、狼の方は肩が上下していて、無事には見えない。
『あの使い魔が、彼女の盾になったようです』
ディバインバスターの直撃を受けたのは彼女ではなかったらしい。
「チッ、しぶといなぁ……」
悪態をつき、再びレイジングハートを向ける。

「で、どうするの？　三対一で、足手まといを連れて、まだやる？」
形勢逆転。彼女は憎悪を滲ませ、私たちを睨む。
「お前たち……！絶対に、許さない！」
――ぷちん、と。私の頭の中で、何かが切れた。
「……許さない、だって？」
自分のものでは無いような、底冷えした声色。
「そんなの、こっちの台詞だ！　よくも、私のレイジングハートを傷付けたな！
そんな犬コロごときの命程度で、許すもんか！」
「お前えぇぇ……！」
ぎらぎらとした瞳。きっと、今の私も同じような目をしているだろう。
「私は、高町なのは」
「フェイト・テスタロッサだ」
レイジングハートを、黒塗りの斧を、お互いに突き付け、宣言する。
（絶対に！）
（必ず！）
私は、こいつを！
（（ブッ潰してやる!!））
黄金色の魔力光と共に、彼女……フェイトは消えた。

なのはとフェイトと名乗る魔導師がタンカを切り合い、数分が経った。なのはは、フェイトがいた虚空をじっと睨み続けている。
……そろそろ、だな。
「なのは」
頭に、ポンッと手を載せる。
「もういいだろ。戻ろう」
「……うん」
漲っていた殺気が霧散し、同時に、セットされていた複数の攻撃魔法がキャンセルされる。よっぽど、頭に来ていたんだろう。

地上に着地し、レイジングハートを待機状態にする。
「私、負けてないよ」
俺に手を引かれながら、なのはが一人ごちる。
「引き分けだもん」
……正直に言えば、今回はなのはの負けだ。
俺の援護が無ければ、あのまま全てのジュエルシードを奪われていた。ユーノもそれがわかっているのか、何も言わない。
「……そうだな。引き分けだ」
わしわしと少し乱暴に頭を撫でてやる。
「あは、くすぐったい」
洗ったばかりの髪の毛は、土埃を着けてしまい、ごわごわしていた。
「宿に戻って、入り直そうか」
◆◆◆◆
「アルフ、大丈夫？　痛まない？」
ある高級マンションの一室。そこは、フェイト達の活動拠点に与えられた部屋だった。
「大丈夫さ、この、くらい……」
備え付けのベッドに横たわる、紅髪の女性……アルフは、呻きながらも健気に返事をする。包帯があちこちに巻かれてあり、砲撃の威力が窺い知れる。その無数の傷の中には、フェイトの折檻によるものもいくらか含まれているのだが……フェイトは気にするそぶりを見せない。
「ボク、『庭園』に戻らないといけないの。一人で大丈夫？」
「それって……」
「うん」
フェイトは、僅かに嬉しそうな仕草を見せた。
「おかーさんからの、呼び出し」
「……待って、あたしも行くよ」
アルフは、よろけながらも立ち上がり、言った。あの女と、一人きりで引き合わせることなど、到底出来ない。
（あの女は、いつもフェイトを……）

「そう？　無理しちゃ駄目だよ」
アルフの手を引き、屋上へと向かう。とは言え、フェイトの部屋は屋上の真下なので、短い階段を上るだけだ。
屋上の扉を開けると、冷たい空気が流れ込んできて、フェイトは僅かに身をすく
ませた。
「う～、寒っ。早く行こうっと」
言うや否や、足元にミッドチルダ式魔法陣が浮かび上がる。選択されたのは、転移魔法。
「座標入力、っと」
フェイトの手の中で、封印済みのジュエルシードが三つ輝く。
「おかーさん、喜んでくれるかな」
アルフは何も言わない。
「褒めてくれるかな」
ただ悔しそうに、顔を歪めている。
◆▪◆　◆　◆
泥や落ち葉があちこちにこびりついて、気持ちが悪い。宿の入口で、仲居さんに驚いた顔をされてしまった。
「お客様、どうされたんですか!?」
「いえ、足を滑らせまして……ははは」
掻いた頭から、ジャリッ、と嫌な手応えがした。現場帰りよりはマシだが、だからといって放っておく理由は無い。
大浴場に比べたら遥かに小さいものの、手頃な広さの浴室は、二人と一匹で入るには丁度いい。二人して適当に服を脱ぎ、シャワーを浴びる。
「……本当は、分かってるよ」
気持ちよさそうにシャワーを浴びながら、なのはがさっぱりとした口調で言う。演技でもやせ我慢でもなく、素直に自分の敗北を受け入れているらしい。
「今日のは、私の負け。でも、」
くるっと振り返り、にっこりと笑う。

「今度は、負けない」
「ああ、頑張ろうな」
そして俺達は翌朝、温泉宿を後にした。
◆▪◆　◆　◆
――ぱんっ！
乾いた音が、高い天井に反響した。
「……たったの三つ」
不機嫌を隠そうともしない、低い声。それが、フェイトの母親、プレシア・テスタロッタの、出迎えの言葉だった。
「ひどいわ……あなたは、私の研究なんて、どうだっていいのね？」
――ぱんっ。ぱんっ。
二度三度と、フェイトの頬を張る。
「ごめんね、おかーさん」
だがフェイトは、赤く腫れた頬を気にするでもなく、笑顔を浮かべる。
――ぱぁんっ！
「あうっ……」
一際強く、プレシアがフェイトを叩いた。フェイトは床に倒れる。
「何を笑っているの……？　この役立たずが！」
――どずっ！
プレシアのつま先が、フェイトの腹に突き刺さる。母親が娘に与える体罰……そのレベルを遥かに超えた、暴力だった。
「げッ……！」
胃液を吐き、悶絶するフェイト。その両腕が、プレシアのバインドにより空中に吊り上げられ、磔にされる。
「言うことを聞かない悪い子には、お仕置きが必要ね」
プレシアの手にするデバイスが、鞭のようにしなる。明らかに、対象に痛みを与えるための形状。だが、それでも……、フェイトは、笑顔を絶やさない。
「はは、あはははは……」
ただ空虚に、けたけたと笑う。プレシアは顔をしかめ、鞭を振り上

げた。
――バチィィンッ！
「うあああああああああああああッ！」
痛ましい悲鳴。白い肌に、真っ赤なみみず腫れが刻まれる。
「い、たい……痛い、よぉ……あはは、あはははは……！」
そして、空虚な笑い。
「ッ！　その、耳障りな笑いを止めなさい！」
――バチンッ、バチィィィィンッ!!
「あああああっ!!」
皮膚が裂け、真っ赤な血がたらたらと滴る。
「はあ、はあ……」
フェイトの顔から、歪な笑顔が消える。そのように、命令されたから。
「フェイト……あなたは、私のことが嫌いなのかしら？」
――バチンッ！
「フェイト……あなたは、私のことなんてどうだっていいの？」
――バチンッ！
「フェイト……あなたは、私を困らせるのが、そんなに楽しいの？」
――バチンッ！
プレシアがそう問いかける度に、フェイトの身体に傷が刻まれる。
（そうだ。ボクが悪いんだ。ボクが愚図だから。
おかーさんの力になれないから。おかーさんはこんなに怒ってるんだ。
だから、おかーさんは、ボクの悪いところを、直そうとしてくれているんだ）
鞭で嬲られながら、フェイトは……決定的に間違った思考にたどり着く。
（喜ばないと。おかーさんがボクのためにしてくれているんだ。
笑わないと。もっと、笑わないと……）
「違う、よ……ボクは、おかーさんが大好きだよ……一番、大事だよ。

困らせたくなんて、ないよ……」
息も絶え絶えに、言葉を搾り出す。
「もう、私の言うことに逆らわないわね？」
「……はい。おかーさん」
「言ったとおりにするわね？」
「……はい。おかーさん」
「悪い子は、いらないわ」
そう言い残し、プレシアは広間を後にした。
気を失ったフェイトは、果たして気づいているのだろうか。
その光景は……自分と、アルフのやりとりと、全く同じだということに。

# 第五話

ユーノくんが張った結界の中。バリアジャケットを纏い、秀人さんと対峙する。

「……行くよ」

「よし……来い！」

そして秀人さんは、１．５メートル程の木の棒を魔力で強化し、構える。その構えは、あの子……フェイトと同じ構え。

『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

まずは、誘導弾！

「シュート！」

数は、正面から二つ、背後から一つ、左右それぞれ一つの、五つ！

「はあああああっ！」

棒を剣のように、槍のように操り、振り回し……全ての誘導弾を撃墜。

やはり、五つ程度では牽制にしかならない。

「足を止めるな！」

踏み込み、攻め込んできた。

『ａｃｃｅｌ　ｆｉｎ』

飛行魔法、行使！

「せりゃあっ！」

――ガンッ！

一秒前まで私がいた場所を、秀人さんの一撃が抉った。無意識のうちに、喉がごくりと鳴る。

「縛れ！」

『ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』

拘束魔法！

「フローター！」

秀人さんもまた、飛行魔法を行使。バインドの照準から逃れる。

「バレット！」

――ドドドドン!!
ばら撒かれる、魔力の散弾。一個一個相手にしてたら、キリが無い。
（なら！）
『ｉｍｐａｃｔ　！』
まとめて掻き消す！
――ドパァン！
掻き消された散弾の残骸を突破し、秀人さんが突っ込んでくる。棒を真っ直ぐに突き出した、突撃だ。避けるのは無理！
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！　』
――ガァンッ!!
シールドがびりびり震える。
「う……くっ！」
でも、新魔法を試すチャンス！
『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ』
バリアバースト。防御魔法を爆発させ、ダメージを与えるのと同時に、『必要な』距離を取る。
「ぐっ……！」
秀人さんが、クロスレンジから離れる。
（行くよ、レイジングハート！）
そして……ここからは、私の間合い！
「ディバイン……！」
チャージ完了！　照準よし！
「バスターーーーーーーーー!!」
桜色の砲撃が、秀人さんを完全に捕らえた！
秀人さんは防御魔法で耐えてはいるけど……軋み始めている。このまま、押し切れ！
「……リアクティブ・アーマー」
え？
秀人さんがぼそりと呟いたのと同時――
――ドゴオオオオン!!
凄まじい轟音を伴い、防御魔法が炸裂。砲撃が、見当違いの方向に

逸れる。
「レイジングハート、砲撃キャンセル！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』
砲撃を消すのと同時、背後に防御魔法を……！
「はい、撃墜」
――間に合わなかった
頭に、こんっ、と軽く棒が当たる。
「二人とも。模擬戦は終了だよ。戻ってきて」
◆　◆　◆　◆
「あ～～～～～～!!　悔しい!!」
例の高台のベンチに座り、おにぎりをほお張るなのは。
「にしても、偶然ってのはあるものなんだなぁ……」
なのはのバリアバーストと、俺のリアクティブアーマー。なのはは、砲撃に必要な距離を取るため。俺は、相手の死角を取るため。用途は違えど、効果そのものは殆ど同じものだった。
「結構いい模擬戦だったよ」
ユーノがビスケットを齧りながら言う。
「秀人が、まさかあそこまでフェイトの動きをトレースできるなんて思ってなかった」
「あんなもん、ただの猿真似だよ。本物は、もっと速い」
「私は、それでも勝てなかったんだね……」
ずんずんと暗くなっていくなのは。やばっ。
「い、いや、結構危ない場面もあったんだぞ!?」
慌ててフォローする。ユーノも援護に回った。
「そうそう！　秀人に砲撃が直撃した時なんて、なのはの勝ちだと思ったし！」
……確かに、死ぬかと思った。非殺傷設定とわかっていても、あの圧倒的な威力に晒されたら、誰だって恐怖を覚えるだろう。
「それじゃあ、戦い方の基本方針は、これで大丈夫？」
『問題ないでしょう』
なのはの問いに即答するレイジングハート。

「フェイトのバリア出力は、なのはや秀人よりもずっと低い」
　月村邸での俺との戦い、温泉宿でなのはとの戦い。二つの話を総合するに、フェイトは速度に重点を置いた戦法を取っているらしい。
「そんじゃあ、バインドの精度を上げればどうだ？　捕まえれば、いくら速く動こうと関係ないだろ」
「それができれば苦労はしないよー……あいつ、バインドが決まる寸前でも回避しちゃうし」
『では、精度ではなく、発動速度を上げましょう』
「それなら、防御魔法も同じようにしよう。さっき、間に合わなかったし……」
　ああでもない、こうでもないと、フェイト攻略戦のアイディアを練る俺達。
「私は……あの子に、勝ちたい」
　あの日の晩、なのはは、確かにそう言った。なら、俺達は仲間として……そして、家族として、最大限の『サポート』をするつもりだ。そう。あくまで、サポートを。
「あの狼は、俺に任せろ」
　俺とユーノは、あの狼に勝負の邪魔をさせないことにだけ集中すればいい。
「いいけど……大丈夫？」
「いざとなったら、ユーノを餌にして逃げるから大丈夫だ」
「ああ、それなら大丈夫だね」
『最良の策です』
　はっはっは。
「……泣いていいかな、僕」

◆・◆　◆　◆

　私は玄関先で、愛用のスニーカーに足を入れた。
「行ってきます」
　教科書を入れた背中の鞄が、重量以上に重く感じられる。
「いってらっしゃい」「頑張れよー」
　玄関先まで見送りに来てくれた秀人さん、ユーノくんが、揃って手

を振る。
（……よし、行くぞ！）
そして、戦場に赴く気持ちで、ドアを開けた。
私は、学校へ行くことにした。
人付き合いが怖いからといって逃げていたら、いつまでも強くはなれない。絶交した同級生の敵意であろうと、口うるさい担任の小言だろうと、真正面から受け止めてやる！
そんな私の内心にも気づかず、通学路では、私と同年代や、ちょっと上くらいの子供達が、学校の方向へ歩いていく。
その中に、見つけてしまう。サッカーボールを入れた袋を提げた葉山君と……それに寄り添う、八代さんを。胃のあたりが、きゅっとすぼまるような感覚をかみ殺す。
「あーあ、あのグラウンド、地震のせいで使用禁止になっちまったんだよなぁ……」
「仕方ないでしょ。それとも、ぼこぼこに荒れたグラウンドで練習したいの？」
その横を、無言で、視線を向けず、追い抜く。
「いや、だってよぉ。野球部と一緒だと、思いっきり練習が……あ」
「どうしたの……あ」
私達は、絶交しているんだから。私は早足で、学校への距離を消化していった。
「おはようございます。富山先生はいらっしゃいますか？」
職員室のドアを開け、声を掛ける。一時間目の授業の準備を控え、コーヒーを飲んでいたりしていた教師達の視線が集まる。その中に、担任の富山先生がいた。
「たっ……高町さん!?」
だだだだっ、と駆け寄ってくる。これから始まるお説教のことを考えると、少しだけ憂鬱だ。
「この一週間、どこへ行っていたの!?　家にはいないし、ご家族とは連絡が取れないし！」
「ちょっと、自分探しの旅を」

あながち間違ってはいない。
「……それは、学校よりも大切な用事だったのかしら？」
低い声で詰問してくる。
「ええ、間違いなく」
それに、即答。周囲の教師の声が止み、緊迫した空気が流れる。
じーーーーーーーー……っとにらみ合う。さて、教室に戻るかな。これ以上は平行線の水掛け論になるだろうし。
「あなた達、ちょっとこっちに来なさい」
そして口火を切ったのは、私でも、富山先生でもなく、学年主任だった。
「立ち話も何ですから……他の先生の目もありますしね」
そして案内されたのは、六畳くらいの小会議室。四角いテーブルに、四つの椅子。私の向かい……学年主任の隣に座ろうとした富山先生だったが、何故か私の隣に座らせられてしまった。微妙に気まずい沈黙。
「あのう……長谷川先生。なぜ、私まで」
どうにも、富山先生は学年主任……長谷川先生に苦手意識を持っているようだった。長谷川先生は曖昧に笑い、話し始めた。
「まず、高町さん。あなたは、正当な理由も届出も無く、長い間欠席しました。これは、悪いことです」
「……はい」
「本当に、何を考えているの!?」
隣に座った富山先生が、ぷりぷりと怒り出す。
「富山さん。少し静かになさい」「は、はいッ！」
だが、長谷川先生に静かに一喝されてしまう。
「一応、富山さんから聞いています。『人付き合いが面倒』『誰とも会いたくない』……でしたね」
「……はい」
確かに、そう言った。
「それに関して、親御さんは何か？」
ここで秀人さんの名前を出してしまったら、きっと、悪いことが起

きる。だから私は仕方なく、『あいつら』のことを、話した。
「母親と兄と姉は、仕事で家に殆どいないので何も言われません。きっと、私が休んでいたことも知らないと思います」
――ガタンッ
大きな音にびっくりして、横を見る。
「……そんな」
富山先生が、呆然とした顔で、私を見ていた。
「あ、す、すみません……」
慌てて座りなおし……しかし、私のことを凝視する。何だと言うのだろう。
それを見ていた長谷川先生も、真剣な表情だ。
「高町さん。私に、欠席の理由を教えてもらえませんか？」
怒るでもなく、淡々とでもなく……真摯な問いかけだった。『大人』という生き物への警戒心が、解けていく。
「……昔の知り合いに、会ったんです」
そして、魔法に関する事柄を省き、話した。
「何で、相談してくれなかったの!?」
第一声が、それか。かちんときた。
「あなたに相談したら、どうにかしてくれたんですか？　他校の小学生を呼び出して、仲直りの握手でもさせてくれたって言うんですか!?」
「私は、あなたのことが心配で……！」
「心配!?　大きなお世話だ！　放っておいて！　どうせ心の中では、私のこと、面倒な子供だって思ってる癖に！　いい人ぶるな！」
「ッッ!!」
右手が、振り上げられる。叩きたければ叩けばいい。
振り上げられた手が、視界一杯に広がる。反射的に目を閉じ、やってくるであろう痛みを覚悟する。だが、痛みは、いつまで経ってもやってこなかった。
うっすらと目を開けると、富山先生の腕を、長谷川先生がしっかりと掴んで止めていた。

「富山さん……高町さんも。少し、頭を冷やしなさい」
目の前には、湯気を立てる湯呑み。中身は緑茶だ。
「落ち着きましたか？」
「……はい」「……すみませんでした」
「高町さん」
長谷川先生が湯呑みを置いた。
「富山さんは、あなたのことを『面倒な子供』だなんて、決して思ってはいません。富山さんは、口調や態度こそ少し乱暴ですが……決して、悪い子ではないのですよ？」
悪い『子』って……何故に子ども扱い？
「富山さんがあなたくらいの頃なんて、それはそれは大変でしてねぇ……」
「は、長谷川先生！　何の話をしているんですか！」
富山先生は、長谷川先生の元・教え子ということだろうか。なら、子ども扱いも頷ける。
「授業妨害、授業放棄の常習犯でした」
……強烈な問題児であったらしい。
「やめてー！」
己の黒歴史を暴露され、真っ赤になる。力ずくで長谷川先生の口を塞ごうとするも、逆にあしらわれ、羽交い絞めにされてしまった。
「教師や上級生への暴力沙汰もありましてねぇ。何度もこうして止めたんですよ。六年生の男子数名をたこ殴りにしていたこともあって……」
「放してー！　それ以上言わないでー！」
じたばたと暴れる富山先生は、子供のように足だけでばたばたと暴れる。
「果ては深夜徘徊ですよ。夜遊びをしては補導され、盗んだ自転車で走り出しては補導され、タバコを吸っては補導され……警察署に何度頭を下げに行ったやら。両手の指では足りませんね」
「ごめんなさいごめんなさい！　先生ごめんなさい！」
――五分後。

「うううう……ひどいよ、長谷川先生」
長谷川先生は、富山先生の過去をひとしきり暴露した後、小会議室を出て行った。「あとは、二人で話をつけなさい」とのことだ。
「先生……『棚に上げる』って言葉、知ってます？」
自分は散々暴れていたくせに、何で私のことをあんなに怒るんだろう。
「うっ……もう時効よ！　ちゃんと更正したもん！　タバコも吸わないし、午後十一時にはベッドに入るもん！」
「それは普通です」
「……」「……」
なんだか、教師というよりは、面倒くさいＯＧというイメージが強くなってしまった。
「あの頃、私の両親が離婚調停の真っ最中でねぇ」
――離婚。
永遠の愛を誓い合ったはずの夫婦の、断絶。
「だから、なんて、正当化はしないけど、理由の一つだったのは間違い無いわ」
微苦笑する、富山先生。
そして、どこかで聞いたような話を、始めた。
「家の中は真っ暗で、帰っても誰もいなくて……それが、すごく怖くて」
――一人で寝るのが怖くて……でも、家には私しかいなくて。家中の電気を付けて、ぬいぐるみを抱きしめて、眠った。
「机の上に、千円札だけがポンって置いてあって、それでご飯を買ったり、作ったり」
――『これで、夕食を買って食べてください』
それが母から私への、初めての手紙だった。
「お鍋一杯に両親の好きだったカレーを作って……結局、何日も食べられずに捨てちゃったり」
――私が始めてまともに作れた、野菜炒め。大きなお皿一杯に作って、「食べてね」という手紙を添えて……翌朝、手付かずのまま残った

ソレを見つけて……泣いた。
「お話がしたくて、仕事場に電話をかけたら……『仕事の邪魔だ！』って怒鳴られた」
――『今忙しいんだ。後で掛け直すから……』
『後』は、いつまでも訪れなかった。
「暴れて、大騒ぎすれば……パパとママが止めに来てくれる、なんて夢想して」
――私が『いい子』で我慢していれば、帰ってきてくれると信じて。
「警察のご厄介になっても、迎えに来るのは、面倒くさそうな顔をした教師だけだった」
――『いい子』にしていたのに、私は、いつまで経っても一人ぼっちだった。
「いつしか、迎えに来る教師は減っていって……でもね」
前置きし、うれしそうな、恥ずかしそうな……笑顔を浮かべた。
「長谷川先生だけは、何度も何度も、迎えに来てくれた」
――秀人さんが、繋がりをくれた。
「担任じゃないのに……それどころか、担当する学年さえ違うのに」
大人と子供。
教師と生徒。
その隔たりを越えて、私は、この人を身近に感じる。
「面倒くさそうな顔じゃなくて、おじいちゃんが孫娘の悪戯でも見るような顔で、『仕方ないなぁ』……って。その時、まだ三十路前だったのよ？」
面白そうに、くすくすと笑う。
「万引きをしたときは……殴られたわ。グーで」
痛い思いをしたはずなのに。笑顔は崩れない。
「痛くって、痛くって……『何しやがる、このジジイ！』って思ったわ。でも、心のどこかで、喜んでいる自分がいて」
私も、もしかしたら。何かが違っていれば、この人のようになっていたのだろうか。暴力で誰かを振り向かせようとして、それが原因でそっぽを向かれ、さらに暴力で振り向かせようとして……悪循環に

陥って、抜け出せなくなっていたのではないだろうか。
「それでね。何回目か、警察署から私を引き取った時、聞いてみたの。『こんなことして、アンタに何の得があるんだ。給料も出ないくせに』って」
　さっき、私が言ってしまった言葉と、ほぼ同じ。
「その時の長谷川先生の言葉は……一言一句、覚えているわ」
　目を閉じる富山先生。今、彼女の目蓋の裏に映っているのだろう。決して色あせない、大事な思い出が。
「『あなたのことが、心配だからですよ。
　あなたは、自分の未来を、自分の手で閉ざそうとしている。教師である私には、それが我慢できない。あなたの未来は、きっと素晴らしいものになるのです。だからどうか、あなたを、あなたの未来を助けさせてください』」
　そっと目を開ける。
「嬉しくて泣いたのなんて、初めてだったわ」
　私は、知っている。人は、辛いときや、悲しいときじゃなくても、涙を流すときがあるということを。
「長谷川先生がいなかったら、今の私はいない」
　きっぱりと、断言した。
「だから長谷川先生は、恩師であり……私の、生涯の目標なの」
　彼女の笑顔は、眩しくて、温かくて。
「あんな大人になりたくて、困っている子供を助けられるようになりたくて、私は、教師になったの……って、高町さん!?　ど、どうしたの!?」
「何が、ですか？」
「あなた、泣いているじゃない！」
　――私の目からは、大量の涙が流れていた。
「な、なんでも、ない……」
「何でも無いなんて、えっと、どうしよう、どうしよう」
　あたふたと慌てた富山先生は、どうしたことか、私を抱きしめた。
「ほら、落ち着いて。落ち着いて、言いたいこと、全部吐き出しちゃい

なさい」
　ぼろぼろと涙を流しながら。秀人さんへの想いを、打ち明ける。
「私も、助けてもらったんです」
　思い出せる。秀人さんと会った時から、今日までの全てを。
「見ず知らずの私に、『家族になろう』って……言ってくれて。居場所をくれて。名前を、呼んでくれて。一緒にご飯を食べてくれて、一緒に寝てくれて、一緒に遊んでくれて。授業参観にまで、来てくれて」
「それは……あの時の？」
　こくん。素直に、頷いた。
「そうだったの……似てない兄妹だと思っていたけど、そういうことだったのね」
　とんとん、と私の背中を叩きながら、頷く。
「私、人付き合い下手だし、誰と、どんな話をすればいいのか、わからないし。友達だって、全然いないし」
「八代さんと葉山君は？」
「絶交、しちゃった」
「……原因は何？」
　ひっく、としゃくりあげ、吐露する。
「八代さんは葉山君のことが好きで、でも、葉山君は私のことが好きで……八代さんは、それがすごく嫌だったみたいで、喧嘩になっちゃった」
「そう、友達との喧嘩は、辛いわね」
「違う。友達じゃ、無い」
　そこだけは、譲れない。私は、彼女とは絶交したのだ。今更、友達面なんて出来ない。
「頑固な子ねぇ……ま、今はそれでもいいわ。いつかは……ちゃんと、話をつけなさい。前の学校のクラスメイトの誤解も、話せばきっと、分かってくれるわ」
　脳裏に浮かぶのは、怒りに染まった、バニングスさんの顔。そして。
　――出て行け！
　ぎゅうっ。先生の服を、皺になるほど握り締める。

「でも、バニングスさん、すごく怒ってたんです。それに、もし話せたとしても、私は口下手だし、人見知りだし、怒りっぽいし」
先生は胸を張って、自信満々に、言った。
「自慢じゃないけど私だって、まだまだヒヨッ子新米教師で、指導力不足で、怒られてばっかりよ」
「本当に自慢になりませんね」
ああ、馬鹿な会話だ。でも、楽しい。
「でもね」
すっと引き離される。両肩に手を置き、私と目線を合わせた。
「少しずつでも、成長しているのよ。あなたみたいな、問題児に揉まれながらね」
大学を出たばかりの、情熱が空回り気味の先生。
「だからあなたも、少しずつ、頑張っていきなさい。ヒヨッ子でよければ、いつでも力になるわ」
ヒヨッ子で、指導力不足で、怒られてばかりで。
「……ありがとう、先生」
でも、この時ばかりは……世界一の教師に見えた。

教室に入ると、一旦喧騒が止み、またざわめきを取り戻す。視線を感じ、振り向く。
「……」
八代さんは、すぐに目を逸らしてしまう。かたかたと震える膝を叱咤し、歩く。ほんの数メートルの距離を、牛歩で歩き……八代さんの正面に立つ。
「おはよう、八代さん」
――ちょっとずつでも、確実に。

# 第六話

「フェイト……フェイトぉっ！」
アルフが、倒れ伏すフェイトに駆け寄り、抱き上げる。白い肌には、無数の痛々しい傷が刻まれ、今もまだ血を流している。
「あ、あいつ……！　またフェイトをいじめやがったな！」
ぎりっ、と歯を食いしばる。怒りのままにプレシアを追おうとしたアルフだったが、フェイトが手を掴み、止めた。
「アルフ……おかーさんのこと、悪く言ったらだめ」
「でも！」
ぎゅっと力を込めた瞬間、フェイトが痛みに顔をしかめ、アルフはハッと冷静になった。
今は怒るより……フェイトの傷を治すことが先だ。
「傷跡一つ、残してやるもんか……」
アルフの足元に、橙色のミッドチルダ式魔法陣が展開する。暖かな光と共に、魔法が発動された。即効性はあまり無いが、じっくりと、人体の治癒能力を活性化させる治癒魔法だ。外傷ならば、一日ほどで塞がる。
「ほら、帰ろう」
そして、消耗したフェイトのかわりに転移魔法を行使し、活動拠点へと戻った。
「すぅ……すぅ……」
ベッドで横たわるフェイトを、アルフが膝枕で休ませていた。
「……よく寝てる」
しばらくは起きないだろう。そして、起きたときには魔力も体力も完全に回復しているはずだ。
目にかかっていた前髪をのけてやる。
「ん、ん～……」
ぎゅっ。
寝ぼけて、その手にじゃれ付いてきた。アルフはさせるがまま、慈

愛に満ちた笑みを浮かべる。
「おかーさん……」
――ずきん、と。胸に痛みが走った。
フェイトが真に求めているのは、アルフではなく、プレシアの愛情。わかってはいても、そう簡単に受け入れることはできない。それでも。たとえ、フェイトにとって自分の優先順位が二番目以下であろうとも。
「フェイトに救われたこの命は……全部、フェイトのために使うよ」
フェイトが望むなら、暴力も甘んじて受け入れよう。ストレスのはけ口にでもなろう。
そう考え、アルフは苦笑を漏らした。
「あたしはやっぱり、イヌ科なんだろうねぇ……」
そして、ほぼ半日が過ぎ、太陽が頂上に昇った頃。
「んー……朝？」
フェイトが目を覚ました。アルフの治癒魔法がよく効いたのか、鞭の傷は殆ど見えなくなっていた。眠そうに目元を擦り、枕もとの時計を覗き込む。
「お昼だ……」
そしてまた、ごろんと横になる。寝すぎて、まだ頭がぼんやりとしているようだ。
「フェイト、起きた？」
キッチンから、アルフが声を掛ける。
「朝……じゃなくて、昼ごはんできたよ」
ご飯と聞き、フェイトの胃が空腹を訴えた。よくよく思い出してみれば、この２４時間、まともな食事を摂っていない。最後に口に入れたのは、スティック状の栄養食だったか。
テーブルの上には、皿に載せられた料理が並んでいた。殆どは出来合いのものを買ってきて、電子レンジで温めたものだ。
豚の角煮。ローストビーフ。ハム。ベーコン。メンチカツ。フライドチキン。ハンバーグ。フランクフルト。
肉料理で埋め尽くされていた。

「いただきます」
そして、猛然と口に詰め込み始める。
取り皿には、半分だけ食いちぎったメンチカツや、まだ肉が付いているフライドチキンが乗っているというのに、ベーコンに手を伸ばし、二つ目のフライドチキンにかぶりつく。
「はぐっ、はぐっ……ん」
口元はソースや油でべたべたに汚れ、食べかすをぼろぼろと落としている。
食事のマナーというものが、およそ感じられない……まるで、幼児の食事だった。
「ごちそーさま」
そして、取り皿にかなりの量の食べ物を残したまま、食事を終えた。皿を片付けるでもなく、口元を袖で乱暴に拭い、ソファに身を沈める。
アルフは自分の食事を終えると、フェイトが食い散らかした料理や食べかすを片付ける。
(リニスが見たら、なんて言われるだろうね)
なにも、フェイトは元々こんな食べ方をしていたわけではない。フェイトが一連の行動を取り出したのは、リニスがいなくなってからのことだった。それまでは、きちんと綺麗に食事をして、片付けもしていた。それが、今ではごらんの有様だ。
最初は、注意もした。だが、フェイトはそうすると決まってヒステリックに怒り、テーブルの上のものを投げつけ、ひっくり返し、部屋に閉じこもってしまうのだ。いつしかアルフは、それを注意しなくなった。
「フェイト、歯磨きしよう？　虫歯になったら大変だよ」
「えー……」
最初は面倒くさそうにしていたフェイトだったが、口の中に残る食べかすが不快なのだろうか、割と素直に身を起こした。
うがいをして、水を吐く。そして歯ブラシを……アルフに手渡した。
「あいよ」

受け取ったアルフは、歯ブラシにイチゴ味の歯磨き粉を適量乗せ、フェイトの口に入れた。かしかしかしかし……と、丁寧に丁寧に歯垢をこそげ落としていく。それが終わると、フェイトはまたうがいをして、泡の混じった水を吐き出す。最後に、アルフは口元をタオルで拭いてやった。

「……寝る」

感謝するでもなく、すたすたと洗面所を後にし、自室へと戻って行った。

「……」

ごろんとベッドに寝るフェイトは、ポケットに手を突っ込み、金色をしたアクセサリーを取り出した。

「バルディッシュ、まだ反応は無いよね」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ　．』

反応とはもちろん、ジュエルシードのことだ。

「……早く、来ないかなぁ」

暴走体を叩きのめし、ジュエルシードを奪い取り……

「高町なのは……だったっけ」

時には、別の敵と奪い合い、それすらも叩き潰し……

「ふふふふっ……楽しいなぁ」

背筋が、高揚でゾクゾクと震える。

戦いは、いい。ただ、目の前の目標を破壊することだけを考えていればいいのだから。余計なことなど。母親が、本当に自分のことを○してくれているのかなど……

――がんっ！

フェイトは、『その思考』を断ち切るように、ベッドのパイプに額を叩き付けた。

「う……うあぁ……」

顔に生暖かい感触を覚え、ベッドのシーツに突っ伏す。じわじわと、紅い斑点が広がっていく。

「おかーさんは、ボクのこと、ちゃんと好きだもん……」

音を聞きつけ、アルフが部屋に飛び込んでくる。

「フェイト、今の音は何……フェイトッ!!」
顔を血で濡らすフェイトをみて、蒼白になる。頭突きの影響で意識が朦朧としているフェイトは、それをぼんやりと眺めていた。
「何でこんな馬鹿な真似を……!」
顔を拭い、傷口を抑える。そしてまた、治癒魔法を掛けられる。
(ご飯を作ってくれた)
科学者だった母親。毎日が戦場のように忙しく……それでも、顔を見ない日は、言葉を交わさない日は無かった。
(同じベッドで寝てくれた)
どんなに研究が切羽詰っていようとも、必ず家に帰り、娘を抱きしめ、一緒に眠り、「おはよう」と、朝を迎えた。
(誕生日には、ピクニックに行った)
苦言を呈されようとも、丸一日の完全休養を取り、通信端末まで家に置き去りに、娘と
の時間を作った。
シアワセな記憶に、フェイトは、年頃の少女らしい笑みを浮かべた。
(不安になることなんて、何も無いんだ)
プレシア・テスタロッサは間違いなく、心から娘を愛していたのだから。
今は変わってしまった母親。だが、フェイトは信じる。母親の望みを叶えてあげることができれば……いつか必ず、昔の母親に戻ってくれると。
「おかーさん……また、ピクニックに行きたいなぁ……」
一面の花畑。そこにシートを広げ、風を感じ、緩やかな時を過ごす。そこには、自分がいて、母親がいて、アルフがいて、リニスがいて。
「ママ、『私』、ママのこと大好き!」
そう言う娘に、母親は微笑みかけてくれるのだ。そう、あの日のように。
「私も……○○○○のことが、大好きよ」
その四文字だけは……思い出せなかった。
◆・◆　◆　◆

とんとんとん……
朝の台所に、包丁が規則正しくまな板を叩く音が響く。見る見るうちに一口大に切り分けられていくキャベツ。
「サラダはこれでよし、と」
それを皿に盛り、プチトマトで彩りを加える。
「お、やばいやばい」
味噌汁が煮立ってしまう前に、コンロの火を止める。
その拍子に、肘が包丁が当たり落としてしまう。包丁は、万有引力の法則に従い、切っ先を下に向けたまま落下し……
「ぎゃっ!!」
……俺の足に、刺さった。あいにくと、こんな狭い家でスリッパなんぞ履いていられない俺は素足だ。その足の甲に包丁が突き立っている光景は、どことなくシュールだった。
とにかく、抜こう。柄に手を掛け……よい、しょっと!
「んぐっ!」
ずるっと抜けた。切っ先は、俺の血でぬらぬらと光っている。今日の昼もこれで料理をするのかと憂鬱になりながら……俺は、包丁をそっと流し台に置いた。
足の傷は問題ない。見れば、もう既に血が止まり、薄皮が張ってきている。
「……前から気になってはいたんだけど、どうなってるの？　秀人の身体は」
それを見ていたユーノが、一言。
「知らねぇよ。物心付いた時からこうなんだから」
刺々しい口調に、ユーノが身を竦めた。
「ご、ごめん……」「あ、いや、俺こそ……」
あー、くそ。何ユーノに当たってるんだよ俺は!
「おはよー……って、あああああ!」
びっくりした。なのはが、起きたと思ったら大声を上げ、詰め寄ってくる。
「秀人さん、今日の朝ごはん当番は私だよ!?」

「あ、いや、悪い。気持ちよさそうに寝てたから……」
もやもやとした気分は、一瞬で吹き飛んだ。
昨日、随分と晴れやかな顔で帰ってきたから、きっと何かに踏ん切りが着いたのだろう。ぐっすりと安眠していたものだから、つい起こすのを躊躇ってしまい……
「もう……それじゃあ、夕食当番は私に交代してね？」
「ああ、わかったよ。……ほら、顔洗ってきな」
そして、訪れる静寂。
「いつか、話すから」
「え？」
ユーノが、きょとんと見上げてくる。
「俺の身体のこと、いつかはちゃんと話すから」
俺の方は……まだ、踏ん切りは着いていない。
◆▪◆　◆　◆
「……はぁ」
くるくると手元で鉛筆を回しながら、物思いにふける。今は、国語の授業中。いつかと同じように、作文の授業だ。『将来の夢』という、願ったり叶ったりのタイトル。十分で４００文字を埋め、残り時間が過ぎるのを待つだけになっていた。
かりかりとノートに線を書いていき……ひし形になる。ジュエルシード。
さらに、かりかり。今度は三角形……何これ？
（三角形、三角形……）
記憶の中を検索する。最近、見たような……あ！
「思い出した！」
あの、フェイトの手の甲に付いてたやつだ！
思い出した途端。
いらいらいらいら……
『あはは、何？』
人を小ばかにしたような嘲笑とか。
『叩き潰してやる！』

身勝手な敵意が篭った目とか。
「ああ、ムカつく！」
二回も負けた。一回目は瞬殺。二回目はＫ．Ｏ．。今度は……今度こそは！
「……あれ？」
あの子は……どうして、ジュエルシードを集めているんだろう。
以前なら気にも留めなかったけど……妙に、気になる。
ジュエルシードなんて爆弾みたいな物を集めて、何をするつもりなんだろう。
「今度……ちゃんと聞いてみよう」
また喧嘩腰になって、まともに会話なんて出来ないかもしれないけど……
「ええ、私も是非、高町さんに聞いてみたいわね」
……げ。
顔を上げると……富山先生が、すごく怖い笑顔で、私を見下ろしていた。
「……何を『思い出して』、何に『ムカついて』いるのか……ちょっと教えてくれるかしら？」
ヤバい。これは、放課後居残りコースだ……！
「え、ええと、その」
しどろもどろに答えに窮する。と、その時。
――キーン、コーン、カーン、コーン……
いいタイミングでチャイムが鳴った！
「さよなら！」
鞄の中に筆箱、ノートを放り込み、ドアにダッシュ！
「こらあああああ！　待ちなさい!!」
あとは帰りのホームルームだけだし……いいよね、別に。
「はっ、はっ、はっ……」
ふぅ……鈍足を克服しておいてよかった。きゅきゅっと廊下を駆け抜け、階段を二段飛ばしで駆け下りる。
「ま、待～ち～な～さ～い～!!」

スリッパ履きの足で、ゴム底の上履きに勝てると思ってるの、先生？

悠々とスニーカーに履き替え、校門を飛び出した。

「さ～よなら～！　また明日ねー、先生！」

私は私なりに……学校生活を楽しんでいるのだった。

さてと、夕食の材料でも買い足しに行こうっと。

◆▪◆　◆　◆

フェイトは、街中を一人でぶらついていた。なぜアルフを伴っていないのかと言えば。

「魔力……というか、体力の使いすぎだよ」

治癒魔法を全力で、しかも立て続けに使い、アルフはすっかりバテてしまっていた。今は、狼モードで休んでいる。

「別に、いいんだけどなぁ。たかが傷跡くらい」

それは、本音だった。自分がどれだけ整った容姿を持っていようと……それがたとえ、道行く人が幾人も振り返る程のものであろうとも。フェイトには、全く興味の無いことだ。それが別に、母親の役に立つわけではない。

「はぁ……つまんない。帰ろうっかなぁ　」

と、一軒の店が目に入ってきた。

「確か、『てれび』でやってた」

この大通りで一番人気の喫茶店。ケーキのメニューは、かなり豊富。

「お財布は……よし！」

１００００ナントカという額の紙幣を、百枚単位で持ってきてある。多分、足りるだろう。

「ケーキ、ケーキ～♪」

足取り軽く、その店に歩いていく。

「……はぁ？」

が、店の前に来て、途端に顔をしかめた。

何と書いてあるのかは不明だが、何やら貼紙がしてあり、店の中には誰もいない。

どうやら、営業していないようだった。
「ちくしょう！」
ガンッ、と扉を蹴り壊す。通行人が、ぎょっとして注目するが、我関せず、面倒事は御免、と歩き去っていく。
ずかずかと店内に押し入ったフェイトは、陳列棚を、バックヤードを物色。そして冷蔵庫を開け、にんまりと笑った。
「みーつけた！」
プリンと、ケーキ。
「へぇ、美味しい。人気なだけあるなぁ……」
ケーキの土台のスポンジをも、ガツガツと食い荒らしていく。全くもって、強盗そのものであった。
「お、おい、何をしている！」
この店と契約していた警備会社の一団が数名、乗り込んできた。だが、侵入者がどう見ても子供であり……顔や服をべたべたに汚しながらケーキを貪る異様な光景に、一瞬だけ立ち尽くした。
だがフェイトは、彼らをちらりと一瞥し、またガツガツとケーキにがっつき始める。
「おい、キミ……」
一人が、フェイトの肩を掴む。子供だと分かり、警戒心を緩めてしまった彼らは……不用意であったとしか、言い様が無い。
「……五月蝿いなぁッ！」
『Ｔｈｕｎｄｅｒ』
待機状態のバルディッシュが、主の命に従い、魔法を発動する。稲妻、と。
――バチバチバチバチッ!!
「ぎゃあっ!!」
身体を痙攣させ、どさっと倒れる。警備員達が、ざわめいた。
「どいつも、こいつも……」
フェイトが、ゆらりと立ち上がる。警備員達は、各々警棒を、盾を構える。
「ボクをイラつかせやがって!!」

――五分後。
「はぁ、おなか一杯」
一団を全滅させ、フェイトは満腹になって店を悠々と出てきた。財布の中身の紙幣を全てカウンターにばらまいて……ご丁寧に、紙箱にアルフへの土産を持って。
「アルフ、これ食べて元気になってくれるといいな」
そして足取り軽く、郊外の住宅地へと歩き去って行った。
◆◆◆◆
「ふふふ、ラッキー」
腕に下げるスーパーのビニール袋。中には、大量の生肉が入っている。豚や鳥ではなく、国産の牛肉だ。お肉売場を物色していたら、丁度タイムセールが始まり、ダンプカーのように押し寄せる主婦より先に確保できた。
「秀人さんにユーノくん、喜ぶだろうなぁ」
特に、秀人さん。肉体労働の後だから、かなりお腹が空いているはずだ。
すき焼きにしようか、焼肉にしようか。
ふんふ～ん、と、柄にも無く鼻歌なんかを歌いながら、夕暮れの中を歩いていく。
「レイジングハート、どう？」
『ディバインシューター。操作も威力も問題ありません』
いつもの如く、マルチタスクで模擬戦。前回の戦闘での敗因になった、鎌の攻略法を模索しているところだ。バリアの強度を上げるだけでは、ダメだ。もっと、搦め手を覚えないと。
新魔法・ディバインシューター。
シューターやバレットのような、射撃魔法の発展型だ。威力にさしたる変化は無いが、『誘導』という特性を持たせてある。それは発射後に、軌道をコントトールできるということ。
「首を洗って待ってろよ……」
今度こそ、三度目の正直だ！
角を曲がって……ばったりと、件の人物に出くわした。

「な……」
「え……」
黒いワンピース（何故か、薄汚れてはいるが）を着て、紙箱を手にしたフェイトが、そこにいた。
こち、こち、こち……
状況を理解するのに、数秒を要した。
えーっと……フェイトは敵。敵と遭遇した。お互いに無防備。つまり、これは。
殺られる前に……見敵必殺！
「きゃあああああああ喰らえええええ!!」
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』
「うわあああああああ墜ちろおおおおお!!」
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』
――ドッゴオォン!!
夕暮れの住宅街に、爆音が轟いた。

# 第七話

「はぁっ、はぁっ、」
息を切らしながら、住宅街を駆け抜ける。
「な、なんで、ボクまで……！」
なぜか隣に、フェイトと並走しながら。一体何から逃げているのかと言うと……
「待ちなさい！　さっきの爆発は何だ！　説明しなさい！」
紺色の制服。同色の帽子。そして、腰に収まる拳銃。どこから見ても、おまわりさん。
どうやら、さっきの現場に偶然居合わせていたらしい。
「あ、あなた、結界、張れないの!?」
人が見ている前で、飛行魔法なんて使えない。
「いつもアルフがやってくれるんだもん！　キミが張れよ！」
「ユーノくんがいないから無理！」
戦闘用の魔法以外なんて、覚えてる暇が無かった。
「このネズミ以下！」
「うるさい犬以下！」
ぎゃんぎゃんと言い争いながら、ひた走る。
どうやらフェイトも、魔法無しではその辺の子供と同レベルか、それを少し上回る程度らしい。このままじゃ、追いつかれる！
前方にT字路！　ここでお別れだ！
右に曲がる。が。
「な、何でついて来てるの!?」
ここで二手に分かれれば、半々の確立でおまわりさんを撒けたのに！
「ボクの台詞だ!!　どっか行け！」
こ、こいつううううぅ……!!
「止まりなさい！　今なら事情を聞くから！」
太ってるのに、無駄にタフなおまわりさんが追る！
「それが一番困るんですーーー！」

「もうヤダあああ！　アルフー！　アルフー！」
フェイトの目が、見る見るうちに正気を失っていく。擬音で表現するなら、『ぐるぐる』してる！
「こ、こうなったら……！」
バチバチとフェイトの手元が帯電している……って、まさか！
「黒焦げにして……！」
「やめろ馬鹿！」
――ごちんっ
「いったぁ!?」
あ、思わず手が出てしまった……ま、いいや。
「な、何すんだよ！　キミから先に焦がすぞ!?」
涙目で頭をさすりながら、私を睨む。
「そんなことしたら、まともに出歩けなくなるよ！」
国家権力を敵に回して、今後、まともな生活ができるとは思えない。
「ボクは別に構わないんだけど……」
「私には、この町での生活があるの！　今度やろうとしたら、頭じゃなくて腎臓を殴るからね!?」
背骨の横から、抉りこむように！
「怖!?　じゃあ、どうしろっていうんだよ～！」
「黙って走れ！」
『一応聞くけど……何やってんの？』
す、救いの神現る！
「おまわりさんに追われてるの！　隔離結界張って！　早く！」
『わかったわかった……』
――ヴンッ……
そんな音と共に、周囲の景色が色褪せ、人の気配が消えた。その場に崩れ落ち、肺に酸素を取り込むことに集中する。
「ぜぇー、ぜぇー……」
「ひゅー、ひゅー……」
フェイトも、ワンピース姿だというのに大の字に寝転んでいる。
つ、疲れた……しばらく、起きられそうに、無い、かも……

◆・◆　◆　◆

「んじゃカントク、お先でっす」

シャワーを浴びた後、作業服を鞄に詰め込み、ヘルメットを手に事務所のプレハブを後にする。さて、帰るか。

『秀人、ちょっといいかい？』

ん？　ユーノか。

「どうしかしたのか？」

ジュエルシードの反応があったにしては、随分と落ち着いた口調だけど……

『ああ、それがね……』

「へぇ、そんなことが」

事情を聞き終えた頃には、俺はバイクを走らせ現地へ……臨海公園へと到着していた。

お、いたいた。二人してへばってる。

「なのは、起きられるか？」

地面に突っ伏すなのはの頭を、ぽんぽん、と軽く叩く。

「まだ、無理……」

「そうか」

よい、しょっと。

「ふぇっ!?」

膝の裏と、背中に手をやり、抱え上げる。

「……あぅ」

なのは、よっぽど疲れたんだな。こんなに顔を真っ赤にして。

「ちょっと休んどけ」

ベンチに寝かせてやり……さてと。

パンツ丸出しで寝転んでるフェイト。あいつは……どうしようか。抱え上げた途端に電気ショックなんて、勘弁してほしい。

――パリン……

と、結界に穴が開いた。あー、これは、アイツだな。

「ガウッ」

鮮やかな茜色の毛並み。額に輝く宝石。

「アルフー……ちょっと遅いよー……」
アルフが、フェイトのそばに駆け寄る。
「フェイト、どうしたんだい!?」
喋った。ハスキーな女性の声で。まぁ、ユーノも喋るし、驚くことでもないだろう。
「……んっ!」
力むような素振りを見せるのと同時、その体が茜色の魔力光に包まれ……
「……ええええっ!?」
今度ばかりは、驚いた……
光が収まったそこには、長身の女性が立っていた。狼との共通点なんて、茜色の髪の毛と、額の宝石くらいしか無い。
「さ、帰るよ」
妙に、不自然なくらいこちらを見ようとしない。
「あ……れ？　あのときの、お姉さん？」
なのはが、顔だけをそちらに向け、そう言った。アルフはその言葉に、思いっきりビクッとして固まった。
え……知り合い？
「温泉宿で……」
そっか、あの時。妙に元気になっていたけど、そういう理由か。礼を言うべきか？　でも、敵だしなぁ……
――ドクンッ……
おなじみの、あの感覚。どうやら、この公園内で発動したらしい。タイミングが悪いことこの上ない……
アルフがフェイトと目配せしている。
「そんな状態じゃ、ジュエルシードの封印は無理だ。ここにいろ」
なのはの砲撃の直撃を喰らって、ここまで全力で走ってきて、万全とは思えない。今も肩が上下している。
「ンなこと、アンタに指図される筋合いは無い！　あれは、アタシたちが貰う……！」
やはりというか、意見を聞いてくれるような雰囲気じゃない。

俺は……
――ズンッ！
アルフの腹部に、インパクトを付加した打撃を叩き込んだ。
「か……はっ」
「……寝てろ」
不意打ちだったとはいえ、アルフの反射神経なら、これくらいは回避なり防御ができる。二度も戦った俺が判断したんだから、間違いない。
ドサっと倒れこんでくるアルフを受け止める。腕の中で、アルフは狼の姿になっていた。
多分、こっちの姿が本性なんだろう。
「お、お前……！　アルフに何を！」
体力が回復したらしいフェイトが起き上がり、詰め寄ってきた。手には、しっかりと斧
が握られている。
「仕方ないだろ……こんな状態で暴走体と戦うのは自殺行為だ」
フェイトに、アルフを渡す。
「んじゃ、行ってくる」「あ、私も！」
なのはが付いてこようとするのを止める。
「いい機会だし、ちゃんと話しとけ」
なのはは、俺を見て、フェイトを見て。
「……うん」
こくりと、頷いた。
「よし」
さて、行くか！
◆▪◆　◆　◆
そこは、吹き抜けのホールのような場所だった。
雰囲気としては、証券取引所に近い。
一人の女性が、最も高い位置にある仰々しいシートに腰を掛け、モニターを眺めていた。
そこには、何らかのグラフがリアルタイムで更新され続けている。

そして、その中の一つが、極端に跳ね上がった。
――ビーッ！　ビーッ！
途端に鳴り響く警報。
「魔力反応！　ランク、ニアＡＡランク！　こちらはジュエルシードと思われます！」
「隔離結界が張られています！　現地への被害、まだありません！」
「ですが、魔力パターンが局のデータベースにありません！」
「他にも、ＡＡＡランク、ＡＡランクの反応が多数！」
「と、ＡＡＡランクが多数!?」
「ＡＡＡランク級の反応、ジュエルシードと思しきものと戦闘に入りました！」
「艦長！　指示を！」
「現地には、クロノを向かわせます」
指示は、一言。だが、それを耳にした局員達は、指示通りに行動を始める。
「現地への転送魔法使用許可、下りました！」
「転送ポートの準備、ＯＫです！」
「艦長」
彼女の隣に控えていた一人の少年が、彼女に声を掛けた。十代中ごろの、黒髪の少年だ。目には、確固とした自信と、使命感が見える。
「出ます」
「ええ、頼みます」
会話は、最低限。だが、そこにあるのは、絶対の信頼。
彼は目礼し、その喧騒に包まれるブリッジを後にした。
◆　◆　◆　◆
『グゴゴゴ……!!』
「今日は亀か！」
そう、今回の暴走体は、亀だった。いつもながら巨大で、全長１０メートルはあるだろう。
「ウミガメでもいたのか……っと！」
――ヒュンッ！

全体的には亀そのものといった風体だが、特徴的なのはその尾だ。幾重にも枝分かれした鞭状になっていて、先端には鋭い刃が付いている。

これの回避にばかり気を取られていると……！

『グゴオオオォォ……!!』

その巨体を揺らし、突進を仕掛けてくる！

「フローター！」

飛行魔法を行使。とりあえず、上空に逃げる。移動する敵としては、質量がこれまでの中でも桁違いだ。まともに正面からぶつかったら、押し切られる。

――ヒュンヒュンヒュンッ！

「って、うおおおお!?　あっぶねぇ！」

鞭が伸び、上空にいた俺に連続して襲い掛かってきた！

――ガキィン!!

「痛って！」

うち一本が、腕を掠めた。魔力で補強し、擬似的なバリアジャケットとして機能してはいるとはいえ、衝撃までは完全に殺せない。

「バレット！」

射撃魔法を撃っては見るものの、そこは亀の面目約如。手足と頭を引っ込め、強靭な甲羅に篭ってしまう。だが、上空に居れば、脅威はあの尻尾だけだ。……そう思っていたのだが。

――シュゴオオオオオッ！

そんな、『ジェット噴射のような』音を立て始め、ふわりと地面から離れ……

「って、マジかよおおおぉ!?」

亀が、円盤のように回転しながら飛んできた！

「ガメラかっつーの！」

方向転換して、回避！　ギュゴオオッ！と凄まじい音を立て、ギリギリを飛んでいく！

小回りはこちらの方が上だが、トップスピードでは暴走体の方が早い！

「防壁！」
とにかく、逃げているだけじゃ埒が明かない。目の前にプロテクションを展開し、突進に備える。そして……
――ガゴオオオオオオオオオオオン!!!!
「っぐあああああ!!」
とてつもない衝撃と共に、景色がすっ飛んでいく……！
――ギャリギャリギャリギャリ……!!
ベルトサンダーのように、俺の防御を削り取っていく。びきっ、と腕が嫌な音を立てた。
「ぐうっ！」
多分、折れた。全く、骨折は何度目か自分でも知らないが……すぐに治り、痛みは引くとはいえ、いつまでも慣れない。
亀と距離を開ける。痛かったけど……もう、間合いは掴んだ！
――ギュルルル……！
空中で方向転換し、再び突進の構えを取る。
「もういっちょ、防壁！」
――ガッギイイイイン!!
再び、衝突。今度は後ろに飛んでいたため、腕は折れなかった。
即興の魔法は、なのはだけの専売特許じゃない！
「……パーテーション！」
プロテクションを上下に分割する。その隙間に、亀の甲羅が入り込む。今だ！
「閉じろ！」
――バクンッ
プロテクションが閉じ、亀の甲羅を上下から押さえ込んだ。
「ホールディングシールド……ってとこか？」
『グゴッ、グゴオオオッ！』
あがく亀だったが、俺の魔法がガッチリと拘束していて、逃げられない。
「うおりゃあああ!!」
――ドムッ

頭を引っ込めたそこに、腕を突っ込む。この距離なら、コントロールが下手でも関係ない!!　喰らえ！
「ディバイン……バスター!!」
――ズドオオンッ！
頭から抜けた空色の砲撃は、そのまま体内を突き抜けた！
『グゴアアアアア!!!』
「ジュエルシード、シリアル7！　封印！」
はぁ……思ったよりも手間取った。なのはは……どうしてるかな。
◆▪◆　◆　◆
「あなたは、何でジュエルシードを集めているの？」
フェイトは、目の前にいる少女に困惑していた。
あれだけの悪意をぶつけ、あれだけ痛めつけたというのに、なぜ彼女は、自分と『戦い』以外のコミュニケーションを取ろうとしてくるのだろう。
「……そんなの、どうだっていいだろ」
自分は彼女の敵。彼女の敵は自分。それだけでいいのに。
「どうでもよくない。大事な、ことだよ」
「ボクは、キミの敵だよ」
「それは、わかってる……」
なぜ、彼女はそんなに、物悲しい顔をするのだろう。
「じゃあ、さっさと戦えよ！」
バルディッシュがアスファルトを砕く。もういい加減、我慢の限界だった。戦いたいのに。早く、戦ってスッキリしたいのに。
「くだらないおしゃべりはここまでだ！　さぁ、構えろ！」
彼女は、ようやくデバイスを起動した。
「別に、戦うのはいいよ」
「ははは っ……!!」
そうだ。それでいい。だが。
「でも、何もわからないまま、ただ力をぶつけ合うのは嫌だ。
お願い、理由を教えて」
そして、彼女は……

「フェイト」
フェイトの名を、はっきりと呼んだ。
「う」
その瞬間、フェイトは理由のわからない衝動に襲われ……
「うわあああああああぁぁぁ!!」
キレた。
三度目の、勝負が始まる。
◆◆◆◆
「うわあああああああぁぁぁ!!」
フェイトが癇癪を起こしたように叫び、斧を振り上げ突っ込んでくる。私は、レイジングハートを構える。
『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
アクセルシューター、数は８！
「シューーート！」
フェイトに迫る、６つの誘導弾。
――バシュッ！
フェイトが斧を鎌に変形させた。
「あああああっ！」
――ザンッ、ザンッ！
誘導弾を切り裂き、迫る。
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』
目の前にバリアを展開。
――ガギィンッ！
「くっ……」
やはり、鋭い。ユーノくんお墨付きの私のバリアに、鎌が中ほどまで突き刺さっている。でも！
『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ』
――ドゴォンッ！
「うわぁッ！」
フェイトを弾き飛ばす。しかも、今回は轟音のオマケ付き。不意打ちは大成功！　チャンスだ！

「キャノンモード！」
『Ｃａｎｏｎ　ｍｏｄｅ』
照準よし、チャージよし！
「ディバイン……バスターーーーーー!!」
（捕らえた！）
完全な、直撃コース！
「……舐めるなあああああ!!」
が、フェイトは咄嗟に防御魔法を、砲撃に対して斜め向きに展開。
砲撃の照準がずらさ
れ、見当違いの方へ飛んでいく。
「それも、読んでる！」
ディバインバスターは、私の主砲。直撃しなかったとしても、無傷で済むはずが無い！
「つく……！」
思ったとおり、ふらついている。
アクセルシューター残り二発、行けッ！
「……このっ！」
――ザンッ
一つは切り裂かれ……
――パァンッ！
「がっ!!」
残る一つは、フェイトの後頭部に直撃した！　クリーンヒットだ！
「こ……のヤロオオォ!!」
一気に距離を詰め、鎌を振り上げる。多分、もう一度同じことをしても通じない。なら！
「レイジングハート、強化！」
『ｓｏｌｉｄ』
レイジングハートの柄を、魔力で強化する。これでもう、前みたいに断ち切られることは無い。
「でええええい！」「はあああああっ！」
そして、お互いの獲物がぶつかろうとした瞬間。

――ガシィンッ！

「え」「な」

私達は、図らずも同時に驚愕の声を漏らした。

レイジングハートは柄を掴まれ、フェイトの斧はデバイスで受け止められている。

秀人さんではない。ユーノくんでもない。アルフでもない。

「双方、そこまでだ！　武器を収めろ！」

見知らぬ少年が、私達の間に割って入っていた。

# 第八話

突如として現れた少年は、私達の勝負を邪魔し、冷たい声で告げる。
「武装を解除しろ」
「……何、あなた」
怒りを抑え、聞く。
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」
……はい？
ジクウ……何だって？
「管理局……!?」
フェイトは知っているらしい。斧を引っ込め、明らかに逃げようとしている。
「あ、待って！」
まだ勝負の途中なのに！
『Ｓｎｉｐｅ』
少年のデバイスが、女性の声で発声する。狙撃、と。
――バシュッ！
発射された魔力弾は、逃げようとしたフェイトの足元に正確に着弾した。
「きゃっ！」
バランスを崩し、地面を滑るフェイト。そして、更に……
『Ｓｎｉｐｅ』
デバイスの先端に、青白い魔力スフィアが発生する。向ける先は、地面に倒れ、まだ体勢を立て直せないフェイト。
まさか……！
「やめろおぉぉ！」
――ドパァン！
衝撃波が、少年の魔力スフィアを掻き消した。
「くっ……もう一人いたな」
秀人さんナイス！
「離せ！」

『Ｉｍｐａｃｔ　！』
――ドゴンッ！
衝撃波を放つ寸前、少年はあっさりとレイジングハートから手を離し、回避した。
『Ｂｉｎｄ』
縛り上げようとしたけど、あっさり回避される。
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
射撃魔法、今度は複数！
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』
――ギギギギギン！
私達と、フェイトを襲う攻撃を防ぐ。
「逃げて！」
誘導弾で少年を牽制しつつ、目を覚ましたアルフに声を張り上げる。
「すまない……！」
フラフラしながらも、しっかりとフェイトを抱え、結界から出ていくのを確認した。
「ユーノくん！　結界解除して！」
「何ッ!?」
私の言葉にぎょっとする。
勘だけど……コイツも、魔法をおおっぴらに使うことは出来ない筈だ。
「わかった！」
――ブゥンッ……
私も飛行魔法を解除。バリアジャケットも解除し、地面に降り立つ。
「なのは、誰だこいつ」
同じように着地した秀人さんが、隣に立つ。
強化魔法は、まだ解除していない。
「ジクウカンリキョクだって」
「何だそりゃ」

「さぁ……？」
少年は、デバイスを待機状態に戻したとはいえ、未だにバリアジャケットを展開している。
「悪いが、君達の身柄を拘束する」
発色を抑え、普通の縄のように偽装したバインドが、私達を縛った。
「ざっけんな！」
――ブチンッ！
秀人さんが、力ずくでバインドを引き千切る。
「あまり、舐めないでよね」
私は、バインドの魔力を分解し、消滅させる。
僅かに驚いたように目を開き、再びバインドを……
『やめなさい、クロノ』
それを、彼のデバイスと同じ声が押し止めた。
これは……念話か。
『そちらの三人を、丁重にお迎えなさい』
「艦長、ですが！」
『これは命令です。クロノ執務官』
その念話の主は、私達に向けて言う。
『我々は、時空管理局の者です。どうか、事情を説明させて貰えないでしょうか？』
くいくいっ、と服の端を引く。
「……秀人さん、どうしよう？」
なんだか、胡散臭い。
「……」
秀人さんは、警戒を解かない。なら、私も同意見だ。
「二人とも、行こう」
「ユーノ？」
「管理局には話を通しておいた方がいい」
まさかとは思うけど。
「お前、こいつらのこと知ってるのか？」
秀人さんの問いに、ユーノくんは首を縦に振った。

◆◆◆◆

かつん、かつん、と、俺達の足音が響く。

と、クロノが立ち止まり、俺達を……正確には、なのはの肩に乗るユーノを振り返った。

「ここでなら、『変身魔法』を解除して大丈夫な筈だ」

ユーノは、今気付いたように答える。

「あぁ、確かに。これだけ魔力素があれば」

……何の話をしてるんだ？

「？」

なのはも、首を傾げている。

「よししょっと」

ユーノの身体が光に包まれ、その光は大きくなり……

「ふぅ、やっと戻れた」

薄黄色のショートカットの、なのはと同い年くらいの子供になった。

「え、えええぇ～!?」

なのはも大いに驚いている。

「お、お前……!?」

何となく、予想はしてた。アルフだってそうだったんだ。

「黙っててごめん。実は……」

でも、まさか、まさか！

「お前、女だったのか！」

まさか女だったなんて！

「……え？」

「えっと、ユーノ……ちゃん？」

なのはも、頭が追いついていないようだ。

「女の子なのに、『くん』付けで呼ばれて嫌だったよね。ごめんね。これからは、ちゃんと『ユーノちゃん』って呼ぶからね？」

そうか。俺も、態度を改めないとな。相手は女の子なんだから。

「ん？どうしたユーノ？　ぷるぷる震えて。寒いのか？」

「駄目だよ、ユーノちゃん。女の子はお腹を冷やしちゃいけないって、

先生も言ってたよ」
ユーノは、がばっと顔を上げ、叫んだ。
「ボクは、男だあああ！」

怒り狂うユーノをなんとか宥めすかし、クロノに呆れられながら、ある一室の前に来た。
文字は読めないが、多分、責任者が待っているに違いない。
「艦長、クロノです」
『入って』
ばしゅっ、とエアロックが外れ、扉がスライドする。
そして室内は……エセ和風インテリアで、飾り立てられていた。峠の茶屋にあるような、大きな和傘。ゴザを敷いて正座し、湯呑みで緑茶を飲んでいる。ＳＦチックな白い内壁に、これっぽっちもマッチしていない。
「いらっしゃい」
俺達に、にっこりと笑顔を向けてくる、『艦長』と呼ばれる女性。
二十代後半程度に見える、えらい美人だった。
――どすっ
うおっ、びっくりした。
俺の脇腹に、なのはが軽く肘打ちを入れてきた。
「ど、どうした？」
なんだか、妙に機嫌が悪い。
「……何でもない」
「……そうか」
突っ込まないでおこう。
「……ふん」
痛いくらいに俺の手を握り締め、そっぽを向いてしまう。
ゴザに座り、艦長……リンディさんと、クロノと向かい合う。
……ところで、あのシュガーポッドにしか見えない物体は何だろう。まさか、な。ははは。
「さ、お茶が入りましたよ」

差し出される湯呑み。
「……どうも」
匂いを嗅ぎ、一口。
……ごく普通のお茶だった。
「お砂糖は？」
……は？
と、例の物体を開ける。中身は、白い顆粒。まごうことなき、砂糖だった。
リンディさんは、匙で砂糖を取ると……ばさっ。
入れた。緑茶に。砂糖を。
「……」
なのはが、怯えるように手を握る力を強めた。
――ばさっ。
もう一杯。
――ばさっ。
更に一杯。
そして、砂糖入り緑茶という、日本人としてはおおよそ認め難いシロモノを、美味しそうに飲みはじめた。
（……オェッ）
見ているだけで、口の中が甘ったるくなる。
「それで、話って何ですか？」
切り出す。
「まず、そちらの……ユーノさんが、発掘したジュエルシード」
ぴくん、とユーノが身じろぎする。
「輸送船のエンジントラブルによって、この地球、日本に散逸してしまいました」
エンジントラブル？　じゃあ、ユーノの過失じゃなかったのか。
「三週間前、時空管理局にジュエルシードの探索許可願いが提出され、受理されています」
三週間前……丁度、なのはと一緒にユーノを拾った日に近い。
「その責任感は、立派です。ですが……民間人を巻き込むのは、感心で

きません」
段々……雲行きが怪しくなってきた。
そして、予想通り、リンディさんの視線は、ユーノから、俺達へと移された。
「これは、我々の領分です。民間人の貴方がたは、今後関わることを禁じます」
「やなこった」
即答。当たり前だ。ここまで関わっておいて、今更放り出せるかっての。
「……忠告を聞く気は無い。そういうことか」
クロノが重々しく口を開く。
「あのな、それは『忠告』じゃなくて『命令』って言うんだよ」
何となく、分かった。
『時空管理局』。こいつらは、上から目線で物を言っている。
「僕達管理局の手を借りずとも、ジュエルシードを全て封印することができると？」
「俺達が倒した暴走体は八体。『同業者』も、それなりに収集している」
俺達の手元に六個。同業者……フェイトの手元には、最低でも二個。
「残りは多くても十三個。今までどおり、俺達だけで十分だ」
ぽっと出の胡散臭い連中なんぞに任せられるか。
「キミは、随分と自分の力に自信があるようだな」
「少なくとも、お前よりは強い」
にらみ合う。
「あの、一つ、よろしいでしょうか？」
なのはが、不自然なくらい平静な口調で挙手した
「何でしょうか？」
リンディさんが、促す。そして、
「あなたがたに、今更、何が出来るというのですか？」
「……そもそも、三週間も遅れてやってきて、大事な勝負に横槍を入れ

て、犯罪者扱いした挙げ句、『手を引け』？　本当に……何様のつもりですか？」
なのはの怒りも最もだ。ようやくフェイトとある程度の話し合いが出来て、伯仲した実力での勝負が出来ると思った矢先、どうでもいい邪魔が入ってしまった。
だが、クロノはそれが堪えた様子は無い。
「キミ達は、何か勘違いしてないか？　キミ達がやったことは、立派な公務執行妨害だ。犯罪者『扱い』じゃなく、本当に犯罪者として拘束されても……」
……いい加減、俺もキレた。
――ダンッ！
正座の姿勢から一気に立ち上がり、クロノの喉元に手刀を添える。魔力を鋭く固定し、刃にしてある。フェイトの真似事を即興でやってみたが、上手くいった。
「……あんまり調子に乗るなよ」
「……キミもな」
ごりっ、と脇腹に硬い感触。クロノのデバイスが、押し付けられていた。
だが俺は、内心でほくそ笑む。クロノは、俺の体質のことを知らない。『相打ち』に持ち込めるなら、俺が圧倒的に有利だ。
「二人とも、そこまでにしないさい」
リンディさんがぴしゃりと言う。
「……了解」
クロノが渋々とデバイスを待機状態に戻す。俺も、魔力を霧散させた。なのはの隣に座り、すっかり温くなったお茶を一気飲みする。
「ジュエルシードの所有権は、我々にあります。ですが、我々だけでは全てのジュエルシードに対応し切れません。ですから……我々に、力を貸していただけませんか？」
一拍置いて、リンディさんは頭を下げた。
「この事件……仮に、『ジュエルシード事件』とでもしましょうか。この件が解決するまでは、あなた方が所持していて下さって構いませ

ん」
なるほど。所有権は自分達にあるのだから、それを預けている間の……いわば、レンタル料ってことか。
「条件は、二つ」
だからといって、何でもかんでも言うことを聞くわけにはいかない。
「一つ目」
人差し指を立てる。
「ジュエルシードの封印は、全て俺達が行い、俺達が所持すること」
戦力の増員も、サポートも必要ない。全て、俺達で間に合っている。
「二つ目」
中指を立てる。むしろ、こちらがメインだ。
「なのはと、『彼女』との戦闘には、一切手を出さないこと」
クロノを睨むが、相変わらずしかめっ面。
「この二つ……特に、二つ目を徹底してくれるなら、協力してやってもいい」
「約束しましょう」
「んなっ……！」
リンディさんは、あっさりと承諾した。クロノの奴は、ちょっと愕然としている。
まぁ、もしも約束を破って邪魔をしてきたら……ぶちのめしてやればいい。
俺はそんなクロノを尻目に、その場所……アースラとかいう宇宙戦艦を後にした。
◆◆◆◆
「艦長、何故あんな条件を呑んだのですか！」
クロノは、噛み付かんばかりにリンディに詰め寄る。
「あんな条件、こちらには何の得もありません」
ことん、と湯呑みを置き、リンディが言う。
「ここは、管理外世界よ」
その言葉に、クロノの言葉は勢いを失う。

「……ですが」
魔法という技術が知られていないこの世界で、自分達はおおっぴらに動けない。
ならば、現地の常識を知る者に協力を頼むのが最善のやり方。
しかも今回、その協力者は、飛び抜けて強力な魔法の力を持っている。
ＡＡＡクラスの砲撃を連発し、堅牢な防御を誇る砲戦魔導師。
単独の白兵戦で暴走体を圧倒する、近接戦魔導師。
そして、魔力量こそ平凡なものの、卓越した技量を持つ結界魔導師。
多少、不利な条件を呑んででも、味方に抱き込んでおいて損は無い。
そして、何より。
「彼女達は、既に八体もの暴走体を撃破しています。対ジュエルシード戦において、彼女達以上の経験を持つ者はいません」
ロストロギアを相手にする事件は稀だ。そのため、アースラ所属の武装局員は、明らかに経験値不足。その点、彼女達は短期間に複数のロストロギアを相手にし、確実に封印してきている。
「私達アースラは、全力で彼女達のサポートに回ります」
「……了解」
クロノは、苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。

# 第九話

「そういえば、吾妻さん、高町さん」
　転送ポート……とかいう、妙にＳＦ的な装置を準備している間、ここまで案内してくれていたリンディさんが話しかけてきた。
「何ですか？」
　そんなに深刻そうな話ではなさそうだ。多分、時間つぶしの世間話程度だろう。
「ユーノさんとの関係はわかるのだけれど、お二人はどういうご関係？」
　恋人にしては年が離れているし、親子にしては年が近いし、友達のわりには接点が無い。俺達を傍から見たら、何とも不可解な関係に見えることだろう。でも、俺の答えは決ま
　っている。
「家族ですよ」
　ぎゅっ、とリンディを警戒していたなのはを抱き寄せる。
「……ん」
　気持ち良さそうに身を預けてくる。その手の中には、またしてもフェレットになったユーノが収まっている。曰く、『こっちの姿のほうが馴染んでるだろうし、燃費もいいからね』とのことだ。……しかし、それでいいのだろうか。
「家族……？　血の繋がりは無いのに？」
「別に、血の繋がりだけが家族の繋がりじゃないでしょう」
　こくこく。なのはが、言葉無く同意する。
「艦長、転送ポートの準備、できました」
　そこに、妙に明るい女性の声が入ってきた。
「ありがとう、エイミィ。　……それじゃ、自宅までお送りします」
「ええ、頼みます」
　世間話はそこそこに、仕切りの向こうへ、なのはの手を引いて入る。
　そして、機械の作動音と共に、景色が暗転した。
◆・◆　◆　◆

「フェイト、もうやめよう！」
アルフはとうとう、そう懇願した。
「管理局まで出てきちまったら、もう自由に動くのは無理だよ！」
時空管理局。数多の世界を股に掛け、平和を守るという看板を掲げる組織。当然、武力は桁外れ。巨大な犯罪組織ですら、まともにぶつかるような愚行は犯さない。アルフ達は最悪の事態に陥ってしまった。もう、自由に動き回ってジュエルシード集めをするのは不可能だろう。
だが、ベッドに腰掛けるフェイトは、薄ら笑いを浮かべるだけだった。
「あはは、何言ってるの？　管理局が邪魔するなら、潰してやればいい」
「……無理だ」
アルフが漏らした呟きに、フェイトが眉をひそめる。
「無理だよ！　フェイトは分かってない！　管理局は、そんなに甘っちょろい組織じゃないんだ！」
フェイトの表情が、どんどん不快な物を見るようなものへと変わっていっている。それに気付かず、アルフは言い募る。
「なぁ、もうやめよう？　プレシアの言いなりになって、こんな危険なことをして……捕まったら、二度と出てこられないかもしれないんだよ！　フェイト、」
「うるさあああああぁぁぁぁぁい!!」
――バキンッ！
バルディッシュで、アルフの頭を打ち据えた。
「うるさいうるさいうるさい！　ボクに意見するな！　アルフはボクの言うことを聞いていればいいんだあぁぁぁ！」
再びバルディッシュを振り下ろし……アルフは、それを掴んで止めた。
「言うことは、聞く、けど……！　フェイトをむざむざ危険に晒すような真似は、出来ない……！」
それは、アルフにとって初めての、主への反抗だった。

「うーっ!!」
子供のように唸り、がすっ、とアルフを蹴りつける。流石に、アルフ相手に攻撃魔法を仕掛けることには躊躇いがあるようだ。
「じゃあアルフはもう付いてくるな！　ボク一人でやる！」
アルフの手からバルディッシュを奪い返し、玄関から飛び出していってしまう。
「フェイト、待って！　フェイト！」
ぶちんっ、とリンクが切断され、居場所が特定できなくなってしまう。それに、今追いかけても……手負いのアルフには、追いかける体力は残されていない。
アルフは力無く、床に座り込むことしか出来なかった。
◆　◆　◆　◆

彼女は、優秀な科学者だった。
十代後半にして、ミッドチルダの誰もが知る巨大企業の開発部長に抜擢され、同年代どころか、その巨大企業の中でも最高額の収入を得る程であった。
彼女には魔導の才能があった。
魔力量は膨大。魔力運用は精緻にして大胆。才能に溺れる事無く修練を重ね、幻と思われていた次元跳躍魔法までも使いこなすまでになり、ミッドチルダ初の『大魔導師』の称号を得た。
『才女』『天才』『ミッドの財産』
誰もが彼女を賞賛したし、それには何一つ間違いは無かった。魔法と化学技術の世界、ミッドチルダにおいて、彼女は間違いなく、成功者だったのだから。
しかし、『そんなこと』は、彼女にとっては大して重要ではなかった。
彼女には、娘がいた。
別れた夫と同じ、金色の髪の毛に赤い瞳。勉強はあまり得意では無く、魔力もほぼゼロ。自分とは似ても似つかない、実の娘。
だが彼女は、そんな娘を心から愛していた。
長い時間構ってやれない分、惜しみない愛情を注いだ。

一緒に朝食を食べた。仕事に行く前にキスをした。寝顔を見れば、仕事の疲れを忘れさせてくれた。娘の誕生日には、どんなに仕事が詰まっていようとも休みを取り、ピクニックに行った。

その時にくれたちっぽけな花の冠は、彼女にとって、社会的地位よりも、大魔導師の称号よりも……何よりも大事な、宝物だった。

娘の笑顔こそが、彼女の全てだった。

そして、その日はやってきた。

新型動力炉の試験稼働日。実際には、稼動させるにあたって、まだ安全上の不安がいくつも残っていた。彼女はそれを全てクリアするまでは、稼動させるべきではないと主張していたが、経営陣はそれを却下した。

彼女の勤める企業に次ぐナンバー2の企業が、同じ理論に基づいた、ほぼ同型の動力炉の開発を着々と進めていたためだった。

最大の利益を上げるのは、いつの時代も最初に始めた者。それを熟知しているが故に、現場を急かすのだ。てこ入れとして、現場を知らぬ名ばかりの監督役を配属し、彼女や、仲間の技術者達を追い立て……強引に、稼動を決定してしまった。

その結果が……暴走だった。

動力炉はメルトダウンを起こし、不安定なエネルギーと毒素を半径数十キロに渡って撒き散らし、最後には自身をも崩壊させていった。

彼女は全開でシールドを張り、ごく狭い範囲ではあったが、全ての破壊エネルギーを遮ることができた。彼女と、仲間の技術者達は無事だった。だが……研究所から数キロ離れた彼女の自宅までは、そのシールドが届く訳も無く……

彼女の『全て』は、永遠に失われてしまった。

「うあああぁぁぁぁ!!」

彼女の意識は、自らの悲鳴と共に現実に帰還した。

「はぁっ、はぁっ、」

額には汗がびっしりと浮かび、頬には涙の跡がある。

「うっ……ゲホッ!」

咳込み、口に手を当てる。手の平には大量の血液が付着していた。

「……もう、時間が無い」
動力炉の暴走の際、大量の有害物質を吸入してしまった。その毒素は、呼吸器系はおろか血液にまで入り込み、彼女の身体を蝕んでいた。
とはいえ、適正な治療を受ければ、かなりの延命は可能だ。
だが彼女は、それをしなかった。そんなことに費やす時間は、一秒たりともありはしなかったのだから。
ずり、ずり、と重い体を引きずりながら、『そこ』に足を踏み入れる。
そこにあるのは、円筒状の巨大なカプセル。彼女は、そのカプセル……正確には、その中に眠る者に、手を触れる。
ここは、彼女の『全て』が眠る場所だった。
「待っていて……もうすぐ、もうすぐだから」
優しい『母』の顔で、ゆっくりと語りかける。
「もう一度……あなたの笑顔を見せて頂戴……」
そして、彼女は娘の名前を呟き、部屋を出て行った。

◆◆◆◆

フェイトがマンションを飛び出し、三日が過ぎていた。アルフとのリンクは切断してあり、念話は繋がらない。
「ボクは、強いんだ。アルフなんかいなくても、ボク一人でやれるんだ」
街中をさ迷い、ぶつぶつと呟く。通行人は、そんな彼女を振り返るものの、声をかけることはしない。
だがそれも、仕方の無いことだろう。着たきりの服は薄汚れ、髪はばさつき、表情は虚ろ。
フェイトもまた、助けなど求めてはいない。食料は強奪すれば良かったし、寝るなら適当なビルの屋上で足りた。
そして、何度目かの空腹。
街中をひたすら徘徊していれば、腹も減る。
「甘いもの……食べたい」
脳裏に浮かぶのは、先日襲撃した店。本人は気付いていないが、疲労がかなり蓄積し、思考能力が低下している。一度荒らした店が、対策を立てないことなどありえない。そんな単純な事さえ、考えられな

くなっていた。
歩いて数十分で、例の店に到着した。やはり、開いていない。
だが今回は、ドアノブを捻ると、あっさりと開いた。一直線に冷蔵庫を目指し、手を触れ……視界がひっくり返った。
「……え？」
床に這いつくばったまま、首だけを動かし、確認する。
「……捕まえたよ」
三つ編みの、眼鏡を掛けた少女が、フェイトを押さえ付けていた。
「……！」
ようやく、フェイトの思考が追いついた。
「何すんだよ！離せ！」
暴れようとするも、起き上がれない。
「質問に、答えなさい。この前、ウチの店を荒らしたのは、あなた？」
フェイトは、いつものように……
「は、な、せえぇぇ！」
――バチバチバチッ！
電撃をお見舞いする。だが、フェイトを拘束する手は緩まない。
「やっぱり、あなたなんだね」
その手には、黒いゴム手袋が嵌まっていた。
『スタンガンのようなもので気絶させられた』という、警備会社の証言から対策していたようだ。
そして、今の一撃で限界だったのだろう。
「あうううぅ……」
フェイトは、ぺしゃっと床にノビた。
「え!?　ちょっと、大丈夫!?」
少女は慌てて拘束を解き、フェイトを抱き起こした。
「……おなか、すいた」
――ぎゅるるー……
フェイトの腹が、間抜けな音を鳴らした。
そして。
「ただいまー」

「あぁ美由希、お帰りなさ……い？」
彼女……高町美由希は数時間ぶりに帰宅した。
「お母さん、事情は後で説明するから。ご飯作って」
「うぅぅ～、ごはん～～……」
何故かその背中に、フェイトを背負って。
「あらあら……」
桃子は、ぱたぱたと台所に駆けて行った。
美由希がフェイトを食卓に座らせる。
「食べたら、ちゃんと説明してもらうからね」
――ぐぅぅ……
美由希の言葉に、フェイトは腹の虫で返事を返した。そこに、桃子が大量のお握りを大皿に載せてやってきた。
「はい、お待たせ。間に合わせの物だけど……」
「ごはんっ！」
フェイトがバネ仕掛けの人形のように跳ね起きた。そして、猛然とがっついた。
「がつがつがつがつもぐもぐもぐもぐ……」
「ちょっと、少し落ち着いて食べなよ！」
少なくとも十個はあったお握りが、見る見るうちに消えていく。当然、そんな食べ方をしていれば。
「う、ムグッ!?」
喉を詰まらせるというものだ。
「うわっ、言わんこっちゃない！　ほら、お茶！」
差し出された湯呑みを引ったくり、喉に流し込んだ。
そして、全てのお握りを食べ尽くしたと思った途端。
――ばたんっ
「うわっ！」
食卓に突っ伏した。
「く～……」
安らかな寝息を立てている。
その外見的特徴を見て、ようやく思い至ったのか、桃子が口を開い

た。
「美由希。この子、まさか……」
「そ。例の空き巣」
「あら、まぁ……」
この、頬に海苔と飯粒をくっつけて寝ている少女が？
「それにね……」
そして、話の続きを聞き……次第に、桃子の顔が強張っていく。

フェイトは、夢を見ていた。あの、ピクニックの続きだ。
母に花の冠をプレゼントしたら、嬉しそうに笑ってくれた。
「ありがとう、○○○○。母さん、とても嬉しいわ」
また、名前は聞き取れなかった。
「お礼に、母さんも○○○○にプレゼントをしないとね」
何度この夢を見ても、その四文字だけは聞き取れない。
「何か、欲しいものはある？　誕生日だから、何でもいいのよ」
「え、いいの!?」
ぱっ、と顔を輝かせる、当時の自分。うんうんと唸り、散々悩み……
「それじゃあ私、『　』が欲しい！」
「え？　……ええと、それは、」
娘のリクエストに、プレシアは顔を赤らめた。
「今はまだ無理かもしれないけれど……約束するわ」
そして、フェイトの頭を優しく撫でてくれる。
（ボクは……何をねだったんだっけ？）
そして、夢から醒めた。
「ん……」
「あ、起きた？」
ベッド脇に、桃子と美由希が座っていた。
「……うわぁっ!?」
慌てて飛び起き、壁を背に睨みつける。
「おはよう」
桃子がにっこりと笑いかけると、フェイトは調子を崩され、「あ、あ

あ」と返事なのかも不明な声を出した。
「じゃ、美由希、よろしくね」
「うん」
そして、桃子が部屋を出て行く。残った美由希は、フェイトの手を掴んだ。
「それじゃ、行こうか？」
「は？　どこに？」
「お風呂」
「はぁ……」
あまりにも平然と言われ、最初は意味が分からなかった。されるがままに手を引かれ……リビングを通過したところで、ようやく思い至った。
「い・や・だ～！」
力一杯抵抗するが、そこは体格の差。
「ほら行くよー」
「うわあぁぁぁん！　助けてアルフー！　やだやだやだ～!!」
往生際悪く柱にしがみついて抵抗するフェイトを引っぺがし、犬猫のようにずる
ずると引きずっていった。
しばらくして、恭也が帰宅した。手には、紙袋。
「おかえりなさい、恭也」
「ただいま、母さん」
紙袋の中身は、男物の衣類だった。
「お父さんの様子は？」
そう、彼の父親……昏睡中の、高町士郎の物だ。
「相変わらず、寝てたよ」
恭也の意識は、先ほどからずっと、風呂場へと向かっていた。それというのも……
「熱い、熱いってば！」
「我慢我慢ー」
「ぎゃあっ、シャンプーが目に入ったー！」

「気にしなーい気にしなーい」
「このッ……黒焦げにしてやる！」
「こんな場所で使ったら共倒れだよー」
「しまったー!?」
「……誰か来てるのか？」
「ええ、例の空き巣さんが～」
「な、何ッ!?」
　のほほんと答える桃子に、恭也が目を剥く。飛び出していこうとする恭也を、襟を掴んで止めた。
「まぁまぁ……そんなに悪い子じゃなさそうだし」
「店を荒らして食料を食い散らして警備員を全滅させる『いい子』がいてたまるかッ！」
「そうねぇ……なら、人の形をした犬か猫だと思えばいいのよ♪」
　桃子は、無自覚に毒舌だった。
「誰が犬猫だッ!!」
　そこに、風呂上りのフェイトと美由希がやってきた。
「あら、まぁ」
　何故か桃子は、驚いた顔をしている。
　美由希のやったことといえば、薄汚れた服を脱がし、ぼさぼさの髪の毛を洗い、身体を洗っただけだ。だというのに。
「お人形さんみたいねぇ……」
　桃子の言うとおり、大変可愛らしい姿になっていた。
「あっはっは。可愛いってさ……って、ぎゃあ！」
　ぽんぽん、とフェイトの頭を気安く叩いていた美由希だったが、その手に思いっきり噛み付かれ、悲鳴を上げた。
「むぐぐぐぐ……」
「あいだだだだ!!」
「こら、離しなさい！」「おい何してる！　そんなもん食うな！」「そんなもんとは何よいたたたた！」
　……犬猫という表現も、あながち間違いではなかったようだ。
「……で？」

むすっとしたフェイトが、机を挟んで高町家の三人と向き合う。
「何だよ。聞きたいことって」
「……あなたが使っていた電気、あれは？」
美由希は、感づいていた。フェイトが使った魔法が、あの日、なのはが使ったものと同質の力だということに。
「……さぁ、何のこと？」
フェイトも、そう簡単には口を割らない。『魔法』というものが公になれば、この世界での活動に支障をきたす。そのくらいは……多分、フェイトにもわかっている……筈だ。
「あのね……」
美由希が、事情を話し出す。
「わたしたちは……何か、……すごく大事な、何かを忘れている……そんな気が、ずっとしているんだ。それが、何なのか……本当に、思い出せなくて、もどかしいんだけど……」
ぎゅ、と裾を握り、切々と訴える。
「でも……あなたが使った、あの力。あれが、すごく……すごく……引っかかって」
（……ん？）
ふと、フェイトは、三人から魔法の気配を察した。しかも……かなり、身に覚えのある類のそれを、だ。
「……キミら、名前はなんてーの？」
不意打ち気味の質問に、美由希が答えた。
「美由希。……高町、美由希」
「……」
フェイトには、その魔法がこの三人に掛けられている意味も、その経緯も分からなかったが……自分なりに推察することで、どうにかそれっぽい納得を得ることにした。
（忘却系……の、ちょっと弱いけど効果的な術式。アイツの縁者。コイツら自身には、魔力の気配は無い。アイツらの強力な魔力に引き寄せられてくる、ジュエルシードたち）
そこから、どうにかこうにか、得られた解答は。

（巻き込まないために、一時的に自分の存在を隠匿している……？）

……だった。秀人の本意とは全く違うが、あながち、的外れでもない。得られる情報の中から、そこまで考えられただけ上出来だろう。

だとすると、ここでその術式を破壊することも、彼らの存在を明かすのも、得策とは言えない。巻き込みたくなくて、そういった行動をとったのに……

――――ふと。

（な……なんでボクが、アイツをフォローするようなことを……!!）

気恥ずかしさにぶんぶんと頭を振る。

「……？　あの、何か、知らないかな？　何でもいいんだ」

アイツらを困らせてやる嫌がらせは、その術式を破壊してやるだけでいい。事実を明るみに出すだけで、アイツの周囲を混乱に陥れて、こちらは格段に動きやすくなる。

だが。

（……なんか、イヤだな……）

正体不明の感情が、その選択を否定する。そして、フェイトの取った行動は……

「――――悪いけど、知らないなぁ」

美由希たちは、目に見えてがっくりと項垂れた。

「じゃ、ボクはもう行くからね」

「ちょっと待ちなさい」

フェイトはクールの去ろうとして……がっちりと捕獲された。

「それとこれとは別に……ウチの店を荒らしたことは、まだ聞いてないよ？」

「うげっ……し、知らないもん！」

しゅばっ、と、魔力を用いた持ち前の素早さで離脱を試みるフェイトだったが……

「させないよ！」

……何故か、生身の美由希があっさりと先回りをしていた。

「ウソォー!!?!!」

クイックターン。１８０度ターンし、庭からの脱出を……
「観念しろ」「うぞぉーーーーーーーーーーー!!!?」
今度は恭弥に捕まった。
「お、お金ならおいてっただろ！」
……瞬間、美由希の目がくわっと見開かれ、
――ごいんっ!!
「いったぁ!!」
容赦のない拳骨が降り注いだ。
「お金で済めば警察はいらんのじゃ!!　その甘ったれた性根に、世の中ってモンを叩きこんだる！　来い！」
「は、はなせー！　はなせ、ばかー！」
そして、フェイトを小脇に抱え、のっしのっしと歩き出してしまった。恭也と桃子は、諦めたような顔で、それを見送るのだった。

街中をその恰好のまま行進し、着いた先は、先ほどぶりの喫茶翠屋。暴れまわった痕跡……散らかった店内が、そのままになっていた。
「ふン！」「うびゅっ」
フェイトを床に放り出す。
「な、なんだよー！」
虚勢を張るフェイト。
逆らうことなど考えもしなかった母。強く出れば必ず引っ込んだアルフ。そもそも敵のなのは達。
そういった極めて限定的な人間関係しか知らなかったフェイトにとって、『真正面から、悪いことを悪いと毅然と指摘してくる』ような相手は、居たためしがなかった。
「……」
美由希は、無言のままバックヤードへ引っ込んだ。この隙に逃げようとは、不思議と思えなかったフェイトは、立ち尽くして待つ。
――どん！
……目の前に置かれる、ホウキ、チリトリ、ゴミ袋。水のなみなみと入ったバケツにモップ。

「……自分で散らかしたモノを、自分で片付けなさい」
「なんで、ボクがそんな……!!」
静かに告げる美由希に、フェイトはまたしても噛み付く。
「――――片付けなさい!!」
「ッ……!!」
びくっ、と萎縮し、目の前のホウキに手を伸ばす。
（うぅー……何でボクがこんなこと……こんなの、アルフの仕事なのに……）
割れた食器を箒で掃き集め、ちりとりですくい取り、新聞紙に包んでごみ袋に捨てる。掃除機で細かな破片を残らず吸い取り、片付いたら床を雑巾がけしていく。
最後に、ぞうきんを絞り水気を抜き、汚水を捨て、再び美由希の前に戻った。
「……終わったけど」
「……」
じろり。
「お、終わりました……」
美由希は、フェイトが掃除したあたりを入念にチェックする。
「……意外。ちゃんと出来てるじゃない」
手順に無駄も無く、与えられた道具で、可能な限りの動作をしていた。
「別に、できないんじゃなくて、やらないだけだから……」
渡された布巾で手を拭く。
「座っていなさい」
「……」
椅子を二つ用意し、美由希が厨房の方へ戻る。おとなしく座るフェイト。
（……怒られちゃったよ、くそ）
だが。
（……おかーさんの時と、何か違ったな）
叱責に折檻。やっていることは、程度の差こそあれ同じだというの

に……
（……なんか、あったかかったな）
何が違ったのか。フェイトには、まだ、それが分からなかった。
――ことん。
物音に我に返ると、目の前に、湯気を立てるティーカップと、切り分けられたケーキ。
「食べな」
「……うん」
おどおどしながらも、ケーキを食べ、紅茶を飲む。モノとしては、以前、忍び込んだ際に食い散らかしたものとほぼ同じ。
（同じケーキ……だよね）
むぐむぐと咀嚼しながら、そんなことを考えていると、美由希が頬杖をついて顔を近づけてきた。
「この間のより、美味しいでしょ？」
「……うん」
美由希は、今度は怒るのではなく、諭すように言う。
「ズルをしているとね、この味は、ずぅーーーっ……と分からないんだよ」
「……」
「ケーキは美味しく楽しく、食べたいでしょう？」
「……うん」
「だから……ズルをするんじゃなくて、ちゃんとしなさい。あなたは、まだ子供なんだから」
「……うん」
注がれた紅茶を、ふぅふぅ冷ましながら飲む。その、随分としおらしい姿を見て、美由希は、頭の中に奇妙な引っ掛かりを感じていた。
一息ついたフェイトは、食器をシンクへ片付ける美由希を、少しの間ぼうっと見て……
「……ごめんなさい」
自然と、その言葉が口をついて出てきた。
「ん。許す」

美由希は、フェイトの頭をそっと撫でてやった。

路地裏を歩き、拠点へ戻るフェイト。その手には、ちょうどケーキが二つばかり入った箱が提げられている。

『今度は、ちゃんとお店においで』……そんな言葉と共に、持たせてくれた。

「うん……また行くよ。だからコレは、アルフと……おかーさんへの、お土産……」

てくてくと歩く。

「ハイ、いらっしゃい！」

……と、人気のない路地裏に、不釣り合いに陽気な声が響いた。

「!?」

慌てて臨戦態勢を取るフェイト。その視線の先には……

「……？」

「オー、怖がらなくてもいいんだヨー！」

……全身に、じゃらじゃらと銀色のアクセサリーを身に着けた異装の女が、ゴザに座ってフェイトを手招きしていた。

「……だれ、キミ」

不信感しか感じられない。

「んふふ。さぁ誰だと思うカナ？　ほれほれ、見ておゆきなさい」

と、彼女が指し示すのは、ゴザの上に広げられた、無数のアクセサリー。どうやら、路上販売のようだが……だとしたら、なぜ、人通りも無く、それどころか、ロクに民家も無いこのような路地裏にいたのか。

フェイトは、不信感を感じつつも……恐る恐る、近づいた。いざとなれば、実力行使でどうにでもなる……という事実も後押しをした。

広げられているのは、どれも、精緻な細工を施されたアクセサリーたちだ。イヤリング一つをとっても、そのクオリティに妥協は見られない。

「キレーだね」

率直に、思ったことを口に出す。
「んっふっふ。嬉しいこと言ってくれるナー。子供は大好きだけど、素直な子供はもーっと好きだヨ」
機嫌を良くした女は、数多の中から、フェイトが先ほどから熱心に、一つを見つめていることに気付いていた。
「オッ、それかい？」
「ん……え、いや、」
単に気に入っていただけ、とは言い出しづらいフェイトに、女は、あけすけな笑顔を向ける。
「ヘイ、ガール。特別だゼ」
女は、それを……四辺形の盾を象ったアミュレットを、フェイトに握らせる。
「これをｙｏｕにやろう」
盾のレリーフには、あつらえたかのような、三角形の窪みがあり……何の気なしに、バルディッシュを当ててみると、カチリと誤差も無く収まった。それはまるで、バルディッシュを収めることで完成することを前提にしているようで、さすがのフェイトも目を剥いた。
「ね、ねぇ、これって……。あれ……？」
フェイトが顔を上げた時、先ほどまでそこにいた女も、大量のアクセサリーも、忽然と姿を消していた。
白昼夢か。しかし、フェイトの手元には、間違いなく銀のアクセサリーが握られている。
「バルディッシュ、追える？」
『？　……追う、とは』
「……？　あれ？」
相棒の怪訝な声。そして、フェイトは……自分が寝ぼけたことを言っていることに気が付いた。
「そうだった。はやく帰らなきゃ、っと」
美由希と別れたばかり、手に提げたケーキの保冷剤が効いているうちに、拠点へ戻らなければならないのだった。
「いそげいそげー」

――チャリ、チャリ……
フェイトが足を踏み出すごとに、己とバルディッシュを繋ぐ愛用の銀のチェーンが鳴る。

「――――――

（全部、あの高町のせいだ。あいつにやりかえされたから……！
先生だって、アイツの味方になっちゃった……！）
……標本にしたいほどの、清々しいまでの逆恨みだった。
「……！」
周りも見ずに歩いていたせいか、街角のゴミ箱に体がぶつかる。そして、
「ッ!!」
――がしゃん。
苛立ち任せに、それを蹴倒した。通行人の何人かは、じろりと見ていくが、わざわざ赤の他人へ関わろうとする者は皆無であった。
「……？」
蹴倒したゴミ箱の中身。その中に、――妖しく光る、青い宝石が紛れ込んでいた。
（……なんだろ、これ）
ひょい、と。子供特有の警戒心の無さから、それを拾い上げる。
――そして。

# 第十話

『キュエエエエッ!!』
目の前で、鳥を素体にした暴走体が吼える。とはいえ、大して強力な個体ではない。精々、二体目の獣と同格の戦闘力だ。
「アクセルシューター」
魔力スフィアを展開。数は6。
「シュート!」
――ドドドドン!
四発を発射。誘導弾は、暴走体へと迫る。
『クエエエエッ!』
だが、暴走体はその羽根を羽ばたかせ、アクセルシューターを回避する。案外速い。アクセルシューターの速度をいくらか上回っている。
「無駄」
二つで追い掛け回し、それに気を取られている間に、逆方向から挟み撃ち。
――ゴゴンッ!
二発、命中。完全に回避されてしまった二発は、魔力に還元。
『Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ』
動きが鈍くなったその身体を、新たに覚えた魔法で縛り上げる。
レストリクトロック。私の得意な、『収束』系の上位魔法……らしい。殆ど思いつきで組んだ魔法だから、そこまで意識していなかった。まぁ、要は強力なバインドだ。
「ディバイン……!」
そして、バインドを維持しつつ、すかさずキャノンモードへ変形。
「バスターーーー!」
――ドゴオオォォン!
「ジュエルシード、シリアル12、封印」
ふぅ……終わった終わった。

『なのはちゃん、お疲れ様！』
ぽん、とモニターが表示され、アースラのオペレーター……エイミィがサムズアップしてくる。この人……悪い人じゃないんだけど、テンションが高いから苦手だ。
『高町なのは、戻ります』
あとは、アースラに戻って報告だ。
「お帰りー」
アースラのロビーで、秀人さんとユーノくんがコーヒーを飲んでいた。
「ただいま！　そっちはどうだった？」
ぎゅっと秀人さんの腕にしがみつく。
秀人さんは、ポケットからプラスチックのような質感のケースを取り出す。その中には、すっかり光を失ったジュエルシードが一つ、収まっていた。
「とりあえず一個」
かぽん、とケースを開け、中のジュエルシードを摘み出す。
「レイジングハート、ほい」
それを、待機状態のレイジングハートに近づける。すると、すぽん、と吸い込まれた。
「あと四つか……」
いよいよ、ジュエルシード集めも大詰めに入ってきている。
最初の頃に比べると、ジュエルシードの出現頻度は格段に増えてきている。このアースラに関わって十日が過ぎて、既に四つ。二つは私達が。もう二つは、フェイトが掠め取っていった。
「クロノは？」
「まだ、周辺に魔力反応があるから、念のために調べていくって」
クロノが苦手な私としては、大助かりだ。クロノは、妙にお堅いというか……意識的に、壁を作っているような気がする。
「あー……そろそろ、のんびりしたいなぁ。学校も休んじゃってるし」
今回の長期欠席は、ちゃんと富山先生に伝えてある。条件として、毎日ちゃんと電話連絡することを命じられた。とはいえ、殆どは雑談

……というか、先生の愚痴だ。
『高町さんが休んでから、テストのクラス平均点が下がった』だの、『葉山君が居眠りばっかりして自信無くしそう』だの、『長谷川先生にまた叱られた』だの……あなた本当に教職課程を修了してきたんですかと問いただしたくなるような内容だった。
――ビーッ、ビーッ！
再び、警報がけたたましく鳴った。
「忙しいな……」
コーヒーの残りを一気に飲み干し、秀人さんが立ち上がる。
どうせなら、全部いっぺんに出てくればいいのに……
『市街地に、魔力反応！　ジュエルシードです！　……え!?』
そして、底意地の悪くて偏屈野郎な神様は、私の願いをバッチリ叶えてくれた。
『反応、四つ！　しかも……隔離結界が張られていません!!』
「「……はぁ!?」」
私達三人の声が重なる。結界が張られていないことは、被害がモロに発生してしまうし……何より、人が傷ついてしまう。
「ヤバいな……フェイトも向かってる筈じゃないのか」
駆け出し、転送ポートに向かいながら、秀人さんが誰にでも無く呟く。
「そういえば……」
以前、お巡りさんに追いかけられていた時……
「前に言ってた。結界は、いつもアルフに張ってもらってる、って」
もし何らかの理由で、アルフとフェイトが別行動を取っていたら……まずい！
「エイミィ、ルート開け！」
『ちょっと待って！　……よし、いいよ！』
もつれ込むように転送ポートに駆け込む。
◆▪◆　◆　◆
「くそ……！」
フェイトは悪態をつきながら、四つのジュエルシードと相対してい

た。
傍らには、意識を失って倒れている何人かの少女たち。
取り込まれてはいないことから、今回の相手は暴走体ではない。
しかし、それよりも遥かに危険な、純粋に暴走したエネルギーの塊だ。曲がりなりにも『願望器』であった四つのジュエルシードは、互いに共鳴し、単独のものとは比べ物にならない程の量に膨れ上がったエネルギーが、貪欲に膨張を続け……間もなく、弾ける。
「止まれ～……！」
フェイトは、ただでさえ苦手な防御魔法を応用し、ジュエルシードを押さえ込もうとしていた。狭い範囲に持てる限りの魔力を注ぎ、強固なシールドを展開している。
――ピキッ
「あうっ……！」
シールドに皹が入り、フェイトが唸る。
（せめて、アルフがいてくれたら……！）
リンクを回復させておかなかったことを、今更になって後悔した。
――ビキッ、ビキキッ……！
亀裂が、広がっていく。フェイトの予想を遥かに上回る密度だった。人がまばらな地域で発動していたのが、せめてもの救いだ。とはいえ、もし爆発すれば、この町全体に被害が及ぶだろう。そして何より。
（こんなとこで、ジュエルシードを失うわけにはいかない！）
もし一つでも欠けてしまったら、プレシアの願いが叶わないかもしれない。
（おかーさんが、ボクに笑ってくれなくなる……！）
それが、フェイトには何よりも恐ろしく……
――ケーキは、美味しく楽しく、食べたいよね
「……!!」
だが、この場で思い出すのが、母の言葉ではなく、そんな言葉であることが不可思議だった。
「フェイト！」

フェイトの耳に、聞きなれた声が届く。視界の隅で、茜色の毛並みが揺れる。
「アルフ！　結界張って！　終わったらシールドで押さえ込んで！」
「ああ、わかった！」
多少仲がこじれていたとしても、そこは主と使い魔。
――キィンッ！
アルフは即座に結界を張り、周囲を遮断。更に、フェイトが使用していたシールドの維持制御を受け持った。
「よくも手こずらせてくれたな！　でも、これで！」
封印魔法を放つ。だが。
――ボシュッ……
「えぇッ!?」
猛烈なエネルギーの中に飲み込まれ、消えてしまう。
「この！　このっ！」
――ボシュッ！　ボシュッ！
だが、何発撃っても届かない。あまりにもエネルギーの密度が高く、ジュエルシードに到達する前にかき消されてしまうのだ。
「ふぇ、フェイト……！　こっちが、ヤバい……！」
見れば、アルフが維持しているシールドが破られかけている。
「うー！　何でだよ、もー！」
二人掛かりでシールドを維持する。今はまだ押さえ込めてはいるが、このままでは魔力と体力を削られジリ貧だ。
「ああ、もう……！　どうすれば！」
――バキンッ！
とうとう、『亀裂』は『穴』になってしまう。封印を停止し、フェイトも結界の維持に加わる。
「くっそ、止まれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
フェイトが叫ぶ、その声に。
「エイミィ！　ジュエルシードを！」
力強い声が、答えた。

なのはが、秀人が、ユーノが、揃ってこちらに向かってきていた。
『了解！』
――ヴゥンッ！
壊れかけていたシールドの代わりに、新しくアースラの出力でシールドを張らせる。ひとまずは、すぐに爆発、ということは無くなった。
だが、もしもジュエルシードが爆発すれば、呆気なく破られてしまうだろう。それでも、そのシールドを張る理由は、一つ。
「お前らも手伝え！」
一人でも多くの魔導師で、封印するため。アルフがやってきて、輪に加わる。今は、敵
味方に分かれている場合ではない。５人で、ジュエルシードを囲む。
「フェイト」
なのはが、フェイトの目をまっすぐに見据えながら……
「色々とお話ししたいけど……今は、全部後回し」
決意を込め、言った。
「手伝って。フェイトの力が必要なの」
フェイトは、ツンとそっぽを向きながら、答える。
「……ふん！　足引っ張ったら、承知しないからな！」
フェイトもまた、輪に加わった。
秀人が、なのはを、ユーノを、アルフを……そして、フェイトを順番に見回す。
「『俺達』で、押さえ込むぞ！」
『俺達』の中に自分がいることに気づき、フェイトは、くすぐったいような、背中がむずがゆいような……だが、不思議と心が温まる、そんな気分を感じた。
「いわれなくても……やってやるよ！」
桜色。空色。緑色。黄色。茜色。
各々の魔力光を輝かせる魔法陣が展開する。
――そして、奇妙な現象が起きた。

フェイトの、バルディッシュを留めていたチェーンが、自ら発光し……秀人の、空色の魔法陣。一つの大円の中で、二つの正方形が八角形を描き出す、オーソドックスなミッドチルダ式魔法陣が……

――変形を始めた。

大円を飛び出すように、四本の直線が伸びて行く。

「え!?」

「な、何これ!?」

二本は、それぞれなのは、フェイトの魔法陣を貫通。

「うわっ！」

「なんだ!?」

残る二本は、ユーノ、アルフの魔法陣を貫く。

更に、展開。なのは達の魔法陣からは三本のラインが伸び……

ジュエルシードを取り囲む五つの魔法陣が……秀人を天辺に、五芒星を描いた。

――ヒュイイイイィィィン……!!

一つに繋がった五つの魔法陣が、回転速度を上げていく。それに比例し、処理能力が加速度的に上昇する。

『稼働率、７６％、８４％、８９％、９４％……』

そして、五人の身体にも、異変。

「う、わ……！」「すご……！」

体中を、かつて無いほど濃密な魔力が駆け巡っていく。

「……よし、やるぞ！」

秀人の号令と共に五人は、示し合わせたように両の目を閉じる。

リンカーコアに、身体を循環する濃密な魔力に、意識を集中する。

――どくん

五人はその時……確かに、繋がっていた。

――どくん

心臓のように、伸縮するリンカーコア。バラバラだったそのリズムが。

――どくん、どくん……

徐々に、合わさっていく。重なっていく。

――どくんっ！
そして、五人全員のリンカーコアが同時に、力強く鳴動した。瞬間。
『稼働率１００％』
五人は一斉に目を開き……！
「「「「せーーーーーの！」」」」
――――――

――まるで、リンカーコアを直結させたかのように。
（……まさか、ね）
リンディは、自分の荒唐無稽な考えに呆れ、苦笑した。
（ありえないわ。そんな理論には、何年も前に『不可能』という結論が出ている）
偶然だろう。そう結論付け……リンディは、そのデータを閉じた。

◆・◆　◆　◆

「……」
「……」
四つのジュエルシードが私とフェイトの間にぷかぷかと浮かんでいる。取ろうと思えば、いつでも取れる距離。でも、私もフェイトも、手を伸ばそうとはしない。今がきっと、『その時』なんだろう。
「フェイト」
「……何？」
眉根を寄せながらだけど、敵意はそんなに感じられない。いや、むしろ……勝手な勘違いかもしれないけど、親近感というか、連帯感のようなものを、感じている……？
「どうして、ジュエルシードを集めているの？」
「……」
斧を握る手に力を込め……
「うっ！」
辛そうに、顔をゆがめた。
一歩、歩み寄り、フェイトの手をとる。
「……ひどい」
フェイトの手のひらは、ボロボロだった。深い裂傷がいくつも刻まれ、白い肌は火傷で爛れて……恐らく、私達が駆けつけてくるまで一人でジュエルシードを押さえつけていた所為だ。
「こんな痛い思いをしてまで……何で？」
フェイトは、私の手を振り払うでもなく、しばし迷い……口を、開いた。

「おかーさんが、必要だって言ってるんだ」
「お母さん？　その人に命令されたの？」
私の問いに、こくん、と首を縦に振る。
「おかーさんの望みが、ボクの望みだから……」
その目から、ぼろぼろと涙が流れ出す。
「おかーさんの望みが叶ったら、きっとまた、ボクに笑いかけてくれる！　優しくしてくれる！」
それは、自分に信じ込ませるように。
「おかーさんは、ボクのこと、ちゃんと好きでいてくれるもん！」
残酷な真実から、目を逸らすように。
私達は、よく似ている。
言うことを聞いて『いい子』でいれば、きっと、振り向いてもらえる信じて。
……いつしか、目が見えなくなっていて。
（ああ、そうか……）
ようやく、気づいた。
虚勢を張るような態度が、気に入らなかったのも。けらけらと浮かべる、空虚な笑いが嫌いだったのも。きっと、全部同じ理由。
それが真実なら、ぶつける気持ちは、敵意でいい。
それが本音なら、交わす言葉は、なんでもいい。
本当の気持ちで、とことんぶつかりたい。
……繋がりたい。
私は、フェイトと……この、ひねくれ者な、寂しがり屋と。

「友達に、なりたいんだ」

# 第十一話

フェイトは、経験したことの無い衝撃を受けていた。
「……とも、だち？」
確かめるように。自分の語彙にありその言葉と、照らし合わせる。
「ボクと、ともだち……？」
それは、母からの愛だけを求め、がむしゃらに戦ってきたフェイトにとって、最も縁遠い物であるはずだった。
『どうせ、誰もボクを好きになってくれない』
第一に、諦観があった。
まともに親の愛情を受けられなかったことへの、コンプレックス。
『好きになっても、すぐにボクのことなんて嫌いになる』
第二に、恐怖があった。
中途半端に母がまだ優しかった頃の記憶があるだけに。手のひらを返されることが、怖かった。
……だから、遠ざけた。
最初から敵として接すれば、下手な勘違いなどしないで済むと。敵意をぶつけて痛めつければ、最初から最後まで、嫌われたままで終わると。
なのに、フェイトの前に居る少女は……ありったけの敵意をぶつけ、痛めつけ……明確に、『敵』としてフェイトを認識していた少女は、確かに言った。
『友達になりたい』、と。
「馬鹿じゃ……ないの？」
心のどこかには、それを喜んでいる自分がいる。
「ボクは、キミのことなんて嫌いだ」
でも、出てくる言葉は、憎まれ口。
「うん、私もフェイトが嫌い」
では何故、そんなに穏やかな笑顔で言うのか。
「だったら……友達になんて、なれるわけ無いだろ」

「なれるよ」
ぎゅっと、握られた手から温もりが伝わってくる。
「本当の言葉ををぶつけあって……正直な気持ちを全部伝えあった私達は……きっと、友達になれる」
意味が分からない。嫌いなのに、友達？
「フェイト」
なのはは、フェイトの手を胸元に引き寄せ……もう一度、言った。
「私と、友達になろう」
そして、優しい笑顔を浮かべる。
その笑顔の、なんと眩しいことか。まるで、光を纏っているように。
そして、その光は確かに……フェイトの心に、届いた。
「ボクは……ボクは……」
――誰かを好きになっていいの？
ぐらりと、フェイトを縛り付けていた妄念が、揺らいだ。
◆◆◆◆
――バキンッ！
憤怒の形相でモニターを見ていたプレシアが、デバイスを力任せに机に叩き付けた。
「お人形の、分際で！」
真っ二つになった机が、プレシアが解放した魔力の余波で消し飛ぶ。
「お人形は、私の手の中で踊っていればいいのよ!!」
――ヴォン！
プレシアの脳がフル回転し、複雑極まりない数式を描いていく。
次元跳躍魔法。
プレシアを大魔導師たらしめる、神域の技法である。
――バチバチバチッ……！
「はあああああぁぁぁ……！」
魔法陣が、帯電する。行使される術式は、次元跳躍……攻撃魔法。
「あああああっ!!」
デバイスを、振り下ろす――！

◆・◆　◆　◆

状況を見守っていたアースラ……そのモニターが、画面いっぱいに表示する。

『ＥＭＡＲＧＥＮＣＹ』

それを確認し、原因を探る、それより早く。

――ズガガガガァン!!

アースラが、攻撃を受けた。

「きゃあああっ!?」

船体が、まるで何かに衝突したかのように激しく揺れる。クルーの何人かがシートから放り出され、床を転がった。

「原因は!?」

シートにふんばり、転倒を回避したリンディが声を張り上げる。

「艦載兵器？　それともまさか……質量兵器？」

落ちたメガネを掛けなおした男性クルーは、モニターに表示されたことを読み上げる。

「いえ、極めて強力な、攻撃魔法……え!?　魔法!?」

そう。ここは、次元航行船をもってして。ようやく立ち入ることが出来る、準虚数空間。装置を解さない純粋な魔法は、発動すら出来ない。なら、なぜ攻撃が通ったのか。

リンディは、あらゆる可能性を思考し、一つの結論を得る。

「次元……跳躍魔法」

シン……と、あれだけ喧騒に包まれていたブリッジが、静まり返った。

それは、誰もが知っている事柄だった。

ミッド唯一の大魔導師にして、大科学者。富と名声を手にし……ある日忽然と姿を消した女性の、代名詞。

「あなただったのね」

魔力の固有パターンを解析し、データベースと照合。そして、リンディの予想通り、女性の写真が表示される。彼女の名は。

「プレシア・テスタロッサ！」

◆　◆　◆　◆

何だ、これは……!!
さっきまで快晴だった空が、暗雲蠢く曇天へと変わっていく。
明らかに自然現象ではない。そして、その暗雲には、途方も無い密度の魔力が込められている！
「ユーノ！　アルフ！」
俺一人では、到底防げない。何より……
「おかーさん……？」
フェイトが、茫然自失と空を見上げ、動こうとしない。
「なのは！　フェイトを！」
「あ……うん！」
『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
桜色のドームが、二人を覆う。そこへ更に、俺と、ユーノと、アルフのバリアを展開する。だが、薄い。四人分のバリアを張って尚、あの暗雲に込められた魔力には届かない。
そして、暗雲が一際強く鳴動し、膨大な魔力が解放される！
（間に合えええええええええっ!!）
俺は、フェイトとなのはの上空に身を投げ出した。
――――――――ズガシャアアアアン!!
「……!!」
声も出なかった。出せなかった。そこいらの暴走体なんかとは、桁が違った。体中に火箸を突っ込まれたみたいに、感覚が遠い。そのくせ、痛覚だけは通常の何倍にも鋭敏になっている。
「あ……」
そんな一瞬にして永遠のような地獄の苦痛が、ようやく終わった。目を開けると、何故か視界が赤い。どうやら、眼球内の血管が破裂したらしい。全身も同様に、血が噴出し、焼け焦げている。
「……！　……さん!!」
なのはが、俺を呼んでいる。
なのは、と言おうとして、出てきたのはそんな意味の無い吐息。どうやら、本格的に失神しかけているらしい。
そんなに、焦らなくて大丈夫……どうせ、目が覚めたら、治ってい

るんだから。
——俺は、そういうふうに出来ている……『〇〇』なんだから。
◆・◆　◆　◆
「秀人さん！」
私の腕の中で、秀人さんが目を閉じた。全身は黒焦げ。血が滲んでいない箇所なんて、一つもない。
「秀人！」
ユーノくんが駆け寄ってきて、すぐに痛み止めの魔法を使う。怪我はいつも通り、見る見るうちに塞がっていく。でも……目の前で傷つく姿なんて見たくもない。
「う……」
よほどのダメージだったのに違いない。意識を失っていても、時折苦痛で顔が歪む。
「高町なのは！」
転移魔法の気配と共に、クロノが駆けてくる。そして、血まみれの秀人さんを見て、息を呑んだ。
「エイミィ！　救護班を用意！　嘱託魔導師が重症だ！」
『了解！』
えっと……
（ユーノくん、話すべきかな？）
秀人さんは、もう殆ど無傷。ダメージが抜けたら、すぐ復帰できる。
（いや、いいよ。話しても混乱するだろうし、秀人は、その……）
——自分の身体のこと、あまり好きじゃないから
私は、無言で頷いた。
「そうだ、フェイトは!?」
周囲をぐるりと見回す、が、姿は見えない。
「あの雷撃が収まってすぐ、アルフが転移魔法で……僕は止めたんだけど」
ユーノくんがうな垂れる。
「フェイト、『おかーさん』って言ってた」
母親からの命令で、ジュエルシードを集めていたフェイト。最初は

……というか、今もあまり好きじゃない。でも、ジュエルシード集めに必死だったことは確かだ。
さっきの雷撃が、もしフェイトに直撃していたら……血まみれになっていたのは、フェイトだった。下手をすれば、死んでいた。
そんな攻撃を、明らかにフェイトを巻き込むと分かっていて撃つなんて……！
「許せない……！」
ぎりっと拳を固める。
「なのは、戻ろう」
「……うん」
今は、帰って休もう。
そして、今度こそ……フェイトと友達になるんだ。
◆▪◆　◆　◆
「このッ！　役立たずがァッ!!」
――バチイイィィィンッ!!
「あああああっ!!」
磔にされ、激しく鞭打たれるフェイト。
「あれほどのッ！」
――バチンッ!!
プレシアの振るう鞭が、帯電している。怒気を越え、殺気にも達する剣幕と共に、フェイトの身体を痛めつける。
「あれほどの好機を前にしてェッ!!」
そして、また鞭を振り上げる。
「やめろおぉッ!!」
その鞭を、乱入したアルフが受け止める。狙いを逸れた鞭は、床を抉るに留まった。
「くっ……この、犬畜生が！」
『Ｂａｒｒｅｔｔ』
射撃魔法を行使。だが、それはアルフのシールドに呆気なく弾かれる。プレシアは、自分の身体が予想以上に言うことを聞かない事実に苛立つ。本来の威力であれば、シールドごと貫くはずだった。

「いい加減にしろよ！　お前は、フェイトの母親だろ！」
「母親……？」
プレシアは最初、きょとんとした顔を。そして次の瞬間には、嘲笑を浮かべた。
「ははっ、あはははは……!!　母親！　そう、母親！」
愉快な喜劇をみたかのように、心底可笑しそうに笑う。
「何がおかしい……！　フェイトを離せ！」
アルフが飛び掛かり、フェイトを拘束するバインドを破壊する。それを、特に阻止することはしなかった。
「くっくっく……ああ、可笑しい」
邪悪な笑みと共に、今度は本気で攻撃魔法を放つ。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｌｌｅｔ』
何の変哲も無い、初歩の攻撃魔法。だが単純故に、使用者の力がダイレクトに現れる。大魔導師の称号は、伊達や酔狂で授けられるほど軽くは無い。
――ズバァンッ!!
「あぐっ……!!」
今度こそ、アルフのシールドを粉々に叩き割り、その背中に突き刺さる。
「フェイト……！」
覆いかぶさるように、フェイトの身体をかばうアルフ。その背中に、容赦なく攻撃魔法が叩き込まれる。
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
『Ｂｕｌｌｅｔ』
執拗に。何度も。いたぶる為だけに威力を落とし、じわじわとアルフの魔力値を削っていく。
シールドを破られては再構成し、また破られては再構成し……苦痛

に耐えるアルフの頬に、フェイトが手を添えた。
「駄目だよ、おかーさんは、ボクのために……」
しどろもどろに、希望的観測を口にする。
――ごんっ！
アルフはたまらず、フェイトに頭突きをかます。
「……アルフ？」
半ば呆然と、フェイトは呟く。
「目を覚ませ！　あのババァは、フェイトを殺そうとしたんだ！」
フェイトは、目を伏せる。かつてのフェイトであれば、それを聞こうともしなかっただろう。だが、なのはとの出会いは、少しだが……確実に、フェイトの心に変化をもたらしていた。
そう。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｒｓｔ』
本当に自分を愛している母親が……
「消えなさい」
殺傷設定の魔法を娘に躊躇無く放つことなど、ありえないと気付く位には……！
「アルフッ!!」
高速機動魔法を発動し、アルフと共に間一髪の所で射線上から退避する。
アルフは、残り少ない気力を振り絞り、次元転移魔法を発動する。座標をいちいち指定しているヒマは無い。目の前では、プレシアが再び魔力のチャージを行っている。かつて使用した座標をランダムに指定し……
――ギュンッ！
プレシアの魔法が着弾する寸前に、転移に成功した。
「チッ……まぁいい」
忌々しげに舌打ちしたプレシアは、デバイスを待機させる。
「せいぜい、ジュエルシードの撒き餌になればいいわ」
プレシアは、既にフェイトに大した利用価値を見出してはいなかった。

せいぜい、あの白いバリアジャケットの少女と戦わせて、ジュエルシードを一箇所に集中させて……自分の手で奪えばいい。

――ドサッ

「うっ……」

フェイトは、身体を投げ出されたショックで目を覚ました。

「アルフ……？　どこ……？」

一緒に脱出したはずのアルフの姿が見えない。まさか、転移途中ではぐれてしまったのか。リンクは、復帰するのを忘れていた。今度こそ本当に、一人きりだった。

「おかーさん……」

疑念は、強まっている。

『目を覚ませ！　あのババァは、フェイトを殺そうとしたんだ！』

アルフが言ったとおりだと認める自分もいて。

『○○○○、お誕生日のプレゼントは、何がいい？』

でも、まだ母を信じている自分も居て。

ごちゃごちゃと、頭の中を渦巻く。

「……面倒、くさい」

考えるのは、苦手だ。

フェイトは、まずは現在位置を確認する。四方を壁に覆われているから、恐らくはどこかの庭だろう。民家と、古風な造りの道場があり……

「あれ？」

フェイトにとっては、一度だけ目にした光景だった。

「……ここ、確か」

ガラッ、と縁側の窓が開き……

「……あれ、あんた」

三つ編みの少女……高町美由紀が、顔をのぞかせた。

そして、庭先に横たわるフェイトの、惨い傷を目にした。

「どうしたの、その怪我！」

素足のまま庭に駆け出し、フェイトを抱え上げる。

「お母さん！　恭ちゃん！　ちょっと来て！」
そして、フェイトは奇妙な縁により、再び高町家へと身を寄せることとなった。

◆・◆　◆　◆

「アリサちゃん」
ウェーブした黒髪の少女、月村すずかは、隣に座る金髪の少女……アリサ・バニングスに話しかけた。
「何、すずか」
「マルスね、もう歩けるようになったよ」
「……そう」
マルス。あの、大怪我をした子猫。
「……」
アリサは、難しい顔をして黙り込む。きっと、考えていることは……
「高町さんのこと？」
「うえっ!?　ち、違うわよ！」
図星を言い当てられ、慌てふためくアリサ。
「アリサちゃん、本当はもう気付いてるんじゃない？」
アリサは、また下を向いてしまう。
「あの状況じゃあ、確かに高町さんがやったって考えてもおかしくないけど……」
アリサは、流れる窓の外の風景を見ながら、搾り出すように言った。
「アイツは……そんなことするヤツじゃない」
「そうだよね」
すずかは、トレードマークのヘアバンドを外す。
「ね、憶えてる？」
「……わざと聞いてる？」
「うん☆」
実に清々しい笑顔だった。

「……」
アリサは、げっそりとした顔になる。
「憶えてるわよ」
それは、今から二年前のことだった。
当時のアリサとすずかの関係は、今のように仲の良い友達同士ではなく……いじめっ子と、いじめられっ子だった。
我の強かったアリサと、引っ込み思案だったすずか。相性は、まさに最悪だった。そしてある日、昼休みの屋上で、アリサはすずかのヘアバンドを奪い、いじめていた。
『返して』と追いすがるすずかを面白がり、ヘアバンドを放ったり、高く掲げてみたりと……傍から見れば、ただの子供の悪戯だが、やられる側は堪ったものではない。
そして、とうとうすずかの涙腺が涙でいっぱいになった時……屋上に居合わせていた高町なのはがベンチから腰を上げ……
――ばきっ
アリサの頬を、グーで殴った。
『痛い？　……痛いよね』
そして、尻餅をついたアリサの手からヘアバンドをむしり取る。
『あなたは楽しいのかもしれないけど……やられた子は、今のあなたみたいに、痛い思いをしているんだよ』
諭すように、非難するように言い、すずかにヘアバンドを返して去っていった。
『……っていうか、目の前で胸糞悪い』
『う……』
アリサはようやく、頬の痛みを知覚し……
『うえええええぇぇぇん……！』
号泣した。そもそもがお嬢様育ち。誰かに暴力を振るわれることになど、慣れてはいなかった。おろおろとアリサを泣き止ませるすずかと、泣き続けるアリサ。騒ぎはあっという間に広まり……数日後。高町なのはは、転校していった。
最初は、父親が手を回したのかと思った。だが、聞いてもきょとん

とするばかりで、そんなことをした憶えは無いと言い……それどころか、すずかに対して行っていた娘の所業に、大いに怒った。すずかに謝罪するまでは帰ってくるなとアリサを放り出し、門扉を閉めた程だ。そしてその日が、アリサとすずかが友達になった日になるのだが……どこか、胸にしこりを残す日でもあった。

「謝らないと、ね？」

すずかの言葉に、アリサはうん、と頷き……

「ッ、鮫島！　車止めて！」

――キキイィッ！

優秀な運転手は、すぐさま実行する。

「ど、どうしたの!?」

目を白黒させるすずかを余所に、アリサが車から駆け出す。

そして、アリサが見つけたのは、大きな獣だった。

「それ、犬？」

「……多分」

体毛は、茜色。首の周りには獅子のような鬣があり、一見、犬には見えない。その上、額には粒状の宝石が埋まっているのだ。

「とにかく、運ぼう！　怪我してる！」

そして、運転手の鮫島に抱きかかえられた獣は……アルフは、バニングス邸へと運ばれていった。

# 第十二話

「やめろ……」

夢を見ていた。今現在、自分が夢の中に居ることをはっきりと認識している……いわゆる、明晰夢というやつだ。意識ははっきりとしているのに、身体の自由が利かない。

「やめろ……！」

目の前で展開される光景を、ただ眺めて続けていることしか出来ない。

『痛い……痛いよぉ……おとうさん、おかあさん……』

病室にいる幼い子供。その四肢にはギプスがはめられており、痛々しいことこの上ない。

彼の求める両親は、廊下で醜く言い争いをしていた。

『これで何度目だと思っている！』

『私に言わないでよ！』

『治療費だってタダじゃないんだぞ！』

『だから、私に言わないでって言ってるでしょ!? あの子に聞いてよ！』

苛立ちを隠そうともしない。

だがそれも、仕方が無いのかもしれない。この少年が入院するのは、この年だけで四回目。ここ数年の治療費だけで、新車が買えるほどだ。

最初のうちは、心配もされた。だが、二回目、三回目ともなると、徐々に態度は硬化していき……今では、この少年は両親にとって厄介者以外の何者でもなかった。

『こんなことなら、子供なんて……』

『あなたが欲しいって言ったんじゃない！ そうよ、あんな子供なんて……!』

――××××

「やめろおおおおおおおおっ!!」

――ガシャアアアアン!!
自分の叫び声と、破砕音で目が覚めた。
「……あ?」
腕に僅かな痺れ。目を開けると、真っ白な天井が目に入ってきた。視界が、涙で滲んでいる。くそ……ガキじゃあるまいし。
ところで、今の音は……?
「キミは……僕を殺す気か?」
クロノが、ベッド脇に立っていた。そして、その向こうの壁には、医療機器の残骸が。金属製らしきその側面が、ベッコリと陥没している。
「……悪い、寝ぼけてた」
「高価な機材を……」
ぶつぶつ呟く。
「ツケておいてくれ」
腹筋に力を入れ、身体を起こす。……うん、異常無し。あの凄まじい魔法を喰らった
割には、回復が早くて助かった。
「そのままでいい。少し、話をしよう」
そして、ベッド横の椅子に腰を下ろした。
「話?」
何か話すようなこと、あったっけ?
正直、俺達の間には友情なんてこれっぽっちも無いし、クロノも性格的にそういう馴れ合いはしない。
「君の身体はどうなっているんだ?」
「――――」
……その話か。
「魔法攻撃とはいえ、落雷の直撃だ。事実、君の身体はボロボロだった。第三度の火傷に、血管の破裂と、それに伴う臓器の損傷。普通なら死んでいる」
ああ、確かに痛かった。
１７年の人生で、一番痛かったかもしれない。さっさと気絶できて

いて、本当によかった。
「治癒魔法を使った形跡はあったが、それはあのフェレットもどきが使った痛み止め程度のものだった」
つまり、俺の身体のことを詳しく聞きたいってだけか……
「お前には関係ない」
別に、俺の身体がどうなっていようが……一時的に、仕方なく協力関係を結んでいるだけのこいつらには、関係ない。
「いや、ある」
クロノは、俺の不愉快そうな表情に躊躇うでもなく、踏み込んできた。
「協力関係にある以上、戦闘に関する情報は共有すべきだ」
「……わかったよ」
なら、半分だけ教えるか。戦闘に関する情報なのだから、それで十分の筈だ。
「昔から、傷の治りが異常に早いんだ」
「……明らかにそのレベルを大きく逸脱していると思うんだが」
「理由はわからない。これは本当だ」
そうか、と一拍置く。
「あの筋力は？」
俺が寝ぼけて殴り壊した機材を顎で指す。
「そっちは純粋に、鍛錬の賜物」
……これは、嘘。
「……」
今度こそ訝しげに目を眇めるクロノ。
「秀人さん、いる？」
と、医務室のドアが開き、なのはがユーノを肩に乗せて入ってきた。
「具合どう……って、クロノ？」
「ああ、邪魔している」
「そう」
素っ気無く返し、ぴょんっ、とベッドに飛び乗ってくる。そしてそのまま、べたっと身体をくっつけてきた。口調こそ大人びてはいる

が、こういうところは子供っぽくて可愛い。
「秀人さん、歩けるなら帰ろう。ご飯作ってあげる」
「そうだな。味気ない病院食は勘弁だ」
そうと決まれば。
「よっし、帰るか」
なのはを抱えながら、ベッドを降りる。
「そうだ、二人とも」
と、ユーノが口を開いた。……どうでもいいが、何でまたフェレットの姿なんだ？
「ん？」「何？」
「艦長からの伝言で、『少しだけ病室で待ってて』とのことだよ」
「えー……」
なのはが不満げに口を尖らせる。
「ユーノ、コーヒーか何か、持ってきてくれ」
そこに、クロノが割り込んできた。
「治療室内は水と、君の言う『味気ない病院食』以外の飲食は厳禁だ」
「ちぇっ……」
そこのところは、普通の病院と同じか。
ユーノが給水機からコップに水を汲み、ベッド脇に置く。
そして、味気の無い水を一口飲み、数分。艦長とエイミィが、治療室に入ってきた。
「艦長。エイミィまで……何かあったのか？」
艦長はそれに答えず、まっすぐになのはの前までやってくる。
「なのはさん」
そのただならぬ様子に怯え、一層強く俺にしがみ付く。
「……何ですか」
まさか、今になってジュエルシードを渡せとか、そういう物騒な話じゃないだろうな。
「家庭訪問を行います」
「かてい……」「訪問？」
最初はきょとんとしていたなのはの身体が、ハッキリと強張った。

「……私の家族は、」
ぎゅううっ……と、力が篭る。
「父親は高町士郎。現在入院中。母親・高町桃子、兄・高町恭也、姉・高町美由希は、家業である喫茶店を経営ちゅ――ッ」
――バシャッ！
資料を読み上げていたエイミィの顔面に、コップから放たれた水が直撃した。
「……調べたな」
地の底から響くような、低い声。
ぎろっ、とエイミィを睨みつける。その手には、ぽたぽたと雫を垂らすコップ。
「……ごめん」
しおらしく謝るエイミィだったが、なのはの怒りは収まらない。
「よくも……ッ！　下賤の野次馬がっ！」
今度は、そのコップそのものが投げつけられた。
――パリンッ！
だが、それはクロノによって叩き落とされる。
「落ち着け。　……艦長、まずは説明を」
「……ええ、そうね」
ふぅ……とため息一つ。
「なのはさん、これは未確認の情報ですが……海鳴市の二箇所に、つい最近使われたと思しき転移魔法の形跡が、二箇所あります」
「転移魔法なんて、アースラからでもしょっちゅう使ってるだろ」
なのはを落ち着かせるために抱き寄せ、頭を撫でる。
「ええ、そうね。でも、その魔力のパターンが……アルフと呼ばれていた、あの使い魔の物と一致しているの」
アルフが……？　今までは神経質に形跡を消していたのに、なぜ今になって。
「一箇所は、ここ」
ぱっと表示される。以前訪れた月村邸に勝るとも劣らない豪邸。
「そして、もう一箇所が……」

表示されたのは、先の豪邸には遥かに及ばないが、それなりに広い家。一度だけ、行った事がある。そう、確かここは……
「高町の、家……」
なのはが、辛そうに顔を背ける。楽しい思い出なんて一つもない。ここは、なのはにとって安息の場所などではなかった。ただ無為に拘束され続ける、薄暗い牢獄だった。
「結界を張ればいいじゃないですか」
隔離結界を細かく設定して、フェイトだけを残す事だってできるはずだ。
わざわざなのはの血縁者と顔を合わせる意味が分からない。
「なのはさん、ご家族のこと……」
『家族』という言葉に過剰に反応し、癇癪を起こして暴れだす。
「家族じゃない！　あんな奴ら……！」
腕の中で暴れるなのはをどうにか押さえる。放したら、艦長に掴みかかっていきそうな勢いだ。
「よしよし……ほら、落ち着けって」
ふー、ふー、と荒い息をつくなのはの頭を、しばらくの間、ゆっくりと撫でる。
艦長やクロノを目で牽制し、なのはを刺激しないように。
「なのは、行ってみないか？」
びくっとなのはが弾かれたように顔を上げる。
「あの馬鹿共も、そろそろ反省した頃だろうし……」
というか、あの魔法も、そろそろ切れる頃合いだ。タイミングとしてはベストだろう。
「でも……でも！」
自分がいなくなっても、あいつらが変わっていなかったら……いつもと変わらず、家にいなかったら。なのはの気持ちなんて、ちっとも考えていないということになってしまう。
「大丈夫。俺も、ユーノも付いて行く」
過剰な嫌悪は、『愛されたかった』という願望の裏返し。なのはは元々、愛情深い女の子なのだから。

「安心していい。もし、のうのうと商売なんてしていやがったら……」
――ヒュンッ
空中に正拳突きを放つ。
「俺が、あの店を粉々にブッ壊してやるよ」
クロノが、ぎょっとした顔で俺を見た。
「……秀人さんが、そう言うなら」
ポケットから、ピンク色の携帯電話を取り出す。
「もう一人、呼んでいい？」
「ああ、もちろん」
そして、携帯電話のアドレス帳を開き……呼び出した。

そして、翌日の土曜日。
「高町さん、吾妻さん、お久しぶりね」
なのはの担任が、パリッとしたスーツ姿で待ち合わせ場所にやってきた。
「あの、俺のことは……」
今、はっきりと『吾妻』と呼んだ。ってことは、もうバレているのか。
「ええ、高町さんから聞いています」
微笑……というより、苦笑する先生。大人なのに、少し子供っぽくて、アンバランスな魅力が……なのは痛い痛い足を踏むな脇腹をつねるな。
「先生、来てくれてありがとう」
にこっと笑い、素直に礼を言うなのはが少し新鮮だ。この先生には、かなり気を許しているみたいだ。何があったかは知らないが……なのはに親しい人が増えるなら、素直に嬉しい。
「そちらの方達は？」
そして、俺の後ろに控えていた二人……リンディとクロノに話題を移す。
「初めまして。なのはさんと親しくして頂いております、リンディ・ハラオウンです」

「息子の、クロノ・ハラオウンです」
設定的には、偶然知り合った留学生のクロノと、その母親ということになっている。無茶苦茶だ。
「息子がお世話になっているなのはさんのご家族に、是非ご挨拶をと思いまして」
よくもまぁスラスラと嘘が言えるものだ。
「ええと、その……」
先生が、ちらちらとなのはを見やる。この反応を見るに、なのはの事情を知っているのだろう。なのはは、先生に強張った笑みを返した。
「……だから、彼らの経営する喫茶店に行こうという話になりました」
なのはが、努めて他人行儀に言う。
そして、大通りに差し掛かり、例の店の前まで来たのだが……
「「臨時休業……」」
俺、なのは、先生の声がハモった。
「高町さん」
先生が、なのはの肩を抱く。
「……」
なのはは無表情で、店を眺めていた。
「思ったよりは、マトモな神経してたんだな」
――バシュッ……
手元に集中させていた魔力を霧散させた。
「本気だったのか……」
クロノが呆れたように言う。当然だろ。
「ここ、です」
そして、牛歩のように歩き、高町の家までやってきた。電気は点いていない。
昼間だからか……もしくは、またどこかへ行っているのか。呼び鈴を鳴らせば、分かる。
「……」
なのはは、かたかたと震える人差し指を呼び鈴に伸ばし……

「……！」
反射的に、手を引っ込めた。
やっぱり、怖いか。
「なのは……」
ユーノが声を掛けるものの、なのはは俯き、首を横に振っている。
「高町さん」
「先生……？」
先生が、なのはの手をぎゅっと握る。
「もう一度だけ……信じてみましょう」
俺を見て、ユーノを見て……
「……うん」
弱弱しく、だが確かに、頷いた。
先生が、なのはの手を握ったまま呼び鈴まで持っていき……
――ピン……ポ～ン
一緒に、押した。
――一秒。二秒。三秒。四秒。五秒……
反応、無しか……
「ふえぇ……」
なのはの目尻に、じわりと涙が浮かび……
（ブッ壊すか）
俺が、ディバインバスターのチャージを始め……
「させないぞ」
クロノが俺を拘束しようとデバイスに手を伸ばした、その時。
「はい、どちらさま……？」
ドアから、なのはソックリの女が顔を出した。
「あ……う……」
なのはが何かを言おうとしてパクパクと口を開き、結局何も言えずに黙り込んでしまう。
そして、なのはソックリの女は、俺を見て顔を強張らせ……その腰にしっかりとしがみつく、なのはを見て。
「なのは！」

素足のまま、駆け寄って来た。
「……」
なのはが片手を伸ばし、すぐに引っ込めてしまう。
「ほら、行って来い」
俺は、なのはの背中を、軽く押し出した。
「……あ」
たたらを踏み、不安げに俺を見上げる。
「……」
そして、立ち尽くすなのはを……なのはの母親が、しっかりと抱きしめた。
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
泣きじゃくり、なのはに縋りつく。なのはは、そんな彼女を振り払うでも無く、ただ困惑した表情を浮かべ……両腕を、回した。
「なのは!?」「……!」
そして、聞きつけたのか、残る二人も顔を覗かせた。

「……」
こち、こち、と。時計の秒針の音。
「ぐすっ……ぐすっ」
なのはの母親……桃子の鼻をすする音。
その二つだけが、リビングに聞こえる。
今現在、俺、先生、クロノ、艦長の四人は、ソファに横並びに座っていた。
目の前には、なのはの兄、恭也と、姉の美由希。ユーノは、美由希の腕の中だ。
なのははといえば……
『秀人さぁん……何とかしてよー……』
ちょこん、と、桃子の膝の上に収まっていた。顔が真っ赤だ。もぞもぞと、それとなく下りようとすると、桃子はぎゅっと腕に力を入れ、抱き寄せる。そんなことを続けていた。
なのはも、口では嫌がっているが、本心はまんざらでもない……と

いうか多分、超喜んでいる。というわけで、しばらく放っておこう。
『秀人、やっぱり、いるみたいだ』
敷地内をサーチしていたユーノが、そう報告する。
『フェイトか？　それとも、アルフか？』
『多分、フェイトで間違いない』
「……で、お前ら」
今は、桃子とは話が出来る状況ではないし、恭也と美由希に目をやる。
「はい……」
美由希が、おずおずと返事をした。
「もう一人、この家にいるはずだ。俺達は、そいつに会いに来た」
ソファから立ち上がり、ユーノを床に下ろす。
「こっち、です」
なのは……は、後でいいや。今は、思う存分母親とくっつかせてやろう。
艦長とクロノは、リビングにいてもらうことにした。ぞろぞろと人数が来たら、怯えて逃げ出すかもしれないし。
そして、フェイトがいる部屋まで来た。ドアプレートには、『なのは』と書かれている。
「入るぞ」
ドアを開ける。オレンジ色の壁紙と、白を基調とした家具。それ以外は何も無い、殺風景な部屋だった。そして、ベッドの上には……
「……やっぱり、キミ達か」
薄桃色のパジャマを着た、フェイトが横たわっていた。
手に、足に……捲れたパジャマの裾から覗く腹部に、真っ白な包帯が巻かれている。
「おい……その怪我、何だ」
あの時、雷撃のダメージは受けていないはずだ。なのに何故、フェイトはこんなにボロボロになっているんだ。
「くふふ……おかーさんに、怒られちゃった」
自嘲し、空虚に笑う。

「いっ……た」
傷に障ったのか、顔をしかめる。
「ユーノ」
……とにかく、治療だ。
『この二人、追い出すから治療を』
『多分もう、魔法についてはある程度知ってると思う』
そして、レイジングハートの映像記録を再生する。そこには、あの日の晩……なのはが、攻撃魔法でこいつらをぶっ飛ばす姿が映っていた。
「なんということを……！」
一般人相手に魔法を使うなんて！
『お前が言うなバカマスター』
レイジングハートさん、ちょっと俺に厳しすぎないですかね。

「今から見ることは、他言無用だ。いいな」
二人は、静かに頷いた。
「それじゃ、はじめるね」
そして、ユーノが人間の姿に戻る。
「「……」」
二人は、あんぐりと口を開けて呆けている。
それを無視し、ユーノが魔法陣を展開。そして、発動。
緑色の光のドームが、フェイトの横たわるベッドを覆った。
「この中にいれば、外傷は一日くらいで治るから」
「……」
何を言うでも無く、もそもそと身体を起こした。
とんとん、と階段を軽い足音が上ってくる。
「……お邪魔します」
なのはだった。妙に緊張した面持ちで、部屋に入ってくる。
別に、フェイト相手に緊張するようなことも無いだろうに……と、そこまで考え、鈍い俺にも思い至った。部屋には、恭也と美由希がいる。まだまだ溝は深い。

「美由希、戻るぞ」「そうだね」
二人は、ふっと苦笑し、頷きあった。
なのはの両肩を、それぞれぽんっと軽く叩き、部屋から出て行く。
残されたのは、アルフを除くいつものメンツ。
「フェイト」
「……なに？」
フェイトとなのはが、見詰め合う。
「私は、ジュエルシードを譲れない」
「これは、ユーノくんのものだし……何より、」
なのはは、フェイトの手を取る。
「フェイトをこんな目に遭わせるような奴には、渡せない」
「……でも、ボクは」
フェイトは、まだ納得できないようだ。
「ボクは……おかーさんの願いを、叶えてあげたい」
どんなに酷い仕打ちを受けたとしても、フェイトにとってはただ一人の母親。
「うん、わかってる」
だが、なのはとてそんなこと百も承知している。
だから。
「だから、勝負しよう」
「え？」
フェイトが、なのはの顔を見返す。
「傷が治って、魔力と体力も満タンにして……そうしたら、ジュエルシードを全部賭けて、勝負しよう」
「でも、ボクのは……全部おかーさんに渡しちゃった」
「それじゃあ、私が勝ったら、私のお願いを一つ聞いて」
「……でも」
「ふぅん、負けるのが怖いんだ？」
なのはが、あからさまな挑発をする。
途端、しおらしかったフェイトの瞳に、炎が灯った。
「誰が！　ボクがキミに負けるなんて、万に一つもあるもんか！」

「じゃあ、いいよね？　私が勝ったら、何でもお願い聞いてもらうよ」
「いいよ！　ボクが負けたら、何でも聞いてやるよ！」
がばっとベッドから起き上がり、なのはと額をぶつけ合うような距離でにらみ合う。
――きゅう～……
と、フェイトの腹が、可愛らしい音を鳴らした。
「あう」
真っ赤になり、腹を押さえる。
「「ぷっ……」」
思わず吹き出してしまった俺達を、フェイトが睨む。
「……おなか空いたんだもん」
ふて腐れるように言い、そっぽを向く。
と、ドアがコンコン、とノックされた。そして、美由希が顔を覗かせる。
「みんな、ご飯出来たよ」
「丁度よかったな。んじゃ、行くぞ」
そして、フェイトを抱え上げる。
「あああああっ!?」
なのはが、愕然とフェイトを見上げる。
「ど……どうした？」
いきなりの大声に驚き、落としそうになってしまった。
「……うううう」
何故か涙目だ。
「ふ～ん……」
フェイトが意地悪く笑い、俺の首に両腕を回し、より一層密着する。
「くっ……！　こいつ！」
「くふふふふっ。どうかしたのー？」
……何か知らんが、水面下では何かの応酬が続いているらしかった。何だろうな、一体。
「ユーノ、魔法陣から離れても効果は続くか？」
「んー、ちょっと待って」

再び詠唱し、魔法陣から一筋のラインがフェイトに繋がった。
「とりあえず、この家の敷地はカバーしたから大丈夫」
さっすが。こういう器用な真似は、俺もなのはも出来ない。俺達が習得しているのは、全て戦闘絡みの魔法だけだ。こういったサポート系の魔法も、習っておいて損は無いかもな……適性の無い射出系を無理して覚えるより、満遍なく覚えた方がいいかもしれない。
『秀人、それはお勧めしません』
と、レイジングハートが割り込んできた。
「え、何で？　満遍なく色々と使えたほうが便利そうだけど」
『まずは、あなたの最も得意な分野を見つけ、徹底的に鍛えなければなりません』
「……俺、近接型じゃなかったっけ？」
殴って蹴って、しか能が無いぞ。操作の利かない砲撃はゼロ距離でしか使えないし、射撃もばら撒くことしかできない。
『いいえ、違います。確かに、そういう一面もあるでしょう。ですが、あなたの魔力運用は、あまりにも繊細に行われている』
「いや、それは前に聞いたけどさ。殆ど無意識にやってるんだよ」
『それが『資質』というものです』
俺の魔力制御とやらが、もう少し雑であれば、レイジングハートも迷うことなく俺を近接型として鍛えていたらしい。
『資質を無視しての成長は、いずれ致命的な歪みを生じさせます』
なのはには、砲撃を主軸に据えた今の戦い方があるように、俺にもあるのだろう。今はまだ分からないが、それを見つけるためには……
「とにかく、場数をこなす必要がある」
『そのとおりです』
そうか。それじゃあ、今度アースラ武装隊の連中かクロノあたりと模擬戦でもしてみるかな。
俺はそんなことを考えながら、フェイトを抱え、なのはの手を引きながら、食欲をそそる匂いが漂うリビングへと下りていった。

# 第十三話

なのはが、フェイトと勝負の約束を取り決めていた頃、リビングにて。

「お母様、よろしいでしょうか？」

なのはの担任教師、富山咲が、桃子に硬い声をかけた。

「はい……なんでしょう」

咲は、張り詰めた表情で言う。

「あなたは、本当に申し訳ないと思っているのですか？」

そこには、押し殺されてはいるが……確かな、怒りがあった。

「たか……なのはさん、は、とても優しい子です。今、母親であるあなたに、涙ながらに謝られれば、今までのネグレクトを許すでしょう」

育児放棄、という言葉に、びくっと肩を震わせる。だが、それは事実だ。

たった九歳の子供を、最も親が恋しい年頃の子供を、しっかりした子だからと放ったらかし、孤独に過ごさせたその罪は、重い。

「そして、許されたあなたは、あなた方は……また、繰り返すのではないですか？」

『その場凌ぎで許してもらって、また繰り返すのか！　あの暗い家に、なのはを一人ぼっちで取り残すのか！』

奇しくもそれは、あの日の晩、秀人が言い捨てていった言葉と同じだった。

「そんなっ……私は、これからは、ちゃんとなのはの傍にいてあげます！　もう、放ったらかしになんかしません！」

身を乗り出し、全身で否定する桃子。

「そうしないという保障は、どこにもありません」

だが咲は、それを切り捨てた。

そして、滔々と語り出す。

「知っていますか？　なのはさんは、教室でも一人ぼっちだったんですよ」

この三ヶ月間、なのはの担任になってから、彼女を見ていた。

「自分から壁を作って、誰とも関わりを持とうとせず……ずっと、ずっと一人だったんですよ」
いつも一人で、本を読んでいた。
「私でも読まないような、活字の本を読んで……それを盾にして、誰からも話しかけられないようにして」
受け持つ生徒の、1、2年次のことについては、以前の担任教師から聞いていた。そして、その誰もが……ある生徒について、言及していた。
『成績優秀だが、何故か早退が多い』
『家に電話をしたが、誰も取り次がない』
『誰かと一緒にいる場面を見たことが無い』
そして、始業式の日。咲の前に現れた彼女……高町なのはは、咲が危惧した通りの少女だった。
「でも、なのはさんは変わりました」
あの授業参観の日、なのはが、葉山健太と八代望という二人と雑談に興じている姿を見て……そして、着慣れていなさそうなスーツ姿の少年に見せた、心からの笑顔を見て、ようやく安心した。
「吾妻さんのおかげです」
一目で、信用に足る少年だと分かった。
「吾妻さんが、血のつながりも無いなのはさんのために、何をしてあげたのか、ご存知ですか？」
それは、なのはとようやく心を通わせたあの日、話してくれたことだ。
話をして、暖かい食事を振舞ってやり、一緒に眠った……ただ、それだけのことだ。その程度のことを、なのはは、本当に嬉しそうに話してくれた。だが、それをするべきだった桃子達は、その程度のことすらしてやらなかった。
「知らないんですか？」
びくっ、と桃子が身を縮こまらせる。
「知らないでしょうね」
咲は、務めて無感情に、言葉のナイフを突き刺す。

「知ろうとしなかったんですから」
咲も、なのはと同じだった故に。『放っておかれた』子供だったが故に……許すことなど、出来るはずも無かった。
「う、うぅ……！」
桃子の目から、大粒の涙が零れる。
「……泣けば、許されるとでもっ」
「はい、そこまで」
「むぐっ!?」
さりげなく距離を詰めていたリンディが、咲の口を塞いだ。
「もう……言い過ぎですよ、先生」
そして、やんわりとそソファに押さえつけた。
少しして、桃子が事情を説明し出した。
「あの店は、私達家族の、夢だったんです」
「！　もがっ！」
咲の顔が、また怒りに染まり……またしてもリンディに押さえ込まれた。
だが、その後に続いた言葉は、咲にとって、全くの予想外だった。
「夫が入院する前は、幼稚園帰りのなのはを、よく店に連れてきていました」
「……え？」
咲が、呆けた声を出す。
最初から、なのはを放ったらかしにしていたわけではなかった……？
「客の入りがまばらで、誰か一人は、必ず一緒にいてあげることができていたんです」
可愛い末っ子が店にやってくるだけで、疲れが取れる思いだった。
「小さかったなのはが、『ケーキ売れたね！』と、『よかったね！』と、喜んでくれるのが嬉しくて……私達は、がむしゃらに頑張りました」
今は人気の翠屋とて、最初から人気店だったわけではない。オープンしてすぐの頃は、赤字が当たり前だった。それが、口コミで客が増えていき、徐々に、徐々に軌道に乗り始めた頃……あの、事故が起こっ

た。
「夫が入院し、店が忙しくなり……とても、小さいなのはを店に置いておける状況では無かったんです」
その結果がどうであれ……きっかけは、なのはの喜ぶ顔が見たい、ただそれだけだった。
「……こんなはずじゃ、なかったんです」
咲は、毒気を抜かれたかのように黙り込む。
「私はただ、なのはに喜んで貰えれば、それで良かったのに……」
いつの間にか、目的と手段が入れ替わってしまった。
「なのはが、自分で料理を作れるようになって……理由も考えずに、『ああ、器用な子だなぁ』なんて暢気に感じて……馬鹿ですよね、私」
きっとなのはは、家族の団欒を取り戻したかったのだろう。
母親が忙しくて料理を作れないのなら、自分が作ればいい。そう考え、実行した。だがそれは、家族をより食卓から遠ざける結果になってしまった。
もっと美味しければ。もっと品数を増やせば。もっと早く作れれば。もっと……
そうして、不必要なまでになのはが料理の腕を上げ、桃子たちがその真意に気がつかなかった結果が、今の状況だった。
「家族皆でご飯が食べたいって、ちゃんとＳＯＳを出していたのに……」
自分たちはなのはに甘え、食事を一緒に摂らないどころか、顔を合わせないことすら、『普通』になっていった。
「……今からでも、間に合うんじゃありませんか？」
自責に沈んでいく桃子を、リンディが引っ張りあげた。
「え……？」
顔を上げる桃子に、リンディが微笑みかける。
「そろそろ、お昼ですし……なのはさんに、ご飯を作ってあげませんか？」
その言葉に、ハッとする。
「きっと……いえ、絶対、喜んでくれますよ」

「は、はい……！」
そして、どこか嬉しそうに台所へ走っていった。
「……」
ぶすっとした顔で、ソファに座る咲。どうにも、納得できていないようだ。俯き、手をもぞもぞと動かしている。
「先生」
と、いきなりリンディの顔がどアップで視界を埋めた。
「ひゃっ！」
飛び上がり驚く咲に、マイペースに話しかける。
「先生、名前は何と仰るの？」
「富山、咲ですけど……」
「それじゃあ、咲ちゃん。桃子さんをお手伝いしましょう」
ぽむぽむ、と咲の頭を撫でるリンディ。咲はその手を、真っ赤になって払いのける。
「こ、子ども扱いしないで下さい！」
「あら、ごめんなさいね」
子持ちのリンディからしてみれば、大学を出たばかりの咲など、子供も同然だ。それに、咲はどうしても放っておけない雰囲気が……具体的には、無理して背伸びをしているような、肩肘を張っているような印象を受ける。
借り物のエプロンを着け、台所に並ぶリンディと咲。
「咲ちゃん、お料理のレパートリーは？」
「家庭料理なら、一通り」
一見、手先が不器用そうだが、料理を始めとした家事は得意だった。
「すごいわね。誰に教わったの？」
全て、自分ひとりで生活するしかなかったから。
「……別に、誰だっていいじゃないですか」
ぷいっとそっぽを向いてしまう。その態度で、リンディは勘付いた。
先ほど、桃子に対して過剰なまでに怒りを露にしたのも、生徒として以上になのはを気にかけているのも、恐らく……

「それじゃあ、一緒に作りましょう」
「何で私が……」
「なのはさん、喜ぶわよ」
「……わかりました」
なのはに弱い咲だった。
とんとん、とまな板を包丁が叩く音。しゅるしゅる、とじゃがいもの皮が剥かれる音。ことこと、と鍋の煮える音。
この家では、随分と久しく聞こえなかった音をＢＧＭに、三人が料理を続ける。なにせ、人数が人数だ。作りすぎるということは無い。マカロニサラダ、スパゲッティミートソース、シチュー、肉じゃが、南蛮揚げ、フライドポテト、ちらし寿司が、続々と出来上がっていく。
慣れた手つきで大根を桂剥きにする咲に、同じくキャベツを千切りにするリンディが話しかける。
「私、息子はいるけど娘はいないの」
とはいえ、それもいつまでかは分からない。近い将来、クロノの相棒であるエイミィが、きっと……
「夢だったのよ。女の子と一緒に、お台所に立つの」
ぴくっ、と肩を震わせる咲。
「ありがとうね、咲ちゃん。夢が叶ったわ」
しばらく動きを止めた咲は、唐突にタマネギをみじん切りにし始める。ざくざくと。皮ごと。そして、目元を拭う。
「……タマネギが目に沁みました」
「そう？　大変ねぇ」
ざっしゅざっしゅと、親の敵のようにタマネギを刻む。一体何に使うのかサッパリ不明なみじん切りの山が出来上がっていく。
「ええ、タマネギのせいなんですからね……！　勘違いしないでくださいよ！」
咲は、どこまでも強情だった。
◆▪◆　◆　◆
食事が終わって。
「……」「……」「……」

何故か、私と、母さんと、姉さんの三人は、客間にいた。
秀人さんのところに行こうかと思っていたところを、無言で連れてこられた。何だろうか……？　まさか、今になって攻撃魔法をぶっ放したことを怒るのだろうか。
「なのは」
「……何？」
姉さんが、後ろ手に持っていた何かを、取り出した。
「……リボン？」
それは、白いリボンだった。ただ白いのではなく、白地に、同色の糸で刺繍が施されていて、かなり凝った造りになっている。
「私たちが作ったの」
そして、母さんが私を手招きする。
「……」
おっかなびっくり、膝で歩いていくと、くるりと体の向きを反転させられた。
髪の毛を持ち上げられる感触。
「できたよ」
手鏡を差し出され、受け取る。ポニーテイルになっていた。いつも面倒で、ストレート以外の髪型にするなんて久しぶりだ。
「……そういえば、昔はよく髪の毛、やってもらってたっけ」
ぼそりと、何の気なしに呟いた。私がまだ幼稚園に通っていた頃、毎朝のように姉さんとおそろいの三つ編みや、ツインテールに結んでもらっていた。
あ、やばっ！
母さんと姉さんの顔が、もそもそと暗くなっていく。
――ぎゅうっ
母さんと姉さんが、私に抱きついてきた。
「ごめんね、なのは……ごめんね……！」
「なのは。本当に、本当に……ごめんなさい」
「別に、責めてるわけじゃないよ」
まだ許せないのは確かだけど。

今でも、思い出すと腹が立つ。
でも……私の無意識では、もう心の整理がつき始めているのだろう。腹が立つとは言っても、激怒ではなく、ちょっとむかつく、くらいのレベル。
そのくらいなら……よくある仲違いくらいなら、いつかきっと、許せる日が来るだろう。
どんなに否定しようと、私たちは……家族、なんだろうから。
「それでも、謝りたくて……！」
はぁ……もう、姉さんってば、鼻水垂れてるよ。
「うっぷ……」
ティッシュを取り、姉さんの顔に押し付ける。
ほんと、どっちが年上だか……
「別に、無理して私に構おうとしなくてもいいよ」
いろいろと、思い出したことがある。
まだ、父さんが健在だった頃。私は、よく翠屋に連れて行ってもらっていた。今思い出せば、まだまだ繁盛していたとは言えなかった頃の話だ。
忙しそうに働く家族たちを眺めながら、いつの間にか眠りこけ、父に背負われて帰ったこともあった。
試作品のケーキを、母さんにこっそり食べさせてもらったこともあった。
姉さんに、レジ打ちの真似事をさせてもらったこともあった。
兄さんと一緒に皿洗いをしたこともあった。
ただ、そのバランスが崩れてしまっただけ。
きっと母さんたちは、守りたかったのだろう。いつか目を覚ます父さんが、安心して戻ってこられるように。
「納得は、まだできないけど……理解はしたから」
不満はある。だけど、母さんたちにだって事情があるんだ。それに……私には、秀人さんとユーノくん、それにレイジングハートがいる。
寂しさを感じる必要なんて、これっぽっちも無いんだから。
それでも、母さんと姉さんは負い目を感じているらしい。

「何か、してほしいことは無い？」
と、そんなことを聞いてきた。
ここで、『店を閉めてずっと一緒にいて』とかわがままを言うこともできるけど……今は、そんなことより大事なことがある。
「お願いは、二つ」
順々に二人の顔を見ながら、言う。
「私は今、秀人さんと一緒に暮らしてるの」
もう、今となってはあのアパートの一室が私の居場所だ。
「だから、こっちに帰ってくることは、殆ど無い」
秀人さん達と一緒に居たいし。
「まず、それを許して」
家出ではなく、ちゃんと許可をもらっておかなければ。これは、私なりのケジメのようなものだ。
「二つ目。
しばらく、フェイトをこの家に置いてやって」
拠点に戻らせるのは危険すぎる。いつまた、フェイトの母親がちょっかいを出してくるかも分からない。それに、そこにはクロノたちが立ち入り調査を始めるだろうから、とても前と同じように暮らせるとは思えない。
その点、ここなら安心だ。いつでもすぐに駆けつけて来られる場所にあって、部屋も余っている。
何より、アルフが行方不明らしい。どっからどう見ても生活能力皆無のあの子には、世話係が必要だ。だからといってアースラで預かると、フェイトが緊張してストレスを感じてしまうから、多少なりとも落ち着ける環境で……って、まるで猫じゃないか。
母さんと姉さんは、少し悩み……
「わかった、わ」
母さんは名残惜しそうに。
「フェイトのことは任せて！」
姉さんはやる気満々に。
しっかりと、頷いた。

◆◆◆◆◆

その夜。俺達は、高町の家に泊まっていくよう奨められた。まぁ、メインはなのはで、他の連中はおまけなんだろうけど。

縁側に腰を下ろし、二人で横に並ぶ。

「食べ過ぎちゃった」

少し膨れたお腹を擦りながら、なのはが照れくさそうに笑った。確かに、割と少食のなのはにしてみれば、かなり食べた。久しぶりに口にする、母親の料理だ。そりゃあ、無理してでも味わいたいに決まっている。リスのように頬張るフェイトに負けじと、ハムスターのように口に詰め込み、『行儀が悪い』と二人そろって先生に怒られていた。

今は、桃子さん、美由紀、先生の三人が、大量の洗い物と格闘している筈だ。一体、何皿平らげたやら……

「ちょっと、お腹が重いかも」

頭を撫でてやると、じゃれるように頭を振った。

「似合うよ、それ」

少しだけ伸び、ギリギリ背中までかかっていたストレートの髪の毛は、白いリボンでポニーテイルに結ばれていた。

「ありがと」

このリボンは、美由紀と桃子が用意し、結んであげたものらしい。ただのプレゼント以上の嬉しさがあるに違いなかった。

フェイトは、元なのはの自室にて、事情聴取を受けている。ユーノに監視を頼んでおいたものの、完全に遮断されているせいで念話も通じない。誘導尋問のようなことが行われていなければいいが……

「吾妻」

と、引き戸が開き、恭也が出てきた。

「何だ？」

「少し、いいか」

そして、ちょいちょい、と離れの道場を指差す。

「悪い、ちょっと借りていく」

そして、すれ違いざま……ぽん、となのはの頭を撫でていった。

「……ああ、うん。いってらっしゃい」

なのはは頭を擦り、ほけー……っと俺たちを見送った。

恭也が扉をしっかりと閉め、同情の中央に正座した。何となく、その向かいに座る。

「で、何の話だ？」

多分、他には聞かれたくない話だろう。

「吾妻、」「秀人でいい」

「秀人。俺は……俺たちは、何をしていたんだろうな」

悔恨を口に出す。

「父さんの店を潰さないように……目を覚ましたとき、家族皆でちゃんと迎えてやれるように、頑張っていたつもりだった。新しいメニューやレシピを夜なべして考えて、どれだけの値段で出すかを吟味して……」

そこで、ふっと自虐的に笑う。

「確かに、店は繁盛したよ。あの通りで、一番だと胸を張れる」

いくら一等地に店を構えているとはいっても、店の質が良くなければ、繁盛はしない。だから、きっとこいつらは本当に努力したのだろう。

――実の妹を、おざなりにするまでに。

「その影で、大事な末の妹を泣かせていたなんて、な」

確かに、とんだお笑い草だ。目的と手段の逆転。家族皆でいられる場所を守るために、家族そのものを蔑ろにしていた、なんて。

「俺は、どうすればいい。どうすれば、償える」

そんなもん、自分で考えろ……と言いたいが。

「……週に一回だ」

なのはのためだ。

「定休日でも何でもいい。週に一回、必ずなのはと一緒に食事をしろ」

家族と一緒に食事がしたい。そう言っていたなのはの願いを、叶えてやろう。

「……感謝する」

そして、恭也は深々と俺に頭を下げた。

約束、ちゃんと守れよ？
◆・◆　◆　◆
秀人さんを見送って、少し経った。
「……」
兄さんに頭を撫でられた。あの日の晩は嫌だったのに……今は、そんなに嫌じゃない。
「やっぱり私、甘いのかなぁ……」
『それがあなたの美徳です』
レイジングハートが、すかさず返事をくれた。
「でも、良かった」
何だかんだで、高町家の面々と和解ができた。リンディさんがきっかけをくれ、秀人さんが背中を押してくれたから、実現できた。
「あー……リンディさんにも、お礼しないと」
満月を見上げる。まん丸なシルエットに、人影が重なり……とさっ、と軽い音を立てて、私の目の前に着地した。
「普通に降りてきなよ」
「そんなの、ボクの勝手だろ」
フェイトだった。ユーノくんのお陰で、かなり回復したらしい。
ふてぶてしく腕を組み、呆れる私を見下ろしている。
とんとん、と自分の隣を叩き、フェイトを促す。フェイトはすとん、と素直に座った。
「日取り、決まったよ」
私たちの、勝負。
アースラ監修の、結界内の仮想空間。そこで、決着を着けるんだ。今度こそ、誰の邪魔も入らない。
「いつ？」
「三日後、だって。それまでに、体調を整えておけってさ」
怪我の方は、ユーノくんがそれまでに何とかできるそうだ。だから後は、よく食べて、よく眠って、体力と魔力を回復させるだけだ。
「負けないよ」
私のためにも。そして、フェイトのためにも。

「ボクだって」
そして、こつん、と拳と拳を軽くぶつけ合った。

# 第十四話

それは、ほんの小さな不注意だった。

三歳のある日、俺はいつものように公園でボール遊びをしていて、壁にバウンドしたボールが道路に飛び出し、それを追いかけ……トラックに跳ね飛ばされた。

まぁ、幸いにも死ぬことは無かったんだけど。

救急車に運ばれ、病院に担ぎ込まれ、緊急手術を受け……何ヶ月かして、ようやく退院できた。

頭を打って背骨を折って腕や脚が変な方向に曲がって、何の後遺症も無いんだから、本当に運が良かった……と思っていた。

退院して数日。

俺は、まだ馴染まないベッドで身体を起こし、手すりを掴んだ。

――ゴギュッ……

そんな音を立てて、それなりに頑丈な材質だったベッドの手すり、抉り取られていた。丁度……俺の手の大きさに。

意味が分からず、ただそれを眺めること数瞬。

――ビギィッ……!!

『あ、あああああああ!!』

理解が追いつくより早く、自分の腕から、味わったことが無い（あの事故の時は、痛みを感じるより早く意識が飛んでいた）レベルの痛みが襲ってきて、俺は叫んだ。

『秀人、どうしたの!?』

すぐに母親が部屋に飛んできた。そして、俺を……正確には、俺の腕を見て悲鳴を上げた。

『どうしたの、その腕!?』

『う、で……?』

ずきずきと激痛を発し続ける腕。視界に入る自分の腕が、ありえない方向にねじくれてしまっていた。

『痛いよ……痛いよぉ……!』

幼かった俺は、ただ母親に助けを求めるしか出来なかった。

『あなた！　秀人が！　あなた！』
そして、すぐさま救急車の乗せられた。
その、車中にて。
『ううっ……』
いまだにずきずきと痛む腕。痛くて、いつまで経っても収まらなくて。段々と、腹が立ってきて……
『うあああああああっ!!』
癇癪を起こし、無茶苦茶に身体を動かした。
『大丈夫だから、落ちつい……げっ！』
――まず、一人が飛んだ。
狭い車内を、救急隊員の男性がゴムボールのようにバウンドする。
――次に、モニターのような機材がひしゃげた。
散乱したガラス片金属片が、撒き散らされる。
『ひで、と……？』
母親が、得体の知れないものを見るような目で……化け物を見るような目で、俺を見ていた。
その後、何か注射を打たれ……多分、鎮静剤か何かだったのだろう。俺は意識を失った。
次に目を覚ましたとき、俺は全身が妙に窮屈に感じた。それもその筈。俺の身体は、硬いゴムのようなバンドで拘束されていたのだから。
――びきっ
『ぎっ……！』
身体をよじった途端、また身体のどこかが痛んだ。
『彼の全身の骨格に、微細な皹が入っています』
母親がカーテンの向こうで、医者の話しに神妙に聞き入っている。
『簡単に言えば、その筋力に、骨格が耐えられていないんです』
当時は、難しくて理解できなかった。
『人間には、先天的に身体能力のリミッターが備わっている……という話を、聞いたことはありますか？』
漫画とかでよくあるアレだ。『火事場の馬鹿力』。どうやら、俺は常

にその状態になってしまっているらしい。
『おそらく、例の交通事故で、脳のどこかを損傷してしまったのでしょう』
結果、俺の身体は、抑えを失って暴走してしまったそうだ。
治療は無理だった。
何せ、今の医学では、『脳のどの部分が』『どのようにして』身体能力にリミッターをかけているのかさえ解明されていないのだ。そこを更に、『もう一度リミッターを掛けなおす』なんて真似が出来るはずも無い。
少し身体を動かすだけで、間接がギシギシと軋みを上げ、激痛が襲い掛かる。
特に、成長期に入ってからは、地獄だった。
動かなくてもバキバキと骨が折れ、靭帯が千切れ、自身の張力に耐え切れなくなった筋肉が断裂する。
眠ることもできず、鎮痛剤を常時投与され、今が昼なのか夜なのかさえ分からず、ただ痛みだけが意識を繋ぎ止めていた。
際限無く増えていく医療費に生活を圧迫され、最初は努めて明るくいつも通りに振舞っていた父親と母親からは、徐々に笑顔が消えていった。この頃からだろうか。病院の廊下で、醜く言い争う両親の声を聞いていたのは。
口論の末、激昂して思わず口にした言葉なのだろう。だが、多分に本音が含まれていることも、また事実。俺はただ、黙ってそれを聞いていることしかできなかった。
数年が過ぎた頃、ようやく『奇跡』が起きた。俺の身体の治癒力が、細胞が自壊する速度を上回ったのだ。
そこからは、超回復に次ぐ超回復。積年の恨みとばかりに、骨格が急成長を遂げた。
その結果得たものは、奇跡のような肉体。
異常に頑丈な骨格。
異常に密度の高い筋肉。
異常に早い新陳代謝。

――『超人病』
それが、当時の俺の主治医が付けた名称だ。俺の身体を、実に的確に表現している。
だが、そんな医学的価値の無い奇病になど、誰も見向きすることは無く、自力で歩けるようになると、すぐ俺は放り出された。
そして、奇跡の肉体を得た代償は……家族の愛情だった。
『あなたは今日からここで暮らすの』
車に乗せられ、一言も喋らないまま数時間。俺は、冷たい鉄の門の前に居た。
事務的に俺の手を引く母親が、冷めた声で言う。その声に、かつての優しさや、愛情は感じられなかった。
『だから、これでお別れよ』
むしろ、ようやくこれで開放されるという、安心感さえあった。
そして、目の前の門が開き、一人の男性が俺を出迎えた。
『やぁ、初めまして。私はここの園長だ。これからは、ここを自分の家だと思ってくれ』
善人の笑顔……そして、欲にぎらつく瞳。
孤児を一人引き取れば、決して少なくない額の補助金が出る。それを目当てに、俺を引き取ったことが丸分かりだ。この門の向こうには、俺と同じような境遇の子供がたくさんいるのだろうと、なんとなく分かった。
この分厚い門は……侵入者を阻むのではなく、中に居る者を逃がさないための、檻。
『さぁ、みんなに自己紹介だ』
そして、園長を名乗る男は、俺の腕を強く引いた。
『お母さん……』
ぐいぐいと引っ張られる。やろうと思えば、いつでも抜け出せる。でも、俺はしなかった。出来なかった。母親が、俺のせいでどれだけの迷惑を被ったのかを知っていたから。
父親は残業を重ね、とうとう身体を壊してしまった。母親は、度重なるストレスから鬱病を患った。全て、俺の所為で。

ただ、母親が一度でも振り返ってくれれば。何か言葉をかけてくれれば。

『お母さん……！』

しかし、その願いは叶わなかった。

一度も足を止めることなく歩き去っていく背中が、俺が見た母親の最後の姿だった。

そして、頑丈で背の高い門が――がしゃん、と閉まった。

◆・◆　◆　◆

「秀人、どうした？」

先を歩くクロノが振り返り、訝しげに俺を見た。

「何でもねーよ」

肩をすくめ、回想から現実に戻った。

「そうか」

現在、なのはとフェイトが『試合』に使うフィールドの最終調整が行われている。

俺とクロノが模擬戦を行い、結界の強度や、レイヤーの出来具合を確認する……という名目だ。実際には、来るべき決戦に向け、少しでも力を着けておきたいという俺の申し出に、リンディさんとクロノが答えてくれたんだけど。

なのはは、フェイトとの試合のため体力を温存し、イメージトレーニングだけに留めている。ユーノは直接的な戦闘には不向きだ。アースラ武装隊の面々は、フェイトの拠点だったマンションを調べていたり、警戒任務に当たっていたりで暇が無い。

消去法プラス、俺とタメを張れる実力の持ち主ということで、クロノに白羽の矢が立ったというわけだ。

「本当に、デバイスは必要無いのか？　ストレージでよければ、貸し出せるぞ」

ストレージデバイスとは、レイジングハートやバルディッシュと違い、ＡＩが備わっていない、本当の意味での『デバイス』だ。クロノが言うには、主流はむしろストレージらしい。かく言うクロノのデバイスも、このストレージだ。

「俺、マルチタスクが苦手でさ。魔法を同時発動するのは二つか三つが限界なんだよ。だから、デバイスがあっても無くてもそんなに変わらない」
　というより、魔法という数式を頭の中でごちゃごちゃこねくり回すより、『魔力そのもの』を操作する『魔力操作』の方が……『魔導師らしくない』戦い方の方が性に合っている。
「それに……」
「それに？」
　むしろ、こっちが問題だ。
「レイジングハートが怒るんだよ」
　以前、同じようにリンディさんからストレージを貸そうか、という話になったことがあった。俺は結構乗り気だったのだが……
『秀人はマスターではないとはいえ、私のアカウントを持っているのですよ？　私には秀人の資質を見極め、伸ばしていく義務があり、それが私たちの契約の筈です。契約を破棄する気ですか？それとも、私では力不足であると……そう言うつもりですか？　怒りますよ？手始めに頭痛地獄でも味わってください』
　あそこまで饒舌に喋るレイジングハートは初めてだった。ついでにこっちに負荷を掛けまくって頭痛にするのはマジでやめてほしかった。
「お、怒る……？　インテリジェントデバイスが？」
　クロノは、どこか愕然とした面持ちだ。
「え？　結構怒るぞ、あいつ」
　射撃訓練で的を外せば
『眼窩に収まっている二つの球体はガラス玉ですか？』
　とか。
　マルチタスクの維持に失敗すれば
『脳みそまで筋肉で出来ているのですか？』
　とか。
　ディバインバスターを暴発させれば
『自殺したいのでしたら余所でやってください』

等々。スパルタ教官だ。
「どこまでも非常識だな、君たちは」
はぁ、とため息ひとつ。
「いいか。いくら人格ＡＩを搭載されているとはいえ、それはあくまで思考能力に『似せて』作られたプログラムだ。感情の揺らぎなんて、発生するわけがない」
プラナリア呼ばわりした時、カチンと来ていた気がするけど……
「ああ……そういえば、レイジングハートは出自不明なんだった」
ユーノがジュエルシードを発掘するより前、別の遺跡で偶然発見したらしい。
本来ならばジュエルシードと同じく、ロストロギア扱いになるのだが、危険性は皆無だったため、そのままユーノがデバイスとして使っていたらしい。
「……マリエルが聞いたら大喜びするだろうな」
マリエル？　聞いたことが無い名前だ。
「誰だそれ？」
「技術者だ。のめり込むと暴走しがちになる」
げんなりとした様子。嫌いではないが、苦手らしい。
「ただ、腕は確かだ。もし君たちのデバイスが破損した時には、頼りにするといい」
「覚えておく」
話しているうちに、転送ポートに到着した。ここから、仮想空間に直接飛ぶらしい。
「準備はいいか？」
クロノは、バリアジャケットを纏い、手にはデバイス。臨戦態勢だ。
「いつでも」
対して俺は、ヘルメットを被ればツーリングに行けるような装備。破れてもいいように、以前着ていたジャケットとパンツ、グローブにブーツ。動きやすさと、魔力で補強した時の強度のバランスを考えたらこうなった。
『それじゃ、飛ばすよ～！』

スピーカーから、エイミィの能天気な声がして……
――バシュッ！
俺たちは、仮想空間に移動した。
（さて、と……）
周囲をぐるっと確認。
（大部分は海、着地できそうな足場は、水没した廃ビルだけか）
基本は、空戦がメインになりそうだ。やはり、なのはとフェイトに合わせた調整がされている。
「ルールの再確認だ。魔法は全て非殺傷設定。先に気絶するか、ギブアップを宣言した時点で敗北。以上だ」
シンプルな実力勝負。いいね。
「了解だ」
強化魔法……ソリッドを発動し、装備の強度を上げる。いつでも始められる。
『じゃあ、行くよ。レディ……』
クロノのデバイスが、青白い輝きを放つ。
俺は、右拳を腰だめに構え……
『ゴー！』
――キュボッ!!
足元をインパクトで弾き、突っ込む！
「うおりゃあああっ!!」
拳を、打ち下ろす！
――バゴオオンッ!!
クロノが立っていた足場を吹き飛ばす。クロノは空中に逃げ、
「スナイプ！」
誘導弾を発射した。
『Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｏｔ』
アクセルシューターに比べたら、威力はそこそこ……だが、操作性能は段違い！
――キュキュキュキュキュンッ!!
複雑な軌道を描き迫りくるそれを、飛びながら回避し、迎撃し

……って、
――バチンッ！
「あっぶね！」
追い込まれた先に、設置型のバインドが仕掛けてあった。
やっぱり、クロノの方が一枚も二枚も上手か……でも。
「いい実戦訓練になるっ！」
猪突猛進な暴走体に比べて、何て手強いことか！
『Ｂｒｅａｋ　Ｉｎｐｕｌｓｅ』
クロノのデバイス……Ｓ２Ｕが発声する。
クロノが一変、Ｓ２Ｕを構え、突っ込んできた。中距離戦闘が得意そうなクロノにしては、随分と……
――チュィィィィィィィィイン……!!
Ｓ２Ｕが、妙な振動音を発している。
と、俺の踏み込みで舞い上がった瓦礫の欠片が、Ｓ２Ｕに触れ……
――バシッ……！
粉々に、粉砕された！　そういう魔法か！
受け止めるつもりだった予定を変更。直前まで引き付けて……！
「くっ！」
ギリギリのところで、回避！
――ズバァァァァ……！
俺が足場にしていた廃ビルの屋根部分が、さらさらと砂のように崩れていった。
「おまっ……そんなもん人に向けて使うな！」
下手すりゃミンチになるぞ！
――ガキンッ！
「げっ！」
逃げた先に、またしても設置型バインド。今回は、しっかりと捕まった！　やべっ！
「くそっ！　このっ！」
バインドをどうにか解除しようと悪戦苦闘している間に、クロノはしっかりとチャージを終えていた。

「まずは一発だ」
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
――ドンッ！
打ち出されるのは、巨大な青白い魔力弾！
「おおおおっ！」
プロテクションを展開し、砲撃を防御する。
――ドゴオオオンッ！
受け止めた魔力弾が、大爆発を起こした。威力もさることながら、副次効果でここまでのダメージを受けるとは思わなかった。
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
更に、追撃の誘導弾！
「インパクトォ！」
――バシュンッ！
広域版インパクトで、纏めて吹き散らす。
『Ｂｒｅａｋ　Ｉｎｐｕｌｓｅ』
背後から、Ｓ２Ｕの音声が……くそっ、バック取られた！
――……ッチュイイイイイイィィィィン！
「ぐあぁっ……！」
必死に身体を反らし回避するが、僅かに掠った部分から、ダメージが全身に伝播する。
「こンのォッ！」
振り向きざまに、貫き手を一閃！
その一発は、僅かにクロノのバリアジャケットを切り裂いた。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
――ガゴオォン！
が、接近戦を不利と悟ったクロノが砲撃を発射し、俺を射程外に吹き飛ばす。
「ジリ貧だなぁ……クソッ」
認めたくは無いが、クロノは強い。正直、甘く見ていた。
なのはのような圧倒的な攻撃力も、フェイトのような見失いそうなスピードも無いが、とことん理詰めの数式のような戦法には隙が無

い。戦っているうちに、知らず知らず罠に追い込まれている。
何か、決定的な一打というか……クロノの『理詰め』を崩せるような一手があれば……
と、ごちゃごちゃ考えていたら、再び……
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
砲撃！
一々避けたり、シールドを張っている暇は……無さそうだ。そんなことをしている隙を見逃すような奴じゃない。
利き腕じゃない方の左手、その掌に、魔力を集中して……
――パァンッッ!!
ビンタするように、砲撃を弾き飛ばした。
「む……」
クロノがぴくりと眉を動かす。
見当違いの方向に飛んで行った魔力弾は、どこかの水面に派手な水柱を立てた。
「お？」
思いつきでやってみたが……結構使えるんじゃないか？　コレ。
『使用』する魔力は大きいけど、『消費』する魔力はほんの少し……バレット３発分程度だ。
それでいて、防御性能は格段に高い。
もしかしたら、跳ね返すことも、出来るんじゃ……
お。
おお。
おおお。
閃いた！
――ザッ……
廃ビルに着地する。
「はあああああっ……！」
深呼吸。半身に構え、右手を緩く突き出し、左手を腰溜めに。この構えが、一番やりやすい。
『Ｂｒｅａｋ　Ｉｎｐｕｌｓｅ』

例の振動波！
槍のようにデバイスを繰り出してくる。避けるのは容易い。だが恐らく、どこに避けてもバインドか誘導弾が待ち構えている。それなら！
――バキイィインッ！
真正面から、受け止める！
「なっ……!?」
驚愕するクロノ。まぁ、普通ならそうだろう。触れただけで石材を粉々に粉砕する振動波に、真正面から来るなんて考えもしなかったはずだ。
とはいえ、俺も素手のままぶつかったわけではない。拳の前面に、局所的にインパクトを発動し、振動波と相殺させている。
「おおおっ！」
押し……切れッ！
「くっ！」
とうとう、拮抗が崩れた。
クロノの顔が、焦りに歪む。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
回避は無理と悟ったクロノが、ほぼゼロ距離から容赦の無い砲撃を発射する。
――今だ！
「フッ!!」
振りぬいた右腕に代わり、左手の掌に強化魔法を集中し……！
――バチイイインッ！
掌打で、砲撃を跳ね返す！
「う、うあああああっ!?」
インパクトと、自らの砲撃をまともに喰らい、吹き飛ぶ。直前にプロテクションを張ったのは正解だが、二発分のダメージを受け、呆気無く砕け散った。
そして、完全に体制を崩し、隙だらけになったそのボディに……！
「ディバイン……！　バスターーーーーー！」

――ズゴオオオンッ！
砲撃がクリーンヒット！
遠くのほうで、ざぶん、と何かが水面に落ちる音を聞いた。
『クロノくん、戦闘不能……』
魔導師の戦い方は、対処法のルーチンの積み重ねだ。
射撃魔法はこうして防御する。誘導弾はこうして回避する。砲撃魔法はこうして耐える。
相手の一動作につき、一つの対処。
マルチタスクがあるとはいえ、それはあくまで連続する一つ一つの動作に過ぎない。
なら、一つの動作に複数回の行動を込めることができたら？
まず、初見の相手は必ず倒せる。けど、
「っぐ……！」
弱点もある。
まず、全魔力を集中させた掌打。相手に気取られることが無いように、一瞬で魔力を集中させなければならない。そのために、リンカーコアをレッドゾーンまで回転させる必要がある。
そして、集中させた魔力一瞬で全身に戻し、再びリンカーコアを回転させ、必殺級の攻撃魔法を発動させる。
結果、リンカーコアが急激に収縮し……つまりは、不整脈を起こす。
「う……がはっ！」
リンカーコアを無理やり機能停止させる。
反動、結構キツいなぁ……
と、その瞬間。
――ズパアアアンッ！
「ぎゃっ!?」
後頭部に、何かが命中した。
――あ、ヤバ。
意識にモヤが掛かってきた。脳震盪か、何か……とにかく、戦闘不能になりそう……
視界の隅に、クロノが事前に発射していた誘導弾が、役目を終えて

散るのを見た。
（引き分け、か……）
「……負けたよ」
医務室で目を覚ました俺に、クロノは開口一番そう言った。
魔力ダメージしか与えていないので、外傷は皆無だ。
ただ、ダメージはそれなりに残っているらしく、エイミィに支えてもらってようやく立っている。
「引き分けじゃないのか？　結局、俺もＫＯされたわけだし」
「ルールにあっただろう。『先に気絶するか、ギブアップを宣言するか』……僕の方が、先に気絶していた」
う～ん……あんまし、勝った気にならない。
「ところで……」
んで、俺はというと……
「何で、勝ったはずの君が寝込んでるんだ？」
うるせー……
『リンカーコア出力、２３パーセントに低下しています。
無理な稼働と、強制停止の影響です』
「秀人さぁん……」
なのはが涙目になっている。
『全く……無茶をするのはあなたの悪い癖です』
「いや……ああしないと勝てなかったし」
負けるのは嫌だから。引き分けだったけど。
「訓練なんだよ、訓練！　訓練で大怪我してどうするの!?」
ぼすぼすとベッドを叩き、なのはが怒る。
「悪かった、俺が悪かったから……」
なんとか宥めようと言ってみるものの、ぷんすか怒るなのはの機嫌は直らない。
「もう知らない！　今晩はすき焼きにしようと思ってたけど……ユーノくんと二人で食べちゃうから！」
「えええええ!?　勘弁してくれよ！　牛肉なんてたまにしか食べられ

ないのに！」
「知らないっ！」
うわあああああ……楽しみにしてたのに……！　なのはのやつ、やると言ったら絶対に実行するんだよ！
『というより、詰めが甘いです。背後の誘導弾に気付かないなど……まして、それで負けるなど』
静かな言葉に、滾るマグマのような怒りを感じる。
「れ、レイジングハート……？　秀人は勝ったんだから」
ユーノがフォローする。が。
『最後まで立っていなければ、勝ちではありません。引き分け？　そんなもの負けと同じです甘ったれるな』
鬼だ。鬼がいる……！
『どうやら、訓練すべきはマスターでなく、秀人のようですね……？
では、意識が戻ったところでマルチタスクの維持訓練を……とりあえず１０個、６時間コースでフル稼働、始めましょうか？』
「死ぬ！　脳の神経が焼き切れる！」
『安心してください。焼き切れたら半田付けして差し上げます』
「俺の脳みそは古いラジオじゃねぇ！」
「ほ、ほんとにデバイスと漫才やってる……」
「……やはり、マリエルを呼ぶか」
蚊帳の外で、エイミィとクロノがそんなやりとりをしていたり、カオスな空間と化していた。
『秀人』
と、レイジングハートが口調を改めた。
『あなたが使ったという、カウンター技ですが……あれは、封印して下さい』
「……やっぱり？」
さすがにあんな自爆技、いくら俺の身体でも使い続けるには限界があるしなぁ……
『下手をすれば、リンカーコアが破裂します』
さらっと恐ろしいことを言われた。

「使っちゃだめ！　絶対だめ！」
なのはが、いよいよ涙を流して俺に詰め寄った。
う……これは反則だろ……
でも、あの技があれば、戦力を飛躍的に高めることができるのもまた事実。
さて、どうしたもんか……
『失礼。言葉が足りませんでした』
「「え？」」
俺、なのは、ユーノの声が重なる。
『私が、完全な制御プログラムを構築するまでは、封印して下さい』
「なるほど。レイジングハートの処理能力を割けば、魔力運用のサポートになる」
『うまくいけば、リンカーコアへの負担を最小限にまで抑えることが出来るはずです』
えっと、つまり……レイジングハートがいれば、連発できるようになる？
「連発って……」
ユーノはあきれ返っている。
「反動は軽減できるとはいっても、ゼロになるわけじゃないんだよ？」
「わかってるけどさぁ……俺には接近戦以外、取り柄無いし、アレは確実に決め手になるんだよ」
『決め手』が一回しか使えないのは困るし。
『まぁ、秀人も私のマスターです。デバイスとしての本分を、忘れたつもりはありませんよ』
デバイスの本分……魔法の発動補助、か。
「……まぁいいや。んじゃ、頼んでいいか？」
『勿論です。では……』
ん？　まだ何かあるの？
『マルチタスク維持訓練、始めましょうか』
「えええええええマジでやるの!?」
冗談だと思ってたのに！

『ヒデト……無様な敗北を喫しておいて、罰が無いとでも……？』
逃げようにも、身体が動かない！
「ちょ……誰か止めて！」
「頑張って、秀人さん」
「ごめん、僕には……」
「それじゃ、行くかエイミィ」
「そうだね、クロノくん」
四人はぞろぞろと部屋を出て行った。部屋に残ったのは……
『さぁ、始めますよ』
鬼教官と、俺。
「……ええい、やってやるよコンチクショウ！」
そして。
「――ぎゃあああああああ……!?」
翌日、翌々日共に、俺は割れるような頭痛に苦しむことになったとさ……めでたく無しめでたく無し。

# 第十五話

「いたたた……」
　エマージェンシーハンマーで頭蓋骨をカチコンカチコン叩かれるような痛みを目覚ましに、俺は布団からもぞもぞと這い出た。
「レイジングハートの奴、ちったぁ加減しろっつうの……」
　とはいえ、一昨日の、頭蓋骨の中で道路工事が行われているような激痛に比べたら天国のようなものだ。
「おはよう、秀人」
　ユーノ（人間形態）が、食卓から顔を覗かせた。
「ああ、おはよ」
　洗面所で顔を洗い食卓に戻ると、白米・焼き魚・味噌汁・漬物の、和食が二人分用意されていた。なのはの姿は無く、書置きの手紙が置かれている。文面には短く一言。
『行ってきます』
「……行ったか」
　今日は、待ちに待った勝負の日。
　なのははフェイトへの必勝の策を練り上げ、フェイトは体力と魔力を万全に回復させた。
「なぁ、ユーノ」
　味噌汁を啜りながら、慣れない箸に苦戦するユーノに話しかける。
「なのは、勝てると思うか？」
　正直な意見が聞きたい。
「……そうだね」
　箸を置き、真剣な表情になる。
「フェイトのスピードは、圧倒的だ」
　それはわかる。俺も、初見では全く反応できなかった。
「攻撃魔法も多彩で、尚且つ高威力で、応用も利く」
　一発でなのはを戦闘不能に追いやった雷撃。縦横無尽に襲い掛かってくる一斉射撃。鋼鉄をも切り裂いた魔力の鎌。スピードと相まって、防御も回避も困難だ。今の俺でも、勝てるかどうかはわから

ない。
「それを考慮に入れた上で、どうだ？」
ユーノが顔を上げる。難しい顔をしていたのが嘘のように、あっさりと……
「勝てるよ」
と、俺と同じ意見を言ってのけた。
「……だよな」
俺たちは、ずっとなのはを見てきた。
一回目の勝負に負けた時も。
二回目の勝負に勝てなかった時も。
三回目の勝負を邪魔された時も。
なのはは、一日だって訓練を欠かしていない。話を聞いたクロノが呆れ返るような密度の訓練を行い、着実に力を着けてきた。だから。
「なのはが勝つ」

……んで。
「何で俺が周辺警護なんだよ!?」
隔離結界の中、俺は、武装隊に指示を出すクロノに、おもいっきり噛み付いた。
「……僕も聞きたいよ」
この隔離結界を張っているのは、俺と同じく借り出されたユーノだ。
目の前には、ドーム状の結界が展開している。あの中は仮想空間になっていて、実際にはあの数百倍の面積が確保されているらしい。
「仕方ないだろう？　ここには、残りのジュエルシードが全て集合しているんだ。プレシア・テスタロッサが、それを見逃すとは考えられない」
最近アクションが無いから忘れそうになっていたが、フェイトの母親……プレシアは、まだジュエルシードを付け狙っているはずだ。
「それに、仮想空間の中に君がいても、二人の集中に水を差す結果になる」

「うぐ……！　た、確かに……」
俺は、その場にウ○コ座りをして頭を抱える。
「あ～……見たい！　でも見てたら邪魔になる……！」
どうすればいいんだ……！
見かねたクロノが、助け舟を出してくる。
「エイミィ、秀人とユーノに端末を渡すぞ」
『了解～』
Ｓ２Ｕから、何かが二つ、すぽんと排出された。
「秀人と……ええと、フェレットもどき」
「ユーノだ！　ユーノ・スクライア！　誰がフェレットだ！」
「うるさい奴め……」
手渡されたのは、液晶画面の無いｉ－ｐｈｏｎｅみたいな端末。
スイッチを押すと、モニターが空中に固定され、仮想空間の中と思しき風景が映った。
「それで文句は無いな？」
やれやれ、といった様子で肩をすくめるクロノ。
「サンキュー！　お前、いいヤツだな！」
生で見られないのは残念だだ……まぁ良しとしよう！
空間内では、今まさに二人の勝負が……
――ザッ、ザザザザ……
「あ!?　おい!!」
が、画面にいきなりノイズが走ったと思ったら、砂嵐になってしまった。
もしかして……
――ヴォオオオオオオオン！
『結界内に、侵入者あり！　数１！　ＡＡＡランク相当！』
ああもう！　落ち着いて観戦することも出来ないのかよ！
『強力なジャミングを確認！　仮想空間とのリンクが、一切遮断されました！』
援軍に来る可能性のある二人を、初っ端から隔離してきた。
なのは達が死力を尽くした勝負を終え、消耗しきった所を狙う作戦

か。
「総員、迎撃体勢！」
俺は、端末をポケットに突っ込み、リンカーコアを起動した。
「おい、思いっきりやっていいんだな!?」
仮想空間は、厳重にプロテクトを掛けてある。こちらの戦闘音も届かないし、通信もできない。だから、俺たちがいくら暴れても、二人の勝負の邪魔にはならない！
「ああ、構わない」
Ｓ２Ｕを、侵入者に向ける。その侵入者は……
「……アルフ？」
そう。侵入者は……茜色の長髪が特徴的なフェイトの使い魔、アルフだった。俯き、両腕をだらりと垂らしている。
「今まで、どうしてたんだ？　フェイトも心配して……」
そして、俺がアルフに向かって足を一歩踏み出し……
「離れろ！」
クロノが警告するのと同時、俺は反射的に飛びのいていた。
「ぐがああああああああああああ!!!!」
凄まじい咆哮を上げ……
――ガチンッ！
俺の首筋があった空間を、鋭い犬歯が噛み潰した。
「あ……アルフ？」
俺は、半ば呆然と、半ば確信を持って、その名を呼ぶ。
「がああああああああっ!!」
そして、本性の赴くまま、俺たちに襲い掛かってきた！
「おい、クロノ！　これ……！」
「ああ、多分……洗脳されてる！」
やったのは勿論、プレシアか！
「グルルルル……」
だがアルフは、身構える俺たちの横を素通りしていった。
「まさか……！」
俺たちは、眼中に無かった。アルフの狙いは、最初から……！

「ユーノ！　逃げろおおおおおお!!」
結界を維持しているユーノと、サポートの魔導師！
「え？」
結界に集中していたユーノに、アルフが襲い掛かり……くそ、間に合え！
「ファイア！」
――キュドドド！
バレットを乱射する。普通なら、回避するか、防御するしかない攻撃に、アルフは……
「ガアアアアアア!!」
「何ッ!?」
真正面から、突っ込んでいった。非殺傷設定にしてあるとはいっても、衝撃は通る。それを全く恐れない……いや、俺の攻撃なんて、最初から気付いていないように、ただ直進していった。
「うわっ!!」
ユーノは防御魔法を発動し、なんとかアルフの攻撃を回避する。
だが、他の魔導師は……！
「うわああっ！」「ぎゃっ！」「……ぐっ！」
爪で引き裂かれ、顔面を殴打され、腹部を蹴り上げられて、それぞれ戦闘不能に。
同時、結界が『ぐにゃっ……』と揺らいだ。
結界を維持していた魔導師が、ユーノ一人になってしまった所為だ。
「このままじゃ……エイミィ！」
クロノが声を張り上げる。すると、
――ヴンッ……
「……持ち直した？」
一度は揺らいだ結界が、また元通りに強度を取り戻す。
『仮想空間リソース分だけ、結界の強度を上げたの』
仮想空間の制御が、完全に分離してしまったことが吉と出たらしい。

アルフは、結界魔導師を倒すだけ倒し……再び、俺達を襲う。
「縛れ！」『ｒｉｎｇ　ｂｉｎｄ』
クロノがバインドを行使する。
青白い魔力の枷がアルフの四肢を縛り上げ……
「ない!?」
なんと、バインドはアルフの体表に触れた途端、ぼそっと崩れる。
なのはのように、術式を分解した……というわけではなさそうだ。
そもそも、そんな器用なことが出来る精神状態ではない。
「君たちの世界で言うところの……ドーピングだろう」
アルフに施された強化は、恐らく二つ。
一つは、魔法を無効化すること。さっきもそうだったが、射撃魔法のような初歩的な魔法すら防げていないところを見ると、バインドだけを無効化することに特化している処置のようだ。身体を守ることなど考慮に入れていない、偏った術式。
そしてもう一つが、痛覚の麻痺……というより、遮断。正気をほぼ失っていることから見て、興奮剤を大量投与し、アドレナリンのような神経伝達物質を過剰に分泌させているのだろう。ヤク中のジャンキーがそんな感じだった。
だが、もしも薬物ではなく、大脳を外科手術で処置されていたとしたら……
「アルフ……！」
俺は、最悪の予感に唇を噛む。
この、主のことだけを想ってきた優しいオオカミを、なんとしてでも救ってやりたい。
「どちらにせよ、手遅れになる前に鎮圧するんだ！」
威力を抑えた誘導弾でアルフを牽制しつつ、クロノが言う。
「でも、どうする!?」
バインドは効かないし、ダメージでノックダウンできたとしても……多分、鎮圧できる頃には手遅れだ！」
アルフが動きを止めたとき……それは、俺たち全員を倒すか……肉体が自壊し、構造的に動けなくなった時だけだろう。手足をへし折っ

ても、『痛み』を無視できるのであれば、まだ動けてしまう。
編み出したばかりの、あのカウンター技は使えない。
加減ができないのだ。
今の俺には、あの技を『繰り出す』だけが精一杯で、『威力を抑える』なんて段階には達していない。
なにより、失敗すれば、それだけで俺が戦闘不能になってしまう。
チョークスリーパーで締め落とそうにも、興奮しきったアルフには効果が無いだろう。
「一か八かの賭けになるが……」
「言ってみろ！　……おらァ！」
武装隊の一人に飛び掛っていくアルフを蹴り飛ばしながら、クロノの案を聞く。
「ストラグルバインドを使う」
ずるっ、と思わずずっこけてしまった。
「アホかお前は!?　バインドは効かないんだっての！」
「誰がアホだ！　話を最後まで聞け！
この魔法は、相手を拘束するものじゃなく、解呪するための魔法だ！」
要はアレか。『凍てつく波動』か！　それなら、確かに！
「もしも、その興奮剤が魔法を用いて調合された物なら……きっと、打ち消せる」
なぜ最初から使わなかったのか……その理由は。
「だが、もし興奮剤が化学的に調合されたものだったり、外科手術が原因だとしたら……空振りになってしまうどころか、かえって症状を悪化させてしまう可能性も……」
いまさら、悩むことなんて無い。
「俺が押さえつける。その隙を狙え」
締め落とすのは無理だとしても……クロノが魔法を発動させるまでの数秒だけなら、俺の腕力で押さえつけることが出来るはずだ。
まさかプレシアも、バインドを使わずアルフの馬鹿力を押さえ込める人間がいるとは想定していないだろう。

「だが……下手をすれば」
大怪我をする……って？
「忘れたのか？　俺の身体は……」
身体を、深く沈める。四つんばいに近いまでの、前傾姿勢……クラウチングスタート。
「グアアアアアアッ!!」
牙をむき出しにしたアルフが、今度は俺たちを標的として襲い掛かって来る。
「そういうふうに、できてるんだよ!!」
――ゴバッ!!
ビルの外壁をスターターに、突撃する！
「おりゃあああああ!!」
「ガアアアアアアッ!!」
アルフが繰り出す拳と、俺の蹴りが、正面から激突した！
「グルアァッ!!」
五指を開いた、鋭い爪による一撃。
「んぐっ……」
それを、わざと首で受け止める。
「ガアアアッ……！」
「はッ……あ」
ギリギリと万力のように首を締め上げるアルフ。だが、これでいい。
俺の前に、無防備に差し出された腕を掴む。
ぐりん、と一回転させ……
「大人しく……しろっ！」
――ダンッ！
ビルの屋上に、身体ごと押さえつける。肩をがっちりと極めてあるせいで、アルフは思うように身動きが取れない。
「よし、このまま……！」
だが、アルフはそこで、信じられない行動を取った。
「アアアアアッ!!」

肩を拘束されている方向に、力いっぱい捻り……
――ボギンッ……！
「な……何やってんだ！」
「グアアッ！」
――ドズンッ！
「ぐえっ！」
呆気に取られた隙に、ボディブローを喰らってしまった。
「グルル……！」
俺が極めていたアルフの右肩……そこは、赤黒く腫れ上がり、力無くぷらぷらと垂れ下がっていた。
どうかしている。拘束から逃れるために、躊躇いも無く腕を捨てるなんて！
「……くそっ」
きっと、四肢を個別に固めるだけでは押さえられない。
全身を、一気に縛り上げることができれば……
アルフの猛攻を防ぎながら、方法を探す。飛行魔法を駆使し、無人の街を飛び回り、工事現場の上を通り……工事現場？
「あれだ！」
工事現場の一角に放置されていた、高所作業員の命綱！
あのワイヤーなら……力で千切ることは出来ないはずだ！
「インパクト！」
――ドパァン!!
「ガウッ……」
衝撃波でアルフを弾き飛ばし……よし、ゲット！
がちんっ……とベルトを腰に巻く。準備完了！
「クロノ！　他の奴らを連れて、一旦引け！」
アルフの目に映る敵が俺一人なら、俺をひたすら襲い続ける。
――ブンッ、ブオンッ！
大振りの攻撃を、スウェーバック、ダッキングで避け続ける。
突き出された左拳。その左手首にワイヤーのフック部分を引っ掛け……

「グルアアアアアッ!!」
――ブォンッ!!
「っと!?」
途端、今度はハイキックが飛んできた。でも……その足、もらった！
蹴りの軸足を払い、その場に転倒させる。
「ギャウッ！」
ずでん、と尻餅をつくアルフを逆マウントに固め、両手、両足を胴体と結びつけて固定する。
恐らくミッドチルダでは、魔法という便利極まりない技術が浸透しすぎて、こういったアナログな手段には耐性が低いのだろう。
『バインドされなければ捕まらない』なんて、本気で考えてしまうくらいには。
「オラオラオラァ！　現場職ナメんじゃねえぞコラァ！」
ワイヤーでぐるぐるの簀巻きにする。怪力を発揮しようにも、力を出すことが出来ない体勢にしてしまえば、あとは……
「クロノ！」
俺の後方で、術式を編んでいたクロノが、それを発動する。
――ギュウウウッ……!!
とうとう、アルフの身体に、青白い拘束魔法が巻きついた。今度は、分解されることは無い。
「ストラグル……バインドォッ!!」
トリガーボイスと共に、バインドが一層強くアルフの身体を締め上げ……
「ゲホッ……!!」
アルフが、口から何かを吐き出した。どうやら、幸いなことに魔法薬だったらしい。
抱き起こし、顔を覗きこむ。
「……え、あ？」
開きっぱなしだったアルフの瞳孔が、焦点を結ぶ。
「アルフ、俺が分かるか？」

見詰め合うこと、数秒。
「あ、あんた……？」
アルフは、ようやく俺の顔を認識した。
「よかった……正気に戻ったんだな」
これでひと段落。そう思っていた矢先のことだった。
「は……離れろ！」
――ドンッ！
いきなり、アルフが俺を突き飛ばした。
「うあああああ……!!」
突如として、アルフ苦しみだす。その身体から、明らかにアルフのものとは別の、禍々しく、膨大な魔力がにじみ出てくる。
「おい！　何が起きてるんだ!?」
通信の向こうで、エイミィの困惑するような表情が目に浮かぶ。
『アルフの体内に、高密度の魔力結晶が埋め込まれてる……』
魔力結晶……？
「つまり……爆弾だ」
クロノが、苦々しくそう言った。
「爆弾だって……？」
『きっと、アルフの魔法薬の効果が破られると、発動するように設定されて……』
そう。知恵の働くプレシアが、ストラグルバインドのことを想定していない筈が無かったのだ！　俺は、自分の迂闊さに腹が立った。
「くそっ！」
アルフに一歩歩み寄る。
『駄目！　逃げて、秀人くん！』
逃げる……？　今にも体内の爆弾が破裂しそうになっているアルフを放って？　冗談じゃない！
「逃げ……て」
ぼろぼろになったアルフが、諦観の表情を見せた。
「仕方ないんだよ……爆弾は、体内に埋め込まれている……」
「『仕方ない』で……見捨てられるわけないだろうがっ!!」

エリアサーチを応用し、探索魔法をアルフの体内に発動させる。
場所は……くそっ、肋骨の内側！　心臓の真横だ！
――ビリッ……
アルフの胸元をはだけさせる。今まで服に隠れていたが、真新しい縫い目が、その肌に痛々しく刻まれていた。
「なにを……」
『秀人君、何をするつもり!?』
決まっている。
「俺が……今ここで、爆弾を取り出してやる！」

# 第十六話

俺がそう言った途端、クロノが、エイミィが、猛烈な勢いで反対してきた。
『無茶だよ！　麻酔だって無いんだよ!?』
「俺は絶対に……誰も見捨てない」
『でも』
「ここでアルフを見捨てたら……もう、俺は二度とフェイトに顔を合わせられない」
最初は、ただの敵だった。
でも、彼女達にも譲れない事情があったことを知った。
フェイトが、なのはという好敵手を見つけるまで、懸命に、献身的に……たった一人でフェイトを支え続けてきたアルフ。
彼女にも、主と共に幸せになる権利があるはずだ。
こんな、ふざけた結末があっていいはずが無い！
ユーノは、結界の維持で精一杯だ。今ここで結界が破られたら、現実世界にまで破壊が広がってしまう。だから、ユーノの手を借りることはできない。
「クロノ。武装隊の中で、麻酔か何か使えるやつはいるか？　結界魔導師でもいい」
ユーノの代役ができるようなヤツが要れば……
「すまない……医療班は、アースラにしかいないんだ。それに、今アースラとは、通信するだけで精一杯で……」
まぁ……そうだよな。医者を最前線にまで引っ張ってくる奴はいないよな。
やっぱり、俺がやるしかない。
俺も、一応痛み止めを使える。使うのは、よく世話になっていた術式。
――ヴン……
足元に、魔方陣が展開する。
大丈夫だ。ちゃんと身体が覚えている。

「アルフ」
　手刀に、極小の魔力刃を展開。設定を変更し、物体への干渉力を持たせる。
「もう一度、フェイトに会いたいか？」
「あたし、は……」
　アルフは、一瞬だけ言葉に詰まる。きっと、助かりたいという願望と、助からないという諦観が、一瞬だけせめぎ合っていた。
「言っておくが、俺の痛み止めなんて、せいぜい二日酔いを抑える程度だ。死ぬほど痛いぞ。それでも、やるか？」
　軽く脅しを掛ける。
　だが、アルフの答えは、最初からたった一つ。
「私は……フェイトに、会いたい……！」
「……ああ、俺に任せろ」
　これで、迷いは無くなった。
「行くぞ。我慢してくれ」
「……ん」
　こくん、と頷くアルフの腹に、魔力刃のメスを当てる。そして、
　――ずりゅっ……
「ぐうゥっ……！」
　体内にメスを滑り込ませた瞬間、アルフの顔が苦悶に歪む。俺の身体に爪を立て、歯を
　食いしばる。麻酔で多少は緩和されていても、体内の異物感だけは消せない。
　――ぐっ……ぐりゅっ……
　腹部から肋骨へ向け、内臓を傷つけないよう、慎重に、慎重に進める。
「がァァ……！　うあああああああ……!!」
　ぽろぽろと涙を零し、アルフが呻く。
「頑張れ……！　もう少しだから……！」
　焦ってはいけない。だが、爆弾のリミットはもうすぐそこまで迫っていて……

肋骨を抜け、心臓の横に指を伸ばし……！
――コツッ……
「あった！」
俺は、ソレを慎重に指先で摘み……
――ずりゅっ！
引きずり出す！
「うあああっ!!」
引き抜いた手に、魔法文字の刻まれた、八角形の水晶のような無機物があった。それは、危険な輝きを放ち、徐々に、徐々に光を強くし……！
『駄目だ！　その威力じゃあ、結界のどこで爆発しても……！』
なら……
「クロノ！　ユーノ！　アルフを頼む！」
――ドンッ！
一足飛びに、ユーノ達と距離をとる。とにかく、被害が広がることを防がなくては。
結界の中央に座し、集中させた魔力を、両腕ごと筒状に固定。
「すうう……はあぁ……」
深呼吸を一つ。そして、レイジングハートの講釈を、脳裏に再生する。
『魔力によって『筒』を形成し、その爆発のエネルギーを内部に通すことで指向性を与える。これが、直射型砲撃魔法です』
爆弾のエネルギーに指向性を与え、ただの『超高威力の砲撃魔法』に変えてしまうことができれば……被害は最小限に収まる。
「苦手でも、練習しておくもんだな」
筒……『砲身』を、より長く、より頑丈に構築していく。長くすればするだけ、地上への影響は少なくなる。だが、強度との折り合いを付けなければ、『砲身』はあっけなく破壊されてしまう。
そして、光が臨界に達し……
――キュゴオオオオオオオオオオオオオオオオッッ……!!

爆弾が、爆発した！
「うがあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ!!」
凄まじい衝撃に、俺は無意識のうちに悲鳴を上げていた。
「ぐうううっ……!! うおおおおおおお!!」
制御どころの話ではない。俺には、手元の『砲身』を維持するだけでも一杯一杯だ！
凄まじい光の柱が、天頂に向けて屹立する。
――ビキビキビキッ……！
「あぐっ……くそおお!!」
とうとう、罅が入ってしまった。
その罅割れた『砲身』の隙間から、破壊力の余波が漏れ出し……
――ボンッ……！
「あ……」
目の前を、血色の何かが、横切った。
見覚えのある、千切れた五本の指と、それを伴っていた掌だった。

――俺の右手首から先が、バラバラに吹き飛んでいた。

「……ぐあああああああ!!!!」
もう、目の前がどうなっているかも分からない。吹き飛んだ右手から、左手に魔力を集中し直し、『砲身』を維持し続ける。
クロノとユーノが、必死な顔で俺を援護しようとしている。
が、ユーノはアルフの傷の止血と、結界の維持で手一杯。クロノも、暴風のように荒れ狂う破壊力の渦に邪魔され、近づくことすら出来ない。
（……それで、いい）
俺が無事に人間の姿を保っていられるのは、自身の肉体の恩恵があるからだ。もし、普通の身体だったなら……最初の爆発だけで、粉々に吹き飛ぶどころか、塵になって消滅していた。

だから、これは……俺にしかできない役目だ。
「くおおおおおおおおおおおおおお!!」
即席の砲撃は、結界上部に大穴を開け、現実世界の雲を突き破り……成層圏をも突破している。

――ギュウウウウウゥゥ……ゥゥン……

永遠のようにも、刹那のようにも思える時間が、ようやく終わった。
「……う」
左手に、じゃりっとした感触。どうやら、気付かぬうちに倒れていたらしい。
目蓋を上げても、目の前が真っ白だった。どうやら、網膜をやられたらしい。
（爆弾は……？　皆はどうなった……？）
光に焼かれた網膜が徐々に回復し、周囲の景色が目に飛び込んでくる。
俺の周囲数十メートルは、かなり酷い状態だ。だが、そこから先は、ごく普通の町並みだった。つまり……うまくいった、ということだろう。
「……！　で……！　……でと！　……秀人!!」
続いて鼓膜が再生し、音を拾う。
「秀人ォ!!」
ユーノが駆け寄ってくる。
「よう……」
と、軽く身体を起こそうとして……先延ばしにしていた限界が訪れた。
「ぐ……あぁ……！」
あ……駄目だ。立てない。
よろけたところを、クロノに助け起こされる。
「あ……アルフは？」
それに答えてくれたのは、ユーノだった。

「大丈夫だよ。傷は深いけど、内臓には一切傷が付いていないから、簡単な止血と縫合で、アースラと合流するまでは持つ」
「そっか。よかっ……たぁ」
意識が一瞬だけ飛びかけた。
「……」
クロノ達アースラの面々が、俺を……正確には、俺の右手を凝視している。
あー……そういえば、吹っ飛んだんだっけ。
ってことは、今まさに再生が行われている最中で……
「ははっ……」
やっぱり、何人かは気味が悪そうにしている。そりゃあ、そうだよな。
でも……嫌われるのは、嫌だなぁ……
そんな弱気なことを考えていたら、ユーノが……自分の身体を盾にするように、視線を遮った。
「全く……いつもいつも、無茶ばかりだね、キミは」
「悪いな……でも、いまさら変えられないんだよ」
自己満足言われようと……俺の馬鹿は、直るようなものじゃないらしい。
「もう、大丈夫だ……多分」
何とか、立ち上がれるくらいには……よいしょっと。
――ごりっ……
「……ごり？」
地面に突いた右手に、違和感。何か、手がゴリゴリする。
恐る恐る、再生したばかりの右手を見る。
「……なんじゃこりゃあああああああああああああ!?」
恐らく、骨格や筋肉を再生する際、巻き込まれてしまったのだろう。
俺の手の甲に……爆弾として使われていた瞳のような結晶体が、同化していた。
「取って！　これ取って！」
ぐいぐいとユーノに手を押し付ける。が。

「あ、あはは……ごめん、無理っぽい」
ユーノは、諦め気味の半笑い。
「神経系どころか、魔力のラインまで、ガッチリ癒着してる。多分、外科手術で取り出しても」
「取り出しても？」
「どこからともなく戻ってくる」
「怖！」
呪いのアイテムに取り憑かれてしまった！
「はぁ……」
俺達をあきれた目で見つつ、クロノがアースラと通信する。
「エイミィ、そろそろ回収を頼む」
『……』
が、エイミィからの反応は無い。
「エイミィ、どうした？」
『……』
空気が、緊迫していく。そして。
――ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……!!
紫色の魔方陣！
「来るぞ！」
敵の第二陣だ！
『オオオオオオ……』
魔方陣から出てきたのは、中世の騎士を模したような……巨大なロボットだった。
大きいが、力はそんなに強くない。ここにいる武装隊だけで、簡単に駆逐できるだろう。だが……
――ヴン、ヴン、ヴン……!!
転送魔方陣の数は、二つ、三つ、四つ……!!
「嘘……だろ……」
武装隊の一人が、絶望的な声を上げた。
結界内を埋め尽くす……巨人の軍団。数は、十や二十では利かない。

まさか、アースラとの『通信だけ』が通じていたのも……今になって通信が遮断されていたのも……全て、この絶望感を味あわせるための、プレシアの策。
プレシアは、俺がアルフを助け、爆弾を処理することまでも想定していたのか！
母艦との連絡は取れず、戦力はガタガタ。怪我人を何人も抱え、退却することも叶わない。そんな状態で、大量の敵と戦う……正に、絶体絶命だった。
――からん……
誰かが、デバイスを取り落とした。それを皮切りに、
「くっそおおおおおおおおおおお!!」
「ま、待て！　体勢を立て直してから……！」
クロノの制止も空しく、武装隊の一部の面々は……敵の機械兵へ、無謀に特攻していった。
一人、また一人と倒れていく武装隊の面子。
特に、年齢が若そうな奴ほどクロノの指揮を聞いていない。ただがむしゃらに、自暴自棄に、敵兵に突っ込んで、撃破されていく。
「くそッ！　世話が焼ける！」
爆発の余波で転がっていた、俺のバイクを起こす。
「ユーノ、アルフを頼んだ」
――キュルルル……キュルルル……
掛かれ、掛かれ……！
――キュボッ！
よし、まだ動く！
「秀人!?　無茶だよ！　身体は大丈夫でも、魔力が殆どすっからかんじゃないか！」
ユーノが俺の手を掴み、引き止める。
「怪我人を背負って逃げるくらいはできる！」
フェードアウトしていくユーノの声をバックに、駆け出した。
「うわあああああっ!?」
『オオオッ!!』

今まさに、振り下ろされようとしていた大剣。
「させるかあああああっ!!」
――ズギャギャギャッ!!
バイクごと横滑りし、局員を抱える。
――グリッ!!
自らハイサイドを起こし、片腕で強引に車体を立ち上げる。
――ドドドドッ!!
俺がギリギリで避けた場所に、無数のエネルギー弾が着弾した。
「す、すまない、助かっ……」「この馬鹿野郎！　クロノの指示に従え！　それができないならすっ込んでろ！」
勝手に行動して、それが結果的に部隊を危険に追い込んでいる事に気付いていない。全く……こんなヒヨっ子を最前線に送るなんて、時空管理局って組織は何考えてんだ！
ビルの裏にポイ捨てし、また新たな馬鹿を拾いに行く。
何人かを拾い、物陰に放り捨てる。
だが、あくまでもその場しのぎにしかならない。
何せ、敵は一向に減っていないのだ。
「くそ……魔力さえ回復すれば……！」
魔力さえ……魔力？
右腕に目をやる。甲に埋まった、八角形の水晶のような結晶体。
膨大な魔力を蓄積していた結晶体。
「ひょっとして……」
意識を右腕に集中する。
――どくん……
「!!　やっぱり！」
まだ、魔力が残っている！
あの爆発に比べたら劣るが、俺の魔力を満タンにするくらいには！
「はあああ……」
右腕から、ポンプのように魔力を吸い上げるイメージを描く。
乾ききっていたリンカーコアが、徐々に潤っていく。
『オオオオオ！』

一体が、巨大な戦斧を振り下ろし……
「せー、の！」
――ズドォン！
『アアアアアア……!!』
衝撃波に、粉々に砕かれた。
「よし!!」
復活！　プレシアの奴、置き土産で墓穴掘りやがった！
「行くぞこの木偶野郎オオオオオ！」
『『『『ゴオオオオオオ!!』』』』
飛行タイプ・騎士タイプ・重騎士タイプ。それぞれが、上空からエネルギー弾を撃ち、槍を突き出し、戦斧を振り下ろす。
バイクを飛び降り、スライディングで回避する。
「そりゃあああああっ!!」
――バッチイイイイイン!!
『ウグオオッ!?』
掌打でエネルギー弾を弾き返し……
「せええいっ!!」
――ガギョンッ!!
『グアッ!?』
渾身の撃ち下ろしで槍を殴り壊し……
「ディバイン……バスター!!」
――バゴオオンッ!!
『グオオオオオオ……!!』
砲撃で、重騎士の胴体をブチ抜く！
――ゴゴゴン……!!
三体が同時に爆発する。
「……っしゃあ！」
魔力の集中をかなり遅いスピードで行ったおかげで、身体への負担は少ない。ロボット兵どもの動きが、クロノやアルフに比べて緩慢なことが幸いだった。
地面に転がったままアイドリングしていたバイクに飛び乗り、再び

走り出す。
「クロノ!!」
低空を飛行していたクロノに併走する。
「ヒヨっ子は全員避難させた！　武装隊の状況はどうなってる!?」
苦々しく眉間に眉を寄せる。
「……ほぼ全滅だ。ベテランの局員も、若手のフォローをしている内に……」
「……そうか」
残っているのは俺とクロノだけか。
俺も魔力が回復したとはいえ、あれだけの数を相手にし続けるのは無理そうだ。
『オオオオオ!!』
目の前に、重騎士タイプが立ちふさがる。
「「邪魔だ!!」」
――ドゴンッ!!
クロノの砲撃が戦斧を握る腕を破壊し、バランスを崩した胴体を、インパクトで打ち砕く！
「お前、魔力残り何パーセントだ!?」
「３８パーセント。一応、まだ戦えるが……」
クロノの魔力の最大値は、俺やなのはの半分以下。長く戦えば戦うほど、不利になっていく。俺には魔力があるが、それを効率よく使うのが下手だ。
燃費とコントロール性に優れるが、パワーに乏しいクロノ。
パワーはあるが、燃費とコントロール性が劣悪な俺。
要は、俺とクロノを足して、２で割ればいい。
（……アレを、やるか）
あの時はただ夢中で、殆ど無意識だったけど……一度やれたなら、きっと!!
――ヴィイイイイイイイイ……!!
足元に、ミッド式魔方陣を展開する。
あの時の人数は、五人。さすがにレイジングハートの性能をフル活

用しなければできなかったが……今回は、たったの二人だ。きっと、俺だけでも出来る！
　ミッド式魔方陣。それを構成するうちの直線が、一本のラインになる。よし……このまま！
「クロノ！　行くぞ！」
「は!?」
　慌てて振り向くクロノに……
「繋がれ！」
　――バシュウウウッ!!
　そのラインを、クロノの身体にブチ当てる！
「うわっ……！　何をした!?」
　俺とクロノの間を、一本のラインが結んでいる。
「見てればわかる！」
　目の前に、再び複数のロボット兵が現れる。数は４！
「一借りるぞ！」
　苦手だった砲撃魔法のコントロール。それが、驚くほどスムーズに行える。
「ブレイズキャノンッ!!」
　――バゴゴゴッ!!
　発射された四発の砲撃は、狙い違わず、四体のロボット兵の胴体を、頭部を、粉砕した!!
「……僕の魔法を使ったのか」
　唖然とした様子のクロノ。
「お前もだ！　行け！」
「あ、ああ！」
　そして、Ｓ２Ｕを構え……
「スティンガースナイプ!!」
　本来ならば、牽制が主な目的の誘導弾は……
　――ギュガガガガガンッ!!!!!!
　敵の６体を、一瞬で撃破し尽した。
「……は？」

撃った本人が一番驚いている。
「何だ、このパワーは……!?」
「……すげえだろ、俺の魔力」
「君の……？　まさか」
「ああ。……リンカーコアを同調させた」
俺はクロノと魔力を共有し、クロノは俺と処理能力を共有している。
そう。俺があの時、４つのジュエルシードを完全封印した時に使ったのも、この方法だった。それぞれが勝手に、バラバラに魔力を放出してはロスが生まれる。
多気筒エンジンと同じだ。
完全な同調が取れた多気筒エンジンは……同排気量の単気筒エンジンよりも、数段上の　スペックを引き出すことが出来る！
今この瞬間、俺とクロノは……二人で一人の魔導師だ！
「行くぞ！」「ああ！」
俺は拳を。クロノはＳ２Ｕを構え……敵陣の真っ只中へ……！
「「うおおおおおおおおっ!!」」
突撃だあああああああ!!

# 第十七話

「ありえない!!」

薄暗い庭園の中、プレシアは傷んだ髪の毛を振り乱し、絶叫する。

「ありえるわけがないわ!!」

必勝の策だった。途中までは、思うようにいっていた。だが、あの少年がアルフに仕掛けた爆弾を処理した時には少々驚いたが、それも十分に想定の範囲内だった。

事実、少年は魔力を使い果たし、傀儡兵の大群を前に、屈しようとしていた。

あとは、仮想空間を砕き、消耗しているであろう白いバリアジャケットの少女から、悠々とジュエルシードを奪い、それで終わるはずだった。

なのに。あの少年はあっさりと蘇り、あまつさえ……

「リンカーコアを他者と同調……いえ、接続する……？　そんな馬鹿なことが!!」

だが事実、今も手元に表示される映像の中では、少年は執務官と共に、鬼神のような戦い様で傀儡兵を駆逐している。

針の穴を通すような精密さと、山をも砕きかねない威力を両立させた、ふざけた力で。

生粋の技術者たるプレシアが、集団での戦闘能力と、同時操作をひたすら追求した攻撃兵器が、紙くずのように！

「う……っ!!!」

――ビチャビチャビチャッ……

プレシアの口から、大量の血液がこぼれ出し、床を汚した。

「あああああ……！」

ふらふらと覚束ない足取りで、玉座の裏にある隠し扉を開く。

「どうして、皆邪魔をするの……!?」

がん、がつん、と壁や柱に身体をぶつけながら、そこへと歩を進める。

「私はただ……もう一度取り返したいだけなのにいいいィィ！」

叫ぶだけ叫び、先ほどまでの狂乱が嘘だったかのような、穏やかな笑みを浮かべる。
目の前には、溶液に満たされた巨大な水槽にたゆたう、幼い少女。
「ああ、ごめんなさいね。ビックリさせちゃったかしら？」
もう二度と返事などすることが無いであろう、水槽の中の少女に語りかける。
「大丈夫よ……お母さん、頑張るから。だから、待っていて頂戴……」
彼女の、名を。
「アリシア」
……四文字の、娘の名を。
◆▪◆　◆　◆
「はあああああっ!!」
一気呵成になのはに肉薄し、鎌を振るう。
――ガギィンッ!!
なのはが展開したシールドが、それを阻む。
やはり、硬い。なのはの防御は、フェイトの渾身の一撃を受けきった。
『Ｈｏｌｄｉｎｇ　ｓｈｉｅｌｄ』
バルディッシュの光刃が、シールドに噛まれる。
「くっ……！」
以前、このパターンで痛い目を見た。フェイトはすぐさま光刃を解除。
『Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ』
高速移動魔法で、必中の間合いから脱出する。そして……
『Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｂｕｒｓｔ』
――バゴォン!!
爆風に弄ばれ、一瞬だけ体勢を崩したところに、
「ディバイン……バスター!!」
桜色の砲撃が迫る！
「な……めるなあああああああ!!」
フェイトは、不安定な体勢から敢えて加速。とにかく、射線上から

自身を外すことだけを考える。結果、建造物のレイヤーに身体がぶつかり、少ないないダメージを受けたが、砲撃の直撃を喰らうよりはマシだった。
「しまっ……！」
砲撃を撃っている最中、なのははその場に足止めされる。
「もらったあああああ!!」
ディバインバスターとすれ違うように、再びなのはに迫る。
『ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
「シュート!!」
牽制の誘導弾。
フェイトは、バルディッシュを振りかぶり、
『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ』
光刃をブーメランのように発射。
「いっけえええええええ!!」
光刃は、なのはの放った誘導弾を纏めてぶった斬る！
飛び続ける光刃は、なのはの真正面。それは恐らく、簡単に防がれてしまうだろう。だから。
（挟撃！）
得意の高速移動でなのはの背後を取り、バルディッシュによるショックブローを……シールドの展開より速く、叩き込む！
『Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ』
だが、その攻撃は空振ってしまう。
「なっ!?」
いきなり目の前から消えた。そして、
「高速移動は」
聞こえる声は、背後!!
「フェイトだけが使えるわけじゃないんだよ！」
『Ｆｌａｓｈ　Ｉｍｐａｃｔ』
「このおおおっ!!」
――ギンッ!!
バルディッシュで、背中をガード。それが功を奏し、なのはの打撃

は不発に終わる。
「お返し……だッ!!」
振り向く回転動作に、攻撃を乗せる。
横薙ぎの一撃！
「チッ……！」
『Ｓｏｌｉｄ』
ソリッド。なのはは、物質強化魔法でレイジングハートの柄を強化し、
「「はあああああああああっ!!」」
――ッギイイイイイン!!!
火花が出るほどの勢いで、ぶつけあう！
『Ｉｍｐａｃｔ　！』
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｒｓｔ　！』
そして、示し合わせたように、衝撃波で互いを間合いから弾き出す。
「はぁっ……!!」
肺いっぱいに酸素を吸い込み、眼前を見据える。
白いバリアジャケット。同色の杖。
……自分より小さい女の子。
（強くなってる……前より、確実に!!）
だが彼女は、圧倒的な威圧感を放ちながら、フェイトの前に立ちふさがっている。
（おかーさん……！）
だがフェイトは、母への想いでその重圧を跳ね飛ばす。
（また二人で、ピクニックに行くんだ……！）
記憶が、フラッシュバックする。
見渡す限りの草原。そこにシートを広げ、母とたくさん話をして……また優しく、自分の名を呼んでくれるのだ。そう、『フェイト』と……
『アリシア』
「……え？」
ぱきん、と、何かが割れた。そして、堰を切ったように、今まで曖

昧にしか聞こえなかった……いや、聞こうとしてこなかった四文字が、母の声で再生される。
『おいしい？　アリシア？』
『アリシアは、甘えん坊さんねぇ』
『アリシア』
『アリシア』
プレシアが呼ぶのは、フェイト以外の誰かの名前。
（おかーさん……違うよ。ボクは、ボクは……）
あの、優しい笑みは……一体、誰に向けられたものだった？
フェイトは、ぶんぶんと首を振る。
（どっちでも、いい！）
自分が『フェイト』でも、『アリシア』でも。
（おかーさんが笑ってくれるなら、ボクは!!）
そのために、ただ全力で……目の前の敵を、打ち砕くだけ！
「行くよ……!!」
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』
発動するのは、フェイトが最も得意とする攻撃魔法。だが、その規模は……フェイトの側面、数十メートルにまで魔力スフィアを展開する程だ。
「……やばっ」
なのはは、すぐさま危険を察知し、射程外への退避を試みる。が。
――ガチンッ……
「あっ、しまった！」
バインドにより、両腕を拘束されてしまう。
『Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ』
フォトンランサー・ファランクスシフト。
『個々の威力に劣る分を手数でカバーする』というフェイトの戦術理念を反映した、フェイト最強の攻撃魔法である。
いかなる防御であろうとも、３８の魔力スフィアによる一斉掃射を受ければ削りきり、落とす事ができる。そう自負している。
「これが！」

フェイトは詠唱を終え、空中に磔にされるなのはを睨み付ける。
「ボクの！」
そして、バルディッシュを振りかざし……!!
「全力だあああああああああああ!!」
――キュドドド

した。
煙が晴れたそこには、ズダボロになったなのはが、海面に向かって落下している筈だった。
だが。
フェイトの宿敵たる彼女。高町なのはは。
「……うそ」
健在だった。
当然、無傷とはいかない。
バリアジャケットは原型を留めないほどに破壊され、露出した素肌は、打撲による内出血で浅黒く変色している。レイジングハートにも、あちこち亀裂や欠損が見受けられる。
だが、確かに立っている。
「今度は」
静かな声。それに、フェイトは思わずビクッと身をすくませる。
「こっちの番!!」
『Ｃａｎｎｏｎ　ｍｏｄｅ』
ぎしぎしと、可動部分に破片でも入り込んだのか、ぎこちなく変形を行う。
「避けたいなら、避けていいよ」
その減らず口にカチンときた単細胞なフェイトは……
「来い！　このやろー!!」
バルディッシュを目の前にかざし、防御魔法に目いっぱい魔力を注ぎこみ、強度を上げていく。
『Ｓｉｒ．』
バルディッシュが警告を促す。
「うっさい！」
……その向こうで、なのはが……『掛かりおった！』とでも言いたげに『にやり』、もしくは『にたり』と笑っていたことについては、言及しないでおこう。
「ディバイン……!!!」
――チュイイイ

イイイイイイ……!!
「う、う……」
チャージが、長い。フェイトの脳裏に、じわじわと後悔が浮かんでくる。
（逃げてれば……よかったかなぁ……？）
顔を引きつらせながら、自分の選択に首をかしげるのだった。
『……Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ』
バルディッシュの返答も、どこか投げやりだった。
「バスターーーー

「……くっ、あはははは……！」
耐えた！　耐え切った！
フェイトは、思わず哄笑する。
『Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ』
――バキィン！
「……あ？」
その両足、右手に、桜色のリングが巻きつく。
「なに勘違いしてるの……？　まだだよ」
聞こえる声。それは、遙か天空から。
見上げた先。そこに、高町なのはが、レイジングハートをこちらに向け、佇んでいた。
「は……ハッタリだ！　もう、魔力なんてカラッポのくせに！」
バインドを力ずくで解除するだけの力は、残っていない。持続時間いっぱいまで、この場に拘束されることは、確定している。
「魔力なんて」
なのはは、笑みを崩さない。
「そこらへんに、いくらでもある！」
その言葉に呼応するように……
『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ　！』
「使い切れずにばら撒いた魔力を……」
円環が、回る。
「もう一度、自分の下に集めて、再利用する……!!」
自分に確かめるように、言葉を反芻する。
「収束、砲撃」
ぽつりと、フェイトが口にする。フェイトが、ついには習得できなかった技術だ。それを、目の前の少女は使っている。
回る。そして、集まる。桜色の粒子と、金色の粒子。
「ああっ、それボクのじゃん!!　ズルい!!」
抗議するフェイトに、なのはは、クワッと目を見開き……
「――――勝てばいいのよ!!」
……勝利の鬼と化したなのはには、そんな抗議は通じなかっ

た。
「レイジングハートと」
ぎゅるん、ぎゅるん……と、回転する円環の中心部に、明るい光が生まれる。
「ユーノくんと」
それは、あっというまに膨れ上がる。
「秀人さんと一緒に考えた、知恵と戦術」
遂には、直径５０メートルにも膨れ上がり、今か今かと発射の瞬間を待ちわびている！
「最後の……最強の切り札!!」
じゃきん、と、レイジングハートを振り上げ……！
「受けてもらうよ……」
それは、星の光。
「これが私の、全力全開!!」
そして、発動のキーとなる、トリガーボイスが紡がれる。
「スターライト……!!」
魔力スフィアが、一瞬だけ萎み……解放の瞬間を、迎えた。
「ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
鉄槌の如く、振り下ろす!!
「ちっくしょーーーーーーー!!」
やけっぱちに、残る全ての魔力を防御魔法として放出する。
大中小からなる、五重の円錐状バリア。
正面からの攻撃に対しては、絶大な効果を発揮するそのバリアは、果たして。
――パリイイイイン……
「あ……」
呆気なく、第四層までを貫通。第五層……最後の一枚にも、致命的な罅が入っている。
それが、紙くずのように破られ、身体に直撃するまでの数瞬。フェイトは、ただ一つのことを、考えていた。
――ボクの、負けかぁ……

だが、不思議と悔しさは感じない。
母より遺伝した莫大な魔力と、リニスに教わった戦い方、そして、アルフと共に磨き上げた技術。
己の全てを出し切ったフェイトは、生まれて初めて……充足感と共に、桜色の暴風雨に身を任せた。

# 第十八話

フェイトが『大事な勝負』のため、クロノに連れられて行った、そのしばらく後。
二人の少女が、『高町』と表札が掛かった家の前に立っていた。
「……ここ、ね」
一人は、金髪碧眼。気の強そうな吊り目の少女、アリサ・バニングス。
「うん、間違いないよ」
もう一人は、黒髪黒目。柔らかい雰囲気の少女、月村すずか。
二人が何をしにきたのかと言えば……
「……高町、いるかしら」
「もう、緊張しすぎだよ」
なのはに、あの日の謝罪をするためだ。子供なりに行動力を発揮し、なのはの住所録を調べ、ようやく辿り着いた。
アリサの手には、紙袋。中には、あの日破いてしまった上着が入っている。月村家のメイドによって完璧に修繕され、さりげなくワンポイントまで追加されていたりと、サービス満載だった。
本来であれば、すずかが渡すのが妥当なのだが……アリサが、どうしても自分で渡したいと頼み込んだのだ。
「ええい、死なばもろとも！」
どこか間違った掛け声とともに、インターホンを勢い良く押す。
――ピンポーン……
そして、玄関のすりガラスの向こうにシルエットが浮かび、ドアが開いた。
「はぁい、どちら様？」
出てきたのは、高町桃子。
「ええと、高町……なのはさんの、お姉さまでしょうか？」
すずかが丁寧に対応する。桃子は『姉』という言葉に苦笑し、改めて自己紹介をする。
「いえ。私は、なのはの母です」

二人は、ポカーンと口を半開きにし……
「母ァ!?」
全く同じタイミングで、驚愕の叫びを上げた。まぁ、驚くのも無理は無い。とても三人の子持ちとは思えないほど若々しく、髪の色も、顔立ちも、なのはと瓜二つなのだ。母というよりは、姉と紹介されたほうがまだシックリくる。
「……とりあえず、中へどうぞ?」
「失礼……」「します……」
二人は、促されるまま玄関を潜る。
恭也と美由紀は、しばらく行っていなかった翠屋へ行き、開店に向けて掃除と仕込みを始めている。なので、今は桃子一人だった。
「それで……今日は、どのような御用?」
桃子が淹れた紅茶の味に驚いている二人に、用件を聞く。
アリサが、それに応じた。
「服を返しに……あと、謝りに」
桃子は、詳しくは聞かなかった。それは、当人達の間で解決すべきことだったから。
「んー……なのはは、しばらく帰ってこないわ」
困ったように、寂しい笑みを浮かべる桃子。
『しばらく』には、どういった意味が込められているのか……それを、二人が知る余地は無かったが。
「何なら、私からなのはに伝えておくけれど……」
「いえ」
アリサは、きっぱりと固辞した。
「私が直接言わないと、意味が無いんです」
なのはへの謝罪を、人づてに済ますのは不義理に尽きる。
「そう。　……ちょっと待っててね」
電話機の傍に置いてあったメモ帳とボールペンを手に、戻ってくる。
そして、メモ帳にボールペンを走らせる。
書き終えると、そのページをぴりっと切り離し、二人に渡した。

「それ、なのはの電話番号とメールアドレスよ」
「……」
じっとそれに見入るアリサ。ポケットから携帯電話を取り出し……
「ああ、今日はきっと出ないわよ？」
ずるっ、と、椅子の上で器用にずっこけた。
「今日、大事な勝負があるって……」
「「勝負？」」
なにやら穏やかではない単語に、怪訝な顔をする二人。
「えっと、勝負って……？」
「簡単に言えば……」
そこでしばらく迷う桃子。
簡単に言い表すのは難しいと、言ってから気がついたらしい。どこかずれているところは、なのはと似ていた。
「そう、」
ぽん、と手を打ち、ようやく口にした。
「意地っ張り同士の、意地の張り合い？」
かち、こち……
時計の秒針が、いやに大きく鳴った。
「……すみません、分かりません」
アリサ、降参。
「……あらー？」
桃子は一人、首をかしげるのであった。
◆▪◆　◆　◆
「ぜぇ～……！　ぜぇ～……！」
私は、肺を総動員して酸素を取り込む。実戦で撃ったのは初めてだけど……反動が、予想以上にキツい。気を抜いたら、飛行魔法が維持できなくなってしまいそうだ。
でも……！
『魔力反応、消失。全ての魔力を削り取りました』
レイジングハートが告げるのは、私の勝利！

「……やった」
とうとう私は……あの強敵を下したんだ！
「やったあああああぁぁ……ゲホッゲホッ……！　勝っ、ゲフッ！」
『落ち着いてください、マスター』
落ち着け私。
「レイジングハートの……みんなのおかげだよ」
ぎゅっ、と罅割れたレイジングハートを抱き寄せる。
「ごめんね。私も、魔力ギリギリだから、修復はまだ後で……」
『構いません。ところで、マスター』
「ん？　なぁに？」
『彼女が溺死寸前です』
「へ？」
スターライトブレイカーの着弾地点……そこに、水泡が浮かんでいる。
更に目を凝らすと……
「がぼがぼがぼがぼ……！」
水中でもがくフェイトの姿が見えた。
「ふぇ、フェイトオオオオオ!?」
飛行魔法で加速し、勢いのまま水中に潜り、フェイトを救出。水上に上がり、何とか破壊を免れた廃ビルの傾いた屋上に、フェイトを寝かせる。
「ううう……」
青ざめた顔で呻いている……
とんとん、とんとん、と背中を叩く。
「げぇっほ！　げほっ……おえぇ……！」
身体を丸め、喉の奥から、たんまりと水を吐いた。
「し、死ぬかと思った……！」
「ご、ごめん……まさか、泳げないなんて」
うかつだった……戦いで体力を消耗しているのに、水泳なんてハードな運動が出来るわけ無いのに。

「違ーう！　キミの砲撃で、だ！」
「……え？」
嫌だなぁ、人聞きの悪い。
確かに、ちょっとばかし強い攻撃だったかもしれないけど……
「なんだよあの無茶苦茶な馬鹿魔力！　死ぬぞ！　ボクじゃなくても死ぬぞ!?」
ぎゃーぎゃーと怒り狂っている。
「もう、大げさなんだから」
「大げさなもんか!!」
立ち上がろうとするも、足に力が入らないようだ。
「ほら、まだ動かないの」
ふらつくフェイトを寝かせ、膝枕の体勢に持っていく。丁度、フェイトの顔を上からさかさまに見下ろす形だ。
ひとしきり騒いで、私もフェイトも、呼吸が整ってきた。
膝枕でフェイトを休ませながら、作り物の水平線を見渡す。
「いやぁ……なーんにも無いねぇ」
ちょっと……予想以上だったかも。私達がいるここ以外、見渡す限り水面だけだ。
「……『壊れた』んじゃなくて、『消し飛んだ』んだぞ」
ちょっととがめる様な口調。
見下ろすと、フェイトの真っ赤なルビーのような瞳が、私を見上げていた。
「まぁ……必殺技だし？　これくらい強力でも……」
「いいわけあるかっ!!」
フェイトが、頬を膨らませて噛み付いてきた。
しばらくにらみ合い……
「「ぷっ……」」
どちらからともなく、吹き出した。
「あはははっ……！　いいじゃない、別に！」
「くふふっ……あっはははは！　良くない！　絶対良くないよ！」
「あはっ、あはははっ……何笑ってるの、フェイト……！」

「ふふふふふ……!!　キミこそ、笑いながら戦略兵器ぶっ放すなよ！
　あはははは!!」
「せ、戦略兵器!?　何ソレ、あはは！」
「だって、ドカーンって、廃ビルまとめて吹っ飛んだんだよ！　あは、
はははは!!」
「吹っ飛んだんだ……!?　すっごーい！　あーはっはっはっは!!」
「キミがやったくせに、何驚いてるんだよ……ぷぷぷっ!!」
　げらげらと、馬鹿のように笑い転げた。
「ねぇ、フェイト？」
「ん？」
「私の、勝ちだよね」
「……うん。ボクの負けだ」
　フェイトは、どこか晴れ晴れと、負けを認めた。
「全部、出し切った。力も、技も……意地も」
　もうフェイトは、偽悪の仮面を被っていない。
　少し乱暴な、普通の女の子が、そこにいた。
「約束、覚えてるよね？」
　あの夜、縁側で交わした約束。
「私が負けたら、ジュエルシードを全部あげる」
「ボクが負けたら、何でも言うこと聞く……だっけ？」
　そう。全ては、このときのために。
　フェイトと、友達になるために。
　今こそ、言おう。
「あのね……」

『なのはちゃんっ!!』
　ぶっちん、と、通信回線が乱暴に開かれた。
「うるさいなぁ……！」
　なんてタイミングの悪い。下らない用事だったら容赦しないよ？
『大丈夫!?』
「ああ、うん」

大丈夫、と言い掛けて。
『ひどい……！』
仮想空間の中。私の最大砲撃で根こそぎ消し飛んだ建造物を見て、エイミィが戦慄している。ひどいって。
『一体、何があったの!?』
「ええと……」
説明しづらい。
『まさか、またプレシアの次元跳躍攻撃!?』
「いや、その……」
つまり何か。
今のこの惨状を作り出すには、プレシア並みの攻撃力がいるってことか。
『って、周辺魔力がほぼゼロ!?』
収束砲のエネルギーになりました。
『まさか……集積型の魔力爆弾が!?』
言うに事欠いて……！
「ブフッ……!! ば、爆弾だってさ！ くくくくく……!!」
膝の上で、フェイトが腹を抱えて笑いを堪えていた。
だが、その後の一言で、空気が変わった。
『それとも、こっちにも襲撃があったの!?』
「こっち、にも……？」
『あ、やば……』
エイミィが失言に気付き、慌てた声を出した。
「どういうこと!? ちゃんと説明して！」
やがて観念して、事情を説明し出した。
この仮想空間と外が、完全に切り離されていたこと。
アルフが、爆弾を仕込まれて寄越されたこと。
「アルフに……!? そんな……そんな!!」
フェイトには衝撃が大きかったらしく、モニター内のエイミィに詰め寄った。
「アルフはどうなったの!? ねえ!?」

「フェイト、落ち着いて！」
腰の辺りを掴み、抱き寄せる。
「落ち着けるわけが……もごっ！」
その口を、掌で塞ぐ。
「いいから！　黙って聞きなさい！」
「うーーーー!!」
涙が滲む目で、私を睨み付けるフェイト。
「心配なのは、よくわかる。でも、今ここでフェイトが暴れても、何にもならないんだよ」
私だって、冷血漢じゃない。フェイト程ではないにせよ、それなりに面識のあるアルフに命の危険があると知らされて、何も感じていないわけが無い。
でも、だからこそ……今は、冷静にならないと。
「それで、アルフに仕掛けられた爆弾は？」
最悪の結果を覚悟し、聞く。
『それは、大丈夫。秀人君が、なんとか摘出してくれた』
ほう……と、安堵する。
「あ、あ……」
フェイトの動きが止まり……ふにゃっ、と弛緩する。どうやら、アルフが無事とわかって、一気に緊張が解けたらしい。
『でも』
そう。あのプレシア・テスタロッサが、その程度で済ますような、諦めのいい奴じゃないということは、よく知っている。
『多分、今も……クロノくん達は襲撃を受けている』
策が一つで終わりというわけはないだろう。万が一のときのために、保険を二重にも三重にも用意しているはずだ。
『爆弾を摘出した途端に、通信や操作が全部遮断されちゃったから、詳しくは分からないけど……』
秀人さん達を孤立させて、戦力を削ぐ気でいるに違いない。そして、護衛がいなくなったところで……
「次は、私ってこと？」

私の持っているジュエルシードが、プレシアの最大の標的だろう。
『多分……ううん、間違いなくそう。
そこはある意味一番の安全区域だから、二人は、そこで待機するようにっていうのが艦長の指示』
今すぐにでも、秀人さん達を助けに行きたい。でも、魔力も体力もカラッポのままでは、行っても足手まといになるだけだ。
悔しいけど……本当に悔しいけど、今はここでじっとしているしかない。
「アースラからの救援は？」
増援でも何でも、秀人さん達が無事でいてくれるならそれでいい。
『全力で結界に干渉してるんだけど、まだ小さな穴しか開けられていない状況が続いてる。だから、増援も、医療班も……』
「くそっ……!!」
何か無いの!?
（考えろ、考えろ……!!）
何かあるはずだ……!!
――未だに、
……そうだ
――小さい穴しか……
「エイミィ!!」
私には出来なくても!!
私は、胸元のレイジングハートを握り……
◆▪◆　◆　◆
「だああらっしゃあああ!!」
――バギンッ!!
頭部を殴り砕かれた傀儡兵が、重い音を立てて地面に転がる。
「クロノ！　何体倒した!?」
「五十から先は、数えていない!!」
――ズガガンッ!!
誘導弾で傀儡兵を蜂の巣にしながら、クロノが答える。
「ああもう、何体隠し持ってるんだよ！」

――ガゴンッ!!
騎士タイプの胴体に風穴が開く。
俺とクロノは、リンカーコアを『結んで』いるおかげで、完全に消耗するまで、まだ猶予がある。だが、結界をたった一人で維持しているユーノは……
「ユーノ、大丈夫か!?」
ユーノともリンカーコアを『結ぶ』こともできるけど、そうすると、結界の維持なんて高度な計算をしているユーノに、余計な負担をかけることになってしまう。
「うん、大丈夫……!」
言葉とは裏腹に、額にはびっしょりと汗を掻き、膝は震え、今にも崩れ落ちそうだ。
「後援が来れば、負担も減るから……」
アースラの連中だって、いつまでも指をくわえて眺めているなんてことは無い筈だ!
「それに、」
にやっ、と、ユーノには珍しく、不敵な笑みを浮かべる。
「ここで負けたら、なのはに、顔向けできないからね……!! 絶対に死守する!」
たとえ戦闘に参加できずとも。ユーノは、果敢に戦っていた。
通常なら、アースラの出力に頼るか、何人かで交代しながら維持するような結界を、長時間、たった一人で支え続けている。いかにユーノが優秀な結界魔導師だとはいっても、疲労は蓄積する。傀儡兵に襲われでもしたら、無防備なまま攻撃を受けてしまうという緊張もあるはずだ。だがユーノは、俺達を信じ、全力で結界を支えている。
「……アースラのクルーは優秀だ」
その姿に思うものがあったのか、戦闘時には無口なクロノが、口を開いた。
「きっともうすぐ、干渉を無効化して増援が来る。だから……!」
『Ｂｒａｋｅ　Ｉｍｐｕｌｓｅ』
――チュイイイイイイイイン!!

傀儡兵を振動波でバラバラに分解しながら、クロノが叫ぶ。
「もう少しだけ持ちこたえろ！　フェレットもどき！」
ユーノへの激励を！
『グオオオオオ！』
「「すっこんでろ!!」」
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ　！』
――バガアアアアンッ!!
二発の砲撃が、重騎士タイプの装甲を爆破。副次効果の爆裂が、内部機構を滅茶苦茶に引き裂いた。とりあえず、第……八陣くらいか？……までを片付けた。だが、おかわりとばかりに、また転送魔法陣が出現し、何体もの傀儡兵が顔を覗かせる。
「残存魔力、３１パーセント……」
三分の一を切ったか。もし魔力が切れたら……と、そこまで考え、頭を振る。
（『もし』『たら』『れば』は、その時になったら考えろ！　今は、目の前の敵をブッ潰せ！）
俺は、拳に魔力を纏わせ……
『クロノくん、秀人君！』
――待ってました！
少しばかりノイズ混じりの、随分と懐かしい声が聞こえた。
『遅れてゴメン！　状況は!?』
すぐに、クロノが声を張り上げる。
「術者が限界だ！　結界の維持を！」
『了解！』
――ヴンッ……
返事とほぼ同時、
「……はぁっ、はぁっ！」
ユーノが地面に手を突き、そのまま崩れ落ちる。　本当に……よく頑張ったな、ユーノ！
「他に、怪我人が多数いる！　転送ポートは開けないのか!?」
応急手当しかしていないアルフと、武装隊のヒヨっ子ども。今も、

後ろのビルの中に引っ込めてある。ユーノと共にアースラに回収してもらうことができれば、自由に動き回り、遊撃に打って出ることが出来るようになる。いつの時代も、大変なのは拠点防衛戦だ。
『ごめん、今、全力で解析にあたってるから……』
あー……そう都合よくはいかないか。
『でも、援軍はいるから！』
そして、俺の目の前に、直径１０センチ程度の、極小の転送ポートが開いた。
『秀人君、これを！』
僅かに開いた転送ポート。そこから、心強い『援軍』が現れる！
『お久しぶりです。生きていますか？』
赤い宝石。レイジングハート！
「一応な！　手ぇ貸せ！」
『了解しました』
ある意味、誰よりも心強い援軍だ！　これで、自分の魔法が使える！
レイジングハートを右手に握る。
結晶体とレイジングハートが擦れ、かりっ、と硬い音を立てた。
『？　何ですかこれは？』
「ああ、これか」
右手が吹っ飛んだことをぼかして、説明する。
レイジングハートは『またですか』と、ため息一つで納得するだろうけど……なのはは、間違いなく怒る。そして泣く。というわけで、黙っておくのがベストだ。
『恐らく、無尽蔵に魔力を吸収し、蓄積するタイプのロストロギアでしょう』
レイジングハートは、そう結論付けた。
『簡単に言えば、ジュエルシードの亜種です』
多分だけど、ジュエルシードに辿り着くまで、プレシアが収集してきた候補の一つ。
とはいえ、さっきの魔力補充で完全に沈黙し、今はただの無機物に

なっている。
魔力を補充した、という話を聞いたレイジングハートが、何やら思案顔（顔無いけど）で考え込む。
『吸収……ですか』
――バキャッ!!
騎士タイプの頭部を握り潰す。
「打開策、何か出してくれよ！」
正直、クロノと連携する以上の考えなんて浮かんでこない。前にレイジングハートが言ったとおり、瞬間の閃きこそ強いが、長時間思考し続けることには滅法弱い、ドラッグレース仕様の脳みそだ。
『賭けになるかもしれませんが、よろしいですか？』
「このままじゃ、どうせまた魔力が切れる。それなら、お前に賭けるよ」
今までだって……レイジングハートの言うことが、間違っていたことなんて無いんだから。
レイジングハートはしばし黙考し、『ある術式』を起動した。
『Ｓｔｅｒｌｉｇｈｔ』
スターライト。
周辺に散らばった魔力を集め、再び利用する技術。攻撃にも、防御にも転用できる、かなり実戦的応用的な術式だ。
でも、何でだ？
「俺、スターライトには適性が無いんじゃ……」
練習の時は、いくら集めても、それを留めておくことが出来なかった。
『こればっかりは、適性ですから』
と、レイジングハートも無理に習得をさせようとはしなかったのに。
「……賭けにもなってないぞ」
練習で使えなかったものが、いきなり本番で使えるようになるなんて……フィクションの世界だ。
『ええ、確かに。以前の秀人なら、無理でした』

粛々と術式の発動を準備しながら、続ける。
『あなたの右手。そこに埋まっている物は何ですか？』
へ？　右手？
「ええと……カラッポの魔力結晶」
『その働きは何でしたか？』
確か……
「無尽蔵に魔力を吸収する……ああ!!」
そういうことか!!
理屈としては、筋が通っている。
魔力を『集める』ことはできるが、『留めて』おけない。だから、『留める』役目を、右手の魔力結晶に頼る。
だが、魔力結晶が一回こっきりの使い捨てタイプだったり、蓄積に長い時間が必要だったりしたら、もうアウトだ。
「ははっ……確かに、賭けだな」
リスクは高いが、リターンがあるかどうかも分からない。でも。
「やるぞ」
『よろしいのですか？』
レイジングハートが、少し驚いたように確認を取る。
たとえ、クロノに止められても、俺はやる。何故なら……
「俺は、お前を信じてる」
レイジングハートは、何度も何度も戦いを共にしてきた、仲間だから。仲間を信頼するのに、理由はいらないだろ？
「だからお前も、俺を信じてくれ」
『……』
レイジングハートが黙り込み……
『スターライトを、アカウント・吾妻秀人に合わせ、再編成。完了』
術式を、書き換えた。
「行くぞ！」
目を閉じ、意識を集中。自分を中心に、渦巻くようなイメージを描く。
――ギュイイイイイイイ……!!

そして……集まってきた魔力を、右拳の結晶体に。
だが。
シン……と、結晶体は沈黙したままだ。
（頼む……）
俺は、霧散していこうとする魔力を必死に繋ぎとめ、結晶体に送り続ける。
だが、しばらく経っても結晶体に変化は見られない。
駄目、なのだろうか。やはり、そう都合よくは行かないのだろうか。
（頼む……）
でも。
（頼む……!!）
それでも。
俺は、レイジングハートを信じると決めたんだ！
――ドクン
と、結晶体が、鼓動を刻んだ。
――ドクン、ドクン、ドクン、ドクン……!!
行ける。行ける!!
結晶体と、リンカーコアの鼓動。
バラバラのそれらを、時に押さえ、時に解放し、徐々に、徐々に同調させていく。
――ドクンッ!!
一際強く、弾けるような鼓動を刻み……!!!!
「いッけえええええええええええええ!!」
そして……
――ギュゴアアア

「さて」
睥睨する先には、うじゃうじゃと傀儡兵の群れ。そいつらは、けが人を避難させているビルを目指していた。
「片付けるぞ！」
『Ｈｅｒｅ　ｗｅ　ｇｏ　！』
魔力結晶に吸いきれなかった魔力のカスが、俺の身体を中心に、放射状に広がっていく。なのはのスターライトとは、逆に……そう。
『Ｓｔｅｒ　ｄｕｓｔ』
星屑のように。
決めた。この技の、名前は……！
「スターダスト……!!」
手刀に構えた右手を、居合い切りのように、腰に構える。
『『『『『グオオオオオオオオ!!!!』』』』』
危険を感じ、方向を換え、俺に殺到する傀儡兵。でも、もう遅い!!
膨大な魔力を……俺の得意な衝撃波として……！
「ウォーーーーーーーール!!」
一気に、振り抜いた!!
そして発生する、桁違いに巨大な、魔力の大津波。
――ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!
それは、進行方向にあったアスファルトを、ビルを、天高くまで舞い上げ粉砕し、傀儡兵どもへと押し迫る！
効果範囲は……上は結界最上部。横は結界全幅。つまり……結界の端から端まで。
「逃げられねぇぞ、鉄クズ」
――……ゴアアアアアアアアアアアアッ!!!
元々、装甲は大して厚く無かった傀儡兵どもは……悲鳴も無く爆砕され、ただのスクラップへと成り果てた。
――ガランッ……
装甲の一部が、禿げたアスファルトとぶつかる。それを合図に、俺は戦闘態勢を解いた。

「ふう～……キツかった」
――ヴ……
転送魔方陣が出現し……
――……ウン
すぐに消える。癇癪を起こしたように、何度も、何度も……
「無駄だ。もう、お前の転送魔法は届かない」
俺は、きっと見ているであろうプレシアに宣言する。
「ジャミングは、お前の専売特許じゃない。少しは考えておくべきだったな」
先ほどの、収束魔力波。
アレにはわざわざ不純物を混ぜた、結界全域にバラまいておいた。それらは、レーダーを乱反射させるチャフの役目を果たし、遠距離からの干渉を防ぐ。近距離……つまり、結界の中にいればさほど影響は無いが、このプレシアのようなタイプには効果的なはずだ。
「安全圏から一歩も出ずに、高みの見物を決め込むつもりだったんだろうけど……残念だったな」
俺は、今にも直立を放棄しそうな両足を叱咤し、余裕を装って天を見上げる。
さぁ、どう出る？
諦め悪く出現と消失を繰り返していた転送魔方陣が、止まり消えた。
そろそろ、来る……
『おォのれええええええええええええ!!』
ビリビリと、叩きつけるような殺気を含んだ声が、結界中に響き渡った。
この声が。こいつが！
「プレシア・テスタロッサ!!」
俺は、全身で殺気を受けながら、その名を呼んだ。

# 第十九話

　初めて聞くプレシアの声は少し低く、こんな激情にまみれていても、高い知性を感じさせた。
『お前は……なぜ私の邪魔をする!?』
　なぜ、か。
　思わず失笑が漏れる。
「別に、ご大層な理念でお前の邪魔をしているつもりは無いよ」
　正式な管理局員ではないし、次元世界の平和だの、俺の手には余る。
「俺の家族と、その周辺を守ろうと思ったら……結果的に、お前の邪魔をするようになった、っていうだけの話だ」
『ふざけるな……!!　そんな下らない理由で!!』
「ふぅん……それじゃあ、お前にはあるんだろうな？　下らなく無い理由が」
　今のプレシアは、冷静さを欠いている。もしかしたら、目的を聞き出すことができるかもしれない。
「お前、あんな危険なものを集めて何をしようとしてる？」
『そんなこと、お前には「まぁ、最も」
　間髪入れず、その言葉を遮る。
「お前には何も出来やしないけどな。お前の手元には、たった九つしか無いんだから」
　通信の向こうで、ギリッ、と歯を食いしばるような音がした。
『寄越しなさい……!!』
「嫌だね」
　誰がお前みたいなキチガイに渡すか。
『それは、私たちに……私とアリシアに必要なのよ!!』
　アリシア？
「それは、誰だ？」
　……プレシアが、ああまでしてジュエルシードに執着する理由。それが、『アリシア』らしい。人名っぽいけど……

『あああああああ!!』
その質問には、答えが返ってこなかった。何かが砕けるような音と共に、通信が切れてしまった。
「……悪い、クロノ。お前ほど上手くは出来なかった」
これは、本来なら執務官（警察官と検察官と弁護士を混ぜたような職業）であるクロノの出番だったのだろう。ついでしゃばってしまった。
「いや、十分だ。よくやってくれた」
労ってはくれるが、引き出せた情報は一つだけ。『アリシア』という名前。
「誰なんだろうな、アリシアって」
プレシアの大事な人……うーん、想像付かない。
そういえば、クロノは犯人のプロフィールに目を通していたんだっけか。
「クロノ、知ってるか」
「……まぁ、な」
何故か、クロノは言葉を濁す。
「……？」
何か、言いづらい事情でもあるのだろうか。
そこに、いつものごとく明るいながら、色濃く疲労を感じさせるエイミィの通信が入ってきた。
『秀人君。転送ポートの準備、ＯＫだよ！』
「……ま、戻るか」
アルフの傷も、止血しか出来ていないし……
「なのは達は？」
『もうアースラに回収済み』
勝敗は……まぁ、聞くまでも無いか。
「……戻ったら、話そう」
クロノは、考えた末にそう言った。
「頼むぞ……よいしょっと」
盛大にいびきをかいて眠るユーノを背負う。

「ふあぁぁ……」
俺も、さすがに眠いな……戻ったら、どこかで寝よう。
◆▪◆　◆　◆
「アルフ……アルフッ……!!」
フェイトは、アースラの廊下を全力で疾走していた。とはいえ、疲労が抜けるまでまだしばらく掛かるらしく、へろへろと覚束ない足取りだった。
あまりにも危なっかしいので、私が手を引き、先導していた。
「走らなくてもいいってば……今、手術してるらしいから」
手術とはいっても、そこまで大仰なものではないらしい。せいぜい、臓器などに損傷が無いかどうかをスキャンし、問題なければ腹部の傷を縫合するだけで終わるそうだ。
秀人さんによって無理やり摘出された魔力結晶。あれは、本当にただ『仕込まれて』いただけであって、臓器などに『埋め込まれて』いたわけではなかったのが、幸いだった。
もし臓器など……心臓に癒着していたなら、万事休すだったけれど……なぜプレシアがそうしなかったのかは、今のところ分かっていない。
そして、手術室の前まで来る。私にはミッドチルダの文字は読めないが、扉の上でランプが点っているところを見ると、今もまだ手術が行われているらしい。
「ぐ～……ぐ～……」
「……ふが」
そこに設置されていたベンチで、秀人さんとユーノくんが、いびきをかいて眠っていた。その傍らには、くしゃくしゃに乱れたタオルケットが落ちている。どうやら、ズリ落ち
てしまったらしい。
疲労の度合いで言えば、私達より遙かに高いのだから仕方ないのかもしれない。
「もう……カゼ引くよ、二人とも」
ふたりにタオルケットを掛け直す。

秀人さんの首に掛かったままのレイジングハートが明滅し、私に声をかけた。
『二人とも、単純に魔力切れ・体力切れです。一日も寝れば、回復するでしょう』
「そっか」
私達の勝負には、最初から最後まで、一切の邪魔が入らなかった。
私が完全に消耗し切り……ジュエルシードを奪うには、絶好の機会だったにも関わらず。
「また……助けられちゃったね」
ありがとう、二人とも。
と、感傷に浸る私の視界の隅で、金色の髪の毛が、ふらふら、ふらふらと……
「う～……う～……」
フェイトが、手術室の前をうろうろと行ったり来たりしている。
行って、ちらっ。手術中（たぶん）を示すランプを見上げる。来て、ちらっ。また見上げる。うろうろ。ちらちら。
「少し落ち着きなよ」
ぴたっと立ち止まり……
「だって、アルフが……アルフがぁ……」
泣きそう……というより、泣く寸前みたいな顔で、振り返った。
「はぁ～……」
手の掛かる子……
「こっちおいで」
袖を引っ張り、無理やり私の横に座らせる。
「リンディさんの話、聞いたでしょ？　命に別状は無いって」
戻ってきた時、最初にその説明を一緒に受けていたはずだけど……多分、心配で頭が一杯一杯になってたんだろう。
「でも、おなかに穴が開いたって……」
「だから、それを今塞いでいるの」
ゆっくり、言い含める。多少なりとも冷静さを取り戻したのか、もじもじ動くのをやめ、大人しくなった。

「ボク……アルフに、何度も酷いことしちゃったんだ」
懺悔するように、珍しく、自分から話し始めた。
「頭、ぶったり……髪の毛、ひっぱったり……それで、血が出たこともあって」
「それは、どうして？」
大体、想像できる。会って間もない頃のフェイトなら、多分……
「ボクの言うこと聞かなかったから、って」
はぁ……やっぱり。アルフ、苦労してたんだね。
「アルフは、いつもボクのために言ってくれてたのに」
ぎゅっと固められた手に、自分の手を重ねる。
「フェイト、あなたは、どうすればいいと思う？」
「ボク、は……」
以前のフェイトだったら、多分、考えない。
でも、今のフェイトなら……
「……謝らないと」
顔を上げたフェイトは。
「ボクは、アルフに謝らないといけないんだ」
きっぱりと、強い意志を目に宿していた。
「……うん」
ほら……やっぱりフェイトは、ちゃんとこういうことを考えられる子なんだ。
フェイトは本来、とても優しい子だったんだろう。もし、本当に性根が悪なのであれば、アルフといえども、見放していたに違いない。その優しさを歪めたのは……実の母親である、プレシアだ。
娘を利用し、悪事に加担させる母親なんて……そんなの、母親なんて言えるのだろうか？
私は、フェイトの手前、なんとか怒りを飲み込んだ。
「そうだね……ちゃんと、謝ろう」
よくできました。そんな感じで、フェイトの頭を抱き寄せる。
「ん……」
安心したように、身体を預けてきた。その目蓋が、少しずつ、下り

てくる。
「疲れたでしょ？　寝てもいいよ」
頭を撫でてやると、僅かに頬を緩ませ……
「……」
返事は無く。フェイトは、私にもたれかかりながら、寝息を立て始めた。
「ふあああぁ……」
静かになった途端、大きな欠伸が出てしまった。
う……私も、そろそろ限界かも……
でも、手術中のランプは、まだ点いたままだ。
ちゃんと起きてないと。ちゃんと、起きて……
◆▪◆　◆　◆
艦長室にいたリンディは、アルフの手術が完了したと報せを受け、手術室に足を運んでいた。途中、クロノとエイミィも合流し、廊下に差し掛かったのだが……
「あらあら」
設置されたベンチに、折り重なるようにして、四人が眠っていた。
「……はぁ。仕方の無い」
だがクロノも、無理に起こそうとはしない。
「アルフの麻酔が切れるまで、まだ数時間ある。それまで、寝かせてやるか」
初対面の頃と比べれば、随分と丸くなったものである。
なのはをリンディが、フェイトをエイミィが。そして、秀人とユーノをクロノが、それぞれ仮眠室に運ぶ。
「クロノ、あなたも睡眠を取りなさい」
「いえ、魔力は空ですが、まだ動けますので」
必要書類の作成など、事務仕事はできる……と言いたいのだろう。
「有事に備えなさい。命令よ、クロノ」
いつ何時、プレシアの襲撃があるのか分からない以上、いつでも戦闘に移れるようにしておくべきだ、とリンディは言う。
「事務は、全てが終わった後にすればいいわ」

「……了解しました、艦長」
クロノは、それで納得した。
「はい、クロノくんの分のベッドメイク終了～」
こうなることを見越してか、ちゃっかり準備を済ませていたエイミィが振り返る。その目の下に、色濃い隈があることをクロノは見逃さなかった。
「エイミィはいいのか？　キミもほぼ徹夜だろう」
直接の戦闘に参加はしていなくとも、隔離空間の設置・監修に加え、戦闘中のオペレート、ジャミングの解消と、前線に次いで激務だったのがエイミィだ。
「んー、私は、クロノくん達が起きてから、交代で寝させてもらうよ」
からからと笑い……一転して、悪戯を思いついた子供の笑顔を浮かべる。
「それとも、一緒に寝てあげようか？」
エイミィとしては、鉄面皮のクロノが狼狽する様でも見たかったのだろうが……
「いや、結構だ。三時間で交代しよう」
顔色一つ変えず、即効で断られた。
「……」
すげなくされたエイミィが、少し悲しそうな顔でリンディを見る。
「……」ふるふる。
リンディは無言で、首を横に振った。
「……クロノくんの朴念仁～!!」
エイミィは、そんなことを叫びながらばたばたと駆けていった。
「なるほど、まだ大丈夫みたいだな」
クロノは、もそもそと毛布を被りながら、そう結論付けた。
その、あまりにも鈍感な息子に、亡き夫であるクライド・ハラオウンを……そして、自身の苦労を重ねる。
（……頑張りなさい、エイミィ）
リンディは、将来は娘となるであろうエイミィに、深く同情するのであった。

◆・◆　◆　◆

ぼんやりと、昔の夢を見ていた。

『アリシア、ごめんなさいね』

目の前には、最愛の母。

玄関先で、身支度を整えた母親が、『アリシア』に謝っている。

『少し、慌しくなってしまって……しばらく、帰れそうに無いの』

それに対し、アリシアは……きっと、寂しそうな笑顔で、母親を見送っていたのだろう。

『大丈夫だよ！　わたし、ちゃんと一人でお留守番できるもん！』

本当は、寂しくて堪らないのだろう。その内心では、「行かないで」と今にも泣きそうだった。それでも、母親のことが大好きだから……我慢して、見送るのだ。

『それじゃあ、行ってくるわね』

母親も、本当は一緒にいてあげたいのだろう。何度も何度も振り返り、アリシアの姿を目に焼き付けようとしている。

『ママ！』

アリシアの本音が、一瞬だけ顔を覗かせ、母親を呼び止めた。

だが、寂しいという本音が顔に出たのは一瞬。

『誕生日プレゼント、早く頂戴ね！』

そして、母親の姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けて……

「……誕生日、プレゼント？」

フェイトは、馴染みの無いベッドの中で目を覚ました。

自分が母親にねだったものとは、なんだったのか。以前であれば、『面倒くさい』とそれ以上の思考を停止していたのだが……今日は、なぜか気になってしまった。

（思い出せ、思い出せ……！）

頭の中を必死に掘り返し、記憶を遡る。

自分と友達になりたいとか言う、変な子に会った。

リニスが姿を消した。

アルフを拾った。

その前は……

――ズキンッ!!
「ぎっ……!!」
突然、針を差し込まれたかのような激痛が頭に走る。
「あ……」
その痛みが過ぎ去った後に、見たことの無い記憶が脳裏に蘇った。
――自宅のテラス。地平線まで見渡せる、お気に入りの場所
(あ、れ? ボク、こんなの、知らない……)
知らないのに、知っている。その違和感に、吐きそうになる。
――母の勤める研究所がよく見え、帰りが遅いときは、いつもここから……
(知らない、知らない……!!)
それは、記憶の奥底に封印されていた悪夢。
――その日、大きな地震があり、研究所を中心に光の柱が立ち上った
陽光のような暖かさなど微塵も感じさせない、全てを焼き尽くす、破滅の光。
「やだ……やだぁ……!!」
思い出したくない。なのに、頭は思い出す。思い出してしまう。
――その光は、あっという間に広がり、自宅にまで届いて
逃げる間もなかった。
それは、母親が有事に備え張っていたバリアをあっさりと貫き……
――からだが、ひかりにのみこまれた
「うわあああああああ

秀人とユーノまで起き出してきた。
「わ、わからない！　いきなり……！」
「ユーノ、医務官のオッサン呼んで来い！　俺はクロノを呼ぶ！」
「わかった！」
念話を使おうにも、艦内は厳重なプロテクトが掛かっていて使えない。携帯端末も持っていない二人は、人を呼びに走った。
「あああああ!!」
――がりっ！
「い……った！」
フェイトが振り回した手が、なのはの顔を引っかいた。頬から、じわりと血が滲む。
「フェイト！　落ち着いて！」
なのはが何度呼びかけても、フェイトはただ叫び、暴れる。
医務官が鎮静剤を注入し、ようやく収まったのだが……
「あの、こんなことしなくても……」
頬にガーゼを張ったなのはが、辛そうにソレを見る。
「……僕だって、やりたくてやっているわけじゃない」
クロノが、憮然と腕を組む。
――フェイトの両手は、頑丈な手枷で拘束されていた。
「でも！」「なのは」
言い募るなのはを制したのは、秀人だった。
「秀人さん……」
「フェイトが起きて、また暴れだして……大怪我したらどうする？」
誇張では無い。感情の暴走によってリミッターが外れた身体は、その耐久力の限界を簡単に超えてしまう。特に、フェイトのような少女なら、尚更だ。
「かわいそうだっていうのは、俺も同意見。でも、これもフェイトのためなんだ」
しゃがみ、目線の高さを合わせ、なのはを説得する。
「フェイトが落ち着いたら、ちゃんと外すから。な？」
「……わかった」

なのはは、渋々頷いた。
フェイトの隣のベッドには、手術を終えたアルフが寝かせられていた。丁度、麻酔が切れ、目を覚ます頃だ。
「アルフ」
秀人が声を掛けると、その目が、ゆっくりと見開かれた。
「……あぁ、アンタか」
「調子はどうだ？」
「悪くないよ。まだ動けないけど」
と、横のベッドに眠るフェイトを見つけた。
だが、取り乱したりも、慌てたりもしない。
「……フェイト、負けちゃったんだね」
まだ身体を起こすことはできないようで、ふぅ、と息をついた。
「アンタか？　それとも、そっちの子か？」
「あの……私」
なのはが、おずおずと挙手する。
アルフは、なのはをじっと見つめ、
「……ありがとう。フェイトを負かしてくれて」
何故かなのはに感謝した。
「え？　……なんで？」
「フェイトは、ずっと追い詰められてたから」
強くなければならない。
負けてはいけない。
――全ては、母のために。
半ば洗脳のように、それはフェイトの頭に刷り込まれていた。
幼い頃より甘えも許されず、ただ母親のために力を蓄え続けてきた。
人格が歪んでも、なんらおかしくはない、異常な生活環境だ。
そして、それを止められる者が少なすぎたことも、要因の一つだろう。
養育係であったリニスがいなくなってからは、それが更に顕著になり……結果が、なのはに出会う直前のフェイトだ。

他者を痛めつけることに何ら痛痒を感じず……むしろ、それを見て笑うような残忍な性格に変貌してしまっていた。
「フェイトは一度、誰かにキッチリ負けておくべきだったんだ」
フェイトには、必要だったのだろう。
……文字通り、性根を叩き直してくれる誰かが。
「あの、アルフ？」
「何だい？」
「フェイト、言ってたよ。『アルフに謝りたい』って」
「……そうかい。
……少し、疲れた。もう少し寝かせてくれ」
アルフはそれだけ言い、また目を閉じた。
――ピピピッ……
クロノの携帯端末が鳴る。
「全員、艦長から呼び出しだ」
四人は、ぞろぞろと連れ立って移動する。
「単刀直入に申し上げます」
呼び出された先の艦長室。そこで、秀人、なのは、ユーノ、クロノの四人は、一列に並んで説明を受けていた。
「先日の戦闘の際、転送魔法から座標を逆算した結果……」
秀人によってジャミングされ、何度も繰り返された転送魔法。冷静さを欠いていたプレシアの隙を突き、とうとう……
「プレシア・テスタロッサの拠点が、判明しました」
全員の背筋が緊張で伸びる。
とうとう、この時が来た、と。
「突入は、二日後になります。それまで、魔力と体力の回復に努めなさい」
「二日後？」
なのはが首をかしげる。
リンディは、ふっと表情を緩め、笑みを形作った。
「というわけで、明日は休暇です。ご家族や友人と、ゆっくり過ごしなさい」

「でも……」
どうにも、フェイトが心配らしい。
ぽん、とその頭に手が置かれる。秀人だ。
「僕と秀人が残るよ。フェイトとアルフのことは、心配しないで」
ユーノが言い、それに秀人が続ける。
「恭也とかに、ちゃんと経過報告してこい」
後ろ髪を引かれる思いのなのだったが、
「そんな辛気臭い顔してたら、起きたフェイトが心配するぞ？」
「うううう……わかった」
その言葉に、なんとか納得した。
そして、なのはは一日の短い休暇を過ごすことになるのだが……

# 第二十話

約束どおり、『アリシア』という名前の人物について、クロノから詳しく聞くことになった。

「アリシア・テスタロッサ。プレシアの、実の娘だ」

実の娘って……フェイトだけじゃなかったのか？

フェイトは、そんなの知らないような様子だったが。

「享年、６歳」

「……は？」

享年って……

「それじゃあ、アリシアはもう死んでるのか？」

「ああ。……3年前にな」

そう前置きし、プレシアのプロフィールを語りだした。

聞いたところによると、プレシアは、ミッドチルダでは知らない者がいないというレベルの有名人だったらしい。

今から三年前のその日は、プレシアが開発の指揮を執っていた、新型動力炉の稼動実験が行われる日だった。理論はさっぱり不明だが、要は原子炉のようなものだろう。それも、前例の無い理論で作られた、全くの新型。

普通なら、何十にも安全対策をして、いざとなれば緊急停止もできるようにするのが普通なのだが……プレシアのいた企業のトップは、利益に目が眩んだのか、強引に稼動を決定してしまった。安全対策どころか、改善点がまだまだ残っていたというのに、だ。

押収した記録には、プレシアは最後の最後まで、安全装置の増設を訴えていたらしい。

そして当然のように、暴走した。

半径数十キロにわたって、結構な被害が出てしまった。研究所が辺鄙な地域に無かったら、災害レベルの死者が出ていたそうだ。

被害者は、多くの研究員。そして……研究所の近隣に住んでいた、研究員達の家族。

その中に、アリシア・テスタロッサが含まれていたのだという。

トカゲの尻尾切りのように、企業側は全ての責任を開発者であるプレシアに押し付けたらしいが……管理局は、そこまで無能な組織ではない。その後の調査で、現場主任と、社長ら数名が逮捕されている。
でも、そんなもの……何の慰めにもならなかったんだろう。
その直後、プレシアは失踪したそうだ。
娘の死。ジュエルシードというエセ願望器。そして、
『私とアリシアに必要なのよ！』
あの言葉。
「おい、まさか……」
その、あまりにも馬鹿馬鹿しい想像を、きっぱりと否定して欲しかった。
でも、どう考えたって、プレシアの目的は……
「プレシアの目的は、十中八九……アリシアの蘇生だ」
「……いや、無理だろ」
なぜなら。
「ジュエルシードは、万能の願望器なんかじゃない」
持ち主の願いを、一度でも完璧に果たしたことがあったのなら、まだ理解できる。
持ち主が何を願ったのか、判明しているものだけを思い出してみる。
シリアル１０。なのはの同級生が、『想い人を独占したい』と願った結果は、街を巻き込んだ大破壊。
シリアル１４。月村家の猫が、『大きくなりたい』と願った結果は、成長ではなく、体積の倍増。
つまり、願いを曲解する上、融通も利かない。
多分、２１個全部を共鳴させて、出力を稼ぐつもりだろうが……共鳴したジュエルシードは、その不完全な願望器としての力すら失い、ただのエネルギーの塊となって、全てを破壊する。
たった四つで、あれだけの破壊力。もし、プレシアの手元にある九つが発動したとしても、破壊力は単純計算で２倍。
「プレシアだって、それがわからないほど馬鹿じゃない」

仮にも、研究職に就いていたんだから。
「ジュエルシードで願いを叶えるつもりなのか……もしくは、ジュエルシードを使って、何らかの手段を用いるのか……」
クロノも、頭を悩ませているようだ。
「……というか、さ。フェイトはプレシアの何なんだ？」
三年前に、アリシアは六歳。生きていれば九歳。丁度、今のフェイトと同じ年頃だ。
「アリシアの双子の姉か妹か？」
「……プレシアが失踪する直前までのデータに、フェイト・テスタロッサという名前は一言も書かれていない」
おかしいな……
「プレシアは、アリシアを大事にしていたんだよな？」
娘を生き返らせたい、と思うほどに。
「もしフェイトがアリシアの双子の姉妹だとして、戸籍さえ作っていないなんて、ありえるか？」
「……」
クロノも、その辺で行き止まりになってしまっているようだ。
「拾い子か？　でも、」
以前、フェイトの身体検査を行った。その結果は……
「プレシアとフェイトには、明確な遺伝子の繋がりがある」
ＤＮＡ鑑定の結果、フェイトは、プレシアの実の娘であることが判明した。
アリシアと、フェイト。二人の関係は、一体……
――ビーッ
と、休憩室のブザーが鳴る。
『訓練室の準備、整いました』
エイミィとは別のオペレーターが、スピーカー越しに言う。
今は、決戦に向けて弱点の改善だ。
インターバルを終え、再び訓練室に戻る。
俺達のほかにも、武装隊の何人かが訓練を行っていた。
決戦を控えているから、本格的な模擬戦は行わず、魔法の制御を行

うのみ。
特に、俺の燃費の悪さは露呈したわけだし、対策を講じなければ、プレシアに辿り着く前にリタイアしてしまう。
そこで、使える魔法の多彩さでは俺達の遙か上を行くクロノに、いくつか教えてもらっている次第だった。
『Ｂｌａｚｅ　Ｓａｂｅｒ』
ブレイズセイバー。そう発音したＳ２Ｕの先端に、銃剣のような小ぶりの魔力刃が出現する。フェイトのより大分短いが、その分軍用ナイフのように厚みがある。
――ゴトン
目の前に、ドアのような平べったい鉄塊が出現する。訓練用の仮想物質だ。
クロノは、ブレイズセイバーをひょいと持ち上げ……
――斬！
鉄塊を、真っ二つに切り裂いた。
なるほど。威力もそれなりか。
「このように刃の形で固定してしまえば、魔力消費を抑えることが出来る。キミの使った掌打と同じだな」
あれの応用か。
「んー……」
魔力刃を使ったこともあるんだけど、手刀サイズが精々だ。『刃』なのだから、ある程度はリーチが長いほうが有利なのは分かっているのだが……
「よ……っと」
――ヴ、ヴヴ……!!
あ、ダメだ。境界が曖昧に揺らいでいる。
このまま魔力を注いでも、すぐに破裂してしまう。
「刃じゃなく、『容器』と、『中身』をイメージしてみろ」
クロノのアドバイスどおり、魔力で、刃の形をした『容器』を作るのだが……
「あー……」

やっぱり、ユラユラと曖昧な形にしかならない。
「僕に一度、手刀を突きつけたことがあっただろう。あのイメージでやってみるといい」
ああ……アレか。
手刀を構え……腕そのものを、『容器』として。
――ヴンッ!!
「出来た！」
二の腕を包み込むような形で、刃の外殻が形成された。
「ふむ……」
クロノは、Ｓ２Ｕでコンコン、とその外殻を叩く。
「まだ構成が甘いな。これでは鈍器だ」
なら、より鋭く、より頑丈に。
うんうん唸ること、一時間弱。
――ギンッ
ようやく、『刃』と呼べるだけの鋭さと、長さを持たせることが出来た。刃の全長は、１．５メートル程だろうか。腕の部分を除くと、約１メートルの片刃の形だ。
「ああ、そんなものだろう。後は簡単だ。魔力を流してみろ」
言ったとおり、そこから先はスムーズだった。魔力刃が空色に染まり、僅かながら質量を帯びる。とはいえ、重量は殆ど感じない。これ、本当に切れるのか？
――ゴトンッ
目の前に、クロノが切ったのと同じサイズの鉄塊が現れる。
「切ってみろ」
よし。やってみるか。
腕を振り上げ……
「せいっ！」
斜めに振り抜いた。が。
――スカッ
「ん？」
全く手応えが無かった。もしかして、空振った？　こんな近距離で

？
「合格だ」
だが、クロノが顎で示す先。鉄塊が、滑らかな切断面を覗かせていた。
「おおお！　やった！」
腕には、まだ魔力刃が残っている。魔力も、殆ど消耗していない。
でも……
「これじゃ、傀儡兵には効果薄そうだな……」
刃はこれ以上伸ばせない。人間サイズの相手には有効な武器になるだろうが……傀儡兵を切り裂くには、リーチが足りなさ過ぎる。至近距離まで近づけば効かなくも無いが……
「あくまでこれは、牽制程度に考えておけばいい」
だからこそクロノは、先の戦闘では使わなかったのか。
もっと長く、遠くまで伸ばすことが出来れば……
「……よし」
こうすれば……どうだ？
「おい、何を……」
鉄塊から、十メートルほど間合いを取る。
腕を振り上げ……
「せー、」
斬撃の瞬間に、『容器』の中の魔力を、刃に沿って、細く、鋭く……
「のっ!!」
衝撃波として、射出！
「!?　馬鹿やめろ！」
クロノの静止は、遅すぎた。ぴしゅんっ、と小気味のいい音を立て発射された衝撃波は、
――ズギャギャギャギャギャギャギャギャ……
「あ」「あ」
地面を切り裂きながら奔り、
――ドカーン!!
「「ギャアアアアア!!」」

訓練中の武装局員を木の葉のように空中に吹き飛ばし、
――ドゴオオオオオン!!
訓練室の壁に、くっきりと跡を刻み込んだ。
「……」
「……」
衝撃……いや、斬撃波の通った跡。頑丈であるはずの床がザックリと抉れ、ぷすぷすと焦げている。
「……」
「……」
沈黙が、痛い……
「……何か、言うことはあるか？」
射抜くような目で俺を睨むクロノ。
「……いやぁ」
「ぐおおお……」「い、痛てぇ……！」「い、医者を……!!」
そして、戦闘不能レベルのダメージを負い、倒れ伏す局員達。
何だこの地獄絵図。
やったのは誰だ……って、俺か。
額に青筋を浮かべるクロノに、俺は……
「……どんまい！」
殴られた。

「おおお……マジで殴りやがって」
まだ奥歯がガタガタしてる気がする。
「魔力刃を教えていたのに、なぜ飛び道具を開発するんだキミは！」
「いや……なんとなく、できるかなぁって気がして、つい……」
『つい』で貴重な戦力三人を病院送りにしてどうする!?」
「スマンッ！　俺が四人分働くから!!」
平身低頭。
「……全く。キミの発想には驚かされるよ」
魔力刃としては失敗もいいとこだが、単純な飛び道具としてなら……かなり有効なんじゃないか？　威力はディバインバスターには

多少劣るが、貫通性能と命中精度は段違いだ。俺の、致命的ノーコンが解消される。
内部にあるだけの魔力しか消費しないから、ロスも少ないし……何より、再び魔力を充填すれば、引き続き魔力刃として利用できる。
「まぁ……傀儡兵相手なら、有効な技かもしれないな……」
少数相手なら魔力刃で。数が増えたら斬撃波で。
「だろ？」
少し得意げに、胸を張ってみた。
「調子に乗るなッ!!」
今度はＳ２Ｕでドツかれた。痛てぇ……
訓練を終えシャワーを浴び、フェイトとアルフのいる部屋に向かう。
「んじゃ、またなー」
「ああ」
おざなりな挨拶を交わし、クロノと分かれる。
なんかいいね。学生っぽくて。
まともに中学高校に通ってたら、こんな感じの毎日が送れたのだろうか。

「よーっす」
扉を開ける。
「ああ、秀人。お疲れ様」
ユーノは、アルフの横に座って治癒魔法を掛けていた。その手には、レイジングハート。
魔法の処理能力を上げるため、なのはが置いていったのだ。
『またやらかしましたね？』
「……すまん」
どうやら、バレバレのようだった。
「調子はどうだ？」
緑色の光を気持ちよさそうに浴びていたアルフは、ぱちっと目を開けた。

「あたしは……まぁ、何とか」
「そうか。よかった」
アルフの腹の傷は、適切な縫合とユーノの治癒魔法のおかげで、大分塞がってきている。安静にしていれば、もう数日しないうちに完治するらしい。オオカミの生命力、たいしたものだ。
「ちょとフェイトの様子見てくるよ」
挨拶をして、奥の区画へ。俗に、営倉と呼ばれる懲罰房があり、その一室に、フェイトは寝かせられていた。
「フェイト、気分はどうだ？」
そして、隣のベッド……手枷をされたフェイトが、不満げに上目遣いで俺を見上げる。
「いいわけないだろ。こんなもんつけられて……」
「だよなぁ……」
営倉とはいっても、ベッドもトイレも水道もあり……場末のビジネスホテル程度にはなっている。何より、フェイトは別に囚人ではない。また暴れだすことが無いよう、ここに隔離されているだけだ。
ベッドサイドに置いてあった、リンゴっぽい果物を手に取る。丸かじりにするには皮が硬く、フェイトの小さな口では食べるのに難儀しそうだった。
――しゅぴんっ
「剥けたぞ」
精神状態が不安定なフェイトに、刃物は厳禁。というわけで、指先に魔力刃をちょっとだけ展開し、果物の皮を剥いた。皿に並べ、フェイトに差し出す。しょりしょりと果物を齧りながら、ぽつりと一言。
「……そんな使い方する奴、初めて見た」
確かに、『魔法』というにはアットホーム過ぎる使い方。
「力ってのは、使いようだからな。生かすも殺すも、使う奴の気持ち一つだ」
俺達の魔法は、人間くらい簡単に殺せてしまう。なのはの砲撃しかり、俺の拳しかり、ユーノの治癒魔法だって、使い方を変えれば、人間を内部から破壊できてしまう。

でも、俺達はこの力を、誰かを守るために使うことが出来る。
力そのものは、悪ではない。誰が、どのように、どのような目的で使うかが大事なんだ。
「気持ち、一つ……？　でも、ボクは……」
確かにフェイトは、酷いことをした。子猫を半殺しにし、民間人を襲い、傷つけた。
「大丈夫だよ」
その、少し傷んだ金髪を撫でる。
「フェイトの力を、正しく使える時がきっと来る」
「それは、いつ？」
無垢な表情で訊ねるフェイト。
「さぁな。それは、フェイトにしかわからない」
こればっかりは、本人が気付かないことには意味が無い。誰かに言われるままでは、これまでと変わらない。
「……よくわかんない」
眉をハの字にし、首をかしげた。
「いずれわかるよ。それまで、しっかり考えておけ」
「……わかった」
えらく素直になったもんだ。
「いい子だ」
ぐりぐりと頭を強めに撫でる。フェイトは嫌がるでもなく、されるがまま。
野生動物の餌付けに成功した気分だ。
本当は、アリシアについて何か聞けたら……と思っていたが、それはもういいな。
「ボクのおかーさんはね」
と、思っていたら、フェイトから話し始めた。
「昔は、すごく優しかったんだ」
それは、報告書にも書いてあった。いかれる前のプレシアは、いっそ親馬鹿と言っても過言ではない程に、娘を溺愛していた。
「何度も何度も、優しい声で言うんだ。

『アリシア』……って」
息を呑んだ。フェイトは、気付いている……？
「『フェイト』っていう名前は……一度も、呼んでくれたことが無かったんだよ」
それは、フェイトの自意識と、記憶の齟齬。フェイトにとって、プレシアは優しい母親。でも……その逆は？
「ボクは、おかーさんにとって何だったのかなぁ？」
半ば自分に問いかけるように、そう言う。
「もしかしたら、ボクは……」
――本当の子供じゃ、ないのかもしれない
そう言いたかったのだろう。でも、口にしたら本当のことになってしまうような気がして、言えない。
「プレシアにとって、フェイトが何なのかは……正直、俺にもわからない」
言葉を慎重に選び、フェイトに言い含める。
「でも、俺に……俺達にとって、おまえは『フェイト』だよ」
ぴくりと、フェイトがわずかに身じろぎする。
「なのはのライバルで、アルフの困った主人」
俺にとってのフェイトは……正直、はっきり言葉に出来ない。なんというか……なのはの喧嘩友達みたいな、そんな感じ。
「だから、そんなに気にするなよ」
「……うん」
あー……俺って、口下手だなぁ。もっと上手く伝えることもできるかもしれないのに。
フェイトは、くるっと俺に向き直り……
「ありがとう……ひでと」
「え……」
ハッキリと……俺の名前を、呼んだ。
「……ちょっと疲れた。寝るね」
ぼすっと枕に顔を埋め、表情が伺えなくなってしまう。
ただ、僅かに見える頬と耳は……真っ赤に染まっていた。

「ああ。またな、フェイト」
きっと明日、全ての謎が明かされるだろう。
もしそれが残酷な真実だったとしても。俺は、全てを受け入れてやろう。
フェイトは、俺の身内なんだから。
決意を新たに、俺は独房を出て行った。
◆　◆　◆　◆
「おはよう、ございまーす……」
消え入るように小さな声でそう言い、およそ十日ぶりに、教室のドアを開けた。
時刻は八時十五分。ホームルームが始まるまで、まだ少しある。だからなのか、教室のいたる所で、いくつかのグループが談笑していた。
「……」
からから、というドアの動く音に気付き、一斉に私に視線が集まる。
十日ぶりとはいえ、元々クラスに親しい人はいない。誰も、何も感じないはずだが……
「あー、高町さんだ。久しぶりに見た」「あ、ホントだ、久しぶりー」「どこ行ってたのー？」
話のネタに飢えているらしい女子のグループに、取り囲まれてしまった。
「あ、あの……？」
完全に及び腰になって、包囲の輪から抜け出そうとするのだが……
「ね、どこ行ってたの？」「何してたのー？」
じりじりと追い詰められて……
――とんっ
壁に背中がぶつかった。
「う、うううぅ……」
帰りたい……
「はいはい、ストップ」
と、そこに、パンパンと手を打ちながら一人の女子がやってきた。
「あ、望」「おっはよー」

……八代さんだ。
「もう、高町さん困ってるじゃん。ほら、散った散った！」
わざとふざけて、そのグループを追い散らした。グループの女子達は、きゃーきゃーと楽しそうに逃げ、また別の場所で雑談を始める。
「……」
八代さんの横顔からは、いまいち表情が読み取れない。
「……、……あり、がとう」
「ん」
短いやり取りだけをして、互いの席に戻る。まぁ……こんなもの、だよね。クラスメイトの距離感は。
「ねぇ、なのはさん？」
昼休み。私は廊下で、先生に呼び止められた。
「なに？」
「昨日、『高町さんはいつ登校しますか？』って電話があったんだけど……心当たり、ある？」
私に？
「ううん、全く」
私に用がある人なら、携帯電話に掛けてくるだろうし。
「そう……何かあったら、相談してね？」
結構、先生も変わった。頭ごなしに怒ることも少なくなって、段々と、頼りがいのある教師に……
「富山先生？」
びくぅっ!?　と、富山先生が跳ねた。後ろを振り返り、あからさまに狼狽する。
「ははは、長谷川先生？　なな何でしょうか？　申し送り事項も、不備は無かったと思うんですけど……？」
「職員室前の掲示板への記入がまだでしたよ」
その掲示板には、各部活動への連絡など……結構、重要な連絡事項を書くことになっている。先生、大ポカだよ……
「ふぅ……朝に頼んでおいたのですが……。……ちょっと来なさい」
「あの、できますから！　ひとりでちゃんとできますからあああ手

を引っ張らないで下さいいいい!?　ごめんなさい長谷川先生――!?」
フェードアウトしていった。
「先生……頑張れ」
訂正。まだまだ、道は遠そうだ。
学校は終わったけど……どうしようかなぁ。『報告して来い』って秀人さんに言われたけど……母さん達は翠屋だし。仕事中に行っても、話をする暇なんて無いだろうし。
うん、今日はもう帰ろう。冷蔵庫の中身は……確か、豚肉とじゃがいもがあったと思う。肉じゃがにしようか。それとも、カレーにしようかと、夕食のことをあれこれ考えて
いたら……
――すっ……
恐ろしく静かなエンジン音を立てて……何やら見覚えのある、黒い車が止まった。そして扉を開け出てきたのは、やはり見覚えのあるメイド。
ああ……猛烈に、面倒事の予感がする……
「高町様、お迎えに上がりました」
ほらやっぱり！
「頼んでません！」
逃げろー!!
反転し細道に入って……反則かもしれないけど、飛行魔法をちょっとだけ使って、塀を足場にジャンプ！
瓦屋根を、コンクリート屋根を、モルタル屋根を、飛び越え、乗り越え……着地！
（見えた！）
アパート！　あとは、一直線に……！
「あらあら、足がお早いのですね」
いきなり目の前に、メイドが現れた。
「ひっ!!」
ずざざざっ……と、急ブレーキ。ど……どうやって追いついた!?
車が入ってこれないような細道を、魔法まで使って飛び越えて来たの

に！
「ふふふ……わたくし、高町様の健脚ぶりに驚いてしまいますわ。素晴らしい跳躍でした」
見られていた？　つまり……このメイドは、魔法も何も使わず、私の後ろに余裕でついて来ていた……？
「高町様」
すぅ……っと、黒塗りの車が、私の目の前に止まった。
数分前の再現ビデオを見るように、メイドは、全く同じ角度でお辞儀をし……
「お迎えに、上がりました」
その目は言外に……明確に、語っていた。
――逃がしませんよ？
と。
「……はい」
私はガックリとうな垂れ……車に、乗った。
出荷されていく羊の気分が、少しだけ分かった気がした。
「お飲み物はいかがですか？」
車内というか……下手をすれば、そこいらのホテルの一室のような空間で、メイドの接待を受ける。
「いえ……結構です」
緊張し過ぎて、喉を通りそうに無い。
「……何で、今更」
「はい？」
私の呟きに、メイドが頷く。
「今更、何の話ですか」
月村さんか、バニングスさんか……どちらにせよ、最悪の別れ方をした相手だ。酷い誤解をされて、それを解くことが出来なかった。今でも、彼女達にとって私は、大事にしていた子猫を傷つけた、憎い相手の筈なのに。
「それは、お嬢様から直接お聞き下さい」
そして、車に揺られる？ こと（恐ろしいことに、全く振動が無かっ

た）二十分。
「お待たせいたしました」
私は……月村さんの屋敷に到着した。
「ご案内いたします」といったメイドが早々に歩き出してしまったので、後を追う。
はぁ……相変わらず、大きい家だ。
その長い廊下を歩ききり、扉の前へ。メイドがドアをノックする。
「お嬢様、お連れいたしました」
……覚悟を決めよう。どうせ、こちらの心証はマイナスゲージを振り切ってるんだ。今更、何を恐れるものがある。
私は、部屋に足を踏み入れた。すると。
「にゃー……」
「え？」
歓待の声は、足元から上がった。見ると、縞模様の入った灰色の猫が、私の足に擦り寄ってきていた。首には、小さな鈴が着いた赤い首輪。
「……もしかして、」
あの時の？
「そうだよ」
「……ッ!?」
いきなり背後から声を掛けられ、飛び上がってしまった。
「悪趣味だね……覗き見？」
「うん」
開けられたドアの後ろに隠れていたらしい。悪びれもせず、肯定する。そして。
「……」
「バニングス、さん」
腕を組み、むっつりと私を見る、バニングスさんもいた。
「……」じー。
「……」じー。
無言で、見つめ合う。

「……」にこにこ。
なぜか、月村さんがほんわかと私達を眺めている。
「……」じー。
「……」じー。
「……」にこにこ。
そして。
「だあああああああ!!」
いい加減、我慢の限界！
「何!? 何なの!? 言いたい事があるならさっさと言いなよ！」
「あんたこそ何なのよ！ あの日のこと怒ってるなら、ちゃんと抗議しなさいよ！」
「はぁ!? 今更気にしてないことを、何で抗議しないといけないのよ！」
「気にしなさいよ！ あ、あたし、あの後、すっごく謝りたかったのに！」
「知らないよそっちの事情なんて！ 気にしてないったら気にしてないの！」
「気にしなさい！」
「死んでもイヤ！」
「むぐぐぐぐぐ……!!」
額をぶつけ合い、至近距離から睨み合い。
――あれ？
ふと我に返り、力を抜く。
「のわぁっ!?」
バランスを崩したバニングスさんが床に倒れそうになり、それを月村さんが抱きとめた。
「……謝りたかった？」
何で？
「あの後、いろいろ考えたんだけど……」
月村さんが、バニングスさんを支えながら話を接ぐ。
「にゃ～」

と、またしても子猫が私に擦り寄ってきた。
「高町さんは、やってないんでしょ？」
その様子にくすっと笑いながら、核心を突いてきた。
「……うん」
やったのは、初めて会った時のフェイトだ。
「一昨日、アリサちゃんがどうしても謝りたいって言って、高町さんのお家まで行ったんだけど……いなくって」
一昨日……私とフェイトが勝負をした日。高町の家には母さんしかいなかった筈だ。そもそも、私はあそこには住んでいない。
「学校に問い合わせたら、今日登校するって聞いて」
待ち伏せていた……ってことか。
「……そういうことよ」
バツが悪そうに、バニングスさんが言う。
「あ～……！」
がりがりと頭を掻く。何やら懊悩しているようだ。
そして、顔を上げ……
「高町！」
「は、はい!?」
ずかずかと目の前まで歩いてきて、
「ひどいこと言って、ごめんなさい！」
がばっと、頭を深く下げた。
「……」
そのまま、動かなくなる。
これは、私が「許す」と言うまで、動かないだろうなぁ……
「いいよ。許す」
元より、あまり怒っていない。今冷静になって考えてみれば、あんな状況では、私は疑われて当然だ。親友である月村さんが大事にしている子猫を傷つけられ、怒るのも無理は無い。
「……いいの？」
バニングスさんの表情は、まだ不安げだ。本当に許してもらえたのかどうか、図りかねているらしい。

「だから、いいよ」
「でも……」
はぁ……なかなか、難儀な性格をしている。サクッと納得してもらうには……あ、そうだ。思いついた。お互いに納得できる、解決方法。
「バニングスさん。歯を食いしばって」
「……！　わ……わかったわ」
そして、ぎゅっと目を瞑る。スカートをぎゅっと掴んで、これから来るであろう衝撃に耐えようとしている。
「行くよ」
左腕を振り上げ……
――びしぃッ!!
でこピン。
「いったぁ！」
額を押さえ、うずくまるバニングスさん。
「これで許してあげる」
……さすがに、殴るのはやりすぎだからね。
「ふふ……よかったね、アリサちゃん」
月村さんはどうやら、私がバニングスさんを殴る気なんて無いことに、最初から気付いていたようだ。
「くああ……！　効いたぁ～……!!」
バニングスさんが涙目になって、一部分だけ赤くなった額を擦る。
「くすっ……」
何となく面白くて、月村さんと顔を見合わせて笑い……恥ずかしくなって顔をそらした。
あの日と同じ席に座り、紅茶を飲む。
「何だったら、本人連れてきて謝らせるけど？」
そのぐらいは、何とかしよう。
「え……知り合いなの？」
「うん。色々複雑な事情があって、追い詰められちゃったみたい」
もちろん、それで全てが許されるわけではないだろうけど……せめて、多少は印象を良くしてあげよう。

「その子、今は大分落ち着いてきてるし……多分、素直に謝るから。そうしたら、許してあげてくれないかな？」
……まさか、私がフェイトを擁護することになるなんて、思いもしなかった。何となく、放っておけないんだよねぇ……
「ねぇ……それ、どんな子？」
バニングスさんが聞いてきた。どんな……？　ええと。一言で言えば……そう。
「可愛い子だよ」
見た目もどことなく小動物っぽいし……本性なんて、人に慣れない野生動物そのものだ。
見ていて飽きないし、つい弄くり回したくなる。
猫……ではない。フェイトは、一人でいることを嫌う。だからといって、犬というわけでもないし……あ、そうか。
狐だ。
猫っぽい犬。ピッタリだ。
「……」「……」
二人は、目をまん丸にして私を見ている。
「？　どうかした？」
「アンタ……その子と、どういう関係なわけ？」
ああ……そういえば。忙しくて『お願い』を聞いてもらうの、忘れてた。
「友達……候補、かな？」
そうとしか言いようが無いんだよね。
「候補って何よ……」
どこかゲンナリとした様子。
「え？　だから……『友達になろう』って言ったけど、まだ返事が貰えずにズルズル一緒にいる……みたいな」
「そういうの、世間では『友達』っていうんだけど？」
「そうなの？　でも、向こうからお返事貰ってないし……」
向こうの気持ちも考えないで、友達面するのは、ちょっと……
「少なくとも、私は……」

「私は？」
「私、は……」
カップを手元でいじり、尻すぼみになっていった。
何かを言おうとしているらしいのだけれど、まだ踏ん切りがつかないらしい。
――ボーン、ボーン……
壁掛け時計が、午後五時を指し、鐘を鳴らす。
「ごめんね。そろそろ時間だから行くね」
席を立つ。タイムアウトだ。
明日に備えるためにも、これ以上ここに居座ることは出来ない。
「紅茶、美味しかったよ。ありがと」
今日は、気持ちよくお別れすることができそうだ。
「待って！」
と、バニングスさんに呼び止められた。
「？」
月村さんは、なにやらニコニコと……いや、これはこの人のデフォルトの表情か。
バニングスさんは、椅子の下から包みを取り出し……
「ん！」
ぼすっと胸に押し付けられる。
「……開けていい？」
こくん、と肯定の頷き。ぺりぺりと包装を丁寧に剥がして……あ。
「これ、あの時の」
バニングスさんに破られた、上着。完璧に修繕されているどころか、ところどころグレードアップしている。
「……あたしが直したわけじゃ、ないけどさ」
顔を真っ赤にしてそんなことを言うバニングスさん。少し誤解していたけど……本当は、結構いい人だったんだね。
「ありがとう。バニングスさん」
そして、もじもじとして……
「アリサ、でいいわよ。友達は、みんなそう呼ぶから……」

「……え？　え？」
今、何て……？　聞き間違い？
「私は……なのはのこと、友達だって……そう、思ってるから……！
だから、私のことは『アリサ』って呼びなさい！」
聞き間違いではなかったみたい。バニングスさんは、もうヤカンのように真っ赤だ。
「……」
でも、多分私も、同じような顔をしているに違いない。
月村さんに、すっと手を取られる。
「わたしも、『すずか』って呼んで欲しいな。なのはちゃん」
私の返事は……もう、決まっている。
「ありがとう……アリサ。すずか」
これからも、よろしく。

二人に見送られ、屋敷を出る。あの日曇天だった空は、今日は綺麗な夕焼け。
茜色に染まる道を、スキップしそうなくらい元気良く駆け抜ける。

「はっ、はっ……あははっ」
嬉しくて、もどかしくて、つい笑いがこみ上げてきてしまう。道行くおじさんやおばさんが、怪訝そうな顔で振り返る。でも、全然気にならない。
だって、本当に嬉しいんだから！
「あーはっはっは！　いやっほー!!」
高町なのは。九歳の梅雨。

――――友達が、出来ました！

# 第二十一話

――ピピピ、ピッ。
目覚ましの音を、鳴り始めると同時に止める。
「なのは。朝だぞ」
布団をめくり、コアラのように真正面から俺にしがみ付いているなのはを揺り動かす。この寝相、いずれはちゃんと矯正しないとなぁ……
「……う～ん」
もぞもぞと動き……半開きの眼で、目を覚ました。
「もう、あさ……？」
「そ。朝だ」
「……そっかぁ、それじゃあ、デッキブラシで洗わないとねー……」
駄目だこりゃ。完全に寝ぼけてる。
「なーのーは！　起―きーろー！」
頭を掴み、ぐわんぐわんと前後に揺さぶる。
「あうあうあう……！　お、起きた！　起きたよー!?」
よし。
「今日は大事な日なんだろ？　早く起きて仕度しなきゃ、リンディさんに怒られてクロノに皮肉言われるぞ」
「それは嫌ッ！」
がばっと起き上がる。やっぱ、あの二人の名前は効果的だな。
「朝飯どうする？　俺が替わろうか？」
「ううん、大丈夫」
そして、寝巻きのまま台所に歩いていった。
心なしか、うきうきと踊っているようにも見える。
「おはよう秀人。……よいしょっと」
出窓に置いてあるバスケットから、ユーノが危なげなく飛び降りる。そして、変身魔法を解除し、人間体に戻った。

朝食を頬張りながら、神妙な顔になる俺達。
「いよいよ、今日だな」もりもり
「……そう、だね」ぽりぽり
「ほんと、早かったね」もぐもぐ
今日は、プレシアの拠点へ総攻撃を仕掛ける日。
昨日は全員、しっかりと身体を休め……魔力と体力を満タンまで回復させた。
いつ戦闘になっても困らない。士気は高く、負ける気はしない。
「なのは、嬉しいのはわかるけど、しっかり切り替えろよ？」もりもり
昨日、にこにことても嬉しそうな顔で帰宅してきたなのはは、『友達が出来た！』と、とても嬉しそうだった。携帯電話のメールで、桃子達にまで報せていたのだから、本当に嬉しかったのだろう。だからといって、今日の行動に支障をきたすようでは困る。
「うん。それは大丈夫」ぽりぽり
なのはは、しゃきっとした態度で答える。
「秀人、心配しすぎだよ。なのははその辺、ちゃんとしてるって」もぐもぐ
「そうだよな。悪い」もりもり
そう。いよいよ、今日だ。
「お、今日の鮭、濃い目の味付けだな」
塩辛くは無いが、いつもの味付けと違う。
「いっぱい動くだろうから、少し多めに調味料使ってみたんだ」
なるほど。確かに。
「そう？　十分に美味しいけど」
ユーノはマイペースに箸を動かす。
「「……」」もりもりぽりぽりもぐもぐ。
……今日、だよな？

朝食を終え……俺達は、アースラのブリッジに集合していた。
「皆さん」

リンディさんは普段の柔らかな態度を封印し、厳格な『艦長』として、俺達の前に立つ。
出撃を控えた武装隊も、モニターで見ているだろう。
「いよいよ、この時が来ました」
偶然にしては出来過ぎていた、あの出会い。
俺達がユーノと出会い、ジュエルシードを始めて封印した夜。あの夜から、全ては始まった。
なのはとユーノ、レイジングハート。一人っきりだった生活に、三人の家族が加った。
負けられない相手……フェイトとの出会い。
幾度も衝突し、何度も負けた。
『友達になりたい』という願いを込めた、全力の勝負。その末に、遂に勝利をもぎ取った。
フェイトにもまた、負けられない理由があった。それは、母のため。
そして、今。その全ての因縁に、決着が付こうとしている。
「プレシア・テスタロッサの拠点へ、総攻撃を仕掛けます」
ざわ……と、アースラ全体が、にわかにさざめき立つ。
「まず、アースラ所属の武装局員が先行。進入経路を確保し、敵拠点の構造を把握します。その後、少数精鋭の突入部隊が最深部へ乗り込み、プレシア・テスタロッサを確保。以上です」
本当に、至ってシンプルな作戦だ。それだけに、達成は難しいだろう。
武装隊が相手にするのは恐らく……あの時以上の数の、傀儡兵。プレシアの本丸を守る、強力な個体が出現するかもしれない。
さすがに、出てくると分かってさえいれば、以前のように自暴自棄の特攻をするような馬鹿は出ないだろう。
そして、俺達がプレシアを押さえることができれば、傀儡兵は機能を停止するはずだ。
「突入部隊は、四人」
問題は、その突入部隊だが……メンバーは、既に決まりきっている。
「クロノ・ハラオウン」

まずは、クロノ。執務官としての実力・経験共に、前線指揮官を担うに相応しい。目の前の敵を倒すことしかできない俺に、的確な指示を出してくれることを期待する。
「ユーノ・スクライア」
次に、ユーノ。攻撃こそ苦手だが、転送・捕縛・回復・強化など、現地での貴重なバックアップ要員。後援があると分かっていれば、俺も、他の局員も、安心して力を出し切れる。
「高町なのは」
そして、なのは。言うまでも無く、戦力の要。実戦で磨き上げた力は、恐らくは俺を上回る。その自慢の砲撃は、有象無象を寄せ付けない。露払いからトドメまで、オールラウンドで活躍するだろう。
「吾妻秀人」
最後は、俺。ジュエルシード事件の当事者として、また、ユーノの協力者として、最後まで関わり、見届ける義務がある。
「以上の四名を、最深部への突入部隊として編成します。質問があれば、今のうちに」
たった四人での突入。だが、負ける気は欠片も感じない。
「無いようですね。では……」
全員をぐるりと見渡し……
「状況、開始！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「了解!!」」」

取るのが難しそうではあるのだが。
行き着いた先は、アルフの病室。独房を出られたら、真っ先にここに来ると決めていた。
ドアを開ける。
「おや、君は……」
アルフに治療を施していた医務官の男性は、フェイトの姿を見て、軽く驚いたようだった。
「おじさん、アルフの具合は？」
「おじさんって……私はまだ、二十代なのだが……」
少し凹んだような様子で、咳払いを一つ。
「ああ、正直驚いているよ。スクライア君の治癒魔法という要因はあるのだろうけど……数日どころか、もう動いても問題無いレベルにまで回復している」
さすがは、生命力の強いオオカミをベースにしているだけのことはある。
「アルフ……アルフってば」
フェイトが声を掛けると、アルフは目を覚ました。
「……フェイト!?」
がばっと跳ね起きる。確かに、もう動いても問題は無いようだ。
「お願いアルフ。ブリッジってところまで着いてきて」
その切羽詰った様子に何かを感じ、アルフはベッドから起き上がる。
「オッサン、行っていいかい？」
少なからず世話になった相手だからか、一応許可を求めるアルフ。
「だから私は二十代だと……ああ、構わんよ」
諦めたように、退院許可を出した。
ブリッジへのドアを開ける。
「え……？　フェイト!?　アルフ!?」
突入に備え、ブリッジで待機していた秀人たち突入班が、目を剥いて驚いた。

それを無視し……いや、最初から気付いていなかったのだろう。リンディの目の前までやってくる。
「リンディ、あの……」
恐らく、これがプレシアと話をするチャンスだと考えているのだろう。言葉を選んで、考えあぐねて……出てきたのは、簡単な一言。
「ここにいさせて」
意を決して、リンディにそう頼み込んだ。
本来なら、却下されて当然のことだ。局員でも、協力者でもないどころか、元・容疑者の一味なのだから。牢に閉じ込められないだけでも、異例の温情措置なのだ。
だが、リンディは予想に反し、来ることが分かっていたようで……
「特別よ?」
と、同席を許可した。
「……フェイト・テスタロッサ」
クロノが口を開く。やはり、拒否するのだろうか。だが、クロノが口にしたのは、俺の予想とは違っていた。
「ここにいたいというのなら、条件がある」
リンディは、クロノに任せるようだ。
「……なに?」
フェイトは、どこか不安げに、その『条件』を尋ねる。
それは……
「最後まで、逃げる事無く……見届けるんだ」
真実と向き合え……そう、言いたいらしかった。きっと、何か真実の一端を掴んでいるのだろう。フェイトを見る目が、少しだけ弱弱しい。
フェイトは。
「……うん、頑張る」
その条件を飲んだ。
モニターの中では、今まさに、先行部隊が敵拠点へ足を踏み入れるところだった。

先行部隊の面々は、敵の拠点……その『庭』に該当する位置に転移した。
目の前には、巨大で、禍々しい気配を漂わせる城砦。あそこが、プレシアの居城。
「行くぞ！」
既に、プレシアは感づいているだろう。故に、傀儡兵が出現するより一刻でも早く、城砦へ乗り込む必要があった。
「……妙だな」
だが、予想に反し城砦は、異常なまでに手薄……いや、無防備だった。巨大な鉄扉は施錠すらされておらず、手動で簡単に開いた。絨毯敷きの廊下には罠も無く、妨害される事無く通過することが出来、一直線だった。突き当たった先の扉もまた、人一人で簡単に開いてしまった。
そして、極めつけに。最深部どころか、最も手前の広間。その玉座に……
「プレシア・テスタロッサ！」
プレシアが、悠然と腰を下ろしていた。
◆▪◆　◆　◆
「あいつが……」
全ての元凶にして、フェイトの母親。プレシア・テスタロッサ。
もっと凶悪な面構えをしてるのかと思ったが……思っていたより、普通だ。
疲れ、やつれたようにこけた頬。紫色の口紅。どこぞのシャーマンがするような、幾何学的な模様を顔に描いている。化粧の毒々しさを除けば、妙齢の美女といった外見だ。
「おかーさん……！」
フェイトが、モニターに映る映像だと分かっていながら、一歩前に踏み出した。
映像とはいえ、双方向通信によって、向こうとの会話は可能だ。プレシアと話がしたいという、フェイトの心境も分かる。だが、なのはが、その手を掴んで止める。

「ダメだよ」
　これ以上、フェイトを傷つけさせない。そんな強い意志を感じさせる行動だった。
「でも、」
「フェイト」
「……わかった」
　それも、なのはに静かに見つめられ、引き下がる。
　もう少し……静観することにしよう。
◆　◆　◆　◆
「そこを動くな！」
　局員達は円状に展開。玉座を取り囲むようにして、デバイスを構える。
「プレシア・テスタロッサ。時空法違反・公務執行妨害の容疑で、あなたを逮捕します！」
　対して、プレシアは。
「……愚かしいわね」
　ただ、ぼそりと、そう呟いただけ。局員達によってデバイスを突きつけられていることに、全く動揺していない。ただ気だるげに、頬杖を突いている。
　だが、局員達が『そこ』に足を踏み入れた途端、態度が豹変した。
「何だ、これは!?」
「……ッッ!!」
　局員達は『ソレ』を目にし、息を呑み……手を触れようとした、その時。
「アリシアに触るなアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
　――ズガアァァン!!
　轟く大音声。目を焼く閃光。
「なっ……!?」
　驚き、振り返った局員が見たのは……黒焦げになり倒れ付す仲間

達。
油断などしていなかった。いつ動いても、即座に鎮圧できるはずだった。
それは、わずか一瞬で崩れ去る。
そして。
「私の娘にいいい……！　触るなあァァ!!」
悪鬼の表情で迫る、プレシアだった。
「ヒッ……！」
デバイスを構えようとする局員の顔面を鷲掴みにし……異常な腕力で、そのまま宙に掴み上げた。
――ギリギリギリ……！
そのまま、冗談のような膂力で頭蓋骨を締め上げる。
「あ……がァッ……！」
痛みに呻き、プレシアの手を振りほどこうとした拍子にデバイスを取り落としてしまう。
仲間達は、距離が近すぎて攻撃魔法を撃つことができない。タダでさえ、狭い場所で魔法を撃つ危険は高い上、仲間がプレシアと密着しているのだ。巻き添えにしてしまう可能性も、十二分にあった。
――バチイイィンッ!!
「ぎゃっ……!!」
掴まれていた局員は、ゼロ距離から電撃を食らわされ一発で失神。
「ああっ!!」
ゴミのように放り投げられたその身体は、近くにいたもう一人を巻き込んで床に転がる。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｂｕｒｅｓｔ』
狼狽する残りの局員へ、攻撃魔法を仕掛けた。
――ドゴオォン!!
狭所での爆発は、その威力を数倍に増し……局員達を蹂躙する。
シールドは砕け、吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。
「……他愛もない」
気だるげに、プレシアが言う。

戦闘開始から、たった数分。それだけの時間で、先行部隊はプレシア一人に敗北した。

「管理局。見えているかしら……？　聞こえているかしら……？」

◆▪◆　◆　◆

『管理局。見えているかしら……？　聞こえているかしら……？』

私は、モニターから目を離すことが出来なかった。

プレシアに呑まれていたわけではない。先行部隊の惨状に慄いているわけではない。

ただ、その映像のインパクトに、動くことを忘れていただけだ。

「……フェイト？」

そう。それは、一見フェイトのようだった。

顔は、同じ。そっくりとか、瓜二つとかいうレベルを越えて、同じ。

長く、量の多い金髪。閉じられてはいるが、その両の瞳も、フェイトと同じ赤い色をしているだろう。

だが、共通点といえばその程度。

残るのは、怖気を催すほどの異常な光景だ。

モニターに映る少女は、上下を密封された、瓶のような水槽の中で、薄緑色の溶液に漬かっていた。

胎児のように溶液の中に浮かぶ少女の口からは、気泡が漏れていない。つまり、生きていない。

「う……ッ！」

モニター越しとはいえ、人間の死体を直視してしまい……何より、死体を『娘』と呼び、瓶詰めにして保存している、プレシアの異常な行動が恐ろしい。

「あれは……何？　アリシアって、誰？」

「プレシアの、実の娘だ」

私の疑問に答えたのは、クロノだった。

「プレシア・テスタロッサの娘、アリシア・テスタロッサは……三年前

に死亡している」
クロノが、諦めたように白状しだす。
「フェイト・テスタロッサという名前は、プレシアの過去の経歴には、一言も登場していない」
だが、と言い、一拍置く。
「フェイトという『名前』は無かったが……『名称』は、存在していた」
名前ではなく、無味乾燥な名称。
「それは、人造生命……クローンの製造」
え……？
「クローン……？」
それじゃあ、フェイトは……フェイトと瓜二つの、あの死体は……！
「記憶転写型特殊クローン。プロジェクト・ＦＡＴＥ（フェイト）」
フェイト……？
私の小ざかしい頭脳が、勝手に結論へ辿り着いてしまう。
フェイト。フェイト・テスタロッサ。目の前にいるプレシアを母親と慕う少女。記憶の中にいるプレシアは、随分と優しい母親で……でも、ある境を機に、ぱったりとプレシアは愛情を見せなくなった。
その『境』とは、十中八九……
『そうよ。フェイト……お前は、プロジェクトＦＡＴＥの実験台一号……アリシアの模造品よ』
それは、プレシアによって明言された。
フェイトは、アリシアのクローン。私はなかなか、その事実を受け入れられなかった。
でも、それとは関係なしに、プレシアの口からは悪意が吐き出される。
『私がアリシアを取り戻すまでの間を繋ぐ……ただのお人形』
一言一言が、フェイトの心を抉っていく。
『やっと、アリシアを取り戻す算段が付いた……』
恍惚とし、瓶詰めの娘の遺体を撫でるプレシア。
『だから』

こちらを向き、表情を一変。嫌悪感を隠そうともせず、吐き捨てる。
『おまえはもう、いらないわ。
どこへなりとも……消えなさい！』
これが……曲がりなりにも、母親の言うことか!?
「フェイト、！」
母親から悪意を叩きつけられたフェイトは……地べたに、ぺしゃんと座り込んでいた。
「なんとなく……わかってたんだよ」
ぽつりと、寂しげにフェイトが言った。
「記憶が、ところどころ抜け落ちていたり、逆に、見たことが無いような光景を突然思い出したり」
この前の、突然のパニック。あれも、そういうことだったの？
「当たり前だよね……だって、ボクの記憶じゃないんだから」
フェイトの記憶ではない……なら、その記憶の、本来の持ち主は……
「これは、あそこにいるアリシアの記憶なんだから」
その内心を知ることはできない。けど、想像する事はできる。
自分の記憶の大部分が、自分のものでは無かった。
『優しい母親』だったプレシアが、愛情を注いでいたのが、自分ではなかった。
フェイトがどんなに頑張っても、プレシアは『優しい母親』になどなってくれない。
それは、アイデンティティの崩壊だ。
「わかってたんだよ。でも……！」
堪えきれず、フェイトの頬を一筋、涙が伝った。
「昔のおかーさんは、優しかったんだ……！　それを、信じたかった……！」
一度堰を切ってしまった感情は、涙となってあふれ出す。私は……慰めも、同情も、何も出来ず、何も言わず……ただ、フェイト身体を、アルフと一緒に抱きしめる。
私と同じくらいの大きさであるはずの身体は、細く、小さく、今に

も折れてしまいそうで……
「うえええええぇぇん……!!　えええええぇぇん……!!」
「フェイトッ……!」
打ちひしがれたフェイトの泣き声が、胸に突き刺さる。
『あっははははは……いいザマねぇ』
耳障りなプレシアの嘲笑が、私の神経を逆撫でした。
「おまえは……ッ!!」
どこまで……どこまでフェイトの気持ちを踏みにじれば気が済むんだ！
「てンめえええええええええええ!!」
アルフが、ぎりぎりと拳を固める。
それを、さも愉快そうに見つめ……
『私はねぇ、フェイト……
アリシアと同じ顔をした、あなたのことが、ずっと、ずっと、ずっと……!!』

プレシアが、決定的な一言を吐き出そうとする。
私は咄嗟に、フェイトの耳を塞ごうとする。
クロノがエイミィに、通信を遮断するように指示する。
リンディさんが立ち上がり、何かを言おうとする。
ユーノくんが、感情を露に叫ぼうとする。
全ての行動の、直前。

――――アースラが……『揺れた』。

比喩的な意味ではなく。心理的な意味ではなく。
ただ、物理的に。極めてアナログに。
物体と物体が衝突した際に発生するエネルギーの波を、私達は『揺れ』として感じ取っていた。
その轟音はプレシアの言葉を引っ込めさせ、発生した揺れは、その場にいた全ての者の動きを直前で硬直させる。

衝突した、二つの物体。
うち一つ。それは、アースラの内壁。
合金とも、カーボンとも、プラスチックとも違う、私にとっては未知の物質。ただ、私の常識を覆しうるだけの強度を持っているということは、間違いない。それも、アースラという艦船の最重要区画である、ブリッジを守るために構築された内壁。
その、非常識なまでに頑丈な内壁に……非常識な大穴が開いていた。
数ミリや数センチなど、植物の根が時間を掛けて侵食するなどという、ちんけな穴ではない。まるで、薄いアルミに、釘を金槌で打ち付けたが如き、大穴。
釘と金槌。二つで一つの、衝突した物体のもう片方。それは……

――秀人さんの、右腕。
誰も口を開かない。身じろぎ一つしない。リンディさんも、クロノも、ユーノくんも、アルフも、フェイトも、私も……画面の向こうのプレシアさえ、口を閉ざしている。
「……お前は」
ぼそりと、低く、小さく……それでいて、万人の耳に届く声が、耳朶を打つ。

「……もう、口を開くな」

◆◆◆◆◆

『口を開くな』。
それは、プレシアに向けて発せられた命令のはずだった。
だというのに、なのは達は、一歩も動けない。
俯いたまま、めごっ……と、肘までめり込んだ腕を、壁から引っこ抜く。
魔法の発動気配は、一切無かった。つまり、正真正銘……単純な腕力だけで、壁を穿ったのだ。当然、引っこ抜いた腕は無傷では済まな

い。
握り固められた拳は、自らの握力か、衝突の所為か、グチャグチャにひしゃげていた。
あるはずの無い関節が急造され、骨が、肉を突き破って露出している。
それは徐々に回復はしているが、痛くないわけではないだろう。痛覚が無くなるわけではないのだから。
痛みを脳に伝えるべき神経が千切れたか……もしくは、怒りが痛みを振り切ったか。恐らくは、後者だ。
――ボタッ……ボタタッ……
噴水のように噴出した血が、床に鉄錆びくさい水溜りを発生させる音と。
――パチ……パチッ……！
何かが弾けるような音。
その二つだけが、だだっ広いブリッジにある、唯一の音だった。
アースラ内部で、訓練室など限られた場所以外では魔法は使えない。アースラに搭載された装置で、魔力の結合を打ち消されてしまうからだ。
なのに……秀人の身体を取り巻くように、空色の光が立ち上り、弾けるように帯電している。
魔力は……魔法の力は、多分に感情や、精神力に影響される。
普段なら、いくら秀人やなのはといえど、ここで魔法を使うことはできない。
だが、今は……秀人の魔力は感情に呼応し、異常なまでに高まっている。
時折稲妻が爆ぜ、アースラのエネルギーと、秀人の魔力がぶつかり合っていることを示していた。
そして、その色が空色……秀人の魔力光だということは、アースラが、秀人さんの魔力を打ち消しきれていないという、なによりの証だった。

感情。それは……『怒り』だ。
地底のマグマのように煮え滾り、天上のフレアのように燃え盛る……圧倒的な、いっそ暴力的なまでの、『怒り』。
その怒気に中てられ……なのは達は、呼吸することさえ、忘れていた。
いや、違う。この『怒り』に触れて、矛先が自分に向いてしまうことが怖くて……何も、出来なかった。
『ふ……ふん！　お前が何を言おうと……私の邪魔はさせない！』
最初に動いたのは……動いてしまったのは、プレシアだった。
秀人が顔を上げる。さながら、獲物を捉えた肉食獣のように……
『怒り』の全ては、プレシアへと向けられた。
「口を開くなと……」
幸いなことに、なのは達はその表情を見ることは無かったが……プレシアは、真正面から見てしまった。
――憤怒に染まる……鬼のようなその顔を。
「言わなかったか……？」
ずしん、と、重力が増したかのような錯覚を、なのは達は感じた。
威圧感、圧迫感……そういうレベルではない、文字通りの『重圧』が、なのは達を真上から押し潰した。
『ひっ……!!』
プレシアは明らかに恐怖を覚え、一歩後退する。その時点で、既に勝敗は決していた。
その恐怖を振り払うように、プレシアがデバイスを凪ぎ……
「敵拠点に、大量の魔力反応……ランク、いずれもＡからＡＡランク……」
蚊の鳴くような声で、エイミィが報告する。この状況で発声できただけ、エイミィは立派だ。フェイトなど、とうに限界に達し、意識を失っているのだから。
「エイミィ」
ぞっとするほど静かな声で、秀人が言う。
「先行部隊は全滅した。出撃する」

凍り付いているリンディに構わず、確定事項のように、そう言った。
「あ……あの、ちょっと待って。さっきのゲート、潰されちゃって……新しく開くのに、ちょっとだけ時間が……！」
「何分だ」
単刀直入に、そう聞く。
「にじゅっぷん……」
「十分でやれ」
「は、はいッ!!」
エイミィは、青ざめた顔と涙目でコンソールを叩き始める。

そして、しばし沈黙の後……ふと、秀人が表情を変えた。
「……準備が出来たら呼んでくれ」
それは、いつもの秀人の声色。
もちろん、努めてそういう声色を作っているわけだが、なのは達は、それに気付かなかった。僅かながら自制心を取り戻し……端的に言えば、我に返ったのだろう。
だが、なのは達はそんなことを考えるより先に、重圧から開放されたことに安堵し、久方ぶりとなる呼吸を行う。
「はいっ！　お任せ下さい！」
エイミィは慣れない敬語と共に、びしっと敬礼した。
「……」
その背中に、なのはが声を掛けた。
「秀人さん……だよね？」
なのはは、そう言ってから、あまりにも馬鹿な質問をしてしまったと気付いた。
だが、それを責められる者が、誰一人としてここにいただろうか？
誰よりも秀人を信頼するなのはでさえ、そう感じずにはいられなかったのだ。
秀人の怒りには、それだけ凄まじいものがあった。
プレシアの所業に、堪忍袋の尾が切れた――ただそれだけとは、到底考えられない。無理やり言葉に表現するとしたら……そう。

自らの信ずる何かが、穢されたかのようだった。
「……」
なのはは、恐々と確かめるように……秀人の指先をそっと掴む。
そうして振り払われないと確認し、ぎゅっと両手で掴む。
秀人もそれを握り返し……ようやく、なのはに振り返った。
「……ごめんな。怖がらせて」
ぽん、といつものように頭を撫でられる。
「……！」
たまらず、人前であるということも忘れ、秀人の腰のあたりに抱きついた。
「ごめんね。つい……」
なのはが、顔を赤らめて身体を離す。まだ僅かに指先を掴んだままというのは、単に甘えているだけだろう。
「もう手はいいの？」
ユーノが秀人に聞く。
「このとおり」
ひょいと持ち上げられた右手は、傷跡一つ無く治癒していた。その手で、床にへたりこんだフェイトを、横抱きに抱え上げる。
「ユーノはアルフを」
「ああ、わかった。……ほら、アルフ」
「すまない……」
そしてユーノは、腰砕けになったアルフに肩を貸し、立ち上がらせる。
そのままブリッジを後にし……クロノも、その後を追った。
◆◆◆◆
秀人たちがブリッジを出て行った途端、空気が一気に弛緩した。
「こ……」
ぴたりと、作業する手を止めるエイミィ。
「怖かったぁ……！」
べしゃっ……と、そのまま突っ伏す。
「……」

だが、リンディはそれを責めることはしない。というより、できない。リンディもまた、膝が震えて立ち上がることができないからだ。
管理局員として、提督として、アースラ艦長として……決して少なくない数の修羅場を
潜ってきたはずだった。
だが、あれは……埒外だ。あそこまで純粋で、高濃度な『怒気』は、未だ経験したことも無い。
『殺気』であれば、まだ耐えられた。戦場では、大なり小なり必ず経験するものだ。『殺してやる』という、言ってしまえば分かりやすい感情に過ぎない。
だが、『怒気』は違う。何をするのか、全く想像する余地が無いのだ。それだけに、恐ろしい。
それに加え、あの魔力。
確かに、感情に比例して魔力が高まるというのは事実だ。
しかしそれは、数値にして数パーセント、最大でも十パーセントに届くかどうかというレベルに過ぎない。あんな……艦船の阻害効果を上回る程の増幅など、あるはずがない。
オーバーSランク魔導師の魔力量は、平均して２００万前後。魔力量で強さの全てが決まるわけではないが、一つの基準にはなる。
アースラや他の次元航行艦には、魔力の結合を阻害する……ＡＭＦ（アンチ・マギリング・フィールド）の発生装置が搭載されている。
まだ新しい技術のためサイズは巨大であり、十メートル四方もあるが、効果は折り紙付きだ。
最大魔力値３００万以下の魔導師……すなわち、現時点で確認されている全ての魔導師は、魔法の発動すら困難になる。まして、『無意識に流れ出した魔力が、体表に目視で確認できる』レベルの魔力結合など、誰にも……リンディにもできない。しかも、秀人はそれを無意識の内に行っていたのだ。
つまり、あの時点で秀人の魔力は、３００万を軽く超えていたということになる。
以前計測した際の、秀人の魔力量は１５０万前後。当然、これだけ

でも非常に高い数値なのだが……その、更に二倍。
記録が残っているだけでも、それだけの魔力を持った人間は確認されていない。
そう、まさに……
「……非常識だわ」
リンディには、そう漏らすことしかできなかった。
◆▪◆　◆　◆
「ありがとう」
フェイトをベッドに寝かせていたら、アルフに礼を言われた。
「何がだ？」
「あの時、プレシアの言葉を遮ってくれて」
……ああ。
「もし、最後まで言われていたら……フェイトは持たなかった」
あの時プレシアが言おうとしていたのは、きっと……フェイトを決定的に殺す言葉。
ああしなければ、アルフが言うように、フェイトは正気ではいられなかったはずだ。
とはいっても、さっきキレたのはそういう計算じゃない。本気の本気で、俺はプレシアに対して怒っていた。いや、今も、プレシアへの怒りが渦巻いている。
なのはが怖がるから今は抑えているが……戦闘になったら、抑えきれるとは思えない。
まぁ、その辺はクロノが上手く手綱を握っていてくれると信じよう。
「なぁ、頼みがあるんだ」
頼み……？
「何だよ。言ってみろ」
「アタシも、連れて行ってくれ」
……
「それは、」
言葉に詰まる。

アルフは……回復したとはいっても、それはあくまで、普通に過ごすなら、という前提
での話だ。戦闘なんて、とんでもない話だ。
「いいんじゃない？」
「ユーノ!?」「ユーノくん!?」
思わず、なのはとハモる。いきなり、何を言い出すんだ。
「行きたいっていうなら、連れて行ったほうがいいよ」
「でも……まだ、ダメージが」
残っている。そう言おうとした俺の眼前に、目にも止まらない速さで、拳が寸止めされ
た。拳の主……アルフが、不敵に笑う。
「ダメージが……なんだって？」
……一応、雑魚の相手くらいはできるか。でも、持久戦は厳しい。
「……クロノ」
俺は、クロノに意見を聞いた。
「おい、フェレットもどき。きみには勿論、考えがあるんだろうな」
クロノはまず、言いだしっぺのユーノに確認を取る。
「簡単だよ。僕がアルフとワンセットで行動する」
サポートには秀でているが直接的な攻撃力に乏しいユーノと、攻撃力はあるが長く戦えないアルフ。確かに、理にかなっているかもしれない。
「……言っておくが僕も、自分のことで手一杯だ。手助けはできないかもしれないぞ。それでも、やるのか？」
「「やる」」
答えは、随分とあっさり出た。
ユーノとアルフは声を揃え、頷いた。
「……ああ、わかった」
微妙ながら、戦力が増えた。
「秀人さん」
なのはが、こしょこしょと小声で話してくる。
「イザというときは、私がフォローするから……」

「ああ、俺も気をつける。
もしアルフに何かあったら、フェイトに顔向けできないからな……」

それと、もう一つ。
「先に行ってくれ。すぐ追いつく」
俺はきびすを返し、元来た道を逆走する。
「どうした？」
「忘れ物だよ」
それも、かなり大きな。
「急げよ」
クロノは、さっさと行ってしまった。察しのいい奴で助かる。

「フェイト」
俺は、フェイトの寝るベッドに腰を下ろす。
「……寝ていてもいい。俺の独り言に、付き合ってくれ」
俺の今からやろうとしていることは、ただの自己満足の不幸自慢だ。
生傷を他人に晒して、悦に浸る馬鹿な行為に過ぎない。
でも、それがフェイトに必要なら……俺は、喜んで馬鹿になる。
「俺の身体のことは、もう知ってるだろ？」
ベッドの脇に置かれた、金属製のポッドを手に取る。
――メキッ……ガキキッ……
それを握り潰し……手の平サイズにまで圧縮する。
「この馬鹿力は……欲しくて手に入れたものじゃないんだ」
そう。こんな力なんて、要らなかった。俺はただ平凡に……両親と共に過ごしたかっただけだったのに。この身体のせいで……俺は何もかも失った。
「骨格が筋力に耐えられるようになるまで、ベッドから一歩も動けなかった」
痛みで暴れないよう、特性のベルトで全身をベッドに拘束され、縛

り付けられた。
「一日に何度も骨が折れて、靭帯が千切れて……治療費も、かなり掛かった」
際限の無い支出に、家計は火の車。父さんは病気を患い、母さんは心を病んだ。
仲の良かったおしどり夫婦。そのはずなのに、いつも廊下で言い争って……いや、不満をぶつけあっていた。
「母さんが言ってたんだ」
もう、俺に聞こえることも気にせず、母さんは大声で叫んだ。
『あんな子なんか、産まなければよかった』……って」
どんな怪我よりも、あの言葉が痛かった。だから、願った。
「……毎日毎日、鎮痛剤で薄らボンヤリとした頭で、カミサマなんてもの相手に、必死に願ったよ。
『身体を丈夫にしてください』
『怪我をしても大丈夫なようにしてください』
……って」
実際、カミサマはいたのだろう。俺の願いは、聞き届けられた。
「身体が筋力に馴染んで、どういうわけか、怪我がすぐに治るようになった」
俺は喜んだ。これで、母さん達に迷惑がかからない。家に帰れる……そう思った。
「でも、遅かったんだ」
父さんは、母さんは……もう、俺と一緒にいることさえ、嫌になっていた。
「俺は、遠い場所にある施設に入ることになってた」
ハッキリと言えば、厄介払いだ。
「俺と同じような境遇のヤツが、結構いたよ」
親に捨てられた。親が蒸発した。親が死んだ。親戚中をたらい回しにされて来た。

男も女も、野良犬みたいにギラついた目をしていたっけ。
自分より年下を、自分より身長が低い奴を、成績が悪い奴を、自分より駆けっこが遅い奴を……自分の『格下』を、虐げる対象を、いつもいつも、捜し求めていた。
俺は、私は……コイツよりはマシだ、と慰めるために。
「でも、そんな奴らも……俺のことを怖がって、近づこうとすらしなかった」
腕力というのは、子供社会の中では絶対だ。それが、子供相応のものだったら、腰巾着が擦り寄ってきたりもするのかもしれない。
だが……グランドピアノを片手で持ち上げ、コンクリートの壁をぶち抜くような力は、明らかに異質で、異常で……異端だった。
「大人達には猛獣扱いされて、檻の中に閉じ込められた」
鋼鉄の扉の奥の、鉄格子の窓しかない薄暗い部屋に閉じ込められ、食事もトイレも睡眠も勉強も、全て一人で済ませていた。
扉の横にある、食事やらが差し入れられる小窓が、外界との唯一の接点だった。
「誰かと会話することも、滅多に無かった」
娯楽用に差し入れられる、時代遅れの漫画や小説。
その中に自分を登場させ、架空の友情や愛情で、自分を慰め続けた。
漫画の中のヒーローが、自分をこんな牢獄から連れ出してくれるのだと、妄想に耽っていた。でも、そんなことは有り得るはずも無く……
「何年かそこで過ごして……高校卒業の資格を取ったのと同時に、そこを追い出された。……まぁ、年齢は詐称してたんだけどな」
就職し自立できるように……正確には、国からの支援金が打ち切られる年齢になると同時に、俺は呆気なく牢獄から解放された。
結局のところ、俺を助けてくれるヒーローなんて現れず……ただぞんざいに、扱い方の分からない『自由』を投げ渡された。
「必死で、生きるために駆けずり回ったよ」
泥水を啜って生きるのも、野垂れ死ぬのも、自由だった。
何者にも拘束されない代わりに、誰にも支えてもらえなかった。

今の職場に落ち着くまで、各地を転々とした。日雇いから短期……時には、合法なのかどうかも分からないような仕事、明らかに違法な品物の運搬まで。モラルなんかとうに無くなり、ただその日の食事と、雨風を凌げる場所を見つけるだけで一日が終わっていった。

俺とそう年の変わらない奴らが……何の心配事も無いような能天気な顔で、親に洗濯してもらった綺麗な服で、ただ遊ぶ金を稼ぐための気楽なバイトをして、買ったアクセサリーをジャラジャラさせて俺の横を通るたび……殺したいほど、妬ましくなった。

「今の職場に拾ってもらわなかったら、俺は泥棒か、人殺しになっていたかもしれない」

そんな俺を拾ってくれたのが、今の上司……カントクだ。

日雇いの仕事現場の縁で、素性の怪しい俺を雇ってくれた。

企業を立ち上げたばかりで、とにかく若くて体力のある奴が必要だったのだと言った。

実際には、カントクの会社には俺を雇う余裕も、俺の保証人になってアパートの敷金礼金を立て替える必要も、全く無かった。

一応は社長であるはずのカントクさえ、生活費だけが給料のような、ギリギリの生活が一年以上続いていたのだから。

「……しばらく後に、探偵を雇ったんだ」

会社がようやく軌道に乗り始め、『貯蓄』という言葉の意味を、身をもって実感した頃、

それでも生活費を差し引いたら殆ど残らないような給料を……なけなしの生活費を削って、何ヶ月も貯めて、ようやくその資金が溜まった。

「父さんと母さんを探してくれ……って」

散々な目にあってきた。

やっと救われる。そう思った。

離れ離れだった両親と再会して、ぎこちなくても、親子の関係を取り戻し、また三人家族で暮らせる。

俺には、誰よりも幸せな未来が待っていると……そう信じていた。

「一ヶ月くらいで見つかったけど……遅すぎた」

カミサマはいなかった。
いたのは、俺に他人分の不幸を押し売りする、『現実』という名の悪魔だった。
俺がこんな身体になったのも、交通事故で死ななかったのも……全ては、俺を絶望に突き落とすために仕組んだ、悪魔の脚本だったのかもしれない。
仕事熱心だったのか、おしゃべりだったのか。あの探偵は、現場の状況まで、詳しく教えてくれたもんだ。
「母さん、は……」
不意に、目の前が滲むが……それだけだ。もう、流れるものは、何も無い。
「俺……俺を、施設に預けた、その日の晩に……」
あの時、引き止めていれば……それをしなかったばかりに、母さんは。

「首を吊って……死んだんだ」

俺が生まれ育った家で。いつも食事をしていた部屋で。排泄物を垂れ流しながら、白目を剥いて死んでいたそうだ。
それを見つけたのは、病身の父さんだった。
「父さんも、その後すぐ……」
その父さんは、次の月に病気をこじらせて、一人で死んだ。今の俺が暮らしているような安普請のアパートで、孤独死していたらしい。
もう、病気を治す気も無かったんだろう。病院の往診記録は、母さんが死んだ日で、ぱったりと途切れていた。
「俺の家は、とっくに取り壊されて無くなってた」
自殺者の出た借家など、買い手も借り手も付くはずが無く……大家によって取り壊され、駐車場になっていた。
毎朝寝起きしていたベッドも、食事をしたリビングも、窓からの眺めが良くて気に入っていた屋根裏部屋も、何もかも、何一つ、残っていなかった。

「だから、俺にはもう……やり直せない」
やり直すべき両親はもう、この世にいないのだから。
「どんなに泣いて後悔したって、あの日には戻れない」
――何度、夢に見ただろう。
あの日、道端で遊んでいなければ。
車に撥ねられなければ、今でも俺は普通の人間で、普通の人生を歩んでこられたのかもしれないと。
――何度、夢に見て泣いただろう。
あの日、母さんを引き止めていれば、母さんは死なずにすんだかもしれない。
父さんと一緒にちゃんと病気を治して、二人だけでも幸せに過ごせたかもしれないと。
でも、もう遅い。
俺の家族は終わってしまった。どうしようもない程に、壊れてしまった。もう、直すことも、取り戻すこともできない。
「でも、フェイトは……まだ、やり直せる」
フェイトの母親は、プレシアは……まだ生きているのだから。
「俺がプレシアの首根っこふん掴まえて、フェイトの前に連れて来てやる」
どんな事情があろうと。どんな理由があろうと。
「プレシアに土下座させて、今までのことを謝らせる」
全ては、それからだ。
「もし、それでも無理だったら……どうしてプレシアを許せなかったら」
フェイトは、プレシアにされたことを覚えているだろう。
もう、盲目的に従うことをやめたフェイトは、ちゃんと不満を訴えることができる。怒ることができる。そして、その結果、プレシアとの決別を望むなら……
「アルフも連れて、俺ん家に来ればいい」
俺が、フェイトの家族になる。
「なのはと、ユーノと、俺と……五人で、楽しく暮らそうぜ」

きっと、楽しい。寂しさなんて、感じる暇も無いだろう。
フェイトは毎日、なのはやユーノ、アルフと遊んで、喧嘩して、何度も仲直りを繰り返して……今よりもっと、絆を深めていく。
「皿を突っつきあって食事して、取り分が多いの少ないの、つまんないことで騒いだりさ」
――俺がしたかったこと。家族みんなでの食事。
「ああ、学校に通うのもいいな。友達を作って、放課後、おしゃべりしながら道草食って帰るんだ」
――俺が出来なかったこと。普通の学校生活。
「誕生日には、みんなで盛大にお祝いするんだ。でっかいケーキ買って、年の数だけ蝋燭立てて、その日の主役が一気に吹き消したりして」
――俺がしてもらえなかったこと。誕生日のお祝い。
したかったことを、できなかったこと、してもらえなかったこと。
全部、全部……俺が、叶えてやる。

「俺が、嫌でもフェイトを幸せにしてやる」

時計を見る。丁度、十分が過ぎていた。
「独り言は、これでおしまいだ」
――コトン……
ベッドの脇に、それを置く。
フェイトの魔力光と同じ、黄金色のトライアングル。
バルディッシュ。クロノからガメておいた。
一人では心細いに決まってる。常に傍にいて、アルフと共にフェイトを守ってきた、フェイトの相棒なら、きっと。
『フェイトのこと、頼んだぞ。バルディッシュ』
届くはずの無い念話を、願掛けのつもりで送ってみる。
『言われるまでも無く』
……え？
頭に直接響いた声……念話に驚き、振り返る。
だが、フェイトは変わらず眠ったままで、バルディッシュも沈黙し

ている。
聞き間違い……だよな。
マスター登録されていない俺は、ＡＭＦ下でマスター登録をしていないデバイスと、念話を行うことはできない。
……ま、いいか。
「行ってくる」
さぁ、行こう。フェイトの幸せを、取り戻しに。
◆　◆　◆　◆
秀人が出て行ってすぐ、フェイトはぱちっと目を開けた。どうということはない。最初から……正確には、廊下を秀人に抱えられて移動していた時には、もう目を覚ましていたのだ。狸寝入りならぬ、狐寝入りというやつだった。
「……秀人も、辛かったんだ」
ベッドから降り、バルディッシュを手に取る。ろくにメンテナンスもされず、戦闘を続けたせいか、細かな傷や罅割れが痛ましく刻まれていた。
――キンッ……
デバイス形態に変形させる。
「あはは……ボロボロ、だね」
そう。デバイス形態のバルディッシュは、あちこちがひび割れ……すでに、限界近くに達していた。武器としての強度を保っているかどうかも怪しい。
「ボクといっしょだ」
見てくれだけの、ポンコツ。
「おかーさんは、ボクのことなんて、最初から見てなかったんだ」
自分がプレシアの娘だというのは、ただのまやかしで。
「おかーさんが大事だったのは、アリシアだけだった」
自分は、アリシアの模造品だった。
でも。
「あいつは……そんなボクでも、友達になってくれるのかな」
高町なのは。フェイトの宿敵で、ライバルで……『友達になりたい』

と言う、変な奴。
「あいつは……こんなボクでも、幸せにしてくれるのかな」
吾妻秀人。『嫌でも幸せにしてやる』と言った、不思議な奴。
「あいつらは……『ボク』を見てくれた」
アリシアの模造品ではなく、一人の『フェイト』という人格として。対等に扱ってくれた。
「ボクは……どうすればいいんだろう」
彼に、彼女に……報いたい。でも、どうすればいいのか分からない。
「何から始めたらいいんだろう」
誰かのために、何をすればいいのか。
『Ｓｉｒ．』
迷える主に、寡黙な戦斧が答えた。
『私は、造物主の願いを託され、それを実現しうる者として作り出されました』
「リニスの……？」
バルディッシュの製作者。プレシアの使い魔にして、フェイトの育ての親……リニス。
「リニスは、何て……？」
ある日、忽然と姿を消してしまった。何も言い残す事も無く。
彼女がバルディッシュに託した願いとは、一体……
『――あなたの未来を切り開く剣であれ。
――あなたの生涯を支える杖であれ。
――あなたの夢を守る盾であれ。
……そう、託されました』
「……リニス」
目を閉じ、メッセージを反芻する。その目蓋から、一筋の涙が流れた。
「そうだよね。今のボクを見たら、がっかりしちゃうよね」
うじうじと悩んで、二の足を踏むような自分が、リニスに誇れる姿なわけがない。
「……うん！」

顔を上げたフェイトは、吹っ切れたような笑顔を見せた。
バリアジャケットを装着。
「ボクは、もう一度強くなる」
己の覚悟を確かめる。
「リニスに、アルフに……誇れる自分になるために！」
傷だらけのバルディッシュを手に立ち上がったフェイトの姿は、凛々しく、気高く……
「行くよ、バルディッシュ！」
誰よりも、美しかった。
バルディッシュのコアが……黄金色に眩く輝いた。
光は広がり、バルディッシュを包み込む。そして……
――バキィンッ……!!
『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ』
全ての傷を、完全に修復した。
誰もが、知る由も無いだろう。
秀人がぶち抜いたブリッジの壁。丁度その場所に、ＡＭＦ発生装置のコントロールユニットがあったことを。そして、秀人の拳が、寸分違わずそれを砕き、ショートさせていたということを。全ては、偶然に過ぎない。だが、その出来すぎた偶然はまるで、フェイトを促しているかのようだった。
何も阻むものは無く、フェイトは魔法を発動する。
転移魔法。
『いいのですか？　使ったことの無い魔法です』
そう。フェイトは、転移魔法を使ったことがない。バルディッシュに登録されてはいるものの、いつもアルフにまかせっきりで、練習さえ怠っていた。
魔法の失敗は、直に命を危険に晒す。
ここで大人しく待っていれば……そう呟く、弱気な自分がいる。だがフェイトは、自分の弱さを、己の意思でねじ伏せた。
自分はもう、一人ではないと……
「ボクを支えてくれるんでしょ？」

『……Ｙｅｓ．』
頼りになる相棒が、支えてくれると知ったから……
「頼りにしてるよ、バルディッシュ！」
『Ｙｅｓ．ｓｉｒ　！』
フェイトはもう、迷わない！
――ヴォンッ!!
そして立ち上る、黄金色の魔力光。
『術式構築・確認。座標入力・確認。必要魔力充填・確認。
システム、オールクリア』
驚くほどスムーズに、魔法は発動段階に入る。
フェイトの魔法の才覚が、意志と完全に合致した瞬間だった。
『主。その力は、何のために？』
――その力を正しく使える日が、きっと来る。
バルディッシュは、秀人の言葉を、再び主に問う。
「当然！」
フェイトは、あの日の言葉に……今こそ答える。
「ボクの友達を、助けるために!!」
――フェイトは、飛翔する。

# 第二十二話

キーを差込み、イグニッションキーを回す。
この先必要の無いと分かっていても、ついライトやウインカーの灯火類を確認してしまう。セルスイッチを押すと、ボンッ……と、低音と共にエンジンが始動し、アイドリングを始めた。
「向こうの状況はどんな感じだ？」
『ゲートはギリギリまで遠ざけたんだけど……やっぱり、転移してすぐ、敵兵に襲撃されると思う』
ま、今回はそうだよな。先行部隊があんなに簡単に突入できたのは、きっとプレシアが舐めきっていたからに違いない。事実、瞬殺だったもんなぁ……
ヴォンッ、ヴォンッ……と、エンジンを空ぶかしして、調子を確かめる。
「各部、問題なし……と」
俺がシートに座り、なのはがタンデムシート。ここまでは、いつもの乗り方だ。
ただ、今日は……
「せ、狭い……！」
ユーノは俺のポケットにねじ込まれ。
「アルフ、ちゃんと掴まるんだよ」
「ああ、そうする」
なのはの後ろに、アルフが座り。
「……走るのか？　この状態で」
「カワサキなめんな」
クロノがリアキャリアの上に立ち、俺の肩に手を伸ばすという……どこの途上国のカブだと言いたくなる様な、凄まじい曲乗りだった。
飛行魔法でバラバラに飛んでいたのでは、飛行スピードの差でばらけてしまうし、アルフは普段のスピードを出せない。
だからといってアルフを抱えて飛ぶだけの余裕は誰にも無く……こうして、俺のバイクに五人ですし詰めになっている、というわけだ。

大半が子供と女。それぞれの体重は軽いが、五人合わせれば二百キロ近い。
６００ｃｃのエンジンを積んでいるとはいえ、いつもの速度が出せるのかどうか……ハイオク
入れて、エアクリ外して直キャブにして、マフラー換えて……と、突貫工事でパワーアップしてみたが、傀儡兵の追撃を振り切れるかどうかは、正直疑問だ。
もっとパワーのあるバイクも用意できないことも無かったんだが（管理局は予算潤沢）、身体に馴染まないバイクにいきなり乗せられて、いつもの運転ができるかどうかわからなかったから、いつものバイクを使う流れになった。
『あと五秒で転送するよ』
エイミィの声を聞きつつ、両足でバイクをしっかりと支える。
『３』
『２』
『１』
――ガオオオオオオオオオオオッ……!!
レッドゾーン寸前まで吹かして……
『みんな、死なないでね！』
ゼロ。同時、目の前の景色が歪み……次に見えたのは。
『『『『グオオオオオオオオオオ!!』』』』
傀儡兵どもの、一斉攻撃!!
「うおおおおおおおおおおお!!」
一気にクラッチを繋ぎウイリー気味に急発進し、その攻撃をかわす。
――キュゴガガガガガガッッッ!!
無数に飛来したエネルギー弾や投擲の雨が、直前までいた場所を抉り、吹き飛ばした。
雑魚には構わず、一気に門に突撃する。蹴散らすのは簡単だが、温存しておいて損は無い。この先どんな敵がいるのか、全く分からないのだから。

でも……
（加速が鈍い！）
スピードメーターは、時速１２０キロあたりで停滞していた。やっぱり、過剰積載のツケが回ってきたか……！
「チッ……！」
速度重視の飛行タイプが、確実に距離を詰めてきている。
――ドンッ！　ドンッ！
「っと!!」
なんとか、かわしたけど……さすがに、体重移動が難しすぎて傾け辛い。
「どうする？　ここでバラけて戦うのか？」
クロノは、流れ弾をひょいっと軽く避けながら聞いてくる。
一応、門までの距離は縮まってはいるけど……今こうしている間にも、門のあたりに大量の傀儡兵が集まってきている。このままのペースでは、あの日と同じか、それ以上の数の傀儡兵を相手取ることになってしまう。
だからといって、バイクより速く飛べる奴はいない。
ま、しょうがないか。
「クロノ、降りるぞ」
かくなる上は軽量化だ。
一番重い荷物……俺とクロノが降りれば、まだ加速できるはずだ。
「は？」
クロノが怪訝そうな顔をする。
「なのは、後よろしく」
「え？」
なのはの手をハンドルに導き、しっかりとスロットルを握らせ……
「とうっ！」
クロノの腕を掴んで、バイクから飛び降りた。
「えええええええええええええ!?」
ギアチェンジとコーナリング、ブレーキのことを考えなければ……
ただしがみついて、スロットルを開けてさえいれば、バイクは直進す

る。
「ひ、秀人さああああぁぁぁ……」
フェードアウトしていく、なのはの叫び。
「っと!!」
クロノは危うげ無く着地。
――ブオオオオオオオッ……!
おー、ちゃんと走ってるな。とりあえず一安心だ。
「……大丈夫か？」
心配性な奴だなぁ……
「大丈夫だって。自転車に乗れればバイクにだって乗れる」
あとは、なのは次第だ。いつもタンデムシートに乗っていたし、直進するだけなら、さほど問題は無いと信じよう。
「さぁて……」
――ギンッ……
魔力刃を構築。
目の前にいる数多くの傀儡兵を、正面から睨みつける。
「ちょっとばかし、足止めさせてもらおうか？」
プレシアの居城のどこかには、きっと傀儡兵の生産プラントがある。でなければ、あれだけの兵力をたった一人で生産・維持できるとは思えない。
俺達がここで大多数の傀儡兵を足止めし、その間になのは達が生産プラントを潰せば、あとはプレシアまで一直線だ。
「水を差すようで悪いが……生産プラントがあの中にあるのか、まだ確定したわけじゃないぞ。別の場所にあったり、最悪、生産プラントなんてそもそも無いかもしれない」
クロノが言うことも尤もだ。でも、やってみないことには分からない。それに……
「俺達が足止めしておけば、なのは達が少しでも楽に進めるだろ？」
なのはは、いかに魔力が多かろうが九歳の女の子だ。体力にも恵まれていないし……何より。
「なのはの身体には、傷一つ付けさせないって決めてるんだよ、俺は」

「……過保護だな、君は」
そう言い、Ｓ２Ｕを構えるクロノ。俺が過保護なら、クロノはお人よしだ。
「悪いな。また付き合ってくれ」
――ヴォンッ!!
あの日と同じように、魔方陣を展開し、ラインを伸ばす。
――バシュッ!!
そして、クロノに繋げる。
あの時と違うのは、俺も、クロノも、万全の状態だということ。
これで、俺にはクロノの処理能力が加わり、クロノには俺の魔力が加わる！
『『『グオアアアアアアア!!』』』
痺れを切らし、傀儡兵が突っ込んできた。さあて、と。
「「うおおおおおおおおっ!!」」
行くぞッ!!
◆▪◆◆◆
「ひゃあああああああ！」
ひ、秀人さんの馬鹿ーーーー！　私が、私が……！　すっごい運動音痴で、自転車にも乗れないってこと忘れてるでしょおおおお!?
『グオオオオオ!!』
「きゃあああ！　どいてーーーーーー!!」
見よう見まねでブレーキを掛けようと、して……
「届かないー!?」
スロットルを握るのだって精一杯なのに、ブレーキにまで手を伸ばす余裕なんてあるはず無いよー!!
『Ｆｌｏａｔｅｒ』
ふわ、っと前輪が浮かぶ。
『Ｓｏｌｉｄ』
その前輪が、強化魔法の光を纏って……
――めきぐしゃべきっ
傀儡兵を、轢き潰した。

「……」
はははは……やっちゃった……自動車運転過失致死……
もう、引きつった笑いしか出てこない。
『オ、オオゥ……』
ミラーに映る傀儡兵が、ぴくぴくと悶えている。
『マスター、落ち着いてください。いつも乗っているではありませんか』
「いつもは秀人さんが運転してくれるんだもん……」
「なのは！　前！　前ー！」
って、
『『『『『ウオオオオオオ!!』』』』』
怒りに燃える傀儡兵たちが、目の前に迫っていた！
「いいいやあああああああ!!」
『Ｓｏｌｉｄ　！』
前輪の強度を上げ、
――ばごばごべきべきめきゃっ
撥ねて、轢いて、押し通る！
『『『ギャアアアアアア!!』』』』
「ごめんなさあああああああい!!」
何て後味の悪い!!
――ガッ、ガガガガガガッ！
「うわ、うわあああああっ!?」
砂利やら砕けた石畳の欠片を踏んでしまい、一気にハンドルがぶれ出す。
「くっ、このっ!!」
ハンドルは、私の抵抗を嘲笑うかのように暴れ……！
――ずるっ
「あっ……！」
こ……転ぶッッ!!
「っとォ！」
と、私の両側から手が伸び、ハンドルをがっちりと握った。

「こんにゃろっ！」
ぐわん、と大きく揺れ……なんとか、タイヤが地面に接地し直した。
とりあえず、転倒することは防げたけど……
「アルフ、運転できるの!?」
ユーノくんが、私のポケットから顔を出し、風切り音に負けないように叫ぶ。
間違いなく、初めての筈。だが、
「ああ！　もう十分見たからね！」
カキンッ、と、左下方でギアの変わる音。そして、
――ガオオォォッ!!
アクセルを開け、加速！
まだ多少のぎこちなさはあるけど、間違いなく……乗れている。
「ははっ……なかなか、いいモンじゃないか！」
――ガオンッ!!
「ひゃっほー！」
アルフは、その長い手足を存分に活かし、バイクを操る。殆ど直感的にバイクの挙動を見極め、コントロールしている。
すごい。さすが、狼を素体にしているだけあって、運動神経も反射神経も抜群だ。
タンクにへばりつくようにして、メーターを覗き見る。時速……２００キロオーバー！
門はもう、目の前だ！
「レイジングハート！　ユーノくん！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』「わかった！」
私がプロテクションを展開。そして、ユーノくんが円形の形を崩し……以前、秀人さんが使ったときのように、円錐状に変形させる。
「アルフ！　スピード上げて！」
「言われなくても！」
――ガオオオオオオオオッ!!
アクセルを全開！

「う、う……！」
しがみついているタンクから引っぺがされそう！
でも、これだけスピードが出ていれば……！
――ヒュガガガッ!!
傀儡兵達はまともに照準を合わせることができず、攻撃は掠りもしない。
傀儡兵の攻撃を振り切り、巨大な扉へ！
「「いっけえええええええええええええええ!!!」」
――バガアアアアアアンッッ!!
扉を粉砕し、プレシアの居城へ乗り込んだ！
◆・◆　◆　◆
「忌々しいッ……」
プレシアは、アリシアの眠るポッドを伴い、庭園の最下層に降下していた。
目の前に展開されるモニターには、増産が追いつかない程のペースで傀儡兵を破壊する秀人とクロノが、そして、庭園内を原始的なガソリンエンジンで爆走する、なのは達の姿が、それぞれ映し出されていた。
「でも……もう終わり」
秀人の気迫に怯えるという醜態は晒したが、プレシアの手元には、九つのジュエルシードがある。
「さぁ……始めましょう」
アリシアのポッドを、愛おしそうに撫でる。その周囲に、九つのジュエルシードが浮かび上がり、旋回していた。
「取り戻すのよ……」
コンソールのキーを、叩いた。
――ズズズ……
低く、庭園が唸る。そして、
――ズゴゴゴゴゴ……!!
それは、巨大な震動へと変化した。
「私達の全てを!!」

◆　◆　◆　◆

アースラのブリッジ。そこは現在、かつて無い緊迫感に包まれていた。アラートは鳴り続け、誰もが現状の把握と対処に追われていた。

「次元震、発生!!」

「徐々に増加中！　既に、中規模に達しています！」

エイミィは庭園内をサーチし、この次元震の発生源を探る。

「『庭園』の動力炉と連動しています。恐らく、足りない分の出力を補おうと……」

九つという、想定の半分にも満たない数。

それを補うため、動力炉を限界以上に稼動させているのだろう。

あの巨大な庭園を常時、準虚数空間に浮遊させ続け、完全に独立したエネルギー供給を実現させる動力炉だ。そのエネルギー総量たるや、ジュエルシードにも匹敵するだろう。

秀人たちの世界で言えば、原子炉のようなものにあたる。

適切に管理し、安定供給を続けるなら、さほど危険は無い。だが……

「わざとバランスを崩して、意図的に暴走させているのかと」

炉心溶融させるのであれば……炉の破壊と引き換えに、莫大なエネルギーを発生させることができる。できてしまう。

――動力炉の暴走。

それは、プレシアが娘を失うことになった、直接の原因。あれは、未完成のまま強引に稼動を決定した上層部が引き起こした事故だった。プレシアには、非難される謂れは無い。

だが今回は、プレシア自身がそれを引き起こそうとしている。

「なんてことを……！」

リンディは、席を立った。

「私も出るわ。庭園内から、次元震を抑えます」

「了解！」

指揮権を副官に移譲。リンディは裾を翻し、ゲートへと向かった。

（必ず阻止する）

リンディは、歩きながら決意を新たにする。

（死者は、決して蘇ったりはしない）
リンディ自身が、それを知っていた。
十一年前。とあるロストロギアを追っていた、リンディの夫、クライド・ハラオウン。
彼はそのロストロギアを道連れに、この世から消滅した。
一片も……髪の毛一本として、この世には残らなかった。
悲嘆に暮れ、親友の言葉にも耳を貸さず、ただ部屋に閉じこもって泣くだけの日々。
提督という、それなりに高い地位にあったリンディは、上層部にのみ公開されるロストロギアの資料を読み耽る日々を送った。
夫を取り戻す。ただ、そのためだけに。
そして、候補になりそうな物を見つけた。それは、管理局の保管庫に、極めて厳重に収められていることを知った。
普通ならば、躊躇したり、諦めたりもするだろう。だが、当時のリンディは、正気を失う一歩手前まで、追い詰められていた。
そしてその晩、リンディはデバイスを手に、着の身着のまま部屋を飛び出した。
地位になど、クライド無き生活になど……今更、未練は無かった。反逆者として追われることになろうと、クライドさえ取り戻すことが出来れば……そう、本気で考えていた。
そして、家を飛び出そうとした彼女が目にしたのは……たった一人で廊下に佇み、リンディに声を掛けるか、掛けまいかと葛藤する……クロノの姿だった。
そして、ようやく正気に戻れたのだ。
自分には、まだ愛する者がいるのだと、気付くことができた。
あの晩、クロノがいなければ……リンディもまた、狂っていたのかもしれない。
今のプレシアの姿は、リンディの可能性の一つだ。
愛するものを失い、引き止めるものも無く、ただ修羅の道を進むことでしか己を保てなかった、もう一人の自分。
その気持ちは、誰よりも……本人よりも理解できる。

それでも。
だからこそ。
（必ず……止める！）
彼女を、止めなくてはならない。
――彼女と同じ、一人の『母親』として。
◆　◆　◆　◆
――ズズズズ……!!
いきなり、足場がぐらぐらと揺らいだ。
「うわっ……何だ!?　地震か!?」
って、こんな場所で地震が起きるはずが無い。
『オオオオオ!!』
「るっせぇ！」
――ザンッ!!
首を切り落とし、飛行タイプの撃ってきた魔力弾を回避する。
とんっ、と着地した、その時。
――ボゴッ！
「うぉわっ!?」
唐突に、足場にしていた石畳が抜け落ち、巨大な穴が開いた。妙な極彩色の……原始的な恐怖を呼び起こすような、どこまでも続く穴。
「何だ、これ」
もう少し遅かったら、落ちていた。
『オオオオ……!!』
俺を追撃していた飛行タイプの一体が、その穴の上を通過しようとした、その時。
『オオオッ……』
まるで、いきなり見えない手に掴まれたかのように、穴に落ちていった。
何だ？　何が起こった？
「何で飛ばないんだ……？」
飛行タイプなのに。
「飛べないんだよ」

穴を迂回してきたクロノが、意味の分からないことを言った。
「？　どういう意味だ？」
「あれは虚数空間……魔法が一切発動できない空間だ。次元航行艦ですら、あれに落ちたら重力の底まで真っ逆さまだ」
恐ろしいことをサラッと言う奴だな……でも、
「そりゃ、好都合だ！」
いいこと聞いた！
『グオオッ！』
重騎士タイプ。とにかく装甲が硬く、二発、三発とこれ一体に消費させられる、厄介なタイプだ。だけど、
「そりゃっ！」
――ゴンッ！
胴体を蹴りつけ、数歩後退させれば……
『オ、オオオオオォォォォ……』
虚数空間の穴に、勝手に落ちていってくれる。
「……なるほど」
クロノが感心したように息を吐く。
――ギャリリリリッ……!!
騎士タイプを三体纏めてバインドし、
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
――ゴンッ!!
『『『ギャアアアアア……』』』
纏めて、穴に叩き落とす。
とはいっても、下手をしたらこっちが穴に落ちてしまうことも考えておかないと。
「インパクト！」
――ドゴオオオン!!
広域版インパクトで、傀儡兵の足元を爆破する。ただでさえ図体のでかい傀儡兵。一度バランスを崩してしまえば、転倒は必至。そして、倒れた先には……大口を開けて待ち構える、虚数空間。
『オアアアア……!!』

さよならーっ、と。
クロノはクロノで、バインドで足を引っ掛け、誘導弾で穴に突き落としている。
「おっ」
さすがに、敵兵も馬鹿じゃないようだ。穴を迂回し突進してきている。
「……でも、所詮はロボットだな」
傀儡兵どもは、総じてガタイがいい。穴の隙間を縫うように走ってきても、一直線に並ぶという……入れ食い状態になっていることに、全く気付いていない。
魔力刃を振りかぶり、
「はあああああッ!!」
――バシュンッ!!
斬撃波を射出！
――ザンッ!!
騎士タイプ、飛行タイプを数体纏めて両断し、その後ろにいた重騎士タイプの装甲に亀裂を入れる。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
――バォンッ！
亀裂の中に、クロノの放った砲撃が直撃。重騎士タイプは後退し、虚数空間へと落ちていった。
とりあえず、足止めは問題無く……
「秀人、下がれ！」
「っとォ!?」
クロノの声を聞き、全力で後ろに跳ぶ。
――ヴォンッ!!
俺が飛びのいた場所に、巨大な魔法陣が展開された。
「……何か、ヤバそう？」
ボス的な何かが、出現しようとしている。
そして。
――ズズゥ……ン!!

巨大な質量を伴い、そいつは現れた。
「で……っけぇ」
思わず感心してしまうほど、巨大な傀儡兵だった。
『グ、グ……』
大きさは、足元に転がった重騎士タイプが、子供に見えるほど。
足は無く、巨大な円盤のようなものに上半身が直接生えている。
腕は、大小含めて八本。
「ボス戦か……」
『グ……ゴオオオ

放っておけば治るけど……今は、いちいち修復を待っている時間は無い。
『ゴアアアアアア!!』
巨大な腕を振りかぶり、打ち下ろす！
「舐めるなあああァァァ!!」
左腕に強化魔法を纏わせ、迎撃!!
――バギイィィンッ!!
硬い！　さすがに、雑魚とは装甲の厚みからして違う！
「こいつで……どうだァッ！」
――ザンッ!!
魔力刃を、思いっきり腕に突き立てる。よし、刺さった！
「ブレイク……インパルスッ!!」
Ｓ２Ｕから魔法を発動！　突き立てた魔力刃から、体内に振動波を送り込む!!
――ボォンッ!!
「チッ……」
破壊できたのは、肘から先のアーム部分だけ。わざと腕をパージして、ダメージを最小限に抑えやがった！
だが、この調子で腕を捩（も）いでいけば……
「なっ……!?」
だが、そう上手くはいかなかった。
――ビュウウウウ、ン……
光が軌跡を描いたと思ったら、そこにすっぽりと収まるように、腕が元通りに修復された。
「はァ!?　そんなのありかよ!?」
「君が言うな」
……それもそうだな。
――ギュイイイイイイイイイィィィン……!!
四肢の先端に魔力スフィアが出現する。またあのビーム弾幕を撃つ気だ。
「させるかっ!!」

『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
クロノが誘導弾で誘爆を狙う。
――ガキンッ!!
だが今度は、強固なシールドに阻まれてしまった。
「攻防共に死角無し、再生能力付きって……」
思わず呆れてしまう。
――ズババババババッ!!
「ぬおおおおおおおっ!!」
そして発射された弾幕を掻い潜り……
「ファイア!」
バレットを数発、試しに撃ってみる。すると、
――ガガガガンッ!!
「駄目か……!」
攻撃中はバリアを張れないと思っていたが、そう上手くはいかないらしい。
『ウオオオオッ!!』
弾幕が止むと、今度は巨腕による攻撃。今度は、しっかりと表面がバリアで覆われている。やろうと思えば、ぶち抜けなくも無いけど……
「はっ!!」
――バゴンッ!
回し蹴りにインパクトを纏わせ、巨腕を蹴りつける。
バリア越しに多少のダメージ……装甲の表面を凹ませることはできたけど、またすぐに直ってしまった。
「エイミィ、何かわからないか!?」
クロノが、通信の向こうにいるエイミィに聞く。
『もう一度、そのでかい奴に攻撃当ててみて!』
「了解!」
『Ｂｌａｋｅ　Ｉｍｐｕｌｓｅ』
――チュイイイイイイイン!!
振り下ろされた巨腕を回避し、振動波を打ち込む。

――ボンッ……！

『グッ……！』

一瞬だけたじろぐ傀儡兵だったが、またしても腕だけを切り離し、そこを修復してしまう。『……うん、やっぱり！』

だが、エイミィはそこから何かを掴んだようだった。

『別の場所にもう一つ、そいつと全く同じ反応があって、リンクし合ってる』

「別の場所……？」

しかも、リンクし合ってるということは……

『そこにいるもう一体も同時に叩かないと、いくらでも再生しちゃう』

お互いが、お互いのバックアップになっている……そういうことか。

『今、そこになのはちゃん達が向かってるから……！　それまで、持ちこたえて！』

攻撃力も防御力も高くて、再生能力もあって、パーツを切り離してダメージを抑える知能まで持ち合わせている。

そんな馬鹿げた敵を相手に、いつまでも時間稼ぎなんてしていられない……あれ？

「ダメージ……？　待てよ……？」

思わず考え込んでしまう。

「どうした!?」

クロノが、ビームを避けながら聞いてくる。

「いや……回復するなら、腕を一々切り離す必要なんて……ダメージの大小を気にする必要は無いんじゃないか？」

その再生力が無限なら、ダメージのことなんて気にしないで戦うに決まっている。

「……あ」

クロノが、腑に落ちたようにハッとする。

そう。ダメージを気にするってことは、つまり……

「「耐久力にも再生力にも限界がある」」

ということだ。

「……僕としたことが、再生能力に気を取られすぎていた」
じゃきっ、と、Ｓ２Ｕを強く握りなおす。
「どうする？」
これは、時間稼ぎの防戦なんかじゃない。道を拓くための、攻戦なんだ。
そうと決まれば、話は簡単！
「変更は無しだ！　再生が追いつかなくなるまで……徹底的に破壊する！」
「了解!!」
こっちを潰せば、向こうのもう一体も、バックアップを失って弱体化する。そうと分かれば、気合も入るってもんだ！
『そいつが傷を再生する時には、胴体と円盤部分の繋ぎ目、そこが中心になってる！　多分、そこが弱点!!』
「っしゃあ！」
『オオオオオオ……!!』
――ギュイイイイイイイイ……ン!!
「クロノ！　突っ込むぞ！」
右手の結晶体を中心に、小さく、硬くしたシールドを展開する。
全身を覆うと被弾面積が大きくなってしまい、突進を阻まれてしまう。
小さなシールドで、頭などの致命傷になるであろう部分だけを防ぎ、一気に間合いを詰め、叩く！
「ああ！」
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
クロノもまた、砲撃と、誘導弾をセットする。
『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』
一際大きな咆哮を上げ……
――ゴバアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!
なのはに匹敵するほどの巨大な砲撃を発射した！
掃射時間を犠牲にする代わり、攻撃範囲を広げたのか！

――ドババババババババッ!!
「んがあああああああああああああっ!!!」
シールドをかざし、砲撃を受け止める。
「やれ！　クロノ！」
俺の背後……庇う形になったクロノに、檄を飛ばす。
「はあああああっ!!」
『Ｆｉｒｅ！』
クロノが発射した砲撃と誘導弾は……
――バゴォンッ!!
砲撃の隙間を掻い潜り、砲身となっている小腕を叩き折った！
『グ……グ……』
またしても、腕を切り離す。けど……
――ギャリイイイインッ!!
チェーンバインドが絡みつき、それを妨害する！
「今だ!!　行け！」
「よっしゃあああ!!」
クロノの声に応え、飛び出す!!
小腕が無ければ、射撃や砲撃はできない。
さっきから観察し続けて発見したことだが、この巨大傀儡兵は……巨腕と小腕を、同時に動かすことはできない。憶測だが、同時に操れる腕は四本が限界なんだ。
いくら機械仕掛けでも、八本もの腕を干渉しないように同時操作するなんて出来ないのだろう。
そして今、あいつは小腕を切り離すことに夢中になっていて、俺の接近に対する反応が明らかに遅れている。
チャンスは一度だ！　一撃で、あの巨体をブッ壊す！
両掌に、ディバインバスターとブレイズキャノンをセット。そして、殆ど直感的に、
――ぱぁんっ!!
掌を打ち合わせ、二つの魔法を合体させた。
発生した魔力スフィアを発射するのではなく、魔力刃のフレーム内

部に溜め込む！
『『『ウオオオオッ!!』』』』
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ！』
――キュゴガガッ!!
それを阻もうとする傀儡兵に、クロノの放った誘導弾が突き刺さる！
俺は、完成したばかりの新魔法を片手に、一直線に巨大傀儡兵へと切りかかる！
狙うは胴体！　正中線!!
「ブった斬れえええええええええええええええッ!!!」
――斬ッッ!!!!
「……」
振り下ろした刃は、巨大傀儡兵の正中線を、正確に切り割っていた。
『ガ……ガ……！』
ぶった斬られた断面同士が、磁石であるかのように引き寄せあう。
ここまでやってもまだ生きているとは恐れ入る。
だが……
『ガッ、ゴガアアアアアアアアアアアアアアッッ!!??』
――ボゴンッ!!　ボゴゴゴゴンッ!!
切断面から、爆発が連続して発生し……
『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!!!!』
――ズガアアアアアアアアアンッッッ!!
一際巨大な爆発と共に、巨大傀儡兵を粉々に爆砕した！
爆風が収まり、視界が開ける。周囲を見渡してみるが、動いている傀儡兵の姿は見えない。
「……片付けたみたいだな」
ガラン……と、剥がれ落ちた装甲が足元に落ち、さらさらと砂のように崩れた。
『反応、消失！　撃破を確認!!』
エイミィの歓声が聞こえ、俺は、ようやく一息ついた。
「これで、このフロアは制圧だ」

足元に転がった、飛行タイプの頭部を虚数空間に蹴り捨て、クロノが戻ってきた。
「よし……次だ」
休んでいる暇は無い。まだ、他のフロアには敵がうじゃうじゃと徘徊している。
「なのは達はどこだ？」
早いとこ合流したい。
『庭園の……動力炉に繋がる通路！　そこからの最短距離は、Ｓ２Ｕに転送済み！』
よし。
「クロノ、先導頼む」
「ああ」
いつ虚数空間が開くかもわからない以上、うかつに飛行魔法で飛ぶのは危険だ。バイクも無い以上、走って行くしかない。
無事でいろよ、なのは！

# 第二十三話

フェイトは、バルディッシュを手に庭園内へと降り立った。
いつもの通路。そして、いつもと違うのは、通路いっぱいに傀儡兵が立ち塞がっているということ。
『『『『ウオオオオオオオオオオッ!!』』』』
途端、襲い掛かってくる傀儡兵。
侵入者へと、容赦の無い攻撃が加えられる。
『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』
だが、その攻撃がフェイトを捕らえることは無かった。
――ガギュンッ!!
フェイトは、すれ違いざまにバルディッシュを一閃。傀儡兵の脚部を切断する。
――ドドドドドッ!!
数体の飛行タイプが撃ち出すエネルギー弾の弾幕。
『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ！』
「はああっ!!」
フェイトは大上段から、光刃を解き放つ。
――ザンッ!!
回転しながら突き進むそれは、弾幕を突き破り道を開け、その向こうにいた飛行タイプを両断した。
弾幕に開いた穴から、マントを翻しフェイトが疾走する。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｍｕｌｔｉｓｈｏｔ』
フォトンランサーを掃射。
――ガガガガガガガガガガガガッ!!
魔力弾の豪雨は、傀儡兵の頭に、核に、武器に、吸い込まれるかのように突き刺さり、
――……ドゴォン!!
一拍遅れ、爆発四散。
傀儡兵達は、何もできぬまま無意味な鉄塊へと成り下がった。
「やあああああっ!!」

フェイトは足を止めず、文字通りに道を切り開き、前へ進む。
（ボクは、アリシアじゃない）
戦いながらも、考える。
（ボクとアリシアは、別の人間だ）
それでも、覚えている。
あの事故の後……つまり、アリシアが死に、フェイトが『作られ』、目覚めた時……抱き締められた温もりを。それが、『フェイト』ではなく、『アリシア』への抱擁だったのだとしても、あの瞬間だけだったとしても……間違いなく、プレシアに愛されていたのだと。
とはいえ、かつてのように妄信しているわけではない。
プレシアはあの時、フェイトを捨てた。それ以前に行われていた暴行についても、『アレは虐待だった』と正しく認識している。
それでもフェイトには、プレシアに会わねばならない理由があった。
「会うんだ……！」
アリシアの記憶にあった、あの言葉。
――ママ、わたしね……
「会って、伝えるんだ!!」
その言葉を……心を病むほどに愛した、アリシアの遺言をプレシアに伝えるという、理由が。
「バルディッシュ、いちばん近い道！」
フェイトは、この庭園の構造を殆ど把握していない。住んでいたのは、表層の居住区、さらにその一部だけ。
『ルート、既に登録済みです』
バルディッシュは呆気なく、あっさりと回答した。
バルディッシュの創造主、リニス。
プレシアの使い魔であり、アリシアの飼い猫で……フェイトの育ての親。
彼女はこうなることを……フェイトがプレシアと向き合おうとすることを、予想していたのだろう。
「よーし、頑張ろう、バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ』
バルディッシュは、どこか嬉しげに応じた。
――ヴンッ!!
新たな傀儡兵の部隊が出現する。
「邪魔だあああああっ!!」
だが、フェイトは止まらない。
――ザンッ!!　ガゴンッ!!　ガガガガガッ!!
切り裂き、打ち抜き、薙ぎ払い……瞬く間に殲滅していく。
それも、ただ闇雲に戦っているのではない。
脚部や武装などを破壊し、敵の数を減らすことなく行動を不能にしている。
なのは達には知る由も無い事だが、この傀儡兵達が現れる転送魔法陣は、自動制御。
傀儡兵の頭数に変化が起きると、生産プラントから増援が現れるように設定されている。
つまり、フェイトのように、『頭数を減らすことなく』敵を無力化してしまえば、増援は来ないのである。
そして、フェイトは動力炉までの近道……螺旋階段を目指し、稲妻のように駆け抜ける。
――バンッ!!
通路の突き当たり、巨大な扉を蹴破る。
その先に見えたのは、底が見えない程に長い螺旋階段。
遥か下方から、戦闘音が聞こえてくる。
「……もしかして」
目を凝らして見ると、時折、見慣れた桜色の光が散っている。
「やっぱり!」
吹き抜けを飛び降りる。
あえて飛行魔法を行使せず、自由落下の速度に任せる。
そして、見えた先で……
「……ッ!!　危ない!」
高町なのはの死角から、傀儡兵が戦斧を投擲していた。

「バルディッシュ！」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ．』
――バチッ……バチバチッ!!
フェイトの身体の周囲に、稲妻が迸る。
『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』
全身に稲妻を纏ったまま、落下速度に、高速機動魔法による加速を加える。そして……
『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｉｍｐａｃｔ!!』
戦術も何も無い、身体ひとつでブチ当たる……特攻を仕掛ける！
「間に合ええええええっ!!」
◆▪◆　◆　◆
――バゴンッ!!
胴体を撃ち抜かれた傀儡兵が、吹き抜けを落下していく。
「はあああっ!!」
『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』
「シューーーーーート!!」
――バゴゴゴゴンッ!!
後から後から！　きりがない！
「ユーノくん、そっちは!?」
「……芳しくない、かも！」
――ギリッ……ギリリリリッ……!!
十本近いチェーンバインドで、傀儡兵を纏めて縛り上げている。そして、
――メキャメキャメキャッ!!
傀儡兵たちの身体を、捻じ切った。
……えげつない。でも、バインドを攻撃に転用するのは考え付かなかった。
「レイジングハート、次から参考にしよう！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』
「もう！　どこまで続いてるの!!」
ただ延々と……妙に長い螺旋階段を、アルフの駆るバイクで延々と

下る。
「あたし達は、いつも転移魔法で移動していたから詳しい構造は知らないんだけど……」
階段の段差を危うげ無く越えながら、アルフが言う。
手摺の下を覗き込んでも、ただ延々と続く螺旋階段しか見えない。
バイクごと吹き抜けにダイブしてもいい……というか、そうしたほうが早いのは当然だけど、そうした瞬間にバイクはただの重い荷物になってしまう。何より……
『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』
螺旋階段の中心……だだっ広い吹き抜けから、また数多の傀儡兵が顔を覗かせる！
「ああもう！　鬱陶しい!!」
こうして、敵にしつこく妨害されるっていうのが、一番の理由！
「アルフ、ユーノくん！　先行ってて！」
バイクから飛び降り、吹き抜けに身を躍らせる。
「ちょ!?」「なのはっ!?」
『『『　オオオオオオッ!!　』』』』
いちいち対応していたんじゃ、間に合わなくなる！
何より、この三人の中では、私が一番戦闘力があるんだから……私が一番、がんばらなきゃ!!
『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ！』
「シューーーーート!!」
――キュゴゴゴゴッ!!
「次！」
『オオオオオオッ!!』
次は、重騎士タイプ！
「ディバイン……！」
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』
「バスターーーーーーーーーーーーー!!!」
――ズバアァァンッ!!
「次ッ!!」

『『『ウオオオオオオオオオオ!!』』』
次、飛行タイプと騎士タイプの編隊！
『Ｃｈａｉｎ Ｂｉｎｄ』
――ギャリリリリッ!!
そのうち三体に、バインドを絡ませる。でも……しまった。飛行タイプを一機、取り逃がした！
「この～……!!」
――メキ……メキッ!! バゴォンッ！
捕まえた奴だけは撃破できたけど……間に合わないっ……!?
「なのはァッ!!」
『Ｃａｕｔｉｏｎ ！』
ユーノくんの、切迫した声。
「うわっ!?」
振り返った途端、血の気が引いた。
目の前に迫る……巨大な戦斧。遥か下方には、それを投擲したと思われる騎士タイプ。
回避……無理。防御……無理！ 迎撃……間に合わない……!!
「や、ばい……!!」
最悪だ……！ 調子に乗った挙句、こんな所で……！
「だりゃあああああああああああ!!!」
――ズッガアアア

「……フェイト？」
紛うことなく、フェイトだ。
「……うん」
「……どうして？」
あれだけ、プレシアに酷い言葉を言われて、突き放されて……もしかして、まだ、プレシアに縋っているというのだろうか。
「その……ええと……」
蚊の鳴くような小さな声で、もそもそと呟き……
「た……たしゅけにっ……!!」
……噛んだ。このシリアスな場面で、思いっきり、可愛らしく噛んだ。
「……」
「……」
「……」
私はもとより、フェイトに駆け寄ろうとしていたアルフや、いきなりバイクを押し付けられたユーノくん、その全ての動きが、止まった。
「た、たしゅけ、たひゅっ、たひゅけに……!!」
しかも、噛みまくってドツボに嵌り、まともな発音が出来なくなっている。
こ、これは……ちょっと……無理……！
「ぶフッ!!」
とうとう、吹いてしまった。我慢できないって。
「……うがー!!」
あ、壊れた。
「助けに来たっつってんだろー!!」
――バゴォン!!
まるで、フェイトの叫びにシンクロするように、螺旋階段が纏めて吹っ飛んだ。
『グウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!』
で……でかっ!!
全体の形としては、二足歩行の人型だけど……とにかくサイズが桁

外れだ！　さっきまで相手にしていた傀儡兵が、ミニチュアに見える！

――ガシャコンッ!!

そして、背中に装備した……これまた巨大な大砲が、私たちに向けられる。

させるか！

「シュート!!」

先手必勝！

砲口目掛けて、誘導弾を発射する。これで、あの大砲は粉々に……

――バチィィッ!!

「え!?」

砲口に吸い込まれる寸前……障壁に阻まれてしまった。

絶好のチャンスを逃してしまい……私の身体は、敵の照準の中。更に、砲口内部には十分なエネルギーが充填されている！

――ドゴオオオオオオンッ!!

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ』

『Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ』

レイジングハートと、フェイトのバルディッシュが同時タイミングで高速機動魔法を発動。その射線上から、緊急退避する。

――ガキッ、ガキンッ!!

砲身が左右に可動し、もう一度私たちに向けられる。

「させるかぁっ!!」

――ギャリイイイインッ!!

緑色と、茜色。ユーノくんとアルフが、チェーンバインドで砲身の向きを換える。

――ドゴオォン!!

的をはずした砲撃は、私たちが下ってきた螺旋階段を、壁ごと大きく抉り取った。

「……っと」

――ザッ！

いつのまにか、最下層に到着していたようだ。こうして地面に立っ

て見上げてみると、いかにこの傀儡兵が巨大であるのかがわかる。
――ズシン……
『グロロロロ……』
同じく、着地を果たした傀儡兵。
足場を得たため、より巨体を活かした格闘戦を仕掛けてくるかもしれない。
――ジャコンッ……!!
やっぱり。
背中に収納されていた、これまた超巨大なハルバードを取り出した。
「ぜぇッ……ぜぇッ……」
アルフは、無茶をしすぎた反動からか、ぐったりしている。ユーノくんがアルフを庇いつつ、巨大傀儡兵の死角に退避。
「はぁっ!!」
『Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ！』
フェイトが光刃を飛ばす。それを、巨大傀儡兵は棒立ちで迎えた。
――ガキィンッ！
避けるまでも無い、ということか。光刃は、あっさりとバリアに弾かれてしまった。
「バリアも硬い！」
最大威力に近い誘導弾を、数発纏めて弾いたバリアだ。ディバインバスターでも、打ち抜いて本体にダメージを与えるのは難しいかもしれない。
「それに……ッ!!」
『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』
大上段から、ハルバードで薙ぎ払ってきた!!
――ドガガガガガガガッ!!
地面を、壁を、掘削機のように抉り飛ばす！
暴風のような攻撃の中、照れくさそうに……そして、嬉しそうに、フェイトが言う。
「でも……二人でなら!!」

私への信頼を、口にする！
――ガキンッ!!
再び、背中の大砲が私たちに向けられる。
でも。
「うん……!!」
フェイトが、私を信頼してくれている……
「うんっ!!」
それが……そんなことが、堪らなく嬉しくて……！
『ウオオオオオオッ!!』
「はあああああああっ!!」
――キュゴゴゴゴッ!!
『グアッ!?』
力が、沸いてくる!!
「アクセルシューター……フルパワー!!」
「フォトンランサー……マルチショット!!」
単発が効かないのなら、数で押す!!
「シューーーート!!」
「ファイアッ!!」
――ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴンッ!!
巨大傀儡兵が仰け反る！
今がチャンスだ!!
「行くよ、バルディッシュ!!」
『Ｌａｎｃｈｅｒ　Ｆｒｏｍ』
「こっちもだよ、レイジングハート！」
『Ｃａｎｎｏｎ　Ｍｏｄｅ』
――チュイイイイイイイイイイイイイイイイイン……!!
敵の大砲に、膨大なエネルギーが集まっていく。
そんなもの!!
「ディバイン……!!」「サンダー……!!」
私たちには、通じない!!
「バスターーーーーーーーーーーーーーーーー!!」

「スマッシャーーーーーーーーーーーーーー!!」
――ッドゴォン!!
私たちの砲撃魔法と、敵の砲撃が衝突し、拮抗する。
『グ、グオオオオオオオオオオオオオオオ!!』
じりじりと、押されている。でも!!
「フェイト、行くよ!!」
「うん!!」
フェイトと私は、何度も何度も戦った好敵手。
攻撃のタイミングから、砲撃魔法の瞬間最大放出量まで、把握しきっている。
呼吸の合わせ方なんて、今更確認するまでも無い!!
「「せーーーーーーの!!」」
気合とともに、一気に威力を増した砲撃魔法は……
――ドバアアアアアアアアアアアアアアン!!
『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』
巨大傀儡兵を打ち抜き……庭園の外まで、突き抜けた!!
――ズズゥン……
巨大傀儡兵が、沈む。
――バシュウウウウッ……
レイジングハートとバルディッシュが、一仕事を終えたかのように排熱を行う。
「……フェイト」
歩み寄り、その手を取る。
「……」
無言で……でも、確かに、フェイトは握り返してきた。
「ありがとう、助けてくれて」
「……うん」
少しはにかんで、フェイトが笑う。

「フェイトーーーーーーー!!」
アルフが、ユーノくんを荷物のように小脇に抱えて駆けて来た。
「アルフ……ッ!!」
それを、フェイトがしっかりと抱きとめた。
と、その時。
視界の隅で何かが……倒れたはずの巨大傀儡兵の巨体が……!
『ウ、オオオオオオオオ!!』
「なっ……!?」
うそ！　まだ動けたの!?
『グガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』
――ブオォンッ!!
巨大傀儡兵は残った右腕で、へし折れたハルバードの柄を、私たちに投擲してきた！
「くっそ……!!」
間に合うかどうかわからないけど、ディバインバスターで……！
「――――おおおおおおりゃあああああああああああ!!」
――バゴオオオオオオオオオオオォンッッ!!
投げつけられた、電柱ほどの太さのあるハルバードの柄が、粉々に粉砕された。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ』
そして、涼やかな電子音声。
――バゴンッ!!
『ゴブッ……!!』
巨大傀儡兵の頭部を、消し飛ばした。
もうもうと立ち込める砂煙。
それを切り分け、出てきたのは……
「なのは、無事か!?」
秀人さんだった。
「大丈夫、だけど……」
秀人さんの足に目をやる。
よっぽどの勢いで落下してきたからなのか、片足をずるずると引き

ずるように歩いてきた。
「足、大丈夫？　痛くない？」
「……ああ、気にするな。すぐ治る」
だから、そういうこと言ってるわけじゃ……
「って、フェイト!?　何でここに!?」
秀人さんが仰天している。
「……秀人」
あ、クロノだ。でも、どうしたんだろう？
額に、見事なまでに青筋が浮かんでいて……明らかに怒っている。
「……エイミィから連絡があった。君が破損させたブリッジの内壁……その奥にあった、ＡＭＦ発生装置のコントロールユニットが粉々だそうだ」
ああ、だから転送魔法で来られたんだ……
「……ツケに」
「出来るかッ!!」
――ごんっ！
Ｓ２Ｕでしこたま殴られていた。
「まぁまぁ……おかげで、危ないところで助かったんだし、いいんじゃない？」
あそこでフェイトが助けてくれなかったら、墜とされていた。
差し引きゼロ、ってことで。
「それは……そうだが」
「そうなの。だから、結果オーライだよ」
『みんな、聞こえる？』
Ｓ２Ｕから、全体に向けて通信が入った。
『さっき、秀人君となのはちゃんが倒した二体の傀儡兵なんだけど……』
エイミィだ。
『どうにも、あの二体が、他の傀儡兵の親玉……っていうか、生産プラントそのものだったみたい。
二体の間で循環するエネルギーの余剰出力で、他の傀儡兵を製造し

たり、動かしていたらしいんだ』
一応、念のために。
「レイジングハート、エリアサーチお願い」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』
――キンッ……
音叉を鳴らすような音を立て、波紋が広がる。
エリアサーチの結果は……
『周辺に、敵性因子と思われる熱量・質量・魔力を持った存在は、認められません』
「……本当みたい」
ところで。
「秀人さん達も、あのおっきいの倒したの？」
「ああ。でも、そんなに強くは無かったけどな」
秀人さんは、右斜め上に視線を外し、言う。
これ……秀人さんが、話を誤魔化す時の仕草だ。
「……嘘」
秀人さん……何を誤魔化そうとしているのかな……？
「な、何がだ？」
「……怒らないから。絶対に怒らないから。……正直に教えて？」
「いや、何のことだか俺にはさっぱり、」
この期に及んで、まだ白を切ろうだなんて……
「お・し・え・て？」
――ごりっ……
キャノンモードの先端を、鼻先に突きつける。
「秀人……諦めろ」
クロノが、ふぅとため息をついた。
秀人さんは、がっくりと肩を落とす。
「……わかったよ」
そして、クロノも説明に加わって……
「秀人さんの馬鹿ーーーーーーーーーーーー!!」

「おおおお怒らないって言ったろー!?」
　さっきはさっき、今は今!!
「何で言ってくれないの!?　同時に叩けば、もっと負担無く倒せたのに!!」
　リンクしているというのなら、二体の、同じ箇所に損傷を与えてしまえば、修復は行えない。
　そんな簡単なこと、秀人さんが気づかないわけない。
　なら、理由はひとつだ。
「また、私に負担をかけないようにって抱え込んだんでしょ!?」
「……ああ」
「なのは、ストーーーーーーーーップ!!」
「ちょっと待った！　話を聞いてくれ!!」
　ユーノくんまで、庇い立てする気!?
「……なに。言い訳なんて聞きたくない」
　チャージ、完了。
「なのはには、大事な役割があるからなんだ!!」
　ぴたっと、発射直前で止める。
　大事な、役割……？
「この先に、この庭園を動かしている動力炉がある」
『うん。そこから、数百メートルの距離』
　エイミィが言うからには、本当なんだろう。
「動力炉には、ロストロギアが使われているらしくて、封印魔法で動きを止めることが出来る」
　フェイトが、バルディッシュ振った。
「リニス……えと、ボクの先生みたいな人が、バルディッシュの中に色々とデータを残してたから、本当だよ」
　なんとなく、話が読めてきた。
「でも、俺の封印魔法は乱暴すぎて……逆に、動力炉を暴走させるかもしれない」
「……」

「だから、なのはには、できるだけ万全の状態で動力炉の封印に向かってもらおうと思って……」
「……話は、理解できたよ」
「なら……」
「でも……一言くらい、欲しかった……」
少しくらい、頼ってくれたって……私、そんなに頼りないのかなぁ……
「悪かった。今度からは、ちゃんと言うから」
凹んで俯いた私の頭に、ぽん、といつものように秀人さんの手が乗っかる。
「……絶対だからね」
今日のところは……許してあげよう。

「二手に分かれるぞ」
私と、ユーノくんと、クロノは動力炉へ。
封印魔法が使える私と、結界魔法に詳しいユーノくん、それに、いざというときの保険にクロノ。
傀儡兵はもういないけど、崩れた瓦礫で道が塞がれていたとき、一々私が吹き飛ばしていたのでは、肝心なときに魔力が足りなくなってしまうかもしれない。
そこで、クロノが露払いを買って出た。
フェイトと秀人さんとアルフは、プレシアの元へ。
こちらは、秀人さんがどうしてもプレシアに一言ぶつけてやりたい、と望んだことだ。
「秀人さん、気をつけてね」
「任せとけ」
うん。秀人さんがいれば、こっちも大丈夫。
「ユーノ、クロノ。なのはのこと、頼む」
「うん。任せて」「ああ」
それにしても、秀人さんとクロノ……初対面は最悪だったのに、結構仲良くなったよね。

これも、秀人さんの特徴なのかもしれない。
もしかしたら、プレシアも説得できちゃったり……なんて、都合良すぎるよね。
「それじゃ、行こう！」
妄想はここまでだ。
「無茶はするなよ、なのは」
「秀人さんには言われたくないよっ!!」
まったくもう!!
「ははは、そうだな。んじゃ、行くぞフェイト、アルフ！」
バイクではなく、自分の足で走っていく。
「フェイト！」
秀人さんについていくフェイトに、声をかける。くるりと振り向いたフェイトに、一言。
「がんばれ！」
「……うんっ！」
フェイトは今度こそ振り返らず、走っていった。
◆▪◆　◆　◆
――ドオン……!!
「……っく!?」
プレシアは、次元震とは違う揺れに身体を揺さぶられた。
一瞬、苦痛に顔をしかめ……次第に、歓喜に染まっていく。
「あと、少し……」
ジュエルシードが、いよいよ本格的に空間を破ろうとしている、その証だった。
「もうすぐ……行ける……アルハザードに……」
うわごとのように、ぶつぶつと繰り返す。そして、唐突に、
――ズズズズ……ズ……
振動が、止まった。
「……なに？」
『プレシア・テスタロッサ……聞こえていますね？』
その声を……リンディの声を聞き、悟る。

「邪魔を……!!」
こんな大詰めで、またしても邪魔が入ったことを。
『次元震は、私が抑えています』
「ディストーション、シールド……!!」
次元震を押さえ込む。ただそれだけに特化した、汎用性の欠片も無い術式。
途方も無い魔力を喰う上、非常に高度な演算が求められるために、術者は他の魔法を発動できず、その場を動くことも出来ない。
そして、次元震の中心部近くでしか発動できないという最大のデメリットがある。
リンディが今の今まで使用しなかったのは、そういうことだった。
秀人たち突入部隊が道を開き、障害となる傀儡兵を全て止めたことで、ようやく発動できたのだ。
『動力炉も、じきに封印されます』
リンディは、宣告を下す。
『終わりです』
「まだよ！　私は、アルハザードへ……!!」
『アルハザード……失われし都。禁断の秘術……そんなものは、もう失われています』
それは、管理世界の人間であれば、生涯に必ず一度は耳にするであろう御伽噺。
原初にして、至高の世界。
死者蘇生。時間支配。因果律操作。
神域の技法を誰もが使用し……なんらかの理由で、滅びた世界。
そんな世界は、最初から無かった。
そもそもが作り話だというのが最も現実的な話だ。
第一、・本当に時間や因果律を支配できたというのなら、なぜ滅びたというのか？
この御伽噺の作者が未だに不明だということが人々の空想に拍車を掛け、一人歩きしているに過ぎない。
いよいよ、そんなオカルトじみたものに縋るようになってしまった

のか、と、リンディはプレシアを哀れむ。
「違うわ」
だがプレシアは、それを確信を持って否定する。
「アルハザードは存在する」
『……では、あなたは。そこに行って、何をするの？』
「取り戻すのよ……私とアリシアの……過去と未来を……」
神を、運命を呪う、呪詛を吐く。
「こんなはずじゃなかった、世界の全てを!!」

――バゴンッ!!
と、壁が破壊された。
「おかーさん……」
フェイトとアルフが、姿を現す。
「お前に一つ、教えてやるよ」
更にその向こうから、瓦礫を踏みしめる足音。
ボロ切れ同然のジャケット。穴だらけのグローブ。プロテクターが剥がれ落ちたブーツ。
「過去を取り戻すことは、誰にも出来ない」
秀人が、プレシアの元に辿り着いた。

◆・◆　◆　◆

（やっぱり、似てるなぁ……）
秀人は、初めて生身で相対するプレシアに、そんな意味不明の感想を抱いていた。
漫画のような巨悪をイメージしていて、モニター越しに見た姿はまさにソレだったのだが……こうして見ると、普通の人間であることに、戸惑った。
「お前は、お前たちは……なぜ、邪魔をする!?　何度も、何度も……!!」
憎憎しげに秀人を睨み付けるプレシア。
その傍ら、あの巨大な水槽の中には、フェイトにそっくりな少女の遺体。

フェイトはそれを、何ともいえない表情で、ただ見つめていた。
「……あんたが、俺の家族や知り合いを危険に晒すからだ」
次元断層などというものをこんな場所で起こされでもしたら、秀人たちの世界は、凄まじい被害を被ってしまう。カントクも、先生も、桃子も、恭也も、美由紀も、アリサも、すずかも……傷付き、最悪、死んでしまうかもしれない。
「もう、よせ。あんたがどう足掻いたって……その子はもう、死んでいるんだ」
プレシアもまた、ある意味被害者であるということは、秀人にも分かっている。
話し合いで止まってくれるなら……暴力に訴えずに済むのなら……それに越したことは無い。
「あんたがやろうとしているのは、ただの無意味な虐殺だ」
「関係無い……！　私は、アリシアさえ取り戻せれば……!!」
（駄目か……）
諦観が、秀人の心を支配しかける。もう、誰かの言葉で止まれる段階ではないようだ。
（仕方ない。言葉が通じないなら……ぶちのめして、確保しよう）
「待って」
だが、フェイトが秀人を止めた。
「ボクに、話させて」
両手を横に広げ、秀人の前に立ち塞がる。
「……大丈夫か？」
「うん。……アルフも、お願いだから、ボクにやらせて」
「……わかった」
「ありがと」
アルフを一撫でし、一歩、前へ。
「おかーさん……」
フェイトが、プレシアに一歩、近づく。
「お前の母親になった覚えは無い」
プレシアは、目も向けずにそう言った。

「てめぇ……！」「アルフ、少し待て」
飛び出そうとしたアルフの手を掴み、止める。
「ううん。おかーさんは、おかーさんだよ」
笑みを浮かべ、母親への好意を言葉にする。
「ボクの中にある記憶は、アリシアの物なんだよね」
「そうよ。おまえは、アリシアの模造品だもの」
淡々と、フェイトを否定する。
「おかーさんは、ボクのことなんてどうでもいいんだよね」
「そうよ。私には、アリシアさえいればいいのよ」
暖かな言葉に、酷薄な返事。
だが裏を返せば……フェイトは、プレシアとの会話を成立させているということだ。
「おかーさん、覚えてる？　アリシアの、六歳の誕生日のこと」
六歳……アリシアが、死んだ年。
「……」
黙っているのは、肯定だろうか。
「ピクニックに行って、シート広げて……花の冠、作ってあげたんだよね」
場違いなほど楽しそうに、自分のものではない思い出を語る。
「それが、何だって言うの!!」
プレシアは激昂し……初めて、フェイトと目を合わせた。
「それは、アリシアの記憶よ！　お人形のお前じゃない！　私の、アリシアの記憶なのよ！」
プレシアは、言葉のナイフでフェイトを切り刻もうとする。
「ううぅ……!!」
アルフは怒り心頭で、変身魔法が解けかかっている。
「頼む。もう少しだけ、我慢してくれ」
「うん、知ってるよ。これは、アリシアとおかーさんの記憶」
だがフェイトは、寂しそうではあるが、微笑を崩さない。
「おかーさん……アリシアが、誕生日に何を欲しがっていたのか、覚えてる？」

劇的な、変化があった。
「……あ、……あ」
ぱくぱくと、愕然とした面持ちで、フェイトの顔を……いや、アリシアの面影を、穴が開くほど見つめる。
「……覚えてない？」
「違うッ!!　覚えてる……覚えているわッ!!」
プレシアは、割れるような大声で、否定した。
だがそれは……暗に、今の今まで忘れていたということの、証明だった。
「プレゼント……アリシアの、誕生日プレゼントは……!!」
必死に思い出そうと、髪を振り乱し、かきむしる。
ふらふらと後ずさり……虚数空間の穴の方へ……!!
「ッッ！　止まれ、馬鹿!!」
秀人の制止も空しく……
――ごつんっ……
と、プレシアの身体が、アリシアの遺体が入った水槽にぶつかった。
次元震の揺れで、不安定に傾いていたアリシアのポッドは、自重で傾いていってしまう。
「アリシアッ!!」
我に返ったように、アリシアの水槽の、その金具部分を掴み止めようとした。
だが、質量の差から、プレシアの身体までもが、虚数空間へと吸い込まれるように……
「……あ」
落ちる。
「アリ、シア……」
落ちていく。奈落の底へ。
――綺麗な花が咲く、どこまでも続くような草原。
それは、人が死の直前に垣間見る、走馬灯だったのだろうか。
――自分と娘だけの、一年に一度の、楽しい時間。
かつて無いほど鮮明に、幸せだったあの日の風景が、目の前に広が

る。
――アリシアは、小さな手で一生懸命に花の冠を作ってくれて、少し楕円気味になったそれを、頭に乗せてくれた。
「アリシア、ありがとう……母さん、とても嬉しいわ……」
プレシアの口から、言葉が漏れる。心だけが、あの日に戻ったかのように。
「誕生日のプレゼントは、何がいい……？」
久しく忘れていた笑顔を浮かべながら、幻影のアリシアに語りかける。
「なんでもいいのよ……ぬいぐるみ？　おもちゃ？」
『本当に、何でも良いの？』
「ええ、もちろんよ」
『それじゃあ……』
アリシアへのプレゼントとは、なんだったのか。
『ママ、わたしね……』

――妹が欲しいの

「あ……」
ハッと……夢から覚めたように、思い出した。
『妹がいれば、お留守番してても、寂しくないんだよ』
「そう……でも、ごめんなさい。すぐに用意することは……できないの」
『ふ～ん、そっかぁ……じゃ、約束!!』
「約束……」
『いつか必ず……妹に会わせてくれる？』
「ええ、約束するわ。いつか、必ず。あなたの妹に……会わせてあげる」
「おかーさん！　……おかーさんッ!!」
穴の淵から、必死に手を伸ばす……自分を母と呼ぶ、アリシアとよく似た少女。

「妹……アリシアとの、約束……」
そう。最初から、間違えていたのだ。
『彼女』は、アリシアの代替品では……人形などでは無かったのだ。
「わたしは……何をしていたのだろう」
彼女は、アリシアではない。
「私は、いつも……」
彼女は、アリシアが切望した……妹だったのだ。
「気づくのが、遅すぎる……」

――約束は、果たされていた。

「ごめんなさい……アリシア」
大事な妹を、愛してあげなかったことを。
――神という存在が、あるとしたら。
「ごめんなさい……フェイト」
もう一人の娘を、愛してあげなかったことを。
――残酷なまでに平等で、公平だ。しかし。だからこそ。神という存在は……
「ごめんなさい……!!」
心の底から、謝罪した。
――罪を償おうとする者には、平等に……

「気付いたなら……まだ、遅くない」

――救いの手を、差し伸べる。
「過去を取り戻すことは、誰にも出来ない」
――救いの手は痛いほどに、力強く……プレシアを繋ぎ止めている。
「それでも……どんなに辛い過去、やり直したい過去でも……現在に繋がっている」
――腰元から伸びる、一本のロープ。それだけの装備で、虚数空間

へ飛び込んだ。
「過去を取り戻すことが出来なくても、あの日に帰ることができなくても……」
――彼は、そういう男だ。手を伸ばさずにはいられない、愚直なまでの、お人よし。
「今を生きて、過去を償うことは、きっと……誰にでも出来るんだ」
――吾妻秀人は、そういう男だ。

◆▪◆　◆　◆

――間に合った……!!
柱に命綱を結んで、虚数空間にダイブして……プレシアの手を、掴んだ。
「……っく!!」
でも、さすがに重い……!!
無理がある体勢で、プレシアと……プレシアが掴んでいる、液体が満タンに詰まった水槽を支えているんだ。
プレシアがアリシアを手放せば簡単だけど……そんなこと、絶対にしないだろう。
「この〜!!」
フェイトとアルフが引っ張りあげようとしているけど……こいつは厳しい。
「手を、放しなさい」
宙ぶらりんのまま、憑き物が落ちたように涼やかな声で、プレシアが言った。
「このままじゃ、あなたまで落ちてしまうわ。私は、いいから……」
「ざっけんな!!　何、一人で勝手に諦めてんだよ!!　あんたは、まだ……!!」
力を込めながら、プレシアに届かせるように、叫ぶ！
「フェイトに、謝ってないだろうがッ!!」

プレシアは、心底不思議そうに首をかしげた。その手は、水槽を保持し続けている為にうっ血し、青黒く染まっている。
「なぜ、そこまでするの……？　私は、フェイトをさんざん虐めて痛めつけた……あなたにとっても、憎い敵なんでしょう……？」
確かに、憎くないと言えば嘘になる。
「超、個人的なことなんだけど……」
でも、憎めない。憎みきれない。なぜなら……
「……あんたってさ、」
初めて見たときから、思っていた。
「俺の母さんに、似てるんだよ」

あの日、離してしまった手。
「マザコン野郎って笑いたければ、笑えよ……!!」
今は……この手を、絶対に離さない!!
「もうすぐ、増援が来る!!　それまで、諦めるな!!」
命綱は……まだ、ほつれていない。クロノ達が来れば……
――ズズンッ……!!
と、庭園が、最後の抵抗のように、身を震わせた。
その揺れは、最深部に程近かったこの場所にも伝播し、地面を揺らし……
「あ……」
フェイトの小さな身体を、宙に放り出した。
穴の淵に足を掛け、踏ん張っていたフェイトは当然、虚数空間の中に……!!
「フェイトオオオオオオオオ!!」
アルフの絶叫が、木霊する。
「フェイト、掴まれええええ!!」
プレシアを右腕一本で吊り下げ、左手を伸ばす!!
――ズルッ……
フェイトの手は、俺の手をすり抜けて……!!

「くそおおお

「おかーさん……でも、アリシアが!!」
虚数空間へ落ちていく、アリシアの亡骸。
「アリシアはもう、死んでいるの……!!」
とうとうプレシアは、現実を受け入れる。
「あなたはまだ、生きているのよ！
アリシアの妹を……娘を！　二度も死なせて、たまるものですか!!」
「……!!」
フェイトの目が、見開かれる。
「ボク……おかーさんの子供で、いいの？」
しょぼくれるフェイトに、プレシアが微笑みかける。
「あなたは、アリシアの妹よ。わたしの娘……フェイト・テスタロッサ」
「おかーさんっ!!」
「フェイト!!」
母は娘を。娘は母を。
放さぬように。離れぬように。お互いを、しっかりと抱きしめた。
最後の手向けにと……落ちていくアリシアを、瞬きもせずに、見送る。
――ぱきんっ
……と。バルディッシュの台座の、アミュレットが、砕けた。
その二人の耳に……ある声が、確かに聞こえた。
『――――ママ……約束、守ってくれてありがとう』
それは、プレシアには懐かしく。
『――――フェイト……やっと会えたね』
フェイトには、聞きなれない声だった。
それは、この場においてありえる筈の無い……アリシアの声だっ

た。
だが、二人の耳に、アリシアの声は確かに届き。
水槽の中。動くはずの無いアリシア亡骸は。
『――――――――ちゃんと、仲良くするんだよ？』
確かに……微笑んでいた。
「「アリシアアア

……そりゃ、そうかもな。フェイトを散々痛めつけた奴だ。フェイトを大事にしているアルフが、そう簡単に納得するわけがない。アルフ本人も、結構……いや、滅茶苦茶ひどい目に遭ってるし。
「でもさ」
と、アルフが俺を……正確には、右手の魔力結晶を見ながら、言う。
「それ、元はあたしの腹ん中にあったんだよな」
「ああ」
「でも、臓器との癒着は無かった」
「……ああ」
なんとなく、アルフの言いたいことが伝わってくる。
「もしかして、プレシアは……最初から、いざとなれば取り出せるようにしていたんじゃ……」
「……どう、だろうな」
確かに、そういう見方もある。俺も最初は、理由を思いつかなかった。
もしかしたら……という、あくまで仮定の話だが。プレシアは、最後の最後まで、己の内にあった修羅に、抗い続けていたのではないだろうか？
「あたしは、信じてみようと思うんだ。
今は無理でも……アイツが、ちゃんと反省してるってことが、納得できるまでは……」
その頭に手をやり、犬にするようにわしわしと撫でる。
「……好きにするといい。これから、時間はいくらでもあるんだから」
さてと……
「急いで脱出しよう。もう、いつ崩れるかも分からない」
なのは達のことだ。ちゃんと封印はできているとは思うが……さっきから、細かな震動が続いている。もう、この庭園そのものが崩れ始めているんだ。
「プレシア、フェイト。脱出するぞ」
俺は、落ち着いてきた二人に言う。魔力以外にも、いろいろと消耗しているに違いない。

「おかーさん、立てる？」
「ええ。……ッ!!」
立ち上がろうとして……すとん、と膝が砕けてしまった。
ったく……無理するから。
「よいしょ」
プレシアを担ぎ上げて、背負う。軽いなぁ……
「……あ」
耳元でプレシアが何かを言おうとしていたが……とにかく今は、脱出する方が先だ。
「行くぞ!!」
◆・◆　◆　◆
――ズズズズ……
封印魔法を打ち込まれた動力炉は、始めは抗うように震動を増していたけど……それが、ぴたりと止まる。
『Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』
「よし!!」
動力炉の封印、完了!!
「クロノ、ユーノくん、戻るよ!!」
「了解だ」「急ごう！」
もう用は無い。一刻も早く、秀人さん達と合流しなきゃ！
――ズシン!!
「え!?」
今の揺れは……!?
「ちゃんと、封印したよね!?」
走りながら、ユーノくんに聞く。
「ああ、手順も問題なく、魔力も十分だった！」
「じゃあ、何で!?」
「単純に、この庭園そのものが壊れ始めているんだ！　急いで脱出しないと、生き埋めだ！」
ったく、最後の最後まで気が休まる暇が無い！
『クロノくん！　転送ポート、一番近くに開いたから！　なのはちゃ

ん達も連れて、急いで!!』
一番近くって……それでも、直線距離で二百メートル以上は離れている。
「秀人たちと……プレシアはどうなった!?」
目の前の壁を、砲撃魔法で破壊しながらクロノが聞く。
『ええと……魔力反応、四つ！　健在だよ!!』
秀人さん。フェイト。アルフ。そして……プレシア。
「ヤツなら当然だ」
「うん。秀人なら、やってくれると思ってた」
クロノとユーノくんは驚いた様子も無い。
でもまさか、あの益体の無い妄想が現実になるなんて……
『……よし、バルディッシュに、データの転送、完了！　もう大丈夫！』
それじゃあ後は、脱出用の転送ポートに向かうだけだ！
足元に開く虚数空間に気をつけながら、走る。
「なのは!!」
「秀人さん!!」
よかった！　フェイトも、アルフも無事で……
その秀人さんに背負われて……プレシアの姿が見えた。
「……プレシア・テスタロッサ」
クロノが一歩、踏み出す。
そして、感情を抑えた声で罪状を読み上げる。
「時空法違反・特殊研究管理法違反・ロストロギアの不正使用……そして、児童虐待の容疑で、あなたを逮捕する」
フェイトが、プレシアの服の裾を、ぎゅっと不安そうに握り締めた。
「クロノ、今はまだ……」
秀人さんが、苦りきった顔で言う。
「……分かってるさ。今は、脱出する方が先決だ」
転送ポートに、大人数で一気に飛び込み、アースラに帰還。その直後、さっきまで転送ポートがあった場所が、虚数空間に飲み込まれた。
「あ、危なかった……!!」
でもこれで、一安心……

――ズズズズ……!!
じゃない。もう震動は、かなり危ないレベルに達してきている。
「クロノ。もしこの庭園が崩れたりしたら、どうなる？」
秀人さんが、単刀直入に聞く。
「これだけの質量だ。たとえ動力炉を封印してあるとはいっても、周辺の次元世界には、少なからず被害が出る」
「具体的には？」
「……庭園の破片が、ワープアウトして落ちてくる」
大惨事だよ!!　庭園の破片……遠めに見ただけでも、１０メートル四方はある！　それが、無数に降り注いだりしたら……!!
山奥とかだったら、まだいい。でも、それが街中に落ちてきたりでもしたら……!!
「アースラの武器で、粉々にしたりとか……！」
あの図体だ。どうせ、山のように武器を搭載しているに決まってる。
「粉砕しようにも……封印した動力炉がまた活性化して……更に被害が広がることも考えられる」
「じゃあ、どうすればいいの!?」
ああもう、クロノに当たっても仕方ないっていうのに!!
「あの庭園を、丸ごと封印するしか無いだろうな」
「丸ごと……」
あの、東京ドーム何個分かを数えるのも馬鹿馬鹿しいサイズの、庭園を……？
「なのは。ユーノ」
秀人さんが、その庭園を睨みながら、言う。
「俺達で、なんとかしよう」
……そうだよね。今ここで騒いでいる暇なんて、無いんだ。
頭が、すーっと冷えていく。そして、レイジングハートを握り締める。
「待って！　ボクも……！」
フェイトが加われば、成功率はぐんと上がる筈。

「バルディッシュ、もうヤバいんだろ」
え……？　見た感じ、傷一つ無いけど……
「う……」
苦虫を噛み潰したような表情で、黙りこくる。じゃあ、本当に……？
「うん。間に合わせで応急処置したんだけど、ここに来るまでの戦闘で……」
バツが悪そうに、白状した。
「でも、魔力ならまだ余裕が……!!」
それに、レイジングハートが答える。
『これから行う封印魔法は、大量の魔力を消費します。バルディッシュが万全ならば、耐えられるでしょう』
それは、逆を言えば万全でなければ耐えられないということだった。
「もし、今の状態でバルディッシュを使ったら……？」
『全機能……機構から思考ＡＩまでの全てが、全損します』
「……！」
フェイトはバルディッシュを握り締め、息を呑んだ。
機構……外装の損傷であれば、直せば直る。でも、思考ＡＩ……要は、バルディッシュの心は、戻ってはこない。
つまり、バルディッシュは死んでしまう。
『……あなたが、望むのであれば』
「馬鹿なこと言うな!!」
バルディッシュのその言葉に、フェイトが声を張り上げる。
「だから今回は、俺達に任せておいてくれ」
うん……それしか、無いよね。フェイトだって、バルディッシュを犠牲にしたくはないだろうし。ちょっとだけ、厳しいかもしれないけど……
「待って」
意外な人物が、声を上げた。
「おかーさん？」

プレシアが、秀人さんを見ている。
「少しだけ、待って頂戴」
いったい、何だろう。
「フェイト、バルディッシュを」
「うん」
疑いも無く、バルディッシュを差し出した。プレシアはそれを手に、極小の探査魔法で、バルディッシュの状態をスキャンする。
「機体の損耗は……外部は１２％、内部が４０％」
四割……大雑把に言って、半分が壊れているらしい。秀人さんの見立ては、正しかった。
そしてプレシアは、次に私を見た。
「あなたのデバイスを、見せてくれないかしら」
「え……」
レイジングハートを抱き、後ずさる。だって……ついさっきまで敵だったんだ。警戒するな、って方が無理だ。
「お願い。時間が無いの」
どうしよう……考えて、考えて。
「うううう……秀人さぁん……」
秀人さんに、委ねた。
「……それは、なのはが決めるといい」
「そんなぁ……」
私はまだ、そこまで割り切れないよ……
『マスター』
レイジングハート……？
『ヒデトは、彼女を信じたようです。ですから、私も彼女を信じてみようと思います』
……レイジングハートが、そう言うなら。
「……わかった」
本当は嫌だけど、プレシアに任せてみよう。
「……どうぞ」
プレシアに、レイジングハートを手渡す。

そしてプレシアは、バルディッシュと同じように、内部をスキャンした。
「損耗率、内部・外部、それぞれ１０％以下……っ!?
これは……!?」
何か驚いた様子だ。さっきから、プレシアは一体何をしようとしているのだろう。
「あなた……」
秀人さんに何かを言おうとして、言葉に詰まった。
「秀人だ」
あ。そっか、名前……
「秀人。この二機を持ちなさい」
プレシアは、フェイトから受け取ったバルディッシュと、私達のレイジングハートを秀人さんに手渡した。
「ええと……持ったけど」
左手にレイジングハートを、右手にバルディッシュを持った秀人さんが、プレシアに聞き返す。私もフェイトも、両手の納まりが悪い。
「あの魔法を使いなさい」
あの魔法……って、例の連結魔法陣を？　何でこのタイミングで……
「でも、いくらアレで魔力を増しても、バルディッシュの機体が耐えられないことに変わりは……」
秀人さんも同じようで、納得がいっていない。
だがプレシアは、予想外の提案をしてきた。
「あなたたちじゃない……バルディッシュとレイジングハートを、繋ぎなさい」
「……はい!?」
え、それって、レイジングハートとバルディッシュを、合体させるってこと!?
「そんなこと、できるわけが……!」
機体を制御するプログラムから、構成素材まで……レイジングハートとバルディッシュに、共通項はほとんど無い。

いや、もしあったとしても……そんなプラモデルみたいに簡単には……

だがプレシアは、確信を持って告げる。

「秀人になら……いえ、秀人にしか出来ないわ。秀人の魔力資質……」

魔力資質……？　確か、フェイトの電気がそうであるように、変換プロセスを経ずに魔力の属性を変換できる、ある種の才能。秀人さんに、そんな物が……？

「……『結合』」

「ありえ、ない……」

真っ先に反応したのは、クロノだった。

「《結合》は、何年も前に、存在を否定されている筈だ」

そんなに珍しいの？

聞く限りでは、『結び合わせる』という、ごく単純なものに思えるけど……ユーノくんまで愕然としている。

「あのー……具体的には、その『結合』の、何がありえないの？」

とりあえず、聞いてみた。

「たとえば、リンカーコア」

クロノの話は、いきなりその言葉から始まった。

「空気中の魔素を取り込み、魔力を精製する……魔導師にとって、もう一つの心臓のようなものだ」

うん。それはユーノくんの授業で、何度か耳にした。

「その精製する魔力の大小の差こそあれ、機能的には、誰のものであろうとも大差は無い」

それも、聞いた。たとえ魔法が使えない人にも、必ずリンカーコアは備わっているのだと。

「だが……例えば、僕と秀人のリンカーコアに、互換性は全く無い。なぜなら……僕達二人ののリンカーコアを動かしているのは、それぞれ全く別の意思だからだ」

同じように、同じ魔法を習得したとしても……その発動の際に踏まれるプロセスは、千差万別。
『同じようなもの』と、『同じもの』には、絶対的な隔たりがある。そういうことらしい。
「その、全く違うものを、文字通り『結び合わせる』……言ってしまえば、水と油を、有機物と無機物を、プラスとマイナスを、完全に融合してしまう。
それが、魔力変換資質『結合』だ」
……確かに、そんなことはありえない。でも……
「でも、あなたは……誰よりも、知っているのではなくて？」
「……」
クロノは、グウの音も出ない。私とフェイトの勝負の日も、今日、大量の傀儡兵を相手取った時も……クロノは、秀人さんの能力を身をもって実感しているのだから。
もちろん、私たちも。
「だが、二機はＡＩ搭載のインテリジェントデバイスだ。ＡＩが衝突（コンクリクト）して、破損してしまうかも……!!」
「そのレイジングハートというデバイスは、少し特殊だわ」
……ユーノくんが、古代遺跡から発掘した、正体不明の出土品。それが、レイジングハート。デバイスとしての使用が可能だったから、デバイスとして扱ってはいるけど……まだまだ、謎が多い。
「容量が、デバイスとしては異常なほどに大きいの。自身の人格ＡＩと、全ての魔法術式……その全てを合わせても、全体の５パーセントも使っていない」
あれだけ毎日、たくさん魔法を覚えて、登録して……それでもまだ、その程度……？
「レイジングハート、本当？」
『Ｙｅｓ．　Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ』
……私、実はとんでもない子と契約しちゃったんじゃないだろうか。
「だから、バルディッシュと合体させたとしても、ＡＩが対消滅するこ

とは起きない筈よ」
「信用していいんだろうな」
クロノが、用心深く聞く。
「腐っても科学者よ」
プレシアは胸を張り、太鼓判を押す。
「ひでと、お願い」
フェイトが、秀人さんを上目遣いに見た。
「ボクは……最後まで、ちゃんとやりたい」
秀人さんは、少しだけ考え込んで……
「……よし、ちょっと待ってろ」
フェイトの頭を、ぽん、と軽く撫でた。
「行くぞ、レイジングハート」
『Ｙｅｓ，ｍｙ ｂａｄｙ』
レイジングハートは、相棒、と秀人さんを呼ぶ。
「バルディッシュも、力を貸してくれ」
『Ｙｅｓ ， ｍｙ ｆｒｉｅｎｄ』
「……！」
バルディッシュの言葉に、秀人さんが目を見開き……嬉しそうに、笑った。
「ああ！ それじゃ、二人とも……やるぞ！」
『『 Ｓｔａｎｄｂｙ ｒｅａｄｙ 』』
――ヴオオオオンッ……!!
秀人さんの足元に、魔法陣が展開する。
いつものように、魔法陣が分解し……
――バシュッ……!!
伸びたラインが、クロノ、ユーノくん、アルフの順に、繋いでいく。
「せめて一声掛けろ……」
残り少なくなっていた魔力を吸い取られ、げんなりしながらクロノが言う。
けどもう、既に諦めたかのような、気安い雰囲気が漂っていた。なんだかんだで、秀人さんには振り回されっ放しだもんね……

そして四人の魔力のラインが、レイジングハートと、バルディッシュを繋いだ。
――ヒュイイイイイイイィィィィィィィィン……!!
レイジングハートとバルディッシュが、光に包まれる。レイジングハートは、桜色。バルディッシュは、黄金色。
二色だった輝きは、徐々にその色合いをシフトさせ、空色へ近づいていく。
「ぐっ……!」
ユーノくんが、がくりと膝を突く。
二つの光は、次第に重なっていき……一つの光へ。
「う……!」
アルフが、その場に倒れる。
一つになった光は、次第にある形へと収斂する。
「しっかりと、決着を着けろよ……」
ばたん、とクロノが倒れる。
そして……
「……来い!!」
秀人さんが、魔力を最後の一滴まで注ぎ込み……
――光の中から、一本の杖が現れた。
基本は、レイジングハートのキャノンモード。その各部を補強するように、バルディッシュを思わせる外装が装着されている。レイジングハートの基本色である白と、バルディッシュの基本色である黒が、美しいツートンカラーを描いている。
核である赤い宝石の隣には、バルディッシュの……フェイトの魔力光と同じ、黄金色の宝石。少し地味であるモノクロの杖に、鮮烈な色を加え……
「……きれい」
「……かっこいい」
その美しさに……そして、その凄みに圧倒されてしまう。
レイジングハートでもあり、バルディッシュでもある杖が、二重音声で発声した。

『『Ｕｎｉｔｅｄ Ｈｅａｒｔ Ｓｅｔ Ｕｐ』』

……それが、この杖の名前。

……まるで、私達を象徴するかのような名前。

『『さぁ、マスター達。私を手に取ってください』』

「マスター……」「……達？」

フェイトと、ぴったり同じタイミングで秀人さんを振り返る。そういえば、この杖は誰のものなんだろう。私？　それとも、フェイト？

秀人さんは、今度こそ魔力と体力をすっからかんに干上がらせ、床に倒れていた。その体勢で、答える。

「どっちも……なのはと、フェイト。二人がマスターだ。中身も、そういう風にしてある」

「本当に……よくやったわ、秀人」

プレシアが、秀人さんを休ませる。

『二人とも!!　準備はいい!?』

エイミィの呼びかけに、私達は、声をそろえて……！

「「いつでも!!」」

アースラのハッチが開き、目の前に、準虚数空間に浮かぶ庭園が現れる。轟々と唸り、今にも瓦解しそうな、巨大な質量を持った建造物。

もしもあれが砕け、地球に、海鳴市に降り注いだりでもしたら……私の大事な人たちが、欠けてしまうかもしれない。絶対に、止めなければならない。

「……ボクね、」

と、フェイトが独白を始めた。目はしっかりと目標を見据えながら、それに耳を傾ける。

「ついこの間まで、おかーさんとアルフ以外、何もいらないって思ってた」

初めて会ったときの……冷酷な敵。

「でも、今は……ちょっとだけ違うんだ」

それは、偽りの姿で。本当は、ただ寂しがりやなだけの、優しい女

の子。
「ももこ、みゆき、きょうや……」
フェイトにつかの間の温もりを与えた、私の家族。
「ユーノに、ひでと。それから、それから……」
手を伸ばしたのは、ほぼ同時。
私と、フェイトの手が、
「なのは」
ユナイテッドハートを、手にした。
「フェイト……？　今……」
今、私の名前を……
「ボクは、みんなを守りたい」
目の前には、照れくさそうなフェイトの笑顔。
「力を貸して。ボクたち二人なら……なんでも出来る!!」
「……うん！」
……暖かな気持ちが、胸を満たしていく。
それは俗に……『友情』と、呼ばれる気持ちだった。
「やるよ、フェイト!!」
名前を呼ぶ。
「うん、なのは!!」
呼び返してくれる。
無敵の万能感が、全身を満たしていく!!
『『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　＼Ｈｉｇｈ　ＥＮＤ』』
桜色と、黄金色。二対の翼が、広がる。
シーリングモード・ハイエンド。
放たれるのは、最強の封印魔法。
魔力収束……スターライトで集めた魔力を、私たち二人の封印魔法に乗せて、打ち出す。本来であれば、機体も、肉体の限界もはるかに超えた、過剰出力にも程がある魔法。
今の私達には、『限界』なんて……きっと無い。
既に、十分な魔力は集まっている。
あとは、たった一節の言葉を、詠唱するだけ。

それは、レイジングハートとの契約の一節。
初めて魔法を使って暴走体を封印するときに、秀人さんが選んでくれた。
――始まりの言葉。
それを今、もう一度口にしよう。
「「不屈の心は……」」
……これで、終わる。今までのすべてが。
そして、これから始まるんだ。私の……私たちの、すべてが。
「「この胸に!!」」
――――――――!!!!!!
発射された二色の封印魔法は、まっすぐに、揺れることも、阻まれることもなく突き進み……
――ゴオオオオオオオオオオオオオンッッッ!!
今にも崩れようとしていた庭園を、捉えた。
貫くのではなく……命中した箇所を中心に、庭園を魔力の殻で包み込んでいく。
負担は、ほとんど感じない。当然のように、封印は成されていく。
そして。
――キィンッ……!!
そんな甲高い音を最後に、庭園の震動は完全に止まった。
『『Ｓｅａｌｉｎｇ Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ』』
封印、完了。
『『Ｍｏｄｅ Ｒｅｌｅａｃｅ』』
役割を終えたユナイテッドハートは、元の二機に分離し、レイジングハートは私の左手に。バルディッシュはフェイトの右手に、それぞれ帰還した。
『皆さん』
エイミィではなく、リンディさんが直々に通信をしてきた。『皆さん』と言うからには、これはきっと全体通信。

『次元震の停止を、確認しました。これより、準警戒態勢へと移行します』
危機は脱した。
『嘱託魔導師の皆さん』
嘱託……つまり、私たちのことだ。
『あなた方の協力無しには、本件の解決はありませんでした。アースラ艦長として、また、一人の管理局員として、深くお礼申し上げます』
そっか……終わったんだ。でも……
ちらりと、横を見る。
この事件が終わったら、フェイトは、事件の重要参考人として、連れて行かれてしまう。死に別れるわけではないから、一生会えないというわけではないけど……でも折角、仲良くなれたのに……
――ぎゅっ
俯いていた私の手を、フェイトが握った。
「大丈夫だよ」
――また、会えるから。
暗に、そう言われた気がした。
全く……そんな希望に満ちた顔をされたら、私が馬鹿みたいじゃないか。
「ん……」
でも、わざわざお礼を言ってやるのも癪だから……今は、こうして。
手を取って、少しでも長く……繋がっていよう。
私は、フェイトの手を握り続けた。ドッグに局員が来て、フェイトを連れて行く、その間際まで。
そして、ジュエルシード事件……後に、P・T（プレシア・テスタロッサ）事件と呼ばれるこの騒動が終結して、二週間が過ぎた。

# 第二十四話

――ピピピピピッ……

「う……？」

無粋な電子音は、気持ちのいい睡眠から、私を強制的に現実へと帰還させた。

「うる、さいい……！」

薄目を開けて、カーテンを引いた窓を見る。

……確かに、もう日は昇っているけど……

「いま、何時……？」

携帯電話を引き寄せ、開く。

闇に慣れた目を、ディスプレイのバックライトが眩しく照らす。

「午前、五時……？」

誰だ。こんな時間に非常識な。

それに僅かに顔をしかめ、メールボックスを開ける。

「クロノだったら……ぶん殴ってやる……」

人の睡眠を……よりにもよって、第二土曜日の朝を、台無しにしてくれて……！

ベッドの下。秀人さんは、布団の中でもぞもぞと身じろぎをした。

「……すー」

また、布団を被りなおして、静かな寝息を立て始めた。

よかった。起こしちゃったのかと思った。

五日前から仕事に復帰し……それまで休んでいた分もガンガン働き、疲労困憊なのだ。

おかげで洗濯物が多くなって、我が家の洗濯機は回りっぱなし。食事もお肉が中心にな

って、エンゲル係数も鰻上りだ。

「って、そうだ。メール……」

そして、表示された文章に目を通す。

『クロノだ』

よし、ぶん殴ろう。
『朝早くにすまない。だからひとまず、僕を殴ろうとするのはやめてくれ』
……ちっ、行動を読まれてる。
『さて、それでは用件の方だ』
スクロール。
『フェイトに会いたくないか？』
「えっ!!??」
フェイトに、会える!?
布団を跳ね飛ばし、起き上がる。
『フェイトとアルフは今日、時空管理局の本部へ護送される。時刻は、地球で言うところの午前七時だ。午前三時にその時刻が決定されたおかげで、こんな時間に連絡することになってしまった。すまない』
クロノ、ナイスだよ!!
スクロール。スクロール。夢中で文章を読み進める。
『午前六時から午前七時までの一時間だけ、地球で面会が許されている。場所は……』
『海鳴臨海公園』
「……あはっ」
あまりに気の利いた待ち合わせに、笑みがこぼれてしまう。だって、あそこは……
「なのは、どうした？」
あ、起こしちゃった……私の馬鹿。
「ごめん。でも、これ」
秀人さんに、携帯電話を渡す。それを徐々に読み進め……
「急いで準備するぞ」
「うんっ！」
さあて、ちゃっちゃと着替えよう！
「ユーノ、起きろ！　おい！」
「ぐえっ!!」
バスケットの中にいたユーノくんを掴み上げ……

「ストラグルバインドッ!!」
――バシイイイッ！
「ぎゃあああああああああああああッ!!!」
……変身魔法を強制解除され、床に落ちた。
ユーノくん、こんなのばっかり。
「な、な、何をするだァー――!!!!」
ネズミ柄のパジャマ姿で秀人さんに詰め寄る。
「フェイトとアルフに会える！」
押入れの中から服を取り出し、投げる。
「おっ……っと！」
反射的に受け取ったユーノくんの手を引き、脱衣所に消える。
お風呂に入ろうとしているのではなく、私が『女の子』だから、着替えは別々……ということらしい。私は別に、一緒でも構わないんだけど。
ハイソックスにスカート。無地の長袖シャツの上に、アリサから貰った上着を羽織り……母さんと姉さんからもらったリボンで髪をポニーテイルに纏め、準備完了。
「秀人さん、ユーノくん、もういいよー」
二人が出てくる。秀人さんは、ジーンズに薄手のジャンパー。ユーノくんは、ハーフパンツにパーカー。
「変じゃないよね？」
私なりに精一杯おめかししてみたけど……
「似合ってる。可愛いよ」
「そ、そうかな？　えへへ……」
褒められちゃった。
「二人とも、時間！　時間！」
そうだった。
携帯電話を開き、メールをタイプする。
『今から海鳴臨海公園で、フェイトと会ってきます』……文面は、これでいいかな。
メールアドレスに載っている人全員に、一斉送信っと。

ポケットに携帯電話を突っ込み、家を出た。
いつものようにバイク……ではなく、今日は……
「それじゃ、行くよ……レイジングハート」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』
ふわ、っと飛行魔法を発動し、浮上する。
「ユーノくん、お願い」
「りょーかい」
ぱしゅん……と、私たち三人の周囲に、五メートル四方の結界が発動する。移動式の結界だ。これで、誰かに見られる心配は無くなった。
――実は、秀人さんのバイクはもう無い。
脱出することが先決だったから、庭園内に置いてきてしまった。庭園を封印した後、取りに行ったんだけれど……バイクを置いていた場所に虚数空間が開いてしまったらしく、影も形も見当たらなかった。
『気にするな』って言われたけど……やっぱり悲しい。たったの一ヶ月かそこいらでも、私たちの思い出が詰まった一台だった。
「はぁ……」
ため息をついて、眼下に広がる町並みを眺める。
「こら」
ぽすっ、と頭を軽く撫でられる。
「そんな顔で、一週間ぶりにフェイトに会う気か？」
う……言われてみれば。沈んだ顔をしていたら、フェイトに申し訳ない。
笑顔、笑顔……よし。
「さ、急ごう！」
秀人さんとユーノくんの手を掴み、スピードアップ。
臨海公園まで、あと少し。
◆　◆　◆　◆
早朝の市街を、黒塗りの高級車が走っていた。
走行音は、恐ろしいほどに静かだ。車のポテンシャルを、熟練のドライバーが引き出したが故の、無音。

だが、それとは対照的に……
「鮫島、もっと飛ばしなさい！」
「駄目だよ、アリサちゃん。法定速度は守らないと……」
「私が法よ！　というわけで、ガンガン飛ばしなさい！」
「アリサちゃん……」
車内は騒がしかった。
ドライバー……鮫島は、法定速度ギリギリの速度で、海鳴臨海公園へと向かう。
「全く、何でこんな直前に言うかなぁ……」
腕を組み、ドカッと座席に座る。
愛犬の散歩をしていた最中、いきなりなのはからのメールを受け取った。
「ふあぁ……」
隣のすずかも、大きな欠伸をしている。朝に弱い彼女をたたき起こし、車に押し込んだのもアリサの仕業だった。
「どんな奴なのか、面を拝んでやろうじゃないの……！」
聞いた話では、あの日、子猫を半殺しにした張本人だという。理由はどうであれ、その罪に変わりは無い。
「確か～……『可愛い子』、だったっけ？」
「そんで、『友達候補』ね」
「……」「……」
「「……どういう子？　」」
考えれば考えるほど、よく分からない。
「ま、会えばわかるわよ」
「そうだね」
想像を切り上げ、背もたれにどっかりと体を預けた。
「そうだ、すずか。今日、私の家になのは呼んで遊ばない？」
「あ、賛成」
そして二人は、今日の予定を組んでいく。臨海公園まで、あと十分ほどだった。
◆　◆　◆　◆

――カラン
店のドアに、『ＣＬＯＳＥＤ』の看板を出し、鍵を閉める。
そして、手書きのチラシをどさっと置く。
『喫茶翠屋、本日臨時休業。
こちらのチラシをお持ちの方、次回ご来店の際にケーキ半額！』
「これでよし、と」
彼女……高町美由紀は、満足げに頷いた。
「おーい、まだか！」
ウェイターの格好から、普段着に戻った恭也がせっつく。
「はいはい！　今行くよー！」
ばたばたと慌しく、スニーカーで駆けていく。
幸いにも、この翠屋のある大通りから臨海公園まで、走れば十分程度だ。
桃子は二人に後を任せ、先に向かっていた。
今日は掻き入れ時の日曜日。それを臨時休業にするなど、以前なら絶対にありえないことだった。さすがに、反省したのだろう。
「フェイト……会えなくなっちゃうのかな」
走りながら、どこか寂しそうな美由紀。
僅かな……一週間にも満たない期間ながら、汚い食べ方を矯正し、最低限のマナーを文字通りに叩き込み、髪の毛の手入れをしてやったりと、色々と世話を焼いてやったのは彼女である。
「なに、死に別れるわけじゃない。また会えるさ」
なぜかフェイトの実戦訓練につき合わされ、日がな一日、木刀を振る羽目になった恭也。
「……それまで、鍛えなおさねば」
何気に、フェイトに何本か取られてしまったのは苦い思い出である。剣の鍛錬を疎かにしていたことを、今更ながら悔やんだ。
「……今日は、なのはと食事でもするか」
「そう言うと思って、料理の下ごしらえしてきたんだよ」
美由紀がサムズアップし、手柄を誇る。
「……そういえば、今日が初めてか」

秀人との約束。週に一度は、家族で食事をすること。
先週は、なのはが疲労でダウンしていたためお流れになってしまったが、今日は大丈夫な筈だ。
「で、何を作るんだ？」
「ハンバーグとパスタ。後は、お母さんと一緒に即興で作るよ」
「いいな。きっと喜んでくれる」
二人の中では、なのはは一日、自分たちと過ごすことが決まっているようだった。
◆　◆　◆　◆
「くー……くー……」
富山咲は、日曜日らしくベッドで惰眠を貪っていた。
一日の大半は寝て過ごし、日ごろの疲れを忘れる……それが、咲のいつもの週末だった。
たぶんに漏れず、今日という日もまた、枕を抱き締め涎を垂らし、怠惰な一日を満喫しようとしていた。
――♪♪
と、その睡眠を妨害する物があった。咲の携帯電話である。流行の音楽の一節が、メールの着信を告げていた。
「ん、ん～～……」
だが、咲は起きない。
――ピリリリリッ！
今度は、メールではなく電話が着信した。
「んぁ～……？」
半分以上寝ている頭のまま、携帯電話を取る。
「はぁい……ただいまるすにしております……ぴーというおとのあとに～……」
……居留守を使うつもりらしい。
『富山さん、起きなさい』
だが、電話口から聞こえてきた声に、少しだが目を覚ます。
「あれー……はせがわせんせー……？」
『はいそうです。メールは見ましたね？　すぐに向かいますよ』

「めーる……？　はい、すぐに～……すぴー」
懲りずに眠りに落ちていく。電話の向こうで、すぅっ、と息を吸う音がして……
『起きなさい!!』
「わひゃあああああっ!!」
ずでんっ！とベッドから転げ落ちた。
「あた、あたたた……！　お尻打った……！」
『起きましたね？』
「そりゃ起きますよ……もう、何ですか？」
『ついさっき、高町さんからメールが届きました。件の彼女と、海鳴臨海公園で会うそうです』
「なのはさんが？　……何時に？」
『今からだそうです』
時計を確認。午前五時五十分。
「な、何でこんな朝っぱらに言うのよーーーー!!」
携帯電話を放り出し、洗面所に駆けていく。ざぶざぶと顔を洗い、最低限のメイクを施し、髪をバレッタで纏める。
わたわたとパジャマを脱ぎ捨て、クローゼットから服を引っ張り出す。いつもの癖でスーツを取り出し、ハッと気づいて今度はワンピースを取り出した。
時刻は、六時になろうとしていた。
「うえええええん、間に合わない～……!!」
ハンドバッグに携帯電話を開いたまま放り込み、原チャリの鍵を手に玄関を飛び出していった。
『変わりませんねぇ、あなたも……』
電話の向こうで、長谷川が呆れて呟いた。
マンションの横に一台のセダンが停車し、クラクションを短く鳴らした。ヘルメットを被ろうとしていた咲は、それを放り出し、運転手の顔も確認せずにセダンに駆け寄る。
「先生、ありがとー!!」
ダイブするように助手席に滑り込んだ。

「全く、世話の焼ける……」
律儀に咲がシートベルトを締めるのを確認してから、発進させた。
「でも、わざわざ迎えに来なくても……何でです？」
ポーチから取り出した櫛で、寝癖を直しつつ聞いた。
「あなたのことです。あのまま原付で家を出ていたら、道路交通法違反で警察のご厄介になるのは目に見えていますから」
「うっ……」
実は、既に点数がギリギリの咲であった。
「……前にもこんなこと、ありましたねぇ」
「ええ。小学五年生の遠足でした」
「違いますよ。四年生です」
珍しく、咲が正解を言い当てた。
「む……そうでしたか」
「はい。ちゃーんと覚えてますよ。寝坊した私を迎えに来てくれて、お弁当を半分こしてくれましたよね」
胸を張る咲に、ぼそりと一言。
「覚えているなら、なぜ普段の出勤時間がギリギリになるのでしょうか……」
実は、こうして送り迎えをするのは今回だけではなかったりする。
「え？　……あ、あはは、それはまぁ……えぇと、何といいますか……」
途端、しどろもどろになる。それに苦笑しつつ、臨海公園に近づいていく。
「ねぇねぇ、先生」
「何ですか？」
くいくい、と袖を引く咲。律儀に応対する長谷川に、咲は提案する。
「今日は秀人さんとなのはさんを連れて、動物園にでも行きませんか？」
「ふむ……悪くないですね。予定らしい予定もありませんし。ですが……」
長谷川は、その場面を想像してみた。
十代の少年と小学生の少女を連れて、動物園を歩く自分と咲。

「……はは、まるで夫婦ですね」
何の気なしに言った言葉に、咲が過剰に反応した。
「えっ!? ふ、夫婦……!?」
赤面し両頬に手を添え、かぶりを振る。
「も、もう! 先生ったら何を言い出すんですか!」
「……? はぁ、済みません」
長谷川は、よく分かっていないようだった。
「うふふ」
「……?」
咲が機嫌を良くした理由がいまいち分からず、首をかしげる。
「秀人さん……というのは、どのような方ですか?」
話には聞いているものの、実際に会ったことは無い。
「先生とは、きっと気が合いますよ」
咲は、妙な確信を持ってそう言った。
臨海公園は、目の前だった。
◆ ◆ ◆ ◆
何分かの飛行を経て、俺たちは臨海公園に到着した。まだ早朝というだけあって、人はあまりいない。ジョギングをする人、犬の散歩をする人……その程度だ。
それも、事前に展開されていた認識阻害結界をくぐった途端、いなくなる。
さーてと。待ち合わせは、確か遊歩道だったか。
「秀人さん、ユーノくん。こっちこっち」
俺たち二人の手を引き、ぱたぱたとなのはが走る。ポニーテイルの先端がぴょこぴょこと跳ね、抑えきれない喜びを表現していた。
雑木林を抜けた先……海沿いの遊歩道に、クロノと、アルフと……少し挙動不審なフェイトが待っていた。
「フェイト!」
喜色満面で走り寄っていく。
「ひぅ……!」
が、フェイトはアルフの背中に引っ込んでしまった。

「ふぇ、ふぇいと……？」
がびーん、とでも形容できそうな表情で、なのはが立ち尽くす。
「私と会うの、嫌だった……？」
縋るような声。
そんなに心配することは無いんだけどな。大方、久しぶりに会うなのはに、どんな態度で接すればいいのか悩んでいるだけだし。
「……ちがうよ。ちょっと、はずかしかっただけ」
恐る恐る、アルフの背後から出てくる。服は……少し地味だ。まぁ、事件の重要参考人がフリフリのゴスロリファッションなんて、着れるわけないんだけど。
長くて量のある金髪が、潮風に揺れている。
「よっ。久しぶり」
三人に、軽く手を上げて挨拶する。
クロノは目礼。アルフは尻尾を振りながら片手を挙げ、フェイトは控えめに手を振る。
「……」
「……」
じーっと見詰め合う、なのはとフェイト。
「んじゃ、俺たち向こうで待ってるから」
「時間が来たら呼びに来る」
水入らずで話をしたいだろうし、二人っきりにしてやろう。
「リンディさんとエイミィ、来てないのか」
誰よりも真っ先に駆けつけてきそうなのに。
「艦長は事後処理、エイミィは仮眠に入った」
「ふぅん……みんな疲れてるんだな」
確かに、なのはとユーノもあの後二日間くらい寝込んでたっけ。
「……あの翌日にピンピンして仕事に行った君が、異常なだけだ」
「何日もずっと欠勤してたんだぞ。身体は動くんだし、早いとこ復帰しないと申し訳立たないだろ」
普通の会社だったら、とっくに首にされているところだ。
「秀人、君に会わせたい人がいる」

「何だよ、藪から棒に。誰？」
クロノは、ユーノとアルフを見た。
「……できれば、秀人と二人きりのほうがいいらしくてな。
ユー……フェレットもどき、犬。秀人を借りるぞ」
「「誰が（フェレットもどき／犬）だッ!!」」
仲良いなぁ、お前ら。だがユーノ、さすがにバインドカッターはやりすぎだ。アルフもその爪を引っ込めろ。
「は、離せ秀人！　わざわざ言い直しやがったぞこの野郎！」
「このチビ!!　あたしは犬じゃなくて狼だ！」
「はいはい。すぐ帰ってくるから大人しくしててくれ……よっ」
――ギュルルルルッ！
ストラグルバインドで、二人を纏めて縛る。
「ひ、秀人おおおお！」
恨みがましいユーノの声をスルーし、クロノの後を追った。
「この辺りでいいだろう」
何本か道を挟み、クロノは足を止めた。
簡易結界を展開し、懐からＳ２Ｕを取り出す。
「どうしても、君と話がしたいらしくてな。……ほら」
それを俺に渡し、ユーノとアルフがいる場所に戻っていった。
Ｓ２Ｕから、空中にモニターが投影される。相変わらず、意味不明にハイテクだ。
そのモニターに、真っ白い……囚人服のような服を着た、一人の女性が映し出された。
その人物に、俺は息を呑む。
『……久しぶりね、秀人』
「……プレシア」
あんたかよ。
一週間ぶりに見るその顔は、あの呪的なメイクが剥がれ落ち、元の端麗な容貌となっていた。
『十分間だけ、あなた達と話をする時間を貰えたの』
十分？　たったそれだけか……でも、何でわざわざ俺に？

「フェイトはいいのか？　色々、話したいこともあるだろ」
紆余曲折を経て、ようやくフェイトと向き合うことができたのに。ただの十分でも、フェイトと話したいんじゃ……
『……駄目よ』
プレシアは首を横に振る。
駄目って……何でだ。もしかして、話をできる人物にも制限がされているとか？　やっぱり、主犯格だと色々厳しいんだろうか。
だが、違った。
『私は人間として、母親として……娘に、最低の行いをしてきたわ』
表情に色濃く、悔恨を滲ませる。
『この罪を清算しない限り、私には母親を名乗る資格は無い』
「そんなこと……！」
無い、と言いかけて、口を閉じた。
プレシアの罪は、重い。
もし本当に次元断層が発生していたら……数え切れない程の命が、失われていた筈だ。さらに言えば、フェイトを虐待していたという事実もまた、プレシアの言う『罪』なのだろう。
「大体、どうやって清算するって言うんだよ！
ただ牢屋でじっとしているだけが、あんたの言う『償い』なのか!?」
代わりに出てきたのは、自分でも理解できない激情だった。
プレシアは瞑目し、努めて冷静に宣言した。
『私の刑期は、少なく見積もっても数百年……事実上の、永久幽閉よ』
「……！」
でも、どこかそれに納得している自分がいる。即刻死刑にならないだけ、まだ温情措置だと考えられる。
「でも、そんな……！」
これじゃあ、救いが無さすぎる。
くすっ、と小さな笑い声が聞こえ、再び視線をモニターに移す。
『でも、１００％、永久に会えないというわけでは無いのよ』
……どういうこと？

とっくに脳がオーバーヒートして、思い浮かばない。
『私の知識と技術を供与し続ければ、減刑も可能』
「え……？」
減刑できる……？
『今を生きて、過去を償う……あなたの言葉よ、秀人。私は私なりに……精一杯、『生きて』みるわ』
その表情は、これから獄中へ入るものとは思えないほどに澄んでいて、力強い。
本気……なんだ。本気で、数百年の刑期を相殺するつもりなんだ。
『もう一度、フェイトに会えるようにね』
「プレシア……」
どう声をかけるべきか。激励か、慰めか。
だが、先に口を開いたのはプレシアだった。
『……吾妻秀人さん』
画面の向こうでプレシアは、改まって俺の名を呼ぶ。
その声は、僅かに震えていた。
冷静に振舞っていても……やはり、娘と離れ離れになってしまうことは、嫌に決まっている。
何かを言おうとしては、口をつぐみ……それを幾度も、幾度も繰り返す。
そして、プレシアが搾り出したのは……ありふれた、たった一言だった。
『……フェイトを、どうか、よろしくお願いします』
そして、深々と頭を垂れる。
――ザッ、ザザッ……
いよいよ、時間切れらしい。映像が、徐々に消えていく。
「……ああ、任せろ！」
同時、プツン……と、映像が消えた。
聞いたのかどうかは、分からない。だからあれは、俺の決意表明だ。
プレシアが帰ってくるその日まで……俺が、フェイトを守る。

三人が待つ場所に戻る。
「秀人、誰だったの？」
「ああ、プレシア」
特に隠すようなことでもないだろう。サクッと簡潔に伝えた。
「……」
アルフの耳が、ぴこんと動く。
「……ふん、あの女……私にも言ってたよ。『フェイトを頼む』って。一々言われなくても、そうするに決まってるだろ」
なるほど。そのくらいの話をする程度には、なっているんだな。
「……クロノ、さんきゅ」
Ｓ２Ｕを返す。
たったの十分。だけど、その十分を捻出するのにどれだけ苦労したかなんて、目の下の色濃い隈を見ればハッキリ分かる。
こいつはこいつで、プレシアの……ひいてはフェイトのため、奔走していたんだ。
「別に、僕は何もしていない」
ったく、礼くらい素直に受け取れっつーの。
それから数十分、たわいも無い話をしたり、水切りの回数を競ったりしながら、時間を過ごす。
「……そろそろ、時間だ」
柱時計は、午前六時五十分を指していた。
「……そうか」
いよいよ、本格的にお別れか。
「そろそろ、認識阻害も限界だ」
確かに。
早朝の数人しか通らないような状況であれば、認識阻害結界は有効な人払いだ。確固たる目的も無い人は、無意識のうちにこの公園を避けるようにできる。
だが、今日は日曜日。朝七時にもなれば、この公園目当てに近所の住民が来てしまうか
もしれない。そうしたら、認識阻害は意味を成さなくなってしま

う。だからこそ、こうして早朝を選んだんだろう。
「たったの一時間……僕もまだまだ、力不足だな」
「そんなこと無い。一時間でも、十分でも……二人には、必要な時間だ。それを作ったのは、クロノ、お前の力だ」
「決まっていたなら、僕に一声掛けてくれればよかったのに。結界は得意分野だよ？」
　ユーノの結界魔法の腕は、クロノを上回っている。
「……いや。さすがに、民間人の手を借りっぱなしというのは体裁が悪くてな」
「管理局ってのも、大変だねぇ……」
　そこらへんは、大組織の弱みか。
　でもまぁ、そんなに気にすることでも無いだろう。
　あの二人なら、きっと今頃……
◆　◆　◆　◆
「久しぶりだね、フェイト」
「うん。一週間ぶり……くらい？」
　ひょこっ、と首を傾げる。
「くらい、じゃなくて、丁度一週間だよ」
「……」
「……」
　……ええっと、何だっけ。
　おかしいなぁ……色々、話したいことがあったのに。フェイトの顔を見た途端、全部吹っ飛んじゃった。
「……おかーさん、ね」
　ぎりぎり潮風にかき消されない程度のか細い声で、フェイトが話し出す。
「しばらく、ボクとは会えないんだって」
　……フェイトと違い、今回の事件の主犯のプレシアが、そんな軽い刑で済む筈が無い。そんなこと、フェイトが一番よくわかっているはず。
「せっかく、仲直りできたのになぁ……」

それでも、理性と感情は別物で、折り合いなんて付けられない。
「もう怒ってないって言ってるのに……ボクをいじめてたことも、ちゃんと償うんだって」
「そっか……」
微妙な気分だ。改心したとはいえ、プレシアがフェイトを虐待していたという事実には変わりは無い。私としては、プレシアにはしっかり罪を償ってもらいたいけど……それは、フェイトから母親と一緒に過ごす時間を奪うということだ。
「ボクたちも、しばらく会えなくなっちゃうんだよね」
「うん……」
そして、フェイトもまた……プレシアの言いなりだったとはいえ、実行犯として、この事件の中心にいた。
聴取が終われば、今度は裁判だ。リンディさん達は、可能な限り情状酌量を勝ち取ってみせると言っていたけど……少なくとも、数ヶ月は会えないことは、もう確定しているらしい。
ああ……久しぶりの再会なのに、どんどん暗い話になっていく。
「おかーさんが、言ってくれたんだ。『後悔しないように行動しなさい』……って」
え……？
「多分、今日を逃したら、ずっと言えなくなっちゃうんだ」
それって、もしかして……
「何だかんだで先延ばしにしちゃってたけど、あの時の返事……今、するね」
「う……うん……！」
心臓が、五月蝿いくらいばくばくと脈打つ。
（断られたらどうしよう……）
そんな懸念が、ぐるぐると渦巻く。
「ボクは、キミの友達になりたい」
――――――――――――――――やっと、言ってくれた。

感無量になり、抱き寄せようとして……

「でも、さ……」

あれ？　何で困ってるの……？　ここは、感動の抱擁をする場面じゃないの……？

「友達って……どうやって『なる』の？」

……あれ？

迂闊だった。友達になろうにも……私、自分から作ったこと、一度も無かった。

「ええっと……友達っていうのは……その－……」

……やばい。知らない。

「……知らないの？」

「ちょっと待って！　今考え……じゃなくて、思い出すから！　すぐに！」

ど……どうしよう……！このままじゃ、フェイトと友達になれない……！

「キミ……もしかして、友達いないの？」

「はうっ!!」

フェイトの無邪気な一言は、ぶっすりと、私の心のナイーブな部分を貫いた。

「い、いるもん！」

涙が浮かんだ目で、反論する。まったく、失礼な！

「二人もいるんだから！」

「それ、多いの？」

「……もう許して」

うううう……泣いてないもん……友達は量より質だもん……

アリサと、すずかっていう立派な友達が……。

アリサと、すずか……？

『アリサでいいわよ』

あのときの記憶が、フラッシュバックする。

『友達は、みんな……』

「あ……」

何だ……ちゃんと知ってるじゃないか。
「……名前」
「え？」
「名前で呼び合うのが、友達なんだって」
多分、最初はそれでいいんだ。
「だから、『キミ』じゃなくて……ちゃんと、『なのは』って、呼んで欲しいな」
きっかけは小さくても……それで、友達になれれば。
「知ってるかもしれないけど……私、なのは。高町なのは、だよ」
フェイトが私の名前をちゃんと呼んでくれたのは、あの戦いの最中……言ってしまえば、ドサクサ紛れの一度きりだけだ。
だから、ちゃんと呼んで欲しい。
フェイトは頬を染め、すうっ、と深呼吸。
「……なの、は」
ごによっ、と、蚊の鳴くような声で……確かに、呼んでくれた。
「うん！」
それに、大きな声で返す。
「……なのは」
恐る恐る、確かめるように。
「うん！」
ぱぁっ、と、フェイトが笑顔を見せた。
初めて会っときのような、諦めきった、冷酷なものじゃない。
フェイトの……本当のフェイトの、笑顔。
「なのは！」
それが今、私に向けられている。あの頑なだった心を、開いてくれたんだ。
「フェイトっ！」
「ひゃあっ！」
うれしくてうれしくて……今度こそ、フェイトを抱き寄せた。
「……ありがとう、なのは」
最初は恥ずかしがっていたフェイトも、私の身体に手を回して、抱

き返してくれる。
「なのは達がいなかったら、ボクはきっと駄目になってた。
今だから言うけど……なのはは、ボクの憧れだったんだよ」
「……憧れ？」
何で……？　私、最初のうちはボロ負けして、敗走して……とてもじゃないけど、憧れの対象では無かったと思うけど……
「自分の力を信じて、仲間と力を合わせて、強敵に立ち向かう。
……まるで、正義のヒーローだ」
手放しに褒められ、背中がむず痒くなってしまった。
「そんなつもりは無かったんだけどなぁ……」
正義とか、そんな小難しいこと知らないし。
「秀人さんと一緒にいて、恥ずかしくないように……秀人さんに、誇れる自分になるために、がんばってただけだもん」
「誇れる自分に……か」
密着しているせいで、フェイトの表情は読めないけど。何か、思うものがあるみたいだ。
「ごめんね。そろそろ、みたい」
「……うん」
柱時計は、午前六時五十五分を回ろうとしていた。
向こうから、クロノが戻ってきてしまった。
「なのは」
秀人さんと、ユーノくんも。
「フェイト、時間だ」
「あの、もうちょっとだけ……」
クロノは、時計を見る。
「あと五分だ。伝えたいことがあるなら、今のうちに」
「うん、ありがと」
そして、ちょこちょこと私たちの前にやってくる。
「あのね……もしかしたらボク、一年以内に出てこれるかもしれないんだ」
あくまで、可能性の話。でも、かなり高い確率。

「そうしたら、アルフも連れて、こっちで暮らそうと思ってるんだけど……」
何かを言いたそうに、ちらちらと秀人さんの顔を見る。
「ひでと、言ってくれたよね……？『ウチに来い』って」
秀人さんは、うーん、と考え込む。
「さすがに、今の家じゃ狭いなぁ……」
六畳一間に、五人……確かに、無茶がある。
「え……」
がぁん、とショックを受けていた。
「そ、そっかぁ……は、はは……」
フェイト……話は最後まで聞かないと駄目だよ。
――ぽん
その頭に、秀人さんの手が乗る。
「模様替え、手伝ってくれよ？」
「え……？」
きょとん、と目を丸くする。
もう……お馬鹿さんなんだから。
「う……うんっ!!」
一転して、うれしそうに笑う。
あれ……？　そういえば、ユーノくんとアルフは、どこ行った？
「うっ……ぐすっ……フェイト、良かったねぇ……」
あ、いた。
「……でも、フェイト取られちゃった……ぐすっ」
喜びながらいじけるという、器用な真似をする。
「……」
その肩を、無言でぽんぽん、と叩くユーノくん。
……苦労性同士、気が合うみたいだ。
「午前七時。時間だ」
「うん……」
フェイトは名残惜しそうに、私の手を離す。
――キィンッ！

フェイト達を中心に、魔法陣が展開した。
いよいよ、お別れだ。
しばらく会えない。その事実が、今更ながらのしかかってきて……
「フェイトッ……！」
思わず、駆け寄る。
「なのは」「駄目だ」
けど、秀人さんとユーノくんに肩を押さえられ、止められた。
「辛いのは、フェイトも一緒だ」
「でもぉ……！」
せっかく友達になれたのに、もう離れ離れなんて……
「なのは」
でも、私の名を呼ぶフェイトの表情に、悲しみは見えない。
「大丈夫。また、すぐに会えるよ」
いや……目じりに、薄っすらと涙が浮かんでいる。
秀人さんが言うとおり……フェイトだって、悲しいのを我慢して、私に笑顔を見せているんだ。私だけがぐずぐず泣いているなんて、みっともない。
ぐしぐし、と乱暴に涙を拭う。
「ふ、ん……！　さっさと出てこないと、フェイトのことなんて忘れちゃんだから……！」
意地を張って強気に、思ってもいないことを言ってしまった。
「ふふ……それじゃあ、がんばらなきゃ」
光が強くなり……フェイトの姿が、段々見えなくなっていく。
「またね。なのは、ひでと、ユーノ」
徐々に、徐々に……
「嘘だよ！」
……意地を張るのは、もうやめる。
せめて、友達には素直に……笑顔を向けよう。
「フェイトのこと、ずっと待ってるから！」
「……！　うんっ！」
ぶんぶんと、大きく手を振る。

フェイトも負けじと、大きく手を振り返す。
――そして、光が収まった。
「……」
もう、そこにフェイトはいない。周囲を覆っていた結界も、同時に解除された。
「……さ、帰ろう！」

「ユーノ、お前はどうするんだ？」
秀人さんが、傍らを歩くユーノくんに聞いた。
そういえば……ジュエルシードのことが全部解決した今、ユーノくんがここにいる理由は、もう無いんだった。
「……ユーノくん、帰っちゃうの？」
「うーん……一族からは、報告も兼ねて帰って来いって言われてるけど……」
「そっかぁ……」
「でも、まだ帰るつもりは無いんだよね」
……え？
知らず知らず下がっていた顔を上げる。
「報告なんて手紙ですれば問題ないし、まだしばらく、こっちにいるよ」
「……！　うんっ！」
良かった……！　本当に！
――ぐうぅ～……
秀人さんのお腹から、盛大な腹の虫が鳴った。
「……悪い、腹減った」
そういえば、朝ごはん、まだだったよね。
「もう、仕方ないなぁ……」
帰ったら、何か作ってあげる。
「せっかくこの辺まで出てきたんだし、どっかで食べていかない？」
うぅん……外食は高いんだけど……たまになら、いいよね！
二十四時間営業の店もあるし。

そんなことを話しながら歩いていたら……見知った顔ぶれが、こっちに走ってきていた。
「え」
しかも、妙に多い。
「なのはっ！　どこにいたの!?」
「探しても見つからないから、焦っちゃったよ」
「あ、ごめん……ちょっと別の場所にいたんだ」
アリサとすずか。
「あらあら……遅かったかしら？」
母さん。
「うん、ついさっき行っちゃった」
「そんなぁ……」
べちゃっと座り込む姉さんと、
「だから、急げと……」
呆れたように腕を組む兄さん。
「なのはさん、ちゃんとお話できた？」
「うん。っていうか先生、髪の毛ボサボサ」
「へっ!?」
あわあわと頭を撫で付ける富山先生。
「富山さんは猫毛ですからね……」
懐から取り出した櫛で、富山先生の髪を梳かす長谷川先生。
何でそんなに手馴れているんだろう……
「先生、しっかりしなよ……大人なんだから」
「うううう……！　小学生に言われたぁ……！」
ちょっと涙目だった。
「それで……みんな、私たちに何か用？」
まず最初に口を開いたのは、アリサ。
「なのは、今日ヒマ？」
「ヒマって……何が？」
私の今日の予定なんか聞いて、どうすんだろうか。
「お洗濯とか、お掃除とかする予定だけど……」

「なのは……」「なのはちゃん……」
……なんでそんな、変な物体を見るような目で私を見る。
「……ああもう、つまりヒマなのね！　よし、決まり！　今日は、私たちと遊びにいくわよ！」
ええと、これってアレだよね。友達同士で、お出かけ……！
「うんっ！　私でよければ……！」
どうしよう……友達と遊びに行くなんて、人生で初めてかも！
「ちょっと待ったー！」
と、姉さんがアリサの言葉を遮った。
「なのはは今日、私たちと一緒に過ごすんだよ！」
そのまま、がばっと私を抱き上げる……って、何するの!?
「ね、姉さん!?」
「秀人くんとの約束でもあるんだから！　ね、恭ちゃん！　お母さん！」
うんうん、と後ろで頷く二人。
『秀人さん、一体姉さんたちに何を……』
『ああ、うん……週に一度は、なのはとの時間を持て、と……』
そういえば先週、食事に誘われたような気が……
「というわけで、なのはは連れて帰りま」
「待ちなさい！」
ぐわん、と視界がぶれ、気がついたら先生に抱きすくめられていた。
せ、先生まで!?
「なのはさんは、私たちと動物園に行くんです！」
「何で!?」
どこからそんな話が出てきた!?
「そんなの、仮病で休んだ春の遠足のやり直しに決まっています！」
「きゃー！」
何でみんなの前で言うの!?　先生の馬鹿！
「仮病じゃないってば！　本当に、熱が出てたんだから！」
三十七度だけど！
「気づかなくて御免なさい……！　駄目な母さんを許して……！う、

うう……！」
うわ、母さんに飛び火した!?
「母さん、違うの！　熱って言っても三十七度で、『降って沸いた休日最高！』って感じだったし……って、やべっ！」
「な～の～は～さ～ん～……!?」
バレたあああああああ!!
ぐいっと腕を引っ張られた。
「ちょっと、おばさん！　なのはは私たちと遊びに行くんだってば！」
「お、おばっ……!?」
アリサの大馬鹿！　なんてことを！
「張っ倒すぞゴルアアアアアアァ！」
先生、ヤンキー時代に逆戻りしてるうううう!?
「ああもう！　部外者は引っ込んでてってばー！」
――ぐいっ！
もう片方の腕が、姉さんに引っ張られる。
「家族が優先！　遠足なんて、また次行けばいいでしょ！」
「あァン!?　地味子はすっ込んで背景に徹しろや！」
先生、何気に一番酷い……
「地味、子……？」
姉さんの顔から、すーっと表情が消えていく……ああ、修羅場だ……！
秀人さん助けてー！
「はじめまして。私、三年生の学年主任を勤めております長谷川と申します」
「これはこれは、ご丁寧に……吾妻秀人です。……ええと、あちらの先生は」
「ははは、懐かしいですねぇ……後でお仕置きですが」
「あの、これからはちゃんと行事にも参加させますので……」
「ええ、責任を持ってお預かりします」
保護者会!?

「なのは！」
「なのは！」
「なのはさん！」
じり、じり……と、距離が詰められていく。
「「「「　誰と行くの!?　」」」」
「う、うううう……！」
選べるわけ無いじゃん……だって、みんな同じくらい好きなのに……
秀人さん、ユーノくん、兄さんってばー！
「ははは、モテモテだなぁ……」
嬉しくないー！
「もう！」
「「「あ！」」」
三人を振り払い、ダッシュ！
「秀人さん、ユーノくん！」
二人の手を掴み、走り出す！
「おいおい、どうするんだよ……」
「いいのかなぁ……」
後になったら考えるからいいの！
「さぁ、行くよー！」
見上げた空は、綺麗な快晴。
この広い空の下には、幾千の、幾万の人がいて……きっと、それ以上の出会いと別れがある。
フェイトとのお別れは悲しいけれど……きっとこれも、新しい物語のプロローグ。
どんな物語になるのかは、誰にもわからない。でも……
「秀人さん。ユーノくん。レイジングハート！」
両手に感じる温もりは、確かなものだから。
「ちゃんと、ついてきてね！」
私はもう、一人じゃないから――――

しゅー……と、車輪のベアリングを僅かに鳴らしながら、車椅子を進める。
座っているのは、小さな少女だ。年のころは、十歳程度だろうか。だが、その表情は妙に平坦……いや、見合わぬ厭世観が浮かんでいた。
膝の上に乗せているのは、コンビニの袋。中に入っているのは、脂っこくカロリーの高い弁当と、自然界には存在しない色をした飲み物。
「……不味そ」
それでも、それを食べなければ生きていけないという事実が、少女を苛立たせる。
平日であれば、学生や会社員の視線を浴びながらの買い物。
だが、今日は日曜日。普段であれば鬱陶しい好奇の視線も、そんなに多くはない。
これでも、比較的機嫌のいい状態であった。
と、通路の前方から、騒がしい集団が走ってきた。
先頭を切るのは、栗色の髪の毛の少女。その少女に手を引かれ走る、黒髪の青年と金髪の少年。そしてそれを追いかける、年齢も性別もバラバラな集団。
どたどたと走り抜けていき、その際に発生した風が、少女の異様に長い髪の毛を散らす。
「うぷっ……！」
顔を叩いた一房を乱暴な手つきで振り払い、不快に顔を歪める。
「チッ……！　騒がしいったらありゃしない……」
道を行く少女の前から、家族連れやカップルが、臨海公園の方向目

指して歩いていく。
決まって、少女に好奇の視線を向け、すぐに逸らすという行動を取りながら。
それとすれ違いになる度、少女の眉間には皺が刻まれていく。
さらに一組……今度は、ボールを入れた袋を持った少年と、バスケットを提げた少女が前からやってくる。
「早朝練習、やっと終わったー……おい望、どこで食うんだよ、それ」
「健太ってば、食べることしか頭に無いわけ？」
二人の視線が、やはり、少女に向けられる。
「……！」
ぎっ、と睨みつけ……
「何見てるのよ！」
怒りを、叩きつけた。
怒りの赴くままに車輪を回し、足早に自宅を目指す。
自宅のドアを閉めたのと同時、オートロックで施錠する。
「はぁっ、はぁっ……」
僅かに汗ばみ、立てば膝まである髪の毛が、首筋にへばりついている。
「チッ……」
またしても舌打ちをし、コンビニ弁当の入った袋を、乱暴にリビングに投げ捨てた。
「どいつも、こいつも……！　ヘラヘラ締まりの無いツラしやがって……！」
だが、ぶつける対象のいなくなった今、その怒りは自らのうちで分解され……ただ、言いようの無い空しさが残った。
――ちゃりっ
胸元には、大人びた十字架のネックレス。それを、ぎゅっと握り締める。
「……パパ、ママ」
窓に切り取られた狭い空は、忌々しいほどに晴れやかな快晴だった。

# A’s編　第一話『夜の帳、下りる頃に』

……朝が来て、目を覚ました。
遮光カーテンを引いたというのに、忌々しい朝日は容赦なく差し込み、私から睡眠を剥ぎ取っていった。
時計を見ると、朝九時。
半端な時間に起こされたせいで、中途半端に眠気が残って不愉快極まりなかった。
「……チッ」
今日の朝も、舌打ちから始まった。
ベッドの上には、読み散らかした本や漫画が転がっていた。
開いたまま置きっぱなしにしていた所為だろうか。癖が付いて、きっちり閉じられない。
……いいや、別に。もう読まないし。大して面白くなかったし。
つい、半分寝ぼけたままの思考で……以前からの習慣で、ベッドから自分の足で降りようとしてしまう。そして、現実に引き戻された。
――一生、足が動かないという現実に。
「……くそったれ!!」
太ももの辺りを拳で強く叩いても……痛みどころか、僅かな痺れさえ感じることは無かった。
「……はぁ」
やめよう。叩いて直るわけでもないし……怒るのも疲れるし。
車椅子を引き寄せ、腕の力で身体を乗っける。
ドアを開け、埃っぽい廊下に出た。またしても、引きっぱなしのカーテンの隙間から陽光が入り込んできている。宙を漂う埃に陽光が反射していて、まるで私の怠惰を戒めているかのようだった。
まぁいいや。別に、埃が積もったところで死ぬわけでも無いし。
来週か、来月か……気が向いたら、掃除しよう。
リビングに向かう途中、二階に続く階段が目に入ってきた。
二階には、誰も使うことなく、物置になることもなく、空っぽのま

ま半年は放置されている部屋が四つある。
そのうち一つは私の部屋だけど、この忌々しい身体のせいで、二階へはまだ足を踏み入れたことさえ無かった。
今の私の部屋は、書斎になるはずだった部屋にベッドを置いただけの場所だ。
トイレにもリビングにも玄関にも近い、六畳一間。これなら、ワンルームマンションにでも住んでいるほうが楽なのに。
――ぐぅ。
「あー……腹減った……」
車椅子の車輪を回し、生活臭ゼロのリビングへ。
聳え立つ冷蔵庫の下段を開き、出来合いの弁当を一つ、取り出す。
「……うへ」
見ているだけで、げんなりとしてしまう。
脂っこくて、変な匂いのする食べ物。正直、こんなもん食べたくない。
でも、自分で料理をしようにも、コンロが高すぎてうまく手が届かない。シンクで水をヤカンに入れ、茶を沸かすのが精一杯。
……結局、こんな不味い物体を食べるという選択肢しか無いわけだ。
レンジに放り込み、三分くらい待ってから取り出す。
「……いただきます」
当然ながら、返ってくる答えは無い。
言う必要が無いとわかっていても、つい口にしてしまうのは両親の躾の賜物だろうか。
ボソボソした鮭と、粘っこい飯と、変な色の漬物を口に入れ、お茶で流し込むという作業を繰り返し、朝食は終了した。
「うぅ……」
満腹感もそこそこに、不快感が胃に沈殿してくる。
だから、朝一番でこんなもん食べたくなかったんだ。
不快感が抜けてから、プラスチックの容器と、割り箸をゴミ袋に捨てる。そろそろ、一袋が満タンに……って、

「おぇっ……！　臭っせぇ……！」
梅雨明けから間もないからなのか、変な臭いが漂っていた。
換気だ換気！
窓を開けた途端、ぶわっと吹き込んできた生暖かい風が部屋の埃を巻き上げ、ゴミの匂いとブレンドされ……要は、部屋中が臭くなった。
「……くそったれ」
でも、窓を開けたまま放っておけば、多少はマシになるだろう。
その間に、風呂……じゃなくて、シャワーでも浴びるか。
タオルと着替えを持って、浴室へ。
浴槽には、入ろうと思えば入れる。でも、入ったが最後、私の腕力では出ることが難しくなってしまう。一度それで痛い目に遭って以来、私の入浴は専らシャワーだけだ。
シャンプーを多めに手に取り、髪の毛を洗う。
――ごしごしごし……
それにしても、我ながらよく伸ばしたものだ。
ほったらかしにしている間に、なぜか膝まで伸びてきてしまった。
ママが生きていたころは、一緒にお風呂に入って、背中の洗いっこをしたり、髪の毛を切ってしてもらったりしていた。でも、今は……
鏡を覗くと……まるで、ホラー映画のような出で立ちをした子供が写りこんでいた。
はっ……言いえて妙かも。
年中カーテンを閉め切った家に住む、陰気臭い子供。舞台設定もバッチリだ。
自嘲しつつシャワーで石鹸を洗い流し、浴室から這い出した。
リビングに戻ると、嫌な臭いはほぼ消えていた。
燃えないゴミの収集は、明日だったか……今夜中に出してしまおう。
さてと……部屋に戻ろう。
「……あー」
そういえばアレも、早く処分しないとなぁ……部屋の隅に放置

してある、珍妙なオブジェ。
「粗大、いや、資源ごみ……？」
目障りで困るんだよねー……液晶の割れたテレビなんて。
「……まぁいいや」
破片は捨てたし、躓いて怪我するなんてことは無いに決まってるし。放っておこう。
「あン……？」
電話機のランプが、チカチカと点滅している。
あーあ、またか……
イラつく手つきで、留守番電話の録音を再生する。
メッセージは二件。最初のメッセージは……
『〇〇テレビです。今度、あの事故について特番を組むことになったので……』
「死ねッ!!」
――バキッ！
拳で叩きつけるようにしてボタンを押して、再生終了。
「……ったく！　どっから聞きつけてんのよ……!!」
片っ端から着信拒否リストに放り込んでやっているというのに、ゴギブリのように沸いてきやがる。
あー、そうだった。残りの一件は誰だ？
また下らない用件だったら、電話機ぶっ壊してやる。
ぴっ、と音が鳴って、メッセージが再生される。
『石田です。最近、リハビリに来ていないじゃない？　確かに、あなたの足が動く可能性は低いわ。でも、治療法が分かった時に、間接が固着していたら……』
――再生、終了。
「……無駄だよ、先生」
大体……治ったところで、歩けるようになったところで、どうなるの？
私が歩けるようになったって、パパとママは褒めてくれない。二度と戻ってこないのに。

頑張ったから報われるなんて、漫画の中だけだ。
せいぜい、お涙頂戴な不幸話が大好きなマスコミの、恰好の視聴率稼ぎの道具にされるのが関の山。
友達を作ろうにも、こんな身体じゃできっこ無い。道行く人の反応を見ていればわかる。ちらっと私を見て、ふいっと顔を逸らす。コンビニに行っても、図書館に行っても、全く同じ反応しかしない。
二言目には、『大丈夫？』で、次は『手伝おうか？』だ。大きなお世話だ偽善者どもめ。
結局、私にはまともな未来なんて無い。それならいっそ……残りの一生を、この家に引きこもって暮らしていたほうがいい。
怠惰に。無為に。
起きて、食べて、眠くなるまで時間を潰して、眠くなったら寝る。
それが私……八神はやての選んだ日常なのだから。
――プルルルルッ……
言っているそばから、電話が鳴った。
留守電に設定し直していないせいで、いつまでも鳴り止まない。
「……」
仕方ないから、受話器を取った。
「……はい、どなた？」
受話器の向こうで、息を呑む気配。あーあ……これは、一番うざい輩だ。
『ああ、やっと出てくれたのね！』
きんきん耳障りな声。受話器を耳から離す。
『心配してたのよ。ずっと電話しているのに、出てくれないんですもの』
……誰だっけ、こいつ。
「何か用ですか」
『そろそろ、学校のほうへ出てきてくれないかしら？』
……ああ、先公か。
『クラスの皆も、あなたが登校してくるのを待ってるわ』
阿呆か。会ったことも無い他人を待ちわびる子供なんて、いるわけ

ないだろ。
……ここで切ると五月蝿いから、言うだけ言わせてやろう。
『あの事故のことは、残念だったけど……』
……あ？
今、なんつった？
残念……？
パパとママの死を、そんな一言で済ませやがったのか……？
黙って聞き流してやろうかと思ったけど……やめた。
『あなたのお父さん、お母さんも、きっとあなたが元気になることを』
「黙れ」
『望んで……え？』
「黙れっつってんだよ」
こいつに……パパとママの何が分かる。私の何が分かる。
「てめぇ、何様のつもりだ？」
したり顔で、人の心にズカズカと入り込んできやがって。
『私は、あなたのために言ってるのよ！　それを……！』
「あなたのために……それ、『自分のために』の間違いだろ？　お前は自己満足、自己陶酔で酔っ払ってイイ気分なんだろうけどさぁ……正直、うぜぇよ」
『教師に向かって何て口の利き方を……！　人が気を使ってあげているのに！』
はン……これが本性か。
いい人面して近づいて、恭順しないとわかった途端に高圧的になる。典型的な偽善者だ。
そのカスが電話口でキーキー喚いている光景を想像しただけで笑えてくる。
「うるせぇ黙れ偽善者」
――がしゃん
受話器を置き、電話線を引っこ抜いた。
最初から、こうしておけばよかったんだ。
はぁ……馬鹿馬鹿しい。

今日は何をして時間を潰そうかなぁ……
「図書館にでも行くか……」
何か、適当に長い小説でも借りて、退散しよう。
平日の真昼間。時折すれ違うのは、汗を流して営業に精を出すサラリーマンと、犬を散歩させる老人くらい。実に歩きやすい。引きこもっている内に、無意識に人の少ない時間帯を見つける能力が備わったらしい。
そういえばこの前、病院の帰り道に、変な集団とすれ違ったなぁ……
何人も連れ立って、悩みと無縁の楽しそうな表情で……
「……チッ」
……くそ。思い出したらまたイライラしてきた。
陰鬱な気分のまま、図書館に到着。エントランスを潜ると、快適な空調が私を出迎えてくれた。少しだけ浮いていた汗が、引いていく。
貸し出しカウンターから、白いカーディガンのお姉さんが会釈する。
「……」どうも。
会釈を返し、書架へ。
時代小説。現代小説。エッセイ。自叙伝。ドキュメンタリー。ノンフィクション。ティーン小説……と、ここだ。この辺の本なら、私にも読める。
学園恋愛。非日常バトルもの。ロボットバトル。ＳＦ。異世界冒険譚。不条理ギャグ。剣と魔法の物語。
あ、これいいかも。
私は、剣と魔法の物語のシリーズを書架から……書架から……
「……届かない」
せめて、もう一段低い段に入っていれば……
「はぁ～～～……」
つくづく、このポンコツの身体が恨めしい。
今日は、厄日だ……

恨めしく本棚を眺めても、本が落ちてくるわけでもないのに。すっぱいブドウ……じゃないけど、諦めるしかない。誰かに頼むなんて情けない真似、したくないし。

仕方なく、下の段に入っていたＳＦ小説を纏めて引っこ抜いた。

「……お願いします」

貸し出しカウンターに持って行き、カードを差し出す。

「あら、たくさん借りるのね」

「ええ」

会話終了。

「ねぇ、八神さん？」

手提げに本を入れていたら、お姉さんに呼ばれた。

「本、好き？」

じっ……と、なぜか探るような目でみつめられる。

「……」

どう答えるべきだろう。司書なんて仕事に就いているからには、このお姉さんはかなりの本好きなんだろう。ただ時間つぶしの手段に読書をしている、なんて答えたら、気を悪くするに決まっている。過干渉してこないこのお姉さんは結構好きだし……

「……ええ、好きですよ」

心にも無い嘘で、ごまかした。

「そう、よかった」

うれしそうな声に、ずきん、と胸が痛んだ。

「……それじゃ、」

俯き加減のまま、出口に向かう。

と、入ってきた人とぶつかりそうになってしまった。

「あ……すみません」

謝って、今度こそ外に出た。

あーあ……何やってんだろ……

――ちゃりっ

半ば無意識で、胸元の十字架に触れた。

「……参った」
翌日の深夜。私は、冷蔵庫の前で途方に暮れていた。
「食べ物、無くなった……」
朝起きて、何の気なしに読み始めたＳＦ小説が以外にも面白く、夢中で読みふけっているうちに夜の十一時を回ってしまった。
こんな時に限って、買い置きのカップ麺も無い。
「しゃーない……買いに行くか……」
ああ、嫌だ。
もう出前もやってないし、ピザは高いしもたれるし。
鍵を持ったことを確認してから、オートロックの扉を閉める。
一日に二度も外出するなんて、久しぶりのことだ。
暗い夜道を、申し訳程度の街灯が照らしている。寒くは無いけど……好き好んで出かけようとは思えない。でも、人目を気にせず出歩けるというのは有難い。
財布には、現金で３０００円くらい入っている。
私は障害者だし、追い剥ぎに狙われることも考えて、常に必要最小限の額しか持ち歩かない主義だ。……持ち『歩く』機会なんて、この先一生訪れないんだけど。
「はっ……」
下らない。つまらない自虐をしている暇があったら、さっさと用事を済ませて帰ろう。
車椅子で十分弱。いつものコンビニに到着した。
「らっしゃーせー……」
やる気ゼロの店員に迎えられ、弁当のコーナーへ直行。
海苔弁、シャケ弁……あと、軽めのサンドイッチと惣菜パン。
「２４５０円でーす」
無言で、千円札三枚を差し出す。
「５５０円、お返しッス。ありゃーとあしたー……」
とりあえず、幼稚園からやり直せばいいと思う。
からから……と車輪を回し、店を出る。
帰り道は、これまた一層薄暗い夜道だった。

民家も少なく、あったとしても電気は点いていない。
――いきなり、衝撃が走った。
「……ッ!?」
驚いて振り向く。すると、
「つーかまーえたァ……！」
下卑た笑みを浮かべた男が、車椅子のハンドルを掴んでいた。
「な……んだテメ……！　うムッ……!!」
口を塞がれる。
「ひぁはははは……!!」
がしゃん、と車椅子から引き倒された。
「うー……!!」
半年も引きこもっているうちに、警戒心がとことん鈍っていた……
人通りが少ない夜道なんて……こういった手合いの巣窟だってことにさえ、気づかない程に……！
「……ッ！　……ッ！」
離せ、離せ、離せ!!
目いっぱい力を込めて、抵抗する。爪を立て、暴れ……
「ひひゃひゃひゃ……！」
辛うじて目に入る光景。そこは、鬱蒼とした雑木林……!!
「、――ー!!」
本能的な恐怖が、最後の抵抗を試みる。
がりっ、と、男の顔面をひっかいた。男は一瞬、私の口をふさぐ手を離し……
――バキッ!!
「あがッ……!!」
視界がブレて、そして、左頬に強い痺れが走る。
遠慮呵責も無く殴られた……そう気づいたのは、折れた歯が口から転がり落ち、錆臭い血の匂いが口内に充満してからだった。
「う……」
ぐらぐらと、脳震盪なのか、恐怖によるものなのか……だけど、確かなことは。

もう、抵抗する力は残っていないということだった。
私はこの小汚い男に陵辱されて……きっと、死ぬ。
――これで、終わりか。
恐怖でも、怒りでもない。ただ底なしの虚無感が、頭の中を支配する。
たった十年にも満たない人生が、今終わる……いや、違うな。
私の人生は、半年前……両親が死んでしまった時に、とっくに終わっていたんだ。
パパが死んで、ママが死んで……他にも、たくさん死んで。私だけが生き残ったのが、間違いだったんだ。
――ブチッ……！
胸元に下げていたアクセサリーが……洋服ごと引きちぎられた。
何よりも大事な宝物が、ゴミのように。
「あ、ああ……!!」
一瞬、虚無感を忘れた。
押し倒されたまま、男の握る十字架に手を伸ばす。
「か、えして……!!」
それは、その十字架だけは……！
「かえしてよッ……！」
「あァ……？」
男は、訝しげに私の顔と、手に持った十字架を見比べ……にたぁ、と笑った。嗜虐心が疼いたのだろうか。私の手の届かないギリギリのところで、見せびらかすようにぷらぷらとチェーンを揺らし……
「ヒヒッ……返してやる、よっ!!」
「あっ……！」
振りかぶり……遥か遠方の道路に、投げ捨てられた。
「あ、あ！」
そして。
――ギャリッ……
通りがかったトラックの車輪に巻き込まれ、手の届かない場所へと……消えた。

「なん、で……」
ぼそっ、と、切れた唇が、痛みを無視して言葉を紡いだ。
『何で』、と。
「なんで、わたしが……」
理不尽な事故に家族を奪われて。
無神経な奴らに平穏を奪われて。
たった一つの宝物さえ奪われて。
――なんで、私だけが……!!

「こんな目に、遭わないといけないのよ……!!」

――憎い。
どろりと、ドス黒く粘りつくような『何か』が、胸の奥で脈動する。
――憎い。
どろどろ、どろどろと……ヘドロのように、あふれ出してくる。
――薄汚く笑うこの男が憎い。
それは、恐怖を塗りつぶし、
――平穏を奪った偽善者どもが憎い。
虚無の平野を、汚泥の如く侵略し、
――家族を奪った事故が憎い。
たった一つの言葉が、全身を支配した。
憎い。憎い。憎い。

憎い。憎い。憎い。

い。
「ふふふ……あはははは！」
――それが、何？
すっくと……立ち上がる。
呆気無く。いとも簡単に。
私を地べたに縛り付けていた足が、再び私の元に返ってきた。
まともな神経なんぞに固執していたら、絶対にありえなかったことだ。
ああ、馬鹿馬鹿しい。
こんなことだったら、もっと早く……壊れていればよかったんだ。
「あはははは……!! あーっはっはっはっは!!」
ああ、可笑しい。
「ひ、ひいいい……!!」
……ああ、まだいたんだ。
みっともなく尻餅をついて……腰が抜けたんだね。
立場は、完全に逆転していた。
私は二本の足で地面に立ち、男は地面に這いつくばっている。
「……刃以て、血に染めよ」
ふっと、頭に浮かんだ言葉を口にする。
闇は、私の命令を忠実に実行した。
――ゴポッ……ゴポポッ……！
不定形だった闇の一部が分離・凝固し……紅色の短剣へ、変化する。
標的は……あの男。
「た、たすけッ……たすけてぇっ……!!」
……逃がさない。
――がきんっ
「ヒィッ！」
闇を操作し、男の身体を樹木に磔にする。
……恐怖に染まった顔が、よく見える。
「穿て」
これは、復讐の第一歩だ。

私を虐げてきた物すべてを……闇に葬ってやる。

「……ブラッディ・ダガー」

――ドガガガガガガガッ!!!

「……!!　……ぁ！　……！」

ざくざくざくざくざくざく。

気持ちのいい感触が、闇を通じて伝わってくる。

「……あ、あ」

――ぼどっ……

男の身体から、両腕が肩から剥離する。

両足は……

「……あーあ、はずしちゃった」

膝から下はミンチになってるけど……大腿部が、中途半端に身体と繋がっている。どうやら、角度が浅くて切断しきれなかったみたい。

「……す、け……け、て……」

うわごとのように、男がつぶやく。

「……ふふ。いい格好」

闇が、ねだるように渦巻く。

「いいよ」

何を望んでいるのか……言葉が無くとも、ハッキリ分かった。

「食べちゃえ」

獲物……私を強姦しようとした男へ、闇が群がる。

――ごりごりごりゅごりゅぐちゅぐちゅぐちゃぐちゃ……!!

骨を噛み砕き、肉をすり潰し……血の一滴までも、闇が貪る。

咀嚼音をＢＧＭに、夜空を見上げる。街灯が壊れたおかげで、真っ暗だ。

――新月。

夜空のどこを見ても、闇夜を照らす月は見当たらない。

月も星もロクに輝かず、ただ暗闇だけが存在する……本物の、夜。

「……」
ずるりと、男の身体を貪りつくした闇が、戻ってきた。
手を触れ、意識を集中させる。
「……まだまだ、未熟者だけど」
闇の奥深くには、膨大な知識と経験値が埋もれている。
その全てが……私が欲しているとおりの力だった。
「これから、よろしくね」
にっこりと……久しぶりに、心から笑えた。
「……ん？」
でも、おかしい。なんで、両目から涙が流れるんだろう。これっぽっちも、悲しくないのに。
「それ、片付けて」
不自由の象徴……車椅子を、闇に沈める。

二本の足で地面を踏みしめながら……私は、家へ続く暗闇へと歩を進めた。

## A’s編　第二話

――じゃきんっ
髪の毛に鋏を入れ、腰から下を切り落とす。
「……これでいいの？」
足元の受け皿には、黒々とした頭髪が散乱していた。
何も、イメチェンしようとか思ったわけではない。全て、これから行う儀式に必要な物質だ。術者の頭髪。魔力。そして残りは……
「うん、わかった」
――ぶしゅっ
術者の血液。
手首を切り裂き、必要なだけの血液を抽出する。適当なところで止血。
それが、受け皿の中の頭髪と交じり合う。
ずもももも……と、私の魔力がそれを飲み込む。
あとは、闇が教えてくれた通りの呪文を唱えるだけ。
「我、力を乞う者なり。
汝が剣、我が怨敵を処断するもの。
汝が槌、我が仇敵を鎚滅するもの。
汝が盾、我が運命を守護するもの。
汝が鏡、我が願望を反映するもの。
我は乞う。
四種の力よ、我が手に集え。
我は王なり。
闇統べる王なり。
汝らが王なり。
汝らが王、八神はやての名の元に、馳せ参じよ……」
すぅ……と一拍置き、『その名』を呼ぶ。
私が持つべき、闇の力。その象徴。その名は……
「ヴォルケンリッター!!」

――ギイイイイイイインッッ!!
足元に、数学的な図形が展開する。正三角形の頂点に円を配置した、いわゆる魔法陣。
「ぐ……うううう……!!」
体中から、膨大な魔力が搾り取られていく。でも、これは……儀式が成功したという証だ。だから耐えられる。力を得る代償がこの程度なら、安いものだ。
「ぜー……！　ぜー……！」
そして、体中の魔力が殆ど空っぽになる頃……
――がしゃっ
私の目の前に、プレートアーマーで全身を覆った者が四人……揃っていた。色合いに多少の差異はあれど、基本色は黒。
一人だけ、妙にちんちくりんなのがいるけど……感じる魔力は本物だ。
「……剣の騎士」
紫がかった鎧。腰には、その名の通り、長大な剣が佩いている。
召喚と同時に、四人の基本スペックは把握している。この剣の騎士は、守護騎士……ヴォルケンリッターを統率する将という役割があるらしい。
スキルも近接オンリーという徹底ぶり。
「鉄槌の騎士」
あらー……やっぱり、ちんちくりんだ。
下手したら、私より身長低いんじゃないだろうか。鎧までミニサイズだった。
こんなナリで、本当にヴォルケンリッター随一の破壊力を持っているんだろうか果てしなく疑問だ。
それでいて、中距離・近距離戦闘をこなせて、防御力も水準以上。万能選手だ。
……まぁいいや。実戦で役立てば、何でも。
「盾の守護獣」
鎧越しでも分かる、鍛え上げられた肉体。

使用術式の大半は、強固なシールド等の防御系ばかり。
命令を下すと、青白い光を纏い……その身を、狼のような姿へ変えた。
なるほど……二形態を使い分けられるってことか。
「湖の騎士」
最後の一人の使用術式は……回復と捕縛、索敵に転移。
直接的な戦闘力は一番低い。
なるほどね、後方支援タイプ……あと、現場指揮官か。
『剣』と『鉄槌』がオフェンス、『盾』がディフェンス、『湖』がバック……そういう布陣で戦えば、どんな相手でもかなりの確立で撃破できる。
ネックなのは、個々の能力が尖りすぎていて、応用が利かないことぐらいか。
一角でも落とされれば、そこから綻んでしまう。とはいえ、落とされることなんてそうそう無いだろう。
ずるぅっ……と、闇の中から一冊の本を拾い上げる。この本は、魔力の蒐集器として機能する上、闇の魔法を一時的に使用することもできる……自分で言うのもなんだけど、高性能な一品だ。ただ、高性能なおかげで一冊しか作れない。四冊作れれば、もっと楽なんだけど……ま、無いものねだりしても仕方ない。
それを、『湖』に手渡す。
「行け」
守護騎士たちは、私の血肉を用いて作った分身のようなもの。だから、多くの言葉を交わさずとも意思を伝えられる。
「……」
四人は恭しく一礼し……隠蔽結界を展開しながら、町の方角へ向かっていった。
「さーて、と」
面倒な魔力の蒐集は守護騎士たちに任せて……私は、自分自身の力を磨こう。
「私たちも行こうか？」

練習台を、探しに。
以前、私が破壊した街灯は修理され、いつもどおりの光を灯していた。
人気の無い裏通りを、てくてくと歩いていく。
街灯も、民家も、どんどん少なくなっていって……
「や、やめてくれ……！」
「だぁかぁらぁ……大人しく財布出せば、見逃してやるっつってんだよぉ……」
「俺たち未来ある若人に、お小遣い恵んでくれよ、あァ？」
みーつけた。
典型的な恐喝。それを行っているのは、茶髪に金髪。だらしない服装に、くわえタバコ。典型的なクズだった。まるで、誘蛾灯に吸い寄せられる虫けら。
「ねぇ」
クズ共に、背後から話しかける。
「あァ……？」
振り返ったクズの一人が、私を見て訝しげな顔になる。
「あなたたち、楽しい？」
げらげらと笑いながら、数の力を自分の力だと勘違いして……
「弱い奴を威圧して、力を誇示して……楽しい？」
「おい、何言って……」
「ひいいいっ!!」
私に意識を移した隙を見て、おじさんが逃げていった。
「あ、おい!!　……チッ！」
「くっそ、財布が逃げちまっただろうがよォ……！」
「おい、どうしてくれんだよガキ!!」
精一杯の睨みを利かせて、子供相手に本気で凄んでいる。
くすくす、と笑いがこみ上げてきた。
いい年をして、群れることでしか力を誇示できないクズ達が。
「わかるよ。力で何かを屈服させるのって、楽しいよね。うん、わかるわかる」

くすくす。
「何がおかしいんだよテメェ!!」
ぐいっと胸倉を掴もうと、伸ばされる腕。
「だって、私もすっごく楽しいから」
――とととんっ
「……あ？」「え」「へ……？」
クズ達は、何が起きたのか分からないといった面持ちで、きょとんと見ている。
……消失した、自らの肉体の一部を。
「いやだなぁ……クズの分際で、私に触れないでよ」
うぞうぞと、闇が蠢く。先端は、刃の形状。異常なまでに鋭い刃が、上腕部の半分から下を、足首を、両目を、串刺しにしている。
「ひやああああああああああああ!! 腕、おれ、うで、うでえええええええええ!!?」「ああああああああ！ 足がああああああ!!」「いてえぇ……いてえええええええ!!」
肩を足を顔を押さえて、ばたばたとのた打ち回る。
刃の先端に串刺しになっていた肉塊が、闇に食べられて魔力に変換される。
「おいしい？」
闇は、物足りなさそうに蠢く。
「大丈夫……まだまだあるから」
今日は三人。大漁だ。
「さ、始めようか」
隠蔽結界を展開しているおかげで、邪魔は入らない。
思う存分……魔法の練習に励めるというものだ。
「まずは～……射撃誘導の練習」
「ひィッ!!」
眼球を抉り貫いた肉の的を、前方につるし上げる。
狙うのは、胴体。
「闇に沈め……」
簡易詠唱で発動させる。

「ブラッディ・ダガー」
――ドドドドドッ
「あ、あぎ、ぎ、ぎゃ、……!!」
臓腑をズダズダに切り刻み、肋骨を切断し、肝臓を、肺を貫通し……
最後に、心臓を破る。
「よし……狙い通り」
初めて使った時は、何発か狙いがそれてしまったけど……段々と、コントトール能力が上昇している。この調子で行けば、百発百中の精度にまで磨き上げられるだろう。
ぐりんと白目を剥いて、男が死んだ。
もう全身ズタボロで、的に使っても手ごたえが無くて面白くなさそう。
というわけで。
「はい、召し上がれ」
――ごきごきぼきごぎゅん
あっという間だ。
残りの二人は、ガタガタと恐怖に震えながらその光景を見ていた。
「次は、近接攻撃の練習を……」
さて、どっちにしようか。
「うわあああああああああ!!」「て、テメエが行けええええええええっ!!!」
半狂乱になって、さっきまでつるんでいた片割れを足蹴にする。
「あーあ……駄目じゃない。トモダチは大事にしなきゃ」
決めた。次はお前だ。
右足を掴み、さかさまに吊り上げる。
「嫌だあああああああああああああああああああ!!!!」
もう、うるさいなぁ。静かにしてよ。集中できないじゃない。
今度は、これだ。近接用の、魔力付加攻撃。
宙吊りになった男の胸に、掌を当てる。
ええっと……技名は……
「……フランメ・シュラーク」

――ボンッ……!!
「……!」
一瞬だけびくっと痙攣し……絶命する。
「ん……?」
背中を見てみると……威力が大きすぎたのか、身体の中身が道路にぶちまけられていた。
「あっちゃー……難しいなぁ」
本当は、体内だけを綺麗に焼き潰すつもりだったのに。
「チッ……失敗か」
じゅるじゅると、道路にぶちまけられた臓器や血液、骨の欠片まで、闇が啜り尽くした。
ぽいっとセミの抜け殻みたいになった死体を闇に放り、食べさせる。
「何でだよォ……!! 何で俺なんだよォ……!!」
涙と鼻水で顔をどろどろに汚しながら、最後の一匹が聞いてきた。
特に理由は無いんだけどなぁ……ああ、そう。強いて言うなら。
「たまたま、そこにいたからだよ」
あんたたちと、同じ理由だよ。
「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け」
さっきの二人を喰ったおかげで、また一段と闇が活性化し……新しい魔法を、使えるようになった。早速試そう。
「嫌だ! 嫌だ嫌だ嫌だ!! 助けて! 助けて母ちゃ……!」
感謝して欲しいくらいだ。何の意味も、価値もない命を……私が有効に活用してあげるんだから。
白色に輝く槍。さぁて、どういう効果があるのやら……
「ミストルティン」
――ざしゅっ!
「ぎゃっ……!」
槍は、男の残った右腕、両足、腹部、胸部に突き刺さった。
「あ、あ……? いき、てる……?」

それ単体でのダメージは、肉体を貫通する程度の微々たる物だ。死にはしない。
「はひゃ、ひゃひゃひゃひゃ!!　生きてる、まだ生きて……！」
歪んだ歓喜の表情を浮かべ……
――ビキンッ……
「……？」
男は、両の眼球を残し、動かなくなる。
全身が、石化していた。
「へぇ……石化するんだ。それも一瞬かぁ……え？　的が小さいから、早く固まっただけ？」
こんこん、と軽くノックしてみても、岩石そのものだ。
「魔法って、何でもアリなんだ……ねっ」
細い小指を、ぺきっとへし折ってみる。
断面から、真っ赤な血がたらたらと流れ出してきた。
「……！　……!!」
ぎょろぎょろと両目が動く。
「あはは。ちゃんと痛いって、わかるんだ？」
正確には、全身の筋肉を石化させているわけだから、痛覚もある。
当然、心臓も肺も機能しているから、呼吸もする。
ただ、口と鼻を完全に塞いでいるから、死ぬほど苦しいだろうなぁ……あらら、目が見る見る血走っていく。うわぁ、苦しそう。
可哀想に……一思いに、殺してあげよう。
「テートリヒ・シュラーク」
腕に、闇の魔力を纏わせ……
――ガゴンッ!!
石の身体を、粉々に打ち砕いた。
うひゃー……とうとう素手で岩を砕いちゃったよ、私。
――ごりごり……
闇は、石の身体をお構いなしに噛み砕き、飲み込んだ。
――……

闇が、まだ足りないと訴えている。でも……
「もう、三人も食べさせてあげたでしょ？　今日はおしまい」
隔離結界、攻撃魔法と使い続けて、守護騎士も遠隔維持してるおかげで疲れた。
今日はもう、守護騎士たちも呼び戻して帰って寝よう。
あっちはどのくらい集まったかな。
「ん……」
歩きながら、『剣』『鉄槌』と視界を共有する。
「……うん、順調みたいだね」
なにやら、杖を構えた人たちと相対している。その足元には、同じような服装の人たちが転がっている。
見た感じ、相手方の実力は、『剣』『鉄槌』に遥かに及ばない。百人で掛かってきたって、撃退できるだろう。
「『剣』、殺したら駄目だからね」
殺したら、魔力の源……リンカーコアが、取り出せなくなる。
「殺さなければ、腕や足の一本は飛ばしてもいいから」
ま、そういうことだ。
視界の向こうで……『剣』が、残った数人に襲い掛かる。
『盾』と『湖』に、『剣』『鉄槌』の回収を命じて、視界を閉じた。
今日は大量だ。三人を喰って、リンカーコアも多数を蒐集できた。
……そうだ。いいこと考えた。
「らっしゃーせー……」
今日も今日とてやる気の無い店員に迎えられた。目指すのはは弁当じゃなくて……ドリンクコーナー。
「これと、これと……あとこれ」
かごの中に、チューハイだとかビールの缶をぽいぽい放り込んでいく。
祝杯というやつだ。
レジに持っていくと、金髪の店員は訝しげな顔をした。
売ってくれないというのであれば、魔法で催眠を掛けてやればいいか。

「あー、すんません。お酒はハタチからなんでー、売れないんスけど……ま、いいや。オーナーいねぇし」
こんな店員を雇っていて、問題ないんだろうか。素直にありがたいけど……
「あのさぁ、」
と、財布から現金を取り出す私に、興味本位で話しかけてきた。
「あんた、足治ったの？」
……店員は、案外客の顔を覚えているものらしい。そこそこ通っている私が、今日は自分の足で歩いていることに気付いたようだった。
「ええ、問題なく」
少しイラッとしつつも、如才なく答える。答えてやったんだから満足だろう。
けど、店員は妙に真剣な顔で食いついてきた。
「どこの医者？　教えてくんねーかな」
……めんどくせぇ。
「海鳴総合病院の、石田って人」
敬語と愛想を彼方に投げ捨て、端的に教えてあげた。
「もういい？　眠いんだけど」
店員は、メモ帳に汚いカタカナで『海鳴総合病院・石田』と殴り書いた。
「ああ、さんきゅー」
んじゃ、帰るか。
「ただいまー、っと」
家のリビングには、守護騎士四人が戻っていた。チェックしてみた感じ、大きな負傷は無い。楽勝だったらしい。
すっ、と『湖』が本を差し出した。
「ん」
受け取り、ページを確認してみる。かなり分厚い本の、最初の数ページが埋まっていた。
記されている魔法も、闇が保有しているものよりずっと低レベル。
「あんな雑魚じゃ、この程度か……」

この本のページが全て埋まった時……闇の奥底に眠る、最強の殲滅魔法が完成する。
焦る必要は無いけど、ちんたらやっているのも性に合わない。
もっと魔力の大きい獲物を、狩らなければ。
「……明日は、コレ使ってみるか」
瞑目し、今現在私が使える魔法をリストアップしていく。
結界魔法のバリエーションに、『魔力を持つものだけを閉じ込める隔離結界』という便利なものを見つけた。どうやら今日、蒐集した中にあったらしい。
クズを嬲り殺すのも楽しくていいんだけど、やっぱり本命はこっちだ。
……明日は、私が現場に赴くとしよう。守護騎士の連携も、直に見ておきたいし。
ぷしゅっと缶のプルタブを開け、人生初のアルコールを口に含んだ。
「……う」
最初、つーんとした刺激臭が鼻をつき、続いて、人工的な果汁の匂いが口に広がる。
「……悪く、無いかも」
くらくらと酩酊して……何というか、気持ちいい。
「んっ、んっ……」
二　口、　三　口　と　飲　み
……その後の記憶が消えた。
「あたまいたい……きもちわるい……おえええぇ」
リビングのソファで起きて、目にしたのは三本のお酒の空き缶。
酔っ払って、一晩で飲んでしまったらしい。
これが世に言う、二日酔いというやつか……キツい。
「……ん」
本はどこにいったのかと思ったら、頭に敷いて枕にしていた。

寝転んだままページをめくり、都合のいい魔法を探す。
「体内浄化魔法……」
よし、これで体内のアルコールを飛ばせば大丈夫のはずだ。
なぁんだ。これさえあれば、いくらでも飲み放題だ。
早速、発動っと……
「……あれ？」
発動しない。何で？
「この、このっ……何で!?」
調べてみると、何故か闇が発動を妨害していた。
「ちょっと、何すんのよ！」
――――……。……。
『飲みすぎです。少し懲りてください』だぁ……!?」
あんた、いつから主にそんな生意気なこと……！
「いっ……!? たたたたた……!!」
あ、頭が痛くて、怒るに怒れない……
「お、覚えてろテメェ……!! う、おえぇ……！」
幻聴なんだろうけど、呆れたようなため息が聞こえた気がした。
結局、昼過ぎまでソファでぐったりしていた。
多少はマシになってきたけど……まだ立ち上がると辛い。
「水……」
ああ、駄目だ。シンクまで歩いていくのがキツい。
車椅子、処分するのは早まったかなぁ……
「……」
「んー……？」
気配を感じて目を開けると、赤い鉄兜が目に入ってきた。
『鉄槌』……？ 私に何か用でもあるんだろうか。
「……」
すっ……と差し出されたグラスの中には、氷水。
「……もしかして、私に？」
『鉄槌』は、こくんと頷いた。
「ああ……ありがと」

少し驚いたけど、助かった。
「んぐっ、んぐっ……ぷは～～～っ!!」
生き返る……！
にしても……
「あんたたち、自由意志あったんだ」
てっきり、私の意志を忠実に実行するだけの人形だと思っていたけど……ちゃんと考えることができるんだ。
からん、と、グラスの中で氷が滑る。そう、氷だ。冷蔵庫を開けたとしか思えない。
「……」
中世の物語に出てくるような鎧の騎士が、冷蔵庫から氷を取り、グラスに水を注ぐ……実にシュールな光景を、想像してしまった。
「ま、助かったよ。ありがと。ええっと……」
『鉄槌』、と言いかけて、少し悩んだ。
「ねぇ、アンタたちの名前……」
――ばつんっ……
「……あれ？」
いきなり、目の前から『鉄槌』が消えた。消えた……というよりは、強制的に闇の中に引き戻された感じだ。
――……。
「『アレは人形だ。名前など無い』……ねぇ。はいはい、わかったよ」
……違和感が残った。
まるで、聞かれたくないことを聞かれてしまったように、唐突に話を遮った。いくらなんでも不自然だ。
それに、二日酔いをたしなめた声と、今の声……トーンが違っていた。
前者は、暖かく柔らかい声で……後者は、冷徹で硬質。
まるで……
――闇の中に、二つの人格があるようだ。

## A’s編　第三話

ったく……酷い目に遭った。今度から、酒は控えよう。
「おかげで、一日無駄にしちゃったよ」
ぶつくさ愚痴りながら、夜の歓楽街を歩く。警察官がパトロールをしているが、私を呼び止めるようなことはしなかった。
新たに覚えた、変身魔法のおかげだ。今の私の姿は、十代後半から二十代程度に見えている……はず。
「……」
今日は、『湖』を連れている。もちろん、隠蔽結界を展開しながら。
歓楽街から外れて、裏通りへ。
本当なら、今日は守護騎士の連携を見ておきたかったんだけど……それよりも試してみたいことがある。
「ん。あったあった」
一際大きく……電気が点いているのに、どこか薄暗いイメージを受けるビル。
大仰な木の表札には、達筆な字でナントカ『組』と書かれている。
世に言う、ヤクザ事務所だった。
「『湖』」
「……」
指示を聞いた『湖』が、その身を包む結界を大きく広げた。
とにかく堅牢な結界で、『湖』が解除するか、それ以上の力をもって無理やり破壊するでもしない限り、外には出られない。
「ここで待ってて。手出し無用だからね」
「……」
こくん、と頷く『湖』を残して、中に入る。
「……嬢ちゃん。何の用だい」
受付にいた厳つい風貌の男が、のっそりと立ち上がる。
うわ……大きい。身長、2メートルくらいあるんじゃないかな？
「よッ……と」

変身魔法を解除。
いまさら、素顔が割れたところで困りはしない。
だって……目撃者は、一人も出ないんだから。
「……あ？」
大男からすれば、いきなり目の前に子供が現れた……としか思えないだろう。
とん、と大男の腹に手を添える。
「フランメ・シュラーク」
――ボンッ……！
くぐもった爆音……そして、大男は鼻と口から、煙突のようにぷすぷすと煙を上げ、倒れた。
「うん……いい調子」
細かな制御も、問題無い。これなら……使えそうだ。
「おい、何の騒ぎだ！」「出入りか!?」
どやどやと、明らかに堅気ではない風体の男たちが出てきた。
おあつらえ向きに、短刀や拳銃で武装している奴もいる。
「……子供？」
怪訝な顔をして私を見て……その足元に転がる大男の死体を見て、血相を変えた。
「こンのガキがあああああ!!」
「待て、いくらなんでもありえんだろう」
「でも、どう見たって……」
ごちゃごちゃごちゃごちゃ……サンドバッグが騒いでるなぁ。
『甲冑』、展開」
――ぞぞぞぞぞ……！
影から、闇が起き上がる。
「……は？」「なんだ、アレ……」
両腕を広げて、告げた。
「おいで」
――――……！
轟々と、私を取り巻く闇が渦を巻き、私の身体へ収束していく。

試してみたかったこと……それは、新しい魔法の性能。
この前知ったことだけど、魔法をフルに使うには『デバイス』という道具が必要らしい。蒐集した連中の持っていた杖しかり、守護騎士たちの武装しかり。
でも……剣、ハンマーとか、武器として使えるならともかく、なんでわざわざ『弱点』を手に持つ必要がある？
腕ごと切り落とされてしまったら、そもそも破壊されてしまったら、ロクに魔法を使えなくなってしまうのに。
そして編み出したのが、この『甲冑』という術式だ。
「……はぁっ！」
――バオッ!!
余剰魔力の竜巻を、吹き散らす。
そして、私の姿は変貌していた。
体格は、成人女性に近いめりはりの利いた体格に。
髪の毛は白銀に染まり、地肌に赤い紋様が浮かび上がる。
全身を覆う装束は、左右非対称。編みこめるだけの攻撃魔法・強化魔法・補助魔法を編みこんだために、少しだけ歪な形になってしまった。
これは常に複数の魔法が発動している状態であり、必要に応じて出力を上げ下げするだけで済むから、発動にかかるタイムラグも無い。
……まぁ、燃費はすこぶる悪いけど。
闇の魔力自体が膨大で、私自身の魔力もそれなりに大きいおかげで成立した。
ぎゅぱぎゅぱと手を開けたり、閉じたり。
……そんじゃ、ま。
「試運転、開始！」
脚部の高速移動魔法で、一気に間合いを詰める。そして、攻撃魔法そのものと化した腕を振るう。
――パゴンッ!!
小気味のいい音をたて、スイカのように頭が爆ぜた。
「あはっ、呆気なーい!!」

「な……」
中途半端に匕首を抜いたまま、銃を持ったまま……無防備に硬直する。
「ぎッ……!!」
そのうち一人の顔面を鷲摑みにして……爆破！
――ボンッ!!
「あーっはっは!!　ほらほら、ボサっとしてないでさぁ……！　頑張らないと死んじゃうよーーーー!?」
――ざしゅっ……ぐちゃっ……ぶちィっ!!
手刀で心臓を貫く度に……頭蓋骨を握り潰す度に……脊髄を引っこ抜く度に……赤黒い悦びが、頭の中を快楽で染め尽くす!!
「ひゃはははッ！」
ああ……楽しい!!!!
「うわあああああ!!　バケモンだあああああああ!!」
――パンッ！　パンッ!!
拳銃が火を噴き、鉛弾を撃ち出す。
そんなオモチャが、私に通じるわけないじゃない！
「……あむっ！」
がちん！
「……へぁ？」
口の中に広がる、火薬の匂い。
「銃弾噛み……なんちゃって」
ぺろん、とキャンディーのように銃弾を乗せて、舌を出す。
何かの小説で見た技だけど、簡単なもんだ。
「プッ!!」
再び口に含んだ銃弾を吹き出す。
――びすっ！
「……あ」
頭の中に返却っと。
「うおぁぁあああああっ!!」
「ん？」

抜き放った日本刀が、私の肩口で停止した。
へぇ……そこそこ骨のある奴もいる。でも……しょせんはオモチャだ。『甲冑』を貫くには、威力が足りなさすぎる。
「これちょーだい」
ひょいっと指先で刀を摘み、取り上げる。
「この！」
今度は、懐の匕首を抜いて切りかかってきた。
「ひゃはッ、やるじゃん！」
いつでも殺せるけど……ちょっとだけ、チャンバラに付き合ってやろう！
――ガキンッ！
相手の匕首に、力任せに日本刀をぶつけた。
「くッ……こンの、バケモンが！」
手がしびれているだろうに、懸命に匕首を振るっている。
「ほらほらほらぁっ!! がんばれがんばれー！ ひゃはははは!!」
――ガキキキキンッ！ バキッ！
あらら、折れちゃった。
「今だあああああああああっ!!」
正面に匕首……背後に拳銃が3、か。
「よいしょっと」
髪の毛に魔力を流し、操作。
――形質変化。
腰までの髪の毛を、魔力で延長。
――硬度強化。
絹糸並みのしなやかさに、刃の切れ味を追加。
――衝撃加速!!
遠心力を、数十倍に増幅!!
「そりゃあっ!!」
――ザザザンッ!!
四の肉体を切断する感触が伝わってきた。
そして、倒れる音は三つ。

……三つ？
「ひいいいいいいいいいいいっ!!!」
両足首から先を失った手下の男が、出口に向かって這いずっていく。
……取りこぼしちゃった。
「待ってよー」
すたすたと近づいていく。
先っぽが無い腕で、扉をごすごすと押し……逃げられないと悟り、命乞いをはじめた。
「た、たすけて！　なんでもするから……！　命だけは……！」
……馬鹿だなぁ。
そうやって祈っていれば助かるなんて、御伽噺みたいなもんだ。そんなんで助かるなら、パパとママは死ななかった。
……少し、現実ってものを教えてやるか。
「ねぇ、おじさん？」
目の前にしゃがみこみ、視線の高さを合わせた。
「は、はいっ!?」
助かるかもしれない。そんな希望的観測が、表情から読み取れた。
あはは……おめでたいなぁ。
とん、と人差し指で胸を突く。
「運命って、残酷だよね」
――バスッ……
「ぐひッ……！」
指先から迸った極細の射撃は、正確に心臓を貫いた。
「あと何人いるかな～……っと」
建物の中をサーチしてみても、数人が隠れているだけだ。いちいち探し出すのも面倒だし……そろそろ、お開きにしよう。
手をかざし、魔力を集める。
いくら『甲冑』を纏っているとはいっても、このクラスの魔法を使うには、多少のモーションと、詠唱が必要だ。
手のひらに、闇色の球体が出現する。

「サポートよろしく」
まだ、使い慣れてないからね。
――……。
広域空間攻撃。闇の中に埋もれていた魔法の大部分は、この類。今から行使するのは、その初歩にあたる。
「闇に、染まれ」
手のひらサイズの隔離結界の中に、魔力を溜め込んでいく。
隔離されている空間を魔力で満たし、破壊し……現実世界へ一気にフィードバックさせることで、破壊力を生み出すのがこの魔法の真髄だ。
術式名称……
「デアボリック・エミッション」
――――――――グアアアオオオオオオオオオオオオオン!!
お。おおお。すごい反動。
私を中心に発生した魔力の衝撃波は、凄まじい勢いで膨れ上がり……結界内を、蹂躙していく。
――ギチッ、ギチッ……!!
『湖』が展開する結界が、軋んで歪む。
――――――――オオオオオオオオオオ……!!
衝撃波は鉄筋のビルを……そして、無様に隠れていた残りのクズ共を、飲み込み、破砕し……分子レベルにまで粉々にしていく。
「あ、あらら……？」
――ギチッ……ビキッ。
やべっ！　結界にヒビが……！
「ちょ、ストップストップ!!」
慌てて手綱を握りなおそうとするものの……一向に止まらない。
――……、……。
「魔力の配分を、間違えた……？」
……最初に注いだ魔力が、多すぎたらしい。
「どうしろっていうのよ!?」
こうしている間にも、破壊力は増し続けている。

もういいや！　制御放棄！
――ギュゴオオオ

――ばさっ!!
背中に編みこんでいた、飛行魔法を発動。
烏のような漆黒の羽根が、空気を叩いて羽ばたく。
『湖』を闇に埋没させ、一気に上昇!
全速力で空を翔る。
今時分、星を見上げる酔狂な人なんていないだろうから、見つからずに済みそうだ。
できるだけ人目を避けて、自宅を目指す。
「おっ……とと、難しいな……」
真っ直ぐに飛んでいるつもりでも、フラフラと左右に振れてしまう。
闇がちょこちょこ軌道を修正してくれるおかげで、墜落はしないで済んでいるけど……これも、要練習だなぁ……
「ん?」
ここまで来て、ようやく思い至った。
――何で逃げてるんだ、私?
目撃者なんて、皆等しく消してしまえばいいだけなのに……
もしかして、捨てたと思っていた良識が、まだ残っていたんだろうか。
罪無き人に、理由無く手を出してはいけないという……
「チッ……」
イラつく。
何が、『罪無き』だ。一番タチが悪い連中じゃないか。
自称一般人なんて、一皮剥けばどれも同じだ。
普段は善人ぶって、他人の不幸を面白おかしく取り上げた情報媒体を娯楽にして、『かわいそうねぇ』とか、『大丈夫かしら』なんてしたり顔でのたまう。
それを助長するのが、自称ジャーナリストのハゲタカだ。
わざわざ病室にまで押しかけてきて、カメラとマイクを突きつけて……

『ただ一人生き残ったご感想は？』
……だったか。
「……うん、あれは殺そう」
丁度、隣町に支部があったはずだ。片っ端からブッ殺しておかないと……今夜、ぐっすり寝られない。
――……。
『『おやめください』……って言われてもね』
もう、闇の一人格が何を言おうと聞く気はない。
「私は、あの連中を殺すって決めたの。黙って従え」
――……。
「は？　何よ、『やむをえません』って。いいから、方向転換を……」
――がくんっ。
「へ？」
いきなり、視界がかくんと一段下がる。そして……
――ガガガッ、ゴガガガッ!!
「きゃあああああぁぁぁああああああ!!」
いきなり、きりもみ回転ーーーーーーーーーーー!!!?
「ちょっと……きゃっ！　何すんのよ！　早く、姿勢制御を……！
うひゃあっ！」
ぐわんぐわんと、いきなり制御がきかなくなって……！　このっ！
「あ、アンタわざとやってる!?　っていうかわざとでしょ！」
――……、……。
『あなたには、こうしたほうが効果的であると判断しました』だとぉ!?
「こんなことして、後でどうなるか……！　お、覚えてなさいよー!?」
ぐいいっ、と、今度は襟を引っ張られたように、後ろに急発進……！
背後には、コンクリートの壁って、えええええええ!?
――ぐんっ！
唐突に引き上げられ、
――……どべしゃっ
「んぎッ……！」

……床にスライディングさせられた。
「い……ってええ……！」
『甲冑』のおかげでダメージはゼロだけど……気分的には痛いのよ！
「離れろ、このやろっ！」
『甲冑』を解除し、元の姿に戻る。
「……あー、クソッ……どこだ、ここ」
妙に暗い……というか、午後十時だから、消灯されていて当然か。
ベッドと、テーブルと、テレビ、白いカーテン。ここ……病院？
――からから……
「あン？」
背後から、妙に慣れ親しんだ音が聞こえてきた。
振り返った先で……なんというか、デジャブを感じる光景を見た。
「……お姉ちゃん、誰？」
車椅子に腰掛けた女の子が、興味半分、怖さ半分くらいの表情をしていた。
「チッ……さぁね。誰だと思う？」
「え？　ええと……」
はっ、わかりゃしねぇって。
「もしかして……魔法使い？」
……子供の純粋さって、怖い。
あたらずとも遠からず。
「何で、そう思ったわけ？」
「さっき、変身してたから」
……見られてたか。
――……。
『始末し、喰らえ』……？
あ、入れ替わったんだ。もう一人と。
「うーん……」
じろじろと眺め回してみる。
「なに？」

きょとん、と私を見返す、無垢な瞳。細っこい身体。……動かない足。
「別に」
わかってるよ。この子の魔力、かなりのものだ。私ほどじゃないけど、比べ物になる程度はある。
「運の無さを、呪うんだね」
関係ないね。
（ブラッディ・ダガー）
一発で、心臓を貫いて……
「？」
じゃあね。
――……!!
……!?
な、何だ、急に、コントロールが……！
――バキィンッ!!
くそっ……!! 壁に跳ね返っただけだ！
「なに……してんだよぉおおおおおおおおッッッッ!!!!?」
無理やり……私の中から、コントロールを乱しやがった!! これは……あの、『もう片方』か!!
――ギュウウウウウウウッ……!!
何だ……急に、胸が、苦し……!!
「あ、がはっ……!! ぐうううううっ!!!」
体内の、流動魔法で……心臓の血流を……!!
「ふざけんな……ふざけんなふざけんな、ふざけんなあああああああああああ!!!」
私の身体を……好き勝手しやがってえええええええええええ!!!
――ジャキィッッ!!!
右腕一本は、使える……!!
「この……クソ心臓がぁあああああああああああああああっ!!!」
えぐり出してやるッッ!!
「だめーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

「ぐっ!?」
どん、と、横合いからの衝撃に倒される。
「だめっ！　だめだよ!!」
っこの、ガキ……!!
「そんなことしちゃダメだよぉおおおおお!!」
「……、」
……なぜ、このガキが泣いている？
「うっぐ……ひぐ……だめ、だめだよぉ……」
私の右腕にしがみついたまま……自分を殺そうとした相手に、わざわざ飛び込むようにして。
……馬鹿じゃないの？　血も出てる。歩けもしない癖に……
「……何をしている？」
腕の力だけで、私をぎゅっと抱きしめている。全然リーチが足りなくて、抱きつくというよりは、しがみついている、だけど……
「お、お兄ちゃんと、お姉ちゃんが……わたしが、カーッてして、暴れると……こうして、くれるから……」
「そうじゃなくて。……私が、別に怪我をしようが、死のうが……お前には、関係の無い話……」
「でも、そういうのは、やめないと……看護婦さんも、先生も、悲しむから……」
「……私には」
――悲しんでくれる人なんて、いない。
でも。
私は……二度とマトモな体に戻れないと知ってから……コイツみたいに、他人のために、身を投げ出せたことが、あっただろうか。
「……眩しいなぁ」
……殺す気が、失せてしまったじゃないか。
ぐいっとガキの身体を持ち上げ、車椅子の上に、放る。
「おい、下ろしてやるから離せ」
……だというのに、まだ、首元に手が回ったままだ。
「……もう、しない？」

「……」
「もうしないって、いってくれるまで、はなさない」
ああ、もう。
もう、なんだかな。もう。もう……調子が……狂ってしまう。
「――――ああ。もうしねぇよ。約束する」
……どうして、振り払わなかった？　……どうして、殺さなかった。
「へへ……やったぁ」
「……」
（……おい、起きてるんだろ）
内に問いかけると、返答……のような反応が、返ってきた。
（コイツの身体の状況は、どんな原因だ？）
接触したんだ。わかるだろう。
――――……。……。……、……。
（特異な形質のリンカーコア。規格外の成長を続ける魔力回路が、運動神経に霊的に干渉して……下肢の麻痺に繋がっている）
その、特異っていうのが何なのかは、分からないけど……
――――機能そのものが失われた私よりは、まだ可能性のある状況ってことか。
「……おい、お前。『名前は？』」
言葉に、言霊を含め、問う。
「え？　……美香だよ」
……言葉には、霊力が宿る。それが名前だとすると、尚更だ。
「では、『美香』。お前の望みを一つ言え」
ぴくん、と、美香の身体が一瞬、硬直し……酩酊したような、トランス状態に陥る。これで、誤魔化しの利かない本音が聞き出せる。
「――――歩けるように……みんなと同じように、歩けるように、なりたい。お兄ちゃんと、お姉ちゃん……先生に、ほっとしてほしい。ちゃんと、ありがとうを、言いたい」
そうか。やっぱり、このガキ……美香には。ちゃんと、大事に思っ

てくれて……大事に思える相手が、いるんだ。
「――――受諾した。命の恩を対価に、汝の願いを遂行する」
契約、成立。この契約が完了されるまでは……必要以上の殺しは、出来そうもない。
（……これも、あんたの思惑通りってわけ？）
内なるものに問いかける。返事は……曖昧。
（ま、どっちでもいいや。乗せられてやるよ）
昏倒した美香をベッドに運んだ。
――――バサッ。
窓枠に足を掛け、翼を広げる。もう落とすんじゃないぞ。
――――……。
承知、だとさ。あーあ。……何にも持たないつもりだったんだけどなぁ。
「じゃあな、美香。――――おやすみ」
「……おやすみ……なさい」
……久しぶりに、自然と笑みが浮かぶ違和感を感じながら、私は帰路へと着いた。

## A’s編　第四話

板張りの床を素足で踏みしめ、構えを取る。
「……んじゃ、始めるか」
暑さと緊張感で流れた汗が顎を伝い、床に落ちる。
「ああ、いつでも来い」
相対するのは、恭也。両手に短い木刀を持ち、構えている。少しぎこちなさを感じるのは、ブランクが長いからだろうか。
――ぎっ……
僅かに床が軋み……
――だんっ！
それを合図に、一気に間合いを詰め……
「おおおおっ！」
勢いのままに、掌打を振りぬく！
「はっ！」
紙一重で回避され、カウンターの突き技が繰り出される。
鳩尾を狙った一撃。
左手でそれを払いのけ、顎を狙ってアッパーカット！
――がんっ！
木刀の柄尻でそれを受け止められる。
（ここ！）
左手でボディを狙う。この距離なら、木刀より拳の方が速い！
が……
――ぱんっ!!
「うわっ!?」
拳を打ち合わせていた柄尻から衝撃が発生し、弾かれた。
何だ、今の!?
まるで、インパクトを喰らったみたいな衝撃だ。
でも、恭也の……というか、なのはを除く高町家の面々は魔力ほぼゼロのはず……！
「おおりゃっ!!」

よくわかんねぇけど、間合いを取るために、上段蹴り！
――とんっ……
「は!?」
何と、恭也は俺の脚をジャンプ台にして……跳んだ！
なんて身の軽さだ！
「はぁっ!!」
横凪ぎの一閃！　狙いは、延髄！
（間に合え……！）
左の二の腕を、射線上に上げる。左手を盾に！
――ボグッ……!!
「……っぐあ！」
痺れと痛みが、いっぺんにやってくる。折れてはいないだろうが……回復するまで、左手は使えない。
「おおっ!!」
好機と見て、一気呵成に攻め込んでくる。
――ひゅんっ！
縦横無尽に繰り出される刃。
半身に構え、右腕と足捌きのみで応戦するが、やはりリーチの差も相まってじりじりと追い詰められていく。
「はっ!!」
再び、一閃！
「くっ！」
――ごきんっ！
拳と相殺。だが、
――ぱぁんっ!!
……、また！
どうあっても、獲物同士をぶつけ合うつもりは無いようだ。
しかも、マズい！　衝撃で、腕が上に跳ね上げられた！
――ひゅっ！
今度は、脇腹狙い！
「こンのっ!!」

身体を捻り、床の上を転がって退避する。
「はぁ、はぁ……！　っしゃあ！」
腹筋で立ち上がり、感覚が戻ってきた左腕を構えに入れ、ファイティングポーズを取る。
甘く見ていた。こいつ、下手したら魔法抜きでもクロノ並みじゃねえの？
身体能力は高いし、剣術は冴えてるし……何より、あの意味の分からん衝撃が厄介だ。
対策は……
「……シッ！」
実は、ある！
恭也の右側に回りこむ。
「っ！」
思ったとおり、横薙ぎの一閃。この立ち位置なら、一刀しか使えない！
それに……再び、拳を合わせる。
二、三回受けて……衝撃のタイミングは、大体わかるようになった。
接触して、０．５～１秒。多分、ブランクが無ければもっと速いんだろうが……今は、十分に対応できるレベルの速度だ。
――バチンッ!!
「ぬっ……！」
対策。それは……
「弾かれるなら、弾かれないようにしっかり握ればいい！」
そんだけだ！
「ふんっ！」
――ベキャッ！
木刀を握り潰す。よっしゃ、これで手数が減る！
「……！」
残った一刀で、懸命に手数をカバーする恭也だけど……この勝負、俺が貰った！
――ガスッ

木刀を肩で受け止め、間合いを詰める。
「うおりゃあああああああああっ!!」
渾身の……正拳突き!!
「……使うつもりは、無かったのだが」
そんな一言を残して……恭也が、目の前から消えた。
「は!?」
姿を探すより先に、ぞわっ……と、鳥肌が立つ。
回避……駄目だ、遅い！
――ドガッ!!
「がぁっ……!!」
延髄に、クリーンヒットした。
「……これでも、倒れないか」
恭也も、運動とは別の汗を浮かべている。
あれだけの無茶な機動、生身でそう何度も使えるわけが無い。でも、多分だけど……少なくともあと一回くらいは、使える。
……そう何度も、使われるわけにはいかない。
あと一発。あと一発で決められなかったら……素直に降参だ。
「……」
一本きりになった木刀を逆手に握り、互いのチャンスを伺う。
じりじりと、円を書く動きで動き……
――ビシッ！
「……っ!?」
何だ、目に何かが……！
「アレか……！　くそ！」
俺が砕いた、木刀の破片か！
「決まりだ」
声だけの恭也の気配が、また目の前から消える。
探っても、探っても……恭也は見事に気配を殺している。
「……何となくそこに居る感じィイイイイイッ!!」
ヤケクソで、裏拳を振る！
――ごしゃっ！

「がはっ!!」
あ、あれ……!?　当たった!?
「おおおおおっ！」
無理やり目を開ける。
目の前には、木刀を振りかぶった恭也の姿！
「はあああああああっ！」
「おりゃあああああっ！」
斬撃が俺の首を薙ぐ寸でのところで……俺の正拳突きが、恭也の顔面を捉えた！
――どばぁんっ……!!
「げふっ……！」
恭也を道場の壁に叩きつけ……そこで、恭也が限界を迎えた。
「……参っ、た」
でも、俺もギリギリだ。
「ぜー、ぜー……！　ど、どんなウエイターだよ……！」
まさか、あと一歩にまで追い込まれるとは思ってもみなかったぞ……
最後の一撃が、あとコンマ数瞬速かったら。あと数日ブランクが短かったら。
ああして倒れているのは、俺だったかも。
疲労困憊で、道場の床の上に身を投げ出す。
「あー……あちー……」
道場の外からは、じーわじーわと気の早いアブラゼミの鳴き声が聞こえている。
季節は、初夏を迎えようとしていた。
◆　◆　◆　◆
――……ばぁんっ!!
あ、終わったみたいだ。
茹で上がったそうめんから顔を上げ、道場を見る。
さっきから断続的に聞こえていた踏み込み音や、衝突音は聞こえない。

どっちが勝ったのかなぁ……
「ま、秀人さんだろうけど」
言っちゃ悪いけど、秀人さんと兄さんの力の差は歴然だ。
異形の怪物や歴戦の管理局員、リアル魔法使い（プレシア）を相手に、常に実戦で力を磨き続けていた秀人さんに対して、剣に埃を被せていた兄さん。
前は強かったらしいけど、今は最盛期の半分も強くないに決まっている。稽古を怠れば怠っただけ、力は削げ落ちていくのだから。
「ふふふふ……いい気味」
私をほったらかしていた報いを、今こそ受けるといいよ……
「な、なのは……？　二人の様子を、見てきてもらえる……？」
若干怯えた様子で、母さんが恐々と頼んできた。
「はーい」
エプロンを畳み、椅子に引っ掛けた。
「準備は、僕らがやっておくよ」
人間形態のユーノくんが、慣れた手つきで稲荷寿司を皿に載せていく。
「うん。ありがとう」
それにしても、ユーノくんもこっちにかなり馴染んだよね。お箸だって使えるし、日本語の小説を読めるほど言語も習得して……
「ねぇ、ユーノ。後で古文の課題手伝ってよ。難しくてさぁ……」
「うん、いいよ。源氏物語だっけ？」
今や、高校生の課題程度なら片付けられるほどになっている。
でも姉さん……そのくらい、自分でやろうよ。
机の上には、夏らしいさっぱりした味付けの食べ物が所狭しと並んでいる。
うん。稽古でお腹を空かした二人には丁度いい量の筈だ。アスパラのベーコン巻きと鰹の叩きは、特に自信作。
「姉さん、兄さん運ぶから手伝って」
「負けてること前提なんだ……」
勝手口からサンダルをつっかけて、道場へ。

「お待たせー。お昼ごはんできてるよー」
がらっと引き戸を開ける。
「よっしゃ、飯だ！」
秀人さんはタオルでぐいっと汗をぬぐい、跳ね起きる。
「おい恭也、飯だ起きろ」
壁際に座り込む兄さんの肩をぽんぽん、と叩いた。
「……だから、何故お前はそうピンピンしているんだ」
姉さんが肩を貸し、立ち上がらせる。
「もう……恭ちゃん無理するから。意地になるような年じゃないでしょ？」
「……すまん」
この稽古というのも、実は兄さんから言い出したことだ。
『恭也、お前ちょっと身体動かしたほうがいいぞ。身体硬くないか？』
秀人さんの何気ない一言。それが、高町の人間に共通の、『負けず嫌い』に火をつけてしまった。
よろしい、ならば模擬戦だ……と、あれよあれよと言う間に、秀人さんと兄さんが対決する運びになり、じゃあ飯ができるまで一汗かくかー、と道場に来たのが一時間前。
全くもう……一汗どころじゃなくなってるよ。
「秀人さん、シャワーでも浴びてきなよ。上がったらすぐに食べられるようにしておくから」
「悪いな。頼めるか？」
「もちろん」
秀人さんは自分の足で、兄さんは姉さんに支えられ、浴室に向かった。
「おお、美味そうじゃん」
戻ってきた秀人さんは、食卓の上を見てそう言った。
「強いて言えば、どれがおいしそう？」
……気付いてくれるかな？
「そうだな……」
平静を装い、内心どきどきしながら言葉の続きを待つ。

「アスパラのベーコン巻き……かな」
　よっしゃあ！
「それ、私が作ったの」
「さすがだなー……俺もレパートリー増やさないと」
　私はこうした細かい料理が得意で、秀人さんは鍋でたくさん煮込むような料理が得意。
　ユーノくんは、専ら仕込みや味付けのお手伝い。しっかりと役割分担ができている。
「あら、褒めるのはなのはの料理だけ？」
　母さんとユーノくんが、最後の二品を持ってきた。
「いや、桃子の料理も十分に美味そうだ」
「良かった……たくさん食べてね」
　よし、みんな揃った。
「それじゃ、」
　――いただきます！
「はい、秀人さん、ユーノくん」
　二人の取り皿に、料理を取り分ける。
　そして、早速私の料理を口にした二人が一言。
「うん、やっぱり美味い」
「おいしいよ」
　そう言ってもらえると、がんばって作った甲斐がある。
「まだまだあるから、たくさん食べてね」
　次は、何を取ってあげよう。
「なのは。取り分けてくれるのはありがたいけど……なのはが食べてないじゃないか」
「いいの。好きでやってるんだから」
　別に、すぐに無くなる量でも無いし。自分で食べるのもいいけど……作ったものを『おいしい』って言ってくれるのが、すごく嬉しいんだ。
「秀人さん、いつもお仕事大変なんだから一杯食べなきゃ」
「そうか？　悪いな……」

ぱくぱくと料理を口にする。
あ、お茶が無くなってる。おかわりを注いで……っと。
「さんきゅー」
「どういたしまして」
していることはいつもと同じだけど、大人数で食べるのも、たまになら悪くないね。
いつもは作らないような料理も作れるし、他の人の意見もこれからの参考にできる。
「ねぇ、ユーノ」
ずぞぞっ、と素麺を啜り、姉さんがユーノくんに聞く。
「ん？　何だい？」
「……あの二人、いつも『ああ』なの？」
かつん、と、兄さんが茶碗を置く音がやけに大きく聞こえた。
「……詳しく教えてもらおうか」
ずいっ、とユーノくんに詰め寄る。
「恭也、近い、近いって……」
「で、どうなんだ？」
姉さんは止めず、むしろ興味津々といった感じで様子を見ている。
「まぁ、いつも大体あんな感じだよ」
さらっと告げられた言葉に、兄さんは食卓に額をぶつけ、姉さんは口を三日月にして、
母さんは妙に嬉しそうにニコニコと笑顔を浮かべた。
「何の話？」
目の前で、気になるじゃないか。
「あなたたち、仲がいいのね～……っていうお話よ」
「ふぅん……？」
でも、何を今更？
そろそろ、私も食べようっと。
適当に取って、一口。
うーん……やっぱり、母さんの作った方がまだ美味しい。
私も作ってるけど、年季の違いだろうか……？

「ねぇ母さん。この南蛮漬け、タレに何を使ったの？」
「うふふ、秘密」
「えぇ～？」
　教えてくれたっていいじゃん。
「ねぇ、秀人くん」
「何だ？」
　箸を止め、顔を上げる。
「前になのはが作った方と、今日の品、どっちがお口に合う？」
「え？　ああ、そうだな……」
　ぱくり、と一口。もしゃもしゃと噛み砕き、飲み込んだ。
「桃子には悪いけど、なのはが作ったやつの方が美味い」
　え……？
「ほんと？　正直、母さんの方が一枚上手だと思うけど……」
「そんなことで嘘は言わないって。俺、なのはの料理が好きだから。自信持っていいぞ」
「う、うん……」
　どきっとした。秀人さん、真顔でさらっとすごいこと言うなぁ……
「ほらね」
　母さんが、分かっていたように笑う。
　まぁ、秀人さんがそう言ってくれるなら。
　食べ終わった後、食器を洗って、後は雑談の時間だ。
　私の学校生活や私生活の報告がメインで、アリサとすずかと遊んだこととか、フェイトにビデオレターを送ったこととか、クロノからは時々メールで報告が来るとか、他愛も無い話をしながら、時間が過ぎていく。
　お茶を注ぎ足そうと戸棚を開けた母さんが、困ったように頬に手を当てた。
「あら、お茶が無くなっちゃった」
　そりゃ、いつもの倍の人数で飲んでいれば無くなるのも早いか。
「私、買ってくるよ」
「そう？　悪いわね……」

千円札を受け取って、外に出た。
「なのは」
あれ、秀人さん。
「どうしたの？」
「一人じゃ危ないだろ。俺も行くよ」
そうかな？　この辺、治安は結構良いんだけど。それに、まだお昼だし。
でもまぁ、厚意は素直に受け取ろう。
「うん、ありがとう」
手を繋いで……少し遅いペースで歩く。
週に一度、家族と楽しく食事ができる。
休日には、友達と一緒に遊びに行く。
学校は面倒くさいけど、そこそこ面白い。
――夢のように楽しい、充実した毎日。
こんな日が、いつまでも続くのだと思っていた。
だけど、私は愚かにも、すっかり忘れていた。
一度関わってしまった非日常とは、そう簡単には縁を切れないということを。
魔法という力はいつだって……争いの呼び水になるんだ、っていうことを。
『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』
レイジングハートが、およそ一ヶ月ぶりに鳴らす鋭い警告が、穏やかな空気を切り裂いた。
「え」
ああ、認めよう。
鍛錬を怠れば、その分だけ力は削げ落ちていく……それは、私にも適用されてしかるべきだった。
平和に慣れきって……神経が、完全に鈍っていた。

ほんの一ヶ月前までなら反応できたはずのレイジングハートの警告に、呆けてしまったことが、何よりの証だ。

だから、気付かなかった。

振り向いた背後から、すぐ目の前に……鋭い凶刃が迫っていたことを。

# A’s編　第五話

「え……」
突然の警告に私は、そんな間の抜けた声を出すことしか、できなかった。
ああ、認めよう。
鍛錬を怠れば、その分だけ力は削げ落ちていく……それは、私にも適用されてしかるべきだった。
平和に慣れきって……神経が、完全に鈍っていた。
ほんの一ヶ月前までなら反応できたはずのレイジングハートの警告に、呆けてしまったことが、何よりの証だ。
だから、気付かなかった。
振り向いた背後から、すぐ目の前に……鋭い凶刃が迫っていたことを。
得物は日本刀。
それを手にするのは、黒い鎧を纏った騎士。
ちぐはぐな組み合わせの襲撃者は、迷い無く躊躇い無く……私の顔面へ、刃を突き出した。
「……何やってんだ、てめぇ」
けれど、その凶刃が私に届くことは無かった。
――ビキッ……
ぎらぎらと輝く日本刀は、私の目の前数センチで、その進攻を止められていた。
「おい……」
――ビキッ、パキッ……！
めきめきと、単純な握力だけで鋼を握り潰していく。
「秀人、さん……」
――バキンッ!!
とうとう砕け散った金属片が、血と一緒にぱらぱらと落ちた。
「何やってんのかって……！」
ぎちぎちと、拳が硬く握りこまれていく。

「……ア……アアア」
襲撃者は言葉にならない呻きを上げ、構わず日本刀を振り上げる。
それよりも速く……
「聞いてンだよオオオオオオオオオオオオッッ!!!」
――グギャアッ!!
その顔面に、鉄拳がめり込んだ！
「ゴ、ゴフッ……ギャァッ……!!」
コンクリートの塀を何枚もブチ抜き、何件もの民家の庭をぶち抜き……ようやく止まった。
「怪我は無いな？」
手に食い込んだ金属片を抜き取りながら、私の心配をする秀人さん。
「う、うん」
ようやく、言葉が出せた。
「よかった。……あの野郎、死ぬ寸前までサンドバッグにしてやる」
安堵の笑顔から一転。憤怒の形相で殴り飛ばされた襲撃者を睨む。
でも……生きてるかな、アレ。顔面がべっこり凹んでるけど。
「……ア、ア」
顔面を陥没させ、足が変な方向にひん曲がった状態で立ち上がった。
気持ち悪ッ……！
「……まともな状態じゃ無い。レイジングハート、スキャンだ」
すっと怒りを霧散させ、敵の身体をスキャンする。
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ．』
そして、結果が提示された。
『あの鎧は、魔法により実体化したものです』
「つまりはバリアジャケットか。他は？」
『思考操作の形跡が見受けられます。生命反応が微弱ながら在るので、洗脳され、操られているのでしょう』
洗脳って……いきなり現実感の無い言葉が出てきた。

いやまぁ、私もやろうと思えば出来なくも無いけど……それを実行するには、良心が咎める。
つまり、こいつを洗脳してけしかけた奴は、何本か頭のネジが飛んでるんだろう。
「……傀儡兵みたいに、四肢をもぎ取って動きを封じるのは無理か」
「だよね」
中身が人間……それも、何かの被害者だというのなら、力ずくで叩き潰すわけにはいかない。バインドして、動きを止めて……
「やっぱりな。気づかない内に、結界の中に誘い込まれてた」
「え？」
結界……？
「さっきから、ユーノと連絡が取れない。真昼間なのに人もいないし、間違いないだろ」
『迂闊でした。まさか、私のセンサーに悟られずに結界を展開するなど……』
――ぱんっ!!
「うおっ!?」
乾いた音が響いたのと同時、秀人さんが上体を思いっきり反らした。
ちゅいんっ！　という変な音と共に、塀に何かが当たり、砕けた。
「野郎ッ！」
『Ｉｍｐａｃｔ　！』
――バゴォンッ!!
衝撃波でブロック塀を破壊する。
その影から転げ出てきたのは……オートマチック拳銃を構えた、さっきのと同じ鎧を身に着けた騎士だった。
「け、拳銃……？」
さっきの日本刀といい、なんでこんな変な武器ばっかり……
「ア、▪ア……」「ウウ……」「ウアァ……」
続々と増えていく、黒い騎士。
釘バット、鉄パイプ、匕首、拳銃、日本刀……まるでヤクザだ。

じりじりと、緩慢な動きで間合いを詰めてくる。
落ち着け。警戒を怠るな。これは、一ヶ月ぶりの実戦だ！
「レイジングハート、」
レイジングハートを掲げ、起動させる。
『Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ　，』
一ヶ月のブランクを感じさせない、力強い声が返ってくる。
よし……！
「セットアップ!!」
『Ｓｅｔ　Ｕｐ　！』
巻き上がる、桜色と空色。
バリアジャケットを装着し、デバイス形態のレイジングハートを握る。
「それじゃ、軽くやっちゃおう！」
油断さえしなければ、雑魚に遅れは取らない！
「アクセルシューター!!」
誘導弾を形成。数は１２!!
「バレット」
秀人さんも散弾を準備完了。
「オオオ!!」「アアアアアア!!」
凶器を振りかざし、迫る敵兵。
ふん……取り柄は、魔力気配の遮断だけ。攻撃力なんて、十回喰らったって私の防御は
貫けない貧弱なレベル。
「シューーーーート!!」
「ファイア!!」
――キュゴガガガガガガガッ!!
「ギッ……！」「ギャアッ!!」
面白いように命中する。でも、やっぱり……
「うわ……」
ぶらぶらと、多分折れたらしい腕や脚を引きずりながら、ゾンビのように近づいてくる。

無駄に頑丈……というか、痛みを感じていないんだろう。
「ストラグルバインド」
――バチイイッ!!
秀人さんが、魔法効果を打ち消すストラグルバインドを仕掛ける。
あの鎧はバリアジャケットの一種だし、思考操作が魔法によるものであれば、救出も可能かもしれない。
でも……
「……駄目みたいだな」
「……うん」
バインドの効果で足止めは出来るけど……それだけだ。
「解除。魔力の無駄だ」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　』
バインドを解除する。
うーん、どういうこと？　魔法効果なら、打ち消せるはずなのに……
『単純に、向こうの魔法のほうが強力なのです』
ああ、効いていないわけじゃないんだ。
『もし、あの魔法を打ち破ろうとするのなら……瞬間最大放出量を増やすしかありません』
もっと魔力を注げば、効くかもしれない。
「却下だ。魔力切れして負けるのが目に見える」
「だよね」
そうと決まれば、話は簡単だ！
「耐久力の限界までボッコボコにして、無力化する！」
『妥当な判断です』
じゃきん、とレイジングハートを構えなおし……攻撃魔法を発動！
『Ｉｍｐａｃｔ　ｗａｌｌ　！』
インパクトウォール。
秀人さんの収束系最大技、スターダストウォール。その発動に必要な魔力収束の代わりに、インパクトを組み込むことで、速攻性と汎用性を持たせた簡易版。

さすがに攻撃範囲は小さくなるけど……威力と扱いやすさは広域版インパクトを数段上回る。
「インパクトォ……！」
こういう、雑魚の殲滅にはもってこい、ってね！
「ウォーーーーーーーーーーール!!」
――……グオオオオオオオオオオオオオ!!
そそり立つ衝撃波の壁が、兵士の軍勢に迫る！
「オオォ……！」
ある者は逃げ、ある者は手にした得物でささやかな抵抗をしているけど……決まりだ！
「よし……ッ!?」
――ずりゅっ……
胸元に違和感を感じるのと同時……ぷしゅん、と、衝撃波が掻き消えた。
「……あ？」
わけが分からない。
術式に穴は無いはず。
発動工程にミスは無かった。
十分な魔力も注いだ。
「なのは……!?」
秀人さんが、驚愕に目を見開いて、私を……私の胸元を見ている。
「あ、あ……？」
見下ろした先、私の胸元から……漆黒の篭手が、生えていた。
「う」
痛みは無い。でも、そこには確かに、手があって……
「う、」
手の平に、ピンポン玉サイズの桜色の光球を握っている。
「この、野郎……！」
秀人さんが、その篭手を捕まえようとして……

――ずるぅっ……！

「うあああああああああああああああああああああああっ!!」

極大の違和感と共に、全身の力が、ゴッソリと喪失した。

バリアジャケットが……まるで、腐り落ちるように崩れていく。

「あ、あああ……！」

あの光球……あれは多分、魔法の源、リンカーコア。

魔力を生成する、魔導師にとっての、もう一つの心臓。

それを、抜き取られた。

「……くも、」

私の大事なものを、

「よくも……！」

秀人さんと、ユーノくんと、レイジングハート……私たちを繋いでくれた……魔法の力を!!

「よくも……やってくれたなあああああ!!」

胸元の穴に、レイジングハートを突っ込む！

「なのは、何を……!?」

この穴の先に、必ずいる筈だ！

（ぶっ飛ばしてやる……！）

『マスター！』

（絶対に、許さない!!）

「ディ……バ、イン……!!」

――ギンッ……!!

残った魔力を総動員して、砲撃魔法を発動させる。

『お止め下さい！そんな事をしては、あなたの身体が！』

「なのは、よせ！」

消し飛べえええええええ!!

「バスタァァァーーーーー!!」

発射された砲撃が、私の身体を貫通することは無く……

――ゴォォォ、ン……!!

遥か遠方で、着弾したような轟音が鳴り響いた。

「うあああああああああっ……!!」

倒せたかどうかは分からない……それに……！
どさっ……と、立っていられなくなって、地べたに倒れた。
「がっ……！あ、はっ、あああ……！」
刃物を突き立てられたような痛みが、全身に広がる。
やっぱり……体内に向けて砲撃なんて、暴挙だった……
でも、そうしないと敵の位置は分からないし……今度は、秀人さんが狙われたかもしれない。
「ああ、ああああ……!!」
でも……ダメージがここまでだなんて、予想外だった。
バラバラになりそうな身体を抱きしめ、痛みを堪える。
「なのは……なのはっ！くそっ……！」
多分、秀人さんが一人で敵兵を退けているんだろう。
あれだけの数……しかも、異様にタフネスが高い集団を。
なんとかして加勢しようとしても……すぐに力が抜け落ちてしまう。
「く、うぅぅ……！」
……馬鹿だ、私。
平和ボケして、勘を鈍らせて……挙げ句、自爆して秀人さんのお荷物になって……
「秀人さん……ごめん」
ぷつん、と。
意識のブレーカーが……落ちた。
◆　◆　◆　◆
「なのは！」
くそっ……なんて馬鹿な真似を！
「レイジングハート、どうだ!?」
『……危険です。リンカーコアを無理やり摘出された上……砲撃により体内の臓器にまでダメージが及んでいます。非殺傷設定とはいえ、これでは……！』
自分の身体の中に砲撃を撃つなんて、何考えてるんだ！
「治癒魔法を……邪魔だおらァッ!!」

――ベゴンッ!!
手加減無しのミドルキックを繰り出し、敵兵を纏めて蹴り飛ばす！
悪いけど、手加減できるような余裕は無い！
――ゴババババッ!!
砲撃を振り回し、広範囲を薙ぎ払う！
傀儡兵レベルだったら一気に蹴散らせる威力だというのに、敵兵は何事も無かったかのように立ち上がった。
「くっそ！　キリが無い！」
でも、とにかくなのはの治療が先だ。
『Ｈｅａｌｉｎｇ』
治癒魔法に大部分のタスクを割き、残った一つだけで戦闘を行う。
俺は、なのはを守るためにここを離れるわけにはいかない。それに対し、敵は大勢で、自由に動き回れる。
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　！』
今はこうして、防御に徹するしかない。
ああ、畜生……ユーノがいればなぁ……！
『Ｃａｕｔｉｏｎ　！』
「あァ!?」
今度は何だ!?　とにかく、防御に魔力を追加して、強度を上げて……!!
ぞわぁっ……と、首筋の毛の一本一本が、悪寒で逆立った。
「や、べぇ……!!」
何かが、来る！
「うおおおおおおっ!?」
全魔法をキャンセル！　なのはを抱え上げ、思いっきり跳ぶ!!
――バッガアアアアアアアアアアアアアアアン!!!!
その場所を……俺の弱まった防御を紙のように突き破ったであろう、とんでもない威力の攻撃が吹き飛ばした!!
「ぐっ、ううっ……!!」
なのはを胸に抱えたまま、ごろごろと地面をバウンドする。
身体を起こし、視界を前方に向ける。

「ア、アアアア……！」
その攻撃は、俺たちどころか、その辺にいた数体の雑魚騎士を巻き添えにしていた。
「ちっくしょう！　お構い無しかよ!!」
再びなのはに治癒魔法を幾重にも施し、矢面に立つ。
粉塵が晴れ、ようやく敵の姿を見ることが出来た。
「……！」
敵は、ゲートボールのスティックのようなハンマーを持った、赤黒い鎧を着た騎士だった。雑魚とは違う、禍々しさの中に不思議な優美さを備えた鎧。
「どういうつもりだ！」
「……！」
返事は無い。ただ無言で、ハンマーを上段に構える。
その肩は、なにかに興奮しているかのように上下していて……ん、もしかして……？
「……怒ってる、のか？」
もしかして、なのはの砲撃で倒された（多分）仲間の仇を取りに？
「……!!」
図星。そして、返礼は……！
――ボボボボボッ……!!
数十個の魔力弾……いや、鉄球！
「……レイジングハート、治療は止めるな」
『了解。ですが、おそらくあの攻撃は防御を貫通してきます』
「だよなぁ……」
初撃も多分、あれの掃射だったんだし。
一つしかタスクを割いていない防御なんて、無いも同然。
でも、一応考えはある。
「じゃーん」
背中から取り出したのは……あの雑魚騎士の一体が持っていた、釘バット。
「これで打ち返す！」

『馬鹿ですか、あなたは……』
レイジングハートが脱力したように呟く。
「というわけで、強化よろしく！」
『……はぁ。了解』
幸いにも、雑魚騎士はチビ騎士の攻撃であらかた吹っ飛んでどこか行っちゃったし、一対一だ。
「さぁ来い、チビ！」
「……!!」
実は気にしているらしく、殺気立ち……
――ボババババッ!!
鉄球を一斉に発射してきた！
「オラオラオラオラオラァッ!!」
――ガキンガキンガキンゴキンカキン!!
くううううう、硬ってええええ!!
手がびりびり痺れてきやがる！
それに、強化したバットが一発打ち返すごとに凹み、歪んでいく！
「だあああありゃあああああああああああ!!」
全部打ち返すくらいまでは、持ってくれよ……！
――ゴキンゴキンゴキン……カキィンッ!!
うち一発を、正確にチビ騎士の頭部へピッチャー返し！
――パガンッ！
「!!」
頭に血が上って、判断力が低下していたのか……額に直撃し、仰け反った。
同時、全ての鉄球が制御を失い、あらぬ方向へ飛散する。
――ピキッ……!!
チビ騎士の兜に亀裂が入った。
くそ……こんな状況じゃなければ、攻め込むには絶好の機会なのに……
「レイジングハート、そっちはどうだ？」
『脈拍は安定してきましたが、予断を許さない状況です』

「……タスク三つ、俺に割けるか？」
こうなったら、アレしかない。
「カウンター三連撃……決まれば、倒せる」
あのチビ騎士の鎧は、そんなに頑丈じゃない。
うまく『返』せれば、倒せるはずだ。
『……可能ですが、制御プログラムがまだ未完成です』
「どうせ、このままじゃ負ける」
負けるだけならまだしも……最悪、なのはが死ぬ。
「俺の身体なんてどうなってもいい。今、あいつらを退けるのが先だ」
それでこの結界を壊せればユーノを呼べるし、な。
『……可能な限りバックアップします。無茶も程ほどに』
「あいよ」
タスクは三つ。
ディバインバスターと、ブレイズキャノンと……魔力刃。
いつでも発動できるように、スタンバイしておく。
「……」
――ガキッ……
チビ騎士が、ハンマーを構える。
「……来い！」
半身に構え……右手を腰溜めに、左手を緩く突き出す。
「……！」
――ダンッ!!
地面が砕けるほどのスタートダッシュで、一気にハンマーを振り下ろしながら突っ込んできた！
でも……フェイトに比べたら、全然遅い!!
「はぁっ!!」
使えるだけの全魔力を、掌打に乗せて……!!
――バチイイイィィィンッ!!
衝突!!
「……!!」
「こ、のおおおおおっ!!」

スピードはフェイト以下でも……パワーは俺以上か！
拮抗した状態から、チビ騎士のハンマーがじりじりと迫ってきている。
「うオォあああああああああああ!!」
砕けそうになる膝を叱咤し……拮抗を押し返す！
「……！　……!!」
「こ、のやろおおおおおおおおおおお!!」
そろそろだ。もうそろそろ、チビ騎士は突進力を失う。そうすれば……
耐えて、堪えて……！
ふっ……と、突進が止まった！
「うおりゃあああああっ!!」
――ドゴオオォォンッ!!
左手から、ブレイズキャノン！
――ガギュウウウンッ!!
右手から、ディバインバスター！
「喰らいやがれえええええええェェッ!!」
発射した二つの攻撃魔法と並走し……魔力刃を振り下ろす!!
チビ騎士は、完全に攻撃を終えた無防備を晒している！
（貰った!!）
確信は、手応えとして返ってくる……筈だった。
――――――ガギュンッ、ガギュンッ!!
チビ騎士のハンマー……そのヘッド部分がスライドし、弾丸のような薬莢を排出したのと同時。
――ガオオオンンッ!!
「……あ？」
ディバインバスターとブレイズキャノンを、あっさりと撃墜し……先端を鋭利なピッケル状に変形したハンマーが、
――ごぎゅっ……!!
「……が、あ、あ……!!」
俺の胴体に、深々と食い込んだ……

食い込んだだけでは止まらず、めきめきと骨が砕け、何かが潰れる音が、体内から聞こえた。
――どさっ
一瞬だった。
ほんの一瞬で、俺の最大技は破られて……俺は、負けた。
『秀人!?』
レイジングハートが俺を呼ぶ声が、妙に遠く聞こえる。
「げふっ……!」
喉の奥からこみ上げてきた、鉄臭い、液体だかよくわからん物を吐き出す。
――ザッ……
立ち上がれない俺達の周囲を、チビ騎士と……その辺に散らばっていた雑魚騎士が取り囲む。
「なのはに……ざ、わるな……!」
潰れた肺が、言葉を濁らせる。
ずるずると這いずり、なのはの身体の上に、覆いかぶさる。
少しでも、時間を稼ぐんだ……!
「……」
――ざくっ
「ぐっ……!」
背中に、刃物のようなものが食い込んだ。
「ア、アア……!」
俺が抵抗しないと見て……
――ざぐっ、ごきっ、ばきっ、がしっ、ぐちゃっ……!
「ぐっ……う、うううう……ああ!!」
全身を鈍器が殴打し、刃物が蹂躙し、つま先が傷の治りかけた腹を蹴り上げる。
傷の修復は行われているけど……流石に、数が多すぎる。
頭部を殴打されるたびに意識が飛びかけて……背中を切りつける刃物の鋭い痛みが、再び意識を繋ぎ止める。
「あ、あ……!!」

徐々に、意識が薄れてきた。あまり痛みも感じない。
――がぎゅんっ、
また、あの音だ。
チン……と、見せ付けるように目の前に薬莢が落ちる。
俺のしぶとさに業を煮やしたのか、チビ騎士が止めを刺すつもりらしい。
やべ……今回ばかりは、死ぬかも……
『秀人！　秀人ッ!!　気をしっかり持ちなさい！』
レイジングハートが、これまでに無く切羽詰った声を張り上げる。
『秀、』
――バキンッ!!
その声が、不自然に途切れる。
『……人、……逃、』
レイジングハートは、チビ騎士のハンマーに叩き壊されていた。
ころん……と、ヒビだらけになったコアが、目の前に転がってくる。
その赤い宝石に宿る光が消え……
――途切れかけていた意識が……燃え上がった。
「て、めェ……!!!」
血反吐を吐き散らす内臓を無視し、断ち切られた靭帯や筋繊維を強引に再生し……
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」
獣のような咆哮と共に、立ち上がる!!
「おおォまエェェ……!!」
自分が出しているとは思えない、おどろおどろしい怨嗟の声が、喉の奥から絞り出される。
――ゴボゴボゴボッ……!!
「うううウウウウォオオオォォ!!」
撒き散らされた俺の血液が……泡立ち、煮え滾り……！
――ゴォウッ……!!
烈火の如く……発火する!!
怒りのままに……いや、怒りそのものを、炎と化して！

「オオオオ

## A’s編　第六話

――ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!
俺の血を熱源として、燃え盛る蒼炎。
俺のほぼ全身に刻まれた傷は、その炎に触れた箇所から、片っ端から修復されていく。
そして、レイジングハートが機能を停止し、治療が中断されたままになっているなのはの身体を、蒼炎が包み込む。
ボロボロになっていたバリアジャケットが燃え上がり、その魔力を治癒魔法へと変換される。
――ゴウッ!!
一歩、前へ。
蒼炎の動きもそれに追従し、移動する。
それだけで、俺を好き勝手に痛めつけていた雑魚騎士が、一歩後ずさった。
「……!!」
チビ騎士の号令を受けた雑魚騎士の集団が、俺に殺到する。
「……はアァッ!!」
――ゴバアアァッ!!
近寄る雑魚騎士を、吹け上がる蒼炎の熱波がなぎ払う！
「……、ア！」
バックステップで回避しようとする雑魚騎士の鎧を、蒼炎が僅かに撫でた。
そして、
――ボウンッ!!
爆発的に、発火する！
「ア、アアアアアア!!」
「ギャアアアアッ!!」
蒼炎に炙られた雑魚騎士達が、のたうち、逃げ惑い……
「ア……あ、あ……」

一瞬のうちに鎧を失い、倒れ付す。
だが、もうそんなものは考慮に入らない。
単に……チビ騎士を破壊するのに邪魔だったから、どかしただけだ。
「……！」
先端をピッケルのように細くし、一点での破壊力を増したハンマーを振り回し……
――ガゴオオンッ!!
その先端は、再び俺の身体に突き刺さった。
「……!?」
どろっ……と、ハンマーの先端が……高熱で溶ける。
――ブゴオオオッ!!
傷口からあふれ出た血液が炎上し、一瞬のうちに傷を塞ぎ……チビ騎士を吹き飛ばす！。
「……！」
――ギュガガガガッ!!
鉄球の一斉掃射。だがそれの大部分は、身体に届く前に蒼炎によって蒸発し……届いた数発もまた、ダメージにはなりえない。
「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!」
思考が怒り一色に染まり……この蒼炎で、いかに敵を焼き滅ぼすかだけが、めまぐるしく頭を駆け巡る。
――ギュルルルルッ……!!
手元に、蒼く燃える血液を凝縮し……！
「くたばり……やがれえええええええエェェッッ!!!」
その炎を……全ての怒りのままに、叩き付けた!!
「……!!!」
チビ騎士は、迷い無く回避を選ぶ。
「……!!」
――がきゅん、がきゅんっ、がきゅんっ!!

三発の薬莢を排出。
攻撃力を爆発的に増大したハンマーで、
――バッキイイイイインッ!!
火炎弾の下を叩き、力をいなし……火炎弾を天空へ跳ね上げる。
「逃ィがすかアアアアアアアアアアアアッッ!!」
天空へ上昇を続ける火炎弾に手をかざし……操作！

――……ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッッ!!!!!

蒼い炎は、より一層激しさを増しながら姿を変える。
「……!!」
背中を向け全速力で逃走していたチビ騎士が、その圧倒的な熱量に振り返り……硬直。
大気を切り裂く、巨大な両翼。
幾重にも重なる、長大な尾。
獲物を食い千切らんとする、鋭利な嘴。
全身に炎を纏う、伝説の神獣。

――――――――不死鳥。

『ギュエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ!!』

生誕の嘶きが、空間を揺るがす！
――ガシイイッ!!
「……!?」
その荒々しい鉤爪が、チビ騎士の胴体を拘束し、ぎちぎちと締め上げ……
――ビキッ……ビキッ……!!
鎧に、細かなヒビが広がっていき……ぶしゅっ、と、血液が噴出さ

せる。
『ピギュエエエエエアアアアアアアアアアアアッ!!』
鷲摑みにしたまま……
――ッドゴオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!
大地に、叩き伏せた！
「……、!!!!」
直径１０メートルはある巨大なクレーターが、大地に深々と刻まれた。
『フシュウウウウ……!!』
不死鳥に踏み潰された格好のまま、ぴくりとも動かなくなったチビ騎士の手から、ハンマーがずるっと滑り落ちる。
死んだか……どちらにせよ、戦闘の継続は不可能……
いや、まだだ。
――ガギンッ……
蒼炎の檻で、チビ騎士を大地に張り付け……
『ギュエエエエエエエエエエエエエエッ!!』
不死鳥を、再び上空へ解き放つ!!
「お前は……お前だけは!!」
なのはを魔導師生命どころか、本気で命を奪おうとした。
レイジングハートを全損にまで破壊した。
「ここで、終われエエエエエエエエエエエエッ!!」
その罪を……死をもって、償え!!
「焼き尽くせ……!!!!」
……叩き下ろす!!
「クリメイション……フェニイイイイイイイイィィックス!!」
『ギュエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ!!!!』
特大の嘶きと共に、蒼き不死鳥が急降下する！

「！　……！」
檻に捕まったチビ騎士は、脱出に間に合わない。
ただ呆然と……圧倒的な『死』というプレッシャーに、立ちすくんでいた。

――――――

命名したわけじゃない。唐突に、頭の中に浮かんできた名称だった。
って、それよりも!!
「も、戻らなきゃ……!」
一応、治癒魔法は残してきたけど……ちゃんと効いているかどうか不安だ!!
レイジングハートだって、ちゃんと状態を確認してやらないと!
「ああもう、さっさと治れっつーの……!!」
そのぐらいしか取り柄の無い身体なんだから……!
いまいち動きが渋い身体を動かし、なのはを置いてきた場所へ戻る。
なのはは……
「……すぅ、すぅ」
良かった……寝てるだけだ。
問題は、
「レイジングハート……」
『……』
レイジングハートは、答えない。
魔力を注いで修復しようにも、結界を破壊しようにも、もう殆どすっからかんで全く足りない。
「……しゃーない」
右手の魔力結晶に、意識を集中させる。
「スターライト……も、無理か」
魔力を収束しようにも、レイジングハートがいなければまともに出来ない。
この辺は、魔導師共通の弱みか。
もういっそのこと、魔法そのものを継続的に身に纏えればいいんだけどなぁ……
出力の上げ下げだけすればよくて、タイムラグも無くなるし。
……って、
「お、おおう……なんじゃこりゃ」

あたりに目を配ると、死屍累々と……多分、雑魚騎士として使われていた人間が、その辺に転がっていた。
ボロボロの洋服……これは、アロハシャツ？　そんで、こっちは黒いスーツ……妙につま先が尖ったエナメルの靴。
「……ヤクザ？」
そういや、雑魚騎士達の武器も、トカレフだの匕首だの、それっぽい物が多かった。
その辺の事務所の奴らを拉致ったのだろうか。
「う、うう……!!」
一人、作務衣を着ていた男がうめき声を上げる。
「おいコラ、起きろヤクザ」
襟を掴み、頬を二、三回張る。
「あ……？」
ようやく焦点を結んだ目が、見開かれる。
「俺、は……生きている、のか？」
「まーな。んで……どこまで覚えてる？」
「あ、ああ……」
ヤクザが話すところによると……
「子供が変な姿に変身して、仲間達を殺した？」
「信じられないだろうが、本当だ……この場にいる人数より、ずっと大勢が……」
「……そうか」
子供……か。なるほど。
「顔は覚えているか？」
大体の特徴さえ覚えていれば、アイツに頼んで、似顔絵を描いてもらえる。
「ああ、確か……」
いくつかの特徴を聞き終えたところで、精神力を使い切ったのか、再び意識を失った。
さてと。
「どうやって、結界から出るかなぁ……」

魔力は空。
周辺から集めようにも、スターライトは使えない。
外への連絡手段もない。
早いところ外に出て、なのはをちゃんと治療してやりたいんだが……
――パリンッ……
「……え？」
今、結界のどこかに穴が開かなかったか……？
もしかして……
「ユーノか!?」
慌てて、念話と同時に肉声も出してしまった。
「……ユーノ？」
返事が無いってことは……ユーノじゃないのか？
「……増援だったら最悪だぞ」
今のところ敵意は感じないけど……着々と、距離を詰めてきている。
あと、数十メートル。
――ザッ……
姿が見えてきた。
遮蔽物が無くなっているおかげで、身を隠すつもりは無いらしい。
青いスラックスに白いシャツを着て……変な仮面で顔を隠した、長身の男だ。
じろじろとぶしつけに俺の身体を上から下まで眺め……
「……蒐集は無理だな。完全に肉体と同化している」
「は？　何のことだ」
シュウシュウ……？
「まぁ、そっちの少女の分が手に入っただけ、よしとしよう」
「……？」
何のことだかさっぱりわからん。
「なぁ、アンタ」
ぶつくさ言ってるだけで襲い掛かっては来ないし、とりあえず敵で

はないだろう。
「……」
くいっと首を曲げ、俺と眼が合った。
……いや、仮面だからわかんないけどさ。
「悪いんだけど、結界の外まで連れ出してくんねーかな？」
結界に入れたなら、出ることもできるはず……
「……」
「あ、おい！」
用事は済んだとばかりに踵を返してしまった。
敵ではないにせよ、友好的でも無いか……まあいいや。
「勝手にやらせてもらうぞ」
――バシュッ……
『ライン』を伸ばし、仮面男に接続する。
「……!?」
おー……って、なんじゃこりゃ!?
結界・捕縛術だけで３４!?
遠距離バインドに、これは……拘束結界？
それに、幻術魔法、変身魔法……
派手さは無いけど……速効性・汎用性・確実性は、俺が使うものに比べたら段違い……というか、別次元だ。
まるで、クロノの魔法が、更に磨きぬかれたような……お、あったあった。局所的結界破壊。
結界は残しておいて、後でユーノに頼んで修復してもらわないと……
ついでに、ちょこっと魔力を拝借して……
――ブオッ!!
「うおっ!?」
いきなり飛んできた回し蹴りを回避する。
「貴様……!!」
「怒るくらいなら、最初から手伝ってくれよ……」
「……ふん！」

ずかずかと大股で去っていった。
まずは……拝借した魔力で、結界の一部を破壊。
とりあえずはこれで、通信は外に通じる。
残った魔力をレイジングハートに注いで、修復を開始させた。
「……」
さすがに、ここまでぶっ壊されていたら、すぐには直らないか。
結界の外は……うわ……もう夜だ。
あー……携帯電話、道場に置いてきちゃった。
『ユーノ、俺だ』
念話でユーノを呼ぶ。
『秀人!?　今、どこにいるんだい!?　この結界、防御が硬くて全然破れなくて……』
「んーっと……」
位置情報を、探る。丁度、結界を挟んで反対側か。
『今、そっちに行くから……』
「いや、その必要は無い」
……妙に聞き覚えのある声が、割り込んできた。
「管理局嘱託魔導師・吾妻秀人。並びに、高町なのは」
厳つい法衣のようなバリアジャケット。手には、複雑な形状の杖……Ｓ２Ｕ。
「アースラへの出頭を、要請する」
黒い髪・黒い瞳の……
「……クロノ？」
およそ一ヶ月ぶりの、再会だった。

# A’s編　第七話

「ふわあああぁ……」
自分の口から、そんな間抜けな大あくびが出た。
いやぁ……だって、とにかくヒマでさぁ……
――――……？
騎士団……？　ああ、アレ？　あんなもん、使い捨ての消耗品だからどうでもいい。
養分にしたクズの中からそこそこ使えそうな奴らを選んで、ヴォルケンリッター召喚の術式を弄くった術式で再利用してみたんだけど……どれもこれも、大した戦力にはならない。せいぜい、足止めと壁に使えるくらいだ。
そんな使えない奴らに、『闇の書』を持たせても無駄だし……作っちゃった分だけを消費し尽くしたら、また別の戦力増強の方法を考えよう。
……ずいぶん、帰りが遅いな。
滅茶苦茶でかい魔力反応が二つ見つかったから、手が空いていた『鉄槌』を向かわせたのが今日の夕方。もう日はすっかり落ちて、夜の時間になっている。
お、そうこうしているうちに午後九時。時間だ。
『鉄槌』の回収は後でいいや。
「ええっと、チョコレートと、マシュマロと……」
私が食べるために買ったおやつを、リュックサックに詰め込んでいく。
「まぁ、病院食よか数倍はマシだろ、多分」
あれ、あんまし味が無いからなぁ……二日で飽きる。
「別に、内臓の病気じゃないんだから……好きなもの食べさせてやってもいいじゃない……って、違う違う!!」
賞味期限が近くて、食べる前に腐らせないためだから勘違いするなよ!?

窓を開けて庭に出る。
「スレイプニル」
――ばさっ……
翼を展開し、飛ぶ。
「うーん……いい空気」
夏の気候でも、フライパンみたいなアスファルトから離れれば、それなりに涼しいのだということを最近知った。
……折角だし、あいつにも教えてやろうっと。
ここ最近で、大分基礎力も着いてきたし、いっつも同じメニューのルーチンワークじゃ、やる気も削げる。
いつものルートを辿り、総合病院までやってくる。もう既に面会時間は終了し、消灯されて真っ暗だ。
――コンコン。
カーテンが引かれた一室の窓を、軽くノックする。
すぐに窓が開き、おかっぱ頭の少女……美香が、嬉しそうに顔を覗かせた。
「姐さん、いらっしゃい！」
この呼び名は、美香が勝手に言い始めたものだ。
『お姉ちゃん』だと、美香の実姉と被るから……らしい。
どことなく、響き的に強そうだから、そこそこ気に入っていたりする。
「よう。……ほら、土産」
リュックサックを、どさっとベッドに下ろす。
目で促すと、美香はいそいそとリュックサックを開けた。
「わー、お菓子だ！　……食べていいの？」
「ああ。好きにしろ」
たかが菓子でそこまで喜べるなんて……子供は単純でいいな。
早速マシュマロの袋を開け、二、三個をいっぺんに頬張る。
「美味しいー！　……でも、姐さんは食べないの？」
「甘い菓子は苦手なんだよ」
なんか、口の中がべたべたする気がするし。

「じゃあ、何で買ったの？」
……このガキ。
「間違えただけだ。そんで、賞味期限も近かったから……」
「あと一ヶ月もあるのに？」
「……うるせぇ、黙って食え!!」
「むぐっ!?」
口の中に、板チョコを突っ込んでやった。
目を白黒させていた美香だったけど、次第に嬉しそうに緩んでいく。
「それ食ったら、始めるぞ」
「もぐもぐ……はーい！」
びしっ、と威勢よく挙手する。
……美香と初めて会ってから、大体二ヶ月。
契約を着々と遂行している私だった。
美香の不随の原因は、魔力回路と、その制御方法を知らないことが原因だ。であるなら、美香が、魔力の運用をしっかりと身に着けさえすれば、少なくとも悪化はしない。とはいえ、地味な運用ばかりでは、覚えるモチベーションも上がらないから、無害な発光の魔法や、簡易的な念動力を覚えさせている。
さて、今日は何を教えてやるかな……ああ、そうだ。
「今日は……」
言いかけて……
「美香、この魔法を覚える前に、約束しなさい」
「……？　はい」
「この魔法を使っていいのは、夜だけ。もし使ったとしても、必ずその晩のうちに、部屋に戻ること」
「……戻る？　今日は、何の魔法を教えてくれるの？」
わくわくと、嬉しそうにしている美香。
思わず顔が綻びそうになるけど……今は授業中だから、ぎゅっと引き締める。
遊び半分の気持ちで魔法を使うなんてこと、あってはならないん

だ。
「……約束できる？」
「はいっ！」
美香の身体は、その魔力に反して、小さくて弱い。
小規模の結界を展開しただけで、かなりの負担が強いられてしまう程だ。
もし、発動に失敗してしまったら……考えたくも無い。
「空の飛び方、教えてやるよ」
……
……
……
……
……
……
「ひゃーーー!!」
背中に小さな羽根……ミニサイズのスレイプニルを生やし、落下しないよう必死に羽ばたく美香。
「ほらほらー、落ちたら死ぬぞー」
ふよふよと浮遊しながら、適当にアドバイス。
術式はしっかりコントロールできているし、問題は無いだろう。
夜食のカップ麺にお湯を注ぎ、蓋をする。
三分持つかなー……
手元のストップウオッチを押し、計測開始。
一分……二分……
「ふにゅー……!!」
ヒヨコのような羽根が、明滅している。
……三分。
さて。
食べるか。
「姐さーーーん!!　も、もう……もう無理―!!」
ぷしゅん、と羽根が消えた。
「きゃあああああああ!!」

数百メートル下に広がる地面へと落下していく。
「……三分二十秒」
スレイプニルで加速して、キャッチ。
「まだまだ……だな」
おっかしいなぁ……もう少し、伸びてもいいはずなんだけど……
ぐいぐい、と、服を引っ張られた。
「何だ？」
「姐さん、今日はもういいよ。帰ろうよ……」
完全に、及び腰になっている。
……なるほど。この甘さが、成長を妨げているわけか。
そうと決まれば、話は簡単。
「姐さん……何で、地面に戻らないのでしょうか……？」
なぜか敬語。
「練習を続けるためよ、美香」
ばっさばっさとスレイプニルで上昇を続ける。
「姐さん……何で、さっきよりも高いところに向かっているのでしょうか……？」
ひくひくと、頬が引きつっている。
「お前をより高い場所に連れて行くためよ、美香」
眼下に広がる町並みが遠のき、人や自動車が豆粒のように小さくなる。
「姐さん……何で、さりげなく私の身体を、手放そうとしているのでしょうか……!?」
私は、にっこりと、聖母の気分で笑みを浮かべ……手を離した。
「お前をここから落とすためよ、美香」
ぽいっとな。
そーれ、行ってこーい。
「うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん!!　姐さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
美香が、豆粒の仲間入りをした。
フェードアウトしていく泣き声を無視して、ずるずるとカップ麺を

すする。
「食べ終わったら迎えに行くからなー」
一人前への道は、険しいのだ。私だってまだまだなくらいだし。
「ぜぇぜぇ……！　姐さんの意地悪……！」
数分後、病院の屋上。
息も絶え絶えになった美香が、私を見上げながら恨み言を言った。
「ちゃんと飛べたじゃないか」
最後のトライで、最初の倍の六分間、飛行を続けていた。
「そりゃ、飛ばなきゃ怪我する……」
「そのくらいの覚悟でやらなきゃ、身にならないってよくわかっただろ？」
実際、私だって……闇の補助無しで飛べるようになるまで、あちこちに打ち身や擦り傷……酷いときには、骨折までしたんだ。
こうしてサポートしてやるだけ、ありがたいと思わなきゃ。
「むうぅ……！」
「美香、……美香？」
「……」
あらら、すっかりへそを曲げちゃったか……
「仕方ないわね……後でアイスおごってやるから、機嫌直しなさい」
「あいすっ!?」
うおビックリしたー。
「買ってくれるの!?」
現金だなぁ……さすが子供。
「ああ。……っても、連れて行くのは無理だけどな」
車椅子で連れ出して……それが病院にバレたら、美香が怒られる。
「何がいい？　二つまでだからね」
「チョコレート味と、バニラ味！」
「あいよ。んじゃ、部屋で待ってろ」
「うんっ！」
美香を病室に戻せ……
この辺にあるコンビニは……やっぱり、あそこだな。

「とうちゃーく……」
いつもの通り道に着地し、翼を消す。
てくてくと歩いて……いつものコンビニへ。
――ピンポーン……
自動ドアの開閉音を鳴らしながら、見知った店に足を踏み入れる。
「……らっしゃーせー」
今日も今日とて、あのやる気の無い金髪バイトがいる。
いつもの習慣で弁当売り場に行こうとして……直前で、クーラーケースに方向転換。
ハーゲンダッツ……は、やめておくか。子供に大事なのは、美味い不味いではなくて、いかに腹いっぱい食うか、それが一番大事なんだし。
一個百円くらいのカップアイスを四種類……チョコ、バニラ、抹茶、バナナを積み上げ、レジに持っていく。
いっそのこと、全部抹茶味にしてやろうか……という、子供っぽい悪戯心も浮かんだけど止めておいた。まーたヘソ曲げられちゃ、面倒だし。
「……くかー」
……金髪バイトは、レジに突っ伏して寝息を立てていた。
どんだけやる気無いんだよ……
「……チッ」
――ガンッ!!
レジの前を、思いっきり蹴飛ばした。
「んあ……!?」
のっそりと身体を起こし、目をこする。
「寝てんじゃねぇよ……レジの金盗まれたらどーすんだ」
それでこのコンビニが潰れたら、私の飯はどうなる。
「あー、よかった……オーナーじゃなくて……ふあああぁぁ……」
疲労の色濃い、大きな欠伸が出た。
たかがコンビニ……しかも、客足の少ない深夜。こんなバイトで、ここまで疲れるようなことは多分無いはずだ。

だとしたら……
「あんた……いくつバイトしてるの？」
掛け持ちくらいしか、考えられない。
「あー……工事現場と、引越しと、深夜コンビニ」
前半分は、短時間・バイトにしては高収入……そして、体力を必要とする仕事。
「呆れた……そんなに金が必要なの？」
「ああ。いくらあっても足んねー」
……即答かよ。
ま、いいんだけどね。レジ叩いてくれれば。
四つで五百円以内に収まり、つり銭をポケットに仕舞う。
「……つーか、お前まだガキなんだから夜遊びすんなよ」
「大きなお世話だ」
「あのなぁ……」
思えば、これだけ無礼な物言いをする子供に、律儀に忠告するなんて、見た目と違って割りといい奴？
「最近、行方不明事件が頻発してるらしいぜ？」
「知ってるよ」
……つーかその犯人、私だし。
「そんじゃねー」
「真っ直ぐ帰れよ」
「やなこった」
ぷらぷらと袋を揺らしつつ、コンビニを出た。
「美香、ただいま……美香？」
「すぅ……すぅ……」
時計は、午後十二時を指していた。待ち疲れて寝てしまっていても、おかしくはない。
「……美香」
無邪気な寝顔。
「ん……？　んん……」
髪を手櫛で梳くと、僅かに身じろぎし……また寝息を立て始める。

「お兄ちゃんに、お姉ちゃん……か」
もともと一人っ子で、今や天涯孤独の私には、眩しいほどに羨ましい。
「でも、結局は……いなくなっちゃうんだよ」
パパとママは、いつまでも私と一緒。
私がおばさんになっても、おばあちゃんになっても。
でも、そんなのはただの幻想で。
世の理不尽は、あっという間に幸せを掠め取っていく。
でも。だからこそ……
「……力さえあれば。何にも負けない力さえあれば……もう、何かを奪われることは、起きない」
「んぅ……？」
「あ……起きちゃった？」
「んーん……ちょうど、起きようと思ってたとこ」
「アイス、食べる？」
温度操作をしていたから、まだ溶けていない。
「……食べるー」
寝ぼけていて尚、食欲に忠実な様子に苦笑し……アイスを手渡した。
ぺりぺりと蓋を開け、緑色のアイスを、スプーンで一口。
その瞬間……
「に、苦ぁい！」
美香の目が、一気に開いた。
「ひゃーっはっはっは!!」
大・成・功！
「うー！　バニラか、チョコって頼んだのにー！」
ぶんっ、と投げられたアイスの容器をキャッチする。そのラベルには、『抹茶』の文字が燦然と輝いていた。
「姐さんの意地悪ーー！」
枕を振り上げ、ぼすぼすと私の身体を叩いて怒る。
「あはっ、ごめん、ごめんってば！」

ああもう、なんて弄り甲斐のある子なんだろう。
結局、美香にはバナナアイスを進呈する……という条件で、許してもらった。
「三つも食べて……腹壊しても知らないからね」
美香は、ぴたっと手を止めて、まじまじと私を眺める。
「……ねえ、姐さん」
バニラのカップアイスを食べながら、美香が不思議そうな顔をして聞いてきた。
「何だよ？」
何か、魔法のことでわからないことでもあるんだろうか。
「何で姐さん、そんな変な喋り方してるの？」
……はい？
「へ……変？　何が？」
「女の人っぽい喋り方したり、男の人っぽい喋り方になったりしてるよ？」
え、うそ……
「お、おかしくない、ヨ……？」
ちゃんと、パパと一緒に練習した標準語なんだ。変なわけが……
「えー、おかしいよー」
けらけらと笑われた。
「は、はは……おかしいんだ……そっかぁ……」
凹むわぁ……
「あ、あれ……？　姐さん？」
がつがつ。
一気に残りを食べつくして、涙を堪えるのだった。
「そういえばね、院長先生がいなくなっちゃったんだって」
ぴたりと、抹茶アイスを口に運ぶ手が、止まる。
「それで、新しい先生がよその病院から来る……って」
「へぇ……」
適当な相槌を打ちつつ、私は……
あのジジイを殺した夜のことを、思い出していた。

◆　◆　◆　◆

でっぷりと太った男だった。

頭頂部は薄く、顔全体がてらてらと脂ぎり、目はどんよりと濁っている。

男のいる部屋。

革張りのソファに、毛足の長い高価な絨毯。マホガニーのデスクに、壁際にずらっと並べられた古酒。

「……ぷぁあ……」

一本で万単位もする葉巻をくわえ、紫煙を燻らせる。

成金、という言葉がここまで似合う姿も、そういない。

――プルルルッ……

「……」

がちゃっ、と、アンティーク調に仕立てられた電話を耳に当てる。

「私だ」

尊大な態度が許されるのも、男の社会的地位が高い証拠なのだろう。

電話の内容は、要約すれば次の一言だった。

――新薬を、買ってもらいたい。

病院が、薬を買う。

傍から聞く分には、何もおかしくはない。

だが。

ある会社が、新薬とは名ばかりの、効果の薄い薬品Ａを安価に作る。

それを、名のある大病院が買い上げ、完治寸前の患者に薬品Ａを使用する。

もちろん、治療薬として最低限の効果はあるため害にはならず、当然のごとく完治し……カルテには、薬品Ａを投与した、という事実が記述される。

それにより、薬品にＡは、『薬品Ａを投与した患者が完治・全快した』という事実が付随する。

新薬Ａは、『〇〇の治療薬』という肩書きと、大病院のお墨付きを得、飛ぶように売れ、製薬会社は利益を得るのである。

「ああ。だが……わかっているだろうね？」
もちろん、得をするのは製薬会社だけではない。
その新薬Ａを試用するかどうかを決めるのは、最高責任者……院長なのだから。
製薬会社は、「ウチの新薬を宣伝してください」と、誠意を持って、お願いするのである。誠意……つまりは、賄賂。
「２００？　……馬鹿を言っちゃいかん。５００だ。それより下は無い」
……この男が、町で三本指に入る大病院の院長だとは、初見では誰にもわかるまい。
「……ふん、まあいいだろう」
５００。つまり、５００万円が、この男の懐に入ることが確定した瞬間だった。
がちゃん、と電話を切り、どっかりとソファに身を預ける。
「チッ……貧乏人が」
５００万円。一般家庭の年収にも匹敵する額を、鼻で笑う。
棚に収められたヴィンテージワインの栓を抜き、グラスに開ける。
「……柳瀬くん、君にはまだまだ、治療を続けてもらうよ」
――あの患者とその家族は、実に扱いやすい。
二度と動かない足を、『動く可能性がある』とニンジンをぶら下げ、尻を引っぱたけば……いくらでも新薬を買っていく。疑問も持たず、目を輝かせ……感謝さえ浮かべながら。
そこから得た臨床データを高値で製薬会社に売れば、また利益に繋がる。
利益が、利益を産んでいくのだ。
「くはははは っ……!!　これだから、医者はやめられんわ……！」
欲望にべたついた、醜い笑み。
ワインを、再びグラスに注ぐ。
「……躊躇い無く殺せるクズで安心したよ」

「!?」
院長は、驚きにグラスを取り落とした。
ワインが絨毯に零れ、黒い染みが広がる。
「美香は、私のモノになったんだ」
その染みは、零れたワインの量とは釣り合わないほど、その面積を広げ……
「美香の足は、医学ではもう治せない……それはまぁ、仕方ない」
床一面を黒く染め上げ、その色合いをより濃くしていく。
「でも」
院長は、異常な光景にガタガタと震える。
「それを隠して、美香を縛り付けるようなブタ野郎は、許さない」
床一面の闇の中から、『甲冑』に身を包んだはやてが、姿を現した。
「死んでもらうよ」
ビキュンッ!!
院長がつい先ほどまで座っていたソファとデスクが、真っ二つに両断される。
「ひいいっ……!」
後ずさり、どんっ……と、棚に背中をぶつける。
目の前に現れた化け物は、絶対零度の殺意を撒き散らしながら、真っ直ぐに歩を進める。
「ま、待ってくれ……!!」
ざくざくと、辺りの物を切り刻みながら迫る闇に、命乞いを始めた。
「金をやろう！　一生遊んで暮らせるだけの、金！　い、いや、宝石でも、マンションでも、好きなだけ……！」
ぴたりと足を止める。
脂汗をだらだら垂らしながら、安堵の表情を浮かべる。
「……お前には、それしか無いんだな」
深い哀れみを浮かべた……まるで、養豚場の家畜でも見るかのような顔。
「……へぁ？」
それが、院長がこの世で見た、最後の光景だった。

……

「……」

はやての目の前で、引き千切られた五体がずぶずぶと闇に沈んでいく。

今日は、楽しむような気分では無いらしい。

「……はぁ」

やれやれ、とでも言いたげなため息を残し、ずぶずぶと自らも闇の内に沈んでいく。

残されたのは、主を失った豪奢な部屋だけだった。

◆◆◆◆

「……さん、姐さん」

ゆさゆさと身体を揺さぶられ、回想から引き戻された。

「あ、ああ、悪い。何だ？」

聞いていなかった。

「新しい先生が来る、って話」

「ああ、その話か……んで、何て人なんだ？」

美香は、チョコアイスをパクつきながら、

「石田先生、って言うんだって！」

「えー……」

実に聞き覚えのある名前を、告げた。

# A’ s編　第八話

主が出払い、無人となった八神家。
その玄関口に、雲のような闇が蠢く。
……蒼炎の不死鳥に飲み込まれた瞬間に、闇の書の自動防御プログラムによって発動された、脱出用の転送魔法。
――どさっ
そこから排出されたのは、真紅の頭髪が目を引く、小さな人影。露出した細い手足の輪郭から、それが少女であると判別できる。
「……、あ、！」
投げ出された衝撃で、少女は僅かに呻く。戦闘中でさえ、一言も発することが無かったというのに。
その身を包むのは、簡素な衣服と……既に原型を留めない、闇色の鎧。
蒼炎の破壊力は、鎧の耐久力を遥かに上回っていたらしく、飲み込まれたほんの一瞬でほぼ全損していた。
そのボロボロになった鎧が蠢き、しぶとく再生を試みる。が、
――ゴウッ……!!
蒼炎の残滓が、その闇を完全に吹き散らした。
それによって完全に焼失してしまったのか、もう再生する気配は無い。
「う……？」
倒れたままの少女の瞼が、僅かに開く。寝ぼけているように胡乱だった瞳は、次第に焦点を結び……確かな理性の輝きを宿した。
「アタシ、は……？」
頭の片隅に、ヘドロのようにこびりついた記憶を閲覧する。
――目の前で命乞いをする、敵兵の生き残り。
戦の勝敗は、既に決していた。
僅か5人と侮った数百の敵兵は、目の前の士官を残し、無残な肉片に姿を変えた。

――自分の傍らには、一冊の本を携えた人影。
彼が、命令を下したのだ。『殲滅せよ』、と。
殺す必要なんて無かった。ただ、リンカーコアを奪ってしまえば、用は無い筈だった。
一人殺してしまう度に、抵抗した。だが、その度に……
――どろどろと、粘りつくような闇が身体を覆う。
こうして、闇の契約の強制力で、意思を剥奪されてしまう。
――腕が、自分の意思とは関係無く、得物を振り上げ……
これは、誇りを賭けた戦ではなく、飢えを満たすための狩猟。
自分達は、誇りある騎士ではなく、蒐集の道具。
――それこそが、闇の書。
「そうだ、アタシは……！」
がばっと、一気に起き上がり、自分の身体を見渡す。
己を拘束する鎧は、見当たらない。
見慣れない、自分の肉体が直に空気に触れていた。
「……うそ」
あの忌々しい鎧が、無くなっている。
鎧……闇の呪縛から逃れることが出来るなど、思いもしていなかった。
「逃げなきゃ……」
とはいえ、それも……再びあの闇に沈められてしまったら意味が無い。精神は、再び闇に封印され……
「奪われるのは、もう嫌だ……！」
人格、記憶、尊厳、絆……そして、名前。
その全てを、闇に……ひいては、歴代の主に奪われてきた。
闇の呪縛が解け、それを見咎める主がいない今こそが、最大の脱出の好機なのだ。
「……」
一瞬、今代の主の顔がちらつく。
憎悪に染まり淀んだ瞳。血に愉悦を感じる歪んだ笑み。
それだけを見れば、歴代の主と共通。

だが、慣れない酒に酔い潰れるなど、人間味のある一面もある。
それでも、今はまだ、本来の人格を保っていようとも……
「あいつだって、いずれは……」
僅か9歳の女の子。哀れに思う気持ちも、無くは無い。
「アタシたちのことを……」
次に浮かんだのは、三人の『仲間』のことだった。
顔と名前は、忘れて久しい。
どのような経緯で、闇の書に組み込まれてしまったのかも忘れた。
ただ、『仲間である』という曖昧な確信だけが、単独での逃亡を僅かに躊躇わせた。
「……くっ!!」
しかし、闇への恐怖がそれらを振り払った。
――ばんっ！
ドアを開け放ち、方角も考えず……素足のまま、夜の道へ飛び出す。
――ただ遠くへ。
夜の闇、物陰、暗がり……まるでそこから、今にも自分を捕らえようとする手が伸びてくる錯覚を覚えてしまう。
――ただ遠くへ。
この世界に関する最低限の知識は、召喚の際に与えられている。
逃げれば。逃げてしまえば。
「どうにでも、なる！」
――ただ、遠く。闇の魔手が届かぬ所まで。

◆　◆　◆　◆

俺は現在、アースラのラボルームで待機している。
先に収容されたなのは……あっちは、蒼炎の効果なのか、問題ないレベルにまで持ち直した。当面の間は絶対安静だが、命に別状は無い。
でも。
「……レイジングハート」

目の前、何かの容器に入る相棒に声を掛けるも、返事は無い。
ただ沈黙し、これ以上壊れないよう、神経質なまでに保護されている。
それもそうだ。何せ、全機能の８割が破損したんだ。
人格ＡＩと、活動記録……記憶が残っていたのが不思議なくらいの損傷なんだから。
放っておいたら、勝手に自壊していってしまう。
「……」
ひび割れて……今にも砕け散りそうな状態。
「……すまない」
全部、俺の力不足が招いたことだ。
己の技量を見誤って……このザマだ。
今回は運がよかっただけで……
「……くそっ!!」
――ガンッ!!
苛立ちのまま、壁を殴る。
頑丈な壁は、僅かに軋むだけに終わる。
「何が、ＡＡＡランクだ！」
いい気になっていた。
『稀有な才能』だの、『百年に一人の逸材』だの持て囃され……その実、それが満更でもなかった馬鹿な自分をぶん殴ってやりたい。
――ガンッ!! ガンッ!!
二度、三度……己の身を痛めつけるためだけに、拳を叩きつける。
「何が、なのはを守る、だ！」
皮膚が裂け出血し、筋繊維が千切れ、骨に亀裂が入り……だが、すぐに治る。
あの後、あの蒼炎の力が無かったら……なのはは、殺されていた。
そして、不死身の俺だけが生き残るという醜態を晒していたに違いない。
――ガゴンッ!!
「肝心なときに何も出来ない俺が、どのツラ下げて……!!」

堅牢と思い込んでいた防御は、紙くずのように破られた。
必殺と思い込んでいたカウンター技は、かすりもしなかった。
――ゴキンッ!!　バキッ!!
腕が疲労で垂れ下がるまで、何度も、何度も拳を振るう。
己の無力を……己の愚かしさを、少しでも、この身に刻み込むために。
「くっそがあああああああああああああああああああああああ!!」
――――――……ゴゴンッッ!!
思いっきり額をブチ当てた壁が、とうとう完全に陥没した。
「はぁ、はぁ……!」
どろっとした血が額から流れ、顔を濡らす。
その傷も、即座に塞がる。
「くそ……」
脳震盪でも起こしたのか、立っていられなくなった。
「……俺、こんなに弱かったんだな……」
自分への怒りが過ぎ去り……途方も無い無力感が、全身を苛む。
「……桃子達に、何て言えばいいんだよ……!」
ぐしゃっと髪を掴んでも、答えは……いや、もう出ているのかもしれない。
「もっと俺に、力があれば……!!」
そう。俺に、もっと力があれば。
チビ騎士の武器……あの弾丸の出力に負けない力があれば。
カウンターを弾き返されないだけの力があれば。
なのはを、レイジングハートを守れたんだ。
「くそォッ……!!」
何十分かしただろうか。
壁に背を預けて座り込んでいた俺の耳に、ドアのエアロックが解除される音が届く。
「入るぞ」

ドアが開き、クロノが入ってきた。
「……よう」
一ヶ月ぶりだが、今は旧交を温めているような気分じゃない。
「……気は済んだか？」
半眼で、陥没した壁を見やり言う。
「……」
答えられず、黙り込んでしまう。
八つ当たりで艦内を破壊して……情け無いったらありゃしない。
「まぁいい。それより、艦長室に行くぞ」
「……ああ」
のっそりと、鉛のように重い身体を引きずり起こす。
そして、クロノの後を追った。
艦長室には、リンディさんとエイミィが待っていた。
「秀人君、久しぶりね」
「おひさー」
にっこりと笑うリンディさんと、ひらひらと手を振るエイミィ。
「……久しぶり、です」
そして、挨拶もそこそこに着席する。
「まず、秀人君。あなたを襲った集団についてです」
部屋の照明が落とされ、モニターが表示される。
そこに、古ぼけた映像記録が映る。
漆黒の鎧を身に纏う、四人の騎士。そして、一冊の本。
「S級指定ロストロギア……『闇の書』」
S級……つまり、A級のジュエルシードよりも、ランクが上。
「この騎士達は？」
俺達を襲った奴も、確かに映っている。あんなのが、あと三人もいるのか……
「この四人は、闇の書を守護する戦闘プログラム」
「プログラム……？　にしては、随分と……」
どう見ても、機械の思考じゃなかった。
「プログラムとは言っても、0と1で作られているわけじゃないわ。

古代ベルカ……過去に存在した実在の人物を再現して、使役している」
なるほど……思考は生身の人間ってことか。
「これまでも、何度か確認していたのだけれど……」
「僕たちが到着するころには、とっくに姿をくらましていた」
ぶすっと、忌々しそうに口にした。
「あいつら、なのはからリンカーコアを抜きやがったけど……そう簡単に取り出したり出来る物なのか？」
第一、奪ってどうするって言うんだ。
「それが、闇の書の最大の特徴だ。リンカーコアを蒐集し、６６６の頁を埋める。その頁には、蒐集した魔導師が使える魔法が記され、それを使用できるようになる。
……一切の制限無く、万全のパフォーマンスで」
「……反則じゃねえか」
普通、魔法の習得には割かし時間が必要だ。
習得とは、『発動できる』というだけじゃない。ミス無く発動でき、コントロールの失敗が無くなって、初めて習得した、と言える。
それを、ただリンカーコアを奪うだけで……？
つまり、その闇の書の主は、なのはが使える魔法をそっくり丸ごとコピーしやがったってことか。
「だからこそ、ロストロギアに指定されている」
「……でも、それってＳ級に指定される程か？」
それだけ聞くなら、ただの魔法の記録メディアじゃないか。蒐集しなければ、ただの本。蒐集したとしても、それを使えるのはたった一人。
Ａ級のジュエルシードのほうが、よっぽど危険だ。
「もちろん、続きがある。
闇の書の別名は、『呪いの魔導書』。主となった人物の人格を侵食し、破壊衝動・殺戮衝動で支配する」
どんな聖職者であろうとも、と付け加える。
「そして、６６６の頁を埋めた闇の書は……破壊衝動のままに暴走し、

蓄えた膨大な魔力を炸裂させ、周囲一体を消し飛ばし……主もろとも、消滅する」
最後に表示された映像は、瓦礫さえ残らなかった死の荒野。地図の縮尺が正しければ
……東京都と同規模の都市。それが、丸ごと。
それでいて、これは被害が少なくて済んだ方らしい。じゃあ、被害が多かったら……と考えたら、空恐ろしい。
……いや、待てよ？
「待て待て。消滅するって……それじゃあ、何で現存するんだよ」
それも、ロストロギア指定されるほどの昔から。
「そこが、この闇の書の厄介な所だ。たとえ、発動前に撃破に成功したとしても……数年の後に、また新たな主の元へ向かう」
「本来、この闇の書はキミが言うとおり、偉大な魔法を後世へ伝えるための記録媒体だった。その知識を得るに相応しい者かどうかを書が自身で判断し、守護騎士達が簒奪から守り、破損したとしても、自らのバックアップ機能で再生する」
なるほど……聞くだけなら、優れた品物だ。
「だが、何代目かは知らないが、闇の書を改変してしまったんだ」
「書の自意識……管制プログラムを封印し、守護騎士を戦闘プログラムへ変換し……再生機能は、終わらない悪夢の火種にされてしまった」
その結果は、聞かなくても分かる。
「主を得ては暴走を繰り返し、倒しても倒しても蘇る……呪いの魔道書に」
ああ……確かにそりゃS級だわ。
使い減りしない上に、自らの意思で行動するジュエルシードみたいなものじゃないか。
ったく、どうしてこう常識外れの輩ばっかり出てくるんだよ
「……守護騎士の一角を退けるキミも、大概非常識だがな」
俺だって、ワケわかんねぇよ……
「つーか、あの弾丸みたいなのは何なんだ？

使った途端、いきなり出力がハネ上がって……」
「弾丸……？」
ああ……アースラの局員達は、まだ交戦したこと無かったんだっけか。
「実は……」
俺は、チビ騎士との戦いの様子を……蒼炎で撃退した部分まで、詳しく説明した。
そして、クロノ達が驚愕の表情を浮かべる。
「カートリッジ・システム……!!」
「……すまん、説明してくれ」
正直、勝手に驚かれても理解できない。
「基本的に、リンカーコアは一定の魔力しか運用できない」
最大魔力量が１００なら、上限は１００。
その中から、５や１０をやりくりするのが、普通の魔法戦闘だ。
「だがそこに、事前に容器に貯めておいた魔力を『解凍』することで、出力の増加を図るのがこのシステムの特徴だ」
「便利じゃないか」
素直にそう思う。事前に、予備タンクを外部に用意しておけるなら……イザというとき、決め手になるかもしれない。
「けれど、普及していない。なぜだか分かるか？」
出力の一時的なブースト……ニトロか。
一時的に爆発的な出力を得られるが……
「後遺症が残る……で、合ってるか？」
本来なら、ガソリンの爆発する温度しか想定していないエンジンの素材は、規定外の熱で変質し……二度と元に戻らない。
「使えるなら、僕が真っ先に使っている」
魔力量はなのは並みながら、出力が低いクロノならではの、切実な感想だった。
「普通の人間より、遥かに頑健な身体を持つ守護騎士だからこそ、使えるシステムだ。
……危険極まりない、物騒なシロモノだよ」

……へぇ。
つまり、普通より遥かに頑丈な肉体があれば、いいわけだな？
「リンディさん、頼みがある」
いきなり話を振られたリンディさんは、何も言わずに俺を見つめる。
「確か、前回のプレシアの件での報酬は、まだ保留してあった筈だ」
俺は、嘱託魔導師……つまりは傭兵みたいなものだ。
管理局の提示する報酬で、特定の仕事をこなす。
俺達は、半ばなし崩しでその立場になったから頓着していなかったが、あの件での俺達への報酬は、日本円にすれば一軒家がポンと一括で買えるくらいの金額になるらしい。
主犯の確保・説得に始まり、傀儡兵の無力化、動力炉の封印、ジュエルシードの封印と、自分で言うのもアレだが八面六臂の仕事ぶりだった。
現実感の無い金額を提示され、あの時は尻込みしていたが……今こそ、必要な時だ。
「デバイスを用意して欲しい。条件は、一つ……」
普通のデバイスじゃ駄目だ。俺の魔力の出力に耐えられて、尚且つ、魔力を高速運用できるだけの処理能力を持った……レイジングハート並みのデバイスが最低条件。
そして……
「……おい、まさか」「ちょ、ちょっと……秀人君、本気？」
クロノとエイミィが、顔を引きつらせる。
信じられない、という思いと、コイツならやり兼ねない、という確信が、ごっちゃになったような表情だ。
「カートリッジシステムを、搭載してくれ」

# A’s編　第九話

瞼に差し込む、人工的な光。
眠る邪魔になるそれを鬱陶しく思いながら、つらつらと記憶を探る。
母さん達と食事をして……お茶が無くなったから、秀人さんと買いに行って……
「あー……買って無いや」
ポケットに入れたままの千円札を探るが、何故かポケットが無い。というより、着ていた服じゃなくなっている。
「……んー？」
何か、大事なことを忘れているような……
お茶を買いに行って、それで、それで……
「あああああっ!!」
思い出した!!
がばっと跳ね起きる。そして、
「あ、いたたた……!!」
胸の痛みで、ベッドにうずくまる。
「って、ここは……？」
きょろきょろと周囲を確認する。真っ白いベッドシーツに、仕切りのカーテン。雰囲気としては、学校の保健室に近い。いや、ここは……
「……アースラ？」
「おや、目が覚めたのかな？」
カーテンが開き、見覚えのある顔が覗いた。
「あ……お久しぶりです、オペル医務官」
プレシア事件でも世話になった、オペル医務官だった。やっぱり、アースラに運び込まれたらしい。
「調子はどうだい？」
ゆっくりなら、身体を動かしても痛みは走らない。ただ、胸の奥にぽっかりと穴が空いたような喪失感があって……試しに、ダメ元で魔

力を探ってみるかな。
リンカーコア、起動……っ!?
「うッ……!!」
再び、刃物で切り刻むような痛みが全身に広がった。
「……最低、最悪です」
……やっぱり、ダメだった。
「その痛みの原因は、わかっているね？
リンカーコアの強引な摘出……それもあるが、」
「私自身の砲撃魔法、ですよね」
……キレていたとはいえ、さすがにやり過ぎた。
「あの……秀人さんと、レイジングハートは？」
倒れてしまってからの記憶が無い。こうしてアースラに運び込まれているということは、敵を撃退したんだろうけど……嫌な予感がする。
念話も使えないし、不便なものだ。
「……それに関しては、後にクロノ執務官から説明がある。それまで、安静にしていなさい」
「はい……」
隙を見て、こっそり探しに行こうっと。
「ああ、そうそう……ちょっと手を出してくれるかな？」
「？　……はい」
言われるままに、手を出す。
――がちゃんっ
「……はい？」
ええと……何コレ、腕輪？
「ちょっとした計測器みたいなものだから、心配しなくていいよ」
何故か申し訳なさそうに苦笑し、ファイルを纏めて席を立った。
時計が一分経ち、少しの間なら、戻ってこないと確認する。スリッパをつっかけ、ベッドを降りる。秀人さんはどこかなー……
「……ん、あれ？」
自動ドアが開かない。小癪にも、施錠されたらしい。

「あーあ、困った困った……」
なーんてね。ドア横に、非常用レバーが隠してあるってちゃんと知ってるんだから。
がきょんっ、とレバーを倒す。これでエアロックが解除されて、手動で開閉できるようになる。
「楽勝楽勝―」
と、ドアの敷居を跨いだ途端……
――ビーッ!! ビーッ!!
「うわっ!?」
けたたましいブザーが腕輪から鳴った。
『警告します。要監視者には、そこから先への出入りが許可されていません』
まさか、この腕輪って……!
『警告します。要監視者のあなたには……』
監視用の、手枷だ!
隣の部屋に詰めていた大勢の局員がわらわらと……!
「確保ーーーーーーーー!!」「また嘱託がやらかしたぞ!」「俺達の余暇が……!!」「大人しく寝てろ!」「明日の定時上がりが懸かってるんだ! 捕まえ……じゃなくて、保護しろおおおお!!」
思考ダダ漏れで、ゾンビのように群がってくる。
っていうか、誰が爆弾娘よ!?
「残業代出るならいいじゃない!」
――ビキッ……
「あ、あれ……?」
地雷を踏んだっぽい感覚が……
「「「「「残業代を使う時間が無ければ意味が無いんじゃーーーーーーー!!」」」」」
ぴったりハモった!
「来るなー!」
もう何のために逃げているのかも、すっかり忘れて逃亡する。
が、スリッパ履き＋痛みでダッシュが効かず、もたついているうち

に追いつかれてしまった。
――ぎゅるるるるるっ！
「むがー！　むがー！」
あっという間に簀巻きにされ、打ち上げられた初鰹のように担ぎ上げられる。
「丁重かつ、厳重に扱え！　隙を見せたら噛み付いてくるぞ！」
わたしは動物じゃないー！
「むもももー!!」
その抗議さえ封じられ、わっせわっせと病室に強制送還。
っていうか、『定時に上がれるぞ』なんてエサをぶら下げて尻をひっぱたくような真似をするのは、多分……！
――げしっ！
「……ぶはっ!!」
身体を起こした勢いのまま、私をバインドする一人に蹴りを見舞う。しゅるっ、と、口元を縛るバインドが消えて、言葉が自由になった。
「ひ、一人やられたぞ!!」「だから、油断するなと……！」
――すううぅっ……！
思いっきり胸を反らし……肺の隅から隅まで酸素を吸入し……！
「クロノオオオオオオオオオォォォォ!!　ハゲろおおおおおおおおおおおお!!」
アースラ全体に響き渡るような大声で、クロノに呪いを掛けてやった。
「なんということを……！」「ただでさえ、ストレスを溜め込みやすいクロノ執務官に向かって……」「むごい……」
「ハゲろ！　十代後半で生え際の後退に悩め！　２０代前半でバーコード状にハゲろ！　三十代で落ち武者にムグググググ！」
再び……というか、より厳重に口元を二重に拘束された。
「「「「「「「「「そーれ！」」」」」」」」」

ぼふんっ、と医務室のベッドに投げ込まれる。
ばしゅん、と、今度こそ完全に施錠されてしまった。
「むー……」
さっきは気付かなかったが、部屋の隅に置かれた籠の中には、私の服が畳まれた状態で入っていた。洋服の上に、私の携帯電話が鎮座している。
何気なく取り、電源を入れ……
――ぶるるるるっ！
「……うわぁ」
電源を入れた途端、大量のメールが着信し、留守番電話が数十件表示された。
いちいち全部見るのは時間が掛かりそうだから……電話帳から、高町家の電話番号を呼び出す。
――プルがちゃっ
早っ。
『もしもし、なのは!?』
「あー……うん、そーです」
『心配したんだよ!!』
姉さん……すっごい涙声だ。
明日は月曜日で、普通に翠屋の営業日なのに、寝ずに待っていてくれたんだ。
罪悪感がひしひしと……
「ごめん……いろいろ、トラブルがあって……」
なおさら、本当のことを言うわけには行かない。
「でも、大丈夫。秀人さんも無事だから」
多分、ユーノくんも今頃アースラに召集されている頃じゃないかな。
「ごめんね。せっかくの日に……そういうわけだから、今日はもうそっちには戻れそうに無いや」
『そっか……でも、無事ならそれでいいんだ』
ほーっ、と、安堵の息をつく姉さん。

「うん……うん……それじゃ、また」
その後、母さんと兄さんにかわってもらい、同じような説明をして、電話を切った。
電話を切った時点で、午前二時。こりゃ、明日は学校行けないなぁ……
「あーあ……」
携帯電話を籠に放り、ベッドに倒れこむ。
数時間寝ていたとはいえ、深夜にまで起きているほど、不規則な生活は送っていない。
シーツを被り、目を閉じる。
私の身体はまだ休息を欲していたらしく、あっという間に眠りに落ちていった。
◆◆◆◆
小部屋を借りて、ユーノと向かい合う。
「秀人、それ……本気？」
アースラに到着したばかりのユーノは、そりゃあもう凄かった。
結界に気付かずにいたことをかなり悔やんでいて……えらい勢いで号泣して。
あんな巧妙な結界、普通は気付けないし……第一、あれは自分で何とかできなかった俺の責任だと言っても、いやいや、僕の責任だ……とユーノも譲らなくて、結局クロノが場を収めてくれるまで、そんな押し問答が続けられていた。
そして落ち着いた今、俺は、自分のデバイスを持つことを明かしていた。
「もちろん、本気だ」
なぜ真っ先にユーノに教えるのかと言うと……
「レイジングハートとの契約の解除、どうすればいい？」
俺のアカウントの削除のためだ。
「レイジングハートは、そんなこと望まないと思うよ……？　それに、まだまだ容量には余裕があるんだし……何も、契約を解除しなくても」

確かに、レイジングハートの容量は大きい。二機分の思考ＡＩを入れても、ありったけの術式を入れても、まだ余るくらいに。でも……
「処理速度は、一人のマスターしか想定していない」
そもそも、以前フェイトに指摘されたが……効率が悪いんだ。
「この前、気付いたんだ。レイジングハートのレスポンスが、少しずつ……でも、確実に悪化してる」
「……」
ユーノが、押し黙る。俺の言わんとしていることに、思い至ったようだ。
「限界なんだよ。デバイスの共有は、もう……」
それが、少しの誤差でも。その誤差が、生死を分けることになる。実戦ではよくあることだ。俺なら別にいい。でも、もしなのはだったら……そんなこと、それこそ、レイジングハートは望まない筈だ。
そもそも、共有するっていうのは俺達が未熟で、半人前だったから可能だった事だ。
だけど、既になのはは一人前の魔導師と言っても差し支えない。するだけ無駄……それどころか、害にしかならない。
それでもこの一ヶ月、俺のアカウントを残しておいたのは、襲撃が無かったからこその平和ボケと……レイジングハートの我が侭だ。
「……契約の解除には、デバイス側からの認証が絶対に必要なんだ。ストレージなら、そんなに難しくは無い。でも、レイジングハートはインテリジェントデバイスだから」
……どっちにせよ、レイジングハートとは話をつけないとな。
「……明日の朝、なのはも連れて行く」
「そうだね。なのはも立ち会ったほうがいいだろうし」
小部屋を出て、仮眠室に向かう。
「はぁ……」
その道中で、ため息が出てしまう。
恋人に別れを告げる前って、こんな気分なのかねぇ……彼女なんかいたこと無いから、わかんねーけど。
「怒るだろうなぁ……念話の周波数をチューニングして、ハウリ

ング攻撃されるかも……いや、マルチタスクを強引に起動させられて、頭痛地獄か……？」
どう転んでも、いい展開にはならないだろう。
でもまぁ、別れ際のビンタくらいは、覚悟しておこう。
◆　◆　◆　◆
『そう……闇の書が現れたの……』
クロノは、執務官としての権限を利用し、裁判を控えて拘留中のプレシアと面会を行っていた。
モニターに映るプレシアは、すっかり憑き物が落ち、柔和な雰囲気を漂わせていた。
のど元に通された、呼吸器系へ直結するチューブは痛々しいが、この一ヶ月の集中治療のおかげで、即座に生命に関わるような状態は脱した。
「拘留中で、刑も確定していないところを済まない。だが、どうしても貴女の協力が必要不可欠なんだ」
とうとう確認された、魔力変換資質『結合』を持つ魔導師、吾妻秀人。
その、特異すぎる魔力に対応した専用デバイス兼、初のミッドチルダ式カートリッジシステム搭載試験機。
プレシア程の科学者の力を、使わない手は無かった。
もちろん、プレシアには拒否権があるのだが、そんな選択肢は初めから除外されている。
『構わないどころか、願ったり叶ったりよ。
初めての技術提供が、秀人のデバイス作成だなんて……それも、兼ねてから提唱されていた、ミッドチルダ式カートリッジシステム。元科学者として、これ以上になく魅力的な研究だわ』
プレシアの、ひいてはテスタロッサ一家にとっての、大恩人。その恩に、報いないことなどありえなかった。
『機材と、秀人のバイタルデータを用意してもらえるかしら。すぐにでも始めさせてもらうわ』
「早速、手配しよう」

手元のキーを操作し、機材とデータの手配をする。
これで、準備は整った。
「こちらでも、メカニックマイスターが研究を始めている。そのデータも、纏まり次第そちらに送る」
『ええ。……ねえ、クロノ執務官？』
「何か、足りないものでも？」
『いえ、その……』
先ほどまでのキレのいい態度から一変、妙に腰が引けている、弱気な態度を見せる。
『……フェイトは、元気かしら？』
別の場所で裁判を待つ、娘の心配だった。負い目がある反面、やはり気になるらしい。
クロノは、キーを叩く手を止める。
「ああ。それはもう……」
遠い目をして、この一ヶ月の苦労を思い出す。
思い出す。
思い出す……
「手に余るくらいだ」
その並々ならぬ苦労を感じ取ったのか、プレシアは項垂れた。
『ごめんなさいね……どんな様子？』
「最近は、幾分大人しくなっているんだが……」
今現在のフェイトの様子を思い出し……途端に眉根を寄せる。
「……アレは、いい傾向なのだろうか」
『……本当に、手間を掛けて申し訳ないわ』
と、そこで面会時間終了のチャイムが鳴った。
「……では、頼んだぞ。プレシア・テスタロッサ」
『ええ、クロノ執務官』
ぷつんっ、とモニターが消える。
「秀人のデバイス、か……」
Ｓ２Ｕを懐から取り出し、物思いに耽る。
「秀人の出力からすれば、当然のことなんだろうな」

ぐっと、知らず知らずのうちに、歯を食いしばっていた。
あれだけの魔力量と資質を持つのなら、一般に流通しているモデルでは、到底スペックが追いつかない。専用機を得るというのは、至極当然の流れだ。
専用機を得て、その魔力を使いこなせるようになれば……秀人の力は、飛躍的に上昇するだろう。
「……僕は、守護騎士に勝てるだろうか」
それに比べて、自分は……
――――キンッ
S2Uを起動。
「僕は……」
一応は、これも自分の専用機だ。自分の足りない出力を十二分に活用し、迅速かつ正確な運用を可能にする……自分にとって、長年を共にしてきた相棒。
だが、それも……敵の守護騎士達の圧倒的な白兵戦能力、カートリッジシステムによる爆発力……それらを相手に、どこまでやれるのか……
「僕に、もっと出力があればな……」
父に関しては、データが不十分なために何とも判断し難いが……母は。
衰えぬ膨大な魔力と、超大規模の魔法の展開を可能にする、正真正銘の怪物だ。
だが、自分に遺伝したのは、魔力量のみ。出力は、十人並みだ。どんなにガソリンタンクが大きかろうと、エンジンパワーが足りていないのであれば、持ち腐れだ。
二人の師匠に鍛え上げられ、出力に依存しない戦い方を習得したものの……
「秀人。僕は……いつまで、君の隣で戦える……？」
それは、クロノが執務官になってから初めて漏らす、弱音であった。
◆◆◆◆
翌朝、私のいる医務室に、秀人さん、ユーノくん、クロノ、エイミィ

がやってきた。
「悪いな、朝っぱらから大勢で」
「いいよ。丁度、起きたところだし」
ベッドからおりて、スリッパを突っかける。
「……あれ？　レイジングハートは、一緒じゃないの？」
てっきり、秀人さんが持ってるんだと思ってたけど……
「……」
途端、秀人さんが険しい表情になった。
「……まずは、来てくれ」
「？　……うん」
ユーノくんも、何だか所在なく落ち着かない。
「……じゃ、行こうか」
「うん」
秀人さんと手を繋ぎ、廊下を歩き出す。
「……？」
でも、なんだろう。いつもの秀人さんに比べて、何か、違和感がある。
「……ここだ」
連れて行かれた先は、ラボルーム。プレシア事件のときにも、レイジングハートのメンテナンスをしてもらったりした所だ。
ドアを開けて、中に入る。
「レイジングハート」
入ってすぐ、レイジングハートがいた。
『……』
「どうしたの？」
が、気配が感じられない。
「厳しい戦闘の所為で破損して……休眠させてるんだ。今、起こしてもらうから」
秀人さんが目配せし、クロノがレイジングハートに繋がった機械を操作する。
そして……

『……ここは、アースラ……ですか』
途切れ途切れ、時々ノイズ交じりの声で、レイジングハートが話し始めた。
『……！　秀人、秀人!?』
って、うわぁ!?　ど、どうしたの!?
「れ、レイジングハート、落ち着いて……!!」
びかびかと点滅し、異様なまでに興奮したレイジングハートを、なんとか落ち着かせる。
「私も、秀人さんも、ちゃんと無事だよ……だから、落ち着いて」
『……申し訳ありませんでした、マスター』
驚いた……こんなに慌てたのなんて、初めて見たかも……
「レイジングハート……」
秀人さんが、相変わらず険しい表情のまま話し始める。
『秀人……よかった。無事だったのですね』
「ねぇ、レイジングハート……あの後、どうなったの？」
『……それ、は』
もごもごと、言いづらそうに言葉を濁す。
「いいよ、話しても」
だが、秀人さんの了承を得て、あの後の状況を説明してくれた。
――敵の大将格が現れたこと。
――秀人さんの必殺技が、通じなかったこと。
――レイジングハートが、全損寸前まで破壊されたこと。
――なんとか、命からがら危機を脱したこと。
「……そんな」
……私が自爆した後、秀人さんは相当に危ない状態だったらしい。
「私が、あんな無茶をしたから……」
「違う。俺の力不足だ」
秀人さんが表情を変えないで、ばっさりと言う。
そうか……感じていた違和感の正体が、ようやくわかった。
秀人さん、今朝から一度も笑っていないんだ。
「レイジングハート、大事な話がある」

秀人さんが、改めて話を切り出す。
その言葉の響きからして、かなり重要な話。
『……今後の、敵への対策ですね』
レイジングハートは、話をはぐらかそうとしている。私には分からないけど……何かを察したのだろうか。
「違う」
『では、複合技のパターン変更でしょうか？』
「違う。話を、聞いてくれ」
『あ……ああ、一番大事なことを忘れていました。技全体の、魔力運用の最適化ですね。そうすれば、今度は敵に有効打を与えることが出来る筈です』
レイジングハートが、のべつく間無しにしゃべり続ける。その言葉の先を、言わせまいと。聞くまいとして……でも、秀人さんは、それを無視して、言った。
「契約を、解消しよう」
『……』
一瞬のうちに、沈黙する。
「……」
秀人さんは、もう何も言わない。
ユーノくんも、辛そうに俯いている。
『……嫌です』
「……その我侭で、なのはの身を危険に晒すことになっても……か？」
薄々、私も感じていた。
……術式の展開に、意思とのタイムラグが発生している。特に、私と秀人さんが、別々の術式を同時発動した際、それが顕著になる。
私でも気付くことに、レイジングハートが気付かなかった筈が無い。
『……嫌です』
レイジングハートが、そう繰り返す。
「……我侭を、言うな」
秀人さんの言葉にも。

『……嫌です』
ユーノくんの言葉にも。
「レイ、」
『絶対に、嫌です!!』
びりびりと、部屋中に反響するような大声を出した。
『私は、そんなに頼りになりませんか!?』
「違う、そうじゃない」
『私にはヒデトの資質を見極め、伸ばしていく義務があり、それが私たちの契約の筈です!』
「……俺の資質は判明した。あとは、俺一人でも伸ばしていける」
『魔法の発動補助は、どうするのですか!? 人一倍、術式の制御が下手糞な癖に!! カウンター技だって、私がいなければ自殺行為にしかならないのですよ!?』
暴言に近い言葉で、必死に言いすがる。でも、秀人さんは淡々と、それに返す。
「……俺の専用デバイスが、近いうちに製造される。術式の運用は、ソイツに任せるつもりだ」
『……!!』
……確かに、それは必要かもしれないけど……
「秀人さん……本当に、マスターやめちゃうの？」
レイジングハートは、私達の出会いの切っ掛けで……そのマスターであるということは、私達の大事な繋がりだった筈なのに……
「秀人。もう一度聞かせて。
……本当に、いいの？」
ユーノくんの念押しに、秀人さんは僅かに黙り……言った。
「……ああ。なのはを、危険に晒すわけないはいかない」
一瞬の油断が、命取り。それは、よく分かるけど……
「俺の分のアカウントを削除すれば、タイムラグは無くなる。何の問題も無い」
『問題ない、ですって……!?』
その一言に、もう一度レイジングハートが猛る。

より激しく、光が明滅し……
――翼を、形作った。
「……な」
クロノの驚愕をよそに、レイジングハートが自立的に飛翔し始めた。
ひゅん、ひゅん、と……助走をつけるように旋回し……
『この……わからずや!!』
――カコーン!
「ぐおっ……!!」
秀人さんの額に、クリティカルヒット。
「秀人……」
「うわぁ……」
超痛そう……
『馬鹿者! 大馬鹿者!』
二発、三発……秀人さんの頭に、体当たりを敢行する。
「い、いてっ……!! いてててっ!!」
気が済むまで秀人さんに暴行を加え……ぽすっ、と、秀人さんの頭に着地した。
『……何故、わかってくれないのですか』
光の羽根が『へにゃっ』としなり、人間臭く感情を表している。
『……認めましょう。確かに、もう共有は限界でした。マスターの力を発揮するには、私がマスターの専用機になるしか、ありませんでした』
そっか、やっぱり……レイジングハートも、気付いてたんだ。
『ですが……理屈では、割り切れないのです。私は、マスターのデバイスであるのと同時に、あなたのデバイスでも、ありたかったのです』
「レイジングハート……」
相棒の、可愛い我侭。
『……了解、しました。秀人のアカウントを、削除します……』
なんとかしてあげることは、できないだろうか。
「……まぁ、待て」

レイジングハートの奇想天外な行動に呑まれっぱなしだったクロノが、それを止める。
「秀人、君は肝心なことを説明していない」
え……？
「説明する前に、レイジングハートが……」
「言い訳をするな」
「理不尽だ……」
相変わらずの二人だった。
「エイミィ、説明を」
「はいはーい」
軽い調子で返事をするエイミィ。
最初から、エイミィが説明していれば良かったのに……と思ったけど、秀人さんの口から言わなければ、レイジングハートは絶対に納得なんかしなかっただろうし、仕方ないのかな。
「秀人君のデバイスは、インテリジェントデバイスになる予定なの」
ぴこん、と羽根が反応する。
やっぱり、辛いんだろうな。自分以外の誰かが、秀人さんに寄り添うのが。
「でも、今から思考ＡＩを１から構築していたら、時間がかかりすぎる」
……確かに、魔法の運用システム構築なんて、気が遠くなるような作業が必要だろう。
「だから、レイジングハートのデータを流用しようと思うんだ」
「え……それって、」
私に向かい、ぱちりとウインクを決めるエイミィ。
「言わば、レイジングハートの姉妹機になるわけだ」
『姉妹機……ですか』
「定期的にレイジングハートとデータのリンクを行い、システムの調整やデバッグを行う」
お、おおお……これって、かなりの名案なのでは。
「私と秀人さんは気兼ね無く魔法を使えるようになって、レイジング

ハートは、姉妹機を通じて秀人さんとの繋がりを保てる……ってこと？」
「イグザクトリィ!!」
　びしっ！　とサムズアップ。
「すごいよエイミィ！　見直した！」
「えー？　えへへ、そう？」
「うん！　クロノの補佐官がこんな軽い人なのは何でだろうって、いつも不思議だったんだけど、これで納得だよ！」
「……持ち上げてから、しっかり落とすんだねー」
　……あれ？　何で沈んでるの？　褒めてあげたのに。
「なのは……言葉というのは、時として思わぬ威力を発揮するから、気をつけよう？」
「？　……うん、わかった」
　何故かユーノくんに窘められてしまった。
「ね、レイジングハート。そうしようよ」
『……条件が、一つあります』
「何だ？　言ってみ」
『私の姉妹機の命名は、私に任せてください』
　自分の写し身であり、大事な人を守る盾。その名前を、自分で付けたいのだと言う。
「デバイスの完成には、まだ時間が掛かる。何せ、ようやく設計が始まったばかりだからな」
「……いつごろ？」
「高町なのは。君のリンカーコアが、再生し終える頃になるだろう。……オペル医務官の見立てでは、あと四ヶ月といったところだな。
　それまで、じっくりと考えておくといい」
　四ヶ月、かぁ……
「その間にまた襲撃があったら、どうしよう？」
　正直、秀人さん一人じゃあ、大変だ。
「闇の書の守護騎士達が蒐集を行えるのは、一人につき一回。一度蒐集された魔導師の元に現れたという記述は無いから、安心していい」

なるほど。
「でも……アースラのみんなが戦っているときに……」
じろり、と、クロノが私を睨む。
「では、魔力を失った君に、何が出来る？」
「う……」
キツい一言が、突き刺さる。
私には、戦う以外に脳が無い。デスクワークもできなければ、機材を活用することもできない。
大人しくしているのが、一番いい。
「なぁ、俺は？」
秀人さんが控えめに挙手し、聞く。
「君のリンカーコアは、通常の魔導師のものと比べて特異だ。高町なのはを襲ったのと同じやり方では、摘出は不可能だろう」
それじゃあ、ひとまずは襲撃される心配は無いってこと？
「闇の書の主が、それを可能にするだけの力を手に入れるのが先か、秀人のデバイスが完成するのが先か……どちらにせよ、通常通りの生活を送っていてくれればいい」
四ヶ月……猶予があるような、無いような。
「……護衛も付けるから、心配はいらない」
……何故か、微妙な顔をしながらそう言った。
……まぁ、気にしなくていいや。
「かっこいい名前、付けてあげようね」
『当然です。私の、妹になるのですから』

……秀人さんのデバイス完成まで、あと四ヶ月。

これが、後に『闇の書事件』と呼ばれる物語の、プロローグだった。

# A’s編　第十話

ここは、とある一室。
広さは八畳ほど。窓は無く、扉には、厳重な対衝撃・対熱・対魔法処理が施されている。
俗に言う拘置所なのだが……この一室の住人は、そんな状況などお構い無しに、うきうきと調子っ外れな歌などを歌っていた。
くるくると、無駄に洗練された無駄の無い無駄なターンをしながら、部屋の一角へ移動していく。
清楚なワンピースを可憐に翻しながら、調子っ外れの歌は続く。
ニコニコと、子供の無邪気さを百倍濃縮したような笑顔を浮かべながら。
……よほど、気に入ったらしい。
ぱこん、とその箱を開ける。
目に見える面には、奇妙な覆面を被った……俗に、『ヒーロー』と呼ばれる格好のものが、印刷されていた。
八畳間に置かれた唯一の娯楽……テレビと、ＤＶＤデッキ。
その脇には、大量のＤＶＤが積み上げられていた。
アニメであったり、特撮であったり、タイトルはとにかく多いが、唯一の共通点は……その全てが、男児向けである、ということだった。
歌詞を端折りつつ、トレイにディスクをそっと置き、読み込みを開始させた。
しゅいいいいいん、かりかりかり……と、使い込まれたＤＶＤプレイヤーがディスクを読み込み、タイトルを映し出す。
「……」
わくわくしながら、本編再生のボタンを押した。
物語も佳境。
番組もそろそろ終盤に向けてのスパートに入っており、強力な敵との、バイクチェイスが映し出されていた。

「おおおぉぉ……！」
目は星を浮かべたようにきらきらと輝き、両手は興奮でぎゅっと握り締められている。
甲高いエキゾーストを奏でながら、追い抜き、追い越し……時には前輪を浮かせるアクロバティックなアクションに、少女はすっかりと心奪われていた。
「ふあぁ……かっこいい……」
敵を倒し、さぁ次回予告を見ようとしていたところに、無粋な雑音が割り込んだ。
――ビーッ……
来客を報せるブザーだ。
「……誰だよ、まったくもう」
仕方なく、一時停止をして応対する。
「はーい」
『僕だ。入るぞ』
がしゅん、と重苦しい音を立て、ドアが開く。
「なーんだ、クロノか」
「いきなり、ご挨拶だな……フェイト」
そして、どちらからでも無く、透明な衝立を挟んで椅子に座った。
「アルフと、おかーさんはどうしてる？」
これは、クロノが来る度に聞いている。
「アルフの腹部の傷は、完全に治癒した。最近は、走り回りたくて落ち着かない様子だな。プレシアの呼吸器系の疾患も、何とか治療が間に合ったよ」
そもそも、あそこまで重篤になるまで症状を放置していたことが不自然なことなのだ。
「……会える？」
「ああ、アルフに関して言えば、すぐに会えるだろう」
上目遣いで聞くフェイトに、クロノは丁寧に受け答えする。
ある程度付き合ってみればわかることなのだが、クロノは少し言葉が厳しく無愛想ではあるが、冷血というわけではない。当たり前の気

遣いくらいなら、出来る少年だった。
「事情聴取に協力的で、素行にも問題は見られない。君との面会も、じきに設けられるだろう」
「やった！」
ぱっと嬉しそうに笑い……
「……おかーさんは？」
心配そうに、そう聞いた。
途端、クロノの表情が濁る。
「……プレシアに関しては、正直難しい。アルフと違って、大規模事件の主犯だからな。技術協力による司法取引を続ければ、いずれは……だが、まだ断言は出来ない」
主犯であり、次元犯罪者であるプレシアとの接触は、執務官以上の階級にある者にしか認められていない。
それ以外の者には、音声通信どころか、アナログな手紙での交流、執務官を通じての伝言さえ禁じられている。次元犯罪者とは、そこまでしなければならないほどの重罪人なのだ。
「……そっか」
目に見えて落ち込むフェイト。
「だが、いい報せもある」
「え……？」
「実は、……」
クロノが説明を続けるにつれ、きょとんとしていたフェイトの表情が、徐々に輝いていく。
「マジで⁉　いいの⁉」
「ああ」
クロノは、珍しく笑みを浮かべ、それをフェイトに向けた。
「その許可申請も、すでに提出してある。まぁ、問題なく受理されるだろう」
「ひゃっほう⁉」
ぐっとガッツポーズを取った。
「……まぁ、とにかく楽しみにして……」

――――ビーッ!!
と、部屋のブザーが、先ほどより強めに鳴った。
『クロノ執務官、緊急事態です。すぐにアースラへ帰還するよう、リンディ・ハラオウン提督より連絡がありました』
「了解だ」
思考を切り替え、席を立つ。
「すまない、フェイト。少し早めに切り上げる」
◆◆◆◆

俺は現在、時空管理局、その地球支部のような場所に連れて来られていた。
アースラの連中と同じような制服を着た局員達からじろじろと注目を浴びつつ、エイミィに教えられた通りのルートを歩く。
そのエイミィ本人はと言うと、今日俺が対面する、マリエルとかいう人物を呼びに先に行ってしまった。
「うわー……超気まずいんだけど……」
さすがに、Tシャツにジーパンという格好は浮きすぎているけど……それだけでは無いらしい。ひそひそと、悪意は感じないものの噂話をしているのが、何組かいた。
「……」
何の気無しに、そちらを見る。すると……
「……ひっ!」
明らかに怯えて、そそくさと足早に立ち去っていってしまう。
うーん……何でだろう。俺、そんなに目つきも態度も悪くないと思うんだけど……
「おお、ここだな」
そうこうしている間に、到着した。扉の前に設置されたブザーを押す。
ドアが開き、先に来ていたらしいエイミィが顔を出した。
「あ、秀人君。ごめんね、一人で来させて」
「めっちゃ注目された……」

「あー……」
『やっぱりか』とでも言いたげな表情で苦笑する。何か理由でもあるのだろうか。
「後で説明するよ。さ、入って」
部屋の中は、思っていたよりも整頓されていた。用途がわからない機材がいくつかあるものの、椅子やテーブルなど、普通に生活している痕跡が見受けられる。
「んで、どういう人なんだ？　マリエルさんって」
メカニックマイスター……とにかくすごい技術者、ということだけは聞いているものの、その性格や嗜好は全く聞いていない。
まぁ、部屋を見た感じ、そんなヤバい人じゃなさそうだけど。
「……説明は、難しいかな？　とにかく、会えば分かるよ。……嫌でも」
「？　そうか」
「それじゃ、行こうか」
そして、おもむろに席を立った。
「ここじゃないのか？」
てっきり、ここがその人の部屋だとばっかり……
「ここは、ただの休憩室だよ。マリエルが、人間が入れるくらいに部屋を片付けるから、って」
……うん、めちゃ不安だ。
歩くこと数分。どんどん人通りが無くなり、薄暗く、かび臭くなっていく。
「到着ーー」
……ここ？
この、どっからどう見ても物置というか、ゴミ屋敷的な場所が？
「マリー、入るよ」
その扉を、エイミィは躊躇無く開け放つ。
「……」
まず見えたのは、薄汚れた白衣。薬品でも溢したのだろうか、変な色に変色し、ところどころに穴が空いている。

それが、もぞもぞと動いている。
「……」
もそもそと、聞き取れないほどの小さな声で何かをつぶやきながら、手元のメモに何かを書き込んだり、かちゃかちゃと黄ばんだキーボードを打鍵していたり……あからさまに、マッドサイエンティストだった。
「すまんエイミィ。用事を思い出した」
くるっとUターン。
さーて、帰って飯食って寝るかー。
「待って待ってちょっと待って！」
エイミィが、俺のベルトを掴んで必死に引き止める。
「マリー！　マリーってば！」
そして、残った左手で白衣の背中をべしべし叩いた。
「……んー？　ああ、エイミィか……」
綺麗な中性的な声を出しつつ、のっそりと白衣の背中が振り返った。
「……ソレが、例の坊や？」
厚ぼったく、顔の大部分を隠すような眼鏡……その奥で、瞳が怪しく輝いている。
「うん、そうそう！　……ほら秀人君、挨拶挨拶！」
「……いらないよ。調査済みだから」
積み上げられていた山から、一冊のファイルを器用に抜き出した。
「……読もうか？」
調査済み……つまり、俺の過去のこともしっかり記入されているらしい。
「……勘弁してくれ」
「そう」
ぽいっ……と、片隅に置かれていた箱にファイルを丸ごと投げ捨てる。
――ジュウッ……！
僅かに焦げ臭い匂いをさせて、ファイルは完全に焼失した。シュ

レッダーみたいなものだったらしい。
「いいのか？」
「覚えたから」
ぷいっと、また背中を向けてしまう。
「……専用デバイスの開発。バイタルデータが必要だからちょっと来い」
横柄に自分の隣を指差す。
「ご、ごめんね、秀人君……変な子だけど、根はいい子だし、腕も確かだから……」
「……らしいな」
じゃなかったら、わざわざ俺のプロフィールを読み上げるかどうかなんて確認しないだろうし、捨てもしないはずだ。
マリエルの隣に行く。
「……腕出せ」
言われるままに、腕を差し出す。
「ん」
意外と柔らかな手で、俺の腕を引き寄せ……
ぶすっ。
注射器を、思いっきりブッ刺した。
「痛ってええええええ!!」
せめて一声掛けろ！
「……よし」
針を刺した箇所が再生する前に、注射器を引き抜いた。
「あー……痛かった」
「……次、これ握って」
お構い無しに、変な筒を渡される。
「はいはい……」
その後も、健康診断っぽい検査やら、意味不明な検査をいくつか繰り返し……
「……おしまい」
どこか満足げなマリエルの声と共に、終わった。

「……できたら呼ぶから、また来い」
この短い時間で、分かったようなことを言うのも変かもしれないけど……、気付いた。
マリエルは、クロノとほぼ同種の人間だ。
言葉は横柄。態度は無愛想。でも、根はいい奴。
道理で、エイミィと仲がいいわけだ。
「あ……忘れてた」
がたん、とマリエルが慌てた様子で立ち上がり、ぱたぱたと部屋の隅にあったシャッターへと駆けていく。
途中、くるっと立ち上がり……
「……何してるの？　来なよ」
……クロノと違うところは、『相手は必ず自分の話を理解している』と思い込んでしまう癖がることだな、うん。
がらがら……と、シャッターを開ける。
「え……？」
そして、あるはずの無いソレが、俺を出迎えた。
「……お前、プレシアの庭園に捨てていっただろ」
何種類かの機械油と、ガソリンの匂い。
「ガソリンエンジン……前々から興味があったから、勝手に回収させてもらった」
既に型遅れの、古臭い車体。
「……なかなか、興味深い研究材料だった」
度重なる酷使によりやつれた、漆黒のフルカウル。
イグニッションに刺さったままのキーには、見覚えのあるキーホルダー。
間違いない。
「……俺のバイク」
虚数空間に消えたと思っていたけど……拾っていてくれたのか。
「もう調べつくしたから、返す」
「……さんきゅー。マリー」
親しみを込めて、エイミィと同じ愛称で呼ぶ。

「ん」
拒否は、されなかった。
ふいっと踵を返し席に戻り、かちゃかちゃかちゃかちゃ……と、猛烈な勢いで打鍵していく。
「……こうなったら、三日は動かないんだよね。帰ろうか？」
「ああ。……マリー」
どうせ聞いてはいないだろうが、それでも言っておこう。
「バイク、ありがとな。それと……俺のデバイス、よろしく頼む」
「……ん」
ひらひらと、『さっさと帰れ』とばかりに手を振る。
苦笑しつつ、ガレージからバイクを引っ張り出した。
……さーて、帰るとしますか。
「……」
ヤバい。
来た時の数十倍、注目されてる。
「……ぷくくくっ」
「笑うな」
俺は……バイクをがらごろ押しながら、支部の廊下を歩くという前代未聞の行動を取っていた。
「……しょうがないだろ。トランスポートまで、道はここしか無いんだから」
「ふふ、でも、すっごい目立ってるし……！　また一つ伝説が増えちゃった」
ん？　今、なんつった？　笑い声で、聞き取れなかった。
「エイミィ、今なんて……？」
――ビーッ、ビーッ!!
響き渡る警報。アースラと同じく、これは……
「「　緊急事態!?　」」
『第九十七管理外世界において、守護騎士を観測！　現地担当局員、直ちに出撃！　繰り返します！　第九十七管理外世界において……！』
一気に緊迫した空気に包まれ、持ち場へと走り出す周囲の局員達。

「エイミィ、急ぐぞ！」
「え？」
バイクに跨り、キーを捻る。そして……
「せいやっ！」
「え？」
エイミィの襟首を掴んで一本釣りして、タンデムシートに乗っける。
転送装置まで、一気に！
――ヴァオオォンッ!!!
セルを回した瞬間に、力強い息吹を吐き出す。
アクセルを開けて、開けて、開けて……！
「いっけえええええええええええええええ!!」
――ガオオオオオオオオオォォオン!!
「うにゃあああああああああああああああ!?」
エイミィを振り落とさんばかりの勢いで、疾走を開始する！
「秀人君！　廊下！　屋内!!　また伝説がぁ！」
「伝説は塗り替えるものなんだよォ！」
滑りやすい床をタイヤがグリップし、一気に走り抜けていく。
待ってろよ守護騎士！　今度こそ、リベンジだあああああああああああ!!

# A’s編　第十一話

――ビーッ！　ビーッ!!
「これは……!?」
一ヶ月ぶりに感じる、緊迫した空気。
周囲でくつろいでいた局員達が、一斉に駆け出していく。
「緊急警報!?」
まさか……まさか！
「ああ、くそっ。こんな時に……！」
彼らの後を追う形で、私もその場から駆け出した。
「リンディさん！」
ブリッジの扉を開け、入る。
リンディさんは、すっかり戦闘モードになった表情で、私を見据えた。
「なのはさん。あなたには、医務室での安静を命じていたはずです」
開口一番、そう切り出した。
「……」
ぎりっ……と、一瞬だけカッとなり、歯を食いしばる。
なんとか理性で爆発を防ぎ……心を落ち着けた。
「即刻、ブリッジから出て行きなさい。ここは、戦えない者がいる場所ではありません」
厳しい……時空管理局の責任を、認識した目。
リンディさんだって、何も私を邪魔者扱いしているわけじゃない。
私の体調と……これ以上、非日常へと関わらせまいとする、優しさからの対応だろう。
でも、だからこそ……
「回復し、戦線に復帰した時のことを考えてください。守護騎士達の戦闘を見ておくことは、後の戦闘を有利に運ぶことに繋がる筈です」
「戦線に復帰って……本気なの？」
「はい」
……非日常、上等。

最初から最後まで……しっかりと関わり抜くつもりで、ここにいるんだから。
「……それは、秀人君に止められてでも、曲げないつもり？」
……確かに、秀人さんなら渋るだろう。過保護なあの人のことだ。自分ひとりで、勝手に背負い込んで片をつけようとするに違いない。
でも、私がやると言えば……
「秀人さんなら、止めません」
最後には納得して、一緒に戦ってくれる。
「……わかりました。許可しましょう」
リンディさんは、そう言って許可を出した。
「ありがとうございます」
さて……現地の様子はどうなんだろうか。
前回の戦闘では、何もできないまま終わっちゃったから……今回は、しっかりと目に焼き付けておこう。
「映像、出ます！」
オペレーターの一人が声を張り上げる。
――ブンッ……
ブリッジ内に巨大なモニターが表示され、現地の様子が映し出された。
クロノが率いる、アースラ武装隊。
彼らに円状に囲まれ……全く怯む気配さえ見せない、二人の人物。
一人は、片刃剣を佩いた紫色の鎧を着込んだ……多分、男性。
もう一人は、群青色の鎧越しだが、柔軟な曲線を描く……こちらは、女性。
二人は背中を合わせ、包囲の輪を観察している。
「……あれが、守護騎士」
画面越しにも、びりびりと威圧感を感じる。
私が相手にしていた雑魚騎士なんて、比較するのもおこがましい程だ。
「あれが……！」
思わず、握る手に力が加わる。

秀人さんが引き分けたのとは、違う個体らしいけど……それでもあいつらは、憎い仇だ。
「……くそっ」
こんな時に、見ていることしかできないなんて……！
でも、見ていることしか出来ないなら……思う存分、目に焼き付けてやる。
何か、掴むことができるはずだ。
『時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。君たちには、傷害および、殺人未遂の容疑が掛けられている。武器を捨てて、投降すれば……』
その、言葉の途中に……
『ぐあっ……！』
群青の守護騎士が、かなりの速度で局員の一人に接近し、拳を振るった。
ただの拳。魔法陣の展開も無かったはずのソレは、局員が咄嗟に張った防御を易々と貫き、沈めた。
『攻撃、開始！』
クロノの号令の元、大量の射撃魔法が守護騎士たちに襲い掛かる。
――バッ!!
青騎士が、両腕を広げる。
展開するのは……三角形の魔法陣。
「何、あの術式……」
魔法文字も、私達が使うものとは全く違う。
『……』
そして、動こうとしていなかった紫騎士が剣を抜く。
『……！』
それを、クロノに振るう！
『くっ!!』
――ガギイイインッ!!
クロノは、プロテクションを展開して……え、受け止めた？
「何で……？」
どう考えたって、あそこは回避する場面だ。

続いて、青騎士も三角形の魔法陣を展開し……
――ズババババババッ!!
杭状の魔力弾を、大量に射出した。
確かに、凄い弾幕だけど……速度は、私のアクセルシューター以上、フェイトのフォトンランサー以下……くらいかな。
クロノなら、余裕で……
『……!』
あ、あれ……？
どうして、また防御魔法を展開するの……？
『おおおおっ！』
そして、そのまま弾幕に向かって、真正面から突っ込んでいった！
『ク、クロノ執務官!?』
回避を選んだ局員が、愕然としている。
「、馬鹿！」
わざわざ、敵の弾幕に突っ込んでいくなんて……！
私や、秀人さんくらいの魔力があれば無理じゃないけど……クロノの魔力じゃ、自殺行為にしかならない！
――バキンッ、バゴッ……!!
クロノのバリアジャケットを、容赦なく削っていく。
――ビシュッ！
防御を突き抜けた一発が、クロノの額を掠める。危ない……あと少しで、目を潰されていた。
『はああっ!!』
失明のリスクを払ってまで詰めた距離。
「馬鹿、あの馬鹿……！　何してるのよ……！」
あんな、接近戦の鬼みたいな敵に、ダメージを負ってまで接近するなんて……！
『おおおっ！』
決死の突貫も、ブレイクインパルスも……
『……』
――バキイイイインッ!!

青騎士の防御に、呆気なく吹き散らされる。
『……！』
青騎士が、防御を解除して拳を振るう。
近距離バインドをするには、絶好の好機。けど……
『っ、おおおっ！』
クロノは、魔力で強化した自分の拳を撃ち合わせた。
『っく！』
だが、青騎士の方が威力で勝り、クロノは拳から出血する。
『……』
――ブォンッ!!
紫騎士の剣。
『あああああっ!!』
それを、武器としての強度に欠けるＳ２Ｕで、わざわざ受け止めた。
「どうしちゃったの、クロノ……？」
クロノは、冷静な戦闘が出来ていない。
あれだけ口を酸っぱくして、私達の戦い方に口出ししていたクロノが……まるで、当の私達のような戦い方をしている。
得意のバインドも、誘導射撃魔法もまともに使わず……不得意な体術と、ダメージ無視の突貫戦法。
「クロノ……！」
ダメだ、このままじゃ……！
守護騎士達の攻撃は、緻密に計算されたロボットのように正確で、隙が無い。
更に……
『ア……』
『オオオ……』
『アアアアア……』
わらわらと……雑魚騎士まで沸いてきた。
かなりの数だ。私が潰した時の、数倍の数は確認できる。
『な、何だこいつら……！』
『くそっ、どけ!! クロノ執務官が……！』

……局員達は雑魚騎士の数に押され、クロノの救援に向かえない。
指揮官が冷静さを欠いている現状、戦列は意味を成していない……
ただの烏合の衆に成り下がっている。
「まずいわね……」
「……このままじゃ」
全滅。
そんな、不吉な言葉がよぎり……いてもたっても、いられなくなった。
――ガンッ！
椅子の背を蹴飛ばす。
「な、何ですかぁ……!?」
座っていた、エイミィの代理を務めるオペレーターに命令する。
「通信繋いで！」
「は、はぁ……？」
ぽかん、とボケた返事を返すオペレーターの胸倉を掴み上げ、至近距離で睨みつける！
「早くしろォ！」
「ヒィッ……！　は、はいいいっ!!」
……よほど凄い顔をしていたらしい。恐怖に顔を引きつらせながら、命令に従った。
「つ、繋がりましたぁッ……!!」
涙目で報告してきた。
「ご苦労！」
「ひいっ！」
インカムをむしり取る！
今の私に出来るのは……この程度！
「なのはさん、あなた何を……」
リンディさんを無視して、思いっきり息を吸い込み……！
「クロノオオオオオオオオオオッ!!」
大声で、現場に怒声を送る！
◆　◆　◆　◆

『クロノオオオオオオオオオオオオオッ!!』
唐突な声に、クロノは、今しがた打ち込もうとしていたＳ２Ｕを取り落としかけた。
「な、何だ!?　君か、なのは!?」
慌てて後退し、魔力弾をやり過ごす。
『何やってるの!?　そんな、らしくない戦い方して！』
「……！」
クロノはその言葉に、ぐっと歯を食いしばった。
『クロノの戦い方は、そんなのじゃないでしょ!?　さっきから、何を……!?』
そんなの。
彼女が言う、『そんなの』とは……
――力には力。敵に真正面から挑んでいく戦い方。
――出力に乏しい自分には、致命的に合わない戦い方。
――吾妻秀人、高町なのはのような、恵まれた人間にしか出来ない戦い方。
「うるさい！」
クロノは思わず、そう叫んでいた。
『な……！』
通信の向こうで、なのはが息を呑む。
「……口出しを、するな！」
（僕はやれる！　低い出力でも、平均以下の体格でも……！）
それは、不安。
ＡＡＡ＋認定を受けてはいるものの、運用技術によるものが大きいクロノにとって……絶対的な出力の低さというのは、後ろ暗いものがあった。
（彼らと、共に戦える！）
周囲にいる仲間は、誰も彼も、才能に溢れ、努力が成果として結実し、今も尚成長を続ける、真の一流。今、自分に怒声を送るなのはと……幾度と無く共闘した秀人は、その最もたるものだった。
――自分は、彼らと肩を並べるに値するのだろうか？

それが、クロノが抱く不安の正体だった。
自分には、高町なのはのような、圧倒的威力の砲撃魔法は放てない。
自分には、吾妻秀人の身体のような、強力な資質は備わっていない。
自分には、フェイト・テスタロッサのような、見失いそうになるほどの機動力は無い。
自分には。
自分には。
――自分には、何があるというのだろうか。
それは、劣等感、と言い換えてもいいかもしれない。
（僕は、やれる……！　なのは、秀人と同じように……力で、敵を打ち倒せる！）
だから、このような暴挙に走った。
周囲に……そして、自らに認めさせるために。
「戦闘は、問題なく続行できている！　君は、引っ込んでいろ！」
『ちゃんと目の前を見て！　クロノの目の前で、何が起こっているのか、ちゃんと見て!!』
なのはの、必死の説得。
だがそれも、頭に血が上ったクロノには届かない。
「目の前……？　そんなの、守護騎士が二体だ！　それ以外に、何が……！」
ビキッ……と、通信に奇妙なノイズが走った。それが、なのはがインカムを握り潰し掛けた音だとは、クロノに気付く由は無かったが……彼女の怒りが頂点に達したということだけは、理解できた。
『クロノ……あなたの敵は、守護騎士だけ……？』
静かな……氷のように、静かな声。
『あなたの仲間は、今どうなっているの……？』
「あ……」
それが、文字通り、クロノに冷や水をぶっ掛けた。
「……！」
クロノは、今になってようやく、自身の置かれた状況を振り返った。
見ることさえ忘れていた、オペレーターからの現状報告を、目の前

に表示させる。
――敵勢力、増大。いずれも、C～Bランク。
――武装隊、三割が戦闘不能。
「僕は……！」
自分の馬鹿さ加減に、ようやく思い至った。
そしてそのツケが、今頃、このタイミングで回ってきた。
――バキィンッ……!!
「……！　し、しまった！」
両腕を拘束する、青白いバインド。
見れば、青騎士が魔法陣を展開していた。
そんな初歩的な見落としをするほど、我を失っていた。
「……！」
そして、紫騎士が迫る。
――解除は、間に合わない。
「……」
そう悟った瞬間、クロノの内心は、驚くほどに冷静……いや、諦めで満ちていた。
（……駄目だった）
圧倒的な諦観の念が、クロノの全身から抵抗する気力を奪い去る。
（僕は、秀人のようには戦えなかった）
自分の力は、ここ止まりだった。
秀人と肩を並べて戦うなど……土台、無理な話だったのだ……と。
（執務官……魔導師としても、僕はこの程度だった）
オペーレーターからの情報を見逃し、増援にも気付かず、ただ不利な状況だけを、作り出してしまった。
自分の無意味な意地で、指揮すべき、守るべき仲間を危険に晒してしまった。
ゆっくりと、スローモーションのように映る景色の中、凶悪なまでに鋭い刃が、真っ直ぐに振り上げられていた。
あの剣を頭に受ければ、死ぬだろう。
「……ははっ」

その事実とは裏腹に、自虐的な笑みが零れた。
（……受け入れよう）
この愚か者を断罪してくれるのなら、何でもいいと。
目を閉じようとさえ、考えていた。
『結界前方に、転送ポート開きます！　これは……地球支部からの……』
オペレーターのそんな報告も、もはや耳を素通りする。
――……オオオオオォォ……!!
「……？　これは……」
特徴的な、何度も耳にした音。
「まさか……！」
――オオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォン!!
内燃機関の、爆発音！
「うおりゃあああああああああああああっ!!!!」
黒塗りの二輪に跨り、凄まじい速度で突っ込んでくる!!
――ドガッ、ガギャッ……！
「ア……!!」「アギャッ……!!」
局員達に迫る雑魚騎士たちを、猛烈な勢いで跳ね飛ばしながら！
鎧袖一触という言葉を具現化したように、一直線に障害物を跳ね除けるその姿。
窮地に立たされ、生傷を増やし続けていた局員達の表情が一変。
「うおおお！　増援だ！」
「しかも、よりにもよってお前かよ！」
「執務官を頼んだぞ！」
驚きと、喜びが入り混じった声援を受けつつ、秀人のバイクが疾走する。
『秀人さん!?』
アースラから、なのはが驚く声が聞こえた。
「……！」
紫騎士が驚き、身を引こうとするより早く……
――ズガシャアンッ!!

「……!!」
真正面から、微塵も減速せずに衝突した！
バイクの外装の欠片を撒き散らしながら、紫騎士が投石器で放られたように吹き飛ぶ！
がりがりと、鎧と地面が火花を散らす。体勢を立て直そうとするところに、更に……
――ベギッ、ゴギャッ……!!
追撃の、轢殺攻撃！
「……！　……、!!」
更に激しく転がり、
――ドゴォンッ……!!
電柱に背中から激突し、海老反りになり止まった。
右腕にありえない関節が追加されて尚、剣を手放さないその戦意は敬意に値するが……
「ふんッ!!」
急制動によるジャックナイフで後輪を浮かし……
――ドズンッ!!
操縦者含め、３００ｋｇ近い重量のほぼ全てを乗せた後輪で、紫騎士の兜を踏み潰した。
「……！」
ビクンッ！　と痙攣し……動かなくなる。
兜が大きく罅割れ、手足が変な軌道を描き……見た目は轢殺死体そのものだった。
「え、えげつねぇ……！」
「うえ……！」
「……かわいそう」
局員が言った通り……もはや、哀れにさえ思えるほどだった。
「……」
まとわり付く闇が、紫騎士の傷を修復し始める。
一体きりとなった青騎士は、それを一顧だにせず構えを取った。
「……、今だ、掛かれ!!」

それを攻め時と見た局員達が、一気呵成に攻撃に転じる。
「……」
戦闘音をよそにバイクを降りた秀人が、険しい顔でクロノに歩み寄ってくる。
「……」
クロノはそれを、死んだ魚のような目でぼうっと見ていた。
「クロノ……」
労わるように、両肩に手が乗せられる。そして……
「歯ァ食いしばれッッ!!」
――ゴギィンッ!!
……渾身のヘッドバットが、クロノの前頭部に直撃した。
「くあああぁッ……!!」
頭を押さえ悶絶するクロノ。
「な、何をする!」
若干、目に光が戻ったクロノが秀人を睨みつける。
「目、覚めたかよ」
「……! ああ、不本意ながらな!」
少なくとも、活力は戻ったらしい。
だがすぐに、肩を落としてしまう。
「……僕には、無理だった。君のように戦うのは」
「……は?」
呆気に取られる秀人を無視し、続ける。
「君たちのように、才能が無い僕には……」
ぐずぐすと、拭えぬ劣等感が口をつく。
秀人は、ぽりぽりと頭を掻き、うーん、と悩ましく唸り、言う。
「そんなことで、悩んでたのか」
かっと頭に血が上る。
「ああ、そうさ! 君にとっては、そんなことだろう! 才能の有無なんてことは!」
クロノは、自分の言葉に反吐が出る思いだった。
醜い劣等感を言葉にして、妬む相手に八つ当たりするなど……人間

として、恥ずべき行為だ。
だが、止められない。
「才能の有無が、本当に力の全てなのか？」
「……全てではないにせよ、かなりの要素だろう！」
聞き分けの無い弟を諭す兄のように、諭す。
「エイミィが言ってた。低い出力、乏しい才能を努力で補って、ＡＡＡ＋認定を受けたって」
「あ、ああ……」
劣等感が疼き口ごもるクロノに、秀人が言った。
「才能の差っていうハンデがあって、資質が乏しいってことも分かって……でも、お前は努力を怠らなかった。諦めなかった。それは、何のためだ？」
「……」
クロノは、あの夜のことを思い出す。
あの夜……父が殉職した日の夜。
常に笑顔を絶やさない母が、誇りある時空管理局の提督が、背中を丸めて泣いていた。
いつも自分を背負ってくれる大きな背中が、妙に小さく見えて。
その涙を止められない自分の無力が、本当に悔しくて。
その涙を止めたいと……止められるだけの力が欲しいと、確かに願った。
それが、クロノ・ハラオウンという魔導師の原点。
今の生き方を決めた、始まり。
「でも、まだ僕は……弱いままだ」
「……なぁ、クロノ」
そこまで聞いた秀人が、半笑いで言う。
「お前、結構バカだろ？」
本気の本気で、バカを見るような目だった。
「な……何だと!?」
怒るクロノに、秀人はやれやれ、と首を横に振る。
「母親の悲しむ顔が見たくないなんて理由で、才能が無い分野に飛び

込んで……それで、執務官にまでなっちまうんだもんなぁ……苔の一念、岩をも通す、と言うか……」
でも、と前置きし、言った。
「努力だけで執務官にまでなれたなら……それは、立派な『才能』じゃないか」
はっと、雷に打たれたように我に帰り、秀人と目を合わせる。
「実際、俺となのはは、何度かお前に模擬戦で負けてるんだぜ？」
それもまた、事実だった。
二人の能力検定試験の際、秀人とは引き分け。なのはに至っては、絡め手に引っかかりノックアウトされていた。
「お前に才能が無いなんて言われたら、俺らは立つ瀬がねーよ」
からからと快活に笑い、ぽん、と軽く、しかし力強く、クロノの肩に手を置く。
「胸を張れ、クロノ！
お前は強い！
俺が、なのはが……アースラの皆が、保証してやる！」
クロノは、ぽつんと立ち尽くし、秀人の言葉を反芻する。
――お前は強い！
「そんな、ただの気休めが……」
だがクロノは、自分の中から、劣等感が拭われていくのを確かに感じ取っていた。
「気休め、が……！」
ぽたぽたと、地面に水滴が落ちる。
「っく、う、うううう……!!」
自分は、なんと些細な事で悩んでいたのだろうか。
秀人は何も言わず、ただクロノを見つめる。
――お前は強い！
その、たった一言が、無責任な一言が……今までの実った努力も、実らなかった努力も……『力が欲しい』という想いの全てを、肯定してくれた。
自分が力を求めたのは、何の為か。

誰かに認めてもらうためか？
地位を築くためか？
いいや、違った筈だ。
「僕は……」
誰かの涙を止めたくて……その『誰か』の対象が、徐々に広がって……彼らを、この手で守りたかったのだ。
それを守れるならば……自分の才能なんて、些細なことではないか。
それらはあくまで手段の一つであり……目標では、無いのだから。
――胸を張れ！
「ふん……」
ぐいっと、目元を袖で乱暴に拭う。
僅かに充血した目。
だが、吹っ切れたような猛々しい笑顔と……
「わざわざ、言われるまでも無い!!」
取り戻した男の顔が、そこにあった。
「ハッ……上等！」
秀人もまた、笑みを浮かべる。
「……!!」
ようやく修復を完了した紫騎士が立ち上がり、
――ガギュンッ!!
……峰に備え付けられた、カートリッジシステムが火を噴く。
途端、膨れ上がる破壊力と殺気。
「!!」
一気に至近距離。振り下ろされる刃。
秀人とクロノは、同時に振り向き……
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ　！　／　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｍａｓｈｅｒ　！』
「「はあああああああああああああああっ!!」」

――ズッガアアアアアアアアアアアアアン!!

紫騎士を、遥か遠方まで吹き飛ばした！

「行くぞ、クロノ！」

「ああ、秀人！」

二人の魔導師は肩を並べ……敵の懐へ、飛び込んでいった。

「……なかなか、骨が折れそうだ」

感じる圧力は、あの時……秀人を死の寸前まで痛めつけた、赤騎士と同等。

更に今回は、青騎士のオマケつき。

局員達は、雑魚騎士の相手で手一杯……となれば、

「2対2でのタッグ戦」

「僕がサポートする。全力で、いつも通り……考え無しに突っ込め」

秀人の支援……いわば、サブ的な役目を買って出るクロノ。

「おう」

秀人は短く応じ、体表の魔力を纏った。

「……！」

開戦の祝砲は、青騎士が放つ、青い魔力攻撃。

「ディバイン……！」

「ブレイズ……！」

秀人、クロノもまたミッド式魔法陣を展開。

「スマッシャーーーーーーーーーーーー!!」

「キャノンッ!!」

――ズバアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

広範囲への、波状攻撃！

――ズガアアアアアンッ!!

二つの魔法が衝突し……。

――ボッ!!

「……！」

その余波を吹き飛ばしながら、剣を振り上げ、紫騎士が迫る。
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ　！』
――ズガガガガガガガガガガガッ!!
その突進を、上下左右から迫るクロノの誘導弾が食い止め、タイミングをずらす。
――ヴォンッ！
「ヒュウッ！　あっぶね！」
薄皮一枚で回避に成功した秀人が、すれ違いざまに膝蹴りを紫騎士の腹部に放つ。
――ガシンッ!!
紫騎士はそれを、刀の柄尻で受け止める。
互いに決定打を打てない距離でつかみ合い……
「ブッ飛べ！」
――ドパァンッ!!
「！」
――ガゴォンッ!!
超至近距離でのリアクティブ・アーマーと、紫騎士の爆破魔法で互いを間合いの外に押し出す。
「!!」「……！」
今度は青騎士との二体！
「「うおおおおおおおおおおおおっ!!」」
咆哮と共に、衝突!!

# A’s編　第十二話

――嫌な予感がした。
「……!?」
いや、予感なんて、漠然としたものじゃない。
はっきりと……嫌な感触が、私の体をぬるりと撫でた。
「姐さん？　どうしたの？」
私の膝の上に頭を乗せ、ごろごろと寝そべっていた美香が顔を上げる。
「ごめん、ちょっと待って……」
これは……守護騎士からのフィードバック？
今日、狩りに向かわせたのは、『鉄槌』と、『湖』だったっけ。
「ん……！」
意識を集中し、二人の視界情報を覗き見る。
『湖』は、無事だ。超至近距離からの攻撃を喰らい、完全にノックアウトされている。
闇の中に回収……完了。
じゃあ、『鉄槌』は……？
「……嘘」
……反応が、無い。
「嘘……嘘よ」
守護騎士と私は、強固な契約の鎖で結ばれている。
『湖』のように、たとえ戦闘不能になっても、ある程度の操作は可能だ。
だけど、『鉄槌』からの反応が、これっぽっちも無い。それは、つまり……戦闘不能以上の要因で、私とのリンクが断ち切られたということだ。
闇の呪縛は、一般的な解呪の魔法如きでは軋みもしない。
だけど、一番簡単な方法がある。それは……
「……っ！」
「うきゃっ……！　あ、姐さん!?　どうしたの!?」

美香をベッドに投げ、窓の外へ飛び出した。
そう、それは……
――守護騎士が、殺されるということ。
「無い……そんなこと、絶対に無い!!」
スレイプニルにありったけの魔力を注ぎ込み、空を翔る。
私の魔力を分け与えた、私の分身が……そんな簡単に、やられるもんか!
そして、しばらく飛んで……結界があった地点へ、到着した。
周辺に、戦闘痕は無い……って、当然か。結界の中で戦ったんだ。
「……よし」
……うん、まだ残ってる。
「結界、修復」
――……。
了解。その声と共に、周囲に薄い帳が下りる。
そして現れたのは、ボロボロに荒廃した住宅街だった。
「……」
ざくざくと砂利を踏みしめ、最後に『鉄槌』の反応があった地点に向かう。
確か、最後に見た光景は……
「何だったのよ、あのでっかいトリは……」
青く燃え盛る、巨大な怪鳥。
あんな巨大な魔力の塊、私でも作り出して、操作できるかどうか……
それに、使用者の男の意思とは違う、独自の意思を持ち合わせているようにも見えた。
――……、……。
「わかってるよ」
考察は後回し、だよね。
そして、その地点に到着した。
「……いない」
何も無かった。

抉り取られ、高熱でガラス状に溶かされていて、道路も、家も……『鉄槌』の反応も、何も。
「……いない」
ずしゃっ……と、砂利に膝をついた。
現実的に考えて……その可能性は大いにあったけど……本心では、認めたくなかった。
でも……もう、認めるしかない。
「『鉄槌』、死んじゃったんだ……」
完膚なきまでに敗北し。
再生も不可能なレベルにまで、消滅してしまったんだ。
言葉にした瞬間、
「う……！」
ぼろぼろと、自分でも戸惑う程の涙が、両目から溢れてきた。
「ううう……!!」
ぎゅうっと目を閉じ、歯を食いしばっても、止まらなかった。
わけがわからない。
私にとっての守護騎士は、ただの道具。
最強の殲滅魔法を完成させるための、ただの駒。
それだけのはずだったのに。
「――……!!」
……言葉にならない絶叫が、響き渡った。

「……」
散々泣き喚いて……泣き疲れて眠って……いつの間にか、日が変わっていた。
「……」
直接地面に寝転び、ぼうっと薄紫の空を見上げる。
……自分でも、驚いた。
まだ私に、誰かの死を悲しむだけの良心が残っていたなんて。
「認めるしかない、か……」
私にとっての守護騎士は、道具で、駒で……大事な、だったの

だろう
歪んだ感情だということは、自分でもわかる。
当の本人達の意思を無視した、勝手な思い込みに過ぎない。
もしも守護騎士達に感情が残っていたら、『はぁ？』と呆れ返るに違いない。
でも、知ったことじゃない。私がそうと決めたのなら、そうだ。
「はあああぁ……」
津波の前兆のように、すーーーーっと心が穏やかになっていく。そして……
「……がああああああああああああああああッ!!」
――バゴオオォォンッ……!!
爆ぜる程の魔力と……極大の憎悪と殺意が、全身を支配した。
「あンの……クソガキがああああああああああああああ!!」
最後に映っていた、若い男。顔は覚えた。
アイツだ。アイツが『鉄槌』を殺した！
――バサァッ……
スレイプニルが、半ば無意識に羽ばたく。
憎い仇を、探し当てろと。
五体を引き裂いて、地獄の釜に放り込めと。
「……ブチッ殺してやるッ!! 細胞単位までバラバラにして……酸で永遠に溶かし続けてやるッ!!」
……言われるまでもない。
あの男だけは……、この手で直々に!!
◆ ◆ ◆ ◆
「ふんぬっ!!」
――ガキイインッ!!
紫騎士の片刃剣と、俺の魔力刃が衝突し、甲高い音を立てる。
「ぬぐぐぐぐっ……!!」

膂力は、ほぼ互角。だが、得物の差は埋まらず……パキパキと、魔力刃がひび割れていく。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ　！』
――ガオンッ!!
すかさず、クロノのカットが入った。
「……っし!!」
――パァンッ!!
足元にインパクトを発動し、跳ぶ！
「……！」
なぜか、紫騎士もそれに合わせて後退した。
こりゃ、またあの攻撃が来る！
「避けろ！」
「言われなくても!!」
――ズバババババッ!!
杭状魔力弾の掃射を、バック転で回避する！
今度は、クロノも回避を選んだ。
だが、逃げた先には……!!
「アァァァ……!!」
雑魚騎士の集団！
「ああもう、邪魔くせぇ!!」
インパクトウォール!!
――ゴババババッ!!
纏めて薙ぎ払って一掃……！
「……！」
――ブオンッ!!
「うおおっ!!」
頭スレスレを、片刃剣が切り裂いた！
ちゅいんっ、と髪の毛が一房、宙に舞う。
「この歳でハゲたらどうしてくれんだオラァ！」
インパクト!!
――ドパァンッ!!

紫騎士の体勢を崩し、
「おりゃああっ!!」
――ガスッ!!
飛び蹴りで蹴り飛ばす!!
「……!」
青騎士の突貫!
「はァッ!!」
――バチィンッ!!
左掌に魔力を収束し、横っ面をひっぱたく!
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ　！』
――ズドドドドッ!!
「クロノ!　今、どんな感じだ!?」
間合いを取り、現状を確認する。
「……局員側の損害は、三割に収まっている。敵の雑兵は、数は多いがそれほど脅威ではない」
三割……微妙な数字だ。それでも、損害がさっきから増えていないということは、この指揮官が機能し始めたということだろう。
「引き続き雑兵は武装隊に任せて、僕たちは守護騎士を……」
「ああ、了……」
解。そう言い終わる、直前のことだった。
「……死にさらせえええええええええええええええええええッ!!」
結界を突破し進入した何者かが、一直線に俺に向かって突っ込んできた!
尋常な速度じゃない。まるで、隕石が降ってきたんじゃないかと思うほどの、豪速!
「うおおおおっ!?」
防御魔法……間に合わない!　両腕を体の前で交差して、衝撃に備える!

――――ごぎゅっ……!!
「ぐああっ……!」
交差させた腕が、纏めてヘシ折れ……いや、砕けた。完全に感覚が消失し、防御する能力が失われる。
「ぐっ……がっ……!!」
勢いのまま、景色が凄まじい勢いでスクロールしていく。
そして、相対速度が無くなったことで、ようやく俺は侵入者の全容を見ることが出来た。
漆黒の翼。漆黒の装束。そして……白銀に輝く長髪。
「誰だ、てめぇッ……!!」
俺の問いに、侵入者の女は……にィ、と、邪悪に笑った。
再び、女は拳を振り上げ……って、マズい！　両腕、使えね……！
「はあああああっ!!」
防御、間に合えッ!!
――バキイイインンッ……!!
……防御も何も、あったもんじゃない。
殴り飛ばされた挙句、ビルを三つも四つもぶち抜き、地面に背中から叩きつけられた。
「……いっ……てぇ」
主に、地面で摩り下ろされた背中がずきずき痛む。
「ドラゴンボールじゃあるまいし……」
軽口が出せる程度には、重症では無いらしい。
「チッ……これで死なないとか……どんな身体してんのよ」
未だ膨大な魔力を秘めたままの手をぷらぷらとスナップさせ、しかめっつらを作る。
「まぁいいわ……これで死なれちゃ、面白みが無いし」
傲然と言い放ち、歯をむき出して獰猛に笑う。
「アンタに殺られた『鉄槌』の痛み……一億倍にして返してやるッ!!」
「ナイトメア……!」
その黒装束から、何の前兆も無しに、ディバインバスター並の砲撃

が迸る！
「うおおおおっ!!」
死ぬ気で体を動かし、インパクトで自分の身体を弾き飛ばす！
――ズゴオオオンッ!!!
着弾地点を、容赦なく消し飛ばした。
一切のタイムラグ無しで、あれだけの威力を……なんて滅茶苦茶な……！
飛行魔法を行使。上空の女に肉薄し、拳を……！
――バスッ……！
俺の拳は、女が軽く差し出した掌に、あっさりと受け止められた。
何だ、今の感触……!?
ただのパンチじゃない。インパクトとバレットを付与した、破壊力の塊だぞ!?その纏わせた魔法が、あっさりと散らされた！
それに……
「くっ……！」
何て握力！抜け出せない！
「……」
俺の抵抗を嘲笑うかのように、急激に温度が上昇していく！
「はい、右手もーらい」
そしてそんな、軽い調子の言葉を合図に、
――ボンッ……！
「……！」
……右手が、爆ぜた。
五指が炭化し、ボロッ……と落ちる。
「があ……！」
痛みで飛びそうになる意識を、根性でつなぎ止める。
……何せ、右手首が吹っ飛ぶのは二回目だからな。
「秀人！」
クロノが、誘導弾をいくつも放ちながら追いついてきた。
槍のように構えたＳ２Ｕに、ブレイクインパルスを纏わせながら……！

「駄目だ、来るな!!」
そのまま突っ込んだら、コイツの思うツボだ！
――バスバスバスバス……!!
やはりと言うべきか。
誘導弾は、女の体表に触れた瞬間に四散してしまった。
「離れろと……！」
Ｓ２Ｕを、女に繰り出す！
――バシュンッ……！
やはり、四散。
Ｓ２Ｕを繰り出すも弾かれ、あのノーモーション砲撃が放たれる！
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』
――バチィィィインッ!!
俺とクロノ、二枚重ねの防御魔法が軋み、たわみ……
――バキンッ……！
砕けた。
二人揃って地面にたたき付けられる。
「ひゃはははは……どうした？　本気出せよ」
上空から俺達を見下ろす女が、余裕の嘲笑を浮かべ、言う。
本気？
「そんなもん、さっきから思う存分出しとるわ！」
女は、つまらなさそうに鼻を鳴らした。
「焔の鳥」
……あ。
「……忘れたとは言わせないよ。あんたが、私の『鉄槌』を殺したんだ……！」
あの不死鳥のことは、クロノにも話していない。知っているのは、俺と、あのチビ騎士くらい……
「お前、まさか……!?」
俺の問い掛けに、女は再び残忍な笑いを浮かべた。
ざっ。
ざっ。

その両脇に、紫騎士と青騎士が侍る。
「……我こそが、守護騎士を束ねる主にして、闇の書の主……」
傲岸不遜な、名乗りを上げる。
「『闇統べる王』である」

# A’s編　第十三話

私は、モニターに映る人物に目を奪われていた。
くすんだように光沢の無い銀髪。
退廃した雰囲気の漂う、左右非対称の黒い装束。
色彩が抜け落ちたような全身像の中……毒々しい、血のような紅い瞳と、同色のアクセント。
「あいつが……」
闇の書の、主。
何て、禍々しい魔力……
「……リアルタイム映像を、無限書庫のユーノ司書の元へ」
「了解」
知らず知らず、冷や汗をかいていた。
「なのはさん、」
プレシアのように、気が振れているわけじゃない。
ごく自然に、呼吸をするように……殺気を振りまいているんだ。
モニターから、あの紅い瞳から、目が離せない。
身体の感覚がおかしくなり、五感のうち視覚だけが鋭敏に研ぎ澄まされ、瞬きもせず、じっと、じっと……
「なのはさんっ！」
……ッ!?
「あ……」
私、今……？
夢から覚めたように、身体の感覚が戻ってきた。
「呑まれたらダメよ」
「は、はい……」
しまった……無意識のうちに、引き込まれそうになっていた。
――ぱんっ！
自分の頬を張り、痛みで気合を入れる。
……ちゃんと、しっかりと見るんだ。動きのクセや、特徴……弱点

を。あの膨大な魔力を持つ敵を切り崩すには、真正面から無策に挑むのは馬鹿のすることだ。
ただ……その弱点があるのかどうかは、疑わしい。
一見、バリアジャケットに見える装束。
だけど、さっき秀人さんにノーモーション砲撃を放った際、あの黒い装束から滲み出すように、魔法文字がちょろっと見えた。
つまりあれは、魔法そのものが服の形をしているのだろう。それも、文字で真っ黒に染まるほどの、膨大な術式の塊。
私が真似をしたら、一分も持たずにガス欠を起こす。
規格外の魔力と、それを完璧に御する能力。
以前クロノのやつが、私たちのことを『化け物』呼ばわりしたことがあったけど……あいつは、正真正銘の怪物だ。
「秀人さん……」
……疑っているわけじゃない。でも、心配で、心配で……思わず、口をついてしまった。
でも、私には心配する資格は無い。あんな馬鹿な真似さえしなければ……今頃、秀人さんと一緒に戦えていたんだから……
「ちくしょう……」
魔力を失った今の私は、ただの無力な子供に過ぎない。
モニター越しの戦場が、いやに遠かった。
……力が欲しい。
心の底から、そう思った。
◆◆◆◆
「……で、その王様が何の用だ？」
軽口を叩いて、探りを入れる。
「……」
ギロリと、殺気を湛えた瞳で睨み返された。
がつん、と、網膜を通じて脳を揺さぶられる。
「くっ……！」
……唇を噛んで、それに耐えた。
横を見れば、クロノもまた、Ｓ２Ｕを握る手が強張っている。

「敵討ち、って、言わなかった……？」
そういえば、テッツイがどうのこうの、言っていたような気が……
テッツイ……鉄鎚？
鎚って、ハンマー……あ！
チビ騎士のことか！
「思い出したみたいね」
「……ああ」
居心地が悪い。敵だったとはいえ、あの状況では間違いなく……
「返り討ちにしてやったぜ？」
あえて、軽口で返してみた。
――ギュドンッ!!
「うおっ!!」
一抱えほどもある魔力弾が、飛び退った俺達の足元に着弾した！
いちいち威力にビビッてる暇は無い！
とにかく、攻撃だ！
足元をインパクトで弾き飛ばし、『王』に肉薄!!
――ガキイイインッ!!
青騎士の張ったシールドがソレを阻む。
「……リアクティブ・アーマー!!」
――バゴオオォンッ!!
バリアごと、青騎士を吹っ飛ばす！
「……」
紫騎士は無感動に、剣を俺の首に振り下ろしてきた。
――パンッ!!
前面にインパクトを発生させ、回避。
「死ねッ!!」
同時、『王』のノーモーション砲撃。
クロノがバインドで俺の腕を絡め取り、射線上から引きずり上げた。
「フランメ・シュラークッ!!」
ゴウッ!!　と、黒い炎を纏った拳が迫る。

「インパクトッ!!」
それを、同じくインパクトを纏った拳で迎撃。
じりじりと拮抗し……にやぁ、と『王』が笑う。
「ひゃはっ……死ねェッ!!」
その黒い装束から、紅い短剣が無数に出現した！
ヤバい、この至近距離じゃ……！
咄嗟にインパクトを解除し、身体を丸める！
――ドドドドッ!!
……！
一発、二発、三発……!!
致命傷を避けつつ、魔力で補強したジャケットで受ける。
さすがは管理局の訓練服だ。もともと、頑丈な繊維を格子状に編みこんでいるおかげで、軽量かつ強靭。少し魔力を通しただけで、かなりの防御力になってくれた。
「ってぇぇ……！」
……それでも、衝撃までは殺せなかった。ついでに何本か、腕に刺さったままだ。
「……そういや、初めてかもな。敵が連携して襲ってくるのは」
「確かにそうだな」
いつもいつも、単独か、烏合の衆かの両極端しか無かった。
「くひひひひっ……！　楽しい楽しい……こんなに遊んでも壊れない玩具、初めてだ!!」
嗜虐的な笑みを浮かべ、ぎゅっぱぎゅっぱと両手を開いたり閉じたりと、抑えきれない喜悦が漏れ出している。
「……言ってろ」
タイプ的には、『王』はオールラウンダー。ほぼ全距離に対応できる万能型。
「……」
紫騎士は近接特化型。遠距離攻撃もできるのだろうが、使おうとしている様子は無い。
「……、」

青騎士は防御・拘束の支援をメインに、肉弾戦が主な戦い方。要は、アルフとユーノを足して二で割ったような奴。
攻撃・防御を紫騎士・青騎士で分担し、どうしても出来てしまう隙を『王』が埋める。
単純だが、隙の無い布陣。
さすがに、三対二じゃ分が悪い。
「さぁ、次はどうするのかな……!?」
『王』の瞳が妖しく輝くのと同時、
――ゾゾゾゾゾッ……!!
……どういう理屈かは知らんが、奴の周囲にあった平面の影が、Z軸を与えられたかのように立体的に浮かび上がり、刃を象った。
「な、何だありゃ……!?」
魔法……と呼ぶには、あまりにも異質な力だ。
「……恐らくは、魔法なのだろう。あんな怪奇な術式、見たことも聞いたことも無いがな」
「……せめて、ユーノがいてくれたらなぁ」
何か、的確なアドバイスなり対処なり、対策を立ててくれただろうに。
さぁ……互いに、様子見は終わった。
いよいよ、第二ラウンドだ。
――……ガキュンッ。
……紫騎士の剣。その峰に据え付けられた、カートリッジが消費される。
――ゴウッ!!
そして、爆発的に増大する魔力！
「……！　来たぞ」
俺を屠った、チビ騎士のハンマー。あれと同じ原理なら、これまでとは比べ物にならない程の威力が、あの剣に宿ったことになる。
剣の腹を叩いて、剣筋を逸らす……普通の剣には有効な戦法も、通じないと思ったほうがいいな、これは。
「……青騎士の方は、デバイスの類は所持していないようだな。おそ

らく、攻撃の要は紫騎士で、『王』と青騎士はあくまで後衛なのだろう」
「どう叩く？」
ここは、クロノの指示に従おう。
「……正直、数の差もあって厳しいな。君の『結合』で、僕とリンカーコアを同期させても、確実な勝利は無い。だから今、艦長とエイミィが増援を要請している。それが到着すれば……」
「おお、数の差は埋まるな!!」
――ブオッ……!!
紫騎士の剣が、俺達がいた空間を激しくなぎ払った。
「「せーの!!」」
振りぬいた姿勢のままでいる紫騎士に、ブレイズキャノンをお見舞いする！
「……」
――ガドォンッ!!
「あーもう！　またアイツかよ!!」
青騎士のシールド。とにかく頑丈で、始末に終えない！
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ　！』
一面のみのシールド。それを迂回し誘導弾を放つ。
「はいはい、おつかれー」
……その攻撃は、『王』の装束に吸収されてしまった。
「これじゃ、うかつに魔法で攻撃できねぇ！　直接攻撃で……！」
「……紫騎士相手に、それは無謀だ！」
近づけば紫騎士の剣。離れれば青騎士と『王』の攻撃魔法。こちらからの魔法攻撃は無力化され、数の差もある。
「やってられっか!!」
俺は早々に、正面衝突を放棄した。
「回避に専念!!」
「あいよー！」
とにかく、避けて避けてく時間を稼ぐ!!
――。
「で……その増援っての、いつ来るんだ!?」

――ガギッ！　ゴギッ、ガギィンッ!!
絶え間無く続く攻撃を迎撃・回避し続ける。
「おかしい……！　そろそろ来てもいい筈なんだが!!」
『王』のばら撒く、滅茶苦茶な数の魔力弾を回避しつつ念話を繋ぎ、どこかと通話を始めた。
「そちらに何か異常があったのか!?　こちらも長くは……は!?　何だって!?」
聞き返し……
「……ふー……」
額に青筋を浮かべながら、大きく大きく深呼吸し……
「馬鹿言ってないで、さっさと来いッ!!!」
クロノにしては珍しく、声を荒げて叫んだ。
「……ったく！　面倒な……！」
律儀に敵の攻撃を迎撃しながら、毒づく。
「おい、クロノ……？　何かあったのか？」
クロノは、呆れ半分、怒り半分といった感じで説明した。
「……『とことんピンチになったところに、颯爽と登場するのがカッコイイ』らしい」
「……大丈夫か？」
「……」
返事は無かった。

「はーっはっはっは!!」
と……緊迫した戦場の空気をぶち壊す、高笑いが響き渡った。
「天が呼ぶ！　地が呼ぶ！　人が呼ぶ！」
そして、どこかで……一昔前の特撮番組で聞いた口上を、ノリノリで名乗り上げる。
「悪を倒せと、ボクを呼ぶ!!」
ああ……この、思わず脱力するほどに阿呆っぽい声は、間違いない。
がばっ、とビルの給水塔の天辺に仁王立ちする影が一つ。

「聞け、悪人ども！　ボクの名は……!!」
そして、ノリノリ最高潮。口上を格好良く締め括ろうとした瞬間、
『王』が腕を振るい、
――どかーん。
「ぎゃーーーー!?」
……無防備に高い場所に立ち、腕まで組んでいた人影の足元を吹き飛ばした。
命中こそしなかったものの、足場を崩された所為で数メートル下まで落下した。
「あいててて……おいこらぁぁ！」
よじよじ、と再び給水塔の残骸の上に立ち、『王』をビシィッ!!と指差す。
「名乗りの最中と、変身中は攻撃しちゃいけないって暗黙のルールを知らないのか!!」
うがー、と髪を逆立たせて怒る、その姿……
「……フェイト!?」
……だった。
完全な不意打ちに近い攻撃を喰らっておいて、命中の直前に飛び退るなんて素早い反応、出来る奴は限られている。
でも、アレは……
「……クロノ、『増援』ってまさか……アレか？」
「……ああ、アレだ」
クロノは、苦虫を噛み潰したような声で、肯定した。
「……どうしてああなった」
「……艦長に聞いてくれ」
「……は？」
『王』も、ぽかんと放心している。そりゃそうだ。
すたっ、と俺の隣に着地したのは……おお、お前も久しぶりだな。
「アルフ」
「……や。久しぶり」
とっても気まずそうに、目をそらした。

……相変わらず、フリーダムな主に振り回されっぱなしのようだった。
「ボク、参上!!」
びしィッ!!　と、無駄に洗練された無駄の無い無駄な動きで、ポーズを決めた。
――ヒュウウゥゥッ……
……悲壮感を含んだ風が、戦場に吹き抜けていった。
◆◆◆◆
「……フェイト」
私は、ふらふらとモニターに歩み寄った。
綺麗に整った顔立ちに……底抜けにバカっぽい、自信満々の表情。
「フェイトだ」
三ヶ月ぶりに見る……友達の顔だった。
『ひでとー！　ひっさしぶりー！』
スピーカーを通じて、フェイトとアルフの声が聞こえてくる。
「でも、何で……？　しばらくは、会えないんじゃ……」
数年単位は、覚悟してたのに。
「司法取引と言ってね。プレシアが技術を供与することで、刑期を減らすように……フェイトさんとアルフさんは、あなた達の護衛をすることで、刑期の短縮をする、ということになったのよ」
そっか……フェイトはフェイトなりに、ちゃんと考えてたんだ。
「ところで」
――ビキィッ……!!
ブリッジ内の空気が、戦闘とは別の意味で凍りついた。
「リンディさん。エイミィ」
「え、ええ……」「何……でしょう、か？」
あれ……何でそんなに怯えてるのかな？
「私、頼んだよね？　フェイトのこと、お願いしますって……？」
私はただ、ちょっとだけ……ほんのちょっとだけ、聞きたいことがあるだけなんだけどなぁ……？
「なんですかアレは」

さぁ……元凶は、一体誰かな……？
リンディさんとエイミィはだらだらと冷や汗を流し、
「え、エイミィ！　どういうこと!?」
「ウエ!?　デッキとテレビ、部屋に用意したの艦長じゃないですか!!」
「作品をチョイスしたのはエイミィよね！」
「しょーがないじゃないっすか!!　ディズニーとジブリの隣に並んでて、間違えて注文しちゃったんですから！　それにオッケー出したのは……！」
「エイミィも反対しなかったじゃ……!!」
「わかりましたから、黙ってください」
醜く責任転嫁をする二人の元凶を、黙らせる。
あの二人が加勢に加われば、こちらから細々と指示を出す必要は無いだろうし……
「……双方向通信を、切ってもらえる？」
ちょっと、秀人さんには聞かれたくないかなぁ……って。
エイミィが戻ってきたことで、席を交代したオペレーターの女性に優しく微笑みかけた。
「い、いえ、でも……！」
「切れって言ってるのが、わからないのかな？」
「は、はいいいいっ!!」
……気弱なオペレーターは涙目で、パネルを操作した。さぁ、これで心配する必要は無くなった。
「……さて、お二人とも。釈明があれば、お聞きしましょうか？」
リンディさんとエイミィは、責任の所在を投げ合っていた。
◆　◆　◆　◆
「……ふん、何かと思えば」
四人になった俺達を見て、『王』が吐き捨てるように言う。
「塵芥が一つ二つ増えたところで、」
バサッ……!!
「何が変わるものか……!!」
羽ばたく翼。その両翼に、膨大な魔力が集まり、今にも射出されそ

うに……
「そうでもないよ」
――――――。あ？
俺の隣にいたはずのフェイト……が、対角線上、『王』の背後数メートルにいた。
「なっ……ぐあッ!!」
驚いて振り返った『王』。そのバリアジャケットの右肩が、思い出したかのように弾けた。
フェイトの手にするバルディッシュ。その刃に、闇色の残滓がこびりついていた。
――斬った、のだろう。
俺はおろか、クロノも、守護騎士さえ気付かない程の速度で。
「それでさぁ……」
ダルそうにバルディッシュをひゅんひゅん手元で弄び、
「なのはをいじめたの、おまえ？」
――バギュッ……!!
……今度は、辛うじて見えた。
バルディッシュの横っ面で、『王』の顔面をすれ違い様にブッ叩いた。
「ブッ……！」
鼻血こそ流さないものの、顔面を押さえる『王』。
「……！」「……」
ようやく反応を見せた守護騎士達が、主を害するフェイトに照準を合わせる。
――ギュイイイッ!!
青騎士の、全方位から捕獲するバインドが、
――ゴウッ!!
紫騎士の、膨大な破壊力を宿した剣が、それぞれフェイトに迫る。
足の遅い魔導師だったら、バインドに捕まった挙句、バッサリと切り捨てられてしまうに違いない。だが……
「おまえ？　それとも、おまえ？」

――ガギンッ!!　バギンッ!!
全方位から迫るバインドはフェイトを捉えることはできず、剣は空振りし……共に、両肩の鎧を失う結果になった。
「ねー、ひでと？」
あくまで平然と……だがしかし、確かに怒りを含んだ声で、俺の名を呼ぶ。
「……守護騎士のうち、一人だ。今ここにはいない」
「ふぅん……まぁいいや。全員連帯責任だ。苦痛をもって償ってもらうよ」
『Ｓｉｚｅ　ｆｏｒｍ』
――バシュンッ!!
バルディッシュが、鎌に変形。バチバチと帯電するソレは、フェイトの怒りを写したように、激しい。
「フェイト、アルフはクロノと協力して守護騎士を押さえておいてくれ」
まだまだブランクもあって、思うようには動けないだろう。雑魚騎士を武装局員が、守護騎士をクロノ達が抑えておいてくれれば……
「『王』は、俺が叩きのめす」
あのガキを、ボッコボコにしてやれる。
「ああ、任せた」
クロノはあっさりと承諾。フェイトとアルフもまた、守護騎士に狙いを定めたようだ。
「クソガキがぁぁッ……!!」
顔面に痛打を食らった『王』が、憎しみに満ちた声を出す。
「ハッ……こんなもん、痛覚を遮断すればいいんだよッ!!」
……便利なもんだ。
「……ひでと、あんまりやりすぎないでね。ボクの分が、なくなっちゃうから」
「……」
フェイトは、紫騎士と真正面からにらみ合う。
「鈍った身体には、丁度いい運動かもねぇ……」

アルフは、指をポキポキ鳴らしながら青騎士を見据える。
「勝てよ」
「互いにな」
――ぱんっ。
クロノとハイタッチを交わし、それぞれのターゲットへ向かう。
「今生の別れは済んだ？」
「火葬か土葬か、好きな方を選ばせてやるよ」
「オトモダチが一緒じゃなきゃ、何も出来ないんじゃなかったっけ？」
「守護騎士がいなけりゃ、戦力は半減だな」
互いに浮遊しながら、挑発の応酬。
「ハッ……！」
『王』は嘲笑……そして、憎しみを浮かべる。
「私を舐めるなよ……!!　守護騎士がいようと、いまいと……！」
――バサァッ!!
漆黒の翼が、はためく。
「お前は、私に触れることも出来ないんだからなッ!!」
――ギュオォンッッ……!!!
「うおぉっ!?」
慌てて回避。
「はっえぇ……!!」
目にも留まらぬ速度……フェイトが瞬発力でそれを作り出しているのだとすれば、『王』のそれは最高速度。
すれ違い様に俺の急所を狙ってくる『王』に、カウンターで攻撃を加えようとするが、悉く回避され、逆に裂傷を負ってしまう。
――ババババッ!!
翼で空気を捕え、器用に旋回しながら、俺の周囲を多角的に飛び回る。
くっそ、ダメだ、このままじゃ……！　速度が違いすぎる！
――ヴォンッ！　ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン……!!
地上へ戻り、停めてあったバイクに跨りエンジンを始動。タイムラ

グを置かず、速攻で走り出し、一気にフルスロットル！
「制空権って知ってるー!?」
　上空から、魔力弾の豪雨が降り注ぐ！
「地べたを這いずり回る虫けら……一息に、踏み潰してやるよっ!!」
　スピードメーターが２００ｋｍ近くを指しているのにも関わらず、
『王』は悠々と俺を追い抜き、攻撃魔法の雨を降らせる。
　下から攻撃されることは無くなったけど……!!
「ひゃははっ……そんなドン亀じゃ、私には追いつけない!!」
　……悔しいが、その通りだった。『王』の最高速度は、俺のバイクを大きく上回っていた。
「それに……！」
　――ドンッ!!　ドドドドドドッ!!
　砲撃、誘導弾があちこちから迫る。
「くっ!!」
　ハンドルを操作し、回避！
「旋回が、遅いッ!!」
　――ゴウッ!!
　強化魔法を纏った蹴りが飛んでくる。
「くっそ！」
　それに、バイクに跨ったまま蹴りを合わせ相殺。
　その勢いに押し負け、タイヤが一瞬、路面を離れてしまう。
　慌てて接地させ、アクセルを開けるものの、『王』の速度にはまだ追いつけない。
（くそっ……もっとパワーがあれば……!!）
『おいアガツマ。聞こえているか』
　……っと。
「な、何だ……？」
　いきなり通信に割り込みがかかり、挙動が一瞬乱れた。
『おい。聞こえているなら返事をしろ』
　中性的な声。それに、このぶっきらぼうで無愛想な口調は……
「マリー、お前か？」

『それ以外に誰がいる』
……ああ、マリーだ。間違いない。
「悪いけど今忙しい、……ッとォ!?」
――ギャギャギャッ!!
リアブレーキを踏み込みロックさせ、テールスライドで敵の砲撃を回避。
『戦闘中か？　なら、都合が良い』
「何がだよ！」
戦闘音にかき消されないように、大声で応対する。
『おまえのバイクな、バラしたついでに色々と……まぁ、説明は順次で良いか』
「あ!?　何だって!?」
今何か、サラッととんでもないことを言わなかったか!?
『とにかく、キーをもう一つ、右に回してみろ』
「戦闘中にエンジン止めてどーすんだよ！　アホか！」
今は、とにかくエンジンを全開に回さなきゃ間に合わないってのに！
『アホはお前だ。この私が、その程度のことに気が回らないと思ったか』
いや、でも……ううん……
「……！　ああもう、知らんぞ！」
どうせこのままじゃ、追いつけないんだ。なら少しだけ、マリーを信じてやろうじゃねぇか！
――……カキンッ。
……回した。マリーが言ったとおり、エンジンが止まることは無い。だが……
――カキンッ、カキキッ……ギキンッ!!
「お、おいマリー……!?　なんか、明らかにヤバそうな音が……！」
エンジンの内部どころか、バイクの全体から、軋むような悲鳴が……！
それでいて、全く走行に異常をきたしていないことが、また俺の不

安感を加速させる。
『おまえの過去の戦闘記録を見るに、そろそろ、そのバイクのパワー・強度では追いつかないだろ？』
……まぁ正直、元が普段乗り用の、何の変哲も無い６００ｃｃのバイクだからな。
実は、初っ端に紫騎士に突撃した時点で、フレームがガタガタになっている。
『そこで、デバイス技術の応用だ。普段の状態は、スタンバイモード。魔力は一切食わず、通常のモーターサイクルと何ら変わりは無い。だが、起動させれば……』
――バキョンッ!!
「カ、カウルがあああああああ!?」
パージされて、ポイ捨てられたあああああああああああっ!?
――ガキョン、グキグキグキ……!!
「フレームがあああああ!?」
丸見えになった内部機構が、何か動いてるうううううっ!?
『フレームや構成素材は、とあるデバイスの構成素材と同じ、高硬度軽量魔導合金に変換され、新たなエンジンのパワーに耐えられる構造に組み替えられ』
――ジュウウウウウッ……!!
周辺の魔力が収束・物質化され、新たな物質へと構築されていく。
以前の外装が、丸みを帯びたラインだとすると……新たな外装は、直線。徹底的に空気抵抗を抑え、突き抜けんとする鋭いライン。
ハンドルの切れ角は極端に小さくなり、挙動の操作の大半は、体重移動で行う形に移行する。
『わたしスペシャル、ＣαＨβＸ―Ｍａｇｉｃａハイブリット・Ｖ型８気筒エンジン搭載・両輪駆動二輪型陸戦用特殊戦闘装備……』
『スレイプニル』に変形を果たす』
――ガ……ギンッ!!
変形を終えたバイク。
――ヴァオンッ、ヴァオンッ……

枷から解き放たれる寸前の猛獣のように、エンジンが低く唸り、解放の瞬間を今か今かと待ちわびている。
なんか……開けるのが怖くなってきたんだが。
「最大出力は……？」
念のために聞いておこう。ちなみに、ホンダのレース用マシンＲＣ２１１Ｖの最大出力は、オーバー２４０―ＰＳ。市販車の出力が最大でも２００ＰＳというのだから、その出力は押して知るべき、である。
だが、バカに技術を与えると、ロクな真似をしないというのがこの世の常であり……
「最大出力は……７５３ｐｓ！」
「お前やっぱ正真正銘のアホだろおおお

これまでの俺の戦い方は、ただ魔力を振り回しているだけだった。
大した知能の無い暴走体や傀儡兵、雑魚騎士にはそこそこ戦えた。だけど、この守護騎士どもには通じない。チビ騎士にやられた時のように、あっさりと破られてしまう。
……今こそ俺の魔法を、一つ上のステージに、進める！
「……」
スロットルを操作し、『王』の攻撃を回避しながら意識を集中する。
これから行うのは、スターライトの応用だ。
（周囲の魔力を集めて……）
――ギュウウウウッ……!!
右手の魔力結晶に、魔力が集まってくる。『王』が馬鹿みたいに魔法をばら撒いて、一帯の魔力濃度が異常な濃さになっていたこともあり、ひどくスムーズだ。
「ひゃははは！　涙ぐましいねぇ……！　残飯をかき集めて、威力の足しにしようって!?」
「ふんっ……」
逆にそれを、嘲笑で否定してやった。
集めた魔力を、右手を通じてバイクに伝播させる。
カウルからフレーム、フレームからタイヤ、タイヤから地面へ……
「大ハズレだ、バーカ!!」
『結合』、させる!!
ふわっ……と、バイクのフロントが空を向く。
ウイリーじゃない。ただ単純に……目の前に『道』が出来ただけだ。
空へと繋がる、魔力の道が!!
「ウイング……!!　ローーーーーーーーード!!」
駆け上がれえええええええええええっ!!
――ギャオオオオオオオオオオオオンッ!!!!!
傾斜４０度を越えるスロープを、お構い無しに『スレイプニル』が駆け上がる！

目の前だけにウイングロードを展開していたんじゃ間に合わない!!
先へ、先へ……!!
――……ギュウウウウン!!
「なっ……!?」
圧倒的な速度で俺をリードしていた『王』が、驚愕と共に振り返り……あっという間に、視界の後方へ消えていった。
「ぐ……おおおお!!」
リアブレーキと魔力放出と気合と根性で１８０度転回!!
真正面から、『王』に向けてスロットルを開ける！
――ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!
テレポートでもしたように、あっという間に距離が縮まる。『王』ご自慢の速度が、そのまま回避不能の状況へと追い詰めた。
「くっそおおおおおおおっ!!」
――ビュインッ!!
決死の思いで左手をハンドルから放し、魔力刃を展開。
狙いは……！
「その翼！　貰ったぁぁ!!」
――斬ッ!!
「――、あ」
ばさっ……と、羽根を撒き散らしながら地上へ堕ちていく、『王』の両翼。
信じられない……そんな表情で、呆然とソレを見つめる『王』。そして……
「……あああああああああああっ!!」
数秒後、コントロールを失った『王』が地上の重力に捕まり、墜落していった。
――ガキンッ……
バイクを通常形態に戻し、ウイングロードで地上へ……『王』の墜落地点へ降下する。
「ぜー……ぜー……!!」

なんてバイクだ……マリーの奴滅茶苦茶しやがって……！
『ふむ。最高時速毎時５３０ｋｍか……出力を抑えてしまえば、こんなもんか』
今、なんつった……？
「ふ、ふざけんな……こんなバケモン、これ以上パワー増やしてどうする!?　最大値いくつなんだよ!?」
『９１３ｐｓが理論最大値だが？　すぐに作業に取り掛かってもいい』
「……遠慮しとく」
マリーに冗談は通じない。
会って一日で、それを痛感した。
『王』は……ああ、いたいた。民家に墜落したらしい。運のいい奴め。
「よう、王様……ご機嫌麗しゅう？」
ウイングロードの上から、見下しながら言ってやった。
「……てめえええええええっ!!」
プライドを打ち砕かれた『王』は、そこいらのチンピラのように、力任せに拳を振るってきた。
「……」
ぱしんっ、と左手で軌道を逸らし……
――ドゴッ!!
「ぐっ……！」
ボディブロー一閃。
「おりゃあっ!!」
続けて、腹部を思いっきり蹴り飛ばし、叩き落す!!
――ドガンッ!!
再び地面に背を叩きつける。
（……やっぱりな）
ウイングロードを解除し、バイクから降りた。
「がぁッ……！　このォっ!!」
やけくぞに放たれた、残心も何も考えないハイキック。
スウェーバックで回避し、軸足を払う。宙に踊り、全くの無防備に

なった背中に、膝を叩き込む。
「あああああああああああああ!!」
――ズバババババババッ!!
装束から全方位に向けて、砲撃魔法・射撃魔法がバラ撒かれる。
俺に当たりそうな弾だけを撃墜。
「何で、何で、何で……!! 練習したのに! いっぱいいっぱい、たくさんたくさん殺したのにいいいいいいいっ!!」
がむしゃらに振るわれた、ただ威力が大きいだけの拳を、魔力を収束させた左掌で受け止める。
「……確かに、一撃一撃の威力なら、俺はお前には勝てないさ」
――ビュンッ!!
駄々っ子のように暴れ、残った右手で捌く。
――ボバッ!!
爆炎が迸る……寸前に、腕を上に跳ね上げる。爆炎は、空しく空を焼いた。
「お前の攻撃は、ロクに俺に命中しない。何でだろうな?」
「知るかあああああああああっ!!」
――ギュッ……パスッ……
攻撃魔法を発動しようとした瞬間に、ストラグルバインドを発動する。
「ぐっ……は、放せ!!」
装束が明滅し、片っ端から無効化されていく。
「発動タイミングも、攻撃範囲も考えない。ただデカい魔力を、威力にだけ重点を置いた術式に乗せて、闇雲にばら撒くだけ」
確かに、初見では驚いた。狼狽して、対処に遅れたけど……メッキが剥げればこんなもんだ。
「下手なんだよ、お前は。戦い方が」
傲然と、言ってやった。
「抵抗しないサンドバッグを殴って、いい気になってたか?」
――ドズッ、ドズッ、ドズッ!!
三度、腹部に膝蹴りを叩き込む。

「はッ、あぁッ……!! な、何で……？」
がくがくと膝が震え、顔色が青白くなっていく。
「……痛みは無くても、呼吸をして、酸素を供給することができなければ、肉体は機能を低下させる」
……こいつは、油断と慢心の塊だ。
自分には強大な魔力がある。だから負けない。
自分は痛みを感じない。だからいくら攻撃を喰らっても平気。
自分には守護騎士がいる。だから力を磨かなくても大丈夫。
……下手に初期能力値が高かったからこそ、それが仇になった。
もしこれで、俺と同じように絶え間ない鍛錬を重ねていたら……
きっと、俺は勝てなかったに違いない。
「……終わりだ」
左手の魔力刃にストラグルバインドを。右拳に封印魔法を、それぞれ纏わせる。
――ザンッ!!
漆黒の装束を切り裂き、無防備な地肌を露出させる。
「あああああ!!放せってんだよおおおおおおおお!!」
影を刃に変える。だがそれは、さっきまでの鋭さも大きさも無く、脆弱なシロモノだった。俺の身体を貫くことには成功するが、致命傷にはなり得ない。
魔力刃を一閃。ぱりん……と、刃は儚く砕け散った。
「……ひっ!?」
いよいよ身を守る術が無くなった『王』に、拳を振り下ろす!!
「シーリング・インパクトッ!!」
――ゴゴンッ……!!
とても肉体を殴ったとは思えない感触。だが確かに、俺の右拳は……それに付随する封印魔法は、『闇の書』を確かに捕えた。
「あああああ……!!」
力の源泉を塞がれ、苦しむ『王』……いや、そこにいるのは既に、ただの無力な女に過ぎなかった。
「嘘だ……こんなの、嘘だ……!!」

見る見るうちに萎んでいく、凶悪な魔力。
「私が、『闇統べる王』である私が、負けるなんて……そんなこと、あるわけがッ……」
――ザッ。
と、足音。
「……魔力の供給が途切れたからだろうな。守護騎士達は、溶けるように消えた」
バリアジャケットに無数の切り傷が刻まれたクロノ。
「あいててて……けっこー強かったな～……アルフ、だいじょぶ？」
髪留めが吹っ飛び、ボサボサ髪になったフェイト。
「折れちゃいないよ。フェイトこそ……」
打ち身で青あざを作ったアルフ。
それぞれ三者三様に、満身創痍だった。
中でも、一番傷が多いんじゃないかと思うクロノは、それをおくびにも出さず、苦しむ『王』の目の前で足を止め、言った。
「闇の書の主。殺人・民間人襲撃・時空法違反・公務執行妨害の罪により、あなたを逮捕する」
……何はともあれ、これで解決か……？
いや、待てよ……？　何か、忘れているような……？　何かを忘れている。何か、何か……――!!　そうだ!!
「……なのはっ!!」
『は、はい……!?』
「リンカーコアは、どんな様子だ!?」
『え……？　相変わらず、反応あんまり無いけど……』
そうだ……『王』を倒したなら、なのはのリンカーコアが再生するはずだ！
それで、再生してないってことは……！
「まだだ!!」
まだ一人、守護騎士が……！結界魔法の使い手が、残っている!!
残った魔力で維持しているんだ！　もう一撃、封印を……!!
――……キュゴンッ!!

「うあっ!!」
そして……突如として発生した加速感に、身体を真横に吹き飛ばされた。
「秀人！　……ぐあっ!!」
クロノも不意打ちで蹴り飛ばしたのは……
あの日、結界をあっさりと破って進入してきた仮面の男だった。
「……てめぇ!!　邪魔するな!!」
拳を振り上げ、振り下ろす！
「邪魔をしているのは、そちらの方だ」
――パシッ……
それは、あっさりと受け止められてしまった。
ぎちぎちと拮抗。
「何すんだよっ！」「この野郎！」
フェイトがバルディッシュを振るい、アルフが射撃を放つ。
それを、流れるような動きで回避し、間合いから脱出した。
「……守護騎士は四人。鉄槌の騎士は欠員。剣の騎士、盾の守護獣は敗北……さて、残りは何人かな？」
「……!!」
そいつは、まさか……！
「湖の騎士。高町なのはのリンカーコアを奪った」
あの時も、今も、ここにはいない。まさか……！
「……こいつが保険にしていたのだろう。『湖』は現在、結界の外で待機している」
「！　エイミィ！」
『了解！』
早速、サーチを任せる。だが、奴ら守護騎士には気配というものが戦闘中以外はほとんど無い。本気で隠れられたら、アースラのレーダーでも見つけられるかどうか……！
「そうそう、『湖』は、直接的な戦闘力こそ低いが、ある技能があってな」
「おりゃあああああっ!!」

フェイトとアルフの射撃魔法を難なく回避しながら、言った。
「闇の書に記された魔法と蓄えられた魔力を、ある程度まで使用する権限があるんだよ」
――――ガッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッ!!
「!! な、何だ……!?」
超巨大な雷が、強装結界の一箇所にピンポイントで降り注ぎ……車の強化ガラスをエマージェンシーハンマーで叩いたように、砕き破った!!
「……、状況を報告!!」
一番先に復帰したクロノが、アースラに要請する。
『……強装結界、術者の半数が戦闘不能!! 維持は、できて数分!! どうしよう……逃げられちゃう!!』
くっそ……! 最悪だ!!
クロノたち三人も守護騎士との戦闘で消耗している今、まともに戦えるのは俺だけだ。
こんな状態じゃ、クロノと俺のリンカーコアを『結合』させても大した意味はない。
だが仮面の男は、俺に対しては一切の戦意を見せず、『王』の身体を無造作に抱え上げた。
「……彼女は今日、敗北を知った」
そして、俺達はその意図を知る。
「自身の弱点も痛感したことだろう」
「まさか、お前……」
「下らぬプライドを捨てた彼女は、真に強くなる。……お前達のおかげでな」
仮面の向こうで、はっきりと……嘲笑を浮かべた。
「……ッ!!」
俺とクロノが駆け寄った瞬間、透明な檻のようなものが俺達を包み込んだ。
「クリスタルケージ……こんな高等魔法を、一瞬で!?」

技巧に優れるクロノがかなり驚いていることから、それがいかにデタラメな技量なのか、よくわかった。でも、こんなもん!!
「だぁりゃあああああああああああっ!!」
――――バギィンッ!!
正拳突きで、叩き壊す!!
「こんなガラス一枚……!! って、うおおっ!!」
――ぎゅるるるるるっ……!!
破壊をトリガーに、更に別の拘束魔法が仕掛けられてやがった!!
「くっそおおおお!! 卑怯だぞてめぇ!!」
「そうだそうだー! 正々堂々たたかえー!」
見れば、隣ではフェイトとアルフが同じように転がされていた。
「……とはいえ、闇の書の封印とは厄介だな。下手に手を加えれば、癒着しているリンカーコアそのものが破損してしまう」
無視すんな!!
「……お前ほど偏った能力も珍しいな」
魔力操作と、強化魔法……それから、リンカーコア結合。その三つにだけ突き抜けた三角形が、俺の能力グラフだ。
「……生憎、取り柄が少なくてな」
暴走体相手に、死ぬような思いで磨いてきた封印魔法だ。そう簡単に破られてたまるかっての。
「……短く見積もって、三ヶ月といったところか」
三ヶ月。……俺の封印魔法が、効力を失うまでの期間だ。長いやら、短いやら……でもとにかく、向こう三ヶ月は、敵の襲撃は無い。それだけが、不幸中の幸いだろう。
「では……」
「待てッ!!」
去っていこうとする仮面の男を、呼び止める。
「お前は、誰だ!? 何の目的があって、闇の書に手を貸している!?」
ぴたりと足を止めた仮面の男は、少しだけ考えたようなそぶりを見せる。
「主による闇の書の完成を目指す。それこそが、我が目的」

意味を問いただすより先に、転移魔法で『王』ごと逃げられてしまった。
「くっそ！　なんだよアイツ!!」
同時にバインドが消滅し、身体の自由が戻ってくる。
『強装結界、解除……通常の隔離結界へ移行しました』
オペレーターの悔しげな声。試合に勝って……勝負に負けた。そんなとこだろう。
くいくい、と服の裾を引っ張られる。フェイトだった。
「ひでと、戻ろ？」
……そうだな。ここにいたって、仕方ない。
「そうだな。なのはといろいろ、話もしたいだろ」
「うんっ!!」
ボサボサになってしまった髪を整えながら、快活に笑う。
「アルフ、どうしたの？」
フェイトの問いに、挙動不審に辺りを伺っていたアルフがびくっとなった。
「え？　ああ、いや……ユーノはどこだろう、って……」
もじもじと、消え入りそうな声量で言った。
「……諸々の説明は、アースラに戻って、休息を取ってからにしよう」
クロノが場を収め、全員でぞろぞろと転送ポートに向けて歩いていく。
（三ヶ月……か）
言うなれば、嵐の前の静けさ。
最短で三ヶ月。それで、俺が施した闇の書の封印は解ける。不審者が言ったとおり、『王』は、更なる強敵となって俺達の前に再び立ちふさがることだろう。
だけど、恐れることは無い。
「うゅ？」
「ん？」
歩きながら、フェイトとアルフの肩に手を置く。
「頼りにしてるぞ」

最初、ぽかんとしていた二人は……

「うんっ！」

「おうっ！」

サムズアップと共に、頷いた。

――俺には、こんなにも大勢の仲間がいるのだから。

闇の書。

王。

守護騎士。

追跡者。

それぞれの思惑を胸に。

◆・◆　◆　◆

このバッドエンド確定の物語は序章を終えた。

# A’s編　第十四話

パパの転勤が決まった。
単身赴任ではなく、ママも私も、生まれ育った関西地方から、関東地方のそこそこ大きい街へお引越し。
よくわからないけど……パパは相当に仕事が出来る人であったらしく、東京では支社長の待遇だそうだ。
この先十年以上は住むことになるということで、思い切って家を買った。ローンではなく、豪儀にキャッシュ一括で。
豪邸……というほどではないが、写真を見る限り、家族で住むには十分に快適そうな、一軒家だった。
当然、今の３ＬＤＫのマンションよりも部屋は増える。
物置にでも使うのかと思っていたら、「そろそろ下の子を……」とか、子供の前で言わないで欲しいようなことを言っていた。ほんと、勘弁して欲しい。
いくら小学校低学年でも、ちゃんとわかってるんだよ？
まぁ、それはさておき……実際に引っ越すまで、大体一ヶ月くらい。
おかげで私も、訛りを矯正するのに一苦労、二苦労……ちょっと大変だった。
けど、いつも帰りが遅いパパと、練習という名目でお喋りできるのがたまらなく楽しかった。
一ヶ月が過ぎた。
学校の友達とお別れするのはちょっと寂しかったけど、悔いなくお別れできたと思う。
がらんと広くなった家で、クリスマス・イブと引越し祝いを兼ねたごちそうを食べて、翌日の朝、出発した。
生まれて初めて乗る飛行機に興奮する私を見て、パパとママが苦笑する。
そしてそれが、最後に見た両親の笑顔だった。

最初に感じたのは、衝撃だった。
ぐらぐら、なんて易しいものじゃない。まるで、巨大なミキサーに放り込まれたように平衡感覚が無くなり、今足をつけているのが床なのか天井なのかすら、わからないほどの揺れだった。
何もわからないまま泣き叫び、両親にしがみつき……そして、暗転。
あまりの衝撃に、失神していたおかげで気づかなかったけど……多分、墜落したんだろう。
次に感じたのは、熱だった。
「……あ、」
意識を取り戻した私が見た物は、ほんの数分前まで『飛行機』と呼ばれていたスクラップの山と、燃え盛る炎。
そして……あちらこちらに散らばる、赤黒いもの。
それは、太かったり細かったり、大きかったり小さかったり、真っ直ぐだったり曲がっていたりと様々な形があった。
だけど、その色は……生々しい赤と、煤けた黒の二色のみ。
腐った果実のように黒い表皮が弾け、中から赤が覗いていた。
「……！　あ、ああ……！」
目のピントが合い、焦点を結んだ先……その赤黒いものの全容が、目に飛び込んできた。
ソレは、歪んだヒトの形をしていた。あるべき場所にあるべき部位が無い。けれどソレは、紛れも無く、人だった。
……俗に、『死体』と呼ばれる物体だった。
「ひィっ!!」
悲鳴を上げる。だが、逃げられなかった。
別段、酷い状態にはなっていない。足も多分、繋がっているし、大した出血も無い。
「う、ん……！」
うつぶせのまま、何とかして後ろを見る。
熱で変形し、ドロドロに溶け固まった金属。黒焦げになった、何ら

かの残骸。
下半身の上に、そんなものが固まった数百キロはあろうかという大量の瓦礫が積もっていた。腰から下がどうなっているのか、自分でもよくわからない。
シートの残骸がクッションとなっていなければ、下半身をすり潰されていたに違いない。その点、私は幸運であり……不運だった。
「パパ……ママ……？　どこにいるの……？」
きょろきょろとあたりを見回し……私の前方、数メートルに投げ出された両親の姿があった。私と同様、瓦礫に埋もれ、自分ひとりでは動けそうにない。だが人一人いれば、なんとか動かせそうな大きさだ。
「……う」
その手が、僅かに動く。
まだ、生きている……！
「どいて！　どいてよ！」
瓦礫から抜け出そうと足掻くが、数百キロもの重量を動かすには遠く及ばず……ただ、見ていることしか出来なかった。
そして……激しい炎は、すぐ目の前にまで迫ってきていた。
「逃げ、て……げほっ、げほっ……！」
熱に焼かれ、からからに乾いた喉で叫ぶ。だが、両親は動けない。なにせ、高度数千メートルから落下したのだ。今このとき、存命しているだけでも十分な奇跡だった。
当然、無傷なはずは無いだろう。身体の内部は、ぐちゃぐちゃになっているに違いない。
「……や、て、……まえは、……子、だ……」
「は……て……、あな……は……、……あわせに」
両親の、おそらくは最後の言葉。
それが、聞こえない。轟音にかき消され……両親の言葉が、届かない。
そして、いよいよ炎が、両親の身体を舐め始めた。
「いやぁ……！　いやあああぁぁぁ……!!」

泣いても、叫んでも……炎は、その歩みを止めない。
両親の肉体を、末端から物言わぬ消し炭にしようと、侵攻してくる。
「「……はやて、……うび、……めで……う」」
聞かないといけない。なのに、言葉は届かない。いくら耳を澄ましても、周囲の音が邪魔になって、届かない。
「あ、あああ……！　あああああああああああああああああ!!」
叫んでも、暴れても……私は、その場から一歩も動けない。
そして、無力な私の目の前で……両親は、炎の向こうへ消えた。

その日は、十二月二十五日。
――世間は、クリスマスだった。
◆　◆　◆　◆
「パパ……ママ……」
……自分の声で、目が覚めた。
目を開けると、そこは見慣れた住処。埃っぽい淀んだ空気と、カーテンで囲まれた、薄暗い空間。
背中の感触から察するに、ソファに転がされているらしい。
「……あれ？」
……なんで私、こんな場所に？
――ズキッ……!!
「うぐっ……!!」
腹部に走る鈍痛。
「う、うう……!!」
身体を丸めて痛みを耐える。
その痛みが、敗北の記憶を呼び覚ます。
「畜生……！」
あの『鉄槌』の仇に、返り討ちにされて……
「……」
恐る恐る足に力を込めてみると、幸いなことに動いた。
けど……自分を満たしていた、無敵の全能感がキレイさっぱり消え

失せている。
「……はぁ!!」
気合を入れ、胸の奥……リンカーコアに意識を集中する。
――ゴウッ……!!
魔力……一応は、出せるか……精々、美香と同程度だけど。
でも……
自分の影に、闇に、呼びかける。
「おい。……おいってば」
――……。
反応が、無い。
「……ふむ」
つまり、こういうことだ。
あの男の魔法。あれには、私の力を戒める効果があった。それは、確かに私に命中し、効果を発動した。だけど、それによって封じられたのは、私自身の力ではなく、闇の書の力だけだった。
「運がいいやら、悪いやら……」
確かに、負けた。言い訳のしようが無いほどの、完敗。惨敗だった。
けど、妙にさっぱりした……というか、冷静に事態を飲み込めた。
「私、まだまだ弱かったんだなぁ……」
慢心……それに尽きるだろう。
「その通りだ」
――!?
「だ、誰!?」
「……力を得たものは、それに溺れる。過去に、己の無力を悔やんだ者なら、特にその傾向は強い」
そいつは、私の寝そべっていたソファーの真後ろの壁に、腕を組んでもたれかかっていた。
「……降って沸いた、巨大な力。ゲーム感覚で試しこそすれど、本気で磨く事は無く……井の中の蛙に終わる」
「誰だ……って、聞いてるだろ!! 答えろ!!」
そいつは、『黒いもや』だった。

表情は読めず、男にも女にも聞こえる声も平坦。
体つきも、その『もや』に隠され、中身がうかがえない。
その胡散臭い奴は、私が聞いているのか、それすら興味なさ気にべらべらとしゃべり続ける。
「それ故に……力を得たとしても、結果的に……無力であることに変わりは無い」
「!!」
無力。
「お前に……!」
無力。その一言が、私の逆鱗に触れた。闇を操れない……そんな不安感を一瞬で消し飛ばす。闇の書の補助は無い。だから、
「お前にッ……!!」
――リンカーコア励起。魔力精製。術式構築。術式名称……
今の自分にできる最大限の技術を駆使して、
「何がわかるッ!!」
――『ナイトメア』!!
叩き潰す!!
――ッドオオオォォンッ!!
発射された砲撃は、室内を余波で滅茶苦茶に破壊し、不審者に突き進む。
だが……
「……ヌルい」
――バチイイィィンッ!!
『黒いもや』が展開したシールドに弾かれ、弾道を天井へ逸らされてしまった。
そんなに硬いシールドでは無かった。だが、進行方向の斜めに展開されたシールドは、砲撃のベクトルを逸らし、最小限の動きのみで、無傷を勝ち取った。
「くそったれ……!」
二発目は……出さない。
私の中の冷静な部分が、撃っても無駄だと、冷酷に判断する。

「何で、どいつもこいつも……！」
私の力を、簡単に対処しやがるんだ……！
「……娘」
『黒いもや』が、またあの平坦な口調で、私のことを呼んだ。
「……力が欲しいか？」
……答えるまでもない、質問だった。
いや、きっとこいつは、私がなんと答えるかも承知の上で、それを聞いている。
「だったら何よ……」
「答えろ。力が欲しいか？」
……曖昧な返事は、聞き入れるつもりは無いらしい。
「答えろ。
……力が欲しいか？
守護騎士の仇を取れるだけの力が。
憎い仇を殺戮するだけの力が。
今度こそ、何者にも屈せず、何者をも這い蹲らせるだけの力が」
だから……答えるまでも無いんだっての。
「欲しいよ」
力が欲しい……けどそれは。
「でも、お前には頼らない」
……私の復讐は、私自身でのみ完結させる。
「……では、どうするというのだ？」
……はい？
「お前は、どのようにして……一人で力を得るというのだ？」
……。
「また、その辺の適当な奴でも使って練習する……」
「……」
『黒いもや』は無言だけど、明らかに呆れたような気配を見せた。
「な、何！　文句ある!?」
「……何の進歩も無い」
「うっせー！」

何なんだ、コイツ!!
「お前が真に力を欲するというのなら……協力してやろうと言っているのだ」
……胡散臭い。とにもかくにも、胡散臭い。
まずは、コイツの素顔を見ないことには……
「……本当に？」
声色を変え、恐る恐る……弱弱しく聞き返す。
「……本当に、協力してくれるの？」
意図して泣き顔を作り、『孤独で哀れな少女』を演出。
「私の味方になってくれるの……？」
「……技術の供与は惜しまない」
堅苦しい言葉……でも、僅かに柔らかい雰囲気を感じた。
……嘘を嘘と見抜かせないコツは、幾分かの真実を織り交ぜること。
だからまぁ……心細いというのは、守護騎士を失った今の私の本音だ。
「……あ、！」
――ガタッ！
ソファから下りようとして、転げ落ちる。……もちろん、フリだ。
「……」
仮面の男が、すっと手を差し出す。
「ありがとう……」
ぐっとその手を掴み……
――ギュルルッ……!!
「!?」
そのまま、私の手ごと、拘束魔法で縛り上げる！
「ひっかかってくれて、本当にありがとう……！」
「貴様……！」
さすがに、反応が早い。すぐさま魔法に亀裂が入り、砕かれそうになっている。だが、それよりも早く発動させる！
「……ストラグルバインド！」

……『鉄槌』が最後に蒐集したガキが持っていた、術式の一つ。
効果は、対象に付与された全ての魔法効果のキャンセル。
一見、とても便利そうな魔法だけど……実のところ、使いどころは殆ど無い。
例えば、魔法で強化された武器での攻撃を受けるとする。その強化魔法をストラグルバインドで打ち消したとしても、単純な武器での一撃がまだ残っていて、結局はそれも防がなければならない。つまり、二度手間を食うよりは、最初からストラグルバインドの分の魔力も費やして、防御魔法で防いだほうが速いのだ。
それ故に、この魔法は極端に習得者が少なく、マイナーな魔法となっていたのだろう。
――ボシュンッ……!!
『黒いもや』の姿は、魔力の塵となって掻き消える。
「やっぱり……」
あれは、本当の姿じゃなかったんだ。
さーて、そのツラ拝んでやろうっと。
目の前に人影は見当たらない。逃げられたんだろうか？
――ぐにゅっ
……その考えは、あっけないほど早く否定された。
つま先にめり込む、生温い感触。見下ろした先にあったのは……
「……猫？」
灰色っぽい毛並みの、上品そうな猫。それが、リビングのフローリングにぐでーっと伸びていた。
「……まさか、コイツが？」
首根っこを掴んで、目の前まで持ってくる。
どこからどう見ても、猫だ。こいつが、あの『黒いもや』の正体……？
「ん、んん～……？」
にわかには信じがたいが、割と大き目の魔力を持っている。正確には、『大きい魔力の支流』とでも言うべきか。大本になる何者かの魔力を分け与えられているらしい。

システム的には、守護騎士に近いか。
「……残念だったね」
うまいこと私に取り入って、利用するつもりだったんだろうけど……私は、他人に利用されるのが大きらいなんだ。
パパの財産を狙って、病室にまで押しかけてきた顔も知らない親戚に、私を出汁に視聴率を稼ごうとするマスコミ。
そんな輩ばかりを見てきたおかげで、すぐにわかったよ。
こういうのを、『ミイラ取りがミイラになる』って言うんだっけ？
でも、どうしよう……こいつが目を覚ましたら、絶対に逆襲される……
それどころか、正体を知られたからには……とか言って、マジで殺られるかも……
「……参ったなぁ」
守護騎士がいれば……闇の力があれば……
「ん？」
私を補助する守護騎士の不在。
私を補助すると言った目の前の猫（敵対予定）。
……コイツ洗脳して、私の奴隷にできないかな？
魔法の指南役と、守護騎士の代用品を一挙に手に入れられる。
「……やってみるか」
物は試しだ。
「ん……っと」
猫と、大本（主人）を繋ぐ魔力のラインに、自身の魔力を接続する。
途中にあったプロテクトと思しき障壁は、強引に破壊して。
これで、準備は整った。
「……」
どきどきする。そういえば、こうやって魔力を細かくコントロールするのは、初めてだ。
攻撃魔法や防御魔法なら、目分量に気分量で大雑把に魔力を注げば問題なかったんだけど……これは、ほんのミスが命取りになる。
魔力の総量を変えず、中身だけをそっくりそのまますり替える。

要は、人工心肺の魔力版だ。
「……ん、このっ!!」
私の魔力を注ぎ込みつつ、主人からの魔力の流れを徐々に遮断していく。
魔力の流れは細かくて、緩急があって……流れる水以上に、複雑だ。
「えいっ、このやろっ……!」
掴もうとすればするだけ暴れる魔力流を調節し、時にせき止め、時に解放し……私の魔力の比率を、徐々に高めていく。
汗をだらだら流して苦戦すること……体感時間で数十分。
「……いいよっしゃあ!!」
……猫に繋がる魔力のラインは、私の物を一本残すのみとなっていた。
「うまいじゃん、私!!」
少し時間は掛かったけど……我ながら、かなりうまくいった。
魔力流への干渉を阻むプロテクト……これは、数が多ければ多いほど防御率もアップする。だがそれは、折角の魔力流に堰を作ってしまうのと同じだ。
だから私は、その『堰』を、『水門』に置き換えた。
普段は、全くプロテクトの意味を成さない。水門で言えば、上がりっぱなしの状態。
そして、今回のように……私との魔力流へ干渉するような真似を受けた際に、『水門』が下がり、『堰』となる。
簡単に言えば、ＰＳ（フェイズシフト）装甲と、ＴＦ（トランスフェイズ）装甲の違い。
……パパのパソコンに入っていたアニメが役に立つとは。
完全に私の魔力に染まった影響なのか、灰色っぽかった猫の体毛は、漆黒へと変じていた。
「あはっ……」
どうせなら、黒ローブに三角帽子、ついでに箒でも用意してやろうか。美香には大ウケするだろうな。
「……にゃあ」

あ、起きた。
「お前は、誰だ？」
確認……そして、最後の仕上げのため、そう聞く。
「……私は、リーゼ……」
ぼうっとした様子で名乗った。
リーゼ……それが、こいつの名前か。
「リーゼ。お前の役目は何だ？」
「……闇統べる王、八神はやて。あなたに尽くすことです」
「ふふ……！」
やった……完璧だ。
「リーゼ。お前に、命令を与える」
「はい、我が主。何なりと」
……無表情なのが、少し気に食わないけど。ちょっと、呪縛が強すぎたかな？
まぁいいや。
「私に、戦い方を教えろ」
「はい、我が主。私の持てる全てを、献上致します」
今の私は、ただの無力な魔導師に過ぎない。
魔力は有限、特殊能力は封印。……まして、身体能力なんて小学生そのものだ。これだけのハンデを負ったのだから、これまでの戦い方なんて、出来るわけがない。
「……訓練に関して、一切の加減を禁ずる」
「外傷を負われた場合は、如何にいたしますか？」
ただの骨折だけでも、動きは確実に鈍る。切り傷を負えば、血だって流れるだろう。
「……訓練の継続に支障が出ない程度に治療。完全な治療は、一日の訓練を終えてからとする」
……自分の中の甘えを、消し去るために。痛みは糧に。
敗北の底から、這い上がってやる。
「首を洗って、待ってろよ……!!」
そして、今度こそリベンジだ!!

# A’s編　第十五話

アースラの転送ポート。
――とんとん。
戦闘は終わって、そろそろ、戻ってくる頃だ。
――とんとん。
秀人さんと、アルフと……フェイト。
「なのはちゃん……もうちょっと、落ち着いたら……？」
――とん。
無意識のうちに行っていた貧乏ゆすりを止める。
エイミィを見上げる。
「……だって、何ヶ月も会ってないんだよ」
連絡だって出来なかった。
忘れてるなんて、絶対に無いと思うけど……どういう顔で会えばいいのか、分からない。
――ヴゥン……！
転送ポートが輝く。そして……
――バシュッ!!
光が収まり、前線メンバーがわらわらと戻ってきた。
けが人も多く、待機していた医療班がストレッチャーに彼らを乗せ、医務室へ走っていく。邪魔にならないよう、壁際に立って彼らを見送り……自力で歩けるメンバーの中に、ぴょぴょこ動く金髪を見つけた。
「あ」
「あ」
向こうも、私を見つけた。
「……」
「……」
私は、どう声をかけたものか思い悩んでいて……フェイトは多分、認識した光景に、思考が追いついていない。

口を半開きにして、ほけーーー……っとしている。その間抜け面といったら、もう……
「ぷっ……」
ああ……なんというか、笑えてくる。
「あ、ああ～～～!! 今、ボクのこと笑っただろ!?」
目を吊り上げ、ずかずかと歩いてきた。
「ごめんごめん……」
目の前にやってきたフェイトは、まぁ何と言うか……ボロボロだった。
バリアジャケットは解除しているから、服は小綺麗なワンピース。でも、髪はボサボサで、身体は土ぼこりでザラザラ。擦り傷や青あざも多い。
「大丈夫?」
「うん、へいきー」
にへら、と締まりの無い笑顔を浮かべる。
「おお、いたいた」
「ダメだよ、フェイト……ちゃんと手当てしないと」
と、人混みの中から秀人さん、アルフ、それにクロノが出てきた。
「……」
クロノは、ちょっとバツが悪そう。
「ごめんね? 怒鳴っちゃって……」
ちゃんと謝っておこうっと。
「いや……ありがとう」
あら、珍しい。クロノが素直だ。
「うひひひひ……」
と、エイミィがとても頭の悪そうな笑いと共に、クロノへ意地の悪い視線を送る。
「クロノくん、泣いちゃったんだもんね～?」
「ぐっ……!」
気まずそうに、恥ずかしそうに俯く。
「ふふふ、もう、クロノくんったら……」「エイミィ」

調子に乗って、更に何かを言おうとするエイミィを、秀人さんが遮った。
「は、はいっ!!」
条件反射のように直立不動となり、背筋をピンと伸ばすエイミィ。
「……あんまり、俺のダチをいじめてくれるな」
「はっ！　失礼いたしました！」
……よっぽど、怖かったんだろうなぁ。
横ではクロノが、「『ダチ』とはどういう意味だ……？」と首を傾げていた。
教えてあげてもいいんだけど……面白そうだから、黙っていよう。
「……ま、いいや。艦長への報告もあるし、戻ろう」
「はーい！」
と、私の目の前にいたはずのフェイトが素早く秀人さんに駆け寄り……あろうことか、腕にしがみついた。
「な……何してるのよおぉぉぉ!?」
慌てて、フェイトを秀人さんから引き剥がす。
全く、油断も隙も無い……!!
でもフェイトは、不満タラタラな顔で、しぶとく秀人さんの腕にしがみつく。
「いいじゃん別に少しくらい!!」
「ダメったらダメ！」
「少しくらいボクに貸してくれたっていいじゃん！」
するっと私の手から逃れ、ひょいっとジャンプし……秀人さんの右肩に、横座りした！
「こ、こらぁぁぁ!!」
頭を両腕で抱え込んで、なんて羨まし……じゃなくて!!
「秀人さん、怒っていいんだよ!?」
そう言ったのに、秀人さんは何故か私を宥める。フェイトを、背負ったまま!!
「まぁまぁ……全然重くないし、いいって」
「でも……！」

「久しぶりに会ったんだし、このくらい許してやってもいいんじゃないか？」
むぐぐ……まぁ、秀人さんがそう言うなら、ちょっとくらいなら……
話の流れから、自分の勝利を感じ取ったらしいフェイトは、
「べーー！」
勝ち誇った表情で、ぺろ、と舌を出した。
「こ、こら……！」
秀人さんが慌てて止めさせたけど……手遅れだった。
――ぷちんっ……
堪忍袋の尾が、ブチ切れた。
「こ、の……！」
カーーーーッ……と、自分でも分かるくらい、頭に血が上っていくのを感じる。
「返せーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
そんな、目的語が抜け落ちた叫びを上げ、フェイトに飛び掛かる！
「か・え・せーーーーー!!　秀人さんは、私のなんだからあぁぁ……！」
秀人さんの左肩に跨り、フェイトをぐいぐいと押す！
「わたすもんかー……！　ひでとは、ボクのもんだー！」
フェイトも落とされてたまるか、と押し返してきた！
「ふぇ、フェイト……」
「……ど、どうしょうか？」
おろおろするエイミィとアルフ。
「……知らん。先に行ってる」
諦めた様子で、さっさと部屋を出て行くクロノ。
「うにゃーー！」
「このぉーー！」
負けて……たまるかあああああああああああ!!

◆◆◆◆

「……うう」

酷い目に遭った……まだ両肩がギシギシいってる気がする……

「……というわけで、しばらく襲撃は無いものと思われます」

クロノの報告を横に聞きながら、両肩をほぐす。

「ごめんなさい……」

なのはが、俺の左手を握りながら謝った。

じとーーーーーっと、俺の右手を握るフェイトをやぶ睨みする。

「……ふぁああ……」

フェイトは我関せずと、大あくびを隠しもしない。

「闇の書の主に関しては、秀人の方が詳しく説明できるでしょう」

「お願いできるかしら、秀人さん？」

……っと。俺か。

まず、説明から始めるか。

「封印魔法が届いたのは、闇の書のみ。本人は、残念ながら取り逃がしてしまいました」

詰めが甘く、逃げられてしまったのは痛恨のミスだった。全く……俺も、まだまだだな。

でもまぁ、当面の危機は無いだろう。

「闇の書は、言ってしまえば魔力の増幅装置です。俺と同程度……まぁ、仮に１００として、それを１００倍の１００００に増幅するのが闇の書」

資質があれば、極めて危険な災厄を齎すシロモノだが……

「増幅装置さえ無ければ、それは１００。ただ大きいだけで、それ単体では脅威にはなりえません」

大きな魔力があっても、それを御する能力がほぼゼロだった奴は、何も出来ずに大人しくしているだろう。少なくとも、襲撃してくるような馬鹿ではないはずだ。

「……なるほどね」

「猶予期間は、なのはを参考にすればいいでしょう」

なのはは流石に聡明で、俺の言おうとすることをあっさりと理解していた。

「蒐集も、ある意味封印の一種。蒐集の影響が私から抜ける頃には、奴も同じく、封印魔法を破る」
　そういうこと。
「現場での報告は以上です」
　あとは、リンディさんの判断だ。
「……闇の書の細かい機能については、ユーノさんが現在、調査に当たっています。上がってきた報告の中には確かに、魔力の増幅という項目もありました。なので、秀人さんの報告は、十分論理が通ります」
　なかなか、好感触だ。
「猶予期間については、あまり楽観はできませんね」
「……はい、そうです」
「同じ人物に一度だけ、という蒐集の制約があるにせよ、今のなのはさんは、魔法で自分の身を守ることが出来ません」
　……だよなぁ。アイツ、復讐する気満々だったし、俺ではなく、弱体化したなのはを真っ先に襲うだろうし……
　悩んでいたら、リンディさんがパンッ、と手を叩いた。
「護衛を付けましょう」
　……護衛？
「なのはさんと同レベルの戦闘能力を持ち、常になのはさんと行動することが出来る、専属の『護衛』を」
　……いやいやいや。
「いるわけ無いじゃないですか、そんな都合のいい人」
　俺の変わりに、なのはが答えた。
「私並に強くて、あまり管理局の縛りを受けず、自己判断で行動できる人なんて……」
　なのは並に強い……それは、クロノも当てはまる。けど、クロノは管理局の中でも比較的高い地位にいる。なのはにかかりっきりで護衛なんて、不可能だろう。
「それが、いるのよ……秀人君」
　あれ……？

リンディさんが、気さくモードになった。
「さぁて、誰かしら？」
リンディさんの視線は、俺……ではなく、俺の右隣を向いていた。
……おいおい、まさか。
「……フェイトとアルフ、ですか？」
「ええ、その通り」
「いいんですか？　その……前回の事件の裁判だって、まだ……」
そう。フェイトはまだ、前回の事件の重要参考人のままなのだ。容疑者、と言ってもいい。それが、護衛という名目で自由に出歩いて、後々フェイトの不利にならないんだろうか……？
「その辺りは、もう済んでいるから安心して」
今回のことがあろうが無かろうが、護衛……というか、フェイトとなのはをくっつけるつもりでいたらしい。
……色々と、根回ししたんだろうなぁ。黒いぜ、提督。
「それとも、嫌？」
「まさか！　大歓迎ですよ！」
即答で返す。
言い方は悪いが……手回しが済んでいるのなら、何の問題も無い。
「ははっ……やったな！　なのは！」
あれだけ会いたがっていた、大事な友達だ。
久々の再会どころか、これからはずっと一緒だなんて……嬉しいとか、そういうレベルじゃないだろうな。
「よかったわ。ねぇ、なのはさん、フェイトさん……なのはさん、フェイトさん？」
「なのは……？　おい、どうした？」
見れば、二人は時間が停止したように顔を見合わせて固まっていた。
一体どうした……と、思った矢先のことだった。
「……ウえええええええええええエエエエエええエッ!?」
なのはが、素っ頓狂な声をあげた。

……いや、驚きすぎだろ。
「いいいいィやっほおおおおおおおおおおぉ!!!　やったあああああああ!!」
フェイトが歓声をあげ、なのはに抱きつく。
「わあああああっ!?」
「フェイト、危ないってば！」
いきなり抱きつかれ、転びかけた二人をアルフが支えた。
「なのはー！　よろしくねー！」
百パーセントの、明るい笑顔。それにほだされて、なのはも笑顔になった。
「あ、あはははは……うん、よろしくね、フェイト」
少し照れている。
「ボク、ハンバーグとオムライスがいいな！」
「え、作れってこと……？　そっちの『よろしく』だったの!?」
「どっちも！」
「……もう、しょうがないなぁ」
そう言いながらも、満更ではなさそうだった。
そんな坩堝を遠目に眺めながら、我が家を思い出す。
「……あ、やべ」
今更ながら、別の壁が生まれた。
「部屋……どうしよう」
今現在の、俺達三人で住んでいるアパートは、元々は単身向けの物件だった。
なのは、ユーノと同居するにあたって、大家さんの了承は得たものの……更に二人増えたら、定員オーバーだ。
「護衛中は任務として扱いますから、皆さんにはお給料も出ますよ」
金銭的には問題なし、と。
んじゃ、まぁ……
「でもしばらくは、あの狭いＩｋか……」
これからは、大人数であの一室で暮らすことになりそうだ。
あの八畳一間に、五人……すし詰め・イモ洗いという言葉が、これ

ほどまでに似合う状況もそう無いだろう。
風呂もトイレも流し台も常に満員。そろそろ本格的に夏だから、体温で更に暑苦しくて、動くたびに互いの身体がぶつかってしまう。部屋の中は、なのはの本、ユーノの資料、俺のバイク用品、フェイトの玩具、アルフの雑貨で、足の踏み場も無くなって……
「……くくっ」
大変だといいうことが分かりきっているのに、つい笑ってしまう。
五人で暮らして、騒いで、じゃれ合って……そんな生活、楽しいに決まっているじゃないか。
「……秀人さん」
裾が引かれた。
フェイトと手を繋いだなのはが、にこにこと無邪気に笑いながら、言った。
「楽しみだね」
……ああ、そうだな。楽しみだ。
さて……なのは、フェイト、アルフ……残り一人は、どこ行った？
戻ろうとしていたクロノを捕まえた。
「ユーノはいつ頃戻って来る？」
何日も前から、姿を見ていない。
『ちょっと、調べ物をして来る』と言い残して、それっきりだ。
「先ほど、件のフェレットもどきから連絡があった。まだ少し調べたいことがあるから、先に帰っていて欲しい……とのこと、」
あいつ、目の前のことに集中しすぎて突っ走るからなぁ……やれやれ、仕方ない。
「駄目！　連れて帰る！」
……無理やりにでも連れ帰って、休ませよう。そう言おうとした瞬間、殆ど同じことを考えていたらしいなのはが、がーっと吼えた。
「みんなで帰って、みんなで晩御飯！　ご飯抜きなんて許しません！」
ふぅ……と、クロノがため息をつく。
「……だろうと思って、通行許可を人数分確保しておいた」

段々、いい意味で力が抜けてきたな。頑固な堅物も、いろいろと俺達に影響されているらしい。
「で、ユーノはどこにいるんだ？」
「無限書庫……まぁ、書庫とは名ばかりの、膨大な未整理データの山だ」
その中から、闇の書および、古代ベルカの知識を発掘しているらしい。
発掘……？　そんな、大げさな……
俺達は、実際に案内されるまで半笑いだった。

そして、転送ポートからその場所まで案内され……言葉を失った。
――山。
比喩表現でもなんでもなく、正真正銘、それは『山』だった。
それも、ギッチリと本を納めた書架が、四方八方どころか、果てが見えないほど上下に連なっている。
「……す、つげぇ」
試しに、近場にあった本棚に接近してみる。無重力のようだが、進みたい方向へ意識を向ければ、すんなりと移動できた。
「無限書庫には、あらゆる世界の出来事が、『本』という形になって絶え間なく更新されている。どこの誰が、何のために、いつ創ったのか、まったくの不明。そのあまりに膨大なデータ量は、活用するには難しくて、長年放置されていた」
クロノの説明を聞き、納得。
……確かに、ろくな検索装置も無い以上、自分の手でデータの山を掘り返すしかない。
そんな時間があったら、他のデータベースを使った方が早い。
……既存のデータならば。
ここにある膨大な知識の中にはきっと、闇の書に関するものがある。
ユーノはそう信じて、この場所に足を運んだのだろう。

「うわー！　何コレ何コレ！　たのしー!!」
　飛行魔法ともまた違う感覚に、歓声を上げるフェイト。
「う……落ち着かないなぁ……」
　逆に、アルフは居心地が悪そうだった。
「あんまり遠くに行くなよー？」
　……まぁ、俺達以外に人はいないみたいだし、遊ばせておいても問題無いな。
「あいつは……ああ、結構遠くまで行ったんだな」
　クロノがユーノの位置を探査し、僅かに驚く。
　……この数日、こもりっきりで調査をしていたんだろう。あいつはどうにも学者肌というか、熱中すると時間の観念を忘れてしまう悪い癖がある。
「全員で行くことは無いだろう。僕が呼んでくるから、君たちはこの辺りにいてくれ。本は、自由に閲覧してくれて構わない」
　と言って、クロノだけがすーーっと移動していった。
　……途中、
「どれどれ……？」
　おお……本そのものも、大判の図鑑くらいのサイズがある。
　一冊を抜き出し、頁をめくる。
「……駄目だ、読めん」
「こっちも……」
　ミッド文字もあまり読めないというのに、この本は更に複雑な文字がびっしりと埋めつくしていた。
　隣の本を抜き、同じように捲る。最初に抜いた本とは、更に違う言語だった。
　何冊も捲ってみたが、言語もバラバラ。たまに言語が同じように見えても、文体がバラバラで、結局違う言語だったり……『内容が分からない』ということだけが、共通だ。
「あ！」
　と、俺と同じように、本を物色していたなのはが、驚いたように声を上げる。

「これ、日本語だよ！」
「え!?」
驚いて、その本を覗き込む。
「……ＪＳＳ・旅客機墜落事件概要？」
それは、一昨年のクリスマスに、世間を騒がせた事件の名前だった。
……なんで、こんな物がここに。
「これ、何年か前のクリスマスに起こった事件だよね？」
変な気分……切迫感、とでも言えるだろうか。
何かに突き動かされるように、二人して食い入るようにその本の頁を捲っていく。
図鑑並みの厚みは伊達ではなく、途中、難解な表現や、意味不明な文字の羅列があったりと、読みづらかった。
だがそれでも、事件の概要、被害者の総数、……そして、原因が、極めて克明に、まるで、その時その場所で見てきたかのように記されていた。
「……あの事故、結局は原因が不明だったんだよね？」
「ああ。エンジントラブルだとか、地磁気の影響だとか、陰謀論とか、あれこれ好き勝手言われてたけど……でも、実際は違ったみたいだ」
読み進めていくと、原因の箇所に辿り着いた。
それによると、原因は……
「大規模な魔力噴出による、駆動系の破損……？」
おいおい……マジかよ。
「魔力噴出って……」
なのはが、強張った表情で呟いた。
魔力噴出。
それは、術式に乗せた魔法ではなく、ダイレクトに魔力そのものがあふれ出てしまう……言ってしまえば、暴走状態のことを指す。
何らかの影響で、誰かの魔力が制御不能の状態に陥り、結果……旅客機を墜落させた。
その魔力の持ち主は、きっと……
「生存者、一名」

ニュースでは、7歳の子供だった、としか報道されていない。男児なのか女児なのかも不明だが、ほぼ間違いなく、この子だろう。生きていれば、なのはと同い年。
次のページで、名前が分かるはず……そう思い、ページを捲る。
「あれ……？」
次のページは、白紙だった。なんでこんな唐突に……
「ちょっと待って」
なのはが、白紙のページと、前のページとの隙間を開く。そこには、ほんの僅かに、ぎざぎざした……明らかに、意図的にページが破り取られた痕跡があった。
何で、この頁だけが……首をかしげる俺達の元に、クロノの念話が入った。
『秀人、今から戻る』
「ああ、わかった」
動揺は、声に出なかったと信じたい。
……それじゃあ、本を戻そう。
「……」
いや、待った。
この事件は、魔法絡みの事件だ。しかも、何やらキナ臭い。頁が破られているということはつまり、少なくとも、誰かにとっては、見られては困る資料なのだろう。
今回の闇の書事件と無関係かもしれないけど……念のためだ。
本を、目印を付けて書架の裏に隠す。今度来た時に回収しよう。
「なのは」
呼ばれたなのはは、こくんと頷いた。
「うん、秘密だよね？」
「ああ、頼む」
短いやり取りをして……俺達は、クロノ達が戻ってくるのを待った。
さっきの本。
何故あれが妙に気になったのか、その理由は、最後までわからな

かった。

# A’s編　第十六話

「ふあぁぁあ……」
あーーーー……眠い。
「……もう朝、か」
「……そうだね」
「……うん」
自宅へ向かう道。空はすっかりと白み、早朝の空気を漂わせていた。
戦闘直後は、その高揚感で眠気を感じないけど……事後処理をしているうちに、ドカンと眠気がやってくる。
でも、久しぶりだなぁ、この感覚。
微妙に湿気た空気の中を、疲れた身体を引きずって歩く、この感覚。
ちょっと違うのは、背中にのしかかる微妙な重さと温かさ。それと、両隣を歩く足音。
「すー……すー……」
「くー……くー……」
足音に混ざるように、二つの寝息が聞こえてくる。俺の背中……それと、隣を歩くアルフの背中から。
「秀人、代わろうか？」
「いーよ。お前だって疲れてるだろ」
ユーノも、何だか足取りが怪しい。それとなく進路を修正してやっているが、右へフラフラ、左へフラフラ……正直、危なっかしくて見ていられない。
ジョギングをする人、犬の散歩をする人、新聞配達のカブ。
徐々に街が朝に向けて動き出す中、俺達はようやく、俺の家に到着した。
転送ポートから、ほんの数百メートル。だけど、体感ではもっと長く感じた。それだけ疲れていたんだろう、きっと。
ポケットから鍵を取り出し、開錠。

まず、なのはとフェイトをベッドに寝かせて……押入れから、予備の布団を出して……

――どさっ。

そのまま、布団に倒れこんだ。

――どさっ。ばたんっ。

多分、アルフとユーノも同じように……ま、いいや。

「おやすみ……なさーい……」

今は、ゆっくりと寝て……ぐぅ。

◆◆◆◆

「はあぁぁぁ……」

マリエルは、深い深いため息をつき、椅子に座ったまま大きく身体を逸らす。

「リンディさんも無茶振りするよ……」

机の上に足を投げ出す。その際に発生した風で、積み上げられていた紙の山の数枚がヒラヒラと落ちる。

それを、空中で器用にキャッチし、自身のアイデアに目を通す。

「……やっぱ、こうなっちまうんだよなぁ」

指先で紙片を弄び、ぐしゃっと丸め、放った。既に丸められた紙で一杯になっていたゴミ箱は、それをぽすんと弾く。

「ま、これで行くっきゃないよね」

パネルを操作し、３Ｄの図形を立体的に出現させる。

その立体は、かなり無骨な形状をしていた。立方体を乱雑に積み上げたような形状に、思い出したように曲線が加わり……かと思えば、また直線になる。

洗練されていない……それどころか、内部機構すら煮詰まっていない、未完成の試作品……更に、その草案。未完成の未完成。

とはいえ、全くノウハウの無かった技術を組み込み、必要な機能を開発、一応の成果に仕上げたのは、メカニックマイスターたる彼女の技量の高さを示していた。

――ピピピッ、ピピピッ。

と、コンピューターの動作する音のみがあった部屋に、通信を報せ

る電子音が無味乾燥に響く。
「……ったく、少しは休ませろっての」
鬱陶しそうに、その通信を受ける。
目の前に、囚人服の上に白衣を羽織るという、なんとも奇抜かつミスマッチな格好をした女性が映し出される。
「お……珍しいじゃないか。許可が下りたのか？　……プレシア」
プレシアを目にしたマリエルは、ほんの僅かだが……挑戦的に口角を吊り上げた。
皮肉とも取れる挨拶をスルーし、切り出す。
「バルディッシュの構成素材のサンプル、助かったよ」
振り返った先に鎮座していたのは、秀人のバイク……最近、『スレイプニル』という愛称を得た。その構成素材の多くは、バルディッシュの刃の素材と、ほぼ同質のものが使用されていた。
初陣を経た後に回収した。
どの箇所に、どの程度の負荷が加わったのかを解析する予定だ。
『それは何より……で、そちらは進んでいて？』
「……あんまり。めぼしい成果は上がっていない」
この、恐らくは管理局が保有する中ではトップクラスに優秀な技術者をして悩ませているのは、他でもない。
極めて特殊な魔力資質を持つ、秀人の専用デバイスの開発である。
「既存のデバイス設計じゃ、どう小細工したところで強度が足りない。カートリッジシステムの出力に、耐えられないんだ」
かといって、十分な強度を持たせたら、巨大かつ鈍重になってしまう。
『そこへ更に、リンカーコア結合の負荷も想定すると……』
ぽん、と再び３Ｄモデルを出現させる。
「これが、小型化の限界」
『確かに、これでは駄目ね』
秀人は、膂力にこそ目を見張るものがあるものの、体格的には平均的な男性である。

これをそのまま装着するとなれば、上半身の動きが制約されてしまう。
それでは本末転倒だ。
一般的な杖型にしてしまえば、いざとなれば棍棒代わりに使えるか……という考えもあったのだが、マリエルの美学に反したこともあり、没になった。
「そもそも、秀人の希望じゃないからな」
秀人が求めたのは、手持ちの武装ではなく……
『『甲冑』、だったかしら？』
「そ。正確には、『腕の一本や二本が無くなろうと、問題なく魔法の発動補助をしてくれる形状』。腕が無くなる時点で、問題大アリだっての……あのバカ」
『確かにあの子、遠距離は得意じゃないみたいよね』
秀人が使える魔法は、近接戦闘系の魔法に偏っている。一応、射撃や砲撃も可能なのだが、命中率は低く、ゼロ距離から叩き込むようにして使うのが常だ。
『と思って、新たな素材を鍛造してみたわ』
研究者時代は、動力炉の開発に携わっていたプレシアだ。軽量かつ堅牢な素材の開発は、お手の物だろう。
「助かるよ。これで小型化が進む」
転送されたデータを、嬉しそうに眺めるマリエル。
プレシアもまた、マリエルの草案を受け取り、目を通す。
『システムは？』
人格ＡＩはプログラム、カートリッジシステムはドライブ、それらの式は出来ているのだが、肝心のもの……それを走らせる大元になるＯＳが、未定となっていた。
プレシアの疑問に、マリエルはあっさりと答える。
「ベルカ式」
……プレシアは、息を呑むと同時に、納得した。
『……ああ、確かに』
秀人の戦い方は、汎用性と範囲攻撃に重きを置いたミッドチルダの

魔導師のものではなく……近接戦闘による一撃の破壊力・突破力に重きを置いた、ベルカの騎士のものだった。
ならば、ベルカ式を選択したのは当然といえる。
「……と、言いたいところだけど」
感心した様子のプレシアに、マリエルは肩をすくめ、おどけた調子で言う。
「全然、データが足りていなくてね。聖王教会の石頭どもには、困ったもんだ。
無限書庫の中から必要なデータが全て見つかるのは、まだずっと先だろうから、取り急ぎ、見つかったデータを活用する」
そう、時間が無いのだ。
三ヶ月から四ヶ月……それは、世間一般からすれば、十分な期間に思えるだろう。
だが、今だ研究段階のカートリッジシステムを搭載するという暴挙に加え、秀人の魔力資質による負荷に耐え、更には武器としての強度まで求められるのだ。
本来なら、数年のスパンで取り組むべき大仕事。
「ベルカの術式を、ミッドの術式でエミュレートする、擬似ベルカ式。……まぁ、『擬似』じゃあ聞こえが悪いから、
――『近代ベルカ式』とでも呼ぼう」
『近代、ベルカ式……』
ゆっくりと呟くプレシア。
『……教会が、黙っていないでしょうね』
もし、それが実用化されたとしたら……資質が無くとも、ベルカ式の魔法が使えるようになる。
聖王教会……厳正な宗教集団である彼らの中には、ベルカ式に適正があるということを、一種のステータスのように感じている輩も少なくない。
その希少価値を無くしてしまう研究が明るみに出れば……どのような目に遭うか、想像に難くない。
「『データを取りたいのに、あなた達が騎士も資料も貸してくれないか

ら、自分で自己流で作っちゃいましたー』……って、ことで」
違法性は無いのだから、問題は無い。
あくまで、そう言い張るつもりのようだ。
「ま、コイツはデータ収集のための試作機だからね。一般の局員に出回るのは、まだ当分先の話さ。十分にデータを集めて、危険がないように改良して、それから公に発表する」
『秀人は実験台、ということ……？』
プレシアの声に、僅かに険が混じる。
カートリッジシステムだけなら、何とかなる自信があった。だがそれは、ミッドチルダ式による運用を前提としていたわけで……未知のOSとの相性は、全くの不明。
影響はゼロかもしれない、もしくは、誤作動で命を削るかもしれない。
それを、秀人で試そうと言うのだ。実験台以外の、どのような言葉が当てはまろうか。
「でも、そのくらいの理由が無けりゃ、嘱託局員一人のために専用デバイスを建造したりはできないんだよ」
秀人に専用デバイスを……という話をリンディが打診した際、上層部からは猛烈に反対された。
『階級すら無い嘱託魔導師のために、管理局の資金を費やすとは何事か』、と。
だが、カートリッジシステム搭載型デバイスのデータ収集のための実験機、という話になった途端、掌を返したようにあっさりと承諾された。
未完成のカートリッジシステム。もし実用化に漕ぎつければ、管理局の戦力は飛躍的に上昇する。だが、現状では不安定で、場合によっては使用者の命を脅かす機能でもある。
公募したところで、協力者など現れるはずも無い。
だが、秀人は自ら進んで志願していて、異様な耐久力もあり、何より。
「秀人は、『嘱託魔導師』だから」

いざとなれば……使い捨てることが、できるわけで……
「……我が組織ながら、悪辣だよねぇ」
じっとその話を聞いていたプレシアが、重い口を開く。
『気が変わったわ、マリエル。先ほどの素材は、提供を取り止める』
「……そうかい」
ふぅ、と息をつく。
これで、振り出しか……そう考えたマリエルだったが、続くプレシアの言葉を聞き、放心することになった。
『より強靭で、秀人に負担を強いない素材を改めて開発する』
「……は、」
ぽかん、と放心していたマリエル。
「は、はははははははははははは!! そ、そうか、そうかぁ……! そりゃいいや!! ははっ!!」
珍しく爆笑し、童女のように手足をバタつかせる。
「あはははは……!! ははははっ……!! ……んで？」
それが、ピタリと止まる。
「どの程度の強度を想定している？ 言っておくけど、強度の問題さえクリアすれば何の問題も無くなるわけだが」
冗談でもなんでもなく、マリエルはプレシアに詰め寄る。撤回は許さない、と。
やるといった以上、しっかりやれるんだろうな……と。
その、挑戦とも取れるマリエルの言葉に、プレシアは傲然と答える。
『好きに設計しなさいな。
どんな形状・どんなシステムを組み込もうが……非常識な強度を保証してやるわ』
「上等ォ……！」
にやぁっ……と、獰猛な笑みでそれに応じた。
「やってやろうじゃん!!」
机の上にあった、強度の問題で妥協していた案を全て叩き捨て、それまでのデータを躊躇い無く全消去する。

そして、猛然とキーを叩き始めた。
プレシアの姿も、既に無い。彼女もまた、自信の研究に没頭するのだろう。
データ量がテラバイトに達するまで、そう時間は掛からなかった。
◆　◆　◆　◆
「……ん」
僅かに覚醒した意識。
まだ身体は付いてこなくて、思考だけが緩やかに回転を始めた。
ええと……フェイトと暮らせることになってくユーノくんを迎えに行って……帰り道、秀人さんに背負われて……ああ、そうだった。それで、寝ちゃったんだ。
「んー……！」
眩しさを我慢して、目を開ける。すると……
「すぅ……すぅ……」
目の前で……文字通り、ほぼゼロ距離で眠るフェイトの顔が目に入ってきた。
朝日を浴びて輝く金髪。白磁の肌。長い睫。
「……おぉ」
不覚にも、ドキッとした。忘れがちになるけど、フェイトって美少女なんだ……って、いかんいかん。早く起きなきゃ。
ベッドから身を起こすと、床で雑魚寝する三人……秀人さん、ユーノくん、アルフ、が
眼に飛び込んできた。
もう……私が床でも良かったのに。
皆を起こさないように、足音を殺しつつ抜き足差し足、台所に向かう。
ちらっと時計を見上げる。午前十一時。完全に寝坊だ。
「……ま、いいか」
今日は、自主休校ってことで。
「別に、会いたい友達もいないし……」
――。

苦い思い出が、僅かに蘇る。
結局あの子とは、友達になれず終いだったなぁ……
全部、終わったことだ。今更、悔やんだところでどうにもならない。
さてと……五人分の昼食でも、作りますか。
冷蔵庫の中を確認。
「あ……足りない」
食材は、三人分が限界だ。どうやっても、五人分には足りそうに無い。
「……買いに行くか」
寝癖を整え、家計用の共用の財布をポーチに入れる。服は、このままでいいや。
（行ってきます）
心の中で言い、ゆっくりと部屋を出た。
すたすたと住宅街を歩き、スーパーを目指す。
片道十分……いつもだったら、レイジングハートと話でもしながら歩くんだけど、今日はそれが無い。十分がこんなに長いなんて知らなかったなー……
スーパーで買い物を済ませ、店を出る。
五人分にもなれば、やはりずっしりと重い。
フローターを使って運ぼうとして……クロノの忠告を思い出した。
『君は日常生活の中で、結構な割合で魔法を使用しているな』
そりゃあ、便利だもの。魔法陣や魔力光を発生させないレベルなら、何の問題も無い筈だった。
『当面の間、そういった用途での魔法の使用を控えるように。魔力を察知され、追跡される可能性がある』
……はいはい。頑張って手で運びますよー、っと。
ビニール袋を担いで、えっちらおっちら。
荷物が多いときは、秀人さんとバイクで来たり、魔法で飛んだりしていたから、忘れがちになる。
「自分のバイク、欲しいなぁ」
まぁ、あと七年は我慢しないと無理なんだけど。年齢的にも、背丈

的にも。
「あ……た、高町!!」
……と、つらつらと考え事をしながら歩いていたら、誰かに呼び止められた。
声で、何となく誰かは分かった。
「……八代さん」
件の、八代望その人だった。
ランドセルを背負ったまま。学校帰りに、こっちに来たらしい。
「あ、あのさ……」
「学校はどうしたの？　まだ、お昼休みの時間じゃない」
「半日授業だったから……これ、今日のプリント」
私と彼女は、友達じゃない。
だから……言葉に親しみなんて、込めるべきじゃないんだ。
「ありがとう。用は済んだ？」
意図的に無表情の仮面を被り、突き放す。
「何で今日、学校休んでたの……？」
「あなたには関係ない」
「……！」
言葉の棘に突き刺され、びくっと強張る。
傷ついた表情。握り締められる手。それを見て、胸が痛まないと言えば、嘘になる。でも、仕方ないんだ。
……以前、八代さんはジュエルシードに憑かれ、とても危険な目に遭った。
その原因こそジュエルシードだけど、暴走の切っ掛けは……私だった。迂闊に仲良くなって、下手に八代さんの気持ちに触れてしまって……
だから、今度こそ。今度こそ、私は失敗しない。絶対に、クラスメイトを魔法関係のイザコザには、巻き込まない。そう決めたんだ。
もし、魔法に関することに少しでも触れたら……例え、これ以上に嫌われても、突き放すと。
「……ごめん、でも、本当に何でもないから」

顔を伏せ、踵を返す。
「待って……」
呼び止める声を無視して、歩き出す。
もうこれ以上、彼女と関わってはいけない。私は、彼女にとって……疫病神みたいなものなんだから。
「待って!!」
意外と強い力で手を引かれ、引き止められた。
「放して」
少しだけ険を強めた言葉を突きつける。
でも、私の手を握る手は、緩まない。
怒っているわけでも、泣いている訳でもない。ただ、悲しさだけを浮かべ、私の目を見つめる。
「……もう、やめようよ」
「――。え?」
――一瞬、耳を疑った。
「絶交とか、そういうの……もう嫌なんだ」
それは、静かな言葉だった。
「学校で知らんぷりしたり、避けたり……そういうの、全部やめようよ!」
でも、その言葉は……確かに、私の無表情の仮面を剥がしていく。
「え……あ、あの……」
しどろもどろに、身を引く。でも、しっかりと掴まれた手が、私を引き止める。
「前みたいに……あの日の、前みたいに……」
いつしか私は、逃げようとするのを止めていた。
「……友達に、戻ろうよ」
……やっぱり、駄目だ。
私は、非情になり切れない甘ちゃんで……どうしようもない、寂しがり屋だ。
だから、こんな風に真っ直ぐに言われたら……何も、言えなくなっ

てしまう。
「高町は、私のこと……そんなに嫌い？」
「そ、」
そんなこと、無い。
「私は……ッ!?」
大事な事を伝えようとして……いきなり、押し黙ってしまった。
……今、何かが……引っかかった。
身体に染み付いた、一種の第六感。
――魔力察知能力に。
ほんの微量だけど、これは……魔力だ。
発生源は……向こうの、雑木林？
「八代さん、ごめん。本当に、ごめんなさい……でも、お願い。ちゃんと、返事するから、今日は……」
ほんの微弱な魔力は、徐々に小さくなっていく。
もしかしたら、何かが起きているのかもしれない。ここで八代さんと一緒にいたら、以前の二の舞になってしまう。
「……ごめんッ！　明日、ちゃんと返事するから!!」
手を、やさしく振り解く。
「高町！　ちょっと……！」
ごめん、ともう一度呟きながら、荷物を放り、走り出した。

雑木林の中は、昼間だというのに薄暗く、圧迫感を感じさせた。
「……」
ごくりと、怯んで生唾を飲んだ。
「ええい……行くぞ!!」
魔力が弱くなったとはいえ、成人男性一人を叩き伏せるくらいの力は残っている。
自らを鼓舞し、土の地面に歩を進める。
僅かな魔力を頼りに、雑木林の中を探索していく。
――ガサッ

「！」
今、何かが動く音がした。
茂みの影から、紅い何かがちらちらと見え隠れしている。
「……」
警戒しながら近寄り……その正体を知った。
「女の子……？」
簡素なワンピース……それ以外に、何も身に着けていない。明らかに訳ありな風体の、紅い頭髪が目を引く少女だった。赤毛を通り越して、完全に紅色の頭髪は、この世界の人間ではないということを明確に示していた。多分何かに巻き込まれて、ユーノくんみたいに、ここに漂着したんだ。
「ちょっと、どうしたの!?　大丈夫!?」
背中に手を添え、上体を起こす。
……顔色が悪い。それに、妙に冷たい。呼吸は……ある！
『秀人さん、秀人さん!!』
緊急コール。
『な……何だ、どうした!?』
飛び起きたらしい秀人さんが、すぐに応じた。
手短に状況を説明して、位置情報を送信。
『わかった、すぐ行く！』
あとは……この子を！
「高町！」
――――――は!?
「八代さん、どうして……!?」
何で……!?　ちゃんと、置いてきた筈なのに!!
「あんな逃げ方したら、『何かあります』って隠してるのバレバレよ！
その子、けがでもしてるの!?」
ズボンが汚れるのも構わず、膝を地面につき、倒れた少女の状態を確認する。
「目立った外傷は無し。脈はあるけど……体温が低い」
妙に慣れた手つきで、てきぱきと各部をチェックしていく。

ハッと気付き、八代さんの肩を掴む。
「駄目……！　八代さんは、『こっち』に関わったら……！」
……また、何かに巻き込まれてしまう！
「今は、そんな事情は後回し！」
でも、八代さんは逆に私を叱り付けた。
「近くに病院……は、無いか。……高町、ケータイ持ってる？」
「あ、ご、ごめんなさい……家に」
財布以外、持ってくるのを忘れてしまった。
「で、でも、人呼んだから……！」
――……ダンッ!!
「なのはッ!!」
飛行してショートカットしてきたのだろう。秀人さんが、唐突に目の前に着地した。
「うぉあッ!?　そ、空から人が……!?」
……しまった、見られた！
「高町……今、その人……？」
ああ、どうしよう、どうしよう……
「……ああ、もういいや！　両方とも来い！」
秀人さんは秀人さんで焦っていたらしい。
紅髪の少女と、私と……何故か八代さんを抱えて……ええええええっ!?
「行くぞ！」
――飛行魔法を、行使した!!
途端、すっ飛んで行く風景！
「え、ええええええええええええええっ!?」
八代さんは、混乱の極みだ。
「ごめん、後でちゃんと、説明するからあああああああああ……!!」
「意味わかんないいいい

飛び続けた。

# A’s編　第十七話

数分間の空の旅は、あっという間に終着した。
ばんっ！　と秀人さんがドアを開ける。
「ユーノ！　アルフ！　ちょっと手ェ貸せ!!」
保護した女の子を小脇に抱え、室内に飛び込んだ。
ユーノくんとアルフは、治療魔法を使うことができる。とりあえず、アースラ医療班に連絡するまでの応急処置はできるだろう。
さて、こっちは……
「八代さん、大丈夫？」
「ぜー、ぜー……!!　全然、大丈夫じゃないわよ……！　お、おえ……！」
全力で飛ばしたとはいえ、たったの数分……本気の空戦訓練に比べたら朝飯前……じゃなくて、昼飯前だ。
……でも、風を切り裂いて飛ぶ感覚を知らない八代さんは、疲労困憊だった。
「……ちゃ、ちゃんと、説明……ゲホッ!!　しなさいよ……!?」
「あ……」
そうだなぁ……ノリで連れて来ちゃったけど、面倒くさい。
いっそのこと、抱えたまま空戦機動に持ち込んで、意識をブラックアウトさせてしまう手もあるよね……って、駄目だ。飛ぶだけの魔力が無い。
「高町っ！　黙ってないで……」
説明するか、すっとぼけるかの二択。
「やだ」
後者に決定。
「んがっ……!!　さっき、説明するって言ったじゃない！　こんな……」
さっきは情にほだされて、あやうく口を滑らせるところだった。
「気が変わったの。お願いだから、もう帰ってよ……」

……何で、わかってくれないんだろう。
「私は、」
ひくっ……と、のどが詰まるような錯覚を覚える。
……これから言おうとしているのは、八代さんの気持ちを、踏み躙る言葉。こんな私を、『友達』と言ってくれた彼女の気持ちを傷つける、最低の行為。
でも……でも……八代さんの身の安全には、代えられない。
私一人が嫌われる程度の代償で、彼女が平穏無事に暮らせるなら……安いものだ。
「私は、あなたみたいな人……！」
ばくばくと、罪悪感に早鐘を打つ心臓を押さえつけ、決定的な一言を……!!
「なのは、どこ行ってたんだよー!?」
さっき秀人さんが駆け込んだドアが、内側から、どばん！　と開いた。
「起きたのに隣にいないから、ボク……」
と、その目が私の隣にいた八代さんに向き……
「……ひッ!!!」
――ばんっ!!
……ドアの向こうに、引っ込んだ。
「……え、ええと……？　ごめん、よく聞こえなかったんだけど……」
「……なんでもない」
コレは……フェイトに助けられた、と考えてもいいのだろうか。
……冷静に考えたら、事情も話さず納得しろ、というのも理不尽かもしれない。
「八代さん」
口調を正し、告げる。
「あなたには、ちゃんと事情を説明する。信じて……とは言えないけ

ど、最後まで、ちゃんと聞いてくれる……？」
八代さんは、私の本気を悟ったのか、重々しく頷いた。
「……わかった」
そして、私は彼女を家に招き入れた。
「お邪魔します」
八代さんは躊躇無く、私達の家に足を踏み入れる。これで、八畳一間に合計七人……パンク寸前だ。
診察を受ける少女を見ていた秀人さんが、私達を振り返った。
「おお、さっきの子。悪かったな、つい勢いで……」
困ったときの癖……頭を掻いて、ぺこりと軽く頭を下げた。
「あ、いえ……」
八代さんも、毒気を抜かれたように軽く応じた。
その、秀人さんの背中から。
じーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ……と、顔半分だけを出して、八代さんを伺う赤い瞳があった。言わずもがな、フェイトだ。
「あなた、さっきの……この家に住んでるの？」
八代さんが声をかける。すると、ぱっと秀人さんの背中に隠れてしまう。
「え……？」
困惑し、言葉が途切れる。
また、フェイトが顔を出して、じーーーーーーーーーーーーーーーーーーっと八代さんを観察し出す。
「あー……気にしないでやってくれ」
秀人さんが、フェイトの頭をぽすぽすと乱暴に撫でる。
「あの、あの子は……？」
「さっきからアルフとユーノが……っていうかフェイト、ちょっと離れてくれ。歩きにくいっつーの」
「……やだ」
「ったく……人見知りは良くないぞ？」
コバンザメのようにくっつくフェイトに苦笑しながら、八代さんを

招く。
例の女の子は、ベッドの上に寝かされていた。
アルフが体の状態を調べ、ユーノくんが細かな外傷を塞いでいく。
「どんな状態だ？」
ユーノくんとアルフは、なんとも言えない顔で振り向き……
「「……はぁ」」
と、ため息をついた。
「お、おい……？　何だ？　ちゃんと説明してくれよ」
二人で顔を見合わせ、ユーノくんが頷いた。そして、病状を告げる。
「……空腹による貧血」
「……はい？」
秀人さんも私も八代さんも、きっと同じような表情を浮かべていたことだろう。
「単に、ハラが減ってただけ……？」
「は、ははは……何それ……」
べしゃっ、と思わずへたり込んでしまった。
全く、人騒がせな……でも、大事にならなくてよかった。
そうと決まれば……
「……よっし！　ご飯作ろうか！」
遠回りしちゃったけど、結局必要なのは食事だ。
「高町、これ……」
と、八代さんが手に持っていたビニール袋を差し出してきた。あー……そういえば、置きっ放しにしてきちゃったんだ。それを、わざわざ拾ってきてくれていたらしい。
「ありがと」
多めに買っておいたから、冷蔵庫の中身も総動員すればたっぷり作れそうだ。
包丁とまな板を準備して、野菜を水洗いして、準備完了。
「なのは、手伝うよ」
と、コバンザメを引っぺがしてきた秀人さんが、腕まくりをして台所にやってきた。

「フェイトは？」
「置いてきた」
くいっと指差した先では……
「……」
漫画を広げ顔を隠し、コミュニケーションを完全拒否したフェイトと。
「私、八代望っていうの。高町のクラスメイトで……」
懸命にコミュニケーションを図る八代さん。
「……」
フェイトは、頑なに目を合わせようとしない。
まぁ、育ってきた環境が環境で、まともに他人と接したことが無いから、仕方ないのかも……。
「ごめん八代さん、その子、人見知りが激しくて……フェイト、返事くらいしてあげなさい！」
「……うぅぅ」
助けを求めるように、アルフを見つめる。が、アルフはユーノくんと共に、少女の看病に掛かりきりで、救援は望めない。
「……これ読んでるから無理」
結局また、漫画本を取り出してしまう。
「あ、それ……仮面ライダーＳＰＩＲＩＴＳ？」
ぴくん、とフェイトが反応した。
「……うん」
おお……フェイトが返事をした。
「私の幼馴染がそういう漫画たくさん持ってて、よく読むんだけど……」
「……何巻？」
漫画本で顔を隠したまま、ぼそっと聞いた。
「え？」
「何巻、が、好き……？」
顔を隠しているのは変わりないが、目はしっかりと八代さんを見つめていた。

……大丈夫、かな。
「……はぁ」
でも、何だか寂しい気もする……。
「大丈夫」
ぽん、と秀人さんの手が、私の頭を軽く撫でた。
「……」
無言で、人差し指を口の前に立てる。
「へぇ……あなた、高町の友達なんだ」
「うん。なのはは、ボクの初めてのともだち」
「どういう理由で知り合ったの？」
「おかーさんに言われて探し物してたら、なのはも同じもの探してて」
「へぇ……それで？」
「ぶっとばしたら、ぶっとばされた」
「……」
「……でも、今は一番の友達なんだ」
「……」
……一番。
「フェイトに、なのは以外に友達が出来たって、なのはが一番だよ」
「……うん！」
照れくさくもあるけど……それ以上に、嬉しい。
「……よし！」
包丁を手に、食材を刻む。
フライパンに油を敷き、鍋と共に火を掛ける。
秀人さんのサポートが追いつかないくらいのスピードで、料理を仕上げていく。
うん……今日は記念日だ！　思いっきり豪華な昼食を、用意しよう！
そして、一時間後。
「できたぞー。机の上片付けろー」
台所を、シンクまで一杯にするほど大量の料理が埋め尽くしていた。

「ごはんだっ!!」
フェイトが、ぱっと顔を輝かせる。
隣では、八代さんがびっくりした様子でそれを見ていた。
「あ……」
我に返ったフェイトが、恥じ入るように俯いた。
「ユーノ、アルフ、その子はどうだ？」
「うん、血糖値も安定したから、そろそろ目を覚ますはずだよ」
「やれやれ……ごめんよフェイト、お待たせ」
集中していた二人が、やや疲れた様子で立ち上がった。
「初めまして。僕はユーノ・スクライア。この家の同居人をやってるよ」
「アタシはアルフ。フェイトと遊んでくれてありがとうね……ええと、ヤシロ？」
「はい、八代望です。初めまして」
自己紹介も済んだところで、食事の時間だ。
予備の座卓も引っ張り出して、料理を並べていく。
「う、う……？」
食事の匂いに釣られて、例の子がようやく目を覚ました。
髪の毛の紅色に反して、瞳は綺麗なブルー。
「おはよう。ご飯、食べるよね？」
「……んー」
フラフラとした足取りで、ちゃぶ台の脇にちょこんと座る。
頭が半分くらい寝ている状態でも、しっかりとフォークを掴んでいる。
よし、それじゃあ……
「「「

を、スパゲッティを、次々に口に詰め込む。ハンバーグが食べたいって言ってたの、覚えておいてよかった。
「これ……高町が作ったの？」
「うん。……そういえば、八代さんも料理するんだっけ？」
以前、葉山君にお弁当を作っていた気がする。
「……負けたわ。でも、どうしてこんなに上手なの？」
「訳あって、二年くらい自分で家事やってたから」
「……そっか」
それ以上は、聞いてこなかった。
見れば、例の子の持つフォークは、ちゃぶ台や皿の端っこをかつん、かつん、と突っつくだけで、全く料理を口に出来ていない。
「しゃーねーな、もう……」
秀人さんが、少女の手から取ったフォークでハンバーグを切り分け、女の子の口元に持って行く。女の子は、ふんふんと匂いを嗅ぐや否や、ぱくっと食いついた。
「……はぐっ」
もぐもぐ、ごくん。
二口目、三口目と続け……
「……んぁ？」
ここにきて、ようやく完全に目が覚めたらしい。
吊り目気味のブルーの瞳が、秀人さんの顔を間近で捉えた。
「よっ。おはよう」
爽やかに挨拶する秀人さん。フォークを返却して、自分の食事に戻る。
その秀人さんの顔を、じーっと、じーーーーーーーーっと、無言無表情で見つめ、そして……
「あぎゃあああああああ

思わず秀人さんが仰け反るほどの悲鳴を上げた！
――どんどん!!
――がんっ！
――どすんっ！
二回三回とでんぐり返しを繰り返し、ようやく安定。
「お、おま、おまえはッ!!」
女の子は、フォーク片手にワナワナと震え、秀人さんを睨みつけた。
「……悪い、何かしたっけ？」
「ざけんなっ！　忘れたとは言わせねぇぞっ!!」
が、ガラ悪ッ!!
「いや……マジで身に覚えが無いんだが……」
困惑する秀人さんに、今にも飛び掛って行きそうな剣幕。
アルフとユーノくんが、僅かに身構える。
「え？　え？」
緊迫した空気に、八代さんが戸惑ったように左右を見渡す。
「……！」
女の子が、フォークを逆手に構え……
――ぐぎゅ～……
……腹から、盛大なコーラスが鳴った。
「「「「「「……」」」」」」
暴れだしたら拘束しようと身構えていたユーノくんとアルフ。状況についていけず、固まっていた八代さん。フライドチキンに手を伸ばしていたフェイト。全員が、どう反応すればいいやらわからず、固まった。
「な、何だよ!?　何が言いたいんだよ!?　……腹が減ってて悪いかチクショー!!」
何も言っていないのに、勝手に逆ギレして涙目になっていた。
確かに、これは恥ずかしい。
「あー、おなかへってるとイライラするんだよねー。　……たべる？」
フェイトが、フライドポテトを載せた皿を差し出した。
少女は同じようにフェイトを睨むが、

「おいしいよ？」
にへら、という言葉がぴったりの、締まりの無い笑みを見せられ……
「……食べる」
すっかり、気勢を削がれてしまった。
どすん、と乱暴に腰を下ろし、ガツガツと料理を平らげていく。
やはり、空腹には勝てないか。
どういう理由かは分からないけど、とにかくこの子は、秀人さんに並々ならぬ敵意を抱いているらしい。それがどうしてなのか、ちゃんと聞き出さないと。
「あ、ちょっと待て！　そのソーセージ、ボクがマークしてたんだぞ！」
「ふん、知るか！　取られるのが嫌だったら、口の中に入れておけ！」
「このっ……！　そりゃ」
「ぬあぁ!!　てめぇ！　その肉はアタシが……！」
「もぐもぐもぐ……へへーん、口の中に入れちゃったもんねー！」
「このやろー！」
……食後にね。

「「「

「……」
……厄介なことに、着々と成長しているらしかった。
「それで、『いい機会だから』って、プリント持たされたの」
大きなお世話……本当に。
「ねえ、教えて……？　何で高町は、私と絶交したの」
でも、約束は約束だ。
「秀人さん……」
「ああ。あの高台でいいな？」
「うん」
ここじゃなくて……いつも、魔法の練習に使っている、あの高台で話そう。
「あの……もしかして、また……？」
「うん。飛んでいく」
ひくっ、と顔が引きつった。
「どうする？　やめる？　それでもいいけど」
「……上等！　ドンと来なさい！」
開き直った人間は、意外と動じないものだ。
本日二回目となる飛行に、八代さんは悲鳴一つ上げずに耐え切った。
……唇が紫色だけど。
秀人さんは、軽く人払いの結界を展開して、歩いていってしまった。
私の好きなように……そういうことだろう。
「あのね……――」
――そして、話せる限りのことを話した。
――ユーノくん、秀人さんとの出会い。
――魔法の力。
――ジュエルシードの力と、それがもたらした結果。
「あの地震……私が……？」
無言で頷き、肯定。
「……もう、あんな危険な目に遭わせるわけにはいかない」
だから遠ざけたのだと、告げた。

魔法の力は、災厄を呼び寄せてしまうものだと。
「……じゃないわよ」
俯いていた八代さんが、ぼそりと呟いた。
「……そういうことだから。もう私に、」
関わらないで。
そう言おうとした瞬間、伸びてきた手が、私の胸倉を思いっきり掴み、引き寄せた。
「ふざけんじゃないわよ!!」
「……え？」
目をぱちくりさせて、目の前いっぱいに広がる八代さんの顔を見つめる。
「魔法だとか、災厄だとか言って……！　私の気持ちなんて、欠片も考えてないじゃない！」
「……違う！」
聞き捨てのならない言葉に、私の頭に血が上った。
「ちゃんとあなたのことを、考えた結果だ!!」
八代さんの胸倉を掴む。
「あなたには、もう傷ついて欲しくないから……だから……！」
「それが、考えてないって言ってんのよ！」
もう、完全に頭に血が上って、冷静な言葉が出てこない。
がくがくと互いを揺さぶり、思いの丈をぶつけあう。
「私にさえ関わらなかったら、あなたはジュエルシードに取り込まれずに済んだんだ！」
「だからって、どうして絶交になるのよ！　もう、終わったことじゃない！」
「私の近くにいたら、また巻き込まれるかもしれないからだよ!!」
「そんな確証の無い考えで、私を避けてたっていうの……!?」
「そうだよ！　なのに、何でまた私に近づいてきたのよ！　クラスで孤立していた私に対するお情け!?　馬鹿にすんな!!」
どんっ、と八代さんを突き飛ばす。
尻餅をついた八代さんは、すぐに立ち上がり……私に掴みかかって

きた。
「私は……お情けとか、関係無しに!!」
ぐるんっ、と視界がひっくり返る。
地面に背中がぶつかり、一瞬だけ息が詰まる。
見上げた先……空を背景に、八代さんの顔がアップで映った。
「高町と、友達になりたかったの!!」
……一瞬、思考が固まった。
「……最初は、いつも無愛想で、お高くとまってる嫌な奴だと思ってた。
付き合い悪いし、サボり魔だし、根暗だし……でも、気付いたら目で追ってた。『いつも、何の本読んでるんだろう』『どんな性格の人なのかな』……『お話、したいなぁ』って。
授業参観の日、初めて自分から話しかけて……内心、すごくドキドキしてたんだよ?」
……思えば、悪意以外で、意識して築いていた壁を乗り越えて、声を掛けてきてくれたのは……八代さんが初めてだった。不躾で無神経だったけど……確かに、私の心に触れた。
「一緒に、肝試ししたよね。夜に学校に忍び込んで……本物のお化けが出ちゃって、大変だった」
ジュエルシードの捜索の際、運悪く二人が巻き込まれてしまった。でも、翌日にはけろっとした顔で、『おはよう』って言ってくれたっけ。
「健太のサッカーの試合、応援しに行ったよね。高町、柄にも無く熱心に応援して」
「でも……その帰りに」
「……うん、少しだけど、覚えてる」
あの日。葉山君の気持ちを知ってしまった……いや、前から薄々感づいていたんだろうけど、目の前で聞いてしまった八代さんは、ジュエルシードを発動してしまった。
「あの時は、高町を許せないって気持ちが一杯になって……人をたくさん巻き込んじゃった」
「……」

「確かに、高町の言うこともわかるよ。二度も、ジュエルシードっていう危険物の騒動に巻き込まれたんだから」
でも、と前置きして、私の手を引っ張って立ち上がらせ、言った。
「絶交したまま途切れるなんて……そんなの、絶対に哀しいよ」
ぱきん、と、頑なに我を押し込めていた堰に、罅が入った。
「さっき、私の気持ちのことしか話さなかったけど……高町は、どうなの？」
「どう……って？」
ひび割れは、堰をあっという間に侵食し、結界寸前にまで追い込む。
「……私のこと、嫌い？」
こんなにも一生懸命に、気持ちを伝えてくれている。
それが、照れくさくて……胸の奥がぽかぽかして……嬉しい。
「……そんなこと、無い」
――堰は、完全に決壊した。
鉄砲水のように、押し込めていた感情があふれ出してくる。
「わ、私は、八代さんと仲良くなりたい。
いつかまた絶交することになるかもしれない、けど、喧嘩別れするかもしれない、けど……私は、」
緊張で、言葉にどもりが出てしまう。
「あなたの、友達になりたい」
――それが、私の本心だった。
「つまらないことで、喧嘩になるかもしれない」
「何度でも、仲直りすればいい！」
「学校を休んで、会えない日が続くかもしれない」
「だったら、私から会いに行く！」
一陣の風のように、私の不安を悉く吹き飛ばす。
「それでも望は、私の友達でいてくれる……？」
望は、一瞬だけ驚いたような顔をして……いっそう強く、手を握った。
「あったり前でしょ、なのは！」

……深かった溝が、すれ違っていた気持ちが……ようやく、結びついた。

# A’s編　第十八話

……目を閉じて、意識を集中する。
胸の奥。心臓の隣辺り。
そこに、リンカーコアがあるものと仮定してイメージすると、より正確な魔力運用が出来ると……リーゼのアドバイスだ。
「すー……はー……」
一気に大魔力を搾り出すのではなく、緩やかに、全身の回路を使って、魔力の純度を上げて行く。
「十分です。では、次の工程へ」
高めた魔力を、手元に集中させていく。
――ボウッ……
球状の魔力が、薄らぼんやりと実体化を始める。
脳裏にイメージするのは、守護騎士の一体……『剣の騎士』。
そして、手にしていた……
「召喚」
守護騎士システム……その中から、武装のみを選択。不定形だった魔力が、結実する。
「焔の魔剣」
――バキィンッ!!
そして、手に感じる、確かな重み。
「初めてにしては、上々の出来です。主」
目を開ける。
「……当然でしょ」
右手には、無骨な片刃の剣が握られていた。
――シュッ……!!
リーゼの手に、ほぼ同じ刃渡りの片刃剣が出現する。
要した時間は、数秒も無いだろう。
確かに私は、細かな魔力運用が苦手だ。
短所を無視して、長所を徹底的に伸ばすという方法もある……とい

う話を聞いたが、それでは駄目だ。
あの忌々しいライダー野郎……あいつも、魔法こそチャチかったけど、魔力の運用技術は相当のものだった。それこそ、このリーゼに匹敵するほど。
だとしたら、短所を克服しないことには勝てない。
全てのパラメーターを、バランス良く向上させていくというのが、私のプランだった。
だからこうして、訓練を重ねているわけだが……
「チッ……まだ、あんたと同じようには出来ないか」
リーゼは、感情の無い顔をふるふる、と左右に振った。
「私のこれは、ただの魔力刃です。主のそれは、一部とはいえ守護騎士を使役する、召喚魔法。求められる技量の土台が違いすぎます」
「そーなんだけどさぁ……」
思い起こすのは、『鉄槌』の死に際。
目の前に襲い来る、巨大な猛禽。
「アイツの、あの不死鳥。
あれも召喚魔法なんでしょ？」
だから、私も召喚魔法で対抗……と思ったんだけど。
「はい、そうです。かなり……いえ。正直、ありえない規模の」
淡々と……それでいて、僅かな畏怖を感じさせる。
「そんなに難しいの？」
ただのデカい炎の鳥だったら、簡単に出来る。
ただ攻撃魔法に炎の属性を追加して、形を整えればいいだけ。
多分、私にもわかりやすいように言葉を噛み砕き……話しだした。
「魔法とは、要は弾丸です。一定のエネルギーで射出された後は、そのエネルギーを消費するのみ。いずれは消えます」
……そんなもん、いちいち確認しなくても分かっている。
それをわざわざ口にするということは……これから口にする事への反例のためだろう。
「ですが、あれは……召喚されたモノが、独自にエネルギーを発生させ、自らを維持していました。つまり、」

「術者から独立して、エネルギーを永続的に維持し続けられる。
簡単に言えば、『生きた魔法』ってトコ？」
先回りして、さくっと回答。
「その通りです」
「でもさ、それって使い魔と何が違うの？」
自意識を持って、自己を維持する魔法生命体。それは、使い魔と同じじゃない？
「『使い魔』という存在は、存在の基盤となった依代が、必ず存在します。その依代に、マスターのリンカーコアの一部を移植・共有することで、魔法生命体となります」
ぴょこぴょこ、とリーゼの猫尻尾が揺れる。
リーゼの依代は、元マスターの飼い猫だったっけ。
「ですが、あの不死鳥が発動する際に用いたのは、リンカーコアの断片のみでした」
あの、撒き散らされた血液は違うんだろうか。
「あれは、単なる構成素材です。依代ではありません」
う、うぅん……？
私は、足りない頭をなんとか回転させる。
「……依代っていうのは、魔法を発動させるための核になるもの……構成素材は、出来上がった魔法の、外殻になるもの……？」
「ほぼ正解です」
と、リーゼは言った。
「自身の魔力のみで、自意識を持った存在を創り出す……？」
それは、生命を創造することに等しい。
もし、そうだとしたら……
「無機物に生命を宿すことも、
果ては、死者を蘇生することも可能でしょう。
神域を侵す……まさに、真性の『魔法』です」
なによそれ……反則じゃない。
「ですが、彼はまだ、意識的に召喚を行えているわけではないようです」

「え？」
どういうこと？
映像記録は、『鉄槌』が殺された時点で途切れている。そこから先は推測しかできないんだけど……
「私は、全てを観察していましたから」
「……ああ、そうだった」
このリーゼは、私が従えるまで、影でいろいろ暗躍していたんだったっけ。なら、守護騎士や敵をマークしていたのも頷ける。
「あの不死鳥は、『鉄槌』を撃破した後、リンカーコアの断片へと還元され、術者の体内へ還っていきました。彼はそのような指示を出していませんでしたから、恐らく、あの不死鳥自身の判断でしょう」
んー……えーと……
「つまりあの不死鳥は、『呼び出された』っていうより、『自ら出てきた』……？」
リーゼは、こくんと頷いた。
うわぁ……ありえないにも程がある。
「それ、おかしくない？　リンカーコアが、勝手に一部を切り離して出てくるなんて」
まるで、リンカーコアそのものに意思があるみたいじゃないか。
「申し訳ありません。ここから先は、私の推測になるのですが……」
「彼のリンカーコアは、先天的・後天的……何らかの要因で、変異してしまったのでしょう。休眠状態になることも無く、常に体内で大量の魔力が循環していました」
体内での、魔力の循環。
奇しくもそれは、さっき私が行った、魔力の純度を上げる工程そのものだった。
それを年がら年中、行っている……？
「恐らくは、外的な衝撃で肉体が著しく損傷してしまったのでしょう。意識を失った肉体の危機……それに生存本能が、リンカーコアの起動という形で反応し、損傷を修復し、回復させたものかと」
……一般人のリンカーコアの大きさだったなら、それは肉体の機能

を正常に戻す程度で済んだ。本当に、ただそれだけだったなら、それはごくありふれた感動話として埋没したことだろう。
けれど、あいつのリンカーコアは多分、そんじょそこらの魔導師なんか比較にならないほど大きく、強大だった。そして、それまで一度も起動させておらず、加減が利かなかったということもあり、結果……
「どんな怪我でも、宿主の無意識のうちに修復してしまうことが定着した」
正解、というふうに、リーゼが首肯する。
「そして、それを繰り返すうちに、リンカーコアに自我が芽生えた」
宿主の危機に際して、外敵に能動的な攻撃を加えるほどに。
「じゃあ、アイツを蒐集するのは無理か」
「そのほうが無難でしょう」
下手したら、闇の書の中で大暴れして、大爆発するかもしれないし。
「まぁ、まずは地力を鍛えるとしますか」
まずは、アイツと対等に渡り合えるようにならなくちゃ。
ぶんっ、と剣を振る。
「うおっとととと……！　お、重っ……！」
刃の重量に負けて、身体が大きく流されてしまった。
「腕の力だけで振るうから、流されるのです。
下半身で地面を掴み、上半身全体で……」
――ヒュンッ!!
快音と共に、リーゼの剣が宙を凪ぐ。
「このように。まずは、コレを切れるようになりましょうか」
――ごすんっ。
リーゼの目の前に、魔法で組んだであろう物質が出現する。
触ってみた感じ、鉄に近いだろうか。
何だ、こんなもん……この剣なら、余裕で切断できるに決まってる。
何せ、『剣』が自動車を切断するトコ、見てたもんね。
思いっきり剣を振りかぶり……

「うおりゃー!」
――ゴキィンッ
「いっ……!」
電気が走ったような衝撃が、腕全体に伝わった。
剣は、刀身の半分ほどを物質にめり込ませ、そこで停止していた。
「……ったあああああああああああい!?」
思わず、剣を取り落としてしまった。
「力任せに叩きつけたら、どんな名剣でも意味がありません」
魔剣を拾い上げるリーゼ。
――カンッ……!
そして、バターを切るように、あっさりと物質を切断する。
「この剣は、勢いと重量で叩き斬る西洋の剣・速さと鋭さで切断する東洋の剣、双方の利点を併せ持っています。使いこなせれば、接近戦で大きな力になるでしょう」
剣を受け取り、もう一度、仮想物質の前に立つ。
これをぶった斬れば、とりあえずは合格か……
何度か素振りをして、その都度リーゼに構えを矯正してもらった。
ひとまず、基礎の基礎……くらいは、形になったと思う。
よーし、もう一度……!
「お待ちください」
勇んで剣を手にした私を、リーゼが引き止める。
「ただ斬るだけでは、何も身につきません」
「ぐ……そ、そうだった」
あのライダー野郎の、憎たらしいまでに的確な言葉を思い出した。
『サンドバッグを殴って、いい気になってたか?』……だったな、確か。
「そもそも、敵は立ち止まってはくれません。止まった的を相手に、いかに好感触を得ようと、実戦では無意味なのです」
ずず……と、仮想物質が浮かび上がる。
でっかい板状の物質は、バレーボール大の球状に形を変える。
「そして、常に一対一とは限りません」
二つ、三つ、四つ……お手玉のように、空中を踊る。

魔法で物質化させた、仮想物質。
それも……非殺傷設定にしていない。ぶつかれば、半端無い怪我を負うだろう。
思わず浮いてしまった冷や汗を拭い、魔剣を握る手に力を入れる。
「……始めて」
そして……
「それでは、主……どうかご無事で」
――ギュオオオンッ!!!
一斉に、襲い掛かってきた!!
「うあああああああああああああああっ!!」
目の前に迫ってきた鉄球に、大上段から魔剣を振り下ろす。
――ギギンッ!!
「う……くうっ!!」
切断には至らず、目の前数十センチで拮抗。
「横!」
リーゼの声。でも、もう間に合わない……!
――べきっ……
「……げふっ!」
……肺の中の酸素を、血反吐と共に吐き出した。
「あ、あ……!!」
ずきずきと、体験したことの無い痛みが、全身を支配する。
――これが、痛みか。
痛い。苦しい。辛い。
今すぐにでも、痛覚を遮断したい。
でも……これから戦う奴らは、皆これを覚悟しているんだ。痛みを知らない半端な覚悟じゃ、勝てっこない。
「……ああああっ!!」
膝を叱咤し、立ち上がる。
「主!」
再び、リーゼの声。だがそれは、私の身を案じるものではなく、注意を怠った私を叱責するものだ。

「実戦でしたら死んでいます！」
「わ、かってる……！」
リーゼは私に、痛み止めの魔法だけを施す。完全には消さず、ギリギリ動けるレベルに留める。
「起きなさい！　もう一度です！」
再び、四つの鉄球が飛来する！
「こん……ちくしょおおおっ!!」
一発目を、剣で弾く！
二発目は、横！
――ビュオッ……!!
跳躍し、回避！
一発を捌けば終わり、じゃない。よけた弾も、すぐに軌道修正をして再来する。
斬ろうにも……
――ガリイィンッ!!
球の曲面が、刃を滑らせてしまい、かすり傷程度にしかならない。
「くっそおおおおおっ!!」
――ボグッ……！
「うぐァっ……！」
強烈な衝撃と、焼けるような痛み。失われる、左肩の感覚。
左肩を砕かれた。
そして、動作が鈍ったところに、残る三発が殺到！
「くゥッ……!!」
魔剣をかざし、受け止める！
――バギンッ!!
「……あ」
魔剣が砕けた、次の瞬間。
鉄球は私の視界を埋め尽くし……
……暗転。

◆　◆　◆　◆

ここではない、どこかの景色。
それを、俯瞰するように……それでいて、一人称で体験しているような、奇妙な視点で眺めていた。
「うっ……うあああぁ……！」
――一人の少年が、泣いていた。
少年の姿は、異様だった。
四肢を強靭なゴム質の器具で拘束され、さらにその身体を、ベッドに四方から縛り付けられていた。さながら、芋虫のように。
拘束具の一部が、丁度腕の形に隆起する。
……自動車のタイヤよりも、遥かに強靭なゴムが。
――ビキィッ……！
それに遮られた、鈍い、嫌な音が聞こえた。生木をへし折るような、怖気を催す音が。
「ヒぐっ……!!」
少年の身体が、びくんと跳ねた。
この何度と無く続く痛みに、少年は涙を流していたのだろうか。
「い、痛い……痛いいいいいいいい！」
癇癪を起こし、拘束具の中で身体を暴れさせる。
拘束具の一部に、亀裂が入り……
――バツンッ!!
……とうとう、破断した。
――ガシャンッ！
弾け飛んだ拘束具の先端が、既に何も飾られなくなった花瓶を砕く。
ばたばたばた……と、明確に苛立ちを感じさせる足音が、病室に近づいてくる。
そして……
「……何を、しているのっ!!」
ガタンッ！と力任せにドアを開き、女性が現れた。
シミと、皺だらけの洋服。
かつては整えられていたであろう髪の毛は、ボサボサの枝毛だら

け。
頬はげっそりとこけ、濁った瞳だけが顔の中心でギラギラと輝いていた。
「お母さん、痛い……！」
少年の言葉からするに、この恐ろしい女性は、母親らしい。
だが、彼女の顔に、痛みに苦しむ息子を慈しむ気配は微塵も無く、床に落ちた拘束具の一部をギラリと睨みつけ、拾った。
「あああああもう！　また器具を壊して!!　弁償するのが、一体誰だと思っててるのよ!!」
がりがりと頭を掻き、拘束具を壁にバシンと叩きつける。
「何度も、何度も、何度も!!　何回言えばっ!!」
母親が手を振り上げる。
「吾妻さん！」
そこに、音を聞きつけてきた看護婦が割って入った。
「息子さんに、何をしようとしているんですか！」
両腕を掴み、少年から引き剥がす。
「放しなさいよおおおおっ!!」
完全にヒステリーを起こした母親が、看護婦の腕の中で暴れる。
やがて、男性の看護師や医師によって、完全に取り押さえられた。
「吾妻さん、落ち着いてください」
壮年の男性医師が、穏やかな表情を母親に向ける。
その背後で、『研修医』のプレートを胸につけた若い女医が、怯えるように立ちすくんでいた。
「ああ、そうでしょうねぇ！　器具が壊れたら、また新しい器具が必要になるものねぇ!?　あんた達医者は、病院は、何も困らないでしょう！」
「吾妻さん、これが無ければ、あなたの息子さんは……」
医師は、やるせない顔で言葉を詰まらせた。
……これで拘束していなければ、恐らくあの少年は、自らの腕力で、命を落とすことになりかねない。
だがそれでも、少年の規格外の筋力の前には対症療法にもならず、

こうして幾度と無く破壊されていた。
「そう言って、また新しいものを売りつけるつもりなんでしょう!?」
「……」
肯定も否定もせず、沈黙する医師。
「あなたたち、もしかしてわざとコイツの病気を治さないで放置してるんじゃないの!?　……ああ、そうよ！　そうに決まっているわ！　この詐欺師!!」
再び、暴れだした母親を看護師らが取り押さえる。
医師は、傍らの女医に短く指示を出した。
「鎮静剤を」
「は、はいっ……！」
研修医は、緊張に震える手で注射器に薬品を充填する。
そしてそれを、母親の肘関節あたりの血管に注入した。
徐々に、身体を弛緩させていく母親。
「あんな、子供……産まな……ければ……」
諦観と、絶望に満ちた恨み言を残し、母親は意識を失った。
「……ひとまず、他の病室に運んで下さい」
「はい」
看護師らは母親を背負い、退室していく。
「……すまない」
医師は、部屋の片隅にスペアしてあった予備の拘束具を、少年に装着し直す。
そして、その医師も、女医を伴って退室していった。
再び無音となった部屋に、少年のすすり泣く声が寂しく反響した。
「いらない……」
みきみきみき……と、再びあの音の前兆が聞こえ出す。
「こんな『力』……いらないよぉ!!」
また、生木をへし折るような音がして、視界にスパークが散った。
◆　◆　◆　◆
意識が、緩やかに現実に帰還する。
「……主、起きられましたか」

心配そうに、治療魔法を私に施すリーゼと目が合った。
そっか……顔面に鉄球を喰らって、ノックダウンされたのか。
それで、あんな変な夢を見てしまったのだろう。夢にしては、妙にリアル……まるで、本当に誰かの記憶を、追体験しているようだった。
「……うん」
身体は……まだ、起きられない。暖かく柔らかな枕に、再び頭を預ける。
ふと、自分の枕になっているものが何なのか、気付いた。
「膝枕？」
「はい。お嫌でしたか？」
いや……全然。というか、むしろ……
「これ、イイかも……」
なんとも言えない安心感がある。
「申し訳ありませんでした」
リーゼが、心底申し訳なさそうに謝罪した。
「その……訓練に、熱が入りすぎてしまいました……」
猫耳が、ぺたんと伏せられる。
「いや、あれでいい」
まだ顔面に鈍痛が残っている。だけど、もしあれが、仮想物質の鉄球じゃなかったら？
答えは簡単。死だ。
『一切の手加減無用』……ちゃんと、約束どおりだよ」
今後も、この方式の訓練を続けよう。
「主。あなたは少し、目先の敵に気を取られすぎです。全方位を警戒しなければ……」
リーゼから、さっきの訓練でのダメ出しを喰らう。
「うん……」
それにしても、リーゼってば肌スベスベ……
「この数ヶ月は、徹底した実戦訓練をあひゃうっ!?」
さわさわ～、っと、太ももに手を這わせる。リーゼは、聞いた事が無い珍妙な悲鳴を上げ、飛び上がった。

「あ、あの……あまり撫で回さないでもらえると……あっ……助かります」
「えー聞こえなーい」
撫で回して、指でなぞって……
――ぺろん
「ひぃうっ……！　主、悪ふざけはお止め下さい！」
肌を舐められ、身じろぎするリーゼ。
膝を抜けば、私の頭が地面に落ちるとわかっているためか、それをしないで耐え続ける。
と、私はソレに気付いた。
ぷるぷると、柔らかそうに揺れる二つのブツ。
次の瞬間、私の頭はたった一つの欲望に支配された。

――――――　揉　み　た　い　。

……と。
その欲望のままに、太ももへ気を向けている隙を突いて……！
もにゅっ！
「……！　みきゃあああああああ!!」
――ゴッキイイン!!
リーゼの拳骨が、先の鉄球並みの威力を持って落とされた。
「げふっ……!!」
痛みと共に、またしても絶たれる意識。
でも、何となく本望だったりして……

# A’ s編　第十九話

なのはと望を置いて、家に戻ってきた俺を出迎えたのは、緊迫感だった。
それを発しているのは……というか、他に誰がいようか。
「……！　てめぇ……」
拾ってきた、紅髪だ。
普通にしていれば可愛いつり目も、今や単に刺々しいプレッシャーを放つだけ。
「よっ。ただいま」
まぁ、相手は子供だし……理由を聞き出すまでは、余計な刺激を与えないようにするか。
――パンッ!!
「お」
意外なほどに熟練した身のこなしで、俺の顔面を殴ろうしてきた。
ただ、それがあまりにも真正面からの攻撃だったのと、事前に警戒していたということもあって、平手で受けることができた。
「よいしょっと」
――ドンッ！
背中から、床に投げ落とす。
「うあっ!?」
そのまま関節を固め、怪我をしないように軽く押さえつけた。
「ストップだ」
「……」
真っ先に懐のバルディッシュに手を伸ばそうとしていたフェイトを、空いた手で制する。
ユーノとアルフも、それに倣って手出しをしなかった。
「……くそっ！」
組み敷かれた紅髪が、汚く毒づいた。
「無茶するなよ。また倒れるぞ」

もう俺が倒しちゃったけど……などと、冗談を交えて呟いてみる。
「上等だテメェ！　二分でブッ潰してやる!!」
が、ぎゃいぎゃい騒ぐだけで、実行には移せそうになかった。
今はこうして制圧できたとしても、魔力が回復してしまったら、それも難しいだろう。
「……ねぇ、」
……フェイトが、紅髪の目の前にしゃがみ、視線を合わせた。
「あのね、ひでとには、キミをいじめようとか、そういうつもりは無いんだよ。もちろん、ボクだってね？」
穏やかな言葉。
一言一言を言い含めるような……それでいて、氷のような意思を込めた口調。
フェイトがこうして、流暢に言葉を出せる相手は、二種類だ。
まずは、なのは、アルフのような、心を許した相手。
そして二つ目は……フェイトが、『敵』と認識した相手だ。
さっきの行動で、この紅髪は後者に認識されてしまったらしい。
「でも、キミが何の理由も無く、ひでとを傷つけるっていうなら……」
つぅ……と、フェイトの手が、紅髪の首筋をなぞり……
――――ころすよ？
……と、極めて不穏な口調と表情で、告げた。
俺は……
「こら！」
ごっちん！　と、割と本気で拳骨を落とした。
「いったぁ!?」
途端、フェイトの纏っていた冷酷な気配が霧散した。
「女の子がそんな汚い言葉を使うな！」
「だって……！　だってこの子が……！」
涙目で、あせあせと弁明する。
全く……本当はちゃんと分かってるくせに、気持ちが暴走して口走ってしまうんだから。

「すまん、気を悪くしないでやってくれ。口はちょっと悪いけど、根は良い子だから」
空いた手で、フェイトの頭を下げさせる。
「ぎゅっ……！　ひ、ひでとぉ……！」
「ちゃんと謝りなさい」
フェイトは、頭を押し潰されながら、同じく目の前に這い蹲る紅髪を恨めしそうににらみつけた。
「放してぇ……！　そいつ、ころせないいぃ……!!」
「まだ言うか」
むぎゅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ……！
「めり込むめり込む！　っていうかもう額がタタミに埋まりかけてるってばー！」
ぴーぴー泣き言を言うフェイト。
「秀人……あんまりフェイトを怒らないでやってくれよぅ……かわいそうだよ……」
俺の手を、アルフがちょこんと摘まんで懇願してきた。
「こういう時にしっかり言っておかないと、定着しちまうだろ。お前はフェイトを甘やかしすぎだ」
聞けば、保護した当初は虫歯だらけだったらしいじゃないか。自分で歯磨きもさせないだなんて、過保護が過ぎる。
まぁその後、延々と続いた虫歯治療で泣きを見たのか、今ではしっかりと歯磨きをするようになったそうだ。
言えば分かる子なんだから、言ってあげるのが本当のやさしさ……だと思うぞ、俺は。
「ご、ごめんなさいいいいいっ!!」
フェイトはようやく謝った。
ぴょんっ、と飛びのき、アルフの背中に隠れる。
俺は、すっかりおとなしくなった紅髪を解放した。
（ユーノ、手出し無用で頼む。あと……）
（ああ、クロノに中継しておくよ）
さすがにユーノは察しが良い。

魔力を持った、異世界からの漂流者。一応は俺も管理局員の端くれだけど、こういうイレギュラーはクロノの仕事だ。
この場に更に人が増えたら、逆に言い辛くなってしまうだろうから、通信で状況を報せることにする。
（秀人。もどき。僕だ）
（とうとうフェレットでさえなくなったな?）
ユーノが素でツッコみを返した。
（……では、聴取に関しては秀人に一任しよう）
（スルーすんな!!）
（おいユーノ、大事な話してるんだから騒がないでくれよ）
（え、これ僕が悪いの……？　なにそれ理不尽……）
「……」
紅髪は、ただ黙って俺たち……じゃなくて、俺の顔を睨み続けている。
「……」
だんまりを決め込んだまま、一言も発しない。
いきなり情報を晒したりはしないか。なら、まずは……
「お前、俺の記憶にも残らないほど弱かったんじゃないのか?」
とりあえず、何でも良いから揺さぶりをかけてみよう。
「あァ!?」
ちゃりっ……!
効果は、劇的だった。
紅髪は、ワンピースのポケットから十字架……みたいな、変わったアクセサリーを取り出した。
っていうか、ソレ、まさか……!
「……起動!」
『Ａｎ……ｆａｎ……ｇ……』
濁った電子音声と共に、十字架（？）が赤く輝く!
「!」
やっぱり、デバイス!
身構える俺たち。だが……?

「……あ？」
魔力光は、すぐに電池切れを起こしてしまったかのように弱弱しくなり……消えた。
「あ……!?　き、起動！　起動！」
『……』
……駄目っぽかった。
多分、起動に必要な分の魔力が足りていないんだろう。
「起動しろってんだろこのポンコツうううううううう!!」
癇癪を起こして、ぶんぶんと十字架っぽいデバイスのチェーン振り回す紅髪。
「そりゃー」
その手から、フェイトがデバイスを掠め取った。
「あっ……！　返せテメェ！」
「やーだよー」
ひょいひょい、と持ち前の素早さで回避する。
「返せー！」
「ひでと、パス」
「おう」
放り投げられたデバイスをキャッチ。
「うがー！　返しやがれー!!」
「はいはい、ちょっと待ってろ」
突っかかってくる紅髪の頭を掴み、押し留めながらデバイスを観察する。
十字架かと思っていたけど、実際にはちょっと違うみたいだ。
なんというか……剣玉みたいな……まぁいい。試しに、起動してみるか。
何でかは知らんが、プロテクトが外れているみたいだ。
セットアップ……じゃなくて。
「起動」
で、合ってるよな？
――ギンッ!!

正解だったみたいだ。待機状態だったデバイスが発光して、戦闘形態に変形する。
「……え？」
手に感じる、ずっしりとした重み。
その形状は……長い柄と、先端に装着された……ハンマーヘッド。
（ちょ……秀人、それ！）
（えー……）
見覚え……どころじゃない。
その機能も、破壊力も……この身をもって体験している。
それを持っているということは、この少女は……
「おい……おいおいおい……マジかよ」
思わず、目の前にいる少女を凝視する。
フェイトの肩までしかないような、小さな身体。
確かに、あいつもこのくらいの背丈だった。
「お前……あの時の……」
それに、コイツの髪。着込んでいた鎧と、殆ど同じ色。
オマケとばかりに、俺に恨みを持っているとすれば……
「……ふん、やっと思い出しやがったか」
目の前で傲然と腕を組む……ただし、相変わらず頭を俺に掴まれたままでいる……この少女は。
「チビ騎士？」
「誰がチビだっ!!」
ぷすん、と。
残りカスみたいな魔力が、溶けて消えた。
◆　◆　◆　◆
望と手を繋ぎながら、家路に着く。
反対方向なのだから、途中で分かれてもいいんだけど……何となく、望を家まで送って行くことにした。
「……そっか、お父さんが」
「うん。だから、母さん達がちょっと忙しくなっちゃって」
道中、色々な話をした。

不幸自慢は大きらいだけど、望にはサクっと話せた。
アリサ、すずかにも話せたし……私の性格みたいなものだろうか？
とはいっても、変な負担を強いないように、極力軽く。
「ちょっと脳波が弱いだけで、身体は健康そのもの……なんだって」
別に、私が自分で確かめたわけじゃない。
あくまで、母さん達からの受け売りだ。
「え……お見舞いとかは？」
「……そういえば、あんまり行ってないかも」
……一時期。ほんの一時期だけど、私は父さんに恨みを抱いていたことがあった。
――父さんさえ、倒れなかったら。
一過性のものだったけど、そのあまりにも自分勝手な考えが後ろめたくて……足が遠のいてしまっていた。
最後にお見舞いに行ったのは、いつだったか。
「行かなきゃ駄目だよ」
望が、真剣な表情で言った。
「意識が無くったって……全部じゃないかもしれないけど、言葉は聞こえてることだって、あるんだよ」
……
「なのに、何も言ってあげなかったら……お父さん、きっと寂しいよ」
「そう……なのかな？」
そんなの、フィクションの世界だけだと思うんだけど……
「私のお父さん、医者だからたまに話してくれるけど……実際に、昏睡から回復した患者さんが、覚えてたっていう例もあるんだから」
「え……望のお父さん、お医者さんなんだ」
「うん。最近、勤め先の病院で何かあったらしくて、忙しそうだけど……って、それはいいから」
ちっ……うまく話が逸れたと思ったのに。
「ちゃんと、お見舞いに行くこと。わかった？」
「うん……そうする」

父親の顔くらい見に行かなくちゃ、だよね。
「ありがと、望」
――すっ……
と、もうすっかり慣れたことだけど、私達の真横に、音も無く黒塗りの自動車が停車した。
窓が開き、派手な金髪がひょいっと身を乗り出した。
「ハーイ、なのは。奇遇ね」
「アリサ。一週間ぶり」
そこで、アリサと望は、互いの存在に気がついた。
「初めまして、八代望です」
「ご丁寧にどうも。私はアリサ・バニングス」
予想外の邂逅……でも、なかなか友好的だ。
対人コミュニケーション能力が高い人って、得だよね……うらやましい。
「……ところで、なのはとはどういう関係？」
アリサがそう切り出して、望は若干、声を硬くして答えた。
「……『友達』、ですけど？」
「奇遇ね。私も、なのはの『友達』よ」
バチィッ……！　と、何故か火花が散ったように見えた。
何だろう、あれ。
「……ああ、あなたが。さっき、なのはから聞きましたよ」
「へぇ……何て？」
「『前』の学校の、『元』クラスメイトさんですよね？」
ビキッ……と、アリサの額にうっすらと青筋が浮いた。
「なのは、言ってたわよ？
『今の学校に、友達らしい友達はいない』って。何ヶ月か前に。……現クラスメイトのあなたはいつ、なのはと友達になったのかしら？」
「ついさっきですけど、何か？」
にこり、とアリサが微笑む。
「ああ、それじゃあこれから、どんどん知らない一面が見えてきて面白いわよ？　……私は、とっくに知ってるけどね」

望もまた、にっこりと綺麗な笑顔で返した。
「付き合い始めて数ヶ月って……ちょうど倦怠期が始まる頃ですよね？」
バチバチバチッ……！
仮想の火花が、一層激しくなった。
「ついさっき……って、言ってたわよね。どんな切っ掛けがあったのかしら？
ちなみに私は、交際を申し込んだら、快く受け入れてくれたけど」
ふん、と、望が鼻で笑うような変な声を出した。
「さっき、言ってくれたんですよ。『望と友達になりたい』……って。自分から」
……ぶるっ。
あれ？　何だか、寒い……もう夏なのに。
「うふふふふふふふふ」
「あはははははははは」
何でだろう。半袖じゃなくて、七部袖にしておけばよかったかなぁ。
「うふふふふふふふふふふふ」
「あはははははははははははははは」
二人は妙に平坦な笑い声で、愉快そうに笑っていた。
うーん、よく分からないけど。
「二人とも、仲良くなれてよかったね」
二人は、仲良くずっこけた。
「あのねぇ!!」
わー息ぴったり。
「……」
二人は、気まずそうに顔を逸らした。
アリサが、それを取り繕うように明るい声で、私に言う。
「なのは、今から私の家に来ない？　新作のＲＰＧが入ったんだけど……お茶とお菓子でも食べながら、遊ぼうよ」
タイトルは、ゲームに疎い私でも知っているような、大作ＲＰＧ

だった。
「あ、そのゲーム私も持ってる。なのは、私んち来ない？　今日、お父さんもお母さんもいないから」
右からアリサが、左から望が、互いを押し合いながら、迫ってきた。
「なのは、お菓子好きよね？　ウチのメイドも、あんたに会いたいって言ってたし」
「なのは、あんまり広い家じゃ落ち着かないし、人が多くて疲れるでしょ？　私の部屋で、二人水入らずで遊ぼうよ」
んー……よくわからないけど。
「ゲームはアリサの家でみんなで遊んで、セーブデータを望のメモリーカードに残せば良いんじゃないかな？」
そうすれば、また集まった時に遊べる。なかなかの名案だ。
でも、二人はお気に召さなかったようだ。
顔を見合わせ、ふうぅ～……と、長いため息をつく。
「……鈍感」
正直、心外だった。

# A’s編　第二十話

「……にしても、よく生きてたな、お前」
　周囲一帯ごと焦土と化したと思ったんだが……
「ざっけんな！　マジで死に掛けたんだぞ！」
　ころころと、よく表情の動く奴だ。本当に、プログラムなのかどうか疑いたくなる。
「それはお互い様。俺だって、お前に殺されかけたんだからな」
　あの、魔法かどうかも怪しい不死鳥が発動されなければ、とっくに殺されていた。
「おかげで、相棒は今も入院中だ」
　レイジングハートの修理は難航しているらしく、いっそフレームを新品に換装する、という案も出てきている。
「はっ……だから何だって言うんだよ」
　ふてぶてしい。
　完全に、没交渉だ。
　それじゃあ、仕方ない……
「交渉役を、呼ぶからな」
　あまり、脅迫じみた手は使いたくなかったが……。
「ふん、呼びたいだけ呼べば良い。あたしは、絶対に口を割らないからな！」
　自信満々。
「……いいんだな？」
　ずい……っと、顔を近づけて凄む。
「なにが……だよ」
　意地でも引かず、ぎろっと睨み返された。
「もう一度、聞く。いいんだな？」
「呼びたきゃ呼べっつってんだろ！」
「よしわかった」
　冥福を祈るような気持ちで、メールを送った。

にらみ合うこと、十分。
フェイトがあくびをしてアルフに窘められ、ユーノは緊張したまま。
そして。
――ガタガタガタガタガタ……バキッバキッ!!
ドアが、不穏な音を立てて、軋みだした。
って、おいおいまさか……
「な何だ誰だ敵襲か!?」
チビ騎士は懐に手をやり……ハッ、と、デバイスが俺の手にあることを思い出した。
ドアはいよいよ持って、耐久力を使い果たし……
――どかーん！　と、吹っ飛んだ。
「守護騎士の現物サンプルはどこだあああああああああああああああッ!!」
ドアを蹴破り、白衣姿の小柄な人影が踏み込んできた。
吹き飛んだドアがくるくると回転し、本棚に命中。中身を盛大にぶちまけた。
「……よう、マリー。早かったな」
「どこだぁ……!?　サンプルはどこだぁぁ……!?」
ぎょろぎょろと部屋の中をサーチする、その狂気じみた迫力に、俺たちは……そいつを呼び出した俺ですら、完全に硬直していた。
……っていうか、メール出してからまだ十分も経ってないぞ……マリー。
さては、リンディさんかクロノを脅したな。
『おいクロノ、生きてるか』
『……ま、りー……！　きん、しかんざい、は、やめろ、と、いった……だろう……』
ぷつんっ……と、念話（＋クロノの命）が途切れた。
……注射一本でＫＯかよ。
『アイツも苦労が絶えないな……周囲が変人ばっかりで。なぁユーノ』

『その筆頭が言うなよ』
ん？　姿が見えないが、どこ行った……？
「……きゅー」
いた。
ちゃぶ台の下へ、フェレットの姿で潜んでいた。
ピキーン、と、マリーがチビ騎士をロックオン。
「見ィつけたあああああァァ……!!」
「……ひィッ！」
守護騎士の見る影も無く狼狽し、内股で後ずさる。
その華奢な腕を、マリーが猛禽のような所作で捕獲する。
「さぁ来い！　ひん剥いて、隅から隅までじっくりねっとり分析してやる！　ふふふふふ……まさかの生きた標本！　与えたもうたモルモット、髪の毛一本まで美味しくしゃぶらせてもらおうか……！」
本気で舌なめずりまでするその姿、まさに捕食者。
または変質者。
「ひでと……なに、コレ」
「コレとか言うんじゃありません」
ひっし……と俺にしがみつくフェイトに至っては、人扱いしていない。
アルフが、耳をぺたんと伏せながら、フェイトの頭を撫でる。
「よしよし、大丈夫だよフェイト。アレは、こっちから手を出さなければ害は少ないからね……」
祟り神か。……まぁ、あながち間違ってもいない。
抵抗も空しく、ずり、ずり、と出口まで引きずられて行く守護騎士。
目に恐怖で涙が浮かび、助けを求めて左右に揺れる。
「た、すけて……！」
よほど、マリーが恐ろしいらしい。
……それでいいのか守護騎士。
「なのはとレイジングハートに謝るって約束するなら、助けてやってもいいぞ」
仕方ないから、助け舟だ。

俺が殺されかけた程度のことは、多目に見てやろう。
……なのはと、レイジングハートの分は、後でしっかりと侘びを入れさせるけどな。
「あ、あたしは悪くねー！　誰が謝るか！」
よし、もう止めない。
「マリー、持ってけ」
「解剖だ!!　歴史的解剖をしてやるぞ!!　ＤＮＡの一片まで、調べ尽くしてやる!!」
「かい……!?」
猟奇的な単語に、臨界が近づく。
「さぁ……！　一緒に来てもらおうか……！」
そしてとうとう……
「いやあああああああああああああっ!!　ごめんなさいいいいいいいいいいいいいっ!!」
……結果。泣き喚くチビ騎士から、四人がかりでなんとかマリーを引き剥がす頃には、皆ぐったりとしていた。

「どうだ、渾身の演技だっただろう」
マリーが、額の汗を拭うような仕草をして、相変わらずの無表情でそんなことをのたまった。
「「「「「……」」」」」
四人が、異口同音にこう感じた。
『百パー本気だっただろ』、と。
「ぐすっ……」
チビ騎士は、返してやったデバイスをがっちり握り、部屋の隅に座り込んでいる。
倍増した警戒心は、マリー一人に向けられていた。
……結果として、俺たちへの警戒を解くことには成功したわけだが。
「ただいまー……って、何これぇ!?　ドアが!!」
ばたばたばた、と、なのはが風通しの良くなった部屋に駆け込んで

きた。
「秀人さん秀人さん秀人さん！　ドアが……あれ？」
　そして、部屋の中心に居座るマリーに気付いた。
「……どなた？」
「マリエル・アテンザ」
　実に簡潔な回答だった。
「いや、そうじゃなくて」
「レイジングハートの修理を担当している」
「え!?　あ、これは失礼を……」
　相棒の主治医、と聞き、態度を軟化させる。
「そして、ドアを破壊したのは私だ」
「さらっとカミングアウトしないで下さい！」
「ついでに、本棚も中身ごと壊した」
「帰れ！」
　飛び掛ろうとするなのはを、ユーノが羽交い絞めにして止めた。
「止めないでユーノくん！　こいつのメガネ、ばっきばきに砕いてやらないと気が済まない！」
「まぁとにかく、」
　マリーは悪びれもせず、部屋に居座った。
「ソイツを連れて行く、というのは本当だ」
「……!!」
　ビクッ！　と、チビ騎士が背後で強張るのをはっきりと感じつつ、マリーに言い募る。
「拘束の後に事情聴取、で済む話じゃないんだろ？」
「ああ」
　まぁ隠すことも無いか、と、マリーは話してくれた。
「正直に言えば、守護騎士を構成する真性古代ベルカの術式と、アームドデバイスのデータが欲しい」
　カートリッジシステム搭載デバイスはともかく、術式……？
　そんなもの、一体何に使うっていうんだ？
「おまえ、本気か？」

マリーが、怪訝そうに俺を見る。
「お前の専用デバイスは、ベルカ式対応だと言っただろう？」
「聞いてねーよ!!」
初耳だぞ、そんなこと！
「……そうだったか？　まぁ、とにかく必要なんだ」
「でも、なんでベルカ式？　ミッド式じゃだめなのか？」
「駄目というわけではない。単に、ミッド式の魔法というのは、どうしても遠距離がメインになりがちで、近接先頭の術式は少ない」
確かに、そうかもしれない。インパクトは、そろそろ威力的に厳しい。ブレイズセイバーと、フラッシュムーブ、ソリッド……そのくらい。あとは、砲撃魔法を至近距離でぶっ放すくらいだ。
「そいつの構成術式の中には、失われた古代ベルカの魔法や、カートリッジシステムについての記述があるはずだ。それを解析し、使用可能にすれば、守護騎士とも互角に渡り合えるようになる」
それは、なかなかに魅力的な提案だった。
カートリッジシステムは自分で言い出したことだが、ベルカ式の魔法は考えたこともなかった。
「遠隔・広範囲に特化したミッド式と、近接・単騎に特化したベルカ式。どう考えたって、おまえはベルカ式の方が馴染む」
だが、話を聞いていたなのはは、難色を示した。
「そんな、敵と同じ力なんて……」
抵抗が無いわけじゃない。それでも、これから先、強力な敵を相手にすることを考えたら、使えるものは何でも使っていかなければならない。
……今度こそ、なのはを……レイジングハートを、守るためにも。
「なのは」
意外にも、それを諌めたのはフェイトだった。
「力は、どこまでいってもただの『力』で、それを活かすか、ころすかは、使う人の気持ち次第なんだよ」
それは、以前俺がフェイトに伝えた言葉だった。
ちゃんと覚えててくれたのか。

「ひでとは、力の使い方を間違えるようなひと？」
「……違う、けど」
「なら、いいんじゃないかな？」
「……」
じっと、考え込むなのは。
理屈では分かっていても、感情は割り切れないらしい。
「それにさー！」
ぱっ、と、フェイトが口調がいきなり軽くした。
「『敵と同質の力で戦う』って、ライダーみたいでちょーカッコいいじゃん！」
「ぷっ……！」
なのはも、思わず吹いてしまっていた。
「そうだよね……ありがと、フェイト」
よしよし、とフェイトの頭を撫でる。
「ごめん、秀人さん」
「いや、気にしないでいい」
壁際のチビ騎士に、歩み寄る。
チビ騎士は、一瞬ビクッと強張ったものの、襲い掛かっては来なかった。
「……何だよ」
「聞いての通りだ。お前の身柄は、時空管理局が預かる」
「……ああ、もう好きにしろよ」
既に、諦めているらしい。
でも、このまま引き渡したとしたら……待っているのは、尋問だけだ。
「その前に、一つ聞かせろ。リンカーコアの蒐集、あれは、やりたくてやっていた事か？」
それが、聞きたかった。
俺は最初、守護騎士達は、自ら進んで蒐集を行っているのだと思っていた。
だけど、こうして接して、言葉を交わしてみて……疑念を感じた。

確かに、蒐集を行っているのはこいつらだ。それは間違いない。けど……それを、主が無理矢理やらせているのだとしたら、話は別だ。
「どうなんだ？」
「……アタシは、闇の書の守護騎士だ。主の願いを叶えるのが、アタシ達の存在意義。
殺せと言われたら……女子供でも、殺してきた」
「……」
「でも」
持ち上がった視線が、俺とぶつかる。
「アタシ達は、殺したくて殺したことなんて、一度も無い」
そこには、確かな意思と……誇りがあった。
「そうじゃなきゃ……誰が……」
俯き、肩を震わせる。
その姿は、冷酷な敵でも、残忍な殺人者でも無く……ただの、哀れな子供だった。
「よし……わかった！」
ぱんっ、と膝を叩き、立ち上がる。
「なんか、すっごいデジャブを感じるよ……」
「うん……もう馴れたけど」
なのはとユーノが、顔を見合わせて生暖かい笑みを浮かべていた。
「？　ねーねー、なんの話？」
「フェイト、いいから……」
アルフにやんわりと止められるフェイト。
「……リンディさんから聞いていた通り、か……」
成り行きを傍観するマリエル。
「お前、ウチに来ればいい！」

# A’s編　第二十一話

鉄鎚の騎士は、困惑していた。
「ウチに来いって……本気か？」
「ああ、マジだ。お前さえ良ければ……だけどな」
今、自分を抱き上げているのは……
「アタシはお前を、殺そうとしたんだぞ」
そう。操られていたとはいえ、自分が死の寸前にまで追い込んだ、一般人の少年だ。
恨まれて当然……いや、確かに恨まれてはいる。だが、それにしては軽すぎる。
「ああ……俺はいいよ、別に」
何だろう、この少年は。自分の命というものを、あまりに無造作に扱っている。
「どうせ、放っておけば治るし」
不貞腐れているわけでも、自暴自棄になっているわけでもない。
ただ単に、自分というものに、少しも頓着していない。
「また、そういうこと言う……！」
傍らで、栗毛の少女が眉を吊り上げ、少年を睨んでいた。
「……ひでと、」
金髪の少女が、悲しげに少年を見つめる。
「で、どうする？」
意図的にそれを聞き流し、鉄鎚の騎士に聞いてくる。
「待て」
成り行きを傍観していたマリーが、口を挟む。
「それは、お前の一存で決定できることではない」
少年は、そこまで高い立場にいるわけでは無い様だった。
「何より、私はそいつのデータを持って帰りたいんだ」
……珍しい研究素材を逃がしたくない、という一心だろうが。
面倒くさそうにマリーを見やり、ため息をつく。

「わかった。データがあればいいんだな」
くるっと鉄鎚の騎士を振り返ったのと同時、少年の魔力が発動した。
足元に、ミッド式魔法陣が展開。
身体の周囲の魔力が、一本のラインとなり、そして……
「ちょっとくすぐったいぞ」
「え……？」
――バシュッ！
「うあっ!?」
鉄鎚の騎士の身体に、突き刺さった。
「……!!」
目を瞑り、やってくるであろう痛みを覚悟し……
「……？」
が、痛みは無い。むしろ……
「魔力が……回復した？」
干からびていたリンカーコアに、魔力が補充されていた。
「ほう……これが、例の」
白衣の女は、それはそれで興味深そうに観察していた。
「マリー、それこっちに渡せ。あと、お前のストレージも」
少年が、白衣の女に言った。
「……チッ」
舌打ちを一つ、懐へ仕舞おうとしていたハンマー状のデバイスと、カード状の機器を差し出す。
「油断も隙もねーな、お前は……」
両手にデバイスを持ち、それにもラインを繋げる。
魔力のラインが、鉄鎚の騎士と二機のデバイスを、少年を中継するようにして繋がる。
そして次の瞬間、見えない手で、身体をまさぐられているような感覚が走った。
「ひゃんッ!?」
鉄鎚の騎士は、意外と可愛らしい悲鳴を上げた。

「ちょっと我慢な」
「ちょっとって……ひゃうっ！　ど、どれくらい……!?」
「んーっと」
　腕を組み、焦らすようにゆっくりと、時間を算出する。
「五分くらい、いってみようか？」
「ふ、ふざけんな……ひゃあああっ!?」
　そして、きっかり五分後。
　ぷつん……とラインが途切れるのと同時、奇妙な感触は消え去った。
「はひー……はひー……！」
　息も絶え絶えにぐったりとする。
「よーし、これで許してやろう」
　……いっそ、一発殴ってくれたほうがマシに思える制裁だった。
「マリー、これでいいな」
　差し出されたのは、カード状の機器のみ。
「……確かに」
　口惜しそうに、ハンマー型デバイスに目を遣りながら、返された機器を操作する。
「おい、何だったんだ、今の……？」
　何故か魔力が回復して……全身がむずがゆくなった、
「お前のデバイスとリンカーコアのプログラムを、丸ごとコピーしてマリーのデバイスに記録した」
「……はぁ!?」
　さらっと告げられた衝撃の真実に、素っ頓狂な声を上げる。
「でもやっぱり、ベルカ式ってのは難しいな。何が何やら、さっぱりわからなかったから、丸ごとコピーする羽目になっちまった」
「いやいやいや、そうじゃなくて！」
　少年に詰め寄り、がっくんがっくんと前後に揺さぶる。
「何でお前が、『蒐集行使』を使えるんだよ!?」
「ええ……？」
　今度は、少年が呆ける番だった。

「蒐集って、何が？」
「すっとぼけんな！　今、お前が使ったアレだよ、アレ！」
「リンカーコア結合のことか？」
「そう、多分それ！」
「いや、今のは単に、リンカーコアを接続して、情報を片っ端からコピーしただけだぞ」
「全然『だけ』じゃねーよ！」
守護騎士の身体は、プログラム……つまり、文字列の情報で出来ている。
それを片っ端からコピーした……ということは、全身を隈なく探られたのと同義で……あのむずがゆさも頷ける。
「あー……確かに、ちょっと似てるかもね」
栗毛の少女が、こくこくと頷いた。
「カットペーストか、コピーペーストかの違いくらいかな」
中性的な少年が、それを補足。
「闇の書の蒐集能力っていうのは、元は秀人がやったのと同じように、術式などをコピーするだけの安全な機能だったらしいよ」
「……ああ、そうだよ」
闇の書の生き証人である彼女は、ごく僅かながら、それを覚えていた。
「アタシたち守護騎士も最初は、その知識を狙う輩から、主を、知識を守るための存在だった」
それが、何代目かの悪意ある主により、改悪され……
「……今じゃ、自分の名前も思い出せないけどな」
ははっ……と、自虐的な笑みを浮かべる。
と、少年が口を開いた。

「『ヴィータ』」

全員の注目が、少年に集まる。
「文字列の中に、それだけ読める文字があった。多分、お前の名前なん

じゃないか？」
「……アタシの、名前？」
確かめるように、「ヴィータ……」と、小さく呟く。
「そう、だ……」
バラバラだった記憶のピースが、その名前を基点として、かちかちと次々に繋ぎ合わされていく。
「アタシは、鉄鎚の騎士……ヴィータ」
――ガシュン！
「うお」
少年の手の中で、ハンマー型デバイスが突然暴れだした。
そのまま手を離れ……鉄鎚の騎士、改め、ヴィータの手の中に納まる。
「そして、そのデバイスの名は……」
「思い出したよ」
僅かな微笑みを浮かべ、相棒の名を呼ぶ。
「起きろ、グラーフアイゼン」

◆◆◆◆

チビ騎士……改め、ヴィータとグラーフアイゼンが、紅い魔力を輝かせた。
「よかったな……ヴィータ」
俺のほうを向いたヴィータは、やや気恥ずかしそうに唇を尖らせた。
「ふん。うっせーバーカ……」
きんっ……と、グラーフアイゼンが金属音を鳴らす。
『……貴公、名は』
まだ少し寝起きのような声で、そう尋ねた。
「秀人。吾妻秀人だ」
『よくぞ、我が使い手を救ってくれた。貴公には、いくら感謝しても足

りぬ』
礼儀正しいを通り越して、堅苦しいなこいつ。
「それで、どうする？　ウチに来るか？」
わき道に逸れてしまったが、まずは返事を聞かないと。
「条件は、何だ？」
「いや、別に条件とかは……」
何も、従属させようとかそういうつもりじゃないし。
「違う」
が、否定された。
「アンタは、敵であるアタシのために、力を尽くしてくれた。
アタシはベルカの騎士として、その恩に報いなければならない」
ちょっとばかし寝かせて、飯を食わせて、魔力を回復させて、名前を教えてあげただけなんだけどな……
「……それが、アタシの誇りだ」
……ほんっと、主もデバイスも、堅苦しいことだ。
「わかったよ、ヴィータ。条件は二つ」
本人が望むなら、いいよな。
「一つ。定期的にマリーの所に通い、データ提供をすること」
さっきの一回だけでは、必要最低限のものしか得られなかった。
俺の専用デバイス製造のためにも、細かなデータが必ず必要になるだろうから、それを戴くとしよう。
「ここまでは、いいか？」
「ああ」
ヴィータは、一切のタイムラグを置かずに頷いた。
「二つ目」
まぁこれは、条件というか、家事の分担に近いかもしれんが……
「お前を、我が家の『お買い物係』に任命する！」
――――――――時が、数秒間停止した。
「……はぁ!?　おか……!?」
「うむ。お買い物係だ」
なたしても、ヴィータは慌てふためいた。

「あ、アホかお前は！　そこはほら、もっと……重要な条件を出すところだろう!?」
「あ、それいいかも」
なのはが、ぽんと手を打った。
「私そろそろ学校に復帰するし、夕食の買い物、してくれるならかなり助かる」
今までは、俺かなのは、もしくはユーノが時間を見つけては買いに行っていた。
けど、俺は仕事で帰りが遅れることがあったり、なのはは学校帰りに友達と遊びたいだろうし、ユーノは何やら研究に没頭していることがある。
誰かが、決まった日時に行ってきてくれるなら、なのはの負担も少なくなる筈だ。
「お買い物……おかいもの……アタシが……？」
悩ましげにぶつぶつ考え込むヴィータ。
「頼めるか？」
「……えぇい、お買い物係でも何でもやってやるよコンチクショー！」
……やけっぱちだった。
さて……事後承諾になるけど、話を通すとしようか。
『クロノ。おーい、クロノ。生きてるか』
「誰が、死ぬか……！」
返事は、玄関からあった。
ぜーぜー言いながらも、しっかり二本足で立っていた。
「マリー！　勝手な行動をするなと、言っておいたはずだろう！」
「ふん。ワタシはお前の部下ではない」
守護騎士を独自に確保しようとしていたことを、今更ながら怒られていた。
「まぁ座れよ。説明すっから」
ちゃぶ台が用を成さなくなったので撤去し、ぐるっと適当に陣取る。

「ってわけで、こいつウチで引き取ろうと思うんだけど」
「……はぁ」
何かを諦めたようなため息をつく。
「……それが、どういうことかわかっているのか？」
「ああ。闇の書の主は、守護騎士の一体を取り戻しに来るだろうな」
これだけの力。生きていると分かれば、四分の一とはいえ、そう簡単に諦めたりはしないだろう。
「逆に言えば、常に俺たちに闇の書を引き付けておくことが出来る」
一般人への被害は、少なくすることが出来る。
「第一、」
ぐるっと、部屋に揃った面子を見渡す。
俺、なのは、フェイトはＡＡランク相当。ユーノ、アルフはＡＡランク相当。
合計５人の高ランク魔導師が揃っている。
更に、ヴィータを戦力に数えることが出来れば、体制は万全だ。
「管理局は、これ以上のメンバーを、この事件のためだけに用意できるのか？」
確かに、管理局にも俺たち以上の実力者はゴロゴロいるに違いない。が、人材不足が常態化している管理局で、この事件のためだけに、トップメンバーを贅沢に投入することなんてできないだろう。
「……君は、高町なのはを危険に晒すことを良しとしなかったのでは？」
「フェイトとアルフが護衛についてる。心配する理由が無いな」
ぱぁっ……と、フェイトの目が輝いた。
「アルフ、アルフ！　聞いた!?」
「うん、よかったねフェイト」
「いやっほー！」
どーん、とアルフにタックル。
ごろごろと床を転がり、俺の膝の上に着地した。
「……」
黙りこみ、考え込んでしまうクロノ。

多分、アースラからの対応の遅れが心配なんだろう。
「お前もこっちに拠点持ったらどうだ？」
「なに……？」
「前線基地みたいな感じで。そうすれば、現地に常駐できる上に、守護騎士の監視も、闇の書への対処もスピーディにできるんじゃないか？」
「ふむ……確かに、名案だな。よし、それで行こう。
艦長やエイミィにも、話を通しておく」
と、話を聞いていたマリーが「早速、準備に取り掛かる」とだけ言い残し、開け放しのドアへすたすたと歩いていく。途中、足を踏まれたフェイトが「ぎゃーす！」と悲鳴を上げたが、お構い無しだった。
「何だ、アイツ……？」
「……マリーの突飛な行動に、理由を求めるだけ無駄だ」
ふぅ、と、仕事に疲れたサラリーマンみたいなため息をつく。
まぁとにかく。
「よろしくな、ヴィータ」
何やら、奇妙な縁だが……
「ようこそ、我が家へ」

# A’s編　第二十二話

私は、何度目か数えるのもバカバカしく、リーゼの膝枕で傷の治療を受けていた。
「うううぅ……痛い……超痛い……」
今日も今日とて、実戦訓練。
魔剣を振るい続け、鉄球をよけ続け、斬り続け……最後の最後には、またしても顔面レシーブだった。
「はぁ……当たり前ですよ、主。すぐに熱くなって、考え無しに突貫するから……もっと状況を冷静に判断してからですね……」
くどくどと小言を言ってくる。
おっかしいなぁ。
もっと従順な人格を設定したつもりなんだけど……
「そんなことでは、一生掛かっても彼らには勝てませんよ」
むかっ。
「うっせーこの野郎！」
――むにゅっ。
柔らかい胸を、鷲掴みにしてやった。
「にゃあああああああああああああああああっ!!」
リーゼが飛び退り、同時、頭が地面に落ちて「ごん」と音を立てた。
「あ、あ、主！　私の胸を揉むのはお止め下さいと、何度も……！」
「ふん、そんなモンぶら下げてるお前が悪いんだよ……」
おー、痛い……でも、もう起きられる。よっこいしょっと。
「……はぁ」
リーゼが、諦めたようにため息をついた。
「確かに、そういった弱点はあるものの……技量としては、なかなかの上達振りです」
ちらっと目を遣った先には、スイカのように真っ二つになった鉄球の残骸が、いくつか転がっていた。
「あなたには、優れた剣の才が有るようです」

「ふーん……」
剣道なんて、習ったこと無かったからよく分からないけど……才能が有るのは、いいことだ。
――ぴぴぴっ。
と、今日だけは傍らに置いていた目覚まし時計が鳴った。
おっと、時間時間……
「主？」
首をかしげるリーゼ。あ、そういえば……言ったことなかったっけ。
「どこへ行かれるのですか？」
「美香に会いに行く。お前も付いてきて」
「美香……？」
面倒だから、歩きながら説明しようっと。
……
「なるほど……」
道中、リーゼはあごに手を当て、何か考えていた。
ちなみに、リーゼの容姿は色々な意味で目立つから、服を量販店で買って行った。
別にパクってもよかったんだけど、リーゼの「あなたは『王』であって、夜盗では無いはずです」の一声によって却下された。
耳をハンチング帽、尻尾をカーゴパンツに仕舞いこみ、伊達眼鏡を掛けた姿は、まぁ割と街中に溶け込んでいるようにも思える。Tシャツが猫柄の染め抜きなのは、ちょっとしたシャレだ。
「つまりその方は、主と師弟の契約を結んだのですね？」
「うん。とはいっても、一方的なものだけど」
「……」
リーゼはまたしても、何かを考えこんでいる。
美香のやつ、元気にしてるかな。
久しぶりに……しかも、夜じゃなくて昼に会いに行ったら……
多分、すっごい驚くだろうな。それに、リーゼのことも……
「ふふ……」

目を真ん丸くして、ほけーっと驚く姿が目に浮かぶ。
「主は、彼女をとても好いているのですね」
と、リーゼが突然、そんなことを言い出した。
「……はァ!?」
突拍子も無い発言に、思わず声が裏返ってしまった。
「ち、ちがうし！」
否定しても、リーゼはただ微笑むだけだった。
「主のそんな優しげな顔、初めて見ました」
「だから、誰が、誰を好いているって!? テキトーなこと言うな！」
何人かが、くすくすと笑いをかみ殺しながら通り過ぎて行く。
「あーもう！ さっさと行くよ!!」
「はい、主」
リーゼの手を引き、ぐいぐいと通りを進んで行く。
商店街を抜け、住宅街を抜け……段々と、人気が無くなっていく。
草が生えっぱなしになっている、なだらかな丘を登り……
「へー、こんな建物だったんだ」
到着したのは、妙な存在感のある、白い建物。
ここが、美香が入院している病院。
何食わぬ顔で、自動ドアをくぐる。若干弱めの冷房が、私達を出迎えた。
ぱたぱたと、ナース服や白衣を着た人が忙しそうに走っている姿を見ると、やはりここは病院なんだなー、と、当たり前の感想を持ってしまう。
腐ったミカン的な院長はサクッと殺しておいたから、多少は雰囲気が明るい。
「すみません、見舞いに来たんですけど」
「はい、どなたでしょう？」
「えーっと……柳瀬美香って子の」
「え……？」
と、その名前を聞いた看護婦の顔が、明らかに引きつった。
「……失礼ですが、柳瀬さんとの続柄は？」

最近の病院は、セキュリティが厳しいらしい。
「あー……友人です」
「……少々、お待ちください」
あ、信じてないなコイツ。
「……」
意識を集中して……魔力発動。
「主」「わかってるってば」
うるさいリーゼを制し、魔法による暗示を行使する。
後遺症は残らない。あくまで、この場を凌ぐための……
『私は、柳瀬美香の友人です。部屋の番号を教えてください』
言霊をかけられた看護婦は、とろんとした目になる。
「……はい、柳瀬美香さんは、５０３号室です」
よっしゃ。
「どーも。行くよ、リーゼ」
効果が切れる前に、スタコラサッサだ。
――チン……
エレベーターが五階で止まる。
と、廊下に足を踏み入れた途端……
「もう、放っておいてよ!!」
実に聞き覚えのある声が、えらい剣幕で張り上げられていた。
あーあ、タイミング悪い時に来ちゃったかなぁ……
病室のドアの横に立ち、聞き耳を立てる。
「美香……お願いだから、話を聞いて……」
「うるさい！　帰って!!」
そして、がちゃん、と何かが割れる音。
「……また、来るからね」
とぼとぼ、という表現がぴったりと合う様子で、一人の女性が病室から出てきた。
気配を消しているから、私達には気付いていない。
コイツが美香の姉貴か……って、えええ!?
「司書のお姉さん……？」

「え？」
やべっ……！　気付かれた！
「あなた……八神さん？」
美香の姉は、私がよく足を運ぶ図書館の司書……美穂さんだった。
……
待合室のベンチに、三人で腰を下ろす。
「まさか、八神さんがいるなんて、思いもしなかったわ」
「お互い様」
姉と、兄がいるとは聞いていたけど……まさかこの人とは。
「……でも、いつ美香と知り合ったの？　あの子、ずっと入院してるのに」
夜に窓から忍び込んで……駄目だ言えない。
「私も一時期、足が不自由だったからその縁で」
「ああ、そうだったわね」
車椅子で図書館に通っていたからか、すんなりと信じてもらえた。
「そちらは？」
すっと、リーゼを示す。
「……親戚」
「初めまして。リーゼと言います」
私の家族構成なんて知らないだろうから、これでいい。
「それで……今日は、美香のお見舞いに来てくれたの？」
「うん」
「……今日は、無理かもしれないわ」
「あー……」
やたらと癇癪おこしてたけっけ。
「……はぁ」
ずーん……と、やっぱりダウナーな雰囲気。
「入院生活が長くて、鬱憤が溜まるのも分かるんだけど……最近、特に不機嫌で」
……げ。
まさか……私か？　私が最近、顔を見せないからなのか？

だとしたら、美穂さんはとばっちりだ。
「ちょっと、顔だけでも見ていく」
心配そうにする美穂さんを残し、美香の病室へ向かう。
リーゼを部屋の外に待機させ、病室のドアを開ける。
「帰れって言ったでしょ！」
ぶんっ！　と、いきなり文庫本が顔面めがけて投げつけられた。
それをキャッチして、ベッドの上に放り返す。
「せっかく来てやったっていうのに、随分な言い草だね」
「……え？」
そこで、私の顔に気付いたのか、美香が呆ける。
「……姐、さん？」
「久しぶり、美香。元気してた？」
ベッドの脇まで行って、ぽんぽん、と頭を撫でる。
じわー……っと、美香の目が潤んでいく。そして。
「姐さんの……バカー!!」
「おおおっ……？」
どん、と思いっきり抱きつかれた。
「うううぅぅ～……!!」
ぐいぐいと、遠慮の無い全力で抱きしめられて、正直言えば、ちょっと苦しい。
でも、しばらく放置してしまった罪滅ぼしだ。好きなだけ、甘えさせてやろう。
そして、十分くらいの後、ようやく美香が離れた。
「……ごめんね、美香。ちょっと、忙しくて」
魔法を教えてやる、そういう約束だったのに……ゴタゴタと忙しくて、おざなりにしていた。
「でもね、美香。せっかく見舞いに来てくれた姉ちゃんに、あんまりひどいこと言うもんじゃないよ」
本当に、見舞いに来てくれる人がいるってことが、どれだけ幸せかわかってるのかな？
「でも……」

「でも、じゃない。後でちゃんと、謝っておきなさい」
「……はぁい」
「お、うまそうじゃんコレ」
小さなテーブルの上に置いてあったフルーツの盛り合わせの中から、桃を取り出してかじりつく。
「姐さん……」
呆れるような視線から逃げ、もしゃもしゃと果物を頬張る。
そのとき、廊下から数人の騒がしい足音が聞こえてきた。
うるさいなぁ……病院なんだから、少しは遠慮しろっつうの。
「あ……このフロアは、四部屋しか無くて、二つしか使ってないよ」
うっわ……贅沢。
私が言いそうになっていた言葉を、美香が肯定した。
「私は別に、大部屋でも良いって言ってるのに、お兄ちゃんとお姉ちゃんは……」
ぶつぶつ、と愚痴る。
個室の病室がいくらするかは知らないけど、かなり高額なはずだ。美香に余計なストレスを与えないよう、かなり無理しているに違いない。
「やさしいお姉ちゃんだね」
「……でも、私のために変な我慢とか、しないでほしい」
「喧嘩の原因はそれ？」
「うん。お姉ちゃん、『欲しいものは無い？』って、いつもそればっかり」
……うーん、難しいなぁ。
どっちの気持ちも、よく分かるんだけど……
――……、……!?
と、隣室が、またにわかに騒がしくなり始めた。
（……うっさいなぁ、もう！）
さっきから、人が考え事してるのにがやがやと……いい加減、我慢の限界だ。
怒鳴り込んでやろう。

「美香、ちょっと待ってて……」
「ちょっと！　静かにしてよ!!」
病室の中にいた大勢が、ビクッと振り向いて……

# A’ s編　第二十三話

――――また、いつもの夢か……？
意識はハッキリしているのに、身体が無くなったように、見ていることしか出来ない、もどかしい状況。
『……うるさい』
……いや、違う。いつもの夢じゃない。
俯瞰するのは、いつもとは別の病室だ。ベッドシーツを頭から被り、外界をシャットダウンしようとしているのは、声からして小さな女の子だろう。
――ドンドンドン!!
鍵を掛けた病室。そのドアが、激しくノックされる。
『×　×さん！　×　×さん！』
ここが病院だと配慮している雰囲気は欠片もない。
『事故の状況を説明してください！　×　×さん！』
下賤な好奇心を満たさんとする、下衆の所業だった。
『唯一の生存者であるあなたには、それを語る義務があるんですよ！』
ただ一方的に自分の要求を叩きつける、不快極まりない声だった。
『うるさい……うるさいうるさいうるさい!!』
少女は、泣いていた。
『たすけて……！』
か細い声。
――ドンドンドン!!
それは、ドアを叩く音に容易く掻き消され、誰にも届かない。
『誰か、たすけてよぉ……!!』
――ドンドンドンドンドンドンドンドン『思い出せ思い出せ思い出せ』ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン『思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ』ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン!!
いつしか、壊れたテープレコーダーのように、延々とそれをリピー

トする。
いつドアを破られるかも分からない。
その恐怖に怯え、シーツを被り、がたがたと震える。
『パパ……ママ……!!』
シーツの中で呼ぶのは、両親。
だが、両親はいつまで経っても現れない。
――『思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ思い出せ』ドンドンドン

フェイトがタオルケットを蹴飛ばし、クロノを足蹴にして寝ている。
……俺の家だ。
「……」
「……ヴィータ？」
ヴィータだけは、起きていた。
壁に背を預け、じっと宙を見据えている。
「……」
ずっと起きていた……わけでは、無さそうだ。
特徴的な紅髪に、寝癖が混じっている。
「……なんだ、早起きだな」
ヴィータは軽口には応じず、俺と目を合わせた。
「なぁ、秀人。お前……」
……何だ？
何かを言いかけて、思いとどまったように、口を閉ざしてしまった。
「……なんでもない」
もしかしたらこいつも、悪夢を見たのかもしれない。
「そっか。んじゃ、起きようぜ。もう朝だ」
悪夢を見て目が覚めるなんて、ガキっぽいにも程がある。
さて、もう起きるとしよう。
窓の外からは、太陽が顔を覗かせていた。

「ヴィータ、クロノ。それじゃ、留守番を頼んだぞ」
俺、なのは、ユーノ、フェイト、アルフの五人は、玄関先から部屋の中に声を掛けた。
「ああ、行ってくるといい」
部屋の中には、クロノと、
「……いってらっしゃい」
まだ少しぎこちない、ヴィータが見送ってくれる。
今日は、ヴィータを我が家に迎えた翌日。
ついでに、なのはが桃子たちと過ごす日でもある。

この後ヴィータは、クロノの護衛のもと、マリーのラボへと向かう予定になっている。
……一人で向かわせるのは、色々とデンジャラスだからな。
猫に鰹節というか……飢えた肉食獣の巣穴に、ウサギを放り込むようなもんだ。
「クロノ……今度は一撃死するなよ……？」
「……うるさい」
隙を突かれ、薬物注射でＫＯという無様な敗北を喫したクロノは、弱弱しく目をそらした。
「大体、お前がマリーにあんなメール送るからこうなったんだろうが！」
おう……よっぽど恥ずかしかったのか、クロノの口調が崩れている。
「いやぁ……スマンかった」
まさか、クロノを制圧してまで飛んでくるとは思わなかったんだ。
「だいたい、お前はだな……！」
うへ、小言が始まった。
「行ってきまーす！」
なのはの手を引き、ダッシュした。
「あ、おいコラ待て！　まだ話は……！」
とりあえず徒歩だ。
転移魔法を使いたいところだけど、口うるさい執務官がすぐそこにいるからな。
「クロノってば、やっぱり口うるさいなー」
頭の後ろで手を組み、てくてくと歩くフェイトが愚痴る。
「もっと女の子らしくしろー、とか、スカートであぐらをかくなー、とか、ピーマンのこすなー、とか……まったく、キミはボクの兄貴かっつうの！」
思い出してはぷりぷりと怒り、歩調が荒くなる。
「三日に一回はきてたよー。ね、アルフ」
「いや、あたしのほうは週に一回くらいだったけど」

「え、なんでー!? ずるい！」
……あいつがそんな足しげく面会に行っていたことのほうが驚きだわ。
そういえば、クロノは一人っ子だとか言ってたな。つい年下に世話を焼いてしまう性分なんだろうか。兄弟がいない分、他人の世話を焼くとか……無いな。
年下というか、むしろ……
「フェイトだからなぁ」
「フェイトだから」
「フェイトだもんねぇ」
「フェイトだし」
俺、なのは、アルフ、ユーノの異口同音な感想に、フェイトが叫ぶ。
「りふじんだー!?」
「フェイト、ピーマン食べられないの？」
なのはがふと思いついたように、何気なく聞いた。
「う……だって苦いんだもん……」
「他には？」
「えーっと……にんじん、なす、きゃべつ、れたす、とまと、かぼちゃ……」
「野菜、殆ど全部駄目じゃない……」
超お子様の味覚だった。
「じゃあ、好きな食べ物は？」
「甘いもの！
……けどリンディさんが『また虫歯になるから』って、あんまり食べさせてくれない」
「そうなんだ……」
ちらっと、なのはと目が合う。
念話で、以心伝心。
――今夜、野菜尽くしで。
――ＯＫ。
野菜嫌い、なんとかしよう。

今日はまず、全員で食事をして……その後、なのはの父親の見舞いへ行く予定だ。
望に言われたから、久しぶりに様子を見に行くことにしたらしい。
「……病院、か」
つい口をつき、出てしまった。
今朝の夢は、一体何だったんだろう。
似たような夢は、何度も見た。けど、それは俺自身の体験であって、あんな異常なものではなかった。
あの女の子も、多分知らない子だ。
それに、あの目の覚め方……俺があの子を助けようとしたら、急に現実に引き戻された。夢なんてそんなものかもしれないが、少しタイミングが不自然だった。
うーん……考えても考えても、答えが出ない。
歩きながら考えていたら、ぐいっと手を引かれた。
「みゆき、げんきにしてるかな？」
「ああ、多分……というか、アイツが元気じゃなかった事なんて無いだろう」
「あはははは！　みゆきのやつ、いっつも走ってるしな～！」
けらけらと、面白そうに笑う。
どうせなら、ということで、フェイトがいることは高町家の面々には秘密にしている。
主に、美由希へのサプライズだ。
妙にウマが合うらしい二人は、年の差を感じさせないほど仲が良い。フェイトの精神年齢は、そんなに高くないと思うから多分、美由希の精神年齢が……
「秀人さん、姉さんにそれ言ったら駄目だからね」
……おおう。バレバレだったか。
「もう、すぐ悪ノリするんだから……」
「悪い悪い……」
わざとらしくぷいっとそっぽを向くなのはに、これまたわざとらしくへコへコ謝る俺。

そんな心地よいじゃれ合いを続けながら、桃子達が待つ高町家へ向かった。
インターホンを押し、玄関を開ける。
「あ、来た来た！　いらっしゃーい！」
ばたばたばた……と、美由希がフローリングをスリッパで疾走してきた。
「ぶフッ……!!」
まさに、フェイトが言っていた通りだ。
「さぁさぁ、上がって上がって！」
「あー、ちょっと待った。……おーい、」
ドアの影に隠れていたフェイトを、ちょいちょい、と手招き。
「？」
首を傾げる美由希。
「みゆきー！　ひさしぶりー！」
びしっとポーズで決めたフェイトに、美由希は……
「……」
完全に、フリーズしていた。
「……え、あれ？　どしたの、みゆき？　ジェノサイダーがフリーズベントくらったみたいな顔になってるよ？」
一般人に分かりづらい例えをするな。
っていうか、どんな顔だ。
「みゆき？　おーい……」
「……フェ、」
ふぇ？
「フェイトだあああああああああああああああああああああっ!!」
どごーん！　と、全体重を乗せたタックルで飛び掛っていった。
「ぎゃー！」
咄嗟にバック転で、タックルを回避。
ずざざざざ……！　と、庭の芝をスライディングする。
「……うわぁ」

痛そう……
「……フェイトッ!!」
すぐさま復活。ずれた眼鏡を直し、
「フェイトーーーーーーーーーーー!」
再び、タックルを敢行。
「うわあああああああ!!」
どしーん、と、今度こそ命中した。
「フェイトフェイトフェイトー! 戻ってきてたなら何で連絡よこさないんだよこいつめー!」
力いっぱいハグし、くるくると回転する。
「ごめーん! あやまるから、あやまるからー!!」
「ゆるさーん!!」
楽しそうだ。
「美由希―? どうしたのー……って、あらあら」
奥から様子を見に来た桃子が、その様子を見て苦笑した。
「母さん、こんにちは」
「お帰りなさい、なのは」
毎晩メールか電話で話をしているから、よそよそしさは皆無だ。
かくいう俺も、ちょくちょく近況を報告していたりする。
「悪いな、桃子。あと二人分、追加よろしく」
「はいはい、任せてくださいな」
さーて。
「おい、美由希、フェイト。先に食べちまうぞ」
「「はーい!」」
体中に草の切れ端をくっつけた二人が、元気よく返事をした。
「よう、元気そうだな恭也」
「秀人も変わり無いようで何よりだ」
「少し日に焼けたか?」
少し、褐色が混じっている。
「ああ、鍛錬を再開し始めたんだ」
……ほほう。

「俺とフェイトに負けたのが、そんなにショックだったか。そうかそうか」
「……まぁ、そういうことが理由にならなくも無い」
素直じゃないなぁ……ま、それでも負ける気はしないけど。
「今度、また組み手しようぜ」
「ああ、望むところだ」
襲撃が無い間は、恭也を相手に実戦訓練をしてもいいかもしれない。
「ちょっと、秀人、恭也……料理を運ぶの、手伝って欲しいんだけど……」
両手で器用に大皿三枚を持ったユーノが、恨みがましく言ってきた。
「おお、悪い悪い……」「手伝おう」
こういうことは、男衆の仕事と相場が決まっている。
そして、三人で料理を並べ終え……ついでに、急遽必要になった追加分の料理を手伝ったりしながら、時間が過ぎて……
「準備できたよー！」
「「「はーい！」」」
食事の時間になった。
メインは、野菜の天麩羅。細麺のパスタや冷製トマトスープなどと、夏らしいさっぱりした料理が食卓を埋めていた。
「「「「「「「いただきまーす！」」」」」」」
めいめいに箸を伸ばし、天麩羅を、白身魚のフライを、パスタを小皿に取り分け、口にする。
「おお……この天麩羅、衣に味がある」
「あ、ほんとだ。……母さん、どうやったの？」
「食べ終わったら、レシピを教えてあげるわ。今度からは、なのはも作れるわよ」
「恭ちゃん恭ちゃん、ケチャップ取って」
「自分で取れ。……というか、何に付ける気だ」
「え？　パスタ」

「却下だ味音痴め。というか、お前も妹を見習え。嫁の貰い手が無くなるぞ」
「う、うっさいわぼけー！　自分こそ、忍ちゃんとギクシャクしてるくせに!!」
「ぐっ……大きなお世話だ！」
「ユーノ、この箸っていうの、使いづらいよ……口で直接食べていい？」
「駄目。使い方、教えてあげるから。ほら、人差し指と中指を……」
「うあー……指が攣りそうだ……そうだ、ユーノが食べさせてくれよ」
「え!?」
「その魚がいいな。あーん」
「いや、その……」
「（あーん）」
「フォークじゃ、駄目かな……？」
「（あーん）」
「……はい、あーん」
「あぐあぐ……うん、うまいじゃないか」
全員、概ね好評のようだった。
「うううう……やさいがいっぱい……」
約一名を除いて。
「あら、フェイトは野菜が苦手なの？」
「うん……だって、苦いし、エグいし……」
桃子はにっこりと、優しいようでいて……実は厳しい笑みを浮かべた。
箸でかぼちゃの天麩羅を持ち、フェイトの口元に持って行く。
「はい、あーん……一口で良いから、食べてみて」
「かぼちゃって、なんかデロっとしてる……」
「一口食べて、駄目だったら無理しないでいいから」
「……はーい」
……やんわりと諭され、しぶしぶ口にした。
口に入れるときは、ぎゅっと目を瞑り……

「もぐもぐ……あれ？　デロっとしてない」
　不思議そうに、一つ食べきった。
「煮物にすると粘りが出ちゃうから、それが苦手だったのね。どう？」
「きらいじゃない……というか、おいしいかも」
「じゃあ、次はナスをいってみましょうか？」
「うえ……汁がえぐいんだよ……」
「かぼちゃは食べられたでしょう？　なら、きっとナスも食べられるわよ」
「……わかった、食べてみる」
　さすが、このへんは三児の母の面目躍如。
　俺だったら、無理矢理にでも食べさせていたかもしれないところを、自分から食べるようにうまく誘導した。
「フェイトが野菜食べてる……」
　アルフが、信じられない、といった様子でそれを見ていた。
　フェイトが、野菜をぱくぱくと食べる。
「食べられたじゃない。偉いわフェイト」
　頭を撫でられたフェイトは、一瞬何かを考え、桃子の服の裾を引いた。
「……ねー、ももこ」
「なぁに？」
「料理って、ボクにもできるかな？」
　……そうきたか。
「……」
　なのはも、じっと耳を澄ましている。
「それはもちろん、練習すれば出来るけど……どうしたの？　なのは達に、作ってあげるの？」
「うん、それもあるけど」
　次にフェイトが口にした言葉は、沈黙をもたらした。
「おかーさんに、作ってあげたい」
　……プレシア。
　彼女は、今もまだ獄中にいる。直接に言葉を交わすことが出来るの

は、管理局の中でもかなり上の地位にいる者に限られていて……料理を覚えたとしても、作ってやれるかどうかは……
「……フェイト」
多少の事情を知っている桃子は、フェイトを抱き寄せた。
「わ……なに？」
「今度……なのはも一緒に、翠屋へいらっしゃい。時間を見て、教えてあげる」
「え？　母さん、私は別に……」
料理の腕に不自由が無いなのはは、遠慮しようとしていた。
「なのは、行って来いよ」
週に一回の家族の時間。それを増やすチャンスを、わざわざ見逃す手は無い。
「……まぁ、秀人さんがそう言うなら」
しぶしぶ言っているような振りをして、微妙に口角が上がっている。
どんなに大人びていたとしても、なのははまだ９才の女の子だ。母親との時間が嬉しいのは、当然のことだろう。
「……早く、プレシアさんに会えるといいわね」
「……うん」
それからしばらく、桃子はフェイトを胸に抱いていた。
「……ああもう、湿っぽいのは無し！　な―し！」
ぶんぶん、と、大きく腕を振り、『湿っぽい空気』とやらをリセットする美由希。
桃子の腕から離れたフェイト。その目は、微妙に赤くなっていた。
「へへへ……ごめんごめん！　なんでもなーい！」
明るく振舞い、残った料理を平らげていった。
「それじゃ、食事も終わったし……そろそろ行くか」
食べ終わった料理の皿を、流し台で手分けして洗った。
次は……病院へ、なのはの父親の見舞いだ。
「そういや、病院までどうやって行くんだ？」
「車で行きましょう。９人乗りだから、ギリギリ乗れるわ」

「おっけ。なのは、荷物持ったか？」
「うん……」
気の無い返事。どうやら、緊張して堅くなっているらしい。
車庫から出てきたワゴン車に乗り込む。
俺となのは、フェイトの三人は、真ん中のシートに並んで腰掛けた。
「でっけー車だな……」
「それはもう、うちの業務車両も兼ねてるから」
キャラバン・スーパーロングを、慣れた手つきで操りながら、桃子が答えた。
俺も、１８になったら取らないとな～……運転免許。あと、だいたい五ヶ月。
「……」
五カ月後に、免許だとか何とか、言っていられる状況であれば万々歳なんだけど。
いつも、魔法の練習に使っていた高台とは、町を挟んで反対側。
開発の手も殆ど入っていない、自然豊かと言えば聞こえは良いが、要は雑草が生えっぱなしの空き地が延々と続く、寂れた地域。
その真ん中に、ヘリポートまでを備えた巨大な病院がデーンと居を構えているのは、滑稽でもある。
「はい、到着」
ぞろぞろと、八人で車から降り、病院のロビーへ向かった。
「はい……あら、高町さん」
受付にいた看護師とは、顔見知りらしい。
「夫の見舞いに参りました」
「はい、それでは……」
渡されたのは、病室の鍵。５０１と、刻印されている。
エレベーターで５階まで移動し、５０１を目指す。間取り図を見た感じ、どうやらこのフロアは四部屋で贅沢にスペースを使っているようだ。
途中、通りがかった５０２のドアの前に、今時の若者っぽい格好をしたねーちゃんが直立不動で立っていたので、全員で会釈をしながら

歩いた。
　ベッドでは、人工呼吸器や、何に使うのかも分からないような管を通した男性が眠るように瞼を閉じていた。
「うわー……きょうやにそっくりだな、このひと」
「そりゃ、父親だからな」
「？　ちちおやだと、似るの？　ボク、おかーさんとあんまり見た目似てないけど」
「多分、フェイトは父親に似てるんじゃないか？」
「ふーん……」
　あまり普通じゃない産まれ方をしたフェイトには、理解し辛い内容だったらしい。

「じゃあ、ボクとひでとのあいだに子供ができたら、どっちに似るの？」

「ブッ……！　ゲホッ、ゲホッ……！」
　いきなり、何を言い出すんだこいつは……！
「フェイト、変なこと言わないで！」
　なのはが、顔を羞恥で赤くして怒鳴った。
「え、ええ!?　ボク、なにかへんなこと言った？」
　やっぱり、わかっていなかったらしい。
「言った！　そんな、秀人さんとの……子供だなんて……！」
　ちらっ。
　目が合った。
「……!!　と、とにかく！」
　あ、逸らした。
「そういう話、禁止！　禁止――――!!!!」
「なのは、ちょっと声大きいって……！」
　このフロアには、少なくとももう一組、見舞い客が……
　――ぱたぱたぱた……!!
　ほーら、やっぱり……

スリッパを鳴らして、５０１に足音が近づいてきていた。
しゃーない、とにかく、謝らないと。
――ばんっ！
「ちょっと！　静かにしてよ!!」
扉が開いて、さっきのねーちゃんが……あ？
「他の人も入院してるって言うのに……非常識……だと……」
さーー……っと、見る見るうちに血の気が引いて行く。
その子は、散切りの髪をした……なのはと同い年くらいの、小さな女の子だった。

# A’s編　第二十四話

ドアを開け放った先……待ち受けていた面子に、その驚愕に、動きを固められてしまった。
「すまん……少し、はしゃぎすぎた」
目の前で頭を下げるのは、憎たらしい仇の代表格……不死身の怪力野郎。
私の顔をブッたたいてくれたアホっぽい金髪赤眼や、ジェノザウラーみたいにビームをぶっ放す砲撃バカ。嫌らしい魔法でちくちく手間を取らせたガキに、犬女。砲撃バカの血縁者らしい奴らも、顔を揃えていた。
「……」
私の素顔は、幸いにもこいつらにはバレていない。
速攻でリンカーコアを起動させ、ブラッディダガーでもゼロ距離でブチ込んでやれば、今の弱体化した私でも、一人くらいは仕留められる。
――殺るか？　ここで……
狙うなら、リンカーコアを抜き、弱体化した砲撃バカだ。
『おやめください、主』
……リーゼか。ずっと念話を通じて、こちらの様子を伺っていたらしい。
『一人仕留めたとしても、残りの人数に押しつぶされてしまいます』
……そう、だね。
何も、いまこの場でドンパチしてたら、美香に危険が及んでしまう。
だから、今は。
『リーゼ。一人残らず、顔を記録しろ』
『了解』
一人でも多く、敵の姿を記録して……独りになったところを、個別に狩ってやる。
「……？」

怪力野郎が、怪訝な顔をする。
ここで怪しまれたらアウトだ。アクシデントとはいえ、私の顔も、相手方にばれてしまっている。なるべく自然を装って……
『主。全員の顔を記録しました』
よし。
「……それだけ。もう騒ぐんじゃないよ」
撤退だ。
去り際にもう一度振り返り……
「……」
怪力野郎の顔を、目に焼き付けた。
――ぱたん
扉を閉める。
「高町……ね」
多くは無いけど、珍しくも無い苗字だった。
「主」
ネームプレートを見上げていたら、廊下の向こうからリーゼが歩いてきた。
「いったん戻るよ」
「はい」
行動は、夜からだ。
病室に戻ったんだけど……
「……」「……」
美香が窓の外に目を遣って、頑なに口を閉ざしている。
美穂さんはどう声を掛けるべきか、おろおろと狼狽していた。
……はぁ、言ったそばからこれか。
「美香」
「私、悪くないもん」
「美香」
「……」
むすっと、より頑なに口を閉ざす。
「そう、話してくれないんだ。じゃ、バイバイ」

さくっと踵を返し、出口へすたすたと歩を進める。
「えっ……」
後ろで、美香が振り返る気配がしたけど……聞き分けの無い子供のことなんて、知ったことじゃない。
「……」
引き止めるような視線を無視して、いよいよドアに手を掛けた時……
「ごめんなさい！　謝るから帰らないでー!!」
「……」
ベッドに歩いていき、
――ゴンッ！
「いいったぁ……!!」
お仕置きの拳骨を、美香の頭にお見舞いした。
「ごめんなさい……」
涙目になる美香。
「謝る相手が違うだろ」
「うぅ……」
そして、バツが悪そうな顔で、美穂さんの方を向いた。
「……お姉ちゃん、ごめんなさい」
「……いいのよ。私も少し、言葉がきつかったわ」
……はぁ、全く、手がかかる。
「ほら、これでも食べな」
ぽいっと、ポケットの中からチョコ菓子を取り出して、美香に放る。
「ありがとー！」
「ちゃんと歯磨きするのよ？」
「はぁーい」
その後、リーゼを紹介したり、雑談に興じたり、差し入れ代わりの漫画をまわし読みしている間に、夕方になってしまった。
そろそろお暇することにしよう。
もう少しいてもよかったんだけど……
「すぅ……」

美香、寝ちゃったし。
美穂さんが玄関まで見送りに来てくれた。
「今日は、いろいろとありがとうね。八神さん」
「別に……大したことはしてませんよ」
単に、遊びに来ただけだし。
「それにしても、美香があんなに素直に話を聞くなんて……少し、妬けてしまうわ」
ふぅ……と、疲れたため息をつく。
でも、それは……
「逆じゃないかな？」
「え？」
「私は、美香のオトモダチ……突き詰めれば、ただの他人。他人には良いところだけを見せようとするし、無理してでも笑顔を作る。……誰だって、友達には嫌われたく無いからね」
最近、友達がいたことの無い私に断言は出来ないけど、推測はできる。
「でも、美穂さんは『お姉ちゃん』でしょ？　好きだから……本当に嫌われることは無いってわかってるから、つい我侭を言っちゃうんだよ」
好きな人には、つい我侭を言って、甘えたくなってしまう。
私も両親に対してしたことがあるから、よくわかる。
「だから、本当の意味で信頼されて、慕われているのは美穂さん。これは間違いないから安心していいよ」
「……八神さん」
「『はやて』でいい」
「はやてちゃん、本当に、ありがとうね……」
「……」
そして、美穂さんは病院の中へ戻っていった。
「……」
美穂さんの、去り際の笑顔が頭から離れない。
他意の無い、純粋な感謝を表す笑顔。

……世界を滅ぼす。
それが、私の最終的な目的。それに対して、躊躇いは無い。
美香は私の身内だから、生かす。
でも……美穂さんは？　美香のお兄さんは？
なんだろう。胸が、モヤモヤする。
「……ねえ、リーゼ」
「はい、主。何でしょうか」
「……」
「主？」
でも、そのモヤモヤを言葉にすることができなくて、黙り込む。
「……なんでもない」
……私は、どうしたいんだろう。
深夜。
「……」
私とリーゼは、また病院の中にいた。
病院とは言っても、病室ではなく、総合受付のカウンターの中だ。
理由は簡単。あの、高町とかいう男の住所を調べるため。
ぶぅん……と、パソコンが立ち上がる。
魔法は必要最小限……監視カメラと警報システムに、リーゼが細工を施すのみ。
物理的に何かが無くなるわけでも、データが破損するわけでもない。ただ見て、もとに戻すだけ。これなら、誰にも気付かれない。
「んーっと……」
パソコンには疎い私だけど、フォルダからデータを閲覧する程度のことは可能だ。
こういう個人情報には、普通、パスワードが設定されているのが普通なんだけど……担当の職員がボンクラだったのか、面倒くさがっていたのか、自動でログインできた。
馬鹿は、身内以外に多ければ多いほど良い。
『入院患者』という、そのままなフォルダ名のフォルダを開く。
「あった」

あっさりと見つかった。
「それほど、離れていないな……」
住所をメモに取り、パソコンの電源を落とす。
魔法は便利だけど……こうした、アナログなやりかたを忘れさせられてしまうのが、欠点といえば欠点だ。個人情報はゲットしたことだし……帰るか。
さーて、帰ってから戦闘訓練だ。

「ほい、ほいっと……！」
スウェーで鉄球を回避し、すれ違い様に刃を入れる。
――カキンッ……!!
力でねじ込むのではなく、刃を、滑り込ませるように……斬る!!
「せいやッ!!」
――キンッ!!
うん……この魔剣の扱いにも、大分慣れてきた。
今現在、私の魔力は、リーゼの言うランクにするとA。闇の書によるブースト抜きの常態がAAAだから、まずまずの回復だ。ダメージが抜けてきている。
最初のうちは避けるだけで精一杯だったこの訓練も、仕上げの段階に入っている。
「はい、ラスト！」
――キ、キィンッ!!
最後の鉄球が、上下左右に斬り裂かれた。
「見事です」
「ふん……ざっとこんなもんよ」
かしん……と、魔剣を鞘に収める。
「では、訓練を次のステップへ移しましょう」
「次って……？」
「……主、御手を」

「？　……はい」
言われるままに、手を差し出す。それをリーゼが握り……
――ヴゥンッ……!!
展開する魔法陣。記述された術式は……転移!?
「え、え!?　ちょっと、リーゼ!?」
「お達者で」
文句を言うよりも早く、光が私を包み込み……
――バシュンッ!!
「う、わああああああああああああああ!!?」
……ここではないどこかへ、転送された。
光の渦を抜けて、一瞬の停滞。そして。砂利の地面が、目の前に迫ってきていた。
「うおっとォ!?」
――ザンッ!!
……なんとか、足から着地に成功した。
「……なんだ、ここ」
見渡す限り、草原と荒野を半々にしたような、静かな風景が続いている。上空に浮かんだ二つの月が、その静けさに拍車を掛けていた。
時折吹く風が、草をさらさらと鳴らし……
――ガサッ
いや、違う。風じゃない！
「……」
魔剣を鞘から抜き放ち、正眼に構える。
――ガサガサガサッ……!!
二、三、四……まだ増える。
集中しろ。狙うのは……出足だ！
「グアアアアアアッ!!」
「はぁッ!!」
身体を回転させ、背後に一閃!!
――ザンッ!!
「ギャフッ……！」

どうっ……と、目の前に墜落する。その姿は……
「犬……いや、狼？」
とにかく、イヌ科の肉食獣に酷似した姿だった。
「グルル……」「フウウウウ……」「グルゥ……」「ガルルルル……！」
草の影から、虎視眈々と、私を狙う。
そうか……訓練の次のステップは……！
「「ガアアアアアアアアアアッ!!!」」
敵との、実戦！
「ぜあああッ!!」
――ザンッ、ザシュッ……!!
生きた肉を切り裂く、久々の感触。
だけど、殆ど自前の筋力だけでその行為を行うのは初めてだ。
鉄球と違って、繊維が複雑に絡み合った肉はゴムのように柔軟で、刃を通しづらいことこの上ない。
「ガウッ!!」
飛び掛ってきた二頭。うち一匹は、首を切断したが、もう一体はしとめ損ねた。
右前足を失いながらも、私の二の腕に喰らいついてきた！
――グチュッ……！
強化した握力で、その頭を握り潰す。
「ガアアアアアッ!!」
「っ……！」
ったく、リーゼの奴……！
「アアアアッ……ガヘッ……！」
――ボキッ……！
頚椎をヘシ折り、絶命させる。
まぁ……いっか。これはこれで、いい訓練だ！
――ズシン……！
と、岩場の影から、ひときわ大きな……体高3メートルに届こうかという程の、巨大な狼のような四足獣が姿を表した。
「グォルルルル……!!」

いよいよ、親玉のお出ましか！
「グガアアア

逃がすものか！
「死ねえエエエエエエエエエエエエエッ!!」
斬撃波を発射し、敵の群れと、野獣の四足を切断する。
これで……とどめだ！
カートリッジに残った全魔力を乗せた、渾身の一撃！
「紫電……一閃ッ!!!」
――――――……ガゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!!!
攻撃の余波で、草原が炎上する。
生き残った敵は、いない。
「はははははっ！　どうだ、リーゼ!!」
リーゼからの返事は無い。
つまり、まだ終わっていない。
「……とりあえず、」
ぐるりと見渡す。
草原と、荒野の世界。さっきみたいな獣達が、弱肉強食の掟に従う世界。
「ここの頂点に、なってみるか」
本当、練習には丁度良い。
私は魔剣と、空になったカートリッジを手に、荒野を歩き始めた。

# A’ s編　第二十五話

七月末日。
私は、屋上の給水タンクの日陰に腰掛け、ぼうっと空を眺めていた。
「あー……本日も、晴天なりー……終業式、いまだ終わらずー……」
ふわぁ……と、大きな欠伸が出た。
そう。今日は、一学期の終業式だった。
だった、というのは、私は絶賛サボタージュ中だからだ。ロクに換気もされていない体育館で、無駄に長い校長の話を聞いていられるほど、私は気が長くない。
屋上の鍵は、ちょこっと魔法を応用した念動力でシリンダーを回転させて開けた。
しっかりと施錠もしたから、バレる心配は殆ど無い。
「あーあ……」
やはり、レイジングハートがいないと寂しい。
……修理、いつ終わるのかなぁ。
少し顔を出して覗くと、体育館の渡り廊下から、ぞろぞろと生徒たちが溢れ出てきていた。
ようやく終わったらしい。さーて、教室に戻るか。

「……高町さん」「はい」
教卓まで歩き、じっとりと恨みがましい目つきで私を見る富山先生から、成績表を受けとった。
「なーのはっ。成績どーだった？」
望が、ひらひらと成績表を片手にやってきた。
「望は？」
「あー……算数と理科が2で、3が殆ど。4は家庭科だけで、5は無し」
良いのか悪いのか、分かりづらい成績だった。
さて、私はどうかなーっと。
「あ、オール2だ」

なんだか、ちょっと得した気分。
「へぇ、オール2かー……って、えええええっ!?」
望が素っ頓狂な奇声を発した。
「な……何、いきなり?」
びっくりしたなぁ、もう。
「オール2って……え、うっそ、マジで!?」
「うん。ほら」
机の上に置いた成績表を、二人で覗き込む。
「うわ……マジだ！　マジでオール2だ！」
学科の点数面はAなのに、意欲・関心・態度がF……まぁ、こんなものか。
「……な、なぁ」
あ、葉山君だ。
「あん？　何よ健太」
ぎろっ……と、葉山君を思いっきり邪魔物扱いする望。
「その……よかったら、夏休みの宿題、一緒にやらねー？」
「え？」
夏休みの宿題？
「……そんなのあったっけ？」
正直、覚えてない。
「なのは……あんたねぇ」
呆れた視線を向けられた。
貰ったプリントを確認すると、休み中の課題一覧が記載されていた。
「ちゃんとやってきてくださいね！」
檀上の先生が、主に私にむけて言った。
「提出率が悪いと、私が長谷川先生に怒られます！だからお願い！ちゃんとやってきて！」
「ははは……さっちゃん先生、相変わらずだよね」
「そうだね……」
「まぁ、心配はしてないけど。なのはなら半日あれば終わっちゃうで

しょ？」
「多分ね」
　読書感想文なら空で書けるし、他も同じく。
「そ、そうか……」
　葉山君は少ししょんぼりして、席に戻った。
　ちょっと、悪かったかな？
　望に目で尋ねると、気楽な笑いが返ってきた。
「いーのいーの。ったくあのアホ、性懲りも無く……」

「はぁ……」
「ハヤマ、どんまい！」「よくやった！」「俺達に希望が無いってことが、よく分かった！」「ナイス人柱！」「ナイス玉砕！」
「う、うっせーよ!?　ほっとけ！」
　それを友達らしき男子たちが、口々に慰める。
　――キーンコーンカーンコーン……
　お、時間だ。
「はい、それじゃあ皆さん。有意義な夏休みを過ごしてくださいね。解散！」
　さよーならー！
　大合唱が、響き渡った。
「なのは、このあと暇？」
　……うーん。暇と言えば暇なんだけど。
　明日、フェイトについて、リンディさんの上官に会う以外、何も予定が無いし。
「うん、付き合うよ」
「やった！　実は、前から気になってたお店があったんだ」
「へぇ……」
「前に行ったら閉まってて、店の前に置いてあった割引チケット貰ったんだよ」
　ぴらっ、と、鞄からそのチラシ兼チケットを取り出した。
「この、翠屋って店！」

……マジかよ。

「いらっしゃいま……せ……？」

眼鏡に三つ編みの店員……姉さんが、私たちを出迎えた。

「ま、窓際の御席へ、ドウゾ……？」

なかなか混乱しているらしく、接客がぎこちない。

でも、私も、あまり人のことを言えたほどでもない。

「ドウモ……」

一昔前のロボットのように、ガチガチの動作で席に移動する。

「わー……やっぱり、雰囲気がいい店だね」

隣で呑気にはしゃぐ望が少し憎らしい。

……久しぶりに来たな、この店も。

記憶の彼方に消えかけた風景だけど、どこか懐かしい。

姉さんが厨房に引っ込み、わたわたと身振り手振りで何かを伝えていた。

「ご注文は？」

数分後、オーダーを取りに来たのは兄さんだった。

さすがに、姉さんよりは落ち着いている。

「……ミックスサンドと、デザートにシフォンケーキを」

「かしこまりました」

一礼し、去っていく。

肉親に恭しい態度を見せられ、照れ臭いやら、恥ずかしいやら……

とにかく、調子が狂う。

「ごゆっくりどうぞ」

サンドイッチは、すぐに出てきた。

「ね、ね！今の店員さん、かっこよくない!?」

「ど」こが？

あ、あっぶな……思いっきり言うところだった。

……世間一般の評価というのは、あまり当てにならないものだ。

「はぁ……健太も、せめてあれの半分、いや、三分の一でも落ち着きがあればなぁ……」

サンドイッチをつまみながら、望がぼやく。
「でもさ……落ち着きのある葉山君なんて、葉山君じゃないよ」
彼はもっと……こう、アホじゃないと。
「あはははは……言えてるかも！」
爆笑する。
「お待たせしました」
と、話をしているところに、デザートのシフォンケーキが来た。
「あ、ども……ゴフッ！」
びっくりして、噎せてしまった。
「ちょ、大丈夫!?」
「ゲフッ……な、何で……!?」
テーブルの脇に立っていたのは、ウエイトレスではなく、パティシエが着ていそうな服を着た（事実パティシエが着ている）店員……というか。
母さんだった。
「……え？　……え!?」
望が、私と、母さんの顔を見比べる。
あまり自覚は無いけど、私達って似てるらしいから。
……はぁ、もう。
「母さん、何してるの……」
「あら、せっかく娘が友達を連れて来たのよ。挨拶くらい、いいじゃない……ねぇ？」
母さんが望と目を合わせた。
「は、初めまして。なのはの友達で、八代望って言います」
「初めまして。高町桃子です。なのはと仲良くしてあげてね」
「あ……ハイ！」
「この子、目つきと態度と言葉遣いと人付き合いは悪いけど、根は優しい子だから……」
「はい、それは知ってるから大丈夫です！」
「私達のせいなんだけど、人付き合いが苦手で、なかなか友達も出来ないみたいで……」

「もう！いいから仕事に戻ってよ！」
　恥ずかしいなぁ、もう！
「はぁい。それじゃあ、楽しんでいってね」
　そう言って、厨房に戻った。
「ったく、もう……！」
　ケーキを一口、大きめに切り分けて口に運ぶ。
　兄さんと姉さんは、明らかに父さんに似ている。
　さっきの二人との血縁に気付かれなかったのも、そういうことだろう。
「やっぱり、美人な人だったねー。さすが、なのはのお母さんだ」
　……え？
「『さすが』って、何が？」
「え……？　だから、なのははお母さん似だから、可愛いんだね……って」
　変なこと言うなぁ、望は。
「何で、母さんが美人だと、私が可愛いことになるの？」
　可愛いっていうのは、フェイトとか、望の方がしっくり来ると思うんだけど。
「……、」
　がしっ……と、両肩を掴まれる。
「……？」
「嫌味かコラー!!」
　がっくんがっくんと、前後に揺さぶられた。
「あああああ……？」
　店内にいた他の客の目が、一斉に集まる。
「あんたが可愛く無いなら、私はブスか!?　見るに堪えない醜女かー!?」
「あうあうあう……」
　何で怒ってるのか、よく分からない……
「はぁはぁはぁ……」
　バイトの店員に注意される頃には、望はすっかりバテていた。

追加注文したアイスティーを飲み、一息ついた望は、今度は言い聞かせるように話し出した。
「少しは、自信持ちなさいよ。謙虚と、卑屈は違うんだからね」
「……」
自信……か。
「……考えとく」
多分、無理だけど。
店を出た所のすぐ近くに、大型の貨物車が路上駐車していた。
……秀人さんも、お仕事してるのかな。
「なのは、どーしたの？　置いて行っちゃうぞ」
「うん、」
――ミチッ……
……今の音、何？。
きょろきょろと辺りを見渡すが、発生源は分からない。
気のせいならいいんだけど……何だろう。
――プチプチッ……！
やっぱり、気のせいじゃない！
――バツンッッ!!
次の瞬間、私の目に飛び込んできたのは……
「、の」
貨物車の荷紐が中途から千切れ、
――ガランガランガランッッ!!!
全周が一抱えはありそうな鉄骨が、望に雪崩れ落ちようとしている光景だった。
「……のぞみぃッッ!!!」
刹那の……そして、極限の集中。
それは、一つの感覚を励起させる。
フェイトとの戦闘で、何度も感じたソレ。
……辺り一帯が、モノクロ写真のように色彩を失うのと同時。

――時間が、凍結する。
身体をすくませた望。
呆気に取られる通行人。
その全てが、止まって見える。
――……。
テラス席から、兄さんが飛び出して来る。
、まずい……徐々に、時間が動き出しつつある。
集中が途切れたのでは無く単純に……身体が、耐久の限界を迎え始めている。
「――あ、！」
あと、少し……！
「……アあああああッ!!」
届けええええッ！

――ガシャアアアアンッ……！

なりふり構わずに、望に飛びついて……地面に転がった。
「ぜー……ぜー……！」
望は……!?
「……あれ？」
きょとん……と、私の腕の中にいた。
「よかった、望……！」
ぎゅうっと、望を抱きしめる。
「なのは、頭、、!?」「え？」
どろっ……と、汗とは違う、錆臭く、生温い何かが、額を伝い、視界を朱く染め……
「あ……」
ブツンッ……と、意識が強制シャットダウンされた。

警察が通報を受けて駆け付け、事後処理にあたっている。
桃子達は営業時間を切り上げ、なのはが担ぎ込まれた病院に急行していた。
「……なのは」
望は、辛そうに俯いている。
事実、辛いに違いない。
「……大丈夫よ、望ちゃん」
その肩を抱く桃子は、気丈に振る舞っていた。
転がる時に額を割ったものの、傷跡は残らないそうだ。
意識を失ったのも、単にショックによるもの、と診断された。
……いの一番に駆け付けた秀人ら……特にフェイトは、それを聞いた瞬間に、崩れ落ちた。
護衛とは言え、フェイトは保護を受ける少女に過ぎない。
今日、なのはと共にいなかったのも、明日の下準備のためであった。
それでも泣いて、泣き疲れて、ソファで眠ってしまった。
恭也と美由希は、心配する傍ら、なのはが見せた現象について、話し合っていた。
「……美由希、見たか」
「うん。さっきのって……」
二人は、畏怖を込めて、その名を口にした。
――神速。
と。
美由希はおろか、恭也ですら、使いこなすことが難しいそれを、なのはが使った。
わずか9歳の、女の子が。
しかも、肉体が限界を迎えただけで、『神速』が破綻したわけでは、無かったのだ。
練度で言えば、恭也をも凌ぎ、全盛期の父親にも匹敵するだろう。
「……『あれ』を、使えるかもしれないな」
恭也と美由希は、そのまま黙り込んだ。
「……秀人は？」

ユーノの一声に、全員がハッとする。
いない。
つい先程までそこにいた秀人が、忽然と姿を消していた。

# A’ s編　第二十六話

時間は、数時間前に遡る。
秀人は、会社の事務所にいた。
デスクに腰掛け、型遅れのノートパソコンで、在庫表をチェックし、発注書を作成していた。
「……ふぁぁ」
と、応接間とは名ばかりの、仕切で区切られたブースから、大きな欠伸が聞こえてきた。
「……あーあ、まだ昼前か」
ふて寝していたらしい。むくりと起こした身体は、ニメートルにも迫る巨体だ。横幅もあるが、その殆どが筋肉。黒く日に焼けた肌が、いかにも肉体労働者らしい。
彼は、秀人が勤める建設会社の現場監督兼……アルバイトを含めても、両手の指で事足りる小規模な会社の、社長だ。
従業員達からは、親しみを込めて『カントク』と呼ばれている。
「クソ……あの野郎」
その彼が、明らかに不機嫌だった。
それもそのはず。
今日は本来なら、新たに建てられる施設の基礎工事を行っているはずだった。
その割と大きめの案件を、他社に奪われてしまったのだ。
どうということは無い。
……それが、合法的に行われたのなら、の話だが。
今回、その案件を掻っ攫っていった建設会社は、業界では名を馳せる、悪徳業者……というか、ヤクザの傘下だった。コストダウンを唄った粗悪な材料。手抜き工事。作業は下請に丸投げ。安全管理も何も無い。
そんな連中が奪った仕事とは……病院の、新しい病棟を建てる仕事。

「タチの悪いジョークだぜ……」
ふて腐れ、煙草に火を点ける。
秀人が、見るに見兼ねて発言する。
「カントク、俺、半日で上がりましょうか？
ノート貸してくれれば、明日までに上げておきますけど」
仕事が無いなら、いるだけ人件費の無駄だ。
「いや、ヒデはいろ。……おい、ヨシ！」
代わりにカントクが呼んだのは、中卒でアルバイトのヨシヒコだった。
「ういーッス。何スか、カントク？」
金髪に失敗したような黄色髪の、軽そうな若者だ。
「帰れ」
しっしっ……と、邪険に手を払う。
「いきなり何スか!?」
納得出来るわけも無く、食い下がる。
「仕事が無ぇのにいてもしょうがねぇだろ」
「そりゃまぁ、そうッスけど……」
「んじゃおめぇ、パソコンできっか？」
「うっ……！ハイテクは、苦手ッス……」
「フォーク、動かせっか？」
「……無免ッス」
「顧客応対、できっか？」
「……さいなら」
消沈して作業着を着替えるヨシヒコに、カントクが声をかける。
「ま、詫びにメシ奢ってやるから許せ」
がばっ、と、一変して喜色満面になるヨシヒコ。
「マジっスか!?　ひゃっほー！」
いいタイミングで、ヨシヒコの腹がグゥ……と鳴る。
「お前、朝飯食ってきたか？」
現場ならともかく、待機で、そんなに腹が減る筈が無い。
秀人の問いに、ヨシヒコはからからと笑った。

「節約ッスよ、節約」
朝食代の数百円すら惜しんで、どうしたいと言うのだろうか。
「深夜にコンビニの廃棄弁当、食い溜めてるから大丈夫ッス！」
「いや大丈夫じゃねーし……」
まぁ、秀人は秀人で、そういう経験がある以上、あまり強くは言えない。
「おーい、メシ食ってくらぁ！」
カントクが残りの社員に声を掛け、秀人とヨシヒコを伴って事務所を出て行った。
食べに行く、とは言っても、洒落たレストランなどは眼中に無い。
育ち盛り食べ盛りの男子が二名、仕事柄大食漢の男性が選ぶのは、専ら……
「カントクカントク、肉食いたいッス肉!!」
「焼肉……なら、バイキングだな。ヒデはどうだ？」
「あ、ハイ。問題無いです。つーか大歓迎です」
高カロリー高タンパクの、炭水化物だった。
……席に着き、いきなり大量の肉をゴッソリ持って行った三人に、店員がぎょっとした。
ガツガツと掻き込むように食べるヨシヒコ。
もりもりと詰め込むように食べるカントク。
ぱくぱくと流し込むように食べる秀人。
流石、肉体労働者だった。
腹がある程度ふくれ、雑談が始まった。
「でも、そのナントカ商会って、そんなに酷い奴らなんスか？」
と、ヨシヒコが軽い調子で聞く。
「鉄骨縛るのに、手間が掛かるからってハーネスの本数を減らすような奴らだ」
……ぴたり、と。秀人の箸が止まる。
「……事故は？」
「あぁ、現場ではバンバン起きてるだろうよ。コトを荒立てたくないから、救急車も呼ばねぇらしいけどな」

ふん、と、忌ま忌ましそうに烏龍茶を煽る。
「……そうですか」
ため息をつき、また肉に箸を伸ばす。
「ちょ、それだけッスかヒデさん!?」
ガタンッ、と、椅子を蹴立てて立ち上がるヨシヒコ。
その目は、若い正義感に燃えていた。
「悪徳業者に、一杯喰わせてやろうとか……!」
「……あのなぁ、ヨシヒコ」
言い聞かせるように、カントクが言う。
「一杯……どうやって喰わせるんだ?」
「えっ……えーっと、それは」
途端、ごにょごにょと口ごもるヨシヒコ。
「仮に、手段があったとして、やってどうなる?
俺達が、業界から追われて刑務所入ってオシマイだ」
「うううう……納得できないッス」
秀人も、憤りを感じないかと聞かれれば、答えはノーだ。
だが、納得するしか無いのだ。
それが、たとえグレーゾーンだろうが、合法であれば、納得するしか無いのだ。

――Ｐｒｒｒｒ……
と、秀人のポケットから、携帯電話の着信音が響いた。
目で了解を取り、電話を取り出す。
相手は、
「……桃子?」
まだ、翠屋は営業時間真っ只中の筈。
怪訝な顔で、通話ボタンを押す。
「桃子、どうした?」
『な、なのは、なのはが……!!』
「おい、落ち着け。なのはが、どうしたって?」
動揺し、まともな会話が成り立たない。

がさごそ、と、電話口の向こうで音がする。
『秀人、俺だ』
「恭也か。……一体、何があったんだ？　なのはがどうとか……」
『落ち着いて、聞いてくれ』
ただならぬ雰囲気に、秀人の表情が張り詰めていく。
――話を聞き終えた瞬間、走り出していた。
『今日、なのはが友達を連れて、翠屋に来たんだ』
カントクやヨシヒコを振り返りもせず、店を飛び出し、職場まで。
キーを取り出し、バイクに跨がる。
『その、帰り道で……近くのトラックから、荷物が雪崩落ちて』
キュボッ！　と、エンジンを点火し、フル加速で走り出した。
『なのはが、友達を庇って飛び出したんだ』
大通りを、路地を、最短距離で駆け抜ける。
『それで、なのはが頭に怪我を……』
ギャギギギッ!!と、タイヤ痕を残す程のフルブレーキを掛ける。
入口を、受付を、全力疾走し……
――バンッ！
「なのは、」
病室に飛び込む。
ベッドの中では、なのはが寝息を立てていた。
……近付いて、息を呑む。
なのはの頭には、額を隠すように、包帯が巻かれていた。
「ひでと……」
フェイトが、ふらふらと秀人に寄っていく。
「ごめんなさい……ボク、なのはの『ごえい』なのに……！　なのはのそばを、はなれちゃった……」
秀人にしがみつき、しくしくと涙を流した。
「……相手は？」
それを宥めながら、恐らく一番冷静であろう恭也に聞く。
「カタギリ商会、という連中だ」
「……なに？」

唖然とする秀人に、恭也は押し殺した口調で続ける。
「治療費と、慰謝料の額だけを告げて、それっきりだ」
「……」
そこに、白衣を着た壮年の男性がやってきた。
「あ、お父さん……」
望の父親。そして、この診療所の医師でもある、八代信義だった。
「高町さん、お待たせしました」
カルテを置き、なのはの容態について説明を始めた。
「まず、命に別状はありません。失神しているのは、極度の緊張からの、疲労によるものです。じきに目を覚ますでしょう」
まずは、一安心だった。
「……ふぅ」
ぱたん、と、フェイトが倒れ込み、秀人が支えた。
「あの、先生……怪我の方は……？」
桃子が聞く。
「幸いにも、切断面が綺麗でした。適切に処置すれば、縫う必要も無いでしょう。傷痕も残りません」
「……」
秀人は無言で、医師の話に耳を傾ける。
「……」
いや、聞いてなどいなかった。
……もう、それ以外を考える余裕が無くなったのだろう。
無言のまま、病室を後にした。
敷地から出て、すたすたと歩き続ける。
「……は、」
かたかたと、噛み合わぬ歯が鳴る。
「はは……」
口角を吊り上げ、狂ったように笑い出した。
「くはははははっ……、あぁ、そうだよ」
哄笑から一変。
虚ろな無表情で、歩き出す。

「……ヨシヒコ、お前は正しかったよ」
したり顔で納得していた数時間前の自分を、ぶちのめしてやりたかった。
「……」
そう。
災害というものは、誰にでも起こりうることだ。
「関係が無いなんて、有り得ないよな……」
ふらふらと、夢遊病患者のように……しかし、方角は一直線に。
すぅっ……と、俯いていた顔を上げる。
その顔は……
「物理的にブッ潰す……!!!」
恐ろしいまでに、凄惨な笑みを浮かべていた。
――ドンッ!!
飛行魔法を、行使。
一直線に、敵の下へ――

あるビルの、最上階。
「……ええ、そのように計らって下さい」
仕立ての良い高級スーツに、高価な腕時計。
装飾品の一つ一つから、この男性が、所謂『成功者』であることを物語っていた。
「そうです。積荷が落下してしまったのは、不運な事故。委託業者の怠慢が招いたこと……」
……但し、ろくでもない類の。
こうして下請を生贄に、損失を免れる。
いつもの手口だった。
「被害者の方には、委託業者の保険から、十分な保障をするように。では」
がちゃん、と電話を切る。
「ふぅ……まったく。たかが事故くらいで手を煩わせないで欲しいものですね」

テーブルでポーカーに興じていた、筋者らしき巨漢達が男に話し掛けた。
「カタギリさん、どうかしたッスかー？」
「いえいえ、ただの現場事故ですよ」
ただの……で済ませるあたり、罪悪感など微塵も感じていないのだろう。
「あーあ、カタギリさんが下請クンせっつくから……」
「イジメはよくないですよー？」
男……カタギリは、にこやかな笑みを貼付けたまま、それを鼻で笑う。
「いえいえ、私は単に、ぼやいただけですよ。『資材の積み込みが、遅いようですね』と……それを、下請さんが耳聡く聞き付けたに過ぎません」
「ははは、違いねぇや！」「そうそう、下請さんの自業自得！」「次はどこに『依頼』しますぅー？」「ぎゃはははは！」
げらげらと、室内に下卑た笑いが満ちる。
「そうですねぇ……では、本来この案件を落札したはずだった所にでも……」
……ゲスな話に夢中なカタギリ達は、気付かない。
窓の外。
一つの影が、迫っていることに。
人通りの無い裏路地に面しているとはいえ、地上十階。
その影は、一切の減速無し……どころか、むしろ加速し……!!

――ガゴシャアァッ!!

コンクリートの壁と、強化ガラスをたやすく破壊突破し、室内に突撃してきた。
「な……何ですか一体!?」
デスクの残骸の中から、カタギリが這い出す。
彼が、そして、室内の男達が見たものは……

「……覚悟は、出来ているだろうなあァ……!?」

――地獄の鬼をも喰らい尽くす、悪鬼羅刹の威容だった。

# A’s編　第二十七話

しぃん……と、沈黙する室内。
カタギリ達は、理解を越えた状況に、ただ立ち尽くすだけだった。
「……何者だ、テメェ」
取り巻き兼ボディガードの男達が、拳銃を秀人に向ける。
「脅しじゃねぇ。分かる……うごッ!?」
――ゴゴンッ！
「……」
正に、問答無用。頭蓋骨が陥没寸前にまで衝撃を受け、意識を失う。
「……」
向けられるのは、圧倒的な……暴力的な、敵意。
「うおぉ！」
――殺られる。
本能的に察した男達は、躊躇い無く発砲した。
――パンパンパンッ！
乾いた銃声が響く。
それが、ワンサイドゲーム開始の、ゴングだった。
――チュインッ!!
着弾地点に、既に秀人はいなかった。
――ドボォッ！
ソバットを叩き込まれ、内臓に損傷を受け、
――ガンッ！
脳天に肘打ちを喰らい昏倒する。
「うおおぉっ！」
――ヒュンッ！
大振りのナイフが、秀人の皮膚を僅かに削ぎ落とす。
「はははは……最近、俺達のシマを荒らしてるヤツがいるって話、ありゃお前だったのか！」
「……？」
内心、首を傾げる秀人だったが……どうでもいい話だった。

「おらあああぁっ！」
真っ直ぐに突き出されるナイフ。
――ベキンッ!!
秀人の右フックが、ナイフ諸とも、顔面にめり込んだ。
「……」
ひとまず、この部屋にいたゴロツキはいなくなったが……肝心のカタギリは、階段から一目散に逃げ去ってしまっていた。
この辺の危険察知能力は、さすがドブネズミといったところだろうか。
「……3階か」
が、秀人がそれを見逃す筈が無かった。
追跡魔法を辿り、現在地を割り出す。
どうやら、地下の駐車場を目指しているらしい。
階段から下りる事も考えたが、ぞろぞろと気配が増えてきた。相手にはならないだろうが、足止めをくらってしまう。
「なら……」
――キュイイィ……！
拳に魔力を集中させる。秀人の十八番、インパクト。それを……
「ブチ……抜けろッ！」
床に目掛けて、振り下ろした！
――ゴバァンッ!!
ビルが激震し、天井が崩落する。
「うわあああぁっ!?」
「な、なんだあああぁ!?」
ガラガラと降り注ぐ瓦礫が、敵を混乱に陥れ、戦意を奪う。
一つ下のフロアに降り立つや否や、既にチャージ済みの左拳のインパクトを……再び床に、叩き付けた。
「もう一丁……うぉらあああぁぁっ!!」
――バゴンッ!!
二撃。
――バゴォンッ!!

三撃。
――バゴオオォンッ!!
まさに、災厄だった。
ビルが、見る見る内にがらんどうの煙突へと代わっていく。
――バゴォンッ!
そして、最後の床を突破した。
今まさに発車しようとしていた下品なベンツの前に、秀人が降り立つ。
――ギュギギギッ!
恐慌に駆られたカタギリがアクセルをベタ踏みし、後輪をスピンさせながら急発進する。
「……」
ひょいっ、と避け……すれ違い様に、バンパーを鷲掴みにした。持ち前の怪力でリアを持ち上げられ、後輪が空しく空回りをする。
運転席のカタギリは、数刻前の余裕などとうに無くし、血走った目で、アクセルを踏み続けていた。
「……ふん」
ゴロンッ! と、ベンツを上下にひっくり返す。
「ヒィ……ヒイィ……!」
ずりずりと、高級スーツを土だらけにして、カタギリがベンツから這い出してきた。
――ズシンッ!!
「ヒッ……!」
その目の前に、秀人が立ち塞がった。
恐る恐る顔を上げ……初めて、秀人の顔を見た。まだ、あどけなさを残すほどの、年若い少年。それを、カタギリは好機と見たのか……
「な、なぁ……? 条件は、何だよ?」
懐柔に、掛かった。
「か、金か? 金なら、すぐに用意して……」
――ザッ。
一歩、前へ。

「何だったら、オヤジに口利きして、組に取り立ててやっても……！」
――ザッ。
懐柔を歯牙にも掛けず、カタギリへの間合いを詰めていく。
「い、依頼主の倍……いや、三倍の報酬も出すから！　た、頼む……！」
――ザッ。
「あ、あ……」
ここに来て、カタギリはようやく悟った。
「……」
……振り上げられる、右拳。
――この男の目的は、金や依頼では無く……
……拳が、空色の光を纏う。
「いや、だ……！　何でもする！　何でもくれてやるから！　た、たすけて……！」
……懇願は、かけらも聞き入れられず。
「ならば死ね」
――最初から、自分の命が狙いだった。
……断頭台のような拳が、振り下ろされた。
「うわあああああああああぁぁぁぁぁぁ!!」
断末魔の絶叫を上げ、カタギリは、失禁しながら意識を失った。
――バゴンッ！
それは、カタギリの頭蓋が砕かれた音……ではなく。
頭の数センチ横の床に、秀人の拳がめり込んだ音だった。
「……お前の命なんて、背負う価値も無い」
そうして、踵を返した秀人の目の前に、
「……クロノ」
法衣型バリアジャケットに身を固めた、『執務官』が立っていた。
が、秀人にそれ程、驚いた様子は無い。
「時空管理局嘱託魔導師・吾妻秀人。民間人への、魔法を用いた暴行。建造物の破壊。守秘義務違犯の現行犯で……」
――ガキンッ。
無骨な手枷が、秀人に嵌められる。

「君を、逮捕する」
「……了解。クロノ執務官」
秀人は、特に抵抗せず、それを受け入れた。

「……さて、」
アースラ、艦長室。
そこに、秀人は手枷を嵌めたまま立っていた。
目の前にいるリンディとクロノは、厳しい表情だ。
「吾妻秀人。自分が行った行動について、釈明はありますか？」
「無いです」
即答だった。
「……」
言いたいことは言い終わった、と言わんばかりに、無言になる。
「……」
「……」
「……」
「……処罰は、追って通達します。
それまで、営倉入りを命じます」
「はい」
呼び出された武装隊に両脇を固められ、秀人は退室していった。
「あああぁ、もう……！」
机に突っ伏し、リンディが頭を抱える。
「……何で、こんな時に限って……！」
今、管理局は闇の書事件を追っている。
その重要な手がかりに、『犯罪組織の集団失踪』
……闇の書の主である、八神はやてによる『練習』である。
故に今回の出来事は、下手をしたら秀人の立場を危ういものにしてしまう危険があった。
ただでさえ、秀人を自身の陣営に引き込みたい輩が増えてきているのだ。
「被害者にもあまり同情は出来ないけど……はあぁぁ……」

被害者……つまり、カタギリ達が、なのはに怪我を負わせた元凶だということは調査済みだ。
「……気持ちは、分かります」
クロノにしては、随分と物分かりのいい台詞をはく。
「でも、なのはさん達に、なんて説明すればいいのかしら」
「……有りのまま、伝えるしか無いでしょうね」
リンディは、しばし黙考し……
「明日は、秀人君にも同席してもらいましょう」
明日フェイトは、リンディの上司二人と、軽い面接を行う。
一人は、秀人と同じく、地球出身の、とても穏やかな紳士だが……
もう一人は、陸士から少将にまで上り詰めた、生粋の叩き上げ。
「彼は一度、ビシッと怒られる必要があるわね」
必ずや、秀人に良い影響があるはずだと、リンディは信じた。
「少将、『あの話』にはかなり怒ってるみたいだし」
管理局において、秀人・なのは・ユーノの三人は、かなり話題になる人物である。
二十にも満たない若輩ながら、各能力（秀人の格闘・なのはの砲撃・ユーノの結界）はＡＡＡ以上と、目を見張るものがある。
初の魔法戦闘で、暴走したロストロギアを鎮圧した。
模擬戦ではあるが、執務官を撃破した。
砲撃魔法で強装結界が壊れた。
武装隊二十人掛かりで維持する強装結界を、一人で、かつ長時間維持し続けた。
次元震を押さえ込んだ。
最近、無限書庫を開拓し始めた。
……これだけなら、まぁわかる。が、問題はその先だった。
独断先行は当たり前。
武装隊を舎弟にした。
執務官にタメ口を利いて許されている。
最凶のマッドサイエンティストと大魔導師に、愛機を製造させている。

施設内をバイクで爆走。　闇の書の主をタイマンで退けた。
……等など。嘘のようですべて真実なのだが。
この噂を聞いた新兵の間に、『実力さえあれば、好き勝手が許される』という風潮が生まれてしまっていた。元凶と言うには、いささか理不尽だが。
「では、高町なのは含め、説明は私が」
「頼んだわ、クロノ執務官」

なのは達の元に向かうクロノ。その足取りは、当然のように重い。
医院の受付へ名を告げ、病室へ向かった。
「失礼する」
病室の中には、見知った面々がいた。
「あ……クロノ」
なのはは目を覚まし、身体を起こしていた。
気まずそうに、見舞いの者達に囲まれている。
その額には、痛々しくガーゼが当てられ、包帯が巻かれていた。
「傷の具合はどうだ？」
「もう……みんなそればっか。かすり傷だってば」
いくら朴念仁のクロノとはいえ……女の顔に傷が付くということの意味が分からない程、愚かではない。
「秀人のこと、なんだが……」
そこへ追い撃ちをかけたい訳では無かったが、説明を始めた。

「……ふう」
一通りの話を聞き終えたなのはが、ベッドに倒れ込んだ。
「ヤクザを襲撃って……はぁ、もう……」
怒る気も失せた様子だ。
「秀人がやらなかったら、俺がやっていたがな」
恭也が、しれっと言った。
「秀人さん、どうなっちゃうの？」
「今、艦長が手を尽くしているが……減刑するので手一杯だろうな」

「そんな……」
辛そうな表情をするなのは。ポーカーフェイスを維持しつつも、内心ではクロノも辛かった。
「週に……いや、日に一度は、必ず面会できるように取り計らう。
だから、その、なんだ……」
もごもごと口ごもり、ようやく口にできたのは、ありきたりな一言だった。
「元気を出せ」
「……」
「……」
クロノ・ハラオウンという人物を良く知るなのはとユーノは、ぽかん、とした様子でそれを聞いていた。
「……何だ。僕が励ましの言葉を掛けるのが、そんなに意外か」
不本意そうにそう聞く。
「うん」
「すっごく、意外」
「……まぁ、それはそれとして」
流した。
「フェイト」
「え、ボク？」
「明日の面接だが、秀人も参加することになった。そのつもりで」
「フェイトッ！」
がしっ、と、異様な素早さでフェイトを捕獲。
「うわ！　な、何……もがもが!?」
シーツを被り、周囲をシャットダウン。
（フェイト！　明日、秀人さんの様子をちゃんと見てきて！）
（い、いいけど……）
ずいっと目の前に迫るなのはに、フェイトは赤面する。
（それと、伝言！『本当にかすり傷だから、心配しないで。あまり無茶ばかりすると、今度は私が怒るから覚悟しておいて』……いい!?）
（な、ながいよ～!?）

（覚えて！　今！）
（うえぇん！）
「……何してんのよ、二人して」
もこもこと動くシーツに、望が呆れた声を出す。
そして、どたばたと足音が近付いてきて……
「なのは！」
「なのはちゃん！」
「高町！」
アリサ、すずか、健太の三人が、押しかけ……
「静かにしなさい！」
看護婦に怒られ、解散の流れとなった。

# A’s編　第二十八話

翌日。
「秀人」
営倉の硬いベッドで寝ていた秀人が、目を覚ました。
「艦長がお呼びだ」
「りょーかい」
その手には、相変わらず無骨な手枷が嵌められたままだ。
虜囚の身である証。
が、秀人は不自由な手で器用に顔を洗い、寝癖を整えた。
「……」
「……」
無言で廊下を歩く二人。　クルー達は、何とも言えなさそうな顔で、二人を一瞥していく。
「……気にするな、とは言わないぞ。むしろ気にしろ」
「わかってるよ」
秀人は、やれやれとでも言いたげに、首を振った。
転送ポートから、地球支部へ移動する。
秀人……正確には、その腕の手枷を見て、通りすがった局員達が目を剥く。
「まだ少し、時間があるな……」
時間に神経質なクロノが、それを余らせるようなことは有り得ない。
つまり、口実だ。
「レイジングハートの改修も、仕上げの段階に入っている。折角だし、会っていくか？」
「……」
秀人は、しばし悩む。
クロノは、当然オーケーすると思っていたが……
「……いい。やめとく」
バツが悪そうに、ぼそぼそと断った。

「？　何故だ？」
「多分……いや、絶対に怒るし……」
……今回の大暴走。
危なっかしい秀人を気にかける余り、小言が多くなる傾向があるレイジングハートのことだ。
烈火の如く、秀人を叱り付けるに決まっている。
しかも最近では、自立飛行まで身につけ、ダイレクトアタックまで可能としているのだから……
「……アレ、マジで痛いんだよ」
「なるほど」
うむ、と、尤もらしく頷き……
「では、会いに行こう」
「どうしてそうなる!?行かないっつってんだろ!?」
逃走を図る秀人。が。
――ビンッ！
「なんじゃこりゃー!?」
秀人の手枷は、クロノのＳ２Ｕから伸びたワイヤーと接続されていた。
「成る程、成る程……秀人を諌める適役は、レイジングハートだったのか。
艦長が言っても、僕が言っても、高町なのはが言っても、効果が無いわけだ……」
ニマー……と、Ｓっ気たっぷりな笑みを見せるクロノ。
「さぁ行くぞ。言っておくが、拒否権は無い！」
「い、嫌だ！」
――メキメキメキメキ!!
「行かないからな！絶対に、行かないからな！」
壁に指をめり込ませ、必死の抵抗を見せる秀人。……腕力の無駄遣いである。
「くっ……！　この、筋肉ゴリラめ……！」
なにげに、クロノも酷かった。

「そうか……そんなに嫌か」
一瞬だけほっとする秀人だったが……
「では……向こうから、来てもらうとしよう」
「クロノくーん。連れて来たけどー……」
ひょこひょこと、エイミィがガラスのような素材で出来た容器を抱えて、やってきた。
「てめ……ッ!?」
ぞわあぁ～……と、秀人の直感が、危機を訴える。
ぱきぃん!!と、容器から『中身』が飛び出してきた。
『秀人オオォ！　そこに直れェェェッ！』
「ぎゃあああああぁッ!!」
足をもつれさせながら、曲がり角の向こうへ逃走する。
『逃がすかあああぁッ！』
レイジングハートはフィンを展開し、ピンボールのようにそれを追う。そして……
「ぎゃあああああ、」
――ゴキーン！
……何やら、質量を無視した鈍い打撃音が響いた。
「あああぁぁ……」
フェードアウトしていく悲鳴。
そして、バタッ……と、倒れる音がした。
クロノがそちらへ向かうと、頭にでっかいタンコブを乗せた秀人が倒れていた。
しゅるしゅる、と、例の治癒により消えるタンコブ。
「さて、そろそろ時間だな」
クロノは秀人を肩に担ぎ、面会を行う部屋へ向かった。
クロノとエイミィは、フェイトを迎えに行き、今現在、この部屋にいるのは二人だけだった。
『秀人』

「……何だよ」
むすっとした表情で、頭上に視線を向ける。
会議室のソファにもたれ掛かる秀人の額に、レイジングハートが器用に鎮座していた。
『マスターの件……あなたが怒るのも、無理はありません。
というか、あれで怒らなかったら、秀人ではありませんから』
「……じゃあ、何で怒った」
『……私が言わなければ、あなたは二度も三度も無茶を繰り返します』
「……」
当たっているだけに、言い返せない。
『無茶をする前に、その筋肉で出来ているような頭で、思い出してください。
あなたが無茶をすることで、マスターがどれだけ心細い思いをするのか……私だって、マスターの五倍くらい、心配しているのですよ？』
そして、片翼でべしべしと頭をはたいた。
「……わかったよ」
レイジングハートを、手の平に載せる。
「……傷はもういいのか？」
見たところ、目立った亀裂や欠損は見当たらなくなっている。
『およそ八割……といった具合です。あとは、全体的な耐久力を強化するだけです』
「そっか」
素っ気なく言ってはいるが、心底から安堵していた。
『それと、マリエル技官から朗報が』
「何だ？」
『あなたの専用機が、ロールアウト間近です』
「マジか!?」
『はい。あとは、ＡＩを組み込むだけと。
守護騎士から得られたデータが、非常に有用だったらしいです』
「あぁ、ヴィータのやつ、最近ずっと出ずっぱりだったよな……」

彼女は彼女なりに、秀人への恩を返している最中なのだろう。
レイジングハートが何故か難色を示した。
『ただ、ＡＩが……なんといいますか、中々のお転婆娘でして』
ＡＩの教育を任されていたレイジングハートが、珍しく弱音を吐いた。
『……育て方を、間違えたかもしれません』
育児に悩む、母親のようだった。
「……　何か心配になってきた」
朗報のはずだったのだが……
『あぁ、いえ……機体性能は、折り紙付きですよ？　正直、これまで存在した全てのデバイスの常識を覆し、凌駕する……現代のロストロギアです』
「……いいのかなぁ、俺がそんな良いもの貰っちゃって」
今更、そんなことを言い出す。
――パシュッ
と、ドアが開く。
「あ、ひでと！」
一番乗りしたフェイトが、飛び込んできた。
いつものラフな私服ではなく、レースの付いたブラウスに、黒いスカート、同色のベストに赤いネクタイという、パリッとした正装だ。
「おー、似合う似合う！　可愛いなぁ」
ひょいっと、脇に手を入れて抱き上げる。
「わーい！　……って、そうだ。でんごん、でんごん」
ギリギリで忘れずにいたフェイトが、うんうんと唸りながら、なのはからの『伝言』を伝える。
『かすり傷だから、心配しないで。無茶したら、今度は私が怒るからね』……だってさ」
「……怒ってたか？」
「うん。もどってきたら、『おはなし』するって」
「……はぁ。そうか、ありがとうな」
お話＝お説教。

憂鬱になりながらも、覚悟を決めるのだった。
「お待たせ。準備はいいかしら？」
「あぁ、はい。大丈夫です」
「おっけーだよ」
リンディ。
「その様子だと、反省したようだな」
「ふん……反省はしたけど、後悔はしてないぞ」
クロノ。
「あはは……えぇと、秀人、くん……？」
「後で覚えておけ」
「ひぃぃ……!?　わざとじゃないのに……！」
エイミィと続き、それぞれ席についた。
そして、待つこと数分。
――パシュッ……
ドアを開け、二人の人物が入室してきた。
リンディの将官服と似た……恐らくは、それ以上の身分の者が着る制服を着た、総白髪の男性。
「やぁ、リンディ君。しばらくぶりだね」
「グレアム総司令も、ご壮健なようで何よりですわ」
ギル・グレアム艦隊総司令。
アースラ含む、次元航行艦隊を統べる……通称『空』の、実質トップ。
リンディの資質を見抜き、育て上げた師である。
そして、もう一人はと言うと……
「ふん……手早く済ませろ。私は暇では無い　」
無愛想に鼻を鳴らし、グレアムの隣にどっかりと腰を下ろした。
こちらはまた、グレアムとは意匠が異なる将官服を着ている。
「わざわざご足労頂き、ありがとうございます。
……レジアス少将」
レジアス・ゲイズ少将。　またの肩書を、首都防衛司令補佐。
数多の次元世界を股に架ける巨大組織・時空管理局のお膝元……通

称『陸』の、次期トップとの呼び声も高い武闘派である。
面識の無い秀人や、常識の無いフェイトなどは、「このオッサン、誰？」という状態なのだが……
「……」
「……」
クロノとエイミィは、完全に凍りついていた。
仕方の無いことかもしれない。管理局の実質ツートップが、唐突に目の前に現れたのだ。
「さて、まずはこちら、フェイト・テスタロッサについてです。クロノ執務官」
「え……あ、ハッ！」
気を取り直し、慌ててエイミィから資料を受け取る。
「ご報告した通り、彼女はジュエルシード事件の重要参考人です」
フェイトは、ほけー……っと、虚空を見ている。
「責任能力の有無。意思の所在について、共犯というよりは、むしろ被害者であることは明白であり……」
その後も続く報告に、二人は黙って耳を傾けていた。
なのはの護衛、という話になったところで、レジアスの眉が僅かにひそめられた。
だが、まだ口は出さず、最後まで報告を耳に入れた。
「……フェイト・テスタロッサについては、以上です」
「ふむ……フェイト君、と言うのかね」
まず口を開いたねは、グレアムだった。
「うん。おじさんは？」
「おじ……はは、物怖じしない子だね」
「こ、こら……！」
顔面蒼白になるクロノ。　が、グレアムは気にした様子も無く、穏やかに笑う。
「構わないよ、クロノ執務官」
そして、フェイトと目線を合わせた。
「きみは、友達や家族は大事かい？」

「うん、宝物だよ！」
「なら、その気持ちを裏切らないように……嘘にしないようにしたまえ。それを約束してくれるなら、私は、きみの地球での生活について、口を挟んだりはしないよ」
上々。そう思った一同だったが……
「護衛だと？　正規局員に任せておけばいいものを、でしゃばりおって……」
レジアスの否定的な言葉に、場が凍った。
「そもそも、九歳の子供に何が出来る。」
「それは……それ、は……」
事実として、護衛対象であるなのはが負傷してしまったことが負い目になり、黙り込んでしまった。
「まずは、クラナガンあたりの更正施設に入り、社会への復帰を目指すべきではないのか？」
「……」
正論であるがゆえに、リンディ達も口を挟めない。
「子供の遊びで務まるほど、管理局の責務は……」

「おい、オッサン」

――秀人を除いて。
「今、なんつった？
『子供の遊び』、だと？　ろくにフェイトの気持ちも考えないで、決め付けるんじゃねぇよ」
バチッ……と、秀人とレジアスの間に、火花が散った。
「……貴様が、吾妻秀人か」
忌ま忌ましそうに、秀人を睨む。
「少しばかり腕が立つからと言って、図に乗っているようだな」
例の問題のことだろう。
「嘱託魔導師とはいえ、貴様は民間人だ。下手に関わろうとせず、自身の生活を守っていればいいものを……」

「その『自身の生活』の中に、たまたま魔法って要素が入ってるんだよ。だいたい、あんなヘナチョコ古本女に手を焼いているような管理局員に、身の安全を任せられるか」
「目先の対処しか頭に無いような愚か者には、大局を見ることなどできんようだな」
「目先にも対処できないノロマよかマシだ」
「貴様……！」
「レジアス、そのくらいにしないか」
ヒートアップしかけた二人を、グレアムが止めた。
……クロノなどは、顔面蒼白で意識が飛びかけていた。
冗談抜きに、十円ハゲが出来そうだった。
「まぁ、よかろう。
……フェイト・テスタロッサ」
「は、はい……」
フェイトは、すっかり怯えて緊張していた。
「ひとまずは、現地での生活を許可してやろう」
「え……いいの!?」
「投げ出したくなったら、そこの青二才を通して連絡するがいい。すぐさまミッドチルダに引き戻してやる　」
「あ、青二才……」
リンディが、少しショックを受けていた。
「……吾妻秀人」
「何だよ、レジアスのオッサン」
「たとえ力があろうとも……子供が戦場に出ることは、間違っている」
「……」
「それを、ゆめゆめ忘れるな」
「……ふん。知るか」
レジアスと秀人は、終始険悪なまま、接触を終えた。
リンディは二人の見送りに。
クロノ、エイミィは、心労からぐったりともたれ掛かっていた。

「ねーねー、ひでと」
くいくい、と、フェイトが秀人の袖を引く。
「あの、ふとっちょの方のおじさんさぁ」
「あぁ、レジアスのオッサン？
あの人なぁ……」
顔を見合わせた二人は、うん、と頷き……
「怖いけど、いい人だよね」
「口は悪いけど、間違った事は言ってないよな」
意外なことに、異口同音に、その人柄を肯定した。
「……はぁ」
そこに、リンディが戻ってきた。
「秀人くううぅぅん……！」
……怨霊と見紛うほど、恐ろしい声だった。
「今度という今度は……堪忍袋の尾が切れました！」
……ここまで怒るリンディを見たのは、初めてだった。
「嘱託魔導師・吾妻秀人！」
「……はい」
「あなたへの罰則を、言い渡します……！」
ごくりと唾を飲み込む秀人。
「無人世界での、単身生存演習！　場所は……」……なにやら、『生存』などという生臭い言葉が出てきた。
「生存、演習……!?」
「く、クロノくん、大丈夫？真っ青だよ？」
「は、ははは……いや、いくら何でも、まさか……」
引き攣った笑いを漏らすクロノ。どうやら、トラウマがあるらしい。
「第４８、管理世界!!」
クロノが、白目を剥いて失神した。

# A’s編　第二十九話

「はぁ……」
秀人は、海鳴市の路上を、一人で歩いていた。
例の訓練という名の懲罰の下準備のために、一時的に釈放されたのだ。
下準備とは、他でも無い……
「有給休暇……申請、通るかなぁ……」
社会人の憂鬱である。
「はぁ……」
足取りは重く……しかし、すぐに会社に到着してしまった。
（……どう考えたって、無理だ）
常識的な社会に属している（つもりの）ごく常識的な（つもりの）一般人である（つもりの）秀人には、自分の仕事をほうり出し、一月近い休暇を取るような非常識さは持ち合わせていなかった。
「よっし、バックレようっと!!」
そうと決まれば、足取りは軽くなる。
トントントンッ、と階段を駆け上がり、ガチャッとドアを潜る。
「おはよーございまーす！」
元気に挨拶。今日も、気持ち良く始業できる……
「あら、遅かったわね秀人君」
（そう考えていた時期が、俺にもありました……）
「間違えました」
――がちゃん。
ドアを閉め……再び開ける。
「おう、ヒデ！　待ってたぞ座れ座れ！」
……そう言うカントクの目の前。
出された茶をすする、妙齢の美女。
馴染みではあるが、場違いな……リンディ・ハラオウンだった。
「……何やってるんスかアンタはあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

……事務所に、秀人の切ない叫びがこだました。
「いっやー、まさか、ヒデの奴にこんな美人の知り合いがいたとは……」
「あら、お上手ですこと」
つい先日、自分がふて寝していた応接間で、リンディをもてなすカントク。
「……奥さんにバラしてやっからな」
その、鼻の下を伸ばしっ放しにするカントクの隣に、ムスッとしたしかめっ面で腰掛ける秀人。
「それでは……」
「えぇ、えぇ。コイツでよければ、いくらでも使ってやって下さい」
ぼん、と秀人の頭に手を置く。
それをやんわりと払いのけ、
「カントク、本気ですか？
……俺一人で、僻地に出張なんて」
そう。リンディが取った手段とは……秀人が社会人であるということを、正攻法で最大限に利用することだった。
「あァん？　ウチが今厳しいって、話したろうが」
例の仕事が流れてしまい、財政的にはスレスレなのだ。
たった一人の従業員をレンタルするだけで、流れた仕事の倍額が出るのだ。経営者としても、断る理由が無い。
「お前の知り合いなら信用できるし、特別手当も出て万々歳だろ」
「え……えぇと、俺、家族が……」
「たったの一ヶ月よ」
「なのはが……」
「面会の時間は取るわ」
だらだらと、暑さとは別の理由で、汗が吹き出して来る。
知らぬ間に、退路が一つ一つ潰されている。
（管理局は万年人材不足だけどね……？）
にやぁ……と、浮かべるは女狐の笑み。

（予算だけは、潤沢にあるのよ……？）
（き……汚ったねええぇぇ～!!）
そして秀人は、第４８管理世界へ放り込まれることが確定してしまった。

「……」
諦め、無言で荷物を纏める秀人。
「……」
不自然なまでに秀人に背を向け、荷造りを手伝うなのは。
「秀人さん」
「お……おう、どうした？」
「下着と、雑貨はリュックに入れておくから」
「……頼む」
ちくちくと、突き刺さるようなプレッシャーが、なのはから発せられていた。
「秀人さん」
リュックサックに、下着とTシャツを入れる。
「おう」
タオルを綺麗に折りたたみ、リュックに入れる。
「二ヶ月、かかるんだよね」
「……おう」
歯ブラシとコップを、入れる。
「夏休み、終わっちゃうね」
「……」
髭剃りと櫛を、入れる。
「夏休み、終わっちゃうね」
「……すんません」
「うぅん、気にしてないから」
「……」
かちゃん……と、リュックの金具を閉じる音が、いやに大きく聞こえた。

「気にしてないから」
「……」
……秀人の胃が、ピンチだった。
「……なぁ、フェイト」
「……なに、ヴィータ」
部屋の片隅に、被害が及ばないように待避していた二人が、こしょこしょと小声で話していた。
ユーノとアルフは、無限書庫の探索に……と、既にいなくなってしまった。
「アイツ、なにやったんだ？」
「あー……えぇと……わるものをやっつけた、らしいんだけど」
「……それが、何で辺境世界に放逐されることになったんだよ」
「しらないよ……ボクにきかないで」
「つかえねー奴……」
「なんだと!?」
がたっと立ち上がる。
「フェイト、ヴィータ」
それを、恐ろしく平坦な声が瞬間冷却した。
ぱたん……
箪笥の戸が、閉じる。
「悪いんだけど、少し静かにしててくれるかな？」
「「はい」」
再び、置物に戻る二人。
「えっと……それじゃあ……」
荷物を抱え、玄関に。
靴を履き替え……
――どすん。
「おわっ」
バランスを崩しかけた。
後ろを見てみると、なのはが、秀人の背負うリュックサックを掴んでいた。

「どうした……？」
「……ちゃやだ」
「え……？」
　ばっ、と顔を上げる。
「行っちゃ嫌だ！」
　ぷるぷると、目いっぱいに涙を溜め……縋るように、秀人を見上げていた。
「えと……何日かに一度は、面会オーケーらしいから、それで……」
「毎日がいい」
「な、」
「毎日会えなきゃ嫌！」
　……まるで、というか、まるっきり、駄々っ子だった。
「……ごめんな」
　申し訳なさそうに、玄関の扉に手をかける秀人。
「なのは……」
「うううぅ～～～！」
　両手で、チェーンをしっかりと握りしめる。
　とうとう、ぽろぽろと涙が零れてしまった。
「なのは」
　それを見たフェイトが、なのはに近付く。
「だめだよ、それ以上は。ひでと、こまってるよ」
「困ればいいんだ……秀人さんなんて、困っちゃえばいいんだ！」
「なのは！」
　ぐいっと襟首を掴まれ、引き倒される。
「うきゃっ……」
　反動で尻餅をつくなのは。
　ずいっ、と顔を近づけ、フェイトが凄む。
「これ以上わがまま言ったら、おこるからね」
「……だって、」
「なのは！」
「うぅ～～!!」

「二人とも、少し落ち着けよ……」
秀人が仲裁する。
「はぁい……」
フェイトは渋々頷くが……
「……」
なのはは、何も言わなかった。
「……じゃ、行ってくる」
なのはの頭を撫でる。
それを跳ね退けるような真似はしなかったが……
「……いってらっしゃい」
むすー……っと、膨れっ面のままだった。

秀人は、そのまま地球支部へと向かった。
「時間ギリギリだな」
「わりぃ」
クロノが先導し、転送ポートへ。
「では、もう一度確認するぞ」
――基本は自給自足。現地の動植物を狩猟する。
――定期的に執務官が査察に入るが、期間中は基本ノータッチ。
主に、この二つ。
……正直、罰ゲーム以外の何物でも無い。
かく言うクロノも、同様の訓練で死にかけて以来、トラウマになっていた。
「植物を採る時は、よく吟味することだ。
一見無害そうに見えて、とんでもない毒性を持っていたりする」
「……具体的には？」
「周囲の色彩が反転して、ありもしない花畑が見えた」
「……」
「妖精が飛んでいる光景を見た」
食料の安全性すら保証されないらしい。
「動物を狩猟する際、それがどのような生態の生物なのか、よく観察し

ておけ。
一頭を仕留めたら、数十頭の群れに追われるということもありえる。
他にも、翼竜に啄まれたり、角獣に刺されたり……」
「あーもう！　不安になるからやめろっつーの!!」
すたすたと、覚悟を決めて転送ポートに入る。
「んじゃ、行ってくる」
「死ぬなよ」
そして、転送ポートが輝き……
――バシュッ！
秀人が、その中に消えた。

一方その頃。
「……、」
なのはは、膝を抱えて、壁とにらめっこをしていた。
秀人が出て行った、その翌日。
「なのはー」
「……なに」
「おなかすいた」
時計を見れば、そろそろ正午だった。
「……ちょっと待ってて」
不機嫌でも、家事を怠る気はないらしい。
冷蔵庫から三人分、肉や野菜を取り出した。
もぐもぐと、いつもの半分の面子で昼食を食べる。
ふと、フェイトが思い出したかのように言った。
「そういえば、きょうやとみゆきに呼ばれてなかったっけ？」
「あ……」
なのはにしては珍しい、うっかりだった。
幸いにも、約束の時間は夕方だ。
「そうだった……」
「ボクとヴィータも行っていいよね？」

「んー……」
かちかち、とメールを打ち、確認。
「うん、来ていいって」
「いや、アタシは……」
渋るヴィータ。
なにげに、彼女も人見知りの気があった。
「駄目。
一応、保護観察の身なんだから」
「……わかった」
そして、夕方。
バスを乗り継ぎ、高町家にやってきた。
「あぁ、来たのか」
出迎えたのは、恭也だった。
「早速で悪いが、なのは、道場へ来てくれ」
「……？　うん、わかった」
「ボクはー？」
「母さんが、家の方でケーキを用意して待ってるぞ。
ええと……ヴィータだったか。君も、家の中で待っていてくれ」
「ももこのケーキ！
……ほら、いくよヴィータ！」
「わかったから、引っ張るんじゃねーよ……」
道場に入る。
静謐な空気に、無意識のうちに身が引き締まる。
恭也が座った対面に、綺麗に正座する。
「なのは。この前……友達を助けた時、どんな状態だった？」
「どんな、って……」
その時の体験を、思い出す。
「時間が止まって、自分だけが、その中を動ける……みたいな」
「それは、あの時が初めてか？」
「うぅん。フェイトとの戦闘でも、たまに……割と、自力でもできる」
「……」

「そういえば……あの時、兄さんも動いてたよね？」
恭也は、考え込んでしまった。言うべきか、言わざるべきか。
――御神流。
「もしかして、兄さんは自由に『あの状態』になれるの？」
「……ああ」
恭也は、話すことにした。
既に、少なからず命のやり取りをする世界に足を踏み入れているなら……むしろ、教えておいた方が助けになる。
「……本来なら、基礎の技から習得していった、その先にある奥義なんだが」
「兄さんが使う、剣術のこと？」
「あぁ。感覚を掴んでいるのなら、あとは、基礎を積むだけでコントロールできるようになる……かもしれない」
基礎を積む。
つまりは、剣術を学ぶ、ということ。
「私が、剣術を……」
「なのは次第だ。
修業の間、俺は、なのはを肉親とは思わない。
……それでも、やるか？」
どこかで、聞いたような話だ。
『強くなりたい』という意志に対して、友人が問いたこと。
あの時の答を……もう一度。
「やる」
確かに、告げる。
「……わかった」
恭也は立ち上がり、神棚に手を入れた。
かたん……と、板が外れ、奥に空間が現れる。
そしてそこから、全長８０センチ程の、古びた木箱を取り出し、戻ってくる。
それを、なのはの目の前に置いた。
「……」

なのはは、吸い寄せられるように木箱に見入る。
和紙の札で封印されたその箱からは……得体の知れない、呪力のようなものが漂っていた。
「……この封印は、父さんも、俺も、解くことができなかった」
ぐっ、と恭也が力を込めても、開く気配は無かった。
箱を封印する札。あまりにも達筆……日本語なのか、それどころか、言語なのかすら怪しい一文が、添えられていた。だが……
（……読める？）
何故か、そこに書かれている意味が、読み方が、直接頭に伝わってきた。
「これを開けることが出来たなら……御神流の全てを、お前に伝える」
要は、入門試験だ。
「……『我、ここに……其の名を似って、汝を封ずる』」
「……」
あっさりと読んでみせたなのはに、驚くことも無く見守る恭也。
「『其は、海にして空。其は、対にして一』」
書かれた文字が、桜色に発光している。
恐らくは、この箱の中身……その所有者の魔導師が施した、封印なのだろう。
全体的に、魔力を持たない人間が大多数を占める地球において、これほど有効な封印は無い。
「『汝が名は……』」
そして……その名を、告げる。
『二刀一対
――――――

長さにして、約６０センチほどの小太刀が二振り、納められていた。
「その箱は、父さんが生家から持ち出した物で……御神流の創始者の刀らしい」
目で促され、持ち上げてみる。
「……」
鍛造された鋼の、ずっしりした重み。
「それが、『人を斬る』ということの重さだ」
「……」
鞘から抜く。
長い間封印されていたというのに、刃は曇り一つ無く、鏡のようだ。
「明日から、稽古をつけてやる」
「……よろしく、お願いします」
鞘に納め、道場を後にした。
「……秀人さん」
今頃別の場所にいるであろう秀人に向けて、口にする。
もう、不貞腐れているのは終わりだ。
「私、頑張るから」
かしゃん、と、二刀の鞘が、それを激励するように鳴った。

# A’s編　第三十話

秀人が異世界に放り出されて、数秒後。
「うおおおぉ!?」
秀人は、落下していた。
着地地点は、遥か下方。
雲が掴める程の高空に、投げ出されてしまったらしい。
『秀人か？』
と、あわてふためく秀人とは対照的に、マリーはいつもの調子だ。
「マリーか！
おい、どーなってんだコレ!?　座標指定やったのはドコのどいつだ!?
」
矢継ぎ早に質問する秀人。
『……今、こっちでも大騒ぎだ。お前の反応が、ロストしている』
「……」
その一言で、沈黙する。
「……これも、訓練のうちか？」
『いや……直前に、ハッキングを受けている形跡がある。これに乗じて……な……、た……』
この通信すら、ジャミングされているらしい。
「おい!?」
『……』
ぷつん、と、とうとう完全に通信は途切れた。
……なんとも、不吉である。
「どこのどいつだ畜生!!……、って、やべぇ!!」
気付けば、大地が近付いてきていた。
「くそっ……このッ！どーなってやがる！」
……どういうわけか、この世界では魔力が練りにくい。
飛行魔法は、どう考えても間に合わない！
「こうなったら……！」

魔力を魔法陣ではなく……直接、体内を循環させる。
地面まで、あと５０メートル、４０メートル、３０、２０……！
「うおりゃあああああああああぁぁ!!」
炸裂効果だけを強化した、ブレイズキャノンを発射。
それは、威力が減衰する前に、地面にぶつかり……
――ゴバアアアッッッ……、!!
爆風を、撒き散らした。
「ぐぇフッ……！」
急降下から、突然真下から爆風に跳ね上げられ、そのＧに呻く。
だが、おかげで何とか、地面に激突することだけは避けられた。
残り１０メートルは、自由落下で降り立った。
――ドシャッ!!
「くうぅ……！　いってえぇぇ……！」
足の痺れが治まり、周囲を見渡す。
「……マジで異世界だな」
空には、月のような衛星が二つ、並んでいた。
「どーすんだ、俺……」
想定されていた世界では無い以上、発見されるまで、どれだけかかるやらわからない。
その間に、闇の書の主が活動を再開すれば……
「……はぁ。考えててもしゃーないか」
秀人は、とりあえず歩き回ってみることにした。
気温は２０度前後で、湿度もそれほど高くない。
針葉樹の森林と、乾いた地面。
先も感じた通り、魔力が結合しにくい点を除けば、快適な気候だ。
「……」
がさり……と、森林の葉が、不自然に揺れた。
足を止める。
――ザザザザザッ……！
「……いきなりか」
そして……

『ホキャアアアアァ！』
猿のような、体長２メートル程の獣が、飛び出してきた！
「ッしゃあ!!」
――ドボォッ！
狙い定めたような中段蹴りが、猿の鳩尾に減り込んだ。
『ゲッ……！』
白目を剥いて昏倒する猿。
だが、秀人は退却を始めていた。
『『『

「あっちいいいぃぃ!!　……って、うわあああああ～……!?」
それに煽られ……秀人は、崖から足を踏み外した。
――ドボオォォン!!
「……ぶあぁっ！」
崖下の川の中から、秀人が顔を出す。
「あー、川で助かった……」
『キシャアアアァッ!!』
「助かってねえええ!?」
――ドゴォン!!
水面から襲い掛かってきた、魚とも蛇とも判別し難い生物に、バレットをぶつけ……
『ブオオオォ！』
「そりゃあああ!!」
陸に上がった所を待ち構えていた猪を、川に蹴り落とし……
『ギキャアアアァ!!』
「また出たあああああぁ！」
ドラゴンの火炎から身をかわし……
「はひー……」
ほうほうの体で、巨木の根本に開いた穴に身を隠す。
「ぜー……ぜー……！　ったく、グルメ界かここは！　暴走体並みの獣が、ゴロゴロしてやがる……！」
「……ん？」
と、奇妙……というか、場違いな物を見つけた。
草の繊維を寄り合わせた紐に、竹のような板が、いくつも繋がれている。
明らかに、人工物だ。
しかも、そんなに古くないどころか、まだ繊維が緑がかっている。
「俺の他に、誰かいるのか……？」
秀人は、何の気無しに、それに手を触れ……
◆▪◆　◆　◆
「ゆ……行方不明!?」

「ぶフォッ!!」
「ぎゃー!」
……上から、なのは、フェイト、ヴィータである。
なのはがクロノと通信中にいきなり立ち上がり、肘がフェイトの湯呑みをカチ上げ気管に麦茶をダイレクトでぶち込み、噎せた拍子に吹き出された麦茶がヴィータの顔を直撃した。
「テメェ喧嘩売ってんのか!」
「げふっげふっ……し、仕方ないだろー!?」
「クロノ! 説明……いや、今すぐウチに来て説明しなさい!」
「だいたいお前は、考え無しに行動し過ぎなんだよ! 動く前に周囲を確認しろ!」
「ヴィータの動きがトロいんだよ、この鈍重騎士!」
「ど、どん……!? ……よーし、ちょっと表出ろコラ。速さだけが取り柄の羽虫に、思い知らせてやらぁ!」
「羽虫だとぅ!?」
「あぁ、もう……!」
じゃきっ……と、なのはの手が、腰に穿かれた回天・桜花に伸びる。
そして……
「二人とも、うるさいっ!」
――ゴ、ゴンッ!
「ぎゃあッ!!」
「ぎゃふッ!!」
二人の脳天目掛け、鞘打ちの二連撃が決まった。
「大事な話してるんだから、喧嘩はあとにしなさい!」
「はい……」
最近……あの二刀を手にして以来、折檻がますます過激になってきた。
何と言うか……
「えぇと……オニに、」
フェイトは、クロノから（嫌々）教わった、地球の諺を思い出す。
「……かなぶん?」

惜しい。
「金棒だろ」
「そう、それ！」
あっはっは……と笑う二人の背後に、まさしく鬼の気配。
「だれが……鬼ですって？」
「あ、あはははは……？」
愛想笑いでごまかす。
「ヴィータ、外でくんれんしよーぜ！」
「お……おう。行くか！」
ざざざざっ！と、左右になのはを撹乱し……
「「行ってきまーす！」」
玄関から、走り出して行った。
「もう……夕ごはんまでには帰るんだよー！」
少しは、落ち着いたらしい。
「で……どういうこと？」
「……あぁ、今説明する」
返事は、玄関の向こうからだった。

---

ちゃぶ台を挟んで、クロノと対話する。
「じゃあ、丸っきり想定外の場所に、飛ばされちゃったってこと？」
「……あぁ。だが、直前まで、マリーと通信が通じていた。
少なくとも、人間が生存できる環境では、あるみたいだ」
「……」
「本当に、済まない……」
ちゃぶ台に額を擦りつけるほど、頭を下げる。
「いいよ、許す」
が、なのははあっさりした様子だ。
「別に、クロノの責任ってわけじゃないし。それに、ね……」
コンコン、と、二刀の鞘をノックする。
「……ちょっと、やらなくちゃいけないことも、あるし」
訓練の際、秀人は必ず寸止めにして、怪我が無いように心掛けてい

た。
だが今回は、今までと違い、身体を鍛える訓練。しかも、指導するのは恭也。
当然、怪我もするだろう。
「今なら、あんまり心配かけないで済むから」
そうか……と呟く。
「既に、捜索隊を出している。見つかり次第、こっちに送り返すから……」
「うん、よろしく」
そして、席を立つクロノだったが……
「あ、そうだ。夕飯、食べていきなよ」
なのはに、そう呼び止められた。
「……なに？」
「秀人さん、いきなり行っちゃったでしょ？
だから、材料が余って困ってるんだ」
賞味期限が～、と、やたら所帯じみた事を言われ……
「分かった。相伴に預かろう」
『あー……ユーノくん、アルフ？』
早速、念話を繋ぐ。
数秒後……
『……なのは、かい？』
一気に五十も老けたような声が、帰ってきた。
『……だいじょぶ？なんか、死にそうだよ』
『無限書庫って……数秒毎にデータベースが更新されるから、マジ無限……闇の書関連の資料、集めるだけで、二日過ぎちゃったよ……ははは』
ちゃんとした検索システム構築しなきゃ……と言う。
『そんなに根詰めても、効率上がらないよ？　一旦、アルフ連れて帰ってきなよ』
ところで、アルフの反応が全く無いのだが……
『アルフなら、さっき『落ちた』。しばらく起きないかも……あ……

また、更新された……探さなきゃ、捜さなきゃ……』
亡霊のように繰り返すユーノに、なのはが焦る。
『帰ってきなさい！今すぐ！』
かくして……秀人の替わりにクロノが入るという、いつもと違う変則メンバーでの夕食となった。
◆▪◆　◆　◆
――カランカラン!!
「うおっ!?」
秀人が触れた途端、絵馬モドキがけたたましい音を鳴らした。
そして……明らかに秀人を標的にしているであろう殺意の塊が、減速することなく迫ってきている。
「……上等！」
流石に、腹も据わった。
拳を撃ち合わせ、ファイティングポーズを取る。
そして……
「夕食ゲットォ、お、おぉぉ……？」
「うおりゃあぁぁ……あ、？あ……？」

ぱちくりと目を見開く二人。
襲撃者は見るからに幼い少女である。
セミロング……というか、切らなかったから伸びた、という風情の不精な髪型。
整ってはいるものの、全体に纏う退廃的な空気が、全てを台なしにしている。
何より、手にした片刃の剣。
ぽたぽたと、真新しい血を滴らせ……
（……うわぁ）
ドン引きだった。
何故、こんな場所に子供が……と訝しむ秀人。
それと同じく、襲撃者……
八神はやてもまた、戸惑っていた。

何故？
（どうしてここに、こいつがいる……!?）
「なぁ、君……」
口を開く秀人。
はやては、剣を握る手に力を込め……
――ズズゥン……!!
巨木が、めきめきと倒れた。
「くそっ、見つかったか！」
はやてが、この世界での最終標的に設定している、大火竜。
そいつが、はやての根城であるこの場所を、秀人を足跡に突き止めてしまったらしい。
「くそったれが！」
秀人を放置し、一目散に逃げ去っていく。
とりあえず、あの大火竜の狙いは秀人だ。
余裕で逃げられる。そのはずだったが……
「おい、ちょっと待て！聞きたいことがいくつもある！」
驚くほどの健脚で、はやてに追いついてきた。
「おいコラ……！」
『グルルルル……！』
果たして、危惧の通り。
大火竜は、はやてもついでに捕捉した。
「なについてきてンだよテメェ！　竜の歯クソにでもなってろ！」
「無茶言うな！あんなモン、こんな環境で相手にできるか！」
「じゃあ何で着いてきたんだよ！　バラけりゃ、どっちかは逃げられたのに！」
「それは！　……あれ、何でだろう？　……何となく？」
首を傾げる秀人。
「、」
ぷつん、と、はやての我慢の限界を突破した。
「ざっけんなテメェェェ！」
「悪かったあああぁぁぁ！」

『グルアアアアアアアア!!』
「「ぎゃあああああああああ！」」
――ドッゴオオオオン！

二人仲良く、巨大な火炎弾に吹き飛ばされた。

……波瀾万丈な、サバイバル生活が幕を開けた。

# A’s編　第三十一話

『グルルル……！』
大火竜は、秀人たちを吹き飛ばしたはいいものの、見失ってしまったらしい。
荒野の上空をぐるぐると旋回し、ふいっと去って行った。
――ゴソッ……
と、地面が隆起し……
「……行ったか？」
「……さぁね」
頭から土だらけになった二人が、這い出してきた。
「……」
とにかく、抜き足差し足忍び足。
魔力もゼロにし、竜の巨体が入り込めないような、峡谷に退避した。
「まだついて来る気かよ」
「つれないこと言うなって」
「チッ……」
はやても、さすがに二度も大火竜をおびき寄せる愚行は犯さない。
『ギュアア！』
途中、岩場から飛び出して来る亀のような猛獣は……
「……うぜぇ死ね」
『ガ、ガガガ……！』
魔剣を脳天に突き刺し、絶命する。
「おい……！」
反射的に、殺生を咎める秀人。
が、はやては淡々とした表情と口調で、言った。
「馬鹿かお前は。ここは日本じゃ無いんだ。スーパー行けば食べ物が買えるわけでも、蛇口捻りゃ飲料水が出てくるわけでも無い」
「あ……そういや、そうだった。すまん」
突飛な事態に忘れかけていたが……これは、サバイバルだった。
「……食えるの、それ？」

「骨と甲羅以外は。結構イケるよ……よいしょっと」
ずるずると、最小限の身体強化魔法のみを使い、獲物を引きずっていく。
「……」
何となく着いて行った先は、またしても、同様の絵馬モドキが仕掛けられた洞窟だった。
「……」
おもむろに魔剣を取り出し、巨大亀の甲羅の継ぎ目に捩込み……
「よっ……と！」
――バカンッ！
甲羅の一角を、テコの原理で割り開く。
「えらく硬い剣だな……」
呆れながら、そう呟く。
「おい、お前」
「あ、ああ……何だ？」
「手伝え。捌いてる間に腐っちまう」
「……」
一瞬、躊躇する秀人だったが、腐らせるくらいなら、食べてやったほうが供養になるよな……と、手伝いはじめた。
ベリベリと甲羅を剥ぎ取り、内臓と肉とを分ける。そして、運び込める大きさになった食料を、洞窟に運び込んだ。
中は、思いの外涼しい……というか、寒いくらいだった。
肉を、岩塩を砕いた塩の山に放り込む。
「肉は保存が利くから後回しで」
てきぱきと指示を出すはやて。
――く～……
その腹が、可愛らしく鳴った。
「……飯にするか」
「……うん」
はやては、僅かに赤面し、頷いた。
がつがつと、割と品の無い食べ方で、煮込んだモツにかぶりつく。

「んじゃあ、お前……はやても、この世界に飛ばされてきたのか」
「まーね……じゅるるっ」
零れそうになった肉汁を、これまた下品に音を立てて啜る。
「……」
焦りも極限になれば、一回転して平静になるらしい。
はやては堂々と、素顔と本名を晒し、事情を説明した。
『不慮の事態で、魔法の訓練中、この世界に飛ばされた』
と。
ある意味、嘘は言っていない。
「今日で丁度、二週間くらいかなぁ……？」
「二週間……」
初日にして、逃げ回ることしかできなかった秀人には、信じ難い事実だった。
「意外と何とかなる物だよ……ペッ」
……べちゃっ、と、足元に苦みがあったらしき一部を吐き捨てる。
「……」
ぴくぴくと、何かを言いたそうに秀人のこめかみがヒクつくのに、はやては気付かなかった。
「ってなわけで、どーせ長居するなら、目標でも作ろうか……ってことで、あの大火竜を狙ってるんだよ。……げっぷ。もう食べられないや」
そして、食べ残したモツの残りを、無造作に鍋の中に投げ込み……
「……っだあああああぁぁぁ！　もう我慢できん！」
秀人の我慢が、限界を迎えた。
「な……何？」
「何だ、お前のその行儀の悪さは!?」
「……はい？」
「食べ物に対する敬意は無いのか!?」
きょとん……としていたはやてだったが、次第に苛立ちが出始めた。
「私が獲物をどう扱おうが、あんたには関係無いじゃん！」

「お前、言ったよな？『食べるために狩った』……って。
狩ったなら、食え！　それが、狩られた命に対する礼儀だ！」
「う、ぐぐぐ……！」
……ここで『はい、そうですか』と言える程の素直さがあるのなら、闇の書の主などやってはいないわけで。
「うるっせえぇぇ!!」
結局、ブチ切れて飛び掛かって行った。
ごろごれごろ……と床を転がり、取っ組み合いに発展した。
「むぎゃー!!」
噛み付き、引っ掻き……
「いてててて!!　やめんか！」
バチーン！という快音響かせ、はやての尻を叩く。
「みぎゃあああぁぁ!!　やめろこのロリペド野郎おぉ！」
ぶぅん、と振り上げた足が、秀人の顎を正確に蹴り抜いた。
「げぐっ……！　おらあああぁぁぁっ!!」
ばちーん！
「ひぎゃあああぁぁ！　尻はやめろっつってんだろおぉぉ!!」
……魔剣を使わないだけ、まだマシかもしれない。
「ぜー、ぜー……！」
「はぁ、はぁ……！」
二人は消耗し尽くし、地面に転がっていた。
なんと無意味な闘争だろうか。
「食い物、粗末に、すんな……！」
尚も言う秀人に、はやては……
「……あーもう！わかったわよ！食えばいいんでしょ！食えば！」
鍋に残ったモツ煮込みを、ヤケクソのように掻き込んだ。
「げっぷ……ど、どうだ……」
青ざめた顔で、勝ち誇った顔を見せる。
「いや……うん、えぇと……一人で全部食え、って言いたかったわけじゃ、無いんだけど……」
「……は？」

「粗末にしなければ、残りは俺が食ったんだけど……」
「……」
ばたーん……と、全ての力を使い果たし、はやては倒れた。
（やっぱり私、こいつ嫌い……）

◆・◆　◆　◆

「つだあああぁ！」
――ガシィッ！
なのはが振り下ろした木刀は、恭也の竹刀に受け止められた。
「こ、の……！」
「腕力に頼り切りになるな！」
対して、恭也の竹刀はぴくりともしない。
――カァンッ！
「あっ!?」
竹刀が回転、木刀が巻き取られ、跳ね上げられてしまう。
反射的に、木刀を目で追うなのは。
――バシンッ！
その額に、竹刀がヒットした。
「あうっ……！」
「何のための二本の得物だ。手から離れた時点で、捨てたものだと思え」
「はい……」
ひりひりする額をさすり、聴き入るなのは。
「もう一本！」
「はいっ！」
木刀を拾い、再び恭也へ挑みかかった。
「今日はここまで」
「……あ、りがとう、ございい、ました……」
へろへろになりながらも、しっかりと礼をする。
「うううぅ……オデコが痛い……」
「よしよし、よく頑張ったぞ」

練習後、美由紀がなのはを膝枕し、額に氷枕を乗せた。
「でもさー、いいの？　ユーノに頼めば、パパッと魔法で……」
「それは駄目」
「え……」
「怪我がすぐ治るなんて気持ちで修業してたら、絶対に強くなれない」
「……」
「だから、駄目」
「……そっかー」
特に何も言わず、なのはの髪を撫でる。
「全く、こんな可愛い我が妹に……恭ちゃん！」
「……修業に怪我はつきものだ」
恭也は、バツが悪そうな顔で、反対側に座っていた。
「そりゃ、足くじいたりはするだろうけどさ！　アレなら寸止めできたでしょ、恭ちゃんなら！」
「姉さん、いいから……」
「……痛むか？」
今更のように、なのはを心配する。
「超痛い。秀人さんに言いつけてやる」
「やめてくれ……」
ゲンナリする恭也。
「だめ。絶対言ってやる……」
くすくす、と、楽しげに笑う。
思えば、三兄妹だけで過ごすなど、いつ以来だろうか。
さらさらと、夏の夜の生暖かい風が、草を鳴らす。
「な～んか、いいねぇ。こういうの」
仲良し三兄妹みたいでさ……と、少し茶化して言う美由紀。
恭也となのはは、顔を見合わせて笑い……
「おーい！　ももこがスイカきるってさー！」
フェイトの元気いっぱいな声が、その時間を終わらせた。
「……ところで、スイカってなにー!?　ボク、たべたことなーい！」
歩いてくればいいものを、縁側から大声を張り上げる。

大声を出すことが楽しいらしい。
「流石に、近所迷惑だな」
「そうだね、いこっか」
「ひゃっほー！　スイカだー！」
美由紀が、目を輝かせて飛んで行った。
「……姉さん」
「フェイトと仲が良いわけだ」
二人も苦笑しつつ、ヴィータや桃子が待つリビングへ歩いて行った。

◆▪◆　◆　◆

秀人がサバイバルを始めて、一週間が過ぎた。
『グガアアアアア！』
はやての手助けもあったおかげか、一番の心配事だった、飲料水や寝床の問題はクリアした。
『ギャギャギャ！キキー！』
最初はあたふた、はやての後を着いていくのも手一杯だった秀人だが、今では、すっかり……
『ギュイイイイ！』
『ギャアアアア！』
『キキイイイイ！』
『グガアアアア！』
「うおおおぉ!!　ヤバいヤバい流石に死ぬコレは死ぬうぅぅぅ！」
すっかり、獲物として野獣たちに匂いを覚えられていた。
ダダダダダッ！と荒野を疾走し、数えるのも馬鹿らしくなるくらい大量の野獣たちを引き連れる。
と、すこし前方に、薄い煙が立ち上る。
念話が使えない世界での、アナログ極まりない合図手段……狼煙だ。
「あそこかっ！」
そこを目指して、一気にスパートを掛ける。
そこは、対岸が低いため、地平線からは分かりづらい谷だった。

後方に引き連れた獣たちは、頭に血が上って、そもそも気付いていないが。
「はやてええええっ!!」
大声で合図し、急旋回。
昂ぶる獣たちの股の間をスライディングでくぐり抜けた。
最前列にいた獣は、唐突に目標を見失い、多々良を踏む。
『ギュエフッ……!』
その背に、後続の獣達が、勢いのままに玉突き事故を起こした。
――ボゴォッ!!
と、崖の手前の大地が、不自然に隆起する。
結果それが、姿勢を崩したところにトドメとなり……
『『『『『ギャアアアアアアア!!』』』』』
野獣の群れは、谷底へ転落していった。
「ぜぇ、ぜぇ……」
片や、魔力結合を阻害される環境で、体力魔力を絞り尽くした秀人。
「やぁやぁ、ご苦労さん」
片や、十分な時間を確保し、簡単な物質操作の魔法を一回使ったのみのはやて。
……『保存食大量ゲット』という結果を得るために支払った労力が、違いすぎである。
「おら、いつまでも寝てんな。さっさとずらからないと、また竜が来るぞ」
「少しは、休ませろ……!」
ぜーはー言いながら、谷底まで歩いて下る。
谷底で獣を解体し、隠れ家の洞窟へ運び込んだ。
野菜の採れないこの世界では、ビタミンが不足しがちだ。
だから、とれたてで、鮮度が落ちないうちに、生で食べておくのが習慣になっていた。
ただ、ビタミン豊富とはいっても……
「「不味ッ……!!」」
ロクに火を通していないおかげで、味は散々だ。

「つか、寄生虫とか大丈夫なのかコレ……あぐっ」
「言わないでよ。食べられなくなっちゃう……はぐっ」
固い繊維を無理矢理噛み千切り、腹に詰め込む。
この数週間、口にするのは肉ばかり。
焼肉、塩漬肉、干し肉、燻製肉、生食……
（あーあ、（なのは／リーゼ）の料理が食べたい）
二人して、そんな気持ちを抱いていた。
「げぷっ……」
５キロも食べないで、二人は満腹になった。
「んじゃ、残りは……」
「いつもと同じ、塩漬と燻製」
「あいよー」
肉や内臓を加工すれば、後は自由時間（？）だ。
……娯楽も何も無い、非常にストイックな環境で、やることなんて限られている。
まずは、寝る。
そして……
「……１１２、１１３、１１４、１１５」
筋トレである。
薄暗い洞窟の中で、黙々と腹筋を鍛える秀人。
その横では……
「ご、ごじゅう、ろく……ごじゅう、なな……」
はやてが、ひーひー言いながら腕立て伏せをしていた。
リーゼとの修業とも違う、地道な運動にはまだ不慣れのようだった。
「１２０、１２１、１２２、１２３……はやて、無理するなよ。子供のうちから筋肉付けすぎると、身長伸びなくなるぞ……１２４、１２５、１２６……」
「ろく、じゅう……！はぁ、はぁ……うっさい……集中できないでしょ……！」
「あぁ、悪い。……１４０、１４１、１４２、１４３、１４４、１４５、

１４６、１４７、１４８……あー、駄目だ。ちっとも鍛えた気にならん」
もともと、桁外れな筋力を誇る秀人だ。
通常のトレーニングなど、今更、食後の運動程度にしか意味が無い。
「やっぱり、身体よりこっちかな」
見様見真似の座禅を組み、意識を精神の内部に向ける。
「すぅー……はぁー……」
――リンカーコア、起動。
薄らと、秀人の身体に、空色の魔力光が膜のように纏わり付く。
やはり、平常に比べると、その輝きは曖昧で、弱い。
「……」
すぐにギアを繋ぐのではなく……アイドリング状態のまま、体内に留める。
このまま外部へ出力しても、すぐに散ってしまう。
体内を循環させ、純度と密度を上げていく。
意識するのは、あるキーワード。
（俺の、魔力資質……『結合』）
この世界は、常時ＡＭＦが展開しているような環境だ。
だが本来なら、秀人の魔力資質の前には、意味を成さない筈。
いつかの日、ＡＭＦ環境下で、３００万という桁外れの数値を記録した時のように。
今、秀人は満足に魔法が使えていない。
それはつまり、魔力資質を引き出せていないということだ。
あの力を完全に引き出すことができれば、飛躍的な戦力向上ができる。
「……！」
手を突き出し、魔法を行使する。
近接攻撃魔法・ブレイド。
普段なら、特に意識せずとも発動できる、ごく初歩の魔法。
「うくっ……！」
それが、まともに行使できない。

魔力刃の基となる魔力のフレームが、構築できない。
いつも、どれだけ杜撰に魔法を行使していたのかを痛感する。
……秀人、なのは。
二人に共通するのは、高い魔力、優れた才能……そして、それに見合わぬ魔導師歴の浅さだ。
なにせ、初めてリンカーコアを起動させたのが、命懸けの実戦。
その後も、訓練より実戦の中で才能を開花させるような、言ってしまえば異常な環境が続いた。
直感で、手探りで、魔法の腕を磨いてきた。
そして支払わされたツケが……レイジングハートの大破。
……それを、繰り返さないためにも。
「ぐぐ……！」
徹底的に、鍛え上げる。
「……はァッ！」
そして、気が遠くなるほど……実際には、もっと短いだろうが……とにかく、なんとかフレームの　構築には成功した。
あとは、それをとにかく維持するのだが……
「うあ!?」
――パキィン……！
フレームは、呆気なく砕け散った。
「くそっ……」
悔しげに舌打ちする。
だが、すぐに……
「……もう一回!!」
また、一から始めた。

「……」
それを、無言で眺めるはやて。
（……なんでこいつ、こんなに頑張ってるの？）
あんなやり方、効率が悪い。
疲労と、成果の釣り合いが取れていない。

なのに、それを止めることなく愚直に、反復している。
それを維持できる……いや、こんな世界に飛ばされて、自分を鍛えようなどと思える意思は、どこから生じているのだろうか。
（私は、こいつらを殺して、『鉄槌』の敵を取って……）
はやてを支えているのは、負のモチベーション。
復讐という、わかりやすいものだ。
最初、秀人もまた、自分への復讐のために鍛えているのかと思った。
だが、秀人の態度からは、それが感じられない。
ならば、何故……？
「……」
考えて、考えて……気付けば、秀人はぐったりと気絶し、無防備に寝転がっていた。
「……チャンスか、これ？」
疲労困憊。
しかも、全く警戒していない。
またと無いチャンス。
――シュッ……
鞘から、魔剣を引き抜く。
――カキン……
秘蔵のカートリッジを、装填。
まだ、秀人には明かしていない。
今なら、殺せる。
もともと、秀人と一週間暮らしていたのは、成り行きと、気まぐれだ。
そして今、チャンスがやってきたことで、気まぐれは終わった。
魔剣を、振り上げ……
「……」
振り……下ろさない。
「……」
すとん、と腰を下ろし、秀人の顔を覗き込む。
「お前は、どうして……」

『鉄槌』の視界を、通じて見た光景。
ボロボロになって、それなのに……もう一人いた、白い衣服の少女を、身体を盾に守っていた。
「……守るための、力？」
一応の解答に、たどり着いた。
そして、そのあまりの価値観の違いに愕然とした。
「ば……馬鹿じゃないの？　力は、敵を排除するための……」
だが事実、秀人は『そう』してきた。
その力は、その怒りは……誰かのために。
「……自分より大切なものなんて、あるわけ無い！」
苛立ちの末に激昂し、魔剣を秀人の頭、数センチのところに突き立てる。
「他人のための力なんて、まやかしだ！」
認めるわけには、いかなかった。
「どっちが、真に強くなるのか……！」
誰かのために強くなる秀人。
自分のために強くなるはやて。
どちらが、より強いのか。
「見極めてやる！」
……不意打ちではなく、真っ正面からの打倒を、誓った。

# A’s編　第三十二話

いつもの高台に、訓練用の結界が展開していた。
術者はアルフ。久々に、ユーノの手伝いに時間を貰い、フェイトに付き合っていた。
中では、バリアジャケットに身を包んだフェイトと、短パンにジャケットを合わせたような戦闘服のヴィータが、激しく打ち合っていた。
「そりゃー！」
「うぉらあぁっ！」
――バギィンッ……！
「ふにゅうぅぅ……！」
「ぐうぅぅ……！」
鍔ぜり合いの体勢から、互いに牽制の魔法を放つ。
――ドガガガガガガッ！
射撃魔法がぶつかり合い、また間合いが開く。
「ハーケン……セイバー!!」
ギュルギュルと回転しながら追尾する、ハーケンセイバー。
「……はッ！」
ヴィータは、気合い一発。
――パキィィン！
グラーフアイゼンの一撃で、ハーケンを破壊してしまった。
『Ｐｈｏｔｏｍ　Ｌａｎｃｅｒ』
「ファイア！」
間合いを詰めさせまいと、射撃魔法を放つ。
――ガギギギッ……!!
シールドで弾くが、それだけ距離を離される。
「くらえっ！」
『ｉｍｐａｃｔ！』
秀人を真似るように、衝撃波を放つ準備をするフェイト。
「……」

対してヴィータは、野球ボール大の鉄球を二つ、出現させる。
「あはッ……！こんな距離で、ボクの魔法を破れるもんか！　はァッ！」
――ゴパァン!!
発射される衝撃波。
回避か、迎撃か。だがヴィータが取った選択肢は、ありえない三つ目……正面突破だった。
「ハッ!!」
――ガギィンッ！
グラーフアイゼンに打ち出された一発目の鉄球は、フェイトの衝撃波とぶつかり……掻き消されたりはしないものの、減退を余儀無くされる。
後は衝撃波との波状攻撃で、ヴィータをノックアウトするだけ……そう考えていたフェイトの思惑は、呆気なく砕かれる。
「らあぁっ!!」
――ガッキイィィン!!
ヴィータは、二発目の鉄球を……一発目の鉄球目掛け、打ち出した。
――ガチィンッ!!
寸分違わず、一発目の鉄球に衝突。
ビリヤードのように、推進力を中継し、一発目が勢いを取り戻す。
結果……
――バキンッ！
鉄球は、フェイトの衝撃波を突破した。
「えっ!?うわわわわっ……!?」
まさか、こんな手で突破されるとは思っていなかったのだろう。
姿勢を崩し、決定的な隙を晒してしまう。
「どりゃあぁっ！」
「ぎゃあぁぁっ！」
――そして、勝敗は決した。
「うううぅ……ちくしょー！」
「あぁ、動かないでよフェイト。バンソーコーが貼れない」

「負けたぁ……」
うー……と、不満そうにむくれる。
「自信あったのに……」
そんなフェイトに、ヴィータがアドバイスをする。
「アタシらの技術は、防御の上からブチ抜くことに長けてるからな。
ああいうシチュエーションは、恰好の獲物だ」
ヴィータの戦法は、古代ベルカの騎士の、引いては、守護騎士の戦い方だ。
「防御したから安心……ってわけじゃないんだよ。
防御したなら、それが破られた時、どうやって立て直すか。
そこまで考えないと、戦場では生き残れない」
「……むらさきのやつ、そんなたたかいしなかったぞ」
「そりゃ、意思を剥奪された操り人形じゃ、技術なんて活かしようが無いだろ」
その言葉に、フェイトがさー……っと青ざめる。
「あ、あいつ……あれがほんきじゃなかったの？」
アルフと二人掛かりで、相当に苦戦したのだ。
しかも、結局勝負は……闇の書の一時封印による消滅という預かり試合というオチ。
ヴィータは、人差し指をフェイトに突き付け、言い放った。

「ベルカの騎士、ナメんなよ」

「ぐぬぬ……きょうは、ちょうしがわるかっただけだもん……ね、バルディッシュ……？」
と、相棒に目を向けたフェイト。次の瞬間……
「あーーーーーー!?」
素っ頓狂な悲鳴を上げた。
何故なら。バルディッシュの、黒いボディ。
それを真っ二つに縦断するように、大きな亀裂が入っていたのだ。
「ば、バルディッシュー!?」

『修復できます。問題ありません』
「そういうもんだいじゃないー！」
　あたふたと魔力を注ぎ、応急処置をする。
「なんで、こんないきなり……！」
「あー……おめぇ、気付いてなかったのか？」
　慌てふためくフェイトに、ヴィータが、頬をぽりぽりと掻きながら、衝撃的なことを言った。
「アタシのグラーフアイゼンとそいつじゃあ、そもそも強度が違いすぎたんだ。
　打ち合う度に、ちょくちょく割れてたぞ」
「んなっ……！ほんと、バルディッシュ!?」
『……Ｙｅｓ，ｓｉｒ』
「なんで、もっとはやくいわないんだよ！もおおぉぉ!!」
『修復すれば済みます。ご心配には及びません』
　相変わらずクールに返す相棒に、フェイトが怒った。
「ばか！
　つぎはぎしてたら、いまはなんとかなっててもいつか……なおせないくらいにブッ壊れちゃうだろ！」
　クロノに緊急コールを躊躇い無くかける。
『クロノだ。どうしたフェイト、珍しいな』
「実は……」
　そして、事情を説明した。
「……ってわけなんだ。なんとかしてよ」
『……まぁ、そういうことなら、』
「うんうん！」
『マリーに頼むか』
「ばいばい」
　ぶちっ、と通信をちょん切る。
　すぐさまクロノからのコールが掛かり、嫌々渋々、それを受ける。
『あのなぁ！』
「やだ。あいつきらい！」

……相当に、怖かったらしい。
「あいつだけはやだ！」
フェイトの相棒、バルディッシュは、育ての親であるリニスの特製だ。
複雑な変型機能、高度な演算能力、人格ＡＩ……と、採算を度外視した高性能機。
だが、だからこそ、メンテナンスも複雑かつ面倒極まりなく……
『設計図が紛失したワンオフ品を弄れる技術者なんて、僕はマリーくらいしか知らん』
マリーは変態だが、腕は確かだ。
「うううぅ……」
だが、背に腹は代えられない。
相棒の傷を癒すことが第一だ。
「フェイト、あたしも着いていくから……」
アルフが宥めて……
「……うん」
フェイトは、小さく頷いた。
『それと、ヴィータ。君には、マリーから直々に召集がきている』
「……」
フェイトを下した、ベルカの騎士が脂汗をかいていた。
「あー、そのー……なんだ。アタシはちょっと腹痛があるから、今回は……」
どこで覚えてきたのか、仮病まで使ってバックレを決め込もうとしている。
「うわぁ……」「見苦しい……」
主従コンビも、ジト目にならざるを得ない。
「うっせー！　アタシにだって、苦手なモンくらいあるんだー！」
キレて叫ぶヴィータ。
「……」「……」
……なぜか、フェイトがアルフの背に隠れる。
アルフも、何か緊張した面持ちで、ヴィータを……いや、その背後

を見ている。
「あん？……なんだおめーら。変な顔して……」
「……腹痛とは、興味深い」
「はヒィッ……!?」
金縛りにあったかのように、瞬時に凍りつく。
どこまでも沈んでいくかのような、ダウナーボイス。
「……プログラムなのに、腹痛。生理現象。……興味深い」
幽鬼の如き、ほの暗く、しかし確かな存在感。
「あ、あ、あ……!」
ぎち、ぎち、ぎち……と、硬直した身体を後ろに向けようとするヴィータ。
「……迎えに来たよ」
――白衣の悪魔が、そこにいた。

「うぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
……ヴィータは、情けない悲鳴を上げ、魔法まで使って逃亡を図る。
「あ……」
ぽつりと寂しげに、声とも吐息ともつかないものを呟く。
「逃げちゃった……」
『おいマリー……!』
通信の向こうで、クロノが頭を抱える。
『何で、そこにいるっ!?』
「モルモ……じゃなくて、ヴィータが呼んだのに、来ないから……」
（今、すごく自然にモルモットって言いかけたなこいつ……）
（やっぱこわいよコイツ……）
『許可は取ったのか!?』
許可、とは、転送ポートの使用許可のことだろう。
が……
「……取ってない」
『……』

クロノは、完全にフリーズした。
「でも、だいじょぶ……もーまんたい……」
『ンなわけあるかァッ!!』
……壊れた。
「いや、ホント……ワタシ、地球在住だし……」
マリーは現在、地球支部に駐留している。
確かに、異世界を跨ぐわけでは無いのだが。
『地球支部から海鳴市まで、何十キロあると思っている!? 電車、バス……果てはタクシーにも乗れない社会不適合者が、どうやって!?』
「ん……」
すっ……と、後ろ手に持っていたソレを、胸の辺りに持ってくる。
「あ、それ……!」
それは、黒地にオレンジのフレアパターンが栄える、やや派手な……
「ひでとのめっとじゃん!」
オートバイ用の、ヘルメットだった。
「あの馬鹿、メンテついでにワタシのラボに預けっぱなしでいなくなったから、邪魔で邪魔で……だから、返すついでに乗ってきた」
『……乗ったのか、アレに』
「うん」
身長が１４０も無く、筋力も絶望的なマリーが。
「……楽しかった」
意外と、多芸なのかもしれない。
いや、それより……
「よく、つかまらなかったね……」
妙に感心したフェイト。
「捕まる……誰に? ワタシ、信号はちゃんと守ったよ?」
『……』
いちいち突っ込んでいては、頭の血管が持たない。クロノは、傍聴に徹した。
「青は、『進め』」

正解。
「黄は、『急いで進め』」
……可能であれば停止、が正しい。
「赤は、『注意して進め』」
……アウトー！
「ほんとに、ほんとーーーーに、つかまらなかった？」
むしろ心配そうに聞くフェイトに、マリーは、かくっと首を傾げ……
「捕まらなかったけど……変な奴らに、なんか追い回されたような気がする……
白くて黒い、四輪と二輪……ニホンは怖いね……」
パトカーと白バイである。
ナンバーは、修理の際にフェンダーごと取り外し、そのまま付け忘れてしまったらしい。
不幸中の幸だ。
――ぱたっ……
と、通信口から、枯れ枝が落ちるような、はかない音が響いた。
『きゃー！クロノくーん!?』
そばに控えていたエイミィの叫びもセットで。
「それで」
「ぴぃっ!?」
ぐわっ……と、いきなり超至近距離に顔を寄せられ、飛びすさる。
アルフにも、反応できなかった。
「ワタシに、なにか用……？」
「え、えと……」
すっ、とバルディッシュを見せる。
「ヒビが、たくさんはいってて……だから、なおしてほしいな、って」
「む……」
ぴく、とマリーの頬が反応する。
「これ……バルディッシュ？」
知っているかのような、そんな口ぶりだった。

「こわれたらいやだから……」
「いいよ」
「え？」
見れば、マリーの顔からは、ダウナーな雰囲気は消え去っていた。
「一日だけ頂戴」
バルディッシュをつかみ取り、手元にコンソールを出す。
「エイミィ、支部までの転送許可を。すぐに取り掛かる」
『あぁ、うん……』
「では、また」
――パシュッ……!!
……いかなり現れて、突風のように去って行った。
「……なんか、ちがうひとみたい」
ヴィータの身柄を確保しに、アパートに突撃してきた時とは、別人のようだった。
その疑問に答えたのは、向こうのエイミィだった。
『マリーは、人格にすっごいムラがあって……気分の静動の切替が激しいの』
「……ふーん」
あまり分かっていなさそうだった。
「……バルディッシュ、無事に帰って来られるかなぁ……？」
「……魔改造されてなきゃいいけど」
……不安が尽きない二人だった。
さて、すっかり忘れ去られたヴィータはと言うと……
「うわああぁぁぁぁん……！」
自分の影に怯えるように、まだ逃げていた。
……ヴィータ、哀れ。

◆▪◆　◆　◆

ラボに戻ったマリエルは早速、監獄のプレシアと通信を繋いだ。
『あら、何かしら……って、それは』
すぐに、マリエルが手にするバルディッシュに気付いた。

『バルディッシュ……？』
『お久しぶりです』
数ヶ月ぶりの再会だった。
「……」
無言でスキャナーに設置し、内部の詳細な情報を表示させる。
すると、出るわ出るわ……エラーメッセージの嵐。
「……これはひどい」
『本当……管理局の技術部は、ボンクラの集まりなのかしら』
かつての使い魔の作。
それが、ここまで粗末な扱いを受けていることに、怒りすら覚える。
それは、マリエルも同様らしく……
「直すよ」
『了解だわ』
がちゃがちゃと、資材の山を掻き分け始めた。
『……ねぇ、マリエル』
がちゃがちゃ、がさごそ。
「……なに？」
『こんなこと言うのも変かもしれないけど……少しは整頓なさい』
「一見、乱雑な部屋。　それでいて……実は、きわめて機能的な配置」
『……』
片付けられない人間の、常套句だった。
『なら、この前の中間報告……試作型カートリッジユニットはどこ？』
「……この山の、一番下」
指差したのは……分解された、もしくは組み立て途中のまま放置されたパーツ……要は、ゴミの山だった。
『……片付けなさい』
ぴくぴくと、こめかみを引き攣らせながら言う。
「……や。面倒臭い」
ぷいっ、とモニターから顔を逸らす。
――ブチッ……
とうとう、プレシアがキレた。

『片付けなさいッ！』
平然とした様子のマリエルだったが、怒鳴られるのは嫌だったのか……
「なんだよもー……」
ぶちぶち言いながらも、ジャンクパーツを仕分け始めた。
『ふぅ……』
だらしない友人と付き合うのも、苦労するものだ。
ジャンクパーツの山と格闘する小柄な身体を眺めつつ、ぼーっとする。
『プレシア・テスタロッサ』
と、珍しいことに、バルディッシュの方から話し掛けた。
『あら、何……？』
向こうで準備を進めるプレシアも、少し面食らったようだ。
『我が主は、常にあなたのことを案じていました』
『……そう』
罪を清算し終えるまで、母親面はしない。
そう決めているからなのか、表立ったリアクションは見せない。
『……そちらの調子は、どう？』
『毎日を、友人と楽しく過ごしています。最近では、料理にも挑戦されて……』
『まぁ……でも、怪我が……』
『それも含めて、教わっています。初めて触れる事柄に、よく取り組んでいますよ』
『保護観察で、不自由な思いはしていない？』
『ハラオウン執務官の尽力で、その点は問題ありません』
とはいっても、やはり気になって仕方が無いのだろう。
矢継ぎ早に、質問を繰り返していた。
――プレシア・テスタロッサ。
その本性は生粋の、『親バカ』なのであった。
「……修理」
ぼそっ、とした声に中断されるまで。

「……始める」
流石に、始めれば早い。ジャンクパーツの山は、綺麗に整頓されていた。
『そ、そうね……』
恥じ入るように、表情を取り繕う。
『それに合わせ、いくつか要望があります』
「……言ってみ？」
『構成素材を、より強度の高いものに交換・補強を』
「……そのつもり」
『当然ね』
構成素材は、秀人の機体にも採用した新型の魔導合金に変更する予定だ。
ヴィータのグラーフアイゼンから得られた技術を基にした素材で、強度はもちろん、軽量かつ、粘りのある素材となった。強化には、うってつけだろう。
『それから、もう一つ』
……むしろ、こちらが本題だ。
『私に、カートリッジシステムを搭載して頂きたい』

◆・◆　◆　◆

今日もまた瞑想し、魔法構築の基礎を反復していた。
……さて、俺達が先日、多くの獲物を仕留めたのは……なにも、無目的な乱獲がしたかったわけじゃない。
「……」
こうして、時間の全てを、魔法の基礎練習にあてるためだ。
「……ハッ！」
――ビシュンッ!!
手に、魔力刃を発動。
そして、分解されそうになるソレを、とにかく維持できるようコントロール。

「……」
5分が経過した。
初めのうち、一分も持たなかった惨状に比べたら、小さいながらも大きな一歩……
「ていやー☆」
――パリィィン！
「俺の一歩がああああああああぁぁぁぁ!!?」
上手くいってたのに！
「はやてぇぇぇ！」
「ひゃーっひゃっひゃ！」
愛剣を片手に腹を抱えてバカ笑いをするはやて。
「邪魔すんなっつったろ!!」
「ひゃはははは！　ちょっと叩いた位で割れる脆い魔力刃なのがいけないんじゃん！」
「ぐっ……！」
確かに、そうだけど！
「ほれほれ、二刀流～♪」
剣を鞘に収めて、見せびらかすように、左右の手にそれぞれ魔力刃を完璧に構成して見せる。
「ぐぐぐ……！」
畜生……才能の壁が憎い！
「……最初に使った魔力『だけ』で構成するんじゃなくて、分解された箇所に、新しく魔力を注いで維持してみな」
……アドバイスは、してくれるんだな。
「……」
確かに、これはこれで維持がしやすい。
もう一度、集中して……
「こちょこちょこちょ」
「ぶほぁっ！」
――パキィン！
集中を断ち切られ、またしても砕け散った。

「やめい!!」
アドバイスしたと思ったら邪魔しやがって……
「ほらほら、集中集中♪」
はぁ……
思わず、ため息が出てしまう。
「なのはなら、こんな真似はしないのに……」
まして、練習の邪魔をするなんて有り得ない。
「……おい」
バカ笑いから一転して……不快そうに、眉間に皺を寄せて、俺を睨んでいる。
……何だ？
何か、こいつの地雷でも踏んだか？
「私に、誰かを投影してんじゃねぇよ」
「……すまん」
よく分からないけど……って!?
「……死ねッ!!」
――ビュンッ!!
「うわっ!?」
あっぶね……
「……決めた。殺そう」
剣を握る手に、ぎちぎちと力が篭っている。
やべ……マジでキレてる！
「ま……待て。落ち着け。話し合おう！」
「問答無用だァッ！」
振り下ろされる先は……躊躇い無く、俺の額！
――ガシンッ！
魔力で補強した掌で、なんとかギリギリ受け止める。
「はァ……！」
その頬は、酔ったように紅潮していて……とても、言葉で正気には戻せそうにない。
「えぇい、許せ！　俺は今のところ死ぬわけにはいかん！」

――ガスッ！
両手が塞がった状態から、中段蹴りではやてを蹴り飛ばす。
……もちろん、女の子を足蹴にするのに抵抗はあるけど、命が懸かっているなら話は別だ。
――ザンッ……！
はやては自分から後ろに跳び、蹴りの威力を軽減した。
……中途半端な射撃は、隙を作るだけ。
となると、残るのは接近戦だが、ほぼ無手の状態じゃ不利だ。
魔力刃は……駄目だ。まだ、実戦には耐えられない。
「……！」
腕に魔力を集中。
とりあえずは、これで！
――ガシュッ……！
「い……ってェ！」
おいおい……強化魔法を突き抜けたぞ!?
力尽くじゃ、こうはいかない。
やっぱり、剣のセンスが半端無いなコイツ……！
……っていうか、なんでいきなりガチバトルになってんだ!?
――ガギギンッ!!
「何が、そんなに気に食わなかったんだよ!?」
「知るか！　とにかく、ムカついたからブッ殺す！」
め……目茶苦茶だ、こいつの思考回路！
「ミドリムシの方がまだ思慮深いわこの単細胞！」
「い……言ったなあああぁぁ!?」
……実は気にしてたのか？
「言ったから何だバーカバーカ！」
半ばヤケになって、幼稚な罵声を浴びせる。
「生皮剥いでやるこの脳筋！」
「やってみろバーカ！　……ごめん嘘ですやっぱりやめてえええ！」
くそ……せめて、インパクトが使えれば……！

使えないことも無いだろうが、対人制圧用の威力調節版は、まだこの環境下では使いこなせない。
大威力では、はやてに重傷を負わせかねないし……
（――そうだ！）
確か、恭也の奴が前に……！
「……！」
思い出せ……あの時の、恭也の動きを！
「らあぁぁぁっ！」
「フンッ！」
――ごりっ……！
肉をえぐる、不快な感触と痛み。
だけど……
「つかまえ……たっ！」
「!?」
密着している今なら……使えるはずだ。
足腰で地面を捉え……捻りを加えて……接触面に、伝達！
零距離で……！
「せァッ！」
――パァンッ……！
「ぐっ……!?」
この技の利点は……一切の魔力を必要としないこと。
つまり、初見の魔法戦では必ず決まる。
たしか、『徹』……とかいう技だ。
「！」
剣を握る手から、僅かに力が抜けた。
「おおっ！」
腕に食い込んだままの剣を、掠め取る！
「あっ……!?」
意識が逸れたところで……
「寝てろ！」
首筋に、『徹』を叩き込む！

「かはっ……！」
どうっ……と気絶し、倒れ込むはやて。
「……あぶねー奴」
付き合い始めて一週間。そろそろ、地が見えてきたってことか。
「……はぁ」
うまくやっていけるかどうか、激しく不安だ。

# A’ s編　第三十三話

……夢を見ている。
起きた時には忘れているかもしれないけど、今、『これは夢だ』と自覚できる、いわゆる明晰夢というやつに違いない。
見下ろしているのは、閑静……というか、民家や施設が少ない、寒々しい路地だった。
舗装もおざなりなその路地を、二人の人間が歩いていた。
『……』
一人は、重い疲労に表情を塗り潰された女性。
まだ３０代にも見えるが、白髪が多く、肌に張りが無い。
『……』
もう一人は、その女性に手を引かれる、小学校低学年くらいの男の子だった。
……あ！
思い出した！
この子、前にも夢で見た、あの子だ！
確か、前は病院のベッドで呻いていたはず。
今、こうして歩いているということは、無事に退院したんだろうか。
けど、妙に重苦しい空気を纏っている。
母親の方は、息子と手を繋ぐ……というより、重い荷物を牽引しているような、義務感だけのような感じだ。
……まぁ、前の『夢』でも、かなりヒステリックな感じだったし、もしかしたら、もともと大して子供に愛情を持っていないのかも。
先に沈黙を破ったのは、男の子だった。
『……お母さん、どこに行くの？』
不安と共に、母親に聞く。
『……あなたが知る必要は無いわ』
投げやりで、ぶっきらぼうで……面倒臭そうな声。
とても、母親が息子に使う声じゃない。
『う、うん……ごめんなさい、お母さん』

可哀相に、しょげてしまった。
……子供を何だと思ってやがるこのババァ。
夢じゃなかったらブッ殺してるぞ。
……でも、夢だから手出しはできない。
こうして、親子を見続けるしかできない。
くそ……歯痒いな。
そして、妙に高く、不自然に隙間が無い、灰色の塀が現れた。
……そして、無言で塀の横を歩くこと何分か。親子は、大きな鉄扉の前で、足を止めた。
……ただの鉄扉。錆びているわけでも、まがまがしく尖っているわけでもない。
なのに、何でだろう。
その鉄扉が、魔窟への門に感じられるのは。
母親は躊躇せず、扉の横のインターホン
『……×
×です』
……？
不自然なノイズが走って、名前の箇所だけが聞き取れなかった。
――カシャカシャカシャ……
鉄扉は、電動式のスライドドアだった。
その向こうから、仕立ての良いスーツを着た壮年の男性が歩いてきて、親子を出迎えた。
『やぁ、これはこれは……お待ちしておりました』
にこやかな笑顔だけど……これは、欲を覆う仮面だ。
パパの財産を狙ってきた、自称『親戚』のクズどもと同じ、醜い顔。
『……』
何かに怯え、母親の袖を引く男の子。
だけど母親は、顔をしかめて、その手を振り払い……告げた。
『あなたは、今日からここで暮らすの』
『……!?』
男の子が、驚愕に目を見開いた。
『だから、ここでお別れよ』

『や、やだよ……！なんで……！』
『……もう、疲れたのよ』
対して母親は、何の感慨も抱いた様子も無く、踵を返した。
『お、お母さ……!?』
ぐいっ……と、男の子の腕を、胡散臭い男が掴んだ。
『やぁ、初めまして。わたしは、ここの園長だ。これからは、ここを自分の家と思ってくれていいからね』
言葉こそ柔らかいが、とても子供の手を引く力加減じゃない。
何より、さっきのやり取りを見ながら、笑顔がピクリともしていない。
ずりずりと、門に引きずられていく。
『お母さん……』
呟く一言。
助けを求めるように、手を伸ばし……
『……っ』
……なぜかその手を握り締め、下ろしてしまった。
『さぁ、行こうか！』
園長を名乗る男に手を引かれ……母親は、一度も振り返らず、去って行った。
『……』
全てを……自分が、母親に捨てられたことを悟ったのだろう。
子供っぽかった顔から、一切の表情が欠落した。
――……
そこで、いきなり場面が変わった。
身体の感覚が無いことだけは、変わらないけど……
場所は、窓が少ない白い大部屋だった。
『……ふん』
園長は、先ほどまでの笑顔はどこへやら。
本性が浮き出たような歪んだ表情で、男の子を突き飛ばした。
『……』
男の子は、されるがまま。人形のように床に転がり……思い出した

かのように、のろのろと起き上がった。
『鈍臭えなぁ。……おい、てめぇらの新しいオトモダチだ。　仲良くしてやれ……しっかりと、な』
そして、園長が出て行くや否や……
『へへへへへ……』
この中では、一番体格の良い、年長のガキがのしのしと寄ってきた。
多分、腕力に物を言わせ、他の子の食事を横取りしているんだろう。
こいつだけが、繕った跡が無い綺麗な服を着ているのも、多分……
『おい新入り。持ってるモンよこせ』
この服も、奪い取ったのだろう。
『……無いよ』
少年には、手荷物など何も無かった。
『あ？　使えねーな、このチビ！』
どんっ、と乱暴に胸を押され、べしゃっと尻餅をつく。
――くすくす……
昏く、陰鬱な笑いが耳朶を打つ。
……こんな環境にいれば、性根が腐っても仕方ないか。
『ああ、そっか』
白々しく、嫌味ったらしく、事実を突き付ける。
『お前も、親に見捨てられたんだっけな！
クソみたいな、ゴミ親にさぁ！』
取り巻きが、室内の傍観者が、げらげらと笑った。
こうして、新入りを徹底的にいびり倒し服従させるのが常套手段。
この子も、たやすく屈する……筈だった。
『……違う』
ごぅ……と、虚無だった男の子の瞳に、活力が漲った。
『あ？』
予想と違う反応に、ガキ共がぽかんとする。
『お父さんと、お母さんは……ゴミなんかじゃない！』
思わぬ反抗に、顔がヤカンのように真っ赤になっていく。
『て……めぇ！』

『……！』
男の子に、デブを筆頭にガキ連中が群がっていく。
リンチされてしまうんだろう。
せめて、一発はくれてやれ……と、祈った矢先だった。
――ゴギャッ……！
……と、鈍い音が鳴った。
――ビタンッ！
『おグッ……！』
デブの巨体が、轢き殺されたカエルのように、壁にへばり付いた。
ずるぅ……っと、血の帯を引いて崩れ落ちるデブ。
『ひゅー……』
その顔は白目を剥き……顎が、グロく割れていた。
……ど、どんな腕力よ？
『……お母さんは、悪くない……！』
ぎろっ……と、凄まじい眼光を放つ。
彼は、臆病な羊などでは無かった。
それを見誤ったガキ共に、退路は無い。
『ひっ……！』
リーダーを失った取り巻き達が、たじろぐ。
『ぼくが、悪いんだ。ぼくが、ぼくが……！』
――ギチギチギチ……！
ゴム紐を幾重にも結束させるような音が、固められた拳から聞こえる。
『……ぼくがぁあああああああ!!』
感情を爆発させ、獣のように叫んで……！
――グシャッ……!!
クソガキの顔面が弾けた……のではなく、その横、数センチ。
コンクリだか何だか知らないけど、壁。
その壁に、腕が突き刺さる音だった。
……何となく、察しがついた。
『こんな力、いらない』という、この前の言葉。

この子が捨てられたのって、多分……
『うがぁアアアアアアッ！』
思考を遮る咆哮。
――ゴズン、ゴズン!!
がむしゃらに、力任せに拳を振り下ろす。
壁を、近くにあったテーブルを、本棚を……目につく物を、片っ端から打ち砕き、引き裂き……
破壊していく。
その度に、ガキ共の顔面が恐怖で引き攣っていくのは、どこか痛快だった。
『はァー……！はァー……！』
ひとしきり部屋を破壊し続け……ぎろっ、と部屋を睨み回す。
『また、お父さんと、お母さんを悪く言ってみろ……！』
彼を突き刺すのは、歓待でも、拒絶でもない。
……怪物を見るかのような、恐怖の視線だった。
『……今度は本気で、お前たちをぶん殴ってやる！』
……そうだ、それでいい。
思うようにならないのなら……その『力』を、思う存分、振るってしまえばいい。
そうすれば、居心地の良い居場所を、自分で作ることができる。
私からすれば、そうするのが当たり前。
なのに、何で……？
『……』
何で、そんなに泣き出しそうな顔をしているの……？
……そこで、私の意識は浮上した。

目を覚まして、まず目に飛び込んできたのは、
「あーもう、勘弁しろよお前……いきなりキレやがって……」
心配そうに覗き込む、吾妻秀人の顔だった。
「うっさい……いたた、このロリペド野郎、思いっきりやりやがって」

「なんかすげぇ不名誉なレッテル貼られた！」
「後でペナルティだからね」
「理不尽だ……」
今気付いたけど、延髄のところに、濡れタオルが置かれていた。
「……あんた、強いね」
剣を持っていた私を、まさか素手でノックアウトするなんて。
「それしか取り柄が無いし」
……確かに。
「お前、インファイトしかできないもんな」
射撃・砲撃魔法が役に立たないこの世界では、それが更に顕著になっていた。
「まぁ……けど、それに関しては、負ける気はしないかな。誰が相手でも」
事実、『鉄槌』とも、カートリッジが無ければ殆ど互角だった。
技術は荒いけど……天性の才能ってやつに違いない。
格闘……というよりは、殆ど喧嘩だけど。
「決めた。お前へのペナルティ」
「な、何だ……？」
及び腰になる秀人に、王の判決を言い渡す。
「私に、喧嘩のやり方、教えてよ」
……その才能、そっくりそのまま、奪ってやる。
秀人は、拍子抜けしたように笑みを浮かべた。
「あぁ、いいぜ。俺でよければ、いくらでも」
すっ、と、右手を差し出してきた。
「契約成立ね」
その手を、握り返す。
初めて握る秀人の手は、大きくて、ゴツゴツして硬くて……
――不思議と、暖かかった。
◆▪◆　◆　◆
「せやぁっ！」
はやてが、俺の腹部めがけて突きを繰り出す。

強化魔法の恩恵で、そこらのボクサー崩れより、よっぽど鋭い。
「……」
……けど、馬鹿正直すぎる。
二の腕の側面で突きをいなし、掴み……アームロックを狙う。
「……！」
はやてが、関節技を察知して素早く身を引く。
二度も固められれば、流石に感づかれるか。
「はぁっ！」
関節技に気を配るあまり、過剰に腕が縮こまり……思いっきり、俺の制圧範囲に踏み込んでいる。
――ガンッ!!
足踏みをして、威嚇。
「っ!? やああぁっ！」
すっかり騙されたはやては、ろくすっぽ狙いも定まっていない攻撃を繰り出してきた。
――すっ……
慌てず、一歩だけ擦り足で後ろに下がる。
「あっ……!?」
気付いた時にはもう遅い。
――ボフッ！
軽く掌低を当て、迎撃。
「ぎゃんっ……!!」
いかに強化されていようと、それは子供の体格。三十キロも無いような身体が、地面を転がる。
立ち上がろうとしたところに、
――ガヅンッ!!
鼻先数センチに、足を振り下ろした。
「勝負あり、だな」
実戦だったら、頭を地面とサンドイッチして砕いていた。
「くそったれ……」
はやては、忌ま忌ましそうに、負けを認めた。

あの日から、更に一週間。
俺達は、ひたすら組み手に励んでいた。
「……」
ぶすっ、と頬を膨らませ、いじけるはやて。
「まぁ、そう腐るな。なかなかセンスあるって、お前」
「あァ!? 強化魔法まで使って、結局負けた私に対する嫌味か！」
ルールとして、俺は一切の魔法、『徹』のような技術は使っていない。
それに加えて、俺からは決して打ち込まず、カウンター技だけで戦っている。
でも、それは……
「できるだけ体格のハンデを埋めるためだろ」
「ムカつく……！余裕こきやがって！」
それでも、はやてはいたくプライドを傷付けられたらしく、機嫌が直らない。
「……もう一回」
「え？ いやいや、少し休めよ。今日はもう動きっぱなし……」
「うるさい！もう一回勝負しろー!!」
顎を狙った右のアッパーカット。
「うわっ、と、と……!?」
それに左フック、右ストレートと続く。
重さは無いが、鋭く速い。
どうやら、関節を取られないように……瞬発力をメインに据えたらしい。
やっぱり、センスあるわこいつ。
体格のハンデを補うことを、ほぼ直感で覚えるなんて。
（……ワクワクするじゃないか）
思わず、笑みが浮かんでしまう。
「こっちからも行くぞ！」
そろそろ俺の方からも、打ち込んでみるか！
「お……おうよ！」
僅かに頬をひくつかせながらも、果敢に応じる。

「うおおおぉぉっ!!」
「たぁあああああっ!!」
――ガァンッ!!
俺の生身の掌打と、ありったけの魔法で強化されたはやての拳が、激しく衝突した！

……
その後も、何本か勝負し……とりあえずは負けずに済んだものの、かなり際どい場面もあった。
魔法は抜きとはいえ、さすがに年長者の意地がある。
「はー……いい練習になった。なぁ？」
タオルで汗を拭き取り、向こうを振り返る。
「さわやかに、笑ってんじゃ、ねえ……！」
……あちゃ。
相手が子供だってこと、忘れてた。
「水汲んでくるから、そのまま休んでろ」

『ギャオォォン……!!』
おー、今日も呑気に飛んでるわ。
あの巨体じゃ、流石にこの渓谷にまでは入って来られないだろう。
「……にしても、アレを倒す、ねぇ」
俺は別にどうでもいいんだけど、はやてはどうしてもアイツを倒したいらしい。
初めて会った日、竜から逃げ切った後に聞いた。
『お前、何でこの世界にいるんだ？』
と。
対する答えは、簡潔だった。
『修行』
……よくもまぁ、剣一本で生き残ってきたものだ。
というか、剣一本でこんな世界に弟子を放り出すとか……アイツの師匠どんだけ鬼だよ。

「よっこらせっ、と」
水を桶に汲み、ねぐらに戻る。
「くぅ……くぅ……」
……寝てるし。
しかも、剣を側に放ったまま。
「……寝てれば可愛いのになぁ」もったいない。
と、放り出してある剣が、目に入る。
……あの剣、前から気になってたんだけど……少しだけなら、いい、よな……？
恐る恐る、剣に手を伸ばす。
「……ふぁ？」
はやてが、もぞりと身体をよじった。
「……！」
マズい、起きたか……!?
「……くぅ、くぅ」
「……ふぅ」
どうやら、ただの寝相だったらしい。
――ガシャッ。
とうとう、剣に手が触れた。
持ち上げて、目の前に掲げる。
装飾の類は無く、あくまで、質実剛健な『武器』として造られているようだ。
柄の径は、やや細い。
これは、はやての手に合わせているのだろう。
すらっ……と、鞘から抜く。
無骨、という言葉がぴったりの、片刃の刀身が現れる。
「……？」
刀身の峰の部分に、何か……スライドするギミックがある。
「……ん」
内部を、軽くスキャンしてみた。
この内部構造……

「……似てる」
ヴィータのグラーフアイゼンに、そっくりだ。
じゃあ、これってもしかして……古代ベルカの、アームドデバイス？
「んん……ん……」
うめき声にハッとする。
はやてが、何かを捜し求めるように手元を探っていた。
うわ、危ね……！
慌てて、剣を鞘に納めて、はやてに握らせる。
「ん……」
抱きまくらのように剣を胸に抱き、再び寝息を立てはじめた。
にしても、ベルカのアームドデバイスか。
それを与えた、こいつの師匠って一体……
「まぁ、今度聞いてみるか」
今は、まず鍛えなきゃ。
「……」
リンカーコアを起動。
体内で精製した魔力を……手に、魔力刃として出力。
――パチッ、パチッ……！
当然のように、端から分解されていく。
魔力を補充していけば、維持は簡単だけど……それだけじゃ進歩が無い。
――パシュン……
魔力刃を、魔力に還元する。
通常の魔法が分解されてしまうなら……通常より、密度を高めればいい。
まぁ、かねてから考えていた、『結合』の応用……その一つ、『圧縮』だ。
「……」
――ヴゥン……
手の上に魔力スフィアを展開し……それを、硬く、小さく、押し固

めていく。
「……っ、くそ」
――パシュッ……
が、失敗した。
最初は球体だった魔力スフィアは、押し固める過程で歪に変形し……
泡が弾けるように、消えてしまった。
変に歪ませたら、どこかが決壊してしまうらしい。
それじゃ駄目だ。
もっと均等に、形状はそのままに、大きさだけを縮めるようにしないと。
「集中、集中」
練習とはいえ、使える魔力は限られている。
集中して練習しないと。

◆・◆　◆　◆

秀人が行方知れずになって、もうじき一月になる。
八月の末日。
今日も茹だるような暑さの中、道場で、恭也を相手に木刀を振るっていた。
「……せいっ！」
恭也の、適度に手加減した一撃がなのはに迫る。
手加減しているとはいえ、達人レベルの一撃だ。
なのはも、最初のうちは避けられずに当てられるか、転がされていたが……
「……」
緊張するわけでも無く、半歩後退し、皮一枚、触れる寸前で回避する。
「!!」
驚愕する恭也。

その隙を見逃すなのはではなく……
「やぁっ！」
渾身の一撃を、恭也の胴に叩き込んだ。
――ガキンッ!!
それは、左の木刀で防御されてしまったが……
なのはは、恭也に初めて、『防御』という選択肢に追い込んだ。
「……今日はここまで」
「ありがとうございました！」
最近では、ぶっ倒れることも無くなり、持久力のアップを実感できる。
バケツと雑巾を用意し、道場を掃除する。
「……なぁ、なのは」
と、恭也がなのはを呼び止めた。
「ん、なぁに？」
「最後の……どうやって避けた？」
「え？　どうっ、て……普通に、見てから避けただけだよ」
「……見えたのか？」
訝しげに聞く恭也に、なのははサラッと、とんでもない事を言った。
「うん。目が慣れたから」
確かに、手加減はした。だがそれは、威力を弱めたというだけで……
速度は、微塵も衰えていないのだから。
「な、慣れ……？」
「うん。最初のうちは、軌跡が見えるくらいだったんだけど、もうすっかり。
……よし、お掃除終了！」
唖然と立ちすくむ恭也を尻目に、道具をさくさくと片付け、母屋に帰って行った。
「……」
――ヒュッ、ヒュッ！
何故か無言で、一人木刀を振る恭也。

（ま、負けられん……！）
兄の面子にかけて、末の妹に負けるわけにはいかないのだった。
そして、母屋で集まり、桃子らと談笑していた時だった。
――ピリリリリッ。
なのはの携帯電話が、着信を告げた。
「ごめん、ちょっと待ってて」
席を立ち、廊下に出て相手を確かめる。
「……リンディさん？」
『突然ごめんなさいね、なのはさん』
「いえ……それで、ご用件は？」
『レイジングハートの修理が、完了したわ』
「本当ですか!?」
長かったけど……ようやく終わったんだ！
「すぐ行きます！」
『あ、それから、バルディッシュの修理も完了したからフェイトも連れてきてもらえる？』
「はい。　……で、場所は？」
アースラでは無く、もっと本格的な設備が整っている場所にあるらしい。
『地球支部……なんだけど、なのはさんは行ったこと無いわよね？』
「はい」
『それじゃあ、案内役をよこすわ』
「エイミィですか？」
『いえ……あの子は今、秀人くんの捜索に加わってるから……』
「あぁ……」
そういえば、と思い出す。
「進展は？」
『ごめんなさい、まだ……』
「そうですか……あぁ、失礼。
で、私はアースラに行けばいいんですか？」
『ええ。転送ポートは……』

「家の中庭に開いて下さい。フェイトも連れて、すぐ行きます」
　ぱたん、と携帯電話を閉じ、リビングに戻る。
「ごめん母さん。急用だから、フェイトも一緒に出かける」
「あら……そうなの？　ケーキ、出来上がる所だったんだけど」
「ごめん、また今度……フェイト、行くよ」
「まって、なのは！　ボクはケーキたべてから……」
「駄目。ほら、行くよ！」
「うわーん！　ももこのケーキー！」
「安心しろ、フェイト」
「ヴィータ……もしかして、とっておいてくれるの？」
「あぁ」
　ヴィータは、優しく笑い……
「お前の分も、アタシが食べてやる」
「このやろー!!」
「はいはい、もう行くからね」
「ケーキ！　ケーキー！」
　じたばたもがくフェイトの首根っこを掴み、中庭まで引きずって行った。

　アースラまで来れば、流石に諦めがついたらしい。
「もう……きゅうようってなんだよ？」
　私に手を引かれながら、ぶつくさと言っている。
「レイジングハートとバルディッシュ、直ったって」
「まじでっ!?」
「女の子が『まじ』とか言わないの。
　……そう。だから、呼び出されたんだよ」
「ひゃっほー！バルディッシュに会えるー！」
　喜色満面で、私の手を振り回す。
　……で、案内役って誰だろう。
「あ……あの……」
　と、オドオドした声の女性局員が、話し掛けてきた。

背は、姉さんと同じくらいかな？
……思い出すのに時間が掛かったけど、思い出した。
「あなたが案内役？」
「は、はい……！わたくし、フィアット二曹が、拝命いたしました……！」
この人、エイミィの代役でオペレーターやってた人だ。
「……それでは、ご案内致します……！」
……それにしても、何でこんなに怯えているんだろう。
「……ねぇ、フィアット」
本人に聞いてみよう……と思ったのだけど。
「ひぃっ!?」
あ、ムカつく。
「フェイト、ちょっと待っててくれる？」
「？　うん、いいよー」
さてと。丁度、そこに人気の無い談話室が……
「フィアット、お話があります。こちらに来て下さい」
「えっ、えっ……？　あの、案内……？」
「すぐ済みます。来なさい」
「ひいいぃぃ……！」

「はい。甘くしておいたよ」
使い捨てのコップにコーヒーを注ぎミルク砂糖を入れて、手渡す。
「あ、ありがとう、です……」
びくびく、おどおどして……嫌になっちゃう。
「ねぇ……フィアット」
真横に座り、物理的に距離を縮める。
逃げようとしたフィアットを壁際に追い詰め、逃亡を阻止。
もう、お話くらいさせてよ。
「ひぃ……なんで、ありましょうか……」
「私、あなたに何かしたっけ？」
正直、本当に覚えが無い。

フィアットは、がばっと面を上げ、涙目で叫んだ。
「け、蹴飛ばしたじゃないですかぁ！」
「え、えぇ……？」
したっけ、そんなこと？
「わ、わたしの椅子、がぁんっ、て、がぁんっ、てぇ！
そのあと、胸倉掴んで脅したじゃないですかぁ！」
うん。嘘じゃなさそうだ。
……あ。アレか、もしかして。

『通信繋いで！』
『は、はぁ……』
『早くしろォッ！』
『は、はいイィィィ！』

トチ狂ったクロノに怒った時の、アレか。
「いやぁ、ほら……状況が状況だったし？」
「ひどいですよぅ！」
「……ってなわけで、誤解は解けたのでした」
「勝手に纏めないで下さいぃ！　そんなんだから、あちこちで……
ハッ!?」
ん……？
「あちこちで……何だって？」
「あわわわわ……！」
「逃げるなッ！　言えッ！」
「ひぁあああ！　言えないですうぅぅぅ！」
フィアットをソファに組み敷き、尋問していたら……
「なーのはー。まってるのあきちゃった……ん？」
……冷静に、考えてみた。
今の私は、か細い女性局員を、人気の無い談話室に拉致し、ソファに組み敷いている。
下手をすれば、犯罪者そのものの姿である。

「？　なにしてるのー？」
　でも良かった。
　フェイトがバ……、無知で。
「おい、駄目じゃないか。休憩時間以外、談話室は入室禁止になって……」
　が、話し声を聞いてきたクルーが、手に持っていたファイルを、ばさっと床に落とした。
「……二曹を、手籠めに……!?」
　ちがーうー!!?
「なん……だと？」
「うわ……将来有望……」
「ソッチも素養充分だったのか……」
「……あぁ、うん」
　――しゅらぁん……
　二刀を、鞘から引き抜いて……
「いい加減にしろおぉぉぉ！」

　……結局、物理的に誤解を解くのに一時間も掛かってしまった。

　アースラの連中は、しっかりシメておいた。
「す……すみませんでした」
　へこへこと、妙に腰の低い態度で、フィアットが私達を先導する。
「っていうかさぁ、」
　頭の後ろで手を組み、ぷらぷらと気楽に歩くフェイトが、口を開いた。
「なんでそんなに、なのはがこわいの？」
　一瞬、きょとんとしたフィアットは、あたふたと弁明を始めた。
「え、えぇと……やはり、苦手意識と言いますか……」
「うん。でも、それだけじゃないよね？」
　フェイトって、基本的にはお馬鹿さんだけど……たまに、妙に鋭い

んだよね。
「そうなの、フィアット？」
「うううぅ……は、はいぃ……」
……さて、どういう話だ？
「噂に、なっているんです。吾妻秀人さん、高町なのはさん……あなた達、お二人は……」
「……噂？」
口ぶりからすると、あまりいい噂じゃないんだろうな。
「つまり、その噂を聞いて、私のこと怖がってたわけ？」
「は、はい」
なるほど。
下手に戦闘中の私を知っていたことが、噂の裏付けになってしまったわけか。
「それに、その腰の……」
ん？　腰の……って。
「刀のこと？」
かんかん、と鞘を叩く。
「ひぃ……！」
びくっ、となって後退った。
「何よ……別に抜いてないでしょ」
「なのはー……かたなもちあるいてるひとって、たしかにかなりこわいよー」
……そう、なのかな？
「別に、必要なとき以外は使わないのに……」
フィアットが挙手し、聞いてきた。
「必要な時、とは……？」
うーん、そうだなぁ……
「まず、敵に襲われたとき」
当然だよね？
二人は、うんうん、と頷く。
それから……

「悪い子にお仕置きする時、とか」
当然だよね？
「いやいやいや、ねーよ！」
「思いっきり悪用じゃないですかぁ！」
え、えええ……？何で総ツッコミ喰らうの……？
「やっぱり、あの噂は本当だったんだ……！」
じりじりと距離を取り、逃げの体勢に入る。
「だから、噂って何なのよ!?」
「きゃあぁぁぁ!!」
あ、逃げた！逃がすかぁ！
――じゃきっ！
鞘から二刀を抜いて……！
「ちょ、なのは!?」
「待てええぇ!!」
思いっきり、ブン投げる！
――ガゴンッ、ガスンッ!!
投擲された二刀は、フィアットの制服の、袖と裾を壁にガッチリと縫い止めた。
「ひいぃ……!?　おかあさぁん……!!」
「さぁ……洗いざらい、吐いてもらおうか？」
そんでもって、噂とやらを広めた元凶を突き止めて……！
「……何してんの？」
と、平坦ながら少し不機嫌な声が、行進を阻んだ。
振り返ると、いつ見ても変わらない白衣の姿。
「あ、まりー」
「マリーさん？」
引きこもりに見えて、意外にもアグレッシブで行動力溢れるこの人のことだ。
多分、痺れを切らして迎えに来たんだろう。
「……遅い」
「す、すみません」

「見せびらかしたかったのに……」
「……」
「……」
……反応に困るような台詞は、言わないで欲しい。
「……そ、それじゃあ、行きましょうか？」
「うんうん！　バルディッシュにも、はやくあいたいし！」
壁に突き刺さっている回天桜花を抜き、かちん、と鞘に納める。
「あああぁ、おろしたての制服が……！」
「あー……」
フィアットの制服に、穴が空いていた。
「おかあさんに怒られる……」
ずーん、と落ち込んでしまった。
……いやー、ごめんごめん。
「貸して。繕って返すから」
「え、いや、あの……」
有無を言わさず上着を剥ぎ取った。
「じゃ、案内ありがと。制服はクロノにでも渡しておくね」
「じゃーねー」
手を振りフィアットと別れ、すたすた歩きだしたマリーの後を追った。
直後、後ろがにわかに騒がしくなる。
「フィアット貴様、何だその服装は!!」
「ひいい！　違うんです三佐どの!!　これには訳が……」
聞かなかったことにしよう。
……ドンマイ！

さて、直に対面するのは実に久しぶりだ。
「元気にしてるかな？」
多分、秀人さんが行方不明になったことも、知ってるだろうけど……
「あんまり」

「……そっか。やっぱり、そうだよね」
レイジングハート、落ち込んでるだろうなぁ。
「違う……会えば分かる」
「……？」
ロック解除されたドアを開け、ラボに入る。
すぐ目の前に、円柱状の容器に入った、レイジングハートが……
『……しくしくしく』
って、レイジングハートおぉぉぉ!?
「ちょ、何で泣いてるの!?」
そんなに寂しかったの!?
『マスターまで、浮気を……！』
「浮気……」
って、まさか、回天桜花のこと!?
「ち、ちがうよ!?これは……！」
『私というものがありながら……！』
「違うんだってばー!!」
……一度くらいは、見舞いに来るべきだったかもしれない。
『……そういうことでしたら、納得です』
フェイトはバルディッシュを抱えて、そそくさと退散した。
「……ところで、レイジングハート？」
『何でしょうか？』
……最初この部屋に入って来た時、机の上にはデバイスが入った容器があった。
一つ目はレイジングハート。二つ目はバルディッシュ。そして……
「……この、砕けた『三つ目』の容器は……？」
もう一つ、デバイスが入っていたんだろうけど。
『……』
「あぁ、それか」
むっつりと黙り込むレイジングハートとは逆に、マリーさんはあっさりした様子で、言った。

「秀人のデバイス……が、入っていた」
……『いた』？
「ごめん、よく意味が分からないんだけど」
マリーは、とても軽く、とんでもないことを言い放った。
「逃げちゃった」
「え？」
……え？
ええええええええええええええええええええええええええええええ!?

◆▪◆　◆　◆
「……」
手元に魔力スフィアを浮かせ、何やら瞑想する秀人。
――ゴキッ……
その魔力スフィアが、ごく僅かに収縮する。
「……！」
――ゴキキッ……！
また更に収縮し……内部に、魔力を凝縮していく。
「く、うぅぅ……！」
滝のような汗を流し、分解が追いつかないよう、全霊で圧力を更に高める。
「……っ！」
そして、手中の結界が限界を迎える寸前……
――……ギンッ!!
一際強い光と共に、分解がぴたりと止まった。
「……よし」
残ったのは……力強い輝きを放つ魔力スフィア。
恐る恐る、圧力を弱める。
……だが、分解は始まらなかった。

「いよっしゃあああぁぁ！」
喜びのままに、両手を上げて歓声を上げる。
「うっさい、なぁ、もう……！」
皮で作ったお手製のサンドバッグをリズミカルに叩きながら、はやてが顔をしかめた。
「成功はいいけど……実戦で、呑気にそうしていられる時間なんて無いでしょ」
「今はまだ……な。けど、感覚は掴んだから」
あとは反復あるのみ……と、また魔力を練りはじめる。
「ふん……終わったら、組み手するからね」
「いや、今日は反復に使うから……」
「……チッ」
汚く舌打ちをして、またサンドバッグを殴打する。
だが、やはり地味な基礎トレーニングは気が乗らないのか、一時間もしないうちに、秀人にちょっかいをかけはじめた。
「ねぇ、組み手……」
「んー……」
「組み手しようよ！」
「明日なー……」
集中している秀人は、つれない態度。
むかむかむか、いらいらいら……と、堪え性の無い地の部分が首をもたげてきた。
「何だよ、バーカ！」
手元に転がっていた、拳大の石ころを掴み、秀人に向けて投擲した。
「ちょ、おま……！」
慌てたせいで、密度を保つための結界に穴が空き……その中にスポンッ、と、見事にホールインワンを決めた。
……とてつもない圧力の中に、唐突に異物を放り込む。
それが、どのような結果を引き起こすのか、はやてにも、秀人にも、分かっていなかった。

石ころは、瞬時に圧縮され赤熱。内部の熱エネルギーは逃げ場にたどり着くことも無く、自身の分子構造を破壊し、気化。結果……

――超高温の『プラズマ』が、発生した。

――……ドゴオオオォォォオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

「「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!」」

空全体を揺るがすような爆音を轟かせ、秀人とはやてが身を潜める渓谷が……崩落した。

『……グル』

その爆音は、岩山の頂で羽根を休める大火竜の耳にも、当然のように届き……

『ガルァァァァァァ!!』

巨大な翼が空気を叩き……巨体は、渓谷の跡地へと猛スピードで向かって行った。

# A’ s編　第三十四話

「う、ううぅ……？」
なんとか、防御が間に合った。
はやては、土砂の中からのそのそと立ち上がり、頭にこびりついた砂を払う。
「……くっ」
その最中、不自然に体勢を崩し、膝を突いた。
熱波や爆風は防げたとはいえ、洞窟内という狭所で増幅された爆音は、はやての鼓膜を破壊し、
三半器官に甚大なダメージを与えていた。
「……」
ふらふらと覚束ない足取りで、周囲を歩く。
「や、べぇ……！」
今まで、はやて達の身を隠していた渓谷は、原型を留めない程に崩れてしまっていた。
「……私達のいた洞窟が、渓谷全体のウィークポイントだった……ってこと？
ったく、どんだけツイてないのよ……！」
私『達』。そう、自分のほかにもう一人……
「秀人……!?」
自分は防げたが……爆心地にいた秀人は、どうなったのだろうか。
「……うげッ!?」
見覚えのあるスニーカーが、土砂から突き出していた。
「……」
ためしに、軽く引っ張ってみる。
ぐい、ぐい……と、確かに手応えが返ってきた。
……どうやら、足だけがもげて転がっているわけでは無さそうだ。
両手でその足を掴み……
「よっこい……しょっ!!」
――ズボッ!!

……と、どこかの童話のカブの如く、秀人を引っこ抜いた。
「……」
秀人は、辛うじて息をしていたが……
「……黒焼き？」
と、思わずボケてしまうほど、見事な黒焦げだった。
「うわぁ……生きてるかな、コレ。とにかく、治さないと……って、あれ？」
そこで、はやては首を傾げた。
……先程まで、炭化したような真っ黒だった秀人の皮膚が、パリパリと剥がれ落ちていく。
「……!?」
その下から見えたのは、血色の良い、やや濃い肌色。
……新しい、皮膚だった。
「……治癒魔法？　でも、意識も無いのに……」
更に、異常なことが起こった。
「……!!」
はやての耳が、『風が吹く音』を、確かに捉えた。
つい先刻、破れたばかりの鼓膜に。
「治っ……た？　嘘……？」
信じられない、と。
だが、確かな事実として、傷は治癒している。
「……どういうこと？」
治ったにせよ、理由も無いのでは気味が悪いだけだ。
「……死ぬかと思った……死なないけど」
秀人が、目を覚ました。
やはりというか、何と言うか……傷は、既に治癒していた。
意識無意識の関係無い、秀人の特異体質。
「今のは、おまえの力？」
「……あー、いや、単なる、治癒魔法」
「ホラ吹いてんじゃねぇ」
「……いや、まじで」

ほぼ知られた……にも関わらず、頑なに体質のタブーを隠す。
いつもなら、それで良かった。
どうせ、それ以外では説明が着かないのだから。
だが……次にはやてが口走った言葉に、すべての動きを止めた。
「大体、もしそうだとして……何で、私の傷まで治る」

「……なに？」

……険しい顔。
はやては、初めて見る秀人の顔に動揺した。
「え……」
その、豹変とも言える如実な変化に、腰が引けてしまった。
だが秀人は、はやての両肩を握り、ぐいっと身体を近付ける。
「ち、近いっての……！」
「どういうことだ？
お前の傷が、治ったって……お前の方こそ、何か魔法でも使ったんじゃないのか？」
「いや……気付いたら、治ってたけど……」
「……」
口に手を当て、ふらふらと後ずさる。
「嘘だ」「ありえない」「そんな馬鹿な」……口からこぼれるのは全て、事実からの逃避であり、同時に……その真実を肯定する言葉だった。
「おい……何だか知らないけど、とにかく落ち着けっての」
はやてもまた、混乱していた。
何が起ころうと、妙に肝が据わっている秀人がこんなに取り乱すなど……この一ヶ月の間、殆ど無かったのだから。

『ギャオオオオオオン!!』

「!!」
その、原始的な恐怖を呼び起こす咆哮に、目を覚ました。

「チッ……！話は後で、ちゃんと聞くからな！」
「……わかったよ。　で、どうする、また安全地帯探して逃げるか？」
「……」
一瞬の思考。
――彼我の戦力差。
――ＡＭＦ環境下での経験値。
――地対空戦闘。
様々な要素を加味し、判断した結果。
「……叩く！」
いよいよ、この世界における最終目標へ、手を出すことに決めた。
地平線の向こう、小さな黒点だったソレは、あっという間に、全体像を見せた。
「うわ……やっぱデカいな。　で……勝てそうか？」
不敵な笑みで、はやてを挑発する。
「勝つ！」
勝てる、では無く、勝つ。
それがはやての決意であり、判断だった。
「はやてが指示を出せ。俺は、それに従う」
秀人は、はやての作戦に乗ることにしたようだ。
『ゴフゥ……！』
大火竜の口元から、口内に蓄えたブレスが僅かに溢れる。
「ブレスを回避！その後、接近戦を仕掛ける！
「了解！」
はやては魔剣を構え、秀人は魔力スフィアを出現させ、圧縮を開始する。
そして……
『ゴハァァァァァァァァァァッ！』
地上目掛けて、ブレスが発射された！
――キュゴォオオオン！

ブレスは、辺りに目茶苦茶に破壊を撒き散らし、粉塵を巻き上げる。
――ボッ!!
粉塵の中から二つ、飛び出してくる影があった。
「うぉりゃあああああっ!!」
当然、はやてと、秀人である。
瓦礫を足場に、大火竜の前後から、攻撃を仕掛ける。
『ガァッ!』
大火竜が羽ばたく。
――ビュオォオッ!!
それによって、突風が発生。
「うわっ!?」
「きゃあっ!」
煽られ、再び地面へと逆戻りしてしまった。
「何だよアレ! 近付けないじゃん!」
「私に聞くな! こんなの、想定外よ!」
「……勝つって言ったじゃねぇかこのヘッポコ指揮官!」
「へ、へっぽこ言うなぁ!」
『ゴァァァァァァァァ!』
そしてまた、ブレスが発射される。
――ドゴォオン!!
「あークソ! ブレスを避けて近付くにしても、あの風が……」
「少しの間だけでも、あいつを地上に落とせれば……! おりゃあっ!」
「あっ、馬鹿!」
再びジャンプし、大火竜に剣を突き立てようとする。
が、当然、そんな考え無しの攻撃が通じるはずもなく……?
『ガァッ!』
――バヒュウウウッ!
「きゃあぁっ!」
やはり、突風に飛ばされた。
錐揉み回転してしまい、体勢を立て直すことが困難になる。
「っ、とォ!」

秀人もまた、空中に身を躍らせ、はやてをキャッチした。
――ゴォオオオ!!
隙を見逃さず、猛烈な火炎を吐き出す大火竜。
不自由な空中で、小規模なインパクトで射線上から逃れ、我が身を盾に、はやてを庇う。
「……くそっ！」
だが、やはり小規模。
待避は十分でなく……秀人の背中を、火炎が蹂躙した。
「うがぁあああぁっ！」
神経を焼く激痛に悶え、地面に墜落する。
「うぐ……！」
流石に、脊髄にまでダメージが及ぶとなると、回復には時間が掛かる。
「おい、しっかりしろ！」
はやてがその腕から抜け出し、秀人の肩を支える。
体格差もあって、引きずるような形だ。
『ガアアァッ!!』
攻撃が来ないと分かった途端、大火竜は急降下。
地表を、大火竜の爪がえぐり取る。
「……っ！」
躊躇い無く、瓦礫の山を転げ降りる。
「いッ、てぇ……！」
そのまま、秀人を背負って駆け出す。
「おい、俺は、いいから……！」
揺られながら回復しつつ、秀人が言った。
ほんの数十秒。
回復を待つ間、大火竜を引き付けておけばいい。
「俺を囮にして、アイツを攻撃……！」
……なのは辺りが聞けば、大激怒するような台詞。
「ふっざけんなッ!!」
当然、はやても怒った。

「おまえは、アイツに勝つための、私の手駒だ！　まだ、使い捨てるタイミングじゃないんだよ！
そういう台詞は、手足と目ン玉と歯ァ全部無くなってから言いやがれ!!」
なかなか、外道な理由だった。
「……鬼畜め」
苦笑いし、
「……んじゃあ、悪いけどこのまま逃げ続けろ。もう少し……すりゃ……完、治……」
かくん、と秀人が脱力する。
（やべ、死んだ!?）
……死んでない。
「くぅ……くぅ……」
秀人は回復するため、意識をシャットダウン。
戦闘中に睡眠を取るという、荒業を敢行した。
「えぇい、首に息が当たってこそばゆい……！」
身体強化魔法を使っているとはいえ、男性一人というのは重い。
「重いのよ、この野郎……！　ハラワタぶちまけて、軽量化してやろうか、、！」
憎まれ口を叩きながらも、律儀に秀人を背負い直す。
――ドゴォン！ドゴォン！
「ひィッ!!」
ブレスを避け、跳ぶ。
「きゃあぁっ！」
爪を避け、転がる。
「はひー、はひー……!!」
逃げても逃げても、上空を飛ぶ大火竜との距離は開かない。
「不公平よ！　あいつばっか、重力を無視しやがって!!　万有引力どこ行った!?」
「……おい、今なんつった？」
「あ、生きてたんだ」

……
「いま、不公平って……その後、」
「あいつばっか重力を無視して、万有引力……」
「それだ！」
がばっ、と、はやての背から飛び降りる。
「え……おい……ウェルダン状態だった背中はどうした？」
「寝たから治った！」
「……ＲＰＧじゃねぇんだぞ」
「まぁいいから。とにかく……！」
そして、はやては秀人の案を聞き、検討し、時に補足し……
「……よし、それで行くわよ!!」
作戦が、決定した。
はやてと秀人は、一定の距離を、つかず離れず駆け出す。
ブレスでは、どちらか片方しか攻撃できない。
『グァァッ!!』
火炎のブレスを、自らの突風で拡散させ、広範囲へと撒き散らす。
やはりこの大火竜、相当な知能を持ち合わせている。
とはいえ、威力は弱まる。
秀人とはやては、バリアジャケットの防御力のみで、炎に耐え、走りつづける。
『ゴァァァァァッ！』
同様の攻撃を、二度、三度と繰り返し、二人にダメージを蓄積させていく。
だが、二人に焦りは見えない。
むしろ……勝利を確信した、笑みさえ浮かべている。
「……もう少し！」
「……あと少し！」
そして、何度目かの熱波。それに揺さぶられ……
――ゴガガガガガガガガガガガガン!!
崩れかけていた渓谷が、完全に崩壊した。
瓦礫は山になり……新たな、足場を作り出す。

だが、制空権という優位は崩れない。
大火竜は、上空を旋回し、粉塵が止むのを待つ。
晴れればまた、ブレスを上からぶつけるのみ。
『グァッ!?』
……と、唐突に、見えないワイヤーで引っ張られたように、大火竜のからだが、ガクンと空中でバランスを崩す。
「無駄だ……もう、浮かぶことはできねぇよ」
一跳びで、ふわり、と、秀人の身体が軽々と浮かぶ。
まるで、重力から解き放たれたように。
「このへんの重力、お前の身体に『結合』させてやったんだからなぁ！」
……超高密度の魔力による、魔法の行使。
それは、単純な攻撃とも防御とも、補助とも違う……全く新しいジャンルを、開拓した。
――重力操作。
普遍的に存在する、ある種の『概念』を操る……まさに、『魔法』の力だった。。
『グォオオオ！』
悪あがき。
長い首を、今や自身を上空から見下す秀人に向け、最大威力のブレスを放とうとする。
――ボッ！
と、粉塵の向こうから、飛来するものが一つ。
「使用権限、一時譲渡！
……秀人、やれえええええ！」
はやての号令と共に……秀人の手に、投擲された魔剣が握られる。
「おおおおおおおぉぉっ！」
『グガァァァァァァッ！』
――ギュゴォオオッ!!
迫り来る、灼熱の炎。
秀人のリンカーコアは、大火竜を縛り付けるので手一杯。
持続時間は、残り一分も無いだろう。

残り一分で、大火竜にトドメを刺す。
秀人自身のキャパシティは、既に満杯。
――ならば、

「ロード、カートリッジ!!」

――ガキィンッッ!!
外部の魔力を、使うまで！
「だぁぁぁ

『ガァ……！』
大火竜……？
いや、違う。
――ズズゥ……ン……
大火竜は崩れ落ち、
「はぁ……」
右腕を振り抜き、残心のを取る……はやての姿があった。
秀人は、はやてに歩みより、右腕を高く上げる。
はやても、無言のまま右手を上げ……
――パァンッ!!
軽やかな、ハイタッチを交わした。
「いよっしゃあああぁぁ!!」
はやては、がばーっ！と両手を振り上げ、全身で喜びを表現する。
それを、端から秀人が見ていることに気が付いたはやては……
「な……何ニヤニヤしてんだよテメェ！」
げしっ、と、赤面したまま秀人に蹴りを入れた。
「いって！　……でも、よく頑張った」
「ふん。本当なら、私一人でやるべきだったんだろうけど……」
かしかしと、ごまかすように頭を掻き……
「ま、三割はおまえの手柄にしといてやるよ」
どこまでも不遜に、秀人に感謝した。
「厳しいなぁ……あ、そうだ。返しておく」
手に持ったままだった魔剣を返却する。
「そういやおまえ、何で、カートリッジのこと……」
（ギクッ）
――寝ている隙に、こっそりいじってました。
等と、言えるはずも無く……
「さ、さぁて、獲物、さっさとバラそうかなっ!?」
下手くそなごまかしを、始めた。
「……後で、じっくり聞かせてもらうからな」
今は、その体力が惜しい。

と、秀人とはやてが、大火竜に近付いた時だった。
……大火竜の身体が、淡く、黒色の光を発する。
これは……
「……魔力光？」
その魔力光は、大火竜の身体を包み込み、徐々に小さくなっていく。
そして光は……人型に収束し、収まった。
「……嘘」
はやては驚愕のあまり、感情をせき止められる。
「おい、どういうことだ……!?」
秀人も、困惑している。
何故なら。
その人型は、漆黒の頭髪に、目立つ猫耳、尻尾を持つ……

――はやての使い魔、リーゼだったのだから。

じわ……と、リーゼの下の岩場に、ドス黒い液体が染み出す。
「……！　リーゼ!!」
はやてが、その身体を助け起こす。
「なんで……なんで……！リーゼ！」
言葉らしい言葉にならない。
「う……」
リーゼが、意識を取り戻す。
「あ、るじ……」
「！　リーゼ、気が付いたの!?」
リーゼは、こんな状態になって尚、冷静な言葉を紡いだ。
「主が、最後に使われたのは……古代ベルカ拳技、最大奥義……『シュヴァルツェ・ヴィルクング』……お、お見事な、一撃、でした……」
「そんなこと、聞いてない！なんで、リーゼが竜に……！」
「『修練の門』……結界魔法に、対象を閉じ込め……試練を与え、成長を促す、古代ベルカの、禁呪です……ゲホッ！」
びちゃっ、と、咳と共に血を吐き出す。

「発動条件は……魔力ラインが、繋がっていることと……己を、理性無き暴竜と化し、最終試練と、すること……」
それ故の、禁呪。
「おまえ、そんなこと一言も……！」
泣きそうな目で、リーゼを問い詰める。
「ご命令、でしたから……『修業に、一切の手心を加えるな』、と」
「……私の、せい？」
いいえ、と、リーゼは首を横に振る。
「あなたが、強くなられること……それが、私の望み、私の使命……」
「馬鹿……この大馬鹿!!」
「ご心配、なさらず……私の命が尽きれば、じきに、この世界から出られます……」
じわ……と、リーゼの下の岩場に、赤黒い液体が染み出す。
「……！　リーゼ!!」
はやてが、その身体を助け起こす。
「なんで……なんで……！リーゼ！」
言葉らしい言葉にならない。
その色は、見慣れたものだ。
だがそれが、近しい者が流すものとなると、意味合いが違ってくる。
……大火竜として、その命を担保に維持してきた結界は……死を以て、解除される。
ＡＭＦの影響も、消えるだろう。
「……やだ、やだよ、そんなの……！」
「……」
とうとう、リーゼが意識を失った。
「はやて、代われ」
秀人もイマイチ理由は分からなかったが、とにかく……目の前のリーゼが死にかけている、ということは、確かなようだった。
「治癒魔法、試したんだけど……うまくいかなくて……」
泣きベソをかき、ぐしぐしと目を擦る。
「どうしよう……リーゼが、死んじゃうよぉ……！」

秀人はリーゼを抱え、傷を確認する。
（背中に裂傷……それに、肋骨、内臓がいくつかやられてる）
背中は秀人の斬撃、内臓は、はやての拳による傷だろう。
出血は派手だが、背中の傷は大して深くない。
むしろ、問題は内臓の方だった。
「……まだ、使えなさそうだな」
圧縮魔力スフィアを使えば、使えなくも無いだろうが……ユーノには遠く及ばない。
「……よし、やるか」
「え……？　でも、おまえだって、魔力殆ど……」
「裏技」
……例の、リンカーコア結合。
あれを使えば……あるいは。
「……一時的に、俺の身体と、こいつの身体を、リンクさせてみる」
「え……でも、そんなこと」
「俺には、出来るんだよ」
いつもは、リンカーコアの結合のみだが、秀人には確証があった。
……先程の、はやての治癒。
あれはどう見ても、秀人のソレとしか思えない。
恐らく、『どこか』で……この世界で出会う前後、関係無しに、魔力のラインがリンクしてしまったのだろう。
それが、はやてにも小さいながら、自己修復をもたらした……
それが、秀人の見立てである。
魔力残量、一割以下。
失敗は許されない。
「……」
一割の魔力をかき集め、圧縮を開始。
失敗すれば、リーゼを救う手立ては無くなる。
「……」
はやては固唾を呑んで見守る。
リーゼの手を、しっかりと握りしめながら。

「……この人が、お前の師匠？」
秀人はもっと、こう……フンドシ一丁の、ガチムチな老人を想像していた。
まさか、ネコミミ尻尾が似合う、可憐な女性とは予想と違った。
「うん……」
ぐすっ、と、また鼻を啜りながら、頷いた。
とにかく、よほど大事な存在だということだけはわかった。
「……よし」
魔力残量が少ないことが幸した。
圧縮は滞り無く完了し、次の工程に移る。
――キィンッ！
魔法陣を展開。
そのまま、ラインをリーゼに伸ばす。
「接続、成功……！」
同時、秀人の中に、見聞きした覚えの無い術式が流れ込んで来る。
それは以前、ヴィータの魔力を解析した時のものと、酷似していた。
――古代ベルカの魔法。
中には、ミッド式の魔法もあったが、大部分はベルカのものだった。
（さて……ここからが、正念場か）
ここまでは、いつもと同じ。
いつもなら、魔力のラインに意識を向けるところを、今回は、対象の肉体に。
だが……
「……う」
リンカーコアと肉体では、勝手が全く違っていた。
それ以上の接続は、遅々として進まない。
駄目なのか……秀人が思った、その時だった。
――ドクン
……と、心臓の最奥が、脈動した。
「……今のは？」
接続を維持しながら、その音に耳を傾ける。

「……」
――――ドクン
その脈動の正体は……
「……俺の、リンカーコア？」
秀人の治癒能力を司る、大きな要素。
それが、秀人の意志を離れ、跳ね回っている。
「お、おわっ……何だ!?」
意識した瞬間、さらに激しく……
――まるで、自らを使えと……鈍い主に、訴えているかのように。
「抑え……らんねぇ!!」
一か八か。
「うぉおおおおおおおおおおおおっ!!」
秀人はその衝動を……思うままに解放した。
――……ゴォオオオオッ!!
そしてソレは……まるで、殻を破る雛鳥のように……顕元した。
『――キュァァァァァァァァァァァァッッ!!』

――蒼炎の不死鳥。
「……!」
それを目にした瞬間、はやての脳裏に、『鉄槌』の最後が想起された。
――ジャキッ！
衝動的に切り掛かりそうになる寸前、なんとか意志の力でフルブレーキをかける。
まだ、リーゼに危害が及ぶとは決まっていない。
動向を、固唾を呑んで見守る。
「うおッ……!?　こ、コイツは……!!」
秀人は秀人で、驚いていた。
サイズこそ翼長2メートル程度と、鉄槌の騎士を滅した時より小さいが、内に秘める力の『質』は、全く同一のものだった。
『フシュルルル……!』

不死鳥は、秀人の目の前に滞空する。
「ええっと……？」
戸惑い、首を傾げていたら……
『ピギィッ!!』
――ゴスッ！
「痛ッたぁ!?」
嘴が、秀人の頭頂部を突っついた。
自分のリンカーコアにドツかれる……という、極めて意味不明の事態が起こっていた。
「何しやがる！」
怒る秀人だったが……
『ピギー！』
むしろ、怒っているのは不死鳥の方だった。
「あァ……？」
徐々にだが、何を言わんとしているのかが、伝わってきた。
『とっとと目的を言え、ぼけなす』……？
って、誰がボケナスだ、この焼き鳥！」
『ピギー!?』
――ごすっ、がすがすがすっ!!
啄むような連続攻撃。
「痛ッ、痛ッたぁ!?　……分かった！分かったから止めろ！」
『フシュウゥ……！』
……
「あー……そいつの傷を治したいんだ。手伝ってもらえるか？」
『ピィッ！』
ばさっ、と、『任せろ』と言わんばかりに両翼を広げ……その鼻先を、リーゼに向けた。
――キィイイイ……！
すると、どうしたことだろう。
先程まで行き詰まっていた肉体への接続が、呆気ないほど完了してしまった。

そして、治癒が始まった。
「……」
無言になり手をかざし……
『ピュイィィ……』
不死鳥は、翼をリーゼに被せる。
……流石に、秀人ほどの速度ではないが、あれほどの重傷……いや、致命傷が、確実に塞がりつつあった。
「……うん、大丈夫……助かるよ」
「……よ」
はやては、べしゃっ、と、膝が砕けたように座り込み……
「よかったぁ……!!」
安堵から、泣き笑いのような表情を浮かべた。
（なーんだ、この子……）
接続を続けつつ、心の中で呟く。
（ちゃんと、誰かのために泣けるんだ）
破綻者ではなかった。
その事実が、何故か無性に、嬉しかった。

……

「あぅ……？」
程なくして、リーゼが目を覚ました。
「リーゼ!!」
はやてが、その傍に駆け寄る。
「……はァー、疲れた」
どっかりと座り込む秀人。
『ピギー……』
全くだぜ……とでも言いそうな調子で、トコトコと秀人の所まで歩いていった。
「……お疲れ」
すっ、と手を出す。

その上に乗った不死鳥は、まるで雀のようなサイズにまで縮んでいた。
『ピィ……』
フッ……と、再び秀人の内に還元される。
「うーん……マジで、何なんだろう、コレ」
こんな土壇場でまさか、あの不死鳥を呼び出す術を、身につけられるとは思っていなかった。
「はぁ……」
が、秀人はどこか、憂鬱そうだった。
「……」
ふるふる、と頭を振り、思考を切り替える。
「……何故？」
「あいつが、助けてくれたんだよ」
「……」
くるっ、と秀人の方を向く。
「……あなたは？」
「吾妻秀人。通りすがりの、魔導師だ」
「……あぁ、そうでした。主の、協力者、ですね」
「手駒よ」
「……さて、それで、なんだが」
秀人のスルー能力も、向上したらしい。
「何よ」
「何でしょうか」
「……どうやって、ここから出る？」
「「あ」」
……この世界を覆っている、ＡＭＦ結界。
それは、リーゼの展開した『修練の門』によるものだ。
理性を失い竜と化したリーゼを打倒……殺害することで、結界を解除。
元の世界に、強制送還される。
……対象者が術者を越える力を得、術者を殺すか……対象者を、竜

が食い殺すか。
そのどちらかしか、解除されない。
だが、今は……中途半端な状態で、『修練の門』が解けかけ、術者が生存している。
明らかな致命傷から、完全に回復することなど、想定されていなかったのだろう。
秀人というジョーカーがいたからこそ、このような事態が引き起こされた。
「『修練の門』を越えられる程、強力な転移魔法は、持ち合わせていません……」
「……私も、攻撃魔法くらいしか知らない」
「……同じく」
三人が三人、帰る手段を持ち合わせていなかった。
「……救助信号は？」
「転移のような、大きな力ならともかく……信号のような微弱なものは、遮断されてしまいます」
「……収束砲撃で、結界を破壊する……ってのは？」
「我々の全魔力、大気中の魔素、全てを収束しても、破壊には届きません」
更に、魔力が希薄であることが追い撃ちだった。
「……どうするよ」
「……いっそ、この世界で暮らしますか？」
食うに困ることはありませんし……と、しれっ、と言い放つ。
冷静に見えるが、単にテンパッて思考停止しているだけのようだ。
「……秀人」
と、それまで黙っていたはやてが、口を開いた。
「おまえ、洞窟が崩れた時のこと、覚えてる？」
「……ああ」
覚えてるも何も、ほんの数時間前のことだ。
「あの時、どんな状況だった？」
「俺が、圧縮魔法の練習をしてて……」

「私がそこに、石を投げ込んで……」
「石が光って、なんか、ドーンって」
こく、と秀人が頷く。
「圧縮……そして、爆発？」
リーゼが、何かに気付いたらしい。
「……」
「……」
顔を見合わせ……

「縮退」
「あぁ、それだ！」
ぽん、と手を打つ秀人。
「……って、縮退!?」
ノリツッコミで、あたふたと慌てていた。
「知らないでやってたのかよ……」
はぁ……とため息。
「まぁとにかく、あのエネルギーに指向性を与えて、『砲撃魔法』に転化させちゃえば……」
「ふむ……破壊は、可能でしょうね」
着々と準備に向けた話し合いを続ける二人の横では、
「縮退かー……はははは」
秀人が、現実逃避していた。
「ていっ！」
――ゴンッ！
「ギャッ！」
秀人の頭に、峰打ちをして現実に引き戻す。
「……でもさ、ただ押し潰すだけで、縮退なんて起きる？」
プレス工場なんて、毎日ビックバンが起きてるわ……と、極めてもっともな疑問を口にした。
「勿論、ただ潰せば良い、というわけではありません。分子の逃げ場を、無くす必要があります。ですが、そんな真似、いかに魔導師であっ

ても……」
魔法とて、『可能』と『不可能』の境界は、しっかりと存在している。
だが、これは……明らかに、その境界を越え、『不可能』の領域へ踏み込んでしまっている。
「いやいやいや、でも実際……」
ピッタリとハモり、手を振る動作まで同じタイミングだった。
「とにかく！」
秀人に蹴りを入れつつ……
「実際、そいつはそれをやっちゃったのよ！」
「……不可解です」
普通の魔導師には出来ない。
ならば、秀人と、『普通の魔導師』との違いとは……
「……あー、俺の、魔力資質だと思う」
もう、隠していても仕方ない。
そう考えて、情報を提供することにした。
「プレシアが言うには、『結合』、とか言うらしい」
「……なるほど。それならば、合点がいきます」
普通の圧縮では、分子同士が結合するほどの密度は作り出せない。
だが秀人なら、分子同士を、魔力資質により、無理矢理『結合』させることができる。
だからこそ、可能だったのだ。
「つまり、その破壊力をもって、物理的に結界を破壊してしまおう……ということですね？」
「そ。これなら、魔力は殆どいらないでしょ？」
破壊力に指向性を与えて打ち出すというのが、砲撃魔法。
その破壊力というものが、魔力だろうと、反応プラズマだろうと、変わりは無い……かもしれない。
ひとまず一晩休憩し、体力魔力を回復させた後、脱出を決行することにした。
その夜……
「……リーゼ、起きてるよね」

同じ毛皮に包まる、はやてとリーゼ。
秀人が寝落ちした後、はやては切り出した。
「はい、主」
「あのさ……私たちの契約……」
「はい」
契約とは、リーゼが、はやてを鍛えるという内容のことだ。
「アレ、一文だけ追加しとくね。覚えておいて」
そして、リーゼの血色の瞳を見据え……
『自身の生命を、可能な限り、維持すること』
……かみ砕いて言えば、『勝手に死ぬな』。
……ということだ。
――ぎゅうぅっ……！
リーゼの身体を、力いっぱい抱きしめる。
身長差から、しがみつくような形だ。
「主……？」
「……おまえまで、私を置いていったら許さない」
「……」
「許さないからね……！」
その肩が、震えていた。リーゼは、はやての背中に腕を回す。
「……了解しました、主」

……秀人は背を向けながら、そのやりとりを聞いていた。
（『おまえまで』……か）
確かに、それらしい雰囲気はあった。
年齢に見合わない、厭世観。
それは、かつての自分……その日暮らしで、ただ余生を消費していた頃の自分と、似通っていて、
（お父さん、お母さん……俺は……いつになったら……）
そのまま、眠りに落ちて行った。

翌朝。

「そっちの準備はいいか？」
天気は快晴。
「いいよー」
「問題ありません」
三人は、脱出の用意を終えていた。
秀人の目の前には、直径1メートル程度の岩石。
それを、丸ごとエネルギーに換えてしまおうという算段である。
「んじゃ……始めるぞ！」
――ギィンッ!!
岩石の表面が、秀人の魔力……空色に発光する。
「ぬぐぐ……!!」
流石に、今回は的が大きい。
小石のように、すぐ圧縮……とはいかない。
だが、それでも……
――ゴリッ……
僅かながら、圧縮が始まった。
「ふんぬぅぅぅ……！」
――ゴリッ、ゴギッ……！
潰れていく。
押し潰されていく。
やがて、巨大だった岩石は、バレーボール大に、ハンドボール大に、野球ボール大に……徐々に圧縮され……
――ゴウン、ゴウン……！
ただ巨大なエネルギーが、岩石の周りを取り巻いていた。
「ここらが、限界だ……！
はやて、リーゼ!!」
「よっし……やるよ、リーゼ！」
「了解しました、主」
――キィンッ！
二人の足元に、古代ベルカ式魔法陣が展開。
濃淡二色の闇色の魔力が、『筒』の形状を成していく。

その『筒』の内部に、エネルギーを移し替えていく。
『筒』を維持するのは、一番器用なリーゼが担当。
「充填率、２４％、３８％、５６、６４、７２、８２、９６、９７、９８、９９……　１００％です、主！」
「よっし！」
そして……引き金を引くのは、はやての役だ。魔剣を引き抜き……
「ロードカートリッジ!!　行くよ！」
破裂寸前のエネルギーに、とどめの一撃！
「紫電……一閃!!」

―――――――

◆・◆　◆　◆

「ぐわあああああああああああああっ！」
「ひゃあああああああああああああああっ！」
落ちていた。とにかく、あの場所からの脱出を第一に飛び出したものだから、座標の指定こそ出来たものの……うかつなことに、『高度』の入力を、すっかり忘れており……
――高度１２００ｍからの自由落下をする羽目になっていた。
「ひ、飛行魔法、飛行魔法……！」
はっと思い出したかのように、それを行使するのだが……もともと、発動をレイジングハートに任せていた節のあるそれは、思うようには展開できず……
「ぬおおおおお勢いがぁあああああああ！」
自由落下の加速度とＧが凄まじく、効果的な減速は果たせていなかった。
そして、もう一方も。
（スレイプニル出したらバレるぅうううううう！）
……秀人への身バレを防ぐために、最も得意な汎用魔法の使用が躊躇われていた。
「り、リーゼ！　どうすんのコレえええええ!?」
「と、とにかく、何でもいいから減速を……地表へ向け、砲撃なりを……反発作用で、加速度を相殺しましょう……！」
「わかった！　おい、秀人！　聞こえたなこのバカ!!」
「お、おう！　聞こえた……って誰がバカだこの単細胞!!」
言い争っている暇は無い。秀人は、空中ではやてとリーゼをキャッチし、一塊になる。
そして、二人で地表へ向け……
「インパクトォオオオオッ!!」「ナイトメアーーーーーーーー!!」
衝撃波と砲撃を発射。数拍を置き……
――――――――……ズッドォオオオオオオオオオオオオオンッ!!

地上で爆裂した余波が、三人へ吹き上げる。
「ぐふぉっ……!!」
咄嗟にはやてとリーゼを抱き込むことで、一身にそれを浴びた秀人が呻く。
「ちょ……おい!?」
「へ、へーきへーき……」
肋骨が何本か損傷しているのだが、気にせず、着地の態勢に入る。
「よし、この高さなら……。はやて、剣貸せ」
「え、ええ……？　いいけど……」
はやての背中から、魔剣を引き抜くと、宙へ放り……
「せいっ!!」
結合。自身らに影響する重力の対象を、魔剣へと『結合』させる。
――ビキ、ビシッ……!!
秀人たちの落下速度が緩やかになるのと同時、魔剣が、エネルギーに負け、崩壊を始める。完全に崩壊するより先に……
「今度こそ……、インパクトッ!!」
――ドパァァァァァンッ!!
再びの、衝撃波。これにより、秀人たちの落下速度は、せいぜい五階建てのビルから飛び降りた程度にまで減速されていた。
「――ふンッ!!」
――ドガシャァァァァァァァンッ!!
二人を抱えたまま、足からの着地に成功する。どうやら、足元には何らかの残骸が散乱していたらしく、直接大地に叩きつけられるよりは、まぁマシな衝撃だった。
「いっててててて……!!　おい、大丈夫か？」
がらがら、と頭の上に覆いかぶさっていた何かの残骸を除けつつ立ち上がる。
「まぁ、生きてるよ……」「無事です」
二人も無事な様子だ。
――ガコンッ。
……役目を終えた魔剣が、地面に突き刺さり……バキン、と折れた。

「あー……んで、どこだ、ここ」
「座標は、高度以外は合ってたけど……おいリーゼ。ここどこだ」
「……」
と、リーゼは青い顔で沈黙していた。そう、敢えて言い表すなら……
『……やっべぇ』
……で、あった。
その表情から何かを察したはやてが、周囲を見回す。
「ふむ……うむ……なるほど。
――私ん家だ」

……衝撃波と砲撃と、おまけにもう一つ衝撃波を喰らい崩壊したのは、はやての自宅だったらしい。
「あ、あるじ……もうしわけ、もうしわけありません……!!」
「いや、気にすんな。命あっての物種だ」
愛着の無い家だっただけに、特に感じる物は無いようだった。
「おっ、念話が使える。ってことは……」
と、目の前に魔法陣が開き……
「――秀人、無事か!?」
現れたクロノは、無事に秀人と……その同行者であった、はやてとリーゼを保護。アースラへと帰還するのだった。
◆▪◆　◆　◆
むくっ、と、なのはは目覚まし時計よりも先に起き出した。
『おはようございます、マスター』
「おはよ……あと二日、か」
カレンダーを見ると、日付は八月三十日。
夏休みが終わるまで、残り僅かだった。
「くかー……」
タオルケットを蹴飛ばし、パジャマが腹までめくれ上がっているフェイトに、それを足蹴にして眠るヴィータ。

ユーノとアルフは、またしても缶詰だ。
「……ランニング、行こうっと」
『お付き合いします』
レイジングハートを首にかけ、支度を整えて家を出た。

早朝の土手を、マイペースに走る。
『ですが、驚きました』
胸元で揺れるレイジングハートが、話し出す。
『まさか、マスターが剣術を修めるとは』
「うん、いろいろあってさ……黙っててごめんね？」
『いえ、構いません。戦闘の幅が拡がるのは、歓迎すべきことです』
「うん。とりあえずの目標は、ヴィータとフェイトに、剣術オンリーで勝つこと」
元々、砲撃魔導師として力を伸ばしていたなのはと、近接型オールラウンダーのフェイト、白兵戦のスペシャリストであるヴィータでは、大きく差がついている。
「レイジングハート、私の魔力はどう？」
『現在、全快時の、約三割。
砲撃も射撃も、一応は使えるまでに回復したが、射程も威力も心許ない。
今までと同じ戦い方は出来ない。
だからといって、俄か仕込みの剣術では、逆に不利になる。
それゆえに、剣の腕だけでも、彼女らと対等にならなくてはならない。
「……まぁ、地道に基礎トレーニングだね」
『はい、マスター』
それにしても、と前置きし、深く深く、ため息をついた。
「秀人さん、遅いなぁ……」
既に、失踪から一ヶ月が過ぎていた。
『……』

同じような思いで、沈黙するレイジングハート。
「あーあ、夏休みくらい、一緒に過ごしたかったなぁ……」
――……ピリリリリッ
と、ポケットに突っ込んでいた携帯電話が鳴った。
待受画面には……クロノからの着信が告げられていた。
「……なんだろ？」
足を止め、土手に腰掛けつつ、携帯電話を耳に当てた。
「よっ、クロノ。どうかした？」
『高町なのは！
見つかった！見つかったんだ！』
クロノにしては珍しく、慌てふためいた、ハイテンションな口調でまくし立てる。
「……何が？」
『秀人だよ！
……ははっ、あの馬鹿、やっぱり無事だったんだ！』
……なのはは、電話を切ることも忘れて、自宅に向かって猛然とダッシュした。

◆・◆　◆　◆

「ふぃー……生き返るわぁ」
無事に保護された俺らは、何は無くともシャワーを浴びたかった。リーゼも、一度は致命傷を負ったのがウソのように万全で、検査は不要……らしかった。
（ま、調べられたらまずい事情でもあるんだろ）
じゃりじゃりとした砂やら、こびりついた血糊を洗い流していく。
「お」「あ」
サッパリしてシャワー室を出たところで、同じくシャワーを浴びていたはやてと出くわした。
「よっ。調子はどうだ？」
「……」

はやては、無言……というか、口を開いては閉じて、を繰り返している。顔色も赤くなったり青くなったり……大丈夫かコイツ。
「おい、秀人。艦長との面談まで時間が……」
クロノが、痺れを切らしたのか俺を呼びに来た。今回の事は、完全に管理局側の過失だったらしく、その件についての話がある、とのことだ。まぁ、順当にいけば謝罪、そして示談交渉かな。別に、得る物こそあったが、何かを失ったわけでもないし……別にいいんだがなぁ。
「んだよ。久々のシャワーくらいゆっくり入らせろよ」
むしろ湯船に一時間くらい浸かっていたい気分だ。
「んじゃな、はやて」
コイツも日本在住だし、これからもちょくちょく会えるだろう。
「……、あ、……が、と」
ん？　何か言ったか？
振り返ると、はやてが、真っ赤になって、怒っているような顔をしていた。
「あ、……、」
ど、どうした。体調悪いのか。
「あ、あ……！」
――ありがとう、って言ってんのよ！」
……それだけ言うと、曲がり角の向こうへすっ飛んで行ってしまった。
「……ありがとう、か」
何だかんだ言うけど、アイツ、割と義理堅いやつだよな。
艦長室では、リンディさんがいつになく真剣な眼差しだった。対面に座るや、深々と頭を下げた。
「この度の事故の件、完全にこちらの不手際によるものです。誠に、申し訳ありませんでした」
「ん、いえ、別に気にしてませんので……」

「いえ。信賞必罰です。此度の失態、いち部隊を預かる身として、わたしは責任を取らなくてはなりません」
　責任て。別に、そんな大事にしなくても……うーん、でも、このままだと「申し訳ありません」「いえいえ、お気になさらず」の無限ループになりそうだ。もしくは、リンディさんが妙な提案をしてくる前に……
「んじゃ、条件いいですか」
「何なりと。力の及ぶ範囲において、最大限の協力を致します」
　んじゃ、えーっと……
「ＦＣＲ３３と月木アレーテヴォルテックスとゲイルスピードとオーリンズを」
「……え？　あの、何を仰っているのかが……」
「いや、だから、俺のバイクに着けられるＦＣＲキャブレターと、集合マフラーと、軽量ホイールと、高性能サスペンションをですね。あ、４００のじゃないですよ。６００ｃｃ用じゃないと着けられないんで」
「え？　ええ……？」
　なんかめっちゃ困惑してるけど……何かおかしいこと言ってるか？　正直、無ければ無いでどうにでもなる、言ってしまえば無駄遣いになる趣味の用品を寄越せって言ってるようなもので、これはこれで十分な謝礼になると思うんだけど……
「あ、あなたって人は……はぁ……」
　リンディさんが、ガスが抜けた風船のように萎びてしまった。
『艦長、失礼します』
　と、通信が入る。
『なのはさんから、こちらへ来たいとの連絡が』
「構わないわ。お通しして」
「……やっぱ、心配掛けちゃった感じですか」
　期日としては、ほとんど予定通りだけど……その間の連絡が、全く取れていなかったんじゃ大変だよなぁ……
　そして、ほんの数分後。
　――ばんっ！

「――――秀人さんっ!!」「ひでとー!」
なのはとフェイトが、ドアを蹴破るようにして飛び込んできて……おぉっと。飛び込んできた。
「おー、久しぶりー」
部屋の入口あたりでは、ユーノとアルフも、苦笑いしながら立っていた。
「久しぶり……って、いつも通りみたいだね」
「もう……あんまり心配かけさせるんじゃないよ」
ヴィータの姿は見えないけど……多分、またマリーのところだな。
「心配したんだからね!?」
「すまん、すまん……って、何だそれ……」
……なのはの腰に、明らかにそれっぽい……匕首、いや、脇差……小太刀？　が二振り、佩かれている。恭也にでも貰ったのか？
まぁいいか。
「んで、……悪い、今日って八月の何日？」
日時の感覚が、完全に狂っている。
「今日が２９日で、明日が３０日」
うーん……そっかぁ……
「悪かったなぁ。あちこち連れて行ってやる予定だったのに……」
「……ううん、無事なことが一番大事だよ」
「フェイトも。心配かけたな」
「できれば、ボクもついて行きたかったんだけどねー。ひでとはさびしくなかった？」
「いや、寂しいとか以前に必死でなぁ……ああ、そうそう。めっちゃ強い子も一緒だったぞ」
「……へ？」「……え？」
まだ言って無かったっけ。
「たまたま出くわしたんだけど、一緒に訓練とかしながら過ごして……って、どうした二人とも。変な顔して」
なんか、釈然としなさそうだ。

「単細胞だけど悪いヤツじゃないから、今度会ってみろよ」
アイツにも、悪いことばかりじゃないだろうし。
「う、うん……」
「そういや、明日はまだ夏休みなんだよな？」
「！　うん！」
なのはは、期待するように強く頷いた。
「んじゃ……明日くらいは、パーっと出かけるか！」
「うん！　行く!!」
おお、ここまで喜んでくれるとこっちも嬉しいぞ。

◆・◆　◆　◆

はしゃぐ二人と、一緒にわいわいと騒ぎながらも……フェイトは一人、疑念を抱いていた。
（滅多に人がいない世界で、近いエリア内で、言語の通じる相手と遭遇する確率って……どんな偶然なんだろうね）
ふと、去り際にリンディと目が合う。
「……」
「……」
フェイトは、その数瞬で、己の役目を自覚した。
「ねぇ、ひでと」
「おう、何だ？」
「ボク、その子に会ってみたいなぁ」

# A’ｓ編　第三十五話

「……」
それは、年若い少女だった。
外見年齢は、１５に届くかどうか。
青色がかった、黒というよりは藍色に近い、不思議な色合いの髪の毛。白い肌。
そして、好奇心に輝く、紫の瞳。
それだけなら、ただの美しい異国の少女、という風貌だが、服装がこれまた異様だった。
明らかに室内用のサンダルをつっかけ、ほつれたジャージを身につけ……その上に、薄汚れた白衣を羽織っていた。
「……ふぅん、」
道を行く誰もが、そのちぐはぐな姿に振り返る。
「……へぇ、」
少女に、頓着した様子は無い。
手元に開いた本に視線を落とし、道のド真ん中を闊歩していた。
難解な哲学書のように読み進める、その本の表題は……
『今日から始める、３０ｄａｙｓ拳法トレーニング』
……と、あった。
読み捨てる類の、中身の無い本。
「……ふむふむ」
それを、大まじめに読み込みながら、ぱたぱたとサンダルを鳴らしている。
「……うん。アイは、またひとつ賢くなった」
読み終えた。
どうやらこの少女は、『アイ』という名前らしい。
それを白衣のポケットに突っ込み、また何かを取り出す。
「やっぱり、おそとは勉強になる」
今度の本は、『２ストロークエンジン・チューニングマニュアル』。
「データだけじゃ得られないものが、ダイレクトに感じられる。

『ひゃくぶんはいっけんにしかず』は、真理だった」
そんな動作を繰り返しながら、歩いていく。
「あれは……？」
と、ふらふら歩いているうちに、大通りを外れていた。
目の前には、開けたグラウンドと、サッカーに励む少年達。
「……アイは、かれらが何をしているのか、分からない。だから、アイはかれらに聞きに行く」
土手を越え、グラウンドの前までやってきた。
そして、そのままフィールドに足を踏み入れようと……
「待った待った！ちょっと待ったー!!」
傍らのベンチに座っていた、活動的な雰囲気の少女が慌てて止めた。
「おねーさん、試合してるんだから入っちゃ駄目だよ！」
「……？　アイは、かれらに聞きたいことがあるだけ」
「だーかーら、試合中なんですってば！」
首を傾げるアイを、ずるずるベンチにまで引っ張っていく。
「阻止された……」
ベンチに座り、平坦な表情で、少女を観察し始めた。
「答えられることだったら、私が答えますから……」
かくん、と首を傾げ、第一の質問。
「あなたはだれ？」
あまりに澄んだ瞳。
その色合いを不思議に思いつつ、自己紹介をする。
「私は、八代望って言います」
「あいしー。のぞみ、覚えた」
拙いなんちゃって英語で、返事をした。
「おねーさん、外国のひと？」
「ガイコクって、なに？」
「え？　えーっと……」
虚を突かれたが、なんとか分かりやすい言葉を捻り出した。
「日本の出身じゃあ無い……ですよね？」

「いぐざくとりー。アイは……」
……と、言いかけたところで、言葉が止まった。
「やめる。はなしたら、姉様におこられる」
「お姉さんがいるんですか？」
望は、出来るならその人物に連絡を取ってみようと考えた。
もしかしたら、迷子になった観光客という可能性も……
「あのいしあたま。いつかたおす」

……無さそうだった。
「おーい、望……って、誰だその人？」
そこへ、試合を終えた少年達がぞろぞろやってきた。
得点板には、一点差で逃げきったことが印されていた。
「おつかれ。……なんか、外国の人みたい」
「うぉっ、ガイジン!?」
にわかに騒がしくなる。
アイは健太の持つサッカーボールを、じぃっ、と見つめていた。
「なんか、サッカーに興味があるんだってさ」
「へぇ……」
試合は終わり、グラウンドは自由に使える状態になっていた。
「……ねーちゃん、一緒にやる？」
アイは、迷わず頷いた。
◆▪◆　◆　◆
秀人が退室していって、少しして。
「……ふん」
「お邪魔します」
はやてとリーゼの二人が、艦長室に呼び出されていた。
「お二人とも、体調の方はいかがかしら？」
にこやかに話しかけるリンディ。
それに対して……
「良いも悪いも無いわよクソッタレが……」

不機嫌丸出しで、髪の毛をがりがり掻く。
「主、言葉遣いが汚いですよ」
それを嗜めるリーゼだったが、
「ふんっ」
ぷいっ、とそっぽを向かれてしまっていた。
「では、手短に済ませます。八神はやてさん、リーゼさん」
だが、そこはやはり軍人か。動じる事無く、話しを進める。
「まず、貴女達についてです。あなたは、どのような経緯で、魔法の技術を入手したのですか？」
魔法とは言っても、それが現地の文化に基づいた……例えば、神道、密教、仏門……などであれば、特に追及する理由は無い。
それはあくまで、現地の文化なのだから。
ならば、『時空管理局』がそうする理由は……
「私たちの世界の魔法を、何故、現地人のあなたたちが保有しているのでしょうか？」
自身らの技術の流出が、認められた場合だ。
「お答え頂けますか？」
「……」
はやては一瞬だけ、『口ごもるフリ』をして……事前にリーゼと打ち合わせ済みの事を、
話しはじめた。
「……私の家の前に、変な猫が転がってたんだ」
あくまで、平静に。
「……」
リンディの放つ、無言の圧力を受け流す。
「んで、手当てしてやったら……何でかは知らないけど、この姿になってさぁ」
「……成る程。では、リーゼさん」
「はい」
はやての脇に控えたリーゼに、話が振られる。
「なぜ、彼女に魔法を供与したのですか？　……謝礼、ということで

しょうか？
もしくは、何らかの意図が？」
「いえ」
ふるふる、と頭を振る。
「……覚えていないのです。
何故、私が倒れていたのか……
この『リーゼ』という名も、主はやてにより授かったものですから」
嘘を嘘と見抜かれないコツは、幾らかの真実を織り交ぜること、らしい。
「ただ、『魔導を伝えよ』と、頭の片隅に残っていたので……」
はやては、それを特に否定せず欠伸していた。
「……そうですか」
リンディも、少し勘繰りながらも、一応は納得したようだ。
が、きゅっと眉を上げ、厳しい顔を作った。
「ですが、いくらなんでもやり過ぎです。こんな小さな子を、あんな危険区域に放置するなど……」
「おい、オバさん」
そこで、はやてが不躾に話を遮った。
「憶測でベチャクチャ喋るんじゃねぇよ。
魔法の修業も、全部私がリーゼに命じたんだ」
きん……と、脅すように魔剣の鯉口を切る。
「死んでしまったら、どうするのですか？」
リンディの案ずるような言葉に、はやては鼻を鳴らした。
「別に？
死んだなら、私は所詮、その程度ってことでしょ」
本気、とリンディは判断した。
「つーわけで、私の魔法の出所は不明。
……もう戻っていい？眠いんだけど」
「……ええ、ありがとうございます」
まだ、どこか腑に落ちない様子のリンディを残し、艦長室を後にした。

「行くよ、リーゼ」
リーゼの手を握り、すたすたと通路を歩く。
「はい、主……ですが、どこへ……？」
「あー……」
……家が吹き飛んだことを、今頃思い出した。
「どうすっかなぁ……適当に、そのへんでアパートでも借りるか」
借りる……の辺りに、まだ人間味が感じられる。
ばたばた、と、向こうの通路を走り抜けていく集団があった。
「うおりゃあああ！」
「いやっほー！」
「あわわわわ……！」
疲れなど何のその、二人の少女を肩に乗せ、猛烈な健脚で走る秀人。
そして、その後を追う、中性的な少年と、野性的な女性。
彼等は秀人を中心にするように、楽しげに、笑顔だった。
「チッ……」
面白くない。
……一ヶ月、苦楽を共にしてきて、親近感を抱かない方がおかしい。
だというのに、秀人には待っていてくれる仲間がいた。
……言ってしまえば、子供じみた独占欲だ。
「……ちぇっ」
足を止め、恨めしげな目で、秀人を見送った。
リーゼが、はやての手を引く。
「主、空腹ではありませんか？」
「……うん、お腹すいた」
本人は気づいていないかもしれないが、消沈しているようだ。
さっきまでとは逆に、リーゼに手を引かれ、俯きながら歩く。
「……ケーキ食べたい。しばらく肉はいらないから」
「そうですね。そのように食事をご用意致します」
「おーい、はやて！」
「……え？」
振り向いた先、秀人が、はやての名を呼びながら駆け寄ってきた。

「え……なんで、」
行った筈では？
混乱するはやてに、秀人が言う。
「いや、あのさ……俺達、明日あたり遊びに行くんだけど……
一緒に来ないか？」
「……えっと」
はやては、今度は本気で思い悩んで……
「……リーゼ、どうしよう？」
結局、リーゼに聞いた。
「主が、望まれるままに」
「……」
なのはは、少し警戒気味に。
「へー……あいつボクよりちっこいのに、つよいんだ」
フェイトは、興味深そうにじろじろと見ていた。
ユーノとアルフも、特に拒否しない。
つまりあとは、はやての返事次第なのだが……
「……うぅぅ」
物怖じしていた。
戦闘や修業には積極的だが、人付き合いには消極的だったらしい。
そして……
「……リーゼと、一緒でいいなら」
一応の、オーケーを出した。
「もちろん。リーゼもいいよな？」
「それを主が望むなら」
……二人増えて、七人の大所帯となった一行は、がやがやと（主にフェイトが）、転送ポートから降り立って行った。

……

ところ変わって、地球支部。
その奥まった一角。

『重要参考人留置室』に、クロノは来ていた。
その部屋の中は、ごくオーソドックスな病室だ。
そのベッドの住人に、クロノが話しかける。
「カツラギ・テツヤ。気分はどうだ？」
カツラギと呼ばれた、がっちりした体型の壮年の男は、首を僅かに動かした。
「……悪くは無い。相変わらず、身体は動かないがな」
この男はかつて、秀人の蒼炎に焼かれた……『雑魚騎士』の一人だ。
一度は、『王』の襲撃を受け、闇の書に取り込まれていたが、こうして、自我を取り戻していた。
「申し訳ないが、始めさせてもらう」
他にも生存者がいた中で、何故、このカツラギという男だけが幾度も聴取を受けているのかと言と……
「まずは、その少女の身体的特徴を……」
そう。
『王』の素顔と、変身後の姿、その両方を、目撃していたからだ。
クロノの聴取により、似顔絵が作成されていく。
そして、一枚の人物イラストが出来上がった瞬間……
「これは……！」
クロノは、バタン！とドアをブチ開け、秀人の元に飛び出して行った。。
「ダメだ、秀人……！お前の隣にいる、そいつは！」
今なら、間に合う。
全力で駆けるクロノ。
だが……
「……どこへ行く気だ？」
……その目の前に、一人の男が立ち塞がった。
「なっ……!?」
その男は、いきなり現れた。

この、内部への直接転送が不可能な、管理局内に。
何かの制服のような、無機質な服。そして……顔面を覆う、珍妙なデザインの覆面。
「貴様、何者だ……!?」
デバイスを構えるクロノ。だが……
「遅い」
――ガシィッ！
「ぐぁっ……!?」
……いくら焦っていたとはいえ、執務官。
それを、一瞬で間合いを詰め、頭部を鷲掴みにしていた。
「この距離なら、殴った方が早い。鉄則だぞ、クロノ」
「なに……!?」
名前を呼ばれ、驚くクロノ。
「……！　君は！」
ぴん、と、ある人物を思い出す。
――近距離戦闘。
――通信妨害
――変身偽装。
そして――
「お前が知るには、まだ早い」
――催眠暗示。
「う……ぐぁあああああっ!?」
頭の中を、直接手で掻き回されるような違和感。
頭の中に組み上がっていったパズルが、ばらばらに分解されていく。
「なぜ、だ……！」
段々と朦朧としていく意識の中、クロノは、仮面の男の真の名を、呼んだ。
「……何故だ！アリア！ロッテ！」
ぷつん……と、クロノの意識が、闇に沈んだ。

# A’ s編　第三十六話

「……」
床に倒れ伏すクロノを見下ろす、仮面の男。
「……」
――パァッ……
その姿が、光りに包まれ、カタチを変える。
長身だった身体は、二十センチ近く縮み、肩幅もいくらか狭まる。
変身魔法。
偽装を主な目的とする、今ではマイナーな技術である。
大柄な男性だった追跡者は、灰色の頭髪に、猫耳、猫尻尾を備えた……

――二人の、女性の姿を形作った。

姿形、装束、顔立ちまでうりふたつだが、片やストレートのセミロング、片やウェーブヘアと、見分けるのは容易い。
「……ロッテ、急ごう」
「……うん、アリア」
二人は、クロノの手足を持ち上げ、忍び足で移動を開始した。
「……ねぇ、ロッテ」
ぽつり、と、ウェーブヘアの猫耳……アリアが、口を開いた。
「……なに？」
「本当に、これで良かったのかな？」
それは、疑問。
「……お父様の、ご命令よ」
対して、ロッテはそう返した。
だが、ロッテもまた俯き、顔を逸らしている。
「……本当に、これで……」
アリアは、ポケットから数枚の紙切れを取り出す。
それは、乱暴に破り取ったかのように、端が荒れている……本の、

ページ。
そこには、現地の言語と、一人の少女の顔写真が写っていた。
「こんな、小さな子を……どうして」
「アリア」
ロッテが、その先を窘める。
「……わかってる」
アリアは、それをポケットに仕舞い直す。
「……わかっているでしょう？
お父様の、御命令よ。きっと何か、お考えがあるのよ」
「……うん」
二人は、そこから去って行った。

「……？」
数分後、クロノは目を覚ました。
「……仮眠室？
おかしいな……さっきまで」
クロノの記憶は、つい先程……重要参考人への聴取を終えたところで、ぱったりと途切れていた。
「……そうだ」
参考人からの聴取の後……モンタージュを作成して、そして……
「……結局、まともな成果にはならなかったんだった」
手がかりにもならない……ただの似顔絵が残って、疲れを取るために、仮眠室に『自分の足で』やってきた。クロノの頭の中では、『そういうこと』になっていた。
「……く、」
重い頭を持ち上げ、身体を起こす。
現在の時刻から、今後のスケジュールを確認。
「あと少しで、秀人の面談か」
幸いなことに、空き時間の範囲内で眠っていたらしい。
さて、秀人は今、どこで何をしているのか……

◆・◆　◆　◆

からん、とベルを鳴らし、秀人が翠屋に入った。

「……秀人くん？」

ウエイトレスの格好をした美由希が、ぽけーっ……とした顔で、それを出迎えた。

「よう美由希、久しぶり」

それに対する秀人の態度は、実に軽かった。

「おおおおお、お母さん！お母さーん！」

なのはは、まだ高町家には連絡していなかったらしい。

あわてふためいて、厨房へ呼び掛ける。

その様子に、周囲の客がぎょっとして振り返った。

「もう、なぁに美由希。お客様の前、です……よ……？」

美由希と同じく、固まる桃子。

「えっと……なのは、は？」

「家で出かける準備してるよ。待ってようと思ったんだけど、『顔見せてきたら？』って……」

「ふ……ふうん」

「……」

「何だよ、変な顔して」

「え？……いやぁ」

二人の視線は、秀人……ではなく。

「……」

その背後に、付かず離れず、一定の距離をオプションのように寄り添う……はやてに注がれていた。

「「……その子、誰？」」

当然の疑問を口にしたその瞬間……

「……！」

ギロッ……と、殺気立った鋭い目で、睨みつけられた。

「あ、あれ、怒らせちゃった……？」

「……」

無言で殺気ビームを照射するはやてに、ドン引きして後ずさる美由

希。
「……リーゼ」
ぼそっ……と、聞き取りづらく何かを言う。
「はい、主。なんでしょうか」
と、今まで、興味深くショーケースを覗き込んでいた帽子の女性が、とことこやってきた。
「……帰る」
今度は、リーゼの背後に隠れるはやて。
「主……」
やれやれ、といった様子で、ため息をつく。
が、やはりそこは、主人の意向を優先するのか、ぺこっと頭を下げ、店のドアノブに手を掛けた。
「待って」
それを、桃子が制止する。
「……何だよ」
苛立ちと共に、吐き捨てるはやて。
「折角来たんだから、ケーキの一つでもいかが？」
「そうだな。折角だ」
それに、秀人が乗っかった。
「どーせお前、コンビニのケーキくらいしか食ったこと無いだろ？」
図星だった。
両親が健在だった頃は、誕生日にはちゃんとしたケーキを食べていたのだが……
「……るっせぇ！」
Uターンし、秀人のところまで戻ってきて……げしっ、と足蹴にした。
「いってぇ！」
「三食コンビニ弁当で悪かったな畜生！」
「悪かった悪かった……ほら、座ろうぜ」
ぎゃーぎゃー騒いでいるのも迷惑だと、秀人がはやての手を引き、窓際の席に座った。

「モンブランとサバランとレアチーズケーキ。それと、アイスレモンティーを人数分」
「はい、かしこまりました」
下がっていく美由希。
「……チッ」
頬杖を付き、テラス席に視線を流すはやて。
不機嫌……は、最早デフォルトだ。
「お待たせしました」
そこに、美由希がケーキを運んできた。
「んー……おぉ」
何の気無しに目を向け……一瞬、輝いた。
（結構……いや、かなり、）
「美味そうだろ？」
秀人はそれを見透かし、けらけらと笑った。
「主、どれがよろしいですか？」
「全、」「全部、というのは無しですよ」
「うぐっ……今日くらい、」
「カロリーオーバーです。血糖値が、やや高めでしたからね」
リーゼは、その点で甘やかすことはしないようだ。
「じゃ、モンブラン……」
「どうぞ」
目の前に出されたモンブランを一口、フォークで切り出し、口に運ぶ。
「！」
見開かれる目。
やはり、ランキング一位は伊達ではない。
「あはは……美味いか？」
自分はサバランを食べながら聞く。、
「ええ。たまになら、甘味も悪くないですね」
上品にレアチーズケーキを食べながら、リーゼが返答する。
今風の服装とのギャップが、非常に激しい。

「……」
モンブランを食べながらも、秀人とリーゼが食べるケーキが、気になって仕方ないらしい。
「主、どうぞ」
リーゼが、はやての口元に切り分けたレアチーズケーキを持っていく。
『いいの？』と目で聞くはやてに、頷くリーゼ。
喜色を滲ませ、リーゼのレアチーズケーキを口にした。
「いかがですか、主」
「……おいしい」
実に楽しそうである。
……この姿だけを見て、巷を騒がせる連続失踪事件の犯人だとは、誰も思うまい。
「……」
「……？」
そこで、リーゼが秀人に、謎の目配せをする。
ケーキを見て……秀人のフォークを、ちらちらと……
「……マジかよ」
意図を察した秀人が、思わず呟いた。
……ここからは、アイコンタクトの内容である。
――無理無理、絶対無理だって！怒られる！
――いえ、問題ありません。主は単純な方ですから、ケーキさえ食べられれば、過程は気にしません。
――お前、結構酷いな……
――さぁ、主に『あーん』と。さぁ。さぁ。
――いや、無理！恥ずかしいし……っていうかお前、遊んでるだろ!?
――我が主には、それをする価値が無いと？　愚弄するつもりですかそうですか……許せませんね。
――なんでそうなる!?
結局、リーゼの威圧に負け……

「あぁもう、わかったよ……」
サバランを一口、フォークに乗せ……
「はやて」
「あぁン……？」
極めて態度悪く、秀人に振り返るはやてに……
「はい、あーん♪」
半ばヤケが入った満面の笑みで、差し出した。

――シャグッ!!
……明らかにおかしな効果音と共に、フォークにかじりついた。
「……」
秀人は、先端が消失し、持ち手の部分だけになったフォークを引き戻し……半笑いしていた。
「……鉄分たっぷりだな」
はやては、もごもごと口を動かし……
「……ペッ!!」
口元から、フォークの三股の先端が射出した。
――スコーン!!
……三股の先端が、秀人の眉間に、クリティカルヒットした。
「……ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ!!」
もんどりうって椅子から転げ落ちる秀人。
「おおお、お客様ー!?」
「何じゃこりゃあああああ!!」
「抜くから大人しくして!……そいやっ!」
「うおおおぉ抜けたぁ!……抜けたけど血がああああ!?俺のトマトジュースがあああああ!?」
騒然となる店内。
一方、はやてはと言うと、秀人のサバランの残りをちゃっかりと胃に納めて、
「……ご馳走様」

とびっきりの笑顔で、そう締めたのだった。
「全く、お前は……！」
秀人は、額を摩りながら、家路を歩く。
「あっはっは……あー、面白かった！」
対してはやては、ケラケラ笑いながら、その隣を歩いていた。
「んで……どこ行くの？」
なのは達の準備が出来次第、遊びに行くという話だった。
「んー……とりあえず、なのはが行きたい所に行こうかなって」
――またか。
はやては内心、辟易としながら、秀人をじっとりと眺める。
「なのは、なのはって……あんた、主体性無さ過ぎじゃね？」
……かくいうはやても、二言目にはリーゼに意見を求めるのだが、棚に上げていた。
「え……そうか？」
驚き、聞き返す。
はぁ～……とため息をつく。
「もし、あんたの愛しのなのはちゃんが、『秀人さんの行きたい所に～……』とか考えてたらどーするワケ？」
「うっ……」
その可能性も、大いに有り得る。
そして秀人は、ぼそぼそと、バツが悪そうに呟いた。
「……どうやって遊んだら良いのか、分からないんだよ」
「……は？」
今度は、はやてが聞き返す番だった。
「……」
それ以上は語らず、無言になってしまった。
秀人の休日といえば、なのはと本を読んだり、フェイトと仮面ライダーのＤＶＤを見たり、ヴィータの買い出しを手伝ったり、模擬戦で身体を動かしたり……良く言えばインドア、悪く言えば出無精な過ごし方しか、していなかった。
「……夏休みだから、どっか遠出すればいいんだろうけど……大人数

でしたことって無いし」
なのはを温泉に連れていったことはあったが……
「仕事以外で集団行動したこと無いんだよ、俺……」
「寂しい奴……」
はやてが、哀れむような上から目線で、秀人の心をえぐった。
「うっ……うるさいわ!!」
ムキになって言い返す。
どうにも秀人は、はやてが相手だと子供っぽい部分が垣間見えてしまう。
「お前だって似たようなもん……いや、俺よりひどいわ！
このヒッキー！」
「はぁうっ……!?」
痛いところを突かれた。
はやてははやてで、一日中を家で無目的に過ごし、魔法に覚醒した後は、ひたすら殺戮や訓練に明け暮れていた。
更に言えば、極度のコミュニケーション障害。
自宅とコンビニ（たまに図書館）の往復が限度……リーゼを従えてからは、その外出さえ億劫になっていた、根っからのヒッキーである。
「うぐぐ……」
唇を噛み締め、悔しそうに黙り込むはやてに、秀人が勝ち誇って言った。
「ハッ、幼卒ニートめ！」
幼（稚園）卒。
小卒を下回る、凄まじいレッテルである。
「ンだとゴルァ！　あんただって年齢的に中卒だろ！」
「高卒資格までは持っとるわい！」
目を逸らし、付け加えた。
「……通ったことねーけど」
「駄目じゃんかよ！通えよ！」
「いや、それお前が言うなし……」
「わ、私は……！」

そこで、秀人は真顔になった。
「通っておけよ。
『世の中には、通いたくても通えない子供だっている』……みたいな偽善じゃなくてさ。無駄に思えるような時間も、後になれば、貴重な思い出になるんだから」
……不利な流れになってきた。このままでは、なし崩しに復学させられてしまう。
やだやだやだ学校とか超やだ面倒臭い……と、拒否感全開だった。
「リーゼ、学校なんか通わなくて良いでしょ？」
やはり、リーゼに助けを求めた。
「そんな時間があるなら、剣か、魔法か、格闘の訓練を……」
「私は、秀人に賛成です」
「……え？」
意外にも、リーゼが裏切った。
「主は以前、美香に言っていましたね？
『さっさと治して、学校に行って美穂さんを安心させてやれ』……と」
「言ったケド……」
「言った本人が不登校では、示しがつかないでしょう」
「……そうかも、しれないけど……」
「師として、姉貴分として、もっと自覚を持って……」
リーゼが、説教モードに入った。
「けど……」
「けど？」
秀人とリーゼが、ぴったりとハモった。
「……人に会いたくない」
……この期に及んで、この有様である。
「ふうぅ～～～～……」
二人に、盛大なため息をつかれた。
呆れた目線も、もれなくセットで。
「あぁもう！分かったわよ！」
――げしっ！

「いてっ！何で俺!?」
秀人を蹴飛ばし……腕を組み踏ん反り返った。
「復学でも何でもしてやるわよ！」
……言ったな、と、二人は確かに言質を取った。

「あ、来た来た。秀人さーん！」
と、ようやく秀人のアパートに到着した。
なのは、フェイト、アルフ、ユーノ。
いつもの面子が、揃っていた。ヴィータは、マリエルに呼び出されて不在である。
運が良いのか、悪いのか……
「お待たせ。……んで、どこ行きたい？」
「うん、実は……」
――すぅっ……
見慣れた黒塗りの車が、相変わらず不気味なまでに静かに、アパートの前に横付けした。
「折角だから、アリサとすずかと望にも、声掛けてみたんだ」
「あーよかった」
「え？」
話の流れが読めず、キョトンとする。
「いや、こっちの話」
がちゃっ、とドアを開け、馴染みの四人が降り立った。
「なのは、久しぶりね！」
「秀人さん、こんにちは」
大体いつも一緒の、アリサとすずか。
「いやー、ガイシャって乗り心地良いんだね。驚いちゃった」
なのはにとって……実は、初のクラスメイトの友達、望。
そして……
「こ……こんちわ」
なのはには微妙に気まずい気持ちを抱く……健太だった。
「あ、葉山君も来たんだ」

なのはは知ってか知らずか、普通に挨拶をした。
「うん、部屋でダラダラしてたから引きずってきた」
「……迷惑だったか？」
「んーん、全然」
恐る恐る聞く健太に、軽く笑って否定した。
「……」
フェイトは、さりげなく一歩下がり、初対面のアリサ達から距離を置いていて……さらにその影で、コソコソとその場から離れようとするはやての姿があった。
「どこへ行くおつもりですか、主？」
「わっ、バカ、しーっ！」
リーゼに呼び止められ、その口を慌てて閉ざす。
が、バッチリと見つかってしまったらしく……
――がしっ
「今更、帰るなんて言わないよな？」
笑顔の秀人に、捕獲されてしまった
「ナイスだリーゼ」
ぐっ、とサムズアップする秀人。
「は、はなせえぇぇ!!知らない人には、着いて行ったらダメなんだよ!!」
じたばた往生際悪く暴れるが、素の力が秀人に及ぶ筈も無く、その場に縫い止められていた。
「安心しろ。俺の知り合い、つまり『知り合いの知り合い』だからセーフだ」
「思いっきりアウトじゃんかよ！　はなせえぇぇ！私は帰る！帰ってダラダラのんびり時間を潰すぅぅぅぅぅ！」
……その自宅が、瓦礫の山になっていることも忘れてしまっているようだ。
「主、正直言って、あなたは社会性に欠けます。いずれ万人の上に立つ者として……」
「なぁにが社会性だクソ喰らえだ！　一人で生きていけない弱者の妄

言じゃねーか！」
ふぅ……と、本日二度目のため息をつく。
「押し込んでしまいなさい」
「了解」「ノエル」「どうぞこちらへ。ファリン、お相手して差し上げなさい」「はい、おねーさま」
すずかの指示でメイドがドアを開け、秀人がそこに詰め込み、車内にいたもう一人のメイドが、はやてを引きずり込んだ。
「いやあぁ　――バタンッ、ガチャッ。
ドアを、しっかりと閉めた。
「……よし、行くわよ」
アリサの指示の元、素早く乗車していった。
「なぁ、望……」
「何、健太？」
「……この人たち、なんか変じゃね？」
「……かも」
どこかおかしい……と、頭を捻る二人の肩を、この中では数少ない常識人であるユーノがポンポン、と叩いた。
「……君達も、いずれ馴れるさ」
フッ……と、半笑いを浮かべる……さらにその肩を、涙目のアルフがそっと支えていた。
秀人、フェイト、リーゼを残し、全員が車内に収まった。
「あ……そうだ」
アリサが窓を開け、ポン、と秀人に何かを手渡した。
「ちょっとばかし、人数オーバーなのよ。
乗れるのはあと一人だから秀人、」
「ん？」
「どっちか連れて、バイクで着いてきて」
……渡されたのは、ポータブルナビと、その台座だった。
「……オッケー。そんな気してた」
幸いにも、バイクは手元にある。残る問題は、リーゼとフェイト、どちらが乗るか、なのだが……

「はいはい！ボクがのるよ！」
当然、キラキラと目を輝かせて立候補した。
秀人の運転するバイクに乗れて、緊張からも解放される、一石二鳥のチャンスだった。
一方リーゼは、顎に手を当てて考え込む。
「ふむ、妥当でしょう……ですが主には、他者との交流を持って頂きたいところ。私が車内にいては、主のためになりません」
「……でも、バイクは二人乗りだぞ。どうするつもりだ？」
「あぁ、心配無用です」
――ざわっ……と、リーゼの身体から、魔力の気配が立ち上る。
「ちょ……！」
……少なくとも、アリサ、すずか、二人のメイド、健太の五人は、魔法には無関係な一般人だ。
もしもバレたら、相当面倒なこと……具体的には、堅物執務官のお説教タイムが待ち受けていることは、想像に難くない。
「健太、向こうにマスターピース・シールドライガーが!!」
「何ィッ!?」
……単純な健太の注意を望が逸らし、なのはが素早くパワーウインドウを閉じた。
「出してください」
「え、でも、まだ一人……」
「大丈夫だから、早く」
「……わかったわ」
バレる寸前で、車はするすると発進した。
……同時、リーゼは変身を終えていた。
「……あぁ、もしや、彼らは魔法と無関係で？」
「……後になって考えるなよ」
胃が縮み上がるほど焦った秀人。
「失礼、勘違いしていました」
クールに見えて、意外とボケていた。
「わー……キミ、つかいまだったんだ？」

二人が見下ろすそこには……艶やかな毛並みの、黒猫が鎮座していた。
「はい。主はやての使い魔で、名をリーゼと言います。お見知り置きを」
「うん、よろしくー！」
……相手が猫だとわかった途端、楽に話しはじめた。
「……お前の人見知りも、なんとかしないとなぁ」
「ん、なんかいった？」
「いや、後で話すよ。メットとキー持ってくる」
秀人は家に入り、自分のと、いつもはなのはが使ってるヘルメット、バイクの鍵。そして、リュックサックを手に裏手へ回った。
「……」
その合間に、かちかちとメールを打つ。
「……ご検討を願います、っと。これでよし」
「まだー？」
表の方から、フェイトが呼んだ。
「はいはい、今行くよ」
秀人は、携帯電話をポケットに仕舞った。
フェイトのヘルメットを調整してやり、リュックサックを背負わせる。
このリュックサックに、リーゼを入れていくようだ。
「八部屋あるというのに、秀人の部屋以外、表札が出ているのは三部屋だけ、ですね」
リーゼが、アパートを観察しながら言った。
「あぁ、それ一つは大家さん。家賃収入で遊んで暮らせるはずなのに、何故かこのアパートに住んでるんだよ」
「……残り二つは？」
「職業不明の信吉じいさんと、美人なのに貞子ヘアの朧ねーちゃん」
「他は空き部屋、と？」
「らしいよ？」
「……」

リーゼは、猫の姿のまま考えている。
「ほら、行くぞ」
「あ……」
リーゼをリュックサックに入れ、自身もバイクに跨がる。
――キュルッ……バォッ!!
セル一発だった。
「……何か調子良いな?」
一月放置してた割には、バッテリーもガソリンも満タンだ。
「あれ? 距離が伸びてる……」
「あー、それね……」
フェイトが、思い出して教えてくれた。
「アルフがのりまわしてたよ」
「……そうか」
無免許運転……と、突っ込みたい気持ちをぐっと飲み込み、ナビの示す目的地へ、
バイクを発進させた。
「……」
恐ろしく静かな高級車の車内、はやては、緊張でガチガチに固まっていた。閉鎖された環境で、初対面の、しかも知らないグループの中に放り込まれたのだ。アウェー極まりすぎて、異次元にでも迷い込んだ気分になるのも無理は無い。
「……」
固まるだけならまだしも、やたらと険しい……眉根を寄せ犬歯を覗かせ、ぎりっと足元を睨みつける表情を見せていた。
「……」
微妙に緊迫する車内。
当の本人は、心臓をバクバク言わせながら、ただ固まっているだけなのだが。
「ねぇ、はやてちゃん」
いきなり唐突に、すずかがはやての名を呼んだ。
「ぁえっ!?」

教えた覚えも無いのに呼ばれ、動揺して変な声が出てしまった。
「さっき、秀人さんが呼んでたから……間違ってた？」
「……違わない」
ぼそっと、とりあえず返事は返ってくる。それを皮切りに、次々に質問される。
「年はいくつ？」
「……」
「学校はどこなの？」
「……か、」
はやては、負のオーラを全面に出したまま……
「関係、無いだろ……誰だよ、お前……」
……殻に閉じこもるのではなく、攻撃を以て排除する方向へと移った。
しかし、すずかは物怖じせずに、自己紹介をする。
「私は、月村すずか。秀人さんの知り合いだよ」
ここは、なのはの名より、秀人の名を出した方が有効だと踏んでのことだ。
「……そう、秀人の……」
共通の話題で、会話の輪の中に引っ張り込むという手段で、はやては、気付かぬうちに取り込まれていた。……現段階では、すずかの方が何枚も上手である。
やいのやいの賑やかになっていく車内。
「ねぇ、ユーノくん、アルフ」
「ん、何？」
「何だい？」
「……あいつのこと、どう思う？」
およそ一月、秀人と共にあった少女。
人がいるはずが無い辺境世界に……しかも、ピンポイントで、秀人の近くに。
……偶然にしては、出来過ぎている。
現在進行中の、闇の書事件。

それとの関連はまだ不明だが、とにかく、疑って掛かった方が賢明だ。
「……なんかむかつくし」
……それに、少なからず嫉妬も混じっているらしい。
なのはは聞き役に徹することに……
「なのはちゃんとはやてちゃんって、何となく似てるよね」
完璧なタイミングで、すずかが爆弾を投下した。
「はァッ!!?」
当然、それをスルーできる訳は無く、なのはも強制的に会話に参加するハメになった。
「似てないっ！」
図らずも、ハモった。
ぎろっ、と、およそ小学三年生がするには険悪すぎる目つきで、二人が睨み合う。
「真似するなぁっ！」
……そっくりである。
「ったく、秀人の知り合いってこんなのしかいないわけ!?」
『こんなの』とは何よ！」
「むぐぐぐぐ……」
額を突き合わせ、威嚇し合う。
……確かに、色々と似通った部分もあるかもしれない。
「……あれ……？」
と、何かを思い出したように、
「……お前、どっかで会ったこと無かったっけ？」
ぽろっ、と、はやてを見て、そんなことを口走った。
「え？」
車内の視線が、健太に集中する。
「会ったって……いつ？」
怪訝な顔で聞く望。
「三ヶ月くらい前……んー……いや、やっぱ人違い、かな？　もっと髪長かったし……車椅子、乗ってたし」

……確かに、会っている。
ジュエルシード事件の終わり、海鳴公園で。はやてからすれば、すれ違う程度。
だが健太からすれば、訳もわからず罵声を浴びせられたという理不尽かつ強烈な経験だった。
「葉山君……よく覚えてたね」
本気で感心して、健太を褒める。
「え？そうかな……へへ」
……裏返せば、『葉山君は物覚えが悪い』ということの裏返しなのだが。
「……知るか」
ぷいっ、と窓の外を見る。
「愛想の無い奴ねー……」
アリサが、やれやれと首を振った。
気にせず、健太ははやてに話し掛けていく。
「じゃあ、足治ったのか。よかったじゃん」
「……」
「俺も前、足首ポキッと逝っちゃってさー……」
「……」
「歩き回れないと退屈なんだよなー」
はやては、視線も寄越さず黙り込んでいるのだが、健太は気にせず話しつづける。
「ゲームしかすること無くてさぁ。どうせなら、腕が折れれば良かったのに。そしたら、サッカーだけは出来たじゃん……って、駄目だ、今度はゲームが出来なくなる！」
「宿題やれっ！」
スパーン！と、望が平手で健太にツッコミを入れた。
「……ぷっ」
それまで仏頂面だったはやてが……笑った。くすくすと、堪えきれず笑いを漏らす。
「あ、やっと笑った」

すずかに指摘され、ハッと真顔に戻った。
「……」
恥じらい、またしてもそっぽを向こうとする。
「……ていや」
なのはが、その両頬を挟み込み阻止。
……凄まじくマヌケな顔になった。
「「「「ぶはっ！」」」」
車内全員が一斉に吹き出し、大爆笑する。
「て、てめぇ……！」
恥をかかされ、怒りとも羞恥とも分からない赤面でなのはを睨みつける。
「くくく……」
にやにやと不敵に笑い、それを受け流すなのは。
「あはははは！はやて、変な顔ー！」
「可愛い顔が台無し！」
人目がある手前、物理的に反撃することも出来ない。
「うぐぐ……！覚えてろテメェ……！」
憎々しく睨みつけるが、なのははどこ吹く風。
抵抗感が取り払われたらしく、一気に輪の中に取り込まれて行った。

「……」
あまり話さず、シートに身を預けるなのはに、ユーノが話しかける。
「なのは」
「なに？」
「あれ、狙った？」
あれ……とは、はやてのことか。
さっきまでの仏頂面は鳴りを潜め、ちゃんと返事をし、時に笑い、怒り、突っ込み……まるで、年相応の少女のようだ。
きっかけは、すずか、望、健太かもしれない。だが、それを上手く持って行ったのは、なのはだ。

「……秀人さんも、そうして欲しいって思ってるだろうから」
秀人達が、わざわざこっちの車に押し込んだ意図は、ちゃんと理解しているらしい。
「……そっか」
「え!?じゃあじゃあ、一ヶ月くらい、秀人と二人っきりで!?」
「……まぁね。組み手したり、筋トレしたり……」
「食事はどうしてた？」
「……適当に調達して、交代交代で用意」
「寝るときは？」
「……同じ部屋」
「「「きゃー!!」」」
黄色い歓声。
ユーノとアルフは、戦々恐々だった。
「な……なのは、あくまで、非常事態だから……」
「そ、そうだよ……別に、後ろめたいことはしてないんだしさ……」
ぴきぴきと、なのはの額に青筋が浮いた。
「……やめとけばよかったかな」
今度は、なのはがブスッと黙り込んでしまった。

# A’s編　第三十七話

「それで、向かっている目的地なんだけど……」
　和やかな空気を見計らって、すずかが切り出した。
「うちのグループの、テストコースなの」
「「テストコース？」」
　そんなところに、小学生が何をしに行くというのだろうか。
　怪訝な顔をする面々に、意味深に笑いかけた。
「夏休みなんだし、思いっきり運動しようね」
「……??」
　……謎のまま、車は現地へと向かって行った。

「お待たせ」
　移動すること、およそ一時間。
　高級車と、秀人のバイクは、『私有地』と書かれた看板がそそり立つ前で止まった。
「ふー、着いた着いた。……ほらフェイト、顔上げて」
「んー……」
　バイクを降りた秀人が、フェイトのヘルメットの顎紐を解いてやった。
「……っぷは。　あー、たのしかった！」
　にぱっ、と明け透けに笑う。
「でもなんか、あたまがきつかったよ」
　わしゃわしゃ、と自分の髪の毛を掻き回す。
「……なのはの分と合わせて、新調するかなぁ」
　……ちなみに、ジュニア用ヘルメットはそれなりに高価だったりする。

「リーゼ、」
　そそくさと集団から逃げてきたはやてが、秀人の目の前にやってきた。

「……リーゼは？」
『ここです。主』
フェイトのリュックから顔を出す。
オープンチャンネルの……魔力がある者になら聞こえる設定で、はやてを呼んだ。
『大丈夫だった？　酔ってない？』
『問題ありません』
アリサ、すずか、望、健太……魔力の素養が無い筈の四人には、聞こえない筈。
だというのに。
「……おい今、その猫……喋らなかったか？」
「う、うん……喋った、よね？」
健太と望には、しっかりと聞こえていた。
「……」「……」
半笑いで、顔を見合わせる秀人となのは。
「……何が？」
「何も聞こえなかったけど……」
アリサとすずかには、聞こえていない。
なら、考えるまでも無く、理由はただ一つ。
「……」
無言で、健太の傍まで歩いていく秀人。
「な……何ですか？」
「いや……幻聴が聴こえる程、疲れてるのかなー、って」
少しビビる健太の背後に立ち、両肩を揉むフリをして、魔力の気配を探る。
「ちょ……なのは？」
「ごめん、大事なことだから」
なのはも、望の背中に触れて……
すると、案の定。
「……マジであるよ」
「……こっちも」

最低でもＢ＋ランク。
望に至っては、Ａに届こうかというレベルの、高い魔力を秘めていた。……考えてみれば、ジュエルシード暴走体の中で、最も手強かったのは、シリアル１０……望だった。
あれは、ジュエルシードの力に、望の魔力が上乗せされた影響もあったのだろう。
望は魔法の存在を知ってはいるが……なのはは可能な限り、非日常とは関わらせないと決めていた。
幸にも、二人のリンカーコアはまだ殆ど眠ったままだ。
……これが目覚めれば、流石に放置、とは行かないだろうが。
「さ、行きましょう」
「あぁ、わかった」
すずかに続き、うやむやの内に、話を終わらせた。
案内されたのは、想像を超えるスケールの『テストコース』、だった。
「……」
とにかく、広い。
しかも、広いだけではない。
整然と舗装されたサーキットコース。
ホームストレート、ヘアピンカーブ、シケインと……今すぐＧＰが開催出来そうなくらい、豪華な設備が整っていた。
その向こうには、サーキットコースとは真逆の、土の地面が剥き出しのダート。
更に急斜面のヒルクライム・ダウンヒルコース。
オフロード走行……というよりは、重機の試験も行っているのだろう。
オマケとばかりに、船舶のスケールモデルを航行させるであろう、市民プールの何倍でもありそうな人口湖など……
「す、」
一番最初に我に返ったのは、秀人だった。
「すっげぇ!!」
目を輝かせ、きょろきょろと見回している。

「走っていいの？」
「ええ、どうぞ」
喜ぶ秀人だったが……はた、と気付いた。
「俺以外は……？」
いくらなんでも、秀人だけが楽しいのでは不公平だ。
「ご心配なさらず」
裏手から、メイドの一人が運転するトラックがやってきた。
荷台には、ジュニアサイズのマウンテンバイク等が満載されている。
「おぉ……」
「プロテクターもヘルメットもありますから、ちゃんと全員で楽しめますよ」
確かに、自転車ならそれなりに安心だ。だが……
「「……じてんしゃ」」
引き攣った表情で後ずさる、なのは（基本インドア嗜好）と、はやて（真正ヒッキー）がいた。
「うわー、サス付きＭＴＢなんて初めてだよ俺！」
「砂利道……走れるの？」
「ふふん、私は走れるわよ？」
「……や、やれるもん！」
「頑張ろうね」
……子供チームは、浮かれ気分ではしゃいでいた。
「……ボクはどうしようか？」
「え？フェイト、自転車は嫌かい？」
「うーん……いやじゃないんだけど、」
ごによごによ、と口ごもり、意を決したように、すずかに話し掛けた。
「あの、ボク……キミに、あやまらないといけないことがあるんだ」
ジュエルシード事件の最中、フェイトは、暴走体となったすずかの飼い猫を、手酷く痛め付けた。
まずは、、ケジメを付けてから。

そういうことらしい。
「……うん、わかった。こっち来て」
フェイトの手を引き、レストルームに向かっていく。
「フェイト、あたしも一緒に……」「アルフはこっち」「あああああ……」
過保護な使い魔を、ユーノが引きずっていく。
「ひどいよユーノ……フェイトが心配じゃないの？」
「フェイトが自分でやるって言ったんだから、任せよう」
「むうぅ……」
不満そうだった。
「なのは……、はやても、どうしたの？」
「……いや、」
「……なんでも、」
「あ、もしかして……あー……」
望が言い当てようとして、気を使って言うのをやめた。が……
「え？　二人とも乗れないのか？」
……無神経な健太が、ズバッと言い当ててしまった。
「健太！」
――ごすっ!!
「ぎゃあっ！」
望の鉄拳制裁が、健太の頭を捉えた。
「この馬鹿！あんた、デリカシーってもんが無いの!?」
「知らねぇよ！何だよデリバリーって!?」
ぎゃあぎゃあと夫婦漫才を始める二人はさておき……
「え……二人とも？」
「……」
「……」
無言の肯定。
「……しゃーないか。えーと……」
多数の自転車を物色し……
「あったあった。んじゃ……」
２０インチの小径ホイールを履いた、他より一回り小さな自転車

……ＢＭＸバイクを三台、取り出した。
「練習するか！」

……レストルーム内。
ソファに向かい合うように座った二人。
「それで……話って？」
「あの、ね……？　キミ、ねこ、かってるでしょ？」
「うん、それなりに」
微笑を崩さず、続きを促す。
「はいいろのこねこ……いるでしょ」
「うん、いるよ」
ふー、と、フェイトが一息つき……
「……おおけが、したよね」
切り出した。
「それやったの……ボク、なんだ」
「……」
ぎゅっと、両手を膝の上で固く握り……それでも、一番苦手であるはずの視線だけは真っ直ぐに、
すずかを見つめて。
「ごめんなさい……！」
深々と、頭を下げた。
「……」
家庭環境のせいにも出来た。母のせいにすることもできた。
けれども、やったことは事実で、それは間違いなく、フェイトの意思で行った行為だ。
「……」
頭を下げたまま、じっと返事を待つ。
「……」
かたん、と、すずかが立ち上がり、ソファの脚が鳴る音が、やけに大きく響いた。
そのまま、足音と共に、レストルームから出て行ってしまった。

「あぅ……だめだったよ……バルディッシュ……」
がっくりとしょげる。
『……もう一度です』
「……え？」
『許しを得られるまで……謝罪を続けましょう』
「……うん、わかった！」
すずかの後を追い、ドアノブに手を掛け……
――どばんっ！
「ぶへぇっ!!」
いきなり開いたドアに、顔面を強打された。
「え？……え!?」
開いたドアの向こうに、出て行った筈のすずかが唖然と立っていた。
「ご、ごめんなさい！大丈夫!?」
うずくまるフェイトを助け起こす。
「いだい……ちょーいだいぃ……！」
涙目で顔を上げた。
「ひぃっ！」
おののくのも仕方ない。
「……？」
何やら鉄錆臭い液体……鼻血が、鼻から伝っていた。
「きゃー！ティッシュティッシュ！」
まとめたティッシュを、フェイトの顔面に押し付けるように止血。
「むがー!!」
「暴れないで！」
フェイトを押さえ込み、ティッシュを押し付け続けた。
「ふぅ、ふぅ……」
「はぁ、はぁ……」
止血するだけだというのに、なぜこうも消耗しなければならないのだろうか。
「……うぁー」

フェイトの鼻には……美少女にはあるまじきことに、丸めたティッシュが詰め込まれていた。
「……」
「……」
何とも言えない空気が流れ……
「ニャー」
すずかの持ち込んできたケージから、そんな鳴き声が聞こえてきた。
「……おいで、マルス」
手招きされ、一匹の猫がケージから出てきた。
その猫は、見覚えのある灰色で……
「あ……」
びくりと怖じけづく。
「……この子だよ」
「……」
そっと猫を持ち上げ、フェイトの方を向かせた。
「……ニャー」
てこてこ……と、フェイトの足元まで歩いてきた。
「……」
ゆっくりと、鼻先に手を伸ばす。
……敵と見なされれば、噛まれるか、引っ掻かれるか。
――ぺろっ
「あ、」
が、猫は、フェイトの指先を舐め、じゃれついてきた。
「……ふふ、『許す』って言ってるよ」
「……いいの？こんなんで」
「いいの。マルスがいいって言ってるんだから」
……釈然としないが、飼い主が言うのだから、許されたということでいいのだろう。
「……ごめんね、まるす。それに、キミも……」
「す・ず・か」

「え？」
「私の名前。『キミ』、じゃなくて、すずか、って呼んでほしいな」
「……なして？」
　首を傾げるフェイトに、すずかはにっこりと笑う。
「それはね……」
「おーい、すずか、まだー？」
　痺れを切らしたアリサが、様子を見に来た。
「彼女は、アリサって言うの」
「……あ、あの……ありさ？」
　呼ばれて振り返り……
「あン？何……って、ぶはーっ!!」
　思いっきり、吹き出した。
「……（がーん）」
　コミュニケーションの出鼻をくじかれた。
「フェイト、あんた……なにその鼻！　あっはははは!!」
　いきなり笑われ、ぷるぷると震える。
「……わらうなー!!」
「ごめ、むり……あはははっ……！」
「くすくすくす……か、可愛いよ……？」
　フォローにもならないフォローを入れるすずかだったが、無責任にこちらも、
　目尻に涙を浮かべて笑っていた。
「うぅうう～……！」
　取りたいが、取ったらまた鼻血が流れ出てしまう。
　歯噛みし、地団駄を踏み……吠えた。
「ありさ、すずか！　わらうなっていってるだろー！」

　ごく自然に名前を呼べたのだが……そのことに本人が気付くのは、しばらく後になってからだった。
◆▪◆　◆　◆
「あ、あわわわわ……！」

がしゃーん。
「おっ、おぉぉぉ……!?」
がしゃーん。
「「ぎゃー！」」
がっしゃーん。
青空の下に、悲鳴と、衝突音が響いた。
言わずもがな、なのはとはやての、自転車の練習風景である。
「ほーら、前見ろ前ー。足元見るなー」
なのはの場合、バランス感覚は良いんだけど……立て直そうとしてパニックになってる。
「そ、そんなこと言ったって……きゃあっ！」
はやては単純に、バランス感覚が鈍い。
「「きゃー！」」
がしゃーん。
まぁ……こんだけ練習すれば、上手な転び方も身につくだろ。
「よし、んじゃあそろそろ、本番行くか」
「「はいぃ!?」」
なに驚いてんだ……って、そうだ説明してなかった。
「今のは、『上手に転ぶ練習』で、今から始めるのが、『上手に乗る練習』……」
「死ねェッ!!」
――ぶんっ！
「うぉわっ!!」
はやての奴……自転車を俺の顔面目掛けて投げつけて来やがった！
「あっぶねーだろ馬鹿！」
「るさいっ！もう知るか私は帰るッ！」
あーもう、癇癪起こしやがって……
「逃げるのかー？」
その背中に、挑発を投げ掛けてみた。
「……ッ！」

すると、案の定……単細胞なはやては振り返り、ギリッと俺を睨みつけた。
「根性の無い奴め……」
「ンだと！」
「やーい運動音痴の根性無しー」
「んがががが……！言わせておけば……！」
魔法でもぶっ放したいところなんだろうけど、一般人や管理局関係者の前では使えない。
「悔しかったら乗ってみろーヘッポコ単細胞ー」
こうして、思う存分、からかえるって訳だ。
「……どけっ！」
ぐいっと俺を押しのけ、自分で放り投げた自転車のもとに、ずんずん歩いていく。
「この私が……こんな原始的な道具、使いこなせないワケ無いだろうがっ！」
勇ましく跨がった。
「さぁ、次は何だ！」
「秀人さん、次は？」
二人がほぼ同時に詰め寄って来る。
「むっ……」
「むぐ……」
睨み合い、火花を散らす。
競うこともまた、上達への近道だ。
「工具工具……１４ｍｍはあったかな、っと」
トラックの荷台を漁り、レンチを一本取り出す。
二人の自転車から、ペダルを取り払った。
「よし」
これで、準備完了だ。
なのはの背中に手を添えて……
「そりゃあっ！」
思いっきり押し出す。

「ひ、秀人さん、ペダルが無いー！」
「まずバランスを取ることだけに集中してみー。ほら、前見て前」
二輪車は、視線を向けた先に自然に曲がるように出来ている。
初心者はつい、怖くて足元ばかりを見てしまって、余計にバランスが取りづらくなる悪循環にハマるから……足にぶつかるペダルを取り払って、姿勢制御にだけ集中してもらおう。
「よし、次ははやてだ」
「来いやおらー！」
「おらー！」
同じく、はやてを渾身の力で押し出す。
おいおい、はやての奴、なのはが通ったラインをトレースしてねえか？
「おいはやて！前見ろ……あ」
――がしゃーん。
……ぶつかった。
「……どこ見てんのよヘタクソ！」
「るっせぇノロマ！　チンタラお散歩してんじゃねぇ！」
「うがー!!」
……あいつら、奇跡的なまでに相性悪いな。

「んじゃ、いいな？　ペダル付けるぞ」
あれから転んだり、無駄に器用にハイサイドしたりすること数１０分。
いよいよ、ペダルを漕ぐ段階まで来た。
下手したら、今日一日は掛かるかと思ったけど……妙にサクサクとカリキュラムが進められた。
二人の運動神経……というよりは。
「もうぶつからないでよね」
「おまえがトロトロしてなかったらな」
「ふんっ！」
「……喧嘩すんなよ」

……負けず嫌い同士の、対抗心の為せる技だろうな。
二人が自転車に跨がる。
準備完了だ。
「んじゃ……頑張れ！」
「「……!!」」
とんっ、とんっ……と、自転車に跨がったまま、シーソーのように地面を蹴り、進み出す。
……そして、十分にスピードが乗ったところで……
「……よし！今だ！」
合図。
教えた通り、前を見たまま……ペダルに足を乗せた。
「！」
スムーズに漕ぎ出し……やがて、ペダルを漕ぐ力のみで、自転車が進み出す！
「……いよっしゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
成功だ！
「よーし、よくやったぞ二人とも！」
二人を、自転車ごと持ち上げる！
「やったー！　乗れたー！」
なのはは無邪気に喜び、
「お、下ろせ！　下ろせ、ばかー！」
はやては、顔を引き攣らせて喚いている。

「あーっ！」
素っ頓狂な声に振り向くと、フェイトがこっちに走ってきていた。
「なのはばっかりずるい！ボクも、ボクもー！」
びょこぴょこ飛び跳ねている。
「それじゃあ、次はフェイトの番だな」
さて、もう一台ＢＭＸを……
「ふーん、コレ？」
あ。フェイトの奴、俺が使ってたＭＴＢを……

いくら何でも、足が届かないだろうに。
まぁ、好きにさせてやるか。

……だけど。
「よっ……はっ……！」
いくらなんでも、その才能は反則だろう。
「よいしょー！　……あっははは何コレたのしー!!」
……ヘッドチューブとダウンチューブの間に足を入れる……所謂、三角乗りで、スタンディングを維持している。
「ひゃっほー！」
シャカシャカと漕ぎ、フロントをロックさせてのジャックナイフ。
「……よーやるわ」「ホントにね……」「チッ……」
妬むより先に、感心してしまう。
「あんな金髪アホウドリなんぞに……！」
「負けてたまるか……！」
はやてとなのはが、ムキになってＢＭＸに跨がった。
……まぁ、楽しそうで何よりだ。
「秀人さん」
「おう、すずか。話はもういいのか？」
フェイトの奴、バイクに乗ってる時から言ってたしな。
「えぇ。三人は私が見ておきますから、秀人さんも楽しんじゃって下さい」
「とーぜん、私もいるから心配無用よ！」
アリサも、長い髪をアップに纏めて準備完了か。
それじゃあ、任せようかな。
「……」
実を言うと、ちゃんとしたサーキットを走るのは生まれて初めてだ。
……戦場ばっかり走り回ってるからなぁ。
オフ車ばりに悪路を乗り越えたり、２００キロの速度域でスラロームしたり、敵に体当たりしたり、空飛んだり……

「……」
スレイプニルモードの自己修復機能が無ければ、とうの昔に廃車になっている。
「さて……」
レンタルのレーシングスーツ一式を身につけ、準備完了。
――キュルルッ……ボゥンッ！
各部、異常無し。
「……行くか！」
ギアを入れ……発進！
――バオオォォッ!!
流石に、スレイプニルモードは使えないけど……純粋に、単車の限界性能を引き出せるのは楽しい。
「とりゃあっ！」
カーブに差し掛かり、シフトダウン。エンジンブレーキで減速した所から、思いっきりバンクさせカーブを滑り抜けていく。
「ほっ、はっ！」
連続するシケインを抜けた先は……約3キロのストレート!!フルスロットル!!
――バゴォオオオオオオオオォォッッッ!!
「最ッ高ぉおおおおおおぉぉ!!」
超・爽快！
一日中でも走っていたいくらいだ！
今だけは……闇の書だとかを忘れてもいいな！
◆　◆　◆　◆
「……ふぅん、」
ばたばたと、風が吹きすさぶ。
「アレが、アイの……」
白衣とワンピースが、風をはらんでバタバタと揺れる。

だが、それを纏う黒髪紫眼の少女に、ふらつく様子は見られない。
……テストコースの管制塔、その頂上のアンテナに立っているというのに、その様子は異常だった。
「……原始的な道具。アイには、あれが何故面白いのかが分からない」
値踏みするように、サーキットを快走する秀人を見下ろす。
「……そして、そんな原始的な道具に熱を上げているあのひと」
ぺたん、と、サンダル履きの足を鳴らし、一歩踏み出す。
「あのひとが、アイの……」
ぺたん、ともう一歩。
「……なんかむかつく。でも、アイは何故むかついているのか、わからない。だから……」
ぽんっ……と、アンテナから飛び降りる。
「アイは、あのひとに聞きに行く」
……躊躇いも無く、疾走するバイクの鼻先へ。

◆◆◆◆

――とん。
「……は？」
思わず、そんな間抜けな声を出してしまった。
だって、仕方ないだろう。
サーキットの直線コース。そこを、メーター読み２１０キロで走っているバイクのスクリーンに……
――人間の足が二本、いきなり唐突に脈絡無しに、出現したんだから。
「……」
「近くで見た結果、あなたはアイが会うべき人であると確信した」
「……」
……いきなり、何を言っている？
「わからないけど、わかったの」
得心したように鷹揚に頷き……

「やっぱりおまえは、むかつくの」
「!!!」
――ビュオンッ!!
単車の向きを切り替えて、回避するより早く。
――ガシャアンッ!!
足場を物ともしない痛烈な蹴りが、バイクごと俺を蹴飛ばした！
――ギャリギャリギャリッ……!!!
「あっ、ぐ……！」
視界が二転、三転する、と、同時に！
「つだぁ！」
地面を両足で掴んで、立つ!!
「ッッ……！いきなり、何だ！」
まさか、守護騎士の一人か!?
それにしては、妙に軽装だが……
「いわゆる……『おまえに名乗る名は無い』……なの」
「……」
守護……騎士？
「……」
「……」
ジャージに、白衣に……なんだ、その……何？
「……」
……何故かどちらともなく、睨み合うというより、見つめ合ってしまう。
「秀人さん、大丈夫!?」「コケてんじゃないわよバーカ……まさか、怪我なんてしてないわよね？」「ひでと、けがはない!?」「秀人！無茶はするなよ……」「あたしのバイクは無事かい!?」
「いやお前のじゃねーから！　俺のだから！　……とりあえず、大事無いけど……」

「……」
全員の視線が……黒髪紫眼の少女に、集中する。
『……何を、しているのですか』
レイジングハートが……明らかな努気を宿した声で、口火を切った。
「レイジングハート……知り合いか？」
『何を、しているのか……聞いているのです!!　アイ！』
アイ……？
それが、この子の名前か？
『逃げ出したと思ったら、こんな所で……しかも、秀人に危害を加えるなど！』
敵というか、年下を怒る年長者みたいな口調だ。
どういう関係……？
と、誰もが思ったその時、沈黙していた少女……アイが、口を開いた。

「だまるがいいの……クソ姉貴」

……え？
「え？」
クソ、姉貴……？
レイジングハートを。そう呼んだのか？
『……こやつの名はアイ。秀人。認めたくありませんが、あなたの機体となる予定だった……インテリジェントデバイス、です』
「え？」
流石に、冗談だよな？
『……』
「……マジで？」
『マジです』
「……」
『大マジです』

二回言われちゃったよ。
「……嘘ぉ。人間にしか見えない……」
「でばいすが、にんげん、、？　でばいす……え？え？」
すー、はー……よし、準備ＯＫ。
それでは、声を揃えて……
「「「「えええええええええええええええええッッ!!?」」」」
「そんなに驚かなくてもいいと思うの……」
アイが、少ししょげた様子で呟いた。

# A’ s編　第三十八話

いきなり現れて、いきなり攻撃してきて、いきなり三行半を突き付けられた。
何だこの状況……
「大丈夫ですかー!?」
音を聞き付け、スタッフがやってきた。
やっべぇ……何て説明すれば……
「チッ……世話の焼ける奴」
はやて……？　何を……
『何でもないから、仕事に戻れ』
……なんだ、今の声？
ハウリングでも起こしたように、妙に頭に反響した。
「あ……はい……」「了解、しました……」
責任者でも何でもない、はやての言葉を聞いたスタッフ達は……ふらふらと、どこか覚束ない歩みで戻って行った。
今、何をやったんだ……？　魔法……だとは思うけど。
『暗示です』
悩む俺に、レイジングハートが言った。
ああ、俺が桃子たちに掛けたのと同じようなものか。

向こうから、すずか達もやってきた。
「秀人さん、ご無事ですか!?」「あちゃー……タンクべっこり凹んでるわね。高くつくわよコレ」
「大丈夫大丈夫、予備パーツ持ってるし」
実際には、スレイプニルの自己修復なわけだが。
遅れて、健太と望も……
「……」
「……」
あれ……なんか、びっくりした顔のまま固まってるんだが……
そんなにひどい転び方したか、俺。

だが、違った。
「はろー。望、健太」
アイが、しゅたっと手を挙げ、気安く二人に挨拶をした。
「アイさん!?」
「……知り合いか？」
……一応、聞いておくけど。
「な……何で、望たちに……？」
なのはも、この急展開に頭が追いつかないようだった。
「先々週、くらいかな。健太たちの練習に、ちょくちょく顔出して……」
……見た目、15くらいのアイが、小学生に混じってサッカーをしている姿を思い浮かべた。
……ちょっと待て。
「服はどうした」
「着てる」
「そういう意味じゃない」
こんな……雑誌を突き刺した白衣に、ヨレヨレのジャージ、スリッパ履きで、
あちこち歩き回ってたのかよ……
頭を抱える俺に、望が話してくれた。
「えぇと……基本、あの格好でしたよ？
練習が終わると早々に、どこか行っちゃいましたけど」
「どこ行ってた」
「……（つーん）」
そっぽを向いて、答えようとしない。
『何をしているのですかこの阿呆！
教育プログラムが終了せるまで、民間人との接触は厳禁と……！』
レイジングハートが、念話をビシバシとアイにたたき付ける。
「ほんっとにうるさいのこの石頭……」
アイは、聞こえていないフリをして聞き流した。
あー……なんか、グダグダになってきた。

「んで……何しに来たんだ？」
まさか、わざわざ俺に三行半を突き付けるためだけに来たわけじゃ……無い、よな？　多分。
「それもあるの」
あるのかよ。
「でも、残りもう半分は、別のこと」
半分……？
「……あれ？でもここ、私有地よね……フェンスもあったのに、どうやって……」
望がいち早く、不自然さに気付いた。
やっべ……！
『アイとは街で会って、同じ車に乗ってきただろ』
はやてが、再び暗示を掛けた。
「……あぁ、そういえば」
ほっ……
なんとか、ごまかせた。
「それじゃ、アイさん。また後で」
四人が向こうに戻ったのを見計らって……アイに向き合った。

「マスターとして認めないって……何でだ？」
俺、アイに何かしたどころか、初対面だったんだけど。
「アイは、学習の過程で、おまえの戦闘の映像記録を見ていたの」
まぁ、俺の専用機、って扱いだからな。
「お前の戦い方は、見ていられなかった」
「……」
「……不利になると、ただがむしゃらに相手の懐に飛び込んで、ゼロ距離から砲撃魔法を
炸裂させたり……自分の体を省みない、自滅行為に躊躇無く走る」
「……」
「例え、その身体の性能があったとしても……いずれ、破綻をきたす」
……ヴィータとの初戦という実例もある。

他者から改めて指摘されると、言い返せない。
「アイは、デバイス」
胸に手を添え、告げる。
「契約者の半身となり支える杖であり、契約者を守る盾」
「……」
「けれど、」
目を開き……とん、と俺の心臓あたりを人差し指で突き、言った。
「自ら死地に身投げをするような……自殺志願者など、支える意味も、守る価値も無いの」
「……」
それは、前々から誰其に言われ続けてきた。
我が身を省みないって。
でも、それは……
「俺は、」
『そういうふうに出来てるから』？」
「……ぐ」
こいつめ……いらんことまで学習しおって。
「……ま、そーゆーことなの。アイと契約をしたいのなら、」
「やーめた」
「まず……え？」
キョトン、と首を傾げるアイ。
「つーか、よく考えたら俺、デバイスがあっても無くても、そんなに変わらないし」
レイジングハート不在でも、特に戦い方に変化は無かった。
スターライトと、三連コンボが使いづらくなる……くらいの制約か。
それなら、その二つを自力で使えるようになった方が良さそうだ。
「さーて、バイクも壊れちゃったし、チャリで遊ぼっかなー」
「待つの」
がしっ、とジャケットの裾を掴まれた。
「訂正するの。このアイを……最新最高スペックの私を……『いても

いなくても変わらない』……？　訂正するの」
……プライドは高いらしい。
「だってお前、俺の力にはなってくれないんだろ？」
「そのつもりは無いの」
「なら、俺の戦力には変化無し。いてもいなくても同じじゃん」
「だから、お前がその性根を入れ替えれば……」
「やーだよ」
はいそーですか……なんて変われるなら、苦労は無い。
「……気が変わったの」
ぐいっ、と、俺の胸倉……より少し下を握り締め、精一杯の意思を込めた目で、俺を睨み上げる。
「おまえに、アイのマスターに『なってもらおう』なんて、甘々の大甘だったの」
「ほぅ……で、どうする？」
「おまえを、アイのマスターに相応しくなるように……教育してやるの」
「やってみろよ」
上等だ。
誰が、お前のマスターに相応しい人間になんてなるものか。
「俺は俺のまま、ぜってぇーに変わってやらん」
言うことは言い終わった。俺は、さっさとなのは達に合流して……
「待つの」
「……今度は何だ」
びしっ、と、皆が乗っている自転車を指差した。
「それは、なに？」
「……自転車。それは知ってる。けれど、自転車は市街地を走る乗り物のはず。なぜ、不整地を走る？」
……えーと、つまり、『残り半分』って……まさか。
「わからないから、聞きに来たの」

えへん……と、胸を張った。
結局その後、何でか分からんが、アイにマウンテンバイクについて講義を行い、乗り方を教え、ダウンヒルを走った。
……しっかり楽しんでやがった。

その、帰り道。
バイクは適当に修復し、後ろに猫モードのリーゼ、犬モードのアルフ、フェレットモードのユーノを、すずかに借りたケージに纏めて突っ込んでおいた。
なのは、フェイト達は、とっくに体力を使い果たして夢の中。
人数的に、こうなった。
その三人（匹？）も、ケージの中で休んでいた。

なのはの夏休みは、明日で終わりか……
「明日、どうすっかなぁ」
また遠出……は、ちょっとなのはが疲れるかもしれないな。
「……あ、そうだ」
さっきリンディさんに送ったメール、確認してもらえただろうか。
念話のチャンネルを開いて、と。
『リンディさん、今いいですか？』
『えぇ、問題ありませんよ』
答えは、すぐに返ってきた。
『例の件、なんですけど……』
簡単に通るとは思わないけど、可能な限り、力を借りたい。
『……その件なんだけど、えぇっと……』
途端、口ごもる。
『……難しいですか？』
『いいえ。手続きさえ踏めば、実現できるんだけど……』
ハッキリしないなぁ。
『問題って何すか？』
『……レジアス少将との、面談』

……うへぇ。
うーん……
『それって、フェイト一人でなくちゃ駄目ですかね？』
『縁者の同席は可能よ。……秀人くん、あなた、まさか』
『俺が同席します』
流石に、あのオッサンと身一つで対面させるにはまだ早い。
『わかりました。少将には、私の方からアポイントメントを取ってみます』
出来れば明日の午後……と要望を付け加え、念話を終了させた。
午後の予定は埋まったし……よし、午前中は、なのは連れて、街まで買い物にでも行くか。
そんなことを考えながら、高速道路を降り、街に戻ってきた。
アパートの前にバイクを止める。
高級車のドアを、ゆっくりと開けると……
「くぅ……くぅ……」
遊び疲れたなのは達が、安らかな寝息を立てていた。
「では、秀人さん。またいつか」
挨拶をするすずかも、流石に疲れて眠そうだ。
アリサはとっくに、シートにゴロンと横になっている。
「あぁ、それじゃあな」
高級車を見送り……俺がなのは、アルフがフェイト、ユーノが……
何故かアイを抱えて、
アパートに戻る。さーて、俺も、明日の準備でもするかなぁ。
「あ」
大事なこと、忘れてた。
「……ただいま、みんな」
一月ぶりの、我が家だった。

さて、一方その頃。

「……どこで寝るかなぁ」
寝床に困る、闇統べる王がいた。

◆・◆　◆　◆

帰宅してすぐ、疲れもあって熟睡してしまった。
夏休みだから、目覚まし時計も止めていて……起きたのは、９時になる少し前だった。
「んー……！」
背伸びをすると、ぱきぱき、と背が鳴る。
「……今日で終わりかぁ」
カレンダーを見るまでもなく、今日は八月三十一日。夏休み最終日だ。
宿題は……まぁ、ぼちぼち。富山先生が怒らない程度に仕上げてある。心配皆無。
両隣の布団には、一緒に朝を迎えるのは久しぶりになる秀人さんと……
まーたタオルケットを蹴飛ばし、寝巻がお腹までめくれ上がっているフェイトがいた。
「はあ……」
タオルケットをかけ直す。
まぁ、朝ごはんまで寝かしておいてやるか。
できるだけ足音を立てないように、抜き足差し足……ん？
何コレ。食卓の上に、紙ペラが……
『暇だから遊んでくるの。気が向いたら戻るの』
……ワープロ打ちしたような綺麗な字で、そんなふざけた内容が書かれていた。
『戻る』って、完全に居座る気だコレ。
……頭が痛い。
それにしても……
『全く、アイは……秀人の専用機だというのに、何を考えているのやら』

傍らで、レイジングハートがふよふよ浮かびながら、ぶつくさ愚痴っている。
あはは……確かに、教育係としては、育てがいの無い子だったよね。
「まぁまぁ……アイの言っていることも、あながち間違いじゃないし」
秀人さんの無茶が、あれだけ真正面から切り捨てられるのは初めてだ。
「アイはアイで、自分なりの考えを持ってるんだし、さ。尊重してあげようよ」
……そういえば。
「ねぇ、レイジングハート」
『ぶつぶつ……え？、あぁ、何でしょうか？』
「アイの正式名称は、そのまま『アイ』でいいの？」
もしそうなら、少し素っ気ない気がする。
『いいえ、あれは愛称です』
愛称……
「じゃあ、本当の名前は？」
実は、かなりカッコ良かったりするんだろうか。
密かにワクワクしていたんだけど……
『……思い出せないのです』
「……はい？」
ふぅ……と、最近すっかりサマになるようになったため息をつき、ぼやいた。
『アイは脱走の寸前……私とバルディッシュがスリープモードに入った隙を見計らって、メモリーにプロテクトを仕掛けやがったのです』
……なんて奴だ。
『なので、アイの正式名称は、奴にしか……』
重ね重ね、何て奴だ。
『マリエルにも伝える前の出来事だったので、機体番号『ＡＩ―００ＸＸＸ』の頭文字から、『アイ』と呼ぶことにしたのです』
「……大変だったんだねぇ」
と、話している間に、鍋が沸騰した。

削り節を入れて、一煮立ち火を弱めて……具はどうしようかなぁ。
「ワカメと豆腐でいいんじゃないか？」
「うん、わかった……っていうか、おはよう秀人さん」
気付いたら、いつの間にやら背後に秀人さんが立っていた。
「手伝うよ」
「ありがと」
台所に並んで、五人分の朝食を支度する。
ヴィータは、今日の夜に帰る予定だ。
「秀人さんが迎えに行くんだよね？」
午後からはフェイトと一緒に管理局だし、そのついでに拾ってくるらしい。
「あぁ、全部午後からの予定」
フェイトは説明を受けにアースラに、アルフはその付き添い、ユーノくんは無限書庫で調べ物……
つまるところ、一日まるまる暇な私と、半日だけ時間のある秀人さん。
「と、いうわけで、なのは」
秀人さんの手が、まだ寝癖がついている私の頭を、わしわしと撫でた。
「朝飯食ったら、街まで遊びに行くぞ」
「うんっ！」
夏休み最終日は……秀人さんとお買い物だー！

「支度できたか？」
「おっけーだよ！」
うきうき気分で、ショルダーバッグを提げる。
財布、携帯、ハンカチティッシュ、回天桜花……忘れ物、無し！
「なのは、いいなー……」
フェイトが、物欲しそうな口調で玄関先まで見送りに来た。
「いいなーって……午後はフェイトと一緒じゃん」
「うぅー……それは、そうだけど」

あー……もしかして、遊びに行きたいのかな？
「フェイト」
秀人さんが、フェイトの前に腰を下ろし、目線の高さを合わせた。
「今日はお仕事だけど……今度は、二人で遊びに行こう」
「……ほんと？」
「ああ。約束だ」
小指を差し出し、指切り。
「「指切りげんまん、嘘ついたら、なのはの砲撃喰ーらう！　指切った！」」
ちょっと待てええええええええええ!!
「二人とも、どーいう意味ソレ!?
私の砲撃、針千本!?
「いやー……むしろ、いちまんほん……くらい？」
「針っつーか……杭百本？」
「「ねー」」
二人して、ハモった！
そんなに酷くないもん！
「もうっ！　秀人さん、行くよっ！」
ぎゅーっと手を握り、引っ張る。
「いってらっしゃーい」
ニコニコと、悪戯を成功させた子供のような顔をしていた。

「さてと……まずは、ヴィータの服と雑貨かな」
「そうだね」
私とフェイトとユーノくんは、体格が近いから（と言うと、ユーノくんすっごく渋い顔するけど）服の着回しができる。
自分の服を選ぶ時も、まずそれを考えて選んでいるんだけど、一回り小さいヴィータには、合う服が無い。いつまでも私のお下がりを着ている状態では可愛そうだし、ここで一丁、超可愛い女児服を用意してやろう。お代は、貯め続けている、管理局からの報酬で。
「お……コレ、似合うんじゃないか？」

秀人さんが、ボーイッシュなパーカーを選び出した。
「それじゃ、こっちのデニムを合わせて……」
……結果。
「ボーイッシュというか、まんま男児だよな」
「動きやすそうではあるけど……」
まぁ、まずは普段着をワンセット。
次。
「ぶはっ……なのは、コレコレ！」
秀人さんが、寝巻のコーナーから一着を選ぶ。
「どれどれ……ぷっ！」
それは……俗に言う、『着ぐるみパジャマ』だった。
しかも、よりにもよってポケモ○の。
「秀人さん、真剣に選ぼうよ……ぷくくっ！　こっちはイ○ーク……！」
「寝袋じゃん！」
「ビリ○ダマだ！」
「……どうやって着るんだろうな」
「ソーナ○ス……」
「まぁ普通……おい待て。右手と頭が縫い付けられてるぞ！」
「寝られないよ」
……まぁ、おふざけは程々に。
「……お？」
秀人さんが、一着のワンピース……というか、ドレスのようなものを見つけた。
深い紅色で、所々にブラウンの装飾。
子供サイズにしては、妙にシックな感じの服だ。
ぶかっとした帽子とセットで……
「これ……似合うんじゃないか？」
「うん……」
イメージ図だけで、ベストマッチだ。
お値段は、他と比べて桁が一つ多いけど……管理局からの報酬から

すれば、微々たる額。
でも、贅沢すぎるような気も……うーん。
「いいんじゃね？　特別に、プレゼントってことで」
「……うん、そうだね！」
……色々と見て回り、服は揃った。
次は雑貨かな……
「ヘイ、そこなお二人サン！」
「ひっ!?」
びっくりした……
振り向くとそこには……なんというか、派手な女性が。
「なんですか……？」
「何だお前……」
秀人さんも微妙に迷惑そうだった。
「あっれ、忘れてる？　忘れられてる的な感じデスかー？」
身につけた多数のアクセサリーが、じゃらじゃらと鳴った。
「その飾り紐、あたしが作ったんだけどなァ」
あ！
「あのお店の……」
今年の春、レイジングハートの飾り紐を買った店の店員さんだ！
「あぁ、あのケバいねーちゃんか」
思い出した。
……けど、何で露店にいるんだろう？
「潰れたのか？」
秀人さんが、そのままズバッと尋ねる。
「潰れてねーヨ！　営・業・活・動！」
あぁ……なるほど。
「頑張って下さいね。それじゃ」
サクッと挨拶を済ませ、その場を後にする。
「ウェエエエエイトゥ！」
ズザザザザッ……と、お姉さんが目の前に回り込んできた。
「……何ですか？」

……なんで私、こういった類の変人とばかり縁が出来てしまうんだろうか。
「その飾り紐、使い心地はどう？」
「？……まぁ、悪くは無いですよ」
「でも、そろそろ交換時期！　あら大変、紐の繊維がほつれてきてるｙｏ！」
……言われてみれば、確かに。
買って半年くらいだけど、表面が僅かにざらざらしてきている。
毎日使っているから……だろうか。
「……計算尽くで作ったろ、お前」
「なんのことカナー？」
すっとぼけてはいるが、確信犯だ。
「飾り紐が切れかけて困っている、そこのアナタ！　こちらの、気品有るシルバーチェーンはいかが!?」
つまり、最初に売り付ける商品は、短い期間でダメになるように仕掛けているってこと？
「現在、当店で販売したお客様に限り、下取りキャンペーン実施中ダヨ！」
……商売上手だなぁ。
「お前、商売上手いな」
秀人さんも、半ば呆れて言った。
まぁ、見てみれば、そのチェーンもいい出来だ。
アタッチメントの流用も可能らしい。
「……で、いくら？」
……満面の笑みを浮かべるお姉さんに代金を渡し、チェーンと紐を交換した。
「今度は千切れないだろうな」
秀人さんが念を押す。
「だいじょーぶだいじょーぶ！　今度はイケるって！」
何が。
ケラケラと笑いながら、サムズアップした。

「これでも、西から東へアクセ売りながら渡り歩いてたんだから！」
　腕は確かってこと？
「関西にいたころは大変だったヨー。ヤクザ屋さんから逃げて逃げて、警察から逃げて逃げて……気づいたら、東京にいました☆」
　凄いんだか、凄くないんだか……
『もし壊れたアクセサリーとかあったら、店に持ってきて。サービスで直してあげる！』
　そんな話を最後に、露店を後にした。
　時間は……十一時を回っていた。
　秀人さんはいつもとは違う道を通って、ある店の前で足を止めた。
「バイク屋？」
　駐車スペースには、色々なバイクが止められていた。
　売り物じゃないみたいだけど……
「ちょっと違うけど、似たような店だ」
　手を引かれて、店内に入った。
　ジャケット、ヘルメット、グローブ……
「あ、バイク用品のお店だ」
「ご名答……と、いうわけで」
　ずぼっ、と、頭に何かを被せられる。
「あっ……」
　両肩を持たれ……鏡の方を向かされた。
「新しいヘルメットをプレゼントだ」
「え……でも、」
「あれはもうキツいだろ？」
　ちらっ、と値段を見て……
「高っ!?
　……駄目だよ、こんな高いの！」
　今まで使ってたやつで十分だよ！
「あ、店員さーん。コレと同じサイズのやつ、三つ！」
「こらぁあああ！　むぐっ」
　口を塞ぐなぁ！

「あぁ気にしないで。それと、もう一回り小さいやつを一つ」
ヴィータの分まで!?
「……かしこまりましたー♪」
店員は、爽やかな笑みでバックヤードに走っていった。
「ぷはっ！　……秀人さん、いくらなんでも使いすぎ！」
今日だけで、六桁の金額を使った。
「贅沢癖が付いちゃうでしょ！」
「必要経費だよ必要経費。それとも……いらなかった？」
「ぐ……そ、そりゃ、いるかいらないかで聞かれたら、いるけど……」
「だろ？　……それに、これは会社からの手当で買ってるから、貯金には問題無し」
管理局からの報酬は、使っていないらしい。
けど、
「それなら、自分が欲しいものでも買えばよかったのに……」
「だから、なのは達の新しいヘルメット買っただろ」
「うー……」
秀人さんは、お金の使い方が豪快すぎるんだよ。
ラッピングまで施されたヘルメットの箱の配送手配を済ませ、店を出る。
「秀人さん」
「んー？」
「……ありがと。プレゼント、嬉しいよ」
秀人さんは笑顔で、私の頭を撫でた。

時間は、１２時半。
名残惜しいけど……
「秀人さん、そろそろ帰ろう」
一緒に過ごせたのは、僅か二日……いや、実質、一日半。
けど……
「夏休み、楽しかったよ」
「またどっか行こうな」

私の夏休みは、幕を閉じた。

# A’ s編　第三十九話

なのはを家に残し、フェイトを伴い、また家を出た。
裏庭に開いた転送ポートから、地球支部へ。
「うううぅ……」
やはり、あのオッサンに会うのは緊張するのか、強張っていた。
（根はいい人なんだけどなぁ）
アレは間違いなく、態度と口調で損をするタイプだ。
「うぅー……こわいよぅ……」
お気に入りのリボンで一つに纏めた髪が、頼りなく垂れていた。
「……ボク、なにかやらかしちゃった？」
話の中身は、サプライズということで秘密にしてあるけど……
多少は話しておけばよかったか？
「そういう話じゃないから大丈夫だって」
「……ほんとう？　うそだったら、アークルかってね？」
「おう、コンプリートセレクションのやつ買ってやるよ」
……帰りに買ってやるかな？

そして、オッサンが待ち受ける小会議室のドアをノックする。
『入れ』
低い声で指示が出る。
「入ります」
フェイトの手を引き、会議室に入った。
「ふん……生きていたか小僧」
どっかりと腰を下ろしたオッサン……レジアス少将が、腕を組んだままじろりと俺を睨んだ。
「悪いかよオッサン。生憎、ピンピンしてるよ」
……クロノあたりが聞いたら、また青ざめて怒りそうな口調だが、俺はあくまで嘱託。
階級も権力も無いけど、必要以上に媚びてやる義務も無い。
「そのしぶとさは評価してやろう。

それで……話とは何だ？」
言い淀んでいても仕方が無い。
俺は、その話を切り出した。
「フェイトをなのはと同じ学校に通わせる。　許可をくれ」
それを聞いたオッサンは、ムスッとした顔のまま黙り込んだ。
「え……え？」
寝耳に水状態のフェイトがの目が、俺と、オッサンの間を行き来する。
「……その必要性は」
「情操教育。社会勉強。何だったら、友達作りでもいい。……子供が学校に通うのに、それ以上の理由があるか」
荒療治かもしれないけど、フェイトの人見知りは非常にまずい。。
三つ子の魂百まで……というわけでは無いが、幼少期の人格形成はその後の人生に大きく影響する。
もしこのまま人見知りをひきずってしまったら、損をすることはあっても、得をすることは無い。
「……」
「……」
何も語らず、無言で視線をぶつけ合う。
「……」
「……」
オッサンは俺の真意を図ろうとしているようだ。
俺は、探られて痛いような腹は無いが……ここで目を逸らしたら、オッサンは退室してしまう
だろう。
じりじりと、プレッシャーがのしかかってくる。
「……フェイト・テスタロッサ」
と、オッサンがフェイトに話を振った。
「は、はいッ!?」
びくっ、と背筋を正す。
「この話について、事前に説明はあったか？」

「ううん」
「……」
じろっ、と見られる。
「い、いいえっ！なかった、デスッ！」
……おぉ、フェイトが敬語使ってるとこ、初めて見た。
「何故、本人に事前に話をしなかった」
「……先に言ったら、逃げると思って」
フェイトの逃げ足は、馬鹿に出来ないのだ。
「馬鹿者が」
心底見下した目と口調だった。
「うぐ……」
このクソオヤジ……！
「……すんません」
けど確かに、話しておかなかった俺に非がある。
「では、フェイト・テスタロッサ。今、この場で聞こう」
最初に言っておく、と前置きする。
「貴様には、この世界の教育機関に通う義務は無い。貴様はまだ事件の重要参考人で、被害者であり……被保護者なのだからな。自分の意思で、自分の意見を答えるがいい」
「……」
フェイトが、揃えた膝の上で、きゅっと拳を握った。
「貴様は……そこの小僧が言うように、教育機関に通いたいか？」
……フェイトの言葉を待つ。
フェイトは、自分の握りこぶしに目を落しながら……言った。
「ボクは……しょうじき、こわい」
「……」
「しらないひとばっかりいるのもこわい。そのなかですごすのもこわい」
……口を出したい衝動をぐっと抑え、見守る。
「でも、」
フェイトが顔を上げ、オッサンの厳つい顔面を見る。

平静を装っているが、本当は怖くてたまらないんだろう。
かち、かち、と、歯が震えてぶつかる音が、わずかに聞こえる。
「それを、ひでとがやってみろ、っていうなら……ちゃんと、いみがあるとおもう、から」
つっかえつっかえながら……
「ボクは、がっこうに、かよいたい……です」
ちゃんと自分の意見を、言いきった。
「いいだろう」
「……はい？」
まさかの、ノータイム即決だった。
おいおいおい……マジかよオッサン。
いや……もしかして、最初からオッサンも準備していたんじゃ……って、それは考えすぎか。
「あ……ありがとうっ！」
ぱぁっ、と顔を輝かせて喜ぶ。
――じろっ。
「……ゴザイマス」
睨まれ、敬語に修正するオチがついた。
「明日、青二才に正式に許可を出してやろう」
「……俺、てっきり断られると思ってたんだけど」
「貴様が勝手に決め、フェイト・テスタロッサの本意でなかったのなら、な」
すっくと立ち上がり、俺の目の前を通過。
……やっぱ、思った通りの人だ。
「あぁそうだ、レジアスのオッサン」
退室間際のオッサンを呼び止める。
「何だ、小僧」
何度もオッサン呼ばわりしたにも関わらず、キレず返事をするあたり、
意外と大人物なのかもな。まぁ、それはさておき。
「捜索隊のメンバー……大部分が、あんた直轄の部隊から出してくれ

たんだってな」
それこそが、俺がこのオッサンを信用している根拠だ。
「感謝してる」
「……知らん。ゲンヤが勝手にやったことだ」
……大概、素直じゃねーよな。
そのゲンヤさんとやらがどんだけ偉いかは知らんけど……上官であるオッサンの許可無しに、管轄外で隊員を動かせるわけ無いだろ。
「ありがとよ。いつか、借りは返すから」
オッサンは、フン、と鼻を鳴らした。
「精々、こき使わせて貰うとしよう」
捻くれた言葉だけど要は、オーケーだ。
……意外と俺は、このオッサンが好きだったりするのだった。

さてさて……
所変わって、マリーのラボ。
……ところで、ヴィータはいつもここで何をしてるんだろうな。
ドアを潜り更に、小型のポータルを通る。
「おーい、無事かヴィータ」
うわ……前来た時より、更に汚くなってる。
「よっす。久しぶりー」
がちゃがちゃとガラクタの山を掻き分け、部屋の主の元に行く。
「……あれ？」
が、マリーはコンソールから顔を上げない。
「おい、マリー。マリー？」
肩を揺する。
「……」
ゴトンッ、と、頭が卓に落ちた……
「……し、死んでるッ！」
「……勝手に、殺す、な」
あ、生きてた。

「なんだ、寝落ちか？」
「あぁ、うん……ついノッちゃって……」
ふぅん……マリーが寝落ちするなんて、相当なもんだ。
「何の研究だ？」
マリーは、眠そうな目をごしごし擦り、面倒臭そうに言った。
「……グラーフアイゼンの、機能拡張」
グラーフアイゼンの？
「……用語で言っても伝わらないだろうから簡単に説明してやると、対象物を魔力で再現する、エミュレートプログラム……」
……よーわからんな。
「ぶっちゃけ、どんなプログラム？」
「……ぐー、ぐー」
ありゃりゃ……まーた寝ちまったよ。
しばらく起きないなこれは。
「あ、ヴィータどこだっけ？」
目的を忘れるところだった。
「あ、ひでと、こっちだ」
くいくい、と袖を引かれる。
研究用具に埋もれつつある簡素なベッドの上で、ヴィータが身体を丸めて眠っていた。
トレードマークの三つ編みは解かれ、シーツの上に広がっている。
「……ったく、だらしねーな」
起こすのは……やっぱり止めておこう。
目の下に、マリーに負けず劣らず濃い隈が浮いている。
軽い身体を抱え上げる。
「回収完了。よーし、帰ろうぜ」
「おー！」
廊下を歩いていると、たまに局員とすれ違うんだが……
「ちわー」
「おおお、お疲れ様ですっ！」
手を挙げて挨拶したというのに、なぜか直立不動の敬礼という謎の

リアクションが返ってきたり、
「あ、どーも」
談笑している三人組に声を掛けても、
「「お勤めご苦労様です！」」
『休め』の姿勢で出迎えられたりする。
「はあぁ……」
やーな噂が独り歩きしてるな、これは。
憂鬱だ……
――ばふっ。
「おっ、と……」
いきなり背中に重量が発生し、バランスを僅かに崩した。
バランスの発生源は、言わずもがな。
「フェイト、どうした？」
「んーん、べつに？」
ニコニコ笑うだけ。気分の問題だろう。
前にヴィータ、背中にフェイトを引っ付けて帰ってきた俺を、なのは、ユーノ、
アルフ……三人の爆笑が出迎えた。
「ふぅん……見たものを魔力で再現、ねぇ」
夕飯のかに玉を白米と一緒に飲み込み、なのはが興味深そうに呟いた。
「あぁ」
メシの匂いに釣られて目を覚ましたヴィータが、得意げに頷く。
「んじゃ、バルディッシュもさいげんできるのかな？……もぐもぐ」
「フェイト、口の中のもの飲み込んでから喋りなさい」
「あうー……」
なのはに注意される。
「あー……できる、とは思うぞ？多分」
多分？
ヴィータは、ついっ、と目を逸らし、ぼそぼそっと言った。
「……実を言うと、使い切りのプログラムなんだわ」

……一見万能なのに、使い辛いことこの上ないな。
「しかも、マリーが徹夜で超アッパー気分な時に書いたプログラムで、本人も記憶が定かでは無いって」
追加増産も無理かよ。
「じゃあ、何に使うの？」
「ふっふっふ……」
不敵な笑いを浮かべ、言った。
「アタシの、騎士甲冑だ！」
「騎士……」
「甲冑……？」
なんだそれ？
「僕たちが言うところの、バリアジャケットのことだよ」
無限書庫から得た知識で、それに答えるユーノ。
「ベルカのアームドデバイスは、頑健な造りと引き換えに容量が少ないんだ。
だから、バリアジャケットは一つの形状のみ、というのが一般的だったらしい」
へぇ……そういう考え方も有りなんだ。
フェイトみたいに、用途ごとに用意はしなかったんだな。
「古代ベルカの王達は、直属の騎士に甲冑を与えるのが通例だったんだって」
ほう……まぁ、王はいないんだし、自分の好きにさせていいだろう。
食後。なのはとアルフが洗い物、俺とフェイトとユーノは雑誌や漫画や古書を広げている傍ら……
「……」
ヴィータが真面目くさった顔で、少年漫画のページをぱらぱらとめくる。
その手には、何故か起動状態のグラーフアイゼンが。
例の、『超カッコイイ甲冑』を、選んでいるらしかった。
「獅子座、天秤座……は、安直過ぎるな……」
……聖闘士○矢か。

確かにアレはかっこいい。
ウキウキと吟味するヴィータを見て……土産の存在を、すっかり忘れていたことに気が付いた。
「ヴィータ」
「んー、何だー？」
「土産あるぞ。こっち来い」
「どれどれ……」
――この時、気づくべきだったかもしれない。
ヴィータはグラーフアイゼンを起動させていて、かつ、例のプログラムを走らせっ放しだった、ということに。
「ほら、これ」
昼間買った、綺麗なドレスを広げて見せる。
「……アタシに似合うか？」
予想していた通りの反応だった。
「だーいじょぶ！なのはのお墨付きだ！」
「……へ、へへ。なんか、照れ臭いな……」
ドレスを受け取り、身体に合わせる。
「でも、サンキューな。大事に着るぜ」
『……』
ピカーッと、グラーフアイゼンが輝き……
『……形状記憶、完了しました』
……おい待て。
「あ、アイゼン!!　今、何をした!?」
『主の騎士甲冑を形成致しました』
「はぁッ!?」
『？　そちらの衣服が、お気に召したのでは？』
「ちげぇよ！」
『まぁ良いではありませんか。よく似合うかと』
「良くねぇよぉおおおおお!?」
……変態（マリー）と関わりすぎた影響で、グラーフアイゼンがアホになっていた。

「まさか……！」
……バリアジャケット……じゃなくて、騎士甲冑を展開する。
「う、あ、あ……！」
ワナワナ震え、姿見に目を移す。
そこに写る自身の姿を見て……
「……ぎゃーーーーー！」
……可愛らしいドレス姿で、ムンクの叫びを上げた。
ま、いいんじゃね？
◆▪◆　◆　◆
――たったったっ。
「、はぁっ、はぁっ……！」
「ふぅっ、はぁっ……！」
九月一日。その早朝。
――たったったっ。
「ぜーっ、ぜーっ……！」
「はひー、はひー……！」
今日は、私……高町なのはが通う、海鳴第二小学校の始業式の日だ。
まだ暑さが残る夏の朝。
背中のランドセルには、各種宿題。
教科書の類が入っていない鞄は、いつもよりも軽く、新学期への足どりをも軽くしてくれる。
さぁ、学校に着いたら、望に会ってお喋りをしよう……等と、気楽に考えていた私は何故か……
……死に物狂いで逃げるフェイトを追って、学校とは逆方向へ走っていた。
「ま……まぁてぇぇぇぇ……！フェイ、トぉぉぉ……！」
「い～……や～……だ～……！」
この半年余りで、私とフェイトの体力差は随分と縮まった。
だから、ここまで泥沼な追いかけっこが出来るわけだ。

ぜぇはぁ。
「待てって、言ってる、でしょ……！」
昨日、お偉いさんに意思表明したんじゃなかったの……!?
だばだばと、スタミナ切れ寸前の不様な走り方で、必死に逃げている。
「べんきょうなんて……まっぴらごめんだ～!!」
……どうやら、『学校』というものを大幅に勘違いしていたらしい。
フェイトにとっての『学校』とは、クラスメイトとコミュニケーションを取り、
対人コミュニケーション能力を身につける場所……だと思っていたみたい。
……それは幼稚園だろう。
回天桜花を投げれば、とりあえず捕獲できるけど……そのために、秀人さんが選んであげた服に穴を空けるのは、心苦しい。
けど、どうにか捕獲して、職員室まで連行しないと！
時刻は、間もなく8時を回る。
始業式が9時から……まぁ、これはサボってもいいとして……フェイトの顔見せだけは、
遅らせるわけにはいかない。
「待ちなさーい！」
「勉強はやだー！」
だっ、と最後っ屁のように加速した。
くそっ、往生際の悪い……！
何か無いか、何か！
住宅、コンビニ、八百屋、金物店……金物！
ざかざかと物色し……
「あった！」
テントとかを固定する、『J』字型の金具！
何本かを引っつかみ……！
「こぉの、怠け者がぁぁぁぁ!!」
投擲!!

――スコーン!!!
うまいこと、金具の曲線部分がフェイトの手首を捉らえた。
ふふふ……兄さんの真似してみたけど、うまくいったぞ。
「うぎゃー!!　うぅー……!」
深々と街路樹に突き刺さっている金具を、抜こうと躍起になっている。
「さーて、と……」
時間は、８時２０分。ここから学校までだと、歩いて一時間、走っても４０分。
「ほら、観念してさっさと行くよ!」
「やだぁ、やだぁああ!」
腕を組み、もう一回方向転換……あ。金具、返しておかなきゃ。

学校に着いたのは、９時ちょっと過ぎ。
「おはようございまーす」
職員室の戸を開ける。
あ、いた。
「富山先生、久しぶりー」
「なのはさん……何で遅刻するのよー……?」
久々の富山先生は、いつも通り半ベソだった。
「……あれ、そういえば、何で職員室に?」
今はまだ、始業式の真っ最中だったはず。
「聞かないで……」
……まーた何かやらかしたな。
説明して、ずっと後ろで小さくなっていたフェイトを引っ張り出す。
「というわけで、転校生です」
「あなたが、テスタロッサ、さん?」
「……」
「……あの?」
「……」

たたたっ、と、また私の背中に隠れ、じぃっ……と、先生を観察する。
「……」じー。
「……初めまして、テスタロッサさん」
「……」じーー。
「……お返事は、してくれないのかな？」
「……」じーーー。
「て、照れ屋さん、なのかなー、なんちゃって……あはは」
「……」じーーーー。
がんばれ先生。がんばれ担任教師。
「……なのはさぁん、」
弱ッ!!
はぁ、仕方ないなぁ……
「フェイト」
「……なに」
「秀人さんと約束したでしょ？　自分から、挨拶しなさい」
手助けはするけどね。
「……わかった」
感情に蓋をしたように、無機質な声で答える。
あぁ……秀人さんの行動も、納得だ。
「……フェイト・テスタロッサ」
ぼそっ、とそれだけ言い、黙り込んでしまう。
……これは、非常にまずい。
下手をしたら、相手によっては反感を買ってしまう。
「あぁ……そういうことね」
先生も、得心いったように頷いた。
「テスタロッサさん、今日からよろしくね」
「……ん」
「じゃあフェイト、教室で待ってるからね」
「え……でも……？」
「教室で、待ってるからね」

「……うん」
心細いかもしれないけど……ここは、厳しくしておかなくちゃ。
後ろ髪を引かれる思いもあるけど、フェイトを職員室に残し、教室にやって来た。
ガラッと扉を開けると、クラスメイト達が一斉に私に視線を向けた。
「あ、なのは！」
その中から、望がぶんぶんと手を振ってきた。
「おはよ、望」
席に座る。
「あんた、始業式からサボるとか……」
「あー……遅れた理由は多分、後で先生から説明があると思うよ？」
「ふぅん……あ、そうだ！」
ぱん、と手を打ち、話題を替える。
「今日、転校生が来るんだって！」
うん、まぁ……知ってる。
「へぇ、どんな子だろうね」
だから、ざわついているのか。
「ほんと、二人も転校してくるなんて珍しいよね！」
「……え？」
二人？
何それ聞いてない……
困惑しているうちに、先生が廊下の向こうからやってきてしまった。
……まぁいいか。別に、私には関係ない人なんだろうし。
「はい、座ってー！ホームルーム始めまーす！」
クラスメイト達は、各々の席に座っていった。
「ふふ……もう皆、知っているみたいね」
にっこりと笑う先生に、クラスメイトの一人が突っ込んだ。
「だって今朝、さっちゃんがバラしちゃったじゃん」

「うっ……」
思い出したかのように、口々にいらん情報をバラしていく。
「普通バラさないよねー」「いくら初めての転校生だからってはしゃぎすぎ」
「俺達よりテンション高かったよね」
「う、うぅぅ……そうよ！
口を滑らせて、長谷川先生に怒られて、職員室でお留守番だったわよー!!」
だから職員室にいたんだ……
「それじゃあ、入ってきて下さい」
扉を開ける。
「……」
まず、最初に入ってきたのはフェイトだ。
神妙な表情で、教卓の横にトコトコ歩いてくる。
「うわぁ……！」
初見のクラスメイト達が、思わずため息をついていた。
まぁ……中身を知らなければ、見目麗しい美少女だからね。
続いて入ってきたのは……
「チッ……マジ面倒臭い」
上履きの踵を潰し、ポケットに手を突っ込んだ、
――八神はやて、だった。
あまりの落差に、クラスメイトもドン引きしている。
「うわぁ……」
……同じ言葉で、こうも響きが違う。
「あぁン……？」
ぎろっ、と睨まれ、顔を伏せるクラスメイト達。
「テスタロッサさん、八神さん、自己紹介をお願いします」
「……はいっ」
「チッ……」
裏返りそうな声で返事をするフェイトと、本気で嫌そうに舌打ちをする八神。

「……フェイト・テスタロッサです。よろしく、おねがいシマス」
おぉ……裏返ったけど、ちゃんと言えたじゃないの！
「……八神はやて。別に、ヨロシクしてくれなくていいから話しかけるな」
……これはひどい。
重ね重ね、うわぁ、だ。
静まり返る教室を尻目に……八神は、空いている椅子にドカッと腰を下ろした。
「……」
何で、よりによってコイツが……
「……」
じーっと眺めていると、視線に気づいたのか、頬杖をついたまま、私の方を振り向いた。
そして……
「……はン」
嫌みったらしく、鼻で笑いやがった！　むっかつく……！
「はぁ……」
よりにもよって、こんな奴とクラスメイトだなんて……
先行き、激しく不安だよぉ……

◆　◆　◆　◆

（あー、かったりー……）
首を回すと、コキコキと関節が鳴った。
あーあ……何で私が、いまさら小学校なんか……
「……い……ね」「……う」「……か、じゃ……」
途切れ途切れに、私を噂する声がする。
目を向けると、丁度私を不躾に眺めている連中と目が合った。
「「……」」

チッ……なら、最初から喋るんじゃねぇよ……
「はぁ～～～～～～……」
昨日、リーゼがあんなこと言い出さなければ……

昨日の朝方、剣の鍛練を終え、仮住まいの廃ビルに戻った私達。
「主」
「んー、何？」
味気ないコンビニのサンドイッチをかじりながら休憩していた私に、リーゼが話し掛けてきた。
「以前、高町なのはの個人情報を入手したこと、覚えていますか？」
あぁ……あの、病院のデータを盗み見た時か。
「うん、覚えてるけど……」
住所とか、いろいろ。
「私の調査の結果、彼女は一日の大半を、『学校』と呼ばれる教育機関で過ごしているようです」
まぁ……小学校だから、当然といえば当然だ。
「それで？」
続きを促す。
「潜入し、彼女らの隙を探ります」
ふぅん……小学校に、ねぇ。
リーゼは変身魔法が使えるから、問題無いっちゃ問題無いな。
「頑張ってね」
と、言ってあげたのに。
何でそんな、不可解そうな顔を……
「主が行くのですよ？」
……え？
「……ごめん、イマイチ聞き取れなかったんだけど……」
「主が、小学校へ行き、高町なのはの隙を、探るのです」
一言一言、くっきりと言った。
私が、学校に……？
「ヤだ」

そんな、面倒臭いこと。
「……主、」
「ヤだ。そんな面倒臭いこと……」
そんな時間あったら、身体でも鍛えているほうが余程有意義だ。
「これは、あなたの計画を成就させる上で、欠かせない作戦なのですよ」
説得にかかる。
「それを面倒臭いなどと言って切り捨てるなど……」
「……」
どうにも、何かをたくらんでいるようにしか感じられない。
けど、リーゼの企みは、いつも何らかの成果を出しているのも、また事実だ。
「……わかったよ」
たまには、リーゼの言うことも聞いてやるか。
「こちらが、学用品一式となります」
とんっ、と、どこからともなくランドセルを取り出し、目の前に置く。
……転校手続きはまだだから、しばらくは無理だけどね。
「ご心配なく。昨日済ませてきました」
「はぁっ!?」
昨日!?
「リーゼあんた……最初から……」
「……」
無言の肯定だった。
なんか、行動が読まれていたっぽい。
……そんなこんなで、ここにいる。
釈だけど……高町の阿呆面が見られただけでも、来た意味はあったかもしれない。
『ちょっと、八神』
ん……?

今の、念話……？
それに多分、声の感じからして……
『八神、聞こえてるんでしょ？』
『……チッ。何の用だよ』
高町だ。
『……話があるの。ホームルームが終わったら、屋上に来て』
……これは、いきなり訪れた好機か？
『……いいぜ。お前こそ、逃げるんじゃねえぞ』
さぁて……ちょっくら、学生ゴッコでも始めてみますか。

# A，s編　第四十話

「はい、それでは、今日はこれで終了です」
先公のクソッタレなホームルームを聞き流していたら、
今日の終了時刻になった。
帰る……前に、アレだ。
「……」
「……」
同じく席を立った高町と目配せし、教室を後にする。
高町は、同じクラスだった八代望にぺこぺこと謝っていた。
一緒に帰る約束、云々……
「チッ……」
そんなもん、後でいいだろ。
私との用件より優先すべき事柄なんて無いんだから。
「よっす、八神！」
……ぽん、と気安く肩を叩かれた。
あぁ……そういえば、あんたも同じクラスだったっけ。
「葉山。何か用か」
今は、お前と遊んでやる時間は無いんだけど。
「用って……用が無いと駄目か？」
「駄目に決まってるだろバーカ……おら、さっさと帰って球遊びしてろ」
「ちぇっ……また明日なー」
しっしっ、と追い払って、ようやく教室を出られた。
……ったく、面倒臭い。気まぐれで人間関係広げるもんじゃないな。
「八神、行くよ」
……チッ。結局、高町に追い越されたよ。
「チッ……」
はいはい……
そして、屋上に続く踊り場で、足を止めた。

当然ながら、アニメみたいに屋上が開放されているわけも無い。
「ちょっと待ってて」
……高町は、ヘアピンをポケットから取り出した。
「うちのユーノくん、遺跡探索とかが好きで……」
――かちゃかちゃかちゃ……
「ピッキングとか、いろいろ教わって……」
――かちゃかちゃかちゃ……
「お、教わって……あれ？」
――かちゃガチッ！
「あ」
変な音がして……高町の手には、ヘアピンの一部だけが空しく残っていた。
「……バカじゃないの」
「う……うるさいな！いつもは、ちゃんと開けられてるよ！」
あーどうしよー……等と、頭を抱えた。
「……」
身体強化魔法を発動し、ドアノブを握る。
――ゴキンッ!!
そのまま、ドアノブを引っこ抜いた。
「開いたぞ」
最初からこうすれば良かったんだよ。
「何してんのよアンタはァァァァァ!!?」
うるさいなぁ……
「行くぞ」
それを無視し、屋上へ足を踏み入れた。
「あっつ……」
よく考えれば、今はまだ夏と言って差し支えない気温だ。
いくら風があったとしても、暑いことに変わりは無い。
貯水タンクの陰にある、僅かな日影に入る。
「……で、話って何？」
「どういうつもり」

「なんのことやら」「真面目に答えて!!」
チッ……うるさいなぁ……
「お前に言う必要は無い」
言ったところで、私には何のメリットも無いし。
「何だったら、力ずくで聞き出してみな」
それはそれで、楽しそうだ。
「……そうしたくないから、こうやって聞いてるんじゃない」
「なぁんだ……無理矢理聞きたいから、こんな所に呼び出したのかと思った」
「違う。何で、そんな考え方しかしないの」
殺すとリーゼが五月蝿そうだな。
「まったく……」
半殺し……いや、三分の二殺しくらいに……

「親の顔を……、

――瞬間。冷えきった殺気が全身を駆け抜けた。

怒りをも置き去りにして、機械的なまでに正確に、その動作を行った。
「……」
壁に、いや、貯水タンクの影に……闇に、手を突き入れる。
ズブッ……と沈んだ手が、ゴツッと硬い物に触れる。掴み出す。
「死ねよ……お前」
引き金を、引いた。
――パァンッ!!!
乾いた破裂音。
発射された弾丸は、真っ直ぐに……高町の額目掛けて、突き進んだ。

◆◆◆◆

まったく、なんて奴なんだろう。
私に意地悪をするためだけに、わざわざ転校までしてくるなんて。
「お前に言う必要は無い」
何か理由でもあるのかと思ったのに、何も言いやしない。
「何だったら、力ずくで聞き出してみな」
やらないってば。
まったく……
「親の顔を……、
見てみたい。
そう言い切るより先に、八神が奇妙なアクションを起こした。
影に手を突っ込んで……拳銃を、その手に握った。
「!?」
――極限の緊張は、また私を『あの世界』……倍速の世界へ、引きずり込んだ。
――……
銃声が間延びする。
発射された弾丸はおろか、雷管が着火した際の火花も、硝煙も、
全てが視認できた。
が。
「ぐ……!」
身体が、軋みをあげる。
通常の時間の流れに留まろうとする身体を、無理矢理動かしているのだから
当然だ。
音速に近い弾丸は、もう目の前に迫っていた。
「……あああァあ!!」
左の小太刀、桜花の鞘を、弾丸の進路上に構える。
その時点で、私の意識は、『あの世界』から帰還した。
――パギンッ!!
弾丸は鞘の上を滑り、進路を変更。
バチッ、と、私の髪を僅かに掠め、見当違いに飛んでいった。

一瞬の停滞の後……はらり、と、白いものが、落ちた。
「あ、」
それは、帯状の物だった。
「あ、」
白地に、同色の糸で丁寧に刺繍されている。
ぱさり、と、地面に落ちた。
弾丸が掠めた跡だろう。焦げたように茶色くなり、千切れてしまっている。
お気に入りのリボン。
母さん達からの、贈り物。
それが……壊された。
「許さない……」
ぽつりと口をついた言葉。
それを認識した途端……怒りが、燃え上がった。
「絶対に、許さないッ！」
八神は、殺意に満ちた目で、私を見ている。
……どこかで、見たことがある気がする。
けど、今はそんなことどうでもいい！
「お前を殺す」
「やれるもんなら……やってみなよ！」
再び照準を合わせ、第二射！
――パァンッ!!
今度は、最初から予測できた。
来ると分かっていれば、銃口の向きから射線を割り出せる。
「……」
――パァンッ！
無感動に、第三射。
「何度も同じ手を……！」
……喰らうわけがない。そう、浅はかに考えすぎていた。
――ぐいっ
「えっ!?」

右足が、何かに掴まれた。
「バインド!?」
……いや、違う。
足元の影が、三次元的に形を成し、私の足を捕縛していた！
――パァンッ！
「くっ！」
――ガィンッ！
また、鞘で防ぐ。
「放せ、このっ！」
――ザンッ！
回天に魔力を纏わせ、立体の影を切り捨てる。
拘束が消えた一瞬で、影から飛びのく。
切り捨てた筈の影は、何事も無かったように再生した。
夏の太陽は、真上。
自分の影は、足元に小さく存在している。
「レイジングハート、足元の警戒、お願い」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』
久しぶりの実戦だ。
「シュート！」
試しに、アクセルシューターを打ち込んでみる。
――バシュッ！
魔力弾は、影に侵入するやいなや、立体の影に喰われた。
「……」
八神のテリトリーは、あの影の中か。
――パァンッ！
「、当たらないっての！」
目測で弾を避ける。
「……」
八神は、手にした拳銃をじぃっと見つめ……ぽいっと放り出した。
そして再び、影に手を突っ込み……新たな得物を掴み出す。
今度は、二回りほど大振りな……えぇと、なんだっけ!?

『サブマシンガンです』
「そう、ソレ！」
——バララララララララッ!!
「きゃあああああっ！」
拳銃とは段違いの威力！
屋上のコンクリートが、ガリガリ削られていく！
砲撃が封じられている状態じゃ、ラチがあかないよ！
「レイジングハート、突っ込むよ！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』
こうなったら、無茶を承知で接近戦だ！
——バララララッ！
八神も、そこまであのサブマシンガンを使いこなせていないみたいだ。
本当なら、撃ちながら薙ぎ払うように使うんだろうけど、同じ方向にしか撃っていない。
——バララララララッ!!
「フッ!!」
回避！
掃射を止め、再び私に照準を合わせる。
僅かに……けど、決定的に出来た隙。
（今ッ!!）
踏み込みと同時に、小規模インパクトで加速！
——ガシャンッ!!
フェンスを蹴って、三角跳びで切り込む！
「はぁあああああっ！」
立体の影が動くより速く、八神の目の前に！
もらった！
「それを、」
この距離なら、引き金を引くより、剣の方が早い！
「……待っていた」
——ガキィインッ!!

え……？

「……近距離なら、勝てるとでも思った？」

振り下ろした回天桜花は、サブマシンガンを捨てた八神の右手が握る、少し大振りな剣に阻まれ、届いていなかった。

八神のテリトリーに踏み込んでしまった。

「浅はかにも、」

や、ば……！

「……程があるッ！」

八神の左手、闇色の刃が振り抜かれる！

「くっ!?」

咄嗟に桜花を右手にパスし、防御魔法を展開！

――パキィインッ！

破られたけど、なんとか無傷で回避に成功！

『マスター』

「……うん、ごめん」

正直、嘗めていた。

戦力分析も済んでいないのに、格下と戦っているつもりになっていた。

「……」

……もう、油断はしない。

八神も、両手で剣を握り、正眼に構える。

あの余裕から察するに、まだ何か隠し玉があると見た。

でも、私がすべきことは変わらない。

（斬れる距離まで近付いて、斬り伏せる！）

「……」

「……」

睨み合う。

夏の日差しが容赦無く照り付ける。

「……」

「……」

汗が一滴、額から顎を伝い……

――ポタッ……
地面に落ちる。
「「ッ!!」」
お互い同時に、飛び出す！
「はぁああっ!!」
「おぉおおっ!!」
八神の剣と、私の刀がぶつかる……直前。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』
雷撃が、私たちの間に割って入った。
――バシュンッ!!
直撃を避けるため、跳びのく。
再び、間合いが開く。
「……誰だッ！ブチ殺されてぇのかッ!?」
八神の、本気の恫喝。
「……なにしてるの」
横槍を入れた人物から、静かに、冷たい声が発せられる。
「……フェイト、これは、」
「……なにをしてるの、二人とも」
「チッ……！」
八神が、再び取り出したサブマシンガンの照準をフェイトに合わせる。
「フェイト!!」
ぎちっ、と、引き金のスプリングが軋む……より速く。
――ガキンッ!!
バルディッシュの魔力刃が、サブマシンガンを両断した。
――ギチッ……
「うぐっ……！」
そのまま、バルディッシュを八神の喉元に突き付ける。
「……キミがどんな動きをしても、ボクが喉笛をかっ切る方が速いよ。
……わかるよね。大人しくして」
「……チッ」

八神は渋々、剣を下ろした。
「なのは」
……いつもと違う、爛々と光る紅い瞳で、私を見据える。
「武装を解除して」
「……」
いくら、フェイトの言うことでも……聞けない。
「こいつは、許さない……!!」
つまらない挑発で、私の大事なものを壊した。
「……」
フェイトは、片手で八神を牽制しながら、もう片方の手で、髪を結わえていたリボンを解いた。
「はい」
「え……」
「千切れたリボンが直るまで、貸してあげる」
……
「……で、ヤガミ」
「……」
「ヤガミは、何が気に入らなかったの」
「……ふん」
答える義理はない、とばかりに、鼻を鳴らす。
「どうせ、つまらない挑発……」「なのは」
ぴしゃりと遮られた。
「今は、ヤガミが話す番だよ」
うぐ……
バルディッシュを下ろすフェイト。
「チッ……つまらない邪魔が入った」
だんっ、と跳び、フェンスの上に着地する。
「……」
フェンスの上に器用に立ったはやては、ポケットに手を突っ込んで、高みから私たちを見下ろしている。
「……まぁ、今日のはほんの挨拶だよ」

皮肉な笑みを作り……
「それじゃあ、高町さん、テスタロッサさん……また明日」
ぽんっ……と、身を投げた。
「……！」
フェンスに駆け寄って……見えたのは、漆黒の翼。
『……飛行魔法、及び、隠蔽魔法の発動を確認しました』
「……」
屋上に残されたのは、私とフェイトだけ。
「帰ろうか」
やがて、どちらからともなく、そう口にした。
「なのは」
その、帰り道。
私にリボンを貸したお陰で、ストレートロングな髪型になったフェイトが、振り返らず口にした。
「……あんまり、心配かけないで」
アルフから聞いた話だけど……
初めて守護騎士が来襲した際、手続きの問題で、フェイトは初動が遅れた。
それは、フェイトては無関係な所で、非はない。
けど、フェイトは相当悔やんだらしい。
「……ごめん」
フェイトには、心配ばかり掛けている。
でも……あいつとは、いずれ決着を付けてやる。
内心のみでそう誓い、家路に着いた。

# A’s編　第四十一話

「……よし、」
無限書庫の空間に浮かびながら、ユーノは確かな手応えを感じていた。
この、まさに無限としか言いようの無いデータベースの検索プログラム、その試作第一号が、ようやく完成したのだ。
これが稼動すれば、手作業で一冊一冊、確認する手間が省け、大幅な効率アップが図れる。
遅れに遅れていた、闇の書に関する詳細データを揃えることができるのだ。
「……長かった」
万感の思いを込め、実行キーを押し込む。
――ヴァァァァァァ……！
ディスクドライブが高速回転するような音を立て、プログラムが無限書庫全体を走る。
――ヒュヒュヒュ……！
そして、ユーノの目の前に、何冊もの……年代も文体もまちまちな本が飛んで来る。
これらは間違いなく、闇の書の打開策に繋がる筈だ。
「……お、」
と、流石にユーノもふらついた。
「うぅ……四徹はキツいか……」
四徹。四日間、徹夜。
このプログラムの基本を作る時間を含めたら、それを遥かに上回るだろう。
……自分はこの先、戦闘の役には立たなくなる。
ユーノの冷静な部分は、そう予測していた。
「……」
男児としても、平均を下回る体格。
結界魔法は、そこそこの力があると自負してはいるものの……言っ

てしまえば、代わりはいくらでもいるのだ。
戦闘は……言わずもがな。
なら、自分が戦闘以外で出来る……いや、自分にしか出来ないことは何か？
……それは、データの蓄積・分析。
チームの頭脳として、力を尽くす……そう、決めていた。
「……続きは、一眠りしてからだな」
プログラムは、何とか完成にこぎつけた。
順調だ。
手早くコンソールに入力し、報告する。
「うあー……」
顔色は最悪で、今にも死にそうだ。
「……」
ゆらゆらと、無重力に揺られるままに……眠りに落ちてしまった。

……
音も無く、無限書庫に入り込む、人影。
「……」
スーツのような装束に……仮面。
違和感を感じさせないレベルで、仮面の男はユーノの眠気を増幅し、無限書庫に堂々と入り込んだ。
そして、何冊かの本を手にし、ざっと流し読み。
「……」
暗記術でも駆使したのか、一切のコピーを取ることも無く、中身を盗む。
「……」
「……うぁ、」
「、」
……ユーノの意識の覚醒を察知し、音も無く、無限書庫から消えた。
「あ……いけない、帰らなきゃ」
目を覚ましたユーノは、本をリストに登録し、施錠。

ふらつく足取りで、窓口まで鍵を返却しに行く。
ほぼ顔パス、鍵を持ち帰っても問題が無い程度の権限は与えられているのだが、律儀な性分か、その都度、貸出・返却の手順を踏んでいた。
「……ユーノ・スクライア司書です。鍵の、返却を」
窓口にいた女性局員は、ユーノの顔色を見てギョッとした。
「ゆ、ユーノさん、大丈夫ですかぁ!?」
少し舌足らずな声。
気弱にオドオドした、どこかウサギかハムスターを思わせる物腰。
……何故か繕われた制服。
「……えぇ、大丈夫。意識がハッキリしすぎて空でも飛びそうですよ……フィアットさん」
「あんま大丈夫じゃない気がします……えぇと、無限書庫の鍵の返却ですね……はい、確かに預かりましたよ」
「どーも……あ、そうだ、フィアットさん、」
「はい？」
「なのはが、制服に穴開けちゃったお詫びに、食事でもしないか……と言っていましたよ」
ずてんっ、と、椅子からコケた。
「かかか、閣下が!?」
「……閣下？」
聞き慣れない言葉に、ユーノは首を傾げた。
「おー、二曹。閣下からのお誘いかー？」「有給休暇、申請しといてあげよっか？」
窓口にいた他の局員らから、からかいの言葉が飛ぶ。
「大きなお世話です！」
ぷりぷりと怒るフィアット。
「……まぁ、考えておいて下さい」
眠気が洒落にならなくなってきたユーノは、秀人たちが待つ家に帰って行った。

「……ふむ、ご苦労」
閉め切られた執務室にて、追跡者……いや、今はアリア・ロッテの二体に戻った使い魔が、先程の本に記されていた内容を、主……グレアム提督に伝えた。
「あの、お父様……」
アリアが、主を呼ぶ。
「何だね？」
資料から顔を上げず、グレアムが答える。
「……どうしても、やらなければ……ならないのでしょうか」
「アリアッ!!」
ロッテから、短く叱責が飛ぶ。
が、一度口にした言葉は、その後の言葉も、引きずり出してしまった。
「今代の主は、素養こそあっても、管理外世界の民間人で……子供ではないですか！」
「だか主だ」
「……！」
アリアは、言葉に詰まった。
「既に、相当な数の人間を手に掛けている。……同情の余地は無い」
「……で、でも、」「アリア！」
これ以上は……と、ロッテが鋭く呼び止める。
「下がれ」
短く命令され、ロッテは、アリアを引きずるように、執務室から退室していった。
「……」
グレアムは、デスクに肘を突き、深くため息をついた。
――ビーッ！
と、何かのコール音が鳴る。
「……」
無言でコンソールを叩き、それに応じる。

『……進行状況はどうか』
挨拶も無しに、しわがれた老人の声が漏れだす。
「これはこれは……カスパール議員」
『……進行状況はどうか』
しわがれた声で、それだけを繰り返す。
余計なやりとりは不要、ということか。
「闇の書は、徐々に活性化を始めております。もう間もなく、かと」
『……デュランダルは』
「外殻はほぼ八割、内部は六割前後」
『急げ。そして、今度こそ……完成されし闇の書を、我等に捧げよ』
「えぇ……全ては、最高評議会の意思のままに」
進行状況を聞き終えたカスパールは、ただ無言で通信を終えた。
恭しく頭を垂れていたグレアムは、くっと面を上げるその顔には。
「ふん……老害が」
隠しようも無い、侮蔑が浮かんでいた。
「闇の書を……完全なる魔導を手にするのは、貴様ではない」
コンソールを操作し、ある設計図のような図面を３Ｄで表示する。
……デバイス、だろうか。
杖のような、長剣のような、奇妙な造形の武装。
「この、ギル・グレアムだ……！」
――『ＤＵＲＡＮＤＡＬ』
その、伝説の聖剣と同名の武装を前にして……グレアムは、笑った。

◆◆◆◆◆

……高町たちがいる小学校に通い初めて、一月あまりが経過した。
十月十日。
予想外だったもう一人……フェイトとかいう名前の金髪バカは、なんとかクラスに溶け込もうとしているらしい。
……最近ようやく、高町とか八代とか葉山を介さずに、クラスのガキどもが話し掛けているのを横目で見かけた。
ご苦労なこった……上っ面だけの付き合いなんて、するだけ徒労に

終わるのに。
「……」
さ、かーえろっと。
今日は、ちょっと野暮用だ。
「八神、まだ三時間目よ」
「あァ……？」
八代か。
「ほっとけ。私は忙しいんだよ」
「ちょっと、八神……！」
ドアを閉め、シャットアウト。
さーて、帰るか。

……私の家が吹っ飛んで、しばらくはホテルだの空き家だの、転々としてたけど、正直飽きた。そろそろ、根を張って寝泊まりしたい。
……というわけで、賃貸アパートを探すことにした。
金を幻覚で水増しして、家の一件でも買ってもいいんだけど……
リーゼが怒るし。
狡っ辛い真似をするな、って。
……物件は既に見つけていて、今日は大家に顔見せ、って段取り。
まぁ、渋ったら暗示で了解取るけどね。
それに関しては、リーゼからオーケーを取ってある。
日当たり良好な、八畳一間。バス・トイレは別と、しっかりした作りだ。

リーゼと落ち合い、不動産屋へ。
奥のソファにかけてしばらく待つと、店員に続いて……杖をついた作務衣のジジィが入ってきた。
「可愛らしいお客さんだのう。よっこらせ」
好々爺、という表現で、間違っていない。
今の私の姿は、幻覚を掛けて、二十歳前後に見せ掛けている。
リーゼに似せたから、『可愛らしい』という表現も、まぁわかる。

「ほぅ。親子にしては、歳が近いのう？　かといって、姉妹にしては歳が離れておる」
……おい。今なんつったこのジジイ。
「……！」
リーゼも、一瞬だけ強張った。
幻覚が、効いていない……？
「……！」
目に魔力を通し、暗示を……！
「ほっほ……やめとけ、若いの」
これも、効果無し!?
「妖しの術は知らんが……慣れておる。効かんよ、ワシには」
……意味わかんない。
ジジィはすっとぼけた様子で、ヒゲを弄っている。
「どうやら、堅気ではなさそうだのう……参った参った」
暗示も、幻覚も効かない。
このままじゃ、話が無かったことになってしまう。
（なら……！）
――ダンッ！
ソファを蹴り、ジジィに肉薄する！
（力ずくで、従わせてやる！）
固めた拳を、ジジィの顔面に……！
「ほっほ。良い跳ね返り具合……鍛えがいがありそうだのう」

◆　◆　◆　◆

「そういえば、さ」
夕飯の支度をしながら、傍らの秀人さんに聞く。
家賃がどうのこうの、という話から、気になった。
「ここの大家さんって、どういう人なの？」
家賃は口座引き落としらしいから、見たことが無い。
前に聞いた話だと、家賃収入で暮らしている御隠居さん、らしいけ

ど。
「変な爺さんだよ」
具体的に。
「え？　うーん……このアパートに住んでるけど、あんまり帰ってこないで、あちこち放浪してたり……」
旅好きな人……別に、変じゃない気がするけどなぁ……
「基本、ここには自分が気に入った人しか住ませない」
信吉さんって男の人と、朧さんって女の人、だったっけ。
「秀人さんは、何で気に入られたの？」
「俺はカントクの紹介で……あと、そうだ」
ぽん、と手を打つ。
「『鍛えがいがありそう』……って言われたんだ」
「き、鍛え……？」
それって、まんまの意味で？
秀人さんは、あっけらかんと言った。
「俺の格闘とか、殆ど爺さん仕込みだぞ」
ふぇー……
「……強いの？」
正直、秀人さんより喧嘩が強い人なんて思い浮かばないけど。
秀人さんは眉間に手を置き、少し考え、
「魔法抜きなら、負けるだろうな」
あっさりと、そう言った。
「……会ってみたいなぁ」
少し、どういう人なのか気になるところだ。
――ピリリリリッ！
と、秀人さんの携帯が鳴った。
片手で開き、確認し……
「何々。今、こっちに帰ってる最中。土産があるから、楽しみに……？
なんのこっちゃ」
それじゃ、すぐにでも会えるの？
急な話だなぁ。

まぁいいや。
そして、夕飯の支度が出来て、玄関先で待っていた。
道の向こうから、作務衣を着たお爺さんが手を振って……
「ほっほっほ。帰ったぞーい」
「……爺さん、ソレ、何」
秀人さんが、私の気持ちを代弁した。
「何って……」
くいっと、細い手に吊り下げられていたのは……
「土産だがのう？」
顔面に青タンを作って白目を剥いた……八神だった。
「……」
「……」
「ミー……」
反対側の手で持たれていた黒猫が、弱く鳴いた。

◆▪◆　◆　◆
ぼやーっ……とした意識。
まどろみの中をフラフラする、何とも言えない心地好さ。
……それを妨げる、右眼窩の痛み。
触るまでも無く、見事な青タンが出来ていることだろう。
「……はっ!?」
思い出したッ！
がばっと身体を起こす。
唐突な行為のせいで、右目の青タンがズキンッ！と鋭く痛む。
「いっててて……!!」
「あ。主、目が覚めましたか」
寝起きでぼやける視界の中、艶のある漆黒の毛並みが揺れていた。
「リーゼか……」
「はい。お加減は、如何ですか？」
「最悪だクソッタレ！
くそ、あのジジィ……!!」

よくも私を、タコ殴りにしてくれやがったな！
――ジャキッ！
魔剣を現出させ、握る。
「切り刻んでやる！」
辺りを見回して、状況を確認。
和室の一間に、寝かされていたらしい。
襖の向こうから、話し声と人の気配！
――ドバンッ！
襖を蹴破る！
案の定、そこにはさっきのジジィがいた！
「死ねぇぇぇぇぇッ!!」
「甘いわ」
――ぱしんっ！
魔剣の鋭い刃は……ジジィの親指と人差し指で、白刃取りされていた。
「このっ……！」
万力みたいに、魔剣をがっちり挟みこんで解けない！
……そして、また。
「少し血を抜け、若いの」
――ドボォッ!!
「あっ、」
突如、腹部に生まれる灼熱。
それが、殴られた衝撃だと理解した瞬間、灼熱は零度に変わり、体中の活力を根こそぎ奪い去ってしまった。
「ぎ、ぅっ……！」
畜生……！
「おい、爺さん！　やりすぎだ！」
……今更気付いたんだけど、こっちの部屋にはジジィ以外の人間が複数いた。
それも、よりにもよって……
「なぁに、死ぬほど強くはやっとらん。ちぃっと撫でてやっただけ

じゃよ……ま、死ぬほど痛かろうがの」
「だから、それがやりすぎなんだっつーの！女の子だぞ！」
ジジィに気安い口調で抗議する、秀人。
「……八神、殺す気マンマンだったでしょ」
高町。
「だ、だいじょーぶ？　ヤガミ……」
金髪バカ。
「……おい、大丈夫かはやて」
秀人が私を助け起こす。
「なん、で、あんた達が……？」
振りほどく気力も湧かず、されるがままになってしまう。
「「だってここ、俺／私／ボク　ん家だし」」
……嫌な偶然もあったな。
リーゼは何で、猫モードになっているんだ？
「……申し訳ありません、私も、意識を保っているのが精一杯で、」
念話を通じて、リーゼもまた、このジジィにボッコボコにされたという事実を知った。
……妖怪かっつうの。
「まぁ、食事でもするかのう」
……ジジィはマイペースに、台所へ引っ込んで行った。

「偶然ってあるんだなぁ……」
食卓の向かいで、秀人が頬杖をついて感心していた。
「まさか、俺達と同じアパートに引っ越してくるなんて……」
学校に関してはわざとだけど、これは本当に偶然だ。
「……」
高町は、依然として私を警戒しているようだ。
まぁ実際、軽く殺し合ったんだし当然といえば当然か。
テスタロッサの邪魔さえ入らなければ、間違いなく私が勝っていた。
全く……カンに障る。

「ほんっとに……腐れ縁ってヤツ？」
用がすんだら、こっちから千切ってやる。
「……痛むか？」
「なめんな」
こちとら、伊達にリーゼの鬼特訓受けてねぇんだよ。
「……っていうか、何なのあのジジィ。幻覚も暗示も効かないし……」
それが、不可解だった。
魔法の訓練を積んでいるようには見えなかったし、魔力も殆ど感じない。
なのに、完全にシャットアウトされていた。
「……うーん、」
秀人は、言うかどうか悩んでいる。
「準備ができたぞい」
と、ジジィが皿を両手に、高町とテスタロッサの使い魔を連れて、戻ってきた。
テキパキと料理を食卓に並べていく。
いつも食事はリーゼ任せにしてる私だけど、それが美味しく調理されている、ということは分かった。
「なのはが作ったんだ」
「え……？」
この美味しそうな料理を、高町が？
「……そうだよ」
うわぁ……人は見かけによらないというか、何と言うか。
ポン刀振り回してる野蛮人、ってイメージしか無かった。
「ほう……」
ジジイも、割と感心していた。
「うむうむ、料理上手なおなごは、良き母になるぞ」
「母、ですか……」
高町は、微妙そうに相槌を打つ。
「なりたくないです。」
そう、苦笑した。

「ふむ……そうか、残念じゃ」

独り身だと面倒で、買って食べる方が楽で、全くやらなかったなあ。

「ボク、たまごやきならつくれる！」

テスタロッサが、阿呆っぽく元気に手を挙げた。

……え。もしかして、料理できないの私だけ？

「卵焼きっていうか、オムレツだよね、アレは」

「いいじゃんべつにー……もっとじょうずになって、おかーさんにたべてもらうんだ」

……母親。

あんまり耳にしたくない単語を、今日はよく耳にする。

すぅっ、と、いつもの癖で胸元に手が伸びてしまう。

「……」

……そこにはもう、十字架のネックレスは無いというのに。

食事の最中。

「あの、大家さん」

「何かね？」

高町が、ジジィに話し掛けた。

「やっぱり、何か武道を修めているんですか？」

……だと思うけど。

なにせ、リーゼをボッコボコに出来る程だし。

「いんや。なーんもしとらん」

「嘘こけジジィ!!」

どう考えても達人レベルの動きだろ！

「今風に言えば、マジじゃよ。空手も柔術も合気道も、なーんも知らん」

……目を見た感じ、嘘はついていないらしい。

「ワシも、若い頃は血気盛んでのう……気に喰わなんだ者に片っ端から喧嘩を吹っかけておったんじゃ」

しみじみと、昔を懐かしみながら髭を撫でる。

「街のチンピラに始まって、やれ極道だ、やれカルト宗教だ……片っ端

からぶっ潰してやったわい」
……微妙にデジャブを感じる話だ。
「その中に、たまに、妙な術を使う輩もおってのう……羽ばたいたり、掌から閃光を放ったり、姿形を自在に変えたり……びっくり人間じゃよ」
……ビックリなのはお前だジジィ。
「ビックリなのは爺さんだろうが……」
秀人は、はぁ、とため息をついた。
三流とはいえ、魔導師とステゴロしてんじゃねえよ。
「最初は悩んだわい。
何せ、見てもさっぱりわからなんだ」
そりゃ、そうだ。
ジジィは、だから、と前置きする。
「『見ないで』ぶん殴ることにしたんじゃ」
その発想は色々間違ってるだろ……
「初めのうちは目を閉じとったんじゃが……後ろから、パーンと派手にハジかれての」
親指と人差し指で、鉄砲の形を作った。
「目は開けておくもんだ……と知ったんじゃ」
「当たり前だ」
馬鹿がいる……
「じゃが、『見』れば騙される。『見』なければ、後ろからハジかれる」
思い付いたんじゃ、と、本気で知ったように言う。
「相手の姿形に囚われず、『中身』を『視』れるようになれば、ぶん殴れる」
脳みそが筋肉で出来ていそうな発想だった。
「練習したら、意外と簡単に出来てのう」
しかも、実現してた。
「『視』てからぶん殴ったら、うまくいったんじゃ」
……もう、言葉も出ない。
つまりアレか。

バトル系漫画によくある、『心眼』か。
そんな理由で、私の魔法は見破られたのか
「で、おぬし……はやてよ」
「えあ……何？」
いきなり話題が変わって、びっくりした。
「おぬしは実に遊び……いや、鍛えがいがありそうじゃ。この長屋に住まうことを許そう」
え……いいの？
「ペットもおっけーじゃ。ヒデ坊も飼っておるし、朧に至っては部屋が猫の集会所じゃ」
話が逸れた。
向こうの部屋に、契約書その他諸々があるらしい。
「行こ、リーゼ」
「申し訳ありません、主」
リーゼを胸に抱き、移動する。
「すまんの、お嬢さんがた。　……少し外させとくれ」
「あ、はい……」
「わかった！」
「ヒデ坊、洗い物やっとけ」
「へーい……」
……蹴破った襖を元に戻し、ジジィと二人になった。
契約書一式が、卓に広げられている。
「おぬし、親族はおるか？」
「……！」
噴出しそうになる怒気を、ギリギリで押さえ込んだ。
高町みたいに、パパとママを侮辱された訳じゃない。
「いや、すまなんだ……許せ」
ジジィは、本心から申し訳なさそうに謝罪した。
「では、法的な後見人は、どうかの？」
「……いるよ」
後見人。

……一応、いる。
名前と連絡先くらいしか知らないけど……パパとママの財産を、キッチリ守っているらしいから、これまでノータッチだっただけ。
外国人の男性らしいけど……
「では、その後見人に保証人になってもらおうかの。連絡先を」
「……」
渡されたメモ帳に、ボールペンで書き写す。
「汚い字じゃのう……」
「ほっとけ！」
ジジィのくせにやたら近代的なスマートフォンを取り出し、連絡先に電話をかけた。
「うむ……突然の連絡、失礼する」
電話中、リーゼを撫でて遊んでいたら……
「はやて。相手が、おぬしに代われと言っとる」
「えぇー……」
面倒臭いなぁ……ま、しゃーないか。
「……八神だけど」
『挨拶くらい、しっかりしたらどうだ』
渋い中年男性の声が、電話口から聞こえてきた。
知ったことか。
「つーわけで、家ぶっ壊れちゃったから賃貸に引っ越す。
口座から、毎月の引き落としになるからよろしく」
……電話口の向こうで、ふるふると怒りに震える気配がする。そして……
『馬鹿者ォッ!!』
「ぎゃあっ！」
鼓膜がぁ!!
取り落とした電話から、ハンズフリーで怒鳴り声が聞こえる。
『何故、家が壊れた時点で連絡しなかった！
今の今まで、どこで、どうやって寝泊まりしていたっ!?』
「うるっさいな！　関係ないだろ！」

なんで、後見人ごときに怒鳴られなきゃいけないんだ！
『それでも、伊吹の娘か！
父親に顔向けできなるようなことはするな！』
――伊吹。
「軽、々、しく……」
逆鱗に……触れた。
「パパの名前を出すなぁあああああああァッ!!」
『はや、
――バゴォンッ!!
「はァー、はァー……!!」
……めらめらと、怒りに呼応するように、漆黒の魔力が揺れている。
癇癪と共に振り下ろした手は、電話機を砕き、畳を貫通し、床材を貫いていた。
「うゥウウウ……！」
……それでも、止まらない。
「主、お気を確かに！　怒りに、憎しみに捕われてはなりません！」
必死に私を抑えるリーゼの姿も、どこか遠い。
憎しみに身体を乗っ取られて、『私』は、遠い所からそれを眺めていた。
めらめらと、どろどろと、憎しみが汲み出され、溢れてしまう。
「爺さんッ！」
秀人達が、緊迫した面持ちで飛んでくる。
「……うガァあああァァァァァァァッ!!」
魔剣の現出も、鍛練の成果も忘れ……野獣のように、秀人の首筋に食らい付いた。
「うぁあっ……！」
「ぐルァァァああッ！」
ぶしゅっ、と、血が噴き出し、私の顔を紅く染める。
「秀人さんっ！」
「だい、じょぶ……！」
「ひでと、ごめんっ！」

テスタロッサが、私の背中に手を沿え……

――バチィイインッ!!

……強力な電撃で、秀人ごと私の意識のブレーカーを落とした。

◆　◆　◆　◆

突然の修羅場をなんとかくぐり抜けた。

秀人とはやては、共にフェイトの電撃で意識を失っている。

……が、どういうわけか、はやては秀人の首筋にしがみつき……まるで、抱き着いているような姿勢で気絶してしまっていた。

「……まぁ、このまま寝かせてやろう」

……この老人、どうやら、秀人の身体について知っているようだ。

「こ、こんな危ないヤツ、秀人さんの近くに置いておくなんて出来ない！」

なのはの意見も、最もである。

「……どうやら、お嬢さん方。

あなたたちも、大なり少なり、世界の裏側に関わっておるようじゃな……」

しばし、話すべきかを思案した。

「ワシの見立てじゃが、このはやて……既に一線を越えておる」

一線の意味に気付いたなのは、フェイト、ユーノ、アルフは、戦慄した。

先程の狂乱、尋常な様子ではなかった。頸動脈を噛み千切られ、秀人でなければ間違いなく致命傷だ。

「……答えかねます」

リーゼは顔を伏せるが、その態度が、事実を裏付けているようなものだ。

「！　……秀人さんから、離れなさい！」

なのはが慌てて、はやてを引き離そうとするが……ガッチリと首を

ホールドされ、それは叶わない。
戦慄をもって、はやてを見る面々。
「ふむ……」
が、大家は、別の角度から見ていた。
（……何故、ワシに喰らい付かなんだ？）
憎しみをぶつけるのなら、大家でも良かったはずだ。
だがはやては、一直線に秀人に突進した。
……見ようによっては、秀人に縋るように。
現に今も……秀人にへばり付いて寝るその顔は……狂乱が嘘のように、平素なものだった。
「はやての部屋割、決めたぞい」
面々は、こんな状況下で何を……と、訝しげな顔を大家に向ける。
そして、大家が口走ったのは……またしても、意味不明なことだった。

「……１０５号室。秀人の、隣じゃ」

# A’s編　第四十二話

……また、あの少年の夢を見ていた。
前回は確か……施設の初日だった。
今回は、個室だ。
あれから、何日経っているのかは分からない。そんなに長く経過した感じは無さそうだけど……縦長に三畳くらい。それに反して、天井がやたら高く、小さな窓が一つしかない。
粗末な簡易ベッドの上に、少年は布団に包まって横になっていた。
「……」
目は、開いている。
消沈でも悲嘆でも憤怒でも無く……ただ、無表情だ。
廊下から、複数の足音が聞こえてきた。
その足音は、部屋の前で立ち止まる。
「……」
少年は首だけを動かし、ドアの覗き窓に視線を合わせる。
「よぉう……クソガキ」
醜く歪んだ顔で吐き捨てるのは、この養護施設の所長の男だ。
「どういう理屈かは知らねぇが……よくも、俺の城を傷つけてくれやがったな、あァ!?」
――ガンッ!!
金属の扉を革靴で蹴り飛ばし、威圧的な音を立てる。
「……!」
びくりと、身体を縮こまらせ……ようと試みる。……不自然だ。
少年の身体は、さっきから動いていない。
ただ、布団に包まっているだけなのに……
「チッ……おい」
煙草に火を点け、部下に扉を開錠させる。
「……ひっ」
怯えてるのに、少年は微動だにしない。

ぷかぷかと煙草をふかしながら、少年の横たわるベッドに近付いていく。
煙草の灰が、少年の枕元にぽろぽろと零れ……
（……おい、まさか！）
「ははは……流石に動けないよ、なっ！」
――ジュッ!!
「……あああああっ!!」
煙草の火を、頬に押し付けやがった！
ギシギシと、ベッドから変に軋む音がする。
ここまでされて、動かないってことは……
「おー、怖い怖い。　けど、この拘束衣、高いだけあっていい性能だわ……あっはっは！」
……布団に包まっていたんじゃなくて、犯罪者用の拘束具で、ベッドに縛り付けられていたんだ！
「あつ、や、やだ……！」
ギシ、ギシと軋むが……それだけだ。
コンクリートの壁を破壊するだけの力があっても、伸縮するゴムは力を逃がし分散するため、破壊できないらしい。
「おい、お前達……ここを喫煙所にするぞ」
それを聞いた部下達も、主人と同質の、賤しい笑みを浮かべ……煙草に火を点けた。
――ジュウッ！
「あああああ……！」
肉を焼く音。か細い悲鳴。賤しい笑い声が……劣悪不快な三重奏を奏でる。
（――殺すッ！）
この男だけは、生かしておくものか！
夢の中ということも忘れ、ばたばた暴れる。
……唐突に、画面が切り替わった。
あれから、しばらく経過した頃だろう。

少し、身長が伸びている。
少年は、拘束されるわけでも無く……独房に持ち込まれたテーブルセットの椅子に座り、何やらペンを握っていた。
めくっているのは、本ではなく、算数ドリルのようだ。
「……」
黙々と……ただ黙々と、時に考え込んだり、教科書を見たりしながら、問題を解き進めていく。
その横顔には、段々と精悍さが見え隠れし始めている。
独房には、拘束具の類は見当たらない。
……千切れたゴム紐のようなものがその残骸だと気付くのに、それ程時間は必要無かった。とうとう、拘束具を克服したのだ。
……けど、この少年は、まだこの独房にいる。
しばらく観察してたけど、食事もこの部屋で食べている。
隣室には真新しいユニットバスも併設されていて……
ここが独房から、少年を隔離しておくべく与えられた個室に変化したことが分かった。
さっき、食事を届けに来た職員、酷く怯えた目をしていた。
あれだけ少年を嬲っていた所長も、姿を表さない。それに、部屋の、環境の変化を鑑みるに……
――きっと、腕力を行使したんだ。
拘束も不可能となれば、嬲るどころか返り討ち。
……いや、もしかして、とっくにそうなったのかもしれない。
(あはははっ、やるじゃん!)
感覚に乏しい手で、少年……とはいっても、私より少し上、十歳くらいの男の子の頭を撫でてやる。
少年は、ふっと顔を上げた。
「……」
時計は、午後6時を指していた。
ドリルを仕舞い……部屋の片隅に設置されたテレビの前に座り、電源を入れる。
流れ出すのは、ヒーロー番組のオープニングテーマ。

まぁ……子供だし、普通か。
というか、まだこういうものに興味が向くだけ、マトモな神経をしている証拠だ。
「……」
３０分の放送が終わり、少年は、ベッドに寝転んだ。
そして今度は、本棚から少年漫画のコミックスを取り出し、読み進めていく。
クスリとも笑わず、真剣に……まるで、物語を、そこにある『架空の何か』を頭に刻み込むかのように、真剣に読み耽っている。
……その光景が、急に遠ざかっていった。
あぁ……目が覚める。
全く、いつまで続くんだろうな、この夢は。

……起きたら、目の前に秀人がいた。
寝転がっているとかいうレベルじゃない。
もう、視界一杯に秀人が……
「うぉっ、」
落ち着いた驚き……という、実にわけのわからん感情と共に、秀人を遠ざける。
「ん、む……」
どうやら、秀人は寝ているようだ。
……さっきの和室だ。
床に空いた粗雑な穴が、それを示していた。
……私、どうしたんだっけ。
ジジィにボコられて、食事して、電話して……今起きた。
中間の記憶がぶっ飛んでいる。
うー……思い出せないぞ。
時計を見ると、午前１０時。
「あー……」
寝坊だ。まぁいいや。
「起きたか」

台所からジジィが顔を覗かせた。
「なのはちゃん達は、学校へ行ったぞい。」
「……」
「担任教師には、体調不良と伝えておいた。今日は休むがええ」
「ふん……余計な真似を」
そんなもん、わざわざ伝えなくていいっての。
「少し遅い朝食としようかの。ヒデ坊を起こしておいておくれ」
「なんで私が……」「起きてなかったら飯抜きじゃ」
……リーゼは、どこかに外出中らしい。
となると、食事は買うか、ジジィが出したのを食べるしか無いわけだ。
買いに行く手間と、秀人を起こす手間を天秤にかけ……後者に傾いた。
「おいコラ起きろー」
頬をぐいーと引っ張る。
「……う、」
あれ、起きない。
んじゃ、もっとこう……ぐいっと、ぐにょーん、と。
「うー……むー……？」
ケケケケケ……超楽しい！
「あ？」
「あ」
起きた。
「……何してんの？」
「え？　遊んでるんだけど？」
「……やめい」
ま、やめないけどねー。
「ううううう」
「やーめーろー……」
くりっ、と首を横に向ける。その先にある時計を見た途端……
「……ぎゃー！寝過ごしたぁあああ!!」

がばっと一気に飛び起きた。
「し、仕事！　現場が！　持ち場が！」
珍しいことに涙目になりつつ、携帯電話を取り出した。
「鉄郎には連絡しといたぞ」
ジジィがまた顔を出し、言った。
「……」
ぱっ、と、動きが止まった。
「よ、よかったあ～……！　迷惑かけるところだった……」
（ふん……馬鹿じゃないの）
たかが仕事場だろうが。なーに必死になってんだか。
「ジジィ、朝飯」
「うむ」
焼き魚と白米を咀嚼する。
「おいはやて、ネギも食え」
秀人が口うるさく言う。
まったく、リーゼといい秀人といい……
「野菜は嫌いなの。だから食べない」
「お子ちゃま」
……なんつった？
「ガキ味覚」
「ぶっ殺すぞ!?」
「二人とも」
ぎくっ、と身体が強張る。
「行儀の悪い子には、ゲンコツかのう？」
「「……」」
……怖いわけじゃないからな！
「では、行くとするかの」
「リーゼなら、ヒデ坊んとこの末っ子と遊びに行ったぞい」
……末っ子？
「ああ、ヴィータと一緒か……」

お前、どんだけ扶養してるんだよ……
「ふむ……では、出かけるとしようかの」
「そうだな」
二人の間だけで納得するな。
まぁ、行ってらっしゃーい。
「……おぬしも来るんじゃ」
……何で。
「だって、お前の家具だぞ？」
「知らねぇよ！」
何で本人おいてけぼりで決定してんだよ！
「なぁに、心配いらん。引越し祝いに奢ってやるわい」
「爺さん爺さん、俺ん家のちゃぶ台、もちっと大きいのを……」
「学生限定じゃ馬鹿者！」
――ごんっ！
……まぁ、タダなら、貰ってやらなくも無いけど。
「ほれ、準備せい」
「「できてるけど」」
秀人も私も、普段着のまま寝てたから……髪さえ整えればすぐ出られる。
「んじゃ、ヒデ坊はメット持って来い」
チャリッ、と何かの鍵を
「げ、まさか……！」
ぽんっ、と投げ渡されたボールのようなものを、受け取る。
……俗に言う、ヘルメットだった。
「爺さん、やっぱ電車にしようぜ！な!?」
なぜか食い下がる秀人。
いまいちわからないけど、とにかく外に出よう。
……甘く見ていたよ、ジジィのこと。
どーせ、秀人があの黒バイク、ジジィはスクーターにでも乗るんだろう。
そう、勘違いしていた。

――ドルッドルッドルッ……！
図太い排気音を響かせるのは、黒いバイク。
秀人のものとは違う……というか、ある意味二輪ですらない。
確か……『サイドカー』とか、『側車付き二輪車』とかいう部類だ。
ハンドルを握るのは、当然この乗り物の所有者……ジジィだ。
「うむ、いい音じゃ。　……では、行くとするかの。はやては側車に乗るがええ」
言われるがまま、側車に身体を潜り込ませる。
「あー……マジかよ……」
何でそんなに嫌なんだろう……と思ったけど、納得だ。
ハンドルを握るのはジジィ。側車には私。
となると、秀人は……ジジィの後ろ。
「うあー……超恥ずかしい」
「ぶつくさ言うでないわ。行くぞい」
がしゃっ、という衝撃の後、ドルルルルッ……と重低音を吐きだしながら、サイドカーが発進した。
「そうそう、はやての部屋はヒデ坊の隣じゃ」
……勝手に決めるなっつってんだろぉおおおおお!?

◆　◆　◆　◆
その、前の晩。
海鳴市の、とある居酒屋。
二人の女性が、晩酌を交わしていた。
一人はショートカットに私服。もう一人は、ポニーテールによれたスーツ姿だ。
「いっちゃん、きいてる!?」
スーツ姿の女性が、ジョッキをダンッ！とたたき付けるように置いた。
酒が回っているらしい。

「はいはい、聞いてますよ咲ちゃん」
なのは、フェイト、はやての担任、咲だった。
「あのね、私、けっこう頑張ってると思うのよ！」
「そうだね、頑張ってるね」
ショートカットの女性こといっちゃんは、聞き役に徹していた。
「初めての担任クラスでぇ、」
「うんうん」
「初めての転校生がぁ、」
「うんうん」
「始業式サボったんだよ！クラスの子と一緒に！信じられる、ねぇ!?」
「……咲ちゃんだって、サボってたじゃないの」
「何か言ったぁ……？」「ううん、何も」
酔っ払いの絡みを、するっとかわした。
「せんせーに、またおこられるしぃ……」
怒られたのではなく、遅れて来るであろう生徒の案内を任されたのだが……
「たまには、褒めてくれたっていいじゃないの！」
びえぇ……と、テーブルに突っ伏して号泣する。
「褒められたこと、あった？」
「あるよー」
泣き顔から一変。にへー……と、締まりの無い笑顔を浮かべた。
「高校大学に受かった時でしょー？」
「うんうん、咲ちゃん、頑張ってたもんね……元ヤンが同じ大学のキャンパスにいてびっくりしたけど」
ちらっと、本音が覗いた。
「大学で、教員免許を取ったとき！」
「夢が叶ったんだもんねぇ」
「うん！」
……というか、逐一報告していたことの方が驚きだ。
「それだけだあああぁぁぁ……！」
びえぇ、と、また泣き出す。

「その生徒さんの名前は？」
「たかまちなのはさんー」
「……高町？」
いっちゃんは、眉を寄せた。
「ふぇいとさんー」
外国人の名前。これはスルー。
「その二人？」
「もうひとりー、もうひとりはー、」
フラフラ定まらない視線で、言った。

「やがみはやてさん」

――ガシャンッ！
「……ぁ？」
咲が、少しだけ我に帰った。
いっちゃんが、タンブラーを取り落としたのだ。
店内は、その音に一瞬だけ静まり、また喧騒を取り戻す。
「いっちゃん、どーした」
の、と言い終わるより早く、いっちゃんが咲の肩を掴んで引き寄せた。
「八神さんが、学校に来ているの!?」
あまりの迫真の様子に、咲はぱちくりと目をしばたたかせた。
「うん、来てるけど……いっちゃん、知り合いなの？」
「こうしちゃいられないわ、咲ちゃん！　詳しく聞かせて！」
「い、いっちゃん、石田ちゃん、どーしたのー……？」
ほけーっとした咲を引きずり……ショートカットの女性こといっちゃんこと石田は、足早に咲のアパートを目指した。

# A’ s編　第四十三話

時間は、少し遡る。
はやてが失神した後、大家によってはやての部屋割が決定された。
……秀人の隣室。
静まり返る。
なのはは目を見開き、反抗した。
「嫌です!!」
……当然だろう。
子供じみた嫉妬ではなく……事実、はやてが秀人に危害を加えている場面を目撃してしまったのだ。
しかも、先程の大家の発言である。
家族を危険に晒すなど、そんな危険な選択をするわけにはいかなかった。
「んっ……」
リーゼが、魔力を使って人間に変身した。
注目が集まる中、リーゼは進み出て、膝を折り……
「……どうか、この通りです」
土下座した。
わざわざ人間の姿になってまで……敢えてそうするのだから、相当なものだ。
「主を、嫌わないでやって下さい」
平身低頭、いや、それ以上の懇願だった。
「……」
はやての罪について、弁明しようと思えばいくらでも出来た。
だが、それでは疑念が残る。
故にリーゼは、懇願したのだ。
今はまだ、聞かないでくれ……疑念を、飲み込んで欲しい、と。
「リーゼ、さん……」
なのはは、困惑していた。
「……ふむ、顔をあげてみぃ」

大家の一言で、また状況が動き出した。
「そんな真似せんでも、無下にはせんよ」
「……はい」
よっこいせ、と、大家は正座するリーゼの前に胡座をかいた。
「さて……おぬしの願いも聞いてやらなくはないが、なのはちゃんの不安も最もじゃ」
皆も、何となく正座する。
「まぁ何も、洗いざらい話せとは言わん。ワシの質問に、一つだけ答えてくれんかのう」
「……はい」
穏やかな声に、リーゼは蚊の鳴くような声で返事をした。
「はやては……好き好んで、他人を傷付ける子かのう？」
……あくまで、婉曲に聞いた。
「……」
リーゼは、答えかねていた。
好き好んで……の範囲が曖昧だ。
街のクズを『練習』という名目で虐殺した……あれは間違いなく、『好き好んで』の部類に入る。だが……
「私と契約してからは、無為な暴力は一度も振るっていないと断言できます」
リーゼを配下に加えてからは、たとえクズが相手であろうとも、一定の制裁を加えるに留めていた。
理由無き者に、手を下したことなど一度も無い。
美香を始めとした親しい者は、言わずもがな。
「……らしいぞ、なのはちゃん」
なのはは、フェイト、ユーノ、アルフと順々にアイコンタクトを取り……
「……わかりました」
渋々だが、頷いた。
「嫌うな、っていうのは、正直、無理ですけど……偏見は、捨てます」
「……ありがとう、ございます。高町さま」

リーゼはなのはの手を取り、深々と頭を下げる。
「え、あの、いや……『様』とかいいです……呼び捨てで」
「では、なのは。ありがとうございます」
「あはは……極端な人だなー……」
こうまで素直に礼を言われると、さすがに気恥ずかしいらしい。

秀人とはやてが眠る横で、大家と茶を飲む。
生真面目な同士だからか、話は弾んでいた。
「へぇ……じゃあ、八神の剣はリーゼさん仕込みだったんですね」
「主の剣の腕は、それは素晴らしいものです。……なのは、貴方は？」
「兄から、指導を受けています。まだまだですよ」
「……今度、我が主と手合わせを願えませんか？　私一人が相手だと、どうしても慣れが出てしまうようでして」
「……」
もうガチでヤりかけてしまいました……とは、言えないに違いない。
「あ、あー……そういえば、格闘もリーゼさんが？」
話を逸らした。
「格闘は、秀人との鍛練で磨いた、とおっしゃっていました」
「……へぇ」
ぴきっ……と、微妙に固まる。
異世界で。
二人っきりのマンツーマンで。
さぞ、上達したに違いない。
……いらいらいら。
「ヒデ坊はワシが育てた」
どっかで聞いたタワ言を口に出す大家。
「ヒデ坊は免許皆伝で、暇になっとったのう」
……暇だからといって、数ヶ月に及ぶ旅行に出るものだろうか。
「うむ。はやてには、ワシから稽古でもつけてやるかの。ラジオ体操

よか効果的じゃて」
「……お手柔らかに」
その拳の威力を、身を以て味わっているリーゼは青ざめた。
談笑は、その後も続き……
「ふぁ……」
ぱたん、と電池が切れたようにフェイトがアルフの膝に倒れ込んだことで、お開きとなった。

翌朝。
まだ、太陽も昇り切っていない早朝。
「……今日も、ハードだった……」
ふらふらになったヴィータが、帰宅した。
「畜生、マリーの奴。なぁにが『ちょうどいいところに』だ……！」
戦闘装束たる騎士の鎧を、あんなフリフリのドレスに固定され……解除方法をマリーに尋ねに行ったのが二日前。
そうさたら何故か、何かの怪しげな実験に付き合わされ……また徹夜である。
「あー、ねみー……さっさと寝ようそうしよう……」
と、部屋の鍵をポケットから取り出した時、隣室のドアががちゃっと開いた。
（隣……？　誰か住んでたのか）
そして、出てきた人物の顔を見て……完全に、思考をフリーズさせた。
隣室の住人……リーゼは、ヴィータを一瞥し、社交辞令的に一礼した。
「……秀人のご家族の方ですね。ご挨拶が遅れました。
わたくし、隣に越して参りました、リーゼと申します」
「……」
「……？」
反応が返ってこないことを不思議に思いながら、リーゼは大家の部屋へ。

「待て待て待て！」
その手を掴み、リーゼを引き止めるヴィータ。
「？　なにか？」
首を傾げるリーゼ。
ヴィータは、そんなリーゼの顔をしばらく凝視して……ふっと力を抜いた。
「わりぃ……人違いだった」
そのまま家に入った。
（馬鹿馬鹿しい……人違いに決まってる）
ベッドに横になり、目を閉じる。
――焼け落ちる都
あえて思い浮かべる、呪わしい情景。
だが……『彼女』を想起するには、それしかなかった。
『彼女』の姿は、その場面にしか無かったのだから。
一体、どれだけ過去なのかは分からない。
何度目かも分からない。
だが……焼け落ちる街と、瓦礫の中、その手に、本を手に立ちすくむ『彼女』の姿だけは、変わらずだった。
「……すぅ」
眠りに落ちていく意識の中、ヴィータは、『彼女』の名を思い出そうとしていた。

「……」
ゆさゆさ、という感覚。
ヴィータは、重い瞼を持ち上げる。
「おはようございます、ヴィータ」
……隣室のリーゼが、何故かいた。
「ぎゃっ！」
飛び起きる。
「な、な、な……なにしてやがるっ人ん家で！」
「失礼しました……なのはから、入室の許可を頂いていたので」

「なのはがぁ……？」
うろんな目つきになるヴィータに、リーゼは頷いた。
「実は、困っているのです。なのは達は学校、我が主は休息中と……手を貸していただけませんか？」
ぴこぴこ、と動くネコミミと尻尾。
「……内容は？」
はぁ……と荒い息をつく。
「主の、日用品を揃えたいのです」
「……」
勝手に行け、と言いたいところだったが……
「……わかった。少し待ってろ」
ヴィータはシャワーを浴びて着替え、リーゼと共に街へ歩きだした。
（……やっぱり、似てる）
隣のリーゼは、ネコミミをぶかっとした帽子に隠し、凛とした表情で歩いている。
「アンタ、誰かの使い魔か」
隠しているということは、リーゼのネコミミが偽物ではないという証だ。
「……使い魔、というか、契約者、です」
ぴょこん、と尻尾が飛び出す。
「無目的に放浪していたところを、今の主に拾われたのです」
ヴィータは立ち止まり、リーゼもつられて立ち止まる。
「どうかされましたか？」「お前、さ」
ヴィータは、核心に踏み込んだ。
「アタシの顔に、見覚えはねーか？」
その問いに、リーゼは……

◆◆◆◆

授業が終わり、下校の時間になった。
「なのは、かえろー」
「うん、そうだね」
フェイトを伴い、ランドセルを背負う。
望は、葉山君の付き添い。
これから、サッカーの練習があるらしい。
「じゃあね、フェイトちゃん」「まったねー」
クラスメイト達が、口々にフェイトに挨拶し、教室を出ていく。
「アサミヤ、カトウ、またね……」
人見知りながら、しっかりと挨拶を返すフェイト。地道に、クラスに溶け込みつつあるようで嬉しい。
誤算だったのは……
「高町さんも、またね」
「ばいばーい」
『フェイトへの仲介役』というポジションに収まった私にも、こうしたコミュニケーションが生まれたことだった。
さーて、帰るか。
「あ、なのはさん、ちょっといい？」
と、先生に呼び止められた。
「どうかしました？」
先生は、申しわけ無さそうにしている。
どうしたんだろう？
「あの……八神さん、なんだけど」
「……」
……まぁ、リーゼさんとの約束の手前、聞いておかないわけにもいかないだろう。
「私の友達」「先生、友達いたんだ」「い、いるわよぅ！」
おっと、話の腰を折ってしまった。
「で、何ですか？」
「……はぁ。その人が、どうしても、八神さんに会ってみたいって……」

？　なんだそりゃ。
「その人……石田って言うんだけど、お医者さんでね。八神さんの主治医、だったの」
……過去形？
「治療に来なくなっちゃって、いっちゃん、すごく心配したみたいなの」
へぇ。
「で、昨日の夜、登録されてる住所に行ってみたんだけど……瓦礫の山になってて、会えなくて。なのはさん、八神さんがどこにいるのか、知ってると思って」
「あぁ、知ってますよ」
なにせ、今朝まで一緒だったんだ。
先生に伝えたところ、件の石田さんとやらに電話し、すぐに来るそうだ。
校門前で、三人で待つ。
十五分はした頃だろう。
校門に、白いセダンタイプの自動車が横付けした。
「ごめん咲ちゃん、お待たせ。……あなたたちも、ごめんなさいね」
降りてきたのは、ショートカットの女性。
「はじめまして、石田です」
「高町なのはです」
「……フェイト」
「高町さん……？あの、失礼だけど、お父様のお名前は、士郎さんって言わない？」
おや……父さんの知り合いだろうか。
「ええ、間違いないです」
「まぁ……そうだったの」
？
「私、海鳴病院で、神経内科の担当医なの」
だから、父さんを知っていたんだ。

車に乗れば、アパートまではすぐだ。
あっという間に到着。
部屋のドアノブには、鍵が掛かっている。
秀人さん、外出してるのかな……？
携帯電話を確認すると……授業中に、メールの着信が入っていた。
マナーモードにしていたおかげで、気づかなかった。
文面を確認し……
「すみません……今、外出中みたいで」
仕方ないから、私たちの家に上がってもらう。
「粗茶ですが」
お茶を出した。
「……なに、この出来た子供。咲ちゃんよりしっかりしてるじゃない」
「ほっといてよ、もう！　いっちゃんの意地悪！」
どうやら、仲が良い二人みたいだ。
ドルルルッ、と、バイクの重低音を鳴らしながら、見慣れないバイクが敷地に止まった。
運転していたのは、大家さん。
側車には、はやて。大家さんの後ろ、タンデムシートには、秀人さんが座っている。
「帰ってきたみたいですね」
さて……お出迎えだ。
「おーっす、たっだいまー……って、客が来てるのか」
秀人さんが帰ってきた。
はやては、大家さんの部屋に行っちゃったか。
「秀人さん、お帰りなさい」
「おかえり、ひでと！」
「ただいま。なのは、フェイト」
その目線が、先生と石田さんに向いた。
「あれ、先生。それに……」
ふいっ、と。
秀人さんと、石田さんの目が合う。

「秀、人……？」
石田さんは、秀人さんの顔をしげしげと見つめ……
「あなた、吾妻秀人くん!?」
驚いたように、教えたはずの無い、秀人さんのフルネームを叫んだ。
秀人さんは、最初は怪訝に……そして。
「……ッ!?」
苦虫を噛み潰したような顔になった。
秀人さん……？」
どうも、様子がおかしい。
固い表情で、石田さんを睨むようにしている。
「あ、あの……違った、かしら？」
「……違いません」
……冷たく、凝り固まった声。
あまり聞いたことの無い声色に、畏縮してしまう。
「……なのは、フェイト。はやては、昨日の部屋にいる。先生を案内してやってくれ」
「え、でも」
はやてに会いたがってるのは、石田さんなのに。
「いいからっ……！」
秀人さんは……引き絞るように、言う。
「あ……わ、悪い」
我に帰り、謝る。
「……あ、うん」
つい呆けてしまった。
……これは暗に、石田さんと二人で話があるということだろう。
私たちは二人を残し……大家さんの部屋に向かった。

◆◆◆◆◆

二人になった部屋。

秀人は、石田と向き合っていた。

「……どういうつもり」

秀人は、石田と目も合わせない。

「八神さんの、主治医だったことがあるから……」

石田もまた、少し接し方をはかり兼ねている。

「……身体は、どうなの？」

「……」

黙秘。

「秀人くんが小さかった頃、病院で会ったの、覚えてる……？」

秀人の幼少期。病院。

それはつまり……

「ええ、お久しぶりです……石田先生」

――超人病。

秀人の根幹にある、あの病の関係者。

当時は研修という形で、その対症療法に携わっていた。

秀人が、九歳になったばかりの頃だった。

「……大きく、なったわね」

「……」

感慨深く、思いを吐き出す。

「研修が終わって引き上げる時も、気掛かりで……あの後、尋ねたんだけど。　退院して、施設に入ったって聞いて……でも、元気なようで、安心したわ」

――どこまでも残酷な、優しさを。

その手が、秀人の、少し硬い髪に触れ……

「……やめてくれッ！」

その手を、振り払う。

石田は、びくっ、と手を引っ込めた。

「今更、何で俺の前に現れた！」
　罪悪感を覆い隠すように、畳み掛ける。
「偶然、なのよ。本当に……私だって、驚いているわ」
「ふざけるなッ!!」
　それが、白々しい態度にでも見えたのか、秀人は激昂した。
「俺を施設に売り渡しやがったこと……忘れたとは言わせねぇぞ！」
「違う……！あれは、上が勝手に決めて……！」
　どれだけ言葉を重ねようと……病院側が、秀人を施設に放逐したという事実は変わらない。
　秀人にとって石田は、病院側の人間であり……敵だった。
「うるさいっ！」
　ぐいっ、と、怪力で石田の腕を掴み、立ち上がらせる。
「痛ッ……！」
　その力に石田は、秀人が未だ、病と共にあることを理解した。
「かえ、れ……！」
「秀人くん、お願い、話をさせて！」
　がしゃん、と、家具にしがみついた石田を秀人が引っぺがす度、何かが壊れる音がする。
「帰ってくれぇッ!!」
　石田を叩き出し……秀人は、滅多に使わないチェーンまでを施錠し、閉じこもった。
「はぁ、はぁっ……！」
　心臓が激しく収縮する。
　額には、じっとりとした脂汗が浮かび上がる。
　……凄まじいストレスが、秀人を蝕んでいた。
　柱を背に座り込み、膝を抱える。
　からっ……と、施錠を忘れていた窓が開いた。
「……！」
　ぎろっ、と睨みつける。
　だが、覗いてきたのは石田ではない。
「ひでと、ボクだよボク。こわいかおしないでよー」

にへ、と、締まりの無い笑顔を浮かべる、フェイトだった。
驚くべき柔軟性で、窓枠から身体をするりと滑り込ませる。
「どうかしたの？」
ピリピリした雰囲気を漂わせる秀人の隣に、ぴったりと座る。
「……何でもない」
「そんなかおして、なんでもない、なんてわけないじゃん」
そんな雰囲気など、どこ吹く風とばかりだ。
「……」
黙る秀人の横に、ただ座る。
秀人が話し出すまで、根気よく。
「……あの人、な」
ぼそっと小さく、話し出す。
「俺の主治医……の、教え子みたいな人だったんだ。漫画とか見せてくれたり、菓子くれたりして……慕ってた」
けど……と、続く。
「……俺の病気には、何の学術的価値が無いって分かって、医療費の補助がなくなって……それっきり、会ってなかった」
「……」
「分かってるんだよ。俺だって、そこまで馬鹿じゃない。優しくしてくれたのは、ただの同情で……構ってくれたのは、あの人の仕事だからだ。施設行きだって、案を出したのはもっと上層部で、最終的に決定したのは……俺の、母親だ」
「……」
フェイトは、黙って……秀人に寄り添う。
「でも……納得できなくて……」
顔を曇らせた。
幼く、まして、母親から見放されるという恐怖に苛まれていた秀人にとって、仕事でも、義理でも、同情でも……その交流は、暖かいものだった。
それを、一方的に断ち切られた秀人は一体、どのような気持ちだったのか……筆舌にしがたい。

「わかってるんだよ」
突然、声を荒げる。
「石田先生は悪くないって
怒るのなんて筋違いだって
でも」
ぐしゃっ、と髪を掻きむしり……搾り出すように、言った。
「俺は、あの人を許せない」
――手放すのなら……何故、手を差し延べた。
「畜生、何で……もう、十年近く経ったのに……！」
忌まわしい過去が、鎌首を擡げてきた。
「ひでと」
フェイトが、秀人の手に手を添える。
「ボクは、ひでとじゃないから……ひでとの気持ちも、石田って人のことも、完全には理解できない」
「……」
いつもの軽さが嘘のような、凛とした声。
「だから……話してみよう？　許せなくても、話をしよう？」
「でも……また、怒るかも、」
不安になる秀人に……フェイトが、明るく笑いかけた。
「大丈夫。ひでとには、ボクが……ボク達が、ついてるんだから」

……そして、再び大家の部屋。
そこには、はやてと、リーゼと、咲と、大家と、石田と……
「ぷっぷくぷー。子供みたいに怒って、子供に慰められる、情けない男の姿を見たの。
なっさけないやつなの！」
……アイが、いた。
「……」

ぴくぴく、と秀人のこめかみが痙攣する。
「ほんっと、精神的にも力量的にも未熟な奴なの。やっぱりおまえには、アイの力が絶対に必要なの」
ぱたぱたと素足を揺らし、小馬鹿にした口調で秀人をつつく。
「さ、わかったら、『ボクが間違ってました。改心してアイさまの言う通りにします』と懺悔するの」
例の、秀人をマスターにふさわしく、なんたらかんたらの話だ。
「そうしたら、まぁ……おまえを正しく導いてやることも吝かでは無いの、ぼけなす」
「……決めたわ。ぜってー言わねぇこのポンコツ」
「……ポンコツ？」
ぴきっ……と、アイもまた頬を引き攣らせた。
「いま、ポンコツと言ったの？　このアイを……最新最高スペック、デバイス完成型の一つである、アイを？」
「ふん、過ぎたるは及ばざるが如し……用途に合わない過剰性能なんざ無駄なんだよ。
わかったら、俺に合わせやがれ、駄目デバイスめ」
「使いこなす技量も無い分際で、フォーマットなんて口にするものじゃないの……ま、今のままのお前には、1バイトだって使わせてやらないの！」
「いらねぇっつってんだろ、ポンコツ！」
「いい加減、アイの言う通りにするの！」
アイが床を蹴り、秀人につかみ掛かった！
「おまえが悔い改めれば、使わせてやると言ってるの！　こんな破格の条件を蹴るなんて、おまえは馬鹿か大馬鹿、超馬鹿のどれかなの、この馬鹿！　分からず屋！」
「ンだとこのポンコツ！」
「もう我慢の限界なの！」
「こっちの台詞じゃぼけー！」
最早、石田などおいてけぼりで、アイと大喧嘩する秀人。

その喧騒の中……石田は呆然と、だが確かに、口元を綻ばせていた。

# A’ s編　第四十四話

担任の先公が、いきなりやってきた。
サボるな、とか、そんな話かと思っていたけど、違うみたいだ。
先公を連れて来た高町とテスタロッサは、どこか落ち着かない。
話も始まらないまま、時間だけが過ぎていった。
「ジジィ、腹減った」
「夕飯まで待たんか……それと、先生の話をしっかり聞いておけい」
えー……やだ面倒臭い。
「あの、八神さん……」
「何だよ」
「……学校、そんなにつまらない？」
「……ったりめーだろ」
そもそも、転校したのだって諜報が目的だ。
情報を集めて、油断させて……ぶっ倒すためだ。
誰が、好き好んであんな所に行くものか。
「あのね、八神さん」
「あァ……？」
尚もしつこく話し掛けてくる先公を睨む。
「……そろそろ、運動会があるの」
……忘れがちになるけど、一応私は、年齢一桁代だ。
「ふぅん……だから？」
「それをきっかけに、クラスの皆と、もう少し、お話してくれたらなぁ、って……」
「余計なお世話だ」
人のスタンスに口出しするんじゃねぇよ。
「でも、せっかくの行事だし……きっと、楽しい思い出になるわよ」
「……チッ」
あーあ、押し付けの善意って嫌だね。
それが、いかに迷惑なことなのか、全く自覚の無いところが。

「主、ただいま戻りました」
お……リーゼだ。
「あのなぁ……出かけるなら、伝言くらい残せっての」
「申し訳ありません、とても良く眠っておられましたので」
はぁ……なら、メモ書きでもいいだろ。
「あ、ヴィータはどうしてる？」
高町が聞く。
ヴィータ、って、秀人んとこの末っ子か。
「眠そうにしていたのですが、秀人の部屋に入れなかったので……勝手ながら、我々の部屋で休んでもらっています」
「そう」
少しした後。
がちゃんがちゃん……と、何か物々しい音がした。
『お願い、話をさせて！』
……？
どっかで聞いた声だな。
『帰ってくれぇッ!!』
……今の、秀人か？
随分と切羽詰まった……あまり聞いたことが無い類の声だ。
「……！」
高町が、いてもたってもいられなくなって立ち上がる。
「なのは」
それを、テスタロッサが止める。
「ちょっといってくるね」
……止める間も無く、出て行った。
「……お願いね、フェイト」
……あいつでも、あんなこと言うんだな。
ドアが開いて……何やら、人数がドカッと増えてきた。
「お邪魔します……なのは、ただいま」
「お邪魔するよー」
……高町と、テスタロッサの使い魔。

それから……
「ただいまなの」
……漆黒の髪に紫紺の瞳。
秀人のデバイス（仮）、アイだ。
そして……最後尾に。
「……はやてちゃん」
……実に懐かしい人がいた。
一年ぶり……くらい。
「……石田先生」
気まずい……
「あ、あー……ちょっと、用事が出来たんで……さいならっ！」
ドアに向かって、最短距離をダッシュ！
――がしっ
「待たんか」
……回り込まれた。
「は、離せジジィ!! 離せぇぇぇぇ!!」
首根っこを鷲掴みに……って、私は猫じゃない!!
「嫌なことから逃げるのは、お前の悪い癖じゃよ」
ほっとけ！
「はやてちゃん……？」
石田先生は、呆然としている。
……あ、やべ。
石田先生は……私の主治医で、半身不随の診断をした当人だ。
その私が、こうして歩き回っていたら……そりゃ、驚きもするし、不審にも思う。
今の私の足……というか半身は、魔力を擬似神経として動かしている。
通常の医学ではない、裏技だ。
まずったなぁ……
「ていうか、先生。なんでこんな所にいるの」
私は、話を逸らすことにした。

「咲ちゃんが……はやてちゃんを知ってるって言うから」
「咲……？」
誰だ、それ。
「私！　私の名前！　富山咲ですって、紹介したじゃない！」
「まぁどうでもいいけど」
「……」
石になった。
「先生、どんまい……」
そして、高町に慰められていた。
「あんた、秀人と何の話してたの？」
石田先生が口を開くより先に、質問をぶつけた。
「つーか、秀人とどんな関係よ」
「……う」
話せないか。
まぁ、そんな気もしてた。
あの極楽蜻蛉な秀人が、あんなに声を荒げるんだ。
「アイが推測するに～……あのぼけなすの、身体のこと？」
だろうなぁ、と思う。
「……昔、秀人くんを診たことがあって」
ふっ、と、力無く苦笑した。
「怨まれて当然なのに……今更、『話をさせて』というのも、勝手な話よね……」
「いっちゃん……」
その肩を、先公が支えた。
「……ごめんなさい、今日は帰ります」
諦めたように、立ち上がった。
「んー……ちょっと待つの」
それをアイが引き止める。
「……」
じっと虚空を見つめて……何かを、聞いている……？
「あんたまさか、下の会話に聞き耳立ててるわけ？」

人間では無いのだし、それくらいは可能だろう。
「ぷっ……なっさけなーい、なの」
無表情のまま、そんなことを言った。
「こっちに来るの」
がちゃっ、とドアが開く音。かん、かん、と階段を上る音。そして
……
「ただいまー！」
アホ面下げたテスタロッサに手を引かれ、
「……」
気まずそうな顔をした秀人が、部屋に入ってきた。
「なっさけない奴なの！　ぷっぷくぷー！」
アイが早速秀人を突っつき回し、喧嘩を始めてしまった。

「……うぅ、痛いの」
「……何で俺まで」
二人は、ジジィの鉄拳制裁を受けた。
「……秀人くん」
「……なんすか」
むっつりと、不機嫌丸出しの口調で返事をする。
「……ごめんなさい」
ストレートに、謝った。
「……！」
びっくりして固まる秀人に、謝り続ける。
「中途半端に優しくして、ごめんなさい。
会いに行かなくなって、ごめんなさい」
秀人は、まるで拗ねた子供みたいにそっぽを向いている。
「こら、ヒデ坊……」
「ひでと、」
「秀人さん……」
「秀人」
「秀人！」

「ぼけなす」
『秀人！』
皆、口々に秀人を諌める。
「ごめ……な、さ……!!」
うわ泣いちゃったよ！
「……あー!!わかったよわかりましたよ！」
根負けした。
ようやく、石田先生の顔を見た。
「一つ、聞いていいですか」
「……ええ」
「俺に優しくしてくれたのは、同情ですか？」
「……」
石田先生は、たっぷり悩み……
「そうじゃない……と言ったら、嘘になるわ」
と、答えた。
ふぅん……そういえば私も、あれこれ世話焼いてもらったっけ。
「……」
けど……同情だって、優しさの内だよ。
それを非難することなんて、出来ない。
「……秀人くん」
「……なんすか」
「今日は、帰るわね」
「……はい」
と、ポケットから小さなケースを取り出し、カードみたいな……名刺を、秀人に手渡した。
「また今度……秀人くんの気が向いたら、連絡してくれたら嬉しいな」
「……はい」
秀人はそれを、大事に仕舞った。
「はやてちゃん」
「んぁ……？」
先生は、二枚目の名刺を取り出して、私にも手渡した。

なになに……？
海鳴総合病院・神経内科勤務医……？
って、美香の入院してる病院じゃないか。
しかも、神経内科ってことは。
「先生、美香を知ってるの？」
「……？はやてちゃんこそ」
「うん、まぁ……トモダチだし？」
「え、お前友達とかいたの？」
「ぶっ殺すぞてめぇ!?」
話の腰をブチ折りやがって！
ジジィがいなかったら、魔剣の餌だ！
「……そっか。はやてちゃんのことだったんだ」
……うん？
「……あんまり、いじめちゃ駄目よ」
……一体、何を話した美香。今度……いや、今夜、聞き出してやる。
「それじゃ、またね」
そうして、石田先生は帰って行った。
「さて……そろそろ、夕食にするかのう」
お、やっとだ。
「今夜は何？」
「昨日は魚か……んじゃ、水炊きでも作るかの。リーゼ、手伝っておくれ」
「はい」
「先生、よろしければ、御一緒しませんかな？」
「へっ？　いえ、お構いなく……」
「っていうか先生、どうやって帰るつもり？」
「……あー！　いっちゃん先に帰っちゃったよー!?」
……石田先生の車に乗ってきたらしい。
「道、覚えてないの？」
車でも、そのくらいは覚えてるだろうけど。
「あぁ、無理無理」

それを、高町が否定した。
「先生、寝てたし」
「よだれ、たらしてたよね」
……子供かよ。
石田先生に慌ててメールをする。
――ぶぃーん
……直後、階下から震動音。
「……まさか、な」
秀人が出て行って、すぐ戻ってきた。
「……これ、もしかするけど、」
手には、メタリックレッドの携帯電話。
「いっちゃんのだ……」
がっくりと崩れ落ちた。
「預かるよ」
秀人からそれを受け取る。
どうせ今晩、美香に会いに行くつもりだし。
そのついでに、預けてしまおう。
「夕飯が終わったら、ヒデ坊に送ってもらえばええ。女性の夜歩きは、危ないからのう。最近、なにかと物騒じゃし」
……もしかして、私のことか？
大量失踪事件……とか、世間を騒がせているらしいけど。
「悪い、爺さん。ついでなんだけど、俺達もここで食べていい？」
「あー、そっか。ヴィータ……」
「あいつ、一度寝たら起きないタチだし……」
部屋が、物理的に使えないのか。
「ま、仕方無かろう。手伝うんじゃぞ」
「分かってるって」
その晩も……私は、大勢の人間と一緒に食卓を囲んだ。
「げっぷ……」
つい、食べすぎてしまった。

夜風が、満腹の身体に心地好い。
「主、集中を乱さずに」
「うん」
隣を飛行するリーゼが、指示を飛ばす。
「ですが上出来です、主。『スレイプニル』も無しに、そこまで安定するとは」
「まぁ、あっちの方が楽っちゃ楽なんだけどねぇ……」
嫌ーな思い出が、脳裏をよぎる。
「アレ、弱点を晒しているようなものなんだよ」
飛行をアレに頼り切っていた結果、切り落とされ、撃墜された。
「補助輪は、もう卒業だよ」
そして、美香の病室に着いた。
コンコン、と窓をノックする。
「姐さん、いらっしゃい！」
朗らかな笑顔で、私を出迎える。
「よっ。元気そうで何より」
リーゼと共に、着地。
「リーゼも、いらっしゃい！」
最初はリーゼを警戒していた美香だけど、何度か顔を合わせていたら打ち解けた。
聞き出してやろうかと思ったけど、楽しそうにお喋りをする美香を見ていたら、その気は無くなった。
「それでね、お兄ちゃん、警備員さん呼ばれちゃって大変だったんだよ」
美香は、あまり兄とは似ていないらしい。
「だから、お姉ちゃんも『金髪は止めなさい』って言ってたのに」
けらけらと笑う。
お喋りを終えたら……魔法の練習だ。
どうやら美香は、中・遠距離型らしい。
身体にハンデがあるのだから、当然と言えば当然だ。
防御が鬼のように固い高町とは違うから、ちょこまか飛び回って、

チクチク削っていくのが性に合っている。
……私に内緒で、リーゼから何かを教わっているのは知ってるけどね。
訓練は、実戦方式。
リーゼが審判を勤め、私と美香が戦う……というもの。
「そりゃー！」
――ズバァアアッ！
間の抜けた声とは裏腹に、結構な威力の砲撃が、私の服を掠めた。
この模擬戦のパターンは……
私は、いかに近付いて美香を切り伏せるか。
美香は、いかに遠くから私を撃ち落とすか。
「まだまだ行くよー！」
――ヒュガガガガッ！
ブラッディダガーを、雨のように射出して牽制してくる。
「……だあぁっ！」
その中心部を、強引に突破する！
これを抜ければ、美香は射程内！
防御をガリガリ削られるけど、大したダメージは無い！
……抜けたッ！
「もらった！」
が、美香は不敵に笑い……
「……それは、読んでた！」
私の手足の周辺に、魔力光が集まって……！
「檻よ、閉ざせ！」
「バインド……！」
こんな絡め手、覚えていたのか！
「もらった！」
勝ち誇る美香。
けど……まだ甘い。
（読んでたよ）
弾幕の強行突破を、きっと美香は予測している……って。

「……アクセル！」
両足に螺旋状の魔力を纏わせ、一気に方向転換＋加速！
美香の真正面に肉薄し……！
「はぁっ！」
――バチィンッ!!
リーゼが装備させた、安全装置を破壊した！
「勝負あり！」
リーゼが、高らかに宣言する。
これで、八戦八勝！
「うぅぅ～……また負けたぁ」
「けっけっけ……そう簡単には、勝たせないよ」
ベッドの上で、悔しそうにしている美香。
練習が終われば、美香が眠くなるまで、またお喋りの時間だ。
美香は、色々と聞いてくる。
それに釣られて、あれこれ話してしまうあたり……案外、聞き上手なのかもしれない。
「姐さん、そろそろ秋だね」
「寒いの、好きじゃないんだけどなぁ……」
「でも、食べ物は美味しいよ？　食欲の秋、読書の秋……それから、スポーツの秋」
「……」
美香は、そう言って黙り込んだ。
……美香は本来なら、身体を動かすのが好きなんだ。
魔力による擬似神経……これは、肉体改造の部類だ。
幼い美香には、まだ早い。
「……退院したら、好きなだけ走り回れるさ」
「……うんっ！」
美香に、石田先生の携帯電話を渡し、その日は帰ってきた。

◆　◆　◆　◆

翌日、俺は欠勤のことをカントク達に詫び……早速、現場作業にあたっていた。
今は昼休み。
作業員たちは、思い思いの場所に腰掛け、弁当やサンドイッチを食べていた。
「んでよ、左の車輪から妙にカラカラ音がすっから、見てみたんだよ」
秀人と膝を並べるカントクが、秀人が不在であった時のことを話す。
「したら……ロザリオっつうの？
なんか、欠けた十字架みたいなモンが引っ掛かってて……警察に届けたんだわ」
「ふぅん……」
「春先のことだから……そろそろ半年だな」
半年。
遺失物は、届けられて半年経てば、所有権が拾った者に委譲される。
「確か、来週の頭だったなぁ……」
律儀にも、受け取りに行くようだ。
「一応、ヒデにも見せてやるよ。気に入ったら、そのまま持って行ってもいい」
「わかりました。来週ですね」
スケジュール帳に書き込み、ポケットに仕舞う。
「ヒデさん、カントク、何の話ッスか？」
金髪の若者が、輪に加わった。ヨシヒコだ。
「あ？　……人件費削減案だったら、どうする？」
「ひぃッ！　勘弁ッス！」
「もしくは、副業禁止の話しあいだったり？」
「ヒデさんも止めてくださいよ、もー！」
お調子者を輪に加え、休憩時間は和やかに過ぎて行った。
その日の仕事を終え、帰宅する秀人。
段々、陽が落ちるのが早くなってきたと感じながら、足早に家を目指す。

「……」
と、正面から、帽子を目深に被った女性が走ってきた。
秀人自身、ぼうっとしていたこともあり……
――どんっ
すれ違い様に、ぶつかってしまった。
「あ、済みません」
謝罪し、手を伸ばす。
「……いえ、こちらこそ」
女性は、その手を取り立ち上がると、ズレた帽子を再び被り直し、走り去って行った。
女性の腰から、ベルトの端か……何か、長いものが伸び、ぱたぱた揺れていた。
――かさっ
と、懐に違和感。
まさぐってみると……
「……紙？」
いやに古臭い……厚ぼったい紙だった。
表面には、手書きらしき文字と……一つの、装飾品らしい、十字架のイラストが載っていた。
「何だ、これ……？」
不審に思いつつ……秀人はそれを、ジーンズのポケットに仕舞い直した。
◆◆◆◆
新たな住居の中。
はやての帰りを待つリーゼは家事を終え、瞑目していた。
「……急がねば」
ぼそっ、と、無意識の言葉が口をつく。
「闇の書の、闇……今はまだ、不活性だが……綻びが、出始めている」
その言葉は、緊迫に満ちていた。
「『霞の騎士団』ではない、真の、守護騎士プログラムを……主に、託さねば」

リーゼは、その思惑を口にする。

「『七星騎士』を、我が主の手に」

# A’ｓ編　第四十五話

朝の鍛練の後……よくスケジュールを確認してみたら、先公が言っていた運動会は、再来週だった。
「……ま、いいや」
どうせ、参加しないし。
「主、お食事の準備が整いました」
お、待ってました。
「主、間もなく登校のお時間です」
食後、歯磨きを終えて寝転んでいたら、８時を回っていた。
「あー……いいよ今日は」
眠いし……
「……主、」
洗い物をする手を止め、リーゼが振り向く。
「主、ですが……」
「うーるーさーいー……」
朝練の疲れも溜まってるんだ。
今日は、自主休日にしよーっと。
リーゼが、何かを言いたそうにしている。

――ピンポーン。

……あ？　呼び鈴？
「誰だ……？」
リーゼは……洗い物か。無視してもいいけど……
――ピンポーン。……ドンドン、
ノックまでおまけでついて来た。
「八神、起きてるんでしょ？　八神!!」
「……高町？」
……この時、迂闊にドアを開けてしまったことを……二週間後悔し続けることになるとは、思いもしなかった。

「何よ、朝っぱらから、うるさいわね……」
「学校行くよ」
……は？
「何でよ。今日は行く気は無い……」
「行くよ！」
――がしっ。
「!?」
掴まれた。
「ほら、もう時間無いんだから！」
「行かないっつーの！　離せテメェ！」
「リーゼさん、八神の鞄投げて！」「どうぞ」
ぱしっ……と、リーゼが高町に投げて寄越したのは……私のリュックサック。
「リーゼてめぇ！」
「……行ってらっしゃいませ、主」
「お、覚えてろよおぉ～！」
……三流悪役みたいな言葉しか、出てこなかった。
「離せよ気持ち悪ィな！」
何が悲しくて、敵の女と手を繋がないといけないんだ。
「だって、離したら逃げるでしょ！」
ったりめーだろ！
「私が学校に行こうと行くまいと、おまえには関係無いだろ！」
「関係あるわよ！」
ぐいっ、と、顔を寄せてきた。
「八神あなた、クラスの実行委員なんだよ!?」
聞いてねェ!?
「そりゃそうよ。だって、あなたが寝てる間に決まったんだから」
「ふざけんな！」
欠席投票なんて認めないぞ!?
「ついでに、私もだからね！
サボりは、許さないんだから！」

運動会実行委員……？
つまり、運動会が終わるまで二週間ずっと、高町の相方……？
ぞわー……っと、鳥肌が立った。
「嫌だ！　私は帰る！　帰って寝る！」
「我が儘ばっかり言うなぁ！」
高町は、羞恥で赤く染まった顔で怒鳴る。
「なんで私まで……
『高町さんと八神さんって仲良いよね！』
……なんて理由で、実行委員に他薦されなくちゃならないのよ！」
「断れよそんぐらいよぉ！お前、新聞を三紙も四紙も取る田舎者か！」
「先生に頼まれて、秀人さんにまで頼まれて……断るわけにもいかないでしょうが！」
……おいちょっと待て。秀人に、何て頼まれた。
『あいつ、どうせクラスに溶け込めて無いだろ？　更生も兼ねて、クラスの輪に放り込んで、集団行動を身につけさせてやってくれ』……だって」
よし決めた殺そうあの馬鹿。
「……というわけで、お仕事だよ！ほら、シャキシャキ歩く！」
変に覚悟を決めたのか、据わった目つきの高町に引きずられながら、行きたくも無い学校に連行された。
うううぅ……何で私が、こんな目にィいいいいいいい……
その日の、午後の授業……を潰しての、会議という名の話し合いという名のグダグダ。
「あの……静かに、して下さい……あの……話し合いを……」
高町は、普段の不遜な態度はどこへやら。
やれゲームだプリクラだサッカーだの、好き勝手に雑談をするクラスメイト達に困り果てていた。
「……チッ」
このまま放置してやっても面白いんだけど。
この話が纏まらないことには、会議が終わらない。ついでに帰れない。

嫌々仕方なく、進行させてやる。
――ガゴンッ!!
教卓を蹴り倒し、雑談をシャットアウト。
「ちょ、ちょっと八神……!」
「黙ってろヘボ」
「へ、へぼ……？」
全く……たかがガキの２０や３０、御せなくてどうする。
「参加種目は、４００メートル走と８００メートルリレーだ。はい決定」
「「えええええっ!?」」
……不服の声が上がった。
自分では意見を出さない癖に、他人の意見には積極的に反対を飛ばすのかよ……クズ共が。
まぁ、わかりやすく説明してやるか。
「このクラスには、中距離走向けの奴が揃ってる。なら、勝てる競技に戦力を割くのは当然だろ」
「勝手すぎるだろ！」「俺、そんなに走るのやだ」「幅跳び……すぐ終わるし」「……転校生がデカい顔しやがって」
まだまだ出てくる、反対というか、私への野次。
「おい、富樫。斎藤。意見があるなら立って言え」
「!?」
なんだ、お前ら……もしかして、私がクラスの情報を集めてないとでも思ってたのかよ。
「一組、四組には、陸上部を始めとした運動部の男子が多く所属してる。……が、そいつらの殆どは、他の種目にエントリーした」
このクラスの、会議の遅れが幸いした。
「当然、そいつらが出る１００メートル走、２００メートル走、走り幅跳び、走り高跳び……それら種目での勝率は低い」
……馬鹿にもわかりやすく説明するのは、骨が折れる。
「所詮は子供の体力だ……長丁場になればなっただけ、差は縮まる」
と、女子の一人が挙手した。

小綺麗な服を着た、いかにも小金持ちの子供……そんな奴。
「あの……そんなにガツガツしなくてもいいんじゃないかな？
運動会だし……みんなで楽しくやろうよ」
そーだそーだ、いいこと言った、さすが橋本……馬鹿共がそれを後押しする。
ふぅ……いい子ちゃんには、脅しかけておくかなぁ。
「確か……最下位のクラスは、運動会の後片付けと……体育館の床掃除だったよな？」
高町に確認を取る……フリをする。
「うん、そう聞いてる……」
教室がどよめいた。
にや、と意地の悪い笑みを意識して浮かべ、言う。
「やるか？　汗にまみれて後片付け。埃まみれになって床掃除。
……まぁ、『みんなで楽しく』やれるなら、掃除でもいいか？」
「……いえ」
橋本がすっこみ……クラスに、敗北と、それによってもたらされる恐怖が、浸透していく。
しばらく、無言で待ち……
（頃合いだ）
鞭の後は……飴をちらつかせる。
「優勝クラスには一週間の特別給食と、昼休みの体育館の使用権利が与えられる。そうだな？」
頷く高町に、おぉっ……と、男子女子双方から、どよめきがあがった。
「私の指揮に従うなら……優勝と、それに付随する権利はお前達のものになると約束しよう。これは確約だ」
ざわざわと、期待に騒ぐクラスメイト達。
――ばんっ！
机を叩き、再び注目を集める。
全員の顔を見回し……告げる。
「――どちらだ？　勝ちたいか、負けたいか？」

反応を見て……最後は、短く、力強く。
「――では、勝つぞ」
「「おぉぉぉぉぉぉぉ!!」」
私が率いる以上……負けは許さない。絶対確実に、クラス優勝してもらうからな。

「尚、選手は決定次第、高町を通じて担任に伝えるように。その他諸々の雑事は、高町が担当する」
「ちょ……!?」
面倒ごとはお前がやれ。
「以上、解散！」
よーし、これで帰れるぞ。
「ちょっと八神！やが、」「ねぇ高町さん、私は４００メートルが」
「あ、えぇと……種目ごとに集計取るから……八神、八神ー!?」
がんばれよーっと。
私は高町を残し、悠々と教室を後にした。
◆▪◆　◆　◆

カントクと並んで、警察署のロビーを進む。
あの日から一週間。
例の、カントクが拾った十字架の現物を確認しに来たのだ。
「あー、すみません。半年前に落とし物を届けた、向井という者ですが。所有権の譲渡の手続きに参りました」
窓口の、ちょっと色っぽい婦警さんに名前を告げて免許証を見せるカントク。
婦警さんは、手元のパソコンで何かを照会して、顔を上げた。
「……はい、承っております」
廊下を歩き……また別の窓口へ。
そこでようやく、勿体振って渡された十字架を受けとった。
「おぅ、ヒデ」
ぽん、と渡された十字架を確認してみる。

……十字架というから、立方体を重ねたようなシンプル極まりないものを想像していた。
けど、それは……
「おぉ……なんか、凝ってますねコレ」
十字架とはいっても、勇ましい剣十字だ。
しかも、四本の剣それぞれに、更に十字架が彫り込まれているという、製作者の情熱が伝わって来る程の出来栄えだ。
しかも、バリが無いってことは、削り出しのワンオフ品。
「だろ？」
カントクが気に入る理由も、少し分かった気がしたけど……
「これ、壊れてますよ？」
……剣十字の一角は砕けて、チェーンは繋ぎ目が壊れて千切れてしまっていた。
砂埃を掃っても、汚れは酷いし傷だらけ。
元が大層な工芸品だったために、余計に物悲しい雰囲気を醸し出している。
警察に届けはしても、わざわざ半年待って貰いに来る程の物ではない。
「……だよなぁ」
カントクは、何故か首を傾げた。
「だよなぁ、って……カントクが拾ったんでしょう？」
「あぁ、まぁ、そうなんだよな……ぶっちゃけ俺も忘れてたし」
……忘れてた？
「久々にお前の顔見た時にな……ピン、と思い出したんだよ。　あぁ、お前に見せなきゃ、って」
「あの……意味わかんないっすけど」
何で、俺の顔を見て思い出したんだ？
「だから、俺にもわかんねーって。とにかく、それはお前が持ってろ」
「あ、はい」
チャリチャリと手の平の上で遊ばせつつ、トラックの助手席に乗り込んだ。

「待っていたの、ぼけなす」
……見慣れた職場の、見慣れたデスク。
そこに……何故かアイがいた。
行儀良く背筋を伸ばして椅子に座り、まるでこの場の主であるかのように、俺達を横柄に出迎えた。
「あの～……お帰りなさいッス、カントク、ヒデさん」
ヨシヒコが、ヘコヘコと金髪頭を揺らしながら、擦り寄ってきた。
「休憩中だったんスけど、このねーちゃんがいきなり押しかけてきて……」
時計では、既に休憩時間をとっくに過ぎていた。
「客人一人を残していくわけにもいかないんで、オレが残ってました、ハイ」
「わかった……ヨシ、ご苦労だったな。持ち場に戻れ」
「うっス！　行ってきます!!」
ヨシヒコを褒めたカントクは、次にアイに目をやる。
「申し訳ありません。少々の間、あちらの応接間でお待ち頂けますでしょうか？」
「んー……わかったの」
カントクに丁寧に案内され、アイがオフィスから移動していった。
……そして、カントクは俺に厳しい目を向けた。
「ヒデ、知り合いか」
「はい」
「馬鹿野郎ッ！」
――ごんっ
拳が、俺の頭を叩いた。
「仕事場に、ダチ連れ込んでんじゃねぇッ！　遊びじゃねぇんだぞっ！」
「すんませんでした！」
俺は、頭を下げるしか無い。俺はアイに、『職場に来るな』としっかり言い含めていなかった。
そのせいで……

「お前が連れ込んだダチの対応に、ウチの工員を一人割いた。　……わかるな」
「はいっ……！」
　……仕事の納期は、絶対だ。
　納期を遵守するためには、無駄を極力省かなくてはならない。
　……プライベートの客人の対応のために、工員を持ち場から外すなんて、言語道断だ。
　きっと、ヨシヒコの持ち場は、他の工員達がカバーしているか……最悪、後回しになっている。
「分かったら、客人には、お引き取り願え」
「はいっ!!」
　駆け足で応接間に向かい、アイに帰れと伝えた。
　……が。
「よくわからない。アイは、おまえと『お話』をしにきただけなのに」
　……『お話』とは、例のアレだ。
「お前のマスター云々の話だろ？　今は仕事中なんだ。帰ったら、聞いてやるから……」
「いや。　アイは帰らないの。　おまえが『お話』を聞いてくれるまで、帰らないの」
　ぷいっ、と俺に背を向けて、ソファにしがみついてしまった。
　困った……早いとこ、仕事に戻らないといけないんだが……
「アイ。場所を変えるぞ。ついて来い」
「……アイのお話、聞く気になったの？」
「聞かないとは言ってないだろ？」
「……わかったの」
　アイは、渋々といった様子で、ソファから立ち上がった。
　カントクは、先に現場に向かったようだ。
　今回の現場は、この事務所のごく近所。歩いて行ける場所にあることが、唯一の救いだ。
　事務所の戸締まりをして、現場に走る。
　ぱたぱたぱた……と、サンダル履きの足で俺に追いつくアイ。……

今度、ちゃんとした靴を買ってやろう。
「逃げられるなんて、思わない方が身のためなの。ぜったいぜったい、逃がさないの」
「逃げないっつうの」
……現場に程近い一画の、漫画喫茶で立ち止まる。
「何時間か、ここで時間を潰しておけ。仕事が終わったら迎えに来る」
「……そう言って、逃げる気なの」
「ほら、担保」
小遣いを、財布と丸ごとアイに手渡す。
「……わかったの。待っててやるの」
アイは、ようやく納得してくれた。

その日の仕事をなんとか終えた頃には、既に6時を回っていた。
アイの待つ漫画喫茶に急ごうと、作業着を着替える。
かさっ、という乾いた感触が、ロッカーの奥から帰ってきた。
「？」
取り出してみると、それは数枚の紙切れ。
（あ、これ確か、先週の……）
翌日、ポケットに入れたまま仕事場に持ってきちゃって、ロッカーに突っ込んだままだった。
ゴミを置いていくわけにもいかないし、持って帰らなきゃ。
急いで支度を終えて、アイの待つ漫画喫茶に走る。
「……悪い、待たせた」
「……遅いの、ぼけなす」
アイは、漫画喫茶のドアの前にいた。
多分、時間一杯まで過ごしたんだろう。
「んじゃ、帰るか」
「ちょっと待つの」
ぐいっ、と俺の手を引き、少し離れた所にあった大型古書店へずんずん進んで……
「これを買うの」

アイが指差したのは……
「シャーマン○ング愛蔵版全巻セットぉ……？」
「単行本は、未完で終わっていたの」
値段は……四桁後半。
「これ下さい、なの」
ちょっと待てコラ。
って、そうだ。財布預けっ放しだった。
目の前でサクサクと進む会計。
「はぁ……まぁ、いいけどさ」
俺も読むし。
でも、給料日近くでこんな買い物してたら、なのはにどやされちまうなぁ……

「今日は、とてもいい日なの」
上機嫌なアイは、新品のスニーカーを鳴らして歩く。
……ついでに、靴も買ってやった。
「ただいまー」「ただいまなの」
家のドアを開ける。
「おう、帰ったか」「おかえりー！」
ヴィータとフェイトが、俺達を出迎えた。
二人とも、エプロンを着けている。
「おぉ、今日は二人が当番か」
「そろそろできるよー！」
ちらっ、と台所を見てみると、大皿一杯の肉野菜炒めと、定番の卵焼きモドキ。
「アイ、お前も食べるだろ？」
「うん」
……たまに、こいつは人間なんじゃないだろうかと思う。メシ食うし、寝るし。マリーの奴は、何を考えてるやら……
「ただいま……秀人も帰ったところ？」
ユーノとアルフも、夕飯に合わせて帰ってきたらしい。

いつまでも玄関先にいないで、入るとするか。
……それにしても、妙になのはが静かだな。
「……」
理由は、すぐに分かった。
なのははちゃぶ台に向かって、ノートに何かを書いたり、消したりしていた。
「うー……八神のやつ……」
時折唸って頭を抱えて、ぐりぐり黒く塗り潰す。
「なのは、ただいま」
頃合いを見計らって、声をかけた。
「うわっ！　秀人さん!?」
びっくりしていた。
「お、おかえりなさいっ！」
「何書いてるんだ？」
「ん……」
差し出されたノートを見てみる。
浅野、上安、川田……苗字の羅列の下に、何かのタイムと覚しき数値が書き込まれている。
「運動会の、リレーの順番」
そうか……もうそんな時期か。
「八神と私が、クラスの実行委員だから」
……よくやる気になったな。
目立つの嫌いなのに。
「八神のやつ、手伝いもしないで、
『駒を動かすのが私の仕事。
駒を揃えるのはお前の仕事』
……って言うんだよ！」
はは、あいつらしい。
「くそう……あんにゃろう……」
悪態をつきながらも、どこか楽しそうだ。
「フェイトは？」

「個別種目の１００メートルと２００メートル。男子からは葉山君。短距離はその二人だけ」
なるほど……勝てる力量がある奴だけをぶつけるつもりか。
「後は、４００ｍ８００ｍの中距離と、あとリレーに殆どのメンバーを割いてる」
……ガチじゃないか。
少しして、フェイトとヴィータが料理の皿を運んできた。
「ごめんね、任せちゃって」
「きにしないでいいよ。れんしゅうになるし」
そして、夕食が始まった。
「――ところで」
……きた。
「秀人さん。アイが持ってるのは、何？」
なのはが箸を置き、部屋の片隅に置かれたブツを指差した。
「……漫画」
「いくら？」
「……８９８０円」
「秀人さん」
「……すまん」
うぅ……やっぱり怒られたじゃんかよ。
「はぁ……ま、買っちゃったものはしょうがないか。
でも……今度からは、買う前に教えてね」
なんとか、許してもらえたらしい。
食後、くつろいでいたら……ユーノが妙なことを言い出した。
「秀人。最近、無限書庫に来た？」
「無限書庫？　……いや、行ってないけど」
「でも、これ……」
そう言って、俺が持って帰ってきた紙切れを持ち上げる。
「無限書庫の、本の一部だよ」
「なに？」
「……くんくん」

アルフが顔を近づけ、鼻を鳴らす。
「あ、間違いないよ」
犬……もとい、狼の嗅覚なら確実だろう。
「じゃあ、あいつか……？」
俺にぶつかってきた女。
何を企んだかは知らないが、警戒しておこう。
かさっ、と紙を開く。
日本語で表記された文章の下に、凝った意匠の十字架のアクセサリー。
白黒で画質が悪く、見えづらかったが……よく見てみたら、今日、カントクから貰ったアレにそっくりじゃないか。
「なぁ、これ……」
ちゃぶ台の上、紙切れの隣に、壊れたアクセサリーを置き、みんなに見せる。
「……同じもの、だよね」
なのはを始めとした全員が、俺と同じ意見だった。
ユーノが、その文章を読み上げる。
『……○○（破かれていて解読不能。多分、人名）への祝いの品として、銀細工職人・田上奈々に制作を依頼される』……下に書いてある比率は、合金の割合だと思う」
さすが無限書庫。
こと細かなデータが揃ってるぜ。
（無限書庫……破られた本……あ！）
忘れかけていた記憶が、蘇る。
確か、一昨年あたりに起きた、魔力の暴発による旅客機墜落事故。
あの本が、中途半端に破られていた筈だ。
もしかして……昨日の女は、何かを俺に伝えようとしていたのか？
「ユーノ、」
……あの本を隠した座標をユーノに伝えた。
「で、どうするの？」
どうするかな……まぁ、とりあえず。

「直せるものなら、直してみたいよなぁ」
よくわからんが、何かの手がかりになり得るかもしれない。
「……ねぇ、秀人さん」
なのはが、首に下げたレイジングハートを……というか、それを繋ぐチェーンを持ち上げた。
「これ売ってくれたお姉さん、確か……」
「……あ」
――『もし壊れた銀細工とかあったら、店に持ってきて』
脳裏に、ジャラジャラとアクセサリーを鳴らす、ケバいねーちゃんの姿が浮かんだ。
「あの人に、頼んでみよう」
時計は、午後7時。
商店街の店は、そろそろ閉まる。
あのねーちゃんの店が何時に閉まるのかは聞いていなかったが、行ってみるのも悪くない。
「ちょっと行ってくる」
メットとキーを手に、家を出た。

「確か……このあたりだったな」
バイクを停め、下りる。
居酒屋やクラブ等、夜間がメインの店を除いて、ほぼシャッターが閉まっていた。
その一角に……未だ、照明が点る店があった。
「お邪魔しまーっす」
無駄足にならずに済んだみたいだ。
「あり……？　キミは確か……」
ジャラッ、と、金属のネックレスが揺れた。
「よう。今、時間いいか？」
「むふふ……でぇとのお誘いですかな？」
「実は、アクセサリーの修理を頼みたくて」
「……スルーされたヨー」

ちょっと悲しそうな顔をした。
ポケットから壊れた十字架を取り出し、カウンターに置く。
「……!!」
店主が、驚きに目を見開いた。
「これ……!」
やっぱり、同業者から見ても、いい品物なんだろう。
狭い業界だろうし、駄目元で聞いてみた。
「田上奈々、って人の作品らしいんだ。もし直せなくても、その人に連絡が取れるなら……」
「うん、知ってる知ってる、超知ってる！　今、呼んできてあげるよ！」
「マジで!?」「マジで!!」
言ってみるものだ。
店主は、店のバックヤードに入っていく。
「お待たせっ♪」
5分も掛からず、出てきた。
振り返り……
「……あの、田上奈々さんは？」
そこにいたのは、店主ただひとり。
店主は、俺の訝しい表情をスルーした。
「ある時は露店商……またある時は、アクセサリーショップ店長……しかし、その実態は！」
――ばっ、ばばっ！
と、恐らくは常々練習していたであろうポーズを決める。
「流しの銀細工職人・田上奈々ちゃんなのデスっ!!」
……本人だった。
「えぇ～……」
なんかイメージと違う。
「いやー、懐かしいねぇ、コレ。二年くらい前、関西の街で売ったんだよ」
店長改め田上は、壊れた十字架を慈しむように指でなぞった。
「よく覚えてるな」

「全部、私の子供みたいなモンだからね。いつ作ったか、いつ売ったか。ちゃーんと覚えてるの！
　これを買ったのは確か……妙に身なりの良いジェントルメンだったね。クリスマスプレゼントだったのかなぁ？」
　そいつが、生存者の少女の父親で間違いない。
「……直るか？」
「うん」
　あっさりと断言するのだから……信用して良いはずだ。
「銀っていうのはね、『心』が宿る媒体なの」
　……いつものチャラい雰囲気が消えた。
「製作者である私は勿論……数多の作品郡から一つを見定めた者の『心』。
　それを、誰かに贈ろうとした者の『心』。
　受けとった者の、喜びの『心』。
　手放してしまった者の、悲しみの『心』」
　千切れたチェーンをつまみ、振り子のように揺らす。
「貴方は、この傷付いた剣十字に……どのような『心』を込めるの？」
　……十字架が、揺れる。
　田上の碧眼と、俺の瞳の中心で。
　ゆらゆらと。
　ゆらゆらと。
「……『再会』、だ」
　自然と、そのワードが口に出た。
「たとえ、離れ離れになっても……また、いつか必ず、出会えるように……」
　頭の中では考えていないのに、まるで、心の底を吐露してしまったようで……
　――パンッ!!
「うわっ!?」
「……はい、商談成立！」
　田上が手を打ち合わせる音に、現実に引き戻された。

「仕上がったら連絡するよん♪」
田上は、先程までの超常的な空気を消し去り、いつものチャラくて軽い雰囲気を纏っていた。
「さ、店じまいだよ」
「あ、ああ……それじゃ、頼んだ」
まだ少しぼんやりする頭を振って、店を出る。
夜風に当たると、ようやく現実感が戻り……
（俺……何を言ったんだっけ？）
……田上と何を話していたのかを、思い出せなくなっていた。

# A’ s編　第四十六話

選手の選別、ごねる生徒の説得、競技の説明……バタバタしているうちに、運動会の前日になってしまった。
「八神、選手表は確認したよね？」
放課後、八神の部屋で最終ミーティングを行う。
「まぁ……十段階評価で、七ってトコだったな」
「むっ……今更、ケチ付けるの？」
今の今まで、私に押し付けてた癖に。
「ま、上出来じゃねーの？　……お前にしては」
「あんたは一言多いのよ！」
「主、なのは……夕食の支度が整いましたよ」
え、もうそんな時間!?
「せっかくですから、なのはも食べていって下さい」
「……」
八神は、『勝手にしろ』と言わんばかりに、頬杖をついている。
うーん……今日は、秀人さんが当番の日だけど……だからといって、一人だけ別ってのも淋しい。
「あ、そうだ。八神とリーゼ、私ん家で一緒に」「却下」「……な、何でよ！」
折角の名案を！
「……大勢で集まるの、好きじゃないから」
う……確かに、私ん家に来たら、アウェーになるかも。
「……わかった」
……たまになら、いいか。

階下までそのことを伝えに行って、戻って来ると、真新しいテーブルの上にはリーゼの手料理が並んでいた。
低カロリーで、それでいてボリューム的にはかなり多い。
「すごいね、リーゼ」
「主の健康管理も、私の使命ですから」

……リーゼと契約する前は、どんな食生活だったのか、想像するだけで恐ろしい。
白身魚のムニエルを口にしながら、八神にそれとなく会話を振ってみる。
「八神って……転校してくる前は、どこの学校通ってたの？」
「……確か、第一小学校」
「何よ、妙に曖昧じゃない」
「一度も行かなかったから」
「……」
さらっと、とんでもない事を言った。
「えぇ……何で？」
「……」
だんまり。
「……明日」
「え？」
明日って……運動会だけど。
「勝つからね」
「……うん」
やる気、十分。
私達のミーティングは、日付が変わるまで続いた。
そして……

『これより、海鳴第二小学校・運動会を開催します！』
いよいよ、本番だ！
クラスメイト達も、どこかそわそわ落ち着かない。
「あー……うー……」
中でも、最も落ち着きが無いのはフェイトだ。
朝一のクラス会でリレーのアンカーという大役を命じられ……逃げ出し……クラス総出で取り押さえられ……説得されること数１０分。
「フェイト」

見兼ねて声を掛けた。
フェイトは、動きやすいようにシニヨンにアップされていた。
ここぞとばかりに、望達から髪をいじくられ、それが更に心労を増したらしい。
「うぅ……なのはぁ……ボク、かえりたい……」
「１００メートルで一位だったら、秀人さんが何でも買ってあげるって言ってたよ」
「……なんでも？」
ぴくっ、とフェイトが反応した。
「うん。何でも」
「……がんばろう、かな」
……けしかけておいて何だけど、即物的な子だなぁ。
「午後一番の１００メートル、秀人さん達も応援に来てくれるから」
秀人さんも、ユーノくんも、アルフも……そして何故か、高町の家からも、応援に駆け付けてくれるらしい。
「高町、テスタロッサ、ボケッとすんな！すぐに最初の種目だぞ！」
司令官から激が飛んだ。
「すぐ行く！」
フェイトの手を引いて、競技待ちの列に整列する。
まずは、学年種目の１００メートル。
個人種目と違い、競技人数が多いため、例え一位になろうとも、獲得できる点数はずっと少ない。
かといって、見過ごせるほど少ないわけじゃないから、みんな一生懸命走る。
結果として……フェイトや葉山君、ある程度脚力がある子を除いて、平均四位。
かくいう私は、三位だった。
「……」
八神は、冷静にスコアボードに記入している。
「ねぇ、八神さん……」
クラスメイトの一人が、流石に疑問を感じて意見を述べた。

「このメンバーで……本当に、優勝できるの？」
……疑問も、最もだ。
今の競技で、我が三年二組の鈍足っぷりは暴かれてしまった。
八神は、スコアボードをぱたん、と閉じ……
「……問題無い」
短く返した。
「このクラスの、瞬発力の無さは想定内」
「……」
「後は、私の指揮と……お前達一人一人の、やる気と根性に掛かっている」
「……わ、わかった、頑張る！」
その女子は、自分が参加する種目の待機列に走っていった。
消化試合のような午前の部を終えて……点数は、四クラス中、三位。
正直、芳しくない。
けど……八神の目はまだ、勝負を投げてはいなかった。
「……これより、午後の部だ」
休憩時間を利用し、クラス全員が教室に集結した。
「我がクラスの現状はどうだ、速水？」
教卓に腰掛け、そう問う八神。
「……最下位との点差、たった１５……ほぼ、最下位です」
「……」
クラスに、重い沈黙が下りる。
やはり、根性論で覆せるほど、現実は甘くなかったのか……
「ここからだ」
「！」
八神の一言に、ハッと顔を上げる。
「午後の部の個人種目、クラス種目……それらは全て、『勝てる』メンバーで構成している」
「……でも俺、そんなに足速くない」
小太りのクラスメイトが、弱気を口にした。
「臼井。お前の種目は何だ」

「中距離……８００メートル、だけど」
「お前は、授業でも練習でも……一度も歩かずに走り切った」
「！」
　臼井君が、顔を上げる。
「いつもと同じだ。走り切ることだけを考えろ。……結果は、自然とついて来る」
「……はいっ！」
　彼に続いて、一人、また一人……的確に評価を下し、鼓舞していく。
　……私が見ていなかった彼らの側面を、八神はちゃんと見定めていたんだ。
「神尾。高橋。増田。葉山……テスタロッサ」
　最後に……目玉種目、１０００メートルリレーの選手を呼ぶ。
　出場チーム唯一の、男女混成チーム
「二週間前……お前たちはゼロだった。
　リードもせず、バラバラに走り、バトンを落とし……とても、出せるレベルでは無かった」
「……」
　間を取り……
「だけど、お前達は努力した。走って、走って……でも、バトンを落とすことは無くなった」
　すっ、と、全員の顔を見渡す。
「お前達全員が、この日のためにどれだけのものを積み重ねてきたのか……私は知っている。
　どれだけ転び。
　どれだけ泣き。
　どれだけ立ち上がったのか。
　そして、この本番を迎えて……私が言えることは、ただ一言だ」
　すぅっ、と、一呼吸を置き……
「――勝つのみ!!」

――――――!!

３２人の咆哮が、校舎を揺るがした。

◆▪◆　◆　◆

「……」

――かっち、こっち……

秒針が時を刻む音が、いやに大きく聞こえる。

「……」

目の前には、愛用の携帯電話と……一枚の名刺。

それが、何かの寓意のように、机に並んでいた。

というか、俺が並べた。

「……」「秀人……まだ悩んでるの？」

ユーノが、呆れた様子で言った。

「なぁ、早く行こう？

フェイトの出番、終わっちゃうよ」

アルフが、ぱたぱたと足踏みする。

「ふわーぁ……おまえというやつは、決断力が足りていなさすぎなの」

アイが、眠そうに欠伸をした。

「秀人、せっかく半日休みを貰ったんだろ？」「なのはとはやてだって、秀人が来るのを楽しみにしてるんだよ」

うぅ……でもなぁ……

石田先生を呼ぶなんて……

だって俺、あんな醜態曝して……

でも、爺さんが言ってくれたんだし……

「あ、もしもしなの。ウチのぼけなすが、話があると言っているの」

光速で奪い返した！

「何しとんじゃボケェェェェ!!」

「もう繋がってるの」

え、うっそ!?

「……」

『もしもし、アイさん？　ぼけなすって、誰のこと？　……もしもし

？』
切る……って手もあるけど……流石にもう、覚悟を決めるしかないか。
「……どうも、ぼけなすです」
精一杯のおふざけと共に、挨拶をした。
『……秀人くん？』
石田先生が、息を呑んだ気配が伝わってきた。
『……どうしたの？』
かつてと変わらない、優しい声だ。それが少し嬉しく……苛立たしい。
「富山先生から聞いているかもしれませんけど……今日は、小学校の運動会なんです。はやても出ます。だから……あの……お時間があれば、なんですけど……」
緊張と、照れ臭さで言葉が出づらい。
電話機から顔を離し、深呼吸する。
「すー……はー……」
……よし、言うぞ。
「一緒に、観に行きませんか」
よし、言えた。
『……まぁ、』
電話口の向こうで、石田先生が困ったような声を出していた。
……だよな。いくら何でも……
『分かりました。一緒に行きましょう、秀人くん』
来るわけが……って、
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!?　マジで来るの!?」
『自分で誘ったんじゃないの……』
「あ……すんません、つい。じゃ、今から現地集合で……」
「秀人、時間時間！」
「なんだよ……って、うわ！やべぇ！」
時計は、間もなく午前のプログラムを終え、昼休憩に入る寸前だった。

「じゃあ先生、また後でっ！」
携帯電話を切り、メットを掴んで部屋を出る。
ＺＺＲに、俺とアイが乗って……
「全く、待ちくたびれたわい」
「す、すまん爺さん……」
爺さんの、年季の入ったツェンダップには、アルフとユーノが人間形態で腰を据える。
――キュルッ……ボウンッ！
「ちぇーっ……アタシも乗れるのに……」
アルフがぼやいた。
「免許取れ」
「はぁい……」
フェイトとアルフは、管理局の意味不明な手段で、日本での戸籍を持っている。そうでなきゃ、小学校に入学なんて出来ない。
……返せるうちに、恩を返さないとな。
「……あ！」
伝え忘れてた。
運動会は、車での来場が禁止されているんだった。
「爺さん悪い、アイ頼むわ！」
「何を……ぐぇー、なの！」
信号で止まり、アイの首根っこをふん掴まえて、ツェンダップの側車に投げる。
「ぎゃふっ……！」
「ぎゃー！秀人てめー！」
突然、アイを膝の上に投げ込まれたアルフが非難の声を上げた。
アルフ許せ！　緊急事態だ！
「ストラグルバインドッ!!」
――バチィッ!!
「ひぎゃあああああッ!!」
……無理矢理変身を解除させられ、アルフが狼の姿で側車に転がった。

「ウおいいいいいいいいッ!!?」
ユーノの渾身のツッコミを耳に、アルフが着けていたメットを回収。
「先生拾ってくから、先行っててくれ！」
――ギャリリッ！
アクセルターンで方向転換。
石田先生の職場……市立病院の方角を目指し、アクセルを開け放った。

病院に着いたのと、石田先生が白いセダンにキーを差し込もうとするのは、ほぼ同時だった。
――ギキィッ！
慌ててブレーキをかけたせいで、少しジャックナイフ気味になってしまった。
「秀人くん!?」
妙に驚いているけど……あ、そういえば、俺がバイク持ってるの知らないんだった。
「ちッス。迎えに来ました」
「え、でも、」
「小学校、車は入れないんです。近くのコインパーキングも、保護者の車で満員ですから……どうぞ」
アルフから借りた、シールド着きジェットヘルメットを先生に渡す。
先生は、渡されたメットを被ろうとして……
「あ、あらら……髪が、」
被るのが初めてなのか、苦戦していた。
頬当ての部分を広げながら、斜め上から被るのがコツだ。
「ちょっと失礼……」
先生の手からメットを受け取り、一息で被せた。
タンデムステップを出し、先に跨がると……先生も、見よう見真似で跨がった。

「腰に手を回して下さい」
「……こう？」
……自分の腰に手を当ててどうする。
「……アンタ阿呆ですか」「ご、ごめんなさい……！」
正しい位置に、エスコートした。
むぎゅっ、と、背中にそこはかとなく未体験な柔らかさを感じた。
「行きますよ」
その気恥ずかしさを意地でコーティングして、ギアを入れて走り出した。
……加減速する度、腰に回された手が緊張で強張る。安全運転（法定速度の上限一杯）で、小学校に向かった。
「はは……すごいのね、バイクって……」
シールドを開けた先生は、緊張して少しハイになっていた。
「メット取りますよ」
顎紐に手を掛ける。
「……身長、抜かれちゃったね」
――手が、止まった。
「大きくなったね、秀人くん」
無視して、紐を解きにかかる。
「……」
けど……『何故か』手が震え、難航する。
「もう、見上げないと顔が見られないよ」
「……るさいです。やりづらいんで、大人しくしてて下さい」
「仮面ライダーが好きだったよね。バイクは、その影響？」
「……紐、解けたんで」
自分のメットを脱いで、先生のと合わせて、ホルダーに引っ掛ける。
くしゃっ、と、先生の手が、俺の髪を撫でた。
「硬さも、変わってない……」
「、やめてください。ガキじゃないんだから……」
振りほどく。
背を向けたまま、グラウンドに歩き出す。

……背中に、先生の言葉が投げ掛けられる。
「……変わったね、秀人くん」
「十年近く経つんだから、当たり前だ」
「けど、変わってないね」
「……トンチがしたいわけじゃない」
いよいよ無視して……
「時間が経っても変わらないものって、先生は……あると思うよ」
……アンタが言うなよ。

……先生が、どんな顔で言ったのか……俺は、最後まで見られなかった。

◆▪◆　◆　◆

「おーい、なのは」
手を振りながら、待ち合わせの場所に向かう。
鉄棒のあたりに、爺さん達が先に到着していた。
「秀人さん、こっち!」「おそいぞーっ!」
なのは、フェイトが、お揃いの（当たり前だが）体操服でビニールシートの上に座っている。
「……」
あ、はやてとリーゼも一緒か。
「よっ」
はやては、ジロリと不機嫌な目を向ける。
「……なんで、先生まで呼ぶのよ」
あー……そういや、はやてにだけは伝えそこなっていた。
「お前の主治医だろ？　俺だって、駄目元で声掛けたんだぞ」
「お邪魔だったかしら?」
石田先生が、はやての前に腰を下ろした。
「……」
ぷいっ、と愛想悪く無視する。
「主、いけません」
「……わかったよ」

リーゼが咎め……渋々、目を合わせた。
「……どーも」
「八神さん、頑張ってる？」
「……ぼちぼち」
点数表は……あー、最下位とほぼ同着か。
何か考えがあるんだろうけど……
「食事にするかの」
爺さんとリーゼが、重箱を広げた。
……昨夜、俺・リーゼ・爺さんの三人掛かりで仕上げた合作だ。
一段目は俵型に小分けされた白米。
二段目は揚げ物や肉類などの主菜。
三段目はポテトサラダなどの副菜。
水筒の中身はポタージュと、我ながら豪華な仕上がりだ。
だいぶ余計に作ったから……多少人数が増えても問題はない。
「それじゃ、」
――いただきます！
……さすが、子供はよく食べる。
しかも、運動後となれば尚更だ。
「これ、秀人くんが作ったの？」
先生が、俺が作ったおかずを食べて、驚いたように言った。
「……爺さんとリーゼ」
「いえ、揚げ物の大部分は、秀人が」
……リーゼ、余計な事言うなよ。
「秀人くん、料理上手なのね」
「……」
黙々と食べ進める。
――ごん！
「いってぇ！」
「返事をせんか馬鹿者！」
「……」
「済まんの、石田さん。どうにも意固地な奴で……」

「いえ、お気になさらず……自業自得ですから」
そう言って、悲しそうに笑った。
「……爺さんから」
……気まぐれだ。本当の本当に、ただの気まぐれだ。
「え？」
「……爺さんから、料理習った」
「……そうだったの。とても美味しいわ」
他意は無い。
絶対に、無いからな！

「リーゼ、アジフライ取って」
「主……野菜も食べませんと、栄養が偏りますよ」
「野菜嫌い」
「……美香のことを言えません」
嘆息するリーゼ。
リーゼの苦労を知ってか知らずか、はやては揚げ物ばかりを口に運んでいた。
「あぁ、そうだ」
と、石田先生がポロッと漏らした。
「美香ちゃんにも、声掛けてきたのよ」
……ポロッと、はやての箸から、唐揚げが落ちた。
「もーらいっ！」「フェイト、行儀悪い！」
……それを空中キャッチしたフェイトを、なのはが叱った。
「な……何で!?　何で呼んだ!?」
明らかに狼狽している。
「だって、八神さんと美香ちゃん、仲良しじゃない」
「理由になってねーよ！　……私は帰る!!」
がばっと立ち上がるはやて。
「まぁまぁ」
素早く背後を取り、肩を抑える俺。
「まぁまぁ」

両膝を膝カックンするリーゼ。
「まぁまぁ」
両腕を搦め捕る、ユーノとアルフ。
「「「まぁまぁ」」」
「は、放せッ！」
……拘束完了。
「くううぅっ……！　てめぇら全員、絶対に半殺しにしてやる……！」
物騒なことを口にするはやて。
「リーゼ、やれ」
「了解しました」
リーゼは、副菜の中からカボチャを箸で摘み……
「はい、主。あ～ん、してください」
「……！」
これが最後の抵抗とばかりに、がっちりと歯を食いしばる。
「フェイト」「はーい！」
――こちょこちょこちょ……
腋の下をくすぐられ……
「ぶぁはッ！」
反射的に口を開く。
そこに……
「主、どうぞ」
「もふぁっ!!」
……カボチャを、容赦無く突っ込んだ。
「もがもが……！ごくっ！」
お、食った食った。
「リーゼ！　やめろ、マジやめろ！」
「トマトとか、どうじゃ？」
「ジジィてめぇ！」
爺さんがにやけながら言い、それにリーゼが頷いた。
「さぁ、次はトマトです」

「いやーッ！」
……割とマジに嫌がっている感じがするが、自発的に野菜を食べなかった自業自得もある。見ているのも楽しいし……放置しておこう。
「主。あ～ん、です」
……しばらくそうしながら、野菜をはやてに詰め込んでいた時のことだった。

「あああああぁーーーーッッ！」

素っ頓狂な声が、校庭に響き渡った。
「ズルい、ズルい！　リーゼばっかり、姐さんと遊んで……！」
「遊んでねぇよ！」
……それは、車椅子に乗った少女だった。
陽射しを知らなさそうな白い肌。
肩にかかる程のセミロングヘア。
僅かな不機嫌に膨らんだ頬。
「……あの子が？」
石田先生に確認を取ると、こくん、と頷いた。
「済みません、お待たせしました」
……車椅子を押しているのは、見覚えのある女性だった。
「……美穂さん？」
「あ、あら……？」
なのはが、その名を呼んだ。
そう、その女性は……なのは行きつけの、市立図書館の司書だった。
「……すごい偶然ねぇ」
ほぅ、と、感心したように息をつく。
その美香はといえば、車椅子からビニールシートに移動していた。
「……誰？」
俺達を見て、リーゼの袖を引く。
「前に話した、秀人ですよ」
「あぁ。あの……」

……はやて、お前は一体、どんな話をした。
「初めまして。柳瀬美香っていいます」
ぺこっ、と礼儀正しくお辞儀をする。
「……美香、外出しても良かったの？」
はやてが、心配したように聞く。
「うんっ。石田先生が、たまにならいいって」
朗らかな笑顔だ。
……さっき、礼儀正しいと感じた、引き締まった表情は、単に緊張して強張っていただけか。
「腹減らない？　食事に制限とか無ければ、一緒に食おう」
「うーん……」
美香は、美穂さんと、石田先生を順に見回した。
「食べすぎなければ、食べてもいいよ」
「良かったわね、美香」
石田先生の許可が下りた。
「もぐもぐ、」
俺達程ではないが、子供らしくそれなりに食べている。
「美味しい？」
「すっごく美味しい！」
満面の笑みに吊られ、美穂さんも笑顔。
やがて、重箱が空になった。
さて、そろそろか。
「なのはー」
校門から、桃子が手を振りながらやってきた。
傍らには、クーラーボックスを肩にかけた恭也と美由希。
「おーっす、みゆき！」「おーっす、フェイト！」
ぱんっ、とハイタッチする。
「よう。中身は何だ？」
「ああ……これだ」
恭也が開けたクーラーボックスの中には……
「お、シュークリーム」

「デザートいるかなーって思って、朝から準備してたの」
なかなか気が利く。
なのはが、何の気無しに言った。
「そういえば、母さん達が小学校の運動会来るのって初めてだよね」
「「……」」
親子揃って俯く高町家。
「……あれ？」
なのはが、首を傾げた。
……まぁ、仕方ないよな。
柔らかめのシュー生地に、カスタードクリームというシンプルな作り。
それだけに、出来の良さがわかる。
「……美味しい」
あのはやてを以てして、素直に認める程だ。
「うん、美味しい……けど」
が、美香は少し不満そうだ。
「お兄ちゃん、来られなかった」
「今日は、突然の仕事で抜けられないって言うから……」
俺だって、かなり無理を言って休みを貰えたんだ。代打に出てくれたヨシヒコには、後で礼をしなくちゃあな。
「っていうか、弟いるんですか」
「えぇ……なかなか、ヤンチャな子なんだけどね」
三姉弟かぁ……
「羨ましいですよ」
「え……？」
「俺、一人っ子だったんで……兄貴とか、姉ちゃんとか、憧れだったんです」
「あら、それじゃ、恭也と美由希はどう？」
桃子が、にこにこしながら入ってきた。
「なんか、親子揃って頼りないから、パス」
「「……」」

ひくっ、と、桃子と恭也の頬が引き攣った。
「なのは……わたし、頼りない？」
美由希が、なのはに会話を振る。
「……うんっ！　そのままの姉さんでいて！」
「うわぁあああん！」
あ、泣いた。
「ボク、ねーさんがいたんだよ！」
フェイトがそれに続く。
美香はその都度、「へー」とか、「ふーん」とか、好奇心に目を輝かせていた。
そしてその好奇心は、はやてにも向かった。
「姐さんは？」
「え、私？」
ぎくっ……と、なのはが強張った。
「私も、一人っ子だったなぁ」
しみじみと言い……なのはは、ほっと胸を撫で下ろしていた。
「……なんか、そろそろ弟だか妹を、とか言ってた気がする」
「……」
実に気まずい沈黙が、場を支配した。
そろそろ、って……アレだよな。アレ。
「……そ、そうだ！」
パンッ！　と、空気を入れ換えるように手を叩く。
「美香さん、お兄さんの名前、何て言う、」
「おぉい、八神、高町！実行委員、運営テント前に集合だってよー！
あと、テスタロッサ！　俺達の競技、午後一だぞ！」
……と、向こうの方から、健太が呼んだ。
「あ……いっけない！じゃ、また後で！」
「いってきまーす！ひでと、やくそくまもってよね！」
「……さて、行くか」
三人は、靴を履いて走っていった。

『間もなく、午後の部を始めます。生徒は、クラスごとに集合してください』
アナウンスが流れた。

◆　◆　◆　◆

入場門に、フェイトと健太が並ぶ。
回りは、体育会系のクラブに所属する同級生達。
全体競技ではなく、クラス選抜戦だ。
「テスタロッサ」「なに、はやま？」
「うちのクラスからの参加者は、俺達だ。勝てば、一人２０点。逆転の足掛かりになる」
「……うん」
「それだけ、はやては俺達に期待してる。　……絶対に、一等取るぞ」
「うんっ」
握りこぶしを作り、気合いを示す。
「がんばろーね！」（勝ったらロストドライバーとスカルマグナム！）
「おうっ！」（一等取って、高町にいいところ見せてやる！）
……モチベーションの保ち方は、人それぞれ。

いよいよ、スタートラインに健太が立つ。
「……」
じっとゴールだけを見る目に、迷いは無い。
クラスメイト達も、その集中を邪魔しないよう、固唾を飲んで見守る。
『位置について』
マイクを通じた教師の号令がかかる。
『用意』
……選手達が、クラウチングスタートに構える。そして。
――パァンッ!!
一斉に、飛び出した！

「健太ー!!いけー!!」「ぶっちぎれー!!」「葉山ー!!」「葉山君ー!!」
望が一番に声を張り上げ、クラスメイトも大声を上げる。
「はっ、はっ!!」
独走……とはいかなかったが、一歩はリードしている。
「こ、の、！」
二位の少年が、それを巻き返す。
足を限界まで回転させ……最後には、目さえつむって。
「……！」
全力で駆け抜けた健太を……ゴールテープの感触が出迎えた。

歓声に沸く応援席。
「……うぅ、」
フェイトは、ここにきて初めて、プレッシャーを意識した。
「……女？」
他の選手達が、訝しそうな……半分は、侮ったような顔をする。
それが更に、プレッシャーを増す。
（ボクも、かたなきゃ……！）
……それは、リラックスとは程遠い。
『位置について』
教師の号令に、慌ててスタートラインに立つ。
『用意』
――パァンッ！
（しまっ、た……！）
明らかに、出遅れた。
……あぁ。と、応援席から、諦めが混じった声がする。
保護者席からも、残念だとか、女子には無謀だとか
……
「まぁ、最下位なんだから……今更、一つ二つで変わらないよな」
ぞわぁっ！　……と、全身の毛が逆立った。
（ふ……）
自分のミスよりも……健太の戦果を、はやての努力を、クラスの応

援を陥める言葉に……
（……っざけるなぁぁぁ

応援席に戻るや否や、なのはに有無を言わさず治療されていた。
擦り傷をよく洗浄し、消毒液を染み込ませたガーゼを当てる。最後にテーピングをして、治療完了。
「なのは、いちばんだよ、いちばん！」
遅れながら、満面の笑みで報告する。
「……よく頑張ったね」
頭を撫でられ、満更でもないようだ。
「凄かったよ、テスタロッサ！」「ほんと、感動しちゃった！」
クラスメイトも、賞賛を口にする。
「あはははは！いえーい！」
勝利の興奮か、いつもの人見知りはどこかへ引っ込み、陽気に笑顔を振り撒いていた。
「よぉし、アタシも障害物競走、一位取るぞっ!!」「俺だって！」「ぼ、僕も……！」
次の競技……もしくは、ウォーミングアップに向かう、クラスメイト。
「良い出だしだ」
人がいなくなったのを見計らって、はやてがやって来た。
「ただ一位を取るより、効果的な演出だった」
「演出って……！」「なのは、いいよ」
憤るなのはを、フェイトが諌める。
「ヤガミ。ボクはつぎ、なにをすればいい？」
「この後、リレーに連続で出てもらう。今は休め」
「うん、わかった。……ヤガミ」
「なんだ」
「ちゃんと、ボクたちをかたせてよ？」
はやては、少し黙り……
「当たり前だ」
……と、それだけを答えた。
二人の活躍のおかげか、午後の戦果には目覚ましいものがあり、点

差はぐんぐん縮まりつつあった。破竹の勢い……と言って、差し支え無い。
障害物競走、一位。
男子８００メートル、二位。女子１０００メートル、一位。
女子４００メートル、三位。
男子１５００メートル、一位。
はやての狙いは的中し、中距離走では上位を独占。
……午前の短距離走では、体育会系の生徒たちが上位を奪い合ったため、点数が各クラスにバラけてしまっていた。
が、二組は、午後の中距離走に戦力をフル投入したため、他のクラスより一位・二位など、高得点を得られた。……とはいえ、午前がほぼドベだったのだから、余裕の点差とは言い難い。
そして残すは……クラス対抗リレー。これで一位を取れば、優勝確実。たとえ二位以下でも、最下位になる危険は無いのだが……最早、誰もそんなことは頭に無かった。
入場門に、最終競技らしく、大勢の生徒たちが並んでいた。
『次は、最終種目……三年生クラス対抗、全員リレーです』
教師の誘導に従い、ゾロゾロと歩いていく。
もう、ここまで来たら、戦略も何も無い。
はやては、三つをクラスメイトに約束させた。
――コケるな。
――落とすな。
――諦めるな。
……それを胸に、スタートラインに最初の選手が並ぶ。
はやては、前後を健太とフェイトに挟まれる。
決して速くは無い己の足を、カバーするべく設定した順番だ。なのはは、最後から二番目。アンカーにバトンを渡す重要な役に、まさかの大抜擢だった。
毎朝のジョギングと、剣の鍛練により、平均を上回る足腰を持つに至ったことと……アンカー（フェイト）へのバトンパスの確実性を優先した結果だ。

単純なタイムだけでなく、人間関係までも計算に入れたシフトに、なのはは呆れ半分、感心半分のため息をついていた。
喧嘩もした。口論もした。
というか、そればかりだった。
……互いに真剣や銃器を持ち出しかけたのも、一度や二度ではない。
その結果が、今日、この運動会だ。
ここまでやったんだから、負けても悔いは無い……など、考えてはいない。
やるからには、勝つ。
注いできた労力を、情熱を、優勝という形で飾ってみせる。
『位置について』
『用意……』
――パァンッ!!
だっ！　と、第一走者が駆け出す。
一人、１００メートル。
それだけなら短距離走だが、これはリレーだ。
「……馬場！」「おうっ！」
第二走者に、三番手でバトンを渡す。
他のクラスの選手も、バトンパスを行うが……
「あっ、!?」
早速、二番手の選手がバトンを取り落とした。
「く、くそっ……！」
その横を、第二走者が駆け抜ける。
また、１００メートル。
「田口！」「はい！」
バトンは、第三走者へ。
……付け加えるなら、このリレーは、男女混合だ。
男子から女子へのバトンパスは、目一杯リードを利用し……次の走者へ繋ぐ。
１００メートル。

「くそっ、」
また、他のクラスがバトンパスをミスする。
１００メートル。
バトンが繋がる。
１００メートル。
他の選手が、バトンを取り落とし……それを踏んだ更に他の選手がスッ転ぶ。

１００メートル。バトンが渡る。
１００メートル。１００メートル。１００メートル。
……ここまで、ノーミスでバトンパスが成功しているのは、二組だけ。
それは、確実に順位に反映されている。
「八代！」「任せなさい！」
……八代が、驚く程の健脚で、順位を上げる。
「健太っ！」「おっしゃ来い、望！」
ミス無く、バトンが繋がる。
さすが、サッカーで鍛えた脚。はじめ並走していた選手を、一馬身も引き離す。
……そして。
「八神っ!!」「ご苦労ッ！」
偉そうな口ぶりと共に、はやてにバトンが渡る。
途端、待機中の選手から、爆発的な声援が上がった。
「八神ー!!走れー！」「八神さーん！」「後ろ来てるぞ！逃げ切れー！」
「頑張れー！」
それを受けて、はやては……
（だーうるせぇな畜生！集中させろ！）
……毒づいていた。
やはり、魔法抜きの生身で走ることには慣れていない様子で、差を縮められつつあった。
１００メートルが、いやに遠く感じる。

懸命に足を回転させるが、差はどんどん縮められ……
（……!）
……一人に、抜かれてしまった。
いくら、想定内とはいえ……忌まわしそうに、歯を食いしばってしまう。
そして、１００メートル。
「川口、挽回してこい!!」「まかせて！」
男子生徒に、バトンが渡る。
この時点で、はやての役割は終了した。
スタートダッシュの勢いのまま、前傾姿勢で走り抜ける。
前を走る選手をぐいぐい追い抜き、順位をさらに入れ替える。
「藤田!」「おぅっ！」
バトンを渡し……他の待機中の選手とは違う場所に誘導されていく。
そこには、他のクラスのアンカーも集まりつつあった。
……アンカーが走る距離は、２００メートル。
差が縮まる、差が開く……どちらも十分にありえる距離だ。
何より、アンカーには……その先、挽回できる機会が無い。
そのプレッシャーを感じながら、クラスメイトを応援する。

順番も折り返し地点を過ぎ、残りも少なくなってきた。
「笠井!」「よしっ！」
……なのはの直前まで、順番が迫っていた。
「……」
妙に脈打つ心臓。
今更ながら、大役の重圧に足が震える。
「なのはー!」
不意に呼ばれ、ビクッと我に返った。
声は、保護者席から。
吾妻家、高町家の双方から、全力の応援があった。
「なのは、頑張って!」「バトン、頼んだよ!」「なのはー!」「なのは

ちゃん！」
……走りはじめる前に声援が送られ、何事かと注目が集まる。
なのはは、真っ赤になってぷるぷる震え……
「あああぁ、もうっ！　まだ早いんだって！　恥ずかしいことしないでー!!」
ぶんぶんと両手を振り、威嚇した。
走り終えた選手の間から、クスクスと笑い声が聞こえた。
「うー……!!　秀人さんのばか……兄さんのあほ……！」
涙目で、スタートラインに立つ。
「高町さーん、頑張ってー！」「高町ー！」「コケるなよー！」
それに便乗して、クラスメイトからも声援が飛ぶ。
「だから、早いってばー!?」
プレッシャーもどこへやら。
「高町！」
前の走者が、バトンが、近づいて来る。
なのはは一息はいて……
「……任せて！」
バトンを、受けとった。
他の選手は、皆、男子。
フェイトほど足の早くないなのはには、若干、不利な状況だ。
だが、順位だけは落とすまいと、懸命に走る。
……走りに集中するあまり、自分が順位を一つ上げたことにも気付かぬまま、コースを走る。
現在、二位。
アンカーまでの距離、３０メートル。
ラストスパートをかける。
一位に踊り出ることは無理でも……差を縮めて、アンカーに繋ぐことはできる。
先行する男子に追い縋り……数十センチ、Ｉメートルと、距離を縮める。
……そして。

「フェイトッ！」「……うん！」
最後のバトンパスが……渡った。
――わぁあああああっ!!
歓声が、声援がごちゃまぜになり、フェイトの背を打つ。
そして、一位に躍進しようとした、その時。
「くそっ……女なんかにっ!!」
横に並んだ走者が、そんなことを言い……足を、観客席とは逆。見えづらい位置に、突き出した。
「……！」
卑劣な足払い。
……普通であれば、転ぶしか無いだろう。
急ブレーキを掛けようにも、進路にあれば、そのまま突っ込んでしまう。
（転んじまえっ！）
底意地の悪い笑みを浮かべる。
彼の脳裏には、不様に地面にダイブするフェイトが見えたことだろう。
……だが。
「……そんなかちかた、うれしいの？」
フェイトは……『普通』を軽々と飛び越える。
ブレーキを掛けるどころか、より加速を増し……
「……フッ！」
ハードル競技のように、大ジャンプ。
悪意の足払いを、余裕で突破した。
止まったハードルではない。
ほぼ同じ速度で進む障害物を、後方へ置き去りにしたのだ。
「なぁっ……!?」
足を横に出すという、不自然な体勢。更に、驚きが加わり……
「、うわっ!!」
ずるっ、と、スリップダウンしてしまった。
勢いで、バトンも落としてしまう。

「くっそ！」
慌ててバトンを拾おうとした。
だが、
――かんっ。
プラスチックが跳ねる、軽い音。
「……あ、」
続いた他の選手が、バトンを蹴り飛ばしてしまったのだ。
だがこちらは、明らかに事故。蹴った選手は、全く気付いた様子も無く、フェイトを追う。彼がアンカーである以上……最早、挽回は不可能だ。
クラスメイトの冷たい視線（何人かは、足払いに気付いていたらしい）に晒されながら、ノロノロと自失した足取りでバトンを追う。
その彼の耳に、最後尾にいた選手が走り抜ける音が、空しく届いた。
……最後まで、真っ当に競技をしていれば、あるいは勝てたかもしれない。
下らない妨害が、彼の……ひいては、彼のクラスメイトの努力を、無に却したのだ。
「フェイトー！」「フェイト、こっちだー！」「テスタロッサ！最後だぞー！」「頑張ってー!!」
……ゴールテープの向こうに、自然とクラスメイト達が集まっていた。
「……！」
一瞬だけ驚き……笑顔で、最後の２０メートルを走破した。
――ゴールテープを切る感触と、級友達の抱擁は、同時だった。

――パンパンパンッ!!

……ゴールを告げる、三連の空砲が鳴り響く。
「「「

はやて率いる二組。
優勝の立役者は、クラスの全員。
完全無欠、文句なしの、クラス優勝だった。

# A’s編　第四十七話

……薄暗い執務室。
唯一の光源は、デスクトップのモニター。
「……おやおや、これは」
その光が、一人の人物の顔を、暗闇に浮かび上がらせる。
「……いかんなぁ」
……ギル・グレアム提督。
彼は、モニターに写る映像を見て……困ったように、眉根を寄せていた。
――ビーッ。
入室許可を求めるコールが鳴る。
「……」
無言で、解錠する。
開いた二重のドアから、かつかつ、とヒールを鳴らす音が近づいて来る。
女性だ。
「グレアム提督」
「うむ……君か」
「はっ」
規律正しく、礼をする気配。
照明を落とされた部屋では、顔は見えない。
「中間報告です」
レポートを提出する。
その際、モニターが目に入った。
グレアムは、特に隠すそぶりは見えない。
「これは……」
映像の中では……件の調査・監視対象が、大勢の子供達に囲まれていた。
「彼らは、何を……？」
怪訝な顔をする彼女に、グレアムが苦笑する。

「どうやら……スポーツ大会のようだよ？」
「スポーツ、大会……？」
理解不能、といった風に、首を傾げた。
「今回の主は、何をトチ狂ったのか、教育機関などに堂々と籍を置いていてねぇ……」
パキッ……と、乾いた音がする。
「殺人鬼の……分際で……!!」
冷静に見えた彼女が、手にしたレポートのケースを、握り潰そうとしていた。
「排除……排除するべきです。もし、行動を起こしたら……犠牲になるのは、子供達です。
即刻の排除を……！」
「まぁ、落ち着きなさい」
それを、穏便を装って諌めるグレアム。
「今はまだ、その時ではない」
「では、いつ……!?
力を欠いた今こそ、排除する絶好の機会ではありませんか！」
「……厄介なことに、彼女は私的に、管理局員とのパイプを持ってしまった。部隊を動かそうものなら、その局員に阻止される恐れがある」
「一局員ごとき、提督ならばいくらでも……！」
「吾妻秀人、なのだよ」
「……！」
忌まわしそうに、言葉に詰まる。
――吾妻秀人。
その名は、その力は……本人が思っている以上に、重要視されている。
それに……
「嘱託魔導師である彼には、管理局はさほど拘束力を持ち得ていない」
たとえ、グレアムが管理局上層部にいようとも……異世界の民間人を、権力を用いて拘束することは出来ない。

管理局の権力構造から外れている秀人には……権力が及ばないのだ。
「ですが……ですがっ！」
納得がいかない、と憤る。
「……愛する母親を奪われた君の気持ちは、よく分かる」
ぽん……と、彼女の肩に手を置いた。
「私とて……息子同然に思っていた部下を、十年前に奪われたのだ」
「……」
「だが、だからこそ……慎重に慎重を、幾重にも重ねなくてはならない。……一時の怒りでどうこうなるほど、闇の書は安易な代物ではないのだ」
「……了解、しました」
彼女は、ぎゅっ、と、ややくたびれた、サイズが合っていない制服の袖を握りしめる。
「……当然、指をくわえているつもりは全く無いがね」
――キィインッ!!
と、グレアムの掌に、かなり高密度の魔法陣が展開する。
眩ゆい魔力光が、目を焼く。
光が収まり……グレアムの手には、薄い灰色の……一冊の『本』が、握られていた。
「……それはッ!?」
「あぁ、つい先日に完成した……」
――闇の書の、鏡像だよ。
パラパラと、ひとりでにページがめくれて……
◆◆◆◆
……表彰台の上に、はやてと、なのはが立っていた。
クラス優勝の、表彰だ。

「ほんと、よく頑張ったわ、なのは……ぐすっ」
俺の隣で、桃子が涙ぐんでいた。
愛娘の晴れ舞台。
母親として、嬉しくない筈が無いだろう。
アルフなんかは、フェイトがゴールテープを切ったあたりから号泣していて、少し笑ってしまう程だった。
……俺だって、胸に来ない筈が無い。
この優勝はある意味必然で……だが、その必然を手繰り寄せるために、二人がどれだけ努力を重ねてきたのかを知っている。
『クラス優勝、三年二組』
校長が、賞状を読み上げる。
「……八神さん、もう大丈夫なのね」
石田先生が、嬉しそうに、寂しそうに呟く。
はやてが懸命に、自分の足で走っていた。
それはきっと、石田先生が最も見たかった光景に違いない。
『クラス優勝、おめでとう』
なのはとはやては、目を配り合い……結局、二人で一緒に受け取ることにしたようだ。
夕日が逆光になり、よく見えないが……きっと、なのはは笑顔で、はやては仏頂面をしていることだろう。

――ザザッ。

……マイクの、スピーカーのノイズか？
「……」
二人も、勝利の栄冠を手にする前に、気が付いた。
――ザザザッ。
……まただ。
ノイズだが……辺りには、気付いている奴と、全く気付いていない両極端な反応。
気付いているのは、俺の家の面子と、石田先生と、美香と、健太、望

……ごく一部。
……表彰台の上の二人も、きょろきょろと辺りを見回している。
……嫌な予感が。
今まで、必ず的中してきた、嫌な予感がする……！
――――ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザッッッ!!!!
「まさか……これは!?」
リーゼが、驚愕の声を上げた。
――ビキィイインッ!!
……闇の帳が、辺り一面を閉ざした。
瞬時に思考を切り替え、戦闘体勢に移行する。
『ユーノ、この結界の性質と効果を探査しろ。アルフは、可能なら破壊を』
クローズドチャンネルの念話で、指示を飛ばす。
周囲には、状況もわからず取り残された民間人がちらほら。
『……魔力資質持ち、か』
健太、望がいる時点で、大体想像がついた。
魔力持ちだけを隔離する結界。
俺は、これに覚えがあった。
『……闇の書!!』
もう、見境無しか。
質より量で、欠けた力を取り戻そうってハラだろう。
「秀人くん、これは一体……」
……さて、困った。
俺達だけなら良かったが……ここは、魔法のマの字も知らない民間人だらけだ。

……派手に戦ったら、巻き込む危険がある。
「先生、何も聞かずに、俺の言う通りにしてください」
不幸中の幸いか、まだ守護騎士や雑魚騎士は現れていない。
「生徒達を連れて、体育館に避難を」
「え、ええ。それはいいんだけど、秀人くんは……？」
「校庭以外に、人がいないか見てきます」
敵が出るなんて知らないだろうから、これでいいはずだ。
途中、はやてとも合流した。
先生が、子供達を引率して体育館に向かうのを見届けて……
「なのは、レイジングハートから、クロノに連絡を」
「うん。もう完了してるよ。すぐ出撃するって」
……似たような結界に閉じ込められた時の教訓を基に、通信機能も強化してある。
――ドバババババババババババババッ!!
「……来たぞ！」
校庭一杯に、暗黒のベルカ式魔法陣が多数出現した!!

◆◆◆◆

「……嘘」
私は、その術式の結界を見て……そうとしか言えなかった。
だって、これは……この結界は……
『リーゼ、どういうことだ!!』
闇の書の、独自術式だ。
『不明、です!! ですが主の御身には、確かに闇の書が存在しています！』
『遠隔操作の形跡は!?』
『ありません！』
……ってことは、信じられないけど。
『……複製？』
『……恐らくは』

ページ単位か……最悪、そのものか。
石田先生が、魔力持ちの民間人を誘導していく。
が、そんなものは意図的に視界から排除する。
『許さねぇ……！』
秀人達の手前、おおっぴらには出せない怒りを、静かに、激しく燃やす。
王たる私の所有物に勝手に触れ、浅ましく記述を漁り、複製する盗っ人。
必ず尻尾掴んで、引きずり出して……ブチ殺してやる！
「チッ……！　おい、美香！」
「はいっ、姐さん！」
カラカラと車椅子に乗りながら、美香がやってくる。
戦闘に狩り出すのは、まだ早い。
「体育館にいった連中を、防御の陣で囲い込め。そんで、不審な奴が出てきたら、ソッコーで知らせろ！　いざとなれば、防戦も許可する！」
「はいっ！」
闇の書の性質を知っている奴だとしたら、間違いなく民間人を襲う。
リンカーコアの質としては、そりゃ魔導師の方が高い。が、その分、抵抗が厄介だ。魔力持ちの民間人なら、質こそ落ちるが、楽に奪える。
「それと……リーゼ！」
「はい、主」
「私達……秀人達も含めて全員に、認識阻害をかけろ。終わったら、美香に付いて行け」
「了解しました、主」
「……何だ、認識阻害って？」
秀人が、アホ面で聞いてきた。
めんどいから、リーゼに説明させる。
「そのままの意味ですよ。魔力で身体を覆い、人相・発声など、パーソナリティを隠蔽する魔法です。……ある程度、付き合いが長い者には通じませんが、民間人には十分な効果を発揮します」

「つまり、バレることは無いからやっちまえ、ってことだ」
「その通りです」
私の魔力は……封印前の、約八割。
闇の書のブーストは、使用できない。
管理局も出て来るだろうし、単純に、外付けハードディスクとしての使用が望ましい。
「……来るぞっ！」
秀人が声を張り上げ……校庭に、わらわらと魔法陣が浮かび上がる。
せり上がってきたのは……見慣れた、雑魚騎士だ。
ただ、違うのは……手にしているのが、同じ意匠の西洋剣であるということ。
……複製の所有者によるものだろう。
恐らくは、『剣』の劣化コピー。焔の魔剣から、カートリッジシステムを廃したような片刃剣だ。
「……グレードアップしてやがる」
秀人が、呆れ半分に呟いた。
……まぁ私は、そのまま生前持っていた得物……ナイフとか、拳銃とか、釘バットとかをそのまま使わせていたからな。
使い捨ての戦力に、手間隙を掛けてカスタマイズしても高が知れているし。
――ジャキンッ！
魔剣を現出させ、握る。
……体育着のままじゃ、格好つかないな。
『甲冑』は……オートガードと、流動魔法をカットすれば、戦闘服として使えそうだ。
「……」
リーゼが、目で許可を出した。
なるべく、バレないように。
「――セットアップ」
起動音声も、あいつら流にしてみた。

――ゴォオオオオッ!!
魔力の旋風が巻き起こり、私の身体に装備されていく。
ほんの数秒ほどで、武装は完了した。
ノースリーブの上着に、ミニスカート。オープンフィンガーグローブ。魔剣のホルスターを備えた、太い皮ベルト。
うん、実に動きやすそうだ。
『オ、オオオォォ……』『アアアアア……』『グゥウウウ……』
ノロノロした幽鬼のような歩みで、こちらへ進軍する雑魚騎士ども。
……馬鹿な奴隷どもに、教えてやらなければ。
誰が真の王なのか。
今一度、闇の底に沈ませてやる――!

◆◆◆◆

「……許さない」
自然と、口に出ていた。
何の関係も無い一般人を……しかも、子供を狙うなんて。
私と、八神……それに、沢山の生徒達が楽しみにしていた運動会を、ぶち壊しにするような真似をして。
「……八神。これが、闇の書の主のやり方だよ」
「……」
八神は、神妙に聞き入っていた。
「最悪のタイミングを狙ったとしか思えない空気の読めない卑劣な奴で、自分は高みから雑魚騎士を動かして滅多に出てこない臆病者で、ダッサダサな服で格好付けてる勘違い女……」
「お前ちょっと黙れ」
――げしっ。
「いったぁ!?」
蹴られた。何で!?
「何するのよ!!」
「戦闘前にぎゃあぎゃあうるせぇよ。集中できないだろ」

……何故か、青筋が浮いていた。
「……レイジングハート、行けるよね」
『最大魔力値、７８％。収束砲撃、使用不能。誘導弾、最大追尾数、６。砲撃最大放出値、６５％』
……今まで通りの戦い方は、期待できそうに無いけど。私だって、無為に三ヶ月を過ごしてきたわけじゃない！
『Ｓｔａｎｄｂｙ　ｌａｄｙ』
「……セットアップ！」
――ゴウッ……!!
舞い上がる、桜色。私の魔力光。
……久々に纏ったバリアジャケットは、よく見れば、かなり意匠を変えていた。
肩や袖口の膨らみはオミットされ、防御力を多少犠牲に、より運動性能を高めている。
そして腰には、鞘に収まった回天桜花。
『ｃｌｏｓｅ　ｃｏｍｂａｔ　ｍｏｄｅ』
白兵戦特化。
両手で回天桜花を握るため、レイジングハートは胸元に据え付けられている。
――ヒュンッ!!
試しに、回天桜花を一振り。
……うん、いい感じ。
「おー、かっこいーじゃん！」
フェイトは、まだ武装していなかった。
「フェイト、早いところ武装しておかなきゃ……」
「ふっふっふ……ボクのバルディッシュだって、マリーにたのんで、ちょーかっこよくしてもらったんだもんね!!」「ねぇ、聞いてる？」
すちゃっ、と懐からバルディッシュを取り出す。確かに、形状がいくらか変化している。
「……なんか手裏剣みたいね」
「それじゃ……いくよ、バルディッシュ！」

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ』
「セットアップ!!」
フェイトは、期待いっぱいに、武装する。
――バチバチバチバチバチッ……!!
稲妻の魔力が吹き荒れる。
「熱っ、あっつー!?」「ぎゃー!!」
……それに呑まれ、地味にＨＰを消耗するアルフとユーノくん。
「場所を考えなさい！」
……いっそ、敵陣ど真ん中で武装させればよかった。
「あ、あれ？　あれ!?　あっれええええええええええ!?」
ばちばちと、稲妻の中から現れたフェイトに言う。が、フェイトは自分のバリアジャケットを見下ろして、愕然としていたせいで聞いていなかった。
「はむっ」『……Ｓｉｒ．』「もごもご……（ちょっとまってて……）」
バルディッシュを口にくわえて、マントを広げたり、ボディスーツを引っ張ったり、スカートをばっさばさ扇いだり……ああ、みっともない。これで女の子と言えるのだろうか。
（……プレシアさん、ごめんなさい……私が、責任を持ってなんとかします……）
「……かわってないーーーーーーーーーーーー!!!」
……叫んだ拍子に、咥えていたバルディッシュが落下した。

# A’s編　第四十八話

「なんだよもー……マリーのうそつき！　もういっしょにゲームしてあげない！」
　ぷりぷり怒るフェイト。
　最近よく、マリーの所に入り浸っていると思ったら……
『……形状の変化はありませんが、機構は最新式を組み込んでありま
す。数値にして15パーセントの出力アップが』
「えー……よくわかんなーい」
『……』
　……がんばれ、バルディッシュ。
「まーいいや！」
『Ａｘｅ　ｆｏｒｍ』
　――ジャキンッ!!
　いつ見ても物騒な形のデバイスを構える。
「ん？　……おお!?　なにこれなにこれ！　なんかついてる！」
　その基部に、回転式拳銃の弾倉のようなものが追加されていた。
　もしかして、これが……
『カートリッジシステムです』
　……やっぱり。
「なーんだ！　ちゃんとかっこよくなってるじゃん！」
　……口調は軽く、戦闘体勢に移行した。
「来るぞ!!」
　――ドバババババババババババババッ!!
　校庭に、多数の魔方陣が出現する。
　そして出現する、雑魚騎士。
「……守護騎士は、いないみたいね」
「いたらキレるわ」
「え？」「なんでもねー」
　隊列を組む……が、砲手が不足気味だ。
　何せ、以前まで砲手だった私の砲撃の威力がほぼ半減して、誘導弾

さえマトモに操れないのだ。
　秀人さん（近接特化）、フェイト（近接型）、アルフ（近接型）、八神（多分、近接型）が集まり……後方支援にユーノくん一人を置くだけという、とても偏った編成になってしまった。
　……と、いうわけで。
「とりあえず、突撃じゃね？」
「うんっ、そうだね！」「それっきゃないよね！」「おっしゃー！　あたしの本領だ！」「チッ……お前が仕切るなよ……まぁ、突撃でいいけどさ」
　秀人さんの提案に、ほぼ全員が頷いた。
「ユーノ。索敵支援回復捕縛その他色々全部任せた！」
　ぐっ！　と、サムズアップする秀人さん。
「……うん、頑張るよ！」
　ユーノくんは、全てを悟った晴れ晴れとした笑顔で、サムズアップを返した。。
　よーし……!!
「殲滅だあああああああああぁぁ「ちょっと待てえええええええええええっ!!」
　――バシュッ!!
　……私たちと、雑魚騎士の一団の間に割り込むように、転送魔法の光が輝いた。
　出てきたのは、口うるさい執務官。
「あ、クロノだ」
「何で君らはそう、前に前に出ることしか考えられないんだ！　……というか、フェレットもどき！　お前はこいつらを止めろ！」
「ああ……うん。本当なら、そうするべきなんだろうね」
「……おい、フェレットもどき……？」
　クロノが、流石に訝しげに聞く。
「……人生、流されることも必要だよね」

ふふっ……と、シニカルに笑った。
「……なんか、すまんかった」「……うん、謝らないで。切なくなるから」
……謎の共感が発生していた。
『アアアアア……!!』
雑魚騎士の一体が、そんな二人に、剣を振りかぶって……
「ええい五月蝿い!!」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
――ズババババッ!!!!
近づく雑魚騎士たちを、多数の射撃で牽制する。……そうだ！
「クロノ、砲手になって！　私たち、前線でぶった斬ってくるから！」
「だから、待てと言ってるだろう!!」
再三、制止される。
……何か、話があるらしい。
「あの雑魚騎士と呼ばれる存在は……闇の書の主に、一度殺害された被害者だということが判明した」
え!?　アレ、中身あったんだ!?
「ああ。……まだ、救助できる可能性が大きい」
「ええっと……もし、ぶった斬ったら……？」
「……今度こそ本当に、死ぬ」
「つまり……死なない程度に手加減をしろ、と」
「そういうことになる」
やっぱり、闇の書の主は性根が腐ってる。
「倒したからって、元に戻る確証があるのか？」
秀人さんが、もっともなことを尋ねた。
「ああ、ある。秀人、キミの力が不可欠だ。キミの魔法……あの、不死鳥の力が」
「……」
不死鳥？　何のことだろう。
「アレか」「アレかぁ……」『アレですね』

秀人さんと、八神とリーゼは、しっかり理解しているっぽい。
「はぁ……アイツを呼ぶのかぁ……嫌だなぁ……」
……あいつ？　何かを呼び出す……召喚魔法？
「キミは気を失っていたから、覚えていないのも無理はない」
そして、クロノは話し始めた。
私が自爆した後、秀人さんとレイジングハートがどうなったのか……そして、どうやって状況を打破したのか。
――蒼炎。
あのヴィータを……闇の書による強化もされていたであろう守護騎士を、一帯ごと焦土に変える程の破壊力。
闇の書の呪縛をも焼き尽くす、強力な浄化作用。
それが、秀人さんの新たな魔法。
『……』
秀人さんと八神は、わざわざクローズチャンネルの念話で、何かを話している。八神を口止めしているんだろう。
……偶発的に編み出した蒼炎。それを掌握できるようになったのは……おそらく、八神と一緒に過ごした一ヶ月。
「んじゃあ、アイツの蒼炎で焼き払えば万事オッケー？」
「……希望的観測を言うなら、だが」
「あ、だめかも」
と、魔方陣を展開して索敵していたユーノくんが、軽く駄目出しをした。
「何がだ？」
「この雑魚騎士たち……遠隔操作されている端末みたいだ。大本を叩かないと、いくら浄化しても……」「元通り、か」
クロノが、忌々しそうに眉根を寄せた。
「……一度破られた呪縛は、改良していて当然か」
「基本的な術式そのものは、変わってないんだよね？」
「うん。多少、応用の式が入っていたりはするけど……基本的な呪縛効果は、同じものだ。闇の書から、結界内部にいる大本を中継して、雑魚騎士……端末を操作している」

「その中継地点ってのは、結界内にいるのか？」
「うん、いることは間違いない。気配が茫洋としていて、うまく掴めないけど……なんとか、探し出してみせるよ」
「よっし……んじゃ、作戦ちょっと変更！」
——ゴシャッ!!
『グァ……！』
顔面をぶん殴られ、無様に地面を滑る雑魚騎士。
「ユーノが中継地点を探し出すまで、雑魚騎士を叩く！　ただし、絶対に殺すな！　特にはやて！」
「何で私だけ名指しなんだよ！」
——バキンッ!!
『オァッ……！』
刀の峰で肩をブッ叩かれ、折れた腕がぶらん……と垂れた。一瞬だけ動きが止まる。だが、完全には止まらない。浅ましく残った手を伸ばし、八神にのしかかろうとする。
「チッ……!!　めんどくせぇな、もう!!」
——パンッ!!
剣の腹で、雑魚騎士の胴を引っ叩いて遠ざける。
「斬れないんじゃ、剣なんか持ってるだけ邪魔か……」
カシンッ、と鞘ごと革ベルトに差込み、無手になった。
「オラ、来い！」
ひょいひょい、と手招きして挑発する。
『ウウウウウ……』『オオオオオ……』
ちょ、バカ！　無手でどうしようってのよ！
『ガアアアアアッ!!』
って、やっぱ！　私も、人のことばっかり気にしていられない！
「てえぇいッ!!」
交差させた回天桜花で、西洋剣を受け止め……受け流す！
——ガンッ!!
重量のある西洋剣が、地面に切っ先をめり込ませる。
『アアアアッ!!』

――バゴッ!!
掘り起こすように、振り上げる！　ここだっ!!
「せやあああああッッ!!」
――ザザンッッ!!
……確かな手ごたえ。
『ア、ア……！』
――ガランッ……
重ったるい音を立てて、西洋剣が雑魚騎士の手から落ちる。
どんなに強靭な鎧でも、絶対に薄くなっている箇所――関節には、必ずと言っていい程、靭帯がある。それは、人間を素体にしている雑魚騎士も同様のはず。……読みは、当たった。どんな膂力があろうとも、靭帯を切断してしまえば、剣を握れなくなる。
『ア、・アアア!!』
悪あがきのように突進してくる雑魚騎士。
「……ごめんね」
……私だって、好きで斬ってるわけじゃないんだ。
半歩移動して、突進を回避。すれ違い様に……
――ザキュッ!!
……両膝の靭帯を、切断。
『ガアッ……！』
ガシャン！　と、倒れ込む。これで、しばらくは動けないだろう。
「……、そうだ、八神!?」
さっき、二体に挟まれれなかった!?
――ゴシャッ……!!
『ゴ……グブッ、』
振り向いた先。今、まさに剣を振り下ろそうとしていた雑魚騎士が崩れ落ちた。
「……来世から出直して来い、ザコ」
プラプラと手を振り、余裕だった。残る一体も、既に倒れ伏している。
『ゴアアアアッ!!』

仲間をやられた怒り……ではないだろうけど、もう一体が、八神に仕掛ける。
――ビュオンッ!!
ここまで風切り音が聞こえる、豪速。だが、その後には何の音も続かない。
「……っと」
くいっと軽く、首を横に傾げるだけで、その一撃を回避していた。
ボクシングのファイティングポーズのまま、懐に深く入り込み……!!
「だありゃあああああァッ!!」
――ゴキッバキッメキャッグシャッ!!
『ガ、ガグァァ、アッ……!』
……一撃一撃が、やたらと鋭く疾く……重い。
瞬速の四連撃は、命中した箇所の鎧を窪ませ、抉り、砕き……露出した下地に、直に拳がヒットした。
「……」
鎧を回避して攻撃を通した私。鎧の上から叩き壊した八神。
……同じ近接戦闘でも、正反対な戦い方だった。
「チッ……暴れ足りねぇし、つまんねぇな……おい、お前ら!」
「あ!?」「なにー!? ……うひゃっ、あぶなっ!」
八神は、凶暴に歯を剥き出し……
「ゲームしようぜ! 誰が一番多く、雑魚騎士をブッ倒せるか!」
は、はぁ!?
「あなた、こんな時に何言ってるの!?」
――ヒュカカンッ!!
『ギャッ!』
もう一体、雑魚騎士を潰す!
「スコアは、そこのスクライアに計上させる! トップの者は、最下位に何でも一個命令できるってルールだ!! んじゃ、決まり!!」
返事も待たず、八神が敵陣に突っ込んだ!
「あ、ちょっと待て!」

「あ、ふらいんぐだぞ！　まてー!!」「ちょ、待ってよフェイト！」
フェイト、アルフ!?　何で釣られてるの!?
「くっ……世話の焼ける！」
クロノまで！
「こらあああああっ!!　好き勝手するなあああああああっ!!」
怒鳴っても、既にフェイト達は戦闘を続行してしまっている。
と、隣に秀人さんが並んだ。
「……アイツ、一方的にルールと罰ゲームを決める悪癖があって」
「秀人さん……秀人さんは、参加しないよね？」
あんな、一方的なゲーム。
「……正直、アイツの罰ゲームだけは御免なんだ！　すまんっ！」
秀人さんは片手を挙げ、八神の後を追った。
「ひ、秀人さんまで……!!」
まごまごしていたら……八神は、とても腹が立つ顔で、言った。
「はン！　やらねぇなら、そこで案山子みてぇに突っ立ってろ！」
「んぐっ……！　な、何だとぉ!?」
「ひゃーっはっはっは!!　おい秀人！　最下位は、高町で決定らしいぜ!!」
――ぶっちん。
……明らかに切れてはいけない類のモノが、ブチ切れた。
「みんなの……バカーーーーーーーーーーーッ!!」
こうなったら、とことんやってやるうううううッ!!

# A’s編　第四十九話

――ヒュンッ!!
「うわっ!?」
薙ぎ払われる西洋剣を、フェイトは慌てて回避する。
「ひゃー、びっくりしたー……」
初戦の時と比べ、格段に動きが良くなってきている。
「ねーアルフ！　こいつらのうごき……！」
その剣捌きに、フェイトは覚えがあった。
「ああ！　あの、守護騎士ってやつにソックリだ！」
剣を持たせただけではなく、守護騎士のデータをフィードバックすることで、戦力を増したのだろう。
「うーん……どうしよう……？」
フェイトは、悩んでいた。
以前は、気にもせずにバルディッシュを剣に叩きつけていた。だが、ヴィータとの訓練では、それによって破損していたことも明らかとなっていた。
「うーーーーーーーん……」
――ひょいひょいひょいっ。
悩みながらも全て回避しているのは、さすがだが。
『問題ありません』
それに、当の本人が答えた。
「でも……」
『内部機構に加え、外装素材を一新しました。強度・柔軟性共に、以前の比ではありません。どうぞお気になさらず、全力を』
「……うんっ!!」
笑みで返すフェイト。
『ガアアアアアッ!!』
その向かいから、雑魚騎士が迫る。
「でやあああっ!!」

西洋剣に、バルディッシュをぶつけて迎撃。
フェイトの頭の中は、この後、拮抗した鍔迫り合いからいかにして戦うか、という思考になっていた。
だが……予想外すぎる事態が起きた。
西洋剣とバルディッシュがぶつかった、次の瞬間……
――バキィンッ!!
敵の西洋剣が。劣化しているにせよ、守護騎士のアームドデバイスが。
「へっ……？」
――真っ二つに、折れ飛んだ。
『グッ……』
「……はっ!? ちゃーんすっ!!」
最初、ほけー、っとしていたフェイトだったが、その隙を見逃すことは無かった。
『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｈｅｒ』
――バガァァァンッッ!!
一点集中型の雷撃の槍が、雑魚騎士を直撃した！
「うおお、なんじゃこりゃー!!」
喜色満面に、バルディッシュを振り回す。
――バゴッ!!
……一体、何をどう作ったのだろうか。打ち合う……などという段階にさえならない。敵の武装は、衝突した瞬間、一方的に当たり負けしてしまうのだ。
しかも。
『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ!!』
――バリバリバリバチイイイイイイインッ!!
元から得意だったとはいえ、高等魔法に位置する天候操作魔法に、殆どモーションが掛からない！
「うわー、しょりもはやーい!!!」
武装としての強度。魔法の杖としての処理能力。どちらをとっても、常識の範疇を飛び越える。

……管理局随一の技術屋と、ミッドチルダ随一の大魔導師の合作なのだから、そうなるのは必然なのかもしれない。
「よーし、どんどんこーい!!」
全く、負ける気がしなかった。

それを見ながら、クロノは術式を詠唱する。
『グァァッ!!』
迫る西洋剣。
自分より魔力に秀でた、自分より小さな女の子……フェイトは、それを難なく跳ね返して見せた。自分も負けじと、それに合わせようとして……
「……」
一瞬浮かんだ考えを、クロノは苦笑いと共に捨て去る。
――ガスッ!!
飛び退った足元に、西洋剣が突き刺さる。
同時、S2Uは詠唱を認識し、発動の準備を終えていた。
『Stinger Snipe !』
連発された射撃魔法が、雑魚騎士の腕を直撃。装甲と、握力を奪う。
「はァッ!!」
『Blaze Saber!』
展開した魔力刃で、その腕を叩き斬る!
『ガァァァ……!!』
(これが、僕の戦い方だっ!)
誰かに勝る、劣る……そんな瑣末なことには気をとられない。
最小限の動作で、最大限の成果を。
それが、資質に乏しい、クロノ・ハラオウン執務官の戦いだった。
◆ ◆ ◆ ◆
学校は、一時騒然となっていた。
生徒・来場者の大部分が、眩暈などの体調不良を訴えたのだ。
ガス漏れ。食中毒。ありとあらゆる憶測が飛び交い、ついには警察・救急隊・消防隊までもが出動する騒ぎとなってしまった。

とりあえず、確認できた人間は敷地外へと避難させられ、特に症状が酷い者は病院へ搬送される。
「待って下さい！　まだ、うちの子が中に!!」
……恐らく、隔離結界に閉ざされてしまった児童の保護者だろう。
制止する警官隊を押しのけようと、暴れていた。
「市民の皆さん、敷地内は現在、立ち入り禁止となっています！　敷地内に残った児童・来場者を、現在確認中です！」
メガホンで声を張り上げる、制服姿の男性。
人のバリケード。警官隊の誰も、そこを通した様子は無い。無いのだが……
「おじいちゃん、ここなの、ここ」
黒髪の少女と。
「じーちゃん、ここだ！」
紅髪の幼女と。
「……ふむ、ここだのう」
……作務衣姿の老人が、全く気配を悟られること無く、敷地内に潜入していた。
喧騒を背後に、三人同時に、何も無い空間……に見える、結界と現実世界の境目を指差す。
デバイスであるアイ、騎士であるヴィータならまだしも。
……大家が、何食わぬ顔でそれを探り当てていることには、誰も疑問を抱かない。
「ふん、雑な造りじゃのう……」
やれやれ……と頭を振り、結界の粗を指摘する。
「いっせーのせ、でやるの」
「おっしゃ！　いくぞアイゼン！」『ｊａｗｏｈｌ!!』
――ジャキンッ!!
グラーフアイゼンを起動し、騎士甲冑……という名の、フリフリのドレスを身に纏う。
「……いつ見ても戦闘服には見えないの。とっても可憐なの」
半笑いで感想を漏らすアイ。

「るっせ。いいんだよ別に機能には問題ないんだし」
これはこれ、と割り切っていた。
「カートリッジ、ロード！」
――ガシャコンッ!!
薬莢が排出され、グラーフアイゼンに破壊力が漲る。
「すー……はぁー……!!」
大家は、独自の呼吸法で体に力を漲らせる。
「コぁッ!!」
――バツンッ!!
……作務衣の縫い目が、膨れ上がった筋肉で破れた。
「じゃ、いくの。いっ、」「せー、」「の、」
「「「「せっ!!」」」」
――パキイイイインッ!!
アイの無造作な蹴りとヴィータの鉄鎚が結界に罅を入れ……大家の鉄拳が、結界を叩き砕いた。
……重ね重ねになるが、大家はただの民間人である。
『オアアアアアアッ!!』『ガアアアアアアアアアッ!!』
結界に突入するや否や、雑魚騎士が襲い掛かってくる。
「ほっほ……懐かしい空気じゃ」
振るわれる西洋剣。それを前にして、大家はまるで、散歩道に咲いた花でも見るように、微笑んでいた。
「ただ……」
――すぱんっ。　……ゴガンッ!!
「１００年ばかし、鍛錬が足りんのう」
流れるような足払いからの、かち上げるようなアッパー。
雑魚騎士は、甲冑の欠片を撒き散らしながら３メートルも打ち上げられ……落ちた。
「……死んでないよな？」

ヴィータが、怪訝に聞く。
「うむ、安心せい。死んではおらんよ……死んでは、のう」
……コロコロと、足元に白い物体が転がってきた。
……折れた歯（×複数）だった。
「……そっか」
ヴィータは、考えることを止めた。
「ま、まぁ……心臓マッサージでも、アバラ折ったりするもんな！　不可抗力だ不可抗力!!」
――ベキンッ!!
近寄ってきた雑魚騎士に、頭蓋が潰れそうなスタンプを叩き込む。
「命拾えるなら、ちょっと（全治半年レベル）の怪我なんて、安い安い!!」
「うむ。大バーゲンじゃ」
――ゴパッ!!
吹っ切れたように雑魚騎士をボコり始めた。
「……ひっどい奴らなの」
暢気に観戦するアイの背後で、雑魚騎士が剣を振りかぶる。
――ビュンッ!!
「おっと、あぶないの」
その小柄な体躯を活かし、雑魚騎士の股座を潜り抜けた。
『ア!?』
いきなり目標を見失い混乱する。
アイは、何歩か助走を取り、
「とーう」
そんな、気の抜けるような掛け声を発し……
――――――チーン★
……男性にとって割とガチで生命に関わるデリケートなトコロを、人外の力で蹴り上げた。

『ア、アッー……ー!!　……ホアァ……!!　アーッ……!!　ヘアァ……!!』

……蹲り、男性にとって割とガチで生命に関わるデリケートなトコロを押さえ、バッタンバッタンと悶絶する。

「……うっ」

大家が、目を背けた。

『『『『……』』』』

……雑魚騎士にも、伝播したのだろう。

男性にとって割とガチで生命に関わるデリケートなトコロを、ガードしながら、後ずさった。

……哀れな第一号は、動かなくなっていた。

「む、むごいことを……！」

自分のことを棚に上げてまで、アイの行為に慄く。

じりじりと後ずさる雑魚騎士達に、アイは傲然と言い放つ。

「……おまえたちのも、潰してやろうかー、なの！」

『も』!?

「潰れ……っ!?」

ヴィータも、理解したのだろう。敵であるはずの雑魚騎士に、深い哀れみの視線を向けた。

「……」「……」

大家とヴィータは顔を見合わせ、こくんっ、と同時に頷いた。

「安心せい、お主ら……ワシがこの手で、引導を渡してくれる……!!」

「ああ、そんな真似される前に、アタシがキッチリ沈めてやるからな……!!」

『『『『……!!!』』』』（ぶんぶんぶんぶんっ!!）

いやいやそれはおかしい……と、ぶんぶん頭を振りながら下がる。

「……プチトマト」

『『『『……!!?』』』』

……極めて不吉な単語を呟くアイの声に、ビクッ！　と停止する。

前門の虎。後門の狼。

……おかしい。自分たちは、狩る側ではなかったのか。
雑魚騎士たちは、知らず知らずの間に、立場を逆転されていた。
――叩き潰されるか……蹴り潰されるか。
今、究極の二択が提示されていた。

『……!!　アアアアアッ!!』

……突貫する雑魚騎士。その兜の奥で、何かがキラリと光っていた。

# A’s編　第五十話

戦闘が始まった結界の中。
――……ア、アア……
ドロドロとした、不定形のヘドロのようなものが蠢いていた。
――アアア……
ぶくぶくと、汚らしい気泡を浮かべながら、排水溝をドロドロと流れる。
通った後は汚染され、腐臭漂う足跡を残して。
――シンダ、シンダ……コロ、サレタ……
……その不定形のヘドロは、声を発していた。形状からは信じがたいことだが、意思を持っているらしい。
――ダレニ、コロサレタ……？　ダレニ、ダレニ……？　アア、アアア……！　アシガ、アシガイタイ……！
……だが、思考までも不定形なのか、排水溝を這い出て、裏庭を這い回りながら、意味不明の言葉を口にする。
ドポン……と、プールに落下する。
――アシガイタイ……ナンデ、アシガイタイ……？
はた……と、何かに気づいたように、歩み（？）を止める。
――アア、アア、ソウダ……アシガイタイノハ、チギラレタカラ……
ゴボッ!!　と、ヘドロが激しく泡立った。
――ヒァハハハハハハハ!!!!　ソウダ！　シンダ！　シンダ！
コロサレタ！　オレハ、アシヲチギラレ、コロサレタ！
カン高い、耳障りな哄笑。
ゴゴボゴボッ!!　と、泡立ちは更に激しくなり……ヘドロが、その容積を増していく。バケツ一杯程度だったそれは、いつのまにか、プールの水全てを排出するほどに肥大化し……一気に、凝縮する！
『――クルマイスノオンナニ、コロサレタアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアッ!!!!!』

――ズシンッ!!

……干からびたプールの底に、重厚な騎士が屹立する。

騎士の鎧……とは言い切れない、異様な形状だ。下半身は雑魚騎士同様、人間らしさを保っているが……上半身は、頭部が埋没するほどに異常に肥大化しており、まるで、出来損ないのゴリラのようだった。

『ウ、ウ……!!』

丸太のような腕を振りかぶり……

『ウォアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

――バゴオオオオオオオンッ!!

ドブ色の魔力が、撒き散らされた。

◆▪◆　◆　◆

「……きた!!」

戦闘中、ユーノが声を上げた。

「きたって、何が!?」

――メキョッ!

剣を握った腕を絡め取り、折り砕く。

「援軍!」

――シュババババッ!!

チェーンバインドで、複数体を纏めて縛り上げた。

「チッ、何だ乱入かよ……らァッ!!」

――バキャッ!!

はやてが毒づきながら、アッパーで一体を沈める。

「うん、……っていうか、何か敵もいっしょにこっち来てるんだけど!?」

敵も増援か!

校門のあたりから、確かに雑魚騎士の集団がこっちに攻めて……!

『アアアッ、アアアアッ……!!』『ノオオオオオオオオオオオオッ!!』

『アーッ！　アァーッ！』
いや、なんか様子が違う……？
「……逃げてる？」
「……なのはも、そう思うか？」
俺たちのことが目に入っていない様子で、とにかく『何か』から遠ざかろうとしている印象を受ける。……なぜか、どいつもこいつも股間をガードしているのが、激しく気になる。
そして、その『何か』は……すぐにやってきた。
「待つのー!!」「待てこらあああああああっ!!」
薄っぺらいワンピースの裾をバタバタ揺らしながら駆けてくるのは……アイ、ヴィータ、お前らか。
――ドゴッ!!
横を通り過ぎようとしていた雑魚騎士にラリアットを喰らわせ、ユーノの前に放る。
「ふむ……腕を上げたのう、ヒデ坊」
爺さんが、アイアンクローで二体の雑魚騎士を掴み上げながら言った。
……あー、なるほど。さてはあの雑魚騎士たち、爺さんが恐ろしくて逃げてきたな？　まったく、弱いもの虐めするなよ。
「……何か誤解があるようじゃな」
爺さんが、悲しそうな顔で向こうを指差した。
ん？　どれどれ……？
「ほーれほれ、プチトマト、プチトマトー！」『ギャアアアアアアアアアアアアア!!!』「真っ赤な中身をぶちまけるのー！」『ヒイイイイイイイイイッ!!』「性転換きーっく!!」『ヒギャアアアアアアアアアア!!』
……阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていた。
「Ｏｈ…」
「……だ、大丈夫！　殺さなければ、後で治せるから！」
ユーノが、引きつった顔で後ずさった。
「お、おう……ちゃんと治してやろう」
……男にしか理解できない共感が、そこにあった。

「ぜえぜえ……」
ヴィータが、息を切らしていた。
「ひ、秀人……アイが、アイのやつが……！　酷いんだ!!」
「……うん、知ってた」
一体、向こうで何が起きていたのか……想像するに余りある。
「おい乱入してんじゃねえよ！スコアが伸びなくなるだろ！」
はやてがイラついた様子で、ドスドス歩いてきた。
「ん……？」
ヴィータは、何度か目を瞬かせる。
「あれ……なんか、よく見えねーぞ？」
ああ……そうか、あれだ。認識阻害。
効果が及ばなくなるのは、『ある程度の顔見知り』になってから。その、『ある程度』がどのラインかは知らないけど……初対面じゃあ、まず素顔は割れない。
「はやて、こいつが前に話したヴィータ」
ぐいっと肩をつかんで押し出す。
「……ハッ、ちんちくりんなガキだな」「ンだとやるかオラァ！」
「あァ!?　上等だオラァ!!」
ごちんっ、と額をぶつけ、至近距離でにらみ合う。
「……仲良くしろよ」
短気同士だから、相性自体はそこそこ合うはずなんだけどなぁ……
というか二人とも、言葉遣いが汚いぞ。
「こらっ、大人しゅうせんかっ!!」『アアアアアー!?』
言い合っている間に、爺さんが雑魚騎士を仕留めていた。
……今更だけど、人間じゃねえ。

雑魚騎士がほぼ掃討される。脱走を試みる個体もいたが、ユーノとクロノ、二人の厳重なバインドには抗えず、もがくだけに終わる。
残り、１０体程度か。
「うぁっ……！」

と、ユーノが突然、顔をしかめた。。
「見つけた！　敵の、大本……気をつけて!!」
――バゴオオオオオオオンッ!!
「な、」
突然、プールのあった方角で爆発的に魔力が高まり……ドブ色の汚らしい魔力が、俺たちの方角めがけて発射された！
「うおおおおおおおおおおおおっ!!」
――バリバリバリバリッッ!!
とにかく全員で、最大出力のプロテクションを展開する。そうしなければ、消し炭にされていた。それほどの威力だった。
「づ、あああああっ!!」
威力が減衰した所でシールドを斜めにし、砲撃を空に受け流す。
ズシン……と、プールのあった方角から……異様な敵が、ぬうっと姿を現した。
「なんだ、あれ……」
上半身だけが異常に大きく、二足歩行ではなく、腕も使って四足歩行をしている。
「秀人、呑まれるなよ」
クロノが、Ｓ２Ｕをがっちりと握りなおして、言う。
「……ああ」
『ガアアルァァァァァァァァッ!!』
ゴリラのような姿をしたそいつは、一吼えし……ダンッ!!　と、巨体を空に舞わせた。
「……！　や、ば！」
ゴリラの着地地点と思しき場所には、まだ雑魚騎士が……！
「どけええええええええっ!!」
――ドパァァァァアンッ!!!
衝撃波をぶつけ、弾き飛ばす。
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ！』
『Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ！』
『Ｐｈｏｔｏｍ　ｌｕｎｃｈｅｒ！』

各々の攻撃魔法で、雑魚騎士を退避させる。
――ズズゥンッ……!!
……着地の衝撃が、足元の地面をぐらぐらと揺らした。
近くで見ると、またデカくて威圧感がある。体高、約５メートル。
さっきの跳躍を見る限り、でくの坊でも無さそうだ。
『アアア……ココニハ、イナイ……クルマイスノオンナ……』
上半身に半ば埋もれた首が、何かを探してぐるぐると動く。
クルマイス……車椅子？　何だってそんなものを……
『……ドコニイッタ』
ズシン……と、地面に付けていた右手を振り上げ……！
「ヤバい、退けっ!!」
全員、その場から飛び退る。
次の瞬間……
『ドコニイッタアアア

「「「「……」」」」
その威力を知らない俺以外は、呆然と立ち尽くしていた。
「はァー……!!」
腕を振りぬいた格好のまま、荒い息を吐くはやて。
……待て、どこか様子が変だ。
「はやて、どうかしたの、」
か、と言い終えるより先に、伸ばした手が振り払われる。
「触んなクソがぁ!!」
そのまま、ゴリラに向かっていってしまう。
「あ、おい！　はやて！　……くそっ！」
一人で突っ込ませるわけにもいかず、その後を追う。
ほんとに一体、どうしたっていうんだよ……
◆▪◆　◆　◆
……奴の顔を視認した瞬間、私は飛び出していた。リーゼがいたら、絶対に止めるであろう突撃。
けど、アイツは……アイツだけは!!
『グウウウウウ……ダレダアアアア……？』
ガラガラと、瓦礫となった校舎から、奴が立ち上がる。
「……」
腰に下げた魔剣を抜き放つ。
『……ググウ……オ、オレノジャマ、スルナ……！』
ぬうっ、と右腕を振り上げる。鈍い。鈍すぎる。
「カートリッジロード……!!」
――ズ、ザンッ!!
……その腕の半ばまで、切れ込みを入れてやる。
『アアア……』
あまりにも重過ぎる腕は、自重を支えきれずに分断された。
――ベシャアッ……！
地面に落ちた腕は、どろどろと汚らしいヘドロになった。
「死ね、死ねっ、死ねッ!!」
『……』

ゴリラじみた上半身。そこに埋没した顔は、忘れるはずも無い!!

「もう一度、死ねえええええっ!!」

あの日……私を犯し殺そうとした、クソ野郎だッ！

「おおおおおおおおおおおっ!!」

――ザンッ、ザンッ、ザクッ!!

切り裂き、叩き潰し、突き立てる！

『……ヒ、ヒァハハハハハハハハハハハハ!!』

けど……どうなってやがる！　まるで、手ごたえってものが無い！

「ぐゥ……！」

それに、この疲労は一体……！

『ヒァハハハ……キカナイイイイイイイイイイイ!!』

――バシュルルルルッ!!

切り刻んでいた身体が変化し、私の四肢に絡みついた。

『オレハモウ、キリキザマレナイイイイイイイイ!!　ソノチカラヲ、テニイレタンダアアアアアアアアア!!!』

――ギリ、ギリ……！

「ぐ、あ……！　クソがァ……！　舐めんじゃねえええええええっ!!」

魔剣を魔力に還元し……カートリッジの残り魔力分ごと、ブッ放す!!

「スターレンゲホイルッ!!」

――ッバゴオオオオオオオオオオオオオオンッ!!

炸裂する、轟音と閃光。

『オオッ……！』

それは、無敵を錯覚していたクソ野郎の感覚器官を直撃した。

「フッ!!」

拘束が緩んだ一瞬を狙い、離脱。

――ヴンッ！

もう一度、魔剣を現出させ……

「はやて、待て！　何やってんだお前は！」
秀人か……クソ。こいつらさえいなければ、バレることを気にせず、思う存分やれるのに。
「うっせえ！　敵は潰す……潰すんだよォッ!!」
「無策で突っ込むな！　また捕まったら……」
『ヒァハハハハ……！　ケド、マダタリナイ！　マダマダ、チカラガタリナイイイイイイイイイ!!』
クソ野郎は、ドロドロと溶けて……
――バシュルルルルルルルルルッ!!
……そこいらにいら雑魚騎士に、どろどろとまとわり付いた。

# A’s編　第五十一話

「……な、」
……俺は、目の前で起きていることが理解できなかった。
『ア、▪アアアアア……!!』
姿を現した敵の親玉。……泥騎士とでも言うか。
そいつに、はやてが突貫していったと思ったら……そいつは、味方であるはずの雑魚騎士に、ヘドロ状になって絡みついた。
『アアアア……!!』
呑まれかけている雑魚騎士は、明らかに苦悶の声を上げている。
……脳裏に、クロノの言葉が再生される。
『大本を断てば、救助が可能』。確か、そう言っていた。
……ボケッと見てる場合か!!
「やめろおおおおおおおおおおっ!!」
インパクト、バレット、ディバインバスター……!!　ありったけ……!!
「はやて、どけえええええええええっ!!」
「……！　チッ！」
はやての離脱を確認し……途中で加わったクロノ達も、ありったけの攻撃魔法をぶっ放す!!
――――バガアアアアアアンッ!!!!
……直撃!!
「……」
もうもうと立ち込める砂埃が晴れる。
……そこには。
「……」
『ヒァハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!!』
……切り落とされた右腕も、何もかも元通りに復元された泥騎士だけが、佇んでいた。雑魚騎士は……いない。
「敵、小型戦力……反応、ロスト……」

ユーノが、消え入るような声で、事実を告げた。
「……！」
ガツッ、と、クロノが地面を殴った。
「……」
助けられるはずだった。一度は闇の書の主に殺された被害者を。だけど……
「……」
『クッテヤッタ！　ホネマデトカシテ、ホネマデノコサズ！　クッテヤッタアアア!!　ウマカッタアアアアアアアアアア!!!　チカラガミナギルウウウウウウウウウッッ!!!!』
目の前でギャアギャア喚きたてる、この醜い物体に。
――今度こそ本当に、殺された。
「……」
「秀人さん!?」
すたすたと、自分の意識と乖離した動作で、ヘドロ色の泥騎士の足元まで移動する。
『ヒァハハハハハハハ!!　ヒァハハハハハァー!!』
……汚らしいヘドロに、触れる。
『アア……？　ナンダ、オマエ……？』
俺を見下ろす泥騎士。鎧に反射して見えた俺の体に……凍てついたように透き通る……蒼が、立ち上っていた。
「お前」
『ヒァハハハハハハハ!!　オマエモ、クッテヤルウウウウウウウウウ!!!』
ヘドロの触手が、伸ばされる。スローモーションのように遅い。スローモーションのまま……俺の体に、突き刺さった。
なのはが、フェイトが、叫ぶより早く。獣騎士が笑うより早く。……触手が、皮膚を突き破り肉を抉る痛みが、脳へ届くより速く。
「消えろよ」

――――……ブゴォォオオオ

アアアアアアアアアッ!!
『……!!』
泥騎士は……悲鳴さえ焼き尽くされ、蒼炎の向こうに消えた。
◆・◆　◆　◆
……なのはを始めとする面々は、その光景を前に、一歩として動くことができなかった。
壮絶かつ一方的な勝負だった。
十体近い雑魚騎士を捕食した泥騎士は、単純な魔力にしてSランク。そこに戦闘能力を加味すれば、S＋ランクにすら届く強者だった。
……それが、燃えていた。
汚らしいヘドロを塵に変え、醜い悲鳴を火炎で包み、浅ましい抵抗を爆風で吹き散らす。
災害の猛威が顕現したかのような、圧倒的な業火。
その、あまりの破壊力に、慄いていた。
……いや、正確にはもう一つ。
「……」
怒りが振り切れ、醒めた顔のまま、淡々と泥騎士を『焼却』していく秀人が……恐ろしかった。
「……終わった、のか？」
クロノの頬を、汗が一滴、伝った。
――ビュウウウウウウウウウウウッ!!
「!!」
一時は消えかけていた泥騎士の魔力反応が、突如として膨張した。
「……」
ビデオの逆再生を見ているように、泥騎士の身体が再構成されていく。
『アアアア……アガアアアアア……!!』
「……再生した？　あの状態から？」
「……チッ。たぶん、アイツの主ね。外部から魔力を再入力して、バックアップを起動させたのよ」

さらさらと説明するはやてに、クロノが僅かな違和感を抱く。
『アツイ、アツイヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』
だが、復活した泥騎士は、未だ狂乱の渦中にあった。
巨体をくねらせながら、既に残り火となっている蒼炎に怯えている。
「……」
――すっ。
と、秀人が、右手を泥騎士に差し向ける。
……誰も、それを止める暇など、ありはしなかった。
――ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「……しぶといな」
無感情にボソッと口にし、右手を差し向ける。
『ギュアアアアアアアアアアアアアッ!!』
不死鳥が、舞う。
『イヤダアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!』
――……ズガァンッ!!
頭上から急降下した不死鳥が、泥騎士を叩き潰した。
――ビュウウウウウウウウウッ!!
……また、再生。
『ガハッ……!! モ、モウ……!!』
……やろうと思えば、一息でやれる。
それをわざわざ、再生できるギリギリで寸止めしているということは……
「……12回」
『? ……!!』
泥騎士が、その言葉の意味を察し……戦慄した。
「……お前が喰った12人分……お前を焼き尽くす」
『アアアアアアアアアアアアアアア!!』
もはやなりふり構わず、がむしゃらに暴れる泥騎士。
「……邪魔な手だな」
――ザンッ!!
蒼炎を纏った魔力刃で、腕を切り落とす。はやてに切り落とされた時と同じく、その箇所を修復しようとする。
……が、今回は蒼炎が付随している。
――ボウッ……!!
傷口が炎上し……そのまま、ジリジリと延焼を広げていく。
「……逃げる足は、いらないな」
――ザシュッ!!
延長された魔力刃が、その足を膝から切り落とす。
『……!!』

四肢の先端から延焼した蒼炎が臓腑にまで達し……四度目の死を迎えた。
――ビュウウウウウウウウウッ!!
再生。だが……もはやそれは、次の執行までのカウントダウンだ。
『イヤダ……イヤダ……！　モウ、シニタクナイ……!!』
「……そうか、死にたくないか」
ズッ……と、不死鳥が滞空する。
『ア……』
唐突に止んだ猛攻に、泥騎士が呆ける。
「チャンスをくれてやる」
秀人は、両手を広げ……こう、言い放った。
「……俺を殺してみろ」
『……ア？』
ぽかん、と口をあける。
「物理攻撃でも魔法攻撃でも……どちらでもいい。お前が出せる限りの全力で、俺の命を奪ってみろ」
「何を、言っている!!」
硬直から我に返ったクロノが、口を挟んだ。
「秀人、馬鹿な真似はもうやめ……ぁぐっ!!」
クロノは……いや、そこにいた秀人と泥騎士以外、全ての者は、唐突に頭上に発生した重量に、膝を突いた。
……重力操作。周辺重力を、纏めてクロノたちと結合させたのだ。
身動き一つ取れないその超重力は、秀人の蛮行に拍車をかける。
「さぁ……どうした。遠慮するなよ」
酷薄な……およそ、普段の秀人とはかけ離れた笑みを浮かべる。
『ヒ……ヒァハハハ……!!』
――チュイイイイイイ……ン!!
『タスカル……タスカルンダ……!!　コイツヲコロセバ……！』
口内に、恐怖を覚えるほどの魔力がチャージされていく。
一気に膨れ上がり……！

『タスカルンダアアア

ていなかった。
四肢を切り飛ばされ、全ての関節をへし折られ、どてっ腹をブチ抜かれ……
……ここにきて、ようやく重力増加による金縛りが緩む。
「……」
未だ消えぬ怒りのまま、不死鳥を手繰る秀人。
『ヒィー……ヒィー……!!』
四肢を拘束し、重力操作によって徐々に圧壊させていく。
「秀人、さん……!」
なのはが、秀人の背にたどり着く。
「もう、いいでしょ……!? もう、」
「まだだ」
「!?」
振り返らず、秀人が言う。
「まだ、八度目だ」
――グシャッ!!
……圧壊し、八度目の死を迎える。
――ビュウウウウウウウウッ!!
「もう、いい……! もう、十分だよ!! 秀人さん!!」
「……九度目」
『ピイイイイイイイイイイイッ!!』
『ヒギャアアアアアアアアアアアッ……!』
頭を咥え、胴体を鉤爪で掴み……頭部を引きちぎりにかかる不死鳥。
メリ、メリ……と、聞くのもおぞましい音が、嫌でも聞こえる。
「秀人さん……やめて……もうやめて……!!」
ボロボロと涙を流し、幼児のように秀人の背を引くなのは。
様子がおかしい。
確かに、今までも秀人が激怒することはあった。しかし、どんな時でも……なのはの言葉を無視するようなことは、無かった筈だ。
それが今は、異常なほどの魔力を放ち、泥騎士を死に至らしめる行

為に没頭している。
……瞳に、狂気の蒼を宿しながら。
『オマエト、ナンノカンケイガアルッテンダヨォオオオオオオオオオオオオ!!』
……ぴたりと、秀人の手が止まる。
「……そうだな。殺されたのは俺じゃない。だから、直接は関係ない」
『ナ、ナラ……』
「だったら……直接、本人達に、聞いてみようか」
『……ハ？』
出来る。可能だ。俺には。
「……分かるんだ。お前に殺された者たちの、無念が」
『ナ、ナニヲ……』
――ボウッ……
……青い鬼火が、灯る。一つ、二つ……増え続けていく。その鬼火たちは……人の顔を、象っていく。
「死者を……炎で呪ってな」
『痛い……苦しい……』『どうして、どうして……』『まだ、生きていたかった……』『帰りたいよぉ……おかあさぁん……』
死者の怨念を触媒に、鬼火が一層激しく燃え盛る。
「――無念を晴らせ」
――『『『『『　お前の所為だぁあああああああああああ!!』』』』』
『ウギャアアア

正気ではないと見るや否や、フェイトが、クロノが、ユーノが、ヴィータが、アルフが……それぞれ、秀人を止めに掛かる。
だが……異常な力で右手を手繰り……
「……ヒデ坊、そこまでじゃ」
……大家が、秀人の右手を掴む。
そして、その異常な色彩に染まった瞳を、真正面から睨む。
「その外道を罰するのも、気が済んだじゃろ。
これ以上、なのはちゃん達の言葉を聞かずに、そやつを嬲るというのであれば……」
――ゴウッ……!!
気迫……いや、殺気が迸る。
「ワシが、お主を叩きのめすぞ」
秀人のソレと遜色無いどころか、上回る殺気。
それに中てられ……
「……あ」
夢から覚めたように、正気を取り戻した。
『ピイイイイ……』
しゅるしゅると萎み、カラスほどの大きさになった不死鳥が、秀人の腕に止まった。
「……戻るがええ。役目は終わった」
静かに、しかし厳しく言われ、不死鳥が秀人の体内に渋々戻る。
「え……あ……？」
ぱちぱち、と目を瞬かせ、きょろきょろと周囲を見渡す秀人。
「……。……！」
その、凄惨な破壊の惨状に……そして、それを成したのが自分だという事実に、あからさまに狼狽した。
「ち、ちがう……！　俺は、こんなこと……!!」「ひでと、だいじょうぶ、だいじょうぶだから……おちついて、」
フェイトの言葉も耳に入らないようで、ふらふらと後ずさり……とんっ、と、何かにぶつかった。
振り返った、秀人が見たのは……

「……う……ひっく……ひっく……」
未だに涙をこぼす、なのはの姿だった。
「う」
――なのはを、傷つけた。
その事実を突きつけられ……秀人は。
「……うああ!!」
……その場から、逃げ出した。
「秀人！　……くそ！」
すぐに追おうとするクロノたちだったが、重圧の後遺症なのか、足腰がっふらついてしまい、追いつけなかった。
「……あの、ぼけなす」
大家に背負われたアイが、ぽつりと毒づいた。
そして、秀人に気を取られるあまり……
『……』
巨大な甲冑の中から、泥騎士の本体であるヘドロが滲み出したことに、気づくことができなかった。
「主！　ご無事ですか！」
「リーゼ!?」
はやてが、驚いた顔でリーゼを見た。
「何をやっている！　美香についてろって言っただろ!!」
叱咤するはやてに、リーゼは、本気で意味がわからなさそうな顔をした。
「は……？　いえ、ですが今、念話で……」
「ンなもん、繋げてねェよ！」
……どうにも、話がかみ合わない。
「リーゼ……きみは、どんな念話を受けてきた？」
クロノの問いに、リーゼが答える。
「……『はやてが捕まった。至急、援軍に来てくれ』、と……」
さあっ……と、クロノの顔が青ざめ……
「……体育館だ！　急げ!!」
引きつるような怒鳴り声を、上げた。

◆・◆　◆　◆

……走って、逃げて……俺は一体、何をしているんだろう。

「……」

なのはを、泣かせてしまった。

「……」

俺だけは泣かせまいと誓っていた、大事な子を。

ずきずきと、胸が痛む。

気づけば、体育館の近くにまで、足を運んでしまっていた。

「……そうだ、石田先生が……」

確か、美香やリーゼと共に、体育館に避難しているはずだ。念話で、状況終了を伝えるか……

「……あれ？」

念話でリーゼに話そうとしたのだが、繋がらない。

何度か試しても、通じなかった。

「……仕方ない、」

直に伝えるか……と、歩を進めた直後。

――パキィンッ……!!

「!!」

体育館を覆っていた防御結界に、明らかな亀裂が入った。

いまさらになって感じるのは……あの、泥騎士の反応！

「……くそ、何で気づけなかった!!」

俺はまだ、奴に止めをさしていない!!

体育館の壁を蹴り怖し、突入した。そこで、俺が見たのは……

「きゃあああっ!!」「……！」

しりもちをついた格好の美香。そして、それを庇う、石田先生の姿だった。

『アアアア……イタ、ミツケタ……クルマイスのオンナアアアアアアアアアアアアアア!!』

あの甲冑を脱ぎ捨て、ほぼ素体になった泥騎士。その手には、未だ鋭い鉤爪が備わっていて……！

『ナニモカモ……オマエノセイダアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』
「……！」
「先生に……触るんじゃねえええええええええええええええッ!!」
拳に、ありったけの魔力を練りこんで……！
――ドズゥッ!!
……貫手を、泥騎士の腹部に叩き込んだ。
『ギ、ヒィ……！』
「……おおおおおっ!!」
そして、体内で蒼炎を炸裂させる！
――……バァンッ!!
『ギャアアアアア……　　あああああああああ、あ、あ！」
……命は奪わず。その身に纏った闇の書の魔力だけを、浄化する。
ごとん、と床に落ちる、薄汚い格好をした中年の男。
「はぁ、はぁ……！」
何とか、間に合った……！
「先生、大丈夫か!?」
へたり込んだ先生に歩み寄って、手を……
「ひっ！」

――ぱしんっ。

……手が、ひりひりと痛んだ。
「……」
俺の手は、差し伸べた先から、反れていた。
「……」
感情が、浮かんでこなかった。
痛かった。
ただ、ひたすらに……叩かれた手が、ずきずきと痛かった。

拒絶された手が……痛かった。
「……あ、……ちが、ちがう……！　ちがう、の……！」
先生が、何か言っている。
フィルター越しに聞いているような声で、何かを言っている。
その声とは別の……つい数時間前に聞いた言葉が、リフレインする。
『時間がたっても変わらないものって……』
「秀人くん、違う……違うの……！」
……遠ざかっていく。
いや、これは……俺が、逃げているのか。
『時間がたっても変わらないものって……先生は、あると思うな』
「秀人くん……!!」
……そう言った女性に、俺は……心に浮かんだたった一言を、呟いた。
「――――――うそつき」
「……あ、」
俺は、逃げた。
走って、逃げ出した。
「……ああああああああああああああああああああああ!!!!!」
女性の慟哭を耳に届かせないように、遠くへ、遠くへ……
……頬に伝う冷たい雫を、拭うことも忘れて。

# A’ s編　第五十二話

……体育館に到着したはやて達が見たのは、予想をやや外れた光景だった。
避難していた民間人に、負傷している者はいない。
目を引くのは、大穴の開いた壁。焼け焦げた床。そして。
「……」
呆然とへたり込む、石田の姿だった。
「姐さん……」
からからと車椅子を転がしながら、美香がやってきた。
「美香。説明しろ」「はい……」
そして、美香が説明し始めた。
リーゼがはやてを助けに走ってすぐ、防御結界が破られ、そこから現れた敵に蹴倒されてしまったこと。
即座に反撃しようとしたのだが、石田が美香を庇ったために、思うように動けなかったこと。
そして、飛び込んできた秀人が敵を始末し……その手を、石田がとっさに弾いてしまったこと。
「……」
聞き終えたはやては、腕を組んで瞑目した。
「……秀人はもう、この結界にはいない」
ユーノが、言った。
大本である泥騎士が……その魔力が断たれた時点で、この隔離結界は、大部分の効力を失っていた。
今となっては、ユーノが操作を掌握し、事後処理を終えるまで維持しているに過ぎない。
……抜け出そうと思えば、簡単に抜け出せてしまう。
「……ひでと」
フェイトがなのはの手を握りながら、悲しそうに眉根を寄せた。
「まずいぞ、これは……皆、すまんが先に行く」

大家が、慌てて駆け出した。
「……リーゼ」
……静かに、下僕を呼びつける。
「……」
粛々と、はやての足元に膝を突くリーゼ。
「この……バカがッ!!」
――バキンッ!!
……鞘に収まった魔剣で、リーゼの頭を打ち据える。
「誤情報に踊らされやがって……！　少しは疑え、このバカ!!」
「申し訳、ありません……主」
頭を垂れるリーゼ。そのこめかみを、一筋の血が伝った。
「……!!　おい、ヤガミ！」
それを見たフェイトが、はやてに食って掛かった。
その行為が……かつて、母に言われるがままに行動していた頃の、アルフへの仕打ちとダブって見えたらしい。
「チッ……」
行儀悪く舌打ちし……何故か、魔剣の刃を、腕に添えた。
「リーゼ、チャンスをやる」
そして……
――ざしゅっ。
……自身の腕を、切り裂いた。
鋭い刃によって、皮膚が、その下の上腕大動脈が綺麗に裂かれ……一拍遅れて、真っ赤な血がどくどくと溢れ出てくる。
「……」
その場にいた全員が、硬直した。
ピチャ、ピチャ……と、血が地面を叩く音だけが、耳朶を打った。
「姐さん!?　何してるの!!」
美香が驚いて、大声を上げた。
「あ、主!!」
治癒を施そうとするリーゼの手を、払いのける。
「この血が止まるまでが刻限だ。……ケリをつけて来い」

リーゼは、真っ青な顔色のまま、しばし立ち尽くし……
「……!!」
必死の形相で、転がるように駆けていった。
「ふん、ジジイがいなくてよかったよ……」
ただ無感動に、ドクドクと血を流し続ける腕を眺めるはやて。
（……失血死するまで、1時間くらいか）
「八神！　急いで治療しなければ……！」
「今度は頚動脈を切る」
「……!!」
ユーノが駆け寄ってくるのを、脅迫して牽制する。
「……君は一体、何を考えているんだ……？」
怒りを、呆れを通り越し……不可解なものでも見るかのように、クロノがそう言った。
「念話の阻害に気づかなかったのは私の落ち度でもあるし……下僕にだけリスクを背負わせるのは違うかなー、って」
へらへら笑い、遊ぶように血の雫を飛ばす。
「……私が失血死するまでに戻ってこなければ、リーゼは存在理由を失うんだ。発破かけるには、最適だろ」
リーゼを奮起させるためだけに、己の身体に重症を負わせた、ということか。
「わからない……わからないよ」
なのはが、腫れぼったくなった顔で、はやてを見た。
「何で……？　何でそんな簡単に、自分を粗末に扱えるの……!?」
「今更、こんな命に未練は無い」
人には、大なり小なり、目的がある。
はやてのそれも、大それてはいるものの、実現できる可能性の高い目的だ。
だが、はやてが普通と違うところは……その目的に、自身が勘定に入っていないということだった。
「自分の命がどうでもいいなんて、そんなの、おかしい……！」
尚も食い下がるなのはに、はやては……言った。

「……秀人に、同じこと言える？」
「！　あ、う……！」
　言葉に詰まるなのはに、畳み掛ける。
「自分の命を粗末にするな。もっと自分を大事にしろ……ってさ」
　……消耗したアイが、少しだけ反応した。
「まぁ……言ったところであいつはやめない。変わらない」
　……誰に何を言われても、それを笑って流してしまう。『別にいいよ』と。『自分は、そういう風にできてるから』と。
「あの身体があっても無くても、それは変わらない。きっとあいつは何の躊躇も無く、命を投げ出すよ」
「……」
　否定の材料を、何一つ持ち出せない。
　似ているのだ。はやてと秀人は。
　――根底の部分で、自分の命を粗末にしている。
「だから、あいつを追っても無駄。お前たちじゃあ、見つけられない」
「……！」
　今、まさに秀人を追おうとしていた面々が、足を止めた。
（そうだ、これでいい……）
　気楽な学生生活など、無理があったのだ。
（私は……こっち側なんだ）
　はやてに向けられる、異質なものを見る目。それが真実だ。
　クラスメイト。チームメイト。そんなもの、仮初の関係だったのだ。
　決定的な断絶を示すように……真っ赤な血が、双方の間を流れていた。

◆・◆　◆　◆

「は、はひィ……!!」
　男は、結界の外を走っていた。

薄汚れた衣服。伸び放題の不潔な髪。
……泥騎士の素体となっていた、そして、はやてを覚醒させるきっかけになった、あの男だ。
「は、は、は……!!」
怯えながら……しかし、歓喜を、その顔に浮かべて。
「ひぁは、はははは……！　生きてる……オレは、生きてるぞおおおっ……!!」
解放の喜び。
その、決定的に異常を来たした思考は……秀人に下された罰を。そして……
「ひぁはは……！　何が、焼き尽くすだ！　オレは生きてる！　ま、また、女を味わえるんだあああああああああああ!!」
……与えられた慈悲を、忘れ去っていた。
男の思考には、身勝手な逆恨みと、汚らしい欲望だけが、渦巻いている。
「……救いようがない愚か者めが」
……その進行方向に、夕日を逆光に、人のシルエットが浮かび上がっていた。
頭部には、三角形の猫耳がぴんと立ち、細長い尻尾が揺れている。
――バキィンッ!!
「ひいっ!!」
男の身体を、バインドが捕縛する。
恐怖に支配された思考の中……男は、目の前の人影に起きた変化を、見ることが叶っただろうか。
「……一度ならず二度までも、わが主を陵辱せんとし……秀人に慈悲を与えられて尚、悔い改めぬ……その、薄汚れた魂」
頭部の三角形が揺らぎ、尾が引っ込み……
「……死すら、生ぬるい」
――バサァッ……!!

……背に二対、頭部に一対の……翼が、現出した。
「あ、あ、あ、……!!」
一歩一歩。緩やかに歩むリーゼ。その漆黒の頭髪が、白く、白く……いや、白銀色へと、変遷していく。
「……」
――ガシッ
謎の変化を遂げたリーゼは、男の頭部を、文字通り鷲掴みにし、持ち上げた。
「あ、がああああ……!!」
メリメリと、物理的に圧迫されていく男の頭蓋。
ピキ、ピキ……と、破滅的な音を立てる己の頭蓋に、男は恐怖し、無様に失禁する。
――ヴォオオン……
低い音と共に、リーゼの足元に魔方陣が展開する。
「外法の技だが……貴様には、相応しかろう」
「……!　……!」
魔方陣の術式に、魔力が流れ込み……発動。
「――――――テラー・バインド」
――キンッ。
……目に見える変化は、皆無。
バインドという名の付く術にしても、男の身体は拘束されていない。だが……
「……」
焦点が合っていない目で、涎を垂らす男。その目が、焦点が結ぶ。
そして。
「……!　ひぎゃあああああああ

あああああああ

「……」
仮面の奥は見えず、無言。
ただ、注がれる魔力は確かに、リーゼのリンカーコアを潤し、回復させている。
「……礼を言うべきか？」
「……無用だ。私は、私の考えで行動しているだけだ」
……それだけを言い残し、転移魔法で姿を消してしまった。
……どこか釈然としないまま、リーゼは、はやての元に急いだ。
◆▪◆　◆　◆
「……」
走って、走って……逃げ出して。
俺は、人通りの少ない路地を、ちんたら歩いていた。
うるさく鳴り続けていた携帯電話を切り、帰るでもなく、どこに行くでもなく、ふらふら歩き続ける。
「……」
ただ、あの場所から離れたかった。
『なら……直接、本人達に、聞いてみようか』
……どうかしていた、なんて言い訳をするつもりはない。
あれをやったのは……
『死者を……炎で呪ってな』
……死者の魂を弄んだのは、間違いなく、俺なのだ。
『もう……やめてえええええええええっ!!』
……なのはの、悲しい叫びがまだ、耳の奥にこびりついている気がする。
……あれが、俺の本性なのだろう。
敵を叩き潰すためであれば、死者さえも利用する……闇の書の主と、同レベルの悪魔。
――ピーッ……ピーッ……！
……と、電源を切ったはずの携帯電話に、設定した覚えの無い着信音が鳴った。
「……誰だ」

……仕方なく、それに応じる。
『吾妻くん。私だよ』
……聞こえてきたのは、男の声。
「……グレアムさん。何の用ですか」
いっそ、このまま握りつぶしてやろうか……なんて、八つ当たりじみた苛立ちも浮かんだ。
『実は……困ったことになっていてね』
「……何ですか」
はぁ……と、苦悩するようにため息をつき、言った。
『第６６管理世界に、闇の書の反応があったのだよ』
――……また、あいつか。
『管理局も人手が足りず、現地に向かうのは、私の直轄部隊だけなのだ。……頼む。力を貸してくれないだろうか』
「……いいですよ。すぐに向かいます」
どんな理由にしろ……ここから離れられるなら、乗ってやる。
『おお！　そうか、行ってくれるか！』
電話口の向こうで喜ぶ声も、いまいち信用できないけど……どうだっていい。
『では、部隊の待機所への転送ポートを開く。座標は……』
……言われた場所まで移動すると、そこには確かに、転送ポートがあった。
「……」
これを潜れば……ここから離れられる。戦いに逃げられる。
みんな、いい人たちだ。今ももしかしたら、俺のことを探しているかもしれない。
「……」
けど。
『我妻くん？　どうかしたのかね』
「……急かさなくても、すぐ行きます」
今はまだ……会える気分じゃなかった。
――ヴウウウウン……!!

転送ポートが輝く。
「くっ……ヒデ坊、待て!!　待つんじゃ!!」
……俺を呼び止める声がしたが、きっと、気のせいだ。
――バシュッ!!
俺は……戦場に、逃避した。

# A’s編　第五十三話

そこは、地球支部とよく似た建物だった。
グレアムさんの用意したポータルから飛び、ベッドで泥のように眠った後、ここに向かうように指示を受けた。
「……」
地球支部と違うところは……まず、微妙に荒れている。
壁には意味不明なペイントがあったり、何故か鋭利な切り傷があったりと……昔、仕事で解体した、アホのたまり場と化していた廃ビルに近い雰囲気を持っていた。
事前の説明によると、どうやらここは、グレアムさんの直轄部隊専用の宿舎らしいが……どんな直轄部隊だ。
――ザ、ザザザ……
少し歩くと、僅かな雑音が聞こえてきた。
――ザザザ……ザザ……
開放された一角……多分、サロンのようなスペースに、足を踏み入れる。
中身が飛び出し、あちこちに散乱したソファ。その、唯一正立したソファに、人の後頭部が覗いていた。やや煤けた、ウェーブした金髪が、ソファの背もたれから垂れ下がっていた。
やれやれ……やっと人に会えたよ。
――ザザザザ……
雑音の正体は……時空管理局という組織とはかなり縁が無さそうな、古臭いブラウン管のテレビだった。
どうやら、ソファに腰掛けたその人影は、テレビを見たまま眠ってしまったらしい。寝落ちというやつだ。
とりあえず、テレビを消して……っと。
――ザザ……　プチッ。
テレビを消して、振り返る。
「……」

――目が合った。
「……」
その、存外に整った顔立ちの、オーバーサイズのセーターを着た女性は、今しがた目が覚めたようには見えなくて……
「……あ、ども」
何だ、起きてたのかよ……
「……ん？」
と、その奇妙な食い違いに気が付いた。
この女性は、今の今まで起きていた。でも、テレビは砂嵐で点きっぱなしだった。
……ずうっと、俺が来る前から、砂嵐を眺め続けていたのだろうか。
「……」
女性は俺を、じっと凝視している。もしかして、テレビを勝手に消されたことに抗議している……？
「あの、すみません……勝手に消してしまって」
とりあえず、他人の娯楽を邪魔してしまったことには謝らねば。
「すぐ点けますんで、」
「あなた」
……と、じっと人形のように静まっていた女性が、俺の話を遮って発言した。
「綺麗な目をしているのね」
……目？
「とても綺麗な目をしているのね」
……二回も褒められた。
「あ、どうも……」
「とても綺麗……真珠のような強膜。薄茶色の虹彩。漆黒の瞳孔。……余分な充血一つ無く、それでいて、健康的な活力に満ちている」
「……この部隊の人ですか？　俺……自分は、」
「ああ、綺麗な目……」

……何か、おかしくないか、この人。
さっきから、俺を見ているようで、全く見ていない。見ているのは、ただ一点……俺の、眼球にだけ。
「綺麗……　　だ　か　ら　」
その、セーターの余った袖の下で……何かを、握った。
「くりぬいて、保存しなきゃ……！」

――ぞわあああああっ……!!
凄まじい悪寒が、背中を、全身を駆け抜ける！
「う、お……!!」
銀光が閃くのと同時、経験値からのカンで一歩後退！
――シュッ!!
「ぐっ！」
……下瞼に、熱のような痛みが生まれた。
そして、ドロッ……とした感触。血だ。
女が手にした刃物……所々が錆びたメスが、俺の真新しい血を滴らせていた。
幸いにも、下瞼。目に入ることは殆ど無いだろうけど……この女、躊躇い無く眼球を抉りに来やがった。
「……保存、しなきゃ……美しいモノは、保存、しなきゃ……」
……ヤバい、こいつ。完全にキマッてやがる。
「ああ、いいなぁ……アーデも、その目が欲しかったなぁ……」
（き……きもちわるっ……!!）
今までの敵とは、あまりにも毛色が違いすぎる。
「……ちょうだい」
――ヒュオンッ!!
メスが閃く。
見慣れてしまえば、単純な攻撃だ。
「アーデに、その目をちょうだいっ!!」
何度でも、避けられ……

――バチッ!!
「!?」
……今度は前触れ無く、痛みが発生した。
また、下瞼。しかもそこは……さっき切られ、ついさっき治癒した箇所。
触れていないのに、切れた……？　というか……傷が、開いた？
「はぁ、はぁ……!!　綺麗な目……！　アーデの、新しいおめめ……!!」
アーデ……というらしい女は、不気味な吐息を漏らしながら、興奮に上気した顔で、俺の目を執拗に狙い続ける。
間合いを取ることを止めて……アーデを誘い込む。
「あはっ……アーデに、目をくれるのねえええええええええええッ!?」
瞬時に肉薄するアーデ。
速い。速度だけで言えば、フェイトにだって匹敵するだろう。
けど、そんな直線だけの移動……破って下さいと言っている様な物だ！
「ンなわけねぇだろッ!!」
――ドフッ!!
インパクトを織り込んだ双掌打を、胸部に叩き込む!!
「くぁハッ……!!」
『く』の字に折れ曲がり、吹っ飛ぶアーデ。
決まった……と、思った時だった。
「……ちょうだいいいいいいいいいいいいいいいいっ!!」
アーデは壁を蹴り、天井を蹴り……三次元的な軌道を描き、再び襲い掛かってきた！
「……！」
バインドを仕掛けようとするが、アーデのほうが速い！
――ガシッ!!

「……っぐ!?」
アーデは、俺の腕をするりと回避し……首筋に、思いっきり抱きついてきた！
「くっ……やめろっ!!」
――ドドドドドンッ!!
バレットを生成し、至近距離から、アーデにブチ込む！
「お、あ……う……!!　目、目……!!」
だが、アーデはまるでダメージを感じさせない動きで、メスを振るう！
「ちょうだい、目をちょうだい……!!」
――ぞぶっ!!
「うあああッ！」
……肘を、真一文字に切られる。靭帯を切られたのか、意思とは関係なしに垂れ下がる右腕。治癒するだろうが……！
「離れろおおおおおおおおおっ!!」
――ガゴンッ!!
無事な左腕を振り抜き……アーデの即頭部を、思いっきりブン殴る！
こうなったら、女だろうと手加減無用だ。やらなきゃ、ヤられる。
「あああああ……！　やっぱり綺麗……！」
……が、脳震盪くらいは起こしていそうなアーデは、ぐるぐると気持ち悪く目を回しながらも、俺の頭をがっちりとホールドし、放そうともしない。
――べろォッ……!!
「うわっ!!?」
いきなり右目に入り込んだ、粘り気を帯びた感触。左目に映るのは、どアップのアーデの顔。きめの細かい肌が、視界を埋め尽くしていた。
「綺麗……かわいい……おいしそう……!!」
べろっつ、べろっ……と、何度も粘液のようなものが、右目を撫で付ける。

……舌だ。
こいつ……俺の眼球を、飴玉みたいなノリで舐めてやがる……!!
瞼を閉じても、舌が強引にそれを割り、眼球を愛撫する。
「き……気持ち悪い真似……!」
嫌悪感がマックスに達し……俺は、とにかくこの変質者を撃退することにした。
ぐいいっ……と、思いっきり背を反らし……!
「してんじゃねえええええええええええええええッ!!」
――ゴォンッ!!
渾身の、ヘッドバット!
「……!　あ、」
脳震盪に止めを加え……アーデは、ぐるんと白目を剥いて気絶した。
どさっ……と、汚い床に落ちるアーデ。
「……どうなってんだ、ここの治安は……!!」
こんな変質者が、隔離部屋から脱走しているなんて……!　とにかく、局員見つけて、牢にブチ込んでやらないと、新たな犠牲者が出てしまうかもしれない。
俺は、アーデの身体をワイヤーでガッチガチに縛り上げ、メスを取り上げ、その場を走り去った。
……角を曲がった先から、制服を着た二人の少女が並んで歩いてきた。
無表情ながらもそっくりな顔をしているし、双子だろう。腰まであるりそうなお揃いロングヘアで、片方は右目を、片方を左目を隠している。……さらに付け加えるならば、片方は右腕、もう片方は左腕の制服の袖を、肩から引きちぎっていた。肩から先が完全に露出し、生々しい肌が曝け出されていた。
「おい、君ら……!　ここの局員か?!　さっきあっちに、」
とんでもない変態が……と、言おうとした時。
無表情だった二人に、変化が起きた。
「あぁ……」「うぅ……」

片方の口唇が、にいィ……とつり上がり、もう片方の口唇が、くしゃっ、と歪む。そして。
「あぁはははははははははははははははははははははははははははははは!!!

「あはははは！　クライア！　いくよおおおおお!!」「うえええええん！　ラーファ！　わかったああ!!」
泣き笑う双子姉妹……ラーファと、クライア。
クライアの弾がバラ撒かれている間に、ラーファが次の弾倉をセットする。
――バララララララララララララララララララッッ!!
ラーファが尽きればクライアが。クライアが尽きればラーファが……と、全く途切れること無く、鉛弾が吐き出され続ける。
……！　これじゃ、いつまでも弾切れなんて起きない！　作戦変更!!
――ガシャコンッ！
再びの、弾倉交換。この一瞬だけは、弾幕が薄くなる！
「……リアクティブ・アーマー!!」
プロテクションを、炸裂させる!!
――ッバゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッ!!
「っくあああああ……!!　効くぅ……!!」
防壁を張ったにも関わらず、耳がキーン……と、痛みを発した。
スタングレネードにも匹敵する、リアクティブ・アーマー。しかも今回は、ヴィータ直伝・スターレンゲホイルも流用してある。殺傷力は低いが、閉所での制圧戦にはぴったりだ。
「あは……あはは……うるさいなぁ……」「うう……うえぇん……うるさいよぉ……」
その凄まじい轟音は、細身の少女たちを確かに打ち据えていた。
耳から血を流してふらつき、互いに正面からぶつかり……抱き合った。
「た……楽しい、なぁ……」「か……哀しい、なぁ……」
双子は、そのままコテン、と倒れた。
「……ど、どうなってる……！　はあはあ……！」
さっきの変態といい、今度の変な双子といい、本当にここ、グレアムさんの直轄部隊の隊舎か……？

「ぜー、はー……」
連戦で上がった息を整える傍ら、双子をワイヤーでくくり付けようとしたのだが……銃弾を受け止め続けた手がまだ痛み、なかなかうまくいかない。
「ねーねー、今の音なぁにー？　うるさくて目ぇ覚め……」
……今の銃撃戦でボコボコになった、簡素な木のドアを開けて出てきたのは、俺と同年代くらいの、黒髪の少女だった。
デニム生地のホットパンツに、薄っぺらいタンクトップだけという、いかにもな部屋着で、今まで読んでいたらしい文庫本を手に、俺と目を合わせた。
「……なにしてんのー？」
その少女は、きょとん、とした調子で聞いてきた。
よかった……この子は、比較的マトモそうだ。少なくとも、初対面で殺しに来たりはしない。
「ああ、こいつらいきなり襲ってきたから……あああぁぁぁ!!?」
――スコンッ!!!
頬を掠めて……壁に、紙切れが突き刺さった！
「お前もか……!!」
目の前の少女は、文庫本からページを破り取り、強化して投擲してきた。
首を、真一文字に切り裂くような軌道で!!
「んー……よくわかんないけどー……知らない人だから、殺すね？」
――バリィッ……!!
少女は、文庫本の装丁を破壊して、百枚前後の紙を宙に舞わせた。その紙が、意思でもあるかのように動き、うねり……！
「そーれ！　れっつ・えくすきゅーしょん！」
断頭台のように、鋭い刃の群れが殺到した！
――バチンッ!!
プロテクションで防御！　……突き刺さりはするものの、破るには至らないようだ。

「あらら……防がれちゃってるよ」
殺到する紙の刃の向こうで、暢気な声が聞こえる。
……アーデ。ラーファ。クライア。そして、この少女。
攻撃手段はまちまちでも、共通しているのは……不意を突いた攻撃。奇襲。
そんなやつらが集まってるってことは……この部隊の正体は……！
「……暗殺部隊か!!」
「それだと５０点かなー」
――ガスッ、ガスッ、ガスッ!!
三連続で……プロテクションを、三角形に切り取るように、刃が突き刺さる。
「！」
その描かれた三角形から、頭を反らすのと同時……
――パキイイイインッ!!!
脆くなった箇所を……紙で形成した刃が、貫き通した！
「ちィッ……！」
リアクティブアーマー発動まで、あと少しだったって言うのに……！
「まぁ、暗殺もするけどー……」
――ビュインッ!!
魔力刃を展開し、紙の刃と鍔迫り合う！
「真正面からだって、強いんだからー♪」
――ヒュ……カンッ!!
壁に突き刺さっていた紙が、再び魔力を纏い……背後から強襲する。
「……インパクトぉッ!!」
――ドパアアンッ!!
襲ってきた刃と、漂っていた紙を、纏めて細切れに消し飛ばす。
――ギィンッ!!
間合いから弾かれた少女は、まるで重量を感じさせない動きで、ふ

わりと着地する。
「おー、強い強いー。ラーファとクライアじゃ、歯が立たないわけだー」
「そいつは、どうも……！」
――左手を腰に、右手を頭の高さに……構える。
こうなったら……一撃で仕留めてやる。
「……へぇー。なんか、突っ込んだらタダじゃ済まなさそうー」
ニコニコと笑い……紙の刀を、だらりと下げた。
「んふふ。でも、その構え……自分からは攻撃できないでしょー？」
……こいつ。
初見の癖に、カウンター技だと看破しやがった。
「よーいしょっとー」
少女は、紙の刀を放り出し……その場に座り込んだ。壁に背を預け、両足を投げ出し……完全に、リラックスしている。
「……おい、何してんだ」
「んー……休憩？」
紙の刀を解体し、再び文庫本の状態にまで戻し……ぺら、とページをめくり始めた。
……戦闘意欲、消失……？　いや、油断はできない。
こいつらは……くしゃみでもするようなノリで、命を狙ってくるんだ。
……寛ぐ少女と、構える俺。
そんな状態のまま、時間が過ぎていく。
「なーにしてるんだい、お前たちは」
「!?」
いきなり背後から聞こえた声に、構えを解除してしまう。
ばっ、と振り返った先にいたのは、ボサボサの茶髪を膝あたりまで伸ばした、異様な風体の女性だった。
その身を包むのは管理局の制服ではなく、薄汚れた、野武士のような和装。
「あ、オウル姉さん。おかえりー」

少女がパッと飛び起き、オウルと呼ばれた野武士の女に抱きついた。
……進路上にいた俺を、丸っきり無視するような形で。
「……オウル、おかえりなさい……よいしょ、よいしょ……」
……俺に縛られた格好のまま、尺取虫のような動きでアーデがやってきた。
「わお、アーデルハイド。斬新なファッションじゃないの」
ぎゅむっ、とその背を踏みつけ、地面に押し付ける。
「あはははは！　オウルお姉ちゃんだあああ!!」「うえええん！　オウルお姉ちゃんだあああ！」
手を繋いで、ラーファとクライアもやってくる。
「おーう、双子。今日も極端に感情豊かだねぇ」
二人を、ひょいっと小脇に抱え、くるくると回る。。
「……何なんだ、お前ら」
……馬鹿馬鹿しくなって、構えを解いた。
「なんなんだ、って……そりゃ、ウチの台詞じゃないの？」
「……そういや、そうだな」
今更だけど、俺はこの部隊と合流するんだから。
「……吾妻秀人だ。グレアムさんの依頼で、この部隊に協力することになった」
ぽかーんとしていたオウルは、ぽん、と手を打つ。
「……はーい、はいはいはい……そうだそうだ、すっかり忘れてた。ついでに、こいつらに説明するのも忘れてた」
おい。
「わるいわるい。あっははは」
……なんて胡散臭い連中だ。
――ぐうぅ……
……と、オウルの腹から、品の無い虫が鳴った。
「はら減ったなぁ。んじゃ、メシ喰いながら説明すっから、食堂に行こう」
……ぞろぞろと連れ立って歩くオウル達の後を追い、食堂へ。

「……」
……汚い。その一言に尽きる。
流し台らしき場所には、恐ろしいことにカビが生えた食器や食べ残しがうず高く積み上げられ、入りきらない分は床に直接捨てられ、適当に端っこに寄せられている。
冷蔵庫らしき箱は大口を開け、食べ物なんだかよくわからない、ビニールのパッケージがはみ出している。
テーブルは真っ二つに割れて転がっていて、とても使える気がしない。
「ひとり二つまでなー」
オウルは、冷蔵庫らしき物品から、先ほどのパッケージを三つ取り出し、うち一つを俺に放った。
どこに座るのかと悩んでいたら、オウルは薄汚れた床に、躊躇い無く腰を下ろし、胡坐をかいた。
……郷に入り手は郷に従え、という言葉があることだし、俺もそれに倣う。
いただきます……などとは誰も言わず、好き勝手に食べ始めてしまった。
アーデは尺取虫のまま、口でビニール包装を破き、犬のように中身にがっついている。
……解いてやろうとも思ったが、やめた。さっきから、チラチラと俺を……というか、俺の眼球を見ては、舌なめずりをしている。
その、きもちわるい視線を可能な限り無視しながら、俺もその『食事』……汁気のあるカ〇リーメイト的なソレを、口に入れる。旨くは無いが、不味くも無い。
「そういえば、どこを狙われたんだい？」
行儀悪く、口の中で咀嚼しながら、オウルが聞く。
「……眼球」
「へーえ」
……さらっとスルーされた。
……味気ない食事を終え、一息。

「それじゃあ、自己紹介といこうか」
……やっとか。
「ひさしぶりだなぁ、自己紹介するなんて……今までの奴ら、ここに来る前に死んじゃったしー……」
「……!!」
……あまりにも自然に放たれた言葉に、身体がこわばる。
「うふ、うふふふ……でも、美しい肉体の素材が、たくさん収集できたわ……」
アーデが、ゴロゴロと転がり、俺の膝元にまでやってこようとした。
「……」
――げしっ。ゴロゴロ……
「あらー……」
蹴り転がして、遠ざける。
「あーははは。ウサギ狩りは楽しかったよー」「うえええん。でも、すぐに壊れちゃってつまらなかったの」
ラーファとクライアが、笑顔と泣き顔で言う。
「はじめまして。ウチはオウル。苗字は無くて、ただのオウル」
――キンッ。
鋭い金属音と共に、アーデを縛っていたワイヤーが、纏めて切断される。
「こいつの名は、アーデルハイド・アーバイン」
がっちりと首筋を捕獲され、襲い掛かっては来ない。
「んで、階級は三等……あれ、二等だっけ？　……まぁ、とにかくそのくらいの陸尉だ」
「……うふふふ。綺麗な眼球……絶対に貰うわ」
「やるかボケ」
「ちょっと気が振れてるけど、見てくれは抜群だ」
……『ちょっと』なんてレベル、軽く超越している気がする。
「そっちの双子は、ラーファと、クライア。笑ってるのが姉で、泣いてるのが妹だ。階級は二人とも陸曹」
「あはははは。また後で遊ぼうねーお兄ちゃん」

「うえええん。でも、さっきの耳がキーンってするのはいやぁよ、お兄ちゃん」
「誰がお兄ちゃんだ」
「見ていて飽きない、愉快な奴らだよ」
……というか、オウルの中では、この双子は気が振れてないって認識なのか？
「そんで、残りのそいつは……」
食事を終えたそいつは、文庫本から顔を上げて……自ら、名乗った。
「――カレン・フッケバイン」
……そうか、カレンっていうのか。
「かなり将来有望な、ウチの秘蔵っ子さ」
……確かに。年齢からすれば、まだまだ伸びシロがあると想像できる。
「というわけで、以上５人」
……異常に少ないのは、少数精鋭であるということと、多分……入っても、すぐに消えていく所為。
「……いつまでの付き合いになるかは知らないけど……」
そしてオウルは、両腕を広げ……告げた。
「時空管理局・特殊案件処理専門・独立権限保有……『凶鳥部隊』は、君を歓迎する」

# A’s編　第五十四話

「……で、いつ出撃するんだ？」
　自己紹介を終えた後、まったりと食休みに入ってしまった凶鳥部隊。
「あー……？　んー、通知が来たら出るよ」
「は？」
　通知？
「つまり、観測された敵対勢力に、私たちを投入するに値すると認められた場合のみ、ウチらの独自権限……独断での現場指揮、戦闘、事後対応が許されるのさ」
「……」
　グレアムさんの話だと、闇の書の反応があった、とのことだが……
　それを話すと、オウルはあからさまに驚いた。
「おう……おまえ、ウチらの上司どのに会ったのかい」
「会ったけど……」
「やっぱり、意地の悪そうな奴？　男？　女？　大人？　子供？」
「待て待て待て。一気に聞くな……って、ちょっと待て！」
　さっきから、オウルは変な質問をしている。内面はともかく……外見なんて、今更聞く必要は無いだろ。
「だって、直接会ったこと無いんだもん」
　……ありえねー。
「いっつも通信越しでさぁ、やれ倒せ、やれ潰せ……そればっか」
　やれやれ、というジェスチャーをするオウル。
「基本、ウチらはずーーーーーーっと宿舎で待機してんの。寝たり、テレビ見たり、本読んだり……んで、たまーにある任務の連絡があった場合のみ出撃してればいいってワケ。まあ、この環境も性にあってるし、ラクだし……」
　……そして、オウルは……いや、アーデ、ラーファ、クライア

は……諦観に染まった、歪な笑みを浮かべた。
「この身分が無かったら、とっくに極刑になるくらいのことはしてるし、ねぇ……」
……。
「……」
やっぱり、か。言動やら、行動やら……どう考えても、堅気のものじゃなかった。
この宿舎で待機というのも恐らくは、危険人物を隔離するため。
「うふふふふ……」
アーデ……アーデルハイドが、這いずるような動きで近づいてきた。
――しゅぴん。
取り上げたはずのメスを、手に握りながら。
「……ねぇ、もしかしてもしかするけど、こう考えてない？　『きっと、やむにやまれぬ事情があったに違いない』……な・ぁ・ん・て!!」
「！」
――ブシュッ!!
メスに、魔力光が灯るのと同時……さっき切られた下瞼の傷が、パクッと開いた。
「うふふふふふ……!!　あなたの前に来た局員は、そう言ったわ！　そう言って、そう言って……うふふふはは!!　ねぇ、どうしたと思う!?　その局員はねぇ……私たちを、哀れんだのよ!!　かわいそうに、って！　紅を引いた薄紅い口で！　そう言ったの!!　だから、だから……ふファハハハハはひゃあはははははははは!!!」
ゴ!!ゴロゴロと、床を転げまわる。そして、ずるぅッ……！　と、奇妙に滑らかな動作で、俺に顔をくっつけた。
「内臓を検品して、部品取りにしちゃった！」
至近距離のアーデから、毒々しい香りが漂ってきた。腐臭寸前の、

強烈すぎる薔薇の香気が。
「ぐ、う……!!」
脳を溶かすような、トルエンの百倍強烈な香気に、意識がぐらつく。
――ガシッ……！
「あ、！」
髪を乱暴に鷲づかみにされ、直接目を覗き込まれる。
「あなたも……ヒトゴロシでしょう？」
ザクッ……と、見えない刃のようなものが、俺に中に突き刺さった。
ヒトゴロシ。
ひとごろし。
――人殺し。
「く、あ!!」
裏拳でアーデを振り払う。ゴッ、という鈍い感触。
「……！　出鱈目を、言うな!!」
だが、俺に殴り倒されたままの格好で、アーデがくつくつと笑う。
「わかるわぁ……あなたからは、同属の匂いがするもの……」
「黙れ!!」
これ以上、勝手なことは喋らせない！
「直接……じゃあ無いわねぇ。ということは、間接的……あなたが原因で、誰かが死んだ……？　……大正解みたぁい!!　うふ……あはははははははははははははは　げぅッ!!」
「黙れ……黙れ黙れ黙れ……ッ!!　黙れよッ……!!」
……アーデの喉元を、服ごと締め上げる。
「ぐぅう……！　ア、アハ、アハハハハ……!!　歓迎するわ！　歓迎するわ!!
ようこそ同胞、凶鳥部隊へ！　ようこそ狢、同じ穴へ！　あはははははははは!!」
アーデは、笑っていた。窒息寸前まで締め上げられ、顔を青ざめさせ……それでもまだ、笑っていた。
「……がぁあ!!」

ぎゅうっ、と更に絞め……意識を飛ばす。
その寸前……アーデの口が、パクパクと動き……声にならない声で、言った。
――ようこそ、化け物
……と。
「何だよ……!!」
白目を剥いて倒れるアーデ。爆笑するラーファと、号泣するクライア。本から顔も上げ、じっと俺を見るカレン。
「何なんだよぉ!!」
……わけのわからない激情に駆られる俺に、オウルが言う。
「……ここは、ウチや、アーデルハイドみたいな奴が、最後にたどり着く終点」
……俺より少し上、精々が２０代程度に見えるオウル。その彼女が、妙に実感が篭もった……予想を語る。
「さんざん殺して、殺して、殺して……人の道を外れて、鬼畜外道に堕ちて……最後は、道具として使い潰されて……終わる。もう、マトモな道には戻れない。戻れるはずも無い」
懐から煙草を取り出し、咥える。
「なぜならば、ウチは、ウチらは……楽しんでいるからね。人を殺すことを」
煙が吐き出され、独特の匂いが鼻に届く。
「殺したくて、殺したくて……食事をするように、睡眠をとるように……呼吸をするように」
殺すために、殺す。
「人の輪の中にいられなくなった、はみ出し者。それが私たちさ」
……人の輪、か。
「……」
黙りこんだ俺に何を感じたのか、オウルは俺に、煙草を一本差し出した。俺には読めない文字で、何かプリントされている。管理局の官給品だろうか。
受け取るが……どうしたものか。煙草なんて、一度も吸ったこと無

いんだが……
「……あーもう、じれったいやつだなキミは」
「むぐっ……」
取り上げられ、口に突っ込まれる。
――じゅっ。
俺の咥えた煙草の先端に、オウルが自分の煙草をくっつけ、火を移す。
「……げふっ！」
人生初めての煙草。まぁ予想通りというかなんと言うか。盛大にムセた。
カレンは、いつのまにか文庫本から顔を上げ、じっとこちらを見ていた。
「はみ出し者同士……傷を舐め合おう。それがここの、唯一絶対の規則だ」
「……」
スウッ……と、今度はむせずに煙草を吸う。
「……ああ、よろしく」
――ここにいよう。
自然と、そういう思いが浮かんできていた。
戻っても……また、誰かに拒絶されるくらいなら。ここにいながら、闇の書事件の解決に当たればいい。
「カレン、秀人を案内してやれ」
「ん、わかったよオウル姉さん」
カレンは、読んでいた本をブックホルダーに仕舞い、立ち上がった。
「あはははは！　おーい、アーデ！　おっきろー!!」
「うえええん！　起きてよアーデ！　あそぼうよー！」
「ややややめなさい、やめなさいあなた達ぃ……！　中身が出ちゃうううううう……!!」
……アーデが、双子にのしかかられていた。キャメルクラッチと逆エビ固めをツープラトンで仕掛けられ、顔色が紫色だった。
「……」「……」

うわ……目が合った。
「秀人！　こ、この子達を、私の上からどかしてちょうだいいいいいいい……!!」
「……」
どうしよう。
「ひぃいいいいいいん……!!　痛い、痛いのよぉ……!!」
……どうにも本気で痛そうだし、数々の変態的所業には目を瞑って、助けてやるか……
「あはははは！　お兄ちゃんもやる？　ヒトデごっこ！　いぶくろを吐き出すまで搾り上げるの！」
「うえええん！　プラナリアごっこの方がいいのー！　からだをばらばらにして、くっつけるの！」
……ごめん無理。
「ひぃい！　本気だわこの子たち！　オウル！　助けて頂戴!!　海産物にはなりたくないぃ!!」
「子供の遊びだ。付き合ってやれ」
オウルは、取り付く島も無い。
「じゃ、行こうかー」「そうだな、案内頼むわ」
……俺たちは、その場を後にした。
「んー、んふふふー」
前を歩くカレンは、上機嫌だ。
「何か、嬉しそうだな」
「そりゃ、嬉しいに決まってるさー。久しぶりに家族が増えたんだもーん。基本、ここって女所帯でしょー？　弟でもいれば、もっと楽しくなるのになぁ、って、いつも思ってたんだー」
弟……って、見た目殆ど同い年だけど。
「カレン、おまえ何歳？」
雑談のつもりで切り出した。
「……」
カレンは、ぴたりと足を止めた。
「覚えてない」

語尾も伸ばさず、淡々と言った。
「気づいたら人を殺してて、殺すのが当たり前の生活をしてて……それからはずっとここにいたから、覚えてない」
「そうか……」
つい忘れそうになるけど……この部隊にいる連中は、普通の生活なんて……誕生日を祝うなんて習慣、無かったのかもしれない。
また歩き出す。
(俺が17だから……)
「……カレン、お前は18歳ってことにしとけ」
「？　……なんでー？」
「俺の『姉』なんだろ？　なら、いっこくらい年上じゃないとさ」
「あは……そっか、私、18歳かー……」
カレンは、びっくりした顔をして……
「ありがと、ヒデくん」
少し頬を赤らめて、照れくさそうに笑った。

◆・◆　◆　◆

小学校。三年二組の教室。
「……」
表向きには、ガス漏れか何かによる集団幻覚として処理された、襲撃事件から一週間。学校は、ようやく再開された。
「……」
教室内の空気は、まだ、どこかぎこちない。
うやむやのうちに終わってしまった、不可解な事件。そして……
「……チッ！」
……あからさまに不機嫌な、はやてのせいだ。
(クソが……あのバカ、どこに行きやがった)
……秀人が行方をくらませて、一週間。
大家が目撃した、秀人の行方。アースラの総力を以ってして、未だに手がかりさえ掴めていなかった。
「……」

「あ、ああの、あの……八神さん……」
クラスメイトの一人が、おずおずと意を決して話しかけてきた。
「何だ、戌井」
半眼を向ける。
「た、高町さんとフェイトちゃん……まだ、来ないの……？」
更に加えるなら、なのはとフェイトが学校を休んで、一週間である。
「お、同じところに住んでるんだよね……なら、何か、」
「知るか」
「……！」
クラスメイトとの会話を、邪険に突っぱねる。
……きっと、何かがあった。それを、クラスメイトは薄々感じていて……
「……チッ」
はやてはそのまま立ち上がり、教室を出て行ってしまった。

……学校をエスケープしたはやては、自宅跡地の近くにあったコンビニに入った。
「らっしゃーせー……」
例の、金髪のバイトがいる店だ。
はやては、籠に大量のスナック菓子と、アイスクリームと、ジュースを詰め込む。
「……これ」
どかっ、とレジに置いた。
「そこの肉まんとピザまんと角煮まん、フランクフルトとアメリカンドッグとから揚げ串、全部」
……飽き足らず、レジ横のホットスナックまで買い込むようだ。
「……食いすぎじゃね？」
バイトが、もっともなことを言う。
「チッ……黙って売れ」
「栄養偏るんじゃねーか、これ……」
ぴっぴっ、とバーコードが読み込まれ、表示される金額はあっとい

う間に四桁に届いた。
「オレの妹さぁ……」
「あ？」
　レジ打ちの傍ら、世間話を始めた。
「入院してんだけど、ずーっと病院食だろ？　たまには、こういう身体に悪いくらいのジャンクフードも食いたいだろうに……さすがに、こんなアホみたいな量じゃ無いにせよ」
「うるせぇよ！」
　レジに万札を叩きつけ、両手に抱えるほどのビニール袋を持って、店を飛び出した。
「おい、釣り銭！　おーい!!」
　後ろから呼び止める声を無視して、目的地を目指す。
　目的地……町はずれの高台に登る。
　そこは、はやてのお気に入りの場所だった。車椅子だった時は、坂がキツくて来られなかったのだが……こうして登れるようになってみると、景色は良く、ほどよく静かで、中々に快適だ。
　そこのベンチに座って、本でも読めば最高なのだが……
「……」
　今日に限って、先客がいた。
　しかも、はやてがよく知る人物だった。
「……石田先生」
　……私服であることから、仕事には行っていないと分かった。
「……」
　はやてを見て、眼を見開く。が、何も言わず、俯いてしまう。
　――秀人の失踪の原因は、石田だ。
　美香の話から、はやてはそれを知っていた。
「……チッ」
　その横に、ドカッと乱暴に座り、ビニール袋を放る。
　その量に、あっけに取られる石田。
　むしゃむしゃがつがつ……と、手当たり次第に食い散らかしていく。

「……身体に悪いわよ」
ようやく、口を開いた。しゃがれていて、よく見れば、目元も赤い。
「ふん……もう、患者じゃないから関係無いだろ」
「そんなこと……うん、そうよね」
ただ、町を見下ろす。
「もう、患者じゃないんだもんね……あなたも、秀人くんも」
「……」
「なのに……また、間違えちゃった」
ざくざく、とポテトチップスを噛み砕く。
「……助けてくれたのに、傷つけて……」
さながら、懺悔のように、つらつらと話し続ける。
「石田先生はどうしたいの」
ジュースで一服して、はやてはそれを遮った。
「秀人を傷つけて……それで、先生は今、何をしたいの。どうしたいの」
「……」
「本当はもう、決まってるんだろ？」
――会って、謝りたい。
それが、石田の心情だった。
「……」
沈黙は、肯定だ。
「なら、アンタは今……こんなところで、何をしているんだ」
「……だって、」
小さな子供のように、スカートをぎゅっと握り締める。
「だって……もう絶対、許してくれない……！」
ぼろぼろと涙を零して、弱音を吐いた。
はやては、はぁ……とため息をつく。
「順序が逆だろ」
「……え？」
きょとん、とする石田に、はやてが言う。
「許すも、許さないも……まずは会って、謝ってから考えることだ

ろ」
「……あ」
今更ながら、それに気づいた。
「……馬鹿ね、私。そんな簡単なことに気付きもしないで、こんな場所で……」
きっ、と、目つきを鋭くする。
「秀人くんを探すわ」
……決然と、言った。
「街を虱潰しにしてでも探し出して……まずは、謝らないと！」
「まァ、ちょっと待ちなよ」
立ち上がろうとした石田の手を、はやてが掴む。
「ん」
……ビニール袋を一つ、ぶっきらぼうに突き出す。
中には、ジャンクフードの山。
「これは……？」
不思議がる石田に、はやては、悪戯っぽい笑みを見せた。
「……食べなよ。驚くほど身体に悪いらしいけどな」

「……！」
石田は、意を決したように、猛然とジャンクフードにかぶりつく。
アイスも、菓子も、ホットスナックも、次々に。
――がつがつがつ。
――むしゃむしゃむしゃ。
……女医と小学生が、黙ってジャンクフードにがっつくという、奇妙極まりない光景がしばらく続く。
「んぐんぐんぐ……ぷはァっ!!」
最後に、二人してジュースを一気飲み。
「……はやてさん、ありがとう」
「ふん……別に、私は何もしてないよ」
「それでも、ありがとう」

「……」
それだけ言い残して……石田は、坂を駆け下りていった。
「……ふん」
ごみを片付け終えて……はやては、不敵な笑みを作った。
（そうだとも……答えなんて、とっくに出ている）
今、自分がすべきことは……！
「秀人！　首根っこ捕まえてでも、叩きのめしてでも……連れ戻してやる!!」
――バシュッ!!
飛行魔法を発動し、飛び立つ。
「お前は、私のモノだ！　私から、逃げられると思うなよ!!!!」
……秀人の捜索が、始まった。

# A’s編　第五十五話

――カタカタカタカタ……

多数のオペレーターが勤務する、アースラのブリッジ。

そこに、ひっきりなしにタイピングの音が鳴り響いていた。

「はひー……！」「き、きっつ……」「……眠い」

三々五々に、愚痴りながらも手を休めない。

全員が全員、失踪した嘱託魔導師……というか、秀人を捜索していた。

前回も、こんなことがあったが……あちらは、完全に転送ミス。こちらは、１００％秀人の意思。

正直言えば、この捜索は、リンディの……ひいては、彼女に助力を依頼した、吾妻家の面々のわがままに過ぎない。

特に……秀人の暮らすアパートの大家は、とにかく切羽詰った様子で、海鳴市を駆けずり回っていた。

なのは、フェイトなどは、学校を無断欠席し続けてまで、秀人の行方を追っている。

ユーノとアルフは無限書庫。ヴィータはマリエルと共に。

……彼ら、彼女らの能力は、各々の分野において、既にエキスパートと言って過言ではない。闇の書事件の解決のためにも、ぜひともその能力が欲しい管理局（リンディより、更に上層部）の都合があるのだが……彼らは、秀人の捜索を最優先に行動してしまっている。そのため、早いところ秀人を発見しないことには、彼らの能力をフルに投入できないのだ。なので、管理局上層部は仕方なく、アースラのクルーによる、秀人の捜索を半ば黙認する形となっている。異例といえば、異例の事態だ。

「第２４管理世界、第３５管理外世界、……えっとえっと、第６３管理世界……!!　ひいぃ、終わらないです……」

その中でも特に……クロノのお付きとして駆けずり回っているエイミィに代わって、オペレーターを統括する羽目になってしまっ

たフィアット陸曹。彼女は、忙しかった。
あちこちに派遣された捜索隊からの報告をまとめ、整理し、更新し……それを、いくつも同時にこなさなければならないのだ。
寝落ちも許されず、ただひたすら膨大なデータを整理し続ける。その頭が、こっくり、こっくりと船を漕ぎ始め……
『フィアット！』
「はあああああい!!?」
通信が入ると同時、ばね仕掛けの人形のように跳ね上がった。
「ねねね、寝てません、寝てませんよ!?　フィアット、起きてまーす!!」
誰も聞いてない。
『こっち、第４３管理世界！　データ送るね！』
――ばごーん。
「はいっ！　どうぞ！」
あたふたとしながらも……タイプミス一つしないのは、凄いのか凄くないのか。
「……どうやら、そこもハズレのようですね」
『くっ……！　まったくもう、どこ行ったの秀人さんってば……』
――ぼごーん。
ぶつぶつ愚痴るなのはの後ろで、どうにも不吉な音が気になる。
「あ、あの……なのはさん……？　さっきから、何の音ですか……？」
『え？　ああ、さっきから、現地の歩くカエルみたいな謎生物に襲われてて……！　ああもう、うっとうしい!!』
――ちゅどーん。
フィアットは、青ざめながら言う。
「だだ、駄目ですよ！　現地の生態系に、みだりに踏み込んだら！　ただちに、退却してください!!」
『わかったわかった……とりあえず、襲ってくるのだけ、殲めつ……じゃなくて、撃退したらね！』
「いま、言い換えましたよね!?　とても物騒な単語を、言い換えましたよね!?」
『気のせい気のせい！　じゃーね！』

「なのはさあああああああああん!!」
ぶつんっ、と一方的に断ち切られる通信。
頭を抱えるフィアットの手元に、新たに何通ものメールが届く。
恐る恐る開封すると……
『時空管理局・環境管理部』
いわゆる一つの抗議文。警告通知。
「……あぁっ……!」
……フィアットは、コンソールに突っ伏した。
◆▪◆　◆　◆
俺が、この凶鳥部隊に来てから、そろそろ一週間が経とうとしていた。
アーデに寝起きを襲われたり、双子から銃器で追い掛け回されたりすることにも、結構慣れてきた。
……どんな環境であろうとも、人間は慣れることができるらしい。
「……よし、だいぶ綺麗になってきたな」
掃除機のスイッチを切り、倉庫の中に置く。
ここ最近、ずっと掃除ばっかりだった。何せ、隅から隅まで汚れているんだ。
壊れた家具やらドアの破片を纏めて焼却し、謎の赤い汚れを洗剤でゴシゴシこすり落とし、生ゴミを堆肥ボックスに捨て、水周りのカビやぬめりを洗い流し、あちこちに落ちた吸殻やホコリを掃き……
「……長かった」
……ようやく、人が過不足無く生活できる程度の清潔さを取り戻すにいたった。
さて、戻るか……と、踵を返した時。
「……どうした？」
部屋の入り口に背を預け、じーっと俺を見ているカレンと、目が合った。
「んー？　読書してただけだよー？」
ぱたぱた、と、ハードカバーの表紙を扇ぐ。

「わざわざ、立ったまま、こんな場所で？」
「うん！」
「……二日前に読み終わった本を？」
「うん！」
……初日以来、何故かカレンは、俺と一定の距離を保ちながら、何をするでもなく、視界の隅っこや背後で、俺のことを観察していた。
「……」
とりあえず昼飯にして……その後、各々の部屋でも掃除してやるかな。
「……」とことこ。
また、俺の背後を足音がつけてくる。
厨房には、何故か手付かずの食材と……カレールウが放置されていた。
米、生肉、調味料など……要は、調理しなければ食べられない類のものばかり。オウル達がいかにテキトー極まりない食生活を送ってきたのか、よくわかる。
「あ、ヒデくんヒデくん。お鍋がぼこぼこいってるー」
お、沸騰したか。
「んじゃ、さっき渡したやつを入れて、火を弱めてくれ」
「おっけー！」
――どぼんっ、どぼんっ。
カレンは、手渡したカレールウを、沸騰した鍋に投入する。
少しして、カレールウが溶けてくると、あたりにカレーのいい匂いが充満した。
「ヒデくんヒデくん、なんかいい匂いだよー」
換気扇は……いいや。匂いを漂わせておけば……
「あらあらあら……食べ物の匂いがするわぁ……」
「あはははは！　おなかすいたね、クライア！」「うえええん！　おなかすいたよ、ラーファ！」
アーデと双子が、匂いに釣られてやってきた。
「オウル姉さん、まだ訓練場かな……」

カレンは、壁に据え付けられていたパネルを操作し……
『オウル姉さーん、集合だよー!!』
館内放送で、オウルを呼び出した。
本来ならば、決して許されない設備の無断使用だが……この隊舎には、俺を含めて僅か6人しかいないため、誰も見咎める者はいない。
また少しして、オウルがやってきた。いつもの野武士のような姿で、僅かに汗をかいているようだ。
「おう、急に呼び出して何かと思えば、メシじゃないか」
「わたしとヒデくんが作ったんだよ」
……カレン。お前がやったのは、ルウを投げ込むことだけだったろう。
「オウル、ちょっといいか」
皿に盛ったカレーライスを手渡す。
「何だ、秀人？」
「廊下で匂い嗅がなかったのか？　結構、強烈だと思うんだけど……」
「……」
オウルは、少し黙り込むような気配を見せた。
カレーライスに目を落とし……
「ウチ、嗅覚と味覚が無いから」
……と、言った。
「……え？」
聞き返して……ミスに気がついた。まずった。ここに、過去を聞かれて困らないやつなんていないのに……
「ああ、気に病む必要は無いぞ。ウチにとっては、それが普通なんだから」
そして、むしゃむしゃとカレーを食べ始めてしまった。
味覚も嗅覚も無い……それじゃあ、食生活にこだわりなんて、生まれるはずが無い。
微妙な気分のまま、カレーを食べる。
「あはははは！　お兄ちゃんおかわり！」

「うえええんん！　先を越されたあぁ!!」
口の周りを茶色く汚した双子が、空っぽになった皿を突き出してきた。
この双子は、１２歳と少し……らしい。こうして見てる分には、まんま子供だな……
「うふふふふ……」
アーデは、不気味な笑顔のままで、手をつけようともしない。
「どうした、気に入らなかったか？」
「うふふふふ……違うわぁ……」
じゃあ、何で……
「あのね……さっき、ラーファとクライアと、遊んでいたの」
……微妙に面倒見がいいんだよなぁ。
「そうしたら、いきなり……『射的ごっこ』とか言い出して……ゴム弾で、至近距離から私の両肘を撃ちぬいたの……うふふ、まだ手が上がらないわぁ……しくしくしく」
はらはらと涙を流した。
「うおおおおい！　先に言えよ！」
両肘を掴み、治癒魔法を行使する。
「ラーファ！　クライア！　お前らはお代わりナシだ！」
「えええええええええっ!!?」
がーん、とショックを受けていた。
「何で何でえええええええええ!!?」
ぐいぐいと詰め寄ってくる。
「人に銃ぶっ放すなって言っただろ!!　約束破ったおまえらが悪い！」
「やだあああああああああ!!　おかわり！　おーかーわーりー!!」
びーびー泣いて、皿をスプーンでカンカン叩いて抗議する、１２歳前後の少女たち。ちょっと異常にも思える光景だった。
駄々をこねる双子をあしらっている、その時だった。
――……ビイイイイイイイイイイイイイイイッ!!

突然、聞いたことの無い警報が鳴り響いた。
「!!」
その瞬間……オウルが、カレンが、アーデが、ラーファが、クライアが……変わった。
跳ね起き……壁に据え付けられていたコンソールをざっと眺め、散り散りに走っていってしまう。
「あ……え……？」
この間、1分も経過していない。
あまりにも唐突な場面転換に、俺は、間抜け面をさらして突っ立っていることしかできなかった。
……とにかく、再び足音が集合しつつある一角へ走っていった。
「……」
遅れてきた俺を、オウルはちらっと一瞥し……転送装置の操作盤を、なれた手つきで打鍵し始めた。
「ヒデくん、ヒデくん」
くいくい袖を引かれる。
「カレン、何だよ一体……」
「何って……『お仕事』だよ？」
カレンは、いつもの軽装ではなかった。
上から下まで暗色の戦闘服。軍靴。ミリタリーグローブ。皮ベルト。
機能性を最優先とし、一切の無駄が省かれたその装束は、ある種の格好良さを感じさせてくれた。
小脇に、百科事典ほどもある本……多分、魔導書。それに、紙刀ではない、ずしりとした重量感を感じさせる実体剣をベルトに佩いている。
これが……カレンの戦闘モードか。
「お仕事……」
……そうだ、忘れるところだった。
俺は元々、この部隊と共に、闇の書の追跡をするという依頼を受けて、ここに来たんだった。

こんな大事なこと、何で忘れていたんだか……

「……」

ポケットからは、軽い感触。支給された煙草の紙箱だ。……もしかして、この物忘れは煙草のせいか……？　だとしたら、吸うものじゃないなぁ……

「うふふ……あまり、小難しいことは考えなくてもいいのよ」

アーデが、するりと近づいてきた。こいつも、大まかなデザインはほぼ同じの、暗色の戦闘服に身を包んでいた。

アーデの場合は、ベルトに通すような形で、長方形のケースを携行している。中身など、想像するだけで恐ろしい。

「あはははは！　そうそう、そうだよお兄ちゃん！　ラーファたちは、難しいことなんて考えないで……殺れって言われた相手を、ヤっちまえばいいんだから！」

「うえええん！　お兄ちゃん、クライアの獲物は、横取りしちゃ嫌ぁ、だからね？」

くるくると俺を周る双子が言う。

彼女たちは、腰だけではなく……両肩にたすき掛けにしたベルトにまで、多数のホルスターとをくくりつけ……大量の火器を手に、武装していた。

「よーし、準備はいいな」

ただ一人だけ……オウルのみが、いつもどおりの野武士のような姿だった。

彼女は、本当にいつもどおりだ。カレンのような剣も、アーデのような拷問器具も、双子のような火器も無い。

「……」

だが、なんというか……すごく、『自然』な立ち姿だった。

これからの戦闘に気負うでも、興奮するでもなく……まるで、散歩にでも行こうとしているかのような、自然さ。

――ブウウウン……！

転送ポートが開き……ついに、戦闘が始まろうとしていた。

オウルを先頭として……アーデ、ラーファ、クライアが、次々に飛

び込んでいき……残るは、俺とカレンのみ。
――きゅっ
……武者震いする俺の手を、意外なほどに柔らかい手が包み込む。
「それじゃ、いこっか！」
「……おう、行くぞ！」
俺たちは、手を繋いだまま、転送ポートに飛び込んだ！
……凶鳥部隊での闘いが、ついに始まった。

# A’s編　第五十六話

俺たちが降り立ったのは、どこか薄暗い、砂漠のような世界だった。
さくさくと、青白い砂を踏みしめながら、凶鳥部隊の６人が歩を進める。
「……」
オウルたちは、無言だ。ミーティングも何も必要ない。なぜならば……任務の内容はあらかじめ、隊舎の壁のパネルに全てを明示されていたのだから。
それによると、目標は闇の書……ではなく、その影響を受けた『何か』。詳細は、現地まで出撃し、確認。可能であれば、サンプルを採取しておく……と、至極シンプルだ。
「……」
このへんは、さすがはプロの……うん、まぁ、なんというか……特殊部隊だ。
「……」
皆が皆、ただ無言で……周囲を警戒しながら……
「なぁ、秀人」
……警戒、しながら。
「ただ歩いてるだけじゃつまんないから、何か喋れ」
……ただ、歩いているだけだった。
「何かって何だよ……」
それを耳ざとく聞きつけたのは、アーデだった。
「うふふふふ……それじゃあ、自己紹介でもしてもらいましょうか？　私たちのことは、オウルが勝手に紹介したけど……あなたのことは、何も知らないもの」
（おお、変態にしてはまっとうなことを……）
「すっごく不本意な感想を抱かれている気がするわぁ……えいっ」
アーデがそう言って、メスに力を注いだ途端……

――ぶしゅっ
「――ッ！　また……！」
初日にアーデに切られた下瞼の傷が、また開いて……真新しい血を垂れ流した。
「うふふふふ……ちなみに、私の得意な魔法は、呪術よ……？」
邪悪な魔法……呪い。なるほど、それなら、この不可解な現象も多少は納得できる。
なんて嫌らしい攻撃しやがる……
――ザバァッ!!
……瞬時に魔力を手に集め、砂を掻き分けて飛び上がってきた敵に、インパクトを叩き込む。
『……』
ざしゃっ……と、砂地に叩きつけられる。あーびっくりした。
「……」
倒れこんだそいつは……雑魚騎士に非常に良く似た、傀儡兵だった。
外見は、雑魚騎士そのもので……中身は、がらんどうの空洞。どうやら、本来に操られている端末のようだ。
とりあえず、空洞の中に残っていた魔力をサーチして……
――ガラガラガラッ!!
と、触れようとした瞬間、鎧がひとりでに動き回り……
――ガシィンッ!!
元通りにくっついた。
「ふんっ!!」
――ガコンッ!!　……ガシィンッ！
今度は、物理で殴ってみたが……結果は同じ。鎧は凹んだが、まったく問題無さそうに動いている。
そのものは、割と弱いが……このしつこさは厄介だ。集団で来られたら、際限なく数が膨れ上がってしまう。
こいつは縛って転がしておいて、さっさと本体見つけて叩くか……と、思っていた時だった。

「あはははは！　お兄ちゃんってば、へったくそだなー！」
ラーファが、いつの間にやら手にして……いや、担いでいた、巨大な火器を傀儡兵に向ける。
「ラーファが、お手本見せてあげる！」
その指が、何の躊躇いも無くトリガーへ……！
――バガアアアアンッ!!!!
至近距離で、火を噴いた！
「ぐえ……！」
二歩、三歩と後退して、顔を庇っていた腕をどける。
……目の前には、ひどく抉られた砂の大地が。
「あはははは！　きれいさっぱりだー!!」
ぽいっ、と撃ち終えた火器を捨てた。
「いい、お兄ちゃん？　こーいう敵は、跡形も無く吹っ飛ばしちゃえばいいんだよ！」
「馬鹿！　ンなこと分かってるっつーの！」
「ほぇ……？　じゃ、何でやらないの？」
こういった、『集団で来られたら厄介』な手合いは、大抵の場合……！
――ザザザザザザザザザザッッ！
たいていの場合、集団で徒党を組んで襲ってくる！
だから、撃破しないで縛り上げておくのが一番だったっていうのに……！
チッ……全方位を囲まれた。飛行魔法で飛んでも、これだけ囲まれていては即座に撃ち落とされてしまう。ウイングロードを使えば、逃げられなくも無いけど、まぁ、抗戦かな……
「なぁんだ、ガラクタか……」
カレンが、不満そうに唇を尖らせた。
「ヒトを殺したかったなぁ……」
……目当ての菓子が売り切れていた……程度のノリで、そんなことを言った。
「まーったくだ。あーつまらん」

「うふふふ……スカリエッティじゃあるまいし……無機物を使うなんて、ナンセンスだわぁ……自立兵器は、１００パーセント有機物じゃあないと」
「あはははは！　つっまんなーい！」
「うえええん！　つまらないよぉ！」
やる気無く、ブックホルダーをぷらぷら揺らしながら言ったカレンに、凶鳥部隊の連中が同意する。
「まーあ、でも……」
オウルが手を一振りして……何か、恐らくは詠唱を唱える。
「降りかかる火の粉は払わないと、な」
そして……最後のトリガーボイスだけは、確かに聞き取れた。
「――――錬鉄召喚」
……と。
次の瞬間、オウルの目の前に、魔方陣が展開される。あふれ出る魔力光は、赤銅色。形状は……ベルカ式!?
――ゴズンッ……!!
凄まじい重量感を伴う音と共に、巨大な鉄塊が現れた。
本当に、ただの鉄塊だ。荒削りの長方形で、一部分だけが、僅かに細くなっているだけ。刃がついているわけでもなく……言ってしまえば、それは棍棒だった。
「よーいしょっと」
ずっ……と、特に重そうな表情も見せず、オウルは棍棒を持ち上げる。
「……ん？　どうした秀人」
じろじろ見ていたせいか、オウルが怪訝そうに聞いてきた。
「いや……お前、ベルカ式使えるんだなー、って……」
聞いた話だと、協会……教会だっけ？　そこが技術を独占している……って言ってたのに。
「ははは。まぁ、コレっきゃできないけどな」
「……」
器用なんだか、不器用なんだか。

「オウル姉さーん、そろそろ仕掛けてくるっぽいよー」
カレンが剣を鞘から抜き、気の抜けた調子で言った。
「いえーっす！」「や、やっちゃおう……？」
お揃いのゴツい拳銃……のようなものを取り出し、両手に構える双子。
「アーデ、お前は？」
呪術が、無機物に効くのだろうか。
「うふふふ……心配してくれるのかしら？　まぁ最低限、自分の身は守れるから気にしなくとも大丈夫よぉ……」
よーし。機械相手なら、何の遠慮もいらないな。
――ガシャガシャガシャガシャ……!!
傀儡兵が、包囲を一気に狭めてきた！
まずは、広域インパクトで一気に牽制して……
「……ヌゥウオオオ

……俺は、全力でインパクトを発動した。

◆▪◆　◆　◆

私は、海鳴市の街角で、待ち人を待っていた。

……あれから、二週間が経った。

何が……と言うと、秀人さんが家出をして、二週間が経った……ということだ。

「……」

夏休みの時とは違い、今回は……秀人さん自身の意思での失踪だ。

無事であることは間違い無いんだろうけど……変な人たちに捕まってなければいいなぁ。

「うー……ねぇレイジングハート、こっそり探しに行っちゃおうよ」

もう心配で心配で、あちこち探し回って……ちょっとやりすぎて、謹慎を食らってしまった。

『駄目ですよ。さすがに、マスターの魔力量とはいえ、連戦の疲れが蓄積しています。秀人を探すことも大事ですが、まず、マスターのコンディションを整えなくては』

「ちぇっ……」

『それに……彼女との待ち合わせの最中です。すっぽかしては、失礼になります。マスターから誘ったのですから』

「それはそうだけど……もう時間過ぎてるし……」

レイジングハートの時刻表示が、待ち合わせの時間を１０分ほど過ぎている。

まぁ、もうちょっとだけ待ってあげるかなぁ、と思っていたら……

「な、なのはさぁーん……」

へろへろと、走ってきた。

「すみませぇん……はぁはぁ……通りを一本、間違えてしまいましたぁ……！」

へこへこと頭を下げるのは、暖かそうなセーターを着た女性。服装の違いはあれど、見知った顔だった。

「遅いよ……フィアット」

# A’s編　第五十七話

「だめだよ、フィアット。約束の時間は守らなくちゃ。五分前行動、十分前行動は基本だよ？」
「は、はい……すみませんでした、なのはさん」
「まぁ、仕方ないか。初めてでしょ？　この町は」
「はい……」
「今日は私が案内してあげるから、楽しんでね」
「はいっ！」
　私の行動が原因で、フィアットにはずいぶんと頭を下げさせた……と、リンディさんから聞いた。まさか、余所にまで迷惑が掛かっているとは考えもしなかったから、うかつだった。
　その件と、制服に穴を開けてしまったことのお詫びに、休日のお出かけを提案してみたら、案外あっさり承諾した。
　管理局、かなり人手不足で、有給なんてそうそう取れるものじゃないとは聞いていたけど……どうやら、アースラのスタッフが手を回してくれたらしい。
「なのはさん、なのはさん。私、一度で良いからタコヤキっていうの、食べてみたかったんです！」
　フィアットも、久々のオフが楽しいのかな。
「ん？　フィアット、セーター、ちょっとほつれてるけど大丈夫？」
　よく手入れされていて、汚れてはいないんだけど……どこか、くたびれている。
「あ、あはは……成人のお祝いに、おかあさんが編んでくれたんです」
　おお、手編み。しかも、成人のお祝いって……
「フィアットのお母さんって、どんな人？」
　制服に穴が空いて、怒られるとか嘆いてたけど……
「とっても厳しくて、とっても優しい人です」
　さらっと口にした。にこにこと笑いながら、自慢げに。
「おかあさんも、管理局員なんです」

ああ、だから厳しいのか。
「わたしと違って、武装隊で分隊指揮官をしている、ばりばりの肉体派なんです！　かっこいいんですよー!?　がーんっ、て。どかーんっ、て！」
シャドーボクシングのようなジェスチャーも交えて、はしゃいでいる。
「わたしは、見ての通りもやしっ子だったので、武装隊は落ちてしまいましたが……せめて、前線にいるおかあさんを、おかあさんみたいな人たちをお手伝いしたくて、オペレーターになったんです」
へえぇ……武装隊には落ちた……え？
「フィアット、武装隊志望だったの!?」
こんなほっそい身体で！　弱気な性格で！
「そんなに驚かなくてもいいじゃないですかぁ……もう」
赤面して、照れ笑いしている。
「わたしの家は、おとうさんがいなかったので……おかあさんは、おとうさんでもあったんです」
子供は、親の背を見て育つって言うし……わかる気がする。
「残念なことに、おかあさんと同じ部隊には配属されたことはありませんけど……いつか、そのときのために、今はスキルを身につけるんです！」
むんっ、とガッツポーズを取った。
「職場が同じだと、いいこともあるんですよ？　わたしとおかあさんは背丈がほぼ同じなので、制服はお下がりで着れますし、陸士隊の制服や、佐官の制服をこっそり着ちゃったりもできるんです！」
ああ、だから怒られるのか。
そりゃ、貸してやった制服に穴ぼこ空いていたら怒る。
「ごめんね、フィアット……」
知らず知らずのうちに、フィアットの母親にまで迷惑をかけていた。
「あはは、いっぱい怒られちゃいましたよー？」
悪戯っぽく言うけど……はぁ。

「あ、名前まだ聞いてなかったね」
プロフィールだけは聞いてたけど、すっかり忘れてた。
「あー……そうでした。つい、『おかあさん』で通しちゃいましたね……」
そして、フィアットは……誇らしげに、母親の名を言った。
「ルカ・コルデーロ、です」
ルカさん……ね。覚えた。
「……あ、あった」
そのまま、目的地に向けて歩いている最中……たこ焼きの屋台が出ていた。
「ちょっとここで待っててね」
「？　はいですー」
きょとん、とその屋台を見ている。ああ、そっか。日本語が読めないんだ。
「お待たせー」
二つで６００円。割高な気もするけど、フィアットが食べたいって言ってたし……たまには、いいよね。
丁度焼いているところだったから、焼きたての熱々。パックに入れているのに、ホクホクと湯気が出ていて、この寒空には有難い。
さて、食べるか……と、フィアットに待っていてもらっていた場所に戻ったのだが……
「……いないし」
ここで待ってて、って言ったのになぁ。
『フィアット……フィアット？』
念話で呼び出すこと数秒。
『あ、なのはさん！　今、そこのレストランに入ってます！　すっごくいいお話があるんですよ！　なのはさんも来てください！』
やたらテンション高くそれだけを言い、切れてしまった。
そこのレストラン……というと、曲がり角のファミレスか。
からんころん……と、ベルを鳴らし、店内に入る。
お昼時を少し外れているからなのか、人はまばらだった。

「いらっしゃいま……せ……？」
店員が、怪訝な顔をした。いくらなんでも、小学生が一人で入る店じゃないもんね。
「すみません、待ち合わせです」
さっき入った、フィアットと思しき客のテーブルを聞き、そこへ歩いていく。
『マスター、あそこです』
「うん、いたね……」
喫煙席の薄暗いブース、更に奥まったところに、フィアットはいた。
「……ええ、そういうことです。この基本無料のメンバーズクラブの会員になれば、全商品が常時９０パーセントオフでご購入いただけるのです」
「わぁ……すごいですねぇ」
壁際に座るフィアットの前には……優しげな風貌の、眼鏡を掛けたスーツの男性が座っていた。
「そう、オトクなのです……そのため、このメンバーズクラブの会員数は限られておりまして、今回は特別に……そう、特別に、お誘いしたと考えてもらって差し支えありません」
テーブルの上には、何枚もの資料が広げられている。
『マスター。あれは、かなりの確立で……』
「うん……やっぱりそうだよね」
……典型的な、キャッチセールスだった。
「フィアット」
夢中で資料を読みふけっていたフィアットが、ぱっと顔を上げる。
「なのはさんっ、この人が、とてもオトクなお話を……」
はぁ。ミッドチルダにも、キャッチセールスくらいあるだろうに……
「出るよ」
手を掴み、無理やり立たせる。
「なのはさん……？」
「おっと、待ちなぁ……嬢ちゃん」

がたんっ……と、ほかの席に座っていた連中までもが、私たちを取り囲む。
スーツの男は、こいつらのまとめ役か。
「別に、悪い話じゃあ無いだろう？　タダで会員になれて、商品は９割引だぜ……？」
「ど、どういうことでしょうか……？　なぜ、いかついお兄さんたちに囲まれているのでしょうか……？」
フィアット、少しは疑いなよ。
「最初に会員に『なる』、契約料はタダ……で、会員維持費とかいう名目で、毎月お金取るんだよ」
「えぇっ⁉　そうなんですか⁉」
「それで、退会する時には、契約への違約金として、またお金を取る……そうでしょ？」
スーツの男は、張り付いたような笑みから一変……忌々しげに、舌打ちをした。
「ちっ……お嬢ちゃん、テレビの見過ぎは良くないぜぇ……なぁに、手荒な真似はしないさ。ちょっとばかし、契約書にサインをしてもらうだけ……」
「――――――お断りします」
抜き身の回天を、鼻先に突きつける。
「おいおい、お嬢ちゃん、オモチャ振り回したらいけねぇよ」
オモチャだって？　ふうん……
「……」いいかな？
『いいのではないでしょうか』
よーし、レイジングハートのお墨付きもゲット。
コーヒーカップの取っ手に刃を引っ掛け、宙に放り……回天を、振る！
――カンッ!!
空中で両断されたコーヒーカップが、中身を撒き散らし……うさんくさい契約書と、資料の紙を茶色く染め上げた。
「……」

スーツの男は、口をぱくぱくさせて黙り込んだ。
「オモチャじゃありません。それと……」
もう一度、眉間に突きつける。
「次は、脅しでは済みません」
フィアットの手を引いて、店の出口まで一直線。
背後から、いきりたつような怒気が迫っている。
「歩かない方がいいよ」
警告してあげたのに、止まる気配は無い。あーあ……
――ビターン!!
……という音が、連続した。
「ぬがッ……!?」「うおっ!!」「ぐへっ……!」
全員が全員、足元にズボンが絡みついている。
――カチンッ。
左手の桜花を、鞘に収める。
回天でコーヒーカップを切り、注意をそちらに向けて、その隙に桜花で全員のベルトを切断しておいた。
「それじゃ、ばいばーい」

「すみませんでした！　本当に、すみませんでした！」
さっきのやり取りの意味を教えてあげたら、平謝りだった。
「いや、いいっていいって。こういうこともあるよ」
ベンチに座り、少し冷めてしまったたこ焼きを一パック渡した。
「わぁ……いただきますっ」
爪楊枝で悪戦苦闘しながら、一個を丸ごと口に運ぶ。
「……あつっ!!」
そうなるよねー。
「半分に割って、冷ましながら食べればいいと思うよ」
「最初に言ってくださいよー……べろ、火傷するかと思ったじゃないですかぁ」
愚痴を言いながら、二つ目をちまちま食べる。
「で、美味しい？」

「はいっ！　すごく美味しいです！」
　そのままの勢いで、完食してしまった。
「はー、なんか、喉渇いちゃったね」
　意外と塩味が強かった。
「そうですねー……でも、美味しかったです。あ、空の容器、捨ててきますね」
　二枚のプラスチックケースをビニール袋に入れ、ゴミ箱がある場所に歩いていった。
「……」
『マスター……向こうで、何者かと接触した模様です』
　なんか、デジャブを感じる展開だ。心配だから、見に行こうっと。
「これはまずい。あなたは、近年まれに見る凶星の下に生まれてきています！」
「え、えええっ!?　そうなんですか!?」
　フィアット……駄目だこりゃ。
「ええ！　ですが、心配することはありません！　この、スーパー魔よけのお札（１５０００００円）を部屋に張り、ウルトラ清めの塩（１５０００００円）を盛り付ければ、あなたには絶対の幸運が訪れることでしょう！　今なら、合わせて３０００００円のところを、２００００００円で！」
「買います！」
「買うなっ！」
　――スパァンッ!!
　怪しげなローブを纏った中年女の話に、目をキラキラさせていたフィアットの頭に、チョップを叩き込む。
「いたいっ！　……あ、なのはさん」
「『あ、なのはさん』……じゃ、なぁいっ!!」
「あのですね、お札とお塩があれば、幸せになれるって、この親切な人が……」
『マスター、もしや彼女は……』
「……うん、言わないでおこうね。一応、年上だから……」

――ああ、この子は駄目な子なんだ……

「ええ、そうですよ！　さぁ、さぁ……！」

中年女は、ぐいぐいとお札と塩の入った容器を押し付けてくる。

「うっさい！」

――パカァンッ!!

「オゥフ……！」

回天の鞘で峰打ちして、昏倒させる。

フィアットは……うん、決めた。もう目を離さないように、がっつり監視しておこう。

「……じゃ、行こうか？　今日は、ずっと一緒に過ごそうね？」

「あれ、なんか、なのはさんが優しい……でも何だろう、ちょっと哀しい……」

腕を組み、牽引する。

「ま、待つのです……！　このままでは、あなたに災厄が降りかかりますよぉ……！」

うわ、生き返った！

そのまま、フィアットの腕にしがみつき、怪しげな脅しを掛けていて、非常に迷惑だ。

「あ、あの……お気持ちは嬉しいのですが、あいにく、持ち合わせが足りませんので……」

冷静になってみれば、３０万円なんて大金、所持しているわけが無い。

「ローンがあります……！　さあ、あそこのキャッシングマシーン『無限くん』に……！」

ぐいっ、と、反対側の腕を、中年女が掴んだ拍子に……

――ばりっ。

「……」

ほつれていたセーターの袖が、千切れた。

繊維が千切れ、セーターがただの毛糸の塊になるまで、まるでスローモーションのように、私と、フィアットの目には映っていた。

「あ」

「さぁ、さぁ……！」
中年女は、未だにしつこくフィアットを引きずろうとする。
「いい加減に……！」
そろそろ、我慢の限界だ。その胡散臭い装束、細切れにして……！
「うえええええええええん……!!!」
……その泣き声に、一気に頭を冷却された。
「セーターが……おかあさんがくれた、セーターがあああぁ……!!」
大の大人が、場も憚らず泣く光景が異様に見えるのか……通り過ぎるだけだった人たちが、立ち止まってじろじろ見てきた。
押し売りの女は、しつこくフィアットを勧誘する。
（……ぶっ殺す）
ああ、イラつくを通り過ぎて……ぶちのめしたくなってきた。っていうか、ぶちのめそう。決めた。この場でぼっこぼこにして、素顔が判別できないレベルにまで……！
「そこまでよっ!!」
芝居がかった声が、回天桜花に伸びかけた私の手を止める。
「腕を引いての客引き行為は、条例違反だよっ！　そして何より……泣いている子に、何やっとんじゃあっ!!」
一言一言ごとに、身に着けたアクセサリーが、じゃらじゃらとけたたましく鳴る。
「……奈々、さん？」
あの、アクセサリーショップの店長、田上奈々さんだった。
「あなたには関係ないことよっ！　さぁ、この魔よけの」
「ライ〇ーキィック!!」「ぶげらっ……!!」
……蹴った。思いっきり助走をつけて、真正面から顎を蹴り上げた。
あれ……出番無くなっちゃった。
「ふっ……正義は」「何をしとるかあああああああああああっ!!」「勝……ぅおわあああああっ！　ポリスメェンッ!!」
誰かが呼んだのか、警察官が駆けつけてきた。
「ヘイ、逃げるぞサムライガール!!」

「へ？　えええええええっ!?」
奈々さんは、フィアットを背負って……何故か、私の手を引いてダッシュした！
裏道へ逃げ込み、非常用梯子をよじ登り、ビルからビルへジャンプし、フェンスを飛び越え……どこの特殊部隊だと言いたくなるようなアクションを繰り広げて、ようやく、奈々さんのお店までやってきた。
かちゃん……と、裏口の扉が閉まった。
「いやー、災難だったね」
「……奈々さん、言いたくないけど、とばっちりです」
正直、あの場で逃げ出す必要は殆ど無かったと思う。
「え？　あはは……疲れちった？」
……そりゃ、肉体的にも、精神的にも。
というか、なぜ奈々さんは平然としているのだろう。フィアットという人一人を背負っての逃走劇だったというのに。
「なはは。おまわりさんから逃げるのは、よくあることだし……あれくらいは出来ないと、女一人で流しの旅なんて出来ないわけさ」
どんだけレベル高い旅ですか……
「……っと、そろそろ重いな。下ろすよ」
フィアットをソファに座らせた。
「……」
フィアットは、さっきからずっと動かない。
「……どしたの、この子」
「ええ、実は……」
……説明を聞き終えた奈々さんは、ぽんっ、と手を打った。
「よし、奈々ちゃんに任せなさい」
任せるって、直してくれるのだろうか。でも、フィアットはがっちりと握りこんでいて、手放しそうも無い。
と、奈々さんは、ポケットからマッチを取り出して、しゅぼっ、と火を点けた。
「……」

それを、フィアットの前に翳して、ゆらゆら、ゆらゆら、と揺らす。
「……ほいっ」
シュッ……と火が消えるのと同時、フィアットが、コテン、と倒れた。
「よーし、成功」
……今の、ナニ？
『魔力反応は、一切無かったのですが……』
だよ、ねぇ……？
「企業秘密♪」
詳しく聞く前に、セーターの残骸を持って、工作部屋と思しき個室に入っていった。
「はい、お待たせ」
意外と早く出てきた。
ばさっ、と、テーブルの上に広げられたセーターは……ほぼ完全に、修繕されていた。
「わ……すごい！　元通りだ！」
「サービスで、色々やっておいたよ」
よし、フィアットを起こそう。
揺り動かすと……少しして、むくっと起き上がった。
「……わ、私の……!!」
寝ぼけ眼できょろきょろして……セーターが目に入った瞬間、それに飛びついた。
「直ってる……？」
不思議がるフィアット。
「奈々さんが直してくれたんだよ」
「いえーい」
Vサインで遊ぶ奈々さんに、フィアットはがばっと頭を下げた。
「あ……ありがとうございます！　ありがとうございますっ!!　なんとお礼をしたらいいか……」
何はともあれ。
「よかったね、フィアット」

「はいっ！」
ごしごしと目元に残った涙を拭う。
「あの、お代は……？」
財布を取り出し、おずおずと聞いた。
「んー……それは、いいんだけどさ……」
が、奈々さんははっきりしない。そして、「ちょっと待ってて」と言い残し、工作部屋から、何かを持ってきた。
「……ねぇ、君。これ、握ってみ？」
差し出されたのは、製作途中の、銀細工の原型のようなものだった。
長方形の、きわめて薄い……栞？
「え？　……はい」
フィアットが、その栞を握る。ぜんぜん全く、力を込めているようには見えなかったというのに……
――ぱきんっ。
……真っ二つに、割れた。
「あ……すみませんっ!!」
おろおろと、二つに割れた栞を手に慌てる。
「いや……なんとなく、こうなるような気がしてたんだ」
割れた栞を、『失敗作』というラベルの書かれたゴミ箱に放る。
そして、ころっと態度を変え、またおちゃらけた奈々さんに戻った。
「ま、せっかくだから、ほとぼりが冷めるまでウチにいなよ」
表通り、おまわりさんがいるから……と、空恐ろしいことを言った。
そのまま、お茶をご馳走になったり、何故か店内の模様替えを手伝ったりしているうちに、夕方……帰る時間になってしまった。
「それじゃ……そろそろ、帰ります」
帰り際、奈々さんに呼び止められた。
「あ、そうだ、なのはちゃん」
「はい？」
「吾妻くんに、『仕上がったから取りに来て』……って、伝えておいてくれるかな？」
「……ええ、まぁ、了解しました」

ただ今絶賛家出中です……とは言えず、お茶を濁した。
「それと……フィアットちゃん」
「はい？」
きょとん、と首を傾げるフィアットに、奈々さんは……どこか、苦い表情で、言った。
「……『忘れる』っていうのも、幸せの一つだよ」
……？　どういうこと？
「……」
それを聞いたフィアットは……気弱な笑みのまま、硬直した。
「……それじゃ、お世話になりました！」
……まるで、聞いたという事実を認識していないかのように、不自然に快活な挨拶をして、店を出た。
「それじゃ、なのはさん。わたしはこの辺りで」
転送ポートが開くらしい場所の前で、フィアットにお別れをする。
「うん、今日はありがとうね」
なかなか、楽しくて有意義な一日だった。
「とんでもない！　わたしのほうこそ、とても楽しかったです！　では、またアースラで！」
フィアットは、意気揚々と帰って行った。
「……ふう」
見送ってから、携帯電話の電源を入れる。
「……着信、１４件」
……全部、先生からだった。
――平日にサボるなんて、久しぶりだった。

# A’s編　第五十八話

その頃、海鳴市の別の場所では。
「なぁ、別にいいだろぉ？」「お金持ちのオジョウサマなんだからさぁ……」
金髪に茶髪の、明らかに柄の悪い若者が、たちの悪い小遣い稼ぎに勤しんでいた。
「このっ……近寄るんじゃないわよ！」
絡まれているのは、私立聖祥大学付属小学校の制服を着た、金髪と、黒髪の少女……アリサと、すずかだった。
珍しく、執事やメイドの送迎を付けずに町へ繰り出していたようだが……運悪く、捕まってしまったらしい。
近隣でも有名な、私立学園。その制服もまた、有名デザイナーに依頼した品ということで評判が高く……目立つ。
「おー、怖ぇ怖ぇ……」
へらへらと、圧倒的強者の余裕でにやける金髪。
いくらアリサが気の強い少女とはいえ……腕力の差だけは、如何ともし難い。
その背に、必死にすずかを庇い、腕を広げる。
「なーんもしねぇって。慰謝料だよ慰謝料……ヒヒッ」
つまり、金を払えばいい、と言いたいらしい。
「ちょっとぶつかったくらいで、お金なんて払う道理はない！」
毅然と言い返すアリサだったが、言って通じるような輩ではない。
「コータ、ドウリってなんだっけー？」
「おれ、バカだからわっかんねー」
げらげら……と、小ばかにする。
周囲の通行人たちは、目をそらしてそそくさと去っていく。当然といえば当然だ。彼らも、面倒ごとに関わることは、避けたいことなのだ。
「オラ、いいからカネ出せっつってんだよ」

痺れを切らした金髪が、アリサの肩を掴もうとする。
「あ、アリサちゃんに……さわらないでっ!!」
その手を、庇われていたすずかが、ぱしんと払いのけた。
「てめ……!」
最初はきょとんとしていた金髪だったが、即座に怒りに染まる。
「あーあ、ケンジくんキレさせちゃった……しーらね。ぎゃはははは」
茶髪……コータは、愉快そうにそれを見ていた。
――ビイイイイイン……
遠くから、間延びしたバネがたわむような音が聞こえているのだが……誰も気づかない。
「ガキがチョーシくれてんじゃねえよッ!!」
「……う!!」
金髪……ケンジが手を振り上げ、アリサが反射的に目を瞑る。
――パウウウウウウウッ……!!
先ほどの音が、やや甲高く変化し……接近。
「アリサちゃんっ!!」
すずかが、アリサを強く引き寄せたのと同時。
――めきょっ。
……ケンジが、横合いから突っ込んできたスクーターに撥ねられた。
地面をバウンドし……ゴミ捨て場に頭から突っ込んで、動かなくなった。
「……ハッ!?　ケンジくうううううううんっ!!!」
……多少の友情はあったのか、慌ててゴミ捨て場に走るコータ。
「こ、コータ……なんか、身体の右側が痛ぇんだけど……?」
「ぎゃー!　ケンジくんの右半身が!!」
アリサとすずかは、唐突な状況の変化に戸惑い、動けずにいた。
「ふぅ……なかなか、バイクってのも楽しいわね」
トトトトト……と、牧歌的なアイドリング音を鳴らすスクーターから降りてきた人物。小ぶりであるはずのスクーターが、サイズ比で大きく見えるほど小柄な身体……というか、どう見ても小学校低学年。

アリサや、すずかと大差ない身長。適当に伸ばされたセミロングヘア。ヘルメットの類は、被っていない。
「……はやてちゃん？」
すずかが、その名を呼んだ。
「ん？　……おお、誰かと思ったらお前らか」
別に、アリサだから助けた……というわけでは、なかったらしい。
「あの……助けてくれて、ありがとう……なんだけど……」
ちらちらとスクーターに目を配りながら、礼を言う。
「……何それ」
アリサが、言葉を継ぐ。
「え？　原チャリだけど」
「いやそれはわかるけど！　あたしが聞きたいのは、『どこで』『どうやって』手に入れたのか、よ！」
回答は、シンプルだった。
「奪い取った」
「「……はやて　（ちゃん）」」
「……」
そっぽを向いて口笛を吹く。
「ちょ……てめぇ、ケンジくんに何してんだよコラ！」
「ああ、ちょっとばかし聞きたいことがあってね」
「はァ!?　っつーか、ガキが原チャ転がしてんじゃ……おい、これどこからギッた？」
……と、はやてが乗り回していたスクーターを指差し、愕然とした。
「あ？　……セコい小遣い稼ぎしてやがった、サル顔のバカからよ」
「サル顔って……まさか、トシさん!?　じゃあこれ、トシさんのゼッペケ!?」
サル顔で通じるらしい。
「ぶへぇっ!!」
コータの顔面に、痛烈な掌打を叩き込み……ケンジが待つゴミ捨て場にシュート。
「ケ、ケンジくん……なんか、鼻が痺れるんだけど……？」

「ひィっ！　コータ！　コータの鼻が曲がってる!?」
「やべーよこいつ、マジでいかれてやがる！」
「トシさんが負けるなんて……あの、自称『海鳴の山大将』、トシさん（サル顔）が……！」
「サツだって手を焼いた、自称『如意棒無双』、トシさん（サル顔）が……！」
――バコッ!!
何の溜めも無く振り下ろされた拳が……二人の背後、ゴミ捨て場のブロック塀を突き崩した。
「「……!!」」
悲鳴すら上げず、抱き合う二人。
「……おう、お前ら」
「「はいっ！」」
パブロフの犬よろしく、正座で返事をする。プライドがどうとか、そういった次元の問題ではなく……いかにはやての機嫌を損ねず、自身らの安全を保障するか……という、負け犬の思考に陥っていた。
はやてが一枚の写真を見せる。
「こいつ、このへんで見なかった？」
写真とは、もちろん秀人のことである。はやては、異世界を渡り歩くなのは達とは別行動を取り……海鳴市を虱潰しに探していた。
秀人は恐らく、すでにこの第９７管理外世界にはいない。それでも、もしかしたら……何かの拍子に、海鳴市の土を踏むかもしれない。
網を張って、待ち構えて……その痕跡の一部でも見つけることができれば、持ち前の蛇のごとき執念深さで、尻尾を捕まえられる……と、考えていた。
「いや、しらねぇ……あっ、知らないッス!!　マジ知らないッス!!」
ついタメ口を利きそうになったケンジが、はやての眼光に射すくめられて、敬語モドキに切り替えた。
「チッ、またハズレか……おい、」
コータに、手を差し出す。

「出せ」
「か、カネっすか……？　いま、手持ち２００円なんスけど……」「１０００円しか……」
ぴきっ……と、血管が浮き出る。
「ちげぇよこのアホンダラ!!　ンなはした金いらねぇ！　ケータイ出せっつってんだよ!!」
いや、言われてないッス……と、ケンジとコータは内心で思ったが、当然口には出さない。
完全に立場が逆転した構図で、携帯電話をはやてに差し出す。
「私の番号登録して、オーナー情報と、電話帳を、私に赤外線で送信、っと……」
個人情報を引き出し、用済みになった携帯電話を放り返す。
「よし……お前ら、この写真くれてやる」
ぴっ、と放られた写真を、地面に落とさないようキャッチする二人。
「その写真の男みかけたら、ソッコーで私のケータイ鳴らせ。ダチ連中にも写メで送れ」
……恐らく、はやてはこうして、兵隊を揃えているのだろう。
「それとお前ら……」
「はい」「うっす」
一体、どんな無茶振りされるやら……戦々恐々と待つ二人に言い渡された命令とは。
「バイトしろ」
あまりに真面目な表情で、そんなことを言われてしまったものだから……思いっきり、呆けてしまった。
「「……はい？」」
「町でプラプラしてたんじゃ、人の顔なんざじっくり見ねぇだろ。……ケンジ、お前はコンビニ。コータはスーパーだ」
「「はいぃ!?」」
「何も、一日中バイトやってろとも、バイト代よこせなんて言わねぇよ……そうだな、昼間は学校で、噂話でもなんでもいい。その写真を見せて回って、情報を集めろ。下校時刻まで、ミッチリな。あって

もなくても、毎日私にメールで知らせろ。学校が終わったら、バイトだ。　一日でもサボりやがったら……！」

――ぺきぺきぺきっ……

コンクリートブロックの、こぶし大の欠片を、握力で握り潰して粉にする。当然、強化魔法を使ってのことだが、二人は知る由もない。

「ガッコ……二週間は行ってねぇんだけど……」「オレも……バイトなんて、ロクに続いた試しが……」

尚もグズグズ言っている二人を、はやては。

「とっとと髪染め直して履歴書書いて出して来いッ!!」

げしっ……と、文字通り蹴り出した。

「あーもう、手下増やすのもラクじゃないわね……」

「待って、はやてちゃん」

愚痴りながら、またスクーターに跨ろうとしたはやてを、すずかが引き止める。

「助けてくれて、ありがとう」「……ありがと」

まずは、アリサと共に感謝を伝える。

「今の話、どういうこと？　最近、なのはちゃんと連絡が取れないのと、何か関係あるの？」

「……チッ。私は、高町の伝言板じゃねえっつーの」

しかしながら、町の不良とは、また別の情報源になる……そう思い、事情を話すことにした。当然、魔法関連の話は抜きにして。

「なのはのやつ……！　どーしてあたしに相談しないのよ!!」

なのはの親友を自認するアリサは、いたく立腹した様子だ。

「ふん……多分、頼ることに引け目でも感じてるんでしょ」

友人として……そして何より、魔法と関わりの無い、民間人として。

「なのは……！　今度会ったら、アタシんちに拉致ってメイド服着せてやる！」「燕尾服は？」「そっちも！　……じゃなくて！」

ノリツッコミをして……

「と・に・か・く！　家出した秀人を探せばいいわけね？」

「……まぁ、見つかれば、だけど」

「ウチの執事、なめんじゃないわよ！　ケータイ貸しなさい！」

「……ほれ」
　素っ気無い黒塗りの携帯電話を渡す。アリサは、データフォルダの中から、秀人の写真を自身の携帯に、番号ごと送る。
「確か、秀人さんのバイクはカワサキだよね」「……確か、そこの４００に、６００のエンジン」
「ウチと繋がりのあるバイク屋さんには、話を通しておくよ。不自然な発注とかあったら、すぐわかるから」
「……ま、頼むわ」
「それと」
　素早くスクーターのイグニッションを切り、鍵を抜く。
「あっ！　てめ、何しやがる！」
　ずいっ、と顔を近づけ……
「無免許運転は、だめ」
　と、説いた。
「ノーヘルはもっとだめ。……そして何より」
　ずずいっ、と、更に近付き……
「どんな人からでも、モノを盗ったらいけません」
　……と、同時。
　すうっ、と、殆ど音も無く、高級車が路肩に停車した。
「お嬢様、ご無事ですかっ!?」
　いつもは冷静なノエルが、血相を変えて飛び出してきた。
「うん、アリサちゃんと、はやてちゃんが助けてくれたから……ファリンは、いる？」
「はいっ！　ここにおりますですっ!!」
　後部座席から、ファリンがぴょんっと飛び降りる。
「このスクーター、持ち主に返してきて」
「はいですっ！」
　ファリンは、スクーターのメットインを開け、中から半キャップ型のヘルメットを取り出し、被る。
「お、おい待て！　私のバイクだぞ！」
「はやてちゃん。あんまりわがまま言うようだったら……リーゼ

さんに言いつけるからね」
「……！　ひ、卑怯だぞてめぇ!!」
ただでさえリーゼは、はやての軽犯罪には滅法厳しいのだ。
そのため、通学路にスクーターを隠しているというのに……バレたら、きっとクドいお説教が待っているに違いない。
「とぉうっ！」
ファリンが、気合と共にキックペダルを踏み下ろす。
――カヒュンッ……トッ、トトトトト……！
「それじゃ、おっさきでーっす!!」
そのまま、びいいいいいん、と走っていった。
「それじゃ、行こうか？」
……用は済んだはずなのだが、すずかははやてを離さない。
「……どこに？」
「お礼を兼ねて……私の、おうち♪」
「……帰る」
げんなりして、方向転換するが……
「まあまあ」
すずかが足払いをかけ、ノエルの方に押し。
「まあまあ」
ノエルがキャッチし、車内に押し込み。
「まあまあ」
車内で待機していたアリサが、がっちりとホールドした。
その、あまりにも見事な連携プレーに、はやてはあっさり拉致された。。
「何でこうなるんだよォおおお

# A’s編　第五十九話

凶鳥部隊の連中とつるみ始めて、二週間が過ぎた。
目新しさが無くなってきた所為なのか、アーデや双子の襲撃はだいぶ減って、まぁ平穏な生活を送っていた。
「……ふぅ～」
テラスに出て、煙草を吸う。いがらっぽい匂いも、気管に篭もる熱気も、頭が一瞬ぼやけるような感覚も、未だに好きにはなれないが……何故か、気づいたら手が伸びてしまう。立派な中毒だよなぁ、と一人ぼやき、根元まで吸った吸殻を、灰皿代わりの小瓶に捨てる。
――ばたばたばたばた……
……背後の隊舎では、いつものことながら、誰かが暴れている。この足音は……双子か。
「んじゃ、戻るかなー……」
「おっけー」
……もう、呼んでもいないのに返事があるのも慣れてきた。
「カレン……そこで何してた」
「ん？　読書だよ」
ひらひら、とハードカバーの本をちらつかせる。
「ほら、さっきとは違う本で、ちゃんとページも進んでるでしょ？　だから、読書してたことは間違いないよね？」
「誰もそこまで聞いてねぇっつーの」
……やっぱりこいつ、俺のこと監視してるんじゃね？
そんな疑念もあるが、そこはまぁ……こいつも変人なんだ、という程度の認識にとどめておく。
「ヒデくん、煙草にはもう慣れた？」
は？　煙草？
「慣れてはいないけど……なんか、頭ぼやーっとするし」
「そっかー……慣れたら、いろいろ吹っ切れると思うよ」

「あんま慣れたくないなぁ……おれの国じゃ、未成年の喫煙は違法だったし」
俺のいた……ええと、会社？　は、確か……あれ？
「ええっと……先輩……いや、上司、が、厳しくて」
何だっけ……？
「うんうん、それで？」
ずいっと顔を近づけて、カレンが聞いてくる。
「悪い、ちょっと待って……」
ごんっ、と頭を殴る。ったく、煙草の吸いすぎか？
「……ああ、そうだ、思い出した。俺の上司って厳しくてさ、酒も煙草も許してくれなかったんだ」
当時１９だった先輩が吸ってたら、グーでぶん殴られてたもんなぁ……
「……そう」
カレンは、興味無さそうな真顔で、すたすた先へ行ってしまった。
「あはははは！　ラーファが先！　クライアは我慢してなさーい！」
「うえええええええん!!　ラーファのいじわる！　しんじゃえバカアアアアアアアッ!!」
――パンパンパンッッ!!　チュインッ!!
……クライアの発射した弾丸が、壁に跳弾して、俺の頬を掠めた。
「あっはははは！　やーい、へったくそ……うげっ、お兄ちゃん!?」「うえええええええん、避けられた……ひっ、お兄ちゃん!?」
固まり、今更拳銃を背に隠す。
「こンの、アホ共が……!!」
実戦以外では、せめてゴム弾を使えって言ってるだろ！
――ごいんッ!!
「「いったあああああああ～い!!」」
「ラーファは妹に意地悪するな！　クライアは人に死ねとか言うな！」
「「だって、ラーファ／クライア　が……」」

「あァん……？」
拳を振り上げる動作を見せる。
「「　ひゃっ！　」」
慌てて頭を押さえた拍子に、ラーファの手から、ばさっ……と、紙束のようなものが落ちる。ったく、何取り合ってたんだ？。
拾い上げてみると、それは……
「これ、俺のじゃん」
暇つぶし用にずっとカバンに突っ込んでいた、バイク雑誌の付録だった。歴代国産車の、写真解説付き名鑑。
「んー？　何それ？」
肩越しに、カレンも覗き込んでくる。
「おー、バイクだ。かっこいいねー」「うん、かっこいい！」「かっこいいの！」
それから三人は、名鑑を熱心に読みはじめた。女の子なのに、意外な物に興味示すんだな……
「どれが気に入った？」
いの一番に手を上げたのは、ラーファだった。
「ラーファはこれ！」「クライアはこっち！」
二人がそれぞれ指差したのは……
「二人そろって、ＣＢＲ６００ＲＲか」
「同じじゃないよ！」「色違いだよ！」
訂正された。
コニカミノルタと、モビスター。
異世界人にも通用するデザインだったんだ、これ……
「白くてかっこいい！」「青くてきれい！」「「むっ!!」」
ばちっ……と、双子の視線が火花を散らした。
「喧嘩したらメシ抜きだからな」
「「……はぁい」」
この部隊のあまりに悲惨な食糧事情を改善するべく、俺は連日、台所に立っている。中身はどうあれ、ほぼ全員が十代だというのに、主食はカロリーメイトもどき。しかも、時間さえまちまちだというのだ

から、放っておけない。
胃袋を掴む……ではないが、だんだんと、この部隊での発言権を得てきたようだ。
「おー、集まって何見てるんだい？」
オウルが風呂から上がっ……「あがっ、ががが……！」
「あー？　どうした秀人。ウチの身体に何か付いてるか？」
お、オウル……!!　お前も、大概アホだ！
「何でマッパなんだよ!?」
付いてないから驚いてるんだろうが！
下着どころか、バスタオルさえ身に着けていなかった！
「んー？　お前は何を言ってるんだ。ちゃんと、髪留めをしているだろう」
お前こそ何言ってるんだ！
「まず下を履け、下を！」
「なーんだよもー……風呂上りは暑いってのに……」
あーもう、これだから女所帯は……！
「あー、そうだ秀人」
「何だ……って、うォいっ！　履けよ！　履いてから呼べよ！　危うくいろいろと見えちまうトコだったじゃねえかよ!!」
視界の隅に肌色が映った瞬間、回れ右！
「減るもんじゃないし……」
「減　る　ん　だ　よ　!!」
俺の貞操観念が、ガリガリ削られてるんだよ！　ぜーはー……
「……もういいか」
「もういいぞ」
「着たか」
「着た」
ようやく、最低限の衣類を身につけたようだ。振り返る。
オウルは、いつもの作務衣ではなく、浴衣のような服を、腰の帯で適当に縛っていた。
「ふう、やっと本題だよ……」

「こっちの台詞だこの野郎!!」
「ヒデくん、落ち着いて落ち着いて……血管がピンチだよ」
カレンに羽交い絞めにされる。
あーまったく……変人の相手は疲れるぜ。
「「「……」」」
オウル達の四人が、なんとも言えない表情で俺を見ていた。
「何を見ているんだ？」
双子の覗き込んでいた名鑑を、ひょいっと取り上げる。
双子も、オウルの行動にはケチをつけず、おとなしくしていた。
「お、二輪か。……そういえば前、備品扱いで一台、倉庫に突っ込んであったな……」
「へぇ……乗ったのか？」
「乗ったけど……遅いし、すぐに飽きた」
確か、管理世界で一般的に普及しているのは、水素エンジンか、モーター動力。燃料を燃やす……文字通りの内燃機関は、ほぼ駆逐されてしまっているらしい。
「だが、こちらのは速そうだ」
ぱらぱらとページをめくり、ある一箇所で手が止まる。
「どれがピンときた？」
「これ……うん、これだ。これがいい」
むふー、と、得意げにそのページを開いて見せてきた。
「……いい趣味だな」
ＧＰｚ９００ｒ。もう既に旧車の部類に片足を突っ込んでいるようなロートルだが、そのエッジの利いたデザインや、劇中での活躍のおかげで、未だ衰えない人気を誇る車種だ。
「ふわぁああ～……あふ……うるさいわよ双子。秀人の目を抉る素敵な夢から醒めちゃったじゃないの」
「ラーファ、クライア。やれ」
「アーデ、おっはよーう!!」
「あああああ……やめて頂戴……寝起きに、ボディプレスと裸絞めとサバ折りはやめて頂戴ぃぃ～……！」

永眠してろ。
相変わらずきもちわるいなコイツ。
「ん～……？　何、内燃機関？　オウルあなた、こんな趣味があったかしら？」
かちゃ、とメガネの位置を直す。
「たった今から趣味になった。おい秀人、この文章が読めん。音読しろ」
「へいへい……」
突っ返された名鑑を手に、腰を下ろす。
「ＧＰｚ９００ｒは、カワサキ水冷・第一世代として……」
音読を始める。オウルは、ぴったりと俺の腕にくっついて、興味深そうに写真に見入っている。
忘れようも無いが、オウルは引き締まった、それでいてスレンダーでは済まされないスタイルをしており……俺はまぁ、健康な男児であるからして。
「……世界的に知名度を上げた出来事としては、ハリウッド映画の影響が大きく、」
かーーーー……と、顔に血が集まっていくのを感じる。
――がんっ。
……俺とオウルを隔てるように、紙刀が突き立った。
「オウル姉さん、その場所、代わって？」
「……カレン？　おい、どうした」
オウルは、怒るというよりも、戸惑っていた。
「……」
やや緊迫した空気になり……
「……ふぅ、わかったよ」
オウルが折れた。妹に甘い奴だ。
「わーい、ありがとうオウル姉さん!!」
一転して、笑顔で俺の隣に腰を下ろす。紙刀は、ただのページの切れ端に戻っていた。
「私にも見せて。むしろ一緒に見ようヒデくん」

「お、おう……」
一応、オウルにも確認を取って……二人で名鑑をめくる。
「ねぇアーデ！　倉庫にあるバイク直してよ！」「直してよー！」
オウルの話を聞いて、アーデに無茶振りをしていた。
「うぅ～ん……無理、かも。ごめんなさい……アーデは、無機物には明るくないもの……」
双子の期待に応えられないのが辛いのか、しょぼーん、と萎れるアーデが新鮮だ。
「乗りたいよー！」「乗りたいのー！」
あーあー……すっかりその気になってら。
俺も、いくらなんでも電動だの水素だの、ハイテクなものは弄れないからなぁ……
カレンは、ページをめくるのをやめて、見入っていた。
「ねぇヒデくん！　これ、これ!!　なんて名前!?」
カレンが指差すのは……
「……ブラックバード」
ＣＢＲ１１００ＸＸ。
地球で初めて、ノーマル状態での時速３００キロ走行を可能にしたメガスポーツ。
凶鳥ときて、ブラックバードか……
「かぁっこいい……！」
これは……覚えがあるぞ。俺が、バイク雑誌でＺＺＲの記事を見た時と同じ……
「コレ、欲しい!!　絶対欲しい!!」
ほらきた！
「ヒデくん！」「「「お兄ちゃん！」」」「秀人！」
カレン、双子、オウルが、詰め寄ってきて……うわぁ、嫌な予感しかしない！
「「「「「どうにかしろ!!」」」」」
いや、どうにかしろと言われても……
「欲しいなら、買えばいいじゃん」

給料、それなりに貰ってるんだし。
「……」
オウル達は、頭を捻り、うんうん唸り……
「あ、そうだった。ウチら、毎月お金貰ってるんだった」
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおいッ!! 隊長!?
「お金? なにそれ?」「へー、貰ってたんだー」
双子はボケボケで。
「……足りる?」
カレンは、ここしばらく電源を入れていなさそうな携帯端末をぎこちなく操り、何かの数字……恐らく、全員の貯金残高を見せてきた。
桁が一つ、二つ、三つ……七つ、九つ。九桁の数字が、燦然と輝いていた。
ミッドチルダと日本の通貨は、単位が違うだけで、為替相場はほぼ同じ。ということは……全員が全員、億単位の貯蓄をしていることに……
「……どんだけ使ってないんだ、お前ら……」
こんだけあれば、クラシックなグランプリレーサーだって買えるぞ……
「足りるよ、余裕で」
二台買っても三台買っても、それぞれフルカスタムしてガレージまで買えちまう。
「こういう場合って、どうするんだ? 自分で買いに行くのか?」
「隊に必要な備品なら、タダで支給されるんだけど……私物になると、実費負担での取り寄せかなぁ」
「取り寄せ……」
となると、グレアムさんに頼んで、地球から調達してきてもらう感じかぁ……俺、最近あの人が信用できないんだけどなぁ……
ま、しゃーないか。
「きっちり練習するからな」
「「「はーーーーーい!!」」」
四人は、気前良く返事をした。

その日、俺はグレアムさんにそのことをメール越しに依頼した。

◆▪◆　◆　◆

……海鳴市、とあるバイク屋。

最近、新車はおろか中古車さえ売れない現状を憂う店主は、今日も日常業務をこなしていた。

（あーあ全く……近頃の若いヤツは……）

某オークションで、ポンコツ不動車を買った。動くと思っていた。直してくれ……などと、浅はかな客が来たのが一昨日。

（少しは、あいつを見習って欲しいもんだ）

車体は買わないものの、一定のペースで消耗部品の注文をしてくる、あの青年。聞けば、マニュアル片手に自身で整備してるそうだ。

店主の立場からすれば、中古車でもいいから車体を買って欲しいところなのだが……それでも彼は、バイク乗りの性というものを、しっかり持ち合わせていた。

「……そういえば、最近来ないなぁ……フォークシールが危ないらしいけど」

――ジリリリリン!!

と、電話が鳴る。

「はい……はい？　はいっ！　毎度ありがとうございます！」

驚きから一転。喜色満面の笑みを浮かべた。

……中古車を、纏め買いしたいという注文だった。今の時期、これが助かる。

「……待てよ」

そういえば……と、店主は思い出した。

前回、地元商工会の集まりで、月村グループからよく分からない頼みごとをされていた。

確か……

（不可思議な注文があったら、簡単にでもいいからメールを入れる……だったか）

中古車の纏め買い。確かに、これも不可思議といえば不可思議だ。

店主は、その件についてを、月村家の窓口に寄せた。

# A’s編　第六十話

――がりっ、ごりっ……

朝の吾妻家に、とても軽快とは言いがたい包丁がまな板を叩く音が響いていた。

「ふーんふふふーん……」

寝癖が付いた金髪を適当にゴムで縛り、パジャマ姿で台所に立つフェイト。

――がつっ、ごつっ……

……何をしているのかと思えば、朝食の支度らしい。

「んふふふーん、と」

そして、一つ一つ、指差して確認を取る。

「ごはん、よーし。おみそしる、よーし。さかな、よーし。さらだ、よーし」

八合も炊いた白米、鍋いっぱいの味噌汁、五枚の焼き魚……人数が人数だけに、壮観な分量だ。

「ぜんぶおっけー！　いえー！」

ひとしきり騒いだ後……人数分、ちゃぶ台に運んだ。

「ひっさびっさにー、みーんなーでごっはーん♪」

なぜこうもはしゃいで、朝から料理の支度をしたのかというと……秀人の捜索に出ていた一家の面子が、久々に朝食を共にするからだ。

ヴィータ、ユーノ、アルフは、今まさに管理局から各々帰宅しているところであり、なのはは、毎朝の日課であるランニングに出ている。

とはいえ、それもあと少しの辛抱だ。

なのはが、帰ってきたら支度すると言っていた朝食。それを、先回りして作っておく。

「くふふふ……！　こんなこともあろうかと、みゆきをじっけんだいにれんしゅうしておいたのだ！」

最初は、焦げたり溶けたり崩れたり、まともな結果が出なかったが

……ここしばらくの特訓の末、ようやく人並みの料理を作れるようになったのだ。
その影に、焦げカスを口に突っ込まれ悶絶した美由希の犠牲があった。
「おどろくかなー？　ほめてくれるかなー？」
……流しに突っ込まれた、使用済みの調理器具さえ無ければ、褒めてもらえるだろう。作ることに比重を置きすぎて、片付けのほうはサッパリだった。
――がちゃっ。
ドアノブが鳴り……フェイトは、玄関へと駆けた。
「おっかえりー、……」
出迎えの笑顔のまま、固まった。
ドアを開けたのは、なのはでも、アルフでも、ユーノでも、ヴィータでもなく……
「邪魔をする」
……将官服に身を包んだ、レジアス・ゲイズ少将だったのだ。
「……」
突然の登場に、フェイトはパニックを通り越し、思考を停止していた。
「フェイト・テスタロッサ」
「……はっ!?　はいっ!!」
ようやく再起動したフェイトが、大きな声で返事をする。
「貴様を連行する」
――がちゃんっ。
……そして嵌められる、無骨な手枷。
「へ？」
きょとん、とそれを見下ろすフェイト。
「失礼します」「お邪魔します」「ちょっと失礼」
がやがやと、部屋の中に踏み込んでくる管理局員たち。
「へ？　へ!?」

がっしりと両脇を掴まれ、ずるずると引きずられていく。
「……連れて行け」
「了解」
レジアスの命令に敬礼する管理局員。
ここにきて、ようやくフェイトは、自身に起きようとしている事柄に、考えが至った。
「……ひとさらいーーーーー！　なのはー!!　なのはーーーーーーー!!　たぁすけてぇぇぇ

「さ、転ぶ練習はこのへんでやめておくかー」
「うえええええええええええええっ!?」
がびーん、と同じ顔で愕然とする双子。
「お兄ちゃんなんだよそれー!? 膝擦ってバリバリするんじゃなかったのー!?」「……バリバリ」
「阿呆。膝なんて擦らなくても曲がれるっつーの」
レーサーが膝擦ってるのは、あくまで限界まで車体をバンクさせた結果だ。わざと膝を擦るような走りは、むしろ遅くなる。
「今までのは、『上手に転ぶ』練習で……」
――ふと、頭に引っかかった。
(……『上手に転ぶ』練習……?)
デジャビュのような……何だっけ……? ええっと……
「ヒデくん」
ぽんっ、と肩を叩かれた拍子に、引っ掛かりが消えた。
「あぁ……何だ、カレン」
「ふふ……んーん、なんでもない」
……わけわからん。ま、いいか。
「んじゃ、カレン。お前も乗ってみるか?」
さっきから俺の隣に鎮座している、重量級の黒光りする車体を指す。
「うん!」
簡単な操作方法……クラッチとかの説明はしたが、実際に動かすのはこれが初めてだ。
「えっと……ニュートラルを確認して、チョークを引いて……セルスイッチ!」
――ギュルルッ……ヴォンッ!!
「かかった! ……でも、一分くらいは暖気するんだっけ?」
そこまできっかり時間は決めなくていいんだけど……ま、目安だ。
水温計が多少変化するのを待って……
「んじゃ、やってみろ」

カキッ……とローギアに入り、アクセルを開けつつクラッチをゆっくりと繋いでいく。
「お、おおお……！　動いた！　動いたよヒデくん！　やったー!!」
――ヴォオオオオオオオオオオッ!!
「バカ！　アクセル開けすぎ……！」
「……あああああああああああぁ!?」
――ズシャアアアアアアッ!!!
クラッチを繋いだ瞬間……タイヤが路面を捉えるタイミングを見誤り、綺麗にスリップダウンした。１６０ｐｓオーバーの大パワーは、扱いを間違えればこうなる。
「ほれ、立てるか？」
「あいたたた……失敗しちゃった……」
手を掴んで立ち上がらせる。転びはしたが、そこまで酷い怪我にはなっていない。
「じゃ、引き起こしてみろ」
最低限、男でも女でも、これだけは出来ないと。
「よーし、もういっちょ！」
案外、あっさり引き起こせた。
――ガオオッ……!!
「お帰り、オウル」
……早々と乗り方をマスターし、近場を走りに行っていたオウルが戻ってきた。
自前のボサボサ茶髪が、ヘルメットの隙間からはみ出している。
「調子は？」
アイドリング状態のバイクに跨るオウルに聞いた。
「うん……いい。実にいい」
満足げな様子で、アクセルを軽く開ける。
――ヴォッ、ヴォンッ!!
社外品の集合マフラーから、小気味のいい低音が鳴る。
「倉庫のヤツとは大違いだ」
「ああ、アレなぁ……」

一応、見てみたが……こっちで言うところの、１２５ｃｃのスクーターだった。そこそこ乗りやすくはあるんだが、刺激が皆無だった。
「正直、旧世代のものと侮っていた。これなら……」
ん？
「これなら、戦場に持ち込んでも問題は無さそうだな！」
とんでもないことを言い出した！
「は、はぁ!?　お前、コレで戦場を走る気か!?」
舗装路ならともかく、砂利やら瓦礫やら、転倒する要因だらけだぞ！
「サスとかホイールだってダメになるし、フォークシールは破けてオイル滲むし、ガスケットだって……」
バイクで戦場走り回るなんて、仮面ライダーじゃあるまいし、できるわけが――!!
――ズキンッ!!
「うっ……!!」
いって……!!
何だ……今の頭痛。　ここ最近、こういうことが多い気がする。
「ヒデくん、大丈夫？」
カレンが心配したのか、バイクを降りて声を掛けてきてくれた。
「煙草、いる？」
何故か、ポケットから自分の煙草を取り出して、言う。
「いや……いい」
何故か、今は吸う気にならなかった。
「悪い。ちょっと休んでくる……」
眩暈がしてきた。
「……」
隊舎に歩いていく俺の背後に、カレンの足音が続く。すっかり、コンビが板についてきた。
「コンビ……？」
ぼんやりと、脳裏にイメージが浮かんでくる。
――黒い法衣と、青白い閃光。

『秀人！　ボサッとするな！』
『全く……君はいつも、無茶ばかりだ！』
『少しは、自分のことも鑑みて行動しろ！』
何故だろう。そのイメージに付随してくるのは、憎まれ口ばかりなのに……それが、妙に暖かく、染みる。
最近の俺は、大事なことを忘れている……いや、忘れ続けているような、そんな気がしてならない。
自室に戻り、ベッドに横たわる。ぐわんぐわんと、眩暈はより酷くなってきた。
「……ヒデくん」
すっ……と、額に手が置かれる。ひんやりとしていて……って、違う。俺の額が、熱もってるのか。……自覚した途端、意識が朦朧としてきた。
「――忘れちゃおうよ」
カ、レン……？
「忘れてしまえば、傷つかなくて済む。辛いことも、嫌なことも……全部、無かったことにできる」
さらっ……と、少し硬い俺の髪を、撫でる感触。
「いらない『昔』なんて、忘れて、捨てて……私と、『今』を……」
……声が、遠のいていく。
俺は、泥のような、沈み込んでいくような眠りに、ずぶずぶと落ちていった。
◆▪◆　◆　◆
「よぉォっし!!」
はやては、携帯電話を片手に、飛び跳ねた。
「よくやったジュンペー!!」
『え、え？　……へへ、いやぁ、たいしたこと無いッスよ！』
電話口で、子分の一人が照れ笑いしている。
『車種は、ブラックバードと、ニンジャと、エヌッパチ二台ッス！』
――ピピッ!!

と、更に、通話中にキャッチが入る。
「私だ」
『はやてちゃん、すずかです』
「月村か。こっちにも今、情報が上がってきた。……芳村オートに、中古車の纏め買いの注文」
手下のジュンペーを送り込んだバイク屋に、不自然といえば不自然な注文があったのだ。
『うん、こっちもその系列の情報。詳細は……』
二人で情報を付き合わせ、整合性を確認していく。
「車種と、修理部品の型番、完全に一致したぞ」
『うん、間違いないと思う』
それぞれの店にやってきたその客は、青と紺の制服を着た女性だったという。
「管理局……やっぱり、噛んでやがったのか」
アースラが八方手を尽くしても見つからないなど、よく考えればおかしな話だった。だが、上層部が意図的に情報を隠蔽していたというのなら、話は別だ。
「チッ……大方、秀人の能力絡みだろうけどな」
秀人の能力。戦闘力もそうだが……あの、不死身の肉体と、蒼炎。放置されるわけがない。
「どっかで腑抜けにされてんだろ」
すずかとの通話を切り、別の番号をコールする。
――ブロロオオオオオッッ……
五分もしないうちに、一台のバイクがはやての前に止まった。カスタムされたチョッパーに跨っているのは、がっしりとした体格の若者。
「押忍、姉御！　お呼びでしょうか！」
はやては、チョッパーのタンデムシートに飛び乗り、耳元で怒鳴る。
「テツヤ！　芳村オートまで飛ばせ！　大至急！」
急がねば、魔力の痕跡が消えてしまう。
「押忍ッ!!」

――ヴォロロロロロロッ!!
荒々しいVツインが唸りを上げ、はやてを目的地まで運搬する。
「だぁああっ！　相変わらずやかましいなオイ！　もっとマシなサイレンサー付けろ！」
……ちなみに、このテツヤという若者は、『バイクのアイドリングがうるさい』という、そこはかとなく理不尽な理由でボッコボコにされ、手下に加わった。現在は、バイク便に潜入し、情報を収集している。
「スンマセン！　しっかり捕まっててください！」
「チッ！」
バックレストに背を押し付ける。ぐんっ、と更に力強く加速する。
――ギキイイッ……!!!
チョッパーから駆け下りる。
「姉御っ！」
裏口で待機していた少年が、紙束を持って駆け寄ってくる。
「こないだ売れた中古車の契約書のコピーと、監視カメラの映像ッス！」
受け取り、契約者の氏名を確認。
――山田花子。
「……バレバレの偽名じゃねぇか！」
芳村オートの前で、探査魔法を発動する。嗅覚を拡大し、魔力の『匂い』を辿れるように強化する……守護騎士の一体、『盾』の保有術式の一つだ。
「……ここだ！」
しばらく辿り……それが、不自然に途切れている箇所で止まる。
そこには、まだありありと、転移魔法の痕跡が残されていた。術式としては、アースラのポータルに近い、人工的なものだ。
「こっから先は……」
「主、お待たせいたしました！」
リーゼが、到着する。
「……」
リーゼが、消えかけていた術式を再編し、座標を割り出す。

「……座標を、特定しました」
「……!!」
喜び勇み、転送しようとして……
「一応、高町にも声掛けておくか」
……その些細な変化に、気づいたか否か。
「賛成です、主」
はやては、運動会の際に手に入れていたなのはの番号をコールする。
――ｐｒｒｒｒｒ，，，，ｐｒｒｒｒｒ，，，，，
「チッ、中々出ないな～……」
愚痴ったその時、タイミングよく電話が繋がる。
「おう、高町。お前いま時間あるよな？　無ければ作れ」
……理不尽だった。
が、電話口の向こうになのはは、それを気にしている余裕は、無いようだった。
『八神……！　どうしよう、フェイトが、フェイトが……！』
「あァ……？　あのアホ金髪がどうしたって？」
「主、様子が変です。……事情を聞いてみましょう。座標は特定しましたので、後でも問題ありません」
「チッ。……で、どうした？」
『フェイトが、誘拐されちゃったの!!』
「……は？」
はやては、電話を手に立ち尽くした。

# A’s編　第六十一話

はやてに事情を説明し終えて間も無く……アースラ艦内を、怒気を撒き散らしながら突き進むなのはの姿があった。
その怒りっぷりは、本来なら一番に激怒しているはずのアルフが恐れ戦くほどで、当然、局員たちも一瞥すらせず、関わってはいけないと、そそくさと歩き去っていった。
――ちなみに、なのはは謹慎中の身である。
艦長室に向かって、一直線。腰に提げた二刀が、異様な迫力を醸し出していた。
「あ、あああの、あの、なのはさん……」
そんななのはに、果敢にも接触を図る局員がいた。フィアットだ。
「今回の件ですけど、フェイトちゃんの現在の境遇を考えたら……」
つい忘れがちになってしまうが、現在のフェイトの待遇は、『保護観察』。名義上の後見人はリンディであり、決定権も彼女にあるのだが……現地での実質的な保護者は、吾妻秀人となっている。秀人が定期的にリンディに報告を上げ、リンディは今後の方針を伝える構図だ。だが、秀人が不在となってしまうと……
「吾妻さんの職務放棄と見なされ、フェイトさんの身の上は、リンディさんの預かりに……ひっ！」
ぎろっ、と、鋭い眼光に射すくめられる。
「……確かに、そういう話は聞いてるよ」
「じゃ、じゃあ……」
「でもね」
ぴしゃりと遮る。
「私が怒ってるのは……何で、リンディさんと、アースラじゃなくて……わけのわからない陸士部隊なんてところが、フェイトを連れて行ったのか、ってことよ！」
――ガンッ!!
艦長室前のパネルを刀の石突で殴打し、入室許可を求める。

『どうぞ』
　エアロックが解除されるや否や、なのはは大股で入室した。
「失礼します」「なのはさぁん……！　カタナ、カタナを仕舞ってくださいよう……!!」
　涙目のフィアットも、それに続いた。
「どういうことですかっ!!」
　がんっ！　と卓を叩くが、リンディは表情を崩さない。
「……座りなさい」
　椅子をすすめられ、渋々座る。
「それじゃ、わたしは失礼しますね……？」「いえ、あなたもいて構わないわ」
　いそいそと退室しようとしたフィアットだったが、何故かリンディに止められ……なのはの隣に、腰を下ろした。
「ジュエルシード事件における重要参考人、フェイト・テスタロッサ。彼女の現地保護官・吾妻秀人は、自己判断により消息を絶ち……この職務を放棄したものと見なす」
　無味乾燥な原稿を読み上げるように、リンディは通告した。
「フェイト・テスタロッサの保護権は、法的後見人・リンディ・ハラオウンへ返納とし……それを、レジアス・ゲイズ少将へ一時委譲するものとする」
「レジアス……？」
　少し前、秀人から聞いていた人物名だ。リンディの元上官で……
「何で、その人にフェイトを預けるんですかっ!!」
　前みたいに、アースラに置くことだって出来るだろうに。
「……フェイトを取り巻く環境は、非常に危ういわ。私もそれなりの地位にいるとはいえ……管理局全体から見れば、あくまで、現場指揮官レベル。本局の最終決定には、逆らえない」
「……つまり、管理局の中でも発言力が大きく、一番信用できる人物に身柄を預けたってことですか」
　頭に血が上っていても、回転は早い。
「そうです」

「あ、あの……よろしいでしょうか？」
フィアットが、おずおずと挙手した。目で促され、発言する。
「その……聞いた話ですが、フェイトさんの件について決定を承認するのは、レジアス・ゲイズ少将と、ギル・グレアム提督だと聞き及んでおります。職務上で接点の多いグレアム提督ではなく、なぜ、わざわざ『陸』のレジアス少将を……？」
もっともな質問だった。
リンディは、少し悩み……理由を、言った。
「私は、グレアム提督を信用していません」
……オフレコであるということを考えても、問題のありそうな発言だった。
「……」
どう反応したものかどうか、フィアットは黙り込んでしまった。
「……あくまで、『一時』なんですよね」
「ええ。……秀人くんが戻ってくるまでの、『一時』です」
逆に言えば、秀人が戻ってくる見込みが無ければ、『一時』はいつまでも終わらないということだ。
「……手がかりを掴みました。八神が、秀人さんがいるかもしれない場所の座標を特定して……だから、謹慎を解いて下さい」
フェイトのためにも……そしてなにより、秀人のためにも。アースラのバックアップは、絶対に必要になる。
「その座標を、私にも伝えてもらいます。それが、謹慎を解く条件です」
「……はい」
なのはは、リンディさんに礼を言い……フィアットを伴って、退室した。
そして再び、海鳴市。
「遅いぞ」「ごめん」
自室で、八神とリーゼと落ち合った。
「チッ……で、アホ金髪の行方は？」
なのはは、とりあえず無事、とだけ言い、座標の件を言った。

はやては最初、管理局が絡んでくることを警戒して渋っていたが……最後には、教えていた。
「リンディさん、なのはです。座標は……」
はやての目の前で、リンディに報告するなのは。
これであとは、アースラのバックアップの下、秀人の捜索に戻れる。
そう思っていたのだが……
『……座標を確認しました。場所は、第６６管理世界、です』
『……なんてこと』
フィアットの報告に、リンディさんは頭を押さえた。
「あの……管理世界、なんですよね？　何がまずいんですか？」
『その場所は……グレアム提督が直轄する区域なの』
……グレアム提督。さっき、リンディさんが『信用していない』と言い放った人物だ。
『そこへ入るには、まず、グレアム提督の許可が無ければ……』
許可を得るためには、事情を話さなければならない。
だが、もしも……グレアムが、意図的に秀人をそこに隠しているとしたら？
……許可など、下りるはずが無い。それどころか、妙な勘ぐりを受けて、警戒心を強められ……最悪、また別の場所に連れて行かれてしまうかもしれない。
そうなってしまえば、はやてとリーゼ……その仲間たちの努力は、水の泡だ。
「チッ……これだから組織ってのは……」
はやては舌打ちをする。
「……」
無許可での転送を考えるなのはだったが、リンディ以上の知将であるというグレアムが、それを想定していないはずが無い。
三人で悩むが、やはり、グレアムの許可を取るか……電撃戦で、一気に突入するしか無い。それに最悪、そこにそもそも秀人がいなかったとしたら？
「捕まるね……」

度を過ぎた越権行為として、懲罰を受けるだろう。フェイトにも、アルフにも……悪い結果にしかならない。
――ｐｒｒｒ，，ｐｒｒｒ，，
……と、はやての携帯電話が鳴った。
「誰よ、こんな時に……」
そして、ディスプレイに表示される発信者を見て……煩わしそうに、舌打ちをした。
そこには……はやての財産管理をする、父の知人を示す、『オジサン』という名が表示されていた。
「……はい」
別室へ移動し、渋々、通話ボタンを押す。
『遅いぞ』
「チッ……第一声がソレかよ。で、何の用？」
『様子見だ』
定期連絡……といったところか。
『私生活に、不便は無いか？』
幾分優しい声で、聞いてくる。
「強いて言うなら、変なオッサンが電話をかけてくるくらいよ」
『フ……元気そうで何よりだ』
悪態に、苦笑で返してきた。
『倒壊した家屋の始末は終わった。土地はどうする？』
「テキトーに維持しておいて」
その後も、一言二言、言葉を交わしていく。
『今月も生活費だけか。……小遣いは足りているのか？　お前の財産だ。常識の範囲であれば、引き落としても構わんぞ』
「今のところは、別に。金があっても、使い道が無いし」
……浅ましい『親戚』たちから、両親の財産を守り抜いてくれたこの電話口の男性には、少なくとも感謝はしているのだろう。
「あ、そうだ……あなた、法律とかルールとか政治とか、その辺詳しい？」
財産管理というキーワードから、思いついた。

『何だ……何かあったのなら、言ってみるといい』
「あのさ、実は……」
折角だから……という、軽いノリで、先ほどの話を振ってみる。
……管理局に属さない、ある意味もっとも身軽なはやてだからこそ可能な行動だった。
『……手立ては、ある』
「え、マジ？　教えなさいよ」
『その権力者と同等の権力を持つ者が、不意打ちで既成事実を作り……理由を後付けすればいい』
「……だめじゃん！　権力とか欠片もねぇよ！」
『それはそうだ。その者とお前では、大きな差がある。年齢であったり、経験であったり……な』
「うー……これでまた、八方ふさがりか……」
いっそ、自分とリーゼだけでカチコミかけてやろうか……と、若干危険な案を練っていると、電話口の向こうで、男性が言った。
『……今は時を待て』
「待てっつったって……正直、先が見えないと気持ち悪いんだけど」
宙ぶらりんのままというのは、正直安心できない。
『幸いにも、お前は……人脈というものに限って言えば、恵まれているようだ』
そう言い残し、電話は切れた。
「チッ……」
はやては、携帯電話をベッドに放り出した。
結局、この日は結論が出ず……電話口の男性の言うように、時間が過ぎるのを待つだけだった。
◆▪◆　◆　◆
「ふうう……」
秀人は、眼下に広がるサーキットを眺めながら、煙草をふかす。
「……速くなったなー、あいつら」
外周路をＮＳＲ８０で駆け抜ける双子。そして、慣熟走行のために

作ったクランクやパイロン、スラロームを、器用に小回りするカレンのブラックバード。不整地をオンロードタイヤで駆け回る、オウルのニンジャ。

――キッ……

カレンが隊舎の前に停まり、スタンドを立てる。そして、一足で跳躍し、テラスに……秀人の隣に、着地した。

「やっほ。ヒデくん」

「よ。カレン」

秀人と気安い挨拶をして、同じく懐から煙草を取り出すし、火を点ける。

「……止めないんだ？」

カレンの意味深な問いに、秀人は、きょとんとした態度で返した。

「何でだ？」

「ヒデくん、ちょっと前までは『身体に悪いぞ』って、小言言ってたのに」

「そうだったっけ……？」

「未成年が、煙草吸ってもいいの？」

「……まぁ、別にいいんじゃないか？　止める理由も特に無いし」

……以前までなら、秀人は律儀にカントクの教訓を大事にしていて、喫煙をあまり良い習慣だとは感じていない風だったが……

「ヒデくん。……ずぅっと、ここにいようね？」

するすると、腕を絡ませる。

「……ああ、分かってるよ」

秀人は……煙草を燻らせながら、曇った笑みを……カレンと同質のソレを、浮かべた。カレンは、秀人の顔に唇を寄せ……

――ビーーーーーーッ!!!!　ビーーーーーーッ!!!!

……無機質なブザーが、隊舎を通じて、響き渡った。

「……はじめて聞くんだけど、何だコレ」

「……来客」

カレンは、無表情に……いや、感情を振り切った、醒めた表情で、ぽつりと呟いた。
「へぇ……ここ、客とか来るんだ」
「……」
ガチャッ……と、刀を装着し、すたすたと隊舎の中へ歩いていく。
秀人は、カレンと共に転送ポートの前で待つ。
――ヴウン……！
そして、転送されてやってきたのは……やたら恰幅の良い、将官服に身を包んだ男性だった。
「久しいな、小僧」
「……？」
彼は、秀人を知っているようで……そして秀人は、彼の姿に、ふと既視感を感じる。
だが、思い出せない。頭に掛かったモヤが、それを邪魔する。
「いて……っ!!」
強引に思い出そうとすると……今度は、強烈な頭痛が襲ってくる。
男性が、怪訝な表情でそちらに気を取られた隙に……
「死んで」
カレンが抜刀し、喉元へ切っ先を突き出す。結構な……というか、一般人だったらまず反応できずに刺し貫かれてしまうであろう、その凶刃を……
「ふん」
ひょいっ、と首を僅かにずらすだけで、回避してしまった。
「!?」
これほど最小限の動作で避けられてしまったことは無かったのだろう。カレンは、驚愕に目を見開いた。
「退いていろ」
勢いは殺せず、男性はその間合いを詰める。そして……
「貴様に……用は無いッ!!」
――ドボォッ!!
タックルでもするかのような勢いで背中をブチ当て……吹き飛ば

した。
「うあっ……!!」
あまりの衝撃に、後退を余儀なくされるカレン。
再び飛び掛ってきそうなカレンを、眼力で制止する。
「……」
頭痛でふらつく秀人の懐にあった、煙草のケースを奪い取る。そのパッケージを見るや否や、目を見開く。
「これは……忘却剤!?　こんなものが、何故……!!」
驚きから一変。憤怒の表情で、それを握りつぶした。
「小僧……歯を食いしばれえええええええッ!!」
「!!」
朦朧としている秀人には、身構える間も無く……
――ガゴォッッッ!!!
……顎が割れる程の、鉄拳をその身に受けた。比喩でもなんでもない。冗談抜きに、秀人の顎が砕け、歯が何本か飛び散った。
「ガはぁっ……!!」
床に叩きつけられる。
「……私のヒデくんに、なにすんのよおォッ!!」
再び、襲い掛かるカレン。
だが、それが成されるよりも早く……例の現象が起きた。
――ジュウッ……!!
……秀人の砕けた顎が、瞬時に再生する。
「……ぐ、う!」
壁に手をついて、顎を押さえながら起き上がり……カッ、と、目を剥く。そして、再生したばかりの口で……叫んだ。
「い……ってェだろ!　何しやがるこの野郎!!」
「!?」
秀人の、平常どおりの声を聞き……今度は、カレンが驚愕する番だった。
「うそ……どうして!?　忘却剤を、あんなに一杯摂取したのに……!」

男性は、それを嘲笑する。
「ふん……その小僧の性根のしぶとさは、よく知っておるわ」
悔しそうに剣の柄を握るカレンに、男性は言い捨てる。
「――忘却剣ごときで、篭絡できる小僧であったなら……オレは苦労していない」
忘却剣。それが、秀人が、そして、凶鳥部隊の面々が常用していた、煙草の正体。
「……あ、あれ？　俺、何してんだ……？」
きょとん、とする秀人は、カレンと知り合う前の、秀人と同じ。
「くっ……！　まさか、そんな馬鹿な方法が……！」
「まぁ……そこの小僧にしか、通用しない方法だったがな」
秀人の肉体をある程度、損壊させることによって、体質……秀人に宿る、リンカーコアの再生・復元能力を強引に起動させ、肉体の損傷を修復するのと同時に、体内に沈殿した忘却剣の毒素を、除去したのだ。
「おー。いてェ……って、うお！　何で、アンタがここにいるんだ!?」
秀人は、その男性を指差し……叫んだ。
「レジアスのオッサン!?」
……グシュッ、と、煙草のケースが、蒼く燃え尽きた。

# A’s編　第六十二話

秀人を殴り倒したレジアスは、ふん、と鼻を鳴らした。
「目が覚めたか」
「……！　ああ、嫌でも覚めるっつーの!!」
ぐいっと口元の血を拭う。
「……で、何の用だよオッサン」
若干ふて腐れた様子で、そう聞く。
「アースラに戻れ」
「……」
途端、黙り込む。
「……出張ってもらって悪いけど、戻るつもりは無い」
「……そうか」
一息ついて……
「フェイト・テスタロッサの身柄は、オレが預かっている」
……と、言った。
「は!?」
これには、面食らった。
「な、なんだよそれ!?」
抗議する秀人に、レジアスは、冷たい視線をくれる。
「当然だろう？　現地保護官の貴様が、その任務を放棄すると言ったのだ。ならば、後任の者に権利が移譲されるのは、当然だろう」
「後任って……俺の上は、リンディさんだろ。何でそれをすっ飛ばして、アンタが……！」
「あの青二才からの依頼だ」
秀人は、リンディの本気を知った。
もし、これで秀人がこれ以上、逃避を続けるのなら……なのはが望んでいた生活は、家族は、散り散りになってしまう。
「それが嫌なら、今すぐアースラに戻れ」
「それは……」

視線を下に落とし、口ごもる秀人。
レジアスは、ますます表情の険を強め……秀人の胸倉を掴み上げた。
「身勝手な事情で、己の責務を放り出す……それを、ガキと言うのだッ！」
再三のガキ呼ばわりに、秀人は反抗した。
「……アンタに、何が分かる！」
追い詰められた末の、抗議。だが、レジアスはそれを一蹴する。
「貴様に何があったのかなんぞ、オレは知らん。だがな」
――バキッ!!!
怒声と共に、秀人が殴り倒された。
「どんな理屈をこねようと、周囲を巻き添えにする理由にはならんッ!!」
今度は、いくらか手加減したのだろう。歯の一本も折れることは無かった。
「……」
ふらふらと立ち上がる秀人。言葉も出せず……弱弱しく、レジアスを睨む。
「貴様には失望した」
「……勝手な、ことを」
勝手に期待を持ち、勝手に失望されてはたまらない、と秀人が言う。
「初対面で、オレに食って掛かってきた時の方が……よほど良い目をしていたぞ」
話は終わったと、完全に秀人に背を向け、去っていこうとする。
「……三日後だ」
立ち止まり、独り言のように呟く。
「三日後までに、答えを出せ。オレと来るか……それとも、この汚泥のような環境に沈むか」
そして、レジアスは去り……彼がいた足元には、一枚の紙が残されていた。
「……」

拾い上げると、それは、わざわざ日本語に翻訳された書類だった。
そこには、略式ではあるが、十分に証明となる……異動願いの要綱が、記載されていた。
「……ヒデくん、」
カレンが、途方に暮れる秀人の背に、声を掛けた。いつもの不敵さは何処かへ、気まずそうな……負い目を感じている声色だった。
「悪い、一人にしてくれ」
秀人は、カレンを振り向かず、自室へ向かった。
カレンの足音は……着いて来なかった。
そして、丸一日が経過した。
「……」
自室のベッドに寝転がり、寝るでもなく、ボーッと時間を過ごす。
戻るか、留まるか……悩んでいた。
「入るぞ」
ノックも無しに、ドアが開いた。
「……オウル」
恐らくは、全てを知っていた……部隊長の、オウル。
「……」
無言で、ベッドに腰を下ろした。
秀人は寝返りを打ち、顔をそらす。
「……知ってたんだろ？　あの煙草の効能」
「ああ」
――忘却剤。
レジアスは、そう言っていた。詳しい中身は不明だが、明らかに害のあるものだということは明白だ。
「何で、俺にあれを渡した？」
「辛そうだったからな。忘れさせてやろうと思ったんだ」
開き直っているわけでは無い。ただ、本当に……その行動が、秀人のためになると思ってのことだった。
「……」
自分のことは、それで納得した。いつもの……というより、思考の

基本方針なのだが、どうせ治るから、別によかった。
だが秀人には、もう一つ、疑問があった。
「……カレンも吸ってた」
それが、気になっていた。
カレンは、自身の過去のことを『覚えていない』と言った。
少し前までは、それがウソか……もしくは、強烈な体験が、記憶を閉ざしてしまったのか……と、思っていた。
だが……あるいは。
「ああ。私が吸わせた」
――バチッ!!
跳ね起きた秀人の拳が、オウルの掌に受け止められた。
「危ないじゃないか」
ぎりぎりと拮抗する中……軽い調子で言った。
「どうして、そんなことをした……!」
「……どうして？」
怒りに燃える秀人とは対照的に……オウルは、ひどく冷めた表情をしていた。
「カレンのためさ」
「どんな記憶であろうとも……他人がそれをいじくる筋合いは無いはずだろ……!」
……決定的な、認識の違いだった。
オウルは、ふぅ……と、小さくため息をつき……
「……のぼせ上がるなよ」
拮抗が、崩れ始めた。
冷たい……冷気のような怒気を発するオウルが、徐々に秀人を押し始めたのだ。
「……く!」
「ほんの、一、二週間を過ごしただけのお前が、カレンの何を知っているつもりでいる……」

腕力にはそれなりのものがある、と自負している秀人を、同じく、純粋な腕力で圧倒する。
「記憶を消すな？　……カレンの過去を知ったお前が、同じ台詞を言えるものかよ」
「……カレンの、過去……？」
意地で押し止める。
「お前は、カレンと生涯、添い遂げる覚悟があるのか」
「……!!」
安易な深入りは許されない。もし、カレンの過去を知るとすれば、それは……カレンと同じ境遇に立ったとき。
「カレンを生涯、その身をもって守り抜く……その覚悟があるのか」
「それ、は……」
秀人は何も、ここに永住するつもりでいるわけではない。
「少なくとも、この凶鳥部隊の面々は……お前が子供扱いしているラーファも、クライアも……その覚悟を、身体に刻んでいる」
「……!!」
「秀人。……お前は、どうだ？」
改めて、そして、今度こそ本当に、凶鳥部隊の一員となるか。それとも……
……その拮抗は、揺れ動く秀人の心を表すかのようで……
「俺は……」
――守りたいもの。
そのキーワードで、秀人の脳裏に真っ先に浮かんでくるのは……
「……そうか」
それを察したのだろうか。
ふっ……と、オウルが力を抜き、拮抗は無くなった。
「お前は……我らの同胞には、ならないのだな」
「……」
心が痛まないと言えば、嘘になる。一月に満たない期間だったにせよ……記憶を消されかけたにせよ。

「邪魔をした」
すっくと立ち上がり……寂しそうに、部屋を出て行こうとする。
「先ほど、出撃命令が出た。明後日の明朝、出るぞ」
「……ああ」
奇しくもそれは、レジアスに答えを示す日。
恐らく……それが、この凶鳥部隊での、最後の任務になる。
そして、オウルは扉を閉めた。
◆▪◆　◆　◆
「失礼します」
グレアムの執務室に、またあの女性が入室した。
「うむ……首尾の方は、どうだね？」
「は。吾妻秀人は、順調に凶鳥部隊に情を移しつつあるかと……」
グレアムは、女性が僅かに思案していることを感じた。
「……何か、あったのかね？」
「あ……いえ、お耳に入れる程のことではありませんので」
グレアムは、優しく微笑む。
「なに、遠慮なく言うと良い。私たちは、同志ではないか」
「……勿体無い、お言葉です」
そして……
「……ほう。私を信用していない、と」
「はい。……ただ、それによって何か行動を起こそうとしている気配は、ありませんでした」
「……ふむ。報告、ご苦労」
沈黙するグレアム。女性は、直立不動で、次の言葉を待つ。
――ピッ。
沈黙を裂いたのは、電子音だった。
『お父様、アリアです』
使い魔からの、緊急通信だった。
「どうかしたかね？」
『凶鳥部隊が、吾妻秀人の洗脳に失敗しました』

「……」
僅かに、グレアムの目じりが動く。
「……詳細を報告したまえ」
……そして、詳細を聞いたグレアムは、静かに立ち上がった。
「提督……！」
聞いていた女性が、語気を強めた。
「洗脳とは、どういうことですか！」
どうやらこの女性、凶鳥部隊へ送られた秀人が、どのような状態にあったのか、知らされていなかったらしい。
「話が違います！　吾妻秀人は、一時的に凶鳥部隊に軟禁し……闇の書を破壊した後、家族のなのはさん、……高町なのはの下に帰すと、そう仰ったではありませんか！」
「吾妻秀人は、個人的に闇の書の主と交流がある。たんなる軟禁では、邪魔に入られる可能性がある」
「ですが……それでは、あまりにあの少年が不憫ではないですか！
彼の人格を操作してまで、隔離する必要がどこに……！」
僅かな時間の後、執務室に、リーゼロッテがやってきた。念話で呼び出したのだろう。
「連れて行け」
「はい、お父様」
ロッテは、暴れる女性を拘束する。
「提督!!」
女性は……引きずられるように、退室していった。
グレアムは、一人……闇の書のレプリカを手に、ぼやいた。
「やれやれ……結局、わたしが動かなければならんとは、な」
――ギィイ……!!
ガラスを引っかくような……粗悪なハードディスクを読み込むような、不快な音を立て……ベルカ式魔方陣が展開する。そして……
「守護騎士『ヴォルケンリッター』、システム……起動」
――ギィイイイイイイイイイイイイイインッ!!!
「……吾妻秀人。君は、最高評議会への手土産とさせてもらおう

か」
魔力光が……酷薄な笑みを、照らし出した。
◆▪◆　◆　◆
出撃を前にして、転送装置の前に集合した秀人たち。だったのだが……
「……」
「……」
「……」
秀人、カレン、オウル……三者三様の理由から、沈黙していた。
「うぅー……」「あぅー……」
ここ最近、ぎくしゃくしている三人を見てきた双子が、落ち着き無く動き回っていた。
「こぉら、少しは落ち着きなさい……」
アーデが諌める。
「……じゃ、行くか」
思考を切り替え……現場へと転送された。

これまでの任務であれば、転送されては即戦闘……というパターンだったのだが。
「反応、一つだけ……？」
索敵したアーデが、不可解そうに呟いた。
「一つ？」
「なぁんだ……つまんないの」
カレンが、やる気を無くしたように気を抜き……
――とんっ。
最初、オウル以外の誰も、それを感じなかった。行軍中の凶鳥部隊、その陣形のど真ん中に……
「な……!?」「いつの間に……!!」
――漆黒のプレートメイルに身を包んだ騎士が、出現した。
『……』
「――散開ッ!!」

全員が、即座に飛びのき……
――パンパンパンッ!!
双子の発砲した拳銃の弾丸が、鎧の継ぎ目を狙う。
「はぁあッ!!」「だぁあっ!!」
カレンの刀。秀人の拳が、集中して降り注ぐ。
明らかなオーバーキル……秀人たち自身も、そう考えた。だが……
防ぐのでも……避けるのでもない。
――チュインッ!!
鎧の表面で弾丸の弾道を逸らし……秀人とカレンの眉間へと誘導したのだ。
「「!!」」
回避に成功したのは、幸運だった。だが、それにより体勢を崩され……
――ゴギャッッッ!!
「がぁっ……!!」
あまりにも重い拳が、秀人をガードの上から、殴り倒した。
そして、空いていた方の手で、腰に提げられた大剣を抜き放ち……
――ガキィィンッ!!
カレンを刀ごと、吹っ飛ばす。
「うわっ！　お兄ちゃん、ごめんッ!!」「ご、ごめんなさいお姉ちゃん……!」
まさか、自身の攻撃が……味方へ跳ね返されるとは考えもしなかっただろう。
射撃を中断し、距離を保つ。
「い、いてて……」
明らかに折れた腕を庇いながら、素早く立ち上がる。
「ひゃー……刃こぼれしちゃった……」
が、何とか曲がりはしなかったらしい。
騎士は、凶鳥部隊に取り囲まれながらも……余裕を感じさせていた。
まだ、仕掛けてくる気配は無いが……

「おい、オウル……どーすんだ」
明らかに、今までの敵とは違う。力だけではなく……研ぎ澄まされた『技』をも、備えている。
そう、これはまるで……
「こいつ……守護騎士だぞ」
そう。闇の書の支配の下……秀人を瀕死に追い込んだ、ヴィータと同格。
「気をつけろ。今までとは違う」
「ほう……こいつが」
オウルは、秀人の言葉に……笑った。
「――ウチと双子、秀人とカレンとアーデルハイドの２チームに分かれろ。前後左右、互い違いに波状攻撃」
指示は迅速だった。
「はいはーい」
カレンは刀を納め、ブックホルダーから分厚い大判の本を携える。
『……』
――ジャキンッ!!
守護騎士が大剣を振るうのと同時……オウルが、鉄塊を振りかぶって突撃した！

◆・◆　◆　◆

『守護騎士の反応、感知しました』
「……チッ。やっぱりか」
リーゼの報告に、はやては舌打ちで返した。
『どうやら、我々と管理局の他にも……闇の書を狙う勢力があるようですね』
これで、二度目だ。
「すぐに向かうよ」
『了解です、では、早速……送、の、……準、を……』
……が、念話にノイズが混じり……途切れてしまった。

「あ……？　おいコラ、バグってんぞ!?　おーい!?」
そして……はやては気づいた。
海鳴市の通り……平日昼間だというのに、妙に人通りが少ない……というか、ゼロであるということに。
「……」
即座に武装……焔の魔剣を握り、ブラッディダガー、ナイトメアを発動準備する。
――ブゥウン……
……古いブラウン管のテレビが点くような音を立てて、転送魔方陣が展開した。
そして、現れた敵は……
「……おいおいおい、何の冗談だよこりゃあ……」
思わず、攻撃魔法を発射するのを停止し……観察する。
小柄な体躯に、ロングスカートのような外装。顔はヘルムで隠されているため、見ることは出来ず……いや、もしくは、アレが素顔なのかもしれない。そして何より、手甲で武装された手で握っているのは……杖。
三日月のような丸いシルエットを持ち、中心に漆黒の宝玉を据えた、その杖は。
――高町なのはの愛機、レイジングハートに瓜二つだったのだ。
「……なかなか、面白いことするじゃないの」
なのはは一度、『湖』にリンカーコアを蒐集された経験があった。ならば目の前の敵は、そのデータを守護騎士プログラムに入力した……
「……アイツのコピーってことか」
――ジャキッ。
その先端……銃口に相当する部位が、はやてに照準を合わせる。そして。
――キュゴオオオオオオオオオオオンッ!!!
超威力の砲撃が、はやてに発射された。
「っくううううううっ!!　ハンパねェ……!!」
実は、直にその砲撃を目にするのは初めてだったはやて。

――ズガガガガガガガガガガッ!!!
体勢を立て直し……誘導弾を一挙にぶっ放す！
『……』
――ガギギギギンッ!!
偽者が展開したシールドに、全て阻まれる。
大威力の砲撃と、堅牢な防御。まさに、高町なのはという砲撃魔導師そのもの、といった特徴。
「だあああああああああっ!!」
カートリッジを消費し、威力を底上げされた魔剣の刃が、偽者のシールドに突き刺さり……
――パキィンッ!!
砕いた。
そして、馬鹿の一つ覚えのように砕けたシールドを再展開しようと……
「今の……高町だったら、再構成するより先に、まずは砲撃をブチ込んでくるッ!!」
『……』
……宿敵だけあって、戦法もよく理解している。
――ガキィン!!
偽者を蹴り飛ばし……
「この失敗作が……スクラップにしてやるよっ!!」
再び、焔の魔剣を振り上げる！

# A’s編　第六十三話

「おぉおりゃあああああああっ!!」
『……』
――ゴギイイイインッ!!
秀人の拳と、騎士の盾が、激しい火花のような魔力光を散らす。
「行けッ!!」
カレンは、その隙を突いて刃を飛ばす。刃は、確かに騎士の鎧に突き刺さるのだが……
「……ノーダメージのようねぇ」
「うぁー、もう！　まだるっこしい!!」
遠距離攻撃の手段を持たないアーデルハイドは観測係に徹して、分析する。
「――インパクトッ!!」
ほぼ密着した状態から、攻撃魔法を放つ。
――ドパンッ!!
それも確かに、騎士を捉えるのだが……僅かに身じろぎをするだけで、踏みとどまった。
『……』
――ヒュカンッ!!
カウンターの一閃。
秀人は腕を強化し、それを受ける。
「チィッ……！」
が、騎士の大剣は、強化したグローブごと、秀人の腕に食い込む！
「ヒデくんッ!!」
カレンが放った紙が、包帯のように秀人の腕に巻きつき、なんとかその刃を受け止めた。
「でやぁッ!!」「せいっ!!」
二人でタイミングを合わせ、騎士を蹴り飛ばす。
「――バレット！」

――ドドドドドッ!!
攪乱も兼ねた散弾をバラ撒き、土煙を巻き上げる。今度は跳ね返されることを考え……ただ、派手に散らばるよう調節した。
安全圏まで退避した秀人たちに代わり……
「潰れろ……!」
オウルが、鉄塊を振り下ろす。
――ゴゥウンッ!!
超重量の一撃。
騎士はそれを、無理に受けようとはせず、回避を選んだ。
「これならっ!」
「逸らすことも、跳ね返すことも!」
バッテリーのような機器を、ライフル銃のような形状の銃に接続し、発射。
「「出来ないよねっ!!」」
――バシュウウウウッッ!!
銃声……と呼ぶには、些か軽い音だった。だが、その攻撃は異常なまでに速い。
――バキンッ!!
騎士の兜の横っ面を、削り取った。騎士は、攻撃の勢いを緩和するため、自ら地に転がった。
「よっっしゃー!」「やった……!」
喜ぶ双子だったが、騎士は何事も無かったかのように立ち上がる。削れた兜も、修繕される。
(……キリが無い)
やはり、闇の書のバックアップを得た守護騎士は、反則にも思える強さだ。
「……なら、バックアップごと焼き尽くすッ!!」
秀人は、不死鳥の召喚を試みる。
ヴィータを、闇の書の呪縛から解放した蒼炎ならば……あの騎士も、浄化できるに違いない。だが……
――ぷすんっ。

「……あ？」
不死鳥どころか、火の粉一つとして散らない。
「おい、何で出ない!?」
焦る秀人だったが、騎士は既に目の前に迫っている。
「ヒデくん何やってんの！」
――ガキイイインッ!!
刀で、騎士の大剣を受け止める。
「うっく……!! せやぁっ!!」
――ギャリイイイインッ!!
何とか受け流すことに成功したが、秀人達のターンは攻撃に失敗してしまった。
（何で出せないっ……!?）
傷の治癒は続いている。喪失したわけでは無いだろうが……リンカーコアの化身は、うんともすんとも言わない。蒼炎が使えないとなったら……
「動けなくなるように、拘束するっきゃない！」
『……』
「だあああああああああああああっ!!」
大剣を避けて、腕を掴み……背負い投げる。
――ゴスッ!!
「がっ……!!」
投げられている最中にも関わらず、騎士は、秀人の延髄に蹴りを叩き込んだ。
「……ンの野郎おおおおおおおおおおおおおッ!!」
自身と騎士の腕をチェーンバインドで縛りつけ、そのまま投げを敢行する。
――ガシャアアアアンッ!!
少しは効いたのだろう。僅かながら、立ち上がるタイミングが遅い。
「ふんっ!!」
それを見逃さず、秀人は、十字固めに持ち込んだ。

ギシギシと、自身の腕を破壊して脱出しようとする。捨て身……とは違う。闇の書のバックアップがあるからこそ可能な脱出法。だが……

「硬い鎧が、仇になったな……!!」

騎士の重厚な鎧は、騎士の膂力を以ってしても容易には破壊できない。

「オウル！　やれえええええええええっ!!」

この状態の騎士に決定打を与えられるとすれば、オウルしかいない。

「応ッ!!」

オウルは、鉄塊を大上段に振り上げ……

「ヌぅウあああああああああああああッッ!!」

怒号と共に、振り下ろした！

「……！」

秀人は寸前で、自らを衝撃波で弾き飛ばし、直撃を避けた。

――ドズウウウウウウウウウウンッ……!!!

……鉄塊は、騎士ごと地面にめり込んだ。

「……」

が、依然としてアーデルハイドは状況の変化を伝えない。

まだ、倒していない。いや、それどころか……

――ズルルルルルルルッ……!!

……と、地面にめり込んだ鉄塊に、染み入るように……闇が、広がった。

「!!」

即座に得物を放り出すオウル。

「……吹き飛ばせ」

「あいあいさー！」「りょうかいっ！」

双子は、ポーチから取り出した手榴弾のピンを抜き……騎士がめり込んだ穴に、投げ落とした。

――ドゴオオオオオンッ!!

が、吹き飛ばされたのは、周辺の地面のみ。騎士は……いた。

『……』

右手には大剣が……そして、左手には、闇色に変色した鉄塊が握られている。

「……支配権を奪われたか」

オウルは、手持ち無沙汰になった手をぷらぷらとスナップさせ、独り言を呟く。

「いいだろう。くれてやる」

――……ヴォンッ!!

そして再び、ベルカ式魔方陣が展開し……

「……!」

秀人は、その光景に言葉を失った。

発動された、オウルの錬鉄召喚。確かに、オウルは言っていた。

『錬鉄召喚(コレ)しかできない』と。

秀人はてっきり、武器一つに限った話だと、勝手に決め付けていた。だが……実際は。

刃が、棍が、槍が、斧が、弾が、杖が、鎚が……おおよそ、『武器』として思いつく限りのモノが、召喚されていた。

――その全てが、10メートルオーバーという、馬鹿げたサイズで。

「遠慮はいらん。さぁ……」

すうっ、と。指揮者のように優雅に、右手を振り下ろす。

――受け取れ。

と。

――――キュドドド

錬鉄の樹林が瞬く間に形成され……地形を変えていく。
――……ゴガガガ

が、引き戻されていく。闇色の槍は、鮮やかな緋色に染まっていて……

「――――――ブチ撒けろ」

一切の表情を欠落させたカレンの刀が、槍を手首ごと斬り飛ばし、張り付いたような笑みのラーファが斬り飛ばされた腕を機銃で粉微塵へと変え、仮面のような泣き顔のクライアが、穴に砲撃をブチ込んだ。

――――……ズガァアアンッ!!

砕かれた地面の中から、騎士が飛び出した。

『……』

ずしゃっ、と着地した騎士は……大剣を、棍棒を、鉄槌を、そして再生した槍を……

――四本の腕で、それぞれ装備していた。

「……貸せ」

カレンは、ラーファの手からフルオート拳銃を奪い取り……駆け出した。

「アーデはオウルの傷の治療！　ラーファとクライアは敵を警戒！　カレン！　まだ突っ込むなぁあああああああああああああああああッ!!!!」

必死に指示を飛ばし、無謀な突撃をするカレンを押しとどめる。が、そんな言葉で停まるのが、カレン・フッケバインという人物なわけも無く……

――ギャギイイイイイイイイイイイイイイイイインッ!!

……鉄塊と大剣が交差し、カレンの大上段からの振り下ろしを阻止した。

カレンは、奪ったフルオート拳銃を騎士の兜に押し当て、

――ガララララララララッ!!!!

至近距離から、乱射した。

「死ね……!!　死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねしねシネッ!!」

跳弾が額を掠めて出血しようが、お構いなしに。だから、気づく余

裕などあるはずも無かった。
その背後から、残る二本腕……鉄槌と槍が、カレンに狙いを定め、今まさに解放されようとしていた。
「――――……インパクトォッ!!」
――ゴパァァアアンッ!!
騎士ではなく、カレンを衝撃波で弾き飛ばす。
「……あああああああっ!! 邪魔すんな秀人おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
「頭、冷やせっ!! もう少しで、お前も串刺しだったんだぞっ!!」
怒りで我を失ったカレンを叱咤する。
「知るか!! 殺す……!! 絶対に、ブチ殺す!!」
刀に紙を巻きつけて延長した長刀で、騎士の首を狙う。
『……』
騎士は、大剣を腰に納め……空いた手でガシッと、刀を鷲掴みにした。
「あ、わあああああああっ!?」
そのままカレンを手繰り寄せ……
――ドガッ、ゴゴゴッ!!
拳の連打を、叩き込んだ。
「お姉ちゃん!!」
『……』
双子に向かって、鉄塊を投擲。
「……ちっ!」
軌道は単純。秀人はそれを無視しようとしたが……
「え、えええええええええっ!?」「なに、これ……!?」
投擲された鉄塊が、無数に分裂した。
――パパパパパパパパッ!!
機銃で迎撃を試みる双子。弾丸は、大剣をスルッと透過する。
「……幻影!?」
「きゃあああああああああああああっ!!」「あああああああっ!!」
うち、いくつかの実体が……双子の体を打ち据えた。

騎士の虚ろな眼窩が、オウルと、それを治療するアーデルハイドを補足する直前。
「こっちだあああああああああっ!!」
――ガシャアアアアアアアアアアアアアンッ!!!!
秀人の砲撃が、騎士の鎧に直撃した。
『……』
騎士は、鬱陶しそうに射線上から退避し……逆に、秀人に接近した。
――ズバババババババババッ!!
「うぐっ……!!」
凄まじい剣捌きに驚愕する。
「剣……鉄槌……格闘……幻影……！　これじゃ、まるで……！」
――ガッシャアアアアアアアアアアンッ!!
防御を破壊され、秀人が叫んだ。
「――守護騎士、４体全部と戦えってことかよ!!」
部隊長は瀕死。参謀はその治療。戦力は錯乱。支援は重傷。
……活路は、あるのだろうか。

# A’s編　第六十四話

――ドゴオオオオオオオオオッ……!!!!

「んっ……!!」

スレスレを通過していく砲撃に息を呑みながら、距離を詰めていく。

「おらぁっ!!」

――ガギイイイイィィンッ!!

魔剣が防御を削り取る。

が、それはやはり、微々たるもの。開いた穴は即座に修復され、また堅牢な防御が構築される。

「ふんっ……!!」

――キュゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!

アクセルシューターのような誘導弾を、ブラッディダガーで迎撃する。そしてまた、焔の魔剣で斬りつけるのだが……

――ガキンッ!!

「チッ……!」

破ろうと思えば、破れるのだろうが……そのためには、虎の子のカートリッジを消耗しなくてはならない。防御を破るのはあくまで、本体にダメージを与えるための過程であって、主目的ではない。

やはり、リーゼを呼びつけるか……とも考えたはやてだったが、すぐに頭を振った。

「この程度……タイマンで凌げないんじゃ、その程度ってことだ！」

リーゼと……秀人との修行。その成果が試されている。

「自分の下僕風情に勝てないんじゃ……秀人（アイツ）になんて、一生勝てないッ!!」

『鉄槌』の敵討ち。そして……秀人への雪辱戦。それらの前には、この程度の些事、自力で対処できなければならないのだ。

『……』

守護騎士は、杖の先端を、地面に向けて……

――ゴゥッ!!
砲撃が、拡散した。
守護騎士を中心にした円状に、炎を伴った波濤が押し寄せる。
「……!!」
はやてのバリアジャケットは、運動性を重視した軽装。広範囲攻撃で、一点へのダメージは少ないとはいえ……直撃はマズい。
「スレイプニル……!!」
――バサッ……!!
一対の闇の翼。それが、大きく、大きくたわんで……
「……りゃあぁッ!!」
――バオオオオオオオオオオォッッッッ!!!
凄まじい突風を巻き起こし、熱波を跳ね返した。
『……!』
まさか、跳ね返されるとは想定していなかったのか……僅かに驚愕したような気配を見せ、まともに直撃を食らった。
「なるほど……こういう使い方もアリなのか」
翼を畳み、気配を探る。
「大方、オートマチックな反射で発動するように設定して、処理能力を節約してんだろうな……」
防御が自動化できたのなら、攻撃だけに専念できる。
「……いやー、それにしても本当にこんなことが出来るとは」
スレイプニル。かつては、飛行魔法の発動補助として使っていて、自力での飛行が出来るようになってからは、殆ど使わなかった。
だが、改めて闇の書の記述を読み返してみると、この魔法だけはやけに難解な部分があり……その一部を運用してみた結果、魔法を反射させることが出来た。
――ガゴッ……!!
立ち上がり……横転していた自動車を、苛立ち紛れに殴りつける守護騎士。
「はン……なんだよ、感情あるんじゃねぇか」
はやては、焔の魔剣を構え……

「おらあああああああああああああああっ!!」
加速。
――パキッ!! パキイイイインッ!!
進路上にセットされたバインドを切り崩し、本丸へ。だが、このままではこれまでと変わらない。ただ、自動防御に阻まれてしまうだけだ。
「1、2の……3っ!」
――ビュオンッ!!
はやては……主兵装である、焔の魔剣をブン投げた!!
『……!』
――ヴンッ!
自動防御が発動してしまう。守護騎士は、なんとか立て直そうと、まだ間合いにいるはやてに砲撃を発射する。
――ジュウウッ……!!
はやてはそれを、限界まで引き付けてから、頭を反らして回避。
頬を焼いた代償に……はやては、守護騎士の懐に飛び込んだ!
剣を振るうには近すぎる。攻撃魔法を発動するには遅すぎる。ならば……!!
「……っく、ぁあああああああああああああ!」
――ゴシャァッ!!
守護騎士の兜に、はやての拳がめり込んだ!
……リーゼとの特訓で得た、限界での見切り。そして、秀人との組み手で学んだ、超至近距離での格闘。その二つを、見事に披露してみせた。
「……発見、二つ目だ。その防御は……純然だる物理攻撃に対しては、防御力を発揮できない!」
魔力で編んだ焔の魔剣は阻まれたが……生身の拳は、届いた。
『……』
べっこりと凹んだ兜から、アイガードが落ち……青く、戦意に輝く瞳が覗いた。
――ガキンッ、ガキンッ!!

……カートリッジを二発、ロード。魔剣、鉄槌に備わっているのだから、守護騎士である目の前の者が保有していても、おかしくはない。
魔力を吸収した敵の杖は……鋭角的な、槍のような形状へ変形を果たした。
「ふぅん……？」
『鉄槌』の得物と同じく、攻撃力も爆発的に増大していることだろう。
「まさか、『さっきまでは本気じゃなかった』……とでも、言う気？」
拳を構え……ファイティングポーズを取る。
「ま、いいケド……」
武装を強化して尚、警戒に身を固める守護騎士。
『……』
先ほどの一打がよほど強烈だったのか……一片の気配さえも見逃すまいと、魔力察知の探査魔法を何重にも張っていた。
「ほらよっ」
それだけに……警戒をいとも簡単にすり抜け、唐突に目の前に現れたはやてには、
対処が間に合わなかった。
『!?　……っ！』
慌てて、炎を纏った拳を突き出す守護騎士。だが……
――ガゴッ!!
クロスカウンターが、先ほどとは反対側の頬に直撃した。
そして、守護騎士が反撃に移る時には既に、射程の外へ退避してしまう。
（さっすがジジイの直伝……）
大家直伝の……喧嘩殺法。
そのうちの一つが、これ……縮地。摺り足からの、『初動を察知されない』歩法である。
だが、これを使うには、一切の魔力を使わず、意識を集中しなければならないので……いつでも使えるというわけではない。
大家から似たような技法を習得している秀人や、百戦錬磨のクロノであれば、ロクに効果は無いだろう。

（……広範囲への拡散攻撃に対してのみ、魔法防御。それ以外は、体捌きと、肉弾戦で対処）

……それが、この守護騎士へ対抗する手段。

「……」

――ゴバァァァァァァァァァァァッ!!!

再び、広範囲への拡散砲撃。

「ははっ……今度はノーモーションか!!」

威力も段違いだ。だが……

「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

――バオオオオオオオオオオオッ!!

跳ね返すことは出来なくとも……軌道を逸らし、無力化することはできる。

即座にスレイプニルを収納し……再び、縮地。

――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!!

事前に発動されていた誘導弾の雨が降り注ぐ。縮地を使っている今、魔法防御は出来ない。

「っ……いてッ……!」

はやては……ヒットしそうな弾だけを見据え、バリアジャケットで受け流した。

再び、間合い。狙うのは、水月。いかに守護騎士とはいえ、人体を模している以上、弱点もまた同様の筈。

勝利を確信したのだが……

――ズンッ……!!

渾身の一打は、受け止められてしまった。

「……!」

なのはを模した守護騎士。彼女を守るように……新たな守護騎士が、現れていた。

「テメェらもか……『剣』、『盾』」

『……』

増援に、二体の守護騎士。これで、三対一。さすがに少々、分が悪い。

――ザ、ザザザザザザザザザザザザッ……!!
辺りの空気が、ざわついた。これは……
『ア、アアアアア……』『ウウウウウ……』『ア、ア……　』『グ、ウ……』
雑魚騎士たちも、現れた。
「チッ……もう、なりふり構わないってこと？　あーあ……」
なのはを模した守護騎士へ目を向ける。
「失望したよ。お前は、騎士失格だ」
それが、彼女の本意だったのかどうかはともかく……真剣勝負に割り込みが入るなど、騎士の名折れだ。
『……!!』
それは、彼女にしてみても同様だったのか……屈辱に震えている。
（とはいえ……さすがに、ちょっとまずいか？）
雑魚騎士は、単体や群体として見れば、戦力は微々たる物。だが……あの泥騎士のように、雑魚騎士を吸収・パワーアップしてしまうとなれば、敵は残機を用意しているのと同じだ。長引けば長引くほど、不利になる。
『リーゼ、聞こえてるか？』
『……はい、わが主』
はやては、その声が不自然に緊張していることを察した。
『今、どんな状況だ』
仕方がないから、リーゼを使うことにしたらしい。が。
『……現在、敵性因子と交戦』
どうやら、足止めを食らっているらしい。
『即刻、こちらを片付けて主のもとへ参ります』
『おう。ヘマこくんじゃねぇぞ』
念話を切った。
……リーゼが来ないとなったなら。
「やるっきゃないか……！」
まずは、スペアパーツである雑魚騎士を駆逐した後、守護騎士を潰す。厳しいどころの話ではなくなった。泣き言を言いそうになる自分を叱咤し、魔剣を握る。

そして、にらみ合いが崩れ……互いに戦闘を開始しようとする……直前。

「まてええええええええええええええぇい!!」

……素っ頓狂な声が出鼻を挫き、はやてと雑魚騎士はずっこけた。

「……、こ、この声は、」『……？』

仰ぎ見る空。

とあるビルのテラスの縁に、ふんぞり返る人物がいた。

やたら服の裾が風にはためき、不敵な笑みを演出していた。

「ボク、さんじょ……へ、へっくしっ!!」

……11月の寒空の中、風に吹かれていればこうなる。

「さ、さむい……もういちまい、なんかきてくれればよかった……ずずっ」

まさかの私服だった。

「だからやめようって言ったじゃないか！」

「えーだって、こっちのがカッコイイ……」

「い・い・か・ら！　早くバリアジャケット着な！　風邪ひくよ!?」

「はぁい……」

「アホ金髪……それに、その使い魔……？」

確か、レジアスに連行されて行った筈。

「アホってゆーな!!　……とうっ」

飛び降り、はやての隣に着地する。

「何しに来た？」「たすけにきた！」「いらね。帰れアホ」

予定調和のように、ぽんぽんと軽口が出てきた。

「なんだよそれー！」

「うっさい。私はあのバカどもを叩きのめすんだから邪魔すんな」

「あのバカ……って、こいつ？」

くいっ、と指差された先……

「そうそう、そいつ……」
――守護騎士が、剣を振りかぶっていた。
「……って、うおおおお!?」「ぎゃー!?」
――ジャキンッ!!
スレスレで回避したはやての頭上を、『剣』の一撃が凪いだ。
「チッ……特撮みたいに、待っててくれるわけじゃないか」
そんな表現が出てくるあたり、はやても大概、秀人たちに毒されている。
「とにかく！　ヤガミは、なのはモドキとたたかいたいんだろ!?　だったらそのあいだ、ボクたちがザコのあいてしてやるよ！」
「だから、いらんと言っている……」
辟易してそう言うはやてに、フェイトは、必死な感じで言った。
「なにもしないでかえったら、レジアスのおっちゃんにおこられるんだよっ!!」
怒られるのが怖い……そんな子供っぽい理由で、助けに来たらしい。
「それに、ひでともかえってくるからねっ！」
「……な、なにっ!?」
これには仰天した。慌てて、アルフに目で確認を取る。
「……本当だよ。いま、クロノとユーノが向かってる」
「ま、マジでか……って、高町は？」
誰よりも先に駆けつけたいだろうに……
その疑問には、フェイトが答えた。
「なのは、このまえアースラであばれたから、こっちに配置されるんだってさ」
……リンディによる、生殺しである。
「ヴィータとアイは、リーゼのおうえん！」
どんな敵かは不明だが、その三人で手こずることは、きっと無い。
これで、物量は押し返せることが確定した。
「そういうわけだから、かってにやらせてもらう！　アルフ、いくよっ!!」

「じゃ、アタシはあの青いのを」
「ボクはむらさきのヤツ!!　……こんどはかつ！」
　以前、はやての傘下にいた『剣』と戦闘した際には、闇の書が一時封印されたため、お預けになってしまっていた。
「そんじゃ、けいきづけのぉ……!!」
　――バチッ、バチバチバチッ……!!
　魔力光が輝き……空の曇天に、雷雲が発生していく。雷雲は、ゴロゴロと不吉な鳴動を始め……そして。
『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｆａｌｌ』
「サンダー……！　フォーーーーーーーーーーーール!!」
　――ッバゴオ!!ォォォ

守護騎士は、こくん、と頷いた。
向こうの戦闘区域と離れた、別の通りにやってくる。
拳を握るはやて。杖を構える守護騎士。
――ゴゴンッ……ズンッ……
戦闘音が、遠くに聞こえる。
「なぁ、お前」
はやては、守護騎士に対話を試みた。
「私の……知り合いに、秀人ってやつがいる」
『……？』
聞いている。そう判断し、話し続ける。
「そいつの魔法は、闇の書の呪縛を焼き滅ぼすことができるんだ」
『……』
黙りこみ……いや。微かだが、確かに逡巡している。
「だから、お前」
ふっ……と、優しい笑みを見せて、言った。
「――私が勝ったら、下僕になれ」
……と。
「前にもね、いたんだ。守護騎士のくせに、妙に感情っぽくて……面白いやつ」
『鉄槌』こと、ヴィータのことであろう。
「ああ、間違いの無いように言っておくけど……代わりにしようってわけじゃない。ほんと単純に、お前のことが気に入ったんだ」
『……』
――ジャキッ……
守護騎士は、黙って杖を構える。
交渉決裂か……と、はやてが嘆息する。
そして、次の瞬間に起きたことは……全くの、予想外だった。
槍の先端を、自動防御を司っていた兜に押し当て……
――パキィンッ!!
粉々に、破壊した。
ばらばらと欠片が落ち、現れたのは……

――――――高町なのはと、同じ顔だった。
『……いいでしょう。わたしを打倒し得たのであれば、あなたを我が王として認めます』
なのはと同じ声質で、やや感情薄く……はっきりと、喋った。
「……」
喋れないと決め付けていただけに、ぽかん、と口を開け唖然とする。
『守護騎士が一体……『殲滅者《デストラクター》』、参ります』
「!!」
……主従を掛けた戦闘が、始まった。

# A’s編　第六十五話

はやての元へ急ぐリーゼ。
だが、その進路を、幾分見慣れた人物が塞いでいた。
「貴様か」
「……」
秀人たちに『追跡者』と名乗った、仮面の男である。
「貴様は一体、何を目的としているのだ……？」
不可解だった。
徹頭徹尾、阻んでくるならいざ知らず……以前、泥騎士を処断した後に支援を行った。何か目的があるのだろうが、迷走しているかのような印象さえある。
「……」
――バウッ!!
返答は、拳だった。
「！」
捌き、下がる。
「……貴様こそ、どういうつもりなのだ」
低く、感情を抑えた声で、逆に聞いてきた。
「なぜ、貴様が『表』に出てきている。貴様はあくまで、サブの筈――」
「……」
黙秘。
――バババババババババババッ!!!
魔力刃を掃射する。それら全てを、ホイールプロテクションで防ぎきり……高速バインドをリーゼに仕掛ける。
「メインプログラム……『テンタトレス』を、なぜ実行しない」
「……！」
その名称を耳にした瞬間……ポーカーフェイスが、はっきりと強張った。
「あれこそ、闇の書の真髄。闇の権化……」

「……黙れッ!!」
――ガォンッ……!!
魔力の大玉が炸裂する。
「む……」
追跡者は、その勢いを殺さず……自らの腕の上を滑らせるように、大玉を弾いた。
――ギャリイイインッ!!
リーゼの魔力刃と、追跡者の防御が衝突しあい、魔力光を散らす。
「あれは……あのプログラムだけは、二度と動かさん!」
「二度と……か。なるほど」
蹴りを相殺し、拳を応酬し、攻撃と防御がめまぐるしく入れ替わる。
「吾妻秀人によってメインプログラムが停止させられ……その隙に、己をメインに挿
げ替えたというわけか」
攻防を繰り広げながら、追跡者は、リーゼの僅かな反応から、己の推論の正否を明らか
にしていく。
「だが、不可解だ。いくら己をメインにしようとも、闇の書の機能であれば、再び『テ
ンタトレス』がメインに差し戻される設定になっているはず」
――バチンッ!!
虎バサミのような設置バインドが、追跡者の足を挟み潰す。
――バゴンッッ!!
砲撃がその隙を捉え……するっ、と、蜃気楼のように通り抜けた。
「幻術……」
特に慌てる様子も無く、索敵する。
――ガシッ!!
頭に触れる感触を覚え、回し蹴りを放つ。
「!」
回し蹴りは、追跡者の腕を確かに捉えた。
腕を庇い後退する追跡者。

だが、追跡者は、ダメージと引き換えに、リーゼから情報を引き出していた。
「……そうか。闇の書の主は、設定そのものに介入したのか」
「……」
忌々しげに唇を噛む。
『水門』……よく考え付いたものだ。源流……闇の書の設定からの干渉を断ち、独自のプ
ログラムとして動くようにするなど」
――バシュッ!!
地面が隆起し、刺し貫く。
「力は大きく削がれたようだが……策謀を巡らす小賢しさを獲得したようだな」
が、またも幻術で逃げられる。
「とんだ狸だな。わが姿を模して、従属していると思わせて……その実、主を誘導していたとは」
虚空より、紛れもない侮蔑がぶつけられる。
「いや……違うな」
そこで、言われっぱなしだったリーゼが、初めて反論した。
「秀人に勝ちたいというのは、紛れも無い主のご意思……そして」
――バキィンッ!!
「……!」
輪投げのように連続射出されたフープバインドの一つが、姿を消していた追跡者の実体
を掴み取った。追跡者は煙幕を張り、照準から逃れる。
リーゼは、構わずに勘で砲撃を発射した。
――ドゴオオオオンッ!!
「八神はやてに従属しているのは、私の意志だ」
煙幕の向こうから、追跡者が歩み出る。
気配は……二つ。
「なに……!?」
幻術の可能性も考慮し、念入りにサーチを行う。

「力の大部分を封じられて尚、これほどとは……」「曲がりなりにも、古代ベルカの遺産、といったところか」
だが、結果は変わらず……目の前にいる二体の追跡者は、どちらも紛れも無い実体だった。
「一つの身体に……融合していたというのか……」
驚愕ともつかない言葉を搾り出す。
「……さて、我ら二人を相手に、どう戦う？」
二対一の戦いが、始ま……
「――だァらっしゃあああああああああああ!!」
……る前に、追跡者の片方を、突如飛来した鉄球が弾き飛ばした。魔法での防御は間に合っていたものの、強制的に後退させられる。もう片方は、余裕で回避している。たったそれだけのことで、リーゼは、ある程度の予想をつけていた。
「一体は魔法、残る一体は肉弾戦に特化しているようなの……でも、見分けがつかないのが、ちょっとめんどいの」
「ハッ……どっちがどっちでもかまわねーよ」

ヴィータとアイが、リーゼに並び立った。
「お前たち……なぜ……」
ぽん、とリーゼの背をアイが叩き、ヴィータがグラーフアイゼンをガシャッ、と担ぐ。
「助太刀だ。決まってんだろ」「ま、アイは戦闘はからっきしだけど……目はいいの。幻覚くらいなら、ぱぱっと見破ってやるの」
「さて……」
ヴィータは、目の前の追跡者たちを、じろりと睥睨し……
「アタシら三人を相手に、どう戦う？」
ニヤリと、好戦的な笑みを浮かべた。
◆▪◆　◆　◆
「はぁっ、はぁっ……！　このっ……!!」
もう、何度目になるかもわからない。
接近してきた騎士にインパクトを浴びせ、動きを押しとどめる。

――ギチ、ギチ……!!
が、騎士は既に、インパクト程度ではたじろがなくなっていて……構わず、四本の腕を振り上げ、四つの凶器……大剣、鉄槌、槍、拳を繰り出してきた。
大剣を弾き、鉄槌を受け止め、槍を脇で挟み潰す……ところまでは、よく凌いだと賞賛してもいいだろう。だが、いくら秀人とはいえ、四肢はあくまで四肢でしかない。
最後の一つ……常人の二倍近くに伸長した腕。強靭なバネから繰り出されるその拳を、腹部にモロにくらってしまった。
「ぐ、があッッ……!!」
どろっ……と、血液と胃液が混じったモノを吐き出す。当然、即座に治癒するのだが……鈍痛のようなダメージと疲労は、確実に蓄積していた。
ただ、この敵を打倒すればいいというのであれば、連続カウンターで攻撃を逸らし受け流し、ゼロ距離で拡散砲撃を全身に叩き込んでやれば何とかなるだろう。隔離世界での荒行や、日々の鍛錬は伊達や酔狂ではない。単体の守護騎士であれば、身一つで退けられる程度の実力は身に付いていた。
だが……
「げふッ……か、レン……！　下、がれ……！」
――ガシッ!!
刃を手で受け、騎士と距離を取らせる。
「なんで……なんで、なんで邪魔するのヒデくん……？　そいつは殺す……オウル姉さんを傷つけた、そいつは私が細切れにして殺すんだからあぁ……！　邪魔するなあああああああああああっ!!」
「！　バカ、よせ!!」
反撃の可能性も考えずに騎士にまとわり付き、それどころか、秀人にさえ襲い掛かってくるカレンの存在が、ネックになっていた。
受け流せば、間違いなくカレンに当たる。激昂し無防備な体を晒しているカレンには、それだけで致命傷となるだろう。
ラーファとクライアは、ダウンしたまま動けず、アーデルハイドが

必死に治療を続けていた。だが、その力の大半は、腹部をブチ抜かれたオウルに注がれており……双子の回復は、どうしても遅れている。
――チリッ……
……頭の片隅に、何かがある。それは間違いなく、この状況を打開するための物の筈。
だがそれは、モヤが掛かったように、正体を掴めない。
（まだ、あのタバコが残ってやがるのか！）
……レジアスの鉄拳と蒼炎により、忘却剤の効果の大半は除去されたが……まだこうして、効果の一端は、こびりついていた。
（何だ！　何を忘れてるってんだ俺は!?）
そうこうしているうちに、騎士の大剣が、カレンめがけて振り下ろされる。
――ガキンッ、ギャリリッ……!!
カレンも、よく回避した。
だが、槍と拳は、確実にカレンを直撃するコースであり……攻撃や防御は、間に合いそうも無かった。
「くっそ……！」
秀人は、また『いつものように』その身を騎士とカレンの間に滑り込ませた。
――オオオオオッ……！
刃を体で受け止めれば……最低でも、カレンだけは無傷で済む。
そう考え、攻撃をその身に……
――……ウォオオオオオオオオオオンッ!!!
甲高い唸り声を上げ、重量級の鉄馬が、騎士を跳ね飛ばした！
『……！　……、！』
二度、三度と跳ね飛ばされ……ようやく、停まる。
「ンなッ……!?」
呆然と突っ立っていた秀人の前で、その鉄馬は動きを止めた。
――ガロロロロロ……
粗いアイドリング音を奏で、停車する鉄馬。

「あ……バイク？」
僅かに正気を取り戻したカレンが、きょとんとした調子で言った。
そう。見覚えがあるどころの騒ぎではない。それは間違いなく……秀人が苦楽を共にしてきた、ＺＺＲ６００改だった。
そして、そのシートに腰を下ろすのは……
「やれやれ……死ぬかと思ったぞ。キミはよく、こんなもので戦場を走り回ってこられたものだ」
「ふー……。ま、僕はそこそこ慣れてきたけどね」
法衣のようなバリアジャケットに身を包む、最年少執務官。
民族衣装のようなバリアジャケットを羽織る、中性的な少年。
「クロノ……それに、ユーノ!?」
クロノ・ハラオウンと、ユーノ・スクライアだった。
「おまえら、どうして……」
おろおろと狼狽する秀人に、バイクから降りた二人は、つかつかと詰め寄ってきて……
「「一発殴らせろ、この馬鹿ッ!!」」
……力いっぱい、殴りつけたのだった。

# A’s編　第六十六話

……参った。
開始早々、私はちょっとだけ焦っていた。
目の前にいる高町そっくりの守護騎士……『殲滅者』。
兜や、甲冑の一部を捨て身軽になったと思ったら、マジで俊敏になってやんの。
「……らぁっ!!」『はァっ！』
私の黒炎の拳と、『殲滅者』の紅蓮の拳が交錯する。
――バンッ!!
クロスカウンター……の寸前で、死に手だった左手で、互いの拳を受け止める。
「く……！　魔法、パクりやがったな……!?」
『殲滅者』の紅蓮の拳。それは、私が放ったのと同じ……フランメ・シュラークだった。
が、『殲滅者』はすっとぼけた口調で返してきた。
『心外です。私の焼滅の力を、そんな副次作用の炎と同じに扱われるのは』
「大人しく、高町の魔法でも真似てりゃいいだろ！」
『わたしなりに、オリジナルとの差別化を図ってみました』
「図るな鬱陶しい！」
ギリギリと拮抗し合う。膂力が同格と察すると同時に、魔力スフィアを展開する。だが、『殲滅者』も同時に、スフィアを展開していた。
「ブラッディ……！」『パイロ……！』
さすが、高町をベースにしているだけある。二刀こそ使わないが、近接戦闘のセンスも、私に届く程だ。
こうなったら、とことん張り合ってやらぁ！
「ダガーッ!!」『シューター!!』
――ガガガガガガガッッッ!!
威力も、最大展開数も、ほぼ同じ。

あー、くっそ。今更だけど、さっさと封印解けないかなぁ。今のタイミングじゃ、威力の低いダガーしか使えない。ナイトメア（砲撃）があの速度で出せれば、競り勝っていたんだけど……

「って、いかんいかん！」

まぁた甘えが出てしまった。サポートを当てにするより先に、自分の力でなんとかしなきゃ。じゃないと、また道具に振り回されて、隙を作ってしまう。

基本スペックがほぼ互角なら……あとは、創意工夫で補えば良い。そう言った意味じゃ、こいつもまた、超えるべきハードルってとこか！

「だぁっ!!」

――バォンッ!!

焔の魔剣で、土煙ごとなぎ払う。

――ガキイインッ!!

槍の長い柄で受け流し、勢いを殺さず後退。

……マズい。離れられたら、槍の間合いだ。

さっきみたいにもう一度、縮地で！

魔力を収めて……！

『思い出しました』

いきなり、目の前に『殲滅者』のどアップが迫った。

『あなたの歩法……それは、この国の古武術のものですね』

「っ!!」

悟られた！

『確かに、初動を見破られないのは大変有利……ですが、その歩法を行う間際、魔力の気配が消える』

――ゴフッ!!

肋骨が纏めて砕けるような痛みを伴って、騎士服に炸裂する炎。

『魔力の気配が消えた瞬間を狙って、大体の位置を掴めば……』

『殲滅者』は、シュッ、と手を振って、魔力スフィアを生成して……

――この通りです。

一気に、発射した。

「……!!」
魔力を納めていたせいで、相殺は無理だ。焔の魔剣で打ち払い、切り払い、騎士服に注げるだけの魔力を注いで、体で受け止める。
「くぅ……っ！　痛いだろ、この野郎!!」
負けじと魔力弾で応戦する。だけどそれは、『殲滅者』に残らず回避され、防御され、相殺されてしまう。
槍を構え……先端に、大きめの魔力スフィアが展開される。
『ブラストファイアー』
――……ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ!!!!
炎を纏った、炎熱の砲撃！
「スレイプニルッ!!」
跳ね返せッ!!
ドンッ！　と、翼越しに衝撃と熱が伝わる。けど、問題ない。ギリギリだけど、跳ね返すか、逸らすかして……
『ディザスター・ヒート』
「……え？」
砲撃の衝撃が、二度、三度と重なり……気付いたら、吹っ飛ばされていた。
「……が、あああああッ……!!」
地面を何度もバウンドし、摩り下ろされてしまうような錯覚を感じた。
「……!!」
ぐわんぐわんと揺れる頭で、思考を維持する。
背中に少し違和感を感じると思ったら、翼が片方、もげていた。
「砲撃……三連射しやがったのか……！」
これでは、いくらスレイプニルでも耐え切れない。
「……くそっ！」
スレイプニルを放棄して、両手で焔の魔剣を構える。
高町だって、こんな大威力の魔法を連射なんてしなかった。オリジナルのデータに加え、守護騎士や、蒐集してきた魔導師の技術まで加算されている。

「……正攻法が、通じないなら……」
――……ずるっ。
……私の影が、魔力を帯びて蠢く。闇の書の力の一端……影。
あらゆる影を操作できた全盛期とは違い、『自分の影』に規模は限定されるけど……変幻自在の影の刃は、そう簡単には防げない。
『……』
『殲滅者』が槍を構え、突撃姿勢に入る。
（……そのまま突っ込んで来い）
フラフラになる……演技をして、誘い込む。焔の魔剣には、弱弱しい焔を灯して、疑似餌のように揺らす。
『参ります』
『殲滅者』は、ぐっと力を込めて……
――ドンッッ!!
アホ金髪のトップスピードにも匹敵する速度で、猛烈な突撃をかけてきた！
（かかりやがった!!）
速度から、到達時間を計算して……３６０。に、影の剣山を形成する！
『!!』
『殲滅者』は、慌てて両手をクロスし、衝撃に備えた。けど、そんな程度で……私の魔法が、防げるものか！
「ブッ刺されええええええええっ!!」
剣山を更に伸長させ、その体を、急所を外して刺し貫く！
――ザクザクザクザクザクザクッ!!
両腕、両足、脇腹……臓器がある箇所を避けて、串刺しになる。
「……勝負ありだ」
串刺しにされ……剣山に、覆いかぶさってグッタリしている『殲滅者』。死んではいないだろうが、動けない。
ふう……まったく、手間かけさせやがって。
魔剣を、鞘に収め……

『――――――ええ、勝負ありです』

――……バキィンッ!!

……手足を、拘束されていた。

「……え？」

私は、目の前にぶらさがる『殲滅者』を見て……その姿が、滲むように掻き消える。

「し、まった……！」

ぐるっ、と、さっきまでの場所へ、唯一自由になる目を向ける。今度は逆に、にじみ出るように、その姿が顕になる。

そこには、突撃する前から、一歩も動いていない、『殲滅者』の姿があった。

……当然、無傷で。

悔しさに、己の迂闊さ、浅はかさに歯噛みする。

「幻術……!!」

『ご明察』

ゆっくりと……余裕の足取りで、近づいてくる。

そして思い出したように、魔力スフィアを一つ、出現させる。

『その刃は、厄介です。幻術で無ければ、獲られていました。ですが……』

――――――バッ!!

閃光弾が、炸裂した。

『影が無ければ、発動できない』

コレで……もう、影は操れない。それどころか、バインドを掛けられ、手足さえ動かせない。

――ごりっ。

胸元に突きつけられた槍が、硬い感触を騎士服越しに伝えた。

『終わりです。……武装を解いて、降伏しなさい』

撃たれれば……多分、軽く死ねる。降伏すれば……。そこまで考えて、薄ら笑いが浮かんできた。

答えは、決まっている。

「――クソ喰らえ」

――――ズバァァァァァァァァンッ!!

超・至近距離……いや、ゼロ距離で、遠慮なしの一撃が決まった。

「……」

痛みは、感じない。ただ、篭もるような熱が、体中を嘗め尽くした。

ぼうっと空を仰ぎ、焔の魔剣を目の前に掲げる。

「……は」

刀身は半ばから融解し、カートリッジ機構は全損している。再構築は……多分、無理。ばらばらと、保持されなくなった弾丸が、掌に落ちる。

「……」

負けた。

魔法でも、剣技でも、戦術でも……完膚なきまでに、負けた。

『安心してください。命までは、取りません。……書の使用者の下へ、連行させては頂きますが』

勝者の『殲滅者』が、歩いてくる。

『ですが、あなたは誇るべきです。このわたしを相手に、ここまで粘るとは思いもよりませんでした』

腕が筋力を失い、地面に落ちる。焔の魔剣は、手を離れた。

『あなたの守護者……リーゼ。彼女もじきに、捕獲されるでしょう』

（リーゼ……）

私の師匠。その身を犠牲にしてまで、私を鍛え上げようとしてくれた、大事な眷族。

秀人を倒すことは、適わなかった。私は、負けてしまった。

私を見下ろす『殲滅者』の、青い瞳を見返す。

青い瞳。自然と、あいつを連想した。

（『鉄槌』……）

小さな守護騎士。あいつの敵を取るための力は、及ばなかった。

ここで回収されて……きっと、ロクなことにはならない。
けど……もう、仕方ないんだ。
だって、もう立てない。もう、拳を握ることも出来ないんだから。
（もう、いいや……）
諦めが、思考を緩やかに支配する。
『殲滅者』の手が、私の瞼を閉じようとしている。

――――……ドオオオオオオオオオオオオオオオオンッッ!!!
……上空を、桜色の光条が貫いた。
「たか、まち……？」
あいつ……戦っているのか。誰とだろう。『盾』か、『剣』か……それとも、他の誰かか。
「ハッ……」
よくやるわ。あいつだって、最初は『湖』にリンカーコアを抉り出されて、ボロボロだったくせに……
「……あ」
ぱきっ……と、諦め一色の思考に、亀裂が入った。
そうだ……そうだよ。あいつだって……高町だって、守護騎士に、私に負けたんだ。
リンカーコアを、力を奪われて……ただの無力なガキにされて。
――それでもあいつは、這い上がってきた。
古臭い、時代遅れの剣術を身に付けて。
少ない魔力を、一片の無駄も無く運用する技術を武器にして。
ベルカの騎士に、白兵戦を挑むようなリスクを背負ってまで。
――戦場に、舞い戻ってきた。
「く……！」
ウザいくらいに、つっかかってきて。しつこいくらいに、私に関わろうとしてきた。
「うう……！」
起きろ、起きろ、起きろ……！

笑ってんじゃねぇよ、膝！
曲がってんじゃねぇよ、足腰！
こんな姿、あいつに見せたら笑われる！
『なんと……まだ、』
「う、う……あああ……!!」
あいつなら……！　高町なのはなら！

――――こんな程度じゃ、絶対に諦めない！

「っあああああああああああああああああああああああああっっ!!!」
砲声を上げて、立ち上がる！
『……!!』
「っしゃあああああああああああっ！」
射程内にいた『殲滅者』を殴り飛ばす。
『立ち上がったことは、素直に賞賛しましょう……ですが、無駄な足掻きです』
じゃきっ、と、槍を私に向ける『殲滅者』。
『もう、魔力も体力も、限界でしょう』
確かに……魔法はもうロクに出せない。剣だってヘシ折れて、体力だって限界をとっくに突破している。
……それが、どうした。
無駄だろうと、みっともなかろうと……足掻ける限り、足掻いてやる！
「……無礼を、許せ」
『……何の話ですか』
あぁ、そうだ……こいつは、乗り越えるハードルなんかじゃない。今現在、目の前に立ちはだかる壁だ。
……ブチ破るべき、障害だ！
考えろ。この先なんて無い。次なんて無い。段階なんて無い。今、私がすべきことは……たとえここで果てようと、目の前の敵を倒

すことだ。
剣も、魔法も……どちらも尽きた無手。
拳を握り……
――ちゃりっ
……いや、無手じゃない。まだ、手はある！
「……はぁあああああ」
深く息を吐き、意識を集中する。
半身の姿勢で……左手を掲げ……右手を、腰溜めに。
『……いいでしょう。今度こそ、完膚なきまでに、叩き潰して差し上げます……！』
『殲滅者』は再び、槍を構える。あの突撃だ。
今度こそ、本当に来る。
――……ドンッ!!
（来た！）
『一か八かのカウンターなど、わたしには通用しません』
一か八か、なんかじゃない。
これは……この技は。
常識はずれの大馬鹿が、無い頭を振り絞った末に編み出した、一撃必殺……最強の、必殺技なんだ!!
「秀人……借りるよ!!」
――瞬間。全ての動きが、止まった。
灰色の世界。時間が止まった中、私だけが時間の流れに乗っているような……神速の、世界！
「おおおおおおおおっ!!」
槍の穂先。そして、発射されたばかりの砲撃魔法に……握りこんだ、魔力満タンのカートリッジを、叩きつける!!
――……！
音さえも置き去りに、炸裂する魔力。
第一波が、槍の穂先を減衰させる。
第二波は、『殲滅者』の砲撃魔法をも巻き添えに、『殲滅者』へと押し寄せる。

驚愕に目を見開いた『殲滅者』は、それでも防御を試みる。
……ここだ。
技のタイミングは……あいつから、嫌というほど学んでいる！
「はあああああああああああああああっ!!!」
残された最後の魔力を、拳に込める！
「――ハンマーシュラァァァァァァァァァァァァァクッッ!!!」

――世界に、色彩が戻る。
私の拳は……『殲滅者』の身体の中心線へと吸い込まれるようにヒットした。
殴り飛ばされ、即座に立ち上がる『殲滅者』。
けれども、すぐにその膝が、かくん、と抜け……

『――――――――――――見事、です』

どうっ……と、倒れ伏した。
「……」
ぜい、ぜい、と。自覚無く、必死な呼吸音が耳に届く。
「立って、る……私、」
頭が理解するまで、その状況を観察し……
「勝っ、た……」
認識した瞬間、私の意識もまた、ぷっつりと限界を迎えた。

# A’s編　第六十七話

「……ん」

体力の限界を突破し意識を失っていたはやてが、体に伝わる妙な慣性に違和感を覚え、目を覚ました。

寝起きにぼやける視界に映るのは、薄茶色の毛髪。白いうなじ。

「……あれ？」

意識が覚醒するに従って、記憶が思い出されてきた。

「……あれ!?」

『殲滅者』と勝負して、必死に足掻いて打倒して……

そして、今。

――なぜか、『殲滅者』に背負われていた。

「な、な、なんじゃこりゃあああああああああああ!!?」

当然、慌てた。暴れた。だが、戦闘で消耗した体は、思うように動作しなかった。

『ああ、お目覚めですか』

飄々とした態度で、えっさほいさとはやてを運ぶ『殲滅者』。

「ああ、お目覚めだとも！　だから下ろせ！　離せ！　こんちくしょー！」

耳元でぎゃーぎゃー喚くはやてに若干、辟易したような気配を無表情に漂わせる。

『傷に障ります。あまり、暴れませぬように……我が王』

「傷がなんだこの野郎！　いいから下ろせ……おい、今なんつった？」

危うく聞き逃してしまうところだったその単語を、確認する。

『……さぁ、何のことやら』

「ざけんなコラ今なんか言ったろ吐け！　吐け！」

すっとぼける『殲滅者』の首を、はやてが揺さぶる。
『……はぁ』
『殲滅者』は、諦めて……
『我が王、と申し上げました』
「……私、勝ったの？」
意識が朦朧としていたせいか、実感が乏しいようだ。
『ええ。……あなたの勝利です』
「……あ、うん、ええっと……」
……実戦での戦闘後に、こうしたやりとりをするのは、実はあまり経験が無かったりする。
「……とりあえず、下ろせ！」
同じような体格の……しかも、宿敵・高町なのはと同じ顔をした相手に背負われているのは、結構気恥ずかしい。
『ダメです。足腰が立たないのでしょう？』
「……い、いや、そんなことは」
『そうですか。では』
「へ？　……わぁっ!?」
いきなり『殲滅者』が手を抜き……はやては、『殲滅者』の背中を滑り落ちた。
「なにすんのよー!!」
踏ん張って、立ち上がろうとするが……立てない。やはり、気力は回復しても、体力や疲労ばかりは、そう易々と回復は出来なかったようだ。
「うがー!!」
『……世話が焼けますね』
怒り狂うはやてを、呆れた様子で再び担ぎ上げる。
「ちくしょー……何でお前は平気なんだよー……」
ようやく大人しく運ばれる気になった。
『……』
何も答えない『殲滅者』に首を傾げる。
「つーか、なんでわざわざあっちに……」

『殲滅者』は、フェイトやなのはが戦闘している区域に向かっていた。
わざわざ、戦闘中の区域に移動する意味とは。
『あの場所に留まり続けるのは、危険と判断しました』
「危険……？　ああ、雑魚騎士どもが増援に来るかもしれないって？」
が、『殲滅者』は頭を振った。
『それもありますが……私を遣わした、闇の書の読み手……彼奴が、あなたを狙っています』
「……！」
闇の書の、読み手……つまり、はやての所有物であるはずの闇の書を、無断で悪用する不届き者。
『戦闘中であれ……管理局の目のある場所であれば、そうそう手出しは出来ないはずですからね』
「……そいつ、誰」
今までは、その正体がつかめずにいたが……今、敵方から味方に引き込んだ『殲滅者』から、情報を聞き出せる。
（管理局の手前、おおっぴらに動けないとなると……）
はやては、粗暴で短気ではあるが、馬鹿ではない。むしろ、そういった策謀には長けている性格だ。
（次元犯罪者？　いや、それだとおかしい）
もし、今回の事件に関与していそうな犯罪者であれば、そういった情報が多少なりとも入ってくる筈だ。それが、容疑者すら上がっていない、となると……犯罪者ではない人間かつ、闇の書の情報を知り、活用方法まで辿り付ける知識の持ち主。
（……管理局内部の人間、か）
「……確認なんだけどさ、」
そう、言いかけた。
『……！』
ぎゅっ、と、『殲滅者』は、はやてを背負う手を、僅かに強張らせた。
はやては、その理由を即座に思い知る。
『ア、アアア……』『ウウウ……』
ふらふらと、しかし、統制の取れた動きで、雑魚騎士の集団が、『殲

滅者』の行く手を阻むように現れた。
「……チッ。マジかよこんな時に」
『王、しっかり掴まっていてください』
『殲滅者』は、はやてを背負い……駆け出した。
『アアアアアアア……！』
緩慢な動作で、手にした西洋剣を振り下ろす、または、突き出す雑魚騎士。
が、はやてを背負った『殲滅者』は、構わずにそのど真ん中を突破する。
――ビシュッ!!
防護服の肩が、剣に削り取られる。
応戦どころか、鎧袖一触、その名の通りに殲滅することさえも可能な『殲滅者』が、手傷を負ってまで敵陣を突破する理由は……
「おい、まさかお前……お前も、魔力空っぽ!?」
『……ええ、隠し立てするつもりは、無かったのですが』
飛ぶこともなく、自らの足で駆けていることが、その証拠。
腐っても守護騎士。そこいらのアスリート程度の身体能力は、素で備わっているのだろうが……人を背負った状態では、満足に体を動かすことも適わない。
「馬鹿！　私を下ろせ！　下ろして、どっかから応援呼んだ方が確実だろ！」
『従えません』
「何で……　、おい、なんだよそれ!!」
聞き返そうとしたはやては、見てしまった。
――『殲滅者』の体が、パズルのピースのように、崩れていくのを。
『殲滅者』は、ちらっとそれを目に入れ……構わず、走り続けた。
『私に与えられたのは、『八神はやてを捕獲せよ』という命令。それを実行するための、仮初の肉体情報。それに背く行動をすれば……使用者に、肉体を没収される』
「……！」

思い出す。自分が、『鉄槌』に名を聞こうとした時……不自然な挙動で、その身が掻き消えたことを。
（……使用者に？）
では、あれは何故だったのか。
『鉄槌』に名を聞こうとしたのは、主であるはやての意思だ。肉体を奪うことなど、望んでいない。『殲滅者』を使役していた人物が、まだ闇の書に手を伸ばすよりも前の時期に、望んでいないことが実行された。それは……
（闇の書には、主の命令よりも優先される意思が介在している）
……そう、思い至った。
「止めろ！　私を置いて行け！」
自分を捨て身軽になり、管理局に駆け込むことができれば……肉体の崩壊を、阻止できるかもしれない。だが……
『お断りします』
きっぱりと拒否した。
「ふざけてる場合じゃねェんだぞ！　このままじゃ、お前……!!」
魔力を注いで修復を試みるが、足りない。
『……応援を呼びに行くまでに、果ててしまうでしょうね』
冷静に、判断した。
『王、もっと体を小さく畳んでください』
――バシッ!!
はやての身を庇った『殲滅者』を、剣が掠め、その箇所が分解される。
「さっきから……何で、私を庇ってるんだよ！　私の体なんて、どうでもいい!!」
ぴく……と、『殲滅者』の気配が変わった。
『どうでも、いい……？』
明らかな……怒りの気配。
「ああ、そうだ！　腕の一本や二本、くれてやっても死ぬわけじゃ、」
『……怒りますよ』

それは、思わず言葉に詰まるほどの迫力だった。
『あなたは、私、守護騎士『殲滅者』が仕えると定めた王。あなたをお守りすることが、わたしの本望なのです。王を守れぬ騎士に、どれほどの存在意義がありますか』
――バキンッ!!
槍を振るい、剣を砕く。
『王。あなたを守ることを、許されないというのであれば……』
――バゴッ!
正拳突きで、胴体を打ち据える。
『殲滅者』は、消えかけた肉体で、懸命に駆ける。
『死んだほうがマシです』
「!!」
はやては、ショックを受けて黙り込んだ。
『……王』
気遣いなのか、若干優しい口調で。
『あなたの命は、決してあなただけのものではありません』
諭すように、言う。
『あなたが命を落とすようなことがあれば、悲しみ、涙を流す者がいるはずです』
「……わかったよ」
落ち着きを取り戻したはやてが、命令する。
「私を、管理局の元へ送り届けろ」
『……了解です、我が王』
『殲滅者』は、恭しく……そして、若干嬉しそうに、礼をした。
「それと……」
――ガスッ!!
目の前に現れた雑魚騎士の一体に、奪い取った西洋剣を突き立てる。
「下僕の後ろに隠れっ放しってのも、王の沽券に関わるからね。こっ

ちはこっちで、好きにやらせてもらうよ」
『……背中、お預けします』
「おう、任せとけ」
――走る。
ぱらぱらと散っていく、『殲滅者』の体。刻一刻と迫る、タイムリミット。
ほんの2キロの距離が、こんなにも遠い。
――走る。
『殲滅者』も、はやても、傷だらけだ。
ゼロにも等しい魔力で。底を尽きそうな体力で。
――走る。
雑魚騎士の合間をすり抜け、潜り抜け。
「あーあ、こんなにたくさん、殺すんじゃなかった……」
……今更、罪悪感など湧かないが……その所為で、こうして下僕が死に掛けている現状を見ると……やはり、自業自得だろうか。
『……全くです』
雑魚騎士の足元をスライディングして、潜り抜ける。
……ようやく、雑魚騎士の包囲網を抜けた時、ビルの合間から、見知った顔が戦闘しているのが見えてきた。
「よし、もうちょっと……うげっ！」
がくん、と。『殲滅者』の膝が抜け、地面に放り出された。
「あいててて、何やって、……!?」
はやては、言葉を失った。
はやてを背負い、懸命に駆けてきた『殲滅者』。その彼女が……
――膝から下を、失っていた。
いや、膝だけではない。
利き腕の左腕は、肘から。右手に至っては、肩から先が、完全に消失していた。
『……包囲は、抜けられたようですね。じきに、管理局の面々と合流できるでしょう』

倒れたまま、淡々と述べる『殲滅者』。
『命令は遂行しました。ここからは、あなた一人で……』
――パンッ!!
その頬を、はやてが張った。
「ふざっけんな、このバカ野郎！」
『……王？』
呆然とする『殲滅者』に、言葉を浴びせかける。
「死ぬなだの、命を粗末にするなだの、勝手なことばかり言ったくせに！　その言葉、そっくりそのまま返してやる!!」
――ぐいっ。
はやては、ガクガクと震える膝を叱咤し、何とか立ち上がる。そして……今度ははやてが、『殲滅者』を背負った。
『お、王……？　何を……』
「死なせない……こんな、ところで……！」
『……所詮は、かりそめの命です。死ぬのではなく、単に、データと魔力の塊に還元されるだけ』
一歩一歩、亀のような歩みで、進む。
「かりそめでも、偽者でも……！　お前は、お前だ。私の……大事な、手駒だろうが！」
背中に感じる重量が、徐々に減ってきている。
『……大事と、言ってくれますか』
「私は、もう嫌だぞ……！　失うのは……！」
その言葉を聞いた『殲滅者』は、はやての背に、もたれかかった。
まるで、体温を受け渡すように。
『我が王。　……願わくば、』
いよいよ、言葉が聞き取れなくなってきた。
その表情は、相変わらずの無表情だろうか。それとも。
『……一つ瞬く間でも、長く……あなたに、仕えていたかった』
――幸福そうに、笑っているのだろうか。
「ああ……私も、同じだ」

『よ　かっ　　た　　――――

はやては、膝を突いた。
重さが増したからではない。背負っていたものは、消えてしまったのだから。
「潰してやる……」
呪詛を、吐く。
「潰してやる……！」
顔も名も知らない、闇の書の読み手。
「私が、この手で、叩き潰してやる――――!!」
その殲滅を、誓った。

# A’s編　第六十八話

いきなり俺のバイクで守護騎士を跳ね飛ばして現れたクロノとユーノ。
「……状況は、理解した」
クロノは重々しく頷き、バイクを降りた。
「僕が指揮を執る」
作戦行動の経験は、俺よりクロノのほうが圧倒的に経験豊富だ。俺が戦闘の片手間に指示を飛ばすより、よっぽど効果的であることは間違いない。
「まず、僕と秀人で、彼女……カレン・フッケバインを拘束する。ユーノは、負傷者の治療と、防御結界を」
「了解！」
ユーノを、アーデの張った結界にまで運び、降ろす。
「はぁ、はぁ、……だれ……？」
アーデは、かなり消耗している様子で……オウルを、抱きかかえていた。治療魔法の光は弱く、今にも消えてしまいそうだ。
「秀人の仲間だよ。……替わろう」
ユーノ、そいつらは頼んだ。
「おっしゃ行くぞ！　振り落とされるなよ!?」「聞かれるまでも無い！」
後ろにクロノを乗せ、守護騎士のところまで一気に加速！
荒れた路面を駆け、跳ね上がる感覚。ノーヘルのまま駆け抜ける風の感触。そして……タンデムシートにかかる、人一人分の重量！
「ははっ……やっぱ、こうでないと始まんねぇよな!!」
戦場では定番の、クロノとのタッグだ！
「おらああああああああああああああっ!!」
ジャックナイフからの……後輪パンチ!!
――ガゴォッ!!
守護騎士は、その衝撃を腕二本で受け流し……残る二本、槍と鉄塊

で、反撃してきた。
「！」
――バチイイイイッ!!
だがそれは、青白い魔力刃と、バインドに阻まれる。
四本腕。守護騎士四人分。一対四では、分が悪いが……二対四なら、余裕で対処できる。
――ボンッ!!
カレンの足元を爆破し、体勢を崩す。……普段だったら、絶対に引っかからない。
やっぱり、このまま戦闘に参加させておくのは危険だ。
「クロノ、今だ!!」「ああ！」
――ギャリリリリリリリッ!!!!
チェーンバインドが、幾重にもカレンの体を拘束する。
「うあああああああああああっ!!」
それを馬鹿力で引きちぎるカレン。が……
――バチィンッ!!
「!?」
チェーンバインドの破壊をトリガーにして発生させられたリングバインドが。
――ガキンッ!!
リングバインドの破壊をトリガーにしたホールディングネットが。雁字搦めに、カレンの動きを制限する。
「うあああああああああああ!! 畜生、馬鹿にすんなあああああああああ!!!!」
とうとう、癇癪を起こしてしまった。
「……お前、あれ何重に掛けた？」
あそこまでねちっこい拘束、初めて見た。
「２６だ。事前に自動発動をセットしておいたから、さほど魔力も喰わん」
事前に……？
「おいちょっと待て。じゃあアレ、ほんとは誰に使うつもりだったん

だ!?」
「……もしもの備えだ」
俺かよ!?
『グゥウオオオオオオオオオオオオオオッ!!』
守護騎士が、手にした鉄塊を投擲した！
「!!」
――ギャギャギャッ……!!
フルブレーキを掛け、回避。
「武器を、捨てた……？」
クロノが訝しがる。俺も、それが不可解だった。必殺の一撃でもあるまいに……わざわざ、得物を使い捨てることなんて……
「……しまった！」
そうだ……あそこには、オウルが乱射しまくった武器が散らばっている！
「待ちやがれっ!!　……クロノ、撃ち落とせ!!」
――ガガガガガガッ!!
疾走する守護騎士を背後から追い立てる。
『グ、ガ……！　ガアアアアアアアアアアアアッ!!』
だが、追走虚しく……野獣のような雄叫びを上げ、守護騎士が、新たな得物を手にした。
「転回！」「了解！」
今度は逆に、俺たちが追い立てられる番だった。
守護騎士は、手頃なサイズの鉄塊を次々に投擲してきた。
「アイツをあの陣から引き離さないことには始まらんぞ!!」「ああ、このままじゃ俺たち、ダーツの的だ！」
――ドゴオオオンッ!!
「ぐわー!!」
いきなり後輪を掬われ、派手に滑った。
「チィッ……！　秀人、アレは使えないのか!?」
アレって……リンカーコア結合？
いや、できるならとっくに使ってるって！

「何でか分からんけど、使えねーんだよ！」
蒼炎も出せないし……いや、なんつーか、使い方を思い出せないっつーか……
「そういえば、レジアス少将が……」
なにやら、考え込むクロノ。そして、何を思ったか……
――ガンッ、ゴンッ、ガンッ!!
「ぎゃ、あだっ、ぎゃー!!」
三回、Ｓ２Ｕで俺の後頭部を殴打しやがった!!
「何すんじゃボケェ!!」
「君の体内に残っている、忘却剤の毒素を除去する！」
レジアスのオッサンめ！　いらんこと教えてんじゃねぇ!!
「……なるほど、この程度ではダメージにならないか。いっそ、エクスキューションシフトを口の中にブチ込むか……？」
頼むから手段と目的を摩り替えないでくれ！
「……ふむ。逆転の発想もありだな」
――ビキィイイイイイイインッ!!
俺の両手が、バインドで拘束され、抗議するより先にクロノがハンドルを握り……何を思ったか、守護騎士の陣に向かって、逆走を始めた！
『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』
咆哮を上げ……鉄塊を投擲する守護騎士。
「おいクロノ！　冗談は止せ!!　おい!!　おいいいいいいいいいいいいいいっ!!」
「攻撃を喰らいたくない？　逆に考えるんだ。
――喰らっちゃってもいいさ、と考えるんだ！」
鉄塊が、ぐんぐん近づいてくる！
「いけっ……『秀人バリヤー』！」
クロノは俺を、射線上に放り投げた！
「ぎゃあああああああああああーーーー……!!!!!!!!」
――めきょっ。
……俺は、木の葉のように舞った。

◆　◆　◆　◆

「……普通に死ぬわああああああああああああああああああっ!!」

キレて立ち上がる秀人。

だが、そのダメージから回復するために、秀人の体は治癒し……副産物として、僅かに沈殿していた毒素を、完全に消し去った。

なにはともあれ……

「ふんっ!!」

――バシュッ!!

魔力のラインが、秀人からクロノに伸びる。

「成功したようだな」

「おかげさまで!!」

リンカーコアの接続も、問題なく成功した。

「クソッ……もう一生、煙草なんて吸わねーぞ……!」

飛来した鉄塊を、バイクで回避する。

「あの陣の鉄塊を破壊する!」

「おう!」

秀人の、命中精度イマイチだが、威力はなのな並の砲撃。それを、クロノが補正し、コントロールすれば……

『オオオオオッ!!』

また、１０ｍ級の鉄塊が投擲される。

――ギュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!

「ディバインバスター……!!」

巨大な魔力スフィアが、秀人とクロノの前に生成される。

その制御を、クロノが行い……

「……エクスキューションシフトッ!!!」

――ズバババババババババババッ!!

幾重にも枝分かれし、敵陣に降り注ぐ！

『グ、オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!?』

守護騎士は、懸命に迎撃を試みた。

だが……腕が四本になり、多彩な技能を振るう守護騎士とはいえ……そのベースは、ベルカの騎士。その本質は、『近接・対人』。
自ら距離を開いてしまったことで……『遠距離・広範囲』を得意とするミッドチルダの魔法に、対抗する手段などそう多くは持ちえていなかった。
――バゴオオオオオオオンッ!!!
オウルが突き立てていった鉄塊の山は、粉々のスクラップとなり……得物になり得そうなサイズのものは、何一つ残らなかった。
『グ、グ……!!』
守護騎士は、怒りに震えるような声を漏らし……大剣と槍を、再び装備した。
秀人は手に魔力刃を展開する。
「はぁっ!!」
魔力刃を飛ばし、斬撃！
――バシィッ!!
が、そこは守護騎士もさるもの。斬撃を完全に相殺し、槍の穂先から、鋭い射撃を撃ち、反撃してみせた。
――バキンッ!!
「くっ……！」
ハンドルを握るクロノが、顔をしかめる。先ほどの射撃で、フロントホイールを撃ち抜かれてしまったらしい。タイヤどころか、ホイールの一端が砕け散っていた。
「降りるぞ！」
雪崩式にホイールは砕け散り……ガリガリと、鼻先から地面に叩きつけられていく。
スレイプニルを使用することも考えたが……あの暴力的なまでの性能を、完全に御し切れているとは断言できない。
あの時は、未熟な主が相手だったから不意を突けたが……この守護騎士相手には、通用しないだろう。せいぜい、すれ違いざまに切り伏せられて終わりだ。
そうとなれば……正攻法しかない。

「だぁあああああああああああああっ!!」
クロノの援護射撃をかいくぐりながら、守護騎士へ挑みかかっていく！

（……）
守護騎士と戦闘する秀人を、じっと見つめる目があった。
（……秀人、お前は……）
オウルだ。
腹部に致命的な大穴を開けられて……今は、ユーノの治療を受けている。
生命に関わるほどの怪我を負いながらも、オウルは、それに慌てるでもなく、秀人の戦いを観察していた。
（カレンを、止めたのか……？）
カレンの暴走癖は、オウルたちも重々承知していた。
これまでは、いつもオウルが止めに入っていたのだが、今回はそのオウルが一番に倒れてしまった。アーデルハイドは言うに及ばず。ラーファ、クライアは……本人たちが聞けば激怒するだろうが、とても暴走するカレンを止められる技量は持ち合わせていない。
それだけ、カレンの戦闘能力は……異端者の集まりである凶鳥部隊の中であっても、異質なまでに高いのだ。
だが、その分その強さは諸刃の剣で……暴走すると、とたんに判断能力を忘れ、猪突猛進な特攻戦法に走ってしまう。
（……だが、あれでは）
あの乱入してきた執務官が施した拘束。確かに厄介だが、いつまでもカレンを拘束してはおけないだろう。
――ごそっ。
と、オウルは、袂の下で、一振りの懐刀……刃渡り15センチほどの、小ぶりな刃物を握る。
（……ダメだ。まだ、使えない……）
――オウルの、切り札。そして、呪いの具現。

コレを使用するにはまず……自身の体が、満足に動かせることが必要だ。今、使おうとすれば……制御することができず、何も出来ずに死ぬことになるだろう。
（……見られたく、無いなぁ……）
使用した姿を知っているのは……アーデルハイドだけだ。双子にも、カレンにも、見せたことは無い。……オウル自身が、見せたくないと思っているからだ。
（そうも言ってられないか……）
オウルは、ユーノの回復魔法の光に、再び身をゆだねた。

「うおおおおおっ！」
『ガアアアアアッ！』
秀人と守護騎士の拳が、火花を散らす。
他の得物を握る二本の腕は、クロノが拘束し、動きを鈍らせていた。
……クロノの援護により、『腕が四本』というアドバンテージは封じられ……ほんの僅かだが、秀人が押してきている。
もちろん、守護騎士が弱いわけではない。
一撃一撃は、確かに秀人に届いているし、際どいところを突いている。
――バキンッ!!
また一撃、守護騎士の槍が秀人の防御を砕く。
「、だあああああっ!!」
――ゴキンッ！
『ガフッ……！』
カウンターが、兜の頬当てを凹ませる。
――バチンッ!!
クロノの魔力刃が、守護騎士の腕を一本、切りつけた。
『グガァッ!!』
腱を斬られたのか……だらりと垂れ下がる。
『グ、グ……』

だが、不思議なことに……守護騎士は、不思議な高揚を感じていた。
それが例え、束縛され、使役され、その身を異形に歪められているとしても……こうして、強敵と矛を交えられるのは、騎士としての誉れだ
例え、ここで倒れようとも……悔いは無かった。
願わくば、ひと時でも長く、この強敵たちとの腕比べを……

――そう、願っていた筈だった。

『何をしている』
……守護騎士の脳裏にのみ、響く声があった。
聞き間違えようの無い、闇の書の読み手だ。
『何のために、わざわざ調整を加えてまで、貴様を使役したと思っている。アレを使え』
（イヤダ……ワタシハ……！）
誇りだけは汚すまいと、拒否する守護騎士。
だが、読み手はそんな事情など考慮はしない。
『……守護騎士システム、自動制御から、能動制御に切り替え』
（ヤ、ヤメロ……!!）
バツンッ……と、守護騎士は、体の自由を失った。
「なんだ？」
「……魔力の流れが、変わった？」
様子を伺う秀人とクロノ。
そして……
『イ、ヤ、ダ……』
「!!」
はっきりと、発声した。
『ワタシハ……ホコリタカキ、ベルカノ……ベルカ、ノ、キシ……オ、オオオオオオオオオオオオ……!!』
「おい……どうした!?」
秀人など、状況も忘れて声を掛けてしまう。
頭を抱え、フェイスガードを掻き毟り……苦悶に歪む声で、絶

叫した。

『テラー・フィールドオオオ

# A’s編　第六十九話

『テラー・フィールド』。
その、トリガーボイスと思しき発声と共に、染み出した波動。
効果は、まだ不明だ。
それは、飛びのく寸前のクロノの足元に、僅かに触れた。
――途端。
「う、うあああああああ

――ゴウッ!!
蒼炎を、放った。
「と、父さ、……」
いくら蒼炎が焼くのが魔法効果のみ、とはいえ、体内で大火力を発生させれば、クロノの命に関わる。
波動がクロノの精神を破壊するより早く、しかし、蒼炎がクロノの精神を焼いてしまわぬよう、細心の注意を払い……
「僕、は……」
クロノが、正気に戻った。
「！　……そうだ、あの波動……！」
立ち上がろうとして、ふらつく。
「おい、無理すんな」
それを、秀人が支えた。
「あの波動……精神攻撃のついでに、魔力と体力、ガッツリ削っていきやがった」
「すまん……！　僕としたことが……」
「秀人！　あっち！」
結界から、ユーノの声が飛ぶ。
「!!」
視線を向けるのと同時……秀人は、クロノをユーノの元に放り投げ、走り出した。
染み出した波動が……ゆっくりと、着実に……カレンの下に、進行していた。
クロノが、あれだけ錯乱したのだ。
オウルを以ってして、忘れさせ、封印するしかないと判断した、カレンの過去……それが、掘り返されるようなことがあったら。
「カレンッ!!」
――ゴオオオオオッ!!!
今度は、遠慮なしに蒼炎をぶっ放した。
蒼炎は、波動を端から焼き払う。
「カレン！　無事か!!」

「……」
カレンは、暴走の影響でスタミナを使い切ったのか、反応が鈍かった。
そして秀人は……己の、過失に気付く。
「!!」
一度は焼き払った筈の波動が、ぐるりと、円を描くように、秀人を包囲していたのだ。さながら、浮島の如く、15メートルの波動の波間に取り残されてしまった。魔法が無効化されてしまうこの波動。身体能力だけで、飛び越えていくには無理がある。
……不幸中の幸いとでも言うべきか。
この波動を出している間、守護騎士は満足に動けないらしい。あとは、この波動が届かない遠くまで退避するだけ。虚数空間に比べれば、百倍はマシだ。とはいえ、カレンはまだ、自力で歩けそうに無い。
「あ、こうすりゃいいじゃん」
パッ、と。
解決策は、すぐに……自分を勘定に入れないことで、提示された。
――ボウッ……!!
背負うカレンに、最大限の蒼炎を蓑のように纏わせ……自分は、脚部を申し訳程度に覆った。
「うはー……なんか、あったかーい……」
朦朧としたカレン
一滴とて、カレンにこの波動を触れさせるわけにはいかない。そのため、カレンの体を満遍なく包み、途切れないよう、常に魔力を注ぎ続けていた。
「……」
ごくりと、思わずのどを鳴らしてしまう。だが、悩んでいるこの間にも、刻々と波動が迫ってきているというのなら……
「……ええい!」
ズボッ……と、波動に足を突っ込んだ。
途端。

――痛い痛い苦しい哀しい悔しい痛い痛い痛い痛い

必死に正気を保ち、また一歩。
――バシャッ。
「やめろ……やめろ……!!」
恐怖。
――何度言えばわかるのよ!! あなたなんて、あなたなんて……!!
「嫌だ……こんなの、見たくない……!!」
秀人の心の根底にある、最悪の場面が……呼び起こされる。

――――――

『キュイィイイイイイイイイイッッ！』

展開していた蒼炎は、不死鳥を象り……秀人の襟首を掴み、寸でのところで落下を食い止めていた。

「な、なにこれ!?　トリ!?」

自分を包んでいた蒼炎の変化に驚きながらも、現状を知る。

『ピイイイッ!!』

ちょい、ちょい……と、僅かに自由になるクチバシで、カレンのポケットを指差す。

「……そうか！」

察しのいいカレンは、すぐさま行動に移った。

「ヒデ、くん……!!　これ……!!」

カレンは、懐からソレを取り出し……秀人の口に、入れた。

「……!!!!　げほっ!!」

気管支に蔓延する、いがらっぽい煙の匂い。

だがそれは、気付け薬のように、秀人を眠気から引きずり戻した。

「げふっ!!　……うあ、？」

「吸って!!」

秀人は、反射的にその声に従った。

「すーーーーーー……はーーーーーー……わ、るい……助、かった……」

青ざめた顔で、感謝を告げた。

この波動が、無理やり記憶を思い出させようとするなら……片っ端から忘れて、相殺してしまえばいい。

――忘却剤。

かつて、秀人を篭絡ししようとしたアイテムが、機転となった。

一歩、また一歩……煙草を消費しながら、進む。

「ふー……ふー……!!」

異常な勢いで燃え尽きていく、忘却剤の煙草。

「このままじゃ、足りない……！　どうしよう……！」

涙目で、おろおろと狼狽するカレン。

「私、大丈夫だから、降りるからぁ……!!」
――一歩。二歩。
「心配、すんな……!!」
掠れた声で、言う。
蒼炎で、迫る波動を焼き払い。不死鳥の羽ばたきで、吹き散らし。
……カレンには、一滴も触れさせず。
――三歩。四歩。五歩。
進む。進む。
……残り、三歩。
既に陸地は、目の前だ。
「あァ……!!」
脚部の保護は、既に無い。波動に膝まで浸かり、苦しげな呻きを上げながら……それでも、歩く。
――ザパァァァァァァッ……!!
逃がさぬ、と。波動が津波となり、秀人たちを飲み込もうとしてきた。
『……キュエッ!!』
促すように、不死鳥が一声、鳴く。
「……頼む!!」
秀人の願いに、不死鳥は答えた。
『……ギュエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ!!!!』
不死鳥が、全身を激しく燃焼させながら、その津波へ突貫！
――……ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!!
爆裂し、波動を退け……その爆風を以って、秀人への最後の援護とする。
「お前は、」
……跳べ、と。
「お前は、俺が……!」
秀人は、全身の力を足に込め、全く洗練されず、みっともなく、無様に……！

「俺が、守ってやる!!」

……大きく、跳躍した!!

――ドシャッ!

「……ぐっ!!」

着地の衝撃に、顔をゆがめる。。

（ユー、ノ……カレンを……）

もはや、脊髄反射のみで、カレンをユーノの元へ運ぶ。

だが、肉体も、精神も、魔力も……何もかも、文字通りの全てを使い果たした秀人は、立っていることさえも奇跡であり……とうとう、ガクン、と膝が砕ける。

――……とん。

だが、倒れた秀人を出迎えたのは、硬く冷たい、戦場の大地ではなく……

「……見せてもらったぞ、お前の覚悟を」

オウルの、懐だった。

◆▪◆　◆　◆

闇の波動。

担ぎ込まれてきたちっさい子供……クロノの容態を見るに、恐らくは精神攻撃の類だろうと、勘付いていた。

それは、大変にまずかった。

思わず、オウルでさえも顔を背けてしまうような……地獄そのものの、カレンの過去。

常に忘却剤で記憶を封印し続けているとはいっても、あの波動に晒されてしまっては、無意味になってしまう。

身内を、守れない。それは、この凶鳥部隊の存在意義の消失だ。

（お前は、それを防いでくれるのか）

吾妻秀人。

一時預かりで……自分たちの身内に、引きずり込む画策をして、失敗して……

――『お前は、家族にはならないのだな』
……絶縁を、告げて。
『お前には、カレンをその命に代えて、守り抜く覚悟があるのか？』
その問いに秀人は、あの時何も答えられなかった。
だが……
『俺が、守ってやる!!』
秀人は、その命に代えて……カレンを、過去からの魔手より守った。
感謝と……畏敬を込めて、秀人の身体を抱きとめる。
「オウル……？」
その彼に、オウルは……ここ久しく作ったことも無いような、柔らかな微笑を向けた。
「見せてもらったぞ……お前の覚悟を」

――彼は、紛うこと無く、カレンと生涯を共にするに値する……凶鳥部隊の一員だ。
『グ、ウウウ……!!』
動かずにいた守護騎士に、異変。
――ズズズズ……！
彼の元へ、展開されていたテラー・フィールドが収束していく。
それによって守護騎士は、全身が隈なく強化され、より禍々しく変化を遂げる。
『……』
もはや、悲哀の声さえ聞こえない。
その姿は、例え敵であっても……哀れに思えた。
倒さねばならない。現状、動けるのは回復を終えたオウルのみ。
秀人を横たえる。
不意を突かれたとはいえ、一度は自分を倒した守護騎士。
だが秀人は直感的に……戦いの終わりを、感じていた。
「お前の覚悟に……報いよう」

――シュキンッ……
オウルは懐から、小さな懐刀を取り出す。
小さく簡素で、造形美もへったくれもない、文字通りの『刃』。唯一の特徴といえば、刃の側面に刻まれた……『６６６』という数字だけ。
オウルはそれを……己の胸元に、向けた。
そして、肉体へ突き刺す寸前に手を止め、秀人たちのほうを振り向き……

「……怖がったりしたら、泣いちゃうぞ」

泣き笑いながら、突き刺した。
「う……！」
どくん、と、無機物であるはずの刃が、胎動する。
そして……

「……ぅうウゥおおおおオオオ

面影は、半分以上が隠れた顔立ちと、ボサボサのの茶髪のみ。
見た目は……あらゆる物語に登場する、悪の象徴……
『鬼』、だった。
その顔で、秀人のほうを見る。
「ひでト……ウチが、コわいか……？」
恐れるように。怯えるように。……救いを、求めるように、聞く。
一切のごまかしようも無い、変化。その異形を目の当たりにした秀人は……
「……かっこいいじゃん」
にやっ、と、不敵に笑った。
「フッ……ダろう？」
笑みで返したオウルは、守護騎士に向き直る。
「……そウいえバ、名乗ッテいなカったな、騎士」
……ぴくん、と、守護騎士が反応した。
『……ワタシヲ、マダ……キシ、トヨンデクレルカ』
その言葉には……悲哀と、感謝があった。
「オまえは、あのふぃールドをテンかいしている最中、動こうト思えばウゴけたはずダ」
『……』
沈黙は、肯定。
彼は、主に使役されながらも、必死に、己の誇りを貫こうとしていたのだろう。
その姿は、見紛いようも無いほど、騎士だった。
『……ユクゾ』
――目の前にいるのは、正真正銘の『化け物』だ。
腕の数とか、形状とか……そんな低次元の枠を遥かに飛び越えた、常識外れの、怪物。敗北は必至。無意識に心臓を鼓動させるかの如く、容易く、瞬時に、オウルは守護騎士を葬るだろう。
だが、オウルは……守護騎士の誇りを、尊んだ。
「時空管理局・特殊案件処理専門・独自権限保有『凶鳥部隊』部隊長

……
オウル・『エクリプス』。
推して参る」
……決して名乗ることの無かった己の性を、告げた。
『シテンノショマモリシ、シュゴノツルギガヒトフリ……ワガナハ……』
――我が名は、『シグナム』!!
……参る!!!!』
守護騎士の構えは、6本すべての手で大剣を握り締めた、大上段。
『……ハアアアアアアアアアアッ!!!』
――ダンッ!!
僅か一歩で、オウルとの距離をゼロにまで縮め……
――……ヴァオンッ!!!
超高速・超重量・超威力で、振り下ろす!!
「!! オウルッ!!」
想像を超えた斬撃に、秀人が思わずオウルを案じてしまう。
――バキャアアア……ッッ!!
……大剣が……それを保持する六本の腕が……付け根にあったボディが……砕け散った。
「……」
守護騎士の後に、右腕を振りぬいた体勢の、オウルが佇んでいた。
……まさに、瞬殺だった。
◆▪◆ ◆ ◆
「……すげぇな」
秀人は、感嘆の呟きを漏らした。
オウルは、しばし佇み……
「……うっ!」
胸を押さえ、膝を折った。
それを、脇から秀人が支える。
「大丈夫か……?」

やはり……と、秀人はどこか納得した表情だった。
あれだけの力を発揮することに、何の代償も無いはずが無い。そして、代償とは恐らく……
「オウル、その右目……」
――オウルの右目は、瞳孔を開き……光を、失っていた。
「あはは、バーレちまったか」
……五感の喪失。味覚・嗅覚が無い、ということは、以前にも聞いていた。
きっとそれも、先ほどの変身を行ったからなのだろう。
「ま、かたっぽ残ってるし、よしとするか」
そして……二人は、守護騎士と対峙した。
『わたしの、負けだ』
兜までも砕けた、精悍な顔立ちの青年が、見上げてきた。
「待ってろよ、すぐ……」
『いや、無用だ』
秀人が蒼炎を発動しようとするのを、制した。
何故……という疑問に、目の前の光景が答えてくれた。
「お前……身体が、」
――守護騎士の身体は、パズルが分解されるように、崩れ始めていた。
『わたしは、消える。元々、改変されたイレギュラーな騎士だからな。自己修復プログラムなど上等な物、初めから組み込まれていない。……バックアップも無いし、データの断片に戻るだけだろうよ』
だがその顔は、どこか晴れ晴れとしていた。
『お前たちには、感謝している。私は、最後の最後に……騎士として、誉ある戦いをすることができた』
「……どうにも、ならないのか？」
まだ、生存への道を模索する秀人に、守護騎士が告げる。
『断片データをかき集め、よしんば再構築されたとしても、見た目や性別が、違っているやもしれん。記憶も、大部分は継承されないだろう』
どうあっても、それは無理らしかった。

悔しそうに拳を握る秀人。
『だが……生まれ変わろうとも、私は、私。守護騎士が一体、烈火の将シグナムだ』
秀人は、砕け、中途から喪失した守護騎士の腕を取る。
「……お前の四刀流、凄かったぞ。今度また、サシでやろうぜ」
『ああ。土を味わうことを、覚悟しておけ』
オウルは、ガシガシと茶髪を掻き毟る。
……最近、秀人は知ったが、これは彼女の照れ隠しだ。
「お前のようなキワモノ、ウチら以外に受け入れてくれる奴なんかいないだろう。……いつでも訪ねてくるがいい」
『ああ。……ヒヨッ子どもを、鍛え抜いてやろう』
各々……別れと、約束を済ます。
とうとう、彼の身体は宙に散っていき……
『……オウル、秀人。　いつか　、会える　を、楽　みに　―

―

……風と共に、消えた。
「……帰ろうぜ」
「……うむ」
……こうして、秀人の凶鳥部隊での最後の任務は、幕を閉じた。
◆▪◆　◆　◆
あれから、一日あまり。
疲労の度合いを鑑みて、秀人たち（クロノ・ユーノを含む）はまだ、凶鳥部隊の隊舎にいた。
「秀人」
クロノが、秀人の部屋にやってきた。
……なぜか、あちらこちらに生傷がある。その視線に気付いたのか、クロノは目を逸らした。
「……アーデルハイドに、追われていて……頭髪を、頭蓋ごと寄越せと……」
「……ドンマイ」
クロノも、目をつけられてしまったらしい。

「で、本題は？」
クロノは、気まずそうに……告げた。
「……闇の書の主が、特定されたよ」
ベッドから飛び降りる。
「……!! 本当か！」
「……ああ」
が、クロノに喜んだ様子は無い。
「……クロノ？」
「……もう、戻ってもいい頃だろう。戻ったら……艦長から、説明を受けてもらう」
「……？」
今ここで直接言わない、その回りくどさが気になったが……秀人は、頷いた。
「あと一時間ほどで、出発しよう。それまでに、準備を済ませておくといい」
そして、クロノは退室していった。
準備……と言われ、艦内をぶらついていたところ、食堂から騒がしい声が聞こえてきた。
「ねーねー、ししょー!!」「ししょー……」
「師匠じゃないってば……あ、秀人」
ユーノだった。
なぜか双子に絡まれ、困っていた。
「あ、お兄ちゃん……」「……」
双子は、秀人の顔を見るや、ぱっと離れていってしまう。
ここを出て行く……ということを、察しているらしかった。
ぱたぱたぱた……と、食堂から出て行く。
「……秀人」
「……何、話してたんだ？」
ユーノに、話を振る。
「うーん……大したことはしてないけど……二つ三つ、治癒魔法を教えてあげたら、『師匠』って呼ばれるようになっちゃって」

「ああ……あの二人、オウルの怪我に、何も出来なかったのが相当悔しかったらしい」
銃撃一辺倒だったのが、変わるものだ。
「そろそろ行こうって、クロノが……」
と、出て行ったはずの双子が、何かを抱えて戻ってきた。木箱だ。
「「お兄ちゃん、はいっ！」」
その木箱を、秀人に押し付ける。
「……俺に？」
それを、かぱっと開ける。その中身は……
「……拳銃？」
ハンドガン……というにはやや大きな、銃身の長い、変わった形状の銃だった。
「ラーファたちが作ったの！　ワンオフだよ！」「……クライアたちが考案した、『銃』という武装の理想形……」
更に木箱には、もう一つ……黒い革製の、ホルスターも入っていた。
腰に巻き、銃を収める。
「ぴったりだ！」「似合ってるよ……」
「……ありがとうな。大事にするよ」
そこで、秀人は気付いた。
ホルスターには、用途がよくわからない、穴のようなものが外付けされている。
「きっと、何かの役に立つよ！」「うん……絶対に」
「「またね、お兄ちゃん」」
ラーファは、不自然なまでに明るく。クライアは、無意識な涙を流し。
秀人を、手を振って見送った。
「あら、秀人……」
「ゲッ……！」
アーデルハイドと、角でばったりと鉢合わせた。
「む。失礼ね……アーデだって、人並みに傷つくのよ？」
「悪い悪……いィッ!?」

――シュカンッ!!
空振りしたメスが、壁を切り裂いた。
「ちっ……はずしたわぁ……」
「最後までそれか!!」
突っ込んだ。
「ま、それはさておき」
メスをポケットに仕舞い……深々と、頭を下げた。
「オウルを怖がらないでくれて、ありがとう」
……突然のことに、秀人は反応に困ってしまった。
「オウルは、あの姿をとても嫌っていて……本当なら、使いたくなんて無い筈だから……」
更に言えば、五感をランダムに喪失してしまうリスクもある。
「……でも、オウルの失った五感は、アーデがかならず回復させてみせる」
「……はぁ」
秀人は、仕方ない、とばかりにため息をつく。
「貸せ」
そのポケットから、メスとシャーレを取り出す。
そして……
「……っ!」
腕の肉を削ぎ、シャーレに入れる。
「ほれ。……多分、何かの役に立つだろ」
秀人の体。その回復力の謎さえ解明できれば、きっとオウルの治療に役立つはずだ。
アーデルハイドは、それを大事に受け取った。
「頼んだぞ。主治医」
「ええ。オウルはアーデの、大事な大事な……お友達ですもの」
「……行くのか」
壁にもたれるように、オウルがいた。

「ああ。世話になったな」
「……少し、いいか」
そしてオウルは、厳しい表情となり……言った。
「あの波動には気をつけろ」
……今後、あれと同質の攻撃を使う敵が出てきても、おかしくは無い。
「……煙草、カートンで貰って行っていいか？」
今回は、忘却剤で凌いだが……
「……もう、抗体が出来てしまっている。二度は通じない手だ」
オウルは、ぎゅうっと、組んだ腕に力を込めた。
「あの波動を浴びたら、今度こそお前は……」
言いよどむオウル。
「ま、何とかなるだろ」
軽く言い、カラカラと笑った。
「俺、そういう身体だし」
……誰が何をいくら言っても。泣くほど案じても。
「……」
秀人のそういうところだけは、揺らがなかった。
「……この二週間、ご苦労だった。あの黒チビの元に戻ってからも、達者でいろ」
……その瞳の奥に、一体どれほどの闇を抱えているのか。
「迷ったら、また来るが良い。お前は、凶鳥部隊の一員なんだからな」
……せめて、彼の『逃げ場』となれるように。オウルは、そんな言葉を贈った。
「ああ、オウルも元気でな」
「さて……戻るとするか」
転送装置の前に、秀人たち三人が集まる。
だが秀人は、誰かを探すように、きょろきょろと辺りを見回していた。
「……カレン、いないのか」

最後に、挨拶くらいはしておきたかったのだが、どこにも見当たらなかった。
ブラックバードを置いてあるガレージにも、部屋にも、リビングにも……
「……嫌われちゃったか」
がっくりと、肩を落とした。
濃密すぎる二週間。常に傍らにいたカレン。忘却剤を盛られたり、散々な目に遭わされもしたが、彼女は間違いなく、秀人にとって大事な友人だった。
「時間だ」
――ビュイイイイ……
転送装置が起動する。
秀人たちの身体が、光に包まれ……
――……ビュンッ!!
突然、細長い物体が投げつけられた。
「……っとォ!?」
ギリギリ受け止める秀人。
その物体とは……黒い鞘に収まった、刀だった。
「……! カレン!」
光に包まれ、薄れていく視界の中……廊下の曲がり角から、こちらへ向かってヒラヒラと振られる手を見た。
「……またな! ここでの生活、結構楽しかったぞ!」
言い終わるのと同時……視界が、光に埋め尽くされた。

「……行ったな」
「……ちぇっ」
ぶすー……っと、ふくれっ面のカレンのもとに、コーヒーを片手にオウルがやってきた。
「ヒデくんの一番は、私じゃないのかよ……」
いじける、という姿を、初めて見た。
ぽんぽん、とその背を叩く。

「あいつにとっては、誰もが『一番』なんだよ」
そして、遠くを眺め……
「……『自分以外』は……な」
僅かに垣間見た、彼の瞳の奥を想起した。
「……はぁ～……」
「どうした？」
「いや、たいしたことじゃないんだけど」
やはり、意地を張ったことを後悔しているのか……と、オウルは思ったのだが……
「ヒデくんの子供、産みたかったなぁ……」
――ぶふぉっ!!
……オウルが、派手にコーヒーを噴き出した。

# A’s編　第七十話

「うりゃあああああああっ!!」
――ゴンッ!!
鉄槌が、仮面の男の身体を殴打する。だが、そのシルエットが宙に溶け……
――ボッ!!
その残像の奥から、前蹴りが飛んできた。
「げっ……!」
「ヴィータッ!!」
リーゼが蹴りの軌道を逸らす。
「っくぅ!」
腕を掠めただけ、だというのに、腕が持っていかれそうになる。
――キィイイイン……!!
空中に放られた魔力スフィアが、リーゼに照準を合わせた。
「後ろ！　避けるの！」
――ドンッ!!
「うわ！　アイ、サンキューー！」
アイの指示に従い、飛び退る。
「だらぁっ!!」
巨大な一個の鉄球を生成し、発射！
――ゴンッッ!!!
標的は、仮面の男……の、近接型。
だが、こんな単純な軌道、迎撃されることは見えている。
――ガキイインッ!!
硬い防御に阻まれ、軌道が逸れる。
「分散っ！」
――バッ！
その弾かれた魔力刃が、無数の細かい鉄球に分散。仮面の男の周囲を、旋回し始める。

「数で押すか。だが、このような豆鉄砲、いくら当てたところで……」
にやっ……と、やや下品に笑う。
「……集、合！」
――バキィンッ!!
……分裂していた鉄球は、仮面の男の防御の網目をすり抜け、至近距離で再び一つになる。仮面の男からしてみれば、突然目の前に巨大な鉄球が現れたようなものだ。
――ズガンッ!!
直撃……とまではいかなかったが、なかなかのダメージを与えることができた。
「おのれ……！」
――キンッ！
超高速バインドが、リーゼの手首を戒める。
発動するのは、拡散砲撃。たとえここで防御を展開しようとも、その上からのダメージを与えることができる攻撃。
だが、リーゼは動じず……
――ぽんっ。
……猫の姿に変身し、バインドを抜いた。
「なっ……！」
再び、人型に変身し、拳を一閃！
「ハンマー・シュラークッ!!」
……こちらの仮面の男は、魔法特化。近接特化型の方とは同じとはいかず、胴体に直撃を食らう。
――ガコッ!!
「がっ！」
横合いから殴られ、後ずさる。
「うらあああああっ!!」
ヴィータが再び、鉄球で牽制。
――ヂヂッ!!
身体を逸らし、回避に成功……だが。
「撃ち貫けッ!!」

リーゼが発射した砲撃が、仮面の男を捉える。
「……嘗めるな！」
そんな無茶な体勢のまま、防御魔法で砲撃を弾く。
「ああ、嘗めてなどいないさ」
――ヴゥン……！
……背後に、リーゼが設置していた魔力スフィアが唸る。
（殴り飛ばされながら、仕掛けていたのか！）
気付いたときには、遅かった。
――ゴ、ゴゥンッ!!
二条の砲撃が、全くの別方向から、仮面の男を打ち据えた！
「やるな」
「ああ……予想以上に、よく粘る」
仮面の男が、並ぶ。
「……あれだけ直撃していながら、倒れんとは」
「アタシ、手加減なんてしてねーぞ……」
リーゼとヴィータが、若干呆れて言う。
「ふん。どうせ、身体をいじくりまくっているに決まっているの。でなきゃ、あんな合体・分離なんてゲッターロボみたいなこと、できるわけないの」
アイがそれを説明し、侮蔑するような言葉を吐いた。

仮面の男は、それを特に気にするでもなく、空を見上げた。
「……頃合いだ」
その手に魔方陣が展開する。
リーゼとヴィータは、瞬時に防御の姿勢になった。だが……
「……！　違うのっ！」
警告するが……遅かった。
「貴様の回収は、次の機会としよう」
――ブワアアアアアアアアアアアアアアッ……!!
……一寸先も見えぬほどの煙が、突如として発生し、リーゼた

ちの視界を覆った。
「くっそ！」
『Ｗｉｒｂｅｌｗｉｎｄ　！』
旋風を発生させ、煙幕を吹き散らす。設置型の魔法だったからなのか、完全に消えるまで、少々の時間を要した。
アイはその傍ら、警戒と、結界内部の探査を行う。
そんな中、アイは術式の残滓を発見した。
「これは……転送反応……？　転送先は……」
アイが、その行方を辿る。
「向こうの戦闘区域！」
リーゼたちは、瞬時に理解した。
向こうには、フェイトと、アルフ、それにはやてが……まだ、闇の書に蒐集されていない魔導師が、三名もいる。
「ヴィータ！　この結界、叩き壊すの！」
「応よっ!!」
転送魔法を利用することも考えたが、あの仮面の男の転送スピードは並ではない。転送魔法を発動し、向こうに転送を終える時間があれば、走った方が速いのだ。
「主っ!!」
結界を破壊するや否や、いの一番に駆け出すリーゼ。
ヴィータとアイも、その後に続いた。
「どぉけどけどけぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
……白いバリアジャケットを翻し、なのはが駆ける。
――ザンッ!!
魔力刃を延長し、雑魚騎士達の足を断ち、武装を砕き……一騎当千とまではいかないものの多数の雑魚騎士たちによる肉の壁を、突き崩していく。
「あなた達に構ってる暇は無い！」
ポケットに突っ込んでいた金具を、指の間に挟み……投擲。
「でぇいっ！」

――ガッ!!
一本は外れてしまったが、残る二本はそれぞれ、雑魚騎士の腕と、足を射止めた。
「ディバイン……!!」
剣先に、魔力スフィアが出現する。
全盛期の数割程度だが、雑魚騎士を蹴散らすには十二分。
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』
「バスターーーー

「……何で、あんなに遠くに行っちゃったの？」
フェイトの疑問も、最もだ。
わざわざ、あんな端に放り出す必要は無かった。
それには、オペレーターのフィアットが答えた。
『も、申し訳ありません！　転送の直前、何者かの割り込みがありまして……！』
ザザッ……と、ノイズが混じる。どうやら、あまり通信状況は良くないようだ。
エイミィだったなら、そのような割り込みもカットできたのだろうが……そこはやはり、通信主任と、ヒラのスキルの差だろう。
「しっかりそれに対応して、転送先を結界内に再設定できたから大丈夫。気にしないで」
『はいっ！　……敵は現在、守護騎士２、雑兵２４。守護騎士２体は推定ＡＡＡですが、雑兵は全てＡランク程度です』
いつものヘナヘナ具合は影も無く、的確に状況を伝える。
『守護騎士のカートリッジシステムには注意してください』
「あの群青の騎士、アイツは武装の類を持ってなかった。多分、あたしと同じタイプだ」
アルフと同じ……つまり、支援タイプ。
「……でも、近接戦闘も舐められないから注意だ」
アルフの身体のあちこちには、青痣などの打撲痕が刻まれていた。
そうして、再び戦闘が始まろうとしていたその時のことだった。
ぞわっ……と、なのはの背筋が悪寒に震えた。
この中で、なのはだけが唯一、経験したことのあるもの。
……蒐集の、予兆だった。
「フェイトッ!!」
「え？　ええっ!?」
フェイトをタックルで突き飛ばす。
それに抗議するようり早く……先ほどまでフェイトが立っていた位置を……
――ズボォッ!!

……空中に現れた奇怪な円から、右腕が突き出された。
「あああああっ!!」
――ザシュッッ!!
その腕の主が、腕を引っ込めるより早く、なのはが斬撃を見舞う。
「……ぐっ!!」
パリン……と、奇怪な円が砕け散り、その奥から仮面の男が姿を現した。
「……まさか、探知するとは思わなかったぞ。魔力の気配は、消したつもりだったのだが」
流血する腕をだらりと下げた仮面の男が、腑に落ちない、という風に呟く。それに対する、なのはの答えは……
「勘!」
……だった。
「守護騎士の助太刀?」
フェイト、アルフと並び立つ。
「そして、闇の書の頁の蒐集だ」
ゴキゴキ、と腕を鳴らす。どうやらこの短時間の間に、応急処置を施したらしい。
「……簡単には、獲らせないよ」
回天桜花を構え、対峙する。
じりじりと、空気が緊迫していき……
――カンッ。
「……!」
落下音をゴングに、地を蹴った。
――……ドスッッ!!
……と、両勢の間を割るように、血に濡れた西洋の大剣が突き刺さった。
――バキッ……
耐久の限界だったのか、中途から砕ける大剣。

その大剣を投擲したのは……

「……お前か」

……ずるずると、幽鬼のような足取りで現れた、はやてだった。

「八神……！」

なのはは、その満身創痍な風貌に、息を呑んだ。

――ザッ、ザッ……

だが、それを無視し、はやては歩く。

「……お前か」

――ザッザッザッ……

焼け爛れた頬と、煤けた前髪の簾の奥で……ギラギラと、昏く輝く目が、仮面の男を……その手にある、闇の書のレプリカを、視界に捉えていた。

――ザザザザザッ!!

歩みは、疾走へと変化。はやては、丸腰のまま仮面の男へと近づき……

「私の守護騎士を使い捨てたのは、お前かあああああああ

式の効果範囲を広げたのだろう。
――ビュオオオオオオッ……！
波頭だった影は、瞬時に紙よりも薄く鋭い刃へと変わった。
「む、う……!!」
なんとか脱出を試みる。が、足を挟んでいる影には、更に何らかの術式が仕込まれているのか、ビクともしない。
「くっ！」
仮面の男は、腕に魔力刃を発動する。
そして、刃と化した影が、仮面の男に襲い掛かった。
――ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクッッ!!
……躊躇いも、憂いも無い。圧倒的な殺意のみに染まった刃は、仮面の男を細切れにした。
――ブゥウン……
その姿が溶け消える。得意の幻術……だが。
「……」
うずくまる仮面の男。その右足は……ふくらはぎの半分から下が、切断面を晒し、消えていた。脱出するため、自ら切り落としたのだろう。
威嚇ではなかった。もし、足を捨てていなければ……本当に、細切れにされていた。
「……」
その殺意に、なのはは、フェイトは、アルフは……いや、『剣』や『盾』、雑魚騎士までも、行動を阻まれていた。
完全に、呑まれていた。
「アイツは」
ガリ、ガリ……と、何かを咀嚼する影を使役し、はやてがぼそぼそと言葉を吐き出す。
「……そうやって、身体を端から失っていって……消えたんだ」
……その『アイツ』というのは、『殲滅者』のことだろう。
「……憎い……！」

――ゾ、ゾゾゾゾッ……！
更に広大な範囲の影が、はやての殺意に呼応し、ざわつく。
「……憎いッ!!」
――ズシャアアアアアアアッ!!!!
「う、ぐおあああ……!!」
大きく機動力を削がれた足で、懸命に逃げ回る仮面の男。
「憎い……憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎いッッッ……!!!
――殺してやるッ!!」
だが、はやては一切の加減をせず、仮面の男を追いたて……打ち据え、切り裂き、抉り抜いた。
『……！』
指示を受けた『剣』や『盾』が、はやてに攻撃を加える。
――ゾンッ!!
……腕を切り落とされ、足を潰され、武装を破壊され……雑魚騎士２４体を含む騎士団は、瞬時に壊滅させられる。
『……グ』『ウウ……』
呻く二体の守護騎士の前に、はやてがしゃがみこむ。
――殺セ。
……その声は、なのは達はおろか、状況をモニターしているアースラの面々にも、はっきりと聞こえた。
「……うん、わかってる」
はやては、守護騎士達の首に、手を添えて……
「守護騎士よ……騎士の誇りを、穢されるくらいなら……我が血肉へ、還るがいい」
――ごきんっ。
……首を、へし折った。
『……』
バラバラと魔力に還元され……はやての影に、吸収される。
「守護騎士を、吸収した……」
静まり返る戦場の中、フィアットの声だけが、耳に届く。

『……守護騎士、とは……主のリンカーコアの一部と、魔力を血肉とする者……それを吸収できるのは、同じリンカーコアを持つ者……つまり、』

ここにきて、ようやくなのは達は理解する。

自分たちの隣に居たものの、正体を。

「八神、あなたは……」

吹き荒ぶ、闇の旋風。

その轟音の中……

――ハハ……　ハハハハハ……『てんたとれす』、再起動』

……いよいよ、その意思は肉声を得る。

「……起動」

はやてのバリアジャケットが、再構築される。体表の肌には、真紅の帯のような装飾が、這うように出現。

――バサッ……!!

魔力の高まりに呼応するかのように、スレイプニルが展開し……髪が、白銀に染まる。

その姿は……肉体の外観の違いはあるが、紛れも無く。

『――復活ノ時ダアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!』

「闇の書の、主……」

……最悪の魔導書は今……ここに復活を果たした。

# A’s編　第七十一話

……とうとう復活した、闇の書の意思。再び、『闇統べる王』へと変化した、はやて。
「……想定外、だ」
片足を失った仮面の男が、息も絶え絶えに言った。
仮面の男を睥睨するはやて。その血色の瞳には、常軌を逸した憎悪が、立ち込めていた。
「……闇に、染まれ……」
――――グオオオオオオオオオオッ……!!
促されるまま、莫大な魔力を解き放つ。
数ヶ月前に匹敵……いや、下手をすれば、それ以上の……
「八神……なんで、あなたが……」
いけ好かない奴だとは思っていた。
口は悪い。態度は悪い。意地汚くて、乱暴者。
なのに、意地っ張りで素直じゃなくて、負けず嫌いなところがあって……
「……」
ふらふらと、上空のはやてに向かって手を伸ばす。
『なのはさんッ!!』
事態を受け入れられず放心していたなのはの耳に、フィアットの声が届いた。
「!!」
ハッ、と正気に戻ったのと同時、レイジングハートが状況を判断する。
『マスター、距離を取って！　あれは、空間殲滅攻撃です！』
「……フェイト、アルフ！」
「うんっ！」「あいよ！」
空間殲滅。ユーノやクロノから、そういった類の魔法がある、とい

うことは聞いていた。
だが、いずれにせよSランク相当の超が付く高等魔法で、更には適正が無ければ修めることすら困難。高い魔力と、天性の資質があって初めて、実戦に耐えうるようになるというスタートラインの遠さから、今では殆ど使い手のいない魔法だという。
それだけに、威力は強大かつ絶大。
シールドでは一面しか防げないため、防ぎきることは難しく、高出力のフィールドを展開するか、全速力で振り切るしかない。
フェイトは防御がそれほど得意ではなく、アルフもどちらかといえばアタッカー。防御するなら、適任はなのはだが、今はまだ、蒐集の後遺症もあって、全盛期の防御力は期待できない。
下手に防御するより、逃げた方が安全だ。その注意が、仮面の男に向いているうちに。
フェイトに抱えられ、高速移動魔法で距離を離す。
「……八神！」
つい、呼んでしまった。
咎めたかったのか。問い詰めたかったのか。何故かは、なのは自身にも分からなかった。

「……」
血色の瞳が、遠ざかっていくなのはを捉える。
「……高町？」
その名が出てくるのに、若干の時間を要したのは、頭を埋め尽くす、憎悪のノイズの影響だ。闇の書は、所有者の感情を増幅し、魔力に付与する。
「……誰、だっけ……？」
封印されていたことで取り戻しかけていた、真っ当な感情を、記憶を、上書きしていく。
『瑣末ナコトハイイ。サァ……守護騎士ノ仇ヲ、喰ラウノダ!!』
ぞくんっ……！
「あ、あああ……ディ、アボリッ、ク……！」

身震いするほどの憎悪に突き動かされ……はやては、チャージを終えた魔力スフィアを解放する！

「……エミッション!!」

――――――――――――――!!!!!!!!

闇色の球体が、音も無く拡大していく。

「くそっ……！　予定外にも程がある！」

感情を殺すことすら忘れ、仮面の男の片割れ……魔法に特化した一体が、防御を展開する。

……手本のような術式。理想的な魔力配分。まず遭遇することの無いであろう、空間殲滅攻撃に、仮面の男はよく対応したと言える。

惜しむならば……

――ガリ、ガリガリガリガリガリ……!!

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ……!!!!」

……惜しいのは、はやての振るった魔法が、一般的に認知されている空間殲滅攻撃の常識を超えていた、ということだ。

――ガリガリガリ……バキッ!!

……防御を、紙屑のように噛み破った闇の魔力が、仮面の男の身体を捉える。

――ゴリッ、ゴリュッ……!!

「ご……が、がァあ……！」

身体を食い散らかされ、悶える。

最早ここまで。そう、諦めかけていた時だった。

「うあああああ!!」

悲鳴が、聞こえた。

『……何ヲ、シテイル！　我ガ主！』

はやてだ。

「ちが、う……！　違う、違う、違う、違う!!」

拒絶反応を起こしたかのように、頭を抱え、髪を掻き毟り

……そのたびに、白銀の髪が黒く明滅し、はやての姿がオーバーラップする。
「消、え、ろォおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
一際強い叫びと共に……
『オ、オノレ……! 今一歩のトコロヲォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……!』
――バシュウウッ……
……甲冑が、宙に溶けて消え、同じく、攻撃魔法も消えた。
残されたのは、生身のはやて。
「……私は」
へたりこみ、呆然としている。
「私は、何を……?」
守護騎士『殲滅者』を使い捨てた輩を叩き潰す。その意思に、違いは無い。だが、戦闘区域に現れた仮面の男を目にした瞬間……自我を、失った。
「高町と……テスタロッサと使い魔を、巻き添えに……?」
いっそ心地よいまでの憎悪が心を満たし……唆されるままに、牙を剥いた。
「……何なんだ」
ぶるっ、と震える。
「……何なんだよ、お前は!!」
はやては初めて……己に巣食う闇の書に、疑心を覚えた。
『我ハ、闇ノ書ノ意思……『てんたとれす』。我ガ主。汝ノ憎悪ヲ糧ニ、我ハ写シ身ヲ得タ』
「写し身だと!? お前は、私の道具だ!!」
『ソウ。我ハ、汝ノ道具ニ過ギズ……ダガ、汝モマタ、我ノ道具ナノダ』
……魔導具と所有者。
それは本来であれば、絶対的な主従関係にある。所有者が居なければ、魔導具は単なる物品に過ぎない。
だが、闇の書は……自ら主を選定し、逆に使役することを可能

としている。
『我ハ、汝ノ願イヲ叶エヨウ……汝自身ヲ、供物トシテ。我ガ主ヨ、我ト、汝ハ……』
――対等ダ。
それだけ言い、テンタトレスは沈黙した。だが、はやてにはそれを問いただす気力は、残されていなかった。
「主っ！」
そして、ようやく追いついてきたリーゼ。傷だらけのはやてを見て、苦渋に顔を歪めた。
「……リーゼ」
覇気の欠片も見当たらない。
「……勘違い、するところだった」
一般人に溶け込むような生活。
人間らしい生き方。
真っ当な価値観。
常識的な社交性。
それらは、知らぬ間に、はやて自身を浸食し……過去を振り返るという行為を、忘却させていた。
「主……！」
リーゼが、はやてを抱きしめる。その腕の中……はやては、搾り出すように、言った。
「私は……殺人鬼だったんだ」
◆▪◆　◆　◆
「くっ……馬鹿な！　早すぎる！」
ある一室で、恰幅のいい将校……レジアスは、モニターが設置されていたデスクを叩いた。
「このままでは、あの子が……伊吹と、火乃香の娘が……！」
コンソールを操作し、指示を出そうとしたが……
――ビーーーーーーーーーーーッ!!
……画面いっぱいに表示される、『権限がありません』という、無機質な一文。

「何……!?」
――バンッ!!
そして乱暴に扉が破られ、突入してきた武装局員に包囲される。
「貴様ら、どういうつもりだ……」
局員の一人が、デバイスを構える。
「……命令により、拘束させて頂きます」
努めて無表情を装ってはいるが……その奥には、葛藤が見て取れた。
「残念だよ、レジアス」
……輪が開き、その声の主が現れる。
「やはり貴様か……グレアム」
グレアムは、仰々しいとさえ感じる口調で、レジアスを糾弾する。
「まさか君が、闇の書の主と通じていたとは」
……闇の書の主、八神はやて。彼女のに資金を援助し、法的後見人になり……通じていると言われてしまえば、否定する材料が見当たらない。
――私的に犯罪者と通じ、その情報を隠蔽した局員を、当局が拘束する。
何一つ、誤りは無い。正論だ。正攻法だ。管理局員として正しい姿だ。
「罪状は……言わなくとも、分かっている筈だろう?」
まるで……過ちを犯した友人を、諭すように。
……正攻法を、ここまで悪辣に利用する者がいようとは。
舞台役者のように、台詞を読み上げる。
「そんなにも、失った魔力を、取り戻したかったのか……? 陸戦ＳＳランクが、そんなにも惜しかったのか!!」
ぴくりと、レジアスの眉が僅かに動く。
「君は、今度は故意に、あの地獄を……局地大災害を、再現しようというのかっ!」
――ゴンッッ!!
……グレアムが壁に背を打ちつけ、崩れ落ちる。

「がっ……！」
鼻が明後日の方角を向き、ぼたぼたと口や鼻から血を垂れ流していた。
「……前から思っていたことと、言っておくことがある」
振り抜いた腕を、ゆっくりと下ろす。砕けた枷が落ちる乾いた音が、耳朶を打った。
「オレは、貴様が気に食わん」
そして、後者は。
「……あの小僧を、舐めるな」
……レジアス・ゲイズ少将、逮捕。
このニュースは、瞬く間に管理局に広まった。

◆◆◆◆

傷ついたはやてを背負い、リーゼが歩く。
先ほどから、広域サーチが間断なく発動されている。管理局が、はやてを探しているのだろう。
転送魔法を使えば、その痕跡から座標を特定される。そして、広域サーチは、海鳴市全体をカバーしている。炙りだされるのも、時間の問題だった。
「力を手に入れたつもりで、力の奴隷にされていたなんて……はは、王が聞いて呆れるわ。所詮、私なんて、ただのちっぽけな犯罪者じゃないか……」
ぶつぶつと、誰が聞いているわけでもないのに、自虐する。
繁華街の一角、人気の無い廃ビルに辿りついたリーゼは、比較的清潔さが保たれた一室に、はやてを匿った。
はやても限界だったのか、泥のように眠りについている。
「大丈夫、大丈夫です、主……リーゼが、傍におります」
何度目かのサーチの発動後の一瞬で、リーゼははやてに、魔法を仕掛けた。
「――隠蔽術式、自動制御」
はやての魔力の気配を、徹底的に隠蔽する。はやてにも、使えない

ことは無いが……今は、闇の書をこれ以上、活性化させないことの方が大事だ。
「……う！」
ズキン、と、胸の痛みを覚え、リーゼは蹲った。
（干渉が、予想以上に強い……！）
だが、ここでやめるわけにはいかない。次のサーチが来るまでに、術式を完成させなければならない。
「……我が主。あなたは、私が必ず……うぁあああああああっ!!」
術式を完成させたのと同時……リーゼが人型を保てなくなり、猫の姿になった。
「主……」
――雨が、降り始めていた。
「……リーゼ？」
目を覚ましたはやては、真っ先に己の使い魔を探す。
「リーゼ!?」
それは、すぐに見つかった。
「……」
魔力を限界以上に使い、猫の姿に戻り……はやての膝で、丸まっていた。
使い魔にとって、魔力は生命そのものだ。一刻も早く回復せねば、リーゼは死んでしまう。
だが、リーゼはどういった仕掛けを施したのか、リーゼとはやてを繋ぐ魔力のラインは、ギリギリにまで引き絞られていた。……はやてのリンカーコアを、それに巣食う闇の書を活性化させないために、あえて供給を止めているということに気付き……はやては、歯噛みした。
続いて、自分のいる場所を確認する。
「……」
どうやら、打ち捨てられた廃ビルのようだ。雨風は凌げそうだが、薄っぺらい毛布一枚だけでは、防寒の足しにもならない。

「……今更、戻れるかよ」
思い浮かべたのは、あのアパートの一室。
「……」
あそこに戻ったとしても、待ち構えているのは管理局員だ。
あの大家にしても、殺人者である自分を、迎え入れてはくれないだろう。
「美香……！」
心配なのは、あの小さな友人のことだった。
彼女に魔法を授けたということは、既に管理局に割れている。
アースラの連中は、そこまで非人道的な真似はしないと信じたいが、確証は無い。
「……」
行って、どうなる。
待ち伏せている局員と、一戦を交えるか？
それとも、美香を連れ出して、手元に置くか？
「……馬鹿か、私は」
今、美香のためにできることは……何も連絡を取らず、彼女の嫌疑が晴れることを待つだけだ。
「月村……バニングス……葉山……八代……」
思い浮かぶのは、日常の面子。
……そこまで考え、またはやては自嘲した。
「私も、未練がましくなったもんだ……」
ほんの半年前まで、誰とも関わらず、誰にも接することなく……それを孤独と感じることも、忘れていたのに。
「……忘れよう」
夢から、醒めただけだ。元に、戻っただけだ。
――それでも、夢想してしまう。
もし、自分が普通の小学三年生の子供だったら。
もし、魔法のことも知らず、日々を過ごしていたら。
もし、別の形で、秀人やなのはと出会っていたら。
「……！」

ぐっと、こみ上げてくる感情を押し殺す。
（この甘えが、どういう結果を招いた……!!）
仲間が欲しいという甘えが、美香を危険に晒している。
美香だけではない。リーゼもこうして消耗し、回復の手立てすら見当たらない。
美香も、リーゼも……元はといえば、『仲間が欲しい』という、はやての我儘だ。
「……」
携帯電話が、ポケットに入っていた。
「……」
メモ帳を起動し、かちかちと何かを入力し、リーゼの傍に置く。
（もうこれ以上、誰かに頼ったらダメだ。関わったらダメだ）
――だから。
「……テンタトレス」
『……ドウシタ、我ガ主ヨ』
返事は、すぐにあった。
「リーゼに魔力を」
『ヨイノカ？　追ッ手ニ、捕捉サレルゾ？』
「いいよ、別に」
『……ヨカロウ』
――パキンッ。
テンタトレスは、リーゼの施した仕掛けを呆気なく破壊し、再び魔力のラインを繋げ、魔力を注ぎ込んだ。
「……次元転送」
はやては、転送魔法を発動。座標は、デタラメに……
リーゼを、置いて。
――。
はやては、その場を去っていった。
「……主!?」
目を覚ましたリーゼは、主の不在を知った。そして、己の中に漲る

魔力と、その理由も。
「……主、何故ですか」
遠巻きに、局員と思しき魔力反応が、この廃ビルを取り囲んでいるのを感じても……リーゼは、その場を動けなかった。
「何故わたしを、連れて行って下さらないのですか!!」
傍に置かれた携帯電話の画面には、短く、入力されていた。
『秀人を頼れ。お前は自由だ』
――季節は間も無く、冬を迎えようとしていた。

# A’ s編　第七十二話

「ほら、秀人……」「いい加減、観念しろ」
「おい、押すなって……！」
秀人は、自宅のアパートの敷地の手前で、二の足を踏んでいた。
クロノ、ユーノに背を押され、じりじりと門扉へと近づいていく。
「や、やっぱ、まずはメールで無事を知らせてから……！」
携帯電話を取り出す。が……
「もーらい」
ユーノがそれを横合いから取り上げ、クロノに放る。
「うむ」
それを受け取り、S2U内部に格納してしまう。こうなってしまっては、力ずくで取り返すことも出来ない。忌々しげに、それを睨む。
「くっ……いらんコンビネーション磨きやがって……!!　……はぁ」
そして、ようやく諦めた。
（平手一発くらいで済めばいいけど……）
それはない、と断定する。
（……レイジングハートと、アイもいるからなぁ……）
秀人の身勝手な行動には、無慈悲な制裁を下す、あの二名。
射撃か、砲撃か……スターライトか。
「……ま、しゃーないか」
諦めて、自分でドアの前に立った。
かちゃっ、という金具の擦れる音が、妙に大きく響いたように思えてドキッとする。
鍵は開いている。人の気配もする。しかし、不気味な静寂が漂っていた。
「た、ただいま～……」
そろそろと足を踏み入れた秀人を出迎えたのは……
「……おかえり」

……どんよりと暗い、なのはだった。
卓袱台は端に寄せられており、八畳の部屋には、関係者が車座になっている。
なのは。フェイト。アルフ。アイ。ヴィータ。エイミィ。……何故か、大家。
「……な、」「座って」
ヴィータとアイの間……なのはの真正面にスペースを作り、そこに座るよう促す。
「……ユーノくんとクロノも、お帰りなさい」
ユーノはアルフの、クロノはエイミィの隣に座る。
八畳間は、瞬く間に鮨詰めになった。
「……」
重苦しい雰囲気が漂う。
「あの、」
『黙れ』
「あ、はいスンマセン……えっ？」
謝り、なのはの膝元に置かれたレイジングハートを凝視する。
『……マスターから、じきに話があります』
「ああ、わかった……」
なんだ、聞き間違えか。そう安堵する秀人だった。
『だからそれまで己の愚行を悔いていろボケナス』
「聞き間違えじゃなかった……!?」
驚愕する秀人だった。
そして、何かが足りないと思い、その理由に思い至る。
「あれ、リーゼと……はやては？」
こういう集まりには、なんだかんだ言って、最後はリーゼに手を引かれ渋々やってくるのが常だというのに。
――ピキィッ……!!
……緊張で、空気が凍る音がした。
「え……あの……」
オロオロと戸惑う。

「……あのね、秀人さん」
そして、なのはが口を開いた。
「正直、帰ってきたら文句の一つでも言って、小指でも詰めてやろうかと思ってたけど……」
「……」
凍りつく秀人。
（ま、生えてくると思うけど……）
「ま、生えてくると思うけど……とか考えてたら、怒るからね」
……読み切られていた。
「……話が逸れちゃったね。それで、本題」
ずいっ、と、秀人の唇に、自分の人差し指を当てる。
「最後まで、聞いて。……正直、私もまだ、混乱してるから」
その真剣な様子に、秀人は身を引き締める。
「あのね――――」

――――話を聞き終えた秀人は、唖然と……は、していなかった。
「そっか」
むしろ、どこか納得している節さえあった。
「……驚かないんだ」
「いや、驚いてる。めっちゃ驚いてるって」
さすがに、この面々の中で一番付き合いが濃いだけに、驚いてはいるようだった。
「間違いじゃ無いんだよな……ヴィータ」
秀人は、元守護騎士……闇の書の主と面識のあるヴィータに、確認を取った。
ヴィータは腕を組み、ああ、と肯定する。
「あの子は……闇の書の主だ。アタシが保障する」
面識のあるヴィータならともかく……なぜ秀人は、納得してしまったのか。
その問いに、答えた。

「何となくだけど、偉そうな口調とか、尊大な態度とか……あと、目が似てたから」
「目？」
　聞き返すなのはに、ああ、と頷く。
「なんつーか……もう完璧に、軌道修正が効かなくなってるのに、どこかで横道を探してるっつーか……悪い、うまく言えん」
「私も、気付くべきだったんだ……」
　なのはが、項垂れながら呟いた。
「始業式の日の屋上で、ちょっと喧嘩した時……あいつ、自分の影を操作する魔法を使ったの」
『記録していた術式と、昨日のデータは、完全に一致しました』
　レイジングハートが補足する。
「そういえば、守護騎士に関する考察をやたらスラスラ述べていたこともあったな……」
　クロノはクロノで、心当たりがあるらしい。
「あ、あのね……？」
　聞き役になっていたフェイトが、意を決したように挙手する。
「ヤガミは、闇の書のあるじなんだよね？」
「ああ。最早、余地は無いだろう」
　それには、断定を返すクロノ。
「でも、『ヤガミ』は、そんなにわるいヤツなのかな……？」
「……」
　それには……単純に、はやて本人のパーソナリティについては、誰も決定はしなかった。
「ボク、むずかしいはなし、よくわかんないけど……でも、うんどーかいとか、クラスでいちばん、たのしみにしてて……じゃまされたときは、だれよりもおこってて……みんなのために、がんばってたし……あの……」
　言葉尻は、もそもそと消え入ってしまう。
　――ばんっ！
「私だって!!」

なのはが、畳に拳を打ち付ける。
「はぅっ……！」
ビクッ……と縮こまるフェイト。
「ご、ごめんフェイト……」
驚かせてしまったことを謝る。
「……私だって、あいつがそんなに悪い奴だとは、思ってない」
信じたい。その気持ちは、はやてと関わってきた者たちには、共通のものだった。
「確かに、乱暴だし、口は悪いし、行儀も悪いし、モラルも無いし、ちゃっかりしてるし、自分勝手なところも多々ある……けど、あいつを『嫌い』って言う人は、クラスにいない」
クロノは……管理局員、第三者の視点から、事実を告げる。
「……だが事実として、闇の書の主は大量殺戮を行っている。それはかなりの確立で、彼女の仕業だろう」
雑魚騎士として利用されていた、民間人たち。呪縛から解放された彼らへの事情聴取から、闇の書の主の容姿が浮かび上がってきていた。
残忍な闇の書の主。
頼れるリーダー。
その境界線は、どこにあったのか。
「俺が、闇の書を一時封印して……」
それから、何があったか。
「……予定外の無人世界に飛ばされて、そこで、はやてと会ったんだ」
思えばそれが、ターニングポイントだったのだろう。
嫌々ながら、渋々ながらも、秀人と触れ合い……僅かではあるが、人の心を取り戻した。
「予定外の……？」
その言葉に、クロノが何かを感じた。が、進む話に付いていく為、一時保留とした。
「……無限書庫で、『八神はやて』をキーワードに検索してみたん

だ」
ユーノの番だ。
明確な人名さえあれば、無限書庫は答えてくれる。
「八神はやて。第９７管理外世界『地球』極東方面『日本』、関西圏出身」
関西人だったのかあいつ……と、秀人が変なところに感想を述べていた。
べしっ、とアイに頭を引っ叩かれ、話に戻された。
「両親の名前は、八神伊吹、八神火乃香。二年前、自身の魔力が不意に制御不能になり、乗船していた航空機の電子系統が故障。機体はコントロール不能となり、墜落。……両親は、その事故が原因で……」
なのはは、かつての自分の発言を呪った。
『親の顔が見てみたい』などと……
キレて当然。
なにせ、その顔を見たい両親は既に、この世にいないのだから。
彼女の過去を抉るような発言をした自分を、殴ってやりたい気分だった。
「「それって……!!」」
秀人となのはの声が重なる。
航空機の墜落事故。それは、無限書庫にて、二人が見つけ出した記事のものだった。
「ユーノ、今ここに、無限書庫の本、出せるか!?」
「え!? あ、ああ……うん、一応」
手元から、ストレージデバイスのようなものを取り出す。
本を隠した座標を入力すると、浮かび上がるようにして、本が現れた。どうやら、実物ではなく、写本のようだ。
「……ここ、見てくれ」
そこには、ユーノが言ったことと相違ない内容と……千切られた跡があった。
「んで、この千切られたページに、これを……」

そして秀人は、本棚に仕舞ったファイルの中から、数枚の本のページを取り出す。それは少し前、通りすがりの変な女性に押し付けられたものだった。
ページの末端と、本。それらは、ぴたりと一致した。
繋げて読む。
「……魔力の暴走、墜落のショックで、体内に潜んでいた闇の書が一部起動。はやての生命を維持する」
闇の書は、完成まで主を守る魔導書だ。それだけの要因があれば、未成熟なはやてのリンカーコアであったとしても、起動するだろう。
「……こっちは、はやての本の続きなんだけど」
ユーノは、僅かに躊躇した。だが、ここにいる面子にだけ、という理由で、話す事になった。
「墜落した直後、航空機の残骸に脊髄を圧迫され、下肢の運動能力を失った」
「下肢……？　でもあいつ、普通に歩いてるし、走ってるし、蹴ってくるぞ」
秀人の言うことも、事実だった。
「……ごめん、口では、もう……」
そこで、参ってしまったらしい。
「多分コレは……秀人だけは、知っているべきことだと思う」
今まで、出そうとしなかった原本を、秀人に差し出した。
「……」
秀人だけが、その本を読み始めた。
（……日付は……一年後か）
ぱら……とページを捲り……
――『強姦目的の襲撃を受けた際、自衛のため、闇の書が起動する』
「……！」
ギリッ……と、唇を噛むことで、表情に出てしまうことを押さえた。
――起動に際し、下肢に魔力回路による擬似神経を形成。下肢の運動能力を復元する。

それは、いい。はやてが歩けるようになったのは、その恩恵だろう。
だが……
――闇の書による魔力蒐集の衝動、一種の『食欲』は、彼女の人格を『捕食に適した』ものに最適化させ、『良心』の抑制、『殺人衝動』の増幅など――
……秀人は、本を閉じた。
「……」
そして……ポケットから、凶鳥部隊で使用していたライターを取り出す。
重要な手がかりになるはずのそれに、躊躇無く着火した。
あっというまに灰へと変わっていく、本。
だが、クロノ、エイミィなど……事件解決の責任者たちも、何も口を挟まなかった。
秀人の態度から、内容をある程度察したのだろう。
「……闇の書は、不意の事故で完全起動した。はやて自身が幼かったから、制御が難しかったらしい」
淡々と、事実を述べる。
「不意……」
また、クロノが何か違和感を感じる。
「……確かに、はやては殺人者だ」
以前、大家に襲い掛かった時……大家は察していた。『既に、一線を越えている』、と。
いくら闇の書に自我を歪曲されていたとしても……『殺戮』へと感情を向けてしまったのは、はやて自身だ。
守護騎士の召喚。魔導師襲撃。
それらを全て、闇の書の責任にすることはできない。
「……なぁ、『闇の書の目的』っていうのは、何だ？」
「あ」
全員が、すっかり失念していた。
闇の書の主の目的は、闇の書の完成。そして、それによって得られる莫大な力だろう。

だが、闇の書は……自意識を持つ魔導書、その目的とは、何なのだろうか。
「……闇の書には、二つの管制人格がある」
口を開いたのは、ヴィータだった。資料をあたっていたユーノも、それに続く。
「一つは、主を蒐集へと駆り立てる、攻撃用プログラム……『テンタトレス』。主が攻撃的になるのは、こちらの影響が強いからだ」
そして、もう一つは……
「……」
ヴィータは、かつての情景を思い浮かべる。
――崩れ落ちた都。
――散乱する死体の山。
――守るべき主を、その山の中に見つけ……立ちすくむ彼女。
そう。闇の書は欠陥品。
彼女が出現する時は既に……闇の書が、一主の生命をも滅ぼした後のこと。致命的な、手順の間違い。
手遅れの、無駄足の……救いの手。
「主の生命を守護する、防御用プログラム……」
……彼女の、名は。
「――――――――――『リインフォース』」
全員の視線が、そちらへ集まる。保護されてきたリーゼが、満身創痍の身体で、そこに立っていた。
「それが、闇の書の、もう一つの管制人格……私の、真名だ」

# A’s編　第七十三話

「、リイン、フォース……」
　その聞き覚えの無い、無限書庫にも無かった名に、ユーノは首をかしげた。
「そうか……お前は、ずっと……」
　ヴィータが、それを察した。
「攻撃特化のテンタトレス、防衛特化のリインフォース。二つのプログラムを並列に走らせ、隙の無い布陣とするのが、闇の書……だった」
「『だった』？」
　その付け足されたかのような過去形を、秀人が指摘する。ヴィータが、それに補足する。
「ああ。アタシは、闇の書の誕生の経緯をよく知らないからさ……でも、アタシの覚えてる限りのことを、話そうと思う」
「……いいのか？」
　秀人が、気遣うように聞いた。
　今まで、触れるべきではないと判断して、敢えて誰も踏みこまなかった話。
　だがヴィータは、今が話すべき時だと判断したらしい。
「……何代目かは、知らない。初代だったのかもしれないし、違ったかもしれない。とにかく、以前の闇の書の主が、そのプログラムに改変を加えて、歪めちまったんだ。元々は、テンタトレスも、リインフォースも、ベクトルが違うだけで、同等・同格だったのに……」
　悔しそうに、拳を握る。
「リインフォースの……防衛のための領域の大部分を、攻撃用のテンタトレスに振ってしまった」
　攻撃5、防御5のバランスを、攻撃9，防御1に……バランスを、崩された。
「テンタトレスは、初期とは比較にならない攻撃能力と、多様な力を得

た。……『主の生命を守る』という大前提を、代償に」
確かに、攻撃力は絶大に増加する。だがそれは……
「……そんなもの、欠陥品だ」
クロノが、渋面を作る。
『ええ。……常時、主の限界での活動を求めるようなものです。デバイスとしては、下の下。論外です』
「……それ考えたやつ、間違いなくばかなの。そんなもの、デバイスでもなんでもない、ただの時限爆弾なの」
レイジングハート、アイのデバイス姉妹は、揃って辛辣だ。
「ああ。……だから、闇の書は、呪われた魔導書なんて呼ばれてる」
その改変こそが、現代まで続く、闇の書の呪いの、正体。
そこまで言われ、気付いた。
「守護騎士プログラムって……」
ヴィータは、頷いた。
「アタシたちは、テンタトレスに造られた端末だ」
端末。そのあまりに無機質な単語に、誰もが沈黙する。
「テンタトレスは手始めに、己が受肉するまで、その意思を代行するものとして、端末を作ることを考えたんだ。蒐集した優れたリンカーコアを媒体に、召喚魔法を応用して」
ふっ、と自嘲する。
「……もしかしたら、どっかにアタシのオリジナルがいたのかもしれねぇな」
だがそれも、確認しようが無い。
「アタシが造られたその時から、闇の書は、現在と同じだった。無差別に魔力を、リンカーコアを食い散らかし、主のキャパシティを超える魔力を与え、自滅させ……その力を保ったまま、次の主の元へ転生する。次の主に選ばれるのは、前所有者を超えるキャパシティを持つ……要は、より優れた資質を持つ人間だ」
所有者を自滅させるほどの力を持ち、さらにそれをスタートラインとすることで、雪だるま式に力を増大させていく。
「……その崩れたバランスの中で、私は、主を守ろうとしていた」

「けど、皮肉だった。リインフォースが受肉できるだけの力を得られた時には、もう……」
そこで、黙ってしまう。
だが、言わずとも分かってしまった。
「それは……つらい、ね」
フェイトが、眉根を寄せる。
「……ボクだって、あのとき、おかーさんをたすけられていなかったら……すっごく、つらかったとおもうもん……」
もしもあの時、救いの手が届かなかったら……プレシアが、虚数空間の中に、消えてしまったとしたら。
「……ぐすっ、」
想像しただけで、涙ぐんでしまう。
だがそれを……リインフォースは、何度も何度も、味わってきたのだ。
「……ふぇえぇん」
「おいおい、泣くなよ……クライアじゃあるまいし……」
秀人は、いよいよ本格的に泣き出してしまったフェイトの頭を撫でる。
「もー……」
なのは達は、会議を中断し、フェイトをあやす羽目になった。

「……テンタトレスも、可哀想に」
秀人が呟いた一言に、リーゼ、ヴィータは耳を疑った。
「テンタトレスが可哀想って……どうして？」
ヴィータにとって、テンタトレスは恐怖の対象でしかなかった。
自由意志も許されず使役され、記憶を持つことさえ許されず、道具として何度も使い潰されてきた。捨て駒として討伐されたことも、一度や二度ではない。
そして使役された果てにテンタトレスが目覚めれば、最後は養分として、全身を魔力に還元され、肉体を失ってしまう。

「あいつは、呪いの元凶だぞ!?　あいつを破壊しない限り、闇の書は何度だって蘇って、また犠牲を増やし続けるんだ！」
破壊すべき。それが、大部分の意見だった。
「……そりゃ、そうだけど」
フェイトの頭から手を離し、頬を掻く。
「……でも、元はリインフォースと同じ、主を守るために生まれてきたんだろ？　リインフォースが主を守れない、ってのも、わかるけど……」
ふう、と息を吐き、腕を組む。
「……守るべき主を、殺し続けなければいけないテンタトレスは、どんな気持ちなんだろうな」
神妙に黙り込む秀人たちを横合いに、フェイトは大泣きモードだった。
「ふぇえええん……!!」
感受性の強いフェイトには、ショックな話だったのかもしれない。
「大丈夫かなぁ、この子……」
なのはは、フェイトが独り立ちできるヴィジョンを、思い浮かべることが出来なかった。

――――――ほんとに。おちおち寝てもいられないよ……

……ふと、そんな声が秀人の耳に届いた。
「――――え？」
きょろきょろとあたりを見回すが、室内の面々に気付いた様子は無い。……その声を拾えたのは、どうやら秀人だけだったようだ。
「……すー」
ふと顔を戻すと、つい今まで泣いていたフェイトは、アルフの膝の上に頭を置き、寝入っていたのだった。
リーゼは、場が落ち着いてから、再び話し始めた。
「……私はこうして、奇跡的にも、テンタトレスよりも早く、主より『名』を賜り、独自の行動を起こすことが出来た。秀人。あなたが、テ

ンタトレスを、封印してくれた。だから……私は、何を置いてでも、主の、ために……」
「……わかった。もう、無理はしなくていい」
秀人が、リーゼを休ませる。クロノに連れられ、リーゼは、アースラへと戻っていった。

……はやてが見つからないまま、数日が経過した。
学校から帰り、やや陰鬱な気分のまま、食事の準備をする。
「……一応、クロノ達の分も作っておくかな」
何故か、クロノとエイミィはアースラへ戻らず、アパートの空き部屋を借り、そこで寝泊りをしていた。ヴィータやユーノも出入りしているため、恐らくは情報の整理などをしているのだろう。
「……うー……むずかしい……」
「ほら、もう一回書いてみろ」「頑張ろ、フェイト！」「ぐぬぬ……ヘルクラウダーが倒せないの……！」
食事を待つ部屋の中、秀人とアルフはフェイトの国語の宿題を見てやり、アイは知らん顔でテレビゲームをしていた。
いつも通りの、日常。だがそこに、ぽっかりと穴が空いている。
「……あ、作りすぎちゃったかな？」
無意識に、クロノとエイミィの分に加えて、更に二人分ほど多く作ってしまっていた。
そして、ちらっとドアを見る。待っていれば……
『おい高町、メシくれメシ！　あのジジイの精進料理だけじゃ足りねーよ！』『も、申し訳ありません……なのは』
そう言って、リーゼを引っ張るようにして、はやてが食卓に乱入してくることが、多々あった。
「……あの、ばか。どこで道草食ってるのよ……」
……余分な取り皿を、食器棚に仕舞う。
「おーい！　いるかーい!?　いるねー！　いーれーてー！」
……寸前。遠慮のない大声が、玄関から聞こえてきた。
「……この声、まさか……」

なのはは、その声に聞き覚えがあった。
がちゃっ、とドアを開けると、やはり、その人だった。
「ハイ！　おっひさしぶりだネー！」
じゃらじゃらと、身に付けた大量のアクセサリーが揺れて、やかましく鳴る。
「奈々さん!?」
アクセサリーショップ店長、田上奈々だった。
「げ……あんたか」
「げ、とはご挨拶！　いつまで経っても取りに来ないから、デリバリーに来ちゃったヨ！　お邪魔しまーす！」
そのまま靴を脱ぎ捨て、ずかずかと上がってきた。
「ひっ……！」
闖入者に驚いたフェイトが、アルフの背に隠れる。
「んー？　子供発見！」
人見知りだということを察したのか、卓袱台を挟んで座った。
「奈々ちゃん、子供が大好きだからね。いいもの見せてあげるヨ！」
ことんっ……と、机の上に置かれる、小さな円盤状のネックレス。赤く着色された本体に、金の縁取りがされている。レリーフには、鳥類のレリーフのようなものが刻まれている。
「わ、タカメダルだ！」
ぱっ、と目を輝かせる。
「ふっふっふ。奈々ちゃん、年甲斐も無くライダーに夢中でネ！作っちゃった！」
「すげ……ダイキャスト？」
秀人も、その出来のよさに驚いていた。
「まっさかー。奈々ちゃん、銀細工以外はマトモに作れねーよ」
ケラケラと笑う。
手で促され、そのメダルを手に取るフェイト。
「あれ……ヒビ？」
その中央に入った、不自然な亀裂を見つける。
「よくぞ気付いた！」

奈々は、その亀裂に手をかけて……

――パチンッ！

メダルを、真っ二つに割った。どうやら、マグネットか何かを仕込んでいるのだろう。

「タカメダル、最終回モード！」

「「　お、おおおおお!!　」」

何で割れたら最終回なんだろう……という、なのはの疑問をよそに、秀人とフェイトの興奮は最高潮だった。

「すげー！　ほしー!!」

「やるじゃん！」

「ふん、二人とも、まだまだがきなの」

「ボスに勝てなくて地団駄踏んでるあんたが言うことじゃないよ、それ……」

アイが鼻で笑い、アルフが突っ込んだ。

「うるさいの！　このヘルクラウダー、しんくうはでこっちのＨＰを三分の一近く持って行きやがるの！　むっかつくの！」

「じゃあ、低レベルクリアなんて縛りやめなよ……」

「何じゃ、騒がしいのう……」

わいわい騒いでいるところに、大家がやってきた。

部屋の中を見渡して……奈々と、目が合った。

「……お主、」

「……、」

奈々は、先ほどまでのハイテンションもどこへやら。メデューサに睨まれたかのように、静止していた。

「……ぴぎゃあああああああああ!!」

突如として怪鳥の叫び声を上げ、窓に突進した！

「待ていっ!!」

素晴らしい初動だったが、当然、大家から逃げることは出来なかった。

「うわーん！　ごめんなさいごめんなさい！」

首根っこを掴まれ、卓袱台に座らせられる。

「おいおい、爺さん……奈々を知ってるのか？」
「うむ。ちょっとした知り合いでのう……さて、奈々」
名を呼ばれた奈々は、涙目でぶんぶんと首を横に振った。
「してません、してません！　もう魔導具なんて作ってませんヨー!!」
……食事の準備ができ、卓袱台に運ばれる。
ひと段落したクロノ達も部屋に戻ってきて……奇抜な格好をした奈々を見て、ぎょっとしていた。
「どうぞ。お口に合うと、いいんですけど……」
「ヒューー！　いっただっきまーす！」
取り皿に分けた煮物を、ぱくぱくと口に運んでいく。
「うめー！　まじうめーよこれ！　なのはちゃん、このまま嫁に来い！」
「え？　あの……ごめんなさい」
「がーん……！」
お断りされていた。
「いやー、それにしても、この妖怪ジジイ……じゃなくて、お爺ちゃんがここの大家さんだったなんてねぇ……」
「ワシも驚いておるよ。まさか、あの奈々がこの町にいようとは……」
じろっ、と見られ、奈々は目を逸らした。
「昔、ヒデ坊に話したことがあったじゃろう。信者を洗脳した、カルト宗教の話じゃ」
「ああ、確か、爺さんが壊滅させたって……奈々、まさかお前」
奈々は、みっともないくらい狼狽した。
「ち、違うヨ!?　奈々ちゃん、教祖のために悪意を込めた銀細工を量産して、信者を洗脳する片棒を担ぐなんてことしてないヨ!?　……はっ!?」
……全部ゲロった。
「奈々さん……」「おい、奈々……マジかよ」
「……という訳じゃ。ま、どうやら改心したようで安心したぞい」

どうやら、大家にタコ殴りにされて改心したらしい。
「ひーん……だってこのジジイ、奈々ちゃんの『手品』が全然通じないんだもーん……自信喪失だヨー……」
もりもりと飯を食べながら、赤面する。
「……ま、あんたいい人だから、いっか」
改心したというのなら……当事者ではない自分は、口を挟む必要は無いだろう。
食後、奈々はリュックサックから、小箱を取り出し、卓袱台の上に置いた。
「折角仕上がったのに取りに来ないから、奈々ちゃん出張ってデリバリーなんかしゃったヨー」
どうやら、秀人が依頼した、銀十字の修理が完了したらしい。
――銀十字。
それは、航空機墜落事故の事件概要の本にあった物品であり、つまり、はやての両親の、形見。
全員が見守る中、小箱の蓋を、奈々が開ける。
「……わぁ」
なのはが、感嘆の声を上げた。
小箱の中から出てきたのは、輝きを放つ銀十字だった。
「すっげぇな……これ、こんなに綺麗なものだったのか」
拾った当初の、ボロボロの状態とは違う。
欠けた一角を接いだ目もほぼ見当たらない、プロの仕事だった。
「むふふ、もっと褒めてもいいんだヨ!?」
賞賛に気を良くしたのか、テンションを上げる奈々。
「見せるの」
アイが、その銀十字の箱を持ち上げる。
直接は触れず、箱の状態のまま、じろじろと観察して……
「……おまえ、これどうやって作ったの？」
不可解そうな表情を浮かべて、聞いた。
「えー？　フツーに、鋳造して切削して研磨して……」
「違うの。　……この『銀』に、何を込めたのかと、聞いているの」

「あっははは。そーいうことかー」
奈々はケラケラと笑い……
「秀人と、依頼主さんの願いを込めてあるんだよ」
はたから聞いている分には、ちんぷんかんぷんな話だが……
「……おまえ、マリエルといい勝負なの」
アイにしては珍しいことに、素直な賞賛を口にした。
「あ、そっちのおチビさん、ちょっといい？」
「……それは僕のことか」
クロノは、不機嫌そうに聞いた。
「そのカード、見―せて？」
ちょいちょい、とクロノの懐を指差す。そこには、待機状態のＳ２Ｕがある。だが……それを、奈々の前で出した覚えは無い。なのに奈々は、『カード』と言った。
不審から、警戒するクロノ。
「なーんもしないヨー」
クロノは渋々、Ｓ２Ｕを取り出し……それを、奈々は受け取った。
その表面を、僅かに撫で……
「――――……おっきな船？」
……と、呟いた。
「!!」
ガタンッ！　と、クロノが身を乗り出した。
「正面に、もう一隻いるねー。……あ、なんかキーボードみたいなの操作してる」
「待て、待て待て待て！」
クロノが取り乱し、皆がそれにあっけに取られる中……奈々は、言った。
「『グレアム……闇の書は、貴様などに悪用させない。リンディ、クロノを頼む』」
――――それは、かつてのＳ２Ｕの所有者にして、クロノの父

……クライド・ハラオウンの、遺言だった。

# A’s編　第七十四話

クライド・ハラオウン。
……クロノ・ハラオウンの実父。
十年前の、前回の闇の書事件の際、現場指揮にあたり……一隻の次元航行艦と共に自爆するという最後を遂げた。
船……次元航行艦も、リンディ、クロノという人名も、何一つ、伝えてはいないはずの情報。それを述べた奈々に、疑惑……というよりか、困惑の視線が集まる。
「……奈々、お主は……」
大家は、苦い表情で押し黙ってしまった。
「アンタ一体、何なんだ？　思念を読んだり、込めたり……」
秀人が、真っ先にその疑問を口にした。
……銀十字を復元する際、秀人は何かを聞かれたのだが……その際の記憶は、おぼろげだ。そのことも何か、関係があるのだろうか。
ユーノと視線を合わせ、念のために念話で会話する。
『ユーノ……奈々から、魔力は感じるか？』
『いや、ランクにしてもDかE……一般人程度だ』
「え？　奈々ちゃんはCカップだヨ？　っていうかDだのEだのが一般的って、アニメ脳すぎじゃね？」
奈々がくるっと秀人たちの方を向き……あっけらかんと、自然に、会話に混ざってきた。
「おい、口に出すなよ！」
「出してないよ！」
最早、押し黙るしかなくなってしまう。一体、この女は何なんだ……と。
それには、奈々本人が答えることになった。じゃらっ、とアクセサリーを鳴らし、両手を広げる。
「なっはっは。奈々ちゃん、サイコメトラーだからね」
突然飛び出した突飛な単語に……しかし、妙に納得してしまった。

コールドリーディング……洞察し、相手にそう錯覚させる技術があるが、とてもそれだけでは説明が付かないからだ。
――サイコメトリー。
物品より思念を読み取る、超能力。
「あとついでに、テレパスもヒュプノも、一通り持ってるよん」
一人、陽気に話し続ける奈々。
「……さて、渡す物も渡したし、奈々ちゃんは帰るヨ」
静まり返る部屋の中、奈々が身支度をする物音だけが耳を打つ。
「……んじゃ、お代はスイス銀行の口座に振り込んでくれたまえ！　バイバーイ！」
ぱたぱたと、小走りに部屋を退散していってしまった。
「……!!　秀人さん！」
「お、おう！」
秀人と、なのはが……ハッとなり、後を追いかけた。
「奈々！」「奈々さん！」
てくてくと、リュックサックを背負って歩いていた奈々を、呼び止める。
「……」
くるっ、と振り向いた奈々は、ひどく醒めた表情をして……すぐに、にへっ、と、気楽な笑みを浮かべた。
「おーおー、どーしたん、お二人さん？　奈々ちゃん、何か忘れ物しちゃったっけ？」
「あー……」
よく考えずに飛び出してきたものだから、説明できるだけの理由が無い。
「代金、払い忘れてた！」
秀人が、取り繕うように言う。
「あっは……何だ、タダでいいよ。あの程度」
「いや、そういうわけには……」
奈々を引きとめようと、手を伸ばし……
――パンッ！

奈々はその手を、反射的に払ってしまった。
「あ、ごめ……ん？」
バツが悪そうに謝り……ふと、何かに気付いたような顔をした。
「……ちょっと、昔話をしようか」
薄暗い街灯が照らす夜道を、歩き始めた。秀人となのはは、その後を付いて行く。
「昔々、十年前……あるところに、図工が得意な一人の女の子がおりましたとさ」
冬の冷たい風が、吹きつけた。
「その女の子は、優しい専業主婦の母親と、朴訥な会社員の父親、温和な彫金師の祖父に囲まれ、すくすくと成長しました」
妙に具体的な家庭像を出す。
「お爺ちゃんは、女の子をたいそう可愛がっていました。女の子も、お爺ちゃんの工房は、一番の遊び場でした」
幸せだった記憶を、呼び起こす。
「お爺ちゃんは女の子に、いろいろな物を作ってくれました。ペンダント。ブローチ。手のひらに乗る象さんや、ライオンさん。お爺ちゃんの指は、命を生み出す魔法の指でした」
ですが……と、暗転。
「ある日、お爺さんは、重い病気にかかってしまいました。意識はあるのに、体を動かせなくなる病気です」
秀人もなのはも、何も言わず、付いて行く。
「父親と母親は、悲しみました。女の子も、悲しみました。みんな、お爺ちゃんが大好きだったから、言葉を交わせないのは、とても寂しかったのです。大好きだった魔法の指は、硬く冷たく、凍ってしまいました」
フェイトが泣いてしまったように……肉親の存在というのは、重い。
「女の子は毎晩、神様にお願いをしました。『お爺ちゃんと、お話をさせてください』と」
非力な子供には、そうするしかなかったのだろう。

「自分の宝物……初めて作ったブローチをお供えして、必死にお祈りをしました」
　誰かがどうにかしてくれることを、都合のいい奇跡を、望んだ。
「願いは届き……優しい神様は、女の子の願いを叶えてくれました。寝たきりのお爺ちゃんの手を握ると、お爺ちゃんは、確かにこう言ってくれたのです。『ああ、お茶が呑みたいなぁ』」
　……それが、発現するきっかけだった。
「女の子は、冷ましたお茶を、お爺ちゃんが食事をするための管に、ゆっくりと流し込みました。お爺ちゃんは、またお話してくれました。『おいしいよ、ありがとう』と。女の子は、とても、とても喜びました。これでまた、お爺ちゃんとお話が出来る。また、おうちで家族四人、仲良く暮らせる、と」
　幼い少女にとって、それはまさしく奇跡だった。
「おうちに帰り、いつもそうしているように、仕事帰りのお父さんの手を取りました。少しでも早く、伝えたかったのです」
　きっと、嬉しかっただろう。誰かに頼らず、自分の手で、肉親の意思を取り戻せたのだから。
「ですが……女の子は、それを言うことができませんでした。手を取ったその時、お父さんは、口を動かさず、こう言ったのです」
　奈々はそこで、何拍か置き……一気に、言った。
「……『あのくたばりぞこないめ、さっさと死んでくれ。老人介護なんて冗談じゃない』」
　……それは一体、どれほどの衝撃だったことだろう。
「女の子は怖くなり、お母さんに飛びつきました。ですが、お母さんは、こう言いました。
『あの爺さん、早く死んでくれないかしら。せっかく、生命保険もかけてあるのに』」
　秀人となのはは、言葉も無い。
「女の子は、お父さんとお母さんを、責めました。『何で、そんなことを言うの？　お爺ちゃんが死ねばいいなんて、ひどいよ』、と」
　信じていた両親の、醜い本音。それは、少女の心を、ひどく傷つけ

たに違いない。
「お父さんは、女の子を強く叩きました。お母さんは、顔を真っ青にして、助けてはくれませんでした」
その日から……
「その日から、女の子の優しかったお父さんとお母さんは、いなくなってしまいました。。女の子が何を言っても、返事をしてはくれなくなったのです」
家族から、笑顔は消えた。
「学校のお友達も、少しずつ、少しずつ、少なくなっていきました。女の子は、誰の本音でも、聞き取れてしまったからです」
子供というのは、時に残酷だ。残酷に……異端を、排除しようとする。
「やがて、友達が一人も居なくなったころ……お爺ちゃんは、天に召されました。『ありがとう、ありがとう』……と、最後まで、家族への感謝を伝えながら」
……その祖父は、幸せに逝けたのだろう。息子と娘の醜い本音を……孫娘の苦悩も、知らずに済んだのだから。
「お葬式が終わり、帰っていく親戚の人たちは、口々に、お父さんとお母さんを褒めました。『最後まで介護した、立派な孝行息子』『家庭を守った主婦の鑑』と」
誰も、内情など知りはしない。
「女の子は、先に寝室に追いやられました。どうやら、二人でないしょのお話をするようです」
会話など、ありはしなかった。
「女の子は、お父さんとお母さんを、信じていました。きっと二人で、死んだお爺ちゃんに謝っているのだろう。そう思い……二人のいる部屋に、耳を飛ばしました」
思考を遠隔盗聴できるまでに、女の子の能力は成長していた。
「ですが、そこに望んでいた会話は、ありませんでした。悲しみの涙も、ありませんでした」
最後の希望は、打ち砕かれた。

「そのお部屋には……お爺ちゃんの遺したお金の使い道について話し合う……久しく聞いていなかった両親の笑い声が、高らかに響き渡っていたのです!!」
――ガンッ!
奈々が、自販機を殴りつける。
「……女の子は、信じられない気持ちでした。優しかった両親は、いつの間にか……わるい鬼さんに、食べられてしまっていたのです」
両親の豹変を、女の子は、そう解釈した。
「女の子は、鬼退治をする決心をします。両親の心に巣食った鬼を、引きずり出し、握り潰してやろうとしたのです」
両親は、鬼に取り付かれているだけだと。鬼を退治すれば、また優しい両親に戻ってくれると、そう信じた。
「女の子は、両親のもとへ行きました。お父さんとお母さんは、とても怖い顔をして、女の子に手を上げようとしました」
娘に暴力を振るうことに、躊躇いすら消えていた。
「女の子は、両親の心を、一身体から取り出しました。鬼退治の始まりです」
だが。
「ですが、鬼は出てきません。お父さんとお母さんの心は、どこを見ても触っても、真っ黒でした」
その結論は……
「お父さんとお母さんは、はじめから、まっくろい、鬼の心の持ち主だったのです」
もう、限界だった。
「女の子は、真っ黒で汚い心を……粉々に、握りつぶしてしまいました」
「!!」
それは、精神の死だ。
「お父さんとお母さんは、目を覚まさなくなってしまいました」
天涯孤独となった少女は、どうなったのか。

「親戚のおじさんたちは、女の子を、とある孤児院に預けることにしました。……お爺ちゃんのお金は、どうなったのかは知りません。みな、口々に言いました。『あなたのためなのよ』、と」
本当に、彼女のためを思っての行動だったのだろうか。
「新しいおうちは、こわぁい先生のいる、真っ暗なおうちです」
「……」
秀人は、知らず知らずのうちに、拳を固めていた。
「ですが、女の子には、神様がくれた力があります。先生の弱みを握り、脅迫し、自分の身を守り続けました」
奈々が、自嘲する。
「脅しが通じず、殴りかかってくる先生もいました。女の子は、自分の身を守るため……先生の心を、両親にそうしたように、握りつぶしました」
正当か、過剰かはともかく。
「心を握りつぶすとき、女の子はいつも、嫌な気分でした。本当は、そんなことしたくはないのです。ですが、加減ができません。女の子の力は、あまりにも強かったのです」
まして、子供だ。恐怖に駆られ、力の加減を誤ってしまうことも、あっただろう。
「誰かを幸せにするための力は……結局、誰も幸せにしてくれなかったのです」
こんなはずじゃなかった。そう思ったに違いない。
「ですが、自分に言い訳をします。『自分は悪くない。自分に乱暴する皆が悪いんだ』。それは、女の子から、一時の罪悪感を取り払ってくれました」
「……」
「そんなある日、孤児院に、一人の男の子がやってきました。お父さんとお母さんに、捨てられたのです」
「……え？」
きょとん、と秀人が呆ける。
「乱暴ものたちが、男の子に暴力を振るいます。よわいものは、いじめ

られてしまうのです」
どこかで聞いた……あまりにも符合する、その話。
「ですが、その男の子は、やりかえしました。
――びっくりするほどの力で、乱暴者をたおしてしまったのです」
クククッ……と、秀人の顔を見ながら、意地悪く笑う。
「その男の子は、言いました。『お父さんとお母さんは悪くない。悪いのは、僕なんだ』」
秀人の顔から、血の気が引いていく。
「それを聞いた女の子は、ちょっとだけ哀しくなりました。自分が余計なことをしなければ、何も知らずにいれば、今も幸せに暮らせていたかもしれない、と思ってしまったからです」
もし、その男の子が、ただの子供だったなら、そうは思わなかっただろう。だが、その男の子もまた、特別な力を持っていたが故に……
「そう、誰かのせいにして、罪悪感から逃げていたことを、突きつけられてしまったのです」
もはや、疑う余地はない。
「男の子は、別のお部屋に閉じ込められました。部屋を壊したおしおきを、されているのです」
「――!!」
――奈々も、あそこにいたのだ。吹き溜まりのような、牢獄のような……あの場所に。
「その週末、女の子はその施設を『卒業』します。ここを出れば、誰も自分に乱暴はしない。力を使わなくて済む。そう思ったのです」
その時、まだ、奈々には優しさが僅かなりとも残っていたのだろう。
「ですが、外の世界は恐ろしい場所でした。小さな女の子を狙う悪者が、一杯居ました」
世界は、優しくは無かった。身寄りの無い少女を狙う輩など、履いて捨てるほど居る。八神はやてがそうであったように、その女の子も、危険な目にあってきたのだろう。
「身を守るために、女の子は力を使い続けます。ですが、女の子の力は、使えば使うほど、強くなっていきました。やがて女の子は、力を

抑えることを諦めました」
　人は、慣れる生き物だ。どのような変化にも。
「女の子は生きるため、何でもやりました。悪いことをしながら、生きていたのです。神様から授かった力は、悪いことをするのに、大いに役に立ちました」
　子供が身一つで生きていけるほど、世の中は甘くない。それこそ、犯罪にでも手を染めない限り……
「そんなある日、怖い人と出会いました。真っ黒い本を持った、不気味な男の人です」
　その男こそ、大家の言っていた、カルト宗教家だろう。だが、黒い本、という単語が、ひどく不気味な連想をさせる。
「彼は、言いました。『私の元で、働け』と。その男には、女の子の力が、何故か通じなかったのです」
「黒い、本……？」
　そして、十年前。
「その男は、宗教家でした。世界平和という、ありがちな夢想を掲げる、狂信者でした」
　秀人の中で、話が繋がってきた。
「世界平和のためになら……何人死んでも構わない。そういう、男でした」
　そして……
「女の子は、男に協力することにしました。男が怖かったのでしょうか？　いいえ、違います。嫌な思いをし続けてきた女の子は、こう思っていたのです『人間なんて、皆醜いのだから……一人残らず、死んでしまえ』」
「……」
　なのはが、秀人の手を握る。
「女の子は、銀細工が得意でした。お爺ちゃんの血でしょうか？　見る人を惹きつけるような出来栄えです」
　さぞかし、美しい品物だったのだろう。
「男は、言いました。『その銀細工に、ありったけの憎しみを籠めろ』」

銀は、心を映す媒体……奈々自身が、そう言っていた。
「女の子は、喜んで従います。自分の力で、世の中の醜い人間どもに、天誅を下すことができるのです」
嬉々として、従ったに違いない。
丹精籠めて作った銀細工に、積もり積もった憎しみを籠めるのは、きっと容易だっただろう。
「男が、どのような目的にそれを使っているのかは知りませんでした。ですが、女の子は気にしませんでした。他人がどうなろうと、知ったことではありません」
男に工房を与えられ、そこでの作業に没頭した。
「そして、ある日……なにやら、建物が騒がしくなりました。誰かが暴れているようです」
その日は……
「工房のドアが開き……一人のおじいさんが現れました」
大家が、その宗教の殲滅に乗り出した日。
「お爺さんは、言いました。『お主が、コレをばら撒いている者か』。お爺さんの手には、握りつぶされた銀細工がありました。女の子は、犯人呼ばわりされたことよりも、丹精籠めて作った銀細工を壊されたことに、腹を立てました」
たとえ、どのようなものであろうとも、自分の作品に対する愛情は、当時も今も、変わらなかった。
「お爺さんは、女の子を平手で叩きました」
「……」
覚えがあるのか、秀人は冷や汗を垂らした。
「『何故、このような真似をした』。お爺さんは、女の子を問い詰めます。女の子は、いつもそうしているように、お爺さんの心を、握りつぶそうとしました」
必殺の反撃。だが……
「お爺さんの心は、女の子の力でも、握りつぶせませんでした」
規格外。そうとしか言えない。
「『何故、このような真似をした』。お爺さんは、もう一度聞きました。

女の子は、それに答えます。
『醜い人間なんて、死んでしまえばいい』」
本心から、そう言ったに違いない。
「力が通じないと分かった女の子は、そのお爺さんに、積年の恨み辛みをぶつけます。完全な八つ当たりです。ですがお爺さんは、女の子の話を、一生懸命に聞いてくれました。
……思えば、誰かと話をしたのは、とても、とても久しぶりのことでした」
あの大家なら……きっと、そうするだろう。
「『この細工は、誰に学んだ？』……そう聞くお爺さんに、『お爺ちゃんが教えてくれた』と答えます」
歩いているうちに、奈々の店に到着した。無用心にも施錠していなかったドアは、簡単に開いた。
……当時の工房も、この店内のように、雑多な物に溢れていたのだろう。
「お爺ちゃんのことを思い出すのは、久しぶりでした。いえ、もしかしたら、わざと思い出さないようにしていたのかもしれません」
今の自分を、省みないために。
「そうして、女の子は……何故、自分が銀細工を作り続けていたのか、思い出しました」
力だけで生きられたのに、何故、銀細工を捨てられなかったのか。
「大好きだったお爺ちゃんは、言っていました」
祖父の言葉とは……
「『銀は、手入れをしなければ、くすんで輝きを失っていく。そこは、永遠に輝き続ける金やプラチナとは違うところだ』」
銀は、くすむ。
「『銀の手入れは、研磨すること。当然、手入れをすればするほど、銀の表面は、細かな傷がつく』」
小さな子供だった頃には、いまいち理解できなかったことだろう。逆に、ある程度大人になってしまってからでは、斜に構えてしまい、素直に受け入れることもできない。

「『だが、人の手で大事に磨かれ続けた銀は、金にも出せない輝きを得ることが出来る』」
……荒みきっていた心に、祖父の言葉は、どう感じられたのだろうか。
「『傷だらけでもいい。傷だらけだからこそ、輝いていられる……そんな、銀色の生き方をしてみなさい』」
へっ……と、奈々は照れくさそうに笑い、その話を締めくくった。
「まぁその後、その女の子は教主と決別して、悪の錬金術師から、流しの銀細工職人にジョブチェンジしたりして、被害者に売り上げを寄付したりしながら、チマチマと資金を貯めて……」
ぱっ、と両手を広げ、自分の城……店舗を指し示す。
「……海鳴市にて、毎日を面白おかしく過ごしましたとさ。めでたしめでたし。わーい、ぱちぱちぱち」
「……何で、海鳴市だったんだ？」
秀人は、言った。
ぴたり、と奈々の動きが止まった。
「その女の子は、何でわざわざ、海鳴市を選んだんだろうな」
「……」
生家があるわけでもない。これといって客足に影響があるわけでもない。
「……お爺さんに、いつかの返事を返すためじゃないかナー？」
「……返事？」
「『ワシの子になるか？』っていう言葉への、返事さ」
ぼーん、と、柱時計が、午後九時を告げた。
へらへらと、話を終えた。
「まぁ、その女の子の話はさておき……」
ずいっ、と身を乗り出し、一転。まじめな顔をする。
「あんたたちが探してる子が見つかったら……さっきの、ありがたーいお言葉を伝えてあげなさい」
それが、言いたかったらしい。
気恥ずかしくなったのか、赤い頬を隠すように、そっぽを向いた。

「その子って多分、奈々ちゃんのお客様だしさー……なんかの縁だと思うのよね、コレ」
秀人、はやて、大家、奈々……数珠繋ぎのように、知り合いの知り合いが、繋がった。
「なんせ、奈々ちゃ……じゃ、なくて……悪の錬金術師を改心させた、お爺ちゃんの言葉なんだもん！　きっと効果あるヨー！　……ねっ、吾妻秀人くん？」
なのはは、「あれ、秀人さん、苗字教えてたっけ……？」と、首をかしげていた。
「あ、なのはちゃん。ちょーーこっとだけ、おねーさんとお話しようぜ！」
帰り際。奈々は、なのはだけを呼び止めた。
「……余計なこと喋らないでくれよ？」
「ガールズトークに口挟むなヨ！　ほら、出てけ出てけ！」
念を押す秀人を、奈々はしっしっ、と追いやった。
ばたん……と扉が閉まったのを確認したのと同時、奈々は、なのはの肩を掴んだ。
「……フィアットちゃんは、どこ？」
……その、あまりにも真剣な態度と口調に、驚いた。
「え……？　フィアットなら今頃、職場に……」
奈々は、机の引き出しから、折れた金属片を取り出した。それは以前、フィアットが触れた途端、割れてしまったものだ。
「これは……？」
その銀板が、何だと言うのだろう。
「その薄い銀板は、心のリトマス試験紙みたいな物なんだ」
奈々らしい一品だ。
「ここ……見える？」
なのはは、奈々が指し示した部分を注視する。
「捩れてるでしょ？」
「……はい」
確かに、二つに折ったというよりは、変な方向に力を加えて、耐え

切れなくなった状態だった。
それが表すことは……
「……ねじれて、歪んだ心」
……と、いうことだ。
「……まさか、そんな馬鹿な……」
なのはは、首を振った。だが、奈々は大真面目な様子だ。
「……奈々ちゃんの予想は、だいたい当たるよ。特に、人間の心に関しては」
確信と共に言う。
「でもね……歪んではいるけど、腐ってはいなかったの」
その銀板は、確かに破損しているものの……腐食は、していなかった。
「それが最近、端から段々と腐食が始まってきてる」
端から、徐々にくすみが広がり……端に、腐食が見られた。
「だから……フィアットちゃんを、連れてきて。このままじゃあの子……」
――壊れるよ。
そう、言った。
「……！」
なのはは、息を呑んだ。
「今なら、まだ間に合う。頼んだからね」
なのはは、こくん、と頷いた。

帰り際、奈々が、店の出口まで見送りに出る。
「あの、奈々さん……」
「ん？」
「このチェーン……大事にします」
レイジングハートを繋ぐチェーンを、きゅっと握った。
「Ｙｅｓ！　頼んだヨ！」
奈々は、ぐっとサムズアップで返した。
（銀色の生き方……か）

帰り道を歩きながら、秀人は物思いに耽っていた。
（……お父さん。お母さん）
奈々と会ったことで……両親のことが、頭に浮かんだ。
「……秀人さん？」
くいっ、と手を引かれ、ハッと我に返る。
「……何でもない。帰ろう」
それに笑みで返し……
（……俺には、出来ないよ）
心の中で、諦観した。

# A’s編　第七十五話

「……」
一人の女性局員が、廊下を歩いていた。
カツカツとヒールを鳴らし、背筋をピンと伸ばし、歩いている。
「……」
だが、その表情は、浮かない。それもそのはず。今、女性が向かっているのは……
「……ロッテさん、アリアさん、失礼します」
グレアム提督の側近、使い魔たちの部屋。
「……ああ、あなたか」
ベッドの脇に腰掛けたリーゼロッテが、胡乱な目を向け、すぐに視線をベッドに戻した。
「アリアさんの容態は？」
数日前の任務の後、アリアが、片足を失って戻ってきたのだ。
「……今は、寝ているだけ」
確かに、片足を失うというのは重大な出来事だ。だが、ロッテの表情には、それとは別の懸念も見て取れた。
「お父様が、何て言うか」
もしも、これでアリアが使い物にならなくなった、と判断されてしまったら……
「契約を、断ち切られてしまうかも……」
今、昏睡するアリアを存命させているのは、本人の生命力もあるが、それ以上に、主であるグレアムの魔力供給が大きい。もし、その片方が途切れてしまっては……
「……悪い方には、転ばないはずです」
ここ最近、グレアムの理念や行動原理に疑念を覚え始めてきた女性は、言葉を濁した。
「……包帯、お取替えしますね」
アリアの足に巻かれた包帯を解き……血で固まった包帯を、新

品のものと交換する。
傷の縫合が上手くいったのか、包帯に血が滲んでくることは無かった。
「……ロッテ」
その感触で、アリアの目が覚めた。
「アリア！　目が覚めたの!?」
アリアは、こくん、と頷き……女性に、頭を下げた。
「迷惑を掛けます」
「いえ」
女性は、包帯の端っこをカットし、留める。
「闇の書に対抗する、同士ではないですか」
そう。この女性もまた、闇の書の暴走に巻き込まれ、肉親を亡くしている。
「……母親、だったかしら？」
「ええ。……私の、たった一人の家族でした」
吹っ切れているようで……その内に、消えない激情を感じる。
「……最近の、グレアム提督は……」
思わず、漏らしそうになり……思い直すように、口を噤んだ。
「……いえ、なんでもありません」
包帯や鋏などの一式を片付ける。
「……では、失礼します」
二人分の食事を用意し、退室していった。
「……ねぇ、ロッテ」
ベッドをリクライニングさせ、身を起こした状態で、アリアが言った。
「なに、アリア」
「……私たち、きっと地獄行きね」
「……」
「……あんなに純真な人に、隠し事をして……それどころか、利用して……」
「……仕方ない、なんて、言い訳だよね……」

ロッテは、項垂れる。
「逆らおうと思えば、お父様には逆らえる。……結局、自分の命が惜しいから」
「……私たちは、命を共有している。……あなたの命も、惜しいもの」
すっ……と、懐からカードを取り出す。
二人が持つカード、それ一枚には、アリア、ロッテそれぞれの、一日分の魔力がチャージされている。それを解凍することで、自身の魔力消費を抑えるアイテムだ。
だがそのカードは、それらとは違った。
外見は、巧妙に偽装されてはいるが……それは。
「……氷結の杖・デュランダル」
グレアムが、闇の書に対する切り札として開発を進めていたデバイスだ。
「……でもね、ロッテ。おかしいのよ、この機体のシステムは」
「え……!?　まさかアリア、中身を見たの……!?」
驚愕するロッテ。
「ダメだよ、そんなことしたら！　もし、お父様にバレたら……！」
「……このデバイスを直接分解したわけじゃないわ。設計図の一部を、解読しただけ。規制コードには、引っかからない」
まさに、命がけで得た情報だ。
「氷結の特性に特化し、闇の書を完全に封印する……それが、デュランダルの開発コンセプト」
「……」
ロッテも、そう聞いていた。
「でもね、この回路と、システムはむしろ……分断や、解呪に特化されている」
「解呪……？」
ロッテは、ぱっと顔を明るくした。
「お父様はあの子を、闇の書の呪いから助けるつもりなんだ！」
ようやく見えた、父の真意に喜ぶ。自分たちの主はやはり、正義の

側なのだと。
だが……
「……いいえ、違う」
アリアは、それを否定した。
「この術式は、そんな繊細なものではないわ。もっと乱暴な……言ってしまえば、容器を破壊して、中身を取り出す……そんなものよ」
「え……？」
中身を……つまりはやてを破壊し、闇の書を取り出す。
「取り出した後、封印するんじゃ……」
ロッテの予想は、否定される。
「解呪にしたって、そう。取り出した闇の書の……『呪い』だけを削ぎ落として、容器もろとも捨てる形だわ。つまり、お父様の狙いは……」
ようやく、ロッテも気付いた。
二人で、声を揃えて確認する。
「……呪いを解いた、闇の書の力『のみ』を、手に入れること」
……意見は、一致した。
「……お父様、どうして……」
悲嘆に暮れる、二人の使い魔。
「どうして、そんなにも変わってしまったの……？」
二人だけの部屋を、沈黙のみが支配した。
◆▪◆　◆　◆
とある無人の世界に、はやてはいた。
砂漠と荒野と針葉樹林が一面を埋め尽くす、雪も無いのに寒々しい世界だった。
「……ぐぅっ!!」
はやては、胸を押さえて蹲る。
「くうぅ……！　こ、この……!!」
必死に、己の内より湧き出る衝動を、抑えようとしているようだ。
だが……
――ドクンッ!!

「くぁっ……!!」
びくん、と身体を痙攣させ、倒れ付す。
『抗ッタ所デ、無駄ナ事ダ』
はやての体内から、テンタトレスが無情に言う。
『既ニ、汝ノりんかーこあハ、我ガ掌握シツツアル』
リーゼの加護を捨て、管理局との関係も破綻して……はやては、一人きりだった。自力でのテンタトレスからの脱出は、絶望的だった。
『汝ハ、世界ノ破壊ヲ願ッタノダロウ？　ナラバ、我ニソノ願イ、委ネレバ良イデハナイカ。我ノ深淵ノ力ヲ以ッテスレバ、容易イ事』
闇の書を極めた者のみが到達する、最後の、最強にして最凶の、殲滅魔法。
『サァ、我ニ身モ心モ委ネ……『ヴェツレヘム』ヲ、発動サセルノダ』
「うっせぇ……！　願いは……私自身が叶えなくちゃ……意味が無いんだよ……！」
テンタトレスの誘惑を、はやては意地で突っぱねる。
「この、理不尽を強いる世界はブッ壊す……！　けど、お前の言いなりには、ならない！」
――バンッ!!
「あぅっ……!!」
突如として魔力が弾け、はやての華奢な身体を吹き飛ばす。
はやてが制御しきれなくなるほどに高まった魔力が、暴発したのだ。
『無駄ダ。高マッタ我ノ力、ソノ程度デ消耗スルモノカ』
「う、うぅ……!!　ま、負けるもんか……絶対お前を……抑え、込んで……やる……」
そして、何度目かの失神。
『……ナントモ、強情ナ主ダ。歴代デ最モ強キ闇ノ力ヲ持チナガラ、歴代デ最モ、我ガ支配ニ抗ッテイル』
うーん、うーん……とうなされるはやてを知ってか知らずか、テン

タトレスはぼやく。
『……無駄ナ事ナノダ。全テハ、同ジ結末ヘト進ムシカ無イノダカラ』
どろどろと溢れ出る、闇。それははやてを取り巻き、絶えず循環している。
『……無駄ナコト、ナノダ』
その声は、寒々しく、無機質で……寂しそうに、聞こえた。

◆・◆　◆　◆

二人が帰宅した後、会議は終了し、各々解散の流れとなった。
クロノとエイミィは、ユーノ、なのはと共に、情報の整理の続きをしていた。
「クロノ。さっきのあれ……」
クライドの遺言。それは、クロノにとって重大な意味を持つと共に……この事件の、重要な鍵となる情報だった。
「……艦長の推測は、正しかった」
グレアムは、信用できない。それが、リンディの下した判断だった。
今もアースラには、再三にわたる、リーゼの引渡しが要求されている。リンディはそれを、悉く却下していた。
「……あの、ユーノくん」
なのはが、挙手した。帰ってきてから、何か釈然としない様子だった。
「検索に、キーワードを一つ、追加して欲しいんだけど……」
「ああ、いいよ。何て？」
なのはは、まだ少しだけ、躊躇するように一拍挟み……
「フィアット・コルデーロ」
……そのキーワードを、口にした。
「フィアット？」
エイミィは、首をかしげた。
「フィアットの姓は『マセラティ』だよ？　コルデーロなんて名前は……」

「いや、いい。やってみろ」
だがクロノは、ユーノを促した。
「分かった。……キーワード追加、」
写本は、すぐに現れた。
「……これは、」
クロノが、息を呑む。
そこに現れた写本の表題は……
『ＸＬ級次元航行艦『エスティア』・ＭＩＡリスト』……」
ＭＩＡ……ミッシング・イン・アクション。
任務中の行方不明……広義には、戦死者ということだ。
「こんな……この資料は、焼失したはず……」
ぱらぱらと、ページが捲れていく。その、何ページか目に、彼女のパーソナルデータが記載されていた。
――ルカ・―コルデーロ。
「……え？」
キーワードを追加した当の本人が、呆然としていた。
「ルカ・コルデーロ……？」
なのはは……その名に、聞き覚えがあった。
「あの……前に、フィアットから聞いたの。お母さんの名前だ、って……」
「……」
パーソナルデータの写真を、凝視する。
「……」
……似ている。
凛々しい表情のせいで、一見分かり辛いが……確かに、面影があった。
文章を読み上げる。
「ルカ・コルデーロ三佐。当時２６歳。本局武装隊所属。陸戦ＡＡＡランク……すごいね」
思わず、感心してしまった。
佐官にして、陸戦ＡＡＡランク魔導師。しかも本局ともなれば、エ

リートそのものだ。
「当時、１２歳になる娘……フィアット・コルデーロがいた」
「……すごいね」
１２歳の娘ということは、１４歳で出産したことになる。
「……娘の写真があったよ」
次のページに、家族写真らしき一枚があった。
ぶかぶかの佐官の制服を着て、ピースサインをする少女と、苦笑いでそれを見る、姉のようにも見える女性。
――一人は、フィアットだ。
だが、本局のＩＤに、『フィアット・コルデーロ』の名は存在しない。
「経歴の、偽装……？」
エイミィの指摘に、クロノが頷いた。
「……まだ、黒ではない。しばらく、泳がせて様子を見よう」
そう結論し……パーソナルデータの続きに、目を通す。
「ええと、そして、フィアットの父親は……、、な、なぁあああああああああ!?」
……ユーノが突如として奇声を発し、本を取り落とした。
「何だ何だ、騒々しい……どれ、見せてみろ」
それを拾い上げ、覗き込む。
「だ、ダメだ！　見るんじゃない！」
必死に静止するユーノの奮闘も虚しく……
――バサッ。
本が、その手から落ちる。
「……」
クロノが、珍しく口をポカーンと開け、放心し……
「な、なんだってぇぇぇ

「……ふぅ、お、終わったぁあ～～～……!!」
フィアットは、アースラのコンソールに、がっくりと突っ伏した。
なのはが各地で大暴れした件の始末が、ようやく完了したのである。
「なのはさんってば……少しは、わたしの身にもなって下さいよぉ……もぅ」
もたもたと支度をするフィアットに、リンディが労わるように声を掛けた。
「フィアット、お疲れ様」
「あ、か、艦長！　いえ、そんな勿体無い……！」
ヘコヘコと恐縮するフィアットに苦笑する。
「今日はもう、上がってもいいわよ。続きは、エイミィに引き継いでおくわ」
「あ……ありがとうございます！」
ばっ！　と敬礼し、ブリッジを出て行った。

「わーい！　ひっさしぶりの、完全オフだ～！」
軽装の私服に着替えたフィアットは、『自宅』へと軽やかに駆けていた。
「んふっ……おかあさん、おどろくかな～……」
くすくすと、童女のように悪戯っぽく笑う。
そして。
「おかあさん、ただいま！」
自宅のドアを、勢い良く開いた。
『おかえり、フィアット』
……真っ暗な部屋から、出迎える声が聞こえた。
「ただいま！　ふふ、まーた電気点けないで……だめだよ、目、悪くなっちゃうよ？」
『おかえり、フィアット』
ぱちっ、と電気を点ける。
ぼふっ……と、ソファにバッグを放る。

もうもうと立ち上る埃に、顔をしかめる。
「うぷっ……！　お、おかあさん、掃除しておいてって、頼んだのにぃ……」
『おかえり、フィアット』
「さ、おかあさん、ごはんにしよう。　なのはさんから、失敗しないオムライスの作り方、習ってきたんだよ」
『おかえり、フィアット』
「おかあさん、できたよ。ほら、今日はちゃんと上手に出来たでしょ？　ケチャップで名前も書けるようになったんだよ。　……もう、テーブルの上くらい、拭いてくれたっていいじゃない」
『おかえり、フィアット』
「いただきます。……あれ、おかあさん食べないの？」
『おかえり、フィアット』
「え？　食欲無い……？　もう、折角作ったのに……仕方ないなぁ。わたしが食べるよ」
『おかえり、フィアット』
「ごちそうさまでした。おかあさん、あしたはちゃんと食べようね？　……あー、眠い」
食器を洗い終え、ソファにごろんと横になる。
「……おやすみなさい、おかあさん」
……旧型の局員の制服を抱き、眠りに落ちる。
『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』『おかえり、フィアット』
……卓上のレコーダーは、バッテリーが切れるまで、音声を発し続けていた。

# A’ s編　第七十六話

荒野の世界で、はやては何度目かの失神をしていた。
見ているのは……あの少年の夢だった。
『……おい、出ろ』
無愛想な看守が、ベッドに座り、ボーッとテレビを見ている少年を呼んだ。
『……何？』
看守の方も見ず、やや不機嫌に応じる。
声変わりをしたのか、低い声色になっていた。腰掛けるベッドも、少し窮屈に見えるほど。前回見た時よりも、だいぶ経過した後らしい。
『施設長からの呼び出しだ。すぐに来い』
『いま、いいとこなんだけど』
少年の目は、テレビに固定されていた。
『おい、いい加減に……!!』
看守が怒り、声を荒げる。だが……
『……うるさい』
ゴソッ……と、少年が手をついた壁から、奇怪な音がした。
『見終わったら、顔を出してやる。黙って待ってろ』
少年は、振り向きもせずに、右手に握ったものを、看守に投げつける。
――バサッ……
『……』
頭から灰を被り、立ち尽くす看守。その灰の正体は……握りつぶされた、コンクリートだった。見れば、少年が手をつけていた壁の一角が、不自然に凹んでいた。
『チッ……』
口汚く、舌打ちをする。
妙に、デジャブを感じる。そう思ったはやては……自分自身の

ことだったと気付いた。
（……いや、私あんなに舌打ちとかしねーし！）
微妙に同属嫌悪を感じるはやてだった。
テレビを消し、くるっと看守のほうを向く。
その顔は、幼かった少年から、あどけなさと、無邪気さを取り払ったかのような……非常に見覚えのあるものだった。
（……秀人、か）
だがはやてに、驚いている様子は、それほど見られなかった。
（テンタトレス。なんで、秀人の過去が見えている？　お前の仕業か？）
真っ先に原因として思い浮かべたのは、目下はやてを苦しめている攻撃プログラム。もしやこれも、はやてを取り込む手段の一つなのだろうか。
（アノ忌マワシイ男ノ過去ナド、知リタクモ無イ……）
だがテンタトレスは若干、辟易としているようだった。自身を封印した人物のことだ。それも仕方ないのかもしれない。
（我ヲ封印シタ時、彼奴ノりんかーこあノ断片ガ、我ニ備ワッタ機能ニ干渉シ、誤作動シテイルノダ）
全くの誤算で、秀人の過去を知る羽目になるとは思わなかった。
（夢ハ、夢ダ。タダノ映像トシテ、傍観シテイルガイイ）
どうやら、目が覚めるまでは見続ける必要があるようだ。
（チッ。あーあ……）
『チッ。あーあ……』
……綺麗にハモった。
（むっかつく！　秀人のくせに！）
ぶんっ、と拳骨を落とそうとするが、夢うつつでは、それも叶わない。
秀人は、無機質な廊下を闊歩し、施設長の部屋を目指す。
すれ違う職員や、子供たち……その全てから、畏怖の視線を浴びながら。
一体、どのような数年間だったのか……想像は容易かった。

廊下を歩き続け……一際、無駄に豪奢な扉の前にたどり着いた。
ノックも無しに開け放つと、デスクに腰掛けている人物がいた。
『呼んだか、施設長』
……数年前、秀人を虐待していた職員たちの主犯だった。
『い、いや……た、たいした時間は取らせないよ。だから、さ、最後まで、話を、聞いて欲しい……』
傲岸不遜に、秀人を痛めつけていた当時の見る影もない。びくびくと怯え、作り笑いをへらへらと浮かべていた。
『高卒認定試験、合格おめでとう……』
（……へ？　高卒？）
はやては、秀人の顔を見る。高校卒業の年齢……18には、とても見えない。
『君なら合格できると思ってたよ。何せ、全国模試では常に2桁台に……』
どう見ても、中学生程度だ。だとしたら……
『わざわざ、年齢を弄ってまで？』
『……い、いや、手違いだったんだ。ハハ……』
……年齢の改竄。
そんなリスクを犯してまで、秀人にその試験を受けさせた理由は……
『この施設の利用可能期間は……『自立可能な年齢に至っており、それに見合う能力を身に付けている』こと……そして君は、高校を卒業し、企業に就職することが可能になった』
（……ああ、厄介払いか）
すでにこの施設では……秀人は、手に負えない存在となっていた。
『でも、よかっただろう？　これで君は、晴れて一人前だ……ひっ!?』
へらへらとした、機嫌を取るための作り笑い。秀人が、その胸倉をつかみ上げる。
『気付いていないとでも、思ってたのか……？』
孤児や遺児たちを引き取り、維持コストのみを最小限に、自治体か

ら得た補助金をピンハネするのが、この施設のやり口。
だが今は、その金づるであるはずの子供一人に、支配される現状。
常套手段の暴力は通じず、懐柔も出来ないとなれば……あとは、正式な手順に則り、合法的に追い出すまでだ。
『ああ、喜んで出て行ってやるよ』
あっさりと言った。
『そうなると思って、試験を受けてやったんだ』
追い出されることを見越して……取れるだけの資格を取ったのだと言う。
『そ、そうかい……!?　は、はは、いやぁ、寂しくなるなぁ……』
ほっ、と安堵する施設長。だが、次の瞬間……その笑顔は、凍りつくことになる。
秀人は、施設長の胸倉を掴み上げたまま、ずかずかと歩き出したのだ。
『お、おい、何をする！　やめろ！』
引きずられる度に、調度や備品にぶつかり、悲鳴を上げる。
悲鳴を意に介さず、廊下を通過。児童室を通過、食堂を通過し……『職員室』というプレートの掛かった扉の前で、止まった。そしてそのまま……
――ドバンッ!!
扉を蹴破り、ぎょっとする職員たちのど真ん中に、施設長を投げ込んだ。ヤニ臭い職員室は、僅かにざわつく。
『卒業ついでに……』
秀人の言葉に、ざわつきはぴたりと収まった。秀人の放逐については、職員全員が知るところだ。誰もが予想し、対策していたことだが……
『お前ら全員っ！　叩きのめしてやるッ!!』
……あまりにも、遅すぎた。
（私といい勝負じゃん……）
目の前で繰り広げられる蹂躙劇に、はやてはそんな感想を抱いた。
（ククク……ダガ、ダレモ死ンデハイナイヨウダガ？）

（……うるせぇ）
確かに……職員たちは、殴られ蹴られ投げられ踏まれ、散々な目に遭ってはいるが……恐らく、開放骨折かその程度で済んでいる様子だ。
――場面が切り替わる。
秀人は、薄暗く、蒸し暑いトラックの荷台に詰め込まれていた。他にも人は詰め込まれていたが、秀人ほど若い者はいなかった。
『……おい、兄ちゃん』
そのうち一人が、秀人に声を掛けた。
『若ぇのに、こんなコトしてるってこたぁ……相当なことしでかしたか？』
『……別に』
『へへっ……まぁ、仲良くしようぜ。どうせ、行く場所も、帰る場所も無ぇんだからよ……』
……やがて、トラックは止まった。
下ろされたのは、山の合間……適当に整地された平地に、プレハブ小屋と重機が無造作に放置されている、そんな場所だった。
『オラ、並べ！』
助手席に座っていた、スーツ姿の男が号令を掛ける。
『目の前の山ぁ掘り抜け！　工期は半年だ！』
目の前の山……と言われ、全員がそちらを見る。
……どう見ても、ここにある重機や人数では、半年で穴を掘れるようなスケールではない。
『一日の作業時間は18時間、死んでも手ぇ休めるんじゃねぇぞ！』
そんな絶望的な労働条件を突きつけられ、何人かの作業員たちは絶望し、しくしくと泣きだす者もいた。
『ヘッ……ありゃあ、ダメだな。真っ先に潰れるぜ』
先ほどの男が、嘲笑った。
『なぁ、兄ちゃんよぉ……早速なんだが、俺の担当箇所、手伝ってくれねぇか？　な？』
最初から、秀人を身代わりにする目的で近づいてきたのだろう。

『ここを生き残る処世術ってヤツだ。お前はおれに使われて……お前さんは、次に来る別便のヤツから適当に見繕って使えばいい』
……大方、自業自得がたたって、こんなタコ部屋に放り出されたに違いない。
秀人は無言で、馴れ馴れしく肩を組んできた男の手を解き……もくもくと、作業を始めた。
『……シカトこいてんじゃねぇよぉおおおおおおおっ!!』
――バコンッ!!
突如、激昂した男がスコップを振り上げ、秀人の頭をぶん殴った。
『あぁ!? ナメてんのかコラ! 人が折角、世の中ってモンを教えてやってるってのによぉ! あーあ、つっかえねーなぁ!! オラァ!』
されるがままに、殴打される。周囲でも、同じような弱肉強食の潰しあいが始まっていた。
(……サイッテー)
(ソウカ? 寝ル時間ガアルダケ、良心的デハナイカ)
吐き捨てるはやてに、テンタトレスは律儀に相槌を打った。
滅多打ちにされている秀人だったが……やはり、平然と起き上がる。
『へ……?』
スコップを一瞬で奪い……見せ付けるように、握りつぶす。
『……邪魔すんなよ』
変形したスコップを、へたりこんだ男に投げつける。
そして再び、黙々と作業を続けた。
数日が過ぎた。
秀人の仕事はどうやら、重機が通る足場作りが主なようだった。
一抱えはありそうなものから、果ては身長ほどもある巨岩を、人力で移動させ、なんとか整地らしきものを作っていく。
やがて、目に付く岩は取り除かれ、重機が通りだす。
そして……最初の事故が起こった。
『おい、なんだこのショベル! しゃ、車軸が歪んで……! おい、どけええええええっ!!』

……予算をケチって、程度の悪いスクラップ同然の重機しか揃えていなかったのだろう。
常識的な整備の行き届いた重機に慣れていた運転手は、操りきれず、規定のルートを外れ……作業員たちの列に、ノーブレーキで突っ込んだ。
『ひいいいいいいっ!!』
……逃げ遅れたのは、あの、秀人をスコップで滅多打ちにした男だった。
腰を抜かし、助けを求めるように、きょろきょろと周囲を見る。だが……このような場所で、他人のために動く者などいるはずも無い。
そして、暴力的な質量が男をひき潰そうとした時……
『……ッ!』
秀人が、動いた。
男と重機の間に、身体を捻じ込み……
――グ……オンッ!!
重機を、持ち上げた。
地面から離れ、動力を伝えられなくなった重機は、キャタピラを空回りさせ、静止する。
『ど、け……!!』
歯を食いしばり、言葉を発する秀人。
『はひ……?』
『……どけっつってんだろ!』
『ひ、ひいいいいっ!!』
男が退避したことを確認し、重機を放り出した。
ずずん……という重い音を立て、重機が着地する。
『……』
……いくら、一人乗りの重機とはいえ、その重量は1トンや2トンではきかない。
それを、完全にリフトした秀人に、注目が集まる。
『わ、悪い! 助かった!!』
重機を操縦していた作業員が、秀人に駆け寄ってきた。

『兄ちゃん、すげぇなオイ！』
この場所とは似合わない、快活な笑顔でばしん、と背をはたいた。
『……別に』
無愛想にそっぽを向く秀人。
『別に、じゃねぇって！　ウルトラマンみてーだ！』
『……仮面ライダーの方が好きだ』
秀人の返事に、周囲を取り囲んでいた男たちは、最初きょとん、として……どっ、と、笑いが起こった。
『何してんだゴルァァァァァァッ!!』
見張り役の男から、怒声が飛ぶ。
作業員たちは散り散りになり、持ち場へ戻っていった。
いよいよ不動となった重機を、他の重機にくくり付け、トンネルから運ぶ出す秀人と運転手だった男。
『ふーぅ……なぁ兄ちゃん』
タオルで汗を拭った男性が、秀人を呼んだ。
『ん……？　何？』
『名前、なんて言うんだ？　俺は向井。向井鉄郎だ』
……現在の上司、カントクの本名だった。
『……俺は、――――

その先を見ることは無く、はやての意識が、徐々に浮上していく。
（あ……これ、）
それは、夢から醒める前兆だった。それにしては、随分と急だ。
（……敵ダ。アノ男ガ、近ヅイテキテイル）
（秀人が……？）
自分を追い詰めてきたのか……と理解する。
（潰セ！　潰スノダッ!!）
戦意が、テンタトレスに増幅される。
「うぁあああああああああああああっ!!」
痛みと共に、覚醒する。
ほぼ完全に、テンタトレスに飲み込まれてしまった心。だが

……
「待ってたよ、秀人……!!」
――好敵手を迎える喜びが、笑みとなり。
「さぁ……決着を、付けよう!!」
――二度と戻れない日々への郷愁が、涙となって、浮かんでいた。

◆▪◆　◆　◆

奈々を送り、翌日。秀人の部屋に集合する一同。
クロノと、エイミィと、ユーノ。三人の顔は……暗い。昨夜、クロノは二人を呼び出し……『ある作戦』の決行を、告げていた。
――ピッ！
鋭い電子音声のような警告音が鳴ると同時、エイミィ、クロノは顔を引き締めた。
『お話中、失礼します！　こちらアースラ、フィアット陸曹です！』
「どうした……？」
『闇の書の主らしき反応を、補足しました！　座標を、執務官のデバイスに転送します！　中庭にポータルを開きますので、直行して下さい！』
「……了解」
クロノは、通信を終わらせ……エイミィに目配せをした。
「……わかってる。大丈夫だから」
エイミィは、苦渋を押し殺した顔をして、敬礼する。

「……ヒデ坊」
大家が、秀人を呼び止めた。
「何だよ、まさか爺さんも来るつもりか？」
確かに、この妖怪じみた達人の手があれば、雑魚騎士や守護騎士に対する、いい戦力になるだろうが……
「いや、ワシはここで待つ」

違ったようだ。
「帰ってきた時、誰もおらんかったら寂しかろうて」
「……え？」
はやてと、リーゼのことだろう。大家は、二人を待つ……そう言った。
「あの子は、一線を越えてはいるが……根っからの悪魔ではない。そのことを、ゆめゆめ忘れるでないぞ」
「……ああ。忘れたことなんて、一度もね―よ」
性根がひん曲がっていようと、手が掛かろうと……殺人者であろうと。
「あいつは、ここに連れ戻す」

……中庭に開いたポータルを前に、クロノ達は集まった。
「……座標入力」
ヴン……と、ポータルが力強く輝く。だがクロノは、すぐにそこへ飛び込まず、何故かＳ２Ｕを起動した。
「おいクロノ、何やってんだ？　ポータルはこっちだろ」
発動するのは、これまた何故か次元転送。
そちらへも、先ほどの座標を入力する。
ポータルと自前の魔法を見比べ……
「……やはり」
何かを悟ったかのように、頷いた。
「クロノ？」
「よし秀人、ちょっとこっちに来い」
「……ったく何だよ」
秀人を手招きする。秀人は、ホイホイとそれに応じ……
「そら、行ってこい」
――げしっ。
……クロノの魔方陣の中に、蹴り込まれた。
「あーーー

びゅーん……と、いずこかへ飛ばされてしまった。
「……世話の焼けるぼけなすなの。とうっ」
アイは、そちらのポータルが閉じる寸前、自ら飛び込み、秀人の後を追った。

「クロノォおおおおおおおおおおおおおお！　あなた一体何を血迷ったことしてるのよおおおおおおおおおおおおお

憎き闇の書……その主に、積年の復讐を遂げられる。その昏い喜びに、女性は、笑みを零さないように口元を押さえた。
「座標は、通達できたのかしら？」
リンディが、確認する。
「はい、問題ありません」
「そう……では、」
リンディは、手元でコンソールを操作する。
――パシュッ……
……ブリッジのエアロックが解除される。
そして、入ってきたのは……
「……何故」
偽造の座標に無駄足を踏んで、ここにはいないはず……
――パキンッ。
瞬時に形成されたバインドが、両腕を封じる。
そしてクロノは……告げた。
「……フィアット・コルデーロ特務三尉。機密情報漏洩・捜査妨害・次元法違反の容疑で……あなたを、拘束する」
両手に枷をされた女性……フィアットは、虚飾を取り払った、忌々しそうな目で、クロノを見返した。

# A’s編　第七十七話

拘束されたフィアットは、ブリッジを見渡し、艦長席を見上げ……自分を除く全員が、状況を理解していることを察した。
「……隠蔽は、完璧だと自負していたのですが」
普段の、ポケーっとした雰囲気はすっかり鳴りを潜め、冷徹な目つきで、己を拘束するクロノを眺めていた。
「わたしが内通者である事には、いつ頃お気付きで？」
「秀人への懲罰の際、全く予定外の危険地帯に転送されたことが切っ掛けだ。数度にわたる襲撃。君がオペレーターを勤めていた時にのみ……転送に割り込みが入っていた」
割り込みがあったのは事実。
「だが……君の技量なら、あの割り込みは防げた筈だ」
エイミィの代役を任されているのは、伊達ではない。フィアットには、それだけの技術があった。それを見過ごしたということは……
「君は、敢えてそれを見過ごし、痕跡を消去していた」
その痕跡は、いつも不自然に消去されていた。遠隔操作で、システムに干渉しているとばかり思っていたのだが……手元のコンソールで、手作業で直接、その痕跡を消去しているのだとしたら、頷ける。
「フィアット、何で……？」
なのはが……ショックを受けた顔で、フィアットに問いた。
奈々に、話は聞いていた。だが……信頼していた友人に、ずっと裏切られていたという事実は、なのはの心に、酷く突き刺さった。
「……あ、なのはさんっ！」
フィアットは、冷徹な目をなのはに向け……態度を豹変させた。
「先日は、ありがとうございましたっ！」
拘束されているというのに、いつも通りの態度で、なのはに笑いかける。
「え……？　な、何が……？」

その異常さに、なのはも気付いた。
「やだなぁ、オムライスの上手な作り方ですよぉ」
「フィアット、あの」
「ほんと上手に作れて……おかあさんも、すごく喜んでくれました！」
会話だけを聞くと、ただの世間話だ。
だが……事情を知った、なのは達にとっては……
「フィアット。あなたの、お母さんは……」
「お母さんは、体調が悪くてあまりたくさんは食べられなかったんですけど、」
「フィアット、聞いて」
「そのせいなのかなぁ。最近、あまり家にいなくて……」
その目は……なのはを見ているようで、誰も、何も、映してはいなかった。
「フィアット。ルカさんは、十年も前に……!!」
なのはが、必死に言葉を届かせようとする。だが……
「――――うるさいッ!!!」
……誰もが初めて聞く、フィアットの切り裂くような声に、かき消されてしまった。
「おかあさんは、遠くまで出かけてるだけだ！　闇の書の事件さえ終われば、すぐに帰ってくるんだ！」
こうまで頑なに認めないということは……恐らく、気付いているのだろう。母が既に、この世の人ではない、ということに。
「おかあさんは、死んでなんかいない!!」
だが……認めない。認めるわけにはいかない。認めてしまったら……崩れてしまう。
母への愛と、闇の書への憎悪。
それは、すでに分離することの出来ない物だ。
闇の書を憎み続けることでしか、母を愛せない。
――捩れ、歪んだ心。
奈々が言ったのは、そういう意味だったのだろう。

「……フィアット」
なのははは……いや、そこにいた誰もが、それ以上声を掛けることができず……
「……!!」
……フィアットの挙動を、見落とした。
――ピピピッ!!
フィアットはカード状の機器を起動させ、バインドを解除し……コンソールを、神業の如き速度で操作した。
「くっ!! 何を……!」
腕を取り、物理的に拘束する。エイミィは、恐らくは最後の悪あがきであったであろうその操作をキャンセルしようとした。だが、既に遅く……
「……駄目。転送先の座標が、ジャミングされてる……」
これで、秀人とアイを手助けすることができなくなってしまった。
「……これも、グレアム提督の指示か」
「……あはは……あはははははははは!! やった!
これで、全部カタがつく!! 闇の書も、ここで全部おしまいだぁ!
あはははははははは!!」
哄笑するフィアット。彼女はそのまま、連行されていった。
「……モニターと音声だけは、なんとか回復させたよ。でも、現地に転送できるまでは、まだ……」
エイミィが、状況を告げる。
「映してくれ」
「了解」
そして、モニターに現地の映像が映りこむ。
そこには……
◆▪◆ ◆ ◆
「……っと!」
転送され、危なげなく着地する秀人。だったのだが……
「とーう」
――どかっ。

後から着いてきたアイの着地台にされ、地面に倒れた。
「お前なぁ……」
咎める秀人だったが、今はそれどころではない。
周囲の状況を見る。すると……
「……ここって、」
荒野と、渓谷と、針葉樹林が延々と続く……寒々しい世界。
はやてと一月ほど過ごした、あの世界だった。
「……」
はやてと、初めてまともに出会ったのも、この世界だった。
「あっちだ」
秀人は、迷うことなく歩き出した。
『修練の門』での戦闘の際、生活拠点であった洞窟は崩落してしまったが……
「……よっぽど、悔しかったんだろうな」
アイを伴って歩きながら、秀人は言う。
「だからって、どうして山篭りを実践するかなぁ、あいつは……」
思えば、はやては秀人に初対面から攻撃的だった。
いや、別に秀人だけに限った話ではないが……秀人だけは、はやてにとって特別だった。
はやてはああ見えて、決して自分からは他者に関わろうとしない。それはきっと、事故後の出来事からの、他者への不信感が根強く残っているからだ。
だが、それを飛び越えて……はやては、秀人に突っかかってきた。
僅か一ヶ月ながら、はやての素というものに、触れた。
行儀が悪く、口が汚く……手が早く短絡的で短気で我を失いやすく単細胞で……
「でもまさか、あそこまで強くなるとはなぁ……」
負けず嫌いからくる向上心と、それを実行する行動力。戦闘になれば機転も利き、秀人を指示する場面も出来てきた。
その成長を見守るのは……楽しかった。追い越されまいと、自身の鍛錬にも気合が入った。

「……ま、俺も得るものは大きかったわけだが」
魔力資質のコントロールと、新たな力、圧縮。
それらは、はやて無しには得られなかったものだ。
「……ねぇ、ぼけなす」
と、黙って聞いていたアイが、聞き返してきた。
「アイは、おまえが闇の書の主に対抗するため、作られた」
ヴィータとの初戦闘において、レイジングハートの共有が限界に達し……秀人は、レイジングハートとの契約を解除することに決めた。
レイジングハートは当然、怒って暴れて泣いて、それはもう散々な状況だった。
「闇の書が無ければ、おまえはまだ、姉上をなのはと共有し続けていた」
ジュエルシード事件という、大きな危機が去り……平穏な生活は、緩やかに続いていた。
「闇の書が無ければ、アイが造られることは無かった」
そういった点では……アイは、闇の書の因果によって生まれたようなものだ。

「――アイの力を使えば、闇の書を、存在の根底から滅することが出来るの」
秀人は、立ち止まり……アイを見る。その瞳には、虚飾も誇張も、存在しなかった。
「おまえは……アイとの契約を、望む？」
今、この局面で……アイがその話を蒸し返す、ということは。
「このまま挑めば、おまえは負けるの」
復活した闇の書と、秀人。彼我の力量差を計算した、その結論。
「……」
「正直、アイは『今のおまえ』とは契約を結びたくは無いの」
何度も言うけど……と前置きする。
「……おまえは、自分の命を全く省みていないの。そんなんじゃ、遅か

れ早かれ、自滅するの」
アイは、常日頃から言っていた。『自分の身を大事にしろ』と。
「アイの力は、おまえにとって追い風になるの。届かない『あと一歩』を到達させる、幸運の追い風に。けど……お前が破滅へと歩むのなら、それを後押しする凶兆の風になってしまうの」
力は、ただ純粋に力なのだ。どう使うかによって、良い結果も、悪い結果も呼び込む。アイは、後者を恐れていた。
「……でも、今はその『力』が、必要とされている時なの」
アイは、秀人の専用機として、秀人を守るため、この世に生を受けた。
今まさに、秀人が死地へ向かおうとしているのであれば……その力にならずして、何が専用機か。
「……本当は、おまえがちゃんと、自分を大切にするって言ってくれてから……」
苦悩を吐き出すアイ。だが……
――彼方から、凶悪なまでの魔力反応が飛来した。
「、ッ!! ぼけなす! 伏せるのっ!」
!!! アイ、伏せろッ!!」
ぴったり同じタイミングで、秀人とアイは、お互いを押し倒すように、地面にダイブする。
――ズガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンッ!!!!
……着弾し、猛烈な勢いで炸裂した攻撃。その衝撃は、地面を捲り返し、撒き散らされた爆風は、秀人たちを容易く宙に放った。
「何だ今の、砲撃か!?」
「いや、違うの。砲撃では無い……でも、射撃でもない」
その正体に気付くより早く。
――――ギィィィ

「……」
アイは目を強化し、その正体を探る。
「……なんと」
「アイ！　あの攻撃の正体は何だ!?」
アイを小脇に抱えながら、その流星から逃れる。秀人は、思考のほぼ全てを回避に費やす必要があるため、自ら観測することはできない。
「弓矢、なの」
思わず、理解までの一瞬、ラグが生じた。
弓矢。戦闘において、全く遭遇したことの無い攻撃手段だ。
「離れれば不利なの！　距離を詰めるの！」
威力が減衰するまで離れることも考えたが……あの速度、あの威力。とても、射程の外に逃げる余裕があるとは思えない。
砲撃と違うところは……敵の真上に仰角で打ち上げてしまえば、重力で落下してくれるというところだ。直線で射れなくとも、魔力の塊で爆撃することができてしまう。
「……くそっ！　馬鹿みたいな魔力で乱射しやがって！」
初戦のような、むやみやたらな乱用ではない。必要十分な（それでも、常人には致死量だが）魔力を、最適な形で運用している。
直上から降り注ぐ流星を回避し、爆風に煽られ、身体をいくらか削られ……
――ギィイインッ!!
次弾は、真正面。
爆撃に注意を払っていた秀人には、不意打ちだった。
「！」
だが秀人も、ただむやみに避けていた訳ではなかった。
破壊力を発揮するのは、矢の先端……鏃の部分。
「ここだっ！」
矢柄を横合いから掴み取り、軌道を修正。矢が飛んできた方向へ、投げ返した。
――ガゴォオオオンッ!!

正確に迎撃され……だが、発生した閃光で、視界が曇る。その僅かな隙を見逃さず、一気に距離を詰めていく。
辿りついた先は……崩落した渓谷の、岩石の山。
その頂上に、はやてがいた。
「あ……やっぱり、秀人だ」
常日頃から愛用していた魔剣を変形させたらしき弓を手に、亡羊と佇んでいた。
「……ひっでぇ格好だな」
思わず、秀人は苦言を呈する。
はやての姿は……言ってしまえば、異様な風体だった。
肩まで伸びた髪は、白銀と漆黒……単色であれば美しいそれも、マダラに混ざってしまっては、見苦しいだけだ。
甲冑を生成し損ねたのか、装甲やジェネレーターが中途半端に身体に付着し、無残な様相を呈している。
「うるさいな……関係ないだろ」
弓を魔剣へと変形させ、だらりと提げた。
……まだ、会話をするだけの理性は残していた。
思考の大半は、既にテンタトレスの支配下に置かれている。
はやては、少し濁った目で……それでも秀人を、見据える。
「秀人」
闇の書の支配を受け……それでも尚、はやては望んだ。
「勝負だ」
……秀人との、決着を。
「……ああ、いいぜ」
連れ戻すとか、どうとか……そのような些事は、頭から消えた。
全てを捨て去り……最後に叶えたいと望んだ、はやての願い。ならば……
「――全力で、相手してやるッ!!」
応えてみせるのが……男というもの！
――バゴンッ!!
大地を蹴り砕き、はやてに肉薄する。

「……!!　来い!!」
はやては……好戦的な笑みを浮かべ、それを迎え撃つ！
――ビキィイイイイイイイイイイイイイインッ!!
強化した拳と、魔剣。
衝突し、火花を散らす。
「お……おおおっ!!」
力で押し切ろうと、力を籠める。
「カートリッジ、ロード！」
――ガキュンッ!!
はやては、魔剣に魔力を注ぎ込み、拮抗させる。
秀人は、残った左拳を振り上げる。だがはやては、それを読んでいた。
「はぁっ!!」
拮抗を崩すように、跳躍。
「お……ッ？」
がくんっ、と体勢を崩した秀人の腕に、足を絡めて捻じ切りにかかる。
「……うおりゃあああああああああああっ!!」
秀人は、はやてを巻きつけたままの腕を、地面に振り下ろす。
「……ブラッディ・ダガー！」
はやては、誘導弾を生成。
――ドガガガガッ!!
秀人の顔面めがけ、滅多打ちに乱射した。
「がぁっ……!!」
何発かは直撃したが……それに構わず、腕を振り下ろす！
――ドゴンッ!!
背からまともに叩きつけられ……呼吸を一瞬、止めた。
「あ、ぐっ……!!」
まだはやては、秀人の腕関節を極めたまま。
「……あああああああっ!!」
――ベキンッ!!

……秀人の利き腕を、へし折った。
「この……程度ッ!!」
秀人は、肉体の性能でゴリ押しにかかる。
だが、はやてが欲したのは、秀人の片腕を潰すことではなく……治癒までの一瞬を、稼ぐこと。
――ガチンッ!!
秀人の四肢を、バインドで固定。
「フランメ・シュラーク!!」
胴体直撃の一撃。四肢を拘束された秀人には、回避は難しい。故に秀人は……
「だあああああっ!!」
――ゴ、ゴンッ……!!
唯一、自由に動かせる頭部……ヘッドバッドで、焔の拳を迎撃した!
「うぐっ……!!」
砕けた……のだろう。だがそれも、テンタトレスの膨大な魔力による修復で、回復する。
「……はぁあああっ!!」
バインドを破壊し……
――ズドンッ!!
渾身のアッパーを、はやての胴体に叩き込んだ!
「あぐぅ……ッ!!」
冗談抜きに、内臓が損傷した。
――ドズッ、ドゴォッ!!
宙に投げ出されるはやてに、容赦の無い連撃をかます。
ドサッ……と、地面に落ちるはやて。
「うおおおおおおっ!!」
――ボゴォッ!!
その土手っ腹を、サッカーボールにするかのように、蹴り飛ばす!
「……はぁ……!」
秀人は、腹部に食い込んだ魔力刃を抉り出す。あの攻撃の最中、反

撃されていたようだが……ダメージ差は歴然だ。
――おかしい。
アイの見立てでは……秀人は、負けると言われていた。だが、今は明らかに、秀人が圧倒していた。
「……立て！」
秀人が、はやてに怒鳴る。
「手加減なんてしてんじゃねぇ!! お前の全力を、ぶつけてこいッ!!」
そう。確かにはやては、手加減していた。何も、技術を出し惜しみしていたわけではないが……
「……いい、の？」
ゆら……と、立ち上がったはやては、恐る恐る、といった調子で、聞いた。
「全部、出しても、いいの……？　もう……我慢、しなくて……いいの……？」
抑えられた口調。だが、その裏には……抑えきれないほどの、歓喜があった。
「私……たぶん、あんたを……殺しちゃう、よ？」
脅しではなく、確信の言葉。
「ああ。来い、はやて……、テンタトレス！」
秀人は、笑みさえ浮かべ、受け入れる覚悟を決めた。
はやての闇を。
テンタトレスの力を。
――はやての、全てを。
「う……!!」
――バチィッ……!!
取り巻く空気が、スパークする。
『うァあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ!!』
はやてとテンタトレスの咆哮が、重なった！
――バォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!
解き放たれた膨大な魔力が、旋風を生み出す。

その中で……はやては、武装する。
左右非対称の戦闘装束を纏い……完全な白銀に染まった頭髪は、腰にまで伸長する。
そして、最も顕著な変化は……身体の成長。
――バサッ……！
展開したスレイプニルが、周囲を覆っていた旋風を撒き散らす。
その姿は、以前見たのと同じ……いや、それ以上の力を秘める、
「――『闇統べる王』……」
武装を完了した『闇統べる王』……はやては、何故かまだ、仕掛けてこない。
「アイ」
秀人は、傍観に徹していたアイを呼ぶ。
「なに？」
今度は茶化さず……秀人の傍に、寄ってくる。
「俺はまだ……自分の命が、大事かどうかわからない」
「……そう」
哀しげに、目を伏せる。
「でも、俺はまだ、ここで死ぬわけにはいかない」
はやてを、助けるまでは。
「――お前の力が、必要だ」
秀人は……契約を望んだ。
アイは、僅かに逡巡し……
「……了解、なの。『マスター』」
――パシュッ……
その身を、晒した。
現れたのは……空色に輝く、宝玉。
『我との誓約を望む者よ』
声は変わらず……しかし、厳かだ。
『汝が名を、我に捧げよ』

「……吾妻、秀人」
『我が名を、汝に捧ぎ……誓約の証とせん。我が名を、我に重ね告げよ』
そして……秀人の前に、文字が表示される。
ミッドチルダとも、ベルカともつかない……だが、秀人には理解できる。発音ではなく、『意味』として、脳にするりと入り込んできた。
「……いい名前だ」
秀人の、率直な感想に、アイは僅かに、笑うような気配を見せた。そして……
『「 我、使命を遂げる者なり 」』
……契約が、始まった。
『「 誓約のもと、我が力を、意思と束ねん 」』
眩いまでの光……いや、炎が、辺りを眩く、暖かく、照らし出す。
『「 涙を炎に。慈悲の光を、その腕に」』
それは、レイジングハートのものと、どこか似ていた。違うとすれば……
『「そして、我が名を告げるべし――!! 」』
そこに籠められた、意思の強さ。
「『 我が名は!! 』」
――――――――!!!
蒼き炎が……地平線の向こうまでを、余さず照らし出した――
――

# A’s編　第七十八話

なのは達は、アースラのブリッジで、秀人とはやての決闘を見守っていた。
予想と反して、終始、秀人が圧倒しており……
――画面の中、秀人のボディブローが炸裂し、はやての身体が紙のように宙を舞った。落ちたはやての腹を、これまた容赦なく蹴り上げる。
「うっ……！」
その、情け容赦の無い攻撃に、顔を逸らしたい衝動に駆られた。
『手加減してんじゃねぇっ！』
秀人の怒声を浴び、はやてが起き上がる。
……非常識なことに、ほぼノーダメージだった。
『来いよ、はやて……、テンタトレス！』
その名を呼ぶ。
モニター越しでも分かるほどの、巨大な魔力があふれ出す。そして……
『『うァァァ

『……教育プログラムを途中で放棄するような破天荒でも、私を敬わない無礼者でも、家事をしない怠け者でも、秀人を独占したつもりになっている不届き者でも……もちろん、秀人はまだ私の使用者です。ええ。譲るものですか、そこだけは』

ちょろっと独占欲を覗かせていた。

『それでも、あやつは私の……自慢の妹なのです』

画面の向こうで……秀人とアイが、何かやり取りをしている。轟々と吹き荒れる旋風に遮られ、内容は伺えないが……恐らくは。

『信じましょう。アイを……秀人を』

「だいじょーぶだって！」

不安がるなのはの肩を、フェイトが抱き寄せる。

「ひでとは、ここぞというときは、ぜーったいにまけないから！」

ユーノも、アルフも……ブリッジにいる全員が、同意した。

「秀人さん、アイ……！」

なのはは、モニターの向こうの秀人を見て……

「――――……頑張って！」

声援を、送る。

『「『　我が名は――――！』」』

そして秀人は……その名を、告げる。

「『　――――イモータルハート！　』」

――――……!!!

巨大な火柱が屹立し……暗雲を焼き払い、天を焦がした。

◆▪◆　◆　◆

『誓約完了……通常起動。イモータルハート、全機能正常』

天を焼いた火柱は、その言葉に従うように、一気に収束した。消えたのではない。秀人の身体を覆い、取り巻いたのだ。

それは、『闇統べる王』の武装シークエンスと、同一のものだった。

「……」
右腕を掲げる。
――バキィイインッ!!
その腕に、手甲が現れる。下腕だけではなく……指先から肩までを隙間無く覆う、曲線を帯びた、堅牢な手甲だった。
――……ガキンッ!!
背面に鋭角的な突起を備えた装甲が、展開される。左肩には、無骨でブ厚いショルダー。下半身には、膝にハードポイントを備えたブーツ。
それぞれが、非常識なまでに強固。
『武装完了』
だが、それらは……この第一形態にとっては、申し訳程度のものだ。
――右腕。
秀人の右手には、無尽蔵に魔力を吸収・蓄積する、ロストロギア級の魔力結晶が埋め込まれている。
それは、武装に呼応するかのように表出し……眩い光を放っていた。間違いなく、一撃一撃が、必殺級の威力。
右腕の破壊力が突出した、歪な……だが、秀人に最適化された、武装形態だった。
今や、秀人の放出する圧力は、目の前のはやて……『闇統べる王』と十二分に比肩し得るほどの段階に達していた。
「……」
「……」
武装を完了した二人は、言葉は無しに、一歩一歩……間合いを詰めていく。
――こつんっ。
右手の手の甲同士を、挨拶のようにぶつけ……
――ドゴガガガガガガッ!!!!
嵐のような拳の連撃が、応酬される！
「うおおおおっ!!」「……!!」
――バチィイインッ!!

相殺しあった余波が、二人を引き離す。
『Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ！』
「ファイアッ!!」
――ドゴンッ!!
アイの独自詠唱により、魔力砲が発射される。
『ハハッ、ヌルイッ!!』
「ナイトメアッ!!」
だが、テンタトレスもそれにピタリと合わせてきた。同サイズの、漆黒の魔力砲が発射され……
――……ボンッ!!
ブレイズキャノンを貫通。
『ソンナモノ、通ジルカァっ!!』
魔剣を振り上げ、魔力砲と共に、秀人に迫る！
「くっ！」
防御しようとする秀人。だが……
『避ける必要は無いの』
――ボシュッ……
……はやての砲撃は、秀人の魔力結晶が輝いたと認識した瞬間……霧散した。
「ッ……!!」
魔剣を振り上げたまま、驚愕する。だが、振り下ろすことは中断しない。
炎の魔剣。現存するいかなる剣をも凌駕する、はやてのメイン武器。あらゆる敵を両断する、必殺の刃。
『打ち返すのっ!!』
「……！　応っ！」
秀人は、右拳で応戦する。
秀人の装甲と、はやての魔剣。はやてとテンタトレスの目算では、強度はほぼ互角。打ち合い拮抗し、カートリッジで押し切れる……そう思っていた。だが。
――……ギュィイイインッッ！

秀人の魔力結晶が、先ほど霧散させた魔力を瞬時に吸収。そして……

――バキィンッ!!!

魔剣を、一撃の下に叩き折った!!

「!?」

『ナ……!!』

影を操り、咄嗟に三層の防壁を築いたテンタトレスも、流石と言える。しかし……

――ゴ……バンッ!!

拳の威力は微塵も衰えず……はやてを打ち伏せた。

『……自分の魔力の味は、どう？　……なの』

『オノレ……!』

アイの挑発に、テンタトレスが噛み付く。。

『……マスターの体表に、スターライトを応用した無効化フィールドを形成。魔力攻撃を霧散させ、純粋魔力に還元し、右手の魔力結晶に吸収。それを瞬間放出したの』

なんでもない事であるかのように、言った。

『マスターを守る。それが、アイの本分なの』

つまり、武装した秀人を魔力攻撃で傷つけることは困難であり、かつ、強固な鎧が物理攻撃をも阻む。もし傷つけたとしても、秀人自身の肉体の性能で、瞬時に回復してしまう。

そして……秀人自身の魔力の消耗は、ほぼゼロなのだ。いや、それどころか……敵が攻撃すれば攻撃するほど、秀人の魔力は、無尽蔵に高まっていってしまう。

反則級の性能だ。

『……コンナ、モノォ!!』

はやては、傷を癒して立ち上がり……折れた魔剣を修復する。

『ナラバ、鎧ゴト断チ切ルマデッ!!』

――ガキュンッ、ガキュンッ!!

カートリッジを二発ロード。魔剣の内部に、魔力を充填する。内部に通じさせた魔力までは、アイでも霧散させることはできない。

『受ケルシカ能ノ無イ、腰抜ケガァァァァァァッ!!』
――ガギイイインッ!!
拳と魔剣が衝突し、火花が散る。強化の恩恵か、今度は折れない。
そして、同じく内部に魔力を通された影たちが、全方位から秀人に襲い掛かる！
『受けるしか、脳が無い……？』
ぴくりと、アイが反応する。武装と化しているため、表情は伺えないが……気に障ったらしい。
『……そう。なら……マスター。今こそ』
「よし……いくぞッ！」
秀人は……新たな力を、解き放つ！
「――――ロード……『インパクト』カートリッジ!!」
――ガシュンッ!!
腕輪のように偽装されていた弾倉が、一つだけ右に回転する。薬莢が一つ、排出され……
「……リリースッ!!」
――――……ゴッパァァァァァァ

カートリッジ。汎用性はゼロに等しいが……その性能を、テンタトレスは身をもって知ることとなった。
『……マスターの使える術式が少なくて助かったの。覚えの悪さも、たまには役に立つの』
「一言多いっつーの！」
これが、なのはやフェイトのような、多彩な術式を使い分けるような魔導師には、使い道に困る装備だが……秀人にはぴったりの装備と言える。
『汝、下ガレッ!!　魔剣ヲ魔弓ト変ジ、遠クヨリ、ヤツヲ射ルノダッ!!』
はやては、その衝撃波に抗おうとせず、ソレを利用し離れようとする。確かに、それはそれで正解だ。
いくら、攻撃を無効化し、跳ね返せるとはいっても……敵が逃げてしまっては、意味を成さない。
スレイプニルを羽ばたかせ、地平線近くにまで飛び去っていく。手にした魔剣が、弓へと変形しようとする。
だが。
『もう一発！』
「ロード……アクセルカートリッジ！」
――ガキンッ！
薬莢が排出され……背部の装甲に備えられた突起が、可動する。
――ヒュイイイイイイイイイイイン……!!
そのスリット内部に、炎が灯り……
「リリースッ!!」
『――Ｔａｋｅ　ｏｆｆ　！』
――ズパァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンッ!!!!
破裂音を残し……秀人は、瞬時にはやての目の前に迫っていた。
「ロード……インパクトカートリッジ!!」
拳を腰溜めに構え……推進力をそのままに、はやてに突貫！
「……！」
『シュヴァルツェ・ヴィルクングッ!!』

はやてもまた、拳に魔力を集中し、迎撃する。
通常状態ですら、Sに届く威力の近接攻撃魔法。テンタトレスの力も加わった今、それは超級の一撃となる……はずだった。
「ぐ、うう……!!」
だが、押されている。ただの、初歩攻撃魔法に。
――バチィインッ!!
「うぁあああっ!!」
押し負け……落下する。
――ドンッ!!
秀人が、再び間合いに飛び込んでくる。受けることは、不利にしか働かないと学習し、防御を固める。乱打の中……はやての脳裏に、記憶がフラッシュバックした。
――まあ、腕力に腕力で対抗するのも、十分にアリじゃ。それで凌げる時は、そうするがいい
「……!!」
その瞳に……一時的にだが、正気の光が灯る。
――じゃが、どうしても、腕力同士では押し負けてしまうときも来る。『剛』の力に対抗できない時は……
「力で、対抗できない時は……」
『汝！　何ヲシテイル!?』
だらりと、全身を弛緩させるはやてに、テンタトレスが吼える。
だが、はやては弛緩を崩さず……
「……おおっ!!」
秀人が正拳を打って来るのを、身逃がさず。
――『柔』の力で、受け流すのだ
「受け、流すっ……!!」
すうっ……と、撫でるように、秀人の腕に触れ、優しく摑み……
「……！　はぁっ！」
――ドォンッ!!
一気に引き寄せ、反転。秀人の身体を、大地に叩きつけた！
『な……投げ技!?』

アイも、これには驚愕していた。
「いってぇ……！」
秀人は、衝撃をモロに受け、悶絶していた。
そう。いくら堅牢な鎧といえど……内部に浸透する衝撃までは、殺せない。
はやてが秀人に初めて与えた、有効打だった。
スレイプニルを収納。魔剣も捨てる。
まだどこか、ぼうっとした目をしていたが……確かに、変わった。
「……！」
秀人が、ハイキックを仕掛ける。
はやては、その場に屈みこみ……
――すぽんっ！
秀人の軸足を払う。
「くっ!?」
遠心力で、勝手にバランスを崩す。その足を空中で掴み……膝十字固めに持ち込もうとする。
「うおっ……!?」
慌てて退避し、はやてを振り払う。
『汝……ナンダ、ソノ珍妙ナ技ハ……？』
テンタトレスも、大いに戸惑っていた。
「……」
だがその目には、未だ正気は見当たらず……
『……マァ、ヨカロウ。我ハ、反応速度ノ強化ニ徹シヨウ』
「はぁあああああっ!!」
再び、正拳突き。間合いも適正。速度も威力も十分な一撃。
――打撃には、まぁいろいろと種類があるわな。威力重視であったり、速度重視であったり……だが、大陸の方では、独特の打撃があってのう。それは、敢えて敵の間合いに深く踏み込み……
「……間合いに、深く踏み込み……」
はやては、防御せず……するっと、秀人の間合いに深く踏み込んできた。

明らかに、深すぎる間合い。
――密着状態から、瞬発力で放つ。
「……密着状態から、瞬発力で……放つ！」
震脚。地を蹴る力を、全身を回路とし、伝達し……！
――ドンッ!!
「ぐはっ……！　これ、爺さんの……!?」
『寸頸!?』
重い衝撃に、息を詰まらせる。
――『力み』から生まれる破壊力もあれば、『脱力』から出ずる突破力もある。体を、液体にも等しく弛緩させ……
「液体にも等しく、弛緩させて……」
「チッ……！」
秀人が、ガードを固めようとする。だが、それよりも早く。
――鞭のように、振るうのじゃ
「鞭のように……」
はやては、極限まで力を抜き……
「……振るうっ！」
――スパパパンッ!!
拳が霞んで見えるほどの、高速の連撃を放った！
「あ……？」
ぐらり、と、秀人が眩暈を起こしたように揺らぐ。
計三発。その全てが、秀人の顎を的確に打ち抜き、脳を揺らしていた。
「くっそ……効いたぁ～……!!」
ふらふらと、ダウンから立ち上がった。
「やっぱお前、天才だわ……」
「……」
無言で……再び、弛緩の構えを取る。
「でもな」
その眼前に、唐突に秀人が現れる。テンタトレスによって、反射能力を強化されているはやてですら、まともな反応ができなかった。

「こちとら、免許皆伝だッ!!」
――ド、ドンッ!!
意趣返しの連撃が、はやての鳩尾にめり込む。こちらは、やや威力を重視した連撃。
「……」
間合いを詰め、寸頸を仕掛けるはやて。
「二度も喰らうかっ!!」
秀人はその場で反転し、はやてとの間合いを縮め……
「……どあぁッ!!!」
――ズンッ!!
背中全体を、はやてにブチ当てた！
「……!!」
ズザザッ、と後ずさるはやて。
「へっ……どうだ！」
勝ち誇る秀人。
「……ふふ」
はやては……笑った。
開始から、いまだ15分ほど。
二人の同門生は、その決闘……否、『試合』に、没入していった。

# A’s編　第七十九話

――ガコンッ!!
――ドズッ!!
――バキィッ!!
荒野に、戦闘音が連続して響き渡る。
秀人と、はやて。
共に、強大な魔力を持ちながらも、それらは相殺し合うため、派手な魔法戦にはならず……『殴り合い』という、闘争の基本へと立ち戻っていた。
「おああああああああああっ!!」
「うぉりゃあああああああああっ!!」
――ゴギッ!!
秀人の掌打がはやての胴体を捉え、はやての拳が秀人の顔面を抉る。
「ぐふッ……!」
のけぞる秀人。
「！　あああっ!!」
それを、前蹴りが追撃する。
――ガシィッ!!
秀人は、その蹴りを腋で掴み取り、ぐるんっ、と合気の要領で逸らす。だが当然、投げて終わりとはいかない。
「うおおおおっ!!」
足首を掴み、はやての身体をまるで、団扇のように振り回す。そして、その勢いのまま地面へと叩き付ける。
フローターフィールド等で、衝撃を吸収しようにも……ここは既に、秀人の間合い。外部で魔法を使おうものなら、例のフィールドに分解されてしまう。だが、『体内を強化する魔法』は持ち得ない。
「……ふぅっ!!」
故にはやては……師より学んだ『技術』を、実践した。

呼吸を深く行い、体内で気を練り上げる……内巧。
――ドバンッ!!
「……!!」
大地に叩きつけられて尚、はやてはまだ、余力を残せた。
秀人の手を振り払い、姿勢を持ち直す。
「……シッ!!」
短く漏れる吐息。
放たれるのは、高速のストレート。
それを凌ぐ秀人の腕を取り、関節技。
返されると、今度は防御に回る。
「はは!」
知らず知らずのうちに、はやてはまた、笑みを浮かべていた。
「っしゃ、もういっちょ来い!」
相対する秀人もまた、笑顔だった。
殴る、蹴る。ただ羅列してしまえば、いかにも殺伐とした言葉だが……
「はぁあああっ!!」
「だりゃああっ!!」
その応酬の、なんと楽しそうなことか。
その拳、その蹴りの一つ一つは、間違いなく本気の一撃。
だがそれは、良く出来た殺陣の立ち回りのようだった。
今のはやてには、全盛期のなのはですら敵わない。闇雲に力を振り回していた頃とは違い……今のはやてには、技術がある。それを抜きにしても、リーゼ仕込の剣、大家譲りの格闘など、一部の隙も無い。フェイトやクロノ、管理局が束になって、ようやく五分か、悪ければ三分……
それだけ強大になってしまったはやての力を、誰が受け入れてくれるというのだろうか。
――孤独。
それこそが、はやての根幹にある要素だった。
孤独だから、守護騎士に固執した。

孤独だから、美香を妹分にした。
孤独だから、リーゼを使い魔にした。
――孤独だから、受け入れてくれる者を欲した。
だが、折角手にした者達も、手放さざるを得なかった。
力を得たから。力を取り戻したから。この力は、自身以外の全てを害してしまう。
慕ってくれる美香も、仕えてくれるリーゼも、全て……
――だが、一つだけ……一人だけ。この『力』を、真正面から受け止めてくれる人がいた。
彼だけは、ずっと変わらなかった。
初対面の時も、かつてこの世界で共に修行した時も、あのアパートに転がり込んだ時も。
――吾妻秀人は徹頭徹尾、はやてにとって、乗り越えるべき壁……否、ライバルだった。
「あああああっ!!」「おおおおおっ！」
――バキッ!!
本気の殴り合い。それは……不器用な彼女にできる、精一杯のコミュニケーションだった。

『アイ、カートリッジの残数は？』
『インパクトが3、アクセルが2……それと、ブレイズが1なの』
ブレイズ……恐らくは、ブレイズキャノンに相当する射出系のカートリッジだろう。
『……微妙に相性が悪いな』
はやてには、スレイプニルと、闇の衣がある。
ただ考えなしに発射しても、跳ね返されるか、吸収されるかで終わる。
「なら……コレしかないよな」
すっ……と、秀人は構えを取る。
身体は半身に、右手を腰溜めに、左手を緩く突き出す。
「……！」

はやては、その構えを知っている。その威力も、身をもって。
あの構えは、強い。だが、それと同時に、下手をすればリンカーコアが破裂する危険も背負っている。そのため、これまでは負荷を抑えるため、敢えて精度を落としていた。
ヴィータに初戦で通じなかったのも、それが原因だ。
だが、今の秀人には……イモータルハートがある。
つまりは、精度を落とす必要は無く、リンカーコアへの負担を気にする必要も無い。
「はぁっ……!!」
――ゴウッ!!
秀人の魔力光が、再び蒼炎となる。
「……」
構えたまま、はやてと見詰め合う。
『汝ヨ……分カッテイルナ？　決シテ、汝カラ手ヲ出シテハナラン』
テンタトレスが、警告した。
この構えの弱点として……完全な『受け技』であることが挙げられる。はやてが攻撃してこない限り、戦闘としては成立しない。
かつて、凶鳥部隊でカレンが取った対策……『自分からは攻撃を仕掛けない』というのが、最適な答えだ。
このまま、秀人が構えを解くまで、じっと待っていればいい。
そうするのが得策。だが……
「……っ!!」
『汝……汝！　何ヲシヨウトシテイル!?　ヨスノダ！』
魔剣を拾い上げ、キッと秀人を睨みつけるはやてに、テンタトレスが慌てる。そう……
――それでは面白くないと考えてしまうのが、はやての性だった。
「……」
攻撃を仕掛けようとするはやての身体を、闇の衣がギチギチと締め上げて戒める。
『クッ……愚カナ！　ヌ、グ……！』
だが……はやての力は何故か凄まじく、テンタトレスの拘束を逆に

ブチブチと引きちぎっていく。
「う……あ、あ！」
　その影響なのかどうかは不明だが、はやての瞳が、徐々に正気を取り戻していくではないか。
　恐らく、はやてとテンタトレスの力関係が、逆転を始めている。
「……邪魔、するな」
『邪魔トハナンダ、邪魔トハ!?　アノ構エニ、マトモニ突ッ込ンデイクツモリカ!?』
　……泰然とした余裕を無くし、ぎゃーぎゃーと騒ぐ。
「そうだよ……！　私は……あいつにだけは、真正面から勝たないと、気が済まないんだ……！」
「！　はやて……!?」
　その変化に、秀人も気付いた。
　闇色の魔力光は、変わらずだが……その内包する要素が、変化している。
　殺気に満ちた禍々しい闇から……闘志に満ちた、激しいものへと。
「従え、テンタトレス……！　今は、私が主だ!!」
　とうとう、闇の衣がはやての支配下に戻る。
『……！　モウイイ！　我ハ知ラン！　汝ガドウナロウガ知ランカラナ！　勝手ニスルガイイ!!』
　……テンタトレスは、そんな捨て台詞を残し、沈黙した。
「ごめん……待たせた」
「……気にすんな」
　すっかり正気に戻ったはやて。確かに、テンタトレスは沈黙したが……その力には、些かの低下も見られない。
『大した意志力なの。まさか、闇の書をねじ伏せるなんて……マスター、ちゃんと警戒するの』
「ああ……わかってる」
　アイの助言に頷く。戦闘のために効率化された思考での戦いも、厄介ではあったが……

「……もう、予測は出来ないからな」
最も効率のいい戦い方……つまりは、一番の近道。最短ルートは限られている故に、予測しやすいのだ。
だが、遠回りをする分には、道筋は無限大。
はやての動向に注視し、警戒する。
「……煙れ」
ぼそっ、と呟いた途端……最初は、霞のように。そして瞬時に、黒色の煙が辺りに立ち込めていく。
「煙幕?」
――ガキュンッ！
その煙の向こうで、カートリッジをロードする音がした。
「……」
だが、動かない。はやての狙いは、十中八九、秀人の構えを突き崩すことだ。ここで、インパクトを発動して、煙幕を吹き散らす行動に出れば……間違いなく、はやてはそこを突いて来る。ここで動きを乱されれば、敗北に直結する。
（カートリッジをロードしたってことは……接近戦か？）
――バシュッ!!
（来た！）
視界は1メートル程度。その、地上僅か数センチというスレスレを、飛来してくる物体があった。
剣先でも、魔法でもない。それは……
「矢かッ!!」
秀人を射った、あの魔弓だった。
（脚を砕くつもりか！）
左手に魔力を収束し、展開。足元までをカバーする大きさにまで広げ、矢を捕らえようとする。
――くんっ。
……と、矢が唐突に軌道を真下に変えた。矢は最初から、秀人を狙ってはいなかったのだ。
――バゴォオオオオオオオオオオンッッ!!!

矢は、イモータルハートの無効化フィールドの直前で、地面を爆撃する。
「くっ!?」
それは……『足場』という、秀人自身、思いもよらなかった弱点を突かれることになった。爆撃そのものは、魔力によるものだが……それによって発生した爆風は、純粋な物理。
無効化フィールドを通過し、秀人の身体を煽る。
「……!」
後退し、次の足場を確保する。その僅かな一瞬を、はやては見逃さなかった。
――ギャララララッ!!
……魔剣を蛇腹に変形させ、秀人の左腕を絡め取る。一気に引き寄せ……
――ドズンッ!!
「ごふっ……!」
強烈なボディブローを見舞った。
「くっ……!」
身を屈める秀人。苦し紛れの裏拳も、空振りに終わる。
――パンッ! パパンッ!!
「が、ああっ……!!」
高速のフックが、秀人の顎を的確に打つ。
そして、ぐぐっと身体をたわませ……
――ゴギンッッ!!
……強烈なアッパーが、秀人の身体を宙に舞わせた。
「ロード……!」
だが、秀人もやられてばかりではない。
「アクセルカートリッジ!! リリースッ!!」
空中で、推進力を発生させ……はやてに突撃をかました。
飛行魔法とは段違いの瞬発力に、はやては反応を遅らせる。
「うおおおおっ!!」
拳か。蹴りか。……否。

「だァらっしゃあああああああ!!」
――ゴンッ!!
……頭突き。
「んがっ……!?」
あまりに原始的な攻撃に、逆に喰らってしまった。
「クソ！　痛えじゃねぇかあああああああああっ!!」
「こっちの台詞だオラあああああああああああっ!!」
互いに覚束ない足取りで、距離を詰め、拳を振るう。
――ゴシャッ……!!
「はぁ、はぁ……！」「ぜー、ぜー……！」
いくら治癒するとはいえ、スタミナまでは回復しない。
……二人は、勝負に出ることにした。
「……！」
再び、あの構えを取る秀人。先ほどの対策か、足場を魔力で補強し、崩されることを防いでいた。
「……」
はやてもまた、同じ手を使う気は無い様だった。
――バサッ……
スレイプニルを展開。
左手に、攻撃魔法と思しき術式を走らせる。
「秀人」
ぐっ、と、地を摑む足に、力を込め……
「……行くよッ!!」
――ドンッ!!
真正面から、突っ込んだ！
「！」
正面とは思わなかった秀人は、驚きつつも反応する。
――ドンドンドンッ!!
投擲されたのは、複製された魔剣や、魔杖。
「目くらましか……！」
はやての左手の魔法。それが打ち放たれれば、それを起爆剤に、一

気に……
『！　マスター！』
アイの警告。反応するより早く……
「がァっ!!」
唐突に脚に発生した痛みに吼えた。
先ほどはやてが捨てたと見せかけた、蛇腹の魔剣だった。
それはまるで、蛇のように秀人に絡みつき、足を封じている。
「シュヴァルツェ・ヴィルクングッ!!」
はやての左……渾身の拳。
「……そんなもんかよ！」
――バキィンッ！
魔剣を砕き、迎撃する。
左手に全魔力を集中し、はやての拳に叩き込む。
――バチィイイイイインッ!!
それは、シュヴァルツェ・ヴィルクングさえも弾き返した。
――ゴバァァァァァァァァァァンッ!!
更に、無詠唱でインパクトカートリッジをロードし、衝撃波を発射。
ダメ押しとばかりに……
「クリメイション……！　フェニィイイイイイイイイイイイックス!!」
――――……ギュエェェェ

――……ギィイッ!!
フェニックスを、乱気流で誘導する。その先は……
――バガァァァァァァァァンッ!!
……自身の、真後ろ。
「ぐゥっ……!」
その爆風と衝撃波を、推進力を得る。
後方へと弾き飛ばされていたのを、一気に前進する力へと変える。
「……まだだっ!」
――ギュエエエエエエエエエエエエッ!!
地面から、不死鳥が舞い戻る。
背後からは不死鳥。追いつかれぬよう、倒れこむような前傾で疾走するはやて。
「ロード……インパクトカートリッジ!」
真正面から、不可避の一撃を叩き込む!
――バシュウッ!!
「……、な」
だが秀人は、驚愕に目を剥くことになる。
……はやての右手が、その衝撃波を魔力に還元し、吸収したのだ。
「……!」
その右手の内部に宿る、もう一つの術式が発露する。
……スレイプニル。そして、闇の衣。
本来ならば、体表に展開されるはずのそれを、はやては体内に隠し持っていた。
闇の衣の力を、瞬間的に発動し……分解した魔力を、瞬時にスレイプニルに流し込んだのだ。
――ギュエェッ!!
迫る不死鳥。だが、度重なる爆裂に、その体積は明らかに減っていた。
――ギュルルルルッ!!
闇の触手が、不死鳥を絡め取り……
「ぐ……! うあああああああああああっ!」

――バシュンッ!!
『馬鹿な！　吸収した!?』
スレイプニルの中に、封じ込めた！
「喰らえええええええええっ!!」
狙うのは……ダメージを蓄積させた、胴体！
「……」
秀人は、その攻撃を前に……
「はぁっ……!!」
内巧で、身体を固める。そして……
――ドゴォンッ……!!
はやての一撃が、炸裂した！
「ぐァあああああああっ……!!!!」
カートリッジ十数発にも匹敵する衝撃波。不死鳥の爆炎。……そして、はやての拳。
それらを一撃として喰らった秀人は、数十メートルも滑走した。
「……!!!!」
喀血し、白目を剥く。
だが……
――ガシッ！
「!!」
秀人は、はやての腕をつかみ取り捕獲した！
「俺の……！」
『ロード……インパクト&ブレイズカートリッジ！』
最後の攻撃用カートリッジを、二つ同時にリリース！
「勝ちだァあああああああああああああああああっ!!」
――ズゴンッ!!
はやての延髄に、肘を叩き下ろした!!
「あァあ……!!」
意識を飛ばしそうになるはやて。だが……口元は未だに笑みを浮かべ、声なき声で、こう言っていた。

――――……私の勝ちだよ、秀人

――――――――ズドォオオオオオオオンッ!!

「……あ、」

……横合いから、強力な砲撃を喰らう。

『……マスター!!』

アイもまさか、そんなところから砲撃が飛んでくるとは、全く予知していなかったのだろう。

倒れ付す秀人が、最後に見たのは……

――――レイジングハートと瓜二つの、紫紺の魔杖。

（……そうか、）

最初に、はやてが目くらましとして投擲してきた、数多くの得物。その中の一振りに、予め、タイマーをセットしていたのだ。

「……最後の、決め手になったよ……あり、がと……――

『殲滅者』」

激しい戦闘で、更に荒れ果てた荒野の世界。

その世界に、どうっ……と、倒れる音が響いた。

音は……一つ。

「……」「……」

……秀人とはやては、同時に倒れていた。

――勝者は無く。ただ、全てを出し尽くした二人が、どこか満足げな顔で、大地に倒れていた。

# A’s編　第八十話

――『試合』開始から、約３０分。
「……」
アースラ、ブリッジ内。
両名の壮絶な決闘を見届けたクルーたちは皆、言葉を失っていた。
「……両者、意識混濁……戦闘終了」
エイミィが、半ば義務のように報告する。
「……」
管理局員と、次元犯罪者……その逮捕劇に、ではない。
吾妻秀人と、八神はやて。
Ｓランク魔導師による、死力を尽くした試合に、心奪われていた。
「アイ……ううん、イモータルハートの力も、大概非常識だけど……」
「あんな小さなユニットで、魔力無効化フィールド……」
アルフの言葉を継ぐように、クロノが言った。
アースラに組み込まれたＡＭＦの発生装置ですら、装置全体では、前世紀のコンピューターのような、部屋一つを占領するほどの巨大なものとなっている。
「『阻害』ではなくて、『還元』……あれじゃ、再結合も侭ならない」
ある意味、ＡＭＦ……結合阻害とは別方向へと進化した力だ。
「それに、あのカートリッジ……逆転の発想だな。『汎用性を得る』んじゃなくて、『汎用性を切り捨てて、更に特化する』なんて……」
カートリッジシステムの情報提供者、ヴィータはそう評した。
「誰の影響だろうね、全く……」
ユーノは、ちらっとレイジングハートに目を送る。
『誰の影響でしょうね。全く……』
……スターライトブレイカー＋という前例を作り出した先駆者が、すっとぼけて何か言っていた。
「……すげー！」

フェイトは、目を輝かせていた。
「……変な言葉を使うんじゃありません。女の子でしょ」
なのはが、それを嗜め……ようやく、余韻から醒める。
「でも、本当……凄かったね」
イモータルハートの常識外れの性能も、それを扱いこなした秀人も……
「……八神」
……それに、真正面から挑み、引き分けたはやても。
「ああ。初対面とは、段違い……いや、別次元だ」
そう。
この場に満ちる感嘆とは、秀人よりも……それに対抗し得た、はやてに対するものの方が大きいのだった。
――ピーッ!!
その空気を切り裂くように、モニターから警告が鳴る。
「！　転移反応！　場所……秀人くんの、すぐ近く！」
「――!!　ジャミングの解除、任せる！」
間違いなく、グレアムの手の者だ。
両者が疲弊している今を狙って、漁夫の利を得る気に違いない。
「……!!」
走り去っていったクロノ達を見送り……ブリッジにいたクルー達は、死に物狂いでコンソールを操作する。
彼らは、戦闘中も、わき目も振らずに解除に当たっていた。そして、ようやく……
「……解除完了！」
同時に、転送装置に足を踏み入れたクロノ達を、間髪入れずに戦場へ送り出した。
◆▪◆　◆　◆
「おい、起きるの」
アイは、デバイス形態を解除。いつもの15歳程度の少女の姿となり、しゃがみこんでいた。
「起きるの。おーきーるーのー！」

べしべしと引っ叩くのは、当のマスターである秀人……ではなく。
「起きるの！　この古本!!」
『ヤカマシイ！　誰ガ古本ダ、貴様!!』
はやての胸に抱かれた、一冊の魔導書……闇の書。その意思、テンタトレスに対してだった。
「ふん。やーっと起きたの。もし起きなかったら、ブックセンターイ○ウに売り払ってやるところだったの」
『黙レ石コロ。砕クゾ』
……主たちを差し置いて、デバイス達が話し始めていた。
「ねぇ、この勝負……」
『アア、コノ勝負……』
当然、この勝負の結果についてだ。
「マスターの勝ちなの」
『我ガ契約者ノ勝利ダ』
……完全に、平行線だった。
「……終始防戦で、マスターの構えに四苦八苦していたのはどこのどいつなの!?　法螺を吹くのも大概にするの！」
『馬鹿メ！　我ガ契約者ハ、ソレヲ破ッタノダ！　我ラノ勝チニ決マッテイヨウ！』
「破られていないの！　アイたちの勝ちなの！」
『我ラノ勝利ダ！』
「ふん！　そっちのガキンチョの方が、コンマ０．００１秒、倒れるのが早かったの！」
『イイヤ！　ソレヨリモ早ク、貴様ノ主ノ前髪ガ地ニ着イテイタ！』
口論は、段々と子供じみた口喧嘩へと退化し……
「マスターのガッサガサの針金みたいな髪の毛、いつも尖がっているようなモンなんてノーカンなの！」
『ナラ、我ガ契約者ノ、常ニ砕ケテイルヨウナ貧弱極マリナイ足腰ナド無関係ダ！』
……互いに、己の主を罵倒するような内容になっていることには、

気付かない。
「むーっーーーーー!!」『ウウー……!!』
膨れるアイと、威嚇するように唸るテンタトレス。
だが……そのにらみ合いは、ふとした瞬間に終わりを告げた。
「おまえ……どうして、自分の主を、殺戮に駆り立てるの？」
『……ソレガ、我ノサガ故ニ』
「でも、へなちょこ司書に聞いたの。その機能は、後付けされたもので……」
『……』
「やろうと思えば、今みたいにちゃんと、主と一緒に戦うことも出来るの。実際おまえ、すっごく強かったの。何度も、負けちゃうかと思ったの」
『……』
「おまえだって、本当は……」
黙りこむテンタトレスに、アイは核心に踏み込んだ。
――――――まっとうなデバイスとして、主と共に在りたかった筈じゃないの？
反応は、顕著だった。
『――――黙レッッ!!』
テンタトレスは、激情を露に、叫んだ。
そして……はやての体が、起き上がる。
その目は血色に染まり……頭髪は、灰色へと変化している。
身体の主導権を奪ったのだ。
「……！　あうっ！」
伸びた影が、アイの首を締め上げる。
『黙レ……黙レ黙レ黙レ！』
「あ、ぐ……！」
苦痛に喘ぐアイ。
『貴様ニ、何ガ分カル……!!』
どろどろと……隠してきた己の心のうちを、吐き出す。
『貴様ニ、何ガ分カルッ!!』

ドンッ！　と、地に叩き伏せられる。
『我ハ……テンタトレス。ソウ、闇ノ書ノ攻撃プログラム、呪ワレシ闇！　テンタトレスナノダ！』
――テンタトレス。
それは、個体名という範疇を超えた……忌み名。
いつしか、誰かが呼び始めた……『悪の誘惑者《テンタトレス》』。
『貴様ニ、分カルモノカ！　守ルベキ主ヲ、コノ手デ殺メナケレバナラナイ痛ミガ！　侮蔑ト共ニ、忌ミ名ヲ呼バレル屈辱ガ！　己ノ分身デアル守護騎士ニスラ恐レラレル虚シサガ！　己ヲ止メルコトスラデキナイ無力ガ！
……死ニ際ノ主ニ、憎悪サレル痛ミガ！』
――バンッ!!
投げ飛ばされ、地を跳ねる。
『サァ、『不滅ノ心』ヨ……貴様モ我ガ名ヲ呼ブガイイ。
『テンタトレス』ト……侮蔑ト敵意ト恐怖ト憐憫ヲ込メテ、我ガ名ヲ呼ブガイイ!!』
猛る闇。
それは、再びアイを掴み上げ、放り投げる。
「……！」
ぎゅっと目を瞑り、痛みを予想するアイ。
――どさっ。
……だが、その痛みはやってこなかった。
「……」
「……マスター!?」
墜落寸前に、主によって受け止められていた。
秀人は、はやてへ……その胸に抱かれた魔導書へ、悟った目を向け……
「……――。おまえは、自分を止めたいんだな」
……その願望を、看破した。

『……!!』
図星を突かれ、息を詰まらせる。
「……やっと、お前を理解できた気がするよ」
『理解ダト……？　貴様風情ガ、我ヲ理解シタト……？　笑ワセルナ！』
「……ああ。確かに、全部が全部、理解できるわけじゃない」
『ハハッ……！』
せせら笑うテンタトレス。
「でも……お前のすぐ傍に、いるじゃないか。一番の理解者が」
すぐ傍……と言われ、テンタトレスは、己が身を見下ろした。
『……』
「お前を受け入れて……お前を従えて、こんな辺鄙な場所までついてきてくれた、お前の主だ」
悪態をつきながらも。
その素性や正体が判明しようとも。
決して己を無視することなく、言葉を交わしてくれた少女。
『……ヤガミ、ハヤテ……』
……そういう、名だった。
「……あと、どのくらいだ」
『……？』
その問いの意味を理解できず、首を傾げる。
「あとどのくらい……破壊衝動を抑えられる」
改悪されたプログラムの、行き着く果て。
『――――――――ベツレヘムの星』
それが、闇の書に記された……蓄えた魔力と、主の生命を贄として発動する、最凶最悪の殲滅魔法。
『……順延スルコトモ、不可能デハナイ』
「……そうなのか？」
『ダガ、ソレハツマリ、魔力ヲ得ラレナイトイウコトダ。我ハ、主ノ肉体トリンクシテイル。外部ヨリ魔力ヲ得ラレナケレバ……』

「……内部。はやてのリンカーコアから、魔力を吸い尽くしてしまう」
それが、所有者の魔力を極大まで増幅させる代償。
命を喰らう、異形の本能。
秀人はしばし何分か、瞑目して考え込み……
「……分かった。魔力があればいいんだな？」
ちゃきっ、と、はやての手から零れた魔剣を拾い上げ、右手に当てる。そして……
――ズシュッ……!!
……右手の甲に、魔剣を突き立てた。
「マスター……！」
あいが声を上げる。
だが、秀人とて、何も自棄になって自傷に走ったわけではない。
「う……くっ！」
ずるっ……と、抉り出した。
――右手の、魔力結晶。
「アイ。アクセルカートリッジ、残り三発」
「……わかったの」
嫌々ながら、それに従った。
その内部の魔力を全て、魔力結晶に籠める。
「……」
カートリッジが輝きを失い……全て、魔力結晶に移動する。
「……駄目か」
だがその結晶は、すぐに秀人の右手と、融合を始めてしまう。
この魔力結晶は、取り込んだ際、秀人と魔力のラインが繋がってしまっている。ある意味、秀人の体の一部なのだ。切り取ったからといって、他人へ譲渡ができるはずもない。
「……くそっ！」
悔しさを滲ませる秀人。
――その背後に、転移してきた気配を感じた。
「――!!」
秀人は、反射的に振り向き、構えた。

そこに現れていたのは……

「……お前か」

無機質な仮面を被った、長身の男性。

「……」

変わらぬ無言。

だが、常とは異なった点がある。それは……

「……何だ、その杖？」

……右手に握られた、鳥の嘴を連想させる奇妙な杖だった。

「……」

仮面の男は、無言で秀人の右手と、魔力結晶に杖を向ける。

「……デュランダル」

『ＯＫ，』

合成音声のような声を出す。どうやら、デバイスであるらしい。

「おまえ、マスターになにする気なの!?」

「……」

身構えるアイ。だが、仮面の男は敵意を示さず、無言で秀人を促した。

「アイ。いい、下がれ」

「……了解。だけど、マスターに何か変なことしたらぶっころすの」

渋々、秀人の後ろに下がった。

秀人は、右手を上げる。仮面の男は、杖を右手に触れさせ……

「……分断せよ」

『…Ｄｉｖｉｌｄｅ！』

――バチンッ!!!

「……痛っ!?」

一瞬の痛みと共に……魔力結晶が、右手からポロッと落ちる。

「……これで、問題ない筈だ」

「お、おお……？　……マジかよ」

完全に癒着していたはずの魔力結晶が、完全に切り離されていた。

「その杖の力？」

「ああ……デュランダルの、分断の力だ」
グレアムが、切り札として開発していた特殊なデバイス。どうやら、一応の完成を見たらしい。
『フン……大方、我ヲ契約者カラ切リ離スタメノモノダロウ』
「否定はしない」
瞬時に、剣呑な気配となる。
「……可否で論ずるならば、可能だ。分断した後……その子は死ぬだろうが」
『……！』
ざわざわと、影がざわつく。
「でも、するつもりも無いんだろ？」
「……」
「第一、するつもりならとっくにやってるさ」
戦闘終了後、二人の意識は途絶え、完全に無防備だったのだ。
それに、わざわざこうして姿を現す必要も無い。
「……」
沈黙は、肯定。
「……なぁ。なんであんたは、グレアムに従ってるんだ？」
ごく自然に……その名を出した。
「わざわざ、そんな大仰なものを取り出して来たのだって、はやてのためだろ？　本来の用途を無視してまで……あんただって、本当は、グレアムが間違ってるって、」
「言うな」
仮面の男は、それを遮った。
「……それでもあの方は、我らの父親なのだ」
ほぼ罪状が割れてしまっている以上、隠す意味も無い。そういうつもりだろうか。
「……」
再び無言となった仮面の男。
秀人は、はやての手に魔力結晶を握らせる。
「これで、どのくらい持つ？」

テンタトレスはそれを、手の上でころころと遊ばせる。
『……オヨソ、二日ダ』
「……二日」
これでも、相当な量の魔力を籠めた筈なのだが……
その疑問には、仮面の男が答えた。
「……その子は、テンタトレスが再起動して以来、リンカーコアを蒐集していない。差し引きして、プラスになっただけ運がいい」
頭の中で、カレンダーを確認する。あまりに多くのことが立て続けに起こりすぎて、すっかり忘れていた。
二日後とは……
「……クリスマス、か」
奇しくも、聖夜。
そして……はやてが、両親を永遠に失った日であった。
「……これで、最後だ」
仮面の男は役目を終え、踵を返す。
「……次に会う時は、敵同士か？」
秀人の……若干、寂しそうな声に、立ち止まる。
「……」
だが、仮面の男は何も言わず、歩き去っていった。

――ドクンッ。
脈動するような音と共に、テンタトレスが魔力結晶を飲み込む。
一時的とはいえ、はやての体には、活動には過不足無い程度の魔力が補充された。
『……少シ、眠ル』
「大丈夫か？」
疲弊した様子だ。心配した秀人が気遣うも……テンタトレスは、はやての目で、じろっと秀人を睨んだ。
『貴様ニ殴打サレタ身体ガ痛ムノダ。トニカク、我ノ自前ノ魔力デ回復サセルタメニモ、睡眠ガ必要ダ』
「……正直すまんかった」

だが、良いのだろうか。このまま管理局に拿捕されてしまえば、それこそ、はやてがどうなるか分からない。
『問題ナイ。人間風情ガ、我ヲ縛レル道理ガ無イカラナ』
拘束は無意味。
テンタトレスは、何のためらいも無く、そのまま休眠へ入った。
――どさっ。
倒れこむはやての身体を抱きとめ、背負う。
「……あと二日間、か」
たったの二日と考えるべきか。
それとも、二日も猶予を得たという事実を喜ぶべきか。
――ブゥウウン……！
少し離れた先に、アースラの転送ポートが現れる。
そこから、真っ先に飛び出してくる、二つの人影。
「……秀人さんっ！」「ひでとっ！」
なのはとフェイト。
二人へは、無事を伝えながらも……秀人は、重い気分で歩を進めるのだった。

# A’s編　第八十一話

秀人、はやてに手を貸した後、追跡者は帰還した。
「……やぁ、待っていたよ」
その執務室へ繋がる廊下に……ギル・グレアムが待ち構えていた。
「……!!」
思わず、体を強張らせる。
「お帰り。さて……」
――何か言い残すことはあるかね？」
その手には、追跡者を圧殺して余りある、殺意の塊のような魔力スフィアがセットされていた。
試作品段階のデュランダルを勝手に持ち出し、あまつさえはやてに延命を施した……明確な裏切りを受け、処分を決定した。
「わかっているね？　……君たちの生命力は、既に尽きかけている」
リーゼアリア・リーゼロッテの合体……それは、強力な戦闘力を発揮する代償として、確実に生命を削るものだった。
「ユニゾンデバイス研究の副産物とはいえ、些か無茶があったようだね？」
元より、それを覚悟した上での行動だ。
――シュウウッ……
一つの影は、二つに分かれる。
「……では、一つだけ」
仮面の男……改め、リーゼアリア・リーゼロッテの姉妹は、想起する。
ただの小動物だった自分たちに、知性と魔力を与えてくれたあの日を。
幸せだった。今でこそ外道に堕ちたこの男も……かつては、理想に燃える男だった。時空管理局と、そこに所属する自分は、正義の代行者なのだと信じて疑わず、突き進んだ。
二人は、そんな理想に燃える『父親』が好きだった。

時に手を貸し、時に支え……その理想を、支え続けた。
その甲斐もあってか、男はいつしか、管理局の要職に就いていた。人望も厚く、歳を重ねたとしても、十分な実力。それは、男にとって誇りであった。
だが、ある時……その理想は、歪んで行く。
切っ掛けは、一つの敗北だった。
部下として配属されてきた、若手の中の一人……クライド・ハラオウン。彼との、天覧試合での一戦。
老齢に差し掛かったグレアムと、今まさに全盛期のクライド。
下馬評を覆したのは、クライドだった。
それだけであれば、ただ、新鋭の若手が、大金星を挙げた……という話だ。
ただ、それだけの話。
――だが、グレアムの『誇り』はいつしか、理想を覆い隠す程に、肥大化してしまっていた。
グレアムは、変わった。
いや……もしかしたら、以前からその兆候はあったのかもしれない。
年老い、目に見えて衰える己の実力。次々に現れる次代のエリートたち。
『誇り』によって押しとどめられていたその負の感情は……皮肉にも、『誇り』が傷つけられた瞬間、一気に噴出してしまったのだ。
広げた人脈を手当たり次第に……それこそ、取り憑かれたように、かつての全盛期の力を取り戻す研究を始めた。
アリアとロッテは、そんな主を、何度も諌めた。だが、グレアムは……使い魔としての契約を悪用し、抵抗を禁じた。
唯一の歯止めを失った男は、とうとう……クライドをも謀殺した。
――かつて理想に燃えていた男は、ここまで堕ち果てた。
そして今、幼い少女の家族を、平穏を奪い……生命までをも、奪おうとしている。

全ては……我欲のために。
アリアとロッテは、声を合わせ……かつての主に言い放った。
「「……この下衆野郎！」」
「そうか。では、死にたまえ」
グレアムは、眉一つ動かさず、魔力を放出した。
――――……ッドゴォオオオオオオンッ!!
破壊力は、狭い通路を荒れ狂う。
逃げ場のない破壊に、反逆者は影もなく焼き尽くされる……筈だった。
「……む？」
だが……グレアムと同じく、シールドを展開した反応がある。
それはアリアでも、ロッテでも無く……
「……そこまでだ」
漆黒の法衣。手にした杖は、Ｓ２Ｕ。
「クロノ!?」
クロノ・ハラオウンが……アルフを伴って、そこにいた。
「無事か？　二人とも」
二人を背に庇いながら、油断無くデバイスをグレアムに向ける。
「全く……とんだ変則コンビだよ」
愚痴りながらも、姉妹への防御を張り巡らせる。
「とんだ主もいたもんだね……使い魔との契約を、こんな目的に利用するなんて」
ぎろっ……と、グレアムを睨むアルフ。
同じ動物素体の使い魔として、感じるものがあるのだろう。
「ギル・グレアム提督。時空法・管理局法違反並びに……殺人未遂の現行犯で、あなたを拘束する。武装を解除し、投降を」
そして提示される……数々の証拠。
「ふ……はァはははははっ！」
それらを突きつけられ、グレアムは……嗤った。
「いや、実に惜しいねェ……」
明確な余裕。

「何がだっ……!!」
クロノは、声を荒げる。
「いや、ね？　もう少し早ければ……コレが完成する前に、捕らえられただろう」
ポケットから、カード状のデバイスを取り出す。そして……
「セットアップ」
――ガシュンッ……!
……その杖は、試作品とは大きく違っていた。
「……嘘だ」
クロノが、呆然と呟く。
その杖には、見覚えがあった。
それは、自分の手に握られたものと、非常に良く似ていた。
それは、映像記録で、写真で、何度も目にした形だった。
それは……
「懐かしいだろう？　……父親との、再会だ」
――それは、クライド・ハラオウンのデバイスだった。
「――貴様ァあああああああああああああああああっ!!」
かつて無いほどの激情を露にし……複数の誘導弾を、一気に射出した！
――ドガガガガガガガガガガガガガガガンッ!!
連続する破裂音。
だが、その向こうで……グレアムが、余裕で笑みを浮かべている。
着弾したかに見える誘導弾は、その実……片っ端から、魔力結合を分断され、無効化されている。
「ははは……さすがは、クライドの武装だね。デュランダルが、よく馴染む」
分断の杖、デュランダル。その本質は、外殻に非ず……むしろ、その内に秘められたプログラムと、それを奔らせるシステムだ。
「ほら、もっと撃ってきなさい。はははは……!」

それを、わざわざクライドの武装の外殻を流用するなど……悪趣味ここに極まれり、だ。
「貴様が……貴様が、父さんをっ!!」
「ああ、そうだとも！　生意気なガキだったなァ!!　ガキの分際で、私に土を付けてくれたわァっ!!」
――キュドンッ!!
デュランダルから発射された魔力弾が、散弾のように撒き散らされる。
「！」
防壁を展開する。だが……
「ハハハ！　無駄だァっ!!」
――ズ……ボッ!!
発射された魔力弾は、防壁をすり抜け、クロノの身体を強かに打ち据えた。
「ぐぁあっ……!!」
バリアジャケットで受けたとはいえ、その衝撃に喘ぐ。
「ははは……そうだ、やはり間違いだったのだ！　クライドごときに、私が負けるわけが無かったのだ！」
――ガキィイインッ!!
「ほうら、見ろ！　ヤツのガキも、この力の前では無力だっ!!」
振り下ろされた魔力刃を、Ｓ２Ｕの柄で受ける。
だが……
――パキィンッ……!!
実用品として、一線級の強度を持つはずのＳ２Ｕの外装が、まるでガラス細工のように砕け散る。
――ザンッ!!
回避したかに見えた。だが……
「……ぐっ!!」
腕を切り裂かれ、派手に出血してしまった。
「どんなものかね!?　父親の形見に刻まれる……という気分は!?　ハハハ、愉快痛快！」

これは揺さぶりだ。自分を動揺させるための策略だ。そう頭で理解してはいても……感情は、割り切れない。
「ぐ、ぎ……!! あの野郎ォ……!!」
それを見ていたアルフは……獰猛な怒りを、何とか押さえ込みながら、リーゼの警護を続ける。目は獣の状態となり、牙が大きく突き出した。
「……」
アリアとロッテは、顔を見合わせる。そして……
「エンチャントパワー・フルブースト！」
アリアが、アルフの身に強化魔法を施した。
「え……え？」
戸惑うアルフに、目を向ける。
「わたしたちは直接、グレアムに逆らうことはできない。でも……自分の身くらいは守れるわ」
ロッテは懐から、試作品のデュランダルを取り出し、アルフに握らせる。
「……これを。あの制式仕様には、出力で若干劣るけど……あの分断効果を、かなりのレベルで相殺できるはずだよ」
デバイスモードに変形させるアルフ。
それを目にしたグレアムは、ハッと余裕を忘れた。
「貴様らぁあああああああああっ!!」
グレアムが、魔力刃を振りかぶり……
「うらァあああああああああああああああああああああああっ!!」
――ベキィイイイッ!!
怒りの鉄拳が、グレアムの頬を殴り飛ばした!!
「がっ……! い、犬畜生がァッ……!!」
「クロノォオオオオオオオオオッ!!」
アルフは、試作デュランダルを、クロノに向かって投擲する！
「おおおおっ……!」
「させるかァあああああっ!!」
クロノが、グレアムが、同時に手を伸ばす！

（貫った！）
このままでは、リーチの差で、グレアムの勝ちだ。いくら魔法を放とうとも、分断効果で無意味に終わる。
そう、グレアムは油断した。そう……油断した、のである。
クロノは、背筋を限界まで引き絞り……
「だらぁあああああああああっ!!」
――ゴォッキィイインッ!!
渾身のヘッドバットをかました！
「ぶべェッ!?」
まさかの肉体攻撃に、グレアムは反応が遅れ、鼻っ柱を潰された。
「ご、ごのがぎがァ……!!」
曲がった鼻で、無様な濁声を呟く。
「あいつ曰く、僕の頭は岩をも砕く石頭らしいからな!!」
その目の前で、クロノは試作デュランダルを掴み取る。
「お前の罪を、」
――ジャコンッ!!
Ｓ２Ｕ、試作デュランダルの二刀流！
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ！』『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ　！』
『Ｂａｌｌｅｔ　！』
複数の術式を、一気に読み込み……!!
「数えろォおおおおおおおおおおっ!!」
一斉に、発射!!
――ズゴガガガガガガガガガァンッッ!!
分断効果を中和し、一気に魔法で畳み掛ける！
「オオオオオオオオオオオオオッ!!」
だが、グレアムのしぶとさも大概だ。
伸張した魔力刃を構え、突撃してくる。狙いは、試作デュランダル！
「……モードリリース！」
クロノは、二機のデバイスを解除。
「……っ!?」

破壊対象を失った制式デュランダルは、空振りに終わる。
クロノは間合いを一気に縮め……！
「だァあああああっ!!」
――ぶォんっ!!
グレアムの胸倉を掴み上げ、背負い投げた！
「ナイスパス！」
アルフは、その着地地点に先回りし、そして……
――ガゴンッッ!!
上段蹴りを、脳天に叩き込む！
「ぐぁあああっ!?」
――ゴキャアアアアッ!!
クロノのドロップキック……そして、アルフのアッパーが、グレアムへ連続ヒット！
「お、ごォおおお……!! ば、ばがな……！ この力を以ってして、圧される筈がぁあっ……!?」
分断の力を過信し、冷静な判断を失ったグレアムは、大いに取り乱す。
「何だ、その戦い方はァっ!! こんなもの、教えた覚えは……」
――ギャリリリリリリリッッ!!
チェーンバインド、リングバインド、レストリクトロックが、グレアムを雁字搦めに縛り上げて行く！
「グレアムゥウウウウウウウウッ!!」
「ヒィッ!! く、来るなァあああああああああああっ!!」
バインドを端から解除して行くが……どうやっても、間に合わない。
ありったけの防壁を築く。
クロノは、術式を拳に絡め……！
「インパクトォオオオオオオオオオッッ!!」
――ドパァアアアアアアアアアアアンッ……!!
「お……、ォおおおお……!!」

胴体に、マトモに直撃し……臓腑を撒き散らされるような衝撃に、グレアムが倒れ付す。
「はァ、はァっ……!!」
額にびっしょりと汗を浮かべ、クロノが息を荒げる。
終盤こそ圧倒したものの……薄氷の勝利だ。
もしあそこで、アルフが試作デュランダルをクロノに渡せていなかったら……結果は、逆になっていたに違いない。
「おおお……！　おのれ、おのれ、おのれおのれおのれェええええええ……!!」
吐瀉物を吐き散らし……白目を剥いて怨嗟を叫ぶその姿に、かつての執務官長の面影は無い。そこにいるのは、ただ我欲に取り付かれた、醜い老人だった。
「……」
クロノは、グレアムを拘束するため、再びＳ２Ｕを向ける。
だが……その直前、グレアムの身体が、ビクッと痙攣した。
『……ギル・グレアム』
その空間に、直接響くような声が聞こえた。
念話……とも、また違った。
「か……カスパール議員！」
グレアムの顔が、喜悦に歪む。
「わ、わたしに、今一度のチャンスを！」
「！　この……まだ！」
クロノが、いよいよその身を捕縛しようとする。だが……
『貴様への融資は、現時刻を以って停止とする』
……援軍、では無かった。
「……は？　な、何故!?」
『用済み、と言ったのだ。所詮貴様は、完全なる魔導に到達できる器では、なかったのだ』
「お、お待ち下さい！　私には、まだ秘策が……！　闇の書さえ、我が物にできれば、必ずや……!!　あと一歩、あと一歩なのです！　どうか、今一度のチャンスをォおおおおおおおおおおおお!!」

『……』

カスパールと呼ばれた声の主は、僅かに思考するような間を持たせ……

『……いいだろう。利息分くらいは、援助してやる』

「おお……！」

――ドクンッ……!!

……制式デュランダルが、邪悪に鳴動する。

「!? こ、これは……!?」

グレアムの肉体が、徐々に、徐々に……異常なまでに、容積を増していく。

「や、やめろ、やめろ……！」

べこ、べこん……と、その形が、人間から遠ざかって行く。

「うっ……！」

クロノ達ですら、思わず目を逸らす。

ただ耳には、ぐちゅぐちゅと血肉のうごめく音と、グレアムの悲鳴が届けられる。

『エクリプス……強制発動』

「お、お、おおおおああああ、GI…. GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

――ブチュンッ！

……まるで、己の圧力に耐え切れなくなったかのように……その姿が、収束した。

歪な……一抱えほどの、肉塊へと。

「う、うげェっ……!!」

クロノは、嘔吐した。

「何だ……貴様は、何をした!?」

だが、答える声は、既に無く……

――ぎゅろんっ！

肉塊に現れた、デタラメな配置の眼球が、クロノ達を睨む。

「……pigyaaa

を上げる。
そして……
――ギュウウウウウウウウウンッ……!!
転送魔法……のような術式に覆われ、この場から消えていった。
「くそっ……取り逃がしたか……!!」
歯噛みする。
「大至急、アースラへ帰還する。アリア、ロッテ。……きみたちにも、話を聞かせてもらうぞ」
「……ああ」
「……今更、隠し立てなんかしないよ」
二人はそれぞれ、アルフとクロノに支えられ、その場を後にした。

# A’s編　第八十二話

――夢を見ている。
この感覚も、随分と慣れた。
けど、今日は少し違う。子供時代から追ってきた、秀人の姿は見えない。
見えるのは、古臭い建物と……炎に包まれれる、その瓦礫。
「……？　なんだ、ここ」
あれ……？
声を出してみて、ようやく気付いた。
手も、足も……ちゃんとある。感覚だけじゃない。
ジャラジャラとした荒れた路面も、頬に感じる炎の熱気も、鼻に刺さる煤けた匂いも、あまりにもリアルだ。
「……？　まぁいいか。歩いてみっか」
ざくざくと瓦礫を踏み分け、歩いて行く。
こういう、炎に包まれる風景というのは……あまり、気持ちのいいものじゃない。
「というか、ぶっちゃけ胸糞悪いぞ。なんだここ」
なんというか……妙な違和感というか、欠落した感じがする。
少しだけ歩いて……分かった。
「……人が、いないんだ」
火事に焼き出された、というよりも、唐突にその場から消えてしまったような感がある。
どこを歩いても、瓦礫と炎だけが、延々と続いている。
「……あーもう！　めんどくさい！」
こうなったら、魔法で一気にサーチしてやる！
……だというのに。
「あれ……？」
魔法が、全く使えない。
あー……もしかして、戻ったのは肉体の感覚だけ、とか？

「マジかよ……」
がっくりと肩を落とす。
ま、しゃーない。とにかく今は、この夢から醒める方法を探すだけ。
――ザッ。
「……！」
と、曲がり角の辺りから……唐突に、人が現れた。
罅割れた鎧兜。
造詣に程度の差こそあるものの……間違いなく、守護騎士が一体、『剣』だった。
――ザッ、ザッ、ザッ……
一体を認識した瞬間、他の守護騎士達も集まってくる。
『剣』、『鉄槌』、『盾』、『湖』……間違いなく、私が使役していたものと同じ、守護騎士プログラムだ。
「おい、おーい！」
目の前で手を振っても、石を投げて兜にぶつけても、反応は返ってこない。
ということは、あいつらに私は見えていない……？
守護騎士達は、ある一箇所を目指しているらしい。
「もしかして……！」
これが、過去の映像記録なのだとすれば。
この先にはきっと……かつての、闇の書の主がいる！
――予想は、ある意味正解で……ある意味、大ハズレだった。
歩きついた先……そこに着いた守護騎士達は、『彼女』に傅いた。
『彼女』は、私に背を向けるように、瓦礫の玉座に座していた。
『彼女』の姿は……私には、見覚えがあるものだった。
――『彼女』は……リーゼと、同じ顔をしていた。
『また……こうなってしまった』
けど……その口調や、言葉の響きは、私が知るものとは、大きく違っていた。
むしろ、その口調は……
「……テンタトレス？」

そう。私に巣食う、闇……テンタトレスの内なる声と、同じものだった。
気だるげで……どこかで、何かを諦めている、あの声と。
リーゼが、紅い瞳をしているのに対して……テンタトレスは、蒼い瞳をしていた。
装束も、赤と黒を基調としたリーゼを反転させたような、青と白。
『此度の主もまた……同じ道を辿った』
答える守護騎士は、いない。
当然だ。だって……その意思と記憶を奪ったのは、他ならぬテンタトレスなんだから。
『……あと幾度、繰り返せば良いのだろう』
瓦礫の玉座につき、そう誰とも無しに呟くその姿は……哀しげで、寂しそうで……疲れ果てている。そう見えた。
『……天に至る書が、闇に堕したのは……いつごろだったか……』
幾度も……と、そう言った。
私が知る限りだけでも、闇の書は５００年以上、存在し続けている。
５００年。
１０歳になるかならないかの私には、正直、想像もできないほど途方も無い年月だ。
『……なに、守護騎士達よ。案ずることはない。汝らの記憶は消して……また、最初からだ。存在が磨耗することは無い。――我がさせぬ』
もしかして……守護騎士の記憶を、消していたのって……
年月による磨耗から、守るため……？
『……汝らを縛る呪いも、いつかは消えよう。いつかは……やがていつかは、救われる日も来よう』
それはまるで……自分に言い聞かせるような言葉だった。
『故に、今は……ひと時の闇の安寧に、沈むのだ』
手を翳すと、守護騎士達が、影の中にずぶずぶと飲まれていく。
『彼女』はただ一人、瓦礫の玉座に残される。
誰もいない。何も無い。

敵も、味方も……誰も。
そして、残された『彼女』は……
『……また、一人きり、か……、ッ……！』
――たった一人で、肩を震わせていた。
「……！　テンタトレス！」
何故、そんな行動に出たのか、自分でもよく分からない。
でも、見ているだけでは、いられなかった。
テンタトレスに駆け寄り、真正面から抱き締める。
『……？』
テンタトレスには、私は見えていないけど……少しは、気付いてくれたみたいだ。
だから、今は……この夢の間だけでも、傍にいよう。
私は……闇の書の主なんだから。
――ぎゅっ。
「、……え？」
背中に、腕が回された。
『……』
その瞳が、私に焦点を結ぶ。
『汝……なぜ、ここに……？』
テンタトレスが、はっきりと私を認識する。そして……
◆◆◆◆
「……」
ぱちっ、と、はやては目を覚ました。
「……？」
だがその目は、今ひとつ目覚めきってはいない。
「おい……大丈夫なんだろうな」
傍らで待っていた秀人が、不安げに言う。
『問題無イ。我カラノ干渉ヲ防グタメ、少シバカリ意識ヲ閉ザシテイルダケダ』

自身の意思とは別に、言葉が口をつく。
「いや、駄目だろそれじゃ!?」
『貴様カラノ魔力供給ニヨリ、幾許カノ猶予ハ得タガ……根本的ナ解決ハ、無理ダ』
「……そうかよ」
秀人は、悔しげに唇を噛む。
『フン……試シニ、我ヲ滅スルカ?』
ふて腐れたようにそう吐いた。
(めっする……?)
薄らぼんやりした頭で、その言葉の意味を噛み締める。
(滅する……)
滅ぼす。もっと直接的には……
(……『殺す』!?)
その意味を理解した瞬間……はやての意識、その自己防衛本能が、急速に覚醒した。
――ブォンッ!!
展開する、ミッド式魔法陣。転移魔法だ。
「なっ……!?」
『馬鹿カ、汝!? 何ヲシテイル!?』
ここでそんな魔法を行使してしまっては……一体何のため、魔力を補充したのか。
「殺させない……」
ぎゅっ、と、自身の身を掻き抱く。
秀人たちは、その言葉に違和感を感じた。
「……テンタトレスは、殺させないッ!」
……そう、言った。
『!?』
テンタトレスは、その言葉を聞き、硬直した。
「はやて、お前……」
秀人は、泣きそうな顔をする。
……はやてが手っ取り早く生命の危機を脱するには、闇の書、テン

タトレスを切り離すしかない。言わば、テンタトレスは時限爆弾だ。
はやてが言ったことは、その逆。
――時限爆弾を守るため、その身を犠牲にする、と言っているのだ。
恐れられ、忌み嫌われ、憎まれるだけだった自分を……『守る』、と。
「この、大馬鹿野郎……！」
それが、『彼女』の内面に、どう響いたかは定かではない。
だが……
『……！』
――パシュンッ！
テンタトレスから、アイへ、データが送信される。
掠れていくはやての姿。
その目は、はやての目か、テンタトレスの目か。
だが、その目は確かに、こう訴えていた。
――『追って来い』、と。
その姿が、魔法陣の向こうへ消えた。
「く……っそぉ！」
だが、追おうにも魔力が空ではどうしようもない。
アースラとは、通信こそ回復したものの……転送が可能になるまで、あと少しは掛かるだろう。
「アイ……さっきのデータ、何だったんだ？」
先ほど、テンタトレスがアイに送り付けたデータ。
目を閉じ、それを読み込むアイ。
そしてすぐ……ぱっと顔を上げる。
「……！　これ、転送先の座標なの！」
「でも……！」
「心配いらないの！今……！」
その言葉が終わらぬ間に、そのすぐ近くに転送反応。
「秀人！」「おまたせー!!」
ユーノとフェイトが、一番乗りだった。
「フェイト、よろしくっ！」
「りょーかいっ！バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ、Ｓｉｒ！』
そのまま、再転送に入った。
ここに来たのは、アースラの転送で……その間中、フェイトは既に、詠唱に入っていたらしい。
「バルくん、これなの！」
アイが、珍妙な呼び名でバルディッシュを呼び……先程の座標を送る。
『ＯＫ』
「時間が無い！転送しながら、回復させるよ！」
「なのはは!?」
『今、貰った座標の場所に向かってもらってる！』
アースラから、エイミィが答える。
――ヴゥン……！
そして、転送が始まった。
（くそっ……間に合ってくれよ……！）

◆　◆　◆　◆

「……ここ、」
目茶苦茶に座標を指定し、はやてが流れ着いた先は。
「……」
何の因果か……否や、必然か。
はやてが日常を過ごし……また、日常と決別した、因縁の地。

――海鳴小学校。

「……はは、」
虚無的に笑いながら、足を進める。
……その行動には、何の意味も無かった。
姿をくらますなら、また別世界へ逃げれば良いのだし、逃げ込むにしても、わざわざ袋の鼠になることも無い。
だからきっと……その行動には、『意味』は無くとも、『理由』があっ

たのだ。
教室までの道のりは、意識に無くとも、身体が記憶していた。
――校庭を、歩く。
「麻宮の馬鹿が、蹴ったボールで職員室の窓をぶっ壊したなぁ……」
はやては、その麻宮と同じチームにいて……担任の咲に、怒られた。
――正面玄関を、潜る。
「ここで……佐々木と本郷が、靴を間違えたとか言って、喧嘩してたっけ」
同じメーカー、同じモデル、同じサイズの靴だったから……
『見分けがつかないならどーでもいいだろアホ』と、その場を納めた。
――階段を、上がる。
「加藤と宮本が、階段を何段飛ばしで飛び降りられるか遊んでて、先公に怒られてたな」
踊場から踊場へ……伝説の『全段飛ばし』を成功させたのは、はやてだった。
――家庭科室を、通り過ぎる。
「佐山と野村……あの阿呆ども、クッキーに砂糖と塩、間違えて入れやがって……」
自信満々に奨めてきたそれを一口かじり、あまりの塩辛さに往生し……爆笑しながら、班の全員で食べきった。
――長い廊下を、歩く。
「葛西と小川が、ミニ四駆なんて持ち寄ってたなぁ……」
はやては、えげつない井桁積み仕様のアバンテを持ち出し、ぶっちぎりの勝利を納めた。
「ただの、情報収集の腰掛けだったのに……色々、やったもんだなぁ」
歩けば、歩くほど……驚くほど多くの記憶が、浮かんで来る。
――そして、三年二組。
自分の教室に、到着した。
カラカラと、引き戸を開ける。
見慣れた教室。
席は、窓際、一番後ろ。

――カタン。
椅子を引き、座る。
「？」
机の中から、何か紙切れがはみ出している。
休んでいた間の、プリント類だった。
冬休み間近ということもあり、宿題ばかりだった。その中に、一枚……気になるものを、見つけた。
「……『将来の夢』」
自然と、手は机の中……置きっぱなしの筆箱に伸びていた。

――ころんっ。

数分後、鉛筆が原稿用紙の上に転がる。
「……宿題なんかやったの、久しぶりだな……」
ちらっ、と窓の外を見遣る。
空は、夕暮れに移り変わろうとしていた。
席を立ち、教室を出ようとするはやての目に、黒板の真上、あるものが、映った。
――『運動会学年優勝　３年２組』
夕日を浴びて輝く、安っぽいトロフィーと、粗末な賞状。
「……なんだ、ちゃんと貰えたんだ」
……不明な感情を抱きながら……教室を、後にした。
「……」
かつん、かつん……と、階段を下る。
――ばたばたばた……！
……と、自身のものとは別の足音が、階下から近付いてきた。
「うわ、やっべー！もう４時過ぎてんじゃんかよー!?」
……まだ、残っている生徒がいたらしい。
しかも、はやてはその元気な声に、聞き覚えがあった。
「あーくそ、早く帰んねーと……って、アレ!?　八神じゃん!!」
サッカーボールを抱える、その少年は……

「……葉山」
クラスメイトの、葉山健太だった。
「お前、ずっとどうしてたんだよ!?」
その脇を、通り過ぎようとする。
だが、その腕を無遠慮に掴み、止める。
「……離せ」
「いーや、離さないぞ。職員室にまださーちゃん先生がいるから、一緒に行こうぜ」
「……何をしに」
「え？　そりゃ、ずる休みのこと謝りに……」
「……いらねぇよ」
若干イラッとした様子で、その手を振り払う。
「な、なんだよ！　おれも、望も、皆も、本当に心配してたんだぞ！」
……単純で、真っ直ぐな言葉。
その一つ一つが、はやてを揺さぶる。
「うるさい……！」
いよいよ、余裕が無くなったはやては、その常套区を、口にした。
「――死ねッ！」
こう言えば……大抵の人間は、呆然と動きを止める。
今までも、そうだった。
だが……
――がしっ。
……と、再び、はやての腕を健太が掴む。
さては、逆上したか……そう思い、振り向く。
「……って、言うな……」
「……え？」
はやては、戸惑う。
健太が浮かべていたのは、やはり怒りだったが……それは、はやてが思っていたものとは、少し違っていた。
そこには、隠しきれないほどの……哀しみがあった。
目に一杯に涙を溜め、唇を硬く結び……まっすぐに、はやてを見る。

そして今度は、ハッキリと……言った。
「――『死ね』って、言うな!!」
「――っ！」
はやては……怯んだ。
恐れ知らずの魔導師が……何の力も無い、少年の気迫に、一歩退いたのだ。
「人に、『死ね』って言ったら、いけないんだぞ!!
お父さんかお母さんに、言われなかったのか!?」
……驚くほど真っ当で……だからこそ、逆に新鮮に思えてしまう。
「……いいのか!?」
「な、何を……！」
「おれが、お前が言ったとおりに死んで、本当にいいのか!?」
はやては、ぐっと言葉に詰まり……売り言葉に買い言葉で、言い返した。
「……ふんっ！　ああ、別にいいよ！」
はやての、必死の虚勢。だが……
「嘘つけ！」
健太は、それを突っぱねる。
「なっ……!?」
「おれが死んだら、お前、絶対に後悔するぞ！
『あんなこと言わなきゃ良かった』って、毎日毎晩、嫌ってほど泣くぞ!!」
確信を持って、そう言い切る。
「何を、根拠に……！」
「おれも、そうだったし！　それに！　……それ、に」
健太は……一転、静かになり……言った。
「だって八神は……優しくて、いい奴じゃん」
……はやては、押し黙る。
「う……うぅ……！」
完全に、言い負かされ……ぽろぽろと、涙を流した。
ただの子供に、『闇統べる王』が……敗北した。

「……うわぁああああ～～～～～～!!!」
後は、泣くだけだった。
「な、泣くなー!!」
「うるさいうるさいうるさぁあああああい！　り、リーゼに言いつけてやるからなこのやろー!!!　ばーかばーかう○こやろー!!」
「だ、誰がう○こだー!」
……年齢相応に、低レベルな罵り合いを繰り広げる。
ぎゃーぎゃーと……だが、どこか楽しそうに、感情を爆発させる。
その姿は、恐るべき犯罪者でも、『闇統べる王』でもなく……そのへんにいくらでもいる、普通の子供のようだった。

「ぜー、ぜー……!」
「はー、はー……!」
息が切れるまで、その罵り合いは続き……
「『死ね』って……ぜー、はー……い、言うな……!」
「……あああああ、もう！わかったわよ！」
はやてが根負けすることで、決着した。
「……はは、」
「……ふふ、」
踊場に、座り込む二人。
やがて、どちらからとも無く、笑い出した。
「あはははは……はぁ、はぁ、八神」
「はは……何よ」
「おれ……おまえのこと、本当に友達だと思ってる」
「……」
何もかも、捨てたと思っていた。
何もかも、要らないと断じてきた。
だけど……それでも……捨てきれないものが、あった。
「……ほら、職員室、行くぞ！」
差し出される手。
「……」

はやては、それを、掴もうと手を伸ばし……
――パリィイイン!!
……ガラスを破り現れたソレに、阻まれた。
『……ＧＹＡＡＡ

魔力がその傷口から漏れ出してしまい……

――……ドクンッ!!

……猛烈な飢餓衝動として、表出した。

「ウううウウ……!」

ギラッ、と、理性を失った目で、健太を睨みつける。

『汝、気ヲ急クナ！　マダ、魔力ハ足リテイル！　ソノ者ヲ喰ラウ必要ハ無イ!!』

テンタトレスの、必死の呼びかけも虚しく……

――……とんっ。

……そんな、軽いような音を立て。

――はやての右手が、健太の胸板を貫いた。

「あ……あ……？」

ずるっ、と引き抜かれた手。

「あ……ぁああ……！」

……我に返ったはやて。だが、その手には……罪業の証のように、リンカーコアが握られていた。

――ドサッ。

力を失った健太が、はやての身体に倒れ込む。

「い、や……！嫌、嫌だ、こんなの、私は……!!」

健太の身体を抱きながら、いやいやと首を振る。

どうか、この少年だけは助けてほしいと。

だが、それを叶えてくれる者など、居ないのだと。

かつての、自らの行為を根拠に、遠巻きに理解した。

――『奪う』という行為と……その重さを、はやては、今の今になってようやく……その身で、理解した。

「……だ、ろ？」

健太が、はやての耳元で何かを呟く。

――――――な？　言った通りだろ？

……と。

だが……その理解は、遅すぎた。

――――――――――ッッ!!

声も無く、慟哭する。
――バキィイインッ!!
「八神、見つけ、た……？」
飛び込んできた、なのは。
彼女が目にしたものは……
ぐったりとした、見るからに危険な状態の健太と。
……はやてが手にした、リンカーコア。
「……」
――シャキンッ。
静かに、回天桜花を抜き、構える。
「……もう、駄目なの……？　戻れないの……？」
悔恨と、慚愧。
「……八神ッ！」
その頬には、いくつもの涙が流れていた。
「ぁあ、あああああ……！」
対するはやてもまた……涙で、ぐしゃぐしゃになった顔のまま、なのはを見上げる。
『アァ……マタダ、マタ、我ハ……』
悔恨に満ちた、テンタトレスの声。
そして……
『……『ベツレヘムの星』、発動段階へ移行』

――ズロロロロロロロロ……！

校舎全体を……影より昏き闇が、覆った。

◆　◆　◆　◆

……闇に沈む校舎。
――からんっ。
机の上に放置された鉛筆が、衝撃で落ちる。
そして、それを重しとしていた一枚の原稿用紙が、はらりと舞った。

『将来の夢　三年二組　八神はやて

私には、『敵』がいます。
倒すべき敵。憎むべき敵。それは、間違いありません。
奴を倒すことが、私にとっての一番の目標……でした。
それは、今でも変わりません。
私の『敵』は、おせっかいなやつです。
毎朝毎朝、かったるくてサボろうとしても、必ず私を学校に連れて行こうとします。
教室で読書に集中していても、何かと話しかけてきて、読ませてもらえません。
ソーセージとかを生で齧っていると、火を通さないと危ない、と取り上げてきます。
夜食にカップ麺を食べていると、野菜も食え、とサラダを作ったりします。
運動していると、一緒にやろう、と言ってきます。
なんでも一人でしている方が好きなのに、邪魔をされます。
でも……最近はなんだか、それも悪くないように思えてきました。
一緒にいると、何故か安心できます。
一緒にいると、わくわくします。
一緒にいると、楽しいです。
だから、もっと、一緒にいたいと、ずっと、傍にいて欲しい。
いつでも、笑い合える、そんな　　そんな　　――――――

ああ、
やっと分かった。
私は、あいつと、

友達に、なりたいんだ

# A’s編　第八十三話

突如として溢れ出た闇。
「くっ……!?」
退避しようとしたのだが……一瞬、躊躇したなのはは、反応が遅れてしまった。
迫る闇。だが……
――バゴォンッ!!
「なのは！　ボケッとしてんじゃねぇ！」
ヴィータが壁を突き破り、救助に来た。
『Ｒａｋｅｔｅｎ　ｆｏｒｍ！』
健太を担ぎ上げ、ラケーテンフォルムに変形させたグラーフアイゼンを、一気に吹かす。
――ドゴンッ!!
再び壁を破り、闇の侵食から、ようやく逃れることが出来た。
「……エイミィ、他は!?」
『たった今、全て転送完了！　残ってるのは……その……』
職員室にいた長谷川や咲は、既に救出済み。
「……民間人が一人、八神の被害に遭ってリンカーコアを抉られてる。アースラに運んで！」
『了解！　いま、そっちにユーノくんが向かってる！　応急処置は彼に！』
なのはが見ている中……広がり続けた闇は、学校の敷地一つを埋め尽くしたところで、一応の収束を見た。
「……！」
――ヒュッ!!
試しに、マーカーを着けた金具を闇に投げ込んでみる。
特に抵抗を残すことなく、闇の向こうへ消えたのだが……
『マーカー反応消失。どうやら、完全に敵のテリトリーのようですね』
「……うん」

下手に足を踏み入れることは、出来ないようだ。
「……」
健太は、浅い呼吸を繰り返している。即座に絶命することは無いだろうが、危険であることに変わりは無い。
「……もう、駄目なのかな」
刀を握る手を、力なく垂れ提げる。
「もう……敵にしか、なれないのかな」
去来する、これまでの思い出。
だがそれも……健太を手に掛けたことで、上塗りされてしまうのだろうか。
八神はやてを、『敵』として対処しなければならないのだろうか。
『……マスター、』「なのは……」
主の弱気な呟きに、ヴィータもレイジングハートも、明確な回答を出せなかった。
「……八神、」
その健太が、僅かに意識を取り戻した。
「！　葉山君!?」
「……まだ中に、八神が、」
……はやてが逃げ遅れたもの、と誤解している。
「うん……まだ、中にいるよ」
それを聞く余裕があったのかどうかは、わからない。
「助けないと……！」
健太はただ、うわ言のように言葉を続ける。
「でも……あいつは、」
「……あいつ、ばかだから……誰かの助けなんて、借りないと思う……うぅっ……!!」
苦しげに、身体を丸める。
「葉山君！」
「だ、だから……あいつは、だれか……だれかが……!!」
必死に、その言葉を口に出そうとする健太。
その身体が、ひょいっと持ち上げられる。そして……

「……誰かが無理やり、助けてやらないとな」
その言葉を継いだのは、秀人だった。
「悪いな、遅くなった」
その脇には、ユーノと、フェイト。そして、アイがいる。すぐ、ユーノが健太の治療に入った。
「……うん、なのはと同じような状況だ」
同じような……というと、半年前、蒐集された時。
「……ほぼ休眠状態だったのが幸いだった。これなら、ちゃんと治してあげられる」
魔法陣を展開し、その光に包まれる。呼吸が穏やかになり、血色も良くなっていく。
「よかった……！」
安堵するなのは。
「なのは、ハヤマは？　だいじょーぶだよね？」
その周りをちょろちょろするフェイト。
「……うん。ユーノくんの治療、間に合ったみたいだから」
「そう言うお前は、ギリギリだったぞ」
ヴィータが、やや咎めるような口調で言う。
「……たしかに、あの子が闇の書の主であることは間違いない。そりゃ、信じたくはないだろうけどさ……ああいう場面で、迷うな」
じろっ、と指をさされる。
「……ごめんなさい」
しゅんとなる。
「なかなか、根性のあるガキンチョなの」
アイが、健太の頭をポンポン、と軽く叩く。そして、まるで見ていたような口ぶり。
『アイ。あなた、もしや……』
「転送中、ある程度まではモニターしていたの」
『……なら、説明は不要だな』
通信の向こうで、クロノが言った。
『医療スタッフおよび機材の準備完了。現地の医療機関に、その少年

を搬送する手はずは整えた』
「現地……？　アースラじゃないの？」
なのはが疑問を抱く。治療には、アースラの設備を利用するのが第一ではないのか、と。
だが……
『……ここは、管理外世界。そしてその少年は、そこの住人だ』
忘れがちだが……管理局は、管理外世界に過度な干渉はしない。それこそ、なのはや秀人のように、不可抗力からその知識を得たものに関しては例外だが。
とはいえ、放置できる問題ではなく……人材と機材を現地で運用するという手段で、健太の治療に最善を尽くす、ということらしい。
『……すまない』
クロノにも、どうすることもできないのだろう。クロノも、その法を遵守すべき、管理局員なのだから。
「……わかった」
なのはは、渋々了承した。
そして、五分も待たない内に、救急車のサイレンが聞こえてきた。
アースラの手配の影響か、滞りなく進む。というか、救急車のスタッフ全員が、見覚えのある……アースラ医務室の局員たちだった。
「ご友人の治療は、お任せ下さい」
「……任せます」
なのは達に敬礼し、救急車は走り去って行った。
学校の敷地は、認識阻害の結界で覆い尽くした。
幸いにも、終業式までには土日を挟むため、一般人が足を踏み入れることはほぼ無いだろう。当直の教職員には、記憶の改竄が施されるという。
「……」
なのはは、闇に覆われた校舎を見上げる。
恐らくは、はやてのことを考えているのだろうが……固く引き結ばれた唇から、その内情を推し量ることは出来ない。

「……なのは。一旦、引こう」
ユーノが、その背に声を掛ける。
「彼の容態も気になるし……こんな連戦続きのコンディションで、作戦も無しに、突っ込むのは自殺行為だ」
戦闘に次ぐ戦闘。
体力・魔力が満タンに近いのは、なのはとフェイト、それにヴィータくらいのものだ。
「……ユーノくんが、そう言うなら」
一旦、退却することに決めた。
立ち去り際。それでもなのはの視線は、いまだ闇の向こうへ、向けられていた。
「……八神、」
だが、その先は言葉になることは無かった。
そして、なのは達は、健太の搬送された病院へやってきた。
中規模の医院で……表の看板には、『八代医院』とあった。
「これって……あのパターンだね」
「ああ……あのパターンだ」
「うんうん……あのぱたーんだよね」
……フェイトは、正直良く分かっていなさそうだった。
そして、バタン！　とエントランスの扉を開け、入ってきたのは……
「……なのは!?」
汗だくになって飛び込んできたのは、セミロングの少女。
「……望、久しぶり」
「やっほー」
健太の幼馴染にして、なのはの友達……八代望だった。
「吾妻さんに……ユーノくん、ヴィータちゃんにアイさんまで……」
「んー……アルフがいれば、ふるこんぷりーとだったのにねー」
フェイトがのんきに、そんなことを言った。
「……って、そうだ、健太！」
慌てて駆けて行く望の後を、秀人たちも追った。

「望ちゃん！　病院は走らない！」
「あ、はい！　すみません婦長さん！」
　通り過ぎざまに、中年の女性看護師に注意される。
「望ちゃん、って……」
「ここ、わたしのお父さんの病院だから。……健太が担ぎこまれたって聞いて、本当にびっくりしたわよ」
　そして、健太が運び込まれた病室に入る。
　ベッドに眠る健太と、せわしなく動き回る医師……に偽装した、アースラの医療スタッフたち。その傍でカルテのようなものを記入する、白衣姿の男性。
「お父さん、健太は⁉」
「ああ、望かい」
　その男性は、どうやら望の父親らしい。
「外傷も無く、脈拍も正常だ。今すぐにでも、目を覚ましても不思議じゃないんだが……」
　ぽりぽりと、困った風に頭を掻いた。
「……なんか、見知らぬ顔がまぎれているような気がするんだけど……気のせいだよね？」
　……ぎくっ、と、医療スタッフが動きを止める。
「……もう、やだなぁお父さんってば。そんなわけないじゃない」
　何かを察したらしい望が、笑い飛ばす。
「ははは……そうだよね。まさかこのぼくが、同僚の顔を見間違えるなんてコト、あるわけないもんね」
　弱弱しく笑い……真剣な表情になる。
「……健太くんになにかあったら、愛華さんに申し訳が立たない」
「……お父さん」
「あの……葉山君のご家族に、ご連絡は……？」
　なのはが、恐る恐る、聞く。
　一瞬、望の父親がバツの悪そうな顔をするのを見て……なのはは、

その話題を振ったことを後悔した。
「健太君の父親は、航空会社でパイロットをしている。今頃、地球の裏側だよ」
連絡が届いたところで、戻ってくるのは不可能。
では、母親は……
「母親は……一昨年の冬、交通事故で……」
「……え」
「……」
望も、言葉無く頷いて見せた。
じゃあぼく、他の患者さんのところ行ってくるね……と、望の父親が退室して行った。
あれだけ明るくて活発な少年が、母親を亡くしている。その違和感に、なのはは首を傾げた。
「この馬鹿、これでも大分塞ぎこんでたのよ？　……なのはが転校してくる前後の話だから、知らないのも無理もないけど……」
「……」
転校が云々以前に、他人と接触しなかったなのはが、覚えているとは言いがたい。
「……喧嘩したまま、それっきりだもん……塞ぎこみもするよ」
親子喧嘩などというものは、普通の親子が、普通に経験することだ。もちろん、たいていの場合、すぐに和解もできよう。
だが……突発的なアクシデントで、それが叶わなかったとしたら……
「――『死ね』って、言っちゃったんだって」
「……!!」
もちろん、ただの子供の悪口。だが、永遠にそれが撤回できなくなってしまったのだ。
「『あんなこと、言わなきゃよかった』って……毎晩毎晩、うなされて……」
はやてに語ったあの言葉は、実体験によるものだった。
「家族ぐるみで仲のよかったウチで、しばらく面倒見て……やっと笑

えるようになるまで、一年も掛かった」
だから、あそこまで必死に、はやてに食って掛かったのだ。
「……健太は、これ以上傷ついたらいけないの」
きっ、と、なのはを見る。
「――教えて。健太に、何があったの」
……望は、管理外世界の住人。
だが……クロノが例外として語った、『不可抗力としてその知識を得ている』人物だ。
知る権利は……ある。
「クロノ、いいね」
『……止むを得まい』
許可。
そして、なのはは全てを話し始めた。
――半年前、襲撃を受けたこと。
――ヴィータは、その時の襲撃者であること。
――八神はやてが、一連の連続失踪事件の犯人であること。
――目的は、人間の持つ魔力であること。
一から十まで、全てを話した。
「……そう、八神が」
健太をこんな風にしたのが、クラスメイトだと知り……
「……うんっ、よし！」
……決意の表情で、くるっと踵を返した。
「ちょ……望!? どこ行くの!?」
「八神のやつ、ぶん殴ってくる!!」
「待って待って待って！ 私の話、聞いてなかったの!? 八神は、その……」
凶悪犯だ、と一言で断言できず、ごにょごにょと濁してしまう。
「関係ないわよ、そんなもん！」
「そんなもん、て……」
愕然とするなのはに、望は、ずいっと顔を寄せ……
「なのははどうなのよ!?」

「お、怒ってるよ……？　だって八神は、本当に悪い奴で……」
「ちがーう！」
　そんなしどろもどろな回答を、望はぶった切った。
「……わたし、八神と一緒に遊ぶの好きだった」
「……」
「でも、あいつはどこかで遠慮してて……壁作って、閉じこもってて……それどころか、こんなに簡単に捨てられるとか、意味わかんないもん！」
　肩を怒らせ……どうやら、本気で腹に据えかねているらしい。
「納得できないから、ぶん殴って問い詰める！」
　……子供というのは、時として過程をすっ飛ばし、結論を出してしまう。
　望の言ったことこそ……なのはが、感じていたモヤモヤの正体だった。
「うん……そうだね」
　ぎゅっ、と拳を固める。
「……ちゃんと、納得させてもらわないとね！」
　……それらは全て、置いておく。
　敵だろうと、そうでなかろうと。
　――ただ、納得の行く答えを。
「望……その役目、私が任されてもいい？」
「おう！　いったれいったれ！　あんのアホタレに、キツいの一発くれてやれい！」
　どうやら、奮起したようだ。
　望と健太を残し、秀人たちは病院を後にした。
「んじゃ、作戦会議か」
　秀人が、そんな風に切り出した。
『ああ、その件だが……出来れば、いつもの場所で願いたい』
「いつもの……って、また俺の部屋……？」
　あの八畳の部屋に、スシ詰めになるというのだろうか。
『……どうにも、そこを希望しているお方がいてな』

「……？　まぁ、いいけどさ」
引っかかるものを感じたが……秀人は特に考えることなく、了承した。
そして、秀人のアパートに戻り、大家も招き、秀人の部屋に入り込む。
「……すまない、遅くなった」
そして、クロノがやってきた。
「……」「……」「……」「……」「……」
何故か、固まる一同。
「なっ……なっ……なっ……!?」
唯一、秀人だけが、ワナワナと震えていた。
そう。部屋にやってきたクロノは……とある人物を、伴っていた。
「……邪魔するぞ、小僧」
がっちりした体格を、これまたがっちりした軍服に身を包む、いかつい男性。
「……レジアスのオッサン!?」
――レジアス・ゲイズ少将だった。

# A’s編　第八十四話

「……」
何とも言い難い緊張感に包まれる、秀人の部屋。
いや、緊張感というよりは……
「……狭い」
……八畳。
秀人。なのは。ユーノ。フェイト。アルフ。ヴィータ。アイ。クロノ。……そして、レジアスの、計九名。
一人一畳弱と思えるかもしれないが、車座で座るには、面積は全然足りていない。
「……せめてアースラか地球支部でよかったんじゃないか？」
コロコロと転がってきたベアリングを遠くに放り投げつつ、もっともなことを言う。
「いや、ここなら盗聴の危険も無いと思ってな……」
じろりと部屋を見回し……
「小僧、ここは執務室か何かか？」
心底不思議そうに、レジアスが聞いた。
「バリバリの生活拠点だ！　狭くて悪かったな！」
ぐわーっ、と怒る。
「はいはい、お茶ですよ」
そんなタイミングで、なのはがお茶を入れてきた。
「……おう」
すとん、と腰を下ろす。
「……んで、マジで何しに来たんだよ、オッサン」
真正面に座るレジアスに、切り出した。
「……うむ」
レジアスは、湯呑みを置く。
「オレが拘束を解かれたのは、お前たちの捜査協力によるところが大きい」

そして、ぐっと身体を屈め……
「感謝する」
頭を下げた。
秀人は、イメージとのギャップに驚き……
「……何か変なものでも食ったのか？」
と、非常に失礼なことを言った。
だがレジアスは、怒るでもなく、ため息をついた。
「……娘に怒られてしまってな」
「つーかあんた所帯持ってたのかよ」
むしろ、そっちに驚く秀人だった。
「それでは、本題に移ろう」
クロノが仕切り、話題を移す。
「闇の書の主……八神はやてについて」
途端、空気が重くなる。
「……レジアス少将。あなたが、彼女に生活の支援を行っていたというのは……」
「真実だ」
そして、レジアスは話し始めた。
「オレは十年ほど前、陸戦魔導師として、あるロストロギアを持った次元犯罪者を追っていた」
（陸戦魔導師……？）
事情を知らないなのはは、首をかしげた。
（……あまり魔力は感じないけど）
リミッターを掛けているわけでも無さそうだ。
「オレはその事件の折、一切の魔力を喪失した」
簡潔に述べられた言葉に、言葉を失う。
「次元空間にも歪みが生じたらしく、管理局との交信も途絶し……まぁ、ありていに言えば、遭難したのだ」
「まさか、その場所って……」
秀人の呟きに、レジアスは頷いた。
「第九十七管理外世界『地球』、極東方面『日本』、その西部だった」

どうやら、関西地方のことらしい。
「……傷を負っていたオレを助け、救援が来るまで世話をしてくれたのが、八神伊吹と、八神火乃香だった」
思い出すように、遠くを見る。
「……管理局に戻ったオレは文官となり、ある程度疎遠にはなっていたが、子供が生まれたことは知っていた」
……苦々しく、声を低くする。
「だから……オレは、耳を疑ったよ。伊吹たちが、航空機事故に巻き込まれてしまったなど……」
そして、その詳細も、余さず知ることとなった。
「……それも、魔力の暴発が原因とは。……一因果とは、一皮肉なものだ」
「……？　それって、どういう……？」
若干、その言葉に違和感を感じた秀人。だが、踏み込んでもいい話ではないと、疑問を飲み込む。
「あの子だけは……いや、あの子だけが、生還したと知った。そして、その要因が、あの子に宿った闇の書の力であるということも」
ふぅ……と、疲れたように、息を吐く。
「……管理局員としては、即座に部隊を動かし、あの子を確保するのが正解だったのだろうな」
だが……出来なかった。
恩人の……友人の、忘れ形見。それを、ただ無情に処理することなど、できるだろうか。
「……出来ることなら、直接オレのところに引き取りたかった。だが……オレは管理局の人間で、あの子は管理外世界の人間。それは、叶わなかった」
そして何より、闇の書の主であるということが露見してしまえば、命は無い。
「だからオレは……この管理外世界で、あの子を援助することにした」
名前も伝えず、現地協力者の助けを得て、法的に後見人となった。
「オレは独自に、闇の書を摘出する手段を探っていたが……運の悪い

ことに、あのグレアムもまた、闇の書の所在に気付いてしまっていた」
チッ……と、舌打ちをする。
「幸いなのは、ヤツが手を出すより早く、あの子が力を手に入れたことだ。……その過程は、報告を聞いて……胸糞悪いを通り越して殺意が湧いたが、な」
その対象は既に、リーゼによって抹殺されている。
「……さて、オレからの話は以上だ」
「ありがとうございます、少将」
クロノが礼を言い、議題を進める。
「では……ユーノ。テンタトレスが言った、『ベツレヘムの星』という名称と、あの校舎を覆う闇について、報告を」
「わかった」
ユーノが発言する。
「まず、あの闇だけど……あれは、『ベツレヘムの星』発動の、第一段階」
ぴっ、と指を一本立てる。
「あの中は、文字通りの『闇』だ。一切の干渉を遮断し、内部に入り込めば、そのまま取り込まれてしまう」
「干渉を遮断……魔法なの、それ。いくらなんでも反則じゃない」
なのはの言葉も、最もだった。
「……戦乱の次代に生み出された、オーバーテクノロジーの産物だからね。詳しい原理も、分かっていない。あの、影を操る魔法があっただろう？」
なのはが何度か、目にしたものだ。
「あれを、途方もなく強力にしたものが、あの闇だ」
と、ヴィータがそこで、口を開く。
「幸いなのは、こっちから手を出せねぇ代わりに、あっちも逆に、こっちに手を出せないってことだ」
確かに……広がる速度も、普通に逃げられる程度だった。
「……厄介なのは、第二段階」
ユーノが、二本目の指を立てる。

「危険域に入るのは、展開からおよそ２４時間後……あの闇は、周辺の質量を無尽蔵に吸収しながら、密度を増していく。魔力だけじゃない。人も、物も、大地も……文字通り、『なにもかも』、を」
ヴィータが、ぽつりと呟いた。
「あたしも、そこまでしか立ち会ったことは無い」
その第二段階において、ヴィータもまた、吸収されてしまっていたのだろう。
沈黙する中……ユーノは、三本目の指を立てる。
「そして、めぼしい質量を全て吸収し終えた後……いよいよ、発動するんだ」
僅かに逡巡し……言う。
「――――対界殲滅魔法・『ベツレヘムの星』が」
広域を超え……対界。
クロノが、口を開く。
「１０年前の事件では、そこまでは発動しなかった。闇が成長し切るより前に……闇の書を、破損させることに成功した」
十年前の事件というと、クロノの父、クライドが携わった事件。
「グレアムの使い魔たちから、詳細な情報を得られた」
彼女たちの協力もあってこそ、ここまで真相に迫れた。
「……十年前の、闇の書の主は……
――――――ルカ・コルデーロ。
フィアット・コルデーロの、母親だ」
「!!　うそ……！」
なのはが、驚愕を露にする。
「闇の書を育てる『苗床』として……どういう方法を使ったのかは不明だが、グレアムによって、意図的に転生先に指定されてしまったんだ」
陸戦ＡＡＡランク魔導師。
紛う事なき、エース級。
闇の書の主としては、十分以上の資質を持っていると言える。

「……じゃあ、なに？　グレアムは、フィアットのお母さんを利用して、殺して……今度は、フィアットを利用したってこと……!?」
　なのはの怒りは、最もだった。
　いや、なのはだけではない。そこにいた誰もが、グレアムの所業に憤怒を感じていた。
「気付いたときには、もう……発動段階に入っていた。きっかけは……先ほど、レジアス少将が仰った、次元犯罪者の持っていたロストロギアだった」
　それが切っ掛けということは、前回の闇の書は……この地球の宙域で、発動したということになる。
「……展開された闇は、次元航行艦エスティアに充満し、コントロールの大部分を奪った」
　密室では、逃れるすべはない。
　クロノは、意図的に感情を殺したような声で、淡々と続ける。
「……艦長である、クライド・ハラオウンは、」
　息が詰まらないよう、必死に話を続ける。
「吸収される寸前……艦載魔導砲を、エスティアの至近距離で炸裂させ……闇の書にダメージを与え、機能を一時停止させることに成功した」
　話し切った。
「……闇の書は、エスティアと共に、空間の坩堝の向こうへ消えたものと思われていた」
　だが、今こうして……再び、発動してしまった。
「……文献を当たってみると、詳細が載っていたよ」
　手元に写本を出し、ぱらぱらと捲る。
「吸収した大質量を魔力で圧縮。擬似的な縮退エネルギー炉を生成。（圧縮……縮退……おいおい、それ、まるで……）
　秀人が、愕然とする。
　そう。質量を圧縮し、エネルギー化するのは……秀人が奥の手として、習得した技法なのだ。

「……」
何とも言えず沈黙する秀人。
幸いにも、ここにその秘密を知るものはいない。
「――……」
ただ、アイだけが、静かな目で秀人を見ていた。
「それを人間サイズの駆体の心臓とし、主の意思のままに、破壊を行う。
人間サイズのまま、巨大なエネルギーの塊が動き回るんだ。それはまぁ……無敵だよ。魔導師なんて概念には収まらない。人知を超えた存在になるだろう。それが、長年の間に曲解されて……完全な魔導を得られる、なんて話になってしまったんだろうね」
口ぶりからすると、まだその先があるようだ。
「そして……その縮退エネルギー炉はやがて、臨界に達する。そして……」
高まりすぎたエネルギーは、やがて……
「――ブラックホールと成る」
……ブラックホール。
それは、万物を引きずりこむ……光さえ逃れることの出来ない、永劫の暗闇。
「……」
……まさに、対界殲滅魔法。
「歴代の主で、ここまでその発現に近づいたのは……はやてが初めてだろうね」
代を……呪いを重ねるごとに、力を増していく闇の書。
はやては……その、申し子。
「起きたことが無い事象に関しては……無限書庫にも、知識は無い」
対処の手段を、一から考案しなければならない。
闇の状態のまま滅ぼすには、艦載魔導砲レベルの武装が必要で……だが、今回は地上故に、使用は難しい。吸収が始まってからも同様。
駆体を破壊しようにも、そのサイズから艦載魔導砲を命中させるのは困難であり、対処に当たれるのは、同じく人間サイズの魔導師。だ

が、魔導師では、たとえＳランクが束になっても叶わない。
そして、臨界に達してしまえば……もはや、対処云々の次元ではない。
この難問を……あと、２４時間以内に出さなければならない。
「……ひとまず、解散しよう」
重く沈殿した空気を入れ替えるように、クロノはそう締めくくった。
だが、それでこの空気が変わるわけもなく……
「ふぁああ……むずかしいはなし、もうおわった～……？」
……間抜けな大あくびが、逆の意味で空気を凍らせた。
「……寝てた、の……？」
「え～？　うん、そだよ？　ボク、ねむくってさ……ふぁあ」
なのはの問いに、フェイトがのほほん、と答える。
アイが、半眼でフェイトを見眇める。
「始まって五分で、脳からアルファー波が出始めていたの。こいつ、戦闘のとき以外、脳みそ殆ど使ってないの」
……おバカ認定を下した。
「ね、寝てた……」「こんな大事な話をしている間に……」
「堂々と……」
……あの、仏頂面のレジアスまで、信じられないと言わんばかりの表情で、フェイトを見て、そして……
「……く、くくく……」
肩を震わせ……
「はぁっはっはっはっはっはっは!!　そ、そうか、寝ていたか！　はははは！」
愉快そうに、大笑いをし始めた。
「ぶっ……!!　くくく……おま、おまえは、もう……！」
「……、っ、き、君というやつは……！　ぷっ……」
秀人も……なんと、あのクロノまでもが、笑いを漏らしていた。
あれだけ重苦しかった空気が一転。
『何とかなるさ』と誰かが言い出しそうなほど、気楽な雰囲気が出来上

がってしまった。
「くすくす……ああ、もう！　寝てた罰だよ！　スーパー行って、夕食の材料、買ってきなさい！」
笑顔を必死に抑えながら、フェイトを叱るなのは。
夕飯の材料のメモ用紙を渡す。
「ちぇっ。は～い……」
渋々といった様子で、家計用の財布とエコバッグを持ち、玄関を出て行った。
「アタシも行くよ」
吾妻家・お買い物係であるヴィータも、その後に続く。
「知人にも、挨拶は済ませておけ」
笑いの発作から回復したレジアスが、真面目な顔で言う。
「何だよそれ。遺言でも遺せってことか？」
「そうだ」
「！」
ズバッと聞いた問いに、これまたザクッと答えが返ってきた。
「……これだけ、危険な任務だ。死の危険も、大いにありうる。オレも、娘に言葉を託してきた」
沈黙する秀人を、レジアスは鼻で笑った。
「ふん、嫌なら尻尾を巻いて逃げるんだな。オレの部隊を動かせば、貴様の抜けた穴くらいどうとでもなるぞ」
――死にたくないなら、降りてもいい。フォローもしてやる。
そう言っている、ということに、秀人は気付いた。
（ほんっと、口の悪いオッサンだな……）
だから秀人も……それに乗った。
「……上等だ！　戻ってくるのがこっ恥ずかしくなるくらいの感動的な遺言バラまいてきてやらぁ！」
その傍に控えるなのはも、瞳に同じ意思を宿していた。
「いよっしゃ！　行くぞ、なのは！」
「はいっ！」
秀人となのはは、互いにヘルメットを手に、駐輪場へダッシュした。

「……アタシも、一応」
「ぼくも、族長に一文添えておこうかな」
アルフとユーノも、玄関を出る。
「……あ。アイもマリエルに用事があったの。おい、ちびすけ。さっさと戻るの」
「誰がちびすけか。　……はぁ。　では、少将。一旦帰還いたしましょう」
「うむ。……一旦？」
返事の後、くるっと振り向く。
「ええ。……なのはが、『よかったら、食べていってください』と、今」
秀人と飛び出していって……途中で気がつき、念話を飛ばしてきたらしい。
「……うむ。甘えるとしよう」
レジアスは、苦笑いでそれに答えた。

「おっかいーものー、おっかいーものー」
「……」
ぱたぱたと、スーパーへの道を歩く、フェイトとヴィータ。
「こーんやーは、にこみはーんばーぐー……っと」
「……」
そして、そこそこ歩いたところで……
「なぁ、フェイト」
「ん？　なぁに？」
ヴィータが、フェイトを呼ぶ。そして……
「……わざとだろ？」
……と、聞いた。
フェイトは、ぴたっと足を止め……
「……くふふっ」
……と、返事ともつかない笑みを見せた。
「ボクは、できるけどやらないだけだからね」
（……たいした奴だよ、お前）

ヴィータは、敢えてそれ以上を追求せず、その後を追う。
夕闇に染まる道。
等間隔に並べられた街灯が、ヴィータと、フェイトと
……
「……!?　ん!?」
――フェイトの影の隣に、もう一つの影が、寄り添っていた。
もう一つの影。
それは、フェイトの頭に手を伸ばし、撫でているようにも見えた。
「……!?」
ごしごしと目をこする。
「……ヴィータ、どうしたの？　さむいんだから、はやくかってかえろーよ」
「あ、ああ……」
もう一度見ると、影は消えていた。
「おつりでポテチかってこーっと！」
しゅたたた、と俊敏に走り出すフェイト。
「あ、コラ待て！　お釣りでそーいうのは買っちゃ駄目だ！」
「へっへーんだ！」
「待てー!!」
スーパーまでの鬼ごっこになってしまった。
フェイト達が、走り去っていった後。
――……。ちゃんと、がんばってるね。えらいよ
ジジッ、ジジッ、と鳴る街灯の下、小柄な影が、地面に落ちていた。
――……。どのくらい、持つかなぁ……？
ぷつんっ、と街灯と、影が消え。
――蒼い燐光が、宙に溶けるように消えた。

# A’ s編　第八十五話

秀人がなのはを連れ、最初に訪れたのは、アリサの邸宅だった。
夜間ということもあり、窓から明かりが漏れている。
「……相変わらず、でっけー家だな。間借りしたいくらいだ」
「あはは……でも、お掃除が大変だよ。光熱費だって……」
所帯じみたことを言い合う二人の前に、執事服を着た男性……鮫島がやってきた。
「吾妻様、高町様。ようこそおいでくださいました」
慇懃に礼をする鮫島。
「あ、鮫島さん。寄って行くのは、なのはだけで……俺はちょっと、別の用事が」
秀人は、他に行くところがあるようだ。
「左様で御座いますか」
「じゃ、なのは。後で迎えに来るから」
「うん、行ってらっしゃい。また後でね」
そして、なのはを残し……秀人はまた、夜の街にバイクを走らせる。
「……ん？」
信号待ちをしている対向車線のバイクが、パッシングをしている。
ミラーを覗くが、秀人に後続車両はついていない。
「……？」
ハイビームにはなっていない。不思議に思い、路肩に寄せて停車する。
――パララララ……
信号が青になり……特徴的な2ストロークの音を立て、対向車がUターンし、秀人に並んで停車した。
ミラーシールドを開けたのは、秀人もよく知る人物だった。
「秀さん、チーッス！」
「あれ、ヨシオじゃん」
職場の後輩、ヨシオだった。
「今日はオフだろ？　どこ行ってたんだ？」

「ちょっと早いクリスマス祝いを兼ねた妹の見舞いと……あと、コイツの慣らしッス！」
びっ、と己の愛車を指差す。
「何だよお前、ＮＳＲ買ったの!?」
バイク好きの血か……目ざとく、その車両の話に移る。
「はいッス！　苦節一年、チャリで通勤し昼飯を抜き小遣いを貯め深夜コンビニのバイトを増やし、とうとう買ったッス！」
誇らしげに愛車を見せびらかす。実に、年頃の少年らしかった。
「しかもバーハン仕様……スーフォアの流用？」
「セパハンだと肩こるし、周りが見えないッスから」
メーターの時計を見やる。
まだ、時間に余裕があるということで、路肩で世間話を始める秀人たちだった。
「ぶっちゃけ最初は、あと二年貯めて、中古のランエボでも買おうかな～って思ったんスけど、四つ輪はカネかかるじゃないッスか」
「あー……確かにな。でも俺も来年、クルマの免許も取らなきゃ」
「ウチのッスか？」
「ああ。俺もさすがに、いつまでも助手席ってのもアレだし……４ｔだったら、運転できるようになるからな」
「自分のクルマなら何に乗るッスか？　ＲＸ―８とか？」
「キャラバンのスーパーロングＧＸ」
「……秀さん、夢が無いッスよ」
思いっきり、商用車だった。
「だってバイク乗せられるし、人も乗れるし、荷物も載るし……寝転がって車内泊もできるんだぞ？」
「うっ……それは、いいかもッス」
「そういえば、桃子んトコはそれに乗ってたな……アレを奪うか」
翠屋の商用車をターゲットにする、何気に遠慮のない秀人だった。
「バイト先のコンビニにも、結構停まってるッスけど……あ、そうだ」

と、そこで何かを思い出したように、話を変えた。
「足繁く通ってたウチの客が、最近パタっと来なくなって心配してるんスよ」
客が来ないなど、別に気にするようなことではないのだが……
「なんか、口の悪い女のガキンチョで……深夜にジャンクフードとか弁当とか、たまにアイスとか山盛り買っていくんスよ」
「親は何をやってるんだ……」
呆れる秀人。
「さぁ……でも、車椅子で来たり、たまに身体にアザとか作って来るんでマジ心配で……」
すわ虐待か……と、渋い顔を作る秀人。
「あ、でも。たまに、そいつのねーちゃんっぽい人が現場を押さえて連れ戻すッスね」
「ねーちゃん……『っぽい』ってなんだ？」
「なんか、あんま顔似てないし、そのガキンチョに対して敬語使ってんスよ。変ッスよね？
でも、けっこー仲いいっぽいッスよ。そのガキンチョも、なんだかんだ言って買わないで帰って行くッスから」
「……そうか、ならいいんだ」
ちゃんと味方がいるならいい、と納得する秀人。
「あー、そうそう。そのガキンチョに、礼言っておきたいんスよ」
「礼？」
「ウチの妹、前にとんでもないヤブ医者に捕まってて……でも、そいつが教えてくれた医者に掛かってから、どうにか改善し始めてきたんスよ」
「ほー……そいつは良かった。悪いのは、脚だったっけ？」
「はいッス。なんか、神経が変な動きをする奇病みたいで、二年くらい前から急に始まっちゃったんスよ……って、やめやめ。暗い話はやめるッス！」
ぶんぶん、と手を振る。
「はは……んじゃ、またな」

話しているうちに、割と時間が経ってしまった。
「はいッス！　今度、どっかツーリング付き合ってもらっていいッスか？」
「ああ、付き合うよ」
「約束ッスよ？　んじゃ、またッス！」
――カションッ！　……パララララララッ！
ヨシオは、愛車のエンジンを始動し、走り去っていった。

――カランカランッ……
「おーっす。儲かってるかー？」
ドアベルを鳴らし、店内に入る。
２３日ということもあり、イブほどでないにせよ、店内は盛況だった。
「いらっしゃいませー……って、あれ。秀人君じゃない」
出迎えた美由希が、驚く。
「最近、あんまり来なかったよね」
「……まぁ、いろいろと」
家出して凶鳥部隊で暴れてました……などと言える筈は無かった。
「ちょっと土産が必要でさ……ミルクレープとガトーショコラとサバラン、残り全部」
「げっ……食べ過ぎじゃないの？」
「渡す相手が二人なんだよ」
「ああ、そういうことか……って、それにしても１１個は多くない？」
「一人がすんげぇ甘党でさ」
離している間に、ケーキが出来上がった。
「それじゃあ、お代は……」
「ゴチになります！」
「奢らないよ!?」
「じゃあ恭也にツケとく」
「あ、それならいいや」

「いいわけあるかっ！」
「いたぁっ!?」
パカンッ、とお盆で美由紀の頭を叩き、恭也が現れた。
「ちぇっ……」
渋々、代金を支払う秀人。
「こらこら、お客さんの前で騒がないの……って、あら、秀人くん。いらっしゃい」
「よっ、桃子」
「お買い上げ、ありがとうございます」
ぺこっ、と秀人に頭を下げる。
「ああ、そうそう。今度の食事なんだけどさ、」
食事……というと、毎週のアレだ。
「もしかしたら、次回は流れるかもしれない」
……その言葉に、どれほどの意味合いがあるのか、桃子達に理解できたかどうかは分からない。だが……
「じゃ、また。ケーキありがとな」
と、踵を返し、歩き始めたとき……
「……っ!!」
「うぉわっ!?」
ぎゅっ、と、いきなり背後から桃子に抱きすくめられ、秀人が驚いた。
「お、おい……何だよ、桃子」
戸惑う秀人。恭也と美由紀も、呆然としている。
「秀人くん……ちゃんと、帰ってくる？」
「……？　はぁ、まぁ……」
生返事を返す秀人を見て、桃子が言った。
「今の、秀人くん……あの日の士郎さんと、同じに見えて……」
……高町士郎。未だに目を覚まさない、なのはの父親。
「……気のせいだろ」
振りほどこうとするが、桃子も離さない。

「ちゃんと約束して。ちゃんと……用事が終わったら、帰ってくるって。ちゃんと無事に、戻ってくるって」
「……はぁ。約束するよ」
さすがに、これ以上客の目線に耐えるのは難しい。
ようやく桃子は、秀人を離してくれた。
「……約束よ？」
「わかったわかった……戻ってきたら、クリスマスケーキでもご馳走してもらうよ。……はやても一緒に」
静かな決意を胸に、秀人は店を出た。
次いで向かったのは、これまた馴染みの場所。
「……カントク、お邪魔します」
秀人の職場だった。
もう日も暮れたというのに、事務所には煌々と明かりがともっていた。
「……おう、ヒデか」
疲れた声で、椅子ごと振り向く。
その手元にある書類……備品・消耗品の発注書、取引先への敬具、お得意様へのメール……の多くは、本来、秀人が担当する雑務だった。
「あの……」「座れ」
有無を言わさず、椅子を一脚、秀人に差し出す。
「……失礼します」
それに腰掛ける。
「さて……言わなくても、わかってるよな」
「……はい」
およそ二週間にも渡る、無断欠勤。それが、社会人にとってどういうことなのか、分からない秀人ではなかった。
「お前はクビだ」
……覚悟していたとはいえ、改めて言葉にされると、やはり衝撃が大きい。
「……！」
俯く。

やはり、数年間、苦楽を共にしてきた人間から突きつけられる絶縁は、耐え難く……

「……なーんてな！」

……耐え、難く……？

「……はい？」

「だーッハッハッは！　いやー、すっかり騙されてやんの！　リンディさんから連絡あったっつーの！　傑作傑作！」

涙を浮かべたまま、きょとんとする秀人を見て……カントクは、ゲタゲタと爆笑したではないか。

「な、な、な……!!　だ、だ、騙しやがったな……!!」

「ひー、ひー……っ！　あー、おもろかった……ま、これでチャラにしてやるよ」

「カ、カントクてめぇ……!!」

「お、やるか青二才！」

ぷるぷると屈辱に震える秀人。だが、その拳を振り上げるわけにもいかず、ふくれっ面で、椅子に座りなおした。

「……すんませんでした」

「ま、男には、独りになりたい時も有るわな」

秀人は、持っていたケーキの箱を渡す。

「これ、土産です」

「なんだこれ……お、ケーキじゃねぇか！　気が利くな！」

サバラン三個。ガトーショコラ二個。

手づかみ……などにすることはなく、付属の小さなフォークで、チマチマと食べ始めた。

浅黒い肌をした筋骨隆々の大男がそうしているのはやはり、どこか違和感がある。

禁酒を守り続けた結果、大酒呑みが大甘党へとジョブチェンジを果たした経緯があることは、誰ぞ知ることや。

「おー……美味いなこれ。どこのだ？」

「翠屋っていう、大通りの店です」

「ああ、なのはちゃんとこの」

「はい、そうで……はいッ!?　今なんと!?」
　いきなりなのはの名を出され、飛び上がる。伝えたことは無いはずだが……
「だーかーら、なのはちゃんだろ？　お前が一緒に住んでる、小学生の女の子」
「……あの、話したことありましたっけ？」
「いや、無ぇけど」
　もぐもぐ、とケーキを頬張りながら、あっけらかん、と言う。
「お前がいなくなってから……そうだな、三日くらいか？　ちんまい子が尋ねてきてな」
「え……」
『秀人さんは、少しトラブルがあって帰るのが遅れているだけなんです』って……」
　……秀人の失職を防ぐため、駆けずり回っていたらしい。
「いやぁ……女がいるのは薄々気付いてたけど……まさか小学生たぁ驚いたぜ」
「……」
「俺は、ついにダチを通報する日が来たのかと……！　うぅっ……！」
　わざとらしく泣き真似をするカントク。
「……」
　ぴっぴっぴっ。
　秀人は、無言で携帯電話を取り出し……
「……なぁのはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!　どぉいうことだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
　……羞恥の咆哮を、上げたのだった。
『だって、秀人さんがクビになっちゃったら大変じゃない』
　電話を受けたなのはは、しれっとそう言った。
『管理局からの報酬で暮らすのもいいけど、そんなあぶく銭で暮らすなんて、不健全でしょ？』
「いや、それはそうだけど……」
『だけど？』

「……いや、別に。でもさぁ、でもさぁ……俺にも、プライド的なものが……」
『だったら、家出なんてしなければよかったじゃない』
「……でもさぁ、でもさぁ」
ウ○コ座りをしたまま、ぶちぶちと愚痴る。
その携帯電話を、カントクがひょいっと持ち上げた。
「おう、なのはちゃんかい？　オレだよオレ」
『あ、カントクさんですね。いつも秀人さんがお世話になっています』
「キャーーーーーーーー！」
ばっと携帯電話を奪い返す。
「あああ後で掛けなおすから！　掛けなおすから！」
電源を切り、ポケットに突っ込んだ。
「お前、尻に敷かれてんなー……」
……散々好き勝手やった挙句、この台詞である。
「……」
……秀人は、無我の境地を体現していた。
カントクは、ケーキを食べ終え、フォークを置き……
「……んで、本題は何だよ」
そう切り出した。
「……はい」
秀人も、姿勢を正す。
「明日、俺は人助けに行きます。もしかしたら、大怪我をするかもしれません」
「……」
カントクは腕を組み、じっと聞き入っている。
「もしも明日、俺が戻ってこなかったら……会社の籍から、俺の名前を抜いておいてください」
「……」
嘘は無いかと、秀人と目を合わせる。
「……本気か」
低い……付き合いの長い秀人だから分かる、本気の怒りの声だっ

た。
「はい。……これ以上、迷惑は掛けられ、」
「馬鹿野郎ッ！」
――……ガシャンッ!!
殴られた拍子に、椅子から転げ落ちる。
その際、どこかで傷をつけたのか、どろっと血が流れた。
「……!!」
咄嗟に、傷口を隠す。
治癒の瞬間を見られてしまうことは、大いに困る。
「ッ！」
だが、その手をカントクが掴み、傷口を間近に見られてしまった。
「……」
見られて……しまった。
表情を失い、力無く顔を逸らす。
だがカントクは、驚くでも、嫌悪するでもなく……
「……コレ関係か」
……と、言った。
「……気付いてたんですか？」
そう聞く秀人に、カントクが頷く。
「あたぼうよ。何年付き合ってると思ってやがる」
「……四年」
「四年六ヶ月だ」
細かく訂正する。
「まぁ、オレも最初はたまげたよ。お前の馬鹿力も含めて」
「……」
「その人助けってのは、この力が必要なんだよな」
ここで魔法を見せたとしても、カントクは理解するだろう。
「……はい」
「だったら、遠慮するこたぁ無えだろうが！」
バシン！　と、秀人の背中を叩く。
「逃げ道なんて用意してるヒマがあったら、さっさと済ませて、とっと

と戻って来い！」
「……！」
「へっ。お前の仕事は山ほどあるんだ。そう簡単に、辞めさせるかってんだ！」
不遜なその物言いに、秀人は……
「……わかりました！　さっさと済ませて、とっとと戻ってきます！」
笑顔で、そう答えた。
そして、秀人が事務所から出て行ったのを確認し……
「……戻って来いよ、ヒデ」
小さく、そう呟いた。
さて……これで秀人のあいさつ回りは終わり……ではなく。
「……」
あと一件。これだけは、どうしても外せない人がいた。
「……」
着いたのは、住宅の少ない高台の上に立つ……総合病院。
「……秀人くん？」
退勤したところなのだろう。私服でバッグを持った石田が、車の鍵を手に、呆然と立ち止まり、秀人と目を合わせた。

# A’s編　第八十六話

「……こんばんは、石田先生」
どこか気まずそうに、バイクのシートに腰掛ける秀人。
「……」
探していたものの……いざ目の前に現れてしまうと、言葉に詰まってしまう。
「……あ、の」
「……」
秀人の表情は、硬い。
それもそうだろう。あれだけ、手ひどく拒絶されたのだ。綺麗さっぱり忘れるような器用な真似、できるはずも無い。
「……ぶぇっくし！」
……緊張感をぶち壊すように、秀人がクシャミをした。
「……寒い」
良く見れば、ガタガタと小刻みに震えていて、唇は青紫色だった。
「ちょっ……！　今真冬よ!?　何でバイクなの!?」
気まずさを忘れ、慌てて駆け寄ってくる。
「あ、いえ……その……先生のこと、待ってたんで」
「……ここじゃ、寒いでしょう」
そして、石田は秀人を伴って病院に戻る。
当直室らしき部屋に入って、ストーブの前に陣取り……ようやく秀人は一息ついた。
「はぁ～～……!!　さ、寒かったぁ……！」
「……風邪をひいたらどうするつもりだったの」
呆れたような石田の言葉。
「ひきませんよ。そういう身体です」
だが秀人は、振り返らずそう言った。
「……」
「別に、『怖がるな』とか『忘れろ』とか、そういう話をしに来たわけ

じゃありませんから」
そして、もう一つのケーキの箱を取り出す。
「土産です」
受け取り、箱を開ける石田。
「あ……ミルクレープ？」
ミルクレープが三つ。その頬が綻ぶのを、秀人は見逃さなかった。
「先生、好きでしたよね」
「……憶えててくれたの？」
びっくりしたように、石田が目を剥く。
好物の話をしたのは、秀人が入院していたころ……もうかなり前だというのに。
「……まぁ、単に残り物買ってきただけですけどね」
どう見ても照れ隠しで、そんなことを言う。
「それにしても、三つも……」
和やかな空気が流れる。だが……
「……ん？」
秀人が、妙な魔力の気配を感じて、訝しんだのと同時……
――バタンッ!!
唐突に、ドアが開き……数名の看護師が、駆け込んできた。
「いいい、石田先生！　柳瀬さんが……美香ちゃんが！」
明らかに焦っている。
「落ち着いてください。どうしたんですか？」
「ま、窓から飛び降りて！」
「何ですって!?」
石田も、椅子を蹴立てて飛び起きた。
「でも、下には何も……もしかしたら、外壁のどこかに引っかかってるのかも……！」
「!!　警察、消防にも電話して！」
秀人を残し、廊下に飛び出して行く。
「……美香って、」
一応、面識がある。確か、はやてが妙に可愛がっていた少女だ。

「……」
秀人は、にわかに慌しくなる病院を抜け出した。
「さっきの魔力反応、もしかして」
目を瞑り、広域に簡易サーチを発動する。
するとやはり、飛行魔法の形跡と、今まさに移動する魔力反応があった。
『秀人くん、今いいかな？』
秀人に、アースラからエイミィの通信が届く。
『なんか、秀人くんのすぐ近くで、登録の無いパターンの魔力反応があって』
登録が無い。するとやはり、美香で間違いは無いだろう。
『速度そのものは遅いんだけど、海鳴第二小学校に一直線に向かってて……』
はやてのいる場所だった。
「ああ、知ってる子だから大丈夫。一応、誘導と、現地の工作頼めるか？」
『了解。すぐにスタッフを向かわせるよ』
警察や消防への電話を遮断し、代わりに、局員がそれに偽装し、事実の隠蔽を行う。健太のときにも、やった手段だった。
――ヴンッ!!
秀人は、飛行魔法を発動し、飛び立った。
飛び始めて間も無く、先行する頼りない紫色の魔力光が見えてきた。
「うーん……うーん……!!」
――バッサバッサバッサ……
四苦八苦しながら、翼のようなものを羽ばたかせている。
モーションばかりが大きく、ロクに進めていないが。
「おいこら、止まれ」
すっと追い越し、横合いから手を伸ばし、止める。
「わっ、わっ、わっ……!!」
驚いた美香は、ヘナヘナと失速し、あわや墜落しそうになった。

――ブゥウン……
翼が変形し、二つの魔力スフィアになった。
滞空では、この形態になるらしい。
「な、なんですか、もう！　じゃましないで下さい！」
若干ウェーブのかかった髪を夜風に揺らし、美香が秀人を睨みつける。
「無茶すんなよ。あのまま飛んでても、すぐ墜ちてたぞ」
美香から感じる魔力は、それこそ、なのはに匹敵……むしろ、下手をすれば凌駕するほどの大きさだが、なにせ制御が出来ていない。
「ほっといてください……！」
ではなぜ、美香をここまで駆り立てるのだろうか。
「姐さんを、たすけに行くんです！」
……やはり、思ったとおりだった。
「……」
無理だ、とは否定せず、とりあえず最後までは喋らせる。
「昨日、姐さんの魔力がいきなりふくれあがって……あれは、どう考えても普通じゃないです」
「気付いてたのか……すごいな」
感心する秀人。だが、それを馬鹿にされたと感じたのか、美香がまた憤る。
「とにかく、どいてください！」
「できない。一応、俺も管理局員の端くれだし……石田先生にも、迷惑が掛かる」
「う……」
見られたことを気付いていたのか、僅かに躊躇する。
「第一、▪満足に飛ぶこともできないお前が、行ってどうするっていうんだ？」
「それは、……それは、」
追い討ちのような秀人の言葉に、諦めかける。だが。
「……でも、姐さんが、苦しんでいるんです！」
「……なに？」

「確かに、聞こえたんです。『助けて』って、言ってるのが！」
「……何だって？」
抽象的な意味ではなく……本当に、聞こえたのだろうか。
――だとしたら。
「……美香、さっきのは訂正だ」
「ひぇっ……!?」
美香の肩を掴み、ぐいっと引き寄せる。
「お前の力が必要だ。協力してくれ」
はやての声が聞けるなら……美香は、救出作戦の鍵になる。
美香は、少しだけ逡巡し……こくん、と頷いた。
（なんか、よくわかんないけど……姐さんのためだもん）
「よし、そうと決まったら……戻るぞ」
今頃、石田も気が気でないはずだ。
「……わかりました」
渋々、美香はUターンした。
「んっ、んっ……！」
――ばっさばっさばっさ
……やはり、遅いが。
「……なのはとか、はやても、そうなんだけど」
「は、はい……？」
「フィーリングで魔法を使うタイプは、人に教えるのが苦手なんだよな。リーゼには習わなかったのか？」
「リーゼには防御と、結界までしか、教わっていません……ひー、ひー……」
まだ、教習途中だった。
「下を見るな。進みたい方向を見て、歩くようなイメージで魔力を動かしてみろ」
「……？」
言われたとおりに、前を見て……久しく忘れていた、『歩く』イメージを思い浮かべる。
――ヒュウウッ……!!

「あ……？」
本人が驚くほど、飛行がスムーズになった。
「な？　うまくいったろ？」
快活に笑う秀人。
その笑顔と、ある人物のイメージがピタリと重なった。
（この人が、『アホ』のひと……）
少々、美香が秀人に伝え損なっていたことがある。
（姐さんが、いつも話してたひと）
いや、意図的に隠していた、というべきか。
（……なんか、妬いちゃうかも）
美香が聞いた、はやての声。それは、完全には……
（――『助けて、秀人』……だもんなぁ）

……戻ってきた美香を出迎えたのは、看護師・医師総出でのお説教だった。
「なんか忙しそうだから帰ろうと思って、そうしたら裏庭でうずくまってるの見つけました。腰抜かしてたそうです」
……原文そのままである。
というか、よく納得したものだ。
一通りお説教を終えた看護師たちは、ぞろぞろと所定の持ち場へと戻っていった。
後日、親族にも連絡するそうである。
残ったのは、秀人と、美香と、石田。
「……そういえば美香ちゃんも、あの力があったわね」
運動会の日、石田や他の児童たちが避難した体育館に防壁を張っていたのは、美香だった。
「……じゃあ、はやてちゃんも？」
「……はい」
秀人は、美香に説明する意味も含めて、話す事にした。
「あいつは、この力を利用されて……今、非常に危険な状態です」
「……！」

息を呑む石田。
「でも、あと少しで、救出作戦が始まります」
「秀人くんも、それに……？」
「はい」
「あの……先生」
そこで、美香が挙手した。
「私も、さんかするんです」
「なっ……!?」
コレには、さすがの石田も難色を示した。
「駄目よ、そんなの！　美香ちゃんはもちろん……秀人くんだって！
二人とも、まだ子供なのよ!?」
石田の言うことも、至極最もだ。
「……美香は、前線には立ちません。あくまで安全地帯から、後方支援をしてもらうだけです」
はやてのラインを利用し、あの闇のどこかにいる、はやての正確な位置を捕捉する。それが、美香の役割だ。アースラの機器を利用すれば、言った通り、安全地帯からでも可能なはず。
秀人とて、なのはよりも年下の少女を、戦場に駆り立てるような真似はしない。
だが、石田は……
「そういう問題じゃない！　何で、そんな命の危険があるようなことを、子供のあなた達がする必要があるの!?」
美香が、何かを言おうとして……
「――大人が、助けてくれないからだろうがッ!!」
……苛立ちのままに。怒りのままに。言葉の刃を、叩き付けた。
「――!!」
ショックを受け、一瞬にして黙り込む。
「……、あ」
秀人は、今の言葉を後悔し……しかし、訂正することが、出来なかった。
うつむき、目を逸らし……事務連絡のように、言った。

「……最後の判断は、美香に任せます。美香、」
「……」
美香は、重い雰囲気に耐えかねたのか、いっぱいいっぱいの様子だった。
秀人は精一杯、優しい口調で、諭すように言った。
「……答えは、明日の昼にでもくれればいい。それまで、ちゃんと考えておいてくれ。誓って言うが、誰も強制なんてしないから」
「……わかりました。先生も、おやすみなさい」
そして、病室に戻っていった。
「先生」
力なく椅子に座る石田に、秀人が話す。
「時間が経っても、変わらないものはあります。それは、本当です」
かつて、石田が言ったことだ。
それは、かつて石田と秀人が過ごした、穏やかな時間のことであったり、石田の、秀人を案ずる情愛であったり……それらは、変わることは無いだろう。だが。
「でも……変わってしまうものの方が多いのも、本当なんです」
ビクッ、と、石田の肩が震えた。
「今更、変えられないんです」
たとえ、大切な家族に何度泣かれようと、怒られようと。
正論で諭されようと。感情で詰め寄られようと。
――真っ先に、『命』というカードを切ってしまう暴挙は、止められない。
「……だから、ごめんなさい」
秀人が、弱弱しい口調で……かつて、母親に何度となく伝えたように、意味の無い謝罪をした。
「ごめんなさい、先生」
今一度、謝罪し……ふっと、椅子から腰を浮かせる。
「秀人くん、私は……私は……！」
ふっと、石田が顔を上げる。一瞬だけ、目が合い……
「さようなら」

……離れた。
「……」
カツカツと、病院の廊下を進む秀人。その足取りに、迷いは無い。
しかし……
「……仲直り、出来なかったな」
寂しそうに、呟いた。
『秀人くん』
……エイミィが、見かねたように声を掛ける。
まだ、通信は切れていなかったらしい。
「……盗み聞きか？　趣味悪いぞ」
『ごめん。でも、あのね……』
「わかってるよ」
何かを言おうとしたエイミィを、秀人は遮った。
「全部の大人が、助けてくれないわけじゃない。エイミィも、リンディさんも、レジアスのオッサンも……いい大人だって、たくさんいる」
そこまで、秀人も馬鹿ではない。だが……
「でも、最後に届くのは、きっと……同じ高さの、子供の手なんだ」

◆・◆　◆　◆

地球支部を尋ねてきたアイ。マイペースに白衣を揺らし、秀人に買ってもらったスニーカーを鳴らし、廊下を歩く。
その傍を、局員たちが慌しく駆けていく。
「……」
珍しく、アイの表情は硬い。
「マリエル」
そして、マリエルのラボへ。
「んー……」
かちゃかちゃと、ひっきりなしにコンソールを叩きながら、それを出迎えるマリエル。
「マスターのぼけなす、右手のアレを人にあげちゃったの」

……アイを十全に機能させるに当たって、あの魔力結晶は必要不可欠なものだった。
「代わりになるプログラムかブツ、なんか寄越すの」
「……」
マリエルは、コンソールをポンッ、と叩き……排出された記録媒体を、アイに手渡した。
「ほらよ、持っていきな」
「……驚きなの」
見透かしていたようなタイミングに、アイが驚く。
その記録媒体をロードし……愕然とする。
「マリエル……何なの、コレは!?」
憤り、マリエルの肩を掴んで真正面を向かせる。
「答えるの！　どういうつもりなの!?　こんな、解決にもならないようなモノ……！」
だがマリエルは、淡々と答える。
「魔力強化・限界突破……ブラスターシステムだ」
淡々と、事実を述べる。
「それを使えば、最低でも２４０パーセントの出力向上が見込める。……代償に、術者の生命を削るがな。なぁに、それだけの強化にしてみれば、安い代しょ……」
――パンッ!!
記録媒体が、マリエルの顔に叩きつけられた。
「使わないの……！」
ぎゅっと拳を握り締める。
「こんなもの、絶対に使わないの！　使わせないの！　アイが隠匿すれば、マスターはコレの存在を知らないで済むの……！」
「無理だよ。だって……」
記録媒体を持ち上げ、椅子に身を投げ出す。そして……
「これは……秀人に頼まれて、作ったものなんだから」
……と、アイにとっては衝撃の事実を、言った。
「……マス、ター……」

アイは、へたりこんだ。
「……マスター……どうして……どうして……」
「……仕方ない、じゃないか」
マリエルも、力なく項垂れている。
「これから相手にするのは、人外の……それこそ、伝説級のバケモノだ。常識の範囲内の、生半可な武装や理屈じゃ、抗うことはできないんだ」
非常識には、非常識。
――化け物には、バケモノを。
「……」
「だったら……だったら、さぁ……！」
その声が、湿る。
「アイツを信じて……言うとおりにしてやるしか、無いじゃないかよォ……！」
滂沱と、涙を流した。
「くそぉ……何でだよ……何でワタシは、こんなもんしか作れなかったんだよ……!!」
……マリエル自身も、冷静な部分で驚いていた。
まさか、自分が他人のために、こうも泣ける人間だったとは……全くの、予想外だった。
アイも、かける言葉が見つからず、立ち尽くすしかなかった。
『……そんなに、自分を責めるものではないわ』
……二人しかいない部屋に、声が響いた。
顔を上げたアイが見たのは、奇妙なウインドウと……そこに映る、黒髪の女性。
「……プレシア？」
――プレシア・テスタロッサだった。

# A’ s編　第八十七話

「……プレシア」
　鼻をすすり、マリエルがモニターを見上げる。
『……あなたは、よくやったわ。足りない時間で、闇の書への対策と、秀人の依頼……その両方に、応えて見せたじゃないの』
「でもォ……」
　ぐしぐしと目元を擦る。
「散々、天才だとか自称しておいて……結局、出来上がったのはあんな自爆装置で……」
　完全に自信を喪失してしまったのか、汚い床にペタンと座り込んでしまった。
「……まるで、『死んで来い』って言ってるようなものじゃないか……」
「……」
　アイは、泣かせてしまった気まずさから沈黙する。
『ほら、まだアイに見せてない成果物があるでしょう？　あれも出して御覧なさい』
　プレシアが、見かねたように話の続きを促した。
「あ――ああ、そうだな。そうだったな……」
　そして、ゴミの山をワサワサと掻き分け……長細い容器を、ずるずると引きずりながら戻ってきた。
「……」
　今度は不用意に使用せず……恐る恐る、その箱に触れる。合金製の、頑丈な容器だ。
　留め金を解き、開封する。
　――ゴロンッ。
　そして、転がりだしてきたのは、直径１５センチほどの球体だった。
「……鉄球？」
　随分と重量があるらしく、片手では持つのも一苦労。

「秀人から聞いたんだけどさ……あいつ、圧縮してエネルギーを取り出すのに、そこらへんの石ころとかでやってたらしいんだ」
依頼するにあたって、マリエルには秘蔵の切り札のことを話したらしい。
「でも、もちろんそれらは均一な形状をしていないし、エネルギーを取り出すにもロスが生じる」
時間が掛かる。それが、秀人が軽々しく戦闘で使用しなかった理由だった。
圧縮を使うのは、魔力が本当にエンプティに近づいた時のみ。そうでなければ、その時間で魔力を放出した方が早いからだ。
だが、この金属球は……
『私が開発した、艦船の動力炉にも転用可能な魔導合金よ。質量は、黄金を軽く上回るわ』
「それを、ワタシが限りなく真球に近い形に仕上げた」
これならば、ほぼロス無く圧縮することができる。
「アイ。先の戦闘では、どこまで使った？」
「……第一形態までなの」
右半身を重点的に武装した、第一形態。
だがあれは、右手の魔力結晶を失ったことで、使用不可能になってしまった。
『アイ。確認するけれど……秀人はこの戦いで、どこまで使うと予想している？』
「……多分、次は第二……いや、第三までは間違いなく解放するの」
段階ごとに力を増していく、イモータルハート。
「……運用は、理論的には可能だろうな。一番の問題だったエネルギーは、解決の目処がついた」
だが、力を増すのに比例して、求められるエネルギーもまた、莫大になっていく。
有り得ない仮定だが、もし、秀人以外がイモータルハートを使用したら、起動の段階で魔力・生命力を枯渇させ、死亡してしまうだろう。
「第二なら、その球ひとつにつき、カウントは２０秒。第三なら、その

半分だ」
「……合計、１００秒以下」
アイが、難しい顔をする。
いくら使えるようになったとはいえ、心許ない数字だ。
『とはいっても、それは全開駆動での話。秀人自身の魔力での運用であれば、第一と同じ要領で使える筈よ』
プレシアが、それに補足する。
「……そのための、ブラスター？」
あれだけ無茶苦茶な出力を可能にするシステム。
マリエルは嘆いたが、やはりそれは、イモータルハートを運用する上で、有用なものだった。
「……マリエル、ごめんなさいなの」
そうとは知らず当たり散らした自分を恥じ、マリエルに謝罪する。
「……いや、それでも駄目なものは駄目だ。わかるだろ？　いくらアイツが死にづらい身体だとはいえ、その負荷は並大抵のものじゃない。使い手に必要以上の負担を強いるものなんて、失敗作なんだよ」
技術者として、譲れないらしい。
「負荷……」
だが、アイが気付いた。
それが、『使い手』に負担を強いるのが、失敗作だというのなら……
「――その負荷、アイが受け止めるの」
……機材が受け止めればいい、と。
「『え……？』」
始めキョトンとしていた二人だったが、アイの提案を受け、可能性を見出だした。
「確かに、それなら、秀人への負担は最小限にできる」
『……肝心なことを見落としていたわね。デバイスの本分は、むしろそちらだもの』
使い手への負担を軽減する。
それは、デバイスの本領だ。
あまりにもアイが人間くさいものだから、すっかり忘れていた。

しかし……
「……でも、いいのか？」
マリエルが、不安げに聞いた。
『……並大抵じゃないわよ。下手をしたら、あなたの本体が破損する恐れが……』
アイの身を案ずる二人。
だが、アイは真球を、ためらい無く自らの内に収めた。
「マスターを支えるのが、アイの存在理由なの」
そして、胸を張り……
「アイを……自分達の子供を、信じるの」
……二人の産みの親に、そう言った。
「……わかった。すぐに取り掛かろう」
『期限は、明日まで……ギリギリね』
マリエルとプレシアは、機材を立ち上げる。
完全にスイッチが入った二人を見て、アイは静かに部屋を出ていった。
『……驚きね。まさか、アイがあんなことを』
「……」
マリエルは沈黙したまま、答えない。
『マリエル？』
ふと、我に返った。
「……あぁ、いや。ワタシに、明確な親はいないからなぁ」
ポロッ、と、自らの出自を口にした。
「いつぞやの、いずこかの、優秀な遺伝子同士を掛け合わせて『製造』されたのが、ワタシたち」
『プロジェクトF……!?』
その、他人事とは思えない話に、プレシアは一瞬、手を止めた。
「いや、違うよ。そもそも、年代が噛み合わないだろう」
『あ』
プロジェクトFが発足したのは、十年以内の出来事だ。
「もっと高度で、もっと確実で……もっと、外道なものさ」

歪な……異形の、ヒトクローン製造技術。
「デザイア・―チルドレン」
それが、名だった。
「とはいえ、製造された15体のうち、10年以上の生存が確認されたのは、僅か三体。
その三体にも、深刻な人格破綻が認められ、『規格を満たしていない』として、払い下げられた」
『……』
「あぁ、別に、辛気臭くなる必要は無いぞ。二人とも、とりあえず生きてる」
『そう……』
「ワタシは、機械工学。一人は生物工学。もう一人は……まぁ、それはさておき。
一応、全員きょうだいに当たるのかな。母系か父系か、どっちかの遺伝子は共通だし」
『……名前は、何と言うの？』
複雑な、親愛の情を覗かせ……
「――アーデルハイド・アーバイン。
――ジェイル・スカリエッティ」
『ジェ、ジェイル……ッ!?』
名を聞いたプレシアは、椅子からずり落ちた。
◆◆◆◆
「……お邪魔して、悪かったかな？」
アリサの邸宅は、明日からのクリスマスパーティを控え、準備が進められていた。
「別にいいわよ。丁度いい息抜きだわ」
ソファに座り、紅茶を一服する。
「秀人さんは、いないんだ？」
その隣には、すずかもいた。
「うん。でも、後で迎えに来てくれるって」
すずかの家の方は、家族と親しい友人のみで慎ましく行うらしく、

準備も早く済んだようだ。
「……それで、用事って？」
折を見て、アリサが切り出した。
「……うぅんと、特に、用事っていうほどの用事じゃ、ないかもだけど」
言っていて、変なことを話している、という自覚はあった。
いきなり電話して、自宅に押しかけて、特に用は無いなどと……
「……いや、ううん。大事な用事だ。アリサとすずかに、会いに来たんだ」
「何よ、それ」
アリサは、ふっと笑う。
だが、すずかは……じっと、なのはの目を覗き込んだ。
「……なのはちゃん」
「な……なに？」
若干、腰が引ける。
「……どこにも、行かないよね？」
そんなことを、聞いた。
「……？」
意味が分からず、首を傾げる。
「……うぅん、ごめん。何でもない」
首を振り、その疑念を払う。
「ねぇ、なのはちゃん……はやてちゃん、今どうしてるか知らない？」
「――っ、げほっ！」
紅茶を喉にひっかけ、咳込んだ。
「げほっ、げほっ……！ご、ごめ……！」
「あーもう、何やってんのよあんたは……」
アリサが呆れ、口元を拭ってやった。
「その反応……さては、はやてに何かあったのね？」
「それで、それを解決しようとしていて……」
「覚悟のために、わたしたちに会いに来た、と」
……全部、言い当てられた。
「……はい」

がっくりとうなだれる。
「わたしたちに、出来ることは？」
協力を申し出る。
だが、民間人の彼女達に、直接協力できることは無い。
あるとすれば……
「……八神を、受け入れてあげて。何があっても」
はやてを、待っていることだ。
「……」
その言葉に込められた重みに、気付いたかどうかはわからない。
だが二人は、しっかりと頷いてくれた。
「……うん、ありがと」
笑顔で礼を言い、立ち上がる。
「夕飯、食べて行かない？」
「ごめん、みんな待ってるから……」
アリサの誘いに、申し訳無さそうに断りを入れた。
「あんたって、ほんと……家族大好きよね」
「うん。みんな大好きだから……」
そこに、珍しく、すずかが意地悪く聞いた。
「じゃ、秀人さんは？」
――大好き。家族なのだから。
「……」
だが、答えるべき声は無い。
『好き』という言葉が、なんというか……しっくりこない。
「……？」
嫌いな訳が無い。
それは、天地に誓って言える。
だが、そう。しっくりこない。もやもやする。
「……あう？」
やや短気ではあるものの、聡明なのはにしては珍しく、混乱していた。
「秀人さんは……秀人さんは……好き……だよ？　ううん、好き

じゃない、いや、好き……好きだけど、好きじゃ……ああああ？」
ぷしゅー、と、今にも頭から煙を吹きそうだった。
すずかも、まさかこれ程とは思わず、慌てて話題を切り替えた。
「あぁ、ごめんごめん……じゃ、最後に一つだけ」
最後の問いは……
「なのはちゃんにとって、はやてちゃんは、どんな人？」
それに答えようとした時……なのはの携帯電話が、けたたましく鳴った。
「わっ！……あぁ、秀人さんだ。じゃ、ごめんね二人とも」
携帯電話片手に、その場を後にする。
「……あぁ、そのこと？
だって、秀人さんがクビになっちゃったら大変じゃ……」

「……ねぇ、すずか」
なのはが見えなくなった頃……アリサが、隣のすずかを呼んだ。
「……うん」
「……アレ、さぁ……どう考えても……」
「……ガチだね」
二人は、何かに納得していた。
◆▪◆　◆　◆
アースラの艦長室の前に、クロノの姿があった。
「艦長、クロノです」
『入りなさい』
促され、入室する。
部屋の中には、リンディの他、エイミィの姿もあった。
「……艦長、」
「今だけは、『母さん』でいいわ」
言いかけるクロノに、リンディはそう言った。
「……母さん、これを」
懐から取り出したのは、Ｓ２Ｕとは別の、二機のデバイス。

――キンッ
試作デュランダルと……制式デュランダル。
クライドの、形見だった。
「……」
それを目の前にしたリンディは、何を思っているのだろうか。
「……クロノくん」「ああ」
エイミィがクロノの手を引く。
クロノは、それに逆らうことなく、エイミィと共にドアを目指した。
「……時間が来たら、呼んでください」
「では、艦長。また後で」
――プシュッ。
ドアのエアロックが掛かり……室内の様子を、うかがい知ることは出来なくなった。
「……クロノくんのお父さんって、さ」
「……」
「あの、クライド・ハラオウンなんだよね」
「……何を今更。訓練校時代に、何度も聞いたことだろう」
かつて、訓練校時代……孤独に訓練を重ねるクロノの元に、何かとチョコマカやってきては、『クライド・ハラオウン伝記』を聞かせろ、とねだっていた。
「うん。本当は、全部知ってたんだけどね」
これには、クロノも足を止めざるを得なかった。
「……なに？」
「だって、クロノくんってば……あの頃、『近づくな』オーラをバリッバリに出していたじゃん？」
「……あれは、」
最年少であり、座学・実技、共に主席。父はかの伝説の局員であり、母は現役にして数少ない、女性の現役提督。
やっかまれない訳が無かった。
だが、クロノにはそういった人間関係全てが煩わしく、そんな些事に対応するヒマがあったら、力を磨くことを選択していた。

気付けば、相部屋が基本であるはずの訓練校で個室を与えられ、教官ですらクロノを腫れ物に触るかのように接し、ますます孤立を深めるばかり。
そんな頃だった。
「第一声は……『きみ、クライド・ハラオウンの息子なんでしょ？』……だったか」
「うん。生意気ながきんちょを、更正させてやろうかと思って」
誰もが知っていながら、半ばタブーであるかのように触れなかった話題に、無遠慮かつ強引に突っ込んだのだ。
「……僕の部屋が、雑誌やら雑貨やら生活用品やら、とにかく雑然となっていったっけな……」
「あはは……ごめんね、あれは素だから」
学長に強引に頼み込み、クロノの部屋に転がり込み、ずかずかと押し入ってきた。
「おかげで、教官や級友たちからは冷やかされるわ、いつの間にかコンビ扱いされるわ、何故か見習い先が一緒だわ、気付けば執務官と補佐だわ……やっと一人前になれたと思ったら、やっぱり配属先が一緒だわ……」
「でも、さ」
エイミィが、その愚痴を切り……
「私が一緒で、楽しかったでしょ？」
……傲慢でもなく、自然な確認として、そう聞いた。
「……ヴェロッサのヤツが、一番悪乗りしていたな」
教官や級友たちとは、冷やかされながらも会話をするようになった。『クライドの息子』ではなく、『クロノ・ハラオウン』として、見てくれるようになった。
「……あんな軽薄な服装、今だったら恥ずかしくて出来ないな」
休日には、街まで遊びに連れ出してくれた。
「君が測位を間違えて、僕は僕で敵に嵌められて……初めての任務が、あんなにハードだとは思わなかったよ」
見習い先では、初めて一つの案件を解決した。

「ちょっとでも無理をしようとすると、ベッドに引きずり込んでくれたな」
試験勉強の傍らでは、食事やスケジュール調整のおかげで、身体を壊さずいられた。
「しかも、ちゃっかりと資格を取っていて……」
その傍ら、オペレーターとして、一人前のスキルを身に付けていた。
「腐れ縁も、ここまで来れば大したものだ」
そして、同じ艦に配属され……今もこうして、隣にいる。
「ああ。君と一緒にいられて、僕は幸せだった」
紛れも無い感謝を、エイミィに伝えた。
「……照れちゃうな」
顔を赤らめ、ぽりぽりと頬をかく。
「クロノくん。君のそーいうところ、要注意だからね」
「……何のことだ？」
きょとん、と。素で不思議がるクロノに、エイミィは苦笑する。
「……昔から、どれだけ私が苦労してきたことやら」
「さっきから君は、何を言っているんだ？」
「ふーんだ。教えてあげない」
「……？」
一周している間に、艦長室の前まで、戻ってきていた。
もう、大分時間も過ぎた。
――プシュッ。
ドアが開く。
入室したクロノ達に、赤くなった目を向けるリンディ。
「……デュランダル、確かに確認しました。これは、あなたが現場で運用した方が有用です」
そして、クロノに二機が渡される。
「確かに、拝領しました」
これで、この二機は正式に、クロノのデバイスだ。
「……作戦開始まで、あと少しね」
ちらっ、と時計を見て……

「……そろそろ、約束の時間でしょう？」
なのは達との食事まで、あと三十分を切っていた。
「行ってらっしゃい、クロノ、エイミィ」
「はい、母さん」「行ってきます、艦長！」
作戦開始までの、穏やかな時間はこれで最後だ。
だから、リンディは願うのだ。
（どうか、これからも……あの子たちが、共に歩んでいけますように）
……作戦開始まで、あと、２０時間のことだった。

# A’s編　第八十八話

家に戻った秀人たち。
「……あーあ、俺たちが最後尾だったみたいだな」
「そうみたい」
部屋の中には、秀人となのは以外、全員が揃っていた。
「あーー！　おそいぞ、ひでと、なのは！　ボクがいちばんのりだったんだからなー！」
エプロンをつけ、ぷりぷりと怒っているフェイト。その傍らには……
「……オッサン、何やってんだ？」
……上着を脱ぎ、Yシャツの袖を捲り、台所に立つレジアスの姿があった。
「お前たちの帰りが遅い、腹が減った腹が減ったと、そこの小娘がうるさくてな……」
手元では、驚くほど手馴れた手つきで、ハンバーグのタネとなるひき肉を捏ねている。
「……手馴れてますねー」
なのはも、感心した様子だった。
「野戦では、炊事も必須技能だ。……テスタロッサ、もっと力強く捏ねろ。それでは、粘りが出んぞ」
「はぁい！　えっほ、えっほ！」
……レジアス監修の元、フェイトも手伝いに余念がない。
「……クロノおまえ、何してんの」
「……代わると言っても、聞いてくれなくてな……」
「うううう……気まずい……」
クロノとエイミィは、チマチマと付け合わせなどに使う野菜の皮を剥いていた。
直接ではないとはいえ、上官に食事の支度をさせるなど、本来なら言語道断だ。

「クロノ執務官。ニンジンの皮は捨てるなよ」
「りょ、了解！」
「あっ、クロノくん、ピーラーの向きが逆！　それじゃ皮が分厚くなっちゃう！」
　クロノは、エイミィに手ほどきを受けながら、その崇高な任務を遂行していた。
「あ、アルフ。油の温度、そろそろじゃないかな？」
「そうだね。んじゃ、揚げるか」
　ユーノとアルフは、副菜となる揚げ物を。
「あ、ちびすけ。塩はそこまでなの。それ以上はバランスが崩れるの」
「いや、ここはもっと甘い方が……っていうか、今度チビっつったらぶっ飛ばすぞ？」
　アイとヴィータは、ハンバーグのソースを、それぞれ担当していた。
「んー……っと、」
　レジアスの手元の肉は、解凍して間も無く。まだ、玉ねぎも入っていない。
「なのは、俺が玉ねぎ切るから、片っ端から炒めてくれ」
「ん、わかった」
　包丁を取り出し、玉ねぎをみじん切りにしていく。
「む、小僧。目が粗いぞ。もっと細かく刻め」
　レジアスが、目ざとくチェックしていた。
「あン？　カレーじゃないんだから、これでいいんだよ」
「貴様の生き方のごとく大雑把な切り方だな」
「チマチマ細かくとか、年食ったオッサンらしくてぴったりじゃねーの？」
　……途端、口げんかを始める二人。
「はいはい、喧嘩しないの」
　なのはが、団扇でパタパタと、玉ねぎを炒めた煙を二人の方に流す。
「ぐぉお、目に……！」
「し、沁みるぅ……！」
　……仲良く揃って悶絶した。

「まるで親子のようじゃのう」
……と、新たに大家が、部屋にやってきた。
「……」「……」
レジアスと秀人は、目線を交わし……
「ふんっ。」
互いに、全く同じタイミングで逸らす。
「……そっくりじゃ」
「ほんとに」
大家もなのはも、苦笑していた。

「……ちょっと食いすぎたかな」
食後、片付けを名乗り出たクロノ達に任せ、秀人は外に出ていた。
「ヒデ坊」
「あ、爺さん」
大家が、草履をつっかけて出てきた。
「……行くんじゃな？」
「……ああ。明日だ」
――はやてを、助けに。
はやてを、本当の孫のように可愛がっていた大家にしてみても、他人事ではないだろう。
「……爺さんも来るか？」
この、人外級の達人の手が借りられれば……と、目論む。
「いや、ワシはやめとくよ」
だが、大家は乗り気ではないようだった。
「ワシは少々……歳を重ねすぎた」
どのような考えがあっての拒否かは、秀人には分からない。
「……もう、ワシは表に出るべきではないんじゃよ」
だが、その目元に深く刻まれた皺……その示すところだけは、伝わった。
「……ワシは、はやてを待つよ。ここでな」
小ぢんまりとしたアパートを見上げ……秀人に、向き直り、言った。

「だから……はやてを連れて、全員で帰って来い。任せたぞ……秀人」
「!!」
秀人が、驚いた顔をする。
『ヒデ坊』……ではなく、『秀人』。それは、初めて大家が、秀人を認めた瞬間だった。
「ま、どちらか一方でもしくじったら、ヒデ坊に逆戻りかのう？」
かかか……と茶化す。
「ま、俺たちにドーンと任せとけって！」
秀人は、胸を叩いた。

――――翌日。
秀人たちは、アースラに集合していた。
既に武装を完了し、作戦開始時刻まで待機している。
秀人が武装……イモータルハートをセットアップしていないのは、可能な限り、駆動時間を節約するためだ。
それを補うためか、腰には見慣れない物品がある。
長い銃身を持つ拳銃と、黒塗りの刀。
凶鳥部隊からの去り際、選別の品として贈られたものだ。
銃の訓練も、刀の訓練も、まだ十分とはいえないが……あの凶鳥部隊が着いていると思えば、心強い。
「……」
一人、見慣れない顔もある。
むっとしたようにもみえる緊張顔で、まっすぐ前に視線を固定している。
「美香、来てくれてありがとうな」
そう。美香だ。
闇の結界の中で、はやての正確な座標を割り出すには、彼女の協力が不可欠だった。
「別に、お兄さんのためじゃないよ。姐さんのため」
「……ま、それでもいいや」

妙に対抗意識を持たれているが。
「美香……申し訳ありません。わたしが、不甲斐ないばかりに」
その隣には、拘束を解除されたリーゼの姿があった。
「おめー、やっぱり……」
ヴィータは何故か、胡散臭そうに見ていた。
更に言えば、クロノの両脇には、アリア・ロッテ姉妹の姿も。
『アースラの皆さん』
……と、スピーカー越しに、リンディの声が響いた。
全員、気を引き締める。
『……今回の任務の目的は、闇の書および、その主の拿捕・あるいは撃破……』
にわかに、険しくなる艦内。
『ではなく』
……が、それは即座に覆された。
『本件の重要参考人並びに被害者、八神はやての救出と、闇の書との分断が、主となります』
少なからず、はやてと交流のあったアースラのクルーたちからしてみても、それが本命だった。
『スクライア司書からの情報は、既に皆さん知るところと思います。今更、私が言うまでも有りません。危険極まりない任務です』
「……」
なのはは、回天桜花を握る手に、力が入る。
（魔力は……回復率、76パーセント。決して、低くはないけど……十全ともいえない）
多少、砲撃に制限が加わってしまう。
（……やらなきゃ、ちゃんと）
だが、勝利のビジョンは全く見えてこない。いや、それどころか……
（……また、レイジングハートがボロボロになっちゃうかも……）
守護騎士の襲来に、対処し切れなかった無力感が、今更になってぶり返してきた。

（大丈夫……大丈夫……ちゃんとやれる。そのために、訓練してきたんだ）
手にした、二振りの刀。開祖が遺した霊剣。そして、それを振るう技術。
（やれる……やれるんだ……ッ！）
ぎゅうっ、と、歯を食いしばる。
『マスター』
……と、首もとのレイジングハートが、声を掛けた。
『そんなに、不安そうな顔をしないで下さい』
「……でも、」
『力及ばず、無力に嘆いたのは、マスターだけではありません』
……そう。主を守ることが存在理由であるデバイスが、主を守れなかったのだ。
それは既に、悔しさだとか、そのような安っぽい言葉では言い表せないほどの……いっそ、絶望と言ってもいいかもしれない。
『マスターは、そこから這い上がってきたではありませんか』
なのはの苦労。……そして、そこからの努力を。
血の滲むような特訓を。
『マスター。もし、自分が信じられないのなら……』
それでも、自信がないと言うのなら。
手が、震えるというのなら。
『あなたが私を信じるのなら……私が信じるマスターを、信じてください』
相棒を、信じる。
『私では、頼りになりませんか？』
冗談めかして聞く。
その問いに、なのはは、
「ううん……信じるよ。レイジングハートを……レイジングハートが、信じる私を」
……もう、震えは止まった。
『総員、戦闘配備！』

リンディの号令と共に、ブリッジへ、管制室へ、駆動炉へ……各々の戦場へ、向かって行った。

◆▪◆　◆　◆

――夢を見ている。

今回は、誰のものでもない。

映像も、音声も、何も無い。

（ああ、そうか――）

……理解が及ぶ。

（これは……私の夢か）

この、虚無の闇は、己の心象風景そのものなのだと。

（……何も、ない）

ぼんやりと、意識がたゆたう。

ここにいるのは、ここにあるのは……己の存在のみ。

――ブゥウウン……

古いブラウン管が鳴るような音を立て、闇の世界に、自分以外の存在が現れる。

（お前は……）

白銀の頭髪。白い装束。青い瞳。

色彩こそ反転しているものの……容姿は、リーゼの生き写し。

「……テンタトレス？」

それは、かつての『夢』で見た、テンタトレスのものだった。

『……闇の書、６６６頁の蒐集を完了した』

その手には、禍々しい波動を発する、黒い書物。

……完成した、闇の書だ。

『汝は、これより……闇の書の力を以って、全てを喰らう存在となる』

「……そう」

だがはやては、食い殺されるという恐怖は見られない。

『……怖くはないのか。汝が、別の存在へと変貌してしまうのだぞ』

「いいよ、もう」

はやては、自暴自棄ではなく、悟っていた。

「私には、もう……帰るところなんて、あるわけないんだ

から」
……己の、永久の孤独を。
「……」
テンタトレスの手から、闇の書が離れ……はやての手に、渡った。
「……第二段階へ移行」
己の口が、意思とは別のところで、そのワードを紡いだ。
――。
……と、胸が痛んだ。
「……罪深き者たちよ。我への供物を捧げよ。汝らよりも尚、業深き闇統べる王へ、その身を捧げ、大いなる骸を為せ」
――ずきん、ずきん……と、身の内を刺激する。
精神と肉体の境目が曖昧なこの場において、胸を刺す痛みは……一体、どこから来たものなのか。
――。
「決して沈まぬ昏き星、暗黒の太陽よ」
……無の空間が、らせん状に回転する。そして。
「世界を、闇の底へ沈めよ――――!!」
――――ギュゴォアアア

る。
「美香、わかりますか」
「うん……大丈夫。まだ、姐さんだよ！」
その言葉に……はやてはまだ、完全に変貌していないと理解する。
だが、それと同時に……
――ギュゴォアアア

……秀人たちは、先ほどとは違う景色の中にいた。
――青い空。
――一面の海。
――散逸する、水没したビル郡。
……それはかつて、なのはとフェイト。二人の決戦に使用された、戦闘用の仮想空間だった。
『アースラの出力、お前らに預けるぞッ!!』
機関室の技官長から、檄が飛ぶ。
「全て、仮想空間の維持に充てる！」
――――ゴォオオオ

エミュレートされた、仮初の質量でしかないのだ。

――実体はスカスカの仮想物質で、腹を満たしたと誤認させてしまえばいい

……それが、この作戦だった。

――ゴリッ……ゴリゴリボリボリ……ッ!!

「う、あ……!!」

強装結界が、仮想空間が、軋みを上げる。

やはり、無理があったのか。

あの無の螺旋を、押さえ込むことなど出来ないのだろうか。

――否。

「――来いっ!!」

螺旋を押し戻しながら、クロノが叫ぶ。

呼ぶのは……作戦の、勝利の鍵！

「――秀人ッ!!」

「了解!!　……行くぞ、野郎どもッ!!」

――バシュウウウウウウウウウウッッッ!!!!!

秀人が、魔力のラインを限界まで伸ばし……

「うおおおおおおおおっ!!」

「すっげぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

「これなら……!!」

「押し返せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

強装結界を、纏めて結合させた!!

――ギリリリリ……ギ、ギギギギ……!!

螺旋の動きが、徐々に、徐々に……そして。

―　―　―　―　ギ　……　ギッ。

……膨張を、停止した。

「やっ……た……」

「やったぞ！　停止した!!」

「気を抜くな！　まだ、吸収は続いている!!」
吸収は、続きこそすれど……規模を拡大することは、無くなった。
その螺旋は、半径１ｋｍ以下という極小の面積に閉じ込められ……その、ちっぽけな餌場を喰らい尽くしたところで、完全に停止した。
『……駆体の総エネルギー、想定の１２分の１以下！　成功だ!!』
エイミィが、作戦の成功を告げる。
「……ぜー、ぜー……や、やったな、クロノ！」
「……はぁ、はぁ……と、当然だ……!!」
呼吸を荒げながら、とりあえずの作戦の成功を喜ぶ。
『後は、駆体を……え、な、なに、これ……!?』
だが……エイミィの声が、戦慄に震える。
「エイミィ、何が……!!」
『クロノくん、みんな！　気をつけ、』
て、を言う前に、変化はあった。
「……ぐぼァ……ッ!!」
強装結界を展開していた武装隊。そのうち一人の胸部に……
――腕が、突き立てられていた。
「……!!　あ、た、たいちょ……!!」
救いを求めるように、クロノへ手を伸ばし……
――バキュンッ……!!
……粒子となって、掻き消えた。
「……」「……」
秀人も、クロノも、呆然とするしかない。
隊員が消えた後……その影から。
《はぁはははは!!　脆い！　脆すぎるぞ!!》
銀髪の、若い男が、姿を現した。

均整の取れた肉体。最適なバランスの筋肉。端麗な容姿。
……そして、どこかで見たことのある、下種な笑み。
《しゃアアアアアッ!!》
「なんだ、こいつは……!! ぐわっ!!」「は、速すぎるっ……!! うわァッ!!」
……あっという間の出来事だった。
秀人たちが、殴り倒すよりも早く……その男は、武装隊の全員を撃破……否。
――蒐集、してしまった。
「……お前は、まさか……!!」
その容姿にこそ、心覚えは無いが……その、下種な笑みには、心覚えがあった。
じゃきっ、と、S2Uを向け……
『Ｓｎｉｐｅ Ｓｈｏｔ！』
――ドドドドッ!!
射撃を発射。だが……それらは、直撃したにもかかわらず、全くのノーダメージ。肩を叩かれた程度の衝撃しか、与えることはできなかった。
《ああ、この芥子粒のような魔力……かつて我は、このようなものに手こずっていたというのか!!》
「まだ、生きていたのか……」
《ふふぅん……？ ようやく、気付いたかね？》
ニタニタと余裕ぶる、その顔は……
「……ギル・グレアムッ!!」
……肉解となって、テンタトレスに潰されたはずの、グレアムだったのだ。
《はははは！ 取り戻した……ついに我は、力を取り戻したのだァあああああああああああああああああっ!! おお、若さとは素晴らしい!! 力が……力が……漲るゥアアアアア

かつて、はやてをグレアムの肉塊が襲撃した際、深く食い込んだ触手。

その断片が、はやての闇を苗床に、駆体を乗っ取ったのだ。

《駆体を弱小化しようなど、ザコのおまえが考えそうなことだなァ……？　ぎゃはははは！　だが、どうだ！　オレのこの、溢れる魔力はァあああああああああ　「……おい」　アアアアア……？》

ぐるんっ、と、背後を振り返るグレアム。

その、醜い顔面に……

――――……ジュゴァァァ

# A’s編　第八十九話

――ジュオオオオオオオッ……!!
《オ、ご、あああ……!!》
顔面を高熱で炙られながら、グレアムが呻く。
「……誰が、喋って良いっつったよ」
ズボッ……と、グレアムの口へ、口唇を引き裂きながら、拳を捻り込む。
《グほッ……ッ!!》
――ブゴオオオオオオオオオオオオオッ!!
……体内へ直接、蒼炎を注入され、ビクビクと痙攣する。
「……」
恐ろしく冷静に、無表情に……焼却し続ける。
だが、少しして異常に気がついた。
……グレアムの体積が……先ほどから、全く変化していないのだ。
《……気は、済んだかね？》
眼球が焼失し、頭蓋が露出した顔で、ニタリと笑う。
「……!!」
《ひゃァッ!!》
――ドボォッ!!
秀人の胴体に、強烈なボディブローを叩き込んだ。
「ぐあっ!!」
「秀人！」
すっ飛んだ秀人を、クロノがキャッチする。
「……もう一度、」
蒼炎を握りこむ秀人。だが、クロノとエイミィがそれを静止する。
「落ち着け！　まだ、死んだわけじゃない!!」
『みんなのバイタル、まだ確認できてる！　っていうか、それ以上やったら、中の皆が!!』
「――!!」

はっと我に返り、蒼炎をキャンセルする。
確かに……あの駆体がどういうものなのかが不明な限り、不用意な攻撃は、中に蒐集されてしまった武装隊の面々を危険に晒す可能性がある。
……ようやく、秀人も冷静さを取り戻した。
見上げる上空……身体の内外を散々高温で炙られたにも関わらず、平然と見下ろしている。
――ジュウウウッ……
デタラメな魔力による治癒魔法で、一瞬のうちに組織が再生する。
《さァてと……で……今、何かしたかね？》
対闇の書の切り札と思われていた蒼炎が、全く効いていない。
「……あれは、駆体……いわば、アバターのようなものだ」
蒼炎の効果も、ほぼ無いということは……
「……向こうからは干渉し放題で、こっちからの干渉はシャットアウト……」
反則。
そうとしか言いようが無い。
「だが、わかっているんだろうな！　その駆体は、時間制限が過ぎれば……!!」
クロノが、第三段階へ移行した際に被るデメリットを指摘する。
だが……
《ヒャハハハハ!!　何を言い出すかと思ったら……!!》
グレアムは、不快な笑い声で、それを一蹴した。
《我が、どれだけ闇の書に関する研究を行ったと思っている！　そんな弱点、既に対策済みだ！》
「対策……？」
『――状況の変化を確認！』
そして、モニターが表示される。エイミィが、状況を伝えるために映し出したものだろう。
『海鳴市海上に、もう一つの闇の書の反応……!!』
闇の書が、もう一つ。

海鳴市の海上では、直径１００メートルに届こうかという、巨大な魔力スフィアが鳴動していた。
「おい、まさかあれ……はやて、か？」
その魔力光は、はやてのものと同じだった。
《クククク……》
懐から、一冊の本を取り出し、見せびらかすように、ひらひら、と振る。
それは……
「……アリアたちの言っていた、闇の書の複製。それを同期させ、原書を操作している」
「……」
それの表すことは、つまり……
「力を使うだけ使って、デメリットは全部、はやてに押し付けるってのかよ!?」
《ああ、その通りだ。……なに、我が完全なる魔導を手に入れるための生贄だ。たかがガキ一人の命……惜しくはなかろう？》
悪びれるそぶりさえ見せず、そう言い切った。下種もここに極まれり、だ。
巨大な魔力スフィアの周囲に、いくつものベルカ式魔法陣が出現する。
「……守護騎士か」
現れたのは、雑魚騎士ではなく……『剣』『盾』『湖』の、正当な守護騎士。それが、各々十数体も、佇んでいた。
幻影や分身ではない。
確かな実体として、守護騎士が、多数出現したのだ。
《ほぉら……早くしなければ、人々が喰われてしまうぞ！　ぎゃははは!!》
……巨大な魔力スフィアが、徐々に、海岸へ向けて移動している。
《馬鹿め！　オレがこの駆体だけで満足するものか！　アレが食事をすればしたぶだけ、オレの力もますます高まって行くのだ!!》

グレアムの言ったとおり、もしあれが接岸してしまったら……海鳴市の一般人が犠牲になるのは、避けられない。
しゅるしゅると、触手が伸び始め……
「バカはお前だよ」
――――ザンッ!!
……閃光と共に、切り捨てられた。
異変を察知し、動く守護騎士。だが、既に触手は大半が切り落とされており……
『ア――――ア?』
……ずるっ、と、『剣』のうち一体、右腕が切断され、ぼちゃん、と落ちた。
「……性根腐り果てたテメェのことだ。どうせ、海鳴市を狙ってくると思ってた」
「うん。秀人さんの、言ったとおりだ」
回天桜花を振りぬき、血払いをする、なのは。
――バココココンッ!!
飛来した鉄球が、面制圧で守護騎士達に降り注ぐ。
「……同じ守護騎士のよしみだ。せめて、正面からブチ抜いてやるよ」
グラーフアイゼンを構えたヴィータが、守護騎士へ向かい合い。
「……こんかいばっかりは、ふざけてるばあいじゃないよね」
光刃を携えたフェイトが、残る触手を切り落とす。
――なのは、フェイト、ヴィータ、アルフ、ユーノ。
五人の高ランク魔導師たちによる、絶対防衛ラインが築かれていた。
なのはは、画面の向こうにいるであろうグレアムに、切っ先を向け……言い渡す。
「何一つ、おまえの思い通りにはさせない」
ビキッ……と、グレアムの額に血管が浮いた。
《この……クソガキどもがァあああああああああああああっ!!》
つばを撒き散らし、醜く喚く。
《……ウぉオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!》

グレアムが咆哮し……
――バキィイイイイイイイイインッ!!
……維持する術者の消えた強装結界を、破壊した。
《はァアアア……!! テメェら全員、この力でブチッ殺してやらァあああああああああああああああっ!!》
そして発動する、転送魔法。
秀人たちは、抗うことも出来ず、その中に飲み込まれ……はやてのいる海鳴市海上へ、誘われることになった。

『……』
「やっ、ひさしぶり」
『剣』の前で、気さくに手を挙げ挨拶するフェイト。
『……』
当然、応じるような『剣』ではなく……腰の魔剣を抜き、フェイトに向ける。
――ガキュンッ。
魔剣がカートリッジをロードし、炎を纏う。
「うん、いいよ。つきあってあげる。……バルディッシュ」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ．』
「……ろーどかーとりっじ」
――ガキュンッ。
フェイトもまた、カートリッジを使用。全身に、稲妻を纏った。
『……!!』
『剣』が踏み込み、魔剣をフェイトへ振り下ろし……
――とんっ。
「……きみたちは、ほんとうなら、すっごくつよいんだよ」
『……。――――』
首を落とされた『剣』が、さらさらと消える。
『……!!』
「ちゃんと、ヤガミといっしょに、ヤガミのために戦ってたら、かつのはむずかしい。でもね」

――ズ……ザンッ！
多大な魔力を誇り、高い技巧を持ったはずの守護騎士達が、あっけなく、腕や脚、首や得物を、瞬時に破壊されていく。
「いまのキミたちは……誰のためにも、戦ってない。あやつられているだけ。りようされているだけ」
……何も、理由も無しに無双しているわけではない。
かつて、数度に渡り戦闘し、蓄積したデータを下に対策した結果だ。
意思あるものは日々研鑽し、進歩して行く。
だが……
「いまのキミたちは……ただの人形だ」
……操られるだけの傀儡は、進歩することは無い。
それは、他の守護騎士たちにも言えることで……戦闘開始から10分にも満たない時間で、ほぼ掃討されていた。
「……だから、今はバイバイ」
――ゾンッ。
最後に残った『剣』の一体を、切り伏せる。
「……またね」
……それが、フェイトと好敵手の……あっけない、幕切れだった。
それと、ほぼ同時……グレアムが現れた。
《……》
既に、守護騎士はおらず、出現地点は包囲網ど真ん中。
巨大魔力スフィアとの距離は、遥か遠く。
想定外の事態に、呆然として……否。
《ははっ……予想以上に、使えない手駒どもだったな》
嘘偽りの無い余裕で、苦笑した。そして……バッ、と手を翳す。
――ヴゥウンッ!!
膨大な魔力が、瞬時にチャージされる。
そして……
《……ディアボリック・エミッション!!》
――ズバァァァ

全方位に射出された衝撃波は、いとも簡単に、包囲網を分断してしまった。
指揮官のクロノは、指示を飛ばす。
「くっ……まずい！　近くのものと固まれ！　決して単騎になるなっ！」
《だァが遅いんだなァあああああああああっ!!》
目の前に、グレアムが迫る。
ガキッ、と腕を捕獲される。そして……
《フランメ・シュラークッ!!》
――ドゴンッ!!
「……!!　ぐあァ……!!」
左手を爆破され、その痛みに意識を揺さぶられる。
《ぬゥウウウウウンッ!!》
グオッ!!　と、魔力を込めた拳が振るわれる。
直撃すれば、致死は免れない。
「させるかァっ!!」
――バキンッ!!
その腕にキックし、軌道を逸らす。
だが、その余裕は崩れない。
それどころか、もう片方の手には、既にチャージが完了している。
《ははっ、コイツは貴様の得意技だったなァ！　……インパクトォッ!!》
「!!　インパクトッ！」
同じく、インパクトでの相殺を狙う。
――ドパァンッ!!
「……？」
以外にも、相殺は叶った。
あの、むちゃくちゃな威力を乱射しまくっていた初対面のはやてと比べるべくも無い。
（……そういえば、体表の流動魔法も使ってない。広域殲滅も、それほど）

ディアボリックエミッションも、言ってしまえば、多少強い広域インパクト程度。
弱くはない。それは確実にいえる。
攻撃が通らないのも、圧倒的な魔力量を誇るのも事実。
だが……何かが、おかしい。
「駆体が完全じゃないからだよ」
その疑問には、ユーノが答えた。
「本来なら、膨大な質量を人間サイズに圧縮して、魔力噴射で機動させる……だけど、」
グレアムが駆体を乗っ取ったことだけが残ってしまっていたが……
「……始めの質量が、全然得られなかった」
仮想空間と強装結界を、守り通した。
「だから、今のあの駆体には、膨大な魔力量を受け止めるだけの強度が無いんだ。それこそ……強度だけで言えば、人間並みに」
そう。グレアムがあざ笑った武装隊の奮闘は……決して、無駄ではなかったのだ。
「三輪車のフレームに、F1のエンジンを積むようなものか」
ならば……まだ、勝機はある。
じりじりと、距離を詰めていく。
《ははは……いやぁ、困った困った……》
だが……この、グレアムの余裕の正体とは、一体……？
《ふむ……では、こういう趣向はどうかね》
――ズオッ……!!
グレアムの足元から、空間全体に滲むように……黒い波動が、滲み出し……!!
《――テラー・フィールド》
「――――避けろォオオオ

「!!」
回避を選んだ者は、まだ良かった。
だが……この波動攻撃の性質を知らず、迂闊にもその場に脚を止めてしまった者は……
「なのはぁあああああああっ!!」
フェイトが弾き飛ばされるように反転し、なのはを救助。
だが……やはり、その変則的なムーブメントには無理があったのか、脱出速度は鈍ってしまう。
やがて、その波動が脚に触れてしまいそうになったその時……
「うりゃあああああああああああっ!!」
「フェイトっ!?」
フェイトが、なのはを安全域までブン投げた！
そして、自身も脱出しようとしたが……がくん、と、膝が砕けてしまう。
「うォおおおおおおおおおおおっ!!」
――ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!
唯一の対抗手段、蒼炎を放出し、波動を食い止める秀人。
そして、フェイトの元へ駆けつけ、蒼炎のバリアを発生させる。
――ヂリヂリヂリ……ッ!!
「ぐぅうっ……!!」
それでもやはり、闇の波動は浸食してくる。
「……!!」
蒼炎の向こうで、なのはが何かを叫んでいたが……
――ド……プンッ……
波動がバリアを覆い尽くしてしまい、届かなかった。
◆▪◆　◆　◆
……アイが、駆ける。
「待ってるの、マスター……今、アイが行くの！」
波動に飲まれてしまった秀人。
バリアが破られてしまうのも、時間の問題だろう。
あの波動を超えられるのは……波動そのものを消し飛ばせる

高レベルの攻撃魔法か、もしくは……アイのような、意図的に意識を閉ざし、干渉を防げるデバイスのみ。
適任といえば適任なのだが……アイは、作戦の第三段階までは、温存されなければならない。
だが、それを差し引いても……アイは、秀人を放置することなど出来はしなかった。
「!!　……誰！　邪魔なの！」
ポートに飛び乗ろうとしたアイの肩を、何者かが掴んで止める。
「邪魔、す、る……え……？」
だが、その人物の顔を見た途端……アイの中にあった焦りは、吹き飛んでしまった。

ブリッジにいたリンディは、戦闘の指揮を執る傍ら、何らかの手続きを進めていた。
そして、最後の確認通知を行う。
「準備、整いました。あとは、あなたの同意が得られれば、許可が降ります」
……その人物は、杖を手に、確かに頷く。
「……対象を、転送ポートへ誘導」
「了解」
――ヒュウウンッ……
彼女は、転送ポートに送られ……アイと、鉢合わせる。
そして、二人……頷きあって、転送の光へ、足を踏み出した。
◆▪◆　◆　◆
「くっそ……！　不注意だった……！」
フェイトを抱きしめたまま、バリアの維持に全力を注ぐ。
だが、既にバリア出力は限界に達しており、いつ破られてもおかしくは無い。
「フェイト……いいか、俺が、波動を身体で食い止める。だから、その隙間を……!!」
――ごんっ。

「……おこるよ」
幼い鉄拳が、秀人の額にぶつかる。
「ひでとは、このどろどろにさわったらまずいんでしょ!? 何言ってるの!!」
――もう一度、あの波動に触れたら、お前は……
……かつて、凶鳥部隊でオウルに言われた言葉が脳裏を掠める。
「ああ、そうだ。でも、お前の身には替えられない……!」
――ヂヂッ……ヂリリリッ……!! バリバリバリッ!!
いよいよ、そのバリアの内側へ浸食してきた。
「!! くっ、」
秀人は、フェイトを抱える。
もしも、あのテラー・フィールドに触れてしまったら……フェイトの精神が、焼き切られてしまう。
ならば……せめて、一度体験し、耐性のある自分が。
そう、己の身を差し出そうとした。だが、その行動は、阻まれることになる。
フェイトも、脱出が遅れ……いや、その必要さえ必要無くなった。
――ゴロッ……ゴロロロロロッ……!!
上空の雲が、不自然な動きで、一箇所に集中して行く。
最初、グレアムの魔法かと思った秀人だったが……フェイトも、意味がわからず、きょろきょろしている。
……そして。
「薄汚い手で……ひとの娘に、触るんじゃないわっ!!」
――……ズガガガガガガガガガガガガゴッゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッッ!!
《うがァあああああああああああああああああああああああっ!!!!》

……降り注いだ―雷光が……今まさに、フェイトに襲いかかろうとしていた闇の波動を、残らず焼き尽くし、吹き飛ばし、捻り切った!!
「え……ど、どうして……なんでェ!?」
フェイトも、あたふたと暴れ、他の面子も、呆然と見入っていた。
「あの……何を、しに……？」
思わず敬語で聞いてしまったクロノに、『彼女』は、肩に掛かった髪の毛を払い……答えた。
「助けに来たに、決まっているでしょう」
……不敵に笑う、その女性は。
「「「「……プレシアぁ!?」」」」
――フェイトの母親にして、Sランクにして、大魔導師。プレシア・テスタロッサ。
まさかの、参戦であった。

# A’s編　第九十話

「おかーさん……？」
フェイトが、呆然とプレシアの顔を眺めていた。
それもそのはず。プレシアの刑期は、少なくとも数百年。
だが、前回の事件から、まだ半年。いくら技術供与での減刑が可能とはいえ、外に出てこられるような時季ではない。
「これは、立派な『技術供与』よ。『オーバーSランク魔導師の実戦データ収集』っていう……ね」
……いかにも、リンディあたりがでっち上げそうな名目だった。
『持てる最大の戦力で、対処に当たる。基本よ』
リンディが、通信の向こうでそんなことを言っていた。
理由はどうあれ……フェイトが、半年振りに母親と再会できたのは、違いない。
「おかーさんっ!!」
フェイトが、喜色を浮かべて飛びつこうとする。プレシアが、それを抱きとめようとして……反転。
「邪魔よ」
――ズバァァァァァァァァァァァァァンッ!!
《ぬうううううっ……!!》
ディバインバスターを凌ぐ威力の砲撃を、ほぼ溜め無しで、不意撃ちを狙ったグレアムに叩き込んだ。
「……あまり効いていないみたいだけど」
苦い顔をする。
「まぁ、」
――ゴロゴロゴロ……!!
先ほど、転校操作に使用するために集められた雷雲が、再び鳴動し始める。
しかも……威力を、遥かに増して。
「これ……まさか、サンダーフォール……？」

あまりのスケールの違いに慄く秀人。
フェイトが使うものと比べて、その差は歴然だった。
「効かないというのなら……」
「!!」
そして……
「効くまで……ブチ込むまでよ」
――――――――――――ガァッシャアアア

《ハハハッ！》
——バキィンッ!!
拳を振るい、プロテクションを打ち砕く。
《どうした、大魔導師ィいいいいいっ!!》
——ギュオオオッ!!
攻撃魔法が、プレシアに迫る。
「おかーさんに何すんだこのやろォおおおおっ!!」
飛び出したフェイトが、グレアムの腕に光刃を打ち込み、攻撃魔法の照準を逸らす。
「ぐ、ぬ、ぬ……!!」
グリグリと、更に深く光刃をねじり込むフェイト。
《クソガキがァあああっ!! 母親もろとも、吹き飛びやがれぇえええええっ!!》
痛みは無いのだろうが、イラついたグレアムが、更に魔法を発動。
——ズバァアアアアアアアアアアッ!!
全方位に発射される、広域攻撃。
「おかーさんっ！」
フェイトがプレシアを抱え、射程外まで離脱する。
「半病人が無茶すんなよ……！」
心配のあまり、悪態のようになってしまう秀人。
「ごめんなさいね。どうしても、我慢できなくて……」
「……助かったよ」
あそこで、プレシアの援護が無ければ、まともにテラー・フィールドを浴びていた。
その後の戦闘は、やりすぎだが。
「……前衛は僕たちが勤める。プレシア、あなたは後方から……」
布陣を敷きなおすクロノ。
——ドクンッ!!
だが、はやての取り込まれた巨大な魔力スフィアが、一際大きく鳴動するのと同時……
《う……ム……ォオオオオオオオオオオオッ!! は、ははは っ！ 凄

まじいな……!! この短時間で、更に……!!》
……グレアムから感じる魔力が、膨れ上がった。
しかも、海中、海底から、何らかの質量をも取り込み始めたのだろう。
駆体にあった不完全な部分……『穴』まで、ふさがり始めている。
《ククク……さて……駆体が不完全とか、何とか……淡い希望は、どこへ行ったのかね？》
「くっ……!!」
……前にはグレアム。背後には、その動力源……はやてがいる。
動力源を叩こうとすれば、グレアムが邪魔をし、グレアムをいくら叩こうと、動力源さえあれば、それこそ無限に再生してしまう。
ならば……
「……一方がグレアムを足止めし、もう一方が、はやてを止める」
チームを二つに分けるしかない。
だが……そう簡単にことが運ぶとは思えない。
いくら完全ではないとはいえ、グレアムが強敵であることは間違いは無く……しかも、はやてが周辺魔力を吸収すればするほど、強力になって行く。
はやてを止めようにも、その方法さえ不明なのだ。
時間……そう、時間が、足りない。
動力源であるはやての方は、あまり能動的に移動していないとはいえ、放置も出来ない。むしろ、こちらに大多数の人数が割かれることは間違いない。
だとすれば……誰かが、ごく少人数で、グレアムを足止めするしかない。
「……ボクがやる」
真っ先に、フェイトが名乗り出た。
「アイツをあしどめしておけば、クロノが、なにかアイデアを出してくれるんだよね？」
「ああ……時間さえあれば、対策を練ることが……だが、それは、」
渋るクロノ。さすがに、保護対象でもあるフェイトを矢面に立たせ

ることに抵抗を感じているようだ。
「だいじょーぶ。リニスがくれたバルディッシュと……マリーが付けてくれたかーとりっじ……かくしだまも、ちゃんともってる」
『お任せを』
バルディッシュも、声を上げた。
「そういうのは、俺が……！」
「ひでとの結合のちからは、ヤガミをとめるのにひつようだよね」
大人数の出力を、一つに束ねることができる秀人の能力は、あきらかにはやての対策に必須だ。
「なら、私……」
なのはも、続けて挙手する。
「なのはは、くうちゅうでの機動力がひくいから駄目」
「あう……」
ズバッと遮断された。
「クロノはアイデアだすひとだから駄目」
「……そう、だな」
現場指揮官は、指揮に専念すべき。
「タイマン勝負なら、アタシの専門だ！　アタシが……！」
「ヴィータは、闇の書があいてだと、どんな影響がでるのかわからないから駄目」
守護騎士出身のヴィータも、却下。
「ぼくは……」
「ユーノはそもそも、よわっちいから駄目」
「……」
ユーノは灰になった。
「じょーだんだよ。ユーノは、クロノといっしょにかんがえて」
無限書庫の知識を活かせるのはユーノしかいない。よって、却下。
「……なら、私に任せなさい。娘を矢面に立たせる親が、どこにいるというの」
「おかーさんはしんぱいだから駄目。アルフに、守ってもらってて」
普段はアホな言動や行動を繰り返すフェイトだが、決して頭の回転

が鈍いわけではない。
適任なのは、自分だと……早くに、確信していたのだ。
「……アルフ、いい？」
……アルフに、遠慮がちに声を掛けた。
少なからず、プレシアと確執があるアルフだ。だが、
「ああ、当然。こいつのことは、あたしに任せな」
ごつっ、と拳を打ち鳴らし、意気込みを見せる。
「でも、フェイト……」
尚もフェイトを心配するなのはに、フェイトは得意げに言った。
「あたらなければ、どうということはないっ!!　……って、だれかが言ってた」
「……何よ、それ」
ふっと、顔がほころぶ。
「うん……じゃ、任せたよ。フェイト！」
『武運を、バルディッシュ』
レイジングハートもまた、バルディッシュを激励する。
そして、目線を交わし……
「……意外。なにもしてこないんだ」
フェイトは、グレアムの前に。
確かに、長々と話していた割には、何の手も打ってこなかったのは、意外といえば意外だ。
《くくく……待つ時間というのも、悪くはない。こうして、更に力を増すことができるのだからなぁ……!!》
――ズオッ……!!
その身から……凄まじい、圧力までも感じるほどの魔力が迸った。
「う、っく……!!」
《さて……我がこうして、力を蓄えている間……しっかりと、希望を腕に抱いたかね？》
気圧されるフェイトとアルフに……グレアムは、まるで教鞭を執るかのように言う。
《希望というものはね……積み重ね積み重ね、大事に大事に育て

上げ……砕かれたとき、最も美しく輝くのだよ》
「……うん、よくわかった」
フェイトは、バルディッシュを構え……
「……ロード・カートリッジ」
――ガキュンッ。
カートリッジをロード。そして……
「……ソニックフォーム」
……マリーに託された『隠し玉』を、早々に開放した。
タダでさえ軽装のバリアジャケットを、マントをパージし、さらに軽量化。
フィン状の推進装置をそのスペースに増設し、瞬発力にのみ、極端に偏った形状へと変化している。
《ハハハッ！　なんだ、その紙のような装甲は！　当たれば終わりではないか！》
哄笑するグレアムに、フェイトは……
「問題ないよ。……一発だって、あたらないんだから」
誇張や虚勢抜きに、そう言い放った。
《……ほほう、》
ぴきっ……と、グレアムが苛立った。
《では……やってみせろォおおおおおおおおおおおおっ!!》
――ズシュウウウウウッ!!
凄まじい初速の砲撃が、ノーモーションで発射された。
その砲撃は、フェイトの身体の中心線を的確に捉え……
――ひゅんっ。
……目標を、外れた。
《……？　仕損じたか》
照準を間違えただけ……そう信じて疑わないグレアムは……
――ズドドド

正面だけではない。
前後左右、死角無く、全方位からフェイトを畳み潰す攻撃だ。
だが……
「無駄、だよ……！」
フェイトの姿が、一瞬だけブレたように見え……
――ヒュカンッ!!
一閃。
《……!!》
バシュッ……！　と、グレアムの腹部から、血液代わりの黒い魔力が噴出する。
《ふん……言うだけあって、素晴らしい速度だ》
反応速度を遥かに超える斬撃に、グレアムは感心するように言った。だが……
《……それだけの機動、その脆弱な肉体では受け止めきれまい？》
……言い当てられたことも、また事実だった。
「……そうでも、ないよ……？」
強がって平静を保ってはいるものの、たった一度の回避運動で、身体が悲鳴を上げていた。いくら、防御に使うためのリソースを、高Ｇからの身体防護に割いているとは言っても、やはり未成熟な子供の骨格なのだ。
《ハハハハハ！　よろしい。では……どこまで避けられるか、試してやろうじゃないか!!》
――ズババババババババババババッ!!
途端、打ち放たれる無数の光線。
一直線だけではなく、曲線、屈曲など、無数のパターンを以って、フェイト一人を追尾する。
「う……ァあああああああああああああああっ!!」
――ビュゴッ……!!
空気の壁にぶつかりながら、致命打になりそうな光線を回避する。
《そら、次は上下左右からの挟撃だ！》
挑発的に、わざわざ宣言したとおりのルートで攻撃してくる。

「……、っく、はァあああああああっ!!」
――ガギンッ、ギャリィイイイインッ!!
バルディッシュを振るい、打ち落とし、打ち払い、身体を捻って回避する。
《ハーッハハハハハ!!　何だ、思ったより頑張るじゃないか！　そォら!!》
興が乗のったのか、光線の他に、誘導弾を混ぜてフェイトを弄ぶ。
（……！　かかった！）
フェイトは、苦悶の表情を浮かべるのとは別に、内心で会心の笑みを浮かべた。
（これで……しばらく、アイツはボクに目を向ける！）
その、『興を乗せる』ことこそ、フェイトの狙いだった。
あれだけ強大な力を得た小物が、どういった行動に出るのか、フェイトは知っていた。
（いきなり、あんな『何でも出来る』ような力を手に入れたら……
まず、『試して』みたくなる!!）
その相手が、回避に特化した、『当て辛い』標的だとしたら……
必ず乗ってくる。そう、読んでいた。
《ハハハハハッ！　踊れ踊れぇっ!!》
「ぐ、う……うあああああっ!!」
悲鳴を上げながら、全力の回避を続ける。
『……バイタル、低下。これ以上は、生命の危険が……』
バルディッシュの進言。
だが……
「血流、ちゃんと、ととのえておいて……！　ブラックアウトしたら、おわりだ！」
それでも尚、飛び続ける。
「うりゃあああああっ!!」
《ぬゥんっ!!》
――バキンッ!!
大振りなグレアムの拳をかいくぐり、カウンターにバルディッシュ

を首筋に叩き込む。
　そして、また射程圏外まで一気に離脱。迫る光線や誘導弾を、かわし続ける。
「ひー、ひー……！　き、きっつー……!!」
　心臓は、今にも破けそうなほどビートを刻み、汗が滝のように流れてきて不快極まりない。
　だが、息を整えているヒマも、汗を拭っている時間も惜しい。
「だいじょーぶ……まだ、まだ飛べる！」
　――ギィンッ!!
　鋭い鋭角でカーブを抜け、光線の雨をかいくぐる。
「クロノたちが、いっしょうけんめい、考えてくれてる！」
《そォらそらそらっ!!　まだまだ避けてみろォっ!!》
　……今度は、衝撃波がやたら滅多に連打され、海面に無数の水柱がしぶきを上げる。
「……!!　だ、だから……だから……まだ、飛ぶんだァあああああああああああああああっ!!」
　――ズパァァァァァァァァァァァァァァァァンッ!!
　進行方向にあがった水柱を避けるため、その場で急上昇。
『駄目です。これ以上は、お身体が……!!』
　――ガリッ!!
《ハッハァ!!》
　硬化させた皮膚で、バルディッシュを防ぐグレアム。
　恐ろしいことに、フェイトの速度に、目が慣れ始めてきている。
『!!』
　主の身に起こりうる、最悪の『もしも』を予想し、強張るバルディッシュ。
　だが……
「ためらうなっ!!」
　フェイトの一喝に、それを忘れる。
「ボクは、こんなところじゃ墜ちないし、やられない!!」
『ですが、』

――ガキィッ……!!
《どうだ、捕らえられてしまったぞ、んン!?》
いよいよ、刃先を掴みとめられた。
ギチギチと、構造材が軋む。
《ほらほらほら、傾いてるぞおおおお!?》
次第に力負けし、拮抗が傾く。
「おまえは、強くなったんだろ……!?」
だが、フェイトは決して、諦めない。退かない。
「このクソ野郎をぶっとばすために、強くなったんだろおおおおっ!!」
目の前の敵を、討ち果たすため！
『!! Ｓｍａｓｈｅｒ!!』
フェイトは、グレアムの顔面に手を翳し……
――ズバァァァァァァァァァッ!!
拡散砲撃が、グレアムの目を焼いた！
《ぐあっ……！ おのれ、やってくれる……!!》
いくら強い身体でも……身に付いた、『人間としての癖』までは、そう易々と捨て去れるものではない。
極度に強い光を直視すれば、一瞬、身体は硬直する。
「もういっちょー!!」
『Ｔｈｕｎｄｅｒ Ｓｍａｓｈｅｒ!!』
――ドゴォオオオオンッ!!
今度は、より強い魔法を、無防備になったグレアムに打ち込んだ！
《オオオオオッ……!!》
退くグレアム。
フェイトは、油断無く次の動作を構え……
「いけるね、バルディッシュ!?」
相棒へ、呼びかけた。
『Ｙｅｓ；；』
バルディッシュも、もう迷うことはない。
主が、限界まで飛び続けるというのなら……自分は、その限界を、引き上げるまで!!

『Ｙｅｓ，ｓｉｒ!!』
――ガキュンッ!!
残るカートリッジをロード。
更なる機動へと向けて、身の内に魔力を溜め込んだ。

# A’s編　第九十一話

――ガキンッ……ガキンッ……バチィッ……
遠方から、フェイトとグレアムの戦闘音が聞こえ、黄金色の魔力光が瞬いている。
（フェイト……無事でいろよ）
できるのならば、今すぐにでも駆けつけたい。
だが、それはクロノの作戦を……ひいては、フェイトの決意を踏みにじる行為であるからして、実行に移すことはできなかった。
「あの巨大な魔力スフィアは、周囲の質量や魔力を吸収しながら、時速２０ｋｍ程で、岸に向かっている」
沖合いの、約１０ｋｍ地点にいるはやて。
その速度が維持されるのなら、到達までは、約３０分。
決して、長くはないが……ゼロよりは、よっぽどマシだ。
「まず第一は、接岸を防ぐこと。これには、全員の拘束魔法を秀人の能力で強化し、あの場に押しとどめる」
こうして、はやてを止める作戦を立てられる。
そのための時間稼ぎを、フェイトは買って出た。
「第二に……プレシア。これには、あなたの協力が不可欠だ」
「何でも言いなさい」
大魔導師の心強い言葉。
「あの魔力スフィアは、一種の動力炉だ。しかも、無尽蔵に増大し続ける暴走状態といってもいい。解析、頼めるか」
――暴走状態の動力炉。
それは、プレシアにとってどのような意味を持つのか、分からないクロノではなかった。
「……」
遠まわしに、フェイト生誕の切っ掛けにもなった、あの事故を想起させるには十分だった。だが……
「……任せなさい」

プレシアは、それを受け入れた。
「と言いたいところだけど、私一人じゃ無理ね。応援を要請するわ」
……誰かを頼る。
それは、かつて天才と呼ばれた研究者には、考えられない行動だった。
「マリエル、聞こえていて？」
『ああ、聞こえてるよ。いま、アースラだ』
「今から、この動力炉を解析するわ。中心部の正確な座標が知りたいの」
『オーケー。……んじゃ、美香。どのへんだ？』
『ええっと……』
美香が掴んでいる、おおよその位置をマリーに伝え、それをマリーが座標に数値化し、プレシアに渡す。
観測班から送信されてきたデータなども、手元にズラリと並べ、
「大体分かったわ」
「「「「早っ!!」」」」
思わず、全員で声をそろえてしまった。
ぴっぴっ……と、目の前に図解を表示する。
そこには、波紋のように、三つの円が重なっている図が出されていた。
「構造としては三重構造よ。第一層・第二層・中心核。
第一層……これが、質量を吸収する層。ここで吸収したものを、エネルギーへ変換し、中心核に送信。中心核では、ブラックホール生成のためのエネルギーを精錬し、精錬の際に出た不純物を、第二層……核を守る防護層として転用している」
「ほんと、単純だな……」
拍子抜けした様子の秀人を、プレシアがじろっと見る。
「……言ったでしょう、規模が違う、って。その不純物だけですら、大都市を複数、長期間にわたって賄えるほどのエネルギーなのよ」
その規模に言葉を失う。
「停止させるには、中心核を取り出すことだけど……そのためには、第

一層・第二層を突破しなければならない」
聞くだけなら、簡単にも思える。
「第一層。これは、クロノが言ったように、全員の拘束魔法を結合させて打ち込めば、停止させることができる」
では、第二層とは。
その答えを待つ秀人たちに告げられたのは、驚くべき事実だった。
「第二層、ここは……生命を搾り取られた、犠牲者たちの思念の坩堝なのよ」
死者の怨念。それを、己の鎧としている。
「もし触れれば、その思念たちが、引きずり込みにかかってくる。それが、一体どのような現象なのか……正直、触れてみないことには分からないわ」
全くの、未知。
そのような現象に、捨て身で挑むしかない。
「そして、それを突破した者が、第二層の内部から、外部へ道を開く。その道から、僕が中心核まで突入し、闇の書と主を分断する」
それが、クロノの立てた作戦だった。
あとは、突入メンバーの人選だ。
「恐らく、内部では魔力結合は阻害されると思われる。魔法生命体は、生存できないだろう」
アルフや、ヴィータは不可。そうなると、魔力に依らず生存できる、生身の人間。なおかつ、魔法の使用に制限が掛かる中でも、活動可能な者。
秀人は……拘束魔法に必要なため、持ち場を離れられないため……
「私……だよね」
なのはが、名乗り出た。
クロノは、特に否定しない。
「……！　おい、クロノ……」
だが……秀人にも、理解できる。
今、なのは以外に、突入できる人物はいない、と。

「なのは、でも……」
危険に晒すことに、躊躇する。
「秀人さん、あのね……私、望に頼まれたんだ」
「……」
「八神に、キツい一発、お見舞いしてやれ……って」
だから……これは、それを叶えるチャンスでもあった。
「……わかった。任せる」
秀人は納得して、拘束魔法の準備を進めた。
その秀人に、プレシアが釘を刺す。
「いいこと、秀人。私たちが、第一層をきっちり抑えておかないと、突入することさえ叶わないどころか、下手をしたら、その子がバラバラに分解されて、死ぬわよ」
「わかってる。……役目は、果たすよ」

クロノ達の拘束魔法の準備が整い、あとは、発動するだけの段階まで来た。
「んじゃ……いっちょ、やりますか！」
――ヴゥウウンッ……!!
秀人の魔法陣が展開し……クロノ達の魔法陣へとラインを伸ばす。
そして、編みあがったのは……巨大な円環型バインド。
それは、ゆっくりとはやての周囲を囲い……そして。
――ガギギギギギギギギギギギギギギギギギギィッ……!!
魔力スフィアに、接触した！
「うぉおおおおっ!!」
腕が千切れそうになるほどの衝撃に、何とかその場に踏ん張る。
「と、ま……れぇ……!!」
円環を狭め、更に魔力スフィアを締め上げる。
――ガリガリガリガリガリガリガリィッ……!!
「！　くそっ!!」
その内側から、徐々に分解が始まった。

『まずいな……予想以上に、分解の速度が速い。このままでは、分断されてしまうぞ』
マリエルが、状況を分析する。
「！」
分断される、ということは……今、こうして全員で分担している負荷が、各々に降りかかるということだ。
それは、拘束魔法を解除するより早く、吸い寄せられ、分解されてしまうことを意味していた。
だが、全員が現状で精一杯。出力も全開で、これ以上は出せない。
だとすれば……『限界以上の出力』を。
「……」
……心当たりは、ある。秀人は、尚も分解されていく中で……それを使用する決意を固めた。
そして、その名を呼ぶ。
「――――来い、イモータルハート!!」
アイではなく、イモータルハート。
『!! 秀人、止せ!!』
マリエルの静止を振り切る。
それは、アイのシステムに、確かに届き……内蔵された、転送機能を発動させた。
――――バシュッ!!
アースラから、一瞬で秀人の下に現れた。
「マスター、来たの」
自身が呼ばれた意味は、伝わっている。
「……スタンバイ」
『了解』
秀人の一言と共に、アイが、本体の蒼い宝石に姿を変える。
セットアップは、しない。
目的は、武装ではなく……一つのシステム。
「……ブラスターシステム、オン」
聞きなれない単語に、クロノ達は疑問に思う。だが、その意味を問

いただしている暇はない。全身全霊で、拘束魔法を維持するのみだ。
『……』
アイもまた……その対価を、負荷を、苦痛を、受け入れる覚悟を決めた。
『ブラスターシステム・リミット1』
そして、秀人は……高らかに、トリガーボイスを発声する！
「リリースッ!!」
解放された膨大な魔力ブーストの力が、秀人の全身を駆け巡る。
ほんの僅かなラグを置き……そして。
――――――ズゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!
「うおおおおおおおおおおおおおっ!!」
出力が、途端に跳ね上がった！
――ガ、ガガガガガッ……!! ガリガリガリッ……!!
分解が止まるどころか……目に見えて、その速度が鈍っていく。
『な……何、この滅茶苦茶な出力は!?!!』
モニターしているエイミィが、驚愕している。
『通常全開時の……１８０％!? こんな……!!』
最大では２４０％、限界駆動ではそれ以上……ということは、伏せておく。
「……アイ、おまえ、」
そして秀人は、その違和感を感じた。
この異常出力の対価である負荷……それを、殆ど感じないのだ。
そして、その行方は……
「自分に、負荷を……」
『……このくらい、なんとも、ないの……』
強がるが、その声は、明らかに無理をしていた。
『……マスター……アイに黙って、こんなもん作って……まったく、世話が焼けるの』
――ゴッ、ガガガッ……!!

『吸収率、３６％にダウン……！　このままなら、』
『いけない！　アイ!!　機体の耐久限界だ!!』
　エイミィの観測結果。だが、マリエルが途中で叫んだ。
『く……うぁああ……!!』
　イモータルハートが、明らかに異常な発熱をしている。
「!!　マリエル！　アイの負荷、半分を俺に!!」
『ああ、わかった!!』
　間髪をいれず、マリエルが遠隔操作でシステムを改変する。
『うぅ……!!　や、やばかったの……!!』
　それにより、アイの発熱はそれ以上続かなかった。
「バカか、お前……!!　もう少しで、死ぬところだったぞ……!!」
　その負荷の半分を担い……どっと虚脱感が押し寄せる。
「こんなもん、一人で背負い込みやがって!!」
　アイは、これの倍も負担していたのだ。
『……マスターにだけは、言われたくないの』
「な、なんだとぉ……!?」
　口答えするアイに、秀人が頬を引きつらせる。
『一人で何もかも背負い込んで……周りが、どれがけ心配してるのか、少しは分かったの……？』
「……」
　言い返せず、押し黙る。
　だが、この状況下でフォローする者がいるはずは無く、言われっぱなしである。
「……ああ、よく分かったよ」
『……ふふ』
　安心したように、微笑む。
　そして……
「そんじゃあ……アイ。半分、力貸せ」
『了解なの、マスター』
　――ヒュィイイイイイイイイッ……!!
『出力、１８５パーセントで安定。すご……』

天秤が拮抗するように……極めて高次元で、バランスすることに成功した。
――ギリギリギリギリッ……ギギギギッ……!!
拘束魔法も、問題なく維持できている。
『吸収率、１８パーセント……１４　……１２……安全域まで、もう少し！』
――――ギ、ギ……。
『０パーセント……！』
いよいよ、安全域。
「……!!」
体力を温存し、待機していたなのはが、魔力スフィアの目の前まで飛ぶ。
回天桜花を抜刀し、振り上げ……
「……え？」
きょとん、と動きを止めた。
「え……？」
『ど、どういうことなの……？』
秀人たちも、アースラの面々も、理解不能だった。
吸収層を停止された魔力スフィア……その、なのはの目の前の部分が、ぽっかりと穴を開けたのだ。
――まるで、誘うかのように。
「八神……？」
なのはは、ふと、それがはやての意思であるかのように思えた。
「……」
秀人と目を合わせ……頷きあう。
「八神……いま、行くからね」
そしてなのはは……第二層へ、飛び込んだ。

# A’ s編　第九十二話

「……ん？」
ぱちっ……と、布団の中で、私は目を覚ました。
「ふぁあ……！」
思いっきり伸びをすると、背筋がぴんと伸びて、存外に気持ちがいい。
「……はぁー」
傍らの携帯電話を手に取り、鳴るよりも早く、アラームを解除。
まだ、布団に未練があるけど、起きないわけにも行かない。
なにせ……何せ……
「あれ？　何だっけ……？」
どうにも、寝ぼけているようだ。
とにかく、起きようっと。
ベッドサイドのリボンを手に取り、髪を一つに束ねる。
「……ん？」
けど、そこにはまだ、もう一本のリボンがあった。私、ツインテールとかしないんだけどなぁ。
――ぴぴぴっ。
……あれ。
切ったはずなのに、またアラームが鳴った。
表示を見てみる。
「……『お仕事　早番』……？」
何のことだろう。仕事も早番も何も、私はまだ小学生で……
「……」
頭になにか、引っ掛かりを感じつつも、アラームを切った。
カーテンを開けて、朝日を部屋に取り入れ、階段を下りる。
――かちゃ、かちゃ……
台所からは、食事の用意をする物音がする。
「……あ、なのは。おはよう」

母さんが……よく似ているとか周囲に言われるけど、決してそんなこと思えない若々しい美人なヒトが、菜箸を片手に振り向いた。
「おはよう、母さん」
私も、いつもと同じ挨拶をする。
「……『母さん』？」
でも、母さんは何故か、不思議そうに私の顔を見返した。
「え……なに、母さん。私、何か変なこと言った……？」
「……なのは、どうかしたの？」
母さんの疑念は、深まるばかりだった。
「いつもは、『お母さん』って、呼んでるのに……」
……え、そうだっけ？
正直、全く身に覚えが……
「……まぁ、いいわ。ところで、恭也と美由希を呼んできてくれない？そろそろ、朝ごはんだから……」
「うん、わかった……ところで、二人はどこにいるの？」
「道場で稽古をしているはずよ」
……そうだった。
うーん……まだ、寝ぼけているんだろうか。
「……本当、どうしちゃったのかしら、あの子……」
リビングを出た時、母さんが不思議そうに言っているのが聞こえた。
道場への飛び石を踏み越える。
――パシッ……パシンッ！
「……お、やってるやってる」
道場からは、乾いた快音が壁越しに聞こえてくる。
引き戸を開ける。
「兄さん、姉さん。朝ごはんだって」
声を掛けると……運動着に身を包んだ二人が振り向いた。
「『兄さん』……？」
「『姉さん』……？」
またしても、母さんと同じように訝しげな顔をされた。

「……っていうか、なのは。その髪型、どうかしたの？」
姉さんが、私の頭を指差して、そう聞いてきた。
どうしたのって……心外な。別におかしくないでしょ。
「いつもは、ツインテールにしてるのに」
「いや、してないしてない！」
猛烈に否定する。
「あんな女の子女の子してる髪型、私には似合わないって！」
「でも、」
「あーーもう！　とにかく、いいから朝ごはんだよ！」
さくっと遮って、会話を切る。
「ほら、片付け片付け！」
「ああ、そうだな」
兄さんが、手に持った木刀を棚に掛ける。
置いてあった短い木刀を取って……ちょっと悪戯。
「すぅ……」
腰に構え、呼吸を整え……
「おい、なのは。何やって、」
一息で、抜刀！
「……はっ！」
――ヒュンッ!!
空気を裂き、切っ先が流れる。
その勢いに逆らわず、身体を回転させ……
――ヒュッ……ヒュオンッ!!
仮想の対象に、横薙ぎの連撃。
くるんっ、と身体を一回転させ、鞘に収める。
うん……今日もいい調子。
「あはっ……ごめんごめん。さ、ご飯食べよう」
木刀を仕舞い、道場を後にする。
「……」
「……」
兄さんと姉さんは、あんぐりと口を開けて、呆けていた。

「母さん、二人とも、そろそろ来るって」
「あら、ありがとう」
「何か手伝うよ」
キッチンを見て、何かやれることを探す。
お、ちょっとやりかけのサラダが。
包丁を出し、パプリカをサクサクと千切りにして、プチトマトを半切りにして、レタスの上に乗っける。
「ちょっと彩りが寂しいかな……」
冷蔵庫を開けて、中からミントの葉を探し当てた。これ使おうっと。
「よし、出来た」
サラダボウルを持って、食卓へ運ぶ。
さーて、使い終わったら洗い物しなくっちゃ。
「な……なのは、なのは？　いいのよ、そこまでしなくても……」
母さんが、おろおろとうろたえていた。
「あとはやるから、座っていなさい。ね？」
「？　……うん、わかった」
何だろ……別に、いつもやってることなのに。
いつも……
「……？」
なんだろう、この違和感。
私、いつも食事の用意してたよね……？
「……あれ、変だ」
母さんがいるのに……いつも、私より早起きして、ご飯を用意しているのに……その母さんを差し置いて、私が日常的に朝食の準備をしているなんて、おかしい。
なんだか釈然としないまま、席に着いた。
兄さんと姉さんが、軽いシャワーを済ませてやってきた。
「……なぁ、なのは」
「なに？」
兄さんが、まじめぶった顔で聞いてきた。

「さっきの……あの剣、誰に教わった……？」
誰に、って……変な兄さん。
「兄さんからに決まってるでしょ？」
「恭ちゃん……!!」「待て！　俺は知らん!!」
何故か姉さんが凄み、兄さんは弁明に忙しくなってしまった。
えーっと……剣？　あれは確かに、兄さんから……あれ、でも……何で、剣を習うことにしたんだっけ？
……というか、本当に頼んだっけ？　あれ？
「……？」
まずい、私まで混乱してきた。
兄さんと姉さんが、喧々諤々と言い合いをしていて、母さんはそれを諌めるのに忙しくて、私はまだ混乱が治らずにいて……
「朝から、何の騒ぎだ？」
……あ。
「士郎さん、おはようございます」
「ああ、おはよう桃子。なのは」
穏やかに笑って、母さんに挨拶を返したその人は……見覚えは、ある。
「……父さん？」
……私の父親、高町士郎だった。父さん、だった。
「……父さん？」
もう一度、聞いてしまう。
いつもいつも、顔を合わせているはずなのに。
毎朝毎朝、食卓を囲んでいるというのに。
なのに、なぜか……驚愕と、懐かしさが、同時にこみ上げてきた。
「……で、恭也と美由希は、何を言い争っている？」
ちょっと怒った風な口調で、兄さんたちをじろっと見る。
「ちょっとお父さん聞いてよ！　恭ちゃんったら、なのはに御神流を……！」
「だから、教えていないと言っているだろう！」

どうやら、さっき私が見せた動きが発端のようだった。
でも……本当に、兄さんに教わったものだっただろうか？　何故か、その辺の記憶も曖昧だ。
「静かに。……で、なのは」
「あ……はい、じゃなくて、うん」
いきなり話しかけられ、ドキッとしてしまった。
何でだろう……？　一挙手一投足が、妙に新鮮というか……よくわからない、違和感が付きまとう。
「良かったら、後で見せてくれないか？」
「……いい、けど。じゃ、学校から帰ってきたら……」
「ああ、頼む」
……兄さんたちも、ようやく口げんかを止めてくれた。
「「「いただきます」」」「……ます」
やっと朝食だ。
「……なのは、髪型を変えたのか？」
「……いや、別にいつも通り……」
「まぁ、似合ってるからいいんだけど」
そして、ぽんぽん、と私の頭を軽く撫でて……ふと、食卓が目に入った。
――朝起きたら、母さんが朝食を用意していて、
――兄さんと姉さんに、おはようが言えて、
――父さんが起きていて、
――家族の皆で、食卓を囲めている。
そんなの、当たり前だ。
当たり前の、当然の、ありきたりな……
――ずっと求めていた、日常だ。
「……、」
じわーっ、と、視界が滲む。
「ちょ……なのは!?」
いけない。止めなきゃ。止めなくちゃ。
姉さんが、心配している。

「……、う、」
俯いて……唇を噛んで、涙を止めようと頑張った。でも、止まらなくて、どうしようもなくなって……
「――!!」
ただ、ぽろぽろと涙を流すことしか、できなかった。
「……ごめん、騒がせた」
しばらくして、ようやく私の涙は止まり……腫れぼったい瞼だけが残った。
なんて恥ずかしい……
「……」
そして気まずい。
ちらっとい時計を見ると、既に8時を回っていて、登校時間だった。
「行ってきます!」
逃げるように、椅子を蹴立てて走り出す。
「あ、なのは! 何で私服で――!?」
母さんが私を呼び止めているような気がしたが、まずは逃げたかった。
「……馬鹿だ、私」
飛び出してきてから、気がついた。
背中にはランドセル。うん、これは別にいい。
問題なのは……
「……制服、着てない」
……私が通う、私立聖祥大付属小学校の制服ではなく、ジーンズにシャツと、思いっきり私服だった。
「……っていうか、通学路も違うし――!!」
学校とは、完全に正反対。
このまま歩いていったら、学区内にある公立小学校だ。
「うー……どうしよう、どうしよう……」
でも、今更家に戻って着換えるのも気まずいし、かといって、私服で登校したら先生も怒るし……
「……」

諦めた。そして携帯電話をコール。
――ｐｒｒｒ、がちゃっ。
『なのは？　どうしたのよ。バスの停留所にいなかったじゃない』
「アリサごめん、ちょっと今日は休むって、富山先生に伝えておいて」
『……『アリサ』？』
ああ、まただ。
普段どおりに名前を呼んでいるつもりなのに、何故か不思議がられる。
『っていうか、富山先生って誰よ？　担任は、水島先生でしょ？』
あ、あっれぇ……？　またボケてた……？
「……ええっと、とにかくよろしくっ！　すずかにも謝っておいて!!」
『だからあんた、いつからわたしのこと呼び捨てになったの　――』
――ブツンッ。
通話を断ち切る。
……でもこれで、家に戻ることも、学校へ行くことも出来なくなった。
さて、どうするか……こういうときは、いつも、
――いつも、何だっけ？
「……そうだ、図書館」
いつも、図書館に行っていたような気がする。
でも、おかしい。
私は、そんなに学校をサボるような生徒ではなかった筈だ。なのに、なぜ……校外での、時間の潰し方なんてものを、知っているのだろう。
図書館の利用カードを見るため、ポケットのパスケースを取り出す。
そこには、利用カードは無く……代わりに、スクールバスに乗るための、学生証が入っていた。
そこに写っている私は、髪の毛を二つ結びにしたツインテールで……私があまりしないような顔をしている。
「……これ、私？」

自分の顔。そのはずなのに……、
――ピィイイイッ！
「……!?」
いきなり思考に割り込んできたその音に、ビクッと強張る。
きょろきょろと、その音の発生源を探す。
「……鳥？」
カーブミラーの上に……見たことも無い、鮮やかな蒼い羽根の色をした鳥が止まっていて……どうやら、あれが鳴いたらしい。
――ピィイイイッ!!
その鳥は、私に向かってもう一啼きして……ばさばさと、飛んで行った。
「――っ!!」
私は……その鳥を、追いかける。
ああ、馬鹿なことをしている。追いかけたところで、何になる。捕まえたところで、どうなるっていうんだろう。
この違和感が。このモヤモヤが。この齟齬が。
たかが鳥を一羽捕まえたところで、解決するものか。
「はぁっ、はぁっ……!!」
でも、そうと分かっていても……追いかけずには、いられなかった。
「まぁてぇえええええ……!!」
は、早すぎるけどねっ……!!
――ピィッ!!
あ！　あんちくしょう振り返りやがった！
馬鹿にしてるよ！　ぜったい、私のこと馬鹿にしてるよ！
「焼き鳥にしてやるうううううっ!!」
――ピィイイッ！
あざ笑うように、飛行速度を上げた。
走る私と、飛ぶ鳥。
何故か長時間全力疾走しても大丈夫な自分の体力に驚くヒマもなく、追い続ける。
でも、その速度差は歴然だ。何かないか、何か……

――ブィイイイインッ……
いたぁあああああっ!!
「ストォオオオオオオオップ!!」
対向車線を走ってきたスクーターの前に飛び出し、両手を広げて進路を妨害。
――キキキキッ!!
「ひぇえええええっ!!」
スクーターは急ブレーキをかけて止まり、乗っていた人が転げ落ちそうになった。
「な、な、何なのよーー!! 危ないじゃないのーーー!!」
っていうか、超見覚えがある人だ!!
「富山先生、ナイスタイミング!」
富山先生だった。
……何で見覚えがあるんだ、とか、そういう突っ込みはもういいや!
「は、えぇっと……どなた?」
案の定、向こうは私に見覚えなんて無いみたいだけどね!
「先生、降りて! 降りないと、人身事故を起こしそうになったって、長谷川先生に言っちゃうから! さぁ降りる! 今すぐ降りる! さっさと降りる! Ｒｉｇｈｔ ｎｏｗ! Ｈｕｒｒｙ ｕｐ!」
「は、はいっ!!」
まくし立ててパニックを煽り、スクーターから降ろす。間髪入れずにスクーターに跨り……
――ビィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイインッ!!
フルスロットル!
バイクの運転はしたこと無いけど……いつも見てたような気がするから、多分できるはず!
「……はっ!? こらー!! 待ちなさーーい!! わたしのベスパ返してえええええええっ!!」
先生、ごめーん!

「後で学校に届けておくからー！」
「だぁめぇえええええ……」
先生はミラーの点になった。
鳥は……いた！　前方１２０メートル！
差はどんどん縮まって行く。
うん……やっぱり、バイクは素晴らしい！　高校生になったら、絶対に中免取ろう！
――ピィイッ……
しばらく走り……鳥は、またカーブミラーの上に止まり、私を見下ろしていた。
「……？　もう、逃げないんだ」
その鳥と視線を交わし、じっと見つめあう。
――タタン、タタン、タタン、タタン……
スクーターの規則的なアイドリング音をＢＧＭに、見つめあう。
「あなたは……私に、何を伝えようとしているの……？」
――……ピィッ。
鳥は、最後に小さく啼いて……ふっと、残り火のように、掻き消えた。
「え、ちょ……」
……消えちゃった。
この場所で……この、見通しの悪いＴ字路で。
「!!」
ばちっ、と、稲妻のように、何かのイメージが流れ込んできた。
そうだ、ここだ。この道で……
――誰かと、ぶつかったんだ。
誰かって……誰？
多分……感じている違和感の、大部分。
「――――――――――そうだ、私は」
スクーターを第二小学校へコッソリ返却し、生家に立ち寄った私は……道場にいた。

両開きの大きな鏡の前に、正座する。
鏡像へ向かって、独白する。
「……最初から、おかしいことに気付くべきだったんだ」
我ながら、鈍いことだ。
「私が朝起きるのは、この家じゃない」
――十畳あるかないかの、アパートの一間だ。
「朝食の準備をするのは、母さんじゃない」
――私が、下ごしらえからやっている。
「兄さんと姉さんは、朝から家にはいない」
――学校へ行く前に、翠屋の仕込みの手伝いをしている。
「私立小学校は、転校した」
――公立の小学校が、私の母校だ。
そして……そして。
最大の違和感。
絶対にあり得ないこと。
「父さんは、まだ起きていない」
――私の父親は、今も昏睡している。
だから、この都合の良すぎる世界はきっと……
「これは、夢なんだよね」
目の前にある、私の口の動きをトレースするほか無い鏡像は……
『――ええ、その通りです』
……鏡の中から、出てきた。
『――ですが、存外に早く、自我を取り戻しましたね』
その姿は、一つまばたきをした瞬間、私の容姿とは少々変化していた。
栗毛はショートカットになり、着ているのが、黒いバリアジャケットのようなものに。
瞳は、見覚えのある蒼。
改めて、私の目の前に正座するその子は、凛とした佇まいで、私の目を見つめた。
「うん。……あの子が、」

道場の外を指差した先……
――ピイイッ
枝に、あの蒼い鳥がいた。
「――秀人さんの、蒼炎の欠片。あの戦いで、八神は体内に取り込んでいた」
あれがきっと、私を導いてくれた。
「今更かもだけど……あなたは、誰なの？」
見たところ、私がモチーフになっているようだけれど……
『名乗るほどの名は持ち合わせていませんが……蒐集したあなたのリンカーコアをベースに、守護騎士システムを用いて生み出された、守護騎士が一体……『殲滅者』です』
なんつー物騒な名前だろうか……
でも、私のリンカーコアがこうなっているのを見ると……なんというか、妙に感慨深い。
『思考パターンも、全てとはいえませんが……大なり小なり、あなたのそれに準じています。なので……』
なので？
『私が王を想う気持ちも、元は貴方のものなのですよ。ナノハ』
……
「……そっか」
今更、否定することも無いよね。こうして……私の分身にも等しい彼女が、そう言っているんだから。
『……この先に、我が王がおられます』
その子が出てきた鏡が、真っ黒に染まっていた。そしてそれは、硬く冷たく、閉ざされている。
……この先に、八神がいる。
『貴方の魔力を、お返しします』
『殲滅者』の身体が、魔力に還元され……私の中に、入り込んできた。
消え行く身体で、深々と頭を下げ……
『どうか、我が王をお救い下さい』
……そう、言い残した。

すぐには行かず……少しだけ、待つ。
待ち人は、すぐに来た。
「――なのは」
……父さんが、道場に上がってきた。
そして、私の前に立つ。
「――」
その目は……もう、気付いているんだね。
「――これは、なのはの夢なのかい？」
「うん。父さんは……本当は、ずっと眠っているの」
「そうか……やっぱりなぁ」
困ったように、頭をかく。
そして、真剣な顔になり……
「……すまなかった。父親らしいこと、何もしてやることが出来なかった」
私の返事も、既に決まっている。
「いいよ。もう、怒ってないから」
私はもう、一人ぼっちじゃないから。
寂しくなんて、無いんだから。
「……」
父さんが私の手を開かせて……
「……レイジングハート」
『お久しぶりです、マスター』
大事な相棒を、渡してくれた。
「……セットアップ」
父さんに、見せてあげよう。
もう、大丈夫と。
ちゃんと一人でもやれるってところを。
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ　Ｕｐ』
白いバリアジャケット。
腰には、回天桜花。手には杖。
私の、戦装束だ。

背筋を伸ばして。胸を張って。一言一句、意思を込めて。
「行ってきます！」
役目を果たしたように、父さんの身体が、光に解けていく。
「なのは……今度は、現実で……
……父さんの残影は、消えた。
『魔力最大値・回復量１００％。フルドライブが可能です』
「うん……行こう！」
『Ｅｘｅｌｉｏｎ　Ｍｏｄｅ』
――ガキュンッ!!
カートリッジをロード。
その魔力を使用し……レイジングハートが、変形する。
鋭角的なフォルムの、突撃槍へ。
「八神」
――ギュイイイイイイインッ……!!
先端に、魔力スフィアを生成。
それを、目の前の壁に向け……
「……今、行くから!!」
――ズドォオオオオオオオオオオオオオンッ!!!
発射された砲撃は、閉ざされた壁を、粉々に打ち砕いた。

闇の中を、歩いた先に。
「……八神。見つけたよ」
八神が、いた。
「高町……なんで、ここに……？」
何も無い闇の中に浮かび……呆然と、私を見ていた。
その傍らには、リーゼとそっくりな、色彩が反転したような女性がいた。
もしかして……
「……あなたが、テンタトレス？」
『……いかにも』
鷹揚に頷いた。

『貴様をここへ誘ったのは、我だ』
「どういうつもりだ、テンタトレス……！」
八神が、怒りの表情を浮かべる。
だけど、テンタトレスはそれに答えることは無い。
『……しばし、席を外すとしよう』
そのまま、闇の向こうへ消えてしまった。
「……八神」
「……」
呼びかけには、答えない。なら……勝手に、話させてもらおう。
「迎えに来たよ。出よう」
「……嫌だ。出ない」
「八神……」
「……嫌だ」
「や、
「嫌だっつってんだろ!!」
八神は、激昂した。
「私は出ない！　出たって……もう、私の居場所なんて、どこにもありはしないんだ!!」
「――！」
――パンッ！
頬をたたく音が、暗闇に響いた。
でも……叩かずには、いられなかった。
「じゃあ、どうするの。ずっとここに閉じこもってるの？」
「……ハッ。お前に言えたことかよ」
八神は、あざけるように言う。
……どういうこと？
「さっきの、あの世界……あれは、お前の理想を具現化したものなんだよ」
……理想を、具現化。さっきの世界は……何も起こらない、平穏な世界だった。
それは、つまり……

「変化を拒んでいるのは……お前だって、同じじゃないか」
……事故さえ起こらなければ。
そういうことは、何度も考えた。でも、起こってしまったことだからと……何度もそのたびに、諦めていた。
「……そうだね。否定はしないよ」
たしかにあそこは……理想の世界だった。
何も起こらず……変化も無い。ずっと、ずっと平穏なまま、ただ穏やかに時間だけが過ぎて行く。
「――でも、それは受け入れられない」
「……」
「変化しないなんて……そんなの、死んでいるのと同じだから」
「……！」
私を殴ろうと、振るった腕を掴み……引き寄せて、言ってやる。
「変わらなくちゃいけないんだ。私も……八神も」
ばっ、と腕を振り払われる。
「出て行け……!!」
「！　八神！」
その手に、何らかの術式が発現した！
とにかく、防御だ……!!
「私の中から……出て行けぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
――バシュウウウウウウウッ!!
「きゃあっ!!」
開放されたのは……黒い渦。
それは、あっというまに私を飲み込んで……
「八神！　待って!!」
その距離が、一気に開く！
――バシュンッ!!
「……!!　八神！」
ようやく、目を開けられた。そこは……巨大な魔力スフィアが浮かぶ洋上。
「……外まで、はじき出された」

「なのは！」
　秀人さんが、駆け寄ってきた。
「はやては……」
　……私は、黙って首を振ることしか、できなかった。
「そうか……」
　くそ、情けない……任せてもらったことを、成し遂げられないなんて。
「じゃあ……一人で無理なら、複数で行くぞ」
「え!?」
　でも、さっきまでは全員で……
『ついさっき、固定化が成功したの』
　ついさっき……って、もしかして、あの壁をぶち抜いた時……？
「無駄にはなってない。安心しろ」
　秀人さんが、励ますように肩を叩いてくれた。
「それじゃあ、みんなで行くぞ!!」
　そして、全員が答えを返すより先に……
《そォはいかないんだよなァあああああああああああああっ!!》
　……!!
　凄まじく不快な念話が、割り込んできた。
「今の……グレアム!?」
　フェイトとの戦闘空域には、まだ残っている。あそこから、直接の手出しは出来ないはず……だけど。
　あいつには、闇の書の写本がある。
　遠隔から、何をしてくるのか……!!
《ぎゃはははは！　まさか、あのガキがそこまで深い闇にいたとは、まさに好都合！》
「何を……!!」
《突入されたときは少し焦ったが……始めから、こうすればよかったのだ！　始めから……あのガキ自身に、守らせていればなァ!!》

もし、はやてに抗う意思があれば……でも、それに殉じると分かってしまえば……!!

――グゥウウウッ……!!

魔力スフィアが、収縮していく！

「あ、だめっ!!」

折角開いた穴も、ふさがって……

『……!! 物質化します!!』

バリンッ！ と、魔力スフィアが割れた。

そして、そこから現れたのは……現れた、のは……

――ァァァ

「エイミィ、どうした！　状況を報告しろ!!」
　クロノの喝に……エイミィは、震える声で、言った。
『市街地に……結界外の、市街地に……魔力反応、多数、出現……』
　結界外!?
「民間人は!?　隔離できないの!?」
『してるよぉ!!　でも、でも、範囲が広すぎて……全部は、』
「カバーできない範囲はどこ!?　私が行く！」
『なのはちゃんの、小学校を中心に……半径数キロ、まだ拡大中！』
《我の因子を組み込んだ騎士団だ！　命無き進軍、止められるかァ!?》
　モニターには……おびただしい数の雑魚騎士たちが、市街地を埋め尽くそうとしていた。
　とにかく、そこへ向かうしか……!!
『駄目！　その魔獣も、市街地に向かってる！　どっちも、戦力を分散したら食い止められない!!』
　……冷たい空気が、体中に染み込んできた。
《どうだね、絶望の味は?　……さぞや美味かろう?　ハハハハハハ!!》
「……まだだ」
　そうだ。こんなことで、負けるものか！
「まだだっ!!」
『応援を要請して、市民の被害を食い止めるのよ!!』
　リンディさんの指示に、グレアムが言った。
《いいのかァ!?　管理外世界での魔法技術の露見は重罪だぞォ!?》
『人命には、変えられない!!』
《だが残念……管理局は、増援など出さない!!》
『――!!』
　いったとおり……応援要請への返事は、拒否ばかりのようだった。
《管理世界の魔法技術という利権を……わざわざ、土人どもに渡したがる者がいるものかっ!!》

……腐っている。
でも……応援要請の拒否が、その言葉を裏付けてしまう。
《クククッ……！　まぁ、たかが数万人の命のために重罪を犯す者はおらんわ！
ハーッハッハッハッハッハッハッハ!!》
『たかが』……？　数万人を、『たかが』……!?
……全てのカートリッジを費やして……どちらか片方、止められるかどうかだ。でも……今は、動くしかない!!
《それこそ……よっぽどの馬鹿か、無法者でもなければ……》
無法者。そんな人たちが、いるはずが……
「そうかそうか。それじゃあ……天に仇為す無法者が、出張るとしよう」
――――――……ズッゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!
《……ハ？》
「……え？」
『……あ？』
グレアムも、私たちも、アースラも……同時に、言葉を失って放心した。
雑魚騎士たちのいた、市街地の一角。そこに……
――――ビルほどもある鉄塊が、屹立していた。
蟻のように纏めて押しつぶされる、雑魚騎士達。
《ア、ッアアアアア……》
生き残った一部の雑魚騎士は、尚も市街地へ進行を続け……
――――――……ヴァアラララララララララララララッッ!!
「あーーーーっはっはっはっはっはっはっは!!　死んじゃ

え死んじゃえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
「えええええええええええええええええええええんっ!!　死ね、死ね、早く死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
『ギ、ギャアアアアッ!!』
　重機関銃が火を噴き、片っ端から蜂の巣にされる。
　――――……ゾゾゾゾゾゾゾゾッ……!!
「んーっふっふっふ……さぁ、もがき苦しみなさぁい……!!」
『ヒ、ヒィイイッ……!!　グェエエエッ……!!』
　逃げ出した一団が、突如、首を押さえて悶絶し……そのまま、動かなくなる。

　――――ザンッ!　ザシュンッ!!
「秀君の邪魔はさせないよッ!!」
　黒塗りの刀で、片っ端から手当たり次第に、首を刈り取って行く。
「……おい、ウソだろ」
　秀人さんが、呆然と呟く。
　まさか……彼女たちは……!!
《……上官に楯突くか、カラス風情がぁあああああああっ!!》
　グレアムの怒りの咆哮に……鉄塊が、重火器が、呪術が、刀が、返答として振るわれる。
「ふぅん……？　ま、どーでもいいや。だってウチら、上官の顔なんて知らねーし」
「……そういえばそうだったな」
　秀人さんが納得している。
『……生きているか、青二才ども』
「レジアスのオッサン!　まさか、あんたが……!!」
　そうだ……グレアムと同等の権限を持っている人といったら……この人がいた。
『グレアムの陣営が手薄になった隙を見計らって、あの部隊の指揮権限を奪い取ってやったぞ』
『感謝します……!!』

本当、いいタイミング……

「ヒデくぅううううん！　コレ終わったら、子作りしようねーー!!」

「こんな場面で何を言ってるんだお前はぁあああああああっ!?」

あの黒髪のお姉さんの言うことの真偽はあとでしっかり問いただすことにしようそうしよう今決めた。

「「　お兄ちゃーん！　ししょー!!　久しぶりー!!　」　」

重火器の姉妹は、ユーノくんへ親しげに手を振る。

「……『師匠』？」

「……ぼくのことらしい」

アルフの呟きに、ユーノくんが答える。

『アーデルハイド……!?　きみなのか!?』

「あらぁ？　懐かしいと思ったら、マリエルじゃないの。相変わらずちっちゃいわねぇ。２メートルくらいにまで骨延長してあげようかしら？」

『改造手術が必要なほどちっちゃくねぇよ!!』

……あの危険な呪術の使い手は、マリーの既知らしい。

《クッソがぁあああああ……!!　今更、正義の味方気取りかァ!?》

「管理局に与するわけではない。……無論、正義に殉じるわけでもない」

ぎりぎりと顔を歪ませるグレアムを、リーダー格の女性が、無機質な目で見る。

完全に、排除すべき汚物を見る目だった。

「家族が一人、吾妻秀人を助けるため」

ブォンッ……と、剣のような鉄塊を向け……言い放つ。

「――――凶鳥部隊、推して参る」

凄まじく頼もしい増援が、反撃の狼煙を上げた。

# A’s編　第九十三話

――ゴゴゴォオオン……ッ!!
「のわぁっ!?」「きゃあっ!!」
突如として響き渡った轟音に、アリサとすずかは飛び起き、座っていたソファから転がり落ちた。
「ななな何、今の何!?」
慌てて、きょろきょろと窓の外を見回すが……闇夜に紛れ、全容が見えない。
……市街地に、超巨大な鉄塊が屹立している光景など、見たところで理解できるとも思えないが。
「!」
ぱっとテレビを点ける。大体の局では、緊急特番を組んでいた。
「……？　薬品工場が爆発……薬物飛散の危険があるため……市外退避ぃ!?」
「……」
――飛散した薬品は人体に極めて有害なものであり、揮発性もかなり高く……即刻の退避が必要と思われる。付近の警察・消防・自衛隊が、車両や空挺を救助に向かわせることに決定した
……と、どこのニュースでも、同じような内容だった。
「お嬢様。お車の支度、整ってございます」
執事の鮫島が、些か慌てた様子でやってきた。
「……わかったわ。すずか、行くわよ」
「……うん」
すずかは、アリサの後を着いて行く。
その返事が上の空なのは……
（薬物飛散。多分、その除染のために、しばらくこの地域は立ち入り禁止になる）
先ほどのニュースの、不自然な点を考察していたためだ。
（……初動が早すぎる）

最初の轟音が鳴り響いてから、まだ、1時間以内。
だというのに、各所は既に救助や退避の準備を始めているという。
（第一……町全体に降り注ぐほどの薬品を貯蔵している工場は、この市には無いはず）
重工業の跡取り。さすがにまだ、見習いにすらなってはいないが……それでも、ある程度の情報網は持っている。
車に乗り込み、市外へ避難する。
そこでもまた、奇妙なことがあった。
「……随分とスムーズね」
その奇妙さには、アリサも気付いていた。
……渋滞が、起こっていないのだ。
こういう場合、大なり小なり、混乱し、統制を失い……闇雲に逃げ出す市民が、大渋滞を引き起こすのが常だというのに。
……まるで、最初から避難経路が確保されているかのような、異常なまでのスムーズさ。
（……町から、人を追い出しているみたい）
だが、かといって何か問題があるわけでもなく……すずかは、アリサと共に、市外へと退避していった。
◆▪◆　◆　◆

――バキィイインッ!!
「……!!」
《ハッハァ!!　どうした、動きが鈍っているぞ!!》
幾度目かの衝突。
既に、フェイトは満身創痍だ。着実に、グレアムがフェイトの動きに対応しつつあることもあるが……それ以上に。
「ぜー、ぜー……!」
ソニックフォームでの負荷が、フェイトの身体を軋ませていた。
ずきずきと関節が熱を持ち、痛みを発している。
（まりょくは……まだあるけど……ちょっと、やばいかも）
「……」

ぶんっ……とバルディッシュを構え直す。
《ククククク……！　ああ、そういうことか……》
……と、グレアムがいきなり、意味不明なことを口走った。
そして……遠方。
「……うそ」
なのはが、一人で魔力スフィアから脱出し……
「……あれが、ヤガミ……？」
……巨大な魔獣が、洋上に出現した。
《ククク……ああ、そうだとも！》
「!!　しまった……!!」
僅かに注意を逸らした途端……目の前に、グレアムが迫る。
「うぅあああああっ!!」
ソニックフォームの機動力で、脱出を図る。だが……
《ハハハハハッ！　捉えたぞォおおおっ!!》
「くぅっ……!?」
とうとう追いつかれ、防御を余儀なくされてしまった。
――ドゴンッ!!
……防御も何も無い。
薄い装甲を、モロに打ち抜かれ……海面に、激突する。
――ザッ……バシャッ……ザザンッ……!!
「っ……!!」
海面を、水切りしながら滑走していき……ふらつく身体を、魔法で無理やり空中に固定する。
《ハーッハッハッハ！　最初の大口は、どこへ行ったんだァ!?》
「うるっさいなぁ……！」
グレアムの追撃。
被弾し、目に見えて速度の衰えたフェイト。
轟、と唸りを上げて迫る攻撃の前に、悔しげに歯を食いしばる。
――ズガァンッ!!
だが、その攻撃は届かず……僅かに、照準をずらした。
《ぬ……？》

グレアムが、不可思議そうに右腕を見る。そこには、鎖状のチェーンバインドが絡み付いていた。これを手繰り寄せることで、軌道を逸らしたのだろう。
そして、その使用者は……
「……おかーさん？」
「フェイト、しゃんとなさいっ!!」
救援に駆けつけたプレシアと、アルフのものだった。
「だ、だめだよ！　おかーさんは、むこうで……！」
尚も身を案ずるフェイト。だが、アルフはその肩を摑んで、ふるふると首を振る。
「ごめん……任せようって言ったんだけど……」
「動けないのなら……あの場所から、跳躍攻撃を仕掛けるだけ。そう言ったら、納得してくれたわ」
跳躍攻撃など仕掛ければ、半病人のプレシアは……間違いなく重篤な症状が出る。いや、下手をすれば死ぬ。
『邪魔するなら死んでやる』という意味だ。
「おかーさん……」
強引な説得というかナチュラルな脅迫……どこかの誰かさんの（悪）影響が、確実に及んでいた。
《……仲良く揃って……あの世に送ってやるわ!!》
バインドを難なく引きちぎり、魔力砲を放つ。
「黙れ、ゴミ」
――ズパァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ!!
プレシアがその魔力砲に照準を合わせ、同威力の砲撃で相殺する。
《クァーッハハハハ!!　ヌルいわァっ!!》
だが、グレアムは即座に威力を増大。プレシアの砲撃は、途端にかき消されてしまう。
「アルフ」「よっしゃ！」
プレシアは慌てず騒がず、アルフに声を掛け……アルフは、プレシアを抱え、射線上から退避する。
「ふむ。これなら、動かずに済むわね」

「……あたしゃドダイＹＳじゃねーっつーの」
愚痴りながらも、しっかりとプレシアを抱きかかえるアルフであった。
《ヌゥッ……》
標的を逃したグレアムが、つまらなさそうに呻く。
まとまって退避した一同。
「……おかーさん。ヤガミは……」
ちらっ、と、魔獣の頭部に同化したはやてのほうを見やる。
「……今、アースラの出力を回して、拘束しているわ。完全に動き出したら、まずいけど……まずは、闇の書に干渉しているあのゴミを倒さなければいけないの」
「いくらあの子を止めても、あのクズがまた手出ししてこない可能性は低いからね」
秀人は、拘束魔法を維持するためにその場を離れることが出来ない。適任といえば、なのはなのだが……そこは、プレシアが我侭を通したらしい。
「うん、わかった。とにかくボクらで、あのカスを……！」
《なぁにゴチャゴチャ言ってやがるんだ蛆虫どもがぁっ!!》
ぽんぽんと会話の流れの中に飛び出してきた悪口雑言に、グレアムがキレた。
いくつもの誘導弾を引きつれ、バカの一つ覚えのように突貫してくる。
――ガガァアアンッ!!
プレシアが迎撃し、フェイトが回避する。？
《うぉおおおおおおおっ!!》
「てぇえええええええいっ！」
バルディッシュの光刃が、グレアムの胴体を深く切り裂いた。
すれ違いざまの相対速度を乗せた一撃だ。一般的な魔導師であれば、ただそれだけで戦闘不能となるほどの一撃。
《ふンッ!!》
だが、グレアムとて負けてはいない。

瞬時に傷口を塞ぎ、脱出のタイミングに合わせ、攻撃する。
「させない……！」
プレシアがデバイスを鞭に変形させ、その腕を絡め取った。
《はあっははは！》
「!?」
プレシアが、驚愕する。
絡め取った……と思っていた、グレアムの腕。だが、グレアムはそれを逆に巻き取ることで、プレシアを己の間合いに引きこんでしまった。
――パキィイインッ!!
アルフが防御するが、グレアムの攻撃は、呆気なくそれを突き破る。
「アルフっ！　おかーさんっ！」
――ドガガガガッ!!
誘導弾を発射し、グレアムに命中させた。
《ハハハッ！　効かぬわァッ!!》
グレアムは余裕で受け、返礼の魔力砲を発射する。
――ジュッ!!
僅かに、背を掠めた。
「う、ううっ……!!」
焼け付くような痛み。その隙を見逃すようなグレアムではなく……
――ガキッ！
ついに、掴まった。
「！　しまった……!!」
《ハハハハハァッ!!　虫ケラが手こずらせおって……!!》
「離せ、このやろうっ!!」
――ズガンッ!!
至近距離から顔面に、射撃魔法を炸裂させる。
《あァ……？　今、何かしたか？》
にたにたと、余裕を崩さずそれの直撃を受けきった。
《ヒャハハハハ……!!　頑張った褒美だ！　オレ自身の魔法を見せて

やる!!》
そして……その手に、あからさまに邪悪な魔力の気配。
その魔力は、粘りのある漆黒の球体となった。
「……!!」
フェイトは……その危険な気配に、ぞわりと背筋を震わせ、なんとしても脱出を図る。
「離しなさいっ……!!」
プレシア、アルフの連続攻撃にも、微動だにしない。
つい先刻まで効いていたほどの攻撃が、たったこれだけの短時間で、克服されていた。
《悪夢を……味わえっ!!》
――ゴポンッ……!!
「！　フェイ、」
フェイトは……その球体に、体ごと飲み込まれた。
「ト……」
プレシアは……中途半端に腕を伸ばしたまま、球体に飲まれる瞬間を、まざまざと見せ付けられ……
《ナイトメア・プリズン……!》
哄笑し……球体を、いずこかへ収納してしまう。
「てっめえええええっ!!　フェイトに……フェイトに、何をしやがった!!」
アルフが、激情も露に、グレアムに殴りかかって行く。
《何もしていないさ!　我は、なァ!》
「ぐうっ……!!」
拳を両腕で受け後退し、直撃を防ぐ。
《アレの内部がどうなっているのか……教えてやろうか!》
「何を……!!」
グレアムは……にたりと、邪悪でサディスティックな笑みを浮かべ……言った。
《夢を見ているのだよ!!　それも……とびっきりの、悪夢を!
己のうちに巣食う闇!　その顕現だ!!　さぞかし、暗かろうなァっ

!!》
――バキンッ!!
「がァっ!!」
ガードごと、吹き飛ばされる。
《そして、己の闇に飲まれながら……リンカーコアを、蒐集される！》
「!!」
《極上の絶望に染まったリンカーコアが、我のものとなるのだ！　感謝するがいい！　虫ケラが、この我の供物となれることを！》
――とんっ
……吹き飛ばされたアルフは、プレシアの張ったフローティングフィールドに拾われた。
「くそっ……くそォっ……!!」
「……」
プレシアの表情は……垂れ下がった髪に隠れ、伺うことは出来ない。
《そうか、悔しいか!!　己の無力が、そんなにも悔しいか！　ハハハハハ!!》
「プレシアぁ……どうすれば、……」
次の瞬間。アルフは、激情を一瞬にして凍て付かせることになる。

――ズバァンッ!!!

……大気が、爆ぜた。
轟音の正体は……プレシアが、その身の魔力を、開放した余波だった。
「プレ、シア……？」
アルフが、慄く。
……アルフはこの光景に、デジャビュを感じていた。
「……愚かだったわ。まだどこかで、お前を『人間』だと認識していた」

それは……かつて、プレシアが引き起こした、ジュエルシード事件の際。管理局の虜囚の身となったフェイトに対し、手ひどい絶縁を口にしようとして……秀人を、本気で激怒させた時と、同じ光景だった。

――ゴォオオオオオオオッ……!!

「遠慮していた。手加減していた。……気付くのが、遅かった」

全身に、夥しい魔力の稲妻を纏い、衰える様子は無い。

面を上げたプレシア……その表情は、全ての血の気が失せた、能面のような無表情だった。

《……!!》

グレアムは、一歩後ずさった。

傲慢な簒奪者は、その瞬間、明確な恐怖を感じていたと同時に……理解する。

「――お前は、『処分対象』だ」

――己が、暴竜の逆鱗に、触れてしまったのだと。

グレアムは、余裕の表情を取り繕う。

《は、はははっ！　こうでなくては、面白く、》

ない、と言い掛けたその顔面、鼻先に……白熱する光球が出現する。

その正体にグレアムが気付くより早く……

「――プラズマアーク」

――バヂヂヂ

瞬時に気化。頭骨まで瞬時に露出し、苦しみ悶える。
《オオオゴォオオ……!!》
グレアムは、必死に修復を試みる。
だが……間髪いれず、第二の発声。
「――――――――――ボルテックボム」
――ヴォゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴンッ……!!
《ビッ、ぎ、ギェ、オヴぁ……!!》
大小無数の魔力スフィアが、グレアムの胴体・四肢・頭部へ纏わりつき、体内へ進入……そして、炸裂する。
くぐもった爆音と共に……体が火柱を吹き上げ、『中身』をあたりに撒き散らし、黒く炭化していく。
結果、四肢を欠損し、胴体のみとなり転がるグレアム。
アルフも、アースラの管制室も……本来ならばそれを諌めるべきリンディまでも、戦慄し、立ちすくむしかなかった。
手加減を止める……というような次元ではない。
考えうる最悪な手段を以って、対象を殲滅する……そこに、『戦闘』という意義は無い。それは……ただの、『虐殺』だ。
だが……対人殺傷どころか、表現すら憚られるほどに残虐な攻撃魔法を乱発するプレシアは、留まるところを知らなかった。
「――――――サンダーブレイドエクスキューションシフト。フォトンランサージェノサイドシフト。サンダースマッシャーファランクスシフト。トライデントスマッシャーデストロイシフト。ボルテックボムトゥーチャーシフト。プラズマアークスローターシフト。
全ファイアリングロック解除。――ファイア」
―――――――――――

「早くなさい。……『次』が控えているのよ」
――――――――プレシアの背後に……対人殺傷魔法の魔力スフィアが、群れを成していた。
「……フェイトを吐き出すまで、何度でも何度でも……その身を砕いてあげるわ」

◆▪◆　◆　◆

「……ここは、」
きょろきょろと、周囲の状況を確認する。
「！　バルディッシュ!?」
手に、相棒の姿は無い。
バリアジャケットも纏っておらず……何故か、普段着のままだ。
「……閉じ込められた?」
遠くを見ても、見えるのは、黒い海のような暗黒。移動することも出来ず、ただ、その場に漂う。
ぐにゃ……と、空間が、僅かに歪んだ。その歪みは、波紋のように広がり……
――――大嫌い
……一つの、声になった。
「……!?」
びくっと、身体を強張らせる。
「なに……いまの、なに……!?」
直接、身体に突き刺さってきた悪意……あれは。
「……ボクの声!?」
そう。その声は……紛れも無い、フェイト自身の声だった。
――嫌いだ
「ひっ……!!」
他人の声なら……まだ、耐えられた。だが、この空間は……
「なんだ……なんだよ、これ……！」
まるで、物理的なダメージを伴っているかのように、衝突してくる。
耳を塞ぎ、うずくまり……少しでも、その声から遠ざかろうとする。

――――大嫌いだ。ボクなんて、大嫌いだ
その行為をあざ笑うかのように、声は、更に攻勢を増す。
――――――コピーのくせに
「あっ……」
それは……どんな言葉よりも深く、フェイトの胸に突き刺さった。
――――望まれなかった命のくせに
「あっ、あああ……!!ちがう……ちがう、ちがう、ちがう!!」
違う、そうじゃないと……否定することは、いくらでも出来た。
「ボクは、いらない子なんかじゃない！　おかーさんだって、」
だが……自身の声は、尚もフェイトを苛む。
――おかーさんは、ボクを通してアリシアを見ているだけだ。大事なのは、ボクじゃない
「っ！　ア、アルフが……!!」
――アルフは、生命の存続に不可欠なボクに付き従っているだけだ。本当は、顔も見たくないに決まってる。
「あ、あ……」
フェイトの声で……フェイト自身を、全否定していく。
――ボクなんて、誰にも愛されてなんかいない。必要とされていない。
「う、うううう……!!　やめろ……やめろぉ……!!」
ボロボロと涙を零し、耳を押さえつける。
――だって、ボクは……
だが……その『声』は、とうとう……フェイトにとっての禁句を、口走ってしまった。

――――アリシアの、代用品なんだから

「……」
涙も、もう出なかった。
耳を塞ぐ手もダラリと垂れ、膝を突いて蹲る。
《クカカカカ……！　容易い、容易いなぁ……!!　所詮はガキという

ことだ……！》
その目の前の空間に、グレアムが現れた。
自失状態のフェイトに、ずかずかと近づいていき……
《貴様の魔力を取り込めば、我の力も更に高まろう……あの目障りな半死人とて、容易に蹴散してくれる》
翳された手に、フェイトのリンカーコアが吸い出されようとする。
《さぁ……我に、捧げよ……！》
「……」
フェイトは、されるがまま……
――そんなこと、ないよ
「……？」
ぼう……と、フェイトは、胸の内に、染み入るような温もりを感じた。
「……」
この、冷たく閉ざされた空間で……その温もりは、フェイトの精神を、僅かながら、持ち直した。
《ぬ……!? な……何だ、これは……!? 何が、蒐集を阻んでいる……!?》
グレアムが狼狽する。
――あの人は、ちゃんとフェイトのことを見てるよ。
「……でも、」
打ちひしがれるフェイトは、その言葉に懐疑的だった
――……それじゃあ、見てごらん。
その声と同時……干渉不可能のはずの空間に、スクリーンのようなものが現れる。
そこには……ありとあらゆる手段を以って、現実世界のグレアムをグチャグチャに踏みにじる、憤怒の化身と化したような、プレシアの姿。
――怖いよね。でも、それだけ怒ってる。本当の本気で、怒ってる。
「おかーさん……」
もし仮に、本当にフェイトのことを、アリシアの代用品としてしか

見ていないのなら……取り返そうなどとはしない。また同じようなものを用意すればいいと考える。
――代用品なんかじゃない。フェイトが、フェイトとして大事だから、あんなに怒るんだよ。
もう一つのスクリーンには、プレシアと連携し、グレアムへ挑みかかるアルフの姿があった。
――顔も見たくないんだったら……あんな必死に、取り返そうなんて思わない
「……そうだ。そうだった」
膝に力を入れ、立ち上がる。
グレアムの薄汚い手を払い落とす。
「おかーさんは……ボクのこと、娘って、言ってくれた。アルフはいつだって、ボクの傍にいてくれた」
こびりついた悪夢を振り払うように、ぶんっと頭を振る。
「ボクは……だれかのかわりなんかじゃ、ないっ！」
――ほら、忘れ物だよ
手に、確かな感触。
「……リニス」
師であり乳母であり、かけがえの無い家族だった、もう一人。その彼女が……他の誰でも無い、フェイトのために鍛えた剣。
「いくよ、バルディッシュ」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ』
――そう……あなたには、その子がいる。リニスが託した、閃光の剣が
……聞き覚えが、あった。
いつかの、あの日……母親が、初めてフェイトを見たその日に。
「……ザンバーフォーム」
カートリッジをロード。
そして……戦斧、光刃に続く、第三の形態を発現させる。
それは……フェイトの身の丈をも超える、巨大な光の大剣。
《ぬゥっ……！　こうなれば、心臓ごと抉り出して――!!》

グレアムの手刀が、フェイトの命を抉らんと迫る。
だがそれも……フェイト達『二人』にとっては、些事に過ぎない。
「ボクは、ボクだ。おかーさんの娘で……アルフのごしゅじんさまで……リニスの弟子で……キミの、いもうとだ！」
胸に宿った温もりは、灯火へ。そして……
「そうだよね！
――――――アリシア!!」
『――――うん。お姉ちゃんがついてるよ』
炎へと、変わる！
――――ブゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォッ!!
《グァァァァァッ!!》
グレアムは、その炎に蹴散らされる。
その激しい炎は、グレアムを炙り……だが、至近距離にいたフェイトには、なんら危害を与えはしなかった。
「……きれい」
蒼炎……いや、それよりも彩度の高い、水色の炎。
それは、アリシア自身の魔力光だった。
『でしょ？　わたしの自慢なんだから』
魔力は、ほぼゼロに等しかったアリシア。
ではなぜ、こうして魔力を振るえるのか。いや、それ以前に……なぜ、死んだはずのアリシアが、こうして現れたのか。
考えられるのは、ただ一つ。
――秀人だ。
あの、ジュエルシード事件の終盤、虚数空間へと落下して行くフェイトを助けるため、プレシアは、アリシアの遺体の収められたポッドを手放した。
その際……二人は確かに、聞いたのだ。
『ちゃんと、仲良くするんだよ』という、アリシアの願いを。
あれは恐らく……秀人の魔力と……奈々に持たされた銀細工によって、引き起こされた現象だ。

『結合』により、銀細工に宿る形で、アリシアの残留思念は、現世に留まり……フェイトたちを、ずっと見守っていたのだろう。
《ウオォオオオオオオッ!?　馬鹿な！　ありえん！　この空間で、屈さぬ者など……!!》
「キミには、永久にわからないよ」
認めようとしないグレアムに、フェイトは哀れむような視線を向ける。
巨大光刃と化したバルディッシュに、黄金色の雷と……水色の炎が、螺旋を描いて絡みつく。
「疾れ、迅雷！」
『唸れ、業炎！』
フェイトとアリシアは、しっかりと頷きあい……声を重ね、詠唱する。
その術式は……フェイトが、最も信頼する人物から、譲り受けたもの。
二つの魔法の、二重複合。
「『　其は、災厄の環を断ち切る刃なり！　』」
――バキッ……バキッ……!!
雷と炎が、暗闇に亀裂を入れる。
《う、ウオオオオオ……!!》
亀裂の向こうへ脱出を図るグレアム。
二人は、巨大光刃を、その亀裂へ……グレアムに、振り下ろす！
「『　カラミティ・エンド!!　』」
――――ズバァァァ

た。

◆・◆　◆　◆

《ギ……グ、グゲェ……!!》

今尚、プレシアの攻撃に晒されていた肉塊が、苦しげに呻く。

《オゲェッ!!》

そして……どぶんっ、と、闇色の球体を吐き出した。

その球体は、亀裂だらけだった。

――ヒュイイイィィイイイイイイイイイイイイイイイッ……!!

そして、その亀裂から……強烈な閃光が、迸る！

――ズドォオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!

凄まじい衝撃と共に、闇色の球体が内部から引きちぎられる。

『！　フェイトちゃんの、魔力攻撃です！』

「フェイト……！」

飛び出した巨大光刃は、暗闇だけでは収まらず、遥か遠洋にまで達し。

「え……？　ひ、ひゃあああああっ!!」「のわぁあああああああ!!」

なのはが、ユーノが、蜘蛛の子を散らすように、その射線上から退避する。そして、

――ズパァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンッ!!

クロノたちが包囲する、魔獣の身体を深々と切り裂いた。

「……」

クロノたちがいくら攻撃しても割れなかった装甲を、一撃の下に叩き切った威力に、目を見張る。

「！　フェイト！」

プレシアとアルフが、その発射地点へ目を向ける。

遠洋にいた秀人たちも、フェイトの無事を確かめ……

「やったー！　われたー!!」

巨大光刃をぶんぶんと振り回して喜ぶフェイト。これはいい。別

にいつも通りだ。
問題は……その、隣だった。
ぱっと見たところ、それは、小柄な人型の炎。その割には、妙に輪郭がクッキリしていて、顔の細かな造詣まで見て取れた。
「えっ……!?」
「なっ……!」
「……どういうことだ」
口々に、疑問を口にする。
そして……その容姿を一目見たプレシアは、完全に硬直していた。あまりの衝撃に、事実を受け入れるのに時間が掛かっているようだ。
「おかーさん？　おーい。おかーさーん？」
ぶんぶんと目の前で手を振るが、プレシアは動かない。
その炎の人影……アリシアは、苦笑した。
『――ママ、』
驚愕から立ち返ったプレシアは……その現象が、アリシアであることを、ようやく認識しする。
「――アリシアッ……！」
炎となったアリシアを、そして、帰還したフェイトを、纏めて抱きしめようとして……
『ちょ、待って待って！　まだ調節がうまく……！』
慌てふためくアリシア。
だが感極まったプレシアは、構わず二人を抱き締め……
「あぢっ、あぢぢぢ、あっぢぃーっ!?　おかーさん熱い熱いタンマタンマーー!!?」
バリアジャケット越しに高温に晒され、フェイトが網の上のスルメのようにばたばたともがいた。
「……はっ。フェイトーー!?」
『きゃー！　だから言ったのにー!!』
……感動の再会、とは、とても程遠い様子だった。

## A’ s編　第九十四話『暁、迎える頃に』

「……さて、」
感動（？）の再会を果たしたフェイトたち一同は、拘束された魔獣の目前に戻ってきていた。
当然そこには、秀人や、なのはもいるわけで……
「……マジで？」
当事者の秀人でさえ、あんぐりと口を開けて呆けるしかない状況だった。
『マジだよー』
フェイトの肩に腰を下ろすような位置で、暢気に笑うアリシア。そして、きりっと表情を引き締め……
『――あの子、助けるんだよね？』
……と、魔獣……はやてを、指差した。
魔獣の外殻は、フェイトに深々と切り裂かれた一箇所を除いて、極めて硬質に変化していた。
『多分、あそこが唯一の突破口だと思う。早く行かないと、完全に閉じちゃうよ』
と、アースラからエイミィの通信が入る。
『……グレアムの魔力反応も、あの中……』
「まだ生きていたのね。しぶといこと……」
やれやれ、と言った様子で、プレシアがぼやく。
『……あの内部で、駆体を再構築しているんだと思う』
あの蹂躙劇を見せ付けられた一部の局員は、ぞっとしていた。
「カレンたちは？」
『今はなんとか、持ちこたえてるよ。でも、数が多いから……』
「ちょっと、」
やばいか？　と、言いかけた矢先……
――ゴゴゴンッ……!!
「……」
異常なサイズの直方体が、大地を地形ごと叩き潰した。

「……相手が、雑魚騎士じゃなくて良かった……」
あれが中身が一般人の雑魚騎士だったら、えらいことになっていた。
「うん……あっちはまぁ……大丈夫そうだな」
そう判断を下した。
――アァアァアァアァ……!!
魔獣が、吼える。
（……はやて、）
その頭部にある、はやての半身を見る。
（今……助けるからな）
そうしている間に、エイミィによって作戦の説明がされていた。
『外は、あの凶鳥部隊とアースラで抑えられるから……あの魔獣の内部には、秀人くんたち全員で突入しても大丈夫……なんだけど、あの入り口、よく見て』
モニターがズームされ、フェイトが入れた切れ込みをアップする。
確かに、硬質な外殻に隙間があり、十分に通れそうな幅があるのだが……外殻と内部の間に、得体の知れない膜のようなものがある。
「えい」
なのはが、試しに金具を投げる。
手を離れた金具は、真っ直ぐにその亀裂へと滑り込み……
――バジュウッ……!!
……たかが金具一個とは思えないほど、派手な音を立てて蒸発した。
『物理・魔力……どちらに対しても発動する防御障壁。……多分、魔力を取り戻したなのはちゃんの砲撃でも、通らないと思う』
「カートリッジ全使用の全力全開でも？」
『それ撃ったら、その後何もできなくなっちゃうよ……』
エイミィが、若干呆れて言った。
「……全員の攻撃を、秀人が束ねて撃つ、というのはどうだ？」
いつものメンバーの他に、今はプレシアがいる。合体攻撃をするにあたって、出力が跳ね上がること間違いなしだ。

クロノの提案が、一番の得策かと思われた。
全員で負担を分担し、一撃を加えれば……と。だが。
『……駄目だ。どう計算しても、あの防御障壁を叩き割った後、内部での活動時間が足りなくなる……』
撃って終わり……ではなく、その後も控えている。
そうこうしている間にも、突入までの猶予は刻々と迫って……
「アイ。俺たちがやろう」
秀人が、肩口で滞空するアイの本体、蒼い宝玉へ告げた。
『……それしか、無いみたいなの』
諦めと共に、受け入れるアイ。
可能な限り魔力を使わず、高出力を……無茶な話だ。
だが、秀人には、その無茶を実現できる能力があった。
「イモータルハート……セットアップ」
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ　ｕｐ』
蒼い宝玉が光り輝き……秀人の身体に、装着されていく。
イモータルハート第一段階は……右手に破壊力を集中させた、近接戦闘を重視した形態。
『エラー・機能破損。第一段階・モード『ガントレット』、使用不可能』
だがそれは、核となる魔力結晶をはやてに譲与したことで、使用は不可能となっていた。
ならば、使用するのは……
「――――第二段階・モード『カノン』起動」
第二の、武装。
『了解。モード『カノン』・武装開始』
アイは、その意を受け、機能を解放する。
――ガシンッ……!!
それは一見、第一段階の手甲のようだった。だが、よくよく見てみれば、大分意匠が違う。直線が多く、長方形を切り出したかのような無骨な手甲とは異なる。
鋭角的な曲線が幾重にも折り重なり、まるで……そう、『鱗』のようなパターンを織り成している。拳より２０センチばかり突き出した

装甲は、左右での形状が異なり……左右で1セットであることを、暗に主張していた。だが、そのままではただの高威力なだけの魔力砲だ。あの障壁を突き破れるとは考えづらい。
と、なれば……
『『カーバンクル』、セット』
アイが、マリエルから受け取った魔導合金……『カーバンクル』をひとつ、浮かべる。
「……これは、」
秀人は、最初は訝しがったが……即座に、その用途を理解した。
手元に浮かべると同時、そのカーバンクルを、秀人の魔力が包み込み……
――ゴリィッ……!!
……禍々しい音とともに、圧縮されていく。一つの亀裂さえ生まれず、ただ、内へ、内へと……押しつぶされていく。
（……すげぇな、これ。取り出せるエネルギー量が、桁違いだ）
そして……体積のほぼ全てをエネルギーに変換された。
秀人の魔力により空間に留まったそのエネルギーは、まるで……小さな太陽のように、輝いている。
――ガコンッ！
秀人に装着されたイモータルハート、その右肩部がスライドし……バクンッ！　と、エネルギーを取り込んだ。
『エネルギー、充填完了。発射シークエンスへ移行』
きゅいんっ……と、モーター仕掛けのように、秀人の腕が勝手に動いた。イモータルハートの動作だろう。
前方に伸ばしきった両腕が、その腕の装甲が……がちんっ！　と、組み合わされる。
「……全員、離れていろ」
その言葉と同時に……
――ギュイイイイイイイィィンッ……!!!
圧倒的を通り越し……異常としか言い表せない規模のエネルギーが、砲身へチャージされていく。あの小型太陽のようなエネルギー体

……開封してしまえば、まさかこれほどのものとは、露にも思わなかったなのは達が、驚愕に目を見開く。
「あ……あれは、何だ!?　魔力砲か!?」
クロノさえも取り乱し、エイミィに聞いていた。だが、それに答えたのはマリエルだった。
――縮退砲だよ、と。
『発射準備完了――――』
……そして。
「――――――ディジェネレイト・ブラスタァァァァァァァァァァァッ!!」

――――――……グゥオオオオオオオオオオオオオオオーーーーーーーーーーーーーーッッ!!
それはまるで、巨竜の咆哮――――なのはの収束砲をも遥かに凌ぐ破壊力が、防御障壁へと殺到する!
――――ゴガガガガッ……バギィイイインッ!!
僅かな抵抗を残し……防御障壁は、薄ガラスのように、呆気無く突き破られた。
だが……喜んでいる暇も、驚いている時間も無い。
「総員、突入!!」
クロノの号令と共に、距離を置いていたなのは達が、次々に亀裂へと飛び込んでいく。
「……!　モード『カノン』、オフ!」
秀人が、焦燥した声で命じる。
『了、解……モー、ド、オフ……』
……展開していたイモータルハートの砲身が、不気味に白熱し……一部には、融解しかかっている箇所まであった。
――カシャンッ……!!
砲身が格納され、手甲の形状に戻る。
「アイ!」
『……あぶな、かったの……もう少しで、回路が焼き付くとこ

ろだったの……』
ブラスターシステムに加え、ぶっつけ本番での、縮退砲の使用。それが、予想以上の負荷となり、アイの外装を軋ませていた。
やはり、何の対価も無いわけはなかった。
「……アイ、行くぞ。はやてが待ってる」
詫びるでもなく、いっそ冷淡な声で、秀人が言う。
今は、はやての救出作戦の最中。デバイスであるアイにとって、主が『道具』の状態に固執し、その任務に専念できないのであれば……それこそ、アイにとっては屈辱となる。
だから……今は、徹底的に、アイを道具として使い倒す気であった。
『了解。……モード『カノン』、ハーフモードで維持』
砲身を縮め、手首が自由に動くように形状を変化させる。白兵戦を想定した武装のようだ。本来なら、それはモード『ガントレット』の役目なのだが、それが使用不可能な今、この形状を取る必要があった。
ハーフモードというからには、性能もさぞやデチューンされていることだろう……そう思った秀人は、こう命じた。
「現時点での最高速度で突入する」
『了解。最高速度で、突入するの』
――ガシンッ……!!
律儀に復唱し……装備の配置が、変化する。砲撃の反動を相殺するブースター類が、背部に集中。ひゅいいいいいん……と、どこかで聞いたことのある吸気音。
「……ん？」
どうにも、いやな予感が絶えない秀人。
『3カウント後に、突撃するの。3，2，……』
――キュイイイイインッ……!!!!
いよいよ不吉な予感が時間となり……ようやく、秀人は不安……というか、この吸気音の正体に、思い至った。
『1，』
（あ、これ……スレイプニルの、エンジン音……）
『ゼロ』

――気づいたときには、もう遅い。
バゴンッ!!　と、背中を巨人に蹴り飛ばされたかのような勢いで、猛烈に発進した。
「……ぬあああああああああああああああああああああっ!!?」
秀人は、最後尾で亀裂へと突入したにも関わらず、なのは達を瞬時に追い越し……悲鳴をたなびかせ、すっ飛んでいった。

◆　◆　◆　◆

突入したクロノ達。防御障壁を超えたのだから、後ははやての元まで一直線。そう考えていたのだが……見通しが、甘かったといわざるを得ない。
――オオオオオ……!!
そう。ここは、闇の書の内部。
空間すべての闇が、兵士として具現化し……進入した外敵を排除せんと、いきりたって襲い掛かってきた。
「くそっ……ほんとに、数だけは多い……!!」
砲撃や広範囲攻撃で蹴散らすも、兵士は際限なく発生する。
しかも……
「ディバイン……バスター!!」
――ドォオオンッ!!
なのはの砲撃で蹴散らされ、闇に還元された兵団が……再び、兵士の形を成して、襲い掛かってくる。
「……!　撃ち方、やめ!」
これでは、撃つだけ無駄だと判断したクロノが、攻撃を止めさせた。
ユーノが展開した防御結界へ退避する。
その結界を、外部からドンドンと恨みがましく叩く、死者の怨念たち。
「……哀れな」
クロノが、ぽつりと呟く。

死して尚、こうして闇の書の呪いに縛り付けられ……利用されていることにも気づかぬまま、道具か何かのように、使役されている魂たち。
彼らにも……曲がりなりにも、人生があっただろうに。
「……エイミィ、この層の、大体の厚みと強度は？」
それを押し殺し、アースラとの通信を試みる。
エイミィから送られてきた情報を参照し、突破に必要な手段を講じる。
「通常攻撃では、まず無理か」
第二層の厚みを突破するには、アリシアを加えた全員分の魔力を叩きつける必要があった。それだけならば、全員が全力で攻撃すれば可能だ。
だが……死者の怨念。数多の思念の渦は、台風もかくやというレベルで吹き荒れており、僅かに道を開けたとしても、それはすぐに塞がれてしまう。
全力での攻撃後に、即座に全力で飛翔することなど……
『できるよ』
マリエルが、通信越しに軽く言った。
『簡単さ。攻撃後に移動するんじゃなくて……攻撃しながら、移動すればいいんだ』
言われてみれば、簡単なのだが……
『A．C．Sを使え』
「A．C．S……？」
聞きなれない単語。なのはは、すぐにレイジングハートのプログラムに目を通す。
「――突撃形態」
おおよそ、ミッドチルダ式とは思えない装備。だが、この状況を打破するにはうってつけの機能だった。
早速、起動しようとするなのはを、マリエルが止めた。
『ワタシが最適な突破ポイントを見極めるまで、その場で待機だ。闇雲に突っ込んで、外に出てしまったらどうする』

すでに、突入してきた亀裂は塞がっている。全方位を同じような光景で埋められ、確かに、方位がわからない。
マリエルがオペレーター席に腰を下ろし、コンソールを操作する。
美香がはやてのおおよその座標を指し示すことができるため、突破ポイントの見極めは、時間の問題だろう。
「了解……!?」
――ドシン!!
と、一際強く、結界が揺れた。
見ると、大量に押し寄せた兵士たちが、隙間無く結界にへばりついていた。
「くっ……!? こいつら、結界を侵食して……!!」
そして、その触れた箇所から、漆黒の闇が滲み出し……結界を、黒く染めていく。
――オオオオッ!!
その黒く染まった箇所は、結界としての機能を失うようで……ついに一体、内部へと侵入してきてしまった。
「だァらあああああっ!!」
――バコンッ!!
ヴィータの、気合一閃。フルスイングされたグラーフアイゼンが、兵士の胴体を痛烈に打ち据え、叩き返した。
だが当然……一体のみで、終わるはずが無かった。
――オオオオオオオオッ……!!
虫食いのようになった結界に、次々に兵士たちがなだれ込んで来た!
「このっ……!!」
なのはが、レイジングハートを構える。
『待て、キミは魔力を温存しろ!』
だが、マリエルがそれにブレーキを掛ける。
「……!!」
砲撃をキャンセル。
「たぁあっ!!」

――ザンッ!!
迫った一体は、フェイトが切り捨てた。
「だいじょーぶ！　なのはは、じぶんがやることに集中して！」
「雑魚は、アタシたちが対処する！」
『まかせて～』
アリシアの強化サポートを受けて、ヴィータと共に縦横無尽に飛び回るフェイト。
「……そこ。一体逃げたぞ」
その討ち漏らしはクロノが拾い……
「まぁ、鈍った体には、いいストレッチかしらね」
大挙して押し寄せた一段は、プレシアが纏めて吹き飛ばす。……なんというか、
「……その『ストレッチ』とやらは、僕にとってはフルマラソンにも等しいぞ」
クロノが、げんなりとした様子でぼやいた。
「あなたも、魔力はそれなりの物を持っているのだから、もっと使い方を考えてみなさい」
なぜか、レクチャーが始まった。
「ふむ……その杖、中々いいわね」
「え？　……お、おい……？」
クロノの手に収まった、制式デュランダルに興味を示すプレシア。
さっと奪い取ると、カード状の待機モードにする。同じく待機モードだった試作デュランダルも抜き取り、あれやこれやとその場で改良を加えていく。
「基本構成はほぼ同じね。ただ、試作版のみで、制式では容量の都合で切り捨てられた機能も結構あるわ。分断機能に特化する都合上、オミットされた『氷結』……術式干渉……捨てるには、惜しいわね」
長いローブの懐から、増設メモリ的な物体を次々に取り出し、がちゃがちゃと取り付けていく。プログラムなどのソフト面だけではなく、こうしたハード面にも強いという、今更だが、この女性は才人なのだなぁ、という感想を抱いた。

「できたわよ。……形は、少々不恰好だけれど」
制式に試作を統合し、一つとなったデュランダル。それをクロノに投げて寄越す。
起動して、驚く。
洗練されたフォルムだったのと比べると……あちこちに排気管が付いているわ、増設したメモリがによきっとはみ出しているわ、見る影も無い。
「……ええい、大事なのは中身だ、中身!!」
半ばやけっぱちで、敵の一段を牽制するため、インパクトを発動。
――ガキィイイイイインッ……!!
百にも届こうかという兵士の一団が、剣を振り上げたまま……足を踏み出そうとしたまま……時間が停止したかのように、凍り付いた。
「吹き飛ばすより、効果的でしょう?」
我が目を疑うクロノに、プレシアがしれっと言う。
確かに、撃破するのではなく、こうして凍結させてしまえば、再生のしようが無い。
「さぁ、次よ」
クロノは、デュランダルとＳ２Ｕを両手に構え、第二波を迎え撃つ。

――オオオオッ!!
「……!」
「行かせるかぁっ!!」
結界を片っ端から修復し、破られ、それをまた修復し、戦線を維持するユーノ。彼に迫った兵士は、アルフによって撃墜されていく。
「ごめん、アルフ……」
額に玉のような汗を浮かべ、苦笑するユーノ。
「あんたは安心して、裏方に徹してな。こんな奴らに、邪魔はさせないよ」
そんな中、作戦の要となるなのはは、レイジングハートを手に持ち……瞑想するように、意識を集中していた。
心を乱さず……勝負の一瞬に、フルパフォーマンスを発揮するため

に。
「やるよ、レイジングハート」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』

◆▪◆　◆　◆

なのは達を追う形で、闇の書の内部に突入したはいいが……ここは、どこだ？
毎度のことながら、通信は通じない。
アイには、はやてのいる場所の、おおよその座標を入力してきたが……
『ここは……第二層と、中心の境界領域なの』
「なのは達の位置は掴めるか？」
多分、はぐれてしまったのだろうが……
『第二層のど真ん中なの。多分、突入の勢いが足りていなかったの』
「俺らが飛びすぎたんだろうが……」
まさか、スレイプニルのエンジンと同じ技術が積まれているとは知らなかった。
座標を頼りに、しばらく飛行していると……前方に、闇色の球体が現れた。
その薄気味悪い気配が、正体を如実に物語っていた。
――バリンッ……!!
「くぁーっハッハッハ！　再構築、完了っ!!」
卵の殻を割るように……そいつ、グレアムが、新しい体を露にした。
作りもんみたいな、完璧な肉体……って、ああ、作り物か。自分の理想の肉体を、好き勝手にチートして作り出したんだ。自分の手を汚さず、努力を放棄して……ただ、都合のいい『理想の自分』を、作り上げた。
……はやての、大勢の人生を、ボロボロにして。
「……いい気分か？」
――……ゴウッ。
体を、蒼炎が覆う。

……今までそうだったような、燃え盛るような激しいものではない。かといって、温くは無い。憤怒すればするほど、脳裏がすうっと冴えていく様な……奇妙な感覚だった。
『理想のカッコイイぼくちゃん』を、得意げにひけらかして……楽しいか？」
グレアムは、くくく、と含むように笑い……
「――――ああ、最高の気分だとも!!」
満面の、笑みを浮かべた！
「ああ、そうかよッ!!」
戦闘体勢に、移行!!
「ロード！　インパクトカートリッジ!!」
『Ｅｘｐｌｏｇｉｏｎ!!』
――ガキュンッ!!
『ブチッかますの！』
「わかってらぁ!!」
最初から、全力全開だ！
「ヒャハハハハッ!!　そォらァあああああああああああああっ!!」
――ガゴォオオンッ!!
俺の拳とグレアムの拳が衝突し、暗黒の空間を揺らす。
「刃以って、血に染めよ！」
無数に出現し、俺の全方位を取り囲む緋色の短剣の群れ。
「バレット！」
残らず、相殺！　多分、グレアムは次に……!!
「ナイトメア!!」
砲撃に、繋げてくる！
「せいっ!!」
――パァンッ!!
砲撃で相殺している暇は無い。正拳突きで、砲撃を吹き散らす。
「貫け、ミストルティンッ……!!」
――ザシュッ!!

その中から、グレアムがヌゥっと現れ……白銀に輝く槍を、俺の腕に突き刺した！
「ぐあっ……!!」
だが、耐えられないような威力じゃ……！
『!!　マスター!!』
アイの警告。槍の刺さった箇所が、徐々に……なんだ、これは!?
『石化呪術なの!!』
「くっ!!」
槍を引っこ抜き、握り潰す!!
「アイ、解呪を……」「遅いわぁっ!!」
目前に、グレアムの拳！　防御……くそっ！　石化した腕が、反応を鈍らせる！
――ゴギンッ……!!
「……!!」
鎧に亀裂が入る。衝撃に体勢を崩す俺に……
「はぁああっ!!」
グレアムの蹴りが、モロに入った！
――ズゴンッ!!
地面……だろうか。足場として使えそうな場所に、叩きつけられた。
「エクス……!!」
グレアムの両腕に、闇色の巨大な魔力の剣が出現している！
『マスター！　回避するの!!』
「ああ、……っ!?」
立ち上がろうとした俺の両腕を、戒める何かが。　……地面から伸びた触手のようなものが、バインドのように、俺を縛り付けていた！
「カリバァァァァァァァァァァァァァァァッ!!」
放出される……巨大な斬撃!!
なんとか、両腕だけは脱出完了。腕をクロスして……！
「ロード！　ディフェンドカートリッジ!!」
防御専用のカートリッジを使用！　さらにその防御を、蒼炎で補強

し、斬撃に備え……。
――――ズパァァァァァァァァァァンッ!!
防御は切り裂かれ……イモータルハートの装甲をも割り砕き……。
「ぐ、う、うう、……!!」
――俺の左腕を、中途から切り落とした。
壮絶な痛みに、意識が飛びかけるのを防ぎ、吹き飛ばされる勢いをそおのままに退避する。
「はぁっ、はぁっ……!!」
蒼炎も、度重なる使用で効果が薄く……左腕の再生が、追いつかない。
アイが傷口を止血するが、間に合わせにしかならない。
「おいおい……呆気無いにも程があるぞ、うん？　……でもまぁ、仕方無い」
にたにたと、余裕の笑みを浮かべる。
「あの小娘に集めさせた、無尽の闇、無限の魔力は、全て！　この我……ギル・グレアムの力なのだからなぁ!!　ハッハッハ!!　いやぁ、あのガキは実にいい働きをした！　労せずして、この力だ!!」
この闇色の空間は……グレアムに、都合の良いように作用する。先ほどの拘束も、その例だ。
「……それで、いいのかよ」
言葉が、口をついた。
「ん？」
「両親を殺されて……あったはずの幸せを、全部奪われて……」
「何だ……何を言っている？　痛みで気でも狂ったか？」
「たった一つの逃げ道まで、こんな薄汚い老人に利用されて……」
……怒りが、ふつふつと沸いてくる。
「はやて。お前……それで、本当にいいのかよ!!」
――……。
……僅かに、闇が鳴動した。
「ええい、イラつく戯言を止めんかぁっ!!」
「スッこんでろぉおおおおおおっ!!」

――ガギィイインッ!!
残った右手に魔力刃を作り、グレアムに叩きつける！
「なぁ、はやて！　お前、何のために魔法を使いたかったんだよ！　こんな老人に利用されるためか!?　こんな、他人の勝手な欲望に、いいように使われるためか!?」
――ギンッ……!!
鍔迫り合いから、至近距離で炸裂させる。
「ぬ、うう……!!」
「辛い現実が憎くて、屈したくなくて……そのために、力が欲しかったんだろ!?」
――ドゴォンッ!!
砲撃を連射し、強引にガードの上からごり押しする。
「全てを滅ぼしたって……復讐になんか、なりはしない!!　ただ、このクソ野郎に都合が良くなるだけだ！」
――ゴシャアッ……!!
背部のブースターを全開にして生んだ推進力全てを、拳に乗せて、グレアムの顔面に叩きつける。
「ちゃんと目ぇ開けて、目の前を見ろ！　こいつが……このきったねぇ老人が、お前から全てを奪った元凶だ！　辛い現実を作り上げた張本人だ！」
――パァンッ!!
打ち出された魔力を、魔力を集中させた掌打で弾き飛ばす。
「お前……やられっぱなしで、利用されっぱなしで……当の張本人は、何の痛痒も無しに、高みでふんぞり返ってるんだぞ！」
――――――
闇が、また鳴動した。
「クソ野郎の身勝手のために、他人の命を奪って、力を蓄えて……最後は全部差し出して……そんな奴の、何が『王』だ！　そんなもん、ただの傀儡だ!!」
――――――……
「俺の知ってる八神はやては！　他人に利用されて、大人しく受け入

れるような従順な奴じゃねぇ！　しっかりしやがれ！」
――――。
「言っておくけどなぁ！　俺は、お前の殺人なんて、これっぽっちも許したつもりは無えぞ!!　被害者気取って、勝手に消えるなんて、絶対許さねぇ!!」
「いい加減黙らんかぁあああっ!!　……ニードルソリッドォオオオオオッ!!」
――キュババババッ!!
針のように細く、鋭く砥がれた魔力弾が乱射される！
「引っ込んでろっつってんだろうがぁあああっ!!」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
腕の射出口から、同数の魔力弾を発射し相殺！
「ぬぅあああああっ!!」
――ガシャッ!!
モロに打撃が入った。視界が、暗転しかける。
「ぐっ……がぁあああっ!!」
――ゴギン！
応酬の右ストレートをブチ込む！
――ベゴォッ!!
回し蹴りが、左脇腹に入り、装甲にヒビを入れた！
「うおおおっ!!」
肉薄し……ゼロ距離で、砲撃!!
「ぐふぅっ……!!　は、ははは！　無駄だ無駄だ無駄だぁ！　我には、この無限の魔力が……!!」
くそっ……こっちだけが、一方的に治癒できないんじゃ……!!
また、グレアムの体に、魔力がリチャージされ……
――――パキィイイインッ……!!
……なかった。
どろどろと蠢いていた筈の闇が……凍ったように、

「な……何が起こった!?」
　目に見えて、うろたえるグレアム。
「……これでもう、スタミナ以上の治癒はできない」
「だが、それは貴様とて同じこと……!!　我にはまだ、内包する魔力が……!!」
　……だろうな。その躯体の中にも、薄らみっともなく溜め込んでると思ってた。けど。
「――お前、まともに真正面から戦えるのか？」
「――――」
　グレアムは、ぱたりと無駄口を止めた。
「自慢のチートを剥ぎ取られて、どんな気分だ？　……もう、『限られた魔力をやりくりする』方法なんて、忘れちまってんじゃねえのか？」
　現役時代ならいざ知らず……権謀術数の政治ゴッコに明け暮れて、前線から退いて……一体、どれだけ経っている？
　さっきの戦闘でも、ずいぶんと簡単に攻撃が入ると思っていた。あれは、『避けなかった』んじゃない。『避けられなかった』んだ。
「は、はは……何を、言っているのだこのゴミは。我は、オーバーSランク魔導師だぞ。若さと活力は、全盛期……いや、それをもはるかに、上回るのだ！」
　グレアムは、余裕を取り繕うが……その端々に、焦りが見て取れた。
「片腕で、治癒力の衰えているお前に、今更何が……!!」
「……お前の切り札は、その躯体と、無制限の魔力……だったな。まだ、何かあるか？」
「……！」
　……これまでの暗躍は全て、その躯体と、魔力を手に入れるため。だったら……もう、奥の手なんて、あるはずが無い。
「――俺には、『ある』ぜ」
　俺の……いや、俺達の、切り札が。
「……行くぞ、イモータルハート」『発動準備、完了なの』
　――ブラスターシステム・リミット2
「――リリースッ!!」

……リミット1の、何倍もの衝撃が……体中を駆け抜けた。
――シュウウウッ……
『左腕・復元完了』
左腕の感触を確かめる。
『……『カーバンクル』セット』
手の中に現れた球体を、即座にエネルギーに変換。イモータルハートにチャージする。
『リミット2、活動可能時間……40秒。スタンバイOK』
ハーフモードのおかげで、20秒の制限が倍付けになった。これ以上、『カーバンクル』を喰わせたら……キャパシティをオーバーして、コアが破損する。
「おのれぇっ……!! だが、この程度の抵抗……!!」
……あまり、時間は掛けられない。無駄に長引かせたら、再び、魔力へのリンクを取り戻してしまう。リチャージしている暇は無い。
「行くぞアイ。はやてのくれた、40秒でカタをつける!」『了解なの!』
背部ブースターに魔力を回し……!!
『Ｔａｋｅ　ｏｆｆ!!』
一気に、加速！ スレイプニルと同等の加速は……グレアムに、反応する隙を与えなかった。
――グシャアッ!!
グレアムの横っ面を、力いっぱいブン殴る！ 推進装置を吹かして……!!
ジャブ、ストレート、フック、アッパー！
「ゴはぁあっ……!!」
乱打、乱打。反撃の隙を与えず、拳の雨を降らせる！
「ち、治癒……治癒を……!!」
……馬鹿が。治癒なんてしている暇があったら、離脱して間合いを取るなり、カウンターを合わせるだけの場面だ。
ようやく気づいたのか、反転しようと……だが、させるかっ！
「チェーンバインド!!」

――ガキィイインッ!!
俺とグレアムの手首を、チェーンで縛りつける。逃げられると、思ってんのか！
「てめぇはここで、俺とチェーンデスマッチだ!!」
「こ、この野蛮人がぁあああっ!!」
「文句あんのかクソインテリ野郎ォオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
振り絞るような拳。遅いそして軽い！
「おらぁっ!!」
――ベキンッ!!
迎撃し、腕を破壊！
やっぱりだ。グレアムはミッド式の魔導師だったはず。得意分野も、恐らくは射出系。
只でさえ、戦いの勘を鈍らせたグレアムだ。現役のころでさえ苦手だったクロスレンジの格闘戦には、まともに対応できはしない！
『カウント、２０』
……!! くそっ、もう半分か!!
「し、死ねぇえええっ!!」
がぱっと開けた口に、魔力がチャージされている！
――ドンッ！ ドンッ！ ドンッッ!!
榴弾の連射。俺もまた、至近距離という間合いのリスクを、味わう羽目になった。
――ドゴォオオオオンッ!!
肩、腹部……そして、胸部に、炸裂！
「ぐぁあああああっ!!」
「死ね、死ねよォおおおおっ!!」
霞む視界の中……グレアムが、揃えた四本指を、貫手として放ってくる!!
――ドスッ!!
「……!!」
アバラの下に、差し込まれる。

「は、はぁははは!!　このまま、ねじ切ってやるゥあああああああああ……、あ、あ……!?」
狂喜が、困惑に……そして、驚愕に、染まる！
「ぬぅ、ぐっ……!!　ぬ、抜けん……!!」
筋肉で締め上げて、脱出を封じて……
「ディバイン……バスター!!」
腕の射出口をグレアムに押し当て、砲撃を発射!!
「ギャオあああああああああああっ!!」
チェーンの伸縮の限界まで、砲撃の威力を体全体に受けるグレアム。
『カウント、１０!!　マスター！』
ラスト十秒!!　もう、術式を読む時間すら惜しい!!
「おらおらおらおらおらぁあああああああああああああっ!!」
ひたすら、殴る。殴る。殴るッ――!!
「ご、ごぉ、の、……が、ぁ、ああああああああああ!!」
体内に蓄積した魔力で体を治癒させ、俺を殴り返すグレアム。まだだ、まだ足りない！　治癒を上回る速度で……拳を、叩きつける！
『5，4，3，……！』
最後……残った魔力を全て、拳へ！　グレアムも、同じく魔力を拳へ集める！
「インパクトォオオオオオオオオッッ！　」
「シュヴァルツェ・ヴィルクングッッ！」
拳と拳が、打ち合わされる、寸前……
『カウント０。タイムオーバー』
……無情の宣告が、下された。
◆▪◆　◆　◆
「……これは……？」
先ほどまで、私たちを攻め立てていた闇。
それがまるで、ビデオの一時停止ボタンを押したかのように、ぴたりと動きを止めていた。剣を振り上げていた兵士も、そのまま……

「!!　マリー！　今のうちに、計算を!!」
荒れ狂う魔力が収まった今が……最大の、好機！
「レイジングハート……ＡＣＳ！　ストライクフレーム展開！」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　！』
――ガキュンッ!!
カートリッジをロード。
レイジングハートの穂先が、スライドし……
――キンッ!!
突撃槍の先端が、展開した。
「カートリッジ、フルロード!!」
――ガキュンガキュンガキュンガキュンガキュンッ!!!
いま挿入されているマガジンの中身を、一気にロード!!
膨大な魔力が、スターライトの応用で、穂先に収束していく！
『座標特定、完了！』
「まずい、また動き出した！」
ＡＣＳの展開。座標の特定。闇の活動再開。それらは全て、同時のタイミングだった。
「なのは！　いっけぇえええええええええええっ!!」
フェイトが、進行方向へ極大の斬撃を放つ！
――ゴバァァァァァァァァァァァァァァァンッ!!
これでＡＣＳの突進力を、できるだけ衰えさせずに済む！
――バサァァァァッ……!!
レイジングハートが、六枚の光翼を展開する。
「いっけぇえええええええええええええええっ!!」
『Ｔａｋｅ　ｏｆｆ　！』
レイジングハートが、目の前の闇を切り開きながら、突き進んでいく！
「なのは、頼んだよ!!」
「はやてを、助けるんだ!!」
ユーノくんやクロノたちは、活動を再開した闇に阻まれて、あの場所に取り残されていた。

「……!!　レイジングハート！　全速前進で、一直線で!!」
『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ　．』
でも今は……振り返っている時じゃない。
私は、光の帯をたなびかせ……流星の如き勢いで、八神のもとへと飛んでいった。

◆　◆　◆　◆

俺の拳は、打ち砕かれ……
「この俺様に、屈辱を味わわせやがってぇ……!!　土人の分際で、よくも……!!」
グレアムが、俺の首をつかみ上げ哄笑する。
「だが……勝ったのは俺様だぁあああああああっ!!」
――ドボッ!!
苛立ち紛れの一撃が、臓腑を抉る。
「……」
『武装、解除……』
覆っていた装甲が、解けるように消える。青い宝石に戻ったアイが、俺の手に力なくぶらさがる。
「……」
「おいおいおい……あんだけ大口叩いておいて、もう終いか、ああ？
……ひゃははははっ!!」
ぎりっ……と、首を締め上げる力が、一段と強くなる。
「だぁが、貴様は殺す！」
にやぁっ……と、卑しく笑うグレアム。
いたぶるように、じわじわと力を込めていく。そして、このまま俺の首をねじ切ってしまうつもりなのだろう。
「……ってたぜ」
「あ？　何だ、何か言ったか？」
……グレアムが、いぶかしげな顔をする。それも、そうだろう。
今、俺は……隠すことも無く、会心の笑みを、浮かべているの

だから!!
「待ってたぜ……！　この瞬間をッ!!」
　イモータルハートを、グレアムに押し付け……そして！
「イモータルハート！　セットアップ！」
　――バシィイイイインッ!!
　グレアムの体を、イモータルハートの装甲が覆いつくす！
「こ、これはッ……!?　貴様何をッ――!?」
「イモータルハート！　ドレインモードッ!!」
『フルドライブッ!!』
　イモータルハートが、強く輝き……!!
「――これが……俺たちの、最後の切り札だぁあああああああああああああ!!」
「ぬ、ぬォあぁあああああああああああああああああああああああああああっ!?」
　――ズギュウウウウウウウウウウウウウッッ……!!
　……グレアムの体から、猛烈な勢いで、魔力が放出されていく。
穴の開いた水風船のように、際限なく、漏れ出していく！
　――イモータルハート・ドレインモード。
『エネルギー消費が激しい』という、イモータルハートの欠点を逆に利用した、逆転の一手。イモータルハートを、『相手に装着させる』ことによって、急激な魔力欠乏を引き起こす。『カーバンクル』の圧縮エネルギーですら、たったの２０秒しか維持できないイモータルハートの、フルドライブ。その魔力消費に対応できる魔導師など……ありはしない。
「うおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオっ!?　ば、馬鹿な……！　力が……我の力が、抜けていくぅうううううっ!!?」
　自慢の美貌も、肉体も……加速度的に、老いていく。
　張りを失った肌には、醜く汚く皺を刻み、白銀の頭髪からは色素が抜け落ち、ただの白髪となる。
　目は落ち窪み、歯が抜け落ち……
「あ、アアアアア……!!」
　――ミイラのように干からび、崩れ落ちた。

後に残ったのは……目をデタラメに配置し、手羽先のような異形の四肢を生やした、吐き気を催すような造詣の、醜悪な肉塊。
「……それが、お前の正体か」
『ギ、ギギィ……!!』
その肉塊は、もはや浮遊することさえできず、べちゃりと地面に落ちる。このまま、止めをッ……！
『ギ……ギイイイイイイイイイッ！』
だが、肉塊は……べたべたと四肢をばたつかせ、逃走しようとした。
「に、逃がす、かっ……！」
くそっ……俺も、もう殆ど限界だ。
……魔力の残りかすを何とかかき集め、魔力弾を一個、生成。そして……射出！
――ドシュッ!!
『ピギィイッ!?』
発射された魔力弾は……肉塊の半身を消し飛ばした。
だが肉塊は、残った二肢で、わしゃわしゃと逃走してしまった。
「く、そ……!!」
俺も……もう、動けない。
逃げられる……!!
そう思った矢先。
「逃がさないよ」「もう、終わりにしよう」
……二つの人影が、その肉塊を捕獲した。その二人は……
「アリア、ロッテ!?」
……グレアムの使い魔だった。
「――！　まずい、離れろ!!」
直接している箇所へ、肉塊が薄汚く侵食していく！　こいつ、二人を養分にするつもりか！
「……大丈夫」
だが、俺の焦りをよそに、二人は平常心のままだった。
いよいよ、二人の肉体は、完全に肉塊と癒着してしまった。
肉塊……かつての主の成れの果てを、二人は悲しげに、哀れんだ目

で見つめる。
「そろそろ、ケジメをつけるときだね」
「ええ。……私たちの罪を、償うとき」
そして……取り出したのは、一枚のストレージデバイス。
開放され、魔法陣が展開する。その術式を、アイが読み取る。それは……
「魔力……炸薬!?」
自爆装置、だった。
「どっちにしろ、コイツとあたしらは、一蓮托生なんだよね」
「……だから、こうして」
くっ……！　なに、馬鹿なことを……!!
止めようとした俺の体を、二つのバインドが、戒める。
「！　くそっ、おい、解け！　馬鹿な真似するな！」
万全の状態なら、解けるのに……!!
「悪いのはグレアムだろ！　お前らが死ぬなんて、そんなの、間違ってる!!」
「それに加担したのは、私たちの意志」
「我が身の可愛さに、目を背けたのは、私たちの罪」
でも……でも！
「……お前たちまで、クロノを悲しませる気か！」
二人は、びくっと身をすくませた。
「クロノは……お前たちのことを、家族同然に思ってるんだぞ！　それが死んだら、クロノは、クロノは……!!」
あいつは、任務中に父親を亡くしている。まだ小さい頃だったらしいが……それでも、あいつが何も、悲しまなかったはずが無い。それを、繰り返させるわけには、いかなかった。
「うん。でも、ごめんね」
「……こうして融合してしまえば……逃げることはできなくなる」
やめろ、と、馬鹿のように繰り返す俺に、二人は微笑んで……
「――もっと早く、キミみたいな子と会えてたらなぁ」
「――そうね。それはとても、素敵なことだったわね」

二人は、グレアムを抱えたまま……浮上していった。
「……カウント、スタート。5，……ねえ、アリア」
「4，……なに、ロッテ」
「3，……あの世というものが、本当にあるのなら……やり直せるかな」
「2，……うん、そうだね。でも、いいんだ。もし、行き先が地獄でも……ロッテが、一緒だから」
「1，……ふふ、そうだね。わたしも、そう思う。だから……」
——0。
「「共に参りましょう……お父様」」
かつて、主と共に。
——……!!
二人の使い魔は……はじけて消えた。
「——!!」
ガンッ!!
地面を殴りつけた手が、ひどく痺れた。
「くそっ……！　くそぉっ……!!」
無力感に、体が震えた。
俺は……あの二人を、取りこぼしてしまった——
『マスター。見るの』
アイに促され、それを見る。二人が消えた、その地点に……残り火のように、きらきらと輝く魔法のコードが、残されていた。
重力に従い落下してくるそれを、手に取る。
『——ユニゾンデバイスの、根幹システムなの』
……二人が残した、形見だった。

——キィイイイイイイイインッ……!!
彼方から……見覚えのある魔力光が、飛来してきた。
……持ち主を、伴って。
「秀人さんっ！」

目の前に着地したなのはが、俺に駆け寄る。
「秀人さん、大丈夫!?」
よかった……どうやら、なのはも無事のようだ。
「グレアムは……躯体は、今度こそ完全に破壊した」
「うん。おかげで……八神のところまで、一直線で行ける！」
「なのは、悪いけど……」
なのはは、言い終わる前に意を汲み、実行した。
「よっこいしょっ……！」
なのはは、小さな体で、俺を担ぎ上げる。
「一緒に行こう。……八神の、ところに」
「……ああ」
そして俺たちは……はやての元へ、飛んだ。

◆・◆　◆　◆

第二層を超えて、少し。
呆気無いほどスムーズに……秀人たちは、中心部へと到達した。
「……」
そこは、第二層が昼間に思えるほどに暗い……全ての光を飲み込んでしまいそうなほど、深く、暗い、闇の中。
――その真ん中に、はやてがぽつん、と、うつむいて座り込んでいた。
「はやてっ、」
秀人が、駆け寄ろうとする。だが……
――バシッ!!
無色透明の壁が、その行く手を阻んだ。
「はやてっ！」
ドンッ、とその壁を叩く。はやては、ゆっくりと顔を上げる。
「……お前たちか」
憔悴し……絶望に染まった顔。
「これを、どけろ。一緒に帰るんだ」

「……」
秀人の説得。だがはやては、それに頑く気配を見せない。
「はやて！」
「うるさいっ!!」
「……っ！」
叩きつけるような、否定。
「私はもう、ここを出ない!!」
「何を、馬鹿なことを……!!」
だが、目の前の壁が、秀人たちを通さない。
「……もうね、わかっちゃったんだ」
ぽつぽつと、はやてが語り始めた。
「どんなに頑張ったって……この世界は、何も変わりはしないって……私の居場所なんて、どこにもありはしないんだって!!」
「そんなこと……！」
「じゃあ、見ろよッ!!」
否定しようとする。だが、それに被せるようにして、はやてが叫ぶ。
腕を振ると……周囲に、明かりが点る。周囲が、俄かに明るくなり……
「……!!」
秀人は、言葉を失った。
そこにあったのは……押しつぶされた森林と……滅茶苦茶に破壊された、何らかの残骸であろう大量の金属片と……
――無残に焼かれる、数多の死体。
――はやての足は……その残骸に、押しつぶされていた。
「ここは、……まさか、」
秀人は、その場所に心当たりがあった。
「航空機、墜落事故の……」
「……知ってたんだ？」
そう。ここは……はやてが、全てを失った場所。
「……必死こいて、人殺しに堕ちてまで……闇雲に、がむしゃらに、前に前に、進んできたつもりだった」

ごうっ……と、飛び火した炎が、また別の死体に燃え移る。焼け焦げ炭化した遺体は、時間が巻き戻るように元に戻り、また焼かれる。この空間全てが、そんなことを繰り返していた。
「でも……私は結局、こんなトコに居たまんまだ」
全てが、否定されていた。
「だから……もう、いいんだ。頑張らなくて、前に進まなくて……」
心が、折れてしまったのだから。
秀人は、かける言葉が口に出ず……
「――本当に、それでいいの？」
すっと、なのはが前に出た。
「……八神は……こんなところが、終点でいいの？」
「……」
「こんなところで、膝を抱えてうずくまってて……」
だんまりを決め込むはやて。
なのはは、腰の回天桜花を抜き……
――ガリィッ……!!
目の前の壁を、切りつけた。
「この……大馬鹿!!」
爆発したように、何度も、何度も、壁を切りつける。
「居場所が無い!?　頑張らなくていい!?　前に進まなくていい!?……甘えるのも、大概にしろッ!!」
「うるさい……!!　うるさいうるさいうるさい!!　お前なんかに……お前なんかに、わかってたまるか!!　人に囲まれて、幸せなお前に、何がわかるっ!!」
――その言葉が……なのはの、逆鱗に触れる。
「――お前こそ、何もかも分かったつもりかぁっ!!」
渾身の力で、目の前の壁を切り刻む。秀人も、そのひび割れに、拳を叩きつける。そして……
――バリィイインッ!!
……壁が、破られた。

なのはは、回天桜花を仕舞い……はやてのもとへ、ずんずんと歩いていく。
「……！」
そして、右手を振り上げ……
「……これ！」
……何かを、はやてに示した。
「……？」
それは、一個の携帯電話。黒地に赤いラインの、少々厳ついデザインの……
「……これ、私の」
はやての携帯電話だった。
手に取り、開く。すると……
「……これでも、まだ……帰る場所がない、なんて言うの？」
――何件もの、何件もの……着信履歴。
不在着信があった。メールがあった。留守番電話のメッセージがあった。
「……」
ぴっ、ぴっ……と操作する。
――一件目。
『あ、姉御ッスか!? こちらコージ、定時連絡ッス！ バイト、ちゃんとやってるッスよ！ ……っつか、どーんっていったッス！ なにこれ!? ヤバくね!?』
――二件目。
『あー……八神ちゃん？ あたしあたし。ルミだけど。なんかねー、工場で爆発があったっぽいんだわー。なんか町中危ないっぽいから逃げるけど、八神ちゃんも早く逃げたほうが良さげかもー。じゃねー』
――三件目。
『おっす、八神！ オレオレ、オレだよオレ！ サカキ！ やっべ、なんかチョー揺れた！ 地震!? 八神のほうダイジョブ!? ヤバかったら呼べよ！ オレのマジェでとんでくぜ！』

……町中に配置した、八神の手下たち。
電話帳に記された名前の全てが、電話なり、メールなり、はやてへ連絡していた。
「うそ……あいつらは、ただ、恐怖で私に従ってただけのはず……」
「そいつらは、そうじゃなかったってことだろ」
『はやてちゃん!?　石田です！　無事なら、連絡ちょうだいね！……あと、帰ってきたらちゃんと足の精密検査するからね！』
『八神さん！　担任の富山です！　連絡網が通じなくて、ええっと……あ、はい今行きます長谷川先生！　うん！　無事なら、隣町の公民館で、待ってるからね！』
そして。
『八神？　わたし。八代』
「……!!」
びくっと震える。はやては、八代の想い人……葉山を傷つけた負い目があった。だから、この後には罵声が飛んでくると思っていたのだが……
『いま、健太も一緒に隣町に向かってる。
……言いたいことが山ほどあるんだから、ちゃんと、帰ってきなさいよ。待ってるから。……それじゃ』
「待ってる……？」
信じられない、といった様子だ。
『ああ、はやて!?　アリサよ！　あーもう、やっと繋がったら留守電とか、心配するじゃないの！　すぐ連絡してくること！　いいわね!?』
『はやてちゃん。すずかです。そっちは大丈夫？　もし市外に出るんだったら、月村の家で待ってます。いつでも頼ってくれていいからね』
全てを見て、聞いて……はやては、呆然とした。
帰る場所はある。戻って来い、と。それが、物語っていた。
「でも、私は……何も、できなかった。パパとママを、見殺しにし

ちゃった……許してもらえるわけ、無い」
……燃え盛る事故現場。
これが、はやての深層心理に刻まれた、深い傷。両親を見殺しにして、自分だけが助かってしまったという……罪悪感。
「んなわけねーだろ」
秀人は、それをあっさりと否定した。
「……これ、お前のだろ」
そして懐から、『それ』を取り出した。
「あ……！」
一目で、わかった。
精緻な装飾を施された、美しい銀の剣十字。
「私のだ……パパと、ママがくれた……私の、大事な……たからもの……」
泣きそうな顔で、それに手を伸ばす。
「……だ、だめ。私には、それを持っている権利なんて……」
だが、手を引っ込めてしまう。
「……パパとママの、最後の言葉を聞いてあげられなかった……だから、私には、それを受け取る資格なんて……」
「……資格とか、そんなんじゃない」
それを、はやてに握らせ……その手を、上から包み込む。
「……」
意識を集中する。
――ポウッ……
蒼い光が、灯る。
――かつて、泥騎士に殺害された死者の残留思念を呪い、使役した蒼炎。死者の思念を、呼び起こす……反魂の、蒼炎。
……もう、使い方を違えたりはしない。
「お父さんと、お母さんの言葉……今度こそ、聞いてやれ」
剣十字、それ自体が、輝く。
――梅雨雲のような灰色と……初雪のような純白に。
「魔力光……？」

……はやてが、高い魔力資質を備えているのなら。決して低くない可能性で……はやての両親もまた、魔力を備えていたのだろう。
二つの魔力光は、やがて……二つの、人影を形作った。
「あ、あああ……！」
はやてが、声にならない声を上げる。
その人影は……
「パパ……ママ……!!」
――優しげな笑みを浮かべる、はやての両親の姿だった。
……笑っていた。その最後が、炎に焼かれての、焼死だったというのに。
「ごめんなさい……ごめんなさい……!!」
必死に謝るはやてを、どこか困った風に見つめ……
――はやて。なにもかも、自分のせいにして思いつめるのは、きみの悪い癖だよ
――いっつも、もちっと気楽になってみぃ、言うとるやろ？
「……怒って、ないの……？」
両親は、顔を見合わせ……また、笑った。
――そんなわけ、ないだろう。きみを死なせるなんて、まっぴらごめんだ
――うちは母親やで？　娘の命より大事なものなんて、あるわけないやろ？
そして……二人は、悲しげに、目を伏せた。
――すまない。きみを、ひとりぼっちにしてしまった
――すまんなぁ。あんた、人一倍さびしんぼやのに
と、母親が、後ろを指差す。
はやてが振り返り……その目が、秀人を、なのはを見る。
――ああ、でも……もう、大丈夫だね
――そうみたいやね。もう、さびしくないやろ？
「でも！」
はやてが、声を上げる。
「さびしいよ……！　パパとママが、いないんだもん……!!　一緒に

いてよ……!!」
――すまない。そのわがままは、聞いてあげることができない
――すまんなぁ。ほんまは、何でもしてやりたいんやけど
「いやだ……いやだよ……!」
駄々っ子のように、何度も首を振る。
――大丈夫。離れても……そばにいる
――大丈夫や。一緒にはいられんでも……いつもそばにおるよ
その輪郭が、薄らいでいく。
「……」
はやては、気づいていた。この奇跡のような時間は、もうすぐ終わると。
ならば……どうする。いつまでも、駄々をこねているか？　……そんなことで、両親に胸を張れるのか？
はやては……涙をこらえて、真っ直ぐに、両親の目を見た。
「……わ、かった……我慢、する……!」
両親は、娘の成長を見て、誇らしげだった。
――いい友達が、できたんだね
――ほんま、安心したわ。あんた、人付き合いヘッタクソやもんなぁ
「え、ええっと……」
少し、困ってしまう。
友達と、言ってしまっていいものか、と。だが。
「――いいよ」
なのはが、それをするりと肯定した。はやては驚き……少しはにかむように、笑った。
……二人の輪郭が、更に薄らいでいく。もう、終わるのだ。
「……!!」
顔をゆがめ、手を伸ばす。
両親は……はやての足に、重たく圧し掛かる残骸を……彼女の罪悪感を……軽々と、持ち上げた。
――ああ、そうだ。これだけは、言わないと

――そうそう、これだけは、伝えんと
父親は、はやての頭に手を置き。母親は、その頬を伝う涙を拭う。
その、伝えるべき言葉は……

――――――はやて。誕生日、おめでとう

「――――――!!」
はやては、両親のぬくもりを……最後の最後まで、抱きしめ続けた。
……剣十字が、輝きを失う、その瞬間まで。
◆▪◆　◆　◆
「……立てる?」
なのはが、気遣うように、はやてに手を伸ばす。はやては……
いつもなら跳ね除けるはずのその手を、躊躇いながらも掴む。
「……出るよ」
再三の、呼びかけに……
「……うん、わかった」
ようやく、頷いた。
だが、その表情は、暗く、重い。
「……どうかした?」
「出るよ。出て……ちゃんと、償わないと」
償う。それはつまり、殺人の罪を、受け入れるということだった。
「それは……」
だが、事実として、はやては大勢の人間を殺している。それは、否定しようの無い、事実だった。
日本の……というか、この地球上の法では、魔法による殺傷行為を罰する記述は無い。
おそらくは、管理局によって、裁かれることになるのだろう。
……少なく見積もって、数百の殺人。
極刑は、免れない。
「おい、いるんだろ……テンタトレス」

秀人が、急に声を出した。
『……ここにいるが』
当然のように、現れる。
「ひとつ聞かせろ。はやてが人を殺して、魔力に変えたとき……肉体と魂は、どうなる」
『魂は、動力炉心として、魔力を生み出す機構に組み込まれる。肉体は、守護騎士の素体として、別ストレージで保管する』
「……魂そのものが、魔力になるわけじゃないんだな」
『ああ。それでは、使い捨てになってしまうからな……おい、まさかとは思うが、』
いぶかしがるテンタトレスに、秀人は、言った。
「ああ、そのまさかだ」
『マスター。あれをやるの？』
「……今が、その時だ」
今……そう。闇の書の内部にいて、闇の書に干渉する者が無く、本来の主が、自我を保っていて、そして……魂と肉体が、揃っている時。
これだけの条件をクリアするのは、難易度どころの話ではなかったが……ようやく、実現できる。
――――――はやての罪を、禊ぐことが。
「イモータルハート・モード3『セイヴァー』」
『Ｓｔａｎｄｂｙ　Ｒｅａｄｙ』
モード1は、巨大な手甲。モード2は、長大な砲身。では、モード3は。
「セットアップ」
秀人が、モード3を展開する。
それは、モード1、モード2、それらとは、ベクトルの違う装備だった。
破壊力を持った武装は皆無に等しく……装飾的・記号的な形状の具品が、大半を占める。各部にはジェネレーターが配置され、唯一にして最大の特徴……蒼く輝く、半実体の翼が、背部に展開されてい

た。
両手に、『カーバンクル』を握る秀人。それらを同時に圧縮し、胸部装甲のシリンダーに取り込む。
「お前に、伝えておくように、頼まれた言葉がある」
胸部シリンダーへ蓄積されたエネルギーは、そのまま、背部の光翼へ。
輝きを増す光翼からは、蒼い粒子が、舞い踊る。
「――『銀は、手入れをしなければ、くすんで輝きを失っていく。そこは、永遠に輝き続ける金やプラチナとは違うところだ』」
奈々の……その祖父の、言葉だった。
「――『銀の手入れは、研磨すること。当然、手入れをすればするほど、銀の表面は、細かな傷がつく』」
その言葉を、なのはが継ぐ。
「『だが、人の手で大事に磨かれ続けた銀は、金にも出せない輝きを得ることが出来る』」
傷は、完全には消すことはできない。
だが……それで、いいのだ。
傷ひとつ無い……何も刻まれていない人生など、無いのと同じではないか。
傷も、罪も。……決して、全てが恥では無いのだから。
「「――傷だらけでもいい。傷だらけだからこそ、輝いていられる……そんな生き方を、してみなさい」」
――傷も、罪も……刻んで、抱えて、生きればいいのだ。
「だから、俺が……お前の罪を、許してやる」
臨界に達した光翼から……光が、漏れ出した。
光……超高純度の蒼炎は、静かに、暖かく……凄惨な空間を、焼き尽くす。
無数の死者も。残骸も。全て等しく、蒼く、蒼く、焼け落ちる。
闇に差し込む、救済の光。
『ああ、光だ……』『帰れる……帰れるんだ……!!』
それは……牢獄にとらわれていた人々の魂を、解き放つ。

そして……
「生命結合――」
『Ｃｏｎｎｅｃｔ　ｏｎ』
一人、また一人と……分離されていた肉体に、魂が、生命が、吹き込まれていく。
そして、その度に、沈殿していた呪いが、祓われていった。
幾人も、幾人も。それを、見送るはやては……一人ひとりに、懺悔した。
やがて、ストレージの中から、出て行く魂と肉体が無くなった。
「……」
……これはあくまで、結果論でしかない。
はやての殺人という罪は、過程として、確かに存在する。だがそれは、はやてにとって、確かな救済だった。
無限の呪いは、確かに、浄化されたのだ。
残ったのは……有限の罪。償えるだけの、罪。
『……』
その傍らには、むすっとした顔で佇む、テンタトレス……と、いうか。
「……なんか縮んでね？」
成熟した身体だったはずが、いまや、はやてよりも頭二つほど小さい、愛らしいテンタトレスの姿が。
『……ふん。蓄えていた力を失い、幼体化してしまったわ』
憎まれ口を叩く。だが、そこにはどこか、晴れ晴れしささえ漂っていた。
『秀人君、なのはちゃん！　聞こえる!?』
エイミィからの通信が入ったということは……
『闇の書の反応が極度に弱まって……クロノ君たちも、脱出完了！　それで、今そっちに、リーゼが……』
「……主！」
言い終わらないうちに、リーゼが現れた。そして、そのまま

……

――ぱんっ!!

はやての頬を、思いっきり張った。

「……」

無言のはやて。リーゼは、厳しい顔を、次第に崩していき……

「う、っく、うう……!! あ、主……! ほ、本当に、本当に心配したんですよ……!!」

すがりつくように、泣き出した。

「……悪かった」

はやては、仕方なさそうに、リーゼを撫でる。

これで、万事が解決……いや。

『まだだ。まだ、遺り残したことがある。……そうだろう、汝』

テンタトレスが、前に出た。

「……何を、」

『我を滅ぼせ』

……そう、言った。

「な、っ……!? おい、どういうつもり……!!」

「……。」

秀人が問いただそうとするのを、はやてが手で制した。

『もう、汝を縛る呪いは……ただ一つを残し、消えた』

その、たった一つとは……考えるまでも無い。

『汝を苛んだ、原初の闇……テンタトレス』

そう。闇の書の、攻撃プログラムだ。

『もう、汝が闇に拘泥する理由は無かろう』

テンタトレスは、リーゼを見やる。

『リインフォース、』

と、言いかけて、訂正する。

『……いや。今は、『リーゼ』か』

「ああ、そうだ。……主との、盟約の名だ」

そうか、と短く返答する。

『汝はすでに、闇の書から完全に独立している。我が滅ぼうとも、汝は

残る』
「……テンタトレス、私は、」
『止めよ。我は、我が名を好まぬ』
テンタトレス。それは、忌み名だ。
『千年の縁も、これで終いだ。……思えば、汝にも苦労を掛けた』
「――!! 私はお前に、全ての責を押し付けた!! 闇の書の呪いを、攻撃プログラムのお前だけに……!!」
吐き出すように懺悔するリーゼ。テンタトレスは、悟ったように言う。
『良い。……我が、望んだことだ』
……彼女は、彼女なりに。闇の書の呪いから、同胞を守り続けていたのだ。
そして、再びはやてに向き直り……
『闇を捨てよ。そして、今度こそ、光の中を歩くのだ。
……汝の罪は、我が持ち去ろうぞ』
ロストロギア……闇の書を自らの手で破棄すれば、はやての罪は、軽減されるだろう。
罪は捨てろと。もう、背負う必要は無いのだと。
『……』
背を向け、介錯を待つテンタトレス。
「そんなの、許さない」
はやてがそれを……聞き入れよう筈がない。
『……、何が』
「私、あんたに言わなきゃならないことがある」
はやては、すうっと息を吸い込み……
「――ありがとう」
――頭を下げ、礼を述べた。
『!?』
これには、さすがに驚きを隠せない。
「死にそうになったとき、何度も助けてくれて、ありがとう。……戦う力をくれて、ありがとう」

『……!! ば、馬鹿が！ 我はただ、闇の書の使命を……!!』「それでも」
弁明を、押さえ込む。
「お前が、私にたくさんの贈り物をくれたことは、本当のことだよ」
そして、口調を変えて……
「おまえ、言ったよね？ 私とおまえは、『対等だ』って」
覚醒した際、歯向かうはやてを組み敷き、そう言っていた。
『ああ、言った。だが、それが……』
「おまえは、私の願いを叶えてくれた。だから……今度は私が、お前の願いを叶える番だ。勝手に死ぬなんて、絶対に許さない」
それが……はやての望む、対等な関係だった。
『我の……我の望みは、ここで果てること……』
……まだ、そう主張するテンタトレスに、はやては……『仕方ないなぁ』とでも言えそうな表情で、やさしく告げる。
「私は……罪を捨てたり、誰かに押し付けたりはしない。
闇も捨てない。……どっちも抱えて、一緒に生きていく」
闇を……彼女を、受け入れると。そう、宣言した。
そして。
「あなたの本当の願いは、なに？」
……迷い、戸惑い……
『我は……』
俯き、肩を震わせる。……だが、それもすぐ、嗚咽へと変わった。
『我はもう、呪いの魔導書などと……テンタトレスなどという忌み名で、呼ばれたくない……！ 誰も殺したくない……！ 何者をも、呪いたくは無い……！』
それが……５００年にも渡る、彼女の願い。
ばっと振り向いた、名も無き彼女は……
『なぁ、汝……汝よ、』
涙にぬれた目で、ついに、口にした。
『我を、助けてくれ——!!』

「――うん、わかったよ」
はやては、小さな彼女を、抱きしめる。
「……名前を、あげる」
誓約の名を、贈る。
「もう、誰にも忌み名で呼ばせない。闇の書は……『テンタトレス』は、ここで滅ぶんだ」
『テンタトレス』を滅ぼすという願いを、聞き入れる。そして……
「私の運命……星を守護する、御遣いの名。『罪なき者』の、聖なる名――」
その名は――――
「――――アーフィエル」

それが……彼女の、新たな名。
「アーフィエル……アーフィエル……そうか……我の名は、アーフィエルか……」
確かめるように、何度も、その名を呟く。
心なしか、その声さえも、確かなものとして変化していた。
「――我が名は、アーフィエル。確かに、承認した。……わが主よ」
……晴れやかに、笑った。
――――キュイインッ……!!
……と、はやての手の中に、一冊の魔導書が出現する。
「それは……」
その本を見て、首をかしげるリーゼ。見た目は、闇の書と酷似しているが……紫がかった色彩と……何より、感じる魔力が、桁違いだ。
「我に施された改悪はリセットされ……この魔導書もまた、真の姿を取り戻した。」
「真の姿……？」
どうやらリーゼは、知らないようだ。より深くシステムに食い込んでいたアーフィエルだからこそ、知りえた情報。

「これはな……闇の書と呼ばれる前は、夜天の書と呼ばれていた。
……だが、さらにその前。……夜天の書を生み出す雛形……原書として用いられたのが、これだ」
そのままでは強力……というより、特異すぎ、汎用性が極めて劣悪なため、徹底的にデチューンを施されたのが、夜天の書。
「名を……至天の書という」
夜天を越え、天へと至るための秘宝である。
「……さぁ汝よ。……その手に、魔法を」
促され、その表紙を開く。秀人たちには……何も書いていないように見える頁。だが。
「『我、天へと至る王なり――』」
ざああっ……と、白紙の頁が一気に記述される。
「……至天の書は、『蒐集』する夜天の書とは、大きく違う点がある。それは……自らの意思で、頁を記述することができる」
それは、つまり……
「望む効果の魔法を、任意に創造することができるのだ」
……なのは、フェイト。突出した実力を持ち、感覚で魔法を組むことができる天才型。だが、その魔法は、結局のところ、既存の公式またはその応用でしかない。
この至天の書は、その公式をも、自在に生み出し、操ることができるのだという。
それはもはや、『奇跡』の領域だ。
「――『魔導創造』。いまだかつて成し得たものの居ない、神代の業だ」
アーフィエルは、目を細め……誇るべき主の勇姿を、刻み込んだ。
「『誓いの元、旧き呪縛を解き放ち、新たな道を切り開け――』!!」
至天の書は、まばゆい光を放ち……そして。
「『今再び、我が元へ馳せ参じよ！　来たれ――七星騎士《ドゥーベルリッター》』!!」
――――キュドンッ!!
……立ち上った七本の光の柱は、闇の空を突き抜け……天まで高

く、立ち上った。
◆▪◆　◆　◆
――キュドンッ!!
轟音とともに、魔獣の体を突き破り、七本の光の柱が、立ち上った。
――紫。青。緑。赤。紅。水。白。
ひとつとして同じ色の無い、七色の柱だ。その根元……光の帳の奥に、傅く人影が、見えた。
うち、一つ。赤い柱の根元にだけは、人影は無い。
「え!? こ、これは……!!?」
撤退のさなか……ヴィータの身に、異変。
体が明滅し、行動に支障が出始める。クロノがマリエルに解析を求めるも、それはヴィータの耳には届かず……
――ヴィータは瞬時に、柱の根元に転送された。

◆▪◆　◆　◆
光の柱が、闇の空を突き破り……本来の空が、見えた。
あそこを抜ければ、魔獣の体内から脱出ができる。
ふと、考えてしまった。
この内部は、過去の映像を、克明に映し出す。そして、あまりに精巧な幻想は、現実世界を侵食し、影響を及ぼすこともある。
だから、考えてしまった。
――この中のどこかに、両親が、生きているんじゃないのか……と。
はやてと共に、浮上する最中……背後を、
――振り返ったな
「!?」
気づいた時には、遅かった。

「……!!　、ぐ!!」
不可視の……だが、確かにそこにある闇が、秀人の体内へ、音も無く、抵抗も無く、ずるりと……潜り込んだ。
「……!!!」
それは、何故か蒼炎の効果を受けず……いや、むしろ。それと一体化するかのように、定着した。
取り返しの付かない事態に、だが、秀人は。
「……」
何故か……無言で、放置した。
秀人の身に起こった異変は、不幸なことに、アイですら気付くことができなかった。

◆・◆　◆　◆

――魔獣の体内から、ついに脱出を成功させたはやて。
七柱を従え、中央に佇むその傍らには……本来の姿を顕現させたリーゼ……リインフォースと、アーフィエル。
「……あ、」
秀人の手の中から、……コードが、するりと抜けていった。それは……あのリーゼ姉妹の遺した、ユニゾンデバイスのシステム。
「使わせて、もらうね」
コードは、至天の書の中へ、吸い込まれていった。
「……行こう、リーゼ。アーフィエル」
その声を受け、リーゼとアーフィエルが、輝く光と、漆黒の闇に、姿を変える。
「これは……融合騎の……？」
「……そうか。これが、汝の答えか」
そして……三人同時に、トリガーボイスを、謳い上げた。
「「「「――――ユニゾン・イン」」」」

光のリインフォースと、闇のアーフィエル。本来ならば、反発しあうだけの二つは……至天の王のもと、合一する。
騎士甲冑が、着装される。
右手に、アーフィエルが変じた魔剣を。左手に、リーゼの変じた聖盾を。頭髪は、眩き白銀。背には、七色に変遷する、六枚の翼。
はやて。アーフィエル。リインフォース。まさに、三位一体。
『光も闇も、どちらも抱いて、一緒に歩いていく』……その、具現の姿だった。
――バシュンッ!!
同時……七色の柱もまた、掻き消え……7人の騎士たちが、その姿を現した。
その中には、ヴィータの姿もあり……秀人に、不敵な笑みを見せる。
「――我ら、至天の盟約のもと、集いし騎士なり」
口上の始めを切るのは、魔剣を二振り、腰に佩いた美丈夫。……烈火の騎士シグナム。
「――主ある限り、我らの円環、途切れること無し」
指輪を填め、杖を携えた優男。……湖の騎士シャマル。
「――この身に命ある限り、我が身は御身と共にあり」
細身の手甲を着けた、ポニーテイルと尻尾が目立つ少女。……盾の騎士ザフィーラ。
「我らが主……至天の王、八神はやての名の下に」
そして、……鉄槌の騎士ヴィータ。
「「「「「呪怨の因果を、断ち切らん！」」」」」
そして、残る三柱は。
「ぜー、はー、……くそっ！　そーいえば、まだ外にこいつらがいたんだった!!」
グレアムの作り出した、命無き騎士団に囲まれるフェイト達。
『フェイト、ママ、後ろ！』

「くっ――！」
疲労も、ほぼピークに達し、動きを鈍らせる。あわや、その一撃がフェイトとプレシアを捕らえようとした、その時――！
「――光、翼、斬！」
――ズバババババババッ!!
……飛来した魔力刃が、雑魚騎士を薙ぎ払った。
その発射地点から、瞬時に高速で移動してくる者が居た。
「さんきゅー！　だれか知らないけどたすかっ……うええええええええええええええええええええっ!?」
『……ど、どういうこと……？　……はっ!?　ママ、隠し子!?』
「ちっ、違うわよ!?」
三人が、慌てふためく。
「……初めまして、母さん、姉さん達。わたしは『襲撃者』、刃の騎士……レヴィと、呼んでください」
礼儀正しくお辞儀をするその少女は……フェイトやアリシアと……瓜二つの容貌を、持っていたのだ。

雑魚騎士の一団を縛り上げ、纏めてねじ切るユーノ。
クロノも必死で凍結させ、打ち抜き、縛り上げるが……何せ、数が多い。
敵もまた、それをも上回る数で、押し切ろうとして……
「――あかんなぁ、二人とも。『広域殲滅』っちゅーもんを、まったくわかってへん」
――漆黒の翼が、舞い降りる。
頭髪は白金。装束は紫紺と黒。翡翠色の瞳が、爛々と輝く彼女は……
「うちが、お姉ぇに代わって、教えたるわ」
キューブ状の魔力スフィアを四つ、出現させる。そして……
「吹き荒べ、氷結の息吹――アーテム・デス・アイセス!!」
瞬時に、解放!!
――ゴキィイイイイイイイインッ……!!!!

……全方位。放射状に解放された凍結の魔力は、押し寄せた一個大隊ほどもいた雑魚騎士たちを、絶対零度の凍土の中に、封じ込めた。
「――な？　氷結属性の魔法は、こう使うんやで……っと！」
パチンッ！　と指を鳴らす。氷漬けにされていた雑魚騎士たちは、さらさらと……雪のように、細かく粉砕された。
「兄さん、ブキッチョやなぁ。せっかく、そないなエエもん持っとるんやから、活用せんと。それに、そっちの結界魔導師の兄さん……兄さんは少し、思い切りが足りんよ。相手は、ただのお人形や。もっと遠慮せんと、情け容赦も捨ててブチかまさんと」
ひょい、と自分の十字槍を担ぐ。
眼下……市街地へ進攻する、雲霞のような、雑魚騎士たちを見下ろし……
「この『闇統べる者』、闇の騎士・ディアーチェさんが、お手本見せたるやさかい……よう見ときぃや!!」
――ズゴゴゴゴゴッ……!!
天が……揺れるように、鳴動する！
「万象一切、打ち貫き……降り注げ、白銀の風!!　――フレースヴェルグッ!!」

――……ズドォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!

雨のように無数に降り注ぎ、かつ、一撃一撃が、とんでもない威力の。
……クロノのスティンガースナイプを、全てなのはのディバインバスターに置き換えたような、デタラメ威力の魔法。
それは、群れていた雑魚騎士たちを押しつぶし、射抜き、砕き……周囲の建造物を、根こそぎ消し飛ばした。

そして……残るは、一柱。
「さぁ、我が王――参りましょう」
平坦な……しかし、万感の思いが込められた、声。
「『殲滅者』、星光の騎士・シュテル――――誓約を、果たしに参りました」
「ああ。……お前を、ずっと待っていた」

――――七つの星。至天の王。時空管理局。

――――今ここに……全ての因果を清算すべく、集結する。

# A’s編　第九十五話

「王。戦況は把握しておいででしょうか？」
シュテルが、はやてに奉る。
「敵、残存戦力４２６０騎」
……その途方もない数を、さらりと述べる。
「魔力ランクで換算すれば、ＡからＡＡ……ＡＡＡに達するレベルの反応も、５００を下りません」
「……」
これまでの雑魚騎士たちは、本当にただの様子見の斥候……使い捨ての兵力だったのだ。
まだこの後には、本隊……ＡＡからＡＡＡの、精鋭部隊が待ち受けている。
それを統率するグレアムこそ、もはやいないが……おそらくは、事前に戦闘行動をプログラミングされているため、機能不全を起こすことはないだろう。
「こちらは、後方支援を含めれば、多少は前後しますが……およそ３００です」
聞くだけで、絶望しそうになる物量差だ。
「そうか……」
ふと、瞼を開けたはやては、傅くシュテルを見やり……
「問題ない数だな」
……と、言い放った。
「我らが、至天の王。御身が采配を振られるのであれば、いかなる敵をも、処断してご覧に入れます」
未だ傍にあった烈火の騎士が口を開く。
「われに、命を」
獣の尾を風になびかせ、手甲をガチン、と鳴らす盾の騎士。
「さて……どこまで参りましょうか？」
前髪をかき上げる、湖の騎士。

「どんな敵だろうと、ぶっ潰して、ぶっ壊す!!」
威勢よくアイゼンを一振りする、鉄槌の騎士……ヴィータ。
「……ああ、あんただったのか」
そして、久方ぶりの再開となる、はやてとヴィータ。
「おう。久しぶり」
へへ、と嬉しそうに笑う。
「……心配かけんじゃねーよ。ったく……」
はやては、ぽんぽん、とその頭を軽く撫で……表情を引き締める。
――バララララッ……!!
浮かんでいた至天の書が、術式を記述し、頁を進める。
「まずは、雑魚騎士の数を減らす。残存を１０００以下に」
座標特定の手間さえも省いた、目視での転送術式。
「全部は潰すな。適度に残せ。……だろ？　アーフィエル」
『うむ。ある程度は残しておかんと、逆に面倒だ』
敵の……闇の書の『奥の手』を知るアーフィエル。彼女が言うのであれば、信用に足る。
「本当は、私が暴れたいところなんだけど……お前たちにとっては、５００年ぶりの晴れ舞台だ。譲ってやる」
喜色さえ見える、至天の王の勅令。
「全軍……出撃!!」

「「「「「　御意!!　」」」」」

騎士たちは……戦場へ。
◆▪◆　◆　◆
――ザンッ!!
「あーもう、切っても斬っても湧いてくる……!!」
雑魚騎士の首を切り落としながら、カレン。
すでに、刀は三本目。血糊が付着し、甲冑を切り捨てることで刃こぼれをした刀は捨てながらの戦闘だった。
「いい加減、ワンパターンすぎて飽きるっつーの!!」

――シュカカカカンッ!!
紙束の刃を乱舞させ、雑魚騎士を切り刻む。
「やべっ、切れた!?」
見れば、ブックホルダーに仕込んできた本も、底を着いていた。
――ドガガガガガッ……!!
「あーっはっはっは！　やっばー！　そろそろ弾切れかもー!!」
張り付いたような笑顔に、焦燥の汗を浮かべるラーファ。
――ダラララララッ……!!
「うえええええんっ！　やばいよ、やばいよー!?　どーしよー!?」
いつにも増して、悲哀の漂う泣き顔を晒すクライア。
――ドガガガガ……がちんっ。
――ダララララ……かきんっ。
「「　あ　」」
顔を見合わせ、硬直する。
「……ねぇクライア？」
「……うん、なぁにラーファ？」
「……弾、分けて？」
「……ごめん、今ので最後」
だよねー、と、双子らしくハモる。
『グオオオオオオオオオオッ!!』
これ勝機と、むさくるしい巨体の雑魚騎士たちが殺到した！
「「　いーーーーーやーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!　」」
用済みとなった重火器を放り投げ、スタコラサッサと退却する。
「あーっはっはっは！　アーデ！　次の武器！　次の弾ー！」「うえええええええんっ！　早く、早く出してェェェェェェェェェェェェっ!!」
補給係も兼ねているらしきアーデルハイドの元まで、急いで駆け寄る。だが、アーデルハイドは……
「ひぃ～ん……もう無理、もう無理ぃ……！　第二弾薬庫が空っぽになるまで転送魔法を使ったのよぉ……お願い休ませてェ……!!」
ぐでーっと地面にへばりつき、グロッキー。どうやら、双子の相当な無茶な要求にこたえ続けていた弊害らしい。

「ぬゥうううううううんっ!!」
――バッゴォオオオオオオオンッ!!
鉄塊をフルスイングし、雑魚騎士を薙ぎ払うオウル。
錬鉄召喚で、広範囲を殲滅することも十分に可能なはずだが……それができない理由があった。
「うっぷ……!」
視界が、揺れるのだ。
以前、戦闘に奥の手……『鬼人化』を行った際、副作用として、右目の視力を喪失している。日常生活ならば、まだそれほどの不便はないが……いざ戦闘ともなると、激しく駆けずり回り、隈なく視線を配るため、急激に視界が揺れ……要は、『酔って』しまうのだ。
この状態で錬鉄召喚を行えば、下手をすれば味方を巻き込んで盛大に自爆する危険があった。
……さすがに、そんなギャグのような末路はゴメンだ。
「くそっ。生体義眼でも仕込むべきだったな……」
毒づきながらも、鉄塊を振り回し、雑魚騎士たちを殴殺していく。
「!! オウル姉さん!」
カレンが、鋭くオウルを呼んだ。
振り返るまでも無く、敵が迫っているのだろう。それも、よりにもよって、視界の死角となっている、右側から……!
「……!!」
鉄塊を振る。だが、相手は隠密性に長けた一騎らしく……その攻撃を、するりとやり過ごした。視界が万全なら、ここで返しの一撃を叩き込むところだが……それは、適わなかった。
ヒュン……と、音も軽く振るわれる、何か。
(死んだかもしれん)
あっけなく、そう悟るオウル。
――キュドォオオオンッ!!!
……だが、その予想は覆る。
『ギ、ガ、ガガ……!!』
突如として降り注いだ、一条の閃光。そして、着地の衝撃で立ち込

める土煙の中、細身の雑魚騎士の姿と……
「――――久しいな、凶鳥ども」
二振りの魔剣でそれを刺し貫く、長身の美丈夫。
「ん……？　誰だ？」
ひょい、と彼を指差したまま、手近なところに居たカレンを振り返る。
カレンも、最初はオウルと同じようにいぶかしんでいたが……はっと気が付き、ずざざざっ、と、距離をとった。
「……あー!!　姉さん、こいつ、アイツだよ、アイツ!!　ほらアレ！」
カレンは、身振り手振り、何とも形容しがたい表現をする。
「んっ！　んっ!!」
「……？　？　……おお、わかったわかった」
しげしげとそれを眺めていたオウルは……ぽん、と、得心いったように、手を打った。
「『シグナム』……だったな、確か」
そう。かつて、凶鳥部隊に差し向けられた刺客……守護騎士『烈火』。その、彼だった。
「無茶をする女だ。右目の視界が死んで、まだ間もないだろうに。……だから、こんな芥粒に不意を突かれる」
――ゴォウッ!!
「あ、あんたねぇ！　誰のせいで、そうなったと……!!」
「うむ。オレのせいだな」
怒るカレンに、シグナムは淡々と述べる。
『グギャアアアアッ……!!』
「だから」
刺し貫かれた雑魚騎士。その剣から、魔力の業火が噴出し、雑魚騎士の肉体を焼き尽くす。
「――オレが、お前の右目になろう」
そう宣言し、灰となった敵を吹き散らした。
「烈火の騎士・シグナムと」
――ガキュンッ!!

……聞き慣れた音を立て、魔剣がカートリッジを排出する。
「王より賜りし、我が魂――焔の魔剣レヴァンティンが！」
――ギュララララッ……!!
蛇腹に変形した、二振りの魔剣が、炎を纏い……一つの形を成していく。
「悪しき影どもを、灰燼へと帰さんッ!!」
その形は……！
「飛竜一閃!!」
――――炎の、龍！
『ガ、ガガガ……ッ!!　……!!　……』
敵の部隊長格……おそらくは、ＡＡＡ級の個体を、周辺ごと焼き払った。
「カレン」
……と、シグナムが、無造作にカレンに何かを投げ渡した。
「うわっ、とと……え、これって」
空中でキャッチしたそれを、まじまじと見る。
「あんたの剣!?」
それは、二振りのうちの片方……焔の魔剣だった。
「もう得物が無いのだろう？」
カレンは、魔剣をぶんぶんと振り、手に馴染ませ……
「……せやっ!!」
――バシュンッ!!
斬撃の射線上に魔力を噴出させ、数体の首を刈り取った。
「うんっ！　気に入ったよコレ！　さんきゅー！」
喜色を浮かべ、敵陣へ再び突撃していく。
「……貸してやるだけだ」
「あっはっは！　聞こえないもーん!!」
……今更だった。
「戦えるか、オウル」
「へーきへーき……と、言いたいところだが、どうにも調子が悪い。手を貸せ」

「よかろう」
――ガキンッ！
オウルが掲げた鉄塊に、シグナムがレヴァンティンを打ち合わせた。

「あ、あはは……どーしよ……まだ、しにたくないなぁ……」
完全に包囲され、追い詰められたラーファ達。
「ぐすっ……しぬのはやだよぉ……」
アーデルハイドを背中にかばいながら、何とか活路を見出そうとするクライア。
幼く見えても、数多の修羅場を潜り抜けてきた二人だ。それこそ、時間さえあれば、案も浮かんだだろうが……今は、その時間さえ足りなかった。
『ガアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』
包囲が、攻撃に転じた。ぎりっ、と身を固める二人。
だが……
「……あれ？」
『ア、ア、ア……!!』
攻撃しようとした格好のまま、雑魚騎士たちが立ち止まっていた。
動こうとしているのだが……戒められたままだ。
目を凝らすと、その正体が見えてきた。
「……糸？」
それは、バインドともまた違う、極細の魔力の糸だった。
『ギ、ギ、……!!』
「無駄ですよ。わたくし、湖の騎士シャマルと……我が伴侶クラールヴィントの戒めは、あなた方では逃れられません」
しかも、ただ縛っているだけではない。雑魚騎士の甲冑を貫通し、複雑に絡み合い、力任せの膂力を分散し、実際の強度以上の結束力を発揮しているのだ。
「さて。……逃げられないことは、理解できましたね？」

くいっ、と、指を軽く、糸の上に這わせる。
「では、さようなら」
――ブシュッ。
……雑魚騎士たちの首が、滑らかな切断面をさらし、滑り落ちた。
その体は魔力へ還元され、クラールヴィントの糸を通じ、先端の小さな振り子のような宝石に吸収される。
「さて、お嬢さん方。お怪我はございませんか？」
なんでもなかったかのように、双子と、アーデルハイドを見やる。
「お二方は、弾薬切れ。そちらの麗しい淑女は、魔力切れによる意識混濁ですね」
きゅいんっ……と、振り子の宝石が蛇のように動き、アーデルハイドの体に吸い込まれる。肉体に、まるで液体のように沈みこむ様は、湖の騎士の愛機に相応しい様相だった。
「癒しの雫よ。彼の者に、今再びの活力を」
そして、先端に蓄積された、先ほどの魔力が開放され、空になったアーデルハイドのリンカーコアを、回復させた。
「……んぁ、もう朝かしらぁ……？」
そんな、暢気なことを言いながら、アーデルハイドが目を覚ました。
「アーデ！　武器！　でっかいやつ！」「つよいやつ！」
左右の袖をぐいぐい引っ張りながら、双子がせがむ。
「それと弾薬たっくさん!!」
「ああもう、わかったわかったわかりましたからちょっと待って頂戴……ええと、第三弾から第十くらいまでなら、引っ張ってこられそうね……一分くらい待てるかしら？」
「そんな時間無いーーーーー!!」
「ほら、ほら！　台所にいるアレみたいな黒光りしてる人がわっさわさ……!!」
……だが、双子があわてるほど、周囲の雑魚騎士たちは襲い掛かっては来ない。これほどの隙を前にして。それは……
「心配はご無用ですよ」
――キリ、キリキリキリ……!!

『……!!』
硬く張った弦が擦れる音。
雑魚騎士たちは、クラールヴィントから伸ばされた魔力の糸に貫かれ、空中に縫いとめられていた。
「動きたければ、どうぞ？　……体内の臓器がどうなろうと、わたくしの知ったことではありませんので」
飄々とした口調で……雑魚騎士たちを、嬲る。
いくら、ベースとなった生命の無い雑魚騎士たちとはいえ……行動を停止してしまうのも、仕方の無い状況だ。
――キリキリキリッ……!!
『……!!　グ、ググ!!』
動いてはいない。だが、確実に増した苦痛に、どこか抗議めいた声を発する雑魚騎士。
「ああ、失礼。言い忘れていましたが……動かなくても、あなた方はサイコロステーキになって頂きますので、あしからず」
『……!　フゥー……!!』
呼吸が困難になってきたのか、か細い呼気を吐くのみとなった。
「ふむ。外道と罵りますか？　それは少々、心外ですね。わたくしは、至天の王・八神はやてに忠誠を誓った、誉ある守護騎士」
ちっちっ、と指を振りながら、講釈する。
「わたくしたちは、我が主より、ヒトと同じく、『正』『邪』一体の自我を賜りました。シグナム、ヴィータなどは、『正』の典型ですね。ですがわたくしは……その反対でして」
優男然とした面貌が……にたりと、邪悪に歪んだ。
「――わたくしは少々、残酷なのですよ」
そして、雑魚騎士たちが、冷酷に切り刻まれようとしたその時。
――……バゴォンッ!!
……横合いから発射された火器が、拘束ごと、雑魚騎士を一瞬のうちに灰へと帰した。
「……おや？」
ぷらん、と、対象を失い垂れた糸を、きょとんと見やる。

「……あはは！　ごめんね！　気に入らないから、消し飛ばしちゃった！」
榴弾砲に次弾を装填しながら、ラーファ。
「ぐすっ、ぐすっ……ばいばぁい……」
ガランッ……と、使い捨てのミサイル発射装置を打ち捨てるクライア。
「……美しくないわねぇ、あなた」
アーデルハイドにしては珍しく、嫌悪した表情を見せていた。
理解が及ばないシャマルに、三人が言う。
「殺すのは良いよ。楽しいもん」
「殺すのは大丈夫。食事と同じ」
何も、殺したことを諌めているわけではなさそうだ。では、なぜ……
その答えは、アーデルハイドが示した。
「一殺すために苦しめるのと、一苦しめるために殺すのは、違うのよ」
……正直、何がどう違うのかは常人の感性では理解できないが。
どうやら、シャマルのやり方は、狂人の信条に反するものだったらしい。
さて、助けてやったというのに、やり方を否定されたシャマルはというと……
「……素晴らしい」
……と、ぼそっと呟いた。
「……は？」
「確固たる信念を持った女性は、それだけで輝きを増すのです……実に、わたくし好みの女性だ」
ぽかん、と呆けるアーデルハイド。その手を、シャマルがぬるっと両手で包んだ。
「わたくしとしたことが、心奪われてしまったようです。ぜひ、このまま連れ去り、今宵の褥を共にしたく……」
……正直こいつにだけは、自我を与えない方が良かったか

もしれない。
ぞわぁ、と鳥肌を立てたアーデルハイドが、シャマルの手を振り払う。
「おや、つれないお方だ。　……だが、それがいい！」
「や、やめて……来ないで……いやぁ……!!」
彼女にしては珍しく、恐れおののき、へっぴり腰で双子の影に隠れた。
『オ、オオオオォ!!』
シャマルの背後から、雑魚騎士が隙を突いた（つもりで）襲い掛かってきた。
「ああもう、野暮な輩は馬に蹴られてしまいなさい。わたくしは今、彼女との逢瀬を　ぐぇぇぇぇぇ!?」
と、シャマルが素っ頓狂な声を上げた。
見れば、その指に填められた指輪から赤い糸が伸び、シャマルの首をギチギチと締め上げていた。
『……浮気者』
「あが、あががが……！　く、クラールヴィント!?　冗談、冗談です！　わたくしには貴女だけです　んががが……！」
ばたばたと一人漫才を繰り広げるシャマル。
冗談抜きに、雑魚騎士が迫ってきているのだが……
正直、見捨てたかったが……一応、恩人ということもあるため、無碍にすることもできない。そこで、双子は……
「……」
無言で、新たに取り出した兵器を装着する。
円筒状のボンベを背負い……ノズルのような先端が付いたホースを、握る。
放水銃……であれば、どれだけよかったことか。
「！」
アーデルハイドは、ビシッ！　と無言で指し示す。双子は、方やにやりと、方やくしゃっと、頷き合い……
「「　汚物は消毒だー!!　」」

――――ボゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

……火炎放射器から、猛烈な火炎を吐き出した。

「のわぁーーーーっ!?」『ギャアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

炎に呑まれ、ばたばたと逃げ回るシャマル。

「逃がしたら駄目よ！　ちゃんと止めを刺しなさい!!」

「おっけー！」「らじゃー！」

「こ、こら！　悪ふざけにしても度が過ぎています！　お尻をペンペンしますよ!?」

「「ヒャッハーーー！」」

ラーファ、クライア……二人は重火器を手に、雑魚騎士を盾に逃げ回るシャマルを追走し……行く先々で、雑魚騎士たちを蹂躙し続けた。

「……」

各地で雑魚騎士に応戦していた、アースラの武装局員たち。彼らは、数に押し切られないよう、いくつかのチームに別れていた。

だが、徐々に疲弊し始めたことと、思った以上に数を増していた雑魚騎士に進軍を阻まれ、立ち往生しかけていたところだった。

そんな中、彼女は無言で戦陣の中に現れ、ぼーっと佇んでいた。

「……なんだアンタ。新手か？」

警戒する局員にすっと目を向け、見やる。

「……」

ぴんと立った耳。フサフサと揺れる尻尾。細身の体に反して、妙にゴツい手甲。……アルフの装いに似通っている。

「……」

何かを思案しているのか、いまだ一言も話さない。

「おい、いつまで黙ってるつもりだ!?」

痺れを切らした局員が、少々強い口調で問い詰める。

ついっとその局員へ視線を戻した彼女は、ぽつりと一言。

「ミッドの兵はよく吠える」

……綺麗なソプラノで、毒を吐いた。
「あ、が……なっ……」
予想外の反応に、言葉を失う局員。
「おい前を見ろ、前を!!　来てるぞ！」
そしてこちらも、少し遅れて到着したヴィータが彼女に告げる。
仲間の呼びかけに、局員が反応するより早く。
「――鋼の頸木」
――ズガゴゴゴゴゴゴゴゴッッ!!!
雑魚騎士の一団を、魔力のスパイクが纏めて串刺しにする。その数だけで言えば、クロノを少々下回る。だが……
――メリッ、メリメリメリッ……!!
魔力のスパイクが枝分かれし、変形し…敵の砲撃を、片っ端から弾く。さらに変形……と、絶え間なく、攻防に渡って展開していき……スパイクが消えたそこには、雑魚騎士たちが退いたことで、確かな活路が見出せていた。
「……盾の騎士・ザフィーラが、道を開く。続け」
そして、返事を待たずに、先陣を切っていってしまった。
「ああ、悪い悪い。あいつ、必要以上には喋んねーんだわ」
局員に、片手を上げて詫びる仕草をするヴィータ。
「よっし、んじゃ……いったん退却！　安心しろ、いざとなったらアタシが守ってやる！」
「「「

付かっています。よろしいでしょうか？」
　礼儀正しく、丁寧に、実直に。
「あ、あのさー……ちょっと、いいかな？」
　フェイトが、おずおずとレヴィに話しかけた。
「何でしょう？」
「あの……キミは、その……なんか、ボクにそっくりなんだけど……」
　レヴィが、フェイトの言わんとしていることを理解した。
「わたしは守護騎士ですが、姉さん……フェイト・テスタロッサのデータを元に、構成されています。広義で言えば……その、あつかましく無ければ、ですが……」
　もじもじと、躊躇いがちに……
「わたしは、あなたの妹です」
　その言葉を聴いたフェイトは、アリシアを、プレシアを、アルフを見て……三人が頷くのを見て。
「……い」
　ぐっと俯き。
「いやったぁーーー!!　ボクもお姉ちゃんだぁあああああああ!!」
　がばっ、と、レヴィに力いっぱい抱きついた。
「え、ええと、あの、あの……」
　レヴィは、照れていいやら、戸惑っていいやら……だが、決して嫌そうでない表情で、フェイトを抱き返した。
「フェイト、そろそろ動かないとまずいって……えーっと、レヴィ？で、いいんだよね？」
　それとなくフェイトを引き離しながら、アルフが聞いた。
「はい。そう呼んでください、アルフ」
「あたしたちは、八神の元に集合すればいい、って言ってたけど……残りの雑魚騎士たちは、どうするんだい？　まさか、ほったらかしには出来ないだろう？」
　雑魚騎士たちがそのまま進軍してしまったら、結界に覆われていない戦場が、肥大してしまうのではないか。
「ああ、そのことでしたら、問題ありません」

ちらっ……と、レヴィが見やった先を、アルフたちも見る。
雲霞の如く、市街地へ群れ集まる雑魚騎士たち。
彼らの一角が、唐突に……
――ベゴッ……!!
……潰れて、消えた。
――ベゴッ、ベゴッ、ベゴッ!!
モグラ叩きのように……潰れて、潰れて……無残な残骸となった雑魚騎士たちが、維持できなくなり消滅する。
「……ちょっとだけ、やりすぎてしまうこともありますが……
――彼女に、数の暴力は意味を成しませんので」

◆・◆　◆　◆

「あーーーっはっはっはっは！　トールハンマー！　トールハンマー！　もういっちょオマケにトールハンマー!!」
童女のようにころころと笑いながら、広域殲滅魔法『トールハンマー』……重力の槌を地表へ連打し、文字通り雑魚騎士たちを叩き潰していくのは、闇の騎士……ディアーチェ。
「やめ……か！　強装結界が張られて……　いい加……にしろ！」
爆砕音にかき消され、クロノの制止の声も届かない。いや、届いたところで、止めるかどうか……
「な!?　広域殲滅って、めっちゃオモロいやろ!?」
攻撃を止め……手柄を誇るように、クロノとユーノを振り返る。
クロノは、頭痛をこらえるように、頭を抑え……
「……狙いも滅茶苦茶。魔力の配分もデタラメ。周囲への影響も、巻き添えへの配慮も無し……！　なぜきみは、こんな馬鹿みたいな戦い方を……！」
「楽しいからや！」
何のためらいも無く言い切った。
クロノも、流石に口を噤むしかない。
「みみっちい力で得意げになってる有象無象を、圧倒的な力でねじ伏

せ、蹴散らし、踏み躙る！　こんなオモロいこと、他に無いわー！
そーれ！」
――ドゴォンッ!!
……消滅寸前だった雑魚騎士たちに、ダメ押しの一撃。
「そのわりには、随分と怒っているようだけど……」
「は……？」
ユーノの指摘に、クロノはきょとん、と意味がわからないという風に呆けた。
「怒っている……？」
だが、確かに……ただ楽しみのため、というには、やり方が徹底しすぎている。それこそ……憎しみを、ぶつけているように。
「……っは！」
図星だったようで……ディアーチェは、その碧眼に、ありありと激怒の情を浮かべた。
「お姉ぇを、うちら守護騎士を、散々いいように使ってくれやがったド腐れの目論見も、これで全部パァや！　ざまぁ見さらせ！」
――ズガァンッ!!
巨大な魔力刃が地表を切り裂き、爆裂の余波が、地区に残っていた雑魚騎士たちを残らず殲滅した。
「残せって言われとるけど……我慢できへんわ！　殲滅や、殲滅！　残らず消えてしまえばええんや！」
……魔力をバカ喰いする魔法を連発し、それでもなお、激情のままに魔法を振るおうとするディアーチェ。
「――！　いい加減にしろ、この、」
ディアーチェに真デュランダルを向けるクロノ。だが、それを制するものが居た。
「――いい加減にしたらどうですか、ディアーチェ」
ふわっ、と浮揚してきた彼女を見て、またクロノとユーノが息を呑む。
「……なのは？　じゃ、ないよね……？」
「ああ。恐らく、このディアーチェとかいう阿呆と同じ原理だろう」

さらっと阿呆呼ばわりである。
「ひぇえ、しゅ、シュテルん!?　ちゃう、ちゃうんよ、これは!?」
なのはと、瓜二つの彼女……星光の騎士・シュテル。
「何が違うというのですか。王はご立腹です」
「でもな、でもな……あいつら、お姉ぇにひどいことした奴の下っ端やの……」
彼女を目にしたディアーチェは、悪戯がバレた子供のように、あわあわと言い訳をした。
だが、それに騙されるようなシュテルでは無く、お説教が始まってしまった。
「必要ならば、敵の広域殲滅も有用でしょうが……明らかにやりすぎ、無駄遣いしすぎです。王の勅命をどう心得ているのですか」
「あの」「でも」「それは」……ぼそぼそと反論していたディアーチェ。だが、理詰めで退路を一つ、また一つと断たれ……ディアーチェは。
「うち、あんたと違うて『理』のステータス低いんやもん……その分『力』にステ全振りしとるんやもん……しゃーないやん……そんなキツく言わんでもえぇやん……」
……半べそをかいて、いじけてしまった。背なの翼も、デレーンと萎れている。
その肩を、シュテルが優しくたたいた。
「ですが、大丈夫です。ディアーチェ。貴女は、やればできる子です」
「え……ほんまに?　うち、やればできる子なん?」
ぱぁっ、と、機嫌が上を向く。
「ええ。なにせ、守護騎士で唯一、『王』のマテリアルを持った、私の上官ですから」
「じょう、かん……!?」
……上官。その響きが、ディアーチェ的にはストライクだったらしい。
「ＪＯ☆ＫＡＮ　!!」
萎れていた翼が雄雄しく羽ばたき、紫色の魔力光が激しくスパーク

した。
「……魔力が回復したぞ」
「……感情がそのままパラメーターに反映されるんだよ、きっと」
……ここまでくれば、単細胞も一つの長所である。
「ディアーチェ。王より新たな伝令です」
「えっ、お姉ぇが!?」
はい、と答え、その内容を伝える。
「『雑魚騎士がまだ多い。もう１０００体くらい、削っておけ。……ただし、町を壊さずに』……とのことです」
「「１０００……!?」」
どう考えても、片手間に下すような采配ではない。
「……お二人は、私と共に王の下へ」
「いやいや待て！　１０００体だぞ、１０００体！」「彼女一人じゃ無茶だ！　ぼくたちも……！」
そんな二人に、シュテルは言った。
「大丈夫です。彼女は……やればできるんです」
冗談でもなんでもなく……
「やればできる、やればできる……うちは、やればできる子！」
いくらかの自己暗示の後、ディアーチェは、十字槍を掲げる。
「町を壊さずに、敵だけを……そや、アレや!!」
何か、思い至る術式があるらしい。
ずももも……と、不吉な気配が漂い始め……
「……！　お二人とも、急いで下さい！」
シュテルが、血相を変えてクロノとユーノを急かした。
その道中、説明する。
「彼女は文字通り、『やればできる子』です。ひときわ大きな魔導の力。内包する魔力炉……それを存分に活用すれば、戦闘において、不可能な戦術はほぼ無いでしょう。ですが、彼女はそれと同時に……」
炎熱の砲撃で道を作りながら、全力でその場を退避するシュテル。
まるで。

「『やりすぎてしまう子』でもあるのです」
着火した爆薬から、全力で遠ざかるように――！
「来たれ、奈落の王。汝が化身、億千万の悪魔を、死の晩餐へと招かん。喰らい尽くせ……!!」
十字槍を中心に展開された、無数の粒が寄り集まった、禍々しい、雲。
――ヴゥワァァァ

――――――およそ十五分後。各地へ散っていた魔導師たちが八神はやての元へ集合するのと同時刻。雑魚騎士の残存兵力は、当初の一割にまで減少した。

# A’s編　第九十六話

「……アリアと、ロッテは？」
合流したクロノは、秀人に切り出した。重い、重い口調。
「……!!」
秀人は、どきりと鼓動が大きくなるのを感じた。
『いきなり、アースラから飛び出していっちゃって……多分、グレアムのところに、行ったんだと思う』
アースラの、エイミィからの声も重く……おそらくは二人とも、既に理解しているのだろう。だが、秀人にあえてそれを聞くのは……『もしかしたら』を、求めているから。
「あいつらは……あの、二人は……」
秀人は、口を開きかけては閉じてを、何度も繰り返す。そして……
「……逝ったよ。グレアムを、道連れにして」
……無力感をにじませながら、静かに伝えた。
「止めようと……したんだ。でも、あいつ……」
それ以上を、いうのを止める。きっとそれ以上は、言い訳じみた言葉になってしまう。それは、あの二人の覚悟を、汚す言葉だ。
「……そうか」
『……』
二人は、秀人を責めなかった。それが、秀人には、むしろ辛かった。いっそ罵倒でもしてくれたほうが、どれだけ楽か……
「……聞いても、いいか？」
「ああ」
「……あの二人、最後に何か、言っていなかったか？」
あの二人が、最後に告げた言葉。それは……
「……もう少し早く、俺みたいなのに出会えていたら……って、……笑ってた」
「……そうか」
瞑目し、数秒間。

「良かった。……最後の最後に、救われたんだな」
そして、はやてを見る。
「二人の遺した物は、今も生きている。それで、十分だ」
アーフィエルと、リーゼと、はやて。三人を繋ぐコードが、今こうして在ることが、クロノにとっても、救いだった。
「……始まる。気を引き締めろ」
はやてがそう言うのと同時。
――ゴゴンッ……!!
はやてという核を失った魔獣の抜け殻が、激しく鼓動した。
「う……!!」
……いや、違う。『抜け殻』ではない。ただの『抜け殻』が、これほどの圧力を発するわけが無い。
「！　雑魚騎士たちが……!!」
見れば、ぽつぽつと残るのみとなっていた（それでも６００体を上回るが）雑魚騎士たちが、魔獣の体内……はやてが抜け出した洞へ、吸い込まれていく。
「雑魚騎士を全滅させてしまった場合。もしくは、核を失った魔獣へ一定の干渉を行った場合。魔獣は、魔力を求めて、再び第一段階……周辺質量の無差別吸収を行う」
「!!」
もし、勢いのまま雑魚騎士を殲滅していたら……魔獣に手出しをしていたとしたら。アースラの全出力を喰らって、尚止まらなかったあの現象が、再び起こっていたということか。
「魔獣を倒し、なおかつ『ベツレヘムの星』の発動を止めるには……」
……一体残らず、魔獣へ吸収された雑魚騎士たち。
「雑魚騎士を残らず吸収し、完全体となった魔獣の核を破壊することだ」
そして……
――グゥオァァァ

アッーーーーーーーー!!!!
体中に滅茶苦茶に開いた、乱杭歯を生やした口。イソギンチャクにようにじゅるじゅると軟体質に蠢く口。人間のような歯が並ぶ口……無数の口が、同時に絶叫を上げる。
象のように太い足。蜘蛛のように細く鋭い足。昆虫のような節足。ツタが絡み合った植物状の足が、海底を踏みしめ、その巨体を屹立させる。
赤い目。青い目。血走った目。三つの瞳が蠢く目。腐り落ちそうな目、全てが、秀人たちをギョロリと睨み付ける。
……もはやそれは、魔獣という姿かたちさえ保つことを放棄した、邪悪で醜悪な、怪物だった。
アーフィエルが、ぺっと吐き捨てる。
『ふん。あの目、見覚えがあるわ。闇の書を最初に改悪した、ちっぽけな魔導師崩れだった男の目だ』
「歴代の主たちの、成れの果てか」
『単なる外殻だがな。あの内部に、『ベツレヘムの星』発動に必要な術式が隠されている。あの外殻は、発動まで術式を守るためのものだ』
エイミィの手元に、何らかの情報が図示される。
『二重構造の魔獣の、予想される強度だ』
その強度を破れるだけの攻撃、その出力が算出される。
『外殻だけでも、なのはちゃんと、秀人くん……その場に居る全員の、全魔力を攻撃に変換した数値と、ほぼ同等……』
その声は、どこまでも重く、暗い。
希望が見出せたと思った矢先の壁に、くじけそうになる。
『だろうな』
そこに、別の通信が入ってきた。
「オッサン!?」
レジアスだった。
『つい今しがた、アルカンシェルの使用許可を取り付けてきた』
「アル……？　なんだ、それ」
首をかしげる秀人たちに反して、クロノや、プレシア……マリエル

やエイミィまでもが、引きつった顔をしていた。
「おい、クロノ。何だよ、そのアルなんとかって」
「分かり易く、かつ誇張なしで言うとだな……半径数百キロを、文字通りに『消し飛ばす』魔導砲だ」
「阿呆か！」
秀人は天を仰いだ。
「おいオッサン！　加齢が脳に及んだのか!?　んなもん使ったら、魔獣どころか町ごと綺麗サッパリ消えちまうだろうが!!」
確かに、高確率で魔獣を撃破できるだろうが……それでは、非難した民間人にまで、被害が及んでしまう。
『小僧……』
ぴくぴくと、怒りを堪えている声で、レジアスは言った。
『……話は最後まで聞け。アルカンシェルは、原則、空対地での運用は想定されていない。空対空。もしくは、地対空だ』
「空ったって……魔獣は、陸に居るんだぜ。んなもん、あの魔獣を空に打ち上げでもしない限り……あ！」
秀人たちは、ようやくレジアスの意図を察した。
『そう……あの魔獣を、アルカンシェルの射程にまで、引っ張り上げれば良い。地上に被害が及ばない、宇宙空間にでも、な』
「私達は、外殻の破壊にのみ、集中すれば良いってことだね」
外殻を秀人たちが。内部をアルカンシェルが。それぞれ個別に破壊すれば……
「……いける、な」
秀人は、成功を確信した。
「……となると、あとは魔獣を飛ばす長距離転送だな。ちょっと待ってろ」
はやてが、至天の書をぱらぱらと捲り、記述していく。
「出来たぞ。魔力を足せば足すほど、座標関係無しにより遠くへ対象の物体を送れるようにしておいた」
一瞬である。

『ふむ、上出来だ。では、はやて。人選はどうする？』
レジアスの試すような口ぶりに、はやては淀み無く答えた。
「プレシア、アーデルハイドの両名は、魔力ブースター。ユーノ、アルフ、ザフィーラ、シャマルが、術式担当だ」
至天の書と、ダブルユニゾンによるスペックを備えたはやてならば、一人で扱える術式だが、攻撃に回る以上、６人で分担しなければならないようだ。
「秀人さん！」「ひでと！」
なのはとフェイトが、それぞれの愛機を秀人に差し出す。
「行くぞ、レイジングハート。バルディッシュ。」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』『Ｏ．Ｋ．』
秀人は、イモータルハートの回路へ魔力を流し……
『Ｃｏｎｎｅｃｔ　Ｏｎ』
あの日以来となる、レイジングハートとバルディッシュの合体デバイス・ユナイテッドハートを発動させた。
「二本!?」
……二本を一本に結合させるはずのユナイテッドハートが、なぜか二振り、存在していた。
『姉貴の空き容量に、カーバンクルのエネルギーを使って構築したの。ＡＩは変わらず複合型で、処理能力はちょっと上がったの。カートリッジも付いてるの』
アイも、一仕事を終えて満足げだ。
『『Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ』』
レイジングハート・エクセリオンモードと、バルディッシュ・ザンバーフォーム。その両者を、純粋進化させた形状で、それぞれ、なのはとフェイトの手に握られる。
そして、作戦が決定する。
「魔獣の外殻を破壊！『ベツレヘムの星』の術式を含む核を、軌道上に転送＆アースラの主砲で完全消滅!!」
――戦力は、万全。
――武装は、整った。

『！　魔獣、内陸部へ侵攻を開始!!　内包魔力、自己消滅と、術式発動の間のラインを保ってる！』
――――今こそ。
「身の丈に合わぬ欲望に囚われ、呑まれ……闇に成り果てた者達」
一歩、前へ。
最前線へ歩を進め、おぞましい魔獣へ、凛然とした言葉を投げかける。
「その姿は、私が歩んだかもしれない、可能性の一つ。故に……」
憤怒も、憎悪も、悲哀も、慈悲も……全てを内包する、静かな言葉。
微風のような魔力は、即座に魔力の乱気流へと変わる。
「最後の、闇の書の主。最後の、夜天の王。そして……」
聖盾の輝きが、曇天を切り裂き……魔剣の闇が、暗雲を呑み込む。
「今代限りの至天の王が……――――汝らに、引導を渡す!!」
――オオオオオッ……!!
反逆するかのように、咆哮を上げる！
ズシンッ、と、湾岸を踏み砕く、圧倒的重量。だが……その足が、二歩目を踏み出すことは無かった。
「ウチは正直、お前がどこの誰かは興味は無い。誰を殺そうが、何人を殺そうが、どーだっていい。だがな……」
――――ゴ、ゴ、ゴ……!!
上空に……鉄塊の乱杭歯が、出現する。
一本一本が、恐ろしく巨大で……一切の虚飾の無い、超重量を秘めている。
「お前は、秀人の敵だ。そして、秀人の敵は、凶鳥部隊の敵だ。
だから殺す。死ね」
――――――――ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……ゴゴゴゴゴゥンッ!!
連射された鉄塊が魔獣を打ち抜き、外殻の甲殻を叩き割る！
『グェアァアアアアアアアアアアアッ!!』

魔獣は、一気に沖合いに叩き返された。
――グジュルッ……！
甲殻のヒビから、眼球のようなものがせり出し、ギョロリとオウルを睨むその先端に、暗黒の魔力が収束する。
今、まさに発射されようとしたその時……
「ロード、カートリッジ」
――ガキュンッ！
紫紺の魔剣が、火を噴いた。
開放された魔力は、発散されること無く、魔剣の内部に蓄積される。
「ロード、カートリッジ」
――ガキュンッ！
二度目の、発声。
魔剣に、更なる負荷がかかる。
「……ロード、カートリッジ!!」
――……ガキュンッ！
そして、三度目。
魔剣の刀身が、過負荷の魔力に晒され、赤熱し……ビキビキと罅割れていく。
「ヒデくんと私が生きる世界に、お前の存在は必要ない。消えろ」
今まさに、暴発寸前。その、膨大な魔力を……！
「――ダーインスレイブ・ディバイドッ!!」
――ガシャアアアアアアアアアアアアアアアンッ!!!
砕け散る刀身と共に、撃ち放つ!!
――ザギュンッ!!
『ゴァアアアアアッ……！』
全ての眼球を切断された魔獣が、鳴く。だが、その声にはまだ、余裕があった。なぜなら、魔獣の治癒力を持ってすれば、この程度の損傷など……
「無駄。ダーインスレイブの傷は……決して癒せない」
……治癒は、しなかった。
切断面は、塞がる気配すら見せず、数倍もの激痛を、魔獣へ送り続

ける。
『グ、エアアアアアアアッ!!!』
中途半端に露出していたおかげで、甲殻の再構成さえも阻まれる。
「ラーファ、クライア！　次!!」
「撃つよー！」「ぶっ放す……！」
そして、双子。
「「とっておきを出しちゃおう！」」
ぱんっ、と互いの両手を打ち鳴らし、事前に転送しておいた、その装置を二人で持つ。
「あーよかった！　やっぱり、兵器は使ってナンボだよね！」
「大きな的……粉々に……」
その巨体は、三機の巨大な装置と、長大なレールから成っていた。
「１２０メガワットジェネレーター、稼動。最大出力」
――バチッ、バチチチチ……!!
その、空母さえも賄える電力が供給され、激しくスパークする。
「５００ｍｍ劣化ウラン拡散弾頭弾、装填!!」
ごしゅんっ……と、そのキチガイじみた弾丸がチャンバー内に装填される。
そして、電力が臨界に達し……
「「ドレッドノート・キャノン!!　ファイアーーーーーーーー!!!!!」」
――――!!　ズドォオオオオンッ!!
発射音は、遥か後方に。
秒速１０ｋｍという超スピードで炸裂した重金属の暴風雨が、魔獣の甲殻を、跡形も無く消し飛ばすっ!!
強固な甲殻が剥がれ落ち……下から現れたのは、蠢く肉の壁だった。
『!!……』
――ヴォオオオンッ!!
物理装甲は意味を成さぬと悟ったのか、魔力障壁を数十層、積層で織り成す。

あの肉は、おそらくはゴムのように、物理衝撃を受け流す。それを、同じく弾力性に富んだフィールド系の魔力障壁で幾重にも覆えば……

その魔獣の目論見は、打破されることとなる。

「アイゼン、行っくぞォおおおお!!」

『Ｊａ！』

――鉄槌の騎士・ヴィータ。闇の書の攻撃プログラム、ヴォルケンリッターとしての、千年の闇を抜けた少女によって。

『Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ!!』

子供が画用紙に書きなぐったような、どう見てもバランスが狂っているとしか思えない巨大なハンマーへと変形を果たす。

左右非対称であり、片方は、角錐。もう片方は……

「轟・天……!!」

――ごぅんっ……

……と、大質量が、ゆっくりと動き出す。反対側に備わった、三基のブースターの推力が、ゆっくりと……しかし、確実なトルクを掛けながら、グラーフアイゼンを旋回させる。

――ガォン……ガォン……ガォンガォンガォンッッッ!!!!

「爆・砕!!」

その破壊力は……誰の想像をも、寄せ付けさせない。

「――ギガント・シュラァァァァァァァァァァクッッ!!」

――ッゴォアオオオオオオオンッ!!!

積層魔力障壁は、２枚か３枚を残し、破砕され、蒸発した。その残りでさえも、限界以上に歪み、たわみ……決壊寸前だ。

『……』

だが……堪えた。組織が再生するまで、障壁を何度でも、何度でも張り直して……

「くぁ～!! アタシの全力だぞ!? 持ち堪えやがった！」

崩れ落ち……露出したのは、これまた頑強そうなプレート状の骨格だった。

とはいえ、無事でもない。……体全体を覆う筈だった骨格は、面積

が足りず、全てを覆い尽くせないでいる。
プレートをジャカジャカと絶え間なく動かし、防衛線を築く。
「――――それで、隠しきれているつもりか？」
ジャキンッ……！　と、武装を構える男。
――烈火の騎士・シグナム。思考を奪われ、生来の武技を封印されていた、武芸百般に通じる屈指の猛者。その、最も得意とする得物は……
「往くぞ……レヴァンティン!!」
『Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ　!!』
――――弓!!
ギリィッ……!!
矢を番えられた弓が、張力に撓み……先端の鏃には、複数発分のカートリッジの魔力が、今か今かと、開放のときを待っていた。
「……我が朋友、秀人。そして、凶鳥ども。我が奥義、しかと見届けよ!!」
シグナムの目が……動き回るプレートの動作を、見切った!!
――――ギャオォオオンッ!!!
発射された矢は……摩擦熱と、シグナムの魔力で燃え上がり……その姿を、変える。
「翔けよ、隼!!」
それは、魔力の猛禽。鋭い嘴を、爆発的な加速の勢いに乗せ……
――――ドゴォオオオオオンッ!!
魔獣に、炸裂!!
『ウウ、ウウウ……!!』
いよいよもって、その醜悪な形すら維持することが出来なくなり……
『グギャアォオオオオオ

……脳髄のような姿へと、変わった。
三つの巨大な目玉が、開かれる。その脳髄かと思われていたのは……無数の蛇が、絡まりあって成された形だった。
『グゥウウウウッ……!!』
三つの目玉に、魔獣の肉体を構築していたエネルギーが、破壊の魔力として収束する。
その照準は……海鳴市！

「参りましょう……ルシフェリオン」
「行こう、バルニフィカス」
「ほな、やったろか……エルシニアクロイツ」

――三騎が、並び立つ。

「疾れ明星……すべてを焼き消す、炎と変われ!!」
――星光の騎士・シュテル。　至天の王に仕える、絶対の忠臣。
彼女の使命は、唯一つ。
「轟、熱……滅砕!!」
――その炎を以って、王の敵を焼き尽くす！
「ルシフェリオン・ブレイカーーーーーーーーーーーー!!」
――ゴォオオオオオオオオオオオオオオウウッ!!!!
それはまさに、裁きの炎。
砲撃として打ち出されたそれは、着弾した瞬間、魔獣の目玉の一つを業火で包み込む！
障壁を、突撃の勢いのままに破壊！　砲撃が着弾した瞬間、残ったカートリッジを鬼のようにフルロード！
「ヒート、エンドッ!!」
更なる炎熱を精製し、眼球を、内部から炸裂させる！
「切り裂け雷光！　万物滅ぼす、雷と変われ！」
――刃の騎士・レヴィ。その鋭い眼光は、魔獣の脳髄の眼球を、真

正面から睨み返す！
「雷刃……封殺!!」
巨大な魔力刃を、大きく一凪ぎ。肩に担ぎ上げる。
――バチンッ!!
眼球の周囲に設置された、剣状の魔力スフィアが、その行動を阻む。
決して、逃がさず……屠り去る。その、意思のままに。
切っ先は全て……眼球の、中心点！
「爆・滅・剣!!」
――――バカァァァァァァァァァァンッ!!!
二つ目の眼球が切り裂かれ……断面から内部に至るまでが、爆破される！

「来たれ暗黒……万象呑み込む、虚空と変われ!!」
――――闇の騎士・ディアーチェ。はやての因子を、最も濃く……そして、異なる形で顕現させた、別格の存在。
「紫天に吼えよ、我が鼓動!!」
十字槍を掲げ……中心部に、小さな、しかし、とこしえの闇を呼び起こす。
――――ドスッ!!
眼球に呑み込まれる、闇の球体。ぎょろりと、眼球が動く。それはまるで、拍子抜けしているかのようだった。だが……それで終わる筈が無い！
「出でよ巨重……ジャガーノート!!」
――――ズボァァァァァァァァァァァァッ!!!!
眼球内部に突如として現れた、虚空……それは、まさに小型のブラックホール！
闇より暗き虚空が、眼球を内部へと縮退させていく！

三騎によって、最後の防衛線は突破された。
魔獣の核は……蠢く蛇が凝縮した、闇の衣に覆われているのみとなった。

だが……それこそが、魔獣の最後の策だった。この衣が、魔力・物理攻撃で強引に破られた瞬間……闇の書は自壊し、無限転生機構を発動させ、核を次世代へと飛ばしてしまう。敗北を悟り、次代へと逃げ延びようとしているのだ。

――これまでと、同じように。

だが、これでいい。

なぜなら、闇の書には、無限の猶予「干渉術式、構築完了」が……？

「ふん……お前の考えなんて、全部お見通しだ」

――ジャキィインッ……!!

魔剣と聖盾が合一し、光と闇、二つの宝玉を据えた杖へと変わる。

「――終わりを、始めよう」

古代ベルカ式の魔法陣が、展開する。

三角形の三頂点の、三つの円。その三つそれぞれに、はやて、なのは、フェイトの三人が、座していた。

「我、旧き時代を閉じる者なり」

「悪しき絶望に、終焉を」

「新たな時代に、灯火を」

輪唱するように、詠唱が、詠唱へと繋がり……込められた術式が、紐解かれていく！

最後の詠唱。それは……!!

「「「「不屈の心は、この胸に!!」」」」

始まりの夜の……不滅の誓い!!

闇の衣が、まばゆい光に剥ぎ取られていく。そして……！

「行くぜ、クロノ」「ああ、秀人」

……真デュランダルを持つクロノと、秀人。

秀人によって、リンカーコアを結合し……デュランダルの持つ、ただ一つの機能を、極限にまで高まらせていた。

「父さん……今こそ!!」
デュランダルの力。それは、分断の力。
無限転生……世界の因果律に癒着した闇の書を、永遠の揺籃から、引きずり出す力!!
「捕まえたぜぇ……!!」
秀人が、核と、因果律への接点を捕獲する！
「クロノ！　ぶった切れぇぇぇ

艦長章を、胸元から外すリンディ。
「……アルカンシェル、トリガーオン」
艦長章が、高度に精密化されたアナログキーへと変形する。
そして……コンソールをコマンドし、封印を解く。
――ヴィンッ……
手元に、四角い魔力スフィアが出現する。それに開いていた鍵穴に、アナログキーを挿入。
「3．2．1…来ます!!」
エイミィのカウントと同じくして……アースラの目の前に、闇の書の核が、ワープアウトした。
……それは、既に質量さえも操れなくなった、脆弱な精神体だった。
『オ、ワル……！　ワレノ、エイエンガ……オワッテ、シマウ……!!』
――永遠への妄執。
それこそが、闇の書を呪っていたものの正体だった。
『イヤダ、イヤダイヤダイヤダ……シニタクナイ、シニタクナイイイイイイイイ!!』
無様に、未練をわめき散らすソレに、リンディは哀れみさえ覚えた。
『ヤメロ！　キサマニ　エイエンヲ　アタエテヤロウ!!　キサマノノゾムエイエンヲ……!!』
「そう……誰だって、そうよ。変わりたくない。それが、美しく、輝いているものなら、なおさらね」
……それを耳にしていたエイミィらは、口を引き結んだ。
そう。変わりたくないというのなら……リンディにも、それを口にする動機があった。
「でも、私はね」
だが……リンディは、同じ過ちは、犯さない。
「他人の幸福を犠牲にしてまで、それが欲しいとは思わないのよ」
――カキンッ
……発射トリガーを、引き絞った。
――ギュウウウウウウウウウウウウウウウウウンッ……!!

巨大な円環が旋回し……内部に、反応消滅弾を精製する。そして……

――――――

消滅しかけていたはずの核が……最後の悪あがきに放った攻撃が、アルカンシェルを打ち抜いたのだ。
「!! く、!!」
爆発の余波に、体を投げ出された。
あわてて体を起こし、モニターで状況を確認したリンディたちが見たものは……
『ワレノ、永遠ハ崩レタ……ダガ、貴様タチモ、道連レダ……ハハ、ハハハハハ……ハハハハハハハハハハハハ!!!』
……ゆっくりと、周辺のデブリを吸収する、闇の書の核だった。
……転生の道を捨て……不完全ながらも、『ベツレヘムの星』を、発動させたのだ。
「!! アルカンシェル、第二射!!」
「む、無理です……!! 砲身大破！ 機関部も、その影響で停止しています!! このままでは、生命維持も……!!」
「なら、わたしが直接……!!」
「艦長!!」
飛び出していこうとするリンディを、エイミィが飛びついて止める。
アルカンシェルは、もう撃てない。
いかに高ランク魔導師といえども、宇宙空間では行動できない。
応援は、期待できず。

――――――――――――――――――――積み、だった。

「そんな……!!」
なのはの呟きは、地上の秀人たち、全員の代弁となった。

「……」
秀人は、不気味なほど無言だった。
「全員で、アースラに！　全ての魔力を、秀人の力で結合して、あの術式を破壊するんだ!!」
次善の策を講じるクロノ。
だが……その本人が、諦観に支配されることに、抗うことしかできなかった。

茫然自失。
希望を掴み、手繰り寄せたと思ったら……それ以上の絶望が、降り注いだ。
誰もが、何も言わず、言えず、動けず……

「あはははははは」

そんな中で聞こえた笑い声は、不気味なほど、よく響いた。
「一何だよみんなして。そんな簡単なことが、分からないのかよ」
……発生源は、秀人だった。
「秀人、さん……？」
なのはが、秀人を愕然と呼ぶ。
だが、秀人は……そんなもの耳に入っていないという風に、ケタケタと、不気味に笑い続けていた。
気がふれたか。誰もがその危惧を抱いた。
秀人は、愉快で愉快でたまらないといった風情で、顔を覆って笑い続け……
――――ドプンッ……
秀人の、背中の光翼。
空色だったはずのその魔力光に一点、染みのように、暗黒が浮かんだ。

――ドプッ……ボボボボッ……
墨汁をたらしたかのように、空色が、闇色に汚染されていく!!
「秀人さん!?」
……その、闇は。
「うそだろ……!? それは、闇の書の……!!」
……暗黒の精神世界を脱出する際……秀人に食い込み、同化した闇だった。
闇色に染まった翼。
『アイ! 応答しなさい!! ……アイ!!』
『……』
レイジングハートの通信に、イモータルハートは答えない。
機能にも、障害が出ている。
「簡単な話じゃないか……そんなもん、宇宙空間でも活動できる奴が、一人で行けば良いんだ」
「っ……!? 秀人、まさかお前……うぐっ!!」
その意図を察したクロノが、呻く。
「きゃあっ!!」「ひでと、なにを……ああっ!!」
――ジュルルルルルルッ……!!
……結合の力。魔力のラインが、その場にいた全員へと突き刺さり……
「ドレインッ……!!」
……全員の魔力を、限界以上に絞り上げ、吸収した。
「うあああああっ……!!」
……まず、はやてのユニゾンが解けた。リーゼとアーフィエルが、唐突に宙に放り出される。
続いて、ユナイテッドハートが解除され、レイジングハートと、バルディッシュに分離した。
ほかの面々も、飛行すら危うくなり、次々に地上へ降下していく。
――ドクンッ……!!
膨大な魔力に、暗黒へと染まった翼が打ち震える。

その足で、核を軌道上へ転送した魔法陣を、再び起動させた。
「やめろ……!!　秀人、どうしてしまったんだ!!」「秀人さん!!」「ひでと!」「秀人!」
クロノたちが、すずめの涙ほどの魔力で、秀人に追いすがる。
だが、秀人は、それらを一顧だにせず、魔法陣へと足を踏み入れていく。
「あはははははははは」
……空虚で、無感情な笑いを、へらへらと浮かべながら。
「……目標、軌道上……!!」
「やめろっ……!!」
次の瞬間、クロノは、頬に生じた衝撃で、弾き飛ばされた。
「うるせぇぇぇぇ!　俺の邪魔をするんじゃねぇぇぇっ!!」
……秀人がクロノを、鬱陶しげに殴り、振り払ったのだ。
その行動を見たなのはは、確信した。
――正気じゃない、と。
「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」
なのはたちは、必死にしがみつき……
――バシュウウウウウウウウウウンッ!!!

秀人もろとも、転送されようとした。
あまりの速度に、風景が意味を失う。
転送中の衝撃波が、秀人にしがみついたなのはたちをゆさぶる。
「秀人……馬鹿な真似はやめろ!!　私が、なんとか術式を止めるから……!」
はやてのその言葉に、秀人は、首を横に振った。
「駄目だ。これ以上のユニゾンの負荷に、お前は耐えられない」
……事実、既に体力も限界に近い。
「んなもん、どうでにでもしてやる!!」
強がるはやて。だが秀人は……
「俺一人でやる」

……はやての手を振り払い、地上へ押し戻した。
「ひでと、やめようよ!! アースラだって、まだぜんぶの手が尽きたわけじゃない!! ボク、がんばるからさぁ……!!」
既に半泣きになっているフェイト。
いつもなら、それを率先して慰めてくれるはずの秀人。
しかし、今は……
「必要無い」
端的に否定し、その手を引き剥がした。
……これで、残っているのは、なのは一人となった。
「秀人さん!!」
秀人はしばらく、その顔をじいっと見つめ……
「……ああ、なのはか」
……今しがた思い出したかのように、その名を呼んだ。
「邪魔をしないでくれ」
「っ、するよ! 秀人さんが変なことしたら、止めるに決まってる!!」
「……俺一人でやる。助力は必要無い。離せ」
「いやだ! ぜったい離さない!!」
「……聞き分けてくれ」
……何故か、なのはのことは、強引に引き剥がそうとしない。
正気を失って尚……その存在が、大きな割合を占めているのか。
『秀人、戻りなさい! 極め付けにバカな真似をして……!! こんなこと、誰も望んでいません!!』
だが、さすがに転送が高高度に達するにつれて、レイジングハートにも焦りが見え隠れしてきた。
『この馬鹿!! いいから、戻れと言っています! それとも、このまま強引についていって、心中してやりましょうか!?』
脅迫じみたレイジングハートの要請に、秀人が振り返る。
「……それは嫌だ。でも、これは、俺一人がやらないと……」
「! なんでそう、何でもかんでも一人でやろうとするかな! とにかく、ぜったい離さないんだから!!」
「なのは、……止むを得ないか」

いよいよ、高度は生身では危険域。
秀人はここにきて、なのはを引き剥がしに掛かった。
魔力補助無しでの腕力では、どうあがいても、秀人には抵抗できない。
「あぅっ……！」
「さぁ、戻るんだ。地上に着地できるだけの魔力は、残しておいた」
再び天を見る。だが、右手に違和感を感じ、再び振り向く。
「……」
そこには……レイジングハートを下げるチェーンを、秀人の右手に括り付け、必死に抵抗するなのはの姿が。
「……」
「嫌だ……嫌だよ……!! どうして……!? どうして、私を置いていこうとするの……？ 秀人さんは、……秀人さんだけは、私の傍にいてくれるって、一人にはしないって、言ってたのに！」
途端……秀人の瞳に、僅かな正気が戻る。だが、そこは既に、成層圏の間近で……
「……っ!!」

――――――――……ぶちんっ。

……銀の鎖が、千切られた。呆気なく……分かたれた。
ほかの誰でもない……秀人の手で。
「……、なんで、」
落ちてゆく中……なのはは、音さえ届かなくなった距離で、一人呟いた。
そのさなか……僅かに覗けた秀人の口元が、こう動いているように見えた。
――――さよなら
……と。
「……」
……高度を上げる秀人と、落ち行くなのは。

絶望的なまでの距離が、二人を隔て……
――!!!
なのはは、声にならない叫びをあげることしか、できなかった。

◆▪◆　◆　◆

ベツレヘムの星を発動させた、闇の書。
敵の切り札……巨大な主砲は、既に潰した。
『我ガ永遠ハ、崩レタ……オノレ……クチオシヤ……!!』
今となっては、この術式で、この世界一つを道連れにすることが、闇の書の思惑だった。
『滅ビヨ……全テヲ、トコシエノ闇ニ……!!』
アースラの破片までをも、吸収し始めたその時……
「……」
……何食わぬ顔で、秀人が、宇宙空間に現れた。
『オオ、オオオオオ……!!　マダ、邪魔ヲスルカ……!!』
「……コンプレッション」
すっと手をかざすと、闇の書と、秀人を中心に……巨大な魔力リングが、展開した。
その輪は、二人を……いや、二人の間の空間を、内側へ収縮させていく！
『グ……ゴガァァァァァ!!』
不完全な術式が、どう作用したのか……精神体は、己自身をも、内部へと崩壊させていく。
リングの中……完全に外界と遮断された中で、とうとう……
――ドグンッ……!!
……ベツレヘムの星が、産まれる。
ゆっくりと、時空を歪めながら回転するのは、闇よりもなお昏き孔。
……ソレは確かに、発生したのだが……
『……ダガ、貴様ハ助カラヌ！　アワレダナァ、ハハハハハ、ハーッハッハッハ!!!』
……そう。それは、短時間で蒸発する程度の規模のものだったが

……至近距離にいる秀人に、逃れる術は無い。
『先 ニ 地 獄 デ、待ッ テ イ ル ゾォ オ オ オ オ オ オ……
……それが、千年もの間、呪いと憎悪を振りまいてきた、闇の書の最後だった。
そして、残されたのは、秀人と……ベツレヘムの星。
重力により、ずるずると、孔へ引っ張り込まれていく。
……脱出も、抵抗も、叶わない。それなのに、秀人は……
「ああ、一緒に滅びようぜ……！」
あの、空虚な笑いを零しながら、すすんで自ら、孔へと身を投じていく。
「はははは……はっはっはっは……!!」
ずぶずぶと、腕が、足が、胴体が……内部に、吸い込まれていく。
「やっと……これで、やっと……!! あはははは……あーっはっはっはっは!!!」
……秀人は、狂気の笑みのまま、『ベツレヘムの星』へと、吸い込まれ……この世から、消失した。

◆・◆ ◆ ◆

ぶううん……と、計器の動く音だけが、アースラの内部に、空しくこだましていた。
「吾妻秀人……バイタル反応……消失……」
観測班が、振り絞るように告げて……ぽつりぽつりと、報告が上がってきた。
「……敵魔力反応も、宙域から消滅しました……」
「地上、敵性因子なし……艦長、」
リンディは……生ける屍のように、シートに身を投げ出し、放心していた。

「……秀人、くん……」
認めたくないのに。自らの賢しらな部分が、その事実を、肯定してしまう。
――動かなくては。自分は、艦長で、提督なのだから。
その思いだけで……どうにか、呼吸をし、声帯を震わせた。
「……状況、イエローへ移行……引き続き、警戒態勢を維持……現地の執務官および、魔導師の、収容、を……!!」
じわりと滲んだ視界。
もう、堪えるだけの気力は、残っていなかった。
『……小僧……!! く、……!! オレは、また……!!』
モニターの向こうで、レジアスも、同じように俯き……肩を震わせていた。
……ブリッジのあちこちから、すすり泣く声が、連鎖した。

◆　◆　◆　◆

――闇の書事件。
第何次かも記録に定かではない、特定封印指定・S級危険遺失物『闇の書』による、大規模災害事件。
最も新しく……そして、最後の闇の書事件となった本件についての詳細なレポートは、一部の高官にのみ閲覧が許され……現地へ赴いた局員らによって、堅く秘められることとなった。
――管理外世界・民間被害者（死者・負傷者・行方不明者）２０人
これまでの闇の書事件の中では、最も少ない被害状況。事件を担当した局員たちは、誇ってもいいくらいだ。
だが……その後の、たった一言が……それを、させようとはしなかった。
――嘱託魔導師１名・・・ＭＩＡ《任務中失踪》
……その一文が、この事件の締めくくりとなっていた。

# A’s編　第九十七話『雪、降る頃に』

『ハヒィ……ハヒィイイ……!!』

……海鳴市の路地裏を、ガサガサと蠢く、ちっぽけな害虫の姿があった。

『ハ、ハハハ……生きている……我はまだ、生きているぞォおおお……!!　最後に勝ったのは、この、グレアムだぁあああ……!!』

……グレアム。

アリアと、ロッテの決死の自爆は、完全には仕留め切れていなかったのだ。

『あのクソ猫どもめ……!　我が、精神のみを離脱させ、非常用の肉体へ精神を移したことになど、気づくまいて……!!』

――じゃらっ

損傷した肉塊の体を引きずり、彼自身が最も忌み嫌っていた虫けらのように、地面を這いまわり、生還の喜びに浸っていた。

『フゥ、フゥウウウ……!!　肉体を失ったのは痛いが……潜伏し、力を蓄え……再び、舞い戻って……!』

――じゃらっ

……全く反省することの無い、愚鈍な老人の思考だった。

『ハハ……ヒヒヒヒ……ア?』

――じゃらっ

……その逃走劇が、終わりを告げる。

路地の曲がり角から現れた、……無数のアクセサリーでジャラジャラと着飾った、派手な女が、行く手を阻んだのだ。

『……』

グレアムは、息を殺した。

管理局の追っ手か?　いや、それはない。目の前の人間から感じる魔力は、ほぼゼロなのだから。

（ふん。魔力を持たぬクズか）

侮蔑し……そのクズから、小動物のように息を潜めて隠れている己の現状には、気づくことは無い。

「クズはお前だ」
……口に出していない、ただの思考に……その女は、返答した。
(!?)
「……秀人はね、いつもいつも、無理して、空元気を張って……必死に生きてる、まっすぐな子なんだ」
ぱちんっ……と、胸飾りの留め具を外す。かんざしも、ピアスも、ネックレスも、アンクレットも、チョーカーも……じゃらじゃら、じゃらじゃらと……銀細工を、取り外していく。
「……あの子は、わたしと違って……幸せにならなきゃ、いけない子だったんだ。それを……お前が、踏み躙ったッ……!!」
じゃらんっ……と、むき出しの殺気を、晒し出す。
「今日だけ。今夜だけ。……今この時だけ、……おじいちゃんとの約束を、破る。悪い能力を、使う」
……あの身に着けていた、多数の銀細工。あれは、己の危険な能力を、封印するためのものだったのだ。
『……!? ヒィイイッ!!!』
その、魔力とも違う圧力に、グレアムが逃走する。
だが、その身が、地面を離れる。
「お前を、一殺す――!!」
手を振れずに、眼前にグレアムを吊るし上げる奈々。
そして……ガキッ!! と、グレアムの精神を、鷲掴みにする!!
『や、やめろっ……やめてくれぇぇぇぇっ!!』
ビキビキと、脆弱な精神に、亀裂が入っていく。そして。
「――死ねっ!!」
――バキィイイインッ!!!
『ギャアアア

らいない腐肉に、路傍の虫けらが群がり、貪り始めていた。
「……」
グレアムを始末した奈々は……喜びも達成感も感じさせない、のろのろとした動作で、銀細工……封印を身につける。その手は、疲労とは又別の意味で震えていた。
ずるずると、壁を擦るように力なく歩き……
「奈々」
……己を呼び止める声に、立ち止まる。
「おじいちゃん……」
……大家だった。
「……」
奈々は、約束を破った罪悪感から、涙目で項垂れている。
「奈々」
大家は、ゆっくりと、奈々の頭に手を伸ばす。奈々はビクッと目を瞑り……
――ぽん
……と、優しい手の感触に、きょとん、とした顔をした。
「すまん。嫌な役を、押し付けてしまったのう……」
「おこって、ないの……？　奈々、約束やぶっちゃったんだよ……？」
「怒ることなど、一つも無いわい。もし、奈々より先に、見つけていたら……」
――ベゴンッ……!!!
「ワシが、この手で屠り去ってくれたわ……!!」
殴りつけられた電柱が、内部の鉄骨までを砕かれ、大きく折れていた。
「おじいちゃん、手……！」
……皮膚が破れた拳を、奈々は、持っていたハンカチで包んだ。
介抱されながら……大家は、ぽつりと漏らした。
「……秀人は、帰っては来ないかの……？」
「……!!」
奈々は、能力の副産物により、……秀人の反応が、唐突に途絶

えたことを、悟っていた。
「……『死』の反応じゃ、なかったよ。でも……」
「……そうか。ありがとう」
……あの、豪放磊落の豪傑はどこへ行ったのか。まるで、一気に老け込んでしまったかのように、背中を丸めていた。
……無理も無い。大家にとって、秀人は、息子も同然だったのだ。
「馬鹿者が……！　おまえなんぞ、まだまだヒヨっこのヒデ坊じゃ……!!」
◆・◆　◆　◆

――――――事件より、三週間が過ぎていた。

あの夜……秀人が消えてから、誰もその場を動かず、帰還を待ち続けていた。
ほぼ全員が、秀人に魔力を吸収されたことによる魔力欠乏で……見かねたリンディが、強制的にアースラへ転送していなかったら、一晩どころか、今日の今日まで、待ち続けていたことだろう。
リンディは何度も、本部へ、秀人の捜索の続行を申請した。だが、帰ってくるのは決まって、『事件は解決済み』という返答の、定型句だった。
そして、リンディは……
「……」
惰性のままに、表示された画面を、眺め続けていた。
『事件担当執務官クロノ・ハラオウン氏　特別勲章授与式』
……個人の感情はさておき、とにかくクロノは、永きに渡る難事件の前線指揮官であり、唯一、あの中で正式に管理局に所属している管理局員だ。
『艦長……クロノです』
呼び出した時間ぴったりに、クロノが艦長室をノックした。
「入りなさい」

『失礼します』
やってきたクロノは……変わらず、濃い疲労の隈を浮かべていた。
「これは……」
促されるままに、その画面を見せられたクロノは、はっきりと嫌悪の表情を見せた。
「辞退させて頂きます」
きっぱりと告げるクロノ。だがリンディは、首を縦に振らなかった。
「……それはできないわ」
画面をスクロールさせ、そのふざけた案内状を寄越した人物の名を、表示させる。
「デイリン・グレンジャー中将……ですか」
中将。管理局の中でも、有数の実力者であり……将官の中でも、指折りに評判の悪い男だ。
だが、中将からの招待状。一執務官が、その招待を断れば……一体、どこへ飛び火するのかも分からない以上、出るしかないのだ。
「……了解、しました」
それだけを言い残し、クロノは退室した。
一人残されたリンディは、一人、深く深く、ため息をついた。
「……苦労ばかり、掛けてしまうわね」
提督としての実績を積み、発言力も得て、……だが、結局は組織の中の一個人。それを、今更ながら自覚し、無力感を感じていた。
「……あなたは、あの子の劣等感を拭ってくれたわね……」
思い浮かべるのは、件の人物。
「ねえ、秀人くん……あなただったら、どうしてた……？」

――――答える声は、無かった。

そして、授与式当日……待合室でクロノは、儀礼用の礼服の袖に、久方ぶりに腕を通していた。
「クロノくん、袖のボタン外れてるよ」

「……ああ、すまないエイミイ」
クロノはどこか、上の空。
「さ、……行こう」
「……ああ、そうだな」
そして、待合室を出た。
廊下を歩いていると、通路の壁に、一人の青年が立っていた。
その青年は、クロノと目が合うと、馴れ馴れしく近づいてきた。
「やーァやぁやぁ、クロノ。壮健そうで何よりだね、うん？」
……派手な金髪。やや自己主張が強いが、決して醜男ではない……いや、十分にハンサムで通用する容貌。
「……キーア。お前か」
キーア・ソナタ。
士官学校時代の同期であり……今に至るまで、親しい間柄ではない。
士官学校卒業時、クロノが主席で、キーアが次席。
ライバル……といえば聞こえはいいが、その影で、何人もの級友を陥れ、失脚させることで成績を維持してきたそのやりかたに、クロノは心底、辟易としていたし、キーアはキーアで、馬鹿正直に、正攻法で……常に自分の上にいるクロノのことを、疎ましく思っていた。
極め付けに、クロノが最年少執務官として合格した翌年、キーアもまた、執務官試験に合格。
互いに、決して相容れない存在だった。
「何の用だ」
そんな彼が、わざわざこんな場所にいる理由は……
「おやおや、つれないなぁ。勲章を受けるキミを、祝福しにきたに決まっているだろう？」
気障ったらしく前髪をかき上げながら、キーア。
無論、額面どおりに受け取るような言葉ではない。意気消沈したクロノを、見物に来たのだろう。
「……ご苦労なことだ」

「おや？」
キーアは、意外そうな顔をする。クロノはこれまで、キーアの戯言に、揺さぶられることなど、無かったのだから。
「あれあれ？　ご機嫌ナナメだね、クロノ？」
「こんな場所で油を売っていないで、一つでも事件を追ったらどうなんだ。事件の解決率が、また落ちるぞ」
「……あ？」
キーアが、余裕の態度を一転。頬を引きつらせ、クロノを睨む。
「またデイリン中将に泣きついて、ラクな事件を斡旋してもらうか？」
キーアは最早、憎しみに歪んだ顔を、隠そうともしなかった。
「精進しろよ、《万年二位》」
……
「クロノ君……良かったの？」
同伴するエイミィが、ひそひそと耳打ちする。
「キーアに、アレ言っちゃって……」
……それは、あのプライドが山ほど高いキーアにとっては、禁句もいいところだ。
「……正直、反省している」
クロノにしては珍しく、敵意を持って、相手を皮肉った。その行為そのことに関しては、クロノは自責していた。
「奴に関してはどうとも思わないが、な」

重苦しい気分のまま、参列する。
両脇を、デイリンお付の局員たちがズラッと並び……その先に、デイリン中将がいた。
でっぷりと太った身体。脂ぎった顔。薄い頭髪。目は濁っており、既に、その志も怪しいところだ。
エイミィたちアースラのスタッフたちもまた、端のほうで参列していた。
「――これより、難事件を解決へと導いた誉れある執務官……クロノ・ハラオウンへの、勲章授与式を始める！」

――ワァッ……!!
両脇の局員たちが、わざとらしい歓声と拍手を上げる。
「クロノ・ハラオウン、前へ！」
それを、どこか遠くの出来事のように聞きながら、クロノは、礼節に則った動作で、歩を進める。
デイリンの目の前まで歩くと、歓声と拍手は最高潮に達し……デイリンの合図によって、ぴたりと止む。
そして、デイリンが、文を読み上げる。
「クロノ・ハラオウン執務官！　貴官は、永きに渡る難事件を、短期で決着させた！　その功績を称え、ここに勲章を授与する!!」
壇に置かれていた、豪奢な箱。その中から、これまた趣味の悪いギラギラした勲章を取り出し、クロノの首に掛けようとする。
それと似たような勲章は、デイリンの胸にいくつも着いていた。
（……同類、か）
こうして、自分もまた理想を見失い、目の前のデイリンのように、醜く変わっていくのだろう。ふっ、と、クロノは自嘲する。
それを、隠し切れない喜びが滲み出したものだと勘違いしたデイリンが、能天気に笑っていた。
「いやぁ、さすがは最年少執務官だ！」
そして……デイリンは。

『最小限の犠牲』で、よくぞ事件を解決した！」
――――――言ってはならないことを、口にした。
勲章を受け取りかけていたクロノは、動きを止める。
「最小限……」
「うむ？」
ぼそっと呟いた言葉を、デイリンが、訝しむ。
「最小限とは……どのような、意味でしょうか？」
理性を総動員して……爆発を押さえ込む。
デイリンは……その機微にすら気づかず、べらべらと喋り切った。

「歴代の中で最小人数、そして、たかが現地民の嘱託魔導師ひとり、という意味だが？　どうかしたのか？」
クロノは、ゆっくりと、デイリンの汚い手を除ける。そして……

「――……ふざっけんなぁあああああああああああああああああああ!!!!!!」
――メゴンッ!!
……渾身の怒りをもって、デイリンの脂ぎった顔を、全力で殴り飛ばした！
「ぶべェッ！」
吹き飛び、壇を巻き込み、無様に倒れこむ。
シン……と、唐突な事態に静まり返る式場。
「き、きさま、気でも狂った　グェッ!?」
「ふざけるな……ふざけんなよ、てめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」
――ベキッ！　バゴッ!!
デイリンに馬乗りになり、延々と殴り続ける。
「オ……おごォっ!?」
転がっていた勲章を、デイリンの口の中に押し込む、そして、また殴る。
返り血が飛び散り、式場は一転、修羅場と化した。
「立てよオラァ!!」
胸倉を掴んで引き起こし、壁際に押し付け、更に殴る。
――ゴンッ!!　ガンッ!!
殴る、殴る……まるで、これまで理性で押さえつけていた怒りを、吐き出すように。
ずるずるとダウンしかけたデイリン。それを、更に、ひときわ大きく拳を振り上げ……
「お前が、……お前なんぞが!!」
……

「俺の親友を、知ったかぶってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

――ゴギンッ!!

吹き飛んだデイリンが、配下の列に吹き飛んだ。

「と……取り押さえろ!!　執務官が乱心した!!」

ようやくその行動に移り始めた頃には、既にデイリンはボロボロ。歯が折れてマヌケな顔になり、泡を吹いている始末だった。

――バンッ!!

式場の扉が開き、キーアを先頭にした治安部隊が雪崩れ込んできた。

「クロノ・ハラオウン！　将官暴行の現行犯で逮捕する!!」

その顔は、優越感と、カタルシスで嬉々としていた。

取り押さえられ……地面に組み敷かれるクロノ。その顔を、キーアが踏みつける。

「ははは！　君もこれで終わりだな　……ぎゃっ!?」

デバイスを構えたキーアだったが、予想だにしない方角から後頭部を殴打され、更に足を払われ転倒した。

「な、な……!?」

振り返った先……端のほうに参列してた、アースラのスタッフたちが、これまた鬼のような形相で、デイリンやキーアたちに襲い掛かってきていた。

「このヤロォオオオオ!!」「ふざけんじゃねぇぞおおおおお!!」「秀人くんのこと、なんにも知らないくせにっ!!」「ぶちのめしたらぁあああああああ!!」

血の気の多い武装局員どころか、エイミィらオペレーター、老け顔の医務官までもが、その辺にあったビンやら燭台やら椅子やらを手に、治安部隊や、デイリンの配下を滅多打ちにしていく。

「……ば、馬鹿じゃないのか、こいつら!!」

キーアは何とか立ち直り、バインドでアースラのスタッフたちを拘束しようと……

「ふんっ!!」
――めごしゃっ
「ウヴァッ!?」
先ほどの返礼とばかりに、顔面をしこたま殴られるキーア。
「おおお……!! く、クロノ……!?」
「……祝いの酒だ。お前にも、分けてやるよ」
どぷどぷと、高価そうな酒瓶の中身が、キーアに振りかけられる。
そして……
「火を放て」
「「「「了解!! 」」」」
……どう見ても、本気だった。
「ちょ、待、やめァァァ

……一人称の変化は、何を意味するのだろうか。
空しさを胸に、下らない儀礼の会場を立ち去るクロノ達。
――――この日、時空管理局史上最年少執務官・クロノ・ハラオウンは、将官暴行及び、施設損壊の現行犯で逮捕され、執務官資格を剥奪。その後、拘留中に作成した除隊願いが受理され、クロノ・ハラオウンの名は、管理局から除名されることとなった。

◆▪◆　◆　◆

「……馬鹿だな、あいつ」
そのニュースを聞いたユーノは、そう言いながらも、どこか納得していた。
「……レジアス少……あ、いえ、失礼しました、中将」
「構わん。内定しただけで、まだオレは少将の身だ」
レジアスと、ユーノ。なぜこんな凸凹な二人が、揃って歩いているのかというと……
「……よ、おじさん。ユーノ」
身を起こしたはやてが、リーゼに支えられながら、ベッドから降りるところだった。
その肩の辺りに、３０センチほどに縮んだ、待機モードのアーフィエルもいる。
「……魔力が一時的に足りなくなってな。ヴィータとレヴィを除く七星騎士たちも、今はコアの状態で休眠しておるわ」
はやてのひざの上に置かれた、至天の書。確かに、その中から気配がする。
「主、歩けますか？」
「ああ、問題ないよ。……んじゃ、行くとするか」
……はやてには、いくつか、残された『用事』があった。それを済ませるために、保護者のレジアスと、なんか手持ち無沙汰になっていたユーノが、借り出されたのだ。
「……お前には、監視員が着くことになった」
……さすがに、無罪放免とは行かない。

「安心しろ。ある程度までなら、お前の選択に任せられる。何人かをリストアップするうち、一人を選べ。一人ずつ面接をしても構わん」
「過保護だねぇ……」
あきれたようなはやての言葉。
「ああ、娘にもよく言われる」
「えっ……あんたに、娘!?」
あまりにもぎょっとした顔をするものだから、レジアスも苦笑してしまった。
「オーリスという。今、士官学校の二年目でな……時間が合えば、会わせてやる」

――――!!――――!

その道中……通路の向こうから、ヒステリックな叫び声が聞こえてきていた。
「主！」
リーゼの静止を振り切り……その方向へ。
「返して！　返してよぉっ!!」
「こ、こら！　大人しくしないか！」
手枷を填められ、牽引される女性。
「大人しくしろ！　……フィアット・コルデーロ!!」
……グレアムとの密通の罪で逮捕された、フィアットだった。
なぜ、彼女がこんなにも、恐慌に駆られているのか……それは。
「これは、証拠物件だ！　貴様に所有権は既に無い!!」
……押収された、フィアットの私物類だ。
そのうちの一つ……衣服が収まっているであろう箱から、ほつれたセーターや、型遅れの左官服が、僅かに覗いていた。
「……あの子は？」
どこか、確信を持ちながらも、そう聞く。
「……フィアット・コルデーロ。アースラの元スタッフで、……はやて。君を抹殺するために、グレアムに情報を横流しにしていた」
「……動機は？」

「……」
躊躇うユーノを、目で促す。
「……前回の、闇の書事件の遺族。お母さんが、闇の書の主だったんだって……」
リーゼとアーフィエルは、沈痛な面持ちで、その話を聞いていた。
「……」
瞑目し、考えるはやて。
「返して！　返してえっ……!!」
そのさなか、とうとうフィアットが、衣服から引き離され……
「おかぁさんをかえしてよっ!!」

……悲痛な叫びを、口にした。
「あ、はやて!?」
追おうとしたユーノを、レジアスが押しとどめ、首を横に振った。
ここは……はやての選択に、任せることにしたようだ。
「……どけ」
「は？　……ぐァっ!?」
はやては、衣類を持っていた局員を昏倒させ、荷物を奪った。
それを、フィアットの目の前に放る。
「あ、……」
衣類を掻き抱くフィアット。だが、はやてを見ようとも、一向に何のアクションも起こさなかった。
「……」
心が、完全に折れている。復讐心だけを支えに、これまでを歩んできたフィアットにとって、それはまさに、魂を抜かれたようなものだろう。
「……私が憎いか」
はやての問いかけに、ぼそりと反応する。
「……憎い」

「そうか」
はやては、手元に魔剣を召喚し、振り上げる。のろのろとした動作で、それを目で追うフィアット。
――キンッ……!!
……一閃。フィアットの手枷を、破壊する。
「!」
これには、流石にレジアスも目をむいた。自身へ復讐心を持つ相手を、みすみす解き放つとは。
――ガランッ。
更に、魔剣をその足元に放る。
一体、何を考えているのか……はやては、こう言い放った。
「――私を、殺してみろ」
フィアットの目が、魔剣と、はやてを、行き来する。
そして……母の遺物を目にした瞬間、それが一直線につながった。
魔剣を、掴み取り……
「……ううあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
大上段からの振り下ろし。一切躊躇の無い攻撃。
だが……
――ぱしんっ
……白羽取りされた魔剣が、空しく止まる。
「……この程度か？」
「く、ぁぁぁぁぁぁっ……!!」
意地のように、魔剣を押し込む。
――パンッ!!
「あっ……!!」
軽い動作での、右ストレートが、フィアットの頬を打ち抜く。
「……!!」
転がったフィアットの足元に、またしても、魔剣が放られる。
「そら、もう一度だ」
「このぉおおおっ!!」

「こんなものか、お前の憎しみは！」
また、失敗。
「弱い！　それで仇を討とうなど、百年早いわ！」
また、失敗。
何度も、何度も、はやてに立ち向かうたび……死んでいたフィアットの目が、爛々と、輝き始め……
「お前の母は、犬死にかっ!!」
……その言葉に、かっ、と、ひときわ大きく、輝いた。
「――――殺してやるッ!!　八神はやてッ!!」
……とうとう、その名を呼んだとき……はやてが、にやりと笑った。
「……」
「うあああああああああっ!!」
無言で、左腕を差し出す。
――ザシュッ!!
「、く……!!」
魔剣はとうとう、はやての腕を貫いた。
「主!!」
「来るなッ!!」
駆け寄るリーゼを制する。
――スパンッ!!
再び、右ストレートでフィアットを倒す。
うめくフィアット。
ユーノが、慌てて止血を施し、処置した。
「……おじさん」
レジアスを呼ぶ。
「私の監視員……こいつがいい。こいつにする」
「!!　正気か!!」
目をひん剥くレジアス。
「都合してくれるって、言ったよね？」
「……言った。確かに言った。だが……」

さすがに、これには渋るレジアス。だが、はやてが本気で言っているのだと悟り……あきらめた様に、「いいだろう」と、呟いた。
フィアットに歩み寄り、顔をぐいっと近づけ……その目を睨みつけた。
「私を全力で殺しに来い、フィアット・コルデーロ。
いつでも、どこであろうと……受けて立ってやる」
フィアットは……滾る復讐心を目に浮かべ、はやてを睨み返した。
「必ず……何年かかっても、貴様を殺してやるッ!!」
「……ああ。気長にやればいい」
フィアットは……生きる気力を、取り戻した。
◆▪◆　◆　◆
拘留の後……人気の少ないアースラを、軽装で歩くクロノの姿があった。
人気が少ない理由は……あの日、騒動を起こした局員たちが、片っ端から拘束され、シフトを外れ……結果、アースラの機能がマヒしているからだ。
リンディは、監督責任を追及され、閑職へ左遷されることが決まった。
リンディは、クロノを一切責めることは無かった。それどころか、デイリン中将の発言を、公の場で非難し、最後っ屁までかましていた。
「……ここを歩くのも、今日で最後か」
クロノは、自分の私物を整理しにやってきた。……殆ど全てを捨てることになるのだろうが。
それよりも……もっと、大事な用事のために。
「……フィアット」
「あ……クロノさん」
閑散としたホールの中、フィアットが、ベンチに座っていた。
「こんなところに呼び出して、何の用ですかぁ……？」
フィアットもまた、オペレーターの任を解かれ、ある人物の監視下に置かれることが決まっていた。

保護観察処分とはいえ、彼女は現役の局員。
しかも、勤務先は未公開ときている。
今日、この日を逃せば、話が出来る日が来るとは限らない。
「……きみの母、ルカ・コルデーロは、十年前、闇の書の主となった」
「はい、知っています」
「……僕の父、クライド・ハラオウンもまた、航行艦エスティアで、運命を共にした」
「はい、知っています」
「……正確には、君の母と共に、小型艇に乗り込み……エスティアのアルカンシェルに、撃沈された」
「……グレアムに、闇の書を渡さないために、ですね」
グレアムの所業を知り、１０年前の真相も、大部分は掴んでいた。
……その察しのいいところは、よく似ている。
「そうだ。君の母を、渡さないために」
それが、クライドの下した決断。
「そして……孤独のうちに、逝くことがないように」
「……？」
フィアットはそれに、僅かな引っ掛かりを感じた。
「……クライド艦長が、責任感が強い人物であったことは伺っています。ですが、いち局員のため、家族を残してまで、命を投げ出す理由が、あったのでしょうか？」
「いち局員ではなく……愛した女性なら、十分にありえるだろう？」
「……!!」
フィアットが、目をむいて絶句する。
「……母さんには、まだ話せないよな、こんな話」
……間違いなく、墓石を蹴り壊し、怒り狂う。そして泣く。思い出してはさめざめと、延々と泣き続けるだろう。
「チッ……あの色ボケ親父め……！」

がりがりと頭を掻き、苛立たしげに舌打ちをした。
「お、おかあさんは……おとうさんは、いないって……」
フィアットは、おろおろと狼狽した。嘘じゃなかろうか、と。だが、クロノの苦い表情と……面立ちや、髪質を見て、静かになった。想像だにしていなかったとはいえ、何故、今の今まで気づかなかったのか。
言葉に詰まるフィアットに、クロノは、滔々と、言葉をかけた。
「もし、いつか……互いに、落ち着ける日が来たら。……そのときは、ゆっくりと話をしよう」
今はまだ、落ち着ける状況ではない。
それは、『いつか』の話だ。
だが、それを、伝えることが出来れば。

「いいだろう？　……姉さん」

クロノの腹違いの姉、フィアット・コルデーロに、天涯孤独では無いのだと。
「……うん。クロノ」
フィアットは、泣いているような、笑っているような……ぎこちない笑みを、浮かべた。
……それは、失って久しかった、フィアット自身の、笑顔だった。

◆◆◆◆

「なぁ、汝……」
弱気な声を出すアーフィエル。はやては、それをくすっと笑った。
「……良かったのか？　あやつの母親を殺したのは、我……」
「お前の罪は、私の罪だ」
転送ポートを経てやってきたのは……白亜の建物。美香が入

院する、病院だった。
「さて……悪いけど、ここからは本当に、私一人の問題だ」
建物の中は、閑散としていた。それというのも、三週間前の事件の際に避難した患者たちが、まだ半分も戻ってきていないからだ。
中庭のベンチに座り、少し待つと、からからと、車輪が回る音がした。
「姐さん！」
姉の美穂が押していた車椅子を、自分で漕いで、はやての隣までやってくる。
「よっ」
「はやてちゃん、久しぶり」
美穂がニコリと笑った。
「いきなりメールをもらって、驚いちゃったわ」
美穂にメールをして、会う時間を作ってもらったのだ。
「そうそう、今日は、弟のヨシヒコも呼んだの。なんだか、会社で一人欠員が出て、その枠に正社員として内定をもらったみたいで……」
うわさをすれば何とやら。
中庭にやってきたそのヨシヒコとやらは、丁度影に入っていて、はやての目には見えなかった。
「うーッス。なんだよ姉貴」
「なんだ、じゃないでしょう？　前から言ってた、美香がお世話になってる……」
「ああ、そーいや……」
（ん……？）
どうにも、聞き覚えのある声だった。そして。
「どーも。美香の兄貴でヨシヒコって言いま……」
建物の影から、彼が出てきて……
「「あー!!」」
互いを指差し、驚愕していた。

「びっくりしちゃった。お兄ちゃんと姐さん、知り合いだったんだね」
　輪の中の美香が、そんなことを言っていた。
「あ、ああ……まぁ、な」
「つーか、お前だったのかよ」
「……似てねー兄貴だな」
「ほっとけ。……お前、ちゃんとマトモなメシ食ってんのか？」
「食ってるよ。……たまにそれ以外も食うけどな」
　けらけらと笑い合う。
　そんな会話の中……
「もう酒には懲りたか？」
　ヨシヒコが、バラした。
「お、お前！　ここでバラすことじゃねーだろ！」
「あ、ヤベっ」
　二人して口を塞ぐが……
「酒……？」
　美穂の気配が、はっきりと変わった。
「じゅーすだとおもってれじにもっていきました。よしひこくんはとめませんでした」
　棒読みである。
「ちょ、おまっ……馬鹿、」
　……全てをヨシヒコに押し付けた。
「……ヨシヒコ!!」
　呼びつけられたヨシヒコが、背筋を伸ばして目をそらした。
「は、はいっ!?　何も知りませんッ!!」
「嘘おっしゃい!!　ちょっとこっち来なさい!!」
「あ、あでででで!!　姉貴、耳、耳がぁああ……」
　……ヨシヒコは、美穂に引きずられて行ってしまった。
「……」「……」
　二人になってしまうと、少しだけ、さびしく感じる。
「あ。姐さん姐さん！　わたしね、姐さんがいなくても、ちゃんと魔法の練習してたよ!!」

「……そうか」
美香の頭を撫でる。
「これでまた一歩、一人前の魔法使いに……」
「美香。あいつらは、大事？」
「……え？」
その唐突な問いかけに、きょとん、とした表情を見せる。
「お姉ちゃんと、お兄ちゃんは、大事？」
「あ……うん。大事、だよ」
「そうか」
はやては、勢いをつけて、ベンチから立ち上がる。
「遅くなったけど……美香、プレゼントをあげる」
「え、ホント!?」
ぱっと、うれしそうに顔を綻ばせる。
はやても、つられる様に笑顔になり……懐から、木箱を取り出した。わくわくした顔の美香に、それを渡す。
促し、開けさせる。
「……わぁ！　綺麗!!」
……木箱の中に入っていたのは、ペンダント。毎度おなじみ……奈々謹製の、銀細工である。
一対の翼が、カットされていない、宝石の原石を囲い来むような形状。原石は敢えて固定されておらず、翼の中を、からからと動き回る。
「気に入った？」
「うん！　ありがとう!!　……姐さん？」
美香は……はやてが、何故か、寂しそうな顔をしているのを、見てしまった。
奈々の、銀細工……それは、依頼人の願いを、込めることができるというもの。
では、はやてが託した願いとは。
「おいで。かけてあげる」
箱から取り出したペンダントを、美香の首に掛ける。そして……

「美香。あなたはもう、何にも脅かされない」
ぐいっと美香を抱きよせ……言葉を続ける。
「世の理不尽も、他人も、自分も……その全ては、あなたのために回り始める」
美香は、家族の愛情を受け、これからもまっすぐに成長していく。
その中に……自分のような咎人は、居てはならないのだ。
「でも、……でも、魔法が、無かったら……」
歩けない。その不安に、はやてが答える。
「美香の足が動かないのは、」
先日、アースラの検査で発覚した事実。
「お前の中に、二つのリンカーコアがあるからだ」
身体機能と、密接な関係にあるリンカーコア。まだ未発達な幼少期であれば、共存も可能だったのだろうが……心身の成長に合わせ、リンカーコアもまた大きくなり、身体機能に齟齬が生じてしまったのだろう。
だがそもそも、何故、美香は二つのリンカーコアを持って産まれて来たのか。これは、見立てだが……
「多分、お前はもともと、双子として生まれてくる筈だったんだ」
稀にだが、胎児の状態の双子が融合し、片方に吸収され、一人として産まれてくる事例が存在する。
美香は、それだったのだ。
「だから……そのリンカーコアの魔力を、別の場所に逃がすことが出来れば、自然に良くなるさ」
ペンダントが、その依り代となる。
「誰だって、きょうだいを傷つけたくなんて、無い筈だからな」
「で、でも、私、また歩けるのか、わかんない……自信ないよ……歩けるまで、傍にいてよ……姐さん！」
はやては、寂しそうに笑い……首を横に振った。
「もう、『姐さん』はおしまい。」
「……!!」
今日、この日が……別離の日なのだと、気づいてしまった。

「嫌だ……嫌だよ……!!」
力いっぱい、はやてにしがみつき……はやては、仕方がなさそうに、頭を撫でる。
そして……
「私の擬似魔力神経を……美香にあげる」
……はやての下肢は、事故以来、機能を失っている。それを稼動させていたのは、魔力による恒常的な身体操作。今や、通常の神経と同じように、思考のままスムーズに動かすことが出来ている……それを、美香に譲り渡すということは。
「ま、なんとかするさ。……そうじゃないと、あの馬鹿に笑われちまう。……『なんだ、進歩が無いな』……って」
ぐずぐずと洟をすする美香。
「これが、最後の贈り物だよ」
手元の、至天の書を記述する。書き記されたのは、僅かな数行。その程度の術式であれば、わざわざ『魔導創造』を用いなくとも、既存の組み合わせで作成できたはず。それをしなかったのは、きっと……はやてなりの、美香への心尽くし。
それを、ペンダントに使用する。
「――全てを、忘れなさい。魔法のことも――私のことも。これで……契約、完了だ」
美香の頭に添えた手から、じんわりと、暖かで静かな……夜のような、優しい魔力が、注がれる。
「至天の王の名の下に、汝に輝く未来を贈る」
そして……別れの言葉を、トリガーボイスとして、発動。

――――――――――さようなら、美香

……

……

……

……

「……あれ？」

柳瀬美香は、入院している病院の中庭に、ぽつんと……

――立ち尽くしていた。

頬が、不自然に濡れている。

ごしごしと拭っても、それが何だったのか、わからない。

その視界の隅に……誰かが、車椅子で去っていく姿が、映った。

「――――あ、」

誰なのかは知らない。分からない。

だが……何故か、たまらなく、追いかけたくなった。

二本の足で、元気に駆け寄って……

「んー……あれ？　どうして、ヨシヒコにお説教してたんだっけ……？」

「マジ勘弁してくれよ、姉貴……流石に泣くぞ、オレ」

聞こえてきた、愛しい家族の声。美香は、そちらを振り向くことを、選択した。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん」

出迎えた美香の姿を見て、二人は……

◆・◆　◆　◆

――――……!!

向こうから、悲鳴とも、歓声ともつかない声が聞こえてくる。

からからと、車椅子を押し、その場を離れるはやて。

「……」

……反応の無くなった足の感覚も、どこか懐かしい。

レジアスらが待つ場所まで、車輪を回す。

――がつっ！

「あっ、」

車輪が、路上の石ころに乗り上げ、バランスを崩す。がしゃんっ、と大きな音を立て、身を投げ出された。
「う……」
からからと、掴む地面を見失った車輪が、空しく回る。
「はやて！」「主！」
レジアスやユーノが、駆け寄ってこようとする。
「来るなッ!!」
はやては、それを鋭い声で制止した。
「自分で、立てるから……!!」
腕の力で、車椅子を支えにして……動こうともしない足を、叱咤する。
……ぴくり、と。はやての錯覚でなければ、僅かな反応が、返ってきた。そして。
「……ぅあああっ!!」
ほぼ、腕の力。車椅子を支えにしなければ、崩れ落ちてしまうような、頼りなさ。だが、確かに……はやては、自分の足で、立ち上がった。
「……くそっ……くそっくそっくそっくそぉっ……!!」
だというのに、はやては、大粒の涙を流しながら、毒づいていた。
「誰よりも、一番に……アイツに見せたかったのに……自慢してやりたかったのに……褒めて、欲しかったのに……!!」
……一番に認めてほしい相手は、もう……いない。
「ちくしょぉおおおおおおっ――――!!!」
……冬晴れの空に、叫びが空しく響いた。

◆・◆　◆　◆

――海鳴市に、雪が降っていた。
ざくざくと、新雪を踏みしめて、フェイトが歩く。
その後ろを、プレシア、アルフ……それに、何故かレヴィが、つ

いてきていた。
「もうちょっとだよー」
フェイトは、声だけは明るく、先頭をずんずんと進んでいく。
どうみても空元気。だが、この場にいる皆が、同じ状態なため……指摘するものは、いなかった。
四人は……海鳴市の小高い丘へ向かって、歩いていた。
そして、丘の展望台まで来たところで……その歩みを止めた。
『あ……来てくれたんだ』
一本の木の下で、頼りなく揺れる、水色の炎の影を見つけた。
「や。……アリシア」
手を上げて挨拶するフェイト。それに応じるアリシアの手が、霞み、消えかける。
『いやー、間に合って良かった良かった』
「……リンディにはもう、頭が上がらないわね」
……プレシアを再び連れ出すのに、八方手を尽くしてくれたリンディ。前回は、戦闘データ収集。そして、今回は……
「レヴィの、自立行動のための魔力供給……だったかしら」
……よくもまぁ、あれこれ思いつくものである。
『ほんと、いいタイミングで来てくれたねぇ。……もって、あと1時間ってとこだったよ』
「ッ……!」
元々、このアリシア自身……秀人の蒼炎によって、アリシアの残留思念が形を得たものだ。むしろ、今日この日まで保てたことが、奇跡のようなものだった。
『残った時間で……何をしようか?』
「……」
何がしたいのか……いや、やりたいことが多すぎて、一つを選べないでいる。
だが、悩んでいる時間も、既に惜しく……
「ゆきがっせん、やりたい!!」
……フェイトの鶴の一声で、そう決まった。

なんで雪合戦なんだアリシアは雪玉握れないだろうつーかなんで雪合戦だよ……と無粋なツッコミをするものはいない。
『よし、じゃ、チーム分けだね！』
まぁ、アリシアが楽しそうだし、よしとすることにした。
「くらえーっ!!」「きゃっ！」
フェイトの放った雪玉が、プレシアの顔面を捉えた。
「ふふーんだ、しょーぶにくしんのじょうはかんけいないのだ!!」
「やったわねぇ……このっ!!」
プレシアが投げ返した雪玉は、何故か大暴投。
「ぎゃっ!?　ぺっぺっ……！　プ、プレシアぁあぁ！」
「ご、ごめんなさーい!!」
同じ組であるはずのアルフを直撃していた。
「あっはっは！　……ほら、レヴィもなげるなげる!!」
「えっ、あっ、はい姉さん……せやっ!!」
レヴィの一投は、ふよふよと浮いていたアリシアにヒット。雪は瞬時に蒸発したのだが……
『きゃー！　つめたーい!!』
「「嘘こけ!!」」
茶目っ気のあるアリシアのリアクションに、総ツッコミが入った。
そのやりとりがおかしく、面白く……自然と、全員が笑顔で、他愛の無い遊びに没頭していった。
「はー、はー……もーだめ。もーうごけない……」
「……なんだか、童心に返れたわ」
「ううう……負けたぁ……」
「……勝ち負けがあったのでしょうか？」
『あー、楽しかった』
その辺にへたりこみ、座り込み、荒い息をつく一家。
目が合うと、自然に笑顔になれて……いつまでも、この時間が続いてくれればいいと、誰もがそう願う。だが……
『じゃ……そろそろ、行くね』
……アリシアの言葉が、思い出させる。

「……ヤだ」
「フェイト、」
駄々をこねるフェイトを、プレシアが諌める。
「ヤだったらヤだぁ！」
……耐えていたのだろう。
兄のように慕っていた秀人が消えて……何も感じていないはずが、無かったのだ。
「うえええん……!!」
泣き出してしまうフェイトを、アリシアが、仕方なさそうな顔で見つめていた。
『フェイト』
目の高さを、フェイトに合わせる。
『……夢が、できたんでしょ？』
「……」
ぴくん、と、フェイトの肩が震える。
「あ……でも、あれは……ほんのおもいつきだから……」
『泣き虫のままじゃ、どんな夢も叶えられないぞ。大人にならなきゃ』
そして、僅かに目を伏せ……
『――大人になれなかった、私の分まで』
「……!!」
……そう。アリシアとて、別れたくないのだ。この、奇跡の様な時間が、いつまでも、いつまでも続いて欲しいと願っているのは……ほかでもない、アリシアなのだから。
『アルフ』
「なんだい？」
『これからも、フェイトを守ってあげてね』
「当然だろ。あたしの使命だ」
『でも、甘やかさないように。食べた後には、ちゃんと歯を磨かせること。夜更かしをさせないこと。……いい？』
「……肝に銘じます」
……以前、フェイトを虫歯だらけにした経験から、神妙に頷いた。

『レヴィ』
「はい。……というか、私はこの場にいてもいいのでしょうか……？」
当惑した様子のレヴィに、アリシアは、どこか怒ったような目を向ける。
『あなたは、私とフェイトの妹で……うちの末っ子。そうに決まってるじゃない』
「……はい」
『あなたの魔力光はね、私とお揃いなんだよ。上手に使って、大事な人を守ってね』
「はい、アリシア姉さん」
……そして、最後は……
『ママ』
「アリシア」
『……』「……」
無言で、見つめあう。アリシアは、慎重に、言葉を選び……
何度もそれを呑み込み、ようやく、口に出来た。
『私のこと……忘れないでね』
「アリシアッ……!!」
プレシアは、アリシアの炎を抱きしめる。
『……ママ、ずっとずっと、言えなかったよね』
プレシアと抱き合いながら、アリシアが言う。
『誕生日プレゼント、ありがとう』
……あの、最後の日……プレシアへとねだった、誕生日プレゼント。それは……『妹が欲しい』という、他愛の無いもの。
『でも、それは向こうへは持っていけないの。だから……ママに、預けておくね』
「預ける……？」
そう、と、アリシアが頷く。
『大事にしてね。……いつかまた、託せるひとに会えるまで』
……託せるひと。そんな心当たり、一人しかいない。

「……秀人が？　でも、彼は……」
『私は、あの人の蒼炎で、形作られた。その勘だけど……
……あの人は、まだ生きている』
「「!!」」
沈殿していた諦めが、僅かに晴れ……希望が、芽生えた。
『――――――『さよなら』は、寂しすぎるよね』
……残らず、頷いた。
そして、相応しい別れの言葉も。
それは……
――またね。
たとえ、それが果たせずとも……誓うことに、意味はある。
――家族が見送る中、アリシアは、天へと還った。

「……おかーさん」
丘を下る、帰り道。
「……なに？」
「あのね、さっき、アリシアがいってた……ボクの、ゆめ」
「……興味あるわ。教えてくれるの？」
「うん。……わらわないでね？」
少し不安そうなフェイトに、プレシアが吹き出す。
「笑うわけ無いでしょう？　さ、教えて頂戴」
「うん……」
そして、少しもじもじとしながら……
「ボク、執務官になりたい」
……プレシアたちは、目を見開いて驚いた。
「クロノには、むずかしいってきいてるし……ボクが、そんなにあたまよくないのはわかってる。でも……なりたいんだ」
言葉から、生半可な決意でないことが伝わってくる。
「……もう、だれも、……とりこぼさないために」
「そう……」
プレシアは、フェイトの夢を知り……

「なれるわ。私の娘だもの」
彼女なりの。激励をかけた。
◆▪◆　◆　◆
高町なのは。
彼女はこの春、一人の少年と出会った。
彼は、強く、優しく……彼女の孤独を、埋めてくれた。
彼に、父や兄を投影していたことは、彼女自身、否定はしない。
彼と出会ったその日……紅い宝石と、奇妙な小動物と出会った。
……そして彼女は、『力』を手にした。
力を手にしてから、いくつもの出会いや、変化があった。
それは、環境であったり、心境であったり……強敵との邂逅であったりした。
孤独だった彼女の周りには、いつしか、大事な人が増えていった。
こうして、自分は、彼や、大事な人たちと共に、毎日を楽しく過ごしていけるのだと、思っていた。
だが、それは違った。
時が過ぎても変わらないものなど、ありはしなかった。

「……」
がらんとした部屋の中、なのはは佇んでいた。
部屋の主である彼は、もういない。たった一人がいないだけで、この部屋は、こんなにも寒々しく、がらんどうになってしまった。
部屋に残っているのは……彼と共に過ごした、日常の残滓。
「!!」
彼女は、腰に提げていた二刀を抜刀し……彼と共に買った本が詰まった本棚を、切り捨てた。
――彼が使っていた座布団を切り捨てた。
――彼が購読していた雑誌を切り捨てた。
――彼が遊んでいたゲーム機を切り捨てた。
――そして、彼が、彼女のために選んでくれた、星の散りばめられ

たマグカップを……
「……、く、……」
……切り捨て、られなかった。
彼が使っていたジャケットも、彼が買ってくれたヘルメットも
……
「う、ぁあああ……!!」
……彼の残滓を、消すことが出来なかった。
一通り、泣いて、泣きはらして……
「……行くよ、レイジングハート」
彼女は、その部屋を後にした。
「……よう」
……彼女を出迎えたのは、車椅子に乗った少女と、それを押す、赤毛の少女だった。
「アイツを探しに、か？」
「……」
図星を突かれる。
「無理だよ。もう、管理局はあの事件を、終わったものとして処理している。今更、協力は取り付けられないさ」
「……、それでも、行く。邪魔しないで」
横を通り過ぎようとした。だが、車椅子の少女が、行く手を阻んだ。
「……なに」
「あの事件は、解決済み……表向きは、な」
表向きは……その言葉に、何かを感じた。
「探すなら、『裏』からだ」
そして取り出したのは、一枚の黒いカード。
「凶鳥部隊への、連絡手段だ」
管理局の暗部……極め付きの、『裏』。
「……頂戴」
「駄目だ。お前は、一人だとありえん無茶をする」
ひょい、とカードを仕舞う。
「『一人だと』、な」

そして……車椅子の少女もまた、決意を見せる。
「一緒に行くぞ」
……共に、闇に潜ると、そう言った。
「秀人が帰ってくるまで……私が、お前を支えてやる」
「……どうして」
どこに、そのような義理があるというのか。
「……」
少女は、やれやれ、といった風な顔で……

「――――――――友達だろ」

彼女たちは、歩き出した。
「ふん……私、はやてに支えられるほど、落ちぶれてないもん」
「へっ……だったら、おめーも私を支えろよ。なのは」
憎まれ口を叩きあいながらも、明るく、楽しげに、歩いていく。
その先が、無限の闇であることなど、一顧だにせず。
……車椅子を押していた、赤毛の少女は、内心呆れ返っていた。

――『ほんっと、似たもの同士だよな、こいつら』……と。

彼女は……この後、表舞台より姿を消すことになる。

――皆は、歩き出した。
――それぞれの道を。それぞれの未来へ向かって。
――その先が、何に繋がっているのかは

――――――神のみぞ知る

◆・◆　◆　◆　何時でも無い何時か。何処でもない何処か
◆　◆　◆　◆

――ぼけなす。おまえは、本当にどーしようもないぼけなすなの。
――……
――意識はあるの？　まぁ、どっちでもいいの。
――おまえの肉体は、あの虚空の中、消滅することなく残ったの。
――いくらおまえの身体でも、あの虚空に呑まれれば、癒す間もなく消滅していたの。
――誰のおかげかって？　そんなの、このアイのおかげにきまっているの。
――感謝するがいいの。ふふん。
――……はぁ。張り合いが無いの。
――いつまで、死んだ振りをしているつもりなの？
――……まぁ、アイも、ちょっと寝るの。
――肉体を恒常的に保護するために、思考を凍結して、処理をそっちに回すの。
――それはもう、死にたくなるほど退屈な時間なの。
――でも、いいの。
――おまえは、だらしなくって、ふがいなくて……愛おしい、アイのマスターだから。
――アイは、おまえを愛するために、産まれてきたのだから。
――おまえはきっと、ここを出るときがくるの。

――それまでは……

――アイが、ずっと傍にいてやるの。

――――――ほら、聞くの。向こうから、おまえを呼ぶ声が――――

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第一話

――それは、大きな変遷だった。
「……生きてる？」
「……」
私は、何も答えることが出来なかった。
頬についた、鉄錆のような臭いがたまらなく不快で……でも、それを拭うほどの気力は、残っていない。
――世界は優しさに満ちていて、安らいでいると、思っていた。
「……間に合ったわけじゃ、ないんだね」
「……」
ただ、しゃがみこみ……私を抱きしめたまま硬直する姉の体温を感じていた。
――でも、それは違った。
「……それでも、無事で良かった」
「……」
ぎゅうっ、と、姉が少しだけ、身じろいだ。そして、感じる。姉の腕から感じる、異質な質感を。不自然なまでにゴツゴツと硬い、無機物の感触。でも、怖くは無かった。それは、私を守ったモノだから。
――世界は、優しくもなく、安らいでなんて、いなかった。
「……強いんだね」
長い沈黙の末、私の口を衝いて出たのは、そんな言葉だった。
「……」
「あなたみたいに強かったら……こんなことには、ならなかったのかな」
止まらない。きっと、感情を抑える弁が、バカになっている。
「……それは、どうだろう」
目の前の人は、少し困った風で、首をかしげた。
――世界は、汚いものに満ちている。
「……じゃ。そろそろ、正規の部隊が到着する頃だから」

すっくと立ち上がったその人の背丈は、思いのほか小さい。
静かな無表情のその人は、怜悧で、鋭くて……刃のような、印象だった。
――強くならなきゃ。
忘我の中……私の胸には、その思いが、芽生え始めていた。
憧れとか、決意とか、希望とか……そんな、前向きの気持ちじゃない。
言うなれば、それは、脅迫に近いものだった。
――もう二度と、こんなことが起きないように。
こんなことになりたくなければ、強くなるしかないのだ。他人を頼らず……たった一人でも、情況を打破できるほどに。そのための力は、その素養は、既に備わっている。
――今度こそ、間違いを起こさないために。
「――」
向こうのほうで上がった声に、その人は、ふと顔を上げた。
「……それじゃ」
歩き去っていく。先ほどの呼び声の主は、せっかちな人なのか、部屋の入り口まで、既にやってきていた。
「帰るよ　……
――――――――――――――――なのは。」

……なのは。
それが、彼女の名前。
「カレン、うるさい……すぐ行く」
そして……彼女達は、自身らの痕跡を抹消し、去っていった。
「……」
「人質、確保、――なんだ、これは……!?」
……遅れてやってきた、見慣れた制服の人たちに、私達は発見された。
近くに落ちていた布で、姉の、無機物の腕を覆い隠す。それを、じ

ろじろと見られるのは、何だか嫌だった。
でも……きっと、分かってしまうのだろう。その無機物の腕が、何を為したのか。
もう、無かったことになんか、できない。
だから。
強くなろう。
――もう二度と、姉に罪を犯させないために。
◆・◆　◆　◆
そして……季節が何度か、過ぎ去った。
◆　◆　◆　◆
「はひー！　はひー!!」
ばたばたばたばた。
（い、急げ、急げー!!　遅れるぅぅぅぅぅ!!）
……さわやかな朝……とは、とても表せない。
足は着慣れない制服を突っ張らせフル回転、額に髪の毛が汗でひっつき、口は全開で酸素を吸入する。
「もォおおおお!!　なんで、しょっぱなからこーなるのォおおおお!?」
朝、目覚まし時計が止まってるなんて……！
大きな時計塔……あった、目印!!　もう少し……！
――リーンゴーン。リーンゴーン。
あああああ、でも鳴っちゃったぁ!!
「遅刻だぁあああああああああああ!!」
『第四訓練校』。そう掲げられた門の中へ、全力で駆け込む。
――私、スバル・ナカジマ。今日から、管理局員の……端くれ。
『……で、あるからして……』

あああ、しまった……入隊式が始まっちゃった……

「……入るに、入れない……」

今更、この講堂のデカい門を開けたりしたら、間違いなく目立つ。悪目立ちというやつだ。

でも、入らなかったら入らなかったで、入学早々、お説教が漏れなくついて来るだろう。

「あああああ……どうしよう……」

うんうんと、究極の選択を迫られる私。

「邪魔よ」

……その私の尻を、何者かが蹴飛ばした。

「あいたっ!?　……だ、誰!?」

ばっと後ろを振り向くと……私と同じくらいの子が、私のことを睨んでいた。

誰……だろう。先輩……という線は、無いと思う。訓練校の訓練生であるなら、三等陸士の階級章を着けている筈だ。

……ってことは、私と同じ、新入生？　じゃあじゃあ、この子も、遅刻したのかな？

どうする……？　一緒に入ろうかな……？

……などなど、小ざかしくも責任の分散を試みる私をあざ笑うかのように、その子は、ずんずんと、私を押し退けるように門の前に立ち……

――どばーん。

「……へ？」

両手で、思いっきり、全力で、手加減無しに……両開きの扉を、全開にした。

私も、その子も……というか、私たち二人が、曝け出された。

『……ゴホンッ』

咳払いと共に……講堂にいた総勢数百名の視線が、収束砲のように私たちを射抜く。

「あぅ、あぅ、あああ……」

ヤバい。ヤバい。ヤバい……！

「貴様らぁあああああッッ！　入学早々遅刻とは、どういうつもりだぁあああああああッ!!」
　ぎゃあああああああ怒髪天を衝くムッキムキのマッチョが走ってきたぁあああああああ!!
　講堂とは逆方向へダッシュ!!
「違うんです！　違うんです!!　このヒトが開けたんですぅぅぅぅぅぅぅぅッ!!」
「開けなかったらどうするつもりだったぁあああああああああああああああッ!?!!」
「ごめんなさいごめんなさいわからないでありますぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!!」
「待たんか貴様ぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああッ!!」
　――――スパァンッ!!
……私の局員生活一日目は、革靴の硬さを頭で知ることから始まった。
「氏名、年齢ッ!!」
「スバル・ナカジマ……12歳、であります……」
　入学式が終わったのか、講堂から、続々と人が出てきて……通路に正座した私を、じろじろと変な目で眺めていく。中には、『プー、クスクス』とか、思いっきりバカにしている人までいて……な、泣かないもん……
「年齢が若かろうが、訓練生は訓練生……特別扱いはせんッ!!　運動場へ駆け足ッ!!」
「は……はい、」
「声が小さいッ!!」
「はいっ!!」
　あああああ、なんでこうなっちゃうんだよおおおおお……
「……」「……」
　あ。さっきの子だ。

支給されたばかりの運動着に着替えて、横に並ぶ。当然ながら、運動場にいる訓練生は、私たち二人だけだった。
「ナカジマ、ランスター両名！」
「はいっ！」「……はい」
「貴様らがここにいるのは何故だっ!?」
「入隊式に、遅刻したからですっ!!」
「そうだ！　……特にランスター！　貴様、座学主席合格の身の上だろう！」
「えッ……」
座学……主席？
そうだ……思い出した。試験の成績上位者の名前が、掲示されていて……そのトップにあった名前が、確か……
「……ティアナ・ランスター？」
「……」
名前が聞こえたのか……ジロッ、と、妙に不機嫌な目を向けてきた。
「ナカジマぁ!!　誰が発言を許可した!!」
うわぁ教官にも聞こえてたぁっ!?
「はいっ!!　失礼しました!!」
「貴様らには、反省が足りていないようだな……」
いやぁああ……!!　やることなすことが、全部裏目に……？
「グラウンド１００周！　腕立て１００回!!」
「……」
ええっ、と出かかった言葉を飲み込む。
ぐるりと見回す。グラウンド一周……だいたい、４００メートルくらいかな。
「始めぇっ!!」
「はい！」
とにかく、走り始める。
「……」
ランスターさんは、すーーっごく不満そうな顔で、淡々と足を動かしていた。

「ざっけんじゃないわよ……たかが遅刻くらいで……ったく、やってられるかっつーのクソッタレが……」
うわぁ……ぶつぶつと、恨み言が聞こえる。
少なくとも、走っている間は、教官のチェックも甘くなる。
「……で、でもさ、よかったじゃん」
並走して、小声で話しかける。
「……何が」
「１００周だよ？」
「……だから、１００周でしょうが」
……？　なんだか、かみ合っているようで、かみ合っていない気がする。
「アンタ、何言って……」
「たったの１００周だよ？」
教官も……初日だから、手加減してくれたのかなぁ？
「さすがに５００周とか言われたら、ちょっと疲れちゃうけどね……」
あはは、と愛想笑いをする私を、ランスターさんは、何とも言えない……なんというか、珍獣でも見るような目で見ていた。
「アンタ……ナカジマ、って言ったわよね」
「！　……うん、そうだよ！」
やった！　名前、覚えてもらえた！
「……あいつか」
「え？　なに？」
声が小さくて、聞こえなかった。
「なんでもないわよ。……気が散るから、もう話しかけないで」
……それっきり、何か話しかけても、返事は返ってこなかった。
うううう……嫌われたのかもしれない……
「……ぜー……はー……」
……あれ？
ランスターさん……どうしたんだろう。汗だくだくで、今にも地面にへばりつきそうだ。具合悪いのかな……？

「よろしい。では、午前中はここまで！」
ほっ……やっと、解放された。
教官が見えなくなるまで、直立不動で見送って……
「……もうだめ」
へっ？
――ぱたんっ。
え、えええええええっ!?　ちょ、ランスターさん起きてっ!!
まだ教官いるのに!!
「……む」
あああああ、見つかったぁ……！　もう駄目だぁ……!!
「……」
と、思ったら……あれ？　何も言わないで、教務棟の方に行っちゃった。助かったみたいだ。
「どうしたの？　早く行こうよ」
やっぱり、具合が悪かったらしい。
「うっさい、このバカ……」
がぁん……バカって言われた……でも、ほうっておくのも可哀想だし。
「よいしょ」
「な、あ、あんた、何やって……！」
「どうせなら、一緒に行こうよ。……一人だと目立つし」
いわゆる、道連れ。
「だいじょーぶだいじょーぶ！　寮までだから！　そっからは別だから！」
よーし、そうと決まれば行動開始！
えっほえっほとランスターさんを背負って運ぶ。
途中……やっぱり目立った。目線が痛い。
でも、エントランスを抜けて、寮まで来れば、人通りは減った。
「降ろしなさい、もう歩けるわ……」
意地を張っている風では無さそうだし……ま、いっか。
「……着替えて、シャワー浴びなきゃ……」

あー……確かに、かなり汗臭いかも。
寮は二人部屋だけど……ルームメイトの人、使ってなきゃいいなぁ。
ランスターさんも、部屋まで自力で歩いていくみたいだ。
曲がり角を曲がって。階段を上がって。
「……」「……」
……同じ部屋の前で、立ち止まった。
「……あの、ランスターさん」
もしかするけど。
「……何号室？」
……ですよねー。それじゃ、１、２の、３。
「「３２号室」」
……なんということでしょう。
「同じ部屋かぁ……」
「……」
ランスターさんは、無言で、部屋に入り……がちゃっ。
「……へ？」
今の……『がちゃっ』て……！
「ちょっ……ランスターさん!!　私も入るんだけど!?」
ああ、鍵かけられてる!?
がちゃがちゃとドアノブを弄っていたら、ドアの向こうから、水音がしてきた。
「ああっ!?　シャワー、何で独り占めしてんのー！」
『……うっさいわね。黙って待ってなさい』
私だって、使いたいのにー!!　ひどいっ！　ひどいよー!!
――……結局、私が汗を流し終えたのは、午後の教練が開始される直前だった。
……午後。
「よーし、それでは、実習を始める」
マッチョの教官の声に、教室がざわめく。
実習……つまりは、初めてデバイスを手にして、魔法を使う時

間だ。
「ミッド式は杖、ベルカ式は槍、持参したものは装備の上で、訓練場に集合！」
用意された支給品へ、クラスメイトたちがわらわらと群がっていく。
よーし、私も準備しなきゃ。
よい、しょっと。
――ごっすん。
コレと付き合い始めて、1年くらい経つけど……相変わらず、重いなぁ。
ええっと、ランスターさんは……いた。支給品を取ることなく、自前の入れ物から取り出していた。
「わ、カッコイイ！　銃型だ！」
中折れ式で……弾は、魔力カートリッジを二発、そのまま使うみたいだ。ガンベルトには、ホルスターが二つ。二丁拳銃だ！
「……アンタ、何それ」
うるさそうに振り返ったランスターさんは、私の装備を見て、不思議そうにしていた。
「え？　私の装備だけど……」
ローラーブーツを履いて、ナックルを右腕に填めて……
「……正気？　シューティングアーツなんてイロモノで、局員やろうっての？」
がぁん。い、イロモノ……
「……早く行くわよ」
「はーい。……ね、ランスターさんは、何で銃で……」「ナカジマ」「あ、はい？」
あれ……遮られちゃった。
「仮コンビだか何だか知らないけど……私は、他人と馴れ合う気は無いの。必要以外で、話しかけてこないで」
……そのまま、ランスターさんはツカツカと一人で歩いていってしまった。

「……怒らせちゃった、かな」
ちょっと、馴れ馴れしくしすぎたのかも……
私だけが一方的に気まずいまま、訓練が始まった。
まずは……立てられたゴールマーカーまで、二人で一直線にダッシュする訓練。
やっぱり、初日だけあって、かなり簡単だ。もしかしたら、オリエンテーリングも兼ねているのかもしれない。
「レディ、」
教官の指示に従い、二人でクラウチングスタートの姿勢をとる。
よーし……最速タイム、叩き出しちゃうぞ……！
「ゴーー!!」
フルスロットル！　よっし、いいスタート！　これっぽっちの距離、一瞬だ！
「フラッグポイント確保!!」
一瞬で、円筒状のゴールマーカーを通過！
タイムは……よし、ベストスコア！　……あれ？　何で、片方しか表示されてないんだろう？　しかも、私のタイムが消えて、『ｅｒｒｏｒ』……不可の文字が表示された。
「ナカジマぁあああああああああああああああ!!」
びっくぅ!!
「はィいいいいっ!!」
飛び跳ねて１８０度回転して教官の正面に気をつけー!!
「何をやっとるか貴様ぁ!!」
怒り狂う教官のすぐ傍には……もうもうと立ち込めた土ぼこりを被る、ランスターさんの姿があった。
「コンビネーション不良！　腕立て２０回、始めェッ!!」
ひぇえええっ……!!
「……!!!!」
ランスターさんの目が、『次トチったらコロス』と、明確に私に語りかけていた。
聳え立つ壁を、先行した二人組みが協力して乗り越えていく。

「次、３２番！」
「はいっ！」「……はい」
　私は、ランスターさんを先に押し上げて、後から引き上げてもらうポジションらしい。
　よーし……名誉挽回！
「じゃ、行くよランスターさん！」
「……」
　へ……返事くらい、してくれたっていいじゃん……
　気を取り直して……組んだ腕に、ランスターさんが足を乗せる。
　ここから、全力で――！
「――だぁらっしゃあああああああああッ!!!」
　飛んでけぇぇぇぇぇぇっ!!
「ひぇぇっ!?」
　ふわりと、腕に掛かっていた体重が消える！　よし、すっごく飛んだ!!　これなら、壁なんて一ッ跳び……あ。
「ひゃぁあああああああああああああああああああああーーーーー……!!!」
（し……しまったぁあああああ!!）
　高く上げすぎた！　ランスターさんが墜落するぅぅぅぅぅぅぅっ!?
「馬鹿もん！　……オートバリア！　ネット起動!!」
　教官が何かやってるけど、間に合いそうも無い！　こーなったら……！
　――ぎゅいいいいいいんっ……
　ブーツの底に装着された２対６輪のローラーが、モーターからの動力を受ける！
「行くぞォおおおおおおっ!!」
　――……ドヒュンッ!!
　一気に、フル加速！

がっつんがっつんと、訓練場の不整地を踏み砕いて……

「わぁあああっ!!?」

ランスターさんを、キャッチ!!

よーっし！　救助成功……

「バカ！　このバカ！　前、前――――!!」

へ？　前？

――目の前に、校舎の壁がいっぱいに広がっていた。

（あはは……ブレーキ、間に合いそうも無いや……）

「「「　ふぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

――――ちゅどーん。

……

「……あ、あの、ランスターさ、」

「黙れウスラトンカチ」

ごろごろと、台車に石ころを満載して運ぶ。校舎の成れの果てだった。

……あのあと、校舎の壁を思いっきり殴りつけたおかげで、私達はかすり傷で済んだんだけど……校舎の壁が。よりにもよって、授業中だった教室の壁が。見事なまでに粉々の瓦礫になってしまった。

おかげで、教室は大混乱。

突入してきた私たちを出迎えたのは、灰で真っ白になったまま仏の笑みを浮かべる教官たちだった。

「初日から、反省清掃どころか……何で、土木工事なんてしなきゃならないのよ……!!」

「ごめんなさい……私の責任なのに……」

「連帯責任ってヤツ？　……くそっ、ふざけやがって……!!」

あうぅぅ……だからこうして、私が大きめの岩を運んでる

じゃーん……
「……やってられるか！」
——ガコンッ!!
ランスターさんが、荷車を投げ捨てた。そのまま、ツカツカと私のほうへ歩いてきて、胸倉を掴み上げた。
「どこぞのお嬢様かは知らないけど……お遊びでやってるなら、帰れっ!!」
……！
「遊びじゃない……」
「あァ……？」
それだけは……絶対に譲らない！
「私だって、遊びでやってるんじゃない!!」
「……」
「……」
にらみ合いが、しばらく続き……
「……ふん」
ランスターさんが私を突き飛ばして、終わった。
……
「……」
一日目を終えて、ベッドにもそもそと潜り込む。
あれから、ランスターさんとは話せず仕舞いだ。
「……」
消灯時間を過ぎても、なかなか寝付けない。
……と、隣のベッドで、がさごそと動き回る音がした。ランスターさんも、寝られないのかな……？
（声、掛けてみようかな……）
もしかしたら、仲直りするチャンスかもしれないし……
「……？」
ランスターさんが、ドアの方へ歩いていく。そして、がちゃっ、と……
（えっ、えっ……？　駄目だよ、無断外出になっちゃうよ……？）

消灯時間を過ぎての外出は、非常時をのぞいて、部屋の外も含めて厳禁。もし、教官に見つかったりしたら、放校処分だってありえる。
「ちょっ、ランスターさん!?」
さすがに、これは見過ごせない。一応、ルームメイトだし。
「……」
「……ありゃ？」
……隣のベッドでは、ランスターさんが普通に寝息を立てていた。
（気のせい……だったのかな？）
まぁ、いるなら、いいや。私も、眠いし……
……初日の夜は、更けていった。

そして、一週間くらいが過ぎた。
相変わらず、ランスターさんとは没交渉だ。朝は先に起きてどこかへ行ってしまい、夜は早々にベッドに入って寝てしまう。座学では、話しかけることは出来ないし、実技でも、必要最低限の事務的な伝達しかしてくれない。ほかの部屋の組は、打ち解けて、わいわいと楽しげに談笑しているのに。
せっかく、同い年で、訓練校の最年少コンビなのに……
こうして、朝食を共にしていても、ランスターさんは食器から顔も上げず、淡々と食事を進めている。
「ランスターさん、ニュース見た？」
「見てない」
……挫けそうだ。
「あの、最近問題になってる集団窃盗事件ね、犯人はまだ１０歳前後の子供なんだって」
そして、示し合わせたかのように、モニターにニュースが映し出された。
『追跡！　少年窃盗グループ！　犯人は富豪の子息!?』
……ちょっとアレなタイトルだけど、そう。この巷を賑わす物騒な事件の犯人は、とある富豪の御曹司と、同姓同名なのだ。ただ、その肝心の御曹司は既に故人であり、犯人ではありえない。

「でね、……あっ！」
――がしゃんっ！
振り向きざまに、肘が誰かとぶつかった。しかも、運が悪いことに、ぶつかった相手は、食器を取り落としてしまって……中身が、制服に派手に降り注いだ。
「……」
「ごごごごめんなさいっ!!　すぐ拭きます！」
やっちゃった、やっちゃった……！
しかも相手は……うわぁ！
「ごめんなさい、セリカさん！」
セリカ・クラウンさん！　代々、将官クラスの高官を輩出してきた名家の出身で、本人も入隊試験トップクラスのエリート！
「ちょっと、どうしてくれるのよ！」「あー！　ひっどーい！」「なんてことしてんのよ！」
セリカさんの周りにいた人達からも、口々に非難される。
「この制服、特注なのだけど……どうしてくださるのかしら？」
セリカさんは、口調は丁寧に……でも、明らかに不機嫌に、聞いてきた。
……っていうか、制服を特注って……家柄が良いと、そういう特権も許されてしまうのだろうか。
でも、とにかく、悪いのは私なんだから、謝らないと……
「……スバル・ナカジマさん、だったかしら？　初日の訓練やその他、いろいろと問題のある方のようね？」
周りの……なんというか、取り巻きの人達も口々に、「そうよそうよ！」「こっちはいい迷惑だわ！」と、囃し立てる。
食堂の視線はこの場に集中していて、逃げ場も無い。
「――辞めてはいかがかしら？」
……何だって？　辞める？　辞めるって、この、訓練校を!?
「や、やですよ、そんなの!!」
確かに、悪いとは思うけど……そこまで言われることじゃない！

「だって……あなた、皆さんの訓練の邪魔なんですもの」
「……!!」
邪魔。その一言が、胸にぐさりと刺さった。
「いくら、入隊試験の実技成績が良かろうと……訓練内容も満足にこなせない。私生活も駄目。……一週間でこれでは、先行きは期待できないわ。だから、お辞めになったらいかが？」
「なんで、そんなことしなきゃ……！」
反論すればするほど、取り巻きたちも、ますますヒートアップして……
――ばしゃっ!!
……何が起きたのか、わからなかった。
「……な」「あ」「……え？」
取り巻きたちも、呆気に取られて……
――ぽたぽたと、顔から水滴を垂らすセリカさんと、空になったグラスを振りぬいた、ランスターさんを見つめていた。
「――揃いも揃って、ピーチク、パーチクと……朝っぱらから、五月蝿いのよ」
ぱきっ……と、野菜のスティックを噛み砕いて、心底煩わしそうに、言った。
「な、……ああ、あなた！　わたくしが誰か、わかっていらして!?」
セリカさんが、激昂する。取り巻きたちも、やんややんやと、ランスターさんを攻め立てようとして……続く言葉に、封殺された。
「知ってるわよ。座学で私に負けて、実技でそこのバカに負けた、――総合次席の、セリカ・クラウンさんよね？」
（……へ？　実技？）
なんのこと？　成績、そんなに良くなかったと思うんだけど……
ランスターさんは、「……本当に知らなかったのね」とでも言いたそうな顔だ。
「あんた、実技はトップ合格だったのよ」
え。
え。

えええええええええ!?　ま、マジで!?
そういえば、合否通知だけ見てて、成績表までは、詳しく見てなかった!!
「言ったわね……！」
……ぞわり。怖気が走った。
「言ってはならないことを、言ったわね……!!!」
セリカさんが、憎悪に満ちた顔で、ランスターさんと、私を睨んでいた。
フォローを……フォローをしなければ！
「で、でも、次席なんて、すごいじゃないですか!!」
ぎろっ！
怖い目が、私のほうを向いた！　ひぇえ！　まだフォローが足りない!?
「座学はランスターさんの次に良いってことですよね！　いやぁ、すっごいなー!!　私なんて、体力しか取り柄が無いから、そんけーしちゃうなー！　はは、……はは、は……」
ひゅうううっ……と、薄ら寒い空気が、食堂に流れた。
「……」
セリカさん……なんで、顔を真っ赤にして歯を食いしばって、ぎらぎらと血走った目を私に向けているのでしょうか……？
「……、」
ひゅっと、何かを口走ろうとするセリカさん。それに先んじて、ランスターさんが言葉を吐いた。
「顔でも拭いてきたら？　牛乳臭くなるわよ」
「ぷっ……！」
そこ、吹き出しちゃ駄目だってば!!
「ぶっ……くっくっく……!!」「悲惨～！」「駄目だ、まだ笑うな……堪えるんだ……」「し、しかし……！」
あああ、どんどん伝染していく!?

「……!!」
つかつかと、取り巻きたちを突き飛ばしながら、セリカさんは食堂を出て行ってしまった。
「……」
ランスターさんは、邪魔者は去ったと言わんばかりに、食事を再開していた。
でも、さっきのあれって……もしかしなくても。
「ありがとう、ランスターさん」
「……早く食べなさい。もう時間無いわよ」
そっぽを向いたランスターさん。
頬が、ちょっとだけ赤くなっていた。
◆▪◆　◆　◆
……取り巻きを追い払い、一人になったセリカ・クラウン。
「次席……次席ですって？　このわたしが……名門・クラウン家の出であるわたしが……！」
親指の爪をガジガジと齧り、ぶつぶつと独白を続ける。
ブチッ……！
爪が割れ、血が滲む。痺れるような痛みが、じくじくと広がり……受けた屈辱を、増大させる。
「……!!」
――バシャッ!!
バケツに注いだ冷水を、頭から被る。
「……このままじゃ……済ませませんわよ……!!」
……尊大なまでのプライドが、仄暗い思考を巡らせた。
◆　◆　◆　◆
……困ったことになった。
「……」「……」
訓練場への移動中、ランスターさんと、それとなく目配せをする。
決して振り向かず……でも、背中に、視線を感じる。セリカさんだ。

まさか、背後から襲い掛かってきたりはしないだろうけど……この一ヶ月くらい、ずうっと、見られている。
そうして、今日の訓練が始まった。
コンビごとに、しっかり柔軟。準備運動を済ませて……いよいよ、本番。直立の姿勢で、教官の言葉を待つ。
「……さて、貴様達が入隊し、おおよそ一月が経過した。部隊での生活基礎及び、訓練の基礎中の基礎程度は、身に着いた頃だろう」
ほかの皆も、今日はいっそう緊張していた。そう、今日は……
「本日より、訓練科目『模擬戦』を開始する」
……魔法の対人使用の実技が始まる。
嫌が応にも、緊張が高まる。そして何より、今までと違うのは、全て用意された教材……ミッドチルダ式だったら杖、ベルカ式だったら槍のみで、訓練を行うという点だった。
私の使い慣れたナックルや、ランスターさんの銃は使えない。
何人かと混じって、慣れない槍を取り出す。……と、誰かが、私が持った槍を間違えて、引っ張った。
「……？　セリカさん？」
「あら、失礼」
あれ？　何で、セリカさんがこっちにいるんだろう。
「こちらは、ベルカ式でしたわね。間違えてしまいました」
セリカさんは、すぐに戻っていった。
「整列！」
ランスターさんと並ぶ。相手は、完全にランダムみたいだ。
模擬戦のルールは、至って簡単。
教材デバイスに内蔵された、『シュート／スマッシュ』『シールド』『バインド』の三つの術式のみを使い、相手を自陣の決められた地点へ入れること。ミッド式は、『シュート』……遠隔攻撃が使えて、ベルカ式は、『スマッシュ』……近距離攻撃が使える。
自陣の中には、相手の攻撃が無効化されるエリアがあって、そこに退避することも出来るけど、制限時間を過ぎたら、自動的に敗北になってしまう。

「よっし……！」
気合を入れて、目指せ白星だ！
「……」
ランスターさんは、何かが気になる様子で、私の持った槍を凝視していた。
「どうかした？」
聞いてみる。
「あのドリル髪……私の杖にも、不自然に触ってたのよ」
え……？　さっきの、ランスターさんも？
「……気のせいなら、いいんだけど」
でも、もう、『デバイスを交換してください』なんて言えるタイミングは、逸しちゃってるし……
「次、３２番！　４４番！」
私達の相手は……やはりというか、なんというか……セリカさんたちのペアだった。
「手加減はしませんわよ」
ふふっ……と、余裕の笑みだ。
「小細工はするってこと？」
「……さぁ、どうでしょう？」
ランスターさんのカマ掛けも、いい成果は得られなかった。
「始めッ!!」
教官の声と共に、走る！
「うりゃあああっ!!」
槍を構えて、突進！
「くっ、相変わらず、猪みたいね！　、シールド！」
セリカさんのペアの子が、シールドを展開する。
ランスターさんの言ったとおり、一人を二人掛かりで、各個に鎮圧。
私が突っ込んでも、ランスターさんが遠距離攻撃でサポートしてくれるから、安心して、
「……！　くそっ!!」
……あ？

お、おかしい……一向に、支援が来ないぞ……？　でも、多分何か、考えがあってのことだろうから……私は気にせず攻撃だ！
「スマッシュ!!」
教わった通り、槍に魔力を通して、術式を発動……しない。
「え!?　うそっ!?」
――かんっ。
攻撃の魔力を付与されていない槍は、あっさりと盾に弾かれる！
なんで!?　どうして、発動しないの!?　ちゃんと、教わったとおりにやったのに！
「シュート！」「シュート！」
うわっ！　二人の攻撃魔法！
「……！　ナカジマ、戻りなさい!!」
ちょ、えええええっ!?　援護なし!?
――ドッ！　ドウッ!!
「うわっ……ひゃあっ!?」
一発目を回避！　二発目は、槍でなんとか弾く！
自陣へと戻り、ランスターさんと合流！
「ランスターさん、どうしたの!?」
ランスターさんは、イラついた調子で、杖を地面にガンッ、と叩き付けた。
「……やられた！　術式が妨害されてる！」
「えええええっ！　ランスターさんも？」
『も』……ってことは、やっぱり……あんたもか」
これは、もしかしなくても……
「あら、どうしたのかしら？　デバイスの調子が悪いのかしら？」
……!!　やっぱり！
「くすくす……」
見学者の中の、セリカさんの取り巻き連中が意地の悪い笑みを浮かべていた。
「教官に……！」「やめなさい」

ランスターさんは、それを制止した。
「私達は、局員になるためにここにいるのよ。この程度のトラブルで、教官に泣きつくなんて……私のプライドが許さない」
「……！」
……そうだ。ここは、先生のいる学校じゃないんだ。一人前になるための、訓練部隊なんだ。
「ほら、出ていらっしゃい？　それとも、降参する？」
見せびらかすようにデバイスを私達に向け、セリカさんが勝ち誇っている。
……むかっ。
「私が時間を稼ぐ。ランスターさんは、プランを練って」
「そうね。そうしましょう」
あのヘンテコなドリル髪に、やられっ放しでたまるか!!
「ようやく出てきましたわね……シュート！」
セリカさんの攻撃が、私に向かう。
よーく見ろ。当たったって、死にはしない。軌道を見極めて……
「せりゃーっ!!」
――パンッ!!
槍をスイングして、迎撃！
「、やりますわね。でも……！　シュート！」
「シュート！」
――ドンッ、ドンッ、ドンドンドンッ!!
二人掛かりで、連射してきた！
「はあああああっ!!」
弾いて、避けて、受けて、また避ける！
「くっ……!!」
槍から、手に衝撃が伝わってくる！　でも……まだまだ!!
「粘りますわねぇ……」
でも、もうちょっと粘れば……!!
「見せてあげますわ……わたしの、実力を！」

「!!」
セリカさんの周囲に……五つほどの光弾が展開した。
うそ……まだ、こんなの、習ってないのに！
「……シュートッ!!」
五発、一斉に……!!
――ドドドドドンッ!!!
駄目だ……！　喰らう!!
「う、くっ……うぁあああああっ!!」
二発までは、弾いた。でも、残りの三発……胴体、右肩、腿に……直撃した。
「くぅうううううっ……！　いったぁあああああ……!!」
痛い。痛い。でも……まだ、動ける！
「……ふんっ!!」
痛いけど、立つ!!
「耐えますわね……でも、ここまでですわっ!!」
!!　まずい、また、連射が来る!!
「さぁ……這いつくばりなさい!!」
そして、発射――――――
「アンタがね」
――――ッパカァァァァァンッ!!
「、……、くぁっ!?」
顔を押さえて、仰け反るセリカさん。
ぜー、はー……や、やばかった……
「ら、ランスターさん、ナイスタイミング……!!」
「よく耐えたわね。……ちょっとだけ、見直してあげる」
「！　うんっ!!」
ふらふらと……セリカさんが、立ち上がる。
「な……何故っ……攻撃は、出来ないはず……!!」
確かに。
デバイスには、術式の発動を妨害する仕掛けがあるのに……というか、さっき、セリカさんの鼻っ面を直撃したのは、一体……？

「別に、『魔法はデバイスから発射しなければならない』なんてルールは、無かったわよね？」
――――じゃりっ。
ランスターさんの手の中で……石ころが転がる。
……そうか。
デバイスの処理機能を使わないで……中身の術式だけを、自力で発動させたんだ。
弾殻形成は、さすがにプログラム無しでは出来ないから、石ころを代用にして……
「そんなの、反則……、！」
言いかけて、口をつぐんだ。そりゃそうだろう。これで抗議をして、デバイスに細工をしたことがバレたら、セリカさんが困るんだもの。
それに、教官は一向に止めないし、問題は無い……と思う。
それじゃ、私も！
「でぇぇぇぇっ!!」
「バカね、その槍じゃ通らないのよ！　……シールド！」
セリカさんのペアが、防御を展開する。……狙い通りだ！
「だぁぁぁぁぁっ!!」
槍を……思いっきり、防御魔法に叩きつける!!
――ベキンッ!!
……槍の先端が、柄から外れた。
「ハッ、言わんこっちゃ無い！」
馬鹿にされたけど……これが、狙いだ！
「スマッシュ!!」
「えっ!?」
――ガンッ!!
……よし、思ったとおり！
「くっ……!?　嘘でしょ!?」
相手も、驚いていた。
外れた穂先を、ポケットに突っ込み……柄だけを、構える。

この槍型デバイスは、穂先が核で、柄は導体。発動を阻害するなら……多分、その『継ぎ目』に仕掛けてくるはず。接合部を破壊してしまえば、術式は阻害されない。

読みは当たった。

「もういっちょ、スマッシュ!!」

――ガィイインッ!!

……ま、壊した所為で、シールドとバインドが使えなくなっちゃったんだけどね。

「退避！　退避ですわっ!!」「は、はいっ！」

セリカさんたちのペアが、無効化エリアへ入る。

「「!!」」

ランスターさんと瞬時に目配せ。よし、考えてることは同じだ！

私は柄を、ランスターさんは掌大の石を、思いっきり振りかぶって……!!

「!?　ここは、無効化エリア……!?」

そこは、魔力無効化エリア。魔力以外は、無効化されない！

「スマーーーーッシュ!!」

「シューーーーートッ!!」

セリカさん達に向けて、全力で投擲した!!

「ひぃいいっ!?」

「いやぁあああっ!?」

――ズガッ、ゴンッ!!

……直撃。

セリカさんたちは気絶し……無効化エリアの使用制限時間を超過したため、私達が勝利した。

「やった……やったよ、ランスターさん!!」

ハイタッチしよう、ハイタッチ!!

「……ま、あんたにしては、上出来よ」

ランスターさんが、渋々、手を上げる。

――パンッ!!

小気味のいい音が、掌で鳴った。
「……納得いきませんわ!!」
……と、セリカさんが、取り繕う余裕も忘れ、噛み付いてきた。
「あんなの、魔法ではありません！　教官!!」
確かに、裏技だったけど……元はといえば、セリカさんが……
「……」
言い返そうとした私の肩を、ランスターさんが押さえ、首を横に振った。
「……うわ」「ひっどい負け惜しみ……」
取り巻きたちが、明らかに引いていた。
セリカさんの抗議を受けた教官は、鷹揚に頷いた。
「ふむ。……ティアナ・ランスター」
「はい」
まずは、ランスターさん。
「デバイス不調の中、咄嗟の機転は見事だ」
「ありがとうございます」
「だが、この内容で単位を認めるわけにはいかん。今後は、デバイス不調の際は、即座に申し出るように」
「……了解」
「スバル・ナカジマ」
「はいっ」
「初歩的な阻害術式だったが、患部を的確に判断し、対処したのは見事だ」
……気付いて放置していたらしい。視界の隅で、セリカさんが顔を青くしていた。
「だが、ベルカ式の術者ともあろう者が、得物を放り投げるなど言語道断。現場では、通用せんぞ。……よって、貴様にも単位を認めるわけにはいかん」
「……了解」
……いつもはナックルだから、槍の感覚が身についていなかった。

「セリカ・クラウン」
……セリカさん、かわいそうなほど小さくなっている。自業自得だけど……
「……はい」
「一歩前へ出ろ」
すっと、進み出たセリカさん。
――バチィンッ!!
教官が、その頬を思いっきり張った！　教官、容赦無い！
「……！」
へたり込んで、茫然と……真っ赤になった頬を押さえる。
「貴様は、技術云々それ以前だッ！　その腐りきった性根、叩き直してくれるッ!!　この場で、腕立て１００回、始めッ!!」
「なっ……!?　私は……!!」
……名家の出、とか、そういうことを言おうとしていたのかもしれない。
「どうした!!　やれんというのなら、荷物を纏めて出て行けッ!!」
再び、教官の怒声。
取り巻きたちも……結局は、虎の意を借る狐。虎が張子と分かれば、早々に離れていく。
きょろきょろと……それでもまだ、逃げ道を探すセリカさん。でも、誰も、手を差し伸べることはせず……
「……1、……2、」
のろのろと。
その場に、誰よりも低く、頭を下げるようにして……
「……、」「やめなさい」
何か、言おうとした私を、ランスターさんが小声で止めた。
一回一回、数を数えるごとに、セリカさんの虚飾と……プライドが、がらがらと、崩れていく音が聞こえる気がした。
……そして、１００を数え終えた頃。
「１００、……う……ひっ、ひっく……」
セリカさんは、へたり込んだまま、泣き出してしまった。

「……あの子、終わりね」
ランスターさんが、ぼそっと呟いた。
そうだね……もう、今までどおりの権力は、振るえなくなるだろうね。
何ともいえない空気の中、教官は、セリカさんを一瞥し……
「貴様ら三人には、罰として一週間、訓練場の早朝清掃を命じる!!」
「え？」
「え？」
「えええええええええええええええええっ!?」
な、何で私たちまで!?
「――連帯責任だ!!」
……伝家の宝刀、『連帯責任』。集団生活、おそろしや。
数日後の、朝。
「んあ……ふぁあああああ……!!!」
ベッドから起き出して、時刻を確認。よし……時間通り。それじゃ、今日も……
「ランスターさん！　……ランスターさんってば!!」
隣のベッドで、未だにシーツに包まって動こうともしない同居人を、揺り動かす。
「起きて！　今日も清掃だよ!!　おーきーてー!!」
……最近知ったことだけど……ランスターさんは、すっごく寝起きが悪い。
いや、別にいつもはこうじゃないし、時間通りに起きてるんだけど……毎日きっかり、同じ時間に寝起きしないとスッキリ起きられないみたいで、こうした変な早起きは出来ないらしい。
「む……う、うぅん……もう、ちょっと……あと、半日……」
「どこが『ちょっと』だ!?　起きろーーーー!!」
ああもう、毎朝大声を張り上げる私の身にもなってよー!!?
「……」

寝ぼけ気味のランスターさんの手を引いて、なんとか時間ぎりぎりに訓練場に到着する。
「お、おはよう！　セリカさん!!」
「……」
先に来ていたセリカさんは、私達の姿を確認すると、無言で用具室へ歩き出す。
……その足取りには、良くも悪くも、自信に満ちていた面影は見当たらない。
聞いた話では、従えていた取り巻きたちから総すかんを喰らって、孤立しているそうだ。
今日の訓練で使う用具を用意して、グラウンドをローラーで均して、消耗品をチェック。
最後に、申し送りをチェックして……
「よし、終わり。お疲れ様！」
「……」
……く、暗い……。セリカさんが、果てしなく暗い……!!
チェックも終わったのに、ライン引きに使う粉の入ったズタ袋の紐を、結んで、解いて、結んで、解いて……
「あ、あのー……？」
「何ですの!?」
ひぇえっ!?　おっかない!!
「なんといいますか、えーっと、そのー……」
いらいらしてる人との会話は苦手だよー……。
「お掃除終わったし、戻ろう？」
ばちんっ、と、差し伸べた手が、弾かれる。
「セリカさん……」
「……皆して、わたしのことをバカにして……」
「ば、バカになんて……」
――セリカさん、家柄抜きにしても、すごい人だと思うよ。実技でも、座学でも、高水準をキープしてるし……あの日の模擬戦で見せた技術だって、まだ、ランスターさんも出来ないことだもん。

でも、それを口にしたら、もっとセリカさんを傷つけると思うと、何も言えなくて……

「バカにしてるんじゃなくて、家柄以外、誰もアンタに関心が無いだけよ」

……。

……、

……ら、

「ランスターさんっ!!」

どうしてそう、的確に人の心を抉るかなっ!?

「……、うぁあああああっ!!」

――ばふんっ!!

「ぶわっ!?」

な、何、いきなり、目の前が真っ白に!? あ、ライン引きの粉だ、これ……

って、とにかく、止めさせないと!!

「セリカさん、ストップ、ストーップ!!」

「うるさい離せこのばかー!!」

うおっ、っと、っと……案外、腕力もあるなこの人……!

「うあぁー!!」

セリカさんは、空っぽになった袋を、めったくそに振り回して。

――ずぼっ。

……私の頭から膝までをすっぽりと覆い隠ああ真っ暗だ見えない見えない何も見えない手を繋いでいた姉の手の感触が消えたこのひとわたしたちをどこにつれてアアアアああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

「……」
膝までを覆い隠した姿は、正直、マヌケ極まる。
だが……まるで石の彫像のように、身じろぎもせず……
「……」
ぶちっ……と、被さっていた袋を、中から引き裂いた。
「……ナカジマ？」
最初、異変を察知したのは、ティアナだった。
深く俯いたスバルの表情は読み取れないが……感じる気配が、異なっていた。
――ちゅいいいん……
「……？」
ほんの微かな……機械の駆動音。
それが、スバルの右腕あたりから聞こえていると、気付いた。そして……
――……バシュンッ!!
スバルの足元に、ミッド式でもベルカ式でもない……複数の円がギア状に運動する、奇怪な陣が浮かび上がった。
「な……なんですの、それは……？」
セリカは、事態が飲み込めず、ぼうっとその場に立ち尽くす。
「……き……、ろ……」
ぼそりと、俯きながら、スバルが言葉を発した。
「え……？」
うまく聞き取れなかったのか、耳を傾けるセリカ。スバルが、じゃりっ、と、一歩を何気なく踏み出し……
「!!　下がれ！」
「え、……ぎゃふっ!?」
セリカの襟首を掴んで、後ろに跳んだ。
――ズガァァァァァァァンッ!!!
「きゃあああああっ!!」
……まるで、爆薬が破裂したかのような轟音に、悲鳴を上げるセリカ。

「……きえろ」
土煙の中、冗談のように土中にめり込んだ腕をボコッと引き抜き、ようやく、スバルが顔を上げる。
「アンタ……何、その目……？」
スバルの瞳は、見慣れた碧眼ではなかった。
禍々しいまでの――――黄金色に、輝いていた。
「……消えろ」
ゆらりと、幽鬼のような足取りで、ティアナたちとの距離を詰める。
じりっと、それに合わせて一歩引く。
「……単元『被疑者の確保』、講義の、第四回」
「へ……？　それが、今この情況と、何か関係ありますの？」
冷や汗はとどまるところを知らない。
今、背を向けて遁走しても、間違いなく追いつかれる。
教官も手薄で、こちらにまで目は届いていないだろう。助けは期待できない。つまりは……
「『錯乱した被疑者への対応』……頭に入ってるわね？」
「え、ええ……って、止める気ですの!?　アレを!?」
……自力で対処する。
「教官を呼んだほうが……」
渋るセリカ。
「ヘマの補習中に、またヘマやらかしたら……どんなペナルティになるかしらね？　……最悪、放校処分もありえるわ」
それは、上を目指すティアナにも。
「家名にキズがついてしまいますわー!?」
実家からのプレッシャーもあるセリカにとっても、何としてでも避けたい事態だった。
「……行くわよ、没落エリート」「はいっ……ってぇ、誰が没落ですのっ!?」
まず二人は、残っていた粉の袋を、スバルめがけて投げつけた。
――パンッ!!
当然のことながら、弾けて、中身の白い粉をぶちまける。

ひとまず、目くらましだ。
「……索敵・温度検知モード」
きゅいっ……と、スバルの目が、別の対象へフォーカスされる。
視界の中……赤い人影が二つ、左右からスバルを挟撃するつもりのようだった。
だが、タイミングがずれている。同時にやれば、どちらか一方は届いただろうに……と、まずは片方へ向かって、凶手を繰り出す。
――ごしゃっ!!
煙幕から飛び出してきた対象を、貫く感触。だがそれは、スバルが想定していたものではなかった。妙に無機質で、金属的な……
「くっ……ぬっ……!!」
セリカが、スバルの凶手を食い止めていた。
もちろん、素手ではない。訓練などで、ゴールマークを表示するための円筒状の機器を、目の前に差し出して、盾としていた。金属のオブジェクトは、貫通されながらも、その形状を維持していた。
……とはいえ、貫かれた穴から、放射状に亀裂が進行している。
ぶるぶると、渾身の力で盾を維持する。
スバルの指先が、みきっ……！　と、金属を引きちぎり……貫通！
「まだですわっ!!」
――ベコンッ!!
……二つ目。
打撃訓練にも使われる、丈夫なバリアミットを第二の盾とする。こちらは、スイッチをＯＮにすれば、自動で軽い防護膜が形成される優れもので、『ある程度までの』衝撃を、無効化することが、
――ズボォッ!!
「いーやーーーーーー！」
バリアミットを貫通してきた凶手を、涙を浮かべて皮一枚で回避するセリカ。
「もう、もう限界ですわーーー!!　早くなんとかなさぁい!!」
「叫ぶ元気があんなら、もうちょっと気張りなさい！」
鬼畜な指示を飛ばした。

「ひィいいいっ!!　オニですわ、アクマですわー!」
ずぼっ、ずぼっ……と、トウフのようにスバルの凶手に穴だらけにされるバリアミット。
それでいて、セリカ本人はちゃっかりと無傷なところが、腐ってもエリートたる所以か。
「……!!　消えろっ……!!」
苛立った調子で、スバルが吼える。
「――消えろォおおおおおっ!!」
――ギュリイイイイイイイイインッ……!!
……恐らくは、最大出力。
最大に高まった破壊力を凶手に乗せて、貫手として繰り出す!
「……!!　没落!　退避!!」
「一言余計ですわよっ!!」
セリカは、バリアミットを、スバルのほうへ蹴りだす。
――……ゴバッ!!
バリアミットは、粉々に四散した。
そして、いよいよセリカと、佇むティアナへと視線をロックし……
「……そこっ!!」
「!?」
完全に、意識の外からの奇襲。
目の前に、セリカも、ティアナもいる。では、これは……?
「……!?」
ティアナの姿が、風景と滲むように、霞み……消える。
「なっ……!?」
これには、セリカも驚愕していた。
つい先ほどまで、傍にいたはずのティアナが……いつの間にか、スバルの背後に、回りこんでいるのだ。
「ショートジャンプ……!?」
そんなの、超に超が二つか三つが付く、高等技法だ。
「……ハズレ。種明かしはしないわよ」

びっしょりと額に汗を浮かべる。
――ギュルルルルッ……!!
捕縛訓練に使用されるロープ。そのロープに、訓練用デバイスに内蔵された『バインド』の術式を流し……物理・魔法の二重で、スバルを拘束した。
「……う、うう……!!」
スバルが足掻く。だが……最大出力を放出し、身体が伸びきった直後を拘束されてしまっては、思うような動作は出来ない。
あとは、ロープか、術式が破壊されるまでの、僅かな時間で事足りる。
「没落！　撃てっ!!」
セリカは、訓練用デバイスを構え……お得意の、複数の魔力スフィアを三基、展開。
「……シュート!!」
――パンッ、パンッ、パンッ!!
……額と、顎と、こめかみを、正確無比に打ち抜いた。
「やった……!?」
セリカは、気を抜いてしまった。
「く、う、……うぉおおおっ!!」
脳震盪をおこし、ぐらつく中……セリカへと、最後の一撃を見舞おうとするスバル。
セリカは、咄嗟の対処が遅れる。
「シュート」
涼やかに響いた声と共に発射されたティアナの一撃が、スバルの額に、吸い込まれるようにヒットした。
「あーーー

「適材適所よ。　……まぁ無傷は想定外だけど」
「今、何かおっしゃいました!?」
　きぃっ！　と、あまりの扱いの酷さに抗議する。
「さぁ？」と、すっとぼけるティアナ。
「う、うん……？」
「「!!!!」」
　むっくりと上体を起こしたスバル。二人は、飛び上がって臨戦態勢を取った。
「んー……むー……あ、あれ!?　私、なんで縛られてんの!?」
　ぎょっとした表情で、後ろ手に縛られ、膝や足首まで拘束された自身を見下ろす。
　その瞳は……薄い碧眼へ、戻っていた。
「……あんた、覚えてないわけ？」
　流石に、怪訝に感じたティアナが尋ねる。
「え……？　ええっと、掃除当番で……ランスターさんが余計なことを言って、セリカさんが怒って、それで、……」
　さーーーーっ……と、すさまじい勢いで、スバルの顔色が青ざめていく。
　そして、訓練場の惨状を見て、己の所業を悟った。
「ご、ごめっ……ごめんなさいっ、ごめんなさいごめんなさい……!!」
　……何だかんだで飄々としたところのあるスバルが、ここまで取り乱しているのは、コンビのティアナとて、初めて見た。
「貴様ら、何をしている！」
　……と、ここで、教官が見回りに来た。
「どうしましょうっ!?」
　セリカが、あたりを見回す。
　……大穴の開いた地面。散乱する機器の残骸。粉だらけの訓練場。
「ま、マズイですわー!!」
　涙目になっていた。

今から隠滅しようにも、既に教官は、こちらに駆けてきていて、間に合いそうになかった。
「黙ってなさい……！　いい、一言も喋るんじゃないわよ!?」
ティアナが、何かを詠唱し終えたのとほぼ同時、教官が踏み込んできた。
「む……？　ランスター。訓練場の整備か？」
「はい、定時寸前まで時間を要してしまいましたが、たった今、完了しました」
教官は、ぐるりと……惨状がそのままの訓練場を見回し、頷いた。
「よろしい。整備は完了したようだな。一限目に遅れぬうちに戻れ」
「了解」
そして、教官が歩き去っていくのを、休めの体勢で見送った。
「……っぷは、」
ようやく、緊張から解き放たれた。
「……あんたたち、もう喋ってもいいわよ」
そして……縛られたままのスバルと、へたりこんだままのセリカへ、視線を向ける。
「ど……どういうことですの……？　教官は、この情況が見えて……？」
確かに。
破壊された機器と、訓練場を目にしたはずの教官は、何も咎めなかった。
そう、まるで……目に入っていないように。
「……そう『見える』ように、したのよ」
スバルの拘束を解く。
「ほら、とりあえず戻るわよ。……没落、そっち持ちなさい」
「だから、一言余計ですわ！　ええと、こっちですわね」
二人で、スバルに肩を貸し、一旦は寮へと戻ることにした。
◆　◆　◆　◆
「欠席理由……コンビパートナー、体調不良のため、と……」

「……何でわたくしまで……」
私の部屋で……何故かセリカさんも含め、ベッドに腰掛けていた。
「……あーあ、皆勤賞逃しちゃったわ」
ぼやくランスターさん。
ごめんなさい。その言葉さえ、出す気力が沸かなかった。
「さて……説明してもらいますわよ？」
セリカさんが、ずいっと顔を近づけてきた。
「……」
でも、何をどう説明していいかもわからない。
「……はぁ。んじゃ、順序立てて質問するわよ」
ランスターさんが、人差し指を立てる。
「まず、訓練場に集まったことは、覚えてる？」
「……」
頷いて、肯定。
「じゃあ、そこの没落エリートが癇癪起こしたことは、覚えてる？」
「……」
再び、頷く。隣で、セリカさんがすっごく何かを言いたそうにしているけど、気にかけるほどの余裕が無い。
「そう。じゃ……私達に襲い掛かったことと、その切っ掛けは、覚えてる？」
……覚えている。
鮮明じゃないけど……確かに、覚えている。
「……セリカさんが、私に……袋を被せたこと」
あの瞬間……『あの情景』がフラッシュバックして、飲み込まれてしまった。
「……どうしてそれが、襲う切っ掛けになりますの？」
……正直言えば、話したくない。でも、……迷惑をかけた以上は、説明をする義務が、私にはある。だから……
「……三年前に起きた、管理局員の子供が誘拐された事件は、知ってる？」

……いま再び、あの記憶と、向き合おう。
「……知ってるけど」
「確か、報道管制が敷かれて、概要程度しか世間には伝わっていませんわ」
二人は……何で私が、こんな話をし始めたのか……その意図は、伝わった。
「あれね。……私と、私のお姉ちゃんなんだ」
……二人が目をむくのが、はっきりと分かった。
「あの日……夜遅くなった私を、お姉ちゃんが迎えに来てくれて……」
――夜、街頭の下を歩く私達の横に、車が停車した。
「中から、何人も、出てきて……」
――反射的に、姉の手を握ってしまった。そして、
「頭から、袋を被せられて……そのまま、車に……」
――私達は、誘拐された。その後……その後……
「……だから、でしたのね」
セリカさんが、沈痛な面持ちで、眉根を寄せていた。
ランスターさんが、また一つ、指を立てる。
「質問、もう一つ。……『アレ』は、何？」
――アレ。それが意味するのは、きっと……
「……多分、私と、お姉ちゃんが、誘拐された理由の一つ」
……見せたほうが、早い。
――きゅいいっ……
……システムチェック。グリーン。起動。
「……」
目を開ける。きっと、二人には、黄金の瞳が見えているはずだ。
「……これが、私の秘密」
詳しくは……私より、検査担当のマリエルさんのほうが、詳しいと思う。
「質量兵器とも、魔法とも違う……先天技能」
でも、二人には伝わったようだ。

「その力で……誘拐犯を？」
……ランスターさんが、聞いてきた。
「……違う」
それには、ＮＯと答えざるを得ない。
確かに、三年前とはいえ、この力を使えれば……大の男といえど、圧倒するのは、容易いはずだった。
でも……私は、怖くて、動けなくて……
「私を最初に助けてくれたのは……姉さんなんだ」
――姉が、私を庇った。
『スバル、大丈夫よ』
殴られ、蹴られ……背中を、刃物で切り刻まれて。
『私が守るから』
それでも……姉は、私を庇うことを、やめなかった。
『スバルは、私が守るから』
悟ったような笑顔のまま……左手の『武装』を、展開して。
――男の胸を、貫いた。
「私は、」
ひくっ、と、しゃっくりのようなものが出る。
「何も……できなかった。何も、しなかった……！」
――姉の『武装』は……倍近い体格差のある男の生命を、一撃の下に……断ち切った。
……やっぱり、二人に話すべきではなかった。
明らかに、戸惑っている。でも、仕方が無い。こんな話……されたところで、声など掛けられる筈も無いのに。
「でも、……犯人は、投降したって……」
セリカさんが言っているのは、操作された情報だ。実際は、違う。
「助けてくれたのは……姉さんと、あとは……黒い服の人」
――一人目が倒れた直後、突入してきたのは、漆黒の装束に身を包んだ一団だった。彼ら彼女らは、疾風のように……その場にいた、私達以外の命を、刈り取っていった。その中で、唯一言葉を交わした……

「『なのは』……っていう、女の子」
私と、そう年の変わらない、綺麗な子だった。
「事件の後、お父さんに聞いても、『知らない』って……局員じゃ無かったのかもしれない」
「……まさか……管理局が、そんな傭兵集団を雇う訳が……」
「……でも、あの強さは、本物だった」
何者をも寄せ付けない、圧倒的な力。
それは、あの日あの場所で……何も出来なかった無力な私とは、対極にあるもので……
「だから……私は、管理局に入るんだって……」
なのに、このザマは何だ。コンビパートナーに迷惑をかけて、同級生とイザコザを起こして……何が、『強くなる』だ。
「ごめんなさい……！」
結局私は……あの日から、何一つ、進歩しちゃいない。
「――あんた、自信が欲しかったのね」
ランスターさんが、私の志望動機を看破した。
「……ちょっと、」
ランスターさんが、咎めるような、促すような視線を、セリカさんに向ける。
セリカさんは、気まずそうに、髪を指先で弄る。
「……わかってますわよ」
そして、椅子から立って、私の正面に立ち……
「――すみませんでしたっ!!」
……謝罪した。
でも正直、あの手のトラブルだったら、遅かれ早かれ、起こりうることだったし……
「いやあの、正直、私のほうがゴメンナサイっていうか、その……ごめんなさいっ！」
謝るべきは、私だし……っていうか！
「そもそも、ランスターさんがセリカさんを怒らせたんでしょ!?」
あんな心を抉る一言を言わなけりゃ、セリカさんも怒らなかったの

に！
「そうですわよ！　何食わぬ顔で無かった事にしないでいただけます!?」
「……チッ、気付きやがった」
舌打ちした!?　ダメだこの人！
「ランスターさん!!」
「チッ……あー、はいはい」
もう……なんでふて腐れるの。
「悪かったわよ、没落エリート。興味が無いっていうのは、訂正するわ」
「だからその没落と言うのを止めなさいですわー!!」
……何だか少し、明るくなった？
むしろ、堕ちるところまで堕ちて、開き直っちゃったのかも。
「で、わたくしの疑問なのですが……ティアナさん」
「……」
「先ほどの、不可解な現象についてですが」
不可解な……ああ、なんとなく、分かった。出たり消えたり、教官を誤魔化したりした、あのことだろう。
「ショートジャンプではない、と、おっしゃいましたね？」
ランスターさんは、特に否定も肯定もせず、セリカさんが正解にたどり着くのを待っているようだ。
「恐らくは、視界を誤認させる……幻術の類でしょうか？」
ランスターさんは、降参したように、両手を上げた。
「――正解」
少ない情報から、そんなどマイナーなジャンルへと考えが及んだセリカさんは、やっぱり優秀な人だ。
「それにしても、幻術とは……何故、そのような分野を？」
「あー……私というか、お兄ちゃ……兄が、」
――今、『お兄ちゃん』って言いかけた？
セリカさんと顔を見合わせる。
「……『兄』が！　護身用にって教えてくれたのよ!!」

……頬を赤らめ、力強く言い切った。
「『お兄ちゃん』が、教えてくれましたのね？」
「ぐっ……」
逆襲のチャンスを得たセリカさんが、ニマニマと笑う。
「魔法の練習をしてくれるなんて、素敵な『お兄ちゃん』ですわね。あーあ、わたくしも、そんな『お兄ちゃん』の方が良かったですわー」
「ぐぬ……!!」
……どっちもどっちだ。
「セリカさんにも、お兄さんが？」
さっきの口ぶりからすると、そんな気がした。
「……」
セリカさんは、しばし黙考して……
「……現役執務官ですわ」
……微妙そうな表情で、そう言った。
「執務官……!? すごっ……！」
管理局の中でも、エリートじゃないか！
……中には、すんごいアウトローな人もいるみたいだけど。
――メディアにもよく露出する高官を殴り倒して引退した人とか。
最近では、五度も試験に落ちて、六度目でお情けで合格をもらった『ゴローさん』とかが有名だ。
とにかく、時空管理局という組織の、花形であることは事実だ。
「どんな人？」
「……出世のために、直属の上司に養子縁組までしたような男ですわ。今は、ソナタ性を名乗っておりますので……わたくしの家とは、無関係です」
……あまり詮索しないでおこう。
「あ、ランスターさんのお兄さんは？」
話題を変えようっと。
「航空隊で、執務官になったばっかりだったわ」
……何故に過去形？
「ああ……3年前、任務中に失踪したから」

もっとヘビーだった。
「……ティーダ・ランスター？」
……セリカさんが、思い出したかのように口にした。
「ええ。……3年前の、大規模制圧の任務に就いて、そのまま……」
3年前の……って、え!?
「ランスターさんのお兄さんも……？」
『も』……って？」
「うちのお母さん、その任務に参加してた……」
違法研究施設への、強制捜査という名の武力制圧が行われた。
私達が誘拐した犯人達の残した情報から、証拠が出て……うちのお母さんも、前線へ向かった。そして……
「……クライスラー事件」
セリカさんが、話し始める。
「事件の名は、現場となった生命工学研究所の名からですわね。
作戦総指揮官・デイリン・グレンジャー中将。
ティーダ・ランスター、キーア・ソナタの執務官2名、陸士108部隊を一個大隊投入しての、大規模な制圧戦。
研究所が違法な研究を行い、未知の戦力を保持している可能性が極めて高かったため、それだけの局員が動員されましたの。
いくら相手が戦力を保持しているとはいえ、安全マージンを超えた、過投入だったのではないか、という意見もありましたが……結果は……」
ふ、と、一息をおいて……
「その作戦は、安全マージンどころか、一度は戦線が瓦解しかけるほどの打撃を受けて……幾多の犠牲を払った末、研究所の自爆という結末で、幕を閉じましたわ」
多くの真相は、炎の中に消え……情報は、公には遮断された。でも、一部には知れ渡ってしまった。
なぜなら……明確な犠牲者が、いたからだ。
前線指揮官の一人、ティーダ・ランスター執務官のＭＩＡを筆頭に、

実力のあった局員達も、何人も犠牲になった。
――私のお母さん。クイント・ナカジマも、その一人だった。
……失踪ではない。ほかの誰でもない……陸士１０８部隊の部隊長、そして、クイント・ナカジマの夫、ゲンヤ・ナカジマは、クイントの遺体を、その手で収容したのだから。
「では……ランスターさんが、管理局を志したのは……」
ランスターさんが、膝の上で、拳を固く握り締める。
「……兄さんを、探し出すためよ」
……やっぱり。でも、わかる気がする。私だって、お母さんがＭＩＡだったら、生存の可能性を信じるもん。
「だから……一日でも早く、上へ、上へ行って……事件が風化する前に、あの事件の真相を、突き止めるのよ」
私は……私も、知りたい。あの日、あの場所で……お母さんに、何があったのか。
全ての始まり。
あの誘拐事件に端を発する、クライスラー事件の真相を。
……でも。
私達はまだ、１２そこそこの子供で……訓練課程を終えて、正式に管理局に所属するまで、数年は掛かる。
「……先は長いねぇ」
ふぅ、とため息が出る。
「……」
ランスターさんは、あごに手をやり、おもむろに言った。
「――あんた達、ちょっと付き合いなさい」

――三日後。
訓練を終えた、夜。
消灯時間が近くなり、ロビーの人影がまばらになる。
そして……２１時。ぱっ、と、メインの証明が消え、薄緑の予備照

明に切り替わる。
　もうこの時点で、ロビーには私達以外に人はいない。
「ほ、本当に、大丈夫ですわよね……？」
　おどおどと、セリカさんが息を潜めながら言う。
「シッ！　見回りに見つかるでしょ」
　ランスターさんが、あたりを警戒していた。
　一人なら余裕だけど、今日は二人多いからね……
「……でもでも、ルームメイトに不在を気付かれたら……」
「大丈夫よ。ベッドで寝てるアンタを幻術で設置しておいたから」
　ちなみに。今までも週に２回くらいの頻度で、無断外出していたらしい。
　あの不可解な現象は、そういうことのようだ。
　かつ、かつ……と、見回りの教官の足音が、徐々に近づいてくる。
「「……」」
　き、緊張する……!!
「……、」
　教官は、あたりをぐるりと一瞥し、施錠のための暗証番号を入力。
「……見える？」
「ん。ちょっと待って」
　かしゃっ、と視界が切り替わる。薄緑の風景……ナイトスコープだ。まさか、こんなことに能力を使うことになるとは思わなかった。
「２２・３２・４６」
「よし……」
　教官は、最後にＩＤカードをかざし、施錠をして立ち去っていった。
　ランスターさんのハンドサインに従って、すり足で通用口まで移動。
　正面入り口は、教官のＩＤカードと暗証番号が無ければ開かないけれど、物資の搬入に使われる通用口は、六桁の暗証番号のみ。
「いつもはどうしてるの？」
「迷彩して至近距離まで近づいて覗き見」
「そんなことをしていましたのね……」

セリカさんと一緒にあきれてしまった。
カチッ……という開錠音がした。
「……」
慌てず、騒がず……するすると、移動。
侵入者検知のレーダーがあるところを匍匐前進して……壁を背に横歩きして……門扉を三人で協力して乗り越える。
「「ふぅ……」」
ひんやりとした外気が、私達を出迎えた。
「ほ、本当に、無断外出しちゃった……!!」
「ああ、どうしましょう……？　わたくし、こんな悪いこと初めてですわ……！」
「こっちよ」
ランスターさんに促されるまま、人気の無い夜道を進む。
しばらくして着いたのは、小さな照明に照らされた、窓の無い建物だった。ドアの替わりに等間隔に並んでいるのは、横長のシャッター。ガレージ……だろうか。
懐から取り出したカードを照合し、開ける。
「入んなさい」
言われるままに、中に入る。
ぱっと点いた照明に照らし出されたその内装は、やはり、ガレージだった。
やや手狭な室内に、インテリアはほぼ無し。キャスターつきの工具箱と、書籍、スプレー缶やオイル缶がある程度で……その敷地の大部分を、たった二台が占領していた。
一台は、よく街中を走っている、オートマチック二輪車。
そして、もう一台は……
「うわぁ……！　カッコイイ……!!」
なんというか、そう形容する以外に無い……圧倒的な存在感を放つ、まさかのマニュアルシフト二輪車！
「まあ……！」
セリカさんも、目を輝かせ、その車体に見入っている。

車体を包むフルカウルの色は、ランスターさんの魔力光と同じオレンジ。
でも、企業広告でも、こんな形の二輪は見たことが無いけど……？
僅かに露出したエンジンには、……見たことの無い文字が、刻印されている。
「輸入車!?」
輸入。文字通り、このミッドチルダ以外の世界から、納品されてきた物品。
「すごっ……！」
なんというか……移動手段に過ぎないと思っていた二輪という乗り物の概念を、根底から覆された気分だ。
「でも、乗れないと思うんだけど……」
私達は、運転免許が取れる年齢には達していない。
「？　乗れるわよ。そっちのオートマなら」
「いや、無理だよ。私たち、まだ１２じゃん」
「操作は簡単よ？　足も届くわ」
「いや、そーじゃなくって……免許が」
「何よあんな紙切れ一枚。動かせりゃ動かしていいのよ」
……ランスターさんは、絶対の自信を持ってそう言っているようだから、これ以上は言わないようにしよう。
「それにセリカは１６だから、訓練課程で特殊二輪免許、取ってるでしょ」
「まだ、教習段階ですわ。それに、こういった形状のものには……」
「変速操作が出来りゃ乗れるわよ」
特殊二輪……ここでは、マニュアルシフト二輪車のことを指す。陸士隊の備品には、不整地での走行並びに情報収集を目的にした二輪車があるから、取得は必須となっている。
「……あ。そっか。セリカさん、年上だったんだ」
「今更っ!?」
がびーん、と驚愕する。

確かに、背丈は私達より頭一つほど大きい。
「あっ……すみません！」
しまった……失言だった！
「あの、あまり年齢差を感じないというか、目線の高さが同じというか、ええっと……とにかく、年上には見えなくって！　ええ、まったくこれっぽっちも！」
……セリカさん、茫然としてしまった。
ぽん、と、私の肩を、ランスターさんの手が叩いた。
「……よーく分かったわ。あんた、悪気無くやってたのね」
「何が!?」
私、セリカさんにちゃんと説明というか、フォローしようとしただけなのに！
「さて……遊んでる時間は無さそうね」
壁掛け時計を見ると、既に時刻は、日付が変わる一時間前だ。
「ほれ」
ぽんっ、と投げ渡されたのは、正面に風防の付いた、二輪用のヘルメット。被れば、顔を見られる心配は無さそうだ。
「セリカも」
「っていうかナチュラルに呼び捨てですのね……敬われていませんのね……ぶつぶつ……」
不満そうなセリカさんには、頭をすっぽりと覆う形状のヘルメットを渡す。
続いて、壁に据えられた、収納扉を開ける。そこには、何かを貯蔵しているらしい、円筒状のタンク。印字されているのは……明らかに、『危険物』を示すマークだ。
オレンジ色の二輪を、そのタンクに近づけると、車体上部。ヒンジ式のキャップを開かせる。そこに、タンクから伸ばしたホース先端のノズルを差し込んだ。
じゅあああああ……と、勢い良く液体が流れ出し、注ぎ込まれていく。
でも、おかしいな……？　二輪は電力で動くから、基本はバッテ

リーに充電するコネクターがあるはずだ。『液体』を注ぐ必要なんて、どこに……？

「？　……くんくん。なんですの、この臭い」

言われてみれば……鼻の奥に浸透するような、嗅いだことの無いような臭いがする。

「……まさか、」

セリカさんが、戦慄と、それ以上の好奇心と共に、そのオレンジの車体を凝視する。

「内燃機関……!?」

……歴史の教科書で、その存在は知っている。

液状の化石燃料から精製した揮発性油を、文字通り装置の中で燃焼させて、動力を得る装置のことだ。今では、旧式どころか、骨董品に足を突っ込む部類。

管理世界は、文化保存指定世界でもなければ、バッテリー式が普及する決まりになっている。なら、これはその、文化保存指定世界から……？

いや、それはおかしい。

後退的な内燃機関を搭載してはいるものの、外観は、ミッドチルダ現行の物に近い。

個人でカスタムもしくはビルドしたのならともかく、フレームには機械によってプレスされた際の『バリ』が残っているし、溶接も、ズレ無く綺麗に仕上がっている。

コレは間違いなく、機械によって量産されている物の筈だ。

うーん、うーん……じゃあ、どこから取り寄せた物なんだ……？

文化保存指定でもなく。

管理世界でもなく。個人製造でもなく……

「「あ」」

セリカさんも、同時に声を上げた。

ある。一つだけ、その全てを満たすものが、ある。それは……

「管理外世界からの、持込み……」
「……バレたか」
ランスターさんは、悪びれる様子も無く、舌を出した。
「兄さんが、執務官になった記念に、無理して取り寄せたのよ。……ま、殆ど乗らないうちに、どっか行っちゃったけどね」
セリカさんは、ちらちらと、異世界の二輪車へと目線を送っている。
「乗っていいわよ」
「いいんですのっ!?」
「転かしたらブッ飛ばすからね」
「大丈夫ですわ！」
セリカさんは、ぱぁっと顔を輝かせ、いそいそとヘルメットを被る。
ランスターさんがオートマの方を始動させ、跨る。
私もヘルメットを被り、ランスターさんの後ろへ。
今更だけど、大丈夫なんだろうか？
「目的地まで先導するから、着いてきなさいよ」
後ろのセリカさんへ声をかけ、一息して、発進。
セリカさんは、待ちきれない様子で、アナログなキーを指し込んだ。
直後。
――――キュルッ……ヴォオンッ!!
うわっ……すごい音！
――――ヴォンッ……ヴォオオオオオオオオオオンッ!!
速っ!!
あっという間に、追い抜かれちゃった!!
「あのバカ、先導するっつったのに……」
「あはは……目的地の位置情報、セリカさんに送っておくね」
走行中に片手を離すのは怖かったけど、ほぼ一本道だし、急激なコーナーが無ければ操作できそうだ。
返事は、当然のことながら返ってこない。
きっと今頃、街道をウォンウォン言わせながら爆走してるんだろうなぁ……警邏隊に捕まらなきゃいいけど。
平和にトコトコと舗装路をしばらく走り……きゅっ、と止まる。

「ここよ」
「え……ここ？」
目の前にあるのは、廃棄都市区画と、郊外の境目に立つ、廃工場群。
離れたところから、歓声や怒声、濁った音が聞こえている。
無人では無さそうだけど……なんというか、あんまり、近づいちゃいけない類の場所のような気が……
ランスターさんは、表からは見えない場所に二輪車を停める。
また少し待っていると、遠くから、ウォオオン、と、内燃機関の音。
セリカさんが、ようやく追いついてきたらしい。まったく、どれだけ遠回りをしてきたのやら。
「遅いわよ」
「あら、失礼。あまりにも素晴らしいものですから、つい……」
さて、三人が揃ったところで、また行動開始だ。
「そろそろ、教えていただけませんこと？　一体このような場所に、どのような用が？」
うん……そろそろ、私も聞きたいと思っていたところだ。
「情報収集よ」
ランスターさんは、端的に答えた。
「メディアや、ネットでも表に出ない情報っていうのも、結構あってね……ここにいる人間から、そういう裏の情報を買うのよ」
買うって、
「いくらくらいで……？」
『情報屋』なんて、フィクションの存在だと思っていた。
「あいつ……情報屋が求めるのは、金銭じゃないわ」
金銭じゃない対価？
「そう」
歩いているうちに、一番大きな倉庫の前にやってくる。
「あいつの求める対価は、唯一つ。
――『力を示すこと』」
……扉が、両手で押し開かれた。そして、次の瞬間……

――――……ワァアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!
巨大な歓声が、私達を打ち据えた。
カジノがあった。
闘技場があった。
ナイフがあった。
拳銃があった。
札束があった。
――――おおよそ、『欲望』に関わる物が、溢れかえっていた。
それらに各々、黒山の人だかりが出来ていて……剥き出しの感情を、欲望を……ギラギラと、輝かせていた。
ディーラーの配ったカードを前に天を仰ぎ見る人。
スロットマシンへ血走った目を向ける人。
有刺鉄線のリングロープの中で、素手で殴りあう人。
壁際でアルコールを呷る人。
……あまりにも非現実的な光景に、立ちくらみがする。
「う……」
……育ちのいいセリカさんは、顔面蒼白だ。
「――よう、ティアナ」
ずいっと人垣を割ってやってきたのは、大柄で、浅黒い肌をした男の人だった。
腕といわず胸板といわず、あちこちに、派手な刺青をしている。
「……今日は、オトモダチが一緒か？」
ジロリと、値踏みするような視線が、私達を捉える。
「手ぇ出したら撃つわよ」
「出さねぇよ。ガキは好みじゃないんでね」
肩をすくめる。
「……この人？」
「いや。こいつ……ボルボは、ただの用心棒よ」
遥かに年下のランスターさんに『こいつ』呼ばわりされても怒らないあたり、見た目以上に理性的な人のようだ。
「では、どなたがその『情報屋』なんですの？」

「えっと……」
ランスターさんが、説明に困っているうちに、例のボルボさんとやらが歩き出してしまう。
「オウ、てめーら!!　ティアナのヤツが来やがったぞ!!」
野太い声に、拳銃を置いたテーブルにいた何人かが、一様に振り向いた。
全員が全員……なんというか、嫌な記憶を想起させる容貌をしている。
「おおっ、やーっと来たな！　ったく、三日も待たせやがって!!」
「ハイスコア、アタシがとっくに更新しちゃったわよ!?」
「今日もいいブツがあるぜ！『とかれふ』っつー異世界の禁制品だ!!」
ランスターさんは、ふう、とため息をついて、たじろぐことなく、その一団へと混じっていった。
いえー！　とか、妙に陽気なノリで歓迎される。
はぐれないように、ランスターさんの後をちょこちょこと付いて行く。
「なんだ、ガキじゃねえか！　オラ、ジュースかミルクでも持ってきてやんな!!」
「あ、ども……お構いなく……」
……できるだけ、ランスターさんとはぐれないようにしなきゃ。
隣では、セリカさんが絡まれていた。
「ハンッ……育ちの良さそうなお嬢様だこと。赤い靴でも履いて舞踏会へ行って来たら？」
「いえ、舞踏会の予定はしばらくはございませんわ。サロンなら、来週末に予定されております」
「……」
……赤い髪の女の人は、憮然とグラスの中身を飲み干した。
ここで、いままで黙っていた、カウンターの向こうにいるバーテンダーのような男性が口を開いた。

「なぁ、ティアナよ。いくらなんでも、場違いがすぎるんじゃねぇか？
ここは公園の砂場とは違うんだぜ？」
ランスターさんは、無言で席を立ち……テーブルにゴトンと鎮座していた、無骨な拳銃を手にする。
５０メートルほど向こう。
無造作に設置された、人型の板へと、銃口を向けて……
――ぱんっ!!
……軽く乾いた破裂音。そして残る、火薬の匂い。
首元を打ち抜かれた人型は、ぷらぷらと揺れていた。それに向けて、再び……
――ぱんッ！　ぱんッ!!
二度、三度……肩と腹を撃ち抜かれ、飛散した。
「――」
……バーテンダーへ、意味深な目を向ける。
翻訳するなら、『ああなりたくなかったら黙ってろ』……みたいな感じだろう。
「……合計５０ポイント。おらよ」
バーテンダーは、仏頂面のまま、ランスターさんにコインを手渡す。
「これは？」
通貨では無いみたいだけど……
「……この場所での通貨がわりのメダルよ。あそこ」
くいっと顎で示された先を見ると、壁には、大きなボードが吊るされている。
上から、ＡからＦまで順番に記号が並び……その横には、何らかの数字が示されていた。
「ＡからＦまで、管理局のスキャンダルからトップモデルの下着の色まで、重要度の順に情報が並んでて……横に書かれた数字分、このメダルを支払えば、情報を得られるって仕組み」
なるほど。
さっき、ランスターさんが射撃を行い、点数分のメダルを稼いだように……

『優秀な能力』を披露すればするほど、重要な情報へ近づけるってことか。
管理局が揉み消した様な、都合の悪い情報が含まれていても、おかしくはない。
でも、それ相応に、要求されるメダルの総額も桁違い。
「稼いだメダルを、モノと交換することも出来るわ……禁制品でもね」
私達を呼んだのって、もしかして……
「一人じゃ、稼ぎにも限界があるのよ」
最高額の情報を購入するための、お手伝い……
「あはは……ええっと、なんといいますか……少々、ご遠慮させていただこうかと……」
――がっき。
逃げようとする私の肩を、ランスターさんが思いっきり掴んだ。
「ここまで知っておいて、今更、逃げられるとでも……？」
ひぃいいいっ……！　この人、最初からそのつもりだったんだぁああああ……!!
「いーから黙って働きなさい!!　アンタの馬鹿力はこの日のために授かったものなのよ!!　おら、向こうで重量上げなりアームレスリングなりしてきなさい!!」
「いやぁー!!」
周りの人達も、笑って見てないで助けてぇ!!
セリカさん、……？
「ちょっと待った……セリカさんは!?」
ついさっきまで横にいたはずのセリカさんと……絡んでいた赤毛のお姉さんの姿も無い。
――おい、なんかシエラがやるつもりらしいぜ!!
――新入りにヤキ入れるんだとさ
「!!」
ヤバい!!
倉庫の外に飛び出る。

大勢の観客が、既に群れを成していて……その隙間を、ランスターさんの手を引きながら、無理やり最前列まで出る。
「セリカさんっ!!」
まさか、殴り合いにでもなっていたら……というのは、杞憂に終わった。
でも、それ以上に予想外の事態だった。
真っ赤なバイクに跨ったシエラさんの隣で……セリカさんもまた、オレンジのバイクに跨っていた。
「ボルボ!! どういうことよ!?」
ランスターさんが、ボルボさんに噛み付く。
でもボルボさんは、肩をすくめた。
「断ることも出来たんだぜ? 退かなかったのは、おめーのダチだ。オレはただ、舞台を整えてやるだけさ」
ランスターさんは、ギリッと歯を食いしばる。
「……セリカ!! こーなったら、絶対勝ちなさい!! ……あと、転かしたらぶっ飛ばすわよ!」
振り返ったセリカさんは、呑気に手を振っていた。
「大丈夫ですわー」
そして、二人同時に、エンジンを始動させる。
――シュインッ、シュイイイイインッッ!!
どうやら、シエラさんのバイクは、普通にミッド産の物のようだ。
「0―400でいいな? ……勝ったほうには、1000ポイントくれてやる」
おおおっ! と、観客が色めき立つ。
1000。ランスターさんが稼いだ分の、20倍!
「シエラ! おめぇに賭けたんだからな!! 負けんじゃねぇぞ!!」
「よう新入り!! そのCBR、慣らし終わってんのかー!?」
「シャレで100ばかり賭けてやるぞー!!」
……レースはそのまま、周囲も巻き込んだ賭博になっている。
「カウント10でスタートだ。10，9，8……」
ボルボさんがカウントするごとに、周囲の熱も高まっていく。

「セリカさーーん!!　ファイトー!!」
ええい、もうこーなったら、乗るだけ乗ってやる!!
「3、2、1、……GO!!」
――ウォンッ!!
弾かれるようにスタートした二台は、あっという間に遠ざかっていく。
展開されたモニターに、二人を映す。
最初は並んでいた二人も、今では、シエラさんが僅かにリードしている。
差は縮まらないまま……あっという間に、半分を駆け抜けた。
「くそっ……電気じゃないんだ。ただギア上げて回せばいいってわけじゃ……!!」
まどろっこしそうに、ランスターさんがぼやく。
「このままじゃ……」
負ける。
そう、思っていた矢先のことだった。
『――ああ、こうすればいいんですのね?』
モニターの中。
セリカさんが左足で、シフトペダルを二回ほど下に蹴り入れて……
――ヴァォオオオオオオオンッ!!!
途端、回転が猛烈に上昇した!
ぐんぐんと差を縮めていく!
『……!　クソッ、どうなってやがる!』
シエラさんが毒づくも、既にトップギア、フルスロットル。
完全に、並んだ!
セリカさんが今度は、シフトアップ!
――ヴォオオオオオオンッ!!
さっきと同じギアなのに、段違いの速度だ!
そして……
「――抜いたぁッ!!」
観客の誰かが、歓声を上げる。

モニターの中……セリカさんは、頭一つ分も速く、ゴールを通り抜けた。
――ギュギュギュギュギュッ……!!
車体を斜めに向け、フルブレーキで停車。
「ふぅ……くたびれましたわー……」
……僅かな間を置いて。
――ワァァァァァァァァァァッ!!!
大歓声が上がった。
「イェェェェェェッ!! 大穴だぜェェェェェェェェェェ!!」
「おいおいおい、マジで勝っちまったよ!!」
「１００の１２倍で……うォおおおおおおおおおおよっしゃあああああああっ!!」
セリカさんに賭けていた僅かな人達が、腕を突き上げて喜ぶ。
「冷や冷やさせるんじゃないわよ、全く……でも、よく乗り方がわかったわね」
ランスターさんが言うには、内燃機関と、電気駆動の違いは、そのパワーカーブだという。電気は、それこそスイッチのように、スロットルを開けて電流を増せば、増した分だけ豊かなトルクで加速できる。
だが、内燃機関はそうではないのだと。各ギアごとに、最適な回転数というものがあって、それに合っていなければ、出るパワーも出せない、と。セリカさんは、最初、電気駆動車のように、発進からすぐにトップギアまでシフトアップしてアクセルを開けたが、当然、回転が付いて来なくて、もたついてしまったらしい。なので、一度シフトダウンし、最大出力を発揮できる回転数へ上昇させ、再度シフトアップすることで速度を乗せる。運転暦三ヶ月未満のセリカさんにしては、いささか高度な技術だと思う。
セリカさんは、人差し指を顎に当てて、言った。
「んー……なんとなく、ですわ」
なんとなく、って……
「チックショー……負けたぁ……」

シエラさんが、悔しそうにタンクに突っ伏す。
ばっ、とバイクから降り……セリカさんに、キーを渡す。
「……ほらよ。約束どおり、このマシンはアンタのもんだ」
ええええっ!? まさか、お互いのバイク賭けてたの!?
「セーリーカー……?」
ランスターさんが、恐ろしい笑顔でセリカさんににじり寄っていく。
「勝ったのですから、問題ないでしょう?」
「そーいう問題と違うわー!!」
ぎゃーすかと言い合う二人。
あのー……シエラさんが、さっきから所在無さそうにしてるよ?
「ほら、あんたのもんだ」
「……受け取れませんわ」
差し出されたキーを、そっと押し戻した。
「どうしてだい? 勝った方が、負けた方のマシンを好きにするって話じゃ……」
「もちろん、タダで返すわけではありませんわ。一つ、約束して欲しいんですの」
「……なんだい?」
「また、わたくしと走っていただけますか?」
シエラさんは、最初、ぽかーんと呆けて……思い出したかのように、吹き出した。
「――ああ、わかったよ。約束だ」
「約束ですわよ?」
わぁっ、と、また周囲が囃し立てる。
「おう、新入り。名は?」
ボルボさんが、メダルが詰まった袋を手にやってきた。
「セリカと申します」
「セリカ、こいつはおめェのもんだ。受け取りな」
ぽんっ、と放られたそれを受け取る。
「ティアナさん、どうぞ」

……と思ったら、そのままトスしてランスターさんに渡してしまった。
「セリカさん、いいの？」
「ティアナさんには、必要なものでしょう？」
ランスターさんは、かりかりと頭をかいて、照れ隠しをしている。
「あー……ありがと」
これで、１０５０ポイントか。
Ａランクの情報に必要なのは……１００万くらい、だったかな。
「数年計画になりそうだねぇ」
聞けば、ランスターさん一人のときは、一晩粘っても２００ポイントがいいとこだったらしい。
「……」
セリカさんは、ちゃんと成果を出した。
なら、私も！

――……
私は……有刺鉄線で囲われた闘技場の中にいた。
アームレスリングより、ベンチプレスより、得られるメダルの額が多い。
私は初参加で、女子供。誰も私に賭けないことは、確信していた。
オッズは……１０。
それも当然。相手は、現在５連勝中だ。
「おいおい、出る場所間違えてねぇか？」
「手加減してやれよー」
「殺すんじゃねえぞ！」
げらげらと、野次が飛んでくる。相手も、にやにやと私を眺めている。
リングサイドでは、ランスターさんとセリカさんが、固唾を飲んで見守っている。
今日の稼ぎを、全額私に賭けたんだ。
負けるわけにはいかない。

「……退くなら今のうちだぞ」
ボルボさんが、最後の忠告をした。
それを振り切って、試合に合意する。
――うォおおおおおおおおおおっ!!
盛り上がる中……
――カァンッ!!

ゴングが鳴って、
「ふンッ！」
踏み込んで渾身のボディブローを肝臓の辺りにぶち込んだ。
「ごぅふっ……」
対戦相手が泡を吹いて白目を剥いて倒れこんだ。

「「「「「「「　……えっ？　」」」」」」」

――カンカンカンッ!!
試合開始１３秒。
１０カウントを検知したゴングが、高らかに鳴った。
◆▪◆　◆　◆
ランスターさんの手に、山のように盛り上がったメダルが収まっていた。
１０５００ポイント。それが、今日の稼ぎの全額だった。
「いちまん、ごひゃく……」
ランスターさんも、手にした巨額に、思考が追いついていないようだ。
一日で一万なら、目標までは１００日……とはいかない。
これで、私や、セリカさんのオッズはがくんと下がるだろうし、相手が都合よく油断してくれるとも限らなくなった。
野次馬達をやり過ごして、三人で固まる。
「……まるで、『覇王』だな」
ボルボさんが、変な名前を言った。

覇王。
私達には、割と馴染みのある名前だけど……
「もちろん、御伽噺の古代ベルカ王のことじゃねぇが……まぁ、べらぼうに強い女だった、ってことよ。年のころも、おめぇらと同じくらいだった」
ボルボさんは、タバコに火を点け、燻らせる。
「ふらっと栗毛の小せぇガキがやってきたと思ったら、当時のトップランカーをなぎ倒して、王者を下して……情報だけ得たら、とっとと消えちまった」
――インパクトだけなら、おめぇらも負けてねぇけどな。
そう言い残して、ボルボさんは倉庫の中に戻っていった。
「覇王……覇王、かぁ……」
……言葉の響きに、その凄みに、胸が高まる。
覇王。闘技場の王者をも屠る、強き王。
それを、堂々と名乗れるくらい、強くなれば……
――ファンファンファンファン……!!
うるさいサイレンだなぁ。人がせっかく……
「手入れだー!! 散れーーー!!」
ボルボさんの号令に、集まった人達が散り散りに逃げ去っていく
……ってぇ、呑気に見てる場合じゃない!!
「スバル、セリカ! 逃げるわよ!!」
「は、はいぃッ!!」
「うんっ!! ……あれ、ランスターさん、今……?」
――名前で呼んだ……?
聞き返そうとも思ったが、そんな暇は無さそうだ。
「スバルさん、こっちですわ!」
セリカさんのバイクのリアシートに飛び乗る。
「二手に分かれて、ガレージに集合!!」
「気をつけてね、……」
少し迷うけど……ドサクサ紛れで、呼んじゃおう。
「――『ティア』!!」

「……あんたもね、スバル！」
そう言い残して……　警邏隊のパトライトから逃げるように、アクセルを吹かした。

……ふぅ。何とか、見つからずに済んだみたいだ。
「……ズルいですわ」
「え、何が？」
ハンドルを握るセリカさんが、ぼそっと言った。
「ティアナさんたら、スバルさんのことばっかり……」
もしかして……別れ際、私のことしか呼ばなかったことで……
拗ねてる？
「ま、まぁまぁ、セリカさん、」
「――セリカ」
「はい？」
「『さん』は、なんだか余所余所しくってイヤですわ。ティアナさんと同じように、セリカと呼び捨てになさって」
「え、ええ～……？　それは、ちょっと……」
一応、年上だし……
「呼んでくれなきゃ、このまま隊舎に突撃しますわよっ!!」
ぐりんぐりんと、左右に舵を切って蛇行し始めた！
「うわっ、ちょっ……ぎゃー!?」
目が、目がぁ～!?
「ほら、呼ぶんですの!?　呼ばないんですの!?」
このお嬢様、はっちゃけすぎでしょ!?
わかった、わかったから!!
「――セリカ、やめてぇぇぇぇぇぇぇ!!」
「無事だったみたいね、二人と……いや、セリカ。スバルどーした？」

「さぁ？　酔ったのではなくて？」
……ガレージに到着する頃には、視界がぐわんぐわんと歪んでいた。おえっぷ……
「……んじゃ、また迷彩して部屋に戻るわよ……」
ランスター……じゃなくて、ティアも、疲労の色が隠せない。
今日が休暇日で、本当に良かった……
ベッドに倒れこみ……泥のように、ずぶずぶと眠りに埋没していった。
◆　◆　◆　◆
そして、一年が過ぎた。

「ティア、お願いがあるんだけど」
一年を共に潜り抜けてきた頼もしいパートナーに、私は話を切り出した。
「いや」
「聞いてよぅ！」
一年を共に潜り抜けてきた頼もしいパートナーは、つれなかった。
……ぐいっと腕を引っ張って、ようやくティアは手元で分解整備していた銃から目を向けてくれた。
「……何よ。言っておくけど、私は銃のメンテとバイクの調整に忙しいんだからね」
私を悩ます原因……一通のメールを、ティアにも見えるように開封する。
「？　何よコレ。差出人は、ギンガ・ナカジマ……アンタの姉さん？」
「そーなんだよ……」
「で、コレが何よ？」
ぱんっ、と両手を合わせ、拝む。
「――お願い！　一緒に来て！」
「嫌よ」

「即答!?」
　もうちょっと考えてくれてもいいじゃん！
「何であんたら姉妹の水入らずに混ざらなきゃいけないのよ。行けばいいじゃない、一人で」
　うー……知ってるくせに。
「姉さんは、私が管理局に入るの……というか、一人暮らしに、最後の最後まで反対してて……」
「最後は夜逃げ同然に家を飛び出して、バレて追いかけられて、夜行バスの屋根にしがみついて逃げ切った……でしょ？」
「そう、その姉さんから……1年ぶりの、呼び出しメール……」
　意外にも、訓練校に入ってからは音沙汰無かったというのに……
「セリカに頼んだら？　あいつなら、アンタの姉さんと同年代だし」
「そう思ったんだけど……セリカ、今度はヘリの免許取るんだって、教習に通い詰めてて忙しそうだし……」
「またぁ!?あいつこの前、特殊装甲車の免許取ったばっかりじゃない！　その前は……」
「大型自動車。大型特殊自動車。船舶2級、クレーンオペレーター、……あと、重機もいくつか」
　去年以来……セリカは、乗り物全般に抜群の適性を示し、年齢の許す限り、ありとあらゆる運転免許を取りまくっている。
「それと、オペレーター資格も取るんだって」
　更に言えば、セリカは機械全般にも強いことが判明し、前線指揮官志望だったのがオペレーター志望に方向転換。
「だから、ひと段落するまでは、忙しいと思う」
　もちろん、言えば着いて来てくれるのは分かるんだけど……大事な時期だし。
「……はぁ」
　ティアは、額に手をやり天を仰いだ。
「パフェ奢るから！」
「……」

「ドーナツ奢るから！」
「……」
「アイス奢るから！」
「……」
「クレープもつけるから～!!　一生のお願いだよティア～!!」
「アンタにはいくつの『一生』があるんだ!?　あとアンタじゃあるまいしそんなに食えるかっ!!」
「あうっ」
どげしっ……と、ベッドに蹴り込まれた。
「ああもう、うっさいわね!!　わかったわよ!!　付き合えばいいんでしょ、付き合えば!!」
悪態をつきながらも、最後は付き合ってくれるのがティアのいいところだ。
「ティア、ありがと～!!」
「その代わり、来週はいつもより多く稼ぐのよ!?」
「わかってるって！」
これで、プレッシャーが半分だ！
よーし、姉さんでもなんでも、ドンと来ーい！

……

……

……

……

……

……

「で」
「……」
「どこなのよ、アンタの姉さんは」
「……」
駅のターミナルで、姉さんを待つ。
季節は夏に近づいているのか、じりじりと日差しは暑く、湿度も高くてむわっとしている。喫茶店では、テラス席に日よけのパラソルが

開いている店も多い。アイス屋は大繁盛。ミント、チョコ、ストロベリー、二段重ね三段重ね……ああ、美味しそう……

……と、周囲の空気が、僅かに変わった。

具体的には……男性達の目線が、一点に……具体的には、改札を抜けてきた一人の女性に、集中した。

恋人連れの男性の何人かが、恋人に頬をつねられて物陰に連行されていった。

「……えらい美人ね」

隣のランスターさんが、そう評した。

青みがかった腰までのロングヘア、理知的な双眸、すっと通った鼻梁……オマケに、白いワンピースに藍色のカーディガンが、オーダーメイドのようにハマっている。傍目に見ても、近くに寄っても、完全無欠に美人の類だ。

「ん……あれ？　なんか、こっち来た」

――そして私が、この世で最も恐れる微笑を浮かべていた。

女性は、私達の前ですっと立ち止まった。

ティアは、ここにきて、目の前の美人が誰なのかを悟ったようだ。

「――スバル、久しぶりね」

「――姉さん、久しぶり」

私の姉……ギンガ・ナカジマは、実姉ながら見とれるような笑みで、私の手を取った。

「スバル、こちらの方は？」

すっとスライドした視線が、ティアを捉える。

「あー……ども。ティアナ・ランスター……訓練校で、スバル……さんの、ルームメイトをしています」

ティアが、珍しくかしこまった調子で挨拶をした。が……

「――スバル、こちらの方は？」

……レコーダーのように、同じ声色で、同じ口調で、同じ質問を繰り返した。

「……？」

ティアも、一発で違和感を感じ取ったようだった。

「ティアナ・ランスターさん。訓練校でのルームメイトだよ……聞いてなかったの？」
「聞いていたわ。でも、スバルを脅して無理やり着いて来た人かもしれないでしょう？」
「……」
おかしい。何かがおかしい。
ティアの感じている違和感は、増すばかりだろう。
「ティアに失礼なこと言わないで。無理を言ったのは、私のほうなんだから」
姉さんはその後、実に２０秒にも渡って、私の目をじっと見つめた。
「……そう」
ふっと視線が外れる。
納得したようだ。
「――初めまして。ギンガ・ナカジマです。スバルがいつもお世話になっています」
……最初にこう言えていれば、まともな応答だったのに。
「ここじゃ暑いから、どこかお店に入りましょう？」
そして、私の手を握ったまま、軽い足取りで歩き出す。
ティアの怪訝な目は、やがて、納得へと変わった。
姉さんは、出会ってから、店に入り、席に座るまで……一向に、私の手を離そうとしなかったのだから。
「今日は暑いわね」
冷たくて甘いジュースが、人数分運ばれてくる。
ストローで何口か飲んだ後、私達の向かいに座る姉さんが、口を開いた。
「訓練校での生活は、どう？」
……てっきり、帰宅の催促かと思っていた私は、面食らってしまった。
「え、……あ、うん。キツいけど、成長してる実感はある……かな」
「そう。訓練校では、ティアナさんとコンビを？」
「うん。今年で、二年目になるかな」

「ダッジ教官はお元気？」
　ダッジ教官……初日に私に革靴ストライクを決めた、マッチョな男性教官。
「あの教官、私が第二訓練校にいた時、出向で一月ほど勤められていたの」
「へぇ」
「訓練生への罰が、決まってグラウンド何週、とか、腕立て何回、とかの肉体系で……」
「あ、そうそう！　それで、何故か……」
「「　教官も一緒にやる!!　」」
　くすくすくす……と、姉さんが愉快そうに笑う。
　あれ……？　意外なほどに、普通に会話ができている……？
「ティアナさん、訓練校でのスバルは、どんな調子？　転んで怪我とか、していない？」
　驚いたことに、自ら進んで、ティアへ話しかけていた。
「え……ああ、まぁ、よくぶっ飛んだ行動をとっては、教官に注意を受けていますね」
「ちょっ……！」
　ティア、そんなこと姉さんに言ったら、怒り狂って実家に連れ戻そうと……!!
「ああ、そんな気はしていたのよねぇ……昔から、せっかちで考えよりも先に身体が動いて、痛い目を見るのよ、この子は」
　……しない。
　それどころか、話に乗ってさえいる。
「馬力が有り余っているんだと思います。なので、フィジカル系の訓練はいつも滅茶苦茶にやってますね」
「まぁ。……それじゃあ、コンビを組んでいるティアナさんも大変でしょう？　この子の体力について行くのは」
「厳しいときもありますけど……ペースに乗せられるのか、一人のときよりもいい結果が出たりします」
　どうしたことだろう。

もしかして姉さん、私が見ていない間に、大幅に軌道修正ができたのだろうか。
「ま、座学では私が教えながらやっていますから、持ちつ持たれつ、ですね」
「この子は、やればお勉強も人並み以上にできるのよねぇ……食指が動かなければ、自分ではやらない子だから、助かるわ」
「訓練校では、最年少組ですけど……この前は、成績で総合3位にも入りました」
「あら……すごいじゃない、スバル」
身を乗り出して、私の頭を撫でる。
「……ふふ。それじゃあ、ご褒美をあげないとね」
姉さんが席を立ち……相変わらず私の手を取ったまま、店を出る。
――それから夕方まで、嘘のように穏やかな時間が流れた。
――アイスを買い食いしながら町を歩いて。
――途中、変なお姉さんが開いている露天でアクセサリーを買ってもらって。
――ゲームセンターでゲームをして。
――商店を冷やかして。
――途中、ああでもない、こうでもないと、下らなくも楽しい会話をしながら。
……杞憂、だったのだろう。
一年ぶりの呼び出しに、勝手に気負って、不安がっていただけだったんだ。
姉さんはただ、私を心配して、会いに来てくれただけ。
……そうとわかったら、もっと早く、一緒に楽しめたのに。
「はー……遊んだ遊んだ」
最初に入った喫茶店に、また立ち寄った。
「楽しかったわねぇ」
「うん」
まるで、昔に戻ったみたいに、屈託無く笑える。

「ランスターさん、疲れなかった？　ごめんなさいね。つい、私達のペースになっちゃって」
「いえ……」
「暑いわねー……」
「上着、預かりましょうか？」
「……大丈夫よ。冗談だから」
ティアにも、普通に話せている。
もう、気負うのはやめにしてもいいかもしれない。
昔みたいに、『姉さん』、じゃなくて……
「スバル」
「……、えっ、ごめん、何？」
はっと気付くと……姉さんが、相変わらず微笑して、私のことを見ていた。
「もう、一年経ったのね」
「？　……うん」
今日で、私が訓練校に入って、だいたい丸一年だ。
「一年間、楽しかった？」
「……うん」
ティアや、セリカに会って、……あんまり公言はできないけど、ボルボさんやシエラさんたちとも出会って。
この一年は、間違いなく、充実していたと、楽しかったと、声を大にして言える。
叶うのなら、次の一年は、姉さんも……
「――――――で、いつ辞めるの？」
……えっ？
「姉さん……いま、なんて……？」
聞き間違い……だよね。
いつ辞めるの、なんて……姉さんの口から、出る訳が、
「いつ辞めるの？　今日？　明日？　明後日？　明々後日？」

「――――――――――――――――」
頭が、フリーズして……解けるに従って、徐々に、理解が及ぶ。
「来週？　再来週？　来月？　再来月？　……来年なんてことは、無いわよね？」
「辞めない……辞めないよっ!!」
「この一年は、父さんとシャッハがどうしてもって言うから、引きずり戻したいのを我慢したのよ？　もう一年は待てないわ。もう、十分に楽しんだでしょう？」
「姉さん、聞いてよ、私は……！」
「そうね、じゃ、来週にしましょう。それまでに、教官や、お世話になった人達に挨拶しておくのよ？」
「姉さん！」
やっぱり……最初から、この話をするつもりで……!!
「――――ふぅ」
姉さんは、ため息をつく。
……わかって、くれた？
「――ねぇスバル。あなたは何が不満なの？」
――――ぎりりりっ……!!
「かはっ……!!」
く、苦し……襟首、締め上げられて……!!
「そんなに姉さんが嫌い？　もう、昔みたいに呼びたくないくらい嫌い？」
「あ、ぐっ……う、」
「私と一緒に帰るなら、自由ならいくらでもあげるわ。私の目の届く範囲にいてくれるなら、今まで許してなかったことも許してあげる。
一人で家の中を歩かせてあげる。
一人で食事を食べさせてあげる。
一人でベッドに入らせてあげる。
一人で湯船に浸からせてあげる。
一人でトイレに行かせてあげる。

一人で服を着替えさせてあげる。
――私が外出している間、ホームカメラの前に座っていなくてもいいわ。
どう？　これ以上の自由は無いでしょう？　何が不満なの？」
「ウ、グ……!!」
ティア……助けて……!!
「ちょっと……あんた、おかしいんじゃないの!?」
ティアが、姉さんの肩に手をかけて……ずるっと、カーディガンが脱げた。
「!!」
ティアが目を剥く。
姉さんの背中から、二の腕にかけて。
夏でも、長袖を脱げない理由。
――4年前、私を庇ったとき、切り刻まれた背中。
刃物に付着した雑菌が入り込み、幾筋もの裂傷の痕が消しきれず、今も傷跡が残っている。
「欲しいものでもあるの？　漫画？　ゲーム？　おもちゃ？　お洋服？　いくらでも買ってあげるわよ？」
――ガシャンッ！
息苦しさから暴れた拍子に、足がテーブルに当たり、倒れる。
店内の空気が、一気に緊迫したものへと変わる。
「放しなさい！　あんた、それでもスバルの姉!?」
「――――うるさい」
――ゴッ!!
「ぐっ！」
無造作に振るわれた腕が、ティアを吹き飛ばす。
「――あなたに何が分かるの。たった一年一緒にいたくらいで、もう身内気取り？」
「こちとら、コンビパートナーなもんでっ!!」
――ゴガッ!!
ティアの振り下ろした椅子が、姉さんの裏拳に粉砕された。

店内は一気に恐慌状態になり、客や従業員が逃げていく。
「……一体何から、そいつを守るっていうのよ!?　そいつは、ガキの分際で管理局に入って！　毎日毎日、朝から晩まで訓練漬けになって！
……誰のためだと思ってるのよ!?」
「誰の、ため……？」
「もう、姉さんに頼りきりなのはイヤだって……胸を張って、あんたに『もう大丈夫』って証明したくて……!!」
「何でスバルが強くなる必要があるの？」
――本気でわけが分からない。そんな顔だった。
ティアの必死の説得は、その切っ先も、姉さんに届いてはいなかった。
私の気持ちも……何もかも、無視して、包み込んで、覆い隠して……
「その分、スバルの分も、私が強くなればいいじゃない」
暴力的な、一方的な善意で、私を閉じ込める。
「スバルは一生、私に守られながら生きていけばいいのよ」
ティアの顔が、苦痛とは違う意味で、青ざめる。
「あんた、狂ってる……!!」
「――――」
……返事は、無かった。
代わりに……ようやく、私の首から、姉さんの手が外れた。
「もう誰にもスバルを傷つけさせない」
殴りかかる。打ち払われる。
「もう誰もスバルに触れさせない」
つかみ掛かる。蹴り飛ばされる。
「もう誰の目にも、スバルを映させない！」
殴り飛ばされる。吹き飛ぶ。
「スバルは、一生私が守るんだッ!!　お前じゃない！　私が守るんだ!!
――――母さんの分まで!!」

――姉さんをこんなにしたのは、私のせいだ。
私が弱かったから。
私が背負えなかったから。
姉さんは、私の分の苦痛も背負って、飲み込んで、受け入れて――
――壊れてしまった。
「消えちゃえ、消えちゃえ、消えちゃえ、

しがみついた。
けど、姉さんは、恐ろしい膂力で、ぐいぐいと歩を進める。
「言うとおりにするから!!　もう出て行かないから!!
ティアには手を出さないでえええええっ!!」
駄目だ、駄目だ……もう、耳に届いていない!!
「私とスバルと以外……みんな、みんなみんな……!」
「ティアぁあああああああああああああああああああああっ!!」
「――――消えちゃえッ!!」
凶手が、繰り出される!!
せめて、私の身体をティアの楯に……!!

――――――ガキィイイイイイインッ……!!!

……硬質な音は、姉さんの凶手がティアを貫いた音でも、私を貫いた音でもなかった。
「……、……、、!!」
姉さんの全力の膂力を食い止めたのは……ハサミのように交差された、二振りの、平たい刃。
「……そこまでです、ギンガ!!」
短く切り揃えられた髪。
身を包むのは、聖堂教会の、修道服。
「……シャッハ!!　邪魔をしないでっ!!」
――――シャッハ・ヌエラ。
「スバルさん、ティアナさんっ!!」
「セリカ!?」
どうしてここに!?
「道すがら、彼女に引き止められまして!!　……大丈夫ですか!?」
セリカが……シャッハさんを、連れてきてくれたんだ。
「あんまり……!　げほっ、げほっ……!!」
「……とんでもない姉妹ね、あんたらは」
ティア!

「大丈夫!?」
「全身痛くて死にそうよ……」
　でも、無事でよかった……!!
「――ギンガ！　隊舎にも家にもいないと、おじさまから連絡が入ったと思ったら……案の定ですか!!」
「うるさい、うるさぁあああいっ!!　そこをどけぇっ!!」
「生憎ですが……あなたの保護監察官、兼友人として、出来かねます!!」
　シャッハさんは、姉さんの首筋、うなじの中央に、掌を当てる。
　意図を察知した姉さんが、脱出を図る。
　身体能力では上回るはずの姉さん。でも、シャッハさんは、難なく再び姉さんを組み敷いて……。
　――バチィッ……!!
　魔法……恐らくは、暴徒鎮圧用のスタンショットを、至近距離から叩き込んだ。
「あっっ……!!　ス、バ……――」
　びくん、と大きく痙攣し……ぱたりと、そのまま床に倒れこむ。

　近づいてくるサイレンの音を、どこか遠くに聞いていた。

◆▪◆　◆　◆

　外出先で騒ぎを起こしたことを咎められ、私とティアは、一週間の謹慎を頂戴し、またしても不名誉な噂が増えることになった。
　謹慎が明けてからは、ひたすら情報屋の倉庫に通い詰め……ただひたすら、対戦相手をぶちのめした。
「――、だぁっ!!」
「ぐえっ!!」
　また一人。
　鼻っ面に拳がめり込み、ダウンする。
「――そろそろ止めておきなさい」

「――……わかった」
ティアに促されて、リングを降りる。
オッズは、連勝を重ねすぎた所為で、１．１にまで下がってしまっていた。これじゃあ、いくら勝っても、はした金にしかならない。
「……」
勝った後は、うきうきするほどの高揚感があったはずだ。
またひとつ、強くなった実感があって……それが楽しみで、このリングに立っているはずなのに。
「……」
……原因は、もう分かっている。
あの日……姉さんに萎縮して、身動きが取れなかった。
一年をかけて積み上げてきたはずの自信は、ぐらついて、揺らいで……保てなくなってしまった。
――空しい。
どんな大男に勝つことができても、どれだけ勝利を重ねても……姉さんの前でみっともなく萎縮して、ティアを危険に晒してしまった。
こんなことなら、訓練校になんか、
――ぴたっ
「ひゃっ！」
つめたっ!?
「なに暗―い顔してんのよ」
ティアが、ジュースの缶を差し出してきた。
ううう……また気を遣わせちゃった……
「おう……ティアナ、スバル」
と、いつもの射撃のブースで休んでいたら、ボルボさんがやってきた。
「こんにちは」
「何か用？」
ボルボさんは、私の隣にどっかりと座り……押し殺した声で、ささやくように言った。

「どうにも最近、見ねぇ顔が混ざってやがるんだ」
……見ない、顔？
「新参じゃなくて？」
「ああ。……ありゃあ、ここを探ってやがるな」
探る……って、ここを内偵している、ってこと？
「……どうすんの？」
非合法な集会だから、調査されたら、色々と都合が悪いに決まっている。
叩けば埃どころか、証拠物件のオンパレードだ。
「お前らは少しの間、身を隠しておけ」
そうだよね……そうなるよね。
目標額の１００万には、あと４０万ほど足りないけど……その前に、この集会が摘発されたら終わりだもんね。
「わかったわよ。セリカにも伝えておく」
そうと決まれば、撤収撤収。
と、席を立った私達に、ボルボさんが何の気なしに投げかけた言葉は……私達を、射すくめるには十分だった。
「――――お前らだって、『お仲間』の御用にはなりたくねぇだろうからな」
「「――!!」」
……ティアと目配せをして、互いに首を横に振る。
――私達が管理局員だということは、ここの誰にも教えていない筈だ。
セリカは軽はずみに口を滑らせるような子じゃあない。
だったら……
「……いつから？」
いつから、気付いていたんだろうか。
「去年だ」
最初から……
「まぁ、最初は内偵かとも思ったが……それにしては、マヌケが過ぎるからな」

疑いは晴れているようだった。
「最低、半年だ」
半年、か……それまでは、この集会に顔を出すのはやめにしておこう。
訓練校卒業までは、あと一年と少し。
なんとか、本格的に管理局に組み込まれるより先に、情報を得ておきたい。
「……悪いことは言わねぇ。ここらで、おまえらは手を引きな」
ボルボさんは、うっとうしそうに席を立った。
ティアの後ろに乗り、いつものように夜道を走る。
「半年かぁ……長いね」
「ま、いい骨休めになるでしょ」
「……そうだね」
……姉さんとの一件もあったし、ここで少し、のんびりしておこうかな。
……ボルボさんが言ったように、手を引く気なんて、毛頭無いけど。
その翌日。
休暇日のロビーは、がやがやと賑やかな空気だった。
離れた席に陣取り、セリカと待ち合わせる。
半年間、集会が無いことを伝えると、セリカはあからさまにがっかりとしていた。
「つまりませんわー……ああ、わたくしのＣＢＲ……」
「私のだっ！」
「ちっ」
「ちっ、じゃない!!　アホみたいに走りまくって……もうタイヤ何セット目よ!?」
「たったの７セットですわ！」
「ちっとも『たった』じゃねーっつーの!!　輸入車はブレーキパッドひとつだって希少品なのよ！」
「だって、シエラさんったらモーターをパワーアップしたんですのよ!?　あんな希少なキットを組んでくるなんて、予想外ですわ！　せめ

て足回りで対抗しませんと！」
「そう言ってこの間、軽量マグ履かせたばっかりでしょうが！　お陰で可処分所得がスッカラカンだわ！」
「ティアナさんだって銃を新調したじゃありませんの！　アンカーやら何やら、豪華仕様で！」
ちょ、二人とも静かに静かに……！
なんか、ちらほらとこっち見てるって！
……少しして。
「とにかく、半年はお休みですのね？」
「うん、そうみたい」
「ま、仕方がありませんわね。今は、訓練に集中するタイミングなのかもしれませんわ」
学ぶことは、まだまだ、たくさんある。
――一月め。セリカが、ヘリのライセンスを取った。
――二月め。世間を騒がせていた、少年窃盗団が一斉検挙された。
――三月め。辺境の部隊の隊舎が、謎の全壊をした。
――四月め。前月の事件の犯人が、部族出身の年若い召喚師であることが判明した。
――五月め。私達コンビの名前が、成績最上位者の欄に書き込まれた。

そして、六月め。

――――――私達は、管理局に逮捕された。

訓練では何度も触った手枷。
でも、今……手に填められた手枷は、まったく異質の重量と圧迫感があった。
腕が重く、頭まで、つられて下がっていってしまうような感覚がする。

「スバル・ナカジマ二等陸士。ティアナ・ランスター二等陸士。違法物品取引並びに、違法決闘の罪で、あなたがたを逮捕します」
執務官の黒制服を着た男性局員が、罪状を読み上げる。
「執務官。主犯の『情報屋』を除く側近、集会の参加者たちを拘束しました」
「ありがとうございます」
事務的にそう言い、私たちを連行するよう、指示を出す。
警邏車へ、連行されていく私たちへ……一人の男性が、声をかけた。
「……だから、やめとけっつったんだ」
……今回の、一斉摘発の立役者。
「ボルボさん……なんで、ですか」
ティアも、愕然としたような……彼女にしては珍しく、呆けたような顔で、ボルボさんのことを見ていた。
「自己紹介が、まだだったな」
集会の取り仕切り役でもあった彼は、管理局員の制服姿で、捜査陣の中に、立っていた。
「次空管理局、機密捜査公安部所属……ヴァイス・一グランセニックだ」
――そこから先は、あまり覚えていない。
ただ、警邏車に揺られて行く先が、陽の当たる場所でないということだけは、理解できた。
◆▪◆　◆　◆

――新暦73年。
――第四訓練校所属訓練生、スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士の両名を、違法行為の常習犯として逮捕・拘束。また、同集会での目撃例のあるセリカ・クラウンを、被疑者として拘束。
――これを、再犯の可能性が高いものとして認識する。
――管理局法、訓練校行動規範のもと、上記三名の階級・魔導師ランクを凍結するものとする。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第二話

「……はぁ」
物憂げな雰囲気で、事務机に頬杖を突く、老齢の女性局員。
彼女こそ、この訓練校の校長である、ファーン・コラード。
（クイント。あなたの娘は、あなた以上のジャジャ馬だわ……）
かつての教え子に思いを馳せると共に、その扱いに、頭を悩ませていた。
順当に行けば……最悪、放校処分で済ませることができる。
だが、果たしてそれでいいのか？
道を踏み外しかけているとはいえ、あの三人は、努力家で、ひたむきな若者だ。
それを、ただ摘み取るだけで、本当にいいのだろうか？
席を立ち、窓の外を……その先にある、宿舎を俯瞰する。
「……甘いわね、わたしも」
たとえ、教え子であろうと、子供であろうと……罪を償うのは当然の責務だ。
いや、むしろ……子供だからこそ、厳正に、取り返しのつかない再犯をしないよう、徹底的に制裁を加えるべきなのだ。
そして、それは、年長者であり、この訓練校の最高責任者である、自らの役割なのだ。
断腸の思いで、気を引き締め……振り返り。
「――――」
息を呑んだ。
先ほど、自信が空けた席に……一人の女性が、我が物顔で腰掛けていたのだ。
扉も、窓も、開いた気配は無かった。
「――――驚かせないで頂戴」
少し、咎めるような口調になってしまった。
だが、突然の闖入者は、気にしたような様子は無い。

「――はっ、そっちが勝手に驚いたんだろ」
若い……いや、幼ささえ感じる、少女の声。
「婆ちゃん、久しぶり」
……ファーンを、このように呼ぶ輩は、一人しかいない。
(じゃじゃ馬が、もう一人……)
「……お茶でも、淹れようかしらね」
「あー、いい、いいよ。手短に済ませよう。年寄りの話は長いからな」
ひらひらと、面倒くさそうに手を振る。
「スバル・ナカジマと、ティアナ・ランスター……それに、セリカ・クラウンの三名を、テストしたい」
「――」
これには、言葉を失った。
「……テスト、とは？」
少女は、にっと不敵に笑う。
「そのまんまの意味だよ。私の部隊の、入隊試験だ」
私の部隊……と、この少女は言った。
この若さで、自らの部隊を擁している、ということなのだろうか。
「あなたの、部隊……？　いやまぁ、指揮官希望のあなたのことだから、わからなくもないけれど……あの子達はまだ、訓練課程さえ修了していないわ」
むしろ、その訓練課程にさえ、残れるかどうかも怪しいところだ。
「いいんだよ。いや、むしろ……そうでなくちゃ、いけないんだ」
「――？　あなた、何をしようとしているの？」
繰り返される不可解な返答に、ファーンはすっかり、困惑しきっていた。
「私の部隊、それは――――――――――――」
――――――――――――
真意を告げられたファーンは、最初、呆気にとられ……程無くして、呆れたように、笑い出した。
「そう……それが、あなたの目指す部隊なのね」
少女は、自慢げに腕を組んでいる。

「いいわ。そのように話を進めます」
「さんきゅ、婆ちゃん」
「入隊試験を受けさせるにあたってく部隊名が必要なのだけれど……」
少女は、得意げな顔で、すらすらと……その名を、告げた。
「時空管理局・特殊案件処理専門・独立権限保有――――機動六課
……と。
「……そう」
ファーンは、その呼び名に、何か感じるものでもあったのだろう。
特に疑問を呈するわけでもなく、承諾した。
「……じゃ、行くわ。いろいろ、準備もあるからな」
――かつんっ……
「よいしょ、っと……」
少女は、机に立てかけていた杖を手に、椅子から身を起こす。
杖は随分と、使い込んである印象を受ける。
「じゃーね、婆ちゃん」
ファーンの返答も待たずに、少女はまた、瞬きの瞬間に、部屋から消えた。
残されたファーンは、ようやく椅子に座りなおし……また一つ、ため息をついた。
「――――凶鳥が墜ちて、もうそんなに経つのね」

◆◆◆◆◆

――ひそひそ
廊下から聞こえる誰かの小声が、全て私たちを馬鹿にしているように聞こえた。
隣にティアがいなかったら、見当違いに怒り散らしていたかもしれ

ない。
あの後。
逮捕された後、三日間の営倉入りを命じられ、出てきたのが一昨日。
たったの数日で、私たちへ向けられる視線には、はっきりと侮蔑が混ざるようになっていた。
これまでも、年の差で侮られることも、上位の成績を取るたび、聞こえよがしに陰口が聞こえることもあったけど、……今回のコレは、避けようの無い物だ。
訓練への参加も、自主練習も禁じられ、ただ、自室での待機……言い換えれば、謹慎を言い渡されていた。
詳しい処分は決定されていないけど……多分、良くても放校処分だろう。残る猶予期間を終えれば、身柄は司法局か、もしくは親族に引き渡される。
親族……姉さん。
前回の騒動のときは、シャッハさんがあれこれ手を焼いてくれた。
でも、今回は……
その先のことを考えると、配給された食事も、のどを通らない。
「……くそっ」
パンをもしゃもしゃと齧りながら、ティアが悪態をつく。
「ボルボ……じゃなくって、ヴァイスの野郎……」
ティアの恨みの矛先は、潜入捜査官のボルボ……じゃなくて、ヴァイスに向かっているようだった。公安の捜査官だなんて、考えもしなかった。
……セリカ、どうしてるかな。
私は、ティアと一緒だから、こうして互いに愚痴を言い合うくらいなら出来るけど……
変な具合に吹っ切れちゃったとはいえ、流石に、今回の件は、応えているはずだ。
セリカだけじゃない。
あの日、一緒に逮捕された、シエラ、シズル、ヴォクシィ……馴染みの皆も。

「……」
ただ、ぎゅっと身体を丸めて、不安から逃げるように、眠ることにした。

――答えの出ないまま、一週間が過ぎた頃。突然、私達は学長に呼び出され、謹慎が解除された。
私たち三人は、学長室の前で、待機していた。
しばらくぶりに見るセリカは、変に落ち込んでいるようなことも無く、意外とケロッとしていた。
「セリカ、大丈夫なの……？」
「何がですの？」
「いやその……セリカの、実家から、何か……」
もしかして、本当の本当に、なんでもなかったり……？
「まぁ、軽―く……」
ほっ。軽くで済んだんだ……
「相続権やら家名やら、その他もろもろは剥奪されましたが」
軽くないよ、それ!?
「どうすんの!?」
「……」
セリカ……？
「……わ、」
……わ？
「――わたくしが聞きたいですわよぉおおおおおおおおおおおおおお……!!」
全ッ然ダメだったーーーーーー!!?
「お父様もお母様もなんか冷たいですし、ルームメイトには腫れ物というか、珍獣でも見ているかのように扱われますし……まぁそれは今更ですが」
「今更なんだ!?」
ぐずぐずと半ベソで、愚痴り始めた。
「スバルさんとティアナさんだけ、一緒のお部屋でズルいですし！」

うっ……

「仕方ないでしょ……そういう部屋割りなんだから」

ティアが、呆れ顔で冷たく言い放った。

「一人で寂しかったんですのよー！」

……私も、ティアが一緒じゃなければ、嫌になってただろうし……セリカには、何だか、申し訳なく……

「それに何より、もう二週間も単車に乗ってないんですのよぉぉぉぉぉぉ!?」

「「「全然懲りてないだろぉぉぉぉぉぉぉぉ!!?」」」

……と、廊下で暴れていたのが、扉越しに聞こえてしまったのか、扉があき、ダッジ教官が、顔をのぞかせた。

「「「「!!」」」」

反射的に、ビシッと姿勢を正す。

「何を騒いでいるか。……入れ」

恐る恐る、……初めて入る学長室に、足を踏み入れる。

その部屋の主……ファーン学長が、私たちに視線を向けた。

「学長の、ファーン・コラードです。前置きは不要ですね。あなたがたの処分についてです」

式典の際に見せる柔和な笑みは無く、鋭く冷たい声が、私たちを叩く。

「仮にも管理局員を志す者が、あのような違法・無法の蔓延る場に、遊び目的で足を運ぶなど言語道断。これを重いものとして受け止め……

――あなた方三名には、放校処分を言い渡します」

「「「……」」」

……妥当な、いや、むしろ、温情ともいえる処分だ。でも……それでも、わかっていたとはいえ、堪える。

「……」

真っ先に、ティアが踵を返した。もう用はない、と言わんばかりに。

「話は最後まで聞きなさい」

学長が、それを呼び止めた。

「……放校処分に当たり、あなた方の受け入れ先を用意しました」
「「受け入れ先……？」」
変な話になってきた。そもそも、訓練課程すら修了していない半人前を、どこが受け入れるのだろう。
「受け入れ先からは、あなた方をテストすると言われています。日時は一週間後。詳しい内容は、データで送信しておきますので見るように。それまで、訓練場は自由に使いなさい」
えっ、えっ……？
なんか、すごい勢いで話が進んでる。まだ、何も言ってないのに……ティアも同じようで、目に敵意がちらついてきた。
それが爆発するより先に、学長が、ぴしゃりと反論を遮った。
「――これは処分です。拒否権はありません」
そうして私たちは、否応無く……
うさんくさい新設部隊――――機動六課への入隊試験を、受けることになった。
◆・◆　◆　◆

一週間という期限付きで、セリカも含めた三人部屋と化した私たちの部屋。
夜。その自室で、渡された資料を読みふける。
「廃棄都市区画での、実戦形式による総合技能判断――だって」
「要は、この間の魔導師ランクの認定試験でしょ」
「ですが、それ以外の内容は明記されていませんわね」
うーん……
「どう見ても、私たち三人を対象にした条件の試験じゃない。どうせ、難易度もカリカリに厳しく設定してるわ。……学長のやつら、受け入れ先とか言っておきながら、ここで落とす気なのよ」
そう、なのかも。『救済措置は取りました』っていう、言い訳のつもりなのかもしれない。
でも……いや。むしろ。それなら。
「――で、どうしますの？」

セリカが、解答の分かりきった質問をする。
ティアは、すっくと立ち上がり、宣誓した。
「――正面突破よ。ぐうの音も出ない、完璧な結果をたたき出してやる！」
セリカも、満足げに頷き、同じく立ち上がった。
「それでこそ、ティアナさんですわ」
私も、立ち上がる。
「学長に、一泡吹かせてやろう！」
おー！
と、勢いづいたところで、再び座って早速作戦会議だ。
「各々の装備などの確認をしたいと思いますわ。ではまず、わたくしから」
セリカが床に広げたのは、支給品の汎用デバイスと、オペレート用のインカム類。
「私は、これ」
ティアは、例の集会でゲットした多機能銃。ワイヤーアンカーや、カートリッジシステム搭載の銃型ストレージデバイス。……ここだけの話、実包を装填することも出来る、『デバイス』とは名ばかりオマケの、違法ギリギリの実銃である。これには更に、ティア自身の魔法……幻術が加わる。ヴァイスさんにも、そのことだけは自供しなかったと言うから、向こうの意表を突けるはずだ。
それで、私は……リボルバーナックルと、ローラーシューズ。まぁ、他も使えなくは無いんだけど……この一年で、あれこれ試してみたところ、やっぱり私は、コレのみで運用した方が向いているらしかった。
「……今更だけど、変な構造よね、それ」
ティアが、ぼそっと言った。
「明らかに近接戦闘用……ベルカ式デバイスなのに、中身はミッド式とのハイブリッドって」
「んー……まぁ、もう5年近く前の物だからね」
このナックルは、かつて母さんが使っていたデバイスだ。
丁度、『近代ベルカ式』という概念が、爆発的に普及し始めてきた頃。

ミッド式で運用していたこのナックルにも、試験的にそのシステムの一部が組み込まれていた。
――不思議なことに、最初期の近代ベルカ式デバイスには、腕部武装が多い。
流石に、現行の最新鋭機と比べると、ソフトウェアは多少遅れてるけど……とにかく頑健で、鉄塊を殴り壊してもびくともしないハードウェア、武装としての性能を重視している私にとっては、さほど気にならない。
「スバル。『アレ』は、どうなの？」
思考に被せるように、ティアが聞いてきた。
『アレ』とは、私の、生まれつきの技能……ではなく。
「うん。あとは、実際に運用してみるだけ」
その一部を流用した、私の新魔法だ。
私なりに、知恵を絞って、構想を練って、ティアやセリカに意見を求めてみたところ……私の思いつきにしては珍しいことに、好感触だった。
「――決まりね」
ぱんっ、と、膝を叩く。
「この一週間、スバルの新魔法を軸にしたコンビネーションを、徹底的に訓練するわよ」
よし、そうと決まったら、早速訓練だ！　今日から、訓練場は遣い放題なんだから！
――一週間は、あっという間に過ぎて。
――そして、試験当日の早朝。
「ティーアー!!」「ティアナさぁんっ!!」
――だと、いうのに！
「起――きーろー!!」
「起きてくださいませー!!」
ティアが、よりにもよって朝寝坊した！
「うるさいぃ……すぴー……」
しかもまだ寝ようとしてるし！

「本番だよ、本番！　早く起きてってば！」
「あなたが寝ていてどうするんですの！」
　ああもうだめだこりゃ。揺すっても叩いても起きる気が無い。
　こうなったら……必殺奥義を使わざるを得ない！
「セリカ、そっち持って！」「ええ、了解ですわ！」
　二人で、ティアの手足を持って持ち上げる。えっほ、えっほと運んだ先は、シャワー室。
「ぐー……ぐー……」
　タイルの上に寝かされても、まだ起きる気の見えないティア。よーし……覚悟しろ。
「……」
　シャワーヘッドをティアの背中に入れ……きゅっ、きゅっ、と、冷水の蛇口を……
……
……
　ー　ー　ー　ー　ー　ー　……　ひぁぎゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー!!

……朝の寮に、怪鳥の如き悲鳴が鳴り渡った。

　セリカと二人で、ずんずん先行するティアを追いかける。
「ううう、頭痛い……」
「試験の前にヒットポイントを消費させないで下さいませ……」
　二人して、ティアの拳骨を喰らっていた。
　制服姿で、正門の前に着くと、そこには既に、学長と、教官……それに、見知らぬ女の人が待っていた。待機している車両から降り立ってきたのは、陸士部隊の制服。階級は……曹長。私たちが並び終わるのを待って、曹長は敬礼をした。
「――リーゼ・アインス陸曹長です。あなた方の試験を監督する任を受けております」
　この人が、監督官か。私たちも敬礼をして、車両に乗り込む。

「うっ……」
今気付いたけど、この車、私たちが逮捕されたときに乗せられたやつだ……
わざとか？　わざとなのか？　ティアもセリカも、嫌っそーな顔をしている。
一時間ほど走り、窓から覗ける風景は、朽ちかけたビルが並ぶものに変わっていた。
車が止まり、出ることを促される。
「……」
試験場である、廃棄都市区画に到着した。各々、準備を整える。
私はナックルとシューズを装着し、ティアはホルスターを巻き、セリカはインカム類を私たちに配る。
『あー、あー。スバルさん、ティアナさん、聞こえますか？』
インカムからは、セリカの声がバッチリ届いた。うん……異常なしだ。
「ではここで、試験内容を明示します」
展開されたディスプレイには、たった一枚の地図と座標だけが、ぽつんと表示されていた。
「どのようなルートを通っても構いません。指定のチェックポイントを通過し、三人が指定の座標に、時間内に到達するように。ただし、このマップの範囲より外には出れば、即失格となります」
……それだけ？　何か、えらくあっさりした条件だなぁ……
隣を見ると、ティアもセリカも、どこか拍子抜けしたような顔で……
「――甘く見ていると、大怪我をしますよ」
「――!!」
それを見透かしたように、リーゼ曹長が釘を刺してきた。
いけない、いけない……つい、気を抜くところだった。
「――では」
そして、リーゼ曹長はその場をあとにした。残された私たち三人は、開始時刻まで、機材のチェックと、準備運動。２０分ほどが、過

ぎて……

『では、試験を開始します』

スタート位置に、着いた。

開始時刻まで、１０秒を切る。一秒一秒、カウントが刻まれるたびに、心臓の鼓動が早くなる。そして、異様に長く感じた１０秒は、ようやく終わり――――

「――ＧＯ!!」

ティアの合図とともに、駆け出した!!

◆▪◆　◆　◆

『……』

試験場の上空。一機のヘリコプターが滞空し、地上を睥睨していた。

プロペラという前時代的な装置でありながら、恐ろしいまでに静穏だ。

その、内部。観光用ではないためか、荷室の窓は、必要最低限どころか、申し訳程度の覗き窓すら無い。時刻は日中だというのに、内部はほぼ、暗闇だった。

『……始まりましたね』

その薄暗い荷室の、僅かな光源……薄青色のディスプレイを覗き込む、一つの瞳。

浮かぶ面貌は、女性……いや、少女のものだった。

『……ふぅ』

吐息と共に吐き出される紫煙が、荷室に独特の臭気を充満させていた。

行儀悪く、ミリタリーパンツの足を組み、背もたれにどっかりと身体を預ける。

『……まったくあの子は、どういうつもりでしょうね』

奇妙な声質ではあるものの、静かで、平坦な口調。しかし、そこにははっきりと、不満が込められていた。どうにも、この場にいるのは本意ではないようだ。時折、右腕が慣れない動きでホログラフキーを

叩き、場面を替える以外は、ただぷかぷかと、紫煙を燻らせている。
そして、一本目を消費し終え、二本目に右腕が伸びたその時、操縦席と荷室との間に、小窓が開く。
「――おい、火気厳禁だっつったろ」
低い、男性の声だ。恐らく、彼がこのヘリの操縦者だろう。
「つーか、臭え。何だソレ、タバコじゃねえだろ」
文句が多いが、要は、煙草を吸うな、と言いたいらしい。だが少女は、何食わぬ態度で二本目を咥え、銀色のライターで着火した。
「あのなぁ……」
男性の声に、苛立ちが見える。
『嫌なら換気をすればいいでしょう。こう、後ろの搬入口をがばーっと開けてですね……』
行儀悪く、口のはすに煙草を咥えたまま、右の親指で、後ろをチョイチョイと示す。
「できるわきゃねーだろ！」
とぼけた提案をする少女に、操縦者の怒りが軽く爆発した。
『なんですかもう……』
少女は、ぶちぶち言いながらも、煙草の先端を靴底で潰し、ケースに仕舞った。
「ケチくさ……」
『ほっといてください』
いよいよやることが無くなったのか、少女はつまらなさそうに、ディスプレイに目をやった。途中で、操縦席との連絡口が、まだ開いたままだと気付く。
『……もう吸いませんよ』
若干、ふて腐れた口調でそう言う少女に、操縦者は言った。
「そうじゃなくてよ……あいつらのこと、キッチリ見てやっててくれよ」
どうやら、三人に思い入れのようなものがあるようだ。
『見ていますよ。まだ、見るべき点が何も無い、ということが、分かる程度には』

退屈そうに見えて、姿をしっかりとカメラで追っているのがその証拠か。
「まだ教育課程も修了してないド新人だぞ？　もっと寛大にだなぁ」
『あ、接触しそうですね』
「何ッ!?」
――かくんっ
『ぬわー』
「うぉ、やっべ！」
……振り向き様に操縦桿に引っかかり、ヘリが傾いた。
◆▪◆　◆　◆
――おかしい。
開始から十分ほどで、私は、この不可解な状況に気がついた。
念のため、二人の様子も伺ってみたけど、同じように感じているようだった。
以前の陸戦Ｃ＋ランクの試験では、もっとたくさんの敵性ガジェットがいて、しかもティアの魔法が通らないわ、私の打撃が弾かれるわ、大苦戦したものだった。しかも土壇場でティアが足を捻挫するわ諦めかけるわ、今思えば何で合格したのかさっぱり分からん代物だったけど……
――今回は、そう。
（……さっきから、全く敵と遭遇してない）
敵性ガジェットも、マーカーも何も無い。もう、三分の一の地点にまで来てしまった。
『間もなくチェックポイントです』
セリカが、インカム越しに静止を伝えてきた。
『スバルさん、先行してください』
『了解！』
どうせ、この区画は今回の試験のために借り切っているんだろうし、一般人がいるわけないよね。よーっし……
――ぎゅうんっ
シューズにエネルギーを充填し、身をぐぐっと撓ませる。そして、

一気に！
――どぎゅんっ！
テイクオフ!!
「うおおおおおおおおおおお――」
勢いのまま、ナックルを振り上げ……目の前の壁を！
「――ッりゃあああああああああああああッ!!!　」

――ドゴォンッ!!

一気に、ブチ抜いた!!
「!!　っしゃ！」
どこに……「っ!?」
目の前に広がる光景に、勢い付いていた身体が、思いっきり固まった。
こちらを、ぽかんと口を開いて凝視する……なんというか、どっかで見たことのある、反社会的な空気の中、（たぶん）反社会的なモノを取引する、反社会的なオーラを纏った方々が……
「……お取り込み中でしたでしょうか」
……私は何を言っているんだろう。
「……！　管理局か！」「殺れ！」
手にした物騒なものをこちらに向ける！　よくわかんないけど、正当防衛成立！
「うりゃあぁぁっ！」

――……

……中にいた三人は、鎮圧した。
ティアとセリカも、遅れて到着して、この事態に唖然としていた。
「……駄目ですわ。外部への連絡が通じません」
監督官のリーゼ曹長へ報告しようとしたけど、繋がらない。
「どうする……？」
明らかに異常事態だ。一旦もとの場所に戻った方が……

「……今更、試験を放り投げるわけにもいかないでしょうが」
ティアは、そう言いながらも迷っているみたいだ。
――ピッ
「！」
不穏な電子音に振り向く。さっき捕縛しておいた連中の一人が、リモコンのようなものを、後ろ手に隠して操作していた！
「っ……てめ！」
ティアが、男の顎を蹴り上げ、昏倒させる。
「――！　反応多数！　こちらに向かってきていますわ！」
まずい……！
「外に出るわよ！　建物の中にいたんじゃ、袋のネズミよ！」
「うんっ!!」
取引されていたケースをセリカに任せ、一斉に走り出る。
「！　スバルさんの前方３０メートル！　接敵します！」
――ピピッ
曲がり角から現れたのは、楕円形の筐体にカメラアイ、細いマニピュレーターを備えた、自動機械のような物体だった。前回の試験の時のものとは、形も……感じる物々しさも、段違いだ！
カメラアイが私をフォーカスし、きゅうっ、と窄まって……
――ビシュッ!!
光弾を発射した！
「くっ……！」
回避して、筐体をブッ叩く……つもりが、
（速い！）
空振った！
「スバルッ！」
――バコンッ！
ティアの援護射撃が、自動機械の側面を叩いた。
――ジジ……キュイインッ
凹みはしたけど、動作に影響は出ていない！
「こっの……！」

でも、動きは一瞬だけ止まった！　マニピュレーターを掴んで、振り回す！
「だりゃああっ!!」
――ガシャンッ!!
他の一機と衝突させたことで、ようやく動きが……
「右方５０メートルから5、左方４０メートルから４！　まだ来ますわ！」
「……!!　走れ！」
聞くまでも無い!!
「ねぇ、セリカ！　ティア！」
「あ!?　何よ!?　今喋ってる余裕なんて……」
「これ、本当に偶然かな!?」
ちゅいいいい、と、機械音が重なり、迫ってくる！
「試験のチェックポイントに、たまたま都合よく、そういう現場があるのって、本当に、ただの偶然かな!?」
――ガンッ!!
放置自動車を突き破って、一体出現！　ブン殴る!!
「――ぶつけて、現場を押さえられればよし。もし失敗しても、――――体のいい、厄介払いになるということですの……!?」
セリカが、握りつぶさんばかりに、機器を握り締める。
「～～ッ!!　あンの……クソババァあああああああああああ!!」
怒りと共に発射された射撃が、一体を蹴散らした。
とにかく今は、ゴール地点まで行くしかない！
ここまでコケにされて、黙ってられるか！
「でぁあああああっ!!」
――バガンッ!!
蹴り壊す！
「装甲の強度は、スバルさんの打撃なら抜けて、ティアナさんの射撃ではギリギリ通りませんのね。……ティアナさん、スバルさんの援護に徹してください！　必要最小限、敵の体勢を崩すだけの威力で！」

「う、……ぐ、が……うがーーーー!!　分かったわよチクショー!!」
　セリカの指示に従うという決定がある。それをその場の感情で無視するほど、ティアは馬鹿じゃない。
「次の路地、路面状況が最悪です！　迂回！」
「了解！」
　次の路地へ、頭を出し、
「屈めバカ！」「――！」
　ヘッドスライディングをするように変更!!
――ジッ……!!
　私の頭の通過していたであろう位置を、光弾が突き抜けていった。
　第二射がチャージされると同時、ティアの射撃が敵の砲口へ命中！
――バヂィッ……!!
　動きが止まる！　今だ！　立ち上がり様に、アッパー!!
――ゴシャッ！
　もうそろそろ、減ってきてもいいと思うんだけど!?
　次の一体へ、攻撃……！
――すかっ
「うわっ!?」
　直撃コースだったのに……！
「減ってきてはいますが……こちらの動きを、徐々に学習しているようです！」
――その、セリカの分析どおり……少なくなるに連れて、撃破数も頭打ちになってきた。
「はぁっ……はぁっ……!!」
　しばらくは、この一年の訓練の成果を組み合わせて、相手のパターンに無い動きで、突破することが出来た。でも……全行程の三分の二にまで来たとき。
「……セリカ！　次、どうするっ!?」
「……陣形４も、５も、使ってしまいましたわ……！」
　私たちの隊列を替えるのも、通じたのは始めの数回。

そもそも、セリカとティアの攻撃じゃ、敵の防御を抜けないのだから……結局、私がマークされてしまえば、それまでだった。
「くぁっ……！」
「ティアっ!?」
ティアの撃った弾丸が、敵を外れ、見当違いの方へ飛んでいった！
「でやぁっ！」
飛び掛り、殴りつける！
（駄目だっ！　浅い！）
表面を抉っただけだ！
――バジュッ!!
「きゃあっ!!」
「……っだぁあああああっ!!」
一機、撃破！
「セリカ!!」
「へ、平気です……くっ!!」
セリカが、足を押さえて蹲る。隙間から、どろっと、血が流れ出た。
――ちゅいいいいん。
――かしゃっ。かしゃんっ。
応急手当をしなきゃいけないけど……敵だ。これは、訓練じゃない。負傷したセリカだけを狙わない理由は無いし、ギブアップも出来ない。
「……スバル、セリカをこっちに」
ティアに促されるまま、近くの廃ビルに逃げ込んだ。
「い、いたた、いたたたた……!!」
「我慢しなさい」
セリカの足に当て木をして、包帯を巻く。
「……すみません」
「……何で謝ってんのよ。外した私のミスでしょうが」
それと、仕留めそこなった私の責任でもある。
「……スバル。セリカを背負いなさい。走るくらいはできるでしょ」
「あ、うん……」

どこか、諦めを孕んだ声。
それに、セリカが鼻をすする声が被さった。
「無理ですわよ……だって、もう……このビル全体、敵に囲まれていますのよ……？」
……逃げ込んだ時点で、分かりきっていたことだった。
「……くそっ!!」
ティアが、壁を殴りつけた。
頼みの綱の新魔法は、使えなくもないけど……機動力がこんな状態で使用すれば、むしろ、相手の狙いが付けやすくなるだけだ。相手にまだ見せていない行動パターンだとしても、この包囲網を突破するだけの力はもう……
――積み、だろうか。
このまま、ここで……ただ、敵に押しつぶされるのを、待つだけ。
「……」
――あの時のように。
「……――嫌だ」
……二人が、顔を上げる。
「……諦めたくない。諦めるのは、もう嫌だ！」
何かあるはずだ。何か、何か……!!
――ずるっ
ティアがもたれかかっていた壁。その壁に付着していた砂埃が、擦り取られる。
「――……あ」
「だったら、どうしろってのよ……！」
半分、耳に入っていなかった。
その、ティアの背後……砂埃の中から現れたのは……
「――ティアッ!!　それっ、後ろ!!」
「あァ……？　これが、何よ……ッ!!　これ!?」
私たちにも馴染み深い、企業のロゴマーク！
――カレドヴルフ・テクニクス
ミッドチルダを代表する、魔導端末の製造会社。その商品は、武装、

通信システム……そして、車両！
「……！」
セリカが、手元の機器を操作する。
この座標にあった、当時のビルを検索すれば……!!
「カレドヴルフ・テクニクス　動力研究部　第６分室。当時のデータが、僅かですがヒットしました！」
三人で、映像を覗き込む。
だいぶ古い映像データの中には……確かに、四輪車や二輪車、三輪車の映像があった。
「でも、もうとっくに運び出されてるんじゃ……」
研究成果なんて、真っ先に運び出されているに決まっている。
「いえ、当時のマニア筋の掲示板に。一台だけ、廃棄されたテスト車両がある、放置されているのを発見した、という書き込みが」
「……探すわよ！」
程なくして、そのテスト車両とやらは、あっけなく発見された。
「……やはり」
「……そういうことか」
ひどく、落胆した二人。それもそのはず。その発見された車両は……フレームとタイヤ、それに、エンジンの一部分しか、残されていなかったのだ。誰かがパーツをもぎ取って行ったのか、それとも、機密部品はとっくに廃棄されてしまったのか。
どちらにせよ、この車両は、このままでは決して動かない。
「……このままなら、ね」
二人が、顔を上げる。
「……諦めるのは、まだ早い！」
ぽいぽい、とローラーシューズを脱ぎ捨てる。
「その辺の廃材、何でもいいから片っ端から持ってきて！」

――ちきちき
――ちゅいいん

――きゅいいっ

……外では、大量の浮遊機械が突入の機会を伺っていた。さっとブラインドを下ろし、視線をかいくぐる。

「――準備は良い？」

私の問いかけに、二人は頷く。

「……映像だけじゃなくて、音声も再現するなんて初めてよ」

「いきなりでごめん。でも、ティアにしか出来ないことだから」

「……うっさい」

照れ隠しをして、術式の発動に入る。そして、……

――りゅいいいいいいいいいいいいいんっ!!

ビルの外。

セリカとティアを背負い、ローラーシューズの限界出力で飛び出していく、『私たち三人』の姿があった。

――きゅいいんっ!!

当然、猛烈な勢いで追従する、浮遊機械たち。

まだだ。まだ、足りない。もっともっと、ひきつけてから……!!

――ばしゅっ!!

光弾が『私たち三人』の姿を、次々に貫いた。

そして。

『私たち三人』の姿が、霞むように消える――!!

「――行っけぇ!!」

……アクセルを、開ける!!

――がおおおおおおおおんっ!!!

洗練されていないがさつなエンジン音と共に、私たちの秘密兵器が発進した！

薄汚れたフレームに、腐りかけたタイヤ。錆びたシャフト。そして……分解した、ローラーシューズの動力部!!

「んがっ……！」

覚悟はしてたけど、すごい振動……!!　舌、噛みそう！
「６０，７０，；，１００!!」
――ぼごァあああああああああああっ!!
浮遊機械たちが、振り向く！　でも、もう遅い！
「スバルッ！」「スバルさんっ！」
今が、その時だっ!!
「――ロード、カートリッジッ!!」
――ガキュンッ!!　ガキュンッ!!
開放した魔力を、術式に注ぎ込む。
そうだ、決めた。この、術式の名前!!
地を駆け、天へと駆け上る……翼の道!!
「――ウイング…ローーーーード!!」

――ズバアアアアアアアアッ!!!

空色の道が、まっすぐ、一直線に、空へと伸びる!!
◆▪◆　◆　◆
――がちゃがしゃばたんっ!!
……ヘリコプターの荷室が、騒がしくなった。
『うそ、うそ、うそ……!』
……先ほどまで、面倒くさそうにモニターを傍観していた少女が、今や画面に顔を突っ込みかねない勢いで、映像を凝視していた。
「おいおいおい、何の騒ぎだ……？」
操縦席から顔を出した操縦者のことなど視界に入らず、ただ狼狽した声を上げる。
『――あれは、あの魔法は、――!?』
――ビーッ
と、操縦席で、ブザーが鳴った。
「……部隊長？　はい、こちら試験現場……あ、はいはい、了解ッス」
そして、荷室の少女へ伝令する。

「敵戦力が、予想外に増大したそうです。三人の対処能力を超えるようだったら、あなたが始末するように、と」
少女は、立ち上がり……押さえ込むように、再び座りなおした。
『……まだ、です。まだ、彼女らでも対処できます』
「そうッスね。それにしても、部隊長もひでぇ。訓練と称して、ド新人の半人前に、いきなり案件押し付けるとか……これ、どんくらいの案件ですか？」
『そうですね。通常でしたら……Ａランク魔導師二人、ＢランクからＣランクを１０人。小隊規模で制圧するレベルです』
「うっわ……」
操縦者が引いた。
『……ですが、最後の課題を、彼女達はクリアできるでしょうかね……？』
◆▪◆　◆　◆
「うおっしゃー！　抜けたー！」
秘密兵器は、私たち三人を乗せ、敵の頭上を越えた！
シャフトは今にも折れそうで、ローラーブーツの動力は、異常な高温を発し続けているけど……とにかく、これでゴールまで一直線だ！
「残り、２ｋｍ足らずですわ。この勢いなら、あと何分も掛からな、……あら？」
セリカが、怪訝な顔で遠くを見た。
「どうしたの？」
「今、あの影で何かが動いたような……？」
……望遠で、セリカが示した場所を見る。
「――――!!」
いた！
小さい子供が、敵の浮遊機械に囲まれてる!!
「ティア、ごめん！」「スバル、あっち！」「向こうですわ！」
私たち三人は……全く同じタイミングでハンドルに手を添え、全く同じ方向……試験範囲外へと、ハンドルを向けていた。
試験とか、なんとか……そんなの全部、後回しだ！　アクセル

ベタ踏み、いっそう激しく加速する！
――バギンッ!!
シャフトが折れた！　でも、勢いは止まらない！
「だりゃあああああっ!!」
――ガッゴォオオオオンッ!!
衝撃。そして一瞬、目の前が白くなり……なんとか、セリカを腕の中に庇えたことを確認する。
（そうだ……さっきの子は!?）
周囲を見回すが、それらしき姿は見えない。どうにか、逃げ出せたのだと思う。
「……」
のろのろと、身体を起こす。
――きゅいいっ
――きゅいいいっ
……囲まれちゃった。
「……万策尽きたわ。今度こそ、本当に」
ティアが、妙にサッパリした声を上げる。
――グキ、グキグキグキ……!!
浮遊機械たちが、まるで有機物のように寄り集まっていく。
円柱みたいだった浮遊機械たちは……一体の、巨人のような姿へと合体した。
「……でも、あの子は無事だったようですわね」
「……そうね。おかげで、試験がおじゃんだわ」
セリカが手元に、残った魔力を集め、魔力スフィアを生成する。
「……もう、幻術使う魔力も無いか」
ティアは魔力切れ。セリカは負傷している。……
――。じゃあ、仕方ないよね
「スバル、何を……!?」
ティア……ごめんね。ちょっとだけ、下がってて。
「――システムグリーン。……起動」
機人モード、起動。

……どうにもならないかもしれない。どう見ても、こちらの不利は覆らない。
もう、一発逆転のチャンスも使ってしまった。
……でも。
それでも。
「それでも……！」
――ギャリッ、ギャリギャリギャリッ……!!
決めたんだ。
誓ったんだ。
もう、守られているだけの弱い私と、決別するんだって。
自分の弱さを、誰かに押し付けたりはしないって。
――強くなるんだ、って……!!
「――――……決めたんだからぁあああああああああああああーーーーッッ!!」
――光弾が、雨のように降り注いだ。ナックルを盾にした。駆動部分が砕けた。
諦めない。
――巨腕が、唸りを上げた。全身で受け止め、振動波で弾き飛ばした。どこか折れた。
屈しない。
――マニピュレータで掴んだ廃車が、飛んできた。振動波で砕く。機能にエラー。
絶対に、諦めない。
――再び光弾。再びナックルを盾に。ナックルが大破した。
何が何でも、屈しない!!
――間合いに、入った！
「うおォおおお

おーーーーッッ!!」
渾身の拳を、敵の胴体に突き入れた！　最後の振動波を、直接内部に叩き込む!!
「ぐぁあっ……あぐ、ぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ!!」
反動が、身体を突き抜ける。システムはほぼオールレッド。無事な箇所なんて、殆ど残っていない。
――ギシ、ギシ……！
敵の巨体が、抵抗し、巨腕を振り上げる。
「っ～～ッッ!!」
私が、その巨体を砕くのが先か。
敵が、私を叩き潰すのが先か。
――ガガガガギガガガガッッ……!!
「――――諦めるもんかぁあああああああああああああっ!!」
――ガ、ギッ……！　……。……。……。
振動波が……とうとう、途切れる。敵も、その動きを止める。
永遠にも思える静寂。
だがそれは……敵の巨体から漏れ出る閃光によって、途切れた。
――――ゴバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

わぁわぁと、泣き出した二人を、慰め……

――――――――――――――――――ギ。

「――――!!!」

今の、音は……!!

「よけてぇっ……!!」

駄目だ……間に合わないっ……!!

――ギ、……バシュッ!!

異様なスローモーションだった。発射された光弾に切り裂かれる空気の壁までもが、くっきりと認識できるほどの。動かない。もう、私の身体は反応できない。駄目だ。直撃する。駄目だ。駄目だ。駄目だ――――!!

『――――――――――――――――――合格です』

――――――――――――――――――ガィインッ!!

……直後。煌いた銀光が、光弾を、その後ろの浮遊機械の残骸を、真っ二つに切り裂いた。

「あ、」

激しい　既視感。

その、銀色の煌きは。その、軌跡しか追えないほどの、鋭い斬撃は……数年前に、見たのと同じ。

『……――――。』

――かしん。

彼女は、振り抜いた右手に握られた刃を、鞘に収める。

ミリタリーパンツとコンバットブーツ。

腰まである、栗色の髪の毛。

こちらへ振り向く、彼女。

３年分の年月を僅かに感じるが、当時の面影を残す、整った面貌。
――その左目の一帯を覆い隠す、アイマスクのような眼帯。
一つきりの瞳はしかし、私たちのことなど、これっぽっちも見ていなかった。
『おめでとうございます』
どこか虚ろな、祝福の言葉。それは、不自然な電子音声……
――首に巻かれた、人口声帯から、発せられていた。
「……あなた、は……？」
『……ああ。名乗っていませんでしたね。では……』
眼帯も、声帯も、……ある一点に比べれば、些細な変化でしかなかった。その、極めつけの一点が、私の目を吸い寄せる。
『……時空管理局・特殊案件処理専門・独立権限保有『機動六課』所属嘱託魔導師――
――高町なのは、です』
――空っぽの左袖が、ビル風を孕んで、ばたばたと揺れていた。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第三話

――――雪が降っていた。

「……、……、……！」

肩に掛かる、今にも消え入りそうな体温。

『……』

沈黙した相棒を、文字通りの杖にして、進む。

ずるずると、這うような行軍だった。

目の前に広がる、一面の銀世界。進んでも、進んでも、変化の無い……いや、もしかしたら、進んでなどいなかったのかもしれない。ただ同じところを、ぐるぐると、迷い歩いていたのかもしれない。

確かめる術などなかった。ただ、この体温だけを、決して零さないように……歩き続けるしかなかった。

「――……！」

左目が、ずきん、と痛んだ。

瞼は、開かない。鈍い違和感だけが、残っていた。

ひやりとした感触が、瞼の上をなぞった。

「……あーあ……あんたの目、キレーだったのにね……」

（アーデルハイドかシャマルに治してもらうから、どうでもいい）

しかし、その声は出せず……ひゅう、という無意味な呼吸音だけが、漏れ出した。

喉元に申し訳程度に貼り付けたパッチが、生暖かい血液に、じわりと濡れる。その僅かな熱すら、吹きつける雪が、容赦なく奪っていく。

「……バカな子。無理に庇わなけりゃ、そんな有様になんてならずに済んだのに」

その存在は、背負い続けるにはあまりにも重く……投げ捨てるには、たやすいほどに、軽すぎた。

「……真っ白で、つまんないね。……おしゃべりでも、する？」

「……」

「あんたと、あのタヌキがウチに来たのは……3年前だったっけ？覚えてる？」
――やめてよ。なんで今、そんな話をするんだよ。
「……とにかく、クソ生意気なガキが来たもんだって思ったよ」
初対面で、いきなり斬りかかって来た。
もちろん、腰の二刀を抜き放って、即座に応戦して……決着は、一晩経っても着かなかった。
「年がら年中、鬱陶しいため息ついて、無愛想なしかめっ面晒して……あーあ、なんでこんな辛気臭いチビが、あの人の形見なんだろう、って思ってたよ」
顔を合わせれば刀で斬りつけ合って、隙を見ては手裏剣や紙刃を投げつけ合って、ワイヤートラップとブービートラップが連日連夜、火を噴いて……
「……私にここまで張り合ってくるなんて、なんて骨のあるチビなんだ……って」
――やめてよ。もう、喋るなよ。傷が開いたら、どうするんだよ。
「……二人で、いろんなトコに行かされたよね。炎の森。砂の城。木の迷宮。鉄の神殿。岩の古城」
部隊長には、なぜか二人でワンセットみたいに扱われて、危険な任務に、放り出された。
何度も何度も、死ぬような思いをして。
何度も何度も、喧嘩して。
何度も何度も、絶交して。
何度も何度も、無駄足を踏んで。
「――楽しかったよねぇ」
――まるで。まるで……
何度も何度も、仲直りをして。
何度も何度も、一緒に生還してきた。
「――――ごめんね。今回ばかりは、もう駄目だ」
――まるで、お別れするみたいじゃないか。

カレン。
大事な、大事な……私の、友達。
――雪が降っていた。
残った右目に、罅だらけの相棒の発する僅かな光が届いた。……警戒色。
「――！　……ァ、ェ……！」
敵の、増援だ。声は出せない。
力を振り絞って、少しでも、遠くへ。
大丈夫、きっと大丈夫だ。こんなの、今までだって、何度も乗り越えてきたじゃないか。
「……、ァ、」
足を、止める。いや……そうせざるを、得なかった。
「……ツいてないときってのは、とことん、だね……」
目の前には、切り立った崖が、大口を開けて、待ち構えていた。背後からは敵。
がしゃがしゃと、不快な駆動音が迫ってきて……止まった。
……巨大な、蛇のような姿の、自動機械だ。
「……フゥッ……！」
だったら……やることは、一つだけだ。
体力の限界まで、敵を討ち続ける……！
「……だーめ」
するっ……と、腰元が、僅かに軽くなる。
「……!?」
死に体のカレンが、私の腰から、二刀の片割れを、抜き去った。
（返して）
駄目だ。武器を握ったカレンが、どんな行動に出るのか……嫌でも、分かってしまう。
「とらないよ」
自動機械の砲門に光が灯る。
「――」
応じるような、カレンの短い詠唱。展開される魔方陣。

止めないと。
カレン。
カレン。
カレンッ！

「――借りておくだけだよ。いつか、――――――、」

――透き通るような笑みと共に、刀を振るった。

地面の雪が、爆炎と共に巻き上げられ……深い谷底へ、落ちていく。
――カレンを巻き込んで。
落ちていく。奈落の底へ。
もう、手は届かない。動けない。
敵の最後の悪あがき。一条の閃光が左肩を貫いた。
大事な友達は、暗闇の中に消えてしまった。
私への脅威を道連れに。
私を守って。私なんかを守るために。
また、置いていかれた。
また、取り残された。
また、助けられてしまった。
私が。私だけが。私一人だけが。
私ひとりだけ、また、のうのうと。

「――――――

「――――ごふッ……」
声の代わりに、鮮血が、迸った。
――雪が降っていた。
音にさえならない叫びが、真紅が、消えていく。白く、塗りつぶされていく。
――全てを埋め尽くすような、白い雪が降っていた。

◆・◆　◆　◆

簡素な部屋だった。
あるのは、時計と、デスクと、本棚と、ベッドのみ。
ベッドが、シーツの盛り上がり方で、主の所在を示していた。
「……」
そのシーツのふくらみが、のそりと、身を起こした。
「……、」
シーツを身体に巻きつけたまま、のっそりのっそりと、デスクの方へ移動していく。
――かちっ、かちっ。
ほっそりとした首に、チョーカーのような機器を装着する。
『a，ア、ぁ、あー、……こんなものでしょうか』
数回の調整の後、電子音声が、女性の声に固定される。
――ぱちんっ
眼帯のバックルを留め、左目を覆う。
『おはようございます、マスター』
赤い宝石が明滅し、音声を発する。
『おはよう、レイジングハート。今日の予定は？』
レイジングハートへと投げかける声は、優しく柔和だ。

『ＡＭ８：３０より、部隊結成式が行われます』
時刻を確認する。まだ、６：４０を少し回ったところだった。
『……』
早く起き過ぎたらしい。さりとて、二度寝をするには、目が冴えすぎている。
『フェイトは？』
『シグナムと共に外出しています。ＡＭ７：３０に、空港で担当する二名と合流。その後、隊舎へ戻るとのことです』
もう一人は、言うに及ばず。
『……仕方ない。一人で食べるか』
ふぅ、と物憂げな息をついて、適当に身支度をして、部屋を出た。
まだ早いだけあって、誰の気配もしない。他人の視線が嫌いな彼女にとっては、好都合だった。
食堂へ入る。まだ、時間的にも、職員が居るはずがなかったのだが……
――しゃーこ。しゃーこ。
「ふふふ～ん、ん～、ふっふふ～ん……」
何かいた。
まだ新品であるはずの中華包丁を、鼻歌を歌いながら、研石で研磨する、禿頭の男性。
『おはようございます、エド料理長』
驚くでもなく、彼の前のカウンターに座る。
「ふふふふ～ん、ふふふふ～ん、ふふふふふん、ふふふふん……」
どうやら、包丁を研ぐ方が大事で、コミュニケーションは置き去りにされているらしい。
『誰もいなかったら、自分で作ろうと思っていたので助かりました』
ぴくりと、エド料理長が彼女の目を見る。
「ふふふふん、ふふふふん……」
少し、鼻歌のトーンが下がる。気分を害したらしい。
「ふーん、ふーん、ふふんふんふんふん」

――ごとんっ
唐突に目の前に、料理が配膳された。白米に味噌汁、漬物に卵焼き。
それはいいのだが……彼は、包丁を研ぎながら、どうやってこれを用意したのだろうか。
いつ作った。いつ運んだ。というか材料は何処だ。
『いただきます』
しかし気にすることは無く、行儀よく礼をして、食事を始めるのだった。
食べられればいいのである。
鼻歌と、包丁を研ぐ音をＢＧＭに、ぱくぱくと食事を胃に収めていき……１５分ほどで、食べ終えた。
『ごちそうさまでした。とても美味しかったです』
トレーを返却台に置く。さて、朝食は済んだと、食堂を後にする。
……調理場の隅に寝袋があったような気がしたが、いくら料理人とはいえ、まさか調理場で寝泊りをするような者はいまい。
さて、残り一時間ほどをどうするか……と、真新しい隊舎を歩く。
（嫌な夢だった）
あの夢を見るなんて、ここ最近ではなかったのに。
『……』
しかめっ面を作ったと思ったら、懐をがさごそ長方形のケースを取り出した。
その中身を取り出し、咥える。
『マスター』
咎めるような、諌めるような、相棒の声。それに、バツが悪そうに苦笑いを返す。
『一本だけ、一本だけ……ちょっと、『忘れる』だけだからさ。見逃してよ』
そして、銀色のライターで、しゅぼっと火を点ける。
先端がじりじりと焼けていき、１センチほど燃え尽きて……
『……っぷはぁ』
……もっくもくと、盛大に口から煙を吐き出した。

『嫌な夢は、忘れないとさ』
ふよふよと肩口を浮遊して随伴する相棒に、言い訳を口にする。
てくてく歩きながら、喫煙し……吸い終える頃には、隊舎のエントランスを抜けていた。
『……はー、すっきりした』
ちなみに、隊舎は全面禁煙の建前である。
そして、先ほどから火災報知機がけたたましく鳴っているのだが、気にした気配も無く、隊舎を後にしていった。
『いい天気だなぁ』

――――高町なのは17歳。機動六課に着任して2週間の、嘱託魔導師である。

◆◆◆◆

そんなこんなで、結成式。開始時刻も近くなれば、それなりに人も集まり始め……その中に、スバルら三人の姿があった。
つい先日、部隊長の課したテストに合格し、晴れて管理局員へと返り咲いたのだが……元気が無い。特にスバル。
（……どういうことなんだろう）
脳裏には、3年前の事件の際、助け出してくれた少女と……ついこの前の入隊試験の際、再びめぐり合えた恩人の姿が、ぐるぐると回転していた。
同一人物だ……と、考えている。何せ、顔が似ていた。それでなくても、顔が似ていた。むしろ、顔が似ていた。とにかく、顔が似ていた。
「た、他人の、空似……？　かな……？」
正直、それだけだった。
「覚えてないって線は？」
ティアナが、横から口を出す。
「うーん、うーん……」
正直、恩義を感じていたのが一方的なものだった……というのは、

スバルにとっても不本意であり、否定したいところだった。
――嘱託魔導師・高町なのは。
彼女は、そう名乗った。
嘱託魔導師。正規の局員でないのであれば、３年前の事件の折、リストから名前が漏れていてもおかしくは無い。
ただ、もう一つばかり気がかりなのは……
（あの、左腕……）
――ざわっ
ざわめきに、思考から引き剥がされた。
「え、何、何……？」「……さぁ？」「どなたか、いらっしゃったようですね」
人ごみの隙間から、覗き見る。
陸士部隊の制服を、着てはいる。だが、階級章の類は見えず、実力者としての気負いも見えない。どこまでも自然体に、この異質な集団の中へ、入り込んできた。
だが、隊士たちの誰もが、彼を凝視していた。
「――クロノ・ハラオウン」
……それが、彼の名。
「うそっ……!?」
「なんでこんな場所に……!?」
ミッド全域で、その名は良くも悪くも知れ渡っている。
執務官試験・最年少合格者にして……勲章授与式という場で将官をタコ殴りにして全治十ヶ月の重症を負わせ、部下を扇動して式典をぶち壊しにして逮捕されるという、前代未聞の不祥事を引き起こして除籍された、いわくつきの人物である。
６年間、全く表舞台に出てこなかった彼が、何故、今ここにいるのかと、誰もが疑問に感じていた。
「ま、俺らの『大先輩』だし、いいんじゃね？」
誰かが、せせら笑うように言った一言から、忍び笑いが伝播していく。
「……」

嫌な空気だった。
へらへら笑っている者たちまで……見下しているようで、その実、何よりも自身を見下げ果てているような、自虐的な笑いの連鎖だった。
「何を騒いでいる」
……リーゼ曹長が、入室した。
「……」
静まり返る室内。リーゼ曹長の圧力。
「これより、結成式を始める。進行は私、リーゼ・アインス陸曹長が行う」
そして、式が始まった。
最初のうちは、つつがなく進行していった。だが……
「では、諸君らの直接の上官となる、教導官を、」
「あのぉ～、ちょっといいッスか？」
リーゼの話に、不躾な声が横入りした。
「……何か」
努めて理性的に対応するリーゼ。
声の主は、制服をだらしなく着崩した青年。
「いきなり連れてこられて、何の説明もされてねェけど？　なんなんだよ、これ」
とても、上官への口の利き方ではない。
周囲も、止めるでもなく、囃し立てるでもなく、傍観もしくは、無関心。
「あ？　逮捕でも処罰でも何でもやってみろや。もう怖いもんなんて何も無ェんだよ！」
リーゼの目が、やや釣りあがり……青年が更なる悪態をつこうとした、その時。
――――……ォオオオオオオオンッ、……キュキキキィッ!!
……隊舎の表から、けたたましいスキール音が聞こえ、続いて、どたばたどたばた、と、慌しく駆けて来る足音が聞こえてきた。間髪入

れず、扉が乱暴に開いた。
「遅ればせながら、ボク、さんじょーう！」
ずざざざざーっ。
靴底から煙を上げながらブレーキング。綺麗なブロンドヘアが、翻った。
「ごめんっ！　ちこくした！」
「……いえ、まだ始まったばかりですので。それより、」
「ん？」
「……両脇に、」
「ん？　……あー、そうだったそうだった」
……彼女の両脇には、ぐったりした子供が二人、荷物のように抱えられていた。
「そこの！」
びしっ、と目線をロックされたのは、スバル。
「え？　……は、はいっ!?」
「ぱすっ！」
――ぽいっ
荷物のように抱えられていた二人は、これまた荷物のように放り投げられた。
「へ？　え!?　ええっ!?　……とうっ！」
スバルは両腕を広げ、何とか二人をキャッチすることに成功した。
「よーし、ナイスキャッチだ！」
「は……はは……」
びしっ、と、開けっぴろげな笑みでサムズアップする女性に、スバルも曖昧な笑いで返す。
「……」
「……」
投げられた二人は、特に不満を訴えるでもなく、平然としていた。こういう扱いに、慣れているのかもしれない。
そして、いきなり現れた金髪の少女は。
「あの人……！」「いやいやいや、変だろ。そっくりさんだろ」「いやい

やいや、そっちのがねーよ！」「でもさ、あの人ならやりかねない」
クロノ以上の衝撃だ。彼女の名は……
「「「「「「「ゴロー《五浪》さん⁉　」」」」」」」
そう。
五度も執務官試験に落ち続け、あまりに落ち続けるものだから、逆に世間の注目を浴びてしまったという、悲運の執務官ゴロー……
「うがー!!　ゴローっていうな！　ぶっとばすぞーーーーー！
――ボクは、フェイト・テスタロッサだーー!!」
……改め、フェイト・テスタロッサ執務官。
「うわーん！　マークシートなんぞなくなってしまえー!!」
……マークシートを一列間違えて塗りつぶしてしまったために、3度目の試験を落としたトラウマが呼び起こされたらしい。頭を抱え、床をゴロンゴロンと転げまわる。綺麗なブロンドが、ヨレた執務官服が、埃まみれになっていた。
「落ち着け。どちらにせよ落ちていた」
その彼女の脳天に、容赦の無いチョップを落とす美丈夫。
「あいてっ！　なにすんだよシグナムのばか！　のーさいぼうがへったらどーすんだ！」
「馬鹿とはなんだ馬鹿とは。馬鹿というほうが馬鹿なのだ。この馬鹿め」
「ばっ……!?」
がびーん、と、本気でショックを受けている。
「ばかっていったほうがばか……って、えーと、えーと……シグナムの秀才！　この才媛！　かんぺきな記憶力め！　きみが執務官だったらよかったのに！」
「もっと言っていいぞ」
「ばつぐんの行動力！　さえわたる剣技！　くーる・あんど・くればー！」
「もっとだ」
「シグナムすごい！　カッコイー！
……あれ、何でボク、シグナムのことほめてるんだっけ？」

「気にするな。些細なことだ」
「そだね。まぁいっか！」

「「「「……」

誰もが思った。
『駄目だコイツ』
……と。

「……ああ、で、何の用だったか？」
「あー……どーでもいいわ……」
毒気を抜かれた男性が、隊列に戻った。
「……では、教導官の紹介へ移る。本日一名、別件にて欠席だが、以下の四名が、諸君らの上官だ」
前に進み出る。
「クロノ・ハラオウン特別講師。フェイト・テスタロッサ執務官・機動六課特別顧問。シグナム一等空尉。……？」
きょろきょろと、隊士たちの合間へ、視線を巡らせる。残る一人が、見当たらないのだ。
「……」
リーゼのポーカーフェイスに、焦りが浮かぶ。
「ああ、先ほど、メールが時限送信されてきましたね。『天気がいいから、ちょっとそこまで』とのことです」
のほほん、とした声がした。
フェイト乱入で開けっ放しになっていたドアから、どこか抜けた印象の女性局員が入ってきた。数名が、その出で立ちに違和感を感じ……それが彼女が、型遅れの佐官の制服を着ていることだと気付いた。だが、階級章は准尉。
「少々遅れてしまったようですねぇ。すみません」
……隊士たちは、無言だ。だが、それは、この抜けた女性局員ではなく……
——彼女が押す車椅子と、それに身を預けた少女へと目が注がれたからだ。

「……誰？」
見た目、ずいぶんと小柄な少女だ。陸士部隊の制服を着てはいる。そして、首もとの階級章へ、目が注がれたとき……その沈黙が、戦慄へ変わった。
「准将……!?」
……外見年齢とは、あまりにもかけ離れた階級。それが示すことは、つまり……
誰もが固唾を呑んで見守る中、少女は、車椅子に据え付けていた杖を手に取り、ゆっくりと、立ち上がった。
かつんっ、と杖を鳴らしながら、演台へと上る。
やはり、彼女が……いや、しかし。
誰もが、アンバランスな少女へのもやもやとした不審を感じる中、少女は、堂々とした態度で、隊士たちを見下ろす。そして、第一声は……
「――――――よう、ゴミクズども」
――――――……!!
……無言の空気が、明らかに、敵意へと変わった。
「ゴミはゴミでも、一応は私の部下どもだ。形式上は歓迎しよう」
それを意に介さず、演説を続ける。
「そんじゃまずは、何故、新兵でもない、落ちこぼれの貴様らをこの部隊に招いたかというと、だ……
――簡単に言えば、廃品のリサイクルってとこだな」
「ふざけんな!!」「黙って聞いてれば……!!」
心底見下げ果てたような視線で、隊士たちを逆なでする。
「あ？　何だ貴様ら。半人前以下の分際で、この私に楯突こうってのか？」
隊士たちの敵意は、既に臨界寸前だ。
先ほど、いの一番にリーゼに突っかかっていった、コリンという名の隊士が口火を切った。

「ッだこらァ!!　ナメやがってこのクソガ
――――ドボッ
ぁひゅっ……」
……何時の間に間合いを詰めたのか。
杖で身体を支えたまま、片腕の動作のみで放ったボディブローが、コリンの意識を刈り取った。ずるずると崩れ落ちるコリンを、群集の真っ只中に放り返す。
「……」
沈黙。また、沈黙。
それは、決定的に臨界を越えてしまった、隊士らの怒りを表していた。
「コリンくんに何してくれちゃってんのコイツ……」「……限界だわ。やってやんよ」「コリンの言うとおりだ。もう、何も怖いもんなんて無ェ……!」「ナメやがって……!」「やってやる」「ブッ潰してやる……!」
ざわざわざわ……と、敵意が渦を巻く。
「……はぁ、面倒だ」
ぽりぽり、と部隊長は頭をかく部隊長。
「おいおい貴様ら、その行動の意味は分かっているのか?　この階級章は伊達じゃないんだぞ?」
ちらちら、と襟元を扇ぐ。逆らえば重罪。大きなハードルだが……隊士の誰もが、階級だの権力だの、そのような『瑣末なこと』を気にしてはいなかった。
――そんな人材ばかりが、集められていた。
「そうか、それでも、やるか。だったら……」
くっくっくっ……と、俯いて低く笑う。そして、
――くわっ、と、獰猛な笑みを浮かべ。
「――――――全員、かかって来いやあああああああああああああ!!」

――――ウオオオ

た。
「さて」
　ティアナが、現状を説明する。
「まず、この部隊だけど……部隊長が言っていたことは、間違いなく、本当だと思う」
　訓練課程を脱落した落ちこぼれをかき集めた、と言っていた。スバルたちも事実その通りだし、間違ってはいないだろう。だが……
「どうにも、他に目的があるような気がするのよね」
　先ほどの部隊長の行動は、いくらなんでも、わざとらしかった。
「それに、『廃品回収』に、あんな人材が集まるわけ無いし」
「えっ……でも、フェイト・テスタロッサって……」
「馬鹿。メディアじゃあんな扱いされてるけど、無能に空戦Ｓランクなんて取れっこないでしょ。実力は本物よ」
「担当しているのは、小さな事件が主ですが……解決率は、ほぼ１００％を維持していますわ」
「その失敗っていうのも、普通なら事故死するような状況の局員を守ったからだし……次の事件に関わっていた首謀者は、きっちり逮捕してるからね」
　メディアに報道された、コミカルな部分しか見ていなかったスバルは、赤面した。
「更に言えば、シグナム一等空尉よ。フェイト・テスタロッサの右腕にして左腕にして右足にして左足にして頭脳」
「それって全部じゃないかな？」
「そうとも言うわね」
「彼が居なかったら、解決率は１５％ほどになりますわ」
「だいたいシグナムさんのおかげなんだ……」
　……だが、フェイトの扱いは、こんなもんである。
「彼自身、Ｓランクで、執務官試験を受ければほぼ確実に合格するって言われてるほどの実力者よ」
「極めつけは、クロノ・ハラオウン」
「執務官資格は剥奪されていますが、その力は未だ一線級ですわ。民

間に下り、フリーランスの魔導師として、単身で解決した事件も少なくありません」
　その誰にせよ、ここが本当に、廃品部隊なら、配属されるわけなど無いほどの、掛け値なしの人材だ。
「それに、気付いてた？　管制……ロングアーチのスタッフ、大半が『アースラ』のクルーだったわ」
「えっ……!?」
　その名を聞いて、仰天するスバル。
「アースラって、破壊不可能のロストロギアを、一隻の戦力だけで完全消滅させたっていう……あのアースラ!?」
　クロノ・ハラオウンの乗艦として、良くも悪くも有名な艦船。
　……現在は運用不能の粗大ゴミとして、本局のドッグを一つ占拠している艦船である。
　暴動に加担した乗組員らを処分し、別の部隊が運用を引き継ぐ予定だったアースラを、とある技術者の細工により、完全封印されてしまうという事件があった。
　コントロール系システムなどのソフトウェアはもちろん、メンテナンス用のハッチや、装甲板といったハードウェアまでも物理的に封印され、解体も不可能という有様だった。首謀者である技術者は雲隠れしてしまい、今に至っても所在は確認されていない。
「じゃあ、本当に、私たち以外は、超一流の人材が集められてるの……？」
「……まぁ、そうでしょうね」
　だが、ティアナはそこで、言いよどんだ。
「でも、あの『高町なのは』っていう人は、全く分からない。セリカが調べられる範囲のデータベースにも、一切の情報が載ってないのよ」
　超一流の人材の中に、ぽつんと紛れ込んだ異分子。
「詮索するようなことじゃねぇよ」
　ぬっ、と姿を現したのは、パイロット服に身を包んだ青年だった。
　これといった特徴も無く、最初、誰かと訝しんだティアナたちだったが……数瞬の後。

「てめっ……ボルボ!?」
「そいつは潜入用の偽名。ヴァイスだ」
「何でアンタがここにいるのよ!? っていうかあのゴテゴテしたタトゥーと色黒はどこ行った!?」
ティアナは、敵愾心もあらわに食って掛かる。
「何でって……オレも、この部隊の隊士だからだよ」
「アンタは公安でしょうが！」
「ところがどっこい。今は機動六課のヘリパイロットなんだな、これが」
ひょい、と差し出したＩＤカードには、確かに、そう記されていた。
「……ほんとですわ」
またしても、今度はこちらに潜入したらしい。
「部隊長は、あんたの所属のことは……」
「ああ、全部バレてるだろうよ。知ってて泳がされてる」
「あの、ヴァイスさん。詮索するな、って……」
「んー……例えて言うなら、だ。スバル。お前さん、誘拐事件やクライスラー事件のこと、母親のこと、他人にあれこれ詮索されて、いい気分するか？」
「……いえ」
思わず、目を伏せる。
「そーいうこった。他人の背景を詮索するのは、オレの仕事だ」
そこで、タイミングよく、ヴァイスの手元のデバイスがアラームを鳴らした。
「おっ。『歓迎会』が終わったみたいだぜ。戻れってよ」
「終わったって……んな馬鹿な」
あれだけの人数が暴れる乱闘が、あの短時間で終わるはずが無い。
半信半疑で、ロビーに戻ると……
「おう、遅かったな」
……死屍累々。
タワーのように積み重ねられた新人達の上に、傲岸不遜に座する、部隊長の姿があった。

（マジだった……）
「んじゃ、手っ取り早く説明すっぞ。
スバル・ナカジマ。
ティアナ・ランスター。
エリオ・モンディアル。
キャロ・ル・ルシエ。
以上の四名を、機動六課・フォワードチームとする」
「「えっ」」
スバルたち三人の声が、重なる。
「あの……それは、どのような基準で……？」
セリカが……唯一、三人から省かれたセリカが、戸惑うように問うた。
「――引き離されるのが辛いか？」
ズバリ核心を突く。
「……」
沈黙は、そのまま答だ。
「お前は、何をしたいんだ。仲良しこよしの友情ゴッコか？　楽しいクラブ活動か？」
「……！　わたしは！」
かっと怒り……だが、握った拳を解き、俯く。
「わかり、ましたわ。フォワードチーム以外の所属で、お二人とは、別の部署へ……あいたっ」
べしっ、とセリカの頭を軽くはたく。
「あーもう、めんどくせぇなお前……話は最後まで聞けっつうの」
よっこいせ、と腰を上げる。
「セリカ・クラウン。お前を、ロングアーチのスタッフとして、フォワードチームのオペレーターに任命する」
「！」
ロングアーチ。しかも、部隊の指揮系統を一つ任せるという、大抜擢だ。
「試験の内容を見る限り、お前は指揮に適性があると見た」

「えっ……？」
「部隊長……内容にまで、目を通していたんですか？」
スバルはてっきり、試験管が見極めを行い、部隊長はそれに判を押すだけ、と思い込んでいた。
「ああ、それがどうかしたか？」
もしや……とティアナは、聞いてみることにした。
「えーと……じゃあ、あのコリンは？」
暴動の切っ掛けとなった……ここへ放逐されてきた経緯が丸分かりな彼は。
「風紀を乱す指示は無視する勢いで突っ走る猪突猛進の馬鹿だが、突破力には目を見張るものがあるな。とはいえ、まだまだ実力不足だから、シグナムの指揮下に置いて鍛えさせるさ」
「ゼルビスは？」
「筋力自慢だが、動きの瞬発力は無い。前線には向かない。後方の補給部隊にでも入れて、補給車両の一台でも与えてやるかな」
その後、幾人かランダムに聞いてみたが、誰に関しても、はっきりとした回答が返ってきた。
「……もういいか？　どうせこいつらも、しばらく起きられないだろうからな。
……おいコラ、起きろフィアット」
……その辺にのびていた准尉の襟を掴んで引き起こす。
「……ちっ、まだ生きてやがりますか。死ねばいいのに」
「えっ……？」
聞き間違いかな……と耳を疑った。
「そう簡単に殺されやしねぇよ。……ほら、行くぞ」
車椅子を取り出し、腰掛け、ハンドルをフィアットのほうへ差し出した。それを、自然な動作で握るフィアット。
「リーゼ」
「はい、ここに」
リーゼ曹長が、進み出る。
「フォワードチーム以外は、解散でいい。どうせ、起きられやしないだ

ろうからな。」
「了解しました」
敬礼し、下がる。
「まだ名乗ってなかったな。ヒヨッコども」
じろりとスバル達を睥睨する、未熟な体躯とは対照的な、凄みを湛える瞳。気圧され、思わず一歩、後ずさる。
部隊長はこの日、初めて名乗った。
「時空管理局・特殊案件処理専門・独自権限保有『機動六課』部隊長……
――八神はやて准将だ」
スバル達が、ビシッと敬礼する。
「リーゼ。フォワードチームに説明しといてやれ」
「了解」
「運動したら腹減ったな……」
「ホウ酸団子などはいかがですか？　むしろ食べてください。そしてそのまま死んでください」
「食わねぇよバーカ。……エドに何か作らせるか」
……とても、准将と准尉とは思えぬ内容の会話をしつつ、通路の角に消えていった。
その後、リーゼ曹長による簡単な施設案内を受けた後、解散となった。
教導官たちも各々解散していく。
「んじゃ、エリオ、キャロ。なかよくするんだぞ」
フェイトは、二人の目線の高さに腰を下ろして言った。
エリオ、キャロ、と呼ばれた二人は、一瞬だけ顔を見合わせる。
「はいっ、大丈夫です！」
「だいじょうぶ」
満面の笑みだった。……むしろ、わざとらしいまでに。
「よーし。そんじゃ、あしたからがんばろーな！」
はいっ！　と、５人でフェイトを見送る。
「……」
改めて、五人で顔を合わせる。

（……ちっさ）
　ティアナが、エリオとキャロを見て、今更ながら、そんな感想を漏らした。
「今日は、残りは自由時間ということですし……よろしかったらこの後、お茶でもいかがでしょうか？」
　セリカが早速、チームの交流を図る。スバルもティアナも、問題は無いのだが……
「――あぁ、僕はいいです」
　エリオが、さくっと拒否した。
「あら……遠慮することなんて、ありませんのよ？」
　セリカはてっきり、女性陣に囲まれて、居心地が悪いのか……と思った。
「トカゲ女と茶なんぞ飲めるかっつぅの」
「えっ……？」
　トカゲ女って、誰……？
　だが、それを問い正すより早く、キャロが口を開いた。
「こっちのせりふよ。このセクハラ電気うなぎ」
　抑揚の無い平坦な声だった。
「あ？　……やんのかコラ。貧相な身体しやがって」
　どこからともなく、長槍を取り出す。
「空港のつづき、する？　いいよ。いつでも、どこでも……今でも、ここでも」
　キャロが大事に抱えていたバスケットから、グルルル……と、うなり声が鳴る。
　エリオの周囲が、バチチッ……と帯電する。
「――刻むぞ？」
「――灼くよ？」
　……一触即発。子供とは思えぬ怒気を放出し合う二人に、セリカたちはうろたえる。
「無し、無し！　刻むのも灼くのも無し!!」
　スバルがブレークをかけるも、二人のボルテージは限界近くにまで

高まっており……
「フェイトさんに言うわよ」
……ティアナの一言に、一気に鎮火した。
「……嫌だなぁ、冗談ですよ、冗談」
「……いっつあめりかんじょーく」
ぷいっ、と互いにそっぽを向き、エリオは男子寮、キャロは女子寮へと歩く。
そして、二人同時に、ティアナへと振り返り……
「「――言ったら殺す」」
……子供そのものの無邪気な笑みを作り、そう言った。
茫然と見送る、スバル、セリカ。早々に二人の猫かぶりを見抜いたティアナですら、冷や汗を隠しえなかった。
半日近くが突然の休暇になったにも関わらず、喜ぶ気にもなれない。
――ぐぅ。
……スバルの胃が、色気もへったくれも無い声を上げた。
「……まずはゴハンにしよっか」
「……賛成」「……ですわ」
げんなりとしたまま、食堂へ向かった。
「ふーんふーんふふふふーん、ふふふふーん、ふーん」
……何かいた。
食堂の厨房に、一人でいた。
張り付いたような満面の笑みを浮かべ、中華包丁をショリショリと研ぐ、中年のコック。
「……さて、今日のメニューは、と」
素っ気無い書体の、日替わりメニューを見る。
焼き魚がメインの、ヘルシーな献立だった。
スバルがそれを見て、一人ごちる。
「魚かぁ……悪くないんだけど、肉が食べた
――すこんっ。
「……えっ」

……メニュー表に、小振りな包丁が、ダーツのように突き立っていた。
いやいや、まさか……笑い飛ばそうとするスバルだったが……
――すこかかかかかかかんっ
連続して飛来した包丁の群れが、メニューを穴だらけにした。
「ひぃっ!?」
ぐりんっ、と厨房へ目を向ける。だが、コックは、こちらを見てすらいない。
「……スバル、これ」
「な……何……？」
ティアナが、ちょんちょん、とメニューを指差す。
槍衾のように突き刺さった包丁たち。それらは、一見無造作に突き刺されているように見えたが……一つの単語となっていた。それは……
『オ ス ス メ』
――ゴトンッ
……解読するのと同時、三つの膳が、テーブル席に配膳された。
「……イタダキマス」
「いただきます……」
「……いただきますわ」
……ちなみに、味は最高だった。

――ガシーン、ガシーン……

「ねぇティア、セリカ。私の目の故障じゃなければ、全長5メートルの機械人形が歩いているように見えるんだけど」
「……奇遇ね。私もいま、それを聞こうとしたところよ」
「……おっきいですわー」
……機械の巨人は、スバルたちの目の前で立ち止まった。
そして、その背の操縦席のようなところから、ひょこっと少年が顔を出す。

軽くカールした、薄茶色の髪の毛の少年だ。年齢的には、スバルたちのいくつか下、その程度。背中には、工具や機器の満載されたバックパックを背負う。
「あっ……すみません、邪魔でしたか……？」
弱弱しい声。気弱そうな外見そのままの態度だった。
「すみません……研究成果を、試してみたくて……つい……」
……どうやら、人格的にはマトモらしい。ほっと安堵するスバルたち。
「あの……ぼく……機械が好きで……」
「へぇ」
男子なら、メカに興味があってもおかしくはない。
「人間より、機械が……ロボットが好きで……」
会話の切れ目の分かり辛い話し方をする少年だった。
「でも……そのせいで……人間と関わるのが、面倒くさくなってしまって……」
……会話が、不穏な気配をかもし始めた。
「……現実の女の子より、機械の女の子のほうがいいなぁ、って……」
「「……」」
……機械の、女の子。なんだ、それ。
「は～あ……人間サイズで、人間と同じように思考し、行動する、完全ロボっ娘がいたらなぁ……もし、いたら……ドゥフフッ……ぼく自身の外部メディアを……コポォ……！」
「ねぇ何でティアは私の背中をぐいぐい押すのかな!? やめてよ！やめてよぉ！」
……さりげなく実物を押し付けているティアナだった。
スバルは、半泣きだった。
「あ……すみません……足止めをしてしまいました……」
操縦桿を握り、機械巨人が再び歩き出す。
「あの……ぼく……ケイ、っていいます……それじゃ……」
……業の深い少年だった。

――延々と自動販売機を分解しては組み直すことを繰り返す女がいた。
――輝くような笑顔で植木を剪定する男がいた。
――両手のパペットで一人芝居を続ける覆面の男がいた。
――魚のマスクを被って池を眺める男がいた。
――恍惚の表情でエアギターをかき鳴らす女がいた。
……奇人変人変態の襲撃を凌ぎ切り、ようやく安息の地……女子寮の部屋に戻ってこられた。
「……」ちーん。
「……」ちーん。
「……」ちーん。
……お通夜状態だった。
「……纏めるわ」
ティアナが、気力を振り絞って、ミーティングを始める。
「この部隊にいるのは……」
目で促されたセリカが、言葉を継ぐ。
「技術のある変態」
「行動力のある奇人」
「体力の有り余る問題児」
……よくもここまで、厄介者を集めたものである。
「……あの子供らも、相当な火種よ」
エリオと、キャロ。あそこでティアナが収めなければ、どうなっていたことやら。
問題は山積み……どころか、問題しかない状況。
ツッコミどころ満載の部隊で、この先やっていけるのかどうか……
「……疲れたわ」
ティアナの声を切っ掛けに、バタバタと、ベッドの中に倒れこむ三人。
体力というか気力精神力は、底をついていた。
「……がんばろーね、ティア、セリカ」

……スバルの言葉に、返事はあったのか。

――――だが三人は、近い将来、知ることとなる。

――――この初日が、いかに安穏とした、穏やかな一日だったのかを。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第四話

――時間は、入隊式から少し遡る。
「……おっそいなぁ」
赤毛の少年は、腕時計に眼を落として、ため息をつく。空港の喧騒が響く中、小さなキャリーバッグを手元で遊ばせる少年は、待ち合わせの最中だった。
「……フェイトさんの頼みじゃなければ、ソッコーで置いてくんだけどな」
自販機で買ったジュースをちびちび飲みつつ、ひたすら時間を潰す。
……と、目線を向けた先。
「……」
「ねぇ君。お父さんとお母さんは？　一緒じゃないのかい？」
身なりの良い男性が、一人の少女に話しかけていた。
「……」
目深に被った、民族衣装のようなフードから、桃色がかった頭髪が、僅かに覗く。
目立った荷物は、大事そうに手で抱えたバスケットのみ。
「うーん、困ったなぁ。……そうだ、それじゃ、迷子センターに行こうか？　着いておいで」
少女は、その男性に伴われ……迷子センターとは逆方向へ、歩いていった。
「おいおい」
傍から見れば、違和感の無い光景だ。だが、少年は……その男性の目つきに、嫌というほどの既視感を感じていた。
「くそっ……面倒ごとはゴメンだってのに……」
見捨てたい気持ちも、多々あった。だが、それをすると……彼にとって、いろいろと不都合な展開になる。
「あぁ、もう……」

少年は、彼の後を追った。

「ねぇ、ねぇねぇねぇ？　おじさんのいうことが聞けないのかい？」

「……」

人気の無い、搬入口の死角。そこで、男性は少女へ、畳み掛けるような脅しをかけていた。

「大人を怒らせるとどうなるのか、知らないわけじゃないよね？」

「……ん」

ぽつりと、小声で返事を返す。

「じゃ、じゃあ、いうことを聞くんだ。……さぁ、服を脱ぐんだ。一枚一枚……」

「テンプレ通りかつ予想通りだなぁ、オイ……」

「ひっ!?」

男は、飛び上がると同時に振り向く。だが、その声を発したのが、小さな子供であったことで、安堵のため息をついた。

「……君には関係が無いことだよ？　向こうへ行っていなさい……！」

「ま、そうしたいのもヤマヤマなんだけど……それはオレにとっても、不都合なんだよね」

人を食ったような言葉に、男の神経は逆なでされる。

「大人を怒らせるとどうなるか……！」

懐から、伸縮性の警棒のようなものを取り出す。スイッチを押すと、パリパリと、電流が流れ出した。……標的が抵抗した場合は、これを振るう予定だったのだろう。

「わかってるんだろうなぁ……!!」

引きつったような、下種な笑みを浮かべ、見せびらかすように警棒を揺らす。

「……」

癇に障ったのか、少年は顔をしかめた。

「……、」

少年が、仕掛けようとしたその時……

「うん、わかってるよ。さいしょは優しくせっして、じぶんの思い通りにならなかったら、ぼうりょくを振るうんだよね」
透き通るような少女の声が、しんとした空気を満たした。
「あ……あ……？」
男は、予想外の事態に、少年から、標的の少女へと視線を移した。
少女は俯いたまま、フードの隙間から声を漏らす。
「いつもそう。いっつもそう。いいひとづらした大人って、みんないっしょ。みんなおなじ」
「……！　このガキィ！」
激昂した男が、少女の襟首を掴み上げようとする。
「……フリード」
少女の持つバスケットの中から、高熱が発せられ……
「だらァっ!!」
少年の飛び膝蹴りが男の顔面を直撃するのと同時、少女のバスケットから飛び出した火焔が、天井を舐めた。
――――ボゴォンッ!!!
炸裂した火焔は、天井を黒焦げにし、材質を熱で変形させた。
「熱っちぃ!!」
そして、その火焔は……少年が蹴り飛ばさなかったら、男の顔面を直撃していた。自己防衛にしても、明らかに過剰な威力だ。
「はずれた」
「外したんだよっ！　オレが！」
少年のズボンの腿の辺りが、炭化して穴になっていた。
「おおきなおせわ」
「そうかよ……」
と、そのやりとりの影で、むくりと起き上がる影があった。
「……あ、が、ァあああああ!!　こォの、クソガキィいいいいいっ!!」
直撃した膝蹴りだったが、ウェイトの足りない少年の攻撃では、意識を刈り取りきれなかったようだ。
「……しつこいんだよッ!!」
――バチィンッ!!

掬い上げるように、男の顎を蹴りぬいた。
「寝てろっ！」
男の警棒を取り上げ、延髄に押し当てスイッチオン。
「あばばばばばばばば」
ビクンビクンと気色悪く痙攣し、男は、今度こそ動かなくなった。
「はぁ～……もう間に合わねぇぞ、これ……」
時計を見るが、既に時刻は、待ち合わせの時刻を２０分以上オーバーしていた。
――ピピッ!!
そして、狙ったように端末に通信が入る。居留守を使うわけにもいかず、通話に応じる。
『やっほー、エリオ！　ボクだよー』
「はい、フェイトさん。お疲れ様です！」
いっそ、清清しいまでの豹変振りだった。
「フェイトさん……？」
その横で、少女が怪訝そうに首をかしげていた。
『それで、ボクはもうそろそろ着くけど……ちゃんと待ち合わせできた？』
「ああ、それが……その……まだ」
ばつが悪そうに、言葉を濁す。
「ねぇ」
「すみません。ちゃんと、待ってたんですけど……何か手違いがあったみたいで」
『そっかー。それじゃ、ボクがそっち着いたら、いっしょにさがそ？』
「ねぇってば」
「！　はい、お願いします！」
一緒に……の下りで、少年……エリオの顔に、喜色が浮かんだ。
「ちょっとかわって。かわってってば」
「……、」
エリオは、端末の受話器を指で塞ぐ。
「邪魔だっ！」

どんっ、と、少女を突き飛ばした。
少女は、よたよたとバランスを崩した。
「なにをするの」
当然のように抗議する少女だが、エリオは見向きもしない。
エリオにとって、フェイトとの電話に勝る用件など、ありはしないのだった。
「わたしも、フェイトさんとはなしをする。かわって」
「……？」
何故、この少女がフェイトの名を口にしているのかは不明だが……フェイトとの会話の邪魔をする少女は、エリオにとって、邪魔でしかなかった。
「邪魔だって言ってるだろ！」
「かしてくれたっていいじゃない」
ぐいぐいと、もみ合う。いくらエリオといえども、同年代の少女に、まさか魔法など使う筈は無く、殴るはずは無く……ただ押し退ける。少女はまとわりつく。
その攻防を無為に続けている最中……
――ぐいっ
偶然か、不幸か……エリオの手が、少女の胸部を思いっきり鷲づかみにした。
「――――――、」
動きを止める少女。だがエリオにとって、その行動はあくまで、『邪魔者を排除する』という以上の意図は無く……ましてや、少女の羞恥心などというものに、気を回すわけは無かった。
「あ、すみませんフェイトさん。間違えちゃいました」
『そう？　ならいいんだけど……』
尻目に、端末をいじり、フェイトと接続。
「で、えーと……なんて名前でしたっけ？　待ち合わせの相手って」
『キャロ。キャロ・ル・ルシエっていう子だよ』
「うーん……名前だけじゃ、何とも……何か、特徴は？」
『そーだなー。変わった服装で、大きなバスケットを抱えてるけど』

「え」
ぐりんっ……と、エリオは、先ほど自分が突き飛ばした少女へ、視線を向ける。
「――――――ぶっころす」
変わった服装で、大きなバスケットを抱えた少女が……爬虫類のような生物を肩に乗せ、静かに怒っていた。
「グルルルル……！」
爬虫類の口内に、先ほどと同質の火焔が……
「しね。せくはら電気うなぎ」
「ふざっけんなぁあああ！」
――――ドゴォオオオオンッ!!!!!
『連続児童わいせつ男、空港で自爆！』
……その日の、新聞の三面記事だった。
◆▪◆　◆　◆
男子寮の一室にて、エリオはベッドに寝転び、一日を反芻していた。
「フォワードチーム、だって……？」
嫌そうな口調だ。事実、嫌なのだろう。だが……
「でも、フェイトさんにも、頼まれたからなぁ……」
彼が唯一、全面的に信頼を置く人物。フェイト・テスタロッサ。
「ま、適当に過ごせばいいか……」
彼女の信頼を失わないよう、のらりくらりと過ごせばいいのだ。
「チーム……ねぇ」
ふっ、と蔑むように息が漏れる。
「馬鹿馬鹿しい……そんなもん、どうせすぐ散り散りになっておしまいだ」
フォワードチームの面々の顔が浮かび……やはり、最も印象が強い

のは、キャロだった。
「あのクソチビ……！」
あくまで彼にとっては、意味不明の逆恨みをぶつけてきたというイメージしかない。
だが、実際には、それは小さなもので……
「あんなやつが、もう一人の保護児童……!?」
……フェイトの愛情を横から付けねらう、浅ましいガキ。そんなイメージだった。
「認めるかよ……！　いつか、オレのフェイトさんから引き剥がしてやる……!!」
くつくつと、暗い笑みを漏らす。

……この僅か一週間後に、隊舎が半壊するほどの事件が起ころうとは、誰一人として予想していなかったに違いない。

……記念すべき（？）結団式の翌日から、早速、訓練は始まった。
落ちこぼれ集団を指導するのは、シグナムやクロノといった、豪華な面子。
彼らも、さぞや効率的かつ現代的なトレーニングを期待していたに違いない。だが、実質は……
「キリキリ走れ！　とにかく走れ！　ゲロを吐いても吐きながら走れ！　死んでも走り続けろ!!」
「「「お、おーっす!!」」」
……鬼のシグナムによる、超スパルタ地獄が待っていた。
「ひー、ひー……！　も、もう駄目だ……!!」
どうっ、と前のめりに倒れこむ。
ぜーはーと息をつきながらも……その顔には、『これで休める』という、甘い期待があった。のだが……
「戦場の敵は貴様の回復など待ってはくれんぞ！」
――ちきちきちき……!!

その背後に、訓練用と思しき自動機械が迫る。
――びりびりびりびり
「あぎゃあああああああああああああああああーーーー!!」
尻に電気ショックを受け、飛び上がる。
「ひ、ひィいいいいいいいー!! 俺のケツがぁあああああ!!」
「ケツがどうした！ ケツの一つや二つ無くても死にはせん！ さぁ走れっ！」
げしっ！ とケツを足蹴にされる。
「お、鬼――！」
……まだまだ、限界ではなかったようだ。だばだばと、尻を庇いながら遁走していく。
「ガジェットドローン、追加投入!!」
……阿鼻叫喚とは、まさにこのこと。
「いやぁあああ!! わたし、オペレーター希望なんですぅ!! それでそれで、合コンしまくって、キャリアのエリート捕まえて除隊して、悠々自適に……電気ショックはいやぁあ!!」
「オレは整備士志望なのになんでぇえええ!? あっ、やめてやめてやめてくださいしんでしまいますやめてェえええええ!!」
「ボクは後方の補給部隊に配属じゃなかったのかー!? ……うぎゃーーーーー!?」「ウチなんて食堂のコック見習いだぞォおおおおお！ いみわっかんねーし!! ……ひぎィいいいいいいいっ!!」
前線メンバーだけではなく、片っ端から強制参加らしい。
「こんなもの、基礎訓練の前段階、さらにそれ以前の段階だ！ このシグナムが、機動六課心得を、弛んだ身体、甘ったれた性根！ 心身に刻み込んでくれる!!」
……刻まれるのは、間違いなくトラウマである。
「復唱せよ!!」
自身も 訓連用の模造刀を片手に部隊員たちを追い立てる。
「一つ！ 自身を守れ!!」
「「「「一つ！ 自身を守れ!!」」」」

「二つ！　仲間を守れ！」
「「「「「二つ！　仲間を守れ！」」」」」
「三つ！　誇りを守れ！」
「「「「「三つ！　誇りを守れ！」」」」」
「四つ！　信念を守れ！」
「「「「「四つ！　信念を守れ！」」」」」
「五つ！　これらを片時も忘れること無かれ！」
「「「「「五つ！　これらを片時も忘れること無かれ！」」」」」
「分かったところでもう３０周だ!!　さぁ走れ!!」
「「「「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ!!」」」」」
「やっぱり、トンでもない部隊でしたわぁあああああああああ……!!」
何気に、セリカが先頭を独走していた。

「だ、大丈夫かな……？　なんか、スゴいことになってるみたいだけど……」
その喧騒からだいぶ離れたところに、期待のフォワードチームがいた。
こちらはこちらで、少数で集中して鍛える方針のようだ。
本日の教官はというと……
『では、こちらも始めます』
腰掛けていた物体から立ち上がる。
……左袖は、風にたなびいてはいなかった。
（？　……気のせいだったのかな）
スバルは、あの日の光景との差に疑問を感じたが、深く考えはしなかった。
『まずは、これです』
どすん、と手元に置いたのは、先ほどまで腰掛けに使用していた物体だった。
円筒状の、カプセルのような胴体に、触手のようなマニピュレータを備えた機械。

「……」
スバルとティアナは、その物体に見覚えがあった。
あの入隊試験の際、山のように押し寄せてきた自動機械だ。
『これは、ここ最近、ミッドチルダ全域で存在が確認されている自動機械です。まぁ、管理局では『ガジェット』とか『ガジェットドローン』とか呼んでいます』
ごんごん、と金属の筐体を叩く。
『では、スバル・ナカジマ』
「はい！」
指し示されたスバルは、緊張しながら返事をする。
『このガジェットの特性を述べなさい』
「はいっ！　……たくさんいます！」
『……』
「すごく硬いです！」
『……、以上ですか？』
頬をひくつかせ、腰の刀へ手が伸びる。
「はい！　以上です！」
晴れ晴れとした顔で、『どうだ！』と言わんばかりのスバル。
――ガチーン!!
……鞘で、スバルの頭をブッ叩いた。
「おおお……！　な、なんでぇ……？」
頭を抱えて蹲るスバル。
「ぷっ……」「……ださ」
エリオは吹き出し、キャロは小ばかにしていた。
『ティアナ・ランスター』
「はい」
流石にティアナは、すらすらと回答できた。
「ごく短時間でこちらの動きを学習し、周辺の味方機と情報を共有。対処してきます」
『よろしい』
再び、刀をベルトに差す。

『では、その面倒な相手に、あなた方はどう対処しますか？』
なのはの目が最初に促したのは、エリオだった。
「オレ……ああ、いや、僕は。子機との消耗戦を避けつつ、敵の母機を探し出して叩きます」
「母機……？」
むくりと復活したスバルが、首をかしげた。
「それって、あの、合体するやつのこと？」
『いえ、それは子機の能力の一つですね。範囲内の子機の数が一定以下になると、残存した子機が合体し、戦闘力が上がります』
では、母機とは……？　というスバルの疑問に、なのはが答える。
『レイジングハート。画像を』
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』
ディスプレイに表示されたのは、ほぼ球状の機体だった。その横に、子機が並べられていて、母機の大きさが強調されている。
『母機の名の通り、周辺一帯の子機を統括制御する機体です。恐らくは、子機で得た情報を蓄積する、データベースのようなものも兼ねているのでしょう。速度こそ子機に大きく劣りますが、装甲は子機の数倍。しかも、単機でＡＭＦを発生させる機能があります』
ちらっ、とティアナを見やる。ティアナも、言わんとしていることがわかったのか、不機嫌そうだ。
「……ＡＭＦは、私の弾丸じゃ通せない」
「でも、こんなのいたっけ……？」
見覚えが無かった。ティアナも、首を横に振る。
『荷が重かろうと、先に処分しておきましたので』
「「……」」
だが、子機だけを相手に窮地に陥っていたことは事実である。
『部隊長より、あなた方に適正な環境での試験を、との要請がありましたので』
「僕は倒しましたけど？」
エリオが、いらぬ茶々を入れる。
「ぐ」「む」

エリオを悔しげに睨むが、本人はそ知らぬ顔だ。
『静かに。……キャロ・ル・ルシエ。あなたは？』
見た目には、このチームで最年少のキャロへ聞く。キャロは、肩に乗せたフリードと目をあわせ……
「やきつくす」
抑揚の乏しい声で即答した。
「やきつくす」
『……、』
「やきつくす」
なのはは、頭痛を堪えているような顔をした。
「そのトカゲじゃなくて、おめーはどう対処するんだって聞かれてんだよ」
フェイトの前で無いからか、素の口調で難癖をつけるエリオ。
「とかげじゃない。フリード」
「で、そのフリードとやらがいなきゃ、おめーはガジェットにどう対処するんだ。あァ？　隅っこで膝抱えてマスとか言うんじゃねぇだろうな、オイ」
「……やなやつ。ほんとに、やなやつ」
キャロは、怒りにぷるぷると震える。
「ぐるるるる……!!!」
フリードも、赤い目を爛々と輝かせ、牙の隙間から、ちょろちょろと炎を覗かせていた。
『そこまでにしておきなさい』
なのはがその場を収め、説明を続ける。
『話を戻します。ガジェットは、こちらの動きを学習する。ただ学習とは言いますが、実際には行動ルーチンの蓄積に過ぎません。Ａという行動にはＢという対処を、といった、実はごく単純なものなのです』
「コンビネーションは、いくつも試してみたんです。最初はうまくできても、片っ端から学習されたら……」
『ふむ……では、そのコンビネーションの説明をしてみなさい』
スバルは、入隊試験で使用したコンビネーションの動きを、仔細に

説明。時にティアナと実演も見せた。
『それはコンビネーションではなく、ただの『パターン』です』
が、なのははそれを、ばっさりと切り捨てた。
「……じゃあ、手本を見せて下さいよ!!」
ティアナが、それに思いっきり噛み付いた。
三人の努力を、根こそぎ否定された感覚なのだろう。
『いいでしょう』
だが、なのはは軽く言い、訓練場へ降りていく。
『フィアット。ちょっといい？』
砕けた口調で、フィアットを呼ぶ。
『はぁい、なのはさん。なんですか？』
間延びした返事が返ってきた。
『ガジェットを投入して。……ああ、ただし』
前置きし……
『新人にも見えるレベルの動作で、ゆっくり動くから、それに合わせた設定をお願い』
……そして、なのはの『手本』が、示された。
ガジェットは、訓練場の中、場所も数もランダムで出現するよう設定されている。
「一人で……？」
その不利な条件で、何をしようというのだろうか。
『ああ、あなたたち』
と、通信の向こうから、フィアットが四人に呼びかける。
『よく見ておきなさい。あれが、あなた達の教官……高町なのはです』
――ガギュッ!!
……その、アルミ缶を潰したような音に、四人は訓練場に目を向ける。
なのはが片手だけで振った、何の変哲も無い実体剣が、ガジェットを両断していた。
続いて、複数の集団だ。先ほどと同じ動作で、刀を振るう。当然、学

習されているので、回避される。そう思った新人達だったが……
――ギンッ!!
剣先は、ガジェットを捉えた。
「えっ、……えっ!?　なんで!?」
理解不能に陥るスバルに、エリオが面倒くさそうに説明する。
「最初のときと同じ動作。でも、より深く踏み込んで、間合いを縮めてるんだよ」
エリオには、見えているらしい。
「……でも、一撃目の動作と、モーションにズレが無い。オレにだってできねぇよ、あんなの」
三体目。なのはは、やはり初撃は斬撃だ。
今度は、ガジェットは回避した。……いや、むしろ、わざと外したように見える。
距離が出来たガジェットが、光線を発射する。それを回避し、指鉄砲の形にした手から、ティアナのものとほぼ同威力の魔力弾を発射する。
「これ……もしかして、私たちのコンビネーション……?」
接近戦、射撃、射撃、接近戦……内容こそ違えど、それは、試験の際に使用したものだった。
それを幾度か繰り返すにつれて、ガジェットは、確実にその動作に対応しつつあった。
「ほら、やっぱり……」
ティアナがそんなことを呟く。だが……
――ガシュッ!!
……先ほどと同じコンビネーション。だが、ガジェットをまた一体、破壊する。
「何で!?　同じ動きじゃない!?」
目を凝らしていたスバルが、説明する。
「ギリギリ、見えたけど……振り下ろした刀を、返す刀で切り上げて、連撃に繋げたみたいだ」
振り下ろす、で終わりではない。振り下ろす、切り上げる、の連撃

に、ガジェットの蓄積したルーチンでは対応できなかったのだ。
スバル達が考えた、最も単純なコンビネーション。
ただそれだけを、無限とも思える展開で昇華し、大量のガジェットを掃討してのけた教官に、口答えをする気など、微塵も残りはしなかった。
『手本を見せました』
戻ってきたなのはは、息一つ乱していない。
抜き身の刀を、真一文字に振るう。
『ここから、幾通りかの攻撃を展開できます』
右に流れた刃を、切り下ろしに変化させる。
『ここからも』
切り上げる。突く。削ぐ。凪ぐ。
流れるように、攻撃を変化させていく。さながら、演舞のように。
『攻撃は、一撃打てば終わりではありません。一撃を、どう次へ繋げるか。その場に応じて、自在な攻撃が出来なければなりません』
ぱちんっ、と刀を納める。
『ですが、それにもやはり、限界があります』
「えっ……？」
スバルは、疑問に思った。
あれだけ自在な戦法を持ちながらも、限界があるとは信じがたかった。
『それは、あくまで私は、『個人』であるということです。一人でいかに１００通りの戦術を持とうが、１０００の戦術を持つ相手には、上を行かれます』
「……」
その１００にさえ、遠く及ばない自分達は、どうすればいいのか。
『あなたがたは、そのための『チーム』なのです』
なのはの声に、顔を上げる。
『一人が１０通りしか戦えなくても、二人ならば１０×１０で１００通り。四人なら、１０×１０×１０×１０で、１００００通りにもなります』

ぱぁっ、と気分が上を向く。
『あなたがたは、今のところ〝1〟ですが、ね。何人いても同じです』
「うぐ」
上げてから落とすのは、基本である。
『というわけで、まずは攻撃を覚えることから始めましょうか。ガジェットを１００体くらい出しますから、夕方までに好きなやり方で撃破しなさい』
「うげっ!?」
……スパルタは、こちらも同じようだ。
だが、エリオがひょいと挙手した。
「一人で、向こうでやらせてもらっていいですか？　キッチリ１００体、ノルマはこなしますんで」
「ちょっ、ちょっと!?」
さっきの話を聞いてなかったのか。
「オレは、二人で１００になるよか、一人で１００になった方がいいんで」
そして、返事も待たずにすたすたと行ってしまった。
「……仕方ない。三人で、」
ティアナは、キャロを交えた三人で、訓練を開始しようとするが……
「ひとりがいい」
……キャロもまた、ぱたぱたとどこかへ歩いていってしまった。
『……。始めますよ、二人とも』
なのはは、しばらく何かを思案し、思い出したかのように訓練を再開させた。
そして、日が暮れる頃……
『お疲れ様でした』
ボロ雑巾のような状態のスバルとティアナに、義務的に労いの言葉をかけた。

『今日のデータを、明日の訓練用ガジェットに反映しておきますね。では解散』
……今日の戦略は、もう明日には通じなくなるようだった。
「「……」」

――ばたんっ。
二人は死んだ。

オフィスへと戻ったなのはは、フィアットの元を尋ねていた。
『フィアット。エリオとキャロのことなんだけど』
「はい。どうされますか？」
四人のチームとして召集したのに、アレではコンビが一組と、個人が二人いるだけだ。
『一人だけいれば、マイナスはマイナス。でも、二人いれば、さ』
……転じて、プラスとなる。
「了解しましたー。では、そのように」
長い付き合いのフィアットには、なのはの意図と希望が理解できたらしい。
『いつもごめんね。今日、一緒にご飯食べる？　おごるよ』
「はいっ！　……と言いたい所なんですが……すみません。今夜は、部隊長の食事を用意してあげる日なんです」
『……よく続くね』
はたから聞けば、微笑ましい会話なのだが……フィアットとはやての関係をよく知っているなのはからすれば、呆れる材料にしかならない。
「はいっ！　生きがいですから！」
ごろっ……と袖口から転げ出た小瓶には、見るも禍々しい色合いの液体が満ちていた。
「あっ、いけないいけない。大事な隠し味が」
何を隠すというのか。
『……それじゃ、お願いね』

……ウキウキした様子のフィアットを残し、去っていく。
「あっ！　なのはー!!」
食堂へと向かう道すがら、フェイトに会った。
開けっぴろげな笑顔。ぶんぶんと手を振る、子供っぽい仕草。いつものフェイトだった。
『フェイト。どうしたの？』
「どうしたじゃないだろー？　いっしょにごはん食べよっ！」
『うん。いいよ』
そして、食堂へ行く。
「ふんふふーん。ふんふふーん……」
出迎えるのは、いつもの鼻歌と、しょりしょりと包丁を研ぐ音。
「エド！　ボク、ハンバーグがいいなっ！」
「……。ふふふふーん」
ごとんっ、と、二人の前に料理が配膳される。なのはの前には、今日のオススメ、豚のしょうが焼き定食が。フェイトの前には、リクエストどおりのハンバーグプレートが。
……後にも先にも、エドに料理をリクエストできたのは、フェイトだけである。
「それにしても、すくないねー」
確かに。既に18：00を回り、夕食には丁度良い時間となっているのだが、食堂はガラガラだった。
『新人達は、今日が訓練初日だから』
「あー……だからか」
今頃、訓練場で死屍累々の様相を呈しているに違いない。食事が摂れるまで回復するのは、いつになるやら。コリンなどは、意地で食堂に着いたようだが……カレーライスに突っ伏して寝息を立てていた。
『ねぇ、フェイト。今日の訓練のことなんだけど……』
「エリオとキャロのこと？」
話すまでも無く、筒抜けだった。
「さっき、フィアットから連絡があったから、そうじゃないかなーって」

『ごめん……ほぼ独断で進めちゃって』
「あっはっは。いいって、いいって。ボクもそうした方がいいと思うし」
付け合せのパスタをずるずると食べる。
「まぁ、いまごろ、すごい騒ぎになってるだろうけど……」

◆・◆　◆　◆

「なんっでオレが、お前と相部屋なんだよっ!!」
「わたしだってききたいよ」

個室に戻ったのが１０分前。食事を摂る気にもならず、部屋に入ったエリオを……ルームメイトのコリンの満面の笑みが出迎えた。
「おめーの席、ねーから!」
……殴り倒して肘関節を極めてチョークスリーパーで沈めて、総務に問い合わせたところ、部屋の再編があったらしい。そして、新たに割り振られた部屋に入るとそこには……
「くそっ、なんてこった……」
「しじをだしたのはだれだろう。おしおき」
キャロが居た、ということだ。
「てか、なんでベッドが一つしかねーんだよ!?」
「わたしのベッドしかない」
さりげなく所有権を主張するキャロだった。
だが、やはり寝なければ翌日に備えられない。
仕方なく、ベッドにもぐりこんだのだが……
「こっちこないで」
「おめーがこっちに寄ってきてんだろ!」
また新たな問題が発生した。
ぎゃーぎゃー騒いでいるうちに、すっかり寝る時間を逃してしまった。
翌日。

「……エリオ、キャロ、大丈夫？」
スバルが思わず声をかけてしまうほど、二人は目の下にくっきりした隈を浮かべていた。
「うるせー眠ィんだ話しかけんな……」
不機嫌丸出しである。
「ん……んくっ」
キャロは、立ったまま舟を漕いでいる。
『では、本日の訓練を始めます』
なのはがやってきた。
「……すぴー」
キャロは、眠気に負け立ったまま寝ていた。
「おい、教官来てんぞ！　おい！」
キャロの頭をべしべし叩き、起こそうとするエリオ。キャロは、ゆっくりと目を開け……
「……はっ。フリード」
「きしゃー!!」
……寝ぼけて、フリードへ攻撃の指示を出してしまった。
――ぼうんっ!!
「あぎゃーー!!!　熱っちィいいいいいいいいいいいいいい!!」
エリオに、思いっきり火焔を吐き付けた。
「きゃーー!!?」「消火器！　消火器――！」
エリオは消火のため、溜池に飛び込んだ。
「あ」
目覚めたときには、もう遅い。
「『あ』じゃねーだろうがよォ……！」
溜池から這い出てきたエリオは、訓練服は煤まみれになっているわ、濡れ鼠だわ、酷い有様だった。
「まちがえた。ごめ、」
「大概にしとけよ、この野郎！」
謝罪を口にするよりも早く、エリオは激昂した。
「ペット一匹管理できねぇのか！　飼いきれないなら、どっかの野生

保護区にでも捨てて来い！」
「ペットじゃない。フリードは、わたしのかぞく……」
「ちょっと……やめなよ二人とも!!」
　互いに鬱憤も溜まっていたのだろう。スバルの静止も聞かず、口論は激しくなっていく。
「やってられっか!!」
　そしてエリオは、治療を名目に、訓練を放棄して、隊舎に戻っていってしまった。
「……しらない！」
　キャロも、フリードを抱え、どこかへ走り去っていく。
「二人とも……！」
「やめておきなさい」
　追おうとするスバルを、ティアナが止める。
「今は、自分達の訓練が優先よ。個人間のやりとりは、当人同士で解決するしかないの」
「でも……」
『訓練を始めます。……それとも、あなたも投げ出しますか？』
「……！　いえ、やります！」
　ティアナのいうとおり……今のスバルに出来ることは、何も無いのだから。
　医務室で軽い手当てを受けたエリオは、元の自室であるコリンの部屋に居た。コリンはまだ戻ってきてはいないし、問題は無いだろう。
　不貞寝しているうちに、日没を迎えていた。まだコリンは帰ってきていない。恐らく、シグナムのしごきに耐えられず、訓練場でのびているのだろう。
「……飯でも食いに行くか」
　よく考えたら、昨日の晩から何も食べていない。ポケットをまさぐるが……
「……くそっ。パスカード、向こうの部屋だ」
　取りに行くしかないようだ。
　静まり返った隊舎を歩く。

ロビーでは、グダグダになった新人達が多数、力尽きていた。昨日に比べたら、隊舎に戻ってくるだけマシかもしれない。
そして、相部屋へと戻ったエリオだったのだが……偶然というか、必然というか。
「……」
ベッドに座り、俯くキャロがいた。
「……」
無言で、机の上に置いてあったパスカードを取ろうとする。
踵を返し、立ち去ろうとするエリオだったが……キャロが、いきなり言った。
「フェイトさんは、もっとやさしくしてくれた」
……何故エリオはそうじゃないのか、と言いたいらしい。
「だろうな。オレにも優しかったよ」
対してエリオは、冷たく言い放つ。『お前だけが特別じゃない』……と。
「フェイトさんは、いっしょにおかいものにいってくれた」
「ああ。オレも連れて行かれたよ」
「えいが、みせてくれた」
「そうかそうか。オレも見たよ」
小ばかにしたように、突きつける。
「フェイトさんは、」
「フェイトさんの一番は、お前じゃない」
……決定的な一言だった。
数分の沈黙。そして睨み合い……導き出された結論は。
「おまえなんか、いらない……！」
「――――表に出ろ」

目の前に居るのは、排除すべき敵である、ということだった。

夜の訓練場は、静まり返り……二人と一匹の息遣いだけが、よく聞こえた。

訓練服に、長槍を携えたエリオ。
民族衣装のような服のキャロと、肩に乗るフリード。
「……邪魔なんだよ」
「……」
「オレの思い通りにならないものは、全て……!!」
互いに、決定的な敵意と共に、睨み合っている。
「――ブラストフレ、」
始めに仕掛けたのは、キャロ。現時点での、フリードに出せる最大火力で、目の前のエリオを焼き払おうとした。だが。
「――おせぇよ」
繰り出された長槍が、キャロの帽子を刺し貫いた。
勢いで倒れたキャロを、エリオが余裕で見下す。
「……あんまりオレを舐めるんじゃねぇぞ」
――パリッ……パリパリパリッ……!!
槍が電熱で白熱し、帽子を焼き尽くす。
「お前の実力はこの程度……ってことで、いいのか？」
「――!!」
がばっと立ち上がり、躊躇無く命令を下す。
「ブラストフレア！」
――ボォオオオオオッ!!!!
火炎放射器もかくやという攻撃。だがその攻撃は、エリオの影すら、捉えることが出来なかった。
「おせぇ、おせぇ、おせぇ!!　遅すぎて眠くなってくるぜ!!」
「くっ……」
「オラ背中がガラ空きだァッ!!」
――ズンッ！
「あうっ……！」
槍の石突で、キャロの背を思いっきり突く。
「戦力は全部ペット頼みの雑魚が！」
「――!!　アルケミックチェーン！」
――ギャリリリリッ!!

鋼鉄の鎖が、エリオの足に絡みつく。
「フリード、やれっ！」
今度こそ……と、火焔を発射する。
「ハッ!!」
だがエリオは、余裕の表情で、槍を振るう。
――バギンッ!!
強化しているとはいえ、ただの一振りで鋼鉄の鎖を断ち切り、脱出した。
「フェイト、さんは……！」
攻撃魔法で、エリオを撃つ。
「はんっ……！」
「フェイトさんは……わたしの、いばしょだっ……！」
「っ！　……何がっ!!」
だが、いくら気張って見せたところで、所詮は少女。
エリオの槍術に、いいように翻弄され、削られ……
「う……」「きゅ、く……」
フリードともどもボロボロにされ、倒れ伏すのに、そう時間は掛からなかった。
「は、は……オレの、勝ちだ……！」
じゃきっ……と、キャロの喉元に槍を突きつける。その姿も、キャロの必死の抵抗もあり、ボロボロの様相を呈していた。
「さァ、いえよ。フェイトさんとは、もう関わらないって……!!」
「……いやだ」
勝者は、エリオだ。それは、疑いようも無い。だというのに……
「……やっとできた、わたしのいばしょだ。だれにもあげるもんか」
「言えよォッ……!!　う……くっ……！」
――なぜエリオは、泣いているのだろう。
「何でだよ……何で邪魔するんだよ……お前がいなければ……全部、全部うまくいったのに……!!」
見当違いの恨み言を口にする。

「フェイトさんは……!!」
そして……涙に濡れた、狂気じみた顔で、叫んだ。
「――――オレの母親になってくれるかもしれない人なんだっ!!」
槍を更に、近づける。
「消えろよっ……お前の居場所なんか、あるもんかっ!!」
そして……キャロは。
「……わ、ないで」
――ドクンッ……
「うっ……!?」
ぞわぁっ……と、総毛立ち……かつてないほどの危機感を感じたエリオは、キャロから飛びのいた。
「なんだ、これは……!?」
キャロが、フリードを抱え、幽鬼のように立ち上がる。足元には……巨大な、菱形の魔方陣！
「――――奪わないで……」
――――ゴ、ゴゴゴゴ……!!
徐々に姿を現す……巨大な影。
「あ……あ……」
「私の居場所を……!!」
戦意を喪失……いや、逃げるという思考すら、恐怖のあまり停止する。
「奪わないでえええええええええええっ!!」
……感情の蓋を突き破ったのは……狂おしい程の、悲哀の叫びだった。
「――――、そっか」
エリオは、何かを悟ったように……静かな表情となっていた。
長槍をぶらりと下げ、キャロを見遣る。
「――――……ヴォルテーーーーーーーーーーール!!」

――――――グゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!

二対四枚の翼が、天を覆う。

いよいよ全容を現したのは、巨大な、途方もないほどに巨大な、漆黒の召喚獣だった。

「そうだったんだな……お前も」

だが……その姿を前にしても、エリオは動かなかった。

「あああああああっ……ああああああっ!!」

頭を抱え、制御不能の感情に翻弄されるキャロ。

――――ギュオオオオオオオオオオオオオオッ……!!!

ヴォルテールの口内に……フリードなど、火種の一つにすら及ばないほどの、絶大な火焔の魔力が収束していく。

「お前も……オレと、同じだったんだな」

これだけ離れていても、ジリジリと前髪を焦がすほどの熱気だ。直撃すれば、エリオなど欠片も残らないだろう。

いよいよ、照準がエリオに合わせられる。そして……

「きえちゃえええええええええええええええっ!!」

――――ゴバァァァ

だが……そらした先が、まずかった。エリオを逸れた火焔は、機動六課の隊舎へ、直進していた。
「だめっ……!!」
そして。
――――――ズドォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!!!!
火焔が炸裂し……莫大な熱量が、空間を歪ませた。
「あ。あ、あ……!」
隊舎は、もう残っていないだろう。
「あああああ……!!」
まただ。また、同じ過ちを繰り返してしまった。
後悔が、キャロをじわじわと侵していく。
「ごめんなさい……ごめんなさい……!!」
突っ伏し……許しを請う。
「――――謝るくらいなら、さいしょからやるなっ!!」
……あるはずのない叱責が響く。
「……っ!!」
顔を上げた先……隊舎は、一部というか、半分ほどが消し飛んでいるものの、ほぼ健在だった。
その直前に展開されているのは、黄金色の魔力シールド。
部隊長ら教官陣の魔力光も見える。
「……フェイト、さん……!」
ギリギリのところで、間に合ったようだ。
「なかのひとたちは、」
車椅子に乗った部隊長が答える。
「幸いにも人的被害はゼロだ。新人どもは、揃いも揃ってロビーにぶっ倒れてやがったからな。ヤツらの未熟さに、今度ばかりは助けられた」
「……よかった」

「よくない！」
フェイトが、肩を怒らせながらずんずんと歩み寄ってくる。そして……
――べしんっ!!!
「あうっ……！」
平手で、キャロの頭を引っぱたいた。
「心配させるなっ！　ばか！」
そして、エリオともども、抱きしめる。
「フェイトさん、苦しい、苦しい……!!　オレ、マジで死に掛けたんですよ……!?」
「ボクだって心配で死ぬかと思ったもん!!」
「ぐえぇー……!!」
そんなやり取りを見ていた、キャロは……
「――ねぇ、あなた」
初めて、自発的に……フェイト以外の人間に、話しかけた。
「あン？　――って、オレ？」
自分を指差すエリオに、こくん、と頷き返す。
「あなたの、なまえは？」
――それは、小さな一歩。
「知らなかったのかよ……」
げんなりするエリオ。
「うん。きょうみなかったから。……でも、いまはしりたいの。きょうみがあるから」
「……そうか」
照れくさそうに、頬を掻きながら……
「エリオ・モンディアルだ」
「――『はじめまして』。わたしは、キャロ。キャロ・ル・ルシエ。こっちは、フリードリヒ」
――これがきっと、本当の初対面。本当の、二人の始まり。
「よろしくね。……エリオくん」
「ああ、よろしくな……キャロ」

――小さく、しかし、確実に……エリオとキャロは、距離を縮めていく。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第五話

――――エリオ・モンディアル。享年７歳。
それが、公的記録における、エリオのすべてだ。
資産家であるモンディアル家の長男エリオ・モンディアルは、難病に冒され、短い生涯を終えた。だが、両親はそれを善しとせず、息子を蘇らせんと八方手を尽くし……そして、違法な体細胞クローン技術へと、手を出した。
――記録転写クローン。
それは、故人の細胞内にあるミトコンドリアから、情報を抽出し、生成した肉体へと植えつけるというものだった。
これで、愛する息子は、より完全な形で手元に戻ってくる……と、『エリオ』の両親は、安堵に涙まで流した。
そして……冷たい培養カプセルの中で、エリオは、『エリオ』の記憶を引き継ぎ、覚醒した。目の前には、狂喜する両親と、満足げな科学者たち。
だが……彼は、エリオという名の別人であり、両親の望んだ『エリオ・モンディアル』では、無かったのだ。
記憶はある。目の前の男女が、自身の両親であるという記憶は。
だがそれは、他人のホームビデオかアルバムでも見ているかのような、違和感でしかなかった。
そして……理解した。
この肉体の両親である目の前の男女は、決して、自身を望んだわけではないのだと。
もし、彼が『エリオ・モンディアル』ではないと知れば、都合の悪い、後ろ暗い行為の結果である自分が、どうなるのかも。
その日、生れ落ちたその瞬間……エリオは、自身の力を以って、外的の排除を行った。
記録転写クローンの、不可思議なところだ。
生前の人物に魔力資質が乏しくとも、何故か、再生されたクローン

体には、高い魔力資質が備わっている場合が多い。
とある偏狂な科学者は、こう唱えた。
『個人の魂と、クローン体の魂。二つ分の魂が、生前の魔力資質を増大させているのではないか』……と。
詳しい原理は、彼自身にも分からない。だが、備わった力を使うことに、躊躇は無かった。
研究所の発電施設は甚大な損傷を受け、暴走し、大爆発を引き起こした。
駆けつけた管理局により、モンディアル夫妻並びに、違法研究を行ったと思しき科学者らは、全員が逮捕された。
一人きりとなったエリオ。
だが、公的には死亡している彼に、何の証明もあるはずは無く……生きていくためには、力を行使するしかなかった。
略奪である。
電子錠を容易く損壊できる上、直接的な戦闘にも秀でた彼の能力は、大いに役に立った。
子供の姿に油断した追っ手を、容易く捻じ伏せることさえ、可能だった。
そして、それ以外の生き方が、分からなくなってきた頃……彼の周囲には、彼の能力を利用するために、同じような生き方しか出来ない少年少女が集まってきていた。
集団は、便利で、心地よかった。抜け出すことが、出来なくなるほど。
だが、彼の天下も、そう長くは続かなかった。
ある日。これまでとは段違いの規模による掃討作戦。
手下たちは次々に捕縛され、いよいよ、エリオは一人きりとなってしまった。
追っ手は一人。執務官の女だった。
結局は逃げられず、捕縛されることになったのだが……自分を戦利品のように小脇に抱えて、うきうきした足取りで副官に自慢しまくる女。

犯人である自分にまで、馴れ馴れしく話しかけてきて……あけっぴろげに笑って。
あまりにも、楽しそうに笑うものだから……つい、自分まで、柄にも無く笑ってしまった。
それは、『エリオ』の記憶の外では、エリオ自身は一度も感じていなかった……暖かな感情だった。
◆▪◆　◆　◆
衝撃的な大事件から、一週間ほどが過ぎた。
半壊した宿舎も、ブロック工法を駆使することによってなんとか原型を取り戻し、大部屋に男女雑魚寝という悪夢から、ようやく解放されつつあった。
さて、その元凶となった二人の子供たちについてだが、当然、局員の規定に従った罰則が……
「あァ？　ガキの理屈でガキが喧嘩しただけだろうが。ガキのやったことは、保護者が責任を取るって相場が決まってんだよ」
……という部隊長の決定により、実は、無かったりする。
「だからって、なんでボクがー!?」
……法的後見人であるフェイトが責任を負い、作業着姿で隊舎の修繕へと駆り出されていた。おつむの中身はともかく、手先だけは妙に器用なフェイトは、大いに活躍した。
そして。
当事者同士はというと。
「エリオくん、エリオくん」
「……あァ？」
ちょこちょこと寄ってきたキャロを、冷たい態度で突き放す。
和解したはずなのだが、エリオのキャロに対する態度は、いまいち改善されていない。
「あのね、よくかんがえたら、あの日以来、あんまりおはなしできてない」
「……ああ、だから？」

「あのね、あのね……」
キャロは、小さな握りこぶしをぎゅっと握り、決死の（無）表情で、エリオを誘った。
「……ゆうごはん、いっしょにたべよ？　そのときに、おはなしがしたいな」
「悪ィ。疲れてんだ」
スタコラサッサと、隊舎へと駆けていってしまった。
「……あぅー」
「きゃ、キャロ！　ファイトだよ！」
「そうですわ！　返事が返ってくるようになったじゃありませんか！」
がっくりと項垂れるキャロを、スバルたち女性陣が各々に励ました。
「ご飯食べにいこ？　ね？」
キャロは、項垂れたままぷるぷると左右に頭を振った。
「……いい。フリードとたべる」
「きゅ……」
フリードが、慰めるようにキャロの頭を翼で撫でていた。
「うーーん……仲直り、できたように見えたんだけどなぁ……」
「おかしいですわねぇ……？」
首をかしげるスバルとセリカ。
「……はぁ。アホくさ」
だがティアナだけは、あきれた顔でため息をついていた。

「……で、ここ数日はオレの部屋で寝泊りしてるわけ？」
……エリオは、元ルームメイト・コリンの部屋の中、疲労困憊でベッドに倒れ付していた。
「ケケケッ。モテる男は辛いねぇ？」
「るっせー……！　何なんだよ、あいつ……チョーシ狂うっての……！」
割と年の離れた二人だが、互いに素で悪態を付き合う仲であった。

「初めてだったんじゃねーの？　良かれ悪かれ、あそこまでストレートに感情をぶつけ合った『喧嘩』ってのは」
椅子にだらんと身を預け、ベッドで寝そべる同輩へ声をかける。
「んで、ストレスをスッキリ発散させたあとに残ったのは……」
……陳腐な青春ドラマな展開である。そう、言葉にするなら……
『なかなかやるな』
『お前もな』
……と。
「……にしても極端だろーがよォ」
ごろん、と寝返りを打つエリオ。
「けけっ。オメーだって初めてか、超久々なんじゃねーの？」
「あァ？」
顔も見せず、汚く聞き返す。
「打算すっ飛ばしてタメ張れる、『ダチ』って言えるのはよ」
「……はっ、わけわかんねーし」
寝返りを打ったまま、振り向きもしないが……その頬は、年相応の少年らしく、赤らんでいた。そう、エリオとて、本気でキャロを疎んでいるわけではないのだ。ただ、最初のエリオの言のとおりだ。
――『調子が狂う』。
実は、『初めての感覚』に浮き足立っているのは、どちらも同じなのであった。
「あらやだ、この子ったら照れてる！　照―れーてーるぅー！　オンナノコに懐かれて照れてるぅー!!」
両手をメガホンに叫ぶコリン。
「誰が照れてんだよタコ！　串焼きにすんぞゴルァ!!」
「お!?　やるか小僧!!　かかってこいや！」
「上等じゃねぇか!!」
二人して、獲物を取り出し室内チャンバラを繰り広げる。
……なんだかんだで、仲のいい二人だった。

翌日。ようやく訓練場も再建され、訓練が再開された。
「ひー、ひーっ……!!」
「ぜぇー、ぜぇーっ……!」
……今日も今日とて、地獄の基礎訓練である。
だが、一週間前とは、だいぶ様子が異なっていた。
以前はへたり込み、電撃制裁を喰らっている者が一人か二人、いたのだが……今日に限っていえば、ゼロだった。
「……ふむ」
シグナムも、感心したように呟く。
「……夜間に自主練習をしていたか」
日中は、それこそ降って湧いた連休に惰眠を貪っているように見えた訓練兵たちだが、どうやら、教官たちの目の外で、密かに鍛錬を積んでいたらしい。
「素直に日中にやればいい物を……」
捻くれ者には、捻くれ者なりの矜持というものがあったようだ。
「……これで、第一段階はクリア、だな」
はやてが密かに設定していた、訓練生たちの第一段階……
『各々が自主的な訓練を始める』という段階。
自分の足で歩くことを覚えた新人たちには、次の段階の訓練が必要だ。第二段階……『体を壊さないギリギリのラインを覚える』こと。
持久走を終了させ、訓練兵たちを集合させる。
「――これより、基礎的なフォーメーション及び、対違法魔導師を想定した実戦訓練を開始する!!」
着々と……訓練兵たちに悟られぬよう、ステップアップを促していく。
(そうだ。その調子で、登って来い。我が王の見込んだお前たちならば、きっとできる)
シグナムは、内心でそう呟き……新たな訓練を開始した。
◆　◆　◆　◆
一方、フォワードチームにも一つ、変化があった。
「だぁありゃあああっ!!」

――ガゴンッ!!!
スバルの裂帛の気合と共に、ガジェットドローンが粉砕される。
これまで、ただの間合いを詰める道具としてしか活用できていなかったローラーシューズを、戦術の中へと組み込み、攻撃バリエーションを格段に増していた。
――ガギャギャッ……!!　ギシッ……!!
だが、かつて無い負荷に、シューズが軋みを上げていた。
ティアナも、また……
「くっ……!!」
銃の先端に出現させた魔力弾を、すぐには発射せず、更に二段階目のチャージ。
一発目を包み込むように、魔力の外殻が追加される。
――ジ、ジッ……!!
だが……そもそもこの銃には、魔力弾を二段チャージできる機能は備わっていない。
「……!　ああっ!!」
――バシュンッ!!
……結局、全周囲を覆うことは出来ず、中途半端に外殻を纏った魔力弾を発射することになった。
とはいえ、高速回転する魔力弾は、擬似的に全周囲を外殻で覆ったものとなり、遠距離のガジェットドローンのＡＭＦを、どうにか貫いた。
――シュウウウッ……
バレルが焼けたのか、銃身が、不吉な煙を上げている。
「おらよっと!!」
最近では、スバルたちとも訓練をすることも増えたエリオ。
馴染んだ獲物である長槍を電撃の魔力で強化し、ガジェット群を薙ぎ払う。
――――シュバッ!!
「!」
素早く伸張した触手が、エリオを貫かんと迫る。

エリオは、冷静にそれを槍の穂先で受け流し、
――ビギッ……!!
……長槍に走った一条の亀裂に、頬を引きつらせた。
「!? うおおおやべぇっ!?」
これ以上受けたら、折れる。だが、回避は間に合わず。
「フープバインド」
――シュバッ!!
魔力のリングが、触手を纏めて縛り上げた。
「フリード、ブラストフレア」
「ギュアァッ!!」
――ボウンッ!!
火炎攻撃で、ガジェットを掃討。
「うー……おそい……」
だが、ほぼ独力での魔法の行使は、格段に速度で劣る。
『やめ』
そして、なのはの号令で、訓練は一時中断された。
紫煙を燻らせながら、集合してくる四人をぐるりと隻眼で見渡す。
『まずは、基礎の基礎程度までは、身についたようですね』
息切れをしない程度の体力がつき、また、己が得物を、一定のラインまで扱えるようになった。
『おめでとうございます。ひとまず、第一段階は合格です』
煙草を吹かしながらの、やる気の無い賞賛。
『では、現時点での問題点を……ティアナ。述べてみなさい』
「はい」
指名を受けたティアナは、ちらりと、手元の銃に目を落とす。
「……全体的に、武装のスペックが不足してきています」
車軸にガタが出ているローラーシューズに、バレルの焼けた銃、罅の入った長槍。
『そうですね』
煙草の半分を一気に灰にし、盛大に煙を吐き出した。
『……着いて来なさい』

そして、返事も待たずに歩き出すなのはの後を、四人が追う。
そしてやってきたのは、何故か隊舎の中。
「？　あのう……隊舎に、何の用が？」
『用があるのは隊舎ではありません』
そして……当たり前のように、『そこ』に足を踏み入れる。
――中庭。
「ひィっ!?」
恐れおののき、後退するスバル。
――機動六課隊舎の、中庭。
それには、言葉以上の畏怖が込められている。
赴任してきた訓練兵たちの間で、実しやかに囁かれている噂。
――曰く、四方を隊舎で囲うことで、中庭を封印している。
――曰く、超Ａ級危険人物を隔離している。
――曰く、入ったら戻ってこれない。
……根も葉もない噂ではあるが、見るからに異常な人物が数多く在籍するこの部隊では、真実味があった。
『……はぁ。何に怯える必要があるのですか。馬鹿馬鹿しい』
「そ……そうですよね……はは……失礼しました」
『ああ、でも……』
「……でも？」
『私を見失わないよう、気をつけなさい。はぐれたらアウトですよ』
――ザザッ！
新人四人は、一塊になって移動を開始した。
身構えていたわりには、何も変化は無かった。
中庭には、簡素な建物が一つ鎮座しているのみで、その外観にも、おかしな点は見当たらない。
なのはが、パスカードをタッチし、開錠させる。
そして、中庭に足を踏み入れた。
（……なんだろう、なんというか……）
見た感じは、本当に何も無い。あからさまな物品があるわけでも、壁が血糊で塗りたくられている訳でもない。だが……身体の芯まで

浸み込むような、異様な冷気のような気配が、充満していた。
（う……！）
その、異界のような空間を、なのはから決して離れぬように歩き……たったひとつの建物に、足を踏み入れる。瞬間。
――――かくんっ。
「……あ、」
初めに膝を折ったのは、意外なことにティアナだった。
「ティアっ……！」
それを支えるスバルも、今にも崩れ落ちそうだ。
エリオと、キャロは……こちらもまた意外なことに、なんとか自力で行動できていた。
『……中てられましたか。あと少しですから、歩きなさい』
なのはは、待ってはくれない。置き去りにされる恐怖から、ほうほうの体で、目的の部屋へと到達できた。
「え……あれ……？」
そして、ドアが閉まった途端、圧し掛かってきていた重苦しい気配は、ウソのように消え去っていた。
「遅かったね」
そして、スバルらを出迎えたのは、エリオと同程度の背丈しかない、小柄な白衣の女性だった。
『一週間ぶりだね、マリー』
「うん」
――マリエル・アテンザ。
弩級の変態研究者にして、異能の天才技術者。
整っているであろう素顔は、簾のような伸ばしっぱなしの前髪と、墨汁を塗りこんだかのような隈と、曇った眼鏡で台無し。薬品でもこぼしたのか、白衣は変色し、焦げて穴が開いていて……その下に着ているのは、まさかのジャージ。しかも小豆色。
「……えー」
その、あんまりな格好にドン引きのスバル。
『紹介します。彼女は、マリエル・アテンザ。あなた方の、専用デバイ

スの設計者です』
「専用……」「デバイス!?」
目を剥く二人。
精々、既存の武器の強化程度に考えていた四人には、少々ぶっ飛んだ内容だった。
「ああ。……とはいえ、ただ高性能な武装を支給する訳では無い。……高町隊長から、説明してもらおう」
『……ん、わかった』
なのはは、取り出していた二本目の煙草をケースに戻す。
『では、まず……あなた方フォワードチームは、新人たちの中でも、飛びぬけて『育てにくい』人材です』
「「「「「……」」」」」
ただ淡々と事実を告げているのだろうが、やや反応に困る。
『ああ、誤解しないで頂きたいのは、決して能力が劣っているわけではない、ということです』
……わざわざ、あんな苛烈な試験を、部隊長自らが課すのだ。評価されているに決まっている。
『ですが、ただ……『育てにくい』。今までのケースには無かったスタイル、スキル。それを的確にコーチできる教導官は、教導隊にもいませんでした』
変則的な格闘技を主体とするスバル。
今では廃れた系統である幻術使いのティアナ。
規格外の火力・真竜の加護を持つ召喚師、キャロ。
「……あれ、オレは?」
電気資質こそ珍しいものの、槍術ならば、さして珍しくない筈だが……
『現時点で、あなたの詳細を開示するわけにはいきません』
「?」
なぜか、なのはは詳細をぼかした。
『ただ、言えるのは……フェイトは、無作為にあなた方二人を、機動六課に招いたわけではない、ということです』

エリオと、キャロ。その二人が共にいるということには、何か重大な意味がある、ということらしい。
話を戻します、と前置きし、続ける。
『あなた方の資質を伸ばすためのデータは、あなた方自身から収集するしかないのです。ですが、それをいちいち時間をかけて検証していては、技術が成熟する前に、成長期が終わってしまいます。
――そこで、そのデバイスです』
マリーがデスクに並べた四機を、指し示す。
『そのデバイスたちには、画期的な機能が搭載されています。……まぁ、ざっくり分かりやすく言うと……『ユーザー育成システム』、といったところでしょうか』
「ユーザー……」「いくせい……？」
『デバイスを装着した状態で訓練を行い、毎回の詳細データを記録領域に蓄積。蓄積したデータから、今後の訓練の方針を導き出すというものです』
似たようなシステムなら、既存のデバイスにも組み込まれてはいる。だがそれは、あくまで、映像データや音声データ、浅いバイタルデータといったごく限られた範囲のものでしかない。
このシステムは、使用者一人の、文字通りの専用機として、細やかなデータを蓄積していくのだ。
「ちなみに、このシステムを提唱したのは、そこにいる高町教官だ」
「えっ……教官が!?」
注目されたなのはが、遠い目をして呟いた。
『自主練しか出来ないような環境にいまして』
「ま、ほぼ自主練だけで、若干９才にしてＡＡＡランクまでいっちまうオマエも大概だけどな」
なにげない会話の中で飛び出た驚愕の事実に、文字通り飛び上がる。
「きゅっ……９才でＡＡＡ!?」
『正確には、ＡＡＡランク『相当』です。ランクなんて取ったことありませんよ、私は』

「いやっ……いやいやいや!?　それでも!?」
　15にしてようやくBに届くかどうかというスバルは、度肝を抜かれた。
「まぁ……確かに、年齢の割に高ランクの魔導師ってのはいるにはいるけど……」
「あ、でもでも！　ってことは、私たちも、そのシステムを使えばあっという間に高ランク魔導師の仲間入り……!!」
「ばーか。ンな深夜の通販番組のダイエット器具みたいな話があるわけないでしょ」
　はしゃぐスバルの頭を軽くぺしん、とはたくティアナ。
「勘が良いじゃないか。ちなみに高町教官の初陣は、暴走ロストロギアの鎮圧だ」
「……それ、精鋭部隊が万全を喫して向かう任務じゃ……」
『マリー。昔の話はやめて』
　苛立たしげに、煙草を咥えて着火する。
「……そうだったな」
　かちっ、と卓上の機械のスイッチが入る。空気清浄機のようなものらしく、なのはが吐き出した紫煙が吸い込まれていく。
「もちろん、ただ訓練をしていればいい、なんて都合のいい話は無いぞ？　高価な武装を供与する対価は、一般部隊が敬遠する案件の解決だ。訓練・実戦・訓練・実戦・死刑・実戦の波状攻撃で、強制的に戦闘力を上昇させてもらう」「し、しけ……」
「上昇……しなかったら？」
「……」
　半ば冗談、半ば本気で聞くスバルに……マリエルはニタリと笑うのみ。
「って、いうか」
　ティアナが、当然のような疑問を口にした。
「そんなに才能に恵まれてるなら、教導隊に行けたんじゃないですか？」

管理局のトップガン、教導隊。
ティアナが言うように、将来有望な若手局員は、実地研修などの正規の手順をすっ飛ばして、教導隊へ預けられる。そこで、超一流の魔導師たちから手ほどきを受け、そのまま教導隊に正式所属する……というのが、エリートの鉄板コースなのだが……
――だが、いるのだ。悲しいことに。
集団行動が苦手というかその概念すらあまり分かっておらず。
誰かに合わせることが致命的に下手で、というか必要性を感じておらず。
集団で努力するより一人か限られた相手とマイペースにやっていた方が上達し。
『なんとなく』のインスピレーションで、とんでもない結果を生んでしまい。
しかもその結果というのが、努力の壁を蹴散らすほどの勢いで。
その結果発生する、他者からのやっかみや嫉妬というものへの対処法を知らず。
気づけば、浮き島のようにポツンと孤立している、そんな人物。

『教導隊がナンボのもんですか。けっ』

……どこぞの教官のことであった。
「ヴィータのやつは、そこで天職を得たようだけどな」
『……ふん。あんな子、知りません』
完全に拗ねた様子でそっぽを向いてしまった。
『とにかく。あなた方には、こちらのデバイスを支給します。今後の訓練では、常にその機体と共に臨みなさい。マリー、各機の説明を』
「それじゃ、まずは……。エリオ」
「うッス」
「キミのデバイス『ストラーダ』は、近代ベルカ式の武装として強化してある。強度は保障するよ」
起動すると、長槍の姿となってエリオの手に収まった。

「へぇ……こいつはいい。しっくりくる」
ひゅんひゅん、と狭い室内で槍を器用に回転させる。
『我が使い手よ。汝が、『所有者』で終わらぬことを願おう』
「ヘシ折れるまでこき使ってやる。覚悟しとけよ」
『了解である』
腕時計のような待機形態へと戻ったストラーダは、小さなディスプレイを明滅させ、新たな主の手へ渡った。
「キャロ」
「はい」
キャロに渡ったのは、小さな羽根のついた飾り紐。
「銘は『ケリュケイオン』。キミの希望通り、補助魔法の特化と、魔力の整流化を念頭に組んである」
「おきて」
起動すると、オープンフィンガーグローブとなった。
手の甲には、瞳のような大型のコンバーターが装着され、五指へはライン状のジェネレーターが伸びる。
『あら、可愛らしい主ですこと。それに……ふふ。既に器たる騎士も、付いているのですね』
「……それはまだきまってないけど、でも、そうなってほしいから……みとめてもらうためにも、あなたのちからをかして」
『お安い御用です』
……少々、理解の及ばない会話があったが、無事に渡ったようだ。
「ティアナ」
「……はい」
ティアナの手に託されたのは、紋様の入ったカード。
『クロスミラージュ』。ミッド式の特殊兵装だ。汎用性はあるが、かなり特殊な仕上がりになっている。気をつけろ」
起動すると、カードから、リボルバー型の拳銃へと変形した。弾倉を開くが……そこには、空の薬莢が納まるのみ。これが、マリエルの言う『特殊兵装』なのだろう。
『オレを使いこなせるかな？　お嬢ちゃん』

「やってやるわよ。ランスターの弾丸は、一撃必中なんだから」
『フッ……期待している』
……気障なＡＩである。
そして……
「スバル」
「はいっ！　はいはい、はーいっ!!」
プレゼントを目の前にした少年のように目を輝かせ、両手を差し出す。
「最初に謝っておく。すまん」
……目をそらしてぼそっと聞き捨てならないことを言う。
「で、で!?　私のデバイスは!?」
聞いちゃいない。
「これだ。これだが……」
「うわぁ、綺麗な色!!」
差し出された、抜けるようなスカイブルーのクリスタルを照明にかざして見るスバル。
「――『マッハキャリバー』。オマエの戦闘に特化した機体だ。使いこなせれば、」「セットアップ！」「最後まで聞けよぉ……」
起動して……スバルの両足に、ローラーシューズとはまた違う、格段に上の武装として装着される。
「お、おおおっ……結構、重い……？」
何度か足踏みをする。
「単純な重量増に加え、平時には一定の魔力的な負荷が掛かるようになっている」
パワーリストのようなものだ。
『……』
なのはも幼少期、同じような真似をしていた。
りゅいいいんんっ！　と、力強い動力の駆動音が鳴る。
「えへへ……よろしくね、マッハキャリ、」
『何だ貴様その締まりの無い表情はッッ!!』
……空気が凍りついたようだった。

「……えっ？」
『貴様程度の力量の持ち主が、我が主だとッ!?　認めん！　断じて認めんぞッ!!』
　ビッカビッカとクリスタルを発光させ、動力がギュンギュン唸りを上げる。
「ちょっ……マリーさん!?　なにこれ!?」
「……いや、とあるデバイスのＡＩから、一部を転用したところ、こうなってしまってな。だが、案じるな。このＡＩは、機体のパフォーマンスを１００％発揮できるというシミュレート結果が出ている」
　スバルは慌てて、待機状態へと戻そうとしたのだが……
「……っ!?　と、取れない!!?」
　……呪われていた。
『甘えるな貴様ァ！　行住坐臥！　常在戦場！　甘ったれたその性根、２４時間の鍛錬で叩きなおしてくれるわ!!　我が主と認められたくば、耐えてみせよっ!!』
「にっ……!?」
　顔を強張らせるスバル。
「たっ……助けて、高町教官!!　みんなー！」
「へー、かっこいいじゃないその槍」
「そっちの銃も渋いじゃん。回転式拳銃とか」
「ケリュケイオン、きれい」
　……ティアナたちは他人事のようにスルーし。
『ああ……なんでしょう、このデジャビュは』
　なのはは、ボーっと遠くを見ている。
『さァ往くぞ、未熟者!!　駆け足――――!!!』
　――ギュバァァァァァァァァッ!!!
　床に散乱していたガラクタやらを蹴散らしながら、マッハキャリバーはスバルを引き連れ、猛然と疾走を開始した。
「うわぁぁぁぁぁぁぁん!!　たーすーけーてーーーーーーぇぇぇぇ……!!」

……そして、ドップラー効果を残しながら、スバルはマッハキャリバーに引きずられ、出て行った。
『……さ、訓練再開です』
ぱんぱん、と手を叩き、何事も無かったようにマリエルの研究室を後にした。

◆▪◆　◆　◆

「えーっ……いーなー！　お前らだけ新型デバイス支給かよー!?」
その日の晩。またしてもコリンの部屋に入り浸るエリオ。
「つっても、クソ面倒な任務もセットだけどな……」
嬉しさ半分、面倒くささ半分といったところか。
「……んで、キャロちゃんとはどーなったよ？」
「ん？　あー……デバイスとの相性は良さそうだったな。器だとか、なんか電波なこと言ってたけど」
「そーじゃねぇっての。おめー、いつになったら戻るんだよ？」
「……さァな」
「かわいそーじゃん」
コリンの言うことも、最もだ。
これで一週間以上、キャロは一人と一匹で、あの部屋で過ごしていることになる。
だが、いくら最もだとしても……それを素直に聞き入れる素直さがあったら、そもそもこんな場所にはいない。
「……るっせーな！　おめーにゃカンケーねーだろ!!」
「大有りじゃボケェ！　いつまで俺の部屋占拠されなきゃなんねーんだよ！　モジモジしてねーで、さっさと戻ってキャロちゃんとキャッキャウフフなことして来い！」
「だっ……誰がモジモジしてるってェ!?　あと、キャッキャウフフもしねェよ!!」
「おめーだよ！　ガキかっつぅの……って、ガキじゃねーか！　ぎゃはははは」
「挽肉にしてやんよォ……!!」

「来いやァ！」
……そしてまた、室内乱闘が始まろうとしていた矢先……
――とんとん
……部屋の扉が、遠慮がちにノックされた。
「……」
コリンは　荒ぶる鷹のポーズで停止し。
「……」
エリオは、椅子を振りかぶったまま硬直する。
――とんとん
「――エリオくん、いる？」
「……キャロ？」
どうやら、居場所を知って来たようだ。
「おー、キャロちゃんいらっしゃい」
「ばっ……!?」
出るかどうか、悩んでいる隙に、コリンがさっさとドアを開けてしまった。
「んじゃオレ、しばらくメシ食ってくるわ」
気を利かせたつもりなのか、室内には、エリオとキャロの二人だけとなった。
「……」
「……」
会話の糸口を見つけられず、しばらく沈黙が続く。
「あの、」「あのさ、」
……同時だった。
目でキャロを促す。
「あの……エリオくん、わたし、めいわく？」
非難する口調ではなく……むしろ、気遣いのような口調だった。
「わたし、いままで、フェイトさん以外のひとと、なかよくなったことがなくて……それに、フェイトさんはおとなで……エリオくんはおとこのこで、おないどしで……ほんとうに、はじめてで……うーん……」

かつて無い長文に、徐々に混乱をきたすキャロ。
「だから、はしゃいじゃって……めいわくだったら、いってほしいな」
拙いながらも必死の言葉に、エリオもさすがに、罪悪感が首をもたげる。
「――、」
片手を上げ、キャロに何かを伝えようとした、その時――――

――ビーーーー！　ビーーーー！

大音量の警報が、全体に鳴り響いた。
「!!」
いくつかの警報のパターンがあるが、今回の種別は……緊急出動。
いよいよ、初陣の時がやってきたのだ。
「――！　行くぞ！」
「わかった」
二人は駆け出し、ブリーフィングルームへと向かった。
◆・◆　◆　◆
「任務内容を説明します」
フォワードチームを含む、いくつかの小隊がブリーフィングルームに召集されていた。
その説明を行うのは、フィアットだ。
「先刻、陸上運輸局よりＳＯＳが発信されました。任務は一度、陸士７４部隊に上げられましたが、その部隊は、必要人員が揃わないとの理由で拒否。結果、機動六課へ委任されました」
ぱっ、と表示されたのは、ミッド北部の山岳地帯。そして、そこを山間を縫うように走る貨物列車。その列車の外部に、かなり多数のガジェットが組み付いており、破損した装甲から覗く車内にも、ガジェットの影が見え隠れしている。
「こちらの貨物列車の制御系は、既に敵性ガジェットに占拠され、高速のまま制御不能状態となっています。放置すれば、首都のターミナル駅を突破、脱線し、市民にも多くの犠牲が出るものと予測されます」

更に画面が切り替わる。車内の構造図だ。
「任務の達成条件は、車両を占拠する全ガジェットの破壊、そして、制御系の奪還です」
続いて、詳細の説明が始まる。
「貨物列車の速度は、現在、時速２４０ｋｍを維持しています。当然、この速度のままでは、多数の人員が突入することはできません」
風圧で吹き飛ばされるか、それでなくとも、満足な戦闘は行えないだろう。
「まず、フォワードチームが先行し、制御系を目指します。先頭車両を目指しながら、各車両の連結部分の通路を封鎖。制御系を奪還し減速させた後、後続部隊が残ったガジェットを掃討します」
フォワードチームは、まさに一番槍。ミスをすれば、それはそのまま、この任務の失敗を意味する。責任に、背筋がぶるっと震える。
「２０分後、２０：００に作戦を開始します。各自、装備を整えておくように。では、解散」

デバイスを携えた隊員たちは、小隊ごとにヘリに搭乗していた。
「ヘリで空輸して、列車に投下するとか……」「前世紀の爆弾かっつうの」「いくら落下傘が使えないからって……」「……５０メートルの櫓から降下する訓練って、こういう時のためだったんだな」「うち、それ未修了なんだけど……」「良かったな今日で修了だ」「うっ、急におなかが……」「部隊長に腹パンされっぞ」
各々、緊張しているようだ。
やいのやいの騒いでいるうちに、現場上空だ。
「さぁ皆さん、初陣ですわよ。準備はよろしくて？」
コンソールを開き、準備万端のセリカが、フォワードチームに聞く。
「だい、大丈夫……！」
「あんたってば、いつまでたっても本番に弱いわね」
「だ、だって……これ……！」
これ、と指差したのは……足を枷のように戒める、頼もしい相棒であるべきデバイス、マッハキャリバー。

『何をシケた面をしているか未熟者！　待ちに待った初陣の時ぞ！』
……スバルを置いてけぼりにしそうな勢いで、やる気に満ち溢れていた。
『我が力、存分に発揮してくれよう!!』
自信満々である。
「確かに、あの走力は今回みたいな作戦にはもってこいよね。スバルをトップに、私が中央、両翼をエリオ、後方にキャロを置いて、支援と回復に専念させれば、かなり安定して動けるんじゃないかしら」
「そうですわね。いきなり実戦投入とは、少し不安も残りますが……」
「どうせ、いつかは実戦よ。早ければその分、対策や課題も見えてくるわ」
「……ですわね」
「そろそろ投下地点だ。ガジェットどもに無効化されないよう、フローターフィールドはギリギリまで発動を待て」
配置が決まった頃、操縦室のヴァイスから声が掛かる。
――バグンッ……
リアハッチが開き、闇に包まれる山間部と、その合間を疾走する貨物列車の灯火が明るく見えた。
「皆さん、ご武運を！」
「「「了解！」」」
一番手は、やはりスバルだ。
「――……行くよ、マッハキャリバー！」
『……ほう？』
スイッチの切り替わったスバルに、感嘆ともつかない声で反応するマッハキャリバー。
『よかろう。……地に伏せよ。初撃、仕損じるなよ』
「了解、だよ！」
ぐっと体を撓ませ、クラウチングスタートの姿勢を取る。
――キュイイイイイイイッ……!!
ギアはニュートラル。回転数を、半ばまで上げ……
「スバル・ナカジマ！　行きます!!」

――……キュドンッ!!!
一気にギアを繋ぎ、ヘリから躊躇無く飛び出していった。
「クロスミラージュ。行くわよ」
『ああ、任せておきな』
回転式拳銃を手に、ハッチへ進む。
目の前に口を広げる暗闇。だがティアナは、臆することなく、歩を進める。
『驚いたな。怖くはないのか？』
「そりゃ怖いわよ。でも、恐怖と緊張を……五体と感情すべてをコントロールしてこそ、真の銃撃手よ」
『フッ……頼もしいことだ』
気障に笑い、沈黙する。戦場での己が役割は、銃弾を放つことのみ……ということだろう。
「ティアナ・ランスター、行きます」

「んじゃ、オレも行くとするか。……ストラーダ」
『御意』
長槍を携え、いつもの気楽な調子で降下しようとする……のだが。
「……」
「……キャロ？」
キャロが、エリオのジャケットの裾を摘んでいた。
「……あ、ごめん」
はっと気づいたように、手を離す。無意識の行動だったらしい。
見れば、いつもの無表情に、僅かながら緊張が覗いている。よく考えれば、キャロは機動六課最年少メンバーで、なおかつ年端も行かぬ少女なのだ。育ちや資質に特異な点こそあれど、その芯は、一般的な少女のそれと変わるはずも無く……戦場が怖いという、ごく当たり前の感情があって、当然だ。
「……」
たった一人で、暗闇に命綱なしのダイビングを決行させるには忍びない。

なので。
「エリオ・モンディアル！　キャロ・ル・ルシエ＆フリードリヒ！　行きまーす!!」
「えっ……えっ、えっ!?」
小柄なキャロの体を小脇に抱えて、諸共に飛び出すことにした。
「イヤッホォおおおおオオオオオオオオオオオオオオウ!!!」
「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ
「了解!!」
側面から飛び出してきたガジェット。だがスバルは、目も向けずに通過する。
――ピピッ……
スバルに照準が合う。そして、レンズが絞られ、光弾が発射される……ことは、無かった。
――ドッ!!
飛来した高速の魔力弾に、ボディを撃ち抜かれたからだ。
――ゴグン……!
数体が、壁のようになり立ち塞がる。スバルを後続と分断する動きだ。
「ははっ、なんだそりゃ壁のつもりかァ!?　おらァあああっ!!」
『Ｓｐｅｅｒｓｃｈｎｅｉｄｅｎ!!』
◆▪◆　◆　◆
――ズダンッ!!
着地と同時、スバルが駆ける。
「うぉりゃあああああああああああああっ!!」
ガジェットが反応し、光弾を発射するよりも速く、そのボディを打ち砕く。
『ティアナさん、エリオさん、キャロさんも着地成功ですわ！　そのまま直進してくださいませ！』
「了解!!」
側面から飛び出してきたガジェット。だがスバルは、目も向けずに通過する。
――ピピッ……
スバルに照準が合う。そして、レンズが絞られ、光弾が発射される……ことは、無かった。
――ドッ!!
飛来した高速の魔力弾に、ボディを撃ち抜かれたからだ。
――ゴグン……!
数体が、壁のようになり立ち塞がる。スバルを後続と分断する動きだ。
「ははっ、なんだそりゃ壁のつもりかァ!?　おらァあああっ!!」
『Ｓｐｅｅｒｓｃｈｎｅｉｄｅｎ!!』

――ズシャアアアアアアアッ!!!
回転からの、横一線の斬撃が、纏めて切り捨てる。
「チッ……こう狭いと、オレの速度が出せねぇな。あの能天気女の独壇場になっちまう」
『同意する。だが、よい槍捌きである』
「やっぱ、ゼストみたいには出来ないなっ、っと！」
これも今後の課題だな、と呟き、槍を振るう。
「キャロ！　遅れんなよ！」
エリオの役割は、両サイドを固めつつの、後衛の護衛である。
「うん、がんばる」
「きゅあああっ!!」
フリードも呼応し、火焔でキャロを援護する。
『ふふ、彼は善き騎士ですね』
ケリュケイオンが、場違いに暢気なことを言っている。
「うん。エリオくん、かっこいい」
『やはり、彼しかいませんか？』
「うん。でも、まだだめ」
相変わらず、意味深な会話だ。
「いまは、このよにんで、ちゃんとうごく。それから」
……あのキャロが、チームプレイを意識するようになるとは。
スバルたちフォワードチームは、当初の予想より、遥かに速いペースで各車両を突破していく。そこにはもちろん、鬼教官らの指導による技術の向上もあるのだが……
（すごい……！）
滑走するスバルも。
（これは……！）
魔力弾を連射するティアナも。
（なんて武器だよ、こいつは!!）
霞のごとくなぎ払うエリオも。
（ついていくのが、せいいっぱい）
バインドと補助を並列で発動させるキャロも。

――――マリエル謹製デバイスの性能に、驚愕していた。
猛スピードで滑走するスバル。だが、その動きには微塵のブレも不安定感も無い。
マッハキャリバーの車輪が足場を確実にグリップし、いかなる場面においても、動力を確実に機動力として出力している。
「おりゃああっ!!」
――ゴギャッ!!
滑走しながらの回し蹴りというアクロバティックな動きで、ガジェットを蹴散らす。
「すごい！　すごいよ、マッハキャリバー!!」
『我を見縊るでないッ！　こんなもの、肩慣らしにもなってはおらんッ!!』
「あははっ！　それじゃ……もっとギア上げてくよぉおおおおおおっ!!」
『望むところよっ!!』
――ギュオオオオオオオオオオッ!!
更に速度を増し、車両を駆け抜ける！

「あのバカ……突っ走るのはいいけど、もうちょっと倒してから行きなさいよ……っと！」
クロスミラージュを構える。魔力スフィアが発生し、更に、その周囲に外殻が形成される。
訓練であれだけ手間取っていたヴァリアブルバレット（多重弾殻）の形成が、こうも容易に。そして、高速かつ正確に。
――ドンッ!!　ド、ドンッ!!
連射が命中するのと同時、複数のガジェットが機能を停止する。
照準こそ、ティアナ自身の技術だが……集弾性能が、これまで所有してきた銃器とは比べ物にならない。誤差を修正する必要すら無い。
「でも、いける……！　コイツとなら、もっと……!!」
セリカからの情報に一瞬で目を通す。
物陰。通常の射撃では届かない位置に潜んだガジェットが、先行す

るスバルを狙っている。
「丸見えよっこの鉄クズ！」
クロスミラージュが、意思に反応して術式をロードする。誘導弾の術式だ。
――バシュウッ!!
発射された魔力弾は、鋭い弧を描き、物影のガジェットを見事に撃ち抜いた。
多重弾殻の誘導弾。ティアナが、構想こそ持っていたものの、実現を先送りにしていた戦術だ。ティアナの卓越した技術を、クロスミラージュが見事に支えていた。
まさに、人機一体の働きだった。
◆　◆　◆　◆
――敵性戦力ノ上昇ヲ確認
――子機２３ヨリ母機４へ。敵性戦力・一定らいんヲ突破。対象ヲ『特筆人財』トシテ登録スル。登録なんばー、１～４ト仮称スル
――母機４了解。引キ続キ、特筆人財ノすぺっくヲ計測サレタシ
――子機２８ヨリ子機６４、了解。
――子機２８ヨリ子機３６、４４、４８、５６、６２へ。敵性戦力ノ分断ヲ実行スル。後続ノ特筆戦力３、４ヲ、車外へ排出スル。当機ヲ含ム６機ニテ、連結合体ヲ実行。
――了解
◆　◆　◆　◆
――ザザザザッ……！　と、ガジェットたちの動きが、明らかに変わった。
――ズドドドドッ!!
突如、車両の天井が崩落し、そこから複数のガジェットが進入してきた。
「!?　おっと！」
背後へステップし、キャロの傍へ。
――ガギンッ、ガギギギギンッ!!
……ガジェット群が、互いの触手をアタッチメントのように接続す

る。
子機たちが頭部に、胴体に、右腕に、左腕に、股関節に、右脚に、左脚に……擬似的な人型ロボットへと、合体を果たした。
――ゴウンッ……!!
束ねられた触手の巨腕が、エリオへと迫る。
「ハッ……だったら、何だよッ!!」
そんな大振りの攻撃など、当たるはずも無い。
回避を……と、行動を開始したところで、不意にミスに気付いた。
自分なら、余裕で回避できる。回避して、一撃を叩き込むことが出来るだろう。
だが、自身の背後には……
「……!! しまっ……!?」
動き始めていた身体を急制動。だがそれは、あってはならない、身体の硬直となり……
――バゴォンッ!!
ストラーダを眼前に構えての防御諸共、エリオの小柄な体躯は、吹き飛ばされてしまった。
「ぐあああああああっ……!!」
がりがりと、車内の内装を身体で削りながら滑走する。
そして、その抵抗が不意に消え……
「う……おぁあああああああああああっ!?」
装甲の穴から、車外へ放り出された。
「!? エリオくんっ!! ……きゃあっ!!」
気をとられたキャロも、フリード諸共、弾き飛ばされる。
一瞬の油断が、命取りだった。
順調だった作戦は、ここにきて一気に、チームの分断という結果を招いてしまった。
「!? ティアッ!!」
「! くそ! セリカ、チビたちは!?」
『二人とも、車外へ投げ出されたようですが、無事です! ダメージ軽微! 屋根上に張り付いています!! 作戦続行は十分に可能! お

二人は、制御系へ向かってください！』
「……!!　行こう、ティア！」
「わかってるわよ！」
　セリカの判断を信じる。折角、ここまで勢いを殺さずに突破してきたのだ。足を止めてしまっては、前方に敵が密集してしまい、突破が困難になってしまう。
「エリオと、キャロなら……大丈夫！」
　小さくても、立派なチームメイトなのだ。必ず追いついてくることを信じ……前へ進むしかない。
◆▪◆　◆　◆
「ぐっ……畜生……!!」
　エリオは、ストラーダを足元へ突き刺し、吹き付ける突風への支えとしていた。
　目の前には、連結合体したガジェットロボ。そして、背後には……
「……フリード！　キャロをしっかり守れよ!!」
「きゅっ!!」
　……衝撃で一時的に失神したキャロ。ケリュケイオンが復帰のため、電気刺激を送ってはいるものの、覚醒はまだ掛かりそうだ。
「……」
　今回の戦場は、不利な点がいくつかあった。
　まずは、エリオの機動力を活かしづらい閉所であったこと。
　そしてもう一つは……
「電撃は……使えねぇな」
　……精密機器の塊である列車で、不用意に電撃を使用すれば、回路がショートし、下手をすればこのまま脱線してしまう危険があるということだ。
　本来、エリオの魔力変換資質『電気』は、機械であるガジェットには非常に有効な攻撃手段だった。それこそ、範囲攻撃を行えば、一帯のガジェットを纏めて機能不全に追いやることが出来るほどの。スバルたちが複数名で挑むような試験を単身で突破できたのも、この資質によるものが大きい。それが、封じられた。

「……ストラーダ、腕の見せ所だぜ！」
『了解である』
この不安定な足場で、突風に晒されながら……なおかつ背後のキャロを守りながら、白兵戦で敵の巨大戦力を打倒しなければならない。
ちらっ、と背後に、目だけを配る。
「……まだ、何も言ってないもんな」
たとえ、不利だと分かっていても。
――男には、やらねばならない時があるのだ。
◆▪◆　◆　◆
――キャロ・ル・ルシエ。
竜召喚の力を伝える、少数部族出身の少女。
魔力量こそ十人並みながら、竜種と、深く心を通わすことの出来る資質を持ち、その資質を見込まれ、早くに親元から離され、族長を含む達人に、徹底的な英才教育を施されてきた。
指導は実を結び、若干６歳にして、白銀の飛竜を己が魔力で孵す快挙を挙げる。
部族は手放しに彼女を賞賛し……その、致命的な間違いに、気付けてはいなかった。
竜召喚の力こそが誇り。竜種の加護こそ誉れ。
そんな、閉鎖的で、歪んだ価値観に囚われた部族の中……親の愛を満足に受けずに育ったキャロは、感情をうまく発達させられず、また、それを表現する能力を、培えずにいた。
唯一の家族と呼べるのは、フリードリヒと名づけた竜のみ。
だがキャロはまだ、心のどこかで、信じていた。両親は、今も変わらず、自分を案じてくれているのだと。思われているのだと。力が認められれば、いつかは、家族で仲良く暮らせるのだと。それはいつしか、孤独と、苛烈な鍛錬を受け入れる上での、拠り所となっていた。
そしてキャロは、苛烈な鍛錬を乗り越え、部族の象徴的存在・黒き火竜に選ばれし巫女となった。
長い部族の歴史の中、開祖以来となる、巫女の誕生。
部族は、盛大に宴を催した。

キャロは上座で、遥かに年長の術士たちから次々に酌を受けながら、目だけで両親の姿を追っていた。
そわそわと待つこと、数十分。
ようやく、両親が眼前にやってきた。自分の両親だ。きっと、褒めてくれるに違いない。そして、もう鍛錬から離れ、親元に帰る日がやっと来たのだと。
――そう、思っていたのに。
「偉大なる巫女様。あなた様が、我が卑賤なる身を母胎と選ばれましたこと、大変な栄誉と賜ります」
――母は言った。『私はおまえの母親ではない』と。
「キャロ様。選ばれしあなた様は、我が凡俗の家名を抜け、開祖の名『ル・ルシエ』を名乗られますよう」
――父は言った。『私はおまえの家族ではない』と。
「……」
その瞬間……ちっぽけな心の支えは、意味を失った。
ぱりん、と、豪奢な杯が滑り落ち、割れる。
――ズズンッ!!
激しい地鳴りが、空間を揺さぶった。
「なっ……なんだ!?」
狼狽する族長。若い衆が、外へ飛び出し……慌てて、駆け戻ってきた。
「ぞ、族長！　お山が！　真っ赤に燃えております!!」
「何っ!?」
……集落の傍に聳え立つ霊山。死火山であるはずのその山が、激しい脈動と共に、赤々と燃えていた。
「馬鹿な……!?　……はっ!?」
族長が、その原因に思い至り……顔を向ける。
……キャロは、泣いていた。瞬き一つせず、ただ虚空を見据え、泣いていた。
彼らは、最後の最後まで……キャロのことを、少しも理解してはいなかった。

「……きえちゃえ」

……裁きの時。

――――この日。少数部族は集落を火砕流に飲み込まれ、壊滅した。

各々の飛竜で避難した術士たちは、散り散りとなり、足取りさえ掴めない。

管理局の捜査部隊が、現地入りした際、廃墟に佇む一人の少女を保護した。

「――キャロ・ル・ルシエ」

……彼女は、望まれたとおり、そう名乗った。

保護された先の部隊でも、扱い自体はそう変わるものではなかった。

力への畏怖。恐怖。

キャロと、全長5メートルを超えるほどに成長したフリードへ向けられるのは、大体そんな感情ばかりだった。

鬱屈した感情は、またしても溜まりだし……頂点に達するのに、さして時間は必要としなかった。

――炎上する隊舎。逃げ惑う局員。武装局員たちも、荒れ狂うフリードに蹴散らされ、止める者は既にない。

あの日の再現……だが、それも途中まで。

本局から派遣されてきた執務官。

彼女は、フリードの竜魂を封印し、ヴォルテールを止め……キャロを救ってくれた。

『居場所をあげる』という、約束と共に。

約束は果たされ……キャロは、初めて、居場所を得ることが出来た。

だから、今度は自分が、守ろうと思った。

――――自分の居場所を、最後まで守ろうと思った。

「……あ、」

キャロは、回想から引き戻される。頬に感じるのは、冷たい金属の感触。

「――エリオくん、」

『おはようございます』

両手のケリュケイオンが、応答した。

ぶんぶんと頭を振り、眠気を振り払う。目の前では……

「エリオくんっ」

「おー……やっと起きやがったな……」

既に、見える範囲だけでも複数の裂傷を負い、少なくない出血をしている。

「フリードにも礼いっとけよー……」

ふらふらと、足元がふらつき……ひざを突く。

「……わり、限界……」

――ブォンッ!!

機械の敵は、その隙を見逃さない。

その金属の装甲にもまた、激しい戦闘痕が刻まれている。だが、痛みを感じないガジェットは、止まらない。

――ドシンッ!!

伸張した居腕は、エリオをガードごと吹き飛ばした。

「……!!」

顔をゆがめ、ストラーダを支える。だが、足元の支えを失ったエリオの身体は、容易く突風にさらわれ……

――車外へと、放り出されてしまった。

「エリオくん、」

キャロは躊躇する。目の前には、大口を開ける暗闇。

だが……躊躇は、一瞬だった。

「エリオくんっ!!」

身を投じることに、恐怖は無かった。

危機に瀕しているのは、初めての友達で。彼を失うことのほうが、何よりも恐怖で。
そして……自分には。
「フリード――――やるよ！」
「きゅあああああッ!!」
――――彼を救える力が、その手にあるのだから。

◆・◆　◆　◆

――キィイイイインッ……！
現場へと向かう空路を往く物体があった。
航空機にしては、極めて小型で、無人機であるらしかった。
飛行型ガジェット。新型である。
マンタのようにフォーメーションを組み、列車の『積荷』を回収しようと向かっている最中だった。最新のステルス技術を盛り込まれたボディは、既存のエリアサーチを容易に潜り抜け……
「でも、みつかっちゃうんだなぁ、これが」
行く手を、フェイトに阻まれる。
巡航速度とほぼ同等の速度で、ガジェット群に併走する。
――ギュンッ!!
飛行型ガジェットは、速度を上げた。交戦ではなく、迅速に『積荷』を回収すべく、振り切ることにしたらしい。
――ザンッ!!　ガゴンッ!!
……二機が、瞬時に撃墜される。
「みんなに経験つませるためにも、手出しはさいていげん……って、ヤガミがいってたから、あんまり助けてあげられないけど……」
目線を、列車の方へ……そこから落ちるエリオに、肝を冷やしたが……キャロが後を追ったことで、安心した。
「うんっ、だいじょうぶだ！　あのふたりなら、もんだいナーシ！　空の敵だけは、ボクがキッチリ片付けておこうっと！」
――ガズンッ!!　ガキョッ!!
飛行型ガジェットなど、追いつくことも、反撃することも出来ない

速度で、六課最速は空を駆る。
「がんばれキャロ！　いまのキミなら……フリードの、本当の力を使いこなせる！」

◆・◆　◆　◆

「『蒼穹を走る白き閃光・我が翼となり天を駆けよ』」
――シュイイインッ!!
ケリュケイオンが光り輝き……薄桃色の魔力光が、闇を照らし出す。
キャロは、エリオを優しく抱きとめる。同時、魔力光がエリオを包み込む。
「う……キャロ……？」
「エリオくん、だいじょうぶだよ」
目を覚ましたエリオに、キャロは……無表情のうちに決意を固め、さらにケリュケイオンの回転数を上げる。
（いつも、だれかにまもってもらってた）
フリード、ヴォルテール、フェイト……エリオ。
彼らは、何の見返りを求めることもせず、ただ自分を守ってくれていた。
未熟な操術に、何度フリードを暴走させたか。やりたくもない破壊に、ヴォルテールを駆り出したか。子供じみた癇癪に、何度フェイトを困らせたか。……何度、エリオに迷惑を掛けたか。
（でも……もう、ちがうんだ）
もう、守られるだけの子供ではない。
（じぶんの居場所は、もう、じぶんでまもれるんだ！）
力の使い方は、厳しくも面倒見のいい教官が教えてくれた。
力の使い所は、少し不良だけど当てになる先輩が教えてくれた。
魔方陣が、より一層、力強く輝き……中央に座するフリードが、光の繭に包まれる。
「勘違いすんなよ、キャロ」
エリオが、キャロの額をつついた。

「迷惑だなんて、全然思ってねーぞ」
ぶっきらぼうに……ずっと言いそびれていたことを、伝えた。
キャロは……
「――しってた」
朗らかな笑みで、そう応えるのだった。

――竜魂召喚。

巨大な双翼が、繭を突き破る。
『グォアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!』
翼長１０メートルの、白銀色の飛竜。
それが……フリードの、真の姿だった。
「いくよっ、フリード！」
『グオオッ!!』
その背に、二人を乗せ、列車を追う。
ケリュケイオンによる、魔力の整流化の効果もあるだろう。だが、キャロは、ほぼ自力での完全制御を成し遂げていた。
力強い羽ばたきが、巨体を物ともせず加速させる。
そして、暗闇を抜けた先――
「追いついたっ!!」
車両の灯火が、見えてきた。
上部には、先ほどの合体ガジェットと、多数の雑魚ガジェット。
「キャロ。あの雑魚どもは先に片付けろ。多分、ロボ公の予備パーツになる」
「わかった。……フリード」
『グルルルル……！』
口内へ、莫大な……幼体とは比べるべくも無い、莫大な熱量が蓄積されていく。
背に乗ったエリオにさえ、じりじりとした熱波が届くほどに。
「――ブラストレイ！」
――……ッズドンッ!!

炎ではなく、もはや、熱線。ヴォルテールの極大火焔には及ばないが……その一端程度には、匹敵するだろう。
――バジュウウウッ!!!
器用に屋根の上だけを薙ぎ払い……直撃を受けた雑魚ガジェットたちは、爆散する間も無く、蒸発した。
――ギシッ……ギシシッ……!!
……同じく直撃を受けたはずの合体ガジェットは、外装こそ焼け焦げてはいるものの、動作している。
「我が騎士に、鋼の加護を」
『Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ　Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ　＆　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｐｏｗｅｒ　!!』
左右それぞれの手から、個別の強化魔法を発動。
滾る力を、ストラーダにこめる。
「おぉっしゃ！　ストラーダ！　片付けるぞっ！」
『了解である』
ストラーダの噴射口から、魔力の余波が吐き出される。そして……
『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ　！』
――ゴヒュッ!!
弾丸のような速度で、目標へと突き進む！
「うおォりゃあああああああああああああっ!!」
――ガゴォオオオンッ!!
ストラーダの切っ先は、合体ガジェットの正中線を貫いた！
「オおおおおおおっ!!」
――グギギギギッ……ギギッ!!
巨腕が、最後の足掻きと蠢く。だが、エリオは不敵に笑い……突き刺したストラーダに、更なる力を込める！
「紫電ッ――一閃ッッ!!」
――――ズバァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

◆・◆　◆　◆

「――!!　ティア！」

スバルが、喜色を浮かべ、相棒の名を呼ぶ。

「うん、分かってる！　……やるじゃない、あのチビ達!!」

「負けてられないねっ!!」

目の前には、球体型の、大型ガジェットが鎮座していた。

――ガシャンッ!!

そのボディには、長方形の板のようなものが、マニピュレーターを介して接続されていた。防御が装甲任せだったガジェットへの、敵なりの対策だろう。

しかも……

――キュドドドドドッ!!

ガトリング砲のような連射に、堪らず物陰へ引っ込んだ。

「砲門が増えてる！」

「……」

ティアナが、様子見で魔力弾を連射してみる。

――ガキン、ガキンッ……バチンッ!!

「クロスミラージュ。敵の反応速度を計算して」

『お安い御用さ』

敵の盾は、どうやらオートで反応するらしい。

厄介といえば、厄介だが……

「――どこに撃っても、勝手に盾がぶつかってきてくれるなんて最ッ高ね！」

『全くだぜ』

「スバル、いくわよ！　フォーメーションB！」

「了解!!」

射撃援護からの、近接攻撃！

「クロスファイヤー……!!」

同時操作可能な上限いっぱいの魔力スフィアを展開し、チャージする。その、すべてが、多重弾殻弾。高性能機の補助を受けているとは

いえ、さすがに技量のキャパシティを超えそうな数だ。だが……
（――――高町教官のシゴキに比べりゃ、なんぼのもんじゃー!!）
鬼のシゴキは、確実に、ティアナを上達させていた。
「シューーーート!!」
――――ズドドドドドドドドドドンッッ!!!
盾が生き物のように動作し、弾を片っ端から防御して行く。
「はぁあああああああああっ!!」
連射に次ぐ連射。ティアナとガジェットとの、削りあいに結果は……
「――……ッッく!!」
――ガシュウウンッ……
膝を突くティアナ。そして……全ての盾を除去された、大型ガジェット！
「マッハキャリバーーー!!!!」
『Ｇｏ!!』
機を逃さず、スバルが突貫!!
「うォおおおおおおおっ!!」
――ドガガガガガガッ!!
大型ガジェットによる、光弾の連射を、複雑な軌道で回避しきり……間合いの中へ！
「一撃、必倒ォオオオオオオオオオオオオ!!」
リボルバーナックルが、カートリッジ４発全てをロードし、唸りを上げる！
――ズゴォンッッッ!!!!
盛大に火花を上げながら、装甲を大きく陥没させる大型ガジェット。
内部へは、届いていなかったか……――――否。
――勝負は既に、決していた。
『……』
――――ズズゥンッ……!!

機能を停止し、崩れ落ちる大型ガジェット。
対象に触れるか、内部に拳を突き入れるかでしか有効に働かなかった振動波。
それを、マッハキャリバーがベクトルを微調整し、『対象の内部』で炸裂させたのだ。
内部を滅茶苦茶にかき回されれば、いかに堅牢な装甲があったところで、無意味。
『成った……！　奥義・振動破砕拳！』
「……ってぇ、それ、私の攻撃だからね!?」
ノリノリでキメるマッハキャリバーに、スバルが突っ込んだ。
「はーぁ……バカやってんじゃないわよ。――セリカ、ガジェット撃破！　あとは雑魚がちょろちょろしてるだけよ！」
『了解ですわ！』
――セリカの指示通りに、列車の操縦席を奪還し、レバーを操作し、安全に減速させる。

後続車両では、残存ガジェットの掃討が行われている。
「ふーぅ……ん？」
ふと、スバルが大型ガジェットの残骸に目を向けると……割れた装甲の亀裂から、部品とは違う、何らかのケースが、顔を覗かせていた。八角形をしていて……ずいぶんと、厳重だ。
「よいしょっ、と」
――バキバキ……
亀裂を広げ、そのケースを取り出す。
「ロックが掛かってるみたい」
「ふーん……？　クロスミラージュ、開けられる？」
『まぁ、開けられるだろうが――』
どこか、渋るような様子を見せる。が、結局はケースを開封した。
◆■◆　◆　◆
「――レリック見つけた」
◆　◆　◆　◆

「？　……何よ、それ」
「さぁ……？」
開封したケースの中身は……たった一つの、紅い結晶体だった。
サイズは、掌に収まるほど。
『おいおい……何が飛び出すかと思ったら』
『ふむ……超高密度の、魔力結晶のようだ』
デバイスたちは、各々の見解を述べる。
「げっ……」
それは、爆弾と同義だ。
慌てて取り落としそうになるスバルから、危なげなくキャッチするティアナ。
「大丈夫でしょ。こんだけ、魔力の気配も感じないくらい厳重に封印されてるんだから、そう簡単には……」

――――――――ドガンッ!!
『この馬鹿どもッ!!　今すぐ離れなさいッ!!』
突然飛び込んできたなのはの怒声に、ケースを取り落とした。
「「　!?　」」
なのはは既に、腰の刀を抜刀しており……
――ザンッ!!
『……!!』
スバルたちの背後。闇に紛れるようにして忍び寄っていた存在に、痛烈な一太刀を浴びせた。
「なっ……!?」
『フっ!!』
二の太刀。だが、敵はケースを拾い上げながら、その間合いから大きく飛びのいた。
卓越した体術を見せた敵が、なのはが飛び込んできた亀裂より差し込んだ月明かりに照らされる。
――全身を漆黒の外殻で覆い……紫色のマフラーをたなびかせる、長身の男性だ。

なのはに斬りつけられたと思しき左腕からは……ヒトではありえない、紫色の体液が滴っていた。
『ヒトではありません。別種の生物です。構造的には、昆虫に近いです』
『……どこの虫かは知りませんが。そちらのレリックを、どうするつもりですか』
だが……怪人は、何も答えず……何らかのアクションを起こそうとした。
――ヒュカカンッ!!
……その足元に、黒く塗られた、長い釘のような短剣が突き刺さる。
『……、！』
その四肢を絡め取る、何らかの繊維が、月の光を浴びてきらきらと輝く。
逃亡は不可か……と思いきや。
――シュイイインッ……！
その足元に、紫紺の魔方陣が浮かび上がる。
『転送魔法です！』
『させませんっ！』
なのはが、繊維を引き絞る。
『……!!』
怪人は……痛覚が存在しないのか、繊維に拘束された左腕を、躊躇無く肘の刃で切断した。
――ブゥウウンッ!!
それどころか……切断した左腕が、独立してなのはへ飛んできた！
『チッ……本当、昆虫ですね！』
――ズカンッ!!
ベルトから抜き放ったナイフで、腕を壁に縫いとめる。そのまま、怪人を追撃しようとするものの……なのはが放った短剣が突き刺さるより、ほんのコンマ一秒の差で、怪人はいずこかへ転送されていった。

『……恐るべき転送速度です』
レリックと呼ばれた魔力結晶の『ケース』を持ち去った相手に、驚嘆するレイジングハート。
『でも……得るものもあった』
なのはは、いまだピクピクと蠢く怪人の左腕を、ナイフごと、ひょいと持ち上げる。
『これと同系統の生物のいる世界と……それを使役する術者がいないかを調べさせて。魔力光と術式は、さっきのを記録できたよね』
『了解』
血払いをして、納刀し……スバルとティアナに、向き合った。
『さて……』
びくっ、と後ずさるスバルとティアナ。
『作戦は成功です。お疲れ様でした』
だが、肩透かしだった。
『じきに、回収されるでしょう。それまで、フォワードチームは現場で待機。以上です』
「え……あの、」
『尚、只今の件については、一切の口外を禁じます。これは命令です』
取り付く島も無く、ぴしゃりと言い切る。
「スバル・ナカジマ、了解です」
「ティアナ・ランスター、了解です」
『……よろしい』
そしてティアナは、つかつかと歩き去っていく教官を見送り……
「……魔力、結晶。これが、あれば……」
――――後ろ手に隠し持っていたレリック本体を、そっと、ポケットに入れた。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第六話

「……どうしよう」
電気も点けず、自室で悶々と悩むティアナ。
その悩みの種は……そう、言わずもがな。
「何でパクっちゃったのよ、こんなもん……」
指で摘める程の、赤い魔力結晶である。一片の魔力も漏らさぬほど、厳重な封印が施されているおかげで、危険はほぼ、無いに等しいが……
「厳重注意……いや、営巣入り……いやいや、業務上横領でフツーにムショ行き……」
『隊長どのに素直に詫びて、返上してきたらどうだ？』
傍らのクロスミラージュが、適切なアドバイスをした。
「そう……よね、やっぱり。初犯だし、今ならまだ……」
だが、ばたばたばた……と、聞きなれた足音が接近するのを感じ、反射的にポケットに突っ込んでしまう。
「ティア、ご飯食べに行こー……って何でこんな真っ暗なの？」
ぱちっ、と照明が点く。
「……なんでもない。ちょっと、居眠りしてただけ」
訓練後に、疲れ切って一眠りしていたことも事実だ。
「そっかー……高町教官の訓練、キッツいもんねー」
その割には、ぴんぴんしているように見えるスバル。
「……馬鹿げた体力」
「ん？　なんか言った？」
「なんでもないわよ」
そしてまた、言い出すタイミングを逸することとなった。
食堂では……席をキープしていたセリカと、最近はセットで見かけることの多い、エリオとキャロが待っていた。
今夜の日替わりメニューは、牛肉のビール煮込みと、コールスローサラダのセットである。主食である白米は山盛りだが、日々の激務に

追われる新人たちは、それさえもお代わりをして平らげていく。
「うめーな、相変わらず……」
「おいしいね」
「これでいて、体重はむしろ減っているのですから、恐ろしいですわね……」
「次は筋肉が増えて、重くなっていくんじゃない？」
「やーめーてー……」
一体、自分たちはどれだけのカロリーを消費しているというのだろうか。
そして、腹も落ち着けば、話は自然と、本日の訓練のことへと移っていった。
「最近は、ガジェット相手も減ってきたよね」
あれだけ、これでもかと投入されていた訓練用ガジェットは、ぱたりと使用されなくなっていた。そして、ガジェットに代わる、相手とは……
「……高町教官、ありゃバケモンだ」
なのはが、自身で新人たちの模擬戦の相手をしていることが、多くなってきていた。
「もののけのたぐいだよ」
「ありえませんわ」
「あの人の周りだけ、物理法則が乱れてる気がする」
ここまで言わせる、なのはの訓練とは、一体……
――ではここで、本日の模擬戦を振り返るとしよう。

◆・◆　◆　◆

完全武装でなのはと相対する、フォワードチームたち。
『好きにかかってきなさい』
安全のために刃を潰された、大して切れもしない、訓練用の駄剣一本。抜き身のそれだけを、右手にだらりと提げ、フォワードチームを眺める。構えてさえいない。

「……！」
――ドドドドドンッ!!
キャロが、目視による合図のみで、ティアナと同時に射撃魔法を放った。直射だけではない。ティアナによる曲射誘導弾も織り交ぜた波状攻撃だ。
飛び退るか、迎撃するか……逃げ道は、後方に限られる。
『……』
す……と、なのはが一歩、後ずさる。
「だあああああっ!!」
「うぉりゃああっ!!」
それを合図に、左右から襲い掛かるエリオとスバル。
なのはの得物は剣一本。しかも、訓練に際して、魔法の種類、使用回数、消費魔力量に、限度を設けている。回避か、防御か、迎撃。どの行動を取ろうとも、スバルとエリオの攻撃力ならば、魔力の上限いっぱいにまで防御魔法を展開しても、貫通してダメージを与えられるはず。
……が。
『作戦のつもりですか?』
なのはは、駄剣を構え……
――ヒュコンッ!!
……一言で説明するならば、そう。
剣の腹で魔力弾を『滑らせ』、エリオへと投げつけた。
「んなッ!?」
――ギャリンッ!!
続いて、またしても意味不明な現象が起きた。
なのはへ向かっていたはずのストラーダが、スバルの鼻っ面へといつの間にか突き出されていたのだ。
――めごしゃっ
「あぎゃっ!?」
……訓練用に、先端を柔らかい皮膜で防護しているとはいえ、直撃すれば、痛いでは済まない。

「ノぉおおお……！」
顔を覆ってのた打ち回るスバルだった。
――ドンッ!!
その隙を狙った……と思しきティアナの射撃が、なのはの後頭部を襲う。
撃ったのは拡散弾。弾けば、至近距離で炸裂し、回避する素振りを見せれば、その場で遠隔起爆する。それを、別方向からの誘導も交えて、複数発。
『……悪くない選択です』
ここで、なのはは初めて防御魔法を展開した。全身を覆うフィールドタイプだ。
――ズパパパパパパパパンッ!!
炸裂した魔力弾が、そのフィールドの表面を雨粒のように叩く。
細かく砕けた魔力弾は、更に細かく、霧のように一帯を包み、視界を阻む。
――ブンッ……
フィールドが、自動で消滅する。
「……!!」
この中で、唯一フリー（かと思われる）エリオが、奇襲を掛ける。
『悪くはありません』
――ヒュンッ!!
エリオの身体を、なのはの剣が切り裂き……同時に、エリオの姿が、霞のように掻き消えた。
『幻術』
「と、こっちも」
幻術がなのはと接触した地点を座標に、煙幕の外から、キャロの射撃が迫る。
『弾速は合格点ですね』
足運びでその直撃を回避する。
――ドッ!!
またしても、エリオの奇襲。

『今度も幻術……、と、見せかけた本物』
――がぎんッ！
ストラーダと拮抗する。
『動きを一瞬、止め……キャロによる断続的な射撃援護』
「げっ……!?」
ストラーダを小突き回しながら、合間合間にキャロの射撃を撃墜する。
（このまま、押し切れば……!!）
エリオが、更に高速の連続突きを繰り出し、拮抗を破ろうとしていた矢先。
――ひょいっ
……まるで、手荷物でも放るかのような仕草で、なのはが駄剣を宙に放った。そして、ぐっと腰を沈め……
――スパンッ!!
拳が、エリオの顔面に吸い込まれるようにヒットした。
「ごッ……!?」
鼻へのピンポイントな攻撃に、本能的に視界を塞いでしまうエリオ。
「くっ……！」
ぱしっ、と、なのはは先ほど放った駄剣をキャッチする。
だが、なのはがエリオに注視して（いるかのように見える）状況を、見逃す手は無い。
――ギャギャギャギャッッ!!
「うおおおおおおおおおォォッッ!!」
スバルが、マッハキャリバーの車輪を唸らせながら、必殺の一撃を繰り出す。
「だァあああああああああああァッッ!!」
エリオもまた、横凪ぎの一閃を放つ。
『なるほど。最初の陣形に集約しますか』
「たぁあああっ!!」
キャロも、ここで最大弾数を撃ち放つ。

――……ガシィッ!!
だが……まだ一手、届かない。
なのはは、ストラーダを腋で挟み込み、エリオの身体を振り子のようにスイングし、スバルにブチ当てる。キャロの魔力弾も、駄剣で切り捨てて行く。
視界の外からは、ティアナが速射を撃ってくる。が、軌道は単純で直線的だ。なのはは、剣先を砲口に見立て、射撃魔法を一個、そのティアナへ発射する。
『ふむ。やはり残像』
そして……
――――シュパァンッ!!
全く埒外の方角から、精密に側頭部を狙撃してきた攻撃を、防御魔法で防ぐ。
『……』
再び、剣先からの射撃を射る。狙撃してきたのは、おそらく、始めからあの場所に潜んでいたティアナだろうという予測を以って。だが。
――プシュッ……
『おや……?』
またしても、幻術。そこで、思い至る。先ほど射抜いた残像の一体……消えるタイミングが、僅かに『遅かった』のではないか、と。
――パァァァァァァァァンッ!!
……乾いた破裂音が、訓練場に響く。
「……!」
……幻術を影に、ほぼ重なるようにして隠れていたティアナが、姿を現した。
これだけの連携を駆使した。本気で、手加減ナシで挑んだ。果たして、その結果は。
『たいへん結構。合格です』
……模擬戦において、初めて、なのはに『両腕』を使わせるという大変結構な偉業を残すに至るのだった。

◆・◆　◆　◆

「……魔力、オレの半分も使ってねーよ」
「いたいのいたいの、とんでけー」
「あーもう！　それやめろっつってんだろ！」
　青タンをキャロに治癒してもらいながら、エリオ。
「攻撃も、わざわざ分かりやすく、ギリギリ私にも見えるくらいの速度だった……」
　直接、至近距離で相手をした二人は、どんよりと落ち込んでいた。
「ま……まぁまぁ、お二人とも……始めのように、『お粗末極まります。不合格です』とか何とか言われなくなっただけ、マシではありませんか」
　そう。一応……『合格』は、貰えているのだ。
「「5回に2回くらいの割合でね……」」
「あ。でもさ、でもさ！　今度、最初の昇級試験を、受けさせて貰えるんだよ！」
　そう。本日の成果を以って、受験資格を得られたのだ。
「たぶん、試験ってことは……普段よりハードル高いんだろうな……」
　エリオは牛肉をフォークでブッ刺し、口に運ぶ。
「あーもう、どーすっかなー……何が足りてねーんだ？　速度か？　威力か？」
「んー……威力自体は、訓練の中では、私たちが上だと思う。高町教官、抑えてくれてるし」
「魔力弾のはやさも、おなじくらい。フリードといっしょなら、数は上」
　そう。いくら訓練で、制限を目いっぱいに掛けているとはいえ、一応は、拮抗しているのだ。
「あとは……総合的な、技能でしょうか？」
　結局、答えは出ず……地道に基礎訓練と、反復練習と、実戦訓練を続けていくしかないのだ。
「……」

もそもそと、食事開始時から、無言のティアナ。フォワードチームの、半ミーティング的な会話は殆ど断片的にしか耳に入っておらず、ただ頭の中で考えを巡らせていた。
（……足りないものなんて、決まってるじゃない）
……しかも、かなりネガティブな思考だ。
（私の、威力不足の弾丸と、持続力不足の幻術よ）
苛立ちを悟られないよう、口にメシを突っ込む。
一応、相方のスバルは……人間離れした体力。それに、機人化という奥の手がある。エリオには、稀な魔力変換資質と、優れた武器戦闘の才能。キャロに至っては、竜という反則まで保持している。
対して、自分にあるのは……クロスミラージュ頼りの射撃魔法と、中途半端な幻術だけ。どれも、以前の実戦においても、日々の訓練においても、決定打となったことは絶無だ。
（戦術やテクニックなんて、小手先じゃない。結局、最後にモノを言うのは……）
ごくん、とほぼ丸呑みにして、ポツリと一言。
「……魔力量なのよ」
かたん……と、フォークを盆に置く。
「ちょっと先、戻ってる……」
「ティア……？」
怪訝そうな顔で見送る一同。
ティアナは一人、自室へと戻っていった。
◆▪◆　◆　◆
魔窟……改め、中庭の別棟に、なのはの姿があった。
『……、』
まじまじと、自身の左手を手袋越しに見やっては、にぎにぎと動かしている。
相変わらずの無表情……なのだが、その足取りは、どこか……
『嬉しそうですね、マスター』
――うきうきと、弾んでいるように見えた
『――!!　ソんなこと、』

茶化すようなレイジングハートの指摘に、なのはは声を裏返して否定した。人口声帯が音を拾いきれず、キン、とハウリングを起こす。
『……無いよ』
むすっ、と無言になる。
レイジングハートは反面、長文を喋る。
『全員まだまだですね。スバルは、マッハキャリバーと息を合わせてきているとはいえ、まだまだ猪突猛進なところがあります。エリオも、数秒ならマスターと拮抗できる程度に上達していますが大味で、変換資質を混戦の中で運用できているとは言えません。キャロも、援護以外に射撃を覚えていますが、攻撃がそれ一辺倒で、陣形の切り替えへの対応が一拍遅れがち』
正確な分析。まだ、求められるレベルには、誰も達してはいない。
『ですが……』
だが、一人。
『……ティアナは、凄いね』
観念したように、なのはが口を開いた。
『スバルの影響で、ちょっと突撃思考だけど…場の流れを読む能力は、もう私以上だ』
しかも、かなり珍しいことに、素直な賞賛だった。
『射撃も、バリエーションが増えてきてるし……絡め手も覚えてきてる。幻術の精度にバラつきを与えて、撹乱に気を回すだけの冷静さもある』
ティアナが、『小手先』と自虐していたものを、なのはは認めていたのだ。
『……それと、気付いてるよね？』
『ええ。威力や弾速こそ、僅かにマスターに及ばないものの、射撃の精度はそれ並。
……いえ、行動中の射撃であの正確さです。いざ狙撃をやらせてみたら、どうなるか』
『……まさか、こんな早い段階で、左手を使うとは思わなかった』
しばらくは、片手一本で足りるだろうというなのはの予測を、こう

も上回ってきた。
『あれだけの人材を、魔力量が不足しているというだけで蹴ったのですから、空隊も士官学校も、いよいよ末期かもしれませんね』
『魔力量、ねぇ……』
何か、思うところがあるようだ。
『……ま、私が言っても嫌味にしかならないだろうね』
自分で気付かなくちゃ、と付け足し、目的の部屋へと向かう。
『……』
『やはり嬉しそうですね、マスター』
『だから、違うんだってば！』
わたわたと必死に取り繕いながら、なのはは歩調を速める。
『それこそ、フォワードチームの指導に、ヴィータを迎えてみては？特に、スバルなどには劇的な効果があるかと』
『え……や、やだよ……』
『……教導隊に行く行かないの話で、喧嘩別れになったことですか？』
『だ、だって……ヴィータなら、一緒に来てくれると思ってたのに……』
『凶鳥部隊が解散になって、道を模索した結果でしょう』
『……』
「お、なのは」
「おや、偶然ですね」
「こんにちは、なのはさん」
すると、前方からはやてと、はやての車椅子を押すフィアット、傍に控えるリインフォースがやってきた。
『皆も、同じ用事だった？』
「ああ。……相変わらず、よく寝てるよ」
そして、挨拶もそこそこに……
「フォワードチームの教導に、ヴィータを召集したからな」
『……はい？』
実にタイムリーな決定を伝えたのだった。
『え、ちょ……はやてぇ!? 何を勝手なことを!?』

「私の部隊だ。私が勝手をして何が悪い」
ふふん、と、してやったりな笑みを浮かべるはやて。
「わぁ憎たらしい。死んでください部隊長」
「甘いわ」
フィアットが振り下ろしたナイフを、慣れた様子で白羽取り。
「……すまないな。着任は、一週間以内だ」
そのナイフを塵に変えたリンフォースが、申し訳なさそうに頭を下げた。
無茶苦茶な二人のお守りをしている所為か、疲れた様子だった。
「いい加減、ガキみたいな意地張ってないで、仲直りしろ」
『あ、あなたはそう、いつもいつも……はぁ～……わかったよ、もう』
長く嘆息し……諦めたように、頷くのだった。
◆▪◆　◆　◆
翌朝。
――パリンッ！
訓練場の一角に、ティアナの姿があった。
クロスミラージュではなく、訓練校時代から愛用している実銃を手に、オーソドックスな９ｍｍ弾での訓練だ。
――パリンッ！
周囲にランダム形成される標的を、的確に射抜いていく。
無心に励み、やがて……
――パンッ……！
「あ!!」
握力の限界から、拳銃がすっぽ抜けてしまった。
「……ッ!!　くそっ!!」
がしっ、と地面を蹴り、毒づく。
『あんま、カッカするもんじゃないぜ。ここ最近、毎朝じゃねえか。それ以上は、体を壊す。やめとけ』
スコアを計測していたクロスミラージュが、ティアナを窘める。
『実際、たいしたもんじゃねぇか。照準補正も無しに、よく中てるもん

だと感心するぜ』
「こんな豆鉄砲、いくら中てたところで……！」
ホルスターを掴み、地面に投げつける。
「高ランク魔導師のシールドは抜けないのよ」
散らばった薬莢が、コロコロと転がる。
「でも私には、それを突破できるほどの出力の魔力砲は……」
『なぁ、お嬢ちゃんよ』
その激昂を、クロスミラージュが静かに遮った。
「なっ……何よ」
たじろぐティアナに、クロスミラージュは続けた。
『お嬢ちゃんの強みってのは、何だと思う？』
「強み……なんて……」
俯き、ボソボソと喋る。
『そうか。……だが、オレは知ってるぜ。お嬢ちゃんの強みを』
「え……？」
『それはな、』
クロスミラージュが知る、ティアナの強みとは……

――ビーーー

ます。極秘ゆえ、護衛も最少人数のみに絞っていたため、救援要請が入りました」
　質問！　と、部隊の一人が挙手する。
「要人って、誰ッスか？」
「――極秘です。要人についての情報は、分隊長以上の者にのみ伝達せよ、との部隊長のご命令です。ただ、将官クラスであることは、間違いありません」
　辺鄙な場所で、警護を減らしてまで内密に進めようとしている会談だ。おそらくは、今後の管理局の、ひいては次元世界の行く末を左右しかねない内容なのだろう。
「第２７陸士部隊へと救援要請が入りましたが、作戦遂行は困難であると判断し、当部隊が引き受けました」
　今回は、自ら任務を請け負ったらしい。
「現在確認されている敵戦力は、ガジェットによる混成部隊のみ。ただ、出現の際の記録から、召喚術師が指揮を執っているものと思われます」
　ぴくりと反応したのは、キャロだった。
　ぱっ、ぱっ、とディスプレイが切り替わる。
「――キャロ・ル・ルシエ」
　やはり、名指しされたのはキャロだった。
「当部隊において、召喚術に最も長けているのはあなたです。敵の召喚を予知し、ロングアーチにまで情報をリアルタイムで送信してください」
「はい」
　軽く返事をしたキャロを、エリオが肘でつつく。
「おい、おめー……そんなことできんのかよ？」
「たぶん」
　ずりっ、とずっこけた。
「多分って、おい……」
「んー……」
　うまく説明できるよう、しばし考えを咀嚼して、言葉を選ぶ。

「召喚って、なにもないばしょに、いきなりよべるわけじゃないの。あれこれ、うらわざもあるけど……きほんは、座標をえらんで、目印をつけて、とんねるをつくって、よびたいものをくぐらせる」
ざっくりアバウトだが、感覚型のキャロにしては、うまく説明できている。
「めじるしは、そのまんま、術者の魔力の匂いがのこるから、そこをえらべばいい」
『あとは、わたくしが情報を転送すればいいだけです』
ケリュケイオンが付け足し、説明を終えた。
「フォワードチームが前衛を勤め、敵召喚師を発見でき次第、後衛のシグナム中隊が前衛と合流。敵召喚師を捕獲します」
毎度毎度、一番負担が掛かる場所に、フォワードチームを配置してくれる。
「作戦開始は15分後の08：00とします。では、解散」
散っていき、各々装備を整える。
15分後、集合した隊員たちが、整列した。
「今回は、現地に直接ポータルを開く。向こうに着いた途端、敵からの攻撃が飛んでくるものと思え」
ヴァイスが転送装置の設定をしながら、言う。
「うっし……！　おう、そんじゃ……逝って来いや！」
そして、転送が開始され……
――ドガガガガガガガガガガガッ!!!!
直後、攻撃が来た。
「うぉおおおおおおおおおっ!?」
「やっぱ来たぁあああああああ!?」
各々、回避や防御で直撃を避ける。
周囲はまさに、戦場真っ只中だ。
恐らく、護衛の者たちであろう局員たちが、息も絶え絶えにガジェットへの応戦を続けており、ホテルからは火の手が上がっている。
「慌てんじゃねぇ！　こんなもん、シグナム教官の木刀に比べたらス

ポンジみてぇなモンだ!!　おら、配置に着きやがれ!!」
　ガンガンガンッ!!　と、手にした杖で敵の光弾を打ち払いながら、隊員たちに指示を飛ばすのは、なんとコリンだった。
「エリオやキャロが踏ん張ってんだ！　年上の俺らが、ケツ捲くって逃げてちゃ格好つかねぇぞ！　ヤオは先に護衛してたヤツらを後ろに引っ込めろ！　カトルとジンは俺と遊撃に出るぞ！　リンは援護射撃！」
　次々に指示を出し、三人でガジェットの群れに突撃していった。
「……ほう、コリンの奴め」
　敵陣で母機を破壊しながら、シグナムがニヤリと笑う。
　シグナムが見込んでいただけあって、早くも才能の片鱗を覗かせていた。
「なるほど……教官というのも、悪くは無いな！　ヴィータよ！」
　魔剣を振るいながら、笑みを零すのだった。

「だぁっ!!」
　――ガシャアンッ!!
「母機を見つけるまでは、とにかく子機の数を減らすのよ！」
　ヴァリュアブルバレットを駆使し、子機を複数、纏めて射抜くティアナ。
　エリオやスバルも、堅実に敵の数を減らして行くが……
　召喚術の前兆を察知するため、術者の魔力で周囲を塗りつぶしてしまう範囲攻撃……フリードのブレスや、エリオの雷撃などは、今は使用ができない状況だった。
　有効打を封じられている。
　特に、主に電撃でガジェット群に対処していたエリオなどは、調子が崩されている……
　――などということは、一切無かった。
「遮蔽物が無けりゃ、てめぇらはただの動く的だァッ!!」

なのはとの訓練は、エリオの戦闘能力を、確実に向上させていた。
「数が一定数減れば、敵は補充をしてくるはず！　サブの経路……母機を潰せば、敵が召喚術を使用する可能性も高まるわ！」
通常なら……先ほどの護衛たちのように、ガジェットに対応できず、物量で押し切られてしまう。だが……フォワードチームは。機動六課には。その常套手段は、通用しない。
ガジェット群が、ＡＭＦという絶対的優位を無視され、次々に撃破されていく。
「母機、発見！」
子機達が覆い隠すようにしている母機を、発見した。
入隊試験当初は、『荷が重い』とされた母機でさえ、今のスバルたちにとっては、なんとか倒せる程度の敵になっていた。
「!!」
――ゴンッ!!
マニピュレータの変則的な攻撃を避け肉薄したスバルの初撃が、母機の体勢を大きく崩す。続く、エリオの斬撃が、マニピュレータを根元から切断する。
「……!!」
一瞬で狙いを定めたティアナの、バリュアブルバレット。それは、吸い込まれるように、母機の急所……カメラレンズへ着弾する。
――……が。
――ガギンッ!!
弾丸が、弾かれる。
「そんなっ……!?」
……母機が、本来なら広く、薄く展開するＡＭＦを、着弾の瞬間、カメラレンズ周囲に集中して展開し、致命傷を防いだのだ。
本来なら、速やかに敵の反撃の備えるべき場面。
しかし……
「あ、……？」
がくん、と、唐突に膝から力が抜け落ちる。
……オーバーワークが、よりにもよってこんな時に、影響してし

まった。
――バシュウッ!!!
そして、母機の反撃。子機のものより、威力・弾速ともに数段上の光弾が、ティアナを襲う。直撃こそしなかったものの……よりにもよって、利き腕の肩を、焼いた。
「うあああああっ!!!」
激痛に悲鳴を上げ、倒れこんでしまうティアナ。
「ティアぁっ!! ……、はぁあああああああっ!!」
――ズガッシャアアアアアアアアアンッ!!
振動破砕拳により、母機は撃破されたが……ティアナの負傷は、深刻だ。
「く、ぅうううう……!!」
激痛。そして……屈辱と、劣等感。
（何で……なんで、私だけ……ッ!!）
なぜ、倒せない。なぜ、なぜ……浮かんでは消える屈辱の言葉に、ティアナは、正常な思考を失っていた。
うずくまるティアナに、皆が駆け寄る。
「まってて、いま、……っ!?」
「……るさいっ!!」
治癒を掛けようとしたキャロを、ティアナは乱暴に振り払った。
「てぃ……ティア……？」
「今、すべきは……」
呆然とするスバルたちをキッとにらみつけ、無理やり立ち上がる。
「足手まといの介助じゃないでしょうがっ!!」
ずきずきと疼痛を無視し、右手にクロスミラージュを構えなおす。
「おい……!!」
その言葉に、エリオが激しそうになったその時……
「！　くるよ、てき」
キャロが、察知した。
「よりにもよって、こんなときに……」
だがキャロとて、己に課せられた任務を、忘れたわけではない。

敵の術者の痕跡を、探る。
ケリュケイオンが、広域探査の術式を詠唱する。
「？　……おかしい」
キャロが、怪訝そうに首をかしげる。
そうこうしている間に、ガジェットの増援が現れた。
「キャロ、どこからだ⁉」
「……おかしい。いるのに、いない」
不可解なことを呟きつつ、射撃でガジェットを牽制する。
「どーいうこと⁉」
「……めじるしが、あちこちにばらまかれてる。たぶん、どこからでも召喚できるようにするため」
だが……やはりそれは、召喚術士の定石には、反することだ。わざわざ、自らの居場所に繋がる目印を、大量にバラ撒くなど……
「でも、見えない。それが、なんなのかわからない」
ガジェットは既に、最初と同じ程度にまで数を回復してしまった。
「くそっ……とにかく、ロングアーチにデータを送れ。向こうでも、ある程度までなら解析できるはずだ」
「わかった。あと、ティアナのちりょうをする」
「いらない、っつってんでしょうが!!」
尚も意固地な態度を取るティアナ。そして、あろうことか、大火傷を負った手で、再びクロスミラージュを構えようとする。
「バカか、お前！　そんな状態で、マトモに撃てるワケねーだろ！」
「離しなさいよ!!」
エリオが、ティアナを押さえつけるようにして止める。
敵を前にして、この混乱。もはや、チームとしてすら、機能していない。
ロングアーチにて、セリカは真剣に、フォワードチームの撤退を考え始めていた。
だが……はたと、気付く。
――先ほどから、スバルが一言も、喋っていないのだ。
いつもなら、真っ先に、ティアナの心配をしているはずの、スバル

が。
「おい、おめーからも何か……」
「離しなさいよ！　私はやれる！　腕なら、まだ片方が……、」
「――――――ティアナ」
……静かな、染み入るような……低い声。
それが、スバルの口から発せられたこと。そして……愛称の『ティア』ではなく、『ティアナ』と、呼んだことに……ぴたりと、騒音が止んだ。
「スバ、ル……？」
「……作戦が終わるまで……後ろに、下がっていて」
振り向きもしない。
思えば……スバルが、こんなにも冷たく突き放すような声を出すのは、付き合って、初めてだった。
「私は……私は!!」
弁明するティアナを、振り返りもせず……
「ごめん。今のティアナには……背中は、預けられない」
「――!!」
ショックを受け、固まるティアナ。
「――エリオ。警護対象が安全に撤退できるまで、時間を稼ぐよ。キャロは引き続き、解析を。……それでいいね、セリカ？」
『……ええ、かまいませんわ。ティアナさん。一時撤退し、処置を受けなさい。本作戦への復帰は……認めるわけには、いきません』
「……」
ゆらゆらとした足取りで、ホテル側へと移動して行くティアナ。
「……お、おい……いいのかよ……？」
思わず、エリオも心配してしまう程だった。
「ただしいはんだん、だとおもう。あのままのこっててても、もっとひどいけがをしてた」
「でもよ……」

「――おしゃべりは、ここまでにしよう。来るよ」
それを遮り、構えるスバル。
目の前には、膨大な数のガジェットが、今まさに仕掛けてくるところだった。
「――……はぁあああああああああああああああっ!!」
――ズガゴンッ!!
ガジェットを叩く音が……いつもより、重苦しく聞こえた。
◆▪◆　◆　◆
「あ、いたいた。あのときのお姉さん。レリックは返してもらうからね」
◆▪◆　◆　◆
救護班の車両の中、包帯を巻いた肩を抱き、ティアナが蹲っていた。
「……」
膝を抱え、すっかり小さくなってしまっている。
敵に遅れを取ったことは勿論……
――今のティアナには……背中は、預けられない
「……!!」
スバルの言葉が、効いていた。
「何よ……何よ……!!　私だって、好きで怪我したんじゃないのに……!!」
クロスミラージュは、ただ沈黙する。
おそらく、今のティアナには、何を言っても逆効果だと分かっているからだろう。
「どうせ……どうせ私には、アンタたちみたいな、優れた力は無いわよ……そんなこと、私が一番分かってるのよ……!!　なら、少しくらい無理しても、鍛えるしかないじゃない……!!」
焦りを感じていた。スバルが、自分を置いて行ってしまうのではないかと。それほどまでに、スバルの成長は目覚しい。
ごそりと、ポケットをまさぐり……

「やっぱり……使うしか……」
赤い魔力結晶を、取り出した。
……どさりと、車外で、人が倒れる音がした。
「……!?」
『嬢ちゃん！』
『わかってる！』
念話で返し、クロスミラージュを、負傷していないほうの片腕で握る。
『死んじゃあいないが、救護班の連中はやられちまったらしい』
『敵は、ガジェット？』
また、新型のガジェットでも現れたのだろうか。もしそれが、母機や、合体子機に相当する戦力だった場合は……
『……ダメだ。ジャミングされてやがる。通信が届かねえ』
援軍は見込めない。
ロングアーチが、不自然な状況に気付くまで……いや、もっとも。敵が、ティアナや、救護班の信号をも偽装している可能性もある。不用意に、飛び出すことはできない。じわじわと、圧迫感が押し寄せる。
そして、車内に篭城すること五分。
――バコッ!!
おもむろに、車両のドアが引き千切られる。
「このっ！」
――ドンッ!! ドンッ!!
威力に重きを置いた射撃が、襲撃者の腕を弾く。
――バキィンッ！
だが、攻撃は……襲撃者の腕を覆う甲皮に、跳ね返される。
『気を付けろ！ アイツだ！』
アイツ。それは、列車事件の際……スバルとティアナを強襲し、なのはによって退けられた……あの、昆虫のような怪人。
「最悪!!」
どう考えても、自身の手に負える相手ではない。だが……この状況、撤退しようにも、これ以上は下がる余地は無く……また、後衛部

隊の位置に出現したということは、敵は既に、かなり深くにまで食い込んできている。
……片腕のハンデと、彼我の実力差。
「やるわよ」
『……本気か？』
「私たちの任務は、警護対象を避難させること。もう、警護対象のところには、教官たちの誰かが向かっているはずよ。その時間まで、持ちこたえればいい」
すぅ……と、頭を切り替える。
怪人が、ゆらりとした足運びで、接近する。
「見てなさい。……吠え面かかせてやるんだから!!」

◆▪◆　◆　◆

「だぁー……キッツかったー!!」
コリンが、ぐりぐりと肩を回す。
「おう、無事かおめーら!?」
ぐるりと見回し……欠員がいないことに安堵する。
「まぁ、子機だけの部隊で助かったな」
「だね……母機がうじゃうじゃ出てきたら、大変なことになってたよ」
「召喚で敵の増援がくることも無かったし……」
「そういえば、そうだな……読み違えたのかな？」
――あれ、何か変だ。
班員たちがそう感じるのに、時間は掛からなかった。
「全員、点呼を取れ！」
アナログだが、確実な方法。各々、班員たちが確認していくさなか……一つの班だけが、見当たらなかった。
「!!　フォワードたちはどこだ!?」
コリンが叫び、ロングアーチに照会する。
『……』
「さっさと答えろ！」
苛立つコリン。

『――――――くすくすくす……あーあ、気づかれちゃった』
……聞こえてきたのは、甘ったるい声だった。少なくとも、ロングアーチの誰でもない。
「おい……誰だ、てめぇ!?」
『さーぁ、誰でしょうねーぇ？　あはははっ！』
「……！」
ギリリッ、と歯を食いしばる。
「通信には耳を傾けるな!!　第５班と第６班、シグナム教官に口頭で報告しに行け！　オレの第１班、第２班はフォワードチームの捜索に出るぞ！　第３班と第４班は、ここに待機！　あと救護班を呼んで来い！」
今の今まで、フォワードたちが孤立させられていたことに気がつかなかったことに恥じ入りながらも、率先して指示を飛ばすコリン。
「ゼルビス！　クルマ出せ!!」
『がんばってねぇ……あっはっはっはっは!!』
底意地の悪い声と共に……進行方向に、雲霞の如く、ガジェットが湧き出ていた。
◆▪◆　◆　◆
「っ！　おおおっ!!」
スバルは、数機目となる母機の残骸から腕を引き抜く。
「はっ、はっ……！」
だがやはり……戦闘要員を一人欠いた状態では、負担が増加している。
「……」
エリオも、疲労の色を隠せない。
「くっそ……！　何だよ、今日の配置！　俺たちの周りにだけ、敵が湧きすぎじゃないのか!?」
他の部隊も、際限なく湧き出るガジェットたちには、いい加減辟易としてきていた。
「おい、変だぞ。何で、まだ教官たちは対象に接触してねぇんだ!?」
『教官は現在、警護対象を捜索中です。引き続き、敵戦力の排除に当

たってください』
「何を手間取ってやがるんだ……！　んで、向かってる教官ってのはどこのどいつだ!?」
『テスタロッサ教官ですわ』
　……エリオが、ぴたりと手を止めた。
「……なるほどね。ストラーダ、モードオフ」
『御意』
　武装を解除したエリオに、スバルとキャロが、ぎょっとする。
「撤退だ！　ハメられた!!」
　言うが否や、高速移動の術式を詠唱する。
「ちょっ……エリオ!?」
『モンディアルさん!?　どういうつもりですの!?　まだ、撤退命令は出ていませんわ！』
「……あっ、そういうことか」
「だいたいわかった」
　スバルはキャロを抱え、マッハキャリバーで駆け出す。
「下調べが足りなかったみてぇだな。フェイトさんは、機動六課の『教官』じゃねぇ。『臨時特別顧問』だ」
『……』
「それとな……セリカは、俺の事は『エリオさん』って呼ぶんだよ」
　不自然な沈黙が続き……
『――やっぱり、即興じゃあ、うまく合わせられなかったみたいねぇ……』
　甘い童女のような声へと、豹変した。
「セリカなら、ここは戦術的撤退を選ぶ場面だよ。『原因は分からないけど、現状維持のためにとりあえず戦え』なんて指示は出さない」
『あーらあら、手厳しいわぁ。ま、楽しく遊べたから、いいけどぉ……』
　通信を切ろうにも、相手側からロックが掛けられているらしく、ただ聞き続けるしかできない。
「おい、ティアナのやつ、どこ行きやがった!?」
「多分、救護班の車両に向かったと思う！」

戦線の最後尾。おそらく、その行動はデータ通信にかなり依存しているはず。敵に、その通信を掌握されているということは……完全に、孤立しているということだ。
「うしろには、シグナム教官たちがいる」
「まずい。はぐれた私たちを探して前線に出てきてるかも……」
なんとか、引き返させて……救護班、ティアナの救援に向かわせなくては。
「シグナム教官の部隊……コリンか！」
エリオは、ようやく打開策を得たようだ。ズボンのポケットから引っ張り出したのは、数本の筒状の物体。
「なにそれ？」
「どっかの世界で使われてる、煙が出る筒だ」
発炎筒だった。
「でも、そんなの、訓練の項目には……」
「ああ、訓練じゃあな。暇つぶしに忍び込んだ資材倉庫にあったやつをガメだんだよ」
ついでに、遊びがてら色の符丁も決めておいた。
「ちょっ……それ、おもいっきり違反―!?」
「ハッ！　営巣が怖くて、管理局員やれるかっつーの！　連帯責任だオラァ!!」「おらー」
妙なキャロの合いの手と共に、シュボッ！　と威勢よく着火させた発炎筒は、狙い通りにモクモクと緑色の煙を吐き出した。

「ゼルビス、止まれっ!!」
「うぉあっ!?」
やや遠方に緑色の煙が見えた瞬間、コリンは車両のブレーキを、ゼルビスの足ごと踏み込んだ。
――ズキャキャキャキャッ!!
車輪がロックし、リアを浮かせながら急停車する。
「あっぶねーな!!　何だよ、行けっつったのはおめーだろ!!」
ゼルビスの抗議には耳を貸さず、遠方に見える煙を凝視する。

「……緑、次に赤か。よし、このまま反転！　最後列まで後退するぞ！」
「あァ……？」
　不審そうなゼルビスだったが、コリンの妙に確信めいた表情を根拠に、反転することを決めた。
「いや、引き返そうったって、おめー……」
　……前進するだけなら、とにかくクルマでガジェットを跳ね飛ばしながら強引に進むことができた。だが、引き返すとなると……追走してきた大量のガジェットの中を、もう一度、突き進まなければならない。
「ちぃと骨が折れるが、やるっきゃねーだろ！　援護すっから突っ込め！」
「お、おい!?」
　窓から身を乗り出すコリン。大量の照準が、コリンを捉えた。
　コリンへ集中している隙を突き、班員達が車両の後部から攻撃を加えるのだが……やはり、子機といえどＡＭＦを使用するガジェットは厄介な敵だ。班員の中には、バリュアブルバレットを使用できる者はおらず、有効打にはならない。
「ええい、舌噛むんじゃねーぞ！」
　ゼルビスは、大型の車両を器用に操りながら、ガジェットからの攻撃を回避しつつ、うまく敵を分散させ、その隙間を縫うように後列へ向かう。
「どっせーい!!」
　――ゴシャアッ!!
　子機を重量任せに轢き潰し、跳ね飛ばす。
　だが、いくら頑丈に装甲を施されているとはいえ、元は民間車両。そんな乱暴な扱いをしていれば、前面装甲にも限界が来る。既に装甲は大分ひしゃげ、エンジンルームが露出していた。
「なぁゼルビス、映画だとこういう場合ってよぉ！」
「俺のアトラスを特攻して爆発させるとか言いやがったら、この場で振り落とすぞ!!」

「くっそ！　第５班と第６班の連中はどこで道草食ってやがるんだ!?」
　下手をすれば、シグナムへ伝達する前に、ガジェットに囲まれて行き倒れたか。
「デジタルっつっても、いいことばかりじゃないねー……」
「おう、こういうときのための通信手段、考えとこうな。……無事に帰れたら」
「しくしく……もう悪いことしないから、元の部隊に帰りたいよぅ……」
　そして、悪いことは重なるものだった。
　子機の更なる増援。あっという間に、周囲をガジェットに取り囲まれてしまった。
　――ガゴンッ!!
　全方位からの攻撃に、ゼルビスはよく対応した。燃料タンクやエンジンへの着弾を、ハンドル捌きで回避し……その結果、車軸や車輪の足回りを、粉砕されることになろうとも。
「……あとは、シグナム教官に情報が届いているのを祈るっきゃねぇな」
　車両を背に、デバイスを構える班員たち。
　――ギチッ……ガキンッ、ガキンッ!!
　……包囲網の中、数体のガジェットが合体した。
　ズシン……と、圧倒的な重量が、地響きのような足音を鳴らし、接近する。
「う……」
　怖気づく班員。コリンも表面上は平静を装っているものの、心臓は早鐘を鳴らしていた。
『はーい、ゲームオーバー！　ざーんねーんでーしたー！　潰れてぺっちゃんこになっちゃえ、ばーかばーか！』
　通信が、ひどく耳障りだ。
「ふー……相手が、機械じゃなければなぁ……」
　そんな、意味深な言葉を呟き……コリンは、覚悟を決めた。

息を整える。もうこうなれば、あとは、力の限り、時間稼ぎをするしかない。
「……全員、突っ込めぇ!!」
ヤケクソ気味に、駆け出した、次の瞬間。
――――――――バッゴォオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!
……突如として飛来した巨大な鉄球が、合体ガジェットを、一撃の下に粉砕した。
「――――無事か、お前ら?」
そして、呆然と立ち尽くす班員たちの前に降り立ったのは……スバルらと同年代に見える、赤毛の少女だった。
その身に纏うバリアジャケットも、頭髪と同色の赤。そして何より目に付くのは……
――少女の身の丈ほどもあろうかという、巨大な鉄槌。
その特徴的な装いは、新人といえど、聞き覚えがあった。
「きょ……教導隊の、ヴィータ空尉!?」
班員たちは皆、さっきまでの弱気も忘れて、ヴィータを凝視する。
「よく踏ん張ったな。はやてからの要請があって、急いで飛んできたんだ」
「あ、あいつら……無事なんスよね!?」
「ああ。全員無事だ。今、シグナムと合流して、後方へ向かってる」
コリンが出した指示通り、シグナムへ伝達することができたようだ。
「と、いうわけだが……おい、三下」
『……何ですかぁ?』
ヴィータは、にやりと、好戦的な笑みを浮かべ……
「――これ以上、アタシの前で好き勝手できると思うなよ!」
――――ガキュンッ!!
グラーフアイゼンが、呼応するかのように、火を吐いた。

◆・◆　◆　◆

――シャキンッ!!

『……』

怪人の腕のブレードが、ティアナの胴体を切り裂き……同時、その姿が掻き消えた。

「はー……!!　はー……!!」

『……』

幻術が、怪人を取り囲む。その全てが、銃口を怪人へと向けていた。

「……!　シュー、トッ……!!」

――ドンッ!　ドドドドドンッ!!

誘導弾も交えた射撃。だが、怪人はロクな構えを取ることなく、鬱陶しそうにブレードや拳で魔力弾を打ち払う。そして、作業のように、ティアナの幻術を切り裂く。

「はー……あ、はー……!!」

一見、膠着状態にも見えるが……ティアナは既に、疲労困憊だった。

元からの疲労に加え、圧倒的に格上である怪人のプレッシャー。そして、それを相手にするための、クロスミラージュの全開駆動による幻術の行使……既に、体力も魔力も、ギリギリだった。

だが……どうやら、幸いなことに、敵怪人には、ティアナの幻術を見破ることはできていないようだ。このまま持久戦に持ち込めば、勝てはしなくとも、持ちこたえられる……と、思っていた矢先。

『ガリュー、目を閉じなさい』

「!?」

復旧し次第連絡が取れるようオンのままにしていた広帯域の通信網が、何者かの念話をキャッチした。やや硬質で鋭い、少女の声。

（まっず……!?）

……その指示を傍受できたことは、ティアナにとって、限りない幸運だった。

ガリューと呼ばれた怪人が指示の通りにまぶたを閉じ、他の感覚器

でティアナの姿を捉え攻撃してきたのと同時、ティアナは全ての幻術の維持を放棄し、見栄えもクソも無く全力でヘッドスライディングをしてそれを回避した。
「う、く……!!」
だが、寝ている暇は無い。ガリューはすぐさま、ティアナへ追撃を仕掛けた。
――ガキィンッ!!
ティアナの頭のあった場所へ、ガリューの拳が突き刺さった。
「このォっ!!」
――パンッ!!
実銃による射撃。虚を突いた……のではなく、単純に、底を突きかけている魔力を温存する選択の結果だ。だが、それは予想外の効果をもたらした。
――パキッ……!
……欠けたのだ。僅かだが、甲皮の一片が。ガリュー自身さえも気付かないレベルで、だが、確かに。
なのはの刀でも、あの甲皮を切り裂いていた。ではあれは、なのはの技術、ただそれだけではなかったということか。
(硬度そのものは……９ｍｍ弾でどうにかなるレベル……？　じゃあ、あの防御力の正体は、特性は……魔力分解!?)
要は、ＡＭＦとほぼ同等の効果を持つ甲皮なのだ。
ならば……と、実銃を構え……、
「、……！」
しかし、それをホルスターに戻す。確かに、それは弱点になりえる情報だ。だが、今、それを敵に悟られたら……今後、対策されてしまうかもしれない。今は只、がむしゃらに魔力攻撃を続け、愚鈍を演じるのが……
――ザシュッ!!
「くぁッ……!?」
とうとう、ブレードがティアナを捉えた。幸いにも……というべきか。元より負傷していた方の腕だったおかげで、動きに制限は加わら

ない。だが……
「やば……!!」
ぐっと身を固めるより、僅かに早く。
――ドズゥッ!!
ガリューの蹴りが、脇腹を直撃した。
「あ、！」
凄まじい威力に、ティアナは壁まで飛ばされた。背を強かに壁に打ちつけ……更に、肋骨にもダメージがいったのだろう。呼吸が、うまく行えない。
「……か、はっ……!!」
『お嬢ちゃん！』
クロスミラージュの声も、うまく聞き取れない。
『ま、ガリュー相手に、よく粘った方じゃないかな？　うん……それじゃ、レリックごと、お姉さんを回収しよっか？』
ただ、霞がかったような頭で、敵の言葉を、聞いていた。
『でも、なんでドクターは、『こんなの』を回収しろ、だなんて指示出したのかな』
ぴくりと、ティアナが、反応した。眠りかけていた意識が、徐々に、明晰になっていく。そして。
『あの４人の中じゃ……一番弱くて、取り柄の無い人材にしか思えないんだけどなぁ』
――今のティアナには……背中は、預けられない
スバルの声が、オーバーラップし……
「――……ふ、ざ、けんなぁアあああああああああああああッッ!!!」
砲声を上げ、立ち上がった。
「誰が、弱いですってぇ……!?　背中を預けられないですってぇ……!?」
ポケットに、手を突っ込み……赤い魔力結晶を、取り出す！
『！　それ!?』
敵の驚いた声にも、耳を貸さず……

「どいつもこいつも……私を、ナメ腐りやがってええええええ!!」
――バシュウウウウウウウウウウッ……!!!
その封印を、自力で解除する！
ほんの一片……しかしそれでも、莫大な量の魔力が、あふれ出す。
「証明してやる……!!」
『Ａｂｓｏｒｂ！』
クロスミラージュの、初めから空だった弾倉に、その魔力を、押し込めて行く。
「私の……ランスターの、弾丸は!!」
あふれ出る魔力に、空気が焼き焦がされる。
『ガリュー！　そいつを止めて！　レリックが!!　レリックがぁ!!』
敵が、初めて恐慌した。
ガリューが羽を振動させ、突撃を仕掛けるも……もう、遅い。
『Ｏｖｅｒｌｏａｄ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　！』
「どんな敵だって!!」
暴発寸前の、高圧魔力弾が形成される。そして。
「……撃ち抜けるんだァあああああああああああ!!」『Ｆｉｒｅ!!』

――トリガーを、引く!!

――ガォオオオオオオオオオオオオオンッッッッ!!!!!!
『!!!』
あまりにも凄まじい弾丸に目を剥くガリュー。
既に突撃の姿勢に入っていたガリューは、回避叶わず……
――バギィイイイイイインッ!!
片方の羽を、根元から粉砕させられた。
『――!!』
――グシャッ!!

姿勢制御に異常をきたしたガリューは、突進の勢いそのままに、自ら柱へと衝突していった。
「――……」
『Ｓｙｓｔｅｍ　ｆｒｅｅｚｅ　…　…　…　…　…　…』
……そして、キャパシティを遥かに超える魔法を行使したティアナは、クロスミラージュ共々、今度こそ、倒れ付した。
『あああああああ!!　レリックが!!　わたしの、母さんのレリックがぁああ!!』
敵は、随分とレリックに固執しているようだった。
『……もう、つかえない!!　もしかしたら、それが１１番だったかもしれないのに!!』
ガリューが、ふらふらとした足取りで立ち上がる。
『もう、おまえなんかいらない……!!　ドクターがなにをいっても、しるもんか!!　ガリュー!!　やっちゃえ!!』
――ジャキンッ!!
ガリューが、腕のブレードを構える。
勝負は決した。
ガリューは、片羽を捩がれただけ。そう……
「――――――

シグナムには届いていないものの、相当、想定外だったらしい。
果敢に構えを取るガリュー。だがシグナムは、魔剣をだらりと提げたまま、睥睨する。
「機動力が半減した状態で……俺の相手ができると。
――本気で思っているわけではあるまいな……？」
ゴウッ……と、圧力さえも伴った視線が、ガリューを叩く。
『くっ……戻りなさい、ガリュー！』
――ブゥウウウンッ……!!
敵の判断は、迅速だった。ガリューは、敵の召喚師によって離脱させられ……ガジェットの追撃の気配も無い。
――一応、『勝利』と言えるだけの体裁は、整っていた。

少しして、通信も復旧した。
どうやら、向こうも相当、手古摺っていたらしく……復旧するや否や、互いの情報が錯綜し、パニック状態となっていた程だった。
まず第一は、負傷者の収容。
ひとますはそう結論し、復旧したばかりのポータルへ、ティアナを筆頭に続々と担ぎ込まれていった。
「ティアッ……」
それを見送る、現場処理班として残された、そこそこ無事な隊員たち。その中に、スバルの姿もあった。
思わず追おうとしたスバルを、エリオが止める。
「おめーは事後処理が残ってんだろーが。ティアナも、別に死んだわけじゃねーよ」
「う……ごめん。でも、心配で」
「しんぱいは、じぶんのしごとがおわってから」
「仰るとおりです……」
キャロにまで窘められてしまった。
だが、その二人の心中も、決して穏やかなわけではなかった。
エリオは、ティアナの危機には、結局間に合うことはできなかった。
キャロは、敵の召喚師の痕跡すら見つけることはできなかった。

「ね、エリオくん」
「何だ、キャロ」
「どうして、もっとうまくできなかったのかな」
「……」
　エリオの手が、ぴたりと止まる。
「どううごけば、よかったのかな」
「……わっかんねーよ、そんなの」
　今回の作戦。エリオたちは、限られた条件の中、奇跡的なまでに健闘した。
　コリンとの連携を筆頭に、僥倖にも等しい要素が重なり、どうにか、誰一人として犠牲者を出すことなく、任務を終えられた。
　だが……それでも。
「もっと、つよくなりたい」
「ああ、そうだな」
「もっともっと、つよくなりたい」
「ああ、俺もだ」
「がんばる。わたし、がんばるからね」
「ああ、頑張れ」
　年少組は、決意を新たにした。
　そして、事後処理がだいぶ済んだ頃……
『皆さん、お疲れ様です』
　セリカからの通信が入った。
「あ、ニセモノだ」
「パチモンか」
「ばったもん」
『ニセモノでもパチモノでもバッタモノでもありませんわー！』
　ああ、本物だ……と、変なやり方で納得する三人。
『敵によるハッキングの痕跡を洗い出しているのですが、証拠に繋がるほどの痕跡は、見つかりませんでしたわ』
　やはりそこは、敵も徹底しているのだが……
『ただ、ソースコードに、署名を残していましたの』

よほど、特定されない自信があるのか……それとも、ただのバカなのか、もしくはその両方か。
『人名か、何かのコードネームか不明ですが……
――――『ＱＵＡＴＴＲＯ』、と』
詳しくは不明だが……一連のガジェット事件における、実行犯の一味であることは間違いない。
微かだが、ようやく掴んだ、手がかりだった。
◆▪◆　◆　◆
いつかの記憶。
『じゃあ行ってくるよ、ティア』
愛称で呼ぶ、優しい声。仕事に行くときは、いつもこうして、頭を撫でてくれていた。
『今度の仕事は、少し長くなるかもしれない』
『どれくらい？』
幼い声が、舌足らずに聞く。
『明日には、かえってこれる？』
『あ、明日かい……？』
『じゃあ、あさって？』
『う、うーん……』
こうして彼を困らせるのも、いつものことだった。
『……また、魔法、おしえてくれるっていったのに』
声が、泣きそうに湿る。それに、彼はあたふたと慌てた。
そして、すっと小指を差し出した。
『それじゃ……約束だ、ティア』
『やくそく……？』
『ああ。この仕事が終わったら、目いっぱい休暇を取るから。そうしたら、また魔法を教えてあげるよ』
……正直言えば、魔法など、ただの口実だった。彼と関わりが持てるなら、一緒にいられるなら、何でも良かった。
幸い、自分には、それなりの資質があった。『それなり』というのは、彼が、飛びぬけて優秀だったからで、単に比較しての話だったのだが。

兄は、危険でない程度の、害の少ない魔法を教えてくれた。姿を隠したり、別のものに見せたりする、地味で、ぱっとしない魔法を。
彼を喜ばせるために、一生懸命、一人でも練習をした。自分だけの工夫を凝らして、上達させて……
――いつか、彼に、『すごいな』、と言わせたかった。
小さな指が、絡まる。
『ぜったいだよ。ぜったい、やくそくだからね？』
『もちろん。僕が、ティアとの約束を破ったことなんて……あー……』
……明言が出来ないところが、また彼らしかった。
『それじゃ、行ってきます』
手を振って、玄関を出る彼。
『お兄ちゃん、……』
『……ティア？』
『……ううん、行ってらっしゃい』
このときの選択を、この先、ずっと後悔することになる。
行かせるべきではなかった。
二度と会えなくなると、分かっていたのならば。
そして、ドアを開けて、彼が出て行く。出て行ってしまう。
手を伸ばしても……もう、届かない。
『お兄ちゃん……お兄ちゃんっ!!』

「……行かないで、お兄ちゃん」
自身の声で、目が覚めた。
重い瞼を開けると、六課の医務室の天井が見えた。
首を回すと、ベッドは満席。床にまで怪我人が転がされていた。
「ああ、起きたかい？」
デスクで書類を書いていた男性……オペル医務官が、振り返る。
「……はい」

まさか、聞かれてはいないだろうと思うが……
「もうしばらく、安静にしているといい」
「……はい」
だいぶ、手ひどくやられたらしい。
包帯でグルグル巻きにされた腕が、それを物語っていた。
「熱傷の治癒にはまだ掛かるが、裂傷の方は処置済みだ。幸い、腱には達していなかったからね」
「そうですか……」
ポケットを探す……が、相棒の手触りは、無かった。
「デバイスなら、マリエル技官のところだよ」
「……！」
ぎくりとする。もしや、魔力結晶を使用したことがバレてしまったのではないか、と。
「貴重なデータだからね。フリーズから復旧させてる」
だが、杞憂のようだ。
「それよりも……不可解なのは、キミの方だ」
ぱらりと、カルテをめくる。
「魔力量が、不自然に上昇している」
考えられる原因は、一つしかない。
あの、レリックだ。使いきりの物品かと思っていたら、どうやら、違ったらしい。
「……なぜでしょうか」
あえてすっとぼける。
「魔力量というものは、大なり小なり、変動するものだけど……ここまで極端な上昇は珍しい」
「あの……」
「ん？」
「このことは、高町教官には、内密にお願いします。訓練に、支障が出てしまいますので……」
オペルは、やや悩むような素振りを見せ……渋々といった様子で、頷いた。

「……うん、いいだろう。ただし、少しでも異常を感じたら、すぐに来なさい」
「はい。ありがとうございます」
ほっと一息つき……痛む腕を持ち上げ、三角巾で吊る。
そして、神妙なツラを作り、医務室を出て……ひっそりと、無人の訓練場へと、足を向けた。
あんな激務の直後だ。ロングアーチも、わざわざ訓練場へカメラを繋いではいないだろうし、人目も皆無だ。データという形で記録されてしまうクロスミラージュも、今は無い。
ティアナは、知らず、ごくりとのどを鳴らした。
（リンカーコアを起動）
慣れ親しんだ、呼吸のように行える動作。しかし……
――ドクンッ!!
「うっ……!?」
脈動の大きさが、段違いだった。
これで、最大出力を試したらどうなるか、試してみたくはあったが……それで自滅すれば、世話が無い。なので、最小の、ごく初歩の魔法で、試験する。
「……シュート」
――――キュドンッ!!
予想を遥かに上回る反動に、仰け反るように尻餅を突いた。
「うひゃっ!?」
――ゴゥンッ……!!
発射された、ごく初歩であるはずの魔力弾は……それこそ、数倍の威力となってコントロールさえ拒み、地面へと着弾した。
「……うそ」
魔力量という、最大のコンプレックスが、たった一晩の間に解消されてしまったことを、ようやく実感した。
はっと我に返ると同時、今の音を聞きつけた誰かに発見されないよう、全力で宿舎へと駆け戻った。
「あ」

「あ」
そして……スバルら、フォワードチームの面々と、廊下でばったりと再会した。
「もう出歩いていいのか？」
「一応。痛いけどね」
言葉もそこそこに、その横を通り過ぎようとする。
「ティア、」
「次の週明け」
スバルが、口を開くが……ティアナは、聞く耳は無いようだ。
「高町教官のテストだから。それまでは、コンビでいましょう」
『それまでは』……では、それからは。スバルは、何も言えなくなったように、黙ってしまう。
（……もう、あんたなんかに、背中を守ってもらわなくたっていいわよ）
今までは、半人前だったから、二人一組だった。だが、今のティアナはそれこそ、桁違いの魔力量を保有している。今までできなかったことが、容易に行えるようになるだろう。もう、細かな魔力消費を気にすることも無いだろう。戦術の幅も、大幅に広がるだろう。
――……そしてそれが全て、一人で行えるようになるだろう。
（私は、一人でやっていく）
……それが、ティアナの出した結論だった。
その日からは、任務明けの訓練休暇となり、隊員たちは、疲労を存分すぎるほどに癒していた。ロビーでゲームに興じるもの、図書室で漫画を読みふけるもの、ひたすら自室で惰眠を貪るもの、そして。
――パリンッ!!
一人で、修練を積むもの。
「……次！」
出現する、大量の標的。それらを照準し、多数の魔力弾を掃射する。
――カ、カカンッ!!
……標的は一つとして割れない。そもそも、一発一発の威力が、非常に低い。実用に耐える威力の魔力弾の生成数の上限を上回ってい

るのだ。
だがそれは、ティアナがあえてそうしている結果だった。
あまり、不自然に高威力の魔法を使っていては、訝しむ者も出てくるだろう。教官にでも見つかれば、一発で、レリックを不正に使用したことが露呈する。今はこうして、使用時のシミュレートをし、来る試験に備えているのだ。
――パン、パパパンッ！
「!?」
ティアナが撃つ筈だった標的を、横合いから何者かが打ち砕いた。
「！　誰っ!?」
集中を乱され、怒りの形相で振り向く。
「よう、ティアナ」
ひょい、と軽く手を挙げる彼は……
「……ヴァイス？」
公安からのスパイ、ヴァイス陸曹だった。
「なっちゃいねぇな」
開口一番、ティアナへのダメだしである。
反論して噛み付こうとしたティアナだったが、今の訓練の意図を悟られるわけにはいかず、ぐっと口ごもる。
「……お前さん、ここのところ、ずーっと一人で訓練してるな」
「そうよ。悪い？」
きっと睨み付けるが、ヴァイスは余裕の態度で肩をすくめる。
「いや、個別練習も悪くはねぇよ。だが、オーバーワークだ」
「……」
それは、図星だった。ろくな休憩も取らずに、朝から晩まで、シミュレーションを繰り返しているのだ。魔力量が増えたとはいえ、体力までもが増加するわけではない。
「こちとら、人の倍の訓練で、ようやく人並みなのよ。……凡人なもんで」
「凡人、ねぇ……」
思わせぶりな言葉。そして……

「そいつは、ティーダと比較しての話か？」
兄の名を、あっさりと、口にした。
「!?」
「やっぱりか……そりゃあ、確かにティーダのやつは優秀な執務官だったがな……」
目を剥くティアナに、ヴァイスは、ため息をついた。
「兄さんを、知っているの？」
ああ、と、こともなげに頷く。
「……だったら、分かるでしょ。私は、一日でも早く執務官になって……兄さんの汚名を、濯がなきゃいけないのよ」
あの、心無い将官が言い放った、『役立たず』という汚名。それを払拭することが、ティアナの悲願だ。
「執務官になろうってやつが、いつまでも、半人前でコンビごっこなんてやってるわけには行かないのよ!!」
そして再び、標的を出現させる。もう邪魔をするなと、背中でそう言っていた。
「……」
ヴァイスは、何か言いたげにしていたものの……結局、何も言わずに戻っていった。

起きては訓練、食事は外、シャワーを浴びたらすぐに寝る。スバルたちとの会話は、ほぼ無かった。週明け前日に、クロスミラージュを受領。
――そして、翌日。試験の日がやってきた。

◆▪◆　◆　◆

ぱちっ、と、定刻どおりに目を覚ます。
起き上がり、いつものように、チョーカー型の器具……人工声帯と、眼帯を装着。
『おはよう、レイジングハート』
『おはようございます、マスター。いよいよ、今日ですね』

『うん』
レイジングハートを首から提げ、壁に掛けた刀を……訓練では使っていなかった、とっておきの一振りを腰に差す。
『……今日はやめとこ』
習慣であった、朝の一服も、今日は控える。
ディスプレイを開き、試験の要項を今一度確認し、部屋を出た。
かつ、かつと、床を蹴るブーツの音も、高鳴っている。
『マスター、楽しそうですね』
いつかと同じような問いかけ。しかし今回は、返答が違っていた。
『うん。あれから、どれだけ成長したのか、しっかり見定めてあげないと』
『はい』
教官として……教え子の成長に、期待に胸を膨らませていた。
訓練場は、今日ばかりは試験場となる。いつもと同じように足を踏み入れ……待ち構えていた二人の姿を、見定める。
『おはようございます』
「「おはようございます！」」
スバルと、ティアナ。二人は、挑むような目で、なのはの目を真っ直ぐに捉える。
『試験内容は、頭に入っていますね？』
今回の試験の内容は、これまでの訓練の総合判断だ。
フィールドの中、なのはが、『大量のガジェットを操る違法魔術師』という設定で、ティアナたちを攻める。二人は、ガジェットを突破し、時間内に有効打を一撃でもなのはに加えることができれば合格という、シンプルなものだ。
『質問は……無いようですね。では、配置につきなさい』
すたすたと歩き去っていくなのは。
残された二人は……
「……スバル」
「……なに？」
実に久しぶりとなる会話を交わしていた。

「いつも通りよ。アンタは、いつも通りに、動きなさい」
「？　……うん、そのつもりだけど」
変な欲を出して、無茶をすると怪我をする……それも、この機動六課で学んだ教訓だった。それは、口に出さずとも分かっているはずなのに、それをわざわざ言い含めるティアナに、違和感を覚えたが……気のせいと思い、配置へ着いた。

そして、試験が始まった。
なのはは、いつもの鉄面皮の外面で、手元のコンソールを操作する。訓練と違うところは、ガジェットは自己のＡＩではなく、なのはの指揮で行動する、という点だ。
『まぁ、私に部隊指揮の才能はありませんが……』
判断できて、精々が数人規模が手一杯。こんなにも大量のガジェットを操作できるのは、一重に、マリエルの作成した、操作ツールの恩恵だ。とはいえ。
『才能の無い、私程度の指揮で動くガジェット群程度は、突破してもらわなくては』
そこらへんの野良犯罪者がガジェットを操作して、騒動を起こしたのと同じ程度の難易度には、設定できるはず。
そして、配置していたガジェットの第一群が、二人と接触したことを告げていた。

――ガゴッ！
ガジェットを易々と撃破するスバル。よほど大量に湧いていない限り、子機では最早、スバルの相手にはならない。マッハキャリバーの速度を緩めることなく、直進する。
――ガンッ！
ティアナが撃った魔力弾が、同じくガジェットを貫く。威力は、平常どおり。
努めてそのように抑えているのだが……やはり、燃費を意識して、少ない魔力をカツカツでやりくりするのと、かなりのマージンを維持

しておけるのとでは、気の持ちようも変わってくる。
「次、右だね」
「そうね」
変に落ち着いた意識のまま、淡々と試験の工程を進めて行く。
『……？』
なのはが、ふとした違和感に首をかしげる。
善い意味で、いつもどおりの二人……だと思ったのだが、どこか、違和感……そう、違和感を感じた。
『気のせいでしょうか……』
気になったなのはは、ガジェット群のフォーメーションを変更し、けしかける。
――ゴバッ!!
「!?」
横合いの壁を破壊し、ガジェットが雪崩れ込んできた。
こういった場合、防御力に優れたスバルが前に立ち、ティアナが誘導弾で狙い撃つ……というのが、いつもの動作なのだが……
「……」
――ドンドンドンッ!!
ティアナは、スバルが前に立つよりも早く、バリュアブルバレットを発射。
――バゴンッ!!
ガジェットは、問題なく撃破されたのだが……
「……ティア？」
「何よ？」
らしくない。言ってしまえば、それだけだ。あんな強引な正面突破は、するような場面ではなかったはずだ。スバルが怪訝な顔をするのも、無理はない。
「……」
「行くわよ」

違和感を残しながらも、試験は続行される。
『……やはり、おかしい』
その後も、試してみたのだが……やはり、そうだった。
これまで、スバルが受け持っていたポジションを、ティアナが先行して奪ってしまっている。その結果ティアナは、フロントアタッカーのようなポジションで、魔力を浪費していた。
『試験を中止しますか？』
レイジングハートの言葉に、しかしなのはは首を横に振った。
『いや……。もしかしたら、何か考えがあってのことかも……それに、まだ、止めるような状況にはなっていない』
なのはは、試験を続行することにしたようだ。
『……』
一抹の不安を残しながら。

スバルは、ティアナの様子に戸惑いながらも、しっかり動きを合わせて、ガジェットを撃破していく。そして……
「見えたッ！」
ガジェット群の向こうに、ビルの屋上に、なのはの姿を見つけた。
ウイングロードの展開も考えたが、一撃で撃墜される未来しか予想ができなかったため、地道に屋内の階段を駆け上っていく。そこで現れたガジェットたち。だが、またしてもティアナが先制攻撃で撃破した。
「ティア、ちょっと……！　大丈夫なの!?」
コレには、さすがにスバルも苦言を呈した。
これまでに使用した魔法の、総魔力量から計算すると、ティアナの残り魔力は、既に半分を割っている。これから、なのはに挑むというのに、それでは心許ない。
「問題ないわ。いいわねスバル。『いつも通り』よ」
「……う、ん」
再度、繰り返される確認。だが、ここまできて、今更試験を中止するわけにも行かず……結局、頷く。

――バガンッ!!
屋上へ続くドアと、その真正面で待ち伏せていたガジェットをスバルが殴り飛ばし、屋上に足を踏み入れる。
『ああ、思ったよりも早かったですね』
なのはは、二人を出迎えた。
『……では、始めましょう』
なのはは、刀を右手一本で抜刀し……
――ダンッ!!
ひと跳びで、スバルの間合いへと進入した。
「……!」
バリアでは切り裂かれる。となると、硬く弾くシールドだ。
――ガイインッ!!
展開と同時、後方へ跳ぶ。そして、マッハキャリバーの車輪がグリップし、従来ではあり得ない軌道で、なのはの追撃を回避する。
『……』
本来なら、ここで、ティアナの射撃が入る筈だ。この場面ならば、直射と誘導弾の混成だろう。なのはは、グローブをした左手に、シールドの展開準備をする。
――ドンッ!!
予想は、的中した。直射を回避し、誘導弾をシールドに当て、弾く。
「はぁぁぁぁぁっ!!」
気合一閃。スバルのパンチが、なのはのシールドを破る。そして、その衝撃に一瞬、姿勢を崩すなのは。
『……なかなか』
ぼそりと言い、襲い来るティアナの魔力弾を斬り捨てる。
――やはり、杞憂だったのだ。
スバルも、ティアナも、入隊当初のような無謀な突撃はしない。状況に応じて的確に、冷静に戦えている。その中には、自分が教えてきたことが確実に反映されており、笑みがこぼれそうになる。
続く連撃。ティアナの魔力弾からの撹乱、スバルの近接……いや、違う。ティアナの攻撃が、いつもよりも長い。スバルはというと……

「マッハキャリバー！」
ミッド式魔方陣。そして、魔力の収束リングが、展開している！
『!!』
「うおりゃあああああ!!」
――ドゴォオオンッ!!
まさかの、砲撃！
これには、なのはも目を剥いた。空いている左手で、バリアを展開し防ぐ。
『むっ……!!』
中々の威力だ。単純な威力だけで言えば、ＡＡランクの砲撃相当か。
一瞬の拮抗。なのはが、対処を判断するよりも早く……
「――ブレイクッ!!」
――バシュウウンッ!!
収束リングが消失し、砲撃として束ねられていた魔力が、蒸気のように撒き散らされる。
『やや無駄遣いではありますが……いい判断です』
視界が晴れたとき、なのはの周囲には、銃口をこちらへ向けるティアナの幻像が複数体おり、スバルの姿は見えなかった。
『これは、ティアナの幻術ですか……』
本当に、毎度毎度、驚かされる。引き合いに出すのが、いつも教導隊の面々というのが癪だが……ここまで、完璧に姿を隠蔽してのける技術など、とても新人のレベルではない。
そして、幻像からの射撃を掻い潜りながら、一体ずつ処理して行く。
――ドンッ!!
『これで最後』
最後の一発を刀の側面で弾く。
――ギャリィイイインッ!!
『!?』
が、異変。突然、刀を持つほうの手が、何かに引っ張られる。
見るとそれは、魔力で編んだ鎖。

『射撃に見せかけた、チェーンバインドですか！』
『はぁっ!!』
「ぐっ……！」
力任せにバインドを引き千切り……ティアナの本体に、射撃をお見舞いする。幻術の展開中は、動きが極端に鈍くなる……そして、ティアナと、なのはを直接接触させているチェーンバインドを通じて、居場所を特定したのだ。
短時間で破れる。だが、その僅かな時間を作ることが、目的だった。
「――――うぉおおおおおっ!!」
スバルは、真上!!
ウイングロードで一気に駆け上がり……直後、重力をも見味方に、急降下!!
『……！　面白いっ！』
なのはは……『両手』で、刀を握った！　本気の、一撃！
「『はぁあああああああああああああっ!!!!』」
マッハキャリバーと、なのはの刀が、激突する――――

――――その、直前のことだった。

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――……バースト・ショット」

不吉な発生トリガーと共に……凶悪なまでに高威力の散弾砲が、二人を飲み込んだのは。

◆▪◆　◆　◆

多少、訝しまれはしただろう。だが、試験が中断されていないところを見ると、どうにか誤魔化せているようだ。
多少、いつもより魔力弾を消費しているような気もするが……だが、些細なことだ。
――何せ、自分はもう、魔力量を気にする必要がないのだから。

傍らのスバルが、心配そうに自分を見ていることが、ひどく滑稽に思えた。もう、スバルに劣等感など微塵も感じない。それどころか、教官が相手であろうとも、互角に立ち回れるに決まっている。魔力量だ。全ては、魔力量で決まるのだから。

そして、教官との戦闘が始まった。

今更、必要とも思えない、日々の訓練の成果とやらを出して、スバルを適度に援護してやりつつ、機会を伺う。教官は、相変わらずの無表情だ。無表情のまま、自分たちを、値踏みするような目で眺めている。だが、構わない。そうやって、こちらを侮っているがいい。足元を掬ってやったときが、見ものだ。

そして、きた。

適当に転がされた自分の前で、スバルと、教官が、真正面から激突しようとしている。おそらく、自分の援護射撃も、想定の範囲内だろう。……それが、従来の威力の、射撃ならば。

絶好の機会だ。

「封印、解放……!!」

『Ｂｒｅａｋ　ｒｅｌｅａｓｅ』

圧倒的な魔力が、リンカーコアに滾る。そうだ。これだ。この力さえあれば……もう、コンビなど組む必要はない。自分ひとりの力で、十分にやっていける。

――だからこれを、弱かった自分との、頼らざるを得なかった自分との、決別の一撃にしよう。

トリガーボイスは、躊躇い無く発声できた。

「――――――――――――――――――――――――――――――――――――……バースト・ショット」

◆▪◆　◆　◆

「えっ!?」

「はぁ!?」

「な、何が……!?」

試験を見守っていた、エリオ、キャロ、セリカが、突然の事態に、唖然とする。
ついさっきまでは、抜群に良い試合だった。加減しているとはいえ、なのはの意表を突き、有効打を与える直前の状況を、引きずり出してみせた。
だが……その最中。ティアナの魔力が、爆発的に膨れ上がって……明らかに危険と分かる攻撃魔法を、あろうことか、スバルをも巻き込む軌道で、撃ち込んだのだ。
「おいっ……やべぇだろ、これ!!」
「見えてんだろ、ロングアーチのやつ！　何やってんだよ！」
観客からも、どよめきが上がる。
『――――緊急事態発生！　緊急事態発生！』
今更な警報だったが……誰もが、モニターに釘付けだ。
一体、何がどうなっているのか……そして、ようやく、粉塵が晴れた。
スバルは、なのはは、ティアナは無事なのか……
◆◆◆◆
『――――――何を……しているのですか……？』
なのはの、呆然とした声。
「え……え……？」
同じく、事態が把握できていないスバルの声も、確認できた。
なのはは……咄嗟に刀を捨て、右手でスバルのナックルを。
――そして左手で、ティアナの魔力弾を、直に受け止めていた。
『ティアナ……あなたは、何を……』
そして、受け止めたままの魔力弾を……その、魔力光を、確認した。
その色は……ティアナの、オレンジの魔力光は……
――赤黒い魔力に、汚染され、塗りつぶされていた。
『……レリックを、使ったのですか……？』

だが……ティアナは、その言葉に返答しなかった。
「……」
その目が……凝視している。
――なのはの、中途で折れたように欠けた、一滴の血も流れない左手を。
思い返せば、どこかおかしかった。猛暑の中でも長袖のジャケットに、決して外さない手袋。訓練でも、滅多に使わない左腕。
「――――義手……？」
……そう。あの日、スバルが見た光景は……風に揺れる、空っぽの左袖は、見間違いなどではなかったのだ。
――なのはの左手は、肩から先が、欠損していた。

「あ……え……？」
未だ事態を飲み込めないスバル。そして、その拳が、なのはの生身の方の掌へ突き刺さり……赤い染みを地面に作っていることに気付くことで、ようやく、我に帰ることができた。
「きょ……教官っ!?」
慌ててナックルを引っ込める。
しかしなのはの一つだけの目は、スバルを一顧だにせず……呆然と、ティアナへと向けられていた。
『ティアナ……あなたは、何を……』
「ひっ……!!」
繰り返される言葉に……そして、予想を超える事態に恐慌したのか、ティアナが後ずさる。
「私は……強くならなきゃいけないんだっ!!」
張り上げる大声は、虚勢か。
「こんな、訓練だけしてたって！　強くなんてなってないじゃないか!!」
『、……』

ティアナが、心のうちに溜め込んでいたことを、ぶちまける。
「身体鍛えたって、射撃の精度を上げたって……唯一の取り柄の幻術を磨いたって!!　全部、全部……!!
――魔力量が少ない所為で、何にも実ってないじゃないかぁっ!!」

かたかたと震える手で、銃口を、なのはに向ける。
「だから、アレを使ったのよ……！　お、おかげで、もう、魔力量なんて、気にするのも馬鹿馬鹿しいわ……！」
『――何のために』
「は――？」
『――何のための、魔力量ですか？　何のための、力ですか？　あなたは、その得た力で、何がしたいのですか……？』
一言一言、言い含めるように……ティアナへ、投げかけていく。それに、ティアナは……やけっぱちな笑顔と共に、震える声で、答える。
「もっともっと、上に行って……私を……馬鹿にした奴らを、跪かせてやるためよっ!!」
『――』
すーっ……と、なのはの目が、据わっていく。
『……コンビパートナーを、犠牲にしてでも？』
これが、最後のチャンスだったのだろう。せめて、これで、言葉に詰まるなりすれば……
「――そんなの、私には関係ないっ！」

……この瞬間。ティアナ・ランスターは、なのはにとって、明確な『敵』となる。
くつくつ、と、奇妙な息遣い。
それが……俯いたなのはが発する、笑い声だと気付いた、瞬間……
『――ああ、もう、いいや』

凄まじい殺気が、ティアナを叩いた。
『レイジングハート……』
胸元に下がる相棒を、呼ぶ。レイジングハートもまた……主の意向を、全力で汲む。
『――セットアップ』
『…Ａｓｓａｕｌｔ　Ｃｏｍｂａｔ　Ｍｏｄｅ』
噴き上がる……くすんだ桜色の、乱気流。
「……!!」
ティアナは、今更に、振り返る。自分は、とんでもないことをしてしまったのではないか、と。
――眠れる暴竜の逆鱗に、触れてしまったのではないか、と。
……そして、その考えは、的中していた。
『……ティアナ・ランスター』
両腰に下がる、二振りの刀。
ホルスターには、大型拳銃と、ベルトのように巻きつけた無数の弾倉。
デバイスであろう、黄金色の浮遊砲座を従え……
――左腕には、鋭利な鉤爪やブレードを備えた、鈍色の戦闘用マニピュレーターが装着される。
――漆黒の、バリアジャケット。完全武装した、本気の姿。
『お前を……処分します』
「なにがぁっ!!」
銃口から、またしても凶悪な威力の魔力弾が発射……
『遅いんですよ』
――ゴギッ!!
滑り込むように間合いを詰めたなのはが、鋼鉄の左腕で、ティアナの顔面を、容赦なくブン殴った！
「がふぁっ……!」
もんどりを打って吹き飛ぶ。
「こ、のォ……!」

『だから、遅いと言っています。寝転がったまま何がしたいんですか。ええ？』
――ドズッ!!
……今度は、容赦の無い蹴りが、ティアナの腹にめり込んだ。
「がはっ……、！」
『ほら、自慢の魔力で、射撃でも撃ってみなさい。ほら。どうしたんですか？』
――ガスッ！
硬いブーツの靴底で、ティアナの頭を、容赦なくストンピングし、髪の毛を掴んで引き起こし、またしても腹に膝をブチ込む。
「……！」
暴力。まさに、暴力だ。
『こんな一辺倒な射撃が、通るはずが無いでしょう。誘導弾、幻術、狙撃。それらを駆使するのがお前だったはずです』
――ドフッ!!
呼吸が止まり……それでも、銃口を至近距離でなのはに押し付ける。
『……ふん』
――ズバンッ!!
取った。これだけの至近距離、これだけの威力。確信したティアナだったが……
『なんですか、これは？　ドライヤーですか？』
……銃口を、鋼鉄の左手で塞いで、ノーダメージだった。
「はな、せぇっ!!」
――ズバンッ!!　バシュンッ!!
左手で塞がれたまま、尚も連射。なのはは、酷薄な目で、それを見る。そして。
『……銃身で加速もせず、炸薬で押し出しただけの弾丸が何になるというのですか？』
「くぅううううっ!!」
振りほどこうとするも、万力のような握力で握り潰され、脱出は叶

わない。
『――――ナパームファング』
――ゴバァァァァァァァァッ!!
強烈な爆炎が、ティアナを吹き飛ばした。
「……」
『ふん……ヴェイロンの作ったガキの玩具が、そんなに効きますか？』
かちゃかちゃ、と指を鳴らす。
『……』
おもむろに、腰の刀を抜く。
「教官っ、何を!?」
スバルが、ぎょっとして叫ぶ。
『……黙って、よく見ていなさい』
制裁は、まだ終わっていない。
「やめてください、教官……!!」
スバルは……震える膝を押さえて、立ち上がった。
『……』
そして……なのはに向けて、構えを取った。
ティアナも、意地で立ち上がる。
鼻血を出し、歯が折れたのか唇が切れたのか、口唇からも血が流れ、目は晴れ上がり、酷い有様だ。だが、レリックの効果は未だ健在。負傷などお構い無しに、膨大な魔力を、ティアナに与え続けている。
……リンカーコアが機能不全を起こすまで、そう遠くはないだろう。
『……いいでしょう』
なのはは、刀を納め……
――右手を腰溜めに、左手を緩やかに挙げた、奇妙な構えを取った。
「!!」
なのはが、構える……それは、訓練ではあり得なかったことだ。
ティアナは、ただ魔力任せに撃つことしかしないだろう。スバルが、合わせるしかない。
……幸いにも、ティアナの攻撃は、その前兆からしてあからさまで、分かりやすい。徹底して、敵の隙を突き、精密に狙い打っていた方が、

よほど見極めづらかった。
「ぁあああああっ!!」
「!」
きた。ティアナが、高密度の魔力弾を無造作に、一直線に放つ。スバルはマッハキャリバーで駆け出し……その魔力弾の後に追走する。魔力弾へ対処している間に、スバルがどうにか、なのはへ一撃を加え、下がらせるつもりのようだ。
魔力弾は、あっという間に、なのはへと着弾し……
「おりゃあああああああああっ!!!」
スバルは、拳を全力で振るう。
『……』
魔力弾が、なのはの制空権に触れるのと同時……
――バチィンッ!!
魔力を集中させた掌打で、魔力弾を、あっさりと弾き飛ばした。
威力の大部分を削ぎ落とし、危険でないレベルにまで威力を弱めた……それでも、スバルにとっては脅威の魔力弾が迫る。
「!?」
だが、既に拳を止められる体勢ではない。
「うわあああああっ!!」
振り抜くのみ。
『――インパクト』
だが、それすらも届かない。
衝撃波に、突進の威力があっさり押し負け、吹き飛ばされる。
更に。
『――バスター』
――ズドォオオオオンッ!!!
……浮遊砲座からの、ダメ押しの砲撃。
シン……と、見学者たちも、静まり返る。
「……これが……教官の、実力……」
エリオは、あまりにも隔絶した実力差に、茫然自失としていた。

スバル、戦闘不能。だが……
「あ、あああああああああ!!!」
――ズォオオオオオオオッ!!!
……レリックは、容赦なく、魔力を注ぎ込み続ける。
それに耐えているのは、ティアナの意地でもあるのだろうが……流石にもう、限界だ。
『……腕の一本で、手打ちにしましょう』
恐ろしい言葉を呟き……二刀を、両手で抜く。
『痛くないよう、斬り落としてあげます。感謝しなさい』
やる気だ。本気で、言葉通りに、実行する気だ。
「おい、誰か止めろよ！」「はァ!? 誰が止めるんだよアレを！」「シグナム教官かフェイトさん呼んで来い！」「二人とも今日は出張でいないじゃん！」「んじゃ部隊長でいいから！」「間に合わねぇっつーの！」「んじゃあの人でいいから、ええと」「やべぇ、マジやべぇよ……!!」
なのはは、刀を振り上げ……何の躊躇いも無く――振り下ろした。

――……ガキィイイイインッ！
……誰もが、惨状に目を瞑る中……聞こえたのは、肉と骨を切断する音ではなかった。
「そこまでにしておけ」
刀と、ティアナの間に割り込んだのは……円環に、翼を象ったデバイス。
『――クロノ？』
……クロノ・ハラオウンの、S2Uだった。
「やりすぎだ」
なのはを窘める。だが、なのはの怒りは収まらず、再度、刀を振り上げようとする。
『どいて』
威圧され……クロノは、ふぅ、と溜息をつき……
「……ヴィータ、頼む」

「あいよ。任された」
躊躇うことなく、増援を呼んだ。
『……ヴィータ』
実に数ヶ月ぶりとなる、ヴィータとの対面。だが、今は状況が状況だ。
怒り狂ったなのはにとって、いかに身内の二人であろうとも、目の前に立つのなら、排除の対象だ。
『……二人とも、邪魔する気？』
「ああ」
ブンッ、とグラーフアイゼンを振る。
『ちびの癖に、私に勝てると思ってるの？』
「あァ？　もう5センチも変わんねーだろ」
『……』
「……」
火花を散らすにらみ合いが、しばらく続き……不意に、なのはがふっと脱力した。
『……もういいよ、私、帰るか――――
――――らッ!!』
振り向き様の不意打ち！
「っとォ!?」
アイゼンの柄で辛くもガード！
『ちっ、惜しい』
「こ……こォの野郎！　汚ぇ真似しやがって!!」
こうなると、ヒートアップするのはヴィータもだ。
「その曲がった根性、叩きなおしてやる!!」
『前々から気に入らなかったのよ！』
場外乱闘が始まり、外野にまで魔力弾やら実弾やらが飛び火し、更なる悲鳴を上げる。
「うわァー!?　ダメだあの二人――!!」「逃げろー!!」
……だがこれで、ようやくなのはの意識が、ティアナから外れ

た。
「……危ないところだったな」
ティアナに向き直るクロノ。
「なにがっ……！」
ティアナは、クロノに敵愾心に満ちた目を向ける。
「……そういえば君は、執務官志望だったな」
どこか懐かしそうに、目を細める。
「うるさいっ！　アンタなんかに、分かってたまるか！」
ティアナにとって……執務官という、理想の立場にありながら、自らその地位を捨てたクロノという人物は、理解不能で……妬ましい存在だった。
「わかるよ。俺も、資質のことでは随分と悩んだ」
どこか、懐かしむような顔だった。
「……!!」
一歩踏み出したクロノに警戒し、後ずさる。
「その所為で、らしくもない無茶もした。仲間にも迷惑を掛けた……だが、止めてくれた奴がいた」
「はぁ!?　あなた、さっきから何を……！」
ビシッ、とＳ２Ｕを突きつける。
「――お前は、俺が止めてやる」
その表情には……自信に満ちていた。
「やれるもんならっ……!!」
ゴウッ……！　と、更に高まった魔力が、吹き上がる。
「やってみろォおおおっ!!」
――ガォオオンッ!!
迫り来る巨大な誘導弾。だが、クロノは……一歩、二歩と、左右に歩くだけで、それを回避した。
「――スナイプ」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
そして、手に持ったＳ２Ｕから、同じく誘導弾を発射。
「こんなものっ！」

ティアナは、これまた巨大なシールドを展開し、それを防御する。
「――スナイプ」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
そして、また、誘導弾。
「チマチマ、チマチマと!!」
バリアタイプの防御で、纏めて遮断。そして、魔力弾で反撃する。
余裕の動きで、回避され……
「――スナイプ」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
リピート再生のような、同様の攻撃。
「しつっこい……っ!?」
だが、今度は足元を這うような、低い一撃だ。
咄嗟に跳んで回避したが、そこはやはり誘導弾。
――パシンッ！
「あっ……!!」
……足首のあたりにヒットし、転倒させる。
「畜生！」
反撃……だが、狙いが大雑把すぎて、やはり当たりはしない。
「――スナイプ」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
……ここでようやく、頭に血が上ったティアナも気付いた。
「さっきから、おんなじ攻撃……！　それにあいつは確か、空戦魔導師のはず……！」
たった一つも魔法だけで……しかも、それほど威力を出してもいない攻撃で、ティアナを翻弄している。
「嘘よ……何かのペテンだわっ!!」
苦し紛れに、魔力弾を連射するも、それが一発も、かすりもしない。
「大威力と、高速処理は両立できない。基本だろう」
涼しい顔で、ティアナの攻撃を避けながら。
「そもそも君の魔法は、効率化と、処理速度に重きを置いている。そこ

に、唐突に大量の魔力を上乗せしたところで、威力が上がること以外、メリットは無い。むしろ、コントロール性の低下や、命中精度の低下など、デメリットの方が上回る」
「うるさい……」
「ただ大きな魔力を振り回せるというだけでエース級になれるのなら、誰も苦労はしない。……ティーダの奴だって、そんな魔力任せの戦い方はしていなかったぞ」
兄の名を出された途端、ティアナは一瞬、躊躇うような素振りを見せた。
「大事なのは、自分の特技を極めることだ。君の特技は……大威力の攻撃魔法か？　違う筈だ」
ティアナの特技は……幻術と、射撃。
「でもっ、そんな、小手先のテクニックだけで、どうこうなる問題じゃあ……!!」
やはり、コンプレックスは根強いようだ。クロノは、ふと笑い……再び、Ｓ２Ｕを構えた。
「なら、よく見ているといい。……『小手先』の技が、どこまで通じるのかを、な」
――避けられる。
何度撃っても……さほど速くも動いていないはずのクロノに、かすりもしない。それどころか、クロノが単調に繰り返しているだけにも見える誘導弾は、的確に、ティアナを追い詰めて行く。避ければ、避けた先に別の攻撃が。防げば、防御を潜り抜ける一撃が。一発一発は、ゴムボールが当たった程度のダメージにしかならないというのに、確実に、ティアナを消耗させていく。いや……攻撃に、防御に、必要以上の魔力を注いでいるティアナが、『勝手に疲れている』のだ。
「――スナイプ」
『Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ』
そして、また。
「……私は、私はぁっ……!!」
迎撃を試みて……そこで、ティアナの腕は、上がらなくなっていた。

――トンッ
軽く、身体に当たった魔力弾が解け、リング状に変形する。バインドだ。
「――封印」
『Ｓｅａｌｉｎｇ』
そして、バインドを介して、封印が施され……
――キンッ……
ティアナから、レリックが分離し、摘出された。
「、……」
その反動から、ふらっと力無く倒れるティアナ。
「さて、と」
ひょい、と米袋を担ぐように、ティアナを運ぶ。
下に降り……スバルと共に、救護班に預ける。
「クロノさん」
……と、ヴァイスが、済まなさそうにやってきた。
「すんません、助かりました」
ヴァイスにしては珍しく、下手に出ている。
「……ティーダに、コイツのこと頼まれてたんで」
どうやらヴァイスも、ティーダの顔見知りだったらしい。
「まぁ、俺もティーダは知らない仲ではないからな」
「つーか……相変わらず、お見事ですね」
「ああ、バカ魔力を振り回すバカが、身近にいたからな。慣れている」
……ヴァイスは、知っている。このクロノが、『バカ』だの『アホ』だのと形容するのは、決まって、心を許した友人だけなのだと。
と、見物人の新人たちが、自分に注視していることに、今更ながら気付いた。
「……どうした？」
「あっ……いえ、何でもないッス！　クロノさん！」「お疲れ様です！クロノさん！」
……ぶっちゃけ、クロノのことを舐めきっていた新人たちにも、今回のことはいい薬になったようだ。

『この薄情者！』
「何だよひねくれ者！」
……遠方では、まだあの二人が喧嘩をしていた。
「向こうの収拾をつけるほうが大仕事だな……」
「……お疲れ様です」
げんなりとするクロノに、敬礼するのだった。
◆▪◆　◆　◆
さて、大騒動のあった試験から、数時間が経過した。
『……』
なのはは、部屋の片隅で、ぶっすぅ～……と不機嫌そうに三角座りをしている。
「おう、なのは。こっち向けこのタコ」
はやてが、苛立たしげに机を叩く。
『……私、悪くないもん』
度を越した体罰。無許可での私闘。職務放棄。
「悪くない要素がどこにあるッ!?」
これには、はやても怒る。
「まぁまぁ、部隊長～、なのはさんだって、いろいろと考えてですねぇ」
フィアットが、やんわりと諌めるのだが、逆効果だった。
「だ・か・ら！　何でお前は、なのはにだけ甘いんだよっ！　私の書類のことは、重箱の隅をつつくみたいにネチネチ粘着するくせに！
……あーもう、それよりも！」
「はい、スバルとティアナの容態ですねぇ」
そこはぬかり無く、用意した資料を出す。
「スバルの方は、もう問題ありませんね。目立った外傷も無く、すぐにでも退院できます」
気になるのは、もう片方だが……
「ティアナは～……レリックの影響が懸念されるので、もうしばらくは入院ですねぇ。マリエルさんが、詳しいデータを取りたい、って言ってました」

管理局では初の事例となる、魔導師によるレリックの実戦使用。データを録らない手は無い。そういった意味では、ある意味、収穫があった。
「と、言いますか～……ぶっちゃけ、なのはさんにボコボコにされた外傷の方が、重症ですねぇ」
『うっ……』
びくりと、反応する。
「ダメですよ、なのはさぁん。オンナノコの顔面をタコ殴りにしちゃ……」
それはもう、力いっぱい殴った。親の敵のように踏みつけた。
「眼底骨折寸前だったそうですよぉ？　肋骨は完全骨折二か所、内臓にもダメージがあって、歯は三本も折れて……」
……ボコボコところか、半殺しである。
「さぁて……どうしてくれようか……」
はやてが、じっくりと処分を検討し始めたあたりで……

――ビーーー

げて行く。
今回ばかりは、ヴァイスも文句を言い出せない雰囲気だった。
「えーーー……間もなく現場上空。お降りのお客様は、お忘れ物の無いよう、お手回り品をお確かめ下さいー……」
『わかっていますッ!!』
「うへっ……」
八つ当たりでヴァイスに当り散らし、なのはは降下の準備をしていく。
乱暴に支度を整える。
『降りますッ!!』
ハッチを蹴破るように、降下した。

目の前には、雲霞の如く群れるガジェット。このルートを直進させては、市街地へ出てしまうだろう。
『あなたたち、運が無いですね……』
『ｓｅｔ　ｕｐ』
――ガキンッ。
降下から、即、滑空に入り……背負ったブツを、構える。
――８０ｍｍ榴弾砲。３７ｍｍ機関砲。
……大地に据える等をして運用する筈の、あからさまに過剰かつ違法な破壊兵器。それを、フローターフィールドで重量を軽減し、その身に装備していた。
『今日の私は、……機嫌が悪いッ!!』
榴弾・装填。照準。そして……
――……ズドォオオオオオオンッ!!
着弾。敵の一軍は、瞬く間も無く、鉄屑となり、海洋へ没した。
『……!!』
強大な反動を、スラスターによる神業的な姿勢制御で相殺。そして、砲身の温存のため、もう片方……３７ｍｍ機関砲を、薙ぎ払った。
――ド、ド、ドォオオオオンッ!!!
一撃、一撃が、山なりの軌跡を描きながら、敵機を粉砕していく。空

対空戦闘であるからこその、容赦の無さであった。
『まだまだぁあああああああああっ!!』
――――――ドガガガガガガガガガァーーーーーーッ!!
……敵機が有人機ではなかったことが、幸いである。

◆▪◆　◆　◆

「うっ……」
ティアナは、目を覚ました。
「あっ……ティア、起きた？」
隣のベッドでは、身を起こしたスバルがこちらを覗いていた。
「気分どう？」
「……最悪よ。言わせないで」
「そう……」
だが、こうして悪態がつけるなら、マシなのかもしれない。
「えーっと……それと、さ……これ、伝言なんだけど……」
「……」
言いよどむスバル。ティアナは、その伝言の内容に、心当たりがあった。
「……処分の件？」
「……うん。起きたら、二人そろって、部隊長室に集合、だってさ」
部隊長直々の呼び出しである。
「……はぁ。行くか」
「でも、まだ痛むなら……」
「え？　何が。」
ほら、と、スバルが、部屋に据え付けられていた鏡を指し示す。顔を向けたティアナは。
「なっ……なんじゃこりゃあああああ!!?」
……顔の半分を包帯でグルグル巻きにされた、スプラッタな姿に悲鳴を上げた。

「い、いたた……！　口の中、痛い……！」
「ああもう、だから言ったのに……歯が折れて、口の中裂けてるんだから」
「お、思い出したら……顔全体と……あと、お腹も痛いわ……」
「えーっと……い、医務官呼ぼうか？」
今更になって、ダメージを認識したらしい。
しばらく痛みにあえいだ後……
「……スバル、」
相棒の名を呼んだ。
「なに？」
きょとん、と聞き返してくるスバルに、ティアナは。
「――――ごめんなさい」
深々と、頭を下げた。
「――――うん、いいよ」
スバルは、からっと笑い……それを、受け入れた。
二人は、揃って病室を出て、部隊長の部屋へ向かった。
「あ！　おい、大丈夫か!?」
「ひどいかお」
「なんだか語弊がありますわね……」
途中、エリオ、キャロ、セリカの三人が、二人を見て駆け寄ってきた。
「もしかして……みんなも？」
三人、頷く。どうやら、呼び出されたのは、フォワードチーム全員らしい。
「あとでなおしてあげるね」
「……ありがと。お願いするわ」
この顔のまま、出歩くのは厳しい。
「んで、大丈夫なのか？」
エリオが、ぶっきらぼうにスバルへと聞く。
「あはは。もーぜんぜんオッケー。ありがと」
「うわっ、おい、やめろって！」

スバルは、そんなエリオの髪の毛をもみくちゃにする。
「なんだか、こういうのも久しぶりですわねぇ……」
ほんの一週間程度だったはず。だがそれでも、こうして和気藹々としているのが、随分久しぶりのことのように思えた。

「おう、来たか」
部隊長の執務室に入った5人を出迎えたのは、はやて、フィアット、それに、ヴィータだった。
「あ……ヴィータ教導官。先日はお世話になりました」
セリカが、ぺこっと頭を下げる。
「いや、こっちこそ。敵のジャミングに気付かなかったら、全滅してたぜ」
どうやら、何かの縁があったようだ。
促され、座る。
「……それでは、始めます」
フィアットが口火を切った。
「――高町教官について、あなた方は、どう認識していますか？」
「どう、とは……？」
「正直な感想で構いません」
そう言われ……
「厳しい人」「怖い人」「おっかない人」「じんがい」
……最後の一言は、聞かなかったことにするが、ほぼ共通の認識だ。
「あー……やっぱそういう認識なんだな」
ヴィータは、あきれ半分、納得半分の様子だ。
「あんなんだから、教導隊の連中も、放っておけなかったんだろうなぁ」
「え？　でも、高町教官は……」
教導隊に馴染めず、出奔したと言っていたが……
「逆だ、逆。全員が全員、なのはに構いすぎるもんだから、逃げちまったんだよ」

実は、可愛がられていたらしい。
「アタシは最後まで、残るように進めたんだけど……最後は、喧嘩になっちまってなぁ」
ばつが悪そうに、頭を掻いた。
「誤解されることもありますが、なのはさんは、とても優しい方なんですよ」
フィアットが、その言葉を継ぐ。
「……だから、厳しくなってしまうんです」
ちら、とはやてを見て……頷くのを了承と取り、話をする。
「――なのはさんは、二度、大切な人を亡くしています」
「!?」
目を剥いた。
「詳しくは話せませんが……その過程で、左腕と、左目と、声帯を損傷し……所属していた部隊の仲間を、多く失いました」
ヴィータが、辛そうに俯いた。
「アタシも、はやても、フィアットも、その部隊に所属していた。……縁あって、アタシは教導隊に、はやてたちは陸士１０８部隊に拾われて、馴染めたけど……なのはにとって、教導隊は、居場所じゃあなかったんだろうな」
重大な後遺症。確かに、訓練中も眼帯をしていたり、それどころか、大威力の魔法も、使う場面を見たことが無かった。
「本来なら、現役を退くどころか、長期療養をしなければならない状態なんです。……もちろん、今現在も」
「いま、も……」
では、なぜ、今も現役を貫くのか。なぜ、そんな身体を酷使してまで、教官として在るのか。
「私が誘った、っていうのも、確かにある。だけど、拒否することもできたんだが……あいつ、お前らの入隊試験を見て、なんて言ったと思う？」
あの時、なのはが何を思っていたのか……

「――『心配だったから』、だとさ」

「……！」

危なっかしいスバルたちに、かつての仲間を重ねたのだろうか。

「特に……ティアナ。あなたのことを、とても気にかけていましたよ。どう伸ばせばいいのか、わたしにまで相談をして……嫌々ながら、教導隊にも意見を仰いだり、マリエルと、デバイスの設定のことで深夜まで議論したり……自分の技能を、現時点で、どこまで教えておくべきか、真剣に悩んでいました」

恥じ入るように下を向くティアナ。

見下されてなど、いなかった。ただの、ティアナの被害妄想だったのだ。それどころか、誰よりも、想われていたのだ。

「……」

視界がぼやける。気丈に、零さないようにしていた涙が、溢れてきてしまう。

「いいもん見せてやるよ」

と、はやてが、パスケースの裏に、大事そうに仕舞っていた写真を取り出す。

いまどき珍しい、印刷された実体の写真だ。

そこには、見知った顔と、見知らぬ顔が、入り混じっていた。

「あれ……？　これ、アルフじゃね？」

「ってことは、となりのばかっぽい女の子……フェイトさん？」

「これ、ちっさいクロノさん!?」

「よく見れば、こちらはリイン曹長ですわね」

「……あのー、では、こちらの車椅子の方は、」

「私だ」

「へ、へー……」

この、睨まれたら石化しそうなほど凄まじい目つきの悪さ。確かに、はやてだ。

「真ん中のそいつ」

真ん中を見る。そこには、やや筋肉質な青年が、からっと笑ってい

た。……黒髪の少女が、肩車のようにしがみついているのが気になった。
「……の、右横」
つつ、と視線を移動させる。そこには、その青年の手を握り寄り添う、栗毛の、可憐な少女が写っていた。緊張気味なのか、ぎゅっと彼の袖を握っている姿が、また愛らしい。
「うわぁ……かわいい……」
スバルは、頬を紅潮させて見とれている。
「それ、なのはだぞ」
「「「「　えっ!?　」」」」
この、可憐な少女が……あの、スレた感じの鬼教官……？
正直、髪の色くらいしか、共通点が見つからない。
「うっそだぁ。だって、私、今よりちょっと前のなのはさんに会ったことあるけど、こんな雰囲気じゃ……」
「……ああ、そういやそうだったな」
「……（あれ？）」
そこで、何かが繋がりかける。
なのは。
大事な人を『二度』亡くした。
前に所属していた部隊。
と、いうことは。あの、カレンという少女は……

――ピピピッ
「――――あら？」
と、フィアットの手元に、連絡が入り、スバルの思考は中断された。
「海洋保安局からですねぇ。えっと……あのー、部隊長」
困ったように眉根を寄せた。
「どうした？」
「……なのはさんと思しき人物が、ブイを次々に破壊していると」
「何をやっとるんだあいつは……」

「あ、あのっ！」
ティアナは、椅子を蹴立てて立ち上がる。そして……

◆・◆　◆　◆

――パァンッ!!

『うー……うー……!!』

埠頭に座り、足をぶらぶらさせながら、拳銃を乱射するなのはの姿があった。

苛立たしげに……というか、癇癪を起こした幼児のように、がちゃがちゃと乱暴に拳銃をリロードする。

『何よ、何よっ！　ティアナの馬鹿！　バカッ！　ばーか！』

――パンッ！　パンッ！　パンッ！　スコンッ！

……近く見積もっても、１５０メートルは離れたブイを、ただの９ｍｍ拳銃で的確に沈めるのは脅威の腕前だが……どう考えても使い道を間違えている。だが今は、相棒も何も言わず、見守っている。

『人の気も知らないで……！　ああもうムカつくー！』

乱暴に煙草をくわえ、乱暴に着火する。もくもくと紫煙が立ち込める。

『このっ、このっ！』

――パンッ！　パンッ！

そしてまた、弾倉をリロードしようとして、既にポケットが空なことに気付いた。

――パァンッ!!

『!?』

予想外の方向から聞こえた銃声に、びくっと振り向く。そこには……

『……ティアナ』

「……」

同じく拳銃を構える、ティアナの姿があった。

『――何か用ですか？　私はあなたと話すことなんて、何もありませんが』
「……別に、何も」
そう言いながらも、なのはの隣に腰を下ろす。
『な、何ですか……』
だが、退いては負けるとでも思ったのか、その場に留まる。
「これ、今更ですけど、いい銃ですよね」
『はい……？』
「実包も撃てて、魔力弾も撃てて、集弾性も良くて……」
『それは、そうでしょう……マリエルが、作ったものですから』
「――――でもこれ、教官の設計ですよね？」
シン……と、なのはが沈黙した。
『……何のことでしょうか』
「まぁ、ＡＩとか、デバイスとしてのソフト面は、マリエルさんでしょうけど……銃そのものは、どう考えても」
『……』
「しいて言えば、勘ですけど。この銃にだけは、教官の面影を感じました」
『……だったら、何ですか』
嘘がばれた子供のように、唇を尖らせるなのは。
「――ありがとうございます」
なのはに、深々と頭を下げた。
なのはは呆気にとられ、ぽろっと煙草を取り落とした。
『なにを……』
「あと、ごめんなさい。教官の、昔の事……部隊長から、聞きました」
『……』
ぴたり、と固まった。
「……私の兄、ティーダ・ランスターは、３年前の事件で、失踪しました」
ぽつぽつと、語りだす。
「自慢の兄だったんです。両親の代わりに、育ててくれて……その傍

ら、執務官試験にも合格して……いくつもの事件を解決して、表彰される兄は、私のヒーローだったんです」
「でも……クライスラー事件で失踪した兄を、当時の指揮官が、こう罵ったんです。
――『現場から失踪するような腰抜けに、事件を任せるべきではなかった』……と」
……それから。
「悔しくて、悔しくて……兄は、腰抜けなんかじゃない、って、馬鹿にする奴らを、見返してやるんだ、って……でも、私には、兄ほど優れた才能は無くて、歯痒くて……」
そして、手軽に達成感を味わえる、あの情報屋の倉庫へ、入り浸るようになったのだ。
「――でも、今回のことで、気付きました」
なのはは、じっとティアナの顔を見ている。
「私は、超一流の、万能無敵のエースにはなれません」
ともすれば、諦めにも思える言葉。だが。
「だから、私は……自分の得意分野だけは、誰にも負けないよう、伸ばすことに決めました」
誰よりも優れたナンバーワンではなく……一つのことを極める、オンリーワンになる。
それが、ティアナの出した答えだった。
「だから――」
決意を滲ませ、なのはの目を、まっすぐに見返す。
「――もう一度、チャンスを下さい。私に、もっともっと、射撃を、戦い方を教えてください。お願いします」
もう一度、頭を下げた。
一分、二分……と、時間が過ぎていく。
――ことんっ
……と、ティアナの前に、何かのケースが置かれた。
「……？」
『開けてみなさい』

言われたとおり、開けてみると……
「これ……カートリッジ？」
そこには、見慣れない形のカートリッジが六発、丁度、クロスミラージュの弾倉と同じ数、並んでいた。
『新型の、チャージング・カートリッジです』
「チャージング……？」
『事前に、任意の魔法を込めて、発砲の際、開封して使うことが出来ます』
感慨深そうに、指でつつく。
『……随分と進歩しました。試作型は、どれか一つしか、使えませんでしたから』
しかも、エース級の魔導師にとっては、無用の武装だ。いちいち事前に準備をせずとも、その場で、タスクの一つを、その魔法に割けばいいだけなのだから。
つまりこれは……魔力の最大値が低く、タスクも多くない……そう、ティアナのような魔導師にこそ、最大の効果を発揮する装備なのだ。
『……試験に合格したら、これを渡すと決めていました』
「教官っ――！」
ティアナは、感極まって、なのはを抱きしめた。
『え。うわ。おい。こら。やめ』
もぞもぞと身をよじる。ぱたぱたと振れていた手は、やがて、諦めたように、ティアナの背に回される。
『――励みなさい』
シンプルに、一言。
「はい、教官――！」
『そ、それと……』
くいっと離れる。なのはは、不自然なほど沖合いへ顔を向け、揃えた膝に、顔を埋める。
『わ、私のことは……『なのは』、と、呼んでも、いいんです……よ？』

……埋められた顔は、見たことが無いほど、真っ赤だった。
「……」
『……』
「……な、」
『……やっぱりナシです』
「ええっ!?」
梯子を外され、ティアナが素っ頓狂な声を上げる。
『……ダメです。ナシです。無かったことにしてください』
「いいえっ！　こうなったら、意地でも呼ばせて頂きます！」
『だ、ダメと言っているでしょうに！』
「ダメっていうのがダメです！」
『何ですかその理屈は！』
互いに真っ赤になりながら……どこか、じゃれるように、がなり合う。
『聴きません！　何も聴こえません！』
耳を塞いでうずくまる。なんとも珍妙な姿だった。
「大人しくしてください！」
そんななのはの両手を掴み、引き起こすティアナ。
『ひぃっ……』
最早、逃げ場は無く……
「――なのはさんっ！」
『は、はいっ！』
びっくりしすぎて、思わず素で返事をしてしまった。
「――これからも、よろしくお願いしますっ！」
ティアナの、全力の挨拶に、なのはは……根負けした。
『――頑張ろうね、ティアナ』
……それは、なのはが初めて、敬語の防壁を、取り去った会話だった。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第七話

ざん……と、静かに波が打ち寄せる埠頭。
なのはと、ティアナ。二人揃って、足をぶらぶらさせながら、水平線に浮かぶ対岸の街明かりを、ぼうっと眺める。
「あの、なのはさん」
『何ですか？』
落ち着いた二人は、また、ぽつぽつと会話をしていた。
「その……昔の事、聞いてもいいですか？」
『――、』
ぴくっ、と、なのはが動きを止める。しばし、逡巡して……ポケットから、いつもの煙草を取り出した。だが、火は点けない。気分的に、落ち着くためらしい。
『答えられる範囲でしたら、答えましょう』
これまで、家族と友人以外の他人へ話したことは無いのだが……ティアナは、特別のようだ。
「あの、写真を見ました。昔のなのはさんや、部隊長が、一緒に写っている」
なのはは、黙考し……あぁ、と、思い出した。
『カメラ趣味のあった知人が、折角だからと、撮ってくれたんです』
「それで、あの……これが、『答えられる範囲』かどうかは、分からないんですが……」
『……言ってみなさい』
いやな予感でもしているのだろうか。少々、渋るような気配があった。
「真ん中に写っていた人は……誰なんでしょうか？」
『――――』
動きが止まった。
『……』
長い、長い沈黙。答えるべきか、答えざるべきか。二つの選択の板

ばさみで、身動きが取れなくなってしまったようだ。
『――マスター、お嫌でしたら、無理をなさらず』
見かねたレイジングハートが、助け舟を出した。
『――――いや、いいよ。ティアナになら、ちょっとだけなら、話しても』
しゅぼっ……と、煙草に火を点け、ふぅ……と少量の煙を吐く。
『どんな人だったか、と言いますと……』
宙を眺め、記憶のかけらを、手繰り寄せる。
『――――太陽のような人でした』
端的に……そして、的確に、『彼』を言い表した。
陽だまりの様に暖かく、ぽかぽかしていて……ずっとそこで、まどろんでいたくなる、そんな人。……そして、彼を中心にした周囲には、いつも誰かが、何かが、引き寄せられていた。そして、最期は……それこそ、恒星のように。
「……」
それ以上を詮索することは、ティアナには出来なかった。ただ、彼が……なのはにとって、唯一無二の存在であるということだけは、伝わった。
『彼』を語るなのはの表情は、相変わらずの無表情だったが……柔らかく、暖かい気配を漂わせていた。
『大事な人を失うのは、とても、とても辛いことですね』
「……はい」
太陽を失った惑星たちは……冷え切って、バラバラになってしまうのだ。下手をすれば、二度と、関わりあえなくなるほどに。
『だから、コンビパートナーが、どうでもいいなんて――そんな悲しいこと、言わないで下さい』
命令……ではない。一人の経験者としての、懇願だった。
「――――はい」
ティアナは、神妙に頷いた。
『さ、戻りますよ』
ぱんぱん、とズボンをはたき、砂を落とし……拳銃に、ゴム弾を装

填した。
『そこのお前たちも』
――パンッ!!
おもむろに、防砂林の一角へ向けて発砲した。
「うひゃっ!」「わっ、バカ!!」「押さないで下さいまし!」「むぎゅっ」
どててててっ……と、将棋倒しのように、フォワードチーム（と、セリカ）が、転げ出てきた。
「あ、アンタたちいいいい……!!」
ティアナは、顔を真っ赤にして、ぷるぷると震える。
見られた。泣いているところも、なのはに抱きついているところも、全部。
『非殺傷設定ですよ』
さらっとアドバイスをした。
「わかりました!」
だが、それはつまり……死なない程度に、ボコボコにするということで……
「きゃー!!」「ぎゃあああ!」「ひぇえええええっ!!」「あわわわわ」
「待てやオラァ!!」
……鬼のような剣幕で追い立てる。
――きゃーきゃーと逃げ回るのも、それを追い掛け回すのも、同じチームの仲間たち。
『うん……うん……』
なのはは、ぼうっとした顔で、遠巻きにそれを眺め……
『――こういうのも、悪くないですね』
……口元だけで、薄っすらと、微笑んでいた。
◆・◆　◆　◆
それから数日間、比較的、平和な日常が戻った。
――海上保安局への謝罪と、破壊したブイの補填に忙殺されたフィアットが、アザラシのように廊下に打ち上げられていたが、誰も気にしなかった。

そして。
中庭の、特別棟。マリエルの研究室。
「お、お世話に、なりました……」
その扉を開け、ゾンビのような歩みで、ティアナが数日振りに姿を見せた。
……レリックの実戦使用のデータを、ティアナの身体から、事細かに採取していたらしい。
「や、やっと……寝られる……」
……不眠不休だった。
「あ、ティア!!」
一般棟の廊下へ生還を果たしたティアナを、スバルが出迎えた。
「寝る……ロビーのベンチで……一番近い……」
「ダメだよ!?」
ぐいっと引っ張られたティアナが、不機嫌そうに唸り声を上げた。
「もーちょっと頑張って！　部隊長が呼んでるんだって！」
「んえー……？」
「ほら歩いてー！」
途中、エリオたちとも合流し、半ばスバルに背負われるような形で連れて行かれた。
「ま、簡単に言うとだな……休暇をやる」
出揃ったフォワード陣に、はやてがさらっと言った。
「合格の褒美だ。次の任務まで、準備がしばらく掛かる。その間、自由に過ごせ」
「「「「……」」」」
フォワードたちは、最初、何を言われているのかガサッパリ分からず、互いに顔を見合わせて困惑していた。
「あ、あの、休暇って……」
「次の任務まで、って……」
それだと、数日間は纏まった休みが取れる計算だ。
「――なんだ、いらんのか。じゃあ、シグナムかヴィータあたりに……」

「「「「「「いりますっ!!」」」」」」
と、早くも鬼のトレーニングを課そうとしてくるはやてに、全員で詰め寄った。
「よぉおおおっし！　休暇だ!!」
……ティアナが、先ほどまでの眠気など何のその。２時間ほどの仮眠を摂っただけで、腕をグルグル回して、復活した。
「……」
……が、スバルは、何かを考えている顔だった。
「スバル？」
ティアナに声を掛けられ、ハッと我に返る。
「……新しい靴でも買いに行こうかな。あそこ、新作のスニーカー出したんだよね」
「確か、郊外のモーテルに出店してたわよね」
大体、ここから６０キロ程度の距離だった。
「久々に、バイクでも乗るか」
「あはっ、ほんと久しぶりだ」
あの夜、没収されて以来か。車両そのものは、機動六課が接収した、と報告を受けている。格納庫へ行けば、二台ともあるだろう。
――と、思っていたのだが。
「何で二台とも無いのよッ!?」
ＣＢＲも、スクーターも、綺麗サッパリ無くなっていた。
「遅かったな、ティアナ」
と、ヘリの整備をしていたヴァイスが、ぬっと顔を出した。
「ヴァイス！　あんた、どっか隠したんじゃないでしょうね!?」
八つ当たりのようにヴァイスに詰め寄ったが、ヴァイスは首を横に振った。
「一時間くらい前、セリカがメット片手に持ってったぞ」
「――お前かぁあああああああああ!!」
……どうやら、先を越されてしまったらしい。
「あ、あの野郎……!!　いつの間に合鍵なんて用意しやがった！」
「シエラが仮釈放されたんで、会いに行くんだとさ」

「知るかっ！　……っつーか、もう一台は!?」
　もう一台……大体、二人乗り専用になっていたスクーターは。
「エリオとキャロが街まで遊びに行くと」
「――お前らもかぁあああああああああっ!!?」
「いや、というか、エリオって無免許……」
　仲が良いのは結構なことだが……
　聞けば、ゼルビスやコリン、ヤオといった年長組も、クルマを使って出かけてしまったらしい。
「あー、くそっ！　アシが無いんじゃどこにも行けないっつーの！」
　ガシガシと頭をかくティアナ。……と、突然に。
『――ティアナ、スバル？』
「「　はいっ！　」」
　……条件反射で、直立不動で返事をしてから気付いた。
「あ……なのはさん」「教官？　何でドッグに……」
　言いかけて、なのはの服装が、いつもと違うことに気付いた。いつもは、上下の迷彩服にベスト、ブーツという装いなのだが、今日は、地味な紺色の作業ツナギを着ている。ホルスターに収まっているのも、拳銃ではなくスパナとレンチだ。
『困っているのですね？』
「……はい」
　困っているといえば、困っている。だが、それを教官に言ったところで……と、二人は思った。だが……
『困っているのですね？』
　……何故、二度聞いた。こくん、と頷く二人。
『よろしい。では行きましょう』
　――がしっ。ぐいぐい
　……ティアナとスバルの手を掴み、ずんずんと歩き出した。
「えっ、えっ……」
　迷い無く、二人を引っ張っていく。それも、異様なハイペースで。
『行きますよ。ほら急いで。さぁ急いで』
　――ぐいぐい。ずりずり。ずりずりずり。

やがて、二人はなのはに引きずられ始めた。
「ちょ、なのはさんっ!?」
「歩けます！　自分で歩けますってばあああぁぁ……
――ずりずりずりずり。
……強引に、隣の格納庫へと拉致されていった。
「……」
それを、傍を通りがかったクロノとヴィータが見て、何ともいえない表情をしていた。
「……似てきたなぁ」
「……ああ。似てきた」
どこぞの誰かに。

……どどん、と目の前に鎮座する、巨大な漆黒の車体。
「……」
呆気にとられたように、車体を食い入るように見つめる二人。
「あの、これは……」
「ん」
期待半分に、恐る恐る聞くティアナに、なのはは、すっとキーを差し出した。
『……特別ですよ？』
……その本当の意味が分かる者が、果たしてどれだけ居ただろうか。このバイクは……なのはの友、カレンの愛機にして、形見。ＣＢＲ１１００ＸＸなのだ。
それを、貸し与えるあたり……なのはが、いかにティアナたちへ心を開いたかが分かる。
『マフラーを替えたんですが、試乗する時間が無いので、あなた達に試験運転を任せます。あ、でも、転ばないでくださいね。そこまで頑丈には出来ていませんので』
あれやこれやと、照れ隠しのように説明するなのは。
「は……はいっ！　ありがとうございます!!」

まさか、あの教官がここまでしてくれるとは。
ぐるっと中を見回せば、あるわあるわ、バイクが山ほど。
「（ＣＢＲ６００ＲＲ……色違いが二台、ＧＰｚ９００ｒ、Ｖ―ＭＡＸ、ＲＶＦ……）」
ジャンルもちぐはぐな、バイクの山。
『……私のは、一台もありませんよ』
その視線に気付いたのか、なのはは、遠い目をした。
『全部大切な、預かり物です』
……一番奥。布を掛けられた一台に目をやりながら、そう言った。
僅かに露出したサイドカバーから……『ＺＺ―Ｒ』という掠れた文字が、物悲しげに、覗いていた。

――キュルルッ、キュルルッ……
「……あれ？」
セルスターターを回すが、回るだけで、エンジンが掛かる気配がしない。
『お前は、エンジンの掛け方も知らないのですか……』
困惑する二人に、なのはは、呆れて助言をした。
『チョークを引いて、スロットルをほんの少し開けながらセルを回しなさい』
「チョー……ク？」
謎の装置の説明をされた。
『左スイッチボックスにレバーがあるでしょう？　それです』
言われたとおり、レバーを目いっぱい引いて……アクセルを、目分量で『かぱっ』と開けながら、セルスイッチを押し込む。
――キュルッ、バォオオオオオオンッ!!
「うわァあっ!?」「ひゃあっ!?」
耳を劈く轟音に、びくっと身を竦ませる二人。
『馬鹿。アクセル開けすぎです。チョークを戻しなさい』
あたふたと言われたとおりにすると、轟音は収まり、ドッドドドッ……という、不安定なアイドリングへと変化する。

『安定するまでは、そのままにしておきなさい。止まりそうになったら、軽く煽ってやるといいでしょう』
言われたとおり……一分もすると、アイドリングは綺麗に安定した。
『では、行ってらっしゃい』
なのはは、いつもの、何を考えているのかいまいち分からない顔で、ひらひらと手を振った。
「「行ってきます！」」
敷地の外へ出て、幹線道路へと差し掛かる。
バイクは、重低音を鳴らしながら、驚くほどスムーズにその巨体を走らせていた。
「……」
跨っているのは、未知のバイク。目の前には開けたストレート。遮蔽物、無し。
「……」
……うずうずしてきた。飛ばしたい。アクセルをガバッと開けてみたい。
「……ちょっとだけ、なら」
どこまでも誘惑に弱い奴だった。
そして……ぐいっ。と、アクセルをラフに開け……
――……ファォオオオオオオオッッッ!!!
「うァぎゃあああああああああああああああッッ!!?」
ガクンッ……と、強烈な加速に、前輪がポンッとパワーリフトし、振り落とされそうになる。しがみつくと同時、前輪が着地。猛烈な加速が、ティアナを襲った。
――ァァァ

「あーーーーはははははははははは!!　さいっこー!!!」
タンデムシートの上で、スバルがケラケラと笑いこけている。アトラクションか何かと勘違いしているのではなかろうか。
「、！　……!!」
冗談ではない。ティアナはアクセルを緩め、断続ブレーキで、緩やかに減速させた。
「ひー、ひー……!!」
「えー、もう終わり？」
息も絶え絶えなティアナに、スバルが物足りなさそうに言う。
「ふ、ふざっけんな！　何よコレ!?」
ピーキーすぎてお前にゃ無理だよとか、そういう次元の話じゃない。
「乗り辛いの？」
「あーもう、死ぬかと思った……」
速度表示は、アナログメーターで１６０ｋｍを維持している。その速度でいて尚、ハンドルには些かのブレは無い。……セリカに強奪された方のＣＢＲには、やや大振りながらも電子制御式ステアリングダンパーが装備されているというのに。高速域での安定性は、同等以上だ。
「すげーわ、これ。アナログが極まっちゃってる。……これが、一切の電子操作補助が備わっていない旧式の性能？　あの人の出身世界、どーなってんのよ」
そして、のんびりと走る……のだが。
――ファンファンファン!!
その『のんびり』は、制限速度など軽くチギッてしまっていた。
「!?　ヤバいっ!!」
背後に赤色灯が迫る。警邏隊だ。速度超過の罰は……最悪で、車両没収！
「なのはさんに殺されるっ!!」
捕まったところで、痛くもかゆくも無いが……なのはの怒りを買えば、どうなるか。身をもって知っているティアナは、生命の危機を感

じた。こうなれば、道は一つしかない。
「スバル！　ナンバー取って！　まだギリで撮影はされてない！」
「お、おっけー！」
　べきょっ……と、ナンバープレートを折り取る。それを、ジャケットの胸元へ仕舞いこむ。ヘルメットは、二人ともフルフェイス。ミラーシールドだ。
『前のバイク、止まりなさいッ!!』
　警邏車両のスピーカーから、女性と思われる怒声が聞こえる。しかし、はいそうですかと止まれば、自分はなのはに殺されることになる。
「……あれ？　この声……」
「――――振り切るッ!!」
　意を決して、アクセルを開けるのだった。
　――――ファォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!
　速度計の針が、ばね仕掛けのように、あり得ない勢いで上昇する。ぴったりとタンクに伏せ、身体を、車体のウインドプロテクションの内側にコンパクトに畳む。
「ひぃいいいいっ!!」
　５秒もせずに時速２５０ｋｍを易々と突破！
「ま、まだ加速するってぇぇぇぇぇぇ!?」
　そして、とうとう……
「さ、３００ｋｍ!!」
　前方。小さな黒い点のようなものが、あっという間に視界に広がる。それは、遥か前方を走っていた一台の貨物車両だった。
「やっ……やばっ!!」
　相手方も、８０ｋｍやそこらで、そこそこ高速で走ってはいるのだが……こちらは３００ｋｍを超えようとしている。簡単に計算すると、２２０ｋｍで静止物に突撃している格好になる。
「ブレーキは……、」
　……この速度域でフルブレーキを掛けると、どうなるか。それが分からないティアナではない。まぁ実際は、この車種特有の連動ブレー

キで、ある程度は安全に減速が出来るのだが、知る由もなかった。
「このォっ!!」
ぐりっ！　と体重を移動させ、車線の変更を試みる。
――くいっ
……が、何とも意外なことに、車体は拍子抜けするほどにスムーズに曲がり、前方車両を回避してのけた。この車格、この速度で、このハンドリング。
「あ、ありえないいいいいーーーーー!?」
背後の警邏車両は、追跡を諦めたらしく、遠ざかっていった。

◆▪◆　◆　◆

……路肩へ停車した警邏車両から、二人の女性局員が降り立った。
「……今の……スバル？」
真夏でも長袖。腰までのロングヘアがトレードマーク。
「……これは、困りましたね」
そしてもう一人は、対照的にショートヘア。
……ギンガ・ナカジマと、シャッハ・ヌエラ、だった。

◆▪◆　◆　◆

「うひー……」
「なんとか……撒いたみたいね」
買い物はキャンセルし、主要な道路を迂回し、コソコソと幻術で身を隠しながら帰ってきたのは、日が沈んでからだった。
――ドロロロロ……
心なしか、バイクの排気音も、どこかお疲れ気味の様子だ。
『おかえりなさい』
格納庫では、いつもの迷彩服に着替えたなのはが出迎えた。
「た、ただいま戻りました……」
二人とも、ヘロヘロだった。
『随分、走り回ってきたようですね』
トリップメーターの距離を見たなのはが、そう言った。
『楽しかったですか？』

上機嫌だ。
「え、ええ……とっても刺激的でした……」
『そうでしょう、そうでしょう』
うんうん、と頷く。
『機会があれば、また別のにも乗せてあげますよ。Ｖ―ＭＡＸの加速は、また違う趣がありましてね。ＧＰｚの、大雑把なエンジンの回り方もまた良いものです』
（……いえ……もう……カンベンしてください……）
……などと、上機嫌ななのはに、言えるはずも無く。
「はい……機会があったら……」
……と、お茶を濁すのだった。
その後、インプレを述べたりした後、部屋に戻った。
「ぐぅ……」
疲れが溜まったのか、泥のように眠るティアナ。
スバルは、ベッドに腰掛け、右手を握ったり、開いたり……
『どうした？』
マッハキャリバーが、気になったのか話しかけてきた。
「いや……あのね、ちょっと、愚痴になっちゃうんだけど……」
『構わぬ。話してみるがいい』
「今日、さ。久しぶりの、休暇だったじゃん」
『うむ』
「訓練中、いつも、考えてたんだ。ああ、休みたいな、って。遊びに行きたいな、って」
『……』
その願いは、図らずも、叶ってしまったのだが……
「正直、あんまり楽しくなかったんだよね」
きっと、無事に買い物を済ませていたとしても、同じだっただろう。
「あの、試験の日のことが、ずーっと頭にあって」
本気のなのはと対峙し……完封され、完敗した。
「このままじゃいけない、って。でも、どうしたらいいんだろうか、って」

最も得意とする分野の白兵戦で、その分野の専門でもないなのはに、一蹴された屈辱。
「……どうしようかな、私」
『鍛錬しか無かろう？』
……が、マッハキャリバーからの返答は、至極簡潔なものだった。
『幸いにも、しばらくは休暇、つまり、通常の訓練時間の全てを、己の鍛錬に費やせるであろう』
武の道に休み無し。……その言葉で締めくくったマッハキャリバーを手に、格納庫へと向かう。
「んじゃあ、えーっと……白い煙が位置の確認、黄色い煙が、作戦開始。赤い煙が、救援要請、黒い煙が、作戦失敗につき即撤退……で、いいんだよな？」
「いいんじゃね？　あんま増やしても覚えきれねーし」
遊びに出ていたはずのコリンたちが、前に言っていた、電子通信に頼らない通信方法の話し合いをしていて、ゼルビスは地道に車両の改修を行っている。ヤオもデバイスを分解し、丁寧に整備をしている。他を見渡しても、遊び呆けているものは、いなかった。
「高町教官」
『おや……スバルですか』
人伝いに居場所を探し当て、なのはを見つける。なのはは、芝生に腰を下ろし、訓練場をぼうっと見下ろしていた。無人……ではない。ヴィータが、新人の何人かへ、説明を行っていた。
『休暇だというのに、ヴィータに訓練を志願したそうですよ』
「……」
『まったく、物好きな……』
そうは言うものの、口調は優しい。自分だけではなかったのだ。そのことに少し、安心感を覚え……なのはに、向かい合う。
「あの……高町教官！」
『はい？』
「あの『技』を……私に、教えてください！」

なのはは、ぱちくりと、一つきりの目を瞬かせ、聞き返した。
『あの技……とは』
「あの……カウンター技です」
試験の際……自分を一瞬で戦闘不能にした、あの奥義。あれを極めれば……とは言わないが、それでも、戦い方の幅が広がることは、間違いない。なのはは、しばし目を閉じて黙考し……
『――駄目です』
熟考の末、拒否した。
『危険すぎます。あれは、ただ、カウンターを連続で放っているだけではないのです』
その原理でさえ、下手に教えてしまうわけにも行かない。あの技の発案者にだからこそ、身一つで使いこなすことが出来たのだ。その彼もまた、不用意な使用は極力控えていたほどの、自爆技。なのはでさえ、レイジングハートの助けを借りて、機械の左腕をフル活用し、ようやく再現できる程度なのだ。
「じゃ、じゃあ！」
ほぼ真正面から密着するほど、身を乗り出す。
『う……近い、近いです』
両手を突き出し、距離をとる。
「せめて、教官のいる領域にまで、連れて行って下さい！」
その技を抜きにしても、なのはは、スバルの遥か先を行っている。教わることは、それこそ山のようにあるだろう。
「お願いします、教官！」
『……』
ぐいぐい、押せ押せ……と、なのはの手を取って懇願しだした。
『……分かりました。稽古を付けてあげますから、手を離してください。リアルに腕がすっぽ抜けてしまいます』
根負けしたなのはが、羽織っていたベストと迷彩服を脱いだ。
『一つ、技を教えてあげます』
「はいっ！　よろしくお願いします！」
なのはは、半身に構え……何の変哲も無い、ストレートを繰り出し

た。それも、ひどく低速の、スローパンチ。それは、スバルの胸に、軽く、とんっ……と押し当てられる。
「……？」
これが、技……？　と、首を傾げた……次の瞬間。
――――ドンッ――――！
なのはの足が、地面に深くめり込み……押し当てられた拳が、グンッ!!　とスバルの身体を吹き飛ばした！
「!?　わぁっ!?」
どてんっ……と後ろに転ぶ。
「え……？　今、拳、完全に止まってて……え？」
目を回している。
『接触面に打撃を発生させました』
なんでもないことのように説明するが、スバルには全く意味が分からない。
『全体的に、打撃系格闘技の弱点は、密着状態からの有効打が繰り出せない、ということがあります』
確かに……スバルの使う格闘技の源流である、管理世界で広く使用されているストライクアーツにおける密着技というと、それは次の打撃へと繋げるため、もしくは脱出用……、要はオマケの扱いだ。完全に絞め技が決まってしまえば、それでほぼ勝負あり……ということも、珍しくは無い。
『今の技なら、拳といわず、密着した箇所であれば、どこからでも全力の打撃と同程度の威力を出すことが出来ます。今は加減しましたが、多分、あなたの膂力で行えば、雑魚ガジェットくらいなら簡単に抜けますよ』
ファンタジー世界の中国拳法で言うところの、発勁だ。
「す……すごい！」
月並みな感想を口にし、目を輝かせる。
「どうやるんですか!?」
これを覚えることが出来れば、地味だが着実な進歩になる。
『……さぁ』

「さぁ、って……」
……本気で、分かっていないようだった。多分、『やっているうちに覚えた』という類の、参考にもならない言葉が出てくるに違いない。
『ま、身体で覚えればいいでしょう』
「……えっ」
じりっ、と後ずさるスバル。それを、ちょとウキウキした様子のなのはがガッチリと確保する。
『さ。始めましょうか？』
「いえ、いいです！　やっぱりいいです！　何でちょっと楽しそうなんですか!?　いやぁあああー!!」
またしてもずりずりと、病院を怖がる飼い犬のごとく、なのはに引きずられていった。

――ブロロロロロッ
ある昼下がり。真っ白い軽トラックが、敷地内にやってきた。
「？　なんだありゃ」
好奇の目が集まる中、がちゃっとドアを開けて出てきたのは……
「たっだいまー！」
いつも適当に脱ぎ散らかしているであろう、皺の寄った執務官服の、フェイトだった。そういえば、出張中という話だった。
「あのー……フェイトさん」
ボブカットの少女……ヤオが、フェイトが乗り付けてきた軽トラックを指差した。
「……何ですか、その変なクルマ」
「へ……」
フェイトは、笑顔を凍りつかせ、慌ててヤオに詰め寄った。
「ヘン!?　ヘンって、ボクのサンバーが!?」
「はい……すごく、変です」
「がーん……」
……どうやら、ガチで愛車らしい。騒いでいたからか、他の隊員たちも、わらわらと集まってきた。

「ちっせー」
「頭つっかえそう」
「うわ、鉄板むき出しだぜ、これ」
「ぜってー安全基準クリアできてねーだろ」
散々な言われように、フェイトは、開き直って、得意げに無駄に大きな胸を張った。
「ふふーん。のったことないキミらには、わっかんないもんねー！」
――――イラッ
……そのとき、隊員たちの心は一つになった。
『ウゼェ』……と。
「おいおい、何の騒ぎだよ」
……と、狙い済ましたかのように、六課のドライバー、ゼルビスがやってきた。
「おっ、ゼルビス。いいとこに来た」
「あれ見てよあれ」「あぁ？　……なんだ、あのちんちくりんは」
「そうそう。あのちんちくりんをさぁ……」「ほうほう」「……な？」
「……楽しそうじゃん？」
後ろを向き、クケケケケ……と、邪悪な企みをする。
まずは、癖毛の女性局員……セラがフェイトの気を引く。
だが、相手は腐っても執務官。簡単な陽動には……
「フェイトさーん！　クッキー焼いたんですけど、食べますかー!?」
「え、ホントー!?　わーい！　たべるたべるー！」
何の疑いも無く、たたたたーっ……とセラに走り寄っていった。
……現役執務官である。管理局の人手不足は、深刻かもしれない。
……フェイトを菓子で釣り、気を引いている隙に、ゼルビスが、窃盗団もかくやという素早さで、軽トラに乗り込む。そして、付けっぱなしだったキーを捻り、イグニッション。
――シュルルルッ……ボウッ！
「はーいフェイトさん、チョコチップですよー？」
「わーい！」

――ブロロロロロォッ……
「……って、ぁあああぁあああぁあああああああーーーーー!!!?」
クッキーを口いっぱいに頬張るフェイトが気付いたのは、軽トラが奪取された後だった。
ブホッ……と、クッキーの欠片を口から噴射しつつ、叫ぶ。
「か、かえしてー！　ボクのサンバーかえしてよーー!!」
……まるっきり、オモチャを取り上げられたいじめられっ子だった。
で、そのオモチャを奪った張本人……ゼルビスはというと。
「おおぉっ！　なんだよこれ、チョー楽しくね!?」
ヘコヘコに軽いクラッチ。すぐに吹け上がってしまうローギアードなエンジン。クルクルとハンドルに追従する足回り。正直言って、低性能だ。だが、ガチャコン、とラフにギアを入れても、ガフガフ言いながらエンストもせずに繋がるミッションを操りながら、エンジンを上限まで吹かし切る、扱いきるのは、大型車や高性能車では味わえない、新鮮な楽しさがあった。
――グァァァァァァッ!!
「ひゃっほー!!」
調子に乗って、その場でスピンターンなども披露してのけ、隊員たちの喝采を浴びる。
やがて、馬鹿どもは調子に乗り、助手席に箱乗りするわ、荷台に乗るわ、やりたい放題。
「ぎゃはははは！　サイコーだぜサイコー!!」
「おう、飛ばせ飛ばせー!」
「ひゃっはー!!」
――ガコンッ!!
「おわっ!?」
突然、何かに衝突したように、車体が揺れた。
「なんだなんだ……ウゲッ!?」
その先には……
「……がるるるる！　ふしゃー!!」

……猛獣のように怒り狂う、バリアジャケットを装着し、稲妻を纏うフェイトがいた。
「フゥー！　フゥーーー!!　アンギャーーーーーー!!」
――ばちばちばちばち!!
「「「「「「ぎゃあああああ!!」」」」」」
馬鹿どもは、フェイトのアホみたいな威力の雷撃の直撃を喰らい、車から弾き飛ばされる。まさに雷神。たった一人残されたゼルビスは、ビビりまくっていた。
「サーセン！　マジサーセンっしたァ!!」
平身低頭するゼルビス。だが、フェイトはゼルビスを運転席から引きずり出した。
「うぅるヴぁぎゃがぎゃぎゃ、ふんぎゃーーーーーーー!!!!」
「うぎゃぁあああああああ!!」
フェイトの怒りの咆哮と、ゼルビスの悲鳴が響く。
――ばきっ、ぼこっ、めごっ、ぐしゃっ、がりがりっ、めきゃっ。
……。ぽいっ。
ぼろ雑巾になったゼルビスを投げ捨てた
「……」
しーん……と、さきほどまでの馬鹿騒ぎはどこへやら。
静まり返り……ササササー……と、ゴキブリのように音も無く避難を始める。
「にげんなー!!　ボクをバカにしやがってー!!」
――バリバリバリッ……!!　ズガシャーン!!
晴天の隊舎に、怒りの落雷が降り注ぐ。
……フェイトにボコボコにされた隊員たちには、休暇明けまでの絶対安静が課せられた。自業自得である。

そして、休暇明けの前日のこと。
いつもの一日が始まるはずだった。隊員たちは、翌日からの訓練を

思い出してか、憂鬱そうな顔で過ごしていたのだが……
――――キュキキキィィッ!!
……玄関先に、機動六課のものではない警邏車両が急停車した。
ロビーにいた隊員たちが、怪訝そうな顔をするのと同時……
――――ドガシャァアアンッ!!
玄関の、強化ガラス製の自動ドアが、ハリウッド映画の飴細工のように、粉々に砕け散った。
――突き破ったのは、小振りな拳。
「……」
ロングストレートヘアを翻し、陸士隊の制服をピシッと着込んだ女性が、ロビーに足を踏み入れる。綺麗な女性だ。
「――――妹を返しなさいッ!!」

綺麗な相貌を怒りに染め……ギンガ・ナカジマは開口一番、そう憤激するのだった。
「……おう、今度は誰だ」
が、こういった事態には慣れっこな隊員たちは、立ち直りも早かった。
「昨日はコリンとエリオだったよな」
「スクーターに2ケツしてぶっ飛んでやがった」
「バカだよな、あいつら」
そんな隊員たちには目もくれず、ずんずんとロビーを闊歩して行く。
警邏車両から、お付きのように、シャッハが慌てて飛び出してきた。
「ちょっ……ギンガ! 何をしているのですか、あなたは!?」
腕を取り、拘束する。
「放してよっ! いつもいつも、邪魔ばっかりして!」
「邪魔ではありません!」
今にも殴りあいに発展しそうな混乱の中、人ごみから、フィアットの押す車椅子に乗ってはやてが現れた。

「誰だ、お前？　人ん家の庭で騒ぎやがって」
　制服の階級章を目にしたシャッハが、慌てて敬礼をする。
「失礼しました！　陸士１０８部隊に出向中、聖王教会所属・シャッハ・ヌエラです！
　……ほら、ギンガも！」
「誘拐犯に名乗る名なんて無いッ!!」
　ばしっ、とシャッハの手を払いのけ、はやてを睨みつける。
「誘拐犯……？　それに、ギンガ……ああ、お前、スバルの姉か」
　得心したように呟くはやて。そして、スバルの名を聞いた途端、はやてに詰め寄る。
「いるのね!?　スバルはどこっ!?　勝手に訓練校を辞めて、姿をくらましたと思ったら……こんな頭のおかしい部隊に隠れてたのねっ!?」
　外野が、ざわめきたてる。
　はやてにこんな口を利いて、無事で済んだ者は居ない。
「ああ、あああああ～……も、申し訳ございません～!!」
　再びギンガを床に組み敷いて、鏡餅のようにはやてに頭を下げる。
「ふぅん……？」
　はやては、気分を害した様子も無く、ギンガを眺めていた。
「んで、お前……スバルに会って、どうすんだ？」
「決まっているでしょう！　連れ戻すのよ!!　今度こそ、絶対に逃がさないんだから！」
「ふむ。おい、フィアット」「はい？」
　ぽわん、とした調子のフィアットに、命令する。
「スバルの居る場所まで案内してやれ」
「承知しました」
　あっさりとしたものである。
「こちらへどうぞ」
　からから、と車椅子を押しながら、フィアットが歩き出す。
　ギンガは迷うことなくその後を追い、シャッハもその後に続く。
「今日こそ……何が何でも、連れ戻すんだから……」
　ギンガは、血走った目で、ぶつぶつと呟きながら歩いている。

ほんの少しだけ歩き……着いた先は、運動場だった。
休暇中だけあって、人は少ない。ヴィータやクロノと訓練をしている者、何故か器具を用いて筋トレをしているもの等等。
その中に、スバルが居た。なのはと一緒で、何かの訓練中のようだ。
「スバルっ……！」
――次の瞬間、スバルはなのはにぶっ飛ばされた。
「……！！！」
……ギンガの目が、一瞬で黄金色に変化する。

「――――うるさいぞ。ちと黙れ」
――ゴウンッ……！！
……はやてが、ほぼノーモーションで、ギンガの影を縛った。
「あぐっ!?」
……口の動きをも封じられる。
「あ、暗黒魔法……!? それも、かなり高度な……！」
はやてが得意とする、影を操る魔法の一種……影縫いだった。
「おい、なのは。ちょっとこっち来い」
『？　何？』
ノビたスバルを放置し、やってくる。
「コレ、見覚えあるか？」
親指でちょいちょい、と、彫像と化したギンガを指す。
『……』
あ。大体分かりました』
……思い出したらしい。ついでに、はやての意図も察したようだ。
「んじゃ、任せる。お前の教え子のことだ」
『教え子……』
じっくりと、その言葉をかみ締め……少し嬉しそうに、何度か頷いた。
『うん、うん……スバルは、私の教え子……教え子ですもんね……』
……『教え子』というフレーズに、何か憧憬でもあるのだろうか。
「う、ううん……？」

……ぶっ飛ばされていたスバルが、目を覚ました。そして、なのはの不在に気付き、見回す。そして。
「姉、さん……!?」
『ああ、気付きましたか』
「……！　、！」
……何かを言おうとしているのだが、はやての影縫いが持続している所為で、何も喋れない。
『……』
なのはは、面倒くさそうに刀を一閃。口元の影だけを、器用に切断した。
「ぶはっ！　……スバルに、何をしているの!?」
『鍛錬です』
「ふざけないでっ！　スバルは私が守るんだから、そんなことしなくてもいいのよっ!!」
「……！」
スバルが、ぎゅっと目を閉じて俯く。なのはは、無表情の中……若干、イラッとした成分を混ぜる。
『その程度の魔法に引っかかっている貴方が、何をどう守るというのですか？』
……凄まじく率直に、辛辣な言葉を投げつけた。
「!!」
ギンガは、怒りのあまり歯をかちかち鳴らし打ち震える。
『察するに、貴方は、スバルを連れ戻しに来たのですね？』
「そうよっ！」
何を当然のことを、と言わんばかり。
『いいでしょう』
……対する返答は、予想外のものだった。
スバルも、シャッハも、硬直している。
付き合いの長いはやてとフィアットは、苦笑いでそれを見ていた。
『ただし――スバルに勝てたら、ですがね』

◆・◆　◆　◆

「ああ、ああああ～……!!　どうすんだよー……!　教官のばかー……!」

更衣室のベンチに座り、悶々と頭を抱えるスバル。その中は、当然、姉のことだ。まさか、ここにまで出没するとは、思ってもいなかった。

スバルをがんじがらめに束縛しようとするのも相変わらずだが、なのはの言動は、予想外だった。庇ってくれるとは思っていなかったが……まさか、あんなことを言い出すとは。

『勝てばいいんですよ。勝てば』

「簡単に言うなよ～!!」

言うに事欠いて、あのモンスターに、喧嘩で勝てと言う。思い出す、ほんの数ヶ月前のこと。繁華街に誘い出され、まさかの人前でサンドバッグにされ、情け無くもティアナに庇ってもらった、あの事件。

あの拳の硬さと痛さを知っている。

ギンガとの対決を１０分後に控えた今だって、足が竦んで、膝が笑って、立ち上がることすら困難なのだ。

だが……それでは、あの日と何も変わらないのも、事実で……

「――――ええい、くそ!!　なるように、なれ!」

膝を叩いて、意地で立ち上がった。

『ほう、逃げぬのか？』

マッハキャリバーが、試すように聞く。

「……正直、逃げたいよ。投げ出したいよ」

今は、相棒しか聞いていない。思うだけの弱音を、正直に吐き出す。

「でも……それってつまり、ティアナを、チームの皆を捨てるってことだ。皆を捨てて、自分だけ安全な場所に逃げ隠れる……卑怯なことだ」

はぁ……と、深呼吸をし……顔を上げた。

「私……甘ったれで、弱虫かもしれないけど……卑怯者にだけは、なりたくないんだ」

……試合会場は、先ほどの運動場だ。

教官だけではない。フォワードチームの皆、六課の同期の面々が、示し合わせたわけでもないのに、見届けに来ていた。
ざっ……と、足場の砂利を踏みしめる。マッハキャリバーは、待機状態のまま、首に提げている。
「――スバル」
ギンガは、動きやすい訓練服に着替えた状態で待っていた。
「ねぇ、お願いがあるの。スバル」
「奇遇だね。私も、姉さんにお願いがあるんだ」
毅然と、ギンガを真正面から睨み返すスバル。多少、ギンガも面食らった様子だった。
「大人しく、私のところに戻ってきなさい」
「もう、私を子ども扱いするのをやめて」
……真っ向からぶつかる、互いの願い。
「……」
「……」
静かな緊迫。
睨み合い……そして、互いに譲る気が無いことを察した。
「だったら私は、」
「だったら私は、」
互いに、構える。……似通った構え。まだ、仲の良い姉妹だった二人が、最愛の母から授かったもの。
「あなたを倒して、連れ戻す――！」
「姉さんを倒して、認めさせてやる――！」

スバルの拳と、ギンガの肘撃ちが衝突する！
――ガスンッ!!
「くっ……！」
拳と、肘。真正面からぶつけた拳が、やや押し負けた。
「あはっ……！」
狂的な笑みと共に、追撃の拳が、スバルの顔面を狙う。
――ジッ!!

掠めた頬が、僅かに焦げる。
「うぅっ……！」
側腕で受け流し、バックステップで距離を取る。だが、ギンガはそれにタイミングをぴったり合わせ、突撃していた。
「はぁっ！」
回し蹴り！　スバルは、受けたものの、大きく蹴り飛ばされた。しかも、攻撃はそこで終わりではない。回転の勢いを殺さないまま、しかし鋭く、左の手刀が飛んでくる！
「……うああッ!!」
スバルも、やられっぱなしというわけでもない。その手刀を掴み取り、勢いのまま背負い投げた！
「お……!?」
だが、投げの途中、ギンガはつかまれた手を振りほどき、難なく着地する。
「あ、しまっ……！」
ギンガは、長い髪を翻し、がら空きになったスバルのボディへ、痛烈な左フックをぶち込む！
――ズドンッ!!
「ごふっ……!!」
吹っ飛ばされ、地面を滑る。
……奇妙だった。観戦している六課の面々も、違和感を感じていた。
――スバルは、こんなに弱かったか？
……いつもスバルへ体罰を加えていたギンガ。スバルへ拳を振るうことは、慣れてしまっている。対してスバルは、いつもは殴られっぱなしの側。そういう要素もあるのだろうが……やはり、肝心要のところで、スバルはまだ、ギンガの精神的重圧から、逃れられていないのだ。
「くぅっ……！」
ギンガは、余裕の表情で、構えを取っている。
「――ねぇ、スバル。もういいんじゃない？」

……ギンガは、すっとその構えを解き……不気味に優しい声で、スバルに話しかけた。
「――よく頑張ったわ。そこそこ動きもサマになっているし、一生懸命、訓練したのねぇ」
ギャラリーも、ざわめいている。
「――あなたの気持ちは、よぉく分かったわ。……だから、もう、スバルも意地を張るのはやめにしましょう？　姉さんも、あなたに手を上げるのは、気が重いのよ」
……気遣うような素振りを見せ、篭絡をしに掛かる。気が重い、というのは、恐ろしいことに、本気なのだろう。
「もう、子ども扱いするのは、やめてあげる」
――ぴく、と、スバルの身体が、動いた。
よろ、と立ち上がったスバルは……一歩、二歩……ギンガの元へ、歩み寄った。
「そうよ、スバル。それでいいのよ」
ギンガは、両腕を広げて、スバルを受け入れる。
スバルは……すっぽりと、ギンガの腕の中に、納まった。
「いい子ね、スバル……、」
「姉さん」
……スバルが、いやにキッパリした声を出す。
「？」
「調子に、」
とん、と。スバルの拳が、ギンガの胸に軽く当てられる。そして
「――……乗るなァッ!!」
スバルの足が、地面を捉える!!
――――ドズンッッ!!!
なのは直伝の、ゼロ距離打撃が炸裂した!!
「ごはぁァッ……!!?」
未知の攻撃をモロに食らい、ギンガが吹き飛ぶ！
『見事です……！』
人知れず……なのはが、ぐっと拳を握り、小さくガッツポーズを

取っていた。
「……ったく、心配かけさせるんじゃないわよ。あの馬鹿」
ティアナは……ギンガの額へ向けていた銃口を、そっと下ろした。
「こ、こんな技……！　母さんからは、教わって……!?」
「私だって、成長してるんだ!!」
まさかの反撃に、狼狽し、混乱するギンガ。それでも、鋭い突きを繰り出す。
スバルは、また、側腕で……
――くんっ。
スバルは、その腕を、拳の進行方向へ、コロのように回転させ、威力をほぼ完璧に受け流す。……化勁だ。
「なにっ!?」
「はァあああっ!!」
そして、正拳突き！
「！　これなら！」
何の変哲もない、ただの直線突きだ。ギンガは、腕をクロスさせ、受け止める構えを取る。
――ガシィッ!!
「！　重っ……!?」
スバルの本来の拳は、ギンガのガードを、真正面から貫き通す！
「うンッ……!!」
インパクトの瞬間、スバルは、全身を鋼鉄のごとく引き締め、硬直させる！
――ドゴンッ!!
「が、ぁうっ……!!」
鉄球が炸裂したかのような衝撃！
「『剛体術』、っていうんだよ！」
……それもまた、なのはがスバルに授けた技だ。
スバルの追撃を振り切り、間合いを取る……つもりが。
「フッ!!」
全くの同時に行動したスバルが追いつき、『真正面からの奇襲』とい

う、奇天烈な攻撃をする。
——パァンッ!!
「あぅっ!」
顔面に掌打を喰らい、仰け反る。
『無拍子』！　これも、なのはさんが教えてくれた！」
「うあああっ!!」
最早、最初の余裕など毛ほども残ってはいない。がむしゃらに手足を動かし、スバルに打撃の雨を浴びせる。
「駄目……駄目、駄目、駄目よっ！　ねぇ、スバル！　どうして分かってくれないの!?」
鬼神のような連撃。
「ぐ、ぅっ……!!」
化勁の防御力を上回る手数で、スバルに打撃を当ててくる。
「スバルを守ってあげられるのは、私だけなんだァッ!!」
——ドンッ!!
……遂に防御が押し開かれ、胸部に一撃を喰らう。
「このォっ!!」
スバルは、その腕を取り、再び背負い投げる！
——ドバンッ!!
今度こそ、地面に背中を打ち付けられるかと思いきや、ブリッジのような体勢で、足の関節で衝撃を吸収。反動をバネに飛び起きる！
「「うおおおっ!!」」
——ゴキィッ!!
クロスカウンターで、互いの顔面を打ち抜く！
堪らず、揃ってダウンする。
「どうして……わかってくれないの、スバル……」
ふらふらと立ち上がった二人。先に口を開いたのは、ギンガだった。
「どうして、守らせてくれないの……?」
俯いた表情は、前髪に隠れて見えない。
「頼まれたんだよ……?　母さんに、『スバルを守ってあげて』、って

……」
……亡き母との、約束があった。ほんの3つ違うだけの姉に託された、約束が。
「母さんとの約束、守らなきゃ……そうじゃなきゃ……」
だが……二つの事件が、それを歪ませてしまった。
スバルを守る。ただそれだけが、大きく大きく、膨れ上がり……
「私がいる意味、無いじゃないっ!!」
――その『約束』そのものが、存在意義となってしまった。
「!!」
止めなければならない。その過ちを、正さなければならない。
――彼女の、家族として。
その、重い、重い拳を受け止める。
「そんなこと……言ったら、駄目だ。姉さん……!」
「……!!」
ギリ、ギリ……と、押し戻す。
「もういっこだけ……ずっと、言いたかったことがあるんだ……!」
左ストレートを、額で止める!
「私は、もう、大丈夫……! 守ってもらわなくても、大丈夫だから!」
「……!」
ギンガは、それを否定する言葉が無かった。
「自分の道を、進んで欲しいんだ! ねぇ、――」
至近距離……スバルの右拳が握られ、ギンガの、左拳が固められる。
「ギン姉ッッ!!」
――――決着。
スバルの拳は、ギンガの顎を、真下から掬い上げるように打ち抜いた。

「……、」
ぱちり、と開いた目には、真っ白い天井と、傍のスツールへと腰を下ろし、林檎などをショリショリ剥いているシャッハが写った。
「気付きましたか？」
……散々に手を焼かせているというのに、このシスターは、いささかもブレない。
「……」
しかし、ギンガは……シーツを手繰り寄せ、頭から被ってしまう。
「……」
……どよぉん……と、擬音が聞こえてきそうなほどに暗い。
「その様子だと、ちゃんと覚えているようですね」
シャッハは、シーツの隙間に、ウサギ型に剥いた林檎を差し入れる。
しゃくしゃく……と、シーツの中で、林檎を咀嚼する音が聞こえる。
「……自分の道って、何」
反抗し、拗ねる声。
「私はずっと、スバルを守るために生きてきたのよ。今更、他の生き方なんて……わからないよ、そんなの」
シャッハは……そんな拗ねた声ながらも、どこか、憑き物が落ちた印象を受けた。
「で、どうするんですか、貴方は？」
「――スバルを守るわ」
ずでん、とシャッハはずっこけた。
「でも、スバルに負けた私が言うのは、おこがましいわよね」
『守る』というのは、はっきりとした力量差が無ければ実現しないのだ。
「当面の間、鍛え直すわ」
シーツの下から伸びた手が、林檎を丸のまま引っ掴んでいった。がりごり。ぼりぼり。
「このままじゃ、スバルに守られてしまうもの。それじゃあ、本末転倒だわ」

「――そうですか。それと、一つだけ通達が」
「？」
「――ギンガ・ナカジマ陸曹。本日付で、陸士１０８部隊より、機動六課への出向とする」
……極上の笑顔で、死刑宣告をかました。
「――――――

「――――ようこそ、地獄の一丁目へ」
「いいやぁあああああああああああああああああああァあぁぁぁぁぁぁぁ……!!」
……ギンガの悲鳴が、隊舎に轟いた。

◆▪◆　◆　◆

――いいやぁあああああああああああああああああああああァあぁぁぁぁぁぁぁ……!!
……ギンガの悲痛な叫びは、廊下にまで突き抜けていた。
「……」
菓子や軽食を積んだバスケットを胸に、スバルが突っ立っていた。
入るに、入るタイミングを逸してしまっていたのだろう。
『おい、スバル。ンなとこ突っ立ってないで入って来い』
「!?　は、はい！」
筒抜けだった。おずおずと、バスケットを抱えながら、医務室に入る。
「あは、あはは～……あのー……お邪魔します～」
「あ、え……スバルッ!?」
ギンガが、赤面して姿勢を正す。
「うっし、スバルとギンガ以外、撤収！」
……はやての号令に、マジで退室して行く一同。
「えっ？　えっ!?」
去り際、シャッハがスバルの肩をポン、と叩き、意味深なウインクをする。
さて、いよいよ二人きりになってしまった。
「これ、差し入れ」
バスケットをギンガに渡すと、やることが無くなってしまい、所在無くなってしまった。
「で、その……私が聞くのも、変なんだけどさ……大丈夫？」
「……正直、まだちょっと痛いわ」

さすさす、と撫でる腕には、打撲痕がいくつか。
「ごめん……」
「気にすることじゃないわ。そういう勝負だったでしょう？」
「うん。でも、ごめん」
ギンガは、ベッドにごろん、と身を投げ出す。
「ギン姉」
……その、久しぶりとなる呼称に、驚くギンガ。
「――、なぁに、スバル？」
「今度……また今度、オフの日に……遊びに行かない？」
「……構わないわよ」
「その時、さ……みんなのこと、紹介したいな」
「みんな……？」
「うん。……私の、仲間たちのこと」
……あの日の、やり直しだ。あの日は、和解の意思さえ無く、散々に終わってしまった。だが今は……
「――ええ、楽しみにしているわ」
ギンガは、優しい笑みと共に頷くのだった。

――。
扉の向こうでは、おそらく、和解が成されていることだろう。
はやてたちは、各々の持ち場へと戻ろうとしている。
「きょうだいとは、良い物ですね」
シャッハは、若干の憧憬を感じさせることを言った。外面モードのフィアットが、ぽややん、とした顔で話に加わる。
「シャッハさん、一人っ子ですかー？」
「弟、のようなモノは、居るには居るのですが……なにぶん、手が掛かる奴でして」
「わかります、わかりますー。私にも、実は弟的な人がいるんですよー」
弟的……というか、半分は血が繋がった実弟だ。
「でもその子、手が掛からなさ過ぎて、ちょっと寂しいんですよー」

「その弟さんの半分でも、あやつに真面目さがあれば……」
やいのやいのと、楽しそうに会話をする二人。
よもや、その『弟』的な二人が、同級生で顔見知りで友人同士……ということは、まだばれていないようだった。
「……妹、かぁ」
はやての、ぼそっと漏らした言葉。
「気になりますか？　主」
リーゼが気遣う。無論、連想したのは……あの少女のこと。
「――――いや。あの子はもう、『こっち』のこととは、無関係なんだ。あの子にはあの子の日常がある」
そういうはやてだったが、強がりだということは、明らかだった。
「――――あ、部隊長。メールです」
と、フィアットの端末が着信を知らせる。
「誰からだ？」
「レジアス・ゲイズ中将です」
「……」
ぱっ、とフィアットの手から端末を奪い取り、そわそわした様子で画面をスクロールさせる。
「フィアット。明日一日、私の予定を全てキャンセルだ」
「……はぁ。本部との折衝はどうなさるおつもりで？」
心底あきれた風に、フィアットが溜息をつく。シャッハが、その越権にも等しい行為に、ぎょっと目を剥いた。
「自分の予定を優先するのは結構ですが、まずは義務を果たしませんと」
「ンなもんテキトーにはぐらかしとけ」
「チッ……死ねばいいのに」
……真正面から毒づくフィアット。シャッハはもう唖然として、言葉を失っている。
――――はたから見れば異常でも、機動六課では日常の光景だった。

……そして、翌日。ターミナルとは反対側の、比較的人気の少ない路地。
「……」
一軒の飲食店の脇で、一人の小柄な女性が、壁にもたれていた。キュロットパンツに編み上げのブーツ。七部袖のストライプシャツにデニムベスト。オレンジ色のサングラスに、キャスケット帽を被る。傍らには対照的に、ジーンズにスニーカー、黒いパーカーと、シンプルな装いの女性。
……はやてと、リーゼである。
「……約束の時間までは、ええっと……」
「12分45秒です。その質問は5回目ですね」
……はやてにしては珍しく、そわそわした様子だった。
「いや……だってよ……久々じゃん？」
「およそ半年振りです」
「やっべーよ……なんも連絡してなかったし……ぜってー何か言われる」
この傲岸不遜が服を着て歩いているようなはやてにも、苦手な人物がいようとは。
がりがりと爪を噛み、『やべェ……やべェよ……』とごちる。
「主」
「……」
「主」
「あーっもう、何だよ。聞いてるっつーの」
「後ろに、」
……と、リーゼが全てを言い切るよりも早く……
「は～や～て～～～～～～～～♪」
……猫なで声とともに、はやての首に両腕を回して抱きつく者が居た。
「うぎゃァあああああぁあああああああああああ!!?」
背中に氷を入れられたようなリアクションで跳ね上がる。
「はやて、はやて、はやて～♪　久しぶりね～♪」

「ひっ、おっ、おまっ……
――――オーリス!?」
彼女こそ、至天の王・八神はやての天敵……オーリス・ゲイズである。
「あら、少し背が伸びたのね～？」
なでなでなで……と、無限の愛情を体現したような撫で回しが炸裂し、はやてを更なる恐慌に陥れる。
「バカヤロー！　削れて縮むだろうがッ!!」
「縮んだはやても可愛いわっ!!　ああ、可愛いっ!!」
「う、おっ、やめっ、……リーゼ！　リーゼぇえええ!!」
みっともなく従僕に救援を求める。リーゼは、やれやれといった様子で、オーリスを引き離す。
「ああん、もう。もうちょっとくらい、いいじゃないの……」
至極残念そうに指をくわえるオーリス。
「ふ、ふざけんなー！　なんでお前がここにいるんだぁー!!?」
リーゼの背に隠れ、ふしゃー……と、威嚇する。オーリスは、しれっとした顔で……
「だって私、父さんの秘書官だもの♪」
……と、開き直った。
「オーリス、急ぎすぎだ……遅かったようだな」
遅れてやってきた、ポロシャツ姿のレジアスは、オーリスに絡まれるはやての痴態を見て、目を覆った。
飲食店の座敷に案内された４人は、各々席に着く。
はやてはリーゼにひっついていたのだが、オーリスがそれを引っぺがし、自分の隣に座らせた。
さて、こうして、非公式の場で会ったわけだが。
「元気にしていたか？」
……それもそのはず。ただのプライベートなのだから。
「おじさん、そればっか」
ふっ、と笑うはやて。
「当然だ。半年間、連絡も寄越さずに……全く」

「悪かったよ。つい、忙しくてさ」
注文した料理をモリモリと食べながら、他愛の無い会話をする。
「そうよ、もうちょっと、会ってくれたっていいのに……」
「おめーとだけは本気で会いたくなかったんだよっ！」
「あら、いけず……でも、そんなところも……！」
「もうこいつヤダー！」
……数年前。レジアスが、約束どおりにオーリスとはやてを会わせたことがある。
母親は既に亡く、兄弟もおらず、父親であるレジアスは多忙の身。決して愛情を注いでこなかったわけではなかったが、それでも、幼少期のオーリスは、やや淡白で、そっけない子に育っていた。
それを心配して、はやてと合わせてみたのだが……
「――どうしてこうなった」
目の前で、はやてに抱きつく……というか、鯖折りをかますオーリスの姿を見て、つくづく思った。
「で、どうなの？　またあの性悪ババァにいじめられてない？」
「……そりゃフィアットのことか」
「ええ、そうよ！　こんなに可愛いはやてを虐めるなんて許せない！」
納得ずくの関係なのだが、オーリスには許せないらしい。
「ああ、口惜しい！　どうしてあのババァがはやての隣にいられるのよ！　わたしに譲りなさいよ！」
「抱きつくんじゃねー!!」
ぎゃーぎゃーと騒ぐ二人。リーゼはいつものことと、傍観の構えだ。
「――さて……はやて」
「おう……」
はやては体力を使い果たし、オーリスの膝の上に載せられていた。オーリスは、はやてをエネルギー源に体力を回復できるため、未だツヤツヤしている。まさに天敵。
「早速だが、機動六課に新たな任務だ」
すっ、と渡された資料を受け取り、目を通す。

「――――――――――えっ」
レジアスの顔を見る。だがそこには、大真面目な顔があるだけ。
「おじさん……これ、マジ？」
「ああ。紛う事無く、真実だ」
「……うわー」
と、リーゼに資料を手渡す。
「……。おや、これは」
リーゼも、意外そうに目を剥いた。
「――わかった。受けるよ、この任務」
はやては、特に嫌がる素振りを見せず頷いた。
「さーて、そんじゃあ準備があるから……」
そそくさと逃げようとするはやてを、オーリスが捕獲する。
「――リーゼ。はやての今日の予定は？」
「（リーゼ！　ごまかせ！　絶対にごまかせ！）」
はやてからのアイコンタクトを受け取ったリーゼは、すらすらと虚偽報告をする。
「午後から、部隊内での教導を査察する予定で、」
「嘘ね」
……あっさりと、オーリスに看破される。
「……」
唖然とするリーゼを尻目に、いずこかへ通信を繋げる。繋いだ先は……
「時空管理局本部・情報統括室所属オーリス・ゲイズです。本日、機動六課の部隊長は」
『あ～、オーリスさんですか。部隊長は、本日いっぱい、非番の予定ですねぇ』
……一日、時間を空けていたのが仇になった。
「さァ……は・や・て～～♪」
「ひぃいいいっ……！」
――――結局この日。はやては１０時間以上、オーリスに連れ回さ

れたのだった。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第八話

たったったったったっ……と、一定のペースで、早朝の町並みの中、足音が響く。
「ふっ、ふっ……」
規則正しい呼吸音。どうやら、ランニングをしているらしい。
年のころは、中学生か、高校生か。ジャージにスポーツシューズという、いかにもな運動部。
そして、走りきった彼が到着したのは、一軒の民家だった。
このとき、時刻は午前七時。彼にとっては、ごくいつもどおりの到着だった。
表札には、『八代』とあった。
――ピンポーン
インターホンを押す。どうやら、自宅ではないようだ。
『はーい』
押し主が誰なのか、完全に把握している口ぶりで、家人が応じる。
「おう、望！　オレオレ！」
やや弾んだ息で、快活な声で告げる。
『ああ、健太か。入っていいよ』
「お邪魔しまーす！」
勝手知ったる……といった様子で、玄関を開け、家に上がる。
「おはよー」
台所から顔を出したのは、ボブカットの少女。制服の上にエプロンを着け、朝食の準備をしていたようだ。
そして二人は、慣れた様子で、リビングのテーブルで朝食を取る。
「……あんた、今更だけど良く食うわよね」
望は、目の前でがつがつと白米を掻き込む健太に目線を向け、そんなことを言った。
「だって、腹減るじゃん」
「ほんと、男の子って感じ」

小学生のころ、そんなに変わらなかった身長は、今や１５センチも健太が上回っていた。
「俺らも、来年は受験なんだよなー……」
健太が、ぼそっと憂鬱そうに呟いた。
「何暢気なこと言ってんのよ。受験はもう始まってるようなモンでしょうが。中三よ、中三。部活だって引退間近でしょ」
「いや、いやいやいや……まだだ、まだ大丈夫……！」
……受験勉強という現実を受け入れようとしない幼馴染の少年に、望は呆れた視線を寄越す。
「あーあ、今回の試合、パッとしなかったからスポーツ推薦は難しいよなぁ……ま、イザとなったらフツーに勉強して……」
「あのね、結構偏差値高いのよ？　あそこ。……ま、私は大丈夫だけど」
「うぐっ……」
志望校は、どうやら同じようだ。そして、その話の中……二人は、どうしても、彼女たちのことを思い出してしまう。
「高町と八神……いま、何してんだろうな」
……小学三年生の冬。忽然と姿を消した、二人の級友のこと。
「フェイトのやつは、外国で仕事に就いたとか言って、たまにメールもくれるけど」
「……うん」
望は、漠然とだが、分かっていた。きっと……自分たちの日常とは、別の世界での出来事が原因だと。フェイトに尋ねても、うまくはぐらかされてしまう。
――ヴーッ、ヴーッ……
……と、卓上に置かれた携帯電話が、メールの着信を告げる。
「あれ……？　知らないアドレスからだ」
そして、文面を開き……
「……おい、望？　どうした？　固まって」
「、！　！」
望は口をパクパクさせ、開いた携帯電話を、健太の顔面に押し付け

るように差し出した。
「うわ、おい、何だよ!?」
「メール！　メールが！」
「いやだから落ち着けって!?」
ぱっと望から携帯電話を受け取り、文面を追う。そして……

◆　◆　◆

――ピピピピピッ！　ピピピピピッ！
もぞもぞ、と、ワンルームマンションの寝室で、携帯電話がアラームを鳴らす。
「ん、ん～……？」
ずぼっ、と布団から顔を出したのは、ボサボサ頭に寝ぼけ眼の女性。
「……もう、朝？」
にょきっと手が伸び、携帯電話を手に取り、アラームを解除する。
「……あら？」
同じく表示されていた、新着メールの表示。
「葉山君と、八代さん……？」
なんとも懐かしい相手からの連絡だった。
――ピピッ
その文面を開くよりも先に、またしても新着メール。今度は、見覚えの無いアドレスから。何の気の無い操作で、その文面を開き……

――ドタンッ!!
……ベッドから転げ落ちた。
「え、え、うそ、うそ……!?」
そして、神業のごとき速さで、電話帳を開き……
「は、長谷川先生ーーー!!　私です、咲です、富山咲ですーーーー!!」
……朝っぱらから、恩師に電話攻撃を仕掛けた。

◆　◆　◆

海鳴市の一部分が、大騒ぎになる、その少し前。機動六課の部隊長

室にて。
『何、はやて。こんな朝っぱらから』
日常生活用の義手を付け、訓練用の駄剣を一本ベルトに提げた姿で、なのはがやってきていた。
「おう、なのは。座れ座れ。アホも呼んである」
『……フェイトも？　ま、いいけど』
どかっ、とソファに身を投げ出し、懐から煙草とライターを取り出す……が、ぱっとフィアットに取り上げられてしまう。
「なのはさぁん？　ここは禁煙ですよぅ？」
『……はーい』
渋々、今度は手持ち無沙汰にでもなったのか、卓上にあったカップケーキをつまみ始めるのだった。
「ごめーん、おそくなった！」
「だから、録画しておいて後で見ろと」
「だって、リアルタイムで見たいじゃん！」
「我慢しろ」
と、フェイトとシグナムが入室してくる。
『これで全員？』
ぽりぽりと煎餅をかじりながら、なのはが聞く。
「いや……あと一人だ」
そして……最後の一人が、ドアを開けて、入室する。
「失礼します」
入室してきたのは、中背の男性だった。薄茶色の髪の毛、柔和で中世的な顔立ち。
最初、なのはは、ぽけーっとその顔を眺めていて……やがて、得心したように、ぽん、と手を叩いた。
『……あ、ユーノくんだ』
ユーノは、なのはを見やり……一瞬、悲しそうな表情をした。
「久しぶりだね、なのは。皆も」
『顔色悪いよ。ちゃんと寝てる？　ちゃんと食べてる？』
「うん……まぁ、ぼちぼちってとこかな」

何の気の無い、家族の会話。しかしこれも、ほぼ数ヶ月ぶりの再会だった。
フェイトは事前に知らされていたのか、『やっほー』と、ひらひら手などを振っている。
『で、はやて。最初の質問に戻るけど……何、朝っぱらから』
「んじゃ、説明すっかな」
よいしょ、と杖を突き、億劫そうに立ち上がる。
「まぁ、ぶっちゃけ言うとな。管理外世界へ、出張任務の依頼が来た」
――出張任務。
なのはの第六感が、警鐘を鳴らす。
『……』
マズい。囲まれている……と。
「その近辺で、小規模ながら、レリックに近い魔力の反応が検知されたんだと。が、しかし小規模だ。正規の部隊が、無駄足に終わるかもしれない管理外世界への出張になんぞ、わざわざ労力を割けるか、っつー話だ」
レリックに近い反応、というのは、本当の話だ。
「んで、出張先は……
――第９７管理外世界『地球』・極東方面『日本』沿岸部……『海鳴市』、だ」

なのはは、脱兎のごとく駆け出――
『あ、れ……？』
――せなかった。
かくん、と膝が抜け、視界がぐわんぐわんと歪む。
『なに、これ……！　くそっ……！』
立ち上がれず、もがくなのはの眼前に、はやてがしゃがみこむ。
「ひひひひっ……マジでひっかかってやがんの」
――底意地の悪い笑みを浮かべて。
ぐるりと室内を見渡すと、自分以外、割と平然とした顔だった。
つまり――計画通り。

『い、いつの間に！　……って、アレしか無いじゃない！』
……先ほどまで、なのはが食べていたカップケーキだ。
「はい～。わたしの特製です～」
フィアットが、ニコニコ顔で語る。
「なのはさんは、煙草が切れると、手近なお菓子を摘む癖があるので～」
……煙草を取り上げた時点で、既に、ハメられていたのだ。
「本当は、部隊長に召し上がっていただいて、一刺ししようかと～。うふふ」
「うふふじゃねぇ……」
げんなりするはやてに、ニッコニコと、得意満面のフィアットである。
「これでも、元・諜報部所属なんですよ～？」

『は、図ったなぁあああああああああ～!!?』
◆　◆　◆
てくてくと、六課の廊下を、スバルらフォワードチームとセリカが歩いている。
「管理外世界かぁ……誰か、行ったことある人、いる？」
が、当然、首を縦に振るものはいない。
「地球って、アレだろ？　高町教官と、八神部隊長の生まれ故郷」
「魔法は一般的には認知されていないけど、ミッドチルダとほぼ同等の文明レベル」
「でも、たまに、やたらまりょくのつよいひとがいる」
地球について、知っていることといえば、この程度だ。
「あと、アレよ。兄さんのバイクを取り寄せたトコ」
「……ほほう？」
セリカが、目をギラリと怪しく輝かせる。
「……私的物品の購入、誤魔化すにも限度があるんだからね」
ティアナが釘を刺すが、止める気はあまり無いようだ。
『おーりんず』のサス、『まるけじーに』のホイール、『もりわき』の

マフラー……！『すうぇっじらいん』のステンメッシュホースも……！　タイヤも、パッドも、買い放題……!!　シエラさんへのお土産も、たんまりと！」
「聞いちゃいねーよ、コイツ」
　エリオが、夢見心地のセリカを突っつく。
「ね、エリオくんエリオくん。フェイトさんがね、おもしろいまんが、よませてくれるんだって」
「あー、そういや、そんなこと言ってたな。『絶対面白いから！　面白いから！』……って。ありゃ、話し相手が欲しいだけだな」
　うんうん。と同意する一同。まぁ、なんというか……フェイトの感性は独特で、ついていけないことが、たまにある。
「そういえば、今回同行してくれる人……ええっと、誰だっけ？」
「無限書庫の司書長さん」
「……？　何で本屋が着いてくるのよ」
「現地での長期滞在経験があるんだと」
「なら別に、なのはさんでいいじゃない」
「ブリーフィングにもいなかった」
　いつもなら、部屋の片隅で聴いているのだが……とっくに現地に荷物のように輸送されていることなど、誰も知りはしない。
「は？　オレが知るかよ」
「……最近、生意気すぎるわよアンタ」
　ティアナが、エリオの頭を両の拳で挟み込む。
「あいでででっ！　何しやがる！」
　そんなこんなで、遊びながら……出張任務が開始された。

◆　◆　◆

　――――薄暗い空間だった。
　照明は灯っているのだが、光量は小さく、最低限。その代わりに、部屋中を埋め尽くさんばかりの大量のモニターが、何らかの数列やグラフを、絶え間なく更新し続けていた。

「んー、ふふーん、ふふーん」
その、大量のモニターの中心。簡素な椅子に座り、鍵盤のようにホログラフキーを叩く、一人の姿。
「ふふーん」
鼻歌のように漏れるのは、甘い、少女の声。
ボディスーツ状の衣服の表面には、配線のような幾何学模様。そして、その頭には、バイザーのようなヘッドギアを装着しているため、素顔は伺えない。
――ピッ
「……あら？」
新たにホップしたタブへ目をやり、ちょこん、と可愛らしく首を傾げる。
「思ったよりも早かったね」
そして、視線によるカーソルで、回線を繋ぐ。
「もしもしー？」
『……』
……繋がった気配はあるのだが、答えてくれる様子が無い。
「ああん、もう。お返事くらいいいじゃない。……ルーテシア」
『こっちだって忙しいんだよ』
ようやく返ってきた答えは、無愛想でつっけんどんだった。
『それに、あんたの頼みは聞きたくない。ろくなことにならないし』
……あまり、信用はされていないようだった。
『どうしてもって言うから、このまえはガリューを出したのに……結局失敗したじゃないか。ガリューは傷ついた』
「えーと、実は……例の部隊が、」
『わかった。行こう』
「って、早ッ!?」
あまりの変わり身の早さに驚く。
『あいつらは許さない……ガリューの腕を斬ったあの野蛮人も……レリックを使ったあいつも。絶対絶対、絶対に許さない……！』

「て、手伝ってくれるなら、ありがとう……？」
　でろでろとした粘っこい悪意に、思わず腰が引けた。
「オホン。……えー、今、動かせるのは誰？　ゼータあたりかしら？」
『ゼータは別任務。シータは調整中、ガンマは補給中』
「ふむ。となると……――――――あっ」
　……そして、はた、と動きを止める。
「……待って。ちょっと待ってルーテシア！　やっぱナシ！　お手伝いいらない！」
　……何故か必死に拒否する。が、ルーテシアは既に聞く耳を持っていない。
『ガリューと……『デルタ』を使う。任せて――――クアットロ』
「駄目ええええええええー!!!」
　ぶちんっ、と回線が切られた。薄暗い部屋から転げ出る。
「だ、誰かー！　誰かいないのー!?」
　廊下の角から、二人の少女がひょこっと顔を出す。
「あ、クアットロだ」「二日ぶりッスね」
　そのうち一人……髪の一房だけを長く伸ばした少女が　ぱっ、と顔を綻ばせ、とことこと駆け寄ってくる。
「ディエチちゃん！　丁度良いところに！」
「うん！　出撃だね!?」
「そうっ！　出撃よっ！」
「うんわかった！　おっきいの、ぶっ放してくる!!」
　――ガションッ
　……身の丈ほどもある武装を、軽い調子で背負う。
「って、違う！　違うのよディエチちゃん!!　まだなのよ！」
「ま、いいや！　ぶっ放してくるね！　いやっほぉおおおお!!」
「駄目ぇ！　駄目だってばぁ！」
　ひょいっと武装を担ぎ上げ、軽快な足取りでポータルへ向かうディエチにしがみつき、ズリズリと引きずられる。
「ウェンディ！　ディエチちゃんを止めてぇ!!」
「任せるッス！」

もう一人……ウェンディと呼ばれた少女は、――――何故か、クアットロ、ディエチ両名の身体を抱え上げ、ポータルへと乗り込んだ。
「私は行かないってばーーーー!!」
「えっ？」
既にポータルは起動済み、スイッチオン。
「あ、間違えたッス！　あっはっは！　どんまーい！」
「出撃――――！」
「もうバカばっかりで嫌ぁーーーー!!」
三人は、転送の光に消えていった。

◆　◆　◆

……視界が暗くなって、うとうとして……
『……むがっ!?』
……気付いたら、真っ暗闇の中だった。
『むー、むー!?』
……なのはは、簀巻きにされて、猿轡を噛まされて、目隠しと耳栓をされて、箱に入れられていた。
『ふむむむむぅ……!!』
後ろ手に縛られている中、手首を何とか、回転させる。
――シャキンッ!!
……義手に仕込んでいた暗器の刃が飛び出し、両手首が自由になった。
拘束をぶちぶちと引き裂き、猿轡と目隠しをちぎり取る。
『ぶっはぁ!!　はやて！　今日こそ息の根を止めてやるぅーーー!!』
……怨嗟に叫ぶなのは。
『レイジングハート！　……あっ、クソ。スリープにされてやがる！　こらっ、起きなさい!!』
相棒にまで手を回されていた。
『……おはようございます、マスター。不覚です……おそらく、マリエルが一枚噛んでます』
『だろうね。……おらぁっ！』

――ドカンッ!!
箱に蹴りを入れ、蓋を吹き飛ばす。
さぁ現在地からはやての居場所を探り当て成敗してやろう……と、身を乗り出した。
――…のだが。
『……ええと、レイジングハート。ちなみに、現在地は？』
『……海鳴市、三番通り、です』
――ざわざわ。「おい、いま、あの箱から……」ざわざわ。「何か出てきたわよ？　なぁにアレ……」ざわざわ。「何かのイベント？」ざわざわ。
――おもっくそ注目の的になっていた。
『……』
なのはが固まっている中。観衆が、懐からスマートフォンだの何だのを取り出して……
「カァァァ

「いざ、撤収ぅー!!」
　呆気に取られるなのはを軽々と抱え上げ、スタコラサッサと駆け出した。
「んっふっふっふっふ」
　お馴染みの裏路地までやってきて、奈々はようやく、なのはを下ろした。帽子とサングラスをゴミ箱に捨てると、脱色した長い金髪が広がる。
「7年と126日ぶりだネ！　なのはちゃん！」
『……そんなに経ちましたか？　いや、それよりも……』
　何故、あそこに、あれだけ都合よく奈々がいたのか。さては、はやてが仕組んでいたのか……と思うなのはだったが、違う。はやてと奈々には、直接の交流は無いはずだ。
「おっきくなったネー？」
　手で身長を比べるような仕草をし……唐突に、真顔に戻る。
「でも、ボロボロだね」
　――奈々の手には、見覚えのある眼帯が握られていた。
『!?　うそっ!?』
　なのはは、慌てて左目を手で覆い隠す。……あの日、光を永久に失い、白濁したままの、左目を。
『また、珍妙な技を……』
「ううん、これは、ただの手品。意識誘導だよ。アポートも、使えないことも無いんだけどね」
　あの、身長を比べるような手の動きに意識をひきつけ……その隙に、眼帯を掠め取っていたらしい。
「……ま、さておき」
　そこで、ふっと、また道化の仮面を被る。
「久しぶりだネ！　なのはちゃん！」
『あは、あはは……そうですね……』
　どうも、ペースを乱されっぱなしだ。
「そっちの赤い宝石の子も！」

『お久しぶりです。その節は、どうも』
レイジングハートも、この超能力者には何も隠せないと理解しているのか、ごく自然に挨拶を返した。
ちゃりっ……と、レイジングハートを提げるシルバーのチェーンを確かめる奈々。
「うん、『育って』るネ！　お手入れもバッチリだ！」
そして、懐から、懐かしの品を取り出す。裏面が鏡面加工されたソレは、型遅れのスマートフォン……ｉｐｈｏｎｅ３ＧＳ。
「あ、もしもし。おじいちゃん？　うん、奈々だよ。　今からそっち行くからね」
奈々の素の声は、意外にも愛嬌があった。
「さ、帰ろっか！」
帰る、と言われ、真っ先に思いついたのは……
『へっ？　いやあの、心の準備が、心の準備が』
「もーまんたーい！　っつーわけで、帰るヨ！」
『心の準備がー……』
「どなどなどーなー、売られていくヨー♪」
持ち前の強引さで、なのはを引きずっていくのだった。
そして。
『……帰ってきちゃった……こんなにあっさり……』
あれだけ、敬遠していたはずの我が家。
「おじいちゃん、ただいまー」
奈々が扉を開けると、のっそりと、一人の作務衣の老人がサンダルを履いて出てきた。
「おお、奈々か。おかえり」
そして、気まずそうに俯いているなのはに目をやって……
「ふむ……長い家出じゃったのう？」
少し皺の増えた顔で笑い、迎えた。
『ご無沙汰……しています』
なのはも、怒られるとでも思っていたのか、ぎこちなく返事を返す。
大家は、なのはの左目と、左手、そして喉元に目をやる。

『……落っことしちゃいました』
おどけるように言うなのはに、大家は、何も言うことはしなかった。
そして……自然と、自分の部屋……１０１号室へ、足を運ぶ。
ドアノブは、記憶にあるよりも下にあった。それだけ背丈が伸びるほど、帰ってきてはいなかったのだ。
『……ただいま』
ドアを、開ける。数年ぶりだというのに、埃っぽさは、無い。
「ひひひっ、奈々ちゃんが管理してやってたんだぜ」
『ありがとうございます。……でも、どうして奈々さんが？』
「だって奈々ちゃん、今は２０４号室の住人だもんね。信吉さんと朧ちゃんのお隣さんヨー」
『えっ……越してきたんですか？』
「そうヨー。４年くらい前」
『……ん？　あれ、お店は……？』
確か、あの通りの片隅に、奈々の住居兼店舗があったはずだが……
「……潰れちゃったのヨー」
『……』
何も言えないなのはだった。
部屋の中身は、何一つ変わっていない。
部屋に反して、大き目の本棚には、少年漫画と、小説と、ＤＶＤと……バイク雑誌の、バックナンバー。壁掛けには、ライダージャケットが掛けられていて、数個のヘルメットも、当時のまま。
『……』
そのうち、一つ……一番大きなヘルメットを手に取る。あちこち、ヤレていて、細かなキズがたくさん付いていて……
『……』
――がちゃっ
と、ノックも無しにドアが開く。
『ひっ!?』
ビクっと体が動き、ヘルメットをお手玉してしまう。

『ななな何ですかノックも無しに!?』
　気恥ずかしさから咎めるなのは。が。
「え？　別にいーじゃん。ボクん家なんだし」
『……フェイト？』
　やってきたのは、フェイトだった。
「やー、帰ってきた帰ってきた！　あー！」
　靴を脱ぎ散らかし、手荷物を放り出し、クッションにぼふっと顔を埋める。
　……図体がでかくなった割に、何一つ変らない光景だった。
『こら、靴を揃えなさい！　荷物は片付ける！　上着を脱ぐ！』
「あとでするー」
『だらしないんだから、もー……！』
　とりあえず、放り出した手荷物を壁際に寄せる。そして、寝転がったままのフェイトの襟を掴む。
『ほら、バンザイしなさい』
「ばんざーい」
　フェイトから上着を剥ぎ取り、壁掛けにハンガーで吊るす。
『それで、ユーノくんは一緒じゃないの？』
「うん。なんか、行くトコあるんだってさ」
『そう』
「それとさー、なのは」
『えっ、なに？』
「そろそろ、みんなを入れてあげたら？」
『みんな？　――――っ!?』
　……玄関先に視線を向けたなのはが、硬直する。
「「「「……」」」」
　フォワードチーム（＋セリカ）が、勢ぞろいしていた。
『ぎ』
　ようやく我に返ったなのはが発したのは……
『ぎゃーーー

……羞恥の悲鳴だった。

『この任務、現地拠点はここだということは理解しました』

……なのはは、赤面を取り繕うように冷静な声で、事実を確認した。

「あの……高町教官」

『何ですか？　スバル』

「『バンザイ』とは、どのような『斬り捨てますよ』嘘ですなんでもありませんごめんなさいごめんなさい」

畳に頭をこすり付けるスバル。

『……ふー』

頭痛をこらえるように、額を抑える。

『近辺の地理を、身体で覚えていたほうが良いでしょう。食事をしたら、出かけますよ』

「えっ……食事？　ここで、ですか？」

不思議がるティアナに、なのはは、当然のように返した。

『私が作ります。不満ですか？』

「ほら、キャロ。読んでみ！」

「んー……なんてよむの、これ」

フェイトに漫画を押し付けられたキャロが、首を傾げる。

「だいじょぶだいじょぶ！　ケリュケイオンに翻訳機能あるから！ね！」

「すっげぇスペックの無駄遣い……」

キャロに漫画をゴリ押しするフェイトを尻目に、エリオは本棚から抜いた数冊を既に読み始めている。

流石の順応性を見せる年下組の傍ら、スバル、ティアナ、セリカは、落ち着かない。

そわそわ、もぞもぞと、目配せをして、立ったり座ったりを繰り返し……

『出来ましたよ』

そして、ちゃぶ台の上に並べられる料理。

「うわ……美味しそう」
　大喰らいのスバルと、男子のエリオに合わせてなのか、とにかく多い。一つの皿に、こんもりと料理の山が出来ている。バラ肉と茎ニンニクの炒め物をメインに、きんぴらごぼう、ほうれん草のお浸し、大根とワカメの味噌汁と、あの短時間で作ったとは思えないほどの品目がずらっと並んでいた。
『奈々さんと大家さんに材料を借りました。間に合わせですが』
　なんてことは無い、という風に言う。
「なのはさん、料理できたんですか……」
『昔取った杵柄……というやつです。隊舎では、エドが作ってくれますからね。自分でする必要が、ありませんでした。それに……いえ』
　――作る相手もいませんし。
　その一言は、飲み込んだ。
　なべの蓋を開けると、白米が湯気を上げる。
『こちらのほうが、炊飯器より早く炊けますので』
　人数分、食器に取り分ける。
「おい、キャロ。メシだメシ」
「んー……もうちょっと……キリのいいとこまで」
「バーカ、ンなもんメシの後にしろ」
　エリオが、漫画をぱっと取り上げてしまう。
「しゃーまん……きんぐ？　って読むのか、これ」
「うん。面白い。いま、しゃーまんふぁいとの試験がはじまった、すごくいいところだったのに……」
　恨みがましく、エリオの手にある大判の漫画本を見つめる。
「いいところだったのに……」
「駄目だ。メシん時はメシを食え」
　が、それに絆されるほど、エリオは甘い性格ではなかった。
「おー……久しぶりに読むと、またしんせんなはっけんが……」
　その背後でフェイトが漫画を読みふけっていたので、エリオは無言で漫画を取り上げた。

そして、食後……
「なのは、それじゃ打ち合わせどおり、ここからは別行動だね」
『いいでしょう。エリオ、キャロ。フェイトと行動しなさい』
「了解」「わかった」
年長組と別行動。
『フェイト。ちゃんと洗い物をするように。洗い流すだけじゃ駄目だよ。最期は布巾でちゃんと水気を、』
「わかってるってばー……」
フェイトは、奥へ引っ込んでしまった。
『まったく、もう……では、行きますよ』
身支度を整え、出発。なのはも、流石に迷彩服にミリタリーパンツは目立つと思ってか、ジーンズにパーカーという普段着だ。
『はやてから、連絡端末は受け取りましたか？』
頷く3人。念話も使えるが、万が一、念話が使えなくなったときの備えだ。
『まぁ、地理とはいっても、私も帰ってくるのは本当に久しぶりですからね。歩きながら見て回りましょう』
女四人。傍から見れば、同年代の少女たちの集団だ。
街中を歩くなのはは、6年前でも思い出しているのか、時折、郷愁するような雰囲気を出していた。
『……まぁ、レリック反応が出るまでは道草を食っていても良いでしょう。どこか、行きたい所はありますか？』
なのはの気遣いに、真っ先に挙手したのはセリカだった。
「教官っ！『ぶれんぼ』と『おーりんず』と『まるけじーに』を売っているお店に行きたいですわ！」
元・名家の令嬢とは考えられない程に物欲丸出しだった。
『……スバル。ティアナ。そこでいいですか？』
なのはも、呆れながらもそれに沿う流れだ。
「是非っ！」
……ティアナ、物欲モードＯＮ。
そして、某大型バイク用品店に足を運ぶ一同。

客層は、成人男性でほぼ占められるこの店で、女子高生と言われれば通ってしまいそうな四人は、明らかに浮いていた。
と、いうより……
「ブレンボ！　ブレンボのラジアルマスターですわ！　アントライオンのレバー！」「サスがこんなに……！　ああもう、どれにすればいいのよ!?」「天井にマフラーが……はっ、あれはモリワキですの!?　二本出しＧＰマフラーですわ!!」
……セリカとティアナの、あまりにディープなはしゃぎっぷりに、自然と距離を置かれていた。
買い物籠が、あっという間に満杯になる。一体、どれほどの金額になるやら……
『……私の家の住所で構いませんから、無料発送サービスを利用しなさい。抱えて歩くわけにはいかないでしょう』
買い物籠の中身以外にも、マフラーだのヘルメットだのタイヤセットだの、大量である。
「「　くださいっ！　」」
レジに、ドコーン！　とかごを置く二人。店員も、若干引き気味だったが、何も年齢制限があるわけでもない。
「えと……２２万・３千円になります」
「２６万５千円になります」
……なんという大人買いか。
「カードで！」「支払いますわ！」
ズバッ！　と、現地通貨に自動で振り替えてくれるキャッシュカードを取り出した。
「「　毎度ありがとうございましたー　」」
……店の噂になっていないかどうか、なのはは胃が痛くなった。
――ピリリリリリッ
と、なのはの携帯が着信音を鳴らした。ディスプレイに表示された名前は……
『……はやて？』

かぱっと携帯を開き、耳に当てる。
『何よ。　――え？　うん、知ってるけど……え？　は？　なに、それ。勝手に決めないでよ。あんたはそうやっていっつもいっつも……って、くそっ。切りやがった』
忌々しげに舌打ちを一つ。
『……予定変更です。付いてきなさい』
三人を連れてやってきたのは、一見の喫茶店だった。入り口で名前を告げると、空きテーブルへ案内される。
『ふん……』
どかっ、と腰掛ける。
「あの……部隊長は、何と？」
『緊急ミーティングをするから、ここに来いと……全く、ちゃらんぽらんな……』
ぶつくさぼやき、運ばれてきたコーヒーを飲む。
「あの、教官」
『何ですか？』
「教官と部隊長は、こちらの出身なんですよね」
『そうですよ』
「魔法への認識が無いこの世界で、どういう経緯で管理局へ？」
『ふむ……』
なのはは、コーヒーカップを置き、沈黙。話すべきか、否か……
『まぁ、別にいいでしょう』
「はいっ！」
スバル達は、興味深々に耳を傾ける。
『私が魔法と関わったこと、管理局に関わったこと、それは』
「「それは!?」」
ずずいっ……と身を乗り出す。
『――成り行きです』
三人は、盛大にずっこけた。
「教官～！」
『いや、ですが……それ以外に説明のしようが無く』

と、スバルたちは、なのはが背を向ける入り口から、スーツ姿の女性が入ってきたのを見た。女性は、２０代後半か、３０代に差し掛かったころに見える。きょろきょろと、誰かを探すような動作で、店内を見渡し……

――まっすぐ、こちらへ歩いてきた。

えっ……と思うスバル達であったが、女性は、口元に人差し指を立て、『静かに』、と。

『だいたい、私は帰ってくるつもりなんて無かったんですよ。私は、６年も前に、こちらでの交流を絶っているんですから』

「それは、聞き捨てならないわね。絶たれたつもりなんて、毛頭ないのだけれど」

……なのはの背後をとった女性が、発言する。なのはは、不機嫌に振り返った。

『は？　誰ですかコノヤロウ』

そして……女性と、ニッコリと笑顔を浮かべる女性と、目が合った瞬間……

『、、、え、あああああ、う、、、えあ、』

混乱しすぎて変な声を上げた。がこんっ、と、椅子からずり落ちる。起き上がることも忘れ、アワアワと、女性を指差し……

『せ、せ、せん、せんせっ……？』

「久しぶりね、なのはさん」

年月を経ても、一発で分かった。

『富山、先生っ!?』

――なのはの、小学校時代の担任……咲だった。

『なんで、ここに……っ!?』

「八神さんから今朝、メールをもらってね」

『またあのタヌキかっ！』

「さて……なのはさん？」

がしっ……と、なのはを席に座らせ、真正面から見据える。

『な、なにっ、先生……』

「ちょーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっとだけ、先生とお話をし

ましょう？」
『うそだっ！　ちょっとじゃない！　絶対ちょっとじゃない！』
が、あまり本気で抵抗する気は無いらしく……
『ゴホン……仕事中なので、手短に』
スバル達の手前、あまり見苦しいところも見せられない。格好つけては見たものの……
「初めまして。なのはさんの元担任の、富山と言います」
『先生ェ……』
咲は、スバル達と話し始めてしまった。
「は、初めまして……」
どこか、緊張した面持ちのスバル。
「あの……富山さんは、どちらの所属で……？」
「所属……と言うと……そうね、海鳴第二小学校、だけど……？」
「ショウガッコウ、というのは、どのような機関なのでしょうか……？」
「？　学校は、学校よ。教育機関」
「なるほど……新兵の養成機関ですか」
「新兵……？」
……どうにも、話がかみ合っていない。
『先生、先生、そのくらいで……』
止めようとするなのはを、咲は笑みで制する。
……そして、咲が、小学校とは、教育機関とは……と、懇切丁寧に説明した結果。
「「「「ええええええええええええええええっ!?　」」」」
三人は、驚愕の叫びをあげた。
「嘘ッ!?　高町教官が、普通の学生だった!?」
「しかも普通校!?」
「といいますか、文系!?」
「「ありえないっ!!」」
……そう思うのも、無理は無い。
『お前たちは私を何だと思っていたのですか!?』

ばんっ！　とテーブルを叩く。
「紛争地域を渡り歩いてきた傭兵かと思ってました！」
「歴代の特殊部隊を遍歴してきた筋金入りの兵士だと思ってました！」
「Ｊａｐａｎｅｓｅ　ＮＩＮＪＡの血を引いてると思ってましたわ！」
――だいたい全部合っていた。
『この三馬鹿どもッ!!　うぎゅっ!?』
……拳を振り上げたなのはを、咲がテーブルに押し付ける。
「ごめんなさいねぇ。なのはさんってば無口な上に口下手で、誤解を受けやすくて……昔っからあちこちでトラブルを」
『先生っ！　その先は、その先は!!』
「もう、しょっちゅうサボるし、学校に来ても二時間目からとか、四時間目には帰っちゃったりとか、気付いたら図書室に隠れてたり仮病で保健室で寝てたり」
『きゃー!　きゃあああああ!!』
咲の口を塞ごうとするが、咲にはひょいひょいと避けられてしまう。
「教官……私が寝坊で５分遅れたとき、スクワット２００回って……」
恨みがましい声を出すスバル。
「お友達なんて、最初は一人もいなくって。聞いてみたら『一人の方がラク。足手まといはいらない』なーんて悪ぶった強がりを」
「なのはさん……『コンビパートナーを大事にしろ』って……」
「本当は得意なのに、数学も理科も、居眠りをするわテストを白紙提出するわ」
「教官……『読解力を磨くのも、地理学を学ぶのも、オペレーターには必要なことです』と……」
幼少の頃の恥部を暴露され……三馬鹿からじとーーーっとした目を向けられ、さすがのなのはも、涙目だった。

『も、もういいでしょうっ!? 先生の意地悪っ!!』
ばしんっ、とテーブルを叩く。
『うー……!!』
がりがり、とストローを噛む。
実はこれ、かつて、なのはが咲と和解した際、学年主任であり咲の恩師でもある長谷川教諭が行った状況と同じなのだが。
収まりが付かない様子で……いつもの癖で。つい、いつもの癖で。家では匂いがつくからと我慢していたから。コーヒーといえば、コレだから。苛々したら、これだから。
――タバコを咥え、ライターを取り出し、着火。
『……はふー』
もくもくと、煙が。呆然とした咲にまで漂い……
『――――――

欲しくありません）

「なのはさんっ！　分かりましたか!?」

……実に数十分。煙草に関するデメリット。未成年者の飲酒・喫煙。女性の身体に与える影響。その他もろもろの社会道徳を、みっちりと叩き込まれ……なのはは、ぶすぅーーーーーーっとした顔で、そっぽを向いていた。

「出しなさい」

『……！　えっ、やだよっ！　せっかく持ってきたのに！』

「な・の・は・さん？」

咲が、青筋が浮かばんばかりになのはを睨みつけ……

『……わかりましたぁ』

超不機嫌に差し出された煙草とライター。

『……』――ふん、帰ったらまたマリーに作ってもらうもんね。

……と、開き直っていたなのはだったが……

咲は、残っていた数本の煙草を一気に口に咥え、一気に着火した。

「ふっ、むごっ……すはー……げっほ、げほっ!!　すはー!!」

『きゃー!!　先生――――!?』

咲は、涙目になりながらも、全ての煙草をフィルターまで灰にした。

「わ、がりまじたがぁ、なのはざん……だ、煙草は、オエッ……やめないと……何度でも、同じように、没収……げほっげほっ……しまずがらねぇ……」

教え子へ、身体を張った説得だった。

『わかった、わかったから……あんまり無茶なことしないで、先生……』

なのはは、同じく涙目になりながら、咲の口に甘ったるいカフェオレのストローを差し込む。

「ぎぼぢわるい……なにコレぇ……苦味が取れないぃ……」

『……』

実は、煙草ですらないということは秘密である。

騒いでいるうちに、また、一組の学生と思しき男女が。

「お、おおおおっ！　なのはだ！　ホントになのはだーーーーー!!」
「お、おおおおっ！　高町だ！　高町じゃねーかーーーーー!!!!!」
『のっ……望!?　葉山君まで!?』
「ちぇすとー!!」
『ぐぇッ――――！』
　望は、出会い頭に、なのはにラリアットを喰らわせた。
「何で連絡の一つも寄越さず消えたっ!?」
『だ、だって！　私にだって、色々と都合が！　都合が！』
「知るかー！　わたしが、ど、どれだけっ……！」
　途端、涙目になる望に、なのはも気まずそうにする。
「なのは、わたしのことなんて、忘れちゃったのかって……！」
「あーホラ、ストップストップ」
　健太が、望をなのはから引き剥がす。
「よッス。なんか、グダグダだけど……久しぶりだな、高町」
『葉山君……うん、久しぶり』
「まぁ、こいつが癇癪起こすのも無理ないっつーか……うん。マジで心配してた」
　咎めるような口調ではないが、言葉の端端から、心配を掛けていたことを察した。
『……ごめん』
　……望は、もう一度だけなのはの頭をコツン、と叩き、席に座った。
「つか、その子たち誰なんだ？」
　と、置いてけぼりになっていたスバル、ティアナ、セリカの三人に目が向く。ほぼ同年代のようにも見えるが……なのはに対して、遠慮というか、腰が引けているようにも見える。
『私の教え子だよ』
　……事も無げにさらっと言うなのはだったが、咲、望、健太の三人は、開いた口が塞がらなかった。

◆◆◆

――カランカラン。

ドアベルが鳴り、来客を告げる。
「……」
杖を突いたはやてが、店内に足を踏み入れる。珍しいことに、フィアットもリーゼも、傍らにはいない。
アルバイトであろう、見知らぬ店員に案内され、テラス席へ。
そこには、フェイトとはまた違った質感の金髪の少女と、漆器のような黒髪の少女が待っていた。
二人は、はやてと顔を合わせ……数年越しに、はやてと再会を果した。
「よう、久しぶりだな。
――アリサ。すずか」
数年ぶりだというのに、軽い挨拶だった。だが、これでいいのだろう。
「はやて――！」「はやてちゃん！」
駆け寄ろうとしてくる二人を制し……杖を椅子に立てかけ、座る。
「やめろやめろ。感動の再会とか、背筋が寒くなるわ」
運ばれてきたアイスレモンティーを、ストローを使わず直飲みで飲み干す。
「……というか、お前たちには時々連絡をしていたんから、別にいいだろう」
「いいわけあるかっ！」
尤もである。
「それで……まだ、見つからない？」
「ああ。影も形も、だ」
定期的に連絡を取り合っているのも、それが目的なのだが……今日は、少し違った。
「連絡したとおりだ。今、なのはをこっちに連れて来ている」
「7年ぶり……よね」
「うん。あのクリスマスから、ずっとだもんね」
なのはが、こちらでの暮らしの全てを捨て、凶鳥部隊へ参入し……既に6年。

「今は、一人ひとり……な。次は、お前たち二人。そんで最期に、アイツの肉親だ」
アイスレモンティーが、再び空になる。
「もしかして、ここまで手を回してまで、はやてがやろうとしてるのって……」
はやては、ああ、と頷く。
「里帰りだ」
フライドポテトをバリバリと口に放り込み、苦笑する。
「あー、でもな。仕事絡み、ってのも本当だぞ？」
微小ながら、レリック反応があったということは、嘘ではない。誤反応か、別の痕跡か。……はたまた、アタリか。
「それにしたって……公私混同もいいとこね」
「うん。……大丈夫なの？」
はやては、けたけたと笑う。
「いや、いいわけ無ぇよ。ぶっちゃけ、この先の面倒ごとの3、4は押し付けられても文句言えねーし」
ある程度、自由裁量で部隊を運営しているとはいえ、はやても巨大な組織の一員だ。
「――あいつは、頭が良い癖にアンポンタンでな。……一つの目的に没頭しすぎて、本当に、こっちでの人間付き合いを忘れ去りかねん」
だから、騙してでも、力ずくに訴えてでも、引きずってきたのだ。
「へぇ……」
「ふぅん……」
「な……何だよ……」
二人の生暖かい視線に晒されたはやては、少しムッとした顔を作り、ぼそっと呟いた。
「……しゃーないじゃん。あいつは、私の友達なんだから」
――和やかな時間が終わる。その時は、一瞬だった。

――――――――ズガァァァァァンッ!!!!

巨大な炸裂音と共に、町の一角で火の手が上がった。

◆　◆　◆

「ええっとぉ……」

降り立った海鳴市の一角で、クアットロは佇んでいた。流石に、バイザーはあまりにも目立つので、シンプルにサングラスでの変装だ。敵方の位置でも知ろうかとしていたのだが……

「うわー！　何アレ何アレー!?　いいにおーい！」

「『くれぇぷ』って書いてあるッスよー！　何だか知らないけど美味そうッス!!　買うッスー！」

……完全なおのぼりさんと化したディエチとウェンディが、真横で大騒ぎしていた。

「ああ、こら！　駄目よ勝手に行ったら！　待って！　ストォオオオオップ!!」

襟首を掴んで引き止める。

「もう！　何をしに来たのか、忘れちゃったの!?」

「？　任務だよ？」「そのお供ッス」

「分かってるんじゃないの……」

「だがしかし――」「――いつから任務開始だとは明言されていないッス！」

「よって、これは正当な準備時間である!!」「で、あーるッス!!」

……まんま子供の屁理屈だった。

「……はぁ。わかった。わかりました。一個だけよ？」

が、折れてやることにしたようだ。

「むぐむぐ……あまーい！」「そして、うまーいッス！」

三人、クレープを食べながら歩く姿は、とても工作員には見えない。

「んで、どこでブッ放せばいいの？」

「ぶっ放しません。……ええっとぉ」

顎に手をやり、首を傾げるクアットロ。

「……あら？　あらあら？　……因果かしらねぇ？」
サーチャーに引っかかった、とある反応に、笑みを深くする。そのまま、通信回線を開き……
「あ、ルーテシア？　クアットロちゃんでーす。なーんとなんとぉ、レリック反応が検出されましたぁ。……あ、更に気合入っちゃった感じぃ？　くすくす」
妹たちに振り回されていた姉の姿は、そこには無く……
「――それじゃあ、食べ終わったら、始めましょうか？」
……狡猾な策士が、そこにいた。

――そして。
「おいおい、ツイてんじゃんヒトシー！」
「すっげ！　マジすっげー！」
……裏路地を闊歩する若者たち。その一組が、道端に座り込み、大騒ぎをしていた。足元には……無骨なハードケースのようなもの。おそらく、金目のものだと勘違いしたのだろう。無警戒に開封し、中身を……レリックを、弄んでいた。
「やっりぃー！　質屋に売りに行こうぜ！　ぜってー金になるって！」
「マジで!?　うっひょー！　何買う何買う!?」
拾得物横領などという言葉を彼らが知るはずも無い。
「はぁい、こーんにーちはー♪」
……と、裏路地には似つかわしくない、愛想に溢れた声がする。
「あァ？」
振り向いた先にいたのは……三人の少女たち。
「キレイですねー。ちょーこっと、見せてもらえませんかー？」
「は？　お、おい……誰だテメ」
すたすたと、おくびも無く距離をつめたクアットロは、彼の手のレリックを間近に検分する。
「はーい、ナンバー3……というわけで、残念。大ハズレでした」
『……ふん。違うならいいや。好きに使いなよ』

「はいはーい」
ルーテシアと通信越しに会話をしつつ、ぱっとレリックを取り上げる。
「は!? おいゴラァ!」
途端、逆上する若者たち。
――ゴキンッ!
その鼻っ面を、ディエチの振るった武装が叩き伏せた。
「ゴぁっ!?」
身の丈を超える程の、金属製の筒状の武装だ。振るうだけでも、脅威の膂力だが……それをモロに喰らったのでは、堪ったものではない。
「ありゃ、予想以上に弱っちぃ」
「こらこら、殺したら後が面倒ッスよー」
けろっとした調子で言うディエチとウェンディ。
「あ、アタマおかしいんじゃねーの……!?」
難を逃れた一人が、恐怖のままに逃げ去っていった。
「あーあ、逃げちゃった。……追うッスかー?」
「うーん……そうねぇ。騒がれると面倒だし、軽くプチッとしちゃって頂戴」
「あいよーッス!」
ウェンディは、スキップするような足取りで……しかし、恐ろしい速さで、もう一人を追跡に走った。
「さぁてと、」
クアットロが、懐から、腕輪のような装置を取り出す。台座のところには、丁度、『何か』を据えるアタッチメントがある。
「ここに、レリックちゃんを、ぱちっとな」
クアットロが、『ハズレ』と称したレリック3番。腕輪の中で、凶暴な、赤黒い輝きを放ち……
「撒き餌の役目を、命の限り果たしなさぁい」
――ガチンッ。
……腕輪が、装着された。

◆◆◆◆

――――――――ズガァァァァァンッ!!!!

唐突に鳴り響いた爆音に、店内は騒然となった。

『異常なエネルギー反応を検知』

レイジングハートの警報が鳴ると同時、なのはは、神経を切り替える。

『行きますよ』

そして、咲たちには目もくれず、店から飛び出す。スバル達三人も。

「えっ……」

完全に置いてけぼりを食らった咲に対して、望と健太は、察した風に、爆音とは反対方向へ、咲を連れて避難を始めた。

「教官。西南の方角、現在地より3ｋｍの方角ですわ」

『通信範囲内ですね。セリカ。指示するポイントで認識阻害結界を展開しなさい』

「了解ですわ！」

セリカのみ、別方向へ。フェイトたちとの中継の役目も果すためだ。

『スバル。それまで、マッハキャリバーでの移動は控えなさい。アレは目立ちすぎます』

「了解！　走ります！」

たかが3ｋｍ、走れば10分も掛からない。

『ティアナ。認識阻害結界が展開するまで、発砲は可能な限り控えなさい』

「はいっ！」

ここが、魔法への認識が無い、管理外世界ということは理解しているようだ。

――ドガゴンッ！　バゴンッ!!

現場の方からは、断続的に爆音が響いている。

『……急ぎましょう』
「……？　はいっ！」
その声に、僅かな焦燥を感じるが、今は聞き返している時ではない。
そして、現場に到着した。
『民間人への被害は』
『現時点では、ゼロですわ！　ですが……』
『……ええ。把握しています』
――腕を金属状の組織に融合された若者が、正気を失った目で、破壊を撒き散らしていた。
「うｇｅあａａａａａａａａａａａａ!!」
おぞましい金属腕を、振り払うように振り回す。その度に……内部で赤い光が明滅し、余波が破壊力として撒き散らされているのだ。
『制圧目標を確認』
セリカの管制の声が届く。
『右腕内部に、レリックの反応を検知しました。恐らく内部に、接続機器のようなものがあるはずですわ』
『一番手っ取り早いのは、右腕を切り落とすことですが』
『純然たる被害者に、それは酷というものです、マスター』
『言ってみただけです。さて……スバル』
「はいっ！」
『打撃ダメージでのノックアウトが望ましい以上、適任はあなたです。前衛は任せます』
「はいっ！　スバル、行きますッ!!」
『教官！　東南の方角に１．５ｋｍ、また別個の反応！』
『脅威度は』
『データベースに照合……該当無し！　未知の体系です！　出力をランクに換算して……Ｂ＋～Ａ相当！』
『わかりました。ティアナを向かわせます』
「！」
『ティアナ。できますね？』
なのはは、一定の信頼を以って部下を蹴り出す。

「……了解！」
そして、ティアナは単独で別方向へ。
『セリカ。フェイトたちをティアナの元へ向かわせなさい』
『了解ですわ』
『……』
こうして後衛に付くと、良く分かる。
「だぁっ!!」
――ガスンッ!!
「お、ゴｇａａａａａａａａ……！」
懐に潜り込んでからの、体重の載った正拳。
「ｇｕあァあああッ!!」
無造作に突き出された金属腕に合わせた、カウンター。
「ｓｈあああああああああああ!!」
――バガガガガガンッッ!!
吐き出される衝撃波を、流れに逆らわず、背後に跳び、回避。
『(いい仕上がりです)』
スバルは、確実に進歩している。あの、真正面に突撃するしか脳の無かった頃とは大違いだ。
『(とはいえ、まぁまぁかな)』
そのタイミングを取りやすいように、後方からそれとなく射撃で暴走体の体勢を崩したり、逸らしたりしているのだが……鎮圧は、時間の問題だった。
◆　◆　◆
路地の一角……先ほどの若者たちの片割れが、息も絶え絶えに逃げていた。
「はーっ、はーっ……！　ここまで、来れば……！」
「逃げられるとでも思ってたッスかー？」
ヌッ、と至近距離で覗き込む、顔。
「ひィっ!?」
貫き手を、躊躇無く水月へ繰り出す。
「そんじゃあー、ほい。プチっと――――っ!?」

――ガキィンッ!!
貫く寸前、ウェンディの側頭部へ弾丸が迫り、辛うじて迎撃。
「っとっとっとぉ！　……何ッスかー？」
気だるげに振り返ったウェンディと、銃を構えるティアナの視線がぶつかる。
「管理局機動六課です。管理外世界での、」
「うざいッスよー」
――バシュッ！
瞬間移動のように、ティアナの側面に回ったウェンディが手刀を振るう。が、ティアナの身体に触れた瞬間……
――ギュルルルルルッ
ティアナの姿が宙に解け、ウェンディの身体を縛り上げるバインドが発動した。
「お、お……？」
「随分、せっかちね。文言くらい、最後まで言わせなさいよ」
物陰から、またティアナが出てくる。
「罪状は……あー、公務執行妨害でいっか」
「何スか、こんなもん」
――シュウウッ……
バインドが、不自然な解け方をする。持続時間はまだ余裕があるというのに、まるで、それが早まったように。
「そいやっ、ッス！」
また貫き手……と見せかけて、手元の『何か』を、ティアナに向けて投擲した。
――バチィンッ!!
回避が間に合わない程の速度で、ティアナを貫く。そして、また……
「同じ手ばっかりじゃ、つまんないッスよー？」
バインドの圏内から、数歩後ずさって回避。
「そうかしら？」
――ドンッ!!

「っとォ!?」
バインドの術式の影から、直射の射撃が飛び出した。数は、3。
身を逸らすウェンディの足首に……
――ギュルルルッ!!
バインドではない、実体のワイヤーが絡まる。
「ぬっ、おっ……?」
今回は、何故か解かない。解かないまま……
「おわたぁっ!?」
……ずべしゃっ、と、顔から地面に倒れこんだ。
「や……やりやがったッスねぇ～!?」
顔に付いた土ぼこりを拭い取り、立ち上がる。
「だったら何よ?」
再び、ティアナが姿を見せる。
が、ウェンディはそれに仕掛けることはせず、不敵な笑みを浮かべた。
「ふふーん！　もうオマエの手品は見破ったッスもんねー！」
「そう。それは残念だわ」
ウェンディは、ティアナの横を走りぬけ、その先にいたティアナ……も、通り過ぎる。
「こっちと、こっちは偽者ッス！　そんでぇ……！」
更に、その先。ミッド式魔方陣を展開していた、三人目のティアナを補足。
「オマエが本物ッスー!!」
――ビュゴッ!!
旋風が起きるほどの高速でキックを繰り出した！
――ゴイイイイ～～ン……
……非常に間抜けな音が響く。
「馬鹿ね。わざと見破りやすいようにしておいたのよ」
本物だと思っていたティアナの姿がまたもや消え……そこにあったのは、金属製のポールだった。ウェンディの足の形に、ベッコリと凹んでいる。

――ドゴッ!!
「あ痛ぁっ！」
……二人目のティアナが撃った射撃が、ウェンディの後頭部にヒットする。
ウェンディは、涙目でいずこかへ叫ぶ。
「話が違うじゃないッスかこのへっぽこ指揮官！　シャンとするッス!!」
「指揮官……？」
ティアナが訝しみ……ウェンディは、ハッ、と失態に気付いた。
「あっ、違う！　違うッスよ!?」
が、もう遅い。
『セリカ、探して。別働隊がいるはずよ』
『了解ですわ』
「違うって言ってんのにー！」
『……馬鹿で助かった、けど』
ウェンディに、先ほどの射撃のダメージは見受けられない。結構、本気で撃ったのに。べっこり凹んだポールのこともある。
「身体能力と頑丈さは、人間の比じゃないわね」
『もちっと出力上げとくか？』
相棒からの提案に、しかし首を横に振る。
「このまま突っつき回してれば、勝手に自滅するわよ」
……ティアナは、ウェンディをそう評した。
◆　◆　◆
『話が違うじゃないッスかこのへっぽこ指揮官！　シャンとするッス!!』
独自の回線で安全に情報交換ができるというのに、よりにもよって口に出して敵に情報を漏らしたウェンディ。
「あ、ああ、あの、お馬鹿……!!」
クアットロは、怒りのあまり呂律が回っていなかった。
「～～!!　後で、こってりとおしおきよ！」
今は、戦闘に集中するべきである。

気持ちを切り替え、自分の仕事に戻るクアットロ。
「フェイト・テスタロッサと……ジャリが二匹。到着まで、あと数分ってところかしら？　認識阻害結界が展開するまで、空も飛んじゃいけないなんて……お役所って不自由ねぇ？」
「ねぇねぇ、クアットロ。わたしの出番まだー？」
退屈をもてあましたディエチが、クアットロのコートの袖を引く。
「はいはい、引っ張らないの。撒き餌クンは、もうちょっとは　持ちそうかしら？」
「んー……っと」
ディエチが、じっと目を凝らす。
「もうそろそろっぽいよ」
この距離で、見えているらしい。
「ルーテシア、そちらの準備は？」
『いつでもいいよ。というか待たせすぎ』
「はいはい……」
『ぎにゃー！　また引っかかったッスー！』
……ウェンディは、いいようにティアナに遊ばれているようだ。
「あの子は武装が無いんじゃ、能力を存分に引き出せないからねぇ……」
ぱちぱち、とホログラフキーを叩き……
「よし、準備終わり」
仕掛けが整った。
「ディエチちゃーん」
「はーい！」
「三点同時に、物理破壊設定でぶっ放しちゃって頂戴」
なのは、ティアナ、フェイト……それぞれの三地点。
「オッケー！　ＩＳ・《ヘヴィバレル》！」
ディエチの持つ巨大な砲が、起動する。単一の砲だったそれは、砲身部分で分離。三つ首の、異形の砲となった。
「ふんふんふーん♪　ぶっ放すのは、楽しいな～っと！」
――ロック。

――ロック。
――ロック。
引き金に、指が重なる。
「ファイヤーーーーー!!」
――――――三方向へ、驚異的な殺傷力を誇る砲撃が発射された。

◆◆◆

――ビーーーーーー!!!
セリカの管制システムに、真っ赤な警告が表示される。
「物理破壊……殺傷可能設定!?」
しかも、発射地点は認識阻害結界の範囲外だ。
「皆さん！　可能な限り民間人を保護し、その場から退避！　砲撃が来ます!!」
その通信を受け取った六課のメンバーたちは、その場を各々、離脱した。
そして、次の瞬間……
――――――グゴォオオオオオオオオオオオオオオオンッ……!!
街中のど真ん中に、着弾！
「お構いなしにも程がありますわッ！　被害状況は……！」
表示される情報群。幸いにも、民間人に死傷者は出ていないようだった。
「教官っ！　フェイトさんっ！　……ティアナさんッ!!」
仲間の安否を探る。マーカーは消えていないが……着弾時に何らかの細工がされたのか、通信が届きにくくなっている。更に、そのマーカーの反応が、点滅する。
「転移反応！　これは……例の敵召喚師!?　いけませんわっ！　分断されるっ!!」
砲撃は、あくまでこの準備。倒せるなら善し、倒せなくとも、戦力

を分断できる。
「――!! 繋がって下さいませ！」
受け取っていた通信端末を取り出し、コール。例え現地の回線が民間人によるパニックで混雑していても、衛星回線を用いるこの端末なら繋がるはずだ。
――ｐｒｒｒ，
たったの１コールで繋がった。
「お三方！ 転移反応が検出されています！ 戦力の分断が目的と予想！」
『了、』『了解！』『りょーかい！』
マーカーが、完全に消える。何とか、伝えることは出来た。あとは、どこへ飛ばされたのかを検出しなければならない。
が、見つからない。執拗なまでに妨害工作がされており、三組の行方どころか、敵の所在すら掴めない。
「……!!」
指先が霞んで見えるほどの高速タイプで、妨害工作を潜り抜けようとするも、敵方の方が優勢。一向に、回復しない。
「……！ どうすればっ……！ このままじゃ……!!」
こちらは碌な管制も無い状況で、敵は万全の備えをしているだろう。なのは、フェイトのようなベテランなら、潜り抜けることが出来るのだろうが……フォワードチームを抱えた状態で、戦力の構成も未知数な敵を相手に、無事で済むかどうか。
不安に押しつぶされそうになっても、手は休めることは出来ない。泥沼のような敵の仕掛けを、一刻も早く攻略しなければ……
「――お待たせ。一人でよく頑張ったね」
……セリカの肩を、誰かが叩く。
「――――ユーノ、さん……？」
「うん。ごめんね、遅くなって」
柔和な笑みを浮かべながら、ミッド式魔方陣を展開。
「認識阻害結界、展開継続。爆心地の鎮火と避難誘導は……うん、現地スタッフが向かってる」

セリカの負担分を、軽く引き受けた。
「セリカさんは、なのはたちの捜索を継続してくれるかな？」
が、セリカは弱音を漏らした。
「まだ、全然出来ておりませんわ……！　敵の妨害を、全然解決できていなくて――！」
……ソレに対するユーノの返答は、驚くべきものだった。
「――解決しなくて良いんだよ」
……セリカは、開いた口が塞がらなかった。
「トチ狂いましたのッ!?」
ユーノは、「逆に発想してごらん」、と促し……
「君が、敵を分断するような罠に嵌めるとき、どういう手を使う？」
セリカは、その意味を考え……
「――、あっ!?」
納得したように、手を打った。
「相手が用意した問題に、馬鹿丁寧に答えてやる必要なんて無い。自分なら、どうするかを考えてごらん」
セリカは、とっくに答えを得ているようだった。
「一番、来られては困る場所を、一番厳重に妨害しますの！」
正解、とユーノは頷いた。そうと決まれば、話は早い。
「全帯域に、短波を発信。徐々に、波の強度を上げていって……」
「最期まで反応が返ってこなかった所を、上から順に総当りですわっ！」
セリカは、早速取り掛かる。発見は時間の問題だろう。
「ユーノさん……司書である貴方が、何故こんな」
職業柄と、全く一致していないようにも思える。ユーノは……
「場数は、嫌って言うほど踏んできたからね」
……柔和な笑みの奥に、なのはと同質の、強い自負を見せた。
「それに、スバルさんたちは大丈夫だよ」
セリカの懸念も口にする。
「なのはの、情け容赦の無い地獄の訓練に今日まで付いて来れたんだ。こんなの、いつもの訓練の半日程度さ」

セリカの肩から、余分な力が抜けていく。
「さぁ、探そうか」
「――はいっ!!」
セリカは、再びキーを叩く。
◆　◆　◆

ティアナが飛ばされたのは、巨大な空洞のような空間だった。とにかく、広いという印象しか与えない。天井を支える柱も、また巨大で……
「座標は？」
『さっきの町から、北西に４５ｋｍってとこだな。まだ地球だぜ』
「他の連中は？」
『……駄目だ。通信が届かねえ』
「敵の常套手段ね……」
油断無く相棒を構える。
「――――――――どォおりゃあああああああああああああああああああ、ッス!!」
空間内に反響するような雄叫びと共に、『何か』が突っ込んできた。
「うわぁ!?」
地面に這いつくばって回避する。ビュゴッ！　と、風圧が背を撫でるほどの距離だ。
「ハッハァー！　この……『トルネイダー』と!!」
エンジンのような駆動音に、顔を上げれば……ウェンディが、ローターを縦に二つ並べたサーフボードような、奇妙な形状の浮遊機械の上で立っているのが見えた。
――ヒュイイイイイイイン……！
揚力を生み出していると思しき二つのローターは、青白く発光しながら、高速で回転を続けている。
「何でも速く動かすうちのＩＳ・《エリアルレイヴ》が合わされば！
うちは無敵ッスー!!」
速く動かす……加速させる。あの、不自然に速い貫き手や手刀など

の攻撃も、バインドが設定時間より早く解除されたのも、この能力を対象に使用したからなのだろう。
「(……やっぱりバカだ、あいつ)」
よりにもよって敵に向かって、自分の能力の秘密をペラペラと勝手に披露して……何がしたいのだろう、あの敵は。
呆れるティアナを知ってか知らずか、ウェンディは、ティアナをビシッ！　と指差した。
「オマエは、罠に嵌ったネズミちゃんッス!!　大人しく屠られるッスよー！」
――ビュゴォオッ!!
そして、再び突撃！
――ドンッ!!
正面からの射撃。回避は、相対速度的にも不可能。しかし……
「避ける必要なんて微塵も無いッス!!」
――バチィンッ!!
浮遊機械……『トルネイダー』の正面に、力場が発生。ティアナの弾丸を、蹴散らしてしまう。
「くぁっ……！」
回避が遅れ……衝撃波に揉まれるも、その背後に向かって射撃を連射。
「遅いッス！」
……が、発射された射撃が、『トルネイダー』の速度に追いつけていない。標的を外れた射撃は、壁に命中するに終わった。
「ヴァリュアブルバレット……外殻強度で、あの力場を抜ける？」
『……難しいだろうな。弾ごと消し飛ばされて終わりだ』
「それじゃ……作戦変更よ」
――ヴゥウウンッ……
幻術で、ティアナのシルエットが増える。
「一つ覚えの手品なんて、こうッス!!」
――ビュゴォオオオオッ!!
低空を滑空してきたウェンディと『トルネイダー』が、複数のシル

エットを纏めて消し飛ばした。
「ありゃ、本体は……」
……幻術を囮にしたティアナは、柱の影に隠れていた。
「……」
じっと目を瞑り、鼓動を落ち着かせる。
「……よし」
――作戦は、決まった。
柱の影から……今度は、本物のティアナが出てくる。……コレを成功させるには、幻術を介しての遠隔操作では無理だ。
「お？　よーやく観念したッスか？」
「さぁ、どうかしらね」
煙に巻くティアナに、ウェンディは『トルネイダー』の先端を向ける。
「こんな閉所じゃあ、幻術を囮にして逃げることも出来ないッスもんね!!」
――ゴウッ!!
突貫を避け、通り過ぎるギリギリのタイミングで、射撃を発射。
――バチンッ!!
が、それは力場にはじかれる。
「あっはっは！　無駄ッスよー！」
再び天井近くにまで上昇。空戦能力の無いティアナでは、手が出せない。ヒットアンドアウェイで、じわじわと削っていくのだろう。
――突貫。回避。射撃。無効。
――突貫。回避。射撃。無効。
――突貫。回避。射撃。無効。
――――。
幾度繰り返した頃か。ティアナの魔力量が、半分を割った頃……
『見えたわね、クロスミラージュ』
確かな情報を得ていた。
『ああ。全長３９００ｍｍ、全幅１１００ｍｍ全高３１０ｍｍのうち、

力場で覆われているのは前方２５００ｍｍまでだ。最高速度は……この空間に限っての計測だが、時速４００ｋｍってとこだな。奴さんも、壁にぶつかりたくは無いんだろう』
すれ違うのは、一瞬。２５００ｍｍを過ぎたところで、『トルネイダー』に正確に命中させる必要がある。
「やるわよ。一泡吹かせてやるんだから」
『おう。やっちまいな』
そして……クロスミラージュに、虎の子のチャージング・カートリッジを装填した。
「年貢の納め時ッスーー!!」
――ゴォオオオオッ!!
文字通りの旋風と化して、ティアナへ突っ込む『トルネイダー』。
ティアナは、その鼻先……ではなく、地面に向けて、一発目を発射する。
――ボフンッ……!!
吐き出されたのは、漆黒の煙幕。
「邪魔ッス!!」
吹き散らされる煙幕……そして。
――グイイイッ!!
「おわぁっ!?」
唐突に、後ろのローターに違和感。見れば、ガリガリと……鈍色の鎖……錬鉄が、ローターに絡まり速度を下げていた。
「こんなもんーー!!」
ウェンディは、強引に出力を上昇。
――バキンッ!!
錬鉄が砕かれ、宙に消える。
「あっはっは！　秘策は不発だったみたいッスね!?」
安全域に再度上昇したウェンディが高笑いをする。見下ろす先、ティアナは煙幕の位置から一歩も動かず、相棒を手放して転がっていた。
「そんじゃあ……次こそ、プチっと潰れるッスー!!」

今度こそ、無防備……と、ウェンディは最大速度での突貫。
――ガヒュウウウウウウウウウウウウウウウンッ!!
その、駆動音が……異常な高鳴りをする。
「なっ!?　……何ッスか!?　どうしたッスかー!?」
有り余る出力は、コントロールを不能にし、空中で無様なダンスを踊る。必死に制御しようとするも、暴走したエンジンは、更に出力を上げていく。力場はその形を失い、掻き消える。
「くそっ！　いっッスか！　いつ……！」
忌々しげに、地上のティアナを見下ろす。その視線を受けたティアナは……
「……ばーか」
会心の笑みで、中指を立てていた。
「あ、……あの時かぁあああああーーーーーー!?」
一瞬、速度が落ちたあの瞬間……その、一瞬の狭間で、力場を回避した一撃を食らわせていたのだ。恐らくは……カートリッジ内に込められていた、強化魔法に類するものを。カリカリにチューニングされているであろう『トルネイダー』は、それで呆気なく機体バランスを失い、暴走した。
ぐんっ、と、無軌道に飛び回っていた『トルネイダー』が、一つの方向へ向きを定める。力場を失った穂先には、壁と一直線に繋がる……オレンジ色のチェーンが伸びていて。
「くっそォおおお

ぱらぱらと、破片まみれになったウェンディが呻く。
いかに頑丈な肉体といえども、時速数百キロで壁に衝突すれば、甚大なダメージを負う筈だ。衝突の寸前、自ら『トルネイダー』を捨てたおかげで、即死は免れたようだが……
「……」
こちらはこちらで疲労困憊のティアナが、銃口をウェンディに向ける。
――パンッ!!
着弾した弾丸が破裂し、ウェンディを、トリモチ状の組織が拘束する。
「確保、完了……」
『よくやったな、ティアナ』
相棒の労いの言葉に、笑みを返す。
「アンタと……あいつらのおかげよ」
弾倉から、使用済みのチャージング・カートリッジを取り出す。
煙幕弾は自前だが……錬鉄はキャロ、強化魔法はエリオに、事前に込めてもらっていたものだ。何より……
「真正面から突っ込んでくるのは、スバルの相手で慣れてるからね」
普通、アレだけの勢いで突撃されたら、一瞬体が硬直してしまうものなのだが……スバル相手に訓練をしていたおかげか、それは起きなかった。
「ひとまず、これで……」
「一件落着、ってか?」
「!?」
クロスミラージュを手に、飛び起きる。
「いやー、惜しかった惜しかった。あたしがいなかったら、文句なしにきみの勝ちだったんだけど……」
索敵に、反応なし。
「お姉ちゃん的に、みすみす敵に妹を渡すわけにはいかないんだよねぇ」
トリモチで拘束しているはずのウェンディが……ずぶずぶと、地面

に沈んでいく！
「!!?」
『下かっ!?』
まるで……地面が、液体になったかのように。
何は無くとも、ひとまずその周辺へ射撃を撃ってみるが……弾丸は、地面に跳ね返されるだけ。ウェンディは、そのまま……地面の中に、姿を消してしまった。
「はい、回収完了―。んじゃあついでに……
―きみにも来てもらおうかなー!?」
地面を介して……気配が迫る!!

「―――火炎城壁」

―――ゴォオオオ

ウェンディを、取り逃してしまった。
「構わん。あの能力を予想しろというのも、無理な話だ」
レヴァンティンを鞘に収める。
「さて……他の連中。うまくやれよ」
シグナムの呟きに、ティアナは、こくん、と頷いた。

◆　◆　◆

「うおっと!!」
「きゃー」
エリオとキャロは、フェイトとは別々に転送されてしまったようだ。
「フェイトさんは?」
「んー……だめ、つうじない」
周りは、ティアナが飛ばされたのとは別の場所だった。辺りは、経年劣化したコンクリートで囲まれた、トンネルの中だ。苔むしていて、長いこと手入れもされていない廃洞だろう。この閉鎖空間では、フリードの空戦能力を活かすことは難しい。下手をすれば、崩落に巻き込まれかねない。
「おい、キャロ」
「うん。……いる」
辺り一帯から、例の召喚師と同じ魔力の気配が濃密に漂っている。聞こえるのは、虫の羽音。エリオは、油断無く周囲を警戒し……
――バォンッ!!!
瞬間移動をするように現れた、人型昆虫・ガリューの蹴りを辛くも回避する。
「何だ、コイツ?」
ストラーダを繰り出し、応戦。リーチでは、ストラーダが上だが……ガリューは易々と間合いを縮め、打撃を放つ。
「これでも……喰らえッ!」
――バリバリバリッッ!!

打ち合ったストラーダから、電撃が迸る。
「……!!」
ガリューは、身体を仰け反らせ、慌てるように距離を取った。
「キャロ、フリード。適当に援護しろ」
「わかった」
電撃が有効なことが分かっただけでも大収穫だ。打ち合いながら、隙を見て電撃をお見舞いして……と、計算していた矢先。
『ｅｌｅｃｔｒｉｃｉｔｙ　ｓｅａｌｉｎｇ』
……不意打ちの魔力弾が、エリオに直撃した。
「がはっ……!!」
「……!　フリード、あそこ!!」
その発射地点へ、フリードの火球を発射。
――バシュッ……
ガリューにあっさりと弾かれるが、距離を取ることはできた。
「くっそ、油断した……!」
ダメージはあるものの、自力で立ち上がることは出来るようだ。
『使い手よ。少々厄介なことになった』
「あァ？　んだよ、この程度のダメージで」
『違う』
ストラーダが、事態を知らせる。
『今の一撃で、汝の雷が封じられた』
「何っ!?」
エリオは、確認するため、放電を試みるが……
「……マジだ。魔力が、変換されない」
ただ、素の魔力が流れるだけで、１ボルトの電気も発生しない。
「これでもう鬱陶しい電撃は使えないね」
ガリューが守っていた術者が、姿を見せた。
「……女？」
女……いや、少女だ。外見的には、キャロやエリオと同年代か。
「そっちだってかたほうは女じゃない」
こちらを見下すような、変化の無い表情で淡々と喋る。

「大人しく投降すれば殺さないであげるよ」
やる気の無い、降伏勧告。言わされている感が、満々だった。
「はぁ。ランダム転送だったとはいえあの野蛮人に当たらないとは不幸ね」
本命は、なのは。だから、エリオたちはオマケ程度で、本気を出していないのだろう。
無言でストラーダを構えるエリオに、ルーテシアは……
「抵抗したら殺すって意味が分からなかったのかな」
あっさりと、ガリューをけしかけた。
フリードの召喚と、有効な電撃が封じられている以上、エリオ、キャロ、二人の通常魔力と、フリードの火炎。ストラーダによる物理攻撃で倒さなければならない。2対3という点では、有利といえるのだが
――ガリューだ。
なのはは、腕の一本を切り落とすことが出来たが、それはなのはだから出来た芸当だ。まだ未熟なエリオの槍術では……
――ドスッ!!
「ッ――!!」
軽く振るったような一撃は、しかし、エリオにとって痛恨の打撃だ。
キャロが隙を見ては射撃や、フリードの火焔をぶつけようとするのだが、ガリューの甲皮は魔力ダメージを相殺し、火炎は簡単に対処されてしまう。
「ッのやろォおおおおっ!!」
『……』
――ガキィンッ!!
エリオの一撃を、甲皮に生えた棘の部分で、軽く受け止める。
(駄目だ……! レベルが違いすぎる!!)
手を抜いた教官にさえ歯が立たない自分が……本気の教官と、近接戦で張り合うような手練と、張り合える道理など無い。
――ドカッ!
直蹴り。ストラーダの柄で受けることには成功したが、衝撃は胴体にまで伝わった。

「ぐ、う……っ!!」
追撃の踵落とし。
「錬鉄……召喚っ!!」
――ギャリリリリリリッ!!!
キャロの、魔力では無駄と知っての、錬鉄の鎖。蹴り足を縛り上げ……
『ｖａｒｎｉｓｈｉｎｇ』
――パリィンッ!!
召喚魔方陣が、ガラスのように砕け散り……錬鉄の鎖も、解けるように、消えてしまった。
『ｂｉｎｄ』
フリードも、口と翼を、強固なバインドで縛られる。
「――2対2、なんだよ？」
杖状のデバイスから、紫色の魔力光を立ち上らせ……ルーテシアが、酷薄に告げる。
行き場を失った自身の魔力の逆流は、ケリュケイオンの安全弁に塞き止められたが……その、一瞬。キャロは、魔法を発動できなくなり。
――ドスッ
「――、ぁ」
ルーテシアが放った魔力弾を喰らい、倒れた。
「一人終了。ガリュー、そっちも、、……」終わらせなさい。
言いかけたルーテシア。が。
「――――――……どけぇぇぇ

「な――――」
つい先日なのはに断たれ、再生したばかり。確かに、強度としては、低下していたのだろう。しかし……カートリッジも、強化魔法も……使っていない状況で。
「どけっつってんだろォーーーーーーーッ!!」
――バキンッ!! バリィンッ!!
交差する連撃に、ガリューの胸部甲皮までもが砕かれる！
『ｌａｎｃｅｒ ｂａｒｒｅｔ !!』
――キュドドドドッ!!!!
至近距離から、その甲皮の罅に射撃を乱打。勢いのまま、ルーテシアをも薙ぎ払う！
「……!!!」
ガリューは腕を捨てて下がり、ルーテシアに迫る弾を防御した。
「はァー……!!」
エリオは、排熱するように息を吐き……冷静さを、取り戻した。
敵は、エリオの爆発力を警戒しているのか、ガリューの治癒を優先しているのか、仕掛けては来ない。
「キャロ！ フリード!!」
「、……エリオ、くん……」
キャロのバリアジャケットには……じわりと、赤い染みが浮いていた。殺傷可能設定の一撃を、喰らったのだ。
「くそっ……！ ケリュケイオン！ 起きてるか!?」
『ｆ；ふ……カく、です。術シキ、を、……はカイ、され、……ぎゃく、流すル、魔力に、てき、の、魔力、ガ……うわ、の、ｓｅ……しすテム、ｇａ、おーばー、ロー、ｄｏ……』
弱弱しく明滅する、ケリュケイオンのコア。自力での復旧は、この環境では無理だ。
「俺と……お前だけか、フリード」
『グルル……!』
バインドは、ストラーダで解除が出来た。……が、本来の出力が望めない以上、フリードの戦力は微々たるもの。

「……やるっきゃ、ねえんだよ」
唯一の希望は、別の地点に飛ばされているであろうフェイトだが……そう都合よく、駆けつけてくるようなことは無いだろう。
敵は、既にガリューの治癒を終えようとしている。今度は、ルーテシアもエリオを標的にしてくるだろう。近接に特化しているとはいえ、まだまだ未熟なエリオに、幼体のフリードだけで、実力で上回るガリュー、その手の内すら読めていないルーテシアの二人は、荷が重いどころか、勝てる可能性が限りなく低い相手だ。
『騎士と、その槍よ……』
と、ケリュケイオンがエリオたちを呼んだ。
『我が操者より、先刻、秘策有りと……』
飛ばされてくる一瞬前に、やり取りをしていたらしい。
「言ってみろ」
『わたしの、半身を、その腕に』
今は、何でも試してみるほか無い。
言われるままに、ケリュケイオンの左を、装着。その手を介して、デバイス同士で、何らかの情報をやり取りして……
ストラーダから、その情報が開示される。それに眼を通し……驚愕に眼を見開き……フリードと顔を見合わせ……
「――やるぞ」『グァアッ!!』
――覚悟を、固めた。
ガリューの腕は、接合が完了していた。
「もうふいうちは喰らわない」
ルーテシアは杖を構え、エリオを、完全な敵として認識していた。
「ああ、別に良いぜ」
エリオは、肩にフリードを乗せ……しかし、構えていない。
「別に無抵抗でも殺すから無駄だよ」
ガリューが、構えを取る。
それに呼応するように、エリオも……
「行くぞ、フリード!!」
ケリュケイオンを装着した手で、フリードに触れた。フリードの小

さな体躯が、薄青色に発光し――同色の光玉……オーブへと変化する。
「召喚術の、中途段階で……あいまいな状態で、留めている……？　相方のデバイスに入っていた召喚術式を使っているんだろうけど、何でそんな、意味の無いことを……？」
ルーテシアには、その意図が読めない。読めないが……排除することに、躊躇は無い。しかし、エリオは更に、ルーテシアの予想を超える行動に移った。

――エリオは、フリードが変じたオーブを

――自身の身体に、押し込んだ。

「ぐっ……」
呆気に取られるルーテシア。一瞬、苦しそうに呻いたエリオは……
「――――ぅおオオオ

必死に、頭の中のデータベースを探る。探って、探って……たった一冊の古文書。たった数行の記述が、該当した。
「――ル・ルシエの、未完の秘術――――!!」
――実現叶わず。そう絞められていた、あの秘術だ。
「そうか、あの女……ル・ルシエの一族！」
が、それでもまだ、疑問は残る。
「――無理な話。一つの体に、二つの魂は同居できない。勝手に自滅するのが道理」
それは、絶対の絶対。大原則のはず。
……が、エリオには、それとなく察しがついていた。
「――Ｆの遺産、か」
エリオの身体は、プロジェクトＦの技術により、精製されたもの。その、何故か高い魔力が備わる性質について、どこぞの偏屈学者が、言っていたではないか。
『オリジナルと、肉体の持ち主……二つの魂が、合わさっているからだ』
……と。
エリオの身体はそもそも……『複数の魂を受け入れ得る』性質を、備えていたのだ。
――『器の騎士』。ケリュケイオンが言っていたのは、この事だった。
「生まれて始めて――――俺の出自に、感謝するぜ……！」
不規則な明滅も収まり……白銀の光が、エリオを包み込んでいく。
が、それでも……
「――死ぬよ。死なないにしても寿命を縮める」
無茶であることは、変わらない。
「なんだ、心配してくれるのか？」
エリオの軽口に、ルーテシアは……白い肌を、真っ赤に染めた。
「ち、がうっ!!　違うっ！　違うもんっ！」
（……わっかりやす）

その様子に、エリオは苦笑いするしかない。
（殺すだのなんだの、物騒な言葉使っちゃいるが……根っこは善人だな、こいつ）
あくまで、根っこに限っての話だが。やっていることは普通に犯罪で、エリオたちは現在進行形で命の危機だ。
「安心しな。死ぬのは二度目だ。それに……」
エリオには、小さいけれども、重い、厄介な、手の掛かる、世話の焼ける、とことん面倒な……
「――――……『死んでも守る』って、決めてんだよ!!」
――背負うべきものが、あるのだから！
『――――Ｓｉｌｖｅｒｙ　Ｄｒａｇｏｏｎ　Ａｒｍａｍｅｎｔｓ!!』
白銀色の光が、エリオの身体に収束する!!

――――――バシュンッ!!!

……一条の閃光が、ガリューの側面を貫いた。
「……、ッ!?」
方向転換……しかし、横転。
――ガリューの左足が、消失していた。
「……ふゥーーーー」
槍を振りぬいた姿勢で、残心する……
――鱗状の白銀の魔力光を纏い、フリードのような両翼を展開した、エリオだった。
どさっ……と、ガリューの左足、その残骸が地面に落ちたところで、ルーテシアは我に返った。
「!!」
ルーテシアが、砲撃でエリオを狙い打つ。しかし……
――バァンッ!!
羽ばたきの一つで、砲撃はかき消され……バインドも、妨害魔法も……掠りもしない。

「疾、すぎる――!!」
ガリューの複眼を以ってしても、その挙動を捉えることが出来ない。軌道を予知し、必殺の拳を、蹴りを、叩き込もうと……
――ヴァオンッ!!!!
その腕が、足が、ズタズタに切り裂かれていく！
甲皮の硬度を強化しようと、速度を上乗せしようと、お構い無しに削り取る！
「ぐゥアあアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!!」
咆哮。フリードの竜魂に、意識を翻弄されている。
暴走状態……その言葉を、ルーテシアは思い浮かべた。
「あ、あああ……ガリュー、ガリュー……!!」
ルーテシアは、幼子のように、使い魔の名を呼ぶ。
「やめて……」
――バシィッ!!
……ガリューの甲皮が、崩れる。
「やめて……!」
――ゴリッ……!!
防御した腕が、半分も抉り取られる。
「やめて、やめて、やめて……!! ガリューが、死んじゃう!!」
都合が良いことを、と、責めることも出来るだろう。しかし、今のエリオに、その言葉は届かない。
「ぐルァアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ストラーダの切っ先が、ガリューの心臓を貫く……寸前。
――漆黒の炎が、エリオの身体を呑み込んだ。
「――――ぐはァっ……!!」『ゴフッ……』
竜魂憑依が、ただの一撃で解除され……エリオとフリードは、別々に地面に転がった。
その、黒炎を放った……ルーテシアが、『デルタ』と呼んだ者が、姿を見せた。
「ッ！　ガリューが、もう一体……!?」
倒れたままのエリオが、驚愕する。
現れたのは……ボディスーツにヘルメット、金属のような、プラスチックのような、不可思議な質感の全身プロテクターを装着した男だった。見ようによっては、確かに、ガリューのようにも見える。
――――シュイイイインッ……
そのボディスーツからプロテクター、更にはヘルメットまでを、発光するラインが走り、暗闇のトンネルの中を、照らしていた。
「……」
ヘルメットの複眼が、エリオを、続いて、ガリューを捉える。四肢を損傷し、また甚大なダメージから、立ち上がることの出来ないガリューを……肩を貸すように抱え上げ、ルーテシアの前で下ろしてやった。
「あ……ありがとう、デルタ……」
続いて、その複眼で……エリオたちを、見る。
ルーテシアに確認は取らず、大股で、近づいてくる。回収する気なのか……もしくは。
「――させるかよォッッ!!」「――だァらっしゃぁあああああああああああああああっ!!」
鉄球と、稲妻が飛来する!!
――――ゴッ！　バヂィイイインッ!!
巨大な鉄槌に強かに打ち据えられ、オマケとばかりに電撃を喰らい、デルタはトンネル内をバウンドしながら、大きく後退した。

「フェイトさん……ヴィータ教官……」
待ち望んでいた救援がやってきた。しかも、これ以上無いタイミングで！
「――ボク、さんじょう！　ごめんな、ふたりとも！　たすけにきたぞ！」
フェイトは、エリオとキャロの元へ。
『殺傷可能設定での攻撃を被弾したようです。怪我の程度は……外傷は、裂傷・打撲。微量に混入された敵の魔力が原因で、昏倒しているようです』
直ちに命の危険は無いと知り、安堵の息を吐く。
「……すみません、フェイトさん……俺は……」
結局は、助けられてしまった無力感をかみ締めるエリオに、フェイトは笑みを見せる。
「――よくやった、エリオ。ちゃんと……ちゃんと、見てたぞ。すごいじゃないか」
現場映像を見ながら飛んできたフェイトは、エリオの精一杯を、見届けていた。
「さすが、男の子だ。ちゃんとキャロを守ったな。えらいぞ」
エリオは……黒炎のことを告げると、安心したのか、意識を失った。
「おい……フェイト」
と、警戒にあたっていたヴィータが、戦慄したようにうめく声が聞こえた。
見れば……ヴィータ本気の一撃を喰らったはずのデルタが、ケロッとした調子で、立ち上がっていた。
「ふせいだのかな」
「いや、それはねぇ。あのプロテクターがどんだけ硬いのかは知らねぇが……確かに、骨を砕く感触があったんだ」
が、デルタは、平然と立っており……その動きに、庇うような動作は、無い。
「がまんしてるだけかもよ？」
「だといいが……」

警戒を緩めない。敵の魔導師と思しき少女は、ケープのようなもので素顔を隠しており……その腕に、丸い、卵のようなものを抱いている。
「ねぇ」
……と、その少女が、話しかけてきた。
「……なんだい？」
フェイトが応じると、彼女は……場にそぐわない、なんというか……『もじもじ』という形容が似合いそうな態度で、聞いてきた。
「そいつらの名前なんていうの」
常識で考えれば、答える必要はないどころか、答えてはいけない類の質問。当然、ヴィータは沈黙していたのだが……
「男の子は、エリオ・モンディアル。女の子は、キャロ・ル・ルシエ。そんでこっちの竜がフリードリヒだよ」
……フェイトは、気軽に答えてしまっていた。ずっこけるヴィータをよそに、話は進む。
「……わたしは、ルーテシア。ルーテシア・アルピーノ」
「うん、ルーテシアだね。ちゃんと伝えておくよ」
デルタは、そんなルーテシアの話が終わるまで、構えるでも、仕掛けるでも無く……
「よかったら、いっしょにこない？」
が、懐柔とも取れる言葉が発せられた瞬間……
「……3821」
……ぼそりと、機械処理された声で、謎の数字を呟く。
は？　と、ヴィータが訝しんだ、瞬間……
――――――――ドゴォオオオンッ!!
土砂で封鎖されていた出口を強引に突破し、『ソレ』は現れた。
――――ヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォッッ……!!
形状的には……緩やかな円錐状の、ロケットか。その背部には、ト

ンネル内を蒸し焼きにしかねんばかりの熱を排気する、コーン状のノズルがくつも連なる。そして、最大の特徴……底部には、巨大重機のような巨大なタイヤが二本、装着されている。それは、言い表すなら……

――二輪の怪物……だった。

「……」

デルタは、ルーテシアを抱え、そのコックピットと思しきスペースに乗り込んだ。

手元の、巨大なレバーのような装置を、右に軽く捻り……

――ゴヴァアアウッ!! ゴヴァアアアアアアアアウッ!!!

……ブリッピングなどという、生易しいものではない。背部ノズルからは、火炎放射のような高温の炎が吐き出され、トンネルの中は、その熱で一気に気温が上昇する。

「……」

手元のコンソールを操作する。

――ガシャコガシャコガシャコンッ……!!

前面装甲が展開し、……どう見ても、『ミサイル』としか形容の出来ない代物が、せり出してくるに至って。

「……!!!」

フェイトとヴィータは、エリオ、キャロ、フリードを抱え、自分たちが突入してきた、トンネルの反対側に向かって、一目散に逃げ出した。

――ズドドドドドドドドドドドドンッ!!!!!!

背後で、ミサイルが一斉に発射され……精密に誘導されたそれらが、背中に触れるほどに迫り……

「――どっせぇぇぇ

――ズズズズズズ……!!
山全体が鳴動し、鳥獣などが逃げ出して行く。
内部のトンネルは、完全に埋もれたものと見て、間違いない。
「あ、あぶなかった……!! ほんとーに、あぶなかった!!」
「危うく生き埋めになるとこだったぞオイ……! なんてクレイジーな野郎だ……!!」
が、得られた情報も多い。
敵魔導師……ルーテシア・アルピーノという名前と、エリオが戦闘を介して得た、様々なデータ。これらは、一連の事件について、大きなヒントになるに違いない。
「さ、もどろ。ティアナんとこにはシグナムがいってるからだいじょーぶ」
「残りは……ああ、何の問題もないわ」

◆・◆　◆　◆

各所に飛ばされたフォワードチームたち。しかし意外なことに、スバルとなのはは、海鳴市に残されていた。だが……
『制圧目標、ロスト』
レリック暴走体とは、大きく引き離されていた。
『エリアサーチ、使用不能』
『ふむ……スバル。同じ状況ですか?』
以前の任務で、偽のセリカに隔離されていた時。自力でのサーチを行えなくなっていた。
「はい。ほぼ同じ状況です」
『ですが、今回はこちらにも準備があります』
海鳴市は、なのはにとってホームグラウンド。
一度は切れてしまった衛星携帯電話を取り出し……セリカではなく、はやてにコールする。
『待ってたぞ。今、町の各所の監視カメラの映像を送る』
はやては、なのはの意図を汲んでいたかのように、実行。実は高性

能だった衛星携帯電話のディスプレイに、画素は荒いものの、各所の映像が映し出される。
『いましたね。場所は、……』
……なぜか、固まった。食い入るように、ディスプレイを覗き込む。
『スバル。マッハキャリバーでの移動を許可します。先に行っていなさい』
認識阻害結界は、既に展開されている。問題は無い。
「はいっ！　ですが、その……教官は!?」
流石に、背負っての移動は時間のロスだ。
なのはは、横目に、避難する民間人と、それを誘導する警察官を見やり……
『何とでもします。先に行きなさい』
「はいっ！」
スバルを先行させたなのはは、避難誘導をしていた白バイ警官の背後を音も無く通過し……
――窃盗団もかくやという素早さで接近。搭乗。スタンドを払いギアをローに。
滅多にエンジンを切らないという習慣が仇となった。
「!?　君、何をしているッ!?」
見咎める警官に、一言。
『借ります』
まさかの白バイ泥棒。目的のためならば、いかなる手段であろうと躊躇いというものが微塵も無い。
――リュイイイイイイイイイイイイイイインッ!!!!
カムギアトレーンの音を唸らせながら、現地へ直行する。
途中、スバルとも合流。スバルは、なのはが突如として乗り付けてきた謎のバイクにぎょっとしながらも、シングルシートの後部に無理やり飛び移る。
「どうしたんですか、これ!?」
『親切な方に借りてきました』
――ピー。ガガガッ。　――、、方面へ逃走中。繰り返す。警

察車両窃盗犯の女、青いズボンに緑の上着、脱色した髪の毛。現在も窃盗した車両で逃走中！　周辺の部隊、現場に急行されたし！

――ぶちっ。

……青いジーンズに緑色のパーカーを着た、栗色の髪の毛のなのは は、白バイの無線機の電源を無言で切った。

「教官、教官……！　これ……!?」

『借・り・て・き・ま・し・た。はい、リピートアフタミー』

「……カリテキマシタ……ナンノ、モンダイモ、アリマセン……」

『グッド』

……時に、目的というものは倫理を超越するものである。

――ガリガリガリッ！

バンパーで路面を削りながら、ハングオンで交差点を抜ける。完全にルートを把握している動きだ。

「あっ……車が……！」

前方、逃げる車で、渋滞が起きていた。

『問題ありません』

なのはは、車体に後付されているスイッチをＯＮにする。

――ファンファンファンファンファン!!

回りだす赤色灯。唸るサイレン。

『緊急車両通過します。緊急車両通過します』

堂に入ったニセ白バイっぷりだった。

ギリギリの隙間を、ミラー一つ削らず通過し……

『発見』

レリック暴走体を、発見した。

『……進行していますね』

侵食は、既に胸部にまで進んでいた。そして、意識は完全に無く……

「いやぁあああああっ!!」

一人の民間人へ、今まさに、その金属腕を振り下ろそうとしていた。

なのはは、瞬時に判断した。

――グワシャアッ!!!!

……スバルと共に白バイを捨て、暴走体に突撃させた。
暴走体は、バイクともみくちゃになりながら滑っていき……大通りのど真ん中で、止まった。民間人を逃がし……暴走体の元へ。
『スバル』
後は、先ほどの再現だ。スバルが、着実に暴走体にダメージを蓄積させ……
『封印です』
なのはは、スバルのリボルバーナックルに、封印魔法を付与。
――パキィイイイイイインッ……!!
若者に巣食っていたレリックは、切り離され、封印された。
「任務、完了っ！」
なのはも、そのレリックを回収しようとしたのだが……
「はっはっは！　隙ありィーー!!」
ズボッ！　と、地面から突き出た手が、レリックを鷲掴みした！
『!!』
――シュコォンッ!!
投擲された棒手裏剣が、コンマの差で、その腕をとり逃す。
『不覚。地面に潜む敵がいましたか』
『データベースに照合しましたが……エネルギーの内容的には、先ほどの砲撃と近いものです』
未知の技術体系を使用する、テロリスト集団。
――ガガッ……
……と、街頭に設置されていた、時報などを告げるスピーカーが、不自然にハウリングする。
『これにて！　威力偵察しゅーりょー!!』
ラジオＤＪのように、軽い口調だった。そしてそれが、敵からのメッセージであることも、明白だった。
『んっふふふふ！　あー、楽しかったぁ!!』
相手はスピーカー。こちらから返事をしても、向こうへは届かない。
『今回のレリック争奪戦はぁ……戦力的には削がれちゃったけど、レ

リックをゲットしたのはこっちだからぁ……ざぁーんねん！
あなたがたの負ぁーけ！』
　実にイラつかせる喋り方だった。
『次は、もっと、もぉーーーーっと、強いメンバーで行くから、待ってねぇー!?　それじゃ、またね
――――バキンッ!!
……なのはは、手裏剣でスピーカーを破壊した。
　そして、通信妨害も解除され……セリカから、全員の無事が知らされた。
『状況、レッドからイエローに移行』
　ほぼ、状況終了である。
『スバル行きますよ。急いで』
「え、あ、はい……」
　しかし、なのはは……目深にフードを被り、一目散にこの場所を離れようと……
「……なのは?　なのはか!?」
　……足を止めず、足早に逃げ出そうとしたところ、腕をつかまれ、振り向かされる。
　端正な顔立ちの青年が、立っていた。
『だから……嫌だったのに……』
　パラ、とフードが落ち……なのはの素顔と、隻眼が、露になった。
　息を呑む青年に、なのはは……気まずそうに、言った。
『……兄さん、ただいま』

◆・◆　◆　◆

　喫茶翠屋。今日の騒ぎもあり、早めの店じまいをした店内に、なのはと……その関係者一同が、集まっていた。
　結果的に売れ残ってしまったケーキなどを放出し、茶などを淹れ、ちょっとしたパーティになる中……なのはは、浮かない顔で、隅っこ

の席に座っていた。
「いいかしら？」
と、その４人がけの席に、なのはとよく似た美人が座る。
『……母さん』
気まずい親子の再会だった。
「……連絡くらいは、寄越すものよ？」
よりにもよって、５年も音信不通だった。
「はやてちゃんから、連絡がなければ……こっちに戻ってきていることも、分からなかったのよ？」
責めている……というよりは、心配していたのだろう。
『……ごめん、母さん』
なのはは、しおらしい。
「その目は……どうしたの？」
切り傷がつき、白濁した左目。
『……事故。でも、見えてないわけじゃないから』
「……そういう問題じゃ、ないでしょう？」
『……』
美由希が運んできた茶を啜る。
「……でも、久しぶりに会えて、良かったわ。のんびりできるの？」
『……3日くらいしたら、戻る』
まだ、会話はぎこちないままだが……その姿は、親子のものだった。
そんな中……恭也が、なのはにぼそりと告げる。
――今夜、実家の道場に来い
……と。
◆▪◆　◆　◆
解散し、スバル達をアパートに送り届けた後……なのはは、生家へとやってきた。
久々に足を踏み入れる道場の板張りは、冷たく、きしっ、と鳴った。
「……待っていた」「なのは……」
恭也と美由希が、正座し……木刀を携えた姿で、迎え入れる。
『一応、聞くけど……何の用？』

道場の中に、人工声帯を介した声が、反響する。
「今、お前がいる場所が、どういう場所なのか……大体だが、想像がつく」
『……そう』
左目の事も……左腕のことも、恐らく、既に分かってしまっている。
「もう……『彼』のことは、諦めろ」
話の核心に、触れた。
「きっと、手がかりの一つも得られていないのだろう？」
尚も、続ける。
「彼は、確かに大事な恩人だ。俺たちにとっても……もちろん、なのはにとっても。だが……だからといって……お前が、そんなにまでなって、どうするんだ……!?」
まだ未成年のなのはの体には、無数の傷跡が刻まれている。
『――――あの人がいない世界なんて、いらない』
なのはは、言い切った。歪なほどに、純粋な想いを。
「なのは……お姉ちゃんから、お願い。……もう、無茶はやめて、帰ってきて」
美由希の懇願に、しかし、なのはは首を横に振る。
「……そうか」
――恭也と美由希が、木刀を手に立ち上がる。
「なら……仕方ない」
力尽くで……捻じ伏せる。二人は、木刀を構え……
――ふぅ
……と、緊迫とは縁遠い溜息が、なのはの口から毀れた。
『兄さん、姉さん……』
なのはは、ゆっくりと、顔を上げ……
『――――兄さんたち風情が、私に勝てると。――本気で思っているの……？』

――左右から、なのはの延髄に挟撃。『神速』をも利用した、刹那の一撃。

――それを、眼で追ったなのはは素手で掴み取り、木刀を強奪。

――残る一本を構える……遥か前。なのはの木刀の柄が、美由希の水月を抉り昏倒。

――恭也の振り下ろし。木刀で受ける。

――『徹』。間接を通じ足元に逃がし無力化。

――なのは、木刀を投擲。恭也、回避。

――身軽になったまま、より深く懐へ。

――無手。正中線・三連撃。顔面を掴み、回転の勢いを殺さぬまま、壁際へ、……

――ドガンッ!!!

……ずる、と、恭也が崩れ落ちる。

『……こういうこと』

体術だけで、二人をあしらったなのはは、息も乱さず言う。

『もう、邪魔をしないで。お願い……』

なのはは、道場を出て行った。

◆・◆　◆　◆

――三日後。

アリサ、すずか、望、健太、咲……大家に奈々、高町家の面々。
なのはの関係者が勢ぞろいして、なのはを見送りに来ていた。
この三日間……敵の襲撃は無かったものの、連日のようにアパートに彼女らが襲来し、なのはを引きずり回して、とにかく（主になのはが）疲れる三日間だった。
「望さん！　健太さん！　また試合しましょうね！」
「おお、またやろうぜ！　チョー楽しかったし！」
「お弁当、いっぱい作らなきゃね」
スバルは、健太の草サッカー試合の助っ人として大活躍し。
「……これで勝ったと思わないことね」
「……いつでも受けてたつわよ」
……格ゲー、音ゲー、クレーンゲームですら決着がつかず、バニングス家のリビングにて耐久スマブラをしていたティアナとアリサが、隈を浮かべた顔を突き合わせていた。ちなみに、決着は互いの寝オチで勝負無しである。
「すずかさん。すばらしい時間をありがとうございました」
「いやー、こっちとしても助かったよー。またお願いして良いかな？」
「万難を排して駆けつけますわ!!」
月村家のテストコースにて、ＧＰマシンの試作機や、市販予定車のコンセプトモデルを、テストライダーという名目で散々に乗り回したセリカが、すずかと固い握手を交わす。
――そして。
「なのは。これ、道中、皆さんに召し上がってもらいなさい」
なのはは、桃子から山のような菓子を受け取っていた。
『母さん、ありがとう』
恭也は。
「……まだ、お前を連れ戻すには、鍛錬が足りなかった」
……と、苦渋の面で言い……
「『もうちょっとだけ、好きにしてて良い』……って、言いたいみたいだよ？」
美由希が、それをフォローする。

『兄さん、姉さん……その……ごめん……つい、イラッとして』
イラッとしたから達人をボコボコにされても困るのだが。
「たまには、顔を見せに来い」
『わかった』

出発の時間。ひとまずは電車で郊外まで。そこから、ミッドチルダまで転送の予定だ。
――こうして海鳴市での出張任務は、平穏無事とはいかなかったものの……なんとか、達成されたのだった。

「ただいまー」
クアットロが、アジトへ帰投する。
「ウェンディちゃん、大丈夫？」
横でディエチに抱えられている半死半生のウェンディが、ぷるぷると指を動かし……
「……駄目、って……まぁ、ドクターとウーノ姉さまに頼んで、治してもらいましょ」
「まーーったく、せっかく出来上がったばかりの専用武装を木っ端微塵にしちまうんだもんなー」
水色っぽい色彩のショートヘアの少女が、呆れながら、ウェンディのわき腹をつつく。
「セインちゃんもありがとうねぇ。あのままだったらこのお馬鹿さん、管理局に捕まっちゃってたわぁ」

「はっはっは。もっと褒めてくれてもいいぞ」
レリックを確保したのも、彼女の功績である。
「ねーねー、わたしは、わたしは？」
髪の一房が、犬の尻尾のように揺れていたので、クアットロは頭を撫でてやることにした。ディエチは満足そうに笑っていたから、これでよかったらしい。
途中、ガリューの卵を抱えたルーテシアとも合流。
「あ、クアットロ」
「げ」
また文句を言われるんじゃないか……と腰が引けるクアットロに、ルーテシアは……
「培養槽貸して。ガリューがこのままだと窮屈だ」
……特に文句を言うことはなかった。いや、それどころか……
「あれ、ルー。なんかいいことあったの？」
セインの言うように、いつもの無表情ながら、少し様子が違った。
「うん。気になる子がいるの」
……たったった。小走りに去っていくルーテシアを、呆然と見送った。
「あああ相手は誰!?　ルーテシアを誑かしたのはどこの馬の骨!?」
セインの首をがっくんがっくんと揺さぶるクアットロ。
「知らないよ！　知るわけ無いだろー!?」
「ルーテシアが……私の大事なオモチャが汚されたあああああ……!!」
クアットロは、バイザーごと頭を抱えた。

◆・◆　◆　◆

煌々と明かりの灯る研究室。紙の資料はファイリングされ、そのファイルも色分け、サイズ分けがされ、この部屋の主の几帳面さが窺えた。
――こつんっ
その部屋に、来客。

ボディスーツ、ヘルメット、プロテクター。デルタだ。
「おぉ、帰ったのか」
奥の一室から、研究者のような風体の、若い男が出てくる。ボサボサに乱れ、くすんだ金髪に、赤い瞳。小脇には、また別の資料ファイルが抱えられている。
「オマエから見て、後発ナンバーのガキどもの仕上がりは、どんなもんだった」
「……まだまだ、ボディの調整が必要だと思う。武装にも荒が多い」
「だろうなァ……」
ボリボリと頭をかきながら、言う。
「ま、本格始動はもうちょい先だ。それでには、後発ナンバーどものボディも、武装も、完璧に揃えてやるぜ」
「……調整を頼む。ストリームの一つが、破損してしまった」
ベルトのアタッチメントから、機器を取り外す。
――シュイイイインッ……
……ヘルメットを含むプロテクターは、光に解けるように消えてしまった。
「頼むよ。――ジェイル」
アンダースーツ姿の、素顔のデルタが、部屋を出て行く。
ジェイル……ジェイル・スカリエッティは、残されたデルタギアを受け取り……早速、作業台にて分解整備を行う。
「――」
真剣そのものの表情で、特殊精密工具を手に、デルタギアの分解を行う。
正面のカバーを外すと、中には、機械回路に、発振装置……そして。
――漆黒のクリスタルが、コアとして据えられていた。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第九話

「おらァァァァァァァァッ!!」
「いよいしょおーーーーっ!!」
――バコォンッ!!
……晴天の広がる訓練場に、エリオと、スバルの雄たけびが木霊する。
「っしゃあああああああっ!!」
「おおっとォ!!」
――ギュバッ!!
エリオの薙ぎ払いを、マッハキャリバーの車輪を使い後退することで回避。そして、間髪いれずに突貫！
「させるかよォッ!!」
エリオは……ストラーダを地面に突き刺し、柄をポールのように見立て、スバルの打撃を回避！
『ｓｐｉｋｅ　！』
エリオのブーツが、魔力光を纏ってスバルの顔面を狙う！
――ゴキィインッ!!
スバルのリボルバーナックルと衝突し、火花を散らす。
「ッチィ！　防ぎやがった！」
「もらったァーーーー!!」
――ズドォオオオンッ!!
ストラーダを引き戻す。スバルは、その引き戻しのタイミングに合わせ、近距離から砲撃を発射！
――バシュウウウウッ!!
「っしゃ!!　これで一本！」
射程が短いことが難点だが、その出力は、エリオの張れる魔力防御を貫通しうる。勝利を確信するスバルだったが。
「油断大敵だぜイノシシ女ァ!!」
黒コゲになったジャケットをたなびかせ、エリオが粉塵の中から飛

び出してきた！
「えええええええっ!?　うっそォーーーーー!!?」
「今度こそもらったァあああああ!!」
――ズシャアアアアアアアッ!!
「きゃー!!!!」
あたふたと慌てるスバルを、エリオのクリティカルヒットが吹っ飛ばす！

――ブーーーーーーーーーーッ!!
……訓練終了のブザーが鳴った。
「俺の勝ちだな、スバル」
ストラーダを肩に担ぎ、勝ち誇るエリオ。
「う、うううう～……！」
まさかの敗北に呻くスバル。
「でも、直撃コースだったのに……なんで……？」
エリオが防げる出力ではなかった筈なのだが……
「シールドの形状よ」
訓練服を煤で汚したティアナが、解説した。
「真正面に構える『壁』としてじゃなく、細く、狭く、体を横にして、ようやく入れる程度の極小面積に、シールドを最大出力で展開したの。硬く細いシールドで、アンタの砲撃を『裂いて』回避したのよ」
見ていただけで、よくそこまで分かるものだと感心する。
『そういうことです』
向こうにいたなのはもやってきて、今の模擬戦の感想を述べた。
『スバル。あなたの砲撃は、出力こそ高いのですが、収束が甘いのです』
手元のコンソールを操作すると、敵を模したオブジェクトが出現し、エリオがやったのと同じように、シールドを展開した。
なのはは、右手に魔力を集め……
――ボシュッ!!
スマッシャー……では無い程度の、収束を緩めた拡散砲を発射す

る。その拡散砲は、オブジェクトのシールドにぶつかり……
『――だから、裂ける』
――シュウウウッ……
先ほどの再現になった。
『エリオ、いい防御でした』
「……どもッス」
なのはの賞賛に……しかしエリオは、短く返答するのみ。
「すんません、俺、ちょっと抜けます」
ストラーダを待機状態に戻し、インターバルを取りに行った。
「あはは、それじゃあ、私も～……」
――ぐわし。
さりげなく逃げようとしたスバルの肩を、なのはが鷲摑み。
『おまえは補習です。ちょっとそこに直れ』
怒りの『おまえ』呼ばわりモードであった。
「ひィ！　でも私、たった今、激戦を繰り広げたばかりで……!!」
『何が激戦ですかこの未熟者めが。言い訳無用問答無用で、組手１０本コースです』
「あ～～～!!」
襟首を掴まれ、ズリズリと荷物のように引きずられていくスバルを、ティアナは他人事のように見送った。
◆▪◆　◆　◆
――クオォオオオン……
訓練場の海域を飛翔するフリードを、主たるキャロは、いつものぼうっとした目で眺めていた。
「……」
近づいてきた足音が、背後で止まる。が、振り返らない。
「……」
ぼうっとした目で、フリードを眺めるまま、振り向かない。
「……ねぇ、エリオくん」
振り向かずとも、誰かは分かる。芝を踏んだときの音。僅かに聞こえる息遣い。風に伝わる体温。土のにおい。

だから、安心して、独白することが出来る。
「わたし、フリードを、ちゃんと飛ばせてあげられるようになった。わたしじしんも、ちょっとは強くなった。……おともだちもできた」
キャロは、成長している。それは、誰の目からも、明らかだ。だが……
「でも、負けちゃった」
先日の襲撃。何も出来ないまま、一瞬で蹴散らされてしまい……
「エリオくんは、ころされそうになった」
何とか、エリオの機転で切り抜けたものの、その後に現れたデルタという戦士には、例え万全であろうとも、自分たちでは歯が立たなかった。
フェイトと、ヴィータが駆けつけるタイミングが、少しでもずれていたら……
「ねぇ、エリオくん」
くるっと振り向いたキャロは、沈黙するエリオに問うた。
「どのくらい、つよくなればいいのかな？　エリオくんを守れるくらい？　フェイトさんにおいつけるくらい？　それとも……
――敵を徹底的に破壊して、二度と反撃する気なんて起きないくらい、グチャグチャに磨り潰してやれるくらい？」
……恐ろしく無垢な瞳で、そう問うてくるキャロに、エリオは……
――すぱんっ
頭を平手ではたいた。
「いたい」
「痛くしてんだ、バカタレ」
がしがしと頭をかき、腰を下ろす。キャロも、その横に座った。
「あんま物騒なこと言うんじゃねぇよ。おめーの場合、シャレになってねぇ」
エリオの脳裏には、天を衝く黒龍の威容が焼きついている。
「――俺は負けた。キャロも負けた。フリードも負けた」
それも、完膚なきまでに。

「だけど、俺たちは全員無事で、ここにいる。誰一人、欠けちゃいねぇ。負けはしたが、終わっちゃいねぇ」
生還……それは、勝利と並んで、重要なことだ。
「死んでなきゃ、『次』に繋がる……いや、繋げる。絶対に、繋げてみせる」
飛翔するフリードが、二人の眼前に着地する。その巨体が、魔力光の球体……オーブへ変化し、エリオの掌に乗る。
――『竜魂憑依』。
エリオが死中にて見出した、新たな力。
「強さってのは……繋げてきた物を、途切れさせずに、また繋いでいくことだと、俺は思う」
この力も、キャロが竜魂を安定させることができていなければ、オーブ化することもできなかった。いや、エリオとキャロが歩み寄っていなければ、その機会さえも、永久に訪れなかった。そうして繋いできた『強さ』が、全員の生還という結果をもたらしたのだ。
「ただデカいだけの力なんて、それを振り回すだけなんて、強さでも何でも無いんだよ」
……もし、前述の全てが為されておらず、キャロがパニックを起こし、ヴォルテールの召喚でも行っていようものなら、あの山は完全に崩落し、少なからず、誰かが欠けていただろう。
「……でも」
尚も良い募るキャロに、エリオは珍しく、優しい表情を向ける。
「だから、デカい力でも、使いこなそうぜ」
大きな力に、振り回されなければいい。
「つかいこなす……ヴォルテールも？」
巫女という立場にあったキャロには、新鮮な意見だった。
「ああ。……なぁ、キャロ。ここには、誰がいる？」
「フェイトさん」
「それだけじゃない。高町教官も、シグナム教官も、ヴィータ教官も……クロノさんもいれば、八神部隊長だっている。俺たちからすれば、ずっと先の領域にいる人たちだ」

この部隊は、確かに、落ちこぼれや奇人変人の掃き溜めなのかもしれない。しかし、底に集められた教官たちは、その奇人変人落ちこぼれを、全力で教え導いてくれるのだ。
「あれだけのエース級に、全力で指導してもらえることなんてまず無いぞ？」
今、このときがチャンスなのだ。
「だからよ……死なない程度に、全力で無茶しようぜ」
わしわしわし、と、キャロの髪をかき回す。
「うん、わかった。しないていどに、むちゃをする」
「……あと、隊舎をぶっ壊さない程度にな」
キャロの無茶というのは、実はあまりシャレになっていない。
「うん。わかった。もどろう」
そして、二人で訓練場へ戻っていった。
「……あ」
……その道中。キャロが、何かを思いついたようだったが、エリオは気付かなかった。
◆▪◆　◆　◆
ところ変わって。
「調子はどう？　ウェンディちゃん」
培養槽から出てきたウェンディに、着衣を手渡すクアットロ。相変わらずのバイザー姿だ。
「ん。問題ないッス」
肩をぐりぐり回して、調子を確かめる。
「まったくもう……メインフレームにクラックを入れるわ、完成したばかりの専用武装を木っ端微塵にするわ、その上、格下相手に負けるわ……」
「あーもー！　お説教は聞き飽きたッスよ！」
クアットロのお小言に、ウェンディは鬱陶しそうに耳を塞いだ。
「まー、カンベンしてやりなよ。ウェンディも理解してるだろうし、さ」
二人の間に、ショートカットの少女が割って入った。ナンバーズ８

……前回の脱出の立役者、セインだ。
「さ、ウェンディの全快を祝して、栄養補給といこうじゃないか」
場を纏め、食堂へ。
「あ、クアットロだ！」
ディエチが、口元にカレーをくっつけたまま、嬉しそうに駆け寄ってきた。
「クアットローー！」
そして、子供のようにクアットロに抱きつく。
――めきめきめき。みしみしみし。
「ちょ、やめて、やめて……あなた力が強いから……ぎゅうーーーーー！」
「あはははーー！」
ベアハッグというか、鯖折りというか……ディエチが無邪気なので、邪険にすることもできないクアットロだった。
「ディエチ……あたしは二の次ッスか……」
ウェンディが、がっくりと肩を落とす。
「仕方ないよ。クアットロは、ディエチの教育担当だし」
基礎的な知識しか持たずに製造されるナンバーズたち。素のままでは実戦には耐えられないので、先行機のナンバーズが、指導を行う。なので、ある意味、本当の姉妹のようになるのだ。
「でも、悔しいッス！」
「はっはっは。では慰めてやろう！」
セインは、ズバッ！　と両腕を広げた。意図を察したウェンディも、同じように両腕を広げる。
「さぁ妹よ！　おねえちゃんの胸に飛び込んでおいでーー！」
「セインお姉ちゃーーーーーーーーーん!!」
……ナンバーズ中、メンタル面では相性最高の二人だった。
「なに馬鹿なことやってんの」
……と、ルーテシアが姿を見せた。
「姉妹のコミュニケーションさ」「ルーもやるッスか？」
「やらない。馬鹿馬鹿しい……」

傍らには、いつもどおりのガリュー。
「もう大丈夫なのかしら？」
が、ルーテシアはふるふると首を横に振った。
「まだ、甲皮の厚みが足りてない。たくさん栄養を取らなきゃ」
貯蔵庫から、栄養ゼリーのようなパックを取り出す。
「でも、あといっかいくらい脱皮すれば、元通りだね」
ガリューの横で、同じく栄養ゼリーのようなものを吸い込む。
もくもくと、作業のように。じゅるじゅると。
「……あのッスね、ルー」
見かねたように、ウェンディが口を出す。
「それ、おいしいッスか？」
「？　……どういう意味？」
質問の意図が理解できず、聞き返す。
「いや、だから……その単調な味のゼリー、おいしいッスか？」
「栄養においしいもまずいも無いよ。ウェンディたちも食べてるじゃない」
「めんどくせー時はそれ食うッスけど……ほら、貯蔵庫には、一応ドクター用に肉とか野菜だって……」
「栄養をバランスよく取れれば何でも良いんだよ」
本気で、味に興味が無いらしい。
ウェンディとセインは、顔を見合わせ……
――むんず。
……ルーテシアの両脇を、抱えた。
「クアットロ。ちょっとルーのやつ借りてくッスよ」
「はいはーい、一名さまご案内ー」
「やめてはなしてなにするの」
そのまま、ずりずりと。
「ガリューが万全になるまで、ルーはお休みッス！」
「おら、メシ食いに街まで繰り出すぞー！」
「いらないいらないはなして」
……ガリューはというと、ルーテシアたちのあとを、のそのそ

と着いていった。
「まぁ、ガリューが万全でないのなら、出しても無駄か」
　万全のパフォーマンスを発揮できるようになるまでは、休養でも良いだろう。敵方から得た情報によると、哨戒に当たっているのは、機動六課ではなく、現地の陸士１０８部隊。遭遇しないようなルート選びは、セインが把握していることだろう。
「……んー」
　脳内のＴｏＤｏリストを確認したが、次の出撃が来るまでは、予定が空いていた。
「こうなると、私もヒマねぇ……ディエチちゃんの訓練でも見ていてあげようかしら？　それとも……」
『クアットロ。いるか？』
「あら、ドクター。今行きます」
　首魁……ジェイル・スカリエッティからの呼び出しが掛かった。
　ジェイルのラボに入ると、椅子を限界までリクライニングさせ、潰れるように体を預けていたジェイルが身を起こす。
「あぁ全く、どんな馬鹿力だよ、あの赤いお嬢ちゃんは……」
　汚れでくすんだ金髪をがしがしと掻きながら、愚痴る。
「コレだよ、コレ」
　行儀悪く、顎で示した先には……デルタの武装一式。
「デルタギアが、どうかしました？」
「左上腕部のストリームが、基部から破損してやがったんだよ。いくらクリーンヒットっつっても、一発でここまでなるかぁ？」
　ヴィータの一撃による損傷が、かなり深かったらしい。
「『鉄槌』の二つ名は、伊達ではないということですね。改良案、纏めておきます」
「おう。あと……」
　ぽいっ、とぞんざいに放り渡されたデルタギアを、クアットロがキャッチする。
「オレは寝る。代わりに、デルタに届けといてくれ」
「わかりました」

一礼し、退室。そして……
「……さっ、デルタに会いに行こうっと」
……まるで、年頃の少女のような表情を見せ、足取り軽く、小走りしていった。
ナンバーズたちとは別のフロアで、クアットロは、素顔で佇む彼を見つけた。
「デルタ！」
呼び止められた彼は、振り向く。無機質な、それこそ機械のような素顔に、僅かな揺らぎが生じる。
「……クアットロ。どうした」
感情の抑制された声。
「どうした、じゃあ無いですー。はいコレ、ドクターからですよ」
「あぁ……そうだった。預けていたんだった」
「もう。あなたの大事な『仮面』なんだから、しっかりしてくださいよ」
「ああ。気を付けるよ」
どこかとぼけた口調に、クアットロは可笑しそうに笑う。
そして……デルタに寄り添いながら、二人で歩き出した。
「威力偵察の方は、どうなっている」
「こちらも、ちまちまと手を変え品を変え、何とか相手の戦力を引き出そうとしているのですが……手強いですね。敵の指揮官は有能」
フォワードチームや他の新人の小隊で、上手くかわされてしまっているのが現状だ。
「もっと戦力を投入したらどうだ？　４型でも投入すれば、ラクに事を運べるだろう」
「それじゃあ、木っ端の部隊を半端に痛めつけるだけになって逆効果ですよ。こちらの戦力の情報まで漏れてしまいます」
「そうか。浅慮だったな」
「いえ」
クアットロも、デルタに対しては非常に素直に振舞っている。バイザーの奥の素顔には、姉妹にさえ見せないような笑みが浮かんでいた。

「潜入させているドゥーエからのリークもありますので、問題は無いです」
そして……
「『あの子』が、自発呼吸を開始しました」
……ぴたりと、足を止めた。
「現在、ポッドに入れ、こちらへ移送中です」
「……そうか」
「『ゆりかご』『聖遺物』……そして、『聖王』。私たちの理想の成就に必要な要素は、揃いつつあります」
「……」
デルタは、先ほど受け取ったデルタギアを、装着する。
――シュイイイン……
漆黒の甲冑は、デルタの体を、素顔を、再び覆い隠した。
「では、いよいよだ」
「ええ。我らが大望の狼煙に……」
――一ヵ月後、全戦力を投入し、機動六課を強襲・殲滅します」

◆・◆　◆　◆

「エリオくん、デートをしよう」

……食堂で、コリンらと昼食を摂っていたエリオの下へ一直線にやってきた、第一声がそれである。
「……は？」
エリオは、手に持っていたチキンを、皿に取り落とした。
キャロは、聞こえていなかったのかと思い、より一層、エリオに接近し、再度言う。
「デートをしよう」
凍りついていた空気が氷解し……囃し立てるような歓声が、あちこちで上がった。
「は、あ、……あ!?　おまっ……、」

「ヒューー！」
「うるせぇ！」
「グホぁっ……！」
　呂律が回っていないエリオは、とりあえず隣のうるさいコリンをぶん殴り……キャロの手を引いて、逃げるように食堂を後にした。
　中庭にまで逃げ……改めて、問いただした。
「どういうつもりだ？」
「？　だから、デートをしようって……」
「何でだ」
「こんびぷれー」
「……おう、それがどうした」
「……」
「説明終わりかよ!?」
　頭を抱える。まぁ確かに、これまでも二人で外出することはあったが……こうも明確に、『デート』という単語を出したことは無かったはずだ。無かったということは……
「……誰にアドバイスされた？」
「フェイトさん」
　……誰かに、妙なことを吹き込まれたか。
「……あの人は」
　エリオの脳裏に、あの能天気で無責任な笑顔が浮かんだ。頭が上がらないだけに厄介だ。
「でもよ。休暇はまだ先だぞ。しばらくは待機シフトだ。外出許可を取り付けないと、部隊長に何言われるか」
「もらった」
「は？」
「きょか。部隊長にはなしたら、くれた」
「……」
　エリオは、キャロがはやてに直談判した場面を想像し……なんとなく、納得してしまった。
　無言で威圧するはやて。その威圧をぬぼーっとやり過ごすキャロ。

その末、この調子だと訓練や任務にさえ影響を及ぼしかねないと判断して、渋々、許可を出したのだろう。話術や脅しが通用しないド天然が相手というのは、はやてにとって鬼門だ。
　まぁ無いだろうが、抑えつけた挙句、またしてもキャロが癇癪を起こし、隊舎を『蒸発』させてしまった日には……
「でも、そのかわり、よるの哨戒任務を倍にするって」
「うげぇっ!?」
　……はやてのことだ。ここでエリオが取り消しを求めたところで、認めないだろう。
「……ふう。もういい。わかった。デートでもなんでも付き合ってやるよ」
「ほんと？」
「ああ」
　諦めの境地だった。キャロは、嬉しそうにして、はしゃぐ。
「エリオくんとデートだ。みんなにはないしょ」
「あー、あいつらは……まぁいいか」
　巻き込んでしまったことだけは、後で詫びておくことにした。
「んじゃ、支度してくるか。15分後に格納庫で集合だ」
「わかった！」
　たたたたっ、と、フリードを頭に載せ、軽やかに駆けていく。
　その、去り際……キャロの無表情が、僅かに綻んだ……ように見えた。
「……」
『どうした、我が担い手よ』
「ん？　……ああ、いや」
　エリオは、ようやく歩き出しながら、ストラーダへ胸中を呟く。
「――――あいつ、よく笑うようになったな……って思ってさ」
『……そうであろうか？』
　ストラーダは、半信半疑。というのも、アレは笑ったうちに入るのかどうか、といった些細な変化だ。殆ど気付かなかった。
「ああ？　んだよオメー、鈍い野郎だな」

『すまんな』
「着替えて格納庫行こう。ティアナにバレるとうるせーからな」
エリオ自身は、気付いているのだろうか。
――エリオも、よく笑うようになっていたということに。

きっかり15分後。
「おまたせ」
赤いワンピースに、白いボレロ。洒落た余所行きの服に着替えたキャロが、格納庫にやってきた。
「時間通りだ」
エリオが、二人乗りスクーターを引いてやってくる。
「行こうぜ」
跨り、タンデムシートを指し示す。
「……」
やや無言のキャロ。
「ああ、そういえば」
「……」
「服、似合ってんじゃん？」
エリオが、思い出したように言った。
「……」
先ほどとは、また違う沈黙を保ったまま、タンデムシートに腰を下ろす。
発進するスクーターに振り落とされないよう、エリオの腰に強く掴まるキャロ。
「ひとまず、町まで出るか。行動ルートとか、決めてんのか？」
「……」
「？　おい……？」
返事がないことを変に思うエリオだったが、まさか走行中に後ろを振り返るわけにも行かない。寝ているわけではないようだが……
「ほめられた。ほめられた。ほめられた。ほめられた……」
……キャロは、エリオに聞き取れない程度の音量で、ずっとそうリ

ピートしていた。
「決めてないなら、俺が適当に決めちまうからな」
「ほめられた……」
「？」
怪訝に思いつつも、アクセルを捻り、スクーターは町まで進んでいった。
◆▪◆　◆　◆
「街ッス!!」「街だ！」「……なんでわたしが」
流行のファッションに身を包んだウェンディとセイン。そして、半ば強引に着替えさせられたルーテシアが、繁華街にやってきていた。
「……やることといっぱいあるのに。新しい術式を組んだり召喚術に関するレポート纏めたり保護区の新種の観察だって」
半ば、仕事のようなものである。ウェンディとセインは、はぁ～……と、わざとらしいにも程がある溜息をついた。
「……とにかく、たまには謎ゼリー以外の、おいしいものでも食べるッスよ！」
「まずはアレっしょ、アレ！」
セインが指し示したのは、いわゆるクレープ屋。バナナやブルーベリーのようなフルーツから、ウインナーやケバブ風など、カップルの男女どちらでも満足できそうなラインナップが取り揃えられていた。
「イチゴクリームチョコソース、一個よろしくッス！」
「んー、あたしはブルーベリーで」
テロリストの癖に、手馴れていた。恐らく、何度もこうして遊びに出ているのだろう。
「……おまかせで」
すし屋ではない。
とりあえず、とウェンディと同じものを注文し、ベンチに腰を下ろし、食べ始める。
「……」もりもりもり。
男らしく大口で、クレープにかぶりつくルーテシア。
「ルー、どうッスか？」

「……」もっしゃもっしゃ。
表情に変化がないので、分かりづらい事この上ない。そして、一個を食べたルーテシアは、おもむろに立ち上がり、カウンターで立ち止まり……
「……照り焼きチキンサルサソースにベーコン2枚とウインナーをトッピングで」
べらべらと長文を喋りだした。唖然とするウェンディ、セイン。店員は営業スマイルと共に、注文どおりの品を5分と待たせず提供した。プロである。
ルーテシアは、逆再生のようにベンチに戻り、見るからに辛そうなソレを、もっしゃもっしゃと大口を開けて食べ始めた。
「ルー……おいしい、ッスか？」
「……」もっしゃもっしゃもっしゃ。ぴたっ。
食べる手を止めたルーテシアは、じっとウェンディの目を見て……
「――まぁまぁ」
……口の端にソースを付けた顔で、そう言った。ウェンディとセインは、顔を見合わせ……吹き出すように、笑った。
吹っ切れたように、めぼしいものにグイグイと首を突っ込んでいくルーテシア。
「あれは何」
「これは何て名前」
「何に使う物なの」
……もともと、好奇心旺盛な性格だ。最初は笑顔で付き合っていたセイン、ウェンディも、次第にヘロヘロと困憊してきていた。
「ま、待つッス、待つッスよ、ルー……！」
「ちょっと、ちょっと休もう……！　いや、休ませてください……！」
ルーテシアは、むぅー……とだらしない二人に不満げな顔を見せ……
「あ。何あれ」
……本日、何度目か。
すったかすったか進んでいく先にあったのは……派手な看板が目

立つ、大型のゲームセンターだった。
◆▪◆　◆　◆
スクーターを公共の駐車場に止めたエリオは、キャロを伴って、繁華街へ向かった。
「久々に来たなー……」
明るい色のタイルで舗装され、歩道のスペースを広めにとったメインストリート。飲食店が立ち並ぶほか、屋台からは香ばしい匂いが立ちこめ、設置されたベンチには、カップルや親子、夫婦が腰を下ろし、思い思いにくつろいでいた。
「ふぅん……区画整理ついでの開発で、この辺も変わったもんだな」
「エリオくん、来たことあるの？」
「ああ。初めてフェイトさんに会った場所だ」
数年前までは、非合法な物品の売買や、違法風俗店が乱立する、指折りに治安の悪い区画だった。ほんの数年前に就任した新市長による浄化作戦で、このような街並みに変化した。もとより、治安の悪かった区画だ。管理局は、執務官を投入する大盤振る舞いでこれを支援し……結果は、見ての通りだ。
「別に、感傷とかは無いんだけどな。居たくて居たわけじゃねーし。安心して町を歩けるってのは、いいことだ」
「へいわがいちばん」
ほけーっとした口調で同意するキャロ。
「エリオくん。まずはごはんだよ、ごはん」
「あー……んじゃ、テキトーに軽いもん食うか」
そして、二人は一路……クレープ屋へ。
「昼時だけあって混んでるな」
クレープ屋は人気なのか、かなりの人だかりだ。エリオはキャロに席を確保させ、一人でカウンターへ。
「いらっしゃいませー！」
「グリルチキンバーベキューソースと、ストロベリースペシャルを一個ずつ」
満面の営業スマイルで振り返った店員と、エリオの目が合い……

「……エリオちん？」
クレープ屋の可愛らしい衣装に身を包んだ少女が、エリオと顔を合わせ、あんぐりと口をあけた。エリオは最初、怪訝そうにその顔を凝視していたが、正直、見覚えが無い。
が、その特徴的な呼び名を使っていた知り合いは、いた。
「……おめー、ポルテか？」
かつて、窃盗団のメンバーだった少女。どぎついメイクと馴れ馴れしい態度で、エリオなどは心の中で『山姥』などと蔑称していた輩だったが……素顔が、こんなにも整っているとは思わなかった。
「エリオちん！　エリオちんじゃーーーん!!」
ポルテは、カウンターを身軽に飛び越え、エリオにハグをした。
「だぁ！　くっつくんじゃねー！」
この馴れ馴れしさが、エリオが彼女を敬遠していた理由の一つだった。
「あぁん、いけずぅ」
くねるポルテにいやっそうな顔を向ける。
「ポルテ！　仕事中に遊んでんじゃないよ！」
と、厨房と思しきスペースから、女性の声が飛んだ。
「はいっ！　すみません!!」
ポルテは、ビシッと直立不動となってそれに応じた。カウンターを再び乗り越え店舗に戻り、てきぱきと注文のクレープを作る。
「おめー、ここで働いてんの？」
「うん、そだよー。おかみさんが、声かけてくれたんだー」
エリオと同じく、窃盗団のメンバーの大部分も逮捕されていたと聞いていたが……こうして更正して、まっとうに生きている者もいたようだ。
「でね、食べ物を扱う店だから、化粧は禁止、付け爪も禁止、ピアスも禁止、髪は一つに纏めろ、ってさ」
やんなっちゃうよねー、などと言いながらも、実に楽しそうに仕事に励んでいるように見える。
「そうか？　ぶっちゃけ、昔より今のほうがケバくなくて全然いいぞ。

いっそそれで通せ」
「えー、やだー。かわいくなーい」
けらけら笑うポルテ。はいよ、とクレープをエリオに渡す。
「んでさー、エリオちん」
「あぁ？」
ひょい、とエリオの背後を指さす。
「……それ、エリオちんのお知り合い？」
ぎょっとして振り向く先。キャロが、いつもの無表情を少しばかり曇らせながら、無言で佇んでいた。
「ああ、どした？　待ちきれなかったか？」
「……そうじゃない」
そして、エリオの手から、ストロベリースペシャルを受け取る。
「しりあい？」
「ああ」
それがどうかした？　と聞き返すが、キャロは黙り込み……ポルテを、上から下まで観察するような目を向ける。
どうしたんだこいつ……と訝しむエリオを尻目に、ポルテは、『ははぁん……』と、得心したようだった。
「へぇーーー……かーわいい。なんて名前？」
……よりにもよって、エリオにそう聞いた。
「キャロ。職場の……あー、同僚だ」
「……ちがう。ちーむめいと。こんびぱーとなー」
むっとしたキャロが、そう訂正する。
「？　……まぁ、そうとも言うけど」
「そうとしかいわない。だいじなこと」
普通に昔馴染みと世間話をしているだけのつもりのエリオは、なぜキャロがこんなムキになっているのかが分からない。
「いこ。ばしょ、とられちゃう」
「あ。店のテラス席、ちょうど空いたんだけどな？」
「……」
歩道のベンチは、満席だった。

「ごゆっくりー」
サービスのドリンクを置いて行ったポルテを見送る。
「あー、腹減った……」
ボリュームのあるクレープにさっそく食いつくエリオ。反してキャロは、ストロベリースペシャルを、ちびちびと食べ進む。
「……つーか、どしたん？」
漠然と聞くエリオ。
「……なんでも、」
「なんでもない、って事は無いだろ。らしくねーぞ」
炭酸飲料をグビグビと飲む。キャロは、カフェオレを飲む。
「あのひと……」
だれ、と聞きかけたその時。
「おー。マジでエリオだ」
「うわ、オンナ連れてやがる」
「毛も生えてねーくせに」
運送業の作業服や作業着に身を包んだ、ガラの悪そうな若者たちが、馴れ馴れしく近寄ってきた。
「あぁ？　……おいおい、今日は同窓会か？」
「ひゃひゃ。なわきゃねーだろ。　ポルテからメール入ったからよ、ツラ拝みに来てやったんだよ」
「おいポルテ！　何かサービスしろや！」
「するわけないっしょ！　金払いな！」
前歯の欠けた青年が、変な声で笑った。
通行人は、彼らのいる一角だけをそそくさと避けていく。が、その威圧感のある若者たちとため口で、馴れ馴れしく軽口を叩くエリオに、キャロは不思議がるように、首をかしげた。まぁ別に、キャロはキャロで、アホの集まり機動六課で、こうした手合いは毎日相手にしているわけで、慣れていたが。
騒ぎすぎた彼らが、ポルテや店主に追い出され、笑いながら去って行った後。
「……」

キャロは、落ち込んでいた。
「……わたし、エリオくんのこと、なにもしらないんだなぁ」
あんなに知り合いがいるなんて、知らなかった。機動六課に来る前、どこで何をしていたのか、知らなかった。チームなのに。コンビなのに。
「きゅ……」
バスケットの中で、フリードが小さく鳴く。
「あ」
と、キャロは気づいた。
「……わたしも、エリオくんに、むかしのことはなしてなかった」
相手のことだけを知ろうだなんて、都合がよすぎるのではないか。よし、話そう。すぐに話そう。具体的には出生から部族壊滅のあたりまで……
「またトンチンカンなこと考えてるだろお前……」
トレーを片付けてきたエリオが、その思考を遮った。
「知りたいなら歩きながら教えてやっから、出ようぜ」
「あ、うん」
エリオの後を、カルガモのようについていく。
「ようポルテ。まぁまぁ美味かったぞ」
まぁまぁって何よー、というポルテのぼやきを無視して出ていくエリオ。
「あ、キャロちん。ちょっと待って」
続こうとしたキャロは、なぜかポルテに呼び止められた。
「……」
キャロは、ポルテが嫌いだった。この短時間で、何を……と思われるかもしれないが、嫌いだった。自分でもなんだか理由が分からないけど、嫌いだった。なんだかむかつくのだ。
「……てみじかによろしく」
とはいえ、エリオの昔馴染みを無碍にするのもどうかと思い、話だけは聞いてあげることにした。
ポルテは、やや小声で話し始める。

「エリオちんはね、とっても気が強くて、つんけんしてるけど……実際は、人一倍寂しがり屋なんだ」
「――。」
　いきなりその事を言われるとは、思っていなかった。
「あたしらとも、一時はつるんでたけど……やっぱ、こんだけ年が離れちゃってるとさ」
　ポルテは……どう見ても、十代半ば。エリオとは、五つは年が違う。
「あいつ、気持ちだけはあたしらとタメなんだろうけど、実際はまだまだガキだし？　かといって、いまさら同年代のガキんちょと一緒になっても、ビビられてソリが合わないだろうし」
　今でこそ、機動六課の空気に溶け込んではいるが……
「驚いたよ。あのエリオちんが、誰かと一緒に歩いてるんだもん」
　……思えば、エリオが他人と関わり始めたのは、キャロとの大乱闘の後からだ。
「あいつ、照れ屋で意地っ張りでガキなところもあるから、自分の口からは言わないんだろうけど……キャロちんみたいな子、エリオちんはずっと欲していたんだよ」
　キャロにとってもそうだったように、同年代で……本気で本音を全力でぶつけても、同じだけ張り合ってきてくれる相手は、今までいなかった。
「あたしらじゃ、エリオちんのダチにはなれなかったからさ」
　と、前置きし……
「エリオちんと、ずっと仲良くしてあげてね」
　キャロと目線の高さを合わせ、手を握った。
「……」
　無言のキャロに手を振って去って行ったポルテ。キャロの手には、手作り感溢れる割引クーポン券が数枚綴りで握られていた。
「……」
　正直……ポルテのことは、まだよく分からない。でも、
（この店に、またクレープを食べに来よう）
　……そう思った。

エリオに追いつき、また町を歩く。腹も膨れたし、あとは散策だ。
「どーせなら、あんま入ったことない店入ろうぜ」
「うん」
――ふと。
二人同時に、不自然に、足が止まった。
「？」「？」
そして……何かに引き寄せられるように、横へ向くと……
「お？　見つけちゃったカナ？」
……じゃらじゃらと、過剰なまでにアクセサリーを付けた若い女性がにまっと笑った。
赤に金糸のシートに座り、彼女の目の前には……売り物と思しき、シルバーアクセサリー。何て事は無い、ただの、どこにでもいる露天商。ただそれが、尋常でなく胡散臭いというだけで……
「……」
エリオは、足早にその場を離れようとした。
「……!?　な、なんだこれ……!?」
が、動かない。足が、進みたい方向とは真逆の……露天商のほうへ、勝手に歩いていく。キャロも、困惑しながら、ひょこひょこと。
「にーっひっひっひっひ。逃がさないヨ？」
（やべぇ。なんか、こいつやべぇ……！）
困惑は、危機感へ。
「おいっ、ストラーダ！　何やってんだよ早く解除しろ！」
おそらく、何らかの魔法の類だ。しかし……
『いや、担い手よ……出来ぬ』
「はぁ!?」
『出来ぬのだ。なんだ、これは。魔力の欠片も感じぬぞ』
意味が分からず……ただ、見えざる手に誘導されるがままに、露天商の女の前へ。
「どわっ……!?」
女は、にまにまとエリオ、キャロを見渡す。
「んー、二人はデートかなぁ？」

「そうだよ」
キャロが即答した。露天商の女……いや、田上奈々は、きょとんとして……楽しそうに笑い出した。
「あっはっは。いつの世も、女の子は肝が据わってるねぇ」
エリオは、脱出を諦め、胡坐をかいて座りなおした。
道端に座り込んでいるというのに、通行人の誰も、奈々たちを気にした様子はない。ごく自然に、そのへんのポールでも避けるように、逸れて歩いていく。
「……で？　何なんだよ、あんた」
「ただのアクセ売りだよん」
ただのアクセ売りは世界を股にかけたりはしない。どうせ、『なんとなくできた』といったノリで、ミッドチルダにやってきたのだろう。
「奈々ちゃんは子供が大好きだから、サービスしてあげるヨ」
不思議なことに、子供と呼ばれても、嫌な気分はしなかった。
「さ、まずはエリオ君だ。槍を見せてごらん？」
「お、おう……」
……よくよく考えてみれば、エリオは名を告げた覚えも、ストラーダのことを話した覚えもない。
奈々は、エリオの腕を取り、待機状態だったストラーダに触れる。
「……はいオッケー」
ほんの数秒後、奈々はその手を離した。
「……何した？」
『不明だ。……フレーム強度、外殻強度、ソフトウェア、変更なし』
ますます、意味が分からない。奈々は、ケラケラと笑いながら……
「霊媒としての属性を強化したんだヨ」
「れ……？」
「奈々ちゃんのスペシャルなパワーで、けっこう簡単だったヨー」
意味不明な単語が飛び出し……それが毎度のことながら非常識な内容だった。
「キャロちゃん、おいでー」
「うん」

素直に応じたキャロに、奈々は相好を崩した。そして、同じようにケリュケイオンに触れる。
「今度はカップ麺くらいの時間が掛かるから、おねーさんとお話し、しよっか？」
かっぷめんって何だろう……と首をかしげるキャロ。
「強い力を持っているせいで、人に畏れられるのって、どんな気分？」
「――――。」
虚を突かれ、返答が一瞬遅れる。キャロは、その質問の意味を何とか理解し、返答する。
「――――いやだな、って、おもう」
奈々は、安心させるようにからからと笑った。
「あっはっは。だよねー……でも、そう思っているのは、キャロちゃんだけかな？」
「え？」
奈々は……あの、全てを見透かしたような目で、キャロを見据えた。
「畏れ多くて、誰も名前を呼んでくれない。畏れ多くて、誰も近づいてきてくれない。いっつも一人で、待ちぼうけ。このかわいそうな子……だーれだ？」
「――――ヴォルテール」
どうして知っているのかは、正直分からなかった。しかし、彼女の言わんとしていることは、理解できた。
「おっと、ちょうど時間だネ！　んじゃ、デートの続き、楽しんでおいで！」
ケリュケイオンから手を離し、おどけてみせる。ぱっぱっと立ち上がり、エリオとキャロの手を取り、立ち上がらせ……
「そうそう、これはサービスの占いなんでけど……
――君たちにとって、意外な出会いが二つ。でも本当は、どちらも必然かもね？」
「……、え？　それ、どういう……いねーし!?」
「……きえた」
振り向いたとき、そこには誰もいなかった。

「何なんだ今日って日は……」
いきなりすぎる出来事の連続に、エリオはやや疲れ気味だった。
「……」
キャロは思案顔だ。エリオや奈々の言葉が、気になっているのだろう。
『デカい力でも、使いこなそうぜ』
『いっつも一人で、待ちぼうけ』
「……」
ヴォルテールは、一族で信仰されてきた、いわゆるカミ。キャロは、そのカミと交感する能力を持った巫女。その関係に、疑いを抱くことは無かった。
しかし、ヴォルテールはカミとはいえ、いかに絶大な力を持っているとはいえ、一個の意志ある生命だ。自分は、無意識のうちに、ヴォルテールとの間に、壁を作っていたのではないか。ヴォルテールと交感できたのは、初代のル・ルシエ以来、数百年ぶり。では、その間、ヴォルテールは……畏れられ、遠ざけられ、近づかれず……
「おい、」
ぽん、とエリオに肩を叩かれ、はっとなる。どうやら、知らず知らずのうちに、俯いていたらしい。
「あ……ごめん……なんでもない」
しかし、浮かない顔は隠せない。
「なんでもない、って顔じゃねーだろ。ったく……」
エリオは、キャロの手を引く。
「せっかくの休暇だ。パーッと遊ぼうぜ！」
駆け出すエリオに手を引かれ……二人は、大型のゲームセンターに入って行った。
「はじめてはいった」
興味深そうに辺りを見渡す。エリオは、キャロを対戦格闘ゲームの筐体の前に座らせた。
「やったことないよ？」

「いいんだよ。今はとにかく、夢中になってろ」
簡単に操作をレクチャーだけして、あとはキャロのやりたいようにやらせた。
キャラクター選択画面が表示されて……キャロは、緋色の槍使いを選択。
「？　……迷いなく選んだじゃん」
「いちばんエリオくんに似てたから」
……真顔ですっぱりと言い切った。
「……そうか」
「エリオくん、かお、あかいよ？」
「ああそうだな。画面の照り返しだ」
キャロは、ぎこちない手つきで、スティックを握った。
――『Ｒｅａｄｙ，，Ｆｉｇｈｔ!!』
「わ。わ。」
いきなり攻撃を仕掛けてきた敵に、キャロはスティックやボタンをやたら滅多にがちゃがちゃ動かし抵抗する。手を動かしながら、筐体に張り付けられたコマンド表を目で追い、がちゃがちゃがちゃがちゃ……
「ええっと、ぼうぎょ、ぼうぎょ……あああああ」
ぼがーん、という気の抜ける音とともに、キャロの操る槍使いは画面の中で倒れ伏していた。
「エリオくんがしんじゃった」「俺じゃねーからな、それ」
エリオは、コインをちゃりん、と投入し、コンテニューさせてやった。
「えい。えい。まいだすめっさー。しゅわるべふりーげん。」
「いや、技名ちげーから」
ちゃりん、ちゃりん、とコインが定期的に投入されていく。
「奥義・暗黒吸魂輪掌波」
「もう原型ねぇじゃねーか……ヤだぞ俺、そんな技名叫ぶの」
そして、キャロがガチャプレイながらもゲームに慣れ始めてきた時……

――Ｎｅｗ　Ｃｈａｌｌｅｎｇｅｒ!!
画面が突如として暗転し、そんな表記が現れた。
「？　なにこれ」
「お、乱入か」
対面の筐体から、対戦を申し込まれたようだ。筐体がやたらデカいため、相手の姿は見えない。
「よし、行けキャロ。ぶちのめしたれ」
「うん」
相手のキャラクターは……全身を黒い装備で固めた忍者のようなものだった。
――『Ｒｅａｄｙ，，Ｆｉｇｈｔ!!』
どうやら、相手もゲームにはそれほど慣れていないようだ。キャロと相手のキャラクターはどこか挙動不審でキモい動きをしているし、謎のゲージ消費技を繰り出したと思ったら、間合いのド真ん中でアピール行動を始めたりもする。
「えい。えい。」
が、第二ラウンドから、変化が訪れた。
……敵の動きが、徐々に洗練されてきているのだ。中距離のクナイ攻撃や、変則軌道の手裏剣。近距離では忍者刀。ダメージは変わり身の術で無効化され、じわり、じわりと、槍使いの体力を削っていく。
「この。この。」
が、キャロの吸収力も大したものだ。すっかり慣れた手つきでスティックを動かし、防御からのカウンター、投げ技を繰り出す。
地味に着実にダメージを重ねてくる相手に、大振りだが重い一撃でゴッソリと削るキャロ。
――ピコン！
……そして、ほぼ同時に必殺技ゲージが溜まる。互いの体力ゲージは、２割前後。必殺技が繰り出されれば、防御をしていても、削りダメージで敗北することになるだろう。
「!!」
躊躇いなく、必殺技のコマンドを入力するキャロ。しかし、対戦相

手も同じ考えらしく……ほぼ同時に、必殺技が画面中央で衝突した。
そして表示される、またしても謎のサイン。
「連打しろ連打！」
エリオが急かす。どうやら、一定時間内に連打の数で勝ったプレイヤーの必殺技が優先されるシステムのようだ。
――ズダダダダダダダダダダダッ!!
キャロも相手も、一心不乱にボタンを連打する。
「ぐぬぬぬぬ。」
が、連打数は拮抗し、拮抗し……
「むぅぅぅぅぅ。」

――ズダダダダダダダダダダダッ……ばきょっ。

……そんな、破滅的な音とともに、ボタンが異常に陥没し、画面が消えた。
「「「「「「あ」」」」」」
エリオ、キャロ……そして、対戦相手の声が重なる。
「元々、疲労してたんだろ……たぶん」
エリオは素知らぬ顔で、キャロを連れて撤収の準備に入っていた……のだが。
「いやー、惜しかったッスねー」
向こうから赤毛の少女がフレンドリーに話しかけてきた。
「ああ全く。いい勝負だったのになぁ」
エリオも気分よくそれに応じる。相手の少女は、エリオの年恰好に少し驚いたようだったが、変に偉ぶることも無く、気さくに話している。
「……つか、逃げた方が良くね？　弁償騒ぎにでもなったら面倒だぞ」
「そうッスね。店員が来る前に逃げるッス」
「んじゃ、またな。俺、エリオっていうんだ。こっちはキャロ」
「またッス！　あたしはウェンディ、んでこっちが、ウチのお嬢……、
――ルーテシア！」

……エリオとルーテシアは、互いの顔を瞬時に認識し、一瞬だけ戸惑い、一瞬で理解し……

――――一瞬で、戦闘に入った。

「強装結界――!!」「フラッシュグレネード!!」

――バキィイインッ!!

――ボゥンッ!!

ルーテシアがエリオたちを封じ込めるのと、エリオの閃光弾が弾けるのは、同時だった。

◆・◆　◆　◆

――ここは、どこだろう。

気付いた『彼女』は、まず第一に、そう思った。

――これは、なんだろう。

自由になる体を使って、手を伸ばしてみた。ひたり、ひたりと、触れる。

――……？

腕が届く範囲には、冷たく、固く、艶のある壁があった。そしてそれが、ぐるりと、自分を覆う筒である、ということが分かった。呼吸をすると、ごぼりと、口元が泡立ったから、液体の中にいるということが分かった。その液体の中で、さらさらと体をなでるのが、自身の毛髪であるということが分かった。口元に充てられている機器から酸素が供給され、呼吸ができているということが分かった。自身の体が液体に満たされた円筒状の容器の中で人工的に呼吸をさせられ時折ガタンと揺れることからこの自身の入った容器が凹凸のある路面を原動機によって稼働する車輪を持つ機械によって運搬され目覚め

てから運搬されて距離が５００メートル程度この後もしばらくは同じような状況の中ひたすら運搬されどこかへ運び込まれ自身の持つ先天資質を起動の鍵とする古代遺産へと利用され玉座という名の制御装置へ据えられこの僅かな自我さえ奪われ肉体が限界を迎えるまで時間にして４３８００時間の耐久限界まで酷使され廃棄されるだけの消耗部品であるということが

――――――わかった。

（いや、だ……）

それが、明確に思い浮かべた、初めての言葉だった。

（いやだ、いやだ、いやだ！　嫌だ！　消えたくない！　消されたくない！）

喪失への恐怖が、次々に言葉となる。

（気づいて！　誰か、私に気づいて!!　気付いて！　気付いて！）

自身の存在が、誰からも祝福されず、名さえ与えられず、何一つ得る物も無く、誰にも知られぬまま葬られるものだということが、堪らなく耐え難く……

（私は。　私は!!）

瞼が――開く。

「私は、ここにいるんだ!!」

初めての、声帯を震わせての発生。それが、彼女の産声だった。

伸ばした手を、冷たい壁に押し当て――――

◆・◆　◆　◆

この商業ビル一つ分。

「くそっ……！」

強装結界。本来ならば、複数の術者によって展開される、戦術魔法

だ。主に、敵の逃亡を阻止するため、もしくは被害を最小限に留めるため……要は、『敵を逃がさない』ことに特化した結界魔法である。エリオが知る限りだけでも、通信阻害、転移阻害、結界内部を恒常索敵……と、厄介この上ない。

「複数の術者で、って前提が既に無くなってるじゃねーか……！」

エリオは最短経路で、フロアーを移動していた。だが、敵には居場所が筒抜けだ。

「……エリオくん！　した！」

「!!」

下……床からの奇襲など、通常ならば考えづらい。だがエリオは、迷うことなくキャロを抱えて跳ぶ。

――ズボッ!!

ただの地面を、まるで液体のように透過し、ガジェットのマニピュレーターが突き出した。

「あれ、外しちゃったよ」

意外そうに言う。セインが、ガジェットを一体、小脇に引き連れ、上半身を覗かせていた。

「!!」

――バシュンッ!!

エリオの射撃がセインを狙う。しかし、セインは再び地面を潜航し、射撃はむなしく地面で弾ける。

「あいつ……多分、教官の言ってた奴だ！　地面に自在に潜る奴！」

「じゃあ、ウチのことは知ってるッスかー？」

……エリオが、その顔面狙いの手刀を防げたのは、殆どまぐれだった。

「っく！」

苦し紛れに薙ぎ払うが、当たるはずもない。

「……ああ、知ってるよ。なんでも速く動かす奴だ」

そして、ルーテシアがいる。

不幸中の幸いは、敵の中にガジェットは一体のみ、という点だけだ。物量が強みのガジェットだが、敵も結界内部に持ち込むのは、あの一

瞬では一体が限度だったのだろう。
「んっふ。情報にはなかったッスけど、うれしい偶然ッスね」
「情報……？」
……ウェンディの言葉に、ピクリと反応する。
「あ、バカっ……！」
セインが慌てるが……
「……なるほど。スパイか」
腑に落ちた、という感じで、エリオが呟いた。
「……あーーー！　なし！　今のなしッス!!」
「今更ナシもカカシも無いだろバカー!!」
セインがウェンディの特徴的な頭をひっぱたく。そして、ギロッとエリオたちを睨んだ。
「……猶更、帰すわけにはいかなくなった」
ガジェットを引き連れる。
「怪我をして無理やり拉致されるか、大人しく無傷で投降するか、選びな」
状況は、圧倒的に不利だ。恐らく、敵にはこちらの戦力は全て知れ渡っている。対してこちらは、相手の情報が圧倒的に不足している。
だが。
「脅迫の現行犯だ」
「たいほできるね」
ここで無傷を選ぶほど、賢しらではなかった。
「……賢くないねっ!!」
ガジェットからの射撃と同時、セインが潜航。
――ビシュッ!!
ウェンディが投擲したコインが、銃弾にも等しい速度で迫る！
――パキィイインッ!!
（報告じゃ、厄介な武装はティアナがブッ壊してくれたらしいな）
ならばウェンディは、速度に優れた『だけ』の敵。問題は、自在に障害物を潜航するセインと……未だ動きを見せない、ルーテシアだ。
「キャロ、あのライダーもどきは」

「いないみたい」
一番の懸念だったガリューは、今回は連れていないようだ。
ルーテシアは、推定Ｓランク級の魔導師だ。魔力量も、相当なものだろう。だが、この結界は、いかに魔力量が多かろうと、一人でそう易々と維持できる代物ではない。結界の維持で手一杯か……それでなくとも、召喚術での増援という可能性は、低く見積もっても大丈夫なはずだ。
「――――おい」
……ウェンディが、醒めた顔で、エリオを見ていた。
「――今、アタシのこと……速いだけの奴とか思ってただろ？」
砕けた口調ではない。己の優先順位が、最下層に判断されたことを察していたのか……いつものお気楽さは鳴りを潜め……冷たく冴えた目で、エリオを補足していた。
「……」
はったりではない。エリオは、ストラーダを構え、迎え撃つ構えだ。
「ＩＳ・『エリアルレイヴ』」
……投擲でも、体術でもない。
「……う、っぐ、ぅぅぅぅぅぅぅ……！！！」
突如として、苦しむ素振りを見せる。
ストラーダが分析する。
『体温、異常に上昇。……推定４５度。生身の人体に耐えられる体温ではないぞ』
ウェンディが何をしようとしているのか……
「体温……それに、加速……？　……！　おい、まさか」
『ああ、そのようだ。奴は……
――――己の血流を、『加速』させている」
ウェンディが、ガジェットのパーツと思しき武装を振りかぶり……
「……覚悟しろよ、このクソガキィいいいいいいいいいっ!!」
――ガゴぉオオオオオンッ!!
「うぐぁあああああっ……!!」
エリオを、ストラーダごと押し潰さんばかりの重撃を放った。

「我が騎士に、鋼の加護を……！」
キャロが、エリオへ強化を施そうとする。しかし……
――『Ｂａｎｉｓｈ』
……不発。
「！　また、」
今回は、己に逆流してくるようなことは無かったが……やはり、ルーテシアが術をかき消してしまう。
「……あいつだ」
以前……何も出来ないまま、無力化された時と同じ。
「……ケリュケイオン」
『ええ、御意に』
ならば、闘い方を変えるのだ。
「エリオくん、ぷらんＢだよ！」
そう言い残し……キャロは、フロア出口へ、一目散に駆け出した。
「Ｂって……え、Ｂ!?　」
ぎょっとするエリオ。
プランＢとは……二人の間だけで決めていた符丁で……二人で共同で戦闘するのではなく……互いに相手を分断し、各個撃破するというものだ。ただし、これは訓練でガジェットを相手にする際の作戦であって、初戦の、機械ではない生身の相手に試すのは初めてだった。しかも、かつて相手にしたことのない極めて奇異な能力者。後衛向きで直接的な戦闘能力の低いキャロでは、危険にもほどがある。しかもこの狭い空間では、フリードを竜魂召喚することも困難だから、猶更だ。
「フリードは、エリオくんにあずける」
……正真正銘、一人で相手にする気のようだ。
「大丈夫なんだな!?」
ウェンディと鍔迫り合うエリオが、確認のため声を張り上げる。
「へっ、泣かせるねぇ！　足手まといにはなりたくないってか！」
ウェンディが、茶化すように言う。
キャロは、くるりと振り返り。

「かてるから、だいじょうぶ」
……当然、といった顔でそう言い残し、駆けていった。
「逃げるなってーの!!」
階段の下。段差の隙間。横合いの壁。天井。
セインは次々に出現地点を変え、キャロを翻弄する。
「しばれ」
『Ｂｉｎｄ』
捕縛のため、バインドを発動させる。
「んー。だめだ」
しかし、無効化。
「ちょこまかと!」
――ビュウンッ!!
ガジェットのマニピュレーターが、鞭のようにキャロを絡め捕らんと迫るが、それを機敏な動作で回避する。
「そのうごき、もうあきた」
……訓練で、連日連夜、嫌というほどのガジェットを相手にしている。今更、一体程度、どうということは無い。
「でも、魔法を封じられたあんたじゃ、何もできないだろ!」
「そうかもね。でも、もういっかい」
『ｓｈｏｔ!』
試すように、探るように、何度も、何種類もの魔法を試す。しかしそれは、片っ端から無効化されていくが……
（どう、ケリュケイオン）
『８割がた、割り出せました』
それこそが、キャロの狙いだった。
（ルーテシアのばしょさえわかれば、それでいい）
……キャロはすでに、セインなど通過点程度にしか見ていなかった。
『割り出せました。５Ｆ、アミューズメントホールです』
「ありがと。――それじゃ、やろう」
ずるっ、と、セインがキャロの真下から現れる。

「何度も何度も……何がしたいわけ!?」
「おまえ、ようずみ」
――どげしっ！
……その鼻っ面に、ブーツの底が食い込んだ。
「ぶぁっ!?」
真下から現れるという奇襲に、通常なら身を竦ませるか、反射的に飛び退くところだ。……そのタイミングに合わせて、正確にカウンターを合わせるあたり、機動六課は、確実にキャロを成長させていた。
「もぐったまま、うまっててて」
ジャケットの懐から、手のひら大の、マグカップ程の……その、何というか、どう見ても『手榴弾』っぽいものを……、ぽいっと。セインが潜った直後、波紋のように揺らめく力場へ。

――……ゴゴォオンッ!!!

……セインが潜った地面の『中』で、凄まじい音が響いた。
魔法が使えないのなら……魔法以外の手段で、打倒すればいいのだ。
「いほう……ぶっ……ぴん……」
絞り出すような抗議とともに、セインが、よろよろと、地面から這い出てきて……右腕が出たところで、ぱたりと、力尽きた。
「音響弾だから、せーふ」
勝利のピースサイン。
――セイン、撃沈。

◆・◆　◆　◆

「……!!」
クアットロが、いつになく焦った様子で通路を走っていた。
「なんであのタイミングで遭遇するのよ！　よりにもよって、『あの子』も近くにいるって、どういう確率よ！」

『おいクアットロ。どういう状況だ』
スカリエッティまでも、この騒ぎに目を覚ましたらしい。
「どうもこうもありませんよドクター！　『あの子』が……極秘で運搬中だった『あの子』が、何を寝ぼけたのか目を覚ましてしまったんです!!」
『……ああ、まずいな……今、最高評議会から、問い合わせが雨あられ……おっと、評議会、自ら回収するとさ』
「ンなっ……！　何を勝手な!!」
『評議会に今『アレ』を渡すのは、まずいな……』
「事態の収拾は、お任せを！　良くはなりませんが、これ以上悪くもしませんので！」
『そうか、頼んだ』
クアットロは、それきり通信を切った。
――ばんっ！
「今いるのは誰!?」
待機室を見回す。いたのは、デルタと同型の仮面を装着した男女。
「！　ゼータ、シータ！　丁度いいわ！　出撃よ！」
「いいでしょう」
シータというらしい人物は、感情の抑えられた平坦な声で応答した。
「武装は解禁しても？」
「構わないわ！　とにかく、覚醒した『あの子』の傍で魔法戦闘を行うのは危険よ！　ルーテシアたちの回収に専念しなさい！」
「いいでしょう。では、出ます。……ゼータ、よろしいですか？」
「構わん」
ゼータは寡黙に、ぼそりと応答し、シータとともに、格納庫へと向かった。
「……」
きち、きち……と、バイザーの装置を操作することで、戦況を確認する。
三つのうち、一つ……セインを示すアイコンが、ぱたりと途絶えた。

「!! ディエチちゃん！ 行くわよ！」
そしてクアットロは、自身も出撃の準備をする。ディエチを呼び出し、トランスポーターを使用して現地へ飛んだ。

◆・◆ ◆ ◆

――――――……ゴゴォオンッ!!!
天井から、その爆音が轟き……
「セイン!?」
ウェンディは、セインが敗れたことを悟った。
「……やりやがった」
エリオは、打撲や裂傷だらけになった体で、笑みを浮かべる。
「あとは、ルーテシアをどうにかして終了、ってな！」
「はァ!? なに勝った気になってんだよ!!」
――ガゴンッ!!
ウェンディの棍を、ストラーダの柄でどうにか受ける。
「ぐぅっ……!!」
が、一撃は重く、エリオの体は大きく流される。体格でも、膂力でも、今のウェンディはエリオを上回っていた。
――ゴォウッ!!
「あっち!! ……ああクソ、鬱陶しい!!」
追撃は、フリードが火炎で牽制してくれるとはいえ……こちらは、有効打を与えられずにいた。
「はァ、はァ……！」
しかし、ウェンディもまた消耗が激しい。やはり、あの能力の使用方法は、かなりの消耗を強いられるようだ。このまま防戦に徹して、時間切れを待つのも手だが……やはり、ルーテシアの相手をキャロ一人にさせておくわけにもいかない。竜魂憑依は、最後の最後まで温存していたいが……
「オおおおおおおおっ!!」
消耗をものともしない気迫で、棍を振るうウェンディ。

「しゃらくせえええええ!!」
とうとう火炎を無視し、熱傷覚悟で突き破ってきた。
ストラーダを構え……
――ビシィッ……、!!
……肘に、ウェンディが死角から放ったコインが命中する。当然、能力により加速されたそれは、一瞬、腕の動きを麻痺させる。エリオは、衝撃を覚悟し……
――ドズッ……!!
「クァアッ……!!」
……しかし、その衝撃を受けたのは、エリオではなく……その直前、身を挺したフリードだった。
「フリード!!　……ンなろォおおおおおっ!!」
――バチィイイッ!!
魔法は打ち消されてしまうとはいえ、魔力までは消すことはできない。エリオは魔力を放出し、一時的な電撃でウェンディへ攻撃を加えた。
距離を取り……負傷したフリードを、腕の中に庇う。
「……一応、忠告しておいてやるよ」
ウェンディが、エリオの意図を察して言う。
「確かにその魔法なら、ルーは無効化できない。発動可能だ。だけど、発動したが最後、残り体力を搾り取られて、お前は終わる」
竜魂憑依は、非常に体力・精神力を消耗する。前回は、デルタの黒炎に強制解除されたが……今回は、暴走だけで済むかどうか。
「……」
ぎち……と、ストラーダの柄を強く握る。
『担い手よ』
ストラーダが、エリオに呼びかける。
『――できるな?』
その一言に込められた意図を知り、エリオは……力強く、頷いた。
「――フリード、行くぞ!!」
フリードの体が発光し、オーブへと変わる。

「竜魂――憑依!!」
――ドクンッ!!
フリードの鼓動と、自らの鼓動が重なる。
「……!」
――制御するのではない。
――掌握するのではない。
――支配するのではない。
――――二つの意志を、重ね合わせる。
『Ｓｉｌｖｅｒｙ　Ｄｒａｇｏｏｎ　Ａｒｍｓ!!』
目を開ける。
「……」
竜を甲冑としていた前回とは違い、エリオの変化は、ジャケットが翼状に変化しただけだ。
「……ストラーダ？」
『Ａｒｍａｍｅｎｔではなく、Ａｒｍｓ、か』
しかし、ストラーダが違っていた。柄は両手で持てる程度にまで短縮され、穂先には、白銀色の魔力で形成された刃が備わった――大剣へと、変化していた。
「フリード、ストラーダ……行くぜっ！」
翼を撓ませ……一息に、跳ぶ!!
「……！　速っ……!?」
加速能力を使用しているウェンディでさえ、目を見張るような速度。その瞬発力、もはやフェイトを超えかねない程だった。棍でなんとか受け流しながら、回避する。
「う、っく……!!　お前、槍使いなんじゃなかったの!?」
情報では、エリオがそれ以外の武器を使用することは無かったはずだ。
「ははは！　誰が教えるかっ！」
「ムカつくー!!」
一合、二合と打ち合う度に、ウェンディの頑強なはずのフレームに衝撃が響く。

しかし……エリオの剣術は、にわか仕込みではなかった。基本の型に忠実でありながら、枠には囚われない自由な動き。そして、その斬撃の鋭さは、単に竜魂憑依で強化されただけでは実現できない。
――ガキィンッ!!
間合いが、一時的に離れる。ウェンディは、エリオが更に間合いを詰めてくるものと想定し、地面にコインをバラ撒く。踏み込んできた瞬間、エリオ目がけ、炸裂させる。ダメージにはならないだろうが、セインを回収ののち、撤退するだけの時間は稼げる。
(お前との勝負、ここまでッス!!)
……が。
「フリード!」
大剣が、薄く輝き……
「――――伸びろォッ!!」
――バシュゥウウウウウッ!!!
刀身が瞬時に、何倍にも伸長!!
「んなーーーーーーーー!!?」
咄嗟に棍を盾にするウェンディ。
――バキンッ……!!
「うっそ……!?」
ウェンディの棍が、耐えかねてへし折れる。
「魔力刃だぜ!? 長さなんざ、いくらでも変えられるのさ!!」
「くそ!」
棍を捨てる。が、ウェンディは未だ、自己ブーストを継続させている。
「ついでにお前の能力、弱点発見だ!」
自身を対象に発動した場合、一定時間は解除が不可能なのだろう。
エリオは、大剣を振りかぶり……剣の腹で、ウェンディをブッ叩くモーションに入った。
「――――!!」
ウェンディが、敗北を悟り、身を強張らせる。
「おりゃあああああああ!!」

フルスイングされる大剣。致命傷にはならないだろうが、骨の何本かは貰っていく程には力を込めた一撃。

――ガギギィイイイインッ……!!

しかし、それは、大剣がウェンディの体を打ち据える音ではなく……

「……」

――豪壮な薙刀が、大剣を真っ向から受け止める音だった。

「……」

仮面姿の大男が、忽然と、二人の間に割って入っていた。拮抗する、大剣と薙刀。恐ろしいことにこの男、竜魂を宿した状態のエリオと、互角の膂力だ。

「チッ……！」

――バンッ!!

拮抗していたのでは、埒が明かない。エリオは後退し、大剣を正眼に構え直す。

「……ゼータ、っ」

「……」

ゼータと呼ばれたその巨漢は、薙刀を胸の付近まで持ち上げる。すると……

――ボウッ……

……薙刀の穂先に、あの、解呪の黒炎が宿った。

「……！」

身構えるエリオ。しかしゼータは、その黒炎を、ウェンディへと向けた。

――ボウッ!!

黒炎は、身を竦ませたウェンディの体を包み……加速状態を、強制的に解除させた。

そのまま、ウェンディの体を抱え上げる。

「逃がすか、」

『担い手よ！』「っ!?」
追撃の直前、ストラーダからの警告。即座に耐ショック姿勢を取る。その、ほんの数瞬の後……
――――――……バゴォオオンッ!!!
「うおおおおおおっ!?」
凄まじい威力の魔力の旋風が、エリオたちのいるフロアを、階下から吹き上げた！

◆・◆　◆　◆

セインをあっさり撃破した後、キャロは単身、５Ｆのアミューズメントホールへと向かっていた。結界の維持に専念しているからなのか、ガジェットによる妨害がなかったのは行幸だった。
――ギィッ……
重い防音扉を押し開く。
「あ、きた」
部屋の中央、隠れるでもなく、堂々と姿を晒していたルーテシアが、キャロを眼中に捉える。
「ひとり？」
まるで世間話のように、軽く話しかけるキャロ。
「うん。あなたも？」
それに、同じく応じるルーテシア。
「うん。フリードはエリオくんに預けてきた」
「ふぅん。じゃあ、やろっか」
地面に突き刺していた杖を引き抜き、構える。
「うん。やろう」
キャロも、ケリュケイオンを装着した手を握る。
「けっかい、いじできるの？」
「注いだだけの魔力分は稼働するよ。それを過ぎたら解除される」
「どのくらい？」
「１５分くらいかな」

「ながい」
「そうだね」
――それまでに、決着がついてしまう
二人とも、そう言っているようだ。
「まずは様子見」『Ｓｈｏｔ』
――バシュンッ!!
初歩の射撃魔法。以前は、不用意な防御魔法に付け入られ、一瞬で戦闘不能に陥ったが……今回は。
――とん、とんっ。
軽くステップを踏み、体捌きのみで回避した。一応、防御魔法にも対策を施してはいるが、避けられるのなら避けてしまった方が早い。そして……
「――――」
……そのステップのまま、唐突にルーテシアの至近距離にまで踏み込んだ。
「――……!?」
ぎょっと目を剥くルーテシア。察知ができなかった。移動速度を強化する魔法を使用した気配もない。だというのに。
――ドスッ!!
ケリュケイオンが、ルーテシアの腹部を強烈に打ち据えた。
「こふっ……!」
せき込む程度で済んだのは、やはりキャロが、打撃戦に慣れていないこともあるのだろうが……それでも、有効打だ。
「……今の何」
無拍子……キャロが、はやてから学んだ古武術の歩法だ。打撃は、スバルのを見よう見真似。
「ひみつ」
が、それを教える意味は無い。
ようやく一矢報いた、といったところだろうか。
「……そう」
ルーテシアも、様子見を止めたようだ。

『ｉｍｐａｃｔ』
――ドンッ!!
衝撃波でキャロを吹き飛ばす。
「卑怯とか言わないでよね」
その周囲に展開される、攻撃魔法の魔力スフィア。
キャロを近づけず、遠距離から弾幕で押し潰すつもりらしい。
「……」
ケリュケイオンを、拳ごと握りしめる。
ルーテシアは、召喚魔法と、無効化魔法という特殊な魔法を得意とするが……それだけでは無い。膨大な魔力量と、極めて高い出力、明晰な頭脳を誇る、生粋の『魔導師』だ。弱いわけがない。容易い筈が無い。魔力量、出力、術式のバリエーション……およそ、魔導師として求められる実力は、圧倒的にルーテシアが上。
なら、賢い判断をするべきだろうか。相手は格上だ。諦めるか……逃走するか……
「このことばのいみ、わかる？」
キャロは、戦闘中に、唐突にそんな質問をする。
「――『自分より強い相手に勝つためには、相手よりも自分の方が強くないといけない』」
それは、訓練の合間……なのはが、フォワードチーム全員に出した質問だった。正直、それは当然のこと過ぎて、質問する意味があるのか、とも思っていた。チームで最も聡明なティアナでさえ、首を傾げていたほどだ。その言葉は結局、単純に、強敵を相手にした場合を想定して、常日頃から訓練に励め、という意味だ……と、全員が思っていた。
「……前準備をしていれば負けなかったっていう負け惜しみに聞こえるけど」
ルーテシアも、ほぼ同様の見解だ。
「――ちがうよ」
だが、否。今なら、明確に答えを出すことができる。
「私は、あなたより弱い」

「……今更？」
「でもね。
――あなたには、まけない」
――決して誰にも負けるまいと、磨き上げた己が力を信じ、貫き通すのだ
「――――我、請うは其の猛きカイナなり」
ならば、行使するのは……召喚魔法に他ならない。
「そんなもの、消してやる」
ルーテシアは、得意の無効化術式を発動。キャロの発動した召喚魔法へ、割り込みを駆けようとする。割り込んだ後は、魔力を逆流させてリンカーコアを機能不全に陥らせて……
「出来ない……？」
が、それは叶わなかった。キャロは、ルーテシアの魔法を、あの日以来、徹底的に研究し、対策し……そして、何よりも。
「むだ。この経路は、わたしたちだけのもの」
他者が入り込む余地など、ありはしない。
「なら、術者を先に消す」
『Ｂｕｓｔｅｒ』
――ゴッ!!
ルーテシアは、キャロへ砲撃を発射する。殺傷設定。十分な出力。召喚術をキャンセルして防御を展開する間もないほどの速度。
――ズバシャアアッ!!!
そして、炸裂。
「……」
直撃した感触があった。倒した。
「――――来たれ、真龍の剛腕!!」

しかし響く、キャロの詠唱。
「!!」
――グォンッ!!
魔力の余波を吹き散らし、現れたのは。
「うで……!?」
黒曜石の輝きを放つ鱗。赤熱した鋼鉄の如き肌。そして……万物を砕く鉤爪。
――ヴォルテールの、右腕だ。
空中から出現した巨大な右腕が、キャロを守護していた。
「はぁあああああああっ!!」
驚愕するルーテシアに向け……裂帛の気合いとともに、剛腕を振るう。片腕とはいえ、真龍。生半可な防御は、容易く粉砕されてしまう。
「う、ぁあああああっ……!!」
見栄もへったくれも無く、床に転がり、射程の外へ逃げる。
――ズゴッシャアアアアアア!!

……合金の構造体を、床から壁から上階まで、スポンジのように根こそぎ抉り取る、馬鹿げた威力。ただの一振りで、この様だ。
「あ……ありえない！　真龍クラスを、そんなやり方で……!!」
キャロが、ル・ルシエ一族の出身であることは知っていた。そして、その一族に信仰されていた真龍のことも、文献から知っていた。
しかし……その真龍を使役するには、キャロの力量は足りていない筈だった。それを、片腕に限定することで使役を可能にするなど、思いもよらなかった。
「はぁ、はぁっ……!!　まだ、まだぁ……!!」
滝のような汗を浮かべ、懸命に剛腕を振るう。防御は間に合わず、仮に間に合ったとしても、あっさりと砕かれてしまう。逃げようにも、自分で張った強装結界の持続時間がまだ残っている。解除するわずかな時間さえ、キャロは見逃さない。
「……失敗した」
諦めと共に、そう呟く。眼前には、既に剛腕が迫っていて……

――ズガシャアッ!!
「っ……!!」
しかし、その衝撃はルーテシアには届かなかった。
「……？」
自分を抱え、攻撃の軌道から退避させた、誰かがいた。
「……シータ」
デルタと共通の仮面を装着した、女性。ブーツ型武装からは、ローラー状のエネルギーが渦巻いている。手には、華奢な身体とは不釣り合いな、無骨な手甲。
「――ご無事で？」
かくん、と傾けた仮面の奥から、淡々と聞いてくる。
「一応。でも逃げる」
「いいでしょう。セインとウェンディは、ゼータが回収に向かいました」
仲間は確保済み。ゼータほどの実力があれば、エリオに拮抗できるはず。
ただ、そう易々と脱出できるとは思えないが……
「――させないっ!!」
キャロの追撃。シータは、胸元に手を当てるような動作をする。
――ボウッ……!!
その手に、漆黒の炎が宿る。炎は、手甲を取り巻き、渦を巻き……
――ドガゴォンッ!!
……ヴォルテールの剛腕を、相殺した。
「……！」
目を見張るキャロ。ヴォルテールに拮抗できる実力か？　いや……
「馬鹿。それを使ったら……！」
「一度だけですから、問題ありません。二度は無理ですが」
慌てるルーテシアと、シータの受け答えから……おそらく、あの黒炎には限りがある、ということが分かった。事実、腕の黒炎は既に消えている。

以前、デルタという戦士がエリオに使ったのと、おそらくは同一のものだろう。しかし、竜魂憑依を強制解除させるほど強力な解呪にも使えて、ヴォルテールに拮抗するほどの強化を与えるとは、驚愕の汎用性の高さだ。

『ルーテシア！』

このタイミングで、クアットロからの通信が入った。恐らく、増援をよこしてくれたのも彼女だろう。

「クアットロ、ちょうどいい。撤退するから……」

『――――――逃げて!!!!』

は？　……と、首を傾げた直後……

――階下から吹き上がってきた高密度魔力の乱気流が、ルーテシアとキャロを飲み込んだ。

◆・◆　◆　◆

――ずる、ずる

「はぁ、はぁ」

名も無い彼女は、歩いていた。記憶の中には無いが、『歩く』という動作は、既に身体にインプットされていた。

その背後では、内部から破壊された容器と、その中身だった液体……そして、それらを運搬していた自動車両が大破し、炎上していた。

「ここに、いるよ……」

うわごとのように呟き……液体に浸り、重くなったボロ布のような衣服を引き摺る。

周囲に照明は無い。あるのは、遥か天井に走った亀裂から差し込む、僅かな光だけだ。

だが、分かる。

「あっち……あっちに、だれかがいる……」

目では見えない。しかし、『視える』もの。心臓のように脈動し、色も、形も、大きさもまちまちで、ゆらゆらと輝く……魔力の光を目指

して、暗がりを一人、歩いていく。
「あ……」
歩いて、歩いて……その、真下まで来た。
真下……しかし、そこを上る手段は、無い。
「あ、あ、あ……！」
手を伸ばす。届くことのない、手を伸ばす。
「だれか、だれか……」
声を出す。届くことのない、声を出す。
――ゴッ……！
暗闇を、黄金色の輝きが照らし出す。少女の頭髪が、黄金色に輝いていた。
「――――」
手を伸ばす。届け、届けと……必死に、懸命に。そして……
「誰か……誰か、気付いてよぉ!!」
――黄金の輝きは、虹色と変わり……天高く、吹き上がった。

◆▪◆　◆　◆

「……！」
エリオは目を覚まし……ようやく、自分が失神していたことに思い至った。
「くそっ……!!　なんだってンだ！」
傍らを見ると、力を使い果たしたフリードがぐったりとしており、ストラーダも、通常の長槍へと戻ってしまっていた。
先ほどまでいた、ゼータという巨漢も、ウェンディも、姿が見えない。
「……」
逃がしてしまった悔しさもあるが……それ以上に。
「……ゼータ、とか言ったな」
ゼータ。前回は、デルタ。明らかに、何らかのコードネームだ。その正体など、知る由もない。しかし……
「……」

ストラーダを、一振り。手に残った、剣戟の感触。僅かな痺れ。それが、強烈なデジャビュとなって、エリオに問いかける。
――本当に、心当たりがないか？
……と。実際、思い至る理由は……あった。それと同時、それはありえないことだ、と否定する自分もいた。
「……違う。アンタじゃない。アンタである筈が無い」
かつて、フェイトと共に、自分を救ってくれた恩人で……槍の手ほどきをしてくれた、最初の師匠。彼は……
「……アンタは、死んだんだ。
――ゼスト」
……クライスラー事件で命を落とした、ゼスト・グランガイツである筈が無かった。

「……というか、何があった」
……ゲームセンターのフロアで戦っていたはずが、気付けば周囲が瓦礫の山、廃墟のような有様になっていた。
『発生地点は……丁度、この建物の真下だな。地下室よりも深い。恐らく、下水道だ』
「レリックが暴発したのか？」
『可能性は高い』
――ぼごっ
……と、エリオの正面を塞いでいた瓦礫の山が……異様に巨大な腕によって、端に除けられた。一瞬、警戒するエリオだったが、その腕を観察した途端、警戒を解いた。
「エリオくん、やっほー」
……疲れは見えるが、ピンピンしたキャロが現れた。
「やっほーじゃねぇだろ……」
キャロに付き従う剛腕が、魔方陣ごと消えるのを見て、エリオはだいたい理解した。
「勝ったよ」
「だろうな……」

当然のようにそう言うキャロに、エリオは頷く。
「……こんなもん相手にさせられたのか、ルーテシアは」
ルーテシアに、同情を禁じ得ないといった様子のエリオ。キャロは、むっとした（無表情だが）顔で、つかつかとエリオに歩み寄り……
「ルーテシア、じゃなくて、わたしは？」
……若干、気分が高揚しているのか、せがむようにそう繰り返す。
「あーーーーー……よくやった。偉い偉い」
帽子ごと頭を撫でた。
「……よし」
ガッツポーズで喜ぶキャロ。これで良かったらしい。
「さて……」
ぐるりと辺りを見回す。どうやら、強装結界は消えたらしい。通信は、あっさりと繋がった。
「こちらエリオ。……休暇中に敵と遭遇。どうぞ」
『エリオさん!? ご無事ですのね！』
セリカだ。
『現在、わたくしたちも現場へ向かっています』
「そりゃ心強い」
時間を確認すると、戦闘が開始されてから、まだ４０分も経っていない。エリオは、何かを思案した後……
「なぁセリカ。さっきの、真下から吹き上げてきた魔力は、一体何だ？」
『……現在のところ、不明です。レリックの暴発にしては、出力が低すぎました。それに……』
確かに。レリックが暴発したのなら、恐らく……この繁華街が、丸ごと崩壊していてもおかしくは無い。
『どうやらあの魔力は、人間のリンカーコアに精製された物のようです』
「敵の魔導師か？」
『いえ。術式はありませんでしたので……攻撃ではなく、単に魔力が放出されただけのようです。発生場所は……地下、下水道です。エリ

オさん、キャロさんは、そこで待機を。その消耗で踏み込むのは危険です』
「……ああ、了解」「わかった」
確かに……エリオも、キャロも、相当に消耗している。敵の罠だという可能性も、ゼロではない。自分たちだけが無茶をしなくても……
「エリオ、キャロ、大丈夫!?」
……こうして、駆けつけてくれる仲間がいる。
『休暇中に災難でしたね』
飄々としたなのはが、二人を労った。
『敵の魔力の残滓は、現在、フェイトとシグナムが追っています。地下道へは、私たちが向かいます』
私たち……と言われ、気付いたが……スバル、ティアナは当然として、何故か。
「……ギンガさん、何でいるんスか?」
左のリボルバーナックルを装着した、やる気満々のギンガがスタンバイしていたのだった。
「えっ? だって、スバルが行くのでしょう? なら、わたしも行かないと」
「いらない、って言ったじゃん! 強引に着いてきて、もー!!」
「あら、スバルひどいわ。だって、閉所での戦闘は、わたしたちの分野じゃない?」
……確かに。この崩落の規模では、地下道も無事ではないだろう。悪路で最大の機動力を発揮するのは、飛行魔法ではなく、フットワークだ。尚且つ、障害を強行突破するだけの能力も必要だ。
「うるさいシャッハは、部隊長に随伴して教会へ行っているし……まぁ、居たら居たで、便利なんだけどね、あの子」
……ひどい扱いである。
『ティアナ。地上から誘導弾で追従しなさい』
「了解!」
機動力で一歩劣るティアナは、連れてはいかないようだ。
『では、行きます』

戦闘用義手に、軍刀。ガンベルトにはリボルバー式拳銃と、一応のフル装備で、薄暗いマンホールへと降りていった。

◆▪◆　◆　◆

――ズシャアッ!!

なのはの刀が、さっそく現れたガジェットを両断する。

『……早速ですか』

前衛をスバル、ギンガが務め、殲滅ではなく、突破を主眼に置いたフォーメーションを組む。

――グシャベキバキッ!!

……やはり目を見張るのは、スバル、ギンガの突破力だ。怒涛の勢いで、群れるガジェットたちをなぎ倒していく。

『……おかしいですね』

しかし、なのはは、どうも違和感を感じていた。

ガジェットの注意が……なのはたちへ、向いていないのだ。接敵して、初めてこちらへ気づき、応戦……それが間に合わず、スバルたちにあっという間に撃破されていっている。

『……急ぎましょう。ガジェットは、魔力の放出元の人物を狙っている可能性が高い』

「了解!!」

そして……ある地点を境に、奇妙な光景が広がっていた。

『これは……』

そこかしこに、内部から炸裂させたような、ガジェットの残骸が散乱していた。

「……誰かが先行してるのかな?」

「いえ、私たちが一番乗りの筈よ」

だとすると……

『……』

なのは達は、歩を進めることにした。

やはり、行く先々で、ガジェットの残骸が転がっている。点々と……道しるべのように。

そして、気付く。最初に見つけたのは、動力反応も消え去った、文字通りの残骸だが……進むごとに、ガジェットの壊れ具合が変わってきていた。
――ギ、ギギッ……
いまだ、動力部も生きているガジェットさえ現れ始めた、その先。いよいよ、照明すら無くなった、暗黒の先。
――――敵が、現れた。
『……』
なのはは……唯一の左目を、限界まで見開き、その『敵』の姿を認めた。
――金属の蛇。
そうとしか形容のできない、闇の中に佇む、異質な姿。これまでのガジェットとは、明らかに違う。ただ、その蛇は、全長にして5メートルほどもあり……
『あ……あいつ、は……!!』
――5年前のあの日……雪山で遭遇したのと、同型の機体だった。
その蛇が、こちらではなく、その先へ意識を向けている。その、赤く輝く目線の先には……
「こないで……こないで……!!」
暗くてよく見えないが……間違いなく、幼子の声。
「……!!」
躊躇なく、眼帯を取り払う。失明した眼球に埋め込んだ高性能カメラが、熱源を映し出す。
『……!!』
「教官!?」
スバルが驚くのにも構わず、義手のギミックを展開。蛇のほうへ、狙いを定め……
『アンカークロー!』『Ｆｉｒｅ!!』
――ドシュウッ!!
手首から先のマニピュレーターが、猛烈な勢いで射出される!!
――ガギンッ!!

蛇の頭部へ……鉤爪が、深々と食い込み……ギチギチと、締め上げる！

『グアッ……!?』

その衝撃に、蛇が呻くにも関わらず……

――ギャリギャリギャリッ!!!

猛烈なトルクで、マニピュレーターを巻き取る!!

『スバル！　ギンガ！』

「はいっ!!」

スバルとギンガは、その意図を察し、拳を構え、そして……

――バガァァァァァァンッ!!!

蛇の胴体を、猛烈に打ち据えた!!

『……ギ、ゴ……、!!』

そこを、更にワイヤーで巻き取り……！

――ゴギュッ!!　メギメギメギ……!!

マニピュレーターを、体内へより深く突き入れる!!

『ガグァ、ガガガ、ガ……、!!』

『砕け……散れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ!!』『Ｎａｐａｌｍ　Ｆａｎｇ!!』

――ゴパァァァァァァァァァァンッ!!!!!

……ナパームファング。マニピュレータ内部に充填された液化爆薬を解放・着火させ、至近距離に爆裂させる、対人での使用を躊躇わせる攻撃が、蛇を粉々に爆砕した。

そして……

『……要救助者、確保』

なのはは、蛇が狙っていたと思しき少女のもとへ向かう。

「……」

少女は、度重なるショックからなのか、意識を失いかけていた。だが……無事だ。目立つ外傷も無い。

『……よかった』

ぽつりと……穏やかな安堵の声が、漏れる。

……その言葉に込められた意味を知る者は、この場にはいなかった。
『……もう大丈夫です。今、安全なところに連れて行ってあげますからね』
少女を、両手で抱え上げる。その身体の、なんと軽いことか。
「……」
すぅ……っと開いた両目が、なのはを見上げる。
「……あ、」
絞り出すようなか細い声に、なのはが耳を傾ける。
――パチッ……！
撒き散らされた機械油が赤々と燃え……暗闇を灯した。
「……あり、が、とう……」
『……お礼が言えるのですか。偉いですね』
スバルたちと共に、通ってきた道を戻る中で、なのはは、ハッと気付いたように、眼帯を装着した。
『……！』
「……？　どうして、かくすの？」
……彼女は、そう聞いてきた。
『気持ち悪いでしょう？　こんな顔……』
なのはの顔には、左目を袈裟懸けにする傷と、機能をほぼ失い、白濁した眼球がある。
何も知らない幼子が目の当たりにするのは、ショッキングなものだろうと、なのははそれを隠したのだ。
「……！」
そんなことない。スバルは、そう反論しようとしたが、今は任務中。警戒を怠るわけにはいかない。口をつぐんだ。しかし……
「――ううん。きれいだよ」
……彼女は、真剣な様子で、そう言い切った。
『……え』
なのはは、ぴたりと足を止める。
「しろくて、雪みたいで……すっごく、きれいだよ」

『……』
「……」
やがて、地上が近くなり……ようやく、互いの顔が認識できるようになった。なのはは、自然と、腕の中の少女と顔を見合わせた。
――――エメラルドの右目。ルビーの左目。そして、流れるような……『栗色の髪』。
美しい少女だった。『人形のような』という表現が、そのまま当てはまりそうな。
「……みせて」
少女の手が、なのはの眼帯を、そっと取った。諦めたように、なのははその素顔を晒す。
『……』
――怖いだろう。おぞましいだろう。きれいだなどと世迷言は、二度と言えまい。
そう心中で呟くなのは。しかし……
「……やっぱり、きれいだ」
『……!!』
……少女は、微笑みながら、やはりそう言うのだ。
『やめて、ください。調子が狂う……!』
……赤面し、眼帯で顔の半分を覆ってしまう。少女はやがて、なのはの腕の中で、すぅ……と寝息を立て始めた。
こうして……エリオの休暇に端を発する小事件は、一応の幕を引き。なのはは、この、奇妙な既視感を感じさせる少女を、機動六課へと搬送し、任務を終えた。

◆・◆　◆　◆

「……あーあ、結局、こうなっちゃった」

アジトでモニターを眺めるクアットロは、安堵半分、諦め半分といった様子で、そう言った。

「ま、評議会に渡すよりは、まだマシってところかしらね」

本当に、タッチの差だったのだ。スバルたちを、最短のルートで『あの子』の元へと導き、厄介な機械人形を処分させるのは。おかげで、手元からは離れてしまった。計画にも、若干の遅延が出るだろう。

「あはっ……イイこと、思いついちゃった……♪」

しかし……この事態は、クアットロの嗜虐心を、大いに刺激するものだった。

「今は、預けておいてあげる。……その子と、仲良くしてあげてね？

――『なのはお姉さま』ぁ？　あっはっはっはっは……!!!」

モニターの光が不気味に照らす部屋で、クアットロは一人、空虚に笑い続けた。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十話

あの、謎の少女を保護してから、三日ばかりが経過した。
なのはは、はやてに呼び出されていた。執務室の中には、はやての他に、シャッハがいた。無言で会釈するシャッハに目礼を返す。
「おお、来たか。なのは」
『うん、来たよ。はやて』
目を通していた書類をバサッと投げ、きいっ、と椅子を回転させてなのはに向き直るはやて。なのはの前とあって、上機嫌に見える。
「……今更だけど、何とかならんか？　そのカッコ」
『何とか、って？　……別に、汚れてはいないけど』
臭くないよね……すんすん、と袖に鼻を近づけ、嗅ぐ。
いつものミリタリーパンツに、ボロいスカジャン。髪もとりあえず結っただけ。靴はゴツい軍用ブーツ。その、あんまりにもあんまりな恰好のことを指摘したのだが、なのはには通じなかったようだ。
「……はぁ。まぁいいや。後で何着か見繕ってやる」
『それで、何の用？』
と、雑談を終わらせ、本題に入る。
「まず、前回、お前が保護した児童だが……おい、シャッハ。説明しろ」
そしてこの丸投げである。
「はい。それでは、僭越ながら」
それに文句を言うでもなく、笑顔で応じるシャッハは寛容だ。フィアットだったら、舌打ちが飛んでいる。
「あの少女は、保護された時、魔力欠乏による意識混濁に陥っていました。栄養状態も芳しくなく、この３日間、昏睡状態が続いていました」
『……』
確かに、やたら軽かったなぁ……と思い出す。
「戦闘中、建造物を破壊したのは、あの子の魔力放出が原因で間違いはありません」
『末恐ろしいですね』
術式すら載せていない、単純なエネルギー放出で、あの被害。ルー

テシアの結界が無かったのなら、一体どれほど被害が広がっていたか。
「ええ。ですが、それほどの魔力を放出したのですから、自然回復は困難です」
魔力は、休息を取れば徐々に回復していくのだが……さすがに、リンカーコアが干上がるほどの消耗から回復するのは、普通の手段では難しい。
「ただ、いつ回復し、また魔力が暴発するとも考えられませんので、監視が必須な状態です」
『ええ、それはわかりましたが……』
なのはが、首を傾げる。
『あの子、あの子と呼ぶのも何ですが……彼女の名は？　身元くらいは、割り出せたのですか？』
なのはは、彼女の名前すら知らないのだった。監視をするにしても、親がいるのなら、説明をした上で行うのが道理。事情聴取だって必要だ。
「はい……それ、なのですが……」
……しかし、途端にシャッハは口ごもる。
『出生検査で、魔力量くらいは記録があるでしょう。あれほどの魔力量の持ち主なら、尚のこと、リンカーコアの波形パターンなり、魔力光なり……』
シャッハは、首を横に振った。
「やらなかったとでも思ってるのか？　この私が？」
はやてが、横から口を出した。
「――不明、だ。名前も、身元も……ミッドチルダどころか、管理世界全域の医療施設にも、あの子供のデータは無かった」
なのはは、考える。
公に、一切の記録が無い子供。まともな境遇ではない。ならば……
『地下組織に、秘密裏に養育されていた、ということでしょうか？』
あの魔力量だ。研究目的なり、兵力なり……必要としている組織は、それこそ山のようにあるだろう。そこから、脱出してきたという

のなら、話は通る。
「ああ。多分な」
　さて……、では、はやての話の本題とは、何なのだろうか。また、シャッハが代弁する。
「この三日間、昏睡が続いていましたが……今朝方、目を覚ましました」
『それは良かった。外傷などは？』
「不思議なことに、目立つ外傷は、かすり傷ひとつありませんでした。ただ、体の動作は問題ないようなのですが、記憶が混乱している可能性があります」
　でなければ、名前くらいは知れている。
「それで、ウチで面倒を見ることになった」
『……は？』
　……二つ三つ、大事な話の過程が飛んでいる気がする。
「いつ暴走するかも分からん大魔力の持ち主。身元も不明、名前も不明。対処までを含めた監視が必要……しかも、ウチの管轄する事件の当事者ときた。これ以上に理由はいらんだろ」
『それだったら余所の部隊でもいい筈じゃないか』
　別に、事件の現場に居合わせたからといって、そこまでしなくても……というなのは。
「レジアス中将、直々の依頼だ」
『はやて。いくらレジアスさんに恩があるとはいっても、断るべき話ってもんがあると思うよ』
「……安請け合いはしていないつもりだ」
　渋い顔で反論する。
「ええと、それと……これが、もっとも大きな理由なのですが……」
　シャッハが、申し訳なさそうに話はじめ……
　――こ、こら！　待たないか！
　――やー!!
　――そっちに入ったら駄目ですってばぁ！　大事な話をしているんですぅ！

――やー！　もうまてないー！
隣の部屋から、どったんばったん走り回る大小三つの足音が響いて来た。そして。
――ばーん！
「わーい！」
扉が無遠慮に開かれ、小さな人影が飛び込んできた。そのまま一直線に、なのはの元へ。
『おおお……？』
べしっ、と、その頭部を掌で受け止める、なのは。
「あうっ……!?」
その小さな人影は、ようやく動きを止めた。
明るい栗色の髪の毛が、心地よい手触りを伝えてくる。
「むがむが……」
『……おや？』
顔を塞ぐ形になっていた手をどかすと、紅と碧の目が、なのはの隻眼と合わさった。
「！」
『うっ……』
途端、にこーっ、と、子供特有の、特に理由のない満面の笑顔を浮かべる。反面、なのはは顔を引きつらせた。
『はやて。これは。何』
「その子供が、目を覚まして早々、お前を探して大騒ぎをしたそうだ」
「泣いて、暴れて、点滴を引っこ抜こうとして、大変だったんです……」
疲労を滲ませるシャッハ。
「たいへんなのは、それを宥めすかして隊舎まで連れてきたわたしです！　労ってください！」
クタクタになったフィアットが、声を高くした。
「あー、はいはい。ご苦労だったな。下がっていいぞ煩いから」
しっしっ……と手を払う動作をするはやて。
「こ、このクサレ部隊長……！」
懐に手をやり……しかし、子供の手前、それを歯ぎしりと共に自重

した。
「はぁ、ふぅ……も、申し訳ありません、主……」
息を乱したリーゼが、横に目をやると……
「……」
額に当てられた手にしがみつき、抱きかかえようとする子供。
『……』
困惑しながら、するすると腕を引き抜いて距離を取るなのは。
「……！」
がっしりと袖をつかみ、強く引き寄せようとする子供。
『……!?　――……!?』
見せたことも無いような弱気な顔をして、狼狽する。
振り払えばいいのか、しかし子供相手にそれは如何なものか、しかし、しかし……と、思考が目に見えるようである。
そして。
「あっ……!?」
『……！』
――しゅぱっ!!
『それでは訓練があるのでこれで』
なのはは、タイミングを見計らって袖を引き抜き、執務室から脱兎のごとく逃げ出した。
「……逃げたな」
「……逃げましたね」
「……逃げましたねぇ」
「……逃げたようです」
……いちいち、状況を確認しあう一同。その四人の視線は、残された子供へと集まる。
手がすっぽ抜けたままで固まり、なのはが逃げて行ったドアを呆然と眺め……
「……ふぇ、」
目の端に、ぷくりと涙が浮かぶ。そして……
「ふぇえええええええええええんっ!!!!」

……子供特有の、遠慮呵責のない大泣きを始めるのだった。
「ぎゃー!! 何とかしろー!」
はやてが悲鳴を上げ、シャッハが宥めにかかり、フィアットはソファにぐったりと倒れ、リーゼははやての近くでオロオロするばかり。
実に混乱の様相を呈している執務室から、なのはは一目散に遠ざかるのだった。

「あの、教官」
訓練の合間、スバルがなのはに話しかけた。
「今日の訓練は、ヴィータ教官が行う筈じゃ……」
『予定が変わっただけです』
「あー……それって、例の保護された子供がらみですか？」
『どこでその話を……』
ギクッとするなのは。傍から、ティアナも交じる。
「今日は、その話で持ちきりですよ？」
「そうそう。なんか、教官にやたら懐いてるって」
『それは、危機的状況下での刷り込みです』
スバルもまた、同じく危機的状況下で同様の経験をしているのだが……口には出さないでおいた。
「でも、懐かれてるんですよね？」
「なんで逃げちゃったんですか？」
「構ってあげればいいのに」
こんな時にも息ピッタリの二人を前に、なのはは……観念したようだ。
『それは……それは……うぅむ……』
うんうんと唸り、言葉を選び……
『――――私は、子供が苦手なんです』
……意外な弱点を露呈した。
気恥ずかしさを隠すように、煙草を咥える。
『自分で言うのも何ですが、私は手の掛からない子供でしたし

……感情のままに振る舞う、といったことも、数えるほどしかありませんでした』
「……例えば？」
ふぅ……と紫煙を吐き出す。
『肉親に広域衝撃波をぶつけた程度ですよ』
「……」
だめだ、何の参考にもならない……と諦める。
『……だから、子供の考えは分かりませんし、何を求めているのかも分からないんです』
何を求められているのかわからない。しかし、寄ってくる。何を求められているのか、何をすればいいのか、見当がつかず……逃げた。
『適任のフェイトは、どこかへ出張していますし……はぁ……』
気苦労をしていそうだった。
「なのはさん」
『帰りたくない……ガレージで寝ようかな……寝袋あるし』
「なのはさん、ってば」
『あ……はい、何ですかティアナ』
「あの子自身のことは、どう思っているんですか？」
なのはは、漠然と、『子供は』苦手……と言った。しかし……あの子、個人のことについては、何も言っていない。なのはは、虚を突かれたように黙り込む。
『子供は、苦手、です。苦手、ですが……嫌い、というわけでは、ないのです』
ぶつぶつと、考えをまとめながら、拙く話す。ここまで言いよどむなのはを見るのは、二人は初めてだった。
『好いてくれていることは……その……正直、嬉しく思いますよ』
一目で分かるほどに赤面し、照れ隠しにそっぽを向いた……
「ほうほう、そうかそうか」
……その先に、ニヤついたはやてと、その一味がいた。
『うぇげっ!?』
変な悲鳴を人工声帯が広い、更に奇妙な悲鳴になった。

「ほれ……行って来い……」
はやては、ストレスにひきつった笑みを浮かべ、女児を送り出す。
「みつけたー！」
『げっ……!?』
その一団の中から、一際小さな少女が飛び出してきて、なのはに抱き着いた。今度は遮らず、抱き着かれるまま。少女は、頭をなのはの腹辺りに当て、ぐりぐりと押し付ける。
「あったかーい！」
なのはは、諦めたようにため息をつき、生身の方の右腕で、少女の背中をぽんぽん、と叩く。
『はぁ……こんな女の、何が良いっていうんですか……？』
「こんな女、って……」
スバルが、困惑を浮かべるのにも気づかない。
「かわった匂いがするー」
『あー……コレですか。……子供にはキツいですよね』
なのはは、まだ8割がた残っていた煙草を、携帯灰皿に捨てた。
ぱっと顔を挙げる少女。その打算の無い笑顔に、なのははつられて笑いそうになり、表情を引き締める。
「あなたは、『なのはさん』!!」
どうやら、誰かから名前を聞いたらしい。大発見！　とでも言いたげで、得意げだ。
『……はい、そうです。なのはさんですよ』
「なのはさん！　やったー！」
万歳、と手を大きく広げる。
『あなたの名前は？』
「え？　なまえ？　うーんとね……」
背後の方で、はやてが、『それで分かったら苦労しねーよ』とでも言いたそうだ。
しかし、栗毛の少女は、虚空を見据えて……
「えっと……お、リ、ヴィ……え……？」
――瞬間、シャッハが、驚愕に目を見開いた。

「いや、えっと……そうじゃなくて、り、ヴィ、オ……いや」
しかし、少女の言い間違いだと分かり、平素に戻る。
「ヴィ、ヴィオ……うん！　そうだ！」
やがて、得心いったように、頷いた。
「わたしは、ヴィヴィオ！」
……少女は、そう名乗った。
『変わった名前ですね』
「そう？　でも、ヴィヴィオだよ？」
『そうですね、ヴィヴィオ』
「そしてあなたは、なのはさん！」
なのはは、ヴィヴィオの前にしゃがみ込み、目線の高さを合わせてやった。
『はい、二度目の正解です。ヴィヴィオはお利口ですね』
「おりこうさんなの！」
その、成立しているのか、いないのかよく分からない会話を続けて……なのはは、ハッ！　と背後から漂う気配を察知した。
はやて、シャッハ、スバル、ティアナが……ニヤニヤニヤニヤと、とてもいやらしい笑みを浮かべていた。
『なっ……何を見ているのですか!!』
またしても赤面してしまうなのは。
「お前、根本的に世話好きなんだよなぁ……」
「とても優しい顔をしていらっしゃいました」
はやてとシャッハが、ウンウンと頷く。わざとやっているだろう。特にはやて。
ぎゃーぎゃーとじゃれ始める三人を尻目に、ティアナとスバルは、訓練へと戻って行った。
「……うーん」
そのさなか、スバルは首を傾げて何かを考えていた。
「……アンタまたくだらないこと考えてるんでしょう」
付き合いも長くなってきたティアナは、それを察した。
「うーん……」

「思いつきもいいけど、それで勝手に行動するのは勘弁してよね。フォローする私の身にもなってよ」
「うーん……あ。」
「何よ」
ぴこん、と閃いたっぽいスバル。ティアナは、諦め半分で聞き返す。
「ティア！　――――お風呂だよ!!」
……相変わらず、この相棒の考えは読めなかった。
◆▪◆　◆　◆

――高町教官と、お風呂に入ろう！
……そんなことを言い出したスバルを、ティアナは諦めを通り越した無我の境地で眺めていた。
「……一応聞くけど、何で？」
「よくぞ聞いてくれました！」「近い」
ずずいっ、と顔を近づけてきたスバルを、無碍に押しのけるティアナ。それにめげず、頬を紅潮させながらべらべらとしゃべり始める。
「高町教官って、キレイな人だよね」
「そうね。顔の造りが良いってだけじゃないわ」
煌びやかではないが、路傍の石とは比べるまでも無い。眼帯や傷痕があっても、損なわれない美しさがある。これは、男性、女性の隊士を問わず、共通の認識だ。
「姿勢だってシャンとしてるし」
「そうね。作法や立ち振る舞いも心得ているわ」
無愛想ではあるが、ガサツなわけではない。背筋は常にピンと伸びていて、見苦しい動作を取っている姿など、見たことが無い。悪癖のタバコを吸う姿さえ、サマになっているほどだ。
「なのに……教官……」
しゅん、と俯くスバル。その言わんとしていることは、ティアナも何となく分かった。
――『こんな私』が、どうこう言う問題でも無いでしょう
――『こんな女』の、何が良いって言うんですか

――――『こんな』

……それは、嫌味のような謙遜ではなく、心底、自分を卑下している言葉だ。

なのはの自己評価の低さは、はっきりいって過小評価である。それを、改めさせたい……というのが、スバルの話らしかった。

「……で、出した結論が、『風呂』……？」

「うんっ！」

なぜそこに飛んだ。スバルの発想は、たまにぶっ飛んでいる。

「……まぁ、教官が頷くとは思えないけど。誘ってみれば？」

とりあえず、自分に被害は及ばないだろうと考えるティアナだったが、やはりそうはいかない。

「ティアからも誘ってよ」

「……おやすみ」

ベッドにもぐりこみ、シャットアウトする。

「寝ないでよー！」

スバルは、馬鹿力でシーツを引っぺがす。

「何で私までつき合わされなくちゃいけないのよ！　一人で行って来い！」

「だ、だって、だってー!!　ティアの方が教官と仲良いじゃん!!　名前で呼び合う仲でしょー!?」

仲がいいのと、スバルの思いつきにつき合わされるのは、別問題だと思われる。

「一生のお願いだよ、ティアー!!」

「だから、お前は何度の『一生』を生きてるんだーっ!?」

……このやり取りも、何度目か。オチまで想像できてしまうティアナだった。

◆・◆　◆　◆

――コンコン

２１：００過ぎ。なのはの部屋のドアがノックされた。
『……む』
ドアを開けると、やや緊張した表情のスバルと……なのはに対する申し訳なさ半分、スバルへの諦め半分といった顔のティアナが連れ立っていた。
「あれ……ヴィヴィオは？」
ティアナが部屋を覗くが、例のヴィヴィオはいなかった。
『ああ。……一応、まだ検査が残っていますので、病院へ戻りました』
駄々をこねて帰ろうとしなかったヴィヴィオだったが、なのはに説得され……『また今度遊びに来る』という条件で、渋々帰って行ったのだ。
『それで……二人とも、どうかしましたか？』
「……」「……」
スバルは、ちらちらとティアナへと目配せをし、ティアナは、早くしろと言いたげに顎で指す。
「あ……あのっ、教官！」
『はい』
スバルが、上ずった声でようやく言った。
「お、おおお、お、」
緊張しすぎてどもっている。
『お？』
怪訝な顔をする。
「お風呂っ！　一緒にっ！　入りませんかっ!?」
腹から声を出し、明瞭に聞こえる声を上げた。
『……』（どういうこと？）
「……」（すみません。ホントーにすみません）
なのはとティアナは、アイコンタクトで意思の疎通を図った。
その間、スバルは直立不動でなのはの返答を待っていた。
『残念ですが、それはできません』
返ってきたのは、断りの言葉だった。当然と言えば、当然である。
「え、えええ～……」

スバルは、決死の誘いが断られ、二の句が継げない。
そんなスバルに、なのはは仕方がなさそうに説明を始めた。
『私の身体のことは、ある程度は知っていますね？』
「……はい」
左半身に残る、痛々しい傷痕。
『生活用の義手は防水仕様ですが、精密機器ですので、蒸気が入り込むと不具合が起きる可能性があります。なので、入浴の際には……どうしても、義手を取り外す必要があるのです』
「は、はい……」
部屋に備え付けのユニットバスならば、別段問題は無いのだが……他人の目のある大浴場では、そうはいかない。
無神経すぎた……と、自省しようとするスバルだったのだが……
『――好き好んで、そんな無様な姿を見せたがる者は無いでしょう』
その一言に、プッツンと――切れた。
「無様なんかじゃありません！」
『……』
呆気にとられるなのはの左手を、スバルは思いっきり掴んだ。
「腕の一本が作り物だろうと、生身だろうと……なのはさんは、なのはさんです！　無様とか、そんなのはウソです！」
『……』
場の勢いで、スバルも『なのはさん』呼びになっていたのだが……誰も気づかない。
「腕の一本や二本が何ですか！　なのはさんは、私とギン姉の命の恩人で……大事な教官なんです！」
あの薄暗がりを切り裂いた、白銀の光。それを携えた女性は、スバルにとっては、恩人であり、憧れであり……目標だ。
その目標が、不当に卑下されているなどと……それがたとえ、その本人自身によるものだとしても、許せる筈が無かった。
『一本や二本て……そんなこと言って、見たら絶対に後悔しますよ!?
ドン引きですよ!?　生身からアタッチメントが生えてるんですよ!?』

「そんなこと言ったら、全身サイボーグな私やギン姉はどうなるっていうんですか!?　ギン姉なんか、腕がドリルなんですよ、ドリル！　それに比べたら可愛いもんです！」
……放っておいてやれ。
『そ、それとこれとは話が……ティアナ、ティアナ！　何とかしなさい！』
ここは、コンビパートナーのティアナの役割。そう思い声をかけたのだが……
「……それじゃ、行きましょうかなのはさん。大浴場へ」
『ティアナ、なぜ!?』
……実は、なのはを慕っているティアナである。スバル同様……自分を卑下するなのはには……正直。
「あのー……正直、イラッとしました。なのはさんみたいな美人が、自分を『無様』とか……え、なに、世の女性の大半にケンカ売ってるの？　みたいな……うん。許せませんね。というわけで風呂です」
……更に、なのはに追い打ちをかける事態が。
ざわざわと、騒ぎを聞きつけた女性局員たちが、部屋から顔を覗かせてきた。
「あら？　どうかしまして？」
その中には、セリカも含まれている。
「ああセリカ、丁度いいわ。……今からなのはさんと大浴場に行くから、着いて来て」
セリカは、目を輝かせた。
「まぁ、教官と、裸の付き合いですのね!?　是非是非、お供させていただきますわ！」
「あ、あたしも！」「うちも！」
そんなセリカに同調するように、他にも幾人かの局員たちが、同伴を求めた。
『ひぃーーーーー!!?』
迫りくる恐怖に、引きつった悲鳴を上げるなのは。戦闘以外のアクシデントに、からっきし弱いという弱点は、克服できていないよう

だった。
――そして。
「はぁい、なのはさん、そろそろ諦めてくださいねぇ」
……騒ぎを納めにやってきたフィアットまでもが同調し、率先して場を取り仕切り始めたあたりで、なのはは諦めた。
更衣室には、今やなのはとフィアットのみ。浴場からは、スバルたちの楽しげな会話が、浴室のタイルに反響して聞こえていた。
人口声帯――実は精密機器――を外し、眼帯を外し……
「……」
――かち、かちゃ……かしゃん
義手のラチェットを解除し、外した。
「うん……特に破損は無いようですねぇ。表面に保護クリームを塗るくらいでしょうか？」
フィアットが、義手を専用のケースに入れ、大事に棚に置く。
これで……、鎖で下げたレイジングハートと、頼りないバスタオルを纏うのみとなった。
「さ、入りますよ～、なのはさぁん」
「……」ぐい。
フィアットが手を引き、なのはが抵抗する。しかし、それは、本気で嫌がっているというよりは、むしろ……
「もう、拗ねなくたっていいじゃないですかぁ。スバルたちだって、何も憎くてやっているわけではないでしょうし」
なのはは、抗議を目で訴えながらも……フィアットに手をひかれるまま、浴室へと入った。涙目である。
「……」
浴室の、洗い場へと案内される。
「あの……なのはさん、さっきは、その……」
冷静になって、先ほどの行いを今更ながら自覚したのか、申し訳なさそうにスバルが寄ってきた。
「……」
なのはは、じろりと一瞥し……何かに気づいた。

そう。人口声帯を外しているため、返事ができないのだ。
『いえ、構いませんよ』
代弁したのは、レイジングハートだった。
『ｓｅｌｆ－ｓｕｐｐｏｒｔ　ｍｏｄｅ』
――ポウッ……、
レイジングハートが、桜色に輝き……
『機能正常。』
――――そこに、成人女性が一人、忽然と姿を現していた。
どこか作り物めいた美しさの、白磁の肌。金髪に、赤み掛かった色の瞳。
白、金、赤……そのパーソナルカラーから連想されるのは、どう考えても……
「あ、レイジングハート」
フィアットが、あっさりとその名を告げ……
「「「「「「「え」」」」」」」
初めて対面する面々は、驚きに目を見開いて絶句した。
『お初にお目にかかります……というのも、奇妙なものですね』
整った顔で、口だけが動いているような……表情筋の存在が感じられない動作で話す……レイジングハート。
『この姿では、初めまして。レイジングハートです』

◆・◆　◆　◆

『この形態は、戦闘以外のマスターの行動を補助するためのものです。なので、戦闘能力は皆無に等しい。処理能力を、義体の操作に充てているわけですからね』
なのはの身体を、ボディソープを泡立たせたタオルで洗いながら、興味津々のスバルたちへ説明する。
「へぇー。でも、容量が圧迫されちゃうんじゃないの？　インテリジェント型は、ただでさえＡＩの比率が大きいのに」
ティアナの指摘に、レイジングハートが答える。
『一般的なデバイスと比べ、データ容量が大きく、かなりの余裕がある

のです。なので、このような無茶ができます』
「なのはさんのお世話って、例えばどんな？」
『そうですね……こういった生活の補助や、デスクワークの補助を』
　スバルたちは、その姿を想像し……少し、笑った。
「でも、すごい発想だよね。デバイスが、人間の姿になって所有者を助けるなんて」
『先ほども申し上げましたが、私には、それが可能な能力がありましたし……何より』
「何より？」
『……あの大馬鹿野郎に、この手で、直に制裁を下したい、と考えました』
　ぐぐっ……と、憤然とした様子で拳を固めた。
（（（（（（（（（……誰？　）））））））））
　しかし、それを聞ける雰囲気でなかった。
「あのさー、レイジングハートのしゃべり方って、教官を参考にしてんのー？」
　局員の一人が、誰かが気にしていたことを聞いた。確かに、なのはの話し方と、レイジングハートの話し方はよく似ている。
　別に、マネをしているわけではないのだが……と、困惑する二人。
「あぁ、それはですねぇ～……」
　フィアットが、のほほん、と間に入った。
「実は逆で、なのはさんが、知らず知らずのうちに、レイジングハートの口調に似てしまったんですよ」
　話す間も、レイジングハートは献身的に、なのはの身体を洗う。桶に張った湯で、石鹸を洗い流す。なのはの肌が、露わになった。
「……」「……」「……」「……」
　それを、何故か凝視する部下たち。
「……？」
　何だろう、と思うなのは。最初に口火を切ったのは、やはりというか、スバルだった。
「なのはさん……やっぱり綺麗だな～」

「……ッ!?」
ぎょっとした顔で、足元を滑らせるなのは。
『マスター。お気を付けて』
危なげなくフォローするレイジングハート。念話で、なのはが通訳を命じる。
『……「何が綺麗なんだ」、と仰っています』
「え？　いや、だって……均整取れてるし、肌もつやつやだし……」
『「傷痕だらけで、何が綺麗なものですか」……あの、マスター。通訳しておいて言うのも変ですが、そういった発言は……』
なのはを諌めるレイジングハート。しかし……
「桜吹雪のようですわね」
続くはセリカは、なんと、傷痕そのものを美しいと言ってのけた。
「サクラって、なに？」
「なのはさんの出身国では、ごくポピュラーな花ですの。春先に咲く、薄桃色の花で……風に舞う花弁を、『桜吹雪』と呼ぶんですのよ」
細かな金属片が突き刺さった無数の傷痕は……確かに、見ようによってはそう見える。
なのは本人が言うほど、醜いものではなかった。
「ああ～……分かる気がする」
全員の視線を受け、レイジングハートの後ろに隠れるなのは。
『「見るな見るな見るな見るな」……マスター、落ち着いて』
……混乱しているようだった。
「それに、髪もサラサラだし」
「その髪色、天然ですよね？　いいなぁ」
「ちょっと洗わせてくださいよ」
「あ。それならあたしも」
何を思ったのか、自前のシャンプーを手に、なのはへと殺到した。
「シャンプーはこれ使いましょうよ。最近のお勧めで……」
「これなんてどう？」「んじゃ、こっちも」
四方八方から、手が伸びてきて……
「――――!!!」

なのはは、声にならない悲鳴を上げた。

両脇をフィアット、レイジングハートを置きガードを固めながら、なのはが湯船につかった。丹念に丹念に丹念にそれはもうクドいまでに丹念に手入れをされた髪の毛は、天使の輪が出来るほどに輝いている。

「……反面、なのは自身はぐったりと憔悴していた。

「おつかれさまでしたー」

にこにこと、どこか嬉しそうなフィアット。

「スバルも、なのはさんを連れ出してくれて、ありがとうございます～」

『できるモード』ではなく、『のほほんモード』のフィアットだと、いい上下間の緩衝剤になる。

「ね？　誰も気にしてませんって」

「……」

スバルが、なのはの左半身を見て、言う。

肩関節に、ボールジョイントのように接合されているアタッチメントは、確かに目立つ。

しかし、そこは六課の面々である。

「ロケットパンチとかできるんですか？」

……目を輝かせてそんなことを聞いてくるのだ。

実際、出来てしまうのだが。ワイヤーで射出して、巻き戻せる便利仕様で。

「機械整備用のマニピュレーターとかあるんですか？　無限関節レンチとか、無限関節ドライバーとか」

ある。

「サバイバル用十徳義手とか言って、ナイフ、シャベル、バーナーとか」

ある。

「応急医療用とか」

ある。

「「「「すごーい！」」」」
……感性のズレた女子たちであった。
なのはも、まさかウケるとは思っていなかったらしい。
「ああ、確か～……ほんの少しだけ、違和感があるんでしたっけ？」
声帯を取り外したなのはに代わり、レイジングハートが代弁する。
『ええ。微妙にですが……左右のバランスが崩れている、と。摩耗した部品は、チェックした限りではありませんでした』
「う～ん……民生品ですし、そういった微妙なトラブルは……、――あ」
と、何かに気付いたようだ。
なのはと目線を合わせ、手で何かを測るように……
「――なのはさん、すこぉしだけ、背が伸びましたね」
……違和感の正体は、それだった。身長が伸びれば、手足の長さも変化する。生身と違い、自然に変化することのない義手が取り残され、違和感を発していたのだ。
「ふふ。そろそろ、背丈も抜かれてしまいますねぇ」
『……盲点でした』
「いえいえ～。なのはさんの成長を見守るのは、私の生きがいですから～」
まるで母親である。
「あ、それ聞きたいと思ってたんです！」
途端、またしてもなのはが取り囲まれる。
「小さい時のなのはさんって、すっごい可愛かったってホントですか!?」
スバルかティアナが、はやての写真のことを言いふらしたらしい。
「いえいえ、今でもすっごい可愛いですよ～。９歳からですから……もう７年くらいでしょうか～？」
なのはは、もう好きにしろ……とでも言うように目を閉じていた。
「昔から、わたしをあっちこっちに引っ張りまわして、連れまわして……大変でしたが、とても楽しい日々でした～」
「え、引っ張りまわすって……」「なのはさん、何歳の時……？」

……連れまわしていたというか、はやてとくっついていない時のフィアットがあまりにも頼りないので、手綱を握ってやっていたという方が正解なのだが。
「人見知りで、ぶっきらぼうな態度が誤解されちゃうのも、なのはさんの損なところですよ～」
「うん、わかるわかる」
「丁寧語だと、逆に怖いよね」
自分についてあれやこれやと談義され、なのはは、照れくさいやら恥ずかしいやら。
が、不思議と、この場から抜け出そうとは思わず……
――ざぶんっ！
……照れ隠し代わりに、フィアットを湯船に蹴り込むのだった。
「あばばばばば……！　ひ、ひどいですよぉ！　なのはさぁん！」
顔に張り付いた長い髪の毛をかき分け、抗議するフィアット。そっぽを向いて黙殺するなのは。
完成された寸劇のようなやり取りに……陽気な笑いが起きる。
『はぁ……何年経っても、変わりませんね』
レイジングハートは、『どこぞの誰か』とそっくりな……呆れた表情を浮かべた。

◆・◆　◆　◆

翌日。今日も今日で、訓練である。
昨日のリベンジなのか何なのか、なのはは、スバルとティアナにだけ、妙に意地の悪い課題を出し、締めの手合せで二人を纏めてボコっていた。
ガッツンガッツンと容赦なく鉄拳を振り下ろす姿に、修羅を見た。
「容赦ねーな……」
エリオは、引いていた。
「いーな、いーなー……昨日、たのしかったんだろーなー……ボクも混ざりたかったなー」

指をくわえていじけるフェイトが、傍らのシグナムにチョップを喰らっていた。
隊舎から、フィアットに車椅子を押され、はやてが出てきた。
休憩も兼ねて集まるフォワードチーム。特に通達があるでもなく、単に気分転換で出てきただけのようだ。
――きっ。
と、施設正門に、変哲のない乗用車が停まる。運転席を開けて出てきたのは、シャッハだ。後部座席からギンガが、続いて、ギンガに手を引かれるのは……
「あ、ヴィヴィオだ」
スバルの言うとおり、ヴィヴィオだった。
『……』
なのはが、ヴィヴィオと目を合わせた途端、ヴィヴィオはギンガの手を振り切って、全速力で駆け寄ってきた。
「なのはさ～ん!!」
『そんなに急ぐと、転びますよ』
忠告は、耳に入っていないようだ。そして、やはりというか、何というか。
――ずべっ。
芝に足を取られ、盛大に顔面からスっ転んだ。
『……言わんこっちゃない』
呆れ、全員で駆け寄る。
「いたたたた……!」
ヴィヴィオが押さえた膝頭から……つうっ、と、真っ赤な血が滴る。ぎょっとして傷口を見ると、薄透明な、ガラス片のようなものが突き刺さっていた。
『昨日の清掃担当はどこの班ですか……!』
悪態をつきながら、傷口を看る。
大した怪我ではないとはいえ、結構な出血だ。適切に治療すれば、傷口も残らない程度だろう。しかし、子供のヴィヴィオには、いささか刺激が強い。

ああ、泣くだろうな……と、誰もが思っていたのだが……
「ん。だいじょーぶだいじょーぶ」
ヴィヴィオは、あっけらかんとした表情だった。
なのはが、怪我を甘く見るなと、それとなく注意しようとした。
フェイトが、救急箱から消毒液とガーゼを取り出した。
はやてが、フィアットに言って医務室に連絡させようとした。

――その目の前で起きた現象は、信じ難く。

――また、見慣れたモノだった。

傷口が、裂けた皮膚と肉が……能動的にガラス片を排出する。
『――!!?』
「え……!?」「おい、これは……!?」
フェイト、はやても、驚愕に固まる。
「だいじょーぶ、だいじょーぶなんだよ」
――『ああ、大丈夫、大丈夫。このくらい』
なのはの脳裏に、在りし日の『彼』の言葉が……最後の最後まで、改められることの無かった悪癖が、思い浮かべられる。
ヴィヴィオに対して感じた、強烈な既視感。
――似ている。確かに、似ているのだ。
異色の瞳にばかり気を取られていたが……顔立ち、鼻筋、目尻。
『彼』を思わせる要素が、そこかしこに見られた。
そして……なぜ、何故気が付かなかったのか。『彼』だけでは、無い。

――ヴィヴィオの、栗色の頭髪は……高町なのはと、同じ色だった。
「このくらい、ほっといても、すぐになおっちゃうんだ」
組織が、互いを引き寄せ合うように、合わさり……傷口を、塞ぐ。
出血は、既に無い。それどころか、傷口の痕跡さえ、見いだせない。

――――『こんなもん、放っておけば治るから』
――笑い話でもするかのように、軽々しく、軽薄に。笑みさえ浮かべながら。
その、自身をどこまでも、どこまでも軽率に。
傷を、痛みを……生命そのものを、冒涜的なまでに軽んじる言葉。
聞きたくは無かった。口にして欲しくもなかった。
――だが、彼は繰り返すのだ。その言葉を、行為を。

「ヴィヴィオはね、」

――『俺は』

「――――そういうふうに、できてるんだ」
『――――そういう風に、出来てるんだ』

なのはは、ヴィヴィオの肩を掴んだまま……凝視することしか、できなかった。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十一話『風、吹く頃に』

――同じ夢を、もう何度、見たのだろう。

「……」

見渡す限りの草原に、丘陵。時折そよぐ風は、肌に心地よささえ感じさせるほど、リアルだ。

だけど、これが夢であるということは、わたし自身、よくわかっている。

なぜなら、これだけの草原だというのに、鳥の一羽はおろか、虫の一匹さえ、いないのだから。

――ちりん。

そして、いつもわたしは、丘陵へと向かって歩くのだ。

誰かが呼んでいる……と、いうわけではない。ただ、なんとなく、ぼんやりと……そこで、何かが待っているような気がするのだ。

――ちりん。

強烈に突き動かされるのではない。衝動に駆られるのでもない。

ただ……そこに行こうという、漠然とした指針が、わたしの中にあるのだ。

「……」

さくさくと、足首あたりの高さの草を踏みしめながら、歩く。

――ちりん。

胸元に下げた首飾りが、足音に合わせて鳴る。

夢の中だというのに、これだけは、しっかりと現実と同じだ。

――ちりん。

そして……丘陵に着くと、そこにはいつも、純白のガーデンテーブルと、二つのチェアが置いてある。

これも、いつも通りのことだ。

「……」

チェアの一つに、腰かける。

――この夢は、いつも『ここまで』だ。

椅子に座って、ただなんとなくぼんやりしていたり、景色を眺めて

いるうちに、気付いたら朝になっていて、わたしは自室のベッドで目を覚ます。
「……」
……あれ、おかしいぞ。
だいぶ経つのに、目が覚めない。
「？」
――ちりんっ。
ひときわ強く、首飾りが鳴る。そして。
「……っ!?」
びっくりしすぎて、のけ反ってしまった。
いつも空席の、向かいのチェアに、誰かが座っていた。
――……。
薄らぼんやりとした、光のモヤのような、ヒトの輪郭。女の子……だろうか。大きさは、わたしと同じくらい。
「……」
――……。
知らない子（？）だ。光のモヤの知り合いなんていない。オカルトもファンタジーも、漫画や小説の題材としては好きだけど、実在を信じているかどうかは別だ。
でも……何故だろう。親近感……？　いや、それよりも、もっと、もっと近い……そう、敢えて言葉にするなら……
――肉親への、◆　◆　◆　◆「……香。……美香」
「んぅ……？」
体を揺り動かされている。……うぅ、眠い。
「……」
お布団、あったかーい……
――どむっ
「おぅっふ……！」
いきなり、頭がマットに着地。一気に目が覚めてしまった。
「え？　……え？」
寝起きで焦点の合わない目が……見知った顔と、なぜかその手にあ

る枕に注がれる。
そうか、枕を引っこ抜いたのか。ひどいことをする。
「起きましたか、美香？」
いつもと変わらない、『くーる』な目と視線が合う。
「うー……起きたよぅ……」
まったくもう……まだ七時半じゃないか。あと２０分寝ていても、学校は八時半からだから、余裕で登校できるのに。
「おはようございます、美香」
第一ボタンまでしっかりと留められたブラウス。きちっと絞められたリボン。
寝癖まみれのわたしとは、えらい違いだ。
「おはよー……――シュテル」
私の一番の親友……シュテル・スタークス。名前の通り、日本人じゃないらしい。どこぞの国……ええと、オーストリアだか、リトアニアだか、そんな感じの国からの国費留学生。完全バイリンガル……じゃない、トライリンガルで、ものっそい頭のいい子です。
「でも、なんでシュテルが……？　お姉ちゃんは？」
いつも私を起こしに来るのは、一周り以上、年の離れたお姉ちゃんのはず。
「美穂は早番です」
「そうだった……」
すっかり忘れてた。
「美穂がいなければ遅刻するでしょうから、鍵を預かっておいて正解でした」
「うん、ありがとー」
さて、準備準備―っと。ベッドのふちに足を下ろして……よい、しょっと。
よーし、ふらつかずに立てたぞ。
「……」
いざという時のためなのか、傍でシュテルがスタンバイしていた。
「もう、だいじょーぶだってば。心配性だなぁ」

……うーん……いまいち現実感が無いんだけど、どうやら私は昔、足が不自由だったらしい。それはもう、動く動かないのレベルじゃなくて、感覚が死んでいるレベルで。

それが何故か、私には記憶が無く……でも、たまにバランスを崩して、何もないところで転ぶから、本当なのだと思う。

髪を櫛で整え、パジャマを脱ぎ、シュテルとおそろいのブラウスとリボンを着け、制服のスカートに足を通す。姿見で確認したけど、大丈夫。

「おまたせ！」

わたしの部屋は一階だから、部屋を出ればすぐにリビングだ。

「あ――おはよう、美香」

「おはよ、レヴィ！」

テーブルにお皿を並べていたレヴィ――――私の無二の親友、レヴィ・ラッセルが、美少女な笑みを浮かべる。うむ、カワイイ。さすが私の親友。

というか、レヴィまでいるということは、当然……

「あー、美香や。おはようさん」

台所に立っていた、エプロン姿のほんわかタヌキ……じゃなくって。

「ディアーチェ、朝ご飯作ってるの？」

私の大親友、ディアーチェ・K・クローディア。ミドルネームなんて、珍しいよね。

シュテル・レヴィと同じ国からの留学生だけど……なぜか、訛っている。『ニッポンに来る前に、がんばってお勉強したんよー』といって取り出したのは、お笑いＤＶＤ。なぜ止めなかった、シュテル。

「せやでー。今日のお味噌汁は、玉ねぎとトマトやー」

料理は、上手だけど独特だ。

四人でテーブルにつき、声を合わせて『いただきます』。

「お兄ちゃんは？」

「ヨシヒコさんなら、そろそろ」

――――ドルルル……キュッ。

噂をすれば、お兄ちゃんがバイクで帰ってきた。これまた一周りも年の離れた兄だ。
玄関先で、ヘルメットを置く音がして……お出迎えしようっと。
「ただいまー」
「おかえり、お兄ちゃん。あのね、今日、シュテルたちが来てるの」
作業着と空のお弁当箱を受け取る。作業着は洗濯機へ。空のお弁当箱を台所へ持っていく。
「……って、お前ら、来てたのか」
夜勤明けの、眠そうな顔だ。
「今日もお勤め、ご苦労様です」
シュテルが律儀に立ち上がり、ぺこりと頭を下げる。
「ヨシヒコさん、ご飯はどうしますか？」
「まだいいや。シャワー浴びたいし」
きっと今日も、あちこちの現場に駆り出されてきたのだろう。職場にも寄らないで、まっすぐに帰ってきたようだ。
「さよかー。ほな、ちゃちゃっと浴びてサッパリしてきぃや。準備しとくで」
「悪いなー。助かるわ」
シュテルたちとの付き合いも長いから……お兄ちゃんにとっては、みんな妹みたいなものだ。
「ごちそうさま」
それじゃ、今日も学校へ行こうかな。
「お兄ちゃん、行ってくるねー！」
お風呂場から、おう、行ってこーい……と、やや適当な返事が返ってくるのを確認してから、家を出た。うちから中学校まで、徒歩で15分だ。
――にゃーご
あっ、そうだった。おまえもいたんだった。
真っ黒な毛並みの美しい、我が家の飼い猫。こうして毎朝、お見送りをしてくれる賢い仔だ。
「行ってきます――アーフィ」

「お嬢さんがた、おはよう」
……凄まじく不審な風体の男が、朝日を浴びて佇んでいた。
白いスーツに蝶ネクタイ。白いシルクハット。手にはＪ型ステッキ。口元には白いカイゼル髭。白いチャップリンみたい。
……やっぱり、浮いてる。霧の立ち込めるロンドンにでもいれば絵になるのだろうが、ここは日本の住宅街だ。
「あ、信吉さん。おはようございます」
レヴィの礼儀正しい挨拶に、相好を崩す。
周防信吉。通称、『信吉おじさん』。
――紳士である。
……だって、それ以外にどう言い表せばいいの。
「一応聞いておきますが、いつまでそうしているつもりですか？」
シュテルも、胡散臭そうにしていた。
「朝、学び舎へと向かう女児たちを見送ってから、下校する女児たちを見送るまでだが？」
――信吉おじさんは、末期のロリコンだった。
横断歩道を渡る女児あらば旗を持って誘導し、自主的に地域をパトロールをして防犯に努め（当然、本人が通報される）、区内の小学校を（アポ無しで）見学し、お巡りさんと熱い逃走劇を繰り広げる……一部では（どこのだろう）偉大なカリスマとして崇められている……というのを、小耳にはさんだことがある。
親御さんとお巡りさんから危険生物扱いされている一方、子供たちの間では、『愉快なおじさん』として有名だ。
「ふふ……安心するがいい。先達は、素晴らしい標語を残している。そう――
――ＹＥＳ！　Ｌｏｌｉｔａ！　ＮＯ　ｔｏｕｃｈ！」
威風堂々と意味不明なことを宣言する信吉おじさん。
「あ。ちなみに君らは元々４年前の時点で範囲外なので、安心するように」

……年齢二けたは、既にアウトらしい。

――――ピー!!

「……!!」

係の吹いたホイッスルを合図に、クラウチングスタート。腕を振り、リズムに乗って、一歩一歩、確実に地面を蹴る！

「――……！」

１００メートル、完走！

「レヴィ、タイムは？」

ストップウォッチを構えていたレヴィに確認。

「１５．５２秒、だよ」

「そっかー……」

まだ、１４秒台は遠いなぁ。

ちなみにわたしとレヴィは、陸上部に所属している。

意外に思われるかもしれないが、わたしは、走ることが好きだ。

まともに歩くこともできなかった幼少期の反動……も、あるんだろうけど。

風を切って走ることは、単純に気持ちが良くて好きだった。

よく転ぶから、レヴィには心配かけちゃってるけど。転ぶせいで、まともに大会に出れないけど、それでも、トラックを使ってのびのび走れるこの部活は、私の性に合っていた。

よぅっし、あと一本！

……。

「調子乗った結果がこれだよ……」

練習後、わたしは、保健室で膝の手当てを受けていた。すりむけはしなかったが、青く内出血をしている。

「ふぅ……柳瀬さん。あなたもすっかり常連さんねぇ」

保険医のおばちゃんとも、すっかり仲良し。

「美香、大丈夫？」

レヴィが、着替えを持ってきてくれた。

「大丈夫？　立てる？」

「あはは、大げさだなー。ちょっと転んだだけだって」
カーテンで仕切り、制服に着替える。
「石田先生の診察、次はいつだっけ？」
「んー……あ。明日だった！」
「忘れちゃだめだよー」
診察というよりは、茶飲み話みたいなもんだけどね。
おばちゃんにお礼を言い、校門の辺りまで行くと、シュテルとディアーチェが待っていてくれた。
「それでは、帰りましょうか。……おや」
シュテルが、めざとく私の膝へ視線を注ぐ。
「ご、ごめんなさい……私がついていながら……」
「レヴィの謝ることじゃないよー」
シュテルが、呆れた顔をする。
「まったく、美香は……腕白少年でもあるまいし、乙女が生傷ばかり作るものではありませんよ？」
「はぁい」
あーあ、またお説教されちゃった。
「ほな、痛いの痛いの、飛んでけー」
ディアーチェが、私の膝を優しく撫でさする。鈍い痛みが、徐々に引いていく……ような、気がした。
家の前でシュテルたちと別れ……家に入る。
「お姉ちゃん、ただいま」
お姉ちゃんは、リビングで夕ご飯の用意をしていた。
「お帰りなさい、美香。今朝はごめんなさいね」
「大丈夫。シュテルがちゃんと起こしてくれたよ。……あ。これ、新しい本？」
テーブルの上には、真新しい文庫本が何冊か置いてあった。
「読んでいい？」
「ええ、いいわよ。もうわたしは読み終わったから……」
さっすが、早いなぁ。
それじゃ、夕ご飯まで読んでいようかな。

制服をハンガーに掛け、部屋着に着替え……
「ただいま」
机の上に置いていた首飾りを、着ける。これが無いと落ち着かないけど……さすがに、学校には持っていけないもんね。
――ちりん。

首飾りとは、別の音。
見れば、いつの間にかアーフィが、椅子の足元に寄って来ていた。
……どうやってドア開けたんだろう。
「あなたもいっしょに読む？」
ぽんぽん、と膝をたたいてやると、アーフィは素直に飛び乗ってきた。
「……」
膝の上で、ごろごろと喉を鳴らすアーフィが落ち着いてから、ページをめくる。
――ちりん。
私の、大事な首飾り。
「……」
気付いた時には、傍らに在った。一対の翼が、紅い宝石の原石を囲い込むような形の、凝った細工の首飾り。
大事な、大事な……贈り物。
「……え？」
『贈り物』……？
誰から……？　お兄ちゃん？　お姉ちゃん？
……違う。じゃあ、シュテルたち？　……いや、違う。――違う！
――にゃーご！
アーフィが強く鳴いているけど、今はそれどころじゃない！
「……！」
頭の中、記憶の奥底。
そうだ、そうだった。これは、贈り物だった。誰から……いや、違う。知っている。知っているのに、思い出せない！

「う……!」
ずきん……と、頭痛に似た痛みと共に……一つのイメージが、脳裏に浮かんだ。ノイズだらけの……断片的な、イメージ。
夕焼け。小さな私に、首飾りを掛けてくれた、優しい両手。そして……
――すべて、忘れなさい。×のことも、×のことも
別離の、言葉。
「い、た……!」
忘れたくない。忘れたなかった筈だ。なのに……思い出せない。
――×の名のもとに、汝に、輝く未来を――
その思い出が……『痛かった』ことだけが、はっきりと……
――ちりんっ。
鈴の音のような首飾りの音。
「……え?」
痛みが、嘘のように消え去り……私は、意識を失った。

◆・◆　◆　◆

ロングコートのような衣服をまとった男性が、丘から町を見下ろしていた。
「――あのあたりか?」
『ああ、間違いない』『少なくとも、ＡＡＡクラスの反応だった』
彼にしか聞こえない返答を、確かめる。
「魔法知識ゼロの、高魔力保持者……クスリで洗脳するなり、売り飛ばすなり……クク、美味しい商売だ」
卑しい笑みを浮かべる男。
彼らは、こうした『商売』を常習的に行う、非合法の魔導師集団だった。
その彼らは先ほど、『狩場』としていた町に、高い魔力反応が検出さ

れたことを知った。
「結構は迅速に。退却は速やかに」
『ラジャ』『行くぜ』
一人売り飛ばせば……尚且つ、それが『女』だった場合は……
「クククッ……」
相手は、無知で無力な小鹿。対して彼らは、無敵のライオン。
失敗などあり得ない。隠密性を重視した結界を展開し、自らもまた、その中に紛れる。
「ククッ……おい。味見でもしてみるか？」
『おっ、いいねぇ。丁度、ご無沙汰だったところだ』
「未開の土人が相手ってのも何だが……まぁ、我慢してやろうぜ？」
『ははっ。違いねぇ！　なぁオイ、お前も黙ってないで調教プラン出せよ。……あ、でも、前みたいなのはナシな！』
「前ってぇと……ああ、アレか。無理やりブチ込んだら、加減間違えて裂けちまったやつ！　たしかにありゃあカンベンだな！　使いもんにならねぇ！」
『ぎゃはははは！　……なぁオイ。　……オイ？』
「？　……どうしたんだ、あいつ」
三人目が、会話から消えた。
「……ま、通信範囲から抜けちまったんだろ。目標地点は通達してあるし、先に行こうぜ」
家々の屋根を無音で飛び伝いながら……先ほどの高魔力反応を示した民家へ。
着地をしようと、足を

――――――ズシャッ！
「あぐっ!?」
無様に転ぶ。
「くそっ、何だ……!?」
術式の制御は完璧だったはずだと、男が何の気なしに、自分の足元を確認……できなかった。

――己の両足。その、ふくらはぎから下が、ブスブスと煙を上げ、炭化していた。
「……。――――ヒッ!?」
思考が、現実に追いついた。
「あ、あああああーーーーー!! あああああー! あああああああーーーー!!」
遅れてやってきた、痛み。地面を這い回り、絶叫を繰り返す。
「――――――」
シュテルの……月よりも怜悧な、一切の慈悲を感じさせない蒼い瞳が、男を見下ろしていた。
「がぁあああああ! うがぁあああああああ……、、!!」
這い回る男に、シュテルは、砲口を向ける。
「――――『ルベライト』」
淡々とした指示。男の四肢を、赤熱した鋼のような魔力の輪が締め上げる。
――ジュウウウウウウウウウッ……!!!!
火炎の属性を伴った拘束魔法は、男の四肢を、容赦のない高温で焼いていく。
「……!!!」
あまりの苦痛に、声さえ枯れ果て、白目をむいて失禁する男。
――バスッ!!
射撃魔法が、男の両目、両耳、鼻を抉る。四肢は付け根まで炭化し、傷口は焼き潰されているため、失血死さえ許されない。
「奪う価値も無い命だけは預けましょう。寛大なる我が王に、感謝なさい」

――グシャッ!!
「……オぐ!」
苦悶ではない。ただの反射として、声が出る。

「グゥーーーーーー……！　ウムゥーーーーーーーーーーーーーー……!!」
……血だまりの中、辛うじてヒト型の体裁を保っている男が、呻く。
しかし、四肢は既に関節を幾重にも増設され、胴体は裂果したトマトのように裂け、顔面は潰れ、眼球が飛び出していた。
「次は、上空２５メートルです」
ゴミのように片手で男の首を掴み、浮上するレヴィ。
言葉通り、上空２５メートルでぴたりと静止。そして……ぱっ、と、手を離す。
――ドチャッ……!!
……眼下の血溜まりの中へ、再度落下する。裂けた胴体からは内臓がはみ出し、新たな血溜まりを生む。
「では次は３０メートル……さすがに死にますか？　……ああ、殺したら駄目なんでした。命拾いしましたね？」

「――――何しようとしてたん？」
ディアーチェが、ゴムボールのようなものを手で弄びながら、磔になった男に、聞いた。
「――――やめ、――返……」
「質問には答えんとアカンなぁ？」
――ぎゅむっ。
その赤黒いゴムボールのようなものを握る。
「アンタら……うちの可愛い可愛い美香に、何しようとしてたん？　ええ？」
「――――!!!!」
男は、打ち上げられた魚のように口をパクパクと開ける。
「なんや、答えん気かいな？　強情やねぇ……ならエイッ、や」
――――さくっ
「ゴぉオおおおおおおおおーーーーーーーーーーーーーー……!!」
……磔にされた男の胴体から、青黒っぽい塊を切り取った。
「これで、残っとるんは肺と、肝臓の半分、それに膵臓かいな？　……

はよ答えんと、大変なことになってまうで？　ん？」
――ぎゅむっ。ぎゅむっ。
ディアーチェが手にしたモノを握るたび、男の身体が、面白いように痙攣する。
「、え、ひて……ひゅ……、か、え、ひて……、かえして……」
「だーかーら、アンタらが美香に何しようとしてたんか、答えてくれんと返せへんって」
――男の心臓を弄びながら、ディアーチェは張り付いた笑みを見せていた。
「……もうええわ。バイバーイ、やね」
――ぎゅうううううっ……！
心臓を握る手に、力を込める。
ぶしゃあぁっ……と、男が小便を吹き出す。
心臓が、握りつぶされる寸前……
「……なんてな」
ぱっ……と離す。
「んー……止血は完璧やね」
がらんどうになった男の胴体。しかし、心臓は弱弱しくも鼓動を刻んでいた。
「よし、殺しとらへん！　お姉ぇとの約束、ばっちり守ったで！」

「――んで、こいつらこれだけなん？」
集合した三人が、半死人を前に話し合う。
「吐かせた限りの仲間の所在は、ここにいるだけだったよ」
「ええ。武装の規模からいって、少人数のブローカーでしょう。……ただ、最近、こういった手合いが異常に多いのが気になりますね」
今月に入って、既に4回目。毎回毎回、こういった小物たちだけとはいえ、こうも続くと、何かの意図を感じざるを得ない。
小規模な結界を展開し、三人を纏めてその中へ……と、その最中。
「――だめや。生ぬるいで」

ディアーチェが突如、半死人たちの前へ歩み出る。
「そろそろ、うっとうしいゴミどもには、見せしめが必要や。どうせなら……とびっきり、上等なカカシになってもらわんとなぁ？」
槍を振りかぶり、術式を……
「――――――とりあえず、心筋を『随意筋』に変換したろ」
えげつない追い打ちを加えようとするディアーチェ。
十字槍を中心に、術式が展開し……
――すこんっ
そんな軽い音と共に、術式が消滅した。
ディアーチェが十字槍を確認すると、そこには、銀色のクナイのようなものが刺さっていた。
「……アンタかいな」
煩わしげに振り返る。
「やっほー。いい夜だネ？」
じゃらっ……と、アクセサリーを鳴らしながら、暗闇から現れる。
「奈々。ずっと監視していたのですか？」
「うんにゃ。美香っちの方で『予兆』があったから、様子見に。こっちはオマケだよん」
道化じみた立ち振る舞い。しかし……隙が無い。
「……」
光刃を構えるレヴィ。
「やめておきなさい。勝てる相手ではありません」
シュテルの断言により、退いた。
「んん、さっすがシュテルん。話が分かるゥー！」
ぴょんっ、と半死人たちの前にしゃがみ込む。
「えー、ここにありますのは何の変哲のないマントでござーい」
銀色の……恐らくは、銀繊維を織り込んでいる布を、被せる。
「はい、それではご唱和ください。あ、ワン、ツー……スリー!!」
ばさっ、と布をはぎ取ると……
「あ、あれ……？」
三人の男たちは、五体満足で目をぱちくりとさせていた。

まるで、夢から醒めたように。
「な――」
これには、さすがのシュテルも目を剥く。
唯一、気付けたのはディアーチェだけだった。
「い、因果律操作……!?　マジモンの『魔法』やないか……！」
「んっふっふ。だーかーら、『手品』だってば」
銀のマントで作った不可視領域を疑似的な『世界』と定義して、その領域内でのみ、『世界の管理者＝神』としての権能を行使する。奈々が行ったのは、そうした『手品』だった。
……『魔法』に見せかけるという意味では、それは正しく『手品』なのだろう。
「た、助かっ――!?」
「――――た、とでも思った？」
奈々の手から、銀色の栞が飛び、男たちの額に張り付いた。
「あ――」
ぐりんっ……と目を剥いて痙攣し始めた。口の端からはだらだらと涎が垂れ、白痴の様相。
「――何をしたのですか？」
諦観と共に聞いてくるレヴィ。聞くだけ無駄かと思うが……
「『嘘をつけない正直者』にしてあげたんだヨ。何でもおしゃべりしてくれるヨー？」
……何らかの精神操作を行ったらしい。きっと、死ぬまで解けない類の。
「生ぬるい言うとるやろ！　ジャマすんなや！」
ディアーチェが、シュテルの静止を振り切って十字槍を振りかぶる。
「奈々ちゃんは、子供が大好きだけど……」
――むんずっ。
「ぁひぃっ……!?」
……ディアーチェを、いつのまにか背後から抱きすくめる奈々。
「――乱暴者は、キライだヨー？」

すすすっ……と、顎のラインを奈々の冷たい手がなぞる。
――勝てない。
シュテル、レヴィは、戦慄と共に、悟った。
「お？　……お？　ディアーチェ、ちょっとおっぱいおっきくなった？」
「んなーーーーーーーーーー!?」
「にょほほほほ……！　よいではないかよいではないかー！」
「あー！　やめぇーーー!!」
……セクハラ三昧だが。
「奈々、美香の方は」
「悪くは無いんだけど、よくも無く……うゥむ、中卒奈々ちゃんの語彙では、説明が難しいヨー」
とにかく、美香の身に、好ましくない事態が起きたらしい。
「――いや、喜ばしいって言った方が、近いかもしれないヨ」
「……？」
奈々の思考は独特すぎて、理解が難しい。
しかし……アーフィエルが着いているのなら、問題は無いだろう。
『それじゃ、おうちで待ってるよーん』
奈々がそう言い残し現場を去り、管理局がやってくること察知した三人は、家路についていた。
「ひっく、ひっく……もうお嫁さん行けへん……」
さめざめと涙を流すディアーチェを、慰めながら。
この上官は、なぜこうも締まらないのだろう……と心中でぼやいているうちに、三人は拠点……二階建てアパートの一室に、たどり着いた。

――するり、と。

闇夜の中から、青白い人影が出現した。
「……」
病的に白い肌。膝までありそうな、絹糸のような黒髪。

白いワンピースに身を包んだ女性は、茫洋とした目で、シュテルたちを捉えた。
「……」
「ふ、ふぇーん！　朧ぉー!!」
ディアーチェが、ワンピースの女性――どうやら、朧というらしい――の胸に、まっすぐに飛び込んでいった。
「……？」
――どうしたの、言ってごらん？
「奈々が、奈々がぁ……！」
「……。　……。」
――そう、奈々がそんなことを。ひどいわね
「朧からも怒ったってぇな！」
「……。」
――大丈夫よ。奈々にはキツく言っておくから。
「ほんまに？　頼むで？」
「……。　……。」
――ええ。さぁ、顔を拭いて。可愛い顔が台無しだわ
すっと差し出された絹のハンカチでぐしぐしと顔を拭く。
「……」
ちなみにこの間、朧は一言も言語を発していない。
ディーアチェなど、一部、波長の合う物だけが、朧の意思を汲み取れるようだ。
……心優しい女性であることは、間違いないのだが。

◆・◆　◆　◆

気付いたら、地平線まで続く草原に倒れ伏していた。
ああ、ここが天国か……
「……！」
――じゃ、なくて！
またあの夢の続きだ。

わたしは、ちくちくとした草の感触を確かめながら、顔を上げる。
今日は……最初から、丘陵……？
初めてだ、こんなこと。愛用のチェアに腰かけ……
『……』
……そして、向かいのチェアに腰かける少女と、顔を突き合わせる。
この間より、さらに輪郭がはっきりとしていて……もう、普通の人間と変わらない。
髪質は、ふわふわのウェーブヘア。髪も、瞳も、薄い金色。綺麗だけど、ありえない色。
でも。
――その子は、わたしとよく『似ていた』。
瓜二つ、というわけでもない。私の髪質は直毛で、黒髪だ。瞳も黒い。
純日本人の私と、目の前のエキゾチックな女の子は、似ても似つかない。
だけど……もっと深い、深層の部分で、私たちは、『似ていた』。
『……』
「あなたは……」
黄金の瞳が、わたしを見据えて――――

◆・◆　◆　◆

あの後わたしは、机に突っ伏したままの姿でお姉ちゃんに発見され、大いに心配された。
「美香、大丈夫？　部活の練習、そんなに厳しいの？」
「いや、そういうわけじゃないんだけど……疲れてるのかなぁ……？」
朝食のパンをもそもそと食べながら、首を傾げる。
「今日は、石田先生の診察日でしょう？　話、聞いてもらったら？」
「うん……そうするね」
石田先生と会うのも、一か月ぶりだ。

部活を終えてから、市内の病院へ足を進める。
「……」
足。私の、足。
今もこうして、しっかりと地面を踏みしめて、前に進めている。
「……」
感触も、ちゃんとある。ジャンプだってできる。
これが、昔はピクリとも動かなかっただなんて、嘘みたいだ。
――汝に、輝く未来を――
「……!?」
ぶんぶん、とかぶりを振る。
最近、おかしい。ずっと、ずっと昔……『誰か』から聞いた言葉が……いや、その『誰か』のことが、気になって、気になって……
――がしゃんっ
「――え?」
ぱちくりと、目を瞬かせる。
え……え?　なに、これ……?

見慣れているはずの、病院への通り道。
桜の街路樹、緑色のガードレール、赤いレンガ調の舗装……
――その全部が、めちゃくちゃに荒れ果てていた。
「え……?　え……!?」
歩みは、自然と小走りに……そして、全力疾走へと変わった。
おかしい。
すべてが、おかしかった。
まるで戦争があったみたいに荒廃していることもそうだけど……
でも、もっとおかしいのは。
「何で……誰もいないの!?」
こんなにも大変なことになっているというのに、悲鳴はおろか、足音ひとつ聞こえないなんて！
――ガゴッ……!!
「きゃっ……!」

目の前のブロック塀が倒れて、立ち止まらざるを得なかった。
「……!?」
いや……進路がふさがれた、だけじゃない。
『ゴルルルル……!!』
――機械造りの、巨大な四足歩行の怪物が、赤い瞳をわたしに向けていた。
もう、頭はパンク寸前だ。
『ゴ、グルルル……!!』
がしゃん、と、重厚な足音が、近づいてくる。
口から覗くのは……鋭利な牙。
機械みたいな外見のくせに、荒い息遣いまで聞こえてきそうだった。
走る。引き返してでも、迂回してでも……とにかく、走る！
――ガシャッ、ガシャッ、ガシャッ……!!
後ろから、獣の足音が追尾してくる。
速度を緩めるわけにはいかない。
十字路。ミラーで確認する。当然、ついてきている。
「……」
タイミングを、見計らう。獣がカーブを曲がる、その瞬間に合わせて。いち、にの……！
「……えぇいっ!!」
――バスンッ!!
顔目がけて、鞄を投げつける!!
『ゴフッ！　グガぁアアアアアッ!!』
よっしゃ、うまいこと顔に被さった！
「……！」
間髪入れず、ゴミ箱と電柱の陰に逃げ込み、息をひそめる。
獣は、視界を塞いだ鞄をずたずたに引き裂いて、視界を取り戻した。
『ご……、、グ……』
きょろきょろと、辺りを見回して……その先へ、去って行った。
「……ふぅ～～……!!」

大きく、大きく息をつく。
当面の危機は去ったけど……また、いつ戻ってくるのかは分からない。とにかく、どこか……警察……で、いいのかどうかわからないけど、安全な場所に避難しないと。
「……」
鞄が無くなって身軽になっただけ、走りやすい。
町には、相変わらず人気が無い。本当に、いったい、どうしたんだろう。

黙々と走っている間、まだ、あまり破壊されていない区画へたどり着いた。まだ、ここにはあの獣はやって来ていないようだ。でも、あまり土地勘のない地域だから、早く抜けないと……
「……」
「え!?」
ちょ、人、いるじゃん!?
駐車場の前で、ぼーっと突っ立ってる女の人、発見！
「おおお、おばさん！　何やってんの!?」
「……」
４０代……くらい？　の、疲れた雰囲気のおばさんは、私を、焦点の合っていない目でぼうっと見つめた。
「……家を、探していたの」
はい？　家？
「……そこ、駐車場だよ？」
おばさんが『家』と言ったのは、舗装された駐車場だった。
「……家を、探していたの」
おばさんは、そう繰り返す。
……ちょっとおかしい人だろうか？
「……はっ!?　じゃなくて！　逃げよう!?」
ぼうっとしている場合じゃなかった。
見捨ててはおけない。おばさんの細い腕を引っ張り……
「……当然よ。……、何を、今更……」

「ああもう！　自分で走ってよー！」
なんとかおばさんを引き摺りながら、住宅街を抜ける。
――ドンッ!!!
「――――――うっ……!?」
引きつった声が出る。
『グルルルル……』
見つかった……!!
『モクヒョウ……ホソク……!!』
喋った!?　目標って……やっぱり、わたし!?
――ガシャンッ。
――バシュンッ。
『モクヒョウ、ホソク』『モクヒョウ……ホソク』
まだ、……一体じゃ、なかった……？
まだ、どこか冷静な部分で、観察する。
四足歩行の獣。
のたうつ大蛇。
忍び寄る蠍。
三体の、機械造りの怪物が、敵意に満ちた目を向けていた。
「……いいのよ、別に」
ちょっ……！　何で手ぇ放してんの!?
「……」
おばさんは、怪物たちに向かって、ふらふらと近づいて……
『グゴぁアアアアアアアアアア!!』
「ああもう馬鹿ぁあああああ!!」
おばさんを思いっきり引き倒し……目の前には、怪物の牙!!
お姉ちゃん、お兄ちゃん……シュテル、レヴィ、ディアーチェ……
石田先生、保健室のおばちゃん。
……次々と、近しい人の顔が浮かんでは消える。ああ、これが走馬

灯か……
（今回だけは、もう駄目かも……）
牙が迫る。スローモーションのように。
――目を瞑るな。
「!?」
回避できたのは、奇跡だろうか。
――ズシャアッ!!
獣の突進は空を切り……地面を抉るに終わった。
「え……わたし、いま」
『グォオオッ!!』
――目を瞑るな。見続けろ。瞼を閉じる力があるなら、体を動かせ
「くぅっ……!!」
蠍の尾の一撃を、半身を逸らして避ける！
――突っ込んでくるだけの攻撃なんて、いくらでも避けられる
「あ、れ……？」
わたし……避けられてる？
――避けられないのは、死への恐怖に？まれているからだ
蛇の、頭上からの押し潰し。しかし、空を切る。
ちりちりと。
くすぶる記憶。
――恐怖に？まれるな。しかし、恐怖を忘れるな。
覚えている。
失っても……覚えている!!
――恐怖の感情を、意志の力で支配しろ
怖い。
でも……でも!!
『――――!!!』
――立ち向かえ!!

◆・◆　◆　◆

「美香……無事でいなさい……!!」
シュテルたち三人は、隔離結界へと向かい、全力で飛翔していた。
いつもはぽやんとしているディアーチェも、今は余裕が無い。
レヴィに至っては既に隔離結界に到達し、結界破壊の光刃を幾度も叩きつけていた。
「ん……んん……？　何だこりゃ」
その脳裏。
魔力を持たないというのに、平然と念話を行う奈々が、言いよどむ。
「何や、勿体ぶらずに言うてみぃ!?」

「――美香の中の、『あの子』が目覚めようとしている」

「……確かなのですか？」
「シュテルん達だって、ほんとは気づいてたんでしょ？」
「……薄々、ですが……」
そうだ。気付いていない筈が無い。毎日一緒にいるのだ。
「あの首飾りは、美香の持つ膨大な魔力の逃げ口として機能しています。ですが、それが何か……、ッ!?　まさか！」
正確には、無尽蔵に魔力を吸収する特性のある魔力結晶へ、奈々の銀細工を経路に、流し込んでいる。
では、もし……所有者のリンカーコアの魔力を吸収し続けた首飾りが、何らかのアーティファクト的な物体――所有者の魔力を媒介するモノ――
――そう、言うなれば……『デバイス』へと変容したとして。

――デバイスのＡＩに相当するものは。

◆・◆　◆　◆

気が付いたら、あの草原にいた。
『ずっと眠っているつもりでした』
唐突に、女の子がしゃべりだした。鈴を転がすような、軽やかで、涼しい声。
黙って、声に耳を傾ける。
『眠っているつもり――だったんです』
困ったように俯いてしまった。
『私は、生まれることのできなかった、もう一人のあなた』
「……」
『魂だけの、虚ろな存在。名も無い魂。だから……この世に生を受けたあなたが、羨ましかった』
……何で、この子の言うことが分かるんだろう。
『手を伸ばして……でも、その手が、あなたの生命を蝕んでしまった』
もしかして……わたしの、昔のこと……？
『でも……あの人が、私に温かい夜の帳をくれた。あなたを脅かさない、ずっと眠り続けるための、揺籃を』
――ちりん。
……首飾りが、風に吹かれ、鳴る。
『でも、もうわたしは、眠り続けることができなくなってしまった』
悲しそうに、瞼を伏せる。
『――なぜ、立ち向かおうとするのです』
悲しげに、目を伏せる。
『闇の三騎士は、あなたを守護してくれます。それでいいではありませんか。この揺籃のように、いつまでも、安寧な温もりを……』
「――違うよ」
『……？』
今なら……はっきりと、言い返せる。
「わたし……みんなが好き。お姉ちゃんも、お兄ちゃんも……シュテルも、レヴィも、ディアーチェも。石田先生も、保健室のおばちゃんだって、みんな、みんな好き」
『では……』

なぜ、戦おうとするのか。そう聞きたいんだね。
「与えられるばかりのものが、宝物なわけがない」
みんなと過ごす時間は、一分一秒が、何にも代えがたい、わたしの宝物。でも……
「自分の宝物は……自分で守りたいんだ」
『……勝手です。彼女たちは、それを望まないでしょう』
「だろうね」
みんな、わたしをとても大事に思ってくれている。わたしが怪我をするようなことがあれば、それだけでおろおろと狼狽えるほどに。でも。
「――わたし、これでも結構、ワガママなんだ」
言葉を失う『彼女』に、一歩近づく。
「それに――」
小さい体躯。消え入りそうなほど、儚い気配。ああ、違う。違うな。
「あなたは、『もう一人のわたし』なんかじゃない」
『!!』
ショックを受けたように、固まった。
その頬に、触れる。
……ああ、触れられた。
「ここにいる。あなたも、わたしも……ここにいる。だから、同じなんかじゃない」
彼女は一歩、後ずさる。
「……なぜこの世界は、こんなにも青空が広がっているんだと思う？」
『……』
夜の帳。揺籃。確か、そう言った。
「……あなたに、この『夜の帳』をくれた人はね。ただ眠っていろ、なんて、言う人じゃなかったはずだよ」
――思い出せた。ほんの、ほんの少しだけ。
――ぶっきらぼうで、いつも眉間に皺が寄っていて……
――意地悪で、厳しくて……
――誰よりも、優しいあの人。

揺籃……ゆりかご。
それの、持つ意味は……
「――あなたが、いつか巣立つ日のために」
親鳥の元で、雛が育つように。
献身的な、わが身さえ厭わない、献身を以て。でも、それは全て……
やがて来る、その日のために。
「あの人は、そう願いを込めて、あなたに揺籃を贈ったんだよ」
きっとそう。
「あなたは、もう一人の私じゃない。
でも、だから……あなたは、一人じゃない」
同じじゃない。誰も、きっと。だから……孤独じゃない。繋がっていられる。
自分を、『名も無い魂』と名乗ったこの子も、きっと。
『ですが……わたしは……』
困り果て……でも、素直に言い出せない。
ならば……ならば。ここは、『あの人』に、倣おう。
「――あなたに、名前をあげる」
――『あの人』なら、きっと、こうしただろうから。
『もう一人のわたし』でなくなるために。
ただ一人の存在となるために。
いまこそ、揺籃を巣立つために。
「――悠久の千里を超え……地平を越え、大空を往く翼。
――悠里（ユーリ）」
草原の世界に、強く、強く――一陣の風が、吹き抜けた。
◆・◆　◆　◆
――ビュゴぉオオオオウッ!!!!

『グアアアアアアアアアアアアアッ!!?』
猛烈な突風が、目の前に迫っていた怪物たちを、吹き散らす。
そして……身体の奥底から湧き上がる、それこそ、無限の力！
「悠里!!」
『――『エグザミア』、起動!!』
胸元の首飾りから……軽やかな、悠里の声。それに呼応するように、赤い結晶が、輝く。
――ゴヒュウウウウウウッ……!!!
結晶へ、周囲に満ちていた魔力が、吸収されていく。
『黄昏を、夜天を越え――』「――紫天を往く、我が翼よ』
悠里の声に、重ね、詠唱する。
『――我は虚無より出でし者！』「――我は虚無をも満たす者！」
二つの、暖かな炎が、背に灯り……
――バサァッ……!!
魂魄の翼……魄翼となる！
ああ……郷愁が、胸を満たす。
知っている。わたしは……この力を、知っているんだ!!
魄翼が、わたしを包み込み……纏っていく!!

『「――我、砕け得ぬ意思、貫く者なり!!」』

――バォオオオオオッ!!!
フレアパターンの入った、袴装束。
右手には、『エグザミア』の核たる魔力結晶を納めた手甲。
長く伸びた髪の毛が、悠里と同じ、黄金色に輝いている。
「いくよっ！　悠里！」
『いこうっ！　美香！』
――構える!!
大蛇が、バクンッ、と大顎を開け……！
『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

魔力の砲撃を、撃ち放つ！
えっと……どうする!?
『――雲散霧消の型！』
悠里の声と一緒に……動きのイメージが、流れ込んでくる。
「――わかった！」
手甲をした右手を、開いて突き出す！
――パァンッ!!
魔力の砲撃は、弾け飛び……エグザミアへ、吸収！
次は……！
『炎剣咬鎖の型！』
「おっけー!!」
魄翼から、双剣を現出！　左右から、挟み込むように……!!
――ザシュンッ!!
硬質な鱗を持つ大蛇を……中途から、分断！
『ギ、ァ、……！　ギシャァァァ

に変換!!
回転運動の慣性を、解放！
「でいやぁあああああああああああっ!!!」
――ドゴァァァァァァァァァァンッ!!
蠍の胴体へ、ボディブローを叩き込み、爆散させる!!
『ガルルルゥ……!! ウォオオオオオオオオオンッ!!!』
最後に残った獣が、咆哮する。爆散し、散乱していた大蛇、蠍のパーツが、獣の身体へ吸収される！
獅子の身体に、蠍の尾。蛇の骨格と表皮を用いた翼をもつ、キマイラに変身した！
『ガゥァァァァァァァッ!!!』
――速い!!
右……いや、左!?
『大丈夫！』
――ガシィィィィンッ!!!
……身体を中心に展開された魔力の防護壁が、波紋を作り……たったそれだけで、獣の爪の一撃を、完全に遮断した。
『あの程度の攻撃は、いくらでも防げる！ 思うように、戦って！』
ああ、なんて頼もしいことを言ってくれるんだろう、この子は！
――ガシッ!!
振り回された尾を、ふん捕まえる!!
「いいいいい……よいしょぉおおおおおおおおおっ!!」
一本背負いだぁあああああああ!!
――ズシィィィィィィィンッ!!
巨体が、まともに地面に衝突して、轟音を響かせる！
『ガ……グ、ググ……!! ゴぁァァァァァァァァッ!!』
あれ、意外と平気!?
『分厚い外殻が、衝撃を半減させて……あと、ダメージは自己修復したんだと思う』
じゃあ、これまでの斬撃や打撃は、通っても回復されちゃう。

『――大丈夫。魔力波形も、個体振動数も……』
脳裏に、悠里が語りかけてくる。
『もう、充分に――――――『蒐集』できている』
流れ込んできたイメージは……
『「――――――絶招・天羽々斬（アメノハバキリ）！」』
――パキィイイイインッ!!
掌に、半透明の両刃の長剣が精製される。
『ゴファァア……グルァァァ

傍らで、悠里が頷く気配。
『……あ』
何かに気づいたようで、わたしの意識もそちらを向く。
ええっと……何か、やたら速い飛行物体が三つ、こっちに近づいて来てるんですけど……？
敵じゃ、なさそう。
よしよし、見えてきたぞ。えーっと……。なんだ、レヴィたちか。
「……って、ええええええええええええええええええええええええええええええええええええッ!?」
何で!?
「美香！　大丈夫だった!?」
「お怪我はありませんか？」
「ちょ、ちょっと出遅れてもうたでー……」
わらわらと、当然のように空を飛んでわたしに抱き着いてくる。
何で……何でみんな……！
「何で、そんなカッコしてんの!?」
「そこかいっ!?」
ズビシ！　と、ディアーチェが突っ込んできた。
色々なことが起こりすぎて、頭がヘンになりそうだった。
「……とりあえず、降りましょうか」
シュテルが場を仕切り、みんなで降下する。
さっきまでボロッボロになっていた街並みも、すっかり元通りになっていた。
どういう原理か、サッパリわからない。
「……美香。」
シュテルの呼びかけに、振り返る。
「――――、うん、大丈夫」
……理解はできないけど、何故か、分かった。
私の、この『力』の意味。

「……ほんっと、好き勝手してくれちゃったなぁ、あの人ってば！」
……ほんのちょっとした怒りと……その何倍もの郷愁が、胸を満たす。
「忘れられるわけ、無いでしょうがっ!!」
私は……あの人が、好きで、好きで、好きで……大好きだったんだ。いっそのこと、最後まで巻き込んでくれた方がどれだけよかったか！
いきなりすっとんで行って、文句の一つでもつけてやりたい！
「――――でも、まだ、なんだよね」
……胸の銀細工が、そう告げている気がした。
今は、まだ。まだまだ、力が足りない。今のままでは、あの人の隣に立つだけの力量が無い。だから。
「シュテル！　レヴィ！　ディアーチェ！」
三人へ、胸を張って宣言する！
「――こうなったら、トコトン強くなってやるんだから!!　キッチリ、最後まで、付き合ってよね!!」

◆・◆　◆　◆

沸き立つ少女たち。それを眺めながら……救助された民間人の女性は、うつろな目で、茫洋とした心で……己の罪を、呟く。
「――――――――――――――――秀人。」
……運命の歯車が、回り出す。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十二話『空、曇る頃に』

――――オオオオオオオン……!!

郊外の山奥……かつては産業道路として活用されたが、今となっては通る者も少ない峠道を、一台のバイクが走り抜けていた。

漆黒の車体は、街灯の少ない峠道を走ると、溶け込んだかのようになる。光源は、切れかけた街灯と、月明かりと、ヘッドライトのビームのみ。

『……!!』

胸元の相棒からは、路面状況が絶えず伝えられ、肉眼以上の認識が可能となる。

路面上の僅かな凹凸や、ほんの少量の砂ですら、命取りになりかねない。

――――ファオオオオオオオンッ!!

ギアを下げ、危なげなくコーナーをクリアしていく。

『……』

続くシケイン。これも、ギアを3速で固定し、重心移動のみでクリア。

なのはがよく行うストレス解消法の一つだった。

こうして、難所が続く峠道を、猛スピードで駆け抜けることで、意識を操縦にのみ集中し、無駄な雑念をそぎ落としていく。

しかし、ヘルメットの下にある顔は、苦りきったままだった。

それは、ほんの三日前の……

◆▪◆　◆　◆

「あの……なのは、さん……？　いたいよ……？」

なのはは、その声にハッとなり、掴んだままだったヴィヴィオの手を離した。

「なのはさん……？」

そっとヴィヴィオが手を伸ばす。

『……ッ!!』
なのはは、弾かれたように飛び退く。
『……ありえ、ない。あるはずが……そんなこと……』
ぶつぶつと思考を垂れ流し……ヴィヴィオとの距離を離していく。
その数時間後……ヴィヴィオは、なのはと二人で、中庭の特別棟へやって来ていた。
人気のない特別棟の床が、かつかつ、と、硬く足音を響かさせる。
「……」
これには、ヴィヴィオも只ならぬものを感じたのか、押し黙ったまま、先を行くなのはの背を見たまま、無言で歩く。
『……』
なのはの背中は、ただ無言で、全ての干渉を遮断しており……刺々しい気配を発していた。ヴィヴィオは、何度も、何度も話しかけようとしては引っ込むことを繰り返し……やがて、目的地に到着してしまった。
――プシュウッ……
ロックが解除され、扉が解放される。
部屋の主……マリエルは、いつもなら、ゴミ屋敷のような部屋のどこかでいびきをかいているところなのだが……今日に限っては、神妙な顔で、二人を出迎えた。
「――準備は出来ている」
「あの……じゅんび、って……?」
ヴィヴィオは、恐る恐る、なのはを見上げた。
『すぐに済みます』
固く強張った返答に、びくっと身を竦ませる。
『……ほんの、検査だけです。痛いことは、何もありません』
さすがに罪悪感を覚えたのか、ぼそぼそと話す。
「……うん、わかった」
ヴィヴィオは大人しく、マリエルと共に、奥の部屋へと向かう。
「……」
だがしかし、不安が残るのだろう。一度だけ、背後を振り向き

……

『……あ』

……付いて行こうとでもしたのだろうか、中途半端に手を伸ばしているなのはと、目が合った。

「なのはさん、」

『！　……お、終わる頃に、迎えに来ます！』

……なのはは、手をと引っ込め、足早に退室していった。

ヴィヴィオは、微量の血液と、頬の内側からＤＮＡを採取された。検査と言っても、その程度のことだ。あとは、マリエルが秘密裏に保存する……『彼』のパーソナルデータと、照合するのみ。

たったの数分でなのはは呼び戻され、なのはは、一旦ヴィヴィオと共に、隊舎へと戻って行った。

検査結果が出たのは、その晩のことだった。

マリエルであれば、即断で結果を伝えることもできたのだろうが……マリエルも、この件に関しては慎重にならざるを得なかった。あらゆるサンプルとの比較が行われ、検証され……結果は、なのはたち、『彼』の縁者にのみ、伝えられる極秘事項となった。

「結論から言おう」

部隊長執務室に招聘されたマリエルは、厳かに口を開いた。

固唾をのんで結果を待つ一同に、告げられた事実は……

「ヴィヴィオは、ほぼ１００パーセント……『彼』と、『高町なのは』の遺伝形質を引き継いだ子供だ」

一同は……無意識で、なのはを見やる。

『……』

なのはは、耐え難い苦痛を抑えるように、顔を手で押さえ……

――。

……へたりこんだ。

「なのは、……」

しかし、掛けるべき言葉が見当たらず、黙り込む。

「……問題は」
務めて冷静に振る舞う、はやて。
「……どこから、あのバカの遺伝子が漏れたのか、だ」
眉間を指で押さえる。
「あのバカの能力を知っていて、尚且つ、その有用性を見出した、どこかの誰か」
はやては、マリエルを見た。
「……一応、聞くが。」
今現在、『彼』のパーソナルデータを最も綿密に所有しているのは、間違いなくマリエルだろう。
「――科学者の矜持に賭けて誓おう。ワタシではない」
マリエルは、断言した。
「失言だったな。忘れろ」
はやては、信じることにしたようだ。他にも、考えられる可能性は多々あったが……
「……あの子の肉体年齢から、少なくとも、５年前。その時のなのは、まだ１０歳。そして、その頃『彼』は既に……だから、とてもじゃないが、……」
――まともな産まれ方をした子供ではない。
はやては、その先の口をつぐんだ。フェイトに気を使ってのことだろう。
「あー。ボクやエリオみたいなかんじってこと？　それなら、じゅうぶんありえるねー」
……あっけらかんと、本人が口にした。
「おい、……」
シグナムが、慌てたようにフェイトを咎める。しかしフェイトは、苦笑いのみ。
「ボクへのえんりょはあとまわしでいいから」
そして……スイッチが切り替わったかのように、すらすらと考えを述べるのだった。
「でも、へんだね。プロジェクトＦは、あくまで、記憶転写クローンの

製造技術だ。誰かとの遺伝子を掛け合わせて、しかも、特定の先天資質だけを表出させるなんて器用なこと、やれる人なんて、いた？」
……首を横に振った。が、一人だけ。
「――――心当たりがある」
……マリエルが、挙手した。
「確かに、プロジェクトＦは、プレシアが主導して完成させた技術だ。しかし、全てを彼女が構築したわけではなく……その原型となる計画があった」
手元の端末を操作し、空間上にディスプレイを投影する。
いくつかの資料と……映像。
映像には、病室のような無機質な部屋と……そこに集まる、１５人ほどの、子供たちの姿。
「……!?」
その中に……見知った子を見つけた。
「こいつは……」
１０歳程度の、長身で、ウェーブヘアの少女。
「まさか……アーデルハイド!?」
凶鳥部隊の、一員。その、幼い姿だった。
探すと……いた。
「これは、マリー……？」
口をへの字に曲げた、不機嫌そうな……今と、背格好が変わらない少女。
「……ああ、ワタシだ」
資料が前列に表示される。読み上げていく一同の顔が……例外なく、嫌悪を浮かべる。
――管理・管理外を問わず、優秀な遺伝子を収集。
――専用装置にて、理想的な塩基配列を構築。
そこから先は、マリエル本人が、言葉にする。
「――長寿は望まず。数年サイクルでの『交換』を前提とされた、御しやすく、扱いやすい……歪な『天才』を製造する技術。
――プロジェクト・Ｄ」

ただ沈黙し……マリエルの独白は、続く。
「開発者のＤＥＳＩＲＥ（欲望）を叶えるべく、ＤＥＳＩＧＮ（設計）された……ＤＥＳＴＩＮＹ（運命）を全うするためだけの、子供たち……デザイア・チルドレン。数万通りのサンプルの中から、自我を発生させられるだけに生育出来たのは　１５人。ワタシも、アーデルハイドも、
――コイツも、その一人さ」
一人の少年が、ズームされる。
散切り頭の、不敵な顔をする少年。
「――ジェイル・スカリエッティ」
……それこそが、マリエルの言う、『心当たり』だった。
「ワタシ、アーデルハイド、ジェイルの三人は、１５人の中でも、突出した能力を示していたからな。３人で、チームのようなものを組まされていたのさ。そのリーダーだったのが、ジェイルだった」
昔を懐かしむ目で、語る。
「ワタシたちが研究して……いや、させられていたモノ」
……最後の資料が、表示される。それは、資料というよりは、手記のようなものだった。
そこに、記されていた言葉は……
「――不死生命の誕生を目的とした……プロジェクト「Ｅ（ETERNAL）」
Ｄと、Ｆを繋ぐもの。
――不死生命。
「――!!」
……きっと、誰もが、『彼』を想起しただろう。
「――断言しよう。ヴィヴィオを『製造』したのは、ジェイルだ」
「でも、」
そこで、ユーノが疑問を口にした。
「今……Ｄ計画の子供たちは、数年の命だって……いや、それを言うなら、マリー。君だって」
「ワタシたちの寿命を制限していたのは、人為的に短く設計されたテロメアだ」

ハッ、と、ユーノが口を閉じる。
「――何で、ワタシたちがE計画なんてものに与したと思う？」
E計画。不死生命。短命の子供たち。……それだけのキーワードがあれば、自ずと見えてくる。
「不死生命を研究する上で、テロメアの研究は欠かせない要素だった。それに関しては、研究所の人間は、いくらでも資金を提供してくれた」
ふっ……と、自嘲とも思える息を吐き出すマリエル。
「そりゃあ、必死にもなるさ。『君たちが研究を続けていれば、兄弟たちを死の運命から救える』なんて言われたらさ」
つまりは、人質を取られていたのだ。自身と……兄弟たち１４人を。
「自分たちの身体で実験しながら、死に物狂いで……テロメアの消耗を抑制する酵素を、開発した」
それは、革命的な……それこそ、医学を根本から覆しかねない程の成果だった筈だ。
「――遅かった。遅かったんだよ」
マリエルは、力なく首を横に振った。
「実験段階から酵素の試作品を使用していたワタシたち３人以外……もう、手の施しようがない程に、老化が進行してしまっていたんだ」
……手遅れ、だったのだろう。
「酵素は、D計画の被験者以外には、猛毒であることが判明し、目的を見失ったワタシたちは、居場所と存在意義を無くし……E計画は、白紙となった」
すべては、失敗に終わったのだ。
「残ったのは、人体実験の影響で、おかしくなってしまったワタシたち３人だけだった」
マリエルは、身体の成長が阻害された矮躯となり。
アーデルハイドは、精神の均衡を崩し。
ジェイルは……恐らく、妄執に取り憑かれた。
「アイツは恐らく、独自にE計画を再始動したのだろう」
E計画。自身の存在の拠り所を。

「バカだよ、あいつは……頭がいいくせに、バカなんだ。……結局、自分も、D計画と同じことをしているに過ぎないってのに……」
目的達成のため……命を弄ぶ所業。
『ヴィヴィオは……』
俯いていたなのはが、顔を上げる。
これまでの話から……その、最悪の予想を、口にした。
『ヴィヴィオの命は、』
D計画の被害者たちのように、数年で尽きてしまう物なのか。
「ああ、確認済みだ」
マリエルは、随分と軽い口調で返した。
軽く安堵する。
恐らく、そのあたりの問題はクリアされているに違いないと――
――
「――――――1年も保たないだろう」

◆・◆　◆　◆
山間部を抜け……空白地帯にバイクを停めた。
『～～～～～……はぁっ!!』
長く止めていた息を吐き出す。
ゴツンッ……と、タンクに頭をぶつけ、目を瞑る。
『……』
ごちゃごちゃと、考えているのだろう。
『マスター。僭越ながら』
と、通常状態になったレイジングハートが、呼びかける。
『いかに、ヴィヴィオがあなたと彼の血を引いた存在であっても……ヴィヴィオは、ヴィヴィオでしかありません』
『……うん、わかってる。わかってるんだよ……』
『マリエルは、例の酵素の提供を約束してくれました。既にある物の

改良ですから、ヴィヴィオに合わせての最適化も、そう難しくは無いでしょう。彼女の寿命について、変に気負う必要もありません』
何が言いたいのかというと……
『――避けないで、普通に接してあげましょう。可哀想ですよ』
……実に普通の感想だった。
『ですが、あの懐きようも納得ですね』
刷り込みどころか、遺伝子的にはなのはの娘と言えるのだ。
『でも、でも……いきなりすぎて、わけわかんない』
なのはは、まだ未成年なのだ。いきなり目の前に、娘です、と現れても、はいそうですか、と受け入れられるほど柔軟な思考はしていない。
『さすがに、今日明日で、人の親としての自覚を求めるのは無理がありますから、強制はしません。ですが……幼い彼女にとって、マスターが拠り所となっていることは、理解してあげてもいいのではないでしょうか？』
『……』
考え込み、考え込み……僅かに、頷いた。

隊舎へと戻り、格納庫へバイクを仕舞う。
（今日は暑かったな……結構、汗かいちゃった）
大浴場は２１：００で終了してしまうが、シャワールームなら２４時間、開いているはずだ。
隊員たちも、２２：００の消灯に合わせて部屋にいるためか、通路の人通りもまばらだ。
人気のない廊下を歩いていると、鍛えられた五感が、背後に視線を感じた。小さな足音もセットだ。と、いうことは。
『……ヴィヴィオ』
通路の角から、こちらを伺っているヴィヴィオを見つけた。
「あっ、あう、あう……おかえりなさい」
見つかったことで慌てて……観念したように、なのはの元へ歩いてやってきた。

しゃがんで、目線の高さを合わせてやる。
『ただいま。ですが、子供が起きていていい時間ではありませんよ』
「ごめんなさい……でも、さいきん、おこってたから。ヴィヴィオ、何かしちゃったかな、って……」
『怒って――――……ああ、そういうことですか』
気まずくて避けていたことを、そう解釈してしまったらしい。
『怒ってなどいませんよ。ちょっと、その……忙しかっただけです』
「なのはさん、いそがしかったの？」
『ええ。寂しかったですか？』
「うん……きらわれちゃったかと思ったよ」
『ごめんなさい。でも、それは無いので安心しなさい』
なのはは、自分がシャワールームに行こうとしていたことを思い出した。
『せっかくですから、一緒に行きますか？』
「うんっ！」
自然に義手の左手を握ってくるヴィヴィオに戸惑いつつ、なのはは、ヴィヴィオを伴ってシャワーを浴びに行った。
義手をアタッチメントから外す際、少し気を使ったが……ヴィヴィオはむしろ、興味津々で見ていたので、普通に外した。人工声帯は、つい先日、防水防湿仕様がメーカーより届けられたので、そのままだ。
『目を瞑りなさい』
「んー……」
少し温めの湯を、頭から流していく。器用に片手でシャンプーを取り、泡立てる。
平均よりやや細い、艶々した髪の毛。
どこか懐かしい感触に、それが自分の子供の時のことだと思い至る。
『……血の繋がり、か』
「え？　なぁにー？」
『何でもありません』

ほとんど、汚れらしい汚れも出なかった。
下を向くと、何やらヴィヴィオが、シャンプーをたっぷりと手に持っており……
「なのはさん、しゃがんでください」
『……』
だいたいの意図を察したなのはが、しゃがむ。ひんやりとしたシャンプーの感触があり、やがて、頼りない力で泡立てられていく。
「よいしょ、よいしょ……かゆいところはありませんかー？」
『……やや泡が多い気がしますが、大丈夫です』
まぁ、傷んで困る髪でもないし、好きにさせようと決めた。
シャワーを終え、ヴィヴィオを自室まで送り届け……なのはは、奇妙に充足した気持ちで就寝したのだった。
翌朝。
『……』
身支度を終え、廊下に出ると。
「なのはさん、おはよう」
少し寝癖のあるヴィヴィオが、出迎えた。
『おはようございます。早いですね』
時計は、まだ午前七時。隊員たちは、さすがに起きているだろうが……
「おなかすいたよ」
『食べに行きましょうか』
「うんっ」
そしてまた、ヴィヴィオは、なのはの手を取る。
『……』
振り払う理由は無いので、そのままだった。
『……』
「はふっ、はふっ……あつっ、」
ヴィヴィオは、味噌汁をスプーンで苦労して口に運ぶ。
なのはも、自分の分を食べようとするのだが……目の前のヴィヴィオが危なっかしくて、それどころじゃない。

『もう少し落ち着いて食べなさい。ああ、一回の量が多すぎるんですよ。ほら、垂れてる垂れてる……』
ナプキンでこぼれた分をぬぐってやり、口元を拭いてやり……
「おいしかった。ごちそうさまでした」
『……私、まだ半分も食べていないんですが……』
やや急いで食事を食べ終え、教導へ向かった。
ギンガとシャッハを交えた訓練の最中。
『あ』
なのはは、あることに思い至った。
「もらった……！」
――ガキィンッ！
シャッハのトンファーによる一撃。なのはは、片手に持った訓練用の駄剣で弾く。
『しまった、私としたことが……』
訓練中に気を抜いたこと……ではないだろう。
『ちょっと早めに切り上げますよ』
「へ？」
なのはの剣が、霞むように掻き消え……
――ガキン　ガキョッ　ベキメキャッ　ゴスッゴスッ……
「……」ちーん。
……やる気を出したなのはに秒殺された。
「シャッハさーん!?」
スバルが悲鳴を上げる。
『クロノ。とりあえず後を任せたからね』
しゅたっ、と手を挙げて訓練場を去るなのは。
なのはは、風のように隊舎へと帰還し……
『ヴィヴィオ。お買い物に行きますよ』
「……えっ」
フェイトがストックしていた漫画を読んでいたヴィヴィオを捕獲。
『よく考えたら、あなたの生活用品を全く用意していませんでした』

「えっ。」
米俵のようにヴィヴィオを担ぎ、足早に格納庫へ向かう。
『ネット注文では、届くのは最短でも明日になってしまいます。今行きましょう。さぁ行きましょう』
「えっ。えっ。」
格納庫でサボッていたゼルビスをシバき倒しながら、トラックの助手席へヴィヴィオを放り込む。
「なのは！　ボクも！　ボクもいくー！」
『いいよ、乗って』
……恐らく書類仕事に追われていたであろうフェイトが、トラックの荷台に飛び込んだ。
さすが、慣れている。
――ブルンッ……ドルドルドルドルッ……！
「れっつごー！」
荷台から身を乗り出すフェイトが、号令をかけ……暖気もそこそこに、飛び出した。
「――――――――えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!?」
ヴィヴィオの悲鳴が、尾を引きながら、遠ざかって行った。
『レイジングハートよ』
『何でしょう、バルディッシュ』
『アレは、意識的なものか？』
『いえ、恐らく無意識かと』
『……』『……』
愛機たちも、沈黙した。
洒落たストリートに、無骨なトラックは全く溶け込んでいなかった。尚且つ、そこから出てきた人物も、また同じく。
『まずは衣服でしょう』
……ファッションではなく、ガチのミリタリー服でそのようなことを申されても。
その恰好のまま、ノシノシと店内へ踏み込んでいく。フェイトは、楽しそうにそのあとを付いて行った。

「いらっしゃいま……あの、何か事件でも……？」
フェイトの執務官服を見た店員が、顔をひくつかせる。
「え？　ちがうちがう！　この子のふくをかいにきたんだよ」
店員に見送られながら、子供服のコーナーへ。
「……わー。ふくがいっぱい」
ヴィヴィオは、目を見開いていた。
『何着か、欲しいものを選びなさい』
「うん。えっとえっと……」
きょろきょろと、ハンガーに掛けられているものや、マネキンが着ているものを見て回る。しかし、やはり選ぶのが難しいのか、助けを求めるような視線を、なのはに向けてきた。
『？　どうかしましたか？』
「えっと、えっとね……」
『？』
その意図を察することができないなのはに、フェイトが助け舟を出した。
「なのは。いっしょにえらんであげたら？」
『……そういうことか』
なのはは、適当に見繕い、ヴィヴィオに見せる。
『どちらがいいですか？』
シンプルなズボンと、フリルのついたスカート。
「こっち」
ヴィヴィオは、スカートを選んだ。
『では、こちらとこちらは？』
キャラクター柄のTシャツと、薄いピンクのブラウス。
「こっち」
ブラウスを選んだ。
『ふむ……だいたいわかりました』
どうやら、可愛らしい感じの服が好みのようだ。
「なのはとは反対だねー」
フェイトが、面白そうに言う。

確かに、なのははどちらかというと、シンプルな服装を好んでいた。
そんな感じで、何着かを購入。
その他もろもろの生活用品も購入し、トラックへと詰め込んだ。
「ヴィヴィオ、こっちおいでよ！」
帰り道。フェイトが、荷台にヴィヴィオを誘う。一応、乗れなくはないのだが……
『……転げ落ちないでね』
なのはは、心配だった。
後方の窓からは、楽しげなフェイトの歓声と、ヴィヴィオのはしゃぐ声が聞こえる。
『……』
『昔を思い出しますね』
『……うん』
思えば……今日の行程は、自分がかつて、経験したものと同じ。
自分も、あのようにはしゃいでいただろうか？
――いや、違った。
適当な丼勘定でポンポン買おうとする『彼』を止め、手ごろな値段で済むものに誘導し、意見を交わしながら購入していた。
――やはり、違う。
ヴィヴィオは、なのはとは違う人間なのだ。
『……』
そう思うと、心が軽くなる気がした。
――ごろごろごろ
「うわー!?」「きゃー！」
……
『――少し落ち着きなさい！』
情緒もへったくれも無い。
隊舎へ戻ると、フェイトは、満面の笑みを浮かべたシグナムに首根っこを掴まれて連行されていった。
「……どしたの？」

『……お仕事ですよ』
……変な影響を受けなければいいが。
時刻は、１７：００を回ったところだ。夕飯には、まだ少し早い。
そして。
『……なぜこうなるのでしょうか』
「なのはさん、つぎのページ、つぎのページ！」
……なのはは、膝にヴィヴィオを載せて、本を読んでいた。
最初は、ヴィヴィオが本を読んでいる傍ら、刀の手入れをしていたのだが……
「これ、なんてよむの？」
「これ、どういういみ？」
「これ、どういうこと？」
何かにつけて聞きに来るので、もういっそ一緒に読んでやろう……と思ったらコレである。
今日、立ち寄った本屋で買ってきた、児童書の一冊だった。
ぱら、とページをめくり、朗読する。
『その鳥の身体は、熱い炎で出来ていました。
親鳥も、兄弟も、仲間も、その鳥に近づくことができません。
大人になっても、鳥は、一人ぼっちのままでした。
炎の鳥は、いつか、空に浮かぶ紅い星にあこがれるようになりました。
あの紅い星には、自分の仲間が……火の鳥の仲間がいるはずだ。だから自分は、一人ぼっちじゃない。毎日毎日、紅い星を見上げます。真っ赤に燃えている紅い星は、鳥にとって、一番大事なお友達でした。
ある日、お友達が消えてしまいました。見上げても、そこには真っ黒な空しかありません。
次の日も、次の日も、お友達はいませんでした。雪が降り始め、寒くて寒くて、羽毛が凍えてしまいそうです。
鳥は、お友達を探しに行くことにしました。大きく大きく羽ばたいて、紅い星を目指します。
寒い世界を飛び続け、やがて、紅い星にたどり着きます。

そこは、寂しい星でした。誰もいません。何もありません。炎もほとんど消えてしまっていて、ただ、一握りの炎だけが、寂しく揺れていました。
鳥は、お友達を待ち続けます。
ですが、待てども待てども、お友達は帰ってきません。
吹き付ける風が、最後の炎を消してしまいそうです。
鳥は、自分の身体を、炎にくべてしまいました。
炎の羽毛が、辺りに散らばり、瞬く間に燃え上がります。凍りついた大地も、吹き付ける風も、紅く、紅く、燃え上がります。
そして、紅い星は、よみがえりました。
……読み終えたなのはが視線を落とすと、ヴィヴィオは、なのはの胸元に頭を預け、寝息を立てていた。
ヴィヴィオをベッドに寝かせている間、メッセージを受信した。
『……シャッハ？』
畏まった文体で、日時の指定があった。どうやら、シャッハもまた、誰かからの伝言を預かっていたようだ。内容は……
管理局理事官――カリム・グラシア少将からの、出頭要請だった。

◆▪◆　◆　◆

特段、従う義理も無かったが……カリムは、はやての部隊設立の協力者。無碍にする理由も特にない。
適当に身支度をして、出発しようとしたのだが……
『……？』
何故か、視界の片隅で、ちらちらと……
『ヴィヴィオ。どうかしましたか？』
先ほど、部屋で絵本を読んでいたような気がするのだが……
「……んーん。なんでもない……」
大判の絵本を胸に抱いて、明らかに何でもなくは無い顔だ。
なのはは膝を折り、ヴィヴィオと目線の高さを合わせる。
『先ほども言いましたが、私はお仕事に行かなくてはなりません』
「……うん」

しゅんとした様子で、項垂れながらも返事をするヴィヴィオ。
『何か困ったことがあったら、――――……あ』
途中まで言いかけて……強烈な既視感を覚えた。
――――『お母さんは、お仕事だから――』
（……そうだ。確か、あの時の私も……こんな風に）
幼少時の記憶が、呼び起された。
聡明だったなのはは、聞き分けのいい子として、自分のわがままを、年相応のわがままを押し殺して……
「……うん、だいじょうぶ。ちゃんと、おるすばん……」
『あの……やっぱり、一緒に行きますか？』
「……え？」
きょとん、とするヴィヴィオを前に、かりかりと頬を掻きながら、言う。
『別に、一人で来いとは言われていませんから……あなたさえ、良ければ……一緒に』
「――うんっ！」
ぱぁっと表情を輝かせたヴィヴィオを見て、なのはは、自分の発想が間違いでないことに安堵した。

「わー！　はやい、はやーい!!」
ヘルメット越しに、ヴィヴィオのはしゃぐ声が聞こえる。
『ちゃんと掴まっていてくださいね』
なのはは、ＧＬ１８００の巨体を操りながら、背後を心配していた。
今日に限って、車両もヘリも、すべて出払ってしまっていて……送迎を付けるほどの身分でもないので、私物のバイクで移動するしかなかった。
しかし、結果的には良かったようだ。さすがに、車種は安全重視のクルーザーだが。
時刻を確認する。
『……流石に、このペースでは間に合いませんか』
いつものＣＢＲで一人であれば、鼻歌交じりに余裕の現着をしてい

るだろうが、安全重視のタンデムでは厳しい。
『少し、スピードを上げますよ。ちゃんと掴まっていなさい』
くい、とアクセルを多少開ける。スムーズに加速していく様に、ヴィヴィオは大はしゃぎだ。
現地に到着し、駐車場にバイクを停める。
「あー、たのしかったー！」
癖のついた、自分と同色の髪の毛を整えてやる。
『……ふふ』
なのはにしては、滅多に無いことだが……笑みが零れた。
受付で名を告げると、すぐに通された。
が、部屋の手前まで来ると、職員は困ったような顔でヴィヴィオを見た。
『……』
おそらく、話とはヴィヴィオのことなのだろう。それも、聞かせることが躊躇われるような内容の。
『ヴィヴィオ。ちょっと大事なお話をしてきます。この人と一緒に待てますか？』
「んー……わかった。まってる」
『いい子です。すぐに終わりますからね。帰りは、どこかでご飯を食べていきましょう』
「ほんとっ!?」
『ええ。約束です』
案内してくれた職員に手を引かれながら、何度もこちらを振り向くヴィヴィオを見送る。
「お待ちしていました」
管理局の制服ではなく、修道服のような衣服に身を包んだ女性が、なのはを出迎えた。
「管理局理事官の、カリム・グラシアと申します。以後、お見知りおきを」
『少将どのが、何のご用向きで？』
来客用ソファにどかっと座る。

「お疲れでしょう？　お茶でもいかがです？」
カリムはほほ笑み、用意されていたティーカップに茶を注いだ。が、白磁のティーカップに注がれるのは、実に馴染みのある緑茶。
「リンディ提督から、聞き及んでおります。貴女の出身地域では、ごくポピュラーな飲み物だと」
まぁ、茶の一杯くらい別にいいか……と安心していた矢先、カリムは、流れるような動作で角砂糖を――
『待て待て待てちょっと待て！』
腰を浮かせて暴挙を阻止する。
「はい？　ミルクとお砂糖を入れて飲むのが『ニホン式』だと」
『あーそうだった思い出した。あの人の脳内ジャパンはそういう世界だった』
「巷では『ジャパニーズティー』としてメニューに取り入れている店も……」
『そんなもん真に受けないでください！』
自国の文化が湾曲されて伝わっていた。
『……で、話とは？』
「機動六課で保護された、ヴィヴィオという少女についてです」
やはりか、と納得する。
「あの少女が保護された際、自身のことを『オリヴィエ』と名乗った……というのは、真実でしょうか？」
『……ええ』
確かに、ヴィヴィオは最初、『オリヴィエ』と名乗りかけ、直後に訂正していた。
シャッハがその名に過敏に反応していたから、そこ経由で伝わったのだろう。
『ですが、それが何か？』
「わたしは、管理局少将の身であると同時に、聖王教会の騎士団長を務めております」
だから修道服なのか……と納得だ。
「聖王教会、その信仰対象である『聖王』。絶大な力を以て、大戦を終

結へと導いた英雄。その人物名こそ……『オリヴィエ』であったと言われております」
　ミッド世界では、割と信徒の多い宗教だと記憶している。
『それが、何か？　子供ですから、何らかの物語から影響を受けていたのかもしれませんよ？』
　ヴィヴィオを連れて立ち寄った本屋の児童書コーナーにも、聖王に関するおとぎ話が多く並んでいた。
『名乗ったから……まさか、ヴィヴィオが聖王その人であるとでも？
　さすがに強引すぎるのでは？』
　胡散臭そうに指摘するなのは。しかしカリムは、何らかの確証を掴んでいるようだった。
「――一説に、聖王は、先天性の虹彩異色症であったと伝えられています。わが教会が保管する『聖王の瞳』は、その色を、ルビーとサファイアという形で遺しています」
　ヴィヴィオの特徴的な瞳。翠と、紅。
『……こじつけもいいところですね。珍しくはありますが、唯一絶対のものでは無いでしょうに』
　こんな与太話を聞きに来たわけではない、と退室の準備を始めるなのはを、カリムが止める。
「――あの少女の遺伝子の件です」
『――……！』
　なのはの頭は、一瞬、真っ白になり……直後、真っ赤な怒りに染まった。
「ご安心ください。触り程度のことで、中身まで詳しく伝わったわけではありません」
『……つぐ』
　マリエルや、はやてが言い触らす訳がない。一番、分かっている筈だったのだが、少し恥じ入る。
「あの少女の遺伝子には、かつて教会が所有していた聖遺物……『聖骸布』に付着していたＤＮＡのデータと、一致する部分が多々見られました」

なのはと、『彼』の遺伝子の他、もう一つ。
マリエルは確かに、『「ほぼ」１００パーセント』という表現をしていた。
おそらくは、なのはと、『彼』ではなく……聖王が女性だったということならば、『彼』と聖王の遺伝子の『合の子』のようなものが製造され、それが、なのはのＤＮＤと掛け合わされて、ヴィヴィオは生まれたのだろう。
「およそ１５年前に、厳重に保管されていた聖骸布は、盗み出されてしまったのです。金銭や、宝石、黄金などの高価な装身具などには、一切手を触れず。不可解でしたが……納得しました」
最初から、聖王のＤＮＡが目的だったというわけだ。
「……捜査協力という形ですが、こちらが当時、聖遺物の管理を任されていた枢機卿です」
写真には、何らかの祭典の最中、人のよさそうな禿頭の男性が写っていた。
聖王のＤＮＡを横流しをしたとなれば、一連の事件の犯人とも、何らかの繋がりが持てるかもしれない。
『ちなみに、この人物は？』
「行方不明です。聖骸布が盗み出された晩に、忽然と消えてしまったのです」
『……怪しすぎて、逆に勘繰りたくなってきますね』
全身で『わたしが犯人です』と主張しているようなものだ。そこまで怪しい行動など、そうそう取れるものだろうか？
『まぁ、とりあえずは受け取っておきましょうか』
半ば外部の人物であるなのはに渡したということは、はやてには直接渡したらまずいモノということだろう。
その写真を、懐にしまう寸前……
（――――ん？）
……なのはは、写真に、ありえないものを発見してしまった。が、気取られるとまずい。
再び、写真を懐に仕舞う。

「それと、もう一件。あの少女について、」
『ヴィヴィオ、です』
「――え？」
　なのはは、明らかに不機嫌な顔で、話を遮った。
『あの子には、『ヴィヴィオ』という名前があるのです。モノ扱いされているようで……正直、不快です』
　カリムは、意外な方向に噴出した怒りに戸惑った。
「――それは、失礼しました」
　情報では、ヴィヴィオは機動六課に保護されている少女……というだけだったが、どうやら、違ったようだ。
「現在、ヴィヴィオさんは機動六課で保護、という形となっています。仮預かりのままにしておくよりは、提案という形なのですが……当教会の系列施設で、」
『――論外ですね』
　なのはは、またしても遮った。
「あの、何か誤解をされているようですが、」
『誤解もクソもありません』
「く、クソ……？」
『あなた個人が、百歩譲って、完全な好意でヴィヴィオを迎え入れようとしているとして……周囲は、どうなのですか』
「……」
『聖王の遺伝形質を色濃く残す少女。彼女を教会の施設に入れる。さぁ、これで『保護』という目的だけで納得する者が、どれだけいますか。信仰対象に祀り上げようとする狂信者が、ウジのように沸いて出るのが目に見えています』
　なのはは、刀の鯉口を切り、言い放つ。
『もし、そうした目的で、ヴィヴィオに指一本でも触れたら……――――――

気圧され、発言を撤回した。
『……情報提供、感謝します』
なのはは、今度こそ部屋を出て行った。
――ぱらぱらぱら……
……デスクに置かれていた、古びた木箱が蓋を開け……中身の、これまた古びた紙片が、魔力光を帯びながら浮遊する。
「……」
紙片は、一枚の頁となって、カリムの手に収まる。
「対なる翼、久遠の闇に分かたれし時――
死せる王、悠久の柩より目覚め――
常世の光、永久の影へと消えん――」

◆・◆　◆　◆

『ヴィヴィオ、帰りますよ』
なのはは、待合室にいたヴィヴィオに声をかける。
「……」
が、無反応だ。どうやら、絵本に夢中になっているらしい。苦笑しながら近づいていくと、呼んでいる絵本のタイトルが見えた。
――かなしいおうさま
……なんだ、この不吉なタイトルは……と、近くにいた職員を睨む。
途端に狼狽しだす職員を見て、自分が大層、苛立っていることに気づいた。
どうやら、先ほどのカリムの話を真に受けて、必要以上に神経質になっていたようだ。
(宗教かぶれの言うことなど、気にする価値も無い)
さっさと忘却することにして、今はヴィヴィオとの約束だ。
『ヴィヴィオ』
ぽん、と背を撫でると、はっとしたように顔を上げた。
「あっ……え、もうおわったの？」
『ええ。終わりましたよ』

ヴィヴィオは、絵本と、なのはの顔を見比べる。どうやら、借り物の本を返さなければならないが、続きが気になるようだ。
『こちら、永遠にお借りしても？』
「ど、どうぞ……！」
ありがたく受け取り、さっさと建物を後にする。
本を荷室へと仕舞い、バイクで走り出した。
「ねー、なのはさん。なんの話してたの？」
『つまらないお話でした。もう忘れてしまいましたね』
「そっかー、つまらなかったんだー。……さっきの本、すっごく面白いんだよ！」
『……アレがですか？』
「うんっ！　王さまのお城に、旅のひとがやってきてね、よそのくにの王子さまと、しょうぶを――」
楽しそうに本の内容を伝えてくれるヴィヴィオを連れて、走る。
『どうしますか？　何か、食べてから帰りますか？』
ヴィヴィオは結局、早く続きを読みたいらしく、機動六課への帰宅を望んだ。
まぁ、エドが作るのより美味な食事など、そうそうありはしないので、正解と言えば正解だ。
隊舎に着き、手を繋いで食堂へ行く。
ヴィヴィオくらいの年の子は、ほんの一瞬目を離した隙にどこへ行ってしまうか分からないから……というのが、なのはの言い分なのだが、それだけではないこともまた、明らかだった。
「あー、ようやく終わった……」
と、そこへティアナたちがぞろぞろと連れ立ってやってきた。
今日の訓練を終えたのだろう。
『……今日は、セリカは一緒ではないのですね』
「セリカなら、まだ管制室にいるって言ってましたよ」
『……そうですか』
折角なので、フォワード陣も同席して、食事にすることになった。
「おうチビすけ。どこ行ってきたんだよ？」

エリオが、ヴィヴィオの頭をグリグリとかき回しながら聞いた。
「んっとね、んっとね……えっと……どこだっけ？」
『教会区にある支部ですよ』
「そうそう！　あのね、なのはさんのバイク、すっごいはやいんだよ！
びゅーん、って！」
その後も、興奮気味に今日の出来事を伝えるヴィヴィオ。食堂の皆も、誰一人として迷惑そうな顔をすることも無く、聞いていた。
やがて、エドが作った料理が配膳され、ヴィヴィオが大口を開けてかぶりつく。
『ああ、もう朝も言ったでしょう。一回一回が多すぎます。せめてナプキンでも着けなさいというのに……』
自分の食事をそっちのけでヴィヴィオの世話を焼くなのは。
――つい、こういった言葉が口をついてしまうのは、不可抗力だろう。責められる理由など、ありはしない。『その言葉』が、なのはにとっては、禁句であろうと。
「――――まるで、親子みたいですね」

『……』
かしゃんっ……と、フォークが卓に落ち、軽い音を立てた。
『おや、こ……？』
強張った、なのはの声。しかし、周囲に、その変化に気づく者はおらず……不運なことに、なのはをよく知る人物も、いなかった。
「話のタネになってますよ。もう、どっからどう見ても親子にしか見えない、って」
『……』
なのはの顔が、次第に、青ざめていく。指先が、かたかたと震え出す。
『……おやこ……おや、こ……』
俯いて小声で話す様に、周囲は、なのはが照れているものだと勘違いをする。

『……っ！』
「なのはさん……!?」
真っ青な顔で、苦悶の表情を浮かべるなのはの異常に、唯一、ヴィヴィオだけが気付いていた。なのはは、立ち上がろうとして……
――ガタンッ!!
椅子に躓いて、大きく倒れ込んだ。
「!? なのはさんっ!!」
スバルたちが、慌てて駆け寄る。
『……、い、たい……！　いたい……!!』
なのはは、頭を抱え込むようにして丸くなり、完全に硬直してしまっていた。
「おい、どうした……!?」
食堂に居合わせたほかの隊員たちも、駆け寄ってくる。
しかし、なのはは、まるでひきつけを起こしたような状態のままだ。
『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ！　Ｓｅｌｆ　Ｓｕｐｐｏｒｔ　Ｍｏｄｅ！』
レイジングハートが、人型躯体を構築する。
なのはのポケットから、常用している煙草を取り出す。ガチガチに噛み締められた歯をこじ開け、咥えさせ、着火。ひゅう、ひゅう、と上ずった呼吸と共に、吸引されていく。
強張っていた四肢が弛緩したことで、一応の落ち着きは取り戻したのだが、まだ、安定とは言えない。
介抱するレイジングハートの傍らに、ヴィヴィオが座り込む。
「なのはさん、だいじょうぶ……？」
頭を撫でようとでもしているのか、手を差し出すヴィヴィオ。純粋な好意の現われである。しかし、正常な判断力を失ったなのはは……
――ぱしっ。
……ヴィヴィオの手を、力なく、しかし、払いのけた。
「――……え？」
払いのけられた手を、呆然と押さえ……なのはを、縋るような目で見やる。
『あ……』

なのはもまた、自分の行いに、愕然としたように声を漏らした。
『……ちがう……ちがうんです……ごめんなさい……ごめんなさい……』
弱弱しく、釈明をする。
「な、なのはさん……なのはさん、」
何かの間違いであってほしいと、再び手を伸ばす。
『――来ないでっ!!』
鋭い声に、びくっと身を竦ませる。
『……お願い……今は……私に、近づかないで……』
なのはは、俯いたまま、懇願するように言った。
『……明日には……ちゃんと、いつも通りになるから……だから、いま、は……』
プツン、と、糸が切れたように倒れ込んでしまう。
「……」
手を押さえたまま、呆然と座り込むヴィヴィオ。
「……」
頬を、涙が伝う。
「……？」
不思議そうに、それを拭う。拭う。拭う。
しかし、拭っても、拭っても、涙は止めどなく流れ……やがて、目の前が見えない程に、視界が滲む。涙に浸食されるように……理解を拒んでいた事実が、突きつけられる。
――自分は、拒絶されたのだと。
理解してしまった途端……今度こそ、本当に……嗚咽が漏れだした。
「……っ!!」
ヴィヴィオはただ、涙を流すことしか、できなかった。

◆・◆　◆　◆

「細工は流々……では、イッてみましょう♪」
◆・◆　◆　◆
――ピリリリリリリリリリリッ!!!!
その静寂を引き裂くように、警報が鳴り響く。
「レイジングハート！　なのはさんのこと、任せたわよ！」
ティアナは、判断に迷うフォワード陣を引き連れ、出動の準備へと向かう。
準備もそこそこに、緊急の説明が行われる。
「現在、ミッド首都に向かって、ガジェットが進行しつつあります」
示される図には、四方八方から首都へ迫るアイコンが、無数に表示されていた。
その、かつて無い数にどよめく隊員たち。
「今回の任務は、地上部隊・航空隊との共同任務になります。我々の任務は、……」
地上にも、アイコンが表示される。
「ガジェットを先導していると思われる、敵戦力の進行の阻止、あるいは、撃破です」
ピッ、と新たな画像が表示される。
そこには、迫りくるガジェットを率いるようにしている、少女たち。
「……っ！　コイツら……！」
ウェンディ、セイン……
「コイツも……!!」
ルーテシアと……ガリューの姿まで見える。
「総戦力をぶつけてきやがったのか……？」
かつて無い数。戦力未知数の敵軍。
「――大丈夫ですわ」
ティアナの肩を、セリカが叩いた。
「みなさんなら、きっと大丈夫です！」
その自信満々に言い切る姿に、ティアナはあきれつつも、感謝をし

た。
「……根拠のない励ましをアリガトウ」
「こ、根拠ならありますわよっ!!」
ふくれっ面になるセリカに、皆が笑った。
「――では、解散!」
滑走路に並ぶヘリや車両に、続々と乗り込んでいく隊員たち。
「スバルッ!」
別々の車両となったギンガが、スバルを呼び止めた。
「あっ、ギン姉……え、あ、ちょっ!? なに、ナニ!?」
近くまで来たギンガは、スバルの身体のあちこちを触る。
「……変に強張ってはいないようね」
「だ、大丈夫だって! 心配性だなぁ、もう!」
恥ずかしいやら照れくさいやら、頬を赤らめるスバルに、ギンガは真剣そのものの表情で、言った。
「――大規模な作戦は、混戦になりやすいわ。決して、単独行動はしないこと。必ず、チームの誰かと一緒に行動すること。勝てないと思ったら、退くことも大事な決断よ」
「……ギン姉」
二人が思い浮かべるのは、当然……母の事だろう。クイントは、まさに、こうした大規模な作戦の最中、命を落としたのだから。
「ギンガ、そろそろ行きますよ」
シャッハが呼びに来て、ギンガは最後に、スバルの手をぎゅっと握った。
「……私たち第3班は、フォワードチームの隣の区画に配置される予定よ。いつでも合流できるわ」
「うん! ギン姉が危なくなったら、飛んで助けに行くから!」
「――――、」
まさか助けられる側だとは思わず、呆気にとられた。
シャッハに手を引かれて、車両へ乗りこんでいく。
「――武運を!」
「シャッハさん、ギン姉をよろしく!」

別々の車両に乗り込み……出撃となった。
「……なぁ、コリンよ」
「あぁ？」
こちらは、また別の車両。
操縦を務めるゼルビスが、隣席のコリンにふと尋ねた。
「今回、マジでオレ達だけなんだよな」
「んだよ、今更……シグナムさんは、フェイトさんと航空戦力の駆逐に行ったぜ」
「おぅ……」
お調子者のゼルビスが、いやに低い声で言う。
「オメー、まさかビビッてんのか？」
「……！　ンなわけ、」
激しかけ……しかし、ため息をついた。
「……ああ。正直、ビビってるよ。今度こそ、正真正銘、オレたちだけの任務だ」
思えば、これまでの任務では、行動範囲内にはシグナムの姿があった。それが、自身や安心感につながっていた。
「けどよ、」
ぎゅっとステアリングを握る手に、力が入る。
「ここで、オレらがバシッとカンペキに任務をやり遂げたらよ……少しは、ヒヨッ子返上できるんじゃねぇかと思うと……緊張しちまって」
きょとん、と聞いていたコリンは……げらげらと笑いながら、ゼルビスの肩をバシバシと叩いた。
「バッ……バカヤロウ！　笑うんじゃねえ！」
顔を真っ赤にして怒るゼルビス。
「悪い、悪い……」
デバイスを撫でながら……自信に満ちた顔をするコリン。
「どうせなら、もっと派手に行こうじゃねぇか」
荷室から、ほかのメンバーも顔を覗かせる。

「任務をやり遂げるだけじゃねえ。ガジェットも、敵も、片っ端から、オレら機動六課で、食い止めてやるんだよ」
いつもの……エリオとつるんで、悪巧みをする時と、同じような顔で。
「エリートの皆さんを差し置いて、オレらが大活躍！　してやると、どうだ？　オレらを無能の落ちこぼれ扱いしやがったセンコーだ、スカシ面のジジババ共は赤っ恥だ！
――マジでサイコーにスカッとするじゃん！」
班員たちは、コリンの語った夢想じみた言葉に笑った。
「――っし。んじゃあ、いっちょやってやるかぁ！」
「ついでに特別休暇もゲットして、本局職員たちと合コンだぁ！」
「ヤオは負傷して療養になりそうよね」
「ちょっ……やめてよ！　洒落になんない！」
笑って、笑って……決意も新たに、踏み出した。

「うわー、いっぱいいるねー」
ヘリから身を乗り出すようにして、雲霞の如き飛行ガジェットの群れを眺めるフェイト。
「目的は何だと思う？」
「陽動だろうな」
シグナムとクロノは、入念にデバイスをチェックしながら話し合う。
「カリムの予言があっただろう？　恐らくは、これを機に地上本部の戦力を手薄にして、一挙に攻め入るつもりなのだろう」
「豪華なものだな。航空部隊が３個大隊、地上部隊は２個大隊」
「首都へ攻め入ったのが運の尽き、我らが力を思い知れ……ってな」
皮肉に言い放つクロノ。
「まぁ、民間人保護を最優先にすることに異議は無いさ」
「我々は我々で、王の命を果たすとしようか」

操舵室のヴァイスから、連絡が入る。
『間もなく接敵します』
ヘリが１８０度回頭する。
「では、やるとしようか……レヴァンティン」
『ｊａ』
――バグンッ
ヘリのハッチが開く。丁度、敵の飛行部隊に向かい合う形だ。
『Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ　ｚｗｅｉ』
レヴァンティンが、狙撃弓に変形する。これは確か、シグナムにとっては、奥の手のようなものだった筈なのだが……
怪訝な目をするクロノに、シグナムが言う。
「もう、粗方のデータは敵に渡っているからな。隠す必要もないだろう？」
――キリキリキリ……!!
弓を番え、引き絞る。
「……エクスプロージョン・カートリッジ……ロード」
鏃に、カートリッジの魔力が充填される。
――エクスプロージョン・カートリッジ。
汎用のものではなく、『炸裂させる』ことに特化させた専用カートリッジだ。高密度に圧縮された魔力の破壊力は極めて高いが……破壊力が高い故に、使用には制限があり、起動にも、『炎熱』の魔力変換資質を必要としていることから、ほぼ戦略兵器のような扱いを受ける代物である。
「――翔けよ、飛燕!!」
――――ギュイイイイイイイインッ!!!!!
甲高い弦の音と共に、赤熱する矢が飛翔する。
――ズバババババババババババッ!!
矢が、幾重にも枝分かれを起こし……無数の弾頭となり、ガジェッ

ト群の中心部へ作悦する！

――――――ズガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンッ!!

『……パねぇ』

ヴァイスが呟いた。

「では、俺たちも行くか」

「うん！」

ヘリから飛び出し、ガジェットの掃討へ向かう。

「レーダーが乱れるから気象操作はするなよ」

「えー、アレが一番簡単なのにー……」

ぶつくさ言いながらも、魔力刃を展開する。

「よっしゃー！　かかってこーい！」

――――ピピピッ。

ガジェットの照準が、フェイトを捉える。

「んー……」

――バシュッ！

光弾が発射された時、フェイトは既に、ガジェットの背に取りついていた。

「よけいなおせわかもしれないんだけどさぁ」

――ガギンッ!!

光刃を深く突き入れ、一機を撃破。

「その攻撃の前、きゅいーんっ、て音がするから、発射タイミングがバレバレだよ？」

――ザンッ！　ガギュンッ!!

得意の範囲殲滅を使えずとも、フェイトは、ガジェット如きに後れを取ることは無い。

「……んぇ？」

しかし、遠方……老朽化し、鉄骨だけがむき出しになっているような廃ビルの頂上で、何かの光が瞬き……

――ズゴォオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

「のわぁあああああああああああっ!?」

凄まじい威力の魔力砲が、味方のガジェットをも巻き込みながら、フェイトのマントを掠った。

「あ、あっぶねー!!」

しかし、妙だ。あれだけの大威力。エネルギーを収束している間に、察知することができる筈なのだが……

「……阿呆。データにもあっただろう。敵の攪乱技術だ」

近寄ってきたシグナムが助言する。

「だれがアホだよ!?」

「いいから周囲に注意を払え。死ぬぞ」

――――ズドォオオオオオオンッ!!

「！　……とぉうっ！」

今度は、危なげなく回避に成功する。しかし……

――ドゴォオオオオオオンッ!!

……どこぞの地上部隊の一角に着弾。

バリケードを築き、ガジェットに備えていたその一段は、ただの一撃で撃破されてしまった。

「うっそ!?　発射地点あそこでしょ!?　何であんな場所に届くんだよ!?」

「……これは無かったな」

ガジェットだけならまだしも……感知不可能、軌道予測不可能の大威力砲撃までセットとなると……

「……おもしろいじゃん！」

フェイトは、ニッと笑って、バルディッシュを構えなおした。

◆▪◆　◆　◆

――ガキンッ!!

「ふんふふーん、ふんふふーん」

バレルを交換し、次弾を装填するディエチ。

「何人やったらー、クアットロはほめてくれるかなー……っと！」
――ゴゥンッ！
巨大な砲身を、プラスチックか何かのように軽々と振り回す。
――ズパンッ!!
敵が撃ったと思しき射撃魔法が、遥か彼方の廃ビルへ着弾する。
「あはははは！　ハッズレー！」
――ズドォオオオオオオオオンッ!!
第二射が、地上部隊の一角を消し飛ばした。
「あはははは！」
そしてまた、全く見当違いの方向へ飛んでいく攻撃。
「だーかーら、そっちじゃないんだよー！」
ディエチが腰を据える発射地点の周囲は、鏡のような力場で覆われていた。
クアットロより渡された、新型の装置である。鏡のような力場は、その見た目の通り、対象物の姿を、別の地点に鏡像として投影できる。
「あはははは！　そーれ！」
――ドゴォオオオオオオンッ!!
……それどころか、細かく調整すれば、大威力の砲撃であろうとも、屈折させ、本来であれば在りえない軌道で撃ち出すことも可能だ。
「もういっちょー！」
――ズドォオオオオオオオオンッ!!
「あはは、……あり？」
次の砲撃を撃とうとしたが、どうやら、エネルギーが切れてしまったらしい。
「えーっと……こんなこともあろうかと……あった！」
懐から取り出したのは、古めかしいランプだった。……いや、問題はランプではない。その中で揺れる……漆黒の炎だ。
「えいやっ！」
パリンッ、とランプが割れて……
――ボウッ……
ディエチの身体を、漆黒の炎が取り巻く。

「ん、んー……!!」
苦しむ様子も無く……むしろ、その炎を受け入れる。
「――みなぎってきたー!!」
エネルギー、回復。懐には、同様の装置があと2つもある。
ディエチは、優位を確信し、嬉々として砲撃を乱射するのだった。
◆▪◆　◆　◆

『……』
「おう、起きたか」
目を覚ましたなのはは、覗き込んでくるはやてと目を合わせた。
「気分はどうだ？」
だが、なのはは、返事もせず周囲をきょろきょろと見渡す。
『ヴィヴィオは……』
「フィアットに預けている」
はやても、恐らくだいたいの事情を知ったのだろう。
『……！　そうだ、さっき……!!』
倒れる寸前、警報を聞いた記憶がある。
「あぁ。異常な数のガジェットと……敵の兵士が、ミッド首都に攻め込んできている」
『だったら、なんでこんなトコにいるの!?』
はやては、部隊長だ。こんなところで油を売っている暇など、在るはずが無いというのに。
「指揮はリーゼに任せてある」
『でも、』
身を乗り出すなのは。
「――あんな状態のお前を、放っておけるわけ無いだろ」
とんっ、と肩を押され、ベッドに倒れ込んでしまう。
「……でもまぁ、意識はしっかりしてるようだな。違和感を感じるところは？」
『んっと……』
一通り、体を動かしてみて……異常がないことを確認する。

『大丈夫』
そして、通路に出ると……やはり、人気が無い。
かなりの人員を、現場に割いているのだろう。
敵の狙いは、恐らくは地上本部か……もしくは、他の行政施設。
だが、なのはは、どこか引っかかるものを感じていた。
『……はやて、これを見てほしい』
なのはが、懐から取り出したのは……先日、カリムから預かった写真だ。
「おう。……ん？　おい、何だこれ」
はやても目を剥いた。写っている枢機卿……ではなく、その傍らに付き従う、一人の修道女に。
「日付は……15年前？　いや、しかし……」
修道服のおかげで体型は判別しづらく、被った頭巾も、頭髪の露出を抑えてしまっている。だが、しかし……そこに映っている素顔は、紛れもなく……
「――――――セリカ……なのか？」
……機動六課の新人オペレーター、セリカ・クラウンと、同一のものだった。

◆▪◆　◆　◆

出撃の準備をするなのは。はやてもまた、現場での指揮を執る事が決まったらしく、準備をしていた。
「なのはさ～ん！」
と、格納庫の入り口に、フィアットが現れた。
「……」
――緊張した面持ちの、ヴィヴィオを伴って。
『……』
なのはは、準備の手を止める。

ヴィヴィオを連れてきたのは、フィアットの仕業のようだ。
じりじりと、距離を詰めていく。だが、ヴィヴィオは、いつものように駆け寄って来てはくれない。当然だ……と、なのはは自戒した。
……と、ヴィヴィオが、何かを手に抱えていることに気が付いた。
『……絵本、ですか？』
それは、カリムのところから借りてきた、例の絵本だった。
「……ん」
こくん、と頷いて、なのはの目を見るヴィヴィオ。
「あの……よめない字が、あって……でも、つづき、よみたくて……その……」
『……』
なのはは、ヴィヴィオの目の前にしゃがみ……拒絶されるのも覚悟の上で、手を伸ばした。
「……」
幸いなことに、拒絶はされなかった。
しかし……開いてしまった距離感は、そう簡単には戻らない。
『……』
「……」
『……ヴィヴィオ』
「……はい」
『……この任務が終わって……帰ってきたら……』
――もう一度、話をしましょう。
……その一言を、どうしても、口にすることが出来なかった。
『……！　で、出ます！』
なのはは、逃げるようにバイクに跨り、アクセルを吹かした。
「……大丈夫よ、ヴィヴィオ。なのはさんは、照れ屋さんなだけだからね」
フィアットが、ヴィヴィオを慰めながら、手を引く。それに素直に従いながらも……遠ざかっていくなのはの背中を、見えなくなるまで、見つめていた。

◆・◆　◆　◆

スバルたちフォワードチームは、指定されたポイントで降車し、遊撃に打って出た。
「……来る！」
――ギャゴァァァァァァァァァァァッ!!
異形の二輪車が、地を踏み砕き蹂躙しながら、ティアナを完全に轢き殺す軌道で疾走した。スバルに抱えられ、マッハキャリバーの機動力によって回避する。
――ゴガガガガガッ!!
フルロックターン。
「ハッハァー！　ツインテに赤毛チビ！
いつぞやの借り、利子つけて返すッスよォーーーーー!!」
操縦するのは、ウェンディだ。
「ふん……木端微塵にしてやったのに、また作りやがったわね」
「性懲りもなく……」
「うるさいッス！　リベンジッスよー！」
どうやら、ティアナとエリオは勝手にライバル認定されてしまったらしい。
「出るッスよ、《ツインブレイズ》!!」
――ヴィイイインッ!!
ウェンディの手に、二本の光剣が出現する。
「新武装ッス！　聞いて驚くがいいッス！　これは――！」
「「『なんでも切れる剣』だろ？／でしょ？　」」
「なんでも、……えっ」
瞬時に看破され、出鼻を挫かれた。
「見りゃわかるわよ、そんなもん」
新武装を『そんなもん』扱いされ、ウェンディは釈明のように……
「い――いや、それだけじゃ……それだけじゃなくって!!　この剣は、なんと……！」
「どこまでも伸びるんだろ？」

「どこまでも、――――――、」
……もともと、魔力刃の扱いに関しては、エリオは専門のようなもの。分からない筈もない。
「そ、それと、それとッスね、えーとえーと……！」
「あとアレじゃね？　磁双刀みたいに二本が同期してて、片方を投げても戻ってくるとか」
「ラケルタみたいに繋げてツインサーベルにできるとか」
「実は飛び道具になるとか」
……順を追って開帳して、『まさか、そんな――！』と、二人を驚かせる計画を全て粉々の木端微塵にされたウェンディは……
「――――――うぇえええええん！　おまえら、嫌いッスーーーー!!!」
……破れかぶれのように、切りかかるのだった。

「久しぶりだねぇ、おチビちゃん」
「……？」
一方、ガジェットの上に座るセインは、キャロと対峙していた。
「あたしの『ディープダイバー』を、あんなやり方で攻略されるとは思わなかったよ」
「……？」
「けど、おんなじ手はもう二度と食わないよ。油断も遠慮もしないで……確実に葬っ、」
「……だれだっけ？」
……ビキリと、空気が凍てついた。
「……え？　いや、ホラ……この前、ゲーセンで」
おろおろと、律儀に説明するセイン。
「……そうか」
ぽん、と手を打つ。ほっと安心するセインだったが……
「――ルーテシアを助けに来た、ムキムキマッチョだ」
盛大に勘違いをしていた！
「違うわぁあああああああああああああああああっ!!」

よりにもよって、ゼータと勘違いされたセインがブチ切れる！
「誰が、いつ、あんなガチムチになったよ、ええ!?」
キャロは、腕を組んで考え込み……
「そういえば――ちがうかも」
何かを思い出す。
「だろ!?」
喜色を浮かべるセイン。しかし……
「――仮面をつけてない」
「仮面の有る無しの問題じゃねぇぇぇ

――ズヴィイイイイイイイイイイイイイイッ!!
光線は途切れず……さながらレーザーのように、振り回される！
――ズィイイインッ!!
築いていたバリケードを両断する。
「はっはっは。どーよ!?　後期型機体のために開発された新技術の味は！」
自慢げに力をひけらかすセイン。ウェンディも、既に専用武装でティアナやエリオを翻弄していた。
ここが踏ん張り時。ここを抑えず、どこをやらと、気合も新たに、戦闘へ突入しようとして……

「――ちょっと待って」
……ティアナが、仲間たちを制した。
「エリオ。あの青毛の女、確か、『何にでも潜る』能力で……赤毛は、『何でも速く動かす』能力なのよね？」
「あ、ああ……そうだけど」
「じゃあなんで、さっきから能力を使ってない？」
「……あ!?」
二人をスキャンをしても、異常はない。
だが……
――二人には、『影』が、存在しなかった。
「――！　クソッ！」
突然の舌打ち。踵を返し、呆気にとられる仲間たちへ指示を飛ばす。
「――撤退！　この場から、全力で――!!」
派手な登場も、新武装も、全て――
「――いい勘してるけど、もう遅い」
――ただの囮！
高空より下される宣告。見上げる先……ルーテシアは既に、詠唱を終えていた。

「やれ――――地雷王」
――――ゴズズズズズズンッ……!!
ティアナたちが立つ道路に、激震が走り……
――ボゴォンッ!!
突如、巨大な洞が口を開け、スバルたちを飲み込んだ！
「っ!!」
落ちてゆく中で……ウェンディとセインの姿に、ノイズが走り、消えていく様を見る。
最初から、ホログラム。
あまりにも多数だったガジェットにも、虚像が織り込まれているに違いない。
敵は、まんまと、管理局に過剰な戦力を放出させることを成功させたのだ。
――陽動だと、分かっていた筈なのに。
ティアナは唇を噛み締めながら、確かに、その言葉を聞いた。
「今日は、ウチの勝ちッスよ」
「――――……ちっくしょォおおおおおおおおおおおお!!」
ティアナは……悔しさに、吠えた。

◆・◆　◆　◆

――落ちている。
このままでは、地面に叩きつけられて、良くて重症、悪くて死だ。
「――！　マッハキャリバー！」
『委細承知よ！』
空中で姿勢を整え、心を静める。
「ひっさびさのォ……ウイングロードッ!!」
――ザァァァァァァァァァァッ!!
蒼い絨毯が、ティアナの落下ポイントへ先回りをする。ティアナは、フローターを発動し、最低限の衝撃で着地に成功した。
「あぶない、あぶない……」

『クエー……』
キャロは、フリードを超スピード召喚しており……
「あ、あっぶねー……！」
その嘴の先に、エリオをぶら下げていた。
「このまま上昇……は、無理そうね」
上空に開いた穴は、残っているが……ノコノコ顔を出したら、即座にガジェットに狙い撃ちされてしまうだろう。
「一旦、降下。地下通路を抜けて、再度地上へ戻るわよ！」
「通信は……うん、生きてる！」
幾度となく妨害された結果なのか、このような状況でも問題なく通信が届いた。
『みなさん、ご無事で!?』
セリカの慌ただしい声に従って、地下通路を進めば、地上との連絡口に出られるだろう。
例のクアットロが通信を偽装していないかどうか、念のため符丁で確認し、安全を確かめる。
地下には、敵戦力は無いらしく……拍子抜けするほどスムーズに、進行できた。
その先の、曲がり角に差し掛かり……
『その『T字路』を右へ』
「――え？」
T字路？　いや、それはおかしかった。目の前にあるのは、唯の曲がり角で……
「……」
右手の壁に手を触れる。すると……
――ジジジッ……！
……映し出されていた虚像の壁に、手が潜りこむ！
「――戻、！」
――ズパァンッ!!
……壁を突き抜けてきた光弾が、ティアナの側頭部を直撃した。
「――、」

音も無く倒れるティアナ。
「ティアッ!!?」
「……かべのむこう！　フリード！」
『グァァァァァッ!!』
――ボゴォッ!!
偽装された壁ごと、フリードの火焔が焼き払う！
しかし……
「……だめ、もういない」
既に、射手は脱出した後だった。
「――くっそ……！」
迂闊であった。敵の姿が無かった事に油断し、敵の偽装を見抜けなかった。
しかも、その偽装の手段というのが、よりにもよって……
「……ティアと同じ、幻術」
魔力探査に引っかかりづらい、幻術魔法だった。使い手は、少数とはいえ、ティアナ一人だけではないというのに。
「……！　セリカ！　ティアが負傷した！」
『状況は!?』
「狙撃されてる！　でも、探査には引っかからない！」
……と、スバルの肩に、フリードが乗った。
「……？　フリード、どうしたの？」
フリードは、まるで置物のように、じっと佇み……
（……あれ？　何でフリード、小さく……）
「――スバル！　ちがう！」
キャロの一声に振り向くと、そこには召喚されたフリードが在った。
「……！」
ぱきりと、偽のフリードの身体に亀裂が入り……
――ドゴンッ!!
炸裂。
「がぁ……っ！　あ、……！」

至近距離での炸裂の衝撃波を喰らい、よろめくスバル。
生身の人間ではないことが幸いした。軽い脳震盪程度で済んだらしい。
「う、ぐっ……!! これも、幻術……!?」
狙撃手と思わせての、この一撃。
しかも、今の衝撃で、鼓膜こそ破れなかったものの、聴覚が一時的に停止したらしい。
キャロやエリオが何を言っているのかがわからない。
――ズパァンッ!!
音ではない。空気の破裂する衝撃波を察知し、倒れ込むように回避する。
「うぐっ……!!」
何とか立ち上がる。しかし、またしても敵の気配は忽然と消えてしまった。
「うぅっ……!!」
ティアナが、キャロのヒーリングを受け、どうにか意識を取り戻した。
しかし、センサーには、仲間のもの以外の反応は示されない。ひとまずは、キャロの張った防御結界に退避する。幸いにも、敵の攻撃力は、それほど高くは無いらしい。
……とはいえ、ああも見事にヘッドショットを決める敵だ。殺傷設定など使われていたら、自分はあの瞬間、死んでいた。
その事実に、今更ながら震えが走る。
「――! くそっ! 不甲斐ないわね……!」
しかし、こうも短時間で回復できたのは僥倖だ。
「スバル、闇雲に動くな。センサー類、全てカット」
「……うん!」
落ち着きを取り戻す。
そうだ。いくらセンサーに反応しないとはいっても、存在しないわけじゃない。
「(――落ち着け。こういう場合の対処も、なのはさんは、ちゃんと教

えてくれた）」
エリオと目配せをする。
「――……ふー」
探知も、セリカからのバックアップも、自身の念話さえも切断し目を閉じ、ただ、己の４感のみで、気配を探る。
「（見えざる敵に相対せし時……）」
「（……全身を目として探るべし）」
安易にセンサーや視界に頼るのは、敵の思う壺。
神経を研ぎ澄まし……僅かな変化を、感じ取る。
外界の雑音を、完全に遮断し……自身の心音のみとなった世界。
どくん、どくんという規則正しい音。そこへ割り込む雑音のみ、感じ取るのだ。
時間が延長されているような感覚。途切れそうになる集中。
『――これを、最低でも作戦行動中に持続できるようになれば、まぁ一人前でしょうね』
なのはが言っていた理由が、やっと分かった。
――こんな極限状態、５分も持続させるだけで精いっぱいだ。
それを、なのはは平然と長時間持続させられるのだ。改めて、驚愕する。
その、永遠とも思える瞬間が、終わる。

――コツッ……

「――！　そこだァあっ!!」
エリオは、全身の発条を一気に伸縮させ、ストラーダを投擲！
「うおりゃあああああっ!!」
マッハキャリバーの推進力を解放し、スバルが突進する！
二人の攻撃は……壁にしか見えない空間を透過し……！
――ズゴシャァアアアアアアアアッ!!!
その向こう、潜んでいた敵を、強烈に打ち据えた!!
「……」

吹き飛ばされ……否、後方へ跳び、衝撃を殺したらしい。だが……

「――そこっ!!」

ティアナの弾丸が通るまでは、隙が出来る!!

――パカァンッ!!

直撃はせず……敵兵の装着していた、『γ』と刻印の入った仮面を、破壊する終わった。

「くそっ、浅かったか！　――!?!!」

千載一遇の好機を逃した。いや――それどころでは、無い。

「……」

「ティア。……ティアってば!!」

仲間たちからの呼びかけにも、反応できず……ガンマの素顔を、凝視する。

「――――――

◆・◆　◆　◆

「ここッスか？」
「ああ、間違いない」
「てっとり早くブッ壊しちゃわない？」
　虚像ではなく実体のウェンディ、セイン、ディエチは、無人となった機動六課の隊舎を抜け……中庭。特別棟の前に立っていた。
「スマートに行くべきだよ。……ＩＳ《ディープダイバー》」
　セインとくっつくようにして、特別棟へ侵入した。
　途端、襲ってくる違和感。
「……忌避結界ッスね」
　忌避結界。本能的に、その場に対する嫌悪感を呼び起こす、不可視の結界。
　これが、常時発動しているのが、特別棟の特徴だった。
「装置基部はどこッスかね？」
「んー……」
　セインが、辺りを見回す。
「地下だね。ディエチ」
「あいあいさー!!」
　セインが指示したポイントへ、ディエチが砲を向ける。そして……
　――ズゴォオオオンッ!!
　……装置基部を、ピンポイントで狙撃した。
「あーて、装置は破壊したし、さっさと目標を確保して、――」
　と、廊下の奥から……何者かが、歩み出てきた。
「――……」
　……それは、薄汚れた白衣を着た、小柄な少年にも見える人物だった。くすんだ金髪は、天然なのか無精なのか、くるっとカールし、黒縁の丸メガネが内気そうな印象を与える。
「お、誰ッスかね」
「さぁ……？　何かの技術スタッフじゃないの？」
「よわっちそー」
　好き好きに言い合う三人。脅威度は低い、と判断したようだ。

少年は、雷に打たれたかのように、三人の方を凝視したまま、硬直していた。
「あら、ブルっちゃって、
「――――ロボっ娘」
「――――は？」
……ボソリと、何やら意味不明の呟きを漏らす少年。
「ろ、ロボっ娘……！　まさに、ロボっ娘……!!」
ちゅいいいん……と、どうやらデバイスだったらしい眼鏡が輝く。
「――!!　た、タンパク質の肉体に、軽金属フレーム……!?　リンカーコア……いや、小型動力炉!!　心臓は……ある！　人体と、機甲化技術の、ハイブリッド……だとォ!?」
――――!!
「こ、このガキ――！」
「わたしらの身体を、解析……!?」
ばばっ……！　と、身構える三人。
「ロボ……否、温かみのある無機物ッ!?
うォおオオオ

――むくり。
生きていた!!
「ひィいいいいいっ!!!!」
「クハハハハ!!　我がロボ愛の前にそのような砲撃など雨粒ほどにも感じぬッ!!」
カサカサカサ……と、黒いあんちくしょうにソックリの動きで、三人に這い寄る!!
「大人しくボクの……ケイ・M・オーターのコレクションに加われぇぇぇぇぇいッ!!!」

――――――――気持ち悪い!!

……三人の心は、今、一つになった。
「ぎゃー!　ぎゃーーーー!!　ギャーーーーー!!」
――ベキバコボコバキバキ!
加速能力で百烈拳を打ち込み。
「来るな、来るなぁぁぁぁぁ!!」
――ズバババババッ!
レイストームの光線を雨あられと浴びせ。
「やだっ!　やだぁぁぁぁっ!　クアットロ、助けて!　クアットローーーーーーー!!」
――ゴンッ!　ゴンッ!!　ゴンッ!!!
ディエチは泣き叫びながら、砲身でケイを殴打した。

――――――……5分後。
「ロ、ロボ、こォおおおおおおお……!!」
……黒焦げ肉団子となったケイが、ようやく力尽きた。
「はー……!　はー……!!　な、何だったんスか、こいつは……!!」
恐怖に戦くウェンディ。
「ほーら、怖くなーい、怖くなーい……」
「ひっぐ、ひっぐ……!!」

セインに慰められるディエチ。
「とにかく、移動するッスよ……！」
……倒れ伏したケイの半径５メートルには、決して入らず……任務を遂行する三人。
「とっとと目標の……ええと、『マリエル・アテンザ』を確保するよ！」
この三人、任務はどうやら、マリエルの拉致であるらしい。
――。
「……今、何か聞こえたッスか？」
「あー……うん。聞こえたね」
「……はなうた、みたい」

――ふんふんふふーん、ふんふんふーん。

そして……
「お、おおお……何ッスか、この、得も言われぬ芳しい香りは……！」
「なんて、美味しそうな匂い……！」
「おなかすいた……！」
……三人は、匂いにつられ、食堂らしき場所へと誘導されていった。

「はぐっ、はぐっ」
「もぐっ、もぐっ」
「はふっ、はふっ」
……三人は、テーブル一杯に広げられた料理を、口に、胃に詰め込んでいた。

――美味しい!!

……三人の頭にあるのは、その感情のみである。
「うまい……うまいッスーー!!」
「こっちも……あれも、これも、ウマーイ!!」
「おかわり、いっぱい……！　おいしい、しあわせー!!」

『――――何をやってるのアナタ達はぁあああああっ!!』

「「「「 はっ!? 」」」」

通信で飛んできたクアットロの叱声に、ようやく我に返った。

「こ、これは一体……!?」

『バカやってないで、いいからそのメシを置きなさい!!』

ウェンディは、両手に持ったチキンを、苦渋の表情でテーブルに置こうとして……

「わ、わかってるッス……わかってるんス!! でも、でも……ウマー!!」

……我慢できず、かぶりついた。

『セイン、ディエチちゃん! ウェンディの阿呆をなんとかしてー!』

「わ、わかった……コレ食べてから……!! モグモグ」

「あと一口……あと一口だけ食べてから……!! ムシャムシャ」

美味い。しかし、任務が。しかい、美味い。が、任務が……

――――飯か、任務か。飯か、任務か……

「うっ……うォおおおおおおおお!!!!」

「ク、クアットロが呼んでるゥうううううう……!!」

……セインとディエチは、鋼の精神力で、エドの料理から逃れることに成功した。

『何なの一体コレはーーー!?』

ヒステリーを起こすクアットロ。

「――――吾輩の料理は、美味い」

鼻歌がぴたりと止み……機動六課・料理長――エド・ダッジラムが、言葉を口にした。

「吾輩の料理は、美味い。……美味くて、美味くて……あまりの美味さに、満腹中枢が麻痺し、無限に美味を甘受したいと、本能が欲する程に!!」

――エド・ダッジラム。
彼のもといた部隊は、末端はおろか部隊長までもが職務を放棄し、２４時間、食堂から一歩も出られず……排泄物さえも垂れ流しながら、エドの料理を恍惚の表情で頬張っていたという。
対ＢＣ兵器装備に身を固めた特殊部隊に救出された際、隊員たちは、重度の肥満と成人病を患っており、今も闘病生活を送っている……
「――故に、全力での調理を、部隊長に禁じられていた……神聖なる厨房で歌いたくもない鼻歌を歌い、目の前の食材から目を背け、遊びながらの調理……!!　屈辱……!　なんたる屈辱……!!　しかァしッ!!」
――ダンッ!!
テーブルに、新たな料理が補充され……セインは、狂ったように頬張り始めた。
「――部隊長は仰った！　外部からの侵入者……『お客様』に限り、全力調理を解禁する、と!!　嗚呼、料理人冥利に尽きるとはまさにこのことッ……!!」
――ゴゴゴゴゴゴッ……!!
エドの背中から、千手観音のオーラが立ち上る！
「フォオオオオオ……!!　今、解放せん……我が秘奥義!!」
――４２本の腕に黄金に光り輝く調理器具を携え……１０００品の料理を以て救いを成す、食の守護神!!!
「固有結界……『この世全ての食卓（いらっしゃいませお客様）』ァあああああああ

……既に故人扱いであった。

◆▪◆　◆　◆

大破した車両を背に、ギンガ、シャッハは、第3班を壊滅させた、恐るべき敵と対峙していた。

「――――……」

顔は、『θ』と刻まれた仮面に隠しているが、体型からして女だ。

「ったぁ……！　シャッハ、動ける……？」

「……無事です。ですが、」

地雷王の広範囲攻撃は、スバルたちだけではなく、隣接していたギンガたちのいたエリアまでも崩落させていた。

車両ごと落下した結果、隊員たちは咄嗟に、車両へフローターを発動し……その隙に、壁面から飛び出してきたこの女に、撃破されてしまった。

ギンガとシャッハのみ、シータの一撃を防御できたのだが……

「素手、よね……」

「ええ、恐らくは……」

ギンガの、左のリボルバーナックル。シャッハのトンファー。　共に、強度には定評のあるベルカのアームドデバイス。そのデバイスの一角が、抉られ、削り取られていた。

見たところ、外部武装は装着していないが……

「解析しようにも、デバイスが無いんじゃ仕方がないわ」

「本当、そこは互いの弱点ですね」

ギンガ、シャッハ、共に、アームドデバイスの機能は、『収納・展開』のみであり、ＡＩも積んでいなければ、術式も最低限だ。

「まぁ、関係ないわね」

ジャリッ……と、地面を踏みしめ、突撃の構えを取る。

「やることなんて、たった一つ……」

――ダンッ!!

「殴り倒して、制圧するだけよ――!!」

「――」
ギンガの突撃。対するシータは、軽く腕を上げ半身になり……アーツの基本の構えを取った。
「だぁあああっ!!」
「せァあああっ!!」
シャッハも、波状攻撃を仕掛けた。
ギンガの拳に、シャッハのトンファーによる挟撃。だが、シータは……
――パンッ!!
……シャッハのトンファーを、膝と肘で挟み潰し。
――ガシィンッ!!
ギンガのリボルバーナックルを、掌で受け止めた!!
「――ッぐ!?」
回避、防御……あるいは反撃を予想していた二人は、面食らう。
いくらなんでも、ただ受け止めた、とは考え難い。
シャッハのトンファーの側面……その最も有効な作用点を膝と肘で抑え、シャッハそのものを、ギンガの拳を受け止める支えとしたのだろう。
純粋な、しかし、研ぎ澄まされた体術の成せる業だ。
「でも――失策ね!」
だがこれは、ギンガの目論見だった。
シータは、攻撃を見事なまでに受け止めて見せたが……裏を返せば、二人に『捕まっている』状態だ。
「――ロード!」
――ガキィンッッ!!
ギンガは、カートリッジをロード。瞬間的に得られた魔力を、至近距離からシータにブチ込む算段だ。
――ギャリリリリリッ!!
タービンが火花を上げて回転する。
「――……」
――チュイィィィィィンッ……

シータの装着した、細身の手甲。その甲部に据えられている小ぶりな金属球が振動する。
「――――ソニックバスター」
――――――――――――……ヂィイイイイイイイイイインッ!!!
「なっ……!?」
「こ、これは……!!?」
ギンガのリボルバーナックル、そして、シャッハのトンファーに、金属球からの、猛烈な振動が伝播する!!
――――バキィイイイイイイイインッ!!!
そして、砕ける!!
「――――……!」
タービンが破損。トンファーに至っては、片方が真っ二つだ。
――ドズンッ!!
その隙を見逃さず、シータの拳が、蹴りが、二人に突き刺さる!
「ぐはっ……!!」
……何と重い一撃か。
「……! でも、見切ったわよ、その技!」
ミッド式で言うところの、『ブレイクインパルス』だ。接触した対象に、強烈な振動波を流し込み、破壊する。しかし、『接触しなければならない』という条件があるおかげで、ミッド式の魔導師たちからは敬遠されている。かといって、ベルカ式はどうかというと、打撃は『瞬間』の接触でしかない故に、組みつかなければ効果を発揮できないという、どの系統に関しても、扱いづらい術式だ。
「正体が分かれば、こっちのものよ!!」
――パキィイイイインッ!!
デバイスの応急修復を完了させ、再度構える。
「いっくわよぉ!!」
「待って、ギンガ!」
「お、おお――!? ちょっと、何よ!?」
が、シャッハが、飛び込んでいこうとするギンガを止めた。

「――私が探る。ギンガ、フォローお願い！」
「え!?　ちょっと、シャッハ！」
今度は、シャッハが前衛。
「……!!」
打ち下ろす！
――ガキキキィンッ!!
接触は最低限に、手数を稼ぐ!!
「――……」
シータは、トンファーを捕獲しようと……
――ドシンッ!!
が、ギンガの拳を阻むことを優先。
「はァあああああっ!!」
ここで、シャッハはさらに手数を増やし、ギンガと共に、シータを潰しにかかる！
「――。」
しかし、シータはまるで機械のように、淡々と防御動作を行う。
「――……！　何で、通らない……!?」
「一発も……!!?」
シータが行っているのは、何も奇抜な動作でも何でもない。むしろ、入門したその日に倣うような、基本の構え。基本の防御。基本の攻撃。ただ、それだけだ。
――だが、通らない。
無理な動きは何もない。一撃ずつを、正確に捌いていく。
「こんのぉおおおおっ!!」
「ギンガ！　熱くなりすぎないで！」
「わかってる!!　くそっ、こいつ……!!」
――『基本』っていうのはね、突き詰めれば、『究極』の型なのよ。
「……！」
ギンガの脳裏に、その言葉がよぎった。
「――違うっ!!」
あの日々の言葉が……こんなテロリストを肯定している筈が無い。

「違う、違う、違う……!!」
「ギンガ?!」
がむしゃらに飛び出したギンガに、ぎょっとする。
「お前が、」
――ガシンッ……
……内部機構を解放。
「お前なんかが……!!」
――ギャリッ……ギャリギャリギャリッ!!!
ギンガ貫き手に揃えた手首が、人体の構造を無視し、高速回転を始める！
「――母さんの言葉を体現するなァあああああああアアアアアアアッッ!!」
殺害も厭わない禁断の奥の手が……シータの顔面を狙う!!
「――――――『母さん?』」
シータは、ぽつりと呟いた。そして……
――すぱんっ。
――と、軽い音を立てて。

――――――――――ギンガの左手首が、消えた。

くるくる、くるくると。
「――――――あ、」
宙を飛び。
「あ、あ……!!」
――べしゃっ。
……目の前に、落下する。己の、手首だったもの。
「――――――あ、ああああああ

あああああああ

視する。
「――――、」
シータは、ブレードを収納し……つかつかと、歩いてくる。
――――姉、ギン姉……!!
聞き慣れた声が、近づいてくる。
「ス、バル……!」
ギンガが、我に返った。
待ちに待った、救援だ。激痛を発する手首を押さえつけ……声を張り上げる。
「――――スバル!! 来ては駄目!!」

◆・◆　◆　◆

「ギン姉……シャッハさん……!!」
スバルは、マッハキャリバーを猛烈に稼働させながら、３班が配置されていたであろうエリアへ向け、地下道を爆走していた。
「バカスバル!! 突っ走るなっつってんでしょ!?」
後を追うティアナたちは、フリードの背に乗り、追う。
しかし、フリードがいかに飛翔速度に秀でていようとも、やはり閉所では思うように速度が出せず……スバルの独走を、許してしまっていた。
エリオ単体であれば、追走も可能だが……それ以上に、危惧することがあった。
「デルタ、ゼータ……」
おそらくは、コードネームだろうが……決して、彼らだけではない。他にも、同様の強者が敵の配下についている。
ティアナとキャロ、二人だけにした瞬間、未知の戦力に襲撃されたら……と、離れることが出来ないでいた。
――――そして、事実。

『――担い手よ!!』
「――ああ！」
凄まじい圧力が、後方に降り立った！
「――――……」
『ζ』と刻まれた仮面を装着した、筋骨隆々の偉丈夫。
未知の戦力ではなかったが……それでも、勝てるかどうか。
「……!!　先に行け!!」
「エリオくん!?」
「止まるな！　行け!!」
フリードを止めようとするキャロだったが、エリオの指示に従った。
「コイツの手の内は、多分……だいたい知ってる!!」
苦渋に満ちた表情で、その場に一人残る。
「――――……」
無言で、槍を構えるゼータ。
「……いつまで、だんまり決め込んでるつもりだよ」
同じく、構えを取るエリオ。
――二人の構えは、鏡写しのように、同じものだった。
「――!!」
先に仕掛けたのは、エリオだった。
「らァあああああっ!!」
――ガキィイイインッ!!
エリオの槍を、軽く受け止め……返礼の一撃。
――ヴォンッ!!
魔力刃が宙を薙ぐ。エリオは、身長差を利用し、屈んで回避した。
「せァあああああっ!!」
そして……足元から、掬うような一撃。
「――……」
ゼータは、手甲で受ける。
――ブンッ!!
胴体狙いの、刺突。

しかし、エリオはそれを回避する。
――ガシィッ!!
エリオの柄による一撃を、掴み止めた。
「……!!」
――バリバリバリバリッッ!!!
柄を通しての電撃が、ゼータの身体を直撃……否。
「――……」
手甲の掌は、絶縁体で覆われていた。電撃は……通らない。
「考えてあるっての!!」
エリオは、空になった左手に魔力を集中。
――ズバンッ!!!
ゼータの胴体へ、魔力の衝撃波を叩きこむ！
「――……」
ストラーダを解放し、後退するゼータ。
しかし、ダメージなどまるで受けていないかのように、再び構えを取る。
「――」
「はっ……はっ……！」
しかし、エリオは何故……こうも、実力差のあるゼータを相手に、食い下がれるのか。
「クソッ……クソッ、クソッたれがっ……!!」
善戦しているはずのエリオが、毒づいた。
「――何で、否定してくれないっ!?
得意げに正体分かった風になってるオレが、馬鹿だったみたいに、否定してくれよッ!!」
ゼータは、ただ槍を構える。無言で……ただ、無言で。
「なぁ！　違うんだろ!?　もう、死んだはずだろ!?　違うって……違うって、言えよ!!　言ってくれよ!!」
「――……」
――ヴォンッ!!
ゼータの一撃。エリオであれば、回避できる一撃。しかし……

「おぉおおおおっ!!」
『担い手!?』
エリオは、避けなかった。
――ガシィイイイッ!!
バリアジャケットの一点に、魔力を収束し、魔力刃を直接受け止める!
「――――アグ……!!」
衝撃に呻きながらも……ゼータの槍を、捕獲する!!
「……スト、ラーダァあああああああああっ!!」
『!』
――ザシュンッ!!
エリオの意思に応じ、鋭く伸長した魔力刃が、ゼータの仮面を真っ二つに切り裂いた!!
「ぜー……ぜー……!! い、痛ってぇ……!!」
しかし……ダメージの代償は。
――カランッ……
仮面の残骸が、転がる。
「――――!!」
エリオは……半ば予想していたとはいえ、驚愕した。
『担い手、……担い手?』
ストラーダの声も、耳に入らない。
「――何で、アンタなんだよ……」
最悪の予想が的中した悔しさに、嘆く。
「――何でアンタが、『そっち側』にいるんだよ……!!」
固い髪質。厳つい顔。頬に入った古傷も。その全てが……エリオの知る物だった。
「――――ゼスト・グランガイツ……!!」
かつての師は……感情の無い瞳で、エリオを見下ろしていた。

◆・◆　◆　◆

ギンガの元へ急ぐスバル。
幸いにも、同中にガジェットはおらず……最短距離を疾走することが出来た。
『……』
日頃は厳しいマッハキャリバーも、今はスバルのしたいようにさせていた。
崩れた瓦礫の山が、道を塞ぐ。
「――邪魔だァあああああっ!!」
――バゴォオンッ!!
蹴散らし、進む！
「ギン姉……！」
間もなく、３班のいたエリアだ。
「ギン姉ぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
「――スバル!!」
聞こえた！
「今行くから、」
目の前には、最後の壁。
「――来ては駄目!!」

――……その声は、スバルが壁を破壊する轟音にかき消され、届かなかった。

「――――」
スバルは最初、その光景の意味が、理解することが出来なかった。
「スバル……駄目……」
大量に出血し、ボロボロになったギンガ。
「……」
限界まで粘ったのだろう。シータに掴み上げられ、だらりと弛緩し

たシャツハ。
大事な人が、ボロボロに踏み躙られた姿に、スバルは……!
「――お前ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!!!!!」
何の躊躇いもなく、瞳を黄金色に輝かせ……
「――っ!!!!」
背を向けるシータに突貫……
「――……」
……できなかった。いや、出来る筈も無かった。
「――」
――スバルは、その顔を知っていた。
――姉に引き継がれた髪色も。
――己に引き継がれた碧眼も。
――意志の強さを感じさせる太い眉も。
――全て、知っているものだった。
――敵兵……テロリストであるはずのシータは。
「――母さん?」
……クイント・ナカジマ。その人だったのだ。

◆・◆　◆　◆

――時同じくして、機動六課。
喧騒に包まれる管制室。各オペレーターは、受け持ちの班へ指示を飛ばし、刻一刻と変化する戦況を観測する。
「……」
セリカ・クラウンも、その中の一人だった。
「3班、交信途絶!!」
フォワードチームへ、救援の指示を……

――ザザザザッ……

「……!!　来やがりましたわね!!」

即座に、対ハッキング用のプログラムを走らせる。

「敵端末への逆探知を!!」

臨時で司令を務めるリーゼが、指示を出す。オペレーター、観測班たちは、班への指示を一時遮断した。これで、現場の隊員たちへも意図が伝わったはずだ。

「今まで、さんざんコケにしてくれた報い……今こそ受けてもらいますわよ!!」

ホログラフキーを、高速で叩くオペレーター達。

「……!」

……セリカのみ、他のオペレーターとは異なる動作を行う。この、管制室の内部に、逆探知を仕掛けたのだ。

――この中に、スパイがいる。

……それは、フォワードチームから得られた、有力な情報だった。

（みつからない筈ですわ。いくら『外』を探したって……『中』にいる敵なんて、分かりっこありませんもの！）

今こそ、敵に通じていたスパイを炙り出して……

――……バツンッ。

――管制室の全電源が、落ちた。

「――え？」

セリカは、己の手元を見て、間抜けに声を漏らした。

「――わたくし、何を」

唯一、本体電源のみで稼働している、己の端末。その画面には、組んだ覚えのない……しかし、己の痕跡が残るプログラム。

「――全システム・隔壁装置・警報装置……停止」

セリカは、そのプログラムの起動を承認していた。
「え……？　え……？」
己の手を見つめる。
「――――わたくし、は」
自分は今、何をやったというのだ……？
――――ゴゴォオンッ!!
次の瞬間。隊舎に、激震が走った。
「――!!　総員、現管制室を放棄!!『艦橋』へ移動せよ!!」
リーゼの指示に従い、駆け出す。
――――ジッ
……セリカの思考に、ノイズが走る。
「あ――」
――ジ、ジジジッ……!
「あぅっ……!!」
痛みは無い。しかし……己の存在が希薄になっていく感覚に、セリカは、恐怖を覚えた。
「わたくしは……わたくしは……!!」
脳裏に、記憶が浮かぶ。

――――交わした、他愛のない会話。
――――機動六課へやってきた日。
――――訓練校での日々。
――――スバル、ティアナとの出会い。
――――訓練校への入校。
ログを読み返すように、記憶を遡っていく。だが……
「……どこから、やってきたというの……？」
――――――――……訓練校への入校。それ以前の記憶が……どうしても、思い出せなかった。
「――!!　そ、そんなはず……!　わたくしは、クラウン家の娘で……お父様と、お母様が……」
記憶の中を探しても……それは、『知識』としてしか、見当たらない。

「お父様……お母様……!!」
両親の顔が……思い出せくなっていた。
「――それはそうさ。偽の記憶なんだから」
へたりこんでいたセリカの耳に、聞き覚えのある声が届いた。
「――!!!」
この、気障ったらしい声は……
「お兄様……!?」
「やぁ、久しいね」
……キーア・ソナタ執務官。
デイリン中将の腹心にして……セリカの、兄。
だがそこで、セリカは、その違和感を感じた。
(なぜ、……お父様とお母様の顔が思い出せないのに……この男のことを、こうもはっきりと……!?)
父、母のことは、思い出せない。だというのに……なぜ、この『兄』のことだけは。
「それはそうさ。だって……キミにその記憶を植え付けたのは、この僕だからね」
「記憶を……?」
キーアは、道化師のバトンのようなデバイスを掲げ……
「――『傀儡よ、追憶せよ』」
……コマンドを、告げた。途端……
――端末を操作している自分。
――敵のハッキングの痕跡を、根こそぎ消去している自分。
――暗号通信を、いずこかへ送る自分。
「……嘘」
覚えにない……しかし、はっきりとした記憶が、蘇ってきた。
「嘘、嘘……そんなの、嘘ですわッ!!」
「いや、嘘じゃない。
――君が、スパイだったんだよ」

……身内に潜りこんだ、獅子身中の虫。必ず見つけ出してやると。
「――――」
――セリカ自身だったのだ。
「さらに、種明かしをすると、だ。クラウン家は、我々のパトロンで協力者。当然、君との血縁なんてものはありはしない」
こつ、こつと……高級ブランドの革靴が、床を蹴る。
「訓練校への入校も……スバル・ナカジマ。ティアナ・ランスターとの出会いと、衝突と、和解も……機動六課への推薦も」
とん、と、気安くセリカの肩に手を置く。
「――――みーんな、僕が用意したシナリオだったのさ」
「――――」
すべてが、嘘だったと知り……抜け殻のようになってしまった。
「さて、そろそろ、本来の君に立ち返ってもらおうか？」
びくりと、セリカの肩が震える。
「い、嫌……！　嫌、嫌ぁ……!!」
蹲り、涙を流し……これから起こる事を、否定する。
――ジジ、ジジジッ……!!
ノイズが走る。
「ティアナさん……！」
生意気な友達の顔が、記憶から消えた。
「スバルさん……！」
無鉄砲な友達の顔が、記憶から消えた。
「エリオさん、キャロさん……教官……部隊長……！」
機動六課での仲間たちの顔が、記憶から消えた。
「シエラさん……！」
悪友の顔が、記憶から消えた。
――消える。
――己の築いてきた時間が。

――己の存在が。
「――――」
アイデンティティを喪失した彼女の耳に……キーアの声が、不思議とよく届いた。
「君の、ここでの役目は、もう終わったんだよ。
――戦闘機人Ｎｏ．２……ドゥーエ」

◆▪◆　◆　◆
――ズシンッ!!
「……!!」
隊舎に衝撃が走り……自室で待機していたヴィヴィオは、ビクッ、と身を竦ませた。
「なに……？」
――バンッ！
「ヴィヴィオ！」
……と、扉が開く。再度身を竦ませたヴィヴィオの目の前に転がり出てきたのは、慌てふためいたフィアットだった。
「ど、どうしたの、フィアット……？」
「敵襲です！　シェルターに逃げますよ!!」
「!!」
敵襲。ヴィヴィオは、体を強張らせた。
フィアットは、やや強引にヴィヴィオの手を引いた。
部屋を出て、他の非戦闘員たちと共に、非難する。
――どこに潜んでいたのか……
――大量のガジェットが……
――警報も、隔壁も停止させられてて……
聞こえてくるのは、そんな不吉な会話ばかり。
「くそっ……地上本部でも、行政施設でもなくて……機動六課を、狙い撃ちにするなんて……!!」
はやてですら、まさか、こう来るとは考えてはいなかった。

あれだけの戦力を投入し。これだけの念入りな手回しを行い。
――狙いは、機動六課『のみ』。
先ほど、ミッド首都上空のガジェット部隊……その大部分が『消失』したとの報告があった。ガジェット部隊そのものも、大半が虚像に過ぎなかったのだ。
そして……首都を襲撃するはずだったガジェットの大群は、一直線に、機動六課へと向かってきている。
「ありえないでしょう……！　たかが1部隊ですよ……!?」
緊迫した状況に、ヴィヴィオはすっかり萎縮してしまっていた。
だが、どこか、安心感が漂っていることも、また事実。なぜなら……
「――――――。」
機動六課の正門。敵襲撃部隊の進行方向真正面に、ヴィータがいるからだ。
なのはより、僅かに低い身長。未だ成長の余地を多く残す体躯。
しかし……戦装束に身を包み、鉄槌を携えるその姿は、雄々しく、頼もしく……隊員たちの行動を統制するのには、充分な威厳を備えていた。
「……」
ヴィータは内心で、計算していた。
(ガジェットの大群程度なら、アタシ一人でも、なんとかなる。問題は……)
先ほどまで通じていた戦況によると……仮面の戦闘部隊、そのうち3名……ゼータ、ガンマ、シータの存在は確認されたが……最も謎の多い、『デルタ』という戦士だけは、姿を見せなかったという。
(……多分、こっちに来てるんだよな)
……刃を交えたのは、一合のみ。
しかし……
――――知っている気がしたのだ。
あの、ただ一撃の攻撃が、嫌でも既視感を呼び起こしたのだ。
――ゴォオオオオオッ……ガシャッ、ガシャッ
しかしその思考も、遠方より迫る進軍に、中断させられる。

「はやて、なのは……ここは、任せな」
ヴィータもまた、思考を切り替える。
――ゴォオオオオオオオオオオオオオッ!!
飛行ガジェットの編隊が飛来し……ヴィータが鉄球を雨あられと発射するのは、同時だった。
――ズゴガガガガガンッ!!
「出し惜しみは無しだッ！　一気に片付けてやるぜぇッ!!」
『Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ　！』
――ガキュンッ!!
鉄槌の頭が、何倍にも拡張し……地上を往くガジェット軍へ向け、一機に振り下ろされる!!
「ギガントシュラァァァァァァァァァァァァァァァクッ!!」
――ズゴォオオオオンッ……!!
凄まじい重量が、ガジェットを群ごと叩き潰した!!
――ガキンッ、ガキィンッ!!
ガジェットたちが合体。巨大な人型を構築し……巨大な拳を振り上げ、襲い来る！
「おりゃあああああああああああッ!!」
鉄槌を振りかぶり、遠心力を以て、合体ガジェットの重量に対抗する!!
――ガコォオオオオオオオン!!
各所を破損し、よろめく合体ガジェット。しかし、破損個所へ、今度は飛行ガジェットが寄り集まって行った！
――ゴォオオオオオオオオッ……!!
なんと、合体ガジェットは、その巨重をエンジンの数にモノを言わせて、飛翔した！
「へっ……！」
同じく、空戦へと突入するヴィータ。
――ギュイイイイインッ……!!

その指先に、光弾がより集められ……！
――ズビィイイイイイイイイイイイイイイッ!!!
極太のレーザーが、発射された！
「ンなろォおおおおおおおおおおっ!!」
――ボウッ!!
ヴィータは、グラーフアイゼンのブースターを点火。射線上より退避し……接近しての、一撃を加える!!
――ゴォオオオオオオオオオオッ!!
複合されたＡＭＦにより、ヴィータの飛行魔法は消失するが……既にロードされたカートリッジの出力までは、消すことはできない！
「くらいやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

――ドッゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!

衝撃に加え、重力まで利用した一撃は、合体ガジェットを地上へ叩き起こした！
――ズドォオオオオオオオンッ……!!
爆散炎上するガジェット。
「――どうした」
鉄槌を担ぎ直すヴィータ。
「――どうした、そんなモンか!!」
飛行ガジェットの放った光弾が、六課の隊舎を直撃。炎上させる。
……が、非戦闘員たちは既に退避した直後。
シェルターの扉は、動力が切れても、手動での開閉、内部からのロックが可能となっている。隊舎など、また作ればいいのだ。
「――アタシはここだァあああああああああ!!　片っ端から、掛かってこいやァあああああああああ!!」
ヴィータの砲声に応えるが如く……ガジェットの第二編隊が、接近する!!

◆・◆　◆　◆

「言われなくても、行きますよ～……っと」

ばさっ……と、マント型の専用武装を翻すクアットロ。

「デルタ、首尾はどう？」

『ああ。いい頃合いだろうな』

通信の向こうで、デルタが戦闘準備を始めていた

「では、現地で合流しましょう」

『分かった』

クアットロは……首都を覆っていた幻惑結界を解除し、発動待機させていた転移魔法で、機動六課へと飛んだ。

◆・◆　◆　◆

「――」

――ガコォンッ!!

「もう終わりかァ!?」

第六編隊のガジェットを殲滅し、さほど消耗すらしていないヴィータだったが……

（……そろそろ、出てきてもおかしくはねぇ）

――ヴォンッ!!

「待ってたぞオラァ!!」

横合いに出現したデルタの回し蹴りを、鉄槌で迎撃する！

『――……』

相変わらずの、徒手空拳。手に嵌めたグローブにも、細工などされていないに違いない。

――バキィッ……!!

「――！」

……否、そのような小細工は、必要無いのだ。

こうして……素手の一撃で、ヴィータのシールドを叩き割るほどなのだから。

（チィッ……なのはほど固く無いってのは、わかっちゃいるんだが……！）

だが……防御の一つや二つ、割られたところで、どうということは

無い。
デルタは、長柄の弱点である懐に飛び込もうと何度もステップを繰り返す。
「そう簡単にゃあ、入らせねぇぞ……！」
――たんっ。たんっ。
踏むような、軽いステップ。肩から先のみの、スナップで……
――シパァンッ!!
「――――っぐ!!」
神速の突きが、アイゼンの柄に受け止められた！
パワーではなく、速度に重きを置いた攻撃。
――パンッ！　パパパンッ!!
速い。鉄槌を振りかぶっている暇が無い！
「――！　喰らえ！」
そこでヴィータは、手元に魔力スフィアを形成し……炸裂させる！
――グゴォオオオオオオオンッ!!
爆破の魔法で、強制的に間合いを離してしまおうという算段だ。
――ドンッ!!
しかしデルタは、爆発の威力を無視し、再度の突撃。
デルタのスーツにも、少なからず亀裂が入り、ダメージが入っている筈なのだが……全く効果が無いかのように、鋭い攻撃を仕掛けてきた。
――――バシィイイイッ!!
「……」
デルタの右足が、ヴィータの発動したバインドに絡め捕られる。
デルタは、即座にバインドの分解を試みるのだが……
「遅いッ!!」
既に、ヴィータは鉄槌を振り回し、充分な遠心力を蓄えていた！
――――ドゴォオッ……!!
デルタは、両腕をかざした防御態勢で、鉄槌を受ける！
「――――……。」
メギッ……と、生木をへし折るような感触が、鉄槌を通して、ヴィー

タの腕に伝わった。
右か左か……あるいは、その両方かの骨を砕いたのだ。
「――――。」
（貫った……!!）
軌道を変え……直上からの振り下ろし！
――――ガコォオオオンッ!!
「――」
デルタは……折れたはずの両腕で、躊躇うことなく、鉄槌を受け止めた！
「ば……馬鹿か、てめぇ!?」
これには、さすがのヴィータも狼狽せざるを得なかった。
折れた腕は、これで再起不能に……
――――ズパンッ!!
「ごッ……!?」
頬に、モロに打撃を受けてしまう。
（また、折れた腕で……!?）
――――おかしい。
デルタの腕は、ヴィータの攻撃をまともに……しかも、二度も受け、粉々に砕けたはずだ。いや、骨折だけならまだしも、靭帯や神経も、断裂していてもおかしくない。やせ我慢で済む問題ではないのだ。だというのに。
「――――――」
打撃は鋭く、重く……的確に、打ち込まれてくる。
「オおおおおおおっ!!」
――ガキュンッ!!
ヴィータは、グラーフアイゼンをドリルヘッドへと変形させた。
どういうカラクリかは不明だが……打撃が通らないのであれば。
「――――一点集中だァあああああああああっ!!」
――――ズゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!

その攻撃に、デルタは。
「――……」
掌を……ドリルの先端に宛がった。
――ズシュウウッ……!!
掌を、ドリルが貫通し……少なくない量の血が、まき散らされた。
「……!!」
――ギャリギャリギャリ……!!!
しかし、生半可な攻撃では、何故かダメージが通らないことが判明している。
「おぉぉぉぉぉァあああああああああああああ!!」
――ギャリギャリギャリギャリ……!!
深く、深く……ドリルを、突き入れる!!
「――、」
ブースターの推進力が、とうとうデルタに膝を突かせた。
デルタは、構わずドリルを鷲掴みにする。
「いけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

――ジジジッ……ジジッ……!!
デルタは懸命に堪えるが……とうとう、ドリルの先端が、仮面に届いた。

『――遊ぶのはそこまでにしてください』

「――!?」
通信が割り込んできた。
いや、それ自体は、当たり前の事。だが、ヴィータを驚かせたのは、別の事象だった。
「――なのは!?」
その、割り込んできた声を……彼女と、聞き間違えたことだ。
「――」
この局面で、なのはが割り込んでくることはありえない。クアット

ロだ。だが……『クアットロである』という前提を無しに、声を耳にしたヴィータは……疑いも無く、それを『高町なのは』の声と、判断してしまったのだ。

『……誰と誰を間違えてるんですかねぇ、このクソチビは』

クアットロは、気分を害したように吐き捨てた。

「――!!」

では……『遊び』とは、一体……？

――ギャリ……ギャ、ギャ……

「!?」

ドリルの回転が……停止した。

そして……

『――分かった。真面目にやる』

機械処理のされた声で、デルタは初めて、口を開いた。

「――!!」

ドリルを再度、突き入れようとした瞬間……

『――インパクト』

――ドパァァァンッ!!

ヴィータの身体を、衝撃波が強く叩いた。

「ぐァあああっ……!!」

たまらず吹き飛ばされてしまうヴィータだったが……即座に立て直す。

「くっ……!!」

ハンマーヘッドの片方が破壊されていた。

『――』

デルタは、残骸を粉々に握り潰し……

懐から、あるモノを取り出した。

「そ、それは……!?」

見覚えがあった。だが……アレは本当に、自分が知る物なのか？
白銀に輝いていたチェーンは曇りきり、一片の輝きも見られず……
目も覚めるような空色が、漆黒に染まった……あの、クリスタルが。

『――――――セットアップ』

――ゴウッ……!!
黒い炎が巻き起こり……デルタを、取り巻いていく。炎の旋風は、
周囲の魔力を奪い取りながら、激しさを増し……
――ゴォオオオオオオオウッ!!
デルタの外装として、装着された。
――パキンッ……
ヴィータに罅を入れられていた仮面は、炎の熱に負け……割れた。
「……やれやれ、気に入ってたんだけどなぁ」
――困ったとき、頬を掻く仕草。
――おどけた物言い。
――やや硬い黒髪。
――年齢不相応に、老成した雰囲気。
「あ……あ……」
その姿を目にしたヴィータは、ぱくぱくと口を開け、意味のない声を漏らす。
それは――――その姿は、正しく。
「んじゃ、行くぞヴィータ。死なない程度には、加減をしてやる」
デルタの姿が、霞むように消え――――
――ヴィータの意識を、一撃のもとに刈り取った。

◆・◆　◆　◆

「……!!」
衝撃音が響くたび、シェルターに避難したヴィヴィオは、頭を抱え、蹲る。
「大丈夫よ……大丈夫だからね、ヴィヴィオ」
フィアットが傍に寄り添い、励ます。
「なのはさんが、悪い奴らを皆、やっつけてくれるからね」
「……うん」
拒絶されてもなお、ヴィヴィオの気持ちは揺らがない。
（なのはさん……）
……思えば、何故、自分がここまで彼女を慕うのか、よくは分かっていない。
助けてくれた。ただそれだけで、あそこまで全幅の信頼を寄せられるものなのか。

『――――当たり前じゃない。そういう風に『教育』したんですもの』

「――!?」
シェルター内……電源が落ちているはずのスピーカーから、聞き慣れた声が響いてきた。
フィアットは、シェルターの構造を、改めて確認する。
二重構造のシェルターはシステムに組み込まれているが……ロックは内部から、手動でしか掛けられず……ロックを掛けてしまえば、システムからは切り離される仕組みになっている。
しかも、外扉はロックが掛けられた瞬間、断面を自動で溶接し、完全に一枚の構造へ変化してしまう。パズルのように分子構造が変異するため、ある特定のポイントを破壊することでしか、扉を開けることは出来なくなる。よって、ロックを掛けた時点で、敵の得意のハッキングでの開錠は不可能。
仮に、力づくで開けようにも、扉には敵の十八番、ＡＭＦが発動しており、生半可な魔法では傷一つ付けられない上に、戦略兵器級の衝撃にも耐えうる設計になっているため、物理的な破壊も困難となって

いる。
開錠不可能、破壊困難な扉。
その、扉が……
――メギッ……ゴギギギィ……!!
誰もが、予想だにしていなかった手段で、脅かされていた。
魔法でもない。重機でもない。ハッキングでもない。
『溶接面を、力尽くで、抉じ開ける』という方法で。
――ゴギギギギ……ギギィイイ……ベギンッ!!
外扉が、破られた。残るのは、同様の構造を持った内扉のみ。
……破られるのも、時間の問題だろう。
「――！　全員、固まりなさい！」
フィアットの指示に、非戦闘員たちは一か所に集まり……扉との距離を取った。
扉の横に、愛用のナイフを携え、侵入者を待ち構える。
――ドゴンッッッ！
……合金の、厚さ５００ｍｍの扉が、歪む。
――ドゴンッッッ！　ドゴンッッッ!!
おそらく、打撃を加えているのだろう。しかも、ただ、叩いているだけではない。
打撃のインパクトが……まるで、余震のように、長く、扉を震わせる。
――浸透勁。
地球発祥の……武術の叡智である。
打撃のインパクトが扉を震わている、その『最中』に、更に打撃、更に打撃――と、インパクトに、インパクトを重ね合わせることで

……

――ドガゴンッ!!

……比類なき破壊力を、生み出す。

「!!」

扉に穿たれた穴に、手甲が突き入れられる。その手は、扉の両端を掴み……

――ゴギギギギギギギィイイイイイッ……!!

溶接面を無理やり引き剥がし、ロックを引き千切り……まるで、『ちょっと重い扉』を、気楽に開けるような動作で。

「――!!」

ヒュンッ、とフィアットがナイフを振り上げ、侵入者の頸動脈を狙う。

――ザシュッ!!

(殺った……!)

神経毒をこれでもかと塗りたくった刃を、侵入者の首筋に正確に突き立てた。

命を奪うことに、葛藤が無いわけではないが……躊躇する理由もない。

「――痛いじゃないか、フィアット」

……侵入者は、ケロリとした顔で、ナイフを引っこ抜いた。

フィアットは。

「――――――――」

侵入者の顔を確認した瞬間……ぺたんと、知らぬ間に尻餅をついていた。

想定外すぎる事態に、体が硬直してしまったのだろう。

『お待たせしましたー』

続いて、またしても奇抜な人物が侵入してきた。

例の部隊とは、また違う……近未来的なバイザーで顔を隠した、10代の少女。

処理された声から……この人物こそが、『クアットロ』なのだと確信する。
へたりこんだフィアットの隣を、悠々と通り過ぎ……
『はぁーい、ヴィヴィオちゃん。お迎えにきたわよぉ』
怯えるヴィヴィオに対して、猫なで声を出した。
「ひぃっ……!!」
『怯えなくていいのよぉ？　お迎えに来ただけだからねぇ』
「あ、あなたなんて……しらない……!!」
ヴィヴィオは……気丈に、自分を見下ろすクアットロと目を合わせた。
「あなたなんて、なのはさんが、やっつけてくれるもん!!」
『ん～～と……』
クアットロは、幼い敵意を向けてくるヴィヴィオに対し、特に怒るわけでもなく……

――バイザーを外し、素顔を露わにした。

「え……」「うそ……」「そんな……」
非戦闘員たちから、口々に、そんな呟きが漏れる。
「――――――」
ヴィヴィオも、敵意をすっかり無くし……その顔を、呆然と見つめていた。
「さぁ、ヴィヴィオ――――」
クアットロが……素顔と肉声で、呼びかける。
両腕を広げ、ヴィヴィオを受け入れるような動作をしてみせる。
「……」
「ヴィヴィオ、駄目……！」
フィアットが止める間もなく、ヴィヴィオは、ふらふらと、クアットロと、デルタの方へ、歩きだしてしまう。
「――――パパとママが、お迎えに来たわよぉ？」

――そして。

――ヴィヴィオはこの日、機動六課から姿を消した。

◆▪◆　◆　◆

セインは……迫りくる変態達に、可能な限り遭遇しないよう、ディープダイバーを駆使し……ようやく、マリエルのラボまで到達した。

拍子抜けするほど、あっけなく扉は開き……チェアに腰かけたままのマリエルと対峙することが出来た。

「――マリエル・アテンザ。来てもらおうか」

マリエルは、最初、きょとんとした顔で二人を見つめ……くすくすと、楽しそうに笑い出した。

「なっ……何がおかしい!?」

顔を赤くして激昂するセイン。

「い、いや、すまないな……エスパス。あまりに懐かしいものだから、つい」

「？　……何だよ、エスパスって……」

「……ああ、すまない。今は、名が違うんだったな。……名は、なんというんだ？」

「……」

相手は、非力な科学者。問答は無視して、拉致することが出来る。だが……

「……セイン、だ」

……何故か、名乗ってしまった。

マリエルは、今度はディエチの方を向いた。

「……ラグナ。今は、何という名なんだい？」

「？　わたしは、ディエチだよ！」

「そうか……そうか……」
マリエルは……今まさに、拉致されようとしているにもかかわらず、嬉しそうに……笑みを浮かべていた。
「ふふふ……それじゃあ、エドの料理にかぶりついてるあいつは……大方、カングーの奴だろう？　昔っから、誘惑に弱いやつだった」
小さな身体。それこそ、自分の胸までも無いような、成長が止まった……小さな、小さな身体……
ちくり、と、正体不明の感情が、胸を刺した。
「他の皆は？　サフランは……トリノは、フエゴはいるのかい？　モデュス……ウインドは元気？　パルスとクリオは？」
「……」
知らない名だ。知らない名、そのはずなのに。
――セインは、郷愁の感情を憶えていた。
「んーっと、あと稼働してるのは、クアットロだけだよ？　あとはまだ、ポッドで寝てるんだー」
さらっとバラすディエチ。だが……セインも、不思議と……
（何だ……？　何だ、これ……？）
……胸の奥が、温かい。
「そうか……そうだったのか……ジェイル。きみは……」
何かを理解した様子のマリエル。
と、そこに……
『セイン。おしゃべりはそこまでよ。回収して』
クアットロが、通信で入り込んできた。セインはてっきり、クアットロに関しても、マリエルから同じような反応が返ってくるのではないか……と考えていたのだが。
「――誰だ、君は？」
全く知らない人物に対する……心底、不思議そうな態度だった。
『ええ、……初めまして』
クアットロも、皮肉気にそう返した。
「ワタシたち15人の一人ではない……と、すると」
ぽん、と手を打つ。

「君は、Ｄの１６番か」
マリエルが、その結論を口にした途端……
『私を、その名で呼ぶなッ!!』
聞いたことが無いほど、感情をむき出しにした。
『私は……ドクターたち３人に次ぐ、クアッ四番目トロだ!!』
「……」
マリエルは……どこか、憐れんだ表情を作った。
「……そういうことだからさ、大人しくしてくれると助かるかな」
セインが、頭を切り替え、任務をこなそうとする。
「……済まないな。もう少し、語らいたかったのだけど」
マリエルは、ポケットに突っこんだままになっていた手で、何かを操作していて……!!
「時間切れのようだ」
――ズズズンッ……!!
特別棟が、揺らいだ。
「逃げたまえ。大変なことになるぞ」
しなくてもいい助言。しかし、真実味があり……
「……！　くそォッ!!」
「マリエル、またねー」
セインは、ディープダイバーを発動。ディエチを抱え、階下へ潜り……ウェンディも回収。
――スポンッ。
「は!?」
……階下へ降りたった筈なのに、そこは、何故か空中だった。
「うわ、うわ、うわーーー!!　おいウェンディ！　トルネイダー呼べ!!」
「わ、わがっだ、ッス……」
呼吸が困難なほどに腹を膨らませたウェンディが、飛行モードへ変形したトルネイダーを召喚し、その上に着地する。
「コ、コイツは……!!」
見下ろす先は、地面。

機動六課の隊舎は、炎に包まれているが……もぬけの殻だ。その中心部……シェルターや特別棟があった部分には、巨大な大穴があいており……

「!!」

改めて空を見上げると、そこには……巨大な、途方もなく巨大な構造体が、悠々と飛翔していた。

「こ、コイツは……!?」

――艦橋に集った、ロングアーチの面々。

「リーゼ副司令。シェルターの収容、完了しました」

「――よろしい」

指令席の隣に立つリーゼ。この光景を見渡すのは、実に懐かしい。

「機関出力８５％で安定――」

「エンジン圧力正常――」

「航行システム・オールグリーン」

そして、リーゼは、本来この場にいるべき司令官に替わり、告げる。

「――機動六課旗艦・アースラ発進」

純白の機体が、５年の眠りから目覚め、飛翔した。

◆・◆　◆　◆

「――あら、時間切れのようね」

……スバルたちと対峙していたシータが、呟いた。

「じゃあ、戻ろうか？」

その横に……空間から滲み出るようにして、ガンマが現れる。

「……うむ」
エリオとの戦闘を中断したのだろう。ゼータもやって来た。
フォワードチームは……重傷を負ったギンガを背後に庇い、彼らと対峙するが……戦意は既に、折れ掛かっていた。
「――どうして」
スバルは……彼らに、問うた。
「――――どうしてッ!?」
彼らは……額に、一様に紋様を刻んでいるが、紛れもなく……
「母さん!!」
――クイント・ナカジマ。
「兄さん……」
――ティーダ・ランスター
「ゼスト……」
――ゼスト・グランガイツ
この三人に、共通することは……
「ねえ、何があったの!? ……クライスラー事件って、一体、何だったって言うの!?」
3年前の大規模事件の際、行方不明……あるいは、殉職した者たちだ。
三人は、スバルたちの方を一瞥し……
「――――真実は、自分で探し当てるものよ」
それだけ言い残し……転移魔法で、姿を消した。
――――ビーーーーーーーーーー!!
……長い時間、放心していたスバルたちの耳に、通信が久方ぶりに戻ってきた。
「……はい」

『――現状は、把握しました』
セリカではなく、フィアットが通信してきたことに、違和感を感じる。
『回収します。指定のポイントまで、移動してください……』
スバルたちは、思考を放棄し……言われるがままに、帰投した。

◆・◆　◆　◆

――映し出されたモニター。
――どうやら、管理世界全土に、同じような映像が流されているらしい。

「――全次元世界に告げる」
モニターの中心に……白衣を纏った壮年の男性がいた。
野心に満ちた、ぎらぎらと輝く瞳をした男だった。
「――俺の名はジェイル。
――ジェイル・スカリエッティだ。
――知らないか？　……ああ、そうだろうな。
――この放送を、安寧に茶でも飲みながら見ているようなクソども……その全てに告げるぜ」

ジェイルの他、映っている人物がいた。
「ティーダ……!?」
クロノと、ヴァイスは、驚愕し。
「ゼスト……!!」
レジアスと、ゲンヤが目を剥き……
「せ、セリカ……!?」
「そんな……!!」

……意志を感じられない目で、ただそこに佇む親友の姿を見たスバルたちが、驚愕に目を見開いた。

「――貴様らクソどものクソみてぇな安寧のため……どれだけの犠牲が払われた？

――戦争ことを言ってんじゃねえぜ？

――貴様らが暮らしている、『この世界』のために、払わされた代償。

――そして、それを払ったのが誰なのか……

――手前ぇらは、知りもしねぇし、知る気も無ぇんだろうな。

――新薬の治験に使われた実験動物のことなんて、気にも留めねぇのが、手前ぇらクソどもの、クソたる由縁だ。

――俺たちは、手前ぇらクソどものため生贄にされた、名も無き『通し番号（ナンバーズ）』たちの、代弁者だ」

……『デルタ』の隣に、寄り添う者がいた。

仮面を着けた……十代ほどの少女。彼女が、口を開く。

どうやら……アースラに対してのみ、双方向通信となっているようだ。

『――直接お顔を合わせるのは、初めてかしら？　私は、クアットロ。

自己紹介より……――こうすれば、わかりやすいかしら？』

クアットロは……己の顔を覆い隠していたバイザーを、取り払う。

「――――!!!」

なのはは、一つきりの瞳で、信じられないものを、見てしまった。

栗色の頭髪に、青み掛かった瞳。その顔は……

「――――――――な……なのは……!?」

――――クアットロの素顔は……高町なのはと、同一のものだった。

『……初めまして。お姉さま』

言葉を失う機動六課の面々に向かい……ジェイルが、演説を締めくくった。

「――――だからこれは、攻撃でも復讐でも……宣戦布告でもねぇ。

――――俺たちを踏み潰していった……貴様らへの、逆襲だ」

更に……デルタの仮面が、クアットロによって、外される。

――――――――

――高町なのはは、レイジングハートを強く、強く握りしめ……画面を食い入るように、見つめていた。

「――――――秀人さん」

――戦闘機人・タイプΔは――――

――7年前、次元の闇に消えた――

――吾妻秀人、その人だった。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十三話

「どうして？」

――絵本を読み終えたあの子が聞いた。

子供が読むには、些か難解な内容の、あの絵本。

身体が炎で出来ていた鳥が、唯一の語り合える友を探し、太陽まで行き……やがて、彼自身が太陽になってしまう……そんな内容だった。

誰よりも力強く、生命力にあふれ……しかし、終には誰とも触れ合うことが出来なかった、哀れな命。

彼は、何故、最後に身を焼いてしまったのか。

――私は、答えることが出来なかった。

◆・◆　◆　◆

クアットロに促され……戦闘機人Ｎｏ．２……否、セリカ・クラウンが、前に進み出る。

『……時空管理局に告げる』

セリカの声だ。しかし……彼女が、こんなにも感情の伺えない声を、出せるものであろうか。良くも悪くも、意志力が強く……常に熱を帯びていたような彼女が、こんなにも、凍えた声を、自分たちに向けるのか。

『我々の目的は、唯一つ――理想世界の創造、だ』

理想世界の創造。

大言壮語に、誰もが、耳を疑った。テロリスト風情が……何を大それたことを、と。

失笑が漏れてもおかしくは無い。しかし……

『我らの手には既に、創造の鍵が握られている』

――ゴォウン……

画面が切り替わり……滞空する、巨大な物体が映し出される。巨大

さという面では、アースラにも比肩しうる程。大部分を直線で構成された……何とも形容のしがたい物体。
最も近い形状を挙げるとすれば……そう、将棋の駒のような形状だ。鋭い船首から、放射状に広がるような後部へと流れるデザイン。紺碧と黄金で彩られ、豪奢でありながらも荘厳さを感じさせる。そこには、既に絶えて久しい、古代ベルカ王族の紋章が刻まれていた。
『これこそ、我らが大願を成就しうる……大いなる力。『聖王の揺り籠』なり』
「そんな……!!」
シャッハが、声を荒げる。
聖王の揺り籠。それは、ミッドチルダでは、きっと誰もが知っていて……その実、大多数が実在を信じていないという、おとぎ話の産物……の、筈だった。
しかし……現実に、目の前に存在している。
精緻な芸術品のような造形……否、それは、ある性能を突き詰めた末の、機能美であった。そう……
――大戦を力尽くで終結させた、大量破壊兵器としての機能の。
『――その一端を、お見せしよう』
――キュオオオオオッ……
……異変。
ただ空に坐していただけだった揺り籠……その後方部、４機のエンジンに相当する魔導機関が唸りを上げ、魔力光を発する。
その魔力光は、先端。鏃のように鋭い穂先へ、エネルギーが収束していく。
超巨大な魔力スフィアが形成され、その周囲を、円環術式が旋廻し……
「――!? 機関全開!! 射線外へ、退避――!!!!!」
「りょ……了解!!」
……既視感があった。故に、辛うじて回避が可能だった。

――――キュバァァァ

映る画面の奥……ジェイルらよりも後方。椅子の形をした玉座に、幼い少女が座らされていた。
「!? ヴィヴィオ!?」
六課の面々が、恐慌する。
ヴィヴィオは、ただ座らされているだけではなかった。
首輪……そう、正しく首輪に、各所から延びる配線が絡みつき、まるで、玉座に縛り付けられているかのようだった。
『ねぇ? スゴイでしょお? 聖王閣下のお力は』
「どういう意味だ……?」
あの、デタラメな威力の破壊兵器が、ヴィヴィオの力。
『この『揺り籠』のほぼ全ての設備・兵装は、聖王閣下を認証しなければ起動しないんですよぉ。さらに言えば、動力炉から生成されるエネルギーは、聖王閣下を媒介しなければ出力されない』
ヴィヴィオは……聖王は……この揺り籠の、起動キーにして、CPUなのだ。
『まぁ……揺り籠に接続している間は、ホントーにただの置物になっちゃうのがアレですよねぇ』
ケラケラと笑いながら……虚ろな目をしたヴィヴィオの頭を小突く。
「ヴィヴィオに、触るな……!」
なのはが……僅かな意志を手繰り寄せ、口にした。
だが、クアットロは、きょとんとした顔で……
『――親が子をどう扱おうと勝手でしょう?』
「――――な、」
何を意味の分からないことを。と。しかし……
『当然でしょう? ヴィヴィオは、私が出産したんですもの』
……理解しがたい……しかし、至極当然の事実を、突きつける。
『比喩ではありませんよ? ……正真正銘、私が性交して。私が妊娠

して。私が生育させて。私が分娩した。――――私の子供ですよ？』
ヴィヴィオは、『高町なのは』と、『吾妻秀人』の子で……クアットロは、『高町なのは』のクローンなのだから。

『――この力を以て、我らは理想世界を創造する』
言葉を失うなのは達を余所に、セリカの声明は続いていた。
『――――阻むものは……全て、破壊する』

……声明が終わり……暗転したモニターを前に立ち尽くしていた一同。
――――どさっ
……不吉な音に、振り向く。
「……」
なのはが、膝を突いていた。深く俯き、顔色は伺えないが……恐らく、蠟燭のような顔色になっているのだろう。
だが……今は、誰もが、頭の中を整理することが出来ず、ただ沈黙するしか、出来なかった。
――否。
ただ一人……ユーノ・スクライアだけは、別の理由で沈黙していた。

◆▪◆　◆　◆

この緊急事態に、将校たちは非常招集され、緊急会議が行われていた。
「――これは、由々しき事態ですぞッ!!」
ドン、と机を拳で叩き、声を荒げる将校。
「まぁ、落ち着きなさい……デイリン中将」
そのデイリンを諌めるのは、老齢の三人。
――ミゼット・クローベル。
――ラルゴ・キール。
――レオーネ・フィルス。
時空管理局の、『表』のトップ3……元帥たちである。形式的な権限

は、限られているが……その発言力・影響力は、いち将校の枠を超える。
その三人を前に、デイリンを初めとする将校たちが並び立ち、訴えていた。
「これが、落ち着いていられましょうか！」
「敵は、Ｓ級ロストロギアにも匹敵する戦力を有しております！」
「ご覧になったでしょう！　あの破壊力！　あれが市民へ振るわれては、どれほどの犠牲が出るか！」
……当然の主張だ。
ジェイルの一味はテロリスト。その破壊活動を阻止することに、疑問を差し挟む余地などありはしない。
口々に徹底抗戦を訴える将校たち。そして、ミゼットらが慮るように口を閉ざしたタイミングで、デイリン以外の将校もまた、口を閉じる。
「――――許可を」
……デイリンが、重々しく口を開く。
「聖王の揺り籠に対抗しうる、唯一の手段……『アインヘリアル』の起動許可を!!」
異議を唱える者など、居る筈もなかった。
何故なら、当然なのだから。
７年前……Ｓ級ロストロギア『闇の書』による、一連の事件。
それまで、最終兵器とされていたアルカンシェルによる攻撃を以てしても、撃破し得なかったロストロギアの出現。それは、より強力な……アルカンシェルをも超える、対・超Ｓ級ロストロギア兵器――――あらゆる組織の枠組み、あらゆる規制法を超越し、ただ、『Ｓ級ロストロギアを破壊する』ためだけの、超兵器の開発が決定された。
その完成品第一号が……『アインヘリアル』。
しかし、当然のことながら、その使用許可が下されたことは、これまで一度たりともありはしない。
無人の管理世界での実用実験。
ほんの１０％にも満たない出力での一撃は、大地を抉り、山脈を消

滅させ、人為的に、天変地異さえも引き起こしたのだから。
「その判断は早急に過ぎる。独立した古代遺物ならまだしも……相手は単に、その力を振るっているに過ぎん」
「説得は難しかろうが……一味を捕縛した後、封印を施せばよかろう」
「真正面からの撃ち合い。それこそ、ミッドチルダは破滅してしまう」
元帥達は、当然のことながら難色を示した。
「否！　そうして手をこまねいている間にも、守るべき市民が危機に晒されているのですぞ！　こちらが撃たずして、どうされようと仰るのですか！」
テロリストの良いようにさせる訳にもいかず……しかし、その手段を取れば、甚大な犠牲が懸念される。
「……」
元帥達は、しばし口を閉ざし……一人、ミゼットが発言した。
「――――アインヘリアル、待機状態への起動を承認します」
「おお……ミゼット元帥！」
デイリンが、感激して声を漏らす。
「――――本起動は……便宜的に『ナンバーズ』と呼称する敵一味の捕縛が、未達成に終わった際まで、保留するものとします」
妥当な判断だった。問題は……どう捕縛するのか。
「――――レジアス中将」
「……は。」
ミゼットが呼んだのは、会議の場にいたものの、口を閉ざしていたレジアスだった。
「ナンバーズの捕縛は、あなたに一任します」
「な……」
目を剥くデイリン。
「……何か？　デイリン中将」
「い、いえ……失礼を」
慌てて取り繕うデイリン。どうやら、捕縛も任されるものと考えていたらしい。
レジアスは、そんなデイリンをじろりと一瞥しただけだった。

「承知しました。即座に部隊を向かわせましょう」
「ま……待たれよ!!」
　そしてまた、デイリンが噛みついた。
「……何か？」
「貴公、まさか……あの部隊を動かす気ではあるまいな!?」
「あの部隊とは？」
「き、決まっておろう！　あの、独立部隊をだ！」
「左様。陸士１０１から１０８部隊に加え……機動六課を投入する」
　デイリンは、茹で上がったように真っ赤な顔で、唾を飛ばして激昂した。
「気でも違えたか!?　あの、声明を発表した女は……あの部隊の隊員ではないか！　敵と通じている不穏分子が存在した部隊を、動かすとは……！　まだ、スパイが残っている可能性もあるのですぞ！」
　レジアスの目が、ギラリと光った。
「――お詳しいですな、デイリン中将」
「なに……？」
「……尉官ですらない、武装隊ですらない、管轄部隊ですらない、独立部隊のいち隊員の素性を、知っておられたのですな？」
「――――!!」
　声明発表から、まだ数時間も経っていない。だというのに、デイリンは、既にセリカの素性を掴んでいた。
「それは、……」
　口ごもるデイリン。そこへ、通信が入った。
『越権かとは存じますが、よろしいでしょうか？』
　ミゼットらは、顔を見合わせ……頷いた。
『失礼いたします。キーア・ソナタ執務官です』
　デイリン子飼いの部下だ。
『あの声明を発表した女性は……わたしの、義理の妹なのです』
「なんと……！」
　ざわつく将校たち。
『優秀な女性で、生家のクラウン家からも、将来を嘱望されていたので

すが……訓練校時代に犯罪行為に手を染め、家名剥奪・追放の処分を受けたのです』
その後も、キーアの答弁は続いた。
追放されたのち、機動六課へ配属されたこと。恐らくは、その人事に不満が募り、テロリストと通じてしまったのであろう、ということ。それでも義妹が心配で、あくまで個人的に、その周囲を探っていたこと。
それゆえ、声明の直後、デイリンに素性を打ち明けたことなど。
疑念を払拭するには、充分な説得力を持っていた。
「そ、その通りである！」
取り繕うデイリン。そして……鬼の首を取ったかのように、捲し立てた。
「そもそも、あのようなグレーゾーンに位置するような、独立部隊の設立には初めから反対だったのだ！　人材はみな、素性も、能力も、適性もＦランク……！　落ちこぼれの寄せ集めに、前科者の集団など、誇りある管理局の部隊には、相応しくは無いのだ！」
……これが平時であれば、レジアスがピクリと反応したことに、気付けたことだろう。
「前科者……とは、誰の事ですかな……？」
デイリンは、鼻をフン、と鳴らして吐き捨てるように言った。
「決まっていよう！　クロノ・ハラオウンと……八神はやてだ!!」
クロノに関しては、公衆の面前で、赤っ恥をかかされた恨みだろう。だが……はやては。
「先の事件の当事者！　闇の書の所有者！　あのような、犯罪者上がりの小娘に、部隊を統括する能力など、初めから有りはしなかった……いやいや、もしや、知っていて見過ごしていたのではないのか!?」
べきり。
……レジアスの手元で、デスクの一部が握り潰される。
だが、尚もデイリンの暴言は止まらない。
「そう……そうだとも！　それならば、全ての都合につじつまが合うではないか！　元は犯罪者……！」

……他の将校も、そのデイリンの演説に？まれ、機動六課への……はやてへの疑念を、感じ始めていた。
「……そうですね。一理あります」
ミゼットが口を開いたのは、その空気がそれ以上、伝播しないようにするためなのだろう。
「ですが、この場でそれを断定することは早計です。……では、双方の意見を検討し、運用部隊を協議しましょう」
そして、協議の結果……突入部隊は、レジアス擁する陸士１０５部隊、１０７部隊、デイリン擁する第１、第２航空大隊の混成によるものと決定された。

「むゥう……!!」
ノシノシと不機嫌も露わに闊歩するデイリン。傍らには、キーアが付き従っていた。
「で、結局どうなったんです？」
「どうもこうも無いわッ!!」
軽く尋ねるキーアに、デイリンが唾を飛ばしながら怒鳴る。
「こちらの部隊だけの筈が、あの忌々しいレジアスの部隊までも……!!」
「……っていうか中将。僕のフォロー無かったらどうするつもりだったんです？」
「あァ!?　何か言ったかキーア!?」
「いえいえ、何でもないですよ親父殿」
へらへらと気安く受け応えるキーア。
が、デイリンの不満は、それだけではないらしく……
「ジェイルの奴は、何を考えているのだ……!!」
……明確にジェイルとの繋がりを口にした。
「あー。僕もアレは想定外でしたねぇ。まさか、ティーダを出すなんて。世間的には、死んだことになってるんですよ？　アレ」
……ケラケラと、笑いながら。
「せっかく、僕が提供してあげたのに、あんな使い方をするなんて」

ティーダの所在を、初めから知っていたかのように言う。
「外部観測不可能の『揺り籠』の中に突入した精鋭の航空部隊。しかし、未知の戦力の稀に力及ばず、大多数が行方不明！　……ってシナリオは、ポシャっちゃったんですねぇ」
「むぅう……！　最高評議会への献上が、よもや叶わぬとは……!!」
口ぶりが……まるで、行方不明になることが好ましいとでも、言っているかのようだった。
「やっぱ、アレじゃないです？　クライスラー事件みたいに、そうそう上手くは行かないってことじゃあないですかねぇ」
「……いや、いやいやいや……そうだ、まだだ。まだ巻き返せる……!!」
本局の、機密ブロックへ認証を通して入る。
――ゴォン……!!
巨大なシャッターが、重々しく開く。
「あの忌まわしい老いぼれどもから、起動の許可は取り付けた……！」
――超兵器アインヘリアル。
それはさながら、移動要塞。
１０００ｍｍを超える複合魔導合金の装甲板に、エネルギー中和フィールド発生装置が搭載され、物理・魔法のいずれも、突破は困難……というよりも、不可能。
内部には、陸空の計２個師団が搭乗可能であり、その装備、兵站までをも、数か月に渡って運用することが可能である。
更に、これだけの巨体を持ちながら、イオノクラフト・ホバーによる推進で、地上は地形を無視し、時速９０ｋｍでの移動が可能である。
そして……自身の名を冠する、最大の兵装。
――重力崩壊砲『アインヘリアル』。
既存の反応消滅砲の理論を、更に推し進めた技術で設計されており……反応消滅させた『空間そのもの』を、更に圧縮。『重力の坩堝』を、対象に撃ちこむことが可能となっている。
「クックック……!!」

愉悦にほくそ笑むデイリン。
その足のまま、さらに奥へ……本来であれば、デッドスペースとなっている区画へ進む。
「……」
壁一面に配置された、半透明の容器。その内部は、液体に満たされ……老若男女を問わず、数多の人間が、静かに眠るように、安置されていた。
年号、氏名まで刻まれたそれらの容器は、まさに棺桶。
――ここは、霊廟なのだ。
アインヘリアル……それは、来たるべき戦へと備え、戦士の魂を安置する館。
「来たるべき、聖戦のために――!!」
歪んだ使命感に目をギラつかせるデイリンを……
「……」
キーアはどこか、蔑むような目で見ていた。

◆・◆　◆　◆

「……」
人知れず、アースラへ戻ったはやて。人気はあるが……あの映像を見た後だ。活気など、在るはずが無い。
かつ、こつ、と杖を鳴らして、歩き……どうにか、自室へと戻る。
椅子に腰かけ、死んだような目で、虚空を眺めた後……ゆるゆると、緩慢な動作で、報告書を手元に表示する。
「物的被害、隊舎全壊……人的被害……負傷者、２６……不明者、２……ッ!!」
――ガンッ!!
デスクを、強く叩く。
「私の……私のミスだッ……!!　読み違えたッ……!!」
頭を抱え、苦悩する。
「何で……何で、気付かなかった……!!　あいつらは、スバルやティア

ナを、何度も、何度も狙い撃ちにしてきてて……あれだけ、あからさまに攻撃を繰り返していたっていうのに……!!」
　そのすべてが、本局狙いのブラフなのだと……自分たちは、隠れ蓑に利用されているだけだと、タカを括った挙句……今度の、はやてにとっては、初めてと言えるほどの、大敗北を喫してしまった。
「クソッ!!　大馬鹿めが!!　死んでしまえ!!」
　デスクを八つ当たりのように殴り……頭をガシャガシャと乱暴に掻き毟る。
「スバルたちに、何て言えばいいんだよ……!!　どう考えたって、おかしい言動だってあっただろうが……!!」
　そして、紛れ込んでいた……否、最初から仕組まれていた、スパイの存在。
　敵の裏を読んでいたつもりで……その実、掌の上で踊らされていたのは、自分の方だったのだ。クアットロを小物と侮り、ロクな対策もせず……その結果である。
　機動六課は……『揺り籠』の突入部隊からは除外されてしまった。
「――――ああああああ

はやては、自虐的な、卑屈な笑みで、フィアットに向かった。
「どうだ……いい気味だろ？　お望み通り、無様に、惨めに……ボロクソにされた仇の姿だぞ？」
「――――」
「……どうした、笑えよ」
フィアットは、無言だ。
――シュキンッ……
……無言で、ナイフを抜く。
「……ハッ」
はやては、鼻で笑い……ソファの上に、身を投げ出した。
「……ああ、もう、どうでもいいや……やれよ」
張りつめていたものが断ち切られ……完全な自暴自棄へと陥ったはやては、目を瞑り、身を任せた。
フィアットは、迷いのない歩調で、ソファへするすると近づく。
「――――」
はやては、完全に無抵抗だ。殺すには、絶好の好機。フィアットが、幾星霜、待ち侘びたその瞬間。
「――ねぇ、あなたは誰なんですか？」

――ブヅンッ!!

「オ……ぐうッ!?!!」
はやては、予想通りの激痛を発した……予想外の箇所に、目を剥いた。
フィアットの振り下ろしたナイフは……はやての右腕、その骨の隙間を、重大な血管や神経を潜り抜け、肉と皮膚のみを、正確に割り裂いていた。
「フィアット……？」
きょとん、とフィアットを見上げる。
その顔に……

「――誰ですか？」
――バキィッ!!
痛烈な痛みを伴って、拳を振るう。
「――あなたは、誰ですか？　――誰なんですか!?」
――バキッ!!　ガスッ!!
幾度も、幾度も……拳を、振り下ろす。
「私の……！　私の部隊長は！　そんな卑屈な顔はしないんですッ！
そんな……たった一度間違えた程度で、全てを投げ出すような真似はしないんですよッ!!」
――ガンッ!!
「私の部隊長は！　傲岸不遜で、唯我独尊で!!　いっつも何喰わない顔で平然として！　ミスらしいミスもしないで！　人に無茶ばっかり言ってくる!!　そんな、子憎たらしくて、苛立たしくて……!!　私が殺したいのは、そんな部隊長なんですッ!!　お前は誰だッ!?　……違う!!　お前じゃない！　お前じゃない!!　私が殺したいのは、お前なんかじゃないッ!!　秀人さんが敵!?　セリカがスパイ!?　……だったら何だ!?　お前のやることは、投げ出すことなんかじゃないでしょうッ!!」
フィアットの拳に、血が滲む。しかし、フィアットは殴ることを止めない。
「こんなことで、しおらしくなるなッ!!　こんな時こそ、傲岸不遜で、唯我独尊でいろッ!!　お前の立場を忘れたのか八神はやて准将ッ!!
八神はやて部隊長ッ!!　お前は機動六課総勢３４６人を背負ってるんだ！　こんなことで折れるような……戦うことを放棄するような貧弱な奴を殺すために、私は今日まで生きてきたわけじゃないんだッ!!」
「……」
「お前が……お前が！　お前がぁ!!」
狂態を晒すフィアットの顔が……まるで。
――ズリュッ……!!
「……ッ!!」

右腕に、再度の激痛。フィアットがナイフを引っこ抜き……再び、振りかぶる。
「私の部隊長を馬鹿にするなぁっ!!」
――ザシュッ!!
……はやての顔、数センチの位置に……フィアットの振り下ろしたナイフが、突き刺さる。
「……フィアッ、ト……？」
「……だから、……だから、部隊長」
フィアットは、ナイフから手を離し……はやてを、優しく抱擁した。
「……今のあなたに、殺す価値はありません」
「……」
「殺す価値が無いんじゃ……一緒にいる意味が、無いじゃないですか」
貫いたはやての右手を取る。
「……早く、私に殺されるべき貴女になってください」
……何という、破綻した論理だろう。
「……フィアット」
さすがに、こうやられっ放しというのは、癪に障る。だから、ほんの少々、仕返しをすることにした。
「――お前、私のこと、かなり好きだろ？」
「ええ」
――。
慌てふためくか、真っ赤になって反論するか、逆上して怒鳴るか……しかし。
フィアットの反応は、そのどれとも違っていて。
「貴女を愛しています部隊長。この手で殺してやりたい程に」
……絶句するはやてを置き、フィアットは、何食わぬ顔で

退室していった。
「……」
はやては、絶句したまま放心していた。
「……っく、」
……我に返ったはやての、胸の内に去来したのは……
「ッ……っ……くく、くっくっく……!! あっはっはっはっは……!!」
……紛れもない、喜悦の感情だった。
「ははは っ!! あーっはっはっはっはっはっは!!」
腕の刺し傷にも構わず、腹を抱えて笑い転げる。
「あーーーー……」
ひとしきり笑い転げた後、はやては、のそのそと身体を起こした。
「……」
腕の刺し傷を、しげしげと眺める。
「うンッ……!」
止血し、傷口を治癒させ、応急処置。
「……私の負けだな」
フィアットの遊びのような襲撃を、全て勝ち越してきていた訳だが……今回は、完膚なきまでに、敗北だった。
「一日に、二度も負けて……もう、こうなったら何度負けても同じかもな」
そう考えると、気持ちが軽くなる気がした。
「うん……うん。そうだ」
どうせ負けるのなら……不戦敗などでは気が収まらないではないか。やるだけもやらずに……負けた気分になるのは、性に合わない。そうだ。どうせ、どうせ負けるのなら……いや、既に負けているのなら――!
「――最後の悪あがき、見せてやろうじゃねーか!」
――全力で、足掻くのみ。

◆・◆　◆　◆

「――――」
てくてくと歩きながら、抜身のままのナイフをしげしげと眺めるフィアット。
ドロッとした血液が、未だ滴ったままのその刀身。
「……久しぶりでしたねぇ」
はやての身体を貫いたのは、５年前のあの日……はやてが、フィアットを傍に置くと決めた、あの日以来だった。
「……」
空しい気分で、血液をペロペロと舐め取る。
待ち焦がれた甘露……の味などするはずもなく、ただ鉄臭い匂いが鼻を突くだけだ。
「はぁ……らしくない。本当、らしくないんですから……」
少し歩くと……目の前に、クロノと、リーゼが立っていた。
「……」「……」
無言で見つめ合う。
「――お前が、」
リーゼも、実に久しぶりに、フィアットに話しかけた。珍しいことなので、フィアットもとりあえずリーゼの方を見た。
「――あれ以上、主に危害を加えるようだったなら、」
「『殺してでも止めるつもりだった』――ですか？」
「……」
図星を突かれるリーゼ。
「……よく解っているのだな。主のことを」
「ええ。憎い仇ですから。……妬ましいですか？　自分ではなくて」
「――――……」
図星らしい。
「……まぁ、ここまでですがね」
「……？」
リーゼが疑問に思ったのと同時……
『――――リーゼ！　作戦立てんぞ!!　どこで油売ってやがるさっさと来い!!』

……はやての怒号が鳴り渡った。
「は、はい、我が主！　ただいま参ります!!」
慌てたあまり、耳と尻尾が飛び出してしまいながらも、すっ飛んで行く。
後は、あの二人がいいようにするだろう。
そして、残されたのはクロノと、フィアットの二人だ。
「……」
周囲に、二人以外の目がないことを確認して……
「――クロノ。久しぶりだね」
その言葉に、いかなる意味が篭められているのかは……二人にしか、分からないことだろう。
「――姉さん」
フィアット……ではなく、ふたりの時だけの呼び名で、クロノも応える。
何の気なしに見たフィアットの横顔は、やはり、クロノと似通っていた。
「……もう、やめたらどうだ」
はやてとの関係のことを仄めかす。だがフィアットは、首を横に振った。
「――――やめないよ」
フィアットとの血縁が発覚して、7年。繰り返されてきた問答だ。
「……ごめんね」
そして、困った顔で謝ってくることも。
「……ねぇ、クロノ。……終わったことにしがみつくのって、悪いことかな？」
「……」
――終わったこと。解決済み。そんなことをしても戻っては来ない。
……当事者たちが、その事実を受け入れるための言葉だ。
だが……それでも、納得しきれない事柄というものは、確実に個人の胸の内にある。

「……」
クロノが思い返すのは……他でもない、母のリンディだ。
彼女もまた……愛する者を奪われた当事者なのだから。
「姉さん、俺は――――」
「――――それ。」
「え……？」
きょとん、とするクロノに、フィアットは笑う。
「あの日からだよね。クロノが、『俺』って言い始めたのは」
「……」
……あの日。執務官の立場を捨て、親友の名誉を選んだ、あの日。
「……悩んでいるんでしょう？　秀人さんのこと」
表面上は平静を保ってはみたものの、お見通しだったらしい。
「姉さん、俺は……」
言葉にならない煩悶があるのだろう。
クロノにとって、秀人は親友で、恩人だ。
その秀人が、明確に敵に加担している。
それでも、何かしらの目的があるのならまだしも……秀人は、進んで他者を傷つけるような真似だけは、しない筈だ。家族同然に過ごしていたヴィータを、躊躇なく戦闘で撃破することなど。精神操作をされている可能性が、真っ先に浮かんだ。だが……それだけでは、説明できないことが、多すぎる。
問い正す。だが、問い正した結果が……最悪なものだった場合は。
彼が、彼自身の強固な意志で、それを望んでいるとしたら。
「なんだ、簡単じゃない」
「え……？」
顔を上げたクロノに、フィアットが平然とした顔で言う。
「石頭の頑固者をどうすればいいか、なんて……あなたが一番、わかっているんじゃない？」
「……ああ」
「今度は、クロノの番なんだよ」
彼が、クロノの価値観を変えたように。

今度は、クロノが……秀人の石頭を、カチ割ってやる番だ。
「頑張るんだよ、クロノ。ふぁいとっ」
ぐっ、と両拳を握るポーズで、激励される。
「……ありがとう、姉さん」
子供っぽい面の残る姉に、苦笑いを返し……
「……この事件が終わったら……母さんたちに、会いに行かないか？」
フィアットの出自は、本人と、クロノだけが知っている。それを、リンディや、エイミィに打ち明けないか。そう言いたいらしい。
フィアットは……
「――――――――絶対に、嫌」
……優しい『姉』としての笑みを浮かべ、拒絶した。

◆▪◆　◆　◆

「……」
ぼやけた視界の中……ギンガは、見知った顔が三つほど、自分を覗きこんでいることに気が付いた。
「ギン姉ッ！　気が付いた!?」
「こらスバル。ちょっと静かに……！」
スバルと、シャッハ。そして……
「……勘弁してくれ。肝が冷えたぞ」
総髪の男性……陸士１０８部隊の部隊長にして、スバル、ギンガの父……ゲンヤ・ナカジマだった。
（おとうさん……スバル……）
ギンガが、目線だけを向ける。
身体を起こすどころか……声を出すこともできなかった。
「……切断面が綺麗だったから、どうにか縫合できたんだって、オペルさんと、マリエルさんが……」
「そうか……後で、礼を言わないとイカンな」

ゲンヤが、苦々しく説明する。
「クイントは、敵の一味として……確保が命令された」
「でも……母さんは、どうして……」
クライスラー事件の際……他の不明者とは違い、遺体が残ったクイント。その遺体を収容したゲンヤも、その肉体が偽装だとは、どうしても思えていなかった。
「――埋葬されていた遺体を、技術部に回収させ解析させた」
故にゲンヤは……墓所を掘り起こすという、苦渋の選択をしたのだ。
「ＤＮＡ検査の結果だが……あの遺体は、間違いなく、クイントの肉体だった。だが、……テロメアの長さが、どうしても、クイントの実年齢と一致しなかったそうだ。
つまり――あの遺体は、クローニング複製されたものだった」
敵が、戦闘機人などというものを製造できる技術があるのなら……意識を必要としない、ただの肉体だけを製造するなど、造作もないことだったに違いない。
「で、でも……何で母さんは、敵に……」
ゲンヤが、資料をめくる。そこには、ギンガたちが交戦した際、僅かながら得られたクイントの画像があった。
「この、額の紋様を見てみろ」
仮面の奥にあった、クイントの素顔。その額に、幾何学的な紋様が刻まれている。だが、スバルたちはおろか……古代ベルカの知識を持つシャッハにも、見覚えのない字体だった。
「こっちは、お前んとこの槍使いの坊主が持ってきたデータだ」
エリオが交戦した、ゼータ。彼の額にもまた、同系統の……しかし、微妙に異なった紋様が刻まれている。
「その意味はまだ解明できてはいないが……恐らくは、呪術に類するものだ」
「呪術って……禁呪の、暗黒魔法の？」
「ああ」
ミッドチルダが、いかに魔法体型の進歩した世界だとはいえ、魔法

に関する禁忌は、当然のことながら存在する。ヒトを原材料とした魔法生命体の製造や、偽造貨幣の製造……そして、暗黒魔法だ。これらは、管理局や教会に厳重に管理され、習得は禁じられ、禁書扱いの文献でのみ、継承を許されている。その継承ですら、本来は、暗黒魔法に類するものが使用されたと思しき場合における、対処のためなのだ。

「俺はこの件に関して……管理局上層部が関与していると見ている」

「……!!」

正義を標榜する組織が、このような犯罪に携わっている可能性を考え……スバルは、不信感と、不快感を覚えた。

「……管理局は、母さんをどうするつもりなの？」

「逮捕、拘留……『ナンバーズ』達への関与に関する調査だ」

「それは、どの部隊が行うつもりなの？」

「セオリー通りに行くのなら、まぁ、被疑者を確保した部隊だろうな」

「そう……」

……と、横たわっていたギンガの身体が、僅かに身じろぎをした。

「ギン姉……？」

ギンガの口元に耳を寄せる。掠れるようなギンガの声を、必死に聞き取る。

「……、スバル、……あなたが、……母さんを、確保しなさい」

「――!?　え、」

驚くスバルに、ギンガが続ける。

「……できない、と思ってる？」

「う……うん……」

項垂れるスバル。

「……大丈夫、出来るわ」

「で……でもっ！　姉さんと、シャッハさんが二人掛かりでも、敵わなかったのに……！　それを、姉さんから一本も取れないような私に……！」

「……大丈夫……スバルなら、……必ず勝てる」

妙な確信を伴った言葉だった。

ギンガが、手の中に握っていたものを、スバルに譲り渡す。
「……ギン姉、これ……！」
それは、ギンガの魔力光と同色のクリスタル。左のリボルバーナックルだ。
「……スバルを、お願いね」
『任されよ』
マッハキャリバーの内部に、格納される。
「スバル……お願い……母さんを、……助けて、あげて」
そして、体力を使い果たしたのだろう。ギンガは、深い眠りへと落ちて行った。
「……どうしろって、言うの」
１０８部隊の隊舎近くに停泊する、アースラの艦内。
マッハキャリバーを握りしめ、スバルは俯いていた。
「……だって、今回の作戦……機動六課は、突入部隊に選ばれてすらいないんだよ」
チカッ、と、マッハキャリバーが瞬く。
『貴様はどうしたいのだ』
「どうしたい、って……でも、どうにも出来ないし……」
『可能か、不可能かの話ではない。貴様は、どうしたいのだ』
「――だって！」
ガタン、と立ち上がり……激昂する。
「どうしようも無いんだよ！　機動六課は出撃できない！　上層部にアースラのキーは握られてる！　……せ、セリカが……、」
じわり、と視界が滲むのにも構わず、続ける。
「セリカが、敵にいるんだよ……！　もう、どうすればいいのか、全然、わかんないんだよっ……!!」
『……』
マッハキャリバーは、取り乱すスバルに何も言わず……
『――――ふんっ!!』
――スコーンッ!!
自立飛行した後、スバルの額へ衝突した。

「……いったぁ!?　……って、え!?」
　目の前を浮遊するマッハキャリバーの姿に目を見開く。マッハキャリバーは、スバルの目の高さで静止した。
『貴様はどうしたいのだ。……ここでいつまでも膝を抱えていたいのか？　他人が都合よく解決してくれるのを待ちたいのか？』
「違う、私は……!!　私は!!」
『――――助けたいのだろう？　母も、友も。――――他の誰でもない、自らの手で』
　……その答えは、マッハキャリバーが口にした。
「……うん」
　胸を張って言えないのは、恐らく……二人の真意が掴めないからだろう。
　額に呪術の刻印が入れられていたとはいえ、それが洗脳のためのものなのか……最悪、本心から『ナンバーズ』に加担しているということも、可能性としてはある。
　だが……それでも。
「――助けたい。母さんも……セリカも!!　二人が何考えてるのかなんて、全然わかんない！　何か目的があるのかもしれないけど！　それでも、何も言わないでどこかへ行っちゃうなんて、私は絶ッッ対に許さない！
　――――ぶん殴ってでも、連れ戻してやる!!」
　マッハキャリバーは、呆れたように……しかし、納得がいったように、少し笑った。
『――――とうに決まっているではないか』
「……でもでも、どうやって行こう……？」
『何、案ずることは無い。世界の流れは、ヒトの意思が決めるのだ。……そう決めたのならば、そう動くようになっている』
「……？　マッハキャリバー？」
『貴様が意志を固めたのなら、きっと……』
　――――ヴーーーーーーーーーーー!!
　……ブザーが鳴る。

「！　部隊長の緊急招集！」
『――な？』
「うんっ!!　ティアだって、きっと……!!」
そして……スバルは、ブリーフィングルームへと向かった。

◆■◆　◆　◆

――パンッ!!
僅かな反響音のみを残し、ターゲットの人型、その右肩部分が吹き飛ぶ。
「……」
――パンッ！　パンッ!!
続けた二射は、ターゲットに掠ることも無く、虚空へ消えていった。
「……」
かちゃかちゃと、機械的に弾倉へ装填する。
『――おい、もう休め』
クロスミラージュがそう言うものの、ティアナは、頑なに訓練とも言えない行動を繰り返していた。
「……」
……酷いスコアだ。静止物であれば、ほぼ１００％の命中率を誇るというのに、今は４０％以下。
――ぶつんっ。
唐突に、訓練設備の電源が落とされた。
「――!!　誰よっ!!」
「……銃口を向けるな」
ヌッと現れたのは、ヴァイスだった。
「またアンタ……？」
なのはを相手に無茶をする前も、こうして訓練に横やりを入れられていた。
「人の訓練の邪魔ばっかりする……!!」
「そりゃ訓練じゃなくて、八つ当たりだ」
「――!!」

鼻っ面に突き出されたパンチを、手首を掴んで止める。
「感情の赴くままに……か？　そんなんだから、ティーダに勝てねぇんだよ、お前は」
「――!!」
かぁっ……と、頭に血が上る。が、ヴァイスに小手返しを喰らった挙句、銃まで奪われてしまった。
「くっ……!?」
――じゃきっ
……立ち上がりかけたティアナの鼻先に、銃口が突きつけられる。
「……!?」
「――――これだけ言って……まだ分かんねぇのか、お前」
普段は飄々として、掴み所のないヴァイスが……怒りを浮かべ、ティアナを真正面から睨みつけていた。
「お前、あの作戦で2回死んでるぞ」
ティーダにヘッドショットを決められた際。そして、ティーダへ最後の一撃を加えた際の、カウンター。
「――――あいつは、オレとクロノさんで確保する。お前の出撃は許さん」
「な、何の権利があって……!!」
「……そんなに死にに行きたいって言うなら、今、ここで死なない程度に痛めつけてやろうか？」
反抗するティアナだったが……グリリッ、と銃口がより強く押し付けられ、黙り込んだ。
「どうして、ティーダの奴は執務官になれたんだと思う？」
「……？　それは、……」
だが、ティアナはそれを知らない。ただ、『執務官である』という前提があり……『なぜ執務官足り得たのか』までを、考えたことが無かった。
「言っておくが、ティーダの魔力量は、オレやお前と同程度……単純な量だけで言うなら、Bランク程度だ。先天資質も、特殊技能も持って

はいない」
「……魔力運用が、上手かった、とか……」
「それじゃ、２０点だ」
　コンッ、と銃身で額を小突かれる。
「あいつは、決して強力な魔導師ではなかった。部隊長のようなバケモンじみた魔力も、クロノさんほどの多彩な術式も、シグナム教官のような剣術も、フェイト執務官のような速度も、持ってはいなかった」
「……」
「決して、万能無敵のエースでは無かった」
　では……何故だ、というティアナの無言の問い。
「――あいつが、『強い』男だったからだ」
「……？　何、馬鹿にしてるの……？」
　ティアナが、怪訝な顔をする。先ほど、言っていたではないか。『決して、万能無敵ではなかった』と。だというのに、この言葉。ティアナが混乱するのも無理は無い。
「……ま、言うよりコッチの方が早いか」
　と、ヴァイスは再び、訓練設備の電源を入れる。そして……カード状のデバイスを展開。オリジナルの一品ものではなく、官製のライフル型だ。
「見てな」
　スタンディングのままライフルを構え、表示される的に向かい……
　――パシュパシュパシュッ!!
　消音効果を施されているらしき射撃を、三連射する。
　ターゲットの人型の、頭部ど真ん中に、一つきりの穴が開く。発砲音は３つ。ということは……全て違わず、全く同じ個所へ射撃を通したのだ。しかも、ロクに体を固定もしていない姿勢で。
「……」
　ティアナも、これには息を？んだ。
「次は、こうだ」
　的の人型が、前後左右に、激しく移動する。混戦を想定したシミュレーションだ。

――――パシュッ、……パシュシュッ!!
やや不規則な発砲音。人型の動作が停まり……スコアを表示する。命中率は、８割。その内訳は、脇腹や、肩など……即座には、戦闘不能にはならない位置への着弾が多く見られた。これなら、ティアナの方が上のスコアを出せる。
「言っておくが、手は抜いちゃいねぇぞ。ここから、どう読む?」
思考停止をすることはせず、考察した。
「……アンタは、狙撃手だ。近～中距離の戦闘には、向いていない」
「正解」
ライフルを、カード状に戻す。
「そんじゃ、問題だ。もしオレが、あのナンバーズどもを相手取って戦うなら……どう動くべきだ?」
考えるまでもない。
「……相手を射程に捉えつつ、身を潜め、機会を伺って撃つ」
狙撃の基本中の基本。子供にも分かる。
「じゃあ、もし……突発の事態が起こり、敵陣ど真ん中に放り出されちまったら?」
「……戦略的撤退。いかなる手段を用いても、敵の攻撃範囲から脱出し……再度、狙撃の機会を伺う」
「――――では、それらを踏まえた上で、聞こう。オレたち凡人が、バケモン相手に戦うために必要な『強さ』とは、何だ?」
ティアナは、ようやくヴァイスの言わんとしていた事柄を理解した。
「――――相手を、自分のフィールドに引き込む力」
――正解。と、ヴァイスは頷いた。
「『自分に向いた戦況を作る』ってことだ。ティーダの奴は、まぁこれが上手かった」
昔を懐かしむ口調で、ふと視線を外した。
「自分だけじゃない。自分の所属していた部隊の全体にまで、その効果を発揮していた。味方からすれば、『不思議と有利な戦況に変化し

て』いるんだ。……敵からすれば、『何故かどんどん戦況が不利になっていく』、っていう、笑えない事態だった筈だ。……そうだろ？」
思い返せば……確かに、あの地下道での撤退戦においては、個の力では勝っていたはずのティアナたちが、いいように攪乱され、退路を断たれそうになり……あと一歩で全滅というところにまで追い込まれていた。
「――やろうと思って出来ることじゃねぇ。戦況を俯瞰する視点。知恵を巡らす頭脳。意表を突く発想力。そのどれかが欠けてしまっていても、実現はできない。
――スペックシートだけでは決して分からない、……ある意味、これぞ真の『能力（スキル）』ってヤツだな」
それが、ティーダ・ランスターの武器――『ランスターの弾丸』なのだ。
「自分は、皆を先導できるような『エース』じゃない、みんなと一緒で、初めて一人前なんだ……って、アイツはよく言ってたよ」
そんな、謙虚が過ぎた、お人よしが服を着て歩いているような、親友のために。
「だから……同期のオレ達全員で、考えたのさ。『エース』に並ぶ、最高にクールな肩書ってやつを」
――どんな逆境も、打開してみせる。
――どんな不利でも、覆してみせる。
――『エース』という『個人』ではない。
――肩を並べ、同じ戦場を駆ける……最高の戦友。

「――『ストライカー』」

それが……ティーダの『強さ』の正体。
「ストライカー……」
かつての、兄の一端に触れ……荒れていた心が、和らぐのを感じた。
そしてヴァイスは、驚くべきことを口にした。
「――素質、あると思うぜ」

「――!!」
ティアナにも、『ストライカー』足り得る素質が、あると言う。
「まだまだ力不足だが……うん。オレが保証してやるよ。ティアナ・ランスターは……いつか、ティーダ・ランスターを超える『ストライカー』になる、ってな」
「な、何よ、急に……今まで、褒めたことなんて無かった癖に……」
ティアナは、頬を染めて慌てた。
「まぁ、つっても……一人で考え込みすぎる悪癖が治れば、だけどな」
……上げて落とすのは基本である。
「お前はお利口すぎるんだよ。もっとバカになれ、バカに」
ぽん、とティアナの頭を気安く叩くヴァイス。
「……う、うるさい!」
ぶんぶんと拳を振り回し、ヴァイスを退散させた。
『はっはっは! おい、バカになれってよ!?』
手元のクロスミラージュが馬鹿笑いをする。
「うるさいなぁ、もう!」
カートリッジを、乱暴に弾倉に突っこむ。
「……チャージング・カートリッジ。ちゃんと満杯にしておくからね!」
『わぁったよ。……んじゃ、行脚といくか』
この時点で……『機動六課は突入部隊に含まれていない』ことと、『自分は出撃しない』ことは、イコールでは無くなっていた。
「待ってなさいよぉ……あのバカ兄貴! それと、バカセリカ!!」

◆■◆ ◆ ◆

エリオは、マリエルのラボへとやって来ていた。
「……話って、何?」
コンソールを叩きながら、半分、分かっているように聞く。
エリオも、隠し立てはせず……ストレートに要求した。
「ストラーダのリミッターを全解除してくれ」
この先の激戦を想定しての、当然の要求だった。

「……何、死にたいってこと？」
確かに、ストラーダの出力上限は上がるだろう。だがそれは……エリオの肉体にかかる負担も、跳ね上がるということであり……
「……そうしなきゃ、あいつらには勝てねぇんだ」
マリエルは、忙しなく動かしていた手を止め、椅子を回転させ、エリオの方を向いた。
「アンタ、フェイトさんと仲良いなら聞いてるだろ」
「……うん」
――ゼスト・グランガイツ。
元１０８部隊、最強の近代ベルカ式術者。シグナムの剣友で……保護されたばかりのエリオの、指導教官だったこともある。変換資質と高い魔力に頼りきりだったエリオに、体術と、槍術を教え込んだ師だ。
「……何故、キミが体を張る。シグナムあたりが適任だろう」
最もなことを指摘するマリエル。
そうだ。何も、明らかな実力差のあるエリオでなくとも、同格のシグナムか、それにフェイトが加勢すれば、ある程度は安全に確保することが可能なはず。
マリエルは、また後ろを向いてしまい……もうこれ以上話すことは無い、とでも言うように、意識の外にエリオを追いやってしまう。
「――――あいつらは、……昔のオレに、似てるんだ」
「……」
あいつら、というのは……ナンバーズのことであり、ルーテシアのことだろうか。
「自分が誰なのか、一個人なのか、誰かの複製なのか……周りに言われている『自分』が、全然納得できてなくて……自分が何者なのかわからなくて、どうしようもなくなってる」
自分も、そうだった。『エリオ・モンディアル』という人物のクローン……完全な代替として、冷たいガラス瓶の中で生を受け……だが、エリオは、『エリオ・モンディアル』ではなく……かといって、『エリオ・モンディアル』ではないエリオが、それを求めた者たちに受け入れられる筈も無かった。

フェイトが、シグナムが……ゼストが、エリオを助けることが無かったのなら。
今、あのモニターの向こうにいたのは、自分だったのかもしれない。
「――頼む。あいつらを、止めてやりたいんだ」
「――――」
気付けば、マリエルは再び、エリオの方を向いていた。
「――――キミは無力だ」
そう、辛辣に切り出すマリエル。
「エースと言える隊長たちには、遠く及ばない」
「……ああ」
「キミ単体が、命を賭しても……きっと、戦況は変わらない」
「……ああ、わかってるよ」
「ジェイルはきっと、過去の戦闘データを使って、戦闘機人たちをアップデートしている。そうなったら、キミは、戦闘機人たちにさえ敵わない」
「……」
これは、厳然たる事実だ。
「……リミッターの解除は、いつでも出来る。でも、それで、どうするって言うの？」
「……必要なんだ。どうしても」
「何のために？」
「――――竜魂憑依を、制御するためだ」
現時点では、竜魂憑依を武装化することで、限定的に制御できているが……やはり、それでは不十分なのだ。あくまで、竜魂憑依の武装化は、通過点でしかない。
「頼む……!! オレに、力を貸してくれ!!」
ばっ、と深く頭を下げる。
一秒、二秒……と、重苦しい沈黙の後、かちゃかちゃと、マリエルがキーを叩く。
「……」
聞き入れてもらえなかったのか……と、落胆するエリオの目の前

に。
「はいこれ」
と、掌に載せた何かを差し出してくる。ほんの数センチほどの、何かのメモリ媒体のようだ。
「――竜魂憑依のサポートプログラム。あげる」
「え……!?」
どうやら、先ほどからがちゃがちゃとキーを叩いていたのは、これを作っていたからのようだ。
「一人じゃ、勝てない。でも、そんなことは当たり前なんだ。だから……キミは、『誰かを頼る』ことを、もっと頑張った方がいい。……今みたいにね」
ぐい、とエリオにそれを押し付ける。
「あと……」
そして、やや意地の悪い笑みを浮かべたと思うと……がしょんっ、と扉が開いた。
「頼る相手が、違うんじゃない？」
……キャロが、見計らったように、そこにいた。
「うおっ……!?」
「あ、エリオくんもきてたんだ」
タイミングを見計らっていた訳では無いようだ。
「マリエル、おねがいがあってきた」
「……リミッターカットか？」
「うん。それと……」
「……竜魂憑依のサポートプログラムか？」
「うん。すごいねマリエル」
……考えることは全く同じだったらしい。マリエルは、呆れ半分にキャロからケリュケイオンを受け取った。
「あ、そうだ……エリオ、キャロ。キミたちには教えておこう」
ふと思い出したように言う。エリオたちを呼び寄せると、今しがた操作していた画面に、映像や資料が表示された。
「これは……」

一人の女性局員のデータのようだ。２０代程に見える。当然、面識はないが……見覚えがあった。
「……ルーテシア？」
あの敵に属する少女と、共通する面立ちをしていた。
「――メガーヌ・アルピーノ。クライスラー事件における不明者の一人。そして……ゼスト隊の一員だ」
「ゼストの……？　いやいや、ちょっと待てよ。それより、こいつ……ルーテシアの母親なのか？」
「いや、彼女は未婚で、子供もいなかった」
だが、これだけルーテシアと似ているということは……
「……!!　まさか……!!」
「恐らくルーテシアもまた、Ｆの被検体なんだろう」
「……いや、何か、変だ」
そこで、エリオは違和感を覚えた。
「あいつ、記憶を持っていそうな気配、無かったぞ」
プロジェクトＦは、記憶転写クローンの製造技術だ。フェイトしかり、エリオしかり……しかし、ルーテシアからは、まだ未発達な自我しか、感じることが出来なかった。
「記憶は転写せず、肉体に自然発生した自我をそのまま発達させた……戦闘機人たちの、テストヘッドだったのだろう」
ディエチなどがいい例だ。彼女のオリジナル……ラグナという少女は、もっと落ち着きのある性格だった。だが、生後１０年にも満たないとすれば、当然だ。
「なぁ、もう一ついいか？」
と、黙り込んでいたエリオが質問をした。
「この、メガーヌって人は……召喚術師だったか？」
マリエルは、首を横に振った。
「いや……彼女は元々、結界魔導師だったらしい。召喚術は、習得していなかった」
「……そうか」
エリオは、何らかの納得を得たようだった。

「わかった」

キャロは、何かを決意したように、頷いた。マリエルが……エリオとキャロにのみ、この話をした意味を悟ったらしい。

「……」

二人が退室した後。マリエルは、モニター越しに、誰かと対面していた。

「――安心しろって。『F』の行く末は……ワタシが、ちゃんと見届けてやるから」

◆・◆　◆　◆

なのはは、自室のベッドに倒れ込んだまま……かれこれ二日。

『……』

考えれば、考えるほど……思考が煩雑になり、ずぶずぶと、底なし沼へと沈んで行ってしまう。

ヴィヴィオが攫われたことも。

クアットロと名乗る女が、自分と同じ顔をしていたということも。

彼女が、ヴィヴィオの母親であるということも。

そして、何よりも。

『――秀人さん』

……彼が、敵側に居たということ。

生きていてくれた。無事でいてくれた。ただそれだけであれば、どれだけよかった事か。

しかし、彼は、敵として現れた。

機動六課を襲撃し、ヴィヴィオを攫い……ヴィータを、倒した。

何故。どうして。

答えの出ない自問自答に……また、思考が停止する。

『……』
今は、レイジングハートも沈黙を守っている。彼女もまた、事態を？み込めず、戸惑っているのだろう。
考えては、行き詰り。考えては、行き詰り。……無為な時間であることを理解して尚、なのはは、それ以上の行動を起こすことが出来なかった。
しかし、考えても、考えても……秀人の行動の意味に、別の解釈を見出すことは出来ない。
――秀人は、なのはに敵対した。
ただそれだけが、絶対の真実だった。
『う……』
唯一の肉眼……右目が、涙で濁る。
『う、う……うぅぅぅぅぅ……!!』
枕に顔を埋め……ただ、嗚咽する。
――コンコン
……戸がノックされた音が聞こえたが……端から、開ける気が無かったので、無視した。
『……』
――コンコンコン……ゴンゴンゴン！
……だいたい、誰がノックしているのかは見当がつく。
『……』
――ガコンッ!!
予想した通り、ドアが破られた。
「なーのは。二日ぶりだね」
やはり、フェイトだった。強引に入ってきたとは思えない、いつもの態度。
『……出てって』
なのはは、枕に顔を埋めたままそう言った。
『今は、誰とも会いたくない……話したくない……』
「もー……すぐひきこもるんだか……らっ！」
ベリッ、と、不意打ちで枕を取り上げる。義手を外し、片腕だった

なのはには、抗う術は無かった。
「そいやっ！」
しかも、その残った唯一の右腕も捕獲されてしまう。
「うわ……ちょーブサイクな顔になってる」
……言うに事欠いて、コレである。
『……!!　うるさい！　放っておいて!!』
とうとう声を荒げるなのはだったが……フェイトは、割と真面目な顔で、なのはの顔をじっと見つめていた。
フェイトを振り行解こうと暴れるが、フェイトはのらりくらりと力を逃がしてしまい、振りほどけない。やがて……なのはは抵抗を止めた。
『……』
そのまま、フェイトの胸に、頭を預ける。
『……秀人、さんが、……。秀人さんが、……』
「うん」
『私、ずっと、探して……ずっと……！』
「うん……うん」

『――――生きていてくれた……!!』

そう。何よりも、他の何を差し置いても。なのはにとっては、それが答えなのだ。
「……うん」
フェイトはただ、なのはの言葉に、耳を傾ける。
『……でも、何で？　どうして？　何でいま、あんなことになってるの!?　クアットロって誰よ!!　どうしてヴィヴィオを攫うのよ!!　あの子は、そんな目的のために産まれてきたわけじゃない!!　あんなこと、秀人さんだったら絶対に認めないのに！　絶対に、絶対に……!!　なのに、なのに……どうして……!!』
「……つらかったね。よく、みんなの前では我慢できたね。エライよ」
かつて……彼がそうしてくれたように。なのはの頭を、ゆっくりと

撫でる。
『……、……!!』
最後は……言葉にもならず、フェイトに縋りついて、泣きじゃくるばかりだった。
「……おちついた？」
『……うん。ありがと』
胸の中のなのはが、幾分落ち着いた頃を見計らい……フェイトが、声をかける。
「……なのはは、どうしたいの？」
『……』
もう、何もしたくない……と言い出すことは無かった。
「いまは、ボクしか聞いてないから……すきなこと、すきなだけ、言っちゃってもいいよ」
そう、諭され……
『……秀人さんと、話がしたい』
……ようやく、素直に胸の内を伝えた。
『いなくなってから……どこで、何してたのか……ちゃんと、聞きたい』
「うん――それから？」
『……私の話を、聞いてほしい。私のこと……カレンたち、凶鳥部隊の最後の事も。機動六課でのことも、ちゃんと、全部、伝えたい……！　それと、それと……！
――ヴィヴィオを、助け出したい……!!』
……もしくは、フェイトが待っていたのは、この一言だったのかもしれない。
「うん、ボクもそうだよ」
なのはの手を包み込むように握り、決意を見せる。
「なのはは、短くても、ヴィヴィオとちゃんと触れ合って、会話をして、同じ時間を過ごしてきたんだ。それを、ただ産んだだけの女に、偉そうに母親面で横から掻っ攫われる筋合いなんて無い。ひでとを好きにする権利も無い。そんなの無いに決まってる。誰のクローンだろ

うと知るもんか。あんなの、遺伝子が同じだけの他人だ」
フェイトにしては長く、辛辣な言葉だった。
よほど、なのはと同じ顔で行った所業が許せないのか、珍しく、くっきりと怒りの感情が浮かんでいた。
「――取り返そう、なのは。他の誰でもない、ボクたちの手で」
何を……とは、敢えて明言はしない。が、伝わった。
なのはは、こくん、と頷いた。
――ヴーーーーーーーーーーーー!!
『！』「！」
二人同時に、顔を上げる。
『はやて……!!』
なのはは、嬉しそうにその名を呼んだ。
そうだ。あのはやてが……やられっ放しで済むような女でないことは、自分が誰よりも知っているではないか。
――まだ、始まってすらいないのだ。
『――レイジングハート！　武装、全部用意するよ！』
『ＯＫ．』
『秀人さんの分からず屋め!!　ぜぇーーー……ったいに！　ぶっとばしてやる!!』
『ええ、お供いたします。マスター』
「……」
奮起したなのはを見ながら、フェイトは……
「……。」
……人知れず、何かを決意した。
◆・◆　◆　◆

機能を停止させられたアースラ艦橋に、機動六課が集う。
あの襲撃で、負傷者も多数出た。しかし、それでも、逃げる者は皆無。
「……」
――カツンッ!!
杖で床を叩く音に、注目が集まる。
「まず、詫びておこう。――――済まなかった。全責任は、私にある」
深々と、隊員たちへ頭を下げ、謝罪する。
ざわざわと、どよめく一同。はやてが顔を上げると同時に、また静まる。
「――――私は、悔しい」
率直な感想だった。
「悔しくない訳がないだろう。これだけ好き放題にコテンパンに踏み付けられ、どこからどう見ても、完全無欠にいいようにハメられて……隊員まで攫われて、しかもオマケに今回の事態に関して、出撃許可が下りない！　まんまと、雁字搦めだ！」
――悔しい。
……それは、機動六課にいる全員の心情だった。
「――悔しくは無いか、貴様ら!!　どうなんだ!?　ええ!?」
静かに……隊員たちの心に、怒りの炎が再燃していく。
「ゴミだ、クズだ、落ちこぼれだ……余所のイイトコのお坊ちゃん部隊からは言われっ放し……だが!!
――クズには、クズの矜持がある！　違うか!?　答えろクズども!!」
――――違いません!!
隊員たちは、声を一つにする。
「――これより、機動六課は作戦行動へ移る!!」
出撃しないのに、何故、と問うものはいない。既に、この部隊長の意をほぼ完璧に汲めるまでに、機動六課は纏まっていた。

「だが、この作戦は正規の作戦ではない！　功績はそのまま罪状へと変わり、賞賛は罵声に、勲章は汚名へと変わるだろう！」
――問題ありません!!
「――宜しい。」
はやては、その部下たちに対し、鷹揚に頷いた。
『その言葉』を待ち侘びる隊員たちへ、檄を飛ばす。
「――名誉など要らん！　賞賛も要らん！　欲しがる乞食にくれてやれ!!
ただ我々は、意地と矜持を守るため、叛逆の牙を剥く！
クズ上等！　これ以上、堕ちる場所など在りはしない！
貴様らは何も恐れる必要はない!!
全責任を、纏めて私に放り投げろ!!　場外まで蹴り出してやる!!
失うものを持たぬ者が、どれほど恐ろしいのか……落ちこぼれの本気を、思い知らせてやれ!!」
――カンッ!!
「――機動六課、行動開始!!」

――オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

怒号のような鬨の声が、艦橋全体を揺さぶった。

◆・◆　◆　◆

第2航空大隊長ベローチェ・セレスピード一佐は、かつて無いほど大規模となるであろう作戦を前に、部隊内を奔走していた。
彼は、いち軍人として……与えられた任務を、愚直にこなすことで、この地位へと就いていた。上司であるデイリンは、個人的にはあまり好ましい人間ではないが……それでも、上官である。
「……」
おかしいことは、何もない。

今回の作戦において指示されたことも、何も間違ったことは無かった。
『他の部隊よりも先んじて、かの『揺り籠』最深部へと突入せよ』……と。
飛行要塞が敵となれば、それこそ、航空隊の出番である。
だが……
「……」
積み重ねてきた経験が、何故か、警鐘を鳴らすのだ。何かがある。何かがおかしい、と。
「……」
だが、命令を拒否するという選択肢は、彼の中には無かった。愚直な軍人であるが故に。
「……む!?」
……そういえば、何故彼は、こんな『人気のない暗がり』を、一人うろついていたのだろうか。
(な、何だ!? どこだ、ここは!?)
自分は先ほどまで、作戦に際しての装備の確認や、人員の配置を検討していたのではなかったのか。
「――掛かれぇっ!!」
ズバッ!! と、薄暗がりの中から、人影が飛び出してきた!
「うォおおおおッ!?」
だが、彼とて歴戦の魔導師。即座に魔法での迎撃を試みた。
――ドウッ!!
「ごはァっ!?」
……いやに呆気ない手ごたえで、敵兵の身体を打ち据えた。
「はぁ、はぁ……! な、何者だ!? ナンバーズの手の者か!?」
狼狽えながらも、警戒を強める。
「やっべー……」
「おい、どーする……?」
「……まぁ、一人くらい欠けても……」
……緊張感のない連中だった。そのくせ、目的意識だけはハッキリ

としているようで、ちぐはぐな印象を受ける。
ぞろぞろと……姿を現す族たち。
「か、管理局員……なの、か？」
……疑問を感じた理由は、その族たちが、陸士部隊の制服を着ていて……それを、ありえないほどに着崩していたからだった。
「――!?　つ、通信が……!?」
密かに部隊へ連絡しようとしていたベローチェだったが、いつの間にか阻害されていることに気が付いた。
救援は呼べず……撃退は容易いだろうが、操られた管理局員であるという可能性もある。攻撃魔法の威力は……？　拘束するにも数が多すぎる。救援を呼ぼうにも通信が阻害されている。
「……」
あっという間に焦りを露呈してしまう。
「通信が使えないくらいで、何ビビッてんだコイツ……？」
「さぁ……？」
「指揮官って、前線で戦わないのかな……？」
……が、敵兵こと機動六課の面々は、心底不思議そうに首を傾げていた。
通信が阻害されているのは『いつものこと』。
指揮官不在の状況下、各々の判断で動くのも『いつものこと』。
上官に危害を加えるのも、『いつものこと』。
「く、来るな……来るんじゃない！」
じりっ、と後ずさるベローチェ。
……各々、手に虎ロープやアナログな手錠を構える。
『お前を捕獲する』と言わんばかりの装備だ。
そちらを注視している、背後……一人が、スリングショットにゴム玉を装填し……
――スコンッ!!
後頭部へ、命中。
「ぬォあああああああっ!?」
錯乱し、やたら滅多に魔法を乱射するベローチェ。

……その隙を見逃すほど、機動六課は甘くは無かった。
――――うおおおおおおおおっ!!
「う、うぎゃあああああああああああああああああっ!!!!」
……多勢に無勢という言葉が、ここまで的確な状況もそうは無いだろう。
魔法が直撃したというのに、無駄にタフな機動六課の面々は意にも介さず、人海戦術で押し迫る。
襟首を掴まれ引き摺り倒され、首筋に何かが押し当てられる感触と共に……
――――バチィッ!!
「おゥっ……」
……歴戦の軍人・ベローチェは、意識を失った。

「……弱ぇー……」
「何だよアレ。教官の魔法より、全然ヌルいじゃん」
「周囲全部が敵なんて状況、普通、訓練でやるだろ……」
トラロープでぐるぐる巻きにして、口にはガムテープを張り、えっさほいさと誘拐されていく。
「よし、一匹ゲット!!」「向こうはどうかね?」「んー……ま、同じでしょ」「んじゃ、部隊長んトコに持っていきますか」

――――ドサッ。ドサッ。
「部隊長、捕まえてきたッスよ」
殊更、誇るようなことでもない……とでも言うような口調で報告する。
「うむ、ご苦労」
「ムー……!!」「ムググ……!!」
……はやての前に転がされた、二つの簀巻き……デイリン配下の航空隊隊長二人は、ガムテープで塞がれた口で、抗議の声を上げていた。
「……縄抜けも知らんのか」

呆れたように呟く。
……ちなみに、機動六課の訓練の必修項目には『縄抜け』が明記されている。
全身をあらゆる手法で拘束し、池にボチャンと落とす。あとは、勝手に縄を抜けて上がってくるのを待つ。溺れそうになったら引き上げて、また落とす。それを繰り返す……という、実に拷問じみた内容だが、おかげで、抜け出しにくい縛り方も含めて、全員が取得できていた。
ベリッ、ベリッ……と、口に貼ったガムテープを引っぺがす。
「お、お前は、八神はやて……!?」
「これは、貴様の差し金か!?」
……仮にも准将のはやてを相手に、この口ぶり。上層部でのはやての評判は、すこぶる悪いようだった。
「……口の訊き方も知らんようだな、この塵芥どもは」
カツンッ……と、杖で床を一突きする。
――ズゾゾゾ……
はやての影が、蠢く。
「うっ……! な、何とおぞましい魔法……!!」
「ンだとコラ」
平面でありながら、確かな殺傷力を秘めた影の刃が、首元に突きつけられる。
死の気配を突きつけられた二人は、ようやく口を噤んだ。
「――私からの要求は、一つだ」

――。
そして。翌日。作戦決行の朝。
デイリンは、意気揚々と、準備を進めていた。
「くくく……あのガキめ。指を咥えて見ているがいいわ」
機動六課は後方待機。先陣を切るのは、配下の部隊。
あの忌まわしいレジアスも、機動六課と共に引っ込んでいるに違いない。

デイリンの筋書きとしては、この作戦で、やむを得ず、幾何かの犠牲を出すものの、ナンバーズは鎮圧。主犯のジェイル・スカリエッティは逮捕の後、最高評議会の元へ送還するのみ。そして、陣頭指揮を執ったデイリンは、当然のように最高評議会の褒章を得、この時空管理局という組織の実権を握る……というシナリオが、完璧に描かれていた。

そして、姿見に映った己の胸元に、未だ見ぬ勲章が輝いている姿を想像すると、つい頬も緩むというものだ。

――タンッ。

しかし、そこへ無粋にもノックもせずに邪魔が入った。

「中将、失礼します。早急に、お耳に入れねばと」

腹心の執務官、キーアだった。彼の手には、部隊の配置表が在った。

己の時間を中断させられた不機嫌からか、その手からひったくるように配置表を取り、目を通す。そして……

「どういうことだっ!? 何だこの配置は!?」

顔を真っ赤にして、ぐしゃっと資料を握り潰すデイリン。

「なぜ、セレスピードの部隊と、機動六課の配置が逆転しているのだ!?

……ええい、奴を呼べ!! 今すぐにだッ!!」

唾を飛ばしながら喚きたてるデイリンに、キーアは心の奥で軽蔑を露わにし……それを欺瞞と薄笑いで覆い隠す。

「いやぁ、それが連絡つかなくって。それで先ほど、機動六課から報告書が」

ぺぺっ、と資料のページを進めると……

「……なんだ、これはッ!?」

――わざとらしくナンバーズのものと酷似したスーツを着た女が、わざとらしく二人を担いで、わざとらしく声明文のようなものを掲げていた。『二人の身柄は預かった』……と。その犯人と思しき女の顔は、首部分に不自然な継ぎ目が見て取れて……

「どこからどう見ても合成ではないかッ!?」

そう。もう、挑発としてしか見れないほど、あからさまに合成だった。

「……!!　機動六課だな!?」
そう。その添付資料には、他にも、『機動六課は、人道的見地から、両名の救出のため、ゆりかごへ突入する』との文面も。
「ふざけるな、こんなもの……!!　強制捜査だ!!」
「んー……それが、無理なんですよ中将」
「何故だッ!?」
「いやぁ……これ、もう昨日のうちに提出されてて、議長からハンコ貰っちゃったみたいで……ホラ」
しっかりと、ミゼット、ラルゴ、レオーネ……おまけとばかりに、レジアスの連名まで取り付けてある。これでもう、いち将校であるデイリンに、これを覆すことは不可能になった。
「……ぬがァあああああああああああああああああああ!!!」
デイリンは癇癪も露わに、デスクの上を薙ぎ払った。
キーアはそれを……どこまでも醒めた目で、傍観していた。

◆・◆　◆　◆

――

「……」
デルタこと、吾妻秀人は、半ば朽ち果てたスツールに腰掛け、手元で金属の破片を弄んでいた。
どうやら、何らかの保存容器の残骸らしい。いかに残骸といえど、その強度は推して知るべしであり……
――ペキペキペキッ……
……それを、指先のみで破断させる膂力も、また然り。
そうして、無駄に量産した金属片を、手のひらの中に集め、握りこむと……そこには、小さく小さく圧縮された、ボールのようなものが存在していた。
秀人の遺伝子情報は、少女であるナンバーズたちの身体能力の底上げのほか、機械部品との生体融合や、動力部にも使用されている。
ある意味、ナンバーズたちは秀人の血を分けた存在であるのだが

……双方に、その意識は無かった。
お付きのウェンディが、ボソっと呟く。
「……相変わらず、バケモンじみた怪力ッスね」
いつもなら、会話は一方通行。デルタは、黙っているだけなのだが……
――ヒュボッ!!
……ウェンディの頬に、一筋の線が刻まれる。その背後……金属の隔壁に、潰れた金属塊がめり込んでいた。秀人が、手首のスナップで投擲したのだ。
「え……あ……!?」
「この、馬鹿……!! 刺激するなって、ドクターに言われてるだろ!?」
へたり込むウェンディを、セインが庇う。
「――」
デルタが……秀人が、冷徹な眼差しで、見下していた。どこまでも深く、深く……漆黒に染まった眼で。格下の、下等生物を見る目で、告げる。
「――次は無い」
無言で、こくこくと頷くウェンディだった。
「……おい、秀人」
と、その背後から、何時の間にいたのか、ジェイルが咎めるような口調で言った。
「いらんトラブルを起こすな」
「……そうだな。こんなのでも、大事な計画の駒だった」
挑発とも取れる言葉。だが、ウェンディもセインも、反抗はしない。知っているのだ。
その気になれば、デルタは、全ナンバーズを瞬殺できるということを。
「もう少しだ」
「……ああ」
ジェイルの言葉に、秀人は頷く。
「あと少しの辛抱だ。だから……今は、耐えろ」

諭すような響きの言葉に、二人は、首を傾げるのだった。

◆▪◆　◆　◆

暗闇の中……無言でデータを整理するナンバーズの姿があった。
セリカこと、戦闘機人Ｎｏ．２……最初期ロットのひとり、ドゥーエだ。
傍らには、ティーダ・ランスター、クイント・ナカジマが、武装の最終調整をしつつ、任務へと備えている。
ふと、整理中のデータの中に、数枚の画像データが紛れていることに気が付いた。
「……」
とある休日の風景だ。少女たちが、楽しげに戯れているだけの、ただの日常の一コマ。
雑多なデータと共に、削除する以外の選択肢は無い。
「……、」
しばしの、躊躇とも取れる沈黙があった。Ｙ／Ｎの表示のまま、操作を待つデータを前に、ドゥーエはのろのろと、Ｙをタップしようとした。
「準備完了だ」
……背後からティーダが声を掛けた。
「、あ」
不意に驚いたのか、ドゥーエの指先は、データを保存するよう、逆のキーをタップしてしまっていた。
「？　……何か？」
怪訝そうに、クイントが聞いてくる。ドゥーエはポーカーフェイスを崩さず、指示を出す。
「作戦開始」
ドゥーエは……かつての親友たちを、討ちに出る。
◆▪◆　◆　◆

決戦の朝。
高空に座する『ゆりかご』を見上げつつ、機動六課は、出撃命令を待っていた。
持てる限りの装備。考えられる最善の装備。部隊資金をこれでもかと放出し、ありったけの資材をかき集めた。慌ただしく駆け回る隊員たちの中を、なのはが歩いていく。
その異様な出で立ちに、隊員たちも一時、手を止める。
戦闘服に、戦闘用マニピュレーター。腰には日本刀を大小計４本。ベストには、実弾のホルスターや手榴弾。そして……眼帯は無く、左目を袈裟掛けにする古傷や、白濁した瞳が、白日の下に晒されていた。
『今日は』
全員に宣言するように、静かに告げる。
『久々に――――全力全開で行きます』
わっ、と、隊員たちが沸いた。
「教官かっけーッ!!」「オレらも頑張ります!!」「巻き込まないでくださいよ!?」
『善処します』
なのはは、その反応に苦笑しながら頷いた。機動六課に来て、なのはは、確かに自分の変化を感じていた。いや、変化と言うよりは……生来のものを、取り戻しつつあるのかもしれない。当初はあれだけ、頑なに他者を拒んでいたというのに。
だから、きっと……ここは、なのはの居場所で……帰る場所なのだ。
「……もう、大丈夫みたいだな」
『ヴィータ。』
そこへ、同じく武装を整えたヴィータが現れた。秀人に敗北した傷は、癒えたようだ。グラーフアイゼンを肩に担ぎ、真紅のバリアジャケットを展開している。
『うん。……私、決めたよ』
「おう、任せた」
言葉は、短く。だが、二人にはそれで十分だった。
――守る。

今度こそ……本当に、今度こそ。
（……カレン。オウルさん。みんな。……私に、力を）

◆・◆　◆　◆

「――今回の作戦だが、私も前線に出る」

ざわっ、と隊員たちがどよめいた。だが、リーゼも何も言わない所を見ると……どうやら、本気のようだ。
「し、質問、よろしいでしょうか！」
隊員から、そのような声が上がるのも、当然と言えよう。
「司令部を離れられるということですが、では、今回の指揮官は……」
はやては、リーゼに目配せをする。そして、フィアットが扉を開け……ある人物を伴って、やってきた。
「り……リンディ提督!?」
旧アースラクルーが、驚愕する。
「久しぶりね、みんな」
ざわつく彼らを尻目に、他の隊員たちは、ぽかん、としていた。
「レジアス中将の推薦を受け、リンディ・ハラオウン。本日付で、機動六課へ着任いたしました」
「……ハラオウン？」
彼女のことは知らなくとも……その名の意味は、十分に伝わっただろう。
「クロノ・ハラオウン。前へ」
「……聞いてないぞ」
「言ってないからな」
「……」
クロノは、観念した様子で、リンディの前までやってきた。
「――クロノ・ハラオウン。将官権限により、現時刻を以て、貴官を現職へ復帰。機動六課所属執務官へ任命するものとします」
「ふ、復帰……？　いやいや、母さん。俺は……」

「除隊している……って？」
頷くクロノに、リンディは、見透かしたように笑った。
「書き換えておいたのよ」
……辞任表を、『一時』除隊願いへ。
「エイミィが」
「……ウチの女どもは……」
クロノは、頭を抱えたくなった。というか、実際に抱えた。ハラオウン家の女は、肝が座っていなければ勤まらないようだ。
「あなたは、あなたに出来ることを、精一杯しなさい」
「……」
そのための……『執務官』という力。あの日……捨てた筈のもの。
――執務官であり続けるために、力を振るうのか。
――力を振るうため、執務官であるのか。
……クロノが選んだのは、後者だった。
「クロノ・ハラオウン。拝命いたしました」
続いて……小柄な女性が、クロノの前に来た。
「エイミィ……」
「はい。コレがなくちゃ、締まらないでしょ？」
その手には……真新しいジャケット。そして……返上していた、真デュランダル。
クロノが羽織るのを確認して……びしっと、敬礼をする。
「――エイミィ・リミエッタ准尉。執務官補佐として、着任します！」
「ああ。頼りにしてるぞ」
その全てを見届けたはやてが……高らかに宣言する。
「――『ナンバーズ捕獲作戦』を開始する!!」
――了解!!
『……！　スバル、ティアナ！』
二人を、なのはが呼び止めた。

『……、……』
訓練では、簡単に出せた言葉が……今は、出てこない。
『……ここからは、別行動です。私は『ゆりかご』へ。あなたたちは、地上へ』
配置の通りだ。
『……』
その先……どう言葉を選べばいいのか、四苦八苦している。その顔が、仏頂面のように見えることも、それが原因で、意図せず威圧感を発してしまうことも、スバルとティアナは、分かっていた。
（この人は、いつもそうだ）
（こういう顔をしているときは、いっつも、誰かを心配してるとき）
（でも、言葉が出てこないから、黙り込んじゃうんだ）
（わかってます。伝わってます）
（だから、任せてください。ちゃんと、きっちりとケジメをつけて……）
（みんな一緒に、帰ってきます!!）
二人は、笑顔を浮かべる。そして……
「「行ってきます!!」」

作戦の第一段階は……まず、何は無くとも、『ゆりかご』に接近しなければ始まらない。
そして、敵の地上拠点を攻略する部隊から、注意を逸らさねばならない。
敵はテロリスト。法規も規定も端から知らぬ無法者。質量兵器や、禁忌に触れる装備を満載していることだろう。
アースラのエンジンが、唸りを上げる。
「ゼルビス!!　しくじるなよ!!」
「オォッス!!」
その、操舵席に着座するのは……まさかのゼルビス。
いや……もともと、はやては、ゼルビスの操舵手としての適性を見抜き、この日のために育てていたのだ。

「ふんヌゥ!!」
ゴグンッ……と、レバーを引き絞ると、アースラが上昇する。
操作こそ荒っぽく見えるが……上昇の際に生じるGを、絶妙に軽減させ、機体への負担を最小限に、上昇する。
『ゆりかご』下部より、高熱源反応！　空対地砲撃、来ます!!」
――カッ!!
礫のように飛来する、敵砲撃。
「なんのォッ!!」
――ゴォウンッ!!
アースラの巨体が、軽々とロールする。ただ、無暗に振り回したわけではない。ブレーキングをせず、速度を維持したまま回避するためだ。旋回したアースラの船体を、敵の艦砲が掠める。
マニュアルには決して記載されていない機動だ。操舵手としては落第点どころか、そのまま懲戒を喰らってもおかしくは無い。
だが……このゼルビスは、『機動六課』。そのような些事など、頭にかすりもしない。
「ハハハハハ！　ンな豆鉄砲が当たる……って、エエエエエエエエエエ!?」
――ゴグンッ、バクンッ……!!
『ゆりかご』に格納されていた、更に多数の砲門が開く。
――ガゴンッ!!
その背面より、円錐状の……そう、『ミサイル』に酷似した質量兵器が、顔を覗かせる。
「お、おおおおおおお!!」
だが、速度は緩めない。ゼルビスは、操舵手だ。艦船を操ることに集中すればよいと、気にせずとも良いと……
「想定内だ。愚か者が」
我らが部隊長が、仰ったのだから。
「リンク開始」
……オペレーターの一人が装着した、アイウェア型デバイスと、アースラのコンソールが直結する。

――ゴヒュッ……
アースラの装甲の一部が、円柱状に迫り出した。
その頂上のレーダー・ドームを介し、オペレーターは、アースラへ照準されたミサイルを複数同時に捕捉。
「ファイア」
――ヴァラアアアアアアアアアアアアアッ……!!!!!!
そのスリットの奥へと秘匿されていた、５０ｍｍ８連ガトリング砲が猛火を吹き、ミサイル群を弾幕で殲滅していく。
――ズガガガガガガガガガガガガガガガガガッ!!
ならばと、敵もまた機銃を掃射する。口径、弾速共に、アースラのそれに引けを取らぬレベルだ。マトモに直撃すれば、装甲板へのダメージは必至。
「オラぁまだまだ行くぞォ!!」
荒々しい声と共に、ダムッ!! と、コンソールを拳でブっ叩く。
――ブシュウウウウウウウウウウウッ……!!
傍目には、アースラの装甲表面から、蒸気のようなものが上がったように見えたことだろう。
――ヒュウウウッ!!
敵の掃射した弾丸は、アースラの装甲を貫くどころか、触れることさえ許されず、明後日の方角へ飛んでいく。
「このアースラの装甲を、ただの魔導合金だと思うなよ！　内臓電源式・超伝導装甲に、……う、おえっぷ……!!」
マリエルが、ハイになった様子で得意げに語る。
「じょ、常時、液体窒素での冷却を必要とするが……、ＡＭＦ化でも、問題なく稼働できるのだ……!!　じゅ、純粋科学バンザーイ!!」
……ミキサーの如く撹拌される船内で、マリエルの小さな体はピンボールのように跳ね回っていた。
「うオげえええええええええええええええええ」
「ギャー!!　ゲロ吐きやがったぞこのチビーー!!」「き、きったねー!!」
こっち転がってくんじゃねー!!」「おう、おぅえええええええ……!」

隊員たちにゲシゲシと蹴飛ばされ、格納庫の端っこまで追いやられるのだった。
高度は、ジリジリと上昇してはいるものの……『ゆりかご』の優位は揺るがない。
「チ……!!　上を取られてたんじゃ……!!」
悔しげに唇を噛むゼルビス。
「――ポイントＺ―８へ向かえ」
そこへ、短い伝令が入った。
「!!　……了解ッス!!」
ゼルビスは、躊躇なくその命令に従った。
――ゴゴンッ……!!
アースラは、高度２００ｍの超低空飛行を敢行した。そのまま、巡航速度どころか、戦闘速度を維持する。
いくら、下が廃棄都市区画とはいえ、発生する烈風や衝撃波は生半可なものではない。
劣化した建造物が、衝撃波に煽られ、片っ端から沈下あるいは倒壊していく。
「ひゃはははは！　公共事業だぜ!!　キレーな更地にしてやらぁ!!」
が、ゼルビスはこのシチュエーションに酔ったのか、変なテンションでゲラゲラ笑っていた。もはや、どちらがテロリストかも分からない。
「オラオラぁ!!」
かつてのストリートを、舐めるような低空で……滑り抜けていく。『ゆりかご』の艦砲射撃は、建造物に阻まれアースラには届かない。しかし、アースラもまた、『ゆりかご』に接近する術を持たぬのではないか？
――バゴッ！　ズズズズズズッ!!
しかし、策も無くこのポイントへ向かったわけではない。
「!?　お、おおお。すげぇ!!」
遥か前方。高い柵で覆われたコンビナートが、『展開』していく。斜

めに迫り出したのは、武骨な2本のレール。
「カネってのはな、こうやって使うんだよ!!」
はやてが、ポケットマネーで企業へ資金協力し建造させた、とっておきの『私物』。
――――マスドライバー。
未だ試作品の域を出ず、精々、一般の航空機を高度1万メートルにまで打ち上げる程度。初速に優れる以外、効率は悪く、リスクが高いだけという、無駄の極みとも思える設備。
だが……この局面においては……
「――『こんなこともあろうかと』、ってな!!」
――ガギイイイイッ……!!!!
アースラの超伝導装甲と、マスドライバーの2本のレールと接触。
慣性もそのままに……
――――キュドォオオオオオオオオオオンッ!!
――射出!!
緩和フィールドを展開して尚、押し潰されるような加速の中……隊員たちは、歓声を上げた。
「部隊長!! 一生付いて行きまーーーーーーーーーーーーーーーーす!!!!!!」

『っ……!?』
突如として、目の前にまで接近したアースラに、クアットロは目を剥いて驚愕した。
「おっ。通信できる距離にまで来たか」
いくらバリアがあったとしても、この距離では、自機の兵器のダメージを負ってしまう。
『……、予想外ね。でも……』
ゆりかごより、バラバラと、雲霞のように、超大量の飛行ガジェットが発進する。敵も、総力戦なのだ。ならば……こちらも全力を以て、抗戦せねばならない。
「――リーゼ。行くぞ」
「御意に。我が主」

――ユニゾン・イン。
機動六課・最大最強戦力――八神はやてを以て。

――――バチィイイイイイイイイイイインッ!!!

「……」

ヘッドショットを狙った収束砲撃を、左手の盾で弾き飛ばす。

『八神准将』

アースラより、リンディの通信。

『発射位置は、ちょうどゆりかごの反対側。跳弾砲撃です。そして恐らく、内部への突入口は、そこのみです』

跳弾砲撃。あの大威力で、そのような芸当ができる者は……

「あっはっは!! クアットロの邪魔はさせないよーー!! わたしが相手だーー!!」

戦闘機人ＮＯ．１０・ディエチ。

「……」

はやて一人であれば、問題のない相手。しかし……現在、大量のガジェットが、市街地へ進軍を続けている。最終防衛線は、地上の部隊が敷いているだろうが、数が数だ。

多対一に最も適任なはやてが、ここを離れるわけにはいかない。

「カトラス。ファルシ！」

「了解!!」「了解です!!」

機動六課の航空戦力を引き連れ、はやては、躊躇うこと無くガジェット掃討のため、上昇を続けるアースラを見送った。

『あはっ……!! 馬鹿!? ディエチの砲撃を、マトモに受けられる奴なんて、他にいないでしょうに!!』

クアットロが嘲ると同時……ディエチの砲門に、再びエネルギーが収束する。

「いくら実弾に強くたって、わたしのびーむを当てれば……!!」

がら空きのアースラを、狙い撃ちにせんと……

――――……バキィンッ!!

……砲撃を跳弾させるためのオプションが、真芯を打ち抜かれ、破

壊される。
「え……えっ!?」
ゆりかごの巨体を影にして、射線には入っていなかった筈だと、ディエチが狼狽える。
『次です』
「――――ヴァイス・グランセニック……了解」
ヴァイスは、硝煙を上げる狙撃銃を構える。
――キンッ。
コッキングと共に、空薬莢が排出される。あまりにも原始的な機構だ。電子装備など、精々がスコープのみ。単純。部品点数は数える程。極めてシンプル。取り回しは最悪。汎用性など端から視野に入ってすらいない。
――だが、それが『良し』とされる武器がある。
『弾丸を一直線に発射する』という、ただそれだけの目的のため、神経質な、病的なまでの精度を求めたソレは……とある異世界の、ある伝説の狙撃手の異名を頂く、全長2メートルに達する異形の狙撃銃。
――白い死神、と。
「たった一回……そんなの、まぐれに決まってるし!!」
バラバラバラッ……と、同型のオプションを散布する。
「どうだっ！　これなら、一個や二個なくなっても……!!」
既に、チャージは完了している。照準をつけ発射すれば良い、それだけだ。
――チュイイイイン……!!
ディエチは、オプションの位置から反射角を計算。2回の反射で、ほぼ威力の減衰も無く、敵艦へ直撃できる弾道を算出する。
「くらえええええ!!」
――――キュドォオオオオオンッ!!
――――バシュンッ!!
……ディエチの砲と、ヴァイスの銃が火を噴くのは、ほぼ同時だった。
――パキィンッ!!

数多のオプションの内、一つを打ち抜くに終わる。だが……
――ギュオオオオオオンッ……!!
ディエチの砲撃は、反射角の一つを失い、見当違いの方角へ飛んでいった。
「あ、――――――!!」
愕然と叫ぶディエチ。
「……あいつ、本物のバカだな」
呟きながら、ヴァイスは再びリロード。
スコープの視界の中、浮遊するオプションたちが映る。如何なる加工か知る由もないがただ、事実として。
オプションの表面に、ディエチの姿が反射して、くっきりと映り込んでいるということだけであった。砲口まで見えるものだから、ヴァイスは簡単に、弾道の予測がつけられた。
「なんでだよ～、なんで当たらないんだよ～!? この、このーーー!!」
己の砲撃に絶対の自信を持っていたが故に、突き崩されれば、脆いものだった。
ろくすっぽ狙いもしない、めくら滅法撃ち。
「……そろそろか」
ヴァイスは、弾倉を排出。たった一発の実包を取り出し、装填する。
それは、この狙撃銃とセットでの運用を前提とした、れっきとした『武装』だった。
この決戦の前まで、ようやく試作品の一発が完成したのみ。テストも何もない、ぶっつけ本番での運用。
「やってやるさ」
「やってやるぞ、くそーー!!」
オプションたちが、フォーメーションを組んだ。互いを連結し、空間上に、巨大な『砲身』を形成したのだ。仰角に屹立する砲は、恐らく、砲撃を上空で弾けさせ、降り注がせる役割を果たすのだろう。
「とっておきも使っちゃうからねー!!」
そして、懐からランタンのようなものを取り出し、足元に叩きつける。

――ぶぁあっ……!!
黒炎が巻き起こり、ディエチと、砲を包んでいく。
「……」
息を殺し、心拍を鎮め……五体と意識を、銃と同化させる。積み上げた修練のみが可能とする、一つの到達点へと、己を導く。
「……」
世界から、色彩が消える。全ての雑音が消える。速度すらも緩慢になる。
己が、遥か高次より、世界を睥睨するかの如き……
――……。
神速の、世界へ。
「――……、……!!」
ディエチが、何らかの叫びと共に砲を発射する姿も、迸ったエネルギーの奔流も、それが砲身を伝達する光景も、全てが『視え』ていた。
ヴァイスが行うのは……『引き金を引く』という、たった一つの仕事だけだ。
――きんっ……
引き延ばされた時間の中……ヴァイスの放った弾丸が、アタッチメントとの僅かな隙間を通過し、
――きんっ、きんっ、きんっ……
その砲身の内部を、次々と跳弾していく硬質な音を届け、
――ぱすっ。
……ディエチの砲の、砲口へ滑り込む光景を、確認した。
――……、ズガゴォオオオオオオオンッッッッ!!!!!
時間間隔が等倍に戻ると同時……ディエチの砲は、完全に崩壊していた。そして、その余波を至近距離から浴びたディエチもまた、戦闘続行は不可能となっていた。
「任務完了」
狙撃手として、最大限の戦果だった。

『チッ……使えない子ねっ……!!』
「逃がさねぇぞ、オラァッ!! アグスタの借りを返してやらァっ!!」
ゴウゥンッ!! と、アースラが再びロールする。その圧倒的巨体を、深海を潜航する巨鯨のようにうねらせ……俗に言う、『バレルロール』の軌道を描く。
二隻の左右が入れ替わり……
――ガキィンンッ!!
巨大なアンカーを射出し、ゆりかごへの突入口へと固定した。
ギギギギギッ……と、アンカーが悲鳴を上げる。固定できて、数十秒が限度だろう。彼我の距離は、８０メートル。アンカーで渡してあるとはいえ、曲がりくねった歪な橋。
艦内での魔力の使用は、大幅に制限されるだろう。
――ギャオオオオオオオオオンッ!!
凄まじいエクゾーストが、唸りを上げる。
『ヴァイス、ゼルビス！ 礼を言います！』
なのはが、一台のオートバイで飛び出した。
――ヴァオオオオオオオオオオンッ!!!
『瞬発力』に全てを振った、イタリアの暴れ馬……ＳＸＶは、歪なアーチを蹴散らすように走破する。
『は、はァあああああ!?』
クアットロの、素っ頓狂な悲鳴。しかし、即座に対処する。
『!?』
ぐんっ……と、ゆりかごの船体が、大きく傾いたのだ。アースラと接触したまま、不自然な軌道を描き、なのはを振り落さんと身をよじる。
『……!!』
なのははバイクを捨て、突破口にマニピュレーターを突き刺し、落下を防いでいたのだが……
「うわーーーー!? おーーーーーちーーーーーるーーーーー!!」
激しく損耗した状態で打ち捨てられていたディエチは、落下を防ぐ術を持たなかった。

『くっ……！』
なのははは、マニピュレータの方を固定用にしてしまったことを強く悔いた。せめて、マニピュレータが使えさえすれば、ロケットアンカーで救出できたというのに。
「ひゃあああああああああああああああああああああああああああああ!!!?」
とうとう、ディエチが空中に放り出されてしまった。
『――今ですッ！　リンディさん!!』
体を、ゆりかごの船内に滑り込ませると同時に、固定用アンカーを解除。
自由になったアースラは、ゆりかご下方に……今度は、全体を縛り付けるような形で、取りついた!!
「出力、最大!!」
「おっしゃァあああ!!」
――――ゴッファァァァ

目の前には、辛気臭い男の顔。
――抗戦していたはずのヴァイスが、ディエチの体を抱き留めていた。
手錠を嵌め、無力化したディエチを、捕虜として連行していく中で……
「……うわーん！　認めない、認めないぞーー!!」
「大人しくしろ!!」
「ぐみゃっ……!!」
ディエチは、バッタバタと癇癪を起し、隊員たちに食って掛かっていた。だが当然、組み敷かれ制圧される。
それでも尚、涙交じりに喚いていた。
「わたしのびーむは、クアットロが褒めてくれたんだー!!　クアットロが褒めてくれたびーむが、通じないなんてことあるもんかー!!」
連れて行くにも、らちが明かない。
「……ちょっと下がれ、お前ら」
ヴァイスは、隊員たちを下がらせ、ベシャッと座り込んだままのディエチと、目線の高さを合わせる。
「なんて言って、褒めてくれたんだ？」
「え……？」
「そのクアットロとやらは、何を、褒めてくれたんだ？」
きょとん、としたまま、ぽつぽつと話す。
「パワーと、射程と、コントロール……」
砲撃戦特化型のディエチは、そういった適性を持たされている。なので当然、訓練でも優秀な成果を残していた。
「そりゃあ、確かに凄かったさ。直撃すれば、下手をすればアースラだって大損害だ」
「じゃ、じゃあ、どうして……」
「実戦では、相手にするのは物言わぬ機械の標的じゃない。意志を持った人だ。それを相手に、ああも殺気を丸出しにしていたら、どんな優れた能力も宝の持ち腐れなんだよ。そんなに俺にビームを当てたいんだったらな、もちっと上手に隠れながら撃て」

「む、むぅううううう〜〜〜!!　それができれば、苦労なんてしないよぉ!!」
　もっともである。
「俺にはできる。だから勝った」
　ディエチは、ふくれっ面をして……
「なら、あんたが教えてよ！　そんでもって、今度は絶対にわたしが勝つんだから！」
　……まさかの正々堂々としたリベンジ宣言だった。
「……はは」
　これにはヴァイスも苦笑いをして……その癖のある頭髪を、ぐしゃぐしゃとかき回した。
「にょわーーー!?　やめろーーーーーー!!」
　ボサボサ頭のディエチに、ヴァイスは言う。
「――いいぜ。教えてやる。……けど、手加減はしねぇぞ？」
「えっホント!?　やったー!!
　……じゃなくて!!　次は絶対負けないんだからなぁ!!」
　ディエチは、すっくと立ち上がり、ずんずんと一人で歩いて行ってしまった。慌てて、隊員たちがその後を追っていく。
「……」
　一人になったヴァイスは、その後ろ姿を見送り……
「……ラグナ、か」
　ディエチのオリジナルとなる人物の名。そして……奇しくも同名の、彼が亡くした、たった一人の妹の名を、呟くのだった。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十四話

首都郊外。
『そこ』にはかつて、ある施設があった。ある時代に作られた、イベントホール、のようなもの。既に老朽化から、１０年も前に取り壊され、全天候ドームを構成していた天井部分のみが取り払われたそこは、見方によっては、古代ローマの闘技場（コロッセオ）にも見えるだろう。今では、何ら価値の無い廃墟。しかし、そこを根城とした集団があった。
集団名……特になし。構成員……その日によりけり。目的……時と場合による。
無秩序を詰め込んだようなその集団は、ミッドチルダの路地裏や、地下水路をフルに活用し、管理局の捜査や摘発を逃れながら、規模を増大していた。
――その中核メンバーの一人は、エリオ・モンディアルと呼ばれていた。
――そして、彼を摘発した捜査官は、ゼスト・グランガイツと名乗った。

「……よう、おっさん」
スクーターを乗り捨てたエリオとキャロの二人は、その廃墟に乗り込んだ。
「……」
ゼストは、仮面の向こうから、無言で。
「なんで分かったの？」
ルーテシアは、特に驚いた様子もなく。
――エリオたちと、対峙した。
「ここには、龍脈が流れている。わたしたち召喚術師には、これ以上ない祭壇だから」
「そうだね。だから、くるとは思っていたよ」
ルーテシアは……これが本気の姿なのだろう。

ゴシックロリータ風の装束に、異形の杖を携え、顔料で全身に文様を描いたその姿は、まさしく、この世ならざる者と交信する異能者のソレだった。
ルーテシアの目的は、ミッド首都への攻撃。龍脈から力を吸い上げ、大規模な攻撃型召喚獣を大量展開し、ガジェットたちとは別方向から、街を焼き尽くす。
「一つ、聞かせろ」
ストラーダを構え、エリオが問う。
「何で、お前はあのテロリストに協力している？」
ここに来るまで、エリオは、理由の大部分を把握していた。これは、その最後のピースを手に入れるための問いかけだ。
「……」
ルーテシアは、無言。そして。
――うおおおおおおおおおおおおんっ……!!
全身の紋様が光を放ち、龍脈より、莫大な魔力を吸い上げる！
「エリオくん」
キャロは、前に出ようとするエリオを制する。
「こういう時の相場は、決まってるよ」
『Ｓｔａｒｔ　ｕｐ！』
ケリュケイオン、戦闘モードへ移行。
「わたしたちは、それを知っている。教えてもらっている」
その手を、エリオと繋ぐ。
「……ああ。そうだな」
エリオが、その手を握り返す。
「……何よ、それ」
黒い感情を含んだ声が、ドームに反響する。
「……そんなものが、何だって言うのよ!!」
――ビギッ……!!
ルーテシアの展開した魔法陣から、漆黒の卵のような物体が出現する。
「召喚獣……？」

感じる魔力の波動は、あの、ガリューのものだった。そのオブジェクトに、ゼストが触れる。
――バグンッ!!
オブジェクトが、大口を開けるように展開。そして、それはそのまま、ゼストの体を覆っていき……
「まさか……」
戦慄するキャロに、ルーテシアは告げる。
「ル・ルシエが出来て……私に、できない道理は無い」
――バキィンッ!!
その身を包む、漆黒の鎧となった。その姿は、竜騎士エリオと対となる。
凄まじいプレッシャー。しかし……エリオは、それにどこか、空虚さを感じていた。
軽いのだ。どこかが。肝心要が。
「――――意志無き力は無力。力無き意志もまた無力」
ストラーダを構え、その言葉を口にする。
「教えてくれたのは、アンタだ」
フリードの竜魂を携え……己の内に、押し込める。
『Ｓｉｌｖｅｒｙ　Ｄｒａｇｏｏｎ　Ａｒｍａｍｅｎｔｓ　!!』
――今再び、竜騎士が出現する。
あの日。救ってくれたのは、フェイトだった。そして……道を開いてくれたのは、ゼストだった。だが、今のゼストには、恩を返すとか、助けるとか、救うとか……上っ面の言葉は、きっと届かない。
――ならば。示すしかない。
――己の意地と矜持を、槍に誓って。
「行くぞ、ゼストォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
――ガキィイイイインッ!!
凄まじい衝突音と共に、槍と槍が火花を散らす！
「――……!!」
その速度、その威力に目を見張る。

いくら、竜魂憑依の初戦データが取れなかったとはいえ……これほどの威力は、想定していなかった。
「……！」
――ビュインッ!!
ガリューの手甲より、硬質化した体組織を刃として生成。
まとわりつくエリオを振り払うような動作で、振るう!!
「そんなモン、今更喰らうかよっ!!」
『Ｓｏｌｉｄ！』
片手で拳を握り、硬質化！
「おりゃああっ!!」
――パキィイインッ!!
へし折る。
なのはから得た情報通りだ。あのガリューの甲皮は、魔力には強いが、物理的な強度は常識の範疇にある、と。
ゼストは、再び槍を振りかぶる。エリオは片腕。ゼストは両腕。膂力は互角。であれば、ゼストが競り勝つが道理。
「――！　伸びろォっ!!」
――ビシュウウウウウンッ!!
ストラーダの魔力刃が伸長し、力が完全に乗る前のゼストの腕を切り裂いた！
槍から片腕を放すゼスト。痛みによるものではなく、靭帯を切断されたことによる構造上の不可抗力だ。
「はァあああああっ!!」
片やエリオは、既に両腕でストラーダを保持しており、完全に振り抜く姿勢に入っている。
「……」
片腕で、槍を掲げる。防御の構え。だが……
――ボキィイインッ!!
ゼストの槍は、中途より折れた。穂先と、柄の接合部。
（……通った!!）
確かな手ごたえを感じた。

かつては、膂力やリーチの差を鑑みても、全く競り合うことさえできなかった、あのゼストに……自身の槍が届いたと。
（行けるッ!!）
そうとも。技術だけではない。目の前にいるのは、所詮は操り人形。そんなものに、後れを取る自分ではないと。しかし……。
――……。
無音の浸食は、始まっていた。
『ぬ……!?』
初めに気付いたのは、他ならぬストラーダだった。
「おらあああああああっ!!」
待て、と止めるには、遅かった。
折れた得物をだらんと下げたゼストに、ストラーダが振り下ろされる。
「……」
ゼストは、唯一動く片腕を、躊躇いも無く盾にした。
「……！　馬鹿かッ!!」
これには、エリオも戸惑ったものの……今ここで、手を緩めるわけにはいかないと、刃を止めることなく、振り下ろした。切断し、無力化し……速やかに断面を保護すれば、ギンガのときのように接合できる筈だと。今は、躊躇っている時ではないと。
――ぱりんっ。
「……え？」
エリオは、その予想外の光景に、一瞬、思考を停止させてしまった。
完全に、『入った』はずだった。避けようの無い一撃だった。振り下ろした刃は、ゼストを完全に撃破する筈だった。だが……
――ストラーダの刃は、硝子細工のように、砕け散っていた。
「……!!　な、にィッ!?」
呆けた一瞬が、命取りになる。
――ドガッ!!

巨躯より繰り出される直蹴りが、エリオの胴体を打ち据えた。
「ぐぉっ……!!」
鎧越しだというのに、この威力。直接喰らっていれば、内臓破裂は必至だろう。
だが、そのダメージを処理するよりも、優先すべきことがあった。
「……!? おい、ストラーダ!? なんだよ、ソレは!?」
『お、おのれ……!!』
ストラーダのボディ。銀を基調としたその姿は、まるでスモークフィルターを掛けたかのように煤け、くすんでいた。
「……!! まさか!」
ゼストの、折れた槍を凝視する。穂先と、柄の接合部。その、断面から覗ける柄の内部は……中空。
『腐食毒か……!』
……武装を破壊しに来ると見越した上で、事前に仕込んでいたのか。もしくは……槍が折れたこと自体、策だった可能性すらある。
「なに……してんだよ……」
エリオは、茫然と、折れたストラーダをだらんと下げてしまう。
「なぁ……おい、ゼスト……アンタ、いったい、何をしているんだよ……!!」
相手が、物言わぬ操り人形だとしても。
『ゼスト・グランガイツ』という人物が、毒を仕込むなど……エリオには到底、受け入れられるものではなかった。
……更に、異変。
『ぐ、ぉ……!! こ、こんな……!! 浸食が、速すぎるっ……!!』
ストラーダの一部を侵しているに過ぎなかった毒は、虫が這い上がるが如き速度で、鎧を侵食していく!!
『クァアアアアアアッ……!!!』
「フリード!?」
鎧そのものへと変化しているフリードは、それこそ、存在そのものが蝕まれているに等しい。
――ボゥッ……

そして……ゼストは、懐より取り出した、ランタンのような道具を握り潰す。
内部に封じ込められていた黒炎が溢れ……ゼストの身体に蓄積していたダメージを、根こそぎ修復してしまった。
「……、」
――。
エリオは……無意識的に……一歩、下がっていた。

◆・◆　◆　◆

ルーテシアとキャロもまた、衝突を開始していた。
「えい！」
――ドガガガガガッ!!
気の抜けた声と裏腹に、機銃掃射のような威力の魔力弾を打ち出す。
「……ふん」
しかし、ルーテシアは杖をくるっと回転させるのみ。キャロが疑問に感じた瞬間、キャロが発射したはずの魔力弾が、そのまま１８０。、くるりと反転し、キャロに襲い掛かった。
（ベクトル操作……いや、術式介入の亜種みたいなものかな）
魔力弾の、目標追尾の術式、その値を変更したのだろう。キャロ自身には、既にインターセプトが効かないと踏んでの新技。
「それじゃ……えい！」
――バシュウウッ!!
射撃が通じぬなら、と、砲撃を発射する。
「……」
また、杖を一振り。すると、軌道こそ変わらぬものの、砲撃は霧散してしまう。
「……」
「むだだよ。その程度の攻撃じゃ、」
――バスンッ!!
「……!?　霧!?」

突如として、視界がゼロになる。砲撃に使用していた魔力を、そのまま別の術式のトリガーとした目くらまし。
「……」
ルーテシアは、中和フィールドを展開する。魔法に対する防御は、これで問題無い。多重殻弾を撃ち込まれても、完全に遮断できる。
――ボッ!!
……だが、キャロの行動は、その予想の上を行っていた。
――だッ!!
両の拳を握りしめ……間合いを詰めてきた！
「!? うそっ!?」
キャロは、やや変則気味とはいえ、ミッド式の術者。そう決めつけていたルーテシアの、完全に虚をつく形となった。
キャロの魔力を研究し尽くし、キャロの魔力であれば、ほぼ完全に無効化する中和フィールドも、物理的障壁を伴っている訳ではない。
左右のケリュケイオンは、それぞれ別の術式を走らせている。
一つは、ソニックムーブをより簡略化した高速移動魔法。
そして、もう一つは……！
「ていやあああああああああっ!!!」
『Ｉｍｐａｃｔ !!』
――ドパァンッ!!!
ごく単純な物理攻撃魔法が、キャロの拳ごと、ルーテシアのどてっ腹に直撃する!!
「かハぁっ……!?」
少ない体重を加速魔法による遠心力で補い、全体重と腰の入った一撃！
いかに優れた中和フィールドといえど、既に発生している物理効果までは消せない！
「このっ……!!」
よろめきながらも、反撃を試みるルーテシア。杖を、攻撃用の術式が走る。しかし、この距離なら……
「殴った方が早いッ!!」

――パキンッッ!!
返しの左フックが、ルーテシアの顎を打ち抜く!!
「か、……!!」
ふらついたのを好機と見るや、キャロは更に追撃!!
『ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ!!』
身体強化！　そして打撃!!　人中、水月、丹田!!
「が、あァ……!!」
死に体のルーテシアが、苦し紛れに、懐に手を伸ばす。バキッ……という破砕音。
――ボォオオオッ!!
黒炎が、ルーテシアの魔力を増幅させる！
「……離れろォおおおッ!!」
――ドパァアンッ!!
ゼロ距離からの、衝撃波が炸裂する！
「くぅっ……！」
バリアジャケットで受けつつ、飛び退くことでダメージを最小限に抑える。間合いはまた開いてしまった。もう、同じ手で近づくことは難しいだろう。
しかし、好機に変わりは無い。ルーテシアには、確実にダメージを与えた。
「おねがい、ヴォルテール！」
――ゴォウンッ!!
真龍の剛腕が、空間ごとルーテシアを抉らんと迫る。
膂力・質量・速度……まともに喰らえば、エース級の魔導師であろうと撃墜必至の一撃を、しかし……
――――ドシィンンッ!!!!
「――――!?」
剛腕と同期したルーテシアの腕が、同等の膂力の前に阻止される感触を伝えた。
朦朦とした土煙が晴れ、キャロが目を凝らした先。
「……よ、くも……!!」

――純白の巨大な腕が、ヴォルテールの剛腕を受け止めていた。
「やったな……よくも……よくも、やってくれたなぁあああああああああああああああああああああ!!!」
ルーテシアの皮膚に顔料で描かれた文様が、魔力に反応し発光している。
「……！　やっぱり、『蟲の王』……!!」
ルーテシアの召喚術は、多彩なように見えるが、その実、一種類に過ぎないということを、キャロは把握していた。
その召喚獣全てに共通するのは、六本足の昆虫に酷似した姿である、ということ。では、ルーテシアは、昆虫型召喚獣の使役に特化した魔導師なのか？　……否。
召喚術とは、原則として、『使役する者』と、『使役される対象』の契約により成されるものだ。
そして、召喚術師一人が、『インゼクトツーク』『地雷王』『ガリュー』、そして、今目の前に存在する腕の主……と、複数の対象と契約を結ぶことは、いかにルーテシアが優れた魔導師であったとしても、人ひとりの耐えうるキャパシティを超える行為だ。
だが……ルーテシアが契約を結んだ対象が、『一つ』であるとするならば、話は別だ。
そう、例えば……『蟻（アリ）』や、『蜂（ハチ）』のような、『真社会性を持つ昆虫の王』という、一つの対象との契約ならば。
そのコロニーに属する全ての個体を、『王』より又借りするという形で、多彩な兵隊たちを、使役できるのではないか？　と。
――予想は、当たっていた。
そして、キャロは更に考えた。
『ルーテシアの使役する召喚獣』の規模から、『ルーテシアが契約を結んだ存在』の規模までを、逆算で予測できるのではないか？　と。
ここまでは、キャロの予想通りだった。
「う……ぐ……！　お、重……!!?」
しかし、唯一の誤算があったとすれば……
――グシャアアアアアアアアッ!!

剛腕が、あっさりと、いとも容易くネジ切られる。
「――!! ぅあああああああっ……!!」
同期していたキャロの腕もまた、激しく傷つき、血を噴き出した。
「……ふ、は、ははは、あははは……!!」
激しく明滅する文様。ルーテシアの目は既に正気を失い、ただ一つの術式を、体へのバックファイヤを無視して行使する。
「――来たれ、『白天王』――――!!」

――ビキッ……バキッ、バキバキバキッ……!!

『腕』が、それを現世へ繋ぎ止める役割の魔法陣が、空間を侵食し、無理やりに押し広げていく。
――ドズゥウウウウウウンッ……!!
重厚な破砕音と共に、純白の甲殻に包まれた、巨岩のような脚が、現世へ降り立つ。
――――バギギギギ……!! バキイイイイイイイイインッ……!!
腕、脚……まるで、絡み付く蜘蛛の巣を払うように、鬱陶しげに、境界を破壊し……
『『『ぐるギュあああああああああああアアア

いう、ただ一点だった。

◆・◆　◆　◆

『『『ぐるギュあああああああああああアアア

『グ、ルル……!!』
未だ戦意を見せてはいるが、ダメージを負っていることは明白だ。
――ギイィンンッ!!!
だが、ゼストの攻撃の手は緩まない。
「ぐぉっ……!!」
エリオは……あろうことか、鎧の無いバリアジャケットで槍を受け流した。元より、浸食を受けていない部位とはいえ……強度で鎧に劣るバリアジャケットで、刃を受ければどうなるか……考えるまでも無い。
『担い手よ!』
咎めるような、ストラーダの声。しかしエリオは、それに返答する余裕は無かった。
「う、お、おおおおおおおおおっ!!」
振り払うような攻撃。しかし、それは『攻め』のための攻撃ではなく……ただ、ゼストの攻撃を遠ざけんとする、逃げの動作だった。
「く、っそぉおおおおお!!」
ぶんっ、と、大振りの攻撃。これは当然の如く弾かれ、返しに突きが飛んでくる。
エリオは、籠手で刃を逸らし、更に返そうとして……
――籠手が無残に打ち砕かれるビジョンが見えた。
「――!!!!」
反射的に、体捌きでの回避に軌道を修正した。だが、そんな無理な動きが続く訳もない。
ストラーダの柄で受け……
――ストラーダがへし折られるビジョンが見えた。
「うおっ……!!」
その方向へ跳び、威力を殺す。
「……、なんだよ、コレ……!?」
次々に頭に浮かぶビジョンに、エリオは恐怖した。
――鎧が砕かれ、フリードが無残に散る様。
――ストラーダが粉砕され、そのまま貫かれる様。

――ストラーダを奪われ、その刃に身を貫かれる様。
――フリードの竜魂が引きずり出され、握りつぶされる様。
「やめろぉおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
……破綻は、直ぐに訪れた。
――ドクンッ。
「うぐっ……!?」
エリオの胸が、大きく不自然に跳ねる。心臓……いや、リンカーコア。
「ぐ……!!」
プログラムと精神力で制御していた竜魂憑依が、その綱渡りにも等しいバランスが、瓦解しかかっているのだ。原因は……考えるまでも無い。
――エリオの精神力が、途切れたからだ。
竜魂憑依が、フリードの魂の上に成り立っている……その、至極当然かつ、当たり前の事実の前に、容易に決壊した。
「がぁあああああああああああああああああっ!!」
――バシュンッ……!!
『キュウッ……!?』
エリオの身体から弾き出されたフリードが、投げ出される。
同時に、エリオの身を防護していた鎧も霧散する。
「しまっ、!?」
が、焦ったところで状況は変わらず……エリオの目の前に、攻撃が迫っていた。
――ドゴォッ……!!
……突きや、斬撃ではなく、柄による薙ぎ払いだったことは、果たして幸運か否か。脇腹を抉られ、呼吸器が一瞬動作を止め、体中の酸素が一気に失われる。
「ご、ふ……!!」
視界が何度か回転し、背中に、鈍い感触が生じるとともに、停止する。
「……」

身に沁みついた習慣から、立ち上がろうとして……両腕に握っていたはずのストラーダの手応えが無いことに、ふと気が付いた。
「……、……」
ストラーダは……中途から、真っ二つに折れていた。
「く、そ……」
エリオの意識は、遠ざかって行った。
（すま、ねえ……フリード……ストラーダ……）
徐々に、徐々に……
「キャ、ロ……」
――異変が、起きた。
「……、グ、」
ゼストが、呻くように声を上げたのだ。
「グ、ごぁアアアアアアアアアアアア……!!」
ガランッ……と、槍を取り落とし、頭を両腕で掻き抱く。
ゼストだけではない。装甲としてその身を包んでいたガリューまでもが、喘ぐように、中途半端な挙動を繰り返していた。
◆▪◆　◆　◆
「あぅ……ぐ……」
――勝敗は、既に決していた。
「あは、あはははは……!!　そうだ、これでいいんだ!!　これが正しいんだ!!」
白天王の肩に乗り、血涙を流しながら哄笑するルーテシア。
その、眼下。
――バチ、バチッ……
悪あがきのように展開した防御フィールドが、辛うじて、白天王の攻撃から、キャロの身を護っていた。
だが、これはルーテシアの遊びだ。キャロが辛うじて防げるレベルの攻撃……いや、最早、白天王の踏みつけを、どこまで耐えられるかどうかという『お遊び』に過ぎない。
ズシン、ズシン……と、踏みつけられるたび、キャロの身体が跳ね、防御が軋む。

「うぐっ……」
防御を解いては、押し潰されて即死する。だが、ルーテシアの『お遊び』が終われば、この防御ごと打ち砕かれる。下手をすれば、この『お遊び』にさえ耐えられなくなる可能性までである。
「はは、あはははは!! どうだ、どうだ!! 見たか!! わたしが、いちばん強いんだ!! わたしは、最強の召喚術師なんだ!!」
――ズガァァァァンッ!!
「うううううっ……!!」
防御ごと蹴り飛ばされ、とうとう、それさえも掻き消されてしまった。
「……いたい、な」
『……』
ケリュケイオンも、沈黙している。
「ヴォルテールも、痛かっただろうな……ゴメンね……」
そして、白天王が、止めとばかりに振りかぶり……

「うっ……!?」
がくんっ、と、ルーテシアが膝を突く。
「ごぼっ……」
ビシャッ……と、白天王の純白の甲殻に、紅い斑紋が散る。
「え……なに……これ……」
ルーテシアは、口元を伝う鮮血を、不思議そうに眺めていた。
「ご、んな……わた、しは……ぢゃんと……せいぎょ、じ、て……」
禍々しく輝いていた全身の紋様は、今では逆に、ドス黒く変色し、ルーテシアの身体を蝕んでいた。
「あああああああ

「……!!　ルー、テシア……!!　いますぐ、召喚獣を送還……しなさい……!」
　状況も忘れ、ルーテシアへ言葉を投げかける。しかし……
「いや、だ……!!　わたしは、ちゃんとできる……!!　ちゃんと、せいぎょできる……!!」
「そのままじゃ、死、」
「いやだぁあああああああああああああああああああああ!!」
　血を吐くような、絶叫。そして、堰を切ったように、感情の乏しく見えたルーテシアの、本音が発露する。
「わたしは、ちゃんとやれるっ!!　ちゃんとできるっ!!　召喚術も、他の魔法も、たくさん、たくさん……!!　がんばって覚えたんだっ!!　お母さんとは違う魔法を、ちゃんと、ちゃんと……!!　ちゃんと覚えたのを、お母さんに、見て、もらっ、て……!!
　お母さん……メガーヌに、みとめてもらって……!!　メガーヌに、お母さんになってもらって……わ、わたしは……、『メガーヌのコピー』じゃない、『ルーテシア』に、なるんだ……!!」
　――るォおおおおおおおおおおおおおおんっ
　共鳴するように、白天王が鳴く。
「……」
　キャロは……ルーテシアの血の叫びを受け止め……

「やっと、言ってくれたね」

　――『ル・ルシエ』。これより、真龍の巫女である貴女様が名乗られる御名に御座います。
　――『ル・ルシエ』さま。卑賤なるこの身より、現世へ戻られましたこと、光栄に存じます。
　――『ル・ルシエ』さま。
　――『ル・ルシエ』さま。
　――『ル・ルシエ』さま。
　――『ル・ルシエ』さま。

皆がそう、『キャロ』のことを呼んだ。父も、母も、一族の皆が。
『キャロ』のことを、『ル・ルシエ』と呼んだ。崇敬と畏怖を以て、そう呼んだ。
現人神ですらなく、過去に存在した人物の憑代として。
誰もが、『ル・ルシエ』を見ていた。
誰も、『キャロ』を見ていなかった。
全てを滅ぼして、逃げ出して……『キャロ・ル・ルシエ』を名乗ったのは、審判のためだった。
『ル・ルシエ』と呼び、それを求めた者には、等しく滅びを与えた。
『ル・ルシエ』と呼ぶ者が居なくなれば、自分は、ただの『キャロ』に戻れると信じて。
だが……誰もいなかった。結局、必要とされていたのは『ル・ルシエ』の名と、その力。
「辛かったね……苦しかったね……」
己の存在を認められない……認識されないということは、生まれてさえいないということと同義だ。
……彼女は、『ここにいる』と、誰にも聞こえない産声を叫んでいたのに。
『さ、行こう。『キャロ』。これからは、ボクがお姉ちゃんだ！』
手を引いてくれた人がいた。力を無視して、『キャロ』を見てくれた人がいた。
『あ？　ンだよ呼びづらいファミリーネームだな。『キャロ』でいいよな？』
ぶつかってくれる人がいた。似た境遇なのに、全く違う人がいた。
いっぱい、たくさんの人が、『キャロ』と呼んでくれた。手を伸ばしてくれた。
嬉しかった。幸せだった。
――誰かに貰った幸せは、また誰かに渡されるべきだ。
だから、今度は……自分が、彼女を救う番だ。彼女を、見つけてあげる番だ。手を伸ばす番だ。手を取る番だ。
――なのに。

「……悔しいなぁ」
届かない。どんなに声を張り上げても、泣き叫ぶ彼女には、聞こえない。
「悔しいなぁ……」
握りしめる手は、あまりにも小さく非力で……一人では、とても。
「悔しいなぁ……!!」
届かない。
――『ルーテシア』
ふと、誰かの声が聞こえた。
――『ルーテシア』
――『ルーテシア』
――『ルーテシア』
――『ルーテシア』
「だれ……？」
誰かが、ルーテシアのことを呼んでいる。
「だれなの……？」
ふ、と、目の前に、ぼんやりした光が現れた。一つ、二つ、三つ……そして、無数に。
「霊核……？」
それは、召喚獣の触媒にして、心臓部となるもの。
「……ルーテシアの、召喚獣たち……？」
だが、ここに現れる意味は。
――ルーテシア。
はっと見上げた先。白天王が、泣いていた。主と同じ、血涙を流して。
「白天王……？」
ルーテシアの契約対象は、白天王。この霊核たちは、その臣下であり、ルーテシアと直接の契約関係にあるわけではない。だが……
――ルーテシア。
――泣かないで。
――笑っていて。

この想いは、嘘偽りのない、『ルーテシア』へ向けられたものだ。
他の誰でもない、『ルーテシア』を想う声だ。
「ねぇ……ルーテシア。あなたにも、いるじゃない」
『……』
ケリュケイオンが、淡く輝く。
「ほんの少し、目を開ければ……耳を澄ませれば……こんなに想われているって、判るじゃない」
ぐっと、小さな拳が、握られる。
「……助ける」
エリオは、言葉にせず。キャロは、言葉にする。
「何が何でも！　本気で嫌がっても！　逃げ出しても!!　どこまででも追いかけて、ふん捕まえて、あの大馬鹿を、助ける……!!」
――助けるよ
――助けよう
――助けたい
――助けなきゃ
――手伝うよ
――力を合わせよう
――ルーテシアのために
霊核たちが、一つの意志のもとに、集う。
「ケリュケイオン……もう少しだけ……無茶に、付き合って……!!」
『Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ』
相棒は、応える。
『ｓｙｎｃｈｒｏｎｉｚａｔｉｏｎ』
――パキンッ
……ケリュケイオンが、変じる。
両の手甲より、水晶を削り出したかのような、透き通る一振りの剣へ。
しゃん……と、振るう度、清廉な鈴の音が鳴る。
「――――我、束ねるは唯一の願いなり」

舞う。ただ一つの願いを純化させ、届かせるために。

「――無音の闇に福音を

――無明の闇に光明を」

唄う。声なき想いを乗せ、届かせるために。

「――祈りと想いを一つに束ね

――無窮の力を、ここに顕さん」

穏やかで、優しく……何よりも力強い、聖なる輝き。

「――祈りを一つに

――想いと一つに」

黒き真龍と契約することで、一千年前の『ル・ルシエ』と並んだ。

彼女が成せなかった竜魂憑依を成すことで、五百年前の『ル・ルシエ』に追いついた。

そしてこれは……今を生きる『キャロ』が、『ル・ルシエ』を超えた証。

『Ｃｏｎｆｉｒｍａｔｉｏｎ……――〝Ｃｌｅａｒ　Ｍｉｎｄ〟』

『キャロ・ル・ルシエ』が辿り着いた……揺るぎなき、精神の境地。

「――光指す、道となれ!!」

『Ｓｙｎｃｈｒｏｎｉｃ　Ｓｕｍｍｏｎ　!!』

「――……招来せよ！

――超神龍ヴォルテール!!」

凄まじい閃光が、一面を眩く照らし出し……

「……っ!?　消え、た……!?」

ルーテシアの眼下より、消える。

「!!　……上!?」

――ズバァァァァァァァァァァァァッ!!!
暗雲を切り裂き、真龍をも超える、超神龍が降臨する!!

「……うそ」
降臨したヴォルテールは、腕のみに限定して現界していた時とは、桁が違った。
格が違った。
位階さえ違った。
目の前に存在するのは、遥かな太古より存在し、世界を識る、原初の神が一柱。
――『龍』。
その龍に寄り添う、龍の巫女。そして……神龍と巫女を守護するように周回する、幾多の霊核たち。
「――ルーテシア」
巫女たる『キャロ・ル・ルシエ』が神託を下す。
「――少し、頭冷やそうか」

◆・◆　◆　◆

「グオオオ

「ぐ……!!」
――バリィンッ!!
残った魔力で展開したバリアも、ただの一撃で打ち砕かれる。
『キュルルルル……!!』
ガリューが、その刃をエリオに振り下ろさんと迫る。
「……」
しかし……既に、退くための力も、残ってはいない。
「……オレ、は」
なぜ、躊躇ったのだ？　竜魂憑依が破られたからか？
（そうか、オレは……）
あの時……明確に、ストラーダや、フリードの死を意識してしまった。
居て当たり前だと、そう思えるまでの関係を築いた者が、居なくなる恐怖に中てられてしまった。
――勝てるはずがない。
既に死んでいる存在である敵は、失うものなど有りはしないのだから。
『キシャアアアアアアアアアアアッッ!!!』
ガリューが、刃を振りかぶり……、
――ボンッ!!
『クァアアアアアアッッ!!』
ガリューの顔面に、小規模な爆発が起きた。
『キィッ……!?』
ダメージこそ微小ながらも、たたらを踏むガリュー。
「フリー、ド……？」
エリオとガリューの間に立ち塞がったフリードは、口腔に火炎を生成し、ガリューへとそれを放っていた。
『クァアアアアッ!!』
――ボンッ！
『キィイッ……!!』
二発目、三発目は、来るとわかっていれば、大した脅威にはならな

いのだろう。ガリューは鬱陶しげにそれを払い、悠然と歩を進める。
『クァアアッ!!』
「やめろ……フリード……!!」
それでも尚、退かないフリード。
――バキッ!!
槍に打ち据えられ、進路上から退かされる。
「フリードッ!!」
『……、!!』
――ボンッ!!
『……』
ガリューの背に、着弾。何のダメージにさえならない、ただの無駄弾。しかし、興奮状態にあるガリューには、それをぶつけてくるフリードは、外敵として認識されていた。
くるっとエリオに背を向け……フリードの元へ歩を進める。エリオは既に、背を向けても問題の無いモノとして認識されていた。
「何で……何で、そんなにして……」
『……担い手よ』
手元の相棒が、諭すように、エリオに語りかける。
『――我は、一振りの槍である』
今更なにを……と。しかし、聞き流せない言葉を続ける。
『我は、汝や、あの竜と共に死線を乗り越える同胞である。汝の槍の師でもあるつもりだ』
しかし、と前置きする。
『――――我は、まず一振りの槍なのだ』
突き放すような言葉だが……その実、エリオへの想いが籠められた言葉だ。
『汝の意思を表出させ、汝の意志を貫く、一振りの槍。それが我だ』
「……」
『汝の意思、途切れること無くば、我も途切れず。汝の意志、折れること無くば、我もまた折れぬ』
だから。

――折れるまで、使い倒してやる。
あの誓約を、果たすまで。
『――――我を使い倒せ。我が騎士、エリオ・モンディアルよ！』
――ガキィイイイイインッ!!
……今まさに、フリードへと振り下ろされた凶刃が阻まれる。
『……！』
エリオは折れた槍を交差させ、その一撃を受け止めていた。
「――退け」
――――バチィイイイイイイインッ!!
痛烈な電撃が、ガリューの刃を通じて、ゼストの肉体を吹き飛ばした。
「……フリード」
傷ついたフリードを抱き上げる。
――すまない。
――ありがとう。
必要なのは、そんな言葉ではない。
「――まだ、いけるな？」
守るのではない。守られるのでもない。
互いを信じる。そう……
――背中を預ける、戦友として。
『クァアアアアアッ!!!』
『これからだ、……らしいぞ？』
「ヘッ……そいつは、頼もしいな!!」
再び、オーブへと変わるフリード。
「……」
ふと遠方で、神々しいまでの偉容が現れるのを感じ取った。
「……キャロは、強いな」
離れていても、感じられる。その意思。その心。
「……へっ。自分の小ささが、嫌になっちまうよ」

『……』『……』
二つの意思が、苦笑する気配を発した。
「――だから、気張らないとな」
――バチッ、バチッ……!!
「――胸張って、アイツの傍にいるために!!」
――バチィイイイイッ!!
「――オレの、魂を賭して！」
竜魂憑依。竜魂武装。この二つに足りなかったものは、何だ？
竜魂憑依は、フリードの魂。
竜魂武装は、ストラーダの魂。
エリオはいわば、その二つに、己の肉体と言う器を差し出しているに過ぎなかったのだ。

だが、己の信念に魂を捧げ、殉じる覚悟を定めたエリオは、既に一人前の騎士だった。

ふと、ある街角で出会った、珍妙な女性の声が、思い起こされた。
『キミにもいつか、その時が来るさ』
まるで、未来を知っているような口ぶりの彼女。
彼女は、ストラーダとケリュケイオンに、何らかの加工を施していたが……それは、竜魂武装のためだけのものだったのだろうか？
……きっと、違う。
「……部隊長、今こそ、お借りします!!」
エリオは、己の胸に手を置き……『その術式』を、発動させた。
エリオの手は、水面に沈むように、体内へ沈んでいく。
「う……ォおおおおおおおおっ!!」
そして、体内より掴み出したのは……黄金色に輝く、光の結晶。
術式は……『蒐集行使』の、簡略版。
リンカーコアの摘出術式！
――キィイイイイイイイイイイイイインッ……!!
ベルカ式魔法陣……その三頂点に、三つの魂が据えられる。

フリードの竜魂と、ストラーダの核……そして、エリオのリンカーコアが共鳴し……魔法陣の中心に立つエリオに、力が集約されていく!!

「――――白銀の飛龍よ、我が生命の燈火よ!!

――――無毀の槍に宿り、交わりて、紅蓮の炎と変われ!!

――――唸りを上げ、燃え盛り……荒ぶる魂の叫びを上げよ!!」

『Ｃｏｎｆｉｒｍａｔｉｏｎ…〝ＢＵＲＮＩＮＧ　ＳＯＵＬ〟!!』

ストラーダの放熱スリットが弾け飛び、熱が、魔力が、剛炎の姿となり……エリオを包み込む!!

三つの心、三つの魂が重なり合い、燃え盛り――――無双の力を現出する!!

「――――今ここに烈を成し、天地鳴動の姿を顕せ!!」

その名は。

「竜魂……鎧装ォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

『ＳＩＬＶＥＲＹ（極）　ＤＲＡＧＯＯＮ（の）　ＳＣＡＬＥ（銀）　ＡＲＭＯＲ（竜）　Ｔｈｅ（鎧）　ＥＮＤ（装）!!』

エリオが辿り着いた、燃え盛る魂の極地！

閃光の如き炎が収束し、エリオの姿が現される！

――紅い。

間隙より溢れ出る魔力の炎が、白銀の装甲を、紅蓮に染めていた。

『ギィイイイイイイイイイイイイイイッ!!』

再び、腐食毒を槍に乗せて打ち出す。しかしそれは、決して届くことは無く、紅蓮の炎に焼かれ、消滅する。

『……!』

エリオの視線が、ガリューと交錯する。

激しい炎と対象に、どこまでも澄み、先を見据える瞳。

そして……構える。

――一の構え。

槍術を修めんとすれば、まず第一に習うであろう、基礎の基礎の基

礎。全ての根幹。全ての基点。全ての始まり。
「……」
ゼストが一瞬、思考支配を抜け出す。思考を支配されて尚、見届けねばならぬと、しているかのように。
『キィアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!!』
――ジャコオオオオオオオオオンッ!!!
全身の装甲を展開・変形させ……顎を、角を、牙を、爪を、棘を、毒を、熱を……ありとあらゆる生体武装を、エリオへ殺到させる！
「……」
対してエリオは、半歩身を引き……ふおんっ、と、流れるような動作で槍で薙ぐのみ。
それだけで……
――――ガゴッシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ!!!
生体武装が、粉砕される!!
『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!?』
全てを力尽くで破壊したのではない。ほんの少し、ほんの数点へ、槍を軽く当て、軌道を逸らしたのみ。それだけで、生体武装は、共食いをするように互いを食い潰し合い、全滅した。なのはとの修練の末に会得した、『理合い』の技だ。
『カ……、……!!』
そして、エリオは再び、一の構えへと戻る。
刺突が、来る。
それが、明らかだというのに……全く、対処できるビジョンが、浮かばない。
――ゴバアアアアアアアンッ!!
一撃が、ガリューを捉える!!
『ガアアアアアアッ!!!!』
黒炎で強化した甲殻が、瞬時に粉砕される!!
『ッシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「はぁあああああああああああっ!!!」
エリオは、鎧装脚部に炎を瞬時に充填……そして、一気に解放!!
――バギィイイイイインッッ!!
真正面から、激突!! 拮抗は僅か、そして……
――バキャアアアアッ……!!
一撃、粉砕!!
「オオオオオオオオオオオオっ!!」
――ドンッ! ドンッ!! ドンッ!!!
足底より爆裂させたエネルギーを、右腕に集中させ……
「うォりゃあああああああああああああああああああっ!!」
――バコオオオオオオオオンッ!!
『グカぁアアアアアアアッ……!!!』
ガリューの顔面を、ブン殴る!!
露わになる、ゼスト本体!!
「行くぞォおおおおおおおお!!」
――バガぁアアアアアンッ!!
ストラーダの外部骨格が、弾け飛ぶ!! 現れたるは、轟雷の刃!!
『――――Ｚａｎｂｅｒ ｆｏｒｍ!!』
顕れたザンバーを、大上段に、振りかぶる!!
「……!?」
――ガキィインッ!!
脱出を図るゼスト、ガリューを、バインドで拘束!
その身を守るための槍は、策がために折れている! 避ける術も、受ける余地も残されていない!!
『Ｄｉｓ ｅｎｃｈａｎｔ !!』
解呪の力を刃に込め……
「ディバイドォおおおおおおお

おお!!!」

――――一刀、両断!!

解呪の刃は、ゼストと、ガリューを、完全に分断せしめた!!

「……一本、だ」

巨大な光に飲まれる寸前……ゼストが、何かを呟いた声が……エリオの耳に、届いた。

『ぬぅ……』

『キュゥウ……』

力を出し切ったストラーダとフリード。

「……、おい、オッサン。ガリュー。生きてっか」

エリオは、同じく横たわるガリューとゼストへ、自身も寝ころびながら問いかける。

「……ああ。」

低く、重い声。

数年ぶりに聞く声は、聞きなれたものだった。

「……見事だった。オレを超えたな」

憑き物が落ちた、さっぱりした態度だった。

「へっ……どんなもんだ……」

だがエリオは理解していた。

本来の実力は、未だ大きく差をつけられていると。

ゼストが傀儡で本来の技量を十全には発揮できておらず、エリオはフリード、ストラーダと協力し、3対1でどうにかこうにか勝てたのだと。

「……ガリューは?」

「……卵に還元されている。魔力と時間があれば、また起き出すだろ

う」
「そっか。良かった」
ガリューは、ルーテシアの一番の味方なのだから。
そして、キャロとルーテシアの戦闘区域もまた、決着が着く寸前の様子だった。
「おう、オッサン。肩貸せ」
疲弊した体を、何とか起こす。
「――見届けるぞ」
あの二人の決着を。
◆・◆　◆　◆
「うそだぁあああああああああああっ!!!」
――ドゴォオオオオオオオオオッ!!!
白天王の放つ魔力砲。砲撃魔導師数百人分にも匹敵するその破壊力。しかし……
――バチィイイイイイイイイイイイイインッ!!
ヴォルテールは、両腕でのみ、防ぎきる。
「……!!」
――無傷。
――全くの、無傷！
「いっけえええええええええ!!」
『ルォオオオオオオオオオオオッ!!』
剛撃、そして、無双の一撃!!
――――バガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンッ!!!
堅牢な白天王の装甲を、ただの一撃で粉砕せしめる!!
「あああああっ……！」
ルーテシアは、苦悶に顔を歪ませる。
「裏切ったな……!!　お前たち、よくも、裏切ったなぁあああああああああ!!」
ヴォルテールを取り巻く霊核たちへ、怨嗟を叫ぶ。

「お前たちも、あいつらと同じだ！　わたしより、他の誰かが良かったんだっ!!　より優れているやつに従うんだ!!」
『……』
白天王は、無茶を承知で、ヴォルテールに殴りかかる。
――ズシィイイインッ!!
ヴォルテールの足元は、地盤ごと陥没はしたものの、全くダメージは通っていない。
「……うわぁあああああああああああ!!」
ルーテシアは、ただ捨て鉢に、魔力を開放する。
「もう、いい……!!　もう、いらない!!　魔法も、魔力も、召喚術も……召喚獣たちも!!」
――バグンッ!!
白天王の腹部の装甲が、展開する。紫紺の宝玉が、ルーテシアを通じて大地の魔力を吸い上げ、破滅的な攻撃を企てる。
「いらない……いらない……もう、なにもいらない……!!」
……ルーテシアの身体も、もう限界だ。呪術紋様は擦り切れ、魔力回路はとうにショートし、リンカーコアは、肥大化し破裂寸前だ。
「もう、わたしなんていらない!!」

――しゃんっ!!

キャロは、水晶剣を振る。
『ルオォオオオオオオオオ……!!』
ヴォルテールの口内が、更に展開。
――行こう
――やろう。
――絶対に。
――――ルーテシアを、助けるんだ!!
霊核たちが、一つの意思のもとに……収束していく!!

「全力、全開!!」
なのはより受け継いだ、キャロの切り札!!
『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ　――――!!』
「スターライトぉ――――――――!!」
『――――ＯＶＥＲ　ＢＯＯＳＴ　!!!!!』
霊核たちが、ヴォルテールが、キャロが……詠唱を重ねる!!　幾重にも、幾重にも……想いの数だけ、力を重ねる!!
――――ルーテシアを縛り付ける、忌まわしき呪縛を……!
「『『『『『『『『『『ブレイカぁぁぁ

誰にも認められず。誰にも理解されず。ただ一人で。たった一人で。ただ孤独に、愚直に、気の遠くなるほどの修練を潜り抜け……

――それでも尚、認められなかった絶望は、どれほど深かったか。負けられない。負けてはいけない。自分だけでも、自分の力を信じてやらなければならない。信じて、信じて……貫き通さなければならない。

だが……

――『私なんて、もういらない』

それでも尚、認められることは無いと悟ってしまった。嘆きを通り越した、絶望。そこから繰り出されているこの一撃は、彼女の悲鳴そのものだ。

――ならば。

――涙も、嘆きも、悲しみも、絶望も……

「――ブレイク、」

――真正面から、打ち砕く!!

「シューーーーーーーーーーーーーーーーーーーート!!!」

――、、、、、、、!!!

極大化した収束砲の中に、白天王が溶けていく。

「――……」

ルーテシアも、ぷっつりと糸が切れたように、倒れる。……体力も、精神力も……生命力さえも、限界まで使い果たしたのだろう。

「……」

ルーテシアは、この感覚に覚えがあった。身の丈に合わぬ大魔法を行使し、失敗し、瀕死に陥っている状態だ。何度も何度も、同じ目に遭ってきた。

だが、今回のコレは、そのどれよりも冷たく、深く……

(ああ……わたし、死ぬんだ)

その意味するところが、理解できてしまった。
（……）
雪の中に寝ているかのように、徐々に、体温が失われていく。
苦痛は無い。不思議なほど、穏やかに……
――……!!　……ル……シ……!!
「……？」
そして……記憶には無い温かさが、あった。
――……テシア！　ルーテシア!!
そして……自分を呼ぶ声がした。符号ではない。番号でもない。
『ルーテシア』と。
（……駄目）
期待してはならない。信じてはならない。この声はきっと、他の誰かを呼ぶ声で。この温もりはきっと、死に際の幻想だ。
（でも……）
何度も、呼んでくれている。
『ルーテシア』と。他の誰でもない、自分の名前を。
それが、活力の枯れ果てた体に。意志の尽きた心に。じんわりと、温かく、染み入る。
――信じてみよう。あと一回、これが最後。
なけなしの活力を振り絞り、瞼を開く。
「！　……ルーテシア！」
眼球さえも力を失っているのか、焦点がロクに合わない。だが……ぼんやりとした視界の中、温もりの正体が、己の手を握りしめる、小さな手であると、判った。
……誰かに触れられている。誰かに触れている。
ただそれだけのことが、たまらなく幸福に感じた。
（……あったかい）
……きっと、もっと、ずっと、単純なことだったのだ。
自分が欲しかったのは、力でも、立場でも、己が証明でもなく……

この、ちっぽけな温もりだったのだ。
……こうすれば、手に入ったのだ。
「……キャロ」
……その名前を、憶えている。
「……!! うん！」
なんて、馬鹿だったのだろう。彼女の周りに、召喚獣たちの存在を感じる。暖かな、穏やかな魂を感じる。己の身体に、生命力を分け与えてくれている。こんなにも、想われている。
積み上げてきたものは、打ち砕かれてしまったけれど。
（――最初から、始められる？）
――大丈夫
（――誰かと、一緒に居られる？）
――勇気を出して
（――誰かを、好きになれる？）
――できるさ

一歩を、踏み出そう。
歩かなければ、届かない。
差し伸べられた手を、取るために。

「……わたしは、ルーテシア。ルーテシア・アルピーノだよ」
「初めまして、ルーテシア。わたしは、キャロ。キャロ・ル・ルシエ」
心が、温かく満たされる。
「……」
ああ、自分は今、笑っているのだと気付く。
花が咲くような、朗らかで、温かい……仮面の奥に隠していた、『ルーテシア』という少女の、心からの笑顔。
嬉しくて、幸せで……何故か、涙が溢れてしまう。
「ねぇ、キャロ」
「なに、ルーテシア」

顔を見合わせる。
「……お願いが、あるんだ」
「うん、わたしも」
――せーの。
――友達に、なってください。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十五話

「着いたわ」
「うん」
スバルとティアナは、バイクを降り……目の前に聳える建造物を見上げる。
大きな建物だ。およそ２０階はあるだろう。高さとしては、ミッド首都の誇る高層建築物には及ばないが、その分、横に広く、まるで要塞の如き門構え。
「……もう、隠す気も無いってことかしらね」
――チキッ……カシャカシャカシャ
多脚を備えたガジェットの軍勢が、二人の行く手を阻む。
「「うぉりゃあああああああああああああああああああああああああああっ!!」」
大群へ、二人が突っ込んだ！

「――――予想通りです」
ドゥーエは、モニターに映し出されるスバルとティアナを観察しつつ、そう評した。
「ガジェットは全て消費して構いません。物量で疲弊を誘います」
上空、市街地、各拠点……恐らくは手持ちのガジェット全てを損耗するだろう。だが、構わない。必要数のレリックを集め終え、起動にまで持ち込めた『ゆりかご』があれば、ガジェットなど取るに足らない損害だ。
それらすべてを消費し、理想を阻む不確定要素を排除する。シンプルな答えだ。
「敵戦力は、想定の範囲内。およそ１５分後に、ガジェットは全滅します」
そして、背後に控える戦士二人へ。

「シータ。ガンマ。出撃」
……侵入せし外敵を排除せよ、と、告げる。
◆▪◆　◆　◆
「おおりゃっ!!」
――バゴンッ!!
目に入る範囲にいるガジェットは、殲滅した。
『……』
索敵を続ける相棒は、状況の変化を告げない。次の部隊が来るのか、それとも。
「――……!」
ティアナの、経験則からの直感が、警鐘を鳴らした。
――バチィイイインッ!!!
咄嗟に展開したバリアを、貫通する一撃。そして。
――バガァンッ!!
天井を崩落させ、岩塊と共に打撃が降り注ぐ！　分断、奇襲の双方を兼ねた攻撃！
「スバル！」
「ティア！」
名を呼び合う。
しかしそれは、分断されたことへの焦りではなく……互いの勝利への激励！
「どりゃあああああああああ!!!」
岩塊は震動波で粉砕。本命たるシータの蹴撃の雨に、体術で応酬する！
（防いだ……第一波！）
敵の正体を知った今、素顔で動揺を誘う手は、もう通じない。クイント……シータは、着地からまだ完全には態勢を立て直しては……
「！」
いない、と見せかけた、倒立姿勢からの、まさかの回し蹴り。
「くっ、」
ガードの上から、大きく蹴り飛ばされる。

「……」
シータは、ひょいと軽い身のこなしで体を起こし、再び構える。スバルもまた、構えを取る。
なぜ。どうして。
そういった疑問と言葉は尽くした。で、あるのならば。
「行くよ、母さん!!」
ただ、力を尽くすのみ！
――ガァンッ!!
剛拳のスバル。柔拳のシータ。
同じ流派でありながら、真逆の打撃を繰り出し合う。しかし、スバルは拳闘家ではなく、管理局員として。シータは、外道のテロリストとして。
――スパァンッ！
スバルの肘が、シータの掌打と相殺する。
「――!!」
「……」
一瞬の硬直。的確にスバルの攻撃を対処し、捌いていくクイントは、スバルにとっては、苦手とする相手だ。打撃の威力が流され、回転運動へと転化。スバルの肘をホールドした状態。逃げようの無い蹴撃が繰り出される。
――『結局のところ、剛拳と柔拳というものは、相克関係です。熱量を上回る水は、火を打ち消しますが、……
「ふゥッ……!!」
呼気と共に、全身に『気』を巡らせ……
――……火勢が強ければ、火は、水に消されることはありません』
「……どっせぇぇぇ

回転肘打ちを、シータの胴体に直撃させた！
「ごっ、……、」
シータの蹴りも当たりはしたが、無理やりに距離を縮められたが為に、脚の根元付近が衝突したに過ぎず不発に終わった。
――シュパァアアアンッ!!
クイントの髪がしなり……暗器、ワイヤーが、スバルを絡め捕らんと迫る。極細の繊維。捕まれば、拘束どころか、四肢を切断されることだろう。しかし……
――バチィッ!!
「！」
ワイヤーは、根こそぎスバルの手により掴み取られていた。
「……知ってたよ！」
暗器とは、『認識の外』より仕掛けることにより、最大限の効果を発揮する。もし、これが初対面で、初戦であれば、スバルは為すすべなく敗北していたことだろう。しかし、今回は、ギンガとの戦闘記録があった。
仕込み刃により、重傷を負わされたギンガだったが……シータという戦闘機人の『未知』を一つ、剥ぎ取るという、大きな戦果を挙げていたのだ。
――ギチィッ……!!
シータはワイヤーを引く。スバルは、刃物の刃面に等しいワイヤーを、鷲掴みにするという失策を犯した。
このまま引いてしまえば、指の何本かを奪うことが出来るだろう……と。
――チュイイイイイイイイインッ……!!
『周波数、チューニング完了!!』
「ＩＳ……震動破砕!!」
――バシィイイイイイインッ!!!
ワイヤーの繊維が、粉々に破砕される！
「はぁあああああっ!!」
右のリボルバーナックルが、シータの顔面を狙う！

――ドシィイイイ!!
しかし、そこまで単調な攻撃が通る筈が無いと、シータは両掌で受ける。
――――……ズ、ドンッ!!
「……!!」
……受け切った。主武装である右腕に勝る破壊力は無い。きっとここで、スバルは右腕を引き、次の一撃に繋げるはず。
――――パンッ!!
「……、？」
ぐらん、と、シータの視界が揺れた。地面が、間近に迫り……、
「、!!」
放心から立ち返り、平衡感覚を強制的に復帰させる。が、反応が遅れ、がら空きの隙を晒してしまう。
――ガシャアッ!!
中段蹴りが、シータの胸部装甲を破砕する!!
「……!!」
ここで、シータは初めて、焦りのようなものを見せる。
――データと違う。
スパイであったセリカ……戦闘機人ドゥーエによってもたらされた内部情報には、当然、フォワードチームのものも含まれていた。訓練記録や、実戦記録から、戦法を予測することは容易く、それに応じた戦術も十分に練っていた。そこに、暗器によるアドバンテージを加えれば、捕獲など容易な筈だった。
しかし、シータは知らなかった。
――パンッッ!!
「っ……!」
スバルが、新たな技を身に着けていることと、それが正規の教官である、なのはと……部隊長・八神はやて直伝の技であるということ。
リボルバーナックルは、相当に重量のある武装だ。重量からの物理的破壊力には、目を見張るものがあるとはいえ、それでもやはり、隙もある。『振り抜いた直後』と、『引き戻す瞬間』だ。

しかし、恐らく……この隙は、なのはによって、恣意的に残されたもの。敵に情報が漏れていると判明したその時から。『弱点』があれば、敵は必ず突いてくるのだから。

はやてがスバルへ授けたのは、正確には『技』ではなく、『動き』だ。

ミッドチルダなどの魔法世界では軽視されがちな、体術。その全ての根幹となる、力積の考え。

重量のある右腕を振り抜き、そこから引き戻す際、慣性の法則により、左半身は大きく前へ出る。その戻る勢いを、身軽な左腕での高速打突に転化し、『引きながら打つ』という、本来ならば、ロスとなるエネルギーの活用。

『――上手くやれば、お前の右腕の重量を、左腕で打ち出すことも、蹴りに乗せることもできる』

これを取得したスバルは、打撃を重くするも、逆に軽くし、速くするも自在。右腕の重量を変幻自在に移動させ、攪乱も可能だった。

――ギャリンッ……!!

マッハキャリバーの装甲を、シータの暗器が僅かに削り、火花を散らす。

「……」

やはり、そうだった。非常に高度に洗練された動作。しかし……それは、ルーチンをそのままトレースしているからに過ぎない。

敵の攻撃という『問』に対して、思考というラグをすっ飛ばし、行動という『解』を返している。確かに、対応速度は飛躍的に向上するだろう。

……事前に用意されている『問』へ、ならば。

しかし……完全に想定外のイレギュラーな要因へは、むしろ、その機械的行動は仇となる。新たにスバルが得た力には、現在のデータでは、有効な対策は無い。精々が、『組みつかれず、遠間から攻撃する』といった程度だ。しかし、その遠間も、スバルの機動力の前にはさほど意味を為さない。

「どっせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい!!」

――ドパァァアンッ!!!

「……!!」
シータの身体が、打撃の威力に宙を舞う。
浮いた。つまり、力を逃す場は無い。
「せァあああああああッ!!」
乾坤一擲の、蹴り!!
「ガふゥッ……!!」
ガードごと蹴り抜かれ、もんどりを打って落下する。
――カチッ
「、！」
俯いたシータの口内より、不穏な金属音が鳴る。カシュンッ、と、マスクが展開し、銃口がスバルを狙う。
退避。回避。
否。
「――いい加減、拳で語れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」
前進!!
――ボグシャアアアアッ!!
ギミックごと、仮面ごと、顔面を殴り抜く!!
「、あ、ァ……あ」
今度こそ、ブラフではなく呻く。
――このまま倒す。
そう、判断するスバルの耳に……スピーカーのハウリングが届く。
『――――充分です、シータ』

◆▪◆　◆　◆

「……」
スバル、シータの戦いが『動』だとすれば、ティアナ、ガンマの戦いは、ひたすらに『静』だった。
四方を壁に囲まれた特殊施設。当時の物品が無数の影を作る中を、ティアナとガンマは、互いの位置を探り合いながら、読みを重ねていた。中途半端な攻撃は、逆に、こちらの所在を教えかねない。念話の

盗聴の可能性も考え、クロスミラージュとの交信すら、今は止めていた。
「……」
懐から取り出した手鏡で、曲がり角の先を最小限、映し出す。
（……クリア）
だが、見たから安心……とはいかないのが、戦闘機人ガンマ……ティーダ・ランスターという男だ。足元に転がった、転がってもさほど音の鳴らない程度の小石を拾い上げ、手首のスナップで、いくつか壁に放る。
あの日……ヘッドショットを喰らった日は、視覚にのみ頼ったことで失態を犯した。
もう、二度と同じ過ちは繰り返さない。そう決意し、聴覚、触覚を最大限に研ぎ澄ます。
やがて、幾つかの小石のうち……
――ジッ。
一つが、壁をすり抜けた。
（……！）
間違いない。ガンマの張った幻術だ。この幻術を解除し、通過するか……しかしティアナは、頭を振った。きっと、解除されることも想定済みのはず。ならば、『気付かなかった』フリをして、そのまま示された道を通ろう。
事前に入手した施設の構造図を脳裏に浮かべる。このまま行けば……物資搬入用のシャッターと、開けた空間がある。
きっと、そこへ足を踏み入れた瞬間に、狙撃なりの攻撃を受けるはず。
（クロスミラージュ）
ここで、初めて通信を行う。多弁な相棒は、今日に限り、寡黙に命令を実行する。
――フェイクシルエット。オプティックハイド。
二つの幻術を、同時に発動する。虚像を作り出す魔法、フェイクシルエットを発動するバックグラウンドで、こちらは姿をカモフラー

ジュする魔法、オプティックハイドを発動する。これで、相手に検知できるのは、表で動かしたフェイクシルエットのみ。
四体の虚像を並べ……
（Ｇｏ！）
一斉に、ダッシュさせる。
――ビシィッ!!
早速、一体目が撃ち抜かれ、消える。
（狙撃ポイント割り出し！）
（合点！）
馬鹿正直に撃ってくる相手とは思っていない。跳弾狙撃や、バナナシュート、射撃スフィアの可能性も考慮し、位置を割り出さなければならない。それまでは、まだ、全ての虚像を消される訳にはいかない。
幻術と重なる位置へ、射撃スフィアを形成する。
「ファイア！」
――ドガガガガガガガッ!!
散弾をバラ撒き、クロスミラージュが割り出した候補を片っ端から潰していく。
――ビシィッ!!
二体目の虚像が、先ほどとは正反対の方角からの狙撃を受け、消える。
（まだまだ！）
ティーダは恐らく、吹き抜けになっているこの空間の上階をぐるりと周りながら撃ってきている。３６０。、闇雲に撃つだけでは思う壺。だが……ティーダのステルスが如何に完璧であろうとも、攻撃の瞬間だけは、エネルギーに変動がある。その瞬間を、事前に予測できれば……、
（！）
――見つけた。
ティーダが攻撃の瞬間に発する、変化。その予兆を、とうとう掴んだ。
クロスミラージュの銃身が延長。フォアグリップとストックが装

着された、カービン銃へと変形する。
（まだよ。まだ……）
虚像には、全く見当違いの方向を攻撃させることで、気を逸らす。
――ビシィッ！
……虚像、残るは一体。ティアナは、息を殺し……片膝を立てた姿勢で、上階へ照準を合わせる。攻撃後にできる隙は、一瞬だ。その一瞬を逃せば、また、振出しに戻ってしまう。手の内も悟られてしまうだろう。
……撃つのは一発。隙は一瞬。
知らず、引き金に掛かる指が緊張する。
（落ち着け、私……落ち着け……！）
――ド、ク、……
心臓の早鐘を、意識の外へ追いやろうとして。
――『緊張や恐怖といった感情は、一般的には、敬遠されますが……
敬愛する教官の言葉が、脳裏をよぎる。
――……乗りこなせれば、これ以上に心強いセンサーは、他に在りません』
……そうだ。緊張を捨てるな。緊張に呑まれるな。
――『戦場で、最もまずいのは……頭に血が上って、冷静な判断が出来なくなってしまうことです。もしも、それを一瞬でも自覚できたのなら……』
「すぅ……はぁ……」
大きく、深呼吸。銃弾の飛び交うまっただ中で、それを行うことは努力を要したが……脳に、酸素を取り込むことが出来た。
――ビシッ、
「……！」
跳弾が、ティアナの側腕を抉った。少なくない痛みに、思わず、得物を取り落としそうになる。
「……！」
思わず、発射地点へと銃口を向ける。

――『おう、ティアナ』
ヴァイスも、言っていた。
――『ライディングと同じだ。目の前だけ見てたんじゃ、脇道からのアクシデントに対応できねぇ』
……銃を、再び元の位置で構え直す。
――『状況を俯瞰して、計算して、二手先の動きをする。……予測だ』
すっ、と、半歩、左に体を動かす。
――チュインッ……!!
その位置へ、今度はティアナを狙ったと思しき銃弾が着弾するが、当たらない。二度目の着弾が無かったところを見る限り、ティーダに見破られたのではなく、先ほどの掠った一発から、確認の意味も込めた狙撃だったのだろう。
――『いいですか、ティアナ』
――『いいか、ティアナ』
……その先は、奇しくも異口同音の言葉だった。

――『頭はクールに、心はホットに』

くっ、と、場違いな笑みが浮かんだ。
「……ええ、分かってるわよ」
――バシィッ!!
最後の、虚像が散る。そして、同時に……
――ばさぁあああああっ!!
虚像が、無数のコマ切れへと変じる。きらきらと、差し込む明かりを反射するそれは、チャフ。最後の虚像に、仕込んでおいたものだ。表面のアルミ箔はセンサーを攪乱し……スコープやセンサーによる観測を、一時的に不能とする。
（――いたぜ）
（――ええ）

ティアナは……初めから、スコープは用いていなかった。己の視力でのみ、世界を観測していた。
――かしゃこっ……
悪手。ティーダは、センサーを兼ねたバイザーを取り払った。
（……わざわざ、ありがとっ！）
引き金を、引く！
――パシュンッッッ!!
亜音速で発射された、漆黒にカモフラージュされた弾丸は……
――パシィイイイインッ!!!
「！　……、……、！」
……ティーダの額、眉間を、正確に撃ち抜いていた。

チャフがすべて落下し、センサーが復活したことで、ティーダの状態を伺うことが出来た。
『……意識だけを、綺麗に刈り取ったぜ』
「……じゃあ、確保ね」
ティアナは、ワイヤーアンカーを使い、一足で上階へ駆け上る。
「……兄さん」
そして、そこには……カモフラージュ用の外套の中に埋もれた、倒れ伏すティーダの姿があった。
「……確保、かんりょ、」
『ガンマ。もういいでしょう』
――瞬間、ティアナの背後から、濃密な死の気配が迫って、
――
――
――
――……。

◆・◆　◆　◆

――人中。水月。丹田。

知覚できたのは、その三つのみだった。

「……？　、……が、」

ずしゃっ……と、意識とは別に、膝を突く。目の前には、シータの蹴りが迫っていて。

――バガッ!!

「、っが……!!」

ガードも間に合わず、蹴り飛ばされる。

威力はある。しかし、これは、先ほどまで自分が捌いていたものと同じな筈。だというのに、なぜ……今になって。

シータが、急激にパワーアップをしたのか？

真の実力を隠していたのか？

……否。これは、シータが強くなったのではなく……

――スバルが、弱くなったのだ。

『……ウイルス……だとぉ……!?』

マッハキャリバーもまた、信じられない、といった口ぶりだ。

――これぞ、真の暗器。

これまでの武装や、クイントとしての実力も……全て、ブラフ。全ては、この『毒』を、スバルに打ち込むための。ざざ、と、ノイズ交じりのスピーカーが、セリカが、語り出す。

『スバル・ナカジマ。戦闘機人０号。現行ナンバーズと比較して……機械的ハードウェアの割合が、高い。より、機械寄りの、戦闘機人』

「……!」

だから、だろうか。人体に無意味な電気信号の塊であろうとも、戦闘機人の……機械を宿す体には、劇薬足り得るのだ、と。

『まさか……貴様……我のデータを……!』

……もちろん、そういった対策をしないほど、機動六課の開発室は無能ではない。幾重にも、ファイアウォールや、プロテクトを仕掛け

ていた。
しかし……セリカ、だ。フォワードチームの指揮官として、そういった重要なデータに触れることは可能であり……また、無意識の盗み見により、情報の蓄積もまた、行われていた。
それを……いわば、対スバル用ウイルスを、クイントに媒介させ……恐らくは、接触回線で、打撃を通じて、感染させたのだろう。
『――――当然。バックドアも付属します』
――ガリガリガリガリッ……!!
不吉な音と共に、マッハキャリバーにノイズが走る。
『あ、gあアアアアアアアアアアあａａａ，・　・　・　・　』
「マッハキャリバー……!!」
『か、勝て……かなｒあｚ、かつ、のだ……相棒……!!』
プログラムを、無理やり書き換えられたか。この戦闘中での機能回復は、不可能だろう。
『ＩＳ『震動破砕』、機能停止。メインアクチュエーター、出力３５％にダウン』
……残されたのは、まるで、水袋のような重い肉体。頼もしい筈の相棒が、今は、ただの重い手枷だった。
「……」
クイントは、ダメージこそ残っているのだろうが、健在。彼我の戦力差は……
（駄目、だ……）
計算するまでも無い。
（部隊長……教官……ギン姉ぇ……、ティア……）
振り上げられる、凶手。
（……ごめん……）

◆・◆　◆　◆
へったくれもなく飛ばなければ、背中を蜂の巣にされていた。
「うあああああっ!!」
だが、無傷ではない。一発は、運悪く大腿部を貫通していた。

ドサッ、と倒れ込む。
「……ど、どうして……!?」
振り返ったそこには……
「……」
全く無傷のガンマが、銃を構え、佇んでいたのだ。
思わず、足元に転がった、『ガンマ』を見やる。外套が捲れたそこにあったのは……
「人、形……」
……それは、カカシのようなもので擬態された、一機のガジェットだった。
「まさか、最初から……!!」
『――はい、最初から、あなたが戦っていたのは、その擬態です』
セリカの声で、セリカが絶対に出さないような冷たい声色で、告げられる。
「……それを、あんなに精密に、動かしてみせたっていうの……!?」
遠隔操作やプログラムだけで……あそこまで、真に迫った『擬態』が出来ようものか。
『――いいえ。ガンマは、あなたのすぐ近くで、擬態を操作していました』
返ってきたのは、否定。そんな近くに居れば、いくら隠蔽しようとも、気付く筈だと、ティアナは疑問を抱いた。
『――居ましたよ。搬入エレベーターシャフトの中に』
「あ、……!!」
……なぜ、見逃していたのか。閉鎖された空間。しかし、エレベーターシャフト内部は、中空。人一人が隠れることなど、造作も無い。
上階に気を惹きつけつつ、その実、同じフロアで悠々とティアナを観察し……頃合を見計らって、擬態を、計算のポイントで倒させる。そして、エレベーターシャフトを伝って上階へ先回りをして……気を緩めたところを、背後から襲撃したのだ。
「……うぁあああっ!!」

――パパパパッ！
苦し紛れの連射。しかし、痛みにより照準は定まらず……ガンマは、悠々と歩を進める。そして。
――グリィッ……!!
……大腿部の銃創を、ブーツで踏み躙った。
「～～～～ッッッ!!!」
声にならない悲鳴を上げる。
「はっ、はっ、……がはっ……ああっ……!!」
痛みのあまり、呼吸も儘ならない。
ガンマは、バイザーの向こうに、何ら感情を浮かべず……銃を、ティアナの頭部へ、照準する。
「う、……」
前回は、魔力で形成された非実体弾。しかし、今回は……紛うこと無き、実弾。
明白な死のビジョンに、ティアナは、身体を強張らせる。
「……、」
結局、自分は……一生、兄には追いつけず終いなのだろうか。あのころから……兄の背中を追いかけていた頃から、何も……
「……、なのはさん……スバル……」
恐怖も緊張も、浮かばなくなった。ただ、無念だった。
兄を蔑まれ。自身を蔑まれ。いつか、いつかの日か……と。その誓いが、果たされぬまま、終わってしまう。それが、ただ、無念だった。
死に際の走馬灯だろうか。
デルタが引き金に掛けた指が、徐々に、それを引き絞ろとしていることが理解できた。
「……悔しい」
涙に震える声が、口を突く。
「……悔しいッ……!!」
ぼうっ、と、残り火だと思っていた意志に、再び、火が灯った。
『――無念でしょうね。あなたは、何も成せぬまま、ここで終わるのです』

――震える手が、まだ、相棒を手放そうとしない。
「言ったんだ……!!　なのはさんに、『行ってきます』って！
約束したんだ……！　ちゃんと、『ただいま』を、言うって!!
誓ったんだ!!　もう、なのはさんを、悲しませないって!!」
二度も、大切な人を亡くした彼女に……三度目は、あってはならないのだと。
恩師に、友に、己に誓った。
――不屈の意志を。
引き金が、引かれていく。ティアナはクロスミラージュの照準を、合わせる。
「誓ったんだ……！　だから……！　だから!!
――こんなところで、終わってたまるかぁあああああああああ!!」
――……！
◆▪◆　◆　◆
――ガキィィィィィィンッ！
……シータの放った凶手が、弾かれる。
『――なに？』
ドゥーエの、動揺する様。
凶手を弾いたのは……スバルの、左腕。
……お守りとして持たされていた、ギンガの……もう片方の、ナックル。
それを使ったのは……ほかでもない、スバル自身だった。

「……ごめん、皆」
重苦しそうに……しかし、スバルは立ち上がる。
「……ふんっ！」
――バキッ!!
己の頬を、拳で殴りつける。
『……気でも、狂いましたか』
「ううん。――――一瞬でも諦めた……私自身への、罰」
その目に宿るのは、不屈の意志。
「手も足も、まだ動く。
――まだ全然なんにも、終わってなんかいない!!」
『……愚かですね。武装を増そうと、それを支える出力が、大きく減衰しているのです』
「……」
スバルは、マッハキャリバーの装甲板を開き、内部の非常用コンソールにアクセス。
――バシュンッ！
カートリッジシステムを排除。装甲板の８５％を分離することで、更に軽量化。
ブーツを脱ぎ捨て、ほぼ生身となる。
『――正気ですか？　今、その生身にも等しい状態でシータの拳を喰らえば、死にますよ』
「――」
……スバルの構えが、変わった。
左腕を、腰だめに。右腕を、緩く上げる。片足を突き出し、半身。
『――何かと思えば、猿真似ですか』
当然、この技のオリジナルのデータも、シータは把握している。そして、その攻略法も。
――ダンッ！
シータが踏込み……体術での攻撃を仕掛ける。この技は、徹底した後の先……カウンターだ。それも、敵の力を利用するタイプの。なるほど、確かに、弱体化したスバルが使うには、理に叶っている。しか

し……それは、オリジナルほどの技量があって、初めて成立する技だ。
そして、純粋な体術で、構えを崩してしまえば……今度は逆に、無防備を晒してしまうのだ。
「……」
手刀打ちで、真っ先に動作する右腕を払ってしまえば良い。シータの、油断など無い攻撃が、右腕を払い……
『――終わりですね』
――パシィインッ!!
……払われた。シータの手刀が。
『なっ……』
スバルは……自ら、その構えを崩し……回し受けで、シータの手刀を逆に払ったのだ。
右で払い……残るは、左のナックル！
――ガシャアッ!!
まさか、土壇場で……スバルは、新たな型を、編み出したのだ。
『――で、ですが、同じ手は……』
「うん。もう使わない。単に、間合いを取りたかっただけだから」
そして、スバルは……
――足を肩幅に開いただけ。両腕を完全に脱力させた。
「もう、身体が重くて、重くて、大変だから……一番、ラクな動きで、やることにした」
緊急時にこその、脱力。
……言うは易し。行うは難し。それは、武の道における、『極意』だ。
「――行くよ。母さん。――セリカ」

◆・◆　◆　◆

――ガチィイイインッ……!!
……それは、銃弾が、ティアナの身体を貫く音ではなかった。
壁に衝突した、一塊の金属塊が、転がり落ちる。
「……！」

ガンマが、驚愕の気配を発する。
その金属塊は……二つの銃弾が、正面部から、互いにめり込んだ形。つまり……
――ティアナは、銃弾を銃弾で狙撃したのだ。
『――まぐれです。油断せず容赦せず、続けなさい』
ドゥーエの声に応じ、ガンマは再び撃つ。今度は、頭、心臓を狙う二発だ。
――ガ、ガァン!!
……しかし、結果は。
「……」
『そんな、馬鹿げた芸当が……!!』
ティアナは……よろよろと。しかし、確固たる意志を目に宿し、立ち上がる。
その目に映るのは……
――モノクロで、時間の流れが止まったような
――神速の、世界。

土壇場の……死に際の、極限の集中力が、ティアナをこの世界へ……否、覚悟と決意を以て、自ら、この世界へ足を踏み入れたのだ。
(……ああ、見える)
ガンマが、引き金を引く動きも。炸薬が破裂し、マズルフラッシュが焚かれる瞬間も。ガンマの筋肉の動きから、次の動作に移るまでも。飛来する弾丸が、空気の壁を螺旋を描いて突き進む姿も。
(あなたの居る世界が、見える!!)
緩慢な時間の中。自らの動作だけは、鈍ることは無い。銃弾に照準を合わせ、引き金を引く。
――ガガガガッ!!
『――! そのまま、撃ち続けなさい!』
ドゥーエの声が、勝利を確信する。ティアナの残弾数が、先に尽きる計算なのだ。そして、それはティアナも把握していた。

『リロードの隙なんて、与えない……！』
そして、弾切れ……の、筈だ。しかし。
――ガガガガガッ、ガキィンッ!!
『何で、何でまだ、撃ち続けてるのよ!?』
……ドゥーエが、この現象を解明できていたとしても、結果は同じだろう。
――ガキンッ……
ティアナが撃った銃弾は、ガンマの銃弾を弾き飛ばし。その弾かれた銃弾が、更に他の銃弾を弾き……
――ビリヤードのように、銃弾を迎撃し続けているのだと、判ったなら。
もし、これが魔力弾だったとしても……結果は、同じことだろう。とはいえ、隠密性を向上させるため、ほぼ実体弾の装備しか与えられていなかったガンマには、詮無き話だろうが。
『身体スペックの差で、ねじ伏せなさい!!』
最早、銃撃は無意味と悟ったのか、そう指示を出す。
ティアナは、高速化された思考の中で……切り札を、切る。
握りこんだ、一発の薬莢。それは……
『チャージングカートリッジ……？　今更、そんなもので何が……！』
真の、切り札。最後の、……最強の、切り札。
「……集え、星よ」
『――――Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　！』
矢尽き、刀折れ……。そんな、最悪の状況に陥った時。必ず、生きて帰ってくるようにと。厳しいくせに、妙に心配性な教官が、ティアナに託したもの。
――キュイイイイイイイイイイイン……!!
集めるのは、一発分で良い。
ただの一撃を、貫くだけの力で良い。
たった一つの術式を、発動できるだけで良い！

「今……目を覚まさせてあげるわ、兄さん。……セリカ！」
『あ、あ……！』

◆▪◆　◆　◆

『あ、あ……！』
シータが、攻撃を仕掛ける。
最後の最後……暗器だらけのシータが頼りにしたのは、己の肉体だった。
「今……目を覚まさせてあげる」
シータの突撃を……まるで、速度が無かったかのように。柔らかく、掌で受け止める。

歩法。力積。寸勁。剛体。脱力。

学んだ全てを……この一撃に込める！

◆▪◆　◆　◆
ティアナのカートリッジに込められた術式と、スバルのナックルに込められた、一つの術式が……トリガーボイスと共に、発動する。

ティアナの……ランスターの銃弾が。星の光と共に撃ち放たれ――

スバルの辿り着いた境地、『不動の打撃』が、威力の全てを、炸裂させる!!

「「『　不屈の心は、この胸に!!　』　」」

――解呪の、生命の光が、ガンマを、シータを……

――呪いの牢獄から、解き放った――!!

◆・◆　◆　◆

「てい、ティア……だい、だいじょーぶ……？」

「これが、大丈夫に見えるっての……？　あ、いたたたた……！」

シータを担いで、大回りをして、どうにかティアナと合流を果たしたスバルだったが……ティアナは、更に重症だ。何せ、銃弾が足を貫通したのだ。大動脈や神経、骨は奇跡的に無事だったが……少なくない出血がある上に、死ぬほど痛い。

「……とりあえず、ここに寝かせましょう。もう、安全な筈よ」

「……うん」

クイントとティーダを、横にする。二人とも血色は良く、呼吸も穏やかだ。

スバルは、ティアナに肩を貸して……指令室へと、歩く。

――パシュウッ……

ロックは、されていなかった。かといって、中がもぬけの殻……ということはない。

「――……来ましたね」

……ドゥーエが、満身創痍の二人と、相対する。

「――さ、わたしの負けを認めましょう。何なりと」

無感情に、背を向ける。

「……」「……」

つかつかと、歩み寄っていく。

「――先に言っておきます。わたしは、戦闘機人Ｎｏ．２ドゥーエ。あなた方へのスパイとして、潜入任務に中っていました」

……

「――クラウン家息女。セリカ・クラウンというのは、存在しない戸籍であり、偽名です」

……

「あの人格・振る舞い・言動その他すべては、あなたがたの……あなた

がた、の、信頼を得るために計算され、用意されたものです……ので……わたし……本来のもの……では……、ありません」
……
「つまり、あなたがたの知る、『セリカ・クラウン』という人物は、そもそも……虚像、……存在しない、……もの、で……裏切ることが前提の……、過ごした……時間も、思い出も……全部、全部が、仕組まれた……嘘で……」
「違うよ、セリカ」
　スバルが、慈悲のこもった声で、ドゥーエの背中に語りかける。
「あなたがどんなに否定したって……私に……私たちにとっては、もうあなたは『セリカ』なんだよ」
「――違います」
「真面目で、責任感が強くて……でも、どこか抜けていて。変なところでアグレッシブで、たまにトンチンカンな、妙ちくりんな、……皆に優しくて、しっかり者の、セリカ」
「――違います」
「訓練校から、ずっと一緒だったよね。私、デスクワーク苦手でさ……よく、お説教されながらだけど、手伝ってくれた。一緒に買い物に行ったり、食事したり……、海鳴市で、すずかさんと、すっごく楽しそうに、」
「――違うって言っているでしょう!!」
　振り向いたドゥーエは、決して認めまいと、言葉を叩きつける。
「わたしは！　戦闘機人のドゥーエ！　その都度その都度、都合のい
い記憶と人格をインストールされて、裏切るために信頼を結んで、最
後には何もかも、素知らぬ顔で忘れてしまう……友達ゴッコ遊びをす
るためだけの、ただの、お人形なのよ！　どうせ……どうせ、あなた
方のことも、スイッチ一つで忘れてしまうのよ!!」
　――バチンッ!!
　……ティアナが、ドゥーエの頬を張った。
「――……どうして、」

茫然とするドゥーエ。ティアナは、怒りと、悲しみをごちゃまぜにしたような顔で、ドゥーエを睨みつける。
「――――だったら、どうしてアンタはそんな顔してんのよ、セリカ!!」
人形。そう自嘲したドゥーエ。だが……いま、二人に向けたその感情は。偽りでも、仮初でも無く……
「――セリカ、泣いてるじゃない!!」
「う……嘘！　嘘よ！　こんなもの、こんなもの……どうせこれも、嘘っぱちで……」
ごしごしと、乱暴に目元を拭う。その手を、ティアナが掴み、無理やり目を合わせる。
「どうして、諦めるの!!　どうして、どうして……どうして、『嘘じゃない』って……『忘れたくない』って、言わないの!!　言ってよ！　そうしたら、そんなふざけたスイッチ押す奴なんて、みんなブッ飛ばしてやるわよ!!　お人形扱いする奴なんて、みんなシバキ倒してやるわよ！」
「！　嘘！　嘘ですわ！　たかがお人形のわたくしに、そんなこと、言ってくれる人なんて、いるわけありませんもの！」
――バチンッ!!
「シバキ倒すって言ったわよね!?」
「わたくしもですの!?」
「当たり前じゃない！　今度はもっと強く殴るわ！」
「ど、どうして……どうして……そんな……」
ティアナ、スバルに、手を握られたまま……どうして、と繰り返す。
「……セリカ。本当は、わかってるんだよね。ちゃんと、わかってる」
その手を、振りほどくことはしない。
「私たち、私たち……、」
――――……友達じゃない。

……その言葉を、彼女は……一体、どれほど、待ち望んでいたのだろう。
そんな、他愛も無い言葉を……一体、どれほど。
「う、」
そして……決壊。
「うわぁぁぁぁぁぁ～～……!! 嫌ですわ、嫌ですわーーーー!!! スバルさぁぁぁぁぁぁぁぁん、ティアナさぁぁぁぁぁぁぁぁ

はまらないだろう。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十六話

――ふぅん。キミが、あの『英雄』の息子か

初対面での第一声が、それだった。

父を亡くし、己が道を定め、歩き出した頃。同期の中では最年少。集まる好奇の視線に事件の余韻を残す中、着なれない制服に身を包み、入隊の訓示を聞き終え、割り当てられた部屋へ向かう途中。気遣い……腫れ物に触るような態度を取るばかりの同期たちの中で、奴は絡んできた。

――キミはあれかい、偉大な父親の跡目を継ぐつもりかい？

周囲の者がそれとなく態度で窘める中、奴は平然と、そこを突いてきた。

無礼。不躾。無神経。その不快を態度に出さずにいられるほど、その当時はまだ自制が効いていなかった。それがどうした、と返す。

――別に。ただ……

他人の神経を逆なでする声。しかし、その目にあったのは……

――強力なコネがあって、羨ましいと思ってさ。

……明確な、あからさまな対抗意識。明らかに年下の、頭二つは小さかったクロノへ、それを示した。

当然、最悪の第一印象から始まった関係は、険悪そのものであったが……ふと、思うことがあった。

――奴以外、良くも悪くも、真正面から突っかかって奴が、他にどれほどいただろう。

と。

そして今、目の前には、あの日と変わらぬ対抗意識を燃やす瞳が待っていた。

◆・◆　◆　◆

ざざざ、と、オフロードバイクの後輪が、僅かに滑りながら止まる。

「――こちらクロノ・ハラオウン。目的地に現着」

クロノが向かっていたのは、敵の拠点の一つだった場所だ。現在は、上空を飛翔する敵『ゆりかご』が発艦した座標。単なる整備基地であると考えられていた拠点だったが、今現在も、無視できない出力のエネルギー炉が生きており、何らかの意図があると踏んだはやてが、単身でクロノを先行させていた。

『こちらアースラ了解。現地のマップを送信します』

送信されてきたマップは、最新のスキャン結果を反映したものだった。やはり、『ゆりかご』発艦の際の衝撃で、壁が崩れている個所が多い。バイクの排気音は目立ちすぎることもあるため、ここから先は身一つで潜入する必要がある。

その、敵アジトと思しき洞穴の内部は、岸壁を素掘りした内部に、鉄骨や足場、さまざまなケーブルが通されていた。

――――。

クロノの眼前。

非常灯以外の消えた、薄暗い洞穴の向こうに、僅かに魔力の光が瞬き……

「これはこれは、クロノ・ハラオウン『元』執務官どの。遠路はるばる、よく来たものだと歓迎してあげようか？」

道化師のバトンのようなデバイスに灯した光を松明代わりに、皮肉たっぷりな挨拶と共に、キーアが姿を現した。

「……おやぁ？」

にやにやと、クロノの姿を眺め……。

「ははは！　あっはっは！　なぁんだ、あれだけ啖呵を切って出て行ったくせに、ちゃっかりと出戻ってきたってワケ!?」

げらげらと、下品に嘲笑した。

「すっごいよねぇ、あっさりと返り咲けるなんて、さすがは『英雄』の息子の政治力ってやつぅ？　心底羨ましいわぁ!!」

……キーアほど、他者の神経を逆なでする技能に長けた者も、そう

そう居るものではない。そう、これらは……キーアの持つ、『相手を怒らせる』という、立派な『技能』なのだ。
で、あれば。クロノの取るべき行動は、おのずと決定する。
「次空管理局・特殊案件処理専門・独自権限保有『機動六課』所属、執務官クロノ・ハラオウンだ。当施設の事件関連性・違法性が、当部隊の独自権限の範疇における捜査の対象として妥当であると判断し、強制立ち入り捜査を執行する」
決して揺さぶられず、淡々と職務を果たすのみ。
「……」
キーアは、馬鹿笑いを止め、クロノを見やる。やはり、挑発だったようだ。
「悪いけど、こちらも権限を以て、捜査を拒否するよ」
「ほう……どのような？」
言い淀んでは、後ろめたさが露呈する。で、あれば、ここは。
「――――デイリン・グレンジャー中将の特命により、如何なる者も通すべからず、との任を頂いているのでね。上官命令ってヤツさ。僕は、それに従うのみだ」
クロノと、キーアの視線が交差する。
「それは、自供と取っても問題は無いか？」
「自供？　はてさて、何のことやら。僕はただ、この場での任務を上官より仰せつかっているだけのいち局員だよ？」
「では、キーア・ソナタ執務官へ問おう。貴官の裁量による判断において、当施設の事件関連性・違法性の有無を述べられよ」
「微塵も無いねぇ」
当然だが、そう断言する。『後ろめたくないのなら見せてみろ』、という文句が通じるレベルのやり取りではない。このままでは、互いの権限が衝突し、膠着状態へ陥ってしまう。
だが……クロノは、それを見越していない訳ではなかった。
「――――では、捜査ではなく……検証をさせてもらおう」
かちっ、と。クロノが手元で、何らかの操作を行う。すると……、
――――ビー！　ビー！　ガシャッ!!

キーアの背後より、多脚装備型ガジェットが、施されていた迷彩を強制的に排除され、突如として駆動を始めた。
「なっ、……!?」
ぎょっとして、クロノの手元を確認する。簡素な、スイッチのようなもの。
キーアは知る由もないが、それは、マリエルがガジェットの操縦系統を解析した結果による成果……言うなれば、『ガジェット暴走装置』である。
「なんなんだよ、これはよォおおお!!」
――バガァンッ!!
ランプをめちゃくちゃに明滅させ、無様なダンスを踊るガジェットを、キーアが粉砕するが……既に、遅い。
「――『ナンバーズ』所属機体を確認。事件関連性在りと断定。管理局執務官キーア・ソナタの関与、並びに虚偽申告による事実隠匿を現行犯で確認。これより制圧を開始する」
……キーアは、余裕綽々なようでいて、これでなかなか狡猾で用心深い人物だ。己の身の他、必ず、何かしらの保険を掛けている。更に、容易に調達可能であり、情報漏洩の心配の無いガジェットを用いてくることは、ほぼ予想できたことであった。
「これ、違法捜査じゃねぇのかよ、あァ!? あわよくば制圧して、証拠能力があるとでも……!!」
見苦しく言い募るキーア。だがクロノは……
「――証拠が有ろうが、無かろうが……どうだっていいんだよ」
凄味のある笑みを、浮かべた。
「な……!?」
「俺の役目は、この施設の最奥に到達し、詳細を部隊へ報告すること。別に、違法捜査で公安が動こうが、その時には、既に事件は終わっている」
そこから先は、はやて達の領分になるだろう。スケープゴートも、トカゲの尻尾切りもさせないと。クロノの『行動』に、違法性があろうと、無かろうと……

「俺は、事件を捜査したいんじゃない。
――――――事件を解決したいんだよ」
その、あまりに破綻的で……それでいて、『己の身を勘定に入れない』という、究極の合理性。『執務官』という立場さえ、クロノにとってはカードの一枚に過ぎない。
「て……鉄砲玉か、お前は……！」
ふ、と笑う。
「鉄砲玉か。それつはいいな。一発の弾丸は、事件の真実を撃ち抜ける」
クロノは……目の前の、『己の立場』に拘泥する甘ったれた小僧に、言い放つ。
「――――――砂糖菓子の弾丸は、撃ち抜けないんだよ」
それが、合図だった。
「クロノォオオオオオオオオオオオオオオーーーー!!」
キーアのデバイスが、魔力弾を形成する！
――――――ズバシャアアアアッ!!
基本技でもある、スティンガースナイプ。クロノが得意とする魔法であり……キーアも、それに勝るとも劣らない使い手だ。
心理戦にばかり強いと思われがちなキーアだが……その戦技の実力は、十分に執務官足り得るものを備えている。
――ズガンッ!!
互いの魔法を相殺し、発生した煙幕を前に、キーアは通路の陰に身を隠す。
（くそ……！　クロノが、こんな手を使ってくるとはな！）
用心深く、突破口になるであろう動線に、バインドや炸裂弾などのトラップを設置していく。これで、また互いを読みあう膠着戦になる。
（まぁいい。どちらにせよ、ボクの勝ちだ）
キーアの役目は……そのままズバリ、時間稼ぎだ。この施設、最奥

へ秘された『ソレ』が起動するまで、ただこうして、居座っていればいい。
『勝つ』ことを捨て、『長引かせる』だけに注力するならば、これほど楽な戦いも無い。ひたすら、防戦と妨害に徹すれば……、
――バキバキバキィッ!!
……という、キーアの目論見は、費える。
「!?」
キーアの設置したトラップ。有利な位置。その全てを、根底から覆される。
「……氷、だと!?」
その全てが……凍てついていた。氷の橋を足場に、悠然と、クロノが歩を進める。
「……そうか、お前は、知らないのか」
闇の書事件の顛末。決め手となったのは、デュランダルの持つ『分断』の力。デュランダルとは、それに特化したデバイスであると。
――しかし、キーアは、デイリンは、知らない。
クロノが持つのは、『真の』デュランダルであるということを。
グレアムによって歪められた姿は、プレシアの助力により『氷結』の力を取り戻し。『彼』の能力により完全なる姿を得た。
「くっそがァあああああああああ!!」
――ダンッ!
氷上の助走から、一気に距離を縮める!!
「おらぁあああああああっ!!」
グシャッ!　と、キーアの顔面へクロノの蹴りが突き刺さる。
「好き勝手しやがってぇえええ!!」
「ぬ、!?」
しかし……キーアもまた、一方的な展開をさせない。クロノの足首をバインドで拘束し、移動系魔法を発動。壁面へ、クロノを投げつける!!
――ダァンッ!!
「く!」

辛くも着地を成功させたものの、やはりダメージはある。しかし、呻いている暇は無い。
――ドオンッ!!
互いの砲撃が衝突する。その衝撃波が、キーアの展開したトラップ、クロノの対策である氷を吹き飛ばし……岸壁そのものを、一部崩落させた。
「!!」
退路が塞がれた。その事実に、キーアが一瞬、気を取られ……
「ソリッドぉおおォッ!!」
――ドンッ!!
強化されたクロノの拳が、キーアのどてっ腹に突き刺さった！
「ごふぅぅうっ……!!」
原始的かつ、効果的。いわゆる、典型的な『ミッド式』術者であるキーアは、ベルカ騎士や、機動六課の面々ほどには、肉体を鍛えてはいなかった。
「……ブラスタァァァァァァァァァァァ!!」
しかし、内臓系へのダメージを喰らって尚、演算を中断しなかったキーアには驚嘆する。
――ズバァァァァァァァァァァァッ!!
熱線の砲撃！
「くぅっ……!!」
デュランダルによる氷結の盾。しかし、咄嗟の発動では、十分に防げない。バリアジャケットの肩口を焼き焦がされ、一時的に可動範囲が奪われる。
――ガキン、ガキンッ!!
「！」
更に、バインド。デュランダルと、残りの片腕が拘束される！
「はぁはははは!!　これで……!!」
にたりと笑い、クロノへと砲撃を敢行する！
――ギィィィィィィィィン……!!
魔力スフィアが展開される！

しかし、クロノは……

「……詰めが甘いのは、変わらないな!!」

そのバインドが、『座標固定』ではなく、より発動速度に優れる『機能制限』であることを解析した。ならば……多少は動ける。

「……!!」

クロノは、上体を、思いっきり後方へ逸らし……!!

「――――ぜァあああああっ!!」

――――ガゴンッ!!

直伝の、石頭ヘッドバット！

「うゴぉッ……!?」

――――バシュウウウウッ!!

見当違いの方向へ飛んでいく砲撃。

「……がぁあああああ!!」

――――ドンドンドンッ!!

しかし、至近距離が裏目に出た。キーアは、デバイスの先端をクロノに密着させた状態で、単純な魔力弾を連発した。

「ごほぉっ……!!」「ぐ、が……！」

内臓が口から飛び出しそうな衝撃。しかし、キーアも、クロノも、互いの襟首を掴む手は緩めず。

「「がぁあああああっ!!」」

――――バゴォッ!!

互いの顔面を、殴り抜く！

「ぐ、ううう……!! くそ、くそ、くそ……!!」

キーアは、苦渋を浮かべながら……懐から、黒炎の容器を取り出す。幾度も躊躇し、しかし……クロノ相手に、躊躇っている時間が命とりになる。

「くっそおおおおおおおお!!」

――――ゴォオオオウッッ!!

叩きつけられた容器が破裂し、キーアのデバイスを中心に、身体が黒炎に包まれる。

この黒炎の作用こそ、多少は解析されてはいるものの……その副作

用には、まだ未知の領域がある。
戦闘機人のような頑健かつ、いくらでも部位交換可能なボディを持つ者にとっては、単純な強化装置を兼ねた予備エネルギーとして使用できているが……生身の人間が使用した例は無い。保身を第一にするキーアだが、既に後が無いからこその使用だった。
既に、退路は断たれ退くことは出来ず、用意していたガジェットたちは役に立たず、増援は見込めない。
――ギュルルルルルルルッ!!
キーアの頭上に、魔力の炎が、球状へ収束していく！
「だが、この攻撃は防げまい!! ボクの魔力に、黒炎のエネルギー……！ 密閉環境で放てば、内部を埋め尽くし逃げ場も無くなる!!」
高らかに、勝利を宣言する。しかし、それを受けたクロノは、冷静を保ちデュランダルを、Ｓ２Ｕを構える。
「良く言えたものだな。

――生まれて初めて、『真剣勝負』をするような男が」

「だ、」
キーアは、最後の余裕さえも失い。
「――だァまれェェェェェェェェェェェェェェェェっ!!!」
――グオォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!
黒炎は、キーアの激情に反応するかのように、激しく燃え盛る!!
「……!!!」
クロノは、その火球に対して……真正面から、突っ込んだ！
「ぁーーーーっはっはっはっはっは!! み、見ろ！ 僕の勝ちだ!!
こうなるのが、当然の……、っ!?」
しかし。
「――うぉおおおおおおおおっ!!」
クロノが、火球の内部を突っ切る!!
『Ａｌｌ Ｄｉｖｉｄｅｄ ！』
限界駆動で輝く、デュランダル！

「ぶ、『分断』で、……黒炎と、僕の魔力を、切り離して……!!　熱を、『氷結』で中和したのかっ……！」
　そして……当然のことだが、キーアの周囲、最低限の範囲に限り、自滅を防ぐため、多少の安全圏が確保されている。つまり……この状況においては、『飛び込んだ方が安全』なのだ。しかし、これだけの威力を前に、その選択肢を実行できるだけの精神力とは。
「はは……あ、ありえない……！」
　キーアは……拳を振り上げ迫るクロノを、茫然と見ているしか出来なかった。

「――インパクトぉおおおおおッッ!!」

――ドパァンッ……!!
「……!!」
　キーアは、吹き飛ばされ……岩壁に、強かに身を打ち据えられる。同時……黒炎の効果が終了する。
「……キーア・ソナタ。事件への関与、殺人未遂、並びに……公務執行妨害の現行犯で、逮捕する」
　手枷を嵌められ……キーアは、完全に捕縛された。
「……」
　拘束されたキーアはしかし、対抗意識に満ちた瞳だけは、クロノへ向け続けていた。
「……そうだよなぁ。ああ、そうだよなぁ!!　クロノ、お前は、僕のことなんて、視界に入ってすらいねぇんだよなぁ!!」
　拘束されながらも、意地で立ち上がり、クロノへ激情をぶつける。
「その、自分の目標以外、何にも映ってねぇ目が、僕は嫌いで、嫌いで、……！」
「キーア」
　……クロノは、その目を、……思えば初めて、真正面から見据えた。

「――――俺は、お前が怖かったよ」

……キーアは、動きを止めた。

「お前の言うように……俺は、『父の跡を継ぐ』という目標のため、その第一歩のため、執務官になることに必死だった。脇目も振らずに走らなければ、辿り着けないと思っていたからな。訓練校を主席で修了し、特待で実務経験制限を免除されることが、あの頃の俺にはどうしても必要だった。だが……実技でも、座学でも、すぐ下に僅差で、お前が付けてくる。だから……俺にとって、『キーア・ソナタ』は、いつだって……

――俺を脅かす、強敵だった」

……その、真実の告白に、キーアは。

「……はは、なんだよ、それ……完全に、僕の、独り相撲だったってコト……？」

毒気が抜けたように、俯いてしまった。しばし、沈黙し……

――ピッ。

……デュランダルへ、あるデータが転送されてきた。

「、これは」

キーアのデバイスからの、無害な情報通信。そこには、事前の調査では明かされていなかった、隠し通路の存在が示されていた。

「――情報提供だ。クロノ・ハラオウン執務官。……クライスラー事件の真実を、伝える」

◆・◆　◆　◆

事件の名の由来にもなった、クライスラー実験施設。そこでは日夜、拉致された市民を材料にした人体実験や、違法性薬物の密造、兵器の開発などが行われている……

――と、いうのは、全くの出鱈目。

『クライスラー』などという組織は存在せず、拉致された市民も存在せず、そもそも、実験設備などありはしない。設備は、ＡＭＦを中心に、

『対魔導師』を徹底的に対策した要塞である。主犯とされた男は、死刑囚を洗脳し、仕立て上げられた傀儡であり、真の黒幕は、表に出てすらいない。
その通報、事前に得られた情報すら、偽造あるいは捏造されたものであり……「管理局が、適度に高ランク魔導師を投入しても違和感の無い」レベルの事件性を持たされているものであった。
――その目的は、『高ランク魔導師の集団拉致』にある。
拉致後には、全てが死亡、全てが行方不明では、逆に不自然な点が残るため、死体を捏造し、死者・不明者が、適度にバラけるよう工作された。
――陸士１０８部隊、通称『ゼスト隊』のメンバーが、今回のメインターゲットだった。
Ｓランク魔導師や、特殊技能を持つ結界魔導師、近代ベルカ式の実力者。彼らを、徹底的に解析することで、『戦闘機人』に次ぐ別系統の戦力……『Ｆ』を用いた、『人造魔導師』の製造技術を確立するために。それによって、『高ランク魔導師のみによる大部隊』を組織するために。
目論見は、ほぼ思惑通りに運び……『ティーダ・ランスター』という思わぬ副産物も得て……クライスラー事件は、表向きには解決されたが、実際には、『成功』していた。
その、黒幕の直属技術者こそが、ジェイル・スカリエッティである。
◆▪◆　◆　◆
「……」
その、あまりにも外道なやり口に、クロノは絶句し……キーアは、自嘲した。
「……その、情報を操作していたのは、僕。そして、それを受けて、ゼスト隊を無理やり借り出したのが……デイリン・グレンジャー中将、ってわけだ」
「つまり……今回の黒幕も、デイリン中将であると？」
キーアは、ふと、笑った。
「親父殿も、俺も、ただの走狗。使い捨ての駒さ。

――更に言えば、前々回、ギル・グレアムの『闇の書事件』も、『黒幕』主導の拉致計画の一環で、キミの父、クライド・ハラオウンも、ターゲットに入っていた」
「!!」
衝撃の真実。しかし、クロノは冷静な思考で、『黒幕』の正体を探る。
――誰が最も得をする？
戦闘機人、人造魔導師の製造技術を確立し……高ランク魔導師の大部隊を編成することに成功して……
「ッ……」
「……気づいたかい？　そう、一連の事件……そして、『黒幕』は、」

――バシュン。

「……、あ」
……キーアが、己の身を……胸部へ空いた穴へと、茫然と視線を落とし……倒れる。
「!!　キーア!!」
駆け寄り、傷口を確認する。
「が。……っ、……」
……まだ息はあるが……瀕死だ。
そして、気付く。先ほどまで、暴走していたガジェットたちが、整然と隊列を組んでいることに。それは、絶対的な命令系統を持つ個体の出現を意味していた。
――機械の蛇。
……かつて。『凶鳥部隊』壊滅の折、カレン・フッケバインを、奈落の底へ沈め……ヴィヴィオを追跡してきたものと、同型の機体。
「やはり、そういうことか……！」
しかも、その周囲には……迷彩と、覆面で個性を消した、質量兵器で武装した謎の部隊が、控えていた。

（……最悪、ガジェットは何とかなる。しかし……あれだけの自動小銃。シールドで防ぐにも、ゴリ押しで……キーアは、間違いなく、守れん）

どうにか、切り抜ける手段を講じている隙にも、謎の部隊は、じりじりと接近してきており……天井を攻撃し、崩落を誘う手段を実行せんとした、その時。

――――ガロロロロロロロロロロロッ!!

……不釣り合いな、ディーゼルエンジンの駆動音が、トンネル内を迫ってくる。そして、覆面部隊の数名が、そちらへの警戒を向けたその瞬間。

――――ズゴォオオオオンッ!!!!

戦闘の余波で崩落した区画を力任せにブチ抜き、鋼の巨体が現れた!!

「ほ、……ホイールローダー……!?」

雄々しいエンジン音を響かせる、『機動六課』のデカデカしい漢字。その、黄色い巨体から……

「――クロノさん！　お待たせしましたッ!!」

アースラを操縦するゼルビスを除いた、コリン小隊が降り立った。色めきたった覆面部隊だったが、操縦席へ、小銃を向け、

「おりゃあああああああああああっ!!!!」

――ドゴォオオオンッ!!

如何にガジェットといえど、機動性を活かせない狭い坑道。更に、単純な質量の差と、圧倒的なホイールローダーのトルクには勝てず、蹂躙されていく。

「ハッ、調べが足りなかったな！　俺ら、一通りの重機は操縦できんだよ!!」

ゼルビスだけが突出しているように見えるが……車両の操縦もまた、機動六課の必修項目である。常日頃から、ぶっ壊した隊舎の修繕や増改築を行っている機動六課の面々にとって、この程度の坑道な

ど、散歩道も同然だった。
「あの蛇みたいなのは!?」
「有人操作！　近距離！　見た目は威圧効果しか無いから余裕！」
……。
クロノは、事前に得ていた情報でのみ、あの蛇を、敵の最大戦力と見積もっていたのだが……考えてみれば、その通りだ。
金属のボディに、光線兵器。
どうと言うことの無い、ただのガジェットではないか。
「ヤオ、リン！　要救助者1だ！」
指示を受けた二人が、キーアの応急処置を行う。
――ガガガガガガッ！
しかし、ガジェットはどうにかなるとしても……あの、自動小銃が厄介だ。覆面部隊をどうにかしない限り、ガジェットが増える可能性がある。
「――。」
そして……コリンは、躊躇なく、それを行う。
「カトル、ジン！　引っ込め！」
「！」
瞬時に指示に従い、退いた二人。そして、コリンは矢面に立ち……
「てめぇら、人間に生まれたことを後悔させてやるぜッ!!」
ダンッ！　と、掌を、大地に触れさせる。すると、……
――ズォオオオオオオオオオッ……!!
漆黒の水たまりのような影が、広範囲へ広がった!!
「!!　これは!!」
クロノが目を剥く。この現象……否、この魔法は！
「――テラーフィールドぉおおおおおおおお!!」
グレアムの用いたのと同じ、暗黒魔法！
「う、うわあああああああああああああああ!!」「ぎゃあああああああああああ!!」
呑まれた覆面部隊が、初めて人間味のある悲鳴と共に錯乱し、昏倒

していく。
閉所だ。逃げ場など有る筈も無い。
「お、おおおおお……」「うぐ……ひィ……」「ああ、あああああ……」
覆面部隊は、死にはしなかったものの……完全に、戦闘不能に陥っていた。
「お、コレだな」
その中の一人の懐から、操作盤のようなものを探り出し……バキン、と踏み壊した。
「制圧完了ッスよ、クロノさん」
「……コリン、おまえは、」
コリンは、クロノに振り向き……寂しそうな笑みと共に、告げる。
「あー……オレの、コリン・バネット……っていうのは、偽名なんスよ。本名は、

――コリン・グレアムって、言います」

……絶句するクロノ。
「……グレアム家っていうのは、違法魔導師対策の名目で、連綿と暗黒魔法を継承する一族で……オレも、暗黒魔法を一通り」
「……」
「なもんで……胸糞悪いグレアムの家が嫌で……部隊長を頼って、逃げ出してきたんスよ」
「……」
「……フツーの部隊じゃ、結局、オレの情報が、上層部かどっかから漏れて……避けられるか、利用されるかのどっちかで、居場所なんて無かったッスから」
そういった意味で、コリンは、どちらかといえば、エリオやキャロに近い立場にいたのだ。エリオを何かと気にかけていたのも、放っておけない境遇だったのだろう。
ガジェットたちが指揮系統を失い、動作を停止して……

「ひゃっほー！　おいコリン、すげえじゃねーか!!」
　飛びつくように肩に手を回す、カトル。
「ンだよオメー、こんな隠し玉もってやがったのか!!」
　ガシャガシャと髪の毛をかき回すジン。
　ヤオとリンも、気にすることも無く、キーアの治療に集中している。
「……、」
　……確かに、その人間の出自は、切って切れるものでは無いのかもしれない。しかし、それが全てではないのも、また事実。コリンは、秘していた技を用いて、状況を解決してみせた。仲間を救って見せた。故に……コリンは、『グレアム』の業を、乗り越えた。
「――手柄だ、コリン。お前のおかげで、助かったぞ」
　彼は……機動六課の一員なのだから。
「へ、へへ。オレは、『グレアム』を終わらせる男ッスから！」
　……と、キーアを治療していたヤオが、おもむろに顔を上げ、
「ふーん。じゃ、あたしん家に婿に来れば解決じゃん？」
　……そのようなことを、のたまった。
「ぶふぅ……!!　な、な……!?」
　コリンは……年相応の少年のように赤面するのだった。

◆▪◆　◆　◆

　ホイールローダーに乗り込み、最奥を目指す一行。日本製建設重機の面目躍如か、車幅さえあれば一定速度で走行できる。
「……そろそろ、だ」
　キーアに受け取ったマップによると、もう間もなく最奥へ到着する。確かに、素掘りの坑道が、徐々に舗装されたものへと変わってきており、目の前には、何かしらの大空間が口を開けていた。
　――そして、最奥で一行が目にしたものとは。
「……なんだ、これは」
　それは、巨大な……次元航行艦と比較しても、優に五倍はあろうかという、凄まじい鋼の巨体だった。たとえようの無い形状だが、

あえて言い表すなら……規格外に巨大な戦車、だ。前方には三門の砲があり、数多の副兵装が高密度に配置され、有人機なのか無人機なのかは不明だが、それが、決して平和的手段を体現したものではない、ということだけは、伝わってくる。

「……」

しかし、動力反応こそあるものの、未だ始動へは至っていない。

ホイールローダーを下り、念のため、キーアを担架で連れながら、内部へ……搭乗口のようなハッチへ乗り込む。

「――――な、」

その光景に、絶句するクロノ。

「これは……」

……壁の一面に敷き詰められた、半透明の容器。ガラスとアクリルの中間のような質感のソレの中には、……明らかに、人間が密封されていた。

「――――」

その、プレート……否、『ラベル』を検めたクロノは、その名が、過去の事件において犠牲となった者たちであると思い至った。

「……！　ごほっ……、」

「！　キーア！」

キーアが、息を吹き返した。

「……、く、黒幕は、……、」

それだけを伝えるために意識を繋いでいる。それを聞き届けるのは、クロノの役目だ。

「――――次空管理局……最高評議会、だ……!!」

――こつん。

「――!!」

身構える一行の前に、革靴の底を鳴らしながら、人が現れる。

「……、」

将官服に、数多のゴテゴテした悪趣味な勲章たち。
「デイリン・グレンジャー中将……」
不用意に姿を見せた彼に、しかし、クロノは疑問を抱いた。
「……、あ、……え……あ、う、ええ……」
血の気の引いた肌。だらだらと流れる脂汗。焦点の合わない瞳。口唇より垂れる涎。まるで、薬物中毒者の様相だ。
「――止まって下さい、あなたを、事件の重要参考人として、」
「あ、う、……ええ……あう、ええ……」
……クロノたちは、その口から洩れるうわ言を……理解した。
「――た、す……け、て……！」
ぼこん、と。デイリンの頭部が……不自然に、隆起する。
「――ひィッ！」
リンが、悲鳴を上げる。
コリンらは、その現実離れをした光景に、ただ茫然と、立ちつくすことしか、出来なかった。その目の前で……デイリンは、ヒトとしての形を失っていく。
――隆起した頭部が弾け、中身がドロドロと流れ出す。
――不自然に湾曲した手足は、ぱきぱきと折れながら、縮んでいく。
――弾けた頭部に、第三、第四の眼球が形成され、それが再び肉に埋没する。
――そのフォルムが、徐々に、小さく、内部へと『折り畳まれて』いく。
「……!!」
しかし……クロノは、その現象を、知っていた。
そう、これは……かつて、グレアムが陥ったのと同じ……!!
「――アああああああああああああぎゃあああああああアアア

「a,,, a,,,, aaaa,,,,,」
知性を失い、生命としての機能を失い……ただ、死に往くだけの、肉塊。
――ゴゴゴゴゴゴゴ……!!
……と、微振動が足元を伝う。
「……!! 総員、脱出!!」
クロノはキーアを抱え、ヤオはリンを支えながら、弾かれるように走り出す。
――グゴゴゴゴゴゴゴゴォン!!
クロノたちは、どうにか丘へとたどり着き……そして、見る。先ほどまで進んでいた岩窟が完全に崩落し……それこそ、山のような巨体が……『立ち上がる』のを。
『アインヘリアルが起動しました』『アインヘリアルが起動しました』
『モード《ギャラルホルン》正常』『モード《ギャラルホルン》正常』『システムオールグリーン』『システムオールグリーン』『英雄に目覚めを』『英雄に目覚めを』『世界に平和を』『世界に平和を』『絶対なる統治を』『絶対なる統治を』『闘争の根絶を』『闘争の根絶を』
――……
――……
――『『 世界に平和な終末を 』』

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十七話

――――――――――――――『死にたい』と、思っていたんだ。

◆・◆　◆　◆

「せいやー!!」
――ゴギャッ!!
抜けた掛け声とともに射出された魔力刃が、ガジェットを両断する。
「数ばっか多いなぁ……」
ガジェットは、確かに困難と言えば困難な相手だが、所詮は機械。対処法さえ分かっていれば、そうそう苦戦する相手でも無い。
「まぁ、ある意味アタリだったと考えればいいのではないか？」
――ザンッ
魔剣で多脚型ガジェットを切断しながら、シグナムが応じる。
「ま、そーだよね。……ジェイル・スカリエッティは、『ゆりかご』の内部にいたんだろうけど……もっと、他に隠しているモノがある、って、ヤガミの意見には同意見だし」
ジェイル・スカリエッティは、ああいう形で活動を開始し、いかにも自己顕示欲の強い、劇場型犯罪者のように見えるが……そこは、かつての同期、マリエル・アテンザである。
『アイツは、計算の結果が『正解』じゃなければ、決して動かない奴だよ。動いた、ってことは、きっと、アイツの中に『正解』が見えたん

だろう』
　ジェイルの『正解』。それが何なのかは、いまだ不明のままだが……
『アイツは、大事なものは手元に置いておくんじゃなくて、宝箱に入れておく奴だ。だから、きっと、アイツにとっての『正解』は……』
「マリーたちの生まれた場所でもある、『プロジェクトE』実験区画にある、と」
　上層部も、痛い腹を探られたくはないのか、この一帯は封鎖されていたが……そこは、機動六課の独自権限である。施設の見取り図も、マリーがささっと書き起こしてくれたものがあるため、特に道中に困難があるわけでもない。問題は……、
　――――ズパァァァァァッ!!
「おっと」「うむ」
　唐突に迫った幾筋もの砲撃を、危なげなく回避。目を凝らすと、壁面に、波紋のような力場が発生しており……
「あれ？」
　しかし、砲撃の技能は、ディエチの物だったはず。
「はっはぁー！　よく避けたなぁー！」
　すぽん、と姿を現したセイン。その手には、新型と思しき武装を装着しており……
　――――ヒュヒュヒュヒュヒュンッ!!
「む」
　シグナムの方へと飛来したブーメランのような武装を、迎撃ではなく回避する。
「惜しかったッスねぇ！　聞いて驚け、このブーメランの刃はなぁー!!」「おい馬鹿やめろ言うなって！」
「……大方、『魔力で構成された物体の分子構成を無効化する』……といったものか？」
「ホラ見ろ見抜かれてんじゃーん！」
「うわーん！　たまには驚いて欲しいッスよー!!」
　……グレードアップだかパワーアップだかを果たしているだろうに、全く脅威に思えない二人だった。

「うむ……」
シグナムは、魔剣を構えつつ、どうせ聞かれているのだと、肉声でフェイトに告げる。
「よし、フェイト。ここは、」「『オレに任せて先に行け』、でしょ！わーかってるってー！」
ばひゅーん……と、以心伝心というか、『伝統』『お約束』『様式美』に従い、勝手に飛んで行ってしまった。
「「あーーーー!?!!」」
責任のなすりつけ合いをしている間に、サクっと一人を通してしまった。
「まぁ……どの道、突破していただろう。そう気を落とすな木端ども」
気遣うようでいて、サラっとディスることを忘れないシグナム。流石である。
「んなっ……!!」「んだとぉ!?」
その瞳に、根拠のない自身と、目に見える慢心が漲っていることを看破したシグナムは、呆れるように助言する。
「初期スペックがなまじ高い分、修練が足りんのは同じか……」
じゃきっ、と、構えた瞬間……
――業ッ!!
魔力の炎が、魔剣を包み込んだ。
「うっ……、」「……」
たじろぐセイン、ウェンディの両名。総出力で言えば勝っているはずの相手だ。長期戦に持ち込めば、二人にエネルギー切れのリスクは無く……
「――『長期戦に持ち込んで、魔力・体力切れを狙おう』……か？」
「!!」
それを看破する。
「……何故、そこで『勝つ』『倒す』と考えない？　なぜ、前に出て、勝利を掴むことを考えないのだ、お前たちは」
……口調に、明らかに苛立ちが混ざっている。
「一応は女・子供だ。優しく意識を刈り取ってやろうかとも思ったが

……、」

――ガキィンッ!!

背後から不意打ちの狙撃を、鞘であっさりと弾かれ……それが、トドメだった。

「――やめだ」

ビキビキ……と、シグナムの形相が、不動明王のソレに変わっていく……!

「ひぃいいっ……!!」

ガタガタと震えだす二人に、シグナムが吠える!!

「――――その腐った性根、オレが直々に叩き直してくれるわッ!!」

◆▪◆　◆　◆

――ぎゃあああああああああああああああああああ

――ごめんなさいいい

フェイトは……決して感情を揺さぶられないようにしながら、その中の情報を取り出す。

◆・◆　◆　◆

プロジェクトEが失敗に終わって……それでも無様に生き残った俺は、無駄な人生の残り時間を使い尽くすために、次元世界を渡り続けた。

なーんもやることも、生きがいも綺麗サッパリ失って……かといって、そこに居続けるのも嫌になってな。

いやー、実際ヒマだったぜ？　カネだけは唸るほどあったし、使い尽くしても、稼ぐだけなら為替相場をテキトーに操作すりゃ、いくらでも湧いて出たからな。

これでいっそ、マリエルとか、アーデルハイドみてぇに社会適応性がゼロとかなら、まだ、『生きること』に必死になれたんだろうけどよ……俺は、要領も良かったらしい。

カネはどーでもいいから、あれやこれやの分野に手を出して、頂上まで行ったらゲームクリア。

そんな空しいゲームを、ダラダラダラダラ続けてたってワケだ。研究者をやったり、医者をやったり……まぁ、これはいいか。

そしてある日、久々にオモシロそうな話を聞いてな。

――――新型動力炉の開発。

ソイツはどうやら、ある一人の科学者が提唱した理論で建造する、って話だった。

その論文を読んで……その科学者が、俺ほどじゃないが、マジモンの天才ってやつだったってことを知って、潜り込んでみたわけよ。チョロいもんだぜ。

そんで、会ってみてビックリ。なんと女だぜ。

兄弟連中以外で、俺とタメ張れるアタマの持ち主の女に会うのは初

めてでな。ガラにも無く、久々に本気の議論だの趣味の共同研究だのをしている間に……まぁ、その、なんだ。

――好きあっちまってな。

何年か一緒にいる間に、ガキも一人生まれて……それが、小憎たらしいくらい、俺の面影があって……こんな人生も、悪かねぇかな、って思ってた矢先だ。運悪く、俺が外出していて、防げなかったんだわ。

――動力炉の暴走を

……

……

……その後さ。俺の、たった一つのミスが発覚したのは。

その女を、好いて、甘えて……俺の出自の一部を、漏らしてしまったことがあった。

――ヒトクローン研究。

……更に言えば、また誤算があった。

俺も、あの女自身も気づいてはいなかったが……あの女の真の適正は、有機生命体の研究にあった。それこそ、アーデルハイドに匹敵、あるいは凌駕するほどの、な。

……あいつは、俺の前から消えたよ……一言も告げずに。

廃棄を逃れて、どうにか残った資料の一部から……俺は、あいつのやろうとしている事を、知った。だが……止めなかった。止められなかった。だって、そうだろう？　やめろ、なんて……言えるわけ、ねぇだろ。

そして……それから、数年が経って。アイツが表に出てきた事件を知った。

エセ願望期を用いた大規模事件。そう、――

――プレシア・テスタロッサ事件だ。

◆・◆　◆　◆

最奥へ到達したフェイトを、ジェイル・スカリエッティの立体映像が、出迎える。
――黄金色の頭髪と。
――紅い瞳が。
「お前は、俺の娘だ。――――――フェイト・テスタロッサ」
これだけの真実を、突きつけられた、フェイトは……
「――――だったらどうした」
何ら動揺を伺わせない、毅然とした態度で、ジェイルへ向かった。
「……」
半ば、予想通りだったのか……ジェイルは、ただ見るのみ。
「――産んだからって、親になれるわけじゃないんだぞ」
「……違い無え」
肩をすくめるジェイル。その、隣には……
「――――秀人。ひさしぶりだね」
戦闘機人デルタ。そして……変わり果てた、吾妻秀人の姿が、あった。
「あはは……アリシアが、言ってた通りだ。生きてて、くれたんだね。うれしいなぁ……ボク、ずっと、キミをさがしてたんだよ」
郷愁に満ちた、フェイトの温かな言葉を聞き、秀人は。
「――――プリズン。」
……既に、隠しもしない肉声で。かつてと変わらない声で。聞いたことも無いような、平坦な、声色で。
「――――セットアップ」
……フェイトの排除を、宣言した。
――――ゴォウッ……
あの日、闇に汚されたままの……闇色の魔力が、秀人の身体を取り巻いていく。
『彼の額を』
バルディッシュの助言。秀人の額には……他の、ゼスト隊のメンバーと同様の斑紋が、刻まれていた。その露出していた頭部も……展開された兜に、覆い隠されてしまう。

――バキィンッ。
……武装を完了した秀人。もう、表情すら伺えない。
『……対処を』
「うん。――だいじょうぶ。ボクならやれるよ」
――バリィッ……!!
そして……フェイトもまた、新たに武装する。
『Ｒｉｏｔ』
長柄を得意としてきたフェイトには珍しい、片手剣。
しかし、ただ小さくした訳ではない。本来ならば、ザンバーを形成する魔力を、片手剣の形状・密度へ圧縮している。リーチこそ縮まるものの……フェイトの、純粋な『速度』を活かすことのできる形状だ。
「ねぇ、秀人。ボクとキミが戦うのって、すっごい久しぶりだよね」
「……」
「ええっと……ジュエルシードの、最初の方だから……あは、もうそんなになるんだ、」
秀人は、無言で……籠手に包まれた両腕を、
――ガァンッ!!
「……!!」
……無拍子の突きが、一瞬前までフェイトのいた空間を、背後の壁ごと叩き伏せた。
――ビキッ……!!
「はなしくらい、聞いてくれてもいいじゃんか」
……しかし。破損したのは、秀人の籠手の方だった。
「……」
その不可解な現象に、籠手を修復するでもなく、油断なく構え直す。
――ガリィィッ!!
……装甲を大きく削られるに至り、ようやく秀人は、答えに思い至る。
「……単純な、速度」
「せい――、」
背後に気配。秀人は、膝を折り大きく屈む。

「――……かいッ!!」
――ガチィイイインッ!!
大顎のような、秀人のホールディングシールドが空振りする。
「……、」
がくん、と体勢を崩す。膝に一撃を喰らった。
「……」
治癒までの、一瞬のタイムラグ。しかしそれは、超速で行動するフェイトにとって、どうしようもない程の隙であり……、
――キィイイイン!!
兜のフェイスガードを、切り飛ばされてしまう。
「――もっと、速くするからね」
その、宣言通り……
――ガギャギャギャギャギャギャッ!!
ミキサーに放り込まれたかのごとく、装甲が削られていく!
「……!!」
ピーカブースタイルを取り、洗脳紋様を中心の防衛を取る。不用意に捕獲を試みれば、腕を切り落とされる。それほどの速度だった。
「――インパクト」
――ドパァアアアンンッ!!
距離を。そう、衝撃波を射出する。この攻撃ならば、全方位へダメージが浸透する。しかし……
「ぜぇえええええいっ!!」
――ズパァン!!
「……!」
フェイトは……『衝撃波を切り裂いて』、間合いを離すことなく、攻撃を続ける。
秀人は、面くらったように、フェイトへの有効打を繰り出せずにいた。
秀人は知る由も無いことだが……フェイトは、秀人の戦闘データを、徹底的に検証し、対策を立ててきていた。幾通りかの戦闘データを基に、シミュレートを繰り返し……秀人の攻撃パターンを体系化

し、実戦訓練を重ねることで、それを盤石なものとしてきた。
「――――『こんなこともあろうかと』、ってね！　秀人が教えてくれたんだよ！」
――――ガキンッ!!
秀人は……腕を捨てる戦法で、フェイトの刃を、受け止めようとする。強度から考えて、完全切断までは至らない。適度に、刃を腕に食い込ませて、捕まえる。しかし、
「ソードオフ!!」
――ヒュンッ！
衝突の瞬間のみ、刀身を解除し回避。そして、完全に不意を突く一撃を加える！
――ヂッ……!!
「……」
洗脳紋様を、掠めた。
「……、」
秀人は……僅かに、よろめいた。
秀人は恐らく、洗脳により、本来の力を発揮できずにいる……というのが、フェイトの見立てだ。黒炎こそ使えるのだろうが……常態強化ではなく、単純に、高速移動魔法と、高密度魔力刃のみで戦うフェイトに、解呪はほぼ無意味。脅威となるような……それこそ、不死鳥召喚や、『構え』は全く使ってこない。秀人ほど、精神力の強い人間を洗脳しているのだ。その自我を抑え込むため、本来ならば、ゼストやクイント、ティーダのように活用できる技能が、全く活かされていない。
「秀人、ごめんっ!!」
フェイトは……秀人の両腕の腱を切断し、膝同士をバインドで拘束。そして、
――――スカァァァァァァンッ!!
洗脳紋様を、一刀両断した!!

ぐらりとよろめき……仰向けに倒れ伏す、秀人。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……！　っ、どう、だ……！」
高速移動魔法の連続使用により、フェイトの体力もまた、大きく削られている。慣性をある程度相殺できるとはいえ、掛かるＧの全てを、無効にすることはできない。
だが、フェイトはやり遂げた。
「秀人は、返してもらうんだからねっ!!」
びしっ、と、立体映像のジェイルを指さし、勝利を宣言する。
それを受けた、ジェイルは……顔を覆って。
『あーあ……やっちまったな、お前さん……』
……と、意味の分からないことを、告げた。何が、と、問おうとしたフェイト。
「――まったく、茶番に付き合わせやがって……ジェイルの野郎め」
……フェイトが、振り向いた先で。……秀人が、何事も無かったかのように、立ち上がった。それも、まるで、ジェイル側の人間のような言葉と共に。いつかの日のような、気安い口調で。
かりかり、と額を掻く。そこには、洗脳紋様は、薄らとも残ってはいない。確かに、破壊、もしくは、無力化したはず……と、混乱するフェイトに……秀人が、言う。
「――ホントはさ……さっきのまま、俺が操り人形って設定のまま倒されてくれるのが、一番良かったんだぜ？」
――秀人は。初めから、正気だった。
――洗脳など、そもそも、されてはいなかったのだ。
「――な、……なんでぇっ……!!」

再度、高速機動。魔力刃を、秀人の額めがけ、振り下ろし――――、
!?
――――ぱしんっ。
……魔力刃は、到達すること無く。フェイトの手首を、平然と掴み止めていた。
「何で……なんでだよォッ!?」
本気どころか……演技のため、『手加減』をしていたのだ、秀人は。
「俺の……俺自身の、目的のためだ」
明確な意思を示す瞳。秀人は、フェイトを無造作に投げ飛ばす。
「……!!」
距離は置いたが……また、仕掛ける気にもならず、茫然と秀人を見やる。
秀人は、ジェイルと目配せをして……フェイトへ、話し始める。
「――あの日。次元の坩堝へ落ちた俺は、消滅することなく、肉体を保ち続けることができた。……何故だかわかるか？」
「それは、……、アイの、」
「それもある。コイツが、全能力で、俺の存在を繋ぎ止めることに身を捧げてくれた」
ちゃり、と、漆黒のクリスタルに触れる。
「けど、それだけだ」
「あの、次元の坩堝の内部はな、時間の流れが、外界と違うんだ。……そうだな、体感で、ざっと……
――――５００年くらいは、あの中にいたんじゃないか？」
「!!!」
その、あまりにも平然と告げられた事実に、フェイトは戦慄した。５００年。あの、暗闇の中に、５００年。
「ああ、いや、精神は別に……さっきも言ったけど、こいつが、俺の意識も休眠させていたからな。寝ていたようなもんだ」
フェイトは……もう、問い詰めることが、出来なかった。
「そんで、ジェイルが俺をサルベージしてくれるまで……５

００年間。激しい時間の流れに晒され続けて。
――それでも尚、俺は今、ここにいる。

……これが、どういうことか、分かるか？」
アイの能力で、いくら肉体を保全したとはいえ……時間の流れまでは、隔離することは出来ない。では、秀人が老化しなかった理由は、……単純に。
「――絶望、だよ。フェイト、俺は……俺は、
――人間でさえ無くなってしまったんだ」

……それは、どれほどの絶望だったのだろう。切り刻もうと、磨り潰そうと、焼き焦がそうと、凍て付かせようと……決して、死なない自分。
「――ジェイルは、約束してくれたんだ。……俺の不死の呪いを、解いてくれる、って。俺を、『人間』に、戻してくれるって。
――だから、俺は、ジェイルに協力していたんだ。俺自身の意志で」
びく、と、フェイトが、気付きたくもなかった真実に、思い至る。
秀人の、増していくばかりの不死性。当時からの、誰彼を構わずに救おうとする献身の姿勢。自身すら顧みない行動力。わが身を盾にすることさえ厭わない自己犠牲。
当時……フェイトは、いや、彼の周囲にいた誰もが……それが、彼の『勇気』や、『正義』が、そうさせるものだと信じていた。
だが、違った。全くの見当違い。完全な、思い違いだった。
「フェイト。俺は……俺はね、」
――彼は。
「あの日から……家族を失ってしまった、あの日から」
――秀人は。
「ずっと、ずっと、ずっと、ずっと……」
――『吾妻秀人』という、男は。

「――――――死にたいと、思っていたんだ」

――ただの、自殺志願者だったのだ。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第十八話

――かつ、こつ。

艦内へと突入したなのはは、大理石のような、はたまた金属のような、未知の素材の敷かれた通路を、隠れるでもなく真正面から闊歩していた。

突入した時点で、居場所は知れている。隠蔽も無意味。であれば、堂々と歩いたほうがロスは少なくて済む……という、いかにも、なのはらしい考えだった。

『ガジェットは出さないようですね』

『無駄だからね』

その行く先には、何故か、一機のガジェットも存在しない。やはり、この艦内は、『聖王』の城そのものであり、無粋な兵に居場所は無い、ということだろう。

なにより、閉所だ。なのはが愛用するプラスチック爆弾でも使えば、威力は空間内に効率よく伝播され、何ら痛痒を与えないどころか、下手をすれば艦内が損傷する。こういった、いわゆる『戦艦』の類は、外部からの衝撃には滅法強い反面、内部からの工作には、驚くほど脆い一面を持つ。

『むかし見つけた、永久凍土に埋まってた旧暦時代の飛空艇に近い構造だね』

『……』

レイジングハートが、思案するように押し黙る。その、『昔』とは……

『いいんだよ、もう』

なのはは、その気遣いを窘める。

『……もう、逃げてる場合じゃないから』

決意を込めて……目の前に現れた、荘厳な扉を見据える。

――ゴゴゴゴゴゴ

扉は……やはりというか、なのはを迎え入れるため、開く。

『――ヴィヴィオ』

……その名を、呼ぶ。
吹き抜けの空間。だだっ広い空間に、ただ一つ設置された大仰な玉座。そこに、不釣り合いに小さな体が収まって……否、縛り付けられていた。
――ゴォン……。
背後で、扉が閉まる。なのはは、玉座へと向かって歩き出す。
『……、』
ホルスターから、スローイングナイフを抜き……玉座へめがけて、投擲。
――カキィンッ!!
甲高い音を立て、ナイフが砕け散り……
――ザ、ザザザ……
玉座と、ヴィヴィオの姿が、ノイズと共に掻き消える。
『案外、見え透いた真似をするものね。試しているつもり？』
『――ご明察。ちなみに、触れていれば高電圧で焼死していましたよ』
……なのはと同質の声が響く。
『わざわざご足労、ありがとうございますねぇ。お姉さまぁ？』
癇に障る喋りで、なのはを煽るクアットロ。
『御託はいい。ヴィヴィオはどこだ』
『あらぁ……？『高町なのはさん』は、ヴィヴィオを……
――『私の娘』を、どうするおつもりですかぁ？』
ビキッ……と、刀の柄が握力に軋む。
『――』
が、応じては思う壺。顔面を叩き割るのは後回しに、まずは、ヴィヴィオの奪還が最優先だ。
『そんなに会いたいんですかぁ？
……いいですよぉ、他ならぬ、お姉さまの頼みですからねぇ？』
――ゴゴンッ……
偽の玉座のあった床に、六角形の光が走り……階下から、真の玉座が、せり上がってくる。
「……う」

果たして、ヴィヴィオはそこに居た。肉眼、義眼のセンサー、レイジングハートによる走査が、今度は本物であると判断する。
『今度は別に、罠とかはありませんので……お好きなだけ、触れ合ってくださぁい？』
いちいち癇に障るクアットロだが、無視し、ヴィヴィオへ近づく。
『ヴィヴィオ、助けに来ましたよ』
「……」
そして、緩やかに顔を上げたヴィヴィオと、なのはの目が、合う。瞬間。

「――――――こないで!!」

――――バチィイイイインッ!!!!!
……なのはが、電撃が走ったかのように弾き飛ばされる。
『……!?!!』
クアットロの仕掛けた罠か、とも考えるが……それは、無いだろう。
『そうそう……触れ合うのは勝手にどうぞ？
――――やれるものなら、ねぇ？』
「こないで……こっちにこないで……！　あっちいって!!」
ヴィヴィオは……怯えに支配された様相で、拒絶の言葉を呟いていた。
『ヴィヴィオ……？』
（洗脳か、いや……これは）
クアットロの哄笑。
『さぁ、かわいいヴィヴィオちゃあん？　あなたを拒絶した、こわぁいこわぁい、なのはさんがやってきましたよぉ？』
『――!!!!』
拒絶。あの日……感情を暴発させたなのはは、無我夢中だったとはいえ……ヴィヴィオの手を、払いのけてしまった。そして、和解らしい和解もせず……
『私の、せい……』

思わず、そう口をついてしまう。クアットロは、嗜虐に満ちた声色で……

『――さぁ、ヴィヴィオちゃあん。大丈夫だからねぇ。ママが守ってあげるからねぇ』

――ヴゥンッ……!!

玉座へ伝う無数のケーブルから、ヴィヴィオの小さな肉体へ……膨大なエネルギーが流入する。

『触れられない、脅かされない……絶対たる力が、あなたにはあるのだから！』

「……あ、ああ、!!!」

『あなたを拒む世界なんて……みんなみんな、ブッ壊してしまいなさい!!』

「うぁ　あ　あ　あ

なのはは、両の刀を抜刀する。保護のためには……無力化は、やむを得ない。できるだけ……そう、出来るだけ、意識のみを刈り取る。
――と。
――――ゴギャッ!!
『がぁッ……!?』
突如として発生した、胸部への衝撃。視界には、右足を振り抜いた姿勢の、ヴィヴィオの姿。
『ぐっ……!!』
プロテクターが、蜘蛛の巣状に破壊されている。もし、これが無ければ、胸骨を粉砕され、戦闘不能になっていたに違いない。
『高速、移動魔法……?』
『いえ、マスター。これは……!!』
――ヒュ、ガッ!!
視覚ではなく、経験からの感覚で、側頭部をガード。
『くっ……!』
重い。そして、これは速いのではなく……なのはの、意識の外からの、不意打ち。
『私の、無拍子打ち……!?』
ようやく、思い至った。なぜ、ヴィヴィオがそれを使えるのか。教えた記憶など無い。では……と、その結論へ、至る。
『訓練で……私を見ながら、学んだ……ッ!?』
――ビシュッ!!
接近からの高速肘打ちが、ジャケットの肩口を切り裂いた。
『驚いた、けど……!』
なのはは、刀を収め……平手の、前羽の構えを取る。
(私の技は、私自身が知っている……!!)
「……っ!」
ヴィヴィオの続く一撃を、いなすことに成功する。たたらを踏むヴィヴィオ。
やはり、と、なのはは得心する。
(まだ、慣れていないんだ)

急激に成長させられた肉体に、感覚がマッチしていない。
ならば、今しかない。ヴィヴィオが、身体に、慣れるよりも先に……！
――ギィイイイイインッ!!
アンカーワイヤーが、ヴィヴィオの身体に巻きついたのと同時、弾け飛んだ。
『!!』
体表を、薄く、しかし強力な防護膜が覆っている。恐らく、最初になのはを弾き飛ばしたのも、この防護膜だ。守りには当然のことながら、攻撃の際には、全身が凶器となる。
『伝承の……《聖王の鎧》!!』
おそらく……生半可な力では、ダメージどころか、破ることさえ不可能。先ほどのワイヤーと同じように、バインド系も消し飛ぶだろう。もちろん、組みつくなど自殺行為。
『……なんとか、なる！』
ヴィヴィオは、無拍子が露見するや否や、スバルのマッハキャリバーの加速にも匹敵する蹴り出しを以て加速し、なのはへ肉薄！
『――はぁあっ!!』
――ズダァンッ!!
「!?」
ヴィヴィオは、背中から床面へ倒れ込んだ。聖王の鎧により、外傷こそ無いが……
「うぐっ……！」
……衝撃は、内部へ浸透する。
『組みつかずに投げる』という技能を、なのはは持っている。ファールボールが迫る観客が、フェンスがあっても思わず回避してしまうような……人間という『動物』の、『本能的防衛行動』を逆手に取った……なのは曰く、『真・空気投げ』である。
『あああぁーーーー！　ひっどぉおおおい!!』
『うるさいッ!!』
クアットロを怒鳴りつけながらも、油断なくヴィヴィオを視界に捉

える。
「う」
ヴィヴィオが、呻く。そして、……
「うぁあああああ!!」
そして……なのはは、信じられない現象を、目の当たりにした。
――ズォオオオオオオッ!!!
ヴィヴィオの魔力光が……幾人かの人型を形成し、なのはへ殺到する!!
『こ、これはっ……!?』
なのはは、構えを捨て、全力の回避行動!!
――掬い上げの拳。
――大地を割らんばかりの踵落とし。
――突撃槍による刺突。
その三つの、強大無比なる三撃が、なのはの身体を木の葉のように吹き飛ばした!!
『……ごふっ……!』
肺の酸素と共に、真っ赤な喀血。
『な……なにが、いま……!』
拳は、掠っただけで防具を消し飛ばし。
蹴りは、鎖骨を粉砕し。
刺突は、臓腑を強く叩いた。
これが、直撃ですらない……『不発』による、損害である。意識が残っていることが、僥倖と言えよう。
『あは』
と、なのはが、謎の現象へ考えを巡らせていると……クアットロが、喜悦の笑みを零した。
『あはははははは!! 凄い! 凄いわ、ヴィヴィオ!!』
そしてそれは、哄笑へと変わる。
『《聖王の鎧》さえ再現できれば御の字と思っていたら……まさか、《英霊使役》まで可能にするなんて!! やっぱりあなたは、私の最高傑作だわ!!』

――英霊使役。

その単語の意味するところは。クアットロは……開示しようと、しなかろうと、勝利を確信しているのか、べらべらと説明した。

『ヴィヴィオのオリジナルは、《最後の聖王》・オリヴィエ・ゼーゲブレヒト！　彼女が保有していたとされる希少技能、それこそが――

――《英霊使役》!!

彼女の血族にある、全《ゆりかご》のデータベースに記録・蓄積された、歴代聖王の至高の一撃を、現実へエミュレートするという、まさに王の力!!』

『英雄の、一撃を……』

では、あの三体の魔力の人型は。歴代の、聖王たちの再現体だとでもいうのか。

『馬鹿げている……!』

だが、このダメージは、全て現実。発動に、僅かなタイムラグがあることだけが、まだ救いのようなものだ。

そして、なのはが持てる、有効な攻撃手段は限られている。

『……あの、最初のエネルギーの伝送……あの中には、データベースからの、聖王の記憶も含まれていた、って、ことか……げほっ、』

既に、ダウンロード済みということは……『元を絶つ』という手段は無意味。

『発動までの、タイムラグは……どのくらい？』

『魔力発露から、人型形成・一撃行使まで――およそ2．８秒』

『……やるしかないね』

あまりにも、短い猶予だが……ヴィヴィオを救うには、やらなければならない。

『……ふー』

呼吸を整え、両の刀を床に置く。銃器や爆薬、暗器の類は、先ほどの一撃で消し飛んでしまっている。だが……なのはの目的は、はじめから決まっているのだ。

――ヴィヴィオを、無傷で保護すること。
武器も……拳も、ヴィヴィオには向けない。
（……レイジングハート、お願い）
（Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．）
――シャキィンッ。
なのはの戦法に合わせ、普段は発動補助のみに留めているレイジングハートを、浮遊砲として展開する。そして、これは……
『――ああ、あの構えですかぁ？』
……当然、開発者の秀人が敵の軍門に下っている以上、筒抜けで当然。しかし……この構えの対処法は、極めて限られている。足場を崩すか……さもなくば、こちらから攻撃をしないか。
だが……恐らく、慣れていないのだろう。ヴィヴィオは射撃や砲撃は使わず、専ら格闘での戦闘を行っている。だとすれば、『攻撃をしない』という選択は、しない筈だ。特に、敵意に支配された、子供の考えだ。そういった計算も、度外視して……こちらを、叩き潰しに来るだろう。
『ヴィヴィオ、やりなさい』
クアットロの声と、同時に……
「うわぁぁぁぁぁぁーーーーーー!!!!」
ヴィヴィオが、再び魔力を滾らせる！
『!!　ヴィヴィオを、道具扱いして!!』
非難するなのはに、しかし、クアットロは平然と……
『――親が子をどう扱おうと、勝手でしょう？』
身勝手な論理で、返す。
『ヴィヴィオ！　話を聞いてください!!』
必死に呼びかけるなのは。しかし、ヴィヴィオは十分な魔力を精製し終えており……また、それを振るうことへの躊躇が見られない。
『ああ、声を掛けても無駄ですよぉ。専用のチャンネルからのアプローチ以外では、聖王の鎧に、すべて遮断されてしまいますからねぇ。音声はもちろん、視覚にも、特殊レイヤーが貼られますので……きっと、いま、誰と戦っているのかも分かっていませんよ！　あはははは

!!』
そして、その嘲笑へ言葉を返す余裕も無く……
「――ぁあああああああ!!」
吶喊!!
『……!!!!』
しくじるわけにはいかない。
聖王の鎧といえど、その源は魔力。その大小で強度に違いは出るが、理論上、魔力には、魔力で対抗できるのだ。
『全盛期よりは、少ないのですが……!!』
――バチィッ……!!
なのはは……生身の肉体よりも頑健な、鋼の義手に、出力できる魔力を全て収束させる。
『……!!!!』
更に、神速。リンカーコア、思考、肉体。その全てを、極限まで研ぎ澄ます。
ヴィヴィオの、渾身の拳が、真っ直ぐに突き出される。
――……、
なのはの左腕が、辛うじて、そのベクトルをヴィヴィオの、聖王の鎧へと跳ね返す。続いて、左腕の魔力を、一気に右腕に移動！
――ズ、ズズッ……!!
『……』
……悪寒戦慄。毛細血管に、動脈の血液流を流し込むが如き所業に、肉体が悲鳴を上げ始める。
肉体へのダメージは不可。であれば、物理的な副次効果を生む魔法が望ましい。
――インパクト。
……魔力の衝撃波が、空気を弾き飛ばす。ヴィヴィオの姿勢が、僅かに揺らぎ……、
（レイジングハート!!）
（Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　!!）
クロック数を限界まで加速させたレイジングハートもまた、衝撃波

を射出する!!
二重に増幅された衝撃波による、昏倒ダメージ狙い。
（通れぇぇぇっ!!）
最善の一手だっただろう。
発動に不備は無く。
会心の手応え。

――しかし。

――……バチィイイイイインッ!!

（な、）
驚愕する。ヴィヴィオは。
――神速を行使するなのはと、同等の領域で。
――左手の掌打で衝撃波を跳ね返し。
――先ほどの倍。６体の英霊による一斉攻撃が。
――モーションを終え、無防備となったなのはに殺到した。

ようやく取り戻した感覚に、まず感じたのは、冷感。己の頬が、床材へ触れている感触。
次に感じたのは、温感。
『……、』
左腕……鋼の義手が粉々に砕け散り、アタッチメントごと生身全身が切り刻まれ、血液が川のように流れ出す感触だった。

『あはは……あーっはっはっはっは!!　馬鹿！　本物の、馬鹿ですねぇ！』
クアットロの、本懐を遂げたような狂喜の声が、鼓膜に届いた。
『――――吾妻秀人の遺伝子を持つヴィヴィオが、あの構えを、万全に使えないワケが無いでしょう！　あーっはっはっは！』
……そう。ヴィヴィオの行った行動は、至ってシンプルなものだった。
――構えには、構えを。
なのはが最初に行ったカウンター。それに跳ね返された、己の拳の威力と、二重の衝撃波を……再び、なのはへとカウンターしたのだ。
『自己修復能力により、肉体面へのリスクはゼロ！　リンカーコアにはレリックを埋め込み、負担はゼロ！　さらにぃ……励起させた魔力を、そのまま英霊使役へと転用可能！　あなたが唯一縋った発動までのタイムラグも……ゼロぉっ!!』
秀人が、苦心に苦心を重ねた課題は、クリアされていた。旧式の、リスクと負担がそのまま残り、また、肉体強度的に不完全にしか扱えないなのはでは、太刀打ちなど出来よう筈も無い。
『既存の魔法で、瞬間発動される英霊使役を破ることは不可能！
まさにこれぞ、完全無欠の力ぁ!!』
勝ち誇るクアットロ。なのはは止血をして、どうにか立ち上がる。既に、死に体だ。先ほどの倍の威力の英霊使役を受けて、生きていることが奇跡のようなもの。クアットロは、なのはが立ち上がり……敗北感と死の恐怖で歪んだ顔を、心待ちにしていたのだ。
しかし。
『――――やっぱりね』
なのはが呟いたのは、そんな、確信めいた言葉だった。
『……え？』
『艦船クラスのデータベースのダウンロードとインストール。その再現のための魔力。

……いかに聖王の資質、不死身の遺伝子を持っていようと……キャパシティには、限界がある』

いくら、『絶対に壊れない車』があったとしても、その『絶対に壊れない車』のスペックでは、『タンカーを牽引』することは、できないのだ。

『だから、レリックを埋め込んだ。

――いや、埋め込むしかなかった』

『……！』

『……でも、限界はある。魔力結晶は、肉体にとっては、あくまで異物。……不死身の肉体は、それを排除し始める』

……彼の右手には、かつて、魔力結晶が埋め込まれている時期があった。しかしそれは、一代変異である、１０割が『吾妻秀人』である彼だからこそ、完全に癒着していたのであって……何割かが聖王であり、何割かが高町なのはでもあるヴィヴィオでは、そこまでの効果は望めない。

『……英霊一体の使役につき、レリックはいくつ必要？　そして、それだけの異物を、肉体が排除し終えるまで、あとどれくらい？』

『あなた……まさか!!』

クアットロが……その事実に、手遅れに、気付いた。

『その情報を引き出すために、わざと……!?』

『……口の軽い奴で、よかったよ。聖王オリヴィエ……そのクローンである、ヴィヴィオを利用する計画。その伝承を、調べていない訳が無いだろう』

……あの過酷な戦闘も。決死のカウンターも。

英霊使役を使わせたのも……いや、何もかも、全て……

『これで、ヴィヴィオを助けてあげられる』

全ては、ヴィヴィオの救出のためだったのだ。

クアットロは……完全に騙しきられ、情報を引き抜かれた屈辱に、怨嗟を漏らす。

『この……くたばり損ないがっ……！　ふ、ふん。そんなボロボロの

身体で、何が出来るっていうのよ!!　……ヴィヴィオ!!』
「……!!」
――ガコォンッ!!
なのはの顔面を掴み、地面へ頭部を叩きつける。
『……』
後頭部へバリアを展開し、衝撃を緩和する。
その中で……なのはは、手をヴィヴィオへと伸ばし……
「！　……うぁあっ!!」
払いのけられ、癇癪を起したように、顔面へ拳を振り下ろした。
『……』
……唯一残された素手で、その拳を受け止める。聖王の鎧が、その手を弾く。
――ガスッ!!
蹴り飛ばされる。
『ははは……ざまぁ無い、』
『……』
「……！」
血反吐を吐きながらも……なのはが、立ち上がる。
クアットロの放つ雑音など、とうに届かない。
「あ、あああ……!!」
ヴィヴィオは、頭を抱え……何かしらに、苦しみ始めた。
『こうなったら……出力を、もっと……!!』
――ズバァアアアアアアアアッ!!
「あああああああああああ!!」
自身の制御を離れ、魔力が増大する。
『――ヴィヴィオ！　やりなさい!!』
――ヴィヴィオは、転がされたままのなのはを、マウントポジションに取り……今度こそ、顔面へ凶器と化した拳を、振り下ろした!!
――ズガァアアアンンッ!!!!

『あっはっはっはっはっは!!　最後は、あっけないモノですねぇ、……え、え？』
……クアットロは、目を疑う。なのはの顔面を、頭部を、弾けさせたと思った一撃は。
――なのはの顔、その僅か数センチ横に……外れていた。
「……」
『……、ヴィヴィオ。聞こえていますか？』
は、とせせら笑うクアットロ。専用のチャンネルを握っているのは、自身のみ。それ以外は、全て、聖王の鎧が遮断する。そう、思っていた。しかし。
「……なのは、さん……？」
ヴィヴィオが、ぽつりと……確かに、反応を返した。
『なっ……!?』
チャンネルをハックでもされたのか。しかし、モニターは全て正常値。では……と、映像をズームする。
――糸。
恐らく、ほんの数ミクロンの、極細の繊維が、光を反射していた。桜色に輝いている、ということは……
『ぼ……防御に使う魔力を、全部……その糸に……!?』
糸の触れる、僅かな……面積とさえ呼べないような面積。聖王の鎧を中和し、ヴィヴィオの身に触れるため。そして、触れることさえできれば……
『震動による骨伝導で、会話を……!?』
……どうかしている、と、クアットロは驚愕した。
手段そのものではない。
計算では、可能だ。だが……戦闘力の要である片腕を奪われ、身体を切り刻まれ、臓腑を傷つけられ、その状態で、無防備を晒す？
ありえない。と。
「あああああ……!!」
なのはを手に掛けようとしていた事実に、ヴィヴィオは戦慄と共に

恐怖した。視界レイヤーは、なのはを認識した時点で解除されている。だからこそ、見えてしまう。今の、なのはの惨状が。己の所業が。
『……ヴィヴィオ』
なのはの言葉に、びくっ……と、ヴィヴィオが固まる。責められる。恨まれる。嫌われる。その恐怖が、ヴィヴィオを責める。
『――――ごめんなさい』
しかし……出てきたのは、謝罪の言葉だった。
「……え？」
全く予想していなかった言葉に、きょとん、と呆ける。
『ごめんなさい、ヴィヴィオ。
――――ひどいことをして、ごめんなさい。
――――冷たく当たって、ごめんなさい。』
それは……あの日まで、ついに言うことのできなかった言葉だ。間違ったまま、すれ違ったまま……だから、必ず伝えると、決めていた。
「なのは、さん……」
ヴィヴィオは、茫然と……頬に触れる手に、自身の手を重ね……
『――――ヴィヴィオ!!』
「あっ……!!」
……クアットロの命令に、弾かれるように、飛び退いてしまった。
『どうして外したの!? まさか……ママの言うことが聞けないっていうの!?』
「……ごめんなさい。…………、」
でも……と、言おうとして、それを引っ込めた。しかし。
『――――わかった』
……なのはは、その意味を理解していた。
『そうよ！ あなたは、私の言うとおりにすればいいのよ!! さぁ……今度こそ、その死に損ないに、トドメを刺しなさい!!
――――最大数……12体の英霊使役で！ 粉微塵にしてしまいなさい！』
「……!!」
ヴィヴィオは……泣いていた。その命令に従うことで……なのは

が、傷つくことが分かっていたから。
――そして……
「……わかっ、た……!!」
涙を流したまま、それに従った。
――ヴァアアアアアアアアアアッ……!!
魔力の人型が、現れる。
屈強な体躯の男性。細身で腰の曲がった老人。年若い少年。肥満の男性。椅子に座った男性。ポニーテイルの少女。三つ編みの女性。結合双生児の少女。武者鎧を着こんだ女性。修道服を来た老女。本を携えた少女。……両腕の無い少女。
荘厳で、神々しき……破壊の使者たち。
「……」
しかし……突撃させず、未だ、躊躇するような様子を見せるヴィヴィオ。
「……、」
クアットロの命令に、抗っているのだ。
なのはは……外していたため無事だった刀……その一刀、『桜花』を握る。
『ヴィヴィオ。……全力で、おいで』
「なのはさん……」
そう。なのはは、決めたのだ。
もう逃げない。目を逸らさない。痛みも、嘆きも、後悔も、弱さも……

『――全部、受け止めてあげるから!!』

――すべてを、受け入れると！
「うわぁあああああああああああ!!」
殺到する、12の英霊。比類なき歴代聖王たちの、至高の一撃！
蹴りが、膝が、棍棒が、斬撃が、刺突が、ショルダータックルが、火炎が、砲撃が、鞭が、粉塵が、水圧が、……無双の拳が、なのは目が

けて殺到する!!
『――オウルさん……カレン……！　行くよ！』
――友に託されし、最後の切り札!!
『――開け、桜花!!』
桜花の刀身が、砕け散る!!
――カシャァァァァァァン……!!
砕けた無数の刀身が……なのはの魔力光を帯びて、英霊たちを包み込む。そして、それに触れた英霊たちの攻撃が、分解……否。
――分断される!!
残された桜色の魔力刃が……英霊たちの終撃、無双の拳を迎え撃つ!!
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
そして……ヴィヴィオが、拳を振り上げ、なのはへと振るぅ!!
『――ディバイドぉぉぉ

……柔らかで、温かな……素の、なのはの声だった。
『こう見えて、私、料理は得意なんだ。何でも作ってあげるよ』
ヴィヴィオは……むずがゆそうに、やや俯きながら、答えた。
「……ハンバーグ、が、いいな」
『うん……得意だよ。美味しいの、作ってあげるね。
――他には？』
「……なのはさんと、いっしょに、食べたい」
……その一言を、皮切りに。
「なのはさんとブランコで遊びたい。なのはさんに絵本を読んでほしい。なのはさんとお昼寝したい。なのはさんとお風呂に入りたい。なのはさんとお出かけしたい。なのはさんとお買いものにいきたい。なのはさん、なのはさん……なのはさんの、こと……、」
……なのはの胸元に、顔を埋めてしまう。だが……もうなのはは、それを聞き流すことも、誤魔化すことも、しない。その言葉を、一つ一つ、胸に留めて……
『――うん、大丈夫だよ。全部……ちゃんと全部、叶えてあげる。新しいことも、いっぱい、一緒に始めよう。だって、……だって、私は……』

――ずっと自分に嘘をついていた。
――ズルい自分は、誰よりもそれを望んでいたくせに。
――大事な気持ちを、心に鍵を掛けて閉じ込めていた。
――温もりを手にすることに、慣れていなかったから。
――いつか来る、『もしも』に恐れ、動けずいたから。
――でも。自分の『弱さ』を受け入れて、初めて思う。
――自分が、『守りたい』と感じた気持ちは――――
『　――――私は、あなたのお母さんだから　』
――今、ここに共にいること。それが、真実なのだから。
「……お母、さん」

『なぁに、ヴィヴィオ』
「お母さん……お母さん、お母さん、お母さん……!!」
『うん……うん……』
抱き合う二人。そこへ。
――じ、じじッ!!
『な、何が……!? どうして!? どうしてなのよっ!? どうして、私の言うことを聞かないのよぉっ!!』
ばんばん、と、機能を失ったコントロール盤を狂ったように叩く音が聞こえてくる。
『子供は、親の言うことを聞くんでしょうっ!? そういう風に決まっているんでしょう!? じゃあ、何で……何でぇッ!!』
癇癪を起こすクアットロ。なのはは、恐らくスピーカーがあるであろう方向へ、思いっきり息を吸って。

『――――――――いい加減になさいッ!!』

ビクッ、と、クアットロが身を竦ませる気配が伝わった。
『ヴィヴィオは、……あなたのコントロールなんていつでも抜け出せた！ 気づいていなかったの!?』
『そ、そんなわけ……、!?』
信じられない風のクアットロ。しかし、実際ヴィヴィオは、自らの意志で視界レイヤーを解除し、絶対の命令であるはずの攻撃を押し留めた。
なのはが幾度も英霊使役から生還できたのもきっと……ヴィヴィオが、手加減をしたからだ。
そして今、最終的に、クアットロのコントロールを抜け出していたことから、事実と分かる。
『何で、あなたの言葉に従っていたんだと思う!? 何で、最後に私に攻撃をすると決めたんだと思う!?』
『そ、それは……!! それは、……』
尻すぼみになる、クアットロの声。しかしそれは、既に正解に気付

いている証拠でもあった。
　それは……、
『ヴィヴィオは、『ママ』である、あなたのことだって大切にしたかったから!!』
　……操られているのであれば。従う気が無いのであれば。『ママ』などという呼称は、きっと使わない。
「嘘よ……そんなの、嘘っぱちよ!!」
　しかし……クアットロは……誰も信じることのできない、かつてのなのはの生き写しのような少女は、認めることが出来なかった。
「私は、あなたを倒して、『高町なのは』になるのよっ!!　あなたよりも優れていることを示して、証明して……そうすれば……そうすれば、私は、『私』になれるの!!　あの人に、愛してもらえるの！　だって、だって……それが、私にできる、唯一で……そうじゃなきゃ……」
　とうとう、仮面で覆っていた、弱気な本性を覗かせた。
「……あなたの劣化コピーでしかない私を、誰が、愛してくれるっていうのよ!!」
　ヴィヴィオを、他人を機械で縛るのは……裏切られることへの、恐怖だったのだ。
「どうして、どうして……私には、何もないの……？　あなたと、何が違うっていうの？　同じ遺伝子なのに！　……ズルい!!　こんなの、ズルいよ!!」
　稚拙で幼稚な主張。しかし……実年齢で、１０にも満たない、クアットロという少女の、偽らざる本音なのだ。
「私、頑張ったわ……いっぱいいっぱい、頑張ったわ……なのに……なのに……どうして私は、『高町なのは』であることしか、許されないの……？
　ねえ、どうして!?　どうしてなのよっ!?
　――『私』は、『私』なのに!!
　――誰か『私』を見てよ!!
　――誰か『私』を愛してよ!!

――模造品（クアット）の四番目（トロ）じゃなくて、ちゃんとした名前で、呼んでよ……!!」
タイプ高町なのは・プロジェクトＦ被験体第４号。それが……クアットロと自称した少女の、正式名称だった。
「ママ……」
なのはの腕の中で、ヴィヴィオが、きゅっと服を握る。
『……』
さんざんの悪行を働いてきたクアットロの、あまりにも痛切な叫びに……なのはは、憐み以上に、感じる物があった。
どうしようもなく弱い心。彼女は、秀人と出会わなかった……誰にも助けてもらえなかった、自分の姿だったのかもしれないから。
「誰か……誰か……『私』を、助けて……」
荒い息をつきながら、嗚咽しながら。クアットロは……、ようやく、心の奥底にあった『本音』を、他の誰でも無い、『高町なのは』へ、吐露することが出来た。
「――助けてよ……お姉ちゃん……!!」
彼女は……ただそれだけの、救いが欲しかったのだ。
それに対する、なのはの返答は……
『――任せなさい』
……実に、頼りになるものだった。
『――レイジングハート。もうひと踏ん張り、行けるね？』
『――Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　・《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》』
魔力は既に尽きかけ。カートリッジ残弾ゼロで補助動力も無し。満身創痍のなのはには、ややバックファイアがキツい魔法だ。しかし……
――キュイイイイイイイイイイインッ……!!
空間内の魔力。レリックの残骸に残された魔力。その全てを、収束していく。

『ちょっと痛くするわよ』
『……がまんする』
　これは、姉としての折檻も含めているのだ。これで……こうして罰を与えることによって、少なくとも自分に関することは、チャラにしてやろうという意味もある。もちろん、周囲の追及からも守ってやるつもりだ。なんだったら、一緒に謝罪行脚に付き合ってやってもいい。更生プログラムだって立ててやる。何故か。そんなこと、決まっている。
『スターライト……!!』
　――――――血を分けた、妹なのだから。
『ブレイカァァァァァァァァァァァァァァ!!!』
　――――――ズゴォオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!
『……!!』
　砲撃は、艦内をぶち抜き、玉座の間と管制室を一直線に繋げた。バックファイアに蝕まれる体を引きずりながら、ヴィヴィオを連れ、クアットロのもとへ行く。
「……」
　衝撃でズリ落ちたバイザーから、毒気の抜けた……なのはにそっくりの顔が覗いている、
『……』
　蹲ったままのクアットロを引き起こす。そして、パンッ、と頬を張る。
『この馬鹿。ほんっと、馬鹿。どうしようもない馬鹿。頭良いくせに何でこんな簡単なことが分からないの』
「ひどいぃ……ひどいよぉ……」
　怒涛の馬鹿呼ばわりをされているというのに、彼女は、どこか幸せそうだった。

『……ま、そんな私も、結構なお馬鹿かもね……』
なのはは、ポケットからリボンを取り出した。幼少のころ、美由希から貰い……何となく、今でも持ち続けているもの。
『あげる。大事にしなさい』
それで、彼女の髪を結んでやった。そして……
『ここは、はやてに倣うところね』
「え……？」
彼女の望みが、まだ一つ、残っている。
『――――名前を、あげる』
驚いた顔の彼女に、なのはは、厳しくも優しく、語りかける。
『クアッ四番目トロじゃない、《高町なのは》でもない……あなただけの、名前をあげる』
劣化コピーではない。誰かではない。彼女は、他の誰でもない……彼女なのだから。
『愛と、希望と、幸運と……幸福のしるし。
――――四葉（よつば）』
「ヨツバ……四葉……」
何度も、確かめるように口にする。
『ちなみに、高町家四兄妹の末っ子という意味もあるわ』
「嬉しい……嬉しいよ……お姉ちゃん……」
それが、彼女の名前だ。
「でも、ごめん……」
謝る理由が分からないなのはだったが……理由が、判明する。
――――聖王閣下、ロスト。聖王閣下、ロスト。緊急事態発生。緊急事態発生。
「……聖王とのリンクが切れた『ゆりかご』は……それを緊急事態だと

判断して……動力炉以外の区画を、圧搾消滅させてしまうの」
聖王を打倒し得た存在を、抹消するための罠。
「ごめんね……ごめんね……せっかく助けてくれたのに……」
泣いて謝る四葉。
『えいや』
その頭頂部に、なのはのチョップが落ちる。
「え……？」
きょとん、とする四葉に、なのはが……ヴィヴィオと、四葉の手を握る。
『――大丈夫。秀人さんが来てくれる』
えっ、と驚く四葉とヴィヴィオに、絶対の信頼と共に、断言する。
『――秀人さんが、来てくれる』

一つ、考える。
……吾妻秀人の、『強さ』とは何か。
『結合』という、他に類を見ない特異な資質だろうか？
そこから来る、膨大な魔力量だろうか？
不死身の肉体だろうか？
――否。

「――!!」
フェイトの魔力の大半を圧縮した魔力刃が、粉々に砕け散る。通じていた筈の力。切り裂けたはずの刃。それが……完膚なきまでに、砕かれた。砕かれるだけには足りず、防御魔法を貫通し、バリアジャケットを無視し、痛烈な打撃が……ロクに魔力さえ込めていない、ただの拳が、フェイトの身体を打ち据えた。
「ぐ、うぅ……!!」
「真芯は外したか……いや、避けられたのか」
意外そうに呟く秀人は……追い打ちを掛けるでもなく、フェイトが立ち上がる様を眺めていた。
「……!!」
高速機動魔法を発動。初速を魔力で蹴り出し、爆発的なスタートダッシュを切る。魔力刃を、再度形成し、死角を狙う。しかし。
「まぁ、そう来るよな」
――白羽取り。
……紙か何かでもそうするように、人差し指と、親指で、その刃をあっさりと捕獲する。
「くっ……!!」
魔力刃を解除し、退避……
――バキィンッ!!
瞬時に距離を詰めた秀人が、フェイトが防御のため前に突き出した

バルディッシュの外装を、貫手で粉砕する。
「お、避けた。……腕を上げたなぁ」
秀人は……笑みさえ浮かべ、フェイトを称賛する。
「――頑張ったな、フェイト」
「……っ!!」
求めていた筈の言葉。求めていた筈の笑み。それが……こんなにも、遠く感じる。じくじくと、フェイトの心に、負の感情が浸食していく。
――――埒外の筋力。優れた瞬発力。並外れた持久力。鋭い反射神経。痛覚耐性。強靭な精神。
――――『吾妻秀人』という生物は……『単純に強い』のだ。
これは、強化によるものではなく、彼自身の、ごくニュートラルな状態……つまり、解除の効くようなものではない。そして、ここへ更に、前述の魔力や、戦闘技術が加わる。
「フェイト。」
……混乱と、恐慌の中にあるフェイトへ……秀人は、語る。
「――――ちゃんと防げ。死ぬぞ」
――――ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンッ!!!
秀人が、余剰分の魔力を消費しただけの、単純な衝撃波。回避したフェイトだが……前後左右上下、全方位から押し迫る面制圧攻撃の前に、膝を折ることになった。
「それ、左だ」
――ドガァッ!!
展開したシールドが、一撃で蹴り砕かれる。
「次、ボディいくぞ」
――――ドズゥッ……!!

盾にしたバルディッシュの柔軟な柄が、限界まで撓み……
――バキィンッ!!
……折れる。そして、その一撃は、まともに腹部へ。
「がはっ……!!」
肺の中の酸素が全て絞り出され、酸欠に喘ぐ。
「……ぅぅぅぅぅぅぅぅぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
――ブォオンッ!!
伸長した魔力刃による薙ぎ払い。
「ほら、気が急いて大ぶりになっている」
――ガキィンッ!!
膝と肘。僅か二点による、挟み潰し。
「んじゃ……行くぞ。上手く避けろ」
「……!!」
――どん。
……認識が追いついたのは、その瞬間まで。
「……あ」
どさっ……と、フェイトは、倒れ伏した。
掌底を腹部と胸部へ喰らった……と、気付く余地さえも無かった。有利な間合いの取り方。意識の外から突く歩法。最小限のモーションに込められた威力。
やはり、体術で秀人に勝てる筈が無い。
「……がぁっ!!」
――ならば、魔法だ。
『Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｓｈｏｏｔ』
フェイトは、まだ残る魔力を、即座に集中。砲撃の形として、秀人へと発射する。もてる中で最速の砲撃。
秀人は……
――ドォオンッ!!
……避けない。
胸部装甲に、敢えて真正面から……直撃させた。見たところ、魔力の流動も無く。単に、素材の強度で受けただけ。

もうもうと立ち込める粉塵の中から……
「――まぁまぁだな」
……全く無傷の、秀人が現れる。
胸部装甲は、多少なりとも砕けている。
しかし……その内部、肉体は、かすり傷ひとつ残っていない。
「……」
見下ろす秀人は……悲しむでも、笑うでもなく……ただ、困ったような表情を、浮かべていた。
「なぁ、聞き分けてくれよ」
彼がよくやる、頬を掻く仕草。わがままを言って、彼を困らせた時と、同じ……
「――――ッ!!!!」
かぁああっ、と、頭に血が上る。再び、高速機動魔法を発動。攪乱は無意味ならば……真正面を、最短距離で進むのみ。魔力刃を、秀人の額へ――、
「――もう、十分だろ？」
――ズダァンッ!!
フェイトの手首をあっさりと捕獲した秀人は……その勢いのままに、その体を、片手一本で投げ落としたのだ。
また、頬を掻く。それは……彼にとっての、日常の中での仕草。フェイトの必死の防戦も……秀人にとっては、『戦闘』ですら無いのだ。
「お前は全身全霊で、犯人逮捕に取り組んだ。俺に一太刀を入れて、善戦した。結果こそ、失敗だっただろうが……それを責められる奴なんて、誰もいないさ。フェイト以外じゃあ、俺に一太刀だって、入れられはしなかっただろうからな」
もっとも、それは、『設定』の中だけの話だった。
『吾妻秀人は、卑劣な犯罪者に操られ、かつての仲間を倒さざるを得なかった』……という、子供だましのような、しかし、誰も信じて疑わなかった、その『設定』の。
「――フェイトは、俺には勝てないよ」

――からんっ。
……フェイトの手から、バルディッシュが滑り落ちた。
秀人を救う。その大前提が、崩れ去ってしまった。犯罪者に操られてなどいない。己の意志を保ち、それでも尚、敵方に付いたのだ。そして、何より……
――彼にとっての『救い』とは、己の死に、他ならないのだから。
「悪いなぁ……せっかく来てくれたのに。でもまぁ、適度にダメージは加えるぞ。あんまり軽傷で見つかると、疑われちまうからな」
――グキンッ!!
「……！　あああああああああああああああああぁぁぁぁ!!!」
肩に走る、熱にも似た衝撃。外された。
「これで、片腕」
「うううううううう!!!」
取り落としたバルディッシュを掴みあげ、がむしゃらに振り回す。
『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ　！』
――バチバチバチィイイイイインッ!!!
発動した電撃の魔法が、秀人を直撃する。
「悪くない手だ」
秀人は……身じろぎもせず、それを受け止めた。皮膚が焦げ、明らかに通っているはずの電撃。
「電撃っていうのは、肉体面へのダメージはもとより、相手の神経パルスを乱して、麻痺させて制圧するのには向いている。……俺以外には、な」
……通電したまま、全く口調を乱すことなく、丁寧に指摘する。
「不死身、すなわち不変。……影響が出るよりも先に、復旧する俺を倒すには、不十分だ」
――バシュッ……。
……起死回生の電撃さえも、軽く振り払ってしまった。
「んじゃ、もういいな？」
秀人は、こきこき、と手を鳴らし……
「安心しろ。優しく倒してやる」

――ドズゥウウウウンッ!!!!

「がはぁ……!!」

重力操作。フェイトの身体へ、重力を『結合』し、縫い止めた。その荷重は、徐々に……増してきている。恐らくこのまま、体力を削ぎ落としていく算段なのだろう。

（だ、ダメ、だ……!! まだ、寝てる場合じゃ、ない……!!）

勝てない。魔導師……いや、それこそ、生物としてのスペックが違いすぎる。

そんなこと、判り切っていた筈だった。しかし、どこかで……心のどこかで、甘い願望が残っていたのかもしれない。

『きっと、説得に応じてくれる』……と。

しかし……秀人の歪みは、それこそ、彼の根幹に根付くほどの深さにあった。

体術では勝てない。魔法は通じない。そして……説得すら、届かない。力も、技も……意志力さえも、フェイトは、秀人に勝てなかった。

――ズズンッ……!!

ひときわ大きく、荷重される。

「……!!」

バリアジャケットの機能により、辛うじて呼吸こそ繋げてはいる。しかし……秀人は、その力の一片すら、出してはいない。

がしっ……と、無造作に、フェイトの首を掴みあげる。

「もう眠れ。起きる頃には……たぶん、終わっている」

その、僅かばかりの寂寥感を含んだ言葉を最後に……フェイトの意識は、急速に遠ざかっていく。秀人は、その握力でフェイトの血流を遮断しに掛かっていた。

「あ、……あ……」

ささやかな抵抗のように、その手に爪を立てるが……その程度で止まるものではない。

（みんな……なのは……）

必ず、連れて戻る。そう約束したのに。

（ごめん……ボクが、甘かった……）

彼の真意を見誤り、彼の実力を無視していた。解呪の刃さえ突き立ててしまえば、それで終わると。秀人は正気に戻り、味方になってくれ、ナンバーズ一味を一網打尽にしてハッピーエンドだと。何も疑わず、そう信じて……いや、盲信していた。
（そうだ……このまま……）
このまま、眠ってしまおう。それが、彼の望みなのだ。不死の呪いを解き、人間らしく死ぬこと。その手段は、ジェイル・スカリエッティが既に握っている。この騒乱の果てに、それが実現できる目途が立っているのだ。
（ボク……最後くらいは、……良い子にするから……）
今、自分が我儘を言ってはいけない。
それが秀人の願いであれば、受け入れることこそ、秀人の家族としての、

――フェイト。

「……？」
僅かに、意識を持ち直す。その声は……誰のものだったか。
――フェイト、聞こえていて？
……プレシア。最愛の母の声。
「……おかーさん？」
ギシギシと、押し潰されかけている肉体。しかし、その声は……明瞭に、届いた。
「？　……念話か？」
秀人は、怪訝そうに……しかし、加減せず、絞めを続行する。
――あなたは……過ちを犯したわたしを、助けようとしてくれたわ。覚えていて？
「……」
半ば、無意識の中。その声へ、答える。
――うん。
あの日……次元の坩堝へ落ちようとしたプレシアと、アリシアの遺

体。秀人は、その中へ飛び込み……自身と共に、救おうとした。
――『あなたは、私の娘なんかじゃない』
……そうとまで突き放された、拒絶されても尚、フェイトが持ち続けた想い。
――『うん、知ってるよ。ボクは、アリシアの代わりだから……』
あの日、プレシアは……死のうとしていた。理想郷……アルハザードへ至るという望みだけを抱き、虚数空間を開いた。
それは、あの時点では間違いなく、プレシアの願いだった筈だ。では、なぜ……自分は、それを拒んだのか。
――『でも……ボクが、おかーさんを好きな気持ちは、ボクだけのものだよ』
……あの日に、決めた。己の気持ちに、正直に生きること。
他の誰でも無い。自分自身に、従うこと。
――『だから、助けるんだ。おかーさんが、どう思っていても関係ない。ボクは、おかーさんを助けたい。だから、助けるんだ』
(……そうだ、ボクは)
――ボク、執務官になりたい
フェイトはあの日、己に課した誓いを思い出す。
『執務官になる』と誓ったあの日。
――もう誰も、取りこぼさないために。
(そうだ……そうだ。そうだった)
フェイトは……目の前で失われていく物、全てを救い、全てを掬うのだと誓った。
それは……空虚に生きてきた己に芽生えた、原初の想い。
いつか……、――
「――誇れる自分に、なるために……!!」
他ならぬ彼が、教えてくれたではないか。
――その力を、正しく使える時がきっと来る。
「――今が、その時だ!!」
『Ｂｌａｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ　！　』

――ズバァァァァァァァァァァァァッ!!!!

消えかけた閃光が、再び輝く。

「……これは」

秀人が……ここにきて初めて、表情を引き締めた。

――魔力強化・限界突破……ブラスターシステム。

それは、かつて秀人が、闇の書事件の解決のため用いた切り札。

莫大な、それこそ常識を超えるレベルでの出力増強を可能にし……重篤な後遺症を患う危険を含んだ、諸刃の剣。

「……！　マリーのやつ、どういうつもりだ……!!」

憤る秀人に、答える声があった。

『――あら、心外ね。託したのは私よ』

「……、プレシア。やっぱり、あんたか」

先ほどの通信も、本人だろう。

『――秀人。あなたの過去を、私は知らないわ。綺麗ごとで、それを止められないのも分かっている』

「……」

『それでも……わたしたちは、あなたに受けた恩を、返し終えてはいないの』

「……、そんなもん、別に、」

『そう言うだろうから……こちらで勝手に、返させてもらうことにするわ』

かつての、鏡写し。目の前に居るのは、死へと歩む、緩慢な自殺者。

『覚悟なさい、吾妻秀人』

止めるべく立ち塞がるは、我儘勝手な正義の味方。

『――私の娘は、強いわよ』

「――!!」

秀人は、爆発的に膨れ上がったエネルギーに対峙する。

「――ボクが、キミを助ける」
散漫だった力は、再び確固たる意志の元に統一された。それは、己が身を捨ててでも、目的を達成するという不退転の覚悟が、完了したという証。
「――――時空管理局執務官……フェイト・テスタロッサ」
すぅっ……と、怜悧な瞳が、秀人を捉える。
「実行犯の制圧、及び――――要救助者の救出を開始する!!」

――ゴォオオオオウッ!!!
黒炎が、燃え上がる。
「……下策だ、フェイト」
強化魔法は、黒炎で強制的に解呪できる。竜魂憑依すら消し飛ばした炎に、ブラスターは無意味どころか、無用なリスクだけを追う結果になるだろう。時間制限まで、保つかどうかも不明。
――ズゴォオオオオオオッ!!
黒炎が、周囲一面を焼き払う！
「――だぁあああああああっ!!」
「――!?」
その黒炎を突き破り、雷光が走る!!
――ガギィイイイインッ!!
黒炎を纏った手甲で受ける。しかし……それに触れるフェイトのブラスターが、減衰する気配は見えない。
「くそっ……どうなっている……！」
――ギィイインッ!!
とうとう、手甲の一部が切断される！
「……!!　そうか、……流動魔法か」
流動魔法。……それは、かつて闇の王が用いていた技法。通常、体表を包むように展開する魔法を……『体内で循環させる』という荒業。確かに、黒炎は体内までは浸透しない。
竜魂憑依を消した時も、外部装甲を通じて、竜魂を弾き出したに過ぎない。対策としては、正解であるかもしれない。

しかしそれでも、あのはやてをして、『燃費が悪い』と言わしめたほど、消耗の激しい技だった。
魔力の消耗だけではない。極めて緻密な構造をした人体は、通常、魔力のような異物を通すようには出来ていない。免疫が拒絶反応を起こし、最悪……
「……止めろ！　体が壊れるぞ!!」
更に、燃費を補うためのブラスターとの重ね掛けである。秀人のような肉体を持たないフェイトにとっては……自滅にも等しい。しかし。
「――――なら、止めてみろ!!」
止まる気など、欠片も無い！
「このっ……!!」
――ギャリィィィィンッ!!
「くそっ……速い……!!」
ここにきて、フェイトの速度は更に上がった。秀人の反応速度を超える程だ。
範囲攻撃を発動しようともお構いなしに距離を詰め、秀人へダメージを与えていく。
「無駄だと言っているだろうが!!」
不死身の肉体に、外部ダメージなど無意味。そう断言する秀人だが……フェイトは、既に看破していた。
「なら、なんで防ぐ!?」
「……、」
「どんなに不死身でも……！　回復するにはスタミナを消費するんだろ!!　そして、キミの『体力』は、無限じゃない!!」
秀人は、事実上、『最強』の生物ではあるが、決して、『無敗』の存在ではないのだ。
「そういう話をしているんじゃないっ!!」
――ガキィンッ!!
バルディッシュを蹴り上げ、衝撃波を纏った突進を放つ！
――ドガゴォオオンッ!!!

施設が激震し、フェイトを壁へと叩き込む！
「大人しくしていろっ!! すぐ解呪して……ついでに眠らせてやるッ!!」
しかし、ダメージ回復のためリソースを割いているため、十分な量の黒炎が発生しない。この調整が効かないのも、秀人の弱点の一種だ。だが、こうまで完全に動きを封じていれば……という秀人の算段。
『Ｌｉｍｉｔ　２　！』「リリースッ!!」
それを、フェイトが決死に乗り越える！
「うぁあああああああああああああーーーー!!」
限界を超えた限界……それを、更に超越する!!
――ドガァァァアンッ!!
圧力ごと、秀人を弾き飛ばす!!
「フェイト、やめろッ!! もう、それ以上はッ!!」
「やめるもんかぁあああああああああああーーーー!!」
――ズドォオオオオオオオンッ!!
速度をそのまま破壊力に転化した跳び蹴りが、秀人を捉える!!
「ぐぉおおおおおおおっ……!! !! ……、」
秀人は、フェイトの限界を超えた力、そして、その先に待つ破滅を感じ取り……
「――……もう、手加減は終わりだ!!」
本気で……フェイトを、叩き潰すことを決意した。
「――フェイト、お前を……！」「――秀人、キミを……！」

――助ける!!

奇しくも、同様の答えに至った二人。
「ブラスター1、ブラスター2、手順省略……!!」
秀人もまた、ブラスターを発動準備する!!
――ゴォオオオオオオオオッ……!! !!
「バルディッシュ、こっちもだ!!」

『……Ｙｅｓ，ｓｉｒ．；；；Ｌｉｍｉｔ３！』
「限界の、限界の、限界を……突破だぁあああああああああ!!!」

――リリース!!!

打ち砕く。叩き伏せる。押し潰す。
斬り裂く。突き通す。撃ち貫く。

――……！

もはや駆け引きも無く、悪鬼羅刹の如き力を振るい、叩きつけあい……それでも尚、互いを助けるための戦いが続く。
「もう、いい……!! 俺のことを、助けようとするな!!」
秀人は……余裕を無くし、叫ぶ。
「俺は……、俺は、お前が思うような、聖人君子でも、英雄でも無いんだっ!!」
その心中を、溜めこんでいた思いを吐き出す。
「俺のせいで……俺のせいで親が死んだ!! その事実を見たくなくて、自己満足の英雄ゴッコで他人を助けて、自分の罪から目を逸らしていただけの……、ただの、卑怯者なんだよっ!!」
かつて助け……今は、己を救おうとしている者へ、拒絶をぶつける。
「誰も、俺を罰してはくれなかった!! 自分で自分を罰することも出来なかった!!
――なのに、何で、どいつもこいつも、俺に笑いかけてくるんだ!?
……違うんだ!! 違うんだよ!!
お前たちが思うような理由なんかじゃないんだ!!
俺は、そんなことをして欲しい訳じゃないのに!! ……俺自身を、何をどうしてでも、罰しなければいけないんだっ!!」

――ガギィイイイッ……!!

秀人は、切り札……カーバンクルを使用する。崩壊により発生したエネルギーが、鎧装を循環し……砲門へと収束する!!

「だから……俺の邪魔をするなぁああああああ

「――――届けえぇえええええええええええええっ!!」

――――――――ズババババババババババババババババッ!!!

凄まじい雷光が放出される！

「ぐぉおおおおおおおおおおおおおおおおーッ!!!」

秀人が、その衝撃に叫びを上げる。

――――フェイトは、この一手だけのために、全てを賭けていたのだ。

リンカーコア結合は、秀人にとっての切り札だ。他者とリンクさせることにより、二次関数的に出力を増すことが出来、そして、それを共有することができる。だが、それはつまり……双方向へ作用する術式であることを意味している。

秀人がフェイトの魔力を吸収できるように、フェイトもまた、秀人の魔力を扱うことが出来るのだ。

その魔力の全てを、片っ端から『電気』へと変換し、放出してしまえば……！

「ぬ、ぐぅうううううううっ!!」

フェイトを引き剥がしに掛かる。しかし、フェイトもまた、全身全霊で秀人を抱きしめており……膨大な電気により、身体を思うように扱えない秀人には不可能だった。

「ぐ、おぉ……」

――――――――――――――――――どさっ。

……秀人が、膝を突き……そのまま、倒れ伏した。

「……ボクの、勝ちだ」

最後の最後に勝ったのは……フェイトだった。

『……ウソだろ、オイ……』
ようやく復旧した通信の向こうで、ジェイルが絶句していた。秀人の戦闘力には、絶大な信頼を置いていたジェイルには、この結果は到底信じられるものではなかった。
「……まだだよ」
フェイトが……ブラスターの反動、極度の疲労を引きずりながら、メス程にしか届かぬ魔力刃を構築する。術式は、解呪ではなく、精神干渉。
「秀人……いま、会いに行くからね」
フェイトは……秀人の意識へとダイブするつもりのようだ。
『おい、やめておけ。無駄だ。ソイツの意識は、ソイツ自身が、固く閉ざしちまってる。『プリズン』っつー自己監獄結界で……』
無理と言い募るジェイルに、フェイトは……
「――――黙って見てろ、このクソ親父!!」
絶句するジェイルを余所に、刃が、秀人の額の紋様へと触れた。

◆▪◆　◆　◆

――――。
一瞬、眩しい光に包まれたフェイトが目を開けると……
「？　……まち？」
見覚えも無いのに、どこか懐かしい。そんな街中の……公園と思しき場所に、フェイトは立っていた。そして、気付く。
「!?　ち、ちっさ!?」
フェイトの身体が、時間が逆戻りしたかのような……子供の姿となっていた。
「うぉっ、おっぱいが無いっ……！」
どうでもいいことに驚愕するフェイト。何はともあれ、秀人を見つけなければならない。
「……半分は、海鳴市みたいだ」

歩いているうちに、見知った光景と、それ以外が混在しているということだけは分かった。無人という訳ではなく、ごく普通に、人もいれば車も走っている。しかし……

「ぐぁー……どこにも居ないじゃんか……」

時間の経過がどのようになっているのかは不明だが、体感で、5時間は探しただろう。

「うーん……？」

――ぼすんっ。

考え込むフェイトの足元に、小ぶりなサッカーボールが転がってきた。

「？」

――わりー！　こっち投げてくれー！

どうやら、公園の近くを歩いていたらしい。やや広い公園の中では、子供たちが、ボール遊びや、ゲーム機に興じていた。

「……、」

フェイトはボールをしばし見て……

「い―れーてっ！」

投げ返すのではなく、その輪の中に飛び込んでいった。

――お、ガイジンだガイジン！

――すげーキンパツ!!

――ちょーはぇえ！

「あっはっは!!」

フェイトは……公園の中で、子供たちに交じり、色々な遊びをした。サッカー、ドッジボール、水風船、ブーメラン、ゲーム……

……そうして、どれほどの時間が過ぎただろう。気付けば、街には夕日が差していて、もの悲しげな放送が流れ出していた。

――『夕焼け小焼け』。

海鳴市では流れない、その音楽と共に……

――あ、母ちゃんだ！

――帰らなきゃ！

子供たちは、おもちゃをリュックサックに詰め込み、母親に手を引

かれ、一人、また一人と、公園を去っていく。
――また明日な！
「うん、また明日」
――じゃあな！
「うん、じゃあね」
フェイトの横で、一人の少年が、彼らを見送っている。小柄で華奢な少年だ。
「ばいばーい！」
フェイトも、思いっきり手を振り、彼らを見送る。
そして。
「……」
公園には、フェイトと、寂しそうな笑顔を浮かべる、少年だけが残された。
……ここは、そういう世界なのだ。
いつまでもいつまでも、穏やかで、温かな時間が流れる世界。
子供たちは、夕方まで思う存分に遊び……夕方になると、親に手を引かれ、家に帰る。
それを、毎日見送る世界。
尊く、美しく、温かく――――彼の居場所が、無い世界。
「ひでと、みーつけた」

――景色から色が消え、時間が止まる。

「……放っておいてくれよ」
少年は蹲り、膝を抱えてしまう。
「ぼくはここで、お母さんを待ってないといけないんだ。いつまでも、いつまでも……お母さんを、待っていないといけないんだ」
年相応の、幼い声。華奢な体。いったい、どれほどの時が過ぎたのか。
「でも……ここには、来ないんだよね」

いったい、この少年は、秀人は……どれほど、この孤独の夜を経験したのだろう。
「……うん」
「なら……立って、探しに行かないと」
フェイトが、秀人の手を握る。
「だめだっ!!」
しかし、秀人は、その手を振り払ってしまう。
「だめだ……ぼくは、ここから出たら、だめなんだ……」
この光景は、きっと……事故の日の繰り返しなのだ。母を待ち……駆け寄った瞬間に、全てが変わってしまった。だから……秀人は、ずっと、出られなかったのだ。
「……大丈夫だよ。キミが立ち上がるまで、ずっと、待っててあげるから」
フェイトは再び、秀人の手を取る。
「キミが笑ってくれるなら、ボクが、ずっと傍にいるから」
「嫌だ……ぼくは……俺は……」
尚も彼は、救いを拒んだ。ここで、永遠の贖罪を続ける気でいる。
「放してくれ……俺は、償わないと……」
「――もう、いいんだよ。」
フェイトが、秀人を抱きしめる。こんなにも小さな、彼の本心。彼は、こんな小さな心で、必死に困難に立ち向かってきたのだ。
――ぱきんっ。
凍てついた時間に、亀裂が入る。
「秀人は、もう十分に苦しんだよ。もう、十分に……誰かを、救ってきたよ。知ってるよ。ずっと見てきたんだ。追いかけてきたんだ」
彼が消えてから。アリシアに希望を託されてから。ずっと、ずっと……彼の痕跡を追い続けた。彼の救ったものを、追いかけてきた。焼け落ちた森に残された、たった一本の世界樹の苗木。乾いた砂漠に流れた恵みの川。汚染された町に吹いた風。古の因果から解き放たれた聖霊。崩れた鉱山から救われた少年。
「誰が許さなくても、たとえキミ自身がキミを責めても、この世のすべ

てが敵になっても……ボクが、キミを赦すよ。キミの罪を、赦すよ。」
――――ぱき、ぱき、……
亀裂が放射状に広がり……その向こうから眩い光が差し込み、色あせた世界に蹲る秀人に、その光が降り注ぐ。
「もう、一人で泣かなくてもいいんだ。だから……だから、さ。もう、いい加減……」

――――――――――――――――自分を、許してあげなよ。

――――――――――――――――

「お、お、おま、おまえ……!?」
慌てふためく秀人。しかし、フェイトは、何も言わず、秀人の言葉を待っている。
「――――。」
……その意味を、理解する。
「俺は、行くよ――――なのはを、助けに」
……それが、秀人の答えだった。
「――うん……。……いってらっしゃい」
「――――ああ。」
高く掲げるのは……抜けるような、青空の色をしたクリスタル。背に広がるのは、同色の翼。取り戻した、彼自身の心の色。
「――――ありがとう。それと、……ごめんな」

ジェイルの通信は既に途切れていた。もう、本拠地で待ち構えているのだろう。
飛び去って行った秀人を見送っていたフェイトは、その姿が、完全に視界から消えたのを、キッチリと見届けて……
「もう、いいよね……もう、だれも見てないよね……」
ぶわ、と、涙を溢れさせた。
「うううぅあああああああああ～～～～～～……!!!!」
泣いた。年甲斐も無く、みっともなく、その場に大の字になり、手足を暴れさせ……思いっきり、泣いた。泣いて、泣いて、また泣いて……全ての想いを流し切るように、涙を流した。

――――ばいばい、ボクの初恋。

「……出ていくべきだろうか」

到着した時にはそうなっていた状況を、シグナムがはらはらと陰から見守っていた。
「うきゅう……」
「ちーん……」
……意外なほどに善戦したセインとウェンディを、米俵のように両肩に担いで。

◆▪◆　◆　◆

天空を飛翔する秀人。その手にある愛機へ、語りかける。
「……悪かったな、アイ」
およそ５００年ぶりに交わす会話がそれかい、と、若干呆れながら、返す。
『……いいの。おまえがどんなにボンクラの朴念仁でも、おまえはアイのマスターなの』
相変わらずふてぶてしいアイに、苦笑を漏らす秀人。
『だから……マスターが望む限り、アイは、マスターの翼になるの。マスターが、答えを出すまで……そのあとも、ずっとずっと、一緒なの』
秀人は、頷く。そして……
「セットアップ……イモータルハート！」
蒼銀色に輝く甲冑を、その身に纏う。
『見えてきたの』
遠方に、戦火。巨大な二つのシルエット。アースラと……ゆりかご。
「――――アースラ、応答願う！」

◆▪◆　◆　◆

「左舷下方、質量兵器！　並びに右舷上方、魔力砲!!」
「だぁらぁあああああああああっ!!」
――――ゴォウウウンッ!!
アースラへ迫る弾幕を、ゼルビスの操縦で回避する。回避しきれぬ

部分は、クルーたちがシールドを展開し、補助する。
「部隊長からお預かりしたアースラだ！　凹ませても、ブッ壊すんじゃねぇぞ!!」
「オォオオオッス!!」
　クルーたちの善戦が、功を奏したのか……ガジェット群は、目に見えて減少していた。ゆりかご内部の状況は不明のままだが、あの高町なのはが行ったのだ。不安こそ在れど、疑心など微塵も抱いてはいない。
　――ズドォオオオオオンッ!!
　そして……桜色の砲撃が、ゆりかご内部から、突き抜ける!!
「!!　教官!!」
　喜色が浮かぶクルーたち。通信は、まだ無いが……時間的に、決着の一撃とみていいだろう。
　――ビーーーーー!!
「……！　通信アリ！　フォワードチーム、スバル・ティアナ班！　エリオ・キャロ班！　共に、任務達成!!　繰り返します！　フォワードチーム、任務達成!!」
「――!!　部隊長に伝令！」「了解！」
　これで、はやてをアースラへ呼び戻せる準備が整った。
　――行ける!!
　天秤は、勝利へと傾いて、……
　――!!
　……。何が、起きたのか。
「ぐぉおおっ……!!」
　己自身のうめき声に、ゼルビスは意識を取り戻した。
「……か、艦体下部……、推進機関の、３５％を喪失……!!　現在の高度を維持……！　ですが、これ以上の上昇は……!!」
　ひっくり返っていたクルーが、状況を伝える。
「だ、大威力の、魔力砲撃です!!　アースラのシールドを、貫通した模

様!!　発射地点、映像出します!!」
「――!!」
　リンディが、その映像を見て……絶句する。
「あ、アインヘリアル……、ですって……!?」
　……それは、この作戦では、稼働するはずの無い超兵器。しかし、その主砲の一門は、放熱しており……今まさに、下手をすればアースラを撃沈されていた。
「――ゆりかご、高度そのままに沈黙……！　し、しかし、……前方アンノウン、エネルギー反応、増大中!!」
「回避行動！」
「了解っ……!!」
　ゼルビスが、操縦桿を握る。しかし……、
「くっ、……さっきのが、まだ……!!」
　アースラは、頼りなく左右に揺れるだけ。推進機関が破壊されただけではなく、操舵機能にもトラブルが生じたようだ。回避するためには、機体をバンクさせるか、下降させるか……どちらにせよ、高度の維持は不可能だ。
「……！　構いません、下降を……！」
　リンディの指示。しかし、
「駄目だ!!」
　ゼルビスは、それを否定する。
「ここで止めたら、それこそ部隊長の作戦がパァになっちまう!!　高町教官が、ゆりかごから脱出できなくなっちまうだろうがっ!!」
　呆気にとられ……しかし、クルーたちがまだ、だれ一人として諦めていないことを知ったリンディは……改めて、指示を出す。
「マリエル技官、操縦系統の点検を!!　ゼルビス操舵士、機体のロールで回避を！」
『了解！』
「了解!!」
　アインヘリアルの副兵装が、アースラを狙う。それは、副砲とはいえ、超兵器の武装だ。艦体を貫くには、十分すぎるほどの威力を誇っ

ている。
――ギャゴォオオオオオオオオオオオッ!!!
「こンの……クソッタレェェェェェェェェェェェェェェェェ!!」
アースラが、３６０。のバレルロール軌道を描く！
切り抜けた。しかし。
――ヒュイイイイイイイイイイイイイインッ……!!
主砲のエネルギーは、フルパワーではないものの、いつでも発射可能な状態だ。
「!!」
慄くクルーたち。リンディは、その身を盾にしてでも、彼らを守ろうと、

『――――アースラ、応答願う!!』

――――――――――。
リンディが。エイミィが。アースラ古参クルーたちが。信じられない、といった表情で、硬直する。敵の攪乱では無いか。聞き間違いでは無いか。極限状況からの幻聴ではないか、と。しかし……互いに顔を見合わせ、それが誤りであると知る。
『――――こちら、時空管理局・極東方面艦隊・旗艦『アースラ』所属！』

――ゴォオアアアアアアアアアアアアアッ!!!
主砲が、エネルギーを解き放ち……、その射線上に、逆光のシルエットが現れる!!

――ほぼ至近距離からの、艦載兵器の主砲。

蒸発どころか、消滅不可避。しかし。
――ドシャァァァァァァァンンッ!!!
……誰もが、信じられなかった。
あまりに意味不明。あまりに非科学的。あまりに理不尽。あまりにご都合主義。
――現れたシルエットは……主砲を『受け止め』、それをそのまま……主砲の砲門へと、――
――『押し戻した』のだ。
――――ガガガァァァァァァァァァァァァァァンンッッ……!!
業炎に包まれるアインヘリアル主砲。
圧倒的な物理的な理不尽。摂理への暴挙を働き、成し遂げるような非常識を、彼らはたった一人しか知らない。
「――嘱託魔導師……!!」
燃え盛る炎から――空色の不死鳥が、再誕する!!
「――吾妻秀人だ!!」

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第二十話

――――――――おかえりなさい

◆・◆　◆　◆

立ち込める火炎から、蒼炎の翼を広げた秀人が、無傷で出現する。
連射の効く副砲を、身一つで完全に大破させた圧倒的な威容に、ただ沈黙する管理局員たち。
アースラ艦橋と、映像通信が繋がった。その顔、その声……まさしく、吾妻秀人に他ならない。
「秀人くん……!!」
エイミィら旧知のスタッフたちが、安堵の声を上げる。
今すぐに、顔を合わせて話がしたい。抱擁を交わしたい。しかし……その衝動を飲み込み、リンディは艦長代理としての職務を遂行する。
「――――嘱託魔導師・吾妻秀人。現時刻を以て、貴官の復隊を認めます」
『感謝する。戦況は？』
「現在、ゆりかごは沈黙。内部には……高町なのは特尉が取り残されています。救出を試みましたが、現状、出現したアンノウンと交戦中につき不可。また、空域のガジェットを、八神はやて部隊長が、航空戦力と共に掃討中」
『……了解。』
二つとも、知った名どころではない。
しかし、それを無為に優先することはせず、現状を把握する。
――――ビーーーー!!
警報が鳴り、クルーが職務に立ち返る。

「地上アンノウンより多数のエネルギー反応！　無機物……未知のガジェットです！　百、千……、転移反応、止まりません!!」
モニターに映し出されるのは、蛇や、蠍、百足のような姿をした、異形の機械兵器たち。
砲戦機能のエラーを対策するまでの間、本体防衛のために発進させられたのだろう。
その数……数千にも届かんとする程。
「八神はやて部隊長は、敵航空戦力の掃討で手一杯です！　他の部隊の戦力を投じたとしても、これだけの数の増援までは……!!」
地上部隊の一角……補給部隊だろうか、車両が破壊され、更にはガジェットに囲まれ、立ち往生の絶体絶命という一団が見えた。
「……」
……それが見えたので、秀人は無造作に、手元に魔力弾を形成し……
――……キュドオンッ!!!
速射砲が如き速度にて、地上へ向け射出。一拍を置き……
――ズドォオオオンッ!!!
「あぁ……!?」
「な、な……!!」
隊員たちに迫っていた一群を、防御の暇さえ与えず、吹き飛ばした。
しかし、まだ敵を見るや否や……
――ドンドンドンドンッ!!
同等威力の魔力弾を、五連射して放つ！
――!!!
爆音は更に衝撃波となり、一帯の敵を掃討した。
「んじゃまぁ、この調子で、」
「――ストップだ、馬鹿者め」
しかし、それを制止する声があった。
「……マリー」
マリエル・アテンザ技官が、ヨロヨロとした足取りで、ブリッジへと這うようにやってきた。

「おまえ、本調子じゃないだろ」
「……バレたか」
……秀人が、本気の、全力全開を出す条件。
――全開にした能力を受け入れるキャパシティのあるデバイスがあること。そして、その武装の残弾が十分にあること。
「どうせ、虎の子の『カーバンクル』を使い切ってしまったのだろう？」
……そう。あれは、プレシアと、マリエルの二人でしか製造できないオーパーツのようなもの。
異能の天才であるジェイルではあるが、それはあくまで、人体及びその周辺技術に特化したもの。工学へ特化したマリエルとは、パラメータが違う。
「それに……アイ。おまえ、しばらくノーメンテだろ」
さらには、それもあった。秀人の自己申告では、５００年以上……時間と空間の狂った場所で、稼働し続けていた。
『むー……やっぱりお見通しなの』
「ホントなら、あのデカブツ丸ごと吹っ飛ばすつもりだったんだが……やっぱり、調子出ないわ」
（――アレで、本調子じゃない？）
指先ひとつで消し飛ばされた、大量のガジェット。
（――アレで？）
地上へ穿たれた……隕石が落下したかのような、６連のクレーター。
（――……アレ、で？）
……彼と面識のないクルーたちが、顔面蒼白になる。
「気合と根性でどうこうなる問題でもないだろう」
そこは秀人のことだ。それなりにやれてしまうのだろうが……不安要素は、可能な限り取り除いておきたい。
「一度帰投しろ。この場でレストアしてやる」
最新設備へと改修されたアースラと、マリエルの腕があれば、ベス

トコンディションにまで復帰できる。
「いや、だが……ガジェットはどうする？　抑えられる人員が無ければ、」
「――――――僕がやるよ」
……と、秀人の耳に、聞き慣れた……しかし、若干変化した声が聞こえた。
秀人は、目の前に現れた三人組に、目をやり……
「や。久しぶりだね」
「ゆ……ユーノか、お前……？　それに、アルフ……と、」
驚くのも無理はない。何故、アルフがフェイトではなく、ユーノと共に居るのか。
その隣に静かに佇む獣耳・尻尾の少女は、『盾の騎士』ザフィーラ。
「僕たちが、あのデカブツを抑えておくよ。だから、その間にアースラへ」
「いやいやいや……無茶言うなよ。お前は、結界魔導師じゃねぇか。アルフも、ザフィーラも、あれだけの物量が相手じゃ……」
どう見ても、前線には不向きな技能だ。
「出来るよ」「可能だ」
両隣のアルフ、ザフィーラが、異口同音に簡潔に述べる。
どうやって、と聞こうとした秀人だったが……
「僕はね……ずっと、『前線には向いてない』って、言われ続けてきたんだ」
突然始まる独白に、秀人は、「お、おう……」と呑まれる。
……あまりに剣呑な目をしていた。
「『後ろで結界だけ張って、あとは支援だけしていろ』、なーんて、言われたこともあったっけ……ふふ……」
じりじりと、負のオーラが漂っている。アルフとザフィーラも、ちょっと引いていた。
「確かに、得意分野に集中することは良いことだ。器用貧乏な何でも

屋より、一極集中の専門家というのが、ある意味正解だろう」
それこそ、フォワードチームのように。
自らの職務を活かして、無限書庫のデータベースから対策を出すブレインの役割に徹するのも、適任と言えば適任だ。
「でも、悔しいじゃないか」
ユーノは、常に後衛だった。彼の尽力があってこそ、秀人たちが心置きなく戦えた場面は幾度もあった。その結界魔法や、治癒魔法、拘束魔法に助けられたことも、一度や二度では効かない。しかし……彼には、彼の葛藤があった。
『苦手だから』の一言で……皆が体を張っている中、後ろから見ているしかできない、なんて……だから。」

――――――ごうん、ごうん、ごうん……

圧倒的質量が、空気を押しのける異様な音と共に……ソレは、現れた。
「……な、なんだ、こりゃ……!?」
単純なサイズで言えば……アースラの、約5倍。
目を凝らせば、それが一枚の装甲ではなく、無数の立方体が、魚群の如く群れを成しているということが分かる。そして、その立方体とは……
「――――本……?」
そう、それは、一つとして同形の物の無い、表記や言語さえまちまちな、無数の『本』の集合体だった。それが、ただの本ならば、だが……先ほどから、アラートが鳴りやまないのはどういう訳か。
『……や……ヤバいの……』
「……お、おう……一応聞いておくが、何がだ……?」
戦慄するアイに聞く。
『アレ……一冊一冊が……封印レベルの魔導書なの……!』
……B級からA級、果てはS級まで。

それが、無数に群れた群体となって、ユーノに従っている……と、いうことは。
「ま、まさか……アレ、『無限書庫』かっ!?」
驚愕にひきつった顔になる。ユーノは、無限書庫『そのもの』を、魔力炉兼決戦兵器として持ち出してきたのだ。
「この数年で、ユーノが掌握できた分のみ、だけどね」
「うむ。古代ベルカ系は、我も手伝ったぞ」
その両隣で何やらの補助術式を展開していたアルフとザフィーラが、苦も無く言ってのける。
「僕だって、ただ無為に時間を過ごしてきたわけじゃないよ。……いざとなれば、君を完膚なきまでに叩きのめせるくらいには、ね」
「……」
誇張では、無いようだ。ユーノもまた、秀人を力づくで連れ帰る術を、持ち合わせていたのだ。
「フェイトのことを信じていたから、使いどころが今なだけ、だよ」
その膨大な制御術式を、難なく手元でコントロールするユーノ。彼もまた……秀人や、はやてのような……ある種、化け物レベルの異能者へと、変貌していた。
――――ギュヴィイイイイイイイイイッッ……!!
その内部へ、これまた常識の埒外にあるエネルギーがチャージされていき……
「秀人。
――――邪魔だから、そこ退いてくれるかな?」
……その射線上に、自分が思いっきり晒されているという事実に、遅まきながら気が付いた。
「ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいいいいいいいいーーーーーーーッ!!」
『きゃー!　きゃあー!!　さっさと逃げるのーーーーーーーーーッ

!!』
弾き出されるように、アースラの方面へ全力で避難する秀人たち。
「――――」
瞑目していたユーノが……カッ、と、開眼。
「魔導書合計３００万冊分の純粋魔力砲……！」
そして、長年の鬱屈を晴らすが如く叫んだ！
「――――知識の力舐めんなやゴラァァァァァァァァァァァァァァ!!」

――――!!!
圧倒的な破壊力の光の奔流が、装甲を蒸発させる！
――――バゴォオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!!
自動修復システムを凌駕する熱量が、機体を内部から蹂躙する！
「ぐわぁぁぁ

だの非殺傷だのという次元を超えている。
「ぎゃぁあああああーーーー!!」
「墜ちる、墜ちるーーーー!!!」
そうは言いながらもしっかり飛べているあたり、ユーノの見立て通り、彼らの腕前もまた確かなようだ。
「あ、あんな大魔力と……精密性を両立……!?」
唖然と呟くクルーたち。
「……そうか、あの術式……」
滞空する魔導書の群体。それらは、動力炉としてだけではなく……一冊一冊がオリジナルであり、互いのバックアップであり、スペアでもある。それらは、まるで人間の脳のように、複雑極まりない無数の経路を構築し、無限にも等しい術式の行使を可能とする。そして、それらに必要とされるエネルギーもまた、術者には求められることは無い。
これまで、特定のデバイスを持たなかったユーノが、初めて手にしたデバイスの正体が、この無限書庫転用システムだった。
ただ、その運用ためには、封印指定の危険魔導書を山のように利用するという、リスクヘッジを彼方へブン投げる必要があるのだが……
「そりゃあ、目の前に全知が転がっているんだもの。使わなきゃ損だよ」
そのキレっぷりはある意味、ジェイルをも超えていた。
「もうアイツをからかうのは止めよう……」
『そうしたほうがいいの……』
……眼下のアンノウンが、反撃の暇も与えられずに蹂躙される様を見て、秀人とアイはボソリと言った。
◆▪◆　◆　◆
アースラの格納庫へ着地した秀人を、新参の機動六課の若手と、古参クルーが、各々の表情で出迎える。機動六課からすれば、恐怖の対象、最強の戦闘機人デルタ。しかし、古参からすれば……旧知の友人の帰還だ。
「おせぇぞ、大将!!」

「道草しすぎだっての!!」
駆け寄ってきた彼らに肩を叩かれ、頭を小突かれ、抱き着かれ……
『マリエル、頼むの』
「おうよ」
その中から歩み出てきたひときわ小柄なマリエルに、アイの本体、空色のクリスタルを手渡す。マリーのことだ。ほんの数分で、レストアも完了するだろう。
その間、秀人がするべきこととは……
「吾妻秀人さんですね。お待ちしていました」
「状況の説明を頼む」
そして、ヴァイスから渡された、ゆりかご艦内への侵入経路を確認する。
「ＡＭＦは依然として健在。飛行魔法から取りつくことは困難です」
そして。
「八神はやて部隊長より、これを貴方に、と」
手渡されたのは……安っぽいアルミのカラビナと、そこに提げられた、一本のアナログキー。
「……これは」
クルーたちが、カバーの掛けられた『ソレ』を、秀人の目の前に持って来る。
――ばさっ。
「……はは。お見通しか」
カバーの下にあったのは、秀人の愛車、ＺＺＲ改。一点の錆、一滴のオイル滲みすらない、完全な動体保存がされている。
「終わったぞ」
マリエルが、アイの本体を持って来る。
「調子は？」
『完璧なの』
そのまま、再び首に提げる。
「んじゃ……行くぞ、アイ！」
『いつでもおっけーなの！』

――ヴァオォンッ!!!
『スレイプニル』起動。凶悪な出力が、再び鼓動を刻む。
『ハッチを開放します。甲板へどうぞ』
エイミィのナビに従い、甲板へ。そこには、以前は無かった筈の装置が取り付けられていた。溝のように埋め込まれた一本のレールと……射出機。カタパルトだ。
――ガチンッ。
『接続完了。続いて、発進シークエンスに入ります』
アイの内部に、術式の発動要請が入る。術式は……ウイングロード。
――承認。
『カウント5、4、3、2、1……、――射出!!』
――バシュウウウウウッ!!!!
「うぉおおおおおおおおっ!!!!!」
雄叫びを上げ、強烈な加速Gとともに、バイクごと射出される！
『ウイングロード、展開！』
――ギュアアアアアアアアアアアアッ!!
射出の勢いそのままに、スレイプニルが、翼の道を突き進む!!
――がしゃんっ……!!
空戦型ガジェットの群れが、砲塔を秀人へと向ける。その数、大隊ほどもあるであろう数から向けられる無言の殺意。
「行くぜオラァァァァァァァァァ!!」
しかし、回避も、迎撃も、排除も必要ない。今、秀人が最優先するべきは――ゆりかご内部への突入なのだから！
『重力衝角、展開!!』
――バキィィィィィィンンッ!!
前部装甲が分離変形し……鋭き穂先を形成！
――ガキャアアアアアアンッ!!
鎧袖一触に、進路上を一直線に貫き通す!!
「!!」
しかし、ゆりかごも抵抗する。高度を上げられぬのならばと、旋回

により侵入口を秀人の進路より外す。
『ならば！』
「押し通るまでだッ!!　……アクセルカートリッジ!!」
『ロード!!』
――ガキュンッ!!
発動するは、秀人の専用武装……アクセルカートリッジ!!
――ギュイィイイイイイインッ……!!!!
穂先へ、魔力・重力を集中！　魔力、物理の双方を、最大にまで高める！
「『『ブチ貫けぇえええええええええええええええええっ!!!』』」

――――――

「……」
資料としては知っていても、到底信じられはしないといった様子の四葉。
『――――絶対に諦めないで、最後まで足掻き続けること』
――――……オオオオオオオ……！
……音が、近づく。
『何度も、何度も……私たちは、そうやって勝利を掴みとってきた。挫けそうになっても……少しだけ躓いても……』
――――……オオオオオオオオ……!!!
『――――あの人が、いつだって立ち上がらせてくれた。立ち上がるための、勇気をくれた。
だから……私は、最後には屈さずにいられた』
――――オオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!
懐かしい気配が迫る。隔たるのは、厚さ１２００ｍｍの防御隔壁。
繊維状の魔導合金を、いかなる力をも分散するよう編み上げた、突破困難な、最後の隔壁。

――始まりのあの日。
――どこへ向けばいいのか。どこへ歩けばいいのか。
――道を決められずに佇んでいた自分を、助け出してくれた。
――いつでも近くに居て、優しさと、勇気をくれた。
――あの日、胸に灯った消えない燈火が……深い闇を、照らし出してくれた。
『ねえ、ヴィヴィオ、四葉。あの人はね、……私が大好きな、秀人さんはね。
――――私の、スーパーヒーローなんだから』
――――――――――――――――ドガァァァァァァァァァァァァァァァァァ

アンッ!!!!

『――――――――――おかえりなさい、秀人さん』

「――――――――――ただいま、なのは」

――再会の願いは、ここに果たされた。

◆・◆　◆　◆

「！　反応確認！　モニター出します！」

通信が回復する。天空に鎮座するゆりかごは……外部こそ変化しないものの、内部は既に、崩壊が始まっている。祈るような気持ちで、固唾を呑んで見守るクルーたち。

――バカァァァァアンッ!!!!

ゆりかごの装甲板が、内部より破壊される。

「!!!!　秀人くん！　なのはちゃん!!　……確保対象、保護対象と共に、脱出を確認しました!!　無事です!!　……みんな、無事、です……ううっ……!!」

感極まり、涙を流してしまうエイミィを、今は誰が責めることができようか。

「……最後には、本当にどうにかしてしまうんだから……あなたという人は」

アースラへ帰還した秀人たちを、隊員たちが取り囲む。歓迎……では、なく。

「……う、」

確保されてきた、四葉に対する警戒だった。デバイスを向けられた四葉は、これも仕方のないことだ、と、自ら歩み出ようとしたのだが……

『――――やめ。全員、武器を下しなさい』

なのはが、それを背中に庇った。
『この子の身柄は、私が預かります。危害を加えることは、私が許しません』
「で、ですが、教官……」「そいつは……」
未だ、クアットロとしての非道が印象強い隊員たちは、警戒を解かない。
なのはは……四葉の手を、握って見せた。
『――妹の、四葉です』
断固たる決意を込めた言葉に、隊員たちは、なのはを信じ、引き下がった。

「デ……いえ、吾妻、秀人さん……」
四葉は……複雑そうな顔で、秀人を見やった。『クアットロ』が、あれだけ執着し、あれだけ独占したかった筈の秀人は……憑きものが落ちたような、サッパリした顔で、笑みを浮かべた。
「四葉、か。……良い名だな。『クアットロ』よりも、ずっと」
「！　……は、はい」
「大事にしろよ。……なのはが、付けてくれた名だ」
「……はいっ！　……って、あ、あ……？　あの、あの……？」
ぐしゃぐしゃ、と、髪を乱暴に撫でまわされ、目を回す四葉に……ようやく、隊員たちの緊張が、和らいだ。
「……」
その、足元。なのはのズボンの裾を握っていたヴィヴィオの視線に、秀人が気が付く。
「……あ、あの……ひでと、さん……？」
緊張と、期待が入り混じった声色で、恐る恐る、声を発した。よく見れば、確かに似ている二人。親子と言われれば、そのまま納得できてしまう。
「どうした、ヴィヴィオ？」
秀人は、ヴィヴィオの目の前に膝を突き、目線の高さを合わせる。
「あぁ……」「そっか。」「なるほどな」

隊員たちが、その仕草の意味に、気が付いた。
こうして、話すとき、膝を突く仕草は……なのはが、ヴィヴィオ相手に、常にそうしていたことだった。基本的には、他人と接する時は腕を組み、遠ざけようとする癖のあるなのはが……『子供が苦手』と漏らしたことのあるなのはが、ヴィヴィオ相手にだけ、そうしていたのは……かつて、秀人がしていたことが根底にあったのだ。
「ひでとさん……あなたは、ヴィヴィオの、ヴィヴィオの、」
……その次が出て来ず、黙り込んでしまう。
――――お父さんですか？
その、たったの一言が、言えなくて。
「――――どう呼びたいんだ？」
……しかし、なのはがそうだったように。
口下手な子供から本音を引き出すのは、秀人の役割だ。
「ヴィヴィオは、俺を、何て呼びたい？」
こちらから押し付けるのでも、出て来るまで待つのでも無い。
ヴィヴィオが答えを出しやすい問いかけで……手を差し伸べるように、聞く。
「……お、」
絞り出すような、第一声。そして。
「お父さんって、よんで、いいですか!!」
最後は思いっきり、声を張り上げた。
土壇場で度胸が出るのは……恐らく、母親からの遺伝だろうか。
それに対する秀人の答えは、当然。
「ああ、もちろんだ」
そして、最後は。
『秀人さん』
「なのは」
ようやく出会えた、二人。
「……大きくなったな」
感慨を込めて言う秀人に、なのはが、綺麗に笑う。
『追いつきたかったから、頑張ったんだよ』

「……」
『……』
話したいことが、多すぎて……結局、黙り込んでしまう。
『秀人くん』
と、ブリッジより入電。
『……ゆりかご甲板に、』
モニターが現れ、映像が映し出される。
「――ジェイル」
――ジェイル・スカリエッティが。
白衣のポケットに手を突っ込み、傲然と、挑むような表情で、モニター越しに秀人を見ていた。
「……」
ジェイルと秀人の間にあった契約。これは。
「……俺が、ケジメを付けないとな」
視線を感じ、振り向くと……なのは、四葉、ヴィヴィオを始め、機動六課や、古参のアースラクルーたちが、秀人を見守っていた。
「アイ、悪いけど」
『……承知したの』
――ぱしゅん。
秀人は、全ての武装を解除し、人型となったアイをも置いて。
「――行ってくる」
ゆりかごへと、降り立った。

ジェイルの思惑なのか……既に、ガジェットたちは停止していた。
誰も邪魔する者は居ない中、二人は向かい合う。
「ジェイル」
「おう、待ってたぞ」
バツが悪そうに黙り込む秀人に、ジェイルは、かか、と笑ってみせた。
「……あの馬鹿娘がやりやがった時点で、こうなる想像はついていた」

「――――今、思い出したよ。『翠先生』」
聞き慣れぬ呼び名を口にする秀人。それに対し、ジェイルは、また笑う。
「バァーカ。鈍すぎるっつぅの」
アースラへ中継されている光景の中に、ぱっと、映像データが表示される。
ぱっと表示された写真には、髪を黒く染めたジェイルの姿と……
「!?」
ぎょっとする一同。そこには、自分のよく知った顔……はやての主治医でもある、石田の姿があった。
「オレが、世界を渡り歩いて好き勝手してた……って話は、前にしたよな」
それを前置きに……とうとう、明かされる。
「オレは、ある世界で医者をやっていた。
そこにある日、一人の患者が運び込まれてきた。
まだ5才のガキだった。
トラックに跳ね飛ばされて……もう、虫の息なんてものじゃない。
四肢はくっついているだけで、骨も靭帯も神経もバラバラ。脊髄にもダメージ。頭蓋は割れて、脳挫傷を起こして……
まぁ、そのまま死んじまってもおかしくない、生きてるのが心底不思議な状態だった」
……誰の話か。だが、皆は察してしまった。
「俺は……唯一、手元にあった酵素を、このガキに使ってみることにした。どうせ死ぬガキだ。未練たらしく持っていたクソッタレなブツの処理には丁度良い、ってな」
プロジェクトD、そして、プロジェクトE……その失敗作を。
古代の文献で得た、神代の魔法の再現。
だが、失敗作だ。
――ある被験者は、使用と同時に臓器が無数に増殖して『破裂』した。テロメアの補填が発現しなかった。
――またある被験者は、過剰な細胞分裂とともに、液状に溶け崩れ

た。
――またある被験者は、完全な己の分身を作ったが、自我が崩壊し、恐慌の末に揃って溶鉱炉に身を投げた。
このガキは、どんなふうに死ぬのか。
単純な興味から、それを服用させた。

――――――だが、耐えた。

――――――耐えられて、しまったのだ。その少年は。
――――――この少年こそが、プロジェクトEの完全適合者だった。
が、せっかくの完全適合者も、現地人の身勝手な欲望により、行方が分からなくなり……そのまま、長い月日が流れた。
そして、異次元で再会した。
「……だから、なんだろ？　俺を、人間に戻してくれる、っていうのは」
「……ああ。オレがしたことのツケだからな」
「戦闘機人や、人造魔導師は、お前の意思か？」
「……半分だ。最高評議会の要望に、俺が応えた形になる」
――秀人は、何気なく自供を引き出していた。
「断れなかったのか？」
「……断らなかった、が正解だ。俺には、やらなきゃならないことがあった。そのためには、必要なことだったからな」
「他に、やり方は……」

「――――ンなもんがあったら、とっくにやってんだよッッッ!!」
突然、ジェイルが激昂する。
「おめぇに分かんのか!?『別のやり方』とかいうのが、分かんのかよ!?
これしか無かった!!
――――こうするしか、無かったんだよ!!」

ジェイルもまた……苦悩の中を、歩んできたのだ。
「……ごめん。俺には、わかんねぇや」
「……!!!」
秀人は……安い同情などはしない。
「俺、お前よりバカだからさ。だから……なんでも知った風には、言えない」
ジェイルが、怒りの感情を……己の内に押し込めてきたその感情を、噴き出さんとしている。
「……だから、さ」
秀人は……拳を、固める！
「来いよ、ジェイル。
――理屈なんざ捨ててかかって来い!!」
「――ざっけんなぁああああああああああああ!!」
――バキィッ!!
ジェイルが、秀人に殴りかかる。
秀人は、傷こそ治癒するが、体力は消耗する。つまり、十分に殴り合いが可能なのだ。
「戦闘機人たちは、お前の……マリエルや、アーデルハイドの、兄弟たちのクローンなんだろ!?」
「そうだ！　１０にも成れずに死んじまった……俺の兄弟たちだ!!」
「そのために、プロジェクトＦを……評議会の提供した技術を！」
「そうだ！　オレは……あいつらに、誓ったんだ!!」
ジェイルは今も、覚えていた。

……忘れることなど、できようものか。

あの日……ついには間に合わなかった研究。小さく……皺だらけになった妹たちの手。
――間に合わなかった。許してくれ。許してくれ。
そう慟哭した、あの日のことを。
「研究は……必ず、完成させる！　あいつらの人生が無駄ではなかっ

たと……!!

――アイツらがこの世に存在したと、兄貴のオレが、証明するんだよ!!

止まるわけには、いかねぇんだよォおおおおおおっ!!」

そのために、彼らの細胞をクローニングした。

「だったら……なんで、人格を移植しなかった!?」

秀人の指摘。フェイトや、エリオがそうだったように……記憶や人格は、ある程度の複写が可能だ。だが戦闘機人たちには、それが無い。

「お前だって、本当は気づいてたんじゃなかったのか!?

――どれだけ精巧な複製でも、彼らにはならない！　もう、彼らは……！」

「――黙れぇッ!!」

帰ってこない、と言いかけた秀人の顔面をジェイルが殴る。

「黙れ、黙れ、黙れぇッ!!　お前が言うな！　お前だけは、それを言うんじゃねぇッ!!　いつまでもくたばった親のことを引きずってるような奴が！　偉そうにのたまってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」

!!　テメェこそ、ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

――!!!

「俺が！　引きずってちゃ悪いのかよ!!　毎日毎日、後悔してちゃ悪いのかよ!!

――あの日に戻れたら!!

――あの瞬間からやり直せたら!!

お前に言われなくったって、そんなもん、ずっとずっと引きずってるに決まってるじゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ!!」

「――テメェには、出来るだろうがっ!!

神に選ばれた能力の持ち主のテメェになら!!　因果律でもなんでも操作して、都合のいい現実を作り出しゃあ良いだろうがぁっ!!」

「ンなもん……ンなもん、何度も何度も考えたッ……!!」
「……！　なら、何で……!!　何でやらねぇっ……!!」
　気づけば、二人は泣いていた。
　泣きながら、殴りあっていた。
「それは……やっちゃいけない事だっ……!!　俺の幸せのために、……狂った因果は、必ずどこかを不幸にして、つり合いを取ろうとする……!!」
「……!!　こんな時まで、他人のためかぁ!?」
「違うッ!!
　――想いを、繋げてきた奴らがいたからだっ!!!!」
　血と、涙で濡れた拳を振るい続ける。
「――望まれない命が、存在理由を見出した！
　――呪われた者が、自らの道を歩み始めた！
　――兄弟たちのため、運命と戦い続けてきた奴らがいたッ!!」
「……!!」
「……そいつらと……そいつらの祈りと、自分の願いを……天秤に掛けるなんて……できるわけ、無いだろうがっ……」
　秀人は……あの時間を、やり直したいと願うと同時に。今、ここにある奇跡が、いつまでも続くようにとも、願っていたのだ。
「……俺も、お前も、やり方を間違えた。お前は、賢いけど……一人だったから」
　だから。
「――今度は、俺も一緒に、考えるから……!!

答えが出るまで、付き合ってやるから……!!
だから、もう、一人で何でも、抱え込むなっ……!!」
互いの顔面を殴り合い……同時に、倒れ伏した。
「はは……なんだよ、お前……何で、そこまで……」
「……友達……じゃねぇか」
甲板に二人して寝そべる。
「……お前、クライスラー事件に関与してただろ」
「……ああ。評議会の連中から、魔導師の素体の保存を命令された」
「ゼスト隊の連中を、生かしたのは……」
「……俺の意志だ」
クイントや、ティーダ、ゼスト……死んだと思われていた彼らを助命したのも、彼らを自身の管理下に置き、悪用を防いだのも……彼の意志。

『……本当に、馬鹿な人』

と、ここに有るはずの無い声が届いた。
「――――うォッ……!? ぷ、プレシア……!?」
「げっ……!!」
顕れたのは、立体映像だが……ジェイルも、苦い顔をする。
『……なぜ、秀人がいた次元を探索していたの?』
そうだ。
そもそも、なぜ、異次元で秀人をサルベージできたのか。
「……」
応えないジェイル。
『――アリシアの遺体を、探していたのね?』
ジェイルは、観念して白状した。
「……当たり前だろ……俺の、娘なんだ……」
ジェイルが……一度は、安息を感じた居場所。

その痕跡だけでも、求めるのはサガだ。
「……あいつな、『パパ、パパ』って……カルガモみてぇに……後ろを付いて歩くんだ」
「……」
「行きたくも無ぇ筈のピクニックなんてもんに、オレとプレシアを、我儘に、強引に連れ出してさぁ……けど……、それが……、最後には、笑えちまうくらい、た、楽しくってよぉ……！」
宝物のような思い出と……痛みと、絶望。
「……俺らは、そんなんばっかりだ」
「……ああ」
「……それでも……俺たちは『今』を生きていくしか、無いんだ。ジェイル」
「……ああ、そうだな。秀人」
秀人は……ジェイルを引き起こす。このまま、アースラへ連れて行く。
……しかし。

――ズズズズズッ……!!
「……!! 何だ、この震動……」
空中の秀人に伝わるということは……
『秀人!!』
「ユーノ、これは……あの日の。……プレシアの時と、同じ……」
『……ああ。次元震だ。そして、発生源は……！』
――バリィイイイイイイイインッ!!!
いとも呆気なく……次元の壁が、硝子のように砕け散った!!
「……!! ジェイル、跳べっ!!」
「チィッ……!!」

――ダンッ!!
アースラへと飛び移った二人の目の前で……次元の壁の向こうより現れたモノ。
――アインヘリアル。
「!? おい、何だアレ!? 同じのが、二機……!?」
それは、先ほどまでユーノが対処していた機体と、ほぼ同一の外観と構造をしていた。相違点は……色。最初に現れたものを、仮に一号機とすると、次元の壁を破り現れた二号機は、血のような真紅に、全体を染め抜かれていた。
「バ、バカかッッ! オリジナル機を……あんなモン、誰が持ち出しやがったってんだ!?」
――オリジナル。
……それこそが、真のアインヘリアル。
ユーノが対処し、足止めをしていた機体。主砲のたった一射で、部隊壊滅を可能とし、無数の副砲が敵を寄せ付けず、艦載ガジェットが穴を埋めるという、あの強大無比な化け物戦車は……出力などにデチューンを施された、言わば、エラッタ機。
――劣化品に過ぎなかった。
そのオリジナルこそ、地を裂き空を割り、世界の理さえも破壊する――超兵器アインヘリアル。
――ぶうぉおおおおんんっ……
異様な術式と魔力と共に……アインヘリアル上部に、奇怪な装置がワープアウトする。
「なんだ、アレ……」
一言で言い表すなら……三連に連なった、漆黒の立方体。

「……最高評議会、直々のお出ましかよ」
ジェイルは、その正体を知っていた。
「最高評議会……？　あれが……？」
「ああ。管理局創設の黎明期から、現代に至るまで……その頂点として君臨し続けてきた」
「……何年くらい前だ、それ」
「聖王統一戦争の頃に、管理局の前身となる組織が生まれてから……５００年」
「……」
「オレみたいな技術者を作って、自分をメンテさせながら……本来の肉体を失い、器を乗り換えながら……今の今まで、生き延びてきた」
「でも……何で、今になって」
影の支配者が、表に姿を現すなど、よほどの事では無いか。痺れを切らしたか……もしくは。
――準備が整ったか。

『『『『次なる器。誠に、大義であった』』』』
念話を極大化させたような、異様な『声』が、脳を直接揺さぶった。
「ぐっ……!!」
頭痛を噛み殺し、その姿を見据える。
「そいつは、どうも……！　で、最高評議会サマは、どういうおつもりですかねぇ……!?」
アインヘリアルは、器じゃなくて……世界を纏めるためのヒール（悪役）にして、汚職官僚を載せて、悪にでっち上げてぶっ殺して、この先１００年の安定と平和を得る……って筋書きじゃ、無かったのかよ……！
オリジナルは……それには性能が過ぎたから、解体して、設計図を献上するって話も……!!」
『『『『計画は、臨機応変に変化するものだ。そして、今回は、それが一歩早まったというだけの話だ』』』』
ややボリュームを下げたのか、まともな会話が出来るようになった。

「早まった……？　おい、アンタら、何を……!!」
『『『『お前は優秀な科学者だった。これまでの誰よりも』』』』
「だから……！　分かるように話やがれってんだ!!」
５００年を生きた知性は……最早、人間の領域を逸脱していた。
『『『『アインヘリアルの性能は、技術を３００年以上、先取りしている。つまり、計画の３００年を、短縮することが、可能になった』』』』
「おい……!!　テメェら、まさか……!!」
内情を知らぬ者達には、微塵も理解できない内容だった。しかし……決して、明るいだけの話ではない事だけは、伝わった。

――最高評議会を構成する立方体・モノリスが、アインヘリアル一号機へと、沈み込んでいく。

そして……
『ゆりかご、降下を開始！　地上アンノウン……二号機も、移動を開始しました!!』
――ゴゴゴゴゴッ……
「……溶けて、やがる……」
……マシンであるはずの、アインヘリアルが……ゆりかごが……ドロドロに融解し、交じり合い……異形のマーブル模様を描き……
「――始まった」
ジェイルの、戦慄と共に……形を、作っていく。
三基の動力炉が、一基へと統合され……構造体が、装甲板が……『立ち上がって』いく。
――ズシンッ……
巨重と共に、踏み出されるのは……巨大な、脚部。
――ばさぁあああっ……!!
展開される、天空を覆いつくすかのような、広大な翼。

――グ、ググググッ……、ボコンッ!!
最後に形成されたのは……禍々しき角を備える、異形の多頭。
――黙示録の赤い竜。
『『『『これより……『聖戦』を開始する』』』』
その偉容より発せられた声は、全世界、全チャンネル、全領域へ、発信されていた。
「聖戦……？」
――ジジジッ……!!
「がっ……!!」「何だ……これ……！」「直接、頭に……!!」
流し込まれる、イメージ図。それは……
「――全次元世界の一括管理……!?」
「え、え、……なに、これ……資質を、決定づけてからの、定数を満たす出産……!?」
「……望まれた資質が発現しなかった者は……隷属……もしくは、」
「戦力への、自動組み込み……足りない者へは、機械化の施術を、強制だって!?」
それらは、すなわち……個人の尊厳を、無駄を、徹底的に排除した、完璧なまでに合理的な……悪夢の新世界。
――時空管理局。
まさに、それを体現しようとしているのだ。この……目の前の怪物は。
『『『――反感も有ろう。しかし、この世界こそが、最も繁栄を約束された形態の社会なのだ』』』
……理解、できてしまう。感情論を、徹底的に排除し……人の感情

と言うものを、コントロールできてしまえば……この世界は、実現できてしまうのだ。

『『『　此度の『聖戦』を以て、世界より『闘争』の概念は消え去るだろう　』』』

それ故の、『聖戦』だというのか。反逆者を、徹底的に排除し……取り返しの付きようのない、新世界を敷いてしまうことが。

『『『　賛同者……我が信徒は、我が、全てを賭けて保護しよう　』』

敵にさえまわさなければ……これほど、頼りがいのある存在も……他には無い。

『『『　貧困も、飢餓も、闘争も存在しない理想の新世界を。人類の夢と理想を。

――『恒久平和』を、我らが創生する　』』』

そして。高らかに宣言する。

『『『　我らこそが、新しき世界を統べる『神』である。　』』』

――――――――――聖戦が、始まる。

Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編　第二十一話　『ひとすじの光が闇を照らす。人、それを愛という』

――――――私、秀人さんが好き。

◆▪◆　◆　◆

同刻……全世界。

――――――オオオオオオオオオオオオッ!!

ある時点で出現した機械獣たちは、瞬く間にその総数を増していき……世界を、恐慌に陥れた。初動に遅れた軍などの治安維持組織は、その物量に押しつぶされ……民衆は、恐怖に震えるしか無かった。

――――『『『　従え。さすれば救われん　』』』

……そして、脳裏に響く、荘厳なる『声』。抗うことさえ無くば、危害は加えられないという保証が、更に人々を萎縮させる。

――――『『『　従え。　』』』

――――『『『　さすれば、安寧が与えられん　』』』

「あ、ああ……わかった……わかったから……」

ある会社員の男性は、早々に抵抗の意志を失った。

「この子が、助かるなら……」

ある乳飲み子を抱えた母親は、受け入れた。

「……どうなるんだ、いったい」

ある公務員の中年は、己が立場を危うんだ。

「ぐ、あ……」

抵抗を試みた男子学生は、手足を圧し折られ、呻いた。
「え、これ……テレビ、じゃないの……？」
ある女性は、現実から逃避した。
「……、」
ある軍人は、部下へも武器を捨てるように指示し、両手を上げた。
テロなどという生易しいものではなかった。そこにあったのは、ただの事実。
『支配される日がやってきた』という、ただの事実だ。

――同時刻。ミッドチルダ。
「む、無理だ……！」
ある陸士部隊の隊員が、デバイスを下した。
「だって、あれは……管理局の、トップで……」
相手は、犯罪者ではない。次元世界を統べる管理局そのもの。組織の一員として、組織のトップが決定した事項へは、従う義務がある。
「でも、こんなやり方は……！」
……人道的見地。倫理感情。それらから、反発の声も上がった。
「じゃあ、逆らえるのか……？」
――ギギギギッ。
……まるで、品定めをするかのような、無数の機械獣たちの眼。教義に背きし背信者が、どのような末路を辿るのか。
「……」
……予感できてしまった。己の、友人の、家族の、恋人の顔がよぎり……反発は、萎んでいった。
「……受け入れるしか、無いのか」
物量に圧倒された……というだけではない。
己が、少なくとも所属し、貢献し、携わってきた組織の決定に対し、ただ個人の意見で不服従とするのか、という、疑念も生まれていた。
「……な、なぁ」
と、年若い隊員が、卑屈な声を出す。

「そりゃ、ひでぇかもしれないけど……でも、これで、平和が実現するのなら……」
「っ……！　サルバ、あんた!!」
「ひっ……！」
　大柄な女性隊員に胸倉を掴み上げられ、男性……サルバが縮こまる。
「で、でもよ、マルティナ……！　おれらが入隊して、……いや、おれらがガキの頃から、何かが変わったことなんて、何も無かったじゃないか……!!　おれらは、運よく管理局に入れたけどよ……でも、おれらだけじゃないか……！」
　闘争。飢餓。病魔。貧困。格差。
　それらは、この世界が敷かれて以来、どれか一つでも解消されたことの無い問題だった。
「それを、管理局のトップが、一気に解決できるって、言ってくれてるんだぜ……!?　クニのガキどもも、安泰に……」
　ひきつった笑いを浮かべながら……名案だ、とばかりのサルバにマルティナが即座に激昂する。
「この、馬鹿がっ……!!」
「ひぃっ……！」
　制裁を喰らわそうと、マルティナが拳を振り上げ……
　――……ぞぶり
「……え？」
「ぎゃっ……、え？」
　サルバは、どたっ、と尻餅をつく。
「……え？」
　目の前には、毎度毎度、鉄拳を喰らわせてくる、おっかない幼馴染の図体があった。
「あ、え……はぁあ……？」
　その腕だけが、自分の胸倉にくっついたままだった。
　――切断された断面から、噴水のように血が吹き出した。
「――!!!　お、ァァァァァあああああっ……!!」

苦悶の声と共に、マルティナが崩れ落ちた。
「ひぃいいいいいいっっ!!!　う、うで、マルティナの、うでがぁあああああああっ!!!」
切断された腕を、マルティナの胴体に押し付けるサルバ。
「だ、だれか……医者、医者を……!!」

――『『『『　闘争は、認めぬ　』』』』

……悲鳴さえも、凍り付いた。
「こういう、ことかよ……!!」
闘争の概念を消し去るとは……こういうことだというのか。ありとあらゆる衝突を、絶対的な恐怖によって、磨り潰すことだとでも。
「……!!」
衝動的にデバイスを構えようとしたサルバを、同僚たちが諌める。
「よせ、サルバ！」
「は、はなせ……!!　コイツら許さねえ!!　よくも……！」
その『諍い』を認識した、統治者は……

――『『『『　闘争は、認めぬ　』』』』

無数の機械獣たちが、牙を剥く。

――『『『『　闘争は、認めぬ　』』』』

逃げ道を決めあぐね、『言い争っていた』男女が。

――『『『『　闘争は、認めぬ　』』』』

泣きじゃくる子供を『叱責』していた両親が。

――『『『『　闘争は、認めぬ　』』』』

通路を塞ぐ車を『怒鳴りつけていた』通行人が。

――『『『　闘争は、認めぬ　』』』

沈黙を命じた上官へ『詰め寄っていた』下士官が。

――『『『　闘争は、認めぬ　』』』

ねじ伏せられ、拘束されていく。

「……」

人々は、ただ沈黙し、それらを見ている事しか、出来なかった。

――これが、『平和』だというのか。

しかし、数百年の思索の末に導き出された結論だ。決して、無根拠ではないのだろう。

「……従うしか、」

そう誰もが、受け入れ始めようとしていた……瞬間。

――ズガァァァァァァァァァァンッ!!!!

そびえ立つ赤き巨竜に、爆炎が衝突した。

「!?」

沈黙しつつあった世界に、その号砲は盛大に響き渡り……その蛮行を成した大馬鹿者へ、視線が集まった。

「――……貴様らに、問おう」

機動六課部隊長・八神はやて准将の声が……全世界へ発信される。

「え、これ……また別のひと?」「どうなってるんだ……?」

巨竜の用いていた回線へ、無理やりに割り込み、逆に利用していることは、ある程度の人物にしか分からなかった。

「平和を欲する心は、皆が持っているだろう。
そのために、闘争を根絶する必要があることも。
当然、皆が思っている筈だ」
威圧でも、籠絡でも無く……ただ事実を淡々と述べる言葉に、聴衆は自然と耳を傾けていった。
「では、なぜ、皆が平和を望むというのに、それが実現しない？」
ある者は困惑し、ある者は思索し、ある者は……一定の正解に辿り着いた。
「答えは簡単だ。
――思い描く『平和』の形が、皆それぞれ、違うからだ」
『仲間外れのいないコミュニティ』を願う者もいれば、『一人でいられる空間』を願う者もいる。ある者は群れることを望み、ある者は静寂を望む。
――では、正しいのはどちらか？
前者は、後者を引き入れようとするだろう。前者にとって、『一人で居る』ということは、平和の定義から外れることなのだから。だが、後者にとっては……それは、己が平和を脅かす侵略者でしかない。
「――――故に、争いは起こる。
――己が『平和』を、『正義』を守るため」
価値観の相違。それが、全ての争いの根源なのだ。
「では、平和を実現するのに、最も手っ取り早い手段は何か？　……これも簡単だ。
――個人の価値観を認めなければいい。
……そこの木偶の坊が言っているように、な。
不可能か可能かで言えば、可能だ。
脳にマイクロチップでも仕込んで思考を機械的に固定してしまうか、肉体を休眠させてコンピュータ内に意識を保存してしまえば、世界は平和になるだろう」
争いの無い、平和が実現される。
「奴に賛同する者と、しない者……当然、そのどちらも居るだろう。同じ価値観など、一つとして無いのだから。

しかし――――だからこそ、我らは言葉を尽くすのだ」
時に徹底し、時に妥協し……互いの落としどころを探ってきた。その果てに、今の世界がある。
「衝突もあっただろう。悲劇もあっただろう。次こそは、次こそは……そう願いながらも、人類の歴史は、闘争の歴史として在った」
それを、彼らが数百年、観測してきたように。
「確かに、奴の言葉は正しい。事実に裏付けされた、有用な解決策だろう。
しかし――その価値観を絶対的なものとして強いることは。恐怖による弾圧で、それを実現するのだとしたら。
――それは、ただのエゴイズムだ」
そう言い切り……大きく、息を吸う。そして。

「――――貴様らに、問おう!!
『神』を憎んだことは無いか！　『神』の馬鹿野郎と、思ったことは無いか!?」
先ほどとは打って変わっての激しい口調に、聴衆は、嫌が応にも感情を揺さぶられる。
「いつだって神は、全てを奪ってきた!!　ささやかな幸福も、かけがえのない時間も……愛する者さえも!!」
その感情の矛先を……全て、目の前の巨竜へと集める。
「――――そのクソったれな『神』を自称する輩が、今、目の前にいる!!　天上でふんぞり返っていた仇が、ブン殴れる距離にいる!!
そして、極大の理不尽を受け入れよと、のたまっている!!」
じゃきん、と魔剣の穂先を、巨竜へ差し向ける。
「――――私は、『神』を認めない！
――――対話を放棄し『手っ取り早い』支配を行使するような浅慮なる神を、決して認めない!!」
そうだ、その通りだと、『神』の宣言への反発を、再び取り戻す。

「――――我らは、何だ!?　ただ与えられる平和とやらを享受するだけの……保護の見返りに身を捧げるだけの家畜か!?」
「……ち、違う！」
市民を避難誘導していた善意の若者が、声を上げた。
「――――違うわ！」
機械獣から子供を庇っていた老婦人が、声を上げた。
「そうであって、たまるか！」
妻子の待つ我が家へ走る父親が、声を上げた。
「――――我らは『人』である!!　数だけが取り柄の、十把幾らの『人』である！」

『『『『　危険分子は、『『『『
巨竜の頭の一つ。その口腔内へ、エネルギーが充填されていく。標的は、射程内、遮蔽物の無い空中に佇んでいる。外しようも無い。
『『『『　排除する　『『『『

――――ギュゴォオオオオオオオオッッ!!!

はやてが、その破壊の奔流に呑みこまれ……誰もが息を呑んだ。
「部隊長っ……!!」
「大丈夫です」
機動六課の面々が、悲鳴を上げる中……フィアットだけは、平静を保っていた。
「――――部隊長は、無敵です」
そして、皆が見上げるモニターの中。

――――……バヂィイイイイイイイイイイイインッ!!

『神』の一撃を耐え抜き……弾き返した!!
「――――我らが、家畜でないと言うのであれば……『人』の意志を示

すのだ！」
魔剣は亀裂が入り……黒翼は千切れ飛び、防護服を貫いた威力が、肉体を焼き焦がし……しかし、『神』の一撃、その直撃を受け……それでも、立っている！
「――――――今こそ、『神』へ抗う時!!
意思を示し、意志を束ね……『神』討つ刃として、喉元に突き立てよ!!」

――ガゴォオオオンッ!!

機械獣が、横合いからの一撃に砕かれる！
「うおおおおおおおおおっ!!」
気を確かにした局員たちが、反撃へ撃って出た！

「――――すげぇな、アイツ」
機械獣たちを撃破しつつ、その成り行きを見守っていた秀人が、呟いた。
見れば……機動六課の面々だけではない。展開していた他の部隊……陸士部隊、空戦部隊……それどころか、指揮官を失ったデイリンの部下たちまでもが、自発的にはやての指揮下に集っていた。そして、その急造の大部隊は、はやての指揮のもとに見事に連携し、機械獣たちへ組織的に対抗さえしていた。この扇動の能力。もはや、カリスマと言い換えても良い。
「あのぼっちでヒッキーで野菜が食えないお子様単細胞が」
「誰が単細胞だ！」「いてぇ!!」
地獄耳で聞きつけてきたはやてが、秀人の尻を蹴飛ばした。
「この野郎！　話はいくらでも、そりゃあもう、いくらでもあるんだぞ！　つーかトマトとセロリ以外なら野菜食えるわ馬鹿にすんな！」
秀人の胸倉を掴み上げながら、ギャンギャンと吠える狂犬はやて。
「よくも勝手に居なくなりやがったな!!　これでも多少は自力で歩けるくらいにはなってるんだぞ!!　何で見てなかった!!　お前に一番

に……一番最初に、見てもらおうと思ってたのに!!　何年もほったらかしにしやがって！　この嘘つき！　見ててくれるって言ったくせに！」
　至近距離から罵詈雑言を浴びまくった秀人は……
「――ただいま」
　はやてを、思いっきり抱きしめた。
「は、はなせ……!!」
　じたばたと暴れていたはやてだったが……
　やがて、自らも秀人の身体に手を回し、抱きしめ返した。
　――めりめりめりめり。
「ぐぉ、ちょ、おま、つよ、……」
　肋骨がミシミシと軋む。
「うるせー……黙ってろ馬鹿……」
　呆れたように笑いながら、好きなようにさせた。
「……、ふんっ！」
　どん、と秀人を突き放したはやては、少し赤くなった目元を拭う。
「戻ってきたからには、私の手足となって馬車馬の如く働いてもらうぞ!!」
「いや、それは俺の権利だ」
　と、そこへ闖入してきた別の声。
「んん……？」
　秀人は、その顔を見て……ハッと気付いた。
「く……クロノぉ!?」
　何と言うことか。あの背丈が小さく、真面目に発育を心配していたあのクロノが、今や秀人とさほど変わらぬ体躯となって、目の前に立っていた。
「ふんっ!!」
　――ぐしゃ。
　唐突に、顔面を殴打。
「ぶっ……！　ってぇな、この……！」
「……」

……しかし、二人は同じタイミングで、片手を振り上げる。
――パァンッ！
ハイタッチを交わした二人の間に、わだかまりは残らなかった。
「おう、悪かったな」
「ああ。このバカめ」
そしてクロノは、はやての方を向く。
「はやて。君はこんなところで、有象無象の雑魚を相手にしている場合か？」
「……秀人と私でやれば、殲滅なんて簡単に……」
珍しく口ごもるはやてに、クロノが告げる。
「適任というものがある。俺には大隊は指揮できない。
はやて。君以外の誰が指揮を執るというんだ」
「ぐぬぬ……」
はやては……未練タラタラな様子で、秀人を睨みつけ……
「……あーもう、分かったよ、譲ってやらぁ!!」
ヤケクソ気味に、アースラの方面へと戻っていった。
――ガシャガシャガシャ……!!
減るどころか、むしろ数を増してきた機械獣たちに包囲される秀人とクロノ。
「敵は多いな」
「ああ」
背中合わせに、機械獣たちと対峙する。改めてみると、凄まじい数だ。どこにこれだけの資源があったのだと聞きたくなるほど……地平線の向こうまで広がっている。そして、一体一体の戦闘能力も、ハリボテではないだろう。
――しかし。
「――行くぜ、クロノ！」
「――行くぞ、秀人！」
――二人に、後退の二文字は既に無い。
『Ｃｏｎｎｅｃｔ　ｏｎ！』
『Ｃｏｍｐｌｅｔｅｄ！』

――――いつだって、そうだった。
――――クロノ・ハラオウンは……吾妻秀人の、最高の戦友なのだから。
押し返す。
跳ね除ける。
投げ飛ばす。

――――皆が、戦っていた。
はやてに喝を入れられた局員たちが……それを見ていた市民たちが、皆、精一杯の抵抗を続けていた。
『『『『……、』』』』
直接の戦闘をすることだけが戦いではないとばかりに、若者たちは女子供や年寄りを、戦闘区画から非難させていく。それに追いすがる機械獣たちを、管理局員が一丸となって排除する。そこに市民も、管理局員も、違いは無かった。皆が、己に出来ることを精一杯に、取り組んでいた。
『『『『……所詮は、一時凌ぎに過ぎぬ』』』』
巨竜は……体表を撫でるに過ぎない魔導師たちの攻撃を意にも介さず……
――――ギュヴァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッ……!!!!
多頭の全口腔へ、エネルギーを充填していく！
そして、今度の標的は……地表の、避難民たち!!
「ふ、」
はやてが、極限までバリアを展開し、射線を遮る！
「ふざけんなぁぁぁ

「認証クリアだ！」
『発射シークエンスオールスキップ!!　バレル展開!!』
クロノとアイが、最短手順で突き抜ける！
――――ガキィイイインッ!!
アースラの艦首……『アルカンシェル』が、即座に展開！
「発射ぁあああああああああ!!!!」
――――――――――!!!!!
発射される、互いの最強兵器!!
「ぐ、ぬぉおおお

魔力に乏しい者たちの中には……最早、手遅れの者さえ居た。
「さ、下がれ!!　まだ、『余震』が来るぞっ!!　次元の亀裂から、少しでも遠ざかれぇえええええええッ!!」
――――ゴガガガガガガガガガガガァァァ

……分かる。
戦場の中に、消えゆく命の燈火。風に吹かれる蝋燭のように……儚く、呆気なく、吹き消されていくのが。
「――――何が、恒久平和だ!!」
修復を終えた秀人が、立ち上がる！
「悲劇をバラ撒いてるのは、てめぇらじゃねえかぁあああああああああっ!!」
止める。何としてでも。何をしてでも!!
――――キィイイイイイイイイイイイイッ!!!
不死鳥を召喚。周辺魔力を収束魔法で取り込み、熱量を上げていく！
ユーノの、無限書庫魔力砲による援護！
そして、アインヘリアル、第二射!!
――――ギュゴオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!!
戦闘区域の全魔導師たちによる援護射撃を取り込み、不死鳥が砲撃と衝突する!!
「ぐ、……がぁあああああああああああああッ……!!!」
――重い。
まるで、ダムの放水を、身一つで受け止めているかの如き衝撃。
しかし……『逸らす』のでは、足りない。この攻撃は、どこへ着弾しようとも、結果として次元断層を発生させる。求められるのは、『相殺』だ。
「――イモータルハート!!」
『了解、なの……!!』
――ガリィイイイイッ……!!
カーバンクルを使用し、エネルギーを底上げする。一つ、二つ、三つ……！
イモータルハートが異常に発熱し、秀人の身体も崩壊が始まる。しかし……
『『『――――――――消えろ』』』

不死鳥と、アインヘリアルが……互いを飲み込み合い、……弾ける！

――――――――――――――……グゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッッ!!!!

「がぁあああああああああああああああああああああああッッ!!」

堅牢なイモータルハートの装甲が砕け、秀人ごと吹き飛ばされる！

「秀人ッ!!」

クロノが、アースラから落下する寸前の秀人を救助する。

「ど、どうなった……!?」

「……、アインヘリアルの第二射は、相殺された。第一射よりは、被害は少ない」

しかし、ユーノの切り札、無限書庫は魔導書の半数を焼失し、砲身の維持は不可能。周囲に居た魔導師たちは、援護している隙を機械獣たちに突かれ、戦闘不能。少数のエース級は健在ではあるが……それも、敵の物量に押され気味である。

「……っく!!」

――ジュウウウウッ!!!

炎と共に修復を終えた秀人が、状況を己の眼で確認する。

「……」

敵アインヘリアルは、先ほどの衝突でどうにか砲身を潰すことには成功したものの……修復機能が備わっていないほど、抜けた設計でもないだろう。愛機イモータルハートは、カーバンクルの多重使用による発熱で、整備が必要だ。

「秀人。ここは……」

「ああ。……戦略的撤退だ」

この状態で立ち向かっても、犬死にだ。敵アインヘリアルを使用不能にしたことで、はやては、大分楽に立ち回れるようにはなっている。この隙に、整備を受けるのが正解だ。

「――――状況は、最悪です」

リンディは、開口一番にそう言った。
敵アインヘリアルの破壊力は、想定を遥かに超えており……修復と再チャージに時間が必要とはいえ、次元断層を引き起こすほどの破壊力を持つ。はやては、アインヘリアルを周回しつつ、距離を保ち……囮となって、副砲による射撃のターゲットを外してはいるものの……また、いつ標的が変わるかも知れない。
「アルカンシェル、先ほどの衝突で大破。……少なくとも、発射は不可能」
「……他の、航行艦は？」
「……評議会の権限により、このアースラ以外は、機能をロックされて……他世界からの帰還もままならない状況です」
いや……彼らもまた、その世界に出現した機械獣たちへの対応で、手一杯だろう。
「敵主砲……修復完了まで、推定、６００秒。今度は……相殺する手段は、……」
――――。
……と、そこへ、マリエルが歩み出た。
「……方法は、……ある、には……ある」
苦渋の表情。その方法とやらが、非常にリスキーであることを、暗に示していた。
「……秀人はどこだ？」
「……イモータルハートは整備中だからと、艦首から、自力での砲撃を行っています」
呼び戻された秀人は、その気配を察した。
ジェイルと、マリエルが……そして、モニターの向こうに、プレシアも。三人の傑出した技術者が、揃っているということは。
「……秀人。お前に、問う」
「……ああ。」
「――――――――――――――――――――。」

……その、説明を受けた秀人は。
「――ふざけるなッ!!」
マリエルを、片手で掴み上げた。
「お前っ……！　自分が、何言ってるのか、わかってんのかッ!?」
「……!!」
されるがままだったマリエルが、頬を紅潮させる。
「――ああそうだよ!!　わかってて言ってるんだよっ!!」
げしっ、と秀人の顔面を蹴り飛ばす。そのまま、今度はマリエルから掴みかかった。
「こうして解決策でも提示してやらなきゃ、またお前は……どうせ、同じことするつもりだったんだろう!!」
あの日……次元の坩堝へ、一人で消えたように。
「……!!」
図星を突かれた秀人は、言葉に詰まり……
「……それでも、俺がやるしかないんだっ!!」
マリエルを突き飛ばし、イモータルハートを整備ポッドから強奪。
「秀人、待て!!　待ってくれ……!!　行かないでくれっ……!!」
マリエルの、切望するような声を振り切り……秀人は、飛び出した。

――対抗するには、お前の力が必要だ。
――お前の『結合』の力を、極限まで増幅し……
――評議会どもと、同等の存在になる必要がある
――そのためのプログラムは、用意できている。
――ただ、一人では、プログラムが実行できない。
――二種の術式の複合発動が、鍵だからだ。

――――――誰か、もう一人……

――――――その、もう一人と共に、『神』と、対等のステージへ。

――――――そして、その誰かは、確実に……

――――――お前と同じ、不死性を発現する。

「ふざけるな……ふざけるなよ……!! そんなこと……!!」

――――――お前が選べ

「誰が、そんな選択をするものかっ!!」

……秀人は、誰よりも知っている。人類の夢……不老不死というものが、現実には、どのようなものなのか。老いず、死なず……時間の流れから取り残され、ただ、近しい誰かが逝くのを、見ている事しかできない。世界が滅んだとしても、ただ一人、取り残されるのだ。永遠の生命は、永遠の孤独に他ならない。

「……俺だけで、いいんだ。そんなのは……!!」

『……マスター。』

秀人は、飛び続け……しかし、ふと、止まった。

――――また、繰り返すのか。

……また、無理やりな方法で、誰も望まない方法で、問題を先送りにして。

皆を悲しませるのか。

しかし。でなければ。誰が、どうやって止める。

「あああああぁあああああああああ……!!」

――――――お前が選べ。

その言葉を聞き……真っ先に彼女の顔が浮かんでしまった。その、愚かな思考に反吐が出る。
『マスター……』
「……モード『カノン』、展開。遠距離から……カーバンクル使用の砲撃で、アインヘリアル主砲を、破壊する」
秀人の選択は……現状維持と言う、最も消極的な応戦だった。
『……マスター。』
諌めるでもなく、言い含めるような呼びかけをするアイ。
『アイにとっては、マスターが、望みのままに行動できることが、一番の願いなの』
「……指示が、聞こえなかったのか」
『それが、マスターの望みであれば……アイは、全てを捧げて、それを叶えるの』
「……」
『けれど……マスター。アイが、一番かなしいのは……マスターが、自分にウソをついて、誤魔化して……自分を、曲げてしまうことなの』
それは、今、まさに秀人が行っていることだった。
『アイは、マスターに……心のままに、動いて欲しい』
心のままに。しかし、それは……『彼女』を、永遠の牢獄へ、閉じ込めてしまう。
『マスター。……マスターは、そもそも、思い違いをしているの』
「……へ？」
思い違いとは、どういう意味だ。そう問い詰めようとした。
『――――秀人さん』
まだ聞き慣れない、人工的な合成音声。
「……なのは」
……痛々しい姿だ。左目は、裂傷の痕……白濁し、視力は喪失している。左腕は、肩から先が欠損し、カモフラージュ用の義手が失われている今、その傷跡が、より強調される。体中の魔力の流れも、歪に

変形しており……かつてほど緻密な魔法の行使は、望めない。
（俺に、関わらなければ……）
『とか考えてるんだったら、怒るからね』
なのはは、秀人の頬をつねり上げた。お見通しである。
「……でも、駄目だ。こればかりは……」
『……』
「そもそも、どういうことなのか、本当に分かっているのか。　永遠なんて……歌や物語で祀り上げられるほど、高尚なものでもなんでもない。……その選択をしたら、もう、引き返せなくなるんだ。テレビゲームみたいに、ロードしてやり直すことも出来ない。なぁ、分かってるのか？　もう、あいつらと同じ時間を生きられなくなるんだぞ。フェイトも、はやても、ユーノも、アルフも、クロノも、桃子も、恭也も、美由希も……あいつらだけが、みんな、先に死んでいくのを、老いない身体で、ずっと、ずっと……あいつらの子供も、孫も、……全てを、見続けなければならないんだぞ。もう嫌だ、もう終わりにしたい……ずっとずっと、そうやって苛まれながら、世界が終わっても、存在し続けて、」
『ああもうゴチャゴチャうるさいなぁ』
――――――。秀人の言葉が、物理的に中断させられる。
視界が塞がるほどの至近距離。柔らかな温もりが、唇を介して伝わってくる。
逃げようにも、片腕で器用に首を固定されていて……というか、そもそも……
――――逃げる気が、不思議と起きなかったのだ。
『――――――

――――――――変わらず抱き続けてきた、その想いを伝える。
『――私、後悔なんて、してないよ。ユーノくんやレイジングハート、フェイトやアルフ、クロノやリンディさんにエイミィ、はやてに、フィアットに、守護騎士のみんな。カレンやオウル隊長。機動六課のみんなや、ヴィヴィオ、四葉。
秀人さんがいたから。秀人さんが繋げてくれたから。私は、みんなに会えた。
――――秀人さんと出会ったことは、私にとって、最高の幸運だったよ』
それでも、と、秀人が言い募る。
怖くないのか、と。
『――――――――ずっと一緒だから、怖くなんてないよ』
……秀人は、すっかり見落としていたのだ。
永遠に続く時間。それは、孤独に違いない。……一人ならば。
だが、もしも……隣に居てくれたのなら。温もりを、分かち合えたのなら。
『――――大丈夫。きっと大丈夫だよ』
こうして、手を取り合って、歩いて行けるのなら。
『私は……秀人さんと一緒なら、ずっと、ずっと……一緒に歩いて行けるから』
抱いては、消えていった願いがあった。望んだ数だけ裏切られ……いつしか、願うことさえ、無くしてしまった……諦めてしまった願いがあった。
――――――暗い夜の中、不屈を訴えた少女がいた。

折れそうな手足で……それでも、胸に抱いた小さな燈火を、絶やさないように懸命に生きていた。自分が失ってしまったものを、守り続けていた。

――笑っていてほしいと、心から、そう思えた。

――この少女の笑顔が、もっと見たくて……

――幸せになって欲しいと、思って。

――気付けば、自分も笑っていた。

――当たり前の日々が……こんなにも愛おしいと、教えてくれた。

――この少女がいたから、俯かずに歩いて来られた。

――これが。

――この感情が。

――『愛』ではなく、何だというのだろうか。

「……なのは。」

秀人は……生まれて初めて……自分のための、我儘を口にする。

「俺も……、いや。

――俺は、なのはが好きだ。俺と、一緒に生きてくれ」

その言葉を、聞き届け……

『……手間の掛かる人ですね。いったい、何年気付かなかったやら』

レイジングハートから、一組の……銀の指輪が、現れた。

秀人と、なのはは……躊躇なく、その指輪を着け――――

――――

『――――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ』

――永遠が、始まる。

Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編　第二十二話『　光り輝く未来へと到達するための道しるべ。人、それを希望という』

――――――

――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ

……と、部下と、隊長のデバイス……近代ベルカ式デバイスまでもが、そう告げた。
「へっ？　……俺の、ベルカ式……？」

◆▪◆　◆　◆

「うわぁあああああああああああん!!　もうやだー！　かえる！　おうちかえるー!!　もう降参して言うこと聞こうよお姉ちゃんー!!」
「バカ言ってないで撃ちなさい！　撃てば的の方が勝手に当たってくるんだから！」
「いやだぁああ……!!　こわいよぉお……!!」
　などと言いながら、バカスカ砲撃を撃ちまくる妹の方。
「あっつ!!　あっつ!!　……ぎゃあああ！　わたしの髪がぁーー!!」
　姉の方は、密かな自慢のストレートヘアが熱でパーマにされていた。
「……見せる相手もいないくせにぃー（ボソッ）」
「……ぁあああああああああん!?　今なんつったこのクソ愚妹!!」
「クロノさんにアタック掛けて撃沈したの知ってるもーん!!」
「オマエはッ……!!　シグナムさんにあっさりあしらわれて、二番手のキープ君と付き合ってるだけだろうが！」
「う、うるさいよ!!　それでも本局勤めの準キャリのエリートだもんねー!!」
「アイツ、空隊の子と付き合ってるよ。ほーら、らぶらぶ2ショットまで！」
「――……えっ。あ。……!!」
「やーいやーい二股掛けられてやんのー!!　知らぬはお前だけじゃバーカ!!」

「うわぁぁぁぁぁーーーん!!　そんなの嘘だぁぁぁぁぁ!!」
「ざまぁぁぁぁぁ

◆・◆　◆　◆

――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ
――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ

ありとあらゆる世界で、響き渡る。

「全世界に普及している官給・民間デバイスに搭載されているＯＳは、ワタシが設計したものだ」

マリエルが、キーを操作しながら語る。

デバイスとは、何も戦闘用だけとは限らない。民間へ、地球で言うところの携帯電話や情報端末の用途で製造されている物も含む。それが……ありとあらゆる次元世界へ、広く普及している。

「ワタシが覚えている限りの数で……２５０億機。

――その全てに、ブラックボックスとして封入した」

……この日のために。この時のために。

利用されるためだけの存在が。

他者の欲望を満たすためだけの命が。

ああ、なんと痛快なことだろう！

「――ワタシの頭脳が、世界を救うのだ！」

――Ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅａｄｙ（さあ、準備は出来た）と、高らかに。

――世界各地から……光が、集まる。
天蓋を流れる、無数の星々。人々の心の光。願いの星。
尾を引き流れる、一つとして同じ色の無い……
――光の帯。(ties)

『『『――何だ、これは『『『
『神』が、身じろぐ。
全知全能を自負し、万物を掌握せしめた『神』が……揺れていた。
『『『――何だというのだ、これは!!!『『『
人の想いが、『神』の思惑を超え、結実する。
『『――――＜ｔｉｅｓ Ｓｙｓｔｅｍ＞ｓｅｔｕｐ『『
『『――我ら、天命を導く者なり『『
――手と手の温もりが、彼らを強くする。
『『――誓約の元、意志を束ね、時を重ね、不滅となりしは我らが想い。『『
――積み重ねた思いが、空を駆け抜けて。
『『――祈りを星に。願いを虹に。我らの誓いを、この空に。『『

――思いを、永遠の炎へと変えて。

『『――そして、』』

――そして。

『『――――――不屈の心は、この胸に!!』』

――繋いだ心を、力へと変える!!

――炎の繭。

――秀人の、蒼炎の一色のみであったそこへ……

――桜色が、交じり合う。

――なのはの左腕、左眼へ……桜色の炎が集まり、形を成していく。

「――……。」

――身体の傷が、消えていく。

――左眼を、斜めに駆ける一文字だけが、残される。

「――秀人さん。」

なのはの肉声が、秀人を呼ぶ。

「――伝わるよ。」

繋ぎ合った手から、互いの情報が、相互に交換される。
「――辛かったね。苦しかったね」
それこそ、過去の記憶までも。
「――でも、もう大丈夫」
互いの手を、しっかりと握り合う。
「――私が、傍にいるから」

――心も。
――身体も。
――希望も。
――未来も。
――全てを一つに。

「――ずっと一緒だよ」
「――ああ。ずっと一緒だ」

なのはの背に、翼が開く。秀人と同じ……炎の翼。

――なのはは、秀人と同じ……不死の存在に昇華した。

もう、取り返しは付かない。もう、戻れない。だと、いうのに。
「――はは……あいつ、笑ってやがる」
「……うん、本当だ」
「お母さん、綺麗……」
なのはは、笑っていた。
この世全ての幸福を得たような……笑顔を浮かべていた。

『『『――下策だ。』』』

『神』が、指摘する。
『『『――――驚異的なエネルギー総量だった。それは、認めよう。しかし』』』
ぎろりと、巨竜の視線が、秀人と、なのはを捉える。
『『『『不死生命への昇華のため、使い切ってしまっては意味が無い』』』』
確かに……巨竜が指摘したように、なのはから感じられるエネルギーは、それでも非常識に強大ではあるのだが……『神』に匹敵するほどの規模ではない。
『『『――――その程度で、我らと同等の『神』となろうなど……!!』』』』
「――――俺は、人間だ。」
なのはが、魔力結晶を削り出した『杖』を手にする。レイジングハートが……なのはと共に、昇華した姿。
――――。
音も無く。魔力スフィア……否、ミッド式の円形魔法陣を、無数に重ねた球体――
――立体魔法陣が、展開する。
空色と、桜色の、二つの光。
「――――次元結合」
――――ズパァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッ……!!
光は……次元断層へ即座に到達する。
『『『『……!!』』』』
断層を修復するのか。……いや、違う。
――世界が、繋がる。
割れて砕けた空の向こうに……別の空が、結合する！

「――――――――俺は、『人間』だ」
秀人が……魔力光を衣のように纏う姿で、再び『神』へ告げる。
「――――神の力を持っていても……奇跡を起こすことができるのだとしても。
俺は――俺たちは、『人間』なんだ」
『『『――――――――……』』』
「お前たちは、……きっと、何も進歩しない、何も変われない『人間』を、諦めてしまったんだ。だから……高みから、管理しようと試みた」
数百年……戦乱を、そして、今現在も続く闘争を、見続けてきて……
彼らは、道を誤ってしまった。
『『『――――それが、どうした。もう遅い。既に、計画は最終段階だ。貴様らが、全ての次元世界を、今から駆けずり回ろうとも……』』』
「ああ、その通りだ」
秀人と、なのはが、如何に『神』と等しくなろうとも……全ての世界・すべての人々を救うことは、出来ない。
――――二人だけでは。
「全てをこの手で救うことが、出来ないのだとしても……
――――後押ししてやることは、できる」
『『『――――なにを』』』
「――――『福音』在れ。」
なのはが、杖より魔法を解き放つ。
光の矢。
破壊力も、それほどのエネルギーも感じさせないその魔法は、秀人が繋げた、全ての世界へ……降り注ぐ。

――使命を果たす者達よ。

ある世界、人々の脳裏に、『声』が届いた。
戦う者もいた。抗う者もいた。力尽きた者もいた。

――今一度。

――その身に、力を。

――立ち上がるための、力を。

その全てに、光と共に、『声』が呼び掛ける。
立ち上がる力。
もう一度、歩き出すための力。
それは。

――さあ。

――その手に魔法(みらい)を。

◆・◆◆◆

管理外世界。
魔法の知識はおろか、大きな戦乱さえ過去の記録にしか無かった世界。
……機械獣への対抗策の無かった世界で。
――――ドゴォオオオオンッ!!!!
機械獣の一体が……突如として、爆散した。
「――――これ以上、市民を傷つけさせんぞ!!」
手にしているのは……何の変哲も無い、ただの警棒。
「本官は、市民を守る警察官なのだから!!」

管理世界。農業が主な産業の、喉かな世界。
「これ以上、ウチの畑踏み荒らしおったら肥やしに埋めんぞぉ!!」
「百姓なめんなぁ!!」
農民たちが、クワを手に吠える。
牛たちの突進で、冗談のように機械獣たちが粉砕されていく。

「このっ、このっ!!」
「ウチの子には指一本触れさせないわよ!!」
地域行事のため集まっていた主婦たちが、フライパンを投擲し、機械獣を打ち落としていく。
「オラ男衆！　さっさと前に出んかい!!」
「サボっとったら小遣いカットやぞ！」
「「は、はいーっ!!」」
それでもやはり、旦那は女房の尻に敷かれる運命にあった。

「――――剛ッッ!!」
――――バグシャアアアアッ!!!!
「――――ふゥー……」

……身の丈三メートルはあろうかという、非常識な大男。浅黒い肌に、はち切れた道着。並みの格闘家の胴体ほどもある腕を、合体機械獣たちから引っこ抜く。
「……いやぁー、身体ばかり若返ろうと、すっかり鈍っておるわい。齢は取りたくないものだのう」
……しかし、その声は不釣り合いに、好々爺然としていた。
「――――秀人や、なのはちゃんが頑張っておるのだ。年長者として、弱音を吐いてはおれんからのう」
「お、お爺ちゃん超かっこいい……!!」
……アクセサリーをすべて外した奈々が、キラキラした目で大家を見ていた。
「あの指輪、名前も彫ってあるんだ。だから……今度こそ、幸せになってね。秀人」

――――斬ッ！
「これで、……いくつだ!?」
「数えてないからわかんないってば!!」
恭也と美由希が、刀を両手に機械獣たちを切り捨てていく。
――――ドガァンッ!!
「……！　しまった!!」
背後から、爆発音。市民たちを匿っていた店内へ、機械獣が突入したのだ。
「……!!　来ないで!!」
桃子が、両手を広げて立ち塞がる。
――グルァァァァァァァァッ!!!
砲声に、びくっと目を瞑る。
（恭也、美由希……あなた!!）
――――。
……しかし、覚悟した痛みは、やってこない。
恐る恐る目を開けた桃子が、見たものは。

「――――待たせて、済まなかった」
機械獣を、一刀で刺し貫く、その雄姿。
「あ、あ……!!」
「母さ、……は……？　え……？」「……、と、え、えええええええええ!??」
「――――あ……あなた……？」
数年ぶりに言葉を交わす、一家の家長……高町士郎、その人だった。
「――うむ。恭也も美由希も、腕を上げたな。」
交わしたい言葉は山ほども。しかし……今は。
「さて……ガラクタを掃除する、簡単な仕事だ。始めるぞ」
「はい、父さん!!」
恭也が、美由希が……士郎と共に、戦う！

『『『うぉりゃああああああ

！」
カントクは、ありったけの重機建機たちへ指示を飛ばす。
「……へへ。ヒデのヤロウ、無事でいやがったぜ!!」
「カントク、泣くのはまだ後ッスよー！」
「おうよっ！　行くぜ野郎どもぉーーーー!!」
『『『　壊すも建てるも俺たち次第!!　』』』
……なんとも物騒な社訓を斉唱する男たちであった。

若者が、老人が、男が、女が、子供が。
機械獣へ、立ち向かっていく。
ただの棒っきれや、街角のガラクタのようなものを手に。
己の未来を、掴み取るために。
ならば……民間人で、これほどならば。
『『『　――――ありえんっ!!　――――『人間』の可能性を、極限まで引き出しただとぉおおおッッ!?　』』』
恐慌し……再び、アインヘリアルの発射体制へ入る!!
「させるかぁあああああああああっ!!」
既に満身創痍のはやてが、魔剣を振りかざし……、

「――――絶招・『天羽々斬（アメノハバキリ）』!!」

魔力の大剣が、巨竜の動力部へ、深々と突き刺さった!!
――――バゴォオオオオオオオオオオオオオオンッ!!!
『『『　――――ぬぉおおおおおおおおおっ!!!　』』』
誘爆し、発射がキャンセルされる。
「……!?　この、魔力は……!!?」

あまりに、懐かしい魔力。
「――美香……？」
茫然とするはやて。その前に、逞しく成長した美香が、至天の三騎士を引き連れてやってくる。
「――――ちゃんと全部、思い出したよ。……はやてさん」
その懐から、黒猫が姿を現す。
「……久しいな、主よ」
「アーフィエル……」
護衛として、家族として、友人として……あれこれ理由を付けてはいたが、結局のところ……未練だらけで、捨てることが出来なかった。
「行こう、はやてさん。皆を護ろう。
――――私も、一緒に戦うから!!」
なんと、頼もしく成長したことか。
「……ああ！『神』なんぞに、負けてたまるか!!」
そして、アーフィエル、リインフォースと共に、ユニゾン。
『至天の王』の姿となる。

皆が、全力全開だった。

クイントが、スバルが、ギンガが、白兵戦で機械獣を撃破し。
ティーダとティアナが、続々と撃ち落とす。
エリオが、ゼストが、フリードの鎧装と、ガリューの甲冑を纏う。
ヴォルテールと白天王が並び立ち、周辺の敵を一掃していく！
「おらおらおらぁー!!　天下御免の機動六課のお通りじゃー!!」
「道を開けろーい!!」
『『『イエーイ!!』』』
コリンら機動六課の戦力らも、戦線を支え続ける。
人と人とが、助け合い、力を合せ……懸命に力を尽くし。

――――『神』の目論見を、崩していく。

『『『『何故分からぬ!?　人の世には、絶対的な管理が必要なのだ!!』』』』

……もはや、悲鳴となった叫びを上げる。

『『『人は、己の欲望で、どれほどの災厄を招いてきたと思っている!!』』』

数百年の時間。その、途方もない時間の陰で……この『神』となった者達は、いったいどれほどの惨劇を目にしてきたのか。

『『『我らは、それを見続けてきたのだ!!　その上での結論なのだ!!』』』

威力が低下したものの、遠慮なく発射されるアインヘリアル。

「――――諦めるなっ!!」

秀人が、それを真っ向から受け止める!!

「――――諦めるなよ!!　お前らだって、人のために……！　平和のために、管理局を立ち上げたんだろっ!!」

巨竜の顎を、受け止める！

『『『ぐうううううっ!!　貴様とて、人間の悪性に裏切られたクチだろうがぁあああああああっ!!』』』

「――――確かに、人間には、汚い部分がある！

人間が、この世に凄惨な地獄を現すこともある!!」

『『『知った風な口をぉおおおおおおおお!!』』』

「知ってんだよぉおおおおおおおおおおおお!!」

鋭き牙を、握り潰す!!

「――――でも、それを正してきたのも、同じ『人間』だろうっ!!」

『『『虚無の中で見続けてきただろうにっ!!』』』

「ああ、見てたよ……!!　何度も、何度も……！」

あの虚無の中、秀人も、それだけのものを見続けてきたのだ。しかし……至った結論は、『神』とは違うものだった。

「――――だけど、俺は!!」

『『『　故に、我は!!　』』』』

――ゴゴゴゴゴッ!!

巨竜の腕が、拳の形を作る！

「――――――人間を、信じ続ける!!」

『――――――人間を、決して信じない!!』

――――――ズガァァァァァァァァァァァンッ!!!!

秀人と、『神』の拳が、激突する!!

「おぉぉぉ

魔力の大巨人が、顕現する！

『『『『馬鹿なっ……それだけのエネルギーを、支配するなど……!!』』』』

『……これが、お前が諦めた……人間の力だ!!』

秀人となのはは、それを集め束ね、結び合わせたに過ぎない。

――ズゴガァァァァァァァンッ!!!

「うぉおおおおおおおっ!!」

『『『『やらせるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!』』』』

巨人と巨竜の、時空をも飛び越えた一騎打ちが始まった!!

――ヒドラとヘラクレス。

――アジ・ダハーカとファリードゥーン。

――八岐大蛇と素戔嗚（スサノオ）。

多頭竜と人との戦いとは、神代からの宿命であった。そして……神の化身・神の遣いたる彼らを乗り越えてきた。人が人たる証を立てるため、いつだって、人間は立ち上がってきたのだ。

「どりゃあああああああああっ!!!」

『『『『ぐぉおおおおおおお

「弱さを抱えて、その弱さを乗り越えようとする人間が、大好きだから!!」

しかし……人間の善性に救われたのも、また事実。

「そんな人間の中で……生きていたいと、思ったんだ!!!」

――最早、言葉は尽くした。

巨人の拳が、膨大なエネルギーに光り輝く。

巨竜の顎に、眩いばかりの閃光が宿る。

――!!!!

……『神』の領域の決着は、人間には認識できなかった。

しかし、確かな結果は……

――拳が、巨竜を撃ち貫いたということだった。

――ビキッ……

巨竜の体躯に、亀裂が走る。その亀裂は、加速度的に増していき……

「――! いかん、目をつむれ!!」

莫大な閃光と共に、弾けた!!

◆▪◆　◆　◆　何処でもない何処か　◆　◆　◆　◆

◆▪◆　◆　◆　何時でも無い何時か　◆　◆　◆　◆

……また、ここにいた。

今なら、ここがどういった場所なのかが……説明は出来ないが、そ

れとなく、分かった。
「……」
手には、温もりがある。目を開けると決めた途端、目の前が、開ける。
「……」
いつか、この場所で漂っていた時とは違う。
暗黒ではなく……温かな、光で満ちていた。

目の前には、三連に連なったモノリス。……最高評議会。
「――なぁ」
声が、出せた。
「――たったの５００年じゃないか。　次の５００年……１０００年だって、１００００年だって、俺たちは、行く末を見守ることが出来るんだ」
目の前のモノリスから、かつての敵意や、絶望は伝わってこない。
「――もう一度……信じてみようぜ」
何度、裏切られても。……何度でも、信じればいい。
ただ、信じて……信じることを、信じればいい。

『『『――人間の、可能性を、か』』』

……そこには、微かに呆れたような、笑うような気配さえあった。
「――ああ。……人間、まだまだ捨てたものじゃない」

『『『――ふ……違いない。』』』

今度は……確かに、笑った。

『『『　ならば……我らは、ここから始めよう』』』

秀人たちに、最後は納得したようだった。

『『『『 我らはここに在り続け、人間の世界の行く末を、見守り続けよう 』』』』

彼らは、観測者として……裁定者として、この世界に在り続ける。

『『『『 いつか、人間が絶える、その日まで 』』』』

光が、増していき……

◆・◆◆◆　何処でもない何処か　◆◆◆◆

◆・◆◆◆　何時でも無い何時か　◆◆◆◆

◆・◆◆◆　改め、多元宇宙内・超々高次元領域　◆

◆◆◆

◆・◆◆◆　時空検閲官の部屋　◆◆◆◆

目の前に、誰かがいた。

どれほどの距離なのかは分からない。距離と言う概念があるのかどうかも分からない。

しかし、確かに前に居た。

男にも女にも、大人にも子供にも見える。

――『無個性の個』とも言うべき相手。

何も語らず。しかし、互いを認識できていた。

「……『神様』、か」

きっと、この遥かな高次より、全てを見届けたのだ。
その上で……秀人を、この場に連れてきた。
何かを、伝えるために。
「――――なぁ。俺、あんたに、ずっと、言いたかったことがあるんだ」
そして、秀人もまた、伝えるために。
「――――。」
恨み、つらみ……いつか、ぶつけてやろうと思っていた。しかし……
「――――ありがとうな」
しかし……己の奥底より引き出されたのは。
「――――俺、生きてて良かった」
嘘偽りの無い、純粋な感謝だった。
「――――俺……産まれてきて、良かったよ」
そして、『神様』は。

――――――――――――お前の

――――――――――――罪を

――――――――――――赦そう

『神様』が、微笑んだように感じた。

◆・◆　◆　◆

――――ミッドチルダ地上。

町並みはボロボロで、見る影もない。
だが、人々は満ち足りた顔だった。
己の可能性を……己の希望を、見ることが出来たのだ。その上で、困難に立ち向かったことが、きっと、彼らにとって、何よりの勲章なのだ。
「――――神様に、会っちゃったよ」
「――――今までの人生、一番ビックリした」
なのはも、対面していたようだ。というか。
「……なぁ、たぶん」
「……うん。みんな、忘れているだけで」
……皆、あの『神様』と対面したのだ。人間の認識力を超えた存在であるがゆえに、記憶には残らなかったのだろうが……それでも。
「終わったのかな」
「……。これで……やっと、行けるよ」
「……え？」
「……父さんと、母さんの……墓参り」
「……。」
なのはが、秀人の手を握り、何かを言おうとして。
「――あのっ、すみませんお邪魔するようで申し訳ないんですけど！」
群衆の中より、なぜか美香がやってくる。
「ああ、お前、あの時のガキンチョか」
「はやての弟子一号だっけ」
二人とも、憶えていたようだ。
「えぇーっと……何と言ったらいいのか」
……何やら、混乱している。目がきょろきょろ、ぐるぐる。

――がしっ。
「落ち着きなさい、美香」
なのはとよく似た少女……シュテルが、美香の頭を捕まえる。
「いま、お連れします」
そして。
続いてやってきた、ディアーチェとレヴィは。
――一人の女性の手を、引いていた。
その女性は、疲労が刻まれた顔に、病的に痩せこけた身体をしていた。どことなく、プレシアを思わせる、その女性は。
「――――。そんな、……だって、……そんな。」
……秀人が、幻でも見ているような、動揺した顔を見せている。
秀人と記憶を共有したなのはも、同じ表情だ。
――彼女が、ここに居る筈が無い。
「――――――

◆・◆　◆　◆

――わたしは息子を捨てた。

――あれこれと、釈明しても、言い訳にしかならない。

――最後まで、わたしを呼んでいたあの子を、施設へ……悪名高く、しかし、必ず引き取ってくれるあの施設へ、置き去りにしてきた。

――だって、耐えられなかった。あの子の身体に起きた、解明不能の症状。

――あの子の身体は、もう元には戻らない。

――夫は看病のため、仕事に穴をあけることが多くなり……結局、そのまま仕事を追われた。

――やっと終わったと、思っていたのに。

――もう耐えられない。

――もう背負えない。

――だから、捨ててしまった。

――この町を出よう。逃げよう。

――あの子と、偶然にでも、顔を合わせることが無いように。

――１０年が過ぎた。

――夫は無理が祟り、皮肉にも、あの子と同じように、施設で寝たきりの生活となっていた。

――わたしは、施設の費用を工面する仕事の忙しさを言い訳に、あの子のことを、考えまいとしていた。

――夫も、あの子については、一言も口にはしなかった。

――ある日、探偵を名乗る男が、私たちを訪ねてきた。時代錯誤の純白のスーツに、同色の帽子を被った、鳴海荘吉という男だった。

――依頼人の名は口にはしなかったが、察してしまった。

――わたしも夫も、既に両親は亡く、親戚とも疎遠な間柄だ。

――で、あるのならば。
――『――殺してください』
――『――依頼人へ……吾妻秀明と、吾妻桐子は、死んだと、伝えてください』
――わたしたちが、今更、あの子のなんだというのだ。
――身勝手に捨てて。身勝手に忘れて。……今度は、身勝手に戻るのか？
――できない。
――ならば、せめて……あの子の溜飲が、下がるように。
――天罰が下り、わたしと夫は、救いようも無く、惨たらしく死んだと。
――首を吊ったでもいい。糞尿を垂れ流しながら悶死したでもいい。
――とびきり惨めったらしく、くたばったのだと伝えてください。
――倍額の報酬を出すからと、頼み込んだ。
――探偵は、その条件を呑んで……二度と、姿を現さなかった。
――また、嘘をついてしまった。
――あの子の溜飲が下がるように、なんて、真っ赤なウソ。
――本当は、会うのが怖かった。
――捨てた恨みを、言葉にされるのが怖かった。

――１０年が過ぎた。

――夫は寝たきりから、在宅介護へと快方へ向かっていた。
――後遺症が残り、言葉と半身は不自由があるものの、あの日々がウソのような、穏やかで安定した生活だった。
――あの子は今、何をしているのだろう。
――……。
――わかっている。
――わたしが、どれだけ都合のいい自分勝手をしているのか、

など。
――余裕が出来て、初めて思い出すなんて……やはり、自分には親を名乗る資格など、ありはしない。
――……。
――……あの町へ、行くだけなら。
――わたしは、記憶を頼りに、あの町へ向かった。
――かつてのわたしたちの家は、既に取り壊され、駐車場になっていた。
――……帰ろう。
――もう、あの子と会うことは無い。
――もう、何もかもが遅すぎた。
――あの子は、いま、２５歳にもなるだろうか。
――もう、子供ではないのだ。
――でも、だから、どうか。
――身勝手な願いを、捧げさせてください。
――幸せになってください。
――こんな身勝手な、最低な、人間の屑のわたしたちより、ずっとずっと、幸せになってください。
――それだけを、祈らせてください。

◆・◆　◆　◆

「……」
銀の栞が、光を失い……崩れ落ちた。
――これが……真相。
「……その時に、私を狙ってきた連中の結界に、巻き込まれて……私たちが、保護したんです」
「――――――

――――――

秀人にとって、それは奇跡だった。
幾度も、奇跡を起こしてきた。
誰かのために、誰かのために……
常に、誰かの幸せのために、戦ってきた。
彼は、数えきれないほどの多くを、救ってきた。
ならば、最後くらい……彼のための奇跡があっても、いいだろう。
彼が救われることに、誰も文句などありはしないだろう。

――――彼(主人公)がハッピーエンドを迎えるための、最高のご都合主義があっても、いいだろう。

秀人は、ようやく……自分の家に、帰れたのだ。

# ＳｔｒｉｋｅｒＳ編　第二十三話『それぞれの明日へ。気ままに、自由に、雲のように』

「くそっ、あの野郎……!!　良かったじゃねえか……!!」
　強がりながらも、男泣きに泣くジェイル。
「うぇえええええん……!!　フられたけど良かったぁ～……!!」
「姉さん、鼻水出てます……ぐすっ」
　こちらに合流したフェイト、そしてレヴィが、手を取り合って喜ぶ。
「歩けるか？」
「……久々の外出だから、ちょっと辛いわね」
「……」
「そこは、素直に『掴まれ』と言う場面なのだ。これだからミッドの犬は」
「ベルカの犬は黙ってろ！」
「どっちも犬じゃなくて狼なんだけどね……君たち、自分で自分の事忘れてない？」
　……と、着陸したアースラの方面から、見知った人影が歩いてきていた。
「あ、マリー！　アルフ！　……と、え、あれっ……!?」
「ユーノさんと、あ、ザフィーラですね。って……え!?」
「――――おかーさんっ!?」
　……監獄に収監中であるはずの、プレシア・テスタロッサが、普通に歩いていた。
「えっ、えっ、……どうして!?」
「――――リンディが」
　と、その言葉を付け足すのはクロノだ。
「プレシアの懲役年数は、最高評議会にとって、障害となり得る存在だったプレシアを隔離しておくのに必要だったに過ぎない。適正な

年数は、それでも５０年を超えるが……技術供与、司法取引……その他の功績で、十分に相殺可能だったんだ」
――――つまり。
――――つまり。
――――と、いうことは。
「プレシア・テスタロッサ。本日現時刻を以て、貴女を釈放する」
プレシアは、許されたのだ。
「……!!!! おかーさんっ!!」
たまらず、フェイトが一番に掛け出し……飛びついた。
「あらあら……もう、フェイトったら……こんなに大きくなって……!」
もう、背丈で言えば自分よりも大きくなった我が子を、すっかり衰えた腕で抱きしめる。
「……、」
混ざりたそうにしているレヴィを、プレシアが手で呼び……
「……! 母さん、会いたかったです!」
親子でもみくちゃになるのだった。

そして、こちらも再会を果たした兄妹は。
「――――キミは、相変わらず無茶をするねぇ……『兄さん』?」
……かつて、幼少の頃にだけ使っていた敬称で、ジェイルをからかうマリエル。
「おう、相変わらずだなドチビ。……ちゃんと、メシ食ってるか」
「それを言うのは、ワタシが相手ではないだろう?
生きているのは、お互い知っていたわけだしな」
「……おう」
そして。
向き合う、かつての夫婦。
「……」

「……」
向き合って、向き合って……
「「……」」
……このまま、十年でもそうしていそうだったが、口火を切ったのは、プレシアだった。
「……たしか、夜中に、研究室の鏡に向かって、『変身』とか言いながら珍妙なポーズを取っているところを、たまたま見かけたのが切っ掛けだったわね」
「ぐげぁっ……!!」
……致命傷である。
「……ええっと、何だったかしら。『俺は存在しない筈の１４番目のライダー』とか」
「ぎゃあああああっ!!」
……止めまでシッカリと。
「自分で作った変なカードを片手に、一日中ニタニタにやにや。……不気味だったわよ」
「やめろっ……やめてくれぇぇぇぇぇぇっ!!」
――死体蹴りはサービスだ。
「えっそれボクもやってるけど……」
「姉さん、静かに」
……嫌な親子の証明だった。
「そうして、周囲から浮きに浮きまくったあなたが哀れで、仕方なく食事を一緒に摂ってあげるようになって……変な趣味嗜好を隠すように教育して……」
――下の名前で呼ぶのに１年」
「ぐっ」
なんのこと？　と、訝しむ一同だったが……
「……手をつなぐのにまた１年」
「うぐっ」
……それが、二人の進展の記録だと分かるや否や、猛烈に食いついた。

「キスをするのに、更に1年半……」
はぁ、と、呆れのため息をつく。
「結局、外堀も内堀も世間体も全部埋められて、一本道になって背後から岩が転がってきて、前に進むしかなくなって、ようやくゴニョゴニョと『愛してる』と言ってくれたわねぇ……」
「あ、あれはだなぁ……その……女に惚れたのが、初めて、だったわけで、だな」
「へー、へー、へー！」
「……母さん、そこもっと詳しく、もっと詳しく」
「うんうん、そこ、わたしも気になる」
「そろそろ、女を待たせる悪癖は、改めるべきではなくて？　……あなた」
「わ、悪かった！　悪かったから！
このアホ娘の前で、もうこれ以上、オレの威厳を貶めないでくれ！」
「だれがアホだ！　このクソ親父！」
「姉さん、口が悪いですよ。人のこと言えません」
「変なところだけ、お父さんに似ちゃったんだねぇ」

――で、なぜ娘の声が、三つあるのか。
「……」「……」「……」「……」
さぁ、皆でくるっと背後を振り向いてみようか。
はい、くるっと。

アリシアが居た。

「「「「「「オアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

「ど、どういうことだ……!?」
「んーーーーっと。」
比較的冷静に驚くクロノに、アリシア（？）が、中空を見上げるような仕草のあと、答える。
「世界を見守るには、まず『眼』が必要だから……らしいよ？」
高次元からだけではなく、現世からも、人間を見守ると決めたらしかった。
しかし、なぜ、アリシアなのか。
それに、やってきたなのはが、付け加える。
「『ジェイルへの褒美』だってさ」
ジェイルは、アインヘリアルを……ひいては、神の受肉を助ける役割を果たした。それに対する報酬のようだ。
「――意外と、信賞必罰のしっかりした神様だね？」
神様はお前だろう……と、誰もが心の中で突っ込んだ。
「お、オレは信じないぞ！」
「……パパ」
「オカルトなんて信じねぇ！　この世は科学で回ってんだ！　だ、だから……」
変な風に凝り固まってしまったジェイル。
その背中を……他の誰でも無い、アリシアが、ぽんぽん、と、叩く。
「あ、」
くるっと振り向いたジェイルは。
「……ア、アリシアぁぁぁぁ～～～～～～……!!」
滝のような涙を、流していた。
そして……
「――――――ただいまっ!!」
とびっきりの笑顔で、無邪気に微笑んだ。

――――――――――――――――――――奇跡はまだまだ、終わらない。

「え、ええええっ、ええええええっ!?」

「ん、どしたのー？　く、……じゃなくて、よつばー」

　再会したディエチにしがみつかれながら、四葉が驚きに声を上げる。

「ドクターー！　ドクターー!!」

　そして、いつものクセでジェイルを呼びつける。

「な、何だよ、四葉……オレは今、ちょっと」

「ラボ内に保管されていた、戦闘機人の素体が、次々に目を覚ましていると!!」

「な……なにぃっ!?」

「アインヘリアルに蒐集していた魔導師たちも!!」

「時間が経てば目が覚めるようなモンじゃねぇぞ!?」

「な……ナンバー5、ナンバー7、ナンバー9の覚醒も確認!!」

「ありゃ封印個体だろうがぁあああああああああっ!!　自我が発生するわきゃねぇえええええええええ!!」

「で、ですが実際にーーーーーー!!?」

「あ、それ私だ」

　犯人は、直ぐ近くにいた。

「あの『魔法』は、潜在的な可能性を活性化させて、対象の存在のもつ意志力によってコインの裏表を判定して世界へ結果をフィードバックする確率操作魔法なんだけど、」

「ちょっと待て！　いろいろ何かおかしくねぇか!?」

「その結果だから、『目が覚める』可能性と『目が覚めない』という両方の可能性がある存在が、『目が覚める』で運命を決定したんだよ」

「あーもう秀人といい、なんなんだよお前らはよぉおおおおおおおお!!?」

　ジェイルの突っ込みは無視された。

「「――――ジェイル・スカリエッティ」」
……と、ジェイルの肩を……クロノと、ユーノが、ぽん……と、叩いた。
「「――――いつか慣れる。」」
「嫌じゃああああああああああああああっ!!」
……非常識存在被害者の会、結成の瞬間である。
「――――よっし!」
と、威勢よくも立ち上がったのは、騎士や、数多の臣下を従える、我らが機動六課部隊長・八神はやて准将だ。
「――――怪我人は救出!
――――不明者は身元の照合!
――――まだまだ休める日は来ないと思え!!
――――者ども! 掛かれぇ!!」
「「「「「「りょうかーい!!」」」」」」
拳を振り上げるはやてに、あちこちズダボロでボロッボロの人々は、それでもどこか、嬉しそうに賛同するのだった。

なのはは、空を見上げる。
その胸中に、去来するものは……。

◆・◆◆◆

――――甘いなぁ、相変わらず。
――――『生きているのか』『生きていないのか』。
――――その確率を活性化させるってことは、
――――シュレーディンガーの箱を開けるに等しい行為なんだよ

？

――いやいや、これはやっぱり、パンドラの箱か、地獄の釜ってやつかなぁ？

――わたしは……わたしたちは、コインの表を掴み取ったよ。

「……また会えるね、なのは」

その背に従えるのは、生きながらに地獄へ落ち……そして、生きながら地獄を這い上ってきた、魑魅魍魎。

この世を侵す病原菌の保菌者（キャリア）。

最悪の病魔。

正の奇跡の反存在。

負の奇跡の体現者。

――その名は。

「――凶鳥部隊、再始動（リブート）」

暗闇が、動き出す。

闇の翼を、翻す。

◆・◆　◆　◆

あの、時空を揺るがす大事件の後、管理局は、その処理に忙殺されていた。一時的とはいえ、すべての世界が一つになり、魔法を目にしたのだ。もはや、記憶改竄などでカモフラージュすることすら不可能な規模だった。

――じゃあ、リスクも含めて、いっそ共有しちまったらどうだ？

……という、時空管理局・暫定トップメンバーの一員による鶴の一声により、管理外世界と呼ばれていた世界とは、技術交流の準備が、内密に進められていた。互いの次元世界の『接点』として、新たに観測

された無人世界を拠点として。
そうして、世界は変革を始めていた。

「……」
そんな中、はやては……着慣れない制服をだらしなく着崩しながら、書類に判を押し、目を通し……を、ひたすら繰り返していた。
「――部隊長、こちらもお願いします」
どさっ……と、ウンザリするような量の書類が、また追加される。
「……」
はやては、それでもひたすら、目を通し、判を押し……
「――」
フィアットが、無言でナイフをその体に突き立てる。すると。
――ぼよよんっ。
……はやての身体が、まるで風船のように弾けた。
――ういーん、がしゃん。ういーん、がしゃん。
……内蔵されていた、全自動判子押しマシーンが、間抜けな駆動音を立てていた。
ダミーである。
――がしゃこん。
フィアットは、そのマシーンを蹴倒し、踏み躙り……憤怒の形相を浮かべた。
――部隊長――――!! どこ行きやがったゴラァアアアアアアアア!!
……フィアットの咆哮がプレハブ隊舎に響き渡るのも、いつもの光景だった。
「……良いのですか？　わが主」
「あー、いーのいーの。どーせ、名目上必要な押印だけだから」
その屋上、お気に入りのスペース、給水タンクの上に腰掛けていた。
「……」
海辺ということもあり、やや塩気のある風が吹き、はやての長い髪を揺らした。

振り返れば、そこには、戦禍の爪痕の残るミッドチルダの街並みがあった。
「なぁ、リーゼ」
「はい、我が主」
と、はやてが一枚の書類を取り出し、リーゼに手渡した。
「――――これは、」
内容に目を通したリーゼが、言葉に詰まった。
「――――統括理事への任命状」
推薦人は……
「ミゼット・クローベル本局統幕議長、ですか……」
ラルゴ・キール武装隊栄誉元帥、レオーネ・フィルス法務顧問相談役までが、連名と言う形で、任命状に名を連ねている。
「これに判を押して送り返せば……まぁ、時空管理局のトップになれる、ってわけだ」
あの事件後。デイリンを筆頭としていたタカ派は纏まりを失い、続けざまに汚職などの容疑で検挙され、現在、管理局上層部は極度の人手不足と処理能力不足に陥っている。
そこへ、あの騒乱時に局員を纏め上げ、事件を解決に導く一助となったはやてを迎え入れようということらしかった。階級、実力ともに十分。管理局と言う組織を纏め上げるシンボルとしての役割も期待できる。
「統括理事にもなれば、その意見に異を唱えられるのは、あの老人会だけ。つまり、ほぼ全てを、私の独断で進めてもいい、っていうご老公の印籠だな」
そして、恐らく……あの三人にとって、自身らの引退後、後継者として据えるとも考えられる。
まさに、破格の待遇だ。
八神はやての名は、次元世界の歴史に刻まれ、燦然と輝き続けるだろう。
「――――」
はやては、その栄光への切符を……

――――――びりっ。
真っ二つに、破り捨てた。
びり、びりと、二度、三度と破り捨て……
……書類の体を成さぬ紙吹雪は、海風にさらわれていった。
「――――――。」
よいのですか、という問いは、出なかった。はやてが行動する時は、既に、心を決めた時。どんなに言葉を重ねようと、はやてが、その権利を行使することはきっと無いだろう。
「――――――だって、メンドいじゃん？」
……そんな、嘘だらけの言葉を口にしながら。

◆▪◆　◆　◆

湾岸・更正施設。
「やっほー、セリカ」
「来てやったわよ」
スバル、ティアナは、セリカを見舞いに来ていた。簡素な服のセリカは、嬉しそうに二人を出迎える。
「！　お二人とも、待っていましたわ！」
セリカは、身に覚えのないこととはいえ、情報を漏洩させたスパイとしての容疑から、ここへ収監されていた。
――――と、いうのは、表向きの話。
ナンバーズの一人、戦闘機人ドゥーエのＩＳ・ライアーマスク（人格変更機能）の、完全停止のためだ。
やはり、稼働年数の長さや、機体の根幹に関わる機能を操作変更するとなると、それなりの時間や手間が掛かる。たとえそれが、開発者のジェイル・スカリエッティだとしても。
今現在は、そのめどが立つまで、安静にするため、この施設に収容されている。
「六課の皆さんの他にも、シエラさんも面会に来て下さったんですのよ。……それと、」
やや、居心地が悪そうに。

「……クラウン家の、おと、……、その、ご夫妻が」
「……」
　捜査により、クラウン家は、ジェイルらナンバーズと内通していたことが発覚し、犯罪幇助の容疑で家宅捜索がされていた。当然、その当主でもあった、名目上のセリカの『両親』もまた、疑惑が付き纏うことになっていた。
「お二人が、その……正式に、養子縁組をしないか、と」
　クラウン家がナンバーズに内通していた理由は、それこそ最初は、裏社会とのコネクションを持つため……だったのだそうだ。しかし、長年、何も知らず、ただ純粋に、自分らを両親と慕うセリカと暮らすことで、知らず知らずのうちに、情が移っていたのだとも。そして、裏社会との関係を絶ち、セリカを保護しようとした時には、既に、切っても切れなくなってしまっていた。
「……資産も利権も、何もかも売り払って、静かに親子で暮らさないか、と」
　静かに……と、いうことは。
「セリカ、……ミッドチルダから、離れるの？」
「……彼らは、そのつもりのようですの」
「――アンタは」
　ティアナが、たまらず聞く。
「アンタは、どうするつもりなの……？」
「……養子縁組の話は、受けることにしました」
「……そっか」
　気丈に振る舞うも、やや消沈する二人。
「で・す・が！」
　しかし、セリカは打って変わって、からっと笑う。
「静かに暮らすのは、ずーっとずーっと、先の話ですわ！」
　へ？　と、肩すかしを喰らう二人に……
「養子縁組は受けますが、まだまだ、機動六課でのお仕事は続けるつもりですの！」
「え、えええっ……!?」

……実際、縁組など、今更書類上での話に過ぎない。セリカは、『両親』に、いつものように我儘を言っただけなのだ。
「だから、待っていてくださいな。機動六課のセリカ・クラウンとして……また、皆さんとお会いできる、その日まで」
今日、スバルとティアナが来たのは、そのこともあった。
――セリカを治療する目途が立ったのだ。
比較的安全に、現在の記憶と人格を保持したまま、特定の機能のみを取り除くという術式が。
しかし……一気に全て、とはいかない。一部ずつ、慎重に行う。
その最中は、記憶の破損を防ぐために、機体をスリープモードへと移行するため、セリカと言葉を交わせるのは、治療前では今日が最後。
「――また、皆さんで遊びに行きましょうね!!」
……不安もあるだろう。しかし、それを表に出さず、努めて明るく振る舞うセリカに、二人は、いつも通りの態度で、送り出すことにした。
「――うんっ！　待ってるよ、セリカ！」
「――さっさとこんなブタ箱、出てきなさいよね」
信じて待つ。
それが、この三人の信頼関係なのだから。
◆▪◆　◆　◆
エリオ、キャロの二人は、入口でスバルと別れ、別棟に足を運んでいた。
「あ。……エリオとキャロきてくれたんだ」
相変わらず病的に華奢なルーテシアだったが、ここでの生活で、だいぶ血色の良い肌色になってきていた。
――ちきききっ。
……と、機械で出来た蝶のような……召喚獣たちの意識の端末が、ルーテシアの肩に留まった。
「それ、いいの？」
「うん。リミッターがガシガシ機能してるから。ピッキングすれば出られるけど」

「おい、冗談でもやめろって！」
……ギリギリアウトな発言をするルーテシアに、エリオは戦々恐々としていた。
「やるならまずは監視員をノックアウトしなきゃだめだよ。
カメラにもダミーの映像を映さなきゃ」
「お前も悪ノリすんな！」
……案外、気質は似ていたのかもしれない。
「……からだ、どう？」
「んー……今日はだいぶましなほう」
龍脈とのダイレクト接続、そして、限界を超えての魔法の行使。
命は拾ったとはいえ、全身の魔力回路は機能を停止し、リンカーコアは不整脈を続けている。
掛けられたリミッターというのも、脱獄防止というよりは、魔力の暴発から身を守るためのものだった。
「わたしのオリジナルがきのう目を覚ましたんだって」
「……！」「……」
その、何の気なしに発せられた言葉に、一瞬、身を強張らせる。
ルーテシアのオリジナル。メガーヌ・アルピーノ。ナンバーズ時代のルーテシアの行動原理は、メガーヌを甦らせ、母となってもらうこと。己の存在を肯定してもらうこと。だったのだが……
「目が覚めてよかったよね」
……他人事のように、そう片付ける。
ルーテシアにとって、メガーヌは、自身のオリジナルであるが……それだけでしかないのも、現状だった。
「……ルーテシアは、これから、どうするの？」
「どうしようかな」
治療が終わって。改めて裁判を受けて。そして……身寄りのないルーテシアは。
「教会かどこかの養育施設に入って早めに就労して頑張って生きていくよ」
「……、ルーテシア」

既に、そこまで決めてしまっているのだ。
であれば、安易に、一緒に行こうなどと誘えるはずもない。
「一人じゃないから大丈夫」
肩の蝶が、ちち、と、同意するように駆動音を発する。
二人が、何か言葉を掛けようとしたその時。
「そうそう一人じゃないわよルーテシア」
……何者かが、そんなことを言った。
へ？　と、三人が振り返った先には……
「ぜ、ゼストぉ!?」
車椅子を押すゼストと。
「と、そっちは」
……車椅子に乗せられた、ルーテシアと似通った容貌の女性。
「はじめましてルーテシア。わたしはメガーヌ・アルピーノって言いますよろしくね？」
「……はじめまして」
緊張した面持ちで、挨拶を返す。
「ちょっと寝起きで歩けないからこんな格好で失礼するよ」
そして、どうにか動くらしい腕で、車椅子の車輪を回し、ルーテシアの目の前までやってくる。
「……」
ルーテシアは、じっと見つめてくる視線から逃げるように、顔を背ける。その手は、何かに耐えるように、ぎゅっと強く握られている。
そして、複雑な関係の二人の間に、沈黙が下り……
「――やーん可愛いぃー!!　さすがわたし！」
……不意打ちで、メガーヌがルーテシアを抱き寄せた。
「!!　……!?　……!?!?!!」
突然の事態に固まるルーテシアを、メガーヌは思う存分に撫で繰り回していた。
「あのあのやめてくれると助かります本当にお願い」
「えぇー？　……ねえゼストこの子このまま連れて帰っていいでしょう？」

嫌と言われたので仕方なく……と、ルーテシアを撫でることだけは止め（抱きしめは継続し）、ゼストに話を振る。
「……駄目だ」
「ちゃんと面倒見るから」
（犬かよ……）
その漫才を眺めるエリオは、内心で突っ込んだ。
「そうではなく、ルーテシアは治療中の身だ。裁判を待つ身でもある。いま、我々の一存で引き取るわけにもいかないだろう」
「えぇー。じゃあ治療と裁判が終わってわたしたちが籍を入れたら引き取ってもいい？」
「それは構わんが……」
「いやいやいやいや、ちょっと待て師匠」
と、そこへ置いてけぼりを喰らっていたエリオが割って入る。
「さっきから話を聞いてたけどよ、……ええと、何だ。あんた、ルーテシアを引き取るって言ってるのか？」
「メガーヌさんでいいよエリオ君」
「あぁ、はいメガーヌさん。……って、そうじゃなくて」
「年齢はちょっとばかし食っちゃったけど肉体年齢はノーカンね」
「、あぁ、はいそれは……ああもうめんどくせぇ。んで、」
「もちろんわたしたちの子供として引き取って育てるって言ってるんだよ」
「ぁあああもう、何なんだこの女!!?」
……その彼女の独特というか、奇妙な会話のテンポに付いて行けず困惑するエリオに変わって、キャロが話を引き継ぐ。
「そこの筋肉とけっこんして、ふうふになって、ルーテシアを養子に取るってこと？」
「そうそうそういうことイイ肉体してるでしょうこの人」
「わた……わたしっ、なんにも聞いてないんだけどなっ」
……メガーヌの胸元で、ルーテシアがもがく。
「……コレと話し合ってな」
と、比較的常識人のゼストが、実際のところを話はじめた。

「もともと、オレたちは婚約中の身でな。クライスラー事件が終わったら籍を入れよう、という話をしていた」
「めっちゃ死亡フラグじゃねーか……」
　慄くエリオ。
「そして、あの事件だ。それが解決に向かっている現在、オレたちの婚約をどうするか、という話になって……」
　……昨日。
　ようやく目を覚ましたと連絡を受け取ったゼストは、シグナム執務官補に伴われ、メガーヌの病室の扉を開けた。
　そこには、仮死状態であったとは思えないほどピンピンした、それこそ、いつもの寝起きのような顔でメガーヌがベッドから体を起こしていて……
『あ、ゼストお早うじゃあ早速結婚しよ？』
　……
「……そういうことになった」
「でも断ったんだよ酷くないかな？」
　……心神喪失状態が認められたとはいえ、ゼストもまだ、拘留中の身。メガーヌには、まだまだ精密検査やら事情聴取やらが残っている。その状況で真っ先に婚姻の話をし始めるメガーヌのバイタリティには恐れ入る。
「で、……結婚から飛躍して子供の話になったメガーヌさんに、ルーテシアの話をしたら……？」
「まってまってお願い待って二人が見てるの恥ずかしい」
「やなこったやめるもんか可愛いやつめ」
「……こうなった、と」
「……うむ」
　――で。
「ルーテシアは、どうしたいの？」
　可能か不可能か、はともかくとして。その関係に収まることに、不満はないのか。結局、本人の気持ちが第一なのだ。
「……」

ルーテシアは、メガーヌの腕からするっと脱出し……
「わたしは真っ当な生まれも育ちもしていないから親子とかそういうのは良く分からない」
「……」
曲がりなりにも、実感は無いながらも親子の記憶のあるエリオとは違った。
「でも、……嫌じゃ、なかった」
メガーヌに撫でまわされている時も。恐怖も嫌悪も無く、ただ、安らぎを感じていたのも、また事実だった。
「……嬉しかった。キャロが、手を握ってくれた時みたいで」
ルーテシアは、メガーヌと、ゼストの前に、進み出て……
「わたしは、……ルーテシア・アルピーノでも、いいですか」
精一杯の勇気で、その言葉を絞り出すように、口にした。
対する、二人の答えは。
「今年中にはルーテシア・グランガイツになるかもしれないが、な」
「いっそ両方取ってルーテシア・Ａ（アルピーノ）・グランガイツでもいいんじゃないかな？」
「どちらにせよ、オレはルーテシアを受け入れる」
「むしろ聞いた時からそう決めていたよ」
朗らかにそう答えた二人に……ルーテシアは。
「――――、お、かあ、さん……」
伺うように、そう呼んだ。
「わたしがお母さんだよルーテシア」
「……！　お母さんっ!!」
今度は、自分からその腕の中に飛び込んでいくのだった。
「来年にはルーテシアはお姉ちゃんになるからね」
「エリオみたいな弟がいいっ！」
「お母さんに任せなさい」
「……どういう……ことだ……」
……謎の家族計画に茫然となるゼスト。

「じゃあじゃあ前祝でエリオを、」「だめ」「頂戴……って、なんで」
喰い気味に否定され、ルーテシアの頬がモチのように膨れる。
「ルーテシアは大事な友達だけど、エリオくんだけは、だめ」
「いいじゃないちょっとくらい」
「だめ。あげない。」
「けちんぼ」
「けちんぼでも、しゅせんどでも、エリオくんだけは、だめ」
むーーーーーーっと、お互い、表情に乏しい同士でにらみ合う二人。

「――――――エリオくんと結婚するのは、わたしだから」
「――――――いいやわたしだね」

……この二人が、いわゆる子供同士の意地の張り合いでも何でもなく、ガチでエリオとの結婚を目的にしていることは確実だった。
「……じゃあ、月一にかしだしでどうかな」
「……すくないよ週4くらいで」
「……それだとおおいから、週1」
「……週3で時間制にするのはどうかな」
「ぐたいてきには」
「デート券を8時間とか」
「6時間」
「それなら週4だよ」
……エリオは、あまりの事態に硬直していた。
「おい、師匠……オレの知らないところで、オレの領土戦が勃発して、オレの分割統治が決定しつつあるんだが……こういうとき、オレはどうすればいいんだ……？」
ルーテシアの話をしただけで、未婚の身でありながら、いつの間にか家族計画まで決定されているゼストは、力無く首を振る。
「――――――諦めて、受け入れろ」
……男に拒否権は無いのだ。

◆・◆　◆　◆

事件から、少し経過して。

「おいキーア」

「なんだい、クロノ執務官どの」

重要参考人、キーア・ソナタは、クロノの小間使いと化していた。正確には、司法取引と、社会奉仕活動の一環として、そして監視のため、だが。

「ティーダの奴はどこへ行った」

そして、生存が確認されたティーダは、少し複雑だった。何せ、ＭＩＡ、更には書類上では死亡扱いとなっているのだ。しかし、生還していたとなると……殉職で特進した階級はどうなる、といった問題や、不可抗力的に更新されていなかった執務官資格はどうなる、などの問題があり、やや宙ぶらりんなのだ。

「また妹のところだってさ」

「そうか。シスコンは死んでも治らなかったか」

そして、結局……キーアのついでのように、クロノが復帰までのサポートをし、対価としてクロノの仕事を補佐するという形に収まっていた。

「シスコンはひどいんじゃないか……」

……と、扉を開け、ティーダが顔を出した。

「ちょっと出発前のティアナとランチをしていただけなのに」

「よう、シスコン」

「やぁ、シスコン」

……まるで、旧友のような三人だが。キーアはティーダを謀殺し、更にはクロノをも同様の目に遭わせようと企んだ悪党だ。その三人が、こうもつるんでいていいのか、とは、よく突っ込まれるのだが……

『――――ぼくが悪かったよ。どうにでもしてくれ』

全てを懺悔し、刑を受け入れる態度を示したキーアを、私刑で処断することはしなかった。あくまで、司法の手に委ねるために、『逮捕』したのだから。甘い、とは言われるが。

「シスコンとは言うけどな、キーア。お前だって『妹』のためにと言って、あちこち駆け回っているじゃないか。今日、スバルちゃんと一緒にセリカを見舞いに行くと言っていたよ」
「……アレは、ぼくの行動のツケを払っているだけだ。他意は無い」
ここでいう妹とは、セリカのことだ。今代、戦闘機人ドゥーエのＩＳ・ライアーマスクの発動権限を与えられていたキーアは、それを行使した。
「……まぁ、あの子はあの子で、曲がりなりにも、ぼくの『妹』だからね。子供のころは、よく遊んでやったものだし。……利用したことは、少なからず後悔しているよ」
偽りのきょうだい関係であっても、情は少なからず在ったということを、事件後、キーアは初めて自覚したのだそうだ。
「今日の仕事は？」
「神を騙る新興宗教の強制捜査、不死化を餌にした詐欺グループの摘発、混乱に乗じて活発化する組織の鎮圧……どれも大変そうだなぁ」
「それは困る」
……クロノが、珍しくそんなことを言った。なぜ、と聞く二人に。
「フェイトが落ち込んでいるんだ」
……
「まぁ、あの馬鹿の所為なんだが……それでも、もと後見人の俺が、何らかのフォローをしてやらないと」
「……」
「……」
二人は、無言で顔を見合わせ……
「「シスコン」」
……と、綺麗にハモって突っ込んだ。
「誰がシスコンだ、誰が！　人のこと言えた義理か!?」「いやぼくは違うっしょ!?　あくまで個人的な感情のケリの付け方の問題だよ！」
「僕はシスコンじゃないよ！　ただ、ティアナを兄として愛しているだけだよ！」「開き直りやがったなこのシスコン!!」「お前がシスコンだ！」「いいやおまえがシスコンだ！」「キミらがシスコンだ！」

喧々諤々と言い争いながら、瞬く間に事件を解決していく三人。

――――――――すべては、アフター（妹との時間）6のために……

……真実を知らぬ市民たちからは、のちに名物トリオとして注目される、ただのシスコン三人組の日常だった。

一方、同時刻。

現在、整備中のアースラ艦内を、フィアットがてくてくと歩いていた。

「……部隊長が居ないのは、久しぶりですねぇ」

どことなく、いつも車椅子を押している両手が手持無沙汰だった。

「お待たせしました。リンディ提督」

いつもの外面を貼り付けながら、フィアットがリンディを視界に捉える。リンディは、やや緊張した面持ちで、向き合った。

「フィアット……久しぶりね」

「ええ。先の事件以来ですから……ああ、もう、そんなに経つんですね」

闇の書事件後……はやてに付いて行ったフィアットと、閑職に左遷されたリンディでは、顔を合わせる機会が無かった。

「あの文書は、本当なの？」

……フィアットは、紙媒体の文書を手にしていた。

『――――依頼者・フィアット・コルデーロ殿。

――――故クライド・ハラオウン氏、故ルカ・コルデーロ氏との血縁、ＤＮＡ鑑定の結果が出ましたことを通知いたします。

――――両者の親子関係の検査結果――

――――血縁を認めるものである』

……ただ、そうとだけ短く記された文書。付随する資料には、事細かな検査の結果、血液型、ＤＮＡ型や遺伝形質などの比較グラフ

が添付されていた。
「ええ。わたしは、クライド・ハラオウンと、ルカ・コルデーロの娘です。外見は母に似ましたので、よくよく見なければ分からないことだったでしょう。一部は、血縁上の父親であるところのクライド氏にも似ているそうです。母は一時、クライド氏と恋仲でしたが、クライド氏がリンディさん、あなたへ惹かれていることを察したために、自ら身を引いたそうです。ただ、その身にわたしという子供がいることは、出産した後も隠し通しました。その後、クライド氏の抹殺を企むギル・グレアムの企みにより、母は闇の書を植え付けられ、企み通りに次元航行艦エスティア搭乗中、逃げ場の無い航路上において暴走。……あとは、ご存知ですね？」
そこまでを一息で話し終えた。
「え、ええ……でも、クロノは、」
「クロノはとっくに知っていましたよ。自分でこの答えに辿り着いたんです」
「……！」
その事実を、クロノが自分へ知らせていなかったことの意味を知り……愕然とする。
「……わたしに、何をしてほしいの？」
リンディは、フィアットがこの事実を打ち明けた理由を、どうにか推察していた。遺産の留置分を欲しがるような人物ではない。だとすると、恐らく、戸籍だけでも、クライドの元へ入りたい……といったことだと。しかし。
「――いいえ、何も」
――ビリィイッ。
そして……その鑑定結果を、リンディの目の前で破り捨ててしまった。
「何も望みません。
わたしには、おかぁさんとの思い出があります。だから、なにも要らないんです」
「……あなたさえ、望むなら……わたしたちの家に、」

「嫌です。絶対に」
そして、フィアットは……ただ素直な胸の内を、吐露する。
「――――貴女なんか、大っ嫌いです」
……そして、何かを言おうとして……結局、黙り込むリンディを放置して、フィアットはすたすたとその場を後にしてしまう。
「――――良かったのかい？　フィアットちゃんよ」
……足を、止める。
「……何故ここに、とは聞きませんよぉ？」
通路脇に、彼女が壁を背に立っていた。民族衣装風の装いに、照明を反射する全身の銀色。しかし、通りがかる誰も、その姿を認識できていない。魔力に頼らない認識阻害結界。そして、セキュリティをスルーしての、アースラへの空間転移を成し遂げる。
「そうそう、奈々ちゃんに『なぜ』は、聞くだけ無駄だぜ。だって、わたしが一番分からないんだからネ」
真性・本物の『魔法使い』、田上奈々は、いつものように嘘っぽく笑った。
「で、もう一度聞くぜ。……アレで良かったのかい？　その気があるのなら、」
ぴっ、と、懐から、銀メッキを施した呪符を取り出して見せる。例の、秀人の母、桐子の記憶を圧縮した、あの呪符の類型だ。
「――――限定的に時間を巻き戻して、和解の選択を『やり直す』ことも出来るヨ？」
魔法の原則を無視した御業に、さすがに腰が引ける。
「……さらっと恐ろしいこと言わないで下さいよぉ」
茶化すフィアット。だが、奈々の目は、これっぽっちも笑っていない。
嘘も誤魔化しも通用しない。

「……本当は、ずっとずっと、死ぬまで隠しておくつもりでした。そうすれば、この事実は、わたしたちきょうだいだけの秘密でしたから。クロノがエイミィさんと結婚しても、子供が出来ても、孫が出来ても……わたしとクロノは、この秘密で、ずっとずっと、繋がっていられる。そう、思っていたんです。クロノはいい子ですから、お墓まで持って行ってくれるでしょうし。あの子、自分の所為でもないのに、ずっとずっと、わたしのことを想って、死ぬまで心を痛め続けるんですよ。それって、とっても素敵なことじゃないですか」

でも、と、話しを区切る。

「それじゃあ、自分の気持ちに嘘をついて、クライド氏から逃げたおかぁさんと、何も変わらないなぁ、って。そう思ったら……おかぁさんが、ずっと思っていたであろう気持ちを、ぶつけちゃいました」

フィアットは、……晴れ晴れとした笑顔を、奈々へ向ける。

「――――これで、やっと……前に進めます」

そして、トレードマークとなっていた、母の遺品のジャケットを脱ぎ、奈々に手渡した。

「仕立て直してくれますか？」

「奈々ちゃんにお任せだヨ」

踏ん切りと、再出発のために。

――――腹違いの弟以外を、家族と認めず。

――――憎しみと愛を、同一の人物へ注ぐ。

ねじくれて、歪みきって……しかし、きっと彼女にとっては、『変わらない』ということだけが、本質で在り続けるのだろう。

◆▪◆　◆　◆

「うぅ～ん……」

行儀悪く胡坐をかいたウェンディが、両手に掲げ持った一枚のカードを、悩ましげに見つめる。

「……まだやってんのか、ウェンディ」

「……なんなんスかねぇ、これは」

「何ってそりゃあ……ＩＤカードだろう」

「それは知ってるッスよぉ～～～……」

ごろん、と、そのまま横になる。
「……んで、ウチらってどうなるんスかぁ？」
「……さぁ。ジンケンとやらを、あたしらに適用するための最終協議中ってのは聞いたけど。
……っつか、任務のほか、何も知らないで稼働してきたあたしらに、いまさら『自分の生き方』なんて聞かれても知るかー、ってなモンだけどな」
「ロボットだから、マシーンだから～～、ってヤツっすね」
「なんだそれ」
「ク、……じゃなくて、……ああもう紛らわしいッスね。四葉のヤロウがウチらに暇つぶし用に差し入れてくれた娯楽映像作品ッスよ」
「なんか最近、『姉』の影響で趣味がヘンになってきてるよなー、あいつ」
「つか、悪巧み以外の趣味なんてあったんスね」
「なーんか、しおらしくなっちゃってさー……調子狂うっての」
「ディエチ、……おいディエチ、聞いてるッスか」
……と、先ほどから会話に混ざらない妹を呼ぶ。
「あ、……ごめん、なんだっけー」
ぼーっとしていたらしいディエチが、とぼけた顔で振り返る。
「なんだっけじゃないッスよ。おまえ、これからどーするッスか？」
「これから、って、なぁにー？」
「だーかーら、あれこれ機能制限くらって、ニンゲンみたいに生きろって言われて、おまえはどーするんスか？」
「ヴァイスのところに行くよー」
意外なほどすんなりと、予期しない答えが出てきた。
「来てもいいって言われたしー」
「……四葉には、ついて行かなくて良いのか？」
あれだけ無邪気に慕っていたというのに。
「うん。四葉が元気で幸せでいてくれるのなら、わたしは一緒じゃなくてもいいよー」
考えていないようで、その実、しっかりと物事を考えていたらしい。

「それにね、わたしの力が、壊すだけじゃなくて、いろいろな使い道があるってことを教えてくれるんだってー」
少し嬉しそうに……狂的なものではなく、年頃の少女のように笑う。
「四葉が幸せに生きられる世界を、わたしが守ってあげるんだー」
――――。
……ナンバーズの中で最も幼かった彼女が、既に己の道を定めていた。
「……はは。参るッスね」
「……先を越されちゃったな」
彼女たちも、いずれ、己の道を定めるだろう。戦闘機人でも、ナンバーズの一員でもなく……ひとりの、個人として。
「安心していいぞ、貴様ら」
――――びくぅっ!!
……条件反射的に、背筋を正すセイン、ウェンディの両名。
「「し、シグナムっ……!!」」
「あァん……？」
「「「執務官補どのっ!!」」」
呼び捨てを慌てて正す。
というか、なぜこのタイミングで現れたのか。
「セイン、ウェンディ両名」
「「――――はい（ッス）!!」」
シグナムは、『休め』の姿勢で直立する二人に、悪夢の判決を言い渡した。
「貴様らは、保釈と同時に、俺の直接監督下に入ることが決まった。期限は無期限。俺が判断を下すまで、永遠に……だ」
「「「……」」」
ぱちくりと、目を瞬かせる。
（チョクセツ、）
（カントクカ……？）
この……悪魔のような鬼剣士に？

（キゲンハムキゲン……）
（エイエンニ……？）
戦場で遭いまみえるだけで、盛大な死亡フラグが立つような、この悪鬼羅刹のもとで……この獄卒の鬼の許しが出るまで、延々と？
「「　嫌じゃあああああああああああああああああ!!!　」」
がしゃーん、と、鉄格子に縋り付く二人。
「堪忍して！堪忍してつかぁさい！」
「お願いします何でもしますから！」
「もう悪いことしませんから！」
「良い子になりますから!!」
……そのザマを、思う存分に鑑賞したシグナムは……組んでいた腕を解き、仏のような笑みを浮かべる。
「「……!!」」
許された……！　……と、期待した二人を。
「――却下！」
……再び、奈落の底へ蹴り落とすのだった。
「「　いやぁあああああああああああああああ!!!!　」」
……セイン、ウェンディの両名。
――シグナムの小姓となる。

◆・◆　◆　◆

フェイトはあの事件以来、不気味なほど仕事に真面目だった。
これにはシグナムも驚いていた。
「……おい、どうしたんだ一体。拾い食いはするなと、あれほど言っただろう」
「ほっといて……」
「……まさかと思うが、秀人に振られたショックがまだ、
「あーもう、シグナムはうっさいなぁ!!」
図星だったらしい。
ぎゃーすかと騒ぎ出すフェイトだったが、職場ではいつものことな

ので、誰も気にしない。
「ちくしょー！　秀人に貰ってもらう予定だったのにー!!」
「なんという予定だ……」
「うわーん！　どうせこのまま行き遅れて、しわしわのおばーちゃんになっちゃうんだー!!」
「ふむ……そうか」
　そして。
「――では、お前はオレが貰おう」
　……は？　と、全員が振り向いた。
「へ……？　え……？」
「もう、恩人である秀人にこちらの義理立てをする必要は無くなったわけだな。うむ」
　目を白黒させるフェイト。
「そういうわけだ。これからはガンガン攻めていくので覚悟するように」
　……そう言うだけ言ってしまった。
　同僚たちも、無言でぽちぽちとキーを……
「やめて！　じじつむこんを書き込まないで！　つぶやかないでー!!」
　どう見てもＳＮＳに炎上不可避な書き込みがされている。
「ふむ……フェイトよ」
「な……なんだよぅ……訂正するならいまのうちだぞ。というか、おまえもさっさとみんなをとめ、」
「――――オレはお前を愛している」
　……冷やかしもあった書き込み音が、ぱたりと止まった。
　その声色に、いつものフェイトをからかうような剽軽さは無く、ただ真剣に、想いを伝えたのだと、分かってしまったから。
「え……えぇ……？」
　いつもの冗談、いつものフェイト下げ芸……では無いとわかり、た

だ困惑する。自分からは、誰かに気持ちを伝えることが得意な癖に、他人からの好意にはからっきし鈍いという、フェイトの悪い癖だった。
「いっつも、ボクに意地悪するくせに」
「照れ隠しだ」
「ボク、ひでとひとすじのつもりなんだけど」
「オレだって、闇の書事件でお前に出会ってから、お前一筋だ」
「ボクのなにがいいって言うんだよ」
　全部……などと、軽い言葉で片付けるような男ではない。
「太刀筋が綺麗なところ。軽いように見えて慎重なところ。気にしていないように見せておいて、影で一人で泣いているところ。子供と同じ視点で物事を考えられるところ。どんな相手の目でも真っ直ぐに見られるところ。救いようの無いような輩にも、自分のキャリアに傷をつけてでも再起のチャンスを与えるところ。それを裏切られても、決して恨み言を吐かないところ。気持ちが通じたことには、全身で喜ぶところ。理論と感情を切り離して思考しているようで、世の理不尽や不条理には憤りを感じているところ。食事の前に、手を合わせるところ。遊びにも全力投球なところ。笑いたいときには笑い、泣きたいときには泣き、他者の感情に寄り添えるところ。
　――――これで一割未満は言ったが、まだ必要か？」
「……もういい、デス……」
　フェイトは、沸騰したヤカンのように頭から湯気が出そうになっていた。
「……えぇと、シグナム」
　フェイトは、居住まいを正し、シグナムの目を見る。
「ありがとう。すごく、うれしい」
　でも、ゴメン……とは、続かない。
「いまは、まだ……ボクはひでとが好きだ。これは、嘘偽りの無い気持ち。おかーさんとのこれからのくらしも、かえってきてくれたアリシアのことも、管理局でもこれからのことも……まだまだ、やることがたくさんある」

シグナムは、それを頷きながら聞く。
「そのためにも、キミのような、優秀な副官が、ボクには必要だ。だから、キミの気持ちを知ったうえで、敢えて、言わせてもらう。
――――ボクのしごとを、手伝ってほしい。
何年がかりになるのか、いつまで続くのか、この立場がどう変わるのか……それも分からない。でも、ずっと、ボクのしごとを、ボクの隣で、手伝ってほしい」
聞きようによっては、最低の言葉。しかし……それだけの言葉で終わらせることは、決してしない。それこそが、シグナムの惚れた女……フェイト・テスタロッサなのだ。
「――――それが全部終わって。ボクが、自分の気持ちに整理を付けて。身の振り方を考えられる余裕が出来て。それでもまだ、キミの気持ちが変わらず、ボクの隣に居てくれるのなら。
――――ボクは、キミの気持ちに、応えるよ」
……冷やかしも、歓声も上がらない。
「……そうか」
シグナムは、その言葉を、じっくりと噛みしめるように瞑目し……少し寂しげに、笑った。
「……では、オレも精々、励ませてもらおう。言っておくが、オレは我が王の要素を下敷きに自我を形成した存在だ。蛇のように執念深いぞ」
「知ってるよ。ながい付き合いじゃないか」
「ああ、そうだったな。……では、今後とも、よろしく頼むぞ。フェイト・テスタロッサ執務官どの」
そして、シグナムが、すっと手を差し出して……
「頼りにしてるよ。シグナム執務官補」
フェイトが、それを握り返す。
そして、これからの事に思いを馳せる二人……
――――に見せかけた策士シグナムは不意打ちでフェイトを

引き寄せ『えっ』とも思う暇も無く決して与えず完全なる奇襲で、
――――――フェイトの唇を奪った。
「ふ……甘いわ。このオレが、ただ待つだけの男だとでも思ったか」
勝ち誇るシグナム。
『これからは』ガンガン攻める……そう言ったな？　アレは嘘だ。
『今から』攻める。それがこのオレ、シグナムという男だっ！」
ドォン！　と、擬音まで聞こえてきそうな宣言だった。
「や、やったッ！」
「さすがシグナムっ！」
やいのやいのと、今度こそ盛り上がる一同。
「あ、あ、あああ……！　や、やられた……！」
フェイトは、ぺたんと座り込み……わなわなと、震え……
「――――しぐなむぅぅぅ

Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編　第二十四話『穏やかな日々へ。平穏に、うららかに、凪のように』

◆・◆　◆　◆　　それから　◆　◆　◆　◆

――皆が知らぬこと。
――秀人となのは。
――神の領域へ到達した二人は。

――――――――嘘のように、元通りの身体に戻っていた。

……冗談ではなく、事実だ。
秀人も、相変わらず死ぬに死なない身体ではある。なのはは、欠損部位が復元された以外、ごく平常のコンディションだ。なのはに至っては、相対的に強化された気までである。

しかし、あの、全世界を一繋ぎへと結合させ、人々の潜在能力を極限まで引き出して見せたような超常能力は、綺麗サッパリ、消え失せていた。

「そりゃ、神様がこうして出歩いてたらまずいもんなぁ」
秀人は、久々に戦闘服以外の……その辺の若者のような、ジーンズにTシャツにスニーカーというラフな格好で、久々の海鳴市の通りを歩いていた。
「うーん……アイにも理由がわからないの……」
その隣を歩く、肩口まで黒髪を伸ばした少女が、首を傾げた。
「っていうか、別に来なくても良かったんだぞ」
「む。ちょっとソレどういう意味なの」
「いや、俺より、ヴィヴィオに付いててくれた方が……」

「アイがおまえよりも優先する事柄なんてあるわけないの！　ほんっとマスターってば、ぼけなすなの!!」
――――。
今日も仲良くケンカする一人と一機の前に、一台のワゴン車が横付ける。スライドドアを開けて、顔を見せたのは、それなりに知った顔。
「お二人とも、お待たせしました！」
明るい笑顔が魅力的な少女……はやての一番弟子、美香だった。二人は、促されるままに乗り込んだ。そして、ふと運転手は誰だろうとルームミラーを見やると……
「……!?　お、おぉおお！　ヨシオ！　ヨシオじゃねぇか!!」
かつての部下にして同僚、アルバイト戦士ヨシオは、学生上がりのあどけなさは既に無い、社会を生きる男の顔になっていた。
「気付くの遅すぎッスよ、秀さんってばもー!!」
人懐っこい笑顔に当時の面影を残し、ヨシオが再会を喜ぶ。
すると、後部三列目の座席から、ニョキッと見覚えのある顔が覗いてきた。
「お兄はん、お久しゅう、やなー」
はやてそっくり。ディアーチェ。
「？　……シュテルとレヴィは？」
聞いた話では、四人娘で行動していることが多い……とのことだったのだが。
「あはー。レヴィはおかんと……シュテルんは、嫁はんと一緒やでー」
ニヨニヨと含みのある笑みを浮かべるディアーチェ。
「そうか、なのはの方か」
「……」
「どした？」
「ぼけなす。ちゃんとリアクションしてあげないと可哀想なの」
……ごく真顔で『嫁』で通じてしまった。ディアーチェは、美香の膝に顔を埋めてヨヨヨ、とわざとらしく嘘泣きしている。
「あーもう、少し静かにしろよお前ら。秀さん困らせんな」

呆れながら注意するヨシオ。
『なーなー、お兄さん』
と、今度は念話でちょっかいを掛けてくる。ちょこん、と摘まんだ指先から、接触回線で、美香に気取られること無く。
『あんなー、ウチら、闇の書事件の時に現世に顕現したんよ。んで、お姉ぇの勅命で、まだ不安定だった美香の生活全般のサポートをすることになって』
「……」
『アーフィエルまで置いて行ったんやでー。お姉ぇ、ものごっつ優しいやろ？』
はやてが、苦渋の選択をしたことは知っていた。しかし……全てを手放すのではなく、必要な手助けをしっかりと残していく過保護っぷりは、実に彼女らしい。
『ウチらは一応、留学生っていう『設定』で、美香の近くに居座ろうとしてねんけど、……なんか、『設定』をゴリ押す魔法を使う前に、アッサリと受け入れられてしもうたんよ』
軽い暗示か、洗脳を用いて違和感を消そうとしていたのだが……
――――え、美香の友達!?　え、家に？　オッケーオッケー！　ドンと来い！
そして、呆気にとられる三人を、何の疑いも無く自宅まで招き、その姉と対面したら。
――――あら、可愛らしい子たちねぇ。いつでも来てくれてもいいのよ。美香と仲良くしてあげてね。少しワガママだけど、自慢の妹なの。
『結局、ずぅっと何年もそんなノリでなー。なんやもう、無理やりどうこうしようって気が起きへんかったんよー』
そして、当時小学生だった美香が中学生になり、間もなく高校受験を迎えるような学年になっても……ディアーチェたちの素性を疑いもせず、美香の友人として、今ではすっかり家族の一員のような扱いまでされてしまい、困惑を通り越して安心してしまっているのだと。

『んで、ヨシオのやつ、何かあるたんびにお兄さんの話ばっかするんよー。だから、うちら一方的にお兄さんの人となり、知ってしもうたわー』
年齢の近さもあり、仲は良かったという自覚はあったが。
『……ヨシオのやつ、ずっとお兄さんのこと気にして、心配して、寂しがってたんやで』
……秀人は、その言葉を聞き……
「……なぁヨシオ」
「あ、ハイ。何ですか？」
「――――ただいま。」
ヨシオは、少し息を呑むように、沈黙し……
「――――ハイ！　秀さん、お帰りなさい!!」
「おお、お兄ちゃん！　前、前――！」
「ぬぉおおお危ねぇ!!」
……そそっかしいところだけは、変わっていなかった。
「ほな、またなー」
ディアーチェと美香は、これからシュテルと合流するため、別行動だ。ヨシオの安全運転を信用しよう。この後、シュテルらを送り届けた後、また合流となる。
さて、秀人がこうしているのは、何も懐かしいメンツとドライブを楽しむため……だけでは、ない。
ごくりと、覚悟を決め……ドアを開ける。
「お、来たか秀人。ま、来いや」
カントクは、数年ぶりということを全く思わせない素振りで、秀人を案内した。
変わらないオフィス。だが、こちらを凝視してくる同僚たち。事変の際、秀人の生存を確認していた彼らだったが……それでもやはり、直接会うのとは違った。
応接室……に通された先。
「あら、思った以上に元気そうじゃない？」
フェイトとはまた違った質感の金髪の少女と。

「もう……素直に久しぶり、って言えばいいのに」
艶やかな黒髪という、対照的な少女ふたりが、先客としてソファに座っていた。
「……？　おう、久しぶりだな。元気だったか？」
しかし内心で、誰だっけ……と、若干薄情なことを思う秀人に変わり、影のように傍らにいたアイが、しゅたっと手を上げた。
「はろー。アリサ、すずか」
「えっ!?」
……思わず口にしてしまってから、慌てて口を塞ぐも……手遅れだった。
「あんた、気付いてなかったの!?」
炎のように激怒するアリサ。
「……ソンナコトナイヨ？　ホントダヨ？　ヒデトクン、ウソツカナイ」
「白々しいわーーーーっ!!」
すずかは、相変わらずニコニコと笑っていた。
「――それだけ、アリサちゃんが綺麗になったってことだよ」
「……っ！　そ、そういうことじゃ……ないと、思うけど……」
「ですよね、秀人さん？」
「え、あ、ああ……」
……言葉を濁す秀人を、じいっと見据えて。
「――ですよね？　」
……全く笑っていない瞳で、そう確認した。
「……おう。二人とも、美人になりすぎてて分からなかった」
とはいえ、これも本音だ。
しかし……なぜ、二人がここに？
カントクが何かの紙束を持ってきて、腰かけたと見るや……
「――おまえ、クビ」
……デジャビュを感じさせる言葉を放った。
「……っふ」
だが、天丼は通じない。この後、「なーんちゃって」という言葉が出

てくると……

と、なぜか無言で、新聞を取り出し、秀人に渡してきた。

――高卒認定資格、文科省大臣が不正取得に関与!?

――引き籠りの息子のため……揺れる教育界！

――その他、年齢と一致しない取得者も!?

――仮面ライダードライブ、堂々最終回！

「なん……だと……!?　フォーゼはいつ終わったんだ……!?」「ウィザード、鎧武が間に挟まるの。５５５完結編、仮面ライダー４号もあるの」「嘘だろオイ……!?　なんてことだ……!!」「っていうかこれでも、数年前の新聞なの」「ウゾダドンドコドーン!!」

――ＴＳＵ○ＡＹＡに！　○ＳＵＴＡＹＡに行かなきゃ!!

今の話は関係無い。

――だが……秀人は、身に覚えがありすぎた。

アリサが発言。

「そうよ。この事件の後、徹底的に調査がされてね……出るわ出るわ、詐称のオンパレード。酷いところじゃ、児童養護施設が噛んでる事件もあって……」

「はっ……!!」

ぎくりとする。そうだ。秀人の高卒資格は、あの施設が、厄介な秀人を放り出すための方便として、年齢を詐称して受験させたもので……

「ま、まさか……!!」

……カントクは、一枚の封筒から、何らかの書類を取り出し……眼前に、広げて見せた。

「――――おまえ、高卒認定取り消し」

「Ｎｏｏｏ

……世界を救った男、中卒に降格。
「……ま、というわけで、ウチの正社員の雇用条件である『高卒以上』を満たしていない以上、お前を正社員として雇用し続けることができなくなった……ってわけだ」
とはいえ、カントクは無下に秀人を切ったわけではない。
「……ほれ」
続いて出されたのは、とある学校のパンフレットだった。
「ん……何だコレ。学校のパンフ？」「んー、定時制高校……とは、また違うシステムなの」
単位制だが、週に3回以上の登校が義務付けられており、制服もあり、部活動まである。
「それ、ウチ（月村）が出資している学校なんです」
「へぇ……いい事業だな」
「お前が入るんだよ!!」
「ええーっ、俺が!?　嘘だろ!?」
……この期に及んで、まだ他人事の秀人に……アイ、アリサ、すずか、カントクの四人は、盛大にため息をついた。

「――学生から、人生をやり直して来い」

――秀人に、『学生時代』は存在しない。
事故が起きたのは、まだ小学校に入学する前のことだった。だから、カントクは秀人に、その失われた時間を取り戻させようとしているのだ。
「……くだらねーけど、必要なんだよ」
かつて、秀人がはやてに言ったことだ。
「学業に支障が無い範囲でなら、オレの会社で、研修って形で働くこともできる。卒業して、それでもまだ働いてくれるってんなら、雇用もしてやれる。大学まで進むなら、それでもいい。別の業界に行くってんなら、それでもいい。だから……だからよ、」
カントクは、その熊のような掌で、秀人の肩をしっかりと掴む。

「たまには、自分のために生きてみろ」
胸が詰まって、言葉が出なくなる。
「なのはちゃんにも、もう話してあるの」
「あの子は行くって言ってたわよ？」
「おぉ……んじゃ、夫婦でガッコ行くわけだ！　ガハハハ!!」
愉快そうに笑うカントク。
「そうなりますね」
「「「「……」」」」
……謎の沈黙が下りて、秀人が、何かに気付いて、一言。
「……俺の居た施設は、」
調査が入ったということは、その他にも、あれやこれや……いや、狡猾な連中だ。きっと逃げおおせているのではないか。被害者がいるのではないか。そう危惧する秀人だったが……
「潰しました」
「そうか、潰れ……えっ？」
聞き返す秀人に……すずかは、全く笑っていない笑顔で、晴れ晴れと。
「――潰しました」
……潰れた、ではなく、潰した、と。
「……」
藪を突くのは止めた。
カントクは、ぱん、と膝を叩いて、立ち上がり……
「うっし……んじゃ、行くぞてめェら!!　今日は全員早上がりじゃあ!!」
――オオオオォッ!!
待ってましたとばかりに、応接室になだれ込んできた同僚たちが、秀人の肩や背中をバンバン叩き、照れ隠しの憎まれ口を叩きながら、連れ出していく。
「よっし、健太と望も連れ出すわよ！」

「春休み、もう始まっているものね」

「……マスター、本当に良かったの」

アイは、その光景をじっと眺めて……珍しいことに、素直に笑顔を見せるのだった。

◆▪◆　◆　◆

海鳴市、とある喫茶店。

「人がいない喫茶店って、新鮮ね……」

小学校教師にして学年主任、富山咲は、店内で人を待っていた。店主の厚意で、店を貸切にし、ケーキと紅茶が振る舞われている。

今日は大事な教え子から、『話がある』と、珍しく相談してきたのだ。幸いにも春休み。児童がいない分、仕事と言えば、新学期へ向けての事務作業がメインだ。有給を取り、その家族へ連絡し、今こうして、この場所に居る。

――カラン。

ドアベルが鳴った。貸し切りの店内に、来客ということは……待ち人である彼女。そう思った咲が、そちらへ目をやると……

――紙袋を頭に被った不審者がいた。

「ブッ……!!」

思わず、アッサムティーを噴霧してしまった。

「なっ……だ、誰っ……!?」

厨房からこちらを覗いてきた桃子たちも、怪訝な表情をしていた。

『……』

目の位置が丸くくり抜かれていて、その向こうに、瞳が見えるのだが……いくらなんでも、怪し過ぎる。

「……」

『……』

距離を取り、見つめ合う二人……だったのだが。

「ただいまー。あ、先生やっほー」

……なのはが、とても軽い調子で現れた。
『……』
不審者は、そろそろとなのはの方へ移動し……サッと、その背後に隠れてしまった。
「……あんた何してんの」
『だ、だってぇ……』
呆れ声に、くぐもった声で返答する不審者。クアットロ時代の習慣で、仮面で素顔を隠していないと落ち着かないのかもしれない。
「バカなことやってないで取りなさい」
『でもぉ……顔見せたら、ぜったいに笑われる……』
「今の方が百倍は笑えるわよ……ほら、取りなさい」
そしてなのはは、ずばっと紙袋を強奪する。
「……え？」「あら」「……む」「……へ？」
そして現れる、なのはと瓜二つの、整った顔。それが、見る見るうちに朱に染まり……
「……ぅ、うううう～～～!!」
顔を覆って、うずくまってしまった。
「あの……なのはさん」
「先生、ひさしぶり」
「ええ、久しぶりね……で、そちらの……その、そっくりな方は？」
「いもうと」
「……？」
意味不明な事態に混乱する咲。いや、それよりも深刻なのが。
「えっ、えっ……どういうことなのかしら。わたし、まだ子供がいたのかしら忘れていたのかしらいつ産んだのかしら」「母さん、落ち着け……どう見ても似ているだけで、似ているだけだ。うん、どう見ても似ている……どういうことだ……？」「妹が増えた……妹って、増えるものだったっけ……？」
……高町家の面々だった。
「お、お姉ちゃん……もういいよ……わたし帰る……」
「だーめ」

袖を引く四葉に、なのははいじめっ子のような笑みを見せるのだった。

――そして。

「そ、そういうことか……」

「大概の事には、もう驚かない自信があったんだけど……」

恭也と美由希は、まじまじと四葉の顔を見る。

なお、魔法とは縁の無い咲にはこう説明してある。

――助成金をピンハネして、虐待が常態化していた悪徳施設を（物理的に）解体するのを手伝った時、その施設の中に居た、何故か私に瓜二つだった女の子。他人とは思えなくて、あれこれケアに関わっていたら懐かれた。知り合ったのは少し前になるけど、心身のケアに少し時間が掛かって、いまこのタイミングでの紹介になった。

……すずかとの口裏合わせはバッチリである。持つべきは友人。

「しばらくは、私と秀人さんが面倒を見ながら暮らすことになるから」

「……ウチで預かってもいいのよ？」

真相を聞かされている桃子が、気を利かせる。しかし、なのはは首を横に振った。

「私の妹だもの。普段は、私が見てあげなくちゃ」

慈しむように、その頭を撫でる。

「それにね……、」

と、胸元のレイジングハートに、念話で語りかける。

――からんからん！

……と、今度は、けたたましくドアベルが鳴る。

「ママ！　けんさ、おわったよー!!」

……と、なのは、四葉と同色の髪色の少女が、ぱたぱたと店内に駆け込み、四葉の胸に飛び込んだ。

「「「「『ママ』!?」」」」

またしても驚愕する一同に、かくかくしかじか。

――――同じく施設から保護した外国籍の女の子。あわや性的搾取の被害者になるかというギリギリのタイミングで保護できた。閉鎖環境で、四葉と擬似的な親子関係を築くことで互いに精神の均衡を保てていた。なので、しばらくは一緒に居た方がいいという判断。救出に携わったなのはのことは『お母さん』と呼ぶが、刺激してしまうので、指摘しないように。

……はやてから、しっかりと台本を渡されていたためにスラスラと説明が出来た。

「やぁ、遅くなって申し訳ない」

「あ、父さん」

と、やや遅れて、士郎も病院から一時帰宅許可を取り付け、店にやってきた。

闇の書事件の折、闇の書の展開した精神世界で、なのはと対話したことは記憶に残っており、事変の際の記憶も消えずに残ったため、こういった類の話には割と寛容だった。

「なのは。遅くなりました」

「お邪魔します！」

シュテル、美香も店内へ続く。ヨシオは、今度は秀人を迎えにとんぼ返りだ。なんとも忙しい。ちなみに、シュテルの容姿に関しては、かつてはやてが使用したのと同様の認識阻害魔法を展開している。さすがに、三人を『他人の空似』で押し通すには無理があった。

『検査の結果はどうだったの？』

なのはが、念話でシュテルに聞く。

『問題ありません。秀人の治癒を無理やり再現した、過剰な細胞分裂が原因であった短命も、あの『矢』の影響で正常化、というか、秀人の力の一片を受けたことで、さながらプチ秀人状態です。……むしろ、貴女以上に頑丈な肉体になったと言ってもいいでしょう』

『それなら良かった』

マリエルの検査だ。問題がある筈が無い。

「高町、来たぞー」

「なのは、しばらくぶり！」

健太と望も、店に到着する。
「……はー……マジで瓜二つだな」
「うん……同じ格好して黙ってたら分からないかも」
並んだなのはと四葉を見比べて、各々の感想を言う。
『魔法ってすげぇなー……今更感あるけど』
『ホント、知ってるのと使えるのとじゃ、全然違うわね』
……と、二人が、念話でなのはに話しかけた。
あの事変の際、二人……特に、健太へ与えた影響は大きく、封印されていた、闇の書事件の際の記憶が解凍され、一定の魔法にまでその力を高めてしまっていた。
もともと、魔法の素養の在った二人だけではなく、あの事変の際、『可能性』としての魔法へ目覚めた者達へは、管理局のエージェントが接触し、希望によっては封印、希望によっては条件付きの知識供与……という対処となっていた。
『あれから、どう？』
『んーっと……三人は捕まえたかな？』
『四人でしょ。そんで、二人は助けたわね』
その『条件』とは、
――『現地で魔法を濫用・悪用する覚醒者たちへの初動対応』というものだった。
もちろん、唐突に目覚めた力にパニックになり、暴走する被害者の救出もそのうちに含まれる。
かつて、ジュエルシード事件の際、救出される側だった二人が、今度は手を差し伸べるようになったのだ。
魔法を知る者も、知らぬ者も……そこに垣根は無く、ただ日々を語らう。
「……」
四葉がヴィヴィオに押し出されるように、輪の中に加わっていくのを見ていたなのはは……
「先生、ちょっといい？」
……と、咲だけを、こっそりと角席に連れ出した。

「ええ。わたしも、それが一番の楽しみだったの」
咲は、なのはが変わったことに気付いていた。いつも、何かに対して気を張っていた姿はそこにはなく、ただ優しく微笑む少女がそこにいた。
そして、今日の本題はと言うと……
「……これ、わたしの友達が、くれたの」
と、秀人に渡されたものと同じ冊子を取り出し、咲へと手渡す。
「……、これは」
咲は、教育者として、その『学校』の存在は知っていた。
『無駄無駄。まっとうに全日制にも入れない、入っても堪え性が無くて逃げるような人間が、変に自分に都合のいいシステムを期待して入って、結局ワガママに不満タラタラで辞めていくだけ。運営者も、それが分かっているから高い入学金を請求するんでしょう。餌で吊ってキャッチ&リリース……いい『ビジネス』ですよ、まったく。こんなものが、『教育』であるものですか』
心無い同僚は、しかし、ある一面においては真実である言葉を述べ、否定していたが……
「私、学校に通おうと思うんだ」
……咲は、この少女が、言い出したら聞かなくて、しかし、言い出したら最後までやり遂げる、そんな女子らしからぬ根性の持ち主であることも……何か目的があるとき、その行動がより補強されるということも、知っていた。
「――――何のために？」
――何のために、学校へ行くのか。
なんとなく。将来のため。友達が行くから。わかんない。大抵、子供とはそういうものだ。
学校とは、『目的の場』ではない。『目的を見つける場』だ。カントクが、秀人を送り出したように、『可能性を広げる場』でもある。
そして、なのはは、小学４年から先、学校へ通っていなかった。彼女は、見つけたのだろう。
『神様』になったりと、ずいぶんと遠回りしたが……『福音』が、彼女

へは効果を及ぼさなかった理由が、今にして分かる。彼女の中には、既に、道が定められていたから。『人』としての時間を過ごすための、目的が。

「――――私、学校の先生になりたいの」

……咲は、少し意外そうに眼を瞬かせ……しかし、すぐに微笑んだ。

咲がそうであったように、問題児が教師になることも、そう珍しくは無い。自分と違って、てきぱきと手際のいい彼女のことだ。きっといい教師になれるだろう。

「ううん」

だが、なのはは首を横に振った。

「いつも、生徒のために、空回りするくらい、一所懸命で……優しくて、厳しくて……私は、そんな先生が大好きで……だから、私……

――――咲先生みたいな先生に、なりたいんだ」

……かつての自分。救ってくれた恩師に追いつくために、教師になった。そして今……今度は、自分の教え子が、自分の後に続くのだ。

「ええ……きっと、なれるわ」

咲は、そっと目元を拭い……笑った。

「さ、さぁて、それじゃあ、長谷川先生にも伝えなくちゃね!! うん!」

そうして、いそいそと携帯電話を取り出して、コールする。

「……咲先生も、今は『長谷川先生』なのにねぇ」

「なのにねー」

近くにやってきたヴィヴィオを、膝の上に抱き上げ……顔を見合わせて、笑うのだった。

◆・◆ ◆ ◆

シュテルが士郎を迎えに来て、少し経って。
「……はい、高町士郎さんは本日、ＡＭ１１：００に退院となりました。……え、あ、はい、少々お待ちください」
一人の看護師が、電話口で対応する。そして、内戦を接続し……
「――――はい、石田です」
ある一人の医師に。
『よう、石田。オレだよオレ』
「はい、失礼ですが、どなた、……、ぅえッ!?」
聞き返している途中で思い出し、珍妙な悲鳴を上げてしまった石田を、同僚たちが怪訝な顔で見やった。
「み、翠先生ですか……!?」
受話器の口元に手をやり、少し声を抑え、確認する。
『おうよ』
……実に軽い挨拶に、拍子抜けしそうだった。
「……その、お久しぶりです」
『でよぉ、いま秀人がそっちに居るんだけど』
「ちょっと文脈的に待ってくれます!?」
子機を持ったまま外に出ようとし、はたと気づいて携帯電話でその番号へ掛け直しつつ、駐車場へダッシュする。
「で、秀人くんがどこにいるんですって!?」
がちゃがちゃと車のキーをポケットの中に探しながら、怒鳴るように聞く。
『あー……アイツのことだから、』
「もう目の前に居ますよ」
……と、キーを取り落とした石田の目の前に。あの日のままの姿で、秀人が立っていた。
「相変わらずそそっかしいなぁ、あんたは」
と、落したキーを拾い上げ、石田に手渡す。
「あの、……秀人くん、……」
「久しぶり、石田先生」
あの日……別離したきり、二度と会えないものだと覚悟した。

石田に対する秀人の表情は、相変わらず、やや硬い。
しかし、それでも……目の前に、立っている。
「……まぁ、ここで話すのもアレだからさ、来てくれよ」
「えっ、えっ、えっ……？」
と、石田をひょいと米俵のように担ぎ上げ……
「カントクー、この人も連れて行きまーす」
「おー、何人でもいいぞ」
会社の営業ワゴン車に、そのまま乗り込んだ。そしてそのまま走り出す。
「――――ええええええええええええええええええええええええッッ!?」
……これを、世間一般では拉致という。

「おぉ、アンタお医者様なんだって!?」「え、ええ、はい。神経科に……」
「シンケーって？」「痛風とかリウマチじゃねーの？」「おお、それだそれだ！」
むさくるしい男衆の中、すっかり萎縮する石田。
「みなさん、石田先生が困っていますんで、そのへんで！」
と、ヨシオがそこへ割り込んだ。
「おぉ、わりぃわりぃ」「美香ちゃんの大恩人だもんなぁ」
「いえ、そういうわけではないのですが……」
石田からしてみたら、理由はサッパリ不明なのだ。しかし、それは謙遜として捉えられたらしく、ますます好感度が上がっていく。
「先生」
と、秀人が石田を呼んだ。
「俺、先生に怒ることはあっても、嫌いになったことは無いよ」
――――。
石田は、少し動きを止めて……氷が解けるように、微笑んだ。
秀人は……無限の慈悲を体現するような笑みで、それに応じ……

「だからもう……責任を感じて、独身を貫く必要なんて無いんだよ、先生……」

……すっげぇ失礼な暴言を、『３○さい・どくしん・しゅみ、ちょちく』の、あらゆる意味でデリケートな年代の女性にぞんざいに投げた。

「……。」

石田は、鎌倉大仏のような表情となり……

「お」

……辛うじて、一言を絞り出した。

「お？」

怪訝に聞き返す秀人（バカ）。

「大きなお世話よ、お馬鹿ーーーーーーーーーーっ!!!」

――ばちーん。

張り倒される中、秀人は、人として一つ学んだ。

――独身女性の、婚姻関係の話題は地雷である、と。

Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編　第二十五話『そしてまた、激動の日々が始まる。しかし、歩みは独りではなく』

「……アルフ、ザフィーラ。大丈夫だね……？」
「ああ、問題ない」
「平気だぞ」
　光学迷彩系技術により風景に溶け込むことのできるＢ級ロストロギア『インビジブルスーツ』を身に纏い、消音・衝撃吸収技術により無音移動が可能なＣ級ロストロギア『サイレントブーツ』を装備し、認識阻害以上に高レベルでの気配遮断を可能にするＢ級ロストロギア『ステルスジェム』を胸に提げ……無限書庫の近辺。コソコソと、人目を忍んで移動するユーノの姿があった。
「明日だけは、どうしても捕まるわけにはいかないんだ……！」
　ロストロギアの効果範囲の中で、二頭の狼が確認する。
「翻訳が４、論文が２……」
「……それに、遺跡調査が３、だ」
「無理だ……！　どう考えても、無理だ……！　何で遺跡調査に任期が有るんだよ！　急いだら見落とすだろう!!」
「それが一度も無いユーノだから、依頼が来るんじゃないの」
「信用が有るのだ。誇るがいいぞ」
「うん、僕じゃなくて館長が勝手に受けた依頼でなければね!!」
　あの館長に捕まったら、缶詰どころかコンクリ詰めにされてしまう。見た目が幼女のくせに、無限書庫発見時から姿かたちがそのまま不変という、あの妖怪変化。
「事変の際、無限書庫を持ち出す許可の対価と……」
「……Ａ～Ｓ級、多数の原典魔導書喪失の損害賠償もあるのだ」
　金額換算できるものだけで、次元航行艦が一隻、建造できてしまうのだ。事情が事情とはいえ、あの、無限書庫の付喪神であると推測される女児が、それを無条件で許す筈が無かった。

「この間は、山を挟んだ敵対部族同士の紛争解決」
山脈を一日に三往復させられた。
「その次は、互いに同一神の起源を主張し合う宗教の和睦交渉」
真相を探るために潜入した遺跡には、S級ロストロギア相当の守護者が居た。
「もー無理もー限界！　あのガキ、ぼくのことを合法的に過労死させる気まんまんじゃないか！」
何かにつけて、ユーノをいじめて楽しむ悪癖があったとはいえ……ここ最近のヤツの所業は、常軌を逸している。ユーノは、頭を抱えて叫んだ。
「有給が通らないのなら……逃げるしかないじゃないか！」
……数百年前の伝説的暗殺者の装備一色が、こんな用途のために使われていると知った学者たちは何を思うのだろう。
ドクンドクン、と緊張で脈打つ心臓を意識しながら、エントランスに差し掛かる。
『内側を向いた番兵』という、無限書庫という組織のブラックさを如実に体現する存在の目の前を、抜き足差し足忍び足で……
「「「「……ふぅ、バレずに済んだ」」」」
――プシューーーーーーーーーーー!!
……突如としてスプリンクラーのような装置から噴き出された塗料が、『インビジブルスーツ』の表面に付着し、姿を浮き彫りにした。
「……!!　バレた！」
ユーノは即座にスーツを収納した。一度でも認識されてしまえば、たとえ迷彩が発動したとしても、『居る』という認識までは誤魔化せない。
――いたぞ！　司書長だ!!
……何故かユーノを捕獲に掛かる同僚たち。猛ダッシュで遁走を

始めた。
「逃がすな！　捕まえろ!!」「館長がご立腹だぞ！」「もう始発帰りは嫌ぁ！」「朝は帰る時間じゃない！　出勤する時間帯なのよ！」「ベッドで横になって寝たい！」「週休０．２日は人間の仕事じゃない！」「早番、日勤、遅番、夜勤までのぶっ通しシフトはもう嫌よ！」
「「「「「「ヤツ（司書長）を捕まえれば有給だ！」」」」」」」
「なんちゅう条件で部下を唆してるんだあのガキはぁあああああ!!」
……本当にロクでもない理由だった。
「というか、なんで判ったんだ？」
ステルス系技術のロストロギアを、三つも併用したというのに。
不思議そうに首を傾げるアルフに、ザフィーラが答える。
「恐らくは『匂い』だろう。人感センサーやサーモグラフィーでは探知不可能。であれば、『匂い』の元でもある分子の変化を感知し、あの塗料を噴霧する仕組みになっていたのだ」
「特許取って売り込めば儲かりそうなハナシだねぇ」「それは良い考えだ。我らの夕餉がランクアップするな。……ちなみに我は、クジラのステーキを所望する」「あたしはスペアリブのブロックがいいなぁ」
「いいから早くルートを算出してくれるかな!?」
……背後から射出式投網やサスマタがビュンビュン飛んでくる中、ヒラリヒラリと見事に回避し続けるユーノだった。

◆　◆　◆　◆

ユーノが懸命の逃走を敢行している現在は、秀人たちの変化から、更に半年が過ぎていた。
結局……統括理事という席が埋まることは無く。はやては、三提督の権威と名を盾に、腰の重い上層部を（時には物理的に）椅子ごと蹴り転がしながら処理を進めた。

「時間を詰めるか、指を詰めるか……好きな方を選んでいいぞ♪」

和包丁を片手に、晴れやかな笑顔でそうのたまった。

……以後、八神はやての名は、上層部にとって恐怖の象徴となり、老害どもが自発的に働き始めるきっかけとなった。

レジアスはその後、大将に昇進……というか、『あんな恐ろしい奴の手綱を握れるのはアンタだけ』という、極めて消極的な理由から、取りまとめ役のような役職に就かされるハメになった。全会一致の信任である。

リンディもまた、その補佐という形で、携わることとなり……結局、ツートップのような扱いを受けることとなった。

そして。

機動六課隊舎。

その正面広場に、はやてと、隊員たちの姿があった。

はやては檀上に立ち、彼らを見渡す。中には、美香やシュテル達、聖王教会の面々や、果ては元ナバーズたちも、集まっていた。見届け人は、秀人となのは。レジアスとリンディ。

ここ最近、あちこちの事態収拾のため、傭兵の如く派兵され続けていた隊の面々にとっては、久々に顔を合わせる機会となっていた。機動六課が結成して、まだ三年も経過していないというのに……まるで、十年来の仲間たちのような雰囲気を醸し出していた。それだけ、短くも濃厚な時間だったということだ。

全員が静まるのを確認し……はやては、口を開いた。

「まず、貴様らを労おうと思う。此度の事件、貴様らの尽力があってこその解決だった。

――――ご苦労だった」

これにどよめく隊員たち。

「ぶ、部隊長が労った……!?」「あの部隊長が!」「あの悪鬼が……!」

「部下をホッチキスの芯くらいにしか思っていない、あの部隊長が」

「他部隊との合同演習に乱入して、全員を根絶やしにするような、あの部隊長が！」
……酷い言われようだった。はやてはそれを無視し、続ける。意外なほどに穏やかに、常識的に、まっとうに……関係者への感謝や、部隊の面々の功績について。このまま和やかに終わるか……と、誰もが思っていた。
「――――――――私は、管理局を去ることにした」
そんな特大の爆弾を投下するまでは。
「――――理由の前に……時空管理局について、話そう」
レジアスとリンディという、現時点での管理局のトップの前で、その話をしようと言う。
「今回の事件で、つくづく感じた。
絶対的な統制機関を頂き、そこがあらゆる分野をリードしていくこの世界の構造は、確かに、効率的なのかもしれない。
そのシステムが、世界を繁栄へ導いてきたことも認める。
だが、あまりに絶対的であるがゆえに、暴走した際、抑止力となりうる力が存在しないという脆さも、同時に抱えている。
今、必要とされているのは、絶対的な統制機関ではない。
――――その統制機関へ、『ＮＯ』という意思を表明できる、全く正反対の存在だ」
その為に、管理局の地位を捨てるのだとしても。
「歪みは、そこに人がいる限り、完全に無くすことは出来ない。
無理やりに正してはいけない。
しかし、それを正すことを諦めてはならない。
世界はこれから、大きな変革を迎える。
当然、その歪みを内包するままに。
既存の体系を引き継ぐだけでは、やがて、その歪みは、世界に亀裂を入れるだろう。
――――だからこそ、その歪みを、外から叩いて直すための、鉄槌

が必要なのだ」
故に、私は管理局を去り、一から……いや、ゼロから、それを構築する」
そこで、ふと……優しげな笑みを、隊員たちに向ける。
「貴様たちはこの一年、よくやってきた。その褒章を与える」
そして、全員のデバイスに、その『褒章』が提示される。第一空挺団。第一陸上機動部隊。防災部特別救助隊。本局管制室。カレドヴルフ社特別開発室。公的なものから民間まで、錚々たる絢爛な組織名が表示される。
「全てにワタリをつけておいた。選んで提出するだけで、内定だ」
はやては……機動六課を解体した後の、隊員たちの進路を確保していた。
「改めて、労おう。お前たちは、この1年でよくやってきた。もう、お前たちを、はみ出し者と、表だって揶揄する者はいないだろう。だから……」
――――達者でやれ。そう言いかけたはやての演説を遮る声が上がった。
「――――オレ、部隊長に着いていきます!!」
その、コリンの声に呼応するかのように。
「水臭いッスよ、部隊長!!」
「そんな面白そうなこと、一人でやろうなんてズルいです!!」
「そうだそうだ!」
「わたしも連れてけー!」
「ここまでひっぱってきておいて無責任だぞー!!」
「責任とってくださぁい!」
次々と、次々と……やがて、部隊全体を揺るがす大合唱へ。
「――――……え、嘘でしょう」
はやては、心底意外そうだった。

――実は、本人も気づいていないことだが。
他人の心情を察することには長けているはやては……自身へ向けられる好意というものへは、まったく想像が及ばないという欠点があった。
「えっ、……えっ……ホントに？　盛大なドッキリとかじゃなくて？」
隣のリーゼと……美香やシュテル、フィアットにまで目で確認し……茫然となる。
かつては落ちこぼれとして左遷されてきた隊員たち。
だが……彼らは今、自分の意志で、はやてと共に、苦難の道を歩こうという。
「……す、酔狂なやつらめ……！」
はやては、嬉しさをできるだけ隠す……とはいえ、隊員たちにはもう、はやての性格はバレているので、隠せていなかった。
「――よし、貴様らの気持ちはよぉく分かった！」
一緒に行こう！　……などと、言うわけがないのも、皆知っていた。
「――だが、ここからは管理局の庇護もなく、多大な困難が待ち受けていることだろう！　そこへ、弱っちい足手まといを連れて行く余裕は無い！
――私と来たいと言うのなら……!!」
各々、何故かやる気満々で武装を構える。
はやても、気付けばツインユニゾンン状態で、やる気満々。
あの日の再現……だが、門出を祝うのに、これほどふさわしい催しは無いだろう。
機動六課らしい……破天荒で、無茶苦茶な、追い出しだ。
「――全員、かかって来いやぁ!!」
――!!!

――――――

――――――――お前がパパになるんだよ！

◆・◆　◆　◆

あのお馬鹿な乱痴気騒ぎから、数週間が経過していた。

「えー……湾岸第二区画ですが、もともと埋立地だったこともあり、地盤が『やや』弱かったのでしょう！

つまり必然！　仕方なかった！　うん、そういうことで、次は頑強に作っていく方向で纏めていきましょう！」

……八神はやての圧力により過重労働を強いられている本局勤め局員、グリフィス・ロウランは、顔面蒼白を通り越し、晴れ晴れとした笑顔でそう報告を締めくくった。

「ンな報告があるかぁ!!」

「誰が補修すると思ってンだ!!」

当然、環境整備課や資材課からは非難轟轟である。

「えぇとですねぇ！　そもそも、あの埋立地はＡ〜ＳＳランク魔導師数百名がリミッター無しにバカスカドカスカと大威力砲撃やら空間殲滅攻撃やら斬艦刀やら震動破砕波動だのを振り回すことは想定していないんです！

ええ、ありえないでしょう!?」

「予算どっから出てくんだ!?　市街地のメタクソんなったインフラ復旧でいっぱいいっぱいだってのに！」

「ですから、クレーター状に陥没した爆心地の所為で海流が変わって、都市部本土の基礎が浸されているので、こちらを急務で復旧を……!!」

グリフィスは、辞典のように分厚い資料を一枚ずつ読み上げていくのだが……

――すこん。びしゃっ。

……投げつけられた紙コップの中身（お～〇お茶）が資料を水浸しにした瞬間。

――ぶっちん。

「穴埋めンのがおどれらの仕事だろがぁあああああああ！　黙って穴埋めろやオラァァァァァァ!!!」「上等だこの若造がぁあああああ!!」「人柱にしちゃるけんガキがぁあああ!!!」「やってみろやキャリア組ナメてんじゃねェぞ一兵卒てめェエエエエエエエエ！」「一兵卒軽んじてんなよ頭でっかちのボンボン風情がぁあああああああ!!」

――どがーん

――がしゃーん

――ぱりーん

――ぶしゃー

長机が飛び交い椅子が転がり、資料の紙吹雪と血飛沫が舞う。

「失礼しま……って、きゃあああああ!?　何やってるんですか貴方たちーーー!?」

入室してきたグリフィスの同僚、ルキノは、その惨状に悲鳴を上げながらも果敢に、胸倉を掴み合いながら殴りあう男たちの間に割って入っていく。

「ひぃ、はぁ……ほ、報告を、しても、良いでしょうか……」

……直接的な被害こそ無かったものの、もみくちゃにされたルキノは疲労困憊の中、どうにか追加の報告を上げる。

「爆心地ですが、埋立地で海辺であるにも関わらず、ブナ系ではありますが未知の広葉樹林が広範囲に形成されています！

根ががっちりと頑強に周囲の地盤を固めており、また、何故かこの樹木は海水でも育つ新種ということで、機械的な補修は不要と判断されました!!」
「「「「「「「……は？　マジで？」」」」」」」
「……マジです」

突如として出現した謎の広葉樹林は、それはそれでまた別の問題ともなったのだが……
――誰も困ってないし、緑増えるてるし無害だし、別に良くね？
……という雰囲気により、アバウトに忘れられていった。

「リハビリとしちゃまずまずじゃないかなー？　ねぇゼストすごいすごいー？　結界と召喚の合わせ技なんだよー」
「やり過ぎだ……」

◆・◆　◆　◆

ある昼下がり。
――ぴんぽーん。
ＤＶＤ鑑賞を満喫していたところに、覚えのないインターホンが鳴った。……コンプリートセレクションの５５５ドライバーはもう届いてるし、もう届くものは無いと思ったんだけど。
「はいはーい」
がちゃっ、とドアを開けたそこには、意外な来客の姿があった。
春先らしい、薄緑の清楚な印象のワンピース。
そういった、いわゆる女性らしい服装とは縁がなさそうだと思っていた奴が、意外なほどの着こなしをしていて驚いた。胸元の剣十字も、ファッションの一部のように調和している。

「……はやて？」
弱い足腰を支える杖を突きながら、それでも傲岸不遜に胸を張り、八神はやてが立っていた。
「邪魔するよ」
「おう、入れ入れ……っていうか、何だよインターホンなんか鳴らして」
いつもならずかずかと踏み入ってくるか、機嫌が悪ければ強襲してくる奴が。
「そうしたい気分だったのよ」
と言い、台所にスーパーの買い物袋を置く。部屋を見回し……
「ねぇ、なのはは？」
「桃子んとこ。なんか、相談事があるんだと」
「そう……」
俺に相談できない……というか、なのはの中の順番では、俺はその後、ということになっているらしい。まず桃子に一番に行くような用事、何かあったかな。
「ヴィヴィオは？」
「なのはが話してる間、四葉と買い物に行くって」
「そう……で、あんたは家で一人でなにしてるの」
――ぐさっ。
『おとうさんは、家にいてください！』
『ごめんなさいね、秀人さん……でも、お姉ちゃんからも頼まれているので……』
……そう言って、仲良く手を繋いで出て行った二人の姿を思い出して自爆ダメージを受ける俺。
「俺だって一緒に行きたかったよ……」
ハブられてるみたいで超寂しい……
こんな日に限って、アイのやつはマリエルんとこ行っちゃってるし……
「マジ凹みするんじゃないわよ……どーせメシもまだでしょう。作ってあげる」

はやては呆れ顔で、なのは愛用のエプロンを着ける。
「ちっさ……」
身長はむしろ、お前の方が低いだろうに。
「胸よ。カップは私の方が二つ上なんだから」
「……」
見ていないぞ。年齢一桁から知ってる女子の胸なんか凝視したら、ただのロリコンじゃないか。
「年齢一桁から知ってる子を嫁にした奴が何言ってるのよ」
言葉も出ません。
「ウエストは互角……ふっ、私の勝ちね」
何を張り合ってるんだお前は……つかお前、料理できるようになったのか？　いつもリーゼ任せにしてたようなイメージしか無いけど。
「……練習『は』してたわよ」
『は』って何だ、『は』って。
しかし俺の不安に反して、はやては危なげなく調理を終えた。そこまで手の込んだ料理では無かったが、煮魚はちゃんと芯まで煮えていて、ダシや調味料の配分も申し分無い。
その出来上がった煮魚を鉢に移し、ちゃぶ台へ運ぶ途中で……
「よい、しょっ、……っ!?」
「うぉ、あっぶねぇ！」
足元がぐらついて、危くスッ転ぶところだった！
しかし、片手にはやての身体、片手に煮魚の鉢を持ってると……ええい、こうなったらいっそ倒れてしまえ。
「そぉい！」
向きに逆らわず、鉢をちゃぶ台へソフトランディング！　俺が仰向けに倒れれば、自然と……
――どさ。
「……」
……ふぅ。危なかった。
「おい、はやて……？」
俺の胸の上に倒れ込んだはやては……ぎゅっと、俺の上着を掴

んだまま、俯いている。
「……起こしてよ」
「……まぁいいけど」
変なところで甘えてくる奴だ。相変わらず軽いな、こいつ……
もぐもぐと、はやての作った煮魚を食べている。普通に食える……どころか、美味い。
「何だよ、作り慣れてるじゃないか」
変な謙遜しやがって。
「うっさい。でも、『練習』しかして来なかったのは本当」
そして、僅かに頬を染めながら、言った。
「誰かに食べさせるのは、これが初めて」
洗い物を終わらせ、レンタルしていたＤＶＤを見始める……んだが。
「ちょっと、動かないでよ」
「無茶言うな」
……俺の膝を枕に、だらしなく横になり小説を読み始めるはやて。
ま、いっか。たまには、ゴロゴロしてるのも良い。
……
……
……しかし、変だな。
「……？」
ＤＶＤはもう3枚目に入っているのに、時計の進みがいやに遅い。電池切れか？
……いや、昼時から始めたから、もう夕方近く。日が暮れ始めていても、おかしくないんだが……
「おいはやて。ちょっとどけ、……おい」
はやては、俺の膝の上に寝そべるように……寝ているわけではなさそうだが、起きない。
「……」
す、っと、思ったよりは粘らずに、俺の膝の上からどいた。

あんまりにも長時間そうしていたからか、少し膝がしびれている。
「よい、しょっと」
？　……なんだか、妙に体が重い。
「時計は……あれ、なんだこれ」
デジタル表記が、変に文字化けしたように滅茶苦茶に点滅している。壊れたか……
「秀人」
……背中に、はやてがくっついてきた。
「私ね、もうちゃんと……杖はいるけど、自分で歩けるんだよ」
……心音が伝わってくる。どくどく、どくどく、と。平常ではない早鐘を打っていることが、分かる。
「リハビリね、痛かったんだ。ただの1メートル歩くだけで、泣きそうになるくらい。手すりを掴む手が、擦り切れて……足が、痛みながら痙攣して……でも、頑張ったんだ」
……背中に、両手が触れる。
「ずっとずっと、私のこと、心配してくれて……思いやってくれて……助けてくれた、秀人に……見てもらいたかったから、頑張ったんだ、私」
……その手が、俺の身体の前に、回されて……組まれる。
「――――秀人が、好きだから」
答えなければならない。真摯な言葉を伝えてくれたはやてに。
それが、たとえ……はやての望みとは違っても。誠実に、真摯に……
「ごめん」
――――彼女を傷つける言葉でも。
はやては……俺を好いている。
庇護されたことからの幼い憧れでも、勘違いの恋愛感情でもなく。
「……こんなに好きなのに、応えてくれないの？　ずっ

とずっと、秀人だけを見てたのに」
「……ああ、それでも、ごめん」
フェイトにキスされた時も、揺らがなかったわけじゃ無い。ここまで一途に真剣に想われて、嬉しくない男が居るものか。
――それでも俺は、なのはを選んだ。
だから……どれだけ大事でも、大切でも、俺はフェイトを、はやてを、選ぶことは出来ない。
「――そう」
すっ、と、温もりが離れていく。
「……ごめん」
「――いいわ。……この気持ちは、忘れてあげる」
「……」
「……気にしないでいいのよ」
「はやて、……」
振り返り、少しでも言葉を尽くそうと、
「だって、」
――？
振り向いたはやては……どこまでも昏い、満面の笑みを、浮かべていた。
「――ここまで全部、計算通りなんだから」
へ？
と、思う間もなく。
――どさっ。
「あ、れ……？」
……まるで、意識が肉体と乖離したような、奇妙な感覚。自分が倒れ込んだということも分かるのに、立ち上がろうにも、手足が言うことを全く聞かない。
「おい……どういう、つもりだ……？」
いったい、どういう理屈だ。俺の身体に、毒や薬物は、ましてや外部からの操作魔法なんて、効いたとしてもこんなに長引く筈が無い。
――のしっ……と、ほんのわずかな重みが、俺の上に乗った。

「はやて……？」
　はやては……長い髪の向こうで、ぼそぼそと話し始めた。
「……秀人。お前、夜は『寝る』よな」
「お前……何を言って、」
「疲れたら『休む』よな」
「……まさか」
「お前の肉体は、外部からの干渉には強くとも……人体ゆえの恒常性は避けられない」
　はやてが手にしていた文庫本サイズの本……あれは、至天の書だ。
　読み進めるフリをして……俺に何重もの魔法を……今日一日という長時間にわたって重ね掛けしていたんだ……！
「使ったのは……睡眠欲求を極限にまで高める魔法。そして、不眠の呪いよ。あんたは今、二週間以上も眠っていないのと同じ状態。すると、どうなるか分かる……？　体は無理やりにでも休息を取ろうとする。意識が保てていても、肉体が勝手に休眠するのよ」
　う、動けん……!!　ピクリとも……!!
「秀人が私を選ばないことは、あの日……テンタトレスと私を、助けてくれた時から分かっていた。あんたの傍らには、いつだってなのはが居た。あんたの隣は、いつだってなのはの特等席だった。妬ましかった。羨ましかった。譲ってほしかった。奪い取ってやりたかった。
　でも……出来なかった。
　だって、私は……なのはのことも、大事になっちゃっていたから。あの子を泣かせていいのは私だけ。あの子を虐めていいのは私だけ。あの子の一番の親友は、フェイトでも、望でも、アリサでも、すずかでも、カレンでもない。この私……八神はやてなのだから。
　だから……私の親友の『一番』を奪ったアンタを、許せないとも思っているわ」
「俺をどうするつもりなんだ……？」
　まさか、殺そうとするなんてことは無いだろうし、有っても無駄だ。
「セックスするのよ」

――――――

ほう）を受けるという現状からの生存本能か、俺の俺自身がたいへん正直なことになっていた！　女体の神秘とは言うが、男体の神秘だってあるんだぞ!!

ひんやりとした手が、それに触れ……

「……良い身体してるわね、秀人」

全身を、ぺたぺたとまさぐり始めた。

「や、やめろ、……やめるんだ！　まだ……まだ間に合う!!　思い直せ!!　こんなこと、誰も幸せにならんぞ！」

はやては、俺の身体をまさぐる手をピタリと止め……よ、よし、聞いてくれたか。

「わたし今日、危険日なの。この日に備えて排卵誘発剤もキメてるから、絶対デキるわ」

いやぁあああああ地雷女ってレベルじゃねえええええええええええ!!

「チッ……！　未通子（おぼこ）でもあるまいしガタガタ騒ぐんじゃねぇ!!」

台詞が男女逆だーーーー!!

「きゃあー！　いやぁー！　助けてパパぁー!!」

パニックに陥った俺の脳裏に浮かぶ父親は……

――ぐっ。

唯一動く右腕で下品なサムズアップしてんじゃねぇえええ!!

神様に返品してやろうかこのダメオヤジいいいいいいいい!!

「――お前がパパになるんだよ!!」

ぐり、と、先端から徐々に、ひんやりした外気とは違う温もりに包まれていく。覚えのある感触……なのは、カレン、四葉、そんな面々の顔が浮かんでは消え……そして、全てがそれに支配された瞬間……

――終わった。

……諦観と後悔と罪悪感と本能がごちゃまぜになった感情が、全身を支配した。

「う、ううぅ……なのは……ごめん……」

「く、くくくくく……!! くはははははは!! あーっはっはっはっは!!」

俺の上に跨ったはやてが、凄惨な笑みを浮かべる。

「やった……やってやったぞ!!

もう言い逃れも誤魔化しも出来ない！

もう後戻りできない！ 姦通してやったぁ！ あーっはっはっはっはっはっはっはっは!!!」

喜悦を隠そうともしないはやて。そして……笑みを浮かべているというのに、その頬には。

（――ほんっと、）

「自分の欲望に正直で、」

「え」

ぐい、と。その華奢な腕を掴み、重心を移動させる。膝を立て、腰を捻り……

――どさ。

立ち位置を、俺が、はやてを組み敷いているように逆転させる。

「……嘘が下手なやつだな、お前は」

「な……え……うそ……？」

掴まれた手首を振り払おうとする微かな抵抗を、抑え込む。

「どうして……！」

「確かに、お前の見立ては正しい。俺は疲れるし、眠りもする。疲労を増進させるっつーアイデアは、悪くは無かった」

「じゃ、じゃあ、どこに綻びが……！」

「不眠の呪い」

あ、と、はやてが合点がいったように声を上げる。

「……呪いは瞬間的な魔法と比べて、長時間持続する。併用するには、

いい手段だ」
けれど……呪いは、いつか消えるんだ。永遠に持続する呪いは、ありはしない。
「俺の蒼炎の治癒力は、お前の知っている俺よりも、いくらか強化されている。その差を見誤ったお前のミスだ」
……まぁ、不眠でなくなったぶん、死ぬほど眠いが。
「……とにかく、もう終わりにするぞ」
異界化の結界魔法を解呪して、クロノにでも念話のワン切りをすれば、すっ飛んでくるだろう。
「泣きながら笑うなよ。この嘘つきめ」
「……！　な、」
大願を成就したと喜んでいる奴が……どうして、そんなに悲しそうな顔で、ぼろぼろと泣くんだよ。なのはへの裏切りを、心のどこかで嫌がっていたんだろうに。
「……間違いだった、っつーことで、この一件は終わりだ」
まだ浸っていたいと吠える本能をギリギリなんとか理性で抑え込み、……
「いや、だ……！」
腕を制圧されているはやてが……あの、気の強く、傲岸不遜で、神に喧嘩を売るような無鉄砲が。縋るような目で、俺を見上げていた。
「いやだ……いやだよ、秀人……！　いかないで……私から、離れていかないで……！」
「……、」
……
……
……
……
……
――――。
「……、はぁ～～～……」

……参った。……どうやら俺、そこまで嫌じゃないみたいだ。
曲がりなりにも、ずっと……とはいかないまでも、長い間一緒に居た子だ。好きか嫌いかで言えば、もちろん好きだ。どこまでも自分に正直な潔さも、こうと決めたら突き進む行動力も、人の話を聞いても聞き入れようとはしない頑固さも、目的のためなら手段を選ばない苛烈さも、手段のためなら目的を選ばないぶっ飛び具合も。……その全てが、臆病な本音を覆い隠すための鎧であるところも。
そのはやてが。
臆病な本音を、弱音を、プライドをかなぐり捨ててまで晒け出して、俺ひとりを得ようと必死になっている。
……。うん、よし。覚悟完了。許せワイフ。
「はやて」
呼びかけると、はやては、真っ赤になった眼で見上げてきた。
「お前、俺となのはのこと、大嫌いって言ったよな」
こくん、と殊勝に頷く。言い逃れをしないところも、こいつのいいところだ。
だからあれは、偽りの無い本音なのだろう。惚れた男と絆を結んだ親友と、その両方に置いて行かれた気分になってしまったのも。
――迷子の子供なんだ、今のはやては。
そりゃあもう、いくら見つけてやっても、盛大に拗ねているに決まっている。
なら、どうする？　……決まっている。
「俺も、なのはも、……はやてのことが大好きだぞ」
力いっぱい、抱きしめてやればいい。
「……!!」
かぁっ、と、はやての頬が赤らんだ。
「う、うるさい、うるさい、うるさいっ!!　お前たちなんか、大きら、……んー!?」
黙るが良い。
「……」
唇を意識し、ぽーっと、夢見心地に、恍惚とした表情する。

「はやて」
「……！」
何かを予感してか、ビクっと震える。けど、もう遅い。というか一から十までお前が悪い自業自得だ思い知らせちゃる。
「――――覚悟しろ。」
「は……、」
はやては、ぎゅっと目を瞑り……
「はい……!!」
今度こそ、心からの笑みを浮かべた。

◆・◆　◆　◆

……いったい、どれほどの時間が経ったのか。
異界化とはいえ、そこまで時間感覚を延長できるわけでは無いだろう。
（……うむ。）
「……すぅ、すぅ……」
……全裸にシーツというあられもない格好で、幸せそうに寝息を立てるはやてを見下ろしながら、俺は……
「ヤバいヤバいヤバい……絶対怒るというか殺される……マジに三回くらい殺される……！　死なないのをいいことに殺され続ける……!!」
来るであろう未来予想図にガタガタと本気で震えていた。
「……ふにゃ」
……この野郎、幸せそうに寝コケやがって。
えぇと……我が家の面々は除外だ。絶対バレる。クロノ……駄目だあいつ超朴念仁のド天然だ。
「むにゃ……お前が言うな……」
そこ、うるさい。
言い訳をするのは不誠実だ……だが凌遅刑は嫌だ……
「ん……ふぁあああ……!!」
起きてきたか共犯者よ。

「……ふへ、へへへへへ……」
だらしねぇ顔……まぁ、幸せそうだし……って、良くないわ。
「……」
「……」
ふっ、と、どちらかともなく笑い出す。
妙に照れくさいやら、こそばゆいやら……笑ってしまう。
和やかな空気が流れ、

――――――――ギコンッ!!

「「!?」」
一瞬にして消えた。
――――ヴゥウウウウン……!!
……どこぞのスター○ォーズのライトセー○―の如く光り輝く魔力を纏った、見覚えのありすぎる日本刀が、異界の結界を突き破り、ドアを深々と貫いていた。
「……」「……」
……いや、突然の事態になると人間って動作を停止するよね。
――――ギコギコギコギコ!!
……異界の扉を、缶切りか何かのようにこじ開ける。そして、円形に切れ込みが入れられた扉に、
――――ずどがめきゃごしゃ!
凄まじくバイオレンスな破壊音と共に、プレス機かと見紛うばかりにくっきりと拳型の出っ張りが出来ていく。そして。

――――ドガゴォンッ!!　　どんがらがっしゃん。

どがごぉん、は、くり抜かれた扉が吹っ飛んだ音。どんがらがしゃん、は、それが俺とはやての間をギロチンのようにすっ飛んで背後の壁に突き刺さった音だ。
――――ヴオオオオン……!!

「……
ただいま（二人とも殺す）」
桜色の羅刹が現臨していらっしゃる。
リボル○インを構えたＲＸさんと対峙したクライ○ス怪人ってこんな気分なんだろうか。うん、そう。このハッキリわかる絶望感。一欠。
『マスター。こいつ去勢しましょう』
「それもありだね」
やべぇ本気だ。
「……四葉には、少し帰りを遅くするように言っておいたから……」
ぶぉおおん、ぶぉおおん、と、リボルケ○ンを揺らしながら、ひたひたと歩を進める。
――キィイインッ!!
「……！」
すわ輪切りの刑か、と身構えたが……そのどれとも違った。
「ちょっとそこで反省していなさい」
――ばこん。
と、俺を囲む空間が、綺麗に切り取られて。
「……
あーーー

ことも分かってた」
……。
「……だから、このタイミングで実行に移してくることも、知ってた」
「……!!」
知っていても見逃されていたと知ったはやてが、怒りを滲ませる。
「――――気は済んだ？」
……それ以上の怒りのオーラに、気圧されるように口を噤んだ。
「……まぁ、少しだけ腹は立つけど、はやてのことも大事だし」
「……なら、秀人を頂戴。私には、あいつが必要なんだ……」
なのはは、んー……と、顎に指をやり、ほんのわずかに思考した。そして。
「――――いいよ？」
は、と。はやてにとって、全く予想もできない答えが返ってきて、言葉を失った。
「別に、うちの人が本気でそれを望んでいるなら、それでも良いと思ってるよ。たまには他の子に目移りしちゃう時だって有るだろうし。永遠に一人しか見ていないなんて、それこそ変だし」
でも私はその変の部類に入るのよねー……と、一人で勝手に納得している。
そして……決定的に定まってしまった格の違いに茫然とするはやてに、なのはは。
「秀人さんが誰を抱こうが、誰と寝ようが……
――――最後に私の隣に居れば、それでいいのよ」
……はやては、己の敗北を悟った。
誰を選ぶとか、選ばない、ではない。そういった次元をとうに飛び越えて、二人は共に在るのだ。一心同体とも、比翼の翼とも違う。そんな表面上の言葉など届かない、遥か深淵なる領域で、二人は結ばれているのだ。

「……まぁ、怒りもすれば折檻もするけど」
今まさに、異次元へボッシュートされていった己が伴侶に思いを巡らせる。まぁいいや頑丈だし、と結論付けて終わった。
そして。
「ヴィヴィオに見せるには毒だから、さっさと片付けなさい」
「……うん」
二重の意味で足腰の立たないはやてに、服を着せていくのだった。

「お母さん、ただいまー！」「ただいま、お姉ちゃん」
「……おう、お前らか。おかえり」
少しして。帰宅した四葉とヴィヴィオを、珍しくはやてが出迎えた。
「？　……ぶたいちょー？　どうしたの？」
「……いや、ちょっとな。……いま、お前のかーちゃんが飯作ってくれてるぞ」
「やった！　ごはんは家で食べようって、ママとはなしてたんだ！」
四葉は。なのはの後ろ姿と。はやての変な態度と。外に干されている寝具の、状況証拠のカタマリを見やり。
「……ふっ」
……勝ち誇ったちょっとムカつく顔をしていた。
『どうだ、お姉ちゃんの勝ちだ！』と言わんばかりである。
「……」
ぶすぅー、と何も言えないはやてだった。
「はいみんな、ごはんよー」
並べられていく食器に、ヴィヴィオが首を傾げる。
「ねぇお母さん、お父さんの分は？」
「ああ、お父さんはいいの。ちょっと帰りが遅くなるって言ってたから」
異次元に容赦なく放り出しておいて『ちょっと遅くなる』で済ませてしまうあたり、なのはも大概である。
「……つか、桃子に用事って何だったんだよ」

肉肉野菜肉肉肉、とヴィヴィオも呆れ顔の食べ方をするはやてを前に、なのはは（表面上は）穏やかに答える。
「……うーん……それが……」
煮え切らない態度だ。四葉を見て、ヴィヴィオを見て。

「……二か月だって」

ぱりん、と。
秀人の茶碗が割れた。

◆・◆　◆　◆

とある異次元。

「あぎゃあーーー

れながら、光年の距離を逃げ惑う秀人だった。

# 無限の未来へ

――ごぅん、ごぅん、ごぅん……

……大仰な駆動音と共に、その装置はあからさまに駆動していた。別に光に敏感な薬剤や機材を置いているわけでも無いというのに、何故か無意味に暗くされた室内で、何故か無意味にブラウン管のモニターを複数個装着した、その無意味のカタマリのような装置を前に。

「く……クックックックック……!!　来る……！　来るぞぉ……!!」

元・狂気の科学者こと現・無害な科学者……ジェイル・スカリエッティと。

「フフ……フフフフフ……いよいよ……いよいよだ……!!」

元・闇の騎士にして現・肉食系騎士……シグナムが。悪童っぽいというか、妙に芝居がかった言葉や動作で、その無意味装置の解放を待ち詫びていた。

「――――そこのバカ二人。いい加減になさい」

呆れたため息と共に、そんな言葉が外野から掛けられる。

「……なんだよ、ノリ悪いなー……プレシア」

外野ことジェイルの妻、プレシアは、返事も返さずに作業へと戻る。反応が鈍いと見るや、ジェイルは渋々と言った様子で、大人しく自分の作業台に戻った。シグナムは素知らぬ顔で、壁際へ楚々と移動する。

「……で、機材そのものはマリエルとあなたに任せたのだけれど……もうちょっとどうにかならなかったのかしら、コレ。少し目が痛いわ。しかも、モニターが複数だというのに、表示されてる画面が全て同じなのだけれど」

「様式美ってヤツだよ。天丼も繰り返せば伝統だ」

マリエルは、あれで結構付き合いとノリのいい奴なのだ。兄の意見要望にバッチリ応えた外装を拵えてくれていた。

「いや……だって、ロマンだろ？　巨大な装置に、旧式っぽいコンソール……たくさんのモニターが、薄暗い部屋を照らしてさぁ。

……」
　と言いながらも、プレシアが目をしぱしぱさせているのを見るやあっさりと趣旨替えして通常の照明のスイッチを入れる。
「ホラ、お前が悪の女幹部みたいなエロい衣装着てたようなモンで、って、いでででで！」
　……めりめりと耳朶を引きちぎらんばかりに引っ張られ、たまらず悲鳴を上げるジェイルに、プレシアは真っ赤な顔で言い訳のようなものを言い募った。
「あ、あの時はどうにかしてたのよ……!!　いまさら人の過去を、それもよりにもよって暗黒期のことを……!!　この、……このデリカシーゼロ夫は……!!　あなただって、一時期はカード型デバイスに凝りに凝って研究室の予算を使い込んで、そのくせ出来上がったのが失敗作で……誰が室長に頭を下げたのかと……!!」
「そ、その件はスマンかった！　だから、もう耳が、耳がぁあ……!!」
「あなたのアイデアノート、局への司法取引ついでに引き渡したらどうかしら!?」
　ギクゥッ、と、恐怖と驚愕に顔を引きつらせるジェイル。
「なっ……なぜ、……っふ。残念だったな。アレは既に焼却処分して」
「アレはダミーよ。本物はわたしの手の中にあるわ。……ええっと、『世界に普遍的に存在する自然エネルギーは、いわゆる神格を持つ一個の存在に凝固し、それは神話の『幻獣』として』」
「アィエエエエエエエエエエエエ黒歴史ノート朗読会ぃいいい

伸を噛み殺すシグナムが、ちょいちょい、と表示される画面を指さしている。
「おい、ご両人。終わったぞ」
「あら、そう。……終わったわよ、あなた」
プレシアは、ひとしきりジェイルを虐げた後に作業を完了させていた。
「……おう、恐ろしき我が妻よ」
……精神に瀕死のダメージを負ったジェイルが、一時的に大人しくなりよろよろと装置を開封する。これでいて、一分もすれば都合の悪い記憶を忘却の彼方にブン投げて立ち直るのだから厄介である。一生大人しくしていれば良いのに。
――――バシュウッ……!!
……無意味にモクモクと焚かれるスチームが溢れだす。果たして、このクソ大仰な無意味装置の真の目的とは。
「お、終わった……のか……？」
「うぅ～……気持ち悪いッス……頭ぐわんぐわんするッス……」
貫頭衣……いや、普通のTシャツのサイズが余りすぎてダボダボになっている状態の、少女というか、童女というか、むしろ幼女が、実にダルそうに歩み出てきた。
「うむ……」
シグナムが顎に手をやり、しげしげと二人の幼女を眺める。
「んー……？　あれ、シグナム……？」
「なんか、でっかく……ダークエボルバーでも使ったッスか？」
「微妙に古いなそれ」
シグナムは無言で、壁際……丁度、夜間で鏡のように反射する窓ガラスの方へ、若干屈まなければ届かないほどに低い二人の肩に手を置き、くるっと向ける。
「おお、ガキんちょがいるな」
「そうッスね。でも、どっか見覚えがあるような」
「そう、この、どことなく抜けていそうな……」
「そう、あの、どこか詰めの甘そうな顔の……」

……そして、完全に動きが同期していることを認識して、あまりにも的確な自己評価まで出せたことで。
「「――――――――――――えええええええええええええええええええーーーーーーーっっっっ!!?」」
……幼女こと、セインとウェンディが、子供特有の高い声で驚愕の叫びを上げた。
――――。
「つまり、お前たちの肉体は、戦闘用に急速に成長させられたもので、自然なものではなかった。もちろん、制式機のボディにこれといった不都合は無いが……」
とんとん、と、二人のＩＤカード、その年齢の数値を指し示す。
――８。
――７。
「あんなうすらデカい女児がいるか」
年齢として、自然に生育した肉体に『戻した』ということらしかった。
「どういう技術だよ」「若返りって、人類の夢じゃないッスか」
当然の疑問を抱く二人に、ジェイルはそっぽを向いてはぐらかした。
「あー……おまえらは知らんでもいい」
「……」
だが、この技術は……セイン、ウェンディ……その他の戦闘機人たちのオリジナル。ジェイルの妹たちのために開発し、結局は間に合わなかったものだということを、プレシアは知っていた。
摂理に反する技術だ。だが、ジェイルはそれを二人に施した。
「ガキはガキらしく黙ってガキガキしてりゃ良いんだよ。変な勘繰りすんな」
「むー……」

「なんか微妙な気分ッス……」
　もともと、さほど倫理面での教育を施されていなかった二人。あくまで活動用の道具としてしか肉体を考えていなかった二人だ。頓着が無いのだろうか、それが逆にすんなりとこの現象を受け入れる素地となっていた。
「あとな、これ新しいＩＤカード」
　ぽん、とそっけなく手渡されたそれには、現在の年齢相応の姿を映した写真と、見慣れぬ文字列があった。
「？　……何て読むんだ、これ」
「管理外世界で似たような文字あったッスね」
「名前だ」
「名前？」
　そろって首を傾げる仲の良い二人に、シグナムが説明をしてやる。
「セイン、ウェンディ……これは、製造番号を現すコードネームのようなものだ。呼称として不便は無いのだろうが、娑婆で生きるには面倒が多いからな。オレが付けてやった。読みは……」
「――――葉月（はづき）」
「――――雪月（ゆづき）」
　しげしげと眺める二人に、シグナムが、いつになく優しげな顔を向けていたが……身長差が開きすぎて、良く見えてはいないようだった。
（（（でも、何で管理外世界の文字で……？　））））
　また首を傾げる二人。
「そろそろか」
　時計を見て呟く、その少しあと。
　――がちゃっ
　ドアが開き、長い一房の髪の毛を背中に流した少女が入ってくる。
「ふたりとも、ひさしぶりー」

その、あけすけな笑顔。
「あー……」「分かる、分かるッス」
……状況から察した。
「――――ディエチあらため、小春(こはる)だよっ！」
がばっ、と抱き着いてくる小春を、二人が歓迎するように抱き留める。
「ねぇねぇ、どう!? 新しいからだ！ ……あうっ」
……その首根っこを、ネコでも持つように摘み上げる手。
「慌て過ぎだ。いきなり走り出してビックリするだろうが」
「う～……いいじゃん、過保護だなぁ」
身元引受人兼・保護者兼・師匠のヴァイスは、すっかり身内を扱う動作で下してやった。
「ねぇねぇねぇ、これ見てこれ！ ヴァイスがくれたんだ！ わたしの新しいぶき!! いいでしょ!!」
「うわ、あっぶねー！」「一連の流れ的に暴発する未来がありありと見えるッス!!」
……途端、注意をすっかり忘れたようにマスケット銃のようなものを両手に姉へと向かってダッシュする小春に、ヴァイスはため息をつくしかなかった。まるでというか、まんま落ち着きのない女児である、
ひとしきり（主に小春による）騒ぎが収まると、場を代表して、最も良識のある大人としてプレシアが三姉妹に向かって説明を始めた。
「あなたたちの肉体をそうしたのは、ただ戻したかったから、だけじゃないのよ」
そして、今となっては珍しい紙の資料を取り出す。日本語だが、しっかり隣にミッド公用語でルビが手書きで振ってある。
「新区・インターナショナルスクール開校のお知らせ」
「初等部から、高等部相当の児童の受け入れ開始」
「学食、児童は無料……」そこは別にいい。
「つまり、あたしらココに通うの？」
頷くプレシアに、当然、疑問の視線が集まる。

「――――お前たちには、オレの仕事の一部を任せる。そう言ったのは、憶えているな？」
シグナムの問いかけに、こくん、と頷く二人。小春も、ヴァイスの視線に頷きを返している。
「新たに観測された世界、そこが、管理外世界との交流の出島になるという話は聞いたことがあるだろう？　だが、大人だけでは結局、政治やビジネスになってしまい、真の意味での交流は難しい。下手をすれば、争いの火種となってしまう。
……そこで、『学校』だ。
子供たちがそこで過ごし、そこで育ち、やがて大人になり……彼らが、真に『交流』を始めるための学校を造る。未来は、未来を生きる子供たちが作っていく。そういう試みだ」
「通う……だけッスか？」
「いや」
次の頁には、こちらはシグナムが事前に纏めたであろうピックアップリストが添えられていた。
「……どっかで、聞いたことある名前ばっかりだ」
「それはそうだろう。古代ベルカの王族、その直系だ」
その子息息女たちも、一堂に会するのだという。王族直系。当然、その中には。
「「「「吾妻・ヴィヴィオ」」」」
後ろめたさが勝る名前が、そこに在った。
「葉月、雪月。お前たちに与える最初の任務だ」
ちゃりっ……と、銀製のネックレスを二人の首に掛ける。
「――――『ヴィヴィオの助けになってやれ』」
漠然とした任務内容。だが……
「――――任務」
「――――了解ッス!!」
二人は、それを受諾した。

「わ、わたしも……!!」
仲間外れにされたと思ったのか、少しふくれっ面で小春が名乗りを上げようとして、ヴァイスに止められる。恨めしそうに見上げる小春に、ヴァイスが言う。
「
――五香。
――七緒。
――九音。
こいつらのことは、覚えているだろう？」
「あ、うん。わたしのいもうとと、弟だよね」
あの事変の際、目覚めた封印個体たち。彼らもまた、一人の人間として歩み始めているのだ。
「こいつらもその学校に通う。だが、まだ目覚めたばかりで足りないところもあるだろう。だから小春。お前の役目は……」
先ほどのものとは別デザインのネックレスを、小春の首に掛けてやる。
「――――『姉として、下の子を守ってやれ』」
「……うんっ、任せてよ!!」
ネックレスを、嬉しそうに弄る。
「わたしは、四葉が開く小春なんだからね！」
……と、ヴァイスはシケた顔になり、ぼそっと呟いた。
「……『小春日和』は秋の気候なんだがなぁ」
「オチをつけるなぁっ!!」
げしっ、と、威力の無い蹴りがヴァイスの脛にヒットした。
◆▪◆　◆　◆
ところ変わって、吾妻家。
「……」
……どことなく居心地の悪そうな秀人が、なのはと四葉に挟まれな

がら、そわそわした様子だった。不倫の代償として異次元送りにされ、ついでとばかりにいくつか世界を救ってきて、異次元の珍品を土産とばかりに持ってきて、ようやく許された感のある大黒柱である。
その珍品が、よりにもよってマリエル・プレシア・ジェイルという神域の科学者の手に渡ってしまっただけでも大事だというのに。
『むぁーっはっはっは！　奈々ちゃんにお任せだヨっ!!』
……どこからともなく現れた奈々によって謎の『調整』が施され。
――――ヴィヴィオ専用のナニカに変貌を遂げつつあるという脅威はさておき。
「で、できたよー」
そろそろと襖を開けて、ヴィヴィオが姿を見せる。
「「「、……お、」」」
チェック柄のスカート。襟に刺繍の入ったシャツ。指定のブラウス。
――――ヴィヴィオたちが通う新区の学校。その制服だ。
「「「おおおおー!!」」」
がたんっ、と、同じようなリアクションを見せる三人。似た者夫婦＋その妹。
「へ、へへ……似合うかな？」
はにかみながらスカートの裾を摘まむ姿に、三人の親はすっかり骨抜きだった。服装は自由とはいえ、制服だって捨てたものではない。
「あ、そうだ。ヴィヴィオに、お母さんから入学祝があります」
秀人、四葉は顔を見合わせ、首を横に振る。どうやら、完全になのはからのサプライズらしい。ごそごそと、押し入れの中から厳重に取り出したのは、全長にして４０センチ程度の絹袋。ヴィヴィオは、ワクワクした様子でそれを受け取り、ちらちらとなのはの顔を見上げる。なのはも、そんなヴィヴィオの反応が嬉しいのだろう。慈愛に満ちた笑みで、頷きを返した。
「開けていいよ」
「うんっ!!」
そしてしゅるしゅると袋を開ける。しかし中身は何だというのだ

ろうか。文具にしては大きい。鞄に入れるには長すぎる。
刀だった。
「「――――――なんでやねん。」」
ずっこける秀人と四葉。
「お母さんは、刃紋の無い直刃が好きなんだけど、ヴィヴィオは女の子だからね！　反りが綺麗で、乱れ刃紋が出るように打ってもらったんだよ！」
ドン引きするヴィヴィオを余所に、なのははウッキウキで解説をする。
「砕けた桜花の破片を鋳潰して打ち直したから。ほら、切れ味だって抜群だよ！」
バイク雑誌を束ねた資源ごみを、トマトのようにシュパっと切って見せたりと大変満足そうな様子だ。
「鞘も綺麗にできたでしょー？　漆塗りに金箔でね、鳳凰を描いてもらって、」
「え、あの、でも……」
……なのはが、突飛な行動をとるのは今に始まったことではないが……
「なのは」
「お姉ちゃん」
二人は、ヴィヴィオの手から刀をそっと受け取った。
「「没収」」
……まぁ当然である。
「え、えええええーーーーーーー!?　何で!?」
「何で、じゃないでしょ！　お姉ちゃん何考えてんの！」
「だって『学校に武器を持って来てはいけません』って校則は無かったよ！」
「無いよ！　普通はそんな校則無いよ！　常識だから書いてないだけだよ!!」

「か、カッターナイフは良いって……」
「そんな可愛いカテゴリ超越しちゃってるよ！　何よこれ完全に本造りの脇差じゃない！」
「ちゃんとヴィヴィオの体格と今後の成長に合わせたサイズだよ！小6まで使えるよ！」
「　使　わ　ね　え　っつってんだろ！」
　あんぎゃー、と同じ顔で言い合う姉妹に、秀人はどことなく察した様子だ。
「だ、だって……学校で、虐められないようにしなきゃ……！」
　母の愛は、難解であった。
「良い子ほどターゲットにされるっていうし……
　この前なんて、同級生三人に寄ってたかってリンチされてる女の子もいたし……。
　まぁ、ちょっと喧嘩のやり方だけ教えてあげたら解決して良かったけど……
　……才能あるね、あの白い子」
　やっていることが、まんま昔の秀人の再現だった。……いや、武装させようと考える時点でやや悪化している。
「お母さん……これ、ありがとう。大事にするね。……家で」
　押入れにそっと刀をしまうヴィヴィオ。
「お母さん、ヴィ……じゃなくて私、大丈夫だからね。ちゃんと友達も作るし、がんばるから。それでも、もし、上手くいかなかったら。
　――その時は、助けてね」
「うぅー……ヴィヴィオは良い子だねぇ……」
　膝の上にヴィヴィオをもしゃもしゃと抱き寄せる。
「おじいちゃんに頼んで、御神流も教えてあげるからね」
「！　いいの!?」
「うん、いいよー。ヴィヴィオには、お母さんたちの知ってることを全部教えてあげるからねー。技の実験には兄さんとか姉さんを適当に使うといいよ。手ごろだし」
「わぁい！　やったぁ！　おじさんとおばさん、そこそこ強いからす

き！」
「ドクター……小春ちゃん……腹を痛めて産んだ娘が、覇道を歩み始めているわ、うふふ。子供の成長は早いわねぇ……」
　現実逃避する産みの母。
「それじゃあ早速、今の身体に合った体捌きをね、」
　ハッ、と正気に戻り慌てふためく。
「！　ちょっと、お姉ちゃん。今は激しい運動しちゃダメだって、桃子母さんが」
「えー……？　ちょっとくらいなら胎教だよ、胎教」
「ダ・メ！」
「……大丈夫なのに」
　ぶーぶー言いながらも、四葉の言葉を素直に聞く。
「そうそう、ここは俺の出番だろう！」
　……そういえば、もう一人居た。
　行儀悪くも窓から外に出、向かい合って構える二人。
「さぁヴィヴィオ、思いっきり打ち込んできて良いぞ」
　両手を広げ、完全に受けるつもりでいる秀人。
「うんっ！　行くね、お父さん！」
　――だんっ!!
　以前教えたとおりの踏込みで、間合いを詰めてくる。
（教えられる相手がいるって、嬉しいものだなぁ）
　ヴィヴィオの拳の威力を、おおまかに予測し、身体に防護フィールドを展開する。体で受け止めてやるシミュレーションを脳内で行い、よしオッケー、と、
「はぁあああああああっ!!」
　――キュイイイイイイイイイイイインッ!!!
「え、」
　その小さな拳に、瞬間的に収束された高密度の魔力が螺旋状に宿っていることに気づき。それに対応するだけの防護を展開しておらず。それを補正してくれるアイがいないうっかりに今更気付いた時には……

――ズドオンッ!!!

「ごっふぁああああああ

「これでいいかな……いや、もう少し、いや……」
　秀人は、一張羅のスーツの袖へ腕を通し、慣れないネクタイの位置を念入りに確かめる。
「秀人さん、準備できた？」
　と、襖の向こうからなのはの呼び声。
「あー、もうちょっと……いつまでも慣れないなぁ」
　スーツを着る機会なんて、年に数回あるかどうか、といったところだ。
「んー、どれどれ？」
　やってきたなのはが、秀人のネクタイをちょいちょい、と整える。のだが。
「……なんかひどくなってないか」
　結び目がだるんだるんになっている。
「……な、なーんちゃって。冗談冗談」
　そして、今度は緩まぬように、ぎゅうううううう、っと。
「締まってる！　締まりすぎてるって　ぐぇぇぇ

「あー……なんか、進路に悩んでるっぽいんスよね。金のことは心配いらんから、好きにすればいいとは思ってますけど」
「進路かぁ……進学すんのか、やっぱ」
ヨシオは、うーんと首を傾げる。
「なんか、はやての作る組織で働きたいとか言ってたッスけど。道を決めるには、まだ早い気がするんスよねぇ。まだ15になるかどうかですし。もうちょっと時間置いて考えてからでも良いと思うんスよ。姉貴やオレん時と違って、そんな切羽詰ってるわけじゃないッスから」
そうそう、と、何の気なしの会話の中。
「今日、はやても来てるって言ってたッスよ」
「――――――。」「――――――。」
ぴたりと、二人の動きがそれぞれ別の理由で固まる。
「……あの日以来ね」
ぼそりと、なのはが低い声で呟く。そう、あの日は強がって見せたなのはだったが、その心中は全くこれっぽっちも穏やかでは無く、正直ぶっ殺すことまでを考えていた。
それを察したのか、はやてもあれ以来、なのはと顔を合わせることを避け、かれこれ数か月。事実上の絶交である。だが、それも事件の当事者たち以外には詳しくは伝わらなかったため、こうして全く知らない者もいる。
嫌とは思っても、車は便宜上『空港』と呼ばれている『新区』へ向かうための施設へ入庫する。あとは、それこそ国際空港のようにパスの提示、身体検査、荷物検査を受け、移動を開始するだけだ。
乗り物が飛行機か、次元航行船かの違い程度である。
「うわぁ……結構、いっぱいいるッスねー」
ヨシオが驚いたように、ターミナルには国籍というか人種というか、そもそも種族が違いそうな者たちが続々と移動船へと乗り込んでいく。
「うっし、俺たちも行くぞ」
パスを提示した際というか、その前から視線を集めまくっている居

心地の悪さもあり、そそくさとシャトルへ移動する。
「んじゃ、ヒデさん。また今度ッス!!」
　ヨシオはここまでだ。というのも、ヨシオはヨシオで結構忙しい中、こうして時間を造って会いに来てくれているのだ。
「おう、またなヨシオ。カントクと奥さんによろしく。」
「今度はヒデさんのときに会いに行くッスよ!」
　そうして、ぶんぶんと手を振りながら、ターミナルから秀人たちを見送った。
「まさか神様がエコノミークラスで移動するとは誰も思うまい」
「うんうん。盲点ってやつだよね。そのぶん特急便だし」
　そんな二人に、ユーノは胡乱な顔で言う。
「いや、ものすごく目立ってるけどね。気付いてないの？　気付いてない設定でゴリ押しするの？　なんか人集まって来てるんだけど!?」
「かみさまー、かみさまー」
　と、額から一本角を生やした少女が、なのはにぱたぱたと駆け寄っていく。
「申し訳ありません、神様。よろしいでしょうか？」
　芯の通った印象のある母親らしき女性が訪ね、なのはは、苦笑しながらも受けた。
「かみさまー。わたし、いちぞくで、いちばん強くなりたい。だから『しんく』のがっこにはいるー」
「どのくらい強くなりたいの？」
「んーっと……
　――かみさまをブッたおせるくらい」
　子供とは無邪気なものである。
「そういうことですので。冥(めい)が、神討つ鬼、鬼神となるべく、お覚悟を願います」
　物腰柔らかく見せかけておきながら、鬼気を瞳に滲ませる鬼人族。
「いいよー。でも、まずは先に倒さなきゃならない相手がいるよ」
「だぁれ？」
　と、無邪気に尋ねる冥に、なのはが答える。

「私の子供」
「なまえはー？」
　じっっっ……と、いやに真剣身を帯びた目でなのはを見る。
「ヴィヴィオっていうの。たぶん、同じ学校に入ると思うから、頑張ってね」
「はぁい。めい、がんばりまぁす」
「ちょちょちょちょちょ、なのは!?」
　慌てたユーノが、ストップをかける。
「駄目だって！　どうして、そんなけしかけるようなことを！」
「大丈夫、あの子は良い子だよ。――目を見ればわかる」
「ろくに人の目を見れないコミュ障が何言っとるんじゃぁあああああ!!」
　うむ、と勝手に納得するなのはに、ユーノは頭を抱えた。
「入学前からお友達を囲い込んでおけば、いじめられることも無いし、ライバルともなれば張り合いも出るでしょう」
「嫁の我が子への愛情が難解すぎる件について……」
　呆れつつも、特に咎めることの無い秀人。結局、有名税を納めながらの道程だった。
「おっそいの!!」
　到着した一同を出迎えたのは、今まで何をしていたんだと言いたくなる顔だった。
「よう、アイ。久しぶりだな」
　ぐい、と袖を引く手の方を向けば、人型に変化したレイジングハートが物言いたげな顔で立っていた。
『わたしも居るんですが。居るんですが。わたしには何か無いんですか秀人』
「あはは。気付いてるよー大丈夫だよー。っていうか、私よりも秀人さんが先なんだねレイジングハート」
　もうすっかり昔通りのやり取りである。
　空港を出、新区の土を踏む。
――――。

秀人となのはにとっては、初めて降り立った新区。だというのに。
「……なぁ、なのは」
「……うん」
顔を見合わせ、同じような感覚を持っていることを確認する。
「「――――ただいま」」
強い郷愁という、まったく場違いな感覚だ。
――――ピッピー!!
と、ホイッスルの音が鳴り、そちらを向く。
「はいはーい！　吾妻家ご一行の皆様、こちらでございまーす！」
典型的なバスガイドのような恰好をした、金髪の少女。
「おう、アリシア」
「いえーっす、神様！」
ぴょん、とジャンプし、秀人とハイタッチをするアリシア。すっかり現世をエンジョイしているようで何よりだ。
車を用意していると言うので行ってみると、黄色いアトラスバンが野太い排気音でアイドリングしながら待機していた。
「ん？　アトラス……？」
なのはが考えたとおりの人物が、運転席から顔を覗かせた。
「ちーっす、教官!!　お迎えに上がりやしたぁっ!!」
「ふむ……やはりゼルビスですか」
と、なのはの口調が『教官モード』にカチリとスイッチする。
「いいでしょう。道中は任せますよ」
「お任せ下さい！　部隊長からも頼まれてますんで!!」
ぴくり、と、なのはの肩がかすかに揺れた。
出発から１０分と少し。
「うーん……参ったな」
威勢よく出発したには良いが、地平線まで続いていそうな大渋滞。新区の交通網は発展途上とは聞いていたものの、これほどとは思わなかった。
「お？　無線……はい、こちらゼルビス。……え、いいんですか、それ。あー……はぁ、ま、そうっすね。んじゃそういうことで」

無線という何故か超アナログな通信を終えたゼルビスが、何らかの準備を始める。
「何をするつもりですか、ゼルビス」
「ま、ちーっと見てて下さいよ教官」
――――ヴォオンッ！
聞き覚えのある排気音と共に、オレンジ色のＣＢＲが渋滞をすり抜け、横へ来た。タンデムのＣＢＲ。搭乗者は、既にわかりきっており……
「なのはさん！」「久しぶりです！」
ヘルメットのシールドを上げ、ティアナとスバルが嬉しそうに呼んだ。
「二人とも……！」
なのはも、二人に対しては若干素直になれるようだ。
「今から先導しますね！」
先導とは言っても、目の前には大渋滞。さてどうするのかと見守る。
展開する水色の魔法陣。スバルの魔法。と、いうことは。
「ウイング……ロード!!」
――――バシュウウウウウウウウウッ!!
天空へ駆け上がる翼の道が、開かれる！
「おっしゃ、いっくぜー!!」
「でも、あの渋滞は……」
あの渋滞の中には、自分たちと同じ目的の者も少なからず含まれている。それを尻目に行くのは、少々だが気が引ける。
――――ばらららららっ
プロペラの旋回音。
「ちーッス教官!!」「こんにちは、教官!!」
コリン、ヤオ、リン、カトル、ジン……機動六課の面々が、ヴァイスのヘリコプターから、飛行ガジェットの改良品と思われる飛行物体に搭乗し、散開。いちいち指示や号令が無くとも、抜群の連携で渋滞を解体していった。

「ま、もう大丈夫だろうな……あ、そうだ教官聞いてます？　コリンのやつ、この間ヤオの実家に挨拶に行ったんですって！　ルーフェンの武術寺で、素手の爺さんにボッコボコにされたらしいですよガハハハハ!!」
「……鍛え直してやろうかな」
ぼそりと、本人が聞いたなら慄くような呟きを漏らす。
虹のように架けられていたウイングロードも、そろそろ終点。あとは目の前の通りをひた走るだけだ。
「ティアナ、スバル。二人も良かったら、一緒に」
一緒に行けたら、きっと楽しい。そう思っての提案なのだが……
「ご一緒したいのは山々なんですが……」
断られ、なのはがあからさまに落ち込んだ。
「そう……そうですよね、さすがに、そういう距離感じゃないですものね、私たち……勘違いしてごめんなさい……もう誘わないようにしますから……」
ずむずむと地の底まで消沈していくなのは。
「だーーーー!!　違う！　違いますって!!」
「わたしたちも、さっきの渋滞のバラシに駆り出されてるんです！」
「ほ、ホントですか……？　『ごめーん、ケータイの電源切れてたー』系の釈明じゃなくて、ホントですか？」
「ああもう、面倒くさい人だなー!!　今度遊びに行きますから！　絶対です！」
「こ、これは……『声かけるの忘れちゃったーまた今度誘うねー』系のアレでは!?　…知ってた！　知ってたから悲しくない！　私は悲しくない！　大丈夫！」
「「　違うっつってんでしょうが!!　」」
この神、拗らせすぎである。
「開始時刻まであと12分！　飛ばすよ飛ばすよー!!」
「安全運転で飛ばしまーっす!!」
アリシアの発破に、ゼルビスがアクセルを強く踏み込む。目的地は、もう目の前。

『新区　――――――――――――――――――――学園
↓『改め、創王覇道学園！
入学式』

……なぜ看板本来の文字が一部塗り潰されているのか。その横に、ペンキでデカデカと書かれている文字列こそが真であるとでも言いたげで、また、その字体も、無駄にエクスクラメーションマークを付けたり、こういうことをするのがどういう奴かということも、嫌と言うほどに分かってしまった。
「……あいつのセンス、基本的に小学生男児なんだよなぁ」
秀人は乾いた笑いを浮かべながら、そうごちた。
「おーい、秀人、なのは！　こっちだ、こっち!!」
ヴィータが、『経路案内』と書いた看板を、よりにもよってグラーフアイゼンに括り付けたものをぶんぶんと振り回しながら呼んでいた。
「あ、うん。いま、」
――そっち行く。
と言いかけたなのはの視界が、歪む。
「……」
結界魔法だ。位相にズレが発生し、秀人たちの姿が霞むように消える。腕時計を見るが、秒針が動きを止めている。時間の流れにも異常が発生している。
瞬時に、しかも悟られず、これだけの結界を展開できる者は限られている。そして、その中で、実行する理由のある者は……
「じゃ、行くか」
――――……ダンッ!!
踏み込んだ地面が陥没する程の跳躍で、屋上までジャンプする。
「いや、階段で来いよマジで……」
呆れ顔で居たのは、やはりというか、はやてだった。杖を突き、屋上に仁王立ちしている。
「久しぶり。ごはんくらい、食べに来ればよかったのに」

「……行ったら行ったで絶対怒るだろ」
「うん」
　そして、探り合いのような会話が終わり。
「なのは。私は今日、お前のために色々とした」
「うん。正直、助かったよ」
「そして私が、何も見返りを求めずに他人に尽くすほど馬鹿ではないことも、知っているな？」
「まぁね。で、その見返りって？」
「それは、……それは、……その……その、だなぁ」
　途端、威厳が消え去り、もじもじとし始める。
「……仲直りが、したいなぁ、って……そんな感じ……」
　杖を持っていない方の手が、落ち着きなく頭を掻いたり、服の裾を弄る。
「……ふむ」
　なのはは、じっと瞑目し……体感的に、ひたすら長い時間を過ごし続けるハメになる。
　そんな地味につらい待ち時間を終えた末の、なのはの回答は。
「――いいよ」
　ぱぁあ、と、はやての顔が喜色に輝く。しかし……
「全部無かったことにしてあげる」

――ばさぁあああああああっ!!

　膨れ上がる圧迫感。魔力……否、神気とも言うべき絶大な力が、炎の片翼となって顕現する。
「――ッ!!!?」
　気圧され、後ずさるはやての前で……翼を開いたなのはが、神の権能を知らしめる。
「あなたの身体を、あの日の前の状態にまで還元してあげる」
　全てを無かったことに。それが、神への贖罪だと言う。……悪い条

件ではない。はやても、あの日のことは悔いている。それが、当人たち同士の間で済むのなら、という気持ちもある。
――しかし。
「……嫌だ……!!」
はやては……腹を庇うような動作で、目に涙を浮かべた。
「……どうして？　仲直りがしたいのでしょう？　迷うことは無いでしょう？」
――ジリッ……
翼が揺らめき、熱波がはやての前髪を舐める。
「ひっ……!!」
後ずさる足がもつれ、尻から落ちる。
「嫌だ……嫌だ、嫌だ……!!　それだけは、嫌だ……!!」
「――。……ああ、そうなんだ」
尚も腹を……その中の存在を庇い続けるはやてに、なのはは悟った。悟った上で。
「――尚更、消さないといけなくなった」
バレーボール大の炎弾が精製される。そして、一切の躊躇も無く、発射された。
「……!!　嫌だぁあああああああああああああッッ!!」
――ばららららららっ!!!
至天の書が一気に記述される。防御。遮断。加護。拒絶。隔離。ありとあらゆる、『防御』という概念そのものを魔法化させた防壁が展開される。
――ジュウウウッ……!!
「あ、あああああああ……!!」
しかし……その防壁ですら、焼き焦がされ、何重もの積層魔法が破壊されていく。いくら力を注ごうと、片っ端から。焼かれ、溶かされ……
「おしまい」
――……。
最後は、線香花火のように呆気なく。

「……!!」
はやては、最後の抵抗とばかりに体を丸めていた。防げないと分かっていても、そうしてしまった。だが……
「……？」
不思議と、何も起こらない。目を恐る恐る開けるが、炎弾は、その残滓さえ残さず消え去っていた。
「――――いいよ。許す」
……と、なのはの口から、信じがたい言葉が発せられた。
「もしここで、黙って受け入れたり、途中で諦めて放り出したりしていたら。
――――魂まで焼き尽くしてやろうと思っていたの。
諦めないで良かったね」
「……!!」
はやては、その神の試練に平服する……ようなタマではなく。
「ふ、ふ、ふ……!!」
恐怖に震える口をどうにか動かし。
「――――ふざけんなちくしょーーーーーーーー!!」
神を前に、大いに吠えるのだった。杖を放り出し、よたよたと頼りない足取りで、なのはに殴りかかる。しかし当然、いなされ、羽交い絞めのように捉われた。
「ぶ、ぶんなぐってやる!! この、この……この、ばかーーー! あほーーー!」
怒りで語彙が貧困になっていた。
「あーあー……身体補助用の魔力までスッカラカンにして、何やってんのよ……」
気付けば、翼も圧迫感も消え去っていた。
「悪趣味にもほどがあるわ!! ホントにもうおしまいかと思ったじゃないの!!」
「まぁ、ぶっちゃけ七割くらいは本気だったけど……」
「嘘こけ!!」「うん、ゴメン嘘。本当は九割九分九厘」

……はやては、０．１％の確率で生き残ったらしい。強運というか、悪運というか。
「まぁ、曲がりなりにもあの人の子供だし。そう悪くするつもりは無かったよ」
「……」
「生まれてもいない子供に罪は無い……って言える程度には、私は常識人のつもりだし」
はやてを背中から抱きしめながら、なのはが殊更に茶化すような口調で言う。
「すごいね、ゴッドハーフだよゴッドハーフ。なんか純血種より強くなりそうじゃない？　サイヤ人みたいに」
「その、つもりだ……」
はやては、ふらふらと立ち上がり……なのはに、宣言した。
「――この子を、秀人よりも強い男にする。私は、自分の人生をそう決めた」
その挑戦には、なのはは茶化して返事をすることはしなかった。
「ふぅん……っていうか、秀人さんどころか、ヴィヴィオに勝てる子って時点ですら相当ハードル高いけど大丈夫？　次元世界探しても、歴王時代にまで遡っても、そうそう……というか、まず居ないよ？　あの子、反則的に強いし。神化してなかったら、私でも危ないレベル」
「むぐ……そこは、まぁ、その……親子鷹でどうにかするさ。どうするかはまだ分からんが……不可能ではない筈だ。前例もある」
「前例……？」
と、なのはが首を傾げた瞬間。
――ずがしゃあああああんっ!!!
……時間の停滞した結界を、巨大な稲妻が打ち砕く。
「ほら来たぞ。神に勝った女」
「あぁ……あの子か」
バリバリと雷鳴と稲妻をバックに、のっしのっしと大股で近づいてくる。

その強大な力と反比例し、威厳の欠片も無い本人が。
「なぁにやってるんだ、キミたちはぁあああああああああッッ!!!」
『神に勝った女（ゴッドキラー）』と一部界隈で称される、フェイト・テスタロッサが。
「あのね！　二人がとーってもなかよしのトモダチってことは、しってるけど！　けんかするほどなかがいいっていうのもわかるけど！　さっきっから、計測器がめっちゃくちゃな反応して、あんぜんのために入学式がすっごくおくれてるの!!　おかげで遅刻者も居なくて全員そろったけど！」
「ならいいじゃない。結果オーライよ」
「さすが私。狙い通りだな」
しれっと自己正当化する二人に……というか、はやてをぎろっと睨みつけて。
「しょっぱなからそんなんでどーすんだよ、校長先生!!　キミは生徒たちの規範なんだぞ!!」
……学園長。そう。この創王覇道学園の運営母体は『機動六課』であり、未来の人材発掘と言う名の青田刈りであり、それを主導するのは機動六課部隊長であるところの八神はやてなのだ。まぁ、才能を腐らすことも無ければ、嫌が応にも努力をしなければマジで死ぬ環境なので、『将来有望な若者』にとっては（当人たちの人権を無視すれば）ベストな環境であるかもしれない。
「学校のルールは校長が決める。校長は私。つまり学校において、私の決定が全てだ。わかったかね、フェイト・テスタロッサ先生？」
その教師陣というのも、ＡＡＡ＋からＳ＋まで、もしくはそれ相当のトチ狂った異能者。
というか、主に機動六課の人外☒ｓである。
「ぐぬぬ……!!　けんりょくをかさにきやがって……!!」
その人外☒ｓ筆頭候補、『神に勝った女（ゴッドキラー）』は、権力に屈しようとしていた。
「ひゃひゃひゃひゃ!!　権力を笠に着て威張り散らすのは至上の娯楽よなぁ!!」

……本当にこんなのがトップで大丈夫だろうか。
まぁ、一癖二癖、生徒たちも合わせれば１０００癖くらいはありそうな面子を纏めるには、このくらいの人間の方が合っているのかもしれない。
（二人は、私より先に『先生』なんだ……いいなぁ……）
教師志望のなのはは、内心で二人を少しばかり羨んでいたが。
「……っていうか、学校名勝手に変えちゃダメだよ格好いいけどさ！」
「滅茶苦茶かっけぇだろ！」
「うん、チョーかっこいい！　……って、誤魔化されるもんかー!!」
「チッ……賢くなりやがって」
「ああもう、ボクの言いたいことはいっこだけ！　いいかい、ふたりとも！」
ずびし、と指さす。
「けんかするなら、ときと、ばしょを、えらべーーーーーーーーーーっ!!」
だんだん、と地団駄を踏みながら可愛らしく憤慨する姿に、なのは、はやては、ほぼ同時に噴き出すのだった。

「あ、お母さん来た!!　もー、遅いよ！」
「ごめんごめん、ちょっと野暮用……ヴィヴィオかわいい。服というか全部かわいい。すっごいかわいい」
いきなりぶっ飛んだ発言が飛び出てきた。
「そうでしょう、そうでしょう！　もー、わたしの見立ては間違ってなかったわ、お姉ちゃん!!」
入学式のため、四葉がデザインから縫製までを手掛けた礼服は、それはもうひたすらに似合っており、自画自賛も許されよう。この後にお色直しが待っているのだが、他の家々も、この短い時間の中、子供を精一杯輝かせようとしていた。
「うん、ママありがとう！」
名家の子息子女が多い中であっても、抜群の存在感を示すヴィヴィオは注目の的だ。

「――おい、あの子が」
「ああ、そうだ。あの子がきっと」
「神の子だ……」
……不穏な注目も含まれていたが。なのはが対処しようとするのを、ヴィヴィオが裾を引いて制する。
「……いいの？」
「いいの。わたし、お父さんとお母さんを、引け目に感じたくないから」
……そして。
「ん？　……おいどうしたヴィヴィオ」
ヴィータが案内のために設置した朝礼台の上に登る。
「ヴィータ先生、貸してください」
そして、ヴィータが握っていたメガホンを受け取り、息を、すううううっ……と吸い込み。
「『――初めまして!!　私の名前は、吾妻ヴィヴィオです!!』」
大々的に、自己紹介を始めてしまった。
「『ゼーゲブレヒトの末裔、系譜の継承者……今代聖王を名乗っています!!』」
聞きようによっては……いや、もはや、そう聞かせているとしか思えない。
「『聖王・吾妻ヴィヴィオが、いつでも相手になります！　みなさん、オトモダチになってください！』」
ざわつく群衆。そういう狙いもあったとはいえ、こうも堂々と友達募集などと言われては、はいそうですか、と言い出せる者などそうは居ない。
牽制にせよ、本気にせよ……もしくはそのどちらにせよ、ヴィヴィオの行いは、正しい。
「物怖じしない子に育ちそうで、お母さんは安心だわ……」
「お姉ちゃんは、もうちょっと人付き合い頑張った方が良いと思うよ……」

……先ほどから、隠密術まで使って打算やら好奇心やら純粋な好意から、あらゆる挨拶を回避しまくっているなのはに、四葉が苦言を呈する。
「嫌よ。知らない人と話すなんて」
「おいコラ教師志望」
あまりにも清々しいディスコミュニケーションっぷりに、思わず真顔になる。
「おっ。おい、みてみろよ」「あ。あの子だ」
と、秀人が指さした先。和装の少女が、朝礼台の上にすたすたと登り、ヴィヴィオの真正面に立った。
「んー、ヴィヴィオ、ともだちがほしいなら、めいがなってあげる」
鬼人族の麒麟児、冥が、台の上に乗り、ヴィヴィオに手を差し出した。
――ぎゅ。
と、ヴィヴィオと冥が、互いの手を握り合う。
「めい、ちょーつよいよ」
――――――メキメキメキメキ……!!!
……互いの手を、圧搾しに掛かっているとしか思えない軋みの音が鳴り渡る。
「――――よろしくね、冥」
「――――うん、ヴィヴィオ」
対等なる友情成立である。
「やれやれ、退屈している暇は無さそうだねぇ」
「はは……ウチら、アレのサポートをするんスか……」
葉月、雪月が顔を見合わせ、今後の苦労に思いを馳せつつも、期待に胸を高まらせていた。
広大な講堂。壇上に立ったはやてが、マイクの前に立つ。神ほどではないが、あの戦乱の旗頭となった英雄だ。さぞかし、威風に満ちた挨拶が有るのだろうと……
「――――諸君、入学おめでとう。

私は明日から産休に入るから、学校内の細かな雑事はこのフィアット校長代理に相談するように」
「「「

――以上を以て、入学式並びに開校式挨拶とする！」
しん、と静まり返る大講堂。ざわめきが起こり。拍手がまばらに起こり……

――……わぁあああああああああああああああっっ!!

大歓声が、竜巻のように巻き起こった。
「さぁ、直近の『学校行事』は、五月の生徒役員選抜戦だー！　張り切っていくよー!!」
『行事委員会』という腕章を装着したスーツ姿のアリシアが、嬉々とした口調で言い放った。

――おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!

「……いいなぁ、楽しそう」
なのはが、ぽつりと漏らした。
「お姉ちゃんだって、先生を目指して頑張るんでしょう？」
「……でも、四葉とヴィヴィオだけで、こっちの世界で暮らすなんて……」
そう。ヴィヴィオはこの学校に通う都合上、この世界に定住することになる。保護者は必要だ。そして、それに手を挙げたのは、四葉だった。
「だーいじょうぶだって。私、結構デキる女なんだよ？」
「それは、知ってるけど。……ねぇ、四葉は寂しくないの？お姉ちゃんと一緒じゃなくて、本当に平気？」
……本当に寂しいのは自分だと、そう本音が漏れているようだ。そんな、可愛い姉を、四葉が抱きしめる。
「――お姉ちゃん。私、頑張るから。
ヴィヴィオのママも、お姉ちゃんの妹も。だから……お姉ちゃんと

秀人さんは、ちゃんと、自分を頑張って」
なのはは、名残惜しそうに四葉を離す。
「……お休みの日には、こっちまで会いに来るからね。四葉が泣いちゃってないかどうか、見に来るからね」
同じ顔の二人の少女は、離れた別の道を歩み始める。
しかし、それは別離ではなく。
「「またね」」
互いを信じて歩み出す、『信頼』だ。
「行こう、なのは」
「うん。秀人さん」
秀人が差し出した手を、なのはが取る。
あの日、連れ出してくれた手を。引っ張ってくれた手を取り。
今は、並んで歩くのだ。
それは、神であっても、人であっても、
――繋ぐ手のぬくもりは、永遠だ。

◆・◆　◆　◆

「カリム。もうそろそろ、お時間ですよ」
「あら……そうだったかしら」
騎士カリムは、デスクから顔を上げ、呼び主であるシャッハを見上げた。
「――ええ。創王覇道学園と、我がＳｔ．ヒルデ魔法学院。二校は姉妹校となりますからね。出遅れるわけにはいきません！」
ぐいっ、と袖をめくるような動作をするシャッハに、同意の笑みを返す。
「ええ。子供たちの未来に、祝福あらんことを」
未来に希望を見出し、子供たちに未来を託し、先駆者たちもまた、己が道を歩んでいく。
無人となった部屋。
――さぁあああっ。

風が吹き、古ぼけた紙片が宙を舞う。『神の予言』を告げる、カリムの先天技能の媒体が、人知れず、淡く輝き、記されていく。

◆・◆　◆　◆　光の文字列

――こうして、人は生きていく。

――時間の中を、生きていく。

――時に迷い。

――時に悩み。

――時に過ちを犯し。

――赦しを与え合い。

――それでも人は、生きていく。

――間違えるのが、人だから。

――それを正すのも、人だから。

――そうして人は、生きていく。

――……。

――人に、未来を託そう。

――人の未来を、信じよう。

――『眼』はある。

――いつまでもいつまでも、人の時間を、見守ろう。

――その未来に、希望があると信じて。

◆・◆　◆　◆　空色と桜色の記述。

――ねぇ、見て秀人さん。『私』、あんなに幸せそうに笑ってる

――ああ。『俺』も、歩き始めたみたいだ。まったく、我ながら出足の遅い奴だ

――私たちの『分身（エイリアス）』、ちゃんと生きてるね

――ああ。紛れも無い『俺』が、生きている。

――もう、大丈夫かな

――大丈夫さ。あの世界は、あの世界の人間が守っていく。

――あの世界、私たちが創ったものだなんて、誰も気づかないだろうね

――カンのいい奴なら、もう気付いているんじゃないかな

――でも、いいよね。あの『私』は、間違いなく『私』で

――あの『俺』も、間違いなく『俺』なんだから

――――『私』たちは、幸せになってくれるよね

――――きっと、運命を殴り壊してでも、幸せな未来へ進むさ

――――私は、そう信じてる

――――俺は、そう信じてる

――――たまには、様子を見に来ても良いよね。『私』、心配で心配で

――――何せ『俺』だからなぁ……どこで躓くか、ハラハラしちまう

――――……。

――――よし、行こう。

――――うん、行こう。

――――次の世界へ

――――別の世界へ

――――永遠を求めた死人『大道克己』か

――――光を求めた闇の巨人『――――』か

――――力を求めた弱き覇王『アインハルト・ストラトス』か

――――彼らの運命を、見届けに

――――彼らの運命を、見届けに

――――――

ｖｉｖｉｄ編　１話『その者、聖なる王として君臨せしは、、、』

――――ヴィヴィオへ。

元気ですか？

お母さんたちは元気です。本当は電話かメールでお話がしたいのですが、四葉が「際限なくなるからダメ」って言うので、またお手紙を書いています。

いっぱい書きたいことはありますけれど、読んでいて疲れないように短くしますね。

学校は楽しいですか？

冥ちゃんとは仲良くできていますか？

最近では、お腹の中から蹴られるという貴重な経験をしています。でも、お父さんに似て腕白な子なのか、息が詰まるかと思いました。

お母さんの方は今度、オリエンテーリングっていう行事があるらしくて、数人の班で踏破訓練……じゃなくて、ハイキングのようなことをするって聞きました。お母さんは停学中なので、お父さん伝手に聞きました。

（注※お母さんは悪くありません。社会が悪いんです）

でも私、そんなの絶対行かな〇〇〇〇（修正テープで不自然に文字列潰されている）

しらないひとと班になって行動するなんてぜったいに〇〇〇〇〇〇（同じく）

行かないったら行かないからね！〇〇いや〇！　おうちに〇〇〇〇！（修正テープがヨレている。抵抗した形跡のようだ）

『あの人の所為で日程が延期されたんだよねー（笑）』『マジ空気読めっつうの』とかぜったい陰で言われてるもん！

――――私、悪くないもん!!

◆◆◆◆

「お母さんってば……」
ヴィヴィオは、呆れの多分に入り混じったため息を吐く。
「お父さんも大変だなぁ」
母からの頼りは初めてではないが、毎度毎度、母のアレな一面を心配するばかりだった。
あの修正テープ、間違いなく父の仕業だろう。
「ヴィヴィオー、ご飯できたわよー」
と、階下から母の呼ぶ声がした。
「はぁい！」
今朝届いたばかりの手紙を大事に引き出しに仕舞い、手早く制服に着替える。姿見でチェック。
「うん……よし」
襟元にキラリと輝く、『F組』のクラス証。
「吾妻ヴィヴィオ、今日もオッケー！」
ビシッ、と鏡に敬礼し、とたとた階段を降りていく。

テーブルには、既に朝食が配膳されていた。そして。
「……おふぁおー、ふぃふぃふぉ（おはよー、ヴィヴィオ）」
……頬袋をパンパンにしてよその家のメシをかっ食らう、鬼が居た。
「……冥、少なくとも私が来るまでは待てなかったの？よその子なんだよ、あなた」
「……んぐんぐ、ぷはぁ。むり。おなかへった」
ゴックン、と、音が聞こえてくるくらい豪快にメシを飲み干すと、ようやくマトモに診れる顔となった。さらさらの黒髪をぱっつんにした、和風な印象の少女だ。すっきり整った顔立ちに、華奢な手足。そして何よりも目を引く、額の一本角。
――鬼人族。
ある種の怪異を日常に取り込み、今日もヴィヴィオの一日が始ま

る。
「よつばさん、おかわりちょーだい」
「ほんっと物怖じしないよね、冥ってば……」
ぼやきながらも自身の食事を始める。
「はい、冥ちゃんおまたせー。ヴィヴィオもおはよー」
台所から、湯気を立てるフライパンを片手に四葉が現れる。
若々しい……というか、実際若い。あり得ないくらい……実際、生物的にはあり得ない逆・年の差母娘だ。姉で通るどころか、それ以外なんなんだ、と言いたいレベル。やや茶色がかった頭髪と、似通った目鼻立ちが母娘の証明だった。
「ヴィヴィオのもたっぷりあるからね。これ、永夜さんからの差し入れなのよ」
永夜とは、冥の『母親』。こちらは二本角の鬼人であった。
冥のめし代ついでに、こうして食料を差し入れてくれる関係だった。ママ友である。
「ママ、お母さんがまた……」
手紙の内容を仄めかすと、四葉も表情を曇らせる。
「また、なのね。お姉ちゃんってば相変わらず、ぼっち気質なんだから……」
サキ先生に言いつけてやるんだから、と一人ごちり、フライパンの中身をヴィヴィオ、冥の皿に移した。
「わぁい、粕漬けだー」
冥の好物だった。もちろんヴィヴィオの好物でもある。
はぐはぐ、と満面の笑みで粕漬けを食べる姿は無邪気で、とても鬼とは思えない。
「「行ってきまーす」」
ふたり、通学路を歩く。まだまだ開発途上の土地だ。街路樹なのか、はたまた単に伐採していないだけの自然木なのか微妙な連なりのある道がいつものルート。
「ねぇヴィヴィオ。……さいきん、どう？」
「また唐突だね……」

最近も何も、だいたいつるんで行動しているというのに。
「まぁ、変わりないと思うよ？」
新生活が始まり数ヶ月。
父母と離れた暮らしも、初めての学園生活も、苦労することはあっても何だかんだで楽しく過ごせている。
「冥がいるからね」
冥は、ぼんやりとした顔に笑みを浮かべる。
「ヴィヴィオは、目を離すとスゴイことをするから退屈しない」
「お互い様だよ……」
ヴィヴィオはポケットをまさぐり、ポーチのようなものを取り出す。開くと中には、金銀銅の、指先ほどのバッジが詰め込まれていた。
「いくつ？」
「うぅん……金が２、銀が１７、銅が３２だね」
そのバッジと同じ形状のものが、ヴィヴィオ、冥の襟元にも輝いている。
ヴィヴィオが金、冥が銀。
はて、これが意味することとは。

この世界で唯一の教育機関、その名も『創王覇道学院』という、ネーミングセンスが小学生男子の学校こそが、ヴィヴィオたちの母校だった。
初年度から多種多様な層が居たため、上級生、下級生の括りは弛く、同クラスに年長から年少までがごっちゃになっているのが特徴だ。
ヴィヴィオたちは、そのＦ組に所属している。
「おはよう！」「はよー」
楽しく連れ立って教室のドアをくぐる。
クラスメイトたちは、そんな仲の良い二人をにこやかに出迎えてくれる。
「陛下、今日の体育、わたしと組んでよー」「あ、ズルいわたしも！」
「じゃあじゃあ、冥ちゃんはわたしとね！」
どやどやと、とたんに人の輪が形成される。

親に似ず、ヴィヴィオは人付き合いは上手のようだった。
「……？」
ちりっ、と、背中に奇妙な視線を感じ振り向く。
が、そこには誰の姿もない。無人の廊下が広がっているだけだ。しかし気のせいにしては、いやにハッキリしていた。
「陛下？」
「あ、ううん、何でも無いよ。あと、私と組むにはラキアはちょっとまだパワーが足りてない。ルルはスピードが今一歩。佐奈は冥と組んだら普通に死んじゃうから止めておきなさい」
はぁい、とやや残念そうに引き下がるクラスメイト達。
視線のことは、まぁいいや、と忘却の彼方へ消えていった。

――バスーン！
快晴の空に、爽快な音が響き渡る。
『ヴィヴィオ、なげるよー』
『いいよー』
――ドバーン！
微笑ましいキャッチボールである。
……念話でなければ声が届かないような距離かつ、投げあっているものが砲丸でさえなければ。
『今日の放課後、委員会あるの覚えてる？』
『うん、ちゃんと覚えてるよ』
平然とした面持ちで砲丸を軽く投擲しつつ、そんな会話が交わされる。
クラスメイトたちも、それには一歩及ばないものの、それなりにトチ狂ったキャッチボールを行っていた。ある者は魔力弾を投げ、ある者はアルマジロのような使い魔を投げ、ある者は殺意満点のウニのような物体を投げている。
――……一般的な体育の授業である。
『ヴィクトーリアさんが、今度のクラス対抗戦について事前協議するって』

『よっぽど負けたのがくやしかったのかな』
『かもねー。でも、前回から一月ぽっちで、私に勝てる見込みが出来る？』
『むり。雷帝は多芸だけど、一つ一つがみじゅく。』
『だよねー。Ａ組さん、みんな優等生だけど、優等生すぎて伸びしろが少ないんだよね』
『だからといって、入学早々に討ち入りしてバッジ狩りするのは……』
『いや？』
『ううん、だいすき』

この学園のクラス分けは、基本的には能力だ。
とはいえ、単に優劣ではなく特異性や方向性で、大雑把に括られている。
しかし、皆が皆、謙虚に弁えた者ばかりではない。なにせ子供だ。
単なる文字の順番に過ぎないＡ～Ｆを序列と勘違いし、居丈高になる児童も少なくはなかった。歴王の系譜に連なる、いわゆる名家の出の世間知らずの御曹司や令嬢。それらが徒党を組み、派閥のようなものを形成し始め、

――ヴィヴィオはそれを、完膚無きまでに圧倒的な力量差で叩き潰した。

彼らで言うところの、最底辺のＦ組のヴィヴィオに、それはもう衆目の下に、圧倒的に、小細工抜きに、言い逃れも負け惜しみも不可能なレベルで。
追い打ちとばかりに、クラス証であるバッジを公衆の面前で毟り取られた彼らは、特に根拠のないプライドを粉微塵とされ……
恥も醜聞も無く、クラス最高実力者を担ぎ出してきた。それが『雷帝』ヴィクトーリア・ダールグリュン嬢である。
『お母さんが言ってたの。『喧嘩に勝ったなら、何でもいいから戦利品を取りなさい。それが敵にとって屈辱になり、上下関係がはっきりす

るから』って。』
『かみさまはファンタジーな存在なのに、たまに超リアリストだよね』
……雷帝は、それはそれは健闘した。善戦だったと、誰もが言うだろう。責められる者など、いようはずもない。先祖より継承した魔力資質、武技、奥義を巧みに操り、時に魔法、時に物理。もしくはその複合と、『雷帝』の二つ名は伊達ではない、と示した。
――ヴィヴィオには、悉く通じなかったが。
しかも、聖王形態にさえなっていない、『聖王の鎧』をも展開していない状態のヴィヴィオに。
単純に、力量が隔絶し過ぎていてダメージにならないのだ。
『残念だけど、ヴィクトーリアさんは、私のトモダチにはなれないみたいですね。他のA組の皆さんも。……残念です』
……魔力体力を使い果たした『雷帝』を、まるで赤子にそうするように両手で抱え、A組の生徒に優しく手渡したのだ。
『雷帝』その身には、擦過傷一つない無傷で。
――違いすぎる。
何が、ではない。ただ、『違う』のだと。A組の面々は震え上がり、以降、ごく謙虚に振る舞っている。
『警戒すべきは、力押しに持ち込めない、持ち込ませない相手。これはお父さんが言ってた』
『……めいはまだ、そういうのに会ったことない』
『クロノさん達がその類らしいよ。ママの見立てだと、私達でようやく五分と五分。それ以外は相手にならないって』
『あのシスコン，sが？』
『なにそのユニット名』
『さいきん、ヴァイスが新メンバーに加入した』
『……まぁ、小春は可愛いからね。仕方ないか』

――ドガンッッ！

『あーもう、どこ投げてるの冥ってば』

『ごめーん』
砲丸は、散々に握り潰され歪み、真っ直ぐ飛ばなくなってしまっていた。
『今日はここまでかな。冥、お昼行こう』
と、見上げた山の向こうから、黒点が打ち上がる。それは、見る見る拡大され……
――――ドゴォオオンッ!!
……校庭に落下し、クレーターを残した。
「わかった」
冥が、そこからピョコっと立ち上がる。この二人、山越しにキャッチボールをしていたらしい。

「……」
しゅうしゅう、と煙を上げる砲丸を手に取り見下ろす、一人の少年がいた。
その目は、去ってゆくヴィヴィオに向けられており……決して友好的ではない質をしていた。
『『聖王』、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト……』
――メキメキッ……!
その手の中、砲丸が握り潰され、ぱらぱらと破片を零した。
「ようやく、見つけた……!」
◆ ◆ ◆ ◆
「はぁ……」
ヴィヴィオが、珍しく憂鬱そうなため息をついた。
「どしたの?」
心配する冥にヴィヴィオは、低い声で愚痴を零した。
「よく考えたら、委員会ってことは『あいつ』もいるんだった……」
ヴィヴィオが他者を『あいつ』呼ばわりするとは、珍しいが、特定の相手においてはいつものことだった。
「かわりに出てあげようか?二割くらいしか覚えてられないけど」
「ダメじゃない……ふぅ。まぁ、でも行くよ。責務は果たさなきゃ」

「私は『王』だからね。」

委員会の行われる会議室の扉を、軽くノックして入室する。

「こんにちは」

ヴィヴィオが最後のようだった。

「ヴィヴィオ。確かにまだ開始時刻までは多少あるとはいえ、君が最後なんだ。少しの謝意くらいは、見せるべきじゃないのか」

……一人の少年が、開口一番にそう咎めた。

「勝手に早く来ておいて、その言い草もどうなの――――九音。」

自然と、ヴィヴィオの声にも棘が出る。

「言い草の問題ではない。なぜ俺に声をかけなかった。終業後に待ち合わせて同行すれば良かっただろう」

「あなたと、一緒に行くのが、嫌だから、声を掛けなかったの」

一言一言、言い含めるように声にした。そして、それに対して九音が何かを言おうとした矢先。

「こら、九音!」

ぽこん、と、軽く九音の頭を、背後から何者かが叩いた。

灰色の髪を、背中まで伸ばした少女だ。背丈もヴィヴィオや冥と同程度。何故か右目に眼帯をしているが、傷めているとか、光に弱いとかではなく、単純に「カッコイイから!」とのこと。

「痛いじゃないか、五香」

少女……五香は、むふー、と多分怒っているであろう鼻息をし、腕を組んで九音を見上げた。

「九音、確かにキミの言葉は正しい!でも、正しい言葉を、ただ相手に伝えるだけ……これは、正しくない!もっと優しく!

おぶ……えっと、ほら、あの甘くて薄いアレで包んでやるんだ!いがいがの薬も、アレで包めば大丈夫!」

「俺は苦党だ。そのまま噛んで飲むぞ」

「うぇえっ……」

想像で顔をしかめ、気を取り直し、ヴィヴィオに向き直る。

「そしてヴィヴィオ!　キミも、そう九音を邪険に扱うものじゃない

！きょうだいなんだぞ！」
「きょうだいじゃなくて、イトコくらいの関係でしょう……」
この熱血少女を前にすると、怒っているのが馬鹿らしくなる。
――くい。
と、ヴィヴィオの服の裾が摘まれた。
「……ヴィヴィと七緒、きょうだいじゃない……？」
「うっ……七緒もいたの」
七緒と呼ばれた少女は、くいくい、と裾を引っ張る。
「ねぇ、なんできょうだいじゃないの？ヴィヴィ、なんで、なんで？」
「えーと、それはね……」
何か上手い言い方は無いものか、と思案しているのを、無言の肯定と誤解した七緒は。
「なんでぇ……？　なんでそんな意地悪いうのぉ……？」
じわぁ、と瞳いっぱいに涙を溜め、今にもぽろぽろと泣き出してしまいそうだった。
「あぁぁ……別に意地悪とかそういうのじゃないって」
「じゃあ、きょうだい？」
「……姉妹かな？」妥協した。
「九音は男の子だから違うけど」
「おいちょっと待て。なぜ俺が除外されているんだ」
「べーーーっだ」
ヴィヴィオと九音がまたしても不毛な口論を始めようとし、それを五香が止めようとし、七緒は泣き出し、
「いい加減になさい！」
バシーン、と、机を平手で叩く音と共に、中断された。
「とっくに会議の開始時刻ですわよ！」
豪奢な金髪の少女だった。顔立ちや、今は怒気を示すその振る舞いからも、気品が感じられる。
「失礼しました。ヴィクトーリア・ダールグリュンさん」
ヴィヴィオが、にこやかに素直に詫びる。しかし、詫びられたというのに、ヴィクトーリアは形の良い眉をきりりと吊り上げる。

「……」
　とにかく、不満そうだ。
「会議のために集まったんですものね。私語が過ぎました。お詫びします」
「……構いませんわ」
「ほら五香。残りもさっさと席につく。ダールグリュンさんに迷惑掛かるでしょう」
　そうだな！と、五香が弟妹たちの手を引き、着席させる。
「……ヴィヴィオさん、その、私にもそんなに、気を遣って頂かなくても良いのですよ」
「？　何故です？」
　ヴィヴィオが、完璧に『よそ行き』の態度と表情で問い返す。
「その……そう、同級生なのですから！」
「そうですね、お気遣いありがとうございます！」
　……しかし、崩れない。
「……」
　友情、気の置けない関係。それらは、互いに対等でなければ成立しない。
　ヴィヴィオにとって、その立ち位置の基準は『強さ』だ。
『友達』『ライバル』『臣下』『その他』……ヴィクトーリアは、『その他』だった。
　蔑ろにするわけではない。無下にすることもない。しかし、明確に隔たりがある。
「本日の招集は、次回のクラス対抗戦の内容協議について、でしょうか」
「、はい、そうですわ。前回は、半ばなし崩し的に……その、わたくしも事情をよく知らず、戦闘に及んでしまいましたが、」
（『戦闘』なんてあったっけ……？）
　ヴィヴィオは、そんな程度の認識だった。
　まぁ、手元に各クラス頭目の証、金バッジがあるということは、一応、戦闘にカウントしても良いだろう。

「ですが、早すぎませんか？仮に『修練の門』、その最難関に挑んで突破していたとしても、私には届きませんよ？」
それに、現在、最難易度の『修練の門』は、Ｅ組が使用している。
「……わ、わかっていますわ！」
バンッ、と、恐らく感情が高ぶった際の癖のようなものなのだろう。机を両の平手で叩き、立ち上がる。
「当Ａクラスへ、姉妹校であるｓｔ．ヒルデ魔法学院より、交換留学生が来ます！　彼をＡクラスの戦力に加えた上での、Ｆクラスへのリベンジマッチを申し入れますわ！」
「「「「「……、（うわぁ）」」」」」

……こんな時だけは、息ぴったりの神の子たち。
現状では勝てないから、外部から招き入れた戦力を宛にしてリベンジする。
「あの……ダールグリュンさん、あのですね、」
ヴィヴィオが、流石に窘めようとしたところ。
「――――家名が泣くぞ、『雷帝』ダールグリュン。」
……空気読めない系男子、九音がバッサリと言葉の刃で切り捨てた。
「がふぅっ……！」
不可視の刃にダメージを受けたようによろめく『雷帝』。
「うむ、ちょこーっとだけ、カッコ悪いと思うぞ！あ、ちょこーっとだけ、だから安心していいぞ！うむ、せいぜい我が家の親父殿の変人具合程度だ！」
五香がフォローにもなっていないフォローをし。
「……はずかしくないの？」
七緒は手酷く言い捨てた。
ヴィクトーリアは、ぐぬぬぬぬ、と恥辱に塗れた表情で……
「も、もう後がないのですわー！　期限以内にバッジを取り戻さないと、家の者に向ける顔がありませんのよー！」
……母直伝、ヴィヴィオの『戦利品大作戦』は、なかなか効果があっ

たようだ。
「これですか？」
ヴィヴィオは、ポーチより２つある金バッジのうちの一つ、『Ａ』の刻印がある方を取り出し、かざす。
「そんなにお困りなら、今この場で返して差し上げましょうか？」
元より、そこまで執着がある訳でもない。苦労の結果、勝ち取ったものでも無い。Ａ組からの、臣下たちへの逆恨みちょっかいを遮断する印籠代わりに使えるなら使う、程度の認識だ。
「それじゃあ意味がありませんのよー！」
ジタバタと手足を振り回す。
あーあ、とヴィヴィオが事態の収拾を図った際、九音があっけらかんと決定事項のように言い出した。
「ふむ、ではこうしよう。Ｂ組頭目である俺、翠（みどり）九音が、Ａ組の助っ人になろう」
「……はい？」
「前提として、Ａ組の総戦力はヴィヴィオ個人に劣る。これでは、決闘としてはアンフェアだ。ならば、ヴィヴィオ・冥を抑えられる者がいれば、多少は戦力の均衡が取れるだろう。」
「……」
突然の提案に、ヴィクトーリアが目を白黒させていた。
「なっ……なんで、九音が出て来るの!?関係ないじゃない！」
これには、ヴィヴィオも抗議した。
「むざむざ弱者が蹂躙される様を傍観できるほど、俺は乾いていないつもりだ」
さり気なく弱者呼ばわりされたヴィクトーリアは、魂が抜けたようだった。
そして、当事者抜きに話は進む。
「どちらにせよ、その留学生に俺やヴィヴィオ、もしくは冥に並ぶ力が有るとは思えん。」
「それは……そうだけど」
「だからこそ、俺が入ると言っている。俺がヴィヴィオを抑えている

間に、雷帝と未知数戦力が、冥を抑えられればＡ組にも勝ちが有るだろう」
「……まぁ、それもそっか。いいよ、じゃあ」
　ぷいっと、年相応の少女のようにふくれっ面でそっぽを向くヴィヴィオ。
「力比べは、久しぶりだな」
　九音が、素直に楽しそうにヴィヴィオに語りかける。
「私に勝ったこと無いくせに」
「引き分けだからだろう。負けは無い」

　傍観していた五香が、メンタルをやられていたヴィクトーリアに問う。
「うむ！　して雷帝よ。その留学生とやらの名は、何と言う？」
「じゃくしゃ、弱者……はっ。そうですわ。わたくしとしたことが」
　えほん、と勿体ぶるような咳払いと共に。
「ハイディ・アインハルト・ストラトス・『イングヴァルト』」
　その家名は……
「ほう……『覇王』か」
　九音が、好戦的な笑みを浮かべる。
「ふぅん……」
　ヴィヴィオは、どこか思うところがあるようで、生返事だった。
　細かなルール詰めは特に無かった。『校庭』をフィールドに、互いの『王』を倒し合うという単純な試合だ。ノックアウトするもよし、拘束し行動不能にするのも良し。審判はヴィータに依頼することが決まり、会議は解散となった。
「たっだいまぁ～……」
　家に帰り着いたヴィヴィオは、リビングのソファにぼふっと身を沈める。
「おかえりなさい。随分と疲れてるみたいね？」
　エプロン姿の四葉が、ぱたぱたとキッチンからやって来て、ヴィヴィオの隣に座った。

「ん～……」
四葉の膝を枕に、ヴィヴィオが今日一日の報告をする。
「あのね、今度、『覇王』の血脈と戦うことになったよ」
花壇にアサガオが咲いたよ、みたいなノリだった。
「へぇ……濃さはどのくらい？」
「イングヴァルドを冠してるから、たぶん直系」
「あらまぁ……珍しいわね」
この時代、『王』の血筋をそのまま家名に据え置くことには、相応のリスクがある。名乗るからにはの責務や、その血筋に相応しい立ち振る舞いが必要となってくる。
そして何よりリスキーなのは、いわゆる「道場破り」の存在だ。
「かの『王家』を討った」とされてしまえば、その戴く『王』の栄光は地に落ち、歴王の面汚しとして終生罵られることとなる。
ヴィクトーリアが、あそこまでバッジに固執するのは、本家筋が散逸しているため、暫定で分家筋の彼女が『ダールグリュン』を名乗るからに他ならない。
「まぁ、それはいいんだけど……問題は九音だよ！　もう、しゃしゃり出てきて、あの出しゃばり！」
四葉にひっつきながら、ぶーぶーと文句を言うヴィヴィオ。
しかし、ヴィヴィオが本気では怒っていないことも、あの二人はあれで良い距離感を持っていることも、何だかんだで互いを信頼し合っていることもお見通しである。
四葉は相槌を打つのみに留め、にこにこと笑いながら、今晩の献立を組み立てていた。

「――――ふぅ」
ヴィヴィオは、辟易した様子でため息をついた。
気のせい、でスルーしていた視線ｗｉｔｈ敵意は日増しに強くなり、無視するにも面倒くさくなっていた。
授業が始まれば、その敵意も無くなる……ということは、生徒の中の誰かだろう。恨みくらいは買っているだろうが、遺恨を残してし

まったのは手落ちだ、とヴィヴィオは思った。
「（Ｅ組の皆さんは、『修練の門』で全員遠足中だから不在。Ａ組は恨むよりも私に屈服してるから除外……九音、五香、七緒のクラスは、そもそも無干渉。外部……いや、もしかしたら、逆恨みの類かな）」
思考を巡らすヴィヴィオに、教壇に立つ教師か、指名があった。
「はい、では吾妻ヴィヴィオ。ここまでを踏まえて、回答なさって」
細身のスーツ姿の女教師の指名に、ヴィヴィオはさらさらと答えた。
「――無力化を優先するなら頭を潰すべきですが、有利な条約を求めるのであれば、手足をもぎ取ることを優先することが効率的です」
「――Ｍａｒｖｅｌｏｕｓ（素晴らしい）」
女教師は、感動に打ち震えるように我が身を掻き抱いた。

「良いですか、皆さん！
勝てば官軍、負ければ賊軍！
勝利者こそが正義なのです！
正義の行いに間違いは無い！
勝利＝正義！
大勝利＝大正義！
輝けｊｕｓｔｉｃｅ！　掴めｖｉｃｔｏｒｙィイイイイイイイ!!」

――キーンコーンカーンコーン……

「あっ今日はここまでにしますね。皆さんお疲れ様でした」
会話が成立するので、学園教師陣の中では一番の常識人と言われる彼女だった。
その日の帰り道。ヴィヴィオは、あえて一人で、普段は利用しないルートで、未開発地域へと足を運んでいた。
「さて、と」
うーん、と伸びを一つ。砂地と土が適度に交雑した、膝下までの雑草がまばらに生えているだけの、殺風景な土地だった。

――――身を隠せるような樹木も、高低差も無い。
背後を振り向くと、もはや隠れる気は無い、とばかりに、一人の人物が佇んでいた。ヴィヴィオより、やや年上にも見える少年だった。九音と同程度の体格だろうか。
「初めまして。」
挨拶は自分から、という、父の教えだ。
「私は、」「『聖王』オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」
……違う。
確かに、ヴィヴィオの遺伝子には、少なからずオリヴィエのソレが含まれている。
だが、ヴィヴィオはヴィヴィオだ。『聖王』の系譜にあろうとも、自分は、あの誇らしい両親の娘なのだと。
「私は、吾妻ヴィヴィオです。」
「違う。『聖王』オリヴィエ……クローン体となって現世に蘇った、かの暴君だ」
「……違います。血筋にあるだけで……私は」
「あの日の恨み、忘れるものか……！」
「私は、今代聖王・吾妻ヴィヴィオで、」
「さぁ、構えろオリヴィエ！　あの日より５００余年、転生体たちの力の結晶！今こそ貴様の牙城を崩してくれる！」
「……。違います。私は、！」
「この期に及んで言い逃れか、オリヴィエ！」
「……」
ヴィヴィオは、『王』としての己の責務を自認している。『聖王』の系譜として。『神』の子として。
しかし……それでも素は、ただの少女なのだ。
両親に愛され、真っ直ぐな気持ちを持つ、たまには級友とふざけ合ったり、喧嘩をしたり、そんな少女。
だが……そこには、微かな負い目も存在した。
人為的に操作された遺伝子。あの事変が無ければ、とっくに使い果たしていた命。歪な存在。

冥は、無神経なようでいて、常にヴィヴィオを大事に思っている。ヴィヴィオが心の底で感じている負い目に、触れないでいてくれている。

その『負い目』を……目の前のダレカは、

無神経に、

――――――

いらっ。……

ｖｉｖｉｄ編　２話『グッバイ現世　～　覇王のユッケ　～　』

車に轢かれる直前、動物はその動作を停止するという。
緊張か、恐怖か、好奇心か。もしくは。

――――己の死を悟ってしまったか。

真相は、死した者にしか分からない。ただ、一つ言えることは。

動きを止めた者は、ほぼ例外なく骸となっている、ということだけだ。

◆▪◆　◆　◆

――――――バチッ……

空気が、爆ぜる。ほんの一かけら、漏れ出したヴィヴィオの魔力圧が、大気を押しのけ、その摩擦で火花が散る。

母譲りと、密かに自慢だった栗色の頭髪が……聖王由来の、黄金色に染まっていく。身体が成長する。

「お……おぉ……!!」

それに比例し増していく圧力に、自称『覇王』、少年がたじろいだ。

「……」

変異が完了し……そこには、輝くような頭髪で、表情の一部を覆い隠す何者かが居た。

「……『久しいですね、イングヴァルド』」

憑かれたかのように、その声色が変わる。少年は、その声色に、頭をガツンと殴られたような衝撃を覚えた。

「間違いない……!!　かの事変の際、『ゆりかご』の存在から、もしやとは思っていたが……!!　やはり現世に甦っていたか!!」

「『ええ、今この時、この大地……わたしはココに在ります』」
すぅ……と、両腕を不気味に広げる。
「『あぁ、実に５１４年ぶり。イングヴァルド。その顔をお見せなさい』」
「……」
求められるがまま、前髪を乱暴に掻き上げる。
精悍な顔……になる数歩手前の、あどけなく、どこか女性的であるその顔が露わになる。
「『くすくす……本当に、……相変わらず、』」
ゆらゆらと、不気味な歩法で『近づいてくる』。いや……距離感が掴めない。近づいてきてはいるのだ。だが、間合いが全く掴めない。
「『か弱い乙女のような顔をしているッ……!!』」
――ガァンッ!!!
凄まじい衝突音と共に、少年が数メートルも水平に吹っ飛んだ!!
「『……？　おや、挨拶代わりに、骨の二、三本でも、と思ったのですが……』」
が、ヴィヴィオ（？）は、不服そうな、どこか嬉しそうな、そんな呟きを漏らした。
「舐めてもらっては、困るぞ……オリヴィエ。僕は……『僕たち』は、お前を倒すためだけに。貴様が惰眠を貪っている間に、絶え間無く修練を積み重ねてきたのだ!!」
対・オリヴィエ特化の体術。そこに、基礎の薄皮を幾重にも張り合わせるような、気の遠くなるような修行。それが、オリヴィエの一撃を防御せしめた。
「『くすくすくす……あらあら、ほんの一撫でを、マグレで躱せたくらいで……随分とご機嫌を良くしてしまって。本当に……』」
めごっ、と、大地が陥没する。その予兆を『予測』した少年は……！
「『弱くって弱くって……可愛いんですから、イングヴァルドは!!』」

暴風雨のような乱打を、迎え撃つ!!　指貫手、平手、前蹴り、手刀、回し蹴り、正拳！

手を変え品を変え、その場で即興で流派と言えるものまでポンポンと創作し、遊びのように打ち放つ!!

「『あはははははははははは!!

ほぉら殴りますよ!!　蹴りますよ！　今度は突きますよ!!　あぁ、こんな技を思いつきました!!　数え突き!!　5、4、3、2、1！

あはははは!!　そぉら防いで御覧なさい！　躱して御覧なさい!!

貴方が『覇王』を名乗るのならね!!　次は蹴りの三段です!!　一つずつ威力を上げていきますからね!!　あはははははは!!　あぁ楽しい、愉しい!!　砕けろ！　壊れろ!!　』」

「うおぉおおおおおおおおおっ!!」

雄叫びと共に、致命打を捌き、逸らし、いなす！

（見える、見えるぞ、お前の動きが!!）

――見よ。

「――断、」

大地を踏みしめる。最も大きな憑代と、脚を一体化させるイメージ。

――これが。

「――空……!!」

そして、下肢から上肢へ、己が身を一つの射出装置と見なし。

――貴様を打ち倒す。

『力』を、解き放つ!!

「――拳ッッ!!!!」

「『……!!』」

遊びと捉えていた。

この身を脅かす者など居ないと。

天に座すこの聖王に、届く拳など有りはしないと。

だが……

「『……まさか』」

その身に、衝撃がある。その衝撃は、世に肉を受けてより、数える程も識ることの無かったものだった。

「届いた……ぞ……!!」

疲労困憊。

ただの一撃。その身に大地の力を伝える秘奥義は、尋常ならざる負荷を及ぼしていた。

「この身に宿る……圧にして、１０００万の魔力。貴様とて、一溜まりもあるまい……!!」

少年の見立てによると、かの聖王の最大魔力圧は１５００万。これが、『ゆりかご』に接続されると、その数倍ともなる異常な数値を叩き出すそうだが……身一つでは、１５００万、多く見積もって２０００万だ。しかし、その全魔力が、常に解放されているわけではない。一つの動作に１万、１０万、１００万と乗ることはあっても……瞬間的に、１０００万もの放出は不可能。故に、少年はそこに賭けた。『全魔力を一撃に込め、瞬間最大放出を行う』という、戦法としても、戦術としても、武術としても出来そこないのソレに。

それは、確かに聖王の鎧を貫き、届かせた。

「『まさか……あの小童が……この身に……』」

「小童と、侮ったことが、貴様の敗因だ……!!」

打ち倒す。それは、何も戦闘不能に陥れることだけが全てではない。

――絶対の自信。絶大なる自負。天頂にまで達する増長。

それを、圧し折ることが出来れば。行うのは、強者であってはならない。互角の勝負などしてはならない。遊び程度の攻撃に苦戦し、這いつくばる姿しか知らぬ弱者でなければならない。

――『弱者に打たれた』という事実が楔（くさび）となり、その牙城を突き崩す。

「どうだ、暴君よ。――それが『痛み』だ!!」

「『……』」
暴君は、膝を突いたまま動かない。
「さぁ……頭を垂れるのだ。貴様の布いた圧政の下、無念を抱いて潰えていった者達へ、心の底から詫びるのだ!!」
また立ち上がるのならば、二度でも三度でも。幾度でも、この拳を届かせよう。
この命、潰えようとも……既に、己は勝っ「『……』はい、ここまで」「!?」
ばっ、と、思わず力む。
「『……』あー。あー。よし。エミュレートは終了」
ぽんぽん、と膝の土を払いながら、平然と立ち上がる……目の前の、誰か。
「お……、オリヴィエ……?」
目の前の誰かは、オリヴィエの顔で、その人物が決してしない表情で、こちらを見ていた。
「――――私は、吾妻ヴィヴィオです」
ばしゅううっ……と、呆気なく、目の前に居た筈の『オリヴィエ』が、消える。
「最初から、そう言っています」
そこに居たのは、少年の知らない誰かだった。茫然と立ちすくむ少年に、ヴィヴィオは。
「ゴッコ遊びは楽しかったですか?」

と。
「ごっこ、あそ、び……?」
「『英霊使役』スキルの応用ですよ。あなたが会いたかったであろう、『聖王』の一柱を、魔力と私の肉体で再現した模倣体」
よく似ていたでしょう? と、ヴィヴィオが笑う。
「もちろん、本物の魂は込めていません。できますけど、しませんでし

た」
最早、理解の追いつかない少年に。
「――――見分けられない節穴には、お人形遊びがお似合いですよ」
怒りが。
どこから湧いたのか。騙されたことか。騙されたことに気付けなかったことか。遊ばれていたことか。遊ばれていたことに気付けなかった自身の道化っぷりか。
「あ、ぁあああああああああああ!!」
再び、秘奥義を振るう。
「――断、空……!!」
「断空拳」
――――――ベギィッ……!!!!
「け、ん……？」
意思に反して垂れ下がる。己の、腕。
「おれ、……ぁあああああああああああーーー!!?」
痛みが襲い、本能的に折れた右腕を庇って後退する。
「う、ううう……!?」
（馬鹿な……今のは、そんな、ありえない!!）
痛みでまとまらない思考の中、状況を判断する理性と、それを認められない感情が衝突する。秘奥義。必倒の拳。それが。それが。
「なぁんだ……あなたの５００年は、この程度ですか」
一瞬で。
「ほら、返してあげますよ。あなたの『だんくうけん』」
軽く肩を上げ、右腕しか使っていないような軽い動作。しかし。
――――グシャッ!!
体内へ、考えたくも無い損傷が発生する。
「ぐ、ぉ……おェッ……!!」
粘り気のある血反吐が、口から零れる。

「脆いなぁ……ちゃんと鍛えてるのかな？」
跪いた少年。それを見下し、何の感情も伺わせない声で、ぼそりと言う。
「（……!!　まだ、だ!!）」
しかし少年は、身体を痛めつけられながらも、大地より得る魔力で、再び己の力を蓄えていた。残った左腕を、身体の痛みを無視して振りかぶる!!　必中の好機！　間合いの中!!
「――――断……空、拳!!」
年少の少女へ拳を振るう。その意味が理解できないほどに追い込まれた少年の拳は、しかし手応えを得た。
――――ドバァンッ!!!!
少女の胴体。土手ッ腹。たとえ防御していようとも、必ず通ると。
「……気は済みましたか？」
――――健在。
（あ、あ……？　当たっ、て、……!?）
視界が暗闇に包まれる。顔面を鷲掴みにされている。体が浮遊している。振られる。
（防、）
「……ったいなぁ、もうッッッ!!!!」
――――ズゴォオオオンッッッ……!!!!
「ゴぁあアアアっ……、!!」
己の肉体を鎚代わりに、大地を陥没させたのだと。気付いた時には、とにかく、己が生あることに安堵していた。……たとえ、その両腕があってはならない角度へ曲がっているのだとしても、
「あり、え、ない……」
口をついて出たのは、理不尽への言及。
「だって……オレは……僕は……覇王の、血族で……転生体、で……」
「……」

「まりょく、だって……１０００万、あって……ぜったいに……」
――魔力、魔力と……たかが数字の指標一つが、そんなに大事か。
ヴィヴィオは、呆れ、失望していた。『聖王』の中には、１００万も無い魔力で、大国を討ち果たした王もいる。育成者として、今につながる分家筋を創生した王もいる。それこそ……あんな、魔力と資質だけで戦うタイプなんて、オリヴィエくらいのものだった。単に、他国にちょっかいを掛け、要らぬ諍いを産み、その果てに勝ち続けていたが故に『歴代最強』などと誤解されていた……
――悪目立ちしていただけの小物に執心とは。
「たおせる……倒せる、筈だ……この身の、魔力を、一撃に……!!」
秘奥義への、絶対の自信。これがある限り、肉体を折り砕こうとも、幾度でも挑まれる。平穏な日常に、それは要らない要素だ。

「私の魔力は５３０，０００，００です」

――ぼきり、と、心の折れる音がした。
「――あ、あ」
虚ろな表情で、ぱたりと腕が落ちる。
「安心してください。あなた相手に、本気は出しません。二段階掛けているリミッターを、外すことはありません。事実、先ほどの戦闘でも、貴女が見積もった通り、とりあえず自由に使える魔力のうち、ほんの１５００万の魔力でのみ、エミュレートを行っていました」
にこりと、欠片も感情を込めていない笑顔を浮かべる。
「たぶん、５００年前のオリヴィエ程度でしたら届いていましたよ。良かったですね」

もう、何も聞こえない。虚無感だけが、心の内を占有していた。
――ジジジジッ……!!
その右腕に……膨大な魔力が収束している。
「魔力比べがお望みでしたね？　応えてあげます」
「……あ、」
本能的な恐怖が、唯一動く足が、一歩でもその場から離れようとする。
「では、さようなら。また来世」
何の躊躇も無く、拳が、魔力が、振り下ろされ――
「『　なくなれ!!　』」
――ぱしゅんっ
蓄積していた魔力が、瞬時にゼロとなる。
「……、」
ヴィヴィオが、特に驚きもせずに、もう片方の腕を振り下ろす。
なぜなら、知っていたから。『彼女』の能力は、『一度に一つの願望しか叶えられない』ということを。右腕の魔力が消された、その『余波』が収まるまでは、再びの無効化はされないと。
――バチィイイインッ!!
今度は、別の……不可思議な光の粒子が膜状に展開され、ヴィヴィオの拳を防御していた。
「？」
たんっ……と、数メートルほど後方へ下がる。
――ズパァンッ!!
あからさまな威嚇射撃が、天空より降る。
「……。どういうつもり」
行く手を阻んだ三つの要素へ、わかりきった質問を投げかける。
「こちらの台詞だ。では問おう。『どういうつもりだ』」

うち一つ。戦闘機人・封印個体Ｎｏ．９『時空粒子（タキオン）』九音はそう問うた。
「わたしが止めていなかったら、その弱っちい気配のやつ、死んでたんだぞ！」
うち一つ。戦闘機人・封印個体Ｎｏ．５『願望機器（デザイアマシン）』五香はそう咎めた。
「やりすぎ。だれがみても、そうおもう」
うち一つ。戦闘機人・封印個体Ｎｏ．７『破壊天体（デスター）』七緒はそう伝えた。
三人。全てが、ヴィヴィオと同格。１００回戦えば、１００回引き分ける。そういう間柄。
「不敬への処罰を執行中です」
「冗談でも、」
――ギュオォッ……!!
九音を取り巻く魔力光が、粒子へと変換され……その身を取り巻いた。
「父上の品位を貶める言葉を、口にするなッ!!」
――ドゴンッッ!!!
威圧が物理的な衝撃波となり、ヴィヴィオを叩く。髪留めが解け……受け止めた拍子に、表情が、隠れる。俯いたままのヴィヴィオに、九音が言葉を重ねる。
「ヴィヴィオ。俺たちは、ほんの腕の一振りで、容易く竜種さえも絶命させる力を持っている」
「……わかってる」
「分かっていて、なぜ弱者に、あんな力を振るった。五香が止めていなかったら、本当に死んでしまっていたんだぞ!!」
「……！」
びくり、と、肩をすくませる。
「創王覇道学園三箇条、その二……『力の意味を、己が内に問い続けろ』。……お前は、力を振るう時、それを忘れていただろう」
……否定、できなかった。

「一時の癇癪に身を委ね、野放図に力を振るう……!!　お前のやったことは、父上の名にも、『聖王』の名にも、泥を塗る行為だっ!!　何を考えているッ!!」
「……!!」
　ぐうの音も出ないド正論に、ヴィヴィオは……俯いたまま、だんまりを決め込んでいた。
「何とか言ってみろ、このド阿呆!!」
　……どこまでもヒートアップしていく九音の叱責に、始めは言わせていた五香、七緒がさすがに止めに入る。
「こ、こら九音！　言いすぎだ！　それではヴィヴィオが何も答えられん！」
「しかるのは、いい。でも、おこるの、だめ。かわいそう。かわいそうだよ」
　袖口を掴まれ、妹二人に今度は自分が咎められ……
「ッ!!　……はぁ～……。」
　九音は、深く深く、息を吐き出す。怒りの熱を、体外へ逃がすように。
「……わかった。ただ、ヴィヴィオがいま、何を考えているのかだけ、聞かせろ。正直に反省の意を示せば、俺はもうお前を責めない。誓おう」
　俯いたまま、一度も顔を上げないヴィヴィオは。
「……いもん」
　ぼそりと、小声で、全く聞き取れないような何かを口にする。
「……あんだって？」
　それを、身体スペックによる地獄耳で聞いた九音が、聞いていながら、半信半疑で聞き返す。
「――――!!」
　ヴィヴィオは、九音をキッと睨みつけ……
「――――私、悪くないもん!!」

……。
時が、止まっていた。九音も、五香も、七緒も……『あちゃー』とでも言いたそうな、ソックリの表情で固まっていた。
「だって!!　そいつが!!」
びしっ……と、そいつ。半死半生でゴミのように転がる少年を指さす。
「そいつが、私に意地悪なこと言ったんだもん！」
……。
「だから、私、悪くないもん!!」
そして……涙目を九音に向けたまま、ずかずかと近寄って行く。
「どうして私ばっかり怒られなきゃならないの!!　ちょっとくらい味方してくれたっていいじゃない!!　九音の馬鹿！　分からず屋!!　おたんこなす！　石頭！」
「いや……あのなヴィヴィオ。別にお前の味方をしないと言ったわけでは……おい、お前らもなんか言え！」
びゅおん、びゅおん、と顔面目がけて正確に振るわれる破壊拳を躱しつつ援護を求める。
「九音も悪い」「くおんがわるい」
いかなる理由が有ろうとも、女子を泣かせるものは女子の敵。不変の真理だ。
「……はぁ～。ああ、分かった、分かった！　ヴィヴィオは悪くないって！」
ぱんっ、とヴィヴィオの拳を掴み止める。
「詫びに、今度のクラス対抗戦で、『全力で』思いっきり相手してやる！　それでどうだ!?」
A組の加勢や、拮抗を保つため……ではなく、ヴィヴィオ一人のために、全力を出すという。それは、この九音という少年には極めて珍しい行為であり、ヴィヴィオにはとても魅力のある提案だった。
「……ほんとに」
「ああ、本当だ」
「……ほんとのほんと」

「本当の、本当だ」
「指切り!!」
「ああ、はいはい……」
ゆーびきーりげーんまーん……と、年相応に約束をして、ヴィヴィオの涙は晴れていた。
「帰る。」
簡潔に言い、自宅方面へ歩いていく。送ろうとしてきた五香と七緒を遠慮し、毅然とした足取りで歩いていく……途中。足を、止める。
「……止めてくれて、ありがと」
それだけ言うと、振り向きもせず、だっ、と駆け出して行った。
ヴィヴィオを見送り、見送り……周囲を索敵し誰の目も無いことを確認。簡単な遮断結界を展開する。
「よし、では始めるぞ。五香」「うむ。――『なおれ』!!」
言霊が、世界へ作用する。ベキベキに折れ、一部体外へ露出していたホネが、巻戻し再生のように、体内の在るべき位置へ戻っていく。破れた内臓が、結着する。
「――――う、う。ぼくは……!? ひっ」
――――鬼がいた。
意識を取り戻した少年が見たのは。角こそ無いものの、炎のような、稲妻のような、氷のような、三者三様の『怒り』を顕す、三人の神の子たち。どうあがいても死ぬ未来しか見えない力の権化たち。
「……おう、ちょいとツラ貸せや」
『お兄ちゃん』として、妹分を泣かせた奴はシメる。それは、九音の信念だった。
ひょい、と、猫のように首根っこを掴まれ、物陰へ連行されていく少年。
「安心しろ。決して死なないよう、死の一歩手前で懇切丁寧に治療してやる。そして何度でもボコる」
――――人、それを拷問という。
「今回ばかりは、ちょこーっとだけ怒ったぞ」

「……ゆるさない」
少年の未来や如何に。

◆・◆　◆　◆　ヴィヴィオ　魂の座　◆　◆　◆　◆

『久しいですね、イングヴァルド』『ええ、今この時、この大地……わたしはココに在ります』『あぁ、実に５１４年ぶり。イングヴァルド。その顔をお見せなさい』」
……映画館のように、その姿が大写しで上映されていた。それを、２３人の人影が、思い思いに鑑賞している。
「いやぁあああああああああああああっ!!」
……可憐な少女が、鋼鉄の義手で己の頭を抱え、ゴロゴロと転げまわっていた。
「思い上っていたわたし的暗黒時代のホロ苦い思い出が口いっぱいにいいい

――――アレ、弱い奴用に作った護身具のつもりだったんだけどなぁ
「うぼぁっ……！　い、今明かされる衝撃の真実ゥ!!!」
――――ステゴロできない王とか看板下ろしちゃえよ
死後、余裕綽々でこの座にやってきて、あっという間にボロカスゴミ雑巾にされて以来、オリヴィエは心を入れ替え……たのだが、相変わらず先輩たちには遊ばれているのだった。
「はぁ……イングヴァルドにも、謝らないとなぁ……」
今、現世に居るのは聖王家の末っ子、ヴィヴィオだ。彼女が望めば、現界することも可能だが……
「アレはイングヴァルドじゃないし」
しかし、血族だからと自分とヴィヴィオを混同するなど言語道断。直々に出向いてお説教してあげたい気持ちも強くある。
「でもヴィヴィオが望んでないし……あぁぁあああ、もどかしいなぁ」
――――なに、簡単なことでは無いか
と、久しく聞かない声が聞こえた。
「げっ……ダキニ!?」
妖艶な女性の声に、オリヴィエは分かりやすく顔をしかめた。
――――聖王ダキニ。
魔力資質がほぼ一般人相当ながら、その卓越した……というか、ヒトとしての良心の呵責を彼岸に置き忘れてきたかのような悪辣な計略により、七つの国を滅ぼした生粋の『魔女』である。
――――その『スポット』をわしに寄越すのだ
ぐわん、と、オリヴィエの足元が歪む。
「ちょ、駄目！　ここはヴィヴィオのために、あぁあああああー……」
彼方へ消えていくオリヴィエの意識。反比例し強くなる、別人の意識。
「ふむ。ちと強引だが、これでよかろう」

佇んでいたのは、和装を着崩した、妖艶な雰囲気を漂わせる黒髪の美女。
「アレ(ヴィヴィオ)はわしの玩具じゃ。弄ぶも、転がすも、わしの気分次第じゃからのう！」
くけけけけ、と笑う。
「さぁヴィヴィオよ。わしの『遊び』、どこまで耐えきれるかのう!?
けけけけけ……くけけけけけけけけ!!」

ｖｉｖｉｄ編　３話『　嗚呼、太陽神はヒキコモリ　』

――生徒個人傾向記録。
――『吾妻秀人』１――Ａ所属。
――学習意欲高く、社会生活の経験から、コミュニケーション能力に長ける。
――クラス内では最年長として、年少者の世話役、指導役といった役割を自発的に行い、信望も厚い。
――既婚者。

――生徒個人傾向記録。
――『吾妻（旧姓・高町）なのは』１――Ｄ所属。

――『　　』

――始業日に乱闘騒ぎ・施設損壊を行ったことにより停学処分を受け、現在に至るまで停学期間中であるため評価不能。

◆・◆　◆　◆

ヴィヴィオの入学式から、しばらく経った。秀人、なのはが入学する予定の学校は、入学式の時期が普通科高校とは数か月単位でズレこんでおり、理事であるすずかより、『ほんと行政ってウスノロですよね、ええ。本社よそに移して納税をやめてやろうかと。ええ』と、うすら恐ろしい独り言と共に理由が知らされた。かなり突貫工事で進めていた事業らしく、まだまだ見切り発車的な側面もあるものの、一次募集での応募数はほぼ満員。入試を受験に来た実数も、それほど大差ないもので、期待されていることも分かっていた。
「いやぁ……しっかし、マジで数式って使わないと忘れるんだなぁ……」
「……ゼロから勉強した私よりはいいじゃない」

……その入試突破のため、参考書片手に猛勉強の毎日。発作的にバイクで走りだそうとする秀人をなのはが引きずり戻し、全く別分野への努力を余儀なくされ、癇癪を起こすなのはを秀人がなだめすかし、どうにかこうにか。合否判定を表示するＰＣサイトを前に、手と手を握り合ってびくびくと結果判定を待ち。

「「　受かったぁあああああ～～～～……　」」

喜びよりも先に、どっと脱力感に襲われたのだった。入試会場では、魔力の気配は完全に遮断していたとはいえ、あの事変の記憶から、ほんのわずかにデジャヴュを感じる者も居た。またそれ以上に、非常に整った顔立ち、左眼を縦断する白斑という特異な相貌、そして妊婦。

誰がどう見てもキャラが濃すぎるなのはは注目の的であり、気配を隠す得意の忍術も、着席しなければならない試験の場では使えず、そのストレスのあまり「落ちたかも……」と、割と本気で落ち込んでいたのだ。

「とりあえず、メール一斉送信で……よし。って、うわ、もう返信きた」

友人知人家族一同から、あっという間に大量の返信が送られて来た。

――――ピンポーン

「本体が来たか」

どやどやと、お前ら実は扉の外で待機してただろ、と言いたくなるペースで来客が。

「ひゃっほー合格祝いだヨー!!」

……果たして、度数４０を超える焼酎をゴロンゴロンと何本も持ち寄ったのは誰だったのか。アルコールその他もろもろに一切の影響を受けない恒常性を持つ秀人となのは以外、だいたいの連中が一部屋の中で酔い潰れ、祝われる側であったはずの二人が看病するというバカ騒ぎを経て。

「……よし」

戦場へ赴く兵士の顔つきで、制服のネクタイをピシッと締めるなの

は。
　これから、念願の入学式に。
「……今日は休もう」
「おい」
　びしっ、と頭頂部を軽くチョップされる。
「いや、なんか……受かったし、もう目標の８割は達成しちゃったかなー、って」
「卒業しなきゃ大学まで行けないぞ」
　燃え尽き症候群にも程がある。
「秀人さん……保健室登校って、知ってる？」
　と、ドヤ顔でどうしようもない知識を披露する。
「何で最初からドロップアウトする気満々なんだよ……似合ってるじゃん」
「……夫の欲目でしょう」
「いや、ホントだって」
　ふぅん、そっかぁ……と気の無い返事をしながらも、頬が薄らと赤くなっている。
「……これは知り合いの話なんだけど」
　すとん、と壁に向かい、座る。
「小学校に入って、少しした頃にね。同級生の子たちが、露骨に話を無視するようになったの。わた……知り合いの子といちばん多く会話をしていた子も、一緒に」
「……」深くは訊くまい。
「放課後の掃除の時間にね、『どうして？』ってその子に聞いたらね、何て答えたと思う？」
「……」
「『あなたが調子に乗ってるから』……って。うん。全く身に覚えが無かったの。でね、自分なりに調べたんだ。そうしたらね、クラスのナントカっていう男の子が、その子に、『高町さんと仲良くなりたいから協力して』……って。で、その子は、その男の子が気になってたんだって……」

ずむずむと暗黒のオーラを醸し出す。
「あのね、逆だったの。クラスの連中が、私を無視し始めて、その子も巻き込まれるのが怖くてそれに参加したんじゃなくて。その子が、クラスメイトを扇動して、私を無視するように仕向けていたの……あはは、笑っちゃう……ぐすっ」
（よりにもよって入学初日になんつーフラッシュバックを起こしているんだ……）
しかも、『知り合いの話』という前提が既に消えている。
スイッチの入ったなのはは、既に登校する意欲を失っていた。
「学校怖い……知らない人がいっぱい居る……いじめられる……」
「……ま、まぁ、でも、もしかしたらいい人だって居るかもしれないだろ？」
「悪い人の方がいっぱい居るに決まってる。やっぱり休む。家にいる」
「友達だって出来るかも」
「いらない。今の人たちだけでいい」
もう引っ張ってでも連れて行くかな、と秀人がなのはの手を握ったとき。
――ごとん。
「……」
「……」
……L字型をした漆黒の金属塊が、畳に落ちた。
「しまっちゃおうねぇ」
「おい待てコラ」
当たり前のように拳銃を懐に戻す……のを、我に返った秀人がひったくった。
「なのは、バンザイ」「……ばんざーい」
……肘を不自然に閉めた姿勢。秀人は問答無用で上着を引っぺがしに掛かる。
「きゃー！　きゃー！　秀人さんのえっち！　もう二人目だなんて！」「阿呆かー!!」

出て来る出て来る、物騒な凶器の山。匕首、大小ナイフ、仕込みボールペン、特殊ワイヤー、小型バーナー。
「学校に戦争しに行く気かー!!」「あぁー返してー!! 私の武器―!!」
当然、没収である。秀人が高く掲げたそれらを、ぴょんぴょん跳ねて取り戻そうとするなのは。
「私の七つ道具、……あっ」
ぽろりと口を滑らせる。
「七つ……? ……あと一個どこだ」
身体検査を続行。
「な、無いヨー? それで全部だヨー?」
「……」
秀人の目は、玄関へ。ぎくっとするなのは。
「……ここかぁー!!」
なのはが今日から履く革靴……その踵に、引き出し式収納が設置されており……その中から白っぽい粘土のようなものと、ヒューズのようなものが見つかった。
「……これ、ナニ」
「……プラスチック爆弾」
ガチで戦争に行く装備だった。
「焼却!!」
しゅぼっ、とその極めつけに物騒なブツがこの世から消えた。
「あぁーグラム単価３０万円が!」
「高ッ!?」
「武器弾薬武装が無くて、どうやって身を守ればいいの!? ……はっ、体術ね!? 分かったよ秀人さん!!」
しゅっしゅっ、とシャドーの眼球に向かい異様に鋭いジャブを放つなのは。
「……さ、行くぞ」
登校前からどっと疲れる秀人だった。

さて、新学期といえば。

「……」
クラス表を見上げ……見上げたまま、茫然と放心するなのはの姿があった。
「なんで」
ぼそりと、半ば無意識的に言葉が出る。
「なんで、クラスが、違うの」
今にも膝から崩れ落ちそうである。張り出されたクラス表。そこに記された二人の名前は、みごとに引き離されていた。
「おかしい。まちがっているにちがいない」
近親者・縁者はクラスを別にする。常識ではあるが、なのははその辺の常識には疎かった。
「……終わった」
……校門潜って１０分で、なのはは学校生活を諦めた。
「ま、まぁ、行き帰りと休み時間は一緒だし……」
気を持ち直して、今にも折れそうな心を支える。
「おー、クラス違うなぁ」
秀人は、割とあっけらかんとしていた。
「今から校長室を襲、……直談判すれば、どうにか」「ダメ」「うぅ……」
――とんとん
……と、身体の内側から、『ドンマイ』とでも言うような感触が伝わってきた。
「私、今日、無事に帰宅出来たら……紀伊国屋で牛肉を買うんだ」
「死亡フラグ建てるのやめい」
幸いにも、入学式での席は隣同士だった。

『Ｉ―Ｃ』の教室へ足を踏み入れる。同時に入室してきた他の生徒の陰に隠れ、注目を浴びずに着席することができた。が。
「――――ねぇねぇ」
「――――ッッ!?」
突然話しかけられ、跳び上がりかけ……ギリギリで平静を保って振り返る。

「な、に……か、ご用……です、か」
油切れを起こした玩具のようだった。
話しかけてきた女子は、既にクラス内グループを構築し始めており、その代表として話しかけてきたようだった。
「いまライン交換してるんだけど」
「……」
「あの、してるんだけど……」
「……？」
してるんだけど。
（……してるから、どうしたの？）
「……？？？」
その後の言葉が、全く来ないどころか、むしろ向こうが訝しがっている。
「あ……ごめんね」
そして、バツが悪そうに向こうが引っ込んでしまった。そしてちらちらとこちらを見ながら、ひそひそと何らかの会話が交わされている。
「……（いま、何が起きたの）」
なのはには、意味が分からなかった。
ぼうっと座っているのも暇なので、ポケットから文庫本を取り出し、ページを捲る。
「ねぇ、」
と、また別の女子だ。
「何の本読んでるの？　わたしも小説好きなんだ」
「……」
なのはは、本好きの同級生ということで若干嬉しかった。嬉しかったので、決して失敗しないよう、脳内でシミュレーションを行うことにした。
～パターン1～
『小説じゃなくて、エッセイ本なんだ』
『あ、そうなんだ。わたし、そういうのは読まないから……（苦笑）』

（これは駄目ね）
　～パターン２～
『どんな作家さんが好きなの？』
『えっ……作家はあまり気にしたこと無いかな（苦笑）』
（あり得るわ）
　～パターン３～
『どんな小説が好きなの？』
『えっと、いま読んでるのが、　』
（――――『３』ね。これなら会話が続くわ。これで行こう。よし、じゃあ『３』路線で行くとして、細部を詰めよう）
　なのはの、アポロ１１号に匹敵する対人関係演算装置がきゅるきゅると稼働する。
「……」
「……」
　そして、気が付いていなかった。返事をしていないまま、そろそろ数分が経過しようとしていたことに。
「あっ……その、ごめんね……？」
　そして、女子はすごすごと退散を。
「！」
（あっ、ちょっと待って。今、どうにか会話を継続させる目途が立ったから。今返事するから、もうちょっとだけ待って、）
　思わず身をのり出し、
　――ガコンッ!!
　膝で机を蹴飛ばしてしまい。
　――ガシャッ！
　無駄に強い脚力のあまり机が転がった。
――――――――――。
　しん、と静まり返る教室。
「……（おっといけない。それじゃあ気を取り直して）。教え

てあげようか？」
よーし、会話頑張るぞーと、努めて穏やかな口調と笑顔を作り、話しかける。
しかし。
「ひっ……！　ご、ごめんなさい、ごめんなさい……!!」
（えっ？）
さささささ、と、潮が引くように人波が離れていく。
（えっ……えっ……？　どうして？　何が起こっているの？）
――――――ではここで、一連の出来事を俯瞰してみよう。
◆▪◆　◆　◆
栗毛の生徒が無言で席に着く。
「――――ねぇねぇ」
ノートとシャープペンシルを用意しているそこへ、派手目の女子生徒が話しかける。
「……何か、御用ですか？」
冷たい口調で、事務的に返答する栗毛の少女。一瞬、その独特の容貌に気圧されるものの、気丈にコミュニケーションを図る。
「いまライン交換してるんだけど」
「……」（無言で見つめる）
「あの、してるんだけど……」
「……」（無言で見つめる）
「あ……ごめんね……？」
笑みを強張らせ、退散していった。

一人で読書をする栗毛の生徒に、お下げの生徒が話しかける。
「ねぇ、なんの本読んでるの？　私も小説好きなんだ」
「……」
栗毛の少女は、僅かに視線を上げる。
「……」
沈黙したまま、じっと、お下げの少女の顔を見つめる。
「あっ……その、ごめんね……？」

居た堪れなくなったお下げの少女は、バツが悪そうに引き下がる。
次の瞬間。
――ガコンッ!!（机を蹴飛ばす音）
――ガシャッ!!（机がころがる音）
「……教えてあげようか？」
栗毛の少女が、威圧的な笑みを浮かべ、お下げの少女へ言う。
「ひっ……！　ご、ごめんなさい、ごめんなさい……!!」
怯える少女を、傲然と無表情で見送った。
◆　◆　◆　◆

――これはひどい。

真意がどうであれ、あまりにもひどい。
なのはは、黙っていれば冷たい印象の美人だ。それは疑いようが無い。そして、そんな美人が無表情に淡々と喋ると、ただそれだけで無駄に怖いのである。しかも、明らかにカタギではないスカーフェイス。絶対に怖い。そして、なのはは自身の容姿にはそれほど頓着していなかった。つまり無自覚。
そんななのはに、果敢にも話しかけた二人の勇者は悉く返り討ちに遭ってしまった。
まさに魔王。

「……（あれ？）」
……気づけば、ドーナツ状に散った人々の中心で、ぽつんと佇んでいた。

――なのはは、入学３０分で孤立した。

職人芸のようなぼっちだった。
（どうしてこうなるの……私、なにもやってないのに……）
教師の説明を右から左に聞き流しながら、悶々と苦悩する。

（なにもやってないのに……）
「えぇと……吾妻さん、吾妻さーん？」
ふと、誰かが呼んでいた。そして気付く。自分の姓が変わっていたことに。
「あ、ぁ。」
はい！　と慌てて返事をしようとして。
――ガンッ！
……膝から上げた手が、机に強くぶつかった。
「……あの人、また」「『あァ!?』ですって……怖い」「不良……」
ひそひそと話される誤解のオンパレードに、なのはは更に表情を硬くする。
「吾妻さん。この後、職員室に来てください」
「（えっ、別にそんなつもりじゃ）……。」
「待っていますので、お願いしますね」
この学校に招かれた教師陣は、そんじょそこらの公務員崩れではない。選り抜かれた、問題児更生のエキスパートである。不良生徒への対応などお手の物だ。人前で強く叱りつければ、プライドを守るため、より強く反抗する。であれば、一対一で話す場を作り、じっくりと言い含めるのが最善だ。問題生徒のことをも想っての行動なのだ。
「……（はい）」
胸が詰まりすぎて、返事の声は出ないまま。
「また無言……」「大丈夫なのかな……」
ひそひそ話される自分への評価。胃がキリキリと痛む中、教師は何事も無かったようにホームルームを続ける。
「皆さんが学校生活に慣れたころを見て、オリエンテーリングを行う予定もあります。もちろん、それぞれに事情がお有りでしょうから、可能な限り調整を重ねての実施となります」
なのはは、既にほとんど聞いていなかった。耳に入るのは、周囲の噂話。なぜこうも、噂話と言うものは耳に入るのか。
「あの傷、ぜったい何かあったんだよ」
――!!!

傷跡。消すことも出来たものを、敢えて残した意味。親友。カレン。秀人が居ない間、はやてと共に自身を支え、守ってくれた者。親友。悲しかった。生きていてくれた。まだ会えていない。会えたら。その時のために残した誓い。土足で、踏み入って、

――――殺す。

「――――やめねぇか!!」

ぴん、と。気だるげな雰囲気を、その一声が引き締めた。視線が集まったそこに、一人の少女が立っていた。

「コソコソと、ヒソヒソと！

気に入らねェことが有るなら、正面から言ってみやがれってんだ！

陰気くせぇったらありゃしねぇぜ!!」

朱色の長い髪を、ポニーテールに纏めた、勝気な印象の少女だった。

黙り込む空気を割るように、ずかずかと、なのはの真正面までやってくる。バンッ、と、なのはの机を両手で叩く。

「でもなぁ、アンタだって悪いぜ！　さっきっから、あの態度は何だ!!」

（あの態度って……別に、私は、普通に……）

「――――何か、問題でも？」

……だから、何故、言葉がそうなってしまうのだ。

「!!　大ありだ！」

熱くなるタイプの少女に、頑なになるタイプのなのは。相性は最悪だ。

「せっかく、ここで気ぃ引き締めて頑張ろうって来てんだろ！　そんなんじゃ、」

「そんなんじゃ……なんだって言うんです？」

「人の話を遮るんじゃねぇッ!!」

「そうですか、それは失礼しました」

「喧嘩売ってんのかコラてめぇ!!」

なのはの対人関係演算装置が、きゅるきゅる、きゅるきゅる

……ちゅどん。
（い じ め っ 子 だ ！ ！）
熱暴走の挙句、大爆発した。戦闘モードＯＮ！
――ドガッ!!
机を蹴り上げる。
「……っせェエいッ!!」
――がしゃぁんっ!!
出来る手合いのようだ。蹴り上げた机を、そのまま遠くへ合気で投げ放った。そして窓ガラスが割れた。
「フッ……!!」
折れよとばかりの鋭いローキック！
「させるかぁっ!!」
――ガシィッ!!
足の裏で受け止め、膝をショックアブゾーバーに跳躍！　壁を蹴り、三角飛びでなのはの死角を襲う！
（なんて身軽な！　でも、見えている！）
「……しッ!!」
頭頂部を狙う肘を、舞うような回転運動で回避。続けざまのアッパーが顎を砕きに翻る!!
――ジャッ!!
「く！」
「う！」
掠った制服の端切れと、数本の頭髪が宙を舞う！
間合いを保ったまま、じりじりと機を伺う。
（こいつ……!!）
（出来る……!!）
制圧のため更なる力を解放せんとするなのはに対し、朱色の少女もまた、その気配を強める。
（徒手に限れば、スバルにも迫る……!!）
（冬眠明けのヒグマより強ぇえ……!!）
遊びの余地を捨て、気を高める！

（我が子よ、母の戦いを見ているのですよ……!!）
（ジッちゃん。オレはいま、最強の敵に会いまみえたぜ……!!）
教師は他の生徒たちを迅速に避難させ、応援を要請。教室には、今や二人のみ。
「リングには丁度いいじゃねぇか、オイ」
「ククク……ジャッジもレギュレーションもありませんよ……？」
完全に悪役である。
「はぁっ!!」
「ぜぁっ!!」
貫手と熊手が、互いを弾く……否、熊手が握撃へ転化。制服の袖を絡め取り、投げる！
（甘いわっ!!）
投げから脱出するのではなく……投げの勢いを、そのまま腕へ返す関節破壊!!
「ちィッ!!」
掴み手を開放、投げっぱなしの速度を、黒板を蹴り砕き吸収！
――ビュンッ!!
出席簿を投擲！　完全に真横を向き、視界に捕捉できるのは厚みの数ミリ！　狙うは目!!
「怯むかよぉッ！」
「!?」
――――ガツンッ!!
額で受ける!!
「本身の刀でも持って来いやぁっ!!」
両手熊手、双掌打!!
「生憎、品切れですよッ!!」
迎撃の正拳!!
「らァッ!!」
激突の寸前、唐突に身を翻す！
「!?」
ばさりと、なのはの視界が朱色に遮られる！

（……髪!?）
ポニーテールを、それこそ尾のように振るい視界を塞いだ！　視界いっぱいに広がる肘の一撃！
「……つぐぅ!!」
回避を損ない、僅かにカスる！　だが、やられてばかりではない！
――ビシィッ!!
「がぁッ……!!」
鼓膜破壊の張り手が、不完全ながらヒットする!!
「……ふぅううううっ、」
少女が大きく呼吸。奥義を放つのだろう。
「はぁあっ……!!」
なのはも、人の身にて辿り着く体術の頂の一つを解禁、
（――何しとんじゃお前はぁあああああああッ!?）

キィイイーン!!　と、頭痛がするほどの念話が降り注いだ！
「んぎっ……!!　な、何だぁッ!?」
朱色の少女も、それに気づいたようだった。
「……あっ!?」
なのはから、殺気が雲散霧消する。
「あっ、えっと……これは……そのっ。……違くて！」
あたふたと声の主に対して申し開きをする姿は、まるで年頃の少女そのものだった。
「そこまでだっ!!」
そこへ、サスマタを構えた教師陣が槍衾を構築して攻め入ってきた。
「くっ……勝負は預けるぜっ!!」
――がしゃああんっ!!
自分で割った窓を更に割り広げ、４階の高さから身を躍らせる。
「チッ……！　首を洗って待っていなさい!!」
――がしゃああんっ！

反対方向を突破し、なのはもまた退散した。

――新築校舎の一室が、悲劇的ビフォーアフター。

窓ガラスは大胆に取り払われ、日差しと風が激しく吹き込む通気口に。

破壊された机、抉られた壁が平和な風景に致命的な退廃感を醸し出す。

砕かれた黒板が、学習という枷から人々を開放するという心憎い演出。

これが、当代随一の破壊の匠たちの技である。

――なんということでしょう。

――なんということをしてくれたのでしょう。

……緊急職員会議の結果。吾妻なのは、ハリー・トライベッカの両名に、1か月の停学が言い渡されることになった。

◆・◆　◆　◆

「おーい、なのは」

……その日の夕方。自宅の前で、制服姿のまま途方に暮れる秀人の姿があった。

「怒らないから、開けてくれよ」

……一足先に自主早退を果たしたなのはが、自宅に籠城しているのだ。

『嫌っ!!　ぜったい怒るもん!!』

扉の向こうから、癇癪の声がする。

「だからって、遮断結界で異界化までさせなくたっていいだろう」

強く結びついた二人だからこそ、こうして半分を念話にして話すことが出来ているのだが……高ランク魔導師が束になっても開けない、

下手な封印遺跡よりも突破が困難な壁に遮られていた。神通力の無駄遣いである。
『……私悪くないもん！　何もしてないもん！』
「……うん、うん、たぶん、本当に悪意なんて無かったんだよな……」
……秀人は、なのはがいわゆる『誤解を受けやすい子』であるということを十二分に理解していた。なのは的には、実際、本当に普通に応対しているつもりだったのだ。それが急に怒り出したり、遠巻きにされたりして混乱し、意味も分からないまま咎められ、パニックを起こしてしまった。それが、既に噂として出回っている『教室破壊事件』の真相に違いない。
（しかしなぁ……なんだって初日に）
……不器用にも程がある。
「こら、いい加減ワガママ言ってないで開けなさい。本当に怒ってないから」
『……』
「怒らないけど、あまり聞き分けが無いようなら、四葉に言うからな」
『!!　な、何でそこで四葉が出て来るのよ!!』
「ほら、どうするんだ。ついでに、はやてにもフェイトにもユーノにも言っちゃうぞ」
『……!!　意地悪!!　秀人さんは意地悪だー!!』
よーしこれで観念するだろう、と思っていたら。
――想像の斜め上の行動をとり始めるのだった。
『押入れ二段目、漫画全集の上……』
「ッ!?　な、何をするつもりだ!!?」
『……プレミアムバンダイ限定、ペイルライダー陸戦重装備仕様……これ作るね』
「!?　お、おい。待て、早まるな！　それはキットが一般販売されてからじっくり作る予定の!!」
『そんな日は来ない!!』
――べりべりべりっ！

「Ａｈａａａａａａａａａａａａ!!」
　そして、壁の向こうからぱちん、ぱちんという音が。
「ひぃいやめろぉー!!　やめてくれぇー!　せめて俺に作らせてくれぇ!」
『意地悪な秀人さんが悪いんだから……!!　ゲートだって処理しないでニッパー一発切りで素組してやるんだから……!!』
「やめるんだ!　それは洒落にならんだろぉおおおお!!」
　……と、喧嘩しているような、いないような。そんな雰囲気を割るように、一台のスクーターが敷地に停まった。
「ん?　ベスパ……?」
　ジェット型ヘルメットを颯爽と脱いだのは、かつてのなのはの担任、咲だった。
「秀人くん、待たせたわね」
「いや呼んでないですが」
「月村さんから連絡を受けてね」
「あぁ……」
　あの騒動、とっくに理事会の耳に入っていたらしい。たぶん、なのはが意固地になるところまでを見越して、咲を呼んだのだろう。
「それじゃ、お願いね」
「うス」
　念話のチャンネルを、咲に合わせる。
「なのはさん」
　ビクゥッ、と、身を強張らせる気配があった。
『ッ……!?　せ、せんせいっ!?』
「来ちゃった☆」
『可愛く言っても駄目!　……な、何の用?』
「……開けなさい?」
　マジギレオーラが出ていた。それもそうだ。
　信じて背中を押したはずの教え子が、まさかの一歩目からドロップアウト。入学初日に停学というアクロバット。呆れればいいやら、怒ればいいやら。

――――慰めるのは秀人がやるだろうと踏んだので、咲は叱ることにした。
『……』
対するなのはは、この知らんぷりである。自分の城に居る限り、気持ち的には無敵になれる。悲しき引きこもりの性だった。
「……そう。そういうつもりなら、こちらにも考えがあるわ」
『……？』
疑問に思うなのはだったが、気持ち的には無敵である。何を恐れることがあるのか。
「秀人くん。初めに謝っておくわね。わたし、今からなのはさんに酷いことを言います」
「あの……気の済むまで、このまま過ごさせてやっても俺は別に……」
「甘やかしすぎです」
ぴしゃりと言い切られてしまった。
（ふーんだ。先生が何を言ったって、私はちょっとやそっとじゃ
「はい、二人組つくってー」
『あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝』
――――鬼だ。
なのはの弱点、トラウマをダイレクトに抉りに掛かっている……！
『はぁーーーー……!!　はぁーーーー……!!　やめろ……やめろォ!!
偶数を2で割るのに余りが出る矛盾はやめろォ！　そ、そんなので、私が、折れるわけがぁ……!!　ククク、ククク……しかし、初撃がすべての一撃、何度繰り返そうと
「あら、なのはさん誰とも組めなかったの？
誰かー！なのはさんを仲間に入れてくれる人――！！」

『ぎええ。え。え。え

「うぅーーー……!!」「ぐぇっ」
気が済んだところで、秀人にタックルをするように縋り付き、表情を隠してしまう。
「……はぁ。で、何があったの？」
咲に頭を撫でられ、ようやくボソボソと話し始める。
「……あのね、学校でね、……何もしてないのに、みんなが意地悪するんだ……」
ぐずぐずと鼻をすすり、咲へ思いの丈をぶつける。
「そう……本当に何もしていないのね？」
「絶対なにもしてない……私は悪くない……社会が悪いんだ……」
「それはそれでどうなのかしらね……」
しばらく話していると、気も晴れてきたようだ。
ヴィヴィオに例の手紙を書いたり、秀人に修正されたり、ぼうっとしたりと、好きなように過ごし……
「停学中の課題、必要なら教えに来るからね」
「……うん、ありがと先生」
「飯でも食いに行くか」
「……あ、もう七時だね。……もう、昼からずっとお腹痛くて……」
「？　お腹が痛いって……えっ、なのはさん!?」
そして、すっくと立ち上がる。
――足元を伝う、見慣れぬ液体。
「……。」
「……。」
「……。」
三者三様に、動きを止める。
「……痛かったのは、いつから？」
「……昼の戦闘の後、あたりから」
「……十月十日は、目安だったな」
ふむ……と、正常化バイアスが掛り、淡々と事実確認がされていく。
「……破水しているわね」
「……なるほど、これが」

「……結構な量が出るな」
うむ……ふむ……などと、一歩も先へ進まない確認が一通り済んだ頃。
「――――――やっべ産まれるわコレ」
事態は急速に動き出す！
「救急車――――――――――!!!!」
大家に、ニートをしていた奈々に、桃子に、とにかく片っ端から連絡が入っていく！
「救急車なんぞ待ってられるかー!!」
秀人はパニクって神化しかけ、駆け付けた最年長の大家にブン殴られ気絶し、桃子と士郎がハイエースをドリフト駐車させながら駆けつけ、旧友の望の実家である医院に運び込まれることになり、……とにかく、あの事変以来の大事件にまで発展した。
……縁者一同が集まれば、いくら人見知りのなのはとはいえ大所帯となる。
「予定日より早いです先生！」「まぁ、そういうことも有りますよ。かくいう私も早産でした」「いえ、学校で乱闘騒ぎを起こしたと……」「アンタ馬ッ鹿じゃないの!?」「うわぁ先生落ち着いて！　妊婦ですよ相手！」「あああもう、これだから若い母親はー!!」
分娩室へ即座に運び込まれ、中から怒号が聞こえてくる。
「……」
当事者である秀人は、腕組みしてどっしりと構えており……
「よーしパパ因果律に干渉しちゃうぞー！」
「「「

秀人の実母、桐子が、レイジングハート(人間形態)に連れられ、やってきた。実父の秀雄も、車椅子上から目で『落ち着け』と促している。
『だだだだ大丈夫ですよ秀人……マスターのししし身体状況はモニターしていますので大丈夫大丈夫大丈夫……無駄に頑丈になる秀人成分も含有されてるから大丈夫大丈夫大丈夫……あぁああマスター大丈夫でしょうか……秀人、ここは一丁、因果律を操作しましょう』
「いや、落ち着けよ……」
……一番冷静じゃなさそうなやつがいた。相変わらず人間臭いデバイスだ。
そんなレイジングハートのポンコツっぷりを見て、少しだけ冷静になれた。
「……」

――――――

# ｖｉｖｉｄ編　４話『ひとりえんそく』

ここは産婦人科の入院病棟。治療と言うよりは、出産の準備、もしくは予後のための宿泊施設といった側面の方が強い。
無事、５６００ｇの男児を出産したなのはも、普通の病院と違い暖色系の内装が特徴的な部屋で（強制的に）入院と言う名の宿泊をしていた。
「だってあなた。あの母親ったら、嬰児連れてさっさと家に帰ろうとするんですもの」
担当した産婦人科医・玉木和江は後にこう語る。
「普通ね、出産っていう大仕事を終えて、さらにこの後数年スパンで取り組む育児っていう更なる大仕事が待っていて……ある意味、ゆっくりしていられるのはこれが最後なのよ。
休むでしょう？　普通は……。というか帰さないわよ。いくらデカくっても嬰児は脆弱なんだから。
え？　さすがに嘘だろうって？
……わたしだって、信じたくなかったわよ」
ため息をついた玉木医師は、さじを投げたように微笑む。
「あなたは、分かっていないわね。吾妻なのはという人物の真の恐ろしさというものを」
――まさか、院内であんな騒動になるなんて。それこそ、神さまだって分からないでしょう？
「帰って！　帰って!!　帰ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
「すまねぇ！　すまねぇ!!　すまねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
……掛布団を頭まで被って絶叫するなのはと、額がめり込むんじゃないかと思うくらいに深々と土下座を敢行するハリー。
時は遡る――

無事、何事も無く出産を成し遂げたなのは。待機していた面々は、その今世紀最大に喜ぶべき出来事に文字通り狂喜していた。

……病院の廊下で。

「じゃかぁしいわボケがぁッ!!!!」

……鬼のような形相の師長に一喝され、なのはの体調も気遣って早々に退散していく。

両家の両親のみが最後に残り、それも帰って行った。

「大丈夫なのにぃ～……」

若干、ぶすっとした態度のなのはがぼやく。二人の子供は、今は新生児室でぐっすりと眠っている。ずっと手元に置いていたい気持ちは、分からなくもない。

「それに、その方が良いと思うんだけどなぁ」

「産声でガラスを割るとは……」

「元気だよねぇ～」

ひと仕事を終えた安心感から、どこかホワホワしている。

「うむ……しかし、そうか……子供か……」

父親としての自覚は持ったつもりだったが……やはりまだ、現実感が無い。男親であるので、仕方ないと言えば仕方ない。

「うんうん。停学してても仕方ないよね」

「仕方あるわ！」

停学は一か月。タイミングが良いと言えば良いのかもしれない。

「……まぁ、学校にも保育所があるから、停学明けからはそこを使おう」

二人の通う学校は、若年者ばかりではなく幅広い年代の生徒を受け入れている。中には、子供を持つ母親もいる。そういった者を対象にした設備も完備されており絶賛稼動中、とのことだ。

「……ねぇ秀人さん。保育所登校って」「無ぇよ」

この期に及んで、この母親は。

「明日あたり、四葉がヴィヴィオ連れて飛んでくるって言ってたよ」

「さすがに急すぎて間に合わなかったな……」

入学式―乱闘―停学―出産……全く意味が分からない。予想でき

たらそれこそ神だ。
と、マナーモードの携帯電話が、メールの着信を告げて振動する
「すずかだ」
文面の長さからすると、学校関係……「え？」同じく、画面を見たなのはも「え？」
――ハリー・トライベッカさんがそちらへ向かっています。
「ハリーって、確か……」
なのはの、乱闘相手の。
――もちろん、こちらから情報は一切開示していません。ですが、何をどうやったのか、そちらの所在を突き止めたと、彼女の知人から通報がありました。
「……不利な状況を突くのは定石だけど」
「これは……ヤバいかもな」
まさかのリベンジマッチか。産後のなのはが不利だ。
――あ、申し訳ありません。もう面会時間は、あ、ちょ、
――きゃー!!　なんですか貴方は!?　警察、誰か、けいさ　あべしっ
……二人は顔を見合わせ、頷き……存在隠匿の高位結界を展開する。
「……」「……」
新生児室までも覆ったので、安心だ。
「ふぅ。とりあえずこれでやり過ごし」
「――邪魔するぜぇッ!!」
――ガラガラガラッ!!
「うわぁあああああああーーーーーーーッ!!」
何事も無かったように入ってきた！
なのはとやりあったままの姿だ。生命力溢れる特徴的な紅色の頭髪が、まるでそれ自体が発光しているかのように煌めいている。
「見つけたぜぇっ……！」
「……随分と早い再会ね」
なのはも既に戦闘モードだ。

「おいちょっと、二人とも待て！　つーか場所を弁えろ！」
すぐそこに新生児室がある。ここでいつものノリでドンパチされては、絶対にマズい。
が、ハリーは聞く耳も持たず……
「ここで会ったが百年目――!!」
シュバッ、と野生動物の身のこなしで跳躍！
「くっ」
迎撃やむなし。構える秀人。そして……
「――すまなかったぁあああああああああああああ!!!!!!」
……額から着地するジャンピングＤＯＧＥＺＡが炸裂した。

――時は動き出す。

その後、根が生えたように動かず土下座を続行するハリーに恐怖を覚え、精神的ひきこもりを発動したなのはも没交渉となる。
「もう帰って!!」
「いいや帰らない！　お前に謝り倒すまでは！」
「いいから帰って!!」
「いいや帰らない！」
「帰ってーーーー！」「嫌だーーーー！」
――どうすりゃいいの、これ。
秀人は、途方に暮れていた。とそこへ、またしても結界を無視して奈々がひょいひょいと入ってきた。
「受付の子は無事だヨー。ちゃんと記憶も消……ケアもしておいたヨー。……そっちの子」
さらっと恐ろしいことを言う奈々だったが、秀人には、どこか……様子がいつもと違うように見えた。
「おーう、秀人。ここにワシの曾孫来とらん？」

「おう爺さん。……曾孫って、もしかして」
「帰っ……ええいもう分かった。私が帰る！　おうちに帰る!!」
「帰すものかぁあああああっ!!」
カバディカバディカバディ……と、部屋の中でシャカシャカと円運動を繰り広げる二人の片方。紅髪のほうの襟首を大家が摘み上げる。
「うわっ誰だ!?　……あ、ジッちゃん!!」
ぱっと顔を明るくするハリーの脳天に、巌のような拳骨が……

「ふむ。騒動の後、なのはちゃんが身重だと知り、いてもたっても居られなくなった、と」
「そ、そうだ……身重の獲物は狩らねェ……それが、野生のルールだ……イクラもシシャモも食わねぇ……」
……ぶすぶすと煙を上げそうなタンコブを作りながら、ハリーが言う。
「爺さん、曾孫まで居たのか」
「そりゃおるわい。ごひゃ、……げふんげふん……８０も生きておれば、おるわい」
「今すっげぇ鯖読んだな!?」
本当に人間かよ、と、お前が言うなと全宇宙から突っ込まれそうな感想を抱く秀人だった。
「ルールを破ったケジメをつけようと、匂いを辿って来た、と」
「おう。余裕だったぜ！」
「時と場を弁えんか!!」「いてぇーー!!」
がり、と、変な音がして振り向くと、奈々が、親指の爪を齧っていた。
「おい、どうした」
「……べぇっつにーーーーーーー……」
その目は、大家とじゃれあうハリーに、ひたすらに注がれていて。
（あぁ……そうか）

「……その察したような目、ちょっとむかつくー……」
余裕の無い奈々という、貴重な1シーンが見られた。
「おう、お前らも入れ！」
ハリーが号令すると、長身、中背、チビの三人がぞろぞろと入室してくる。仲良しグループ……ではない。どこか、三人が三人とも、互いを警戒しており、『友達の友達』が三人集まった……といった様子だった。
「えー……なんかぁー、ウチらが言ったことで気にしちゃってるって、この人から聞いてぇ」
「あー、そうそう。なんかゴメンねー。悪気は無くってさぁ」
「……すみませんでしたぁー」
……謝れと言われたので、形だけでも謝りました感がアリアリと感じられる。
「お前らぁ……!!」
ハリーもそれを感じ取ったのか、怒りのオーラが見え隠れする。
「だってぇ、みんなだって、そう言ってたしぃ」「そうそう。みんな言ってたもんねぇ」「みんなだって同罪だと思うなぁ」
――ガタンッ。
……なのはが、ベッドに突っ伏していた。
「みんなって……みんなって、何よ……『みんな』の中に居たこと無いから、分からないわよ……！『みんな』を引き合いに、話さないでよッ……！　私には、分からないじゃないッ……!!」
あまりに切ない告白に、場が沈黙する。ハリーが、気を取り直したように。
「――ま、まぁ、停学明けたら遠足だ。それで、」
「え、遠足ッッ……!?」
目を見開く。その姿を、『楽しみにしている』と勘違いしたハリーが意気揚々と言葉を重ねる。
「おお、そうだ遠足だ！　どっかの山に行くって」「山ッ!?」「……お、おい？」
……ただならぬ様子だ。

「……う、運動広場……ベンチ……お弁当……!!」
――あ、これヤバい(黒歴史)やつだ。
……そう頭で理解はしていても。
(や、やめろ私！　思い出すな!!　思い出すなッーーー!!)
もわもわもわーん、と、過去の記憶が甦る。

◆▪◆　◆　◆

オイオイオイ（笑）
（寂しくて）死ぬわアイツ（笑）
ほう、友達抜き遠足ですか……
大したものですね（憐憫）
友達を抜いた学校行事はトラウマ製造率が極めて高く、生涯に渡って苦悩する人間もいるくらいです
なんでもいいけどよォ
この先の人生リア充だらけだぜ
それにクラスで一人だけのスーパーの弁当にペットボトルの温いお茶
これも即効性のトラウマ源です
しかもスナック菓子も添えて悲壮感バランスもいい
それにしても人生この先長いというのにあれだけ孤立してしまうとは、悲劇的な社会性というほかはない
死にますよ彼女は（社会的に）
「よし、と……（トラウマ爆誕）」

◆▪◆　◆　◆

「うわぁああ……!!　うわぁあああああああーーーーーーー！　うわァァァァァァァーーーー!!」
……頭を抱え、精神的自刃を強行するなのは。
「あの五部刈りメガネのクソ教師ぃぃぃぃぃぃぃ!!　ええ予想通り孤立したわよぉおおおおおおお!!」
「なのは!?　正気に戻れ！　なのはぁーーーーー!?」

ガクッ……と、電池が切れたように項垂れる。ハリーも、見舞いに来ていた大家と奈々も、何事かと動きを止める。

「……滅べぇ、リア充ううううッ……!!」

……ぐにゃりと、禍々しい動きで首をもたげたなのはは、見舞客、看護師、外敵、そのツレの一般人……その全てへ暗黒の気を無差別に解き放った。

漆黒の瞳で、ただ機械的に、無感情に、有るがままの事実を……。

「……あの日私は、疲れ果てた様子の母さんにどうしても『お弁当作って』の一言が言えず、毎日テーブルの上に置かれている千円札を片手にスーパーへ。丁度半額セールの時間に重なり、幸運にも弁当入手に成功。お茶と、……誰かとシェアできるかもという甘い期待のもと購入した特用サイズのスナック菓子を購入。遠足当日。クラスメイト達はみな魔法瓶を持参。ペットボトルを持って来ていたのは私だけ。また、女子というものはチョコレート・クッキー・マシュマロなどといった甘味を好む傾向が有り、スナック菓子の受けは最悪。封も切らずにリュックサックの底へ。遠足会場、運動広場へ到着し昼食の時間。皆、ランチョンマットで包まれた手作り弁当を持参しており、出来合い弁当を持参した私、見事に浮く。誰からも声を掛けられず、一人離れたベンチで食事をする。自由時間、一人でアスレチックなど出来よう筈も無く、一人で長時間、ベンチから広場を眺める。陽を浴びて目いっぱいに遊ぶ同級生を、薄暗い木陰からただ眺めるだけ。帰りのバス、新たに形成されたグループに席を奪われ、一人で補助席に座る。思い出を語らい、遊び疲れて眠る同級生たちに囲まれ、固い補助席の上、誰も食べることの無かったスナック菓子を齧りながら、一人冴えた目で高速道路の流れゆく壁をただ眺める。迎えの保護者はおらず、一人で家路につく私。後日、張り出される購入希望者向けの遠足風景の写真の中、広場を眺める姿をプロのカメラマンに激写されていた私、最上段に単独で掲載される。掲載期間は一週間。せめてもの慰めに、と、その写真を購入。購入枚数が掲示されることを知らず、購入数1（内訳・私）が公表され、『誰が買ったの、これ（笑）』『いらないー（笑）』『っていうか、誰これ（笑）』と同級生たちがその写真を指さ

し笑う姿を見続けることに」
「もういい!!　もういいだろォオオオオオオオオ!!」「ウギギギギ……!!　やめろッ……!!　お願いだからやめてくれぇーーーー!!」「嘘だ……!!　学校生活が……そんな、そんなのって……!　……嘘だぁっ!」「ひぃいいん……!!　怖いよぅ……ぼっちになるの怖いよぅ……!」「世間が悪いと叫んでも、誰も責めないッ……!!　世の中クソだッ!!」「ああ……故郷に戻らなきゃ……!!」「おかあちゃん……弁当、作ってくれてありがとう……!!」
　切なくて死にたくなるような胸を掻き抱き、滂沱と涙を流して絶叫する者。耳を塞ぎ、歯を食い縛りすぎて血を流す者。学園生活への希望を打ち砕かれ絶望する者。ただ、訪れる可能性のある未来に忘我する者。やり場のない憎しみを覚える者。全てからの逃避を選ぶ者。ロシアンルーレットが外れたことを感謝する者。
――――――これは……ひどい……
　度を越した……それこそ『黒歴史』と呼んで差支えの無い心的外傷が、『共感』という、人間に備わった尊く美しい機能を介して伝播していく。というかちょっと神通力が漏れていた。なのはのぼっちで世界がヤバい。

――――２０××年。世界はぼっちの怨念に包まれた。
――――涙は枯れ、胸は張り裂け、全ての希望が死滅したかのように見えた。
――――だが、リア充は死滅していなかった！
「私の名前を（知っている人がいたら）言ってみろぉ……!!」
――――世はまさに（心の）世紀末……!!
「ククク……私は既に（社会的に）死んでいる……がくっ」
　胸に七つの心的外傷（トラウマ）を持つ女、なのはは、己が暗黒奥義のひとつ、『ひとりえんそく』を解き放った反動＋出産の負担で、二度煎れた出がらしのように干からびていた。
「なのはーーーーーーーーーーっ!!!?　とりあえずこの状況なんとかしてから倒れろーー!!?」

……『学校』システムをロクに知らない者には通用しないという、なのはすら知り得なかった抜け穴をどうにか脱出できた秀人、奈々、大家、という三傑が事態を収束させ、改めてなのははハリーと向き合う。
「……なんか、スマン」
「謝らないでよ……惨めになるじゃない……」
　極めてバツが悪そうに謝るハリーに、なのはは若干、警戒を解いた表情だ。警戒レベル１２０が、警戒レベル９０くらいに。断絶ラインが１００なので、ギリギリ対話が成立する。
「さて、ぼっちのなのは」
「ぼっちは真実だけど余計よ」
「真実なのか……」
　がくっ、と脱力するハリー。
「んじゃ、なのは」
「なによ赤いの」
「ハリーだよ!!　ハリー・トライベッカ!!」
　憤慨するハリーは、腕を組んでなのはへある提案を持ちかける。
「――――同盟を組もうじゃねぇか」
「……同盟？」
「ああ、そうだ」
　仰々しく、頷く。
「……残念ながら、オレも停学を喰らっちまった」
「自業自得じゃない」
「お前もな！　話が進まんから黙っとけ！
　……オレが言うのもなんだが、人間ってのは群れて生きるモンらしい。オレやおまえは、別に生きていくだけなら死ぬまで困らん能力はあるが、世の大抵の人間は違うからな。群れて互助しながら生きる、そのための場が『社会』ってヤツだ」
「しゃ、しゃかい……社会ッ……！」
「怨念出てるぞ。
　……で、『学校』っつーのはどうやら、その『社会』の予行演習の場であり、一部本番らしい。なら……オレらもそのルールに則り、

群れなきゃならねぇ。
が、オレらはその第一歩でケッ躓いちまったようだ。それこそ、下手をしたら群れの中の異物になっちまう」
「？　何かおかしいの？」
「すべてがおかしいんだよ、お前は！
……ああ、まぁ続けるぞ。群れの中で生きるためには、群れの中で更にコミュニティを作って群れなきゃならねぇ。……矛盾してるか？　あぁそうだな。オレもそう思うよ。
まったく人間ってヤツは……
――１００年程度じゃ、これっぽっちも変わりゃしやがらねぇ」
ざわっ……と、ハリーも苛立っているのか、赤い毛並から神気のようなものが漏れる。
「……ハリー、あなた」
「言いっこナシだぜ、新米の『神様』よ」
にやり、と、人間を逸脱した鋭さの牙を剥きだして笑う。
「ま、そーいうわけで、オレも人間社会で生きる以上、必要以上に孤立するわけにはいかねぇんだわ。一人っつーのは、悪目立ちするからな。
例えば、さっきの遠足「「「

劇団ひとりを強制閉幕させるハリー。
「はっ、私はいったい……」
「マジでやめろ！　切なくって死にたくなるんだよ!!」
「えっ、大丈夫だよまだライトなやつだから」
「ライト……!?　今の断片だけで人が死ぬぞ!?」
涙目で訴えるハリーに気圧され、改めてイメージする。
『はいそれじゃあ、二人組になってスケッチをしましょう』
「がふぁっ……!!　お、落ちつけ、私。ただのイメージ……イメージだ……ず、図工の授業……ペア……石膏像……おいやめろ！　……イメージだってばぁ!!」
イメージを気合で研ぎ澄ます。
あの悪魔の言葉は消し去らなければならない。教室を見渡すと、こちらを見るハリーと目が合った。互いに駆け寄り……
『ハリー!』『なのは!』
ぱしーん、と、ハイタッチ。そのままシェイクハンズ。
『『二人組成立!!』』
――――――――――――――――――――――――。
「あれ!?　ダメージが無い!?」
「ダメージ前提なのか……だが、どうだ？」
「ちょっと待って。もう12パターンくらいシミュレートする」
「……そんなに検証する場面があるのか……？」
うんうんと、こればかりは無駄に長けた状況予測能力をフル回転させ、あらゆる場面においての『同盟』の有用性を確認する。
「すごい！　天才じゃね!?」
この神、ウッキウキである。
「同盟、組むか？」「組む!!」
即決！
「おっし。んじゃよろしくな」
すっと差し出された手を、じっと淀んだ瞳で見つめ……「そう、あの日もそうだった。『えー？（笑）いつからアンタと仲良しに
「よ・ろ・し・く・な！！」

もうええ加減にせぇやとばかりに、がっちり捕まえた手を、ぶんぶんと上下に振るハリー。目を回しながらも、照れくさそうになのはが笑う。果たして、なのはは気付いているのだろうか。

――――その『同盟』が、『友情』と呼ばれるものと極めて近しい、ということに。

「がんばれ……なのは、がんばれ……!!」

秀人は、両手をぐっと握りしめ……社会性ズダボロな妻の社会復帰への一歩を涙目で見守るのだった。夫と言うか親の心境である。

「……なぁ、」

と、そんな様子を遠巻きに眺める（回復した）同級生たちが、慈愛に満ちた心で語り合う。諍いなど、わだかまりなど……この胸を満たす温もりの前には、ちっぽけなものではないか……。

「なのはちゃん、停学が明けても、アタシたちが面倒を見てあげよう……」

「うん……なのはちゃんには、たくさんの愛が必要だと思う……」

「……なのはちゃんに、楽しい思い出、いっぱい作ってあげようね……」

――プ○キュア五つの誓い。一つ。愛は与えるもの！

社会性協調性コミュ力その他を、もろもろ過去に置き去りにしてきたなのはのための影の同盟……『なのはちゃんを温かく見守る会』が、ここに結成されていた。

ｖｉｖｉｄ編　５話『　彼女たちの受難　～　被害者の会　～　』

――彼女の幸福は『力』を持っていたことであり、
――彼女の不幸は『力』を持っていたことである。

◆◆◆◆

――海浜レストラン・ミウラ

潮風の香るミッド湾岸部。
地元の湾で獲れる天然のシーフードグルメをご提供。
ブルーオーシャンを望む展望デッキで、家族と、友人と、大切な人との素敵なひとときをお約束します。
ランチ、ディナー、テイクアウトの軽食まで取り揃えております。
皆様のご来店を、心からお待ちしております。

◆◆◆◆

「……はぁ。」
ミッド湾岸をとぼとぼと歩く少女が、物憂げなため息をつく。
宵の刻。ミッドとはいっても、全域が煌々とネオンを焚いているわけではない。郊外に出れば、閑静な住宅街が広がっている。灯りと言えば、街灯ぐらいなものだ。以前は、街頭とはいっても数は最小限で薄暗く、首都であるはずのミッドでさえ夜間は治安に問題が有ったのだが、現トップ、レジアス大将の政策により、市内全域に街頭とリアルタイム監視カメラが設置され……ある程度までなら、夜間に出歩い

ても安全が確保されるようになった。
さて、そうした中、歩を進める少女の足取りは、重い。
「……はぁ～」
台車に乗せた空のガスボンベが、からころと鳴る。
（……潮風って、そんなにいいものじゃないよ。自転車はサビるし。洗濯物も室内干しになるし。……まぁ、サビるもなにも、風で砂が舞って路面がジャリジャリで滑って危ないから乗らなくなっちゃっただけなんだけど）
実家でもあるレストランの宣伝を思い浮かべながら、そんなことを考えていた。
（でも、友達にそう言うと『自虐に見せかけた自慢かなー？』みたいに思われるんだよなぁ）
別に、不満があるわけでは無い。両親は大らかで優しく、スタッフも皆、気さくでいい人たち。お客さん達も、最盛期にはまぁ、ちょっと夏で脳が茹って開放的になっちゃった人たちがドッタンバッタン大騒ぎをするくらいで、まぁ迷惑だけど笑い話になるレベル。
こうして、急な団体客が来て、ガスが足りなくなったのを、距離にして１ｋｍ程をお使いに出るのも苦ではないし、嫌でもない。事実、ミウラが歩くのがてっとり早い。
ただ、キャパいっぱいのお客の対応をして手が離せない両親からのお願いと、今日、クラスメイトのミナコちゃんのお誕生日のお誘いを天秤に掛け、前者を取ったことを、今更モヤモヤと考えているだけだ。
もやもや歩いているうちに、スタンドを小ぢんまりと経営している馴染みのところに到着した。
「あ、あのー……リナルディ、です」
「あぁ、いらっしゃいミウラちゃん」
恰幅の良い奥様が、奥からノシノシと歩いてきた。床板が軋んでいるのは、体重はもとより、その両脇にガッシと抱えたボンベの重量が大きい。
「ごめんねぇ。送って行ってあげたかったんだけど、なんか今日、どこもかしこも繁盛しているみたいで。ウチの営業車、ぜんぶ出払っ

ちゃったのよ～」
「うちもお客さん、いっぱい来たんです。何なんでしょうね」
「さぁ……って、あらやだ、ごめんなさい、お待たせしちゃったわね」
　そして、ミウラが牽いて来た台車に、ボンベがどすん、と乗る。
「それじゃあ、気を付けてね。そんなに物騒ではないけど……」
「はい、失礼します」
　そして、さぁ家路に就こうと、ほんの１００ｍほど歩いたところで、携帯端末に着信が入る。母だ。
「どうしたの、お母さん。もう新しいボンベ、貰ったところだけど」
『ミウラ、ごめんなさいねぇ。それなんだけど……お客様が急に、こんなに新鮮なら、火を通すよりマリネか何か……ええと、サシミ？　で出してくれって。だから、屋外バーベキューのガスは、そこまで急がなくても良くなったの』
「そっかぁ」
　たまには、そういうこともある。お客様の要望には、腕の限り応える……というのが、父もモットーだ。今頃、包丁を振るっているのだろうと考える。
「まぁ、とりあえず戻るよ」
『ごめんねぇ、せっかく出てもらったのに……あ、はい……じゃ、気を付けて帰って来てね』
「はぁい」
　ぷつっ、と通話が切れると、ざざぁん、と、波の音が聞こえてきた。
「……まぁ、結果論だよ、結果論。必要無かったかもしれないけど、これから必要になるかもしれないし」
　今度は焼いて食べてみたい、とか言い出す可能性もある。だから……でも……
「……ミナコちゃんのところ、行きたかったなぁ」
　――今度、わたしのお誕生日会をするの。それで、……ええっと、ミウラさんも、来る……？　えっ、来るの？　……そう。
　……歓迎されていたかどうかは、ともかくとして。
（あー、もやもやする）

気まぐれに、砂浜に下りてみる。数歩歩いただけで、もうスニーカーの中に砂が入ってきた。無視してじゃりじゃり、と歩を進める。
「……」
叫びでもしたら、このモヤモヤは消えるだろうか。
「……」
いや、誰かに聞かれるかもしれない。というか通報されるかもしれない。
傍らには、いまのところ無用なガスタンク。
「……」
無駄な衝動が体を突き動かしていた。
（頑丈な造りだし、大丈夫だよね……？　専用の着火剤がないと燃えないから、引火してドカーンの危険も無いよね……？　よぉし）
ざくり、と、全長１ｍほどのボンベを、砂浜に立てる。
「……ふぅ。」
たったった……助走のために、後ろに下がり……
「えいやあああああーーーーーッ!!!」
――ガギゴォンッッッ!!!
会心の蹴り応え！　……だったのだが。
「あ〝っ、やばっ……！」
よほど当たり所が良かった……いや、良すぎたのだろう。ボンベは見事に宙を舞い、くるくると、回転しながら……
――人影。
（うそ、なんで……なんで!?）
――大けが。
「あ、あぶな……!!　だめ、……！」
最悪の予感に、ミウラが愕然と目を見開き……
――ぱすんっ
……キャッチ。受け止めた運動エネルギーを、身体の関節各所へ分散。横にくるくると回って……どん。堤防の土手に、何事も

無かったかのように着地した。
「あ、あ、……あぁ～～……」
安堵に、へなへなと座り込む。そして、ハッとする。
（そ、そんな場合じゃ……！）
万が一にも、怪我をしていないだろうか。心配するミウラをよそに、そのボンベをキャッチした人物は……じいっと、こちらを見ていた。
（怒ってる……ぜったい怒ってる……）
自業自得とはいえ萎縮してしまう。その人物は、街灯から少し外れたところに立っているため、いまいち姿は見えないが……ボンベと、ミウラを、交互に見比べる。
「……？」
訝しがるミウラ。そして。
――シュバババババッッ!!
……砂浜を、滑るような勢いでミウラの下へダッシュしてきた！
目は……バッチリとミウラを捕捉しており、口元には笑みが浮かんでいる！
（ひぃいいいいいいッ!?!?　モノノケー!!?）
今更、あわあわと逃げようとするも、恐怖で腰が抜けている。その人影は、へたり込んだままのミウラの目の前に瞬時に到着。爛々と輝く瞳に真正面から射止められる。
（もう駄目だ……おしまいだぁ……）
圧倒的な捕食者の圧力に、ミウラは人生を諦めた。
その、人影は。
「あのっ!!」
ガシッ、と、ミウラの両手を握り。
「――私と、お友達になりましょうっ!!!」
……そう、言った。

「……はい？」
……思考が数秒、フリーズしていた。何を言っているのか、理解が出来なかった。そして聞き返す余裕を取り戻したところで、ミウラは改めて、目の前の人物の姿を認識することができた。
（うわ……すっごく綺麗な子……!!）
お人形のような……という表現がある。なるほど、確かに、栗色のロングヘアに、宝石のような両の瞳は、最高級のビスクドールでもまずお目に掛かれないクオリティだ。目の前の人物は、そこへ更に、輝く生命の炎を結晶化したような、そんな一種の神々しさまで感じさせた。
「それじゃあ、さっそく転校の手続きをしましょうか！」
「あの、お友達ってどういう、けがは……て、転校!?」
「まさかこんな逸材が居るなんて！　世界は広いですね！　あ、クラス間の戦力バランスのため、直接私のクラスに編入はできませんけど、望むところですね！」
「待ってください、待ってください、待って「さっそく、先生と校長に話をしましょう！　あ、その前にご両親ですね！　足跡を辿るに、あそこのレストラン！　いざ！」あの「あ、私の名前は、吾妻ヴィヴィオです！　聖王やってます！」待って下さい、あなたは誰ですか……って聖王!?　それはどういう、引っ張らないで、立てます、歩けますー!!」
妖怪より百億倍くらい厄介な存在に、見事キック一発で気に入られてしまった哀れなミウラは、そのまま唯我独尊が服を着て歩いているような少女に連れられ、レストランまでの道のりを引き返すこととなった。
「た、たぁすけてぇぇぇぇぇぇぇ～～～!!」

あら、可愛らしいお嬢さんね？　まぁ、うちのミウラがとんだご迷惑を。ぜひ食べていってくださいな。お代はお詫びと言うことで結構ですわ。

「というわけで、ごちそうになります」
「……」
活力を使い果たし、テーブルに突っ伏すミウラを横目に、振る舞われた料理をもりもりと平らげるヴィヴィオ。
「あの……アガツマ、さん？」
「ヴィヴィオでいいですよ、ミウラ・リナルディさん？」
顔と名前は覚えた……と言外に宣言され、ぶるりと身を震わせる。
「お友達って……」
あんな一方的に、あんな唐突に。
「もうね、こう……ビビっ、と来たんですよ！　実際、素晴らしい力です！」
力。そう言われても、ミウラは困惑するばかりだ。
「ボク……勉強、クラスで真ん中ちょい下くらいで……運動、徒競走はそれなりに速いけど、クラスで一番じゃないし、手先もぶきっちょだし……」
こうして言葉にするだけで、本当に自分は凡人だなぁ、と自覚する。
「あなたが持つ力は、そのままズバリ、物理的な破壊力です！」
「ぶ、ぶつり……？」
あの、ボンベを蹴り飛ばした会心のキックのことだろうか。
「徒競走とは、そもそも体の使い方が違うのでしょう。普通に生きていれば、使う機会が一度も無い。そういった系統の力です」
「ボク、魔力は１０人並みで、普通学級ですけど」
「些細な問題です」
そして、ヴィヴィオは……言葉を失うミウラを真っ直ぐに見つめる。
「――あなたには、力が有ります。」
（……そんなこと、初めて言われた）
「活かしてみませんか。その力。我が――創王覇道学園で」
「そ、っ……」

噂に聞く、噂にしか聞かない、実態不明の人外魔境。あらゆる情報の伏せられた、世界最高レベルの人材の宝庫。
「無理、です……」
どれだけ、買い被ってくれているのか。自分は非才な凡人だ。多少、マグレ当たりをしたキックの一発ごときで、何を判ったつもりでいるのか。
「ボクは……そんな大それた人間じゃ、ありません。お断り……します」
ヴィヴィオは、その後無言で待ち……ミウラが、それ以上の言葉を持たないことを察して、席を立った。
「ミウラさん。お会いした縁です。これは、うちの予知能力者の予言なのですが」
帰り際、ミウラに忠告を残す。
「明日の夕暮れは、外を出歩かないように」

◆・◆　◆　◆

どういう意味だろう。学校へ向かうバスの中、ミウラは考えていた。
（予知能力者って、本当に……？　聖王教会のトップがそれだっていう与太話は、たまに噂になってるけど……いやいや、でも、）
「ミーウーラーさん」
ぽん、と肩を叩かれ、はっと我に返る。
「あ、ミナコちゃん」
「昨日、来られなくて残念だったね。はいこれ」
ぽん、と手渡されたのは、梱包されたクッキーだった。
「ありがとう……」「ん。じゃね」
それだけのやりとりをすると、再び大勢の友達の輪の中に戻っていく。
「やだもー、ミナコ優しいー」「さっすがミナコー」
大勢の友達から行いを称賛され、彼女は謙遜しながらも得意げだっ

た。
「はは……」
誰にでもなく、笑う。いつもこうだ。自分は囲まれる側でも、囲む側でもなく、ただ、遠巻きに眺めているだけの、脇役以下の背景。でも、それも仕方がないと思う。自分には、彼女や、彼女たちのように、多大な社交性や会話術も無く、殊更誇れるような取組みがあるわけでもなく、
――――あなたには、力が有ります
(いやいやいやいや……)
ぶんぶん、と心の中で否定する。悪魔の誘惑に乗ってはいけない。
しかし、結局は日中ずっと、そのことが頭から離れず……授業中に二回も注意を受け、クラスメイト達からクスクスと笑われるという目に遭った。
(それもこれも、あの変な子のせいだ……)
帰りのバスの中、やや愚痴っぽいことを考えていた。
がくん、と。バスが停車する。停留所まで、まだ随分とあるというのに。
『えー、緊急車両通過のため、一時停車いたします。お客様にはご迷惑をおかけしますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします』
何かあったらしい。バスの横を、赤いパトランプを回した管理局の車が通過していく。もう少し待てば、いずれバスも動くだろう。
(……変だなぁ)
だが、10分、20分と車内で経過するにつれて、次第に苛立ちの気配が感じられる。
夕焼けは、夕暮れへと変わりつつある。
「ん、もうっ!!」
とん、と最後部席……上位カーストの居場所から、どうやらまたしても同乗していたらしいミナコが降り立つ。そのまま、つかつかと運転席まで進む。
「あのっ、ドアを開けてください。歩いて帰ります」
「いや……そう申されましても……」

運転手は、停留所以外での乗客の乗降には消極的だ。マニュアルもあるのだろう。しかし、乗客から同様の訴えが続くと、さすがに折れた。

「ミナコ、すごーい！」「そうそう、歩いたほうが早いもんねー！」

開いたドアから、希望した乗客が続々と下りていく。取り巻きに囲まれながら下りていく彼女を見送り……

――――明日の夕暮れは、外を出歩かないように

「――!! ま、……」

引き留めようとして出た声を、慌てて引っ込める。

「……」

言ってどうなる。何と説明する。予知能力者の予言の、又聞きだとでも説明するのか。少し考えただけでどうなるかなんて、すぐ分かる。訝しがられ、説明して、小馬鹿にされて……結局、彼女は降りる。その事実は変わらない。

（……でも）

彼女が、嘘をついているようには思えなかった。つく必要も無い嘘だ。そして……それを、自分は知っているのだ。であれば。

「あの……ボクも、降り、ます」

……今更ながら、自分は何をやっているのだろうと思う。バスを降り、親にメールまでして、自分の家とは逆方向に向かう同級生たちをコソコソと尾行している。

「ミナコ、じゃあねー」「また明日ねー」

取り巻きたちと別れ、単独行動となるが……彼女に不安は無いように見える。それもそうだろう。ここは既に新興の住宅街で、監視カメラや保安員の巡回もあって、安全は確保されているのだから。あとは、家路に就くだけ。他に居るのも、せいぜいトンビやウミネコくらいなものだ。

「「……はぁ」」

（……ん？）

いま、ため息が重なった。誰と？　今、この場には自分と、ミナコだけ。

見れば、いつも自信満々なように見えるミナコが、肩を落としている。……いや違う。あれは、そう……肩の力が、ようやく抜けた。そんな様子だ。
（いろいろと、気苦労があるんだろうなぁ）
遠巻きに見ているだけの自分だが……だからといって、自分も『ああ』なりたいと思うかどうかと聞かれたら……正直、返答に困ってしまう。流行に敏感であり、言葉の裏を察する洞察力があり、グループ内パワーバランスを微調整する政治力があり、ルーチンのような会話を楽しそうに展開する演技力を持ち……
（……無理。無理無理……胃に穴が開く……）
そして、住宅街を半分ほど進んだ。拍子抜けだ。このまま何事も無く帰宅していくのだろう。
――――――――――――――――――――……
……違和感が、身体を通り過ぎる。
（……、鳥の声が、しない）
夕暮れだからといって……唐突に、一斉に居なくなることなどあり得ない。景色は何も変わらない。しかし……
（……圏外。）
「……あれ？」
先を歩くミナコも、違和感に気付いたようだ。端末を操作したり、振ったり……しかし、反応が無い。眉をひそめる。そして。
――――バサバサバサッ……！
それは現れた。
『ガァ、……カァ……カァ……！』
――――カラス。
声と……羽毛の色から、そうと連想する。しかし……それは、決して鴉ではなかった。
通常とは逆関節に曲がった膝。伸長した足指。折れ曲がったような腕。前歯の生えたくちばし。ヒトの骨格を、歪に折り曲げ……無理

やり、鳥類に近づけたようなその異形に……地肌を覆い隠せない程度に、漆黒の羽毛がまだらに生えている。
「……ひ、ぃ……!!」
目の前に現れた怪異に、ミナコは当然ながら、恐怖のままに腰を抜かした。……失神してしまえたら、どれだけ気が楽だっただろうか。
『カァ……カァ……』
ロクな揚力も無いであろう翼は、当然のことながら役目を果たさず……ミナコの目の前に、グチャッ……と、着地……否、墜落、した。
じわりと、血が滲む。しかし。
『カァー……!!』
出血になど頓着せず……その、ギョロリと眼下を飛び出した眼で、ミナコを睨む。
「いやぁあああああああああーーーっ!!!」
生命の危機に、ようやくミナコの足が地面を掴む。だが、子供の足だ。カラスの異形は、ほんの数歩で、ミナコを捕獲してしまうだろう。
「あぅ……う、……」
膝が……震える。今にも、腰が抜けそうだ。
――逃げればいい。
――標的はミナコだ。
――今なら逃げられる。
――逃げても誰も責めない。
――助けを呼べばいい。
――そうだ。助けを呼ぶために逃げればいい。
――間違いじゃない。
――正しい判断だ。
ミナコを見捨てて逃げるための論理が、次々と浮かぶ。
「に、げ……」
あんな怪物、どうにかなるわけない。管理局を呼べばいい。そうだ。逃げろ。逃げろ。逃げろ……!
――あなたには、力が有ります。

「ッ……!!」

……立ち止まる。脇役以下の背景。見ているだけの自分。……反転する。引っ込み思案で、ことさら誇るようなモノも持っていない自分。……震える足を、拳で叩く。臆病で、小心者で。見ず知らずの人にでも。褒めて貰えたことが。認めて貰えたことが。嬉しくて。誇らしくて。

――曲げたくないと、初めて、思った。

駆け出す。

――あんなの出鱈目だ。

「う」狙いを定める。

――自分に力なんて無い

「る」身体をたわめる。

――非才の凡人だ

「さ」助走をつけて。

――無駄な行いだ。犠牲者が増えるだけだ。馬鹿な行動だ。偽善だ。友情ゴッコだ。ヒーローごっこだ。無駄だ。無駄だ。逃げろ。逃げろ。逃げ「いいいいいいいいーーーーーーーッッ!!」

ミウラの力。それは。

――――『物理的な、「破壊力ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅーーーーーーッ!!」

――やけっぱちに全力で、蹴り飛ばす!!

――グッシャァァァッッ!!!

『グガァァァァァァァァァァァァァァァァーーーーーーーーー!?!?』

悲鳴をたなびかせながら吹き飛んだカラスは。

――バガァンッ！『オアアアアアーーッ!!』
レンガ塀をブチ抜き。
――ボゴォンッ！『ゲァアアアーーッ!!』
その向こうの塀も突き破り。
――バキィンッ！『ギェエエエーーッ!!』
ガラス戸を突き破り。
――メギョォッ!!『グゲェッ……。……。……。』
石材の柱に激突し背骨から『く』の字に変形し……動きを止めた。
（だ、出せた……！　会心の、蹴り応え……!!）
『……。カァ、』
（まだ!!）
すでにミウラの頭は、あの怪物を蹴り砕くことで一杯だった。新兵が無暗に弾をバラ撒き続けるような、一種のパニックだ。

「もう大丈夫ですよ」

と。ミウラが、ミナコが、声の出所を探るより早く。
――怪物が、火柱に包まれた。
『ぎッ……!!!!』
鮮やかな蒼い炎は、悲鳴さえも飲み込んで……あっという間に、収束していく。
「そ、そんな……！」
……先ほどまで、死ぬまで蹴り転がす気で一杯だったミウラですら、その容赦の無さに戦慄を感じる。そして、あの声を、ミウラは鮮明に記憶していた。
「――ヴィヴィオさんっ！　何で……、何でっ!!」
滞空していた人影……ヴィヴィオが、ミウラの前にふわりと降り立った。
「無事でよかった」
「無事って……！　いま、そういう話をしているんじゃ……！」

言い募り、ヴィヴィオ発する王気（オーラ）に、気圧され沈黙した。
宵闇の中にあって尚、煌めく異色の双眸。照り返す炎を反射し輝く、黄金の頭髪。
――――聖王。
「……何か勘違いをされているようですね、ミウラさんは」
「勘違い……？」
ん、と指さされた先。火柱が消えたそこには、無惨な焼き鳥が……
ということは無く、それどころか、焦げ跡ひとつとして無い。
「ひ、と……？」
そこに居たのは、異形の怪物では無く、一人の少年だった。
「う……」
ヴィヴィオは、その少年を助け起こす。
「答えられますか」
「ここは……どこ……？　なんで、こんなところに……」
「……。じきに救助が来ます。今は休みなさい」
「……」
少年は、安心したかのように目を閉じる。
どういうことなのか。改めて聞こうとした時。
「……疲れた」
と、ヴィヴィオが呟き……
――――しゅううううっ……
黄金に輝いていた頭髪が、地毛であろう栗色に変化する。
「神化（シンカ）はまだ、維持できて１８０秒が限界かぁ……」
ミウラさん、と呼ばれる。
「お腹がすきました。何か食べさせてください」
あはは、と軽く笑って見せるヴィヴィオ。
そうして……後になって到着した管理局と、見たことの無い制服を着た少数の一団に処理を任せ、ミウラと、その家族への説明に、再びレストランへ向かうのだった。
「まぁ、簡単に言うと、アレは被害者なんです」

素揚げにした大型魚を頬張りながら、ヴィヴィオはミウラへ説明する。両親へは、あの謎制服の一団の代表と思われる人物が、別室で説明を行っている。
「これです」
と、樹脂で固めたサンプルのようなものを、ミウラの前に提示する。
「……羽根？」
どうみても、黒い羽。芯の部分が、鋭利な刃物のようになってはいるが……どう見ても、鳥類の羽根を模している。
「それが感染源です。刺さると『ああ』なります」
ひっ、と手を引っ込める。
「人の形を保っていれば、この羽根……『リアクター』と言いますが、これを除去すれば治療が可能です」
人の形。だが、先ほどの怪物は……そう、怪物だったのだ。人型ではなく。
「……そう。あれがフェイズ2。どこから、という具体的なラインはありませんが、肉体から羽毛が生成され始めたら」「……たら？」「アウトです。もう元には戻せません」
さらりと恐ろしいことを告げられる。しかし、疑問に行き着く。
「あれ、でも、昨日の人は……」
「だから、私の出番だったんです」
二本目の揚げ魚を手に取り、頬張る。
「私の……まぁ、正確には違いますが。あの炎を浴びせれば、フェイズ2まで進んでしまった被害者を、救うことが出来るんです」
では、ヴィヴィオがこの地区へ現れたのは。
「うちの予言能力者にはそれを予知し、この力を持つ、私を含む血族へ伝えるように命じてあります」
「だから、この地域に……」
理由があったのだ。
「そしてあの感染者たちの行動には、一定の法則があることが確認されています」
「法則……？」

「光の矢」
　あの日。世界が変わったとされる日。天空より降り注いだもの。
「あの『矢』を受け……とくに強く、その力を発現させ、今も残すものたちを、感染者は察知し、襲撃しているということが分かっています」
　力の発現。力。ヴィヴィオに言われたこと。……はっと気づく。
「じゃあ、あの怪物は、ボクを狙って」さらに、聡いミウラは気付いてしまった。
　怪物はミウラを狙っていた。ミウラは要らぬ心配でミナコを追った。追った先に怪物が現れた。
「……!!　ミナコちゃんは、ボクのせいで「ストップ!!」
　掌を見せ、それ以上の連想を停止させる。
「私のミスです。余計なことを言わなければ、ミウラさんは普通に自宅に帰り、そこを狙ってきた感染者を、待ち伏せていた戦力で鎮圧し、浄化できた筈でしたので」
　気遣いからの忠告が、気遣いからの行動が、どちらも裏目に出てしまった結果だ。
「どちらにせよ、今後も感染者は元を断たない限り、現れ続けます」
「今後も……。……あ。」
　……本当に、聡い少女だ。
『それじゃあ、さっそく転校の手続きをしましょうか！』
　あの突拍子もない話の展開は、ミウラを感染者の襲撃から保護するための……と、ヴィヴィオが慌てた様子で手をぶんぶんと振る。
「いえ、いえいえ！　別に保護のため、というだけじゃないですよ!?　持って帰りたいと思ったのは本気ですし!!」
「本気だったんですね……」
　がくん、と力が抜ける。ミウラに事情を察知させないための演技だと思っていたが、どうやらミウラに惚れこんでお持ち帰りをしようとしたこと自体は……唯我独尊なところは、ヴィヴィオの素のようだった。
「ご両親の同意は既に頂きました。あとはあなた次第ですよ？　さぁ

選ぶのです。私と来るか……ここに残るか」
「それ選択の自由あるように見えて拒否権無いじゃないですかぁ!?」
「クックック……」
「それ悪役の笑い方!!」
　あぁ……なんということだ。ミウラの進路は、知らぬ間に外堀を埋められ一本道にされてしまっている。
　しかし、これまで通りの生活といかないのも事実だろう。この地に残ると言っても、ヴィヴィオは冗談めかしてああ言ってはいるが、止めない。ただ、管理局がつきっきりで警護にあたることにはなる。どちらにせよ、だ。
「いやぁ……それにしても、ビックリです。まさか感染者を蹴り一発でノシちゃうなんて」
　えっ、と顔を上げる。
「もう、神化はほんっっっとに燃費が悪くて……」
　むしゃむしゃ、と揚げ魚を骨ごと平らげながら、言う。
「とにかく、自己再生でしぶとい感染者が相手ですからね。鎮圧に使うエネルギーと、神化するためのエネルギー、その折り合いが難しくて……とっても助かりました」
「あの……予言で、そこまで読めていたんじゃあ」
「え？」「え？」
「「　え？　」」
　ヴィヴィオは、きょとん、とした顔になり、ミウラと見つめ合ってしまう。
「あっ、やっぱ忘れてた……」
　……非常に聞き捨てならない呟きを漏らすヴィヴィオ。
「我が学園は、力を尊びます」
　今更ながら、なんという校風だ。
「まぁもちろん、学園内の闘争もありますが」
「あるの!?」
「あります」
　真顔で返されてしまった。

「ごほん。……感染者を捕縛し、治療が出来るように無力化するのは、あなたのような力を持った我が校の生徒たちに、いずれ任せる予定です。はじめはもちろん、鍛錬から入っていただくことになりますが……そうですね、ミウラさんなら、精神鍛錬だけで、すぐに投入できますね！」

投入。怪物との戦いに。思いっきり戦力としてアテにされて。

「嫌だ！　嫌だー!!!」

ばたん、と別室のドアが開き、両親が相手に伴われ出て来る。

「お父さん、お母さん、ボクの進路が大変なことに！」

「ミウラ……」「ミウラちゃん……」

両親は、慌てるミウラを、両脇からがっしりと抱きしめる。

「お父さんビックリしたぞ！　まさか、ミウラにそんなすごい格闘技の才能があったなんて！」

悪漢に襲われる同級生を、その身一つで守り抜いた……というようなエピソードへ変換されているに違いない。嘘は言っていないのだろう。

「えぇ、えぇ。専属でコーチをしてくれるっていう話まであるって言うじゃないの。お母さん安心したわ。没個性すぎるから、せめてキャラ付けにと、ボクっ娘になるよう小さいころから上手いこと誘導してきたけど、それももういいのね！」

今明かされる母の企み。

「お、お父さん……お母さん……？」

そして。

「「　わが娘、ファイト!!　」　」

「あ、ああ、あああああ……!!」

外堀が、全て埋まってしまった。

そして翌日。

「それでは、ミウラさんのことは私にお任せください！　立派な戦ｓ……競技者に育て上げて見せます！」

上機嫌でミウラの手をガッチリと握り、鼻歌まで歌っているヴィ

ヴィオ。
目にハンカチを当て涙する両親に見送られながら……
（世紀末だ……!!　ボクは世紀末へ連れて行かれるんだ……!!）
……やがて訪れる動乱の日々に、ただ茫然としていた。
「ようこそ貴様ら！　ワタシが訓練教官を務めるチャールズ・ケリーである！　貴様らを一人前のソルジャーに仕立てる任を与えられている!!　だが安心しろ!!　ワタシの訓練は優しい！　生き残らない者はさっさと死ぬ！　クリスチャンは居るか！　あの世でキリストとマリアを〇〇（ピーー）する許可を与えてやろう!!　ブッディストは居るか！　ブッダのピーーーーーーを拝ませてやる!!　ケツからゲロを垂れながらノミのようにこの世にしがみつく虫ケラどもも安心しろ!!　人間がケチャップに変わる愉快なサーカスへ案内してやる!!」
そして現着である。同意を翻す隙など、与えられよう筈が無かった。
望まぬ編入。ミウラの他にも、結構な数の児童が集められており……訓練教官のあまりのヤバさに、失禁間近である。
「えぐっ、えぐっ……おうちに、おうちに帰りたいんよー……」
さめざめと涙を流す黒髪の少女に、ミウラは同情を禁じ得なかった。他人事と考えることで、実戦投入より先に死ぬかもしれない可能性から逃避していた。
「貴様らへのクリスマスプレゼントをくれてやろう!!」
ケリー教官が、何やら祭具のようなものを物々しく用意し始める。
「キミも、あの子に……？」
「そやー……暴れとったウチも悪いねんけど……こんなんおかしいやろ……何が聖王や……あんなん魔王や……」
何か、誰かと話していなければおかしくなってしまいそうだった。

「……ボクはミウラ・リナルディ。ボクの身体が一部でも残っていたら、両親の下へ届けてください……」
「うちは、エレミア……ジークリンデ・エレミア……おとんとおかんは、いまどこにおるのか分からへんのやー……おうちもぶっ壊してもうた……もうだめやー……おしまいやー……」
そして、ついに処刑準備が整ったようだ。
「貴様らの顔、名前、経歴、すべて平等に……興味は無い！　生き残った真のソルジャーのみに価値が生まれるのだ!!
――修練の門ランクZ！『ケサン・ピクニック』……オープン!!」
そして……E組の面々は、地獄のオリエンテーリングを味わうことになった。

◆・◆　◆　◆

――これが、創王覇道学院1年E組の成り立ちである。

――被害者の会だった。

# ｖｉｖｉｄ編　６話『　審判の鎖　』

――なぜ、ヒトは『正しさ』に従わないのでしょうか。
ずっとずっと、そう思って生きてきましたわ。
ニュースで犯罪行為が報じられるたびに、疑問を感じますの。
だって、そうでしょう？　普通に、特に気を付けていなくとも、普通に過ごしてさえいれば、法に触れることなんてありえませんもの。
わたくしは、人並みにルールを守っていますわ。ええ、それはもう。食事のときは肘をつかないといったマナーから、赤信号は必ず止まる、決められた通学路を通る、買い食いはしない……そういった初歩的な社会マナーまで。
ごくごく真っ当な両親から教わった社会の常識ですもの。意識せずとも、普通に守れて当たり前ではありませんか。
そして、そんな当たり前のルールを守っていると、両親は喜んでくれましたの。
『あぁ、良い子に育ってくれた』と。
わたくしは両親が喜んでくれるのが嬉しくて、ルールは決して破りませんでしたの。
学校の先生も、褒めてくれましたわ。
でも……いつからでしょう。
ルールを守ることが、まるで正しくないかのように言われ始めたのは。
口にモノを入れたまま喋る子がいましたの。当然、注意をしましたわ。行儀が悪いですもの。でも……その子は泣いてしまいましたの。泣いて言いましたの。『あの子はイジワルだ』と。
通学路を守らないで近道をする子がいましたの。当然、注意をしましたわ。夕方になると暗くて、人気が無くて危ないですもの。でも、その子は怒りましたの。『あの子はチクリ魔だ』と。
学校帰りに買い食いをする子がいましたの。当然、注意をしましたわ。子供が一人でお金を使っていると、悪い人に目を付けられてしま

いますもの。でも、その子は笑いましたの。『あの子はいい子チャンぶってる』と。
学校に携帯電話を持って来ている子がいましたの。当然、注意をしましたわ。学校では必要のない遊び道具ですもの。でも、その子は無視しましたの。『あの子は嫌われ者だ』と。
学校に髪を染めてくる子がいましたの。当然、ハサミで切り落としてあげましたわ。図書室で飲食をする子がいましたの。全てゴミ箱に捨ててあげましたわ。花壇の縁に座る子がいましたの。ホースで水を掛けてあげましたわ。時間外にシャワールームを使う子がいましたの。給湯器を切って施錠してあげましたわ。遅刻を繰り返す子が。授業中にお喋りをする子が。自転車で登校している子が。金品のやりとりをしている子が。下級生にたかり行為を行う子が。カンニングをしている子が。
――――正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく。正しく正しく正しく

間違っていないのに。わたくしは、誰よりも正しくあろうとしていただけなのに。そうあるべきと定められたことを、遵守しましたのに。

――そして、あの異変が起こりましたの。

わたくしは、頭に消しゴムのカスが飛んでくることを無視しながら、板書をしていましたわ。授業中でしたもの。空が真っ赤に染まり、クラスメイトが窓に張り付いて。

校庭に、廊下に、教室に……機械仕掛けの獣たちが雪崩れ込んできましたの。わたくしを突き飛ばしたクラスメイトたちは、獣に引き倒されていましたわ。逃げようとしていた担任は廊下で血を流していましたわ。この学校で、わたくしだけが、何もされませんでしたの。そして、あの『声』は言いましたの。

――『従え』と。

あれはまさに、天の啓示だったのですわ。

――わたくしの『正しさ』は、証明されたのですわ!!

……ですが、それも終わってしまいましたの。わたくしは、喜んだのに。正しさが正しく認められる世界が訪れると思っていましたのに。誰かに連れられて、避難させられて……気が付いたら、何もかも終わってしまいましたの。

学校もボロボロになってしまいましたの。あの『声』が曰く、『この地を浄化する』と。きっと、あの学校は『正しくなかった』のですわ。であれば、わたくしが認められないのも、仕方のないことだったのですわ。未練は消えました。

わたくし、『正しくない』その学校を辞めましたの。

そして、親の薦めるままに……この学校に来ましたの。

ほんの少しの期待とともに。でも。

「みんな避難して！　教室に近づいちゃ駄目よ！」「先生、さすまた部隊到着です！　鎮圧を開始します！」「窓を破って逃げたぞ！　一階に連絡!!」

……クラスで茶髪の不良と赤毛のヤンキーの、よく分からない言い争いが起きて、乱闘が起こって入学式の日が早々に終わって……わたくしは、諦めましたの。正しさが認められる、わたくしが求める世界なんて、どこにも無いのだと。

……。

――世界は、あの時に滅ぶべきだったのですわ。

「――ふぅん、あなたもそう思っているんだね」

目の前に立った誰かが言っていましたの。白い肌に、黒い髪の毛。黒い瞳に、黒い衣服。白と黒でだけ構成された、モノクロの人影。唯一真っ赤な唇だけが、にぃ、と、怪しく歪む。

「――なら、滅ぼしてみる？」

その手には、一枚の、黒瑪瑙のような、黒光りする羽根が。

「――あなたの望みを叶えなさい」

羽根が。

はね……が……。

◆▪◆　◆　◆

――とある薄暗い一室に、三人の人影がおぼろに浮かび上がっていた。

「――――では、はじめに。なのはちゃん、およびその第一子の無事な退院、おめでとうございます」

「「「「　おめでとうございます　」」」」

三人が深々と首を垂れる。

「停学明けには、なのはちゃんの学校生活、再スタートとなります。……小山さん」

「はい、大宮さん」

促された一人……小山何某が、手元のプリントを提示する。

「――担任の方針により、クラスメイト全員参加を優先した結果、オリエンテーリングが延期となり、なのはちゃんの復学とほぼ同時期に開催となりました」
　つくづく、いい学校である。
「このプリント、なのはちゃんには？」
「夫である吾妻氏をワンクッションに、手元へ届くよう計らいました」
「良い配慮です。直接では、警戒して受け取り即シュレッダーが有り得ます」
「あり得ますね」「有り得ます」
「では……本日の本題です。
『なのはちゃん、はじめての集団行動　～班員と一緒に遠足～　』
　本計画を提案・主導する中野さんより、発表をお願いします」
「承りました」
　残る１人……中野が、眼鏡のブリッジをクイッと上げる。
「クラスメイトとの遠足。これには、最悪の思い出しかないことは把握済みですね？」
　頷く二人。
「では、なのはちゃんの話をベースに、黒歴史回避策を考案します。まず第一に、『スナック菓子の女子受けが最悪でハブられた』、これについてです」
　……沈痛な面持ちで話を続ける。
「……まず、なのはちゃんの思い違いであろうことは、『女子は、そこまでスナック菓子に抵抗は無い』ということが挙げられます」
　す、っと、中野が鞄から『キャ〇ツ太郎』を取り出す。
「わたしは、これを常食しています。友人とシェアすることも少なくありません」
　クラスを見渡せば、女子はむしろ、バリエーション豊かな菓子を持ち込むことに拘りを見せている。
「手元の資料、二枚目をご覧ください」
　そこには……なんというか……刑事ドラマの証拠品のように、白いシーツの上に整然と並べられた菓子の空き袋が写っていた。

「数回のゴミ捨て当番の際、クラスのゴミを検分しました」
おぉ……と感嘆の声を上げる二人を目に、発表を続ける。
「チョコレート菓子が3、ポテトチップス2、ポッキー系が4、ガム・飴が少量となっています。ガムは恐らく男子のものでしょう」
「……確かに、バラけていますね」
「決して、スナック菓子が原因ではない、と？」
意を得たように、頷く。
「ハブられた原因はズバリ……『スナック菓子が嫌い』だったのではなく、『なのはちゃんが嫌い』だったと思われます」
「そんな……」「ひどい……」
身も蓋も無い。
「ではなぜ、『なのはちゃんが嫌い』となったのか。これを検証していきたいと思います」
三人の中で最も論理思考に長けた中野の話に、残る二人は真剣に耳を傾ける。
「前提として、『女は横に繋がる』ということがあります。会話、食事、移動、消費、行楽……ここに、目に見えない『グループ』という枠が、しかし確実に存在し、よほどのことが無ければ、まず変動はしません」
覚えがありすぎる二人は、思わず俯く。自らが無意識に築いた壁が、なのはちゃんを蚊帳の外に追いやっているのではないか……と。
「いえ、生物的に当然のことです。恥じ入ることではありません」
フォローを忘れないマメな少女だった。
「それを支える物の正体……それは、『みんな』という、『連帯感』なのです」
女子の本質に切り込んでいく。
「『みんな』。……これは、魔法の言葉です。根拠のないはずの、実体のないはずのソレは、女子のときに不合理かつ理不尽な行動に謎の大義名分を与え、そこへ迎合しない者を排斥することへの罪悪感の軽減作用をもたらします」
では、なのはの行動にあった敗着とは。
「なのはちゃんは言っていました。『前日に、一人で買いに行った』、

と」
　はっ、と、二人が気づいた。
「どこかのクラスグループと『一緒に』買い物へ出ていれば、少なくとも、」「連帯感の外に弾かれるリスクは軽減されていた……!?」
　中野が、神妙に頷く。
「ゼロ、とまではいかなくとも、買い物へ行ったメンバーへ、暫定的に加わることが出来た可能性は高いと思われます。また、『悪夢のペットボトル茶事件』も、グループメンバーの意見を取り入れることで回避できた可能性が高いかと」
　つまり、中野の言わんとすることとは。
「我々四人が、なのはちゃんとお買い物へ行き、周囲から浮かないアイテムを取り揃える。これが、なのはちゃんの黒歴史回避に有効だと、」
「――――待ってください」
　……と、聞きに徹していたはずの小山が、中野の話を遮った。
「なんでしょう、小山さん。」
「挙手なしでの発言、まずは謝罪します」
　ぺこりと中野へ謝罪をし……
「中野さんの案は、確かに有効です。決して、失敗しない方策だと同意します」
　ですが、問題の検証の、更に前。『なのはちゃんは、ぼっちである』という確認を行いたく。大宮さん、よろしいですか？」
「お願いします」
「ではまず、『ぼっち』について。ステレオタイプを語るというのは、褒められた行為ではありませんが……『自身の価値観を優先する』という点に終始するのではないでしょうか」
　自身の価値観があり、それを優先し、否と感じた事象へは、決して迎合をしない。頑固とも、潔癖とも違う……まさに『ぼっちの価値観』があるのだ。
　一度でも曲げれば、貫いてきた『自分』を捨てることになる、その期間が長ければ長い程、捨てることが出来なくなる。そして迎合しない。迎合を求められることも諦観と共に無くなる。

――故に孤立する……
「なのはちゃん自身の、」「価値観……」
しかし。まぁなんというか。
「「「なんて面倒くさい子なのかしら……」」」
す、っと、小山が一枚の紙片……レシートを提出する。
「夫である吾妻氏から譲り受けました。吾妻家、最新のお買いもの事情です」
「こ、個人情報を……いくらなんでも……」
「なのはちゃんのためです……!!」
……小山は、心を鬼にしていた。
「……生鮮食品、生活用品といった物品を除くと、こうなります」
す、す、とマジックで横線を引いていくと……
「……『煎り大豆３００ｇ』『いかり豆３００ｇ』、処分品価格の『カンパン（氷砂糖入り）』……こ、これは……？」
はっ、と、大宮が事実に気付く。
「三品を合計で、２８８円……まさか……」
「これを、遠足のおやつに……!?」
三人は、戦慄した。全く学習していない、と。
「――ぼっちは実利主義です。
恐らく、『保存が効き、分量計算が容易で、イザというときの非常食に適している』という理由でしょう」
「完全に、開き直っているのね。『どうせハブられるなら、思いっきりドン引きされてやる』、と言わんばかりに」
そして、中野の意見に異を申した理由は。
「中野さんの案を実行に移すと……きっと、こう捉えられてしまいます。
『あなたは女子グループの暗黙の了解とか作法とか、分からないのね。わたしたちがイチから教えてあげるわ』……と」
「――ッ!!　わたしは、そんなつもりで考えたんじゃ……!!」
「分かっています!!」
びしりと、掌を向けて断言する。

「分かっています。……中野さんの意見の意味も、分かっているんです」
「……はい」
重い沈黙が流れる。
――ぱん。
大宮が手を打つ。
「もちろん、対案があるのでしょう？」
「当然です」
小山が起立する。
「中野さんの案そのもの……『連帯感の共有』には、間違いはありませんでした。そこへ、『なのはちゃんの価値観』を盛り込んでいきたいと思います」
対案とは。
「――わたしたちが、なのはちゃんに寄せていくのです」
おぉっ……と、再び感嘆の声が上がる。
「つまり、なのはちゃんの揃えたラインナップに近似したおやつを持参する、と」
「その通りです。班員が、自身が選んだものと似たものを持っているだけで、なのはちゃんは安心感を得られる筈です」
更に、密な打ち合わせが重ねられていく。
「丸被りは、事前のリークが発覚する恐れがあります。あくまで近似。類似です」
「ふむ……豆菓子というのであれば、甘納豆、バタービーナッツ、ミックスナッツが思いつきます」「変わり種ですが、麦チョコもよろしいのではないでしょうか？」「採用です」
そして。
「……決まりですね。」
ふぅ、と、達成感さえ感じさせる表情で、大宮、中野、小山は……四人目に振り返る。
「――遠足当日班長・ハリー・トライベッカさん、よろしいでしょうか？」

「カラオケボックスに来た花の女子高生がする話じゃねぇだろコレ……」
呼び出され、何事かと思いきや。ハリー不在でしっかり会議が進行していた。
「では、これにて、『なのはちゃんを温かく見守る会』第７回会議を終了します。お疲れ様でした」「お疲れ様でした」「お疲れ様でした」
時計を見れば、終了３０分前。
「ふぅ……そんじゃ、せっかくだし歌うかー!!」「おー!!」「いえー!!」
会議からの解放感をぶつけるように、怒涛の歌唱ラッシュが始まった。
「いつか、なのはちゃんと一緒にカラオケに行くぞー!!」
「絶対行くぞー!!」
「一緒にプリクラ撮るぞー!」
「絶対撮るぞー!!」
「復学したらゲーセン行くぞー!!」
「絶対誘うぞー!!」
「あ、オレ、なのはのメアド知ってるけど誘うか？」

「「「「先に言ってよ班長ーーーーーーー!!」」」」

◆▪◆◆◆
一方その頃。
「ママ、着いたよ海鳴市!!」「……ソウネ、ツイタワネ」
本当は、出産騒ぎの翌日にでも馳せ参じる予定が、ズレにズレてしまい、今日になってしまった。まぁ、保護観察中の身であるのだから、本来そういった自由は無いのが普通なのだが。
許可が下り、ヴィヴィオに急かされ、急かされ……痺れを切らしたヴィヴィオの小脇に荷物のように抱えられ……二人は、市の駅へ到着していた。元気溌剌なヴィヴィオの隣で、ぐったりと座り込む四葉。
「あぅう……ちょっと休憩」

『しかし、ひ弱な……これでマスターの肉体と同質とは思えませんね』
運搬用に四葉の首に提げられたレイジングハートと。
『アレは環境が産んだ突然変異なの。同じにしたら酷なの』
交通費節約のため、嫌々、クリスタルの本体へと姿を変えたアイが、他人事のように語っていた。
「バスは……うぅん遅いなぁ。……よし走るか」
ぼそりとした呟きに、四葉の身体がビクリと跳ねる。
「待って！　ヴィヴィオ待って！　もうママの身体がGに悲鳴を上げてるの!!」
「えぇ～？　またまたぁ。ママは機人でしょ？」
「確かにママは機人だけど、電子戦特化型で、フレームは汎用品なのよぉ～！」
「ハカセ言ってたよ！　汎用フレームなら予備が有るって！　だから、少しくらい壊れてもいいでしょ！　ほら、ほらぁ！」
「いやぁ！　いやぁぁ!!　助けてお姉ちゃぁん！」
がっしと腕を掴まれ、イヤイヤと抵抗する。
『ふぅむ……遺伝形質だけで、こうも似るとは』
『あのぼけなすの因子、強すぎるの……』
他人事なデバイス陣が傍観する中、ぐいぐいとパワフルなヴィヴィオに引き回され、四葉の身体がピンチだった。
――すっ。
と、戯れる二人の前に、一台のワンボックスカーが停車する。運転席には。
「あ、おばあちゃ、ムググ……」「桃子さん！　た、助かりました二重の意味で!!」
言ってはならぬことを口にしようとしたヴィヴィオの口を塞ぐ。
「今日は、士郎さんがお店に立てるから行っておいで、って」
「おばあ……『桃子さん』でしょう！」桃子さん、おじいちゃんは元気ですか？」
えいや、と四葉とその荷物を抱えながら乗車する。
「そうねぇ……まだ本調子じゃないけれど、うちの子二人を相手に毎

朝体を動かしているくらいには元気よ」
「ほほう……そのくらいには元気なんですね」
……怪しげな笑みを浮かべる。
「人間離れしてるけどしっかり人間なおじいちゃんは、いろいろとレアなんです。はやく戦いたいなぁ……」
「うふふ。こんなに好かれて、士郎さんも喜ぶわぁ」
微妙にかみ合っていない会話をしつつ、一路、吾妻家へ。
桃子は士郎が心配になったと帰り、四葉とヴィヴィオだけが残された。
――ぴんぽーん
四葉がチャイムを鳴らし「あ、ママちょっと下がってて」「え？」
――ドバァンッ!!
弾け飛んだドアから、栗色の残影が奔る！
「えっ、なに、なに!?」
四葉の目では追えない速度。しかしヴィヴィオはそれを確かに捉える。
――ガシィッ!!
突き出された掌を掴む！　もう片方！
――グワキィッ……!!
掴んだ手を、そのまま内側へ圧搾していく！
「ヴィヴィオお帰りぃいいいいいっ!!」
「お母さんただいまぁあああああああっ!!」
母娘、感動の対面であった。抱き合ったままピョンピョンと跳ね飛ぶ二人。
「ビックリさせないでよ、もぉ……！」
「あ、四葉もお帰りちょっと来てはやく」
「このパターンも慣れてきたよ……」
『そりゃあ慣れますよ。嫌でもね……』
拉致されていく四葉。
「おー。二人ともお帰り……あれ、出遅れたか」
「お父さん、ただいまー！」

「はっはっは。とりあえず滾らせた魔力を鎮めるんだ、わが娘。それで突進されたら多分死ぬから俺」
『アイが死なない程度に防壁の強度を調整してやるの。安心してぶっ飛ばされるがいいの』
「お前も久々だけど相変わらずだな……」
秀人がノコノコ顔を出した頃には、なのはは四葉を別室に連れ込んでいた。恐るべきフットワークである。
数分後。
「……」「……」
なのはが二人いた。
同じ髪形、同じ服装（制服）、同じ無表情。ヴィヴィオはおろか、秀人ですらパッと見では区別が難しい。傍らには、人型へ変じたレイジングハートが、一仕事をやり遂げた表情で額の汗をぬぐう動作を見せていた。着付けやメイクなどを行ったのだろう。
メーキャップアーティスト・レイジングハートの無駄に高い技術により瓜二つに拍車のかかった二人。
「「魔力探査は禁止だよ」」
がしっと二人で肩を組み。
「ぐるぐるぐるぐる」
「ぐるぐるぐるぐる」
その場でぐるぐると回転し出す。ぱっと離れた二人は、完璧にシンクロした動きで自らを指さし。
「「どーっちだ？」」
……双子姉妹定番のネタを披露し始めた。
「当たったらほっぺにチューをしてあげるけど」
「外れたらデコピンだよ」
「クッ……こいつぁ難問だぜ、ヴィヴィオ……」
「難問だぜ、お父さん……」
思わず口調が移る。
「「3、2、1……」」
無慈悲なカウント！

「「……！　こっちだぁあああああーーっ!!　」」
がばっ、と、ヴィヴィオと秀人、それぞれ違うなのはを抱き寄せた。
「「　……　」」
「「　……　」」
果たして軍配は。
「……」
秀人が抱き寄せた方のなのは（仮）が満面の笑みで両手を『まる』の形に……
「――――ぶっぶー!!　四葉でしたぁー!!」
……×だった。
「クッソォオオオオオオオーー!!」
膝を突く秀人に、四葉が覆いかぶさる。
「わぁい、秀人さんに抱きしめて貰っちゃったぁ」
「ひぇっ……!?」
……正解を引き当てた筈のヴィヴィオが、短く悲鳴を上げる。ヴィヴィオが抱き着いたなのは（真）が、凍て付くオーラを発していた。
「どうして間違えるのよー!!!!　秀人さんの薄情者ぉー!!」
「いや理不尽だろそれ!?」
そういう遊戯だった筈なのだが。
「デコピンだよ秀人さん。さぁデコを出せ。首を出せ」
「待てよ待てよ何で指先に魔力集まってんの!?　それ首ごと吹っ飛ばす気満々だろ絶対！」「刎ねる」「ぎゃあああああ!!」
メリメリメリ……と、なのはの魔手を必死で遠ざける秀人。
――――おぁぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

「あうう……」「す、すごい破壊力……」
四葉は暴徒鎮圧用音響弾でも喰らったように目を回していて、ヴィヴィオもふらついていた。
『こんなこともあろうかと』
『何事も仕込みが全てなの』
……デバイス二機は、遮音していた。
――――――がらら。
……紅葉のような小さい手が、引き戸を開ける。
「へっ!?」
驚愕に固まる四葉を尻目に、引き戸は完全に開いた。
「ぁあー……。あぁー!」
頬に涙の痕を貼り付けた赤ん坊が。秀人となのはを目にし、明らかに笑った。
「え? え!? 笑、……え!?」
そのまま、ハイハイをしながら秀人の足元まで寄って来て……
「あぁあー。」
秀人のズボンの裾を掴んで……立ち上がった。
「おーし、こっちゃ来い息子よ」
秀人は気にした様子も無く、ひょい、と抱き抱える。
「おぉおおお、お姉ちゃん、生後まだひと月未満……ひと月未満……」
「え? うん、そうだよ」
「え?」「え?」
「だ、だって、笑って、動いて、立って……!?」
「そりゃそうでしょ。赤ん坊だよ?」
「赤ん坊の成長は早いねお姉ちゃん。うふふ」
何が正しく何が間違っているのか。四葉は考えるのをやめた。なぜなら、この夫婦に関する理不尽は、考えるだけ時間の無駄だからだ。
『やっとその境地に至りましたか……』
『考えるのはやめて、楽になるといいの……』
「ヴィヴィオ。抱っこしてみろ、抱っこ」

「わぁい!!　……わぁ重い。」
「だろ？　ほら、四葉も」
　思考停止のまま赤子を受け取った四葉は……
「ぐぇっ……お、おっも……!?」
　危うくギックリ腰になるところだった。
「まぁ、いろいろ普通と違う子っていうのは判ってるけどねー」
「そ、そうだよね」
「重いし」
「そこじゃなくてね？」
　息子が四葉の腕の中に居るので、今はヴィヴィオを膝の上に載せて遊んでいるなのは。
「ふぇへへへ……」
　久しぶりに会えた母の膝の上、ヴィヴィオは年相応の少女の表情で、安心して身を任せていた。
「髪の毛は秀人さんっぽいけど、輪郭はヴィヴィオに……というか、お姉ちゃんに良く似てる。わぁ、本当に二人の子供なんだぁ」
　自らも出産を経験している四葉だったが、姉の子となるとまた違った感慨があるらしい。
「――でね、そのミウラさんがね、すっごく伸びしろがあるの！　たぶん、おじさんとおばさんくらいは、あと一年くらいで抜いちゃうね！
　血統補整ナシの、マジモンの天才だよ！　あとね、古城跡地で捕獲……じゃなくて保護したジークリンデさんは逆に、なんと古代人の技能継承者っていう超レアで、本気になると『ガォン』っていって、空間ごと抉り獲っちゃうんだよ！　捕まえるの楽しかったなぁ！　また逃がしてみようかな！」
　マシンガンのようにのべつく間もなく喋り倒すヴィヴィオの言葉を、じっくりと聞き続ける。
　学校のこと。友達のこと。勉強のこと。……話のタネは尽きない。
「――――それで、ヴィヴィオは何を隠しているのかな？」

「――――。」
ヴィヴィオは、口をパクパクと開閉し、笑顔のまま……固まった。
「――――ナニガ？　ヴィヴィオ、ナニモ、カクシテナイヨ？」
……バレバレである。
「お父さんがウソつくときと同じだねー？　わっかりやすーい」
「カクシテナイヨ。カクシテナイヨ。」
「はいはい、ゲロゲローって吐いちゃおうねぇ。ラクになるよー」
咄嗟に逃げようとするヴィヴィオだったが……おかしい。立ち上がろうにも、立てない。
「あははー。まだまだ甘いねぇ」
なのはが、ヴィヴィオの膂力を見事に分散し、膝の上に拘束していた。恐るべき体術である。
「あ、う、う……」
……愛する母の膝の上。そこに身を委ねていた筈が、気付けば猛獣の顎（あぎと）に捉われた子ネズミになっていた気分だ。
「お、おかあさんは、その、えっと……」
「えー？　お母さん、今はヴィヴィオの話を聞きたいんだけどなぁ。んーっと、私に隠すってことは、私と、秀人さんに関わりが有ることは確定。理由は『心配をかけたくない』『秘密裏に処理して平穏を乱さない』の二つが大きいよね。ヴィヴィオは優しいなぁ」
身動きを封じられたヴィヴィオは、ズバズバと切り込んでくるなのはに、引きつった顔で……実に年相応に幼稚な誤魔化しを実施しようとしていた。『話を逸らす』というヤツである。しかし、聞き出したい情報を確固たるものとしている場合、全く意味の無い時間稼ぎである。
「お母さん、友達はできた？」
「……
ごふっ」
……必殺のカウンターが心臓を直撃した。

なのはは、石像のように笑顔のまま硬直していた。
「こ、こらヴィヴィオ……！」
四葉が慌てて窘めるが、もう遅い……
「え？　……あっやべ」
……このダメな神が、入学初日に停学フルコンボをハットトリックでキメたということを、今更ながら思い出すヴィヴィオ。
「まず、『友達』という言葉の定義から、ね……？」
「ゴメンお母さんなんでもない」
「どこからどこまでが友達なのか、そこから、ね……？」
「いいから。お母さん、もういいから。私が悪かったから」
「……班決めって、席で自動的に決定するのと、任意で組ませるのは、どちらが良心的なんだろう。『うわ……こいつ班員かよ』『やりづらいよねー』『えっと……高町さんは、いいの？（苦笑）』。任意だとそういうことは無いけど『だれかー高町さんを仲間に入れてくｒｒｒｒｒがぴーがが がｐｒｏｇｒａｍ ｈａｓ ｂｅｅｎ ｄｅｔｅｃｔｅｄ…」
バグった……。
「お母さん、お母さん、ごめーん!!」
ゆさゆさとなのはの肩を揺さぶる。
『……ねぇ姉貴、やっぱりコレに着いててあげたほうが良かったんじゃないの？』
アイのもっともすぎる指摘に、レイジングハートは彼方を向いた。
『……六課の頃。私もマスターのためを思い、あらゆるコミュニティへの参加を促しました。食事、レクリエーション、入浴……』
……色々とダメだったのだろう。フィアット、はやて、リーゼ、クロノ、フェイト、シグナム……彼ら彼女らが居る環境においても。『スキマ時間を見つける技術に長けたマスターは、食堂・浴場・休憩場をなぜか超高確率で貸切状態。混雑時は自室へ引きこもり読書。訓練を終えると新人へメニューを伝えるだけ伝え自室で事務作業。入浴は主に自室のシャワー。マスターの自室は、誰が言ったか『天岩戸』と……』

フェイトなどと、二人で食事を摂ることこそ、それなりに在ったが……フェイトは、なのは的には『妹』『家族枠』である。ノーカンだ。『屋上の貯水タンクの上で、安堵の表情でひとりおにぎりを食べるマスターを見て、諦めたのです……』

……一度だけ、大浴場へ連れ出すことには成功したが……あれは奇跡だったのだろう。当時の、身体的な負い目を抜きにしても。

すっかりいじけた様子で、秀人の膝に顔を埋めブツブツと言う。

「……スバルたちに連絡しようとしたことも有るけど、今は新組織の運営で忙しいだろうし……それで無視されたら悲しいし……」

後半が本音である。なのはの負の思考能力はスーパーコンピューター並みの先読みを可能とし、たとえ無視はせずとも、『あ、なのはさんからメールだ』『忙しいけど、なのはさんだし、返事をしなきゃ……』『忙しいけど……』と、恐縮されながらも迷惑がられる様子を克明に思い描くことを可能としていた。事務的な返答が来たら、無視よりも悲しい。泣く。

――――ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｍａｉｌ…　ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｍａｉｌ…

「あ、ほらお姉ちゃん、メールだよメール！」「広告だよ」

見てから言え。

「違うって、ほら！」

表示されたのは……未登録のメールアドレスだった。

「最近の広告は手が込んでいるのね……」

文面を流し読みする。

「ほーら、『あした町で買い物するぞ』なーんて、組んだ覚えも無い予定を……あっハリーだこれ」

思い出した。『同盟』結成がてら、メールアドレスを交換したのだった。登録することをすっかり忘れていた。

「……」

慣れた手つきで返信を打つ。

『行けそうなら行くので、適当に連絡ください』

「断り文句の定型句じゃないのー！　お姉ちゃんってばー！」

「……そういう仲じゃないし」
――ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｍａｉｌ…
『明日・１０：００・海鳴駅前モニュメントで待つ』
『行ける努力はしますが、約束の時間に私が居なければ、気を使わず行ってきてください』
――ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｍａｉｌ…
『とにかく来い。待ってるからな』
『ＭＡＩＬＥＲ―　ＤＡＥＭＯＮ　・　Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａｎ　ｕｎｋｎｏｗｎ　ａｄｄｒｅｓｓ…　』
――ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｍａｉｌ　…
『ウダウダ言ってねぇで来いっつってんだろ！』
『本日はお忙しい中、ご連絡を頂き誠にありがとうございました。厳正に予定を折衝しましたところ、残念ながら、今回はご期待に添えない結果となりました。連絡を頂けたことに感謝するとともに、貴殿の今後一層のご活躍をお祈り致します』
――プルルルルル
電凸である。ノータイム即決で切断を試みたなのはだったが、謎の力（ハリーの遠隔神通力）により無理やり通話が開通する。
『このごくごく丁寧に書かれているにも関わらずクソほどムカつく文章は何だオラァァァァァァァァァァァァァッッ！　テメー今からそっち行くから首洗って待ってろよ!?』
――ぷしゅうううううううう
「お姉ちゃん、携帯電話を放り出したと思ったら、急に何をしているの……？」
「いや、とある野犬対策に購入した玉ねぎ臭スプレーの効果検証をね……」
数分後。
――どすどすどすどす
足音からして怒りが感じられる。バンッ、と扉が開き。

「おいコラァ!!　ふざけたメール返しやがっグァアアアアアアアアアアアアくっせェエエエ

「お母さん」
　と、困り果てる大人二人を尻目に、ヴィヴィオがなのはを見つめる。
「あのね、私に服、買ってくれたことがあるでしょう？」
「あぁ……あれは楽しかったわねぇ。フェイトも一緒に、ヴィヴィオに似合う服を探してあげて……」
「それを、もう一度すればいいんだよ」
「もう一度……あっ」
　……ようやく、話が脳内で噛みあったようだ。
「――――つまり、年相応にファショナブルな衣服を、遠足の名目で物欲のままに買い揃えましょう、ってことね!?」
　理解おっせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!　しかも偏見くせぇ!!
「何でお前はそこまで自分に無頓着でいられるんだよぉぉぉぉぉぉ!!」
　ぜーはー、と、ようやく理解させることに成功したハリーは、疲労困憊だった。
「で、行くよな!?」
「ねぇ四葉、一緒に」「わたし、ヴィヴィオと翠屋に行くから」
　フラれその1。
「秀人さん、一緒に」「息子は任せろ妻よ。存分にリフレッシュしてくるといい」
　フラれその2。
「服を買いに行く服が無いの」
「私の着替え貸してあげる」
「スカートはイヤ」
「はいジーパン。お姉ちゃん、こういうやつの方が好きでしょ？」
「……」
　ナイス妹。
「あー、なのは来るってよ。おう。楽しみにしておけ、お前ら」
　既に電話口で既成事実が完成していた。
「うぅー……うぅー……知らない人も来るー……行きたくないよー……おうちでゴロゴロして夫とイチャイチャしてたいよー……」

……部屋の隅で蹲り、人付き合いのプレッシャーに耐え忍ぶのだった。

ｖｉｖｉｄ編　７話『　ぼっち生態学　　～カラオケ地獄変～　』

――――歩くのが速いやつはだいたいぼっちの法則

◆　◆　◆　◆

――――そして翌日である！

脱走は事前に予測されていたために阻まれ、四葉の服に着替えさせられ、秀人に少なくない額のお小遣いを渡され、ヴィヴィオに励まされ、自宅までハリーが迎えに来るという包囲網により、終始引きつった顔で連行されていった。

そして、当初の待ち合わせ場所であるモニュメント前。

「ようオメーら。待たせたな」

気安く手を挙げて、三人娘に挨拶するハリー。

「……」

その背中に隠れるなのは。

「今日はよろしくね、なのはちゃん」

いきなり下の名前で呼ばれ、ビクっと驚く。だが、申し開きはしない。荒療治だが、遠慮していては一生、距離は縮まらないという判断だ。

（なのはちゃんの懐に、飛び込むのよっ……!!）

呼ぶ方も呼ぶ方で決死なのである。

「うーっし、んじゃ予定通りモールで服買うぞ、服！」

結果的に、ハリーが音頭を取るハメになった。

「なのはちゃん、その服、かわいいね」

「私のじゃない」

「「……」」

緊張しているだけである。しかし、なのはも学習している。

「妹の、借りてきた」
自分が言葉足らずであることは承知しているので、必要と思われる情報を追加する。
「そ、そうなんだ……」
大宮がホッとした表情をしたので、なのはもホッとする。
（（よし、上手くいってる……!!））
奇しくも、同じことを考えながら。
「なのはちゃん、家のことは大丈夫？　主婦やってるって聞いたけど」
「秀人さん……夫が、子供の面倒は見ていてくれるから、行っておいで、って」
「わたしたち、学校ではお弁当持って来てるんだ。なのはちゃんは、学食と持参弁当、どっちにする予定？」
「お、お弁当……私、作ってる……夫の分」
「お弁当と言えば、」（ここだ！）
デキる女・中野は、会話の切っ掛けを逃さない。ある程度、会話を継続することで抵抗感を軽減し、そこへ一人ずつ会話人数を増加する、名付けて『慣らし会話』である。
「オリエンテーリングも、お弁当持参するんだって」
「……ん」
一瞬、なのはが暗い表情を作るのを見逃さなかった。ここで小山がフォローに回る！
「わたし、いつもお母さんにお弁当、作ってもらってるんだけど……その日は自分で作ってみようと思ってるんだぁ」
ここで、『一緒に作らない？』系の話の振り方をするのは、実は悪手である。あくまで、『作ろうと思っている』で終わらせ、意識に刷り込むことが重要なのだ。
コツさえつかめば、あとは、ブツ切りになりつつも会話は継続できた。あくまで受け身の会話だが、なのはには大きな進歩だった。
◆・◆　◆　◆
――――――あら、よく見たらクラスメイトの皆様ではありませんか。

――私服、ですわね。
――校則第十七条四項。『外出時は制服着用が望ましい』。
――『望ましい』は『そうせよ』ですわ。
――……。
――校則違反、ですわね。
――正しくありませんわね。
――正さねば、なりませんわね。

◆・◆　◆　◆

（……よし。どうにかモール到着まで会話を繋いだわよ！）
ここから、女子特有のお買いものタイムである！
「効率的に行きましょう。
私はあっちで現地情報を調査します。皆さんは買い物をどうぞ。ではまた」
シュタタタタ……と、颯爽と歩を進めていくなのはを、三人は茫然と見送り……ハリーが真っ先に、はっと我に返る。
「はぐれメタルかアイツは～!!!」
攻略できれば、それはもう大量の経験値が手に入ることだろう。
しかし、ハリー自慢の俊足で追いかけようにも、賑わっているモールの人ごみのせいで見失いそうになる。そして……
「「「な、なんという速さ……！」」」
――ぼっちは歩くのが速い。
ぼっちは誰かと並んで歩くという習慣が無いため、歩調を合わせるということができない、というかしないのだ。あらゆる意味で、歩調を合わせられないのだ……
「ハリーさん、スマホ鳴らして！　音で位置を特定できます！」
「その手があったか！」
早速、コールをする。するのだが……着信音が、聞こえない……
「……やろう……マナーモードにしていやがる……」
――ぼっちは無音で行動する。

音を立てると、注目を集めてしまうから。注目が集まると、孤立していることがバレるから。それ故、足音を鳴らさないよう細心の注意を払い、金属製の物品は身に着けず、携帯電話はマナーモード、最悪、電源を切っているまであるのだ。
「ハリーさん、鼻は利く!?」
「くそっ、ここはフードコート……！　肉屋のメンチカツのジューシーな脂の匂いと、ドーナツ屋のチョココーティングの濃厚な甘い匂い、うどん屋のカツオ出汁の芳醇な香りが混然一体となってそれどころじゃねぇ……！　腹減った……！」
「お昼ご飯は全員揃ってからです！　ええと、『現地情報の調査』……旅行会社、違う。マンツーマン接客の恐怖に抗える子じゃない。接客されず、目立たず、静かで、一人で居ても不自然ではなく……。!!!
あそこよ！」
指さしたのは、フロア案合図。
「「「「「本屋だ　！」」」」」
果たして、なのははそこにいた。地域情報誌コーナーの立ち読み客数人の間に隠れ潜み、完全に空間と調和していた。
「あれ……ハリーどうしたの、もう買い物終わったの？　じゃあ帰ろうか」
すとん、と雑誌を書架へ戻し、ケロッとした顔でそんなことをのたまう。
「「「「「……」」」」」
この子はいったい、これまでどんな人生を送ってきたのだろうか……。四人は、脱力の極みにあった。
三人娘リーダー格にしてお姉さんの大宮が、腕を組んでなのはへ告げる。
「――――帰りません。これからみんなで服を買いに行って、みんなでフードコートでお昼を食べて、みんなでカラオケ・ゲーセンでカロリーを消費して、みんなで次の遊びの予定を話しながら、みんなで街をぶらぶらします」
なのはは……愕然としながら、その宣告を受けた。

「みんなで、か、買い物……カラオケ、カラオケ……うっ頭が」
デロデロと、暗黒のオーラが滲み出す……！
「ヤバい、黒歴史だ！　みんな聞くなーーーッ!!!」
「う、うごけない……!?」「いやぁー!!」「なのはちゃんストップー!!」
だが……全員、魅入られたように、動きを停止していた。そして、鼓膜を通じ、音声として、脳内に……
「――――『高町さん、カラオケ行かない？』そう聞かれたとき、私は正直嬉しかった。転校から数か月。そういった遊びに誘われたことなんて無かったから。もちろんイエスと答える。浮かれて過ごして、放課後。誘ってくれた子たちに連れられ、カラオケへ。小学生だけでも入れる店、と説明を受けた。料金は後払いらしく、初めてのカラオケボックスへ。選曲の前に、飲食物をオーダーするのが基本らしい。電話機の近くに居た私、みんなの注文を聞きスタッフへオーダーを通す。みな、不自然に多く頼んでいたことに、ここで気付くべきだったのかもしれない。いざ選曲。『高町さんは初めてだから、見ていてね』そう言い、私以外の全員で予約リストを埋め尽くす。私、言われた通りに見ている。選曲の権利は無かった。この時点でも不自然さを感じとることが出来なかった。運ばれてくる飲食物。流れ続ける音楽。聞くだけ、見ているだけの私。結局、終了までの二時間、会話という会話は無く、ただ、追加オーダーを伝えるだけの生きた電モクと化す。終了後、清算の時間。『こういうのは、誘ってもらった子が出すものなんだよ』。そういうものなのか。私は愚かにもそう思い、払う。学割とはいえ数千円の出費。その頃の私は、仕事にかかりきりになる母親から一日千円という、小学生には過ぎた金を受け取っていた。自分で簡単な調理は出来た私は、買い食いはほとんどしなかったため、金は溜まり、小学生規模からみれば大金持ちの部類。それが普通だと思っていた私、そのことをクラスの雑談の端っこで漏らしていたことを思い出す。『また行こうね』の言葉に、ただ頷く私。二日おきに催されるカラオケ大会。『初めてだから見ていてね』はどこへやら。私には選曲の権利はおろか発言権さえ無く、常に生きた電モク。『誘ってもらった子が出す』のみが延々と履行され、手持ちの現金はあっという

間に底をついた。やがて不自然さに気付いた店員が学校へ連絡。全校集会が開催される。私、『チクった』という濡れ衣を着せられ針のむしろに立たされる。私を誘った子たち、ひとりとり呼び出される。連れられていく時の憎々しい視線はエンドレス。私、被害者では無く、和を乱した異分子として扱われる。『チクリの高町』。小気味よく語呂の良いあだ名はあっという間に学年中へ広まり、年度を跨いでリアルに７５日間呼ばれ続ける。ようやく収まった頃に待っていたのは、新しい環境では無く、逆恨みからの虐めだった。通りすがりにワザと肩をぶつける、聞こえよがしに悪態をつくといった基本技から、流言飛語を吹聴し尊厳を貶める、笑顔で優しく話しかけるように見せかけて『うっそだよーん』と上げてから突き落とす高等テクニックまでを駆使し、身勝手な復讐を行う。同情的な目を向けていた子も、標的変更が怖くて何もできず。聞こえないフリ、見えないフリ、知らないフリ。私は空気だった。空気だったから、誰も空気を助けようなんて思わない。誰も。誰も――――」

「「「「「「「……」」」」」」」

……活気に満ちていた筈のショッピングモールが、沈黙していた。

呪詛と共に溢れ出る暗黒の波動は空間を超越し、『陽』の気を排除。『陰』の気がそこいら中に毒ガスのように充満していた。

「――――というわけだからカラオケは嫌……って、なんでみんな虹色のエクトプラズム吐いてるの……？」

「こ、の……おバカ祟り神が……っ……!!　り、臨、兵、闘、者……はぁ、はぁ、……か、皆、陣、烈、在……前ッ……!!」

ハリーは息も絶え絶えになりながら、唯一動く右手で九字を切る。

『陰』の気は霧散し、再び、『陽』の気と交じり合う。

――――世界は調和を取り戻した……。

「はっ、ここは一体……」

大宮たちも、意識を取り戻した。多少、意識が混濁しているが命に別状はないだろう。良かった良かった。

「……あの、」

と、なのはが、申し訳なさそうにしているのに気付いた。
「あっ、なのはちゃん。楽しい時間ってあっという間だね。気付いたら記憶が飛んでいたの。キット楽シカッタンダネ。楽シカッタンダネ。楽シカッタンダネ」
命に別状はない。命、には……。
「あの……このモール、カラオケ、ない……けど、ゲームセンター、ある、ので」
ハリーから、要らぬ手間を掛けさせた代償に、そう誘うように言われたのだった。
俯いて、もじもじと落ち着かない様子ながら、しっかりと言えたあたり、なのはも頑張っているのだろう。
「「「「是非!!」」」」
早くも一つ、目標を達成してしまった。
「なのはちゃん、プリ撮ろ、プリ！　デコろ！」
意外とゲームセンター慣れしているらしい中野が、なのはをリードしていく。
「……ぷり？」
……理解できていない顔だった。こういうのは、やって見せるのが手っ取り早い。
五人でハコに入り、ハリーにマリオネットのようにピースを作らされ、パシャリと撮影。
「はい、なのはちゃん」
と、デコ用のペンを渡される。
「何でも好きに書いていいんだよ！　ほら、スタンプも！」
「……すたんぷ？」
迷いながらも、サラサラと文字を書き込む。
『ショッピングモール内　４　Ｆ　１１：３５　異常ナシ　引き続き警戒を続行』
「報告書かッ！　ちげぇの！　こういうのは、素直に感じた気持ちを文字にするんだよ！」
「素直に、感じたことを……」

さらさら。
『お腹が空いたので食事がしたいです』
「あ・と・で・な！　リテイク！」
「う、うぅんと……感じたこと……」
『秀人さん大好き』
「……これでいっか」
((いいんだ……))
素でやっていることである。まごうこと無き素直な気持ちだろう。
5枚のシートになって出てきたシートを、それぞれ一枚ずつ受け取る。
「……今さらだけど恥ずかしくなってきた。消そうかな」
「おいなのは」「何よ」「いぇーい」ぱしゃり。
先程のプリクラをバッチリ写しての不意打ちツーショット自撮りである。
「さて旦那に送信、と」
「わぁあああああああ」
バタバタするなのはだったが、ハリーが指一本動かす方が速かった。
「時間を巻き戻さなきゃ……！」「過ぎた時間は神でも戻せねぇんだよぉ！」
「なのはちゃん、次アレやろ、アレ！」
と、中野が指さしたのは、筐体のほかに一段高い『お立ち台』がある、いわゆるダンスゲーム。
「どうすれば……」
「画面に表示される色と同じところでステップ踏むんだよ。ほら、スタートするよ！」
「あわ、あわわ……」
言われるがままに……と、言う割には。
「なのはちゃん、超上手い!?」
慣れれば、身体を動かす系はなのはの大得意とする分野である。
ヒッキー気質でぼっちだが、実はアクティブな少女だった。

「……（楽しい）」
あっという間にワンプレイをパーフェクトクリアしたなのはは、今度は自ら硬貨を投入し、最高難易度を選択する。その神業的ステップに、ギャラリーまで集まってくる。
――何だあのＪＫ!?
――バー全く触れてねぇぞ!?
――回転だよ、回転！　コマみてーに！　ジャイロで！　だからコケねーんだ！
――……自称・上級者に限って、バーに完全に体重を預けきり、バタバタとみっともなく足踏みをするだけの輩が多い中……見てみろよ。
――あのＪＫ、マジで踊（ダンス）ってやがる……！
そして……実は実装直後であり『殺人的』とまで評される難易度を、まさかの初見パーフェクトクリアである。更に言えばこの筐体はネットワークで全世界と接続されており、観戦モードで全世界生中継までされていることをなのはは知らなかった。
「……あー楽しかっ……え、なに、この人だかり……人がいっぱいいる……いっぱいいる……」
――――うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおーーーー!!!!!
（やべぇ、世界中継されてるとか知ったらなのはが入滅する……！）
「ポップコーンタダで配るんだとよ」「なにそれ欲しい。ポップコーン食べたい」「タダより高いモンはねぇって言うだろ」「高いなら踏み倒しちゃえばいいのよ」「はい、てっしゅー。てっしゅーしまーす」「ああ、ポップコーン、ポップコーン……」「後で買ってやるから！」
なのはを、ハリーが手を引き撤収する。
――後に、『アレ設定ミスってたわ。すまんな（意訳）』というふざけた通知とともにバランスを修正された最高難易度ステージだったが、修正前の『人間には無理』とされたステージをパーフェクトクリアーしたプレイヤーネーム『ＮＮＨ』は、界隈で都市伝説と化したのだった。

「あー、楽しかったね!!」「なのはちゃん、すごかった！」
ゲーセンを抜け出し、休憩所でジュースを飲みながら笑う。
「……」
ハリーが買ってくれたポップコーンを食べ終わったなのはは、ポケットの中身をまさぐり、三人娘を見やり、もじもじ、もじもじと……。
「なのは、ほら、行け！　行けってば！」
「わ、わかってるわよぅ……」
ハリーにせっつかれ、一歩前に突き出される。
「……」
「……ど、どしたの？」
……今から敵の親分のタマを取る鉄砲玉のような形相のなのはに、三人がたじろぐ。
「こ。これ。あげるっ!!」
ズバッと差し出したのは……ラッピングされた、ストラップ。
「さっき、く、クレーンゲームやったら、一回で、みっつ、落ちたから……」
……実はゲームと相性が良いのかもしれない。
――一人でも遊べるし……
「これ、ホイッスルになってて！　あの、オリエンテーリング先、山で！　山で迷子になったら、使えるから！　だから、あげるっ!!」
ずずい、と一杯いっぱいの表情と共に押し出された。
（あぁー……やっちゃった……『え、……ありがとう（苦笑）』『あー、うん（困惑）』とか言われるんだ……あぁー、やめときゃよかった……ぜったい馴れ馴れしいって思われた……あぁー……）
後悔でグッダグダになるなのはだったが。
――きゅ。
握られる手。
「なのはちゃん、ありがとうっ!!」
「……へ？」
顔を上げれば、心からの笑顔があった。

「さっそく付けよう！」「あ、くっそ……このスマホ、ストラップホール無い」「機種おなじだっけ？　はい、予備のカバー。ここにホールあるよ」「中野さん、さすが！」

フツーに喜ばれて、困惑してしまう。

と、いうのも。なのはが異常に悲観的なだけで……普通、友人からの贈り物が、嬉しくないわけが無いのだ。

「なのはちゃん。これ大事にするね。オリエンテーリングの日も、持って行くね」

「……鳴ったら、困ったら、助けに行き、ます」

ようやく、なのはにも笑みが見える。

――――ぼっちは義理堅い。

恩を仇どころか嘲笑で返されてきた経験から、せめて自分だけでも、誠実であろうとする。恩は返すし、スジも通す。

ひねくれていることが玉に傷だが。

「……なーんか犬笛みたいだなぁ」

「やかましい」

ハリーの指摘に、なのはが少し怒った。

――――――――一緒に笑ってあげる。

◆　◆　◆　◆

笑顔のまま解散した後。
大宮、中野、小山は、三人で本日の振り返りを行っていた。
「嬉しいなぁ……」
大宮は、満面の笑みでストラップを振る。
「なのはちゃんとの距離が縮まりましたね」
「わたしたちが貰うことになるとはね」
あれやこれやと暗躍しているが、三人の行動の根幹にあるのは、『なのはと友達になりたい』という一心なのである。
時刻は間もなく１７時。すっかり夕方。
「よーし、二次会行くよー！」
このまま夕食へ。そう、三人で拳を突き上げ……
「――――――いけませんわよ」
……行く手を阻む、小柄な人影があった。
「え……？　だ、だれ？」
困惑する大宮。だが、その小柄な人物が着用しているのは、見覚えのある服装。
「タスミンさん……？」
エルス・タスミン。英国からの帰国子女……というプロフィールだけを知っている程度の、クラスメイトの少女であった。
物静かで、当たり障りのない会話を行い、特に問題行動も起こさない……という、あの学園の生徒としては、至極常識人の部類である、と

も認識している。学業不振ということもなく、むしろ優秀である。目立たないが、優等生。そういう少女だ。
そんな彼女が、休日に制服を着用し、立ちはだかっている。
「？　タスミンさん、何か用？」
「今までどちらに？」
「え？　……そこのモールだけど」
「良いと思っていますの？」
「な……何が？　タスミンさん、あなた、何が言いたいの……？」
会話が噛み合っていない。じわじわと、その違和感が、威圧感へ、やがて、恐怖へと変わっていく。
「――校則第十七条四項。『外出時は制服着用が望ましい』
――守っていませんわね。ギルティ。
――校則第十一条二項。『繁華街への外出は保護者同伴のこと』
――守っていませんわね。ギルティ。
――校則第八条一項。『午後17時以降の外出は、特別な理由の無い限り控える』
――守っていませんわね。ギルティ。
――ギルティ、ギルティ、ギルティ……スリーアウト制度の採択に則ると、これはもう最重度の刑罰を以て、」
「……何を、言っているのか聞いて、」
――ジャリィイインッ!!
「――『他者の話を遮る』……ギルティ。」
頬に、衝撃と、熱を感じた。
「あ、あ……」
エルスの差し向けた掌から、漆黒の鎖が一直線に伸びている。大宮の頬を掠め、背後の自販機をブチ抜き、壁面へ亀裂を生じさせている。
――ギャリギャリギャリッ……!!
鎖は、まるで大蛇のごとく大宮、中野、小山の身体を束縛した。
「ぎッ……!!　あぐ、」
鎖を猿轡のように噛まされ、悲鳴をも封じる。

そして、気付く。これだけの破壊活動にも関わらず……不気味な静寂が、街を覆い隠していることに。人も、灯も、音さえも……。
「――――正しくないですわ。正さねばなりませんわ。どう正して差し上げればよろしいのでしょう」
静寂の中、少女の声だけが有る。まるで、絶対者のように。
「――――始めましょう」
その絶対者……エルス・タスミンは、にぃ……と、愉悦に歪んだ醜い笑みを、その顔に浮かべる。
「――――審判（ジャッジメント）ですの」

◆▪◆　◆　◆

「……!!!　現地の聖王閣下へ連絡を。至急。至急。」
教室の一席で、ヴェールを目深にかぶった少女が声を上げる。
その眼前に据えられた水晶玉が、暗い淀みを映し出していた。
「危険です。極めて。かつてなく、強大」
予知能力者である少女、モイラが、静かに、切迫した状況を伝える。
クラスメイトたちは、上層部への連絡に走る者、かの『神』へ気取られぬよう、ヴィヴィオへ秘密暗号通信を行う者、現地対応に跳ぶ者に分かれ、行動を開始する。
「――――フェイズ1突破。フェイズ2突入。あぁ、あぁあ……」
――――バキンッ……!!
……モイラの水晶玉が、爆発したように砕け散る。
それは、状況が絶望的であることを意味していた。
「――――フェイズ3、……完全発症です」

◆▪◆　◆　◆

「んむ、ンンーーーー……!!!」
――――ギシッ……!
鎖による束縛は強力さを増し、華奢な少女の肉体は悲鳴を上げる。

「……弁明の機会を与えますわ。なぜ、四つ、四つも……法を犯しましたのッ!?」
「……!!」
弁明と言うが、口元まで拘束されていては不可能だ。そのことに思い至ったのか、嫌々といった様子で、猿轡だけは多少緩められる。
「さぁっ、弁明なさいッ!!」
「……」
しかし、未だ混乱の渦中にある大宮に、エルスを納得させるだけの言葉など、期待できよう筈も無かった。
「黙秘、ですの？　機会を与えたといいますのに……これだから罪人は……」
大宮は、ただ、この凶事が過ぎ去ることを待っていた。どうしようもないのだ。命だけでも拾えれば、御の字かもしれないと。過去に母の再婚相手たちから受けていた暴力の経験が、そう言っていた。自分さえ我慢していれば、弟妹たちには危害が及ばないことも。
「……ぐ、う……」
「この国では、罪人を絞首刑にしますの。母国の手法で、罪をあがなえる……素敵ですわねぇ」
恍惚とした様相で力を振るう。完全に、力に呑まれている。
「正しく……正しく、正しく……そうあれば、いいのですわッ!!あなたが悪いんですのよッ!!　正しくない、あなたが悪いんですのっ!!」
（……あなたが悪い、か）
遠のく意識の中で、かつて母だった女性の言葉を思い出す。
（……いつも、こんな感じだったなぁ……わたしを殴るのに熱中している隙に……弟たちを、逃がしてたっけ）
視線の先。中野と小山の拘束が、緩んでいた。同時に同等の力を振るえるだけの力量は、まだ無いのだろう。
少なくとも、あの二人は逃げられる。この空間がどこまで続いているのかは分からないが、この暴力から逃れることさえできれば良い。
（……もう少し、引き付けておかなきゃ）

「……で、……」
「あァ?!! 聞こえませんわねぇ！」
自らの眼前に引き寄せるエルスに。
「……六法全書で、マスでもかいてろ……！」
エルスの表情が、一瞬真顔になり……凄まじく、歪む。
「ぎ、ぁ、ああ、あああああああああーーーーッッ……!!!」
――ガシャアンッ!!
鎖ごと、地面に叩きつけられる。
「おまえ、お前っお前お前お前ェェェ

「逃げるよ、早く!!」
小山とともに、エルスから距離を稼ぐ。
「二人とも……どうして……？」
「「　馬鹿!!　」」
同時に面罵される。
「友達捨てて逃げるほど、人間腐ってないっつーの!!」
「友達同士、助け合うのが当然っつーか、あんなん助けるのが当然っしょ！」
今はひたすら、その場から離れることしか出来ない。だが……鍛えてもいない女の足だ。
――――ギャリリリリッ!!
「きゃあっ!!」
中野の両足首を、鎖が絡め取る。
「こんなのっ……、くそっ……このっ……!!」
見えている。触れている。だというのに……その鎖に触れることが、出来ない。
――――バチィンッ!!
「ぎゃっ……!!」
咄嗟に大宮を庇った小山の背を、鎖が鞭のように強く打った。
ゆらりと、幽鬼のような足取りで、エルスがやってくる。
「どうして、どうして、どうして、」
ぶつぶつと、ただ繰り返す。その体表には……黒い、羽根が。
――――メキ、メキメキメキ……!!
骨格が、歪んでいく。身体各所の関節部が、明らかな破砕音を立てながら。唯一、変異を免れている箇所など、顔面程度のものだ。その口腔内ですら、鋸のような牙がゾロリと並んでいる有様だった。
「どうしぇ、ぎ、ぃ、……『――――ケァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
「……」
かたかたかた、と、自らの歯が恐怖に鳴っている事さえも分からず、

その変貌を茫然と見つめる。
『――――クァアアッッ!!』
――――ギャラララララララッ!!
鎖の能力は、健在。羽毛の内側から、比較にならぬ程の縛鎖が迸る!
「きゃあああああっ!!!!」
生命の危機が、身体を間一髪、動かすことに成功した。
――――ゴリィイイッ!!
絡み付いた鉄柱が、鎖の造形そのままに圧搾される。もはや、捕獲・拘束などといったレベルではない。鎖と共に撒き散らされた衝撃に、身体が吹き飛ばされる。
「……、」
危機感は既に過ぎ去り……どうしようもない現実が、そこには在った。
「、え、遠足……行きたかったなぁ……お父さんもお母さんも、すごく、喜んでくれてて……わたし、学校に通うの……ひさしぶり、だったから……」
小山が、涙を零しながら、儚い願いを口にする。
「……ちゃんと、真人間になろう、って……もう、暴走行為はやめて、悪い連中とは、縁を切って……刑事さんが言ってくれたみたいに……不貞腐れないで、自分にできることを、一所懸命に頑張ろうって、思ってた……」
中野が、痛めた足首を庇いながら、小さな希望を口にする。
「……」
庇われる大宮は、知っていた。あの学校の外部からの評価が、決して良いものではないことを。偏見ではなく、ある面では真実であるということを。既に退学者も出ている。暴力行為も窃盗行為も頻発している。自らの19という年齢が、女子高生という立場には似つかわしくないということも理解している。
――チャリンッ……
……ポケットからはみ出したストラップが、地面と触れ、金属音を

鳴らした。
「……」
ストラップを握りしめる。
大宮は、知っていた。それでも、あの学校が希望であるということを。自分のような、世間からのはみ出し者が、最後に自ら、未来を選び取れるチャンスが与えられる場だと。
小山が、オリンピック・レスリングメダリストの両親から受け継いだ１９０ｃｍ７５ｋｇという体格と、受け継がなかった身体能力のギャップから心無い嘲笑を受け、部屋の外に出られなくなっていたことを。
中野が、中学に上がっても、分数だけがどうしても理解できず、劣悪な教師から馬鹿呼ばわりされ続け、大学教授である両親にすら愛想を尽かされ、非行の道へ走ったことを。
強引なハリー・トライベッカに、無理やり引き合わされた、凸凹な自分たち。
――それでも、大宮は知っていた。
『でくの坊』とよく自嘲する小山が、男子の殴り合いの喧嘩の間にも、身体を盾に割って入り、怪我をしながらも両者を等しく諌めることのできる、心の強さを持った人間であることを。
『頭脳がコドモ』と冗談めかして言う中野が、絵本の読み聞かせや、点字翻訳・手話翻訳のボランティアを自発的に行っている、心の優しさまでは腐らせなかった人間であることを。
そんな二人と友達であることが、大宮の誇りだった。何も無い自分だけれども、友人には恵まれたのだと。年齢の差から頼られても、話を聞いてあげることしか出来ない自分には、もったいないくらい、素敵なお友達に出会えたのだと。
――中野と小山は知っていた。
『自分には何もない』と卑下する大宮が、クラス内外の生徒たちの相談に乗り、その一人一人のために、心から怒り、心から泣き、心から喜

ぶことのできる……辛い境遇にあっても、心の純粋さを失わなかった人間であることを。
――皆が憧れる、素敵な大人のお姉さんであることを。
目の前の怪物が理想と語る、正しいだけの人生ではなかった。間違い続けてきた人生だった。犯した罪の数は、一つや二つでは無い。言葉の暴力に、力の暴力で報復したこともある。貶められた尊厳を、破壊行為で誤魔化したこともある。自分が死なないために、母親だった女性へ、包丁を突き刺したこともある。そんな自分たちが、汚点だらけの自分たちが、何かを望むことなど、許されていないのかもしれない。
――それでも。
今から自分が行う行動は、恐らくは『間違い』と呼ばれる類の行いだ。
「友達、って、いうのは」
ホイッスルを、口元に運ぶ。
『鳴ったら、困ったら、助けに行きます』――ただ、その言葉だけをあてにして。
――助かりたい。
そのために、巻き込む。
「ただ、一方的に、与え、得るもの……」
――死にたくない。
そのために、迷惑を掛ける。
「じゃあ、無くって」
――生きたい。
そのために、信じる。
「信じて、頼って……」
――生きていたい。
信じて、頼る。頼るからこそ。
「お返しに、信じてもらって、頼ってもらって……
重たい荷物を、ヨイショ、って半分こにできる……！
魔法のような関係のことを、言うんだよ……！」

願いを込めて、祈りを込めて、希望を込めて。ホイッスルを、吹く。ぴゅひいいい、と、精度の低い笛の音が、高らかに。

――間違えた選択を、正しく選び取る。

『……コうきょうノ、ばデ、ソウオンッ！　ギギギ、ギ、ぎる、ティ……ぎる、ギルルルルルルルルルルルルルァァァァアーーーーーーッッ！』

異形の翼が、翻る。目を、閉じる。信じる。信じて、強く、願う。

――神様。

「うん」

――叶えたい夢があるんです。

「そう」

――友達と、語らいたい夢があるんです。

「好きにすれば」

――だから、時間を。わたしたちが、夢を叶えるための時間を、もう少しだけ、取っておいてください。

「で、どんな夢なの？」

――。笑いませんか。

「――一緒に笑ってあげる」

――素敵なお嫁さんになりたい。

「――きっと、叶うよ」

風が、吹き抜ける。

『……ぎ……？』

エルスは、不思議な現象を体験した。翻した翼が、射出するはずだった鎖が、己の背より根元から分離する現象だ。確認するために伸ばした手が、肩から大地に滑り落ちる現象だ。膝から下の感覚が無くなると同時、地面が顔目がけて起き上がってくる現象だ。そして、激

痛が『ギャあァァァァあああああーーーーーーーーーーーーッッ!!!』
激痛が・激痛が・あし激痛激痛うで『ギィィィィィィー!!　ゥギィィィィィィ

「悪いだけの人も――正しいだけの人も、そんなのはいない。正しさも間違いも、正義も悪も、どちらも内包する、どちらにもなってしまい、どちらにでもなれるのが、ヒトっていうモノなのよ。
どんな間違いからでも、正しく歩き出そうと前を向く。
――だからこそ、命というものは素晴らしいものなのよ」
切っ先を、突きつける。それは、審判するように。

「それでも、自分が絶対的に正しいと言い張り、私のお友達を傷つけるっていうのなら……――
――お前は、『正しさ』に逃げた卑怯者……即ち、『悪』だッ!!」

言い切られ……エルスは、ただ狼狽える。
『……誰ナンダ、何なンダ、オマエはぁああアアアアアアッ!!?』
なのはは……己が存在を、語る。

「私（わたくし）立（りつ）月村学園。
海鳴本校第一期生・一年D組・出席番号1番。
性を吾妻。名をなのは――」

絶対の戦神が、宣言する。

「――通りすがりの、神様だ」

# ｖｉｖｉｄ編　９話『　孤独の中の神の祝福　』

――――高天原（おくじょう）へ行こうぜ……久しぶりに……キレちまったよ……

◆　◆　◆　◆

――町の古美術商、田中正巳はこう語る。

「いえいえ、近頃は珍しく、刀剣目当ての若い女性のお客さんが多くてね。

ええっと、なんて言いましたっけ、あのピコピコする携帯電話のゲームの……まぁ、その影響らしいですわ。

『備前長船は無いか』とか、『虎鉄は無いか』とか、トンチンカンなことを仰る方もいらっしゃいますが」

――そんなもの、あれば仕入れたいのはこちらだと。

「ええ、まぁ。虎鉄なんて、１００本あれば１００本がニセモノ、なんて話もありますが。

ウチはもとより薄利多売でね。刀工の弟子が練習で打った……まぁ言い方は悪いですが、無銘のクズ刀なんかを仕入れて売ると、まぁよく売れること。鉄の延べ棒みたいなモンに、よくもまぁ大枚はたくモンだわと、ありがた半分、あきれ半分で思うんですわ」

――鉄の延べ棒、とは

「ホント、そのまんまの意味ですわ。ただのデカい包丁みたいなモンです。鍛造はしてあるけど、してあるだけ。銀座で売っているマグロ包丁の方が、よっぽど業物ですな」

――それこそ、古刀まで遡らなくては、本物は無いと。

「でも、まぁ……刀工の弟子作や、蔵出しのボロ、来歴不明の白鞘、アレコレ仕入れているとですねぇ……たまぁに、『有る』んですわ」

――有る、とは。

「真に迫る贋作なら、まだカワイイもんですが『その場のアイデアを実

行したら、それがたまたま、失われた技術そのものだった』という偶然が積み重なり、現出してしまったモノ。真の刀剣。真剣。

――――『刃金の真実』に、迫ってしまったもの」

――――ぜひ、一見してみたいものです。

「あー……それがですねぇ、どっかにやってしまったんですわ。売った記憶は無いし、かといって、盗むならもっと金目の良い品もありますし……」

――――それは、口惜しいですね

「いえ……不思議とね、惜しくは無いんです。こういう商売ですから、理屈では説明できないこともありますし。画のお岩さんがニタリと笑った時には、これは死んだな、と思いましたよ。はっはっは。」

――――それで、惜しくは無い、とは。

「んー……まぁ、納得するための文言なら、こうなるでしょうな。『持ち主のもとへ行ったのだ』、と」

――――持ち主、ですか。

「そ。持ち主。たまぁに、時代に一人か二人くらい、居るらしいんですわ。

――――剣に選ばれたって、お人が」

――――なるほど。では、その真に迫りし真剣も、かの人の下へ行ったと。

「えぇ、どうせ、タダみたいな値で仕入れたうちの一振りですからね。この平和な時代、それほどまでに剣と引き合うお人がいるのなら……それは、剣にとっても、床の間に飾られるより、幸せなことでしょう。あぁ、ところで……

――――さっきから、あなた、誰ですか……？」

――――……。

――――わたしの『名』は、人間の認識の許容を越えてしまいますので、記憶からも消えるでしょう。ですが、久々に俗世へ降り立ち、会話を楽しめました。その礼として、一度きり、我が名を名乗りましょ

う。

――。

――我が名は建御雷之男神（たけみかづち）。

◆▪◆　◆　◆

――なのはは剣の天才だ。

……身も蓋も無い表現だが、これ以外に表現のしようが無い。あれこれ残念すぎる一面もあるが、剣の才能に限って言えば、世が世なら、確実に歴史に名を残す英雄となれたであろう。

なにせ、鋼の鎖を断ち切れるのだ。斬れるはずの無いモノを、技量のみで斬ることができる。そして、それを『なんとなく』で、成し遂げてしまう。それを、天才と言わず何と言おうか。父系の遺伝もあろうが、なのはは間違いなく、剣の天才なのだ。

『ぎ、るァァァ

量のみで、硬質な金属や柔軟な筋繊維を断ち切っている。
「うむ……これは良い刀だ」
駆けつける中で、通りに一軒だけあった古美術商にて、結界内の無人をいいことに拝借した一振り。太刀に分類されるに充分な刃渡りを持ちながら平造り、反りは少なく、切っ先鋭く、切断にも、刺突にも両得。美術品としては失格だが……実用武器としては一級品の出来栄え。
「実に、手に馴染むっ!!」
趣味に合う得物を手にしたなのはは、まさに水を得た魚。実戦ブランクを埋める勢いで、エルスを攻める。
「……」
だが、一方でなのはは、分の悪さを察してもいた。斬っても、切っても……再生力が落ちる気配が見えない。今は、敵が未熟で滅法撃ちをしているだけでいくらでも対処できるのだが、変に『学習』されてしまうと、恐らくは。
なのはの見立てでは、ああいった唐突に力を得たような輩は、何らかのアイテムを用いている場合が大多数であり、エルスの体内のいずこかには、力の源が、核があると睨んでいた。
早いところそれを破壊か摘出をしてケリを付けてしまいたいところなのだが、エルスには無駄にセンスがあり、地味にトドメを阻まれる。
「でも、だいたい分かった」
……分は悪いが、負けるとは言っていない。
「これだけ斬っても死なないことは分かったし……
――バラバラに寸断して小分けにしてから、ゆっくりと核を探すことにするよ」
悪魔の発想である。
「合体ロボみたいにバラして、終わったらくっつけてあげるわ」
『ギッ……!?』
後方に守る小宮ら三人に聞こえなかったことが幸いか。
――ギャララララッ!!

「それはもう見飽きたよ」
馬鹿正直に直射される一撃を、刀の鎬(しのぎ)で、文字通りに凌ぐ。
「目」
――――横一文字。
目といわず、頭蓋にまで到達しかねる斬り込み。
『ギァァァァァァァァァァァッ!!』
「ほら、そこで固まるからこうなる。人外の身体に、人間の意識がついていけて無いんだよ。どうせ治るなら、構わず攻めればいいんだ」
縦一文字からの逆縦一文字。両腕が落ちる。
「残すと、くっつくからね」
バリアとシールドの応用。切断された両腕を『梱包』し
「燃え尽きろ」
内部へ、魔力弾を撃ち込む。
『ギッ……ギィィィィィィィィッ!!?』
「再生している間は、隙だらけ」
片翼、退き損ねた右足を、同様に切断、焼却。
『バラバラに寸断する』という予告を、違わずに執行していく。
――――。
分の悪さとは何だったのか。
というのも、なのはは、凶鳥部隊の頃、遡ればジュエルシード事件の折から、こういった図体のデカい手合いは散々に相手をしてきている。再生能力持ち、飛翔能力持ち、そんなものは束で相手にしてきた。一度……慣れが油断になり、とんでもなく痛い目を見た経験もあってか、今は一切の油断も無い。
つまるところ、理性無き怪物なぞ、なのはにとっては動くサンドバッグに等しい。
『タ、……タダ、シク……アレバ……』
うわごとのように繰り返すエルス。その身体は、胴体に頭がくっつき、片腕が肘まで、片足が膝まで残っているだけの状態だった。
「……」
血払いをし、いざ核を摘出せんとするなのはが、それを無視して歩

を進める。変な情けは、それだけ苦痛を長引かせる。
「……」
白刃が閃き、――――
◆▪◆◆◆
……おかしい。
痛みより先に、頭に浮かんだのは疑問だった。
この力は、この姿は、正しき力ではなかったのか。正しさを遂行するために作られた姿ではなかったのか。事実、罪人どもの封じ込めと処罰は、順調に行えていた。邪魔さえ入らなければ……いや。邪魔が入ろうとも、この力を振るえば、邪魔ごとねじ伏せられた筈だ。
だというのに。なぜ、こうも上手くいかない。躱され、防がれ……返礼とばかりに、全身を切り刻まれているではないか。正しさが、通っていないではないか。なぜだ。何故だ。何故だ。それは。
『――――ああ、そうでしたのね』
この『姿』は、この『力』は。
――――『正しくない』のだ。
「……」
白刃煌めく。だが、思考する。
『正しさの具現』とは。ただ大きな力を得るために、肉体を獣に変異させることが？　鎖をただ振り回すことが？　理性を放棄することが？
――否。
そう。否、である。正しさとは、正義とは、己が理性の上にあらねばならない。理性とは、思考とは、肉体に付随するもの。健全なる精神は、健全なる肉体に宿る。であれば、正義が宿るは、獣の姿に有らず。それは……
――――ギャリィイッ……!!
……防ぐ。ヒトらしい姿へ再び変異した肉体の、腕で。腕に巻きつけた、鎖の手甲で。
『a、▪アぁ……あ。ふふ、聞き取りやすく、なったかしら？』

「……。変わった」
「ええ。――――生まれ変わりましたわ」
巨大な肉体を、ただ捨てたのではない。生来のサイズへ、その質量をそのままに『圧縮』したのだ。筋繊維の中に鎖を……己が象徴を織り込むことで、瞬発力も格段に飛躍した。肉体の頑健さも言うに及ばず。被弾面積も減り、人体構造へ近づいたことで視野も広がった。外装として、可動域へ干渉しない部位へ、鎖を編んだ鎧を纏うことで、防刃性能も獲得。
「おっと、これを忘れていましたわ」
再生した衣服の懐より、予備の眼鏡を取り出す。視力矯正の意味は無いが、コレがなくては始まらない。
「……。」
腕の一部に、羽毛の名残を発見する。
「……ちっ。羽毛が生えた人体なぞ、正しくありませんわ」
消失。『外』へ向かっていた力を、『内』へ。己が肉体の深奥、力の根源へ、外部より取り込んだ力を、合一させる。
「さぁ……あらためて」
武術は知らず。しかし、正しい身体の動かし方は、自然と理解できた。武器は握らぬ。正義の拳で、悪を砕く。

「――――正義を執行しますわ」

目の前の執行対象へ、歩を詰める。
「――、！」
警戒しても、遅い。鎖の収縮を利用した、人体では実現し得ない瞬発を以て、懐へ。武器の間合い。刃こそ届かないまでも、柄尻での打突が有る。がん、と、衝撃が額を走る。だが……。
「それが、どうかしましたの？」
それだけだ。それっぽっちの衝撃が、この身を纏う正義を、貫けるものか。
じゃりいっ！　と、拳がその身を掠める。身に纏っていた見えない

薄皮のようなものが、削ぎ落とされる。
「あは。あはははは。これが、正義。正義の力……!!」
見ろ。あれだけ恐ろしかった刀が、ただの棒切れのようだ。やはり、正しいのは自分なのだ。
「銃刀法違反で、死刑ですわっ……!!」
この力を、正義を、その身で受けよ。
「――――だぁらっしゃあああああああああああああああああああ!!!」
――――ゴギィイイイイッ……!!
……横合いから乱入は、想定していなかった。
「お、ゴ、が……」
頚骨にダメージ。飛び膝蹴りが、鎧の無い頚部を直撃したのだろう。視界が回る。その勢いのままに蹴り飛ばされた。いかにこの肉体といえど、重量を上回る衝撃を受ければこうなる。地面を掴む。回転を停止。立位。
「二人、いましたわね。不良と、ヤンキーが」
見れば、いかにもな下品なジャケットを羽織っているではないか。特攻服といったか。あぁ、よろしくない。アレは、居るだけで公序良俗を侵すものだ。排除しなくては。
――――全ては、正義のために。

◆・◆　◆　◆

「あ、ハリーだ」
「ハリーだ、じゃねぇ!!」
横合いから乱入してきたハリーは、下品な特攻服の裾を翻す。
「オイ、ありゃあ何だ。ヒトガタだがヒトじゃねぇぞ」
「いじめっこよ」「ずいぶんアバンギャルドないじめがあったもんだな」
冗談はさておき。
「たぶん、神化を疑似的に行っているんだと思う。力の質が、私たちにどこか近い」

「お手軽になっちまったもんだなぁ、神様ってやつも」
だが。力の正体が擬似神化だと判れば、対処もできる。
「なのは。お前、荒魂(あらみたま)と戦ったことあるか？」「無い」「だろうな。じゃあオレがフォワードだ。慣れてっからな。オレがあのデコメガネを抑える。タイミングを見て、炎で清めちまえ」
一気に説明する。清める、とは、恐らく神火(しんか)のことを言っているのだろう。
「いや……それは……」
が、なのはは妙に口ごもる。実に言いづらい真実が有るように見えるが、聞き返すヒマは無さそうだ。
「大宮たちは……うっし、隠れたみたいだな」
そして何より、ハリーは聞いていない。
「ハリー、あのね……その、」
致命的な祖語が発生しかけているのだが……時間はそれを埋めることを、許してはくれないようだった。
「二人、いましたわね。不良と、ヤンキーが」
何かを言うより先に、エルスも復旧していて……とても言い出せる雰囲気ではなかった。
「この特攻服(トップブク)を着たオレは一味違うぜぇ……！」
ぐりんぐりんと肩を回す。
「……下品ねぇ、それ。はやてが好きそう」
いかにもチバラギな刺繍を見、なのはが漏らす。
「じゃかあしいわ。……一応、聞いておく。力を鎮めてはくれねぇか？　そうすりゃあ、穏便に日常に帰してやれるぞ」
エルスは、きょとんと……一拍を置き、けらけらと笑う。
「あなた……『矜持を捨てれば命だけは助けてやる』、なんて言われて、はいそうですかと従いますの？」
「……だよなぁ！」
吶喊。
「さぁ来なさい、悪漢。正義のなんたるかを、その身に刻んで差し上げますわ」

「小物が強キャラみてぇな物言いしてんじゃねぇーーーーッッ!!」
ハリーの突き出した熊手とエルスの手甲が衝突し、金属音を鳴らす。身体能力で圧倒的に勝るハリーに、エルスは武装で対抗する形だ。手甲という装備は、単純ではあるが、単純であるからこそ、特別な鍛錬をせずとも、身を守る防具として十分に機能する。そして、圧し固めてあるが、それは鎖の集合体。ハリーが手を引き戻す瞬間、その手を幾重にも拘束し、動きのタイミングを崩してしまう。
「くっそ、やりづれぇなぁ!!」
衝撃も分散されるため、正面からの破砕は困難。幾本かの鎖が断裂したとしても、最小の負担で修復されてしまう。
そして……エルス自身の技量も、実は絡んでいる。読書の一環として、また、過酷な環境を生き抜くため、母国の軍隊式格闘術に関する書籍を読み込んだ経験が、ここにきて活きていた。
「うぉ……!」
目潰し。当たらずとも効果的な攻撃に、ハリーは思わず隙を作ってしまう。だが、そこへ大振りの攻撃を仕掛けるのは悪手。エルスは、最小限の動作で、浮き上がった顎を拳で抉りにかかる。
――パァンッ!!
掌で受ける。追撃は行わず、守りの構えに戻る。だが、攻めて来ないのかと思いきや、ハリーの間合いの外から鎖が飛ぶ。
「せせこましいんだよォおおおおおおおおおっ!!!!」
だが、隙だらけというのも、ある意味ハリーの戦闘スタイルだ。隙無く洗練されているのではなく、野生の勘にモノを言わせ、力尽くでゴリ押す。
――バキィッ!!
と、額に直撃弾。よろけるハリーに、エルス、ニヤリと笑む。
(殺った!!)
「と、油断させておいてぇぇぇぇぇぇ……!!!!」
がばりと、一気に身体を起こし、瞬時に間合いを詰められる!
「!!」
見れば……額に巻いた鉢巻、そこの小型の鉢金が凹んでいる。その

僅かな面積で、受け止めたのだ。
「くっ……！　だまし討ちとは！」
「騙される方が悪いんだよぉ！　オマケに喰らえオラァ!!」
――ブシュゥウウッ!!
「あぎゃーーーーっ!!?」
口に含んだ清酒を、エルスの顔面目がけて噴射した。眼鏡の防御で眼球こそ無事であるが……その唐突な行いに、エルスは慄いた。
「ふ、不潔ですわっ！　汚いですわっ！　全体的に卑怯ですわっ!!」
「卑怯もラッキョウも大好物だぜ!!　勝てば官軍ってなぁ!!」
もはや、どちらが悪なのか分からない。
そしてエルスは、ハリーが懐から取り出した長方形の紙片が、背中に張り付けられていることにも気付いていなかった。複雑な書体で、文字列が綴られているそれは……俗に言う、お札であった。
「急急如律令!!」
――ばちぃいいいいっ!!!
「んぎっ……!!!?」
全身が痺れ、一瞬でも硬直する。
摩訶不思議な術を行使するハリーに、エルスは対応するだけで手一杯だ。
「人型になってくれて、ありがとうよっ!!」
「ぐ、あぁっ!!」
硬直の隙に、身体の関節部を絡め取られる。人外へ変異すれば、抜け出せるのだろうが……エルス的には、それは正しくないことだ。正しくないことは行えない。己に誓約を課すことで、これだけの力を引き出しているのだ。単純な膂力で脱出を図る。手甲や鎧は、組技に対しての防御力は見込めない。で、あるのなら。
――ギャリギャリギャリッ……!!
縛鎖を編み、巨大なハンマーのように形成していく。
「これでっ!!」
……そして、素人のエルスはすっかりと忘れていた。敵は、ハリーだけではない、ということを。

「なのは、今だ!!　やれぇぇぇぇぇぇぇっ!!!」
　はっと気付くが、後の祭り。意識の外で、気付かぬ間に距離を充分に詰めていたなのはが、現れる。
「は、離せ、離せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!!」
「だーっはっはっは!!　勝負あったなぁ!!」
　あの蒼炎は、異形の力を焼き尽くす。ある程度大雑把に……ハリーを巻き込むように放ったところで、ハリーへの影響など、精々が軽い火傷程度のものだ。
「来るなぁあああああああっ!!!」
　形成したハンマーを、なのはに向けて無茶苦茶に振るう。
　――キィイイインッ!!!
　高音とともに、本体との接続部が切断される。コントロールを失ったハンマーは、宙で解けていった。エルスは、己が最後を悟り、目を見開く。最後の悪あがきにと、どうにか自由になる程度の力で、盾を形成する。だが、無駄な足掻きだ。むしろ、鎖を伝う、蒼炎の導火線を作ってしまった形になる。
「……!!!」
　終わった。エルスが、諦めかける。
　終わった。ハリーが、一安心する。
　終わった。なのはが、
　……こんなタイミングまで『あること』を言い出せなかったことを悔いていた。
　――かきーん。

「……。」
「……。」
「……。」
　――地獄のような沈黙が下りる。
　盾は一直線に切断されていた。そこまではいい。しかし、肝心要の決め手である蒼炎は、刀の先端に、マッチ棒が如きチンケな大きさで揺れているのみで……やがてそれも消えた。

「……はっ。」
そこへ究極に運の悪いことに、真っ先に我に返ったのは、エルスだった。
「うらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
「あばぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
関節技を脱したエルスは、ハリーを背負い投げた！
「っとっとっと……!!」
なのはが、投げ捨てられたハリーを回収する。
「……おう、ぼっち。説明してもらおうか」
「ぼ、ぼっちの何が悪い、あぅっ」
ぐい、と顔を引き寄せられる。
「神通力どこいった」
触れてみて、察する。なのはに、神通力……蒼炎を発する源となるエネルギーが、ほとんど感じられないことに。
「――――――息子にあげちゃった♪」

……その量、じつに総量の九割超え。あの不可解な赤子の能力は、遺伝もそうだが、その神通力の譲渡によるものも大きかったのだろう。
「過保護かよ！」
「何が悪いのよ！」
「状況が悪いんだよ！」
「私は悪くない！」
果てしなく頭の悪い応酬を繰り広げる二人だった。その二人の間を割るように、鎖を編んだ棍棒が振り下ろされる。
「っと！」
跳躍し避ける。
「ぶっちゃけ、どうよアレは」
「……核とリンカーコア、それぞれが因果付けられちゃってるから、単純に抉り出すだけじゃ効果は無いと思う」

秀人の右手に、かつて一体化していた魔力結晶と同じ原理だ。当初の目論見が崩れてしまった。
「説得は。かなり理性を取り戻しているが」
「そんなコミュ力があるように見える？」
「知ってるよ言ってみただけだよ！」
「……まぁ、もうちょいすればどうにかなると思うけど」

◆・◆　◆　◆

――――。
「よーし到着っと」
バイクから秀人ら一行が降り立つ。目の前には、一般人の目にも見えて明らかに異常である、半透明の壁のようなもの。それが、繁華街の通り一角をすっぽりと覆っている。先の大乱もあり、群衆もある程度はこういった異常には耐性が付いているものの……だからといって、見過ごせるほどの些事でもない。
「うっわ、雑な造り……」
四葉が、あまりに大雑把な結界に顔をしかめる。
「でも、隠蔽に全く気を使っていない分、かなり強固だよ」
ゴンッ、と、その半透明の壁を拳で叩くヴィヴィオが言う。
「んー……ん、あぁー、」
……末っ子は、紅葉のような手で、結界の向こうを指さしていた。
「あー、あの辺になのはが居るのか」
「あと、生体反応とエネルギー反応を照らし合わせると……一般人が三人、取り残されちゃってる。命に別状はないみたいだけど」
分析といった能力は、実はユーノ並みに頼りになる四葉の言うことだ。信用できる。
「えい、やっ!!」
――――ドガゴンッ!!!
……ヴィヴィオが割と本気で殴った。結界そのものには激震が走ったものの、亀裂の一つも確認が出来ない。
「……ちょっとショックだよ、お父さん」

「あぁ、破壊力を幽世(かくりよ)に逃がして、実際の防御力以上の耐久力を持たせてあるのか。……四葉。」
「うん。その上限値を計測するから……秀人さん、ヴィヴィオ」
す、っと、結界を指さし。
「とりあえず、思いっきりブン殴ってみて」
……吾妻家にすっかり染まった指示を出した。

◆・◆　◆　◆

――ズシン！　ズシン！　ズシン！　ズシンッッ!!!
「うわぁ、何だ、何だッ!?」
ハリーが、突如として発生した激震に慄く。
「さすが我が一家。行動が早い」
ウンウンと満足げに頷くなのは。だが、目の前では切迫した事態が始まりつつあった。
「――――？　う、……げっ」
エルスが、ごぽりと……拳ほどの、どす黒い泥のような血を吐き出したのだ。
「げぇえっ……!!　うぇ、っげぇ、……げぇえええええっ……！」
それを皮切りに、口、鼻、目、耳、……とめどなく、墨汁のような穢れを垂れ流す。
「え、え、ちょっ、なによ、アレ」
「血と……穢れ、だ」
即席の神通力。それを、負の想念を以て行使し続けたことの弊害。濁った力の老廃物が、エルス自身を蝕みつつあった。
「人を呪わば、穴二つ……ってな」
くい、と、なのはがハリーの特攻服の袖を引く。
「助かるの」
「……助けるだろ、あんなの」
「どうすればいいの」

「フツーのやり方じゃあ、無理だ。もうああなったら、呪いと力を、ヨリシロの生命尽きるまで撒き散らす、荒れ狂うだけの災厄だ」
悠長に無力化をしているヒマはない。
「でも、まぁ……」
何かアイデアがあるのか、そういう期待をもつなのは。しかし。
「放っておくのも手だ」
あまりに酷薄な物言いに、なのはがキッとハリーを睨む。
「荒れ狂うとは言っても、ここは無駄に強固な結界の中。爆ぜたとしても、大宮たちを庇いつつ防御に徹すれば、ノーダメージだ」
「お、おまえっ……!!」
胸倉を掴みに掛かる。
「他ならぬアイツ自身が言っていただろう?『悪人は死んでもいい』って。これだけの所業、実行したのは外部から得た力かもしれんが、それを行使したのは、他ならぬアイツ自身の歪んだ性根だ。アイツが悪い。自業自得さ。己の業に呑まれちまうのも、お望みどおりの上等な最期だろう」
平坦な表情に浮かぶその目は。
常の、人情味のある熱血漢のソレではなく。冷酷で、機械的で、合理的で……ある種、カミに相応しいものだった。
「でも、そうはさせねぇ」
ハリーが、ふと表情を緩め。安心させるように、なのはの頭をポンポン叩く。
「死んで償う。死んで許される、死んであの世に逃げる。……そんなの、甘ッタレにも程があるわな」
襟を整える。
「――――アイツには生きてもらう。生きて償ってもらう。死んでも死なせねぇ。ハッ倒してでも現世に居残らせてやる」
懐から取り出したるは……黒に近い赤い呪符。見る者が見れば、それが血液で染められたものであると判るだろう。
――――ピッ。
なのはの刀の刃へ指を沿わせる。血が溢れる。

「なにを」
その血で、赤い呪符へ呪文を刻んでいく。朱に朱を交える。
ハリーの神気が、励起する。
「――急急如律令。来い、咢(あぎと)」
――――ボウッ……
呪符が、朱よりも紅く燃え上がる。その炎の内、幽世より、出ずる者あり。
それは、巫女服に身を包んだ、人形のような大きさの人型。しかし、そこには生命力が感じられ、ハリーと同色の紅い頭髪が煌めいている。
「おう、咢。出番だぜ」
『あいよ、ご主人。……しっかし、もっと早くに呼んじゃくれねぇかな』
コミカルな動作で、ハリーの肩に着地する。
『手遅れ寸前じゃねーか。滅するのか?』
「いんや、引っ張り戻す」
『そういうことなら、さっさとヤっちまおうぜ。おう、そこのカミも手伝えよな』
「わかった。まかせて」
刀の刃へ、一直線に蒼炎を纏わせる。因果を切断するだけであれば、十分だろう。
『器用なヤツだなぁ。フツノカミみてぇなことができるのか』
「でも、まずはあの体中の瘴気を取り払わないと。できる?」
ハリーは、牙を剥き出し、ニヤリと不敵に笑う。
「括目しろ後輩。センパイ神サマの、マジのマジってやつを見せてやる」
咢が再び炎へ変じ、ハリーの発する神気の炎と一体化。
『「神憑り」!!』
神気を衣として、鎧として纏う。そして、高密度の神気はやがて――水晶状に、物質化する!

「『――――大神之大祓(おおかみのおおはらえ)!!』」
神気の爪牙を携えし、現人神が現れる！
『るォオオオオオオオオオオッ!!!!!』
咆哮。原始の獣の雄叫びが、エルスの身体をその場に縛り付けた。汚泥と化した力が、ハリーに振るわれる。捉われたが最後、内側へ圧搾され、無惨な肉塊へと変えられる。変幻自在の鎖の特性のみを残した汚泥が迫る。触れる……！

――――ぞぶり。

……しかし、触れ得ぬ。食い千切られたのは、汚泥の方だ。
「『ぐぁウウウウウッッ!!!』」
噛む。砕く。潰す。裂く……！　水晶状の大顎が、蛮刀のような爪が、汚泥を、穢れを、強引に祓っていく！　否……
――――喰っていく!!
「『たりねぇ。たりねぇ。くいたりねぇぞォオオオオオオオオオオオ!!　くわせろ!!　きさまのにくと、きさまのはらわたを……おれにくわせろぉおおおおおおおおおお!!』」
抵抗。波打つように暴れる。爪牙の一振りで、喰われる。腹をカッ捌くように、爪牙が汚泥を食い散らしていく。
「『ははははは！　あばれるなよ！　たのしくなるだろう！　たのしくて、とまれなくなるだろう！　もとに、もどれなくなるだろう！　ああ、でも、はらがへった!!　はらが、へったぞぉおおおおお!!』」
一方的だ。まさに、獣の狩りに等しい。
「『るぉおおおおおおおおおおおおおおっ!!!』」
ひときわ大きな咆哮が轟く。
「『みつけた！　とどいた！　にくのからだ!!』」
地面を掘り返すような動作で、ハリーの爪牙の向こう、汚泥の切れ目に、エルスの身体が見え隠れし始める。安堵すべきだろうか。生身の肉体を救出できれば、浄化はより容易となる。だが……。

「『　にげるな！　よけるな！　くわせろぉおおおっ!!　』」
目の前で繰り広げられる蹂躙劇を目の当たりにした、なのはは。
「……これ、まずいんじゃないの」
ハリーは、明らかに正気を失っていた。フリで、ああした狂態を晒している雰囲気ではない。本気で我を忘れて、目の前のエサ……瘴気へがっついている印象を受ける。
「止めなきゃ!!」
このままでは、あの言葉通り……エルスの肉体ごと、喰ってしまいかねない。しかし……なのはの神気では、不十分だ。ここで手を緩めれば、今度はエルスが力を取り戻し、全てが水泡に帰してしまう。
「……。来た!!」

そして……解決の糸口、来たる!!

◆・◆　◆　◆

「よーっし、どうにかこんだけ開いたぞ!!」
秀人、ヴィヴィオによる連続打撃により、結界のダメージ吸収の許容限界を、ほんの僅かに超え、直系５０ｃｍほどの穴をあけることに成功していた。
「しっかし、これ以上となると……」
それこそ、神化が必要になる。そうすると、結界は破れるだろうが、同時にこの次元そのものへも影響が出てしまう。ユーノのような最高位魔導師がいれば、どうにかしてくれたのだろうが、今ここに居ない者を頼っても仕方が「ぁいー!!　うぁー!!」「あいでででで!!」
……息子が、考えを廻らす秀人の頬を思いっきり引っ張っていた。
「あのな？　今はパパの頬の伸縮性を検証している場合じゃなくてな？」
が、諭す中で気付く。この子は、なのはの神通力の大部分を受け継

いだ子だ。高密度の神気を持つ、小さな体の……（閃いた!!）
「レイジングハート！　アレだ！」
『秀人。……!!』
　と、四葉の隣でアイと共に計算を補助していたレイジングハートを呼ぶ。その言葉のニュアンスのみで、レイジングハートは秀人の言わんとしていることの全てを察した。そこは一日の長。アイにも負けぬ以心伝心である。レイジングハートは、ぱぁああ、と、顔を満面に輝かせる。
『アレですね！　ひさびさに、アレをやるんですね!?』
「そうだ、アレだ!!」
『いよっしゃぁあああああ!!』
……なぜ、嬉しそうなのか。
――ポン。
　と、人型の躯体から、宝玉の姿へ戻る。そしてそのまま、赤子の首元へ。
「コーホー……」
……謎の呼吸とともに、秀人が、我が子を片手で持ち上げる。
「ぬぅううぅん……！」
「えっ、あの全然理解が追いつかないんだけど。ねぇねぇ、誰か私に説明をして？」
『あー……まぁ、気にすることじゃないの。ウチではよくあることなの』
「無理よぉ――！　だってアレ、どう見ても……!!」
　狂乱の四葉に対して、ヴィヴィオは。
「お父さん超カッコいい……！」
　目をキラキラさせて、父と弟の雄姿を目に焼き付けていた。弟の行く末に関しては、全く心配していないようだ。豪胆な王の器である。
『さぁさぁ、ひさびさのアレです！　思いっきり激しく遠慮なくお願いしますよ秀人ぉー!!』
　レイジングハートのキャラは壊れていた。そして。

「爺さん直伝奥義『人間★手裏剣』、ｖｅｒ．吾妻家スペシャル……!!」
腕を、振りかぶり……
「飛べっ……息子★ミサァアアアアアアアアアアアイルッッッ!!!!」
我が子を穴に向かってブン投げたぁあああああああああああああッッッ!!!!?
◆・◆　◆　◆
「……ぁぁぁ

感じさせる笑みを浮かべていた。
「ごふう……!! お、お前なぁ……!!」
ハリーが復帰し、なのはに文句をつける。
「なによ、暴走してるあんたを止めてあげたんじゃない」
ふふーん、と得意満面のなのはだったが……
「ア レ は フ リ だ ！ ！ 」
……一言ずつ、言い含めるように、衝撃の真実を告げる。
「――――え。だって、喰ってやるって」
「テンション上がってああいう物言いになっちまうんだよ、オレの神化は!! 傷一つつけてねぇだろ！ むしろ、お前んちのヤベー一撃でデコメガネが消し飛ぶところだったわ！ オレが防いだけどな！ 罵は気ぃ失って幽世に戻っちまったわ！」
「え、ええ……!?」
実は、余計なことをしただけだったという現実を突き付けられたなのはは。
「――私、悪くないもん。紛らわしいことをゆったハリーが悪いんだもん」
……心のシャッターをピシャリと閉めるのだった。
やがて、結界は消え、『特別超常災害対策課』と書かれた消防車や救急車、警察車両が路肩を埋め尽くした。
「またあなたですか、神。あなたなのですね、カミ」
巫女服の女性は、ハリーに、呆れた視線を向ける。
「……わ、悪いかよ……?」
「いえ死者は出ませんでしたので大丈夫です。大丈夫です、死者は出ませんでしたので」
巫女服の襟元には、警視正を示す階級章が輝いている。
「ですがもう少し弁えて下さい。弁えてください、もう少し。あなたは神なのですから。肉の身で現世に在るのだとしても、強大な力を秘めた大神（オオカミ）なのですから、あなたは」
「わかってるっつーの」
この淡々とした喋り、ハリーは苦手だった。

「ヴィヴィオはコレのことを隠していたんだねぇ」
　コレ、と、羽根の残骸を手元で遊ぶ。
「う゛っ……」
　……今回は、この海鳴市で、『完全発症者』が発生する、という予知があった。できれば、なのはには平穏な日々を過ごして貰いたいがため、秘密裏に処理する予定だったのだが……こうなってしまえば、全てを吐くしかない。
「あぁ……でも、いいよ。だいたいわかった」
　手元に遊ばせていた羽根の残骸が、燃え落ちる。
　その場にしゃがみ、ヴィヴィオと目線を合わせる。
「危なくなったら、ちゃんと逃げることも考えること。一人で無理だったら、冥ちゃんとか久遠とか、あの辺の力を借りること。一人で頑張りすぎないこと。約束できる？」
「……はい、お母さん」
「いい子、いい子。」
　ヴィヴィオはやはり、なのは自慢の娘だ。
「なのはちゃぁん!!」
　がばっ、と、何らかの術で回復してきたと思われる大宮に、抱き着かれる。
「……無理はしない方が良い。痛みは消えても、治癒したわけじゃない」
　若干の硬直の後、たどたどしく気遣う。
「なのはちゃん！」「なのはちゃん!!」
　中野、小山も、次々に抱き着く。
「私たちのこと！」「『お友達』って!!」
　救援のさ中、自然と口にした言葉は、皆を大いに感動させたようだった。手負いの野生動物の餌付けに成功した気分である。
「――――――。すみません調子に乗りましたごめんなさい許してください他人です」
　どうしてそうなる……。

どうしてかと言うと、過去のトラウマに起因するのだが……今、その話はいいだろう。
「……まぁ、見ての通り、私はちょっとだけ、人間やめちゃってるワケだけれど……秘密、と、いうことで……ここはひとつ穏便に……」
「うん、みんなだけの、秘密にしよう」
「クラスのみんなには」「それ以上いけない」
そして……エルスがストレッチャーに載せられている姿が見えた。救急隊だけではない。巫女服の一団も、何らかの話をしている。恐らく、穢れの残留の有無や、その後遺症の検査を受けることになるのだろう。場合によっては……日常へ戻ることも、困難となる可能性もある。あくまで、エルスも被害者ではあるのだが……行いの内容の度が過ぎていることは明白。何らかの報いは、受けることになるのだろう。
「――――いい、ですわね……あなたは、ひとに、囲まれていて……」
と、エルスが、なのはを濁った眼で見やりながら、そのようなことを口にする。
「わたくしは、いつも、ひとりですわ……間違ったことは、していない……つもり、でしたのに……何も……」
なのはは、歩を進める。
「でも……皆、わたくしから、離れていきますの……何かと、何かと、捨て台詞を言われましたが……ちっとも、理解、できなくて……」
エルスという少女の、悲しいサガだ。彼女は、正しかったのだろう。ただ、他者を受容するという概念を、持っていなかったというだけで。
「間違ったことをしている、連中は……同じようなのと、いつも、一緒にいて……楽しそうで……妬ましくて……」
それでも、人並みに、他者を求める本音は間違いなくあった。
「いつも、いつも……認められるのは、『みんな』の方で……わたくしは、なにをしても、誰にも、認めてもらえなくて……」

独白を続けるエルス。その思考の果てに……エルスは、ある当たり前の真相に、突きあたる。
「集団でいることが、正しくて……一人が悪なのだとしたら……本当に、間違っていたのは……わたくし自身、なのでしょうか……？　まわりに合わせられないわたくしは……わたくしこそが、集団の中の、悪だったのでしょうか……？　わたくしは……誰か……おしえて……」
気付けば、ストレッチャーのすぐ傍まで来ていたなのは。周囲はそれを、固唾を呑んで見守っていた。きっと、エルスの導きとなる言葉があるのだろうと――――
「……それはね。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――社会が悪いのよ」

……をい。

……をい。

……何を。

……何を、言っているのだ……この、神は……
「だって、数の力で個の意見が押し潰されるとか、それホントあるし!!
どんなに間違ってても、先生は集団の方ばっかり、というか、集団を率いているようなズル賢い子ばっかり贔屓するの！その方が自分の仕事がラクになるからなんだろうなーっていうのとか、めッッッちゃわかる！　そ、そうよ……だって、集団登校のとき!!」
――――――先生……？　集団登校……？
「私、ちゃんと集合場所に遅刻しないように行ったのに……グループの子たち、顔見知りが集まったからって、点呼も取らないで行っ

ちゃってて……私、がんばって走って追いかけたのに、何でか一人先に教室に到着して……あとで分かったんだけど、グループの子たち、通学路破りして、他の班の仲いい子と勝手に合流してて『せんせー、高町さんがひとりで先に行ってましたー、いけないとおもいまーす』『そうね、悪いのは高町さんね。高町さん、みんなに謝り、ああぁあああああああああーーーーー!!!!!」

……このレベルでも黒歴史には届かないとは、一体どれほど薄幸な少女であったのか。

「クソッ、クソッ！　あいつらぁあああああ……!!　自転車で急ぎの時に限ってパンクし、黄色信号右折信号は直前で赤になり、走っている車線に限って進まず、トロい車に進行方向を塞がれ続け、渋滞回避に迂回した先で渋滞に捕まり、迂回前の道はガラガラだということを渋滞にハマッた時に知り、止まろうとした駐車スペースは目の前で取られ、出先では必ず白バイに遭遇する呪いを掛けてやる！　苦しめ！　嫌な思いをしろ！　私の数百分の一でも不愉快な思いをすればいいんだ！」

――――――この神様、みみっちい！

あまりにアレな理由で地味に悪質な呪いを行うダメな神に、皆が言葉を失っていた。

『ルールをただ守ればいいってものじゃない』ですって!?　だったらルールの守り方も、ちゃんと明記しておきなさいよ！　ふわっと雰囲気とニュアンスで察しろとか、全員が全員、そんな小器用に生きられる前提で話を進めるんじゃないわよ！　私、そんな雰囲気とか空気と会話できるほどバベルの時代のヒトじゃないっつーの！　明記されていないルールこそが本物のルールだとか、私には、分からないわよっ！　分かるように説明しなさいよ!!」

はぁ、はぁ、と、荒い息をつくなのは。

「――――だからね。『ルールを守る』なんていう、当たり前のルールを、当たり前に順守してきたあなたは、偉いと思うわ。すごいと思うわ。周囲に迎合せず、社会に尽くしたってことじゃない。でも、社会はあなたを爪弾きにした。社会はあなたに報いなかった。恩を、仇で

返した。恩を仇で返すのは、悪でしょう。
――――ほら、悪いのはやっぱり社会じゃない」
……驚異の論法で社会を全否定する。
「わたくしは……悪くない……？」
濁った眼が、濁ったまま、やべぇ輝きを宿していく。
「社会があなたを認めなくても……私は、あなたを認めるわ。あなたは悪くない。悪くないのよ」
エルスは、なのはに後光を見た。神々しい、輝かしい……新たな光だ。
「わたくしは悪くない……悪いのは、社会……社会が悪い……」
「そう、社会が悪い」
「しゃかいがわるい」
「社会が悪い！」
「社会が悪い！」
……やべー宗教、誕生の瞬間だった。
「あぁ……わたくしの……お姉さま……！　すぐに、あなたのもとへ、戻ってまいりますわ……!!」
……完全に染まった眼で、救急車の扉が閉まる最後の瞬間まで、なのはをガン見し続けたエルスを見送る。
完全な沈黙が支配する空気の中……空気を読めないなのはは。
「――っべーわ。迷える衆生、導いちゃったわ、私。っべーわ……なのはちゃんマジゴッドだわ……もう世界救えるまであるわ、私」
果てしなく、調子に乗っていた。
「つれーわ。救済力ありすぎてマジつれーわ……」
……そんななのはの肩に、手が乗る。
「あら……ハリーじゃないの。……ふふ、いいのよお礼なんて。これで、エルスはもう大丈夫ね。でも、当然のことをしたまでよ。だって私、神様だし。民を導くのも大事なお仕事だものね。わかってる」
「……」
「ん？」

沈黙するハリー。なのはが、ようやく不自然を感じ取った。
……怒りのあまり、蒼白になった顔色で、ハリーが告げる。
「――――――高天原(おくじょう)へ行こうぜ……久しぶりに……キレちまったよ……」
「えっ……えっ……？　なんで……？」
まさかと、周囲を見渡すが……皆、何とも言えない表情をしていた。怒ればいいやら、諭せばいいやら。
「なのはちゃん……さすがに、擁護できないよ……」
新たなるお友達、大宮もまた、首を横に振る。
主張に、微妙に筋が通っており、一部、共感できなくもない部分があり、聞き手によっては、真理のように聞こえてしまう。
――ヒト、それをカルトというのだが。
「あぅ、あぅ……」
じりじりと、ハリーを筆頭にした包囲網が狭まっていく。
「ひでとさん、たすけてぇ……！」
へろへろと、秀人のもとへ寄っていく。すっかり涙目である。
「ま、まぁまぁ、みんな……ここは、大目に見てやろうじゃないか。な？」
過保護な秀人は、なのはを背に庇いつつ、周囲をなだめる。ヴィヴィオ、四葉、慈樹も、何となくそちらへ回る。もちろん、言いたいことは山を通り越して宇宙規模であるのだが。
「ほら、なのはにだって、悪気が……たぶん、無いから。結果だけ……だけを、見れば。一人の人間の心を、……どんな形、そう。どんな形であれ、救ったという事実に免じて。ここは、大目に」
「「「「――――――見れるか、ボケェ!!!!!!!!」」」」
「ぎゃあああああ」
秀人は、なのはを抱え空中に飛んで逃げた。
「逃げだぞ！　追え！」「飛べる奴は飛んで追え！　許可する！」「クルマ回せ！　地上(した)からも追うぞ！」「ゆ〝る〝さ〝ん〝！　！」「なのは

ちゃん、待ちなさぁい!!」
皆、なのはを想っての怒りなのだが……さすがに、今回はなのはが
「私、悪くないもん!!」
……。
「私、悪くないもん～～～～!!!!!!」
晴れ渡る空に、なのはの悲鳴が、民衆の怒号が、どこまでも響き渡るのだった。

ｖｉｖｉｄ編　１０話『　再会と再開のものがたり』

――――――――――久しぶり。

◆　◆　◆　◆　いにしえのきおく　◆　◆　◆　◆

――――どずぅん……

『がはぁ……』

おれの身体が、地面に沈む。無様に。あらゆる力も通さぬ自慢の毛皮が、血に染まっていた。

目の前には、おれよりも遥かに小さなヒトの影。否、ヒトの形をとるカミだ。おおかた、おれを倒すために送られてきたのだろう。こういうやつらは、今までもたくさんいた。かたっぱしから、喰ってやった。

でもこいつは、とびっきり、強かった。

『こんな、ひがしのしまぐにで……この、おれが……あらゆるカミをくいころしてきた、この、おれが……』

罠でも、奇策でも無い。ただ正面から、おれを打倒してみせた。

ヒトが望むカミ。祈りと願いのカタマリだ。おれがヒトの世で暴虐とされる行いをした。そこから、おれを倒す願いが生まれた。なにせ、数が数だ。万から先は、数えるのもやめた。

――――だから、オレがいる。

と、目の前の忌々しい存在が口を開いた。

『……ヒトをくって、なにがわるい！　はらがへったんだ！　くってわるいか！』

ごう、と、おれの叫びに大気が震える。

――わるくはないよ。ヒトも、けものやさかなをくう。
――おまえのばあいは、それがヒトだっただけだ。
では、なぜ……と、問うのも馬鹿馬鹿しくなり、やめた。
――ただ、おまえはくいすぎた。ヒトをへらしすぎた。
――おまえのはらは、くってもみたされない。
――そういうふうに、できている。
――だから、くいつづけた。
――とめるには、これしかなかった。
そうだ。生まれてこのかた、おれは満たされたことがない。
だが、食うしかなかった。腹がへるのだ。喰うしかなかろう。
『ははははは……ははははは!!』
笑いが溢れる。
『おれはしぬ。けど、おまえもみちづれだ。おまえのチカラ、くってやったぞ!!』
……目の前の影は、神気の大部分を喪失していた。戦いの中で、おれのキバは、幾度となくコイツに突き刺さった。主神さえも殺す神殺しのキバだ。強力なカミではあったが、カミである以上、おれのキバの力は防げない。
――そうだな。オレはもう、カミではなくなる。消えるか、さもなくば、かぎりあるいのちのヒトになるか
……しかし、互いに存在を喪失しようとしているこの時に、おれはともかく、こいつには全く負の感情が匂わない。おれの場合は。
『おれは、ふめつだ。にくのからだをうしなおうとも、たましいとなり、ふたたびあらわれる』
次のおれは、こいつの神気を手に入れた、更に強いおれだ。そして、次のおれが現れる頃には、コイツはもう居るまい。
――そうだな。それじゃあオレは「ヨメでもつくって、子でもなして、ヒトの世でいきることにするよ」
もう、既にヒトの姿となっていた。おれは既に、消えかかっていた。
「ではな。いんがのはてに、またあおう。――……――んりる……おおかみ」

――――冗談ではない。
……擦れる意識の中で、最後に見上げたのは、夜空に輝く……
いまいましい銀月だった。
あぁ……腹が、減った……

……

ぱちりと、目を覚ます。ということは、再び受肉を果たしたか。くくく。
「おぎゃあ、おぎゃあ！」
……おい。いま、おれの口からヘンな声がしたぞ。
「おぎゃあ、おぎゃあ！」
……なんということだ！　おれは、ヒトの赤子の姿になっているではないか！　というか、ここはどこだ!?　おれの力は、どこへいった!?
「……ごめんねぇ、ごめんねぇ……」
ふと、頭上から声がした。
「ごめん、ね、……」
既にこと切れた女が、そこにいた。まだ、肉体同士が繋がっている。骨と皮だけの姿だ。餓えて死んだか。
へその緒を喰らう。辺りには、女と同じように、餓えて、干からびる寸前の人間と、干からびた人間と、喰われた骸が転がっていた。
――しかし、何故だ？
赤子を産む状況ではないだろうに、なぜ、自らが死んでまで、おれの、この体を産み落とした？　そして、なぜ詫びた？
「おい、何故だ」
だが、おれを産み落とした女は、何も語らなかった。

考える間に、時間が過ぎた。
「変わらぬものだ」
稚児の身体となる頃になっても、周囲には変わらず、乾いた死が溢

れていた。
「あぁ、腹が減る」
肉体的な餓えではない。おれの本質が、魂が、餓えていた。だが、いまのおれに魂を喰らうだけの力は無い。
「ごめんねぇ、ごめんねぇ……」
声がする方へ、歩を進める。屋根も無い小屋で、干からびる寸前の女が、腕に嬰児を抱いていた。
「おい」
あの日、得られなかった答えがあるのかもしれない。どうせ、生きているだけヒマだ。戯れに、知るのも良いだろう。
「おい」
「あぁ、どなたか……存じませんが……」
「おい、答えろ」
「どうか、どうか、この子を……、」
死んだか。手持ちの品には、干からびたへその緒と、名を記した粗末な紙があるだけだ。
「おぎゃあ、おぎゃあ」
嬰児が泣き出した。拾い上げる。
「なかなか美味そうじゃないか」
霊的な素養が高い。きっと美味だ。あんぐりと、口を開け……
「おぎゃあ、おぎゃあ」
喰うのを止める。嬰児の手が、女の骸に伸びている。嬰児が泣くのは、ただそういう生き物だからだ。だが。
「……」
おれには分からなかったことも、このガキが大きくなれば、意味が分かるのかもしれない。
「おい、うるさいぞ」
「おぎゃあ、おぎゃあ」
そこらへんの、犬や狐といった獣の乳を飲ませると、ようやく静かになった。
また、時間が過ぎた。人間の時間は早い。おれがあくびをするよう

な時間で、あっという間に大きくなる。
「ははうえ」
と、デカくなったあの日の赤子が、いつの間にかそう言うようになった呼び名でおれを呼ぶ。
「じゅつを修めました。見てください」
おれの生まれた地で広く使われていた、文字の術だ。それをこの国の文字で充てたものを、このガキはよく覚えた。餓鬼どもに食われず残っていた紙と筆を道具に。
「母上。葛の葉の、母上さま」
こいつの母親からむしり取った着物が、葛の葉の模様だったからか、そう呼ぶようになった。
ガキは、いつのまにか、背丈でおれを追い抜いていた。術はさらに磨きがかかり、間もなく、体系と呼べるまでになるだろう。生きていけるだけの力は、身に付いただろう。
ちっ。食い時を見失ってしまったではないか。適当に肥えさせて、答えを得たら食ってやろうと思っていたのに。
周囲には……やはり飽きもせず、乾いた死が風景だった。それもそうだ。だれも、変えようとしていないのだから。ヒトは、いつの世もくだらない。
「わたしが変えます」
おまえが？　なぜ？
「世のために、ひとのために」
こんな世のために？
「こんな世で、あなたが、わたしを育ててくれたように」
馬鹿を言うな。お前を育てたのは、乳をやったのは、狐だ。お前の母は、狐だ。
「では、あなたは、だれよりも情の深い狐なのでしょう」
ならば、お前は狐の子だ。狐に化かされ続けてきた、狐の子だ。
「はい。私は狐の子です」
愚かなやつめ。
「葛の葉狐に育てられたのだと、誰に訊ねられても、愚かに言い続けま

しょう」
さぁ、巣立ちのときだ。どこへなりとも行くがいい。おまえの母の遺した、おまえの真名を記した紙をくれてやろう。
「母上」
ああ、結局、答えはわからずじまいか。
「答えは、既にあなたの中に」
ほんの少しだけ、腹が満たされていた。
……。
目を開ける。また、ヒトか。
ヒトは、変わらず殺し合っていた。くにをいくつにも分けて、血族同士で憎みあい、殺し合っていた。道具は進歩したが、ヒトはヒトのままだった。むしろ、ちょっと悪化していた。
そんな世の小国の村で、おれは体を得ていた。
前のおれから、ざっと数百年か。あのガキは……？
「……!?」
ぎょっとする。おれはなぜ、あのガキのことを気にしているんだ？
馬鹿馬鹿しい。既に死んでいる。ヒトに毒されすぎたか。
「そうか、死んだか」
空腹とは違う。ただ、何か、静かに、不愉快な感情があった。
ある日、ムラの口減らしに、おれは選ばれた。
「木の葉、くらまに行っちゃうの？」
と、同じムラに住むガキが、そう聞いてきた。木の葉とは、オレの名らしい。そしてくらまとは、おれが捨てられる山の名のようだ。
だが、これはいい機会だ。ヒトに毒され過ぎたと思っていたところだ。今回のおれは、山で一人で過ごそう。
「やだよぉ、木の葉、いったらやだよぉ」

出立の日、俺が入れられた神輿に、あのガキが追いすがってきた。おかしなやつ。いつも、はらを空かせていたのに。口減らしがされれば、喰えるメシの量も増えるだろうに。
おかしなやつ。
「これ、おまもり」
と、麻を編んだ、粗末な飾り紐をおれに手渡す。
「またね、木の葉。ぜったいに、またね」
おかしなやつ。
山は、思っていたよりもおれの気性に合っていた。なにせ静かだ。思う存分に駆け、木々の枝を跳び、獣や木の実を喰らう。まぁ精々、脆弱なヒトの身体を補うために、見よう見まねで小屋のようなものを作った程度だ。
また時間が過ぎる。
……飽きた。
と、小屋の片隅に放り出していた飾り紐が目に付く。そういえば、おれがいたムラはどうなっているのか。暇つぶしに見に行こう。
酷い有様だった。戦火で焼かれたのだろう。辛うじて、井戸と畑は残ってはいるものの、人の姿がロクに見えない。
「あぁ……」
「苦しい……苦しい……」
家屋からは、切れ切れの苦悶が聞こえる。
どうやら、疫病に冒されているようだ。口減らしをしてまで存続させようとしていたムラだが、結局は、滅びの定めにあったのだろう。
不愉快な見ものだったな。
……何が不愉快なのか、分からないが。
と、井戸へ水を汲みに来る人影が見えた。あの、おかしなやつだった。随分と大きくなったものだ。疫病に罹ってはいないようだ。だが、このムラに居る限り、いつかは。いやいや、待て。このムラが滅びようがどうなろうが、おれの知ったことではない。
『ぜったいに、またね』
いつかは。

「おい」
風の術を使い、その前に降り立つ。
「うわぁっ！　て、天狗っ……!!」
てんぐが何かは知らんが。
「二度は言わぬ」
ある植物の効能と、その引き出しかたを伝える。あとは、好きにすればいい。気まぐれだ。
再び、風の術。くらまの山に帰ろう。
「天狗様。鞍馬山の、天狗様……！　このご恩、忘れませぬ……！」
「……約定を果たしに来たに過ぎぬ」
「約定……？」
「またねと、言うたであろう」
まったく……毒され過ぎた。さて、山に帰るとするか。

――鞍馬の山に善なる天狗あり。

……そう、まことしやかに囁かれていると知ったのは、おれの山に『客』がひっきりなしにやってくるようになってからだった。助けを乞う輩だったり、天狗という人外の討伐に来る輩だったり、物見遊山の輩だったり。
あしらったり、戯れに姿を見せてやったりして。
気付けば、静かだった山は、すっかり立派な社が建ち、人間が毎日のようにやってくるようになり、落ち着けるような環境ではなくなってしまった。
どうしてこうなった……
結界を張って、静かに過ごしてはいても、来られる輩は来てしまう。
「やぁやぁ、我こそは源が一子、名を遮那王なり!!」
……こんな童（わっぱ）まで。風で吹き飛ばして脅しても、まやかしで脅しても、飽きもせず、よくもまぁ。
――かきんっ。
奉納されていたモノはおれのもの。社にあった、人間の武器……刀

を振るってみる。
「うわぁっ……!?」
べちゃ、と、童が尻餅をつく。
「おれの勝ちだ。酒と団子はもらうぞ」
「くぅ……!」
タダで姿を現さなくなったおれを呼び出すために、童は酒と団子を毎度のように持参するようになり……気づけば、遊び賃がわりに俺に差し出すという習慣がついていた。
「師匠！　勝負です！」
飽きもせず、毎日、毎日……はぁ。言ってしまうと、この童は弱かった。負けん気の強さは見上げたものだが、体つきも、身軽ではあるが、戦うには華奢がすぎる。やや霊的素養はあるものの、術を行使できるほどではない。今の世では、初陣でコロリと首を転がすことになるだろう。
「……師匠。遮那王は、戦へ参ります。兄上のもとへ参ります」
ふむ。気付けばそんなに経っていたか。
「お前は弱い」
童は、目を伏せる。
「修められたのも、風の術の初歩の初歩……人より高く跳ぶ程度。獣肉を食わせても、身体は育たなんだ」
「……」
袴の裾を、ぎゅうと握る。
「だが、お前は人を寄せる」
木陰から、一人のおなごが童を案じてか、顔を覗かせていた。寺の尼僧の使い走りをしている、髪の綺麗なおなごだ。まぁ、そういうことだろう。
こいつは弱いが、不思議と、人を惹きつける何かを持っていた。
「弱いのなら、群れろ。それがお前の剛(つよ)き腕となり、疾(はや)き脚となるだろう。」
もう、この剣で遊ぶことも無いだろう。良い遊び相手でもあった童に、ポンと投げてやる。

「師匠。この御恩、決して忘れませぬ。たとえ、半ばで果てることになろうとも」
深く頭を下げた童子は、おなごと連れ立って、山を下りて行った。
「まずは里へ。そこから、藤原さまのもとへ……」「あぁ、途中に、木の葉の村へ立ち寄って……」
伝え聞いたところによると、あやつはあれから15年ほどは生きたそうだ。

……山が、静かになった。
あれだけ欲していた静寂だ。だというのに。おれの中には、また、あの漠然とした不愉快な感情が生まれていた。
……次は。
騒がしい人の世で、生きてみるのも、悪くはないか。
腹は……もう、あまり減らなくなっていた。

……。
人の世を見る。
……。

人の世を見る。

……。

ヒトは、弱く、愚かで、どうしようもなく。
ヒトは、温かく、愚かで、どうしようもなく。
決して変わらぬカミと違い、いかようにも姿を替え、形を変え、その本質さえも変わってゆく。
変われぬおれとは、あまりにも違う。こんなにも、違う。
その移ろいゆくさまは、ほんの瞬くような時間であっても眩く……美しく。
おれのなかに、さまざまな感情を残して、そして逝った。

不愉快な感情だ。おれを産み落とした女。おれのもとから巣立って行ったガキ。おれの知己だった男。おれの遊び相手だった童。みな、時間の流れの向こうに、逝ってしまった。明確に何かを残すでもない。物質的なものは、輪廻の向こうには持ってはいけない。

だから、ただ、その感情だけを『次』へ持って行った。

おれの、持ちこせなかった神気は、どこへ行ったのか。だが、そんなことより……そう、『そんなこと』と思える程、ヒトは俺に、多くの感情を残して逝った。

やつらが最後に、何を想ったのか、おれは知らない。分からない。ヒトの気持ちは、カミにはわからない。だから、この感情を理解できたなら、きっとおれは、カミではない何かになるのだろう。

それでも……あまりにも短い命の中で、何かを残せるヒトというものが。こんなにも、おれの心を揺さぶるヒトというものが。おれは。

――――おれは。

「……。あぁ。　人間って、いいなぁ」

――――羨ましいと、思った。

――――カミではなくなっても、構わない。

――――ヒトを知りたいと。

――――ヒトのように成りたいと。

――――そう、思った。

幾度目かの命。

「よう。」

幾度いのちを繰り返しても、決して忘れることのできない顔が、おれを見ていた。

「久しぶりだな。」
おれは、おまえの子か？
「いや。ワシの、孫の子じゃ。えげれすの血が入った」
あやうく、入れ違いにポックリ逝かれるところだった。
「酒天討伐のおり、晴明さまから聞き、もしやと思ったが……
――――変わったのう、お主も」
……そうか。
おれは、変わったのか。
カミではない何かに。
「それはそうだ。ヒトは、変わるものだろう」
「……。は、は。そうだのう」
じんわりと、染み入るような感覚だ。
はじめて、はらが満たされた。

◆・◆　◆　◆　そして、今へ至る　◆　◆　◆　◆

ぱちりと目を覚ます。
「……。」
ぽりぽりと腹を掻く。見上げる天井は、住処としている、稲荷神社の社務所だ。寝間着の襦袢はだらしなく着崩れ、素肌がベロンと見えてしまっている。
「あー、そっか……神化したから」
ほんの少しだけ、記憶が呼び醒まされたのだ。だが、夢の範疇だ。朝飯でも食えば、すっかり忘れてしまうだろう。
社務所の前には、毎朝、お供えと言う名の朝食が用意されている。ちょっとしたルームサービス気分だ。気楽でいいのだが。
「……量が少ねぇんだよな」
もっとこう、ガーッと食いたいときもある。だが、今日は記念すべき一日だ。
「ふっふっふ……待たせたな」
すっぽんぽんの全裸になり、掛けられている制服と対峙する。

「今日から、オレのＪＫライフの第二幕が始まるのだ……!!」
いいから、服を着ろ。
シャコシャコと歯を磨きつつ……心配しかないヤツの行動を予測する。
「こういう時はあいつだな」
携帯電話の電話帳から、大宮女史を選択する。
『迎えに行くべきか、教室で待つべきか』
その相談の前に、大宮女史からメールが届く。
『おはようございます、班長。さて本日は、班長、そして、なのはちゃんの停学が明ける日となっております。予測されることは、なのはちゃんが登校前に愚図り、遅刻寸前ギリギリに来るであろう、ということです。迎えに行くのがベターと思いますが、吾妻氏もいらっしゃる以上は、登校は任せておいて問題は無いと判断します。吾妻氏の手の回らぬ、我々１—Ｄ教室内で、なのはちゃんを自然な態度で出迎えることがモアベターと思われます。よって、班長は通常通りに登校して頂きたく存じます』
「長いわっ！」
一人で突っ込む。まぁ、大宮の判断通りでいいだろう。
「行ってくるぜ!!」
『おう。いって来い、ご主人』
神棚の奥からの、使い魔の見送りを受け、ハリーは颯爽と登校していった。

◆・◆　◆　◆

あのトンデモ宗教の誕生から数日が経っていた。
「それじゃ、秀人さん、お姉ちゃん、わたしたち帰るからね」
四葉が、スーツケースを立ち上げる。滞在可能期間の最終日だ。
「……もう少し、こっち居てもいいのよ？」
すっかり名残惜しくなってしまったなのはは、同じく帰り支度の済んだヴィヴィオを膝の上に載せながら言う。

「ママ、立てない～」
……ヴィヴィオはまたしても、身体の自由を奪われていた。
「こおら駄目でしょ、お姉ちゃん」
よいせ、とヴィヴィオの両脇を持って抱き上げる。
「だいたい、」
ぴしっ、と指さす。
「お姉ちゃん、今日から復学でしょう」
そう。今日はあの入学式乱闘事件からひと月。なのはの停学が明ける日だった。
「学校行きたくない」
「まーたこの姉は……」
と、口で言う割には、しっかりと制服を着用し、学習鞄の用意も出来ている。基本的には、なのはは律儀で几帳面なのだ。とりあえずは問題なく登校するだろう。
「それじゃあ、慈樹、またねー！」
ヴィヴィオが慈樹に声を掛けると、慈樹はニコニコと手を振りかえしてくれた。
ヴィヴィオの手には、あの、例の刀袋が握られていた。聞いた話によると、あの久遠との決戦が待っているのだそうな。簡単なレクチャーも済ませてある。
「鬼に金棒だよっ!!」
使えるものは何でも使う。両親の教育が活きていた。
と、うきうき顔で米俵のような荷物を担ぐヴィヴィオを横目に、四葉が秀人、なのはに問うた。
「……ヴィヴィオは、勝てるかしら？」
もちろん、勝って欲しい。それは、みな共通の願いだ。
「あぁ。それなら――」
秀人が、何のことは無い、とでも言うような態度で。
「――――。」
……と、四葉が予想していた通りの答えを、返す。
「ママー、行くよー！」

「はぁい」
そうして、別れを惜しみながら、二人は帰って行った。
「……行くか」
二人を見送ったあと、なのはは慈樹を、おんぶ紐で背負う。
どれだけのんびり歩いても、結局、学校へは着いてしまう。秀人は自分の教室へ。なのはは託児室へ。
「いつきー……学校着いたよー……」
「あぃー！」
託児室の職員へ、慈樹を手渡す。
「よーしよし、お母さんも、今日は託児室で一緒に過ごすからねぇ」
「吾妻さん……いけませんよ」
「いけませんか」「いけません」
粘っても聞き入れられず、慈樹に見送られる。
さて。教室だ。予鈴ギリまで粘ったからか、廊下に人通りは無い。その人通りの無い廊下に、ひとり佇む。ドアの向こうの教室からは、楽しげな話し声が聞こえてくる。
「……落ち着け。シミュレーションだ……」
――ねぇあんた、高町と一緒にいなかった？
――え？　……んなわけ無いじゃん（笑）
――えー、でも、一緒に下校してるの見たよー
――あいつが勝手について来ただけだよ～（笑）
――だよねー。あいつと一緒とか、無いよねー
――そうそう（笑）友達ヅラされて迷惑だったんだー
「あば、あばばばばばば……!!」
ガクガクと白目をむいてトラウマに打ち震える。だが、もう授業開始まで時間が無い。教室に入らねば……
引き戸に、そっと手を触れる。そして、そっと開けようと、（あ、鼻がかゆい）
「へ、へっくしょん！」
――すぱーん！
思い切り、開放してしまった。

「……」
やっちまったと、表情硬く佇む。クラスメイトの視線は、『扉を乱暴に開け、怖い表情で佇む、一か月ぶりに登校してきた不良』であるなのはに注がれており……何食わぬ顔で、見なかったことにしようと、談笑に戻る。戻るのだが。
（いま、私の悪口を言っていたでしょう……知ってるんだからね……）
これまたヒドい被害妄想だった。見て見ぬふりをしてくれたクラスメイトの生暖かい善意と、なのはの意固地がぶつかる。
（あ、携帯電話の電源、切り忘れていた）
胸の内ポケットに手を入れる。ざわりと、教室がざわめき立つ。
「ナイフ……！」「カミソリの刃……！」「メリケンサック……！」
ひどい誤解のされようだった。
（今日は持って来てないわよ！）
そう、声を大にして言いたい。今日は、持って来ていないのだ。秀人と四葉に徹底的に没収されてしまったのだから……
「なのはちゃん、おはよう！」
そんな雰囲気のなか、小山が大きな体で大きな声を出す。
「……。小山さん」
呼び寄せられるように、その席へ。
「先生に頼んで、席替えをしてもらったの。なのはちゃんの席はここよ」
大宮、中野、小山、ハリー……彼女らに囲まれるような形で、なのはの席があった。
「うん」
大人しく席に着く。
「一時間目は、今度のオリエンテーリングの内容説明だって。わたしたち、一緒の班だからね」
「うん」
コクコクと素直に頷く。無表情だが、緊張しているだけである。
「皆さん。おはようございます」

ホームルームが始まる。停学明けの二人に関しては、特に言及されることはなく。かといって、不自然に避けられることも無い。自然と溶け込める雰囲気が、そこにはあった。
一時間目が始まる前。
「タスミンさん。昨日はあんなことがありましたので、無理はしないように。体調が悪かったら、遠慮せず教師まで」
「はい、先生。気遣い、痛み入りますわ」
そして、エルスは。すっかり元気な姿を教室に見せた。
「むぐっ……」
ハリーが、変な声を出す。散々苦戦させられ、奥の手まで使わされたことがよほど屈辱だったのだろう。
「なのはさん」
さすがに人前では常識的な呼び名で、なのはの下へトコトコと歩いてくる。
「体はもういいの？」
一度はガチでやりあった相手だ。なのはは気が楽だった。
「ええ。おかげさまで。すっかり良くなりましたわ」
エルスの席は、なのはの斜め後ろ。
「皆様方へも、大変なご迷惑をお掛けしましたわ」
大宮ら三人に、深々と頭を下げる。が、事情が事情だ。ある程度は、本人に責があるとはいえ……責めることはしなかった。
「わたくし、風紀委員に志願しましたの」
大丈夫かなぁ、と、班員らが聞いたら総出で突っ込まれそうな感想を抱く。
「ええ、この学園の風紀を、わたくし好みに力尽くで正してやりますわ」
全く成長していない……と、ハリーらは頭を抱えた。
――そして事実、成長していなかった。
――なぜ今日、エルスが教師に付き添われながら登校したのかというと。

――――一日ほど、遡る。

校舎の裏。ちょうど、渡り廊下などからは死角となる位置に、これまたイカニモな風体の生徒たちが数名、たむろしていた。

手には、火のついた煙草。美化委員が丁寧に整備した花壇に座るわ、吸い殻は捨てるわ……かといって、正面切って抗議できるような風体でもなく、困り果てていた。

成人している者もいるのだろう。だが、学校内では原則禁煙である。なにより、悪影響がある。生徒の自主性に任せる指導をすべきか、ここは厳しく対応するか、職員会議では毎度、意見が割れていた。

「ここですわね、悪の温床」

それらをサラッと無視し、たった一人の風紀委員がやってきた。小柄な体に、真新しい腕章を付けた腕を組み、仁王立ちである。

「あぁ？　ンだオメー」

やぶ睨みで、エルスをねめつける。気の弱い生徒は、ただそれだけで逃げてしまうだろう。だが……

「……っふ」

エルスは、つい、笑ってしまった。なんと幼稚な敵意か、と。

「あ？　……おい、ナニ笑ってんだよ……!!」

数名が、連れ立ってエルスを囲む。

「く。く。く。」

エルスは、引きつる笑いを堪えられなかった。

「……ヤんのか、テメー」

「ヤる？　ヤるとは？　戦うという意味のスラングですの？」

首を傾げ、きょとん、とわざとらしく聞き返す。

「弄ばれることを、戦うと言いますの？　この国では」

――パカァンッ!!

飛んだ。下から掬い上げるようなアッパーが、耳ピアスの青年をキレイに吹っ飛ばした。

どさりと、落ちる。完全にノビている。

「あ、アツシ!?　おい！」
仲間が一人、助けに入る。
「何をしていますの？」
と、エルスの声。怒りと共に振り返ると……エルスは、実に楽しげに腕を広げていた。
「ヨーイドンですわ」

……。
……。
……。
「うーん……！　大義名分のもとに他人を殴るのは、いい気分ですわぁ！」
死屍累々の校舎裏。最低な台詞を吐きながら、いい汗をかいた、と伸びをするエルスの前で、地面で伸びをする一団が転がっていた。
「む……？」
と、ノビた中の一人のポケットから、四角いパッケージが覗いている。
「これは煙草ですわね」
しげしげと検分する。
「さてと。」
自然な動作で、一本を口に咥える。
「ん、く、思ったより、固いですわね……」
ライターの点火に手間取っている間に、最初の一人……アツシが目を覚ました。
「お、おい……何やってんだよ……？」
「あ、点きましたわ」
そして、咥えた煙草に、火を。
「おい、やめろ！」
ぴっ、と、エルスの口から煙草をひったくる。
「はァ!?　何しやがりますの!?」
どずぅっ、と、膝蹴りが腹に入る。

「おうッフ……！」
だがタダでは倒れていない。手には、奪い返した煙草のパッケージ。
「な、ナニしようとしてんの、お前……!?」
「吸うんですわよ」
……
「吸うんですわよ」
「いや二度言わなくてもわかる」
――この小柄で華奢な少女が？
――煙草からヤニを摂取すると？
「わたくし、一度、タバコというものを吸ってみたかったんですの！
でも、お店で買おうとしたら『お嬢ちゃん、親御さんのお使いかな？
でもね、子供は買っちゃいけないんだよ』と頑なに売ってもらえず……でも、僥倖ですわ！」
ガシッ、とアツシの手を掴み上げる。
「いで、でででで!!」
「買えないのなら、奪い取ればいいのですわ！」
なんという力か。なんという暴挙か。圧迫された手が、自然と開き、煙草を落としてしまう。
「さぁ、デビューのときですわ！」
――こんな可憐な少女に、煙草の毒を摂取させていいのか？
「社会が定めたルールなぞクソくらえですわ！　いざ！」
――悪の道へ進ませて良いのか？
「駄目だーー!!」
――否！
「く、おぉおおっ!!」
仲間の一人が、決死のダイブ！
「あーーー!!」
エルス、またしても空振り。
「ツヨシ!!」
「お、女の子は、煙草を吸ったらアカンのや！　産めんくなってまう！

産めんくなってまうんや！」
「ノンフィルター煙草を吸って曾孫まで居てピンシャンしてる老人なんぞ、その辺に転がってますわよ！　返せ！　わたくしの戦利品！」
めきめきめき、と、腕を捻りあげていく。
「ぐわぁあああ!!　キヨシっ、パスぅ……！」
アッシ、ツヨシの煙草を託されたキヨシは。
「待ちやがれですわよオラァ!!」
――どすっ。
「くっ」
……後ずさりしている間に、校舎に背が付いてしまった。
「さぁ……観念してもらいますわよ」
――ドン。
「――――寄越せ、ですわ」
次元世界いち嬉しくない壁ドンである。
「ひぃいッ……！　た、煙草は……！」
「あぁん!?」
凄むエルスに、足腰を生まれたての小鹿のようにプルプルさせながら……
「――――煙草は、身体に悪いんだーーーーッ！」
アッシ、ツヨシ、キヨシの三馬鹿が、口々に言う。
「心肺機能の低下！　依存による意欲の低下！」
「経済的負担も大きく、中毒症状のあまり、煙草欲しさに犯罪行為に手を染める輩も！」
「そして、『煙草くらいは』という意識から、本物の麻薬へと進んでしまうリスクが!!」
ひくひくと、エルスの頬が引きつる。
「お前らが！　言うな！　ですわーーーーーーーーーーーー!!!!」
「「「「ですよねーーーーーーーー!!!!」」」」
三馬鹿は、地面に五体投地する。煙草を、最後の最後まで渡さぬと

いう、消極的ながらも徹底抗戦の構えだ！
「ふ、ふざっけんな、ですわぁ!!」
ゲッシゲッシと足蹴にしても、三馬鹿は意地でも煙草を手放さない。
「なんで、どうして、そんなイジワルをしますのー！　うわぁあああ!!」
エルスの癇癪が爆発していた。
「うぉおおお!!　気張れよお前らぁ！」
「ぐわぁ!!　的確に急所を!!」
「サンチンだ！　サンチンの構えだ！　潰されるぞ！」
少女の健康は、オレたちが守る!!
「先生、こっち、こっちです！　風紀委員の子が！　不良たちに！」
美化委員の生徒が、教師を呼んできた。
（頼む……どうか、何も起こっていないでくれ……!!）
教師たちは、危険に晒されているであろう生徒、そして、不良と呼ばれた生徒たちのためにも、全力で駆けつけた。そして、教師たちが見たものは。

「ふざっけんなこのビチ〇（ピー）ソどもがぁあああ!!」
「アーーーッ！　潰れるゥーーーーーーーー！」「イエアアアア！　流れるゥーーーーーーーー!!」「アィエエエッ！　溢れ出るゥーーーーーー!!」「ニコチンチャージさせろですわぁあああ!!」
……不良生徒の内臓をスクラッシュせんと、キャメルクラッチのような軍隊式殺人サブミッションを掛けるエルスの姿を見た。というか、美少女が言ってはいけない系の罵声が聞こえた。
不良生徒たちと目が合った。
「「「「　せ、先生ぇーーーーー！　助けてぇーーーーーー！」」」」
不良とされた生徒たちは、救い主を見るような、素直な目をしていた。
「あっはい」

なんか違う……。思っていたのと違う……。
「煙草を！」
見れば、不良たちはボロボロだった。
「はい、煙草を。」
おうむ返しする教師に、心からの嘆願をする。
「「「「ボクたちの煙草を、没収してくださいぃーー!!」」」」

「っていうことがありましたのよ」
ちなみに、絶好の好機を逃したことにより泣きじゃくっていたエルスは、恐怖と緊張の糸が切れて泣き出したのだと誤解されたことで、お咎めなし。
「客観的事実として、わたくしは悪くありませんわ。」
……哀れな三馬鹿は、その後、保健室で事情聴取を受けたそうだ。素行って大事。
「うんうん、それでいいんだよ。よく頑張ったね」
「お姉さまぁ……」
なのはは、よしよし、とエルスの頭を撫でる。咎めるという意識さえ無かった。それは、教義を順守した信奉者への全肯定だった。
「阿呆かっ！」
ハリーはエルスに拳骨を落とす。が。
――ぎちっ
……半透明の鎖が、手加減していたとはいえ、ハリーの拳を止めていた。
「あれ」
なのはが、きょとんとする。
「消えなかったの？」
「えぇ。どうやらこれは、わたくし自身の能力だったようですわ」
あの黒い羽は、『福音の矢』と同じく、可能性を引き出す効果を持っていたようだ。やや邪悪な方面に発露しやすいのだろうが……引き

出された力は、無にはならない。
確かに、ド素人とはいえ、喧嘩慣れをした不良三人に、この小柄な少女が無双するには、何らかの原因が必要だ。
「くっくっく……どいつもこいつも、雁字搦めの苦しみを味わえばいいのですわ」
「クソッ、手加減せず噛み砕くんだった……!!」
ワイワイと、超常の力で低レベルな喧嘩をするハリーとエルス。
「……ふふっ」
自然な笑いが出る。
「あのひと、他人の喧嘩を見て嗤ってる……!!」「『潰し合え……』って思ってるんだ、きっと」「やっぱり怖い……!」
「ち、ちがうっ!」
サッと顔を伏せるクラスメイトたち。
「大丈夫、私たちは、わかってるからね……」
大宮は、どうどう、となのはの袖を引き、着席させるのだった。まだまだ、誤解が解けるまで時間が掛かりそうだ。

その後……奇跡的に平穏な時間が過ぎていった。
昼休みには、エルスの被害者である三馬鹿が教室までやってきて、自主的にエルスの補佐（と言う名の暴走抑制）に着くことにしたと伝え、エルスが何を余計なことを、と激昂したりする一幕もあったりはしたが。
本当に何事も無く、帰りのホームルームになった。
「わたくし、これから校内の巡回ですの！　夜学の部が始まりますから……ぐへへ、きっと怪しげなワルい品々が、わたくしの手元に……」
「いーんちょー、迎え来ましたー」
金髪を綺麗に剃り落したアツシが。
「来なくて良いって言っているでしょう!!　わたくしの戦利品の取り分が減るじゃありませんの!!」
「あー、やっぱ着いてなきゃダメだわこりゃ……」
「危なっかしくて放っておけねぇわマジで」

同じくパーマとロングを剃り落したキヨシ、ツヨシが両脇からエルスをガードする。
連行しているのかされているのか、不明なエルスを見送り、帰り支度を整える中で。
（あれ？）
なのはの尋常ならざる視力が、校門付近に佇む他校の女子生徒の姿を捉えた。
（望だ。どうしたんだろう）
なのはの、数少ない……本当に数少ない、一般人の友達である。
（あ、そうか。
この学校は、月村の……すずかの家の事業だ。望はすずかとプライベートで親しい。たぶん、この学校に興味があるとか、そういう話があったんだ。望は医療だけじゃなくて、福祉にも興味があるって言っていたし。でも、望も学校があるから、授業風景は見られなくて、放課後の部活風景なんかを見学するんだ、きっと。ってことは、誰か案内人と待ち合わせをしている筈ね。変に声を掛けたら時間を取らせて迷惑になっちゃう。正門から出ると、顔を合わせることになるから、今日は裏門から帰りましょう）
ぽちぽち、と秀人に伝言する。と、秀人はきょう、クラスメイトとラーメンを食べることになった、との返事。であれば、速やかに慈樹を回収し、裏門から撤収するべし。
「なのはちゃん」
と、大宮が声を掛けてくる。目が合う。
「……。また明日ね！」
目の会話により、なのはは今日、一人で帰りたい気分なのだと察した大宮は、それ以上は踏み込まなかった。
「うん、またあした」
託児室より慈樹を回収。
「あの……吾妻さん。この子、いくつでしたっけ？　え、二週間とちょっと？　六か月くらいの間違いじゃなくて？　え？　ええ……？」

気にしたら負けだ。
これで憂いは無い。
「ふっふっふ」
不気味な笑いを見せる。
(望の負担を無くし、クラスメイトとも円滑に分かれ、秀人さんへの連絡を怠らず、慈樹と一緒にトラブルなく帰宅。パーフェクトよ。パーフェクトだわ、私。出来た嫁のおかげで、夫の評価が上がっちゃうわ。もう、困っちゃう。いちばんの気遣い屋といえば、なのはちゃんなんだから。やればできるんだから!)
……心の中で凄まじく饒舌に自画自賛していた。
「んー、んー」
ウッキウキで歩を進めるなのはの後ろ髪を、慈樹が軽く引く。
「これがホントの『後ろ髪を引かれる』、なーんちゃって。でも、いまの私に後顧の憂いなんて無いのよー、っと」
くるっと振り向いた。ぜーはーと息を切らした望がいた。
「あ、望だ。ひさしぶりー」

――――――このあと滅茶苦茶怒られた。

翠屋のテラス席で。
「信っじらんない! ほんっと、もう、信っじらんない!!」
「ごめん〜……ごめんってば〜……!」
ぷりぷりと怒る望に、なのはは平謝りするのだった。
そう、望は、他の誰でも無い、なのはに会いに来たのだ。
すずかもまた、停学明けのなのはを心配していた。出来れば、直接会ってあげたかった。だが、すずかは学園の理事のひとり。そんな公人が、特定生徒と親しい付き合いをしているとなると、途端に問題になってしまう。バニングス家もまた、学園の出資者の一人だ。となると……現在、地球在住者の中で頼れるのは、望だけ。託すような気持ちで、なのはの様子を見てきてほしい、と頼まれた望は、よし任せな

さいという責任感、そして、望自身、なのはのことを、この気難しくて誤解されやすくてぼっちでコミュ障で人見知りでねちっこく根に持つタイプの……羅列すると尚更ヒドさが加速する友人のことを、心配してやってきたのだ。なのに。
「わたしが来てたことに気付いてたのに！　気付いておきながら！　何も言わずに！　裏門から逃げるようにサッサと帰るってどーいうことよ！」
まぁ当然の怒りである。なんて友達甲斐のない。
「だってぇ……」
アイスコーヒーのストローを、ずぞぞーと吸う。
「だって……学外の人間が会いに来たら、学校への用事で、個人への用事とは考えられないじゃない……」
……中学まで一緒で、高校で別れたことによる学外の友達がフツーにいて、フツーに会いに行く望とは、なのははランクが（低い意味で）違っていた。
「ほんっと、性根までぼっちなんだから……！」
ぴくりと、なのはの耳が動く。
「望」
……大真面目な顔で、名を呼ばれる。
重ねて言うが、なのはが真顔で喋ると、結構それだけで迫力が出てしまうのだ。
「な、なによ……」
たじろぐ望。
「ええ、私はぼっちよ。それは違いないわ。むしろ、好きでぼっちをやっている側面も否定はしない。一人って、ラクでいいもの。みな気付いていないだけで、ぼっちには多くのメリットがあるの」
けどね、と、カップをテーブルに置く。
「好きでぼっちを『やって』いる私だけどね。
――――好きでぼっちに『なった』のは、私の所為じゃないわ！」
……シン、と、静まり返る。足を止め、何事かと聞き入る民衆もいて……その中には、ヤバい何かに引き込まれそうになってい

る目をした者もいた。
「私がぼっちになったのは、社会が悪いからよ。そのツケは社会が払うべきだわ」
「……」
絶句する。この友人、どんどん拗らせていっていないか……？
と、民衆の何人かが、膝を突き、両手を合わせる。拝むような動作だった。まさに天啓を得た、と言わんばかりに。
「おぉ、おぉお……!!」
「神様……神様……!!」
「一人でも良いのですね……！　無理に群れなくとも良いのですね……!!」
「やはり社会はクソ。それで良いのですね……！」
……信者が増えた。
「……っふ。まーた導いてしまったか」
着実にダメ教の信徒が増えつつあった。鷹揚に手を振り、一団を解散させる。
「……」
「な、なによ……自分が集団生活に向いてないことを、私は幼稚園で悟ったんだから……今更、変われるものですか」
「はぁ～～～……」
ながぁい溜息。小学生のころを知る身だが、言ったように、人間そうそう変われるものでは無いようだ。だが、そういった頑固で一貫した姿勢が、良くも悪くもなのはの魅力であるのだが。
「これで男子には人気が有ったんだから、そりゃあ妬まれるわ……」
「へ？　人気？　誰が？」
「あんたよ。健太たちのサッカーチームのメインメンバーから、他のクラスの男子まで」
「えぇ……嘘だぁ」
「……これだから。まぁ、小学生なんてそんなもんでしょ。ほら、遠足のとき、」「うわぁあああああ」「えぇいトラウマスイッチはＯＦＦにしておきなさい。……あんたの写真、大上段に掲載されてたでしょ？

アレ、みんな欲しがってたんだから」
「……でも、購入数『1』だったよ。ちなみに私」
「泣けてくる情報はいらん！　最終日、見本が撤去されるまでの間に注文が殺到してたわよ。班の子なんか、隣のクラスの意中の男子に呼び出されてドキドキして行ったら、『あの写真を代理注文してくれ』なーんて頼まれて……あーカワイソ」
「私、悪くないじゃない！　悪くないじゃない！」
　もっともな抗議をするのはだった。
「あ、ちなみにあの写真、写真家にとっても大傑作だったらしくて、『ほとりの孤独』っていうタイトルでコンクールで大賞取って一躍売れっ子写真家になったわよ」
「いやぁあああああああああ!!」
　恥が全世界に。
「ま、まぁ、自然に目線が入るように加工されていたから、そこは安心して」
「イヤらしいホームページの広告じゃないのー!!」
　なぜ知っている。
「でもまぁ……相変わらずで、ある意味安心したわ」
　相変わらず、ダメな方で安定しているが。
　望とは、今度いっしょに買い物に行く約束をした。手を振りながら帰っていく望を見送りながら、残りのコーヒーを飲む。
「――――相変わらず、か」
「う」
　と、慈樹がなのはの髪を引く。
「ん、わかってるよ」
　……ずっと。なのはへ警告を発していたのだから。一人で帰ろうと思ったのも。望を帰らせたのも。翠屋へ寄ったのも。
「あはは、気付いてたんだ」
……

「子供、かわいいね」
「そう、ありがとう」
後ろの席から、声がする。
「ヒデくんとの子？」
「そうだよ」
聞き慣れた声がする。
「いいなぁ。私は、シたけどデキなかったんだよね」
「デキてたら、おおごとだったわよ」
ずっと聞きたかった声がする。
「厨房の方から、こわぁい気配がしていて、仕掛けられなかったの」
「あぁ、あれうちの父さん。病み上がりなりに、まぁまぁ強いよ」
聞こえてはいけなかった声がする。

「そっかぁ。」

振り向く。
人影。否。人の姿をした闇。闇の具現。唇に引いた真っ赤な紅だけが、色彩を放つ。そして、その色彩が、尚更に闇を際立たせる。

「久しぶり。会いたかったわ。――――なのは。」
「久しぶり。会いたかったよ。――――カレン。」

カレン・フッケバイン。そして。影から、滲み出るように……見知った顔と、見知らぬ顔が、現れる。

「凶鳥部隊、参上……ってね」

赤い唇が、にぃ、と、半月を作った。

## ▪ｖｉｖｉｄ編　１１話『　社会をいい方に変えていく第一歩　』

――社会が悪い。
――だからこそ。

◆▪◆　◆　◆

予感はあった。
あの日。数多の可能性を感じたその時。なのはの脳裏には、この状況へと至る可能性が、現実のものとして感じられたのだから。
――なのはは、カレンの遺体を確認していなかった。
凍土のクレバスの向こうへ、消えていった。現実的に考えれば、どこまでいってもヒトでしかないカレンが生きているとは思えなかった。
部隊により、どうにか回収された半死半生のなのはが見たものは……オウル・エクリプス隊長以下、戦闘員の半数が戦死した惨状だったのだ。五体満足で残っていたのは、はやて、ヴィータ、そして当時、戦闘部隊最年少だったヴェイロン。
死を悟ったオウル隊長により、隊長権限及び指揮権は八神はやてへと移譲され、どうにか全滅だけは免れたが……結末は、部隊の事実上の消滅だ。
「んー……と。ヴェイロンは、いないんだね」
「あの子は新入りと調査に出てるよ」
くすくす、とカレンが笑う。
「男の子の後輩が出来たって、兄貴ヅラしちゃってんのよ、アイツ」
「そう、あのハナタレ小僧がね……――で」
すっ、と、後方を指さす。
「あのヘッタクソな狙撃手も、新入り？」

――バスッ……!!
消音された発砲音。亜音速の銃弾は、しかし……
――ヂッッ……!!
軌道を逸れ、街路樹の根元に刺さる。
「……ティアナ以下ね」
ティアナであれば、気が付いただろう。なのは、カレンが座る席の周囲に、極細のワイヤーが蜘蛛の巣のように張られていることに。
「オーケーオーケー。鈍ってはいないようね。……もう分かったから、これ、外してくれない？」
その蜘蛛の糸は、カレンの首に触れる距離にも設置されていた。何らかのアクションを起こした瞬間、斬首となる位置に。
「……」
キン、……と、ジッポライター型の偽装具の中に巻き取られる。瞬間、周囲の戦闘員たちの発する殺気が膨れ上がる。
「はぁ～～～

「――――全員、その場に、すわ(正座)れ。」

……隊員の一人であるクイン・ガーランドは、何が起きているのか、分からなかった。

攻撃を受ける間合いではなかった。制空圏に触れるような真似もしてはいない。離脱も十分に可能だった位置。だと、いうのに。

「あ……が……ッッ……!!」

――――なぜ自分は、路面と頬を寄せ合っているのだ？

斬られた。

そうとしか思えない。冷たい刃が、あまりにもリアルに、肩口から脇腹に掛けてを、皮も肉も骨も臓器も、抵抗など無いかのように滑り抜けていった感触があったのだ。恐慌を抑え込み、何度も何度も、箇所を見やる。が、皮膚どころか、服の繊維ひとつとして、断ち切られてはいない。

「マ、リーダ……、!! 何を、している……!!」

そして……狙撃手は何をしているのか。初弾を防がれただけで、行動可能な筈では無いか。しかし。

『畜生……ちくしょうっ……! なんでっ……!』

通信の向こうから伝わってくるのは、自身と同じ状況であるということだった。

「……殺気の陣。制空圏と、気当たりの複合技術」

何でもない事のように振る舞うカレンが、未熟な隊員たちに解説を行う。

「気当たりの、殺気の届く範囲までを制空圏と見立て、擬似的な斬殺を行うことで、範囲内の対象に『死』のイメージを与え、無力化する……なのはお得意の、『絶対に殺さない必殺技』ね」

殺気の届く範囲と聞いた隊員たちが、戦慄する。最も離れた位置に陣取る狙撃手で、およそ２００メートル。あくまで、擬似的なものとはいえ……なのはの攻撃可能範囲は、優にそこまでをカバーしているのか。

「……カレン。これはどういうこと？」
なのはが、やや苛立った様子でカップを置く。
「どいつも、こいつも……ちょっと斬ってやったくらいで、このザマよ」
げしっ、と、最も手近な位置に転がっていたクインを無造作に足先で蹴る。
――凶鳥部隊戦闘員。それは、独立した個人戦力の集団。究極の精鋭。一騎当千の修羅たち。序列こそあれど……その戦闘力は、ほぼ同等。だというのに。
「いつから、我が凶鳥部隊は、烏合の衆に成り下がった……？」
静かな怒りが、なのはより冷気のように漏れ出す。
「あの日。戦闘員たちが生命を投げ打ってまで打倒した神域の守護者。満身創痍の私たちを狙った漁夫の利野郎と相打ちになったあなたは、命を繋いだ後、その神域の先で、『何か』を手に入れたんでしょうね。オウル隊長の後継者であるあなたがそれを手に入れたことについて、私は文句を挟まない。それを用いて、何をしようとも、同様に」
けれど、と。冷徹な、戦士としてのなのはが、カレンに宣告する。
「オウル隊長の顔に泥を塗るような真似を、凶鳥部隊の格を下げるような真似をするのなら……今、この場で、この手で、部隊を終わらせてあげるわ。
――凶鳥部隊戦闘員・序列三位……高町なのはの名において」
ゆらゆらと散漫だったカレンの気が、それを受け、収束し始める。
「万年三位風情が、吠えてくれるじゃないの……」
「あら、失礼したかしらね……暫定隊長どの？」
――斬る。
互いに、腰に手を伸ばし……。
「「なーんてね」」
互いに、無手の丸腰だった。なのははともかく、カレンまで。
「今日は、挨拶だけよ」
互いの殺気も雲散霧消する。こういったじゃれあいは、二人にとっ

てはよくある日常だ。殺気の余波に中てられ、半人前どもはとっくに意識を手放していたが。
「ちなみにコイツらは、二軍以下の育成枠だよ。一軍はちゃーんと戦力揃えてある」
「……でしょうね。でも、それにしたって……」
「場数を踏ませるって意味じゃ、死ぬ思いをするけど絶対に死なない、なのははホントーに都合のいい相手だから、つい連れてきちゃった」
「……私は、久しぶりに二人でお茶でもって……本当にそう思ってて……」
「だから、今日はこれでバイバイ。……会えてうれしかった」
「なら、もうちょっと、……って、いないし」
見事な撤退だ。その辺に転がっていたヨチヨチ歩きのヒヨコたちも回収されていったようで、嘘のように、都市の喧騒が戻ってきている。カップの紅茶も、まだ湯気を立てているほどだ。……ただ、空席のみを残して。
「……ケーキくらい、食べて行きなさいよ」
……せっかく会えたのに。つれない友人に、なのはは少しいじけたような気分だ。
「ぁー。」
「慈樹にはまだ早いよ。……なによ、カレンのばか。」
さり気なくケーキに手を伸ばそうとする息子を諌め、仕方なく、二つのケーキをヤケ食いするのだった。

◆・◆　◆　◆

アジトへと戻ったカレン一味。現実を知ったヒヨコたちは、雑魚寝部屋に放り込み……カレンは、周囲に誰もいないことを確認し……
（――――死ぬかと思ったーーーーー……!!）
ヘナヘナと、地べたに崩れ落ちた。
（っべーわ……話には聞いてたけど、想定の百倍ヤベーわアレ

……マジっべーわ……）

序列は所詮、過去のもの。二位と三位、ほぼ同率とはいえ、その間に積んでいた経験が、決定的な差となっていた。

（しかもアレ、更にやべー強化変身を隠してるんでしょ……!?　無理でしょ……無理ゲーでしょ……!?　どーすんのよアレ……!?）

こつ。

と、小さな足音を聞き、カレンは居住まいを正す。見事な取り繕いようだった。

「あら……ステラ？　どうかした？」

「……。、……！。」

小柄な金髪の少女……ステラ・アーバインが、身振り手振りでカレンに何かを伝え、端末を手渡す。ん、と鷹揚に受け取る。

『姉貴。終わったぜ』

低い若者の声。調査に出していた片割れ、ヴェイロンだ。

「その調子じゃあ、」

『……あぁ、アタリだ。聖堂の地下に……クソッ、コイツら、シスターの皮を被った、とんだサディストどもだったぜ。子供の骨まで……畜生……』

通信の向こうでは、想像した通りの惨状が広がっているのだろう。

「ん。お疲れ様。あとは任せる。好きにしなさい」

『了解だ姉貴。……おい、トーマ！　ナパームで焼き払、』

ぶつりと切れた端末を、ステラに返却……しようとしたところで、再度通信。今度は……

「……。」

ステラが、苦虫を噛み潰したような、嫌そうな顔をする。

『やぁやぁ、カレンくん！　元気そうで何よりだね、うん!?　わたしだよ、ハーディスだよ！　いやぁ、調査任務ご苦労さま！　前々からあの町の教会は怪しくて怪しくて、地域で定期的に行方不明者が出るわその不明者がミサへの参加を欠かさない信心深い人々だったとか、ああそうそう、あの教団の教義なんだけどね、『信心深い者を神の御許へ送る』んだってさ！　不明者が出る、皆が不安になる、救いを求めて

教会へ来る、信心が深まる、贄にされる、そしてまた……の悪循環を意図的に作り出していたんだよ！　まったくいただけないねスマートじゃない！　あんな寒村で信仰だけが救いだっただろうに！　キミのところの秘蔵っこ、全身タトゥーのクールボーイと銀髪のニヒルガイにより悪の教団は撃滅・壊滅・焼却！　調査対象だった教団の邪神像は結局ハズレだったけれども依頼達成ミッションコンプリィイイイイトだよ！　報酬はたんまりと振り込んでおいたから確認しておいてくれたまえ！　さてさて次の依頼なんだけどね、あぁ、連続任務で辛かろうと少しスパンを置くことにしよう！　休暇！　バカンスは大事だよ！　次の仕事への活力が生まれるからね！　一週間後、今度は管理世界さ！　映画賞の授賞式典で受賞者へ渡される宝冠がね、そう、怪しいんだよ！　どうやらどこか遺跡から発掘された遺物がオークションに流れた結果らしいんだけど、もしかしたら今度はアタリかもしれないってね！　あ、疑ってるね？　呼気で分かるよ！　いやいや、疑われるのもわたしの自業自得さ！　今まで何度の『今度』を使ってきたか分からないからね！　そのたびキミらをいいように使い走りにしていると思われても仕方がないよね！何せ商売敵はあの『機動六課』！　トップはキミの知己の若タヌキさ！　でも依頼をするんだ！　なぜかって!?　キミらが一流のプロフェッショナルだからさ！　高い錬度に裏打ちされた正確な仕事ぶり！　リーダーの求心力！　あぁ、おべっかを使っているわけじゃないよ！　本当のことさ！　キミらには期待をしているんだ！　信頼をしているんだ！　信頼の証として、キミらに、いいやカレン・フッケバイン！　キ・ミ・に・預けた『原初の種』！　いつかアレを萌芽させられると信じているんだよ！　そのためには見込みのある者たちにジャンジャンと種子を植え付けていかないとね！　もう一度説明するけれど、あぁ、別にキミが物覚えの悪い人間だと言っている訳じゃないよ!?　確認さ！　相互認識の確認だよ！　あの『原初の種』はジュエルシードに近しいロストロギアさ！　内に記憶された生物環境を再現するための封入型容器！　それだけならまぁ古代細菌が甦って都市がパンデミック起こして自滅する程度のモノなんだがね、アレは特別だよ

！　内に記憶されているのは、なんといずこかの惑星の天地開闢黎明期！　まさに神代の環境が記憶されているのさ！　だが萌芽し開花するためには、ある程度、その環境に近づかなければならないんだよ！　だからさ！　神代を身に宿した『鬼人族』の末裔オウル・エクリプス、その身より解析培養したエクリプスウイルス！　これらにより古代種を続々復活させ、神代に近づいたと『原初の種』に認識させなければならない！　だが、まだまだ未完成！　せいぜい擬似的な、古代種『ハーピー』『ドラキュラ』『姑獲鳥』といった『翼種』のできそこないを増産する程度！　せいぜいが『ヴァルキュリア』程度！　ああこれはたしか、キミの親友にしてＧＯＤ　！　の力で摘み取られてしまったのだったね！　これではいつまでたっても萌芽はできない！　このウイルスを次のステージに、せめて『天使』種、『悪魔』種の実現にまで押し上げるために必要な『何か』はきっと、同じ年代の古代遺産にあるとわたしは踏んでいるんだよ！　目指すは萌芽、そして開花！　そうすればわたしの願いは叶う！　そしてキミの悲願も達成される！　Ｗｉｎ―Ｗｉｎというんだったねこういう関係は！　頼むよカレンくん！　必要なものがあったらいつでも言ってくれたまえ！　我が頼れる隣人よ！　キミの家族にもよろしく！　ではアデュー!!』

……カレンは、ずきずきと痛む頭を押さえ、端末の電源を切る。

「……独善王め」

表の顔は産業複合体の顧問アドバイザー、しかしその実態は……というやつだ。カレンのような裏の人間にも、代理人を通さず素顔で、本名で、堂々と依頼を押し付けてくる。きっと、管理局にバレても屁とも思わないだろう。自分のことしか頭にないくせに、依頼内容や報酬が、こちらにも明確なメリットをもたらすというタチの悪さ。人のことなど見ていないが、表も裏も、人というものを知り尽くした男。近代社会においての『王』の器と言っても良いだろう。

だが……目的のためならば。辛酸を舐め尽くそうが……

ぴと。

……ひんやりとした感触。ステラが背伸びをして、カレンの額に触れていた。
「……心配しなくていいよ。やることは、判ってるから」
「……。」
「え？　何で、なのはに会いに行ったのか、って？　……あぁ、それは……ほら、カートたち悪ガキに、経験積ませるためだよ。そこは嘘じゃないんだってば。……おっと、もうこんな時間。そろそろ食事にしようよ」
話を断ち切り、ステラの手を引く。ステラは……制限された思考の中で、カレンの意図をどことなく察しながらも、素直に手を引かれていく。
「……」
「食事は大事だよー。栄養だけ取っていればいいっていうのは合理的だけど、心が荒むってヒデくんもなのはも言っていたからね。グレンデルの連中、あの欠食児童どもには腹いっぱい温かい料理を食わせてやらなきゃ」
陽気に、不自然に前だけを見て喋り続けるカレン。ステラは、その姿を見ていると、胸のあたりが苦しくなるのだが……それが何なのかは、制限された思考では、分からなかった。
◆▪◆　◆　◆
「ただいまー」
ようやく自宅に帰りつく。
「おう、お帰りー。遅かったな？」
先に戻っていた秀人が出迎えてくれる。なのはは、慈樹をベッドに寝かせ、部屋着に着替えると……
「秀人さん、聞いてよもー!!　カレンってば、カレンってば……!!」
秀人に抱き着き、この日あったことを逐一報告する。いつもの光景だ。
「そっか……生きてたか」
秀人は特に驚くことなく、納得していた。

「……殺しても死ななさそうなオウルとアーデルハイドが死んで、危なっかしかったカレンが生きてるってのも、まさかだけどなぁ……」
「……うん」
　アーデルハイドの血縁者であるマリエルやジェイルは、知っているのだろうか。伝えるべきだろうか。いや、家族の問題だ。外野があれこれ、騒ぎ立てるような事でも無いのかもしれない。と、秀人は考えを巡らせている。
「それで、ね。秀人さん。大事な確認なんだけど……」
　なのはが、もじもじと、言いづらそうにしている。
「確認……？　あぁ、気にしなくていいぞ。どうした？」
　なのはは、意を決した様子で……
「――――カレンと寝たって、ほんと？」
　……
「……えっ、何だって？」
　突発性難聴（詐病）を発症した秀人が、張り付いたような笑顔で聞き返す。
「だぁかぁらぁ……カレンとセ「あーーーーーーーーーーーー聞こえない聞こえないーーーーー!!」
　ぶんっ、となのはを座椅子に向かってスローイングする。
「な、なんちゅうことを聞いてくるんだお前は!?」
「だって、カレンが……すっごい自慢げに……」
　ぶすーっと頬を膨らます。
「あぁぁぁ……ええっと、アレは、そう。色々と状況的に画もやまれぬ事情というものがあり……」
「……あの夏休みね？　秀人さんが行方不明になり、私たちが心配で心配で夜も眠れなかった日々。フェイトが不安のあまりオネショまでしたあの日々。秀人さんは女に腕枕をしながら人肌の温もりに包まれてヌクヌクとのうのうと熟睡していたのね？　……はっ！　さてはオウル隊長とも寸前まで行ったんでしょう!?」
（女の洞察力こえぇぇぇぇぇぇぇ!!!?）
「いやいやいや、あの頃はその……ほら、結婚とかそういうヤツの前

だったじゃん？」
「私はお嫁さんのつもりだったけど」「そうだったの!?」
　衝撃の真実。
「うー……でも、その頃は秀人さん、私にそういうの無かったし……カレンはスラっとして綺麗な身体だったけど……うー……」
　ガジガジと袖口を不機嫌に噛みながら、なのはが唸る。理屈としては判っていても、納得できないのだろう。
「うむ……なのは」
「……なぁに？」
「ラーメン食べに行くか」
「行く」
　気分がモヤモヤするときはヤケ食いに限る。
　――はいはーい、慈樹くーん！　奈々お姉ちゃんだヨーいでででででっ！　ピアス引っ張らないでー！　千切れるぅー！　……あ、気にしないで行っておいであだだだだだバレッタ引っ張っちゃらめぇー！　ハゲるぅー！
　……呼んでもいないのに現れた奈々に息子を預け、肉体労働者御用達・四桁カロリーラーメン店へと向かうのだった。

「あー、美味しかったね！」
　本日二杯目のラーメンを完食した秀人と、男顔負けの量を同じペースで平らげたなのはが、夜道を歩く。すっかりご機嫌である。単純というかなんというか……
「……カレンにも教えてあげよう。新入りもたくさん居たし」
　小声でそんなことを話しながら、帰路に就く。秀人も内心で一安心だ。

　さて翌日である。秀人の女性問題がとりあえずひと段落、と思った矢先。
「……リーゼ？」
　はやての使い魔、リーゼが突然来訪し、悲壮な顔で縋りついてきた。

「なのは……！　あるじが、あるじがぁっ……!!」
少しばかり距離を置いていたとか、顔を合わせづらいとか、そういったものは彼方へ消え去り。
「ちょっと行ってくるね！」
背嚢に食材を満載し、リーゼとともにはやての下へ。
――主の体調が、ここ数か月の間、思わしくないのです。安定期に入れば、とも思いましたが、落ち着いたのも束の間、つわりがぶりかえし、体重が何キロも落ち……病ではないので、根本解決には至らず……こ、このままでは主がぁ……!!
そしていざ、はやての居城へ。新たに観測された世界に居るのかと思いきや、意外にも、海鳴市のかつての自宅跡地に新たに家を建て、住んでいるのだという。灯台下暗しとはこのことだ。
真新しい玄関に足を踏み入れると、隅っこにある部屋から気配がする。
「んー……リーゼ……？　遅かったじゃない……」
うつらうつらと……恐らくは薬の効果もあるのだろう。朦朧とした様子で、なのはをリーゼと誤認しているようだ。そして、数か月ぶりに会う親友の姿は。
「ちょっ……！　はやて、あなたどうしたの!?」
頬はゲッソリとこけ、腰まである自慢のロングヘアは毛艶を失いパサパサ、もともと偏食気味でアバラが浮くほど細かったが、今は全体が痩せこけている。
「あっ、なのはさん!!」
フィアットがつきっきりで介助をしている様子だった。校長業務にはやての介助と、この中では最も多忙なのかもしれない。
「あー……なのはか。……えっ、なのは!?」
びくっ、と覚醒するが、身体を起こすには至らない。
「おい……リーゼ……どういうことだ……！」
はやては、使い魔を睨みつける……のを、なのはが諌める。
「いいから寝ていなさい。リーゼがあなたを心配していることくらい、判るでしょう」

逆らう気力も尽きたのか、渋々と体の力を抜く。
「そうですよぉ、部隊長。今日もあまり召し上がらなかったんですから、変に消耗する真似はしないでください」
ベッドテーブルには、子供用かと見まがう小ささの器が数点。しかし、そのどれも半分も減っていない。
「……」
なのはの視線に、はやては諦めたように溜息を吐く。
「見りゃ分かるだろ……食っても食えんし、無理やり食っても吐いちまうんだ……あまりに食えんことが続いたら、点滴打って栄養摂るようにしてるけど……」
大きくなっている腹にそっと手を触れる。
「不幸中の幸いだ。そっちはもう順調も順調……しっかり育ってるってさ。ったく、私の栄養を片っ端から食っていやがる……」
少し嬉しそうに笑うはやてだったが、なのはとしては見過ごすわけにはいかなかった。
食事内容に問題は無さそうだ。だが、それでも食べられないとなると……
「なのはさんは、つわりの時は……」
「ゴメン、その点では力になれない」
というのも、なのはは、これほどまでに強いつわりを経験していないのだ。変化した体質もあるだろうが、精々が、食事量の減少と倦怠感程度のもの。だが、別の点では力になれる筈だ。とにかく、母体に栄養を蓄えなければならない。
「……よし」
親友のためとあらば……
「――――出かけるわよ、はやて」
――――鬼となる。
「嫌だぁ……嫌ぁだぁあああ……降ろしてぇえええ……!!」
力無く抵抗するはやてを、なのはは車椅子に載せる。どうやら車椅子も新調したらしい。
「あわわわわ……なのは、無理は、無理だけはぁ……!」

慌てふためくリーゼを敢えて無視し、玄関を出る。
「ひぃー……溶けるぅ……!!」
「干からびるよかマシでしょ！　日光浴びろ！　フィアット！　車を回しなさい！」
「い、イェッサー！」
……一回りも年下のなのはに子分扱いされていることは、今更だろう。
――ヴヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォヴォッ……
車庫よりクローバーマークを装着したＧＴ―Ｒが出てきて、なのははズッコケた。どうやらフィアットもそうとうテンパっているらしい。
「何よこの車――!!?」
「わ、私のだ……国際免許を書き換えてるから、運転できるんだ……へへへ、すごいだろう……でも今日は勘弁……」
そりゃそうだ。改めて、もう一台の無難なアルファードに搭乗する。
「なのはさん、免許、免許！　ここミッドじゃないですよ！」
「あっそうだった」
まさか『魔法世界の免許証です（キャピッ）』なんて検問で出したら、それこそ（頭の）病院へ送られてしまう。
後部座席へ……
「こ、こいつ……ロイヤルラウンジとか、いいグレード乗りやがってからに……」
走る応接間である。フィアットの運転も相まって、走っていることを実感することさえ薄くナビで示した道をゆく。
「……で、どこへ行くんだ？　病院なら、行ってもあまり意味は……」
「近くの海浜公園よ。今日は風も穏やかでいい気候よー」
まさかの行楽地！
「……嘘だろオイ」「マジよ」
マジだった。

駐車場に止め、愚図るはやてをヒョイと車椅子に載せる。
「あーもう軽くなっちゃって……はい帽子！」
ズボっと麦わら帽子を被せ、ノシノシと歩いていく。
「こ、この……世話焼きオカン気質め……！　今日び関西でも居ないわよ……!!」
「吾妻家、凶鳥部隊と、台所番ばかりやってればそうもなるわよ」
最初は身を固くしていたはやても、次第に落ち着いて来たのか、車椅子に身を任せている。
「快晴とまではいかないけど、晴れて良かったわね」
夏はまだ先。絶好の行楽日和と言うやつだ。
周囲に目を送ると、休日を楽しむ人々で賑わっている。学生と思しきカップルや、ある程度の年齢の夫婦、しかし、やはり一番多いのは、子供を連れた家族連れだ。
「……」
望郷の眼差しで、静かにそれを眺める。歩いているうちに、売店を通りがかる。なのはが小声で、フィアットに何かを言いつける。
「……ここじゃ、ないけど」
ぽつぽつと、静かに話し出す。
「小さいころ、パパとママに、こういうところ連れてきてもらってたな……」
過酷な人生を送ってきた少女だが、そういった時期もあったのだろう。
「あんまり食べる子供じゃなかったから、ソフトクリームか、たこ焼きか、いつも迷ってて、メロンソーダも半分くらいはパパに渡してた……でも、」
楽しかったなぁ、と振り返る。
「だから、かもね。こっちに越してきて……買い物行くときは、わざわざ遠回りして、この公園を通ったりしてた」
「初めて会ったのも、この公園だったわね。今よりもっと髪が長かったから、はじめは気付かなかったけど」
「……そうだよ。せっかく静かな早朝だったのに、秀人ったら、なのは

を背負って、バタバタバタバタ走っててさ……」
　ベンチに腰かけての思い出話に花が咲く。
「……いいなぁ、って、思った」
「……」
「……なんの苦労も無く、幸せそうにしやがって……って、思ってたけど……そうじゃ、無かったんだよね」
　少し風が吹き、はやては帽子を押さえる。
「誰も誰もが、大なり小なり、何らかの不幸や理不尽に遭っていて……私は、自分だけがこの世で不幸なんだと思っていて、それに気づかなかった」
　視線の向こうで、小さな二人の子供のひとりが勢い余って転び、もう一人が助け起こす。そんな光景を、羨ましそうに、しかし、愛おしそうに眺める。
「何よ、随分としおらしいじゃない？」
「……弱ってるからな」
　茶化すなのはに、苦笑で答える。
「――――双子だ。二卵性で、男の子と女の子らしい」
　だから難しい、と。
「……」
　呆気にとられるなのは。
「だから、まぁ……人の倍、頑張らなきゃいけないからな。弱音なんて吐いてちゃあ、」「それは違うと思うよ」
　と、はやての言葉を、なのはが強く遮った。
「誰もが不幸や理不尽に遭う。それは本当。でも、不幸や理不尽は、その人自身のもので、それは大小で測れるようなものじゃないの。小さな不幸に弱音を吐いちゃいけないとか、自分の身体の辛さを訴えちゃいけないとか、そういうのは無いと思うな」
　先程の二人の子供を、両親が手を引いて歩いていく。
「誰もかれもが不幸や理不尽に遭うっていうなら……
　――――それは社会が悪いのよ」
　はやては、呆れたように笑う。

「またそれ？」
「そうだよ？」
　顔を見合わせ、わだかまりなど既に無く……ただ笑う。
「社会が悪い。だからこそ、」
「頑張っていい方に変えていかなきゃいけない、ってね」
　と、言いつけておいた通り、フィアットが売店から戻ってきた。
　――メロンソーダとソフトクリーム、たこ焼き。
「……言ってたっけ？」
　話のタイミング的には偶然なのだが、狙ったとしか思えない。
「はやての趣味嗜好くらい把握してるわよ。ジャンクフード大好き人間」
「……あんまり食えないけど」
「なら私が二人分食べるわよ」
　言うや否や、メロンソーダの入ったカップのストローに口を付ける。
「社会をいい方に変えていく第一歩よ。
　――友達の前でくらい、たまには愚痴を言っても良い」
　皆が皆、いつ何時も強く在れるわけではないのだ。
　はやての肩が、ぴくりと動く。
「愚痴ばかり言う人は嫌いだけど……いいんじゃない？
　――ずっと頑張ってきたんでしょう？」
　その言葉を聞いて。はやての肩が、小さく震える。
「……、うん。だって、食べなきゃって思うと食べられないし……」
「うんうん」
「寝られないし、寝られたと思ったら気持ち悪くて目が覚めるし……」
「うんうん」
「……うんうん言ってないで何か言えよぉ、もう!!」
　わしっ、とヤケクソぎみにソフトクリームのコーンを掴むと……
「あ」「あ」二人の従者が呆気にとられるように、あまりにも呆気なく口に運んだ。

「むぐむぐ……っあー美味い！　クソッ、あとでゲロに変わるんだとしても美味いなぁもう！」
「ちょっと、あんまりゲロとか言わないでよ！」
「食わなきゃ食わなきゃって思うと余計に食えなくて、リーゼもフィアットも心配するし、気晴らししようにも気晴らしのための気力が湧かないし……！」
　たこ焼きは男らしく手づかみだ。
「そもそも、私はそんなに趣味多くないんだよ！　ずーっとベッドで寝てるから小説だって刊行ペースより読むペースの方が早くて早々に枯渇するわ、書類仕事でもしようかと思うとフィアットは意外にも事務有能でやること無いし……！」
「押しつけたくせにぃー!!」
　フィアットが後方で発狂しているが、気にしない。
「どうせ吐くんだし好きなモン食わせろって言うとリーゼがクドクドお説教するし……！」
「わ、わたしはあるじのことを思って……!!」
「あぁああ、もう！　喧嘩して気まずくなってなのはは遊びに呼べないし、美香たちにはこんな弱った姿見せたくないし、好きでベッドで日がな一日を過ごしているわけじゃないんじゃーーー

その人々の集客を見込んだ大道芸人が芸をおっぱじめ。
「あっはっは！　あれイリュージョンとかい言ってるけど魔力使ってるよ！　魔法じゃん魔法！　本末転倒！」
「げふぅ……ちと食いすぎたか。買いすぎだリーゼの馬鹿め……おう、ガキども！　くれてやらぁ！　持って行け!!」
その辺で遊んでいた子供らに振る舞いながらも芸を見物し。
「では新曲を……『ファッキン現代社会』。我が神に奉ります。そして社会はクソ」
「っふ。音楽をもって社会へ反抗する意気や良し。弾いてみなさい」
ストリートミュージシャンに信者が紛れていたり。それが意外といい曲だったり。でも倫理的にアウトな歌詞だったり。
結局……夕方近くまで騒ぎ倒し。
「……すぅ、すぅ」
「遊び疲れて寝るとか、子供かっつーの」
車椅子上で、呑気に寝息を立てるはやてをなのはが運ぶ。
「産んでから本当の勝負よ。二時間おきの夜泣き耐久レースに怯えるがいいわ」
「……うぅーん……！　コワイ……夜泣きコワイ……！」
さりげなく悪夢をすり込むのは止めていただこう。
後部座席のフルフラット化可能なリクライニングシートに寝かせると、より深く眠ったようで、起きる気配さえしない。ほんの２キロも無いような、短距離の移動。
（……リーゼ、毛布）
（はい、なのは）
ゆすり起こすのも、折角の安眠が勿体ないと判断し、今日は自宅に居ながらも車中泊だ。
「主……こんなにも穏やかな寝顔、久しぶりに見ました……」
ぱたん、とドアを閉める。フィアットは運転席で、寝ずの番だと言う。
「なのは……本当に、恩に着ます……」

良く見れば、リーゼも隈が濃い。
「あんまり過保護で抑圧しちゃダメよ。食べたいっていうものがあるなら、なんでも食べさせてあげること。付きっきりじゃなくて、一人になる時間を作ること。でも、本質的には寂しがりだから、放置と接触のバランスをうまい具合にとること。いい？」
「はい……はい……！」
これ以上は、あとは上手くやるだろう。
――ヒマなときは遊びに来るね
と、はやて宛に一筆を残す。ささやかながら礼に、と、映画試写会のチケットを二枚受け取り、帰路に就く。
「秀人さんと行こうーっと。乳幼児は元からタダだし」
背嚢の中身もカラになり、身軽な帰り道だ。
「……双子かぁ」
ある意味、なのはも双子の妹分がいるのだが……同い年のきょうだいとは、どのような感覚なのだろう。ヴィヴィオ、慈樹は、若干年齢が離れているし、距離も離れている。離れて暮らしている以上、慈樹は実質、一人っ子だ。
「……三人目かぁ」
……秀人のあずかり知らぬ場所で、計画は進んでいく。
◆▪◆　◆　◆
さて、秀人の女性問題はこれで片付いたのか。
――否。
あと一人。
特大の爆弾が近いうちに炸裂することを、まだ誰も知らないのだった。

ｖｉｖｉｄ編　１２話『　しせつぐらし！　』

――――――

（赤）の若者。
……いるんだよなぁ、不思議と。どんな空間にも。世界の七不思議だわ。ヤンキーってホントどこにでも湧くよな。しかもだいたい複数で。
「あっくん、タバコあるー？」
と、今度は緑色の頭のが声を発した。
「あー？　……あれ、落しちまったみたいだ、クソッ……」
……俺は見ていた。教室案内係の細身の中年教師が、その懐から煙草とライターをスリ取るのを。
特に誰とも絡むことなく、簡単な説明と……生徒同士の、挨拶の時間がやってきた。
「出席番号１番。――吾妻秀人さん」
おぉ……『あ』で始まるから一番なのか。教師に促され、壇上へ。こっちを見ているやつ、見ていないやつ、そして……挑発的にガンを飛ばしてくるやつ。男も女も、バリエーション豊かな面子だ。
「吾妻秀人。齢は、２６です」
「ぶはっ」
とたん、ヤンキーの頭目と思しきカラフル赤頭があからさまに嘲笑する。
「２６!?　オッサンじゃねーか、オッサン！」
そのツレも、げらげらと下品に笑いだす。
……いや、君らホントよく試験受かったね？
よくない空気だ。教室中の空気が、彼らを中心に淀んでいくような感じ。覚えているぞ、これは。施設に入れられたときのアレだ。
――集団を相手にするときは、まずアタマを潰せ。
挨拶を中断し、赤頭のもとへノシノシと歩く。あぁ、懐かしい。なのはにも教えてやったんだった。
「……ンだよ、オッサ」「あ・が・つ・ま・ひ・で・と。」「ご、ぐぶッ……!!」
口を掌で覆い、笑顔で説く。
「クラスメイトのお名前は、正しく呼ぼうな？　……ボクちゃん？」

「……！」
腕を闇雲に振り回すが、この距離じゃ意味は無いな。どうやら、こいつらはいわゆる半グレ。実際に犯罪行為や暴力行為までは、そこまで本気では行えない類の可愛いやつらのようだ。喧嘩慣れをしていない。
「……!!」
鼻は塞いでいないから呼吸は出来るはずだが、どんどん顔が真っ赤になっていく。
「てめっ……あっくんに何すんンンンーーーー……!?」
はい二人目ー。両手にヤンキーだぜＨＡＨＡＨＡ。
さて、そろそろいいか。ここいらで、二人を解放して、平和的解決を図り穏便に『どがしゃぁあああああん』『キャー！』『不良とヤンキーが!!』『あぁ、窓に、窓に！』『窓割れてね!?』はい無理になったー。
……どうやら、ふたつ隣のクラスで、なのはが『やらかした』ようだ。始業式直後までしか保たないとか、ウチの嫁の社会性は俺の想像を遥かに下回っているようだ。
……その後も断続的に響く破壊音に、我がクラスはそれどころではなくなり、うやむやのうちに解散することになった。

◆▪◆　◆　◆

……いやぁ、凄い一日だった。
嫁がクラスメイトの戦闘民族みたいな子と大喧嘩をした。
その数時間後に我が子が生まれた。
戦闘民族っぽい子がなのはの友達になった。
……うむ、意味が分からない。
意味は分からないが、今日も学校だ。
「……うわ、すご」「廃墟みたい……」「『例のあの人』がやったんだって」「あぁ、『例のあの人』が……」「窓割れてね？」
……伝説の極悪魔法使いみたいな呼ばれ方をしているのは間違いなく俺の嫁です。
ほぼ廃墟と化し、申し訳程度にブルーシートで窓際が閉鎖された教

室をスルーし、我がクラスへ。
「おはよー」
誰にともなく挨拶をすると、教室中から、散発的に返事が返ってくる。
――ダンッ！
……あ、忘れてた。半グレくんと遊んでいたんだった。
「おう吾妻ぁ……！　ナメた真似してくれたじゃねぇか……!!」
「おっ、あっくん。俺の名前、ちゃんと憶えてるじゃん」
「誰があっくんだオラァ！」
「？　……おいあっくん。相方の緑の……えぇっと、ガチャ○ンみたいな色の頭のやつは？」
「が、ガチャ……!?　ハヤシのことか……？」
「……ム○クみたいな色してんなー、この頭」
「さ、触るんじゃねぇ！　つか、いつの間に真横に来てんだよ!?」
「フハハハハハ」
「笑ってごまかしてんじゃねぇ！」
「そうは言うけどさぁ……はぁー……俺も昨日からイロイロ有りすぎてさぁ……もう……聞いてくれる？」
「何で深刻な相談のノリなんだよ!?」
「昨日、予定日直前の嫁がクラスメイトと大喧嘩して、そのまま急に産気づいて、そのまま勢いで息子が産まれちゃったんだよね……」
「あ、い、う、え、お、おおお……!?」
ククク……情報の津波に正気を失うがいい。
「息子……？」
そのワードに、クラスメイト……特に女子が食いついた。いいぞいいぞ。徒党を組んだ女子の圧力はヤバい。
――っていうか、徒党を組んだ女子なんて、死んでも敵にしたくないわ。あいつら、ちょっとしたヤンキーより厄介だし。そこに武力が加わるウチ（アースラ組）の女所帯の恐ろしさたるや……
「そうそう、俺の息子。昨日産まれたんだよー。写真見る？」
キャー、と歓声を上げ、あっくんを力士ばりに押しのけ、人の輪が

出来上がる。
好奇心からか、男子もちらほらとその輪に混ざってくる。いい傾向だ。
――――キーン、コーン、カーン、コーン……
「奥さんってどんな人!?」
そして、当然来ると思っていた質問が来た。写真を一枚スクロールすると、我ながら最高の出来であろう一枚……笑顔で慈樹を腕に抱くなのは……の写真が表示される。
「わぁ……綺麗なひと……!」
そうだろう、そうだろう。真顔が怖いだけで、笑うと普通に可愛いんだ。
「……でも、どこかで見たような」「……目の傷とか」「……この茶髪」
……まぁ、気付くよな。
「「「「「「『例のあの人』じゃん!?」」」」」」」
「そう……『例のあの人』こと、吾妻なのはこそ、俺の嫁なのだ」
ほぇー……と、感嘆の声を上げるクラスメイトたち。
「そ、そんなことって……」「……どうやって落としたん?」「すげぇ甲斐性……」「あなたは神か」
神様なんだよなぁ、これが。
渡した携帯電話の画面を好き勝手にスクロールして、あーだこーだと和気あいあいとする面子。
「いやぁ、楽しそうですねぇ」
担任の先生までもが、その輪に加わり……。あっ。そういえばさっき予鈴……
「――――着席」「「「「ハイ……」」」」」
……今朝のホームルームは、長いお説教から始まった。
纏まりつつあるクラス。だが、あっくんを始めとする半グレたちが、今度は逆に孤立を始めていた。
さて、俺は早く帰りたいわけなんだが……
「あっくん、呼んだー?」

「友情かよ!!」
ヤンキーの群れと校舎裏の親和性よ。
あっくんをはじめとする他クラスのヤンキーたちが集っていた。単にだらしなく着崩したのとか、下に変な柄シャツを着ているのとか、制服の裏地に特権階級の紫を縫い付けているやつとか、髪の毛の濃淡で模様を描いたやつとかギャル男ヘアーとか……ヤンキーの見本市かここは。
「つか、誰があっくんだ！」「あっくんじゃん」「あっくんじゃなかったら誰だよお前」「ってか、本名なんだっけ？」
あぁ、味方から壮絶に突っ込まれてる……
「ここにいるのはなぁ……みんなオレのダチだ」
ほほう。
「えっ、そうだったの……？」「さぁ……？」「おれ帰っていい？　そらジロー見たいんだけど」
……あっくん……そらジロー以下。
「憐れみの目で見てんじゃねーよ!?　おい、本田！　ホンジュラス本田！　来い！」
（ホンジュラス本田!?）
と、集団の奥から、ひときわ大きな……いや、何コイツ。
「Ｏｈ……あっくんサン……」
……ハリウッドばりのガチムチ黒人じゃねーか。ちょっとカッコいいし。筋肉でブレザーがやべぇ。
「へへへ、吾妻よぉ……このホンジュラス本田はなぁ、オレらの収容されていた児童養護施設にて最恐の男よ……！　投げ飛ばしたクソ職員は数知れず、女だろうと顔面をパンチ一発で叩き割るモンスターだぜ……！」
ん？　いま、なんかすっごく気になるワードが。
「やれ、本田ァ！」
「ａｈ……ｈｕｍｍ……」
やるのかホンジュラス本田。妙にやる気が無いというか、戸惑っている感じがするのだが。

「あっくんサン……ボウリョクは、Ｎｏ、デスよ」
「……は？」
　まさかの説得フェイズ。ぽかん、とするあっくんに、ホンジュラス本田は２メートルの背丈を屈めるように縮める。
「ワタシ、ｇｒａｎｄｐａ……サトオヤ、の、オジイチャン、に、オソワリ、まシた。ボウリョク、は、ｍｏｒｅ、おおキな、ボウリョクのまえに、いつかは、ｅｎｄだと。Ｒｅａｌｌｙ　ワタシ、オジイチャン、に、ｋｎｏｃｋ　ｏｕｔ　、されマシタ。Ｂｕｔ　、でも、オジイチャンは、ｓａｙ、……『その大きなｐｏｗｅｒで、誰かを助けられたなら、それは、きっとｖｅｒｙ　ｎｉｃｅなことだ』。オジイチャン、ソウいいマシタ。ワタシ、ダレかにｌｏｓｅしたのも、ｃｒｙ、したのも、ハジメテ、だったネ。ワタシ、ｃｈｉｃｋｅｎ　な、ｓｍａｌｌな、チッポケ、な、ｂｏｙ、だったネ」
　大きな手で、呆けるあっくん肩を掴む。
「だから、ワタシ、もうボウリョク、は、しまセン……ｍｏｎｓｔｅｒ、には、なりマセン。このｓｃｈｏｏｌで、ｂｉｇ　ｈｕｍａｎ……デッカイ、オトコになるネ。ゴメンなさい、ｓｏｒｒｙね、あっくんサン」
　な、なんて人間の出来た、いい奴なんだ……！
「ホンジュラス……!!」「すげぇよ、ホンジュラス……!!」
　半グレ連中は涙ぐんでいた。
「こんないい奴を喧嘩に駆り出そうなんて……！」「あっくんは鬼や！」「徒党を組むなんて、男らしくも無い!!」「それでも人間か！」「自分で戦え、このザボエラ！」「やーい、あっくんのザボエラー！」「超魔ゾンビー!!」
　ヤンキー人道を説く。ザボエラ呼ばわりされたあっくんは、今や半グレの中でまで孤立しつつあった。
　……さすがに哀れになってきた。
「あぁあークソッ！　わかった！　わかったよ！　勝負してやらぁ!!
　あとザボエラっつったやつ、後でぶん殴るからな!!」
　すっかりヤケクソになったあっくん。さて、勝負とは言うが……も

う喧嘩をするような雰囲気でも無い。ここは乗ってやろう。
「できればこの勝負はしたくなかった……！　お前が……お前が悪いんだ……!!」
「なっ……！　あっくん……まさか……!?」「ウソだろオイ……アレをやるってのか……？」「死人が出るぞ……!!」「あ、あっくんサン……！　ヤケになっては、ｎｏデスよ……！」
　周囲の半グレたちが慄きはじめる。いったい、どんな恐ろしい勝負を持ちかけようとしているんだ……。
「オレと……『施設暮らしあるある』で勝負だオラァアアアア!!」
……、
……、
……、
……。
「フッ……この俺に、その題目で勝負を挑む奴が居ようとは」
　ばさっ、とブレザーを脱ぐ。あっくんも同じく脱ぐ。
「私営児童養護施設『なかよしの家』出身、綾小路彦摩呂だ！」
　すげぇ名前してんな、あっくん!?
「よっ、綾小路!!」「没落公家!!」「ＦＸで家溶かした貴族！」「お前のカーチャン十二単！」
　なるほど、公家か。そして最後のやつ、お前ぜったい、あっくんのこと嫌いだろ。なにはともあれ、名乗りフェイズらしい。あまり思い出したくも無いが……
「社会福祉法人『逢瀬櫃』出身、吾妻秀人だ」
　ザワッ……！　と、俺の名乗りを聞いた半グレたちにざわめきが走る。
「あ、逢瀬櫃、だと……!?」「あの伝説の……！」「おれらへの最終宣告、『悪い子は逢瀬櫃に送るよ』の、あの!?」「公務員でさえ逢瀬櫃にだけは子供を紹介しないで済むよう必死で働くという……！」「公務員ＯＢが、天下りをも拒否した……」「代議士と組んで、大規模な児童搾取を行っていた臓器カルテル……」「併設された医療施設から、不自然なカルテが山のように発見され……！」「跡地に慰霊鎮魂の碑が建

立されたという……!?」「救出された児童たちが『生存者』と報道されたほどの、あの魔窟……!?」
……えぇ、そうだったの？
……まぁ俺、隔離されてたし、知らなかっただけでそういうことがあっても不思議ではない場所ではあった。たまに人、不自然に居なくなってたし。
「さぁ……始めようか」
「クッ……！　い、いいだろう。だが先攻は貰う！」
すーはー、と呼吸を整えるあっくん。そして、第一声は……
『力こそ全てであると入所初日で思い知らされる』
「「「「あるある」」」」
うむ……基本だな。では俺から。
『女子は職員に取り入るのが上手』
「「「「あるある」」」」
……やはりどこも同じか。
『暴力は痣で職員にバレないように腹パンが中心』
「「「「あるある」」」」
『おかずは奪い合い……だが不文律として主食は奪わない』
「「「「あるある」」」」
『面会で呼び出されたヤツは勝ち組にして裏切り者』
「「「「……あるある」」」」
『恐怖の反省室（もしくは面談室）』『その実態は拷問部屋』
「「「「……ある」」」」「うビャぁぁぁぁぁぁぁごめんなさい！　ごめんなさいぃぃぃぃぃー　先生、エンピツは、エンピツだけはぁぁぁぁぁぁ！ＨＢ!?　ＨＢなんですかぁぁぁぁぁ!?」
一人脱落した。鉛筆を指の間に挟んで強く締められでもしたのか。アレ慣れないと痛いんだよなぁ……
『汁ものはおかわり自由（おかわりできるとは言ってない）』
「「「「ある……ある」」」」
『なのに食べ過ぎと怒られる』
「「ある!!　めっちゃある!!」」「しくしく……お腹が空いたよぉ……

田中くん、ボクのおかず返して……！」「あぁ、甘シャリだけは、甘シャリだけは取らないでぇ……！　きょうはボクのお誕生日なのぉ……!!」

……どうしてもメシ系の話題が多くなるが、仕方ないだろう。ああいった環境での人間同士の交流なんて、ほぼ勢力争いか喧嘩かイジメかマウントの取り合いになるし。

『施設育ちあるある』。それは、互いのトラウマを抉り合う誰も得をしない恐怖の泥仕合のことである。

続々と撃沈していく半グレたち。あっくんは意外なほどの根性を見せてはいるが……顔面蒼白だ。

「はぁ、はぁ……『冷暖房費ケチって夏暑く冬寒い』」「『でも職員室は冬ヌクヌクで夏キンキン』」「『たまにいい職員もいるけどだいたい辞める』」「『もしくは死んだ目をしているの二択』」「『女が施設長のところは地雷施設』」『代々おさがりされるランドセルに歴史がありすぎる』」「『ジャンプが古い』」「『もしくは歯抜けでしか無い』」「『単行本の表紙が無い』」「『シャープペンシルが伝説のアイテム扱い』」「『欲しい文房具第一位がギミック付き筆箱』」「『学校では浮く』」

……中には俺の知らない情報もあるが、そういうもんなのか。

「『たまに本当に死人が出る』」

「「いや、出ねぇから!!　お前んとこだけだから！」」

えぇ……あるあるじゃん。

「『……ある日、どこかへ連行されていく子供』『先生は「里親に引き取られた」と言うが絶対ウソ』『夜な夜な隣の白い建物から居なくなった子の泣き声が』」

「やっ……やめろォ!!　きっとその子は優しい里親の下で今も幸せに暮らしてんだぁーー!!」

チッ。仕損じたか。

「『ある日、突然外に放り出される』」

「……」

「『理由はカンタン。よりオイシイ条件の子供が入ってきたから』」

「……」

「『その後に待っているのはたらい回し、のち寮付きのタコ部屋』」
「……うっ」
「『そこでも待っているのは、より激しい搾取』」
「うわぁあああああああ!!」
「『やがて、あれほど嫌だった施設に帰りたくなる。だが帰れない』」
「……ごふぅ」
　あっくんを残し、全滅したようだ。
「『そして、ある日、同郷もしくは同族と社会で再会する』」
「……おぅ」
「『不思議と親近感を覚える』」
「……っ、おぅっ……!」
　だよなぁ……。臭いメシを食った者どうしだもんなぁ……。よし。
「あっくん……!」
「吾妻……!」
　ガシッ、と熱く肩を組む。
「あっくん、フォーゼのアレやろうぜ」
「おう!」
　ガシピシグッグッ……と、いつの間にか復活していた奴らも感涙せんばかりに光景を見守っていた。
「俺たち……」「……もう、ダチだぜ!!」
　――うぉおおおおおおおおお!!!!!!
　謎の感動が広がっていく。
「おっし、ラーメン食いに行くぞ!」
「オレこの辺のラーメン屋詳しいんだぜ!」
　晴れ晴れした表情でラーメン屋へドヤドヤと向かう半グレもとい友人たち。
「そうそう、ＢＯＯＫ〇（ピー）ＦＦで全巻安売りしてるシリーズしか置いてないんだよな!」「一番新しいのがＮＡＲＵＴＯだし」「スポーツマンガってあんま人気無くってさぁ」「聖闘士星矢、ダイ大、あとは何故か手塚治虫」「あったあった!」「ゲームは無い。なぜなら……」「「「管理が面倒だから」」」「だよなー!」「テレビのチャンネル争いは意外と

起きなかったなぁ」「みんな観たいモン決まってたし」「ライダー」「戦隊」「プリキュア」「「「えっ……？」」」「……ゴホン。女子が、見たいって意味だぞ？」「「「……」」」

……ナニ自爆してんだこいつ。

「ここ！　ここなんだよ！　ワンコインでライス大盛りまで付いてくるんだぜ！　餃子も安くて１０個も食えるんだ！」

おぉ……ここは……そう。カントクたち会社連中の行きつけじゃないか。安い多い美味いの三拍子が揃った男子の味方。でも、実際来るのは久しぶりだなぁ。

「んでよぉ、卓上の漬物がまた美味くて、」

ガラッ、と引き戸を開け。

「……」

ピシャッ、と閉じた。どした？

「……なんかヤベー人いる」

「おいおい、人を見かけで判断するもんじゃないぞ」

どれどれ、と引き戸を開ける。

……奈々がいた。

相変わらずケバいを通り越してヤバいファッションだ。もう、店内の照明をギラギラ反射してミラーボールの様相。うむ、確かにヤバい人だな。帰ろう。

「……待ちなヨぉ、秀人ぉ……」

見つかった。コツコツ、と隣の席を指で突く奈々に、渋々、その隣に腰を下ろす。

「うっわ、酒くさ……！　さては相当飲んでるだろ……！」

どうせ隠し事なんて出来ない相手だ。もう思ったこと言ってしまえ。

「ヘッ……奈々ちゃんはとっくに成人、いまアラサーだヨ……呑んでナニが悪い……おぅ、オメーは随分とセイシュンを謳歌してるじゃねーか、我が弟分ヨォ……」

しかもコイツ、めっちゃ絡み酒！

「……あ」

さては、爺さんの曾孫とかいうあのハリーのことだな？　あの爺さんに明確な『血縁者』が現れたから、自分の居場所が心配になってるんだろう。
「大当たりだヨこんちくしょう!!」
ゴンッ、とジョッキを置く。
「オヤジィ、生、……じゃなくて紹興酒……ジョッキに注いで……へへ……カネならあるんや……今日、オトナのお馬さんレースで勝っちゃったからネ……もちろん未来予知を使ったヨ……？　クニにとられた税金を還付してもらっただけだヨ……？　悪い？」
なんてダメな大人なんだ……
あっくんたち一同を手で招く。放っておけば噛み付いては来ないから大丈夫だぞ。ちょっと心の中を覗かれて人に言えない性癖を暴露されるくらいだ。
「……兄貴、なんスかソイツ……」
「ええっと……」
真性の『魔法使い』……なんだけど。表向きは行商人……じゃない。店を構えて……あっ、潰れたから……今は。
「……同じアパートに住んでいる無職でプーでＮＥＥＴな自称・家事手伝いのお姉さんだ」
「ダメ人間じゃないっスか……」「あぁアアアンッ!?」
うわぁ、出た。酔ってるくせに変なところで敏感な面倒な酔っ払い！　ハヤシの顔面をギンギラの爪でアイアンクロー！　ハヤシィー!!
「コソコソとスーツに着替えて本屋でエロ本買ってるガキに言われたか無いヨ!!　ＯＬパンスト脚フェチってかぁ!?　ほほーう、ＯＬがバニースーツでナニする企画ものでヨンキュッパかい！　奮発したネぇ！」「ぎゃあああああああなぜ知っているぅうううう!!?」
ハヤシィー!!　安心しろ、そのくらい男なら普通……。普通、だ!!
「止めろ奈々！　男子の秘めたる純情を暴くんじゃない!!」
奈々を羽交い絞めにして引き剥がす！
「うるさいうるさいー!!　どーぜＮＥＥＴでプーな奈々ちゃんは、本

物の孫が訪ねてきたお爺ちゃんに捨てられちゃうんだぁー！」
カウンターに突っ伏し、オイオイと泣き始めちまった……
「ｏｈ…オネエサン、ｃｒｙしてるネ……」
ホンジュラスが眉根を寄せ、恐る恐る、その傍に寄る。
「ｈｅｙ、オネエサン……ホンモノって、ナニ、デスか……？」
「ふえぇ……？　そりゃあ、血縁があって……赤ん坊のころから知ってて……」
「ワタシのオジイチャン、サトオヤね。でも、いっぱい、ｉｍｐｏｒｔａｎｔ、なコト、オソワタよ。ワタシ、オジイチャン、ダイスキ……それでも、オジイチャン、ニセモノ？」
「ソッチの事情なんて分からないヨーだ！　ばーかばーかうんこー！」
これがアラサーの語彙である。悲しくなる……が、うんこと罵られて尚、ホンジュラスは切々と話す。
「ワタシも、オネエサンこと、ワカラナイね。デモ、分かるヨ。オネエサンも、オジイチャンのこと、ダイスキね。……それは、オジイチャンが、あなたのこと、ダイスキだから、ネ。ダイスキに、ｒａｎｋｉｎｇも、ホノモノも、ニセモノも、ｎｏｔｈｉｎｇ、デス、よ」
ホンジュラス……お前、菩薩の化身か何かなのか……？
「……」
いつもは人を食ったような態度ばかりの奈々だが……というかはやてにも言えることだが、必ず心に予防線を張ってからコミュニケーションを始めるようなやつは、こういう、ストレートに言葉を投げてくるやつに弱い。
黙りこくってしまう奈々。ホンジュラスはあっくんたちを手で招く。
「ミンナで、ラーメン、たべマショウ。オイシイもの、たべる。オナカイパイ。それ、ｖｅｒｙ　ｈａｐｐｙネ。ｂａｄなコト、なくなるヨ」
……菩薩の化身どころか菩薩そのものだった。
奈々がアウシュビッツ脱走者であることを明かすと、周りは奈々を、まるで英雄か何かでも見るかのように態度を一変させた。という

か、気付く奴は気付くのだが、奈々は結構な美人さんなのだ。メイクとファッションが諸事情からヤバいだけで。男とは現金なものである。全員、大なり小なり同じ境遇であると知った奈々は、少しだけ心を開いたようだった。

ズルズルと、意外なほど器用に箸でラーメンを啜るホンジュラスが、不思議そうな顔で聞いてきた。

「ａｈ…ヒ、ｄｅ、ト、サン」

あー……『た行』の発音って、英語圏の人には鬼門だって言うからな。好きに呼んでいいぞ。

「アニキ＝サン。『ウンコ』って、なんデスか？」

……気づいてなかっただけかよ！

「……英語で言うと、『ｈｏｌｙ　ｓｈｉｔ』とか『ｓｕｎ　ｏｆ　ａ　ｂｉｔｃｈ』とか『ｍｏｔｈｅｒ　ｆｕｃｋｅｒ』とか、……とにかく、言っちゃいけない類の汚いスラングだよ」

「ワタシ、あのオネエサンのｈｅａｄをｃｒａｓｈさせてくるネ。Ｗａｔｅｒｍｅｌｏｎのようにネ。いまダケｍｅはｍｏｎｓｔｅｒネ！」

菩薩が修羅に変わった瞬間だった。

……大暴れを始めたホンジュラスの鎮圧は、本当に……ホント～～～～に、大変だった。

あわや出禁を喰らうかという段階だったが……全員で店内清掃と皿洗いをすることで、どうにか許して頂いた。

「あーーーーーーーーー……疲れた……」

「飲んだ飲んだヨー」

へべれけになった奈々の手を引き、とりあえずアパートへ帰る道すがら。

「お前、後でちゃんとホンジュラスに謝っておけよ」

「わぁかってるヨー……」

げふー、とアルコールくさいゲップをするデリカシーの欠片も無い

アラサー。
「ホンモノー、ニセモノー……ホンモノー、ニセモノー……」
変な調子で変な歌を歌いながら、へらへらと笑っている。
「あぁ、いいお酒だった」
すっと真顔に戻る。……そうだよな。酩酊くらい、お前ならコントロールできるよな。
「お礼に教えてあげる、秀人。」
ぴたっ、と俺の胸元に人差し指を突きつける。
「――――あなたを狙う者がいる。因果でも怨恨でもなく、ただあなたとの戦いを望む者がいる。それはあなたの顔見知りで、よく知っている顔で、……未だ果たされていない約束を、果たそうとしている」
預言か、予言か。敵の来襲には、注意をしておこう。気の弛みが……そう、あの日……闇の書事件の始まりの日のような惨事を招くことも……。あれ？　何か、忘れているような
「――気を付けなさい。秀人。」
思考を断ち切られる。
「――――女がらみで、あなたは永遠に苦労する運命にあるのよ」

……えっ？

その数週間後、俺は……その言葉の意味を、身を以て知ることになる。

# ｖｉｖｉｄ編　１３話『男の戦い』

――――ブラとパンツの仁義なき戦い

◆▪◆　◆　◆

さて、一難去って、いつもの日常である。
校庭のベンチの一角にて、俺、あっくん、ホンジュラスの三人で掛け、昼食を食べていた。クラスの半グレもとい仲間たちは、向こうでドッヂボールに興じていた。……ドッヂボールをするヤンキー。実に牧歌的な光景である。
「食ったら俺たちも入ろうぜ」
メニューはというと、奇跡的に全員、まさかの塩むすびだった。
……いや、質素すぎると侮ってもらっては困る。
「兄貴、タクアンちょーだい」
「んじゃワサビ漬と交換な」
「ｏｈ，アニキサン、ｍｅのピクルスもｓｕｒｅデスよ」
三者三様、漬物を持参である。漬物が入るだけで、おむすびは途端にちょっとワクワクするランチに早変わりをするのだ。ぼりぼりむしゃむしゃ。
「つーか兄貴、なんで『おにぎり』じゃなくて、いつも『おむすび』って言うの？」
「……どっちモｒｉｃｅ　ｂａｌｌネ？」
ひょい、と持ち上げて見せるホンジュラスのは、まんまボールだよな……何合あんの、それ。ピクルスも丸かじりで、さすがアメリカン。
「あー……昔の知り合いが、変に拘るやつでさ」
誰かと言うと、オウル隊長なのだが。
「『鬼を斬るとは喧嘩を売っているのか貴様』ってマジギレされるから、なし崩しでな。うっかり言ってマジで殴られたこともあるし」
死ぬかと思ったよ。

「えー、んじゃ節分も端午の節句もナシ？」
　腐っても名家の出身だけあって、年中行事には明るいあっくん。
「ナシだ、ナシ。そのくせ話に聞いただけの恵方巻きはゴージャスに、と強要するんだ、あの女どもは……」
　あんな環境でそれなりのものを作って見せた俺の主夫力を褒めてほしい。「鬼は外―」って大豆っぽい豆を冗談で投げたら、涙目のオウルに金棒を片手に半日は殺人チェイスされたがな。アレはヤバかった。
「……女『ども』？」
　……なに、あっくん。そこ食いついちゃうの？
「兄貴ってさー、何だかんだでモテるよなぁ」
「んなこたぁ、」
　……マジ押し通されて最後まで行っちゃったのが一人（はやて）、好きだと伝えられたのが一人（フェイト）、爛れた関係だったのが一人（カレン）、寸前まで行ったのが一人（オウル）、……カントクに再会するまでの放浪時代に一時的に関係していた人たちが、ひぃ、ふぅ、みぃ……
「……ナイヨ？　ボク、オ嫁サン一筋ダヨ？」
「爆ぜろ」
「ＨＡＨＡＨＡ、ソレ、ジゴロっていうネ、アニキ」
「誰がジゴロだ、誰が!?」
　最近は女性問題で頭を悩ませているっていうのに……あっ、自業自得だった。
「くっ、何も言い返せない……！　こうなったら……！」
　食事を終え、貸し出し用ボール籠から、一回り大きいブツを取り出す。
「あれ、バスケ？」
　きょとん、と無垢な顔で聞くが……ククク。甘いわ。
「さぁ……ドッヂボールを始めようじゃないか……!!」
「さ、殺人ドッヂ、だと……!?」
「ｏｈ，知っているのデスか、あっくんサン」
　殺人ドッヂ。実に簡単なものだ。特殊ルールは何も無し。ただ

……ボールがバスケットボールになる、というだけだ。そう、それだけなのだ。
「やめろ兄貴！　それは、それだけは……！　職員会議モノだぞ！」
「これを、俺や、ホンジュラスが、他人に向けて投げる――マジで。……その意味が、分かるな？」
青ざめるあっくん。不穏な空気を察して固まるクラスメイトたち。
「ぐへへへへ、おーいみんなー、ドッヂボールいーれーてー!!」
「「「「ぎゃあああああああああああああ!!」」」」
蜘蛛の子を散らすように逃げだす。が。
――ばちーん！
「イヤー!!」「グワー!!」「か、壁！　見えない壁が！」
簡単な結界で逃げ場を塞ぐ。素晴らしき力の無駄遣いである。
「……知らなかったのか？」
男の子が、一度は言ってみたいランキングで上位入賞のあの台詞。
「――大魔王からは逃げられない」

……いやぁ、いい汗をかいた。
「ぐぉぉ……！　８対１でなぜ負ける……!!」
「最後の方はボール三つで狙っていたのにぃ……！」
ヤンキーなぞに後れを取る俺ではないわフハハハハ！　と、ひとしきり悪党ムーヴを楽しみ、結界を解除しようとした。この結界は、ルールの中で俺を倒すか、もしくは俺が解除しなければ出られない。
「よっ、秀人」
背後からの、聞き覚えがある声。
「あ、」
この声は、と、記憶と現実がリンクし、人物名が出る。振りかえる。
瞬間。
「お前を殺す」
切っ先。長剣。片刃。紫紺の炎。「シグ、」

――――ガギィイインッ!!!

「な、ム……!!」

両手の甲に発生させたシールドで、魔剣を挟み止める！

「……仕留めそこなったか」

悪びれるでもなく、あっけらかんとした様子で佇むのは、……見間違いでも、偽物でもない。

「っ、……どういうつもりだ!!　シグナムッ!!」

剣を振り払う。シグナムは、拳の間合いの外まで跳ぶ。

ひさびさに顔を見せたと思ったら、いきなり『殺す』ときた。理由の一つでも聞かねば意味が分からない。

「……どうということはない。思えば、お前とは、決闘で雌雄を決したことが一度も無かったからな。……約束もある」

約束ぅ……？　……あっ。

――――『今度また、サシでやろうぜ』

「あーーーーーーーー!!!!!」

言ってるわーーー!!!!　俺、めちゃ言ってるわー!!　奈々の言ってた『約束』って、このことだわー!!

「あ、兄貴……!?」

あっくん達が、茫然としている。あ、居るの忘れてた。

「まぁ、アレだ。とりあえず下がっとけ。巻き込まれるから」

あの事変の直後、ある程度の非日常への耐性は付いていたのだろう。まるでおまわりから逃げる町のヤンキーのように、ソソクサと脱出していく。……のだが。

「兄貴――！　壁――!!　出られないー!!」

あ、忘れてた。すぐ解除「をぉおおおおっとぉ!?」

――――ジャギィッ!!

あっぶね……!!!!　首が飛ぶところだった……!!

「おい、あいつら民間人だぞ!!」

「それが？」
「それが、って、お前……」
「結界を解除するための隙が産まれるのなら、居てもらう方が都合が良いではないか」
……。こいつ。本気だ。今の一閃。避けていなければ、本当に首を落とされていた。背後からの不意打ち。「最低限、声は掛けた」とかいう言い訳だけをしての顔面狙い。日常への侵攻。本気で、俺を殺りに来ている。
「なぁ、シグナム……」
身体をリラックスさせる。会話をしよう、というポーズだ。
「俺はもう、戦いから離れてから長い」
「あぁ。分かっている」
「アイも、レイジングハートも、ヴィヴィオのお目付け役のために今は遠く、新世界にいる」
「あぁ、知っている」
「結界は俺の魔力で維持されている上、中には複数の民間人。解除プロセスを行うだけの時間は、」「当然、与えるつもりは無い」「だよなぁ」
その上、コイツの格好と来たら。
「……その甲冑、新造だろ？　それも、マリエルあたりの謹製」
「そうだ。研究に協力をした報酬に、拵えさせた」
魔剣も当然、同様にアップデート済み。なにせ、あのマリエルのことだ。手抜きなしに、いま持てる全ての先鋭技術をつぎ込んだんだろう。俺には未知のシステムが組み込まれていても不思議ではない。
つまり俺は、ろくすっぽ準備も無しに、ハンデまで背負って、オーバーSランクの、完全武装のベルカ騎士を相手にしなければならない訳だ。
「……なぁ、シグナム。思い直したらどうだ？」
そう。こんな。
相手が完全武装でこちらは丸腰。
多くの民間人を庇いながら、生命に考慮しながらの戦闘。
こちらを徹底的に研究し尽くしてきた凄腕の猛者を相手に。

「なぁ、シグナム。」
　こんなのは、不公平が過ぎる。そう……
「――『ハンデがそれだけなんてズルい』って、敗けて泣くのはお前なんだぞ？」
　ハンデが無さすぎるではないか。
「秀人オオオオオオオオオオオオオオオオオーーーーーーーッ!!!」
「何か用かイケメン騎士さまがぁあああああああーーーーーーッ!!!」
　ご挨拶とばかりの、大上段!!　安全靴の鋼材を強化し、蹴りを合わせる！
　――ガッキィイイイイイインッ!!!
　か、硬ってぇえええええ!!　そして、重い!!
「ぐ、ぬ、……おらぁあああああっ!!」
　インパクトを放つ。しかし……
「そう来るのは、分かっていた!!」
　バシュウッ……と、衝撃波が、シグナムの甲冑を、『素通り』していく!!　徹底的な対『俺』装備か!!　……ってことは、俺、体術縛りで戦わなきゃならんのか、コイツと！　上等じゃねぇか!!
「とりあえず、その甲冑をオフセット衝突試験してやらぁ!!」
　足元に転がってきたバスケットボールを、魔力で強化し蹴り飛ばす!!
　避ける、受ける、斬る、……斬った。
　――ボゴォオオンッ!!
　炸裂弾。インパクトの応用だ。衝撃波ではなく、副時差用の爆音で敵を昏倒させる。相当な至近距離で受けた。立ち込める土煙。
　ざりっ。
　……健在か。だよなぁ。
「お前を……倒す」
　歩み出てきたシグナムは……目元以外が完全に隠れる兜までを装着した、フルアーマー状態となっていた。衝撃やら爆音やらに反応し

て、不要な部分を遮断してくれるとかいう機能だろう。果たして、魔法そのものに反応しているのか、俺の魔力に反応しているのか、もしくは、その両方か。ただ、現時点で言えることは。

「こちらの魔法はだいたい効かず、そちらは使い放題ってことぐらいだな……」

――ジャキィンッ……

弓に矢を番える。背後のあいつらに考慮しなきゃならないから、自然と移動先は限られる。そして、それを見逃すような節穴の目ではないだろう。手は一つ。鏃に触れず、矢を掴み取る。いち、に、の、……！

――ギュバァァァァァァッ!!!

って、こっち待たずに撃ちやがったぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?!!

「見境ナシかテメェはぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」

あぁクソッ、嫌でも前に出なきゃ背後のあっくん達が余波で死ぬ!!

――バチィィィィンッ!!

ど、どうにかキャッチ成功！　ほとんど音速だったじゃねぇか!!

矢は暴れ鳥のように、俺の手の中で推進し続ける！

「返す、ぜっ!!」

勢いのまま、投げ返す!!

「ぬぅウウウウウウんっ!!!」

――ドォオオンッ!!

弓で、矢を叩き落したか。

「オラッ、お望みのクロスレンジだぜぇっ!!」

だったらこちらも、弓を剣に戻す猶予なんて与えない！　拳を振り上げ……!!

――ジャキィッ……!!

……鎧の装甲が一部を展開。猛烈に嫌な予感。そして……

――ズパァンッ!!!

ニードルが、炸裂音とともに発射される。射線上には、俺の眼球!!!

あ、っぶ、「ねぇだろォがよおおおおおおぉぉぉぉぉぉっ!!」

――ガチィィィィンッ!!!

デコで受ける！　そのまま胴体に膝蹴りをブチこむっ!!
――ガシィイイイイッ……!!
……！　今度は，腹部の装甲が開いた。ギザギザに開いた装甲は、まさに牙で、
「いいいいってぇぇぇぇぇぇ!!!!」
魔力防御を突き抜け、俺の足へ牙を突き立てた!!
「ンの、やろぉおおおおおおっ!!」
舐めんじゃねぇ！
「うぉっ……!?　こ、こいつ、この足でっ!!」
ハイパーアーマー持ちはなぁ、打撃には強くても、投げ技が効くんだよ!!　牙ごと、足でカニ鋏みにしてブン投げる!!
――ダァアアンッ!!
寸前に受け身を取りやがったか。しかも、投げられている最中から、弓を引き絞っていやがった!!
――ジュウッ!!
頬を矢が焼く。だが、
「ハズレだなぁ!!」
校庭と打撃でサンドイッチにしてくれる!!
――ずしゃぁあああああっ!!
くそっ、避けやがったか！　苦し紛れのように、矢を二本、俺の体の両脇を通るように……って、ヤバい!!
「ワイヤーかっ!!」
矢と矢の間をワイヤーで橋渡しにしている！　屈む、跳ぶ、飛ぶ……、
「――詰めるッ!!」
――ビシィイイッ!!
ワイヤーの中央を、魔力で覆った腕で受ける!!　慣性のまま、矢は、くるりと方向を変え……このまま、さっきみたいに持ち主のもとに投げ返してやる!!
――……イィイイイイイインッ!!
……マズいッ！　さっきの矢!!　直上へ射ったのは、上空で百八十

度回転し、俺の頭上へ落とすためか!!　そうこうしているうちに、シグナムは弓に矢を番えている！　そうか……こうして、俺を矢の包囲陣で囲うために……!!
「しゃらくさいわァッ!!」
――ドパァァァァンッ!!!
インパクトで地面を掘り返し、背後からの矢避けに！　脳天目掛けた一矢を、またまたデコで受けて、反らして……直上の矢と衝突させる！
「くっ……!!　滅茶苦茶なクセになんと器用な……!!」
抜刀した魔剣で、胴薙ぎ！　剣の弱点、横っ腹を、膝と肘で挟み潰す!!
――ボギンッ!!!
よし、折った！　くるくると舞う折れた刀身を、空中キャッチし……！
「返すっ!!」
たぶん、鎧のコアであろう部分に当てずっぽうで突き刺す！　当然ハズレだが、今度は弾かれることなく、刀身が鎧に突き刺さった。
「頭も、働くっ……!!」
どうした。せいぜい肉を抉った程度だろう。これからだ。まだようやく、体が温まってきた程度のはずだ。
――ドズゥッ……!!
「ぐ、……!!　打撃が、通っただと……!!」
浸透頸。打撃のインパクトを一瞬ではなく、長い波長で送り込むことで、内部までダメージを行き渡らせる……『遅い打撃』の奥義だ。
「なにが、ブランクだ！　現役のままではないかっ!!」
「脳内妄想（イメージトレーニング）は、男の子の嗜みだろう？」
「お前のような男の子がいるか!!」
「そして、培った想像力は……こういうことが出来るようになる！」
――インパクトウォール。
だが、俺由来の魔法、副次作用までを無効化する、ＡＭＦ上位版。だ

が……空間振動までは、想定していまい。良かったよ。結界を解く間もなく攻めていてくれて。おかげで、この攻撃による影響が、少なくて済む。
「――インパクトウォール、プラス……ディメンジョンクエイカー！」
ぐにゃりと、シグナムの周囲の空間が、歪む。歪んで、撓んで……戻る。
――グシャッ……
紙を丸め潰すような音とともに、シグナムの身体が捻じれる。
「ぐがぁあああっ……!!!」
あの鎧に感謝だ。マリーの作る逸品だ。神の攻撃の一発や二発で、機能を失うほどヤワでもないだろう。おかげで、シグナムを殺さずに済んだ。
「ま……負けぬっ!! 負けられんのだ、オレはッ!!」
どう見ても折れている手足を、精神力で立たせる。確かに、負けられない戦いというものは存在する。しかし、いまこの時間が、ソレだとは到底思えない。
「何を使ってでも……どんな手を使ってでも、俺は、お前に勝たなければならんのだッ!!」
鎧の胸部が展開する。そこに収められていたのは……
「あっ、それ、俺の……!!」
文字通りの黒歴史。ナンバーズたちに供与していた、黒炎のランタン！
――ボォウッ……!!
黒い炎が全身を包み……あとは、見覚えのある現象だ。折れていたはずの手足、身体の損傷が回復……否、復元していく。
「これで……当面は、お前とイーブンだ、秀人！」
変なギミックは全部オマケで、本当の目的は、黒炎の運用ということか。
「なぁ……いい加減、理由を聞かせろよ」
「言えん」

そうか。
「なぁ、シグナム。イーブン、と言ったな」
「……」
確かに、そうかもしれない。もともと、技能面では俺とシグナムは互角に近かった。俺をシグナムの一歩先たらしめていたものは、頑強な肉体と、蒼炎の再生力。肉体性能を鎧で補い、蒼炎の亜種である黒炎を運用した今、シグナムの戦闘能力は、俺に匹敵しているのかもしれない。
「――――いつの俺と、イーブンのつもりだ？」
「……!?」
まぁ、確かに互角かもしれないな……当時の俺と。
――――ゴウッ……!!
蒼炎を体の表面に纏わせる。とりあえず、現在の最大量まで。
「お前の知っている俺は、『これ』だろう？」
「……」
ここへ、アイが加わることで、俺のスタイルが完成する。……今はいないから、まぁ完成度５０％といったところか。
「それじゃあ、始めるか」
「……。手加減のつもりか」
「あぁ、手加減だ。……本気を、出させてみろよ」
黒炎を纏った斬撃と、蒼炎を纏った拳が激突する！

◆・◆　◆　◆

その頃なのはは、昼休みを教室で過ごしていた。契約のもと、ハリーと相席し、大宮、中野、小山、更にはエルスも加わるという、なかなかのグループである。
……のだが。
「……」
我らがヒロインは、新刊本に夢中だった。なのはが本を読んでいるとき、それは二通りに分けられる。
一つは対人防御のため。

一つは、単純に物語に夢中になっているとき。
前者であれば、ハリーが無理やり本を引っぺがしてやるのだが……今回は後者のようだ。
半年ぶりのシリーズ最新刊。読まずにはいられない。朝っぱらから挨拶もそこそこに、授業の中休みなど、隙あらば読書をしているのである。
個人の楽しみまでを邪魔するつもりは無い一同は、控えめな声で会話をしているに留めていた。
良くも悪くも……というか、悪くも悪くも他人の注目を集めてしまうなのはは、『うわアイツ本読みながら笑ってるキッッッモ（笑）まじキッッッモ（笑）』と言われないよう、経験から身に着けたポーカーフェイスで、一定のペースでページを捲っている。
開けた窓からは心地の良い風が吹き込み、一房に束ねた髪を揺らす。
まるで一枚の絵画のように、静謐な光景だった。……そう、なのはは、黙ってさえいれば、口を開かなければ、残念な一面がバレなければ、かなり美人なのである。
ブックカバーで隠したタイトルが『どっこい原始人』というタイトルでさえ無ければ、尚良かったのだが……
（ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの両族の殲滅戦争は止めることができず、互いの最強の戦士たちの苦肉の策で、二人による決闘に委ねられたのか前巻ラスト。あれだけのヒキ展開から、まさかの冒頭３ページでの痛み分け。壁を挟んでの互いへの不干渉条約の締結という形で終わるのはあまりにも予想外だったわ。そして、壁をお構いなしに破壊する侵略者・ギガントピテクス族の登場で、一気に混迷の様相に。強大な敵が出現したことで、皮肉にも壁を越え、結束せざるを得なくなる両族。今度こそ並び立つ両族の最強戦士。これは熱い展開ね。そして全く先が読めない展開だわ。半年も待ったけど、待った甲斐があったわ）
意外と王道な作風が好みのようだった。
さて、昼休みは残り２０分ほど。じっくりと読み進めようとしてい

た。過去形である。
「なのはーーー!!」
……空いた窓の上……おそらく屋上から、綺麗な金色の髪の毛と、さかさまの顔がニョキッと生えてきた。フェイトだった。
「ギャアアアアろくろ首!!」「飛頭盤!!」「デュラハン!!」
ファンタジーに明るいクラスメイトたちだった。
「……」
なのはは、胡乱なものを見る目で、さかさまの金髪頭を見やる。
「あのね、あのね！　ヤバいことになりつつあるんだけど、ボクも無関係じゃないというかモロ当事者というかね、なんというか、まじめにやばいことになるんだよ、これ！　でも、ボクじゃどーにもならないっていうか、どーにかしようとするととっても大変というか、急いで伝えようとはしってきたんだけど、警備員に止められるし、逃げたらリアルＧＴＡになるし、こんなトコからアレなんだけど、ヤバいことになりそうっていうか、あああ、もう、もう……!!」「フェイトうるさい」
なのはは、無言で消しゴムを指先で弾き飛ばした。
「あっぶね！　……あっ」
あっぶね、の箇所で背筋力を生かし消しゴムを回避し、あっ、の箇所で、支えにしていたつま先が屋根の縁から外れた。結果。
「あーーーーーれぇーーーーーーーーーーーー!!!」
……フェイトは、きれいに一直線に落ちた。空中でチェーンバインドでキャッチし一本釣り。窓枠にお尻から着地させる。
「どわぁっ！　お、オシリうった……!!」
「……ふぅー。」
……なのはは、本に栞を挟み、『うーわ、コイツこんなキモい表紙の本読んでるんだけどー（笑）』という攻撃を受けないため、習慣的にポケットに仕舞った。
「……コレは？」
諦め気味のハリーが聞く。
「よく話しているでしょう。うちのフェイトよ。ほら、挨拶したら行

くわよ」
「あ、こんちわー……あー引っ張らないでぇー」
騒ぎにならないよう、手を引いて教室を出ていく。
――『例のあの人』が昼休みに訪ねてきた金髪の女子と出て行った
――『例のあの人』が昼休みに窓から飛び込んできた他校の金髪の女を連れ出した
――『例のあの人』が昼休みに襲い掛かってきた他校の金髪を連行していった
――『例のあの人』が他校のスケ番をシメに行った
恐ろしきかな伝言ゲーム。憶測が憶測を呼び、尾ひれ背びれロケットエンジンが装着され、彼方へと噂が飛躍していく……
「ンなワケねーだろ!!　アレはなのはの妹分だ!!」
ハリーが一喝。これも契約のうちである。そう。誤解とは、第三者が『それは違う』と早期に誤情報を否定することで、拡散は抑えられるものである。
――『例のあの人』がまた美少女をたらしこんでいる
……まぁ別の形で拡散するのだが。

「なに、ここ……」
「私の校内隠れ家よ」
廊下の吹き溜まり、教師でさえ思わず見逃してしまうような死角スポットでフェイトを問い正す。なぜこんな場所を知っているのかというと、復学直後から構内を徘徊し発見した、人呼んで『ぼっちスポット』のうち一つである。あとはボイラー室とか、校舎裏の体育倉庫とか、エレベーター点検室とか、プールサイドの小屋とか……
ぼっちは校内を徘徊する生物なのである。
「で、何よ、ヤバいことって。仕事はどうしたの？　まさかサボりじゃないでしょうね？」
「ちがうってばぁ!!」
未だにフェイトの保護者気分が抜けきらない。
「シグナムが、……ひでとをぶっころすって……なんかスゴい武器

もって出て行っちゃったんだ」
「……あー」
……しかし、意外なほどになのはは驚かない。むしろ、『ついにこの日が来たか』とでも言いそうな雰囲気である。
同時。校庭に何故か展開されていた秀人の結界が、異様な熱を帯び始める。
「あーやばいよー、やばいよー……!!」
「ついでに、慈樹の様子でも見に行こうかしらね。フェイトもたまには末っ子に会っていきなさい」
別棟の最上階が託児所で、校庭も見渡せる。のほほん、とした調子で、なのははフェイトの手を引いて歩きだすのだった。

◆▪◆　◆　◆

「……はぁ、はぁ……!!」
シグナムは、肩で息をすることを隠さなくなっていた。戦闘による消耗だけ、ではない。シグナムは、不眠不休で三日三晩どころか、七日七晩を継戦できる戦士だ。それが、ほんの一刻にも満たない打ち合いで、既に疲弊している。考えられる要因は……当然だが、あの鎧と、黒炎だ。
「……久々だよ、こんなにも力を出し続けたのは」
対する秀人は、余裕こそ消えつつあったが、まだまだ、余力を残している状態。本人たちにとっては、秀人は結界の維持と、民間人を守り続けながら戦うという二重のハンデを背負っておいて、こうである。
……シグナムは、決して弱くはない。
むしろ、多少は弱体化しているとはいえ、神と化した秀人を相手に、一対一の決闘で、ここまで保っていることのほうが、驚異的かつ、異常なのである。
「……退かぬ。決してな」
「……そうか」

秀人は、嘆息する。油断はしていない。まだ、何らかの奥の手を隠している可能性が高い。長引かせることは、不都合に繋がるかもしれない。故に。

――ゴォオオオオオオオッ……!!

凄まじい火炎が、渦を巻き、秀人の手の中に収束し……一つの存在を、形取る。

――ギュアアアアッ!!!

蒼炎の不死鳥。秀人の分身にして、秀人の本質に近いチカラ。

「では、幕引きだ」

万物を焼却し、滅する力。神の権能。

「お前風に、言うのならばっ……!!」

だが。

「――『この時を、待っていた』、だッ!!」

――グワァあああああッ!!

鎧が展開する。先ほどまで、あれほど繋ぐことに心血を注いでいた黒炎をあっさりと放棄する。そして……

――バぐンッ!!!

胸部の『牙』が、蒼炎を……!

「……吸収した」

秀人が、唖然と呟く。

「あぁ、そうだ、これが、狙いだ……!!」

――かつて。

秀人とはやてが、本気の勝負をしたとき。はやてのスレイプニルが、秀人の蒼炎を取り込むという予想外の事態が、発生したことがある。それはあくまで、『吸収された』というだけであり、その場での活用は出来なかったのだが……

「徹底的な当時の状況の再現、検証、研究……！　その結果が……!!」

――ゴォオオオオオッ!!

……シグナムが、蒼炎を吹き上がらせる!!

「コイツだぁあああああっ!!!」

「――……!!」

秀人が……ここに来て初めて、防御の構えを取る。剣閃と、秀人の防御が衝突する。

――ドゴォオオオンッ!!!

「……!!」

秀人の蒼炎。特に、不死鳥召喚の一撃には、大きなデメリットが存在している。蒼炎の源である不死鳥は……言い換えれば、秀人のリンカーコアそのものだ。さすがに、すべてを一撃に込めた訳ではないが……シグナムに十分なトドメを刺せるだけの出力は与えている。つまり、秀人の最大出力のうち、何割かが、シグナムに奪われたという形になる。

「――我が主でさえ叶わなかった、吾妻秀人の蒐集！　いま達成せり!!」

秀人は……唖然とした表情を、すぅっ……と、消す。

「今度こそ、ごか」

――。

「……く、」

……鈍い衝撃が、遅れてやって来る。痛みは、さらに遅れて。発生個所の把握は……すべての後に。秀人の貫手が、シグナムのどてっ腹を、貫通していた。

「、お、ご、ォ、おおおおおオオオオオオっ!!」

それても、秀人はシグナムの間合いにある。魔剣を横一閃。しかし。

――パキィイインッ……

折れる。返す手刀が、

――ガリィイイッ……!!

鎧の肩口を、断った。

「ぐ、ぅ……!!」

シグナム、、飛び退る。

（はぁ、はぁッ……！　何だ、今のは……!?）

蒼炎の恩恵により、傷はおろか、断たれた装甲までも接合される。だが……見えなかった。

「――――シグナム」
冷徹な無表情のまま、秀人が呼ぶ。
「おかげで、平和ボケの目が覚めたよ」
その体。その身に纏うのは、燃え盛る蒼炎……ではない。
――――リィインッ……。
揺らめくことのない……言い表すならば、ガラスの被膜。それが、秀人の身体を甲冑のように覆っているのだ。色は、空色。秀人の魔力光。その表面に触れた塵が、一瞬で燃え尽きる。その、正体は。
「固体の蒼炎、だと……!?」
炎にして、固体。存在からして矛盾している。だが……それは確かに、そこに在る。
「……そうだったな。お前は、何が何でも、俺の命を取ろうとしているんだったな。……だとしたら、こちらばかり、日常の延長のような気構えで対応するのは、不誠実というものだ」
――――ガシャァアアアンッ!!
秀人の背に、固体蒼炎の翼が開く!!
「――殺す気で殴る。覚悟は良いな」
ごくりと、シグナムの喉が鳴る。
(……落ち着け。呑まれるな。ヤツのリンカーコアの四割はオレの手元にある。出力だけならば、互角に近い。初撃で速度は覚えた。だから、あとは……)
「――あとは、思う存分、研究成果を試すが良い。その全てを潰してやろう」
「……!!」
シグナムは、剣を強く握る。対策に対策を重ねても、尚も感じる実力差。しかし、退くわけにはいかないのだ。

◆■◆　◆　◆

「おぅおぅ、やっておるのう」
……作務衣姿の老人が、校舎屋上の縁に腰掛け、若人の戦いを眺めていた。

剣士と拳闘士。ともに蒼い燐光を散らしながら、一進一退の攻防を繰り広げていた。
「男の意地を掛けた戦いというものは、良いものじゃて。……のう、奈々？」
くるりと振り返ると……そこで初めて、世界に認識されたように、化粧もしていない女性が現れる。
「……おじいちゃんには、叶わないなぁ」
平時のエキセントリックな、処世術のためのオモテヅラではない。卑屈と取られんばかりに内気で人見知りな、素顔の奈々だ。
「老眼の所為かのう。ボヤけてよく見えん。……どうにかして貰えるか？」
「……うん」
奈々は、大家に恐る恐るといった調子で近づくと、ぽん、と肩に手を置く。途端、鮮明になる世界。
「ほっほ。よーく見えるわい。曇りガラスの向こうまで、しっかりと」
「ん」
と、奈々が懐からゴロリと……とても自然な動作で、不自然な質量のものを取り出す。一升瓶と、酒枡である。
「おぉ、気が利く良い子じゃ」
ぐりぐり、と奈々の頭を撫でる。奈々は無言で、大家の隣にちょこんと座る。
「……結界は気づかれない程度に補強してあるよ。万が一割れても、別の位相にエネルギーを逃がすから、この世界に影響は出ない。あのバカヤンキーたちも、呑気に観戦させておいて大丈夫だよ」
「いやいや、いつもすまんのう」
「それは言わない約束……いや、普通はこんなサービスしないからね。しっかりお金を取るよ。秀人から」
世界は大丈夫でも吾妻家のお財布がピンチだった。
「でもさぁ」
ちびちびと日本酒を飲みながら、奈々がごちる。
「あのイケメンが本気になってる理由ってさぁ……なんていうか

……」
「愚かしい……と言うか？」
　無言の頷きで返す奈々に、大家が笑う。
「まぁ、男というものは、今昔、変わらぬものよ。男が身命を賭して戦うとき。それは、究極的には、名誉でも金銭でも仇討ちでもない。
　――惚れた女子（おなご）のためと、相場が決まっておる」
　奈々は、理解はできたけれど意味が分からない、と、首を横に振った。

◆・◆　◆　◆

「あ、やっと見られる」
　別棟の窓が開き、慈樹を胸に抱いたなのはが、フェイトとともにひょこっと顔を覗かせる。
「やってるやってる。ほら、いつき。お父さん見える？」
「ぁーい!!」
「んー、なにか話しながら戦っているみたい」
「遠くてあんまりきこえないけど……」
「ちょっと待ってて。それとなくバレないように集音してみるから」
　フェイトが嘆息する。
「……ま、どうせくだらないことだろうけど」

◆・◆　◆　◆

　――ゴズンッ……!!
　シグナムの剣、秀人の拳が、もはや何合目になろうかという打ち合いをする。
（ここまでっ……！　ここまでやって、まだ届かぬか……!!）
　十全の策を講じての、丸腰相手への不意打ち。戦争ならいざ知らず、決闘としては最低なまでの行いをして、奇跡的な確率を手繰り寄

せ、蒼炎の力を一時的とはいえ手に入れた。固形蒼炎という、意味不明な手を繰り出してくるという誤算はあったとはいえ、戦技ではほぼ互角なのだ。

さて一方、秀人はというと。

（やっべ、マジやっべ……!!　コイツ本気じゃねーか!!　ちょっと脅せば引き下がるか譲歩するかと思ったのに!!）

余裕しゃくしゃくに見えて、実は結構、テンパっていた。

（「フッ……」とか余裕ぶって笑ってる場合じゃねーっつーの!!　どーすんだ出力半分近く奪われて!!）

セルフツッコミで状況を確認していく。

（丸腰で襲われるとか、そりゃあ、それなりに想定はしてたけどさ！ここまでガチで狙われるなんて思うわけねーだろ!!）

――――ゴギィッ……!!

魔剣の刃を殴り潰す。しかし、それも蒼炎で即座に復旧する。無論、自身の能力の限度は知っている。蒼炎の再生力も、結局は術者のスタミナに依存するということを。シグナムのように、武装の再生にまでエネルギーを回していれば、徒手空拳の秀人よりも早くガス欠するということも。

「――シグナム。そろそろ教えろよ。なぜ、今だったんだ？」

機会は数々あるとはいえ、シグナムが尊ぶ正々堂々の決闘というのであれば、それこそ、六課など立会いの下、どこか演習場を借り切って行えば、何の不自由も生まれなかったはず。わざわざ、この状況で襲撃という形で行うなど、シグナムがなぜ、そう望んだのかが不明のままだ。

「……秀人。正直に言うと、だな」

鍔迫り合いの間合い。

「――――お前との約束、決着など、ただの口実でしかないッ!!」

口実。

「――――――フェイトだ」

ぼそりと、場に居ない人名を唐突に持ち出され、秀人はぽかん、と放心する。

「フェイトが、どう関係あるって？」
「――そういうところだッ!!」
「理不尽かよ！」
　ギリギリギリ……と、鍔迫り合いを押し込まれていく。
「オレは、フェイトに惚れているッ!!」
「!?」
「あの事変……否！　初めて剣を交えたその日から！　オレはフェイトに惚れていたっ!!」
「え、えぇ……!?」
「だがっ!!　フェイトの心には、既にお前が居たんだ!!　秀人ッ!!」
　……鈍い秀人にも、ようやく全容が掴めてきた。
「……つ、つまり、アレか。お前は……ンな理由で、俺を……」
「そんな理由……ふん、そんな理由さ」
　シグナムが、卑屈とも取れる力ない笑いを漏らす。
「……お前にはわかるまい。何気なく共に過ごす時間も……食事を摂るときも、現場へ向かう車中の空間も、向かい合って話をする時間も、オレではない誰かをッ!!
　――想い人の視線の先に、自分以外の誰かが居るという屈辱がッ!!!」

　ガギンッ！　と、魔剣が秀人の腕を抉る。
「――お前を倒して！　お前を排除して!!
　――フェイトを、オレに振り向かせてみせるッ!!」
　高らかに宣誓したのは……あまりにも俗っぽい決意だった。
「騎士の誇りはどこ行った!?」
「フェイトの愛に比べたら些細なものだ!!」
「言い切りやがったぞコイツ!!」
　あまりにも下心満載な決意と気迫に戦慄する秀人。
「勝算も、あるッ!!」
「勝算ん……？」
　再び間合いを取る。今更、ここまでやっておいて、更に隠し玉など

は無いだろうが。
「オレは、飢えている……!!　フェイトがもう、愛おしくて愛おしくて、しかし手に入らない！　そんな状況に年単位で置かれていた、オレの飢餓感だっ!!」
「どうしようこの騎士さま……どうにかしないと……」
　クールで飄々としている強者……というイメージが、ガラガラと崩れていく。
「半面お前は、世界を救うは最愛の人と結ばれるわ子にも恵まれるわ、順風満帆ではないかクソがっ!!　死ねッ!!　炸裂しろッ!!」「そうだそうだ！」「兄貴ばっかりモテすぎなんだよー！」「やっちまえイケメン！」「でもイケメンも死ね!!」
「おい今しれっと混ざったの誰だ!?　アサクラか!?　タケイか!?　覚えておけよ!!」
　なんと観客からのヤジが飛ぶ。
「言いたい放題言ってくれやがって!!」「げふぅっ……!!」
　密着状態からの膝蹴りを叩き込む。
「お前、局の若い子から言い寄られて片っ端から遊んでるって話じゃねーか!!　なぁにがフェイトの愛だ、このヤリ○ン騎士！」「死ね！」「死ね！」「死ね！」「死ね！」「死ね！」
　一瞬のうちに支持を取り戻す秀人。というかヤンキーズの民度が低すぎてヤバい。
「お前のような男にウチのフェイトをやれるか！」
「ヤリっ……!?　貴様、なんという物言いをぉおおお!!　というか、ウチのとはなんだ、ウチの、とは！　既にオレとともに立ち上げた事務所で立派に業務をこなしているわ！　つまりフェイトはウチの子だ！」
「違いますぅー!!　フェイトにとってのウチは吾妻家ですぅー!!」
　……あぁ、なんと低俗な理由で、高度な戦闘を行っているのだろう、この二人は……
「あー可愛かったなー！　初めて会ったときは荒んでツンケンしてたのが、戦いを通じて気持ちを通わせていくフェイト、ちょー可愛かっ

たなーー！」
「ぐわぁあああああああ妬ましい話を今すぐやめろォオオ!!!」
　秀人の精神攻撃がシグナムの嫉妬心にクリティカルヒットする。
「ク、ククク……！　そういう手で来るとはなぁ……!!　だが、お前は知るまい……!!」
　シグナムが、壮絶な笑みを浮かべる。
「フェイトの、二次性徴の歩みをっ……!!」
　なんか最高に最低なことを言い出した!!
「おい秀人!!　フェイトが初めて買ったブラジャーの柄を知っているか!?　オレは知っているぞ!!」
「何ィ!?　フェイトのブラジャーだと!?」
「ハハハハ知りたいか！　知りたいだろうなぁ！　だが教えんっ!!」
「貴様ぁー!!」
「ククク、一年刻みのカップサイズもトップとアンダーの成長も把握している……!!」
　高度な変態だった。
「お前が消えた後、執務官試験のため、日夜勉学に訓練に励むフェイトに、イソフラボン満載の食事を用意し続けること幾年月！　そう！
　――フェイトのおっぱいはオレが育てた！」
「くぅっ……！」
　秀人が、シグナムのシモから来る気迫に、思わず退いた。
「……こうなったら仕方が無い……」
　あ。嫌な予感しかしないやつだ。
「俺は、
　フェイトのパンツを洗濯したことがある！」
「な」
　シグナムの顔が、驚愕に歪む。
「ん、だとぉッ……!?　トランスフォーマーや変身ベルトを散らかし

放題の部屋のくせに、衣類というか下着関係だけは隙無く片付けているフェイトの、パンツだとぉッ!?」
嗚呼、ブラとパンツの仁義なき戦いよ……
（（コイツ……やはり、できるっ……!!））
何がだ。
（……って、そうこうしているうちに蒼炎がカラっけつ寸前ではないか！　あちらは……）
「なんだ、長話はジリ貧でも狙っていたのか？」
秀人の固体蒼炎は……健在どころか、さほど衰えた気配も見えない。というのも、この固体蒼炎は、何よりも持続力に重点を置いた形態である。ただ燃やすだけでは魔力を垂れ流してしまう蒼炎を、空間に固定することで劇的に負担を軽減し、破壊されたとしても欠片を集めて結合させれば、欠片を集めて結合させるだけの魔力で、再度展開が可能。その際に消費する魔力は、秀人が自然と回復する魔力の数値よりも小さいため、理論上、半永久的に展開し続けていられる。まぁ、その維持には神通力が多分に働いているので、ヒトの身では再現不可能なのだが。
「……」
「どうした、さすがに諦めたか」
「……諦めはしない。だが、勝てもしないだろう」
熱くなりながらも、シグナムは冷静に……負けを確信し始めていた。この、殆ど消耗しない固体蒼炎のこともそうだが……それ以上に。
「話には聞いているが、ここへ更に神化が加わってしまっては、な」
「あー、それ出来ないんだわ、今の俺」
……が、返ってきたのは予想外の否定。
「……なに？」
「いやぁ、実は……神通力の九割ほどを息子に譲ってしまって」
「な、なにィイイイイイイイイイイイイイイイーーーーーッ!?」
嘘だ。ありえない。シグナムは目を見開く。普通、手放すのか、ソレを。

というか。
――秀人は神通力の九割を譲ったと言った。
――片やなのはも、九割を譲ったと言った。
――で、あるのなら。
――――吾妻慈樹の生まれ持った分と併せた、神通力の総量は。

「まぁ、それ抜きにしても、負ける気はしないがな!!」
「なんだ、その自信は……!!」
「シグナム。おまえ、飢餓感と言ったな。満ち足りた俺には、それが足りないと。そう言いたいわけだ」
「……違うと言うわけか」
「あぁ。――――おーい、なのはー！　いつきー！」
　実は観戦に気付いていたらしい。くるっと背後を振り向き、妻子へ手を振る。
「あなたー、頑張るのよー」
「おーう！　見とけよー!!」
　いつきの小さな手を振るなのは。
「あ、そういえばフェイトが「幸せを見せつけやがってぇぇぇぇ……!!」
　シグナムの妬みの波動がなのはの声をかき消した。
「そう。愛する妻子！　円満な家庭！　これ以上の幸福などあるものか！」
「それな。ほんとそれ。」「帰る家があるって、幸せだよな……」「お金じゃないよな……」「幸福を維持するのにお金は必要だけどね……」
「おれんち借金で離散したぞ……出て行った母ちゃん、元気かなぁ」
「マグロ漁船の父ちゃん、ハガキ届かなくなっちゃったな」「ドラッグのｂｕｙｅｒで、イマはどっちモｐｒｉｓｏｎにｌｉｖｅ（終）ｓｅｎｔｅｎｃｅ（刑）ネ身……」
　ヤンキーズがしみじみと頷く。
「――――愛する妻子の前で、男が負けるわけにはいかんのだッ!!」

ズシン、と、重く一歩を踏み出す。決着の一撃を繰り出す前兆だ。
「だいたい、お前は順番を間違え過ぎなんだよ！　俺をどうこうするんじゃなくて、もっと大事なことがあるだろうが!!」
「――――。」
ハッ、と、シグナムが気付く。そうだ。想い人を手に入れるため、必要な段階を踏んでいなかった……と。残りわずかとなった蒼炎と、全魔力を切っ先に集中させる。たとえ、敵わずとも。秀人も、相手が弱っていようと全力で迎え撃つ。
「――――。」
「――――。」
一拍。覚悟の一瞬。シグナムは……駆け出す!!
「うぉおおおおおおおおおおおおおっ!!」
「来いやぁあああああああああああっ!!」
振りかぶる。大上段。シグナムが最も得意とする一撃。
「フェイトを!!!

勝ち誇る秀人。見守るヤンキーズも、安全と見るやワラワラと寄ってくる。地面に転がるシグナムの顔を覗き込み、首筋に指をあて……

「……、兄貴、このひと息してないよー」

「……えっマジでヤベェ」

傷害致死である！

「うわぁあああ！　兄貴が殺っちまったぁー!!!」「『はい、ええ、普段は面倒見のいい人だったんですが（プライバシー保護音声）』」「oh；；アニキサン、オツトメ、するネ……」「兄貴……！　安心しろ、あのクラスはおれが纏めていくからよ……！」

「バッカお前、まず心マだ心マ!!　……ええっと、気道を確保し！（ゴキゴキッ）胸部をリズミカルに圧迫する！（ボキッボキッボキッ）！」

「兄貴ストップ！　トドメ刺してる！　トドメ刺してるってぇ！」「テロップに（首の骨が折れる音）って出てる!!」「リズミカルに肋骨がハーモニーを奏でてるって!!」

シグナムの命運、もはやここまで……と思ったその時。

――――ドンガラガッシャアアアアアアアン!!!!

雷雲も無いというのに、落雷!!

「――、あっぶねぇ!!!」

寸でのところで魔力を察知し、ヤンキーたちを抱え飛び退いたお陰で、黒焦げ案件だけはセーフだった。

「あっシグナム忘れてた！　……でも証拠は消えたぜ」

クズいことを口にする、うっかり秀人くん。

「まぁ冗談はさておき、」

「……く、首と胸が痛い……!!」

シグナムは息を吹き返し、覚えの無い脱臼と骨折の痛みに喘いでいた。

あまりにも強引というか、普通そんなことをしたら死ぬ以前の問題なのだが、これだけ緻密に雷を操れる術者を、秀人は二人しか知らない。一人はプレシア。そしてもう一人は……

「……」

ばりばりとイカヅチのオーラを纏うフェイトが、逆に恐ろしい無表

情で佇んでいた。人差し指で、シグナムのほうをゆび指しているのは、先ほどの落雷による心肺蘇生のためだろう。なんという精度か。しかも恐らく、デバイス（バルディッシュ）を使ってすらいない。

「……」

「ぬぅ……冥府よりの使者か……いや、フェイトの顔をしているから天使に違いなブばいガワラッ!!」

もう一度冥府に送らんばかりの拳が、シグナムを沈めた。

「お、おぉフェイト……元気そうで何より……」

すたすた、と、普通に歩いている筈なのだが、ヤンキーたちがサササーっと割れるように避けていく。強者の貫禄に、本能が反応してしまったのだろうか。

――がしっ。

フェイトのアイアンクローが、秀人の顔を掴む。

「――――〜、なんつーはなしをしているんだこの大バカぁあああああああああああああああああああーーーーーーーー!!!」

――――ズバババババビガガガガガガガガバリバリバリバリ!!!

「ぎょえぇぇぇ

「はいはい、そこまでにしなさい」
フー、フー、と羞恥と怒りに震えるフェイトをなだめる。
――キーンコーンカーンコーン
「学校のチャイムって個性無いわよねぇ。ま、私は小学校のしか知らないんだけどね……あはは……小卒未満ですよ、ってね……」
「じぶんのことばで凹むクセ、かわらないよね……」
ちょうど、昼休みも終わるころだった。
「そこのヤンキーたち」
「「「「「「イエス、マム　!!」」」」」」
兄貴の嫁。つまり姉御である。なのはにとって、普通の人間より、ヤンキーのほうがなじみが深く、人見知りせず付き合える。
「二人を手分けして保健室まで運びなさい」
「「「「「「イエス、マム　!!」」」」」」
「さ、私は授業が待っているから戻るけど……フェイトはどうする？」
「……うー、先にいえ帰ってまってる」
「鍵は？」「もってる！」
家の鍵……つまり、吾妻家の鍵。なのはは少し嬉しくて、ニコニコと上機嫌で教室へ戻るのだった。
（（（（（（（（あっ、勝ったんだ））））））））
……なのはちゃんヤンキー疑惑、未だ解けず。

# ｖｉｖｉｄ編　１４話『　がんばれ女の子　』

――やぁみんな！　新学年だね！　クラスに友達は出来たかな!?

――新社会人のみんな！　これから定年まで４０年間、頑張ろうね！

――ちなみに老後の年金は無いゾ♪

◆▪◆　◆　◆

ぶっ倒れた秀人とシグナムのうち、秀人だけは早々に復帰し午後の授業を受けた後のこと。シグナムを回収したのち、吾妻家であるアパートの一室へ帰ってきた。

「はいこれ運んで。つまみ食いは駄目よ？」

「ぐぬぬ……みぬかれている……」

なのはが作った料理を、フェイトが座卓へ運んでくる。

まぁ、理由はともかく、せっかく来たんだし食べていきなさい。ついでに買い物を手伝いなさい。ついでに配膳もしなさい。あとついでに今日の洗い物はあなたがするのよ。と、なのはに言われたフェイトだった。

「なぁ、フェイトさんや……」「うっさいスケベ」

……秀人は、フェイトに嫌われていた。

「……」

割とガチ凹みをする秀人。悪ノリが過ぎただけで、フェイトのことは家族として大事なのである。……フェイトが求めていたのは、そういった『大事』ではないのだが。

「えいおー」

「あだだだ!!」

……と、慈樹に長い髪の毛を力いっぱい引っ張られる。満面の笑みで、力いっぱいに。これは痛い。
「あらあら、いつきったら、すっかりフェイトに懐いて……」
「イタイイタイ！　なのは助けてー!!」
　神殺しの雷神も、子供の前では形無しであった。
「まったくもう……おい、しぐなむ!!　ごはん!!」
「……ムリ……しにそう……」
　……隣の部屋の畳の上に転がされているシグナムは、息も絶え絶えだった。蒼炎の効果でボキボキに折れた肋骨はうまく治ったのだが、ダメージはそうはいかない。というか、秀人が慣れすぎているだけで、普通はこうなる。
「そういうやつは大抵しなないからヘーキだよね。ボク、さきに食べてるからね」
　不機嫌からつっけんどんな態度を取るが、一応話を振っているのは心根の優しさがなせることか。
「「いただきます！」」
　慈樹がその辺を好きに動き回る中、実に、いつぶりとなるであろうか、フェイトを交えた食事が始まった。
「ユーノくんどうしてる？　アルフが付いているんでしょう？」
　超ブラック職場に囚われるユーノ。秀人やなのはに鍛えられ、不気味にタフになったユーノはそう簡単には死なないだろうが、それでも心配なものは心配である。
「あー……なんかたいへんそう。しごともそうだけど」
　食べ方は幼少時に美由希となのはの徹底矯正により綺麗になったフェイトが、魚の骨を避けながら言う。
「アルフとザフィーラがユーノをめぐって、たびたびガチバトルしてるっぽい」
　微笑ましいように思えるが……
「……飼い主的な？」
「んーん。ツガイになるって、どっちもゆずらない」
　さらっと重大な問題を口にするフェイトに、顔を見合わせる吾妻夫

妻。
「……まぁ、文化が違うからな。ユーノんとこの部族は異類婚姻がザラにあるっていうし」
本人が幸せなら良いか、とあっさり結論付ける。
「そうそう」
と、なんのことはない風に、話の続きであるかのように、フェイトが言う。
「ボク、ひでととケッコンすることにしたから」

――ガターン!!

「な、ん、だと……!?」
シグナムが、半死半生の身体で起き上がろうとしていた。
「えー……だって、シグナムよりひでとのほうがつよいし」
「ぐはぁ」
「かっこいいし」
「げふぅ」
「へんたいさんじゃないし」
「おおおおオレはへんたいさんではない!!」
どの口が言うか。
「ねーねー、なのはー。ボクもひでとのお嫁さんになりたーいなー」
「……」
じぃ、と、何やら見つめあう二人。極めて独占欲の強いなのはのことだ。いくら可愛い妹分であるフェイトの言うことであっても、きっと、度が過ぎると激怒し反対してくれるだろう……と、甘く考えるシグナム。だが。
「うーん……はやてもいるから、三人目みたいになっちゃうわねぇ。それでもいい？」
なんと割と肯定的ではないか。
「あの、俺の意思は……」「却下」

……秀人に決定権は無かった。
「ウソだ……ウソに決まっている……!!　フェイトがオレのもとから去るなど……!!」
　ワナワナと震えるシグナム。だが、頭上ではなのは、フェイトの二人が、将来の展望について和気あいあいと盛り上がっており……
「それじゃあ、こどものなまえはー、」
　……とうとう限界を越えた。
「――――すまなかったぁあああああああああああああああ!!!!!」
――　ＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡ　！　！
　額を畳に擦り付けんばかりの、まこっとに美しい土下座スタイルであった。
「すまんかった……!!　ほんとーにすまんかった……!!　調子に乗りすぎた！　オレが悪かった！　頼むッ……！　許してください……!!　勘弁してください……!!　なんでもするっ！　なんでもするからっ……!!!!」
　嗚呼、かくも無残な懇願であることか。
「――――オレ以外の男とケッコンするとか、冗談でも言わないでくれぇえええええええーーーー!!　うぉおおおおおおおおおおおおーーーーーん……!!」
　シグナム、キャラ崩壊の男泣きであるッ……!!
（し、シグナムっ……！　お前……!!　ちょっと見直しかけたけど、そもそもの理由が最低だぜっ……!!）
　そりゃあ、まぁ……嫉妬に狂って想い人の大恩人を襲撃した挙句、人前で初めてのブラジャーの色柄とかカップとか、バラされそうになったらキレる。百年の恋も冷めよう。そもそも恋さえしていないのだが……
「……はんせいした？」
　なのはにギュッと抱き着きながら、フェイトがジトーっと、わらじむしでも見るような目でシグナムを見やる。
「したっ！　しましたっ!!　心の底から反省しましたぁっ!!」
「ホントーに？」

「ハ→ァイッ!!」
「んじゃケータイのなかのおんなのこのアドレス、ぜんぶけして」
「ハ→ァイッ!!」
　神速で操作を終えた端末を、捧ぐようにフェイトに掲げる。
「ふむ……よし」
「で、でわっ……!」
　希望に瞳を輝かせるシグナム。
「ひでととケッコンしよーっと」
「あァァァんまりだァァァァあああああ!!」
　絶望に打ちひしがれるシグナム。
（プレシアとジェイルみたい……）
　……吾妻夫妻はそんな感想を抱いていた。やはり血筋か。駄メンズに好かれるという難儀な性質はしっかりと遺伝しているようだ。
「これ、フェイト」
　なのはがフェイトを制する。
「もう良いでしょう」
「黄門様かーい！」
　ビシッと息の合ったツッコミを披露する。
「まぁ、シグナムも反省『は』しているようだし。この辺で手打ちにしてあげなさい」
「……はぁい」
　ぶすっと膨れながらも、なのはの言うことを聞き入れる。
「おぉ、神よ……!!」
　さながら調停神を仰ぐように合掌するシグナム。
「はやてには報告しておくわね」
「おぉ、神よ……死んだわオレ……」
　戦わずとも生き残れない。神より悪魔よりよっぽどおっかない王による処罰に恐れおののくシグナムであった。
　いつきはケラケラと楽しそうに笑っていた。
　罰として洗い物を押し付けられたシグナムと秀人を置いて、なのは

とフェイトはいつきを伴い、近所の銭湯にやって来ていた。アパートの浴室は、入ろうと思えば二人で入れるのだが、浴槽がどうしても手狭……というか、へんたいさん扱いのシグナムの半径１０メートル以内で入浴する気にならなかったフェイトが、なのはを誘った形だ。ひとり２４０円。

「きょうはボクがだすね！　しばらいはまかせろー！」

――バリバリ

「やめて。……っていうかまだ使ってたのね、ソレ」

それは、フェイトが吾妻家にやって来た頃、街に出たフェイトが衝動買いした子供用財布（キョウリュウジャーの柄入り）であった。

「んー、プライベート用だけどね」「でしょうね……」

見た目『だけ』は麗しいフェイトが、颯爽とコレをポケットから取り出すイメージを抱き……

「……私服はどうしてるの？　まさかこち亀の両さんみたいに、執務官の制服を着まわしているわけじゃないでしょうね」

「ギクぅっ……!!?　シ、シテナイヨ……？　ボク、シテナイヨ……？」

「なんでみんな、ソコだけは似ちゃうのよ……」

だらけて寝そべる姿も割と似ているし、趣味嗜好も似ているし、だらしなさも似ているし、じつは一番、秀人の（悪）影響を受けているのはフェイトなのかもしれない。というか、進んで秀人のマネをしている、というのが正しいのかもしれない。ヴィヴィオなども、意識的に真似をしている部分が見受けられる。

手早く脱衣した二人は、じゃぶじゃぶと同じようなペースで体を洗っていく。なのははいつきを乳幼児用浴槽に入れた。

「ぶるぶるぶる」

長い髪についた水滴を頭を振って払うフェイト。いくら周りにほかの客が居ないからといって……

「ぐわぁ冷たい！　犬か！」

「いぬじゃないもーんだ」

わっしわっしとフェイトの髪を団子に纏める。長いうえに量が多いから一苦労だ。

「こっちも」「ん」
くるりと反転し、今度はフェイトがなのはの髪を纏める。
「「ふぃ～……」」
足を伸ばせる浴槽に浸かると、思わず息がこぼれる。
「明日、買い物に行くわよ。オリエンテーリングの最終準備もあるし」
そう。あれやこれや、凄まじいトラブルにばかり見舞われていたが、ようやくその日がやってくるのである。
「服くらい買ってあげるわよ」
多分、私服はあると言えばあるのだろうが、しまむらのジャージとかドンキのスウェットとか、そんな感じのものが多いだろうし……
「エボルドライバーがほしいっ!! 再販したんだよアレ!!」
「服だっつってんでしょーが！ あとちゃんとした財布！」
「がぼがぼ……ぶくぶく……」
潜水訓練へと突入した。身内への折檻は割とハードだった。
「ベルト巻けるようにたべすぎないようにがんばってるのにー……」
「そんな理由でそのスタイル維持してるっていうなら大したものよね……」
世の女性の羨望と嫉妬が集まることだろう。本人はこれっぽっちも気にしていないだろうが。
「でも、なのはがえらぶ服かぁ……」
……そう。なのはもぶっちゃけ、他人のことをとやかく言えるほどファッションに詳しいわけではない。はやてに聞いても同様だ。吾妻家及びその縁者の女性陣は、『着られればいい』という実に漢らしい価値観の持ち主なのだ。女子力が低い、とも言う。
「フッ……フェイトも甘いわね。私がいつまでも、昔の私でいると思っているの？」
「しょうじき図体以外はたいして成長していない気が……ゴメンゴメンうそうそ。ぶくぶくするのはヤダってば」
魔の手から逃れる。なのはは、こぶしをぎゅっと握り、輝くような笑顔で言う。
「ワークマンプラスで、フェイトの服を選んであげるわ……！」

（だめそうな気がする……）
やはり、女子力は成長していなかった……
「そういえば、望とも一緒に遊びに行く約束もしていたわね……忘れるところだったわ。今度誘いましょう」
カレンとの再会があったりして、すっかり忘れていた。
「クラスのトモダチは？」
「……トモダチ……トモダチ……ワカラナイ……ニホンゴワカラナイ……」「ゴメンなんでもない」「……よくよく考えたら、私が一方的に友達だと思っているだけかもしれない。うん、誘うのはやめておきましょう……」「……」
相変わらず対人関係はヘタレな姉貴分に呆れるフェイトだった。
そして翌日。女二人で買い物に出る。出た。それは良いのだが……
「なんでホビーショップなのよ……」
「あとでふくもちゃんとかうから……って、あーーーー!! ガオイカロス！ ガオイカロスうってる！ これかう!! こっちに轟雷神もある！」
なのはにはサッパリわからない単語を口にしながら、何やらうすらでかい箱を積み上げるフェイト。
「……その赤いトリみたいなの、同じの二つも買うの？」
フェイトは頬をムーっと膨らませ抗議する。
「おなじじゃない！ こっちはガオファルコン！ こっちはガオイカロス！」
全然わからない。
「手持ちのパワーアニマルとがったいさせるヤツと、オリジナル形態でかざるヤツ！ おなじじゃないの！」
「はいはい……」
徒歩ではなくバイクで来たのは正解だった。紐でキャリアに縛り付ければ運べるだろう。
「全く、何をしに来たんだか」
だが、久しぶりにフェイトと遊んでいると、どこか嬉しくなってく

る。なのはは、知育玩具コーナー見て回る。
「……はやてのところは大変ね。男の子と女の子、両方同時に育てるんだもの」
「ニチアサはしゅっぴがかさむからねぇ。スーパー戦隊、ライダー、プリキュア……あっ。ねぇねぇなのは。このサイフにしようとおもうんだけど」
　満面の笑みで見せてきたのは、ツルツルのビニールの表面にドラゴンがプリントされたサイフだった。なのはは無言で棚に戻した。
「さっきのがよかったのにー。ドラゴンだよ、ドラゴン」
「いま使ってるのと何が違うのよ……」
　結局、秀人が使っているのと同じような、フェイクレザーで二つ折り、内ポケットが多くＳｕｉｃａポケットも備わっている機能性重視のものを近所の店で新品購入した。
「ケーキたべたい！　みゆきンとこいこうよ！」
「えぇー……」
　フェイトに引っ張られるように翠屋へ。もう、何の買い物なのか、分からなくなってきた。まぁ、普通に余暇でいいと思うのだが。
「あぁそうだ。翠屋の前に一件、寄っていくところがあったんだ」
　そう。その用事を済ませなければ、オリエンテーリングが始まらないと言ってもよい。
――――『骨董　買取販売　座自緒』
「こっとう……？　おちゃわん？」
「？　なんで骨董屋で茶碗を買うの？」
「……」
「ごめんくださーい」
「はい……あぁ、お待ちしておりましたよ」
　サングラスの老店主が座敷より現れる。懐には、絹の袋に包まれた……何というか天丼芸である。
「はい。おととい仕上がったばかりですよ」
「むふふ……」
　そして、袋から取り出したるは、またしても懲りずに刀……で

はなく、山刀。要は鉈である。
「ふぅむ……握り良し。鋭さ良し。重心は、ええと……」
ひゅん、と振るう。
「うむ……理想的な仕上がりね。これなら夜叉猿でも狩れるわ」
「おや、マタギでもされるおつもりで？」
「いえいえ、山を越えるんですよ。手持ちの刃物は、藪漕ぎには向いていなくて……」
「米軍のナイフにご興味は？　今度、あるツテから払い下げを一ダースほど仕入れる予定がありまして」
「向こうの刃物は雑で大味ですけれど、大雑把な用途にはそれがまたマッチしますよねぇ。そもそも行軍のためのツールとして存在するわけですから。入荷をしたら、また連絡を頂きたいです」
「ええ、ええ。一番にご連絡しますよ」
和気あいあいと、老店主と刃物トークに花を咲かせる。
「……なのはー、しょうきにもどってー」
肩口をぐいぐいと引かれる。
「こら。少しは辛抱しなさい」
子を窘める母のような口調だが、どう考えてもなのはがおかしい。
「あのね、なのは。学校行事にナタはいらないの。いらないんだよ」
「？　フェイトはおかしなことを言うね。要る要らないではなくて、刃は身に帯びるものよ？」
「……ひでと、ゴメン……ボクはなのはをとめられない」
「わかったわよ。待たせてゴメンってば。翠屋行くわよ。会計は兄さんに出させるから遠慮なく食べていいわよ」
「またのお越しを」
「おーっす、みゆき！」
「おーっす、フェイト！」
翠屋へ到着するや否や、ぱしーんとハイタッチをする二人。相変わらず仲がいい。
「やぁ、なのは。よく来たね」
リハビリとしてウェイターを始めた父、士郎が、まだ痩せたままの

顔でなのはを出迎える。
「あ、父さん。今日、出てたんだ。……ねーねーこれ見てよコレ。買っちゃった！」
ゾロリと山刀を抜くなのは。凍り付く店内。
「な、なのはー!!」
フェイトは、とっさにバウムクーヘンを引っ掴み……
「とぉうっ!!」
ひょろろろ、と、なのはの前に放物線を描くように投擲した。
「？　切ってほしいの？」
シュカカカカッ！　と、肘から先が掻き消え残像だけが視認できるレベルの速度で、鉈が振るわれる。寸断されたバウムクーヘンは、フェイトがもう片手に構えていた皿に綺麗に整列するように返される。
「じゃ……じゃ～ん！　いっぱつげい～！　……あは、あはは……」
ひきつった笑いで店内を見渡すフェイト。
――――ぱち……ぱち……
客たちもまた、ひきつった笑いで疎らな拍手をする。
(((((気にしない、気にしない……)))))
逃避だった。
「いい山刀だね」
第一声がそれかーい。
「山で何か狩ったらお土産にするね」
「この時期は猪かなぁ」
「熊はちょっとまだシーズンじゃないよねぇ」
なのはの、若干天然なところは父譲りだったらしい。
「……みゆき。ボク、がんばったよね……？」
「うんっ、頑張った！　フェイト頑張った！　わかってる！」
よしよし、と頭を撫でられていた。
「そのバウムクーヘンとサンドイッチ。レモンティーとカフェオレで。会計は兄さんの給料からよろしく」
「な、何ッ!?」

恭也が奥でずっこけていた。だが結局は出してやるところが、恭也の甘いところだ。
さて、紆余曲折の末、ようやく目当ての店の入るモールへ到着した。本来の目的であったはずなのに、気づけば日も傾きかけている。
「学校に居る時は『一日が早く終われ』って思うけど、楽しいとあっという間よね……」
「……がっこう、たのしくないの？」
フェイトは、心配になって聞く。
「……わかんない」
返ってきたのは、あいまいな答え。
「……まぁ、当初予想していたハイパーぼっちタイムは免れているみたい。友達……って、言って良いのかな。一緒に過ごす人はいる。話をしてくれるクラスメイトもいる。その人たちと一緒に行く遠足を楽しみにして、こうしていそいそと準備をしている私がいる。……楽しい、のかなぁ。うーん……わかんない……」
――なのはの人間関係は、独特かつ極端だ。
一度踏み込めば、それこそ、血縁が無かろうと家族のように相手のために心を尽くす。それがフェイトや、はやてを救うことにも繋がった。だが一方で、踏み込まなければ、血縁があろうと、なのはにとってそれは『他人』と同義であるのだ。
『他人』と『家族』。0か1か。なのはにとっての自分以外は、その二つだけだった。なのはにとって、その中間となる『友人』というものは、数えるほども存在していなかった。特に、秀人の失踪後はそれが顕著で、小学生時代にようやく出来た『友人』とも疎遠に。凶鳥部隊での、これまたどっぷりと親密なコミュニティを作り上げ……それを失った。なのはは、情操が安定するまで、あまりにも多くの『家族』との別れを経験し過ぎたあまり、そういった感性が鈍磨してしまっているのだ。
それゆえの、『わかんない』である。
『多分、これが楽しいということなんだろう』という、どこか他人事の感情で止まってしまい、それ以上に進展がしない。そこで止まってし

まう。
なのはと親しくなりたい。そう考える者は、あの学校にはきっと多く居るのだろう。こんなクソ難儀なコミュ障ぼっち社会不適合者ではあるが、なのはは同時に、人を惹きつける一種のカリスマを持ち合わせているのだ。
ただ、そのためには、難攻不落の心のダンジョン最深部にて鎮座するなのは大魔王のもとへ、どうにかして辿り着かなければならない。
あぁ、なんと難儀な。
しかし、その大魔王なのはにも、変化が現れようとしていた。暴走するエルスから大宮たちを守ったように。その際、とっさに『友達』という言葉が出たように。こうして、自発的に遠足の準備をしているように。
「それじゃあ、イヤじゃないんだね」
「うん」
「だってさ」
と、フェイトが後方を振り返り、言う。え？　となのはも釣られて後ろを見ると……
「そっか。心配しすぎだったみたい」
「なのはちゃん、良かった……」
「どうにか上手くやれているみたいね」
「……アリサ。すずか。のぞみ」
まさに件の、なのはの片手で足りるほど希少な『友人』たち。
（すずかは学園の運営陣、アリサも出資者の一族。こんなプライベートな場で会っていることがどこかへリークされたら二人に迷惑が掛かるわね。ここは逃げましょう）「って考えてるだろうから捕まえておくわね」「うわぁ」
回り込んだ望が、なのはの腕を抱く。
「その遠回り過ぎる気の回し方……なのはには困ったものね」
やれやれ、とジェスチャーをするアリサ。
「今日は私人だから大丈夫だよ。ほら、変装だってしてるんだから」
すずかは、ぶかぶかのオレンジ色のサングラスを掛けている。

「――それに、チャチなタレコミならクシャポイできるからね」
……現実的に一番怖いのは、すずかなのかもしれない。
「……フェイト。私をハメるとはいい度胸ね」
「ハメてなーいもーん。この時間にこのモールに行く予定ってメールしただけだもーん」
さっきまでやたらと遠回りや寄り道をしていたのは、アリサたちと落ち合うためか。
「……まぁ、たまには良いか。大勢でも」
「きーまりっ!!」
もう片方の腕を、フェイトが抱き寄せる。
「なのは、両手に花ね」
アリサが茶化す。なのはが、私は茎か何かか、と笑う。でも、と前置きし……
「学芸会で木の役を貰ったことがあるから、慣れてるよ」
「「「……それは貰ったとは言わないんだよ」」」
……やるせない気持ちだけが残された。
ワークマンで衣類を（秀人の分も）購入し……いよいよ準備万端。

――明日は、遠足である!!

ｖｉｖｉｄ編　１５話『　ちょっとしたＢ級青春ドラマ　』

――――これも神通力のちょっとした応用よ。

◆▪◆　◆　◆

小山ミサキは不登校児である。

……いきなりな導入であるが、事実だ。

身長１９０ｃｍ体重７５ｋｇという女子としては破格のフィジカル。ウェイトの大部分は骨と筋肉。両親はオリンピックメダリスト。両親としては、自由な人生を歩むことができれば、と考えていたが、結局は、親族・競技連盟・メディアの期待を一身に受けて、レスリング選手としての人生を歩まざるを得なくなってしまった。

確かに、その屈強な肉体は武器となった。学生競技の、あるレベルまでは常勝無敗。しかし、……『あるレベル』を境に、小山は一切の白星を挙げられなくなっていた。ライバル……とされていたのは、自身より２０ｃｍも身長の低い、同い年の女の子。技術……特に、足元へのタックルの正確さ・威力は尋常ではなく、これまで大きな武器としてきた身長が、大きな弱点となってしまった。

勝負の世界は、非情だった。

一度、『対抗策』が出回ってしまえば……これまで通りの戦いは、出来なくなる。連敗から、小山の体格に頼った戦術は完全に対策され……これまでは勝てていた選手たちに、勝てなくなってしまった。

連敗。はじめは「不調」「今が天王山」などと持て囃していた周囲も、インターハイ代表決定戦でストレート負けを喫して代表の座を逃して以来、完全に失望していた。「所詮は学生レベル」「体格で勝てていただけ。技術はアマチュアレベル」「伸びきってしまった伸びしろ」といったものを始めとした、心無い嘲笑。第三者からだけだったのなら、まだ耐えられただろう。しかし……これまで、試合のたびに横断

幕などを作り応援してくれていたクラスメイトや友人たちからも、同質の視線を浴びせられ続け……。

――『図体ばかり木偶の坊』

ある面識のない生徒からの言葉に逆上した小山は、暴力事件を引き起こした。そして、その一軒が最後のトリガーとなり。

――――高校二年生の夏を境に、小山ミサキの選手生命と学生生活は、幕を閉じた。

それ以来、人目を避けるように、自宅内でひっそりと過ごす日々。かつてのメダルやトロフィーは、物置の奥へしまい込んでしまった。両親は、何も言わなかった。辞めてもいい、とも。もう一度頑張ろう、とも。その気遣いが、また小山を苦しめた。

両親とて人の子だ。メダリストたる自身の子が、メダルへ挑戦することを夢見ていたに違いない。そんな両親の期待も。周囲の期待も。クラスメイトたちからの応援も。自らが不甲斐ないばかりに、裏切ってしまった……と。小山は自室のベッドで毛布に包まり、自責の涙を流すばかりだった。

やがて。スポーツ推薦で入学した高校からは、出席日数不足からの単位不足による留年が決定した、と連絡があり。そのまま更に一年が経過し……小山ミサキは、いよいよ『学生』ですら無くなってしまった。

そんな運命を変えたのは、あの『事変』の日。両親とともに、街へ湧いて出た機械の化け物を、タックルで倒し、寝技でシメ落とし、ジャーマンで叩き潰し……それが、一時的に得た力であるとは分かっていたが、それでも、小山は戦った。

――――天空に咲いた、一輪の桜を見上げながら。

結局のところ、自分はきっと、『主人公』ではなかったのだろう。連敗のきっかけにもなったあの選手は、あの後インターハイを無失点で制覇するという偉業を成し遂げ、オリンピック候補への内定まで勝ち取った。レスリングのニュースで、彼女の顔を見ない日は無いと言って良い。自分は噛ませ犬か、と、彼女を逆恨みしたこともあった。

だが、彼女と戦った経験で、今ならわかる。きっと彼女は、レスリ

ングという競技が、好きで好きで堪らないのだろう。周囲からの期待とか、ある種の惰性で流されるように競技をしていた自分とは違って。

あの日、奇跡の力で一時的に引き出された自分の可能性。自分には、あれだけの動きが出来たのだ。好きで居続け、努力の歩みを止めなければ、きっと、あの領域まで辿り着けた筈だったのだ。

それを放棄したのは、諦めたのは、他ならぬ自分自身だ。なるほど。これではレスリングの神様は微笑むまい。主人公など、ちゃんちゃらおかしいと言うものだ。

小山は、レスリングへの……否、過去への未練から、一歩を踏み出すことに決めた。

それから少しして。

ポストへ投函されていた一冊の冊子に導かれるように、月村学園の門を潜ったのだ。

ほんの一月の間に、本当に……本当〜〜に、色々なことがあった。無難に女子グループに入り込んだと思ったら不良とヤンキー大暴れ。発端が自分たちにあるとヤンキーに拉致され病院へ連行。何やかんやあって……今日、いよいよ、友達と、遠足へ行くのだ。

「……」

忘れ物は無い。母は涙を流して喜び、重箱を五段重ねにしてくれた。父はポリタンクのような水筒にプロテインドリンクを用意してくれた。さぁ、あとは、玄関を出て、集合場所へ行くだけだ。

「……っ」

行くだけ、なのに。

――『木偶の坊』『期待外れだ』

過去が、足を掴むのだ。何が発端となったのか。学園に入学してから今日まで、無遅刻無欠席だったというのに。

「ミサキ、……ミサキ？」

母が、心配そうにリビングから顔を出す。

「そろそろ、出る時間だけど……ミサキ？」

「……、……怖い」

――――家を出たら、そこにかつてのクラスメイトがいるのでは？　通りに出たら、近所の誰かが自分を見とがめるのでは？　角を曲がったらスポーツ記者がいるのでは？　けがをさせてしまった生徒が。その親が。

そんな、妄想と言えるような考えが浮かび続け……小山は、一歩も動けなくなってしまっていた。

「怖いんだよぉっ……!!」

「ミサキ、……」

母は、また何も言わなかった。ただ、小山が立ち上がるのを待ち……時間が、静かに、しかし確実に過ぎていく。

「……うっ、うっ……!!」

小山は、泣いた。この期に及んで、立ち上がれない自分に。

「なん、でっ……!!　なんで、わたしはぁっ……!!」

変われたと思った。変われると思った。なのに。また、こんな、肝心な場面で。

時計の時刻は残酷にも過ぎていき……いよいよ、集合時間の限界を過ぎてしまった。もう、間に合わないのだ。

「うわぁあああああっ……!!」

母は、いつの間にか居なくなっていた。小山は一人、玄関に座り込み、うつむいている。

携帯電話は、意外なほど静かだった。班長であるハリーからも、連絡は無い。いよいよ見放されたか。と、より深く沈んでいく。

「……」

ここで、終わるのか。あれだけ後押しされておきながら。あれだけ励まされていながら。また、周囲を裏切ってしまうのだ。この、たった一枚のドアを開けることもできずに。

――――。

――――がちゃっ。

「……へ？」

ドアが開いた。呆気なく。それも外から。
「――――――小山さん、おはよう」
特徴的な栗色の髪の毛に陽光を受け、ここにいないはずの、不良の友達が笑う。

◆・◆　◆　◆

「――小山さんが来ていない？」
フェイトたちに送り出されてきた私服のなのはは、集合場所で合流したハリーたち班員の中に、小山が居ないことに気が付いた。
「あぁ。寝坊や遅刻かと思ったんだが……」
ハリーが携帯電話を振る。
「連絡は……しない方が良いやつね」
「うん。お願い」
ある程度の事情を知る大宮が、真剣な表情で言う。詮索はするまい。
「……まだ、時間はあります。ただの遅刻だというのであれば、待っていれば……」
中野が、腕時計を確認する。
「確か、我々の班員の中で唯一、保護者と共に暮らしているのでしたわね。仮に遅刻というのであれば、保護者から何らかの連絡があるのでは？　最悪、集合場所までは自動車で送り届けるでも良いのですし」
エルスの意見も尤もだ。ほかの班の者たちも、小山の不在に気付いたのか、はたまたなのはたちの深刻な様子に気が付いたのか、ちらちらと見てくる。
そして、出発予定時刻になるのだが、小山が一向に現れないとなり……
「……出発を十分間、延期します。皆さん、よろしいですね」
担任教師が、表情を硬くしてその場を離れる。
「……小山さん」
長い長い十分間。だが、予定は待ってはくれない。

「――――出発します」
「先生!!」
戻ってきた担任のもとへ集まる生徒たち。
「――――保護者の方との連絡はつきました。小山さんは……可能であれば途中から参加をする、ということです」
「可能って!? ねぇ、可能ってどういう意味!? 小山さんがどうかしたの!?」
小山の友人であるらしい女子生徒が、切羽詰まった様子で言い寄る。
担任は言い聞かせるように笑顔で、全体に説明をする。
「……小山さんの、個人的な事情によるものです。参加を強制しては、それこそ、小山さんにとっては不幸なこととなってしまいます。行きのバスを一緒に過ごせないのは、残念極まります。皆さんが、さまざまなレクリエーションを発案して下さっていたことも、承知しています」
まして、小山を待つために予定を詰めるということは……結果的にではあるが、小山が原因で、遠足に水を差すということになりかねない。誰も責めはしないだろうが……彼女が、彼女自身を責めてしまう。
「保護者の方も、行き先は把握しています。自家用車での途中参加を希望されていますので、我々はバスで出発をしますよ。さ、乗ってください」
やや納得がいかないながらも、バスへ乗り込む一同。だが、小山を心配する雰囲気が場を満たし、まるでお通夜――――
「――――オルルァアアアアア!! 一曲目行くぞォオオオオオオ!!!」
――――キィイイイイイイーーーーーン!!
「うわぁっ!?」「なに、なに!?」

強烈なハウリングを起こさせながら、車内のスピーカーから大音声が反響する。
「う、うるっさいですわねぇ、犬ッコロ!!」
当然、それに抗議するエルス。だが大音声のヌシことハリーは、ニッと白い牙を剥くように笑う。
『「シケたツラぁしてんじゃねーぞ、てめぇらァッ!!」』
がちゃがちゃ、とオーディオパネルを乱暴にいじり倒し……音楽のイントロが流れ始める。レクリエーションとして用意されていたカラオケ用の音源だ。
『うっし……おうデコメガネ！　オレとカラオケでバトる準備はいいか!?』
――パシィッ!!
挑戦状のように投げつけられたマイクを苦も無くキャッチしたエルスが応じる。
『あァ!?　誰にモノ言ってやがりますの!?』
……なのはの（悪）影響を受け非常に好戦的になっているエルスは、その挑発に乗る気満々のようだ。
『逃げるってンなら逃げてもいいぜぇ!!』
『我が母国はロックバンドの本場ですのよ!!　受けて立ちますわ!!』
……ある種の予定調和というか、プロレスというか。ハリーとエルスの掛け合いは、周囲の空気や雰囲気を、嫌が応にも盛り上げていった。
そしてハリー、意外や意外、歌が上手い。……まぁ若干、演歌っぽい歌い方というかコブシが入るが、それがまた独特の歌唱力を発揮していた。
対するエルス。普段の仮面優等生っぷりを脱ぎ捨てる勢いで、日本語歌詞を即興で英訳し、腕を振るわ足を踏み鳴らすわ、激しく激しく歌い上げる。……ロックというかメタルっぽいが。
二人の不協和音寸前のデュエットは、車内を熱狂と爆笑の渦に巻き込んでいった。

その陰で。なのはの座席が空席になっていたことを覆い隠すように。

◆・◆　◆　◆

「なのはちゃん……!?　どうして……!!」
「お邪魔！　しまーす！」
なのはは、ずんずんと玄関を闊歩し……どかっ、と、小山の隣に腰を下ろした。
「小山さん、おはよう」
まるで、いつも教室でしているように挨拶をする。
「おはよう……、じゃ、なくって!!　どどどどうしたの!?　遠足は!?」
「小山さんに言われたくないし」
「そっ。……そ、そうだけどっ！」
「うん、私、行かないよ」
「いか、いかなっ……うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーっ!?」
なぜ、と問う前に、真っ先に浮かぶ考えがあった。
「……同情してるっていうの!?」
頭が、かぁっと熱くなる。
「わたしっ……確かに、不登校でっ……、今日、こんな肝心の日にぶり返しちゃってっ……！　でも、だからって!!」
「違うよ。さっきも言ったじゃん。『小山さんが行かないから、私も行かない』って」
「行かないなら、って」
「『行かないから』、だよ」
「えぇ……?　なのはちゃん、ぼっちが極まってて普段人と話さなくて脳内思考だけ高度になりすぎてるから、ごくまれに人間相手に発する会話についていけないよ……」
「ちょっと酷いんじゃないの!?」
――なんでや！　ぼっち関係ないやろ！

「むぅー……なんか最近、私の扱いが雑な気がする……」
少しだけ機嫌を悪くしながらも、なのはがどでかい背嚢へ手を突っ込む。……結局、かわいらしいリュックサックなどという女々しいブツの役目は無いようだった。
「はいこれ」「ナニコレ」「レーション」「ナニコレ」「レーション」
この子、実は結構バカなんじゃないだろうか。遠足用のお菓子はどこへ行った。
「珍しいでしょう。色も味もスゴいのよ。一緒に食べてマズさに悶絶しましょう」
パーティーグッズのつもりのようだ。
「あとこれ。昨日買ってきた山刀と（ゴトンッ）、早朝になってギリギリ間に合った軍用ナイフ（ゴツンッ）。これは湿気っててもも激しく火が点くマッチに、死ぬほど痛いけど確実に効く消毒剤、それに併せて使うこと推奨だけど、分量に気を付けて使わないと人生に取り返しがつかなくなる系の痛み止め、チタン焼結強化アラミド繊維……」
四次元ポケットか！
「待って待って待って！　ウチの玄関がブラックマーケットになっちゃう！　何しに行く装備なの!?」
「何って、そりゃあ……オリエンテーリング（山岳踏破訓練）でしょう？」
「私の知っている言葉に知らないルビが振られている件について」
しかし……なぜこれを、この場で広げるのか。
「はい、食べて」「ｏｈ……」
不意打ちで備え付けスプーンで口に謎のペーストを突っ込まれる小山。
「……!!　ん、ぐっ……!?」
……マズい。強いて言うなら、海苔の佃煮に大量の酢をブっかけた上にコショウを振ったような……名状しがたいナニカの味がする。
「んぎゃあーー!!?!?」
「あっはっはマズいなぁ、相変わらず」
笑顔でそれをパクパクと食べるなのはも大概だ。
「精神が摩耗しているような状態からでも味覚を刺激できるように、

わざとこういう味にしてるんだって。毒は無いよ」
ひぃひぃと喘ぐ小山を尻目に、今度はマトモそうな豆菓子を取り出す。
「はいこれ」「騙されないもん！」「ちっ」
豆菓子という名の漢方薬ボールをぽりぽりと齧る。
「こういうの、いっぱい用意してきたんだよ。まだまだいっぱいあるの」
「……遠足で、みんなと、使うためにでしょう」
長い足を折りたたむように、膝を抱える。
「まぁね。でも良いんだ。今日は二人で遊ぼう。外に出られないなら玄関先でも良いし、お部屋にお邪魔するでも良いし」
「……いいよわたしは。なのはちゃんのことだから、非常識な方法で今からでも間に合うでしょう、みんなと、」
「嫌ヤ」
遮られた上に一文字で否定され、小山が今度こそ激高する。
「……!! 何で!!」
「自分のため」
言葉を失う小山に、なのはが滔々と続ける。
「小山さんが行かなかったら、今日の思い出が悲しいものになっちゃうの。みんなと今日の思い出を話すことができなくなっちゃうの。私は、今日の出来事を、いつか『楽しかったね』って笑って話すことができるように行動しているの。だから、過程はどうでもいいの。班のみんなで遠足に行く『楽しかったね』でも、逆にみんなでサボって『楽しかったね』でも、……正直、どれでもいいの。でも、『楽しかったね』に混ざれない人が居ると、それが成り立たないの。楽しんだということが罪悪感になってしまうの。だから、私はここにいるの。いつかハリーがする『遠足めっっっちゃ楽しかったぜ！』っていう自慢に、『こっちだってすっっっごく楽しかったよね！』って、小山さんと二人で腕を組んで自慢し返すために、ここに居るの。私は他人のためになんか動かない。自分のためにしか動かない。動くものですか。今までもこれからも、ずっとそう。だからこれは私のためで、

自分のためで、小山さんは何も気にすることじゃないの」
「気にするよぉ……!!　あと話がめっちゃ長くて重い……これまでの人生分くらい喋ったんじゃないの？」
「何とでも言いなさい。少し泣くけど」
「泣きたいのはこっちだよ……！」
――嗚呼、情けない。
このぼっちにとっては、生涯において初めてであろう『楽しい遠足』を棒に振らせるような真似をさせて。気を使って『やっている』つもりだった相手に、逆に気を使われて。それどころか、器の大きさをまざまざと見せつけられて。タックルを食らって押し倒されてマウントを取られてしまったような気分だ。今ので何ポイント失った。
――こんなんで、いいのか。
あの日、立ち上がると決めたのではなかったのか。諦観のまま『主人公』に敗北し、逃げ出した、噛ませ犬のままか。これではまさに負け犬かませ犬、木偶の坊ではないか。
――こんなんで、いいのか。
「なのはちゃん……」
小山は、なのはの手を一度握り、離し……
――いいわけ、ねーだろ!!
立ち上がる。１９０ｃｍが屹立する。
「わたしも、自分のために……自分の敵に、勝ってみせるよ」
果てしなく遠い玄関扉へ。ドアノブに手を置く。
「男の仕事の八割は決断。それ以外はオマケみたいなもん……！　わたし女だけど！」
大きく大きく、息を吸う。思い出せ。勝負の気持ちを。引きこもり時代にアニメ漫画特撮から学んだことを。勇気をもって、一歩を踏み出すことを。決断しろ。胸を張って歩き出せ。
「お父さん！　お母さん！」
リビングからハラハラと見守っていた両親へ。
「わたし！　これから!!　遠足に!!!」
幾度も幾度も、自らを阻み続けてきた難敵、玄関扉。その難敵に。

「――――行ってきます!!」

――――――――――――がちゃんっ!!

いま、小山ミサキは、打ち勝った。

なんという強敵だったことだろう。動悸は治まらず、脂汗がじわじわと染み出てくる。膝は生まれたてのキリンのように震え、乙女のような内股になっている。

――――――かっこわるいなぁ、わたしは。

「格好いいなぁ、小山さんは」

その横をひょいと歩み出てきたなのはが……玄関先に鎮座していた見慣れぬ大型バイクに手を触れる。

「私は神様だからね。頑張った人にはありがた迷惑なご褒美をあげちゃおう」

――――――どうんっ。

エンジンに火が入る。

「――今から、小山さんをB級青春ドラマの主人公にしてあげるわ」

――――――――――――。

――――――ウォオオオオオオオオンっ……!!

高速道路を、漆黒の巨体が疾走する。

「うひゃーーーーーーー!!」

悲鳴だか喜声だか奇声だかを上げる小山。

「なのはちゃーん!」

「えー、なにー!?」

インカムの音さえ風を切る音に消されてしまいそうだ。

「いま何キロォ!?」

「２２０キロー!」

距離か速度か両方か。

「小山さーん!!」
「えー、きこえなーい！『小山さん』じゃなくて、『ミサキ』って呼んでくれたら、きこえるー！」
「ミサキちゃーん!!」
「なにー!?」
「ケツ重いー！　ミサキちゃんが重いー！」
「なにおー!?」
「ミサキちゃーん！」
「なにー!?」
「楽しいねー!!」
「……うん!!　楽しいーーー!!」
目の前には、朝に見たっきりの観光バスが――――

◆・◆　◆　◆

バス車内。
カラオケバトルは大盛り上がりの末にお開きとなり、今は各席で各々が和気あいあいとお喋りに花を咲かせている。
「……ふぃー、歌った歌ったぁ」
「……あ゛――……もう喉がガラッガラですわぁー……」
疲労困憊し、互いを支えにドカっと席に座るハリーとエルス。
「おうデコメガネ。オレの血も半分はえげれすなんだぜ。思い知ったか」
「ハん……赤毛なんて、こっちじゃ普通に居ますわよ。気づいていましたわ」
戦いを通じて友情が……
「オレの熱いシャウトがクラスの心をガッチリと」
「わたくしのモッシュダイブが一体感を」
「……」
「……」
「オレのほうがすごかったし!!」

「わたくしですわ!!」
……芽生えないよねー。
「オレが居なかったらお通夜だったし！　オレの功績だし！」
「慈悲深きマイＧＯＤお姉さまのため、盛り上げに協力してやったのはわたくしの功績ですわ！」
「やるかぁ、オォン!?」
「やってやりますわよアァン!?」
大張正己のロボアニメのように額をガツーンとぶつけて至近距離でにらみ合う。
「仲いいね、ふたり……」
「「　良くねぇ（ですわよ）!!!　」　」
大宮の指摘に、ハモって返す。
「……なのはちゃんなら、きっとどうにかしてくれるよ。きっと……」
大宮は、なのはを信頼している。成果を持って帰ってくるとか、来ないとかではなく……ただ、信頼しているのだ。信じて、頼っているのだ。
「えぇと……出発地から、速さかける時間×距離……あれ？　時間×時間×時間だっけ……？　時間わる速さ……？　……???　ぶんすう……できない……」
時空間が歪んでいそうな中野だったが、何を計算しているかは明白だ。
「わかんないから……とりあえず、クイズ大会でもしよう……」
この日クラスのために用意してきたクイズ帳をぱらぱらと捲る。マイクを握り……
「ハイ皆さん、突然ですがクイズです。このクラスで先生以外の最年長女子はダレぁあああああああああああああああああああ!!」
何事!?　と全員が振り向く中、中野リリコが指さす。
「あぁ！　窓に！　窓に！」
窓？　全員がそちらを見る。
「まだギリ十代だし……！　あと半年は十代だし……！」

……最年長女子高生・大宮ハルカ（１９）は、クイズ帳のページを無言で切り取った。

◆▪◆　◆　◆

「「　見えたー!!　」」

二人で歓喜する。

「追いついたよ!!」

「やったー……って速すぎて追い抜いちゃってるよ、なのはちゃーん!!」

「おっといけねぇ」ブレーキ。

「ごっふぅ……!!」

減速Ｇでなのはの背に押し付けられる。

「みんなも気づいたわね」

バスと並走する二人に、窓から覗くクラスメイトたちが目を丸くしている。

「な、なんか恥ずかしいね!!」

「手でも振ってあげなさいよ」

「えぇ～……？　……いっちゃう？　やっちゃう？」

「いっちゃえやっちゃえ。人生なんて楽しんだモン勝ちよ」

おっかなびっくり、左手をなのはの腹から離し。

「――みんなー!!　やっほー!!!」

どうせ聞こえていないのだから、と、思いっきりはっちゃけた声を出してみる。そう、どうせ聞こえていないのだから。

……その陰で、なのはが邪悪にニタリと笑っていることに、小山は気づいていなかった。

――……なー、やっほー!!』

「ん？　この声は……」

ハリーが、唐突に音を出したスピーカーの方を訝しむように見る。

――『みんなー!!　やっほー!!　追いついたよーー!!』

「「「「　小山さんだコレぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!?　」」」」

驚愕するクラスメイトたち。ハリーがオーディオパネルを見やる

と、先ほどまでＡＶモードだったはずの表示が、ラジオに代わり……
「６６．６６６」という何だか呪われそうな数字の周波数を表示していた。
『おいなのは。何をやった』
念話を繋ぐと、なのはの自慢気な声が返ってきた。
『念動力でナビのコントトール切り替えて、周波数をこっちの機器と合わせただけ。
――これも神通力のちょっとした応用よ』
『なんつー神の力の無駄遣いだ……』
『天でふんぞり返ってるよりはよっぽどマシでしょう』
『みんなぁー！　ぐすっ……みんなぁー!!』
「小山さーん！　よかったよぉーー!!!」
確かに、みな幸せそうだった。
『さて、他人に足並み合わせて並走し続けるのもかったるいし、また現地でねー』
『ほんっとブレないよなお前は……』

法を景気よくブチ破る速度で、再びクルージングが始まる。
「ねぇ、なのはちゃん」
「なぁにー？」
「わたしたちさぁ……！」
そして、堪えきれなくなったように笑いながら言う。
「――めっちゃ主人公してるよね!!」
「――うんっ!!　すっごい主人公してる!!」
確かにこれは。なのはの言った通りだ。
不登校児と問題児が、バイクに二人乗りで、遠足地を目指すのだ。
なんというＢ級青春ドラマだろう。
だが、それでも。
小山ミサキは、今この瞬間、間違いなく、自分の人生の『主人公』だった。

二人が当初の集合場所に到着し、二人でクレープやソフトクリームを楽しんでいると……遅れること３０分。クラスメイトたちが乗るバスが、専用パーキングに到着。そして。
「小山さーん！　なのはちゃーん!!」
大宮を先頭にした一団が、どっと押し寄せ……二人を取り囲んだ。
「良かったね！　良かったね小山さん！」
「うん……うん……！　なのはちゃんが、助けてくれたから……！」
「「「……」」」
「な、なによ」
珍しく、恐怖心以外の興味を向けられ、なのはがたじろぐ。
「……吾妻さん、結構いい人？」
「なっ」
ぼそっとした呟きに、なのはの顔がかぁっと熱くなる。
「そんなわけ、ないでしょう!!」
……そこは素直に礼でも言えば良いのに。
「照れてる」「照れてるわね」「不良が照れてる」
「て、照れてないしっ！　不良じゃないしっ！」
じり、と後ずさる。どふ、と誰かにぶつかる。
「吾妻さん。小山さん」
……担任教師だった。
「……」
さぁっ、と血の気が引くなのは。赤くなった青くなったり忙しい。よくよく考えなくとも、というか、実行する前に気付け、と言いたくなる。どう考えてもヤバい行為だった。
「先生」
なのはは、先手を切ることにした。
「ハイなんでしょう」
「羅生門って知ってますか」
「目的のためなら外道も許される、とか言うわけじゃないですよね。生命の危機ならともかく」
「くっ……！　咲先生のようにいかない……!!」

どんだけチョロいんだ、咲先生。
「いえ、別に合流できたこと、そのこと自体は悪いことではないんです。ええ」
「これ知ってる！　一度安心させてから落とすやつだ！　私、知ってる!!」
「まず何より……吾妻さん、いまご年齢はお幾つでしたか？」
「……じゅ、じゅうなな、デスが」
「なるほど。では、あの自動二輪車の排気量は何ccでしょう？」
「担任にナンシーさんされるとは考えたこともなかった」
「で、何ccですか？」
この担任、強い……！　追い詰められたなのはが絞り出した答えは。
「……ヨンヒャクです」
……苦しい！　これは苦しい！
「ほう。では、車体に大きく描かれている『１１００』とは、どういう意味なのでしょうか？」「ソウイウ飾リデス」
「ほうほう。ではエンジンの刻印を検めさせて頂きますね。あぁ、それと車検証も」
「うぁー……うぁー……」
なのは、思考停止す。
「せ、先生ー！　待ってくださいー!!」
小山、動く。担任教師の両脇を掴み……ぐわぁーっと一気にリフトアップ！
「ぬわぁあああーーーーー!?!?」
いきなり天高く飛翔した担任教師が悲鳴を上げる。
「わたしが！（ぶぉん）　わたしが悪いんです!!（ぶぉん）　わたしがヘタレたから!!（ぶぉんぶぉん）　だから、なのはちゃんは悪くないんです!!（ぶぉんぶぉんぶぉん）」
「あ、あば、あばばば……！」
「ミサキちゃん、先生が死んじゃう。死んじゃうから」
タケコプターと化した担任教師。一瞬のスキを突き、なのはが担任

を着陸させる。
「……ま、まぁ、事情は最大限、考慮しましょう……」
地面にへたりこんだまま、担任教師がそんなことを言う。
「さ、さぁ皆さん、目的地はここではなく、この先のキャンプ場です。行動を開始しましょう……あと誰か立たせてお願い」
虚脱した担任を、なのはが支える形で立たせてやる。
（……問題児には問題児なりの苦労があるけれど、その問題児の担任にも当然、苦労があるのね）
なのはは少し大人になった。
「ねぇ、あの不良……吾妻さん」「うん……吾妻さんって」「うん……」
クラスメイトたちが、ごにょごにょと話し合う。
――実はいい人なんじゃない？
不良！　猫ミルク！　ベストマッチ!!
説明しよう！　不良が猫にミルクをあげている構図。出典や原典が明らかになっていないにも関わらず、広く認知されているこの構図は、極悪人がごくごく当たり前の善行を行うと、なんだかとても好感度が上がってしまうということを意味している！　世の中は不公平だな！

「――」
屋台の主人は、なのはの後姿をじいっと見ていた。先ほど、屋台にまで来て至近から確認した。間違いない。携帯電話に耳を当てる。
「――一柱。ヤマに向かった。栗毛。『巫女』を出し、必ず仕留めろ」
ぼそり、と言う。
「――カミは『還（かえ）す』もの。我ら一族の使命を果たすのだ」
通信を終えたそこには、ただ屋台の主人がいるだけだった。
「――ま、気づいてるんだけどねー。サクっと潰そうっと」

組織の壊滅が、極めて軽いノリで決定した。

# ｖｉｖｉｄ編　１６話『　神罰執行　』

――――いつかは帰れるといいわねぇ。

◆▪◆　◆　◆

無事に合流を果たした１―Ｄの面々。なのだが。

「……」「……」

大宮と中野は、何とも言えない表情だった。

『ミサキちゃん』、かぁ……」

名前呼びをされていない二人は、なんだか置いて行かれたような、そんな寂しい気持ちになっていた。

「良いこと……ではないでしょうか。なのはちゃんが、クラスに馴染んできている、ってことでしょうし」

「……そうね。きっと、そうなんでしょうね」

クラスに、なのはが馴染む。それはきっと、大宮たち班員の最終目標だ。それが着実に進行しているということは、間違いなく、良いことなのだ。しかし……

「……もやっとする」

そう。ぼっちでコミュ障のなのはと仲良くなるのに、自分たちはそれはもう苦労したものだ。行動原理を理解するにに何度も検討会を行ったり、エルスに鎖でドツかれたり。一定の親愛関係を構築して、ようやくここまで来たのだが……他の誰かと、ケロっと仲良くなっているなのはの姿を想像すると、なんというか……

「……なんだか、すっごいイヤな気持ちになる。そして、そんなイヤな気持ちになる自分がイヤになる」

文系の中野が、分かりやすく言語に変換する。

「……つまらないヤキモチよね」

「いいんじゃないでしょうか。わたしたちは聖人君子ではありませんし」

――出発します。はぐれないように付いてきてください
……と、登山道の入り口から呼ぶ声がした。
「……あ、向こうみたい」
「……このルートで頂上まで行くんですね」
――はぐれないように付いてきてください
「……行きましょう」
「……そうですね」
――付いてきてください。
――はぐれないように
――ついてきてください
――おいで。
――おいで。
――おいで。
「……」「……」
……ぼう、っと、誘われるままに。大宮と中野は、背の高い茂みの分け入りに歩いて行った。

集合場所から、めいめいに班行動で登山道へ出発していく、1―Dの面々。そんな中。
「大宮さんと中野さんがいない？」
「……うん」
小山がなのはに耳打ちをする。
ことの顛末を二人に報告しようとした小山だったが、二人が荷物ごと、集合場所から姿を消していたのだという。
斥候に遣わしたエルスが戻るが……
「第一チェックポイント……登山道に入って５０ｍほどの二叉路にいる先生に聞きましたが、お二人は来ていないと。チェックポイントまでは脇道もない一本道で、斜面もありませんわ」
「……ハリー。二人の匂いは？」
「……」
すんすん、と鼻を鳴らす。そして、首を横に振る。

「不自然に、匂いがしねぇ。ヤマの匂いで分からなくなるほど、オレの鼻はなまっちゃいねぇ筈だぜ」
……なのは、ハリー、エルスの三人が、目線を交し合う。
「――――さっきの奴らね」
クレープ屋台の店主。そして、その背後に居る何者か。
「……ったく、よぉ」
ハリーが深々とため息をつく。
「ヒトならざるものを敵視して、無条件で排除を目論む連中……どこにでも居るもんだぜ。潰しても、潰してもよォ……！」
ギリッ……と、変化が一部綻び、鋭い犬歯が伸びる。
「ミサキちゃんは……」「一緒に行く!!」「先に行って……って、なんで!?」「だって！」
ぐわっ、と取り出したのは……読み込まれ、ヨレヨレになった、遠足のしおり。めくって一枚目に書き文字で大きく書かれた言葉は。
――――『班のみんなと、山頂を目指す!!』
「だ、だいたい、一人じゃ最初のチェックポイントで先生に止められちゃうよ！　下手したらひとりぼっちでバスで待機だよ！」
確かに、その方がありえる話だ。
「ミサキちゃん」
なのはが、いつになく真剣な顔をしている。
「……」
ぎゅ、と手を握って、なのはの厳しい言葉を受ける覚悟を決める。
「私たちから離れないでね」
……予想外だった。てっきり、ド正論で待機を命じられると思っていたのに。
「んー……そうね、エルス。ミサキちゃんの護衛はあなたの仕事よ。できるわね」
「はい、お姉さま」
敵の主な狙いは、おそらくは自身だろうとアタリを付ける。
「うん、よろしい。そろそろ能力を実戦で試してみても良い頃合いだからね。今回の戦果次第で訓練のレベルを上げるわ」

「はいっ！　もっともっと厳しくしてくださいませ……!!」
　ギラギラした目のエルスが、頭三つほど高いミサキの腕をガッシと掴む。
「小山さん……！　あなたはわたくしがお守りしますわ……！　お姉さまのために!!　わたくしのために!!　ドゥフフフフフ……！」
「わぁ我欲の忠実なる下僕だぁ……」
　気合いに呼応するように、エルスの周囲に鎖状のオーラが発生していた。ある意味頼もしい護衛がついたと考えてもよいだろう。
「ふーむ……しかし、どう追ったものか」
　腕を組むハリー。
「この山の植生は分かる？」
「？　そりゃあ分かるよ」
「なら、生クリームとチョコレート、バナナかイチゴの匂いはする？」
　ハリーは鼻を鳴らす。
「……する。しかし、どうして」
「あのクレープ屋よ。あそこが下界の情報を山に知らせて、それに応じてちょっかいを掛けてくるの」
　少なからず、接触するのだろう。無論、人間には判別できないレベルの僅かなものだろうが……ハリーの鼻は、その痕跡を確かに捉えた。
「全力で行くぜ……！」
　ざりっ……と、ハリーがクラウチングスタート……否、獣の四つ足が地を捉える。
　リュックの二重底に隠し持っていた防刃チョッキを装着し、ナイフのホルスターを巻いたなのはも準備万全。エルスは鎖を身体各所に装着し強化を施している。
「Ｇｏ!!」
　――ダンッ!!
　ハリーが茂みを突き破らんばかりの勢いで、獣道に突撃する。
　――ザザザザザッ!!
　茂みの音に紛れ、何らかの仕掛けが動作する。

「――探知結界!!」
「おぅおぅ、思う存分、オレを見つけてもらおうじゃねーかぁ!!」
――ピュウッ!!
「右に伏兵!! 吹き矢!!」
「どうせ毒針だ！ マジメに相手すんじゃねーぞ！」
「精密性・飛距離・威力、すべて落第点！ もっと上手に隠れながら正確に眉間か眼球でも狙いなさい！ ……こんな風にね!!」
――ベキッ!!
なのはの正確無比な投石攻撃が、防具の薄い顔面を直撃する。
「そして脇差ゲェット!! 下らない用事に自前の刃は損耗したくないもんね！ 戦利品がてら貰ってあげるわアハハハハ！」
ハリーが駆け、なのはが道を均し、エルスは小山を半ば抱えるように悠々と山を切り進んでいく。

――惑え。
――迷え。
――山に。
籠るような、怨念じみた声。
――ガササササッ……!!
それに呼応し、前方に三叉路が出現した。
「ハリー、音!!」
なのはが三方向に投石する。
――バキッ！
石が砕ける音を、ハリーの聴覚が鋭敏に捉える。
「……！ 三本道に見えるが、一本道が空間歪曲で三つに割れているだけだ！ 三方向同時に突破すりゃ抜けられる！ それが最短ルートだ！」
三人（＋一般人）はスピードを落とさず、三方向へ分岐する。
「――散開!! 各個に道を突破せよ！」
「了解ですわ、お姉さま!!」
なのはの指示に、最も実戦経験が浅いはずのエルスが歓喜の声で応

じる。
「ちょっ……エルスちゃん、大丈夫なの!?」
「その時はその時ですわ！　きっとこの先に、悪！　とびっきりの悪がおりますのよ！　あぁ、早く潰して差し上げなければ!!」
　事実、エルスが進んだ道の先は、やや開けた空間となっており……
「……!!　っとォ!!」
　急制動を掛けたエルスの顔面間近を、巨大な影が薙いで行った。
「な、なにっ!?　……ひぃっ!?」
「……いわゆる中ボス出現ですわねぇ」
　――その相手は、ただ巨大だった。
　人の形を逸脱しているわけではない。ただ、大きかった。冗談抜きに、３ｍもの巨躯。しかも、上だけではなく、横にも長い。そして、油でも塗っているのだろう。ツヤツヤの黒髪を、独特の形に結い上げたその姿は。
「――リキシ、ですわね」
　異様に巨大であるが……確かにそれは、力士の姿だった。
「ふしゅうううぅぅぅぅ……!!」
　ずぃぃ、と、巨木のような片足をゆっくり、ゆっくりと持ち上げ……
「――隙だらけですわよ、オデブちゃん！」
　――ギャリリリリッ!!
　鎖の刺突が、力士の顔面を狙い、しかし。
「――ンンんぬぁああァァァッ!!」
　――ドシィイイイインッ!!
「!?　きゃあっ!!?」
　大地が震動し、小山はおろか、エルスさえも立位を保てなかった。
「ぬゥうううん……!!」
　力士が、冗談のように足首まで大地に埋まった足を、ボゴッ……と引き抜く。続けて、両腕をいっぱいに広げ……
「――力ぁあああああっ!!」
　――ずぱぁあああああんっ!!
　平手を、打ち鳴らす！

「――――、うぎっ、!?」
頭が金属バットで殴打されたかのような衝撃が走る。鼻いっぱいに広がる、鮮血の錆臭さ。更に、エルスの世界から、音が消え去った。
「くっ、……鼓膜、イきましたわぁっ……!!」
だが、ある程度、力士の巨体のインパクトから覚めると、見えてくるものがあった。なのはから授けられた数々の知識。頭脳明晰なエルスは状況と知識を正確に照らし合わせる。
(円形の空間……そして、鎮座する社。おそらくは、あの社が空間湾曲の起点。そしてあの力士は、結界の番人、というわけですわね)
「……」
エルスは、おもむろに懐からハンカチを取り出し、鼻に当てる。そして。
――ぶびびびぃっ。
……恥じらいもへったくれも無く、鼻をかんだ。鼻血と鼻水の混合液が消え、呼吸が戻る。
「っあー、スッキリしましたわぁ」
プールから上がってそうするように、首を傾け軽くジャンプをする。耳に、風の音が戻る。
「なおる、はやい」
「あら、人語を解しますのね?」
「おで(おれ)、みち、まもる。おまえ、つぶす。ぺちゃんこに、する」
「……へぇ、面白いジョークを言う肉ですわねぇ」
「おで、つよい。あめのてぢからをの、まつえい」
――――ズシィン。
中腰から、半ば四つん這いのような姿勢。立会いである。しかし……この巨大がその動作を行うということは、そのものが攻撃手段にも等しい。
(純粋な超パワー型。これは……!)
エルスは、そこまでパワー型というわけではない。鎖で最大強化を施したとしても、目の前の猛牛には及ばないだろう。生半可な射撃や砲撃は逆効果か無意味か。今現在、エルスの打てる手は限られてい

る。そのうえで、不利な相手と戦わなければならない。それ……

「――燃えますわねぇ!!」

あえて、不利を承知で、全身の最大強化を施し、力士の見よう見まねで屈んでみる。

「え、エルスちゃん、ダメ！　ウェイト差が……！」

ミサキの警告が、エルスに届くよりも早く。

「おまえ、ぺちゃんこォオオオオオオオオーーー!!」

「やっておみせなさい木偶の坊がぁーーーーッ!!!」

巨獣と少女が、衝突する！

◆・◆　◆　◆

――ドゴォオオンッッッ……!!!

地響きと轟音が、別の道を行くなのはの耳にも届いた。

（やっているようね。勝ちなさい、エルス）

なのはもまた、行く先から殺気を察知していた。

「んー……これはもう駄目ね」

先ほど、刺客より強奪した脇差は、遠慮なく使い倒した影響か、もはや刃ではなく、ただの鉄の延べ板と化していた。

「ほら、あげるわ」

――ビュンッ!!!

気配の主へ投擲する。

「……」

弾くでも、避けるでもない。僅かに顔を逸らし、持ち手を掴み取る。

「……あぁ、巫女とかなんとか、言ってたっけ」

その顔を見たなのはは、一瞬、呆気にとられ……すぐに平静に戻った。

いかにも、である。いかにもな、巫女という恰好をした少女だった。白い帯状の髪留めで結った頭髪は、天使の輪ができるほどに艶があ

り、腰ほどまで長い。
そして、その佇まいに調和する……腰に佩いた、一振りの刀。巫女の体格に合わせて拵えているのだろう。身体の一部であるかのように、自然な立ち姿をしている。
「どんなナリでも、剣客として相対するというのなら相手になってあげるわ」
剣の腕比べとなれば、イキイキとしそうであるなのはだったが……今日は、不思議と消極的かつ受動的だった。
「カミを、天に還す」
腰だめに構え、刀を抜刀する動作に入る巫女。
（なるほど。巫女装束は、霊的な属性に加え、実用品ってことね）
袴は足運びを伺わせず、翻る袖は刀の軌道を隠匿する。
（居合がベースの抜刀術、踏み込みで一気に間合いを詰めて、）
――――キィイイインッ!!!!
「……一刀のもと、切り捨てるスタイル。王道ね」
「!?　立ったまま、わたしの剣を……!?」
否。なのはの周囲には、極細のワイヤーが張り巡らされており、手元のライター型の操作器具を手繰り、繊維で斬撃を受けたのだ。
「んー……７０点。ギリ合格かな」
呑気に採点を行うなのはに、やはりいつものやる気は見られない。
鞘に収めた刀を、再び抜刀の構えを取る。
「カミを、異能を、無条件で討伐する非合法組織……ハリーも言ってたし、父さんも、そういうのに気を付けろって言ってたけど。――――ま、こんなもんね」
あの口ぶりからすると、この巫女こそが、神を討伐する最大の戦力か、それに近いものなのだろう。
「……！」
抜刀のシミュレーションをする巫女。首狙いは防がれた。であるのならば、次は「腕を断つ」「!!」「もしくは足を断つ。身体の末端から攻める。それが叶わぬなら土を舞い上げ撹乱する。一太刀カスリでもすれば、この剣に付与された退魔の力がカミを殺す

――――って、考えているのでしょう？」
「ど、読心の術……!!」
「ただの予想よ。
――他人の内心の悪意を読み解くなど、私レベルのぼっちには造作もないことよ」
そしてなのはは顔をさっと曇らせた。
「……そう……あの日もそうだった……」
……なのはにとって、この程度の相手は考え事をしながらでも務まるのだ。
「おのれ!!　ならば！」
なのはの眼は、鍛え抜かれた心眼を以って巫女の剣筋を予測していた。ぐるりと、なのはの全身を手数で切り刻む軌道。
「いかに視えていようと、受けられねば意味はないッ!!」
「……ま、教えがてら、遊んでやるか」
ホルスターから抜いたのは、今朝、ギリギリで用意が間に合った払い下げの軍用ナイフ。
（あー、そういえば……）
ふと思い出したのは、目覚めた父との会話。確か、そういった組織の人間と敵対することになったならば、こう名乗るよう奨められていた。そう名乗ることを、当代当主より許されていた。
「――――御神流・表裏皆伝――吾妻なのは。推して参る」
「御神流……!?　アレは滅んだはずでは……!?　だ、だが、構わぬっ！
我が天瞳流の剣の冴えを見よ!!」
――連続する金属音。
ナイフの腹で、巫女の斬撃をいとも簡単に凌いで見せる。
「なぜっ……!!　なぜだっ……！」
困惑と怒りがごっちゃになったように、手数を繰り出す巫女。
「はい死んだ」
突如、目の前に刃が出現し、巫女は身体を強張らせる。が……来るべき死は、いつまでもやってこない。
「……え？」

なのはは、はじめの立ち位置から一歩も動いていなかった。巫女は知る由も無いが、なのはが放ったのは斬撃ではなく、殺気。幻の刃だ。
あー、傷が入っちゃった……と、ナイフの表面を眇めながら、なのはが淡々と話す。
「二太刀の斬撃はまぁまぁ合格。だけど、手数が増えると、それに比例して一発の精度が落ちて、隙が多くなる。鉄も斬れないようなナマクラを、いくら繰り出しても無駄よ。もっと一発一発に気合いを込めて斬りなさい。それができるまでは、一撃の居合切りだけに集中して鍛えると良いわ」
ごくまっとうに、六課の教官時代にそうしたように、丁寧な指導だった。
屈辱に顔をゆがめる巫女。
「剣で、斬れぬのならば……!!」
剣技……ではなく、巫女が次に取った行動は。
「魔をもって、魔を砕くのみ！　はぁあああ!!」
巫女は、その剣で……
――ザシュッ!!
己が腕を、真一文字に切り裂いた。一拍を置き、滴り、溢れ出る血液。それが大地へと達したとき……
――――――オォオオオオオオオオオォ……!!!
ざわざわと木々が慄き、大地が震動する。山が吠える。
「山の神に、我が血を以って奉る！」
血液を介し、大地と接続された巫女の身体が、山吹色の光を帯びる。
「魔力光……？」
なのはが、怪訝そうにその様を観察する。この状況と一致する場面を、なのはは知っていた。
ルーテシアだ。
彼女は己が身と大地の龍脈を接続することで、人の身を越えた大魔法を行使したという。原理としては同じものだろう。
「我に、カミを討たせ給え!!　急急如律令!!」
一層強く、山吹色が強く輝き……!!

――――――ドゴォオオオオオンッ!!!
巨大な閃光が、なのはを呑み込んだ。
山吹色の光は、その場に滞留し……余さず蒸発させんと輝き続けている。
「うッッ……!!」
がくり、と、巫女が膝をつく。身に余る力の行使に、活力を大きく削られたのだろう。
「我が一族の秘奥……！　その身に受け、天へ還るがいい……！」
爆熱の余波が収まり……逆ドーム状に抉り取られた大地が露わとなる。
――そして、ほぼ無傷のなのはが立っていた。
「――この私が、対消滅魔法くらいで死ぬと思っているの？」
なのはの足元の大地だけが、抉られず、扇状に残っていた。
「なっ……！　ば、馬鹿なっ!!」
「単純な威力だけでもＳランク相当か、それ以上ね。悪くなかったわ」
パキン……と、ナイフが中途から破断する。
「あーあ。消耗品とはいえ、勿体ないなぁ」
「どういうからくりだっ!!」
「簡単よ。ナイフを媒介に魔力刃を展開して、あんたの攻撃魔法を切り裂いたの。こんな風にね」
ホルスターから抜いたもう一本、山刀で実演をして見せる。なのはの前に、桜色の魔力刃が展開する。
「実戦で魔力を使ったのはずいぶん久しぶりだったから、うっかりナイフ折っちゃったわ。……で。あんたはどうするの？　もうカンが戻ったから、刃を折らずに何度でも同じことができるわよ、私」
「知れたことッ！　山の神よ！　今一度、我に力を……!!」
「死ぬわよ」
端的だが、的確な指摘。だが巫女は、力の行使を止める気配はなかった。
「先代も、そのまた先代も……！　こうして魔を断ち、散って逝った！
カミを還すことこそ、我ら一族の使命！」

「……そう」
なのはは……一層、冷徹な表情へと変わった。
――アレは言っても聞く耳を持たない類の人間だ。
――変な宗教に完全に頭が毒されている。
――でも目の前で死なれると目覚めが悪い。
――という訳で力尽くで救出しよう。
……似たようなシチュエーションは多々あったが、素直に降伏を選ぶだけで、どれほど血が流されずに済んだことやら。なのはは、やると言ったらやる女だ。相手の意思・事情・感情は完全無視で、目的達成まで一直線に突き進むだろう。
――っていうか私、言ったわよね。『剣客として相対するというのなら相手になってあげる』って。
――剣の勝負を放り出すってことは、そういうことよね。
……なのはは若干、苛立っていた。
せっかく、久しぶりに剣の腕比べができると思っていたのに。足らないところを実戦で教えてやって、いつかリベンジでもしてくれたらとっても楽しそうだな、と思っていたのに。むかつく。しばく。
……まことに身勝手である。
その理不尽な怒りに触れた、巫女の運命は。

「――――茶番は終わりよ」

……どうか、命だけは拾えますように。
◆▪◆◆◆
――――ずずぅんっ……!!
「がっはァ……!!」
エルスが、漫画のように地面に大の字でめりこむ。
「が、ぐっ……!!」
地面からはいずり出る。でなければ……
「エルスちゃん、危ないっ!!」
――――どずぅんっ!!

……エルスが脱出した直後、超重量の四股踏みが大地を抉る。
「なおる、おそくなった」
力士が言ったように、何度か叩きつけられ、折れた部分は、『羽根』の後遺症である治癒力を使ったり、鎖で継いだり、どうにか騙し騙し戦線に復帰してきたが……残機は残り僅か。そして、未だに目の前の猛牛の攻略法は見えない。
「エルスちゃん！」
……こうして、ミサキがたびたび声を掛けてくれなければ、とっくに潰されていたかもしれない。
「ぐ、ぐ、ぐ」
力士が、うめくような音を出す。エルスは、それが笑い声なのだと遅まきながら気が付いた。
「ぐ、ぐ、ぐ……！　おで、つよい……！　かみを、ひぃ、ふぅ、みぃ……たくさん、ぺちゃんこにしてきた……！」
「たくさん……？」
エルスはかつて、日本の宗教観についての本を何冊か読んだ知識があった。それらを照らし合わせるに、『カミ』というのは、唯一神のことではなく、普遍的に存在する霊魂、もしくは……
「……異能の人間を、何人も、何人も、殺してきたのですわね」
……強い霊能力を持った人間を。
「ぐ、ぐ、ぐ……！　おまえも、そのひとつ……！　おで、またつよくなる。かみをつぶして、つよくなる！」
この巨体は、無辜の人々の命を喰らい、肥え太ってきたのだ。
「……幕下も幕下。三流ですわね」
「なぁにぃ……？」
力士は、聞き間違えを確認するように、聞き返す。
「――殺した弱者の数を誇るなど……悪として、下の下ですわ、と申し上げましたのよ!!」
――――ギャリリリリッ!!
鋭利に尖らせた鎖を、回転させながら力士に叩きつける！
「オオオォォオオオッ！」

なんと力士は、鎖を素手で掴んだ。当然、鎖は肉に深く食い込み……しかし、埒外の密度を誇る筋肉を、そぎ取るまでは出来なかった。
「エルスちゃん、右ィっ!!」
とっさに背後に距離を取る。抉り取るような張り手が、暴風を巻き起こした。
エルスは、己が無力を呪った。ここに至って、未だ攻略の糸口は見えない。斬撃も、打突も、何一つ有効打になってはいない。
「スモウレスラーとの戦い方なんて……。……レスラー？」
エルスが、はっと気づいたようにミサキの方を向く。
「小山さん！　指示を下さいませ!!」
「え、えぇえっ!?」
ミサキは狼狽する。この怪獣大決戦みたいな現場で、なぜ自分が、と思った。
「先ほどからの指示……！　わかるのでしょう!?」
「……で、でも！」
「わかるのでしょう!?」
必死な様子のエルスの問いかけに、ミサキは小さく頷いた。
「巨体の相手との戦い方！　指南してくださいませ！」
ミサキは、数瞬……あれやこれやの言い訳を考えて、結論を先延ばしにしようとした。
――小山さんはかっこいいなぁ。
そしてその半分以下の時間で、言い訳をすべて捨てた。自分を卑下することは、自分をほめてくれた大事な友人を侮辱することだ。そして大事な友人のひとりが今、自分のことを頼ってくれている。こんな状況で怖気づくようなヤツは……漢（おとめ）ではない！
「エルスちゃん！　姿勢を低く!!」
「はいっ!!」
屈んだ直後、頭上を攻撃が通り過ぎる。
「そのまま背後を取って！」
「うしろ、とらせない……！」
やはり巨体の優位か。ほんのわずかな旋回で、この狭い円形の空間

全てをカバーできてしまう。だが……
「切り返し!!」
エルスは機動力を活かし、逆方向へ駆け出す。
「どこ、いった。はんたい、いた」
右に、左に……時に唐突に間合いに現れては、攻撃を空振りさせて、また視界から消える。
「ぬぅううう……！　にげる、な……！」
やがて焦れたのか……力士は両手を広げた。あの鼓膜破壊の技を使う気だ。
「そっちのこうるさいおんなも、つぶす!!」
「させませんわぁッ！」
掌が打ち合わされる寸前、鎖を丸めた鉄塊を放り込む。
――がじゃぁあああんっ!!!
異物が入り込んだことで、想定されていたほどの衝撃は発生していない。
「んんンがぁあああああああ!!!」
――ドシン！　ドシン！　ドシンッ!!
いよいよ癇癪を起こした力士が、地団駄を踏む。地団駄とはいっても、可愛いものではない。重量に地面が波打ち、エルスの足元を崩しに来た。
「ちょくせつ、ひねりつぶす!!」
力士は、体重の乗った右手で、身体の左側に位置するエルスへ、無理やり手を伸ばす。
「エルスちゃん！」「ええ！」
「むだぁあああああああああああっ!!」
力士の手が伸びる。なにやら、先ほどから動くたびに膝に何かが絡みつく違和感が有ったが、関係なかった。また、力づくで引きちぎって。
――みしっ。
……破滅の音は、耳に届いていたか。
――みしっ、……びきっ……べぎいいいっ!!!!!

……力士の右膝が、血を吹き出し、あり得ない位置でグニャリと曲がった。
「ッゴぉおおおおおおおあああああああああーーッ!?!!!?」
ずずぅうん、と、力士の巨体が大きく沈む。
「あぁ、あぁあ……？　おでの、あし……？　うごかな、い、いでぇぇぇ

ミサキとエルスの呼吸が一つに合わさり……エルスが、力士の腕を掴み、ブン投げた！

――ズズゥウウンッ……!!!

……社は根元から引き抜かれ倒壊し……力士は、大地に膝をついていた。

「あ、あぁぁあああ……おで、ひざ、ついて……まけぇ……？」

目をぱちくりとさせる力士。その体の表面が、淡く発光する。

「あ、ぁあああ！　おでの、おでのちから！　おでのカミがぁ!!」

……その光は、球状となり、次々に力士の身体から抜けていく。悪鬼に囚われた魂が、解放されていく。それに比例するように、あれだけの巨体を誇った力士の身体が、空気の抜けた風船のように萎んでいく。

「いやだ、いやだいやだいやだぁあああ！　おでは、おではつよいままでいたいいいい!!」

「引退式ですわよ、横綱」

ミサキに肩を支えられながら、エルスが刃を投擲し……

――ザンッ。

……力士の髷を切断し、それがトドメとなった。

「お、ぉ、おおお……」

萎み切った力士の正体とは。

――枯れ木のような体。落ち窪んだ眼。色が抜けきった頭髪。湾曲した背骨。

……ただの、痩せ枯れた老人だったのだ。

「お、……お」

ぱたん、と、白目をむいて倒れ込む。

「し、死んじゃったの……？」

「いえ。まぁ、遠くないうちに死ぬでしょうけれどね。老衰で」

……どう見積もっても、寿命だろう。

死を恐れ、老いを恐れ、我欲と虚勢で膨れ上がっていただけの老人に、年貢の納め時がやってきた、というだけだ。

なにはともあれ。

じわじわと、感慨が湧いてくる。エルスが華奢な腕で、ミサキに抱き着く。
「二人の勝利ですわーーー!!」
「え、えぇえ？　わたしも？」
「モチのロンですわ！　小山さんの指示が無ければ、もっと危険な賭けに出ていたかもしれませんもの」
「具体的には」
「能力開放して理性の無い魔獣と化して無差別破壊とか？」
「『とか？』じゃ、なぁいっ!!」
「さ、なにはともあれ中ボス撃破ですわ！　お姉さまと合流しますわよー！」
あれだけの死線を潜り抜けたというのに、元気な娘だと思う小山だった。そして、ああいう怪異みたいな存在に、特に驚きもしなくなった自分がもっと怖かった。
――――いつか慣れる。

◆・◆　◆　◆

「茶番は終わりよ」
巫女は……相対するなのはのことなど、初めから見てはいなかった。
与えられた使命を……カミを天に還すという目的を全うする。ただそれだけで、目の前に居るのは、その目標に過ぎなかった。
（先代様……！　お歴々の巫女さま……！　お師匠さま……！　どうか、このわたくしめに力を！）
里の大人たちが言うには、ある巫女は使命を果たし身命を燃やし尽くし、立派に散っていったのだと言う。ある巫女は、大地と接続し、そのまま大地へ還ったのだと言う。
だから、当代の巫女である自身も、命を懸けて、使命を果たさなければならないのだと言う。
親も無く身寄りもなかった赤子の自分を育ててくれた里のため。
使命のため。

里の大人たちのため。
「うううううーーーーっ……!!」
腕を力ませ、傷口を開く巫女。血液が新たにあふれ出し、大地に。
「――――チャージなんてさせないわよ」
――ドスゥッ!!
強烈な掌底が、鳩尾にめり込む。
「っか、ぁ……!!」
あまりの衝撃に、身体が浮く。呼吸も一瞬止まり、集中が途切れる。
――シュルルルルッ……!!
金属繊維が巫女の腕を圧迫止血し、流血を止める。これで、また新たに傷口を開かなければ奥義を使えなくなる。よって、次に巫女が取る行動は、なのはには予想ができた。
「探し物はこれかしら？」
巫女が腰に手を伸ばした時には、そこには何も無かった。武器であり、祭具である刀は、なのはの手にあった。
「鋭いけれど……鋭いだけ。駄目ね、これは。観賞用の美術刀よ」
「か、かえせ……!!」
「ええ、返してあげるわ」
――ミキッ……ビギッ……!!
「あはは、弱い弱い」
……プラスチックの定規でも曲げるように、なのはの手の中で鋼が軋む。巫女の誇り。歴代の想いの籠った守り刀。
――『これを持ったお前は巫女だ。山の巫女となるのだ』
あの日を、覚えている。一番古い記憶だ。族長から、守り刀を受け取ったあの日だ。
「粘りはあるわねぇ。でも、あと少し……」
「あぁぁ……やめろ、やめろ……!!」
辛かった修練の日々。術を修めたあの日。皆が喜んでくれた。
――ビシッ……!!
思い出が、砕かれる……！
「返してあげるわよ。……真っ二つに割ってからね!!」

悪魔が、笑う。
「や、やめろぉおおおおーーーーーーー!!!!」
――バキィイイイイッ!!!!
「あ、」
ぐるりと、視界が暗転した。
『オォオオオオオ!! よくも、カミめ! よくもォオオオ!!』
巫女は、違和感を感じた。自分の口が、自分の声で、自分でない言葉を発しているのだ。
「あーあ、やっぱりか。剣が本体なんて、いまどき使い古された展開よね」
『カミを討つ! カミを討つ! そのためならば! わが身をカミと化し鋼に封じ! 巫女の身体を乗り換えてでも! 永遠にカミを討ち続けるのだぁあああ!』
巫女の右手に、折れた刀が収まる。右手に柄側の断片。左手に直接、むき出しの刃を握る。
「……そのために、何人の子供を使い潰してきた」
なのはの内に、義憤の感情が沸き起こった。
「巫女の名目で、何人を……」
『知らぬッ! カミを討つためならば! 我が里を守るためならば!
我に続く巫女など童など、何人でも火にくべてやるまでだぁッ!』
「……そう。あんたが、最初の巫女なのね。元凶は他に居る」
義憤。そして……憐憫の情だ。山刀を握る手に、力を籠める。
相手は刀が本体。それが折れた今、消えゆくまでの最後の炎でしかない。巫女の血液が、再び大地と接続される。
『聞けェ、カミよ! 我が山の響きをぉおおおおお!!』
――不発。
『なにっ!?』
……なのはが手にした山刀から展開した魔力刃が、大地を突き刺していた。知る由も無いが、なのはは、己が神通力を用いて、山の霊脈を一部停止させたのだ。
「――山の響きも、天までは聞こえないわ」

――ボッ。
なのはの炎が、大地を介して刀へ燃え移る。
『お、おのれ……おのれぇえええ……!! カミめぇえええ……!!』
「もう眠りなさい。悪い夢は、これで終わりよ」
『我は……わたしは……やっと……おうちに、かえれるのね……』
「えぇ。……天は静かで、良いところよ」
『……とうさま……かあさま……』
「おやすみなさい」
刀に宿っていた哀れな亡霊は、蝋燭が消えるように、天へと還っていった。
なのはは、衰弱した巫女の身体を担ぎ、エルス達やハリーとの合流を目指した。

◆・◆　◆　◆

「おっせぇ!! どんだけ道草食ってやがったんだテメーら!」
一番乗りはハリーのようだ。その足元には、ボロ雑巾のようになった鎧武者の残骸のようなものが転がっている。鎧武者の傀儡人形が、ハリーの相手だったようだ。まぁ負ける。
エルスとミサキのペア、なのはが合流する。
「ん……? おいなのは、そりゃあ誰だ?」
と、ハリーが、なのはが担ぐ見知らぬ人物に言及する。
「あぁ、この子……わけあって保護したのよ」
そう。先ほど、なのはに戦いを挑んだ無謀な巫女だ。今は、両手両足を縛られてはいるが、なのはの背で、すぅすぅと、寝息を立てている。
――10にも満たないであろう、年相応の姿だった。
「……どうせ、あとは本拠地まで一直線だ。詳しく経緯を聞かせろ」
そしてなのはは、これまでに集めた情報と、エルスやハリーが得てきた情報を組み合わせ、結論を出した。
「まず、人里から異能の資質を持った子供を拉致・洗脳する。『自分は里に育てられた巫女である』……っていう風に。そうして育てた『巫

女』を、暗殺の尖兵に仕立て上げる。『アレは討つべき魔物だ』とでも言ってね。生じる罪悪感や違和感は、『身寄りのない自分を育ててくれた組織への恩返し』っていうような思考で封じる。本当に異能の存在を狩ったことがある巫女なんて居ないんでしょう。異能の子供が、人里では忌み子として忌避されていた時代から始まった組織ね」

エルスが戦ったのは、組織の下級戦闘員。ハリーが戦ったのは呪術アーティファクトだろう。つまり、巫女とは……

「ヒトの身に余る魔法を使って、対象を確実に暗殺した後は、呪詛返しで死体ごと消滅する……自爆テロ要員よ」

淡々と話すなのはだが……その内心に、怒りの炎が燃え上がっていることに皆が気付いていた。

「だがよ……保護して、どうする？　物心つく前から刷り込まれた価値観は、ちょっとやそっとじゃあ……」

「ええ。『ちょっとやそっと』じゃ、ね」

気づけば、視界が開け……山間に隠れるように存在する集落を、見下ろせる丘に出ていた。かやぶき屋根の建物が数棟、そして、崖を背後に、巨大な木造の神殿のような建物が存在している。かがり火が焚かれ、中心の広場では何らかの祈祷が行われている。

「万魔調伏の護摩だ」

専門家のハリーが言い当てる。

唯一の一般人、ミサキは、その異様な光景に気圧されていた。

「……あれ、なにか意味あるの？」

「意味はあるけど、効果はない」

端的にハリーが言う。

「もともと信仰や宗教ってのは、民草の不安や不満を和らげるために有るものだ。豊作祈願・雨乞い・地鎮……盆に正月、結納や葬式だってそうさ。神に仏に祖霊に、祈り、願い……不安を軽減する。まさに神頼みってやつだ。事態が好転すれば、『効果があった』『祈りが通じた』『神様が助けてくれた』『きっと次も神様が助けてくれる』と喜ぶ。それだけの意味さ」

「祈る相手が仏像かご神体か十字架か程度の違いですわね」

「そう。だが、不安から逃げられる。そういった意味じゃあ、信仰ってのは意味がある」
「――けれど、信仰は時に暴走する」
巫女を背から降ろしながら、なのはが続ける。
「人々の心の安寧を守るための信仰が、いつしか、信仰を守るための犠牲を人々に強いるようになってしまう。人々の生活を良くするための橋を架けるために、人柱を捧げるようにね。でも、よくあることよ」
とん、とん、と規則的に巫女の背中を叩く。
「ここも、きっとそう。最初は集落を災害や病気、飢饉から守るためのささやかな祈りだった。けれど、時代と共に、自然災害よりも、戦乱から集落を守る必要に駆られて、信仰と武力が融合してしまった。いつしか祈りは、『組織を守るための信仰』へと変わり、『信仰を守るための組織』へと裏返ってしまった。
『組織を存続させるためなら、信仰に基づいて何をしてもいい』ってね」
「う、うぅん……？」
巫女が、目を覚ます。
「ここは……里の丘……」
半覚醒状態で意識を起こす、なのはの持つ尋問技術だ。
「そうよ。あなたの育った隠れ里。……さぁ、思い出して」
巫女は、記憶を辿っていった。
守り刀を受け継いだ記憶。辛く苦しかった修行の日々。でも、出来ると大人は喜んでくれた。褒めてくれた。里の子供たちと話すことは許されなかったけれど、自分は巫女だから。いつか、先代たちがそうだったように。
「里を……守る……」
ぶつぶつと、口から思考を垂れ流す。
「里に……帰らなきゃ……」
「二人の外様はどこに連れていかれたの？」
「社の中で……清めてから……天に還す……カミに触れたものたちもまた……天に還す……」

大宮と中野は、あの巨大な神殿の中に囚われているらしい。
「そう……」
――ボゥッ……!!
なのはの左手に、バレーボール大の炎が灯る。全盛期の1割程度の神気を、持ち前の魔力で補った炎だ。
――ギュウウウッ……!!
なのはは、その炎を掌で圧縮していく。バレーボールがテニスボールへ。テニスボールがゴルフボールへ。ゴルフボールがビー玉へ。
「……」
その結晶を、指鉄砲の指先にセットした。
「……里に、帰らなきゃ……」
巫女の手が、集落のほうへ延ばされる。
「――いつかは帰れるといいわねぇ」

――ポンッ。

……軽い音と共に発射された炎は、護摩焚きの炎に、人知れず直撃した。そして。

――ズッゴォオオオオオオオオオオオオオオオオンッッッ!!!!!!

圧縮されていた威力の全てを、一瞬のうちに放出し尽くした。炎と爆風が巻き起こり、木造の家屋も、神殿も、何らかの魔術的意味があったであろう物体も、何もかもを巻き込んで破壊を拡大していく。
「お、おい、なのはッ!?!!」
これは死ぬ。さすがに死ぬ。
「大丈夫よ」
が、なのはが言ったように……炎も爆風も、延焼させ、破壊しているのは物体のみ。間近で炎を浴びたはずの司祭や村民は、逃げ惑いこそするものの、火傷一つ負ってはいなかった。

「これも神通力のちょっとした応用ｖｅｒ．２よ」
魔力や神通力の宿った物体『のみ』を焼き尽くす、実に都合のいい炎だった。
「クックック……蜘蛛の子を散らすとはこのことね……！　実に爽快だわ！」
――この神、悪役ムーヴが似合いすぎている。
「うわぁあああああああ!!!　里が！　里がぁあああああああ!!」
半覚醒状態だった巫女が、完全に目を覚ました。
「わたしの里が！　天瞳の里がぁあああああああ！　あ、！」
そして突然、頭を押さえて蹲る。
「さ、さとを、守る……!!　わたしが……みこが……ぁあああああ!!
うわぁあああああ!!　さとが！　まもらなきゃ！　もえている!!
さとがもえている!!　あはははは!!　あはははは！　もえている！　もえているよぉ!!　うわぁあああああああ！　あーっはっはっは!!」
洗脳を、強烈な精神的ショックで上書き抹消する。なのは曰く、『逆洗脳』という技だ。凶鳥部隊で身に着けた、まず日常生活では役に立たないスキルだった。
「げぼっ……ぐぇっ……！　アハ、アハハハハ！」
大泣きし、大笑いし、感情制御と精神の均衡を失った巫女に対し。
「これで終いよ。――――大家さん直伝」
両手を平手に、両腕を大きく横に開く。
「――――忘心波衝撃!!」
――――ずぱぁあああああんっ!!!
両耳から脳へ。記憶を司る海馬へ。調整された衝撃が突き抜ける。
「かはっ……」
……巫女は、白目をむいて失神した。
――え、ナニ今の。
ドン引きするハリーを意にも介さず。
「ミサキちゃん。この子をお願いね」
「え、え……？　うん……？」

「私たちは――最後の仕上げに取り掛かるから」
なのは、エルス、ハリーは……眼下で燃え盛る里から逃げまどう人々を、一人残らずロックオンする。
「――――『理不尽』という言葉の意味を、魂に刻み込んであげるわ」
――――。
――――。
――。
「大宮さん！　中野さん!!」
べぎぐしゃ、と燃えカスと化した扉を蹴り破ると。
「なのはちゃーん!!」
半べそをかいた二人が、後ろ手に縛られた状態で無事でいた。
「無事でよかった……!!」
紐を切ってやると、二人は危機から脱した安心からなのはに抱き着いた。
「ごめんね！　ごめんねぇ!!」
「もう……どうして二人が謝るのよ」
「……なんかわかんないけど、ごめんねぇ！」
嫉妬心に付けこまれたことを言っているのかもしれないが、どう考えたって敵が悪い。
怪我の有無を確認し、無事であることを確認したなのはは……焦土と化した広間へ出る。
「た、たすけて……」
「お慈悲を、お慈悲を……」
そこでは、老若男女を問わず、大宮と中野がされていたように、後ろ手にエルスの鎖でギチギチに縛り上げられていた。特に、組織中枢に近そう……と独断と偏見で判断された者は、腕や足をへし折られた

上で縛られているのだ。さぞかし痛かろう。
「お姉さま……どうやら首魁は、この中には居ないようで……」
　人に言えない方法で集めた情報から発覚した。
「親玉が本拠地に居るっていうのは先入観よ」
「はい、お姉さま。この者たちの処遇は如何にしましょう？　みんな仲良く、お手手を繋いであそこの崖からあの世にぴょんぴょんさせますの？　うふふ」
　ウキウキと楽しそうに笑うエルスに、村人たちが、ひぃいいいっ！　と悲鳴を上げた。
「やめなさい。……あぁ、やっと電波通じた」
　なのはの行動は、思っていたよりも普通だった。
「もしもし。山登り中に山火事に遭遇しました。交通手段がなく、逃げ遅れている人たちが大勢います。場所は……」
　携帯電話の位置情報から、緯度経度標高を伝える。これで、一昼夜もすれば煙を目印に消防と警察が来るだろう。
「さて」
　ぐるりと班のメンバーを見渡す。
「寄り道はしちゃったけど、遠足の続きよ！」
　晴れ晴れとした笑顔で言う。きょとん、としていた班員たちも、やがて釣られて、笑顔になった。
「あ、先生！　大宮です！　班員全員で一緒に居ます！　クラスのみんなは……あ、もうわたしたち以外は全員到着。……え、わたしたちを、待ってる……？」
　まずは、大宮が担任教師に連絡を入れる。その後、携帯電話やアナログ地図などを照らし合わせ、現在の位置と、本来の目的地である山頂の位置情報を算出する。
「確か、山頂までの目標到達時刻は１８：００。今が１７：２０だから……クルマでもあれば間に合うんだけど……」
「この集落に、車……？　うぅーん……ちょっと」
　無茶なことを言っている自覚があった。
　――――こっち。

……と、儚い少女の声が届く。
「……？」
振り返ると、集落の外れ……隔離されたような空間に、何人かの少女たちが立っていた。年恰好はバラバラで、血縁を感じるような面立ちでもない。
そして何より……丘の上から集落を俯瞰していたが、このような少女たちの姿は無かったはずだ。
――こっちだよ。
水色の和服を着た少女が発するのは、敵意を感じる声ではない。
「……行くぞ」
何かを察したハリーが、少女が指し示した方向へ歩く。
「え、班長。あの子たちは……」
「いいんだ。行くぞ」
――いそいでね。
向かった先は……焼け落ちた建屋。残骸をどかしていくと。
「……まぁ、今時、下界に馬で下りるわけには行かねぇよな」
――トヨタ・ランドクルーザー７０。
文明の利器は、神の炎による焼却を免れていた。外見に反して意外と手狭な車内に乗り込む一同。
「鍵は……挿しっぱなしって、農家の軽トラじゃあるまいし……まぁ助かるけど」
セル一発で始動する。
――ありがとう
――その子をおねがいね
――彌茅（みかや）をおねがいね
「ミカヤ……この子の名前ね。わかったわ。任せなさい。何も心配はいらないわ」

少女たちは……どこか寂しそうに、笑った。

――――げんきでね

――――……ばいばい。

「……えぇ。でも、ばいばいじゃないわ。必ず、また来るからね。お菓子をたくさん持って来るからね」

なのはは神妙な面持ちで、ギアを入れて車を発進させた。

ｖｉｖｉｄ編　１７話『　人罰執行　』

――――――私がそんな善人に見える？

◆　◆　◆　◆

「オラァ飛ばせなのはぁ!!　もっと飛ばせェ！」「あっはっは！　お姉さまはサイッコーですわぁ！　あ、そこは右ですの。Ｒ４５ですわ」「いやぁあ揺れるゥー!!」「手加減してぇー!!」「なのはちゃん、もっとゆっくりー!!」

……マジの未舗装路をランクルが爆走する。ガッコンガッコンと上下しながらも走行するが、当然、車内はミキサーの様相を呈していた。

「なんでもいいから身体を固定しなさい！　何としても間に合わせるわよーー!!」

……そうだった。なのはは、一つの目標を『こう』と決めたら、その他が結構おざなりになる悪癖があった。

「うわぁああん！　なのはちゃんのバカー!!」

大宮がたまらず泣き出した。今日１日であまりにもいろいろ有りすぎた。

「なんで、なんでぇーーー!!!　なんで小山さんだけ『ミサキちゃん』って名前呼びで、わたしのことは『大宮さん』なのよぉー!!」

ぜんっぜん関係無ぇ。

「年上だから!?　あと半年でハタチになっちゃうからなのぉーー!?　なのはちゃんは年下が好みなんだぁーうわぁーん!!」

支離滅裂というか、若干風評被害が入っている。

「ちょっと!?　人聞きの悪いこと言わないでよ!!」

ガコン、とギアを上げ、さらに加速する。ぎゃあ、と悲鳴も上がった。

「じゃあ呼んで！　ロリコンじゃないなら！　あたしと中野さんのこ

とも、下の名前で呼んで！　さぁ！」
「おぉ呼んでやろうじゃないの！　えっと……。」
　……言葉に詰まった。まさか。まさか。
「ごめん、下の名前なんだっけ？」
　――がすっ。ぼかっ。
「いったぁ!?」
　大宮と中野がなのはの頭を後部座席から器用にシバいた。
「こ、こ、この薄情者めがぁー!!」
「わぁ、ごめん！　ごめんって！　……で、名前なんだっけ？」
　下りカーブ。ギアを2つ下げる。
「ぐわぁーー!!」
　エンブレで座席から投げ出されそうになる。
（あっ……殴られた衝撃で思い出した）
　……テキトーな構造の頭だった。
「ハルカちゃんと、リリコちゃんだ！」
　……拳を振りかぶったまま、二人が寸前で停止する。
「それじゃ、改めて……
　――絶対間に合わすから、飛ばすね！」

　――ゴガァァァァァァァァッ!!!
　エルスのナビに従い、良くて獣道、悪くて山肌をガッコンガッコン乗り越え……
「おっしゃあ！　登山道だ!!」
　目的の山の登山道に、とうとう合流した。そして。
「「「「「着いたぁー!!!!」」」」」
　ゴガガガガガッ……と、車体を横滑りさせながら、山頂に乗り付けた。クラスメイト達の見知った顔が驚愕に染まる。。
「く、車!?」「え、誰!?　……えっ、大宮さん!?」
　ドアを開け、意気揚々と降り立つ。
「どう!?　どう!?　さっすが私！　ギリ間に合ったわよ！」
「ええ！　お姉さまは最高ですわ！」

「がっはっは！　楽しいドライブだったぜ！」
「オエー」「オエー」「オエー」
……一般人☒ｓはそろってゲロを吐いていた。
車内の時計は、１７：５９。……まぁ今更だが。
「刻限過ぎたからといって、何も起きなかったのでは？」
「「……もっと早く教えて」」
……エルスの尤もな指摘に、一般人☒ｓはガックリと膝をついた。
「吾妻さん」
「はいっ、先生！」
間に合わせた私、めちゃ褒められるんじゃね？　とか調子こいていた。
「――なんですか、この車は」
言い訳のしようも無い。
「……先生、」「羅生門は無しですよ」「違うんです。違うんです。これは止まれぬ事情というものがあり、緊急避難であり、決して犯罪行為ではないんですぅ……」
……尻すぼみになる言い訳オンパレード。
「……ま、いいでしょう」（（（（いいの!?））））
担任はこの日、非常識の前に屈した。
「……とりあえず、車は登山道の脇へ。整備車両が通る車道があります」
「はいっ！」
――ガコンガコン、ぶぉおん。
なのはは、クラスメイト全員が見ていることをすっかり忘れ、男らしく車を操作した。
「……カッコイイ」
ぼそりと、クラスの誰かが呟き……また誰かが同意した。
「では、皆さん」
担任の号令に、クラス全員が集合する。
「今日は……大変な1日でしたね」
（（（（（（（お疲れ様です））））））

「……先生は、あとで報告書を書かなければなりません。主に吾妻さんとか、吾妻さんとか、吾妻さんとか……」
「す、スミマセン……」
しょぼーんと小さくなるなのは。
「ですが」
ぐっとなのはを引き寄せ、皆の方へ向かわせる。
「え、え……？　これはあの日の帰りの会、別名『高町なのは弾劾裁判』の再現なのでは……？」
トラウマを掘り起こされるなのはだったが、心配は杞憂に終わった。
「吾妻なのはさんの活躍により、いま、こうして全員で登頂を成功させることができました。手段はともかく……結果は最良です」
クラスメイトたちがなのはを見る目は、これまでの恐怖の破壊神を見るものではなくなっていた。クラスメイトのために、友達のために、わが身（と法）を顧みず、あの手この手を尽くしたのだ。それは意図せずとも、なのはの印象を反転させていた。
――ぱちぱち
――ぱちぱち
断続的な拍手は、次第にクラスメイトに広がっていき……いつしか、全員へ。
「え、エヴァ最終回じゃあるまいし……！」
顔を赤くして、ぷいっとそっぽを向いてしまう。
「あ、照れた」「かーわいい」
……遠慮も無くなってきた。
「では、記念撮影を行います！」
「わー！　集まろ集まろ!!」「なのはちゃん、真ん中に来てよ！」「やだやだやだ。魂抜かれる……！」
ぱしゃり。
「写真は後日、印刷して配布します。クラス新聞にも載りますので、お楽しみに」

そうして、祝福に満ちたムードの中、遠足は大団円を迎えたのだった。

――――――大団円だと思っていたのか？

――――ピーポーピーポー

登山道に続々と到着するパトカー。

「警部！　登山客から通報のあったＳＵＶです！」「車両乗り入れ禁止区域を爆走していたヤツですよ！」「山火事にも関係があるのでは!?」

「あわ、あわわわわ……！　おまわりさんだ……！」

「やっべぇですわ……！　あ、Ｉ　ｃａｎ☒ｔ　ｓｐｅａｋ　Ｊａｐａｎｅｓｅ　！」「Ｍｅ　ｔｏｏ　！」「卑怯だぞ英語ネイティブども！」

醜く責任回避を試みる。

「警部！　後部座席に縛られた子供が!!」

「何ィ!?」

ロリコン案件に警部が動き出す……！

「どこのどいつだ!!」

ここのコイツですわ。山肌をダイブして直滑降で逃げ出そうとするなのは。

「駐車場まで下りてバイクに乗れば脱出成功よ！」

計算高い。

一触即発というか、あまりの事態に担任教師が昇天しかけていると。

「――遅くなり、申し訳ありません」

最後にやってきた黒塗りのセダンから、二人の男女が降り立った。

「初めまして。わたくし、特別超常現象対策課所属の。

――――フェイト・テスタロッサと申します」

抜群のプロポーションをパリっとした黒スーツで包んだ、輝くブロンドヘアの女性……完全お仕事モードのフェイトが、シグナムを伴って現場に到着した。

「特別超常現象対策課……？　あの事変後に新設された部署の……

？」
「はい。今回の一連の事件は、わたくしどもの職域と判断されました。もちろん、県警の方々にご無理のない範囲で、協力という形を取らせていただきます」
（……アレ誰）
　お前の妹分じゃい。フェイトはてきぱきと、相手を無下にせず、それでいてしっかりと意思を通す交渉により、この場を取り仕切る権利を自然と得ていた。
　そして、楚々とした見慣れぬ所作でなのはの元へやってくる。どす、と見えない位置で軽い肘うちをして、コソコソと話す。
「……カンベンしてよ、もう！　秀人に『なのはがバイク乗ってった』って聞いて、ちょー特急でたぶん必要っぽい手続きしてきたんだからね！」
「フェイト、ありがとーーーーー!!　もうすっごく褒めてあげる！　いい子いい子――！」
「わぁい！　……って、いかん、バレる！　ボクの完璧な擬態がバレる！」
　擬態とか言いきりおった。
「テスタロッサ警視正。お話の方は……」
「えぇ、いま済みました」
　シュバッ、と擬態をかぶりなおす。
「彼女たちは、山火事の現場から、犯罪組織からその女児を救出するため、あのような行動を取ったようです」
　あながち嘘は言っていないあたりプロである。
「そう……なのでしょうか？」
「当然、無免許運転、危険走行……その他もろもろ有るでしょう。その件につきましては、我々の方で処理をさせていただきます」
「ですが……」
　よそ者にでかい顔をされたくない。そう考えるのは当然のこと。なので。
「犯罪組織の犯人集団の確保につきましては、県警の方の協力が無け

ればあそこまでスムーズに行うことはできませんでした。わたくしどもは、あくまで情報提供をしたのみでしたので……」
犯人確保の手柄を譲渡する、という意味合いを、決して明言せず暗に伝える。
「……そういうことでしたら」
海千山千と思しき警部は、ニヤリと笑った。世の中はギブアンドテイクである。
「被害児童につきましては、間もなく到着する救急車で病院へ搬送。治療ののち、事情聴取を行いたいと思います。ですが、なにぶん事件が事件ですので……」
「ええ、ええ。被害児童の救済こそ、事件最大の課題ですから。協力してコトにあたっていきましょう。なぁに、子供相手にいかつい男が尋問、などということは起きますまい」
「まぁ、では女性捜査官が事情聴取を行わないといけませんね」
「ええ。しかしなにぶん、当方は山育ちの荒くれ男所帯でして……」
ちらりと、フェイト（女性捜査官）に視線を向ける。
「……では、そういうことで」
「……ええ、よろしくお願いしますよ。総監によろしくお伝えください」
「……ええ、そのように」
ここまで、どちらも、ＹｅｓともＮｏとも、何も明言していないところがミソである。暗黙の了解と忖度により、何事もなかったかのように事態が終息へ向かっていく。
「シグナム警視。証拠物品……こちらの車両についてですが」
「持ち帰っていただいて結構。犯人の指紋、被害者のＤＮＡ、走行履歴……これらは県警の所轄ですので」
面倒ごとが、あれよあれよと片付いていく。そう。暴力だけが、事態を治める手段ではないのだ。
（――――これが、権力……!!）
カルチャーショックを受けるなのはだった。
どういうカラクリがあるのか、なのはたちは、普通に帰りのバスに

乗っていた。
「私のバイク……ブラックバードが……」
しょぼん、としている。さすがにバイクで颯爽と帰るわけにはいかなかったので、売店で預かる形で、後日、回収へ向かうことになった。
「なのはちゃん！」
「うわぁ！」
と、いきなり、見知らぬ誰か……クラスメイトの一人に声を掛けられ、なのはが気付く。
「あの人！」「さっきのカッコイイひと！」「あのイケメン！」
シグナムのことか。
「「「

あいつら、とは、あの組織の構成員たちのことである。特に四肢が無くなるでも、命を落とすでも無い。それどころか、構成員の一人であろう、駐車場から消えていたクレープ屋の主人を追うでもなく、ただ、司法の手に委ねただけのような結果に、ハリーは不思議そうにしていた。なのはの行動の傾向から、モザイク必須レベルのジェノサイドが発生することを予想していたハリーは、肩透かしを食らった気分だった。

「犯人の更生にでも期待しちゃったか？」

冗談めかして聞く。

「――――私がそんな善人に見える？」

なのはは、酷薄に笑った。

「まぁ、優しいといえば、優しいのかな？　わたし、どんな犯罪者でも、敵対者でも、殺したことは一度も無いんだから。凶鳥部隊の中でも、殺害数ゼロで最後まで通したのなんて、私くらいなものだったし。新入りだったアルナージ、サイファー、ドゥビルも、早々にコロシをやったのに、ね。

でも、別に殺せなかったわけでも、殺したくなかったわけでもないよ？　そういう機会は何度もあった。部下がやる分には止めなかったこともある。……弟分が感情に駆られて殺そうとしたときは、止めたけどね」

相手が、永い時を生きるハリーだからこそ、ぶっちゃける話だ。

「――殺すっていうのはね。――――。――――、――――。――――っていうことだから」

ハリーは、なのはの秘された思想に、ただ頷いた。

「それに……」

窓の外を見る。

「私が手を下すまでも無いわよ」

あの集落の向かいの丘に、懐かしい気配を感じたのだ。向こうは鉢合わせを恐れたのか、すぐに引っ込んでしまったが……来ているのだ

ろう。この場に。おそらく、あの集落が標的で。
「――――カレンって、信仰ってやつが大嫌いなのよね」

◆・◆　◆　◆

「――おい、なぜ応答しない！　おいっ！」
バンダナを巻いたクレープ屋の店主は、閉じた車内で、焦った様子で携帯電話に向かって叫んでいた。
「くそっ……!!」
屋台トラックを発進させる。
「――まぁいい。このわたしが生きてさえいれば、組織はまた作れる……！」
……暗殺組織・天瞳宗の総帥は、この男。
奇しくも、なのはが言ったことは的中していた。
「全く……！　再編にどれだけのカネが要るのかと……！」
屋台道具の下には、隠し財産の紙幣が複数のトランクいっぱいに詰め込まれている。逃走をするどころか、組織の再編すらやってのけるだろう。ちょうど、県を2つ跨いだ山に、いざというときのための隠れ家を用意してある。構成員の一部も移転済み。また、同様の手段で、組織を作り上げる未来を描いていた。
――――しかし『逃げられない』という未来は予想できていなかった。
「……へ？」
進行方向。車道のど真ん中に、女が立っていた。
「はぁい、タクシー」
黒い髪に黒い装束。色の抜け落ちたような白い肌。真紅の唇だけが、下弦の月を浮かべている。
「な、なんだっ！　どけっ！」
クラクションを鳴らすも、退く気配さえ無い。
「……！」
構うものか。轢いてしまえ。県警の内部にも協力者はいる。賄賂

をタップリと渡し、飼い慣らしてある。証拠など、いくらでも捏造できる。
スピードを上げるトラック。女は、黒塗りの大型拳銃を構え……
――――ドンッ!!
1発で右フロントタイヤがバーストした。
「ぐぉおおおおおーーー!!!!!」
車体は横転、火花を散らしながら横滑りし……女のスレスレで、止まった。ほうほうの体で車から脱出した男の前に、凶鳥のボスが悠然と立つ。
「どこへ行こうっていうのかな?」
子供に言い聞かせるような、他人をナメ腐った口調。
――カレン・フッケバイン。
「どこの者だ!? このわたしを、天瞳宗総帥と知ってのぶ　え　ぁ?」
――横一閃。
男の口は頬を切り裂かれ、ダランと垂れ下がっていた。
「知らないなぁ。知っているのは、あなたが子供を誘拐して、自爆テロまがいの行いを強要していた組織のトップってことだけ」
蹲った男の右手に、呪符が握られている。しかし。
――ドンッ!!
……右手がトマトのように砕け散る。硝煙を上げる銃口。
「別に、私は正義の味方じゃあ、ない」
左手も。
「単に、仕事だから。おまえたちが秘匿していたご神体が、スポンサーの興味を引いてね。ついでにおまえたちを潰してくれ、って頼まれたから。でも……あーあ。ご神体、燃えちゃったねぇ。仕方ないから、もう一つのお仕事……お前たちを潰すっていう仕事だけでも執行しなきゃなー、っていうだけだよ」
いかなる呪法か。切り裂かれた口が、縫い合わされる。言葉を、吐く。
「わたしを殺すのか……!? カネ! カネなら出す! 依頼主の倍額

を出そう！　いや、それならお前たちを買い取ろう！　新たな組織で幹部待遇を約束するから！　な、なぁ！」
　カレンは白けた顔で、無様な男を見下していた。
「殺さないよ。潰せ、とは言われたけどね」
「そ、そうか！　では！」
　ひゅかん、と軽い音。男の腕が、中途から消え去る。
「おぉ、オォオオオオオ……!!」
　刀を血払いしたカレンが、誰にでもなく言う。

「――殺すっていうのは、殺した相手の人生を背負って生きていくってこと。背負う価値も無いやつなんて、殺す必要がない。
　……って、なのはが言ってたっけ。まぁ私はよく殺すけど」
　へらへら笑いながら、拳銃と刀をホルスターに収める。
「だから、あんたは殺さない。殺してあげない。でも、潰せっていう仕事はキッチリと達成するわ。……もっとも辛い残りの人生をプレゼントしてあげる。なのはが、そうしていたようにね」
　カレンが、両手を平手に。両腕を大きく横に広げる。そして。
「仮面の妖怪ジジィ直伝。
　――ボーシンハショーゲキ」
　――ずぱぁあああああんっ!!!
　――。
　――。
　――。
「はっ!?」
　男は、コンビニの駐車場で目を覚ました。

「しまった、休憩しすぎたみたいだ……」
車内の時計を見れば、既に深夜を回っていた。
「いかん、いかん……明日から週末だ。早く帰って、仕込みをしておかなければ」
そう……自分は、屋台でのクレープ販売を生業とする人間なのだから。
「ん……？　なんだ、いやに騒がしいな」
見れば、駐車場は自身のトラック以外の車両は無く……目の前の道路一杯に、パトカーが並んでいた。
「何か事件か？　参ったなぁ、早く帰らなきゃいけないのに……あれ？　わたしは……なんで、こんなところに？」
考え事をしていると。
――バンッ!!
トラックのドアが唐突に開け放たれた。
「うわぁッ！　な、なんだ、君たちは!?」
物々しい装備に身を固めた屈強な男たちが、自身の腕を掴み、車外に引きずり出し……地面に組み伏せる。
「なんだというんだ！　このような仕打ち、受ける筋合いはないぞ！」
「どの口が言う!!」「このテロリストがッ！」
――がつん。
何かで頭を痛打され、意識を失った。
煙臭い取調室。
――ほう、それじゃアンタ、身に覚えがないっていうんだな？
「あぁ、そうだ！　何かの間違いだ！　わたしが……そんな、児童誘拐など!!」
――ほうほう。それじゃあ、アイツの証言が間違いだって言うんだな？　ヨソのガイジン警視に現場で取り押さえられた鑑識。アイツ、他ならぬあんたからカネを貰ったって言ってるぜ？

「だから！　それが間違いだと……！」
頬に衝撃。目が白黒する。
――ナメ腐ってんじゃねぇぞ!!　いいか、もう証拠も何もかもがアガッてんだ！　テメェがやったこと、全部だ！　言っておくが、オレはてめぇを許さねぇぞ!!　子供を利用した犯罪が、オレは大っ嫌いなんだ！　テメェはその極めつけだよ!!　クサレ外道が!!
「そんな……違う……！　わたしじゃない……わたしじゃないんだ……!!」

かび臭い拘置所。映るテレビニュース。
――今回逮捕された男は、児童誘拐のほか、麻薬の密造・密売にも関与しているとか。
――大規模犯罪組織のトップと目されていますね。
――しかし、取り調べでは一貫して否認をしていると。
――えぇ。そして、『なぜ自分がここに居るのか分からない』と記憶喪失を装っています。まぁ、精神鑑定もそこまで抜けてはいません。責任能力は認められるでしょう。
――誘拐された子供たちの遺品が発見されており、遺体からは、被告のＤＮＡが検出されたということです。
――卑劣極まりない、残虐この上ない犯行です。
「違うんだ……！　本当に、何も覚えていないんだ……!!」

輸送車の中。人垣に囲われる。
――人殺し!!
――罪を認めろ!!
「違う……！　信じてくれ……！　わたしはやっていない……!!」

裁判所。一審。二審。
――えー、今回、アナタを担当する国選弁護人です。……まぁ、頑張りましょう。
――被告には明確な責任能力が存在します。

――記憶喪失に関しては、法務医より詐病の疑いが高い、とのことです。
――弁護人。
――……ありません。
――被告人。
「わたしはやっていないっ!! 本当なんだっ!!」
――ねぇ、もう全部白状しちゃいましょうよ。ぼくだって、こんな負け戦みたいな裁判、本当は関わりたくないんですよ。
――弁護人。
――ありません。
――被告○○。あなたは私利私欲のため、幼い命を犠牲に財を成した。それは社会では決して許されない行いであり、残虐非道の極みにあり、同情も情状を酌量する余地も無い。また心神喪失状態には無く、責任能力を有するという原告の主張を全面に認め……
「うそだ……!! そんな、うそだ! ○○って誰だ! わたしは……わたしの名前なのか!? 違うだろう!! そんなのわたしの名前ではない!!」

――被告人を死刑に処する。

「うそだぁあああああああーーーーーーーー!! なぁ嘘だろ!! 嘘って言えよ! 嘘って言ってくれよぉおおおおおおおお!!」
――お昼のニュースです。今から1年前、児童誘拐殺人の罪で死刑が宣告された○○死刑囚に対し、死刑を執行したと法務大臣から発表がありました。
――続いては、若者に人気のB級グルメ特集! いざ行かん若者の街へ!

「ま、こんなもんね。ロカ、ごくろうさま」
「あいさー、姉御!」

トラックごと部下に運搬させ、あとは野となれ山となれ、だ。
「サイファーはもう、別アジトの構成員たちをサクっと殺った頃だし……じゃ、ヴェイロンたちを回収して帰ろっかね」
通信端末を操作する。
「あーあー。ヴェイロン？　聞こえる？」
『カレン。俺だ』
「ありゃ、トーマか。ヴェイロンはどしたの？」
『んー……ちょっと前に調査対象の集落に到着したんだけど、ヴェイロンが向かいの丘を見るや否や『悪魔だ！　悪魔がいる！　逃げろ！　全員殺されるぞ！』って大騒ぎし始めて……すこし退いて待ってたら、集落が壊滅してたんだ』
「カート坊とグレンデルたちは？」
『悪魔……とやらの気に中てられて、全員ブっ倒れた』
「……あちゃー」
……顔を手で覆い、天を仰ぐ。ご神体が燃えたとは聞いていたが、集落ごと燃えたとは聞いていなかった。
グレンデル一味も、まさかこんな山奥で、また遭遇するとは夢にも思わなかっただろう。ここにいるロカは予見していて別行動を取ったのではないかと邪推してみるが、どうせはぐらかすことだろう。
「はいはい、そんじゃあサイファー向かわせるから。担いで帰っておいで」
『わかったよ、カレン。あ、そうそう。村人たち、縛られて放置されてるけど、どうする？』
「あぁ、殺しておいて」
通信を切り、帰還を目指す。ふと立ち寄った場所で……見知ったどころではないモノを、見つけた。
「あは」
漆黒の車体。無くしたと思っていたモノ。ブラックバード。事務所をロカに開けさせ、鍵を入手する。

「なのは。やっぱり私たちは、運命の赤い糸で繋がってるみたいだね」
ノーヘルで風を切りながら、カレンは愉快そうに笑った。

◆・◆　◆　◆

――――山火事の焼け跡。
その実は、犯罪教団・天瞳宗の総本山……だった場所だ。
「ご無理を通していただいて、ありがとうございます」
「いえ……事情が事情ですから」
フェイトと現場の警察官の責任者が話す。
なのはは、フェイトに無理を言って、家宅捜索が始まる前に、少しだけ時間を作ってもらっていた。
というのも、縛って放置していた構成員の、幹部級と目される者たちが、血痕と肉片だけを残し、行方不明になってしまったのだ。
はじめは手の肉を削ぎ落して逃げたのかと思われたが、血痕が移動した痕跡がなく、また、村人たちの証言……にもならないような言動が、それを否定していた。
――『肉に！　みんな、肉に変わっちまったんだぁ！　鶏を潰すみたいに！　自分から!!　ぶちゅんって、折りたたまれちまったんだぁ!!』
……参考にもならず、また、一部から薬物反応が検出されたため、集団ヒステリーの一種として処理されていた。
不明者捜索の仕事まで発生してしまい、家宅捜索と現場検証に、わずかな隙間時間が発生したことで、来ることができた。
神妙な面持ちで、なのはは、エルスと、ハリーと、その援助者である国家公安に属する陰陽師集団だけを連れて現場に足を運んでいた。
なのはの手には、いっぱいになったトランクケースが２つ。ハリーとエルスは、両手に持ちきれないほどの花束。
集落の外れ、やや開けている空間。
そこは、ある程度は除草されている、１０メートル四方ほどの場所だ。

「……」
なのはは荷物を下ろし、わずかに盛り上がった土の山を、素手で丁寧に除いていく。シャベルなりスコップなり、道具はあるが……なのはは、素手で行っていた。湿った土に手や衣服は汚れ、小石に当たり傷を作る。しかし、誰も止めなかった。みな、神妙な面持ちで見守る。
やがて……土や石ではない感触に、指先が振れる。
「――。」
指先で、その表面を撫でる。見えたのは……陶器にも似た質感の、白い曲面。
……小さな、頭蓋骨。そして、微生物に分解され土に還りかけた、水色の端切れ。
「――遅くなって、ごめんね。助けに来たよ」
その隣で、ハリーが、エルスが、同様に、小さな亡骸を『救出』した。
歴代の、『巫女』の失敗作とされてきた者たち。その数、6体。
風呂敷の上に、一人分ずつ、丁寧に全身ぶんの骨が並べられていく。とはいえ、子供の骨だ。中には、頭蓋以外はほとんど分解され、土になってしまった部位もある。
「……ごめんね。もっと早く、来ていれば良かった。そうしたら……そうしたら、あなた達の誰か一人でも、助けられたかもしれないのにね。ごめんね。ごめんね」
なのはは、涙をぽろぽろと流しながら、被害者の残滓を集める。
「……」
現場指揮官の警部は、やりきれないという表情で、煙草を口にくわえた。誰かとでも話したい気分なのだろう。隣に居たフェイトに、独り言のように言う。
「……いや、ね。たしかにオレぁ警察官で、公務員ですわ。遺体は遺体として、証拠として、回収して鑑識に回して、身元を確かめなきゃあならねぇんですよ。見つかったのなら、あの民間人を現場から退去させて、オレらでそうするべきなんですよ。仕事ですから。それで市民みなみな様の税金から、ありがたくも給料を貰っているわけで。けど

ね……あぁ、言っていませんでしたね。オレには別れた女房との間に、娘が一人、いるんですわ。月イチくらいでしか会っていませんがね……それでも、可愛いモンなんですわ。もし……もし、ですよ。あそこに、オレの娘が居たとしたら……オレは、とても……」

警部は、目元に浮いた涙を指で拭く。

「……でも、……もし、ああして、優しい誰かに、心から弔ってさえもらえたら……」

――魂だけでも、救ってあげられるんじゃねぇかと、思うんですわ」

ま、手前勝手な話ですがね……と、煙を吐く。

「……いえ。その通りだと思います」

こういった現場は、初めてのことではない。むしろ、遺体が見つかるだけ、曲がりなりにも埋葬されているだけ、まだまだ人間味のある末路だとさえ思える。しかし、それでも……

「祈りましょう。被害者たちの冥福を」

「……ええ」

やがて、すべての犠牲者の救出が終わり……裏で作業をしていた公安職員たちは、白木の祭壇を組み上げていた。その上に、約束通り、沢山の菓子と、花束が供えられる。

当然、死者は菓子を味わいはしない。花の美しさも分からない。けれど、祈らずにはいられない。憐れまずにはいられない。それが、人間というものだ。

やがて、祝詞が唱えられる。装束に着替えた巫女が神楽を舞いはじめる。いま、犠牲者を鎮魂する儀式が始まった。

「……なのは」

フェイトは、なのはに告げる。

「あの子の身元照会が完了したよ。名前が判明していたのが幸いだった。近県の新興住宅街に住んでいた、若い夫婦の間に居た『ミカヤ』って名前の一人娘が、ある夜、突然姿を消した……って、地元警察に通報と、捜索願が出されていた」

「いま、その夫婦は？」

「……捜索願を出した一か月後に、交通事故で揃って亡くなっている。これは仕組まれたものではなく、本当に不幸な事故だったらしい」
「親族は」
「ミカヤの祖父母にあたる人物は、ミカヤが生まれたときには既に死別している。ほかに、当たれそうな血縁は無かった」
本当に、やりきれない事件だ。誰も救われていない。
「私が育てる」
否。一人、生きている。ただ一人、助けることのできた命がある。
「彼女には力が必要だ。そして、彼女には剣の才がある。二度と理不尽に負けないように、私が彼女を一人前に育て上げる」
フェイトは何も言わず、じっとなのはの真意を伺う。一時の感情での物言いでは無いのか。哀れみから犬猫でも拾うような軽い感覚ではないのか。客観的に見極めようとしている。フェイトがそれを認めなければ、ミカヤは順当に、児童養護施設へ入所し、信頼のある里親のもとへ送られることになるだろう。
「名前さえ奪われたあの子に、『ミカヤをお願いね』って、私が言われたの。ハリーでもエルスでもハルカちゃんでもリリコちゃんでもミサキちゃんでもない。ほかでもない、私が言われたの。私はそれに『わかった』って答えたの。約束したのよ。あのとき、あの子たちの死を背負うって、そう決めたのよ」
決意は固いようだ。
「ん」
そうしてフェイトは、一枚の紙を差し出す。文面から察するに、里子の引き取り申請に必要な用紙のようだ。ところどころに、フェイトの記名と捺印がされている。
「ボクの権限で、進められるところまでは進めた。あとは、なのはの頑張り次第だよ」
はじめから、フェイトがなのはを疑うことなど無いのだ。
「ミカヤの退院に合わせて、正式に手続きを進める」
「……ありがとう、フェイト。大好きだよ」

「ボクもさ」
――鎮魂の儀は、しめやかに執り行われた。
――哀れな魂たちが、せめて、天での安寧を得られますように。
――輪廻をするのならば、次は、穏やかな生を享受することができますように。

◆▪◆　◆　◆

――ぱちり、と、スイッチを押したように、意識が覚醒した。
「……」
見上げるのは、清潔そうな白い天井。視線を下ろすと、自身が見慣れぬ衣類を身に着けていることと、見慣れぬ寝台に寝かされていること。感覚で七日ほどは経過したのだろうが、慣れることは無かった。
ただ、今回の覚醒で唯一違ったのは、見慣れぬ誰かがこちらを見ていることだった。
「あの……わたしが誰なのか、知りませんか？」
何も、思い出すことができなかった。ただ、空っぽだった。空っぽが不安で、目の前の誰かに尋ねずにはいられなかった。
「あなたの名前は、彌茅（みかや）。あなたの両親がつけてくれた、大事な名前よ」
「みかや」
かみしめる様に、言葉にする。それは、自身の空白の、あるべきところにしっくりと収まった。
「あなたは、わたしのお母さんですか？」
「……違うわ」
栗色の毛の、優しそうな女性は首を横に振る。
「私は、あなたの師匠（せんせい）よ」
聞きなれない言葉だった。けれど、それは、嫌な言葉ではなかった。
「これからあなたは、私が育てます。あなたに、生きていくために必要なことを教えます。いいですね？」
確認ではなく、決定する言葉だ。だが、それも……決して、冷たいものではなく。自分の空白を、じんわりと癒してくれるような……と

もし火のような温かさだった。
自分は……彌茅という人間は、きっといま、この世に生まれたのだ。
この空白を埋めていくために。
抜け落ちてしまった何かを、もう一度得るために。
「――はい、師匠(せんせい)」
彌茅は、産声のように泣くのではなく。
目の前の優しい人と同じように……暖かく、笑った。

# ｖｉｖｉｄ編　１８話『　魔法少女リリカルなのはＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　１ＳＴ　』

――魔法少女、はじめました

◆・◆　◆　◆

……なのはが凹んでいる。

あの遠足から帰ってきて以来だ。

ことの顛末は、なのは本人、そしてフェイトから伝え聞いては、いた。そのあまりにもあまりな事件の概要、生存者の有無など、聞けば聞くほど滅入るばかり。慰霊の儀式に、俺も同行しようと思っていたのだが……なのはは、関わった人間だけで参加することを強く望んでいて、俺はその選択を尊重した。

そして、慰霊から帰ってきたと思ったら……

「師匠（せんせい）、じゅんびの方、ととのいました」

……なんか一人増えた。

いま、なのはのお古のエプロンを身に着け、足置き台の上に姿勢よく直立する黒髪の綺麗な少女。

――名は高町彌茅（みかや）という。

『秀人さん。この子ウチで育てる』

『ちゃんと面倒見られるか？』

『がんばる』

『そうか、ならいい』

……という熱い交渉の末、少女……彌茅は、我が吾妻家へ身を寄せることとなっていた。とはいっても、同じ部屋に住んでいるわけではない。隣の部屋……かつて、はやてが根城にしていた部屋に、爺さんに無理を言って寝泊りをしている。

隣とはいえ寝室は別、苗字も俺たちの『吾妻』ではなく、旧姓の『高町』。養子縁組ではなく、相続権の無い里子。

他人行儀にも見えるが、これは冷遇しているのではなく、おそらく、なのはにしか理解できない論理と理屈でそうしているのだろう。
「包丁。持ち方は教えましたね？」
「はい師匠(せんせい)」
まぁいろいろあったのだろう。彌茅がなのはを見る目は澄んでいて、全幅の信頼を寄せていることが分かる。しかし、その反面なのははというと、どこか悔恨を浮かべているのだ。
「……しょーがないよ」
ごろり、と、フェイトが俺の膝の上に転がってくる。結局フェイトとシグナムは、彌茅が救出された事件の事後処理のため、この家に留まっていた。近々、すべての処理を終えて、また新区へ戻るのだそうだ。
「なのは、あの子のことを助ける、人生を背負うって、決めちゃったみたいだからねー。……だからって、あの子の過去まで背負わなくても良いのにさ」
……なのはの人間関係の形成は、非常に独特だ。付き合いの長さは全く考慮されず、ある種の直感で構築されている。その中でも、あの彌茅は特別な部類だと思う。
なのはが、他人行儀なまま、他人行儀を貫くままに、誰かを近くに置いておくことなど、今までは無かったことなのだから。
「では順番に切りなさい」
「はい師匠(せんせい)」
なのはは、彌茅へ家事を教えているようだった。親子というよりは……そう呼ばせているように、師匠と弟子、といった関係に落ち着いているようだ。
彌茅は純粋になのはを慕っている。
なのはは努めて他人行儀に徹しようとしている。
「なのはが苦手なもの選手権―。どんどんぱふぱふー」
フェイトが何やら言い出したが、乗ってやるか。
「他人」「子供」「人間関係」「コミュニケーション」「純粋な好意」
つまり役満じゃねーか。

「でもさー、その苦手尽くしのミカヤを、頑張って育てようとしてるんだよねー」
「……あぁ」
「師匠、切れました」
「よろしい。では全部鍋に。ガッと一気に」
「はい師匠」
　煮立つ寸前の鍋に、切りそろえた具をガッと指示通りに投入する。あとは、適当に味噌を溶き入れてみそ汁の完成だ。
「はいテーブル片付ける。フェイトもゴロゴロしてないでシャキっとなさい」
「はぁい。シグナムは、用事があるものの、彌茅が気になって離れられないなのはに代わりパシリをしていた。
「そう、ゴオマさんの如くパシリに飛び回るシグナムが居ないせいで……」
「それ結果的に死ぬやつだろ……」
　しょーもない話をしながらも、テーブルは片付いた。なのはが作った料理が並び、あとは彌茅が、人数分のお椀にお玉でみそ汁を分けるだけである。
「……」
　なのはは、じっと彌茅を見ている。見守っている。
「師匠、皆さん、お待たせしました」
　危なげなく、みそ汁が配膳される。そのままちょこん、と炊飯ジャーの横に正座をする彌茅。まるで仲居だ。あまり考えたくはないが……こういった礼儀作法の類は、例の組織で巫女として育てられる傍ら、仕込まれたのだろう。礼節が必要、と考えられたわけではなく、ただ、敵地に潜入するための擬態として。
「彌茅。食席について、あなたも食べなさい。同じ食卓で、食べていない人が居るのは、私は嫌いよ」
「はい師匠。失礼します」
　すとん、と、当然のように、なのはの隣に座り直す。

「……」
あ、なのは、少し逃げた。
……いや、それにしても、ホントに素直な子だな。フェイトなんか手伝いを言い渡されると『えぇ～』とか言うのに。

土曜日の朝は、こうしてまったりと過ぎていく。
「……そういや、コレどうしようかな」
なのはが取り出したのは、リーゼから受け取った映画試写会のチケットだった。気づけば、日にちが迫っていた。
「一枚につき一名の招待になるから、私と秀人さんが行くことになるんだろうけど……」
まず会場だ。ミッドではない、第二管理世界の首都。ほぼミッドの文化・風俗を持つ世界であるため、渡航はそこまで難しくはない。次元航行艦で移動する時間はそこそこ。フェイトやシグナムが滞留している間、危機の心配はほぼ無いと言ってもいい。
「……慈樹がねぇ」
連れていくとなると、秀人が居残り組になってしまう。それは可哀そうだ。
では慈樹を置いていく。これは心配だ。
秀人と慈樹で行く。これもなのはが寂しい。
ではチケットを誰かに譲る。……チケットをくれたリーゼへの不義理になる気がする。
「うむむ……」
難題に悩むなのはだったが……
「師匠。」
彌茅が洗い物を済ませ、なのはの前に正座する。
「旦那様とお二人で、行ってきてください」
「……彌茅」
「師匠は、ここしばらく、何かに悩んでいますね」
「……」
意外とズバっと言い当てた。

「おそらく、わたしに関することでしょう」
「彌茅。憶測でものを言うものは……」
「では、何に、悩んでいるのですか、師匠？」
「……」
「わたしに言えないということは、わたしに関することでしょう」
彌茅は、けっこう遠慮がない。ある意味、なのはを信頼しているからこそ、ここまでグイグイ行けるのだろう。
「わたしは……わたしのことで、師匠に悩んでほしくありません。気晴らしの機会があるのなら、気晴らしをしてほしいです」
「……でも、慈樹が……」
「慈樹さんのことは、わたしにお任せを」
彌茅の膝に、またしてもベビーベッドを脱走した慈樹がよじ登っている。けっこう懐いているようだ。
「……」
じっと彌茅となのはが目で会話をする。
そして……
「宜しい。あなたに任せます」
「はい師匠」
かくして、彌茅は慈樹の面倒を見るという大任を与えられ、なのはと秀人は試写会へ参加することが決まった。
「慈樹さん。お母様はお出かけになられます。その間は、この彌茅がお世話をさせていただきますね」
ぺこり、と０歳児に頭を下げる
「あぃー」
慈樹は、警戒心ゼロの表情で、分かっているような、分かっていないような、そんな返事をしていた。
「ところでこのチケット、『試写会』としか情報が無いんだけど」
普通、タイトルくらいは記載されているものではないだろうか。
「あぁ、それは……」
疑問に答えようとしたフェイトだったが……口をつぐむ。
「行けば分かるんじゃない？　その監督、プロジェクト進行中に唐突

に別作品を作り始めることで有名だし、突貫作業でタイトルが定まってないんだよ、きっと」
なかなかの問題児がいたものだ。
「日付は……あっ、その日の午前は」
と、秀人が思い出したかのように声を上げる。
「……若い衆の都合がどうしても合わなくて、半日だけでも、どうしても、どうしても人手が必要ってカントクが……」
「それなら、私は先に現地入りしておいた方が良いわね」
たったの半日ずれだ。
「……」
秀人は、渋―い顔をする。
「一人で大丈夫か……？　いや、ホントに……大丈夫かな……？
やっぱりカントクに詫びて俺も一緒に行こうかな……」
思っていたよりも信用が無かった。
「むぅう……!!　大丈夫！　大丈夫ったら、大丈夫なの！」
ぜんぜん安心できない。
だが、無情にも時間は過ぎていく。幸いにも必修科目の無い自由登校日だった。
秀人は会社へ。フェイトは仕事へ。
「では行ってきます」
「はい師匠。行ってらっしゃいませ」
慈樹を抱っこした彌茅が見送りに出る。
「稽古は大家さん、もしくは朧さんがつけてくれる予定です。失礼の無いように」
「はい師匠」
「慈樹に好き嫌いはありませんが、食事量には注意しておくように」
「はい師匠」
「それから」
「師匠、間もなくフネに乗るお時間ですよ」
「……」
「師匠？」

まっすぐに見上げてくる無垢な瞳。
「……もしかして、あなたも行きたかったのですか？」
その奥にあった僅かな感情を、なのはが読み取った。
「……ハイ、少しだけ。映画、には、興味があります」
図星を言い当てられたからだろうか。彌茅はわずかに頬を赤くし、俯いた。
（どうしてもっと早く気づけなかったのかしら……）
なのはは、己の愚を恥じた。彌茅は文明と隔絶した暮らしを強制されていた子だ。街中へ出ると、瞳が好奇心に輝く瞬間があることを知っていたはずなのに。
「……」
ぽん、と彌茅の頭へ軽く手を置く。
「帰ってきたら、映画を観に行きましょう。約束です」
「……！　はい、師匠（せんせい）!!」
若干、浮かれた様子の彌茅に見送られ、なのはは家を出るのだった。
登校日ではないが、夏用制服のセーラー服に身を包む。学生の正装としては、この服装が相応しいだろう。試写会がどういうイベントかは知らないが、関係者のみ参加できる一種の式典であると予想できる。
フォーマルな衣類を所持してないなのはにとって、このセーラー服と腰に佩いた日本刀こそが、最も厳かな装いであると考えていた。
荷物検査でめちゃくちゃ怒られた。
堂々と銃刀法にケンカを売りまくった結果、別室へ案内され、女性の検査官からは散々に怒られ、日本刀は没収の上で自宅へ返送されることとなった。背に隠し持っていた匕首も奪われ、ペンに偽装した棒手裏剣も没収された。
「くっ……！　なぜ樹脂製が引っ掛かった……！」
「最近のは形状から判定できるんですよ。はい没収」
「拳銃や爆薬は持ってないのに」
「逮捕されたいですか？」
「冗談です」

テロリストかな？
持ち込めた暗器は、ワイヤーわずかに一点のみであった。それでも持ち込めたあたりプロである。
伊達メガネを掛け、髪を三つ編みにした程度の、申し訳程度の変装。だが、ほんの少し印象が変わるだけで、個人の特定は困難になることを、なのはは知っていた。こういう技能は無駄に長けていた。
（まさか映画を観に行く程度でトラブルなんて起こらないでしょう）
隣席は奇しくも同年代のセーラー服の少女だった。帽子を目深に被り、市販の情報端末の液晶画面を見ている、今風の若者といった装い。なのはは、手元で文庫本を広げた。

（まさか聖遺物を回収しに行く程度でトラブルなんて起こらないだろう）
凶鳥部隊所属（育成枠）、クイン・ガーランドは、変装用セーラー服に身を包み、キャスケット帽で特徴的な銀髪を偽装していた。
カレンよりの命令。第二管理世界の映画試写会、そこで主演女優にサプライズでプレゼントされる冠……正確には、それに用いられている宝石が、実は聖遺物なのだという。
回収とはいっても、スタッフを皆殺しに、とかいう物騒ごとではない。技術部より渡されたイミテーションとスリ変えてくるだけだ。
（まるで子供のお使いじゃないか……）
内心でブツブツと文句を言う。手元の情報端末は、命令の暗号を潜ませたｗｅｂページを表示している。
（……そんなにわたしは戦力にならないって言うのか！）
だが、苦い記憶がある。市街地で、あれだけ襲撃に有利な条件をそろえていながら、何一つ成し遂げられずに制圧されてしまったこと。そして二度目は、あの山奥で、殺気に充てられてコロリと気絶してしまったことだ。これだけ失敗が続けば、カレンとて自身らの育成計画の見直しを図るのも仕方のないことのように思えた。
『んー……あなたに真剣はまだ早かったみたいね。しばらくは無手よ』

（没収されてしまった……）
なんと心細いことか。
赤の他人と距離を詰めることが苦手なクインに対し、偽装もかねて民間の船で移動しろとは、カレンも酷なことを言う。
幸いにも、隣席に座ったのは同年代の少女だ。タイプは違うが、セーラー服を着た学生。やや薄い髪色以外は、三つ編みに眼鏡と、地味な印象を受ける。いまどき紙媒体の文庫本に目を落とし、没入している。
（（大人しそうな人で良かった……））
クインはなのはの変装術にすっかり騙され、正体に気付いていない。
なのははクインという矮小な存在を完全に忘却していたため、正体に気付いていない。
こうして、奇跡的な要素が組み合わさり、クインは無傷での生還という偉業を（無自覚に）成し遂げたのだった。

文庫本を一冊読み終える程度の時間で、航行船は港に到着した。がやがやと動き出す乗客たち。港には最新の映画の広告があり、降り立った乗客たちの話題は、本日開催される映画試写会と、ある意味、それがメインともいえる出演者たちによる舞台挨拶だ。
「あー、いいなぁ、試写会チケあたったヤツ！」
「有料の抽選、応募したのに当たらなかったー！　……パンフは貰えたけど」
「倍率３００倍だっけ？」
「いや。それは予想で、実際はそれ以上だってさ」
（映画と舞台挨拶だけで、そんなに!?）
なのはは、自分の持つチケットの価値を今更ながら知った。やや気後れしながらも、会場へ向かう。イベント会場の入り口は、抽選に当たらなかったものの、少しでもイベントの空気を味わおうと集まった群衆で歩きづらささえ覚えるほどだった。
（……この期に及んで、まだタイトルは未発表なのね）

垂れ幕には、タイトルを伏せるように目隠しがされており、主演の少女の顔程度しか見えていない。
（……？　この子、どっかで見たような顔ね……？）
そのチラ見している主演女優……というか、子役の顔は、何故か見覚えがあった。芸能タレントにさほど興味が無い筈なのだが……
（きっと有名な子なんでしょう）
そう結論付けた。無意識のうちに目に入った広告や何かで、記憶に残っていたのだろう。
幸運にもチケットを入手した試写会の参加者たちは、入り口の左右二手に分かれて会場へ入るようだ。標準的な学生服を着たなのはは、幸いにも目立つこと無く、その群衆に紛れこむことができていた。
「あっ……来たぞ!!」
と、群衆から声が上がる。
正面入り口に、これまたワザとらしいリムジンが停まり……
――――シュゥウウウッ……
レッドカーペットが渡される。チケット組も、群衆も、皆がそのリムジンのドアを注視していた。そして、さんざん勿体を付けて開放された扉から一番に降り立ったのは……
「レアスちゃん!!」「レアスちゃんだ!!」
垂れ幕にもデカデカと描かれていた主演の少女だった。やはり、真っ先に姿を現すのは、主演女優ということか。
「レアスちゃーん！」「こっち向いてー！」「かわいいー!!」
男性ファンだけではなく、女性ファンの黄色い声も上がる。その声に、少しはにかんだような笑みとともに手を振り応える栗色の頭髪の少女……レアス。
「あっ、ピュリスちゃんも出てきた！」「こっちもかわいいーー!!」
続いて出てきたのは、腰まで伸ばした見事な金髪の少女。こちらの少女は準主役級といったところか。少しぎこちなく手を振っているところが、また愛らしさを増している。
次々に現れる、綺羅星のような女優・俳優たち。絢爛な行進は、入場待ちをするチケット組の前をわざわざ通るというサービスも加わ

り……

（まだ入場できないのかなぁ）

全く意に介せず、ボケーっと真正面を向いたまま突っ立っていたなのはの前までやってきた。そのまま、通り過ぎると思いきや。

「？　……あれ、レアスちゃん、止まっちゃったぞ……？」

「何かあるのかな？」「いや、後ろのピュリスちゃんも少し困ってる感じだけど」「レアスちゃん？　レアスちゃーん？」

（しかし人が多くて暑いなぁ）

……少しは周囲に目を向けよう？

（試写会が始まるころには秀人さんも合流できるかなぁ）

完全に自分の世界に入り込んでいた。が。

「あのっ」

ぱし、と、なのはの手を、あろうことか、主演の少女……レアスがつかみ取った。

「えっ……!?」

どよっ……と、群衆がどよめく。ほかの出演者たちも、スタッフたちも、完全な予想外だったのか、目を剥いている。

（……？　こういうサービスかしら？）

なのはは、特に意に介することも返事をすることも無く、握らせるに任せる。

「――――神様ですよねっ!!?」

……よりにもよって、その単語。

「えっ……!?」「神様って……えっ、あの人!?」「ウッソ……でも、言われてみれば似てる……っていうか、そのものじゃない!!」

変装術とは、他者に認識された時点で解けてしまうまやかしだ。周囲が、綺羅星たちから、なのは一人へと視線を注ぎ始める。

「……」

なのはは、笑うでもなく、ただ泰然と、レアスに手を握らせていた。そう、たかが変装を見抜かれた程度……群衆が自分の存在を認知した

程度……数百の視線が自分一人に注がれている程度……
（バレたぁあああーーー!!?　何で!?　何でバレたの!?　私の変装は完璧だった筈よ!!　いやぁあああ知らない人たちが私のことジロジロ見てる見てる見てるよぉおおお!!　どうしよう！　手を振り払ったらぜったいヤバいわよ!?　どうしよう！　どうしようどうしようどうしよう！　うわぁあああん来なきゃ良かった来なきゃ良かった!!　全部はやてのせいよ！　あのデカチチ女!!　かえる!!　おうちかえる!!）
……完全にフリーズしていた。
「まさか、神様ご本人に来ていただけるなんて、大・大・大光栄ですっ!!」
「ひとちがいです。ひとちがいです。はなしてください。はなしてください」
言動が機械化されていた。
「さぁ、こちらへどうぞ!!」
「やめてくださいしんでしまいます」
「ご冗談、をっ……!?」
「むりです。むり、です……！」
ぐいぃ、と、割と本気で抵抗するなのはを引っ張るレアス。膠着する状況。
「まぁ、見て……！　レアスちゃんが、神様と手を繋いでいるわ……！」「なんて神々しい光景だ……！」「約束された神映画だったんだな……神だけに……」「歴史に残るワンシーンだぞ、これは……!!」
勝手に脳内で補完して幸せになっている群衆を尻目に、レアスとなのはの綱引きは続く。
「……神様。」
ぼそり、と、レアスの口調が変わる。はにかんだような、万人に愛される笑顔を完璧にキープしたまま。
「……　　このまま弾かれたように尻もちをついて、さめざめと泣いてあげましょうか……？」
主演女優に選ばれるほどの演技力を駆使して、そのような状況を作

られればどうなるのか……炎上必至。三千世界に神の悪名は広がり、７５日間どころかその倍以上の時間、噂話を立てられ、氏名住所家族構成学校職場すべてがネットワークを介して全世界に拡散し、人生が終わってしまうのだ。

（こっ……こっ……！　こンの、クソガキィいいいィ～～～……!!）

とんだ食わせ者である。

――陽キャ。リア充。

呼び名は多々あれど……共通するのは、図抜けた『場の空気を操る力』。彼らが白と言えば白。黒と言えば黒。右倣えと言わば右へ、鼻でパスタを食えと言われれば食うしかないと思わせてしまう……天性の力の持ち主にして、なのはの怨敵である。

「――わかりますね？」

……なのはは、小学生くらいの子に完全敗北を喫した。

「何よぉ……何よぉ……年下のくせにぃ……！」

「いいから、わたしの主演映画に、ひと花添えてください、よっ……！」

ずる、ずる……と、レッドカーペット（処刑場）へ引っ立てられていく。

「マジで神様だったんだ!!」「神様――！　こっち向いてー!!」

「あぅ、あぅ、あぅ……」

気づけば、他の誰よりも、なのはへ向けてフラッシュが焚かれていた。着飾った主演女優ではなく。ただ、学生服という普段着を着ただけのなのはへ。

「あ、嫌がってる。みんな、撮るのヤメ」「おっけ。目に焼き付けるわ」

「フラッシュ……じゃなくて、撮影自粛って、後ろにも伝えてー」「はーい、後ろの人たちも聞こえたー？」「ま、撮られるのが仕事のタレントじゃねーしなぁ」「間近で会えただけでも最高のサプライズっしょ」

民度、高かった。

「……」

……なのはを引っ立ててきた張本人であるレアスは、無言でその光景を見ていた。

「『お集りの皆様！』」
マイクを手にしたレアスが、スピーカーを通した声を上げる。
「『ここでサプライズ！　シークレット情報の解禁です!!』」
「えっ、なに、なに!?」「サプライズだって！」
スタッフたちに目で合図を送る。予定に無いこと尽くしの中、スタッフは完璧な仕事をしてくれる。
「『神様がいらして下さったこの場にて、映画タイトルと、１８０秒のロングＰＶを、フライング大・大・大・公開！　しちゃいまーす！』」
――うぉおおおおおおおおおーーーーーー!!!!!
凄まじい熱狂が巻き起こる。
垂れ幕の目隠しの両端を、スタッフが持つ。熱狂が、シン、と、静まり返る。そのタイミングで……バッ、と、タイトルが白日の下に晒される。

――――――――魔法少女リリカルなのはＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ
１ＳＴ

「……まほう」「……しょうじょ」
……沈黙が。
「魔法少女……！」「リリカルなのは……!!」
……さざ波へ。
「魔法少女、リリカルなのは……!!」「魔法少女リリカルなのは!!」「魔法少女リリカルなのは!!!」
――うぉおおおおおおおおおおーーーーーーーーーーーー!!!!!
再度の、大熱狂へと変わる!!
なんじゃこりゃあああああああああああああああああああーーーーーーーーーーーーあぁあぁあぁ

なのは、壊れる。
「えっ、何!?　私は何を見ているの!?　ねぇ、魔法少女ってナニ!?　リリカルってどういう意味!?　なんで私の名前が使われてるの!?　ねぇ、ねぇってば!!　……あぁチクショウ誰も聞いちゃいねぇ!!　なんかいい感じのテーマソングまで流れ始めてる!!」
「そ・れ・は・ですねぇ……」
すたたた、と、群衆が画面に……芸術的に演出されたＰＶに夢中になっていることを確認したレアスが、なのはに耳打ちする。
「この映画は、さきの事件にあたって多大なインスピレーションを受けたニュー・バンチ監督が、脚本キャピタル・コンストラクション氏を迎えて制作した、神様の大・大・大叙事詩だからですよっ！」
「つ、つまり、あんたは……！」
「はいっ！　神様の幼少期をイメージモデルに、主演を務めさせていただきました！　レアス・ステラ、年は９歳ですっ!!」
「見覚えが有るわけだよ畜生……!!」
身近過ぎて盲点だった、他ならぬ自分の似姿だったのだ。
「私の幼少期のデータなんて、誰が……！」「管理局です」「物理的に潰してやるッ!!」
情報管理能力の低さにより、次元世界の治安が脅かされようとしていた。
「ほらほら、もうＰＶも終わる頃ですよ」

『――――魔法少女、はじめました』

「始めてないわよッ!!」
画面に向かってツッコミを入れる。
「こ、こんな映画、ブっ潰して……！」
「良いなぁチケ組。本公開まで二週間、長いなぁ」「あー、仕事なんて手につかなさそう！」「明日も仕事だけど……うんっ、頑張ろう!!」
「ぶっ潰して……」

「事件が原因で入院した子供たちにも、特別優先チケットが配布されるんだよな」「そうそう。すごく喜んでくれてるって」
「ぶっ、潰、さなくても、まぁ、いいケド……」
しょぼしょぼと語気を弱める。
「あ。ご家族の分のチケット要ります？」
「あんた私を殺す気!?」
慌てふためくなのはを一通り満足そうに眺めてから、レアスが踵を返す。
「それじゃあ神様、ばいば～い、です。イベント、最後まで楽しんでいってくださいねぇ？」
「帰るぅ……!!　帰るんだもん……!!」
「舞台挨拶のとき、観覧席に神様の姿が無かったらわたし、寂しくて寂しくて、泣いちゃうかもしれないなぁ？」
「ぐぬぬぬ……!!　あんたなんて、嫌い！　嫌いよっ!!」
「アハハハハ」
……小学生に弄ばれる神。
……なのはを気遣ったチケ組による人の輪に囲まれ、なのはは、逃げることも許されず、会場へと向かうのだった。
◆▪◆　◆　◆
『ぶわぁーっはっはっはギャハハハハハハだーはっはっはっはっはヒュひぃヒヒヒヒでゅふふふふぶひゃはははははヴぇふっ、げふっ、だぁーっはっはっはウェヒヒヒヒヒヒげぇっふ、げぇっふ、ヴふっ、ひ、イーッヒッヒッヒビュヒヒヒヒ……!!』
「……カレン姉。ウチの話、ちゃんと聞いてる……？」
通信機の向こうで、下品極まりない様子で笑い転げている姿が目に浮かぶ。
『まほう！　しょうじょ!!　なのはが！　魔法少女!!　リリカルなのは！　ヒュヒヒヒヒ、ビュヒッ……ヒィーッヒッヒッヒ……！　『禍ツ風』『ペイルライダー』と恐れられた、あの、なのはが！　お、おなか痛いぃ……！　笑い死ぬぅ……!!　ぶわぁはははは……!!』
「……これは駄目だな」

クインは通信を切った。先ほど、全世界に向けて公開された映画の情報を確認した途端、アレである。指示は仰げないだろう。

「レアスちゃん……。レアスちゃんレアスちゃんレアスちゃん……。分かってる、ちゃあんと分かっているよ……。ぼくに抽選券が当たらなかったのも、きみからぼくへの試練なんだろう？　きみの一番のファンであるぼくが、抽選なんていう不確かな運に頼らず会場入りできるかどうかを試しているんだろう……？　わかってる、わかってるとも。こうしてちゃんと、チケットも親切な人から譲ってもらえたんだ。ちょっと話したら、説得をしたら、快く譲ってくれたよ。ま、当然だよね。きみの一番のファンはぼくなんだから。ぼくが手にするべきものが、他人の手に渡っていたというだけの話だよ。さっきぼくの目の前で、足を止めてくれただろう？　ほかのクソ俳優どもに肌が触れるほどの距離で苦しい気持ちの中、ぼくがちゃんと居ることを確認して、安堵してくれたんだろう？　あの笑みがぼくにだけ、ぼくのためにだけ向けられたものだって、ぼくはちゃんとわかっているよ。神様とかいう、なんかよくわかんないヤツと話しながら、きみが歌う以外の歌なんていうゴミみたいな雑音が流れるＰＶなんかに気を取られず、ちゃんときみを見ていたんだ。あぁホントにもう、なんてセンスの無い製作スタッフたちだろうね。きみだけを映した映像に、きみの歌が流れていれば、それこそが作品の最大のＰＲになるのに。ほかの有象無象を使わなきゃ画が作れないなんて、とんだ無能スタッフたちだよ。でも、ぼくはわかってるよ。きみの一番のファンだからね。作品も、きみの活躍を、きみの活躍だけをちゃあんと見ているよ」

……舞台裏を徘徊する、明らかにスタッフではない男の存在についての。

クインがここに居る理由は決まり切っている。いずこかに保管されている冠を見つけ出し、聖遺物をすり替えるためだ。あの男の醜悪な独白を聞くに、目的は聖遺物ではなく、レアスとかいう主演の少女。

幸いにも目的は競合しない。

どこかの誰かがどうなろうと、クインにとっては知ったことではな

かった。一刻も早く任務を達成し、カレンの信用を取り戻したい一心だった。
「……!?　……だ、誰だッ!?」
　速やかにコトを済ませる。その目論見は早くも崩れた。こちらはスタッフと思しき装いの男性が、こちらを見て声を上げたのだ。
「あれぇ……？　おかしいなぁ。レアスちゃんの舞台挨拶のために、スタッフはこの時間は裏手までは手が回らないと思ったんだけど……あぁ、そっかぁ。レアスちゃんの采配で、予定が変わったからかぁ。もう、レアスちゃんはぼくに無茶ぶりをしてくれるなぁ」
「ここは関係者以外立ち入り禁止だ、……ですっ！　退出を願います！」
　男性スタッフは、口調を修正する。誤って迷い込んでしまっただけの客である可能性を考慮したのだろう。良い対応力だ。
「はァ～!!?　部外者だァ～～!!?」
　……しかし、常識的な対応が通じる相手ではなかった。
「誰が部外者だよぉっ！　ぼくはレアスちゃんの一番のファンだぞぉッ!!　ぼくが関係者じゃなかったら、オマエは何なんだよォっ！
　偉そうにィ！」
　……男は、たじろぐどころか憤激し、脂肪に弛んだ顔を真っ赤にしてスタッフに掴みかかった。
「や、やめなさいっ！」
「ふざけるんじゃ、ないぃっ!!　オマエが！　オマエみたいなのが居るせいで、ぼくはレアスちゃんのサイン会を追い出されたんだぞォっ!!」
「どうかしているぞっ!!　誰か、警備員をっ……！」
「!!!　またっ!!　ぼくを追い出す気だな!!　またぼくをっ！　ぼくとレアスちゃんの邪魔をするつもりだなぁあああ～～っ!!」
（……出るに出られないじゃないか）
　クインは物品の捜索もできず、物陰に隠れ潜んでいる。このまま騒ぎが続けば、更に人が増え、任務達成は困難になってしまうだろう。
さてどうしたものか……

「うわぁあああああっ!!　ぼくとレアスちゃんの時間を、邪魔するなァあああああっ!!」
癇癪を起した男が、スタッフの男性をもみ合う勢いのまま突き飛ばした。
――――がらぁんっ!!
コンテナへ突っ込む。
（うわ頭から行ったぞ。死んだかな）
「グっ……」
どうやら命に別状はないようだが、昏倒している。
（チャンスだ。今のうちに……）
カサカサ……と、壁を這うアレのような滑らかな動きで物陰から這い出る。
「んン……？　なんだ、これぇ」
男は、自分が蹴散らした物品の中から、何かを拾い上げた。
――――白金に輝く、三原色の宝石を配したティアラ。
「……あーーーーーー!!!!」
見紛うものではない。あれこそクインの目的の物品。中央に輝く特大の宝石こそが、奪取を命じられた聖遺物である。
……しかし、迂闊にも声を出してしまうあたりが、クインの未熟たる所以であった。
「なんだぁ……？　まだ居たのかぁ？」
もうこの際、手段は選んではいられない。じきに騒動になってしまう前に、あのティアラそのものを強奪してしまえば良いのだ。結果オーライの精神である。
たかが一般人。腹に一発、それで終わりだ。クインは疾走し、男の腹部に水平蹴りをかます。先手必勝は喧嘩の常であると、長い路地裏生活で学んでいた。
「うらァっ!!」
――――ドボぉっ!!!
……決まった。分厚い脂肪に若干阻まれたものの、クインの脚力には関係の無い話だ。

「グ、ぶぅ、ぐぐぐぐぅ……!!」
腹を抱え込む姿勢で倒れこむ男。あとは意識を失うだけだろう。そう思っていたクインだったが……
「!? お前、それはっ!!」
男の胸ポケットから。転げ出る。円筒状の密閉容器。明らかに容器が破損している。解き放たれる。
――――刃の羽根が。

「ぶ、ぐ、お、ぉおおおおー!! れ、レアスちゃんンンンンンンーーー!!!!!!!!」
暗黒の魔力が、膨張する。目的のティアラも、その暗黒の中に……
「し、しまったーーーー!!!!!!」

◆・◆ ◆ ◆

『ではレアスさん! この映画の見どころとは!?』
『はいっ! やはり、少女二人の出会いと、そこから繋がる友情のストーリーですね! あまりお話しできないのが残念ですが、観てくださる方に感じてもらえればいいと思っています!』
『ピュリスさん。異例の大抜擢となり、主演級という大任にプレッシャーは感じませんでしたか?』
『は、はい……! なんというか、もう、お話を頂いたときから、夢のようで……! レアスさんをはじめ、素晴らしいスタッフの方々とお仕事をさせていただいて、本当に光栄ですっ……!』
舞台上でスポットライトを浴びるキャストたち。
(ふーん、なるほど。場慣れしたレアスには抽象的に、そうでないピュリスにはＹＥＳ／ＮＯで答えられるように質問をしているのね)
なのはは聴衆の中に身を隠すように、舞台挨拶を聞いていた。はよ終われ、と思っていたが、なかなか聞き応えのあるトークだ。この数刻後に予定されている試写にも期待が高まる。

完全に他人事として捉えていたなのはだったが……

『――ここは是非、神様にもお話を聞いてみたいですっ!!』

「ぶはぁ」

レアスからのキラーパスがなのはを捉える……!

『神様、こちらへどうぞ!!』

(どうぞ、じゃないわよぉ～～～!!)

あたふたあたふたと立ち上がる。そのまま回れ右をして出口を突破しようとする。のだが。

「さぁさぁ、ご遠慮なさらず」

「さぁさぁ、舞台の上へ」

……門番としてガッチリとガードを固めるスタッフに行く手を阻まれ。

「さぁさぁ、恥ずかしがらずに」

「さぁさぁ、参りましょう神様」

……女性スタッフにガッチリと手を握られ、舞台上へ連行されていく。

……なのはは油断していた。自分を宣伝材料に利用としている者など、せいぜいレアス程度であるのだと。レアスが特殊なのだと。興行に、エンタメに生命を賭している者たちの貪欲なる習性を、完全に見くびっていた。

――使えるものなら神でも使う。

それが、不文律であった。

『はい、今回は事実を基にしたセミ・ノンフクションということですが、ご感想は!?』

(ＹＥＳ／ＮＯで答えられる質問にしなさいよ～っ！　感想ってナニ!?　昔の私!?　ええっと……ええっと……)

ジュエルシードおっかけて魔法ブっぱなして、会ったばかりの頃のフェイトに魔法をブっぱなして、家族に向けて癇癪まぎれに魔法をブっぱなして、暴走ジュエルシードに魔法をブっぱなして、戦闘に乱入してきたクロノに魔法をブっぱなして、訓練でミスって自分に魔法をブっぱなして……

（ＰＧ―１２指定は間違いないわね……）
そして、時系列で追うと、はやての事件になるわけだが。
（……完っ全にＲ―１８指定だわ……血が流れなかった日が無かったもの……）
……何をどう言ってもヤバい。
『神様……？』
なのはは、はっと自分の世界から帰還した。無言はまずい。沈黙はまずいのだ。
――何で黙ってるの？　何か不満があるなら言いなさい！　何その目は！　なんて反抗的な！
（ぐわぁあああああっ！　静まれ我が記憶!!）
そう、沈黙はまずいのだ。何か言わなければ。何か、何か……
『――――――――別に』

……ワザとか？　いっそワザとやっているのか？
困惑する司会者。頬をヒクつかせるレアス。きょどきょどと周囲に目をやる演者たち。もう終わったか……と、誰もが察した。
だが……なのはには、本人でさえも気づいてない隠された特徴があった。それは……

――――――ドゴォンッ!!!

……悪運の強さだ。
『へ、へへへへへぇ……！　レアスちゃぁあああーーん……!!
みぃつけたぁ……!!』
壁を突き破り現れたのは、肌色と褐色の中間のような色合いの、肉の塊のような獣だった。
「きゃあああああああーーー!!!!」

居合わせた者たちがパニックを起こす。明らかに演出ではない。その度合いを越えている。
「え……？」
レアスは……マセているとはいえ、まだまだ幼い子供だ。危機への反応が遅れ……怪物の目の前に取り残されている。
『レアス、ちゃぁあああああーーー「――えいっ」
――めごっしゃ
……吹き飛んだ。ヒグマほどのサイズはあろうかという怪物が。
「あっやだ、今日はスカートだったわ……！」
振りぬいた足を下ろし、翻るスカートを手で抑える。
（この気配、ヴィヴィオが隠そうとしていたアレと同じね）
ということは、目の前の怪物もまた、囚われの被害者ということかもしれない。
「か、神様ぁ……!!」
我に返ったレアスがなのはに視線を向ける。
「ねぇ、あいつ『レアスちゃん』とか言ってたけど、アンタの知り合い？」
「……さすがに面識が有りません」
「そうよね……」
あっても困る。
「そ、そうだ、神様！」
ばっ、と、レアスがなのはの手を取る。
「アレ、やっつけちゃって下さいよ！」
「やっつける、って……」
「とにかく、この場から、叩き出してください！　リカバリーは早ければ早いほど良いんです！」
「……」
なのはは、発言の意味を考える。
「リカバリーって、つまり、この式典を再開しようってこと？　こんな状況になってるのに？　まずは全員の避難を終わらせて、正式に中止

して、後日改めて客を招待するべきなんじゃないの？」
　ド正論である。なのはは、曲がりなりにも管理局員の端くれだった時期がある。こういった状況の対応についてはプロの意見と言ってもいい。
「それじゃあダメなんです!!」
　まさかのダメ出しである。
「だって……だって……」
　余裕をなくしうろたえるレアスは……
「神様がわたしのイベントに現れるなんて、二度とないチャンスなんですっ！　このチャンスを、逃したくないんですっ!!」
　……なのはを、静かに怒らせた。
「そう……チャンスなのね」
「はいっ!!　また招待したところで、神様、次は来てくれないでしょう!?　陰キャのコミュ障っぽいし！」
「えぇ……次は世界が滅びても来ないでしょうね」
「だけど、管理局が到着するまで待っていたら、会場も、場の空気も、もう取り返しがきかなくなっちゃうんです!!　ピンチがチャンスに変わらないで、ミスとして終わっちゃうんです！　だから、だから神様……!!」
「えぇ……何かしら、クソガキ？」
「手っ取り早く、神様の力で解決してください!!」
　……いっそ清々しいまでの他力本願っぷり。
「……」
　なのはは、無言だった。レアスを見下ろし、ただ、物体を眺めるような、醒めた目をしていた。
　――なのはは怒ると怖い。
　それは共通認識ではあるが……実は５０点だ。
　――なのはは、『静かに怒っているとき』が一番怖いのだ。
　……今回は、ソレだ。あの天瞳宗の里の連中だとか、そういった類

の悪党へ向ける怒りとはまた別の。
「いいわよ」
にっこりと。聖人のような朗らかな笑みで、そう言った。
「解決してあげるわ」
……これめっちゃヤバいやつ。神が人間を弄ぶ感じの、皮肉たっぷりな寓話的なアレだ。
「あなたはそれを望むのね？」
「はいっ、お願いします!!」
……ここに、神と人の契約が交わされた。
『レアス、ちゃんんん……!!』
さすがは怪物。もう回復した。ずるずると足を引きずるように、レアスを目掛けて這い寄る。
『ぼくと、いっしょにいいいいい……チェキしようよぉおおおおお……!!』
うわぁキモい。
「ひィっ……！　わたしは、アイドルではなく女優ですお断りしますっ!!　神様、ホラ早く！」
「そうね」
が、なのはは、レアスを庇う素振りさえ見せなかった。
――どんっ。
「へ……？」
それどころか、レアスを怪物の前に押し出したではないか。
『レアスちゃんンンンンンーー!!!』
「（いやぁあああああ!!）ええぇいっ!!」
レアスの左手が、掌を差し出す形を取る。その先端に、
――バチイイイイインッ!!!
『うぎゃあああっ!!!?』
「（えぇっ、いま、何が!?）それ以上の乱暴は、許さないんだからっ!!」
レアスの口が、レアスの意思に反して、なんか凛々しい言葉を吐いている。表情もなんか凛としていて、まるで、誰かに操られているような……

――――キリキリキリ……

……なのはの五指から伸ばされた糸が、目視困難な極細の繊維が、レアスの身体の各所へ接続されているではないか。

「――――奥義『水鏡漿』」

それは、かつてなのはが潜入した暗殺稼業の武術一門の秘奥義である。理屈はさておき、他人の身体を意のままに操るという、なかなかにファンタジーな技であったが、なのはは潜入から一週間ほどで奥義を取得し、奥義の使い手であった最強の拳士をボッコボコにした。

それから独自に研鑽を積み、表情や発話までも操作できるように改良した、なのはの隠し芸のひとつ。

くい、くい、と手を操るごとに、レアスが、ビシっとかっこいいポーズを取るのだ。

「余興では泣いて嫌がるヴェイロンとアルナージにソーラン節を躍らせて、みんなの笑いを取ったものだけど、まだまだ鈍ってないわね」

さすがのナチュラル暴君っぷりである。

「（こんなの聞いてない――！）させないっ!!」

「聞かれなかったもの」

「（悪徳業者かっ!!）そこをどいてくださいっ!!」

――――バコォンッ!!

無駄にかっこいいレアスのかざす手の先に、なのはの魔力によりサークルプロテクションが展開され、化け物を舞台から弾き飛ばした。弾き飛ばされた先は、おあつらえ向きに開けたステージ。ここでも何らかのイベントが開催されるのだろう。音響機器が、いつでも使える状態で点在している。

「う、うぅぅ……ひどい目にあった……」

と、崩れた壁の向こうから、セーラー服をボロボロにしたクインがヨロヨロと出てきた。なのはには気づいていない。

「えぇっと、落ち着け、落ち着け……目的を忘れるな。ティアラの赤い宝石を、このイミテーションとすり替えれば……」

懐にあるイミテーションの宝石は、どうにか破損も紛失もしていないようだ。ほっと一息。

「！　あなた良いものを持っているわね」
……ごく自然に、なのはが赤い宝石をすり取った。
「あぁっ！　何をするっ！　って、ぁあああああ!!」
変装を解除したなのはと間近にエンカウントし、クインが腰を抜かした。
「？　……あ。思い出した。あなた、カレンのトコの育成枠のガキ」
「ガキ言うなっ！　あ、いえ、言わないでください……あのう、その宝石はですね、イミテーションで、まったく金銭的な価値は無く……その……返していただけると助かるのですが……」
へこへこと平身低頭でへつらう。
「？　借りるって言ったでしょう？　用事が終わるまでは返さないわよ。あなたは何を言っているの？」
お前は何を言っているんだ。
「さ、レアス。これ持って。あなたの願いを叶えてくれる、魔法のステッキよ」
「（嫌ですよっ!!）はいっ！」
抵抗は無意味だ。愕然とするクインを尻目に、赤い宝石をレアスの手に乗せ、握る。
「……概念付与。機能限定付与。記憶転写開始……完了。よし」
ぶつぶつと何かを呟いた。
「アイツもそろそろ回復するわね」
見下ろした先、ステージの中央では、怪物が肉体再生を終えようとしていた。
「さぁレアス。あなたの願いを叶えてあげるわ」
「（頼んでない！　こんなの頼んでないー！）はいっ、頑張ります！」
レアスの身体が、舞台のヘリにまで歩いていく。眼下に広がるは地面。
「（嘘でしょ!?　嘘でしょぉおおおおおお!!!?!???!?）」
――バッ、バッ、バッ!!
いかなる作用か。ステージライトが、暗闇にレアスの姿を照らし出す!!

「あれは……レアスちゃんじゃないか！」「ええっ、逃げ遅れちゃったの!?」

それに、避難中のファンたちが気付く。

――ビュゥウウン……！

先ほどＰＶを上映したスクリーンに、今度はレアスの姿がライブ上映される。音響機器も同調。

キリっとした表情で、手に赤い宝石を持ち……！

「まさか！」「まさか！」

ファンたちが騒然とする。

「さぁ……ショータイムよ！」

なのはが、ニタリと邪悪に笑い……糸を操る手を振るう!!

とんっ……と、レアスの身体が宙に舞う！

「（いやぁああああああーーー!!）

――お願い、レイジングハート！」

『Ｓｔａｎｄｂｙ ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ ｕｐ !!』

なんかそれっぽいＢＧＭ！

「これは……！」「先行抽選販売オリジナルサウンドトラックＤｉｓｃ１収録６番！」「曲名『Ｒａｉｓｉｎｇ Ｈｅａｒｔ Ｓｅｔ Ｕｐ』だ！」

大スクリーンの中……レアスの身体が謎の光に包まれる！

「変身シーンだ！」「リアル変身シーンだ！」「生（ナマ）変身シーンだ！」

オタク大興奮である。

さて、公衆の面前で（ほぼ）素っ裸に剥かれたレアスはというと。

「（いやぁああああああこういうのはＣＧでそれっぽくやってよぉーーー！　わたしのハダカは安くないんだからぁあああああーーー！）」

凛々しくも可愛らしい変身シーンをじっくり長回しで展開しながら、心の悲鳴を上げていた。

「ほらほら、私の幼少期を演じさせてあげてるんだからもっとシャンとしなさい！　ほーらもう一回転！　わーっはっはっは!!　神の偉大さを思い知ったかガキめ！　ざまぁみろ！」

ノリノリである。そしてみみっちい。
しゅたっ……と、降り注ぐ光エフェクトとともに降り立ったレアスは、赤い宝石が変じたレイジングハートモドキを手に、怪物に対峙する。
「3D格ゲーやってる気分ね」
椅子に腰を下ろし、高見の見物をしながら糸を手繰る。完全に悪役ムーヴ。
『うううう―……レアスちゃんん……!!』
「アクセルシューター！」
レイジングハートの周囲に、魔力スフィアが展開される。もちろん、これはなのはの魔力なのだが、周囲には気付く余地も無かろう。
『ぼく以外のオトコに裸を見せるなんてええええええーーーー!!!』
気持ち悪い叫びとともに突進してくる、もはや完全に豚と化した怪物。
「(こっちに来るなぁー!!) シューーート!!!」
――ズドドドドドンッ!!!
遠隔とはいえ、なのはの攻撃魔法だ。豚は顔面にモロに喰らう。
『げ、ぶ、ぶぁあああああっ!!!』
ひょい、と闘牛士のように回避したレアスのすぐ横を、豚が転がる。
「やっぱりたまには魔力も使わないと駄目ね。命中率が下がっているわ」
大体の問題は腕力か剣技だけで解決してしまう、なのは故の弊害だった。
「ん……？　あらら、ちょっとまずいかしら」
『ぶぅうううううっ……!!　ぶ、ふ、ふふふふふ……!!　わかるよぉ……これは、レアスちゃんの照れ隠しなんだろぉおお……？　ぼくを試しているんだよねぇえええ……!?』
――ビキッ……バキバキバキッ……!!
豚の表皮が、黒く変色する。色が変わっただけではない。察するに、相当な硬度を得ている筈だ。
「(これホントになんとかなるんですか神様―!?) くっ……！　どうす

れば……！」
なのはとクインは、黒く変色した豚の怪物を見下ろし……
「「　黒豚　」」
……なに上手いこと言ったみたいな顔してんだ。
「……」「……」
ハモった二人は、照れるように顔を見合わせる。
「ふっ、」「くくっ、」
何かがツボに入ってしまったらしい。
「ふ、ふふふふふっ……！　だって、豚が黒かったら黒豚よね……！
ふ、ふふふふ」
「くくくっ……ピンクの豚が、黒豚に……！　結局、ブタじゃないか……くくく」
「し、しかも、表面がツヤツヤして、脂ぎった煮豚みたいで……ひゅふ、ふふふぅ……!!」
「ひぃーっひっひっひっひ……!!　や、やめてくださいよ……！　もう煮豚にしか見えないじゃないですか……！　うひゅひひひひっ……!!」
下らないギャグを共有し、お互いの肩をバシバシと叩きながら呼吸が乱れるほど笑っている。
そう、レアスを操っている手で、クインと。
「いやぁああ……！　って、あ、喋れるヤッター！　自由バンザイ！」
『レアスちゃあぁあああん!!』
「か、神様――！　やっぱり何とかしてよー!!」
凛々しい戦闘シーンから一転、踵を返して逃げ回る。
「あ、やっべ」「軽いっすね……」
遠距離から糸を投擲するが、レアスに到達するまでに気流に流されてしまう。
「せめて針があればなぁ……」
没収されてしまったのが痛かった。
「ま、イザとなれば私が全部切り伏せて解決してあげるわよ。そういう約束だしね」

思う存分レアスへの報復を果たし、気が済んだのだろう。
「それに、レアスに持たせたのはただの喋るビー玉じゃないわ」
渡す際、何かしらの加工を施したようだった。
「私の経験と、私の魔力と、私の技能を限定的に再現した、言わばインスタントデバイスなんだから」
サラっととんでもないことをしでかしていた。
「使いこなせるかどうかは、レアス次第よ。そこまでは知らないわ」
なのはは、レアスが曲がりなりにも自分の裁量で事態を収拾することに拘っているようにも見えた。であれば、神は手助けをするだけだ。
「ひ、ひぃいいい……!!」
『ぶひゅ、ひゅひゅひゅ……！　もう効かないよぉ……！』
レアスが苦し紛れに撃った射撃は、硬い皮膚に阻まれダメージとならない。硬化していない部分……例えば眼球や鼻腔・口腔を狙うという手もあるのだが、初戦闘のレアスにそのようなことにまで頭が回るはずもない。
『いいんだよぉ、レアスちゃん。もう、こんなくだらない映画なんて放っておこうよぉ』
その一言に、レアスの震えがピタリと止まった。
「くだらない、って、なんですか……」
『ぶひゅひひひ!!』
豚は、鼻の穴を大きくしながら醜く笑う。
『この映画は、レアスちゃん単独じゃあなくて、あのピュリスとかいうポッと出のペーペーのガキとのダブル主演じゃあないか!!　ダメなんだよぉ、それじゃあ、レアスちゃんの出番が減ってしまうじゃないかぁ！　レアスちゃんの映画なんだ！　レアスちゃん単独で主人公をして、レアスちゃんだけですべての問題を鮮やかに解決して、レアスちゃんだけが輝くように作らなきゃダメなんじゃないかぁあああああ!!』
「……あなた、わたしの何なんですか」
……レアスの声が低く、目が据わっていることに、高らかに

演説する豚は気づいていない。
『レアス・ステラちゃんファンクラブ！　会員番号１番！　ポルク・ポルクスだよぉおおおお!!』
「……わたしにオフィシャルファンクラブは存在しません。ファンとタレントの距離を一定に保つという事務所のスタンスのもと、」
『ボクが作ったんだよぉおおおおお!!　公式のグズのノロマどもは、そういった啓蒙活動がぜんぜんできていないからさぁあああああ!!』
　話を遮られるが、レアスは淡々とした口調を崩さない。
「……何の媒体からわたしを知ったのですか？」
「アニメだよぉ！　きみがＣＶをした、ナントカっていう名前のキャラクター！　よく覚えてないけど、アイドル声優まとめサイトでリアルなキミを見て以来、ぼくはキミに夢中なんだよぉ！　キミが出てるって聞いて、『宇宙の』、えぇと、ナントカっていう映画までわざわざ観に行ったんだぁああ!!」
　レアスはその作品を、嫌な意味で良く覚えていた。
　――主演女優と俳優をプッシュしたいがために作られた、予算だけが潤沢で、その予算を有名俳優・女優の出演料につぎ込み……ただ、集客だけを目的に作られたような、３０秒のコマーシャルを１２０分に延長しただけのような、低品質な映画だった。
　レアスはその作品に、それこそ、この豚がピュリスを評したように『ぽっと出のペーペー』として出演していたのだ。
「……映画の出来は、どうでしたか？」
「よく覚えてないけど　そんなの最高に決まっているじゃないか!!
だって、　レアスちゃんが出演しているんだもの!!
それ以降の作品は観ていないけど、レアスちゃんが出ているのなら、素晴らしい作品だったに決まっている！」
　……返答にもなっていない。どうだったか、の答えにもなっていない。ただ、お気に入りの演者が出演していた、というだけで、あの映画を、それ以降の作品も、タイトルさえうろ覚えの作品を、『最高』と評したのだ。
『ぼくは！　レアスちゃんの！　一番のファンなんだからぁあああ

あ!!　レアスちゃんの全てを肯定して、レアスちゃんの全てを受け入れて、レアスちゃんの全てを最高に感じるんだよぉおおおお!!　だからぁ!!』

ぐい、と、レアスの細い体を、豚の巨腕が掴み上げる。

『レアスちゃんは、一番のファンであるぼくが！　望むように！　気持ちがいいように！

望むままに！　演じなきゃいけないんだよぉおおおおおおおおお!!

――レアスちゃんは、ぼくの！　ぼくだけの！　お人形さんなんだぁあああああ!!』

「ふ、」

ぐり、と、レイジングハートの先端が、豚の頭部に接触する。

「ざ、」

レアスの意思が、アーカイブから術式を選択する。

「け、」

不足分の魔力はレイジングハートに宿された神の魔力を借用。

「る、」

ばちばち……と魔力がドライブし。そして。

「――なぁアアアアアアアアアーーーーーーーーっ!!!!!!」

『Ｐｅｎｅｔｒａｔｅ　ｉｍｐａｃｔ　!!』

――ズバァアアアアアアンッ!!!

『ブごぉおおおおおおおおおーーーーっ!!!!?!!!?!??』

頭部に叩き込まれた浸透衝撃波に、不意を突かれて手を放す。

「なにが……何が、一番のファン、だぁあああああああーーーーーーーーっ!!!」

ガシャコン、とレイジングハートが変形する。

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　!!』

――キュドォオオオオンッ!!!

『ブぁあああああああーーーーーっ!!!』

面制圧である砲撃は、いかに皮膚が硬かろうともダメージを押し徹す。

「ファンっていうのはねぇ!!」
ガシッ、と、豚の口をレイジングハートをバールのように使用しこじ開け、口腔を露出させる。それ以上の駄弁をまき散らさないように。
「わたしのことを、それとなく頭に留めていてくれて！」
――ドスッ!!
「出演作をたまーにでも見てくれて！」
口腔内への攻撃。二度、三度、四度……！
『ぷぎぃいいいいいいーー!!』
「良いところは良いと、悪いところは悪いと、観たまま素直に批評してくれる人たち全般を指す言葉だッ!!」
這う這うの体で逃げ出す豚に、もはや反抗する気力は残されていないようにも見える。
「観てもいない作品を！　そこに情熱を傾けるクリエイターたちの！
キャストの！　何も理解せず！　ただお気に入りのアイドルが出るからという特定情報だけで全肯定するようなヤツを、わたしはファンだとは思わないわっ!!!」
「そうだ!!」
レアスの魂の叫びに、ファンたちが呼応する。
「さっきから何だお前は!!」「レアスちゃんにひどいことをして！」「みんなが楽しみにしていたイベントをぶち壊して!!」「ほかの演者をバカにして!!」
「「「「「お前は何様のつもりだ!!」」」」」
豚男は、怖気づき、負け惜しみのような悪態をつく。
『なんだよぉ!!　お前ら、ぼくをバカにするなよぉ!!　ボクは、一般人どもが理解できないレベルで、レアスちゃんを理解しているんだ!!
レアスちゃんのことを高いレベルで捉えているから、だから、ぼくは、ぼくは、おまえたちよりよっぽど優れているんだ！　ぼくは優れた人間なんだぁあああああ!!!』
語るに落ちるとは正にこのことか。
結局、この豚は、レアスのことなど見てはいなかったのだ。『レアス

のファンである自分』という身勝手なアイデンティティに縋りつくだけの、どうしようもない愚か者だったのだ。
『おまえたちなんかぁ、消えちゃえよぉおおおおおおーーー!!!!』
幼稚な駄々っ子そのままに、豚の口腔に、暗黒の魔力がチャージされていく。標的は、集ったファンたち。
「――させるかぁあああああっ！」『Ｉｍｐａｃｔ!!』
――ドパァアアアンッ!!
衝撃波が、豚の顔面をカチ上げる！
『ぶごぉおおおおおおおーーーーーっ!!!!』
見当はずれの方角へ飛んでいく魔力砲。
『ア、ア、アァァ……』
ぷすぷすと口から黒煙を上げ、膝を突く。
「ねぇほら、煮豚が焼き豚になったわ」「ぶフぉっ……！」
……いまけっこう真面目な場面だからね？
完全に戦意を喪失した豚男。だが……
「わたしは、おまえのお人形になんか、ならないっ!!」
――ガキィインッ！　ガキィイインッ!!
……その四肢に、拘束魔法が掛けられる。レアスは……飛行魔法を行使し、上空へと飛翔していた。レイジングハートを腰溜めに構え、術式をロードしていく。嫌な予感しかしない。
「わたしは、大女優になるっ!!」
そして変化するＢＧＭ。出だしからして荘厳な、威圧感と迫力を絶妙にミックスした、その楽曲は。
「これはっ!!」「知っているのかライデン!?」「うむ！　まさしくこれは先行（ｒｙ　Ｄｉｓｃ２収録９番！『星の輝き』に他ならぬっ！」
――ギュイィイイイイイイインッ……!!!!
レイジングハートの先端に、アホみたいに巨大な魔力スフィアが形成される。周辺魔力ではなく、レイジングハートもどきに宿された魔力を使用した簡易版ではあるが、それは正しく、砲撃魔導師時代の、なのはの最終兵器。
「次元世界を股にかける大女優にッ！　歴史に名を刻む大・大・大女優

に！」
『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒａｋｅｒ　!!』
ぎゅおんぎゅおんぎゅおん、と制御リングが大回転を始める！
「大・大・大・大・大女優に、なるんだからぁあああああああーーーーー!!」
――――ゴ バァァァ

げ出る。
――ぽむっ。
……魔力切れだ。レアスに施されていた魔法が解ける。
「……」
仁王立ちを崩さないレアスのもとに、なのは、クインがやってくる。
ぱちぱち、となのはは拍手をしていた。
「いい啖呵だったわよ。感動的だったわ」
くひひひひ、と歯を見せて笑いながら、レアスの頭をぽんぽん、と叩く。
「もうスクリーンとの同期も切ったわ」
「あ」
かたかた、と、レアスの膝が今更ながら震えだす。怒りと興奮が醒めたのだ。残るのは、恐怖と不安の残滓。
「あ、あ、あ、あ、あ……あぁあああああー！　うわぁあああああーーーん!!　うわぁあああああーーーん!!」
不安と恐怖から解放され、年相応の子供のように泣きじゃくるレアス。その手が、何か縋るものを探すように、なのはの方へ伸びる。
まぁ、なのはも何だかんだでお人よし。不安がるレアスをギュっと抱きしめて一件落着、
――どんっ。
……
「……え」
信じられない、といった顔で、なのはの顔を見上げる。
「えぇ……」
クインも似たような顔をしていた。
なのはが、縋りつくレアスを……突き飛ばしたのだ。
「――――ふっ。」
……なのはちゃん、小学生を相手に、本気で勝ち誇った顔をしている……
「泣いた方が負けなのよ。だからアンタの負け、私の勝ちだっ！　わはははは！」

……小学生を相手に、本気で張り合っている……

「ひ、ひどいいいい……！　ひどいよぉおお……!!」

「き、気にすんなよ。なっ」

今度ばかりは演技抜きで泣くレアス、思わずフォローに入ってしまうクインを尻目に、なのはが勝利の美酒に酔いしれる。

「ふふふふふ……！　ふはははは！　はぁーっはっはっは！　勝った！　リア充に勝ったわ！　ずっと、ずーっと負けてきた私が、初めて勝った！」

……リア充へのひん曲がった感情が、大爆発していた。

「そうよ……！　私はやればできる！　私たち日陰者だって、やればできるのよっ!!

――いぇーい信徒見てるぅー!!?

そんなの見ている筈が……

――かみー!!

――神様――！

――救世主（メシア）さまー！

――お姉さま、輝いてますわぁー!!

――エルスちゃん、いきなりどうしたの図書室の窓から身を乗り出して！

――さてはなのはちゃんがまた何かやりましたね

――なのはちゃーん、帰ってきたら事情聴取（おはなし）だからねー

……割と届いていた。

「ハルカちゃんのおはなしなんて、こ、怖くないわよ……ふんだ」

……若干声を震わせながら、落ちていたティアラを指先でつまみ上げる。

「ほら、これが目当てだったんでしょ」

クインに放る。クインは何も疑わず、それを両手で受け止め……

――べちょっ

「うげっ……なんだコレ……」

「豚の油」

そりゃあ、あの怪物の体内に取り込まれていたのだから当然と言え

ば当然だ。
「ぎゃあ!!」
思い切り素手で掴んでしまった。
「レアス。そのビー玉返しなさい」
あとは、イミテーションとすり替えて終わり。イミテーションである赤いビー玉は、既にインスタントデバイスとしての機能を失い、レアスの手の中にある。
「……やだ」
「あ〝？」
やめい。
「返さない！　意地悪な神様には、返してあげないんだからっ！」
子供っぽい意地の張り方をしている。
「ふぅ～……わかった。もう返せとは言わないわ」
なのはは、大きく息を吐き……
「――腕ごと置いていきなさい」
……なぜこうも悪役ムーヴが似合ってしまうのだろう。
「所有者のあたし差し置いてナニやってんですか」
と、クインがベチョベチョのティアラを手にし、混ざってきた。
「よい、しょっと」
べきゃ、と、中央のルビーが台座ごとネジ切られる。
「こんな騒ぎになっちゃあ、もう宝石の一個や二個無くなったくらいでは騒ぎにはなりませんから。これで任務完了です」
隠蔽の意味がなくなってしまったのだ。破損していても、騒ぎのドサクサでうやむやになると期待できる。
しかし……台座がモゲるわ油で汚れるわ、レアスに授与されるには汚れすぎてしまった。
「直せばいいじゃん」
と、誰かの腕が、ティアラを横から引き上げる。
「あ、秀人さんっ！」
遅ればせながら、旦那の登場だ。
なのはが、剣呑な空気をパッと引っ込めて童女のように無邪気に笑

う。
「無機物の修復ならお手の物だ。任せろ」
――ぼう……
ティアラに蒼炎が灯り、歪んだ形状や汚染がたちまち消えてゆく。もげた台座の部分も丁寧に治金され、まるで初めからその形状であったかの様子。
「それにしても……」
秀人が、会場や、ステージなどの破壊痕をぐるりと見まわし……その場にウ○コ座りする。
「……やーっぱりこうなったか」
だから、無理にでも一緒に行動しようとしていたのに。
「……イベント、もうリカバリーは無理だなぁ……」
ぽそっ……と、レアスが小さく呟く。
秀人は、そんなレアスの前に屈み、目線を合わせる。
「んなことねーって。ほら」
ほら、と指さされた先を見る。すると、そこには……
「おーい、これどっち運ぶー？」「とりあえず、中央の通りだけ優先的に片づけて、動線を確保しましょう。大き目のガレキは脇の道に」「んで、除けられたガレキは種類ごとに更に分ける、と」「あとはバケツリレーの要領で、横へ横へ運んでいこう」
イベントがぶち壊しになったにもかかわらず、参加者たちがめいめいに動いている姿だった。
「なんで」
もう会場も滅茶苦茶で、再開の可能性は絶望的だというのに。
「ファンだからだろ」
レアスの。ピュリスの。ほかキャスト陣の。監督の。脚本家の。
『好き』は、理屈じゃないんだよ」
んじゃ俺も手伝って来るわ。そう言い残し、秀人は何食わぬ顔で片付けへ向かう。
「レアス」
と、なのはに呼ばれる。

「この状況で、あなたに出来ることは、なに？」
「わたしに、できること……」
悲嘆に暮れていた頭が、少しずつ動き始める。イベントは確かに、予定から外れてしまったのかもしれない。設備の即時復旧は難しいだろう。イベント取材に来たはずのメディアも、いまは騒動を記事にすることで忙しい。式典用に用意した豪奢な衣装は土埃で汚れてしまっている。
だけど。
「おっも……誰かそっち持ってー」「いいぞー」「さんきゅー……って、神じゃん!?」「え!?　うわマジだ！」「はいはい、今は片付け優先！」「は、はい」「超特急で片付けるぞー！」「「「「「オォー！」」」」」
これだけ多くの人が、まだ、居てくれているのだ。
「レアスさん！　大丈夫でしたか!?」
避難していたピュリスが、戻ってくる。
「ピュリスちゃん。ほかのみんなは？」「えっと、まだ会場のあちこちに、それぞれ避難しています。レアスさんだけ見当たらなかったので、あの、わたし、勝手に抜け出してきて」
言葉を中断させるように、がしっ、と、ピュリスの両肩を掴む。
「やるわよ、フェイトちゃん」
「……え？」

――数十分後。
「つだぁー!!　とりあえず片付いたぁー！」「おつかれー！」「かんぱーい！」
障害物の撤去がひと段落ついたころ。横倒しになった自販機から購入したジュースで乾杯する一同。さて、残るか、解散するか……という考えの浮かぶタイミングで。
――♪。
「ん？」「音楽？」
生きている音響機器から、澄んだ音色が流れ始める。

「行ってみようぜ」
誰ともなく言い出し、片付けたばかりの通路を歩いていく。この先にあるのは、先ほどの騒動の現場となった野外ステージだ。
ステージ上の明かりは、半分以上が破損しており、日も暮れているということで薄ぼんやりとした光が灯るのみ。それも、均一にステージを照らすのではなく、半分だけがライトに照らされていて、もう半分は暗闇。
その、心もとない光の下に……
「あれ、レアスちゃん……」
口にしたファンはしかし、口を噤んだ。レアスが、ステージの上に居るのだ。
『――――伝えたいことが、あるんだ』
マイクを通して……レアスのものであって、レアスのものではない声が会場に響く。
レアスの装いは、豪奢なドレスではなく、スカートにシャツというラフなもの。しかし、その衣装の意味は伝わった。
「あれ、ＰＶにあった劇中の普段着だ」「……ってことは、これは」
ステージの上で、暗闇の中から現れたのは……
『――――母さんを、助けてあげなきゃ』
同じく、劇中衣装に身を包み、フェイトへ扮したピュリスだ。入れ替わるように、レアスは暗闇の中へ。
二人は、ぼんやりとしたスポットライトと、暗闇という、たった二つの舞台装置を用いて……芝居を行っているのだ。
「すげぇ……」
感嘆の息を上げる。
これが、リハーサル無しのぶっつけ本番、即興劇だと誰が気付こうか。
暗闇と日溜まりを、レアスとピュリス……否、『なのはとフェイト』が、入れ代わり立ち代わり、それぞれの胸の内に秘める言葉を吐露していく。
観客は、たった十分ほどの、二人の女優の演技に引き込まれていく。

（秀人さん）（……何だ？）
なのはは、秀人の手を取り、接触回線で念話を行う。
（レアスに言ったこと、ウソがあるんだ）
（どんな？）
（あのビー玉、私の技能と魔力を一時的に付与した、っていうの。ぜーんぶ、ウソ。それっぽく念じるフリをして、ビー玉を渡しただけ）
はじめの数回の魔法の行使は、なのはが行っていたこと。チュートリアルのようなつもりだった。
……では、アレは何だったのだろうか。公式プロフィールによれば、今回の映画のために集められたキャスト陣の中で、魔法戦闘に耐えうるだけの魔力量を持った人物は、いないのだという。主役を張るレアスも、それは例外ではない。魔法素養ほぼ無しの女優が、才能あふれる魔導師の少女を演じる……という話題性もあった。
しかし、レアスはまごうこと無き魔法を行使した。それも、なのはの魔力光を発する。
（あの子が使った魔法の殆どは、『劇中で使われていた魔法』。衝撃波は、秀人さんの代名詞だからメジャーに知られている。最小限の護身は私が操ったものだけれど……それ以外は、ぜんぶあの子が自分でやったこと）
つまり。
（――あの子の演技力は、世界を騙したのよ）
なのはは、見込み有る若者を語るとき、とてもうれしそうに笑う。
（本当に、成っちゃうかもね。『大大大大女優』ってやつに）
今、その笑顔で、ステージを観ていた。
『私は、あなたと――――』
『それでも、私は――――』
二人の即興劇は、終盤に差し掛かる。物語の核心に触れる言葉は使わず、思わせるような言葉で、最大限の表現を行う。そして、
――――暗転。
ステージの照明は完全に消え、二人の姿は見えなくなる。
観客たちの余韻が消える、その完璧なタイミングで……

――――パパパッ
照明が灯る。
これは奇跡ではない。演技中、ふたりが時間を持たせていたわずかな時間で、プロの機材スタッフたちは照明機器を復活させたのだ。
黒子のように煤だらけになった顔たちが、互いにガッツポーズをしていることに、観客は気付かない。
照明に照らされたステージ上で、手を繋いだ二人が、深々と観客へお辞儀をする。
――ぱち……
――ぱちぱち……!!
――わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!
大歓声が、上がった。
『――以上！　レアス・ステラ初主演作『魔法少女リリカルなのはＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　１ＳＴ』プロモーション、試写会限定バージョンをお届けしました！』
『つたない演技をご覧いただき、あ、ありがとうございましたっ！』
『えー、ぜんぜん拙くなかったよフェイトちゃん』
『も、もう、なのはったら……!!』
『それじゃあみんなに聞いてみよう。……拙くなかったよねー!?』
――――ぜんぜーん!!
『ほら、全然って言ってるよ？』
『あ、ありがとうございますっ！　うれしいですっ！』
演技なのか、演技でないのか……あいまいな状態で観客を翻弄しつつ、会場は和やかな雰囲気に包まれていた。
「それにしても、アレが私をモデルにしているとは到底思えない……」
「再現したら発禁になっちゃうだろ」
……否定できる材料が無かった。
「うむ、『俺』がどうなっているか、不安でもあるが滅茶苦茶楽しみだな！」
あの演技力。ほかスタッフも有能ぞろいのようだ。我らが主人公・我妻秀人がいかに八面六臂の大活躍をしたか、とくと再現してもらお

うではないか。
「――――最初に言っておく。出番はない」
突然、秀人の背後へ位置取っていた地味な男性が、そう断言する。
「うわビックリした!? 誰だオッサン!?」
「脚本担当です」
「いやそうじゃなくて」
男性は、秀人を真っ直ぐに見つめ、断言する。
「重ねて言おう、神よ。……この映画に……
――――吾妻秀人なる人物は登場しない!!」
「な」
秀人が、一歩後ずさる。
「なん、だと……!?」
戦慄の主人公。
「俺となのはの出会いは!?」
「無い」
「ユーノとの出会いは!?」
「高町なのは単独の出番」
「フェイトとは!?」
「二人だけの対峙」
「ジュエルシード暴走体を鎮圧するシーンは!?」
「少女の圧倒的な砲撃で爽快ワンパン」
「庭園突入のバイクシーンは!?」
「アースラからの転送に変更」
「プレシアは!?」
「死ぬ」
「プレシアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーー!!!

「それがどうした。要らんと判断した要素を排し、物語の純度を上げただけのこと」
「純度ぉ……？」
脚本家は、しかし、逆に秀人に向かい、叫ぶ。
「少女たちの尊い友情ストォリィになぁ……
――――男（オトコ）なんて要らねぇんだよォおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおーーーーーーーーッッ!!」
「ぐわぁああああ過去に何があったか知らんが何て圧だ!?」
魂の叫びが、圧倒的オーラが、秀人を弾き飛ばした。
「――――物語と歴史の整合性さえ超越する……わたしこそ神（脚本家）だぁーーーーー!!!」
「これが、ヒトの持つ業だというのか……!!」

騒動が解決しつつある中で。
（よし……今のうちに帰ろう……アレと関わるとロクなことが無いことが、今回の一件でよくわかった）
抜き足差し足忍び足で、クインが宝石片手にスタコラサッサと会場を離れようとしていた。賢明な判断である。
「？　あなたどこへ行く気？」
……達成できたなら、であるが。
「ひィっ！　いつの間に!?」
「背中にも目を生やせって教わらなかったの？　……あいつ、さては指導の手ぇ抜いてるわね」
まったくいい加減な……と、ブツクサ言うなのは。
「は、放してください！　あたしには、コレをカレン姉に届けるというミッションが……！」
「宅急便で送ればいいのよ、そんなもん。あて先はいつものダミー住所に符丁を追記しておけば、工作員が勝手に届けてくれるわ」
「大事なもんを宅急便で送る任務があるかぁー!!」
「フツーよフツー。手渡ししろとは言われてないでしょ。結果として

届けばいいのよ」
「屁理屈だ！」
「でもカレンなら？」
「言うと思う！」
　では、なのはがクインを捕獲した理由とは。
「おまえは弟子への土産にするわ」
「み、みやげ……？」
「腕前の近いやつと戦うことが、上達への近道だからねぇ」
　――――一部の野生動物は、死なない程度に弱らせた獲物を持ち帰り、我が子に与えるのだ。食事と、狩りの練習という目的がある……と言われている。
　ぶちり、と、クインの胸元に装着されていた、ブローチ型通信機を引きちぎる。ぽちぽちと仮想キーを慣れた手つきでタッチする。
「あ、カレン？　もしもーし」
『んー？　あれ、なのはじゃん。どしたのー？』
「コレ貸して」
『あぁ、クイン？　いいけど、四体……いや、三体満足くらいで返してよ？』
「義手義足で生活できる程度には収めておくわ」
　……敵のボスと気軽に世間話をする女、なのは。
「帰らせて……おうちに帰らせてください……ぐすっ、ぐすっ……カートぉ……あたし先に逝くよぉ……」
　死を覚悟したクインは、されるがままだ。
「さて、それじゃあ帰りましょう秀人さん、クイン」
「俺、何しに来たんだ……？　っていうかこの子ダレ……？」「しくしく……」
「仕方ないわよ」
　さきほど、公式から正式に試写会中止の連絡が届いた。さすがに、半壊した建屋で、大人数を収容するのはリスクが高すぎる。チケットの払い戻しと同時、前売り券の配布が行われている。
「あ、居た!!」

前売り券を受け取らずにさっさと帰ろうとしているなのはを、先ほどまで前売り券の手渡し配布をしていたレアスが呼び止める。
「なに帰ろうとしているんですか！」
「配布が終わったら、帰宅者でターミナルがごった返すでしょう？だから先んじて行動しているのよ」
「だからって、一言くらい掛けてから帰るものでしょう！」
「嫌よ。私、あんたのこと嫌いだもの」
なんて大人げの無い……
「未来の大女優とコネ作っておこうとか、思わないんですか!?」
「お・も・い・ま・せ・ん。あんたよりウチの娘の方が一億倍可愛いわよ」
「むぅぅぅぅ……！」
レアスは、ポケットから紙束を取り出す。そして、それをなのはの身体にグイ、と押し付ける。
「はい、これ！」
「何よこれ」
……なのは、押し付けられるだけで受け取ろうともしない。
「何って、映画のチケットですよ！　神様……なのはさんはお友達がとーっても少なそうですから、これで十分足りるでしょう！」
押し付けられたチケットは、１０枚はありそうだ。
「ふぅん……末端価格いくらかしら」「売るなぁ！」
そう言いつつも、レアスは、チケットをなのはのポケットへグイグイとねじ込んだ。
「ぜったい、ぜーったい、観てくださいね！　感想聞きますから、メアドください！」
「めあど」
なのはは、異世界の言語を耳にするような口調でオウム返しにした。
事変の後、マリエルが全世界に無料で公開したＯＳを搭載した情報端末は、言語は違えどデータの交換が可能である。これにより、民間レベルでの交流を目指したものではあるのだが……

「……連絡先交換ってどうやるんだっけ」
……そもそも連絡先交換をする習慣が無いマイノリティ（日陰者）には、何の違いも無いのである。
「はい」
と、なのははおもむろに端末をレアスに差し出す。
「やって」
「……よく躊躇なくできますね、そういうコト」
レアスはドン引きしながらも、なのはの端末と、自身の端末を接触させ、連絡先を交換することに成功した。利用されるリスクを考えなかったのか、というと、それは違う。
「私の連絡先が漏洩したら、あんたの連絡先と泣きべそ顔を三千世界のネットワークにバラ撒くわよ」
「この神（ヒト）ならマジでやりかねない……!!　って、しませんよ、そんなこと！　はい、出来ました！」
突き返された端末を、ぽちぽちと。
「じゃ、ブラックリストに」「入れるなぁ!!　それと!!　……それと。
――――――助けてくれてありがとう、なのはさん!!」
顔を真っ赤にしてそう言い、ぴゅうっ、と配布会場へダッシュで戻っていった。
「あんたが勝手に助かっただけ……って、もう聞こえないか」
「あたしのことも助けてくれませんか……？」「それはダメ」
さめざめと泣くクイン、どこか上機嫌ななのは、納得できていなさそうな秀人の三人は、何点かの土産を手に、海鳴市への帰路に着くのだった。

◆・◆　◆　◆

「……よし」
吾妻ヴィヴィオは、自宅リビングにて、何らかの用紙に手書きで記入をしていた。
――――クラス交流戦協定。

ルールに則った戦争を行うための、事前の取り決めだ。ざっくりと、殺害行為、殺害につながる行為を禁止する、といった簡単な内容だ。
まぁ裏を返せば暗黒魔法も戦略魔法も賄賂もスパイも何でもあり、ということなのだが。
そのクラス代表者欄に、ヴィヴィオは日本語でガッチリと署名をし、円筒状ケースに入れ、厳重に封をした。
「ママー、書けたー！」
「はぁい」
書斎から出てきた四葉は、二通の手紙をテーブルに広げた。電子データの交換に制限がある四葉にとって、ほぼ唯一、安定した情報源である手紙である。
「一通は、お姉ちゃんからです。はい、読んでみて」
日本語とミッド語、そしてベルカ語を並列で学ぶヴィヴィオにとっては、軽いお勉強の時間だ。
「えっと……『交流戦、お父さんと一緒に、必ず観に行きます。楽しみにしています』、だって！」
「お姉ちゃんは手紙でも口下手ねぇ……はい、もう一通」
出し方から察するに、おそらく、こちらの手紙が本命だろう。
「未来創生機関・先進技術開発局……!!」
……大仰な組織名だが、連なっている名前を見ればお察しのことだろう。
――局長・ジェイル・スカリエッティ
「ママ、これって！」
「ええ」
目を輝かせるヴィヴィオに、四葉が愛おしそうに頷く。
「――――ヴィヴィオの専用デバイスが、完成したわ」
新世代を担う若者たちの間で、波乱が巻き起ころうとしていた。

# ｖｉｖｉｄ編　１９話『　暴力は世界を救う　』

――暴力は最高よ。何でも解決してくれるんだから

◆▪◆　◆　◆

「はぁ、はぁ……も、もう、限界ですぅ……!!」

「甘ったれてんじゃないわよ。ほら、ぐい、ぐいっと奥の奥まで」

「あぁっ……!!　無理……！　それ以上は無理ぃ……！」

「痛いのは最初だけ……慣れれば気持ちよくなるわよ。そう、彌茅だって、ね……」

「！　あんな小さい子に、……外道……!!」

「くっくっく……さぁ、受け入れよ……！」

「あ、あ、アァーッ!!」

……拉致ってきたクインの身体をグイグイと乱暴にストレッチするなのはの姿があった。

「師匠（せんせい）。わたし、そんなに硬くありませんでしたよ」

「そうね。で、あなたは瞬発力はあるんだけれど、持久力が無いのが欠点ね」

――ベキッ、ゴキッ！

「ひぎィー!!　痛いよぉ……!!」

「なーに言ってんのよ。私が居た頃の部隊なんて、入隊初日に靭帯損傷有りきの鬼畜股裂きだったのよ？　まったく、カレンに代替わりした途端、コレだもんねぇ……最近の凶鳥部隊は甘っちょろいのよ」

……母校の部活に口出しする系ＯＧ、なのはであった。

「……アハハ、アハハ……のしイカのポーズ……アハハ……」

「お湯に入れたら戻るのかしらね？　ホラ休んでる暇なんて無いわよ」

デレーンと弛緩したクインに、優しさのカケラもない治癒魔法をジャブジャブとぶっかけ、人為的に超回復を促す。戦闘にさしたる魔力を使用しないなのはにとって、ここぞとばかりに魔力の有効活用である。

木刀を持ったクインと彌茅が向き合う。彌茅は腰に、クインは上段に剣を構える。立会い式の稽古だ。
「じゃ、はじめ」
雑に下される指示。が、両者ともにすぐには動かない。彌茅の居合速度は、状況によってはなのはに迫る。対してクインは、速度こそ劣るが、一撃の重さでは上回っており、手数で勝負するタイプ。序盤は膠着するのが常だ。
ジリ、ジリ、と摺り足で間合いを微妙に詰める二人。その制空権が触れた瞬間……
――――がぎぃんっ!!
彌茅の居合が炸裂する。
「つぎ……!!」
クインの防御、今回は間に合った。前回の立会いでは、肋骨を雑に粉砕されていたのだが。なお前々回の立会いでは、彌茅は手首を砕かれていた。
『――私、あなたたちを絶対に死なせ(逃がさ)ないわ。地獄の閻魔と戦ってでも、あなたたちを現世に繋ぎとめてみせる……!!』
……優しい言葉のはずなのに、なぜこうも恐ろしい意味を含めるのだろうか。弟子一号、暫定二号は、そのマッドな発言に戦々恐々としていた。サボり癖のあるクインなどは、意図的に負けることでラクをしようとしてたのだが、当然の如くバレた。
『あら……あらあら……駄目よ。駄目じゃないの。死なないための訓練で手を抜くなんて、さてはあなた、死を舐めているわね？　わかったわ。死がどういうものなのか、まずはそれを魂に刻み込んであげなきゃ、ダメみたいね。死と蘇生を同時にプレゼントしてあげるわ。私もそうやってきたのよ。さぁ死ね。そして生き返れ』
結果、『全身を強く打つ』という隠語を体感するかの如く、なのはにボコられるという地獄の刑罰を受けて以来、『なのはに殺されるくらいなら骨折程度で済むほうがまだマシ』という新しい気持ちで、稽古に臨むクインなのであった。
「――!!」

――ビシュッ!!
脛打ち。これは立会いの体を取っているだけの稽古だ。反則など無い。暗殺者としての適性を持つ彌茅は、ときに剣を捨て、クインの首を絞め落としに掛かることもある。クインはクインで、投石や砂などのダーティファイトも辞さない。
――ガキンっ！
脛撃ちの剣を踏みつけ、クインが彌茅の頭へ木刀を振り下ろす。
「……！」
剣から手を放し、身体を反らせて回避。見逃さず、巻き上げの一撃を見舞う。
――ガツンッ！
今度は彌茅が踏みつける。小柄な体が巻き上げの勢いのまま宙を飛び、クインの背後にヒラリと舞う。
「うぅっ……!!」
首筋に走る寒気。クインは後ろ蹴りで引き離しに掛かるが、苦し紛れだ。彌茅はクインの足首を両手で掴み……
――ぐギリっ……！
……完全脱臼。靭帯損傷。更に逆側へネジリ曲げる。
「ッッ!! ぎゃぁあー!!」
神経の集中する箇所を徹底的に破壊され、クインが悲鳴を上げる。完全に体勢の崩れたクインの首筋へ、回収した木刀で斬撃を見舞う彌茅。
「――勝負あり」
……その手をなのはが掴み、勝敗は決した。
「ひっく、ひっく……痛いよぉ～……!!」
「痛いだけで済むんだから有難く思いなさい。痛いと思う間もなく死ぬことだってあるのよ」
クインの足に高度な治癒魔法をかけるなのは。繰り返し、恵まれた魔力量から鬼のような用途である。
「さて」
その傍ら、立会いの講評に入る。

「まずクイン。脛撃ちへの反応が遅い。肩の動きで斬撃の軌道を予測しなさいと言っているでしょう。剣への踏みつけも弱い。木刀だから止まったけど、真剣だったら振り抜かれていたわ。打ち下ろしから巻き上げへの切り替えしが遅い。だから乗られるのよ。そしてこれが最大の悪手だけれど、背後への蹴り、あれがダメ。狙ったわけでもなく、闇雲に足を伸ばしただけ。恰好のカモよ。切り落とされても仕方ないわ。背後を取られた恐怖から動揺したのね。恐怖はセンサーになるんだから、動揺するんじゃなくて、走馬灯から対処法を割り出して身体に反映させなさい。

次に彌茅。間合いに入ってから抜くまでの動作が遅い。制空権が触れた瞬間には抜きなさい。脛撃ちが遅い。剣を踏まれるなんて剣士として屈辱の極みと思いなさい。跳躍するタイミングが悪い。巻き上げの勢いを利用するんじゃなくて、足場に触れた瞬間に跳びなさい。絞め落としに入るまでが遅い。着地が悪かったからよ。部位破壊が甘い。下手したら不発よ。壊すと決めたならキッチリ壊しなさい」

勝敗問わずケチョンケチョンに酷評する。勝った方も負けた方も、ショボーンと凹む。

「まぁ、でも」

と、なのはがうっすらと笑みを浮かべる。

「クイン。初撃への対応、良く間に合わせたわね。肋骨砕かれた反省が活きたのね。背後への対応も、反応もできずに絞め落されていた時とは段違いに良かったわ。

彌茅。脛打ちを攻略されてから一連の流れは良かったわ。絞め落としから部位破壊への変換も臨機応変で。トドメへの流れも良かったわ。教えた通り、ちゃんと首を狙っていたわね」

……9割ダメ出しをして、1割を褒める。熟練のDVクソ男のような、なのは式の弟子教育法により、二人の弟子はすっかり機嫌を良くしていた。

「クインさん。わたしの勝ちですね」

「ぐぬぬ……まぁ、そうだな……」

「ということで、買い出しはお任せします。今夜はわたしの好物である鮭です」
「あぁ、肉がよかったなぁ……」
『弟子部屋』と名付けた吾妻家の隣室で、二人は結構仲良くやっているようだ。
そうこうしている内に、治癒魔法も完了した。
「はい終わり。調子はどう？」
「……怖いくらい元通りです」
「そう」
相変わらず素っ気ない。
「秀人さんはカントクさんの会社にバイトに行ってるし、ヴィヴィオのトコ行く準備もだいたい終わっちゃったなぁ……慈樹もいまはお昼寝タイムだし」
端的に言えば、暇だった。屋外のベンチに腰掛け、思案する。
「……」
弟子二人を、見やる。よくもまぁ、着いてくるものだと。実は、クインなど、逃げようとも追う気は無いというのに。彌茅も拒否が有れば、平凡な生活へ切り替えてやることもできるというのに。
「木刀じゃなかったら、クインさんの足首は無くなってました！」「へへーんだ！　それこそミカヤだって手首なくしてたもんねー！　今んとこあたしの勝ち越しだもんねー!!」「違いますぅー!!　まだ五分五分ですぅー!!　わたしのほうが強いですぅー!!」「おー!?　やるかー!?」「やってやりますよー!!」
……。
――ズバっと。
「――!?」「うぎゃっ!?」
なのはが不意打ちで飛ばした殺気の刃。どちらも頸部を削ぐ軌道で放ったそれら。クインはまたも直撃し、地に転がるが……
「……あら、まぁ」
――彌茅は、回避した。
木刀で、刃の軌道を逸らしてみせた。まぁ、なのはであれば、木刀

であろうと真剣であろうとも、諸共に両断していたであろうが……それでも、彌茅は反応してみせたのである。
「……あらあら、まぁまぁ」
なのははベンチから立ち上がり、目をパチクリとさせたまま硬直している彌茅のもとへ歩いていく。
「師匠、わたし今……!!」
「あらあらまぁまぁ」
ようやく、快挙を自覚し笑う彌茅を、なのはが抱き上げた。そのままくるくると回る。
「うん……うんうんうん……よーしよしよし。よっしゃしょっしゃ。わっしょいわっしょい」
「わぁ、わぁあああ」
喜びだか驚きだか、イマイチ判別のつかない悲鳴を上げ、されるがままになっている。
「ぐぇっ……」
踏みつけられるクイン。ひとしきり回転すると、なのはは彌茅を降ろし、背を向ける。
「……ふー。さて、彌茅には褒美を取らせます。何を望みますか」
「はいっ！　映画を見たいです!!」
即答である。
「これっ！　これを観たいです!!」
そして、懐からズバッと取り出したのは、Ａ４サイズのチラシ。
「――!!　そ、それはっ……!!」
なのはが慄く。
――『魔法少女リリカルなのはＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　１ＳＴ』
（あのクソガキに無理やり握らされたチケットやらの一部ッ……!!
不覚ッ……！　焼き芋の焚き付けにしてやるつもりがッ……!!）
ひどい。
「……駄目、でしょうか……師匠……」
「くぅっ……!!」
が、褒美を取らせると言った手前、ダメとは言いづらい……という

か、他人行儀ではあるが、我が子も同然に思い入れている弟子の願いだ。何かしらのきっかけがあれば、結局は願いを聞いてやっただろう。

「……良いでしょう。少し待っていなさい」

長考の末、なのはは苦悶したように言葉を絞り出した。

自宅へ戻り、押し入れに封印していたチケットを取り出す。

「幸いにも海鳴市の映画館で上映されています。明日は休暇とします。楽しんできなさい」

「えっと、その……」

と、彌茅はもじもじ、と言いづらそうにする。

「あの、師匠とクインさんも、一緒に、と思いまして……」

「……マジか」

……観に行けと？　自分が主人公の、タイトルにおもっくそ自分の名前が入っちゃってる系の映画に？

「まぁチケットは焼くほどありますが……」

焼くな。

「駄目ですか……？」

「うぅっ……純粋無垢な眼差しっ……！　……よし分かった。行きましょう」

決断は早かった。慈樹は留守番だ。慈樹の専任シッターを自認する奈々に任せておけば、まぁ大丈夫だろう。

「わぁい。えいがっ、えいがっ」

嬉しそうに跳ねる彌茅に、思わず破顔する。「あすの準備をしてきますっ！」と自室へ走っていった彌茅を座って見送る。

「まったく、明日だと言ったでしょうに……ねぇクイン？」

「オコシテ……オコシテ……」

……椅子にされたクインが呻いた。

◆▪◆　◆　◆

――やっと見つけました。

わたしは、Ａ４の大学ノートと、目の前の集合住宅の外観を見比べ

ます。『いんたぁねっと』から印刷した外観と、目の前の建物はピタリと一致します。

――問題は、ここに、ちゃんと『あの人』がすんでいるかどうかです。

目を瞑れば、今でもせんめいに思い出せます。あの日、学校で、おじいちゃんが危篤だと電話れんらくが入った日。わたしは、学校のイジワルなひとたちに拉致され、あわやおじいちゃんの死に目にあえないかもしれない、というぴんちでした。

そんなときです。さっそうと現れた、軽く脱色したような髪色のお姉さんがてんくうから舞い降り、わたしたちの間にわって入ったのです！

ここで、お姉さんがあくとうをバッタバッタとなぎたおす……という展開だと思いますか？

ふふふ、ちがうのですよ。

『あなた。虐げられるだけで終わりたいの？　理不尽の前に頭（こうべ）を垂れて、過ぎ去ってくれるのをただ待つだけでいいの？』

なんと、わたしを叱咤したのです。

わたしは、なんてひどいことを言うひとなんだろう、と思いました。たすけてくれるとおもっていたのに。ですが、いじめっ子たちに無防備に背を晒してまで、わたしのためにことばを掛けてくれたのです。

奮起、という言葉の意味を、わたしはあのとき、はじめてしったのです。ンダテメオラァ、といきりたついじめっ子たち。

『はい、立つ。相手の喉元を見る。こぶしを握る。あぁ違う違う。小指から親指に向かって順々に。ふふ、懐かしいわねぇ』

あれよあれよと、わたしの手は、握ったこともないような固い『拳』へと変化しました。ですが、良い子であろうとして、ケンカひとつしたことなかったようなわたしです。さてどうしたものか……と困っていると、不思議なことがおこりました。

『奥義『水鏡漿』。そして鼻先にドーン』

――ばきょっ

わたしの身体がかってに動き、ながれるようなフォームでいじめっ

子の顔面を叩いたのです！
ぶべっ、と鼻血を吹き出しながら、自称・格闘技をやっているといういじめっ子は、あっさりとたおれました。拳に伝わる未知のかんかく。他人にぼうりょくをふるったという事実が、わたしの身体をいしゅくさせました。ですが、それいじょうに。
『要点はこれだけよ。さぁ、残り二人を始末しなさい』
とん、と軽くおしだされたわたしは、おひざが震えていましたが、それは、こわさによるものではありませんでした。
拳にのこる、じん、とした痺れ。めのまえにぶざまに転がる、わたしにいつもイジワルをしてきた、おおきないじめっ子。
それらが頭の中でむすびついた瞬間……なんていうか……その……お下品なんですが……フフ……　興　奮　しちゃいましてね。
ナニスンダコノチビ、とわめく腰ぎんちゃくさん達の顔面に、おもしろいように拳がつきささります。顔面をガードするひともいましたが、よく見たらおなかがガラ空きでしたので、おなかをなぐってみました。ぼむ、と、空気のはいったボールを叩くような感触でした。かおをなぐると、人はごろごろとじぶんで転がりはじめるのですが、おなかを叩かれた人は、おなかをかかえて丸くなるのです。しりませんでした。
もっといろいろためしてみたかったのですが、たったの数人でしたし、なにより、とても急いでいましたので、きりあげました。
いま思い返してみても、なんでこんなによわっちいひと達におびえていたのか、よくわかりませんね。
いそいでおじいちゃんおもとへ向かうわたしを、あのひとはカッコよくだきあげ、そらをとびました。世界的な事件のあとでしたので、そういったことができるひとがいる、という話は聞いていましたが、びっくりです。ビルを飛び石みたいに飛び越えて、あっというまに病院がみえてきました。
『いいことを教えてあげるわ』
さっそうと風を受けて飛ぶあのひとは、わたしにだいじなことを教えてくれました。

『――暴力は最高よ。何でも解決してくれるんだから』
しょうげきでした。わたしはそれまで、むだにつよい自分の腕力を、すこしはずかしく思っていました。ですが、ちがうのだと。
そもそも、いじわるをされ始めたきっかけも、クラスで腕相撲をしよう、という話になって、わたしが２４タテで勝ってしまったからなのです。逆恨み、というやつなのです。はじめが肝心なのでした。さいしょにイジワルをされたときに、ぼこぼこっとしちゃえば良かったのです。
そんなこんなで、病院に到着しました。末期には間に合いましたが、結果的に、おじいちゃんは天に召されました。
――死因は餓死です。
体脂肪率１．８％という、およそ人体には不可能とおもわれる数値を突破した結果、基礎代謝に体中のエネルギーはおろか、生命までも食いつぶされるかたちで、おじいちゃんは生涯を終えました。
片時も鍛錬を欠かさなかったおじいちゃん。大会が近くなると、鳥のささみをミキサーで潰した変な液体とかをごくごくと飲んでいたおじいちゃん。生物的には最悪の飢餓状態ではありましたが、ビルダーとしては究極の肉体で生涯を終えたことに、きっと本人は悔いが無いのでしょう。
ですが、わたしはおもうのです。
きっとおじいちゃんは、身体を鍛えるということが手段ではなく、目的だったのだろう、と。鍛えた力の持っていく先が、どこにもなかったのだろう、と。肉体づくりに正解はありません。おじいちゃんは、長年の試行錯誤の末に、筋肉の袋小路に迷い込んでしまい、そして……。腕力には、てきどな、そして直接的な発散がひつようなのです。
――暴力はすべてを解決する。
そんな大事なことに気付かせてくれたあのひとに、もう一度会いたい。そして……。そのいっしんで、くっぷくさせてれいぞくさせた元いじめっ子たちにも手伝わせて、情報をあつめました。
そしてようやく、ようやく……！

がちゃり、とドアを開けて出てきたひと。薄い髪色に、白く濁った片目。間違いありません……!!

「みつけました……！　わたしのかみさま……!!」

なにやら、だれかとともにお出かけのようです。うぅ、話しかけづらい……。あ、行っちゃった……追いかけなきゃ。まってー。

◆▪◆　◆　◆

――やっと見つけましたよ……!!

わたしは、生まれて初めて管理外世界に足を踏み入れました。大大大冒険です！

お忍び旅行？　いえいえ、そんな軽い動機ではありません。なのはさんに一言、物申すためにオフを取り、遠路はるばるやってきたのです！

このわたし――レアス・ステラ初主演作品『魔法少女リリカルなのはＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　１ＳＴ』は、この地球という世界においても封切されました。事務所のマネージャーから聞くに、初日から大入りの大大大盛況！　間違いなくヒット作と言える初動を記録した、とのことでした。鼻高々です！　さすがわたし！　だと、いうのに……。

「な～んで、まだ感想を送っても来ませんかねぇ、あの陰キャは……!!」

実は貴重な前売り券を、大盤振る舞いしたというのに！　もう一族郎党、映画館へ足を運び、圧倒的クオリティ（主にわたしの演技）に涙し、わたしをぞんざいに扱ったことを五体投地で詫びるべき！　だというのにです！

現地のフォーマットに自動的に合わされる、マリエル印の謎技術によって、間違いなく連絡は届いている筈なのです。

神様のことだから、凄まじいオリエンタルな大宮殿にでも住んでいるのかと思いましたが、調べ尽くした結果、意外にも質素な住宅に住んでいるようでした。わたしの新人時代の寮のほうが、まだ広いのではないでしょうか？

反対側の門扉の陰には、雪のように白い髪の毛の女の子がいました。こちらのことは全く目に入っていないようですが、すごく目立ち

ます。あれは脱色ではなく、天然の髪色でしょう。個性的でうらやましいです。なにが目的かは知りませんが、とりあえず放っておきましょう。

あ、なのはさんが出てきました。……って、あれクインさんですね。あの時以来です。仲良しさんなのでしょうか。あと一人は……こちらの地域では9割以上を占める、黒髪の女の子です。黒いとはいっても、日の光を浴びて天使の輪っかがキラキラとしています。ツヤツツヤです。オリエンタルです。

三人は連れ立って、出かけるようです。会話を盗み聞くと、『映画』という単語が聞こえました。さては、封切の日には行かなかったのですね!? なんたる不義理……! この可愛いわたしの主演作だというのに……!

――どうして映画観に行ってないんですか!?

端末からメッセージを送信しますが、神様のポケットに入っているであろう端末は、鳴動すらしません。さては通知を切っていますね、あんちくしょう。さすがコミュ障陰キャです。

とにかく、タイミングを見てバっと現れて物申すのです!

……って、考え事してたら行っちゃいました! さっきの白い子もいません!

まてー!!

◆▪◆ ◆ ◆

(……なにあの子。別方向からついてくる。こわい)

「師匠(せんせい)。あの子は誰ですか? 外に作った弟子ですか? 斬っていいですか?」

「落ち着けよ彌茅……」

弟子二人がやいのやいの騒いでいる。

「いや、マジで誰だっけ……。うーん……あの白ウサギみたいな子……変装してる方はたぶんレアスっぽいんだけど……」

……割とマジで忘れかけていた。

「師匠(せんせい)! 映画館ですよ!!」

ぐいぐい、と彌茅が遠慮なくなのはの手を引く。

「はいはい、わかっていますよ……さて彌茅、クイン。ポップコーンを買いましょう」
「「ポップコーン……？」」
　文化圏が違う二人には、未知の単語だったようだ。もちろん、弟子部屋には二人がお遣いのお釣りで買うことを許した菓子類が置いてある。だが、ポップコーンはスーパーにはあまり売っていない類のものだ。食べる機会が無かったのだ。
「なんというか……うん、食べればわかる。三種類、スーパーＬサイズで買いましょう。あとコーラ。黄金コンビね」
　テキトー極まりない師だった。
　なのははポップコーンを買うついでに、チラシ置き場から、『魔法少女リリカルなのはＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　１ＳＴ』のものを一枚抜く。それを、ぴらぴらと仰ぐ。
「「　!!　」」
　これで、後ろに居る二人には伝わっただろう。多分。何の用かは知らないが、今日は、彌茅が人生で初めての映画を観る日なのである。
「師匠（せんせい）！　ふわふわして、さくさくして、あまじょっぱくて、おいしいです！」
「そう」
　素っ気ないなのは。だが、あの行儀の良い彌茅が、カスを落としながらポップコーンをほおばっている姿は、実に良い。
　前売り券をモギリに渡し、半券と入場特典を引き換え。いざ映画の世界へ……
◆▪◆　◆　◆
「!!」
　神様は、あの映画を観るのでしょうか。わたしとしては、こちらの『燃えよブートキャンプ』のほうかと思いますが……ですが、今日はガマンです。あのファンシーな映画を観るのです。
　ポップコーン、チュロス、コーラ……おじいちゃんは、ジャンクフードをあまり食べない人でした。わたしがテストで満点を取ると、意外にも買ってきてくれましたが、口にしている姿はあまり記憶に有りま

せん。塩分・カロリーがじつにやばそうです。でも買います。身体に悪いものはおいしい。これは常識です。悪いことをするのは楽しい。これもまた常識です。

だいじょうぶです。摂取した以上のカロリーをしょうひすればよいのです。今夜は水泳１０ｋｍからはじめましょう。ポーチには、おとめの必需品……握力グリップ（１００ｋｇ）とプロテイン（イチゴ味）が、ちゃんと入っています。映画を観ながら軽いトレーニングを行いましょう。

ところで、先ほどから近くをうろついている、変なサングラスをかけた子は何なのでしょう？　……変な人にはあまり関わらないようにします。害があるなら、ぼこぼこっとしちゃえばよいのです。それはそれで、とても楽しみです。最近は、あまり人をなぐっていませんし。

◆▪◆　◆　◆

結果から言うと、めちゃくちゃ面白い映画だった。

「うぅっ……感動です……！」

彌茅はラストからの畳みかけにすっかり涙腺をやられて、エンドロール中にも涙を流していた。

「……うんうん、わかる」

クインも泣きはしないものの、物語の余韻を噛みしめる様に頷いている。

で、なのははというと。

「……めっちゃ恥ずかしい。しばらく出歩けない……」

……主人公・じぶん（はぁと）という近年稀に見る晒し上げを目撃し、顔を羞恥に赤くしたり、戦慄に青くしたりしていた。

「……え、なにあれ。マジでなにあれ。あれはダレ？　なんで優しいクラスメイトに囲まれて笑ってるの？　あんな経験ないわよ。記憶にあるのは悪意の嘲笑かシカトばかりよ……。並行世界の私はあんな幸福な人生を送っているっていうの？　なによそれ不公平だわ。こちとらドーンと撃墜されて腕の一本だって無くしたっていうのに。アリサに怒ったのは別に義憤じゃなくて、家庭にイライラしてた腹い

せだし……というか、フェイトも誰よアレ。あんな儚げな美少女じゃなかったわよ。虫歯だらけで行儀も礼儀もなってない聞かん坊だったし。さてはレヴィ(雷刃)をイメージソースに使ったわね？　あれじゃ、まるで私が正義のスーパーヒロインじゃないの。私は単に、降りかかる理不尽をなぎ倒してきただけよ。詐欺よ。観客みんな騙されているのよ」

……とは、彌茅の前では口が裂けても言うまい。

「二人とも。言った通りに」

「……」

ぴたり、と、シアター入り口で立ち止まる。門の死角で待機。

観客が、一人、二人と通り過ぎ……最後の最後。小さな少女二人を、彌茅とクインが事前の指示通り、捕獲する。

「うわぁっ、クインさん!?」

「あー、やっぱりレアスか」

変なサングラスを取り払うと、そこにあったのは、意図的になのはに似せた顔。

一方。

「……これはわたしへのちょうせんと受け取っても？」

「……ご自由に」

捕獲に伸ばした手と、捕獲対象の少女の拳が衝突していた。間合いで物騒に対峙する、彌茅と白い少女。

「はい、やめ。迷惑でしょう」

パン、と手を叩き、こんがらがった空気を断つ。

「とりあえず、翠屋に行くわよ」

まずはサ店に行くＺＥ☆と歩き出すなのはの後を、一団がゾロゾロと追う。奇妙な集団が出来上がっていた。

「クインさん、なのはさんってば既読無視するんですよ!!?」

「きどく……？　なんかすごい数の未読メッセージがあるから、ザーっと上から下まで既読にして未読マークは消すようにしているわよ」

「通知も切ってるでしょう！」

「だって、うるさいんだもの」
「ほーら、そういうトコ！　そういうトコですよ！」
「諦めろ。こういうお人だ……」
「返事って義務なの……？　だって、私こどもの頃、クラスメイトに話しかけても無視されてたから、てっきり無視するのは普通なのかと……」
「わかります。わたしも『ユーレイ』って言われて、居ないものとして扱われていました。でも、おかしいですよね。なんでみんな、『ユーレイ』に消しゴムのカスを的確に投げつけるんでしょうか」
「あら、わかる？　そうそう、そういう矛盾ってあるわよねぇ不思議よねぇアハハハハ」
「ありますあります。もう、居るのか居ないのか、見えているのかいないのか、はっきり決めてくれ、って思いますものウフフフフ」
「師匠、言っている意味がわかりません……クラスメイトに囲まれて笑っていた、あの映画はウソだったのでしょうか……？」
「ウソジャナイワ。ホントウヨ。アナタガソウオモウナラ。」
「そうそう、映画ですよ映画。どうでした？　『ひゃースゴい！　感動の嵐！　なんて神映画なんでしょ！』って言ってもいいんですよ!?」
「言わないわよ。でもまぁ、良いエンタメ作品だったんじゃない？　魔法の威力は脚色しすぎだと思うけど」
「いや、カレン姉が言うには『殺意が足りない』と」
「あいつ、あの映画観たの!?」
「封切日に観た、と。笑いすぎてリアルに腹筋が破断したからしばらく凶鳥部隊の活動は休むって」
「知らぬ間に世界に平和をもたらしていた……!?」
「さすが師匠です！」
「やはり肉体言語は統一言語。殴り合えば分かり合える。そんなメッセージを感じ取りました……！」
「そのメッセージ、文字化けしてるんじゃないのか……？　っていうかなのはさん、魔法戦も強いってマジだったんですか」
「別に強くないわよ。私の周りには、私より魔法戦が上手い人なんて

たくさん居たし。私はパワー特化型で、強さが目に見えて分かりやすかったっていうだけ。何度も負けてるわよ、私は。魔法で戦えって言われても、ユーノくんやクロノには勝てないだろうしなぁ」
「比較対象に生ける伝説みたいな人を出されましても……」
「師匠(せんせい)、ためしにビーム撃ってください、ビーム！」
「わかったわ。じゃ、標的に兄さんか姉さんを呼ぶから」
「やめろ店と命が消える！」
――このグループ超うるせぇ。
中高生二人、小学生三人という変な構成。そして、普通学級ゼロ人という奇跡。
「で、あんた誰？」
そして、グループの注目は、白髪の少女に。
レアスはなのはに縁がある。弟子二人は言わずもがな。
「本当に、忘れちゃったんですか……？　二度も、わたしをたすけてくれたのに」
「……二度？」
なのはは、おぼろげな記憶を手繰り寄せる。なんか、いじめの現場を発見して、なんか、解決したような記憶だけはあるのだが。
「――わたしは、逢瀬櫃の出身です」
――!!
「――――あっ!?」
その単語をきっかけに、記憶が蘇る。そうだ、あの日……秀人を、あまたの子供たちを食い物にしてきた極悪非道な伏魔殿を、月村重工とともに文字通り粉砕した日のことだ。
◆▪◆　◆　◆
「たっ……助けてくれ!!　命だけは……!!」
命乞いをする組織のトップの相手は、すずかに任せていた。
「安心してください。わたしは、決してあなたを殺したりはしません」
「ほっ……本当か……？」
「ええ。だって、あなたには、まだ生命(いのち)があるではありませんか。命は、だれにだって一つしかない貴重なものなんです。あなたの生命

は、きっと、誰かの生命を助けることができるんです。生命はそうやって、互いを助け合う尊いものなんです」
「はは、は、そうだろう……？」
「えぇ。どんな生命も、貴重な貴重な、資源ですから」
「……へ？」
とん、と、すずかの白魚のような指が、施設長の胸を突く。とんとん。とんとん。
「あなたには、まだ、心臓が、肺が、肝臓が、腎臓が、脾臓が、胃が、十二指腸が大腸が眼球が血液が骨髄が腕が足が毛髪が皮膚が脳髄が。
――まだまだ使える部位が、たくさんあるでしょう？
――奪ってきた以上の生命を、助けることができるでしょう？
――だから。わたしは。
――決して、あなたを殺したりはしません」
……黒服たちに、全身すっぽりと長袋に梱包された施設長は、いずこかへ。今も、どこかで生きているのだろう。血液製造工場として。肝臓牧場として。生体部品庫として。
粗末な貫頭衣を被せられた子供たちを、どうにか救出することに成功した。皆一様に、感情を失い、人形のように、ただ、そこに佇んでいた。絶望か、諦観か、薬物か……それは、これからの検査によって、わかることだ。
その中で、唯一、意思を発露した子供がいた。
「さわるなっ!!　ワシのリンネにさわるなァっ！　殺す！　殺しちゃるぞっ!!」
出身地の方言で叫び散らしながら、医療スタッフの手に文字通り噛みつく、ざんばら髪の少女だった。
「この子が一番、重症のはずなのですがっ……!!　あいたたたっ!!」
「落ち着いて！　大丈夫！　大丈だからっ!!」
その腕の中に、真っ白い頭髪の少女を掻き抱いたまま、大人たちに手を触れさせようともしない。裾から見え隠れする肌には、青あざや、黄疸、真新しい打撲痕や、煙草の火を押し付けられたような跡まであった。

「あら、活きが良いのが居るじゃない」
医療スタッフを下がらせ、なのはが進み出る。
「誰か、おどりゃあっ!!」
「あなたたちを引き離すわ」
残酷に宣言をする。
――ばちぃいんっ!!!
……なのはが顔面の前にかざした掌に、方言少女の拳が受け止められる。回避は容易かっただろうが、なのはは、敢えてそれをしなかった。なぜならば……
「――――気に入った」
ニタリと笑う。
「そう、そう。理不尽には抗う。その心意気があれば、どこでだって生きていけるわ。たとえ異世界でもね」
受け止めた掌を軸に、やせっぽちの身体を回転させ、大地の支えを刈り取る。
――だんっ!!
柔らかな地面に押し倒す。反抗を訴える目を、真正面から見下す。
「――お前は新区に放り込む。あの白いのはこっちの里親に渡す」
くっついていても、良い影響は互いに無い。そう判断してのことだ。
「うー……! ムー……!!」
なのはの握力で、口をメリメリと圧迫される中であっても、なのはの手に爪を立て反撃を試みている。ますます、なのはは機嫌がよくなった。
「それじゃあ、良い旅を」
――ブン……ッ!!
頭部を高速振動させ、脳を揺さぶり意識を刈り取った。
その後……医療スタッフに引き渡した後、もろもろの手続きを踏み、一件落着。
そして、その出来事をすっかり忘却していた。
◆・◆　◆　◆

「あー……あったあった。そうか、リンネ。あの時の子だ」
感覚が麻痺しているなのはにとっては、かつての思い出話である。
「あのあと、わたしは優しいおじいちゃんに引き取られて……でも、……その、いろいろ大変で。フーちゃん……フーカ・レヴェントンとの連絡が、まったく取れていなかったんです」
「あぁ、あのガキ、そういう名前だったわね。新区の学生寮に突っ込んどいたわ」
人外魔境・創王覇道学院の学生寮である。ミウラやジークリンデなど、訳あったり無かったりする児童たちが暮らしている。
「わたし……もう大丈夫って、もう、ちゃんと一人で立ってるって、フーちゃんに伝えたいんです」
「ん。わかったわ。もう引き合わせても大丈夫そうだし」
ほとんど登録者の無い宛先帳を開く。
「うわ、スッカスカ……人生、寂しくないんですか？」「彌茅、殴れ」「はい師匠（せんせい）」「やめろよ!?」「そうですよ。ここは『子供同士のケンカ』で済む程度のダメージで抑えて、後ほど人目のないところで改めてぼこるべきです」「なんなのこいつ」「わたしもまぜてください」「ほんと何なのこいつ!?」
……グループいちの常識人（殺人集団所属）、クインが奮闘していた。そんなクインの苦労を知ってか知らずか、なのはが通話を終了する。
「ふぅー」
長い溜息。嫌な予感しかしない。
「あの、フーちゃんは……」
「逃げた」
「……はい？」
「逃げた」
「……あの」
「？」
なのはが、首をかしげる。え、説明は終わったでしょう？　とでも言いたげだ。

「報告の基本は５Ｗ１Ｈですよ、なのはさん……！」
　実は一番まっとうな人間的価値観を有しているクインのフォローは続く。
「一週間ほど前、修練の門ランクＺ『ケサン・ピクニック』を終えたあたりで、獄卒……じゃなくて、寮母さんを撃破して繁華街へ消えていったそうよ」
「……」
「……」
　思わず、見つめあってしまう。
「強くなったのね……」
「なに良い話風にサラっと終わらせてるんですか！　おおごとじゃないですか!!」
「繁華街っていったって、性風俗産業は規制や検査が厳しくて、未成年はまず働けない仕組みになってる。そもそも、未成年者の就労は自治体の理不尽に厳しい監査を通さないと許可されないし、かといって待遇は成人と同等のものを用意する義務があるし、能力の未熟な子供を企業側が雇用するメリットがほぼ無いのよ。助成金の類も出ないから、ピンハネもできないしね。結局、身寄りのない子供は、児童福祉の畑で面倒を見るのが一番合理的で、理に適ってるの」
「？　……え、あぁ、はい……」
　普段はむっつりとして喋らないことの方が多いというのに、話し出すとベラベラと、必要な情報を一気に羅列する。なのはの悪い癖だ。
「えーと、つまり？」
　クインに促され、簡潔にまとめる。
「いずれ路銀が尽きて行き倒れるから、それを拾えばいい」
　血も涙もないとは、まさにこのこと。
「こ、この効率厨っ……!!」
「フーちゃんが！　フーちゃんがほーむれすに!!」
　レアスは的確になのはをディスり、リンネはパニックだった。
「え、一番合理的だと思うけど……だって、逃げる気力があるやつを追うのって大変だし。勝手に倒れてくれるのが一番いいでしょう？」

「なのはさんには人の心がありませんね!?」
「彌茅、やっぱりコイツ殴れ」「はい師匠(せんせい)」「だーかーら!!」
非道な命令を下すなのは。躊躇なく実行する彌茅。止めに入るクイン。逃げるレアス。パニクるリンネ。さてはこいつら、ここが飲食店であることを忘れているな?
「……分かったわよ。あそこにガキ……えっと、フーカ? を、放り込んだのは私の判断だし、そこに連なる問題は、私にも責任の一端があることは理解したわ」
一端というか原因というか元凶というか……
「あそこは自由で自己責任な風潮だし、社会への不信感や不満を大いに発散して、適度なガス抜きになると思っていたんだけど……判断が甘かったわ」
珍しく非を認める。
「そして何より、ヴィヴィオの同級生」
そこが一番の理由のようだ。ぴしゃ、と膝を打つ。
「新区に行くわ」
うん、と一人で頷く。
「今度、新区の学校でクラス対抗戦役があって、もとから参観に行くつもりだったの。その用事ついでに、パパっと捕獲してくるわ」
なんか一人で勝手に結論を付けて納得していた。
「ヴィヴィオさんって、」「彌茅、」
「まだ何も言ってませんよね!? 弟子をけしかけないでください!」
レアスの扱いが雑である。
「その方ですよね? 『レアスより一億倍かわいい』っていうのは」
「そうよ? 私や秀人さんの真似っこをしたがる年ごろで、ほんっとに可愛いんだから」
にこにこ、と珍しく純粋に笑っている。ヴィヴィオへの想いのほどが分かるというもの。
「ふぅん……? そうなんですかぁ。このわたしより、可愛いんですかぁ……」
レアスが、何やら策謀を巡らせている。

「……わたしも行きたいな」
ミルクレープを一枚ずつ剥がしながら食べていた彌茅が、喧騒に消え入るような声で言った。丁寧語でないあたり、本音なのだろう。
「彌茅？」
と、なのはが聞き留めていた。彌茅はハッとなり、慌てて取り繕う。
「いえっ……失礼しました」
「ちょっと無理があるわ」
「そう……ですよね……わたし、何を言っているんでしょうか……」
「だって、まだ準備していないんでしょう？　滞在は三日を予定しているから、着替えだけでも結構な量になるわよ。新区からの物品持ち出しには制限があるから、現地調達しても着て帰っては来られないし。明日出発の予定だから、この後の予定はそのための買い物に充てましょう」
「もうしわけありませ……あれ？」
「まずは衣類ね。あなたはよそ行きの服が少ないから、これを機に買い揃えちゃいましょう。リンネ。あなたの方は今日中に用意できるの？　足りないものは今から買いに行くわよ」
「……えっ、えっ？」
……なのはの独特過ぎる思考の飛躍に、誰も着いていけていない。
「一緒に行こう、ってさ」
ぽん、と彌茅の頭に手を置き、クインが要約する。このパーティにおいて、クインなしにはコミュニケーションが成り立たないと言ってもいい。
「!!　はいっ、師匠(せんせい)!!」
「良かったな」「はい！」
弟子二人が、いえーいとハイタッチをしている。すっかり仲良しである。
「わたしも、行って良いんですか……!?」
「何よ。全部私にやらせるつもりだったの？」
「いえっ！　ありがとうございます！　あの、せめてものお礼に……！」

リンネがポーチから、ジップロックに入った白っぽい粉をなのはに渡す。
「……一応聞いておくけど、これは何かしら？」
小分けにされた白い粉という、疲労がポンと取れそうな外観をしていた。
「プロテインです。新製品のイチゴ味ですよ！」
「……あっ、プロテインなのね。そうよね。ありがとう」
受け取り、手提げに入れる。
「あ、それと。あたしは一応、お尋ね者なので行けません」
……すっかり忘れていたが、クインは反社会勢力の立派な一員なのである。育成枠だが。
「えぇ……そうなんですか……残念です……」
「それに、なのはさんの娘なんて会ったら絶対ロクな目に遭わないし……なのはさんが二人になるようなモンだぞ。１＋１は２じゃないぞ。吾妻家因子は１＋１で２００だ。１０倍だぞ１０倍……」
「師匠（せんせい）が二人……!?」
「ナニちょっと喜んじゃってるんだよ……」
「ハッ、これはきっとわたしも誘われる流れ……!!　わたしの時代来てる……！」
グフフ、と下心だらけの笑い。
「レアス」
「はぁい！」
「というわけだから、この先の買い物にあなたの出番は無いわ。もう帰って良いわよ」
「なんでそんなこと言うんですかっ！　信じらんないっ！」
「だって……あとは外泊に向けた準備の時間でしょう？　準備が必要なのは、リンネと彌茅で、彌茅は今日はクインと一緒に過ごしたいっていう希望があったからクインも必要だけど……あんたは外泊慣れしてそうだし、別についてくる必要無いでしょう？」
「そういうとこだっ！　そういうとこだぞっ!!」
なのはの理詰めに、レアスが顔を真っ赤にして吠える。

「うるさいわねぇ……はぁ。いいわよ、買い物に着いてくる程度なら。新区には連れていけないけどね」
「ちぇーっ。未来のスーパーエリートとのコネ欲しかったなー」
「どこまでも我欲で動けるその胆力だけは見習うべきよね……」
幸いにも、映画館もあるような活気ある地域だ。旅行支度くらい、この町だけで整うだろう。
気づけば、五人の大所帯。血縁ゼロ、年齢バラバラの五人である。いったい何の集団かと思われていることだろう。
そう、例えばお巡りさんあたりにも。
「こんにちはー。ちょっとお話よろしいでしょうかー？」
スーツ姿の女性が、にこやかに話しかけてきた。
「無視していいわよ」
キャッチか何かと思ったのだろう。なのはは、歩く速度を上げた。
「あぁっ、違う、違うのよー」
ささささ、となのはの前に回り込み、懐から手帳を取り出す。
――海鳴署　生活安全部　少年課　補導係
それはまぁ、平日の真昼間に、未成年がゾロゾロと歩いていれば、そうもなろう。
「……何の御用でしょう」
なのはが硬直する。
「いえいえ、楽しそうで何よりなのだけれど……ほら、今日って平日じゃない？　皆さんは、どんなグループなのかなーって、おばさん気になっちゃって、ウフフ」
「どんなグループ……」
……そういえばどんなグループなのだろう。なのはは答えに窮していた。
「皆さん、今日、学校は？　お休みなのかしら？」
「単位制なので」
これは答えられる。しかし、問題は残りメンバーだ。
「わたしは芸能科で、都合がつくんです」
レアスは無難に切り抜ける。

「？　行っていませんが」
　彌茅、アウト。
「戸籍が無いもので……」
　クイン、重い。
「もちろん、サボってきたんです！」
　リンネ、完全アウト。
「……代表者はあなたかしら？」
　嗚呼、補導員さんの目が険しくなっていく。あわあわと狼狽えるなのは。しかし、なのはには必殺技があった。こすっからい逃げの一手……!!
「私は入籍していますので、法的には成人です！　職業は主婦です！」
「あら、そうなの」
　フハハ、勝ったな！　サンキュー夫！　と、心の中で勝利を確信した。
「あなたたち、ちゃんと学校へ行くようにね。それと、一応、カバンの中を見せてくれるかしら？」
　補導員さんは引き際を探し始めた。あとはなのはが、後ろ暗いところなど何もないカバンを開帳すればいい。補導員さんは一定の仕事をしたという事実を得られる、なのはたちは買い物を続行できる。まさにＷｉｎ―Ｗｉｎではないか。
「どうぞ」
　ふふーん、と手提げを広げて見せる。
「――この白い粉はナニ？」
「……プロテインです」
　リンネからの贈り物！
「ちょっと動かないで！」
　プロテインを常備する女子がどこにいる！　とばかりに、なのはの腕をガッチリとホールドする。
　補導員さんは、明らかに業務用の無味乾燥なＰＨＳを取り出し、ワンコールする。
「はい、こちら補導係のカナメです。女性警察官と、検査キットを手配

してください。場所は」
「なんですか！　悪いものを扱うみたいに!!」
　リンネが突如として激高した。尊敬する亡祖父の会社の製品である、高品質プロテインである。それをまるで、危険物であるかのように扱われもすれば、まぁ怒る。
「我が家の家業として、長年の信頼と実績と、先人たちが築き上げてきたノウハウを活かした一品を！　厳選した素材を高度な技術で精製し、いまや業界シェアトップ！　世界中に愛用者がいるんですよ！　決して体に悪いものではないんです！　人を幸福にすることができるんです！　確かに検査（特定保健用食品）はまだ通していませんが、効き目は折り紙付きです！」
　……なにも間違ったことは言っていない。言っていないのだ！　ただ、『これはプロテインです』の一言が足りていないだけで……
「公安にも連絡を!!」
「逃げろお前たち!!」
　説得を試みてはならない。なぜなら、むこうは逮捕ありきで来るからだ。囲まれる前に、戦略的に撤退するのだ。
　戦闘力皆無のレアスは嫌々ながら、なのはが抱える。
「現行犯逮捕されたら終わりよ！　陽性反応なんていくらでも捏造できるんだから！　とにかく、逃げるのよーっ！　嫌なことからは逃げればいい！　あとでウチで合流よ!!」
「はいっ！」「わかりましたっ！」
　逃亡は慣れっこのクイン、意外な健脚を見せるリンネと分かれる。足は速いが裏路地を知らない彌茅は、なのはとともに行く。
「師匠！」
「あぁもう、御免なさいね。今日は楽しいお買い物のつもりだったのに……！」
「――楽しいですっ！　すっごく楽しいです！」
「――……。そう、それは良かった！」
「良くないー！　捕まったら、芸歴にキズが！　スキャンダルが！」
「うるさいわね放り投げるわよ!?」

なのはの腕の中で、レアスが抗議の声を上げる。

「おう、お帰りー……って、何か増えてないか？」

秀人が慈樹を背負いながら出迎える。玄関先には、息を切らす五人の少女たち。

「ただいま……うん、二人増えた」

心なしか、ゲッソリしている。

「行く先々で少女を拾ってくるよな、なのはは……」

「秀人さんにだけは言われたくないもん」

「ナンノコトヤラ……」

「ふあー、今日は早く終わったよー！　って、なんだこのちっさいの!?

うわっ、なのはみたいなチビがいる!?」

フェイト、帰宅。

「丁度いいところに！」

きゅぴーん、と目を光らせたなのはが、フェイトを捕獲。

――警察には顔が利くでしょう？　まず、今日の騒動を無かったことにしてね。

――それから新区への渡航許可証、彌茅とリンネの分を追加でよろしくね。

「気軽に言ってくれるけどさぁ!!」

「何よ嫌なの？」

「……やるよぉ！　やってやるよぉ！　うわーん！」

頑張れフェイト。

「皆さん、お茶が入りましたよ」

躾の行き届いた彌茅が茶を淹れる。もともと大所帯だ。湯呑は足りた。問題は床面積。

「うぅー、外観に違わぬコンパクト住宅……！」

「まぁ、そう言うな。もとは俺一人の家だったはずなんだがなぁ……」

「そうね。文句を言うレアスには帰ってもらいましょう」

「ほんっと塩対応ですねぇ!?」

レアスにとことん連れないなのはだった。

「あなたもどうぞ」
「これはどうも」
第一印象がお互い最悪だったリンネへも湯呑を渡す。
リンネは、騒動の発端となった白い粉（プロテイン）をさらさらと。
「何をやっているんですか!?」
「何もしていないでしょう!?」
リンネは運動後のプロテインを摂取しようとしているだけである。
彌茅には理解不能の行動だった。
「あー……リンディさんも砂糖入れるよね……」
良く知るフェイトは何とも言えない顔をしていた。趣味嗜好は人それぞれ。とはいえ、流石に緑茶にプロテインは二重の意味でマズい。
「プロテインの何が悪いんですか！」「作法の問題です！」「押しつけがましい！」「なんですって！」「なんですか！」
「「えぇい、もう埒が開かない!!」」
「ここは暴力で決着を付けましょう！」「えぇ、いいでしょう！　表に出なさい白いの！」「リンネです！　あなたの名前は!?」「彌茅です！
さぁ勝負ですリンネさん！」
……話は纏まった（？）ようだ。
「リンネ。あなた戦闘訓練は？」
成り行きを見ていたなのはが、ようやく口をはさむ。
「いえ、対人訓練は、特に。がっこうのオトモダチは、みんなみんな、脆すぎて……何も試せないんです」
「それ（握力クリップ）、本気で握ってみなさい」
「はい」
――くしゃっ
……強靭なスプリングを、紙のように圧し潰す。
「えぇ……」「うっわ……」
いつの間にか常識人なクインと、パンピーのレアスは恐れおののく。
「やるじゃん」

秀人は、圧し曲げられたスプリングを腕力で伸ばしながら言う。
「――――。」
彌茅は、己の未熟を痛感していた。相手はただの少女だと、軽く捻れると考えていた。むしろ、手を抜いてやらねば殺してしまう、とまで。師がそれを試さなければ、捻られていたのは……
「彌茅。相手は素人です。得物は使わず、素手で制圧しなさい」
「……はい師匠(せんせい)」
恒例の稽古場と化した共用の裏庭である。
リンネはスポーツウェアに着替えており、彌茅はいつもの袴姿だ。向かい合う二人。
「それじゃ、構え」
彌茅は正眼に、リンネは……開いた両手を軽く差し出すような、腰を低く落とした前傾姿勢である。
「はじめ」
――ダンッ!!
様子見という言葉を知らないのか、リンネは一直線に仕掛けた。
「……」
虚を突かれる形……ではない。彌茅は冷静に、リンネの顔面の進行方向に膝を突きだした。
――ゴズッ……!
直撃である。リンネの流麗な鼻筋に、膝が沈み込む。
「ぐ、ぅぅぅぅぁあああああああああ!!」
「――!?」
しかし、止まらず。鼻血を吹き出しながらも、咆哮し、彌茅の身体を捕らえに突き進む!
彌茅の身体は、膝蹴りのため前方へのベクトルが掛かっており……後方への退避では捕まると踏み、右……とフェイントを掛けつつ、左へ跳ぶ!
「がぁっ!!」
リンネ、追いつく!
「くっ……!!」

あの極端な前屈姿勢は、急激な制動や転回のためだ。
衣服の裾をつかみ取り、引き寄せる！
「ォおおっ!!」
彌茅は、敢えてその引き寄せには逆らわず……額をリンネの下あごに衝突させる！
――ガシュッ……!!
「ぐぅうっ……!!」
ぐらり、とリンネの身体が傾ぐ。脳震盪を起こしたのだ。だが……その手は、彌茅の袖を、胸倉を掴んだまま。フラついていようと、離れなければ良いのだ。
「――。」
しかし彌茅は……トドメのモーションに入る。無防備に空いたリンネの喉元を、握る。
――ぎゅうううううっ……!!
気管と頸動脈を締め上げる！
「かっ、……く、かっ……!!」
リンネは、急激に遠のいていく意識に抗いながらも、この先の一手が思い浮かばない。殴るか、投げるか。しかし投げても、平衡感覚が狂ったままでは再び組み付くことは不可能。一度でも組付けたこのチャンスを、逃すわけには行かない。彌茅の片腕を封じられたのは、天運が味方したとしか思えない絶好の勝機。両手は離せない。では。
「あ。」
暗転する直前のリンネの脳裏に、閃きが走る。
――がぱぁっ……
リンネは、大きく大きく、口を開けた。まるで、酸欠寸前に、酸素を求めるかのように。彌茅が、そう誤認するように。
「……」
締めを続行する彌茅。その、首筋に。頸動脈に。
「――がぁあああああああッ!!」
大口を開けて、文字通り喰らいつく!!
「ひっ……!?!!」

その殺気は、紛れもなく本物だった。追い込んだはずの弱い兎が、肉食獣をも凌駕する牙を剥いたのだ。
彌茅は絞める手を瞬時に解放。手ごろな石をがっちりと握りこみ、首筋と、リンネの口腔との間に放り込む!!
――――ガキィンッッ!!
……砕いた。恐るべき、リンネの咬合力。そして、そこが限界だった。
「……が、……」
ばたん、と呆気なく、リンネは意識を失った。
「勝負あり!」
「……!!　……!!」
なのはの宣言も耳に届いていないのか、彌茅は倒れたリンネにトドメを刺さんと飛び掛かる!
「勝負ありだって言ってるだろ!　おい、彌茅!　おいってば!」
クインが羽交い絞めにして止めなければ、本当にトドメを刺していたところだ。
フェイトが倒れたリンネを仰向けにし、気道を確保する。
「はいはーい、ちょっと見せてねー。……鼻折れてるね。あと歯が一本折れてて、顎にヒビ」
「メチャクチャ重症じゃないですかーーー!　な、なんなんですかこれは!」
「ただの組手だよ。ほら、どいたどいた」
秀人のかざした手に、炎と魔力光が灯る。リンネの砕けた鼻や折れた顎が、復元していく。
さて、怪我人の手当は秀人に任せ、なのはがするべきことは。
「――――彌茅」
弟子への、指導だ。
「――!　は、はい、師匠(せんせい)……!」
「勝ちか、負けか。答えなさい」
それは、残酷な問いだった。
形だけを見れば、彌茅の勝ちだ。リンネは意識を失い、無防備に倒

れている。彌茅は大した負傷を負わず、ピンピンしている。しかし。
「この、試合は……わたしの……」
しかし。リンネの土壇場の一手。噛み付き（バイティング）という手に虚を突かれ、彌茅は怯んだ。もっと言えば、彌茅はリンネに恐怖したのだ。
「わたし、の……」
じわり、と、彌茅の目に涙が浮かぶ。下唇を強く噛みしめ、その先の言葉を、出せずにいる。
それは、戦闘訓練を受けている身でありながら、素人に恐怖したという羞恥か。『高町』の姓を授けてくれた恩師への罪悪感か。それとも。
「わたしの、まけですっ……！」
芽生えていた、武人としての矜持か。一度、認めてしまえば……溢れてくるのは、激しい悔恨の念だ。
「まけ、ました……！　わたしは、リンネさんに、まけましたぁあああああ……!!　うわぁあああああああん……!!」
クインに組手で負けた時ですら、ここまでの感情は浮かばなかった。
――なのはが彌茅に求めていたのは、この感情だ。
冷徹な言い方となるが、なのはは、彌茅が負けることを見越して、リンネと対戦させたのだ。同じ訓練を受けた者同士の組手だけでは、負けた悔しさというものは発生しづらい。その忘れかけた悔恨の念を強く刻み込むことが、なのはの目的だったのだ。
「悔しいですっ……!!　負けたことが、怯んだことが、悔しいですっ……!!　師匠（せんせい）が、あんなに教えてくれたのに!!」
へたり込んだ地面に爪を立て、流れる涙を隠しもせず、ただ、悔しい、と訴える。
「――立ちなさい、彌茅」
「……」
のそりと、しかし、指示通りに立ち上がる。
叱責か、失望か。そのどれをも覚悟して受け入れるつもりの彌茅。だが。

「それでいい」
なのははは少し強めに、彌茅を抱きしめた。
「あっ、あっ……師匠……？」
「――その悔恨も、後悔も、屈辱も、怒りも、羞恥も、……その全てを喰らい、糧としなさい。そうすれば、あなたはもっと強くなれるわ」
「……はい、師匠」
「よろしい。」
そうして、師弟はまた一つ、絆を深めた。
「う、うぅ～ん……なんかアゴがすごい痛かったような気が」
回復したリンネが意識を取り戻した。目を開けたそこにあったのは、泣き腫らした目をした彌茅である。正座をしてリンネの顔を覗き込んでいたようだ。
「え、うわっ」
慌てて身体を起こす。
「くっ……負けてしまいましたか……」
リンネは、悔しそうに顔を歪める。
「……リンネさん」
「なんでしょう」
「……今日は引き分けにしておいてあげます」
……やっぱりまだまだ子供だった。
「ぐぬぬ……しゃくぜんとしません……」
「でも、次はちゃんと勝ちます。師匠に鍛えてもらって、クインさんとも技を磨いて。だから……その……なので……うん！」
ぴしゃん、と膝を叩く。
「――わたしたちは、今日から『らいばる』となるのです！」
リンネは、初めはぽかんとした様子で……次第に、好戦的な笑みを浮かべた。
「すてきなお誘いです！　ええ、良いでしょう。そのお話、お受けします。今日から、わたしたちは『らいばる』なのです！」
どちらからともなく差し出した手を、またどちらからともなく握りあう。

「負けませんよ、リンネさん！」
「負けませんよ、みかやさん！」
秀人、なのは、フェイトの大人勢は、うんうん、と頷いていた。
「――先ほどからわたしは一体なにを見せられているのでしょう」
ポケーっと、成り行きを見ていることしかできなかったレアスが、呆けた声を出す。
――ぽん。
そんなレアス（一般人）の肩を、疲れ切った顔のクイン（常識人）が叩く。
「――――いつか慣れるよ。頑張ろう？」
「嫌ですよっ!!?」
……クインはこの日を以って、超常存在被害者の会へ、期待の新メンバーとして迎え入れられたのだった。

ｖｉｖｉｄ編　２０話『　大乱闘スマッシュシスターズ　』

――――――――みんな、仲良くしなきゃ駄目でしょう

◆・◆　◆　◆

――――皆さんへ

――――以前よりご報告をしておりました、明日からの三連休、私、吾妻なのはは娘に会いに新区へ行ってまいります。

――――新区には通信制限があり、ご連絡には返信ができない可能性がありますことをご容赦ください。

――――つきましては、お土産の希望などありましたら本日中にお伝えいただくと助かります。

――――かしこ。

「――――というグループメッセージが届いたわけですが」

夜のファミレス。通例の集会において、司会者役に収まることの多い中野が、スマホを片手にそう切り出した。当然、皆にも届いている。ハリー、エルス、大宮、中野、小山といういつものメンバーに加え、なぜか望まで居る。

「業務連絡かっ！」

パーン、とハリーがテーブルを叩く。

「まったく同じ文面で、わたしにも届いたわよ……」

はぁ……と、望はテーブルに頬杖を突く。

「まぁ、ちゃんと連絡をしてくるだけ、以前よりは心開いてくれている、という解釈で良いのではないでしょうか」

「あの子、単位は足りてるの？」

「意外なことに、大丈夫なのよ～」

大宮がのほほんと言う。
「……無駄に有能で要領がいいから、単位数だけで言えば、二年次までの分を先取りで既に取得しちゃってるみたいなのよ～」
高校のような体を取っているが、実際には単位制。１２４単位を取れば、早ければ二年で高卒相当の学歴が得られる。
「自分のペースでパッパと課題を進めてりゃ良いってシステムと、他人と合わせることができないっつー性分がうまいことぶつからずに済んでるってことだろう」
酷い言いようではあるが、実際、なのはのような……要はアレな人物とは相性が良いのだろう。初日で停学したが、その合間もせっせと課題をこなしていたのだ。クラス制や、週四日の登校を義務化しているのは、あくまで普通校との乖離を減らすためのオプションである。
「まさか、なのはを具体的なターゲットに事業展開した……なんて言いませんよね――
――月村理事？」
……まさかの七人目。学園理事会メンバー、月村すずかは、ｙｅｓともｎｏとも言ってない顔でニッコリとほほ笑んだ。
「学園の理事が、生徒の集まりに顔を出して、カドは立ちませんの？
ほら、足の引っ張り合いとか、権勢争いとか」
「理事会を何だと思っているのかな……？」
エルスがフライドポテトをムシャムシャと食べながら、もっともな疑問をすずかにぶつける。望がこの集まりに参加したい、と言ってきたときは、別に反対意見は出なかった。共通の友人であるなのはを介したコミュニティ、『友達の友達は友達』の理屈である。しかし、すずかは最年少理事であり、美少女っぷりも相まって学園の有名人である。
「そこは、望ちゃんと遊んでいたら、たまたま貴方たちと出くわした……っていう設定でどうかな？　１年Ｄ組出席番号２１番エルス・タスミンさん？」
設定と言い切る豪胆さである。出席番号までをサラっと出してきたすずかに、エルスの危機意識センサーがビンビンに反応していた。

直接的な戦闘能力では、エルスどころか小山にも及ぶまいが……何というか、ハリーにならって野生の勘である。
「わたしが理事の座を降ろされるとしたら、それは学園の運営に失敗したその時。汚職、いじめ、犯罪……あらゆる損益が、それに含まれます」
　エルスが注文したポテトを一本つまみ、口に運ぶ。
「問題の芽は、萌芽の前に掘り起こし……種ごと焼却（クシャポイ）することが重要ですからね。とはいえ、土壌（学園）までは焼きたくありませんし」
「つまり、こういう集まりに顔を出しているのも、その一環だと？」
　中野が、やや不愉快そうな顔をする。まるで、自分たちがその『問題の芽』であるとでも言われているかのよう。
「リスクヘッジというものですよ」
　悪びれもせず肯定する。
　まぁ、あの学園に居るのは、なのはを筆頭に問題児だらけであるというのは地域社会の共通認識ではあるが。わかりやすいヤンキーも、分かりやすいギャルも居る。校内で大暴れするなら、まだ良い（あまり良くはないが）。校外で暴れる、騒ぐ、警察沙汰になる……等々、事業開始から一年経たずコレである。一応、生徒たちの素行を考えると、想定の範囲内であるため『失敗』にはあたらない……らしい。
　――誰が揶揄したか『月村モンキーパーク』。あんまりである。
　ちなみに発信者はウェブサイトごと行方不明である。怖い。
「わたしたち、お猿さんだもんね……」
「一歩でも檻の外に出たら害獣……アハハ」
「笑えないよ……」
　落ち込む。
「犬コロにはお似合いではなくて？　おほほ」
「鳥畜生に言われたかないわっ!!」
　けものたちが仲良く喧嘩をする横で、やや険悪になりつつある場を望がなだめる。
「もちろん、あなたたち以外のところにも顔を出してるからね。ほら」
　……と、スマホの画面を差し出す。一般的に普及しているＳＮＳ

だ。そこには、ギャルっぽい生徒たちとプリクラを撮るすずか、地味目な集団とパンケーキを食べるすずか、運動部の面々とバッティングセンターでホームランを打つすずかなど、むしろいっそエンジョイしているのではないかという疑惑まで出てくる写真の数々があった。学園のプロモーションにでも使う気だろうか。
「そして、なぜかそのたびに生徒との緩衝材として呼び出されるわたし……どうしてこうなった」
　理事でもなく、出資者でもなく、年が近く、なのはと親交があり、コミュニケーション能力に難が無いという超レア人材が望である。
「『学園のため、ひいてはなのはのため』なんて言われちゃ、断れないわよね……うん……いいの……結構楽しいし……アハハ……」
「いつも感謝しているのよ、望ちゃん。高校卒業後は医大でしょう？
　医大合格請負人の家庭教師も、月村資本の医大の枠も、体制万全の病院でのインターンも用意してあるからね」
「怖い怖い怖い……!!　人の進路を一本道に舗装しないでよ!?」
「何も心配いらないのよ」
「心配ないことが何より心配なのよっ!!」
「よっ、未来の医院長！　……割とマジよ」
「いやぁあああ!!」
「金融のバニングス、工業の月村、医療福祉の八代。……これは来たわね」
「来てませんっ！　わたしは平穏な人生を送りたいのよー！」
「……それって一番難しいことよ、望ちゃん」
「えっ……」
『平穏な生活』の尊さを、最も理解している大宮の言葉には重みがあった。大宮は、「んんっと……」などと、顎に人差し指を置き……何でもないことのような態度で。濁った眼で。
「だって、そうでしょう？　まず、国家。個の人権が認められた国家の国民であること。次に社会。警察・消防・救急などが機能していること。三に地域。組織やコミュニティに、互いを尊重しあうだけの民度があること。四に……家庭。これが一番シンプルだけれど、何よ

り大事なこととして……親が、子を、……ごくごく、まっとうに、愛していること。これが無ければ、1から3までが有っても全部無駄なのよ。だって、ぜんぶ機能しないんですもの。前提が破綻しているんですもの。目の前にあるのに届かない、自分に何ももたらさない、そんなものゴミクズも同然……いや、ゴミクスそのものだわ。それら全てが満たされている幸運・幸福こそが、『平穏』っていう状態なのよ？　紛争多発地帯の餓死した子供たちを下を見て、相対的に『自分はまだ幸せ』って思うべきなの？　そこまで求められなくちゃいけないの？　わたしそんな欲張りなこと言ってる？　……ねぇ、それとも、わたしが知らないだけで、『平穏』って、そんなにインスタントに得られるものなの？　わたし以外は？　望めば？　当たり前に？　ねぇ、どうすればそんな簡単に『平穏な人生』なんて言葉が」

「ストーーップ!!　ハルカちゃんストーーーップ!!」

青ざめた無表情で望に詰め寄る大宮を、小山が持ち上げるような形で引き離す。

「だって！　だって!!」

「分かってる……とまでは言わないけど、大丈夫、大丈夫だよー」

何が心の琴線に触れたのかは分からないが……大宮ハルカは、普段の年長者としての佇まいをかなぐり捨てるように恐慌していた。

――数分後。

「ご、ごめんなさい……なんか……その……」

罪悪感を感じて萎縮する望。大宮は、小山の膝に顔を埋めるようにして規則的な寝息を立てている。大宮は、他人に前では努めて年長者ぶるが……たまに、こうなる。張りつめていた糸が切れるように、突然、眠るのだ。とはいえ、ここまで感情を乱したのは初めてであるが。

「八代さんは悪くありませんよ。そして……大宮さんも、悪くありません」

中野は、寝息を立てる大宮の髪を手櫛で梳きながら言う。

「これは……これらは、わたしたち個人の中でケリを付けなければならない問題であって、他人の口出しで解決するようなものではありませんので」

他人、という部分を強調するような話し方をする。そのまま、じろりと、敵対的な視線をすずかに向ける。
「――なので、放っておいてくれませんか。わたしたちは、自分のことで精いっぱいなんです。周囲からどう見られているか、気にしている余裕なんて、本当は無いんです。……えぇそうですよモンキーパークですよ。本当は人並みにもなれないくせに人並みを気取って、それっぽく芸をしているだけの人間以下のお猿さんですよ。医大ですって？　あぁ妬ましい……妬ましい妬ましい……！　平然と幸福になる未来を、楽しそうに思い描いているあなたたちが妬ましい……！
わたしはっ、見せかけだけの『人並み』にしがみついていくしかできないのにっ!!　あなたたちみたいな天上人からすれば、どうせわたしたちなんて、ビジネスに使えれば良い程度の、社会の落伍者でしょうっ!?」
内に秘めた激しい嫉妬心を剥き出しにする中野に反し、すずかは、無言だ。無言のまま、ただ、中野リリコの顔をじぃっと見つめ……
「――囀（さえず）るのを、やめなさい」
――笑みを、消した。
「黙って聞いていれば、身勝手な劣等感を、べらべら、べらべらと。モンキーパーク？　お猿さん？　落伍者？　……誰がそんなことを言ったの？　誰から聞いたの？　あのサイトはもう無いはずよ？」
「……！　それ、は……」
うわさに聞いた。ネットで叩かれていた。等々が有ろうとも。結局は。
「他ならぬ、あなた自身から出た言葉でしょう？　他ならぬあなたが、学園を、生徒を、同級生を貶めているのでしょう？　劣等感の道連れに」
「違う、違うッ!!」
「違わないわ」
立ち上がった中野の額を軽く指先で突き、押し戻す。抵抗したはず

が、全く無意味に、押しとどめられる。
「――あの学園はわたしの所有物。
――校舎も、設備も、教員も、生徒も、風紀も、個性も……それらが抱える問題も、全部ひっくるめて、わたしの所有物」
暴言とも取れる発言。しかし、そこには絶対的な自負があり……中野は、自らの矮小さをまざまざと見せつけられる形となった。
「――わたしに無断で勝手に出ていった者たちも、逃げ場を潰して、わたしの権限を以って強制的に再入学させたわ」
ぐ、と。中野の額をさらに強く押し込み、中野の身体は座席に着座させられた。
見下ろすような形で、すずかはにっこりと、完璧な笑顔を作る。
「――――私の所有物に、落伍者なんて一人もいないのよ？　１年Ｄ組出席番号２８番、中野リリコさん」
完全に言い負かされた中野は……激情に顔を紅潮させていた。殊勝に引き下がるものかと。口で勝てないなら腕力で勝てばよいのだと。勝った方が勝利者で正義なのだと。まずはこの互いを隔てるテーブルをちゃぶ台返しにして、掴みやすそうな長い髪の毛を引っ掴んで、顔面に膝を一発。いつもの喧嘩だ。お世話になった刑事さんは悲しむだろうか。結局、暴力だ。他にないのだから仕方が無い。やるしかない。戦る状況を作った相手が悪い。班長とエルスは止めるだろうか。静観してくれるほうが有りがたい。結果的に大事なハルカちゃんを泣かせた奴らに報復せねば。そうだ、相手が悪い。わたしは悪くない。
――私、悪くないもん。
――社会が悪いんだもん。
今更ながら、なのはの言葉が理解できた。そうだ。社会が悪い。では、目の前の社会の権化のような輩に鉄拳を叩き込むことは正義ではないか。
「……みんな何やってんの？」
……緊迫した空気の中、場違いに呆れたような声が場の緊迫を打ち消した。

簡素な装いにライダージャケットを羽織っただけの、なのはが。店の入り口で呆然と立ち尽くしていた。
（……。え。なぜここに。）
「……っあー……間に合いましたわぁ……」
エルスは、視界の外で操作していたスマホをポイっと卓上に放りだした。どうやら、簡単な事情と所在地を伝えていたらしい。ファインプレーだ。
「弟子が遠足前みたいに興奮してなかなか寝なくて、ようやく寝たと思ったらこの連絡だもの。びっくりしたわよ」
ぼす、とヘルメットを座席に置く。
「まったく、なかなかお土産の返信が来ないから……また何か間違えたのかなーって……うふふ……。でも、違ったみたいで安心したわ」
シャキっと立ち直って、つかつかと修羅場に足を踏み入れる。
「――みんな、仲良くしなきゃ駄目でしょう」
……。
「、お」
……ハリーはポテトを取り落とし。エルスは硬直し。
「……お、おま」
……小山は諦観の笑みを浮かべつつも青筋を浮かべ。
「お前、が……」
……望とすずかと中野の三人の諍いは終結し、心は一つとなった。
「「「「「お前が言うなーーーーーー！！！！！」」」」」
……。
全く意図しない形で、場は治まった。計算づくという訳でもないだろう。
「……何よ、みんなして」
ずぞぞー……とコーラをストローで飲みながら、なのはがいじけて

いた。
「お姉さま、見事なお裁きでしたわ。さ、ポテトをどうぞ」
「ふんっ」
　エルスの差し出したポテトをもしゃもしゃと口に運ぶ。
「誰かにモノを言うときはね、自分のことは棚に上げて、高く高く上げて、上げたことさえも忘れておく程度が丁度いいのよ」
「はいっ、お姉さま！　心の片隅に留めておきますわ……！」
「『参考にします』の三歩くらい先を行く回答だなオイ……」
「ハリーうっさい。んで、リリコちゃんはもういいの？」
　顎をしゃくり、唐突に中野に話を振る。
「も、もういいの、って何ですか……」
「喧嘩。テーブルちゃぶ台返しにしてすずかの髪掴んで顔面に膝入れようとでも思っていたんでしょう？」
　なぜそこまで詳細に分析できるのか。
「見れば分かるわよ。んで、……すずかは特に抵抗せず顔面で受けようとしていたわね？」
「えっ」
　中野は、すずかの顔を見てしまう。
「……ぜーんぶお見通しかぁ」
　てへ、と可愛らしく舌を出す。
「すずかなら、打点だけずらしてノーダメージで受けられるでしょう。んで、派手に吹っ飛ぶフリでもして、リリコちゃん相手に、客観的に『被害者』として有利な状況を作って、改めて対話に持ち込もうとした」
「な……な……」
　中野は、わなわなと屈辱に震える。
「ナメてるんですか、あなたっ……!!」
「んー……まぁ、結果的に、わたしが煽っちゃった形だしね。一発くらい、殴られても良いかなーって思ってたよ？」
　殴られることも織り込み済みという。
「なんで」

と、すっかり蚊帳の外に追いやられていた望が、声を上げる。
「なんでアンタらはいちいちバイオレンスを挟まないと会話ができないの……？」
……ごもっともである。が、だんだんとなのはに毒されつつある面々の中で、一応はカタギに分類される望が話を進めることに、だれも異論は無かった。
「ほら、すずか座る！　えぇと、中野さんの前に!!」
「あらー」
腕を組むような形で、すずかを着席させる。
「交渉のテーブルに着かせる（物理）ってやつね」
「ぼっちシャラップ！」
「ぼ……」
我ながら上手いことを言ったわ、とほくそ笑んでいたなのはを撃墜がてら、ようやく対面する面々だった。
「あなたが、中野リリコさん？」
「そうですが、何か……」
今更名前の確認か、と拍子抜けをする。なんだかもう、喧嘩をする気力も無い。ハルカのようにそっと眠りにつきたい。ふて寝したい。
「――――いつも、ありがとうございます」
唐突だった。望が、テーブルに着かんばかりに深々と、頭を下げたのだ。
「え、え!?　なんですか!?」
意味不明で軽くパニクる中野。
「あぁすみません……その……今回の参加は、すずかの用事じゃなくて、本当は、わたしが、中野リリコさんに会いたいって頼んだからなんです」
驚愕の事実。では、あのリスクヘッジだとかも……
「それもあるよー」
「……そうですか」
一挙両得を狙ってのことだったらしい。
「……で、何です？　わたし、あなたのことなんて知りませんが」

「先週の、院内学級での読み聞かせボランティアのことです」
「……」
確かに、そういったことをした覚えはある。あるが……子供たちだれかの親族か何かだろうか。まぁ、さておき。
「イエ、ナンノコトヤラ……」
「なんで否定しちゃうかな……」
リリコなりに思うところがあり、知らぬ存ぜぬで通そうと思ったが、無理だった。
「わたし、父が医師で、」
「ペッ、選ばれし民が……！」
嫉妬心が暴発していた。かくいうリリコも大学教授夫妻の娘なのだが……あんな親は存在しないのと同義だ。
「いきなり毒づかないでよ！　……うちの父、人手不足の病院に、たまにヘルプで入ることがあって、お弁当を届けに行ったとき、たまたま見たの」
「……」
照れ半分に、聞き流す。
中野リリコは、院内学級での読み聞かせボランティアを自発的に行っている。本人は隠しているつもりだが……クラス内では公然の秘密というやつである。
アルバイトでも無かろうに、無報酬で、である。
「ボランティアさんって、皆がみんな、そういう訳じゃないけど……やっぱり、ルーチンワークというか、まぁ、無報酬だからかな？　どこか義務的にやっている人が多くて……」
難しいところだ。病院側としては、何らかのレクリエーションを行いたい。しかし、人でも時間も余裕が無い。ではボランティアとなると、望が述べた通りの現象が起きる。自己ＰＲのための、社会奉仕活動の実績が欲しいだけの集団もいた。とはいえ、結果としてレクリエーションが提供できているのだから。実費のみのほぼ無報酬で行ってくれているだけで、ありがたい。そうなりがちだ。
「子供たちも、どこか余所余所しくなっちゃってて……でも、中野さん

は違ったの。それに、一回こっきりじゃなくて、何回も」
「……そうでしょうか？」
リリコは……内心、あることがバレていないかどうか、非常にハラハラしているのだが、望に知る由も無い。
「うん、とっても素敵だったよ！　あの『かがみのおひめさま』って絵本！」
「ぐわぁーーー!!」
リリコが、テーブルに突っ伏した。
「……？　聞いたこと無いわね、それ」
なのはは、首をかしげる。そう、リリコが読み聞かせをクラスメイトにさえ秘密にしていたこと。望の感謝をはぐらかしてすっとぼけたこと。その理由とは……
「し、知ったな……！　わたしの黒歴史を……!!」
……そう。リリコ自作の絵本であった。ストーリーは、どこにでもいる少女（本当はかがみ王国の正当なる王位継承者だが訳あって庶民に里子に出されたという設定アリ）が、魔法の鏡で変身し、困っている人を助ける、といった、王道の魔法少女ものである。
まぁ、これといって恥ずかしがる要素は少ないと思うのだが……リリコにとって、それは知られることが非常に恥ずかしいものなのだ。
望の用事は、いちファンとして、感想を伝えたかったということだろうか？　否。
「つい先日、絵本を置き忘れていたから、届けに」
と、望がバッグからホチキスで止めたＡ３サイズの紙束を取り出し……
「見―せて」
……横合いから、すずかが掠め取る。
「ひぃいいいいいいいーーーーっ!!!?　見ないでぇーー!!」
一番見られたくない相手の手に。リリコはこれまでの人生で最も早く動き……しかし、日々の事務処理で培われた速読により、数秒で絵本の内容が詳らかにされた上、宙を舞う落ち葉のような謎の体術により、リリコの手は絵本を掴めない。

「ば、ばかにする気でしょうっ!?　こ、こんな、子供っぽい内容……!!」
　自作の絵本をネタにされ、周囲を威嚇するリリコ。しかし、すずかは、顎に手をやり、無言で何かを考え込んでいた。そして。
「これ出版しましょう」
　……言葉の意味をリリコが理解するまで、数秒を要した。
「……はァ!?」
　出版、と言ったのか。この、その辺で買った画用紙に、学校支給の画材で仕上げただけの、わずか１５ページほどの稚拙な絵本を。
「ナニをするって!?」
「出版です」
「こんな使い古された設定の絵本を!?　新手のいやがらせ!?」
「確かに、王道のストーリーです。これといって奇抜な設定や、精緻な技巧に彩られた作品ではありません」
「ぐっ……!　どうせ図書室で読んだ本での独学ですよ!　悪うございましたね!」
「ですが……胸を打つ。特にこの、主人公の変身口上。『なりたい自分に、いま変わろう!』というところ。とっても良いフレーズだと思いました」
「音読しないでよォーーー!!!　やだぁー!!!!」
　羞恥に悶えるリリコ。
「あ、すずかもそう思った!?　そうなのよ、わたしもそこがすっごい好きなの!!」
「どれどれ」「ほうほう」
　なのは、ハリー、エルスは、すずかの広げた絵本に揃って視線を落とす。
「見ないでぇ……!　お願いだからぁ……!」
　リリコは両手で顔を覆い、耳まで真っ赤になっている。
「院内学級の子たちの間で、『おひめさまごっこ』なんていう遊びが流行っているくらいなのよ」
　望が、フォローにもなっていないフォローをする。

「わ、笑えばいいでしょう……！　高校生にもなって、魔法少女ものなんて……！」
「……」
　つい先日、スクリーンにおいて魔法少女に仕立て上げられたばかりのなのはは何も言えなかった。
「返して……返してお願い……なんでも……なんでもしますからっ……！　出版（公開処刑）だけは……出版だけは勘弁してください……！」
「そう……何でもするのね？」
「し、しますぅ……!!」
　力関係が明確に決まっていた。
「では、してもらいましょう。
　――――入稿を」
「それだけは嫌だぁー!!」
「なんでもするって言ったわよね？」
「言ったけど！　確かに言ったけど！」
　もはや、リリコを弄って遊んでいるのではないかという有様だが……すずかは、割と本気だった。『売れる』という直感に従っているのだ。
「……わたし、好きだよ。リリコちゃんの絵本」
　むくり、と、小山の膝枕から大宮ハルカが覚醒した。
「ハルカちゃん……」
　目元をごしごしと擦り、寝ぼけた眼で、尚も続ける。
「……すっごく、好き。もっともっと、たくさんの人に、知ってもらえるなら……それは、とても素敵なことだと、思うわ」
「……でも、……それはぁ……」
「リリコちゃんは、どうしたいの？　趣味の描き物で、そこまでで終わって、本当にいいの？」
　先ほどの狂乱が嘘のように、慈愛に満ちた表情でリリコを諭す。
（（（（これが年の功ね／だな／ですわね））））
　……無礼な三人だった。
「……ホントは、すごく嬉しいし、お願いしたいって気持ちも、あ

るには、あるよ。いつか賞に応募しようって思ってた気持ちも、ある。だから、これは、渡りに船なんだと、思う……」
「うん」
「でも……これは、違うと思う。ズルだと思う。他の人たちは、まじめに賞を、そこからの出版を目指してるのに……」
「じゃあ、嫌なの？」
「……とりあえず満足いくまでクオリティを上げてから、」
「あー、それじゃあいつまで経っても完成しないねぇ」
すずかが、珍しく話に割って入った。
「満足のいくまで。それって、誰が判断するの？　自分？　自分の満足？　自分の不安が払拭されるまで？　それ、モノづくりで陥りやすい心理だけど、その『満足』が訪れることは永遠に無いんだよー」
「……!!　だから、これは趣味でいいんです！　どうせ、こんな子供だましし……！　わたしはもっと堅実な仕事に……！」
「――駄目だよ。許さない」
断言である。絶句するリリコに、すずかが続ける。
「だって……読みたくなっちゃったんだもの。この絵本を最初から、シリーズを通して。この段階でこの出来栄え。より良い画力が身に着いたら？　プロの作家の下で技術を学ばせたら？　……それが、『堅実』なんて、小さく纏まる方向へ進むために切り捨てられてしまったら？　……わたしは嫌だなぁ
あなたには、ぜひ、先行きの保障も無く、業界の将来性も不透明で、仕事の有無も不安定で、年収だって安定しない、ネットに心無い誹謗中傷が溢れかえって、見ず知らずの誰かに人格否定までされる修羅の道……出版業界に来てもらいます」
この原石を、小さく砕いてなるものかと。磨いて磨いて磨きぬいてみせる、と、身勝手な決意に満ちていた。それに、と。絵本をリリコに差し出す。
「子供を騙すのは、とっても大変なんだよ？」
絵本を受け取ったリリコは……押し黙ってしまった。

「リリコちゃん」
　ハルカが、リリコの肩を抱く。
「頑張ってみよう？　ね？」
　いっそ無責任な励ましである。だが……ハルカの言葉には、なぜか『そうしてみようかな』と思わせてしまう力があった。
「くっ……！　ハルカちゃんがそう言うなら……！」
「やるのね？」
　同意と取るや、すずかの瞳がキラリと輝いた。
「ではまず、出版ではなく学園の広報に載せましょう。早速今週からスタートで。原稿には＃２４とありましたから、最低でも２４話は連載できますね。週イチでも半年間の猶予……ヨシ！」
「ヨシじゃないが」
「来週からウチの出版社で抱えてるプロの下でアシスタント業務に就いて頂きます。これは学園公認のアルバイトとしますので、安心してください」
「ちっとも安心できない」
「ちなみにその作家さんのスケジュールは逼迫していまして、通常のアシスタント業務の三倍の仕事量が求められます。技術取得のため、半年間×三倍の仕事量で計１８か月分の詰め込み修行、みっちりとおしごとに励みましょう！」
「嫌だぁ」
「学園公認のアルバイトだからねぇ……？　――逃がさないよ」
「嫌だぁ！　やっぱやめるぅ!!」
　すっかり怯えてハルカの小さな背に隠れるリリコ。
「あの……大宮、さん……」
　目を覚ましたハルカに、望が恐る恐る話しかける。
「？　なにかな？」
　が、ハルカは不自然なほどにケロっとした様子だった。
「先ほどは、」
「何が？」
「えっ……？」

「何が？」
……冗談を言っている顔ではなかった。本当の本気で、大宮ハルカは、先ほどの狂乱を忘却していた。
かみ合わない二人をよそに、なのはとハリーが、肩を寄せてひそひそと話す。
「『棚に上げる』ってレベルじゃねーぞ、アレ」
「ハルカちゃん、アレができるのかー。すっごいなー」
「アレ、とは？」
エルスも寄ってきた。
「まぁ、主に対拷問の訓練を受けていると起きやすい現象なんだけど」
「どんな訓練だよ」
「話の腰を折るな。――頭の中で、特定の事柄に対する記憶や情報を、自分に最も都合が良いように改変してしまうのよ」
大宮ハルカは過去の経験から、そういった能力を自然と取得していたのだろう。
「やりきれねぇなぁ……」
「あら、いいじゃない」
頭をボリボリと掻くハリー。だが、なのはは笑う。
「――前を向くための能力、って感じがして」
辛い出来事を忘却し、前へ前へと進む。そう考えると、とても幸先がよいように思えるのだ。
「他人事では前向きになれるんだよな、お前……」
「あ〟？　喧嘩売ってるの？　いいわよ別に。出発前の景気づけに一発ヤっとく？」
「あ〟？　上等だコラ。なんならそこのデコメガネと2対1でも構わねぇぞオレはよぉ」
「あ〟？　持ち越しにしていた決着付けますの？　良いですわよ。お姉さま抜きでタイマンでも構わなくてよ？」
「オラァ！」「ンだてめぇ!!」「この野郎！」
……仲が良いのか悪いのか、ギャーギャーと互いの襟首やら袖やら髪の毛をぐいぐいと引っ張り合う三人。

「――みんな」
……そして、ハルカの一声に、ついピタリと動きを止めてしまう。
「――――仲良くしなきゃ、ダメよ？」
なのはが言ったことと、ほぼ同一の内容。無視して大乱闘スマッシュシスターズを開幕するのかと思いきや……
「命拾いしたわね……」「タイミングが悪かっただけだぜ……」「わたくしは何もしておりませんわ……」
捨て台詞を吐きながらも、静々と仲良く横並びに座る。
そう、ハルカの言葉には、謎の『そうしてみようかな』と思わせる力があった。
――――自分の記憶を改竄できる（無自覚の）能力。
――――『そうしてみようかな』と思わせる謎の説得力。

（……政治家に向いているのかしら？）
すずかは、またも巨大な原石を掘り出してしまった気分だった。
――政治の大宮。
彼女が望めば……そういった未来もあるのかもしれない。
「……あの、お客様方っ……!!」
全員すっかり忘れているが……ここはファミレス。公共の場である。深夜とはいえ、客もそこそこ居る……いや、居たのだが、この一団の大騒ぎに慄き、店内は貸し切り状態となっていた。
「し、失礼を承知で、申し上げるのですが……その……もう少し、お静かに、お願いできませんでしょうか……っ！　どうか、平に、平に……!!」
『店長』というプレートを胸に着けた男性が、土下座せんばかりに平身低頭する。毅然とした対応など、この武力集団に通じるわけもなく……といったところか。哀れ。
「――ご迷惑をおかけしました。」
学生たちの責任者として、すずかが頭を下げる。そして、懐から見たことも無い色合いのクレジットカードを……
「はい、撤収！　撤収するわよ！」

なのはの号令に従い、ぞろぞろとファミレスを後にする。うん、教育に悪いからね。
夜風はすっかり初夏のもの。寒いほどではない。
「で、お土産なにが良い？」
ようやく、なのはにとっての本題である。
「食べ物！」「酒！」「アクセ！」「本！」「写真！」
統一感まるで無い。
「わかったわ。何か饅頭か煎餅てきなアレね」
諦めも早い。
「ごめーん、遅くなっちゃった」
問題を解決し終えたすずかも、店を出てくる。少し気になって店内を覗き込むと、床にへたりこんで彫像のように固まる店長の姿が。哀れ。
「ねぇ大宮さん」
「はい？　何でしょう」
少し困惑した様子のハルカの手を、すずかが取る。
「今度は、初めから呼んでくれたら嬉しいです」
この定例会に。
言外に連絡先の交換を迫るすずかに対し、ハルカは、にっこりと笑い……
「――リリコちゃんに謝ってくれたら、いいですよ」
「……そう来るかー」
早速、すずか相手に取引を持ち掛けるのだった。記憶を改竄しているくせに、ことの起こりは正確に記憶し、取引に用いているあたり、実に将来有望である。
「そんじゃ、おやすみー」
新たな関係の始まりを見届けたなのはは、深夜の住宅街をバイクで走り去る。
（ところで）
ふと、疑問を覚える。
（――あんな夜中に、みんな揃って何をしていたのかしら？）

……ごくナチュラルに誘われていなかったことに気付かなかったことは、幸いである。

# ｖｉｖｉｄ編　２１話『　実録・策謀の魔女の悪しきたくらみ　～粉砕偏～　』

――……。お母さん、その子たち、だぁれ？

◆▪◆　◆　◆

いよいよ当日の朝が来た。数か月ぶりに移動船のターミナルまで来て……

「……すぅ、すぅ」

……彌茅は立ったまま寝ていた。無駄に器用である。

「彌茅。起きなさい、彌茅」

「はゥっ!?　お、起きてます、師匠(せんせい)!!」

「嘘おっしゃい……さてはあの後、また起きていましたね」

どうにも興奮していると思っていたが、ここまでとは。現在の時刻は０５：１５。早いと言えば早いが、彌茅となのはは毎朝５時には起きて鍛錬をしているのだから、早すぎるということは無いだろう。

「お、お待たせしました……!!」

と、四角いシルエットが近付いてきていた。

「……」

彌茅は言葉を失っていた。

「申し訳ありません。１５分前行動をしていたのですが、もうお揃いだなんて」

その四角いシルエットの正体は、リンネだった。ふんわりとした生地のよそ行きの服に、大きな黒いリボンが白い頭髪とのコントラストを生み出し、よく似合っている。なのだが……

「なんですかリンネさん、その箱は……」

そう、リンネは、『箱』を背負っていた。縦横キッチリ1メートルの箱、それを……三つ、縦に積んでいるのである。電光掲示板にぶつかりそうになるが、その箱を背負った状態のまま中腰になり、変形スク

ワットのように避けて見せる。箱が意外と軽いのか……と思いきや、足音がノシノシと鳴っているため、見かけ通りの重量があると思われる。規格外の筋力である。
「禁輸品のリストには抵触しないと思うのですが……えぇと、上から……一段目は食品です。乾燥食品メインで、そのままでも水で戻しても美味しく頂けるわが社の自慢の品です。二段目は衣類です。アパレル部門の戦略室が、新区における商品ＰＲのため、うんと持たせてくれまして……あ、三段目はただの重りです。気にしないでください」
「重り……？」「はい、重りですが……？」
　え？　え？　と、互いに首をひねる。
「……あー、とりあえず、そのジュウオウジャーのロボみたいな恰好じゃ乗れないから……荷物預けに行こうな……」
「はい、お兄さん」
　リンネには秀人が付き添い、集荷へ行く。
「師匠（せんせい）、リンネさんの戦闘訓練は、師兄（あにうえ）が行うのでしたね」
「そうよ。ああいったパワー偏重型の格闘なら、秀人さんか、その師の大家さんでしょう」
「……」
　彌茅とはまた別の方向に才能のあるリンネが、その道のスペシャリストたちに指導を受ける。彌茅は脅威と緊張を感じていた。
「追い抜かれないように頑張りなさい」
「はいっ！」
　人数分の（慈樹は乳幼児なので無料）券を買い、移動船の座席に腰を下ろす。さて、向こうでは誰が出迎えてくれるのか。まぁヴィヴィオと四葉はくるだろうが……
「レイジングハートにアイ、何か月も別々になるのなんて初めてですものね」
「そうだな……耳元が静かで良いんだが」
「もう……またそんなことを言うんだから。そういえば、彌茅には話だけはしていましたね……彌茅、彌茅？」

「すぴー……」
　座って気が抜けたのだろう。彌茅は変な寝息を立てながら寝落ちしていた。なのはが少し揺らすくらいでは起きる気配さえ無い。
「……これは駄目ね」
「おいリンネ……あー、こっちもだ」
「すぅー……」
　リンネはリンネで、お行儀よく靴を脱ぎ、シートの上で体育座りして眠っていた。
「どういう寝相よ、コレ……」
「あぁ、これはな。俺らの出身施設では、基本的に寝所で足を伸ばせるスペースが殆ど無くて、足を伸ばして寝るのはカースト上位の特権だったから、自然とこういう恰好で寝る習慣が」「あぁぁぁぁ、そういう話は聞きたくないー……」「……でも俺は雑魚寝さえ許されなかったんだぜ。個室に隔離されてて」「重いんだよー!!」
　良く考えてみれば、秀人はリンネの過去の内情を、実感として知っているのだ。指導者としては実に適任かもしれない。
「まず現地での行動予定だけど」
「二泊三日の二日目がヴィヴィオの試合参観」
「初日……つまり今日と、最終日の夕方の船に乗るまでの間がフリーだ」
「面倒ごとは初日に終わらせちゃいましょう。私は彌茅を連れてヴィヴィオと合流するけど……」「俺は顔合わせだけして、アイとリンネを連れてフーカ・レヴェントンの捜索」「ん。ことの顛末は一号生筆頭のヴィヴィオと、指導員のスバル、ティアナ、セリカの三羽烏に聞けばだいたい分かるから、情報送るね」「んで首根っこを押さえたら、学校に連れ戻すって感じで行こう」
　ここは息の合った夫婦感を見せる二人であった。
　ハイジャックが発生する……といった、ハリウッド的展開も無い平和な移動を終えると、一同は新区のターミナルへと到着した。片道三時間に少し足りない程度。
「うぅ、寝てしまいました……」

「昨晩、寝る前にスイム１０ｋｍはやりすぎました……」
　彌茅とリンネは、すっかりぐっすり眠っていたことを少し恥じらっていた。
「それじゃあまずは二人とも。二人は初上陸だから、そこの情報センターで義務講習を受けてくるように。２０分の短いビデオです」
「「はい！」」
　彌茅とリンネは、競い合うように情報センターへ駈け込んでいった。

「……」
　そして、いざ弟子たちが居なくなり、改めて緊張しているのが一人……
「……」
　なのは、顔が怖い。
「何で娘と会うのに緊張する必要があるんだよ」
「……だって、久しぶりだし」
「メッセージのやりとりはしてただろ」
「それとこれは別」
「でも、そんなに強張っていたらヴィヴィオが怯えるぞ。今もなんか顔怖いし」
「き、緊張なんてしてないし……！　……でもちょっとお腹痛いからトイレ行ってくる……」
　……嘘や冗談ではなくマジでちょっと痛いのだろう。なのはは腹を撫でながらターミナル東側のトイレへ向かっていった。
◆▪◆　◆　◆
「到着ー。いえー」
　ヴィヴィオと四葉、そしてアイがターミナルに到着した。出迎えのためであるが、アイ同伴である。その傍らに、宝玉の状態で浮遊するレイジングハートも控えていた。人間形態でいることを好むアイがそうしているのは自然なことなのだが、レイジングハートがそうしているのは……

『ぐぬぬ……じゃんけんで負けなければ……』
「勝った方が勝ちなの。勝てば官軍なの」
人数制限があり、人間形態となれるのはどちらか片方……となった時、そうなったのである。
「わぁー、お姉ちゃんと会うの久しぶり。楽しみだなぁ」
浮かれてほわほわとしている四葉。そして、その手を握るヴィヴィオはというと。
「……」
ヴィヴィオ、顔が怖い。
「何で親と会うのに緊張する必要があるの」
「……だって、久しぶりだし」
「メッセージのやりとりはしていたでしょう」
「それとこれは別」
「でも、そんなに強張っていたらお姉ちゃんびっくりしちゃう。今もなんか顔怖いし」
「き、緊張なんてしてないし……！　……でもちょっとお腹痛いからトイレ行ってくる……」
……嘘や冗談ではなくマジでちょっと痛いのだろう。ヴィヴィオは腹を撫でながらターミナル西側のトイレへ向かっていった。

ヴィヴィオは、トイレに入り……個室ではなく、掃除用具入れに直行した。
（見―っけ）
そこにあったのは、簡素な段ボール箱。中身は……開けたら爆発する類の爆弾。
（こんな薬品の匂いプンプンさせておいて、バレないと思ったのかな？）
学校で習った、揮発性と引火性が極めて高く、地域によっては航空燃料にも使用される類の薬品である。
（ここでドカンしたら、配管を伝ってターミナル全体が火の海になる感じ）

時限装置のようなものは無く、アナログな受信機のみ。
（無線起爆するやつだ。ってことは……）
念話の応用し、近辺から音声を拾う。
――「西側、セット完了しました」
――「良し。東側も完了」
――「情報センターも同様にセット完了」
――「これで……良いのですね」
――「あぁ、これで良い。新区などと、過剰な文化の融和を認めるわけにはいかないのだから」
――「ええ、まったくその通り。我らの神が喜ぶ筈も無く」
――「浄化。浄化である。我らは神の使徒として、この命を共に燃やそう」
――「決行は『バヂジ礼拝』の時刻に合わせて」
――「そうだ。我らは神のもとへ導かれるのだ」
――「我ら三位一体となり、神聖なるバヂジの時刻に」

「もしもーし」

ゴンゴン、と。唯一ドアの閉まった個室のドアをガラ悪く爪先で蹴る。
「爆弾魔さーん。こーんにーちはー」

――バガァンッ!!

ドアを破壊し、一見、どこにでもいそうない地味な恰好の女が、湾曲した刃をもつ剣を手に、飛び掛かってきた。
「その剣……あぁ、あちらの過激派の方でしたか」
指先で剣を掴み止め、ボディブロー。
「バヂジ礼拝……んー、あと五分くらいですね」
「神を称えよ……神を、称えよ!!」
「あぁ、おクスリで痛み飛ばしてるのか……礼拝の時刻は秒単位で正

確だから、先んじて爆破はしないだろうけど……一応、貰っておきました」
ボディブローのついでに、起爆装置となる携帯端末を抜き取る。
「えい」
――ベキボキッ
握力任せに両肩を粉砕。続いて、膝蹴りをかまして大腿骨頚部を粉砕する。
「おーしまい、っと」
――パカァンッ！
殴り飛ばし……飛ばした勢いでホールまで吹っ飛ばす。
「あ、このひと爆弾魔です。あとよろしく」
駆けつけてきた警備員に投げてよこす。
「せ、聖王陛下!?」
「お怪我は……、あるわけないですよね……」
「これは供物として貰っておきますね。まぁナマクラだけど、趣があるし」
用具入れの中、爆弾の配線を、奪った刃物で学校で習った通りに切断し無力化する。
「東側トイレ、情報センターに同様の爆発物があります」
「はい、そちらでも同様に騒ぎがあり、いま人員を向かわせています！」
「騒ぎ……あぁ、それならもう大丈夫でしょう」
「はい……？」
「隠れている実行犯が騒いでいる……ということは」

◆・◆　◆　◆

「ぐへぇ……」
……壁面の窓ガラスごと蹴り抜かれたスーツ姿の男が、砕けたガラス片の海となった床に転がっている。蹴りの威力と、窓ガラスに熱い抱擁をかました衝撃で昏倒したようだ。

犯人の得物だった刃物をぷらぷらと手元で弄び、なのはがぺらぺらと上機嫌に喋る。
「そんな薬品の匂いプンプンさせて、どういうつもり？　あなたの組織は、マトモな工作員が居ないわねー。さてはニワカ過激派ね。なってないわー」
過激派ガチ勢からのお言葉である。
「いい？　爆発物はね、気付かれた時点で起爆しなさい。最大限の効果が得られなくとも、陽動に使えるわ。その隙に残りを起爆させて、ベストではなくベターな結果を目指しなさい」
どっちが悪役だ、と言わんばかりの言動である。
「コレは授業料として貰っていくわ。まぁナマクラだけど、趣があるわ」
シャムシールをひゅんひゅんとペン回しの要領で回し、ベルトに差し込む。
爆弾の配線をテキトーにチョキチョキと切って無効化し、こちらは一件落着である。手慣れている。
「情報センターって言っていたわね、確か。……彌茅と、リンネが」
思わず駆け出しそうになるが、ぐっと堪える。
「これも経験……経験だから、ね……」
一から十まで助けるのは、違うと思った。親と子ではなく、師匠と弟子なのだから。爆発物への対応術も、座学ではあるが教えている。彌茅は物覚えの良い賢い娘だ。
「……でもちょっとだけ、いざとなれば助けられる位置で待機しましょう」
そそくさー、とその場を離れる。

◆・◆　◆　◆

職員が声を上げる。
「第一回は、間もなく五分ほど……午前八時からです。皆さん、お手元に用紙とペンはありますかー？」

行儀良く横並びしていた彌茅とリンネは、手元にＡ４サイズの紙と、ボールペンが置かれていることをしっかりと確認した。
義務講習後に、講習を受けたことを証明するための簡単な署名だけだ。
「……？」
が、彌茅はどうにも、落ち着かない様子だった。眠気が残っている、という訳ではない。ただ、なんというか……胸のあたりがムカムカとするのだ。
（……？　なんでしょう、この違和感）
悪い予感というものか。通常であれば、気のせい、ですべてスルーしてしまう程度のもの。しかし、彌茅は……
――『自身の抱いた違和感を信じなさい』
……師の言葉を、優先した。講習室には、彌茅とリンネ、そして、数人の男女がまばらに腰掛けている。他人同士だ。自由席であれば、バラけるのが当然。
――違う。
職員はプロジェクターの確認を行っている。電源、ケーブルの接続、本体の状態を入念に確認している。
――違う。
どこだ？　違和感の正体は、どこにある？
「……彌茅さん、どうしたんですか？　キョロキョロして」
リンネの声も、どこか遠くに聞こえる。
リンネは、大荷物を除いた、シンプルな旅行鞄を足元に置いている。
そう、足元に……
「!!」
講習室の中央付近。リュックサックを膝に抱えるようにしている男性。
――「はい、では、」
彼の手は、卓上ではなく、鞄の中に不自然に差し込まれていて、
――「講習ビデオのほうを、」
職員が、ビデオ再生のスイッチを押そうとする。

全員の視線が、スクリーンに集まる。
男の右手が、手首から先が、親指が、何らかの動きを、
唇の端が、にぃ、と、歪む。自らの手元には、紙とペン。
「――――そこぉッ!!」
――――ザクゥッ!!!
……彌茅の投擲したペンが、男の肩口に深々と突き刺さった。
「ぎゃあっ!!?」
反射的に、腕を跳ね上げる。腕の先には、何も握られていない。
呆気にとられる周囲。彌茅は走る。相手は成人男性。殴る、蹴るといった当身では、効果は薄い。
「えぇぇいっ!!」
なので、身体でぶつかっていく。
「な、なんだこのガキ!?」
殴ろうと腕を振り回す。その腕を十字に固める。
――メキメキメキメキ……!!
「ぎゃあああああ……!!」
動きを封じた。それはいい。しかし……口が開いたリュックサックの中で、粗末な液晶が刻々とカウントを刻んでいる。
「リンネさん！　リュックサック！　爆発物！」
「はい!!」
リンネもまた、見事に連携をした。旅行鞄を、リュックサックの上に叩きつけるようにして被せる。
――ベキベキベキッ!!!
その超筋力で、床に固定された机を引きちぎり、更に被せる。
「机いっこ、こっちに！」「はい！」
机を横倒しに、遮蔽物を作る。防げるかどうかは五分五分。そして……
――――……!!
ぎゅっと瞑っていた目を、恐る恐る開く。爆発音は、しなかった。

「ふ、不発……？」
否。
――ジュゥウウウウッ……
蒼炎の猛禽が、爆弾を蒸発させていた。理屈不明の問答無用……神の炎である。
「――そういう賭けはしない方が良い」
秀人が差し出した手に猛禽が戻り、吸収されると……後には何も残らなかった。
「バクチに掛けるのは、八方手を尽くしてからでいい。きっと、なのはもそう言うぞ」
「は、はい……」
「は、放せぇぇぇぇ……！　礼拝の、礼拝の時刻が過ぎてしまうぅぅぅ……!!」
彌茅とリンネ、二人に関節を折れる寸前で固定されている犯人が呻く。
「あと、躊躇せず折れ」
ぐ……と、二人の関節技に軽く力を掛ける。
――ビキィッ……!!
それが最後の一押しとなり……肉体が、破断する。
「!!　っぎゃぁあ「うるさいな」
――バコンッ!!
踏みつけ。顔面が床に埋まった犯人が、ようやく静まった。
「おっし、解決だ」
ぼふぼふ、と彌茅とリンネの頭を乱暴に撫でる。
「彌茅の講評はなのはに任せるとして……あー、リンネ。平気か？」
「はい、お兄さん」
リンネは、意外とケロっとしていた。まぁ、物心つく前から筋金入りの悪意の坩堝で過ごしていたのだ。耐性も付こうというもの。
「彌茅、リンネ」
そこへ、タイミングを計っていたようになのはが現れる。
「師匠（せんせい）！」

彌茅がピシっと姿勢を正す。なのはは、彌茅をじっと見降ろす。現場の状況を一目で理解し、彌茅とリンネの対応を評価する。
「二人合わせて……８０点、といったところですね。ギリ合格です」
「はちじゅう……」
彌茅は、少ししょぼんとしていた。満点を目指していたのだろう。ギリ合格、それも、二人合わせて。
「精進します」
「よろしい」
なのはは努めて厳しめの表情をしながら、彌茅の艶のある髪の毛を撫でる。
「お父さん！　お母さん!!」
情報センター入口ドア……が、かつて存在していた位置から、ヴィヴィオが顔を覗かせた。
「！　ヴィヴィオ！」
なのはもヴィヴィオも、軽めの運動をしたおかげで緊張がほぐれたのだろう。
「久しぶりー!!」「久し、……」
ぎゅう、とハグをする……寸前だった。
「――……。お母さん、その子たち、だぁれ？」
ヴィヴィオの目は、背後の彌茅とリンネを捉えていた。
「っとっとっと……」
「ねぇお母さん、その子たち、だれ？　ねぇ？」
ハグをスカり、たたらを踏むなのはの背をヴィヴィオが掴んで引き戻す。
「あぁ、黒いのが彌茅で、白いのがリンネ」
「みかや、りんね……？　あぁ、名前はわかったんだけど、そうじゃなくて……」
どこかもどかしそうな様子。なのはは、そういえば手紙を送る前のタイミングでウチに来たんだった……と、今更思い出したのだった。
「彌茅は私の弟子。リンネは秀人さんの弟子よ」
「弟子ぃ……？　……ふぅーん、へぇー……」

じろじろと、遠慮なく二人を眺めて回す。
「――お初にお目にかかります」
まず先行したのは、躾の行き届いた彌茅だった。
「高町彌茅と申します。なのは師匠(せんせい)の弟子として、入門いたしました。よろしくお願いいたします」
「高町ぃ？　……なんでお祖母ちゃんの苗字？」
「こら」
質問を重ねようとするヴィヴィオの頭を、なのはの手が撫でる。
「ヴィヴィオも挨拶」
「……はぁい」
ヴィヴィオは、いったんアレコレの感情を飲み込む。
「――聖王・吾妻ヴィヴィオです。彌茅さん、リンネさん、どうぞよろしく」
笑顔には笑顔なのだが……両親や身内に向けるものではなく、どこかよそ行きの笑顔だった。
「お姉ちゃ～ん、秀人さ～ん!!」
遅れに遅れ、四葉たちが現れる。
「四葉～！」
「お姉ちゃ～ん！」
姉妹の抱擁……と思いきや、実は四葉はドサクサに紛れて秀人に抱き着こうとしており、なのははそれを阻止したのだ。
「四葉、元気そうで良かったわ……!!」
「お、お姉ちゃんこそ……!!」
膂力で勝るなのはが、抱擁というにはいささか物騒なチョークホールドを極めようとしており、日々、ヴィヴィオの腕力に振り回されることで場慣れをした四葉はそれを蛇のような動きで回避している。
無駄に高度な組手となっていた。
「まーすたー。会いたかったー」
……ちゃっかりとアイが抜け駆け、秀人の首に手をまわして抱き着いていた。
「『あーーーーーーー!!!!』」

なのは、四葉、そしてレイジングハートが、同時に声を上げる。
「ねぇねぇ、師匠ってどういう意味―？　お母さんに鍛えられてるってことは、強いんだよねー？」
「はい。師匠は、師匠です。わたしの尊敬する師であり、目標とする人物、という意味でそう呼ばせていただいております。強さに関しては、問題に対しての解決能力の値であるため、コレといった定義はしないよう、指導を受けておりますので、ご返答できかねます。申し訳ありません」
「へぇー。それじゃーさぁ、私と戦ってみる？」
「申し訳ありません。今は、私闘を行うことは目的ではありません」
「そっかぁ……それじゃあ、いつ戦る？　明日、私の学校行事があるんだけど、ウォーミングアップにはなるかなぁ？」
「申し訳ありません。まず、目下の目的があり、そちらが達成されるまでは、」
「ヴィヴィオさん！」
ずぅっと黙っていたリンネが、ぐわっ、と、会話に加わる。
黙っていた……とはいっても、引っ込んでいたわけではない。異常に爛々とした、ネコ科の肉食獣のような目をして、ヴィヴィオをロックオンしていたのである。
「――わたしと戦りましょう!!　いま！　ここでもいいです!!」
上気した顔。本気だ、と、彌茅は悟った。考えられる理由は二つ。一つは、先ほどの不審者との戦闘で、気分が高揚しているということ。もう一つは……
――全力で遊んでも壊れないオモチャを、見つけたから。
「構いませんよ。来なさい」
「はい……！　行きます……！」
のし、のし、とヴィヴィオに向かって歩を進めるリンネ。
（止めねば）
デンジャラス＆バイオレンスなライバルの行動を、どうにか止める手段を頭の中で模索する。
「お前らは暴力以外のコミュニケーションを知らんのか……」

「秀人さんに言われたくないよ」「秀人さんには言われたくないわねぇ」「ますたーには言われたくないの」『秀人には言われたくありませんね』
「フルボッコだな!?」
全方位ツッコミを喰らい、秀人は少し涙目だった。しかし、大体の相手とは肉体言語で絆を育んできた実績から、説得力は無かった。
「フーカ・レヴェントンを探すんじゃなかったのか?」
「はっ、そ、そうでした!」
目の前のお楽しみよりも、本来の目的だ。
「あなた、戦うの結構好きですね」
「はいっ!」
なのはの何の気なしの指摘に、リンネは、イキイキとした表情で答えた。
「なんかこう……スイッチが入ると言うか、興奮すると、頭の芯の方がシュワーってなって、心がドキドキワクワクしませんか?」
……完全なバトルジャンキー脳である。が、秀人にもなのはにも、そういう憶えがあるため、深く追及は出来なかった。
「……はぁ。フーカ・レヴェントンの大体の居場所はもう掴んでるよ。はいこれ」
ポケットから折り畳んだ紙を取り出し、秀人に渡す。
「おう、用意が良いな。……しかし、なんで回収しないんだ? 寮を脱走して外泊なんて、大事だろう」
「E組の人たちって、そういう人多いから……」
大変なんだよー、とヴィヴィオが苦笑するが、その実B組とは、ヴィヴィオやその他のヤバい面々が各々で目星をつけ、『おともだち』と称して合法的に拉致ってきた被害者の集まりのようなクラスである。主にミウラとか、ジークリンデとか。そりゃあ逃げる。
「ま、たまにはガス抜きは必要でしょう? 看守……じゃなくて、寮母さんを倒せるライン超えてるなら、外でも問題なく生きていけるだろうし。行き倒れるか、単位がヤバそうになってきたら回収すればオッケーだよ」

「なんだろうな……昔カントクと一緒に捕まってたタコ部屋を思い出すんだよなぁ……」
　秀人が遠い目をする。顔も知らないＢ組の面々に、同情しか湧かなかった。
「まぁ、探す手間が減ったのはありがたい。んじゃ、俺とリンネで、」
「アイもいっしょ!!」「はいはい……」
　背中に乗ってくるアイを適当に運びながら、紙に目を落とす。番地が書かれているほか、潜伏先と思われる人物の名前があった。
「――『アインハルト・ストラトス』」

◆・◆　◆　◆　時は、少々遡る。
「だらぁあああああーーーッ!!」
　ポニーテールを翻し、全身を回転させた渾身のボディブローが目の前の巨体に突き刺さる。
「ごふぅっ……!!　み、見事なりぃ……!!」
　ズシン、と地響きを立て、身長と体重がイコールみたいな巨体が沈む。
「こ、これで、ワシは自由じゃ……!!」
　這う這うの体で、監獄と同義の学生寮を脱走する少女……フーカ・レヴェントン。
（冗談じゃなか！　あの悪魔みたいな女……！　リンネとお別れじゃと!?　ワシがついててやらにゃ、リンネがまたイジメられてまう！　こんだらブタ箱、とっととオサラバじゃ！　……まぁメシは美味かったがの！）
　この学園に運び込まれて数か月。当初は右も左も分からなかったフーカだったが、傷が癒え、貧相でガリガリだった身体に相応の肉が付いた頃、最初の脱走を企てたが、失敗。単純に戦闘力が足りていなかったのだ。
　さらに数か月。『ケサン・ピクニック』なる、遅れて入学したフーカにとっては初の、他の目が死んだクラスメイトたちにとっては二度目の強化合宿が行われることになり、更に脱出計画が遅れてしまった。

脱走を企てては寮母にボコられ、授業中に校舎から脱走すれば教師に捕縛され……ついに、いま。
（――――ワシは、自由じゃ!!）
外の大地を、踏みしめる。
「くぅっ……感無量じゃ……!!」
感涙。しかし、追手が来る可能性がある以上、長居は無用だ。
「じゃあの、クソッタレな我が学び舎!!」
自由を満喫するフーカ。
「ねぇヴィヴィオ―、あれ、冥がつかまえよっかー？」
「んー？　……あぁ、良いんじゃない？　路銀が尽きたら行き倒れるから、その時に捕まえた方が効率良いよ」
……掌の中で転がされているとも知らずに。
実際、二日で行き詰った。
「か、金が無い……!!」
持ち出せた金など、たかが知れている。宿は野宿で良いとしても、食料を調達するたびに目減りし、あっというまに尽きた。
「金が無いのは死んでいるのと一緒とは、よく言ったものじゃ……」
ぐぅ、と、腹の虫が鳴る。
「！　そうじゃ、働けばカネになる!!」
当たり前の発想に今更気付く。しかし。
――え、仕事かい？　……そうだなぁ、学校でちゃんと勉強をすることが、君の仕事だと思うよ。
――きみ、いくつ？　そっかぁ、学校が一番楽しい年ごろだね。働くことはいつでも出来るから、今は学校を楽しんだ方が良いよ。通報とかはしないからね。
――ぐへへ、お嬢ちゃん、仕事が欲しいのかい？　ぐへへ、そういうことは、学校の先生に相談するんだよぉ……ぐへへ、大人になったらまたおいでぇ……
「ぐぬぬ……世の中は世知辛いのう……!!」
とてもいい人ばかりだったような気もするが。
うんうんと頭を悩ませていると、また腹の虫が鳴った。

「あーあ、生きていくのは大変じゃ……」
……そして、はたと気付く。
「って、違ぁあああああう!!　リンネ！　ワシはリンネを探しに行くんじゃった!!」
喰い詰めたあまり、すっかり忘れてしまっていた。頭の容量はそこまで大きくはないようだ。
「……っていうか、ここはどこじゃ!!?」
右往左往するフーカ。いかに腕っぷしが強かろうと、まだまだ子供である。
「あー、もー、わけわからん……」
途方に暮れ、天を仰ぐ。
『ふふーん、ふふーん、妾は自由なのだー♪　フリーダーム♪』
……見上げた先に、半透明の少女がふよふよ浮いていた。
『翼は無いけどー、空だって飛べちゃうのだー♪』
（……今更驚かんぞ、ワシは。ヒトダマが空飛ぶくらい何じゃ）
非常識には慣らされていた。まぁ、放っておけばどこかへ行くだろう、と、ぼうっと眺める。
『妾は自由な―、聖王ダキニさまー、なのだー♪』
（聖王ぅ……？　あぁ、あのC組の大首領の親戚か……）
しかしまぁ、ふよふよと実に呑気そうだ。いい気なものだ。
『自由になったは良いものの―……依り代が無ければ塵と消える定めー……なのだー……あはは……楽しい余生であったのぅ……』
（大事じゃろうがっ!!?）
がばっと跳ね起きる。
『しくしく……イキり散らかして飛び出した結果がこのザマなのだ……妾、生前からずっと、こんなんばっかりだ……』
（……わかる）
とてもヒトゴトとは思えない。ヒトダマだけど。
『なんか策謀の魔女とか言われなき悪名貰ってるし……領地と領民を守るために頑張っただけなのに……しくしく、もうやだ死のう……あ、とっくに死んどった。アハハ』

「お、おぉい……そこなヒトダマよう……」
……とっても声を掛けづらい。しかし、目の前で消えられては目覚めが悪すぎる。
『あぁん？　なんだ、ヒトが末期を噛みしめとるときに無粋な……』
振り向いたヒトダマは、半透明ながら、少女の輪郭をしていた。
『……っていうかお主、妾が見えるのか？』
「そりゃあ、まぁ……目立つじゃろ」
しかし。
――おい、あの子……ずっと独り言をブツブツと……
――まだ子供じゃないか。可哀そうに……
――あの制服……あぁ、学園の子だ。とりあえず通報して保護しなきゃ
……どうやら、目の前のヒトダマ少女の姿は、フーカにしか見えていないようだった。それどころか、すっかり不審者というか、頭が可哀そうな子扱いだった。しかも通報寸前。
「に、逃げるぞ！」
『あいあい』
スタコラサッサと、その場を後にする。
「はぁ……走って余計に腹が減った……」
どうにか腰を落ち着ける。
『しっかし、妾が見えるとはビックリだ。血縁でもない限り、よっぽど共鳴せんと、認識されん筈だが……おぬし、もしかして聖王の血族だったりする？』
「ンなわけなかろうが。ちょっと名前が変わってるだけの日本人じゃ。少なくとも国籍の上ではな。血縁は知らん。縁者もおらん。みなしごってヤツじゃ」
『……ぐすっ。可哀そうにのう……親が恋しかろうに……』
隣にやってきて、フーカの肩を抱くようなしぐさを見せるヒトダマ。
「憐れむな!!」
振り払おうにも、実体が無いのだから叶わない。

『ほーん……お主も家出してきたのか』
接触により読まれたらしい。
「!!　何で分かった!?　……っつーか家出じゃなかっ!!」
『なるほどなるほど……イキって出奔したものの、食うに困って行き詰る……お主は妾か？　こりゃ共鳴するわ。他人事とは思えんのう……』
「知るか！」
『食うに困らん環境があるのだったら、帰れば良かろうに。その友も、良いように処されているのであろう？　急いで見つけんでも……』
「そういうっ……!!」
そういう問題じゃない。と言いかけ、やめた。
「……」
『お主はほんっと妾に似ておるのー』
ぶすくれるフーカに、少女にしか見えないヒトダマが語る。
『素直になれい』
はいそうですかと素直になってたまるか。余計に頑なになるフーカ。
『年長者からの警告は素直に聞け。それができずに、妾は寂しい思いをしたぞ』
「寂しい……か。」
自身の感情の正体が、ようやく分かった。
自分は、親友と離れ離れになって、寂しいのだ。
「……」
『まぁ、聞いて行け。年寄の昔話だ』
消滅間近というヒトダマが、遺言のように語り始める。
――むかーしむかし、その昔。
――古代の王朝に、ひとりの女の子がいたそうな。
――武芸はクソザコナメクジ、知略はスカポンタン。
――まぁ、どうあっても戦乱の世に王位を継ぐ器では無かった。王族でなければ、即、口減らしに選ばれておっただろうな。国は兄の一人が継ぐと決まっておった。

――長所と言えば、たった一つ。
――他人の『求めるもの』を、的確に見抜く力だった。
――その能力に気が付いたのは、敵国に攻め入られ、城が攻め落とされる間際。
――なんと敵国の大将は、わが母を見初めておったのだ。
――あぁ、こっからちと不愉快になるぞ。
――うっかり口を滑らせた結果……
――母は、敵国に渡された。父の助命、領民の命、領地の割譲を三割にまで減免される代わりに。
――父は心を病んだ。その戦いで、兄を含む武芸に秀でた勇猛な血族は絶えてしまってのう……仕方が無く、その少女が、なし崩しに、消去法で、誰からも歓迎されず、王位を継ぐことになってしまったのだ。
――日がな一日、城の蔵書を読んでいるだけの穀潰しが、のう……
――別に、歓迎されないことも、将軍が実質的に国を治めることも、生きたお人形として王座に据えられているだけというのも、別に構わんかったよ。
――ただ、『母を売った鬼子』と、城の兵士や領民にまで広まっておるのだけは、辛かった。
――少女はポンコツダメ王族じゃったが、人並みに両親や領民のことは愛しておったし、また愛されたいとも思っておったからのう。
――だから、母を取り戻そうと頑張った。
――まずは将軍を篭絡した。
「そっからおかしいじゃろ！」
『黙って聞けい！　まだ折り返し地点じゃ！』
――鉄面皮の奥底に隠した、人間だれしもが持っている卑しい欲望を、バラしてやろうかとチラつかせてのう
――次に、重臣たち。一度、要領を掴んでしまえば、あとはただの作業だ。
――気が付けば、少女は名実ともに女王に成っておったよ。
――希代の毒婦、策謀の魔女としてな。
――けれど、少女は信じておった。

――頑張って頑張って、敵国と渡り合えば……母を取り戻せる。父の心も晴れる。親子に戻れる、とな。
――敵国と対等となるため、隣国を併呑し、その隣、その隣まで……
――ここまでで、１０年程度であったな。我ながら快進撃だったと思うぞ。
――英雄譚の一つも作られるかと思ったが、伝わったのは『策謀の魔女』の悪名のみ。
――ま、どうでも良い話だ。
――そうして、……ついに、敵国との戦が始まった。
――将軍も、兵たちも、領地も領民も、何もかもを限界まで使い潰し……ついに、和平交渉にこぎつけた。
――何やら、敵国にもお家騒動があり、情勢がガタガタの良いタイミングだったのも幸いした。
――でな、この話のオチなんじゃが……
――母は、敵国の王と、仲睦まじく愛を育んでおったよ。
――強き王、優しき王妃。その愛の伝記を目にしたとき、どうせプロパガンダと信じないでおった。
――だからまぁ……その……こたえたよ、流石にな。
――だって、母は少女を……妾を、憎しみの目で睨んでおるんだもの。
――『鬼子め』、と。併呑してきた諸国から受けたのと同じ誹りを、母から受けるとはな……
――だから最後に、母が『求めているもの』を、渡したよ。
――『貧乏な小国に戻るくらいなら、大国の王妃として華々しく散りたい』。
――……もう、どーでも良かった。
――だって、父上は幽閉の牢で、とっくに自害しておったし。
――母を殺したのが、七つ目の国。そこでお終い。
――倒したと思った敵国の人質がクーデターを起こし、最強の聖王を名乗るオリヴィエなる新興勢力が生まれたそうだが……もう、国を治める気力は、無くなっておった。

――妾は、犠牲を出しすぎたという名目で、自身を裁判に掛け、全ての罪業を負い、毒を含んで果てた。
――少女の人生は、それで終わり。
『……まぁ、お主までそうなるとは言ってはおらん。だがな、こうして二度目の生（仮）を受け、『座』にて他の王と言葉を交わすようになってもな、思うのだ。
あのとき、『父上と母上を殺さないで』と、子供らしく素直に泣いて縋りつけば、王位も国も自由も無かったかもしれんが、それでも、大事な人と一緒に過ごせたのではないか、とな』
「……」
『だからのう、死に際の年寄から最後の助言だ。素直になれい』
「お前、」
『ダキニ。聖王ダキニだ。何やらご利益と意味のある名らしいぞ』
「ケッタイな名前じゃのう」
『お主には言われたくないわ』
「で、ダキニ。どうするんじゃ、これから。お前こそ、帰る場所があるような口ぶりじゃったろう」
『……気まずい』
「……は？」
『今更、どんなツラをして座に帰ればいいのか、分からん』
「はぁあああああ!!?　ワシにさんっざん年上風吹かせておいてなんじゃそりゃあ!?」
『うっさいわー！　とくに、年の近いオリヴィエに、ちくちくとイヤミ言われるのが想像できるのだー！　やぁっと口うるさい妹分から逃げられたのだ！　この自由を手放してたまるかー！』
「でも消えるんじゃろ」
『うぐぅ……!!　今更になって命が惜しくなってきた……!!　死んでるけどな！』
「死生観ガバガバジョークやめんか！」
『うぅう、消えたくないのだー……でも帰りたくないのだー……』
「……」

なんて仕方のないやつ。フーカは何だかんだで、他者への優しさが強い少女だった。そうでなければ、縁もゆかりもないリンネを、身体を張って守るようなことなどしない。するメリットが無い。

『あぁ、消える……時間切れだ……』

ヒトダマが、すぅっ……と、薄くなっていく。

「お、おい……!!」

『最後に、楽しかったぞ……フーカよ。生まれて初めて、友が出来たような気分であった。……死んでるけど……妾の可愛いヴィヴィオに……あとついでのついでに、オリヴィエにも、よろしく伝えてくれい……』

「あーもー、あーもー……!!」

見る見るうちに、薄くなっていく。

また、失うのか。夕方からの長い付き合いがある相手なのに。リンネが連れ去られた、あの日のように。

考えろ、考えろ。無い頭を絞り出せ。

――依り代が無ければ。

――よほど共鳴しなければ

――妾に似ておるのー

――死んどるけど……

ジョークの印象が強すぎる。

「!!　そうじゃ！」

『うぅぅ……もっとシャバを満喫したかった……ポテチとかダブルチーズバーガーとかマシマシラーメンとか食べてみたかった……蒸したイモとかしなびた葉っぱとかじゃなくて、豊かな食生活を送りたかった……』

俗っぽすぎる未練を見せながら、空気に溶けていくダキニを、フーカが抱き留める。

「ダキニ！　ワシが、お前の依り代……？　っていうのに成ってやる!!　だから、消えるな！　消えるなー!!」

フーカが、強く念じる。しかし、無情にもダキニの姿は既に、視認が困難なほどに薄くなっていた。

思えば、奪われるだけの人生だった。尊厳を、自由を、親友を。また奪うのか。また、奪われるのか。また。また――!!

――胸の奥が、かぁっと熱くなる。

――リンカーコア……否。

――魂が、胎動する。

「――ワシの友達を、連れていくなぁあああああああああああああああああああーーーーーーー!!!

『おう、妾だぞ。フーカよ、礼を言うぞ。妾とフーカの間に、縁が結ばれた！』
「縁って……、依り代のか!?」
『そうだ。単に共鳴だけでは、五分と五分であったが……ふふ、照れるのう。『友達』とはのう……』
　両頬に手を当て、ふるふると照れている。
「ぐっ……そ、そんなこと言うたか……？　覚えとらんなぁ……」
『照れるな、照れるな』
　うんうん、と腹立つしぐさで頷くダキニ。
『んで、お主の『求めるもの』は……あぁん？　……おいフーカ。『寝床とメシ』って何だこれ。もっとでっかくて叶え甲斐のあるものは無いのか』
「足を伸ばして寝られる寝床があって、腹がいっぱいなら十分に幸せじゃろう？」
『……お主さぁ』
「でもガッコに戻るのは嫌じゃ！　ワシは、リンネを探しに行くんじゃ！」
『あー……んじゃ、向こうに歩いてみよ』
「テキトーな指示じゃのう……」
　そして、すたすたと歩くこと数分。未開発の、ただ開けているだけの土地に出る。
　――ズシィンッ!!!!
　大地が、揺れる。
「うおぉっ、なんじゃ地震か!?」
『これ、顔を出すな』
　だが、気になるものは仕方が無い。茂みの向こうに顔を出してみると、そこに居たのは二人の少年だった。年のころは、自身とそう変わらない。
「喧嘩か!?」
『ずいぶん危機感のある顔をしておるのう』
「……喧嘩は嫌いじゃ。なんら、頭の芯がシュワーっとして、胸がドキ

ドキするんじゃ」
『……（こりゃ気づかせたらヤバいな。黙っとこう）』
「だから、止められる喧嘩は止めんと。うぅう、リンネのこと思い出して余計に心配になってきた。喧嘩ひとつしたことが無い優しい子じゃった。いじめられてないじゃろうか……」
『腕っぷしはそこそこありそうだものなぁ、お主』
「……喧嘩をするのが嫌いじゃのに、なんでかワシ、いろんな人に喧嘩を売られる人生じゃったから、殴り合いは慣れとる」
『お主、本当に近代人か？　中世からタイムスリップしてきた系キャラじゃなくて？』
　ダキニの戯言を無視し、二人の少年の動向を見守る。
　声までは拾えないが、赤髪の少年と、銀髪の少年が向かい合っている。喧嘩……というには、いささか怒気が足りていない。
　銀髪の少年が、構えを取る。赤髪の少年も構え……
　――バババッ、バシィンッ!!
『お、おおぉ!?　速いな！』
「あぁ？　左ジャブ三発に右ストレート一発じゃろ」
　喧嘩ではないと確信し、フーカは見物の気分になった。
「……で、あれを見て、ワシになんの得があるって？」
『まぁ見ておれ。今に分かる』
　――ガガガッ!!
「あー……赤い方が勝つな」
『白い方じゃなくてか？』
「なんの話じゃ？　……まぁ、顔を見ればなぁ」
　立会いの上では、互角にも見える。手数では、銀髪の少年の方が多い。しかし、銀髪の少年が、どこか必死に攻撃をしているのに対し、赤髪の少年は涼しげな表情を崩さない。
「……ん？　あの赤い方、知っとるぞ。B組の頭目、翠九音（くおん）じゃ」
『なんだ、有名人か？』
「知っておるも何も、聖王ヴィヴィオのイトコじゃろうが。お前こそ知らんのか」

『えぇー？　……でもアイツ、聖王の因子いっこも持ってないぞ』
「腹違いか種違いじゃろ」
『もう片方なら、よーく分かるんだがなー』
「ワシはもう片方は知らん」
『覇王の血族……しかも、かなり濃いのう……滅ぼしたと思いきや、よもや血を繋いでいたとはのう……恨めしいのう……』
　ぞわり、と。一瞬、ダキニが不穏な気配を見せた気がして振り向くが……肩の上のダキニは、いつものとぼけた顔をしているだけだった。
　身を離した隙に。
「――断空拳ッ!!」
　――ズシィンッ!!!
　銀髪の少年の踏み込みに、大地が激震する。
「この音じゃったのか」
『技の名を高々と叫ぶ悪癖も変わらんのぉ』
「意味あるんか、アレ」
『気合いが入るのだろう、たぶん』
　大地を激震させるほどの踏み込みからの一撃。しかし、赤髪の少年は打ち下ろしの側拳で軽く対処してしまった。更に、浮いた腕を引き寄せ、合気の要領で銀髪の少年を、背から大地に強烈に打ち据えてしまった。
　二、三、赤髪の少年が言葉を掛け……そのまま、踵を返し、いずこかへ去っていってしまった。
「つまりこれは……稽古、トレーニング、スパーリングってヤツのようじゃのう」
『フーカよ。あの少年、どうやら動けぬようだ。助けてやれい』
「何ら意図を感じるのう……」
　とはいえ、吹きっさらしの大地に、身動きの取れないまま放置は出来ない。風邪をひくかもしれない、とフーカは思い、ダキニの言うとおりにした。
『フーカよ、口を借りるぞ』

（あぁ？　どういう意味……って、アレ!?　喋れん!!　喋れんぞ!?）
　ダキニが、依り代であるフーカの身体の一部を操作しているようだ。
「おい、大丈夫か」
「……誰、だ、きみは……？」
「通りすがりの女学生だ。覚えておけい」
　口が勝手に喋るという未知の経験をよそに、フーカは少年を背負い上げた。
「さて、そなたの家に送ってしんぜよう。住所はいずこだ？」
「……すまない、助かる。正直言って、一歩も動けないんだ……」
　なんと、少年の住居は、ここから数キロ先だという。
（身なりは学園の男子生徒と同じ制服じゃが、学生寮住まいでは無いのか）
　その点は助かった。ダキニがそこまで考えてのこと、とは思えないが。
　数キロ歩くのかー、と、少しげんなりしていたフーカだったが、少年は、１０分ほどで歩く程度の体力は戻ったようだ。とはいえ、足元はおぼつかないし、ヨタヨタしているのだが。
「して、なぜあのような場所で鍛錬を？」
「都市部で本気の断空拳を使うと、地下電線に悪影響がある」
「揺れておったのう。そなたほどの力量であれば、そこまで鍛錬をしなくとも、この平和な時代、問題無いのでは？」
「ぼく……じゃなくて、俺は、あなたの言う通りに思って……、いや、思い上がっていた」
「思い上がり、とな？」
「覇王の因子を色濃く継いでいる。魔力が頭抜けて高い。格闘技で負け無し。……まぁ、そういったところだ」
「ほう、それは思い上がりもしよう。それで？」
　ダキニの話術には……つい、本音を漏らしてしまう、否、そうなるように仕向ける細工があった。しかし、普通に話している分には、まず気付かない。

「覇王として為すべきこととして、ベルカ時代の屈辱……聖王オリヴィエに敗北した過去を、濯ごうとした。幸いにも、交換留学先には、聖王を継ぐ者がいるという情報もあった。だから、母校の交換留学の話に乗った。そして、あっさり見つかったよ。肖像画に残された、聖王オリヴィエと瓜二つの少女が」
「ほほーう……して、覇王の末裔たるそなたは、聖王と思しき少女にどうした？」
「『聖王オリヴィエ』として戦いを挑み、」
「ぶち殺すぞおどれ」
「えっ」
「いや何でもない。して、どうした？」
「……負けた。負ける以前の問題だった。相手は、戦いの奈何（いかん）より、『オリヴィエ』として扱われたことに腹を立てていた」
「……ったりめぇだボケカス」
「？　……そうして、先ほどの九音に寸でのところで助命されて……されたついでに延々とボコられて、俺は心を入れ替えたんだ……」
（ヒャッハッハァ！　ヴィヴィオをいじめる悪いやつめ！　いい気味だのう!!）
「……むぐむぐ、ダキニ、ちょっと黙れ……あ、喋れる」
「そうして、チャンスを貰った。今度、俺が所属するA組と、聖王ヴィヴィオの治めるF組との間で、交流戦が行われる。そこには、戦力バランスを調整するため、九音もA組に加勢してくれるそうだ。明日、そのクラス対抗戦が行われるまで……俺は、九音に乞い、徹底的に己を鍛え直すと決めたのだ……！」
　少年と歩きながら話しているうちに、住宅街の一角、広大な敷地、そしてそこに建つ屋敷に到着した。
「で、でっかいのー……武家屋敷、というやつか？」
「分かるのか？　ここは、俺の先祖が影響を受けた『地球』という世界の建築様式を取り入れているそうだ」
「だってワシ、地球の出身じゃけん」

「そうか……これも何かの縁だな。送ってくれた礼をしたい。上がっていってくれ」
遠慮なく……というかまさか、ダキニの狙いはコレか？
『妾たちの時代のブームだったのだ。当時、異世界からの来訪者が持ち込んでの、王族の間に広まった。妾のドレスも『わふく』がモチーフなのだ』
（合点がいった。ちょいと脚を見せすぎだと思うがな）
『エロカワだろう!!』
頭の中でうるさいダキニをあしらいつつ、応接室に通される。
「飲み物でもどうだ」
どう見てもコーラな液体。
「豪奢なお屋敷だが、使用人の類は置かんのか？」
「我が家の方針でな。自身の生活は自身で」
『フーカ。ちょっと身体を貸せぃ』
（あ、こら、また勝手に！）
「……」
すっくと立ちあがったダキニｉｎフーカは、すたすたと歩き……
「！　あ、おい、そっちはダメだ！　待ってくれ！」
ダキニは、意を決したように、隣室へ続く襖を、スパーンと開け放った。
――堆く積み上げられた洗濯物の山。
――水浸しのままの食器＆空のパック。
――ゴミ袋からはみ出したレトルト食品の袋。
「生活能力無さすぎじゃろ……」
――端的に言って、汚部屋だった。
「くっ……!!　た、鍛錬に重点を置いた結果、生活が疎かになってしまったんだ……!!」
「いやそーいうレベルじゃねぇンだわ」
フーカとダキニは、同時に、はぁ、とため息をついた。

「……ゴミ袋はどこじゃ？」
「そこだ」
　そこ……と、食卓の上に、５０１のゴミ袋の束が適当に投げてある。未使用のままのゴム手袋も、梱包された状態で放置されている。
「いよし。片付け開始じゃ」
　大量のゴミの前に、二の足を踏みそうになるが……実際のところ、結局は、片っ端から片付けていくしかないのだ。
「燃える、燃えない、燃える、燃えない、カビてる、沸いてる……うへぇ、ひっさびさじゃのう……」
『フーカよ。手慣れておるな』
（あぁ、出身の孤児院では、職員室からトイレ・下水道・排水溝まで、掃除はガキどもの仕事じゃったからのう）
　……いくら手袋をしているとはいっても、害虫の死骸やらフレッシュな害虫やら、カビた食物残差やらを手づかみでポイポイ片付けていくフーカは、実に頼もしい。
『フーカよ。疲れたらいつでも代わるぞ。遠慮なく言うが良い』
（王族じゃろ。片付けなぞ出来るんか？）
『……妾、城では臣下やメイドたちから怖がられて孤立してたから……プレッシャー与えたら可哀そうだと思って、自分の身の回りのことは、極力自分でやるクセがついているのだ……』
（切なくなるからやめーや。でも偉いぞ）
『フーカよ。それは容器ごと捨てた方が良さそうだ。内部からハエっぽい生き物の気配を感じる』
（うへぇ……）
　肩に載せたダキニと協力しながら、ゴミと格闘すること数時間。
「お、おおお……床が見える」
「……なぁ、一応聞いておくけど、ここ以外の部屋はどうなんじゃ？」
「（ギクッ）」
「……もうええ、分かった」
　そして、口だけダキニにチェンジする。
「さて、どうしたものかのう……一部屋を片付けても、まだほかの部屋

が……というか、お主が片付けを頑張らんと、三日で汚部屋に逆戻りだぞ」
「う、うううう……面目ない……！」
……年ごろの男子らしく、片付けが苦手なアインハルトが顔を真っ赤にしている。礼をするつもりが、まさかの借りを作ってしまった。
「――放っておけんのう」
ふぅ……と、実に仕方が無さそうに息を吐く。
「学生寮に戻るつもりだったが、これも何かの縁。部屋を一つ貸すが良い。そなたが鍛錬に専念できるよう、A組との戦争が終わるまでの間、住み込みで屋敷の片づけをしてやろうではないか」
「そ、それは、流石に……」
「なに、心配するでない。賃金など要求せんよ。妾が好きで行うことじゃ」
「いや……その……」
ダキニには、その葛藤が手に取るように理解できた。
――会ったばかりの相手に
――同年代の女子と同居なんて
――広いばかりの屋敷を持て余していたのも事実
――鍛錬に集中できれば……
『あと一押しといったところかのう』
覇王と言えど、所詮は平和ボケをした子供。ダキニにとっては、文字通り、赤子の手をひねるが如き。
「世の中、持ちつ持たれつと言うであろう。遠慮などするな」
……アインハルトは、数舜の葛藤の末に……
「頼めるなら、ありがたい……」
行儀よく、頭を下げ、『ダキニに頼んだ』のだった。
「あいわかった。そうそう、賃金は要求せんがの、一つ、頼みを聞いてはくれぬか」
「まぁ、俺にできることなら」
「いやいや、そなたにしか頼めないことだ」
ダキニが、畏まった表情で言う。

「――妾に、そなたの流派を伝授しては貰えぬだろうか」
フーカの願いは、衣食住の確保。それは間違いないのだが……その願いは、実は、その奥にあった。
『――――強くなりたい
――――誰よりも、誰よりも、強くなりたい
――――もう、何も失いたくない』
……と。
ダキニには、他者を瞬時にパワーアップさせるような技能は無い。それに、フーカという人物の人となりから推察するに、そういったお手軽パワーアップは望んでいないだろう。
で、あるのなら……最善の道に、誘導する。
「妾は、喧嘩しか知らん。暴力しか知らん。そんなワシだが、そなたの先ほどの一撃……『断空拳』には、心底、惚れ惚れしてしまったのだ。アレが打てるようになりたい。……やはり、ダメかのう？」
上目遣いで伺うダキニｉｎフーカに、アインハルトは顔を赤くしながら、困惑したように確認する。
「いや、構わないのだが……むしろ、良いのか？　そんなことで……」
――――掛かりおったのう、ドマヌケめが。
ダキニの睨んだ通りだ。この少年……世間知らずの平和ボケしたボンボンは、何も知らないのだ。己の流派のことも、その重要性も、何も。
――――覇王流の到達点は、断空拳ではない。
その秘奥……断空拳の先にあるものこそ、『武技において戦国最強』の名を欲しいままにした、強国シュトゥラの王、初代・覇王イングヴァルトの奥義であった。
――一撃必倒。
――確殺の拳。
――神が振るうが如き一撃。

――神撃。
観察眼に長けたダキニを警戒し、秘された決闘場においてのみ振るったとされる奥義は、覇王流の中に隠されていると、ダキニは踏んでいた。
オリヴィエが小手先であしらって見せた『覇王・イングヴァルト・ストラトス』などという、イングヴァルト王の名を模しただけの二流の覇王では、再現は叶わなかったようだが……それでも、覇王流の使い手だった。
かつて、捕虜としたシュトゥラの王族ですら、決して口を割らなかった覇王流。流派が他国に知れるということの危険性を理解していたのだろう。
しかし……五百年の時を経た現代。
覇王流を『使えるだけ』の愚かで無知な餓鬼が、まんまと手の中に舞い込んできた。
『甘き果実を食すが如く……皮一枚ずつ、じっくりと剥いで、剥いで、剥いで、剥いで、剥いで、……覇王の血脈を、父母を奪いし憎きイングヴァルトの系譜を、凌辱し尽くしてくれようぞ……!!』
――……。
――ガツンッ!!
「にぎゃぁっ!?」
……ダキニの邪悪な思考は、唐突に中断された。と、いうのも……
『こン……大馬鹿タレがッ!!!』
体の主導権を取り戻したフーカが、ダキニを……というか、自身の頭を、ボコ殴り始めたからであった。
「ふ、フーカ!? やめよ! やめるのだ!」
『止めんッ! きさん(貴様)が反省するまで、止めんッ!!』
――バコッ! ボコッ!!
「痛いのだ! 痛いのだー!! ふぇぇぇぇぇぇーーん!!」
……とうとう泣き出してしまった。

『反省したかッ!!』
「した！　しました！　反省しましたー!!」
『何が悪かったのか言うてみぃ!!』
「何も知らない無知な少年を悪意を持って弄ぼうとしていましたー!!
　ふぇえええええーん！」
　……意志力でダキニを捻じ伏せたフーカが、仁王の表情を作る。
「――そこに正座せぇ!!」
『はいぃ……』
　……フーカの中に溶けていたダキニのｆｉ○ｇｍａボディが、フーカの眼前にシュババッ、と這い出てくる。
「ダキニ！　ワシのキライなもん、教えたるけん！
　――一つ、人の悪口！
　――二つ、いじめ意地悪！
　――三つ、悪意の嘘！
　おどれはそん全てがアウトじゃ！」
『しょ、しょんなぁ……だって妾、そんなの知らなんだもの……』
　相手の欲するものは分かっても、怒りのツボまでは察せないという、ダキニ最大の弱点が５００年の時を経て露呈した瞬間だった。
「あァン!!?」
『ヒィイッ!!　怒らんでおくれ、友よ……!!』
「誰が友じゃ!!　きさんのような卑怯者は、もう、」
『う、うぅうううう～……!!』
　フーカから決定的な一言が放たれようとしたとき……ダキニは、まんま子供のようにポロポロと泣き始めた。
「もう、……」
『うぅうううう～……！　うぅうううう～……！』
「……」
　たじろぐフーカ。演技ではなさそうだ。
「……二度とするなよ」
『あぃぃ……!!　ごめんなしゃぃぃ……!!』

足元に寄ってきたダキニを拾い上げ、肩に載せる。
くるりと振り向き、ぽかんとした顔のアインハルトに、ぺこりと頭を下げる。
「すまん、色々と、面倒を掛けるが、今日からよろしく頼む」
「……全く話についていけないんだが」
……ごもっともである。
さて、どこかポンコツな面を見せているダキニだが……

――自分だけの依り代（ともだち）
――活動拠点
――怨敵の情報

ダキニはこの三つを、わずか半日で入手している。
運も絡んでいるだろうが、それでも、……ベルカ戦国の世を震撼させた『策謀の魔女』の約如であった。

『フーカよ。仲直りのしるしに、ポテチを買うておくれ。おぬしが食えば、妾も味が分かるのだ！』
「泣いたり笑ったり忙しいヤツじゃのう……はぁ……いつになったらリンネに会えるんかのう……」

……再会は、すぐそこにあるとは知らずに。

# ｖｉｖｉｄ編　２２話『　暴力の使徒たち　』

――――暴力はすべてを解決するばんのうツールだって、神様もいってたもん

フーカ・レヴェントンが、アインハルト・ストラトスの邸宅の居候になり、少しの時間が経った。

髪をポニーテールにまとめたフーカは、庭に出した物干し竿に洗いあがった衣類を手際よく掛けていく。

『なぁなぁフーカ。わらわはポテチが食べたいぞ』

ぴょこん、と、フーカの方に手のひら大の人形……ダキニの端末が起き上がる。

「ダメじゃ。今日はもう一袋食べたじゃろ……おえっぷ。息が脂っこい……」

……否、もう一人。フーカに憑依した聖王の一人格、ダキニもだ。

感覚をフーカと共有するが肉体を持たないダキニにとっては、フーカの食事がそのまま味わえるのだが。

『えー。お主だって若者だろう？　もっと味の濃い物とか、ジャンクな食べ物とか食べたくないのか？』

「……」

フーカは、洗濯物を干す手を止め、しばし考えたのちに口を開く。

「……ワシのいた施設じゃあ、メシの味がひどく薄くてのう。今考えれば、塩もケチっておったんじゃろうがの」

いつもいつも、味のほとんどしない粗食ばかりを口にしていた記憶がある。

「雑草の花の蜜を舐める子もおったし、食えもせんアンズの実を齧って倒れた子もおった。じゃからの、薄い味に慣れるしか無かったんじゃ……」

『……おぬし本当に近代の人間か？』

「じゃかぁしい。……じゃが、その弊害かのう。あんまり味の濃い食

事を摂ると、調子を崩してしまうんじゃ、ワシは。」
　最近は誰かさんのおかげで濃い味にも慣れてきたがの、と、フーカがカラカラ笑う。
「まぁ、そういうわけで、一袋で勘弁じゃの」
『……いや、もっと食え！』
「なんでそうなる⁉」
『フーカ。お主はもっともっと食べて、豊かな食生活を知るべきだ。わらわの頃と違って、食べようと思えば食べられる環境なのだから』
「あー……アインハルトんためのメシは、それなりに味を濃くしておるんじゃがのう」
　居候という身分だが、生活能力皆無の少年に代わり、食事の用意や掃除、洗濯をするというのが、家賃替わりとしてフーカが改めて提案した条件だった。
『だからといって、朝と昼は白米と菜っ葉しか口にせんではないか、おぬし』
「銀シャリは甘いし、菜っ葉はしょっぱい。それで充分じゃなか？」
『いーやーだー！　もっとフライドチキンとかトンカツとかたーべーたーいー！』
「あぁもう、わかったから頭ン中で騒ぐな。頭痛がする」
　わいわいと騒がしく洗濯物を掛け終えた二人のもとに、家主であるアインハルトが気まずそうに現れた。
「あぁ、ハルさん。もう少しで終わるぞ」
　ハルさん、というのは、フーカがアインハルトを呼ぶ時に使うようになった愛称だ。親しみやすい……とは言うが、実際には名前が長いのでフーカが横着しただけである。
「いつも、すまないな」
「家賃のうちじゃろ」
　パタパタと風をはらんで揺れる衣類に、アインハルトが目を向ける。
「しかし、失礼かもしれないが、意外だ」
　フーカの家事は、非常に丁寧だった。もう少し、粗暴な印象を受け

ていたのだが。
「まぁ……いろいろとな？」
　というのも、遺棄児童収容施設こと逢瀬櫃においては、家事全般は年長組の仕事と位置付けられていた。年齢差があるとはいえ、子供が子供の世話をするのだ。一部ではなく、全般の。さらに言えば施設全体の掃除も仕事だった。やはり異常な施設だったとしか言いようがない。
（手ぇ抜いたらブン殴られるからの。そりゃあ、いやでも身に付くわ）
『フーカ……フーカよ……なんてかわいそうな子なのだ……』
（えぇい泣くな。もう終わったことじゃ）
　と、洗濯籠に、一枚の衣類が残されている事に気が付き、取り出す。
「うぉっ……!?」
　と、アインハルトが変な動作で目をそむけた。
「？　どうした？」
　フーカは、取り出した藍色の衣類……というか下着……というかパンツを手に、怪訝に聞く。
「少しは隠せ!!」
「あぁ？　何をじゃ？」
　顔を真っ赤にして目を背けた先……洗濯バサミが連なる物干しでは、アインハルトの下着と、フーカのパンツが、交互に整然と並んでいた。大小交互に並べることにより空間が出来、空気の通り道となる事で乾燥が早まる生活の知恵だった。
「隠せよぉっ!?!!」
　しかしフーカは、パンツの穴に指をひっかけクルクルと回して見せる。
「なんじゃ。たかが下着じゃろ？　いま履いとるモンを覗いて見られるわけでもなし。しょせん布じゃ、布。気にすんな」
「気にするよっ!!」
　……ズレている。アインハルトも相当にズレているが、フーカはそれ以上にズレている。
『フーカよ。おなごが下着を軽々しく見せるでない』

ダキニが、おばあちゃんのような口調でフーカを諌める。
『おなごの下着と肌はな、資源と同じで、もったいぶるから価値が生まれるのだ。外交の基本だぞ』
……ダキニもやっぱりズレていた。
「はぁ……」
残ったパンツを干したフーカが、物憂げにため息をつく。アインハルトは逃げて行った。何かと思い出すのは、やはりかわいい妹分、リンネのことばかりだ。
あの羅刹のような女(なのは)に引き離され、連絡手段は無く、再会のメドも立たない。
学園に戻り、外界と連絡可能な者に頼るのが一番の近道だろうが、カリキュラムがある程度まで進むまでは、それも許されないだろう。
「では、今日の鍛錬を始める。準備をしてくれ」
戻ってきたアインハルトは、動きやすそうなスポーツウェアに着替えていた。ハウスキーパーの見返り……覇王流の修行だ。
「おぉ、もうそんな時間か。準備なら出来ておるぞ」
……フーカは、一張羅の学園の制服を唐突にその場で脱ぎ始めた。
「うわぁあああああああ何やってんだよぉおおおおおお!!?」
顔を覆って叫ぶアインハルト。
「あぁ？　……着ておるって言ったじゃろうが」
……そう、フーカは、制服のスカートの下にハーフパンツを履いていた。だからといって。
『これ、フーカ！　はしたない!!』
もはやお婆ちゃん状態のダキニが慌てて諌める。
「気にしすぎなんじゃなか？　ハダカじゃあるまいし」
そのままズボっと上着も脱ぐ。下にはやはり、トレーニングウェア。これらはアインハルトのお古だ。
やはりフーカは、育った環境が環境だっただけに、色々なものが欠如していた……
顔を赤くしたままのアインハルト。
「では、準備運動から」

……そして流れ出す、まさかのラジオ体操第一（ミッド語ガイド音声付）。
「何故じゃ……何故魔法世界でラジオ体操第一が認知されておるんじゃ……、」
学院でもなぜか朝一はラジオ体操第一だった。
「ある提督によって、管理外世界の極東方面からもたらされたと聞いている。はじめは抵抗があったが、音声ガイドもあり、全身をしっかりと動かせる優れた体操だということで、すっかり管理世界にも定着したぞ」
管理局でも密かに取り入れられ、運動不足の文官たちからも好評であることは秘密だ。
覇王流というやや外連味のある流派名とは真逆に、いきなりサンドバッグを殴ったりはしない。基本の型の確認から、足運びの反復、素振り……と、順序通りに行われていく。
しかし、フーカは習い始めて知った。
この、基本の型稽古というものが、意外にもキツいということを。アインハルトは、フーカの行動に慌てふためく思春期の少年らしい少年であるが、流派を修める者としては、真摯かつ実直だった。基本的に「はい」以外の返事は認めない上、求めるレベルが滅茶苦茶高い。
「半歩ズレてる。やり直し」
「はいっ！」
「軸がブレてる。やり直し」
「はいっ！」
「腑抜けている。やり直し。」
「は、はいいっ!!」
基本の型稽古で……アインハルトが満足するまで、実に二時間は反復しただろうか。既にフーカの息は上がりつつあり、筋肉が痙攣している。
「走るぞ」
続いては走り込みである。住宅街を抜け、だだっ広い未開発地域の道路を延々と走るのだ。そして恐ろしい事に、距離設定は無い。

「……」
邸宅にようやく帰着したフーカは、膝に手を突き呼吸をすることで精いっぱいであった。アインハルトはと言うと、汗をかいて呼吸が早くなってはいるが、まだまだ余力を感じさせる。
ヴィヴィオに半殺しにされたり、九音に半殺しにされたりした姿から勘違いしがちだが、このアインハルトという少年は、スポーツ格闘技の大会くらいなら即座に上位入りし、チャンピオンも視野に入るほどの実力者なのだ。
あくまで、『人間』の範疇では強いのだ。あれは、相手が悪すぎた。そもそもスペックが人間じゃないし……
「さぁ打ってこい」
そして、疲労した身体で今度は打ち込み稽古が始まる。アインハルトは好きに殴らせ、その都度いなしていく……という形だ。
寮母と言う名の看守に打ち克ったフーカだったが、アインハルトはそうそう容易くは無かった。
「うぐっ……固っ……!?」
まず、とにもかくにも防御が固い。覇王流は防御を基本とする流派のようで、とにかく固いのだ。耐える防御、受け流す防御、返す防御……と。暴君オリヴィエという驚異の脳筋に対抗するため、防御重視へと変わっていったのかもしれない。フーカはその体で、覇王流の多彩な技の数々を体感することとなった。
――そして。
「う、うぅ……」
「今日はここまでだ」
疲労困憊し、屍のように転がるフーカ。アインハルトはフーカを担ぎ、縁側に転がす。
フーカは無意識的に体勢を変え、膝を立てて座る。そしてそのまま、すぅすぅと寝息を立てはじめた。
「……なぜ疲れているのに横にならないんだ？」
『……さぁのう』
ダキニは知っているが、しらばっくれた。

「ダキニ殿。フーカを任せられるか」
　すると、呼びかけに応え、フーカの頭上に小さな人型が現れる。ダキニだ。
『あいあい。イザとなったら、わらわが身体を動かして無理やりにでも横にするよ』
「頼む。オレは、自分の稽古に行ってくる」
　そしてそのまま、駆けていった。これから、九音との特訓を行うのだろう。大した体力だ。
「すぴー……すぴー……」
　変な寝息を立てて座って寝ること３０分。
「はっ、夕食の支度じゃ」
　スックと立ち上がり、そそくさと台所へ歩いて行った。
　……あれだけの疲労を、３０分程度の睡眠で、ある程度回復してみせたのである。初日は動くことすらできず、翌日まで筋肉痛が残ったと言うのに、短期間でコレである。
　フーカはフーカで変な特技を身につけつつあった。
　食事の準備を終えるが……いつも帰ってくる時間になっても、アインハルトが帰ってくる姿が見えない。
「どうしたんじゃろうか……」
『おおかた稽古に熱が入りすぎたか、ぶっ倒れておるのだろう』
「そうかもしれんが、心配なものは心配じゃ」
『迎えにでも行くか？』
「うーん……そうすると、学園関係者にワシの居場所がバレて連れ戻されるかもしれん」
　もうとっくにバレて泳がされているだけ、ということは知らず。間を取って、玄関先で待つことにした。
「まぁ、待っていたって帰りが早くなるわけじゃなかなか……」
　……そう。リンネのことも、だ。しかし、それも当然だ。自らアクションを起こさない限り、状況というのはそうそう動くものではないのだから。
「……あの悪魔みたいな女に引き離されて、ワケもわからず世紀末み

たいな学園に放り込まれて……はぁ、どうしたもんかのう。サイズの合わない古着じゃない服が貰えたのは嬉しいんじゃが……」
なのはとしては、互いに自立できる程度の強さを得るまで引き離す……程度の感覚だったのだが、分かる訳もない。何せ、伝えることをすっかり忘れているのだ、あのぼっちは。
「たのもー」
……考え事をしていたせいか、間近で声を掛けられるまで気付かなかった。
「うぉ、ビックリしたぁ」
「あら、これは失礼しちゃったかな」
声の主はトボけた調子で言う。フーカと同年代の少女だ。ウェーブの掛かった、染めているらしいオレンジ色の頭髪。生意気そうな表情。
「お客人か。何用じゃ？　あいにく、家主は留守じゃ」
「あら、そっかー。せっかく道場破りに来たのになぁ」
「……なに？」
フーカは少女と距離を取る。すると、少女の装いが瞬時に変わった。先ほどまで、デニムのショートパンツにシャツだったものが、白と黒の修道服に。
「――聖王教会所属シスター・シャンテ。聖王に仇成す覇王を征伐しに参り、」
――ビュガッ!!
咄嗟に屈んだフーカの頭上を、何かが凪いでいった。
「あっぶな!?」
「……ましたー」
挨拶途中の不意打ち。しかし……
（なんじゃなんじゃ、今のは!?　動く素振りなんぞ無かったぞ!?）
シャンテと名乗った少女は、その場をまったく動いていないように見えた。
『相手の足元をよく見てみよ』
ダキニのアドバイスから観察すると……シャンテの足元に、強く踏

み込んだと思しき凹みがあった。
『幻術だ。目で見ているものを誤認させている』
意味はよくわからなかったが……攻撃されたということは、理解できた。
「これはほんのご挨拶だよー。じゃ、覇王サマが戻ってくるまで、そのへんで暇つぶしでもー、」「待てや」

フーカは、シャンテを呼び止める。
「……なにかなー？　家主にしか用事は無いんだけどなー」
「――踏み込んだじゃろう？」
シャンテの足跡は、屋敷の敷地に踏み入っていた。
「これは襲撃じゃ。侵害じゃ。侵略じゃ。ならば、素通りはさせん。キッチリとケジメつけてもらおうか」
やられたら、やり返す。シンプルかつ明快な、フーカの信条だ。
「ケジメぇ？　……っていうか、アンタだれ？」
「フーカ・レヴェントン。この家の……えぇっと、」『食客な』「食客じゃ」
「んで、その食客サンがアタシにどうするって？」
「ケジメ着けさせる言うとるんじゃ。そこに直れ」
「あははっ。
――いっちょ揉んでやるか」
シャンテの気配が、好戦的なものに変わったことを察した。
『仕掛けてくるぞ。幻術使い相手に、目だけに頼るな』
（わかった……と言いたいところなんじゃが、よーわからん）
『実力はほぼ互角。攻撃の気配を察して対応せよ』
ダキニは戦闘はからっきしだが、分析能力に長けていた。そしてフーカは、環境ゆえ喧嘩慣れしていた。
（何か道具を持っておるな。そこまでリーチは無いが、素手よりは広い）
はじめの一撃で、シャンテが何らかの得物を用いていることを察していた。

踏込の気配。足跡からなんとなくの間合いを読み、体を逸らす。
「や……やりづらいのう……！」
何せ、目の前の相手は動いていないようにしか見えないのだ。そのくせ相手は打ち放題。これは不平等だ。
「あらら、まーた避けられちゃった」
シャンテは涼しい調子だ。その手元で、何かが空を切る音がする。
『音の感じ、刀剣の類ではない』
「なら踏み込んでいくか」
いかにリーチに差があろうとも、腕の延長線上なら対処できる。
「さぁ、おいでおいでー」
しかし、シャンテは余裕の態度だ。何か策があるのか。
（関係無い）
結局、フーカは前に進んで打ち込むことにした。一歩、二歩……
――ガツンッ!!
「うぁっ……！」
側頭部に激しい痛み。
「ちょっと迂闊……いや、考えてないのかな？」
シャンテの声も今は届かない。
（拳の痛みじゃない。これは……ええっと……）
過去の記憶……さまざまな折檻や虐待、喧嘩の経験から痛みの種類を割り出す。
（わかったぞ、ダキニ。『定規』じゃ）
『じょ、じょうぎ……？』
ダキニがたじろぐ気配がするが、フーカは気付かない。
（あぁ。定規のカドで叩かれた時の痛みに似とる）
『何で分かるのだ……？』
であれば……
「……行ける」
フーカは、思い切って突貫することにした。
「おや？　……これは貰ったかな」
間合いに入ると同時、風を切る音。

――ゴキッ……!!
鈍い音。頭を狙った一撃……だったが。
「捕まえたぞ」
白刃取り……というには、あまりにも乱暴なやり方。フーカは、肘関節でシャンテの攻撃を敢えて受け、そのまま挟み込んでいた。
「うぇっ!? おいおい、マジかよ!? ……なーんつって!」
もう一撃……左の攻撃が再度迫る。不可視の一撃だ。本体は虚像の陰に隠している。
「――素直に殴られぇや!!」
どうせ虚像。そう判断したフーカは、シャンテの得物を肘で捉えたまま、柔軟に回し蹴りを見舞った。
――ガシィッ!!
虚空に手応え。どうやら捉えたようだが、防がれた。
「防がれたのう」
「や、やるじゃん……?」
だんだんと、シャンテの余裕も無くなってきた。
今まで見えていたシャンテの姿が霞と消え……実体が見える。
「なんて武器じゃったかのう、アレは」
『トンファーだ』
トンファー。拳に握り込むグリップと、腕をガードするエッジで構成されるシンプルな武器だ。
「あながち、定規もハズレではなかったのう?」
『むしろ、なぜに定規がスッと出てくるんだお主は……』
実体を見破れはしたが、代償も大きい。攻撃をモロに受けた左は、麻痺して拳を握る事が出来なくなっている。
「まぁええわ」
半端に使えるより、割り切れる。
「タネの一つを見破ったところで、どうしようもないと思うんだけど?」
対するシャンテは、ほぼ無傷。圧倒的不利。
「だから何じゃ」

不利な喧嘩など、いつものことだ。
「……ぶん殴ったる」
――あぁ、この感覚だ。
フーカは……頭の芯の方が、チリチリと痺れるような感覚を感じていた。喧嘩をしていると、たまに起きる。身体が熱くなるのに、頭は妙に冷静で……視界が開けるような、そんな感覚。
シャンテの肩が、僅かに動く。動作の起こりだろう。そう踏んだフーカは、そのタイミングで仕掛けた。
――ガァンッ!!
フーカの拳を、シャンテはトンファーの面で受ける。フーカは鉄板をモロに殴った形だ。にやりと笑むシャンテ。これで拳は使えまい、と。しかし……
――ググググッ……!!
受けたはずの攻撃が、トンファーを……力任せに押し込んでくる！
「こ、この……!!」
なんという膂力か。地面を踏みしめる足が、ズリズリと後退していく。これは振り払うしかない。
（拳が密着していちゃあ、、押す以外のことは出来ないでしょう!?）
が、その判断は数瞬遅く。
「……、オオオおおおおおりゃあぁあああああああああああああああ!!!」
――ダァンッ!!
震脚。フーカは拳を面に接触させたまま、大地を強く踏みしめる！
――バギィッ!!!
「うっそォ!?」
トンファーが砕ける。そして、勢いのままフーカは、体勢を崩したシャンテにボディブローをかます！　姿が霞む。幻術。しかし……！
「知ったことかぁあああああ!!」
――バゴォンッ!!
「うぐぇっ……!!」

僅かに逸れた。しかし、シャンテは脇腹を痛打され、呻いた。
「やるねぇ……、！」
片方のみとなったトンファーを構え直し、気丈に笑む。
「これで片っぽ同士じゃのう」
フーカは左腕が麻痺し、シャンテは片方の得物を失った。
（ダキニ。あんまダラダラ戦うのは性に合わん。次で決めるぞ）
『そうするが良い。あの小娘、まだ手を隠しているぞ。出される前に倒すのだ』
それに……と、フーカが思う。
（強く踏み込んでの打撃。アレはなんというか……なかなか、良い感じじゃ）
今までは、ただ漫然と身体を動かしていたようにも思えてしまう。
（踏み込む。踏みしめる。地面を強く踏んで……）
ぎゅ、ぎゅ、と何かを確かめるように足踏みをする。
『フーカよ。何かを掴んだようだな。存分に試すが良い』
「何をぶつぶつ言っているのかなぁ」
シャンテは、残った片方のトンファーを利き腕に持ち替える。魔力光が宿り、威力の底上げが行われているのだろう。
「なら、こちらもじゃ」
フーカの拳にも魔力光が宿る。幻術使いが真正直に正面から仕掛けてくるとは考えづらいが、フーカにはまだ、正面から当たることしか出来ないのだ。
右拳。シャンテがトンファーを合わせる。
――ブゥウウン!!
やはり幻術。インパクトの感触が軽すぎる。ひゅうん、と、風を切る音が迫る。
（思い出せ、思い出せ……！　ワシは、受けた痛みは忘れんタチじゃ！）
フーカは、受けた攻撃は身体で記憶できる。
「せぇえぇいっ!!」
右手を手刀の形に変え、目測を付けた空間を払う回し受け。

――バシィッ!!
「！　そこかぁっ！」
体を回転させ、左の拳を振るう！
――ガコォンッ!!
この手ごたえはトンファーだ。防御された。逸らされた。フーカの身体は、右回転が掛かり体勢が崩れかけている。
シャンテの姿は見えないが、勝機にニヤリと笑んでいるに違いない。
「ふんっ、ぐ……!!」
――ズンッ……、!!
フーカは、右に流れた体を支えるため、右足で大地を強く強く踏みしめた。右に掛かったベクトルを、さらに強い力で左に捻じ曲げる。身体を捻り、その勢いのままに……!!
「うぉりゃあああああああーーーーッ!!」
――――――――!!
……シャンテは果たして、どこまで認識出来ていたのか。咄嗟に防いだトンファーは粉砕され、ほぼ威力は減衰されること無く……
「――、かっ、」
横っ面を、殴り抜いた――……!!
べしゃあ、と、受け身も取れず、シャンテが地を滑る。フーカは、自ら土壇場で繰り出した一撃の威力に驚愕した。そして……
「ま、まずいっ……!!」
シャンテの倒れ方。かなりマズいように見えた。
「ありゃあ36℃の炎天下に直射日光の下で帽子ナシの素手で草むしりをしていてぶっ倒れたヤツと同じ倒れ方じゃ！」
『ねぇお主、ひょっとして中世の暗黒時代から来たのではないのか……？』
「そしてアイツは帰ってこんかった……」
『やめよ、やめよ！　なんか悲しくなってくる！』
わたわたと駆け寄る……筈だったのだが。
「あ……こりゃイカンわ……」

――眠気。
いつも、そうだった。いざ戦いになると、頭の奥がカーッとなる。戦っている最中は良い。変に冷静になれるし、敵の攻撃も良く見える。しかし、その反動なのか……
「ねむ……い……」
『フーカ！　おい、フーカ！』
かくん。フーカは、糸の切れた人形のように、その場に座り込むように気を失った。
「すぅ……すぅ……」
まさか逝ったか、というダキニの心配は杞憂に終わった。フーカは規則的な寝息を立てている。
『……よしよし、よく頑張ったなフーカ。どれ、身体はわらわが寝床まで、』
と、フーカの身体を操作しようと主導権を取るダキニ。しかし……
『あ、あだっ、あだだだだーー!!?　な、なんなのだ、この痛みはー!?』
全身が痛かった。骨から痛むような、心底辛い痛みだ。
『筋肉痛どころの話ではないぞっ!!?　あだ、あだだだだ……!!』
……まるっきり年寄りのように、ヨボヨボと腰を下ろす。
戦いのダメージではあるが、シャンテの攻撃によって受けたダメージなど、せいぜい片腕の麻痺と打撲くらいなもの。この、全身の関節がぜんぶ炎症を起こしたような痛みの原因は……
『あの、最後の一撃か……』
とても、フーカのいまの力量で出せる威力ではなかった。偶然と、思いつきと、タイミング……それらが奇跡のように積み重なり、繰り出せたラッキーパンチだったのだ。だとしても。
『あの拳……まるで、』
断空拳。……の、出し損ない。
フーカは、土壇場の土壇場で、奥義の一端に触れたのだ。なんという資質か。ダキニは、己の計画がスイスイと進んでいることに不安さえ感じた。
『……こんな偶然はあり得ない』

たまたま放浪中に、相性の良い憑代と巡り合う。覇王流の使い手と出会う。憑代に覇王流の高い適正がある。
……何らかの恣意を感じざるを得ない。
『運命、因果、必然……いうなれば、時代の強制力』
この時代に二柱の神が生まれた波紋が、ダキニの周囲にも影響を及ぼしているのだろうか。
……まぁそれはともかく、体中が痛い。
『ひぃー、こりゃたまらん。すまんフーカよ。離れるぞ』
ダキニはフーカの肉体への憑依を中断した。幸いにもというか、フーカは睡眠中だ。
「……やって、くれたねぇ」
……殺気。
『うげっ……何と間の悪い……!』
口腔と鼻からボトボトと血を流した凄惨な顔で、シャンテが起き上がった。足元はおぼつかず、目は虚ろ。しかし、その手には砕けたトンファーが握られており……
『ヤバいヤバいヤバいのだー!! フーカヤバい! 起きよ! 起きよ! 起きるのだー! 起きてー!』
焦りのあまり語彙力が消えたダキニが、どうにかフーカを起こそうと試みるが、フーカは深く眠ったまま目覚める気配がない。
シャンテは、酩酊したような気分の中、勝利を確信する。どのような形であれ、勝てばよいのだと。常に誰かに殴られているような最低な人生だったが、打たれ強さだけは身に付いた。それがこの勝利に貢献するのだったら、無駄ではなかったのだ。
シャンテは、トンファーを振り上げ……
「フーちゃんを、」
――――ぞわり。
……シャンテは悪寒に背筋を凍らせた。背後。しかし、振り返ることが出来ない。振り上げた腕が、万力のように掴み止められている。
――幻視したのは……純白の、大蛇。
「わたしの、フーちゃんを、」

――――がしり。
それこそ大蛇のように、自身の胴体を挟み込む感覚。ふわりと、身体が浮かぶ。一瞬の後。風景が、ひっくり返る！
「フーちゃんを、いじめるなぁあああああああああああああ!!!」
いわゆる、バックドロップというものだった。地面に無防備な頭が激突し、中身を弾けさせるまで一秒も無いだろう。対処法、対処法……
（――あ。これは死んだな）
死を覚悟した瞬間、シャンテは己の半生を走馬灯として回想した。ロクな思い出が無かった。
――『さて、お仕置きはこのくらいで充分でしょう！』
……ギャングに身をやつした自分を、さんざんにボコってくれた相手。唯一、恩人と呼べる人の顔が、今わの際に思い浮かぶ。
（シャッハ……ごめん……！）
地面が、視界いっぱいに広がり……
――止まった。
「あっぶねぇ……！」
誰かの手が、シャンテの足首をギリギリで掴み止め、地面への衝突を防いでいた。逆さまになった視界の中で、シャンテはその救い主の顔を視認する。
「……吾妻、秀人」
いまのところ、世界一の有名神がそこにいた。

◆・◆　◆　◆

――少しだけ、時間を遡る。
秀人はアイ、リンネと共に、アインハルト邸へ向かっていた。
アイとリンネは初対面であるため、やや距離がある。とはいえアイは基本的には物怖じしない人格をしているので、アイのほうがズイズイと距離を詰めていくのだが……

「ねぇねぇ、おまえもマスターと同じパワー型なの？」
「え、えぇ……そのようで、指導はお兄さんにお願いすることになりました」
「マスター、あんまり変な戦法、教えちゃ駄目なの」
「まだ何も言ってないだろ!?」
「ゼロ距離で砲撃とか、チェーンデスマッチとか、とりあえず殴ってから考えるスタイルとか……」
「そんなこと俺が、」
……はたと気づく。全部身に覚えがありすぎる。
「するわけないじゃん……？」
「なんて白々しい。ヴィヴィオに聞いたの。そっちに現れた感染者、市街地でドッカンバトルで……何なの、息子★ミサイルって」
「娘よ、少しはオブラードに包んでくれ……」
リンネはドン引き……と思いきや。
「でも、結果的にかいけつしたんですよね？　なら、いいんじゃないでしょうか？」
「えっ……」
「だいじなのは問題が『どうにかなる』ことで、結果的に『どうにかなった』のなら、過程は別にどうでもいいのではないでしょうか？」
若干狂ったことを平然と口にするリンネに、アイが引いていた。
「……マスター、この子に何か変なこと教えた？」
「……いや、俺は別に……なのはも、今のところは思想教育はしていないっぽいし……」
「思想教育を選択肢に入れるな」「俺に言うなよ……」
なのはは……本当に何も教えていない。強いて言うなら、『暴力はすべてを解決する』くらいのもので……残りは、リンネ自身のパーソナリティによるところが大きいのだろう。
「？　どうかしましたか？」
ピンク色の液体……恐らくプロテインをごくごくと飲みながら、リンネはきょとんとしている。
「こいつは逸材なの……しかも、やべー方の逸材なの……うまく操縦

しないとあっという間に悪の道を最短距離で走破してしまうの」
「うーん……そうなんだけどなぁ……」
が、秀人はそこまで、リンネのメンタル矯正に積極的ではないようだ。というのも……
「悪性を外から無理やり矯正しても、どっか歪になるし……下手をしたら外面だけ善人っていう、タチの悪い悪党になる可能性だってある。だったら、悪性を悪性と認めて、その上手な扱い方を教えてやるほうが本人のためになるだろう」
「それで、扱い方はどう覚えさせるっていうの？」
「それはまぁ……チャリと同じで、転んで覚えるしか無いだろう。俺たちがするべきは、絶対に転ばない補助輪を付けてやることじゃなくて、上手な転び方を覚えさせることだ」
起き上がる助けはしてやるつもりだし……と、秀人が見る先、巨大なブロックみたいな荷物を背負ってヒョイヒョイ歩くリンネが、道端の屋台の前で立ち止まった。
『超激辛！　地獄級チキン!!』
「……」「……」
秀人とアイも立ち止まった。炭焼きの鶏肉に、真っ赤を通り越して警戒色に近くなった真っ赤な粉末がふんだんに盛られている。
「……こっち、こんなもん道端で売ってるのか」
「若い世代が多いから、どうしてもジャンクフードが多いの」
新区、深刻な食育事情であった。
「お兄さん！」
と、リンネが強い意志を感じさせる口調で秀人を呼ぶ。
「とりにくは低脂肪・高タンパクの栄養食です！　辛み成分カプサイシンは代謝をうながします！　つまり、これは栄養食です！」
「……本音は？」
リンネは、もじもじしながら、少し顔を赤らめ……
「おぎょうぎ悪く、ジャンクフードのたべあるきがしたいです……」
実に小さな悪行だった。
三人でアホみたいに辛いジャンクフードを食べながら歩くこと半

時間。
「ここなの」
アイのナビにより、立派な門構えの邸宅の前にたどり着く。
「何だよこれ和風じゃん……」
秀人は、異国で唐突に和のテイストと遭遇し困惑していた。
「文明が進みすぎると、こういったレトロなものに惹かれる人は一定数いるの」
「日本でもいまどき無いぞ、こんなコッテコテの……でも、設備はミッド準拠なんだろ。呼び鈴鳴らして入ればいいのか？」
――……！
何やら、裏手の方で物音がする。
「まずは回り込んで様子を見てみるか」
裏手の塀から覗き込む秀人。
「せまい」「我慢するの」「そっちにも穴あるだろ」「……我慢するの」「お兄さん、みえないです」「はいはい」
わざわざ同じ穴から内部を覗こうと、秀人に頬を寄せるアイ。リンネを持ち上げ、結局三人で狭い切り抜き窓から内側を覗きこむ。
内側では、目的の人物であるフーカ・レヴェントンと、何者かが争っていた。
「フーちゃん！」
「待て」
飛び出していこうとするリンネを、秀人が止める。
「これは、あの子の喧嘩だ」
見たところ、相手は得物を使っているとはいえ、ほぼ素手のようなもの。素手で応対しているフーカとは五分といったところ。
「決着がつくまで、見守れ。俺たちは家主のアインハルトとかいうやつを呼んで来る」
「……」
今すぐ飛び出していきたい。下手人をボコボコにしたい。そんな欲求がありありと見て取れた。
「出来るな？　リンネ」

「……はい」
苦渋の表情で、リンネは従った。見たところ、実力は拮抗している。呼びに行くくらいの時間はあるだろう。

そうして、少し離れた未開発地域で、秀人たちはアインハルトと、なじみの顔を一つ見つけた。
「今日は、ここまでで、良いだろう」
若干、呼吸を整える九音。多少は疲労しているようだ。その眼前に、生まれたての小鹿のように震えながらも立つアインハルトがいた。陸に打ち上げられたアザラシのようだった頃と比べれば、格段の進歩だろう。
「あ、ありがとう、ございました……！」
稽古の礼をするアインハルト。
「いよいよ明日からだな。不調は無いか？」
「あぁ……大丈夫。疲れただけだよ」
いよいよ明日から、クラス対抗戦だ。アインハルト所属のＡ組と、ヴィヴィオが治めるＦ組の勝負だ。九音はＢ組だが、戦力差を埋め拮抗状態とするため、Ａ組の戦力として参加する予定だった。
公園とは名ばかりの空き地に、少年二人で並んで座る。
「あー……勝てるかなぁ」
「勝ちに行くんだろ」
「そうなんだけど……皆目、見当がつかない」
戦力差は圧倒的。九音が加わったとしても、Ｆ組の面々は、一人一人が怪物級なのだ。特に、ヴィヴィオと冥というツートップ。
「あぁー、もう！　勝てるとか謎の確信に満ちていた自分が恥ずかしい……!!」
「いや、５００年前のオリヴィエになら、いい勝負が出来ていたらしいぞ」
ヴィヴィオの内なるオリヴィエから直接聞いたのだ。間違いない。それに……と、何かを言いかけて、九音はやめた。
「なんだ、ヴィヴィオに『勝ちたい』って話か？」

と、第三者の声。話に夢中になるあまり、接近に気が付かなかったらしい。アインハルトには聞き覚えの無い声だったが、九音は喜色を見せる。
「――父上！」
「よっ、九音。……しかし慣れないなぁ、その呼ばれ方」
父上こと、吾妻秀人がそこにいた。なぜ父上かと言えば、九音、七緒、五香……ついでに言えば、葉月（元セイン）雪月（元ウェンディ）、小春（元ディエチ）たち一部の戦闘機人の肉体は、秀人の細胞をクローニングしたもので構成されているからである。
世界一の有名神を前に……というか、ヴィヴィオの父親を前に、アインハルトは萎縮していた。それに構わず、秀人が二人の間にドカっと腰掛ける。
「んで、『勝ちたい』のか？『負かしたい』のか？『負けたくない』のか？」
すべて同じに聞こえてしまう。が、秀人なりに違うのだろう。
頭を悩ませるアインハルト。根が真面目なので、意味をしっかり吟味してから答えなければ失礼だ、とでも考えているのだろう。
「ますたー。ちょっとイジワルなの」
背後から、秀人と少し似た容姿の少女が、肩車をさせるような姿勢で被さってきた。言わずもがな、秀人のデバイスであるアイだった。
「こんなところで問答をしている暇があるのなら、早く戻るの」
秀人の頭を前後に揺さぶる。
「わかってるけどさぁ」
……はた目にはイチャついているようにしか見えないため、ウブな少年二人は顔を赤らめていた。
「そこの小僧」
「はいっ!!」
……綺麗なお姉さん（アイの外見年齢は１６ほど）に話しかけられ、声を裏返して答える小僧（アインハルト）。
「おまえの屋敷が襲われて、おまえの弟子のフーカが応戦しているの」
「……」

アインハルトは、その言葉の意味を理解するのに少しばかり時間を要した。
「リンネはまだ加減を知らないし、大ごとにならなきゃいいけど……」
のほほん、と話す二人をよそに、アインハルトの思考がようやく言葉の意味を理解した。
「そういうことは先に言ってくださいよぉおおお!!」
ダッシュで屋敷へ戻るのだった。
そして、屋敷へ戻った面々が見たものは、座り込むフーカ、満身創痍になりながらもトドメを刺そうとする謎の少女、そして、謎の少女へ一瞬で組み付き、大地へ叩きつける寸前のリンネであった。
「「「やべぇえええええーーー!!!」」」
◆・◆　◆　◆
――時は戻り、殺人バックドロップをかろうじて回避したところまで。
――がきんっ。
……バックドロップに失敗したと見るや、今度は両足がシャンテの首へ絡み付いてきた。両膝関節が気管を見事に捕えている。
「ぐぇえええーッ……!」
絞めるというか、〆るというか……折り砕く殺意に満ちていた。
「リンネ、やめろ。殺す気か」
「殺しますッ!!」
赤い瞳は狂気を宿し、本気の殺意を浮かべていた。
秀人がシャンテの喉との間に空間を作り、殺害を防いでいるが、リンネは本気のようだった。
「フーちゃんが勝ったんだ！　それなのに、気を失ったフーちゃんをいじめようとしたんだ！　ひきょうものめ！　おってやる！　くだいてやる！」
秀人は、無言で顎に、軽く打撃を加えた……まぁ所詮は子供だ。隙だらけである。
「あふっ……」
大蛇の拘束が緩み、シャンテは今度こそ解放された。されたが……

もはや立ち上がる気力さえ沸かないようだ。
「えぇっと……誰だ、これ？」
「……あれ、生きてる。生きてる、あたし。生きてる……」
ぶつぶつとうわごとを繰り返すばかりで、まだ正気に戻れてはいないようだった。なにせ、殺されかけたのだ。
シャンテは意識を失ったリンネとともに秀人の肩に担がれ、屋敷の中に通されるのだった。

「すぅ……すぅ……はっ」
睡眠により一定の回復を果たし、フーカが覚醒する。記憶を辿ると……どうやら自分は、喧嘩には勝ったらしい、ということだった。
『フーカ。起きたか』
「おぉ、ダキニ。その後、どうなった」
『その前によだれを拭けい』
「おっといかん」
見回すと、ここは自身に与えられた私室のようだった。アインハルトと、誰かの話し声がする。寝起きでふわふわする足取りで、そちらへ向かう。
応接間には、アインハルトを含む見知らぬ人たちと、先ほどまで殴り合っていたシャンテ。そして、
――リンネがいた。
「……フーちゃん！」
あぁ、いよいよ幻聴か。こんな場所に、居るわけがないのに。
「……リンネ？」
否……幻覚ではない。幻覚では、無いのだ。
「フーちゃぁあああん!!」
「リンネッ!! リンネーーー!!!」
あぁ、これは奇跡か。またこうして、リンネを抱きしめることが出来る日が、
――ドッゴォオオオオオオ……、!!

「ぶふぉおおオオオ……!!」
……リンネの全力タックルが、フーカに直撃をした。フーカはすっかり忘れていた。リンネは、可憐な見かけとは裏腹に、かなりの力持ちであるということを。
やや遅いが跳び、衝撃を空中に逃す。するとどうなるか。
――ずべっしゃぁあああ
「ぐわぁあああああ」
リンネ諸共に、部屋を飛び越える勢いで、アインハルト邸の廊下に転がる。
「フーちゃん!? ご、ごめんなさい……!」
「よ、良か、良か……」
よろよろと立ちあがると、ようやく姿を確認することが出来た。少し背が伸びたか。身なりはかなり綺麗にしており、良い環境にあることが分かり、安心した。
「フーちゃん」
「リンネ」
そして、顔を見合わせて笑う二人。久しぶりすぎて、何から話せばいいやら。単純に気恥ずかしいのだ。とくにリンネは、こんなフリフリの少女趣味の洋服など、着る機会は無かったのだ。
「フーちゃん」
フーカの手に、そっと己の手を添えるリンネ。骨ばっていたころとは違う、年頃の少女らしい柔らかな手だ、と、フーカは安堵した。
「いますぐ、あいつをボコボコにしてあげるから安心してね」

……やはり幻覚だ、と、フーカは現実から逃避した。
リンネの視線が……シャンテを完全にロックオンしている。
「や、やるかぁっ……!?」
シャンテは怯えながらも、辛うじてファイティングポーズを取る。
「――全員、」
……と。重圧を伴う声が、場を一瞬にして支配した。
「――そこに、座れ(正座)」

……ぺしゃん、と、あれほど殺意をむき出しにしていたリンネを筆頭に、皆がへたりこむ形で座る。九音は自発的に腰を下したようだ。
神の威圧を以て場を鎮めた秀人は、コロっと雰囲気を軽いものに変え、言った
「よし。それじゃ、自己紹介から始めるか！」
当たり前すぎる提案だった。
「ワシはフーカ。フーカ・レヴェントンじゃ。一応、地球出身じゃ。ワケあってアインハルトさん家のお世話になっている」
「紹介に預かったアインハルト・ストラトスだ。新区へはミッドからの留学として来ている」
『そしてわらわは聖王ダキニちゃんだ！　敬うがいいぞ！』
なんかサラっと変なのが混じってる……
「九音。戦闘機人Ｎｏ．０９。父は吾妻秀人もしくはジェイル・スカリエッティだ」
「リンネ・ベルリネッタ。地球出身、フーちゃんのおさななじみです！」
「ＡＩ―０ＸＸ―０１ＡＴ　……気軽に『アイ』って呼んでくれて良いの。そこにいる吾妻秀人のデバイスなの」
「吾妻秀人。地球出身」
「シャンテ・アピニオンだ……です。聖王教会所属のシスターで、新区に赴任してきたうちの、一人です……」
「聖王教会の人間か。いまどき珍しい過激派だな」
先に自己紹介を済ませていたアインハルトは、あっけらかんとした様子だった。
「っていうかさー、顛末が全くわからないんだけど」
「確かに……説明を頼む」
「……別に、聖王教会の一員だから、聖王に仇なした覇王の血族でも倒せば、教会にハクでもつくかなーって」
「なんて迷惑な話だ……」
まったくである。

「だが、まぁ……フーカも基礎訓練ばかりでは、成長が実感できずにモチベーションが下がってしまっていただろう。結果的に、良い経験だったはずだ。感謝する」
「へっ……結局、負けたんだけどさー……」
シャンテは、ソファの上で膝を抱えてふて腐れている。じぃっと自身を見つめるリンネの視線には、密かに怯えているようだった。結構マジに殺されかけたのだ。
「リンネ。そんなことをしてはダメじゃ」
静かにリンネを諭すフーカ。元々いじめられっ子のリンネの激変ぶりに面食らったものの、それでも大事な妹分である。
「……でも、わるいやつは暴力でくっぷくさせてもいいんだよ。暴力はすべてを解決するぼんのうツールだって、神様もいってたもん」
フーカは、ふかぁくため息をつき……秀人[神様]の方を見た。
「いや俺じゃない。俺じゃないって」
冤罪を掛けられた秀人が必死に否定する。
「……んで、本来は何をしにここまで来たんじゃ？」
秀人たち本来の目的。それは……
「学院を脱走した生徒の安否確認、そして捕縛だ」
「やっぱりのう……」
諦めもついたのか、特に抵抗も無かった。しかし、秀人は……何かを考えている様子だった。
「……九音、アインハルト」
「「はい」」
「明日のクラス対抗戦が終わるまで、フーカ・レヴェントンの捕縛は見送る」
更に。
「フーカ、リンネ、シャンテ。お前たちは、明日のクラス対抗戦を見学しろ。話はそれからだ」
「「えっ」」
「フーカ。少なくとも、明日の対抗戦が終わるまでは、お前を無理に連

れ戻しはしない」
　それに何の意味があるのか。異口同音に疑問を呈する年少者たちに、秀人はそれ以上のことは言わなかった。ただ、アイだけは全てを察したように頷いていた。
「ただしダキニ。テメーはダメだ」
『ひょ!?　何でわらわだけ!?』
……悪霊は野放しにはできない。

――いよいよ。
――ヴィヴィオ（聖王）対ヴィクトーリア（雷帝）の戦いが、始まる。

# ｖｉｖｉｄ編　２３話『　開戦　』

そのころ、なのはは。
彌茅とヴィヴィオを伴い、学院までやってきていた。スバルたちへ、フーカの生活実態の聞き取りを行うためだ。事件からおよそ半年で区切りも良い。慈樹はヴィヴィオの背に乗り、スヤスヤと眠っている。
「お母さんなに緊張してるの？」
「いや……その……ね？」
「いや。ね？　じゃないから。ぜんぜんわかんないから」
「……実は、六課時代の携帯端末を粉砕しちゃってさぁ」
「粉砕するものなの……？」
実際は、手頃な投擲物として使用した結果である。投げてから気づいた、まさしく後の祭りである。
「バックアップなんて取ってなかったし、スバルたちの連絡先もそれでおじゃんってわけよ」
「それ、いつごろの話？」
「……三ヶ月くらいかなぁ」
「遅すぎるでしょう!?」
つまり、このなのは。スバルたちと三ヶ月くらい連絡を取っていないのである。
「まぁいいかなーって思ってたんだけど、よくよく考えたら結構薄情かなぁって……会ったら何言われるか……」
「よくよく考えなくても酷いと思うよ、それは」
「あーあ、どやされそう。ところで、ヴィヴィオ。彌茅、気づいてる？」
「うん」
「はい師匠（せんせい）」
三人が校舎の廊下を歩いて、どれだけ経ったのか。あまりにも不自然な距離だった。
「無限回廊型の結界ね。これはセリカかしら」
事件以降も、ユーノに師事していると聞いた。確かに、この術式に

はユーノっぽさを感じる。
「まぁ乗ってあげましょう。二人は見ていなさい」
「はぁい」
「はい師匠(せんせい)」
「慈樹パス」
おんぶ紐で慈樹をヴィヴィオに渡す。慈樹は全く危機感を感じさせることなく、眼をぱちくりとさせていた。謎の大物感を醸し出す息子である。
なのはは、腰に提げた剣を抜く。現地で調達した、そこそこの長さと重さと切れ味の、ベーシックかつオーソドックスな両刃の剣である。
「懐かしいわねぇ」
思えば、六課時代はよくこのような剣でスバルとティアナをボコったものである。
一閃。破壊術式が剣戟に乗り、回廊を斬り裂いた。同時、それをトリガーとしたトラップと、苛烈な射撃が降り注ぐ。
カキンッカキンっと射撃を弾き飛ばす。
「よっとっと、と」
そうして、射撃の最後の一発を斬り裂くと同時……
――ぼしゅうううううっ
煙幕が焚かれる。ティアナの得意な攪乱だ。
――ぼぉうっ!!
煙幕を突き破り、見慣れたナックルが飛来する！
「……思っていたよりワンパターンね」
少しがっかりした様子でナックルを迎撃する。剣を手元でくるりと回し、柄尻で……
――がきぃんっ!!
「……あら？　ナックルだけ？」
妙に軽いと思ったら。それはナックルの外郭だけだったのだ。とたん、全身が警戒に総毛立つ。
「背後、」「うぉおおおおおおっ!!!」

攻撃の瞬間まで、完全に気配を煙幕の中に隠していたのか。以前はイノシシのごとく見え見えだったというのに……

（成長しましたね、スバル）

少しだけ、魔力を剣の柄に込めて強化する。こんな段階で魔力を多少なりとも使うとは。

――――以前の感覚は捨てよう。いま相対しているのは、未熟な新米ではない。幾多の争乱を潜り抜けてきた手練れなのだ。油断してはこちらがやられる。

スバルのナックルは右腕のみ。射出したとすれば、残るは素手のみ。とはいえ、それは過去の話。何らかの武装をしているか、それとも……

「おぉおりゃあああ!!」

素手。多少、デバイスのフレームで補強されているが、ほぼ生身である。無謀にも思える攻撃。しかし……

――――ドゴォンっ!!

……生身でありながら、この一撃。

秀人や大家がそうであるように、徒手空拳を極めたる者に極めて近い一撃だった。

なのははそれに応えようと、剣へ両手を添え……渾身の一撃を繰り出す!!

「ふぅっ……!!」

――――ゴォキィイイインッ!!

互いの気が衝突し、大気が震える！

がしん、とスバルのナックルに外郭が戻る。同時、ティアナの射撃が胴体、頭部を同時に打ち抜く軌道で飛来する。身を屈め、反らし……とは言うが、亜音速で飛来する銃弾を、視認してから動くといった、人間離れしたなのはの視力だからこそ可能な対処だった。

その二発を囮に飛来した本命、不可視の銃弾を、大気の動きで認識し回避をすると、スバルのナックルと併せた重量級の一撃が絶え間無く降り注ぐ。

骨格からのスムーズな動き。筋・骨・肉が一体となった、しなやか

な打撃。
「……」
なのはは、満足だった。
手を離れた部下たちが、予想を上回る成長を見せたのだ。応えてやらねばなるまい。
「『二刀』を使いますよ」
なのはは、腰に提げていたもう一刀を抜く。
「「げっ……!?」
スバル、ティアナ、セリカが驚愕する。
二刀流が一刀流に勝るとは、一概には言えない。しかし、なのはの場合は、違う。そもそもが小太刀二刀流を源流に、実戦の中で身につけた戦闘術の使い手。二刀を持つことで……　なのはの戦闘力は、本来の実力により近づくのだ。手数は倍に、制空権も倍。
「「ず、ズルいー!!」」
「勝った方が勝ちよ」
何より、テンションが上がる。『ヨーシなのはさん奥義出しちゃおっかなー』となるくらいに。
――――ガキュウンッ!!
より収束率を上げた射撃。安易な大出力の大技に逃げず、適切な手を選択したと言える。おかげで……
「命拾いしましたよ、三人とも」
なのはは、射撃を斬って、魔力にまで分解し……それを刀に乗せ、ノータイムで斬撃として『放った』のである。
カウンターの一種であるが、もしここで、ティアナが威力に頼った攻撃をしていたら、それだけダメージも増していた。
自身の魔力を一切使わずに魔力攻撃を唐突に繰り出した不意打ちに、スバルは斬られ、ティアナは投げた刀の杖で額をドツかれ、セリカは結界を破壊されたバックファイヤで……
「「ぎゃー!!?」」
同時に、一時戦闘不能となった。
「うん、三人とも意識あり。合格合格」

ティアナに放った刀を結んでいたワイヤーで引き戻し、からからと笑う。
「ぐ、ぐぬぬ……！」
負けた悔しさを滲ませるスバルたちは、ずいずいとなのはの前までやってくる。そして……
「「なんでメールの返事よこさないんですか――――!!」」
……ごもっともな怒りをぶつけるのだった。
「え、ええ……そっち？」
心外そうにするなのは。
「そっち、じゃないですよー！　三ヶ月！　三ヶ月ですよ!?」
「いきなり連絡付かなくなるし！」
「なんで情報部隊のわたくしの捜索にひっかかりませんの!?」
ＬＩＮＥ、Ｔｗｉｔｔｅｒ、Ｆａｃｅｂｏｏｋ、Ｉｎｓｔａｇｒａｍといった主要ＳＮＳを使用していなければ意味を知らず、他人のソレに写り込むような人付き合いも無く、監視カメラを避けて行動する癖があるなのはは、普段通りに生活しているだけで、セルフステルスだった。忍者の血筋である。
「行くって連絡はしたでしょう」
セリカが、げんなりした様子で抗議する。
「それってアレですの……？　三日前くらい、発信もとが街の公衆電話からの『もしもし私。三日後に行く』っていう謎メッセージですの……？」
ヴィヴィオがぎょっとした様子で話に加わる。
「お母さん、『アポは取った』って、それのことだったの!?」
「？　そうだけど」
「それ、イタ電！」
……学院はその性質上、いたずら目的の悪意あるメッセージが届きがちである。それをセルフフィルタリングするシステムがあるのだが……なのはのメッセージは、それに引っかかって届いていなかったらしい。
「本題に入りがてら、」

「連絡手段を確保しますからね！」
「ケータイを買いに行きますわ！」
　両脇を固められ、なのははスバルたちに連行されていく。
「ヴィヴィオ。お母さんは出かけてくるから、彌茅に学校を案内してあげなさい。あと慈樹こっちにパス」
「ヘイヘイ、パース」
「あー」
　……端から見たらフツーに虐待であった。そして。
　なのはの剣戟も。スバルの格闘も。ティアナの射撃も幻術も。
　幼い眼でありながら、完璧に捉えていたことを、誰も気付いていなかった。

「おっ、教官！　ちーっす！」
「ゼルビスは変わりませんね」
　すっかり恒例となったゼルビス運転の移動である。
「あの空飛ぶ円盤みたいなのは使わないんですか？」
　ちょっとウキウキした様子で聞くなのは。
「有事の際以外は陸路を使うように、と。まぁ、ほぼミッド準拠ですからね」
　新区の開発も未だ途上といったところだ。
「カレドヴルッフみたいな企業も入りましたし、移動手段を限定することで、監視が届きやすくなるってメリットもありますけどね」
「あそこかぁ……」
　管理局で採用されてる制式デバイス。その製造元でもある。もちろん、公正なコンペや入札を経ているのだろうが……
「まぁ、カレド製をほとんど使っていない六課の方が珍しいんだと思いますよ」
　車両は日本車（横流し）、デバイスや電子機器はマリエル印……例外中の例外なのだ。
「個人のケータイくらいはカレド製ですけど」
「カレド製って日本でも使えるのかしら」

「使えると思いますよ。結局、大本のＯＳがマリエル印ですから」
「……今更だけど、マリエルって天才なのよね」
今頃、マリエル、プレシア、ジェイルの三人で仲良くしていることだろう。
「ところで、学院の方はどうなっていますか？」
……六課の面々は、微妙な顔をした。
「フーカ・レヴェントン脱走の件は把握しています。現在の所在も同様に」
「そう。ならいいわ」
自主性を重んじる校風だ。把握しているのなら、多くは言うまい。
「なのはさん、ヴィヴィオなんですけど……」
ティアナが言いよどむ。
「あぁ、だいたいわかるわ」
が、なのははしっかりと把握しているようだ。
「明日の試合は、私も見学します」
その言葉は、どこか、結果を予知しているようだった。

彌茅とヴィヴィオはと言うと。ざっと校内を案内すると、食堂へ移動をしていた。
「基本は無料ですので、好きなものを頼んでください」
「はい。ではポップコーンとチュロスとコーラを」
「……？　なぜに？」
「好きなので」
とはいえ、さすがは頼めば何でも出てくる謎食堂。バケツのような容器いっぱいのポップコーンに、紙で包まれたチュロス、紙コップにストローが刺さったコーラが出てくる。雰囲気が出ている。
ざくざくと食べ進める彌茅。
「一人で食べるのもいいですが、やっぱり、クインさんと一緒に映画を見ながら食べるのが一番好きです。あ、クインさんというのは、私の姉妹弟子の人です」
ヴィヴィオから、とくに返答はなかった。そっけないなぁ、と、彌

茅は特に気にしていない様子だが。
ごっごっごっ……とコーラを一気に飲み干すと、紙コップをかつん、とテーブルに置く。そして。
「ヴィヴィオさん、手合わせを願えますか」
「良いですよ」
……あまりにも飛躍したコミュニケーションだったが、成立しているようだ。
腰に提げた木刀に手を添え、居合い抜きの構えを取る彌茅。
「ヴィヴィオさんは、刀は使わないのですか？　師匠(せんせい)から授けられた、と聞き及んでいますが」
「素手の方が性に合うので。使いたくなったら……まぁ、母に教わります」
「それは失礼しました」
「いえいえ」
……互いに構えたまま、軽口をたたき合う。
見合って、見合って……
「……ふぅ、ありがとうございました」
彌茅が、先に気を抜いた。
「どうにも、届きそうにありません」
実力差を計った結果、その結論に至ったらしい。
「妥当な判断でしょう」
ヴィヴィオもまた、構えを解く。食べ終えた食器を下げに行くヴィヴィオを眼で追い……
「今は、まだ」
彌茅は、ぼそりと呟いた。

なのはは六課の面子と久々に会う一種の同窓会だ。慈樹は人気者で、男女問わず抱き上げられている。
秀人にとっては……
「よう、セイン。ウェンディ」
ナンバーズ時代の同僚……と言ってよいのか悪いのか、微妙な間柄

の顔見知りとの再会である。
もともと、あの頃の秀人はいろいろギリギリであり、まともなコミュニケーションなど取ってはいなかった。
一応、二人は秀人の遺伝子から培養した肉体を持つ、血縁のような間柄なのだが……
「ち、ちーっす……」
……どうにも怖がられている。いろいろ縮んで少女が幼女になった二人に怖がられるというのは、少し傷つく。
「……そう怖がるなよ。取って食いやしないって」
秀人は、プレゼントという飛び道具を用いることにした。
「おーい、アイ！　ちょっと！　こっち！」
「呼び方が雑すぎるの……そういうのが積み重なって熟年離婚に繋がるの」
「アレ出してアレ」
「はいはい……」
アレ、だけで通じる間柄で、離婚などどの口が言えるのだろうか。
「はいアレ」
ぽい、と投げ渡したのは、シルバーのアタッシュケースだった。
「なんスかこれ」
ぱかっと開けると、そこには、少女の手には余りそうな大きさの機材が納められていた。
「……あっ、これ！」
セインは思い出した。この男が、『デルタ』なるコードネームを名乗って、クイントやティーダらと共に仮面の戦士をやっていた頃の装備品だ。
「これやるよ。もう使わんし」
「……」「……」
……二人は困っていた。
「プレゼントのセンスが無さ過ぎなの」
アイはため息をついていた。
「まぁ、それをそのまま使えとは言わないって。三博士のところに

持っていけば、二人の専用装備に仕上げてくれる」
　末っ子の小春は、すでにヴァイスから装備を受け取っているが、この二人はまだ自分の装備を持っていない、と聞いている。
「……」
　恐る恐る、デバイスに触れる。しかし、使い方がイマイチ分かっていないようだ。
「おっ、なにこれカッケェー!!」
　ゼルビスがひょいっとデバイスを持ち上げる。
「おっ、コレとコレが繋がって……こうか！」
　銃型に変形したデバイスを構え、
「バーン、なんつってな！」
　引き金を引き……「あっ、おいそれ」

　――バキュゥウンッ!!
　……発射された弾丸は、ウェンディとセインの中央をギリギリ通過し、壁に穴を開けた。
「……ホンモノだから」
　忠告が遅かった。
「ひ」
　ウェンディが、しゃっくりでもするような声を出し……
「ひぃいいいい――ー!!　やっぱコイツ怖いッス――ー!!」
　セインの手を取り、ワタワタと逃げ出した。
「あっ、待て！　いや誤解だって！　おいぃ!!?　……待てやオラァ！
　お話しようぜぇ……！」
「「ぴゃぁあああああ――――!!」」
　……信頼を得られる日は、まだまだ先になりそうだった。

　――ピピィー!!
　喧噪を切る、ホイッスルの音。見れば、食堂の中央に『実行委員長』の腕章を巻いたアリシアが立っていた。
「はい、みなさーん！　明日のクラス対抗戦についての、最終確認

でーっす！」
――――オォー!!
と、ノリの良い面々が拳を挙げる。
「明日は、リベンジに燃えるＡ組バーサス！　受けて立つＦ組！　Ａ組はオブザーバーとして、Ｂ組代表、翠九音さんと、秘蔵っ子『覇王』の末裔、アインハルト・ストラトスさんの二名を迎え入れての挑戦となります！　恥も外聞も無く外部戦力を迎え入れてまで挑む気概や如何に！」
――――「いいぞー！」「下克上だー！」「戦争だー!!」
……六課の面々は、立場的には教官なのだが、どうにも血の気が多かった。
リンネはアインハルトの屋敷に残してきたが、正解だろう。手遅れかもしれないが、悪影響が大きそうだ。
「師匠（せんせい）、スバルさんたちに挨拶をしてきて良いですか？」
「無理しなくて良いんですよ」
「無理、とは？」
不可解そうな顔をする彌茅。
「だって……知らない人に話しかけて、ましてや挨拶をするなんて……そんな苦行……」
苦行と申すか。
「大丈夫です。行ってきます」
ぺこりとお辞儀し、すたすたと行ってしまった。
「うぅっ……弟子の成長が眩しい……！」
師匠は成長しなさ過ぎである。
「お母さん」
「あらヴィヴィオ。冥ちゃんも」
「こんばんはー神様」
「はい今晩は。明日の準備は万端？」
「どーだっけ、ヴィヴィオ？」
「万端って言ってたでしょう。対九音シミュレーションもばっっちりだって」

「ふぅん、そっか。大丈夫なのね」
「まぁ、それでもちょっと不安が残るところだけどね……九音、強いから」
なのはは、無言でヴィヴィオの頭を撫でてやる。
「恥ずかしいなぁ、もう……」
そうは言いながらも、大人しく撫でられていた。
……なのはが、至極冷徹な顔を見せているとも知らずに。

「……めちゃくちゃおなかが痛いわ」
Ａ組委員長、『雷帝（分家）』ヴィクトーリア・ダールグリュンは、洗面台の鏡に映る真っ青な己の顔を見つめた。
「うぅっ……ゲロ吐きそう……昨日から何も食べてないのに……」
重責からのプレッシャーは、哀れなる委員長の胃を蝕んでいた。
認めよう。確かに己は思い上がっていた。歴王の中で、数少なく現存する純血統。本家筋を軽く凌駕する魔力と戦闘センス。同年代に敵は無し。それが……あのような屈辱の敗北を。
「くっ……！」
毟りとられた金バッジ。クラス代表者の証。
「取り返してみせる……！　今日こそ……今日こそ……！」
……暗示のように呟いても……鏡の中に映るのは、偉大なる雷帝の子孫とはほど遠い、惨めな負け犬の顔だった。
クラスに到着する。皆、それぞれに今日という日を迎えたのだろう。今まさに死地へ赴くような顔をしていた。
ヴィクトーリアは、気丈な顔を取り繕いながら、教壇に上がる。
「……みなさん。いよいよ今日という日がやってきました」
クラスの一部から、すすり泣く声まで聞こえる始末だ。身に纏った先祖伝来の戦装束が、どうにかヴィクトーリアの心を支えていた。
「……クラス対抗戦。相手は……Ｆ組です」
とうに周知されていた事実だ。というかそもそも、クラス対抗戦を持ちかけたのはＡ組だ。

Ｆ組はヴィヴィオ・冥という二大巨頭がおかしいだけで、ほかは拮抗している筈なのだ、と。甘い見立てがクラスに蔓延し、多数決で開戦が決定した結果……このザマである。
なぜ安易に開戦をしたのだ。慎重になるべきだった。最初にＦ組にちょっかいを掛けたのは誰だ。自分は開戦には反対していた。何を平和ボケの鳩めが。黙れ右巻きの鷹が。などなど。
「開戦という事実は、変わりません」
ヴィクトーリアは、教卓に手を置き、静かに言った。とたん、喧噪が静まる。
「我々はクラスを編成された時点で、議会制・多数決制を取る、という決定を下しました。もちろん、反対意見もあったでしょう。ですが……このクラスの一員である以上、一蓮托生なのです」
「うっお腹が痛い……」「頭が痛い……」「腰痛が」「持病の虫歯が」
仮病で脱走を図る。しかし……
「学院が誇る最高の医療スタッフによって、我々の肉体は超健康体ですわ……諦めなさい」
もはや逃げ道は無い。
「ですが……勝利への希望は、ゼロではありません」
ヴィクトーリアの隣に、二人の少年が並び立つ。アインハルト・ストラトス。翠九音。
「お二人の助力を得、ゼロの勝機を……万分の一、千分の一に上げていくのです」
その千分の一の勝機を掴むのは、彼ら次第だが……
「このまま、負けたまま卒業してしまっては……我々は、ただの恥さらしの負け犬です」
曲がりなりにも、Ａ組の生徒は名家の子息子女で構成されている。一族の期待を背負って、この学院に送り出されてきたのだ。
「戦いましょう……！　勝てずとも……せめて、最後は華々しく……！」
「委員長！」「学級委員長！」「雷帝！」「分家！」
クラスメイトは口々に、ヴィクトーリアへの支持を表明する。

……同期の桜でも歌い出しそうな雰囲気だが、一時的にでもクラスは纏まったようだ。ヴィクトーリアにはやはり、人の上に立つ天分がある。

一方そのころ。

Ｆ組の面々も、浮き足立っていた。実力があろうとも、やはり子供なのだ。

「うぅぅー……！」「ちょっと、落ち着きなよ……」「貧乏揺すりしながら言うのもどうかと思う」「だってぇ」

遠足を控え手いるかの様相だが、実際は軽い戦争である。ウキウキとしているあたり、どこか頭のネジが外れている。

「モイラちゃん、結果は!?」

クラスメイトの注目を集めたのは、割れてしまった水晶球をガムテープで固めたものをのぞき込む少女。予知能力を持った少女、モイラである。

「にゃむにゃむ……はっ、見えました」

「「「「どう!?」」」」

ごくり……と唾を飲むクラスメイトたち。

「……金の証が、動きます」

金の証。これは、クラス代表者へ与えられる金バッジのことだろう。ヴィクトーリアのものは、ヴィヴィオが所有している。九音のバッジか？　と、首を傾げていたところに……

ガラッ……

クラスの後方ドアが開いた。ヴィヴィオと、冥だ。いつもは教壇側のドアから入って来るが、今日は反対側。静まり返り、固唾をのむクラスメイトたち。

ヴィヴィオと冥が歩を進めるごとに、クラスメイトたちは自然と教室の両脇に整列するような形となる。

そして……教壇に立ったヴィヴィオが、勿体ぶって振り返る。

「――――開戦です」

ざぁっ……と、伝播する。

それは、クラスメイト、否、兵たちの心に触れ……劇的に、熱狂させた。
「万歳……！」
誰にとも無く、声に出す。
「万歳！」「万歳！」「聖王閣下万歳！」「聖王閣下万歳！」「聖王閣下万歳!!」「勝利を！」「聖王閣下に勝利を！」「我が軍に勝利を！」
恐ろしいカリスマでクラスを沸かせたヴィヴィオは、満足げに『それ』を掲げる。つい先日完成したばかりの、ヴィヴィオ専用デバイス。
その名は。
「――レガリア（王権）、セットアップ」
光輝く七色の魔力光。武装が開始されると同時……Ａ組、Ｆ組は戦場へと転送された。

針葉樹林と荒野のフィールド。
ここが、決戦の地だ。
軽装のままの九音、アインハルトが降り立つ。デバイスらしいデバイスは保有していないようだ。
「ま、参りましょう、みなさん……!!」
ぷるぷる震えながら、先頭に立つヴィクトーリア。
「この戦いはフラッグ戦。そして、フラッグは大将首だ」
「く、くび……！」
ヴィクトーリアがおののく。まぁ実際に首をはねられる訳ではないだろうが……
とにかく、大将を防衛しつつ、敵の大将を倒せばよいというシンプルな戦いだ。
「ヴィヴィオのことだ。まず……」
――と。兵の一人が、空に影を見た。大きな、黒い……巨大な岩塊を。
「――面制圧で所見殺しを仕掛けてくる」
「げ、迎撃――――!!」
魔力砲が岩塊を撃つ。しかし、そもそもの質量が巨大なためそう

易々戸は削れない。
「ひ、ひぃいい――！　とにかく迎撃ですわー！」
「やるぞ」「応！」
ヴィクトーリアの指示を受けた九音・アインハルトが、落着寸前の岩塊に向け、拳を繰り出す！
――ドガゴォンッ!!
岩塊は、粉砕とまでは行かずとも割れ砕け、兵たちで十分に砕ける質量となった。
「……進言だ雷帝。この場を動け。二発目が来る」
「！」
はい、と言い掛け、ぐっと口をつぐむ。そう、このクラスのリーダーは、九音ではなく、ヴィクトーリアなのだ。
「全軍、前進！　針葉樹林へ入り、陣を敷くのです！」
「了解！」
「……」
九音とアインハルトも続く。
――ずずずずんっ……！
その背後で、岩塊が雨となり降り注いでいた。少しでも遅れていたら、と考え、ぞっとする。
針葉樹林の中には岩窟などもあり、陣を敷くには適していると言えた。
「防御を固めつつ、尖候を送るのです！　敵軍の配置を、」
――霧。
気候条件的に発生するのが不自然な、霧が出ていた。
「吸い込むな！」
とっさに口を守れた者も多かったが……
「うっ……」「ね、眠……い……」
ばたん、と力無く倒れていく。
魔力で簡易的なフィールドを張れば防げる。しかし、有効範囲が段違いだ。この森のほぼ全域を霧が覆っている。
「防御用の魔力をサーチされれば、そこへ打ち込まれて終わりですわ

ね……」
身を隠すことさえおぼつかない。
「どうする、雷帝」
「……！　ここは、最大防御ですわ！　攻撃に耐えうるだけの防御を築くのです！」
逃げる隠れる、ではなく、耐える構え。結界魔法に長けた兵たち。
しかし……
――ぐるルルルァァ――――ー!!
「ぎゃあっ!!?」
霧の中から飛び出した謎の影に、引き倒された。
「がっ……かっ……！　……」
謎の影は、兵の首を噛み、窒息失神させている。
「お、狼……!?」「離れろぉっ!!」
しかし……
――オォオオオオーン!!
二つ、三つ……影の獣が、増殖していく。気がつけば、陣は影の獣たちに包囲されていた。
「……」
絶体絶命。九音に頼るという手を使うか……
――否。
「……」
ヴィクトーリアは、自ら結界から歩み出ていった。
――がぁっ!!
ヴィクトーリアの甲冑に噛みつく獣たち。しかしヴィクトーリアは退くことなく……
「身の程を、――」
――バヂッ……バヂヂヂヂッ……!!
「――弁えろぉおおお

……、雷光が迸り、霧も、獣も、等しく消し去った。
「……ふぅー」
バリバリと魔力の余韻で帯電する空気を身に纏う。その姿、まさに……
「――――雷帝」
一度ぶっ放してスッキリしたのだろう。ヴィクトーリアは、静かな口調で兵へ指示を飛ばす。
「敵軍の総力は未知数。対処に徹するだけは愚作。
……前へ出ます。少しでも腕に覚えのある者は共に来なさい」
――――負け犬が、牙を剥く。
「――――えいっ。えいっ」
……可愛らしいかけ声と共に、岩塊が飛んでいく。
「着弾。次も着弾」
観測手の少女が淡々と告げる。
F組は訳あってヴィヴィオ不在の中、副将である冥の指示で動いていた。
「つぎは森に逃げ込むよ。……カミラ」
「ふふ、わかりましたわ」
黒いドレスを着たスタイルの良い美女……カミラが、冥の指示を受け、宙に溶けるように消えていく。カミラが溶けた霧は、霧散することなく、森へ染み込んだ。
「カミラの霧魔法。眠りと牙で、どれだけ潰せるか」
しかし……
――――バリバリバリッッッ、ズドォオオオオンッ!!!
地上で雷が発生したかのような閃光と轟音。
「おや」
体を霧へと変えることで、あらゆる物理ダメージを無効化するカミラだが……霧全体を雷で灼かれては、ひとたまりもあるまい。

霧が晴れる。今頃、森のどこかでノビていることだろう。
「……なめすぎたかな」
冥は、大きな気配が森からこちらへ一直線に進んでくるのを感じた。
「モルル、真管セット」
「あいさー！」
ずぼんっ、と地面から、オーバーオール姿の少女が現れる。巨大な手袋で地面を掘り進んできたのだろう。
「あの一帯を地雷源に変えてきたね！　踏んだらドッカンドッカンよ！」
冥は、手頃な身の丈ほどの岩に手を添える。飛んできたのなら、的当ての的にしてやるだけだ。
しかし、ヴィクトーリアはくさび型の陣形の先頭に立ち、身を隠すでもなく堂々と進んできた。岩を放り投げる……のは芸がない。地雷を踏んだなら、その際に起きるであろうパニックに乗じて攻め入るのが得策だろう。
「爆ぜるぞ、爆ぜるぞ……！　美しきクジャクの羽よ！」
モルルは瞳を期待に爛々と輝かせる。クジャクの羽根、とは、爆炎のことを言っているようだ。
くさび型陣刑の先端、ヴィクトーリアが、地雷源に足を踏み入れる。
――――グゴォンッッ……!!
きゃあ、やったぁ、と歓声を上げる聖王軍。
「引っかかった引っかかった！」「何人くらい減った!?」「掃討に出よう！」
しかし……
「いや、やってない」
煙が晴れる。そこには、ほぼ健在の雷帝軍。ヴィクトーリアは、槍の穂先を大地に突き刺している。
「電気を流して強制的に全部起爆させたんだ。電気真管がアダになったね」
「あぁあ……！　クジャクの羽根が……」

「あとは乱戦だねぇ」
地雷源を突破した雷帝軍は、バラけること無く進軍してくる。これだけ力の差があるのなら、纏まっていた方が良いのだろう。
「ぜんぶ蹴散らす」
冥もまた、先陣を切って歩を進める。
「冥だ……！」「数で当たれ!!」
雷帝軍の兵が総がかりで仕掛ける。怪力を警戒しての、射撃や砲撃をメインとした良い弾幕だ。これだけの槍襖を構築されれば、ひとたまりも無い。下がるか、耐えるか……しかし。
――しかし、冥である。
「ぬるいなぁ。殺す気で来なきゃ」
命中した筈だ。直撃した筈だ。しかし……衣類にさえ、傷どころか乱れひとつ無い。
「――――えい」
拳で、大地を叩く。ただそれだけの単純な攻撃は……雷帝軍の第一陣をへ、壊滅的な被害をもたらした。
――ごぐぅんっ……!!
大地が、割れた。底さえ見えぬ奈落は、無慈悲に敵兵を飲み込み……無慈悲に、閉じていく。
「――――ー断」
兵たちは、死を悟った。このまま、大地の顎に噛み砕かれてしまうのだろうと。
「――――ー空」
しかし、それは幻想に終わる。
「――――ー拳ッ!!!」
――バガァァァンンッ!!
冥が大地に打ち込んだ魔力を、同等の魔力で粉砕する。
「オレが相手
「になるなんて、本気で思っているの？」

……いつの間に間合いを詰められたのか。襟首を掴んだまま、モノでも放るようにアインハルトを投げ飛ばす。背後には、岩。
「くっ！」
体を回転させ、岩に着地……はせず、岩を蹴り、跳ぶ。その判断は、アインハルトの命を救った。
――バガァンッッ!!
冥の追撃の一撃が、大岩を砕いたのだ。
「おまえはヴィヴィオをいじめた奴だ。楽に死ねると思うなよ」
ずぼっ……と、岩の破片から足を引き抜いた冥が、アインハルトへ死刑宣告をする。その魔手を延ばし……
――バヂバヂバヂッ！　バチィイイイインッ!!
その横合いから、稲妻が襲いかかった。
「……雷帝か」
冥が……初めて、攻撃を防いだ。
「アインハルトさん、よろしくて？」
「あぁ、ヴィクトーリア」
覇王と雷帝が……冥府の鬼に挑む。

さて……これだけ戦闘が本格的になってきているというのに、Ｆ組筆頭たるヴィヴィオは、そして、Ａ組の助っ人たる九音は、どこにいるというのか。
「――。この辺りで良いだろう。余波は最小限に収められる」
九音が虚空に語りかける。すると……
「――そうだね。このへんにしようか」
空から、声が降ってくる。日は直上を指している。太陽をバックに……両足を揃えての、急降下キックを放つ！
――ガシィンッ!!
九音の右手甲が、恐るべき威力の蹴りを受け止める。
「ぐっ……いつもより、重いな……！」
「重いとは失礼しちゃうわね」
だが、それは当然のこと。ヴィヴィオはその身に、超重量を纏って

いるのだから。
――黄金。
それは、陽光を眩しいまでに反射する、黄金の鎧だった。アンダースーツが黒色、瞳と同色のルビーとエメラルドが各所に幾何学的に配置されている以外、ほぼ全て黄金色で構成された鎧だった。
「……悪趣味じゃないのか」
「そこは嘘でも褒めておかないと、女の子にモテないわよ」
戦闘中に軽口を叩くという、両親ともに共通した妙な悪癖を見せるヴィヴィオだったが……その身なりは伊達や酔狂ではない。ただ単純に、重いのだ。比重で言えば、それこそ黄金並か、それ以上。わざわざ重りを抱えて戦場に出る異常性。だが……
「丁度いい重さね」
ぶるんぶるんと腕を振るう。
ヴィヴィオに外的な脅威はほぼ存在しない。
しかし、ヴィヴィオは己の弱点を自覚していた。
それは、他ならぬ自身の膂力と魔力だ。実戦経験の乏しいヴィヴィオには、父のようにスタミナを温存するノウハウが乏しい。母と比較すると明らかに魔力コントロールが甘く、不意の動作に魔力が伴ってしまう。二重の魔力リミッター、簡易デバイス時代からの身体機能制限。それらを以てしても、アインハルトを殴殺しかねないほどのスペックこそが、他ならぬヴィヴィオの弱点なのだ。
――レガリア。
このデバイスには、一般的な戦闘用デバイスの必須項目である出力増強や術式補助は搭載されていない。あるのはただ一点。
――吾妻ヴィヴィオのスペックを任意の段階で固定すること。
一般的な魔導師にはほぼ無意味とも思える、しかし、ヴィヴィオが求める唯一の機能を搭載したデバイスこそが、このレガリアなのである。目的もまた、ただ一つ。
「これで――心置き無く、殴り合いが出来る」
「……冗談ではない」
九音が手甲をさする。待機状態とはいえ、あの三博士が制作した武

装の表面装甲を明らかに凹ませるなど、とても人間業ではない。
「あんたも出しなよ」
「そうさせて貰おう」
ヴィヴィオの言葉に、解禁を決める。
「――時空粒子（タキオン）」
瞬間……九音の両眼が、青と緑に変化する。そして、魔力光もまた。
――ヴワァァァァァッ……!!
光の粒子。瞳と同色の青と緑がグラデーションした粒子が、魔力光に代わって放出される。
「――翠九音。目標を撃破する」
――ギュイィイイイッ……!!
鎧の両手甲に埋め込まれた宝玉が、溢れんとする魔力を抑え、負荷に激しく輝く。
「――吾妻ヴィヴィオ。迎え撃つ」
学院最高峰。世界最高峰。その最大戦力が、真正面から激突する。

# ｖｉｖｉｄ編　２４話『　勝利と敗北　』

――ヴィヴィオは負けるよ。

◆・◆　◆　◆

最も古い記憶は、暗闇だった。
何も見えない。何も聞こえない。自分の姿かたちさえ分からない。そんな状態だった。意思と呼べるほどの自己認識も無かったが、それでも、この暗闇の中に居続けていたならば、きっとこの曖昧な意識さえ消し去ってしまっていた。
そうしなかったのは、ひとえに……自分の傍らにあった、二つの存在だろう。
二つ。それは意思を持っているのか、いないのか。
その区別さえ付かない存在だったが……それでも、その気配たちが有ることで、その存在が有るうちは、この意識を保っておこうと。そう思えた。
次に古い記憶は、その暗闇から掬い上げられる感覚だった。
ただ、己にはこれといった感覚器官というものが無かったらしく、結局、変化は無かった。
『おはよう』
……曖昧な意識が、何かを捉えた。空気の振動。それは、この己に何かを働きかけようとする行いであると気付いた。
そして、己に空気の振動を捉える感覚器官……聴覚を得たことを知る。相変わらず、こちらからの意思の発露は出来ない。ただ、聴覚に身を任せる。
『個体ＮＯ．０９。聞こえるようだな』
何かを伝えようとしているようだが……それ以上に、不可解なことがあった。それまで暗闇の中、常に傍らにあった、己と同質の気配が……感じられなくなっていたのだ。

――……。どこだ。
意思の発露。おそらくは、それが初めてだった。
――己の『きょうだい』たちを、どこへやった!!
『!? おい、やめろ落ち着け!』
『ど、ドクター、まずいですよ! この数値……!』
『げっ……! おい、『ゆりかご』が崩壊するぞ! 電源カット!』
『してます! してますって!』
『あぁもう……! あんまりやりたくはない手だが、再封印だ! 急げ!』
『はぃぃ!!』
……ぷつん、と呆気なく、己の意識は途絶えた。
「……」
『目が覚める』とは、このような感覚なのか。
世界を歓喜が満たす中、己……いや、『おれ』は目が覚めた。
「……おれ、は」
周囲を見渡す。するとそこには、己と同質の存在が二つ、同じように目を覚ましていた。
「ぷはー! やっとしゃべれるぞ! ずっとしゃべれなかったんだ!」
「……見える」
初めて『聴く』2人の意思は、一方でやかましく、もう一方は静か過ぎる。
俺たちが目を覚ました部屋に、慌てた様子で2人の人間が駆け込んできて――
「……あっ、これ走馬灯だ」
身体がミシミシと軋む感覚で、俺は現実に帰ってきた。
（いってぇ……!）
顔にも声にも出さないが……めちゃくちゃ痛い。
「ふんっ……相変わらず、すごい耐久力だね」
目の前で……可憐な少女が鼻を鳴らす。

「まぁな」（根性で耐えてるだけだっつーの！）
ちらりと自分のコンディションを確認してみれば、手甲が割れているわプロテクターがひび割れているわ、本当になんという馬鹿力だ。
親父殿（ジェイル）のくれた防具が無ければ、いまの一撃で決していた。やはり、地力の差が大きい。一年ほど先に覚醒し経験を積んでいたヴィヴィオと、つい最近目が覚めたばかりの俺。
しかも目が覚めてすぐは、社会に出られず一般常識をこれでもかと詰め込まれていて、戦闘訓練など殆どしていない。
この俺、九音と、五香、七緒のきょうだいの中で、直接的な戦闘に特化しているのは俺だが……同時に、三人の中で最も弱いのが俺だった。
言葉一つで願望を実現する五香に、たとえば『眠れ』と言われれば灼熱の火炎の中だろうと極寒の吹雪の中だろうと安眠してしまう。
七緒は……うん、まぁ無理。あれに勝てる存在が、果たしてこの世どころか、三千世界を見渡してどれだけ居るか。
とにかく、俺は弱いのだ。幸いにもヴィヴィオは俺と同タイプ……直接戦闘特化の能力であるが故に、『殴り合い』が成立するのだが……
――ガゴンッ！
牽制のような軽い突きを手甲で逸らす。それだけで、ずず、と足が後退する。ヴィヴィオは攻撃の一つ一つに、いちいち術式を乗せたりはしない。素の魔力を『ほんのちょっと』籠めるだけで、あらゆるものを粉砕する鉄槌と化すのだ。
（仕方無い）
ちょっとばかり、ズルをしよう。
「ほぉら！　どうするの!?」
――ズドォンンッ!!!!
『魔力を纏った拳で叩いて押し出した空気の塊』が、必殺の威力を伴って迫る。
――ザンッ!!
その攻撃を……一刀両断で、切り捨てる。
「やっと本気になった？」

「初めから、本気だ」
俺は……手甲から出現させた直剣を構える。手甲ではあるが、その役目は鞘であり、剣の柄でもあるのだ。
――次にヴィヴィオは、こちらの本気度を試すように、『斬れる』性質の攻撃を乱発してくる。
――確実に。
「ほぉらっ!!」
――ドンドンドンドンッ!!!!
連射される空気砲。切り払う。切り捨てる。
――次にヴィヴィオは、最後の一発に紛れて突進。恐ろしい事に俺の顔面を拳で割りに来る。
――確実に。
「はぁあああっ!!」
「!!」
――バチィイイイッ!!!
手甲表面に、粒子の膜を形成し攻撃をいなし、その勢いのまま、胴体へ掌底をカウンターする。
「げふっ！」
……どうにか徹ったようだ。
『時空粒子（タキオン）』。
俺の能力を、親父殿はそう名付けた。親父殿でさえ論理や理屈はよく分からないとのことだが……まぁ、ヴィヴィオが持つ『聖王の鎧』と同じく、俺の肉体に備わった機能だ。
その効果の一つは未来予知。
とは言っても、未来の全てを見通せるわけではない。集中して集中して、どうにかコンマ数秒先のことが分かるくらいだ。俺の近接戦闘に特化した性質とは相性が良く、通常攻撃が即死攻撃みたいな恐ろしいヴィヴィオを相手にも、どうにかなっている。
……しかし我ながら燃費が悪い。動力炉からのエネルギーを、身体を通して『時空粒子』に変換しているのだが、変換効率が悪すぎる。う

まくやりくりをして、たまーに発動して、致死攻撃を避け続け、その合間にカウンターで削る……というのが、俺の基本戦術、「ぐうっ……」だった……はず、なんだけどな……

「ふー……まったく、手間取らせてくれちゃってさぁ」

ぷらぷら、と手を振るヴィヴィオ。

「防いだ、筈だが」

「うん、防いだよね。だから、防いだ上から、攻撃を徹したのよ」

……ゴリ押しにも程があるだろう。

「予知できるっていうなら……予知しても無駄な攻撃をすればいい。それだけよ」

――ゴシャッ!!　ドスッ!!　ベゴンッ!!

かわす、防ぐ、退く……！　一撃でも喰らえば終わりだ……！

まったく……！

「なんつーゴリラ★パワーだ!!」

「だっ、っ、」

あっ、やべっ、つい口に。

「だ・れ・が……ゴリラですってええええ～～～!!!?!??」

うわぁやっちまった!!

――ギャリギャリギャリッ!!!

ヴィヴィオの黄金の鎧の前腕収納部分から、鎖……というか、船を係留するようなゴツい錨が出現した！

「アンカークロー!!」

――バシュウウウッ!!

猛烈な勢いで射出されたチェーンは、不規則に乱れた軌道で俺の身体を狙っている！

『ほら九音！　これが戦隊の歴史に名を残すガオレンジャーの名作玩具で、』

あぁ……フェイト姉さんのきもちわるい早口語りが走馬灯だなんて……！　いくらアンカーチェーンが武器のロボットだからって、

「こんな時にガオゴリラなんて思い出してる場合じゃ、」「まぁた言ったなぁあああああああ!!!?!?」「しまったぁまた口に！」

くそっ、こうなったらチェーンごと斬ってやる！
――ジャリィッ！
よし、斬れる硬度、
――バリバリバリバリィッ!!
「ぎゃあー！　でも電気通ってるんかーい!!」
「捕まえたぞバカ九音!!」
これで腕と腕が鎖で繋がっている状況だ。
「デリカシーって言葉の意味を、吾妻家伝統の、この拳で教育してやる――!!」
これはカウンターを合わせるしかない。
えぇい、出来れば顔は殴りたくは無かったが、これは試合！　不可抗力だ！
――ズドォンッ!!!
事前に覚悟していたとはいえ……「お、重いぃっ！」「何ですってぇ!?」「違うそうじゃない！　体重の乗った攻撃という意味で、」「た、た、た……体重ぅ～～!!??」
……俺の口は俺を苦境に陥れたい誰かによって操作されているのだろうか？
ぶぉんっ!!　と、俺の視界が揺れた。ヴィヴィオは、ハンマー投げのように俺を空中で振り回し始めたのだ！　素直に投げてくれるような優しさは、期待できない。
「潰れろぉっ!!」
空中でベクトル変更、横回転から、急激な落下運動へ……！
――ドッゴォオオオオンッ!!!
「ぐわぁあああああ……!!」
「あーっはっはっは!!　おかわりだぁ！　潰れろぉ!!」
――ドッゴォオオオオンッ!!!
「ぐぇえええええっ!!」
――ドッゴォオオオオンッ!!!
「ぎゃあああああああ!!」
くっそぉ！　濡れタオル振るみたいな感覚で人体を振り回しや

がって……！
　ただの物理攻撃ではない。破壊力を増幅して叩きつけられている。ただ、これでも……
　――冥府の鬼よりはマシだというのだから、笑えない。
「ぜぇ、はぁ……！」
　死ぬ……！　マジで死ぬ……！　こいつ、こんなに強かったか!?
「今日に備えて、めちゃくちゃ鍛え込んだに決まってるでしょうが!!」
「えっ俺の為に？」
「ち」
　ヴィヴィオの顔が、かぁっと赤くなる。
「違うに決まってるでしょう!!」
　――ボグゥッ!!
「ぐはぁ……」
　お返しとばかりに一撃を入れたが、どう考えても割に合っていない。攻撃力も、防御力も、耐久力も……恐らく、ヴィヴィオの方が、やや優る。
「これが年の功……！」
「つぶす」
　何でだ!?　意味は合っている筈だぞ!?
「はぁあああああ……!!」
　ヴィヴィオは、両手の甲を展開させた。内部より……右手にはエメラルド色、左手にはルビー色のエネルギー結晶が露出する！
　――ごぅん、ごぅん、ごぅん……!!
「おい何だよそれ!?」
「女の子に、ゴリラだの、重いだの、トシだの……!!」
　うわ聞いちゃいねぇ。
「女の子に暴言を吐いた罰として、死なない程度に、空間ごと捻り潰してやる……！」
「女の子は空間を捻り潰したりはしないっ!!」
「私が女の子じゃないって言いたいの!?　もうアッタマきた!!」
　ヤバいヤバいヤバい！全く話が通じていないしマジで殺る気だ！

――ガチィイイインッ!!!
両手の宝玉を、打ち合わせた！
――グゴォオオオオオオオオオオオッ!!!
放出された空間湾曲攻撃の波動が、迫る……！　なんて攻撃だよ……！
「こうなったら……こっちも奥の手だ!!」
攻撃を受けながら蓄積していた『時空粒子』を、最大開放！
「赤駆残影!!」
迫りくる金色の波動を、やりすごす！
「えっ!?」
向こうで、ヴィヴィオが驚いている気配が伝わってくる。そうだろう。何せ、見せるのは初めてだからな。俺にだって、奥の手くらいある。
――バシュウウウッ……!!
俺の全身は、赤いオーラに覆われていた。
――赤駆残影。
高濃度の『時空粒子』を開放することで、自らの存在を、亜空間へ瞬間的に跳躍させる技だ。亜空間に跳ぶことで、空間攻撃を素通りし……
「はぁあっ!!」
――ガキィンッ!!
攻撃の瞬間、もとの空間へ跳び戻る!!
「ぐっ!!」
ヴィヴィオのヨロイ……『レガリア』の肩アーマーの一部を削り取る。
「硬度、速度じゃない！　これは……『イレイザー』！」
「時空間攻撃は、お前だけの専売特許ではない！」
この『赤駆残影』の状態において、俺の身体は空間を跳躍する能力を得ている。触れた瞬間、触れた箇所が亜空間へ追放される。つまり、
「俺の刃は、神をも両断する！」

――バチンッ!!　バチンッ!!
ヴィヴィオが指を鳴らし、小規模な時空間攻撃を連射する。ビー玉サイズの空間湾曲だ。触れた箇所を、スイカをスプーンで抉るように消滅させる……いや、ほんっと悪役じみた能力だな！
「『赤駆残影』!!」
――ヴィイイイインッ……!!
だが、すべて無効だ！　俺を巻きつけていた腕のチェーンも既に無い。好機だ！
「おぉおおお!!」
――ジャリィイイイッ!!
肩腕の宝玉を抉り取る。これで、両腕の宝珠を使った大規模攻撃はできまい。
（バレる前に、決着させてもらうぞ！）
そう……『赤駆残影』は我ながら反則的な性能だが、それに比例する高いリスクを孕んでいる。
粒子の残量がゼロになると、戦闘不能になるという特大のリスクだ。
（そうなる前に、ヴィヴィオの戦闘力を削ぎ取る！）
先ほどからヴィヴィオは、小規模な牽制を繰り返すのみ。
「そんなに消極的では、俺には勝てんぞ！」
手甲から発射される光弾を切り捨てる……これ一発一発が必殺級だというのだから、強がるにも限度があるというものだがな！　フツーに死ぬわ！
「いや、もうわかったから」
……なに？
「えい」
赤駆残影で跳躍し、帰還した直後。
――ガシュッ
「ぐわぁっ!!?」
ヴィヴィオの足刀が、俺の首を掠めた！
「な、なぜ……!?」

「転移先座標の法則と跳躍のタイミングは、だいたいわかった」
「わかるものなのか!?」
「というか慣れたわ」
「強がりをっ!!」
ブレードを振るう。が。
――がしんっ。
「だから、慣れたんだってば」
……ヴィヴィオの手甲が、易々と俺のブレードを受け止めた。先ほどまで、削り取れていたのに。というか、どうやってイレイザーを受け止めている!?
「イレイザーで消し飛ばされる瞬間、跳ばされるであろう先の座標の情報で攻撃を『裏打ち』しているの」
まるで意味が分からない。
「レガリアの計算能力の助けあってこそのやり方だけどね。それに、イレイザー使いの『友達』がいるから、初見じゃないっていうのも良かったわ」
持つべきは友達ね。と、明らかに友達の意味を間違えていることを言っている。というかさっきから口調が母親にソックリになってきているぞ。これはマズい。あの母にしてこの娘だ。カッとなりやすいが、一度冷静に戻ると驚くほど適格に敵を破壊しに来る。
くそっ……ならば!
(『赤駆残影』、出力増強モード!!)
「え、」
――ドゴォッ!!!
「が、ぅっ……!!」
……ヨロイを貫通する衝撃に、ヴィヴィオが呻く。
「悪く思うなよ」
残存する粒子も、底が見えてきた。決着は急がなくてはならない。俺は俺の仕事を全うするだけだ。
「本当は、優しく倒してやるつもりだった」
空間跳躍のため体表に纏わせていた粒子を、武装に集中させてい

る。単純な強化ではない。
攻撃座標を『重複』させ、破壊力を倍増させているのだ。俺が把握できる亜空間の数だけ倍増できる。が、先ほどまでの戦いで粒子を使い過ぎたせいで、いま重複させられる座標はせいぜい三つ。だが……
俺が僅かに劣るとはいえ、ほぼ互角だった攻撃力は、単純に三倍になる！　……時間制限付きだがな！
ヴィヴィオから感じる魔力量が、増加に転じる。ヴィヴィオもまた、レガリアの枷を外したのかもしれない。だが、その増加は緩やかだ。
「さぁ、続けるわよ!!」
「さぁ、続けるぞ！」

◆▪◆　◆　◆

「皆さーん！　盛り上がってますかー!!?」

――ウォオオオオオオオオオオオオオオ――――ー!!!

『実行委員会』という腕章を付けたアリシアの呼びかけに、六課のノリの良い連中が野太い声で返す。
「さぁさぁ、どうなってしまうのかクラス交流戦！　ヴィヴィオ代表率いるＦ組の電光石火の面制圧！　避ける逃げるは雷帝率いるＡ組！　そして始まる頂上決戦！　これはもう目が離せない!!」
アリシアは、現世をエンジョイしていた。
「本日は特別ゲストをお呼びしています！」
元ナンバーズ０８あらため葉月、元ナンバーズ１２あらため結月の抱えるカメラがぐるっと回り、長テーブル前に腰掛ける人物たちにピントが合う。
「なんと！　我らが機動六課、永遠の戦闘隊長にして地獄の鬼教官！　高町あらため吾妻なのはさんがやって来てくれましたー！」
――うわぁあああああああああ――――!!?

「み、水責めは、コンクリシューズだけはー!!!」「ここから出して……！　暗いよー……狭いよー……！」「せめて麻酔をしてくださぁああああい!!?」
……若干名、トラウマを掘り起こされて悲鳴を上げていたが、盛り上がりは上々のようだった。というかどういう訓練だ。
「気を付け」
なのはの呼びかけに、六課の面々はビシィッ！と直立不動の姿勢を取る。
「休んでよし」
肩幅に足を開き、手を後ろに回す。下手な軍隊よりも統制の取れた動き。なのはの恐怖は健在のようだ。
「今日は、ヴィヴィオの出来栄えの確認に来ました。お前たちが、我が娘にどういう指導を施しているのか、とくと確認させてもらいます」
……六課の面々は、震えあがった。もし、不出来なら……と。
「そしてこちらは地球出身のニューフェイス！　昨日の晩の壮行会に居た人は知ってるよね!?　なのは教官の内弟子！　小さなサムライ、高町彌茅さん！　弟子候補、アルビノ美人のリンネ・ベルリネッタさん！」
ぐるぐるとカメラが回る。そして……
「さぁ、いま話題の脱走者が一カ月ぶりに帰って来たぞ！　看守……じゃなくって寮母さんを撃破した新進気鋭の反逆者！　フーカ・レヴェントンだー！」
「こぉらぁあああああ!!　フーカぁあああああああ!!」
「スバルはうっさいんじゃ！」
……フーカは気まずそうに髪を弄っている。
スバルはどうやら、指導担当だったようだ。
「聖王教会からはこの人！　元ヤンシスター、シャンテ・アピニオン！　フーカと一戦交えてきたところだー！　ちなみに負けたぞ！」
――わはははは！
「笑うなー！　負けてないし！　引き分けだし！」
「……へぇ、まだそんなことを言えるなんて、よゆうがあるんですね」

リンネの真っ赤な瞳が、シャンテを捉えている。
「やっぱり……もっと……ちゃんと……こう……ぐにゃっ、と」
ジットリとシャンテを見据えながら、脳内で恐ろしいシミュレーションが為されているようだ。
「……ヒィ」
慄くシャンテ。悲しいまでに腰が引けている。

「そしてトリを飾るのはこの人！　……機動六課を苦しめに苦しめた最強最悪のナンバーズにして救世主！　まさかあのなのは教官を娶る漢の中の漢……
――吾妻秀人ォ――――――――ー!!」
――――ありがとぉおおおおおおおおおおおおおお!!!
……何に対してのありがとうなのか。なのはを六課から遠ざけたことか。
「再教育が必要かしら……？」
ちなみに、四葉は機動六課との接触に制限が掛かっているため、自宅にて慈樹、レイジングハート、アイとともにリモート観戦をしている。
「では、なのは教官から見て、試合の展開はどうでしょう？」
「好調な滑り出し。初手で面制圧を仕掛け、戦力を削ぎ、士気をくじく。攻撃側の居場所がバレるけど、冥ちゃんだったらそのデメリットも無いに等しい。効率的な攻撃ね」
なかなかの高評価。して、Ａ組の対応は。
「悪くは無い……というか、それしか選択肢は無いなりに、よく持ちこたえている。九音の助言もあるでしょうが、あのクラスの士気の根幹を支えているのは、あの雷帝ね。外部戦力の九音と……ええっと、あの弱っちいガキ」「アインハルトさんです！」「そうそう、あのガキ。打撃力はまずまず。九音の手習いが身に付いているようね」
妙にアインハルトへの当たりが厳しい。
「霧の魔法。あれは結構、対処が難しいのよ。てっきり九音がどうにかするのかと思っていたから、雷帝が対処できちゃったのは正直、意

外だったわ。分家とはいえ伊達じゃないわね」
　意外な高評価……！
「フェイトをパワー寄りにしたらあんな感じになるんじゃないかしら？　……レヴィあたりを呼んで稽古つけさせたら、化けるかもしれないわね……そうね……はやての身体がひと段落したら、三人娘を学院に呼んで全体的な底上げを……」
「はーい神様が自分の世界に入っちゃったので、秀人さんにパース！」
「あぁ、それじゃあ、ヴィヴィオと九音の戦いに関して……で、いいか？」
「お願いします！」
「まぁ、見て分かる通りだ。ヴィヴィオはデバイスを活用して、わざと九音と拮抗できる程度の出力に抑えている。九音は九音で、ヴィヴィオを可能な限り怪我させずに倒そうとしている。互いに手加減をしている形だな」
　――……手加減してアレかぁ。
　呆れるやら感心するやら。やはり単一個体として見た場合、あの二人は突出しているのだ。
「ただ、手抜きはしていない。互いの出せるものを出し合って、真正面からぶつかっている。……いい『試合』だ」
　褒めている。褒めてはいるのだが……どこか、含みがある言い方だった。
「言えることは……これは、喧嘩でも決闘でもない、ってことくらいかな」
　六課の面々も、どこか気づいているような雰囲気を出しつつスクリーンに目を戻す。
「おぉっと、本隊の方では動きがあったようですよー!?」

◆▪◆　◆　◆

「えーい」
　――ズガゴッシャン!!
　……声と威力が釣り合っていない。

小柄な和装の少女から繰り出されるのは、単純な打撃だ。その手に握られた……しかし、グリップできているとも思えないほどの大ぶりな金棒が、大地を砕いていく。
――メキメキグッシャン!!
魔法もへったくれもない。ただ重く固いだけの、金属バットを全長2メートル、最大直系３０センチにまで単純に巨大化させたような、シンプルなシルエットの鈍器である。
その重量、実に1トン。それだけの重量を、金棒サイズに凝縮された金棒。
「はぁっ、はぁっ……！　何だよ……何なんだよ、こいつ……!!」
アインハルト少年は、なんだかんだで、自分は非常識な存在には慣れきっていると思っていた。聖王ヴィヴィオに殺されかけ、九音に叩き上げられ、そのきょうだい達とも知己となり……
しかし、目の前の少女の姿をしたモノは、一体何なのだ？
違う。常識とか、非常識というモノではない。ただ単純に、『違う』のだ。そこにいるだけで、その空間が異様な法則に書き換えられているような、そんな強烈な違和感。
「覇王もどき」
鈴を転がすような、綺麗な声色でアインハルトを呼ぶ。
「おまえからは、冥が大嫌いな匂いがする」
「う、」
いつの間に懐に入られた。胸部に当てられたひんやりとした手が……
――ドズゥッ!!
猛烈な掌打となり、アインハルトの肺を圧迫する。
「アインハルトさん!!」
横合いから、ヴィクトーリアが槍で突く。しかし……
――ずんっ
……冥は、避けない。ただ、皮膚で受ける。
「……！」
一瞬……ヴィクトーリアの優れた目が見たものは、槍の穂先が接触

した箇所、その僅か数ミリの範囲に黒い黒子のようなものが浮かび、ありえない硬度となったものだった。
「ならばっ!!」
――バリバリバリッ!!
雷撃を放つ。一流魔導師にも匹敵する魔力量から放たれる雷撃。
「……」
冥は一瞬、動きを止めた。その隙に、アインハルトの後ろ襟を掴んで間合いを取る。
――ドンッ。
ヴィクトーリアはアインハルトの背を拳で叩き、無理やり肺を再稼働させる。
「ぶはぁっ。……他の状況は……!?」
「……九音さん、健在。ですが……」
周囲。Ａ組の面々は、Ｆ組の怪物たちを相手に、既に潰走の気配を見せていた。
張り巡らせた結界はドリルのような腕に変化した少女に粉砕され、攻撃の槍衾は虚空へと呑み込まれる。ならばと遠距離を試みれば、巨大な鉄球が投擲されてくる。白兵など……挑めようものだろうか。
「嫌ぁあああああ……！　もうやだぁああ……！」
「あっ……待って！　待ってよ！　怖くしないから！　優しくするから！　今度こそ優しくしてあげるから！」
食虫植物のような腕で逃げる足を絡め捕る。
「くそぉ！　当たれ！　通れよ！」
「当たってるよぉ、通ってるよぉ。効かないだけだよぉ」
攻撃魔法を素通りし、身体をスライム状に変異させ丸呑みされる。
「やめて！　殺さないで！　その子を殺さないで!!」
「???　だって、これはエサでしょう？　お腹を空かせた可哀そうなあたしにエサをくれたんでしょう？　いただきまーす」
召喚魔法で行使した牡鹿の使い魔を、口から下半身まで開いた異形の口で丸かじりする。
Ｆ組の戦力は、始めにヴィクトーリアが倒した霧の魔女以外、ロク

に減ってさえいない。
「冥はおまえが嫌いだ」
　冥は、先ほどと同じことを言う。嫌い、というだけでアインハルトを認識してはいるが、その隣のヴィクトーリアのことは視界に入ってすらいないのだろう。
「おまえからは、『異形狩り』と同じ匂いがする」
「異形……？　何のことだ……!?」
「だから潰す」
　これは、会話ではないのだ。
　冥は、他の面々のような異形の力を見せてはいない。単純な膂力だけだ。しかし……それだけで、ほかすべてを凌駕している。
「あああああっ!!」
　ヴィクトーリアの槍。先端に魔力が集中し、突破力が底上げされている。
　――ぱきんっ
　……穂先が欠けた。冥の皮膚には届いてすらいない。例の黒い鉱物が、攻撃を阻んでいる。
　やはり、無理なのか。そもそものスペック差は、工夫では覆せないのか。
（オレは……ぼくは……ヴィヴィオ級には、どう足掻いても……）
　アインハルトの心は、目の前の絶望に折れる寸前だった。
「まだ……！　まだ、終わっていませんわ……!!」
　しかし……自分以上にボロボロの姿で、尚も立つ雷帝。
「みぐるしいぞ、負け犬」
　冥は、何の感情も籠っていない口ぶりで、雷帝を酷評する。
「じゃまだ。ひっこんでいればみのがしてやる」
　冥の照準はアインハルト。言った通りにしていれば、助かるのだろう。だが……
「見苦しくて、結構ですわよ!!」
　――ドゴンッ!!
　戦斧の打ち下し。冥の頭部へ直撃……は、しない。

「どーせ、負け犬ですわよ！　ええ、入学早々にヴィヴィオさんにボッコボコにされてバッジ取られて醜態晒して、実家からは勘当寸前ですわよ！　このまま行ったらわたくしは、変な口調の元お嬢様ですわよー!!」
……あまりにも運命が狂いすぎていた。
「順風満帆な人生なんて、もう望めないんですわよー!!」
「しるか」
――ばぎっ
蚊でも払うような動作で、ヴィクトーリアの甲冑にヒビを入れる。ヴィクトーリアはカウンターに刺突を入れるが、それも防がれる。
そう、あの黒い鉱物のようなものが、攻撃をオートで遮断してしまうのだ。
（……おかしくはないか？）
アインハルトの停止しかけた思考に、亀裂が入る。
（なぜ防ぐ？　スペック差でノーダメージなら、防ぐ必要も無いだろう。だとすれば……当たったら不味い理由が、）
「つぶしちゃうよ」
冥が……手に、魔力のようなエネルギーを溜める。放出は一瞬。避けるか……否。
「雷帝！」
アインハルトの一括に、ヴィクトーリアがはっと気付く。
「――受けろ!!」
なんという無茶振りか。しかし……
「ええ、分かりましたわ!!」
戦斧を両手に持ち、耐える構え。そこへ、アインハルトが加勢する。
――ドシィンッ!!
恐らくは、かなり手加減をした一撃。殺さない程度に……しかし、戦闘不能にはなるように、と。
「ぐぬぬぬぬ……！」
「うぉおおお……！」
それに、二人がかりで死ぬ気で踏ん張って、どうにか拮抗する。

――バゴンッ！
アインハルトの足元が爆ぜる。冥の攻撃ではなく、アインハルト自身が、断空拳の応用で力を逃がしているのだ。咄嗟の応用であったが、苦し紛れにはなった。
「後ろに跳べぇっ……!!」
「はぃいっ……！」
どうにかこうにか……冥の範囲攻撃から逃れた。
「埒が開きませんわ……というかそろそろ死にそうですわ……」
「安心しろ……オレもだ……」
……二人は、すでに泥だらけでボロボロだった。負ける前から敗残兵の気分である。
「……一矢、だ」
「はい……？」
アインハルトが、ぼそりと言う。
「まずは、一矢を報いる。状況の変わる変わらないは別として、やられっ放し遊ばれっ放しは癪に障る！」
「……ええ、その通りですわ！」
このまま、戦いにもならない戦いを続けて敗北するよりは、せめてダメージを与えてから敗北の方がまだ良い。
アインハルトの脳裏に、ある仮説が浮かんでいた。
――冥は、雷に弱いのではないか？
と。存在を意にも介していない、という扱いのヴィクトーリアだが、冥は……アインハルトには素手で接触しているというのに、ヴィクトーリアの攻撃には、必ずと言って良いほど、あの黒い鉱石……おそらくは、絶縁体を間に挟んで受けている。
だからといって、雷イコール撃破には繋がらないだろうが……
「もういいよね」
アインハルトが何らかの説明をしようとした際、冥の独り言が割り込む。
そう、独り言だ。冥はアインハルトのことを認識してはいるが、見てはいないし、聞いてもいないのだから。

「おにび」
ぞわ……と、周囲の空気が変わる。感覚的なもの……ではない。実際に、周囲の気温が明らかに下がり始めているのだ。
冥が掲げる小さな掌。そこに、蛍のような火が灯る。
周囲の気温が下がるのと反比例し、蛍火は加速度的に、爆発的にエネルギーを増していく。
「ま、魔力攻撃ですの……!?　でもでも、魔法陣も出ていませんし、そもそも魔力の気配が無い……!?」
「……深く考えない方がいい。ああいうのは、そういうものだと思うしかないんだ……」
「いきなり諦めムード!?」
アインハルトは……九音を通じて、超常の存在について深く考えることが無駄であると悟り始めていた。
「だが、好機だ。見ろ」
今にも補食されようとしていたA組だったが、冥の攻撃の予兆は、F組の妖怪変化たちをも遠ざけていた。その威力が伺えようというものだ。
「で、アレは結局なんなんですの……？　アハハ……」
「……突拍子もなく考えるとすれば、極小の人工太陽だと想定するのが一番近いのではないだろうか」
ンなアホな……と思うところだが、それっぽい技能は存在する。秀人の『結合』だ。存在するのであれば、似たようなことを行える者が居ても、おかしくは無い。存在することそのものがおかしいのだが。
「……どう防ぎますの？」
「……」
「……アインハルトさん？」
「……小細工が無理なら、正面突破しか無いだろう」
「嘘でしょう」
「ふふ……短いが、実りある人生だったなぁ……最後に、生き別れた姉さんに会えなかったのが心残りだけど……ふふ、いい人生だった……」

「ちょっとぉぉぉぉぉぉ!!!?」
「えぇい、お前も覚悟を決めろ！　どうせ負けるんだ！　最後くらい華々しく散れ！」
「嘘でしょぉぉぉぉぉぉぉぉ!?」
「まずお前が雷を纏った突破力のある槍の技で突っ込む！　オレが続く！　ハイ以上！」
「嫌ですわぁぁぁぁぁ!!」
「やかましいシャキっとしろ！　槍技が成立しなかったらお前を盾にしてオレは逃げるからな！　やっぱりこんなトコで死ねるか！」
「いやぁぁぁぁ!!　見捨てないで下さいませぇぇぇぇ!!」
　ヴィクトーリアは半泣きで槍を構える。この状況においても、崩れることなく構えを保てていることは幸いだった。
「オレが後ろから槍を押す。そうすれば突破力は１２倍だ！」
「１２倍!?」
「体重が乗って２倍、速度が出て２倍、槍に回転を加えて２倍、ついでに断空拳で押し出せば更に２倍、断空拳の威力を槍のリーチで出せば更に更に２倍！　そして雷帝と覇王が協力して更に更に更に２倍！
　合計１２倍のパワーだ！」
「な……なんだかイケる気がしてきましたわ！」
　往年の少年ジャンプっぽい加算も乗算もよく分かっていなさそうな頭の悪い説得に、どうにかヴィクトーリアがやる気を取り戻す！
　冥が鬼火と称した謎の火球は、まだ精製の途中だ。
「もはや一刻の猶予も無い！　いいか、１、２の、３！　で押し出すからな！」
「はい！　１、２の、３！　ですわね！」
「あぁ！」
　冥にも聞こえていそうだが……
「行くぞ雷帝！　覚悟はいいか！」
「い、いつでもどうぞ……!!」
「１！」
　バリバリと帯電するヴィクトーリアの槍の石突に、アインハルトの

拳が接触する。２でタメを作り、３で射出され……

「２いいいい

姉に断空を伝承した叔父筋の師範もそうだった。海を割り、山を崩し、空をも断つ、と。
だが……断空の修練は、大地と己との接続。つまり、『力の流れ』を意識することに終始していた。つまり、打撃の威力は、本質の副産物。先ほど、冥の攻撃の威力を大地へ逃がしたことで、確信が持てた。
――断空とは。あらゆる力の流れ（ベクトル）を、自在に操作する技である。
海の流れを換えれば海を割り、山の脈動を換えれば山を崩す。強大極まる敵の力を、そのまま……否、他の力を併せ、逆流させることもできるのだろう。
極めれば、それこそ、『空を断つ』ことも可能になる……無限の可能性を秘めた技。
（正直、的外れかもしれない。姉さんは……アインハルト姉さんは、別の技を掴んだのかもしれない。オレの考えは、間違っているのかもしれない。でも）
――瞬間。アインハルトの視界に入る景色から、色彩が消える。時間の流れが、緩やかに感じる。空気が、水のように重く感じる。
（これが……今のオレに……ぼくに出せる……!!）
――水のように重い空気の流れ。踏みしめる大地から伝わる惑星の鼓動。そう。世界は常に、流れ動いているのだ。
――だから、簡単だ。簡単な筈だ。その流れを……否。流れ（ベクトル）と同化する。そうすれば……!!
「――全力、全開!!」
「……!!!!」
冥は、掌の小型太陽を起爆させる。至近弾。自爆覚悟か？　……いや、己の頑健さを担保にした、この場における最適解だ。
――しかし、アインハルトは、その最適解をも取り込んだ。
小型太陽のエネルギーが、起爆し、炸裂する直前。おかしな方向、ありえない角度に、ねじ曲がっていく！
「これは、……！」
冥は、気付く。己に接触した雷を帯びた槍の穂先。その先のアインハルトから……何らかの術理が作用していると。しかし、既に遅かっ

た。
「――断空拳……『遠当て』！」
――――ズドォオオンッ!!!
小型太陽の炸裂。雷撃。断空拳の余波が、その場にいた全てに、爆風としてもたらされた。
◆▪◆　◆　◆
――ずしゃっ。
（……っぐぅ、もう、打ち止めだ……!!）
九音が膝を突く。あれから何合、撃ち合ったことだろう。とにかく、ヴィヴィオの魔力と体力を削って削って、泥仕合寸前の持久戦に持ち込み、ボッコボッコと殴られ蹴られ……しかし、その八割くらいはやり返し……
「……その『レガリア』、リミッターの解除はお前個人の判断では行えないんだな？」
「……そうだよ。だって、リミッターってそういうものでしょう。レガリアが判断するところの、私への脅威度判定で、解除段階が……って、時間稼ぎだよね、それ」
ヴィヴィオもまた、満身創痍。可憐に結い上げられていた黄金の髪は解けて乱れ、豪奢な鎧は罅割れ、欠け、凹み、見る影も無い。
――しゅうううううっ……
「あっ、やべっ！」
ヴィヴィオの髪が、黄金から、栗色の地毛へ……
「!!　――――今!!」
とうとう、聖王モードの維持も怪しくなってきたようだ。
「なんてね!!」
が、それはヴィヴィオのフェイント。片腕で、デバイスの助けを借りずに生身での魔法行使。
――ドパァンッ!!!

インパクト。イレイザーとの区別もつかない程の破壊力を持った攻撃が、九音に迫る。
「知っているさ！」
九音は、最後の最後……本当に最後の隠し玉……『赤駆残影』一回分……どころも無い。
――1秒間の加速を行った。
「おおおっ!!」
「……」
狙うは延髄。いかにヴィヴィオと言えど、首は弱点の筈。魔法攻撃の間隙を縫うように、……
「そう来ると、思ってたよ……!!」
九音は、己の失敗を悟った。ヴィヴィオの狙いは、魔法攻撃によるカウンターではなく……!!
――バガァンッ!!
ヴィヴィオと九音の足元が、爆ぜる。先ほどのインパクトさえも、足元を爆破するための囮。ヴィヴィオと九音の身体が、宙に飛ぶ。いや、ヴィヴィオは跳躍を予期していたが、九音は体勢を僅かに崩した。
（こんな不安定な空中で何を……！　互いに、飛行魔法なんて行使する余裕は無いだろう……！）
「……『無力な王』。聞いたことあるよね？」
九音は、ぼんやりとした記憶を想起し……顔を強張らせた。
かつての歴王神話に語られる、一人の聖王。正当なる血脈の長子として生を受けるも、魔力わずかに９５万。『領地』という名目の荒野へ、元服と同時に数多の棄民とともに棄てられた悲劇の王。
『領地』は敵国との緩衝地帯。死の宣告にも等しい処遇に、民たちの嘆きは、王へと向けられた。
『なぜ、我らの王はこんなにも無力なのか』と。
敵国の蹂躙か。飢餓か。疫病か。誰もが緩慢なる死を受け入れる中、『王』は……
――鍛えた。
文明の極致、破壊兵器が跋扈し、生体改造された魔導兵、獣人、機

械化人が跋扈する中、ただ、唯一の武器である、己が五体を鍛えた。
『徹底的に追い詰められた時にのみ魔力が瞬間的かつ爆発的に増大する』という、全くもってハズレとしか言いようのない資質を切り札に、乱世を戦った。
『無力な王』だったはずの者はやがて、『優(すぐ)る王』と呼ばれるようになり……結果として、その『領地』……第２９管理世界はいま現代においても、独立国家として健在であるということが全てだ。
「だが……！　格闘術の多くは、完全な形での伝承が不可だったはずだぞ！」
　乱世に生まれ、乱世と共に廃れていった技術系統も多く……王宮の壁画にのみ記された伝承もあるという。
「――私を誰だと思っている。歴代王の血と肉と魂を継ぐ、今代聖王・吾妻ヴィヴィオだ！」
　ヴィヴィオは……『魂の座』という意識領域において、オリヴィエを始めとする数多の聖王との対話が可能になっている。そこから技を得たということか。
　――ガキィッ!!
　ヴィヴィオの四肢が、とても空中で行うとは思えない動作で、九音の首と両腕を極める！
「ぐがぁっ……！　う、動けん……！」
　筋力で抜け出すとかいう次元ではない。力技という逃げ道を許さない、これは、そういう『技術』なのだ。
「ぐ、ぬぬっ……！　暴れるなよぉ……！」
　が、ヴィヴィオもまた必死の形相だ。歴代最強のスペックを持ってはいるが、圧倒的な経験不足。技そのものは習得してはいても、習熟はしていないのだ。自爆と隣り合わせのリスクを負いながらも、果敢に技を掛けていく。
「うおりゃぁぁぁぁー!!」
　気合い一閃。ヴィヴィオの技が、空中で完成を見せた……！
「ぐわぁぁぁぁーー?!!」
　――グキボキベキャアッッ……!!!!

九音の五体が……明らかにヤバくてマズい方向へ折れ曲がる。神経を圧迫し、靭帯を封じ……対象を、『雷に打たれた』ように硬直させる！　技の名は……!!

「『聖王・雷光撃』――――!!」

そして……重力と共に加速し、大地に叩きつける!!

――――ドゴォオオオオオオオンッ!!

……。

「ぐはぁ……、……。……」

非人道的な技の直撃を受けた九音、ここに脱落す。

「ふぎゃあっ……!!」

が、ヴィヴィオもまた、技の反動をモロに受け、大地に突っ伏す。

「い、いだい……いだいぃ……!!」

四肢が断裂したかのような痛みに、己の限界を悟る。だが……

「は、ははは……やった……Ａ組代表の九音を倒したぞ……！」

これで、心置きなく戦闘を終えられる。戦場に張り巡らされた機器類により、九音が先に戦闘不能と判断され、次に……ヴィヴィオに、『戦闘不能』の判断が、下された。

――そう、下されたのだ。

――――ビビィーーー

――勝者はＡ組！　代表ヴィクトーリア・ダールグリュン!!

――は？

――は？

――は？

――は？

――は？

――は？

――は？

「……は？」

◆・◆　◆　◆

俺は……動かぬ体の首だけをどうにか回し、ヴィヴィオの方を見る。

「……は？」

ぽかん、としている。ふむ、転送まで五分程度は掛かるようだな。今のうちに種明かしをしてやるか。死にそうだけど。めっちゃ死にそうだけど。なんだよあの技。

「『俺』は負けた。だが……『俺たち』は勝った」

「……何でよ。おかしいじゃない。だって……先に戦闘不能になったのは、九音で……」

「あぁ、それは間違いないぞ。何せ首から下がほとんど動かん。もう無理だ死にそうだ。あー負けた負けた。転げまわって泣いて喚いて悔しがりたいよホントに」

「なんで」

「……いつ俺が、『Ａ組代表』などと名乗った？」

この戦闘は……どちらかの大将を倒せば勝ちのルールだ。Ｆ組の大将は当然ヴィヴィオで……

「A組の大将は、俺やアインハルトの加入に関わらず、ヴィクトーリア・ダールグリュンのままだ」
「どうしてっ!! だってあんたは、雷帝よりも強いでしょう!? あの覇王はともかく、あんたが一番強いんだから、あんたが大将であるはずでしょう!?」
「そんなルールは無い。一番強ければ大将だなんてものは、お前の先入観だ」
戦闘力だけで、戦争の勝敗は決まらない。
「お前の間違いは三つある」
俺は……わざとヴィヴィオを煽るように、順序立てて説明をする。
「一つ。お前が下調べもせず、俺が大将だと勘違いをしてくれたこと」
「二つ。お前が単独で行動し、俺のところまでノコノコとやってきてくれたこと」
「三つ。お前が手加減をせず、俺を全力でボコってくれたこと」
本当に幸運だった。このどれか一つでも無ければ、おそらくヴィヴィオはフツーに勝っていた。常に陣地内に留まり、手下の圧倒的戦力ですり潰しに掛かっていたり、俺を無視して一網打尽を狙っていたり、俺との戦いを中断して冥と合流していたり……さまざまなｉｆがあるだろうが……策を弄して、どうにかこうにか、その確率を手繰り寄せた。
「……あんたに勝ったなんて、嘘だよ。だってこうして、あんたの策にハマって……」
「いや、それも違う」
お。いよいよ転送が開始されるようだ。悔し紛れに、最後に言うだけ言ってやる。
「―　　―　　これらは全てヴィクトーリアの発案で、俺は命じられたとおりに時間稼ぎをしていただけだ」
ヴィヴィオの、愕然も呆然も通り過ぎた能面のような表情を見届けて……俺は休眠に入った。

◆・◆　◆　◆

「……ヴィヴィオ。負けたか」
冥は……
――己の胴体に突き刺さったままの折れた槍を引っこ抜く。
突き刺さったとはいっても、なにもグロく貫通している訳ではない。受け止めたはずの槍が押し込まれ、衣類の脇腹を貫通して、ちょっと擦りむいただけだ。だが、それでも……
「おい」
目の前の二人に声を掛ける。技の反動を殺しきれず両肩と両肘と手首と全指を脱臼骨折したアインハルトと、折れた槍の半分をこちらに向ける雷帝。
「お前たちの勝ちだ」
冥は……敗北を受け入れた。ルールではない。己の領域である腕力。その腕で抑え込んだ槍を押し込まれ、身体にかすり傷を付けられた。敗北だった。
「槍技・拳技、ともに見事なり。たゆまず励め」
冥から出てきた思わぬ素直な賞賛に、二人はきょとん、と顔を見合わせる。
「勝っ……た……？」
そして、A組の生き残りの面々にも、その事実が伝播していく。
歓喜が爆発……など、するわけも無く。
「終わったんだ……やっと……」「うあぁ……うわぁあああ……!!」「帰れる……帰れるんだ……!!」「……」
戦の終結に、ただただ、安堵の涙を流すだけ……
「――――殺しちゃわない？」
……。
「勝った方が消えれば、負けたことはノーカンになるよ。チャラになるよ」
「うん、いい考えだね。そうすれば、閣下の経歴に泥を塗らなくて済むし」

「ナイスアイディア！　だって、このシールド、」
――ぱりんっ。
「こんなに脆いしさ。で、あっちの人たちは出られないんでしょ？」
「あぁ……！　それじゃ、もう逃げ回らないってことだ！　やったね！」
「ごはんのじかんだ」
「おなかすいたよぉ……」
「負けたことは無かったことになる」
「閣下の白星を汚さなくて済む」
「今後の敵が一つ消える」
「おなかいっぱいになる」
「メリットしか無いね」
「殺しちゃおう」
「食べちゃおう」
「無かったことにしちゃおう」
「そうだね」
「それがいいよ」
「そうしたほうがいいよ」
「そうするのが一番だよ」
「やらない理由が無いよ」
「それじゃあ」
「決まりだね」

――「「「

「そうね。たまには運動をしなくちゃね」
……。
「かみさま」
「吾妻秀人」
「吾妻なのは」
「あたらしいカミ」
「邪魔する気だ」
「カミは大嫌い」
「どうして邪魔をするの？」
「閣下のためなんだよ」
「父親でしょう？」
「お母さんなのに」
「全部いいようにしてあげるから」
「引っ込んでてよ」
「引っ込めてやる」
「引っこ抜いてやる」
「カミの座から引きずり降ろしてやる」
「おーおー、イキが良いこった。ガキんちょは元気が一番ってな」
「本当に……。それじゃあ。」
――――。
「「――――遊んでやるか」」

そして五分後。A組、F組は双方ともに大禍なく、学院へ転送されたのだった。

◆▪◆◆◆

――ヴィヴィオは負けるよ。
勝敗の予想を聞かれた際、秀人となのはは、全く同じ答えを出していた。それはもはや、予想ではなく、確信であった。
「何でもできる。誰にも負けない。全力全開……ってね」
「そういう時期ほど、しょーもない理由であっさりコロっと負けちま

うもんだ」
そう。この戦いは大番狂わせどころか……両親はおろか、ヴィヴィオの人となりを良く知る関係者は、大なり小なり、ヴィヴィオ敗北の可能性を示唆していたのだった。
◆▪◆　◆　◆　ヴィヴィオ・魂の座　◆　◆　◆　◆
――あちゃー、やっぱり負けてしまったか。
圧倒的な筋骨隆々に、なぜかブリーフにブーツ姿の巨漢が、コミカルに額に手を当て天を仰いだ。
――大王。やっぱり、というのは
他の聖王の一柱が、そう呼んだ。彼こそ、『無力な王』にして『優る王』……ヴィヴィオの内なる聖王の中でも突出した力を持った、王の中の王……すなわち、『大王』である。
――皆も気づいていただろう。アレは自信ではなく慢心だ、とな。
慢心、という言葉に、オリヴィエ王の肩がびくっと震える。何を隠そう。『座』にやってきたオリヴィエをコテンパンにしたのは他の誰でもない、この大王なのだ。
「で、でもぉ、大王さま。ヴィヴィオは間違いなく強いんですしぃ……そうそう負けるってことも無いんじゃあないかと……」
――あぁ、強い。わたしですら苦戦は必至。……まぁ苦戦はいつものことだがな。たまにはキレーに鮮やかにサクっと勝ってみたかったわい。
はぁ～、と、悩ましげにため息をつき、わっしわっしとオリヴィエのお団子頭を乱暴に撫で繰り回す。
――だが、ネズミが獅子に劣るというのは、獅子の理屈に過ぎん。ネズミにはネズミの牙があるのだ。
最低値に近い魔力量しか持たないながらも、長き聖王の歴史において、片手の指が余る程度にしか存在しない『大王』に列せられた偉大な戦士の言葉だ。
――ですが大王。ではなぜ、負けると確信しながらも、『天』の技を伝授されたのですか？
聖王雷光撃。壁画に曖昧なヒントを隠すのみで、決して技そのもの

を後世には伝えなかった秘奥義を、なぜ。
――それは。
ごくり、と、聖王たちが唾をのむ。きっと、大王としての深淵なる考えがあり、含蓄のある言葉として出てくるのだろうと。
――――――かわいい孫におねだりされたから、つい……
ズデーン、と、聖王たちがずっこけた。
――大王さま～!!
――あんたって人は～!!
――今日の牛丼は肉抜きですよー!
ボカスカボカスカ。相手が偉大な戦士であることをすっかり忘れ、聖王たちは大王をシバいた。
――だ、だって、あんなキラキラしたつぶらな瞳で『大王さま、おねがい……!』って言われたら誰だってそーするわい! あと肉抜きだけはカンベンしとくれ～この通りじゃ～!
……威厳はどこへやら。ヘコヘコと『座』の厨房担当に平身低頭する『大王』の姿がそこにはあった。
――あいててて。しかし、『天』の技はのう……それだけでは、不完全な技なのだ。
不完全。あの、脱出がほぼ不可能と思える絶技が。
――『天』だけで世界は成り立たん。世界を成り立たせるのは……おっと、これ以上はヒミツじゃ
あーあ、とガッカリする一同。今日こそ、大王の強さの秘密に迫れると思っていたのに。
「やっぱり、壁画見なきゃダメかなぁ……」
とはいえ今は、自由に行動できない身である。ヴィヴィオが壁画を見てくれたら、その情報が『座』にまで伝わるのだが……
「ヴィヴィオ、落ち込みすぎなければいいんだけれど……」

◆・◆　◆　◆

――――負けた。
ヴィヴィオはまだ、その事実と向き合えていない様子だった。
「ぽんぽかぽーん！　勝者、Ａ組～!!」
『実行委員長』の腕章を付けたアリシアが、マイクを片手に宣言した。
転送された空間には、アリシアと、ヴィヴィオと、ヴィクトーリアしか居なかった。
ヴィヴィオもヴィクトーリアも、武装が解除され、制服姿となっていた。ヴィヴィオの襟には、『Ａ』と『Ｆ』、二つの金バッジが輝いている。
「……」
ヴィクトーリアが、意を決したように、ヴィヴィオの眼前に歩み出る。ぷるぷると小鹿のように怯え、虎の尾をくすぐるように小刻みに震える手で……しかし、涙目とはいえ、毅然とした表情で、ヴィヴィオに手を伸ばす。
「――――では、頂きますわ」
そして、ヴィヴィオの襟から……『Ｆ』の金バッジを、むしり取る。そしてそれを、己の襟に留めた。
かつて。ヴィヴィオに完膚なきまでに敗北し奪われた金バッジ。物質としてではなく、意味あるシンボルとしてのソレを……ヴィクトーリアはこの時、取り返す……否、『奪う』ことに、成功した。最強の暴獣に、矮小なる小動物が、勝利したのだ。これにて、一勝・一敗……つまり。
「――――これで、わたくしとあなたは、対等でしてよ……聖王ヴィヴィオ」
うつむいたヴィヴィオの表情は、伺えない。別空間で待機する各クラスの面々も、この風景は見えている筈だ。
「――。」
ぼそり、と、ヴィヴィオが何かを呟いた。ぼそぼそ、ぼそぼそ。左手で顔面を抑えるように覆いながら。その指に、ぎゅうう……と、力が加わっていくのを感じる。

「……ダールグリュン。ヴィクトーリア・ダールグリュン」
ヴィクトーリアは……この時初めて、ヴィヴィオにフルネームを呼ばれた。それまでは、『ダールグリュンさん』と、他人行儀に呼ばれていたというのに。不覚ながら、少し嬉しいとも感じていた。路傍の石から、対等な存在になれたのではないか……と。が。

「……ヴィクトーリア……ダールグリュン……ッ!!!!」

――ガリガリガリッ……!!!
……ヴィヴィオの手指が……己の顔を、力任せに引き裂いた。流れ出る鮮血。そして……指の間から覗く……血に染まった二色の瞳……!!
己が魂に刻み込むが如く。この日の敗北を。路傍の石に蹴躓いた屈辱を。王たる己に牙を突き立てた、生涯の怨敵の姿を、焼き付けるが如く!!!
(ヒィいいいいいいいいいいいいいいいーーー

起きようはずも無い雰囲気だった。ただ安堵。ただただ、安堵であった。あの二人が割って入らなくとも、審判のヴィータや、スバルたち講師陣が黙ってはいなかっただろうが……それでも、である。
「委員長……！」「ぼくたち勝ったんですね……!!」「終わった……やっと……」
　その胸元に光る『F』の金バッジを見て、ようやく勝利が実感できたようだ。
「我々の、勝利ですわ……!!」
　高々と拳を突き上げる。
「お前の作戦を聞いたときは、流石に驚いたがな」
　その中から……どうにか歩ける程度には回復したらしい九音が歩み出てくる。
「己の弱さを活用する、見事な作戦だ」
「九音さん……。それでも一番の功労者は、あなたですわ。あの聖王を足止めして下さらなければ、土台、成立しない作戦でしたもの。アインハルトさんも、よくぞ……ってアラ？　アインハルトさんはいずこに？」
「……いやアイツ一番の重傷で、医務室に救急搬送されていま外科手術中なンだわ」
「先に言ってほしかったですわよっ!?　ちょっと行ってきますわ！」
「あー、やめとけやめとけ。身内が付いてるから、その後にしとけ」
「身内……？　あの方、お友達いましたの？」
「お前、けっこう無自覚に失礼だよな……っていうか……」
　九音が、鼻をスン、と鳴らし……
「あぁ、漏らしたのか。着替えてこい。ちょっと匂うぞ」
　……。
　まぁ、クラスの皆も若干気が付いてはいた。いたが、乙女心を考慮し、あえて黙っていたというのに。
「デリカシー注入ゥーーーーー!!!!」
　――ゴンッ！
「ぎゃー！」

手にした槍の残骸の棒ツキレで、九音の頭をドツいた。

# ｖｉｖｉｄ編　２５話『　家出　』

――――日に二度も負ける奴があるか

◆・◆　◆　◆

「ハルさん、大丈夫かのう。手が枯れ木のようにポキポキ変な曲がり方をしちょったが」
「イマドキ外科手術かぁ。まぁ、確実っちゃ確実だけど」
フーカとシャンテが、処置室の前のベンチに座って待っていた。映像で見てはいたが、フーカには訳が分からない次元の戦いだった。
「当面、腕全部をガッチリと補装具で固められる生活だろうねぇ。そういう人、教会の附属病院で見たことあるけど不便だぞー」
「まぁ、その辺はワシが支えるから問題なかろ。……おい、ダキニ。……ダキニ？　さっきっからどーしたお前。黙りこくりおって」
『……ん。何でもないぞ。ちょっとな』
ダキニは先ほどから……『断空拳・遠当て』の映像を見てから、様子が変だった。アホの子とはいえ、策謀で戦国の世を生き抜いた知略の聖王である。あの映像から、フーカとは比べ物にならないほどの何らかの情報を得た可能性がある。
『……ベクトルを操る。あの小型太陽のエネルギーをも、いっときとはいえ操って見せたということは、無形の力にも干渉が可能。偏在するエネルギー、風や温度……時間、空間……』
「あー、駄目じゃ。完全に『入って』しまっておる」
「ふーん。……。ねぇ、突然なんだけどさぁ」
シャンテが、ダメージジーンズから伸びる華奢な足を揺らしながら、言う。
「あー？」
フーカは気だるげに……しかし、わずかに張ったような空気を感じていた。

「あのさー……この状況で言うことじゃないし、何を言い出してるんだ、って思うかもしれないんだけど……

――ちょっと手合わせしない？」

……何を言っているのか。しかし。

「――ええぞ。ワシもちょいと、……なんつーか、動きたい気分じゃ」

ばさっ……と、フーカがスカジャンを脱ぎ捨てる。

……一体、何が起きているのか。

◆▪◆　◆　◆

「うー!!　うーーーーッ……!!!」

秀人が羽交い絞めにする中で、リンネが暴れる。試合映像を食い入るように見つめていると思ったら、これだ。

「覚えがありすぎる……」

怪力のリンネを更なる怪力で抑え込む秀人は、苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

「当事者同士の喧嘩でしかなかったはずなのに、外野が触発されて血が上って、乱闘になるアレだ……俺もカントクにはずいぶんと迷惑をかけた……」

「あー、わかるー。なんかスイッチの切り方が分からなくなるヤツ」

なのはにも、秀人にも、覚えがあった。特に、闇の書事件の折りに、気を抜いた所為で死にかけた――と本人は思っている――なのはは、なかば脅迫観念のように、気を張り続ける日々を送った。

慣れれば良いのだが……まず考えてみれば、そのような暴力漬けの日々を送る人間などごくごく少数だ。イタリアのマフィア以上に暴力慣れしているなのはがちょっとオカシイのである。

「――あなた、平気なのね」

のだが……彌茅は驚くほど、平静だった。膝の上に行儀よく手を揃えて置き、背筋を伸ばして座っている。教団に暗殺者として養成された経験から来るものとも考えられたが、なのはは驚いていた。

「……いいえ。正直、抑えておくのでせいいっぱいです」

「十分よ。……まったく、F組の連中を鎮圧して戻って来てみれば」

リンネが彌茅に飛び掛かろうとしている寸前だったのだ。

「師匠。あちこちから」
――ガシャンッ
「なんかすごい音が」
「……気にしなくて良いわ。あなたは優秀よ」
今頃は、スバルたちが各所で生徒たちの対応に追われているだろう。衝動をある程度制御できている彌茅は、言った通り優秀な部類なのだ。
「はい師匠。でも……たぶん、このあと戦うことになります」
……妙なことを言い出す彌茅だが、なのはは肯定も否定もしなかった。
◆・◆　◆　◆「
――べこんっ。
フーカは、他人を殴ることに躊躇は無いタイプだが、同時に、嫌悪感も消えないタイプだった。あくまで自衛。あくまで手段。の、つもりだったのだが……
「うらぁあああーーーーッ!!」
「ブふっ……、!!」
頬にイイ感じの一発を貰い、フーカの意識が一瞬ぶれる。アインハルトの手ほどきを受けてはいるが、才能の開花はまだまだ先の事だろう。
ここ数日の付き合いで分かったことだが、このシャンテもまた程度の差こそあれ、暴力に晒されて育ってきたタイプだ。暴力に全く躊躇が無い。そして、先ほどまで座っていたベンチを持ち上げ……
――バゴンッ!!
フーカの頭上から、ベンチが振り下ろされる。腕を交差し受けたが、思いっきりカドの部分で殴りに掛かって来ていた。
(『道具』を使い慣れとるのう……!)
その辺に転がっている物を使った、徒手空拳以外に選択肢の有る喧嘩が染みついている。だが、フーカもやられてばかりはいない。砕けたベンチの座面だった板切れを、シャンテの踏み込む足下に投げ入れる。滑ってたたらを踏むシャンテ。

「せぇぇぇいっ!!」
無防備に前に突き出た顎へ容赦のない前蹴りを放つ。
――ガチィンッ!!
「て、鉄片仕込んだ靴で顎蹴るとか、あんた、あたしを殺す気っ!?」
「ちゃっかりと尖った鉄パイプ手にしとるヤツの言うことかっ！」
……どっちもどっちである。
「おうおう、得意の幻術が無きゃ道具使わんと怖くて戦えんのか!?」
「うるっせぇガキだなぁ！　あたしはこのやり方が性に合ってんだよぉ!!」
棒術……と言うには稚拙が過ぎる喧嘩殺法。多少、何らかの鍛錬を受けた形跡はあるのだが……
「通じるか、ンなもん！」
脱ぎ捨てたスカジャンを腕に巻き付け、鉄パイプを受け止める。
――バサッ！
そして、スカジャンを広げた状態で投げつける。投網のように広がった衣類がシャンテの視界を塞ぐ。
蹴りか。殴りか。
「でぇぇぇぇぇっ！」
「ぐぇっ!?」
まさかのタックルである。とはいえ、タックルもまた立派な戦闘技能の一つと言える。そして、タックルにも二種類。吹き飛ばす、もう一つは。
――ダァァァァンッ!!
……勢いのまま、全体重と共に壁に圧し潰すタックルである。
「げぶっ……!!」
肺の中がカラになり、意識が飛びかける。その一瞬が……勝敗を分けることになった。
――がちぃんっ!!
……口の中から衝撃。強烈なアッパーを喰らい、歯と歯が強引に打ち鳴らされた。
「……」

ばたんっ、と、倒れるシャンテ。
「うっし……今回は勝ったぞ！　おいダキニ、そろそろ戻って来んかい！」
『あぁ、うむ……おぬしの喧嘩殺法は抜けんなぁ。覇王流を使うときは覇王流しか使えない、喧嘩の時は喧嘩の技しか使えない。うまく織り込んでいくべきだ。
――というかなんで喧嘩しとんの、おぬしら』
「え？　……あっ、言われてみれば」
だだだだだ、という廊下を駆ける音と、嫌というほど聞き覚えのある、ジャアアアアッ！と、車輪が走る音。
「こおらぁあああああああ!!」「フーカァアアアアアア!!!」
「げぇっ、スバルにシャッハじゃ！」
問題児たちの獄卒もとい指導員たちである。当然、抵抗むなしく捕縛される。
ここに、フーカの逃避行は正式に終わりを迎えのである。シャンテの歯二本を犠牲に。
◆▪◆　◆　◆
ヴィヴィオは、重苦しい雰囲気の漂うF組に帰還していた。誰一人、ろくに消耗もしていない。むしろ、秀人となのはに無力化された際のダメージが一番大きいまである。電撃を喰らったカミラもとっくに回復しピンピンしている。
「――腹を切ります」
と、クラスメイトの一人が本当に刃物を取り出し腹に宛がった。
「わたしも……」「わたくしも」「ぼくも」
触発され連座となり、今まさに集団自決が図られようとしていた。が、ヴィヴィオはその刃物を無言で一本取り上げる。そして……
――ざくっ
……掌に、思い切り突き刺した。
「聖王閣下……！」
ざわつく臣下たち。治癒と同時に奔った蒼炎が刃物を蒸発させる。傷口で燃える蒼炎をかざすヴィヴィオ。

「――――クラス代表の座を降ります」
……臣下たちは、ある程度、予測できたかのように静かであった。引責辞任。
「暫定代表には副将・冥を。近日、改めて何らかの代表選抜を行います。そして私は修行に出ます」
流れるような指示の後、全寮制とは何だったのかと疑いたくなるような決断を下す。
「ん。纏めておくけど……戻ってきたとき、ヴィヴィオの席は無いかもよ」
冥は受諾したが……冷淡な対応をする。
「その時は、また力で得るまでです」
そうしてヴィヴィオは、呼び止める臣下たちを背に、学院の門を出て……
「……」
歩み脚は、早足となり……
「……っ」
小走りになり駆け足になり……学院が地平線に消えたあたりで。
「――――うわぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー!!!

なのは一行が帰宅した。暴れ狂っていたリンネも、今は後ろ手に縛られ猿轡を噛まされることで落ち着いて……いる……？

「……お母さん……」

「目ぇ真っ赤よ、あなた」

四葉の隣に座ると、同じ顔の二人が並んだ。

「お母さん……私、悔しいよ……！」

ヴィヴィオは、なのはに心の内を吐き出す。

「勝てるって思ってたの。勝負は水物っていうけど、私と、冥がいて、クラスのみんなが居てさ……勝てるじゃん、普通、勝てるって思うじゃん！　なのに、……ああそうだ、それもこれも、九音のバカが横槍入れたから……！」

子供っぽい恨み言。

「……」

四葉は青ざめている。

「……。」

隣に座る姉から、恐ろしく冷たいオーラが発せられていることに気付いてしまったからだ。四葉は……姉（なのは）の恐ろしさを、身を以て知っていた。行動が読めない人間ほど、恐ろしい存在は無いのだ。

レイジングハートとアイは、ちゃっかりデバイス形態に戻り、秀人の首元に退避していた。

「だ、だから……！　私は、悪くないんだもん……!!」

――パンッ。

――乾いた音が、リビングに響く。

「……え？」

ヴィヴィオは、信じられない、と言うように、頬を押さえて絶句した。

そう。

――なのはに、平手で引っ叩かれた頬を押さえて絶句した。

「――負けたのはあなたの所為よ」

そうして……いま最も聞きたくない言葉を、最も聞きたくない相手

から叩きつけられた。
「――油断。慢心。あなたの驕りが、自軍を敗北させたの。分かっているのでしょう？　本当は。でも、認めたくないのよね。分かるわよ。けれどね」
――――パンッ。
更に一度、頬を張る。
「これが実戦だったなら、あなたたちは死んでいたのよ」
学院。学び舎。対抗戦。だがそれは、本番などではありはしない。ドライでシビアな、本物の戦場では……慢心は死を招き……死を伝播させる。
「お姉ちゃ、」「あなたは黙っていなさい」
言い募る四葉を、なのはが威圧し沈黙させる。これは、親子の情でどうこう言える問題ではない。
「あの学園に良血・雑草を問わずに人材が集められているのは、実践即応戦力の候補としているからよ。学内のクラス対抗戦は、いわばその予行演習。クラス代表に与えられた使命は、組織集団の統率と、俯瞰的な、戦略的な勝利」
四葉にしがみついていたヴィヴィオを引っぺがし、突き飛ばすように立たせる。
「好きだの嫌いだの、個人的理由でそれらを放り出し……大局から目をそらしたあなたは、リーダー失格よ」
「……!!」
立たされたヴィヴィオは俯き、スカートの裾をくしゃくしゃになるまで握り締めている。

敗北したヴィヴィオに対し、あまりにも辛辣な宣告だ。しかし……今後、学院の生徒たちにも選別の時が来る。適正無し、と見なされれば、容赦なく一般校へ転籍させられていくことになるのだろう。
半端者を戦場に送り出せばどうなるか。それを、他ならぬなのは、この場に居る誰よりも熟知していた。凶鳥部隊で、当時最弱ブービーの戦闘員であったヴェイロンやアルナージですら、作戦行動に際

してはプロフェッショナルに徹していた。だからこそ、なのはは二人を鍛えもしたし、作戦に参加させてもいたのだ。

「一般校に転籍なさい。自分の都合がそんなに可愛いなら、個人競技のスポーツ格闘技でも趣味で続ければいいわ」

なのはは……ヴィヴィオのことを想っている。それは間違いはない。赤の他人であれば、そもそも関与しない。そのことを秀人は誰よりも知っているし、本質的には、ほぼ同一人物とも言える四葉であればなおさらだ。

なのはが頑として譲らない部分は、正直、言っても無駄だ。言い過ぎたことに後悔して後で嘔吐する未来が見えるのだとしても、なのはは言うのだろう。なのはは、とにかく頑固なのである。

そしてヴィヴィオは、両親どちらかと言えば、気質はなのはとよく似ている。

「……」

ヴィヴィオは、すぅっと醒めた顔を作る。そう……なのはと似ているということは……

――凄まじく頑固で意地っ張りで負けず嫌いなのである。

「……なに？　なにか言いたいことでもあるの？　言ってごらんなさい」

威圧的な空気を崩さないなのは。

「お母さんは、……」

「何よ」

「お母さんは……！」

そして……キッ、となのはを真っ直ぐに見据えて。

「――――そんなんだから友達が出来ないんだーーーーーーッッ!!!!!」

（（ええ……））

よりにもよって言うことがそれかよ、と、秀人と四葉はちょっと脱力した。まさに子供の反抗。なのはからの叱責に、全く向き合っていない。
「言っていいことと悪いことがあるでしょー!!　さっきから何よ！ひどい！　ここは慰める場面でしょ！　そうやって場の空気も読まないで言いたいことだけ言ってスッキリしちゃうから、お母さんはコミュ障で友達ができないんだー!!」
なのはは、ため息をつく。心構えの話をしているのだ、と。失敗を心に刻み、以後の教訓にするのだ、と。それを伝えなければならない。そうして、なのはは口を開く。
「い、」
い？
「いまその話はしていないでしょうっ……!!!?」

効いちゃったよ。
「と、と、と、友達、とか、できない、わけ、じゃ、ないし！　い、いなくったって、困らないし！　作るタイミングが、無かった、だけだし！　作ろうと思えば……いつでも、作れるしっ!!」
冷徹の仮面は剥がれ、ヤカンのように顔を真っ赤にして怒鳴る。
「わたし入学初日にはクラスの子の顔と名前ぜんぶ覚えたもんね！お母さん、どうせ5人くらいしか話す人いないでしょうっ!?」
「あ、う、ぐ、」
ハリー、エルス、大宮、中野、小山……実にピッタリ5人しか話す相手がいない。図星中の図星である。
「こ、の……」
ぐいっ、と、なのははヴィヴィオの襟首二か所をふん掴み……
「小娘がぁーーーー!!!!」
窓に向かってブン投げた!!
――ガッシャァーーーン！
小柄な体躯がガラスを突き破る！

「ぎにゃあああああああ!!」
悲鳴を上げながらも、背中で安全に衝突しノーダメージに抑えるヴィヴィオ。流石であった。そのまま庭に着地する。
「……やってやる……」
クラウチングスタートの姿勢を取るヴィヴィオが、呟く。
「戦ってやる……闘ってやる……!!」
ぶわぁ、と、頭髪が金色に輝く!!
「――下剋上だぁーーーーーーーー!!!!」
目の前真っ直ぐ。なのはだけを見据えて……
「――だからあなたは未熟なのよ」
なのはが、先ほどの痴態はどこへやら。呆れるような視線を寄越す。ヴィヴィオが、そのことに疑念を抱くよりも、先に。
「わたしと戦りましょう」
――がしっ……
木の葉のように、大した感触も無く……彌茅が、ヴィヴィオの首筋に背後からチョークホールドの要領で組み着いた。
「!?」
「手合わせの申し出への受諾は頂いています」
……確かに、彌茅からの申し入れはあった。それに対し、ヴィヴィオは受けた。お預けとなっていたが。
ヴィヴィオの膂力で振れば、軽い彌茅など木の葉の如く散るだろう。しかし……振るよりも早く。
「――頂戴します」
――バツンッ……!!
……ヴィヴィオの首を囲い込んだ腕の円周。その内部を、魔力の刃が満たす。それにより、ヴィヴィオの延髄を、一時的に断線させる。結果。
「か……、」
ヴィヴィオは、意識を失った。
……。

ノビたヴィヴィオを確認し、呼吸を確認し……なのはの元へ、ぽてぽてと歩いて来る。達成感を滲ませる足取りだ。
「師匠、勝ちました」
「見事」
なのはが短く応じる。
「戦利品を取りなさい」
「はい師匠。すでに決めています」
彌茅は、呆気にとられる四葉、秀人の横を通り過ぎ、押し入れ収納の中から一振りの日本刀を取り出した。なのはが入学祝にヴィヴィオに与えた一振りだ。
「これにします」
「良いでしょう。真剣を持つことを許可します」
なのはが、彌茅を一定以上に認めた証拠だ。空を……そこに浮かぶ、月のような衛星を見て。
「先ほどの技の名を『残月』とします。磨きなさい」
腕の円周を満たす魔力光を、月に見立てた命名だ。
「！　……はい、師匠!!」
「う、ん……。……はっ!?」
ヴィヴィオは、目を覚ます。そして……周囲の状況と、認識を同期させ……
「……そんな……」
力量で互角の九音に相打った時よりも。知略でヴィクトーリアに敗北した時よりも。
「――日に二度も負ける奴があるか」
なのはの言葉に、敗北を、強く意識した。
「……」
もはや、いかなる言葉も出てはこなかった。実力では圧倒的に格下である彌茅に、負けたのだ。四葉が駆け寄るが……掛ける言葉もまた、見つからなかった。
「ママ」
いやに明瞭に、ヴィヴィオが呟く。

「……な、何かしら」
「修行してくる」
「えっどこに」
「ルーフェン。気が済んだら帰ってくる。週イチで報告する」
ぶつ切りの情報の羅列。すっくと立ち上がったと思ったら……
「お母さんなんて」
暗い感情そのものを声にしたらこうなる、とばかりの声。
――チュィイイイイン……
腕輪デバイス……王権（レガリア）が起動する。
「お母さんなんて……！」
もう、涙をぬぐうこともしない。ただ、幼子の感情のまま、なのはを睨む。
『ｉｍｐａｃｔ　＃２『Ｌａｒｇｅ』』
デバイスが機械音声で読み上げる。
「――大っっっ嫌い!!!!!」
『ｒｅｌｅａｓｅ』
――ドッパァァァァァァァァァンッ!!
弾ける衝撃波。舞い上がる粉塵と砂塵。家屋のガラスは砕け散り、庭木はその命を終えた。
「ぎにゃあああああああ!!」
……娘そっくりの悲鳴を上げる四葉。が、最低限の理性でシールドしたのか、四葉の周囲だけ衝撃波の影響が遮断されていた。
「えい」
――ボフンッ
……粉塵を消し去るが、そこにはもうヴィヴィオの姿は無い。すたすたと四葉のもとまで歩いて来るなのは。
「……怪我は無い？」
「……」
四葉は呆然としていた。何故だ。どうしてこうなった。愛する娘は出奔し、大事な我が家は物理的に半壊し……
「お、お、お、……」

「……」
なのはは、四葉が何を言いたいのか、言われずとも分かっていた。気まずそうに腕を組み、そっぽを向く。
「お姉ちゃんの、バカーーーーーーーーー!!!」
――――パカァンッ!!
ずっと手にしていた木製のお盆で、なのはの頭をぶっ叩いた。
「ぐえっ」
なのはに攻撃をクリーンヒットさせるという、思わぬ大金星を挙げた四葉。
――――カン、コン、カン！
「ヴィヴィオが可哀そうじゃないのーーー!! 何でもうちょっと優しくしてあげられないの！」「でも」「でもじゃない！ だってじゃないー！」
「……う、うう……ごめんて……ほんとごめんてば……」
「ヴィヴィオに言いなさいよー!! 親に攻撃魔法ぶっ放すなんて誰に似ちゃったのよ一体――！」
誰に、と言われれば。そりゃあ。
「……なのはだな」
『間違いないの』
『すげぇデジャビュを感じましたよマスター』
「そうなんてすか、師匠（せんせい）」
彌茅まで。
……まぁ確かに状況こそ違えど。なぜ選択した魔法も、即興の拡張子も、捨て台詞まで一緒なのかと、巡る因果を感じざるを得ない結果は、確かになのはとの確かな血縁の証明だった。
「……だってぇ……」
「あァ!? この期に及んで何を言うつもり!? 引っ叩くわよ!?」
正座したなのはを、仁王立ちして睨み下ろす四葉。普段の力関係が完全に真逆になっている。
「……どうしよう」
……なのはが、珍しく弱音を吐く。

「どうしよう、どうしよう、どうしよう……！」
「え、ええ……？」
　これには、怒っていた四葉も困惑する。思えば、いつも超然としていた姉が、ここまで取り乱す姿を見るのは初めてだった。
「じ、時間……時間、巻き戻す……あぁ駄目だ。『力』は慈樹に渡しちゃった……ルーフェンで待ち伏せて捕獲……あぁこれも駄目。たぶんまた逃げられる……記憶を飛ばすのは論外だし……でもでも、あぁ～……うぅ～……どうしよう……!!　どうしようどうしようどうしよう……!!」
　頭を抱えてぶんぶんと振り乱し始める奇行に、四葉が逆に冷静になってしまった。
「お、お姉ちゃん、いったん、落ち着こ……？　ね……？」
「どうすればいいの、ねえ、どうすればいいの!?　謝るのって、どうすればいいの!?」
「そりゃあ、普通に……」
「普通ってなに!?　わかんないよ、私、わかんないよー！　四葉、顔同じなんだし私の代わりに謝ってよーー！」
「駄目だこりゃ……コミュ障拗らせるとこんなんになるのか～……」
「どうしよう～……!!　ヴィヴィオに……嫌われちゃったよぉ～……!!」
　とうとう、四葉のエプロンに顔を埋めて泣き始めてしまった。
「誰かこの事態を収拾してエーーーーーー!!!?」
　無理でーす。
「義兄上（あにうえ）、義兄上（あにうえ）」
　唯一冷静な彌茅が、師匠（せんせい）の痴態からそっと目を逸らしながら、秀人の裾を引く。
「お、おうどうした……俺はちょっと今から嫁をなだめすかしてチューして落ち着かせるというミッションが」
「リンネさんがいません」
「あいつならリビングの隅っこに転がしておいたぞ」
「ヴィヴィオさんが突き破ったガラスの破片で手枷と猿轡を切って逃

げたようです」
「無駄に知恵が回る奴だな！　で、どこ行った⁉」
「おそらく興奮した勢いのまま、ヴィヴィオさんを襲撃しに」
「アイツのナチュラルボーン通り魔思考はどうにかならんのかー!!」
「……わたしが追ったらヴィヴィオさんと鉢合わせてしまいますね」
「――だいじょうぶだよ」
……誰の声？　全員、ぴたりと動きを止める。そして、騒動の渦中においても、半壊した縁側から、平然と事態を眺めていた、ただ一人。
「――だいじょうぶだよ」
吾妻慈樹が、そう告げた。
「……」　「……」　「……」
「……」
『……』『……』
「「「『『　うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!　』』」」」

◆▪◆　◆　◆

ヴィヴィオは、とぼとぼと……新区の港の中、歩を進める。
「ねえレガリア……『王』たち、何か言ってる……？」
『否定。『座』より反応はありません』
まだまだ自我が未発達な相棒は、気晴らしのお喋りの相手にはならないようだった。顔パスでルーフェン方面への連絡船に乗り込もうとしていた矢先だった。
「ぜァっ!!」
――ガォンッ!!
背後より一撃。頭部を横凪ぎにする魔手を、半歩進んで回避する。
「……？」
が、半歩進んだ感触が無い。まるで、進んだ分の空間を

削り取られたような……
「うぉりゃアッッ!!」
そうして狂った間合いに、超威力の蹴り技が飛ぶ。
――ドシィンッッ……!!!
防御の上からヴィヴィオに衝撃を与えてくる。魔力やその他異能が宿った気配は無い。つまりこれは、純粋な身体能力によるもの。これほどの蹴り技。ヴィヴィオが知る限りでは……
「ミウラさん。お久しぶりですね」
「……ええ、お久しぶり……!!」
友人との再会……と言うには、いささか物騒が過ぎる。蹴り技がミウラなのであれば、先ほどの不可解な攻撃は。
「うちも……お久しぶり、やっ!!」
――ガォンッ!!
「空間切削……ジークリンデさんもお久しぶり」
「そうや……あんたに拉致られて、ケッタイな学校にブチ込まれて……!」
そういえばそうだった。通報を受けて駆け付けたら、『羽根』の能力者ではなくなんか変なのがいたから、ゲットして連れて戻ったジークリンデ・エレミア。
「つい先日まで、わけわかんない戦場に幽閉されて……!」
単なるレストランの一人娘のボクっ娘だったのに、うっかり聖王の目に留まってしまったばかりに暖かく優しいカタギの世界にサヨナラバイバイ（強制）するはめになったミウラ・リナルディ。
「お前に報復することだけを考えて帰ってきたんだよコンチクショーめぇ!!!!」
まったくもって正当な理由であった。
――ドガガガッ!!
連撃とは思えない威力と速度で、ヴィヴィオへ蹴りの嵐を見舞うミウラ。
――ガォンッ!!
当たれば防御力無視。当たらずとも削られた空間によって間合い

を狂わされる空間切削を連打するジークリンデ。
それぞれ単体でも厄介だと言うのに……必殺の威力と、搦め手が同時に多方向から飛んでくる。気が付けば、壁際にまで追い込まれていた。いくら不調とはいえ……恨みのパワーは恐ろしいものである。
ただ、不調とは言っても……ヴィヴィオのスペックそのものが劣化したわけではないということは、忘れてはならない。
「レガリア」
『了解』
グローブ部分のみ形成し、戦闘を開始する。
「ふゥッ!!」
右からはミウラの蹴撃。初対面時は素人丸出しの大振りだったが、威力は下がらず、コンパクトに収まっている。
――ガォンッ!!
そして左からは、ジークリンデの空間攻撃。ヴィヴィオは……上に跳んだ。単に無防備に宙に身を躍らせたのではない。目的は……
――ダンッ!!
天井！
「!?」
閉所戦闘では、壁や天井ですら、足場になりえる。
――バゴンッ!!
ミウラの蹴りは空振り、壁に突き刺さったことで、一瞬、無防備を晒した。ヴィヴィオは既にミウラの背後に着地しており……
――バシッ！
片足状態のミウラへ足払いとタックルを同時に掛け、ジークリンデに向かって飛ばす。
だが、ジークリンデもさるもの。狼狽することなくミウラを回避し、右腕に必殺の一撃を籠める。
「はぁあっ!!」
凪払いの一撃が多かったジークリンデが、掌打の形で空間切削を放つ。前進方向へのベクトルはタイミング的に変えられない。跳躍をしても空間切削の攻撃範囲からは逃れられないだろう。であれば

……
「レガリア、左腕！」
『了解』
ヴィヴィオは、左腕に魔力を集中させる。そして。
――バリバリバリッ!!!
「!?」
ジークリンデが驚愕に目を見開く。空間切削は、基本的には防御不能業だ。しかし……攻撃が魔力によるものである以上、魔力で干渉は可能である。無論、通常の防御魔法ではガードごと抹消されて終わるが……ヴィヴィオは、消される魔力を上回る出力を一時的に左腕に集中させ、『左腕で空間切削を受けた』のである。
「嘘やろ!?」
「真実です」
無敵の存在などありはしない。ヴィヴィオが、本日のみで嫌というほど学んだことである。そうして、ミウラ、ジークの首を挟み込み……
「もーらった！」
「!?!?」
……ヴィヴィオの背後から、気配も無く組み着いて来る、まさかの三人目。ジークとミウラを解放し、組み着いてきた白いのを投げ飛ばす。冷静に対処しつつも、流石に二度も首への急襲を警戒できないほど愚鈍ではない。というか。
「どちらさま!?」「リンネ・ベルリネッタです！」「だから誰!?」
ジークとミウラは驚愕していた。何だこの白いの。だが、ミウラは反撃の機会を逃しはしない。
腹部を狙った蹴り。しかしヴィヴィオは……
「そこにいたお前が悪い」
リンネを引き摺り寄せ、ミウラの蹴りへの盾とした。
――ドッボォ!!
「げぅ……っ！」
「あぁっ……！」

一般人にクリーンヒットさせてしまった。
「あぁあ……や、殺(や)っちまいました……！」
「ミウさん……ムショでも達者でな……」
「共犯ですよぉ！」
一瞬で他人面をするジークにミウラが食って掛かる。
「うぅ……」
リンネは呻くが……直撃の瞬間、腹筋を固めていたことをヴィヴィオは察していた。
「はい、演技しない」
「えっ……」
するとリンネは、ケロっと顔を上げた。
「でも、こういうときはおおげさに被害者づらをした方が、とれるお金が大きくなるって……」
「そういう浅知恵は身を滅ぼしますよ。で、何の用です？　私は今から家出なので、家には帰りませんが」
「？　はい、わたしもかえるつもりはありませんが」
「……？」
「……？」
「……私を連れ戻しに来たのでは？」
「……？　つれもどしてほしかったんですか？」
――ガンッ!!
図星を突かれたヴィヴィオは、リンネの頭に拳骨を落とした。
「いたいです」「嘘こけ！　なんて厚い骨……！」
不用意に殴った手が痛い。
「え、えぇ……？　家出、って……」
「……ただ事じゃなさそうやな」
すっかり気勢を削がれた二人が心配そうに事情を伺ってくる。
「家出というか……修行です」
「既に人外じゃないですか」「とっくにバケモンやないか」
遠慮が無い二人だった。ヴィヴィオはムっとしながらも……言い出すのが恥ずかしそうだった。

「負けたんですよ、今日。二度も」
　リンネがぶっちゃける。言うだけ言って、売店で買ってきたと思しき串焼きを食べ始める。
「「……えぇぇぇぇぇぇっ!?!!?!?」」
　二人にまじまじと見られ、ヴィヴィオは顔を赤くして俯く。
「神話級ゴリラでも出現したんですか!?」
「頭が八つあるサメにでも噛まれたん!?」
　怪獣と同列に扱われることに、今更ツッコミはしまい。
「でも、家出なんて……親が心配しますよ」
「……！」
　ヴィヴィオが、びくっと肩を震わせる。
「あっ……」
　ミウラが、地雷を踏んだことを察した。ちょくちょく口が滑る子である。
「でも……お母さん、私、負けて傷ついてるのに……優しくしてくれないし……叩くし……」
「……仲直りしぃや。今なら遅くないよ」
「でも……！」
　スカートの裾を、ぎゅうっと握る。
「お、お母さんに、酷いこと言っちゃった……本当のことだけど……酷いこと言っちゃった……！　ど、どうしよう……！　どうしよう、どうしよう、どうしよう……！」
　ぶんぶんと頭を振る奇行に走る。
「どうしよう～……!!　お母さんに……嫌われちゃったよぉ～……!!」
　対応しきれないミウラ、ジーク。
「な、泣かないでくださいよ～……」
「大丈夫や、親子の情はそんなに脆くないよ……たぶん……ウチは壊れたけど……」
　ヴィヴィオをあたふたと慰める。そんな中。
「はなしの続きは、フネにのってからにしましょう」

リンネが、食べ終わった串焼きの串で指し示す先に、ルーフェン方面行きの連絡船が到着したところだった。
「それに……このままじゃおちつくことも出来ません」
ちらっと見た先では、先ほどの戦闘の影響で、警備員が大挙してやってきていた。
「うん……」
ヴィヴィオが、両手にミウラとジークの手を握って、船に歩いていく。振り解くこともせず、ミウラ、ジークは、同情的な姿勢でヴィヴィオについていく。
そして。
――バシュンッ。
連絡船のドアがロックされて。
「「……ん？」」
――よくよく考えれば、二人は乗る必要が全くなかったことに気が付いた。
「「……あぁあああああああああああああっ!!?!?」」
愕然とへたり込む二人をよそに、リンネはウッキウキだった。
「うふふふふ。やった、やった。家出だいせいこう。……あ、お兄さんだ」
……離岸を始めた船の窓から見れば、警備員を両手両足に引きずりながら、鬼の形相をした秀人がこちらに向かって何かを言っている。バッチリ目が合っている。なので。
「あっかんべー」
窓越しに、舌を出してやったと同時……連絡船はルーフェンへ向かって旅立ったのだった。

# ｖｉｖｉｄ編　２６話『　第一回・（裏）社会科見学　』

――『ナメられたら潰す』。社会の基本原理を叩き込んであげましょう

◆　◆　◆　◆

ヴィヴィオのド派手ダイナミックな家出という形で締め括られた、新区への訪問。

更にリンネのドサクサ出奔という余計なオマケまでついた形だ。

「くっそ、あのちびっ子バーサーカーめ……！」

交換連絡船に飛び込もうとして、警備員と保守員とその応援に駆け付けた六課の隊員、計１００人とその場のノリで大乱闘をカマした挙句（勝った）、肝心のリンネには逃げられるという大失態を晒すハメになった秀人だ。

次のルーフェンとの連絡船が来るのは1か月後。無許可での次元間移動はアレコレと法で禁じられている上（経験済み）、地球人である秀人が次元法を犯すと、地球担当駐在員であるクロノ、もしくは臨時駐在員であるフェイトが飛んでくる（経験済み）ということなので、秀人は渋々、引き下がるしか、無かったのである。

フェイトには二度負けている上、負けはしないが何をしてくるか分からないクロノを相手にするのは正直ゴメンだった。更にユーノがバックアップするクロノともなれば、秀人は全力で逃げるしか無くなる。というか、そもそも、ユーノ自体を敵に回したくない。キレたインテリ文系がいかに恐ろしいかは先の大戦で嫌というほど見てきたのだ。作者の気持ちを考えられる分、何をされたら一番イヤなのかまで考えられるのが文系である。

「……ルーフェンには、六課のコリンとヤオが居るから、様子だけは分かる筈だよ」

その横、暗黒のオーラを纏ったなのはが元気なく言う。

「……」

なのはは……ものすごく、落ち込んでいた。自己嫌悪である。
「あ、あの、師匠……その……」
彌茅もまた、何が何だか分からない状況に戸惑っていた。
ヴィヴィオに喧嘩を吹っ掛けたり、売ったり、買ったりした結果、成長を認められ、新たなる武器……派手な装飾の日本刀をゲットしたりもした。しかし……その結果なのだろうか。
「……やめといた方が良かったかな」
ヴィヴィオの家出の最後の一押しをしたのは自分かもしれなかった。ぼそりと、そんな言葉がつい出てしまう。彌茅は無意識に、考えを口に出してしまう癖があった。
「……そんなこと無いわよ」
彌茅の髪を、なのはがぐりぐりと撫でる。
「あなたは勝った。そのことは正しい結果よ。頑張ったわね」
「はい……ですが、その……リンネさんもドサクサに紛れて家出を」
「……」
なのはが、はぁ～……と、長いため息を吐く。
「……もともと、秀人さんの指導を受けながらも、内心では不満タラタラだったのは目に見えて分かっていたからね。遅かれ早かれ、ああ
あったわよ」
「不満……ですか。正直、義兄上とはとてもうまくやっているように見えたのですが、違ったのでしょうか」
「……まぁな」
秀人は肩をすくめる。
「近いうちに実戦か、それに近いものを……ってことは伝えていたんだけど、待ちきれなかったみたいだ」
――――いつですか！　いつなんですか！　お兄さんも、かみさまも、おじいさんも、いつもそう！　ちかいうち、ちかいうち、って！
わたしは！　いっぱいぶんなぐって！　たくさん、たくさん！　ぶんなぐられたいんです！
怖い。

「まぁ、暴力の渦中に居るのが楽しくて仕方のない時期は誰にでもあるから」
無ぇよ。
「慈樹さん、大変でしたね」
彌茅が、おんぶ紐の向こうに語り掛ける。あのとき、明瞭に喋った驚異の０歳児は、健やかに寝息を立てていた。
「……あれは何だったんだろう」
「……あれ以降、喋らないのよね」
秀人、なのはという両親にも分からなかった。
考えられるのは、予言の一種。予言をする人面獣『くだん』、聖職者の皮膚に顕れる『聖痕』のように、神の力の一端なのだろう。自分自身に宿る神の力でセルフ予言をしているのだから、前代未聞だろうが。
「慈樹が言うなら、本当に『だいじょうぶ』なんでしょう」
話しているうちに、なのはには少し、元気が戻ってきたようだった。
「さ、さぁ、間もなく地球ですよ師匠（せんせい）、義兄上（あにうえ）、慈樹さん！　クインさんを残して来てしまいましたからね。たくさんお土産を渡してあげなきゃ！」
彌茅は、気遣いの出来る子だった。
「……そうね」
なのはは、気持ちを切り替えた。
「あいつには家の管理と近所の掃除を任せてきたけど、お金は足りたかしら」
「そういや、クインにはいくら渡してきたんだ？」
家を出るとき、当面の生活費と雑費として何やら手渡していたが……
「……」
彌茅が顔を強張らせるのを見て、秀人は嫌な予感がした。
「１００万円。ちょっと少なかったかな……」
やりすぎであった。秀人は顔を引きつらせる。秀人もまぁ、管理局の仕事をしていたり、マリエル（頭のおかしい技術者）の研究協力（人体実験）で報酬を得たりはしてい

るが、根っこのところではカントクのもとで働いていた労働者であり、金銭感覚もそれに準じたものである。なのはも、普段は質素に読書などをしているのだが……傭兵稼業のクセなのか、拳銃や銃弾、各種装備には湯水のように金を使う。クインに対するなのはの対応は、凶鳥部隊時代の部下（道具）への接し方に似ている。故に金銭感覚がガバガバなのはそういう理由なのだろう。

「銃とかタマとか結構するし」

「買わねぇから」

「えっ、素手？」

「なんでナニカと戦うことが前提なんだよ……」

だが、しょっちゅう謎勢力に襲撃されていることもまた事実。

「加工食品は持って帰ってきていいとのことなので、露店で売っていた激辛串焼きをたっくさん買っておいたんです。クインさんと一緒に食べるんです」

彌茅は、クインを割と大事にしているようだった。ライバルのリンネもそうだが、彌茅は、どっかの師匠（せんせい）と違い、人との関係を大事にする子だった。

「クインさんは、わたしの妹弟子……、……？　……いもうと……？」

……何か引っかかったような様子の彌茅。

「……。彌茅、そろそろ家よ」

「！　はい、師匠（せんせい）」

彌茅が足を止める。向こう、近づいてきた我が家の前で、クインが箒を手に立っているのが見えてきた。

「言いつけ通り、ご近所までちゃんと掃除をしているようね。てっきりサボっているのかと思っていたけれど」

逆らうとなのはに9割殺しにされる、という恐怖もあるのだろうが。

「……どなたかと、話をしているようです」

クインは、誰かと何か、あまり穏やかでない様子で言い合っているようだ。クインと同年代に見える、小柄な少年だ。髪色を派手にしているが、それ以外、目立った特徴も無い没個性。なのはは、絶望的な

までに容量の少ない他人の顔メモリーからどうにかその顔を見つけた。ミラクルである。
「クインの同僚よ。凶鳥部隊の育成枠」
つまりは未熟なガキである。なのはは、秀人や彌茅と共に壁に身を隠した。気配察知の鈍いクインからは、これで見えなくなった。ちなみに、なのはは東京ドームくらいの広さであれば他者の所在を割と正確に割り出せる。秀人は特に察知はしないが、衝撃波で纏めてすり潰せるので気にしたことは無い。
「彌茅。目を閉じて耳に神経を集中しなさい。風の音、家鳴り、窓ガラスの音を順々に遮断して、拾うべき音だけを拾いなさい」
「……はい、師匠(せんせい)」
言って出来るような内容では無いが、彌茅は呑み込みが早い。何秒かすると、徐々に、クインと少年の会話を聴けるようになっていった。
――お前、いつまでこんなトコ居る気だよ!?
――いつまでって……一応あたし、人質だし……
――人質!? バカ言ってんじゃねえよ! お前、オレたちグレムリンの一員だろ!? おまえが離脱してから、マリーダは情緒不安定になってオレを射的のマトにするわ、退屈したロロに電流流されるわ……!
――そりゃアンタにリーダーとしての威厳が無いからだろ……
――ぐぬっ……! そりゃあ、むざむざ手下を取られたからだ! おまえを取り返せば、オレのリーダー株価は持ち直しのV字回復間違いなしなんだよ!
――なっさけな……とにかく、あたしは帰んないからね。勝手に一人で帰りな
――あ、お前、隠し事してるだろ。帰れない理由。
――。そんなもん、
――ははーん、お前、こっちで好きなゲブォ
――うるさいよ! 見透かしたようなこと言うな!
――わ、悪かった、悪かったから、安全靴でみぞおちはやめろ! ならせめて、帰れない理由で、ウチの女どもが納得するだけのモノを

……！　でなきゃステラに北極に捨てられる……！

――……だって。

――だって？

――……帰れるわけ、無いだろ。あんな、あんな……

「あんなダメな師匠（ヒト）を、放っておけるわけないだろーーーーー!!!!!」

……声がデカくて、秀人にまで聞こえてしまっていた。

「なのはステイ。ステイ！」

……なのははブロック塀のうち一つをもぎ取り握り締めていた。

「なにもしないよ。ただちょっと、『睡眠魔法☆ブロック』で頭を垂直に殴る』を伝授しようとしているだけだよ」

永眠してしまう。

「あんな、コミュ障で、陰キャで、ぼっちで、そのくせ頑固で融通が利かなくてコミュニケーションにおける折衷というものを知らないダメダメ人間……！　無駄に世界最強レベルに強いせいで誰もそれを矯正することができなかった自業自得マジカルフィジカルロンリーモンスター……！　人生における天敵は顔を覚えて声を掛けてくるレジ打ちのおばちゃん……！　そんな、そんな人を一人にできるわけないだろ……！　あたしが……せめてあたしが、しっかりしなくちゃ……！」

謎の使命感に燃えるクインに、少年はすっかり気圧されていた。

「どーせ向こうで娘さんと大喧嘩して帰ってくるに決まってるんだーーー!!」

「ぐはぁぁぁぁぁ……!!」

なのはは過去一受けたこと無いレベルのダメージを負っていた。

あまりの剣幕にたじろぐ少年。

「お、おう……、」

……その隙を見逃す彌茅ではなかった。

「……ひゅ、」

声を発しようと呼吸をしたタイミングで。背後から音も無く組み

着き、少年の頚部血流と気管を瞬間圧迫。刀の鞘と腕を使った変則締めで、少年の意識を一瞬で刈り取ったのだ。こういった分野はメキメキと成長している。
「クインさん、ただいまです」
「み、みかや……？　……なぁ一人で先に帰ってきたんだよな。そうだよな!?　そうだと言ってくれ……！」
「残念だったわね……この野郎……！　誰がコミュ障か……！」
背後に立つ鬼の気配。秀人の手にはいつの間にか身代わりの術によってブロックが握られており、出し抜いてきたのだ。
「うびょあああああああああああああああ!!」
『『栓抜き』』
――シュコンッ
延髄、その節から、神経に打撃を加え一撃で失神させる絶技である。
「コケッ……」
活〆の要領で意識を刈り取られるクイン。
「さて、どうしてくれようかしらね……
1．右も砂、左も砂！　サハラ砂漠のど真ん中。水はナシ!?　生存チャレンジ！
2．肌で感じる食物連鎖！　アマゾン川の中州。ワニｏｒカンディル！　究極の二択！
3．ここはドコ!?　一面氷の世界！　北極南極どっちでｓｈｏｗ！
アミダで決めましょう」
そうして、地面に拾った石でガリガリと禍々しい死のアミダを描き始める邪術師なのは。その手を、彌茅の手が決死の覚悟で握り止める。
「せ、師匠（せんせい）……クインさんは、どうか……」
「……」
「お願いです……!!　どうか……！　ゆるしてあげて……！」
……1％は冗談で言っていたのだが、彌茅があまりにも必死で頼んでくるものだから。

「……ふぅ。わかったわよ」
石を指で弾いてクインの頭部にヒットさせる。
「んがっ!?　はっ、砂漠と湿地帯と氷原はドコ!?」
人生何度目かの臨死体験から舞い戻ってきたクイン。
「とりあえず食事にするわよ。クイン、そこのガキも持って来なさい」
「ハイ……」
ずりずりと引きずられる少年の半死体。なにがツボに入ったのか、慈樹は秀人の背でケラケラと笑っていた。
「カート・グレンデル。あんたが属する凶鳥部隊内の小グループのリーダー、ね」
「はい……一応……」
「……コイツがぁ?　ホントにぃ?」
まじまじと眺め、懐の装備品をガメて卓に並べる。
(ショボい拳銃、ショボいナイフ、そんでショボい魔力)
どう見ても実力で君臨するタイプのリーダーではない。ということは。
(他は覚えてないけど、連帯意識の強まりがちな女グループに男一人で、曲がりなりにもリーダーとして認識されている。はやてと同じ、カリスマタイプのリーダーか)
戦闘一辺倒になりがちな凶鳥部隊においては、割と有用な人材なのかもしれない。弱すぎて話にならないが。
「起きたら騒いで五月蠅そうだし、縛っておきましょう。彌茅。教えた通りにやってみなさい」
「はい師匠(せんせい)」
彌茅に練習用トラロープを手渡す。彌茅はまず、手首を外しても抜けられないように両手の親指を背中で結束バンドで留める。カートの両手首と両足首をそれぞれ『8』を描くように縛り、さらにそれらを連結させ、海老反りに近い形に持っていく。更に猿轡とほっかむりを合体させるように縛り……
「あの、クインさん。いいですか?」「そんな見事に緊縛されてから聞かれても」

「さぁ尋問の時間よ」
なのはは、カートの鼻の穴に水を滴らせた。手慣れすぎている。
「ぐ、がぼぼっ!!?　……!?　ンーー!!　ンんーーー!!?」
目を覚ましたカートは、全身の身動きが取れず、口さえ自由にならないことにようやく気付いた。
「おはようカート・グレンデル。気分はどう？」
「!!　んんんーーーー!!」
「お話がしやすいように、指か歯の一本からいっとく？」
「……!!（ぶんぶんぶん）」
……カート少年は首を必死に横に振り、動きを止めた。
「賢明ね。それじゃあ、口を自由にしてあげるけど、私が『うるさい』と感じたら、声帯をチョン切るからね。目線が反抗的だと感じたら、瞼を切除して二度と閉じられなくするからね。いいわね？」
「……！（こくこくこく）」
カートは屈した。圧倒的暴力の前に虚勢など張れようも無いのだった。
「はい自己紹介」
「……カート・グレンデル……年はたぶん17……生まれはたぶん管理世界のどこかデス……スラム街でグレンデル一味を結成して、怪しげな実業家からの紹介で、凶鳥部隊の世話になってるッス……ハイ……」
「あなたとクイン以外の構成員について話しなさい」
「技術屋のロロと、狙撃手のマリーダの二人デス……」
「ふぅん。嘘は言っていないようね。あの時の人数とも一致するし。もういいわ。彌茅、解いてあげなさい」
「はい師匠（せんせい）、……あれ、どっちだっけ、ええっと、」
――グキグキグキ
「んぎょあああああああ!!?　違う！　そっちじゃない！」
「あ、えっと、こっち？　あれ、あれぇ……？」
――ポキポキペキ
「ひぎゃあああああああ!!　クイン！　クィィイイン!!　助けてく

れぇ！」
「ハサミ、ハサミ……」
　クインが台所にキッチンバサミを探しに行く。が。
「駄目よ。ロープが勿体ないじゃない」
「オレの骨は一巻き数百円のロープ以下かよぉ!!?」
「１２８０円よ。物価高は嫌ねぇ。気軽に縛り上げることも出来ないなんて……」
「鬼！　悪魔！　凶鳥部隊の女―!!」
　――グキッ
「あっ」
　あっ、じゃない。
「肩の骨が外れたわね。少しは抜けやすくなったんじゃないの」
「なのはさんはもう少し人間味を身に着けて下さいよ……」
　ジョキジョキ、とトラロープを切断する。
「ほら、カート。大丈夫？」
「だ、だいじょばない……」
　なのはは、新区から持って帰ってきた洗濯物を洗濯機に入れ終えてから戻ってきた。
「外れたらハメ直さないとね」
　――コキッ☆
「ぴぎぃ」
　……人体をガンプラか何かだと思っていそうな雑な動作で的確に接合する。
「あ、もしもしカレン？」
『私、いちおー悪の組織のトップなんだけれど……』
　気軽に電話をする仲である。
「このカートっていうガキ、あんたの差し金？」
『……なぬ？』
　フカシではなく、本当に知らないようだ。
「貸してくれるなら、雑用させるついでに鍛えるけど？」
『えー、困るー』

クインは貸してくれたが、カートについては渋るような気配だった。
「あ、姉貴……！」
カートはキラキラした目で電話の向こうを想起した。ほらやっぱり、オレがいなくちゃグレンデル部隊は、ひいては凶鳥部隊が引き締まらないじゃないか。ヴェイロンの兄貴、トーマだってきっとオレを待っている……と。
『洗濯係が居なくなっちゃうじゃん』
「そっちかよぉおおおおお!!」
カートは慟哭した。裏路地の半グレ集団から始まって、名を挙げて、ようやく大組織の一員に順当に成り上がってきたと思っていたのに。
「あのクソ社長、戦闘員として推薦するとか言っておいて、実際の業務内容は斥候と日常の雑事ばかりじゃねーか！　話が違うぞチクショーーー！　耳障りのいい言葉で寄せ付けておいて実態はコレかよぉ！」
「口約束なんて証明する手段が無ければ守る必要なんて無いわよ」
「クソッ、表も裏もなんて世知辛い社会なんだ……!!」
社会の寒風に晒されるカート少年だった。
「まぁ、しゃーないしゃーない。俺も最初に凶鳥部隊入った時にやった仕事は隊舎の清掃と洗濯だったぞ。あれで『女』に対する幻想の８割が吹っ飛んだ……」
経験者は語る。というか境遇だけならはるかに劣悪だった。
「えぇ……あんた当時からクソ強かったって姉貴が言ってたのに……サイファーもフォルティスもドゥビルも居なかった頃の凶鳥部隊ってどんなだったん？」
「そいつらの名前は知らんが……当時の部隊長のオウルってのが鬼のように強い……というかマジモンの鬼でな。腕力で負けそうになったのなんて初めてだったぞ」
「はえー……今じゃ最古参は姉貴とシャマルの兄貴だしなぁ」
「まぁ、俺が居たのなんて一か月やそこらだし。その後の事なら、なの

はの方が詳しいだろ」
「うーん……でもなぁ、逆にオレは新参すぎて、なのはさん、はやてさん、カレンの姉貴の三強体制時代のことはよく知らないんだよ」
「ヴェイロン、アルナージっていう二人の事なら、なのはが良く話すけど……」
「おぉ、そりゃオレたちの一個上世代だ。よく一緒に作戦行動するぞ」
「強いの？」
「……なんでそこだけ前のめりなんスか……」
心の底のバーサーカーが顔を覗かせてしまった。
「しかも当時って、わざわざ隊舎を構えてたんだろ？　出撃とか面倒じゃね？　今なら――」
『カート――』
……電話口から、恐ろしく冷たい言葉が発せられ……
「……」
カートは、顔を真っ青にして固まった。
『ペラペラ、ペラペラと……内情を吹聴するんじゃないよ』
「……す、すんません……すんません……」
カタカタと震えながら電話の向こうに頭を下げる。クインも思わず、なのはの袖を摘まんでいた。
「……」
彌茅は初めて、本能的な恐怖というものを知った。そう。あまりにもなのはが気軽に接しているものだから勘違いしそうになるが……凶鳥部隊というのは、圧倒的強者の集団なのだ。その長として、実力で君臨しているカレンという人物が、生半可であるはずが無い。
緊迫した空気。なのはが仲裁に入るか、カレンの面子を立てて黙るかを慎重に推し量り、
――ピンポーン
……あまりにも空気の読めないインターホンが鳴り響いた。
「はい」
『お届け物でーす。『高町なのは』様の本人確認が必要になりまーす』
「はいはーい」

なのはが、クインと彌茅を連れ出すように玄関口に向かっていく。携帯電話はスピーカーモードのまま、カートの目の前に置かれていた。沈黙。そして。

「……」

荷物を手にしたなのはが、戻ってくる。

「うひぃ……!?」

カートは、あまりの殺気に思わず声を漏らした。電話口の向こう。それと同等の殺気を、なのはが纏っていたのだ。

わざわざ『高町』の性で注文したモノは、何だったのか。

「……ナメたことしてくれるじゃないの」

ごとん、と、乱暴に卓上に放りだした箱の側面は『ギフト用高級銀鱈（ギンダラ）』とある。中身は……

――拳銃と実包だった。

「……あのなぁ」

秀人は額を押さえる。まーた変なものを買って。

「違うのよ……そういう問題じゃないのよ……ほらコレ」

と、なのはが取り上げた拳銃。

「？　普通の銃だろ？　どこがおかしいんだ？」

全部がおかしい。秀人もたいがい麻痺していた。拳銃は、学校に持っていかなければ所持して良いようなものではない。

「これ……純正トカレフだって言うから買ったのに……！　メッキした黒星だ……！」

つまりはニセモノである。

「Ｙａｂａｚｏｎ（ヤバゾン）はこれだから……！」

「俺の知らない通販サイトを嫁が使ってる……」

たぶんディープウェブ系のアレである。

殺気立つなのは。そして落ち度といえば……携帯電話を、カレンへの通話状態で置いていたことであった。

『え、なのはパチモン掴まされたの？　ぷ、ぷぷぷーーー!!!　ぶわぁっはっはっはっは!!　だっせー!!　ぎゃはははははは!!　やーい、バーカ！　バーカ！　新人の雑用レベルの買い物ミスってやがん

のーーーー!!　だっせーーーー!!　くそだっせーーー!!　ぎゃははははは!!　ばぁあああああか！　頭グレンデルかよギャハハハハハハ!!』

ここぞとばかりに煽る煽る。なのはは、掴まされたパチモン銃で携帯電話を殴り壊そうとしていた。が。

「……彌茅。クイン。カート。準備をしなさい」

「はい」「……はい」「えっオレも!?」

返事は待たず、なのははすたすたと家を出ていった。『準備』に行ったのだ。もはやカートの処遇がどうこう、は全く頭にない様子。

「あのぅ……オレはどうすれば……」

『行ってきなよ。あぁなったなのはは話通じないし』

よくご存じで。

「なぁカレン、」

『おうヤリ逃げ三又トライデントちん○野郎』

「すまんかったー!!!」

釈明のしようも無い。カレンに手を出し、なのはに手を出し、挙句にはやてを不倫の挙句孕ませ……と、言葉だけを聴けば秀人は最低のヤリ○ン野郎だった。

『いい雰囲気で凶鳥部隊を出ていったけどさぁ。あの前々夜にわたしと』

「変な薬で記憶混濁させてきた女の言うことか!?」

『出ていく前夜オウル隊長の部屋に行ったんだよね？　……ま、まさか……』

「誓ってヤってません……！」

『はやては？　あんたの9つも年下の低身長ばいんばいんどすけべ女は』

「薬ナシでヤりましたぁ……!!」

『ゴムもナシ、と』

いろいろ最低である。

『そういや今夜、ルーフェンってとこ行くんだけどさ』

「……なに？」

『仕事。良かったら手伝ってよ』
何の因果か。逃げた弟子だの娘だの元カノだの、あらゆる女難が秀人を襲う。
『カートとクイン貸し出してるレンタル料替わりにさぁ、いいでしょ？』
「……わかった」
『んじゃ、番号を交換しよう！　これ、なのはのケータイだしさ』
「……」
『逃げられると思うなよ』
「……ハイ」
秀人は……過去に読んだ漫画の知識から、浮気に走る男ソックリのムーヴをしていることに嫌な予感しかしなかった。ぶつん、と切れた携帯電話を置き、窓から身体を乗り出す。そして上階の住人の名を呼ぶ。
「奈々ぁ―!!」「呼んだ？」「うわぁあああああいつのまに背後に!?」
相変わらず、何か読んでいるとしか思えない動きで背後に奈々が現れる。
「いや、なのはちゃんが部屋に来てさ、慈樹くんをよろしくって」「そうか……すまないな、なんか都合よく」
いくら定職に就かず収入が安定せず何をしているのかさえ不明なザ・不審者とはいえ。
「いいのヨー。慈樹くんに秀人の下半身の武勇伝を吹き込……」「やめろ……マジで……女難から逃れたい……」「無理ヨー」「無理かー……」
無理らしい。クロノとユーノと恭也に女難を分け与えて４分割くらいにすればマシになるんじゃないかと画策するが、よくよく考えたらみんな女で大なり小なり女性関係で苦労しているから今更だった。秀人には知る由も無いが、クロノなんて血縁の女に迫られてるとか修羅場がヤバい。シグナム？　あいつはダメ。
◆▪◆　◆　◆
「師匠（せんせい）、これは……？」
彌茅とクインは、なのはから与えられた新たな装備に身を包んでい

た。
「いわゆる鎖帷子よ。着込める系防具ね」
　袖口までをカバーするタイプであるが、非常に軽量で、動作に支障をきたす気配は無い。
「ユ○クロでストレッチパンツとヒートテック見たときに思いついたのよ」
　ユニ○ロでそんなこと思いつくのはこの人くらいであろう。
「単体でレベル4クラスの防弾性能があるから、標準の自動小銃くらいなら『ちょっと痛い（骨が砕けるくらいの痛み）』で済むわ」
「で、あたしはというと……」
「私の予備の刀と拳銃。実戦で木剣というわけにもいかないでしょう」
　男子なので個別に着替えさせたカートもまた、同様の装備だ。
「いいモンもらってんなー……」
「あんたのは特注じゃなくて私のお下がりだけどね。ヴェイロンのやつは背がニョキニョキ伸びたせいで入らなくなっちゃったし、アルナージは反抗期で。あとこれ」
　と、カートに差し出したのはホルスターと中身のパチモントカレフだった。
「本革のザ・カッチョイイ・ホルスターにシルバーのトカレフを合わせようと思って買ったのに……」
　とんだコーディネイトである。
「こっちじゃあんたの銃の規格のタマが手に入らないのよ。ホルスターは貸してあげるし、銃はあんたにあげるわ。幸いにも発射性能そのものは本物と同じ程度だったし、悪くはないわよ」
　しかし、カートは訝しんだ。管理世界では逆に、地球のトカレフの規格での弾は手に入らないのだが、貰ってどうしろというのか、と。
「決まってるじゃない」
　なのはは……朗らかに、花が咲くような笑顔で言う。
「これから奪えばいいのよ」
……

ルーフェン行きの準備をする秀人とは別行動で、なのはとその連れ3人は港まで来ていた。ぱっと見は旅行鞄を持った仲良しグループであるのだが……観光のような華やかさは無かった。
「……人気あんま無いですね」
「この港は釣り船もやってなけりゃ、漁船もそんなに多くないし、廃船置き場も兼ねてるからね」
どことなく寂しい雰囲気の港だった。その一角、かつては何らかの作業小屋だったであろうボロ小屋の扉を、特定のリズムで叩く。と、気配の欠片も無かった小屋の扉が、ギシギシと音を立てて開く。
「……あい」
顔を見せたのは、不自然に歯が無い老人。招かれて入ると、やはりボロ小屋。
「……ご用件は」
「……」
ごつん、とカートの懐から抜いたパチモントカレフを老人の前に置く。
「……おんや、まぁ」
「そういうことよ」
……首をかしげる三人。要約すると、Ｙａｂａｚｏｎ（ヤバゾン）で買った品物は海運され、この港の沖合で引き渡される。それを配送業者を装った工作員が個別に届ける……というシステムだった。つまりこの老人が、この港における裏取引を取り仕切る者なのだ。
「あんたの『店』は、パチモンを客に売りつけるわけ？」
「……へ、へへへ」
と、老人は、歯の隙間から空気を漏らすように笑い、手元のメモ用紙に何かを書く。日時と、座標。
「……砂糖の輸入に見せかけて、東側国のフネが来やす。……ソレですわ」
「客に始末を任せるっての？」
「えぇっへっへっへ……今日は、店じまいでさぁ……」
取り付く島もない。といった様子で小屋を出る。すると……

『動くな！　貴様たちは完全に包囲されている!!』

……小屋の周囲に、大量のパトカーがいつの間にか大集合していた。

「店じまいって、こういうこと……」

銃刀法でしょっぴかれる前に、警官隊をシバキ倒して逃げる算段を立てていると……見覚えのある黒いクラウンが現れる。

「おっ、ツイてるわね」

運転席と助手席から現れたのは……

「な、何をやっているのキミは、もぉおおおおおおおおお!!!」

フェイトと、シグナムだった。

「わーい、渡りに船ね」

「わーい、じゃないっ!!　せつめい！　せつめいしろーーーー!!」

「ひそひそこそこそ」

「ふんふん、アングラの闇サイトで拳銃買ったらパチモンだったから取引相手をダイレクトに物理クレームを付けに来たんだ。親権がデリケートな彌茅と、ボクが黙認しているだけで反社の密入国者のクインと、その仲間の男の子を連れて。へぇー、ふぅーん……」

――――アウトだよぉ!!」

フェイトは頭を抱えた。どうしてこの姉は、次から次へと国際的な違法行為に手を染めるのか。倫理観が終わっている。

「警視正！　小屋の中はもぬけの殻です！」

小屋の地下にはかつての水道を利用した脱出道があったらしい。抜け目のない老人だ。

「はいこれ」

と、なのははフェイトに先ほどのメモ書きをそっと握らせる。

「……なにこれ」

「取引現場」

「……」
フェイトは……その優秀な頭脳をフル稼働させ、どうにかこうにか、苦しいながらも、通らなくもない理屈をひねり出す。
「警視正。そちらの方は……」
警察官の視線は、怪しさ満点の旅行鞄に注がれている。
「はい」
と、なのはは鞄を警察官に手渡した。訝しみながらも開封する。中身は……
「酔い止め薬、ハンカチ、ティッシュ、ボールペン、メモ用紙、モバイルバッテリー……怪しいものは何もありませんね」
なのはがそんな分かりやすく違法物品を持ち歩くものか。
「……彼女……たちは、捜査協力者、デス……わたしの、知己で……警察協力の経験も……あり……今回も……偶然、通じてしまった闇サイトの情報で……『クルーズツアー』という隠語に騙されて……たまたま、ここに……」
あまりにも苦しすぎる言い訳だが、フェイトとシグナムは、幸いにも警察内部の信用が厚いらしく、警察官は疑う素振りも無く引き下がっていった。
「……」
心臓がバクバクしているフェイト。過去一番で緊張した。
「ナイスよ」
見られない位置で、フェイトの背中をぽんぽん、と叩く。ちなみに渡した鞄は二重底で、普通に凶器が入っていた。堂々としていればバレないものである。
「……もぉおおおお～～!!」
バシバシ、となのはを叩くフェイト。このくらいは許されるだろう。
なのはが取り出したケータイの画面には、Ｙａｂａｚｏｎのページが開かれている。それをフェイト含む警官隊に渡すと、事態は一変した。
「……これ、隠語で隠されていますけど違法薬物ですね」

「従来のどの構造式にも該当しません。いわゆる危険ドラッグですが……」
「新法の適用条件には合致します。検挙可能です」
「あと、従来の拳銃に加えて……『魔法武具』のラインナップも確認しました」
　事態が動いていく。
「この案件は、特別超常現象対策課の所轄となります」
　こうして、このニセトカレフ事件は、晴れてフェイトたちにお鉢が回ってきたのだった。
「思わぬ相乗りになったけど、良かったわ」
　なのはは、ドサクサに紛れて、検挙作戦に参加することが決定していた。天眼宗の壊滅時に立役者となり、慰霊の場にも出たなのはは、警察、公安からは（ちょっとヤバめの）協力者として認知されているのもあり、作戦行動への同行が認められた。
「社会は信用で成り立っているのよ。三人とも覚えておきなさい」
　海上保安庁の船舶に一室を貰い、彌茅、クイン、カート、フェイト、シグナムとミーティングを行う。
「お巡りさんとしてのメンツもあるだろうから、私たち四人は別行動で行くわ。船の内外から挟み撃ちにしましょう」
「……何で連れてきちゃったの……」
「（裏）社会科見学よ。力がある者は闇からは逃れられないのよ……」
「不可抗力みたいに言ってるけどさ、嬉々として闇ピクニックしに行くのやめてくんない!?　ボクの始末書報告書における文章力にだって限界があるんだよ!?」
「大丈夫だフェイト。オレが手伝おう……フフフ……いつまでもな……」
　シグナムがヌルリとフェイトの肩に手を回そうとして、顎をバルディッシュの柄で殴られていた。懲りない奴である。
「ところで魔法武具って何？　ずっとその話題避けてるわね」
「うううっ……キレ芸でもごまかせない……!!」
　そしてついに、バレてはいけない話がバレてしまった。なのはの目

がキラキラと輝いている。これはヤバい。
「……簡単に言うと、六課でも使ってたカートリッジ式簡易デバイスのことだよ」
　戦闘員ではない事務員レベルの職員を、イザというときに肉壁もとい戦力化するためにはやてがマリエルに作らせていたものである。
「バッテリーの電気をカートリッジ内蔵のコンデンサーで魔力に変換して、デバイス内蔵のいくつかの単純な術式をドライブさせる機器。いま、管理外世界に無作為にバラ撒かれて、土着の技術と融合した未知の凶器を使った事件が頻発しているんだ」
「……（欲しい）」
「ダメだからね。全部押収するからね」
　世界のパワーバランスを崩しかねない危険な存在だ。先の大戦を経た後の、世界間の技術共有は、複数の協議を通した平和利用に限られている。
「どーせどっかの軍需産業が後々のシェアを取るために技術と現物を横流ししているんでしょう。管理外世界はブルーオーシャンだもの。たぶん平和利用協議会の中にも潜んでるわよ」
「捜査中だから！　決めつけないの！」
「……捜査中ってことは怪しいヤツは既に居るってことね」
「あああああー！　聞こえないもんー!!」
　世界が良くなる兆しはいまだ見えない。
　――ｐｒｒｒｒｒｒ
　不意に、カートの懐から鳴動音。取り出すと、クレジットカードほどの大きさの機器。
「？　なんだ……？　こんなモン、持ってきたっけか？」
　室内に緊張が走る。当たり前だ。隠密作戦に際して、個人の通信機器など持ち込ませるはずがない。
「出なさい」
　なのはの指示で、カートがその謎の電子機器を当てずっぽうに操作する。
『やぁカート少年！　わたしだよハーディス・ヴァンデインだよ！

久しぶりだねぇ！　その後カレンくんの基での生活はどうだい!?
いやいや、言わずとも分かるさ！　雑用！雑用！下働き！　不満があるだろう!?　だが仕方が無い事なんだ！　確かに『凶鳥部隊入り』をキミたちグレンデルに持ちかけたのはこのわたしだ！　だが期待と違ったかい!?　いきなりエース部隊に登用されると思ったのかい!?
　それは無理だよ！　どうあがいても無理だよ！　それは凶鳥部隊を甘く見すぎているよ！　君に必要なものは経験！　レベルアップのための経験だよ！　そのためには、今君が向かっている密輸船くらい単独制圧できなきゃあならない！　でも出来ないだろう？　だが凶鳥部隊の戦闘員ならば、下位戦闘員であろうともそのくらいの任務は朝飯前に達成するさ！　だが君は出来ない！　未熟！経験不足！
　であればどうする？　そう、レベリングさ！　わたしは『ドラゴンクエストモンスターズ』の大ファンでね！　キミみたいな弱いユニットでもレベルを上げればボスにも通用する！　素晴らしいゲームだ！　そのために今君は輸送船に向かっているんだよ！　頑張りたまえカート少年！　クイン女史！　見知らぬサムライガール！　ハッハッハッハ!!』
「おい切るな。ハーディス・ヴァンテイン」
　シグナムが、カートから端末を奪い取る。
「声紋照合による本人照会と自供を確認した。貴様を逮捕する」
　だが、電話口のハーディスは揺るがない。
『おや、闇の書から独立した騎士どのではないか。現代には適合できているのかい？　神代の戦争が恋しくはならないのかい？』
「たわごとは要らん」
『逮捕、逮捕ねぇ。構わないよ一向に』
　余裕綽綽である。何だったら顔も投影してやろうと言わんばかりだ。だが、この男がここまで強気に出られるのには理由がある。
『軌道上の衛星刑務所レベルⅨ独房に囚われているわたしは、逃げも隠れもしない！』
　シグナムは内心で歯噛みした。そう、ハーディス・ヴァンデインは既に……２０年近く前、戸籍上の年齢で成人したその年に、とっくに

逮捕され、裁判も終結し、刑務所に収監されているのだ。少年期に犯したあらゆる犯罪行為は少年法により追及されておらず、成人し一か月の間でのみ犯した罪状でのみ、最高クラスの刑務所に収監されているのだ。

『わたしの懲役は約1万２０００年。司法取引に応じようが応じまいが、意味の無い数値だよ。確か最新の逮捕歴は一か月前、反社会勢力に知識と武器と犯罪ノウハウを伝授したことだったかな？　それはたしか懲役１０年？　１５年だったか？　その前は、この刑務所からの無許可の外出が咎められたことによる懲役２０年の加算だったかな？　仲の良かった看守（友人）を失うのは悲しいことだねぇ。人生は出会いと別れさ』

逮捕され、司法における最大刑をはるかに超越する刑期を課せられた犯罪者を、これ以上、罰することなど出来ない。

あらゆる情報から遮断されている筈のレベルⅨ刑務所において、何故か世情に精通しており、何故か通信機器や電子機器を所持しており、何故か資産が増加し続けており、何故か軍需産業に顧問として正式に登録されている、世紀の大犯罪者、ハーディス・ヴァンデインを罰することなど、この世の誰にも出来ないのだ。

『そうそう、こんどわたしの７回目の死刑が執行されるのだよ！　薬殺・絞殺・電気殺・銃殺・落殺・焼殺と来て、次は宇宙空間に放り出すとのことだ！　面白いショーが見られるから、ぜひ』

――ゴキャベキメキッ

……シグナムが通信機器を捻り潰したことで、その言葉は中断させられた。

「おいガキ。この一件が終わり次第、お前を逮捕してやるからな。覚えておけ」

「ウゲッ……拘留中って給料どうなるんだ……？」

「出るわよ。拘留手当って制度で。わたしもカレンも貰ったこと無いけどね。あと顧問弁護士制度もあるわ」

「無駄に凝った福利厚生……！」

もとは管理局の暗部組織。そういったアフターケアは無駄に充実

していた。
「オラッ、脱げクソガキ！　まだケツの中に発信器なり盗聴器があるかもしれんだろうが！」
「イヤァ！　お婿さんに行けなくなっちゃう！」
　カートはシグナムと警官に別室に連行され、色々あって乱れた衣服で戻ってきた。
「ウッウッ……汚されちゃった……！」
「いやもとからキレイじゃねーだろ」
「確かに……」
　カート、納得。
「間もなく現場です」
　伝令に海保職員がやってくる。乱れた衣服のカートとシグナムを見て、『あっ（察し）』という表情をする。着々とアレな噂が流れる下準備が整いつつあった。
「さて皆、準備は良い？」
　各々、準備は万全である。
「向こうに認知されているのは、取引相手である私たち……えーと便宜上、チームNが、モーターボートで近づいて向こうに乗船。何やかんやして合図をしたら、海保さんとフェイトとシグナム……チームFが一気に拿捕する、ということでいいわね？」
　確認は取れた。
「『ナメられたら潰す』。社会の基本原理を叩き込んであげましょう」
　大多数の人が知らない社会がそこにはあった。
　モーターボートで近づくと、そこには中型と大型の境目あたりに位置する輸送船が波に揺られていた。船名も船籍も実在するのだろう。堂々とした航行であった。懐中電灯でモールスを送る。リフトが降下し、モーターボートごと乗船させられた。
「イラッシャイマセ」
「微妙に間違っている気がするわね……」
　応対をしてきた有色人種の下っぱに案内され、船内に。特に豪華でも質素でもない、普通の船だ。食堂を兼ねているらしき広間に通され

ると、護衛に守られた中背のアジア人の男の船長が笑顔で出迎えた。
「この度はご足労頂き、感謝を申し上げます」
流暢な日本語を話すが、国籍は不明だ。なのはは早速、本題に入る。
「この落とし前を付けてもらいに来たわ」
カートのホルスターのニセトカレフを指す。
「……」
ちゃきっ、と、下っ端の懐の銃がなのはの頭部に向けられ……無かった。中途から切断された銃身がゴトリと落ちる。
「……これはこれは、失礼を致しました。おい」
自分でけしかけておきながら、その部下を諌めるような態度で下がらせる。銃を失った下っ端は慌てて走り去る。少しすると、大仰なスーツケースを持ってやってくる。
「お詫びと言っては何ですが、こちらをお納め下さい」
スーツケースを開けると、中には丁寧に梱包された拳銃一式がずらりと並んでいた。
「製造年数今年度・未発火・本国軍需工場製の純正トカレフ１０丁、並びに実包２５×４０箱の１０００発。こちらで如何でしょう」
このままでは組織が潰されると察したのだろう。ニセトカレフ２丁の詫びの品としては破格の条件が提示された。
「そうね。あと、この船を丸ごと頂こうかしら？」
――そもそも、潰しに来たのだ。

――ズダダダダダダダダダダダダッ!!!!!
丸窓から自動小銃の銃身が差し入れられ、なのはたち目掛けて一斉に乱射された。
なのははテーブルを蹴り上げ、射線から逃れる。丸窓へ手裏剣を放つと、一時的に掃射が止まる。
「ふん、追いかけっこと行きましょうか」
一瞬の隙に、船長は姿を消していた。良い判断だ。
「さぁ戦闘だ！　準備は良いか！」
「イエス、マム！」「はい師匠（せんせい）」

続いて、室内にドカドカと駆け込んでくる敵の戦闘員。
「膝！」
――ダンダンダンダンッ!!
なのはの指示に、カートが戦闘員たちの足を狙って拳銃を発砲する。若干の撃ち漏らしはなのはがフォローする。そうして、先陣がつんのめって倒れ込み、突入の足が止まる。
「クイン！　彌茅！　指を狙え！」
「はい！」「はい師匠(せんせい)」
銃を握る指を、二振りの刀が切り落としていく。情けだとかではなく、単に腕より指の方が切り落としやすいだろう、という判断だった。
そうこうしている間に、第一陣は無力化された。
「合格ね」
なのはは、切り落とされ指を旅行用エチケット袋に入れ、持ち主に渡してやっていた。まさかのエチケット袋の知られざる活用方法であった。
「ま、貧困だのなんだの、いろいろあるんでしょ。あなたたちも。あとでくっつけてあげるから大事に持っていなさい」
そして、船底に向かって歩いていく。
「カート。あんたカッコつけてないで両手で構えなさい。筋力が足りてないんだから」
「うス……」
――ガスッ
会話のさなかに放った手裏剣が、ダクト口、その奥に潜んでいた狙撃手を無力化する。
「彌茅もクインも、注意力がやや散漫。空間全体に気を配りなさい」
「はい師匠(せんせい)」
「次の角を曲がったら待ち伏せがあるわ。自由に対処しなさい」
――ドガガガガガガガガッ!!
言った通り、バリケードが張ってあった。その隙間から、銃口が覗いている。
「えいっ!!」

彌茅が、懐から取り出した何かを、腕に巻いたゴムバンドを用いて射出した。
――バンッ!!
何かが破裂音。銃声が一つ止む。
「ふたつ、みっつ!」
――バンッ、バキンッ!!
「行きますよクインさん!」
「おう!」
そしてバリケードを飛び越え、射手を捕縛する。その足元には、銃口が花のように開いて裂けた小銃が転がっていた。なのはが蹴り転がすと、銃口からは割れたパチンコ玉の破片が転がり落ちる。あの状況で、銃口をピンポイントで塞いだのだ。
「見事」
彌茅に教えていた射出投擲の技術が、着実に身についていることになのはは満足した。
「案外小規模な組織だったようね」
「……くっ」
そして……船長をデッキの末端まで追い詰めた。護衛達は全て無力化され、袋の鼠だ。しかしどこか、余裕のようなものが見て取れた。懐から取り出すのは、小ぶりな刃物。
「あっ」
と、クイン、カートが声を上げる。
「クイン。あなたが何かしらの隠し事をしているのは良く分かったわ」
「うげっ」
魔法武具、と言っていたが、それとは別種のブツだ。船長はそれを、掌の中に突き入れる。
「ウゥウウウ『オオオオオオオオオオオオオーーーーーーー!!!』
バツンッ!! と、膨張した肉体に衣服がはじけ飛ぶ。漆黒の肌。銀色に輝く頭髪。
「……。なんだか前に見たのより精度が上がっている気がするわね」

前回、レアスの舞台を破壊した暴走体は刃物ではなくランタンのようなものを持っており、肉体は膨張はしたが密度は低かった。
「流通数が揃えば、何らかのブレイクスルーで飛躍的に進歩するわけよね」
変異を終えた船長は、デッキに腕を突き刺し、巨大なハンマーを取り出した。
「アレが魔法武具かぁ……何か好みじゃないわ」
――ザザ、ざ、『あー、聞こえるか、なのは』
支給されたインカムが、懐かしい声で喋る。
「マリエル？　久しぶりじゃない」
驚いた。マリエルは相当に多忙である、とだけは聞いていたのだ。わざわざ辺境の小事件に顔を出してくるとは思わなかった。
『……昔は『マリエルさん』って言ってくれてたのに……まぁそれはそれとして』
ボディカメラが接続される。
『あれは失敗作だ』
「ハンマー？　刃物？」
『どっちも。ハンマーは現地の技術では強度に耐えるための軽量合金が作れず、デカく重く人間が扱えないモノになってしまった。リアクター……刃物の方は格段に精度が上がった。だが、変異が可逆性になったのは良いが、充填したエネルギーを使い果たすまで止まらない。だが、人間が扱えないだけで、威力と強度は十分な武器と、それを扱える肉体スペックが合わさった結果、』
『ウオオオオオオオオオオオーーーーーッ!!!』
――ズガァァァンッ!!!
『たいへんなことになった』
「ざっくりしすぎでしょう」
まぁ倒せなくはない。しかし今回の目的は、弟子たちの社会科見学(闇)である。そして、このままだと船は木っ端みじんとなる。縛ったり切ったりした戦闘員たちや、知らずのうちに乗り合わせていた操船スタッフたちが海の藻屑と消えるリスクがある。

「つまりデータと現物が欲しいのね」
『そういうことだ』
「見返りは？」
『押収品コレクションからこっそりプレゼント』
「乗ったわ」
　悪童たちにガバナンスもクソも無かった。
「さぁ二人とも。デカいやつとの戦い方は教えているわ。ヤってみなさい」
「「はいっ!!」」
　声が震える二人。まだまだ場数経験が足りていないが、これから嫌でも積んでいくことになる。今日はその一歩だ。
　――ゾンッ!!
　彌茅、クインが、見事な太刀筋で巨体のアキレス腱を切る。
『グ、ガァァァァッ!!!』
　だが、船長は断ち切られたアキレス腱で……そのまま踏ん張った。
『ウオオオオオオオオオオオ!!!』
　凪払い！
「うひぃっ!?」
　カートとクインは間合いの外へ。彌茅は……間合いの内側へ！
「せぇいっ!!」
　――ぞぶっ……!!
　圧倒的な筋肉密度により、腕の中途で刃が止まる。
「彌茅！」
　クインが焦ったように叫ぶ。
「おぉおおおおおりゃあっ!!」
　彌茅は、不安定な状況から身体を旋回させ……！
　――がすんっ!!
　食い込んだ刀の柄を、加速で体重を補って、蹴りつけた！
『ウォオオオオオオオッ!!?』
　両腕で振り回すつもりが、片腕の力が消失したことで暴発。
　――ズゴゴゴゴンッ!!

船舶を大きく削り取ってしまう。
「おっしゃ、もらったぁ!!」
「カート、バカ!!」
隙と見たカートが、拳銃を構え、不用心に巨体の前に立つ。クインの警告も遅く、
――ズドォッ……!
手首から先を再生しつつある大木のような腕が、カートの腹を打ち据えた。
「ぐ、ぶッ……」
吹っ飛ぶ。
(死んだわね)
なのはの見立て通り、甲板に落下したカートは意識を失い、ショックで心臓が止まりかけていた。
「なに勝手に死にかけてんのよ！　命は大事に使え！　殺すぞガキ！」
なのはは、カートの鳩尾に足を置き……
――どすどすどす!!
超絶乱暴に心臓を拍動させた！
「ぐぇぇぇぇっ！　げほげほげほぉっ!!??」
「おら死んでるヒマなんて無いわよ！　命は有効に使え！　死んで来い！」
「ぎゃあああああ!!」
再び戦場にブン投げて復帰させた。
――がしっ！
しかし、なのはの人体投擲は正確であった。
「うわぁあああああ！　よりにもよってここかよぉ!!?」
『グォオオオオ!!?』
カートが投げられた先は、まさかの船長の頭の上！
「クソォ！　敵も味方も雇用主も非常識すぎんだろぉ！」
カートが意地を見せた。船長の眼球に拳銃を至近距離で合わせ……

――ダンダンダンダンッ!!
視界を奪う！
「いいわね。男の子だわ」
品評をしつつ戦況を伺う。リアクター有効時間内は再生力のおかげで死なないし、殺しの忌避感を抱かずにボカスカ殴れる。いい練習相手だ。だが、再生力の続く限り地道に続けるのは骨が折れる作業だ。
「彌茅。今日はあなたが決めなさい」
「はい師匠(せんせい)!!」
彌茅の刀に、持ち前の魔力光が瞬時に宿り、輝く。日ごろから鍛錬を重ねていた魔力の瞬間発動が、実践においても問題なく実行できるとは、やはり彌茅は肝が据わっている。
「！　カート！」
「！　オッケー！」
そこはチームメイトの阿吽の呼吸か。クインとカートは、船長を彌茅の方面へ同時に蹴り出す。
「――参る」
刀を正眼に構えた彌茅が、いっそ緩やかに見えるほどの動作で上段へと以降し……！
『天月・下弦』――!!」
強烈な斬り下ろしを放つ！
『……？』
その斬撃が、明らかに身体を通過したにも関わらず……船長は、平然としていた。そしてニヤリと笑う。不発か。そうして、改めてハンマーを振り上げ……
――すとん
『……ア？』
振り上がらない。下に目を落とせば、腕が。
――ハンマーを握ろうと力んだ拍子に、中途から『落ちた』。
『ア、ア、アアアアアアアア!!!』
足に力を籠めれば膝から下が、二の腕だけで立とうとすれば肩が、

ぼろぼろと『落ちて』ゆく。斬撃の通過した、右腕と、右足が。
「……」
そして、船長は見た。残り左半身へと、同様の斬り下ろしを放とうとする、小柄な『鬼』の姿を。
『ヒィイイイイイイイイーーー

とことこ歩いてきた彌茅の手に、ずっしりとした何かを握らせる。
「あなたの報酬と取り分よ」
――黄金のインゴットだった。
「……」
「換金方法は後で教えてあげるから……って、あら、彌茅、彌茅？」
「……」
――彌茅は気絶していた。
「疲れたのね……頑張ったものね」
（（ぜってぇ別の理由だろ……））
戦闘よりも、意味の分からない大金を握らされたことによる精神的ショックが大きいことは明白だった。
「あなたたちの分もあるから安心しなさい」
そうして、はじめに渡されていたトカレフ入りスーツケース、船員たちの所持していた拳銃や小銃と、弾薬を不自然にならない程度に回収し、それを救命ボートに載せると、エンジン始動。無人のまま陸地へ向けて発進。
「無事に浜に流れ着くのよー。あとで迎えに行くからねぇ」
……大量の武器と弾薬をガメたのち、信号弾を上空に打ち上げた。
――
「うわ、なんだこの甲板……」
「ヤケクソになって自爆でもしたのか……？」
乗り込んできた海保の皆さんの手により、違法物品が押収されていく。手錠を掛けられ、連行されていく船員たち。歩けない船長は二人掛かりで引きずられていった。
『何かヤバいものをなのはがガメていないか』と、真っ青な顔で、押収品を目視確認していくフェイトとシグナム。
「警視正。警視。ご確認をお願いします」
「ハイ」
「自動小銃、拳銃、それらの実包……それに、薬物と、顧客リスト……

それにこちらは……密輸されてきた黄金です」
「魔法武具の類は？」
「……アレですかねぇ」
アレ、と指示した先。甲板にズシーンと鎮座する、超巨大なハンマーである。
「……とりあえず船ごと運びますかね」
「そうですね……クレーンでも無いと持ち上げられないでしょうし」
そうして、現場責任者と思しき壮年の男性職員が、なのはたちの前にやってくる。
「……捜査へのご協力、感謝致します。こちらの船舶には、これより立ち入り調査が入りますので……」
やんわりと、海保の巡視船への移動を促される。
……後ろのクインと彌茅はどうみても真剣を携えているし、カートなどホルスターもトカレフ（銀ダラ）も丸見えで、武装強盗団そのものの装いである、なのはたちチームNだったが、見逃してくれる様子だった。融通が利くものである。
帰りは気ままなクルーズツアーである。
「フェイトもシグナムも、これから実況見分に取り調べに関係者捜査に、残業続きなんでしょうねぇ……大変だわ……」
その仕事をムダに煩雑にしている張本人は、提供された簡素な食事をパクパクしながら他人事のように言うのだった。もちろんなのはは、フェイトを信用しているが、言わぬが花というかのように、武装勢力も真っ青な武器弾薬、１００％違法な密輸黄金をガメたことなどはバレないようにしてある。
「帰ったら『お土産』を開けてのんびりしましょう」
……日本国の司法に真正面から中指を立てて唾を吐く行為であった。これが教師志望の１０代女性の姿である。
◆▪◆　◆　◆
がらごろと、家の外から聞きなれない音がするので見てみると、新品のリヤカーを繋いだ、見慣れぬカブがアパートの敷地に入ってくるところだった。荷台に力なく項垂れる三人の姿を見て、俺は察した。

「ただいまー！」
なのはが、ウッキウキで帰宅してきた。
「おかえりー」
……なのはがウキウキしているとき、だいたい周囲は迷惑を被って疲労困憊しているという経験則から、フェイトの苦労を察してしまう。大丈夫かなあいつ……
「ただいま……」「戻りました……」「です……」
……同行した後ろの三人の様子から見るに、そのようだった。というかなんだその大荷物。
「いやーもう大漁大漁！　海はいいわねー！」
「ぜったい魚と関係ないヤツだ……」
スーツケースを開けると、出てくる出てくる……いやもう何も言わないけどさ。こういう嫁だし。
「さて、ひとっ風呂浴びる前に、分け前の話を始めましょう」
円座を組み、何となく俺も慈樹を膝に載せつつその中に加わる。
「カート。そのホルスターはあげるわ。大事に使いなさい」
「えっ、マジですか⁉　おっしゃー⁉」
先ほどまでの疲労はどこへやら。気に入ったらしいホルスターを貰えて、おおはしゃぎしている。分かる。
「ってことはこのトカレフも⁉」
「えぇ。最初の銀ダラと、新品のトカレフ5丁、タマは全部持っていきなさい」
「え、タマもいいんすか？」
「私はいつでも手に入るし、そもそもストックがあるもの」
完全にアウトなことしか言っていない。
「クイン。あなたにもトカレフよ。明日からちょっと重点的に教えてあげるわ」
「この銃、手首と肘と肩が痛くなるのにー……」
「だーかーら、教えてあげるって言ってるでしょう。コツよ、コツ」
……まぁ、生半可よりは、なのはに徹底的に鍛えられた方が、結果的に良い方向に進むだろう。死ぬよりはいい。

「――彌茅」「はい師匠(せんせい)」
「今日のＭＶＰは貴方よ。よく頑張ったわね」
「はいっ！」
褒められた彌茅は、微笑ましくなるくらいに喜んでいた。
「これは追加のご褒美よ」
そして、それを取り出した瞬間……
――ズモモモモモッ……!!
「うげっ……！」
思わず声が出てしまう。
何の動物の物なのか考えてはイケナイであろう革と、黒ずんだ注連縄(しめなわ)、ボロボロなのに何故か剥がれていない禍々しい字体のお札で、明らかに厳重に封印されているであろう物品。
「ちょっ……と、待て。それ、彌茅に渡すのか……？」
なのはの教育方針に、珍しくも口を鋏んでしまう。
「――必要だから」
と、なのはが、その封印を剥がす。剥がしていくごとに、禍々しい気配が強まっていく。
――刀。それも、相当に古い。
部分的に錆ているような形跡があるものの、異常なまでに輝いている。無機物であるのに、まるでそこに、ナニカが『居る』ような気配だ。
――オォオオォオオオオオオオオオオン……オオオオオオオオオオオン……!!
絶対ヤバいやつじゃんこれ！
「……かなりの年代物ですね」
が、彌茅は意外と平然としていた。鈍いわけではない。
「１０００年以上前の刀よ。売ればン十億だけど、これじゃあ誰も買わないでしょうね」
――カタカタ、カタカタカタ……!!
動いてるし！　うわ、刃先がこっち向いた！
「ぁぃ!!」

――ガンッ！
……い、慈樹ぃー!?
「あぃ！　あぃー！」
――ガンッ！　ゴンッ!!
黄金のインゴットで呪いの刀をバッコンバッコン叩くんじゃありません！
「慈樹、やめ……やめーぃ！」
「あぅー！」
不満そうに暴れる慈樹。
――ぷしゅう……
……あ、静まった。すげぇ。
「彌茅。この程度の呪い、御して使いこなして見せなさい」
「はい師匠（せんせい）」
ぜんぜん気にしてない二人は、何の躊躇も無く刀の目釘を抜く。
「？　……あら残念。削り落とされちゃってるわね」
「義兄上（あにうえ）、戻せませんか？」
そうは言っても……やってみるけどさ。
――ボゥッ……！
蒼炎で、削り取られた銘の復元を試みる。が。
――ウギャアアアアアアアアアーーーーーーーー!!!
「ぎゃあああああ悲鳴ーーーーーー!!!」
こえーよ!!
――ドタバタドタバタ。
隣室から爺さん、上階から複数人が駆け下りてくる足音がする。これはオカルティックなものではない。
「ちょっと秀人!?　なに持ってきてんの!?」
「なんちゅうもんを持ち込んどるんじゃお前!?」
（あら懐かしい）
爺さん、奈々、朧さん！　頼もしいメンバーが来てくれた！
――バキバキバキィッ!!
「えっ、えっ、嘘!?　ヤバッ!!」

奈々の全身の護符代わりの銀細工が全部砕け散って呪術的メイクが全部溶け落ちてすっぴんで美人な素顔が露になった！　相変わらず美人だなコイツ！
「うぅ……！　ゲロ吐きそう……!!　おトイレ……！」
そしてそれを全部台無しにするダメっぷりもな！
「清酒！　清酒どこじゃ!?」
（料理酒も清酒と似たようなものですよ）
「なのはー！　料理酒――！」
「はいはい、どうぞー」
「オロロロロロロロ……」
「ここで吐くなーーー！」
風呂場に誘導した奈々の口に無理やり紙パック料理酒の注ぎ口を突っ込みブチ込む。
「オロロロロロヴぉえっ……ヴぉえっ……！」
うわぁ料理酒が一瞬で重油みたいな色に……
「奈々……お前のことは忘れないぜ……ここ置いとくから……じゃな」
ゲロまみれ奈々の近くに料理酒を置く。
……見たことも無いような険しい顔をして腕組みをする爺さんの前に、なのはと彌茅は、気まずそうに正座していた。
「……たまに居るがの。そういう蒐集家の末路というのは、自己責任の範疇を越えて、周囲にまで被害と悲劇を広げてしまうものなのじゃ。分かるの、なのはちゃん？」
「……はい……軽率でした……」
「……おぬしと秀人、慈樹くんは、神気で護られているが故に、呪詛の影響はある程度までなら受けん。だがの、もし少しでも違えば……」
うわぁ……長いお説教コースだ……
「？　私はなぜ無事なのでしょう？」
……。確かに。クインとカートは、なのはが咄嗟にシールドを張ったから気絶程度で済んでいるが、モロに呪い開封の儀の爆心地にしたはずの彌茅は、そもそもケロッとしている。

「「そりゃあ、だって……」」
と、なのはと爺さんが、同じ言葉で何かを言いかけ、口ごもる。
「？」
と、不思議そうにしながらも、慈樹とともに、呪いの刀を指先でちょいちょい、と突っついている。やめなさい。
『持ち主の首を刎ねた刀よ』
と、風呂場に放置してきたはずの奈々が、俺の上着を羽織って現れた。だが、奈々だけど、奈々じゃない。
「朧さん？」
『えぇ。身体を借りているの。この子ったら、いつも護符でガチガチにガードしてるから奪……じゃなくて、借りられないのだけれど』
あー……呪いに負けて全部砕けたもんなぁ……いや、奪うな。どういう理屈だ。
『話を戻すけれど、その刀は、持ち主の首を刎ねるのに使われたせいで、呪いを受けてしまったの。もちろん、そんな刀はゴマンとあるのだけれど……』
……まぁ、時代が時代なら、そういうこともあったのかもしれない。
『もともとが、神より下賜された来歴を持つような霊験灼然（れいげんあらたか）な御神刀だったことが災いして、持ち主の無念と怨念で、属性が変化してしまったのね。しかも、持ち主の王権を否定して貶めるためだけに、神聖な銘まで奪われて……それがトドメ。単に削り取られたんじゃなくて、『喪われた』という概念を受けてしまったのだから、秀人くんの蒼炎でも元には戻せないわ。神霊とて、ここまでされれば『名も無き悪霊』となってしまうもの』
で、と。朧さんは不可解そうな様子で、なのはに聞く。
『そんなもの、渡来人の小悪党が持っているようなシロモノではないのだけれど。どこから持ってきたの？』
……そうだ。なのははこれを、『今回の戦利品』とは一度も言っていない。
「……今は言えない。まだ」
……答えにもなっていない答えに、沈黙が下りる。

「『少し待っていなさい』」
そう言って、奈々の身体でどこかへ行って、3分ほどで戻ってきた。手にしているのは、古ぼけた、やや大ぶりな木の枝。
「『オノミコト……じゃなくて大家さん。この娘の身体を少しの間借りるけど、よろしいかしら？』」
「……許す」
と、奈々の身体で、懐から取り出した白鞘の脇差を抜く。どう考えても、そうはならんやろ、と言いたくなる切れ味で、枝をショリショリと削っていく。ほんの数分で、古ぼけた枝が、刀の拵えへと変化した。いや、そうはならんやろ……
最初にこの呪物を封じていた革袋から素材を取り出し、柄巻を作る。そして、呪いを受けて砕け散った奈々の銀細工の破片。
「『ごめんね坊や。ちょっと分けてね？』」
「あぃ！」
慈樹が刀をぶっ叩くのに使った黄金の一部を削り取り、赤土の地面を脇差で、模様を描くように型を作る。
「『秀人くん、ちょっと溶かして』」
「火種扱いかよ……」
そうして溶かした合金が、地面に描いた型の中で固まると、鍔が出来た。いやほんと、これ奈々の技術だけじゃなくて、正体不詳の朧さんの謎技術も入ってるだろ……
抜き身の刀を柄に挿し、目釘を打ち、鞘に納める。すると、先ほどまで周囲一帯を覆っていたおぞましい気配は嘘のように消え去った。
「……あの革袋、どうする？　焼く？」
どう見ても人間の残骸で作っているであろう革袋に注連縄。ちゃちゃっと蒼炎で火葬してやるべきではないだろうか。
「『持っていた方が良いわ。この神霊級の呪詛を、気配さえ悟らせずに数百年以上封印し続ける力を持った同等の呪物だもの』」
これでひと段落……
「『やはり奈々は、良き巫女ね……受肉に等しきこの肉体……むざむざ返すのは、実に惜しいことよのぅ……』」

ぞわっ。と。先ほどと大差無い気配が漂う。
「――――『朧』」
『……冗談よ。怖い顔をしないで頂戴、大家さん』」
そして……意味の分からない現象が起きた。奈々の身体から、湯気のようなものが立ち上り、その湯気が徐々に……どう見ても、普段の朧さんの姿になったのだ。
（さぁ、奈々もじきに目を覚ますわ）
「んにゃんにゃ……ハッ、全身がゲロ臭……!?」
「着替えてこい」
その上着はやるから。返さなくていい……というか返すな。
「彌茅。あなたの二振り目の刀よ」
「はい師匠（せんせい）。……銘は、」
「好きに付ければよいわ。無理にいま付けなくとも良し」
「では、今は『無銘』で」
カートとクインが心配、ということで部屋に戻っていった。
「しかし爺さんよ、『首を斬った刀』が、あんだけの怨念を持ってるってことは、『斬られた首』の方も相当ヤバい呪物になってるんじゃねーの？」
「おう、そりゃヤバかったぞ。怨念のあまり首だけで日本中を飛び回りおった」
「……？」
何で過去形？
「今は首都ど真ん中・駅前3分・地価推定４０億円オーバーの、スーパーゴージャススペシャル神社（マイホーム）を貰っておるからの。とうに鎮まっておるよ」
まさか刀の方が今更出てくるとはのー、と、ひょこひょこと部屋に戻っていく。
「あの木、なに？」
「あの刀と同い年の木の枝」
へぇ、長生きな木もあったもんだな。何年前の刀かよく聞いてなかったけど。

「みんなー、ロピアで寿司買ってきたから食べよー！」
　あの袋のデカさは……！　５０貫パック×２！　それが両手に、ということは、２００貫！
「起きろカート！　クイン！　寿司食うぞ！」
「やれやれ、お前は呪いよか食欲だのう……」
「朧さんも食べていけばいいのにな」
「水臭いわよねぇ。遠慮なんてしなくていいのに」
　２００貫もあれば、と思うが、大家に奈々が加われば、何やかんやで足りなくなるものである。もしもを想定し買っていたフライドチキンや生春巻き、弁当類まで残らず食べ尽くしてしまうと、カートは即座に寝落ちし、クインも彌茅も互いにもたれかかるように眠ってしまった。奈々は清酒をがぶ飲みしすぎてぶっ倒れたのを爺さんに担がれて退場である。少しは懲りろ。
　多少残った握りをなのはと食べながら雑談する。
「仕事前に寿司食うのもなんだけど、うまいもんはうまいな、うん」
「仕事って？　カントクさんの？」
「いや、フッケバイン一家の手伝いでルーフェン行く。今夜」
「は!?」
「いやいやいや！　違うって！　カレンが、『カートとクイン貸し出してるんだからそのぶん手伝って』って言うから……」
「洗濯係が抜けた程度の穴に秀人さんの助力なんてそもそも必要無いでしょ!?　何で真に受けちゃうの!?」
「いやでも緊急だからって言うから……」
「だからって今夜!?　どー考えたって疑う余地を与えないための電撃戦じゃないの！」
「でも今回もカートを駆り出すことになったんだし、いちおー手伝い程度は……」
「じゃあ私が！」
　――ピコン
　と、なのはと秀人のケータイに、同時にメッセージが入った。全く同じ文章である。

『――ヒデくんだけで来ること。なのはが来たら、クインを強制回収♪』

「あの女ぁ～……!!!」

……なのはの弱点を実に知り尽くしている。正直、クインが帰るなら、それはそれで良いとは思っている。しかし、彌茅が絶対に悲しむ。問題児リンネが家出し、クインまで居なくなれば、彌茅は一人になってしまう。それだけは避けたがるだろう、というカレンの見込みは大正解であった。

「いや、ほら、ちょうどルーフェンだしさ、ヴィヴィオの様子見がてら、バーサク白兎（リンネ）を回収もしくは安定化させて来られるし……」

「ぐぬぬ……カレンめぇ……!」

なのはは、どうにかこうにか、不満を飲み込もうとしている。よし、どうにか納得してもらえそう……

「――子供作って来たらダメだからね!?」

やらねーよ!

……たぶん!!

いってきまーす!!